

牙狼×けいおん 白銀の 刃

ナック・G

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

…光あるところに漆黒の闇あり。

魔界より現れし魔獣「ホラー」。

ホラーは人間の心の闇に付け込み、その魂と肉体を喰らう。

古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ち切る騎士の剣によって

人類は希望の光を得たのだ。

「魔戒騎士」。人知れずホラーを狩り、人を守る戦士。

「魔獣を打ち払いし者」。「人を守りし者」。

人々は彼らをこのように讃えた。

この物語はとある魔戒騎士ととある軽音部員たちの物語である。

この作品は牙狼とけいおん！のクロスオーバーです。

主人公はオリキヤラで、主人公は牙狼ではないです。

牙狼の時間軸は蒼哭の魔竜、ZERO〜Black

Blood〜終了後。

けいおんの時間軸は一期の梓加入からです。

牙狼のメインキャラはバンバン出していく予定です。

牙狼の設定にオリジナルのものが入る可能性があるので、そこはご了承下さい。

拙い文章になることが予想されますが、そこら気にせず楽しんでいただけると幸いです。

目次

混沌魔戒騎士編

第1話	「輕音！」	1
第2話	「騎士」	24
第3話	「秘密」	56
第4話	「魔獸」	90
第5話	「現実」	109
第6話	「銀牙」	141
第7話	「試練」	170
第8話	「試驗」	198
第9話	「欲望」	222
第10話	「記憶」	251
第11話	「同胞」	278

第12話	「繪画」	315
第13話	「屋敷」	347
第14話	「教師」	371
第15話	「歌姬」	399
第16話	「疾走」	431
第17話	「響音」	462
第18話	「邪惡」	501
第19話	「混沌」	527
第20話	「心滅」	553
第21話	「野望」	593
第22話	「突入」	612
第23話	「翔翼」	639
第24話	「白銀」	673

日常・番外編

U A 5 0 0 0 記念作品 「龍夜」

702

番外編① 「転校生 前編」

726

番外編② 「転校生 後編」

751

番外編③ 「期末」

781

番外編④ 「外出」

803

放課後ティータイム結成編

第25話 「合宿 前編」

839

第26話 「合宿 後編」

870

第27話 「休日」

911

第28話 「波乱」

938

第29話 「危機」

966

第30話 「学祭 前編」

997

第31話 「学祭 後編」

1030

第32話 「空想」

1071

第33話 「冬日」

1111

U A 1 0 0 0 記念作品 「ゼクス」

暗黒騎士鎧伝

オリキヤラ設定集

1138

第34話 「響家 前編」

1170

第35話 「響家 後編」

1196

第36話 「年末年始」

1224

第37話 「閃騎 前編」

1246

第38話 「閃騎 中編」

1276

第39話 「閃騎 後編」

1302

魔導人機襲來編
第40話 「甘味」

第41話 「高三」

第42話 「勧誘」

第43話 「整頓」

第44話 「邂逅」

第45話 「堅陣」

第46話 「楽器」

第47話 「光輝」

第48話 「修学旅行 前編」

第49話 「修学旅行 後編」

第50話 「留守番」

第51話 「生誕」

16671618159515551529150414631434140713881354 1327

第52話 「獄龍」

第53話 「法師」

第54話 「茶会 前編」

第55話 「茶会 後編」

第56話 「進路」

第57話 「親友」

第58話 「期末試験」

第59話 「演芸」

第60話 「獵獸」

第61話 「強襲」

第62話 「調査」

第63話 「真意」

第64話 「激闘」

2041202019821948192218881865184218251798176917341701

第65話 「銀狼 前編」

第66話 「銀狼 後編」

第67話 「再来」

U A 2 0 0 0 0 記念作品 「師弟」

2147

サブツク激闘編

第68話 「後輩」

第69話 「旅立」

第70話 「開幕」

第71話 「初戦」

第72話 「勇情」

第73話 「妙技」

第74話 「恩師」

2065

2094

2120

2177 2321 2251 2271 2293 2172 2373 2337

第75話 「熱戦」

第76話 「好敵手」

第77話 「白夜」

第78話 「鎮魂」

第79話 「牙戦」

第80話 「帰郷」

第81話 「捜査」

第82話 「暑中」

第83話 「夏期講習」

第84話 「幻想」

第85話 「陽光」

漆黒の闇呀襲来編

第86話 「持久」

2357

1237

1239

2411

2427

2451

2482

2524

2552

2580

2605

2628

第118話	「天使」	
第117話	「卒業」	
第116話	「学校」	
第115話	「花嫁」	
第114話	「撮影」	
第113話	「学友」	
第112話	「帰国」	
第111話	「邪気」	
第110話	「参加」	
第109話	「街並」	
第108話	「悪魔」	
第107話	「英国」	
第106話	「渡英」	

3845381437843740371136833657363236063565352535043473

「未来」		第119話
「エピソード」		番外編 邂逅！もう1人の牙狼編
「ENGAGE」		邂逅
「GAROP」		黄金
「PRIEST」		法師
「DARK」		暗雲
「HOP」		希望
3991		3977
3959		3937
3915		3902
3867		

混沌魔戒騎士編

第1話 「軽音!」

ここは桜ヶ丘にあるごく普通の一軒家。

普通なのはその見た目だけであり、その家の地下では日常的とはとても言い難い風景が広がっていた。

その部屋は明かりもない薄暗い部屋で、1人の少年が目を閉じ、鏢のない剣を構え、精神を集中させていた。

「……」

すると……。

ヒュン!!!

この薄暗い部屋のどこからかかなりの大きさの丸太が少年目掛けて飛んできた。

こんな物が少年の頭に直撃したらその命はないだろう。

しかし、少年は……。

「……!」

剣を一閃すると、大きな丸太は綺麗に真っ二つになっていた。

その直後、サイズは小さいが、ナイフのように鋭く尖った木たちが少年に迫るが、少年は剣を振って木たちを弾き飛ばした。

さらに、鋭い木たちが少年に迫るが、少年は剣を振るいながら木たちをかわしていた。そして、少年の頭上に最初に飛んできた物の2倍の大きさの丸太が迫ってきた。

「……はあっ!!」

少年の一閃により、巨大な丸太が真つ二つになった。

「ふう……」

少年は一息つくとその剣を青色の鞘に納めた。

少年の名前は月影統夜（つきかげとうや）。数年前に共学になった桜ヶ丘高等学校に通っている高校2年生である。

それは世を忍ぶ仮の姿であり、統夜は16歳という若さではあるが、古より來たる魔獸ホラーを狩る魔戒騎士の1人である。

というものの、統夜は魔戒騎士になってからまだ2年も経っておらず、現在はホラーを狩りながら一人前の魔戒騎士になるために精進している。

『統夜、今日の動きは悪くなかったぞ。その調子でこれからも励むんだな』

統夜の右手にはめてある銀色でドクロのような形をした指輪がカチカチと音を立てながら口を開いた。

この指輪は「魔導輪イルバ」。魔戒騎士である統夜をサポートする彼のパートナーである。

イルバも元はホラーであるため、ホラーを探知することが可能で、統夜はそのナビゲートをもとにホラーを捜索し、討伐する。

統夜は高校に通いながら魔戒騎士としての務めを果たしているが、彼が魔戒騎士であるということは同じ魔戒騎士と魔戒法師。そして、彼らを総括する番犬所や元老院の間しか知らない。

統夜は学校に友人はもちろんいるため、自分が魔戒騎士であることは隠して生活している。

『統夜。そろそろ支度をするんだ。今日も学校に行く前にエレメントの浄化をしなきゃいけないんだからな』

「ああ、わかってるよ」

統夜は修煉場と呼んでいる地下室を後にすると、階段を登り、リビングに到着した。

統夜はコップを取り出し、一杯だけ水を飲むと、コップを流しに置き、着替えのため自室に直行した。

現在は朝の6時半。普通の高校生であればこれくらいの時間なら朝食をとって着替えを済ませたら登校まで時間がある。

統夜がこんな早い時間に登校する準備をしているのは学校が遠いという理由ではない。

魔戒騎士の仕事は昼間はゲートと呼ばれる陰我が集中する場所の浄化を行い、夜は現れたホラーを討滅する。

統夜は昼間は学校があるため、エレメントの浄化と呼ばれるゲートの浄化は朝のうちに済ませ、不足分は同じ番犬所に所属している先輩騎士に任せている。

そしてホラーが出現するのは夜であるため、学校が終わるとホラー退治へと向かっていく。

ちなみに陰我というのは、人間の邪心から生まれるこの世の様々な闇のことである。

ホラーはその陰我に宿ったオブジェをゲートとして人間界に現れ、何かしら心の闇を抱えた人間に憑依し、人間を喰らうのだ。

統夜は手早く制服に着替えると、魔戒騎士としていつも身にまとっている「魔法衣」と呼ばれる赤いコートを羽織った。

魔法衣という物は魔戒騎士によって異なるが、黒い魔法衣が多く、他にも白の魔法衣なども存在する。

統夜の魔法衣は、赤いコートに、肩や背中には自身の紋章でもある四角の紋章がついている。

魔法衣を身にまとった統夜は学生鞆を手に取り、自身が使う剣である魔戒剣を魔法衣の懐にしまい、近くに置いてあったギターケースも魔法衣の懐にしまった。

魔法衣の裏地は魔界に通じており、魔戒剣を始めとしたアイテムを収納し、それを自由自在に出すことが可能になっている。

統夜はギターを背負ったままだと荷物になるので、ギターも魔法衣にしまい、学校が近くなると人目のつかない場所でギターを取り出していた。

出発準備が整うと統夜は家を出て、イルバのナビゲーシオンを頼りに桜ヶ丘のあちこちを移動しながら邪気がたまっている場所を次々と浄化はしていった。

1時間ほどエレメント浄化を行うと、そこでエレメント浄化を終了し、桜ヶ丘高校へと向かった。

その前に統夜はコンビニで朝食を購入し、朝食を食べながら学校へと向かった。

〈統夜 side〉

日課であるエレメント浄化を終えた俺は時間通りに桜ヶ丘高校に到着し、そのまま自分のクラスである2年3組の教室に向かった。

まあ、浄化の方は完璧に出来なかったけど、俺が所属している「紅の管轄」にはまだ先輩の魔戒騎士は存在するんだから、後は先輩たちに任せよう。

最近は騎士のみんなはすぐ協力的だからな…。

俺が魔戒騎士になるちよつと前に布道シグマが全ての魔戒騎士に破滅の刻印という刻印を植え付けて魔戒騎士を滅ぼそうとしたんだ。

まあ、それは黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙（さえじまこうが）さんの活躍でそれは阻止されたけどな。

その後、シグマはギャノンと呼ばれる強大なホラーを復活させ、そのホラーを討滅するのにも多くの魔戒騎士が協力したって聞いたな。

まあ、そんなことがあったんだから協力的にもなるよな…。

それでも中には未だに群れを嫌う魔戒騎士だっているんだけどな。

自分の教室に入った俺はクラスメイトたちと他愛のない挨拶や会話をかわしながら魔法衣を教室の後ろにかけ、そのまま自分の席についた。

そしてそのまま放課後まで何事もなく時間は過ぎていった。

今は昼間だし、ホラーが現れる時間帯じゃないからな…。学校にいる時間が俺にとつては一番平和な時間なんだよな…。

俺は掃除当番の仕事を終わらせるとすぐさま音楽準備室へと向かった。

そこは軽音部の部室であり、俺は軽音部に所属している。

魔戒騎士としての使命があるから入学当初は部活はしないつもりだったんだけど、ある日廃部寸前と話を聞いていたので音楽準備室の前でイルバと話をしようとしたところを見られちゃったんだよな。

……まあ、イルバが喋る前だったからばれなかったけど…。

音楽準備室の前にいるということで、入部希望と勘違いされてそのまま音楽準備室に連行されたんだよな…。

もちろん入部希望とするつもりはなかったからそれは伝えただけで、熱心な勧誘に根負けしてしまい、とりあえずという形で軽音部に入ることになった。

番犬所も部活に入ることをあっさりと了承してくれた時にはびつくりしたよな…。

番犬所が許可しなければ辞めるなり幽霊部員になるなり対策は出来ただけだよな…。

部活をやってるから、昼間のエレメント浄化は出来ないけど、指令だって、ホラー退治だってちゃんとやってるからな。

音楽準備室に向かう途中、見知った顔である小柄でツインテールで、ギターケースを背負っている少女を発見した。

「…よう、梓」

「あつ、統夜先輩……」

俺を先輩と呼んでくれるこの子は中野梓（なかのあずさ）。小柄でツインテールが特徴の女の子だ。

梓は今年桜ヶ丘高校に入り、つい最近あった新入生歓迎会で俺たち軽音部のライブを聞いて俺たちの演奏に感動したとのことで最近軽音部に入ってくれた。

「どうしたんだ？ずいぶんと浮かない顔をしてるけど」

俺はひよこつと梓の顔を覗き込むと、梓は少しばかり憂鬱そうな表情をしていた。

「あつ、いえ……。この前先輩たちにあんなに色々言っちゃったじゃないですか……。だからちよつと行きにくいなあつて思っちゃって……。」

「ああ……なるほどね」

梓が初めて軽音部の練習に参加したのが数日前なんだけど、新入部員が来たつていうのに俺たちは紅茶を飲みながらダラダラしていた。

これだけ聞くとなんだこれって思うかもしれないけど、軽音部は練習よりもティータイムの方がメインになっちゃってるからな……。

これには俺も戸惑ったけど、俺もそんなまったりとした空気に毒されたみたいだ。

それでも今までのままじゃマズイと思って俺は練習するぞと言っただけだな……。

それでもダラけてるもんだから梓が困惑しちやっつてその後思わずキレちゃったんだ

よな……。

その時、色々言ってたから梓はその時のことを気にしてるんだと思う…。

「梓の言ってたことは正論なんだし、あんまり気しなくてもいいと思うけどな。それに、あいつらのことだからきつと気にしてないと思う」

まあ、それはそれで問題な気もするが、部の空気が悪くなるよりかはマシだなと俺は解釈した。

「は、はあ……」

「とりあえず、一緒に部室に行こうか」

「は、はい」

俺は不安げな梓を励ますとそのまま一緒に音楽準備室へと向かった。

音楽準備室に到着するなり俺と梓はすぐに中に入り、すぐ目に飛び込んできたのは……。

……紅茶を飲みながら談笑をしている3人の女の子たちだった。

「ぜ、全然動じてない……」

「あ、あいつら……」

いつもと変わらないだらけぶりを見てただただ呆れることしか出来なかった。

このだらけている子たちは一応軽音部の部員だ。

まず、茶色の髪にヘアピンをつけている女の子が平沢唯（ひらさわゆい）。担当楽器は俺や梓と同じギターで、甘いものと可愛いものが好きな女の子で、超がつくほど天然なところがある。

そして黄色いカチューシャが特徴的なのが田井中律（たいなかりつ）。担当楽器はドラムで、こんなんでも一応軽音部の部長でもある。

明るくて元気一杯などころはいいんだけど、いつもアホなことばかりしたり生徒会に出さなきゃいけない申請用紙を出し忘れたりと少々頼りないところがある。

最後に金髪のように明るい髪に太い眉毛が特徴的なのが琴吹紬（ことぶきつむぎ）。通称「ムギ」で、担当楽器はキーボードだ。

いつもおっとりしていて一緒にいるだけでこちらの心も暖かくしてくれるそんな女の子だ。

この軽音部はティータイムがメインになっちゃってるが、ティーセットは全部ムギが持ってきている。

軽音部に入ってもう一人ベース担当の子がいるんだけど、まだ来てないようだ。

まあ、それはともかくとして……。

《相も変わらさずだらけまくってるな。このお嬢ちゃんたちは》

（ああ、そうだな……）

イルバが思ったことをテレパシーで代弁し、俺は苦笑いをしながらテレパシーで返事をした。

学校にいる間はイルバは喋れないので、会話をする時はこのようにテレパシーで会話をしている。

「お前ら……」

俺は呆れながら3人に声をかけた。

声かけないと気付くまでダラダラしてそうだしな……。

「あつ、やーくん!それに梓ちゃん!」

俺と梓の存在に気付いたのか唯たちは慌てふためいていた。

ちなみに「やーくん」というのは俺が唯にそう呼ばれていて、本人曰く「とうや」だから「やーくん」らしい。

……まあ、初めは違和感だらけで慣れなかったけど、1年もそう呼ばれ続けたらさすがに慣れるよな……。

「いつ、今から練習するところだったんだよ!?本当だよ!」

唯は慌ててギターを取り出し、律は慌ててドラムスティックを取り出していた。

アハハ……。慌ててそんな事言ってもねえ……。

《全然言葉に説得力がないな》

(ああ。俺もそれは思ったよ)

再びイルバが的を得たツツコミをいれていた。

そんな俺たちを後目に唯はどうにかギターの演奏をしようとしたんだけど……。

「あうう……。ケーキ食べないと力が……」

ちよつと弾いただけでその場に座り込んでしまった。

「はい、唯ちゃん」

それを見かねたムギが一口分のケーキをフォークに刺し、そのケーキを唯に食べさせた。

すると……。

——ジャンガジャンガジャンガジャンガジャン!!!

先ほどとはうって変わり、唯は見事な早弾きを披露した。

《相変わらず単純だな、このお嬢ちゃんは》

(ああ……。ケーキを食っただけでここまでやるとは……)

唯のやつはかなりの甘党だからな……。

そこは本当に零さんといひ勝負だよ……。

零さんこと涼邑零(すずむられい)。銀牙騎士絶狼(ゼロ)の称号を持つ魔戒騎士で、

牙狼の称号を持つ鋼牙さんに次ぐ実力の持ち主である。

零さんには魔戒騎士として色々教わったけど、零さんは今どうしているんだろ？

最近は会ってないけど、この間軽音部の話をしたら「俺も遊びに行きたい！」って凄く羨ましがってたっけ……。

まあ、あの人のことだ。いつものようにホラーを狩りまくってるんだらうな…。

今度会ったらまた軽音部の話をしてあげるか……。

「す、す……い……」

俺が零さんのことを考えている間、梓は唯の早弾きに啞然としていた。

そして唯はそんな梓を見てドヤ顔を決めていた。

……普段はこんなことは出来ないくせにドヤ顔するなよなあ…。

俺はジト目で唯を睨むと、唯はそんな俺を見て首を傾げていた。

「…………ごめん、遅くなった」

すると音楽準備室の扉が開き、背の高い黒髪の女の子が中に入ってきた。

彼女は秋山滯（あきやまみお）。担当楽器はベースで、軽音部の中では一応常識人の類に入る。

見た目だけ言えば背が高くてスタイルも良くて大人っぽいんだけど、超がつくほどの恥ずかしがり屋で、痛い話と怖い話が苦手である。

そんなギャップがなければ邪美さんや烈花さんみたいに芯が強く心身ともに大人な

女性って感じになるんだけどな…。

邪美（じやび）さんと烈花（れつか）さんは魔戒騎士をサポートする魔戒法師であり、その実力は魔戒法師の中でもトップクラスである。

俺もこの2人には相当厳しくしごかれたよな…。まあ、だからこそ今の俺があるんだけど……。

俺を含めたこの6人が軽音部のメンバーである。

メンバーが全員揃ったところで俺たちは練習ではなくティータイムに入ろうかという雰囲気になっていた。

……ま、そんなことだろうとは思ってたけどな……。

「…あつ、そうだ。部室の入り口にこんな物が落ちてたんだけど何だろう、これ？」

そうやって濡が見せたのは俺たち魔戒騎士にとっては馴染みのある赤い封筒であった。

「濡、それは俺のなんだよ」

「そうなのか？ ほら、今度は落とすなよ」

そう言いながら濡は赤い封筒を俺に手渡した。

（……学校で指令書を受け取るのは初めてだな……）

この赤い封筒は番犬所からの指令が入っている封筒で、魔戒騎士はこの指令をもとに

ホラー退治を行うのである。

「統夜、それつてもしかしてラブレターか?」

「おお! やーくんモテモテだ!」

俺宛の封筒とわかったのか律と唯がニヤニヤしながら茶々をいれてきた……。

つたく……。なんでそうなるかなあ……。

「そんなんじゃないって。それに、ラブレターにしちや派手すぎだろ、これは」

「まあ、確かにこんな派手な封筒にラブレターは入れないか」

「ラブレターじゃなかったらそれは何なの?」

「悪いけど、それは秘密だ」

……さすがに本当のことは言えないからなあ……。

「来たばかりで悪いんだけど、用事が出来たから俺は帰るな」

俺は回れ右をするとそのまま音楽準備室を後にした。

「え? ちよつと統夜?」

…なんか濡に引き止められたのに聞かずに出て行くのは後ろめたいけど、騎士の勤めを果たすのが最優先だからな……。

それはそのまま学校を後にすると人目のつかないような場所に移動すると、手に持つていた魔法衣を羽織り、魔法衣からライターを取り出した。

このライターはもちろん普通のライターではなく、魔導火を放つ魔導ライターで、俺たち魔戒騎士の必需品である。

俺は手に持っていた指令書を魔導ライターで燃やした。

普通の人が見たらあまりに異様な光景ではあるけど、こうしないと指令書の中身が見れない仕組みなのでこのようなことを行っている。

指令書は魔導火によって燃えると魔戒語で書かれた文字が浮かんできた。

「……この街に小さいが、複数の陰我あり。ただちにこれを殲滅せよ」

指令内容を音読すると、魔戒語の文字は消滅した。

内容的には恐らく素体ホラーであるのは間違いないさそうだけど……。

「複数のつてことはホラーが群れてることか？ずいぶんと珍しいことだけど」

ホラーは一つのゲートに対して一体なので、ホラーが複数出現するケースというのは稀なケースなんだよな。

『まあ、確かに珍しいな。相手は恐らく素体ホラーだろうが、油断はするなよ。何体いるかまではわかってないんだからな』

イルバの言う通り油断は出来ないな。素体ホラーであれば、生身でも倒せるが、何体出てくるかはわからないから少々面倒でもある。

「そうだな、肝に銘じておくよ。相手が誰であれ、全力で倒す。ホラー相手に情けは無用

「だろ?」

『まあ、わかっているならそれでいい』

そう、俺は魔戒騎士。素体だろうと上級ホラーだろうと人を守るために全力で斬る。ただ、それだけだ。

複数のホラーが散らばる前にさっさと見つけてぶっ倒さないとな…。

「行こう、イルバ」

『了解だ、統夜』

俺はギターを魔法衣の中にしまうと、ホラー捜索のために行動を開始した。

く3人称 side く

桜高を後にした統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラーの出現ポイントを探索していた。

「……イルバ、ここか?」

『ああ。小さいが複数の邪気を感じるぜ』

イルバが探知した場所にたどり着いた時、既に日は暮れており、夜になっていた。

統夜はどこからホラーが現れるかわからないため、いつでも魔戒剣が抜けるように周囲を警戒していた。

『……！統夜！上だ！』

上空にホラーの気配を察知したイルバがすぐさま統夜に伝えると、統夜は上を向いた。

すると、この世のものとは思えない怪物……ホラーの中でも一番脆弱な素体ホラーが現れた。

統夜は素体ホラーの奇襲攻撃ともとれる攻撃を無駄のない動きでかわした。

「へへっ、奇襲とはやってくれるじゃねえか……！」

統夜はニヤリと笑みを浮かべると、魔戒剣を抜き、構えた。

「……くらえ！」

統夜はすぐさま魔戒剣を一閃すると、斬撃一つで素体ホラーを真っ二つにした。

「……よし、まずは一体！」

『統夜！次が来るぞ！』

イルバがさらなるホラーの存在を伝えると、先程と同じ素体ホラーが今度は3体も出現した。

「へえ、こいつら本当に群れてるみたいだな」

『統夜。こいつらが散らばったら討伐が面倒だ。ここで一気に倒すぞ』

「ああ!もちろんだ!」

統夜は魔戒剣を構えると3体の素体ホラーが襲いかかってきた。

統夜は素体ホラーたちの爪による攻撃を身を翻したり、バク転のような動きをしたりして、華麗とも言える身のこなしでことごとく攻撃をかわしていった。

「イルバ、敵はあとこいつらだけか?」

『ああ。こいつら以外邪気は感じないぜ』

統夜は攻撃を回避しながらイルバに現状の敵戦力を聞いていた。

イルバはホラーの気配を感知することができるため、イルバが目の前の3体以外の気配を感じないとすると、これ以上ホラーはいないということになる。

「了解した!」

統夜は戦力の確認を終えると後方に大きくジャンプをし、3体の素体ホラーと距離をとった。

「さて…。ここは「鎧」を使わずに行かせてもらおう!明日も学校があるから…。一気に決めてやる!」

改めて魔戒剣を構え、精神を集中させた統夜は再び3体の素体ホラーに斬りかかっ

た。

「っ！」

統夜は素体ホラーたちの攻撃をかわしながら距離を詰めていった。

「まずは一体……もらった！」

素体ホラー一体の爪による攻撃を身を翻してかわすのと同時に、統夜は魔戒剣を一閃し、その素体ホラーを一撃で真つ二つにした。

「よしーあと2体だ！」

統夜が素体ホラーを斬り裂き、地面に着地すると同時に、素体ホラー2体が左右から一斉に統夜に襲いかかってきた。

「……へへっ、甘い！」

統夜は大きくジャンプをし、2対の同時攻撃を回避した。

すかさず1体の素体ホラーが飛翔し爪による攻撃を仕掛けるが、統夜はその素体ホラーに蹴りを放ち、それを受けた素体ホラーは思い切り地面に叩きつけられた。

残りの1体も同じように爪による攻撃を仕掛けるが、統夜はそれを降下しながら回避し、その勢いのまま先ほど地面に叩きつけた素体ホラーに向かって魔戒剣を振り下ろし、そのまま切り裂いた。

「残りは一体！一気に決めるぞ！」

残り一体となった素体ホラーは未だ上空にいるが、すぐさま降下し、爪による攻撃を仕掛けた。

しかし、それは軽々とかわされてしまった。

「遅い! そんな攻撃で俺を殺せると思うなよ!」

統夜は先ほどから常人の動きとは思えないアクロバティックな動きでホラーの攻撃をかわし続けているにも関わらず、息一つ乱していなかった。

統夜は魔戒騎士として一般人では想像もつかないほど厳しい修行を乗り越えているため、それ程の体力があるのは当然である。

素体ホラー一体を相手にばてていては他のホラーには勝てないだろう。

統夜はトドメを刺すべく魔戒剣を一閃するが、その一撃はそれとしまい、素体ホラーの左腕を斬り落とすのみとなってしまった。

「……ちっ! 仕留め損ねたか」

今の一撃で全てを終わらせる予定だった統夜は予想外の出来事に舌打ちをしていた。

『統夜、今のは踏み込みが浅いぞ。奴の腕を切り落とせたのは運が良かったと思え』

「イルバ! 戦いのダメ出しは後にしろ!」

戦闘中にダメ出しを入れるイルバに統夜はもつともなツツコミをいれていた。

そんなやり取りの間、素体ホラーは腕を切り落とされた痛みから苦しんでいる様子で

あった。

「でも結果的には奴の動きは鈍くなったんだ」

統夜は魔戒剣を力強く握りしめていた。

「……これで終わりだ！」

統夜の力強い一線が素体ホラーを真つ二つにし、今度はうまく仕留めることに成功した。

「……さて、これで一丁あがりだ！」

統夜は魔戒剣を青い鞘に納めると、それを赤いコート…魔法衣の懐にしまった。

「さてと……。イルバ、他にホラーの気配はないな？」

『ああ、今仕留めたので全部だ』

「よし……。これでお仕事完了だな。イルバ、帰ろうぜ」

『ああ。……それより統夜。さっきの戦いだが……』

ホラーを殲滅し、指令書の仕事をこなした統夜は早々に帰路についた。

しかし、その帰り道はイルバによる戦いのダメ出しが出され、統夜は少しばかりげんなりとしていた。

……続く

次回予告

『やれやれ……。軽音部があまりにもだらけているせいであのちっこいお嬢ちゃんは何か思いつめているようだな……。これは陰我が出そうな危険な感じだぜ……。次回、「騎士!」白銀の刃がその輝きを見せる!』

第2話 「騎士」

「ここは桜ヶ丘某所にある公園。

「ここで現在、一組のカップルが現在進行形で別れ話をしていた。

「なあ……なんでだよ！お前、俺のことが好きだって言ってたじゃないか！」

男は公園に呼び出されるなりいきなり女に別れ話を切り出され、男は別れたくない一心でこう食いついていた。

「ごめんねえ。あなたとは遊びだったのよ。私、本当はあなたのこと好きじゃないし、あなたはどうしてもって言うから付き合ってたあげたのよ」

女は冷めた表情であまりにも残酷なことをさらつと言ってしまった。

「そんな……。お前が欲しいって言ってた指輪、プレゼントしたばかりだつてのに……」

男は今言った指輪の他にも様々なものをプレゼントしており、女に相当な金額を買い取ったことがわかる。

「あんたのそういうところ、重いよ。それじゃあね」

女はそれだけ言うと言を返し、歩き始めた。

それと同時に男はガクツとその場で項垂れていた。

「ちくしょう……女なんてくそくらえだ！女なんて……」

男は一方的な別れ話のせいで女性に対して憎しみに近い不信感を抱いていた。そして女なんていなくなってしまうばいいと強く願ってしまった。

その時……。

—— 貴様、それほど女が憎いか……

男の脳裏に突然謎の声が聞こえてきた。

男は別れ話のショックからかその声に不信感を抱くところか驚くことも怯えることもなく「ああ……」と素直に返事をしてしまった。

—— それほど憎いのなら壊してしまえばいい。我が貴様にその力を授けてやろう

……

「………本当か？」

—— ああ。貴様が払う代償はたった一つ……！！

この声が聞こえてきたのと同時に男の前にこの世のものとは思えない怪物が出現し、男は驚くが、それより先にその怪物……ホラーが口を大きく開けて襲いかかってきた。

そのホラーは黒い帯のような姿になると、そのまま男の体の中に入ってしまった。

「ぎゃあああああああああああ……！！！！」

男はこの世のものとは思えないほどの断末魔をあげると、それを聞いてしまった女は

すぐさま足を止めた。

「ひっ!? な、何!? 何なのよ!？」

女は恐怖に支配されながらも振り返ると、先程別れを告げた男がゆつくりとこちらに近づいていった。

「な、何よあんた! まだ何か用なの?」

男は返答することなく、さらに女に近づいた。

「ちよ、ちよつと! 返事くらい……しなさいよ!」

男の様子が先程とは打って変わっていたので、女は恐怖に怯えた表情で男の顔を見ている。

「この世の女は……全て消す……」

男はそう言うのと女の肩をガツシリと掴んだ。

「ちよ!?! は、離しなさいよ!」

女は急に肩を掴む男に反抗し、男の手を振り払おうとするが、男と女では力の差があるからか男の手を振り払うことは出来なかった。

男は口を大きく開けると、女の体はまるで吸い込まれるように男の体の中へと消えていった。

「ぎやあああああああああ!!!」

女は大きな悲鳴をあげ、一切抵抗することが出来ず、男に文字通り「喰われ」、その生涯を終えることになった。

ホラーに憑依された男は自分を振った女を喰らい、女の手を持っていたバッグだけが無残にも残っていた。

「まだだ……まだ足りない……」

これだけ言うとホラーに憑依された男は夜の闇に消えていった。

く 統夜 side く

数体の素体ホラーを狩るという仕事をこなした翌週、俺は久しぶりに軽音部に顔を出していた。

学校には通っていたものの、放課後になるとエレメント浄化に出かけていたので、部活には顔を出していなかった。

まあ、これは今に始まったことではなく、俺はけっこう部活を休んでエレメントの浄化や先輩騎士との鍛錬を行っていたからな……。

俺が1年生の時も一週間部活を休むとかけっこうあつたんだよな……。

とりあえず今日は朝のうちにある程度エレメント浄化を終わらせたし、昨日番犬所で魔戒剣の浄化はきちんとしたから、今日はちやんと部活に参加出来そうだな。

まあ、指令が来なければ……の話だけどな。

「悪い、遅くなった」

俺は挨拶をして音楽準備室の中に入った。

「あつ、やーくん！」

「おつ、統夜。やつと来たな」

「悪いな、しばらく部活に顔を出せなくて」

俺は部室に入るなりしばらく部活を休んでいたことを詫びた。

「最近部活に顔を出さないから心配したぞ。教室を覗いてももう帰った後だったし」

俺は軽音部のみんなとはクラスが違うからな…。

「ねえ、統夜くん。アルバイトでもしてるの？ けっこう休むこと多いわよねえ」

「ああ……えつと……」

俺はムギに言われたことの言い訳を必死に考えていた。

まあ、バイトといえばバイト……なのかな？ 超危険な仕事ではあるが。

《おいおい……魔戒騎士の役目はアルバイトじゃないぞ》

（イルバ……！お前は少し黙ってろ！）

急にイルバがテレパシーを送ってくるもんだから思わずイルバを睨んじまったじゃねえか……。

これじゃ目が泳いでて怪しいって思われるぞ……。

「?やーくん?」

「あ、ああ……」

俺は唯の方に視線を向けると俺以外の空席に違和感を感じた。

「あれ?とところで梓は?まだ来てないのか?」

「うん……」

梓がいらないから梓のことを聞いたんだけど、何故か滯は浮かない表情を浮かべていた。

「あずにゃん……最近来ないんだよね……」

おいおい……「あずにゃん」って何だよ……。

……つと、それを考えるのは後にするか。

「梓だけじゃなくお前も来ないからすごく心配だったんだぞ」

そうだったのか……。

魔戒騎士としての使命を果たすためとはいってもみんなにかなり心配をかけてたんだな……。

「ごめんな、心配かけて。今はまだ話せないけど、いつか必ず俺がしょっちゅう部活を休む理由をちゃんと話すから」

「わかった…。今は聞かないからさ、いつかちゃんと話してくれよ?」

「ああ、わかってる」

こうしてしばらく部活を休んでいたことを謝罪し、梓が最近部活に来ていないという事を聞いた俺はそのまま鞆や魔法衣といった荷物を長椅子に置いて、ギターを壁に立てかけると、自分がいつも座っている席に座った。

このままティータイムが始まったので、俺はなぜ梓に「あずにゃん」なんていうあだ名がついたのか唯に聞いてみた。

どうやら俺がホラー狩りに出かけている間に顧問の山中さわ子先生が梓に無理やり猫耳をつけさせたらしく、その姿が猫っぽいところから「あずにゃん」というあだ名がついたみたいだ。

…もつとも、そう呼んでるのは唯だけみたいだけだな。

それにあの先生は…。相変わらずだよな…。

入学当時は優しくしておしとやかな先生だと思ったのに実際のところはその真逆なんだもん…。

それにみんなにやたらコスプレ衣装を強要してくるし…。

俺も色々着せられて参ってるんだよなあ……。

俺は唯の話を苦笑いしながら聞いていた。

だけど、それって梓が来なくなつた事とは関係ない話だよな。

あまりにも俺たちがだらけまくってるからそれに嫌気をさしたとか？

梓、ずっと戸惑つてたもんな……。

……明日にでも梓に話を聞いてみよう。

そういう負の感情は陰我を生み出しかねないからな。

そこをホラーにつけこまれてホラーに憑かれるなんてことも有り得る話だ。

もしそうなら俺は梓を斬らなくちゃいけない。

大事な後輩を斬るなんて事はしたくないからな。最悪な事態だけは避けないと……。

俺は梓が部活に來ない問題をどうにか自分の力で解決させようと心に決め、ゆつくり

と紅茶を飲んでいた。

少しだけティータイムをした後、すぐさま練習を行うことになった。

まあ、こんな状況だし、いつも通りにはいかないもんな。

俺も久しぶりにギターの練習をしたかつたし、ちょうど良かったよ。

この日は途中で指令書が來ることもなく、最後まで練習に参加することが出来た。

まあ、指令がある可能性もあるし、番犬所には顔を出すつもりだけどな。

練習が終わり、俺たちは帰り支度を早々に済ませてみんなで学校を後にした。

最近は一人でいることが多いからみんなが帰るのはすごく久しぶりだよな…。

久々のみんなとの下校は楽しかったんだが、番犬所の近くに差し掛かると俺は足を止め、みんなも足を止めた。

「……………やーくん、どしたの?」

「悪いみんな。今日はここで」

「あれ? 統夜の家ってこつち方向じゃないよな?」

「ああ。この後ちよつとな……………。悪い、またな!」

みんなの追求を避けるため、俺は逃げるようにみんなと別れた。

……………ふう、危ない危ない。毎回毎回騎士の秘密を隠すための言い訳を考えるのに必死だわ…。

『……………おい、統夜』

みんなが完全に見えなくなったところでイルバが口を開いたので俺は足を止めた。

「? どうした、イルバ?」

『お前、さつきあの嬢ちゃんたちに部活を休んでる理由をいずれ話すと言っていたが、騎士の秘密を話すわけじゃないだろうな?』

「ああ、その話ね。それはあの場を乗り切るための苦し紛れの言い訳だよ。必要以上に

騎士の秘密は話せないってのは俺もわかってるからさ。…まあ、みんながもしホラーに襲われるなんてことがあれば話すかもしれないけどな」

ああでも言わないと絶対理由を追及されるからな…。

苦し紛れだっつのはわかってるけど、ああ言うしかなかったんだよ。

『わかってるならいいのだが…。まあ、嬢ちゃんたちがホラーに襲われないことを祈るしかないな』

「ああ、そうだな」

イルバの心配が杞憂に終わったところで俺は再び歩き出した。

少し歩くと行き止まりに差し掛かるのだが、俺はイルバをそこにかぎすと、壁に大きな空間が出現し、俺はその中に入っていった。

俺が入った空間は番犬所に繋がっており、俺はそのまま自分の管轄である紅の番犬所に直行した。

番犬所の中に入ると他の騎士や法師はおらず、いたのはこの番犬所を総括するイレスという神官と、その付き人の秘書たちであった。

イレス様は見た目は俺と同じ年くらいだけど、実際は俺よりも遥かに長い時を生きている人である。

「来ましたね、統夜」

「はい、イレス様」

俺は深々と頭を下げてイレス様に挨拶をした。

近くに狼の像があり、普段はそこで魔戒剣の穢れを浄化するんだけど、昨日浄化は済ませたからな…。

「統夜、さつそくですが指令です」

イレス様がこう宣言すると、付き人の秘書が俺が赤い指令書を渡してきたので、俺は魔導ライターを取り出して指令書を燃やした。

すると、魔戒語で書かれた文字が飛び出してきた。

「えつと…『人の命を育むものを喰らうホラーあり。直ちにこれを討ち払われたし……』」

俺が指令を読み上げると魔戒語の文字が消滅した。

「命を育むものつてまさか……！」

「ええ。ホラーに狙われているのは女性です。すでにもう4人の女性が行方不明になっています」

もうそんなに犠牲者が出ているのか……！

それも女食いのホラーか……。早急に片付けないと唯たちに被害が及ぶ可能性があるぞ……。

「わかりました。早急にそのホラーを討滅します」

俺は神官であるイレズ様に敬意を払うようにしっかりと頭を下げた。

「頼みましたよ、統夜。……それはそうと学校の方はどうですか？」

イレズ様は続いて学校のことを聞いてきた。

俺が桜高に入ったのも軽音部に入れたのもイレズ様の力添えのおかげだといつても過言ではない。

俺が魔戒騎士になりたてで中3の頃、俺は普通の中学生みたいに高校に進学したり就職したりなんて一切考えていなかった。

魔戒騎士として精進し、魔戒騎士最高位である牙狼の称号をもつ冴島鋼牙さんのような騎士になりたかったからである。

そんな中、進学を薦めてくれたのがイレズ様だった。

イレズ様は人界の学校生活……特に高校生活というものにとっても興味を持っていて、俺に高校生になって欲しいと言ってくれたのである。

中には魔戒騎士や魔戒法師としての素性を隠すために仕事をしている人もいるとは聞いたことはあるけど、それもごく少数だという事は知っていた。

仕事や学校に行く暇があるなら昼間のエレメント浄化をしっかりとやりやれと言われても何も言えないからな。

そんな中俺が高校に行くのと全ての番犬所を総括する元老院にも話を通してくれたのがイレス様だった。

……あの人、元老院の神官であるグレス様の娘だからな……。だから多少の無茶なら話を通せるんだよな…。

さらにこの紅の番犬所から一番近いという理由で、近年共学化になったばかりである桜ヶ丘高校を薦めてくれたのもイレス様だった。

こうして俺は桜高に入学し、成り行きで軽音部に入った。

そのことをすぐイレス様に報告し、部活など入らない方がいいと言われればすぐにも退部するつもりだった。

しかし、イレス様は意外にもあつさりと部活の話をした承してくれた。それで、エレメントの浄化も必要最低限で良いとさえ言ってくれた。

まあ、指令がある場合は部活を休まなきゃいけないけどな……。

とにかく、イレス様のおかげで今の俺がある。だからイレス様にはすごく感謝してるんだよな…。

「はい。学校の方はやはり楽しいです。ですが……」

「ですが？」

「軽音部に後輩が1人入ったのですが、彼女は軽音部のだらけきった空気に馴染めてお

らず悩んでるみたいなんです。それで、最近は部活にも顔を出していません……」

俺は部活の近況をイレス様に報告した。

軽音部が練習よりもティータイムが多いことももちろん報告はしているので、イレス様も軽音部は楽しそうな部活だという認識をしていた。

「そうですか……。それは由々しき問題ですね……。統夜、ホラー討伐をしながら彼女の問題も解決してあげるので。それだけ彼女が思い詰めてるっていうのが問題ですかね。その負の感情が陰我につながりかねません」

「ありがとうございます！そちらの方も全力を尽くします！」

俺はイレス様に一礼すると、番犬所を後にした。

……さて、もうすぐ夜になる。行動開始だな。

番犬所を出て先程の行き止まりまで戻ったところでイルバのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を開始した。

）梓 side ）

……こんばんは、中野梓です…。

私は新歓ライブで軽音部の演奏に感動し、軽音部へ入部しました。

ですが、実際入ってみると、そこは真面目にやってる部ではなく、先輩たちに振り回されながら、ただただ戸惑うばかりでした。

……そして、わからなくなっただんで…。

どうして軽音部に入ろうと思ったのか、そしてどうしてあれほど軽音部の演奏に感動したのか…。

その考えがまとまらず、私は気付けば部活を何日も休んでいました。

そして部活から遠ざかって数日後の夜、私は近くのライブハウスに来ていました。

軽音部がダメなら外バンに入るのもありかな？って思ってしまったからです。

私はライブハウスの中に入り、何組ものバンド演奏を聴いていたんだけど…。

…どのバンドもやっぱり上手い…。

だけど何でだろう…。先輩たちの演奏以上に感動出来ない…。

私……。さらにわからなくなっていた。

何で……。あの時の演奏に感動したんだろう…。

わからない……。わからないよ…！

私は気付けばうつすらと涙を流していた。

今日のライブが終わり、私は重い足取りのまま家路についていた。

ライブハウスから数分歩いて人がいなくなつたと思われたその時だった。

「君……大丈夫かい？」

20代前半くらいの男の人が私に声をかけてきました。

「えっ……？」

私は突然の出来事に困惑していました。

「僕もライブハウスにいたんだけど、君、ずっと浮かない顔をして演奏を聴いていたでしょ？それが気になってね」

私……。確かにずっと考え事をしながら演奏を聴いてたかも……。

それだけひどい顔だったのかな……？

「何かあったのかい？僕でよければ相談に乗るけど」

「えっ……？」

何か優しいような人ではあるけどこれってナンパ……だよな？

これはついていけない方がいいよね……。

「とりあえず飯でも食いながら……」

「悪いけど、その話はちよつと待った！」

私が男の人に断りをいれようとしたその時、違う男の人が話に割って入って来たんだけど……。

「統夜……先輩？」

その人はあまり見慣れない独特な赤いコートを羽織った統夜先輩だった。

「な、何だよ君は！」

「俺？俺はこの子が入ってる軽音部の先輩だよ。悪いけど、後輩の相談に乗るのは先輩の仕事だから」

統夜先輩は私をナンパしようとしている男の人から守ってくれた。

「……………」

男の人は統夜先輩の堂々とした態度に息を飲んでいた。

「それよりも……」

こう前置きすると、統夜先輩はコートからライターを取り出すと、それに火をつけた。えっ……？何をやっているの？統夜先輩……。

そのライターの火は男の人の瞳を照らすとその瞳から不気味な文字のようなものが浮かび上がってきた。

えっ……？それは……何なの？

「……………ビンゴ♪」

び、ビンゴって何がビンゴなの……………？

唐突な展開についていけないよ……！

すると先程まで優しい表情の男の人の表情が変わり、すごく怖い表情になっていた。

「貴様……………魔戒騎士か」

「魔戒……………騎士？」

私には男の人が言っている言葉が理解できなかつた。

何？何なの？魔戒騎士って……………。

やっぱりこの展開に頭がついていかないよ！

「……………梓、何してる……………」

「えっ？」

「逃げろ」

統夜先輩のその声はいつものような優しい声ではなく、低くてドスの効いた怖い声だった。

「えっ……………？でも……………」

「早く!!」

統夜先輩が怒鳴りだしたと思ったその時、男の人が衝撃波みたいな何かを放って、統

夜先輩が吹き飛ばされてしまった。

「統夜先輩！」

私は慌てて統夜先輩のもとへと駆け寄った。

「大丈夫ですか!?!統夜先輩！」

「梓、何やってるんだよお前。俺は逃げろって言ったよな」

「えっ?でも先輩が……」

「さっさとしろ!死にたいのか!」

先輩の剣幕にはビックリしたけど、私は先輩の言うことを聞くことしか出来ず、その場を離れようとしたけど、先輩が心配なので安全な場所まで離れて様子をうかがっていた。

統夜先輩……死なないで……!!

く 三人称 side く

「ちっ、梓のやつ。逃げろって言ったのに……」

梓が遠くから様子をうかがっているのを見た統夜は思わず舌打ちをしていた。

(とりあえず仕方ないな……。なるべく奴を梓から遠ざけないと。梓にホラーの返り

血を浴びさせるわけにはいかないし)

統夜は魔法衣の懐から青い鞘に納められた魔戒剣を取り出すと、それを抜いて構えた。

すると梓に声をかけた男の瞳が白くなり、そのまま異形の怪物へと姿を変えていった。

『統夜！奴はアレグレウス、女食いのホラーだ！』

「アレグレウスって確か鋼牙さんが過去に倒したアングレイの派生種だったよな？」

『ああ。だから油断するな！』

統夜が相対しているホラーはアレグレウス。

以前牙狼の称号を持つ冴島鋼牙が封印したホラーであるアングレイ同様女性ばかり捕食するホラーである。

アングレイはトラップを用いて冴島鋼牙を翻弄したりしていたが、アレグレウスはトラップを用いる戦術は行わない。

しかし、その戦闘力はアングレイ以上だと言われている。

イルバの警告を聞いた統夜はアレグレウスを少しでも梓から離すために体当たりを仕掛け、アレグレウスを少しだけ吹き飛ばして距離をとった。

アレグレウスはすぐさま自身の爪で統夜を切り裂こうとするが、統夜はかろうじて爪

による一撃をかわした。

反撃と言わんばかりに統夜は魔戒剣を一閃するが、その一撃は受け止められなかった。

「……ちつ、こいつ思った以上に体が硬いな……」

統夜の一撃を受け止めたアレグレウスは強烈なパンチで統夜を吹き飛ばすが、綺麗に受け身を取り、通れることなく着地した。

着地の瞬間を見逃さなかったアレグレウスはすぐさま連続で爪による攻撃を繰り出す。ことごとく統夜にかわされるか魔戒剣によつて弾かれ、統夜に傷をつけることは出来なかった。

続けてアレグレウスは尻尾による攻撃で統夜を吹き飛ばそうとするが、それより先に統夜は大きくジャンプをして尻尾による攻撃をかわした。

その直後に蹴りを放ち、アレグレウスを少しだけ遠ざけて距離をとった。

「……よし、こいつの動き……見切った!」

統夜は今までの戦いでアレグレウスの動きを完全に見切ったようだった。

「貴様の陰我……この俺が断ち切る!」

アレグレウスに対してこう力強い宣言をした統夜は魔戒剣を高く突き上げ、さらに空中で円を描いた。

すると、その部分だけ違う空間となり、統夜はその空間から放たれた光に包まれた。そして……

ガチャンガチャン！と金属音が聞こえ、統夜の体は白銀の鎧に包まれた。

狼のような顔に頭部には一本の角。体は眩い光を放つ白銀の鎧で、腰の部分などには自分の魔法衣にもあつた四角のエンブレムが存在する。

さらに統夜の左手にはめられたイルバはまるで鎧と一体化したかのように左手にくっついていた。

そして統夜の手に持っていた魔戒剣もその姿を変え、鐔のなかつた剣が中心に四角の紋章のある鐔が出現し、刀身も姿を変えた。

この剣は皇輝剣（こうきけん）と呼ばれる専用の剣に変化していた。

こうして統夜はこの世のものとは思えない異形の鎧を身に纏った。

統夜が身につけているこの鎧は白銀騎士奏狼（ソロ）。

統夜が継承したこの奏狼は魔戒騎士の中でも上位に位置する称号で、その名前の通り白銀の輝きを放つ騎士である。

く梓 side く

……な、何？何がどうなってるの？

統夜先輩が指輪に向かってぶつぶつ何か言ってると思ったらいきなり剣を抜いて……。

それだけでもびつくりなのに統夜先輩はあんな得体の知れない化け物相手に臆せず向かっていった。

私は先輩の戦いをじつと見守っていたけど、先輩の運動能力は常人のものとは思えないものだった。

あんな動きが出来るなんて凄すぎるよ……。

あつ……！先輩押されてる……！

統夜先輩は化け物相手に苦戦してるみたいだけど、私は黙って見てることしかできなかった……。

このままじゃ統夜先輩が危ないんじゃないや……。

そんなことを考えていたその時だった。

「よし、こいつの動き……見きった！」

え……？見切ったって、今までの戦いであの化け物の動きを見きったってこと？

統夜先輩……。あなたは一体何者なんですか？いくらなんでも凄すぎますよ……。

「貴様の陰我……。この俺が断ち切る！」

陰我？それって一体……。

私が聞き覚えのない単語に首を傾げたその時……。

先輩は手に持っている剣を高く突き上げるとそのまま円を描き、その部分だけ景色が変わっていた。

すると、そこから放たれた光に先輩は包まれ……。

ガチャンガチャン！という金属の音が聞こえたと思つたらそこに統夜先輩の姿はなく、その場にいたのは……。

「銀色の……狼？」

思わず見とれてしまうほどの輝きを放っている銀色の鎧に包まれた狼のような騎士だった。

「綺麗……」

鎧から放たれる光は異様ではあるけど、美しくもあつた。

「さて……時間もないんでな、一気に決める！」

あの銀色の鎧から統夜先輩の声が聞こえてきたから、やっぱりあの鎧の人は統夜先輩だった。

これが……さつき言つてた魔戒騎士ってやつなの？

私の中から少しだけ怖いという感情が無くなつてると気付きながら、私は銀色の鎧を見に纏う統夜先輩を見つめていた。

……統夜先輩、頑張つて……!

〔3人称 side 〕

統夜が召還した奏狼の鎧は魔界から召還されたものである。

統夜が奏狼の鎧を召還してまもなく、魔界では砂時計のようなものが動き始めた。奏狼を含め魔戒騎士たちの鎧は99・9秒というタイムリミットがある。

このタイムリミットが過ぎてしまうと、鎧を装着した人間の身に危険が及ぶと言われている。

「さて……時間もないんでな……一気に決める!」

時間がないというのは鎧のタイムリミットのことを指しており

99・9秒以内に決着をつける必要がある。

統夜は皇輝剣を構え、ゆっくりとアレグレウスに近づいていった。

圧倒的なほどの存在感を放つ統夜に臆したアレグレウスは慌てながら衝撃波を放つた。

しかし、衝撃波程度で奏狼の鎧はびくともせず、統夜は歩みを止めなかった。

統夜はアレグレウスに接近すると、強烈なパンチをお見舞いし、それを受けたアレグ

レウスは吹き飛ばされた。

「さて……………これで決める！」

統夜は脱兎の如く猛ダツシユし、アレグレウスに接近すると皇輝剣を一閃した。

皇輝剣による一太刀によりアレグレウスの身体は真つ二つになり、その肉体は陰我とともに消滅した。

「……………よし……………」

アレグレウスを撃破したのを確認した統夜は鎧を解除し、元の統夜の姿に戻り、皇輝剣も魔戒剣へと戻った。

く統夜 side く

よし、これで今日の仕事は終わりだな…。

アレグレウスを斬った俺はふうっと一息ついていた。

あとは…………。

俺はとりあえず梓のもとへ向かうが、それと同時に梓はこつちに駆け寄ってきた。

「統夜先輩！あ、あの……………その……………」

「梓。お前、何で逃げなかった？」

「え？えつと……」

「イルバ、梓にホラーの返り血はついてないよな？」

『ああ、大丈夫だ。お前さんもずいぶんと気を遣って戦ってたしな』

「ゆ……指輪が喋った!？」

梓はイルバが口を開いたことに驚いていた。

まあ、驚くのも当然か。

俺たち魔戒騎士は魔道具をつけてるから指輪だろうが腕輪だろうがそういうものが喋ることに違和感はないけど、一般人には奇怪でしかないからな……。

それよりも……。

「今回は何もなかったから良かったけど……。もし梓が奴の返り血を浴びてたら問答無用で切り捨てなきゃいけないかったんだぞ!？」

そう、ホラーの返り血を浴びた者は誰であろうと問答無用で切り捨てる。

それが掟だからな……。

ヴァランカスの実があれば、浄化も可能だけど、絶対それが手に入る保証もないからな……。

「……めんなさい……」

ちよつと言い方がきつかったからか、梓が少しだけ涙目になっていた。

『まあ待て統夜。お嬢ちゃんはそれだけお前さんのことが心配だったんだろう。そうだろう、お嬢ちゃん?』

イルバの問いに梓はコクンと無言で頷いていた。

「まあ……そういうことなら何もなかったことに免じて許すよ。……怒鳴って悪かったな」

俺は怒鳴ったことを梓に詫びると踵を返し、その場を後にしようとした。

「あのっ……統夜先輩! 待ってください!」

だけど梓に声をかけられたので俺は足を止めて、梓の方へ振り向いた。

「あのっ……助けてくれて……ありがとうございます……」

「気にするな、俺は当然のことをしただけだから……」

「それに……先輩は一体何者なんですか?」

「俺か? 俺はお前も知っての通りただの高校生だよ。ちよつと特殊なところはあるけどな」

まあ、こうは言ったものの特殊なのは絶対にちよつとじゃないよな……。

「それに、あの化け物は一体何だったんですか?」

やっぱりこの質問が飛んできたか……。

だけど……。

「梓、その質問の答えは聞かない方がいい。普通の高校生として平凡な生活を送りたいならな……」

「……………」

俺が警告のような言葉を梓にかけると、梓は何も言えなくなり、口をつぐんでいた。

「……………あつ、そうだ」

大事な用事を思い出した俺は梓の顔をジッと見つめていた。

「梓……………お前、最近部活に顔を出してないけど、どうしたんだ？」

俺の問いかけに梓はビクンと肩をすくめていた。

「……………あつ、あの……………。私は……………」

『あのお嬢ちゃんたちがあまりにだらけるもんだから嫌気がさしたのか？』

「違います！そういう訳じゃないんです……………。ただ……………」

「ただ？」

「……………私……………わからなくなっちゃって……………。どうして軽音部に入ろうと思ったのか。そして、先輩たちの演奏にあれほど感動したのか……………」

……………なるほど、それが今まで部活を休んでた理由って訳か……………。

「……………そんなに難しく考える必要はないと思うぞ」

「えっ？」

俺がこう言ってくるなんて思ってなかったんだろう……。

梓は驚きを隠せないって感じの表情をして顔をあげた。

「確かに唯たちは毎日お茶ばかり飲んでダラダラダラ……。俺だって今の梓みたいに面食らったさ。だけど、1年間一緒にいてわかったことがある」

「わかったこと？」

「それはな……みんな演奏してる時はすごく楽しそうに演奏するんだよ」

「楽しそう？」

「ああ……。だからかな？一緒に演奏してるところつちもすごく楽しい気持ちになるんだよ。みんなの気持ちがあひとつになってる演奏だからな……。自然と良い音楽になるんだと思う」

「音楽を……楽しむ？」

「まあ、そんな感じかな。…梓、今度の部活はちゃんと顔を出すんだ。それで、今俺に言ってくれたことをみんなにも言うんだ。そうすれば俺が言ってることが理解出来るはずだぜ」

俺は伝えるべきことを梓に伝えると、踵を返し少しだけ歩いてすぐ足を止めた。

「……とりあえず、さっきの化け物のことは忘れるんだぞ。……それじゃあな」

俺は足をにホラーのことを忘れるよう念押しをすると、再び歩き出し、その場を立ち

去った。

※※※

『……統夜。あのお嬢ちゃんを記憶を消さなくても良かったのか?』

梓の姿が完全に見えなくなる場所まで歩くと、イルバが口を開いたため、俺は足を止めた。

「俺も迷ったんだけどな……。それは出来なかつたんだよ……」

……本当だつたらホラーに関する記憶は完全に消し去るべきだつたからな……。
だけど、なぜか俺はそれをする事が出来なかつた……。

『お前は相変わらず甘いな、統夜』

「わかつてるよ」

イルバに言われるまでもなく、俺は魔戒騎士としてはまだまだ甘い。

非情になりきれないからな……。今のままじゃ自分か誰かを殺すことになるかもしれないからな……。

だから……。俺はもつともつと強くならなきゃいけない……。

俺が憧れ、尊敬している黄金騎士牙狼である冴島鋼牙さんのような揺るぎなき強さを
持った騎士になるために……。

今以上に強くなるという決意を固め、俺は家路についた…。

……続く

—— 次回予告 ——

『まあ、あのお嬢ちゃんの問題が解決したのは良かったが、今度は軽音部のお嬢ちゃんた
ちが統夜の秘密を知るために行動を始めるとはな……。次回「秘密」。早くも統夜の秘
密が明らかになる!』

第3話 「秘密」

く 梓 side く

こんにちは、中野梓です。

私がああ訳のわからない化け物に襲われそうになったのを統夜先輩が助けてくれた翌日、先輩が言ってくれたことを守った私は軽音部に顔を出した。

そこで、どうして軽音部に入ろうと思ったのか、どうして先輩たちの演奏にあそこまで感動したのかという私が抱えている気持ちを先輩たちにぶつけた。

そして私は泣き出してしまったけど、先輩たちは私が感動したあの曲を演奏してくれ

た。

私、その演奏を聴いた時、統夜先輩が言っていた言葉の意味を理解した。

確かに、先輩たちは演奏をしている時はすごく楽しそうに演奏していた。

これからお茶ばかり飲んでだらける事もあるだろうけど、それも必要な時間で、楽しく気持ちを一つにして演奏することこそ軽音部の音楽なんだということ私は実感していた。

私はやっぱり軽音部で頑張りたいそう改めて心に誓っていた。

そして数日後、私は今日も軽音部の部室である音楽準備室にいた。

……それにしても……。

統夜先輩が身につけていたあの銀色の鎧は何だったんだろう……。

あんな化け物をあつという間にやつつけちやつたし……。

先輩はあの事は忘れろって言ってたけど、あんなの忘れろっていうのが無理だもんね……。

統夜先輩……。毎日あんな危ない事をしてるのかな……。

「……梓、どうした？」

じつと統夜先輩の顔を見つめていると、それに気付いた統夜先輩が声をかけてきた？

「あつ、いえ……」

「さっきから統夜のことジツと見てたよな」

「あつ、あの……それは……」

ど、どうしよう……。

私っただら思わず統夜先輩のことジツと見てたみたい……。

「……もしかして今食べてたクッキーのカスがついてたりしたか？」

そう言いながら統夜先輩はティッシュで口元を拭く仕事をしていた。

もしかして……統夜先輩、フオローしてくれてるのかな……？

「まったく…統夜は慌てて食べ過ぎなんじゃないのか?」

「悪い悪い。ムギの持つてきてくれたクッキーが美味くてつい…な」

統夜先輩は恥ずかしそうに笑っていた。

「まあ♪そう言ってもらえると嬉しいわ♪」

「うん! 今日のおやつも美味しいよねえ♪」

「ウフフ♪唯ちゃんもありがとね♪」

……何だろう……。統夜先輩が上手くフォローしてくれてからまったりとした空気になってる……。

ムギ先輩がおっとりしてるからそんな雰囲気になってるのかな?

統夜先輩は笑いながら携帯電話を取り出すと、時間を確認していた。

「……つと、もうこんな時間か。悪いけど、今日は用事があるから帰らせてもらうわ」

こう言って統夜先輩は立ち上がり、ギターケースと学生鞆。そして、あの赤いコートを手に取った。

「なあ、統夜。用事って一体何なんだ?」

「秘密……って言いたいところだけど、この後、人と会う約束をしてな。待ち合わせの時間がもうすぐなんだよ」

「会う約束をしてる人って誰なんだ?」

「悪いけど、さすがにそれは秘密かな。それじゃあ、また明日」

統夜先輩はこれ以上の追求が嫌だったのか逃げるように音楽準備室を出て行った。

統夜先輩が出て行ったあと、室内は少しの間だけ静かだった。

「……怪しい……」

律先輩がこう呟くとみんなの視線が律先輩に集中していた。

「だって怪しいと思わないか？ 統夜って途中で帰る時っていつもいつも理由を曖昧にするじゃんか！」

「確かに律の言う通りだな。今日だって本当に誰かと会う約束をしてるのか？」

「もし違うのならどうしてそんな嘘をつくのかしら……？」

「やーくんにも何かそうしなきゃいけない理由があるのかなあ？」

……唯先輩にしては珍しく鋭い気がする。

恐らく用事というのは昨日みたいな化け物退治だろうというのは何となく察するこ
とが出来た。

統夜先輩もさすがにあんな化け物と戦ってるなんてみんなに話さないだろうし、先輩
たちも知らないよね……？

「ねえ、りつちゃん。統夜君って確か1人暮らしよね？ やっぱリアルバイトなのかしら
？」

「そうだったらそうだってハッキリ言ってるよな」

確かに……。本当にバイトならわざわざ隠す必要はないだろうし……。

「もしかして人と会って彼女とか？」

「いやいや……。統夜に限ってそれは有り得ないだろ。統夜はわりと真面目だからな。もし本当に彼女が出来たら私たちに報告すると思うんだよな」

「何かやーくんってわからないところがいっぱいあるよねえ」

「そこでだ。明日は部活を休みにして統夜のことを尾行してみないか？」

「おお！何か探偵さんみたいだねえ！」

律先輩の提案に唯先輩はノリノリみただけ……。。

「でも、統夜先輩に悪いですよ。尾行だなんて……」

私は律先輩の提案に反対意見を出した。

だって、そんなことをしたらまたあんな化け物が襲ってくるかもしれないのに……。

「梓の言うことはもつともだけど、確かに統夜の動向は気になるんだよなあ」

み、湊先輩まで賛成だなんて……！

「私、探偵みたいに誰かを尾行するのに憧れていたのお♪」

……そこ、憧れるようなところじゃないですよ、ムギ先輩……。

「よっしゃ！そういうことなら多数決ってことで決定だな！」

「そ、そんなあ……」

「梓だつて統夜が本当は何をしてるか気になるだろ？」

「ま、まあ……。確かにそうですね……」

確かに統夜先輩やあの化け物が言っていた魔戒騎士っていうのは何なのかはすごく気になるけど……。

「それじゃあ決まりだな！ したら明日は部活は休みで、放課後玄関前に集合な。統夜にも部活は休みだつてメールしておくか」

律先輩は携帯を取り出すと、統夜先輩に明日の部活は休みだということをメールで伝えた。

統夜先輩は今日も化け物退治をしているのかなあ……。

私はそんな事を考えながらティータイムに参加していたけど、ティータイムはすぐ終わり、その後少しだけ練習をして、この日の練習は終わったのだった。

〈統夜 side〉

部室を出てそのまま学校を後にした俺は、番犬所に直行した。

そこで昨日ホラーを狩ったので狼の像に魔戒剣を突き刺し、剣の穢れを浄化し、昨日

斬ったホラーの邪気は1本の短剣に封印された。

それをイレス様の付き人の秘書に渡すと、すぐさま指令書を受け取り、すぐさま指令に書かれたホラーの討伐に向かった。

……それにしても梓のやつ、昨日のことをまだ忘れてないみたいだな……。忘れろって言ったのに……。

それに明日は何で部活を休みにしたんだ？まあ、その方が俺は助かるけどな。

何の気兼ねもなく騎士としての務めを果たせるしな。

……つと、それよりも今は目の前のことに集中しないと。

現在は夜であり、俺は今ガーゴイルと呼ばれるホラーと相対していた。

俺は早期決着のために奏狼の鎧を召還し、一太刀でガーゴイルを真つ二つにし、鎧を解除した。

「ふう……。今日のお仕事も完了だな」

『ああ。今日の動きは悪くなかったと思うぜ』

イルバも今日はダメ出しを言わないみたいだな。

『それよりも、明日は部活が休みらしいが大丈夫か？あのお嬢ちゃんたち、何か良からぬ事を企んでるような気がするが』

「まあ、それは俺も思ったが、大丈夫だろ」

一般人が魔戒騎士の秘密を探るなんて出来るわけがないしな。

「とりあえず帰ろうぜ、イルバ」

『了解だ、統夜』

こうしてガーゴイルを討伐した俺は、そのまま帰宅し、シャワーを浴びてから眠りについた。

※※※

そして翌日、いつも通り鍛錬を行い、エレメント浄化を行った俺はいつも通り登校した。

放課後、この日は部活はないって事は律からメールで聞いていたのでそのまま下校し、番犬所に向かおうとしたんだけど……。

「……………」

番犬所に向かう途中、視線を感じたので俺は振り向くが、何もなかった。

……はあ……。この展開はまさかな……。

俺は視線を戻すともう一度歩き始めた。

『……おい、統夜』

「イルバ…皆まで言うな。つけられてるって言うのはわかってるから」

『あのお嬢ちゃんたち、やっぱり統夜をつけるために部活を休みにしたみたいだな』

「ああ、そうみたいだな」

「まったく……。あいつらは……。」

梓のやつは俺の秘密をしつてるくせに尾行するなんて……。

元の生活に戻れなくなっても知らないぞ……。

「まあ、番犬所はすぐそこだし、さっさとまくとしますか」

俺は走り出し、行き止まりの壁に到着すると、イルバをかざして番犬所への入り口を解放すると、その中に入ってしまった。

……ふう、これで大丈夫だろ。

く梓 side く

翌日の放課後、私たちは一度玄関前に集合すると、校門前で統夜先輩を待ち伏せし、統夜先輩が現れると、統夜先輩の尾行を開始した。

統夜先輩は私たちが一緒に帰るときに通っている道を歩いていた。

あれ……？今日は何もしないで帰るのかな？

すると、統夜先輩はこちらに気付いたのか足を止めると、こちらを睨むように見ている。

「！！！！！！」

統夜先輩の迫力に驚いた先輩たちは陰に隠れ、私も同じように陰に隠れて難を逃れた。

「ああ……びつくりした……」

「やーくん、なんか怖いよ……」

確かにさっきの統夜先輩はなんだかとっても怖かった。

まるであの化け物と戦ってる時のような。

統夜先輩は再び歩き始めたんだけど、明らかにさっきより歩くスピードが速かった。

そして……。

「あーりっちゃん！統夜君が走り始めたわ！」

「なにい！？もしかして気付かれたか？急いで追いかけるぞ！」

私たちは慌てて統夜先輩を追いかけて、統夜先輩が曲がった角の道に入ってしまった。

あれ？確かその先は行き止まりだったような……。

私たちも角の道に入って行き止まりのところまで進んだんだけど……。

「……あれ？」

「やーくん、いないねえ」

行き止まりなので統夜先輩の姿があってもおかしくないのに、そこに統夜先輩の姿はなかった。

「おかしいな……。行き止まりなんだから統夜の姿があってもおかしくないんだけどな……」

「確かにこの道に入っていったわよねえ？」

滝先輩とムギ先輩も壁をじーっと見つめながら首をかしげていた。

「まさか……」

律先輩はこう前置きをすると、じつと上を見つめていた。

私もつられて上を見ただけ、壁の高さは100m以上はありそうなので、とても人が飛び越えられるような高さではなかった。

でも……。

「この上を飛び越えていったとか!？」

律先輩があまりにも予想通りなことを言うもんだから私は思わず苦笑いをしてしまった。

「おおーやーくんってばすごい！」

唯先輩もそこは間に受けなくてもいいのに……。

いや、統夜先輩なら出来そうだからなんか怖いな……。

「おいおい、いくらなんでもそんなの出来るわけないだろ？ ヒーローじゃあるまいし

……」

「まさか……。統夜君は人知れず悪と戦ってるヒーローとか？」

「アハハ！ そんなハズないよなあ！」

「そうだとしたら統夜が途中で帰るのも納得だけど、さすがに有り得ないよなあ！」

律先輩と滯先輩はこう言って笑ってたけど……。

……ほぼ正解に近いよね……。

やっぱりムギ先輩って勘が鋭いのかなあ……。

まあ、あんな化け物は実物を見ないと信じることは出来ないと思うけど……。

私だって未だに信じられないのに……。

それはそうと統夜先輩はどこへ行ったんだらう……。

〈統夜 side〉

俺は番犬所に向かう途中に軽音部のみんなが俺を尾行していることに気付いた。

最初は気づかないふりをしていたけど、番犬所の近くで歩くスピードを速め、さらに

走って番犬所の入口がある行き止まりまで走ると、そのまま番犬所の入口を解放して中に入り、唯たちをまいた。

……はあ、あんなんで尾行してるつもりかよ……。

それに、魔戒騎士を尾行しようなんて100年はやいっつうの。

番犬所の入口だつて中に入った後にすぐ塞いだから唯たちに番犬所の入口を見つけ
ることは出来ないだろう。

……今頃は俺が消えたつて騒いでるだろうな。

そんなことを考えながら俺は番犬所の中に入ると、イレス様に挨拶をした。

そして狼の像の前で魔戒剣を抜くと、その口の中に魔戒剣を突き刺し、剣の穢れを浄
化した。

浄化を終えた俺は魔戒剣を鞘に納め、昨日ガーゴイルを封印した短剣をイレス様の付
き人の秘書官に渡した。

「統夜、今日はずいぶんと早いですね。部活はどうしたのですか？」

「それが、急に休みになりました……」

『あのお嬢ちゃんたちは統夜の素性を探ろうと尾行なんてしやがってたな。まあ、バレ
バレだったかな』

まあ、あの程度の尾行に気付かないようじゃ魔戒騎士として終わってるよな……。

万が一気付かなくても魔導輪であるイルバが気付くハズだしな。

「それで、彼女たちはまけたのですか？」

「はい。さすがに彼女たちは番犬所の入口を見つけられることは出来ないでしょうから大丈夫です」

「そうですか」

まあ、出る時は遠回りになるけど反対方向の出口から出るか。

じゃないと待ち伏せされる可能性があるからな。

魔戒騎士としての自分を唯たちに見られるわけにはいかないからな……。

梓には見られたが、全員に見られたとなると流石に誤魔化しきれないし……。

「統夜……指令です」

イレス様がこう宣言すると、秘書官が俺に赤い指令書を渡してきたので、俺は魔導ライターを取り出すと、すぐさま指令書を燃やした。

そして指令書から浮かび上がってきた指令は……。

「親切な気持ちで獲物に近付き、そのまま獲物を喰らうホラーあり。直ちに殲滅せよ」
親切ねえ……。

困ってる人に声をかけてそのままその人を喰らうって訳か…。

そういうタイプのホラーは上手く人に溶け込んでるうえに邪気すら消しちゃうから

搜索は困難だろうな……。

『ホラー「ラウル」か……。こいつはやっかいなホラーだな。奴はその人当たりの良さを利用して人の中に溶け込める奴だからな』

「それに、邪気まで隠してるんだろう?」

『ああ。奴が早々に姿を現して誰かを喰おうとすれば邪気を感じできるんだがな……。』

「それじゃあ手遅れになる可能性が高い。これは根気よく探していけないとな……」

「統夜の言う通りですね。現在はまだ人的被害は出ていません。大変だとは思いますが、被害が出る前にホラーを見つけ出し、掃討するのです」

「はい、お任せください」

……親切な気持ちで獲物に近付くホラーか……。

なぜだろう……。何か嫌な予感がする。さっさとホラーを見つけないとな……。

く 梓 side く

統夜先輩を尾行してそのまま見失ってしまった私たちは先輩を探すのを諦めていつものファストフード店で休憩をとった。

ファストフード店で休憩を取り、ウィンドウショッピングをしていると気が付けば夜

になつていた。

「やーくん、結局見つからなかつたねえ」

「そうだなあ……。統夜のやつ、今頃何をしてるのやら……」

「そうだよね……。統夜先輩は今、何してるんだらう……」。

もしかして、またこの前みたいな化け物を探して町をうろついているのかな……。

「気がつけばすっかり遅くなっちゃったわね」

「先輩方、今日はそろそろ帰りませんか？もう暗いですし」

「そうだな。統夜を探すのは諦めて今日は帰るとするか」

私の提案に滯先輩が賛同してくれて、私たちはそのまま帰ることになった。

しばらく歩いてみんなが解散する道の近くまで来たんだけど……。

「……あれ？」

「ねえ、りつちゃん。その街灯って普段灯りがついてるよねえ？」

「ああ。だけど……真つ暗だな」

「律先輩の言う通り、いつもはついてるハズの街灯の灯りがついておらず、今私たちがいる道は真つ暗だった。」

「うう……。何でこんな時に故障してるんだよお……」

「あれえ？滯お。ひよつとして怖いのかあ？」

「そ、そんな訳ないだろ！ほら、さっさと行くぞ。ここを抜けたら少しは明るくなるだろうし」

濡先輩は恐怖を振り払うかのように前向きに進もうとしたその時だった。

「あら、どうしたの？」

「ひっ！」

突如30代前半くらいの女性に声をかけられ、濡先輩はビクンとしていた。

わ、私もちよつとびっくりしたかも……。

「あらあら、あそこの街灯が壊れてるなんてあなたたちついてないわねえ。大丈夫？」

「え、ええ……まあ……」

私たち暗い道に怯えてるように見えたから声をかけてくれたのかな？

何か優しそうな人だけど……。

「そう……。だけど、気を付けてね。ここら辺ね、「出る」のよ……」

……あれ？何かさつきとちよつと雰囲気が変わったような……。

「……な、何が……ですか……？」

濡先輩がこう訪ねると、女の人はニヤリと妖艶な笑みを浮かべた。

その笑みを見た瞬間、私はすぐにでもこの女の人から離れた方が良いのでは？と思っ
てしまった。

この人、まさか……。

「……「化け物」……がね……」

「!!先輩方、その人から離れて下さい!」

私が急に大声を出すからそれを聞いてハツとした先輩たちは慌てて女の人と距離をとった。

すると、私の予想通り、あの女の人はその時の男の人と同じ怪物だった。

私たちが離れたのと同時に街灯の灯りがつくと、その女の人の姿がはっきりと見えた。

すると、女の人の瞳が真っ白になった。

「ひっ!?!」

「あ、あずにゃん……」

「唯先輩、ひつつかないで下さいよ……。私も怖いんですから……」

唯先輩とそんなやり取りをしているうちに女の人はその時と同じ、見たこともない化け物へと姿を変えてしまった。

「あっ……!あっ……」

「ば……化け……もの……」

あんな化け物を初めて見たからだと思うけど、唯先輩は恐怖のあまり言葉も出ないよ

うで、律先輩も絶句していた。

ムギ先輩は息を飲んでしたが、怖いんだろうというのは素直に伝わってきた。

「うう……あずにゃん……」

そして唯先輩は相変わらず私にしがみついていた。

やつぱり怖い……！

あんな化け物……！

「あなたたち、本当に可愛いわねえ。文字通り「食べ」ちやいたいわあ」

化け物へと姿を変えた女の人は怪しげな笑みを浮かべているのがよくわかった。

「み、みんな！逃げるぞ!!」

律先輩の号令で私たちは逃げ出そうとするが、滯先輩だけがあまりの恐怖から腰がぬけてしまい、その場から動かなくなってしまった。

「え……？な、何で……!?!」

「滯先輩!!」

「滯!!早く逃げろ!!」

「だ……だめ……！動けない……!」

滯先輩は目の前の光景の恐怖と動けないことへの焦りからか顔面が真っ青になっていた。

私はどうにか滯先輩を助けたいんだけど、足がすくんでしまった。

怖い……。怖い怖い怖い怖い!!

だけど、このままじゃ滯先輩が……!!

私は自分を奮い立たせようとするけど、体が言うことを聞かなかった。

それは他の先輩も同じようで、恐怖で足が震えてしまい、滯先輩を助けに行くことが出来なかった。

あの化け物はドチャツドチャツつともはや人間の足音でない音で歩きながら少しずつ滯先輩に近づいていった。

「い……嫌……。来ない……で……」

滯先輩はそう言うのが精一杯で、目は涙でいっぱいだった。

「ウフフ、いい表情ね。まずは貴女からいただくとしますか……」

「滯!!」

「滯（みお）ちゃん!!」

「滯先輩……!!」

あの化け物は滯先輩の近くまで接近し、先輩を捕まえようとした。

……お願い……。統夜先輩……助けて……!!

私は必死に統夜先輩が助けに来てくれることを祈った。

……その時だった。

「ウフフ……。それじゃあいいただき……。うぐっ!!」

あの化け物が溚先輩を掴もうとした瞬間、溚先輩の前に何かが現れたと思ったら、その化け物を切り裂き、蹴りで化け物を吹き飛ばした。

「くっ……。誰!?せつかくの食事を邪魔するのは!!」

溚先輩の前に現れたのは赤いコートを見まとい、手には剣を持っている男の人で、私……いや、私たちが待ちわびていた人だった。

「統夜……。先輩……」

統夜先輩が、間一髪のところまで助けに来てくれた!

良かった……。本当に……!

く3人称 side く

唯たちが街灯が壊れていることに気付いたその頃、統夜はちようどその近くの道を探索していた。

指令をもらってから町をあちこちと周りホラーを探していたが、見つからなかった。今もとある道を歩いていたが、ホラーの気配はなかったので、繁華街の方を探索しよ

うとしたその時だった。

『統夜!!ホラーの気配だ!ここから近いぞ!』

イルバがホラーの気配を察知し、統夜はすぐさま足を止めた。

「本当か!?それなら急ぐぞ!誰かがホラーに喰われる前に」

統夜はイルバのナビゲーションでホラーが現在出現しているポイントに急行した。

そこで統夜が目にしたのは……。

「!あれは……みんな!」

ちやうど誰かがホラーに姿を変え、そのホラーに襲われていたのは軽音部のみんなだった。

(まさか俺の嫌な予感的中するとはな……)

統夜は梓がホラーに襲われてからというもの、唯先輩も近々ホラーに襲われるのではないかと予感していた。

その予感的中してしまったことに統夜は表情を歪めていた。

その時だった。

「……まずい!濡のやつ、動けないのかよ!!」

他の4人はホラーと距離をとったのだが、濡だけが腰を抜かしてしまったのか動けずにいた。

このままでは澪が危ない。

統夜は迷わず魔戒剣を抜くと、ホラーのもとへ駆け出し、澪の前へと現れた。

「ウフフ……それじゃあいただき……うぐっ!!」

統夜はホラーを魔戒剣の一閃で切り裂き、怯んだところで蹴りを放ってホラーを吹き飛ばした。

「くっ……誰!? せっかくの食事を邪魔するのは!」

「……そこまでだ、ホラー」

統夜は魔戒剣を構えると、目の前のホラーを睨みつけた。

「と……統……夜?」

澪は目の前に統夜がいるのが信じられず、目を大きく見開いていた。

「統夜だよ!」

「統夜君!!」

「やーくん!!」

「統夜……先輩!!」

澪を救ったのが統夜だとはつきりわかった律たちはそれぞれ統夜の名前を呼び、歓喜の声をあげていた。

「澪……早くみんなのところへ逃げろ」

「え？私……その……」

『統夜、ダメだ。あのお嬢ちゃんは腰を抜かしてやがる』

「自力じゃダメか……。みんな！濡を連れて早く逃げるんだ！」

統夜は濡たちをなるべくホラーから遠ざけるため、ホラーめがけて突撃した。

「はああああああ!!!」

体当たりからの怒涛の剣の一闪にホラーは攻撃を防ぐことしかできず、少しずつ後ろに下がっていった。

その隙に律と紬は動けなくなった濡を抱え、唯や梓と共に少し離れた安全圏へと避難し、統夜の様子を伺っていた。

「すごい……」

「あれ……統夜君……よね？」

統夜の戦いを見ていた唯と紬が、今自分たちを守ってくれているのが統夜だと信じられないと言いたげな表情をしていた。

「濡……大丈夫か？」

律がこう訪ねると、助かったことに安堵したのか濡は律に抱きついてそのまま泣き出してしまった。

「律う……！怖かった！怖かったよお!!」

「濡、助けに行けなくてごめん……。だけど、あとは統夜が何とかしてくれるさ……」
律は濡の頭を優しく撫でながら、ホラーと戦う統夜を見つめていた。

(統夜……死ぬなよ……)

律は統夜の無事を祈りながら戦いを見守っていた。

「あなた……魔戒騎士ね？本当に忌々しい！」

「悪いが、お前らを狩るのが俺たちの仕事なんでね！」

統夜は力強く魔戒剣を振り下ろすと、ホラーは再び吹き飛ばされていった。

「イルバ。こいつがラウルか？」

『ああ、そうだ。こいつはラウル。見た目は素体ホラーだが、実力は素体ホラー以上だから油断するなよ！』

統夜が相対しているホラー「ラウル」は、見た目は素体ホラーであるが、体の色は黒ではなく青である。

イルバの指摘通りただ青いだけの素体ホラーというわけではなく、戦闘力は素体ホラー以上である。

「なるほど……。とりあえずみんなをあそこまで怖がらせた報いは受けてもらおうぜ！」

統夜が魔戒剣を構えてラウルを睨みつけると、ラウルは反撃として放った爪による攻撃をかわした。

その状態でラウルに蹴りを放ってラウルを吹き飛ばした、自分も後ろに下がって距離をとった。

「さて……。ここは一気に決着をつけるとしますか。……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

速攻でラウルを倒すと宣言した統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

すると、円を描いた部分だけ空間が変化すると、そこから光が放たれ、統夜はその光に包まれた。

光に包まれた統夜の体に次々と白銀の鎧が装着され、光が収まると、そこに統夜の姿はなく、そこにいたのは白銀の鎧を身にまとった狼のような騎士だった。

白銀騎士奏狼（ソロ）。統夜が継承した騎士の鎧である。

それと同時に統夜の持っていた魔戒剣も奏狼専用の剣である皇輝剣へと姿を変えた。

「えっ……。やー……。くん？」

「い、これは……？」

「銀色の……。狼……。？」

「……………」

奏狼の鎧を初めて見た唯、律、紬、滯の4人は奏狼の鎧が放つ白銀の輝きに呆然としながら息を飲んでいた。

「統夜先輩……………」

統夜が奏狼の鎧を召還した姿を見たことのある様も白銀の輝きを放つ鎧に見入っていた。

彼女たちは目の前で起こっている光景にただただ驚きを隠せなかった。それも無理はない。

よく知っている部活仲間がこの世のものとは思えない化け物相手に臆さず立ち向かい、見たことのない鎧を見に纏う光景を見れば誰だつて驚くだろう。

「みんなにホラーの返り血を浴びさせるわけにはいかないから……。出し惜しみはせず、一気に決める！」

統夜はラウルをパンチによる一撃で吹き飛ばすと、魔導ライターを取り出し、皇輝劍の刃に魔導火の炎を浴びせた。

皇輝劍が赤い炎に包まれると、統夜は常人とは思えないほどの高さまで飛翔した。

「ええ!？」

「やーくんが飛んじやったよ!!」

「すげー……」

「……」

律、唯、紬の3人は驚きの声をあげ、滯と梓はあまりの凄さに呆然としていた。

統夜が高く飛翔すると、皇輝劍の刃だけではなく、奏狼の鎧も赤い炎に包まれていっ

た。

この姿は「烈火炎装」。

魔導火を全身に纏うことにより攻撃力と防御力を高める技であり、実力のある魔戒騎士であれば使用できる。

全身に赤い炎に包まれた統夜はそのままラウルに向かって降下し、炎に包まれた皇輝剣を振り下ろした。

振り下ろされた赤い炎の刃はラウルの体を真っ二つにし、切り裂かれたラウルの体は大きな爆発と共に消滅した。

ラウルを烈火炎装によって切り裂いた統夜はそのまま鎧を解除した。

すると元の統夜の姿に戻り、皇輝剣も魔戒権に戻った。

統夜は魔戒剣を青い鞘に納めると、少し離れたところで統夜の戦いを見守っていた唯たちのもとへと歩み寄った。

「みんな……大丈夫か？」

「「「……………」」」

統夜は先ほどのまでの騎士の顔とは違って変わり、優しい表情でこう訪ねるが、唯たちは呆然としていて口を開かなかった。

「ま、その様子なら大丈夫そうだな」

統夜は5人の無事に安堵すると、左手にはめてあるイルバに視線を移した。

(イルバ、みんなホラーの返り血は浴びてないよな)

《ああ。そうしないために烈火炎装で焼き払ったんだろ？お嬢ちゃんたちは大丈夫だぜ》

イルバとテレパシーでやり取りをし、イルバのお墨付きをもらったところで、統夜は5人の無事を改めて無事を確信した。

「本当なら何で逃げなかったんだって怒るところだぜ。だけどみんな無事だったから本当に良かったよ」

唯たちは無邪気な笑みを浮かべて笑う統夜を見て安心していた。

先程までは別人のように思えたが、今目の前にいるのはやはり月影統夜だからである。

目の前に写る笑顔に安心したのか唯たちの目からは少しずつ涙が溢れていた。

「さ、いつまでもここに居るわけにはいかないし帰ろ……」

「うわあああん！やーくん!!」

言葉の途中で唯は泣き出してしまい、唯はそのまま統夜に抱きついた。

「ちよ、唯……?」

「グスン……怖かったよお……!」

唯は統夜に抱きついた状態で泣き出し、それに続いて濡たちも一斉に統夜に抱きついた。

「ちよ……5人はさすがに苦し……」

「怖かった！本当に怖かったよお!!」

「あのまま死んじゃうかと思っちゃったじゃないかあ!」

「ありがとう……助けてくれてありがとう！統夜くん……!」

「うわあああん！統夜先輩、良かったです!」

5人まとめて抱きつかれ、初めは苦しそうにしていた統夜だったが、泣きじゃくる5人を見てやれやれと肩をすくめていた。

（よほど怖かったんだな……。まあ、それも当然か……。落ち着くまではこのままでもいい……）

《やれやれ……。モテる男はつらいねえ。統夜、ハーレムなど考えないで5人からちゃんとして1人選んだぞ!》

（うっさい！茶化すなよ、イルバ）

統夜は茶化してくる相棒をジト目で睨んでいた。

そして統夜は唯たちが泣き止むまで今の体勢を維持することにしたのであった。

※※※

「……ごめんね、もう大丈夫だから」

しばらくして泣き止んだ唯たちがゆっくりと統夜から離れていった。

「ごめんね、統夜。私たちが泣いてたからそのコートが……」

「気にするな。これくらいすぐ乾くから」

「それよりも統夜。お前は今までずっとあんな化け物と？」

「まあ、そういうことだ。今まで理由を曖昧にしたことは謝るよ」

統夜は律の問いをすぐ肯定すると、今まで部活を休んだり途中で抜け出す理由を曖昧にしていたことを詫びた。

「だけど、この事は出来ることならずと秘密にしたかったんだけどな……」

「それはそうですね。こんなのは実際見ないと信じられないですし……」

「さすがにこれ以上は誤魔化しきれないか……。お前ら、あの化け物のことやさつきの鎧について……聞きたいか？」

「話してくれるの!？」

「だけど、この話を聞いたら今までの穏やかな生活に戻れるっていう保証なんてない。

お前らにその覚悟はあるのか？」

「『『『……………』』』」

真剣な眼差しでこう訴える統夜の問いに唯たちは答えることが出来なかった。

「…………もしその覚悟があるなら明日の部活の時に話す。とりあえず、今日はもう遅いから帰ろう。送るからさ」

こうして魔戒騎士の秘密を話すなら翌日話すということになり、統夜は唯たちを家まで送ることにした。

※※※

『…………おい、本当にいいのか？』

統夜は唯、律、漑、梓、紬の順でそれぞれ家まで送り届けた。

紬を家まで送り家に帰る途中、それまでずっと黙っていたイルバが口を開いた。

「イルバ…………。お前の言いたい事はわかる。騎士の秘密を喋るべきではないって言いたいんだろ？」

『わかってるならなぜわざわざ話す必要がある？明日にでも5人まとめて記憶を消せば

済む話だろうか?』

「まあ、その通りなんだけどさ……。それも出来ないんだよ……。ホラーに関することだけとは言ってもさ、あいつらの記憶を消すなんて……。俺……。これ以上あいつらに嘘はつきたくないんだよ。それに……」

『それに?』

「元の穏やかな生活に戻れなくてもこの話を聞きたいか聞きたくないかはあいつらが決めることだしな」

『はあ……。イレス様なら許してくれるかもしれないが、元老院に咎められて寿命を減らされても知らないからな』

イルバはため息をつきながらもこれ以上は反対意見は言わなかった。

こうして、ホラーラウルを討伐した統夜はそのまま家路にいたのであった。

………続く

『俺様が直々に魔戒騎士の秘密をお前たちに教えてやろう。知ってしまったからにはもう抜け出せないぞ……。次回、「魔獣」。暗黒の世界へようこそ』

第4話 「魔獣」

（続夜 side）

唯たちがホラーラウルに襲われ、俺が奏狼の鎧を用いてラウルを討伐した翌日、俺はいつも通り鍛錬とエレメント浄化を行ってから登校した。

そして放課後、日直の仕事が終わらせた俺は音楽準備室に直行した。

中に入ると、すでにみんな自分の席に座って待っていた。

「あつ、やーくん……」

「おう」

俺は簡単に挨拶をすると、魔法衣と学生鞆を長椅子に置き、ギターケースは近くの壁に立て掛けた。

そして鞆の中から細長い箱を取り出し、その中に入っているイルバ専用のスタンドを取り出した。

「今日みんな揃ってるってことはみんな俺の秘密を知りたいってことだよな？」

俺の問いかけに唯たちは無言で頷いた。

「もう一度言うが、ここから先の話を聞いてしまったら今まで通り穏やかな学生生活を

送れる保証なんてない。これからだってあの化け物と出くわす可能性だってあるしな」
「「「「「……」」」」」

魔戒騎士の秘密を知ってそれで俺のそばにいるってことは何も知らない一般人よりもホラーに出くわす可能性が高くなるからな。

「……みんな、その覚悟はあるんだな？」

「話を聞くのはすごく怖いよ。だけど、私はやーくんのことをもっと知りたい！」

「あたしも唯と同じ意見だ。それに、あんな化け物を見た後じゃどちらにせよもう穏やかな学生生活なんて送れないって」

「わ、私も怖いよ……。だけど、あんな化け物を見た後で統夜の秘密がわからない方が穏やかな学生生活なんて送れないよ」

「うん。確かにこれから危険なことが増えてくるかもしれないけど、それでも私は統夜君のことをもっと知りたい」

「私も先輩たちと同じです。それを踏まえて私は先輩を支えたいです」

唯、律、漣、ムギ、梓の順番で自分の意思をぶつかってきた。

「本来であれば俺はあの化け物についての記憶を消さなきゃいけない。あの化け物についての記憶さえ消えればみんなは今まで通りの穏やかな学生生活が送れるぞ。本当にいいの？」

俺は最後に記憶を消さなくてはいけない事実を告げた。

記憶さえ消せば、ホラーの存在など知らない穏やかな生活が送れるからな……。

もつとも、そうなら俺の秘密は永遠に謎だと思っけどな。

「統夜、それだけはやめてくれ。確かにそれなら私たちは穏やかな学生生活を送れるかもしれない。だけど私は軽音部の仲間として隠し事は無しにして欲しいんだよ」

「滯の言う通りだぜ。それに、記憶を消したってあたしたちはきつと統夜の秘密を探ると思うぜ」

まあ……それは勘弁して欲しいかもな……。

「統夜君は軽音部の仲間だもの。隠し事されたり嘘つかれるのは悲しいな」

「そうだよ！ 私たちはこれからもやーくんと仲良くしたいもん！」

「統夜先輩だって隠し事だらけの生活なんてただ疲れてるだけだと思っけです。だから、私たちの前だけでも無理しないで欲しいんです」

お前ら……。

………つたく……。そう来るとは思ってたけど、そこまで言われちゃもう何も言えないじゃねえか……。

「わかった、そういうことなら話すよ。俺の秘密……。いや、魔戒騎士とあの化け物……

「ホラー」の秘密を」

「魔戒騎士?」

「ホラー?」

聞き慣れない単語に唯と律は首を傾げていた。

まあ、日常生活で魔戒騎士やホラーに出くわすなんてよほどのことがない限りはないからな……。

俺は机の真ん中にイルバ専用のスタンドを置くと、左手につけているイルバを外し、そのスタンドにセットすると自分の席に腰を下ろした。

イルバ専用のスタンドを使う時は家で寝る時にイルバをスタンドにセットしてから寝る時だから主に使うのはその時だけである。

だけど、今回はイルバにも会話に入ってもらおうつもりだからな。スタンドを使った方がみんなも話がしやすいからこうさせてもらった。

「あれ?これって確かやーくんがいつも付けてる指輪だよねえ?」

「ああ、この指輪なんだけどな……」

『それは俺様が直々に話すぜ』

急にイルバが口を開くもんだから唯たちは啞然としていた。

そして……。

「「指輪が喋った!!?」」

イルバが喋ると知らない梓以外の4人が思わず驚きの声をあげていた。

まあ、喋る指輪なんて端から見たら怪奇現象みたいなものだから……。驚くのも無理はないか。

それに、梓のやつもやつぱり信じられないと言いたげな感じだな。何かポカーンとしてるし。

『やれやれ……。あんな化け物を見た後だつて言うのに何をそんなに驚く?』

「い、いや……」

「だって、指輪が喋るなんて思わなかったんだもん！」

唯のストレートな意見に他の4人はウンウンと頷いていた。

『まあ、いい。とりあえず自己紹介だが……。俺様は「イルバ」。魔導輪だ』

「「「魔導輪?」」」

再び聞き慣れない単語が出てきたので唯たちは再び首を傾げていた。

やれやれ……。これからもつとこんな単語が出てくるのにこれじゃ先が思いやられるな……。

『俺様はホラーを探知できる』

「それでホラーを見つけて倒すつて訳だ」

「「「なるほど……」」」

アハハ……。5人まとめてリアクションしなくていいのに……。

『まず、あの時の化け物だが……。あいつらは太古より存在する魔獣「ホラー」。」「陰我」のあるところをゲートとして人界に現れる怪物だ』

「あの……。」「陰我」って何ですか？ 統夜先輩、あの化け物相手にもそんなこと言ってますよね？」

「ああ、陰我っていうのは森羅万象あらゆるものに存在する闇のことだよ」

「あらゆるものに存在する闇？」

ああ……。スケールが大きすぎてちよつとわかりにくかったかな？

「もつとわかりやすく言うとなんかの負の感情……。憎しみとか嫉妬とかそんな感情も陰我になりかねないし、深すぎる欲望も陰我になりかねないんだ」

俺の補足説明でみんなは何となくわかったみたいだった。

「そしてホラーは陰我のたまったゲートを通じて人間に憑依し、人間を喰らう」

「そのホラーっていうのはどうして人間を喰らうんだ？」

『餌を得るためさ。お前たちだって腹が減ったら何かを食べるだろう？ 奴らも同じなのさ』

「そういうことだ。さつきも負の感情や欲望も陰我になりかねないって言ったけど、そういう感情に付け込んで人間に憑依するんだ」

「!ということは私たちが見たあの人は……」

『ああ。心に何かしらの陰我を抱えていてそこをホラーに付け込まれたんだろう』

「「「「……………」」」」

ホラーという存在がどういふものなのかを思い知った唯たちは言葉を失っていた。

「そしてそのホラーを狩るのが俺たち魔戒騎士って訳さ」

「その魔戒騎士っていうのは何なんだ？」

『魔戒騎士というのは人知れずホラーと戦う戦士のことだ。お前たちが見たあのような鎧を用いてホラーを狩るって訳だ』

「ねえねえ、この話をする前に記憶がどうか言ってたけど、どうしてその騎士とかホラーのことを隠さなきゃいけないの？協力してくれる人がいればいるほど戦いやすいんじゃないのかなあ？」

まあ、唯の疑問はもつともだよな…。

だけど……。

「それは無駄だ。ホラーは「ソウルメタル」と呼ばれる金属で作られた武器じゃないと倒すことは出来ないからな。何も知らない奴がホラーと戦ったって死に行くようなもんだ」

まあ、それだけじゃないよな……。

「俺たち魔戒騎士は人を助けた後、その人のホラーに関する記憶を消さなきゃいけないんだ。魔戒騎士としての掟の一つだな」

「なあ、ここまで聞いてこんな事を聞くのもあれだけど、本当に良かったのか？ だって統夜はその掟を破ったんだろ？」

「まあ、本当はダメだろうな。だけど……」

「「「「「「だけど？」」」」」」」

「みんなに魔戒騎士の秘密を隠し通すことに疲れたんだな。今までは秘密を守るのに必死だったからな」

「そうだったのか……」

『これも大事なことから言わせてもらうが、ホラーは人間に憑依する。という事はその人間ごとホラーを斬らなければならない。魔戒騎士は人殺しも同然だということを知覚しておいてくれ』

「イルバ!!」

イルバのやつ俺が伏せてたことを言いやがった……。

ちよつと勘が良ければその事に気付くかもしれないけど、それでもそんな事実は知られなくなかったんだよな……。

「統夜先輩……。それって、どういう事……。なんですか……。？」

仕方ない……。ここは正直に話すでしょう……。

「イルバの言った通りさ。ホラーは人間に憑依するんだ。みんなの目の前で斬ったホラーだって元は人間だったんだ。だから魔戒騎士は人殺しと何ら変わりはないんだ」

「「「「「「「「」」」」」」」」

やっぱり、この話は唯たちには重すぎたか？

「アハハ……。やっぱり幻滅したよな……。こんな人殺し同然の俺なんてさ……」

「そんな事ない！」

「ゆ、唯……？」

め、珍しく唯が声を荒げるからちよつとビックリしたよ……。

「確かにちよつとはシヨックだけど、やーくんはやーくんだよ！やーくんだって本当は辛いんでしょう？だけど、そんな気持ちを押し殺して私たちのことを守ってくれたんだもん！」

「唯……」

「そうだな……。お前が何者だろうとそんな事をしていても関係ない。あたしらは統夜にすぐ感謝してるんだから……」

「律……」

唯と律のまつすぐな言葉に滲、ムギ、梓の3人も共感していた。

……何かこんな暖かい言葉をもらったのは久しぶりだな……。

魔戒騎士は人を守りし者ではあるが、それと同時に恨まれてもいるからな……。

素直に感謝されるっていうのは嬉しいもんだよ……。

『これでわかっただろ？ どうして統夜が魔戒騎士やホラーのことを秘密にしていたのか』

イルバの問いかけに唯たちは無言で頷いた。

「騎士の秘密を守るためとはいえ、今まで嘘をついててごめん……。俺はこれからも魔戒騎士として戦い続けるけど、みんなの事は絶対に守るから」

「……………」

……あれ？ 何でみんなは顔を真っ赤にしてるんだ？

俺は別に変な事は言っていないと思うけど……。

《はあ……。お前さんは本当に罪な男だぜ……。その鈍さは本当に罪だぞ》

イルバは何故かテレパシーでこんな事を言ってきたけど、俺はイルバの言葉の意味を理解できなかった。

『さて、とりあえず魔戒騎士とホラーについての話は終わりだ。騎士の秘密をベラベラと喋ったのは問題だが、そのおかげで俺様も自由に喋れるしな。今までお前さんたちがお茶を飲みながらダラダラしてる時も黙ってなきやいけないから苦痛だったぜ』

そう。今までは騎士のことを秘密にしていたから学校の中では喋るなどということもイルバにも徹底していた。

何か言いたい事があるならテレパシーで伝えろってな。

イルバにとつてはここはオアシスのようなところだよな……。

『という訳で俺様も今日からは軽音部員のようなものだ。だからよろしくな』

「うん！よろしくねえ、イルイル♪」

『……ちよつと待て。そのイルイルって何だ？』

「ええ？だってイルバだからイルイルだよお」

『いきなり変なあだ名をつけるな！』

イルバのやつ、さつそく唯にあだ名をつけられたな。

しかもイルイルって……。ぶぶつ……。

『おい統夜！お前もどさくさに紛れて笑うな！』

ちつ……！イルバのやつ気付きやがったな……。

「まあまあ。そんな事よりもお茶にしましょう？私、準備するね」

イルバを優しくなだめたムギは席を立つと、ティータイムの準備を始めた。

『相変わらずティータイムは欠かさないんだな』

「それが軽音部の売りですから！」

おい、律……。そこは威張って言うことじゃないぞ……。

『やれやれ……。本当にここは軽音部か？俺様には茶飲み部にしか見えないぞ』

「何おう！言ってくれるなあ、イルイル！」

『だからイルイル言うな！』

アハハ……。イルバのやつ、あつさりと軽音部の空気に馴染みやがった……。

学校の中じゃ常にだんまりだからなあ……。

これからはこの中では自由に喋れるって訳だ。

まあ、さわ子先生が来たら黙ってなきやいけないけどな。

ティータイムの準備が終わったところで俺たちはいつものティータイムに入った。

まあ、イルバが会話に入ってるからいつもよりかは盛り上がってるような気がするけどな……。

殺伐とした環境で戦ってる俺たちとしてはここは本当に心のオアシスなんだよな……。

そんな事を考えながら俺はティータイムを楽しんでいた。

※※※

「……あつ、そういうえびさ……」

ティータイムの途中で何かを思い出した律がこう話を切り出すと、みんなの視線が律に集中していた。

「統夜が身につけていたあの鎧は何なんだ？ 銀色で、狼みたいな顔をしたやつ」

「それは私も気になってました！」

「なんかすごくキラキラしてて綺麗だったよねえ」

ああ……。そういうえびみんなに鎧のことは詳しく話してなかったな。

「ああ。その鎧はな、俺が魔界から召還した奏狼という騎士の鎧だよ」

「魔界から召還!？」

「なんかすげえな、それ……」

まあ、魔界なんてスケールの大きなが出たら驚くのも無理はないか……。

『正確には白銀騎士奏狼。統夜が継承した、こいつの魔戒騎士としての名前だ』

「白銀騎士……」

「ソロ……」

「なんか名前からして凄そうだけど……」

「決して凄くはないさ。奏狼の鎧は騎士の鎧の中では上位に位置する鎧だけど、俺は魔戒騎士としてはまだ未熟だからさ……」

「ええ!? やーくん、今でも十分強いのに……」

「先輩以上に強い人はいっぱいいるってことですか?」

「ああ。俺より強い魔戒騎士なんてたくさんいるぞ」

「「「「……………」」」」」

みんな俺の戦いを見てたから俺より強いやつがいるなんて想像がつかないんだろうな……。

みんな口をポカーンと開けて呆然としている。

『その中でも黄金騎士牙狼。こいつは別格だ』

「ガロ?」

「ああ。黄金騎士牙狼は魔戒騎士最高位の称号で、現時点で最強の魔戒騎士なんだ」
鋼牙さんは本当に強いからな……。

この前のサブックで優勝した零さんと戦って勝ったみたいだし……。

鋼牙さんの実力は最強と言っても言い過ぎじゃないからな……。

だからこそ俺も憧れてるし、目標にもしている。

「最強ってことは統夜よりも強いってことか?」

「ああ……。今の俺じゃどう戦ったって勝てないな」

「嘘……」

「魔戒騎士って何かすごいですね……」

「そりゃそうさ。魔戒騎士になる者は子供の頃からあり得ないくらい厳しい修行を積んできたんだから」

まあ、俺もその一人だけだな。

「なあ、その修行ってそんなに凄いのか？」

「まあ……ね。俺も修行中に何度も死にかけたよ。騎士になるための修行を何も知らない一般人がしたら間違いなく死人が出るだろうな」

「……そんなに!!」

アハハ……。みんな驚いてる驚いてる……。

俺の場合は騎士になった後も何度も死にかけような修行を積んできたから……。だからこそ烈火炎装を使いこなせるレベルの騎士になれたんだよな……。

それでも魔戒騎士としてはまだまだだからな……。

これからも修行を積んでもっともっと強くなりたいとな……。

「ねえねえ。やーくんのお父さんもその魔戒騎士なの？」

「ああ。俺の父さんは先代の奏狼だったんだ。今はもうこの世にいないんだけどさ」

……」

俺がしみじみとこう話すと、みんなは少し訳なさそうな表情をしていた。

「あつ、ごめんね、統夜君……」

「父親が死んでるなんて知らなかったからさ……」

「本当にごめんなさい……」

「いいっていいって。みんなが知らないのも当然なんだしさ」

「でも……」

「それに……父さんが死んだのは俺がまだ小さい頃だったからな。だからあまり気にするなよ」

俺は明るい言葉でどうにかみんなの暗い表情を明るくしようとした。

「……わかった。ありがとな、統夜」

「おう」

俺は滯からの感謝の言葉を簡単な言葉で返した。

『それよりもお前らはまだ練習しないのか？ ずっとお茶を飲んでるが』

「そうです！ イルバくんの言う通りです！」

『……梓。普通にティータイムに参加してるお前さんが言っても説得力がないぞ』

「あう……」

イルバの的を得たツツコミに梓は何も言えなくなった。

『それに、俺様をくん付けで呼ばないでくれ。何かすごく違和感があるんでな』

「まあ、確かにイルバ「くん」やイルバ「さん」は変だよな」

「それじゃあ何て呼べばいいんですか？」

「普通にイルバでいいんじゃないか？」

「ええ？イルイルはイルイルだよお！」

『唯……。お前さんは何度も何度も俺様のことをイルイルと呼ぶな！』

アハハ……。イルバのやつ、思いきり唯に振り回されてるな……。

ふと唯の方を見ると、唯はぶうつと頬を膨らませてイルバを見ていた。

これはこれでいいコンビ……。なのかもな……。

俺はそんな微笑ましい様子を紅茶を飲みながら眺めていた。

『おい、統夜。お前も黙ってないで何とか言ってくれ』

「つたく……。俺にどうしろって言うんだよ……。イルイル♪」

俺はニヤリと笑みを浮かべながら思いきりイルバのことをからかった。

『なっ……。!?統夜、お前なあ！』

「……………ぷっ」

今までのやり取りが面白かったのか濡が突然吹き出して笑ってしまった。

『おいおい……。何がおかしいんだ？』

「ぷっ……。ごめっ……。アハハ！でもなんか……。おかしくて……。アハハハハ！」

澁が思い切り笑い出し、それにつられて律と梓とムギも笑っていた。

そして唯も笑い出し、最後に俺もなんかおかしくなってみんなと一緒に笑っていた。

『やれやれ……。みんな揃って笑い出すとは……。仲の良い奴らだぜ……』

イルバは少し呆れていたけど、それ以上は何も言わず俺たちが笑い合っているのを黙って見ていた。

……。それにしてもこんなに笑ったのは本当に久しぶりだな……。

魔戒騎士として戦ってる時はこんなに笑う事なんてないからな……。

だからこそ、こんなに明るくて平和な時間はすごく大切にしたいよな……。

そして俺はみんなの笑顔を守るために戦う。戦ってやるさ……。

1人の人間として……。そして、守りし者として……。

俺はみんなに騎士の秘密を話すことで、今まで以上にみんなの事を守りたいという気持ちになっていた。

……。続く。

次回予告

『魔戒騎士というのは必ず誰かに感謝される訳ではない。憎まれる事だってもちろんあるんだぜ。次回、「現実」。魔戒騎士の現実が今明らかになる!』

第5話 「現実」

……統夜が魔戒騎士とホラーについての秘密を話した日の夜、桜ヶ丘某所であるカッブルが別れ話をしていた。

「……おい、いったいどういうことなんだよ！急に別れようだなんて……」
男は急に別れ話を切り出してきた女にこう詰め寄ってきた。

「もしかして……俺のことが嫌いになったのか？それとも……他に男が!？」
「それは違う！私は今でも修一のことを好き!!」

「だったら……だったらどうして別れなきゃいけないんだよ、美優!」
「駄目なのよ……。いくら好きでも駄目なものは駄目なのよ……!」

「……!まさか、親父さんの残した借金のせい……なのか?」
別れ話を切り出した女……美優は、3ヶ月前に父親が自殺していた。

父親は莫大な借金を抱えていた。

父親が自殺する前に母親は離婚して家を出てしまっているため、莫大な借金が美優に残ってしまった。

その借金元がヤクザ同然の闇金であり、美優の家に借金の取り立てが昼夜問わず訪れ

ていた。

男：修一もその現場を目撃したことがあるので、彼も事情は知っていた。

「親父さんの借金だったら俺も一緒に返していく！だから！」

「駄目よ！私は今でもあなたのことを愛しているの！だからあなたを不幸にしたいくないのっ！」

そう言い放って道路に飛び出すが、タイミングの悪いことに猛スピードの車が近づいていることに気が付かなかった。

「美優!!」

修一は迷わず道路に飛び出すと、車に轢かれそうになっていた美優を突き飛ばした。

そして……。

ガシャアアアン!!

その現場には爆音が響き渡り、車に轢かれた修一はかなり吹き飛ばされてしまった。

「しゅ……修一!!」

修一は全身を強く打ち、即死していても不思議ではなかったが、かすかに意識が残っていた。

「うっ……み、美優……」

美優は修一に駆け寄ろうとするが、車から出てくる男を見て美優は思わず息を飲ん

だ。

……美優の借金取りだからである。

「……おいコラ、何してくれてるんだよ！ああ!?人の車をめちやくちやにしやがって!!」

「ご、ごめんなさい……」

「いい加減借りたもの返して欲しいんだがねえ。これでまたためえの借金が増えたな

!!」

「そ、そんな……」

「支払いが無理だつて言うなら体で払ってもらうぜ！なんたつてためえはエロい身体してっからな！やりたい奴なんていくらでもいるだろ！」

借金取りの男はそう言いながら美優の尻を触り、高笑いをしていた。

「あ、あいつが……！美優……を……！」

修一の命の炎は消えそうになっていたが、今の修一には死の恐怖はなく、目の前の借金取りに対する憎しみだった。

(死んで……たまるか……！何があつても……俺は……！)

何があるうと生きたい。そう強く願つたその時だった。

——貴様、それほど生きたいのか……。

修一の脳内から謎の声が聞こえてきた。

(ああ……。生きて、美優を苦しめるあいつらを殺せるなら……。この魂を悪魔にやっ
たつていい……!)

修一は魂を悪魔にやっただつていいとまで豪語してしまった。

——そうか……。ならば、我を受け入れよ!

事故によつて壊れた車がゲートとなり、現れたホラーは黒い帯のような姿になると、
修一の中に入つていった。

修一は弱つているため悲鳴をあげることにはなかつたが、ホラーに憑依されると、ゆっ
くりと立ち上がった。

「……!しゅ、修一……!?!」

「嘘だろ!?!てめえ、あれで生きてるなんて!?!」

美優だけではなく、修一を轢いた借金取りも驚きの声をあげていた。

すると修一はそのまま借金取りに近付くと、借金取りの胸ぐらをつかんだ。

「て、てめえ!何しやがる!?!」

借金取りは唐突な展開に抵抗することが出来なかつた。

「貴様は美優を苦しめる……。だから、殺す!」

修一の体がおぞましい怪物へと変貌した。

「!しゅ、修一……?!」

「ばっ!?! 化け物!?!」

美優は愛する人がおぞましい怪物へと姿を変えたことに啞然とし、借金取りは身動きがとれず、恐怖が支配していた。

修一は借金取りにボディーブローを放った。

その力は常人のものではなく、借金取りの身体を貫いたのであった。

「……があ……ああ……」

体を貫かれた借金取りの男はそのまま絶命したのだが、男の体は黒い粒子に姿を変えると、黒い粒子は修一の口の中に入ってしまった。

「……」

「あなた……。修一……なの……?」

美優は恐る恐る怪物に姿を変えた修一の顔を覗き込もうとするが、修一は美優の胸ぐらを掴んだ。

「!しゅ……。修一……? どうして……?」

「まだだ。まだ足りない。貴様もいたたくぞ!」

修一に憑依したホラーは美優までも喰らおうとした。

その時だった。

「……よ、よせ!! 彼女は! 彼女だけは喰らうな!!」

修一は美優を突き飛ばしてこう叫びだした。

すると、おぞましい怪物から元の修一の姿に戻っていた。

(き、貴様……！我が貴様を生かしてやったというのに……！黙って貴様の体をよこせ！！)

「黙れ!!この体は俺の物だ!!貴様の好き勝手にはさせない!!」

なんと修一は強靱な精神力でホラーの意識を乗っ取ってしまった。

本来ホラーに憑依された者は、そのままその精神もホラーに喰われてしまうのだが、修一の生への執着と愛する者を助けたいという気持ちは相当なものであった。

その気持ちの強さがホラーの意識を押しえ込んでしまった。

(そんなに人間を喰いたいなら好きなかだけ食わしてやる!だけど、美優を喰らうことだけは許さん!!)

修一は美優以外の人間であれば食らっても良いと自分の中にいるホラーに告げた。

(良いだろう……。ただし、我との契約が破られたら貴様は死ぬ。それを忘れるな!!)

ホラーは餌を得るために修一の提案を受け入れたのであった。

「美優……。ごめんな、大丈夫か?」

「修一!?修一なのね!」

「ああ。俺はお前を遺して死ぬわけにはいかないからな!」

「修一!!」

「美優!!」

修一と美優は抱き合うとお互いの温もりを確かめ合っていた。

※※※

その頃統夜は夜の街を歩いていた。

軽音部のみんなに魔戒騎士やホラーの秘密を話した後はほとんどの時間がティータイムで終わってしまい、この日は解散となった。

解散した後番犬所に寄ったのだが、この日は指令がなかったので、夜の街を見回るところにした。

指令はなくてもホラーが出現する時があるので、統夜はホラーが現れてもすぐ討伐できるように見回りをしているのである。

繁華街の方を歩いていたらその時だった。

「おい!!少し前に向こうの通りで事故があったらしいぞ!!」

「マジか!!ちよつと行ってみようぜ!!」

20代前半くらいの男二人組の話が聞こえてきたので統夜は足を止めた。

『……どうした、統夜？』

「いや、事故だなんて物騒だなんて思ってたな」

『おいおい。そんなものよりも物騒なものに関わっているのに何を言っているんだ』

「……それもそうか」

統夜が再び歩き出そうとしたその時だった。

『……統夜。どうやらその事故現場からホラーの気配を感じるぜ』

「……したら行くしかないな」

イルバがホラーの気配を察知したので、統夜はその事故現場へ向かった。

事故現場に到着すると、そこは野次馬だらけだった。

今警察官が事故現場を状況見分していた。

(野次馬が多い……これじゃホラーを探せないぞ)

統夜の周りは野次馬と警察官だらけであり、ホラーを探すのは困難であった。

しかし……。

《統夜。どうやらホラーは移動したようだ。それに、ホラーの気配が消えた。今日は恐らく人間を襲うことはないだろう》

(そうか……。そしたら明日の朝またここに来よう。この人混みじゃ邪気の浄化も出来

ないからな……」

《そうだな。今日のところは撤収するでしょう》

この日は人混みのせいで何も出来ないと判断した統夜とイルバは家路についた。

※※※

翌日の朝、統夜は人混みの多かった交通事故現場からエレメントの浄化を開始した。

ホラーのゲートとなったのは車の破片だった。

破片は小さく、真っ暗だったので警察官が見つけることが出来ず、ゲートだけが無事に残っていたので統夜はすぐさま魔戒剣を抜いて邪気を浄化した。

事故現場の邪気の浄化を済ますと、その他のエレメントの浄化を行い、登校した。

そして放課後になり、この日も最後まで部活に参加してから番犬所へ向かった。

統夜はイレスに昨日ホラーが出現したことを報告したが、番犬所も現在そのホラーを捜索中とのことで指令はなかった。

この日もホラーを捜索したのだが、ホラーは見つからず、気が付けば3日も経ってい

た。

最後まで部活に参加した統夜は軽音部のみんなと同じ帰り道を歩いていた。

「……なあ、統夜」

「……ん？どうした、律？」

律が急に足を止めて声をかけてきたので、統夜も足を止め、他のみんなも足を止めた。

「あれからずっと考えてたんだけどさ、あたしたち、何か統夜の力になれないかな？」

律はこう話を切り出したのだが、統夜は律の話に驚きながら少しだけ呆れていた。

「ホラー退治のことだったからお前らに出来ることは何も無いぞ」

統夜は律たちがホラーとの戦いに首を突っ込まないようにハッキリと言いつつ放った。

「うう……。確かにそうかも知れないけど、どうにか統夜の力になりたいんだよ」

『やめておけ、律。第一、お前さんはホラーと戦う力はないだろう？』

「イルバの言う通りだ。それに、戦う力のないものが首を突っ込んででも邪魔なだけだ」

統夜は冷たい言い方だと自覚しながらも、ホラーとの戦いに関わらないようにあえて

きつい言葉を選んでいた。

「統夜先輩。今のはいくらなんでもひどすぎると思います！」

「そうだよー！りっちゃんがかわいそうだよー！」

梓と唯は統夜の言葉があまりに冷たいと感じたのか統夜に反論していた。

反論していない滯と紬もうんうんと頷きながら統夜を睨んでいた。

統夜は仕方なく、奥の手を使うことにした。

「はあ……。確かに言い過ぎだったな。悪かったよ……」

統夜がここまであっさり謝ると思っていなかったので律たちは驚いていた。

「……どうしてもホラー退治についていきたいなら好きにすればいいさ」

『おい統夜！本気か?!』

統夜の言葉にイルバは反論するが、それを無視した統夜は魔法衣の懐から魔戒剣を取り出した。

「律、この剣を持ってみる。これを持てたならホラー退治についていくことを許可するよ」

「え？それだけでいいのか？それくらい楽勝だつて♪」

「ハハ、それはどうかな」

統夜は律に魔戒剣を渡した。

その瞬間……。

ズシン!!

「うおっ!?!」

律は魔戒剣を持った瞬間持ったことのない重さに襲われ、魔戒剣を落としてしまっ

た。

「「!!」」

それを目の当たりにしていた律以外の4人は目を丸くしていた。

「な、なんだよこれ……。めちゃくちゃ重い……」

律は落とした魔戒剣を懸命に持ち上げようとするが、何度挑戦しても魔戒剣が持ち上がることはなかった。

「だ、だめだこりゃ……」

「りっちゃん。私に任せて!」

律がギブアップし、続いては力自慢の紬が魔戒剣を持ち上げるのに挑戦した。

しかし……。

「ふんすっ!ーうん……!」

紬も渾身の力を込めて魔戒剣を持ち上げようとするが、紬でも魔戒剣を持ち上げることは出来なかった。

「力自慢のムギでもダメなんて……」

「そりゃそうさ」

統夜は律と紬が持ち上がれなかった魔戒剣を軽々と持ち上げた。

「何でやーくんはそんなに軽々とその剣を持てるの?」

「この剣はソウルメタルで出来てるからな。ソウルメタルは真に認められた者しか扱うことが出来ない金属なんだ。持ち手によっては鋼よりも重く、また羽毛のように軽くなる」

『早い話、お嬢ちゃんたちにソウルメタルで出来ている剣は持ち上げることすら出来ないという訳だ』

さらに言うのと、ソウルメタルは女性に扱うことが出来ない。

一部例外はあるのだが、その例外を行うのは危険が伴うと言われている。

「という訳でむやみにホラー退治に首は突っ込まないでくれよ」

「ここまで言えば力になりたいとは言わないだろう。統夜はそう思っていた。

そんなやり取りをしているうちに番犬所の近くまでたどり着いた。

「それじゃ、悪いけど俺はここで」

「あれ？この前も統夜と別れたけど、この先は行き止まりだろうか？」

「ああ、そうなんだけど、この先には番犬所の入口があるんだ」

「「「番犬所？」」」

聞きなれない単語だったのか唯たちは首を傾げていた。

「まあ、わかりやすく言えば魔戒騎士を総括する場所だな」

『統夜たち魔戒騎士はその番犬所から指令をもらってホラーを狩るという訳さ』

「「「へえ……」」」

5人まとめて相槌をうつっていたので統夜は思わず苦笑いをしていた。

「まあ、そういうことだからまた明日な」

統夜はそれだけ言うのと唯たちと別れ、そのまま番犬所へと向かった。

番犬所の中に入ると、統夜はイレスに挨拶をした。

「統夜……指令です」

「ということは例のホラーが見つかったのですね？」

「ええ。ですので討伐をお願いします」

統夜はイレスの付き人の秘書官から赤の指令書を受け取ると、それを魔導ライターで燃やした。

そして飛び出してきた指令とは……！

「男女の愛を隠れ蓑にして人を喰らうホラーあり。ただちに殲滅せよ」

というもので、統夜が指令を読むと魔戒語で書かれた文書は消滅した。

「男女の愛……ですか？」

「ええ。憑依されたのが男なのか女なのかは不明ですが、すでに5人が行方不明になっています」

「5人も……ですか？」

統夜は自分がホラーを見付けるのが遅れたせいでもここまで被害が広がってしまったのではないかと心の中で自分を責めていた。

「……統夜。自分を責めてはいけません。これ以上被害を出す前にホラーを殲滅するのです」

「そうですよね……。すいません、ありがとうございます」

統夜はイレスの言葉で気持ちを切り替え、ホラー討伐に集中することにした。

「統夜。犠牲になった5人ですが、共通点が見つかりました」

イレスは統夜にこう告げると、イレスの秘書官が統夜に一枚の写真を渡した。

統夜は写真を受け取り、その写真を見ると、そこには1人の女性が写っていた。

「彼女の名前は浅野美優。行方不明になった5人はその浅野美優の関係者のようです」

「関係者……ですか？」

「彼女は莫大の借金があったのですが、行方不明になった5人はその借金の金貸しだったそうです」

『なるほど……。その女がホラーって可能性が高そうだな』

「いや、男女って言ってたから男の方がホラーの可能性もある。だからとりあえず一度会ってみないと……」

統夜は浅野美優か男のどちらかがホラーであるだろうと確信していたため、浅野美優

と接触することにした。

「頼みましたよ、統夜。……それはそうと、軽音部の少女たちに騎士の秘密を話したそうですね」

イレスは統夜が唯たちに騎士の秘密を話したかの確認をとっていた。

「申し訳ありません。以前現れたホラーに彼女たちが襲われ、これ以上秘密を隠し通すことが出来ませんでした……」

統夜は秘密を話したことは事実だったので、深々と頭を下げてイレスに謝罪した。

「責めているわけではありません。遅かれ早かれ彼女たちは騎士の秘密を知るだろうと私は予想していました」

イレスは軽音部の少女たちが統夜の秘密を知るのは時間の問題だということを予想していた。

「統夜。彼女たちは統夜に協力したいと話をしていましたか？」

「ええ。俺の力になりたいと言っていました。ホラーとの戦いに彼女を巻き込むのは危険なので、その話は断りました」

「それは賢明な判断ですね。ですが、言葉だけで言いくるめては彼女たちは納得しないでしょう。私が許可します。一度彼女たちをホラー狩りに連れて行ってはどうですか？」

「なっ……!? イレス様、お言葉ですが、本気ですか!？」

イレスの唐突な提案に統夜は驚きを隠せなかった。

「今回のホラー討伐で彼女たちは魔戒騎士の現実を思い知るはずです。そうすれば彼女たちはホラーとの戦いに首をつっこむことはしなくなるでしょう」

イレスは軽音部の少女たちに魔戒騎士の現実を突き付け、ホラーとの戦いになるべく関わらないようにするために軽音部の少女たちをホラー狩りに連れていくことを一度だけ許可することにした。

「わかりました。今回のホラー討伐には彼女たちを同行させます」

番犬所を出た統夜はすぐさま唯たちに連絡をして事情を話すと、全員二つ返事でついて行くと答えたため、統夜は唯たちをホラー討伐に同行させることになった。

行きつけのファストフード店で待ち合わせをすると、ホラーを見つげるために行動を開始した。

※※※

その頃、浅野美優は、恋人である修一と共に、美優の家へ向かって歩いていった。

「……ねえ、修一」

「ん？」

「私……。今、すごく幸せよ」

「ああ、俺もだ」

修一はホラーに憑依されてから人間の捕食を続けていた。

そのターゲットは全員美優の借金取りだった。

借金取りを喰らうだけではなく事務所まで襲撃したため、美優の借金は有耶無耶になつていった。

修一は美優を苦しめる者すべてをホラーの餌にしていた。

しかし、修一は明日からの餌に悩んでいた。

美優を苦しめる者は全て消したので明日からは罪のない一般人を喰らわなければならぬ。

修一は美優のためにそれもやむなしと考えていた。

美優の家が近づいてきたその時だった。

「あの……すいません」

小柄でツインテールの少女……梓が美優に声をかけたので、美優と修一は足を止め

た。

「あら、どうしたの？お嬢ちゃん？」

「ちよつとお二人に聞きたいことがあります……」

「あら、何かしら？」

美優がこう答えると、美優の前に統夜が現れ、近くにいた唯たちも梓と合流した。

「な、何なの？あなたたちは!？」

統夜は何も言わず魔法衣の懐から魔導ライターを取り出すと、火をつけて美優の瞳を照らした。

しかし、美優の瞳には何の反応もなかった。

「おい、坊主。一体何がしたいんだ!？」

「……やっぱりあんたがホラーだったか」

統夜は魔導火を修一の瞳に照らすと、修一の瞳に不気味な文字のようなものが浮かんできた。

……修一がホラーであるという証しである。

「お前……。魔戒騎士か。いったい俺をどうしようっていうんだ?」

「決まってるだろ……」

こう言うと統夜は魔戒剣を取り出すと、抜いて構えた。

「……斬る」

そしてホラーである修一を切るために睨みつけていた。

「……………ヒツ!?!」

美優はいきなり現れた少年が剣を抜いてきたので驚きと恐怖に心が支配されていた。

「あんたは下がってろ。俺が斬るのはその男だけだ」

統夜は鋭い瞳で冷酷にこう告げていた。

そして修一に斬りかかろうとしたその時だった。

「やめて! 修一を殺さないで!」

「あんたの目の前にいるのはもう人間じゃない!! 人間の姿をした化け物だ!」

統夜は修一を守ろうとしている美優を必死に説得した。

「私が悪いのよ! 私が急に道路に飛び出したりしなければ、修一はあんな事にはならなかった!」

「あいつを斬らないとあんたの恋人の魂は救われない!そこをどいてくれ!」

「嫌よ! どんな姿になったって修一は修一よ!」

「……………」

目の前で起こっている壮絶な展開に唯たちは言葉を失っていた。

「なあ、魔戒騎士。俺はどうなってもいい。だけど、彼女だけは助けてやってくれ」

「ホラーのお前に言われなくてもそうするつもりだ」

「嫌だ！そんな事言わないでよ！修一！」

「美優……」

「あんた……。どうしても修一を殺すって言うなら私も殺して！」

美優は自分がどうなろうと修一を守ろうとしていた。

「……わかった……」

統夜は魔戒剣の矛先を修一ではなく、美優に向けた。

「統夜先輩!?本気ですか!?!」

「梓、約束したハズだぞ。俺がやろうとしてることに口を出さないって」

統夜はファストフード店で唯たちと合流した時に自分がやろうとすることに口を出さないということを約束させていたのだ。

「でもっ……!?!」

「梓……」

濡が梓の肩に手を置き、何も言わずに頷いていた。

「濡先輩……」

梓はこれ以上何も反論することが出来なかった。

統夜は美優を斬るフリをして美優の鳩尾にボディブローをお見舞いすると、美優を

気絶させた。

「悪いけど……。俺たち魔戒騎士が斬れるのはホラーだけだから……」

美優が気絶する間に統夜はボソツとこうつぶやいた。

統夜の言う通り、魔戒騎士は人を守りし者であるため、人間を斬つてはならないということが厳しく課せられている

それ故、魔戒騎士は自分がどのような状況であろうと人間を斬ることは許されていない。

「……みんな、彼女を頼む」

統夜は気絶している美優の介抱を唯たちに任せると、ホラーである修一と向かい合っていた。

「貴様……。この男はこの娘を本気で愛している。娘の悲痛な声を聞いただろう？ 貴様は本当に私を斬るつもりか」

ホラーが修一の意識を一時的に乗っ取ると、統夜にこう告げるが、統夜は全く耳を貸そうとはしなかった。

「それに、我と共にこの男が死ねばこの女はどうなるかわからない。貴様は人間の愛情まで断ち切るつもりなのか」

「……言いたいことはそれだけか？」

ホラーの話聞き流した統夜はそのまま修一に斬りかかると、修一は統夜の魔戒剣による一閃をかわした。

「……美優を守るために貴様は始末しなきゃいけないな」

再び意識を乗っ取った修一は人間の姿からおぞましい怪物へと姿を変えた。

『統夜！あのホラーはヤシャウル！こいつは手強いホラーだぞ！油断するな！』

「ヤシャウルって確か以前零さんが封印したホラーだったよな？また出て来たのか！」

『どうやらそのようだ。だから油断するなよ！』

統夜と相対しているホラー「ヤシャウル」は、以前もとある母親の歪んだ愛に引き寄せられてその母親に憑依した。

しかし、銀牙騎士絶狼の称号を持つ涼邑零によつて斬られたのだが、それから数年が経過しており、再び違う陰我をゲートに出現したのだ。

統夜は魔戒剣を一閃するが、それをヤシャウルに受け止められてしまう。

「っ……………」

ヤシャウルは統夜にボディীবローをお見舞いすると、統夜は痛みで顔を歪めていた。

統夜が痛みで怯む隙にヤシャウルは片手で統夜の首を掴みながら持ち上げた。

「……………くっ……………」

統夜はどうか脱出しようとするが、ヤシャウルの腕力は相当なものだった。

ヤシャウルはそのま統夜を投げ飛ばすと、統夜は近くに置いてあったベンチに叩きつけられ、その衝撃でベンチは真つ二つになっていた。

「統夜（君）！！」

「やーくん！！」

「統夜先輩！」

美優を介抱しながら遠くで統夜の戦いを見守っていた唯たちは押されている統夜を見て心配そうに声をあげていた。

ベンチに叩きつけられた統夜は全身に痛みが走っているものの、骨折などはなかった。

なのでフラフラになりながらも立ち上がった。

（……零さんからこのホラーの話は聞いたことあるけど……零さんは一体どんな気持ちであいつを斬ったんだろうか……）

統夜は以前このホラーを討伐した零のことを考えていた。

（非情になりきれないとこのホラーは倒せない。俺は……みんなを守るためにこんなところで死ぬ訳にはいかないんだ！）

ヤシャウルは統夜にとどめを刺すべく腕についている鋭利な刃で統夜を切り裂こう

とするが、統夜は魔戒剣でヤシャウルの攻撃を防いだ。

「貴様っ……………」

「……………はあっ!!」

統夜はそのままヤシャウルの攻撃を弾き飛ばすと、続いて蹴りを放つとヤシャウルを吹き飛ばした。

「貴様の陰我……………俺が断ち切る!」

統夜は魔戒剣を高く突き上げると円を描いた。

円を描いた部分だけが違う空間に変化し、統夜はそこから放たれる光に包まれた。

そして統夜の体に次々と白銀の鎧が装着され、最終的には統夜の顔も狼の鎧に身をまとった。

統夜は白銀騎士奏狼の鎧を召還した。

統夜は奏狼の鎧を召還するなり、魔戒剣が変化した皇輝剣を一閃した。

その一撃はヤシャウルに少しダメージを与えた程度であった。

一撃を与えた統夜はヤシャウルと対峙していた。

「はあああああああ!!」

統夜はヤシャウルの攻撃を防ぎながら2度、3度とヤシャウルを切り裂くが、ヤシャウルはまだ倒れなかった。

(さすがに手強いな……。こんだけ斬っても倒れないなんて……)

統夜はヤシヤウルが予想以上に頑丈であることに少々焦りを感じていた。

『統夜！奴は確実に弱っている。時間も限られているんだ。一気に決めろ！』

「ああ、そのつもりだ！」

統夜はヤシヤウルにとどめを刺すべく皇輝剣を構えた。

※※※

統夜が奏狼の鎧を召還したちようどその頃、統夜のボディーパーをを受けて気絶していた美優であったが……。

「……………う、ううん……………」

なんと目を覚ましてしまった。

「あつ、大丈夫ですか？」

梓が美優に声をかけるが、美優はボケつとしながらゆっくりと起き上がった。

「私は……………いったい……………」

状況が飲み込めず啞然としていたのだが、少し先からガチン！ガチン！と金属が擦れるような音が聞こえてきた。

美優は音が聞こえた方を見ると、奏狼の鎧を身にまとった統夜とヤシャウルに変貌した修一が戦っていた。

「……………し、修一!!」

今の状況に気付いた美優は修一の危機を感じて2人の戦っているところまで駆け寄ろうとしていた。

「ダメです! 危ないですよ!!」

律と紬が2人がかりで美優を押しさえつけると、彼女を戦いの場所へ行かないようにしていた。

「は、放して! じゃないと修一が!!」

美優は悲痛な声をあげながらジタバタとしていた。

ちようどその頃、統夜はヤシャウルにとどめを刺すべく皇輝剣を構えていた。

「……………貴様の歪んだ愛情と陰我……………俺が断ち切る!」

統夜がヤシャウルに斬りかかるより早くヤシャウルも統夜に斬りかかるが、統夜はヤシャウルの攻撃をかわした。

そして……………。

「……………はあっ!!」

統夜は皇輝剣を一閃すると、ヤシャウルの体は真つ二つに切り裂かれた。

「があっ!!…………み、美優…………」

ヤシャウル…………修一は消滅する間に自分の愛する者の名前を呼び、消滅していった。

「…………」

ヤシャウルを討滅した統夜はすぐ鎧を解除したのだが、悲痛な表情で元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「ああ…………ああ…………」

ホラーが消えたことを見届けた律と紬は押さえつけていた美優を解放すると、美優はその場にへたり込んでいた。

統夜はゆっくりと美優に歩み寄るが、愛する人を失って悲しむ美優を見てなんて声をかけていいのかわからなかった。

美優はそんな統夜を睨みつけていた。

「どうして…………」

「えっ?」

「どうしてあの人を斬ったの!?!なんであの人死ななきやならなかったの!?!」

「あれはもう人間じゃない。ホラーに憑依された時点で、もう人としては死んでいるんだ」

それに、ホラーを放っておけば、被害者が増えるだけである。

そう統夜は言いたかったが、どうしてもそれを言うことが出来なかった。

「どんな姿になっても修一は修一よ!!それなのに……!」

殺気立った瞳で統夜を睨みつける美優には憎しみの感情が支配していた。

「私はあなたを一生許さない……!この人殺し!!」

「!!」

統夜は一番言われたくないことを言われ、拳を強く握りしめ、唇を噛んでいた。

「!あなた!!いい加減にしてください!!統夜先輩はあなたのためを思って……」

「いいんだ梓!!」

「っ!で、でも!」

「行くぞ」

統夜は美優を置き去りにした状態でその場を離れると、唯たちも慌てて統夜の後を追った。

1人残された美優は愛する人の名前を何度も呼びながら泣き叫んでいた。

※※※

ヤシャウルを討滅し、帰る途中であつたが、統夜は口を開こうとしなかつた。

『……おい、統夜』

それを見かねたイルバが統夜に声をかけると、統夜は足を止め、唯たちもそれに続いて足を運ん止めた。

『何をそこまで落ち込んでいる。お前さんはホラーを狩つてあの女を守つたんだ』

『そんなことはわかつてる！ だけど……俺は……』

『統夜。お前は誰かに感謝されるために魔戒騎士になつた訳じゃないだろう！ それに、あれくらい恨み言を言われるのは良くあることじゃないか！』

イルバは統夜を励ますことはせず、事実だけを統夜に告げていた。

「そうだな……。あの人はこれからも俺を恨むことで未来の笑顔を守ることが出来たんだ……。だからこれで……」

「やーくん、本当にいいの？」

唯は真つ直ぐな瞳で統夜を見ていた。

「唯？」

「唯先輩の言う通りです！ 統夜先輩、無理はしないで下さい！」

「そうよ。……辛かつたわよね……」

「……………」

唯、梓、紬の優しい言葉に統夜の瞳から涙が出てきたが、慌てて首を横に振って涙を払っていた。

「統夜。あたしたちの前だけは素直になれよ」

「そうだ。我慢しなくても……………いいんだぞ……………」

「！」

みんなの優しさに統夜の瞳からは涙が溢れていた。

「……………うっ……………くっ……………!!」

統夜は泣き叫ぶことはせず、ただただ静かに涙を流していた。

唯たちは優しく統夜の肩に手を置いたり頭を撫でるなどをして静かに涙を流す統夜を励ましていた。

魔戒騎士とホラーとの戦いの現実を思い知った唯たちは、魔戒騎士の戦いにはなるべく関わらないようにしようと心に決めたのであった。

……………続く。

次回予告

『魔戒騎士というのは統夜1人ではない。統夜以上の魔戒騎士はたくさんいるんだぜ！
次回、「銀牙」。月夜に輝く白銀の双牙』

第6話 「銀牙」

……ここは桜ヶ丘某所にある展望台。

ここからは桜ヶ丘の街を一望できるとのこと、地元の人にとっては、地元のデートスポットだけでなく、他の地方からも観光客が来ているほどである。

そこで、1人の青年が桜ヶ丘の町並みを眺めていた。

青年は黒い服に黒いコートを羽織っており、年齢は20代後半くらいである。

「……ふーん……。ここが桜ヶ丘か……。けっこうでかい街なんだな」

青年は今桜ヶ丘に来たばかりであり、予想以上に街が大きいことに驚いていた。

「さーと、統夜に会いに行こうかな。統夜の入ってる軽音部つても興味あるしな」

青年は展望台を出ると、入り口に停めてあるバイクにまたがり、ヘルメットをかぶるとバイクを発進させた。

青年はそのまま桜ヶ丘高校へと向かった。

統夜 side

俺がヤシャウルを討伐してから一週間が経った。

この一週間は指令らしい指令はなく、エレメント浄化や街の見回りを主に行っていた。

……ヤシャウルを討伐した時はみんなに情けないところを見せちまったな……。

男が誰かの……それも女の子の前で泣くなんてみつともないったらありやしない。

あの時もイルバが言ってくれたけど、憎まれるのはよくあるんだ。

それに、俺たちは誰かに感謝されるために魔戒騎士をやってるわけじゃない。

俺はまだまだ未熟だよな……。

……。これから唯たちだけじゃない。多くの人を守るために俺はもっと強くならないと……。

この日も放課後になり、部室に行こうと思ったその時だった。

「……あつ、統夜君。良かった、まだ教室にいたのね」

黒の短髪に眼鏡をかけた少女が俺に話しかけてきた。

彼女は真鍋和（まなべのどか）。唯の幼馴染であり、生徒会に所属している。

俺たち軽音部は和に普段すごくお世話になってるんだけど……。

あれ？和は滯と同じ1組なのに何の用事だろう？

「おう、和。どうしたんだ？」

「あら、統夜君。そこにいるのは誰なのかしら?」

茶色の長い髪に眼鏡をかけた女の人が俺に声をかけてきた。

この人は山中さわ子先生。桜ヶ丘高校の音楽担当の先生で、一応軽音部の顧問でもある。

初めは優しくしておしとやかな先生だなと思っていたけど、デスメタルをやつてた過去があり、色々めっちゃくちゃな人である。

さらに衣装作りが趣味らしく、俺たちは散々衣装を着せられてたんだよなあ……。

「ああ、どうも。涼邑零です。統夜の兄……みたいなもんです」

零さんは爽やかな感じでさわ子先生に挨拶をしていた。

「統夜君、ちよつといい?」

そう言うときさわ子先生は俺を引っ張って少し離れたところへ移動した。

「ちよつと統夜君、あのイケメンは一体誰なのよ?」

「あの人は俺にとつて兄みたいなもんですよ」

そう零さんも言つてたけどな……。

「あの人……彼女はいるのかしら?」

「いや、多分いないと思いますけど……」

「まあ♪まあまあまあまあ♪」

さわ子先生……明らかに狙ってるな……。

だけどなあ……。

「先生、悪いことは言わないからあの人はやめといた方がいいですよ」

「何ですよ！」

うぐつ……。それは零さんが魔戒騎士だからとは言えないんだよなあ……。

「あ、あのー……」

俺がさわ子さんの尋問を受けている間放つたらかしくなっていた零さんが恐る恐る

こちらに声をかけた。

「ああ！何でしょう？」

「あの、あなたは？」

「私は山中さわ子と申します。軽音部の顧問もしております」

……さわ子先生……。完璧にキャラ作ってるじゃねえか……。

「ああ、そうだったんですか！……統夜、羨ましいなあ。こんな美人な先生が顧問なんて

さっ♪」

「まあ、美人だなんてそんな……」

零さんも零さんでさわ子先生の本性を知らずに口説こうとしてるんだろうな……。

《やれやれ……。あの女教師の猫被りには困ったもんだぜ……》

(ああ……まったくだよ……)

イルバもさわ子先生の本性は知ってるからな……。

イルバはだいぶ前にその見た目がロックだからって理由でさわ子先生に奪われそうになったことがあつたっけ。

それ以来、イルバは何となくさわ子先生に苦手意識を持つてるんだよなあ……。

「軽音部を見たいんですよね？ 私が部室まで案内しますよ」

「それじゃあ、ぜひ♪」

「わかりました。それでは……」

さわ子先生が俺を差し置いて零さんを音楽準備室に案内しようとしたその時だった。

『山中先生、山中先生。至急、職員室までお願いします』

非情にもさわ子先生に呼び出しがかかってしまった(笑)

「ああん、残念。涼邑さん、申し訳ないですけど、私はこれで……」

さわ子先生は残念そうに職員室へと向かっていった。

『……ゼロ。あの女、相当キャラ作ってるわよ』

零さんの腕からカチカチと音を鳴らしながら女の人の声が聞こえてきた。

零さんの腕についているのは魔導具「シルヴァ」。零さんの相棒である。

シルヴァはイルバ同様にホラーを探知することが出来て、様々な面で零さんのサポー

トをしている。

「えっ、そうなの？」

「残念ながらシルヴァの言う通りですよ、零さん」

『ああ。しかもあいつの本性はとんでもないぞ』

アハハ……。俺が言っても説得力があるけど、イルバが言うよりも説得力があるよな……。

「へえ、それはそれで見てみたいけどね♪」

『やめておきなさい、ゼロ』

「はいはい。わかったよ」

零さんはとりあえずはさわ子先生のことを諦めたようだ。

「それにしてもシルヴァも久しぶりだな」

『あら、坊やも一丁前な台詞を言うようになったじゃない』

「……お前なあ……」

シルヴァはまだ俺のことを一人前と認めてないのかたまに坊や扱いされるんだよな……。

それでも名前でもたまに呼ばれるからまだマシだけどな……。

『やれやれ。お前さんは相変わらずだな、シルヴァ』

『あなたもね、イルバ。あなたって相変わらずザルバにそっくりよね』
『何度も言うようだが、俺様と奴を一緒にするな!』

シルヴァの言っていたザルバというのは牙狼の称号を持つ鋼牙さんが持つ魔導輪である。

ザルバとイルバは見た目は本当にそっくりなのだが、お互いそれを認めたくないよう
で、お互い嫌っている。

初めて鋼牙さんと会った時もイルバとザルバは喧嘩してたもんなあ……。

「イルバ、そこまでにしてあげ。……それじゃあ零さん、軽音部の部室まで案内します
ね」

「ああ、よろしく頼むよ♪」

統夜は零と共に軽音部の部室である音楽準備室へと向かった。

※※※

「……統夜、ここなのか？」

「はい。それじゃあ入りませうか」

俺と零さんは一緒に音楽準備室の中に入った。

中に入ると既に全員揃っているようだった。

「よう、みんな」

「あつ、やーくん来た!」

「ねえ、統夜君。そちらの方は?」

「ああ。この人は」

「俺の名前は涼邑零。……気をつけっ!礼っ!の涼邑零♪」

「ププツ!お兄さん、面白い人だね!」

「おお、このネタ女子高生相手でも通じるな」

「アハハ……。零さんっては何やってるんだか……。」

「零さん、彼女たちがこの前話した軽音部のみんなです」

俺は席に座っているみんなを零さんに紹介した。

「平沢唯です!」

「あたしは田井中律。よろしく!」

「あつ、秋山……。滯です……。」

「琴吹紬です。ムギと呼んでください♪」

「中野梓です！」

「唯ちゃんにりつちゃん。澪ちゃんにムギちゃんに梓ちゃんね。みんな、よろしくな♪」

「「「はい！」」」

唯たちと零さんは互いに自己紹介を終えていた。

「さ、零さん。立ち話もなんなんで座って下さい」

俺は零さんを普段自分が座っている席に座らせると、学生鞆と魔法衣を長椅子に置いてギターケースを壁に立てかけた。

そして、学生鞆からイルバ専用のスタンドを取り出すと、テーブルの上にそれを置いた。

さらに俺は左手にはめているイルバを外すと、イルバを専用のスタンドにセットして、普段さわ子先生が座っている席に腰を下ろした。

「……零さん。彼女たちは俺が魔戒騎士であることを知っています。なので気兼ねなくとも大丈夫です」

「知っている……ってことは話したんだな」

「ええ。以前彼女たちもホラーに襲われましてね。そのホラーは俺が斬りましたけど」

「そういう事か……。だからイルバをわざわざスタンドにセットしたんだな」

「あれ？零さんはイルイルのことを知ってるんですか？」

『だから変なあだ名で呼ぶな！』

まったく……。まだ言ってるよ、イルバのやつ……。

唯に変なあだ名をつけられてから何度このやり取りをしただろうか……。もう面倒だから数えてないな……。

「みんなに改めて紹介しておくけど、零さんも魔戒騎士なんだよ」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。零さんは銀牙騎士絶狼の称号を持つ魔戒騎士で、その実力は黄金騎士牙狼に匹敵する程なんだよ」

「ちよつと待て。統夜、この前その牙狼っていう騎士が最強って言ってたよな。ということはこの人はそれだけ強いって事なのか？」

「ああ。零さんは俺に魔戒騎士の先輩として色々教えてくれたからな……」

「「「「そうなんだ……」」」」

俺以外の魔戒騎士を見るのは初めてかもしれないけど、5人まとめて同じリアクションしなくてもいいのに……。

『ねえ。という事は私も喋っても問題はないかしら？』

零さんの腕についているシルヴァが突然口を開いた。

「あれ？ 今のはどこから声が？」

「ああ、ここだよ」

零さんは唯たちにわかりやすくシルヴァを見せていた。

「あれ？イルバとは違うんですね」

『ええ、そうよ。私は魔導輪じゃないもの。私は魔導具のシルヴァよ。よろしくね、お嬢ちゃんたち♪』

「こちらこそ、よろしく♪」

「何かシルヴァの声ってお姉さんみたいで色っぽいわね♪」

『ウフフ♪ありがとう、お嬢ちゃん♪』

「せっかく零さんが来てくれた訳ですし、お茶にしましょうか♪私準備するね♪」

ムギは席を立つと、ティータイムの準備を始めた。

「おっ、待ってました！」

アハハ……。零さん、軽音部のティータイムが羨ましいって言ってたもんな……。

「ねえ、ムギちゃん。今日のおやつは何？」

「今日はケーキよ♪色々持ってきたからみんなで食べましょう♪」

「ケーキだよ♪」

「おっ、ケーキか。楽しみだな♪」

唯と零さんがすごく嬉しそうにしてる……。

唯はともかく零さんはかなりの甘党だからな。

ムギは紅茶を淹れる前に様々な種類のケーキをテーブルに置いた。

「うわあ♪どれも美味しそう♪」

「ムギ、随分と多いな。食べきれるかな？」

しかもいつもより箱がでかいしな……。

「昨日も知り合いからケーキを頂いたのだけれど、1人じゃ食べきれないから全部持つてきちゃった♪」

あのなあ……。

いくらなんでも30個のケーキは多すぎるだろ……。

「大丈夫大丈夫。みんなが食べきれなくても残りは俺が全部食べるから♪」

まあ、零さんなら20個でもケーキ食べる人だからな……。

「え？もしかして零さんって甘党なんですか？」

「ああ♪俺、甘いもの大好きなんだよね♪ケーキとかならいくらでも食べられるかな♪」

いつだったか零さんと一緒にケーキ屋に行った時に全種類下さいって聞いた時はさすがに耳を疑ったけどな……。

「そうなんですか？そうしたら遠慮なくたくさん食べて下さいね♪」

「それじゃあ遠慮なく♪」

ムギが紅茶を淹れている間に零さんは箱の中の三分の一のケーキを自分の近くに置いていた。

「凄い……」

「本当にすごく食べるんですね……」

「普段はこの倍は食べるけどな♪」

「……「どれだけ!!」……」

アハハ……。甘党の片鱗を見せた零さんにみんな驚いてるよ……。

驚きながらも紅茶が出てきたところでティータイムが始まった。

……今日は零さんがいるから何か変な感じだな。

零さんはまずショートケーキを一口食べた。

「……お、美味い!今まで色んなケーキを食べてきたけど、このケーキは今までの中でもかなり美味いよ!」

「ウフフ、ありがとうございませう♪まだありますからいっぱい食べて下さいね♪」

「ああ、遠慮なく♪」

こうして零さんはケーキを次々と食べ始め、俺たちはそれを眺めながら紅茶を飲んでいった。

※※※

俺たちがティータイムを始めてから1時間が経過した。

その時にはあれだけあったケーキは全て無くなっていた。

俺、律、漕、ムギ、梓の5人は2個しか食べてないけど、残りを唯と零さんが食べたからな……。

まあ、ほとんどは零さんが食べたんだけどな……。

「まさかあれだけあったケーキが全て無くなるなんて……」

「零さんがいなかったら私たちだけじゃ食べ切れませんでしたね……」

まあ、いくら唯でも食べられる量は限られてくるだろうからな……。

「いやあ、ご馳走さん♪すごく美味かったぜ♪」

零さんも上機嫌だな……。

「さて、食後に体を動かしたいが、統夜。どこかいところはないか？」

「あまり人目につかないなら屋上がありますけど……」

「お前がどれだけ鍛えてるかも知りたいいな。ちよつと付き合え」

「はい」

そう言うのと零さんは立ち上がり、俺も立ち上がった。

俺は長椅子から魔法衣を取り出すと、それを羽織り、音楽準備室を出た。

そして近くにある屋上に向かうと、零さんだけじゃなく唯たちもついてきた。

屋上に到着すると、俺と零さんは屋上の中央まで移動すると、お互い対峙していた。

「統夜。ルールはサバツクと一緒でいいな?」

「ええ。一滴でも血を流した方の負け……ですね」

俺と零さんはそれぞれ魔法衣から魔戒剣を取り出すと、構えた。

零さんの魔戒剣は俺のような一本の剣ではなく、少し刃の短い二刀流になっている。

『何考えてるのよ、ゼロ。やめなさい!』

『統夜。騎士同士の私闘は禁止されていることは知っているだろう!』

「イルバ。これは騎士同士の私闘じゃないよ」

「シルヴァ。これはただのトレーニングさ。だから安心しな」

俺と零さんはそれぞれ相棒を説得したところでそれぞれの魔戒剣を構えながらそれぞれの相手を睨んでいた。

「……行きます!」

俺は零さんめがけて突撃すると、零さんめがけて魔戒剣を振った。

く三人称 side く

統夜と零がトレーニングと称してぶつかり合っている時、唯たちはハラハラしながらその様子を眺めていた。

「なあ、2人とも本物の剣で戦ってるよな？」

「ああ。あたしはそう思うけど」

「ええ!?それって危なくないですか？」

「トレーニングって言ってるから大丈夫だとは思うけど……」

「それでもやーくんが心配だよお！」

唯たちは目の前で戦っている統夜を心配していた。

統夜が相対している零は、統夜以上の実力者であると聞いていたので余計心配になったのだ。

統夜は魔戒剣を一閃するが、零は魔戒剣一本のみで統夜の一撃を受け止めた。

「くっ……!」

零はすかさず2本目を一閃するが、統夜は零の1本目を弾いて2本目の一閃を防いだ。

「……どうした？そんなもんで終わりじゃないだろ？」

統夜は再び魔戒剣を一閃するが、零にかわされると、零は蹴りを放ち統夜を吹き飛ばした。

「ぐあっ！くっ……………」

『統夜！実力は圧倒的にあつちが上なんだ！正面からぶつかるとは無様な結果になるだけだぜ！』

「ああ！わかつてる！」

統夜は体勢を整えると再び魔戒剣を構えた。

「統夜、今度はこっちから行くぜ！」

零は2本の魔戒剣をグルグルと回転させながら構えると、統夜めがけて切りかかった。

統夜は魔戒剣で零の一閃を防ぐが、零にはもう1本魔戒剣がある。

もう1本の魔戒剣が迫るが、統夜は咄嗟に青い鞘を取り出すと、鞘で魔戒剣の一閃を防いだ、

「……………へえ……………」

零も鞘まで武器とするとは思ってもいなかった。

「はあっ!!」

統夜は魔戒剣と青い鞆を用いて零の2本の魔戒剣を弾くと、蹴りを放って零にを吹き飛ばした。

「統夜！やるじゃないか！」

「まだまだです！だけど、次でケリをつけます！」

統夜は魔戒剣を構えると、零を睨みつけた。

「そうだな……。次で最後決めさせてもらうぜ！」

零も魔戒剣を構えると統夜を睨みつけた。

そして……。

「はあっ!!」

2人はお互いめがけて駆け出すと、それぞれの魔戒剣を一閃した。

……その結果……。

「くっ……!!」

統夜は魔戒剣を落としてしまい、その場にしゃがみ込んだ。

「統夜（君）!!」

「統夜先輩！」

「やーくん！」

その場にしゃがみ込んだ統夜を見て唯たちは思わず声をあげた。

このトレーニングは零の圧勝に見えた。
しかし……。

「……………へえ……………」

零も統夜の一撃を受けて一本だけではあるが、魔戒剣を落としてしまった。

「……………統夜。どうやらちゃんと鍛えてるようだな」

零は笑いながらこう言うと、落ちた魔戒剣を拾い、2本の魔戒剣を鞘に納めた。

「まだまだです。……………流石は零さんだ。俺は手も足も出なかつたですよ」

統夜も魔戒剣を拾うとそれを青い鞘に納めた。

それと同時に唯たちが統夜に駆け寄ってきた。

「統夜君、大丈夫？」

「ああ、問題ないよ」

「だけど、統夜先輩。血が……………」

梓の指摘通り、統夜の右手に少量ではあるが血が出ていた。

「ああ……………ああ……………！」

統夜の右手から僅かではあるが溢れ出る鮮血を見た漣の顔は真っ青になっていた。

「おっと。漣はこういうの苦手だったな。悪かったよ」

漣がこうなったのも自分のせいであるとわかつていた統夜は漣に詫びをいれていた。

「統夜先輩。保健室に行きましよう！」

「大丈夫、これくらいすぐ治るし」

「ダメです！ばい菌が入ったら大変じゃないですか！先輩はもつと自分の体を大事にして下さい！」

「……すいやせん……」

梓にすごい勢いで怒られていた統夜は素直に謝ることしか出来なかった。

「零さん、俺は保健室に行ってくるのでみんなと部室で休んで下さい」

「ああ、わかった」

統夜は梓に付き添われて保健室に向かうと、残された他のメンバーは部室に戻り、紅茶を飲みながら統夜を待っていた。

待つこと20分……。

「すいません、戻りました」

統夜と梓が戻ってきた。

「零さん、すいません。待たせてしまって」

「全然気にしてないぜ。美味しい紅茶を飲みながら待ってたからな♪」

「そうでしたか……」

「それよりも、さっきのトレーニングで統夜は咄嗟に鞘を武器として使っただろ？俺と

の修行の成果も出たみたいだな」

「たまたまですよ……。零さんは二刀流ですから、対抗するためには鞘も武器にしなきゃと思っただけです……。出来ただけで……」

統夜は普段の戦いでは魔戒劍の鞘を武器に使う発想は無かったが、今回のトレーニグでは偶然その発想が出てきたのである。

「だけど、ホラーと戦う時はそういう発想は大事だぜ。機転の良さが危機を救うことだつてあるからな」

「……はい、肝に銘じます」

統夜は先輩騎士からのアドバイスを真摯に受け止めていた。

「統夜。俺が桜ヶ丘に来たのはただお前に会いに来たわけじゃなく、ホラーを狩るために来たんだよ」

「やつぱり……指令を受けて来たんですね」

「まあ、そういうことだ。それで統夜。お前も俺のホラー狩りを手伝わないか？」

零からの唐突な提案に統夜は戸惑っていた。

「でも、俺が行っても零さんの足を引く張るだけじゃ……」

「それを決めるのは俺だ。それに、さっきの戦いを見てたら足手まといにはならないって思ったけどな」

統夜は少しは零に認めてもらった。そのことが嬉しくて仕方なかった。

「ありがとうございます！俺で良ければお手伝いをさせて下さい！」

「よしっ、決まりだな！」

そういうと零は立ち上がった。

「……零さん、帰るんですか？」

「ああ。これからホラーを狩ってくる。みんなには悪いが、統夜を借りて行くぜ」

「わかりました……。零さんも統夜先輩も気を付けて……」

「大丈夫だ。俺たちは必ず生きて帰る。信じていてくれ」

統夜は唯たちを安心させるためにこう告げると、零と共に音楽準備室を後にして、学校を出た。

零は乗ってきたバイクに跨ると、統夜にスベアのヘルメットを渡した。

統夜はギターケースや学生鞆といった物すべてを魔法衣の懐にしまうと、ヘルメットを被り零の後ろに座った。

統夜が座ったことを確認した零はバイクを発進させると、とある場所へと向かった。

※※※

すつかりと夜になり、とある場所に到着すると、零はバイクを停めた。

零がバイクを降りたので統夜も降りると、2人ともヘルメットを外した。

「……零さん、ホラーはここですか？」

「ああ。俺のターゲットは恐らくここに現れるハズだ」

『確かに、不穏な気配を感じるぜ』

『ええ。だからゼロも統夜も油断しないで！』

統夜も零も周囲を警戒しながらいつでも魔戒剣が抜ける体制になっていた。

その時である……！！

『統夜！上から来るぞ！！』

顔が2つある鬼のような姿をしたホラーが上空から襲いかかっていた。

統夜と零はホラーの奇襲を無駄のない動きでかわした。

『統夜。やつはネロ。飛翔能力を持つ厄介なホラーだぞ』

「そう、俺のターゲットはあいつだ！統夜、油断するなよ！」

「はいー」

統夜と零はそれぞれの魔戒剣を抜くと、ネロを睨みつけながら構えていた。

ネロは真つ直ぐ統夜めがけて攻撃を仕掛けて来た。

「へえ……。弱いやつから潰す。これは確かに戦いの定石ではある。だけど……！」

統夜はネロのまるで鎌のような腕の攻撃を弾いた。

「俺だつて魔戒騎士なんだ！あんまりなめてると怪我じやすまないぜ!!」

統夜は力強く魔戒剣を一閃し、ネロに一撃を与えた。

しかし……。

「……やっぱりダメージは少ないか……」

ネロにダメージは与えたものの、そのダメージは多いとは言えなかった。

「……へっ、こつちのことを忘れてもらっちゃ困るぜ!!」

零は2本の魔戒剣を振るつてネロに迫るが、ネロは飛翔して零の攻撃をかわした。

「やっぱり飛べるくらいまだ元気みたいだな……」

ネロの飛翔能力は未だ健在であり、ネロは続いて零めがけて攻撃をしかけた。

「……おっ、来た来た♪」

零はネロの一撃を二本の魔戒剣で防ぐが、ネロはもう片方の腕で零に攻撃をしかけた。
た。

「！零さん！」

統夜はネロめがけて斬りかかると、零に攻撃をしかけようとした腕で統夜の一撃を防

いだ。

ネロは軽々と統夜を弾き飛ばすと、統夜はその勢いで少しだけ後ろに下がってしまった。

零はその隙をついてネロを弾き飛ばすと、二本の魔戒剣による斬撃を与えた。

ネロは慌てて飛翔するが、先程より飛行高度は下がっていた。

「よし……統夜！一気に決めるぜ！」

「はい!!」

統夜と零はそれぞれの魔戒剣を高く突き上げた。

統夜は一本の魔戒剣で円を描き、零は二本の魔戒剣でそれぞれ円を描いていた。

統夜の描いた円はそのまま光を放ち、零が描いた円は1つになったところで光を放った。

2人は光に包まれると、それぞれ鎧を身に纏った。

零の身にまとう鎧は統夜同様に銀色の輝きを放っていた。

統夜の魔戒剣は皇輝剣という専用の剣に変化した。零の二本の魔戒剣は切っ先に角度がついた専用の剣である銀狼剣に変化した。

零の召還した鎧は銀牙騎士絶狼（ゼロ）。その名の通り銀の鎧を身に纏った零の魔戒騎士としての名前である。

統夜と零は同時にネロめがけて飛び出すと、まずは統夜が皇輝剣による一撃を与えた。

その一撃にネロが怯んだところで、零の銀狼剣による鮮やかな攻撃が続いた。

銀狼剣の一撃を受けたネロのダメージは相当だったのか、地面に叩きつけられ、統夜と零も着地をした。

「統夜！お前はもうすぐ試練なんだろう？とどめはお前に譲るぜ！」

「ありがとうございます！」

統夜は皇輝剣を構えると、ゆっくりと立ち上がるネロに狙いを定めた。

そして、ネロめがけて駆け出すと、皇輝剣を一閃し、ネロを真っ二つにした。

真っ二つにされたネロの体が爆発すると、その体は陰我とともに消滅した。

ネロの討滅を確認した統夜と零は鎧を解除した。

2人は元の姿に戻り、統夜の皇輝剣と零の銀狼剣も魔戒剣に戻っていた。

2人はそれぞれの魔戒剣を鞘に納めた。

「……ふう、これでお仕事は完了ですね」

「ああ。統夜、ありがとな。おかげで少し楽をすることが出来たよ」

「そんな……。俺はただとどめを刺しただけですよ……。零さんが弱らせてくれたおかげです」

「まあまあ、そんな謙遜するなつて」

あまりにも謙遜な統夜を見て、零は思わず笑みを浮かべていた。

「……それよりも統夜。お前はもう少して試練を受けるんだろう？」

「ええ。あと何体ホラーを討伐すればいいかはわからないですけど」

「……先輩として1つアドバイスをするとすれば……」

統夜は目を見据えてじっくりと零の話聞いていた。

「……自分の弱さを受け入れる勇気を持つことかな？」

「自分の弱さ……ですか？」

「まあ、それは実際に試練を受ければわかると思うぜ！」

統夜は零の言葉を理解出来ずにいたが、先輩騎士のアドバイスにとっても感謝をしていた。

「……さて、俺はそろそろ行くよ」

「え？もしかしてもう桜ヶ丘を後にするんですか？」

「まあな。統夜にも会えたし、軽音部でだいぶ楽しませてもらったしな♪」

（まあ、肝心の演奏は聞かせてないんだけどね……）

統夜は零に軽音部の演奏を聴かせていないことを思い出し、苦笑いをしていた。

「……それじゃあ、統夜。またな」

「はい。今度会う時にはもっともっと強くなつてますから！」

「ああ。楽しみにしてるぜ♪」

「こう言葉を残し、零は去っていった。

『……さて、統夜。俺たちも帰るぞ』

「ああ、そうだな」

零の姿が見えなくなつたところを確認し、統夜はそのまま家路についたのであつた。

……続く。

—— 次回予告 ——

『魔戒騎士にも乗り越えなきやいけない試練というものがある。統夜、気を引き締めていけよ！ 次回、「試練」。乗り越えるか、それとも落ちるか』

第7話 「試練」

銀牙騎士絶狼の称号を持つ零が統夜のもとを訪れ、共にホラーネロを討伐した翌日、統夜はいつも通りエレメントの浄化を行ってから登校した。

そして放課後になると、1時間ほど部活に顔を出してから番犬所に向かった。

統夜はイレスに挨拶をすると、魔戒剣を浄化する狼の像の前に立った。

そして魔戒剣を抜き、狼の像の口の中に入れたのだが……。

「うおっ!? な、何だ?」

不思議な光に包まれると、統夜は狼の像の中に吸い込まれていった。

「……統夜。いよいよ試練の時が来たのですね……」

統夜の様子を見ていたイレスはボソツと呟いていた。

※※※

統夜が目を覚ますとそこは番犬所の中ではなく、正体不明の真つ白な空間であった。だが、あちらこちらに魔戒語で書かれた文章が存在している。

「……イルバ、ここがどこだかわかるか？」

『ああ。どうやら、統夜。お前さんは昨日のホラーでちょうど数を満たしたようだ』
「数を満たす？ということはもしかして……」

統夜はイルバの言葉を聞いて今自分が置かれている状況に気付いた。

『月影統夜。よく来た……』

突如声が聞こえてきたのだが、統夜には聞き覚えのない声であった。

「誰だ！それに……は？」

『真魔界に続く内なる魔界だ。お前は今、父親が歩んだ道を辿ろうとしている』

「……いい加減姿を現せ！」

統夜は謎の声に苛立って声を荒げると、ガシン！ガシン！と足音が聞こえてきた。

そして統夜の目の前に現れたのは……。

「……！奏狼……」

白銀の鎧を纏った騎士であり、統夜が継承した鎧である奏狼であった。

「お前は一体何者だ！」

『私は……。お前の内なる影。そして……お前のもっとも恐れる存在だ！』

奏狼がいきなり皇輝剣を抜いて襲って来たので、統夜は魔戒剣を抜いて奏狼の攻撃を防いだ。

「くっ……くっ……！」

今の一撃は小手調べだったのか、奏狼はすぐさま皇輝剣を鞘に納めた。

『お前が封印したホラーは100体を超えた』

（！そうか、昨日封印したネロでちょうど100体だったのか！）

統夜は昨日封印したネロが自ら封印した100体目のホラーであった。

『その証として、白皇（びやくおう）を召還する許しを与える』

「白皇？それってもしかして……！」

『魔界より生まれし力。その力が欲しくば、私を倒すことだ。それが、お前に課せられた

試練だ』

（魔界より生まれし力？……それってやっぱり魔導馬のこと……だよな？）

魔戒騎士は自らが封印したホラーが100体を超えると、魔導馬を与えられる。

そのためには試練を受けなければいけない。

統夜はその話を聞いたことがあった。

「……そうか。だったらあんたを倒す！大切な人を守る力を得るためにも！」

統夜は手に持っていた魔戒剣を強く握りしめると、奏狼めがけて魔戒剣を一閃した。

しかし、あっさり防がれただけでなく、魔戒剣を奪われてしまい、統夜は奏狼の放つ回し蹴りを受けて吹き飛んでしまった。

「があっ！……くっ……くっ……！」

奏狼はそのまま追撃をすることはなく、統夜の魔戒剣を統夜の目の前に投げた。

『どうした、その程度か？それでは何も守れないぞ。軽音部と言ったか？貴様のそのちっぽけでくだらない時間さえもな』

奏狼の言葉を聞いて、統夜の中で何かが切れてしまった。

「貴様あ!!」

統夜は怒りを露わにすると、すぐさま魔戒剣を拾って奏狼に斬りかかった。

しかし、それよりも奏狼の剣の方が早く、奏狼の斬撃を受けた統夜は吹き飛ばされてしまった。

「このお……！」

統夜が怯まず奏狼に向かおうとしたその時だった。

『統夜！ホラーがゲートより出現しました。直ちに向かうのです』

イレスからホラー討伐の指令が来た。

『行ってこい。まずは魔戒騎士としての使命を果たすのだ。……私はいつでもここでお前を待っている』

ホラー出現により内なる影との試練は一時中断となつてしまい、統夜はホラー討伐へと向かつていった。

※※※

ホラー討伐に向かった統夜は、イルバのナビゲーションを頼りに廃工場に来ていた。そこには明らかに不審な巨岩があった。

「なあ、イルバ。まさかとは思うけど、ホラーってあれか?」

統夜は目の前にある不審な巨岩を指差していた。

『ああ。そのようだぜ』

すると、怪しげな巨岩が姿を変え、巨大なホラーへと姿を変えた。

『統夜。やつはゴレム。こいつの体は相当硬いぜ。気を付ける』

「わかった!」

統夜は魔戒剣を抜くと、大きくジャンプをしてゴレムに斬りかかるが、ゴレムの体は頑丈で傷をつけることは出来なかった。

「くそっ！やっぱりダメか……」

統夜は一度距離を取るが、ゴレムは少しずつ近付いてきた。

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、奏狼の鎧を身に纏った。

統夜はゴレムの上に乗し、一撃、二撃と皇輝剣でゴレムを斬りつけた。

しかし、皇輝剣であってもゴレムに傷をつけることは出来なかった。

統夜は一度ゴレムから離れて距離を取った。

「くそっ！まだだ!!」

統夜は再びゴレム目掛けて斬りかかるが、ゴレムが統夜にパンチを繰り出した。

岩のような硬い体から繰り出されるパンチはかなり強力であり、統夜は壁に叩きつけられた。

そしてその衝撃で、身に纏っていた鎧が解除されてしまった。

「ぐあっ!!……くっ、くそっ……!!」

統夜は再び立ち上がろうとするが、ゴレムは岩の姿に戻ると、どこかへ去ってしまった。

「……皇輝剣の一撃でも駄目だなんて……」

統夜は魔戒剣を眺めながらこう呟いた。

『統夜。剣だけの問題じゃないぜ。……内なる白銀騎士に心を乱されたんじゃないのか？』

「……！そ、そんな事……」

そんな事はない。統夜はそう言い切ることは出来なかった。

『統夜。今のままじゃ内なる影との試練なんて到底乗り越えられないぜ』

「！何だと……！」

『試練を乗り越えるにはどうするべきか、じっくり考えるんだな』

「……………」

ホラーゴレムはどこかへ行ってしまったので、とりあえずこの日は家に帰ることにした。

※※※

そして翌日、統夜は魔戒騎士としての務めであるエレメントの浄化を行ってから登校した。

そして学校に到着したのだが、統夜はかなり怖い顔で考え事をしており、誰も声をかけられずにいた。

そんな中、授業が始まったのだが……。

(どうすればいい……う？どうすれば奴に勝てるんだ……う？)

統夜は授業そつちのので、険しい顔をしながら考え事をしていた。

その様は相当殺気立ったものだったのか、授業をしている先生は集中出来ずにいた。

「……………」

「……月影君」

「……………」

先生はそんな統夜を注意するために声をかけるが、統夜から反応はなかった。

クラスメイトたちも統夜の様子が気になっていたのか視線が統夜に集中していた。

しかし、統夜は気付く素振りを見せなかった。

「……月影君！」

「……………」

今度は少しだけ声を大きくするが、統夜の反応はなかった。

「月影君!!」

「……………何ですか？」

統夜はようやく気付いて先生を見るが、はたから見たらギロリと鋭い視線で先生を睨みつけるように見えた。

「うっ……。い、いや……。今授業中だから……。ちゃんと授業を聞いてほしいなあ、なんて」

統夜の鋭い眼に怯えた先生は恐る恐る統夜のことを注意していた。

統夜はそこでようやく気付いたのかハッとすると、元の統夜の顔に戻っていた。

「あ、すいません……」

統夜がいつもの表情に戻ったので先生もクラスメイトたちもホツとしていた。

こうして授業は再開された。

(……統夜のやつ、相当思いつめてやがるな……)

イルバは思いつめている統夜に対していたたまれない気持ちになっていた。

その後も統夜は考え事を繰り返し、そんな事をしてるうちに授業は終わってしまった。

そしてそのまま昼休みになったのだが……。

「……………」

相変わらず考え事を続けていた。

その時だった……。

「やーくん、いる?」

唯がひよこつと2年3組の教室を覗いていた。

「あつ!平沢さん!ちようど良かった!」

統夜のクラスメイトの少女が唯に声をかけた。

「はい?」

「あなた、月影君と一緒にご飯を食べるんでしょう?だったら息抜きにどこか連れてつてあげてよ。月影君、朝からずっとあの調子なの」

「うん、そのつもりだったよ」

唯はそう言うのと統夜に駆け寄った。

《統夜。唯が来たようだぞ》

イルバがテレパシーで伝えたため、統夜はすぐ唯の存在に気付いた。

「ああ、唯か。どうしたんだ?」

「ねえ、やーくん。お昼なんだけど、みんなと一緒に部室で食べようよ♪」

「いや……。俺はいいよ」

「ダメだよおく!みんな待ってるもん!ほらっ、行こつ!」

「おい、引つ張るなつて!」

唯は統夜を無理やり立たせると観念したのか唯と一緒に部室に向かうことになった。

※※※

音楽準備室に到着すると、律、漣、紬、梓の4人が弁当を広げてまっていた。

「おつ、統夜やつと来たか」

「遅いぞ統夜！あたしたちはお腹ペコペコなんだからな！」

「……ああ、悪い悪い」

「？統夜先輩？」

梓は統夜が浮かない表情をしていることにすぐ気付いた。

「ささっ、唯ちゃんも統夜君も座って。今お茶淹れるから♪」

ムギが紅茶の準備をしている間に唯と統夜は自分の席に座ると、それぞれ弁当を広げた。

そして統夜は制服のポケットに入れていたイルバ専用のスタンドを置くと、イルバを外してそこにセットした。

ムギが人数分の紅茶を淹れると、ティータイムではなくランチタイムが始まった。

「……統夜先輩。昨日は何かあったんですか？」

みんなの食事がほぼ終わるタイミングで梓が話を切り出した。

「……何のことだ？」

「とぼけないでください！統夜先輩、さつきからずっと上の空じゃないですか!？」

「そう言えばさつきやーくんを呼びに教室に行ったらクラスの子達がみんな怯えてたよ」

「統夜……ひよつとして何か考え事をしてるのか？」

「……もしかして騎士に関する事なの？」

「お前らには関係ないだろ」

「統夜！この前も言ったろ？あたしたちの前では無理をしないでくれって。あたしたちだって話くらいなら聞けるからさ」

「……いや、俺は……」

唯たちはどうにか統夜に何があったか聞き出そうとするが、強情な統夜は口を割らなかった。

『やれやれ。それじゃあ俺様から話すぜ』

「おい、イルバ！」

『そうウジウジ考えてるくらいなら話を聞いてもらった方がマシだぜ。そうしても答

えなんて見つからないとは思わないのか？」

イルバの正論に統夜は何も言い返すことが出来なかった。

『統夜は今魔戒騎士として大事な試練を受けているんだよ』

「「「「試練？」」」」

『この前涼邑零と共にホラー討伐に行っただろう？そこで統夜は100体目のホラーを封印したんだ』

「えっ？ということとは統夜君は全部で100体のホラーをやっつけたって事？」

「100体かあ……。凄いな！」

『いや、ホラーを100体討伐なんてそこそこの魔戒騎士なら誰でもやり遂げるのさ。問題はここからなんだ』

「イルバ、その問題って一体何なんだ？」

『詳しいことはさすがに話せないが、統夜は今己の内なる影との試練を受けているんだ』
「内なる影との試練……ですか？」

『ああ、その試練を乗り越えないと一人前の魔戒騎士とは言えないからな』

「それで統夜君はそれを乗り越えるためにはどうするべきか悩んでるのね？」

『ああ。統夜は目の前に現れた白銀騎士に相当心を乱されたみたいだ。昨日現れたホラーも取り逃がしたしな』

「うん、それってすつごく勇気がいることだと思うんだよね」

「！勇気……か……」

「？やーくん、どしたの？」

「いや、何でもない」

そう答える統夜の表情は先程よりも晴れやかだった。

『統夜。旧魔戒語で「勇気」を何というか知っているな？』

「ああ。それは「ソロ」。俺が継承した名前だ」

「へえ、統夜先輩の受け継いだソロの鎧ってそんな意味があつたんですね……」

「ああ……。どうやら俺は大事なことを忘れていたみたいだ」

『やれやれ……。まさか唯に励まされるとはな……』

「ああ、ありがとな、唯」

「エへへ……。やーくんに褒められた♪」

唯は統夜の感謝の言葉にまんざらでもないようだった。

「……みんな、悪いけど、今日の部活は休ませてくれ。今の俺だったら……」

「わかりました。頑張ってくださいね♪」

「ああ」

こうして唯たちのおかげで迷いを振り切った統夜は放課後に再び試練を受けること

にした。

※※※

放課後、まっすぐ番犬所に向かった統夜は、そのまま試練の間へと向かった。

『……………来たな。月影統夜』

「ああ」

統夜は魔戒剣を抜くと、それを構えて奏狼を睨みつけた。

『……………昨日と違って良い顔をしているな。何か掴んだようだな』

「へへっ、それはこれからのお楽しみだぜっ！」

統夜は奏狼めがけて斬りかかるが、奏狼は統夜の一撃を弾き、統夜に皇輝剣による斬撃を与えた。

「ぐっ……………！」

統夜は奏狼の一撃を受けて後ろに下がるが、統夜にはまだ心の余裕があった。

再び奏狼に攻撃を仕掛けるが、奏狼に二撃三撃と皇輝剣の攻撃を受けていた。

「くっ……」

統夜は痛みで顔が歪んでいた。

(正面突破は厳しいか…？俺は今でも怖れているのか？)

唯に励まされたものの、統夜はまだ自分には恐れがあるのではないかと予想していた。

(そうだとしても進むしかない!!)

覚悟を決めた統夜は奏狼に突撃した。

奏狼は剣による衝撃波を放つが、恐れず突き進んだ統夜はそのまま奏狼を魔戒剣で貫き刺した。

奏狼に刺した魔戒剣を抜くと、統夜はその場にしゃがみ込むが、すぐ立ち上がった。

『会得したようだな、月影統夜』

「俺一人の力じゃない。俺の大切な仲間が弱さを受け入れる勇氣っていうのを教えてくれたから」

『そう、最初にも言ったが、私はお前の内なる影だ。影を恐れれば影に飲み込まれる。しかし、お前は踏み込んできた。内なる影へと。お前は心の弱さや恐れを認めたくなかったのだ』

「今ならそれがハッキリとわかる。俺は、今まで心の弱さや恐れを認めたくなかった」

てことを」

『それを知ったお前ならこの先の試練も斬り裂くことができるだろう』

『統夜、昨日のホラーがまた現れたようだぜ』

イルバがゴレムの出現を察知した。

『急げ！お前の助けを待つ者がいる！』

内なる影との試練を乗り越えた統夜はホラー討伐に向かつていった。

※※※

統夜が内なる試練のため部活を休んでいた頃、唯たちはいつも通り練習を行い、練習後は行きつけのファストフード店で談笑をしていた。

そして談笑が終わり、帰る時には既に夜になっていた。

「うわあ……。ずいぶんと暗くなっちゃったねえ……」

帰り道を歩きながら唯がこう呟いていた。

「もお、帰ろうって時に唯先輩がいきなりソフトクリームなんて頼むからですよ」

「だって、アイス食べたかったんだもん……」

本来唯たちは真つ暗になる前に帰る予定だったが、帰る直前に唯がアイスを食べたいとのことでソフトクリームを注文してしまい、遅くなってしまったのだ。

「とりあえず今日は早く帰らないとな」

「そうですね、夜は危ないですから……」

唯たちは過去にホラーに襲われたことがあるので、あまり夜に出歩かないようにしていた。

しかし、今日は偶然遅くなってしまった。

みんなが解散する大きな道に入ったその時であった。

「……あれ？」

「律先輩、どうしたんですか？」

「あんな岩、いつも置いてあつたっけ？」

律は少し先にある大きな岩を訝しげに見ていた。

「確かに、明らかに怪しい岩だよな」

「こういう怪しいのは触らない方がいいですから帰りましょ」

「うん、そうね」

唯たちは怪しい岩を無視し先に進もうとしたその時だった。

その岩が形を変え、ホラーゴレムへと姿を変えた。

「ほ、ホラー!？」

「と、とりあえず逃げよう!」

唯たちはとりあえず逃げ出すが、ゴレムはゆつくりと追いかけてくる。

そしてゴレムは体の一部である小さな岩を唯たちめがけて放った。

「ちよ、岩!？」

「あんなの避けられないよ!？」

小さな岩たちが唯たちに迫ってきたその時だった。

ヒュン!!

唯たちの前に誰かが現れたと思ったらその誰かが岩を弾き飛ばした。

「……………やーくん?」

「いや、違うぞ」

唯たちは助けてくれたのが統夜かと思ったが、よく見たら女性だった。

「お前たち……………大丈夫か?」

女性は黒いコートを身につけており、その手には筆のような物が握られている。

「あ、あなたは……………?」

「もしかして、統夜君と同じ……………?」

「お前たち、統夜を知っているのか？」

「はい。私たちの友達で、以前もホラーから助けてくれたんです」

「なるほど……。またホラーに襲われるとはお前たちもついてないな」

「あの……。あなたは？」

「俺は烈花。魔戒法師だ」

「……魔戒法師？」

「安心しろ。お前たちは俺が守る」

烈花は自身の武器である魔導筆を握りしめると、ゴレムに向かっていった。

「……………」

「……………ムギちゃん？」

「……………格好いい……。あんなに格好いい女性って本当にいるのね……」

紬は烈花の凛々しい姿に見惚れていた。

「あのなあ……」

律はそんな紬をジト目で見ていた。

「はあっ!!」

烈花は魔導筆から術を放つが、ゴレムに傷をつけることは出来なかった。

「ちっ……硬いやつだな。これは厄介だ」

ゴレムは反撃と言わんばかりに小さな岩を烈花めがけて放った。

烈花が術を用いて岩を撃ち落そうとしたその時だった。

ガキン！ガキン！

赤いコート少年……統夜が岩をゴレムに打ち返し、その岩をゴレムにぶつけた。

「統夜！ やつと来たか」

「烈花さん、お久しぶりです。そして、唯たちを守ってくれてありがとうございます」

「気にするな。俺たち魔戒法師だって守りし者なんだ」

「烈花さん。奴は俺が斬ります。だから、唯たちを頼みます」

「ああ、わかった」

烈花は唯たちのもとまで下がると、唯たちの護衛に入った。

「……今度こそ、貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そして円を描いたところから光が放たれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「……統夜先輩……頑張つて……！」

梓がこう統夜の応援をしていると、烈花が梓の肩に手を置いた。

「安心しろ。統夜は必ずあのホラーを倒すさ」

烈花は優しく笑みを浮かべながら梓を安心させていた。

「あいつがああのホラーを斬るって言った時、自信にあふれていた顔をしていたからな。俺はあんな顔が出来るやつは信じている」

「……そうですよね……」

梓たちは少し離れた所で統夜の戦いを見守っていた。

そして統夜は、鎧を召還するなりゴレムに飛び掛ると何度も蹴りを放ってゴレムを吹き飛ばした。

「さっそくだけど、お前の力……貸してもらおうぜー」

統夜はゆっくりと立ち上がるゴレムを睨みながらこう呟いた。

ゴレムは反撃と言わんばかりに複数の岩を統夜めがけて放った。

「行くぞ……白皇!!」

複数の岩が統夜に迫ろうとしたその時、統夜の体から光が放たれた。

その光は岩を砕き。そして……。

ヒーン!!

白銀の輝きを放つ馬が現れると、統夜はその馬に跨っていた。

統夜の乗るこの馬こそ魔導馬白皇（びやくおう）。内なる影との試練を乗り越えて統夜が手に入れた力である。

「ほわあ……」

「すげえ……」

「格好いいな……」

「それにすごく綺麗……」

「馬に乗る騎士って絵になりますよね……」

唯たちは魔導馬に乗る雄々しき騎士の姿に見惚れていた。

（統夜……。お前も無事に試練を乗り越えてたんだな……）

烈花はまるで弟子の成長を目の当たりにしているような優しい笑みを浮かべていた。

「行くぞ、白皇！」

白皇に乗った統夜は大きくジャンプをすると、白皇の脚で何度も蹴りを放ち、ゴレムを吹き飛ばした。

ゴレムは大きく吹き飛ばされたものの、ダメージは浅いようであった。

『やっぱりこいつの装甲は硬いな……』

「そうだな……だけどっ!!」

—— ヒヒーン!!

白皇の嘶きと共に前足を強く叩きつけると、周囲に衝撃波が放たれた。

「「「「きやあつ!!」」」」

「くっ……!!」

その衝撃の強さに唯たちだけではなく、烈花まで怯んでいた。

その時、統夜の皇輝剣に変化が起こった。

剣の形が大きくなり、巨大な剣へと姿を変えた。

この剣は皇輝斬魔剣（こうきざんまけん）。魔導馬白皇の力により、皇輝剣が変化した剣である。

白皇はゴレムめがけて走り出した。

そしてゴレムに迫ると統夜は皇輝斬魔剣を大きく振るった。

すると……。

その一撃によってゴレムの体は真つ二つに切り裂かれた。

切り裂かれたゴレムの体は爆発を起こし、その体は陰我と共に消滅した。

ゴレムを撃破したことを確認した統夜は、鎧を解除した。

それと同時に白皇も魔界へと帰り、皇輝斬魔剣も元の魔戒剣に戻っていた。

「……………」

騎乗ということもありいつもより高いところからの鎧解除だった。

そのため、華麗に着地をすると、魔戒剣を青い鞘に納めた。

「ふう……………どうにか倒したな……………」

統夜が一息ついて落ち着いていると、唯たちと烈花がこちらに駆け寄ってきた。

「みんな……大丈夫だったか？」

「うん！それにしてもやーくん、さっきのお馬さん、凄かったね！」

「もしかして、あれが？」

「ああ。内なる影との試練を乗り越えて得た力だよ」

「剣もすごくでつかくなつてたよな」

「うん♪凄かったね♪」

「統夜先輩なら試練なんて乗り越えるって思っていました！」

「みんな……」

唯たちからの労いが、統夜には何より嬉しかった。

「統夜、よくやったな」

「烈花さん……」

「お前も魔導馬を得るまで成長したってことだからな。お前の修行を見た俺も嬉しいよ」

統夜は涼邑零だけではなく、烈花にも稽古をつけてもらっていたのだ。

「統夜。近いうちにまた稽古をつけてやるよ。今のお前ならさらに鍛えがいがありそうだからな」

「アハハ……お手柔らかにお願いします……」

烈花の指導が相当厳しかったのか統夜は苦笑いをしていた。

「……さて、俺はもう行くぞ」

「もう行つちやうんですか？」

紬は寂しそうな表情を浮かべながら烈花を引きとめようとしていた。

「ああ。俺はこれから行かなきゃいけないところがあるからな」

烈花は烈花で魔戒法師としての使命があるのだろう。

そう統夜は察しがついていた。

「それじゃあ、もしまたこの街に来ることがあつたらぜひ私たちの学校に遊びに来て下

さい！美味しい紅茶を出しますから♪」

「……わかった。その時は息抜きを兼ねて寄らせてもらおう」

こう烈花が告げると、紬はぱあっと明るい表情になっていた。

「それじゃあ統夜、またな」

「烈花さんも、お気を付けて」

「ああ」

こうして烈花はその場から立ち去っていった。

「さて、俺たちも帰ろうか。送るからさ」

「はい！」

こうして内なる影との試練を乗り越えた統夜は、唯たちと共に家路についたのであった。

……続く。

——次回予告——

『やれやれ。高校生というのは面倒くさいんだな。数ヶ月に一度学力を測るテストなるものがあるとはな。次回、「試験」。試練を乗り越えたのに大変だな、統夜』

第8話 「試験」

（続夜 side）

俺は100体のホラーを封印し、内なる影との試験を受けることになった。

奏狼の鎧が目の前に現れた時はかなり動揺したな……。

ホラーを取り逃がすなんて失態をやらかすし……。

イルバに色々言われたが、何も言い返せなかったよ……。

俺はずっと悩んでいたけど、唯たちのおかげで自分の弱さを受け入れる勇気を思い知り、試験を乗り越えることが出来た。

唯たちには本当に感謝だよな……。唯たちがいなかったら俺は試験を乗り越えられなかったかもしれない……。

その後現れたゴレムも新たな力、白皇の力を借りて斬ることが出来たし、魔戒騎士としてはここからが正念場だな。

そしてゴレムを斬った翌日の放課後になり、俺はみんなと一緒にティータイムを楽しんでいた。

「……ほわぁ……」

……ムギが何故かボケっとしていた。

律が言うには烈花さんを見てからあの調子らしいがまさかな……。

『……おい、紬。お前さんは一体どうしたんだ？らしくもない』

「ふえ!? あ、いや……その……」

「まさかと思うが、烈花さんか？」

「!!」

アハハ……。びつくりしてるってことは凶星か……。

「確かに烈花さんは格好よかったな……」

「濡、いつそのこと烈花さんみたいになってみるか？」

「烈花さんみたい……」

濡は数秒間想像を始めた……。

そして……。

「やめろ！ 恥ずかしすぎる！」

「いやいや、服装のことかよ！」

俺はこうツツコミをいれたけど、濡だったら烈花さんの格好も似合いそうだけだな。

まあ、今気にすべきなのはそこじゃないか。

「大丈夫だよ。また烈花さんとは会えるさ」

「本当!？」

「ああ。俺と一緒にいる機会が多ければきつとな」

「ああ……。楽しみだわあ……。♪」

「アハハ……。楽しみなのはいいが、ホラー狩りに連れて行かないようにしないな
……。」

「それにしても、やーくんの乗ってたお馬さん、格好良かったよ♪」

「はい！格好良かったです！」

『あいつは魔導馬白皇。統夜の新たなる力って訳だ』

「新たなる力……」

「あのホラーとの戦いで剣が大きくなっただろ？あれも白皇の力なんだよ」

「「「へえ……」」」

「これからは戦いも厳しくなってくるから気合いれていかないとな」

「おお！やーくんやる気満々だ！」

「魔戒騎士として頑張るのもいいけど、勉強も頑張らないとな。もうすぐ中間試験だし」

「……………え？滯のやつ、なんて言った？」

「ええ!?!中間テスト!?!」

「な！なん……だと……?？」

「？統夜先輩？」

まずいぞ、もうすぐ中間テストだったのか……。

騎士の生活があったからまったたく気付かなかったぞ……！

これは言わずもがなだけど、俺は魔戒騎士だ。

そして学校に行きながらホラーを討伐している。

ホラーは夜に現れるからホラー討伐は夜になる。

そして朝は魔戒騎士としての鍛錬とエレメントの浄化をしなきゃいけないから勉強なんてする暇がない。

……………オワタ＼（＾o＾）／

「……………よし、ホラー狩りに行くぞう」

俺が席を立ったその時、おれの行動を察知した藩とムギが俺を捕まえた。

「統夜！逃げるんじゃないよ！」

「放せ！俺はホラー狩りに行くんだ！」

『……………統夜。残念ながら指令はないぜ』

……………うぐつ！イルバの裏切り者お！

「ほら、イルバもこう言ってるんだから観念しろ！」

「いやーだー!!」

俺はどうか抵抗するが、漣の強烈な拳骨をもらってしまい、黙るしかなかった。『やれやれ……。こんなんで大丈夫か？先が思いやられるぜ……』

三人称 side

統夜がホラーゴレムを討伐した翌日の放課後、統夜は意外な事実を知ることになってしまった。

桜ヶ丘高校はもうすぐ中間試験が行われるのだが、統夜はその事実を今知ったのだ。

統夜は魔戒騎士として活動しているため、朝も夜も勉強する暇はなく、統夜はただただ絶望していた。

「……そういえば、統夜ってテストの時期になるといつもこんなだったよな」

「え？そんなんですか？」

漣の指摘の通り、統夜はテスト期間になるやこのように動揺していたのである。

そして1年生の最初の中間試験では唯は数学で12点しか取れなかったが、統夜はさらにひどく、4点しか取れなかった。

赤点対策の勉強をしようとしたが、魔戒騎士の勤めのせいで思うようにいかず、漣と紬の協力でどうか赤点を回避したという過去があった。

その後のテストもどうにか漕や紬に助けられながらギリギリ赤点を回避していたのである。

「そういうえば統夜って数学と理科は壊滅的なのにあとはかなり点数がいいよな」

律の言う通り、統夜の苦手科目は数学と理科で、そこは壊滅的であった。

しかし、国語、英語、社会においては学年トップ並の点数を取ったこともあったのだ。

「……ふふつ、俺は理数系だけはどうしても苦手なのだ」

「威張るな!!」

漕は統夜に拳骨をくらわせると、統夜は黙り込んでしまった。

「仕方ない……。これからは部活も休みになるし、その時間で猛特訓だな」

「だ、だけど俺はエレメントの浄化に行かないと……」

『統夜、観念しろ。エレメントの浄化については他の騎士に任せるしかあるまい。今までだってそうやってきたんだ』

「イルバもこう言っているんだ。逃げるなよ、統夜」

「わ、わかったよ……」

『やれやれ……。これが昨日内なる影との試練を乗り越えた奴とはとても思えないな。今の統夜は格好悪すぎるぜ』

「うっさいイルバ」

『しばらくは勉強に専念することだな。まあ、指令がある時は俺様が伝えるから安心しな』

「……わかったよ……」

「……言っておくが、唯と律もだからな！」

「わ、わかつてるよ！」

勉強が苦手な唯と律も統夜と一緒に勉強に専念することになった。

※※※

そしてティータイムが終わると統夜たちはティーセットを片付けて、図書室で勉強することになった。

澪と紬は統夜、唯、律の3人の勉強を見て、梓は黙々と勉強していた。

「……統夜、ここの問題だけど、わかったか？」

「ふっ……そんなもの……」

統夜はドヤ顔をしていたので滯は簡単に解けたと思っていた。

「……まったくわからん」

「偉そうに言うな！」

滯は統夜に拳骨をくらわせると、統夜は痛かったのか手で頭を抑えていた。

「まったく……。真面目にやれよな。これじゃあ勉強の意味がないだろ？」

「わ、わかってるよ」

統夜は数学の問題集を集中して見ていた。

「えっと……。これがこうでここがこうだから……」

統夜は真面目に問題に取り組んでいた。

しかし数分後……。

プシュー……。

統夜の頭がオーバーヒートしてしまっていた。

「やれやれ……。これは重症だな……。ムギ、唯と律のことを頼む。統夜は徹底的に教え

ないとやばそうだ」

「うん♪任せて♪」

絢が律と唯の勉強を見ることになり、滯がつきつきりで統夜の勉強を見ることになった。

(やれやれ……。統夜がここまで馬鹿だったとは……。まあ、魔戒騎士としては真面目にやってるんだ。仕方ないと言えば仕方ないか)

そんな統夜を見ていたイルバは心の中でそんな事を思っていた。

この日は図書室が閉まるギリギリまで勉強していたのであった。

図書室が閉まるとそのまま帰ることになり、統夜は唯たちと一緒に帰っていた。

『統夜。今日も番犬所に寄らなきゃいけないんだから忘れるなよ』

「わかってるって。指令があるかもしれないからな」

「統夜。魔戒騎士の仕事をしながら勉強は大変だとは思うけど、ちゃんと勉強もしろよ？」

「……努力します」

統夜は滞り勉強するよう言われると、ちょうど番犬所の近くに到着した。

「さて、俺は番犬所に寄るからここで」

「それじゃあまた明日！やーくん、勉強頑張ってねえ！」

「いやいや、お前もだろ！」

統夜は唯にツツコミをいれると唯たちと別れ、そのまま番犬所の中に入った。

「今日もよく来ましたね、統夜」

「ありがとうございます、イレス様」

統夜はイレスに挨拶をすると、狼の像の前に立った。

統夜や魔戒剣を抜くと、魔戒剣を狼の像の口の中に突き刺した。

すると、狼の像の口の中から煙があがり、魔戒剣の穢れを浄化した。

さらにホラーを封印した短剣が現れると、それをイレスの付き人の秘書官に渡した。

「統夜、どうしました？何かすごく疲れた表情をしていますか」

「あつ、申し訳ありません。もうすぐ学校で学力試験があるものですから、今日は勉強に集中しております……」

「ああ、そういうえば学生は定期的に学力を測る試験があると言っていましたね」

「ええ。そこで赤点を取ってしまったら魔戒騎士としての活動にも支障をきたしかねないのでなんとか頑張ってます」

「そうですね。……統夜、指令がある時は行ってもらいますが、それ以外は勉強に専念するのです。エレメント浄化は他の騎士に任せますから」

「ありがとうございます。そうしていただけたらすごく助かります！」

「ふふ、頑張るのですよ」

イレスとの話も終わり、この日は指令もなかったので、統夜は番犬所を後にした。

※※※

番犬所を後にした統夜はまっすぐ家に帰ろうと考えたが、その前に甘い物でも買って帰ろうと思ったため、近くのコンビニに立ち寄った。

統夜は500m1のジュース1本とコンビニスイーツを2つほど買い物カゴに入れるとレジに向かったのだが……。

「いらっしやいま……ってあれ？月影君？」

見た目だけ言うとギャルっぽい店員が統夜に話しかけてきた。

「あつ、立花さんか。ここでバイトしてたんだ」

彼女は立花姫子（たちばなひめこ）。統夜と同じ桜ヶ丘高校に通っており、統夜のクラスメイトである。

姫子と統夜は席が隣同士であり、時々話をしたりもしていた。

「うん、そうなんだよ。月影君は買い物？」

「ああ。テスト勉強する前に甘い物でもって思ってたね」

「そっかあ。もうすぐテストだもんね」

姫子はレジを打ちながら統夜と世間話をしていた。

レジの計算が終わると、統夜は財布から500円玉を出して精算し、お釣りをもらっ

た。

「それじゃあ、俺は行くよ。立花さん、バイト頑張つてね」

「ありがとう、月影君も勉強頑張つてね」

姫子とこのようなやり取りをした後コンビニを出た統夜は帰宅すると買ったジュースやスイーツを取りつつ勉強を始めた。

翌日、魔戒騎士としての日課であるエレメント浄化を終わらせた統夜はそのまま登校した。

そして放課後になったのだが、テスト期間中との事でこの日は部活が休みだった。

統夜は夕方に番犬所に行く事にして、カフェで甘い物を食べながら勉強することにした。

カフェの中に入り、席を探していたのだが……。

「……おう、統夜じゃないか!」

声をかけてきたのは涼邑零だった。

「れ、零さん!? まだ桜ヶ丘にいたんですね」

「いやあ、仕事は終わったんだけどさ、この街の美味しいスイーツをまだ堪能してないなつて思つてさ♪」

「……相変わらず凄いですね……」

零が座っているテーブルにはおびただしい量のスイーツが置いてあり、統夜は苦笑いをしていた。

統夜は零との相席を諦めて零の真後ろの席に腰を下ろした。

「?どうしたんだ、統夜。こっち来ればいいのに」

「そうしたいんですけど、俺はここで勉強をしようかなと思ひまして……」

「勉強?……ああ、そっか」

零は自分のテーブルに置かれたスイーツを見て何故統夜が自分と相席にしなかったか納得していた。

「いらつしやいませ」

統夜が席に座ると店員が水を持って統夜の席に来た。

「すいません。コーヒーひとつとショートケーキをひとつとチーズケーキをひとつ下さい」

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文を聞いた店員は厨房の方へ向かっていった。

「統夜が勉強つてことはテストか何かあるのか?」

「はい。来週テストがあるんです」

「ふーん。この前試験を乗り越えたんだろ?それなのに次は試験とはついてないな」

「あれ？俺、零さんに試験を乗り越えたと話しましたっけ？」

「烈花から聞いたのさ。昨日偶然会ってな」

「そうだったんですか……」

烈花も桜ヶ丘に来ていたので零と偶然会ったとしても不思議ではない。統夜はそう感じていた。

「ちなみに何の勉強をするんだ？」

「これです」

統夜は鞆の中から数学の問題集を取り出すと、それを零に渡した。

「うわ……。今時の高校生ってよくこんな事やるな。俺にはさっぱりだぜ」

零は問題を少し見たがちんぷんかんぷんだったので問題集をすぐ統夜に返した。

「本当ですよ。だけど、昨日滯にだいぶしごかれたのでだいぶわかってはきましたけど……」

「へえ、滯ちゃんって頭いいんだな」

「ええ。テストの度に滯とムギに助けられてますよ」

「ハハ。統夜もどうにか高校生を頑張ってるってわけか」

「ええ。だけど、騎士の使命を忘れたことはないですよ」

「まあ、その心意気は大事だが、あまり気張るなよ」

「……ありがとうございます」

『ほら、ゼロ。統夜は勉強するんだから邪魔になるわよ』

シルヴァが口を開き、零のことを注意していた。

「わかってるよ。統夜、邪魔して悪かったな」

「いえ。俺としても知ってる人と話しながら勉強した方がリラックスできるんで気にしないでください」

「そっか。そう言ってもらえると嬉しいよ♪」

零とこのような会話をしていると統夜が注文したコーヒーとケーキ達が到着した。

そして……。

「お待ちせしました。チョコレートパフェとイチゴパフェと抹茶パフェです」

さらに零のテーブルにスイーツが追加されていた。

「ま、まだ食べるんですか!？」

「おう♪やっぱりこれくらいは堪能しないと♪」

『もう、ゼロったら糖分の過剰摂取はやめなさいっていつも言ってるのに……』

店員がいなくなったところでシルヴァがぼそつと呟いた。

（アハハ……。零さんってばこの前軽音部に来た時より食べてるな……）

零のテーブルに並んだスイーツを見ながら統夜は苦笑いをしていた。

統夜は自分で注文したケーキを頬張りながら数学の問題集をこなしていた。

夕方になり、統夜が今日のノルマの問題を終えるのと零が全てのスイーツを完食したのは同時であった。

「零さん、全部完食したんですね……」

「ああ♪美味かったぜ。統夜も勉強はいいのか?」

「ええ。今日のノルマは無事終わりました。零さんのおかげでずいぶんリラックスしながら勉強できましたよ」

「アハハ、俺も楽しかったぜ」

2人ともカフェでの用事は終わり、それぞれ会計を済ませた。

最初は零が奢ると言ったのだが、それは申し訳ないのことで統夜は断ったのだ。

「さて……。統夜、お前はこれからどうするんだ?」

「俺は一度番犬所に寄るつもりです」

『統夜。ちようど良かったな。どうやら指令が来たみたいだぞ』

「お、それじゃあ統夜、頑張れよ」

そう言うのと零はその場から立ち去っていった。

零が去るのを見送った統夜はそのまま番犬所に向かい、指令書を受け取った。

統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を開始した。

※※※

統夜がホラーを搜索しているともうすっかり夜になっていた。

そんな中、統夜のクラスメイトである立花姫子はこの日のバイトが終わり、帰路についていた。

バイト先のコンビニからだいぶ離れ、人通りの少ない道に入ったその時だった。

—— キシャアアアアアアアア!!!

突如姫子の目の前にこの世のものとは思えない怪物が現れた。

「ひっ!? な、何なのよ、あれ!」

姫子は突然現れた怪物に怯えるが、どうにか逃げ出そうとした。

しかし運悪く、石につまづいて転んでしまった。

「キヤッ!!」

転んでしまったため、逃げることは出来ず、怪物は姫子に迫っていた。

「……来ないで!!」

姫子の瞳から涙が溢れてくるが、怪物は足を止めることはなかった。

そして怪物が姫子を掴もうとしたその時だった。

「そこまでだ、ホラー!」

姫子と怪物の間に統夜が姿を現わすと、怪物……ホラーを魔戒剣で斬り裂き、蹴りを放って吹き飛ばした。

「つ……月影……君?」

「早く逃げろ!」

統夜は姫子に逃げるよう告げると、姫子はすぐさま逃げ出した。

「よしよし、素直に逃げてくれたな……」

走り去っていく姫子を見ながら統夜は魔戒剣を構えた。

『統夜、奴はストリングル。糸を用いて相手を喰らうホラーだ』

「何か見た目は蜘蛛っぽいな」

統夜の言う通りストリングルは蜘蛛のような見た目のホラーであった。

ストリングルは先制攻撃と言わんばかりに口から糸を吐くが、統夜は魔戒剣を一閃し、糸を斬り裂いた。

「へっ、そんなもので俺を捕えられると思うなよ！」

統夜は素早くストリングルめがけて突撃し、魔戒剣による一撃を放った。

ストリングルは爪による攻撃を放つが、統夜は攻撃を防ごうとせず、ひたすら回避していた。

『統夜！あれくらいの攻撃なぞ防げばいいだろう』

「勉強勉強で体がなまってるんだ。だからおもいきり体を動かさないとな」

統夜は勉強によるフラストレーションを解消するためにあえて大きく体を動かしていた。

ストリングルは再び糸を吐き出すが、統夜はジャンプをしてかわすと、何度も蹴りを放って吹き飛ばした。

「さて……。いい運動もさせてもらったし……。いつきに決めますか……。貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜は魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると奏狼の鎧を身にまとった。

ストリングルは糸を吐き出すが、奏狼の鎧は糸の攻撃を受けてもビクともせず、糸は鎧に触れると消滅していた。

統夜はストリングルめがけて皇輝剣を一閃すると、ストリングルの体は真つ二つに

なった。

その体から爆発が起こり、その体は陰我と共に消滅した。

「……………よし」

ストリングルを討滅したことを確認した統夜は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「お仕事も終わったし、さっさと帰るか……………」

統夜が家に帰ろうとしたその時だった。

「あ、あの……………」

逃げたはずの姫子が恐る恐る統夜に話しかけた。

「立花さん!?逃げたんじゃなかったのかよ?」

「い、いや……………。助けてもらったお礼を言っただけ……………」

「そっか……………。だけど……………」

統夜は魔法衣の懐から一枚の札を取り出した。

そして……………。

「ごめんね」

統夜はそれだけ言うとその札を姫子の額に貼り付けた。

姫子はそのまま倒れ、意識を失ってしまった。

「……………これで良しつと。帰る前に……………」

統夜は氣を失った姫子を安全な場所まで避難させるとそのまま帰路についた。

魔戒騎士は助けた人間のホラーに関する記憶を消さなければいけない。

統夜が姫子に貼り付けた札はホラーに関する記憶のみを消し去る効果のあるものである。

唯たちの記憶は消せなかったが、統夜は姫子のホラーに関する記憶は迷うことなく消し去った。

『やれやれ。今回は素直に記憶を消したんだな。唯たちも記憶を消せばいいものを……………』

「言つたらう？それは出来ないつて。それに、唯たちの記憶を消したらお前は部室で喋れなくなるぞ」

『おっと、それは勘弁して欲しいな。あの空気でだんまりは苦痛だからな』
統夜とイルバはこのような会話をしながら家路についた。

※※※

その後も統夜はコツコツと勉強を重ね、テスト当日を迎えた。

得意教科はスラスラと問題を解いていた統夜であったが、苦手教科に関しては苦戦しながら問題を解いていた。

そしてどうにかテストは終了し、数日後、全てのテストが返ってきた。

その放課後、統夜はまっすぐ部室に向かうと、唯たちはすでに部室で待っていた。

「あつ、やーくん来た！」

「統夜。結果は……どうだったんだ？」

「……」

「統夜は何故か無言になってしまい、唯たちはそんな統夜を見て心配になってしまった。」

「まさか……ダメだったとか？」

「細がこう訪ねるのだが……。」

「………どうにかだけど、赤点は回避出来たよ」

統夜はテストをみんなに見せると、苦手教科である理数系の教科はいずれも40点で

あり、赤点は回避した。

「良かった……！どうか赤点は回避したんだな！」

「やりましたね、統夜先輩！」

「ああ。みんなのおかげだよ」

「ふふん、そうだろう？」

『律、お前さんは何もしていないだろ？』

何故かドヤ顔をしている律にイルバがすかさずツツコミを入れていた。

「まあまあ。とりあえず、お茶にしましょう？私準備するね」

紬がティータイムの準備を始めて、このままティータイムに入ってしまった。

統夜はどうか学生としての試練も乗り越えたのであった。

……続く。

——次回予告——

『やれやれ……。人間というのは本当に欲深い生き物だな。それがホラーを引き寄せる

とも知らずにな……。次回、「欲望」。深すぎる欲には気を付けろ』

第9話 「欲望」

ここは桜ヶ丘某所にある廃工場。

この中で、ひどくおぞましいことが起こっていた。

1人の男が1人の女性をこの場所に監禁し、性的暴行を行っていたのだ。それだけでは飽き足らず、男は女性を暴行後、その命を奪ってしまった。

「……ふう、また女を探してこないとな……」

男はジーパンを履きながらこう呟いていた。

そんな時であつた。

——貴様……。女を喰うのが好きみたいだな……。

「だ、誰だ!？」

突然聞こえてきた声に男は怯えていた。

——女を犯して命も喰らう。我と気が合いそうじゃないか。貴様、もつと女を犯したい。喰らいたいとは思わないか？

「そ、そうだけど何言ってるんだよー」

——フツ、それでは貴様の体を我に捧げよ!!

全裸の女性の死体がゲートとなり、男の体に黒い帯のようなものが入っていった。
「ぐわああああああああああ!!!」

誰もいない廃工場に男の断末魔が響き渡っていた。

そして……。

「ふふふ……。女を……。食らうんだ……」

ホラーに憑依されてしまった男はどこかへと去ってしまった。

※※※

中間テストを無事に乗り越えた統夜は、この日も部室でお茶を飲んでいた。

統夜だけではなく、勉強が苦手な唯と律もどうにか赤点を回避し、誰かが補習で部活にいけないという事態は回避出来た。

「……いやあ、今日の紅茶もやっぱり美味しいなあ……」

統夜は紅茶を飲みながらまったりとしていた。

「……統夜先輩、ずいぶんだらけてますね……」

『統夜。いくらなんでもだらけ過ぎじゃないのか?』

「まあまあ、いいじゃない。統夜君は魔戒騎士としてのお勤めもあるんだもん♪ここに
いる時くらいはのんびりした方がいいと思うわ♪」

「うん♪ムギちゃんの言う通りだよ」

「確かに……。そう言われれば何も言えないな」

『やれやれ。お前らは統夜に甘すぎるぜ』

「ええ?別にいいじゃん、イルイル」

『だから毎度毎度変なあだ名で呼ぶな!』

「アハハ……。まだ言ってますよ……」

「イルバのやつ、いい加減慣れればいいのにな」

「このような会話が行われ、音楽準備室はまつたりとした空気に包まれていた。

その時、音楽準備室の扉が開くと、ポニーテールの少女が中に入ってきた。

「お姉ちゃん、いる?」

「あつ、憂。どうしたの?」

中に入ってきたのは平沢憂(ひらさわうい)。唯の妹であり、家では家事全般をこなす
しつかり者である。

憂は梓のクラスメイトでもあり、一緒に軽音部のライブを見たことがきっかけで仲良くなった。

統夜たちも憂とは何度も会ったことがあり、その度に出来た妹だと感心していた。

「今日は遅くなりそうなの？」

「いつも通りだと思おうよ」

「それじゃあ今日は寄り道しないで帰ってきてね。今日はお姉ちゃんの大好きなハンバーグにするつもりだから」

「わーい♪憂のハンバーグ♪久しぶりだなあ♪」

唯は満面の笑みを浮かべており、それだけ憂のハンバーグが好きだということがわかる。

「良かったら統夜さんもいかがですか？一人暮らしましたよね？」

「うーん、そうだな……」

統夜は考えるふりをしてイルバに視線を向けた。

（イルバ、別に食事くらいなら問題ないな？）

《ああ、今のところは指令はないし、たまにはいいんじゃないか？》

イルバの許可も得られたところで統夜は再び憂に視線を向けた。

「ぜひご馳走になろうかな。俺としても助かるからさ」

「わーい♪やーくんとご飯だあ♪」

子供のようにはしゃぐ唯を見て、統夜はクスリと笑みを浮かべていた。

「そしたら今日は一緒に帰るか？唯」

「うん！」

「いーなー、統夜。あたしも憂ちゃんのハンバーグ食べたいよ」

「まあ、仕方ないだろ？統夜は一人暮らして色々大変なんだし」

「そう言われればそうか」

滞にこうたしなめられると、律は納得したようだった。

「それじゃあ私はこれで失礼しますね」

「ええ？憂も一緒にお茶しようよ」

「唯。憂ちゃんはこのから夕飯の支度をしなきゃいけないんだ。無理言うなよ」

「ごめんね、お姉ちゃん。……皆さんもすいません、休憩中に」

「え？ああ、いや。気にしてないから大丈夫だよ」

さすがにこのティータイムが軽音部の日常とは言えず、統夜は苦笑いをしながら話をこまかしていた。

「ありがとうございます。……それでは、失礼しました」

憂はペコリと頭を下げて一礼すると、そのまま音楽準備室を出て行った。

『……やれやれ。相変わらず優秀なお嬢ちゃんだな』

憂がなくなつたことを確認してからイルバは口を開いた。

「ああ。本当に憂ちゃんは良く出来た子だよな」

『本当にあのお嬢ちゃんは唯の妹なのか？こうも姉妹で違うとはそう疑いたくもなるぜ』

「ああ、ひどいよお！イルイル！」

『だから変なあだ名で呼ぶな！』

「イルバ、観念しろ。唯は恐らくイルイルと呼ぶことをやめないぞ」

『やれやれ……。それは参ったぜ』

「そんなことよりも、そろそろ練習しましょうよ」

「ええ？もう？」

梓が練習を提案したが、唯が反対の意見を出していた。

「そうだな。ずっとティータイムつてのもあれだし、練習しよう」

統夜は席を立つと、壁に置いてあるギターを取り出すと、演奏する準備を始めた。

「ほら、普段合わせられない統夜がやる気出してるとんだから私たちも練習するぞ」

「……そうだな。練習するか」

「もつとお茶したかったなあ……」

統夜が率先して動いたことにより、律と唯も渋々席を立て、それぞれの楽器の準備を始めた。

全員の準備が終わったところで統夜たちはようやくやく練習を開始したのであった。

※※※

1時間ほど練習したところでちようどいい時間となり、この日は解散することになった。

途中までみんなで下校し、解散した。

統夜は番犬所に寄ることはなく、唯と一緒に唯の家へと向かっていた。

「……何か唯と2人で帰るなんて久しぶりだよな？」

「あつ、そういえばそうかも」

統夜が平沢家で夕食を共にするのはこれが初めてではなかった。

統夜が一人暮らしをしていると知った憂は時々夕食と一緒に食べないかと誘っている。

ホラー狩りをしていると家事もあまり出来ないのもので統夜はありがたく憂の申し出を受けていた。

「この前一緒にご飯を食べたのは春休みになる前だけ？」

「そうだったか？俺は忘れちゃったな」

統夜は魔戒騎士として毎日忙しくしているので、最後に夕食をご馳走になったのはいつか忘れてしまっていた。

「……ねえ、やーくん」

「ん？どうした、唯？」

「魔戒騎士のお仕事って……やっぱり大変なんだよね？」

「ああ。ホラーはいっつ現れるかわからないからな。そんなホラーから人を守る。それが魔戒騎士だ。だからやっぱり大変だよ。命だっていつ落とすかわからないからな」

統夜は事実だけを述べると、唯の瞳から涙が出てきていた。

「ちよ、泣くなよ!？」

「グスン……。だって……。やーくん……。死んじやいやだよお……」

「……大丈夫だ」

統夜は優しい表情で唯の頭を撫でていた。

「俺は簡単に死ぬわけにはいかないからな。俺は何があってもお前らを守るって決めるんだ」

「……！そ、それって……」

「みんなは俺にとって大切な友達だからな」

「え？」

『おいおい』

唯は俺にとってかけがえのない存在だからくらい言ってくれるかと彼女は密かに期待していた。

しかし、統夜のあまりの鈍感ぶりに唯は思わず泣き止んでしまい、イルバはただただ呆れていた。

《統夜。お前はもうちよつと気の利いたことは言えんのか？》

（？だって本当のことだろ？他に言うことなんてあつたか？）

《やれやれ……。お前さんがこんなんじゃないや恋人なんて出来なさそうだな……。》

（あのなあ……）

イルバと統夜はテレパシーで会話をしており、そうしているうちに唯の家に着いてし

まった。

(やれやれ……。お嬢ちゃんたちも報われないな)

唯たちの気持ちを察しているイルバは呆れていたのであった。

「ただいまー！」

「お邪魔します」

唯と統夜は家の中に入り、そのままリビングへと向かった。

「あつ、お姉ちゃんおかえり！統夜さんもいらっしやい♪」

「憂、ただいま」

「憂ちゃん、お邪魔します」

「ちようど晩御飯の支度が出来たのでちよつと待つてて下さいね」

「わーい♪楽しみだなあ♪」

「ごめんな、憂ちゃん。俺までご馳走になってさ」

「いえ、気にしないで下さい。統夜さん、一人暮らしですし、困った時はお互い様ですか

ら♪」

「やつてもらつてばかりじゃ申し訳ないからさ、俺も手伝うよ」

「駄目ですよ、統夜さん。統夜さんはお客さんなんですからのんびりしてて下さい」

そう言うとうと憂は台所へと消えていった。

(仕方ない……。何もしないのは申し訳ないけど、のんびりさせてもらうかな)

統夜は魔法衣とギターケースをソファに置かせてもらい、憂の支度が終わるまで待つことにした。

そして待つこと10分。準備が整ったみたいなので統夜と唯がダイニングに向かうと美味しそうな料理が並んでいた。

「おっ、美味しそうだな」

「エへへ……。久しぶりに統夜さんが来てくれたので頑張っちゃいました♪」

「アハハ……。そう言ってくれると嬉しくなっちゃうな」

統夜は憂が張り切って料理を作ってくれたと言うことが嬉しかった。

「さっ、冷めないうちに召し上がって下さい」

「ああ、いただきます」

「いただきます♪」

統夜と唯は同時にハンバーグを一口食べたのだが……。

「うん！すごく美味しいよ！」

「美味しいよお、憂♪」

満足そうにハンバーグを頬張る統夜と唯を見て、憂はクスリと笑みを浮かべていた。

「それにしても料理も上手だし、他の家事だってやってるんだろ？憂ちゃんならいい

お嫁さんになれそうだな」

「ふえ!? そ、そんな……お嫁さんだなんて……」

統夜の言葉を聞いた憂は顔を真っ赤にして俯いていた。

「やーくん……」

「ん? どうしたんだ、唯?」

「憂は嫁にやらん! ふんす!」

「なんでそうなる……」

娘を嫁にやらんと言う父親のようなことを言っている唯を統夜はジト目で見ていた。

(それにしても……。暖かい食卓か……。魔戒騎士になってからは忘れてたけど、いい

もんだよな……)

統夜は憂の作った夕食を食べながらわずかながらの平和な時間というものをかみし

めていた。

※※※

続夜が唯の家で夕食を食べていた頃、桜ヶ丘某所にある廃工場で再びおぞましいことが起きていた。

数人の男の集団が1人の女性に性的暴行を行っていたのである。

男たちは己の欲望のまま行為に及んでいた。

複数の男に犯され、その女性の身も心もボロボロになっていた。

そんな中、強姦魔のリーダー格の男が残りのメンバーを帰らせると、男はさらに行爲に及んでいた。

リーダー格の男は実はホラーに憑依された男であり、男は己の欲望のまま、女を犯していた。

さらにそれだけでは飽き足らず、男は女を己の「餌」として文字どおり身も心も喰らい尽くした。

「ふう……。やはり恐怖に怯えた女の味は格別だな……」

ホラーである男がこのような行為に及ぶのはただ単純に己の欲望を満たすだけでなく、最高の餌を得るためであった。

「……だが……まだ足りない……」

男は一枚の写真を取り出すと、そこには憂が写っていた。

「……ククク……次はこの女だ……!」

男は次のターゲットを憂に定めていた。

※※※

次の日、この日は学校は休みであった。

そして部活も休みであったため、統夜はじっくりと鍛錬を行ってからエレメントの浄化を行うことにした。

鍛錬が終わり、リビングでのんびりしているとテレビで流れていたとあるニュースが気になり、テレビに釘付けになっていた。

それはこの桜ヶ丘で次々と女性が行方不明になっている事件であった。

女性に共通点はなく、中には桜ヶ丘高校を卒業したばかりの女性もいた。

1人の女性が行方不明になる前に何者かに車に押し込められるところを見たという目撃証言があったため、警察がその車の調査をしているとのことであった。

(次々と女性が行方不明か……。まさかホラーか……。?)

統夜は一連の犯行がホラーの仕業ではないかと推理していた。

『統夜。お前まさか今ニュースでやってた事件に首を突っ込むつもりじゃないだろうな？』

「だって、ホラーの作業かもしれないだろう？ だったら……」

『俺たちの役目は犯人を捕まえることではない。ホラーを斬ることだ。人間の起こした事件は人間に任せておけばいいのさ』

「……っ、そんなの……!」

『統夜。お前さんは英雄や神にでもなるつもりか？ 全ての人間を救うなど不可能なことだ。それに、そんな理由でホラーを野放しにするのは本末転倒だ』

「……それはわかってる。だけど!」

『統夜。ここで問答をしても仕方ない。そろそろ出掛けるぞ。今日は普段出来てない分エレメントの浄化をしなきゃいけないんだからな』

「わ、わかってるよ」

統夜はテレビの電源を消して魔法衣を羽織ると、エレメントの浄化に出掛けた。

統夜は平日まともにエレメントの浄化が出来ないのでその穴埋めとして、土日の部活がない日にエレメントの浄化を集中して行っている。

それにより統夜よりも長くエレメントの浄化を行っている紅の管轄の騎士たちの負担を少しでも減らすためである。

昼頃までじっくりとエレメントの浄化を行い、それから番犬所に向かった。

「統夜……指令です」

イレスがこう告げると、イレスの付き人の秘書官が赤の指令書を統夜に渡した。

統夜は指令書を受け取ると、魔導ライターを取り出し、指令書を燃やした。

そして浮かび上がってきた指令は……。

「……己の欲望のまま人を喰らうホラーあり。ただちに殲滅せよ」

というものであり、統夜が指令を読み上げると魔戒語の文字は消滅した。

『こいつはホラーリザリー。ホラーの中でも特に人間の命を軽んじるとんでもなく胸糞の悪いホラーだぜ』

「人の命を軽んじる……だと?」

イルバの言葉に統夜は反応し、怒りを覚えていた。

「統夜。現在4人の女性が行方不明になっています」

「……まさか、それって……」

統夜は今朝見たニュースを思い出していた。

ニュースでは人数までは言っていなかったが、女性が行方不明になっているということが共通していた。

「?統夜、どうしました?」

「あ、いえ……。今朝のニュースで女性が行方不明になってると聞いたものですから、もしかしてホラーの仕業かとも思っています」

「そうでしたか。その可能性はあるかもしれませんがね」

「とりあえず、これ以上犠牲者を出さないためにホラーを早急に見つけ、殲滅します」

「頼みましたよ、統夜」

統夜は番犬所を後にすると、ホラーの搜索を開始した。

※※※

数時間後、時間も昼から夜になろうとしており、ホラー搜索も本格的に行っていた。

そんな中、統夜は偶然唯の家の近くを歩いていた。

その時だった。

「……………ん？あれは憂ちゃんだよな？」

買い物帰りなのだろうか憂の姿が向こう側から見えた。

統夜は駆け寄って声をかけようかと思っただけの時だった。

「!!」

突然男3人組が現れると憂を捕まえて無理やり車へ押し込んだ。

統夜は慌てて車へ向かうが、統夜が車の前に到着すると同時に車は発進してしまつた。

統夜は慌てて車を追いかけてしようとしたのだが……。

『統夜、よせ!』

イルバが統夜を止めると、統夜は足を止め、車はそのまま行ってしまった。

「イルバ!?なんで止めるんだよ!」

『朝も言ったが、あれは人の起こした事件だ。解決は人間に任せればいいだろう』

「何言ってるんだよ!?憂ちゃんがピンチなんだぞ!?放っておけるか!」

『統夜。お前は自分の役目を忘れたのか!?魔戒騎士であるお前はホラーを探すのが最優

先だろう』

「……………」

イルバの言葉に統夜は拳を力強く握りしめ、唇を噛んでいた。

『統夜。俺たちは全ての人間を救えるわけではない。それはお前もわかっているだろう

?』

「…………それがどうした!」

『統夜?』

「憂ちゃんは今にとつて大切な友達なんだ!友達1人救えなくて……何が魔戒騎士だ!」

『統夜、お前は魔戒騎士の使命を忘れたのか!』

「俺は罰を受けたつて構わない。俺は憂ちゃんを助ける!」

統夜の意味は固く、イルバはこれ以上反論が出来なかつた。

『やれやれ……。不本意ではあるがあの車が走り去つた方向からホラーの気配がする。どうせ行くならさつさとお嬢ちゃんを助けてこい』

「ああ!」

統夜は全力で走り出すと、憂を救うために動き始めた。

※※※

統夜が憂を救うために動き始めた頃、憂は目を覚ました。

「うん……?……は……?……つて、えつ?」

憂が目を覚ましたのは明らかに怪しい廃工場で、しかも自分は腕を縛られ、身動きがとれない状態だった。

「おっ、どうやらお目覚めみたいだな」

憂の目の前には怖そうな男4人組がいたので、それを見た彼女の顔は真っ青になっていた。

「ここはどこですか!?!私を一体どうするつもりですか!?!」

「ゲヘヘ……。んなの決まってんだろ」

男の1人が下衆な笑いをすると、憂の胸を軽くタッチした。

「きゃ!?!な、何するんですか!?!」

「こんな誰も来ない廃工場に男がこんなにして女を縛ってる……。犯す以外ないだろ」

「えっ……。嘘……。?」

憂も高校生であるため、性についての知識は知っていた。

それ故にこの後自分がどのような目に遭うのか想像がついていた。

「い、嫌あ!?!やめて!!」

憂は恐怖に震えながらも悲鳴をあげた。

「おっと、叫んだって無駄だぜ。こんな所だ。誰も助けになんて来れないさ」

「でもよお、さつき赤いコートを着たガキがこつちを追いかけようとしてたよな」

(赤いコート……。もしかして統夜さん?)

憂は赤いコートを着ている少年に心当たりがあった。

「勘が良かろうと所詮はガキだ。まあ、念のため見つけて始末はするか」

「そ、そんな……?」

「お、お嬢ちゃん知り合い?もしかして彼氏?」

「ならなおさら都合がいいじゃねえか。お嬢ちゃんを犯してガキを殺す。ガキの方にも最高に絶望を与えられるだろうぜ」

「いや……。やめて……」

「そういえばこのお嬢ちゃんに姉がいたよな。次はその姉でもいいよな」

「やめて!!」

憂は統夜だけではなく唯まで巻き込まれるのかと思うと耐えられなかった。

「うるせえなあ……。さっさとヤツて黙らせるか」

「そうだな。俺はもう我慢出来ねえよ!」

「ああ!思ったより巨乳だし……。俺好みだぜ!」

「まずはお前らの好きにしろ。俺は後から楽しませてもらうから」

リーダー格の男がこう言うと、3人の男が憂に迫った。

(嫌……。初めては好きな人って決めてるのにこんな……)

これから自分は酷い目に遭う。その事実には憂は涙を流していた。

(誰か……！助けて……!!)

憂な心の底から助けを願った。

その時であつた！

ガシャアアアン!!

突然何が壊れる音が聞こえると思つたら、天井から一人の男が降つてきた。

「「「「!!」」」」

突然の出来事に憂だけではなく男たちも目を丸くしていた。

「な、なんだてめえは！」

天井から降つてきた男は赤いコートを身にまとつていた。

「て、てめえはあの時のガキか!」

「バカな!なんでここがわかつたんだよ!」

赤いコートの少年……統夜は憂に迫る男たちを回し蹴りで吹き飛ばすと、憂を縛る

ロープを解いた。

「憂ちゃん、無事で良かったよ」

「統夜さん……。どうして……。?」

「憂ちゃんのことを絶対助けたいって思ったからだよ。奴らに変なことはされなかった

か？」

「む、胸を触られたくらいで後は……」

「何い!？」

胸を触られたと聞いて統夜の怒りは頂点に達していた。

『おい、統夜。他にもやることがあるだろうが』

「あつ、そうだった」

「え？今の声……どこから？」

憂が謎の声に首を傾げていると、統夜は魔法衣の懐から魔導ライターを取り出し、火をつけた。

統夜は一人一人当てていくが、憂を襲おうとした3人には何の反応もなかった。

しかし、少し離れたところで見切れていた男に魔導火を近付けると不気味な文字が浮かび上がってきた。

「……お前がホラーか」

統夜は魔導ライターをしまうと、今度は魔戒剣を取り出して、それを抜いた。

「ちつ、よりにもよって魔戒騎士かよ。ついてねえなあ」

「御託はいい。ただ斬るだけだ」

「てめえら、こいつを殺せ。殺したらその女と好きだけやらせてやる」

男3人はリーダー格の男……ホラーの言葉でやる気が出たのか鉄パイプを手に統夜に襲いかかった。

「憂ちゃん、目を閉じて耳を塞いでくれ」

「え？」

憂は戸惑いながらも統夜の言う通りに目を閉じて耳を塞いだ。

統夜は魔戒剣の切っ先をイルバの口に当てて摩擦を加えるとそこから衝撃波が放たれた。

その衝撃波をモロに受けた3人の男はその場に倒れた。

憂は目を開けると3人の男が倒れていたので憂は驚きを隠せなかった。

「え？ 統夜さん、この人たち……」

「大丈夫。気絶してるだけだよ」

憂を安心したところで統夜は魔戒剣を構えてホラーを睨みつけた。

「貴様……。よくも俺の至高な時間の邪魔をしてくれたな」

「至高な時間だと……？」

「まだ全然足りないが、恐怖に怯える女の味……堪能させてもらったよ。その身も魂もな」

「ひどい……」

「俺が犯して喰らった女どもは俺の血肉となった。ま、くだらない命だったがな！」
「……………ふざけるな……………！自分勝手な理由で命を弄ぶなど絶対に許さねえ！」

統夜は怒りに震えながら魔戒剣をホラーめがけて一閃するが、ホラーは軽々とかわした。

「ムキになるなよ、魔戒騎士。所詮は何億いるうちの一人だろ？なぜそこまで個人の命にこだわる？」

「当たり前だ！人の命は一つ一つが重くかけがえのないものなんだ……………。軽い命なんて……………何一つとない！」

「やれやれ、訳がわからんな。まあ、さっさと貴様を殺してその女を喰うとするか」
ホラーは本当の姿を現した。

そのホラーはまるでゴキブリのような容姿のホラーであった。

『統夜。こいつがホラーリザリーだ』

「ああ。わかった」

統夜はそれだけ言うのと魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身にまとった。

「身勝手な欲望で人の体と心を喰らい、命を軽んじる貴様の陰我……………。俺が断ち切る！」

統夜は皇輝剣を構えると、リザリー目掛けて一閃した。

その一撃を受けたりザリーは何も抵抗することが出来ず、真つ二つになった。奏狼の皇輝剣の一閃で切り裂かれたりザリーは断末魔をあげながら消滅した。

統夜はりザリーが消滅したことを確認する前に鎧を解除した。

そして、元に戻った魔戒剣を青い鞆に納めた。

「憂ちゃん、大丈夫だったか？」

統夜はりザリーを討伐するなりすぐに憂に歩み寄った。

「は、はい……」

憂は統夜に助けてもらって嬉しいのだが、戸惑いの気持ちが勝っていた。

それも仕方ない。

仲の良い先輩がおぞましい怪物相手に臆することなく立ち向かうだけではなく、見たことない鎧を身につけて怪物を倒したとなれば誰だって驚くだろう。

「すごく心配したけど、無事でとにかく良かったよ」

「統夜さん……」

憂が統夜に飛びつこうとしたその時、パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

しかも、サイレンはこちらに近づいてきていた。

「やべっ！ 思ったより警察が早いな……」

統夜は憂を救出する前にこの場所を警察に通報していたのである。

「憂ちゃん、とりあえず逃げるぞ。警察に見つかったら面倒だから」
「あのっ、あの人たちは？」

「あいつらだつて強姦魔なんだ。警察に捕まえてもらつて罪を償つてもらうさ」
統夜はリザリーに加担した男3人のことは許せなかったが、魔戒騎士は人間を斬ることとはできない。

それだつたら人間の法で裁いてもらおう。

そう考えたのである。

統夜と憂は警察が来る前にその場を離れることにした。

※※※

「……よし、ここまで来れば大丈夫だろ」

「そ、そうですね……」

統夜たちは憂の家の近くにある公園まで移動した。

「あつ、あの……。統夜さん」

「ん？」

「助けてくれて……ありがとうございます……」

「気にするなよ。憂ちゃんは俺にとつて大事な友達なんだ。助けるのは当たり前だよ」

「それに……。あの怪物は一体なんだったんですか？それにあの銀の鎧も……」

「憂ちゃん、その話は聞かない方がいいよ。その話を聞いたら元の穏やかな生活に戻れる保証はないからな」

「……………」

統夜はこう警告をすると、憂は何も言えなくなつた。

「それよりもさ……」

統夜は憂の頭を優しく撫でた。

「ふえ？と、統夜さん？」

「助けるのが遅くなつてごめん……。怖かつただろ？」

統夜が優しく語りかけると、憂の瞳から涙が浮かんできていた。

そして、憂は統夜に抱きついていていた。

「うわあああああん！怖かつた！本当に怖かつたよお……！」

「ああ、もう大丈夫だからな」

統夜は憂が泣き止むまで優しく頭を撫でて憂のことをなだめていた。

(憂ちゃんにはずいぶん怖い思いさせちまったな……。そうならないようにこれからもホラーは切り続けていかなないと……。)

統夜は泣いている憂を見ながら今まで以上に魔戒騎士として精進しよう。
そう心に誓ったのであった。

……続く。

——次回予告——

『友よ。覚えているか？おまえと共に戦ってきた日々がまるで昨日のようだけ。……次回「記憶」。悲しい歴史が今明かされる！』

第10話 「記憶」

憂がホラーリザリーに監禁され、暴行されそうになったところを統夜が間一髪のところを救出した。

その2日後、この日は月曜日であったので、統夜は朝の鍛錬を済ませてエレメントの浄化を行った。

それが終わったところで統夜は登校し、この日はいつも通りの学校生活を送っていた。

その日の放課後、統夜はいつものように音楽準備室に入ったのだが……。

「……あれ？憂ちゃん。どうしてここに？」

唯たちだけではなく、憂も椅子に座って統夜を待っていた。

「あの……。統夜さんに聞きたいことがあつて来たんです」

「聞きたいこと？」

統夜はこう聞き返したものの、何を聞いてくるかは察しがついていた。

「実は、あの後お姉ちゃんに聞いたんです。統夜さんがあんな化け物をやっつける魔戒騎士ってお仕事をしてるって」

「!!」

まさか既に知っているとは思っておらず、統夜は驚きを隠せなかった。

唯だけではなく、他の4人も驚いていなかったの、他の4人も憂が魔戒騎士のことを知ったというのは統夜より前にわかっていたみたいだった。

「唯、お前！話したのか!?あれだけ話すなって言ったのに……」

「ごめんやーくん。この前憂にそのこと聞かれたから話しちゃったの。憂には隠し事は出来なくて……」

「統夜さん、お姉ちゃんを怒らないであげてください。私が無理言ってお姉ちゃんに聞いたんですから」

「……まあ、そういうことならわかったよ」

統夜はまだ騎士の秘密を話したことを怒っていたが、渋々許すことにした。

「まあ、魔戒騎士の話聞いたってことはそれなりの覚悟はあるってことだよな？」

「はい。統夜さんがそんな危ないことをしていると知ったら放っておけないですし、統夜さんのことを支えたいですから……」

「……わかった。……唯が話したと思うけど、俺は魔戒騎士だ。あの化け物、ホラーを倒し人を守るのが使命ってわけ」

「そうなんです……。それで、その指輪が統夜さんのパートナーなんですよね？確か

名前は、イルイル……ですよね？」

『おい、お嬢ちゃん。その情報は間違ってるぞ。俺様の名前はイルバだ』

イルバは憂の間違ってる情報を正すために口を開いた。

「……お姉ちゃんから聞いてましたけど、本当に喋るんですね……」

憂は事前にイルバが喋ることは聞いていたが、あまり実感はなく、喋るのを目の当たりにして驚いていた。

「……あつ！もしかして、あの時統夜さんの近くで統夜さん以外の声が聞こえたけど、それって……」

『ああ、おそらくは俺様だろうな』

「……」

憂は納得はしたようだが、やはり驚いていた。

それから統夜は改めて魔戒騎士のことホラーのことを話した。

唯たちに話したように魔戒騎士は人殺し同然と言うことも。

「……」

憂は統夜の話を聞いて哑然としていた。

「……改めて聞くとやっぱりすごい話だよな……」

律たちも改めて魔戒騎士の話を聞いて統夜の使命の凄まじさを改めて思い知った。

「魔戒騎士やホラーの話を知ってことはこれからもホラーとの戦いに関わる可能性が高くなる。だから元の穏やかな生活に戻る保証はないって言ったんだよ」

「そうですよね。私、最近になって統夜先輩の話を実感しました」

梓たちは魔戒騎士のことを知ってから2度ホラーを見ている。

梓はその前にも一度統夜とホラーの戦いを見ていた。

それ故に最近では以前より穏やかな生活ではないことを実感していた。

「今からだってホラーや魔戒騎士に関する記憶を消すことが出来る。そうすれば憂ちゃんも穏やかな日常に戻るぞ」

「それはやめて欲しいです。話を聞いたのは私の意思ですから。それに、穏やかな日常に戻れないのも覚悟の上です」

「……わかった。憂ちゃんがそう言うなら記憶は消さないよ」

「ありがとうございます！」

「ただし、魔戒騎士やホラーに関することはこれ以上は他言無用だぞ。家族や親しい友人にもな」

「わ、わかりました」

「みんなもだからな。特に唯、わかったな？」

「わ、わかってるよ！」

『やれやれ。俺様も唯が一番心配だぜ。現にお前さんは妹に話しちまつてるからな』
「むうう！意地悪言わないでよ、イルイル」

『だから変なあだ名で呼ぶな！』

唯とイルバはいつものやり取りを行っていた。

「統夜さん、今日は話してくれてありがとうございます」

「気にするなよ。憂ちゃんだって俺にとっては守りたい人なんだから」

統夜は恥ずかしげもなくさらっとこう言うと、憂は顔を真っ赤にしていた。

「……」

それと同時に唯たちがドス黒いオーラを統夜めがけて放っていた。

(……?唯たち、どうしたんだ?あんな怖い顔をして)

《わからないのか?……この天然ジゴロめ……》

(?天然ジゴロ?)

統夜はイルバの言葉の意味がわからなかったのか、首を傾げていた。

「ねえ、憂。今日はみんなと一緒にお茶しようよ」

「え?でもみなさん、迷惑じゃないですか?」

「大丈夫だよ、あたしたちも憂ちゃんとお茶したいからさ」

律の言葉に滯と紬がウンウンと頷いていた。

「……そうですね。たまにはいいですか」

梓も律の言葉に同意した。

「みなさん……。それでは、お言葉に甘えてご一緒させてもらいますよ」
こうして憂は統夜たちと共にティータイムに参加することになった。

※※※

「……統夜先輩。私、ずっと気になってたことがあるんです」

梓がこう話を切り出すと、全員の視線が梓に集中した。

「統夜先輩ってどのように魔戒騎士になったんですか？ 厳しい修行を積んだとは聞きましたが」

「確かに統夜がどうやって魔戒騎士になっていったかは興味あるな」

梓の疑問に漣も同意していた。

「そういえば統夜君のお父さんも魔戒騎士って言ってたわよね？」

「統夜のお母さんって何をしている人なんだ？」

唯たちが統夜の過去に関することや家族に関することを聞いていた。

(……もうみんなには話してもいいかな)

統夜は話をする決意を固めた。

「……遅かれ早かれみんなには話すつもりだったから話すよ。……俺の父さんは先代の奏狼だったって言ったけど、俺の母さんは魔戒法師だったんだ」

「魔戒法師って確か……」

「ああ、烈花さんと同じだよ」

「そうなの？」

「？」

統夜の言葉に紬が反応し、憂は首を傾げていた。

「おっと、憂ちゃんには知らなかったな。魔戒法師っていうのは法術を用いて魔戒騎士のサポートをする人たちのことで、烈花さんっていうのはその魔戒法師をやっている、かなりの実力者なんだよ」

「へえ……」

「母さんは魔戒法師だったけど、父さんと結婚するまでは闇斬師をやっていたみたいなんだよ」

「……闇斬師？」

聞きなれない言葉に唯たちは首を傾げていた。

「魔戒騎士や魔戒法師の中には己の欲望に負けて闇に堕ちる人たちがいるんだ。そんな人たちを討伐する使命を持っているのが闇斬師なんだよ」

「討伐って……。その人たちは人間なんだろ？」

「ああ。だけど魔戒騎士や魔戒法師が闇に堕ちるってことはホラーに取り憑かれるのと同じことなんだ。だから討伐しなきゃいけないんだよ」

「魔戒騎士や魔戒法師にも色々あるんですね……」

「まあな……。そこをふまえて聞いてくれ。……俺がいかにして魔戒騎士になったのかを……」

静かな口調で統夜は語り始めた。

自分自身の過去の話を……。

く過去編く

統夜は魔戒騎士である父親と魔戒法師である母親の間に産まれた。

統夜の父親である月影龍夜（つきかげたつや）は先代の白銀騎士奏狼であり、様々なホラーを葬ってきた歴戦の勇士であった。

その成果を認められたからか、龍夜は全ての番犬所を総括する元老院所属の魔戒騎士になった。

龍夜はその腕を買われ、闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師の討伐を命じられていた。

そんな中、後の妻になる魔戒法師の明日菜（あすな）に出会った。

2人はコンビを組むことになり、共に闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師の討伐を行っていた。

共に仕事をこなすうちに互いに惹かれあい、2人は結婚した。

魔戒法師である明日菜の家は代々闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師を討伐する闇斬師の家柄であり、多くの闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師を討伐してきた。

そんな中、龍夜と出会い、結婚した。

明日菜は結婚そして妊娠を機に闇斬師を引退した。

明日菜が引退した後も龍夜は闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師の討伐を続けており、そして統夜が産まれた。

統夜が産まれると、明日菜は子供を守りたいという思いから普通の主婦として生きる道を選んだ。

統夜が3歳になった頃、龍夜は闇に堕ちた魔戒騎士の中でも一番と言えるほどの強敵の討伐を命じられた。

その魔戒騎士は、ただ闇に堕ちただけではなく、暗黒騎士という禁忌の力を手に入れた騎士であった。

その騎士の名は「バラゴ」。暗黒騎士呀（キバ）の名を名乗っていた騎士であった。バラゴは当代最強の騎士であった、黄金騎士牙狼、冴島大河（さえじまたいが）を手にかけていた。

それ故、元老院もその存在を危険視していたのである。

龍夜に指令が来る前にも数多の手練れの魔戒騎士がバラゴの討伐に乗り出したが、誰一人とバラゴを倒せるものはいなかった。

そんな中、龍夜にバラゴ討伐の指令が来たのである。

龍夜は全身全霊をかけてバラゴに挑んだのだが、バラゴに叶わず、殺されてしまった。龍夜が殺されたことはすぐ明日菜に伝えられた。

明日菜は龍夜の死をなかなか受け入れられず悲しみに打ちひしがれていたが、統夜は幼すぎた故に龍夜の死を実感出来ずにいた。

統夜が魔戒騎士としての修行を始めたのは5歳の頃だった。

統夜の修行を見たのは明日菜と、龍夜とは盟友であった魔戒騎士であった。

明日菜は龍夜の死後、魔戒法師として復帰し、ホラーの討伐をしながら統夜を一人前の魔戒騎士に育て上げることを決意していた。

修行を始めた頃から統夜は騎士としての才能があったのか、修行を始めて僅か1年でソウルメタルの短剣を持ちあげることが出来た。

そして8歳の時にはソウルメタルの剣をある程度操ることが出来るようになっていた。

しかし、この頃統夜は皇輝剣に選ばれていなかったのか皇輝剣を持ちあげることすら出来ていなかった。

そして統夜が10歳の頃、悲劇は起こった。

この頃統夜は小学校に通いながら魔戒騎士の修行を行っていた。

この日も学校の授業が終わり、家に帰ってから魔戒騎士としての修行を行うつもりだった。

しかし……。

「ただいま〜」

統夜はこう言つて家の中に入るが、何の反応もなかった。

「あれ？母さん、出かけてるのかな？」

統夜は明日菜がいけないことに首を傾げていたが、そのまま自主トレーニングを行おうとした。

その時であった。

ガシャアアアン!!!

2階から大きな物音が聞こえてきたので統夜は慌てて2階に上がった。そこで統夜が見たのは信じられないものであった。

漆黒の鎧を身にまとった騎士が明日菜を追い詰めていたのである。

統夜は明日菜を助けたかったが、恐怖で動くことが出来なかった。

そして……。

「……………」

「……………」

漆黒の騎士は明日菜の胸に剣を突き刺した。

「!!」

統夜はあまりにショッキングな光景に言葉を失っていた。

漆黒の騎士は統夜の姿を確認するものの、まったく気にすることなくその場から立ち去った。

統夜は呆然と立ち尽くしていたが、明日菜の呻き声を聞いたことですぐさま我に返っていた。

「母さんー!」

統夜は明日菜に駆け寄るが、傷が深く、意識は朦朧としていた。

「と……………どう……………や……………」

明日菜は朦朧とした意識の中手を伸ばした。

「母さん！」

統夜は明日菜の手を取るが、その手はすでに血に染まっており、統夜の手にも鮮血がついてしまった。

「統夜……………ごめんね……………私が……………あなたを……………一人前の……………魔戒騎士に……………育てたかったのに……………」

「母さん！喋らないで！傷が広がっちゃうよ！」

「ありがとう……………だけど私はね……………もうダメよ……………」

明日菜の傷と出血は普通の人間であればとつくに死んでいてもおかしくないレベルであった。

「母さん！死んじや嫌だよ！俺を1人にしないで！」

命の灯が消えかかる明日菜を目の前にして、統夜はポロポロと涙をこぼしていた。

「統夜……………。何を……………しているの……………？あなたは……………こんなことで……………泣いてちや……………ダメよ……………。立派な……………魔戒騎士に……………なるんでしょ……………？」

「母さん！」

死にゆく明日菜は統夜に泣くなど気丈に言い放つが、統夜が涙を止めることはなかつ

た。

「ウフフ……。あなたは……。優しい子だものね……。あなたの優しさがあれば……。どんなことがあっても……。人間を守る……。そんな騎士に……。なれると……。思う……。わ……。」

「母さん！死なないで！死んじや嫌だよ！」

「統夜……。愛して……。いる……。わ……。」

その言葉を統夜に伝えた時、明日菜の命の灯が消えてしまった。

その瞳からは輝きが失われ、統夜がその手を離すと、上げられた手は下がってしまった。

「母さん！母さん！起きてよ！母さん！」

統夜は必死に呼びかけるが、明日菜からは何の反応もなかった。

「うわああああああああ!!!」

統夜の慟哭が家中に響き渡っていた。

〈現代〉

れてしまったと統夜は聞いていた。

「ねえ、やーくん。お母さんを殺した騎士に心当たりはないの？」

「正直心当たりはないんだ。その鎧の騎士は盾を持っていただけ、そんな騎士なんて俺は知らないし……」

「そうですか……」

「それにしても辛いよな……。ママが目の前で殺されるなんて……。私だったら耐えられないよ……」

「[[[[[[ママ?]]]]]]」

「お、お母さん!」

澪は自分の母親のことをママと呼んでいるのだが、ここでも思わずママと呼んでしまった。

統夜たちがおうむ返しのように繰り返すが、澪は顔を真っ赤にしてお母さんと訂正していた。

「それで、統夜さんは本格的に魔戒騎士の修行を始めたんですか？」

「ああ……」

統夜は再び語り始めた。

く過去編く

明日菜の死から一週間が経ち、統夜はとある場所に建てた明日菜の墓にいた。明日菜の墓の隣には龍夜の墓があり、夫婦が仲良く眠っていた。

「……………」

統夜は沈痛な面持ちで両親の墓を眺めていた。

『おい、小僧。お前はいつまでそんなことをしているんだ』

統夜の指にはめられたイルバがカチカチと音を鳴らしながら口を開いた。

この頃、統夜はまだイルバと契約はしていなかったが、イルバが統夜を守るために指にはめろと言ったのである。

「……………うん、そうだね……。俺はもつともつと強くならなきゃいけないんだ……。強くなつて、奏狼になるためにも！」

『そうだ、小僧。その意気だ』

「なあ、イルバ。いつの日か俺が皇輝剣を操ることが出来て奏狼の鎧を受け継いだら……………俺と契約してくれ」

『やれやれ……。わかつているのか？俺様と契約したらお前の1日分の命が俺様の1月分の命になるってことを』

イルバを始め魔導具と契約した者は契約の代償として、1月のうちの1日分の命を魔導具に捧げなければいけない。

魔導具に契約の代償として命を差し出すと、その日は仮死状態のまま眠り続けるのである。

「……もちろん、構わない。覚悟の上だ」

統夜の眼は魔戒騎士になるという覚悟に満ちたものであった。

『わかったよ。ただし、俺が認めるくらい力をつけるんだな、小僧』

「イルバ、いい加減俺のことは統夜と呼んでくれよ」

『そう呼んで欲しければもつと精進して力をつけるんだな、小僧』

「つたく……。わかったよ」

こうして統夜は魔戒騎士になるため修行を始めた。

この頃の統夜は1人で修行に明け暮れていた。

母親も既に亡くなっており、統夜が修行を始めた頃に稽古をつけてくれた父親の盟友だった騎士は、明日菜が亡くなった後に行方不明になっていた。

それ故、頼れる人はいなかったので、統夜はイルバと共に一人前の魔戒騎士になるた

めに修行を積んでいた。

統夜は学校に通い、放課後は誰かと遊ぶこともなく家に帰って魔戒騎士になるための修行をするという毎日を送っていた。

毎日毎日同じような日常、その事に統夜は挫折そうになったこともあったが、父親のような魔戒騎士になる。

その思いが統夜を突き動かしていた。

そして統夜が中学3年生になる少し前、とある事件がおこった。

統夜はこの日も修行に明け暮れ、修行の終わりに皇輝剣を手に取ろうとした時、統夜の目の前に1人の男が現れた。

「な、何者だ！お前は!!」

その男は仮面を被った男で、何処か禍々しいオーラが出ているように見えた。

「貴様……。魔戒騎士か？」

「お、俺はまだ魔戒騎士ではない!」

統夜はこの頃にはまだ皇輝剣を操ることが出来ないで、まだ魔戒騎士ではなかった。

「フン、魔戒騎士の卵ってわけか。貴様などすぐに潰せる。今日のところは見逃してやろう」

「!? 一体どういうつもりなんだ!」

「全ての魔戒騎士はもうすぐ滅びる。貴様もそう遠くないうちに滅びるだろう。その短い命、堪能するがいい」

それだけ言うと仮面の男は姿を消した。

「な、なんだつたんだよ。一体……」

『統夜、運が良かったな』

「運が良かった?」

『ああ。あの男のオーラ……本物だぜ。あの男は本気で魔戒騎士を滅ぼすつもりだろうな……』

「イルバ、何言ってるんだよ。全ての魔戒騎士を滅ぼすなんて……。あの黄金騎士だっているんだぞ!」

『ああ、黄金騎士か……。確かに奴だったらあの男に対抗出来るかもな』

「俺、もつともつと強くないと……。父さんのような魔戒騎士になるために……」

統夜は魔戒騎士になるという決意をさらに固めたのだった。

そしてその一週間後、待ちに待った瞬間が訪れた。

統夜はこの日も修行を終わらせて皇輝剣を持ち上げようとした。

普段なら持ち上げがらずにその日の修行を終える感じになるのだが。

「……いも、持てた……い」

統夜は初めて皇輝剣を持ち上げることが出来た。

まだその資格はないと思っていた統夜は呆然としていたが、すぐさま我に返り、皇輝剣を振るってみせた。

その時、皇輝剣から不思議な光が放たれた。

「うわっ!!」

統夜はその光に包まれると、気が付けば周りが真っ白で何も無い空間に移動していた。

「……は……？俺は一体……？」

統夜はキョロキョロと周囲を見回していた。

その時、統夜の前に1人の男が現れた。

赤いコートを身に纏い、整った顔立ちをした40手前くらいの男だった。

統夜はその男を見て目を丸くしていた。

「と、父……さん……？」

統夜の目の前にいたのはかつて暗黒騎士呀に敗れ、命を落とした統夜の父、月影龍夜だった。

『統夜……。お前はついに皇輝剣を手にすることが出来たんだ……。』

「父さん……」

物心がつく前に龍夜は命を落としており、統夜は父親の顔を写真でしか知らなかった。

しかし、目の前の男から発する雰囲気や暖かい空気を出しているのは龍夜であった。

『統夜。今日からお前が奏狼の称号を受け継ぐのだ』

「はい。覚悟は出来ています」

『守りし者となれ。そして……強くなれ』

龍夜は統夜に暖かい言葉を送ると、その体は消滅してしまった。

「父さんー」

龍夜が姿を消したその時である。

『統夜……』

今度は母親である月影明日菜が姿を現した。

「か、母……さん……さん……？」

自分の目の前で殺された母親が目の前にいる。その事実統夜は驚きを隠せなかった。

『統夜……。大きくなったわね……。』

「母さん……」

『あなたなら誰よりも優しい魔戒騎士になるわ……。そのことを自分の誇りにしなさい』

……』

「……ああ」

『私は……。私たちはいつでもあなたのことを見守っているわ』

明日菜が統夜を抱きしめると、統夜は明日菜の温もりを感じていた。

それだけではなく、統夜は龍夜の温もりも感じていたのであった。

※※※

「……ハッ！」

統夜は気が付くと元の場所に戻っていた。

統夜は皇輝剣を眺めるが、その姿は魔戒剣に戻っていた。

統夜はその魔戒剣をじっと見つめていた。

『小僧。わかつているとは思いますが、これからが本番だ。お前はこれから魔戒騎士として多くのホラーを倒すことになるだろう。己の使命を忘れるなよ』

「……ああ！」

こうして新たな白銀騎士奏狼が誕生したのであった。

「……イルバ。あの時の約束、覚えてるか？俺がこの剣を操れるようになったら俺と契約してくれって」

『ああ、忘れてないぜ。だが、本当にいいんだな？』

「ああ」

イルバと契約するという統夜の意思は変わらなかつた。

『月影統夜。お前の1日分の命が俺様の1月分の命に』

「!!」

イルバが統夜にこう告げると、統夜の中に何かが入ってくる感覚になつた。

それこそが、魔導輪イルバと契約した瞬間であつた。

統夜が魔戒騎士になると、統夜は自分の管轄となる紅の番犬所に挨拶に行つた。

統夜はそこで神官イレスと初めて会つた。

イレスは統夜が今中学3年生だと知ると、高校には行くのかと聞いていた。

統夜は魔戒騎士として精進するために高校へは行かないつもりだつた。

そんな中、イレスは統夜に高校へ行くことを勧めてくれた。

そして、どうせ高校に行くならこの番犬所が近いところがいいとのことで、最近共学

「何言ってるんだよ、統夜。あたしたちは仲間だろ？感謝だなんて水臭いぜ」

「そうだぞ。私たちがだって統夜がいてくれたから毎日が楽しかったんだ」

「そうね。それだけじゃなくて私たちは統夜君に色々助けられたしね」

「うん！私はやーくと仲良くなれてすごく嬉しかったよ！」

「私は先輩と知り合ってからまだ日は浅いですけど、私もすごく統夜先輩には感謝して
ます！」

「統夜さん。これからも大変だとは思いますが、無理だけはしないでくださいね」

「みんな……ありがとな」

統夜は唯たちの優しい言葉を聞いて、軽音部に入って良かったなということを改めて
実感していた。

これからも魔戒騎士として人を守る。

それだけではなく、みんなを守っていききたい。

統夜はさらなる決意を胸に秘めていたのであった。

……続く。

——次回予告——

『一時も忘れることのない遥かな思い出。笑顔、友情、掛け替えのない時間。次回、「同胞」。その日々はいつまでも色褪せない!』

第11話 「同胞」

統夜は唯たちに自分がいかにして魔戒騎士になったのかという話を話した。

その話を聞かせた後、統夜は今まで以上に唯たちのことを守りたいと思うようになっていた。

統夜が自分の過去を話した後は練習どころではなくなってしまう、この日は解散になった。

この日の夜、番犬所からの指令はなかったが、統夜はホラー搜索のために町を歩き回っていた。

数時間町を歩き回り、もう帰ろうかなと考えていたその時だった。

『……統夜、上だ！』

上空からホラーが飛び出してきて、統夜はホラーの奇襲攻撃をかわした。

統夜は魔戒剣を抜くと、ホラーを睨みつけながら構えた。

そのホラーは巨大なワニのようなホラーだった。

統夜はそのホラーを目視すると、さらに視線が鋭くなっていた。

『統夜。このホラーはヴィアル』

「ああ、そうだな。……こいつは……こいつだけは忘れたことはないさ……」

ホラーウイルスは統夜にとつて忘れることの出来ないホラーだった。

統夜は魔戒剣の柄を力強く握りしめ、精神を集中させていた。

そして、ウイルスの牙が統夜に迫ってきた。

「うわああああああああ!!」

統夜は力強く叫ぶと、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれた光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

その直後にウイルスの牙が奏狼の鎧に触れたのだが、ソウルメタルで出来た鎧に牙は耐えられず、牙は砕け、ウイルスは吹き飛ばされた。

「ウイルス……。貴様は、貴様だけはこの俺が斬る！」

「…そうか。統夜、このホラーは……」

イルバは統夜がなぜウイルスにここまで憎悪のような感情を持っているのかを理解していた。

統夜はウイルスに突撃すると、皇輝剣を一閃し、ウイルスの口元を真つ二つに斬り裂いた。

ウイルスは痛みで断末魔を上げるが、統夜の攻撃はまだ終わらなかった。

さらに統夜は皇輝剣をウイルスに突き刺した。

その状態でもヴィアルは苦しんでいたが、統夜はその状態から皇輝剣を斬りあげ、ヴィアルを真つ二つに斬り裂いた。

真つ二つに斬り裂かれたヴィアルの体は爆発し、その肉体は陰我とともに消滅した。怒涛の攻撃でヴィアルを討滅した統夜は鎧を解除した。

皇輝剣は魔戒剣に戻ったのだが、統夜は魔戒剣を鞘に納めることはせず、しばらくの間、そこに立ち尽くしていた。

(……シロ……アオ……ヤマブキ……)

立ち尽くしていた統夜は悲痛な面持ちをしていた。

く統夜 sideく

俺はこの手でずつと討伐したいと思っていたホラーヴィアルを討伐することが出来た。

あいつは……あのホラーだけは一時も忘れたことはなかった。

魔戒騎士になったら絶対にこの手で討伐してやる。ずつとそう思っていたからだ。

これで……みんなの無念は晴らせたのかな……？

翌日の放課後、俺は音楽準備室に入ると誰も来ていなかった。

俺は学生鞆を長椅子に置くと、ギターケースからギターを取り出し、長椅子に座った。そして俺はチューニングを済ませるとギターの演奏を始め、歌った。

あの時、みんなと共に歌ったあの曲を……。

「~~~~~」

なあ……シロ……アオ……ヤマブキ……。

俺、魔戒騎士になったんだぜ。こんな早く魔戒騎士になれたなんて知ったらみんな驚くよな……。

そして普通の人間と同じ高校に通いながら魔戒騎士をやってるなんてみんなが知ったら笑うかな？それとも怒るかな？

だけど、俺は高校に入ったおかげで守りし者とは何なのか。それがわかったんだよ。

こんな俺だけど、見守っててくれよな……。

俺は今でも思い出すよ、あの日々を……。

修行は辛かったけど、本当に楽しかった……。

みんなだつて……そうだよな……？

なあ……。シロ……。アオ……。ヤマブキ……。俺、みんなに会いたいよ……。

会つて、俺は魔戒騎士になったんだぞつて伝えたい……。

みんなの想いを胸に俺はあの曲を最後まで演奏した。

「…………やーくん…………」

…………あれ？みんな、いつの間に来てたんだ？

演奏に集中してたから気付かなかったよ…………。

「よう、みんな来てたんだな」

「統夜先輩…………。泣いてた…………んですか？」

「え？」

本当だ…………。俺、いつの間に泣いてたんだ…………？

「アハハ…………。なんで俺、泣いてるんだよ…………。わけわかんないよな…………」

俺は涙を拭くと、わざとこう言っておどけてみた。

「統夜君…………。強がらなくてもいいのよ」

「えっ？別に、強がってなんか…………」

「統夜。だったら今の曲、なんで悲しそうに歌うんだ？」

「悲しそう？」

「はい。私もそう思いました。統夜先輩の歌から悲しいって気持ちが伝わってきたんで

す」

「……………」

まったく…………。みんなにはお見通しって訳かよ…………。

「悲しいか……。もしかしたらそうなのかもしれないな……」

「やーくん……」

「みんなには話さないとな……。今の曲のことを……」

俺はギターをしまい、みんな席につくと、ムギがティータイムの準備を始め、その準備が終わったところで俺は語り始めた。

「俺さ……。母さんが死んでから本格的に魔戒騎士の準備を始めたんだけど、小6の夏休みに、修練場の訓練に参加したんだ」

「……修練場?」

「ああ、魔戒騎士を目指す子供たちが10日間寝食を共にしながら修行をするんだ。さっきの曲は修行の時に仲間たちと歌った曲なんだ」

「へえ、やーくんにも年の近い仲間がいたんだね」

「ああ。4人1組のチームだったんだ。その時チームを組んだ3人は掛け替えのない仲間だったよ」

「統夜先輩。その人たちは今どうしてるんですか?」

「……………」

「…………? 統夜先輩?」

「あ、ああ……。そこも合わせて話すから聞いてほしい。俺の修練場の日々をさ……」

俺はゆっくりと語り始めた。

〈過去編〉

統夜は母を失ってから、イルバと共に修行を積んできた。

しかし、師匠と呼べる者がいなかったため、成長には限界があった。

統夜は小学6年生の夏休み、自分と同世代の魔戒騎士の卵たちが集まって修行を行う修練場というものの存在を知った。

統夜としては効率的な修行が出来るのは大歓迎だったので、統夜は修練場による修行の申し込みを行い、参加することになった。

当日、統夜は修練場の会場に到着すると、10日間寝食を共にするチームが組まれた。その時、鉢巻を渡されたのだが、統夜の鉢巻の色は赤だった。

修練場の特徴として、修練場で修行をする子供たちは渡された鉢巻の色で呼び合うことになっている。

それはここで修行を積んでも魔戒騎士になれるものとなれないものが出てくるため、

本名や家柄は明かしてはならないという決まりがあった。

チームも決まり、鉢巻の色も決まり、最初に行われたのは人間バルチャスの駒になることだった。

バルチャスというのはチェスに良く似た魔戒ゲームである。

自陣の駒を敵陣の駒に重ねて立てる。

続いて両者は念を込め、思念により戦闘を行う。

負けた方の駒は破壊という形でゲームから取り除かれる。

以上を繰り返して、最終的に全ての駒を破壊したプレイヤーの勝利となる。

バルチャスが強い者は、駒になっても強いと言われており、「バルチャスを制する者は最強の魔戒騎士の資質あり」との格言も存在している。

統夜はシロ組と呼ばれる白い鉢巻をつけた少年がリーダーのチームに所属していた。

統夜たちシロ組の出番はまだ先だったので、他の組が行っているバルチャスの見学を行っていた。

「……やっぱり強いな……」

「え？何がだよ、シロ」

シロが呟いた言葉を山吹色の鉢巻をつけたヤマブキが訪ねていた。

「クロ組だよ。この修練場って黒の鉢巻をつけたやつは強いって聞いたことがあるけ

ど、本当だったみたいだ」

シロはそう言っただけでバルチャスの様子を見てみるとクロと呼ばれる少年が戦闘を行っていた少年を圧倒していた。

「うん、やっぱりクロは強いよ……。あいつは俺が倒してやる……！」

「お、アカ。やる気満々だね♪」

青い鉢巻をした少年アオがこう統夜に言葉をかけていた。

統夜は赤い鉢巻なので、アカと呼ばれている。

「うん、まあね」

統夜はそれだけ言うとバルチャスの様子を眺めていた。

今行われているバルチャスはクロ組の圧勝であった。

「よし、次は俺たちだな」

「ああ、みんな、頑張ろうぜ」

「おう！」

統夜たちシロ組のみんなは立ち上がり、気合十分でバルチャスに挑んだ。

その結果は……。

「よっしゃあ！勝ったぜ！」

辛うじてシロ組の勝利であった。

「だけどアカがいなかったら俺たち負けてたよな……」

「アカってバルチャスの才能あるんだな」

シロとアオが統夜のことをベタ褒めしていた。

「そ、そんなことはないよ。たまたま運が良かっただけだつて」

「謙遜すんなつてお前は本当に良くやったよ」

ヤマブキがこう言いながら統夜の肩を組んでいた。

「これで負けてたら鬼みたいに怖い教官が指導者になつてたんだぜ」

「鬼みたいな教官か……。俺はむしろそっちの方がいいけどな」

「マジかよ!？」

「アカのその向上心の高さは俺たちも見習わないとな」

アオ、シロ、ヤマブキは統夜の向上心の高さに関心していた。

「ほお、ここまで向上心の高い小僧がいるとは驚きだな」

統夜たちの会話に1人の男が乱入してきた。

「あ、あなたは？」

「整列！」

整列という言葉聞いた統夜たちは彼が何者なのかすぐに理解出来た。

それ故統夜たちは男の言葉を聞いてすぐ整列した。

「お前たちは騎士になれる者となれない者に分かれる。なれない者に騎士の名前を明かす訳にはいかない。……以上だ」

こうして修練場での修行が始まった。

まず行われたのは全員で行われる合同訓練であった。

ここでは基本的な剣の素振りや体術のトレーニングが行われた。

続いては組ごとの訓練が行われた。

最下位の組には鬼のように怖い教官が指導につくと言われていたが、ワタルは教官の中でも相当厳しい教官だった。

最初に腕立て伏せを行ったのだが……。

「おい、どうした？お前らそんなもんか!？」

アオとヤマブキがそれぞれ統夜とシロの足をつかみ、統夜とシロが腕立て伏せをしていたが、ワタルからの叱責が入った。

「息を止めるな!!吐け!!」

統夜たちなワタルの叱責に耐えながら必死に訓練についていった。

続いての体術の訓練でもワタルは容赦はなかった。

しかし、統夜たちは泣き言を言うことはなく、どうにかついていった。

続いて行われたのは川の水を2つのお椀に汲み、遠く離れた壺に水を入れていくとい

う訓練だった。

川から壺まではかなりの距離があり、アオやヤマブキは転んで汲んだ水をかなり減らしてしまっていた。

統夜とシロもどうにか頑張るのだが、転ぶまではいかなくても、壺にたどり着いた頃には水の量は三分の一まで減っていた。

そこでワタルから叱責が飛ぶが、統夜たちは修行を繰り返していた。次の修行は思念の中で行われる訓練だった。

「ここでは恐怖や雑念がお前たちを襲う。心を静めてそれに打ち勝て」
思念の中で統夜たちは十字の天秤のそれぞれ端っこに立っていた。

シロ、アオ、ヤマブキはそれぞれ自分の一番怖いものと戦っていた。

そんな中、統夜は……。

『月影くん！』

『月影くん、遊ぼうぜ！』

「……………」

統夜の目の前に自分が通っている小学校のクラスメイトが現れ、統夜を誘惑するが、統夜は動じていなかった。

『月影くんが好きそうなゲームがあるからさ、一緒にやろうよ』

(「だ、ダメだ！誘惑に負けたら……!」)

統夜は必死に目の前の誘惑と戦っていた。

そんな中、ヤマブキが目の前の恐怖に耐えられず、天秤が崩れて4人はそのまま落ちてしまった。

そのため、4人は正座で精神集中していたが、4人とも体勢が崩れてしまった。

「惑わされるな!」

ワタルは叱責と共に木の板でパチン!と4人の肩を叩いていた。

この日の訓練はここで終わり、訓練2日目になった。

全員で行なわれる合同訓練の後、続いて行われたのはソウルメタルを操る訓練である。

「ソウルメタルを操るためには力や技だけではダメだ。想像力で持て」

ワタルは鎧を召還した状態でこう告げると、自らの剣で巨大な岩の一部を軽々と切り取った。

ワタルは統夜たちにお手本を見せただけで鎧を解除した。

「お前たちもソウルメタルであの岩を切れ」

「はい!!」

ワタルは4人にソウルメタルの短剣を渡すが……。

統夜以外の3人は思うようにソウルメタルの短剣を持ち上げることができなかつたか。

「どうすれば持ち上がるか……。自分の心の中で思い描け！」

「「はい!!」」

3人が苦戦する中、統夜だけが軽々とソウルメタルの短剣を操っていた。

「おお……」

「すげえ……」

「関心してる場合か！お前たちもあれぐらい持ち上げられるようになれ！」

「「はい！」」

3人は再びソウルメタルの短剣と格闘していた。

その間に統夜はソウルメタルの短剣を岩に突き刺し、岩の一部を切り取った。

しかし、ワタルが切ったものと比べると遥かに切ったサイズは小さかった。

「ほお、ソウルメタルはそこそこ操れるか……。だが、慢心はするな！もつと自由に剣を操るんだ！」

「はい！」

統夜は3人より先にソウルメタルの短剣を操れたにも関わらずワタルから叱責を受けていた。

しかし統夜は嫌な顔一つせず、真摯に訓練に向き合っていた。

※※※

修練場での修行は日に日に激しさを増していた。

毎日同じようなトレーニングの積み重ねだったが、それは想像を遥かに超える程過酷であった。

他の組の人間の中には修行に耐えられず脱落した者も存在していた。

修練場での修行に耐えられず脱落した者は魔戒騎士になることは出来ず、一般人として生きることを強いられてしまう。

それほどこの修練場での訓練は厳しいものであった。

そんな中、統夜たちは素振りを行っていたのだが……。

「……もう無理……。俺、もう帰りたいよ……」

あまりにもきつい訓練にヤマブキが弱音を吐いていた。

「帰ったらだめだよ。ヤマブキが帰ったら、「鐘斬り」は3人で戦うことになるんだよ？」
シロの言う「鐘斬り」とは、修練場の修行の後半で行われる実践形式の訓練である。
四人一組のチームで戦い、中央に置かれた剣を用いて敵陣の鐘をその剣で鳴らすか、
相手チームを全員倒せば勝利となる。

この鐘斬りという訓練は今までの訓練やチームワークが問われるものである。

鐘斬りは四人一組のチームなので、1人欠けてしまうとそれだけ試合は不利になって
しまう。

「俺なんていてもいなくても一緒だろ？」

「そんなことないよ」

「そうそう、諦めちゃだめだ！」

統夜たちはどうにかヤマブキを励まそうとしていた。

「アカはいいよ。ソウルメタルは自由に操れるし、戦闘のセンスはあるし」

ヤマブキは統夜の持つ才能に嫉妬していた。

「そんなことはないよ。俺だってまだまだなんだ……」

「アカ？」

「とりあえずさ、頑張ろうぜ。お前だつてあのクロ組にあつと言わせたいだろ？」

「……確かに、あいつらには勝ちたいよな」

弱音を吐いて統夜に嫉妬していたヤマブキであったが、再びやる気になったみたいだった。

「よっしやあ！やろうぜ、みんな！」

「「おう!!」」

リーダーであるシロの号令に3人が答えていた。

ワタルはそんな4人の様子を見ながら笑みを浮かべていた。

4人の結末は固まり、最初の鐘斬りの試合が行われようとしていた。

「これより、シロ組とヒイラギ組の試合を始める！」

統夜たちと対戦相手のヒイラギ組のメンバーがそれぞれ対峙していた。

「それでは、始めっ!!」

審判の号令が聞こえると、オフエンス担当の統夜とヤマブキが鐘を鳴らすための剣めがけて駆け出した。

しかし、ヒイラギ組のオフエンス担当の少年たちが立ちはだかった。

ヤマブキは剣の近くでヒイラギ組の少年と戦い、統夜はその近くでもう一人と戦っていた。

統夜たちは修行で身につけた体術で相手を攻撃していた。

そんな中、クロ組の少年たちが真剣な眼差しで試合を見ていた。

「やっぱり警戒すべきはシロ組だよな」

「バルチャスはそれ程でもなかったけど」

「あれは単純だよ。倒すのは簡単」

「そうだよな」

「なあ、クロはどう思う?」

「俺はアカと戦いたい」

「アカ? 確かにあいつはシロ組の中では一番かもしれないけど……」

「あいつは強い。だからこそ倒したいんだ」

クロは鋭い眼差しで統夜のことを見ていた。

そんな中、ヤマブキは相手に押され苦戦していた。

「!ヤマブキ!」

統夜は回し蹴りで相手を吹き飛ばすと、ヤマブキを救うために動くが……。

「アカ!俺に構わず剣を抜け!」

「っ!だけど……!」

統夜は戸惑っていた。ヤマブキを見捨てて勝ちに行くのは本当に良いのだろうか?

その甘さがここでは命取りだった。

ヤマブキを押していた少年が一瞬の隙について剣を抜き、シロ組の鐘めがけて駆け出

した。

「しまったー！」

統夜は自分の甘さのせいで相手にチャンスを作ってしまったことを悔やんだ。

ヒイラギ組の少年がシロ組の鐘に迫り、デیفエンス担当のアオとシロが木で出来た剣を構えた。

シロはヒイラギ組の少年の一閃をかわすと、反撃で少年の胸に叩き込んだ。

「一本ー！」

ヒイラギ組の少年は一本取られてダウンしてしまい、シロが剣を奪い取った。

そこに統夜が駆けつけた。

「アカ！お前が決めて来い！」

シロは統夜に剣を投げ渡すと、統夜は剣を受け取り、ヒイラギ組の鐘めがけて駆け出した。

「アカ！援護するぜ！さっきの失敗、取り戻せよ」

ヤマブキも統夜の援護のため駆け出し、シロとアオは鐘の防衛に専念した。

統夜が鐘に迫り、デیفエンス担当の2人の少年が統夜を迎えうった。

1人はヤマブキが体当たりを仕掛けて狙いを統夜からそらした。

統夜は無駄のない動きで対峙する少年から一本を取ると、ギャラリーから歓声があ

がっていた。

「これで決める！」

統夜はそのまま鐘めがけて剣を叩き込んだ。

そしてその一撃は見事に決まり……。

「そこまで！シロ組の勝ち！」

「よっしゃあ！やったな、アカ！」

「ああ。だれどごめん、ヤマブキ。せつかくのチャンスが無駄にしちやった」

「何言ってるんだよ。……それにしてもさ、アカって以外と甘いところがあるんだな」

「ハハ……。そうかもしれない」

「だけど、俺はアカのそういうところ、嫌いじゃないぜ」

「ヤマブキ……」

「アカ！」

「ヤマブキ！」

シロとアオが統夜とヤマブキに駆け寄り、4人は勝利したことを喜んでいた。

※※※

鐘斬りの初戦を見事制した統夜たちであったが、彼らの修行は終わってはいなかった。

毎日行っていた修行のメニューも日を増すごとにその精度も増していった。

修練場の訓練も9日が経っており、この頃にはシロ、アオ、ヤマブキの3人はソウルメタルの短剣を自在に操ることが出来るようになっていた。

さらに川の水をお椀に汲んで遠く離れた壺に入れる修行でもすべての壺に水を入れることが出来た。

そして9日目の夜、統夜たちは自分たちの部屋で休んでいた。

「俺、本当に魔戒騎士になれるかなあ……」

統夜たちが部屋で休んでいると、アオがこう呟いた。

「俺は絶対になるよ。それも最強の魔戒騎士に」

シロは自信満々にこう言い放っていた。

「最強の魔戒騎士は牙狼だろ？」

「そういえばさ、今牙狼の称号を継いだ人もこの修行に参加していたって噂だよ」

「ふーん。確かにこの修行に参加してたとしても不思議はないよな」

アオが牙狼の称号を継いだ者が修練場の修行に参加していたという噂は魔戒騎士の卵たちの間で広まっていた。

しかし、その時修行を受けていた生徒の大半がホラーに喰われてしまったとの噂も広まっていたが、その噂を信じているものはいなかった。

もし訓練中にホラーが出てきても教官である魔戒騎士が退治してくれると信じているからだ。

「そういえば、クロってさ、どこの家の子供なんだろうな」

「確かにあれだけ強いんだもん。きつと有名な騎士の子供なんだろうな」

「……クロがどこの子かなんて関係ないよ」

「アカ？」

「クロは……俺が倒す」

続夜はクロのことをライバル視していたため、クロに勝ちたいと思っていた。

「よし、明日は絶対にクロ組に勝とうぜ！」

「「おう!!」」

4人は明日の鐘斬りでクロ組に勝とうと気合を入れていた。

そして翌日……。

「これより、決勝戦を行う」

この日は修練場の修行の最終日であり、鐘斬りの決勝戦がこの修行最後のメニューであった。

「シロ組。クロ組」

統夜たちシロ組とクロ組がそれぞれ対峙していた。

「それでは……始めっ!!」

こうして鐘斬りの決勝戦は始まった。

鐘を鳴らす剣を取るために統夜が向かうが、そこにクロが立ちはだかった。

2人は修行の成果を見せながらぶつかり合っていた。

「アカ……俺はお前を倒す!」

「いや、クロ。俺はお前には負けない!」

統夜とクロは互いに意地をぶつけ合っていた。

その頃、オフENS担当のヤマブキは回し蹴りで相手を吹き飛ばした。

「ヤマブキ!クロは俺が抑えるから今のうちに剣を!」

「任せろ!」

ヤマブキは鐘を鳴らすための剣を取るために剣に向かっていた。

クロはどうかそれを妨害しようとするが、統夜が立ちはだかり、ヤマブキの妨害が出来なかった。

ヤマブキは剣を手に取ると、クロ組の鐘めがけて駆け出した。それを見ていたシロは……。

「アオ、お前はヤマブキの応援に行ってくれ。ここは俺が守るから」
「え？でもそれじゃあ防御が……」

「アカがクロを抑えてくれているから大丈夫だよ。俺を信じてくれ」

シロはクロ組に勝つというビジョンが見えていた。

それ故にアオにヤマブキの応援を頼んだのである。

「わかった。信じてるぜ、シロ」

そう言うアオはディフェンスの人が持っている木の剣を抜くと、ヤマブキの応援に向かった。

ヤマブキはクロ組の鐘を指すが、ディフェンス担当の2人に阻まれ、苦戦していた。
「くそっ！やっぱり2対1はきついかな……」

ヤマブキはこうばやきながら戦うが、後ろからクロ組のオフENS担当のもう1人がヤマブキに迫っていた。

「ヤマブキ、危ない！」

アオがヤマブキの危機を伝え、剣を一閃するとオフENS担当の少年を倒した。

「1本！」

クロ組のオフENS担当が1人脱落し、クロ組のオフENS担当はクロだけになってしまった。

「!やばい!」

クロは統夜を吹き飛ばして仲間の援護に向かおうとするが、すぐさま統夜が立ちほだかった。

「くそっ!」

「クロ、お前の相手は俺だろ?」

統夜はクロの動きを抑えるという仕事を確実に抑えていた。

「……今ならいける!」

シロは木の剣を抜くと、アオとヤマブキの援護に向かった。

これではシロ組の防御はガラ空きなのだが、今ならクロ組に勝てる。

シロは勝算があつたために動いたのだ。

その頃アオとヤマブキはディフェンス担当の2人に阻まれ、鐘に辿り着くことが出来ずにいた。

「くそっ、このままじゃ……」

アオとヤマブキはクロ組の2人に追い詰められていた。

クロ組の2人は予想以上の奮闘ぶりを見せていた。

このままではせつかくの優勢も駄目になってしまう。
そう思っていたその時だった。

「アオ！ヤマブキ！」

シロがアオとヤマブキを救うために駆け出してきた。

「シロ!?!どうして?！」

「今なら勝機があると思つたからだよ。アカがクロを抑えてくれている。みんなが他の2人を抑えてくれるから、このままいけば俺たちの勝ちだ！」

シロは自分たちの勝利を信じていた。

その思いを汲み取つたヤマブキは相手を回し蹴りで吹き飛ばした。

「シロー！」

ヤマブキは鐘を鳴らすための剣をシロに投げ渡し、シロは自分が持つてた剣をヤマブキに投げ渡した。

鐘を鳴らすための剣を受け取ると、シロは相手チームの鐘に向かつていった。

「させるか！」

ヤマブキに吹き飛ばされた少年は妨害しようとするが……。

「おっと、それはさせないぜ！」

ヤマブキが少年の動きを抑えていた。

「行け……!!」

「決めてくれ!!」

「シロ!!」

統夜、アオ、ヤマブキはそれぞれ相手を抑えながら自分たちの思いをシロに託した。
そして……。

ガキーン!!

シロは相手チームの鐘を鳴らすことに成功した。

「勝負あり! シロ組の勝ち!」

「よっしゃあ!」

「勝ったあ!!」

「勝ったぜ!」

「ああ!」

統夜たちは全力を出し尽くして勝利を得ることが出来た。

今はその喜びを噛み締めていた。

「……負けたよ。さすがだな、アカ」

「クロ……」

「今回は俺たちの負けだけど、今度は絶対に俺が勝つからな」

「ああ、いつか必ず決着をつけような」

統夜とクロは互いの健闘を称え合い、握手をかわしていた。

そんな2人の様子を見ていた他の組の子供たちが2人の周りに集まって盛り上がっていた。

ワタルはそんな統夜たちの様子を見ながら笑みを浮かべていた。

※※※

最後の鐘斬りの試合が終わり、統夜たちシロ組は集まっていた。

「本当に勝ったんだな、俺たち」

「それもアカが最後までクロを抑えてくれたおかげだよ」

「そんな……。俺はただ無我夢中で戦ってただけだから……」

「お前ら、よく頑張ったな」

統夜たちが勝利の余韻に浸っていると、ワタルが統夜たちのもとに現れた。

「整列！」

ワタルの整列を聞いた統夜たちはすぐに整列していた。

「お前ら、仲間を最後まで信じ切つてよく戦つたな。お前たちの仲間を思う気持ちは魔戒騎士として戦うことだけではない。どんなことがあつても人を信じて守りきる。そんな強い思いにつながつていくんだ」

「……」

統夜たちはワタルの暖かい言葉に心を打たれていた。

「仲間を、最後の最後まで信じるんだ。仲間を信じ、その仲間の身に何かあつた時、可能性が少しでもあれば必ず助ける。それが、魔戒騎士だ」

こう告げると、ワタルはギターのパピックのようなものを統夜たちに渡した。

「これは、友情の証だ。お前たちには大事な仲間がいる。今日の思い、絶対に忘れるな」

「……はい！」

ワタルは統夜たち一人一人の頭を撫で、笑みを浮かべていた。

この日の夜、修練場の修行が終わつたことの記念の宴が始まろうとしていた。

「お前みたいな負けん気の強い小僧はすぐ脱落すると思つていたが、よく最後まで修行に耐え抜いたな」

「俺は小僧じゃないです。それに、俺は絶対に魔戒騎士になるって強い思いがあるんです」

「フツ……。そこまで言ったのなら立派な騎士になれよ。再会の時を楽しみにしている」

「はい！」

ワタルは統夜の頭を優しく撫でた。

「おい、アカ！」

「あ、みんな！」

アオ、ヤマブキ、シロ、クロの4人が統夜のことを呼んでいた。

「アカ！」

「早く早く！」

「もう始ま——」

ヤマブキがこう言いかけたその時だった。

上空から突如ホラーが現れ、シロとアオを喰らった。

「!!」

突如の出来事に統夜は息を飲んでた。

突如現れたホラーから逃れるため、クロとヤマブキ。そして他の子供たちもホラーか

ら逃げ回っていた。

そんな中、クロがヤマブキを救おうとヤマブキを突き飛ばし、クロはホラーの体当たりを受けて吹き飛ばされてしまった。

「クロー！」

クロはかなり遠く、さらにすごい衝撃で地面に叩きつけられ、生死はわからなかった。その後もホラーは次々と子供たちや大人を喰らっていた。

「貴様あ!!」

ワタルは鎧を召還し、ホラーめがけて突撃するが、ホラーはワタルに体当たりをしかけ、ワタルを吹き飛ばした。

そんな中、ホラーの牙が統夜に迫ろうとしていた。

その時だった！

「アカ!!」

クロのおかげでホラーから逃れたヤマブキだったが、統夜を救うために統夜を突き飛ばし、ホラーに捕食されてしまった。

「ヤマブキ!!」

「あ、アカ……。お前なら……。一人前の魔戒騎士に……」

ヤマブキは最後まで言葉を言い切ることが出来ず、全身を喰われてしまった。

「やめろ!!」

統夜の叫びが響き渡るが、ホラーは動きを止めようとしなかった。

「貴様あ!!!」

ワタルは怒りの感情を表に出しながら烈火炎装を発動し、攻撃をしかけるが、その攻撃はかわされてしまった。

ホラーは大勢の人間を喰らって満足したのかそのまま姿を消した。

大事な教え子を喰われるだけ喰われてしまい、ワタルは失意のまま鎧を解除した。

「クソツッ！俺は、また救えなかったのか……!」

ワタルは拳を力強く握りしめ、唇を噛んでいた。

「うわああああああああ!!!」

統夜の慟哭がその場に響き渡っていた。

修練場の宴の会場はホラーの出現で無残にも壊されてしまい、そこらじゅうに建物の残骸や人間の残骸が散らばっていた。

そんな中、ワタルが統夜たちに渡したピックのようなものだけは奇跡的にも全て残っており、統夜はそれら全てを拾うと、悲しみの感情を抱きながらその場に佇んでいた……。

く現代く

「「「「……………」」」」

統夜の話は終わり、壮絶な話を聞いた唯たちは言葉を失っていた。

「……………」

統夜は悲痛な面持ちをしており、首にかけている紐を取り出した。

その紐にはワタルから渡されたピックのようなものが4つぶら下がっていた。

統夜はあの修行の後、それをネックレスのようにつけてそれを肌身離さず身につけていた。

「……………統夜君、それがもしかして……………」

「ああ……………。みんなの……………形見だよ……………」

「統夜は奇跡的に生き延びることが出来たんだな……………」

「やーくん……………」

「統夜先輩……………。本当にごめんなさい……………。こんな辛い話……………したくなかったですよね……………」

……………」

「いや、大丈夫だ……………。いつかはこの話もするつもりだったから……………」

「統夜……」

統夜は3人の形見を握りしめていた。

悲しげな表情をする統夜を唯たちはどう慰めていいかわからなかった。

その時であった。

『『わああああ!!』』』

統夜の目の前にアオ、シロ、ヤマブキの幻が現れ、統夜の前を駆けていった。

「!アオ……シロ……ヤマブキ……」

「?統夜……先輩?」

唯たちは統夜の言葉の意味が理解出来ず、首を傾げていた。

『アカ!』

『『アカ!』』

統夜は真つ直ぐ3人の幻を見つめていた。

『お前、魔戒騎士になったんだな!』

『しかもその若さでかよ!』

『すげえすげえ!!』

「こう言ったのはシロ、ヤマブキ、アオの順番だった。

『俺たちは魔戒騎士になれなかったけどさ、お前ならいい魔戒騎士になれるよ』

『俺たちの分も戦ってくれよな。後は頼んだぞ!』

『頼んだぞ!』

シロ、ヤマブキ、アオはワタルから渡されたピックのようなものを統夜に見せた。

(ああ。任せとけ!俺はお前たちの想いも継いでやるからな!)

統夜はネックレスを握りしめ、うんうんと頷いていた。

シロ、ヤマブキ、アオは満面の笑みを浮かべると、その体は消滅した。

(シロ……。ヤマブキ……。アオ……。お前たちの仇は取ったぜ……。これからは

……。いや、違うな。これからも俺の戦いを、見守っていてくれよな……)

統夜は無念のまま散っていった盟友の思いを胸に秘め、これからも戦っていく決意を

固めたのであった。

……続く。

次回予告

『芸術ってやつは己の美を表現出来る素晴らしいものだ。まあ、俺様は存在自体が芸

術だけどな。次回、「絵画」。闇夜に輝く、金色の牙！』

第12話 「絵画」

統夜が唯たちに修練場での出来事を語ってから数日が経過していた。

この日はいつものように朝の鍛錬とエレメントの浄化を行ってから登校した。

そして今は休み時間で、統夜は次の授業が美術室での美術の授業だったので、美術室に向かっていた。

その途中、掲示板に気になるポスターが貼ってあったので、統夜は足を止めた。

「…………へえ…………」

そのポスターは「御月カオル 絵画展」という絵の個展のポスターだった。

（カオルさん……。桜ヶ丘で個展をやるんだな……）

御月カオルとは、画家と絵本作家として活動している女性である。

カオルは「白い霊獣と仮面の森」という絵本を出版し、この絵本はベストセラーになっていた。

統夜はカオルと面識があり、まるで弟のように可愛がられていた。

（個展の場所は……？）

統夜はポスターを見て個展の場所を確認すると、桜ヶ丘某所にある有名画家のための

画廊であつた。

その画廊では頻繁に有名画家の個展が行われている場所であつた。

(日には今度の日曜日か……。軽音部のみんなでも誘つて行こうかな)

統夜はカオルに会うために個展に行く決意をしていた。

「……あら、統夜くん、どうしたの?」

統夜がポスターを眺めていると、軽音部の顧問でもあるさわ子が統夜に声をかけた。

「あつ、さわ子先生。実はこのポスターを見てまして」

「ポスター?」

さわ子は統夜の見ていたポスターを眺めた。

「……えつ?カオル!?あの子、画家になつたの?」

「え?さわ子先生つてカオルさんのこと知ってるんですか?」

「知ってるも何もあの子はこの学校の卒業生よ。クラスメイトだったから仲は良かったわ」

「え!?!カオルさんが桜高の卒業生!?!」

統夜はカオルがこの学校の卒業生という事実を知らなかつたので驚きを隠せなかつた。

「ねえ、統夜君。あなた驚いてるけど、カオルの知り合いなの?」

「ええ、まあ」

「そうなんだ、それは意外ね。……あっ、そういえばカオルの絵本とカオルのお父さんの絵本がここの図書室にあつたわ。一度見てみたら？」

さわ子はそれだけ言うとその場から立ち去っていった。

（カオルさん、ここの卒業生で、しかもさわ子先生とはクラスメイトだったとは……。世界は思ったより狭いな）

そんなことを考えていると、次の授業のチャイムが鳴り響いていた。
「やべっ！急がなきゃ」

統夜は大慌てで美術室に入り、辛うじて遅刻は免れたのだった。

※※※

その日の放課後、統夜はさわ子からの話を頼りに図書室に向かった。

目的はカオルが描いた「白い霊獣と仮面の森」とカオルの父、御月由児が描いた「黒い炎と黄金の風」という絵本を借りるためである。

統夜が図書室に入ると目当ての絵本はすぐに見つかった。

カオルの個展が近いというのとカオルが桜高の卒業生だというのがあったのか、入り口近くの目立つ場所に2つの絵本は置いてあった。

統夜はそれをすぐ手に取ると、本貸し出しの手続きを行った。

その2つの絵本を借りてから、統夜は音楽準備室に向かった。

「あつ、やーくん来たー！」

統夜が中に入ると既に全員集合しており、ティータイムの準備は始まっていた。

「よう、みんな」

統夜はみんなに挨拶をすると、学生鞆と魔法衣を長椅子に置き、ギターケースを壁に立てかけた。

「今日は少し遅かったけど、どうしたんだ？」

「ああ、実はこの本を借りててな」

統夜は学生鞆から2冊の絵本とイルバ専用のスタンドを取り出した。

「え？何？」

統夜はイルバ専用のスタンドを置くと、その近くに2冊の絵本を置いた。

「えっと……。」「黒い炎と黄金の風」と……。」「白い霊獣と仮面の森」？」
「絵本みたいですね……」

唯たちが絵本を確認している間に統夜はイルバを指から外して専用のスタンドにセツトした。

「ああ、この絵本は御月カオルさんって人が描いた絵本とそのお父さんが描いた絵本なんだ」

「統夜君が絵本読むなんてちよつと意外ねえ」

「そうだな。だけど俺は御月カオルさんと知り合いなんだよ」

「へえ、統夜に絵本作家の知り合いがいたんだな」

「まあ、正確にはこの人は画家なんだけどな」

「「「へえ……」」」

「特に俺が読みたかったのはこつちなんだよ」

統夜は「黒い炎と黄金の風」をわかりやすく唯たちに見せた。

「こつちがカオルさんのお父さんが描いた絵本んだけど、カオルさんのお父さんはかつてホラーに襲われたことがあるみたいで、黄金騎士に救われたみたいなんだ」

「黄金騎士って確かヤークンより強いって言ってた騎士だよねえ？」

「ああ。黄金騎士牙狼。魔戒騎士の最高位の称号を持つ騎士。それで、カオルさんのお

父さんはその時の体験を絵本したんだけど、これがそうなんだよ」

「ということはこの絵本には魔戒騎士とホラーの戦いが描かれているんですか？」

「まあ、あくまでもファンタジーとしてだと思っけどな」

「ねえねえ、さっそく見てみようよ！」

「そうだな、ちよつと興味あるかも」

こうして絵本を読むことになり、唯たちは統夜の周りに集まっていた。

「ねえねえやーくん、早く早く♪」

「わかったわかった」

統夜はさっそく絵本を開き、唯たちと共に読み始めた。

この絵本は黄金の鎧を身に纏った騎士がおぞましい怪物を退治していくというものであった。

黄金騎士の活躍によって怪物の王は倒され、闇の中から光を取り戻すことが出来た。

そして戦いで傷つき、ボロボロになった黄金騎士を待っていたものとは……。

「……ってあれ？」

「最後のページは白紙……ですよね？」

そう、最後のページが白紙になっているのだ。

最後のページが白紙とのことで、困惑する読者も多かった。

しかしこの絵本は自費出版だったからか部数は少なく、この本を置いてある所は少ない。

桜高のように図書室に置かれるケースは珍しいのである。

「ああ。俺も初めてこの絵本を見たけど、本当に最後のページは白紙なんだな」

「ねえ、やーくん。この絵本って何で最後のページだけ初めてなの？」

「これはこの作品を作ったカオルさんのお父さんがわざとそうしたらいいんだ。結末は人それぞれの中にあるらしい」

「結末は人それぞれねえ……」

「まあ、確かにそれは一理あるわね」

「それにしてもこの本は数が少ないらしいから桜高の図書室によくあったなって思ったよ」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。この絵本はカオルさんのお父さんが自費出版で出したらしいからな」

「なるほどな……」

「ねえ、やーくん。こっちの絵本はどんな本なの？」

唯がカオルが出版した「白い霊獣と仮面の森」の絵本を指差した。

「これはカオルさんが出した絵本だな。カオルさんはこの絵本を出版するまでかなり苦

勞したらしい」

続夜はカオルから絵本出版のいきさつを聞いたことがあった。

カオルがこの絵本の製作を始めたのは布道シグマが魔戒騎士を滅ぼそうとしていた時期であった。

この頃にカオルは絵本の出版を頼まれて製作を始めるが、なかなか上手くいかなかった。

紆余曲折を経てどうにか絵本は完成し、今に至る。

「ねえねえ、この絵本も見てみようよ！」

唯がこう提案してするが……。

『おいおい、練習はどうするんだ？お前ら最近ダラダラし過ぎだろ』

「そうですね！練習しましょうよ！」

イルバの駄目出しに梓が乗っかっていた。

「そうだな。この本を返すのは来週だからゆっくり読む時間もあるしな」

続夜はゆっくりと立ち上がると、2冊の絵本を学生鞆にしまった。

「ええ？もつと読みたかったな……」

唯がぶうつと頬を膨らませてむくれていた。

「まあまあ、唯ちゃん。練習しましょう？」

紬が唯のことをなだめていた。

唯はしぶしぶ練習を承諾し、このまま練習することになった。

※※※

統夜が借りた絵本を軽く読んでから練習が行われ、練習が終わるとみんなでいつもの帰り道を歩いていた。

「なあ、みんな。今度の日曜日にカオルさんが個展を開くみたいなんだけど、一緒に行かないか？みんなをカオルさんに紹介したいしさ」

「うん♪行きたい♪」

「たまには絵の個展もいいわね♪」

「ああ、私も行きたい！」

「はい！私も行きたいです！」

「みんなが行くならあたしも行くのかな」

唯たちは二つ返事で個展に行くことを告げた。

「決まりだな」

統夜たちは当日の待ち合わせの場所と時間を決め、そこで番犬所の近くに到着した。

「それじゃあ俺は番犬所に寄るからここで」

「うん。やーくん、また明日ねえ」

「統夜先輩。今日も無茶はしないで下さいね」

「ああ、わかってるよ。それじゃあまたな」

統夜は唯たちと別れ、そのまま番犬所へと向かった。

この日は指令がなかったので、夜の街を見回り、この日は帰宅した。

そして個展当日、統夜は待ち合わせ場所に來ていた。

しばらくは指令らしい指令はなく、統夜はここ数日、まったりとした日々を過ごすことが出来た。

そして待つこと10数分後……。

「あつ、統夜！」

漣、律、紬、梓が統夜と合流した。

「おう、みんな。待ってたぞ」

「統夜、ずいぶんと早いな。だいぶ待ってたか？」

「いや、エレメントの浄化の仕事をこなしてから来たからそんなには待ってないよ」

「なるほど、それでその赤いコートを持ってきてるといふ訳か」

律は統夜が手に持っている魔法衣を指差した。

「そういうことだ。この魔法衣は魔戒騎士にとつて必要なものだからな。いくらプライベートだと言つても手放せないんだよ。ホラーも急に現れるかもしれないからな」

「やつぱり魔戒騎士のお仕事つて大変ねえ」

「まあ、それが守りし者の務めつてやつだよ」

「それよりも唯先輩が来ませんね」

現在のはちようど待ち合わせの時間なのだが、唯が現れる気配はなかった。

「ああ、唯のことだからな。恐らくは……」

「ごめーん!!遅くなつたあ!!」

唯が大慌てで待ち合わせ場所まで駆けつけていた。

「唯先輩、遅いですよ」

「エへへ……。ごめんごめん。憂に起こしてもらつたんだけど、寝坊しちゃつた」

「ま、そんなことだと思つたよ」

律はジト目で唯のこを見ていた。

「とりあえずみんな揃ったんだし、さっそく行こうぜ」

統夜たちはカオルの個展が開かれる画廊に向かつて歩き始めた。

そして歩くことおよそ15分、画廊に到着した。

「ずいぶんおつきい会場なんだねえ」

「ここはね、有名な画家さんたちがよく個展を開いている場所なのよ」

「さすがムギ。知ってたんだな」

「ええ。ここはお父様とよく行くのよ。画家の知り合いも多いから」

（アハハ……さすがムギ……）

紬の家の財力の大きさに統夜は苦笑いをしていた。

「それにしてもそんなところで個展が開けるなんてカオルさんって人はすごいんですね」

「そうだな、あの絵本を出してからはけっこう忙しい日々を送ってるみたいだよ」

「へえ、すごいなあ」

（……そういえばこの前カオルさんと会ったのはいつだっけ？ 鋼牙さんの家に遊びに行った時に会って以来かな？）

統夜は何度か黄金騎士牙狼である冴島鋼牙の家で何度かカオルと会っていたのだ。
今日は久しぶりの再会になる。

「ねえねえ、早く入ろうよお！」

「ああ、そうだな。中に入るか」

こうして統夜たちは個展の会場に入った。

中に入ると受付を済ませ、パンフレットを受け取った。

「おお、すごいねえ」

「はい。私、こういう絵は好きですよ」

統夜たちはさつそく展示された絵を見ていたのだが、唯と梓はカオルの絵を気に入ったようだ。

「なあ、統夜。そのカオルさんはどこにいるんだろう？」

「さあ、そこは俺もわからない。とりあえず絵を見て回ってれば会えるだろ」

「そうだな。せっかくだから色々見て回ろうよ。こんな機会は滅多にないからさ」

「そうね♪みんなでこういう絵を見るのもそうだけど、統夜くんとおでかけも久しぶりだものね♪」

「そういえばそうだったな」

統夜は魔戒騎士として忙しい毎日を送っているせいかな唯たちと出かけたり遊んだり

というのが少なかった。

「だから今日は思いきり楽しましようよ。私、先輩たちとおでかけは楽しみでしたから♪」

梓にとっては軽音部の先輩たちと初めてのおでかけだったので梓はこの日を楽しみにしていた。

「ああ。俺も楽しみにしてたぞ。俺にとっても久しぶりにみんなで出掛けるんだからな」

「うん♪そうだね♪」

「ねえねえ、統夜君。あっちにも絵があるから早くみましょう♪」

「ちよつとムギ。引つ張るなって」

統夜は絀に引つ張られ向こう側の絵の展示スペースに移動し、唯たちもそれに続いた。

展示されている絵を楽しみながら見続けて15分、この個展の目玉と言えるスペースに来た統夜たちは1番目立つ展示をされている絵の前で記者から取材されている1人の女性を見つけた。

「あ、カオルさんだ」

「あの方がカオルさん……ですか？」

「ああ。声をかけたいが、今は取材中だな。声をかけるのはもう少し待とう」

統夜は絵を見ながら待っていると、数分しないうちに取材は終わったようだった。

取材が終わると、取材を受けていた女性……御月カオルは統夜の存在を見つけた

「あつ、統夜君!!」

カオルがブンブンと手を振っていたので統夜はカオルのもとへ駆け出した。

「カオルさん、お久しぶりです」

「うん♪久しぶりだねえ♪」

カオルは満面の笑みで統夜との再会を喜んでいた。

「統夜君、しばらく見ないうちにまたちよつと男っぽくなつたんじゃない?」

「アハハ、ありがとうございます。ところで鋼牙さんはお元気ですか?」

「うん、相変わらずだよ。桜ヶ丘で個展をやるつて鋼牙に言ったら「統夜によろしく伝え

ておいてくれ」つて言つてたよ」

「そうですか! 相変わらずなんですな、鋼牙さんは」

「それよりも……」

カオルは少し離れたところで動向を見守っている唯たちを見ていた。

「統夜君つてば隅に置けないわねえ」

カオルはニヤニヤしながらこう言うが、統夜は首を傾げていた。

「?何のことです?」

「統夜君が女の子と一緒にだなんてね。それも5人も」

「ああ、彼女たちは軽音部の友達ですよ」

「そつかあ。統夜君って桜ヶ丘高校に通ってるって言うってたもんね♪……それで、統夜君の彼女はどの子なの?」

「ちよ!?!な、何言ってるんですか!?!」

「ウフフ、照れちゃって♪統夜君ってレオ君と同じくらいからかい甲斐があるよね♪」

「カオルさん、からかわないでくださいよ!」

統夜は顔を真っ赤にしており、カオルはクスクスと笑っていた。

統夜が照れている間にカオルが唯たちをに向かって手招きをすると、唯たちはゆつくりと2人のもとへ歩み寄った。

「あなたが統夜君の言ってた軽音部のみんなね。私は御月カオル。よろしくね♪」

「初めまして、平沢唯です!」

「田井中律です」

「あつ、秋山滯です」

「琴吹紬です。ムギって呼んでください」

「中野梓です!」

「唯ちゃんにりっちゃんに滯ちゃんにムギちゃん。そして梓ちゃんね」

「はい！よろしくお願いします」

「こちらこそ♪……あなたたちも桜高なのよね？実は私も桜高の卒業生なのよ」

「え!? そうなんですか!？」

「ええ。だからいつかこの桜ヶ丘で個展を開きたいって思ってたの」

「カオルさんの夢が叶ったってことですね」

「そうね。おかげさまで夢がひとつ叶ったわ♪」

夢が叶ったと語るカオルはとても嬉しそうな顔をしていた。

「それでね、軽音部の話を聞きたいんだけど……」

カオルが唯たちに話を聞こうとしたその時だった。

「カオル!? あなた、カオルじゃない!」

「あつ、さわちゃん!」

カオルに声をかけたのがさわ子だと律はすぐにわかった。

「えっ!?! さわ子? 久しぶり!」

カオルとさわ子はお互いに再開を喜んでいた。

「カオル、あなた画家になれたのね」

「まあね。それで、さわ子は今何をやってるの?」

「私は先生よ。この子たちは私の教え子なの」

「あのさわ子が学校の先生ねえ……」

高校時代のさわ子を知っているカオルは苦笑いをしていた。

「昔は相当やんちゃしてたあのキャサリンがねえ……」

「やめてよ！今の私は優しくおしとやかな先生で通してるのに」

「まあ、俺らには本性バレてますけどね」

さわ子の本性を知っている統夜たちは苦笑いしていたが、梓だけが首をかしげていた。

しかし、梓も梓でさわ子は優しくおしとやかな先生っていうのが本性ではないということは何となくわかっていた。

「まあ、私は軽音部の顧問をやってるからね。それは仕方ないわよね」

「だけど、さわ子が元気そうで良かった。紀美たちは元気なの？」

「たまに会ってるけど、変わらず元気よ。それで、亜佐美は元気？たまに会ってるんですよ？」

「亜佐美も相変わらずよ。この前も彼氏と別れたってぼやいてたわ」

「うっ！相変わらず恋愛はイマイチなのね、亜佐美は……」

さわ子とカオルは同級生ということもあって、昔話に花を咲かせていた。

「あつ、ごめんね、みんな。さわ子と久しぶりの再開だったからつい話が弾んじゃって……」

「俺たちは大丈夫ですから、2人でのんびり話をして下さい。俺たちはもつと絵を見てくださいから」

統夜がこう言うのと唯たちもウンウンと頷いていた。

「ごめんなさいね、みんな」

さわ子も申し訳なさそうにしていた。

「いいんですよ。先生とカオルさんは積もる話もあるでしょう？そんな機会って滅多になさそうですし……」

「本当にごめんね。とりあえずゆっくりしていつてね。……あつ、そうだ！今日6時にはこの個展は終わるんだけど、片付けを手伝ってくれない？帰りに何か奢るから♪」

「え？いいんですか？」

「ええ。私もあなたたちともつとお話したいしね♪」

「ありがとうございます。それじゃあもうちよつと絵を見て6時にはここに帰って来ますね」

統夜たちは1度カオルと別れ、個展の見学を再開した。

※※※

統夜たちは一通り個展の見学を済ませると1度画廊の外に出ていた。

現在の時刻は15時半。約束の時間である18時はまだ先であった。

「まだ6時まで時間ありますね」

「これからどうしよつか?」

「ねえねえ、近くにカラオケがあるから2時間くらい歌っていけない?」

唯は約束の時間近くまでカラオケをしようと提案した。

「おお、カラオケいいな!」

唯の提案に律はノリノリだった。

「うん♪行きましょ行きましょ♪」

「か、カラオケですか……」

「ああ……」

紬はノリノリだが、梓と漣はあまり乗り気ではないようだった。

「あずにゃん、行こうよお」

「あれえ？ 漣お、恥ずかしいのかあ？」

唯は梓を説得し、律はニヤニヤしながら漣をからかっていた。

「は、恥ずかしいわけないだろ！」

「じゃあ別にいいよな？」

「いいぞ。行こうじゃないの！」

漣は律に焚き付けられる形でカラオケに行くことを了承した。

「ま、まあ……。先輩たちが行くなら……」

梓もカラオケに行くことを了承した。

「やーくんは大丈夫？」

「イルバ。今日は番犬所から指令は来てるか？」

『いや、今のところは来てないな。まあ、最近はずいぶん忙しかったし、たまにはいいんじゃないのか？』

「……ありがとな、イルバ」

『よせよ、統夜。お前さんに礼など言われると気持ち悪いぞ』

「イルイル照れなくてもいいのに♪」

『だから変なあだ名で呼ぶな!』

唯とイルバが変わらぬやり取りをしていたので統夜は苦笑いをしていた。

「それじゃあ、さっそく行こっ♪」

こうして統夜たちはカラオケに行くことになった。

カラオケで歌うこと2時間後、店を出た統夜たちは再び画廊に戻って来た。

「あつ、統夜くん!みんな!」

画廊の中に入ると、カオルが統夜たちを見つけて手を振っていたので、統夜たちはカオルに駆け寄った。

「あれ? さわ子先生は一緒じゃなかったんですか?」

「さわ子ならちよつと前に帰ったわ」

「そうでしたか」

「みんなよろしく言ってたわよ」

統夜はこの場にさわ子先生がいなくて助かったなと思っていた。

カオルと話をする時には魔戒騎士絡みの話もするだろうと思っていたからだ。

「さて、早く片付けを終わらせてご飯を食べに行きましょ♪」

「「「「はい!!」」」」」

統夜たちは個展のスタッフと共に絵の個展の片付けを手伝った。

個展の片付けは統夜たちの手伝いもあり、1時間強で終わり、個展のスタッフは先に画廊から撤収した。

「さて……。終わりましたね」

「ありがとね、みんな。おかげで早く終われたよ♪」

「いえ。少しでも力になれたなら良かったです」

「それじゃあ、私たちも撤収しましょう。約束通りご飯奢るから♪」

「わーい♪ご馳走さまです♪」

「おい唯！……すいません、カオルさん」

「クスツ、いいのいいの♪ほら、早く行きましょっ♪」

統夜たちがカオルと共に画廊を出ようとしたその時だった。

「……御月カオルだな」

統夜たちの前にサングラスをかけた明らかに怪しい男が現れた。

統夜は嫌な予感がしていたので魔法衣を羽織って、不測の事態に備えていた。

「ええ、そうですけど」

「絵本作家としてデビューして以来、画家としても活躍してると聞く」

「あの……ご用件は？」

「俺は……。貴様の才能が欲しい。貴様を喰らってな」

男がカオルに迫る前に統夜が男の前に立ちはだかった。

「！統夜君！」

「……小僧、そこをどけ」

「ホラーの言うことなんか聞けるかよ」

統夜は魔法衣の懐から魔戒剣を取り出し、それを抜いた。

「カオルさん、みんなを頼みます」

「ええ！みんな、こつちよ！」

カオルは唯たちを連れて安全な場所まで移動した。

「小僧……魔戒騎士か」

「まあな」

統夜は魔戒剣を一閃するが、これは男にかわされてしまった。

『統夜。こいつはペインティ。他人の才能を喰らって自分の才能にしてしまいたいしたことのないホラーだぜ』

「なるほどな。自分の力じゃろくな作品は作れないって訳か」

「黙れ！貴様に何がわかる！」

「わかるさ。芸術ってのは自分の力で作っていくもんさ。他人の力を手に入れてもそれ

統夜の持つている魔戒剣は柄が青なのだが、男の剣の柄は赤だった。

「……鋼牙さん！お久しぶりです！」

「統夜、久しぶりだな」

統夜の前に現れたのは冴島鋼牙。黄金騎士牙狼の称号を持つ魔戒騎士で、現時点で最強の魔戒騎士である。

「……統夜、こいつは俺の獲物だ。すまないが譲ってくれないか？」

鋼牙は魔戒剣を構え、こう統夜に告げた。

「鋼牙さんがそう言うなら。俺は久しぶりにお手並みを拝見させてもらいます」

「フツ……別に構わないぞ」

統夜は魔戒剣を鞘に納めると、唯たちの元へ駆け寄った。

「やーくん!?あの人を助けなくていいの!？」

「大丈夫。俺が助太刀しても邪魔になるだけだから……」

「統夜先輩。それってどういうことですか？」

「梓ちゃん。あいつはね。みんなの希望になる存在……。黄金騎士牙狼なの」

鋼牙のことを語るカオルの顔は完全に鋼牙のことを信頼していると言いたげな顔であつた。

「牙狼!?それって確か……最強の……」

「が、牙狼だ?!? 貴様、まさか?!?」

『やれやれ。この街まで俺たちが追いかけて来たっていうのにこいつが何者か知らなかったんだな』

鋼牙の指にはめられたドクロの指輪がカチカチと音を立てながら口を開いていた。

この指輪は、「魔導輪ザルバ」。黄金騎士牙狼である鋼牙の相棒であり、ホラーとの戦いにおいて鋼牙のサポートを行う。

その容姿はイルバにそっくりなのだが、お互いそれを認めたくないらしく、会う度にケンカをよくしている。

「無駄話はそれまでだ。貴様をこれ以上逃すわけにはいかないからな」

(あのホラー、人を喰らいながら桜ヶ丘まで逃げてきたのか)

統夜はペインティがなぜこの桜ヶ丘に来たのかを分析していた。

「牙狼だかなんだか知らねえが、貴様を喰らってあの女を喰らってやる!」

「カオルは俺にとつて誰よりも守るべき女だ。貴様ごときに喰わせるわけにはいかな
い」

「ちよっ?!? 鋼牙?!?」

鋼牙がサラッとと言った言葉を聞いたカオルの顔が真っ赤になっていた。

「……貴様の陰我。俺が断ち切る!」

鋼牙はペインティに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。円を描いた部分だけ空間が変化し、そこから光が放たれた。

そこから放たれる光に包まれた鋼牙の体にガチャン！ガチャン！と音を立てながら鎧が装着されていった。

そして……。

統夜たちの前に黄金の輝きを放った狼の騎士が姿を現せた。

この騎士こそが魔戒騎士の最高位と言われた黄金騎士牙狼。

闇を照らす希望の光を放つ騎士である。

鋼牙の魔戒剣は専用の剣である牙狼剣に変化していた。

「く、くそ!! やってやる! やってやるぞ!!」

牙狼の雄々しき姿に畏怖したのかペインティはがむしやらに筆の形をしたミサイルを連射していた。

鋼牙はミサイルをかわそうとはせず、全てを受けたのだが、黄金の鎧に傷一つ付いておらず、鋼牙は一步一步ゆっくりと前に進んでいた。

「ハ」のっ……」

ペインティはミサイルだけではなくまるで絵の具のような衝撃波を放つが、鋼牙はそれを全て受けるが、それでも鋼牙は止まらなかつた。

「く、くそーこいつ……化け物か……!」

『おいおい。ホラーのお前さんにそれは言われたくないぜ』

ペインティの言葉にザルバは思わずツッコミをいれていた。

「……」

鋼牙は牙狼剣を構えると、恐怖に怯えるペインティを睨みつけていた。

そのまま牙狼剣を一閃すると、ペインティの体は真つ二つに切り裂かれた。

最強の魔戒騎士牙狼を相手に手も足も出なかったペインティは断末魔をあげながらその肉体が消滅した。

「……」

鋼牙はペインティを討滅すると、そのまま鎧を解除した。

鎧を解除すると、手に持っていた牙狼剣は元の魔戒剣に戻っていた。

鋼牙は魔戒剣を赤い鞘に納めた。

「鋼牙さん!」

ペインティが消滅したことを確認した統夜は鋼牙に駆け寄り、唯たちもそれに続いた。

「統夜。……すまなかったな。お前の獲物を横取りする形になってしまった」

「いいんです。久しぶりにあなたの戦いを見られたんですから」

「フツ……。そうか」

鋼牙は優しい表情で笑みを浮かべていた。

「……鋼牙。相変わらず凄かったよ」

「カオル。すまなかつたな。またお前の個展の会場で戦うことになってしまった」

「ううん、いいの。もう個展は終わってたし、あなたなら私を絶対に守ってくれると思っ

てたから」

「ああ、そうだな」

鋼牙がカオルに向けた笑みは統夜に向けた笑みとは違い、愛情にあふれたものであった。

「……ところで、統夜。彼女たちは？」

「ああ。彼女たちは軽音部の仲間です」

「……そうか。ホラーとの戦いに何度も巻き込まれているそうだな。零から話は聞いている」

鋼牙はここに来る前に零から軽音部の話を聞いており、唯たちが何度もホラーに襲われ、それを統夜に救われていることを話していた。

「あのつ、平沢唯です」

「田井中律です」

「秋山……滞です」

「琴吹紬です。ムギと呼んでください」

「中野梓です」

「俺は冴島鋼牙だ。……統夜がいつも世話になってるみたいだな」

「あのっ、私たちは何も……」

「はい。統夜先輩は私たちのことをいつも守ってくれて……」

「そうだったか。これからも統夜のことをよろしく頼むな」

「……はい！」

「……カオル。俺はもう帰るが、お前は どうする？」

「私はこれから統夜くんにご飯を食べに行くわ」

「……そうか。俺は先に帰るぞ」

鋼牙は画廊を出るために歩き始めるが、すぐ足を止めた。

「……統夜。たまには家に遊びに來い。ゴンザも会いたがってたぞ」

「はい！ぜひ遊びに行きます！」

「ああ。……それじゃあまたな、統夜」

鋼牙はそう統夜に告げるとその場を立ち去った。

「……さて、私たちも行きましょうか」

「「「「はい！」」」」

鋼牙がいなくなつてすぐ、統夜たちは食事を取るためこの場を後にした。

その後統夜たちはカオルの奢りで夕食をご馳走になり、主に桜高の話で盛り上がった。
いた。

………続く。

——次回予告——

『おいおい統夜。本当にあいつの家に行くのか？俺様は気がすすまないんだがな。次回、「屋敷」。まあ、お前が行くっていうなら仕方ないか』

第13話 「屋敷」

御月カオルが桜ヶ丘で個展を開いていたので統夜たちはその見学に訪れていた。個展が終わり、統夜たちはカオルたちと共に個展の片付けを手伝った。

それも終わり、帰ろうとしたその時、ホラーペインティが現れた。

統夜はホラーペインティに立ち向かうが、その途中、黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙が戦いに乱入してきた。

鋼牙の実力を知っている統夜はホラーを鋼牙に任せ、鋼牙はその圧倒的力でホラーペインティを討滅した。

その後、鋼牙はその場から立ち去り、統夜たちはカオルの奢りで夕食を取った。

食事の席では桜高のことや軽音部のことを話しており、魔戒騎士に関する話は出来なかった。

その翌日の放課後、統夜たちはいつものようにティータイムを行っていた。

「……なあ、みんな。今度の日曜日、鋼牙さんの屋敷に一緒に遊びにいかないか？」

統夜の唐突な申し出に唯たちの視線が統夜に集中した。

「鋼牙さんの？」

「ああ。昨日鋼牙さんも言ってただろ？」

「そういえばたまには遊びに来て言ってますたよね」

「昨日カオルさんも遊びに来てねって言ってたわね」

カオルは統夜たちと食事をしている時にもぜひ遊びに来てと言っていた。

「なあ、統夜。カオルさんってもしかして鋼牙さんの家に住んでるってことなのか？」

「ああ。カオルさんは鋼牙さんの家に住んでるよ」

「そ、それって……。同棲……ですか？」

梓は顔を真っ赤にしながら統夜に質問していた。

「同棲っていうかあの2人は確か結婚してるハズだぞ」

「「「「そうなの!!」」」」

「なんでそこまで驚くんだよ……」

統夜は大げさに驚く唯たちに呆れていた。

統夜の言う通り鋼牙とカオルはすでに結婚していた。

しかし、結婚したのは割と最近である。

「ねえ、やーくん。カオルさんってホラーや魔戒騎士のことを知ってるみたいだけど、関係者じゃないよねえ？」

「ああ。カオルさんは鋼牙さんと出会ってホラーと魔戒騎士の戦いに巻き込まれたんだ

「よ」

「私たちみたい……ってことだよな？」

滯の問いに統夜は無言で頷いた。

「だけど、カオルさんの場合、みんなより状況は最悪だったんだぞ」

「なあ、統夜。それってどういうことなんだ？」

「カオルさんはホラーとの戦いでホラーの返り血を浴びてしまったんだ」

「それを浴びてしまったらどうなるの？」

「えっと。それはな……」

『ホラーの血に染まりし者はホラーにとつて格別な餌になってしまう。それ故にホラーの血を浴びた者は問答無用で切り捨てなければならない。魔戒騎士の掟だ』

「！！！！」

衝撃の事実唯たちは驚きを隠せなかった。

「ホラーの血を浴びた者を斬らなきゃいけないのはそれだけが理由じゃない。ホラーの返り血を浴びた者は100日後に死を迎える。それも地獄のような苦痛を感じてな」

「そういえば、私が初めてホラーに襲われた時、統夜先輩は返り血がどうか言ってましたよね？それって……」

「ああ。お前にホラーの返り血を浴びさせるわけにはいかなかったからな」

「そうだったんですね……」

梓は、あの時、統夜がなぜあそこまで怒っていたのかその理由がはつきりとわかった。「鋼牙さんは騎士の掟を守ってカオルさんを斬ろうとしたけど、それが出来なかったみたいなんだ。それで、カオルさんは何度もホラーとの戦いに巻き込まれて、その度に鋼牙さんはカオルさんを救った。そうしてうちにカオルさんを救いたい。そう思ったんだと思う」

「鋼牙さんにとってカオルさんはかけがえのない人になったのね」

「それで、鋼牙さんは血に染まりし者を浄化する方法を見つけ、どうにかカオルさんを救ったんだよ」

「……私、どうして統夜がホラーとの戦いに私たちを巻き込みたくないか、わかった気がするよ」

濡の言葉に唯たちの唯たちはウンウンと頷いていた。

「……それで話を戻すけど、今度の日曜日一緒に鋼牙さんの家に行かないか？」
統夜は改めて唯たちを誘っていた。

「私、行ってみたい！」

「ああ、私も行きたい！」

「あたしも！何か面白そうだし」

「うん♪私も♪」

「はい！私も行きたいです！」

「決まりだな。それじゃあ今度の日曜日に行こう。鋼牙さんには俺から連絡をいれておくよ」

「うん♪お願いね♪」

こうして統夜たちは鋼牙の家を訪問することになった。

ティータイムを終えると練習を開始し、1時間ほど練習を行った後、解散した。

※※※

鋼牙の家を訪問する日曜日になった。

この日まで指令はほとんどなく、あったのは前日の土曜日にホラー討伐が一件あっただけであった。

この日、統夜たちはバスで隣町にある鋼牙の家に行こうとの話だったが、紬から前日連絡があった。

学校の前で待つていて欲しいと。

その話を聞いた紬を除く5人が桜高の前に集まり、紬を待つていた。

「ムギちゃん。どうしたんだろうね？」

「そうだな、学校の前で待つててだなんて」

「もしかして、大きなリムジンで迎えに来るとか！」

「馬鹿言うなよ。そんな都合のいい話がある訳……」

統夜がそう言いかけたその時、一台のリムジンが統夜たちの前で止まった。

そのリムジンの窓が開くと……。

「みんなあ、お待たせえ♪」

紬がニコニコしながら統夜たちに手を振つていた。

「……あつたな」

「ああ……。まさかマジでリムジンとは……」

律の予想が見事に的中し、統夜は驚きを隠せなかった。

統夜はたちがリムジンに驚いていると運転席から50代くらいの男が降りてきた。

「あなた方が紬お嬢様のお友達でございませうね？」

「あつ、あなたは？」

「申し遅れました。私は琴吹家の執事をしております、斉藤と申します」

「ムギの家の執事さん……」

紬の家は琴吹財閥というかなりおおきな財閥であり、唯たちがギターなど楽器を買った「LOGIA」という楽器店を始め、様々な店を経営している。

その家は桜ヶ丘の中でも一二を争うほどの豪邸であり、執事やメイドなども雇っている。

統夜たちはそんな紬の家の大きさの一端を目の当たりにして驚いていた。

「皆さま、どうぞお乗りください」

斉藤と呼ばれる紬の執事がリムジンの扉を開けると、こう促してきたので、統夜たちはリムジンに乗り込んだ。

「それにしてもすごいな、ムギ」

「本当だよ。まさか本当にリムジンを持つてくるなんて」

「だって今日は隣町まで行くでしょう？ だったらバスよりもみんな一緒にドライブもいかなあなんて♪」

紬はあえてバスを使わず、みんな一緒にドライブ気分を味わいたいという思いからリムジンを用意していた。

「それにしても……。見るだけでも初めてなのにリムジンに乗るなんて初めてです」

「うん！ 私もだよ！」

紬以外はごく普通の家庭で育っていたため、このようなリズムジンなどはテレビでしか見たことはなく、見るのも乗るのも初めてであった。

「ウフフ♪今日は楽しいドライブになりそうね♪」

みんな一緒なのが嬉しいのか紬はニコニコしていた。

「斉藤。〇□町にある鋼牙さんの屋敷に行つて頂戴」

「ああ。雷暝館でございますね？かしこまりました」

「『雷暝館？』」

聞きなれない言葉に統夜と紬を除く4人が首を傾げていた。

「ああ、雷暝館っていうのは鋼牙さんが住んでる屋敷の名前なんだよ」

統夜の言う通り、雷暝館は現在鋼牙が住んでいる屋敷の名前である。

以前は違う屋敷に住んでいたのだが、布道シグマが冴島邸を襲撃し、その時に屋敷は全壊してしまった。

その後建てられたのがこの雷暝館である。

斉藤はその雷暝館に向かって車を走らせた。

移動中の車内では紬はニコニコしている中、統夜たちは初めてのリズムジンに困惑していた。

しかし、徐々にリラックスしてきたのか雷暝館に到着するまで終始笑い声と話し声が

絶えなかった。

そして雷暝館に到着したのは、車を走らせてからおおよそ30分後だった。

統夜たちはリムジンを降りると目の前にはおおきな屋敷の姿が見えた。

「ふおお……大きい……」

「ああ、すごいな……」

「まるでムギの別荘みたいに大きいぞ……」

「こんなお屋敷……。テレビでしか見たことがないです……」

雷暝館の建物を初めて見る唯、滯、律、梓の4人はその大きさに驚いていた。

「……あれ？ムギは驚いてないけど、ここに来たことがあるのか？」

「ええ。実は一度だけお父様と来たことがあるの♪」

ムギは過去に一度この家を訪れたことがあったようだ。

（そういえば鋼牙さんって表の顔は確か財閥の社長だったっけ？だとしたらムギが一度この屋敷に来たことがあっても納得だよな……）

統夜は鋼牙の表の顔のことを聞いたことがあり、ムギがここに来たことがあっても不思議はないと思っていた。

「斉藤。それじゃあ私たちは行ってくるわね」

「かしこまりました。いってらっしゃいませ」

斉藤に見送られながら統夜たちは雷暝館に入るためドアをノックした。すると、扉が開かれ、1人の老紳士が出てきた。

「これはこれは。ようこそ、いらつしやいました」

老紳士は深々と頭を下げていた。

「こんにちは、ゴンザさん。お久しぶりです」

統夜は老紳士のことをゴンザと呼び、一礼していた。

「これはこれは、統夜様。お久しぶりでございます！」

「ゴンザさんも元気そうで何よりです」

「統夜様もお元気そうですね。学校の方はいかがですか？」

「ええ。すごく楽しいです。今日も軽音部の友達と来ました」

「お友達……でございますか？」

ゴンザが唯たちのことを見ると、袖以外がペコリと頭を下げた。

「ゴンザさん、お久しぶりです♪」

「こ、これは……！袖様！お久しぶりでございます」

ゴンザは袖に深々と頭を下げていた。

「えっ!? ムギ、知り合いなのか？」

「うん♪実は前に一度このお屋敷に来たことがあるの♪」

「そ、そうだったんですか」

「統夜様のお友達のお一人が絢様とは驚きました」

「うん♪統夜君は大切なお友達よ♪」

「左様でございましたか。……さきつ、こちらへどうぞ」

統夜たちはゴンザの案内で屋敷の中に通された。

「こちらでございませす」

ゴンザは統夜たちを応接室に案内すると、応接室の扉を開き、統夜たちは中に入った。

応接室の中では鋼牙が椅子に座って統夜たちのことを待っていた。

「鋼牙様。統夜様とそのお友達でございませす」

「そうか。……統夜、よく来たな」

「はい。お言葉に甘えて早速遊びに来ました♪」

「ああ」

「鋼牙さん、お久しぶりです♪」

絢は鋼牙に挨拶をすると鋼牙は少し驚いたような表情をしていた。

「お前……。琴吹財閥の令嬢か？」

「はい、絢です♪私、この前カオルさんの個展でホラーが出た時、統夜君たちと一緒にいましたよ♪」

「そ、そうか。あの時琴吹の令嬢に似ている娘がいると思っていたし、名前を聞いてもしやと思ったが、まさか本人とはな。……親父さんは元気か？」

「ええ。おかげさまで」

「そうか」

鋼牙は紬の父親が息災であることを知り、フツと笑みを浮かべた。

「あつ！統夜君たちだ！」

応接室の扉が開くとこう声がすると、カオルが中に入ってきた。

「あつ、カオルさん。こんにちは」

「いらつしやい♪さつそくみんなで来たんだね！」

「ええ。俺も久しぶりに遊びに行きたいって思っていました」

「あつ！ちようど良かった！今ね、料理を作ってたんだけど、良かったらどう？」

「え？いいんですか？」

「もちろん♪さ、こつちに用意してあるから行きましょっ♪」

カオルは統夜たちをダイニングに案内し、鋼牙とゴンザは引きつった顔でその様子を見ており、すぐさま統夜たちの後を追った。

統夜たちはダイニングの中に入ると、見た目は美味しそうなピザが並んでいた。

「今日はね、ピザを作ってみたんだ♪」

「うわあ！美味しそう！」

「本当すごいですね！」

「ささ、座って。さっそく食べて食べて♪」

カオルは統夜たちを椅子に座らせ、統夜たちにピザを振舞おうとしたが、鋼牙とゴンザがダイニングに入ってきた。

「あつ、鋼牙。ゴンザさん。2人も私特製のピザを食べる？」

「いや。それより……」

鋼牙は唯たちをジッと見ていた。

「？あの、鋼牙さん、どうしました？」

「お前たち、ちよつといいか？話があるんだが」

「？話、ですか？」

「そんな大したことではない。……統夜。お前は先に食べててくれ」

「？わかりました。……早く来ないと全部食べちゃいますからね」

「ああ。……じゃあついて来てくれ」

唯たちは鋼牙の後を追いかけて先程の応接室に戻ってきた。



「あ、あの……。私たちに話って何ですか？」

「そんなに身構えることはない。……カオルのことだ」

「?カオルさんのですか？」

「ああ。あいつの作る料理はかなり問題があつてな」

「…問題……ですか？」

「ああ。あいつの料理を食べたものは全員食中毒ですぐさま病院に送られるんだ」

「「「「!!」」」」

鋼牙から告げられたあまりにも意外な事実には驚きを隠せなかつた。

「え……。そ、それって本当なんですか？」

「残念ながら本当だ。あのままお前たちが何も知らずにカオルの手料理を食べたら病

院行きだったぞ」

「え!?で、でもやーくんが……」

「ああ、あいつなら問題ない。統夜はカオルが作った手料理を嫌な顔一つせず平らげることの出来る唯一の人間だからな」

『統夜は相当な味覚バカだからな。何を食っても美味いっていうやつなんだよ』

「そういうえば統夜のやつ、好き嫌いなんてなさそうだったけど……」

「それに、何食べても確かに美味しい美味い言ってたよな」

唯たちはザルバの言った味覚バカということに関して思い当たる節がいくつもあつた。

統夜は軽音部のティータイムの時も、夏の合宿の時も、さらにはクリスマスパーティーの時もどんな料理も美味しい美味いと言いながら料理を食べていた。

だがしかし……。

(……統夜先輩ってそこまで味覚オンチだったなんて……)

統夜の知られざる真実を知り、梓は驚きを隠せなかった。

「あつ、そういうえば。統夜君は食中毒は大丈夫なんですか?」

「ああ。あいつはカオルの料理を食べて食中毒になったことは一度もない」

『まあ、鋼牙や統夜のような魔戒騎士は内臓も丈夫に出来ているからな。普通の人間なら即死する毒物でも耐えられるしな』

『ああ、俺様はザルバだぞ』

「……」

唯はザルバのことをジッと見ていた。

『?どうしたんだ、お嬢ちゃん?』

「……ザルバだったらザルザル……だね!」

『おい、何が「だね!」だ。俺様を変なあだ名で呼ぶな!』

「アハハ……。そのリアクションは本当にイルバそっくりですね……」

『おいおい、俺様をあんなやつと一緒にするなよ』

「それでも本当に見た目は似てますよね」

律、滯、紬、梓の4人はザルバのことをジッと見ていた。

『まあ、誠に遺憾だが見た目は似ていると言わざるを得ないようだ』

ザルバは見た目は似ているものの、イルバと似ているということを確認たくはなかつた。

「……それよりも戻るか?お前たちも統夜の様子が気になるだろう?」

「あつ、そうですね」

こうして唯たちは応接室を後にすると、もう一度ダイニングに戻ってきた。

そこで唯たちが目にしたものは……。

「……うん、美味しい！カオルさん、また腕を上げました？」

「やったあ♪そう言われると作った甲斐があつたな♪」

カオルのピザを美味しくそうに頬張る統夜と統夜にほめられて喜ぶカオルの姿がそこにあつた。

「……ああ、みんな。遅かつたな」

「う、うん……」

「みんながあまりにも遅いから待ちきれずに全部食べちゃつたぞ」

「ああ、べ、別に問題ないですよ」

「あ、そつかあ。唯ちゃんたちの分も無くなつちやつたね。私、また作ってくるよ」

カオルが再び厨房に行こうとしたため唯たちは慌てていた。

「カオル、そこまでしなくてもいい。ゴンザに何か用意させる」

「……そう？それは残念だなあ」

カオルは厨房に行くのを鋼牙に止められ、しゅんとしていた。

「……統夜先輩、体調はどうなんですか？」

「？別に異常はないけど？」

「そ、そうですか……」

鋼牙の言ったことは事実のようであり、梓は苦笑いをしていた。

『お前たち、聞いたんだな……。あれを……。』

イルバが唯たちを憐れむように口を開いた。

「?イルバ、あれって?」

『いや、何でもない。大したことではないからな』

イルバの言葉に統夜は首を傾げていた。

「……カオル。ゴンザはどこに行ったかわかるか?」

「ああ、ゴンザさんならお茶の準備をするって言って出て行ったよ」

「そうか……。お前たち。何度も移動させて悪いが、お茶は先程の部屋で頂くことにしよう」

「あつ、はい。大丈夫です!」

唯たちはダイニングを出ると、そのまま応接室に戻っていった。

「……………」馳走様でした!」

「フフ、お粗末様♪」

統夜は席を立つと唯たちを追いかけて応接室に向かい、カオルはピザで使った食器を洗うために厨房へ向かった。

※※※

統夜たちが応接室で待っていると、ゴンザが応接室に入ってきた。

「……………皆様、お茶の用意が出来ました」

ゴンザのお茶の準備が終わり、ゴンザはテーブルに様々なお茶菓子を置くと、カップに紅茶を注ぎ、それを統夜たちに配った。

「ささ、冷めないうちにお召し上がりください」

「……………いただきます！」

統夜たちはゴンザが用意してくれた紅茶を一口飲んだ。
すると……………

「……………美味い……………」

「ああ、確かに美味いな……………」

「まるで軽音部で飲むお茶みたいだね！」

「あ、それは私も思いました」

「ウフフ……。軽音部で出してるお茶はここで出してるお茶と同じ茶葉を使っているのよ」

「へえ、そうなんだ」

統夜たちはゴンザの淹れてくれた紅茶に舌鼓をうっていた。

「さあ、お菓子も遠慮なくお召し上がりください」

統夜たちはテーブルに置かれたクッキーやマドレーヌなどのお茶菓子を頬張った。

「ん！美味しい！」

「確かに、すごく美味しいな！」

「はい！すごく美味しいです！」

「うん！ムギちゃんが持ってきてくれるお菓子と同じくらい美味しい！」

「ええ。本当に美味しいわ♪」

「ありがとうございます。これらは私が作ったんですけど、喜んでいただいて何よりです」

「え!?これ、ゴンザさんの手作りなんですか？」

「すごいです！」

「アハハ……。そこまでお褒めになられると照れますなあ」

ゴンザは唯たちに褒められまんざらでもないと言った感じだった。

「統夜。軽音部とか言ったな？そこでもよく紅茶を飲んでいるのか？」

「ええ。俺たちの軽音部はちよつと特殊でよくティータイムを行っているんですよ」

「そうか。その紅茶がゴンザが淹れたのと同じような紅茶であれば俺もぜひ飲んでみたいな」

「いつでも桜ヶ丘高校にお越しください♪大歓迎ですから♪」

「そうだな。桜ヶ丘に寄ることがあれば寄らせてもらおうか」

「はいっ！」

鋼牙とやり取りをする統夜はとても嬉しそうだった。

「やーくん、楽しそうだね♪」

「まあな。ここにくるとなんか気持ちがあらぐんだよな」

「フツ……。そう言ってもらえらるともてなし甲斐があるってものだな」

『まあ、そのクソ指輪は歓迎しないがな』

『おい、お前今なんと言った？』

『クソ指輪と言ったんだ。貴様、魔導輪のくせに耳まで遠くなつたか？この骨董品め』

ザルバの挑発にイルバはカチンと来てしまった。

『言つたな！貴様なぞその骨董品と同じ形をした骨董品のくせに』

『俺様を貴様と一緒にするな！』

『それは俺様の台詞だ!』

ザルバとイルバはそのまま口喧嘩を始めそうになったが……。

「やめろ、イルバ。鋼牙さんの前だぞ」

「ザルバもそこまでだ」

統夜と鋼牙がそれぞれの相棒を止めていた。

「鋼牙さん、すいません。俺の魔導輪が」

「それは俺も同様だ。だから気にするな」

統夜は申し訳なさそうにしていたが、鋼牙に気にするなど言われて安堵していた。

「ささつ、お茶もお菓子もまだまだございますから遠慮なくお召し上がり下さい」

ゴンザに薦められる形で統夜たちは紅茶やお茶菓子に舌鼓を打っていた。

そうしているとカオルが戻ってきて、ティータイムに参加した。

それから日が暮れるまでティータイムを楽しんでいた。

ティータイムが終わると統夜たちは雷暝館を後にし、待っていた斉藤のリムジンにのって桜ヶ丘へ帰って行った。

……続く。

—— 次回予告 ——

『やれやれ、教師というのはけっこう大変なんだな。人を教えるってことだけが仕事じゃないみたいだしな。次回、「教師」。ま、俺様はそんな仕事勘弁だな』

第14話 「教師」

……ここは全ての番犬所を総括する「元老院」。

元老院所属の魔戒騎士や魔戒法師は元老院からその実力を認められたものばかりである。

そのうちの1人である青年が元老院の神官に謁見していた。

「……よく来ましたね、レオ」

レオと呼ばれる青年にこう言った女性は何官「グレス」。

この元老院の最高責任者であり、紅の番犬所の神官、イレスの母親でもある。

そしてグレスに謁見している青年は布道レオ。元老院所属の魔戒法師であり、様々な発明品を開発し、魔戒騎士や魔戒法師を助けている。

しかし、そんな彼にはもう1つの顔があるが、それは後にわかることである。

「あの、グレス様。もしかして指令ですか？」

「ええ。あなたにやってもらいたい仕事があります」

グレスはレオに仕事の内容を告げると、レオは驚きを隠せなかった。

「ええ!? 僕がですか? 僕ではとても務まりませんよ!」

「いいえ。私はあなたが一番適任と判断したからあなたにこの仕事をお願いしているのです」

「……」

グレスにこう説得され、レオは少し考え込んでいた。

「……わかりました。自信はありませんが、その仕事。お引き受けします」

「頼みましたよ、レオ」

レオは元老院から指令を受けると、元老院を後にしてその仕事の準備を始めたのであった。

※※※

統夜たちが鋼牙の家である雷暝館を訪れた翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

エレメントの浄化も終わり、この日も学校へ向かった統夜であった。

しかし、最後に浄化したオブジェのある場所から桜高まではかなりの距離があり、統夜はそこを計算に入れていなかった。

統夜はそれでも急いで桜高に向かうが、時間通りに桜高に到着することが出来なかった。

遅刻してでも学校に到着した統夜はそのまま教室に入ったが、なぜか教室は無人だった。

「……あれ？何で誰もいないんだ？」

『さあな。今日は朝から移動教室だったんじゃないのか？』

「確認したからそれはないと思うけど……」

とりあえず席に着いた統夜が数分待っていると、クラスメイトたちが続々と教室に戻ってきた。

「あつ、月影君。今来たんだね」

隣の席の姫子も戻ってきて席に座った。

「ああ。ちよつと前に来たんだけど、誰もいなかったからびっくりしたよ」

「アハハ。今日は朝から全校集会があったからね。ちよつと前に終わったんだよ」

「ふーん、全校集会ねえ……」

統夜はなぜ今までこの教室が無人だったのか納得した。

「それでね、今日から教育実習の先生が来るんだって」

「教育実習の先生ねえ……」

今日の全校集会はその先生の紹介なのだろう。

統夜はそう分析していた。

姫子と話をしていると、担任の先生が教室に入ってきた。

「はい、HR始めるぞ」

先生は教壇に立つとすぐに統夜の存在を見つけた。

「お、月影。遅刻だぞ」

「すいません、寝坊しちゃいました」

統夜がこう言い訳をするとクラスメイトたちが笑っていた。

「まあ、今度から気を付けろよ」

先生はこう統夜を注意すると、クラスの全員を見回した。

「はい。さつき全校集会で言ってたけど、教育実習の先生がこのクラスの副担任になりました」

「えっ？嘘?!」

「それは楽しみだねえ！」

クラスメイトたちはまさかのニュースを聞いてそれぞれ喜んでいった。

(ふーん、たまたまこのクラスに当たったんだな……)

統夜だけは教育実習の先生に興味はなかった。

「それじゃあさつそく入ってきてもらうぞ。……布道先生。お願いします!」

(……ん? 布道?! いや、まさかな……)

統夜は布道という名字に聞き覚えがあつたのだが、気のせいだろうと思つていた。

教室に入つて来た先生は二十代中頃くらいの青年で、眼鏡をかけてスーツ姿だった。

「それじゃあ、布道先生。自己紹介を」

「はい。……この度このクラスの副担任になりました教育実習生の布道レオです。このような場は初めてでまだまだ未熟ですが、皆さんと一緒に成長していきたいと思ひますのでよろしくお願いします」

なんと教育実習生としてこのクラスにやつて来たのはあの布道レオであつた。

(れ……レオさん!?)

《ほお、驚いたな。まさかあいつが来るとは……》

統夜だけではなく、イルバも驚きを隠せなかつた。

統夜はレオとも面識があり、色々なことをレオから学んでいた。

そんな彼がなぜここに?

統夜の疑問は絶えなかつた。

そんな中……。

『キヤアアアアアアア!!』

女子生徒の黄色い歓声がこの2年3組中に広がっていた。

「やっぱりイケメンだよ！イケメン！」

「うん！それに何か優しそうな感じ！」

「先生に守られたい!!」

「この気持ち……まさしく愛だ!!」

「イケメン……キター!!」

「我が生涯に一片の悔い無し！」

(……おい、後半のはちよつとおかしいだろ！しかも最後！どこの世紀末覇者だよ！)

統夜は心の中ではあつたが、ツツコミを入れていた。

「はい！静かに！」

担任の先生がどうか女子生徒たちを黙らせた。

「それじゃあ、布道先生。お願いしますね」

「は、はい」

こうしてレオがSHRを進行することになり、女子生徒たちはワクワクしながらレオの話聞いていた。

一方統夜は……。

「……………」

統夜はジト目でレオのことを見ており、統夜と目が合うとレオは苦笑いをしていた。

こうしてSHRは終わり、休み時間になったのだが……。

「布道先生って休みの日って何してるんですか？」

「趣味は何ですか？」

「彼女はいるんですか？」

「先生ってどこの大学何ですか？」

「普段はどんな音楽を聴くんですか？」

レオは女子生徒たちからの質問が集中砲火のように飛び交っていた。

「アハハ……………。参ったなあ……………」

レオは激しい質問にタジタジだったが、満更でもないようだった。

（やれやれ……………。これじゃあ待つてたら休み時間は終わるな）

統夜は席を立つと質問攻めが行われてる人混みの中へ入っていった。

「……………あつ、とう……………月影君。どうしました？」

こうレオが統夜に声をかけると質問は止み、質問をしていた生徒たちの視線が統夜に集中していた。

「……布道先生。ちよつといいですか？話したいことがあるんですけど……」
「奇遇ですね。僕も話があるんですよ」

「ええ!?!月影君と布道先生って知り合いだったの!?!」

「まあ……ね」

「嘘!?!ねえ、どこで知り合ったの?」

統夜はこのままじゃやばいと直感で感じていた。

このままだと再び質問攻めが激しくなると思ったからだ。

「先生、行きましょう!」

「え、ええ!?!」

統夜はレオの手を取ると、そのまま教室を出て行った。

その様子を見て女子生徒たちが再び黄色い歓声を上げていた。

統夜とレオのツーショットがかなり絵になるからだろう。

「ああん、行っちゃった……」

「もつと布道先生のこと聞きたかったのに……」

「レオ統……統レオ……。フフフ、悪くないわね」

統夜は移動中に不穏な言葉が聞こえてきて、顔が真っ青になっていた。

とりあえず人が来なさそうな所がいいと判断し、統夜とレオは屋上まで移動した。

「ここ、ここまで来れば大丈夫だと思います……」

「そ、そうですね……」

屋上には人はおらず、話をするにはうってつけだった。

「レオさん……。どうして桜高で先生に？」

「実は……元老院からの指令なんです」

「元老院から？」

「はい。この桜ヶ丘で不穏な動きがあるから桜ヶ丘高校に教師として潜り込み、その不穏な動きを調査するようにと」

「なるほど……」

統夜はレオの言葉でなぜレオが先生としてここに来たのかがわかった。

「それにしても……不穏な動きって？」

「それはまだ僕にもわかりません。だけど、グレス様は凶悪で強大なホラーが目覚めようとしていると言っていました……」

「凶悪で強大なホラー……」

統夜はレオの言葉にビクンと反応し、少しだけ身構えていた。

「それが本当だとしたら封印が解かれる前に何とかしなくてはいけません。そうでなければこの桜ヶ丘が壊滅的な打撃を受けるでしょう」

「……そんなこと……。絶対にさせてたまるか！」

「ええ、僕も同じ気持ちです。だから、力を合わせて頑張りましょう！」

「はい！」

統夜は桜ヶ丘を……さらに言うのと唯たちを守るために奮闘することを心に誓ったのであった。

「……おっと、そろそろ休み時間が終わりそうだ」

「戻りましょうか、統夜君」

「そうですね」

レオと統夜は屋上を後にすると、そのまま2年3組の教室に戻った。

そこでちょうどチャイムが鳴り、次の授業が始まった。

次の授業はさっそくレオの授業であり、レオは現代国語を受け持っていた。

レオの授業はともわかりやすく、みんなとても集中して授業を受けていた。

(へえ……。レオさん、教師としていけるじゃん。さすがは様々な魔導具を開発してるだけあって博識はあるよな)

統夜も耳をすませてレオの授業を聞いていた。

こうしてレオの最初の授業は好評のまま終了した。

※※※

そして昼休みも終わり、放課後になった。

統夜は軽音部のみんなにレオを紹介するためにレオを連れて音楽準備室に向かった。

「……え？レオさん、軽音部の顧問になるんですか？」

音楽準備室に移動中、レオから思いもよらぬことを聞いたので統夜は驚いていた。

「はい。今、軽音部の山中先生は忙しいみたいで代理の顧問を頼まれたんです」

「忙しい？」

「吹奏楽部……でしたか？そちらの練習が大変みたいです」

「そっか……。吹奏楽部はコンクールとか出るから忙しいですもんね」

「ああ、なるほど。だから忙しいんですね」

「だけど、レオさんが軽音部の顧問なのはこちらとしても都合がいいです。軽音部のみんなは俺が魔戒騎士であることは知ってますから」

「その話は鋼牙さんから聞きました。……鋼牙さんに統夜とその友達のことを頼むってお願いされましたよ」

「そうですか……。鋼牙さんが……」

統夜は黄金騎士である鋼牙が自分のことを気にかけてくれていることがとても嬉しかった。

こう話をしている内に音楽準備室の入り口まで来たので統夜は扉を開けて音楽準備室に入った。

中に入ると、すでに全員集まっており、紬はティータイムの準備をしていた。

「よう、みんな」

「あつー！やーくん！それと……」

「教育実習生の布道先生……。でしたよね？」

「はい、そうですよ」

「布道先生がどうしてここに？」

「ああ。レオさんは今日から軽音部の顧問になるみたいなんだよ」

統夜は学生靴と魔法衣を長椅子に置きながら事情を説明していた。

「え!?でも軽音部の顧問はさわちゃんだろ?」

「さ、さわ……?」

レオは先生をあだ名で呼ぶ律に少し戸惑っていた。

「ああ。だけど、今さわ子先生は吹奏楽部を見るので精一杯なんだと」

「あつ、最近部室に顔を出さないと思ったらそういうことだったんですね」

さわ子は元々は吹奏楽部の顧問で、軽音部の顧問ではなかったのだが、統夜たちが1年生の時にさわ子が顧問になったのである。

初めは顧問の掛け持ちは厳しいと断られたのだが、統夜たちはさわ子が元軽音部で、優しくおしとやかな先生というイメージを打ち壊すほど滅茶苦茶だったということを知ってしまった。

それを軽音部だけの秘密にする代わりにさわ子は軽音部の顧問も引き受けることになったのだ。

統夜はギターケースを壁に立てかけ、鞆からイルバ専用のスタンドを取り出し、それをテーブルの上に置いた。

「さ、レオさん。座ってください」

統夜はこうレオを促しながら指にはめられたイルバを外して専用のスタンドにセットした。

「と、統夜君。ど、どうしてイルバをそこに？」

「レオさん。彼女たちは俺が魔戒騎士だってことは知ってるので大丈夫です」

「あ、そういうええそう言っていましたね」

「あれ？布道先生は何でやーくんのこととかイルイルのことを知ってるんですか？」

「や、やーくん？イルイル？」

レオは統夜とイルバがあだ名で呼ばれていることに驚いていた。

「ああ、それはな……」

『その男は元老院所属の魔戒法師なんだ。だから統夜が魔戒騎士であることは当然知っているぞ。……あと唯。俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

イルバはレオのことを説明しつつ、いつものツツコミをいれていた。

「布道先生が……」

「魔戒法師……」

「まあ、それだけじゃないけどな。さらにレオさんは……」

「ま、まあ。いいじゃないですか。それより統夜君。軽音部のみんなを紹介してください」

「い」

「ああ、そうでしたね。えつと……こつちから」

「統夜先輩。自分で自己紹介しますよ」

「そ、そうか？」

統夜は自分がみんなを紹介しようとしたが、梓の言葉を聞いて自己紹介は各々に任せるところにした。

「平沢唯です！」

「あたしは田井中律。よろしく！レオ先生♪」

「中野梓です！よろしくお願ひします！」

「琴吹紬です！」

「あ、秋山……漣です」

「！みお？」

「ひっ！」

漣の名前にレオは思わず食いついてしまい、漣は怯えてしまった。

「ああ、すいません。私の大切な人の名前も「みお」だったものですから……。つい反応してしまいました」

（！そうか……。その「みお」って人って確か……）

統夜はレオの大切な人の話を聞いたことがあった。

「その大切な人って？」

「あっ……その……」

「まあ、いいじゃねえか。人間聞かれたくないことの一つや二つあるだろ？」

統夜はレオの心情を察してこの話をさせないようにしていた。

「あつ……。そうですよね……」

「すいません、布道先生……」

「いえ、いいんです。こちらこそすいません」

「まあ、この話はおしまい！ムギ、お茶を淹れてくれないか？」

「うん♪もう準備は出来てるわ♪」

少し気まぎれな霧囲気を変えるために統夜は紬にお茶を淹れるよう頼み、紬はみんなの分のお茶を淹れ始めた。

「さあ、レオさん。飲んでみてください。軽音部の紅茶はなかなかのですよ」

レオの前にも紅茶が置かれ、統夜はレオに軽音部の紅茶を勧めた。

「それじゃあ、さっそく……」

レオは紅茶を一口飲んだ。

「……！美味しい……！」

「良かった。そう言ってもらえて嬉しいですよ」

紅茶を入れたのは自分ではないが、レオが美味しいと言ってくれたことが統夜は嬉しかった。

「まるでゴンザさんが淹れてくれた紅茶みたいです」

「ウフフ♪そう言ってもらえるとすごく嬉しいですよ♪」

「ささ、お菓子も食べてください！これもなかなかですよ」

統夜はさらにテーブルに出されたお菓子もレオに勧め、そのままティータイムに突入

した。

レオは紅茶をだけでなく、お菓子にも舌鼓を打っていた。

(……いつものティータイムもいいけど、やっぱり知ってる人がいるっていうのはやっぱりいいよな♪)

統夜はいつものティータイムとは少し違うと感じながらも知っている人が参加しているティータイムは楽しいと感じていた。

そしてティータイムを始めてから30分後……。

「……おっと、もうこんな時間か」

「? 滯?」

「みんな、ごめん。私今日はこれから用事があるから今日は帰るな」

滯はそう言うのと席を立てて帰り支度を始めた。

「用事?」

「うん。ちよつと叔父さんのところに行かなきゃいけないくてな」

「ああ、滯。あの人に会いに行くんだな?」

滯と付き合いの長い律は滯がこれから会う叔父さんのことを知っていた。

「ああ、そう言うことだ。それじゃあ悪いけど、また明日な」

そう言うって滯は音楽準備室を後にした。

「……漣が部活の途中で帰るとか珍しいな」

「やーくんはしょっちゅうじゃん！」

「俺はホラー狩りをしなきゃいけないんだから仕方ないんだよ!!」

「まあ、それは知ってるけどね♪」

唯は統夜の事情を知った上でわざとツツコミをいれていた。

「そういえば漣は月に1回くらいのパースで叔父さんのところでご飯を食べてるみたいだからな。漣の家族も一緒に」

「へえ、律先輩。詳しいんですね」

「そりゃあ、漣とは付き合いが長いからなー」

律と漣は小学校の頃に出会い、とある出来事がきっかけで仲良くなった。

その後、同じ中学校を経て、一緒に桜ヶ丘高校に入学し、今に至る。

「……さて、そろそろ練習しようか」

「ええ？まだお茶飲んでから30分くらいしか経ってないよ？」

『30分もティータイムをしてりや充分だろ？』

「そうですよ！今日は漣先輩はいませんが、その分ギターパートの合わせをしっかりとしない」と」

梓の言葉に統夜は頷き、唯は引きつった表情をしていた。

「そうだな……。あたしもドラムの個人練習したいなって思ってたし」

「うん♪私も新しい曲を作りたいなあって思ってたのよね」

「さあ、統夜先輩、唯先輩。ギター出して。練習しましょう」

「うう……。やーくん……」

唯は統夜に助けを求めるが……。

「唯、諦める。お前は日によって演奏が上手かったり下手だったりするからな。お前には基礎をしつかり覚えてもらわないとな」

「おお、統夜先輩が軽音部っぽいことを言ってます！」

『いやいや、ここは軽音部だろう……』

梓の言葉にイルバがすかさずツツコミをいれていた。

こうしてティータイムは終了し、統夜たちは各自練習を始めた。

く 漣 side く

こんにちは、秋山漣です。

今日は教育実習生の布道レオ先生がこの桜ヶ丘高校にやって来ました。

それにしても布道先生がさわ子先生の代わりに軽音部の顧問になるとかびつくりだよな。

……それだけじゃない。

布道先生も統夜と同じであのホラーと戦う人だったなんて……。

そんな人がなんで先生なのか疑問だけど、きつと何か事情があるんだろう。

そう思ったので私は深く追求はしなかった。

それにしても……。

布道先生が私の名前を聞いて食いついてきた時はびつくりしたよな……。

先生にとって大切な人がだったみたいだけど、その「みお」さんは一体どんな人なんだろうな？

気になったから聞きたかったけど、統夜が止めてきたんだよなあ。

という事は私たちにはあまり知られたくない深い事情があるんだろうな……。

統夜から魔戒騎士や魔戒法師。それにホラーのことは色々聞いたけど、私たちが知らないことがかなり多いからな。

私はそんな統夜を支えていきたいって思ってる。それはきつとみんなも同じ気持ちだ。

だけど、あまり魔戒騎士やホラーについては深く関わっちゃいけないって気はするんだよな……。

私はティータイムに少し参加してから家の用事があったので先に帰ることになった。月に一度くらいペースで叔父さんの家に「ご飯を食べに行っており、今日はその日だった。

パパとママは先に行くって言ってたから私は叔父さんの家にまっすぐ向かった。

叔父さんの家で夕食を済ませた私は先に家に帰ることにした。

宿題もやらなきゃいけないし、勉強もしないといけないからな。

叔父さんの家を出た時にはすでに外は真っ暗だった。

「うわあ……。早く帰らないとな……」

夜はホラーが出てくるかもしれないから……。なるべく早く帰らないとな……。

私は寄り道することなく家に帰ることにした。

叔父さんの家を出てから10分が経過し、少しだけ薄暗い道に入ったその時だった。

——キシャアアアアアア!!!

「ひ!?な、何!?!」

突然聞こえてきたこの世のものとは思えない声が聞こえてきた。

い、一体なんなんだよ……。

すると、私の目の前にホラーと思われる怪物が現れた。

「ほ、ホラー!?!」

「ほお、貴様、我らのことを知ってるのか……。それなら話は早いかな」

このままでは危ない。私の本能はそう叫んでいた。

私は慌てて逃げるが、その途中、運悪く何かにつまづいて転んでしまった。

そうしているうちにホラーが迫ってくる。

……怖い! やっぱり怖い!

統夜が魔戒騎士だと知ってからホラーを見る機会は増えたけど、やっぱり怖い!

統夜……! 助けて……! !

そう心から祈ったその時だった。

「……! 漣さん!」

私の目の前に現れたのは統夜ではなく、意外な人物であった。

「ふ……! 布道……! 先生?」

私の目の前に現れたのは眼鏡を外してはいたが、間違いなく布道先生だった。

（3人称 side）

軽音部の練習を見送ったレオは教師として残った仕事を片付けていた。

統夜は練習の途中で番犬所に寄るとのことで先に帰っていた。

レオが仕事を片付け、桜高を後にした時はすでに外は暗くなっていた。

「はあ……。教師ってけっこう大変だなあ……」

教師という仕事が予想以上にハードだったのでレオがぼやいていた。

『……レオ、大丈夫かい？あんたの仕事はそれが主じゃないだろ？』

レオの左手から老婆のような声が聞こえてきた。

レオの左手にはめられた指輪が口を開いたのである。

この指輪は「魔導輪エルヴァ」。レオのパートナーである。

レオは魔戒法師の顔だけではなく、魔戒騎士の顔もあるのだ。

「そうだね……。この町で不穏な動きがあるからそれを阻止しないと……」

『レオ、その前に目の前の仕事だよ。……ホラーの気配がする。ここから近いよ！』

「！わかった！」

レオはエルヴァのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を行った。

移動すること数分。意外にもホラーはすぐに見つかった。

しかし……。

(！あれは、滯さん！ホラーに襲われているのか！)

レオはその場を飛び出し、滯の前に現れた。

「滯さん！」

「ふ……布道……先生？」

滯は目の前に現れたレオに驚いていた。

「滯さん、大丈夫ですか？」

「は、はい……」

「心配いりません。あいつは僕が倒します」

レオは今は動きを止めているホラーを見ていた。

「で、でも……」

「大丈夫。心配いりません」

レオはどこからか魔戒剣を取り出し、それを構えた。

「！そ、それって……」

「ええ。僕は魔戒騎士でもあるんです」

レオが説明している間にホラーが迫ってきたので、レオは魔戒剣を一閃し、ホラーを切りつけると蹴りを放ってホラーを吹き飛ばした。

『レオ。そいつはただの素体ホラーだけど、油断するんじゃないよ』

「ああ、わかってるよ！」

エルヴァが目の前のホラーがただの素体ホラーであることを分析していた。

「……漣さん。安心してください」

「?先生……?」

「あなたは、僕が守ります！」

レオは両手で魔戒剣の柄を握りしめると、それを高く突き上げ、円を描いた。

円を描いた部分は違う空間に変わり、そこから放たれる光にレオは包まれた。

すると、レオは紫の鎧を身に纏っていた。

レオが身に纏うこの鎧は閃光騎士狼怒（ロード）。レオが継承した、魔戒騎士としての名前である。

「……レオ先生……」

漣はいつの間にかレオのことを名前で呼んでいた。

レオは狼怒の鎧を身に纏い、ホラーに向かっていった。

それと同時に……。

「漣、大丈夫か？」

統夜が遅れて駆けつけてきた。

「と、統夜……?」

「ごめんな、遅くなった」

「大丈夫。レオ先生が助けてくれたから……」

「レオ先生? 滞、いつの間に名前で呼ぶようになったんだ?」

「う、うるさい! 別にいいだろ!」

「まあ、それだけ元気があれば大丈夫そうだな」

統夜は滞を連れて少し離れたところに移動し、レオの戦いを見守っていた。

統夜が滞を避難させている頃、レオは着実にホラーを追い詰めていた。

ホラーは何度も攻撃を受けて弱っていた。

「よし、とどめだ!」

レオは片刃の剣に変わった魔戒剣を一閃すると、ホラーは真つ二つに切り裂かれ、消滅した。

素体ホラーを討滅したレオは鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を鞘に納めた。

それを見た統夜は滞を連れてレオに駆け寄った。

「レオさん、お疲れ様です」

「統夜君? いつ来てたんですか?」

「レオさんが鎧を召還したあたりからです。……滞を助けてくれてありがとうございます」

す」

「いえ。僕だつて守りし者ですから当然のことをしただけです。それに、滯さんは僕の教え子でもありますからね♪」

「れ、レオ先生……。助けてくれて……。ありがとうございます……」

頬を赤く染め恥ずかしそうにお礼を言う滯を見て、レオは少しだけドキツとしてしまった。

統夜もそれを見ていてレオ同様にドキツとしていた。

(なるほど……。これが萌え萌えキュン♪つてやつか……)

《おいおい、統夜。お前さんは何くだらないことを言ってるんだよ》

統夜は心の中でそう思っていると、イルバがテレパシーでツツコミを入れていた。

「とりあえず今日は帰りましょうか」

「あれ？統夜君は何か指令があつたんじやないんですか？」

「はい。俺の獲物はさっきの素体ホラーだったのでもう俺の仕事は終わりです」

「あつ、すいません、統夜君。君の獲物を横取りしてしまつて……」

「いいんです。久しぶりにあなたの戦いぶりも見れましたし♪」

「……そう言つてもらえると助かります」

「さて、滯帰ろうぜ。送るからさ」

「あつ、ああ。よろしく頼むよ」

統夜と漣はレオに別れを告げ、漣の家へと向かった。

それを見届けたレオも元老院が用意してくれた宿泊場所へと戻ることにした。

閃光騎士狼怒の称号を持つ布道レオがこの桜ヶ丘にやって来たこの日は、これから起こる大きな戦いの序章に過ぎなかった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『人間外見だけ美しくても何の意味もないよな。身も心も美しい俺様が言うんだ。間違いないぜ。次回、「歌姫」。本当の醜さは心に潜む』

第15話 「歌姫」

……ここは桜ヶ丘某所にある某芸能事務所。

事務所の中には1人の女性が椅子に座っていた。

その女性の顔は絶望に満ちた顔をしていた。

「何でよ……何で私が事務所を解雇されなきゃいけないのよ……！」

この女性はこの芸能事務所に所属しているアイドルなのだが、最近人気に陰りがでてきていた。

それだけではなく、この事務所所属の後輩アイドルの人気が上がってきていたため、さらに人気に陰りがでてきているのだ。

そのこともあり、この日事務所から解雇宣告されたのだ。

「私の方がアイドルとして可愛いし美しいのに何で私が解雇されなきゃいけないのよ……！」

その女性……姫野綺沙羅（ひめのきさら）はこの解雇に納得していないようだった。

「この女……この女がいなければ！私はアイドルとしていられたのに！」

綺沙羅は目の前に置かれた写真の女性……。最近人気が出てきたアイドルである綾

野美海華（あやのみみか）の写真を睨みつけていた。

さらに綺沙羅はこの綾野美海華という女性に憎悪のような感情を抱いていた。

この女を消してしまいたい！綺沙羅の心の中はその気持ちでいっぱいになっていた。その時だった。

——貴様、それだけその女が憎いのだな……。

「……だ、誰?」

綺沙羅は突然聞こえてきた謎の声に怯えていた。

——そこまで怯えることはない。我は貴様のその気持ちがよくわかるのだ。……貴様は最高のアイドルだ。綾野美海華などという小娘如きに遅れを取るアイドルではあるまい!

「そうよ!この姫野綺沙羅こそがナンバーワンアイドルよ!あんな小娘如きに遅れは取らないわ!」

——貴様はその小娘を消したいとは思わないのか?

「もちろん思ってるわ!あの小娘だけじゃない!アイドルは私1人で十分なのよ!」

綺沙羅は美海華だけではなく、他のアイドルの存在も疎ましく思っていた。

——我が力を貸してやろう……。貴様に、悪魔と契約する覚悟はあるか?

「……どうせ今のままじゃ死んだも同然だから悪魔だろうとなんだだろうと契約してやる

わよ！」

——そうか！なら……我を受け入れよ！

目の前にある美海華の写真から黒い帯のようなものが現れ、それが綺沙羅の体の中に入っていた。

綺沙羅は悲鳴をあげることではなく、されるがままの状態になっていた。

「……フフフ……！待ってなさい……綾野美海華……！」

綺沙羅は事務所を後にすると、美海華の元へ向かった。

※※※

……ここは桜ヶ丘某所にある高層マンション。

こここの最上階のとある部屋に綾野美海華は住んでいた。

美海華は現在恋人であるマネージャーと行為に及んでいた。

お互い求めあい、今は同じベッドで並んで寝転びイチャついていた。

「ウフフ……。そういえばあの女は今日クビになったそうね」

「ああ。あの女が君に敵うわけないからね」

「当然よ。なんと言つても私はこれから世界一のアイドルになる綾野美海華なのよ。あの女は私のいい踏み台になってくれたわ」

美海華はそう言うと高笑いをしていた。

「俺はあの女がクビになる様を見ていたけど、あの時のあの女の顔と来たら……。本当に傑作だったよ！」

美海華のマネージャーも綺沙羅がクビになり、気分爽快な気持ちになっていた。

「もうあの女はおしまいね。アイドルの成れの果てなんてどこも行き場なんてないわよ」

「その時は風俗の仕事でも紹介してやるか？」

「フフ、それもいいわね」

マネージャーは美海華に抱きつき、再び行為に及ぼうとしたその時だった。

「……。あら、誰がおしまいなのかしら？」

突然2人がいる寝室に綺沙羅が現れた。

「な！あ、あんた！どこから出てきたのよ!？」

美海華は突然の出来事に驚き、ベッドから飛び出し、マネージャーも同様に飛び出した。

「な、何の用よ！さっさと出て行きなさい!!」

「ええ。出て行くわ。……あなたを消したらね」

そう語る綺沙羅の顔はあまりにも冷酷だった。

「じ、冗談はやめなさい。早く出て行かないと警察を呼ぶわよ!」

「呼びたけりや呼びなさい。私にとつては餌が増えて好都合なだけよ」

「え、餌?」

綺沙羅の言葉の意味がわからず、美海華は困惑していた。

その様子を見ていたマネージャーは綺沙羅の胸ぐらを掴んだ。

「おい……アイドルの成れの果てが調子に乗るなよ」

「はあ……。貴方、邪魔よ」

綺沙羅はマネージャーの両肩を掴むと、マネージャーをまるで体内に吸い込むかのようには喰らい始めた。

「ぐわあああああああああああああ!!!」

マネージャーは綺沙羅の体内に吸収される形で喰われてしまった。

「い……嫌あああああああ!!!」

凄惨な光景を見た美海華は思わず悲鳴をあげていた。

「ウフフ……。こんな高いマンションに住んでるから貴方の悲鳴なんて誰にも聞こえないわよね……。可哀想に……」

綺沙羅は不敵な笑みを浮かべながらゆっくりと美海華に近付き、美海華は恐怖で腰を抜かしながらも後ろに下がり続けていた。

「い……。嫌……。来ないで……。！」

あまりの恐怖に美海華はおかしくなりそうになっており、その瞳からは涙がポロポロと出ており、とても人気アイドルとは思えない顔をしていた。

「アハハハハハ!!その顔、最高だわ!!私はね、あなたのその顔が見たかったのよ!!」

綺沙羅は高笑いをあげながら携帯を取り出すと、涙でボロボロになった美海華の顔を写メで撮っていた。

「さて……。思い切り楽しませてもらったし、メインディッシュをいただくとしようかしら」

「お願い!殺さないで!」

「私はね、あなたのことが憎いのよ。あの男みたいにただ喰らうだけじゃ物足りないわ。徹底的に痛めつけて喰らうとするわ」

「やめて!やめてくれたらあなたの復帰を社長にお願いしてあげる!私がお願いすれば

あなたのクビなんて取り消してくれるわ!だから!

「そんなもの……。今となってはどうでもいいことよ!」

こうやり取りをしているうちに美海華の逃げ場はなくなり、綺沙羅は美海華の両肩を掴んだ。

「今日ここであなたは消えて、私、姫野綺沙羅がこの世で1番美しいアイドルとして返り咲くわ!」

「た……たすけて……」

「……そうねえ。命を助けてあげてもいいわよ」

綺沙羅は掴んだその手を放し、美海華は綺沙羅から解放された。

「本当!?!」

「それじゃあねえ……。今この場で3回回ってワンって言ってごらんさい」

「え?」

「あら、出来ないの?それじゃあ……」

「で、出来るわよ!!」

美海華は助かりたい本心で綺沙羅の言う通りその場で3回回ってワン!つと云っていた。

「……………、これでいいんでしょう?」

「うーん……。まだ足りないわね……」

「え？」

「そうねえ……。今度は豚の鳴き真似でもしてもらおうかしら」

「……………」

美海華は無言で綺沙羅のことを睨みつけていた。

「あら、そんな反抗的な態度をとつてもいいの？」

「くっ……。わかったわよ！」

美海華はその場に這いつくばっていた。

「……………ブヒー！ブヒー！ブヒー！！」

「アツハハハハハ！！最高だわ！これが人気アイドルの綾野美海華なの！？本当にお笑いだわ！！」

「こ、これで助けてくれるのね？」

「……………」

美海華の問いかけに綺沙羅は黙っていた。

「……………豚といえば家畜ってことよね……。家畜ならどうしようとするの勝手よね」

「……………！騙したわね！」

「私はそれをしたら助けるだなんて一言も言っていないわよ？」

!!!

美海華は綺沙羅のあまりに下衆な態度に戦慄していた。

「私、あなたを助ける気なんて最初からなかったしね」

「そ、そんな……」

「さようなら、綾野美海華。さっきのはとても最高なショーだったわ」

綺沙羅は美海華の両肩を掴むと、マネージャーの時のように美海華の体を吸い込むかのように喰らい始めた。

「きゃあああああああああああ!!!」

こうして人気アイドル綾野美海華は先輩アイドルだった姫野綺沙羅に喰われるといった形で生涯を終えてしまった。

「ふう……。これで1番の邪魔者は始末したわね……。だけど、まだ足りないわ……。アイドルは、私1人でいいのよ……!」

綺沙羅はこのままマンションから姿を消すと、どこかへとそのまま姿を消してしまっ

※※※

閃光騎士狼怒の称号を持つ布道レオが教育実習生として桜ヶ丘高校に赴任してから数日が経過した。

統夜はこの日もいつものように朝からエレメントの浄化を行ってから登校した。

「おはよ〜」

統夜は教室の中に入ると、教室の中が何故か騒然としていた。

「?みんな、どうしたんだ?」

「月影君、ニュース見てないの?人気アイドルの綾野美海華が行方不明になったんだよ!?!」

「綾野美海華?」

統夜は聞き覚えのあるない名前に首を傾げていた。

「え!?!月影君、綾野美海華を知らないの!?!今テレビに引つ張りだこで人気急上昇中のアイドルなのに!」

「俺、あまりテレビ見ないからさ……」

統夜の家には一応テレビはあるのだが、時々見る程度だった。

それ故今流行りの歌や流行りのアイドルなどは統夜は知らなかったのである。

統夜が美海華のことを知らないとわかると、クラスメイトたちは再び美海華が行方不明になった話を再開し、統夜は自分の席に着いた。

(……人気アイドルの失踪ねえ……。なんかキナ臭いな……)

《なんだ、統夜。お前さんはそのアイドルの失踪がホラーと関係があるって言いたいのか?》

(まあ、確証はないけどな。とりあえずもうホームルームだし、後で調べてみるかな)

統夜とイルバがテレパシーで会話をしていると、チャイムが鳴り、ホームルームが始まった。

そして昼休みになると、統夜は購買で買ったパンを頬張りながら携帯のネットニュースをチェックしていた。

「……桜ヶ丘で現在人気急上昇中のアイドル綾野美海華(20)が行方不明ねえ……」

統夜は綾野美海華と検索するとこのニュースが一発で出てきた。

その記事を読むと、同様に美海華のマネージャーも行方不明になっていると書いて

あった。

それだけではなく、他にも今人気が出始めているアイドルたちが次々と行方不明になっていくこともニュースに書いてあった。

「アイドルが次々と行方不明ねえ……」

『統夜。お前さんはやっぱりホラーの仕業だと思うのか?』

「ああ。アイドルだけがピンポイントで行方不明つてのがな……。それに、これを見てみる」

統夜は違うニュースの記事をアクセスした。

「アイドルたちが行方不明になる中、今人気が爆発的に上がってるアイドルがいるみたいなんだよ。その名は姫野綺沙羅」

『統夜。もしかしてその女が怪しいって思ってるのか?』

「その可能性は高いと思う。とりあえず今日の放課後にでも調査をしてみるさ」

『統夜。その前に番犬所に寄ることを忘れるなよ』

「わかってるって」

統夜は昼食のパンを完食すると、教室に戻っていった。

※※※

放課後、律に今日の部活は休むとメールで連絡をいれると、統夜は番犬所に直行した。統夜は番犬所の中に入ると、いつものように狼の像の口に魔戒剣を突き刺し、魔戒剣の穢れを浄化した。

この数日の間にホラーは討伐していなかったので、短剣は出てこなかった。

「統夜……指令です」

統夜が魔戒剣を鞘に納めるとイレスがこう告げ、イレスの付き人の秘書官が統夜に赤の指令書を手渡した。

統夜は魔導ライターを取り出すと、その指令書を燃やし、中から飛び出してきた指令の内容を確認した。

「この世の中でも容姿が美しき者を徹底的に狙う心が醜きホラーあり。直ちに殲滅せよ」

統夜が指令を読み上げると、魔戒語で書かれた文字は消滅した。

『ホラー、ジャーレデア。自分が一番美しいと勘違いをして自分より美しいと思われるやつを捕食するでしょうもなく愚かなホラーだぜ』

「自分が一番美しいか……」

『統夜の予想は当たってるんじゃないか?』

「? 統夜、予想とは?」

「ええ。実は今、人気が出ているアイドルが次々と行方不明になってるみたいなんです。それと同時に1人のアイドルの人気が出てきてまして、そいつが怪しいと思っっていました」

「なるほど……。それなら調べてみる価値はありそうですね」

「ええ。そのアイドルのことを調べてみるつもりです」

統夜は姫野綺沙羅のことを調べるつもりでした。

「頼みましたよ、統夜。早急にホラーの正体を突き止め、わかり次第討滅するのです」

「はい! 任せてください!」

統夜は番犬所を後にすると、姫野綺沙羅について調査を始めた。

統夜は綺沙羅のことを調べるために桜ヶ丘のテレビ局に行ってみることにした。

統夜がテレビ局に到着すると、入り口は綺沙羅のファンとマスコミの群れでごった返していた。

「うわ……。人多すぎだろ」

『まあ、人気アイドルならこれくらいは当然じゃないのか?』

「そりやそうだけどき。この人混みじゃ思うように近付けないぞ」

あまりの人混みにどうしたものかと考えていたその時だった。

「あつ! 統夜先輩じゃないですか!」

短いツインテールの少女が統夜に声をかけ駆け寄ってきた。

「おう、純ちゃん」

彼女の名前は鈴木純(すずきじゅん)。梓と憂のクラスメイトであり、ジャズ研究部に所属している。

「純ちゃんは今日もジャズ研の練習があるんだろう? どうしたんだ?」

「今日はジャズ研の練習は休みなんですよ。それで今人気が出てる姫野綺沙羅がテレビの生放送に出てるって言うから見に来たんです」

「……ああ、だからこんなにマスコミやらファンやらがいるって訳か」

「それにしても意外ですね。統夜先輩ってアイドルなんて興味ないって思っていましたけど」

「そ、そうか……?」

統夜は純に痛いところをつっこまれてしまい、表情が引きつっていた。

「……まあ、俺はたまたま別の用事でここを通りがかったただけなんだけどな」
統夜は苦し紛れにこのような言い訳をして話を誤魔化そうとした。

「ふーん。やっぱり統夜先輩はアイドルには興味ないんですね」

統夜はどうか話を誤魔化せたのでホッとしていた。

その時……。

——キヤアアアアアアアアアア!!!

突如黄色い歓声が聞こえてきたので統夜と純はその方へ行ってみると、入り口から姫野綺沙羅が出てきた。

すると、ファンとマスコミが一斉に押し寄せ、その場は大混乱になっていた。

(アハハ……。なんかすげえな……)

《統夜。感心してる場合じゃないだろう。あいつがホラーかもしれないんだろ?》

(まあな)

統夜とイルバはテレパシーで会話をしていた。

「綺沙羅さん……。やっぱり綺麗だなあ……」

純は生で見る綺沙羅にうっとりとしていた。

「……私、けっこう前から綺沙羅さんのことが好きだったけど、綺沙羅さん、当時より綺麗になってる気がするなあ……」

統夜は純が呟いた言葉を見逃さなかった。

「純ちゃん、今の言葉は本当か!？」

「は、はい……。そうですけど……」

統夜が自分の呟きに食いついてくるとは思っていなかったのか、純は少したじろいでいた。

(だとしたら……。十中八九姫野綺沙羅がホラーだな……。だけど、どうやって接触すればいい……。?)

統夜はホラーの正体の検討はついたので、相手とどう接触するべきか悩んでいた。

相手は人気急上昇中のアイドル。正面からの接触は目立つだけでなく、ガードしている人間が多くいるため不可能に近い。

「……そういえば姫野綺沙羅が明日ライブをやるって言ってましたね……」

「純ちゃん、それは本当か?」

「は、はい。チケットは当日券しか発売しないとのことなので、その日はチケット争奪戦が壮絶になるだろうって噂です」

「なるほどな……。純ちゃん、ありがとな!」

純から有力な情報を得た統夜は純に礼を言うのとテレビ局を後にした。

「……統夜先輩、一体何だったんだろう……」

嵐のように去っていく統夜を見て純は唖然としていた。

『……………おい、統夜。一体どうするつもりだ?』

「俺に考えがあるんだ。手っ取り早くかつ確実に姫野綺沙羅と接触する方法だ」

『ほお、それが本当なら大したものだな。しかしどうするつもりだ? 生半可な方法じゃ接触なんて無理だぞ』

「俺一人の力じゃ厳しいだろうな」

統夜はそう答えるとポケットから携帯を取り出した。

「……………もう部活は終わってみんな帰ってる頃合いか……………」

統夜はそのまま携帯を操作すると誰かに電話をかけ始めた。

「……………ああ、ムギか? 統夜だけど、今大丈夫か?……………ああ、実はムギに頼みがあつてな……………」

統夜が電話をかけた相手は紬だった。

統夜の頼みを聞いた紬はその内容に驚きはしたものの、二つ返事でその頼みを了承した。

「本当にありがとな、ムギ。それじゃあ、また明日」

統夜は紬に礼を言うと電話を切り、携帯をポケットにしまった。

「さて、これで準備は完了だ。あとは明日になるのを待つだけだ」

『……なるほどな。そのやり方なら確実に接触は出来そうだ』

「ま、そういうことだ。だから今日はあと町の見回りをして帰るぞ」

『了解だ、統夜』

こうして統夜は町の見回りを始め、それが終わるとそのまま帰宅した。

※※※

そして翌日、予定されていた姫野綺沙羅の復帰ライブの日である。

その綺沙羅本人は控え室でステージに立つ準備を整えていた。

「ウフフ……もうすぐよ……。このライブが成功すれば私はアイドルとしてもつと花を咲かせることが出来る……。そして、目障りなアイドルはまだいるから餌にも困らないわ……」

綺沙羅はこのライブ成功後はこの桜ヶ丘だけではなく全国区でアイドル活動を行う

予定だった。

各地には自分より人気のあるアイドルは大勢いる。それ故食糧には困らなかつた。

綺沙羅はこのライブを成功させるために自分をより美しく魅せるメイクアップを徹底的に行っていた。

ちようど、その頃、ライブのスタッフである青年はこれから行われるライブの準備に追われていた。

「さて……。もうすぐ入場だ。今日はこの会場は満員になりそうだな……」

青年がぼやいたように今日のライブは満員になることが予想されていた。

ライブを見たいがために前日の夜から会場入りしている者もいると聞いている。

「まあ、頑張らないとな」

青年が他の仕事を行おうとしたその時だった。

「あの……。すいません」

金髪のように明るい髪の少女が青年に話しかけてきた。

「何ですか？もしかしてファンの方ですか？申し訳ありませんが、直接の面会は禁止されております……」

「いえ、そうではないんです」

「?それじゃあいったい……」

「……ごめんなさい♪」

少女は青年の頭に札のようなものを貼ると、青年はそのまま意識を失って倒れた。

「……よし、これで全員ね。早く統夜君と合流しなくちゃ♪」

金髪のように明るい髪の少女の正体は紬であり、紬は統夜と合流するために移動を開始した。

そしてそれから30分後、ライブ開始の時刻は刻一刻と迫っていた。

「……おかしいわね。もうライブが始まるっていうのに誰も呼びに来ないなんて……」

綺沙羅はライブ開始時間が近いにも関わらずスタッフが誰も呼びに来ないことを不審がっていた。

「……まあ、いいわ。ここにいるスタッフはみんなクビね……」

綺沙羅はゆつくりと立ち上がり、ステージへと向かった。

その道中、スタッフが誰もいないことを不審がりつつも舞台袖に来ていた。

「……ここにも誰もいないなんて……。まあ、いいわ。このライブは私一人いれば十分

だもの。余計なスタッフなんて必要ないわ」

綺沙羅がステージに立つと、その幕がゆっくりと上っていった。

幕が上がると、歓声が聞こえてきた。

「ほら、観客はたくさん入ってるじゃない……。ウフフ……。最高のライブになりそうね……」

こうして舞台の幕は上がったのだが、綺沙羅は会場の光景を見て呆然としていた。

観客はほぼ満員で入っているはずなのに会場は真つ暗で、誰もいなかったのだ。

「なっ……。!?こゝ、これはどういうことなの!?」

「それは……。貴様は舞台に立つ資格がないってことさ」

客席のとある場所にスポットライトが当たると、そこから魔戒剣を手に持った統夜が姿を現した。

「あ、あなた!? 一体なんなのよ!?!」

「わかるだろ、ホラーのお前なら。魔導火を使うまでもない」

「それに、他の客はどうしたの!? さっきすごい歓声が聞こえたわよ!」

「ああ、これのことか?」

統夜はすぐそこに置いてあったCDプレイヤーの再生ボタンを押すと、歓声の音が流れ、それを聞いた綺沙羅の顔は真つ青になっていた。

「な……！あとチケットは一体どうしたの!?あれがなければ中には入れないはずよ」

「ああ、それはな……」

「私が全部買い占めました♪」

客席の陰から袖が出てきて、それに続いて唯、漣、梓が出てきた。

ちなみに律は照明係を担当してくれている。

「な、それは当日券なのにどうして!？」

「統夜君に頼まれてからすぐに手を打ったのよ。チケット全部のお金をすぐ支払ってね

♪」

「そ……そんな……！あり得ないわ!？」

「まあ、普通に考えたらあり得ないよな。だけど、この作戦はムギがいたから成功したんだ」

統夜が考えていた作戦こそ、ライブのチケットを前日のうちに全部買い占め、観客を誰も入れないようにして、ライブ開始時間に綺沙羅が出て来たところで殲滅するというものだ。

「す……スタッフはどうしたの!?!このライブのために多くのスタッフがいたはずよ!」

「ああ、彼らなら俺が仕事を終えるまでお寝んねしてもらってるよ」

統夜はさらにライブのスタッフを巻き込まないようにするために、軽音部全員の協力

を得てレオが用意した札をスタッフ全員の頭に貼り付け、仕事が終わるまで眠ってもらっていた。

さらに、そのことを悟られないようにスタッフを一か所の部屋に集めることも行っていた。

「そ……そんな……。私を斬るためだけにそこまでするなんて……あり得ないわ！」

「ホラーを斬るためなら手段は選んでられないんでね」

「統夜先輩、それじゃまるで悪役みたいですよ……」

「正義だとか愛など俺たち魔戒騎士は追いかけないんだよ」

統夜はこう語ると何故かドヤ顔を決めていた。

それを見ていた唯、滯、紬、梓の4人は苦笑いをしていた。

「観客は魔戒騎士とお嬢ちゃんたちつてわけね……。いいわ、思い切り見せつけてあげる。この姫野綺沙羅の最高のステージをね!!」

綺沙羅がこう言い放つと、統夜はステージまで飛び上がり、綺沙羅に斬りかかった。「はあっ！」

統夜の魔戒剣の一閃は回避され、綺沙羅は蹴りや拳などで統夜を攻撃するが、統夜はそれを受け止めていた。

綺沙羅の格闘攻撃を受け止めると、魔戒剣を持っていない方の手でパンチを繰り出す

が、それはかわされてしまう。

しかし、すかさず蹴りを放つと、それを受けた綺沙羅は吹き飛ばされた。

「さすがは魔戒騎士だけ……。あなたは致命的なミスをしているわ」

「……………」

「それは、あんな足手まといをここに連れてきたことよ！」

綺沙羅は唯たちめがけてエネルギー弾を放った。

統夜が今から駆けつけても間に合わないだろう。

それにも関わらず統夜は顔色一つ変えていなかった。

「……………そう来ると思ったぜ」

「何？」

統夜の予想外の言葉に綺沙羅が驚いていると、どこからかレオが現れ、エネルギー弾を弾き飛ばした。

「！魔戒騎士!? もう一人いたって言うの!？」

「ああ、そういう事だ！」

統夜はこの場にレオがいる事を知っていたので顔色一つ変えなかったのだ。

「レオ先生！」

「え!?!レオ先生って魔戒騎士だったんですか!？」

「知らなかったです……」

レオが魔戒騎士と知り、唯、紬、梓は驚いていた。

照明を担当している律も知らない事だったので驚いていた。

「統夜君！彼女たちは僕が守ります！だから心置きなく戦ってください！」

「レオさん！ありがとうございます！」

統夜は力強く魔戒剣を握りしめ、それを一閃した。

それは綺沙羅にかわされてしまうが、統夜はすかさず攻撃を続けていた。

「ちっ……！」

少しずつ綺沙羅は追い詰められ、統夜が魔戒剣を一閃したその時だった。

「……………」

綺沙羅は目をウルウルとさせて斬らないでと懇願していた。

「……………」

統夜は突然の行動に一度手を止めた。

綺沙羅はこれをチャンスと思っていたのだが……。

「……………」

統夜はすぐ攻撃を再開して綺沙羅を斬りつけた。

「ぐあっ！何故なの！？あれでたいの男は攻撃を止めるっていうのに！」

「?あれ、どう言う意図でやってたんだ?急に抵抗しないからびっくりしちやったよ」
「なっ?!こいつ……どれだけ鈍感な男なの!?!」

統夜が色仕掛けにも全く動じないのを見て唾然としていた。

「アハハ、さすがやーくん……」

「統夜先輩は女性絡みだとあり得ないくらい鈍感になりますからね……」

「さすがは唐変木……」

「何かわからないけど、みなさんも大変ですね……」

統夜の鈍感ぶりを目の当たりにした唯たちは苦笑いをしていたが、レオもまた統夜の知らない一面を見て苦笑いをしていた。

「でも、魔戒騎士としてはいいでしょうけど、男としては最低ですよね」

「うん。やーくん最低だよ」

「あ、アハハ……」

梓と唯の言葉にレオはまたしても苦笑いをしていた。

「何だかよくわからないけど、茶番は終わりだ!」

統夜は魔戒剣を一閃すると、綺沙羅はそれをかわすが、その隙に統夜は舞台の高台に飛び上がった。

「貴様のステージはここで幕を降ろす!ここからは俺の舞台だ!その眼にしかと刻み込

むんだな！」

こう言い放つて綺沙羅めがけて魔戒剣を突きつけるのと同時に律はスポットライトを統夜に当てた。

「……うん、あたしグツジョブ！」

律は自分の仕事ぶりに満足していた。

「おのれ……魔戒騎士。ここは私の舞台よ！ 貴様ごときに汚させはしないわ！」

綺沙羅はこう言い放つと、自分の体をホラーの体へ変えていった。

『統夜。こいつがジャーレデーだ。油断するなよ』

「ああ、わかっている。……貴様の陰我……俺が断ち切る！」

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれた光に包まれると、統夜の体に次々と白銀の鎧が装着され、奏狼の鎧を身に纏った。

統夜は高台から降りると、ジャーレデーに向かっていった。

「……ねえ。やーくんは高台に上がる必要はあったのかなあ？」

唯は統夜の戦いを見ながら的を得たツツコミをしていた。

「統夜先輩、舞台の上だからかノリノリですね……」

「ウンウン♪たまにはいいんじゃない？」

（何か……。アグトウルスとの戦いを思い出すな……。あの時はスポットライトを鋼牙さんに向けたのは僕だったけど、鋼牙さんもあんな感じだったよね……）

レオは鋼牙と共に戦ったとあるホラーとの戦いを思い出していた。

ジャーレデアは複数のエネルギー弾を統夜に放つが、エネルギー弾程度で奏狼の鎧に傷がつくことはなかった。

続いてジャーレデアは身体の一部から分離したパーツをミサイルのように飛ばした。

統夜は皇輝剣を一閃し、それを全て斬り裂いた。

「ホラー、ジャーレデア！傲慢に満ちた貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜は皇輝剣を構えると、ジャーレデアに向かっていった。

ジャーレデアはエネルギー弾を連射し、それを阻止しようとするが、それで奏狼を止めることは出来なかった。

統夜は皇輝剣の一閃で、ジャーレデアを真っ二つに斬り裂いた。

体を斬り裂かれたジャーレデアは断末魔をあげながら消滅した。

「……貴様のような偽物のアイドルは決して栄えることはない」

統夜は決め台詞のような言葉を呟くと鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に収めた。

『…おい、統夜。さつきからいつたいたいどうしたんだ？いつものお前さんとちよつと違うような気がしたんだが……』

「いやあ、舞台の上に立つたら何か気分が高揚しちゃってな」

『やれやれ……緊張感のないやつだぜ』

「まあ、たまにはいいじゃねえか」

統夜はイルバとこのようなやり取りをしながら舞台を降りると、唯たちが駆け寄ってきた。

照明係をしてくれた律もこの時には合流していた。

「統夜君、やったね♪」

「ムギ、ごめんな。いきなりとんでもないことを頼んで」

統夜は袖にかなりの額を投資させたことを詫びた。

「ううん、いいのよ。私だって統夜君の力になりたいって思ってたもの。これくらい何てことはないわ」

「「「……………」」」

袖がいくら投資したか知っている唯、律、漕、梓の4人は啞然としていた。

「本当にごめんな。ムギが出してくれた分は必ず返すから」

「あら、それはいいのよ。さつきも言ったけど、あのお金は統夜君に協力するための資金

だって思ってるから♪」

統夜は絢に出してもらった分をすぐにも返そうと思っていたが、絢は返さなくてもいいと思っていた。

「……ムギってやつぱりすごいな……」

「ああ。唯のギターを値切ってもらった時も凄かったけど、今回はそれ以上だよな」

絢は唯のギターを買う時、25万のギターを5万に値切りするというとんでもないことをしたのだが、今回はそれとは規模が遥かに大きかった。

「……それじゃあ、帰りましょ♪」

「ああ、そうだな」

こうしてホラー、絢を始めとした軽音部のみんななどレオの協力でホラー、ジャールデーアを討伐した統夜はみんなと共に会場を後にすると、そのまま帰路についた。

その後、長きに渡って姫野綺沙羅が行方不明というニュースが流れ続け、世間を驚かせるのだが、それはまた別のお話である。

……続く。

次回予告

『レースの臨場感と言うのはなかなかかななものだよな。俺様はそういう刺激的な展開というのはいかなりの大好物だぜ！次回、「疾走」。そのスピードにお前はついてこられるかな？』

第16話 「疾走」

……ここは桜ヶ丘某所にあるレース場。その控え室にある長椅子に1人の男がうなだれながら座っていた。

男の名前は風間隼人。桜ヶ丘を中心に活躍するバイクレーサーである。

しかし、最近は成績が振るわず、引退もささやかれていた。

「くそっ……なんで最近では記録が伸びないんだよ……！」

隼人は記録が伸びないことに悩んでいた。

「成績が伸びないのはマシンのせいか……？ だけど、今の俺にはマシンをチューンする余裕はないし……」

隼人は以前から自分のマシンのチューンアップを考えていたが、経済的問題でそれは叶わなかった。

「……俺はまたあの気持ちを感じたい。最高のマシンに乗って最高の風を感じて最高の栄光を手に入れたい……！」

隼人はかつての栄光を取り戻したい！ そう心に祈っていた。

その時だった。

——貴様、取り戻したいのか？かつての栄光を……。

「だ、誰だ!？」

隼人は謎の声に怯えていた。

——そんなに怯えることはない。我は貴様と同じだ。スピードで競うというのが大好きなのだ。それで、誰よりも速くなりたいとも思っている。

「ほ、本当に同じだ……」

——私の力を使わないか？そうすれば貴様は最高のマシンなどなくても最高のスピードを手に入れることが出来る……。

「ほ、本当か？」

——ああ……。貴様の払う代償はたった一つだ……。

「このままじゃレーサーとしても死んだも同然なんだ。何だっしてやるよ」

——そうか……。ならば、貴様の命をもらうぞ!!

長椅子に置いてあったとある置物から黒い粒子が突然現れると、それが隼人の体の中に入っていた。

「ぐわああああああああああああああ!!」

控え室一帯に隼人の断末魔が響き渡っていた。

「……………」

黒い粒子が収まると、隼人の瞳は不気味な輝きを放っていた。

隼人は不敵な笑みを浮かべると、控え室を後にし、どこかへと姿を消した。

数日後、この桜ヶ丘レース場とあるレースが行われていた。

それに隼人も出場していたのだが、何と隼人は2位以降を大きく突き放し、ぶつちぎりな成績でそのレースを制した。

(そう……。そうだ！これだ。この感触だ！俺はこの感触を味わいたかったんだ！)

表彰台に上がる隼人は優越感に浸っていた。

その後、控え室に戻った隼人は着替えを済ませてのんびりと休んでいた。

「あつ、隼人さん、お疲れ様です」

控え室に入ってきたのは隼人の後輩であり、ライバルでもある堀田龍だった。

「おう、龍。お疲れさん」

「隼人さん、今日のレース最高でしたよ。風間隼人復活すね！マスコミも大騒ぎでしたよ！」

「ふつ、そうだろうな」

「隼人さん、その秘訣は何だったんすか？教えてくださいよ」

龍は隼人に成功の秘訣を教わろうとしていた。

「秘訣か……。いいだろう、お前には特別に教えてやろう」

「え!?マジっすか？やったぜ!……で、何なんすか？」

「……」

隼人は急に黙り込むと不敵な笑みを浮かべていた。

「……は、隼人……さん？」

隼人は急に龍の胸ぐらを掴み始めた。

「い、一体何をするんすか!？」

「俺の成功の秘訣を知りたいって言ってたよな……。……俺はな、悪魔に魂を売ったん

だよ!!」

「!!」

「貴様の才能ももらうぞ。より高みを目指すために」

隼人はそう言うのと龍の体を粒子に変えてしまうとそのまま龍を喰らった。

龍は抵抗も一切出来ず粒子にされてしまい、隼人に喰われてしまった。

「フフフ……。これでまた一流のレーザーに近付くぞ……」

隼人は不敵な笑みを浮かべると、控え室を後にした。

※※※

統夜がホラー、ジャーレデーアを討伐した翌日、校内はアイドルの姫野綺沙羅が行方不明になった事件の話で持ちきりになっていた。

統夜はアイドルが次々と行方不明になる事件を解決した本人なので何も言うことはなく話を聞いていた。

放課後、いつものようにティータイムを行っていた統夜だったが、やはり話は姫野綺沙羅の話になっていた。

「何か学校中が昨日の話で持ちきりだねえ」

「まあ、人気アイドルの失踪ともなるとマスコミも黙ってないよな」

「あいつはホラーなんだ。遅かれ早かれ消えるのは運命だったんだよ」

統夜は冷静にこう言うどゆつくりと紅茶をすすっていた。

「まあ、そうだよねえ……」

「……あれ？　そういえばレオ先生は？」

「ああ、レオさんなら先生の仕事で忙しいんじゃないのか？」

レオとはある指令でこの桜ヶ丘に来たのだが、教師と名乗っているため、普段は教師の仕事に追われている。

今日も仕事が行っているからか軽音部に顔を出してはいなかった。

「ふーん。レオ先生も大変だな」

「そうだよな、レオさんは魔戒法師としての仕事もあるし、教師の仕事もあるしな」

「なあ、統夜。レオ先生は魔戒騎士でもあるんだよな？」

滯が確認のために統夜に聞いていた。

「そうだよ！　レオ先生が魔戒騎士だなんて知らなかったもん！」

唯が抗議するように訴えかけると、滯たちはウンウンと頷いていた。

「黙ってたのは悪かったよ。でもこれはレオさんの意向でな。レオさんは魔戒騎士ではあるけど、魔戒法師の仕事の方が多いんだ。だから主に魔戒法師として魔戒騎士や他の魔戒法師のサポートをして、時には自分もその力でホラーを討滅する。そういう生き方を選んだみたいなんだ」

「……やっぱり魔戒騎士と魔戒法師にも色々あるんですね……」

「まあ、そういうことだ」

統夜はこう話をまとめると、また紅茶をゆつくりと飲んでいた。

こうしてのんびりとティータイムを行っていたその時だった。

「統夜君、いますか？」

レオが音楽準備室の中に入ってきた。

「レオさん、どうしました？」

「番犬所から指令みたいですよ」

レオは手に持っていた赤の指令書を統夜に手渡した。

「あつ、その封筒何か見覚えがあるような……」

「そういえばみんなもチラツとは見たことはあつたな。……これはな、魔戒騎士の指令

が書かれた指令書なんだよ」

「指令書？……つと言うことはその指令を受けてホラーを倒すってことなのか？」

「(名答♪)」

濡が指令書について正解を答えたのでこう返すと、統夜は長椅子に置いてある魔法衣から魔導ライターを取り出した。

「……あつ、それって……」

「ああ。これは魔導火と呼ばれる特殊な火を放つライターだな。俺たち魔戒騎士の必需

品なんだよ」

「それって確かホラーをの正体を見破る時に使うんだよねえ？」

「それだけじゃないぞ。魔導火の力を借りてホラーを攻撃したり、この指令書を読むのにも使うんだよ」

「え？封筒の手紙を読むのにライター……ですか？」

「まあ、百聞は一見に如かずだな」

統夜はみんなが見えるところで指令書を魔導火で燃やした。

「！！！！」

統夜の思わぬ行動に唯たちは驚きを隠せなかった。

「や、やーくん!?何やってるの!？」

「そうですよ！手紙を燃やすなんて……って何か出て来ました」

唯たちが戸惑う中、指令書から魔戒語で書かれた文章が浮かんできた。

「……こ、これって何て書いてあるんだ？」

「律、私に聞くなよ」

魔戒語で書かれた文章はさすがの滯もちんぶんかんぶんだった。

そんな中……。

「……己の速さのみを追求し、才能をありし者を喰らうホラーあり。ただちに殲滅せよ」

「！！！！！！」

統夜がスラスラと魔戒語の文章を読むと、唯たちはまた驚いていた。

統夜が指令の確認を行うと、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

「と、統夜先輩、い、今の……読めるんですか?」

「ああ。魔戒語が読めなきや魔戒騎士失格だからな」

「魔戒語ってさっきの文章のことだよな?」

「ああ。番犬所からの指令は必ず魔戒語なんだよ。万が一誰かに見られてもその人は謎の暗号ぐらいにしか思わないからな」

「……確かに……」

統夜の説明に唯たちは納得したようだった。

『ホラー、ローウイン。こいつはホラーの中でもスピード狂でレースをこよなく愛する変わり者のホラーだ』

イルバが今回討伐するホラーの解説を行った。

「へえ、イルイルってさっきの文章からホラーのことがわかったんだね」

『まあな。指令の内容さえ聞けば大抵のホラーはわかるぜ。……それと唯。毎度毎度言っているが、俺様を変なあだ名で呼ぶな!』

イルバが懲りずにいつものやり取りをしていたので、統夜たちは苦笑いをしていた。

「さて……。指令が来たんなら今日はもう行かないと……」

統夜はスタンドにセツトされたイルバを自分の左手にはめると、帰り支度を始めた。

「統夜先輩……。行っちゃうんですね」

梓は少し悲しそうな顔を統夜に向けていた。

「そんな顔をするな。俺は必ず生きて帰る。信じてくれ」

統夜は梓の目をしっかりと見ながらこう伝え、それを聞いた梓は少しだけホツとしていた。

「それじゃあ、俺は行くな」

「やーくん、気を付けてね」

「統夜、無茶だけはするなよ」

「そうだけ、そこは忘れるなよ」

「うん。私たちは統夜君のことを信じているから♪」

「統夜君。僕も仕事が終わり次第応援に駆けつけますのでそれまでお願いします」

「……はい。わかりました」

統夜は音楽準備室を後にすると、ホラーを搜索するために行動を開始した。

※※※

統夜はイルバのナビゲーションを頼りに訪れたのは桜ヶ丘某所にあるレース場だった。

「……イルバ、ここでいいのか？」

『ああ、ホラーの気配はここからしているぜ』

「にしても広すぎるな……。これは根気強く探さないといけないな」

レース場のあるコースのスタート地点に立っている統夜はここからどうホラーを探そうか考えていた。

その時だった。

「……おい！お前は俺を探しているんだろう？魔戒騎士！」

突如統夜の目の前に現れたのはホラーに憑依された隼人であった。

「ホラー自らお出ましとは、どういう風の吹き回しだ？」

「俺は逃げも隠れもしない主義なんでね。それに、コソコソと探られるのも不愉快だ」
「へえ、まあおかげで探す手間は省けたがな！」

統夜は魔戒剣を抜くと、それを構えて隼人を睨みつけていた。

「まあ待て。俺は今はお前と争うつもりはないんだよ」

「お前にはなくても俺にはある！」

統夜は魔戒剣を一閃するが、それは隼人にかわされてしまった。

「俺はまだ死ぬわけにはいかないんだよ。明日のレースに出るまではな」

「ホラーの戯言に付き合う道理はない！」

統夜は再び隼人に攻撃を仕掛けるが、隼人は鮮やかな動きで統夜のことをいなしていった。

「まあ、そう慌てるな、魔戒騎士。今のお前じゃこの俺を斬ることは出来ないぞ」

「ふざけるな！俺はお前を斬る！」

『統夜。少しは落ち着け！お前がそんなんじや倒せる敵も倒せないぞ！』

「その魔導輪の言う通りだ。明日のレースが終わればちゃんと相手をしてやるよ」

「それを待つていられるか！」

統夜は二度三度と魔戒剣を振るうが、隼人の動きは機敏で動きを捉えることは出来なかった。

『統夜。やつはスピード狂なだけあってその動きは機敏だ。冷静に動きを見極めないと動きを見極めることは出来ないぞ?』

「わかつてる!」

「へへッ、魔戒騎士といつてもすぐにムキになるところはやっぱりガキだな」

「黙れ!」

統夜の何度目かの攻撃をかわした隼人は蹴りを放って統夜を吹き飛ばした。

「ぐあつ……!」

「遅い遅い。お前の動きはスロー過ぎて欠伸がでるぜ」

隼人はそう言うと本当に欠伸をしていた。

「……もう遊びは終わりだ!」

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれた光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「なるほど……。お前さんも本気って訳か。だったら……!」

鎧の召還を見た隼人もまた自らの姿を変え、ホラーの姿に変わった。

『統夜。こいつがホラー、ローウインだ。この姿になったらさらに機敏な動きをするぞ

!・油断するな!』

「ああ!」

統夜は皇輝剣を構え、ローウインを睨みつけた。

ローウインは自らの足をローラーブレードのような姿に変化させると、先ほど以上に俊敏な動きで統夜を翻弄していた。

「ちっ……。本当に速いな、こいつ……」

ローウインのあまりに速い動きは統夜に捉えることは出来なかった。

「統夜。目で相手の動きを見ようと思うな！心の目で見るんだ！」

「心の……」

統夜は瞳を閉じ、精神を集中させた。

精神を集中させてローウインの気配を追っていた。

そして……。

「そこだ!!」

統夜は皇輝剣を一閃した。

しかし、その一撃でローウインを切り裂くことは出来ず、ローウインの体にかすめるだけにとどまった。

「つとと！今のは危なかったぜ。さすがは魔戒騎士と言ったところだな」

「ちっ……。だが、まだだ！」

統夜は再びローウインに攻撃を仕掛けようとするが……。

『まずいぞ、統夜！早く鎧を解除しろ！』

鎧の制限時間が刻一刻と迫っていた。

「くそっ！」

統夜は舌打ちをすると、鎧を解除した。

「危なかった……。あともう少し時間がありやられていたぜ」

ローウインは鎧を解除した統夜を見て安堵していた。

「……今日はこの辺で失礼するぜ。明日のレースに支障を来たすんでな」

ローウインは衝撃波を放って統夜を吹き飛ばすと、そのスピードを活かしてその場から逃走した。

「……くそ、逃げられたか……」

『統夜、お前もまだまだだな。ホラー相手に心を乱されやがって……』

「そうだな。早急に倒さなきゃと思って焦ってたよ」

統夜は魔戒剣を鞘に納めるとホラーを取り逃がしたことに責任を感じて唇を噛んでいた。

その時……。

「統夜君!!」

統夜の名前を呼び駆け寄ってきたのはレオだった。

「レオさん……。すいません、ホラーは逃してしまいました」

「え？ そうなんですか？ すいません、僕がもつと早く行けてたら……」

「レオさんが悪いんじゃないです。全ては俺が未熟だったから……」

『ああ、そうだな。お前はまだまだ未熟だ』

イルバのダメ出しに統夜は黙ってしまった。

『……だが、あのホラーは明日のレースに出ると言っていた。だとすると、明日のレースの時に接触のチャンスがあるはずだ』

「そのホラーに関しては僕も調査しました。それで、明日のレースに参加して調査しようと考えていたところです」

レオはレオでホラーの調査を行っており、じっくりとホラーを搜索するつもりでいた。

「……ホラーの正体はわかりました。今度は必ず斬ります」

「統夜君。ホラーを狩るその使命感はとても大切ですが、焦りは禁物ですよ？ 確実にホラーを追い詰めて討伐すればいいんですから」

レオは統夜自身の焦りが原因でホラーを逃したと察してこう統夜にアドバイスを送っていた。

「……そうですね、ありがとうございます、レオさん。今の言葉で俺、目が覚めました」

よ」

統夜はアドバイスをくれたレオに素直に感謝し、次こそはローウインを確実に仕留めると決意した。

「ところで、レオさん。明日のレースにはどうやって潜り込むんですか？」

「ああ、実は明日のレースに急遽出られなくなったレーサーがいますね。彼の名前を借りて出場する予定です。番犬所の協力も得てそのように手配しています」

レオはまるでこのことを予期していたかのようにホラーを追い詰めるための手筈を整えていた。

それを聞いていた統夜はさすがは長きに渡りホラーを狩り続けてきただけあるなど素直に感心していた。

「レオさん、そのレースですけど、俺にレーサーをやらせて下さい！」

「ええ!?!でも、統夜君。君はバイクには乗れないですよね？」

「実はバイクの免許は持つてるんです。魔戒騎士たるもの何でもこなすべきだと思います。バイクの操縦は零さんに教わりましたから問題ないです」

統夜は16歳になるとバイクの免許が取れることを知っていたのですぐ免許を取りに行つた。

しかし、桜ヶ丘高校は当然と言うべきかバイクでの登校は禁止されていたので運転する機会はほぼなかったが、零にバイクの操縦を教わったこともあった。

それ故に統夜はそれなりにバイク操縦の経験はあった。

「そういうことなら統夜君にお任せします。僕もバイクは乗れることは乗れますが、ちよつと苦手です……」

「それならなおさら任せてください……後、明日のレースですけど、俺に考えがありません。ホラーを追い詰める作戦を」

「それは一体？」

統夜は自分の作戦をレオに伝えると、レオは驚きながらも感心していた。

「なるほど……。統夜君、さすがですね。その作戦の進行、もちろん僕も協力します」「ありがとうございます、レオさん。よろしくお願いします」

こうして統夜はレオと協力してローウインを追い詰めるため、行動を開始した。

※※※

翌日、この日も学校であったが、統夜はこの日学校を休んでいた。

放課後になり、唯たちは統夜なしでティータイムを行っていた。

「……統夜先輩、今日学校お休みしてるんですよね……」

「うん、そうなんだよね……」

「統夜君、昨日はホラーの討伐上手く行かなかったのかしら？」

「レオ先生も学校を休んでるらしいぞ」

「うーん。それは気になるなあ」

唯たちは学校を休んでいる統夜やレオのことを心配していた。

「話は変わるけどさ、最近風間隼人ってバイクレーサーが最近人気らしいな」

そんな中、漣が唐突に話題を変えた。しかも、ホラーである風間隼人のことであるが、

漣は隼人がホラーだとは知らなかった。

「どなた？」

「当時はかなり人気だったバイクレーサーだったんだけど最近記録が伸び悩んでたみたいなんだよ。でも最近になってまた記録が伸び始めて風間隼人復活なんて言われているんだよ」

「へえ、みおちゃん、詳しいね！」

「濡ってスポーツだけじゃなくてこういうレースとかを見るの好きだもんな」

濡とは一番長い付き合いである律は濡がこのようなレースも好きだということを知っていた。

「そういえば今日もその風間隼人のレースがあるんだよ！そろそろ時間かな……」

濡は携帯を取り出すと、携帯のワンセグ機能を起動させてバイクレースのテレビ放送を見ていた。

唯たちも濡のもとに集まって携帯の画面を見ていた。

『さあ、いよいよ始まりました、風雲杯。このレースを制するのはいったい誰になるのでしょうか？』

レースの実況が始まり、レーサーたちが続々とスタートの準備をしていた。

『さあ、解説の涼元さん。このレース注目の選手はいったい誰になるでしょうか？』

『そうですね、やはり風間隼人でしょう。彼はここ最近破竹の快進撃を重ねていますからねえ』

「うんうん、やつぱりそうだよな！」

濡は解説の言葉に同意していた。

「アハハ……。みおちゃん、ノリノリだね……」

あまりにも楽しそうにしている濡を見て唯は苦笑いをしていた。

『あと、注目なのは初出場のシルバーファンクですね。赤いコートに黒い仮面を被った謎の多い選手ですが、果たしてどのようなレースを見せてくれるのでしょうか?』

「あーっ!!!」

謎の多い選手と言われたシルバーファンクを見て唯は思わず声をあげた。

「ゆ、唯先輩!? どうしたんですか?」

「こ、この仮面の人……やーくんじゃない?」

唯の指摘を受けて4人は画面を凝視していた。

「た、確かに……」

「あの赤いコートにある四角の紋章……。間違いなく統夜だな」

「どうして統夜先輩が? 確か今日って学校を休んでましたよね?」

「まさか、あのレーサーの中にホラーがいるからとか?」

「[[[[……]]]]」

紬の推察を聞いて納得したのか4人は無言になっていた。

「それにしても、統夜先輩ってバイクに乗れるんですね」

「まあ、免許は取れるから乗れても不思議はないけど、知らなかったよ」

「全くだ。なんで統夜はバイクに乗れることを黙ってたんだよ!」

「私も乗ってみたいのに……」

「アハハ……」

唯たちは統夜がバイクには乗れることを知って口々に驚いたり文句を言ったりしていた。

「あつ、レースが始まるみたいですよ」

梓の指摘通りレースは間もなく開始されるようだった。

『さあ、各車一斉にスタートしました！』

実況の人のアナウンスと共にレースは開始され、各車が一斉にスタートした。

スタートしてすぐ、レースに動きがあった。

『おっと、風間隼人速い！早くも2位以下を突き放しております！』

隼人がさつそくとトップに躍り出て、リードを守っていた。

「おお！やつぱり最近の風間隼人はすごいな！」

レースを見る滯の目はとてもキラキラしていた。

『おっと！ちよつと待つてください！風間隼人を猛追している選手がいます！……これは、シルバーフアングです！ものすごいスピードで風間隼人に迫っております！』

「おお！やーくんが追いついてきたよ！」

「すごい……。統夜先輩、プロのレーサー相手に負けてないです……」

「これは、風間隼人といい勝負ができるんじゃないのか？」

「統夜君、頑張れえ♪」

「……………」

唯たちは統夜が予想以上に奮闘していることに驚きながらも統夜の応援をしていた。レースの序盤は風間隼人の独走だったが、統夜ことシルバーファングが徐々に隼人と距離を詰めていった。

この展開に実況者も解説者も驚いているようだった。

『さあ、レースは中盤ですが、まさかの展開ですね、涼元さん!』

『ええ。私は風間隼人の活躍を鑑みて、今回も独走と考えていましたが、まさか初出場のシルバーファングが予想以上の奮闘を見せていますね。これはもしかすると風間隼人に追いつく勢いじゃないでしょうか?』

解説者の言う通り、統夜はこのまま隼人のことを抜かしそうな勢いであった。

唯たちは固唾を飲んでレースの行方を見守っていた。

そして……………」

『おおっと! ついにシルバーファングが風間隼人を抜かしたあ!!』

『おお! やった! やったよ!!』

『はい! 統夜先輩が1位になりましたよ!』

『だけど、勝負はここからだぞ』

「ああ。風間隼人だつて黙つてないだらうしな」

「統夜君頑張つてえ♪」

レースの展開が変わり、唯たちの応援にも熱が入っていた。

そしてレースも終盤に差し掛かり、とある分かれ道に差し掛かった。

統夜と隼人は矢印の方に移動するが、その直後、矢印の向きが逆になっていた。

『おおつと!?!? どういうことだ!?! シルバーファングと風間隼人がコースから外れてしまつたぞ!!』

何故か統夜と隼人はコースアウトしてしまい、その後、他のレーサーたちは続々と正規のルートを通っていた。

「ええ!?! やーくん、違う道走っちゃつてるよ!!」

「な、何やつてるんですか!?! 統夜先輩!!」

「だけど、風間隼人も一緒にコースアウトしてるぞ」

「そういうことはまさか風間隼人が……?」

「うん、その可能性は高いわね」

唯たちは突然統夜がコースアウトしたことに驚いているが、その一方でホラーの正体が風間隼人ではないかと疑いを持っていた。

唯たちはレースを見ることを中断し、再びティータイムを始めたのであった。

※※※

ホラー、ローウインを取り逃がしてしまった統夜はその雪辱を晴らすためにレオと共にバイクレースに参加することになった。

統夜はシルバーファンクという名前で出場し、レオはホラーをとある場所へ誘導するために準備を行っていた。

そしてレースはスタートし、最初こそ失速していたものの、バイク操作のコツを掴んだ統夜はレーサーたちをごぼう抜きして行き、隼人に迫っていた。

そんな統夜を見て隼人は笑みを浮かべながら統夜を迎え撃とうとしていた。

レース中盤、統夜は隼人をなかなか抜かせずにいたが、統夜はついに隼人を抜かすことが出来た。

隼人はそんな統夜を抜かし返そうとするが、統夜はトップの座を譲らなかつた。

そして、とある分かれ道に差し掛かると、統夜と隼人は矢印の方角へと移動した。

それを見ていたレオが魔導筆で術を放つと、矢印の向きが逆になった。

(僕のお膳立ては終わりました。あとは君次第ですよ、統夜君)

レオは自らの仕事を全うすると、その場から姿を消した。

統夜と隼人はバイクでしばらく走り続けるが、4キロほど走ったところで行き止まりに差し掛かり、2人はバイクを止めた。

2人はそのままバイクを降りて、ヘルメットを外した。

統夜はさらに正体を隠すために被っていた仮面を外して投げ捨てた。

「貴様……。よくも神聖なレースを汚したな！」

レースを邪魔され、隼人は怒りに満ちた表情で統夜を睨みつけた。

「勘違いするなよ。俺はレースをしに来たんじゃない。お前を追い詰めるためにこのレースに参加したんだ」

統夜は魔戒剣を抜くと、それを構えて隼人を睨みつけていた。

「貴様あ!!」

怒りに支配された隼人は統夜に攻撃を仕掛けるが、そのどれもが精細さに欠けていたため、すべての攻撃が統夜にかわされてしまった。

「なっ!?俺の攻撃を?」

「バイクレースを通して色々学ばせてもらったからな。今の俺ならお前のスピードにもついてこれる!」

統夜は連続で隼人を斬りつけると、蹴りを放って隼人を吹き飛ばした。

「おのれ……。魔戒騎士!」

隼人は自らの体をホラーの姿に変えた。

「いくら昨日より動きが良くなっても、俺の本気のスピードには追いつけまい!」

ローウインは足をローラーブレードのような形に変化させると、その俊敏な動きで統夜を翻弄していた。

「……なるほど、やっぱり速いな。だけど……そんなスピードじゃ、俺は満足できないぜ!」

統夜はローウインに翻弄されながらもその攻撃を次々とかわしていった。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る!」

統夜は魔戒剣を前方に突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「お前の力を使うぜ……。白皇!!」

統夜は鎧を召還してすぐに魔導馬である白皇を召還した。

「……面白い！その駄馬で俺のスピードに追いつけるかな？」

「白皇が駄馬がどうか……確かめてみる！」

統夜と白皇はローウインとスピードで競っていた。

そのスピードは両者互角で、お互い走りながら攻撃を仕掛けて小競り合いをしていた。

「くっ……。なかなかやるな……」

「当たり前だ。俺はホラーを狩る者。どんな事をして俺はお前を斬る！」

統夜とローウインはその後も互いの速さを競っていた。

『統夜！その辺にしておけ！このままじゃレースの分岐点に戻るぞ！』

イルバの指摘通り、先ほど曲がった分かれ道が見えてきた。

「ああ、そうだな！」

統夜は白皇に蹴りをさせてローウインを吹き飛ばした。

吹き飛ばされたローウインを見ながら統夜は狙いを定めていた。

「……………これで決める！」

統夜は白皇をローウイン目掛けて走らせると、皇輝剣を一閃し、ローウインの体を真つ二つに斬り裂いた。

皇輝剣の一閃により切り裂かれたローウインは断末魔をあげながら消滅した。

ローウインが消滅した事を確認した統夜は鎧を解除した。

「ふう……。どうにか倒したな……」

統夜はこう呟くと元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

『統夜、やったな。課題は残る戦いではあったが、まあ良かったんじゃないか?』

イルバは皮肉を言いながらも統夜のことを労っていた。

その時だった。

「統夜君!!」

どこかに姿を消していたレオがこちらに駆け寄ってきた。

「レオさん」

「やりましたね!」

「ええ。レオさんが協力してくれたおかげでどうにかホラーを倒すことが出来ました」

「この調子でこれからも頑張りましょう」

「はい!」

こうしてホラー、ローウインを討伐した統夜はレオと共に帰路についたのだった。

ちょうどその頃、そんな統夜たちを見ていた男がいた。

「……あれがこの町の魔戒騎士か……」

男は統夜の羽織っている赤いコートに目が行った。

「……あの赤いコート……。ククク……。そういうことか……。これは面白いことになりそうだな……」

男は何故か統夜のことを知っていた。

「もうすぐだ……。もうすぐ私の悲願は達成される……。だが、魔戒騎士の小僧には邪魔はさせんぞ……！」

男はとある計画のために統夜や魔戒騎士の存在は邪魔であった。

「後はあそこにある魔獣の牙さえ手に入れることが出来れば……。私の悲願を達成させることが出来る……。この町を……。グオルブ復活の生贄にしてやる……。フハハハハ!!」

高笑いをあげながら男はその場から姿を消した。

男の語るグオルブとは一体どのような存在なのか？

統夜たちがその存在を知るのももう少し先の話である。

そして、その存在を知った時、統夜にとって壮絶な戦いが繰り広げられる事をこの時の統夜はまだ知る由もなかった……。

……続く。

——次回予告——

『ロッキンローラーというのなかなか興味深いな。魂の叫びを歌に乗せるか……。俺様はこういう熱い歌っていうのは嫌いじゃないぜ！次回、「響音」。響かせろ！己の音楽を！』

第17話 「響音」

統夜がホラー、ローウインを討滅した日の夜、紅の番犬所所属の魔戒騎士、桐島大輝はとあるホラーと戦っていた。

「……はあっー！」

大輝は魔戒剣を一閃するが、その攻撃はホラーにかわされてしまった。

続けて大輝は蹴りを放つと、ホラーを吹き飛ばした。

「……ふん、他愛もない。一気に決着をつけるぞ」

大輝が魔戒剣を振り下ろし、ホラーにとどめを刺そうとしたその時だった。

「……ん？音楽？どこから……」

どこからか音楽が聞こえてきたので、大輝は思わず手を止めてしまった。

その時だった。

「ビヤツハー!!ノって来たぜえ!!」

ホラーのテンションが突然上がったと思ったなら蹴りを放つて大輝を吹き飛ばした。

「くっーこいつ、急に動きが？」

大輝はホラーの動きが先ほどとはうって変わったことに驚いていた。

続けて大輝は反撃で魔戒剣を一閃するが、ホラーは鮮やかな動きで攻撃をかわしていた。

「ヒヤッハー！ たまんねえぜ！」

ホラーはピョンピョン跳ねながら蹴りを放ち、大輝はそれを受けるしかなかった。

「くっ……調子に乗るな!!」

大輝はどうかホラーを斬ろうとするが、ホラーは鮮やかな動きで大輝を翻弄していた。

魔戒剣による攻撃もかわされたり受け止められたりとホラーは大輝を圧倒していた。

しかし……。

「……ん？ あれ？ 終わり？」

音楽が終わってしまい、機敏だったホラーの動きが止まってしまった。

「動きが止まった？ 今だ！」

大輝は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、大輝は銅の鎧に包まれた。

大輝は魔戒騎士としてはとてもベテランな騎士ではあるが、称号を持つ魔戒騎士ではなかった。

大輝が身に纏う鎧は「鋼（ハガネ）」と呼ばれる称号を持たない魔戒騎士が身につける

鎧である。

称号を持たないと言っても大輝は魔戒騎士としては統夜以上の経験があり、その戦闘力も統夜を上回っている。

大輝は変化した牙狼剣や皇輝剣に似た魔戒剣を振るうが、ホラーは大きくジャンプし、攻撃をかわした。

「……今日はここまでだ！」

ホラーはそのまま逃走し、どこかへと姿を消してしまった。

「くそっ！逃したか」

大輝は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を鞘に納めた。

「くっ……！思ったよりダメージが……あるのか？」

大輝はホラーの攻撃を受けた時に負傷してしまったようだった。

ホラーに逃げられてしまったため、大輝はその場を離れることにした。

ちょうどその頃、大輝がホラーと戦っている場所とは別の場所で一人の青年が路上ライブを行っていた。

青年はプロを目指すSHU（シュウ）と言われるミュージシャンで、時折このように

路上ライブを行っている。

♪br ight hope、今、闇の向こう」

青年が歌っている曲はbr ight hopeと呼ばれる曲で、SHUが作曲した曲である。

SHUの人気はそれなりにあるようで、この日の路上ライブにもけっこうな数の客がついていた。

演奏が終わると観客は大きな拍手を送った。

「みんな、ありがとう！br ight hopeでした！」

「SHU!!」

「最高!!」

「明日のライブ見に行くからね!!」

観客たちは口々に感想を述べて歓声を上げていた。

「おーい、SHU！」

ライブの様子を見ていたとある会社のプロデューサーがSHUに駆け寄った。

「今日の演奏も良かったぞ！この調子で明日のライブも頑張ってくれよ！」

「はい！ありがとうございます！」

SHUはプロデューサーにほめられまんざらでもないようだった。

そしてSHUは翌日に桜ヶ丘某所にあるライブハウスでライブを予定していた。

さらに、今演奏していたbrighthouse hopeもレコーディングを予定しており、SHUはミュージシャンとしてデビュー目前だった。

この日は路上ライブは終了し、SHUも撤収した。

SHUの手に握られていたピックは透明で歪な形をしており、怪しい輝きを放っていた。

※※※

統夜がレオと協力してホラー、ローウインを討伐した翌日の放課後、統夜は音楽準備室に入るが、まだ誰も来ていなかった。

「あれ？まだ、誰も来てないな……。それだったら」

統夜は魔法衣を長椅子に置くと、ギターケースからギターを取り出して構えた。

そして統夜は何を演奏するか考えた後、演奏を始めた。

統夜が今演奏している今日はSHUが歌っているbright hopeだった。

統夜は携帯の動画サイトで偶然SHUの演奏を聞いてSHUのファンになっていた。

SHUの作った曲が格好いい曲が多かったため、それで統夜は気に入ったのであった。

そのため、魔戒騎士の使命の合間にSHUの曲を動画で見て楽しんでいた。

「♪bright hope〜今〜闇の向こう〜」

統夜は歌も歌い始め、ご機嫌な感じでギターを弾いていた。

最後まで統夜は楽しみにギターを弾き続けていた。

「ふう……」

統夜が一息つくと、パチパチパチと拍手が聞こえてきた。

「おう、梓か」

統夜が音の方を見ると、拍手を送っていたのはいつの間にか音楽準備室に来ていた梓だった。

「さすがです！統夜先輩！今弾いたのって確かSHUの曲でしたよね？」

「ああ。新曲のbright hopeだよ。動画で見てハマってたな」

「SHUいいですよね！そういえば今日の夜ライブがあるみたいですよ？」

「そうなのか?!いやあ、指令がなければ行きたいんだけどなあ……」

『統夜、ダメに決まっているだろう。いつ指令が来るかわからない状況なんだからな』
「ですよねえ」

統夜はイルバに改めてダメと言われるとがっくりと項垂れていた。

「と、統夜先輩。私は見に行きますから……」

「そうなのか?!じゃあ明日でも感想を聞かせてくれよ！」

「は、はい……」

統夜の食い気味なりアクションに梓はタジタジだった。

2人がSHUについて話をしていると唯、律、漣、紬の4人も音楽準備室に入ってきた。
た。

「おっ、統夜。練習か？」

「まあな」

「統夜先輩、今SHUの曲を弾いてたんです」

「SHUかあ、路上ライブ見たことあるけど、なかなかいいギタリストだよな」

「うんうん、あたしも漣と一緒にだったけど、悪くなかったぜ」

律と漣もSHUの評価は上々であった。

「それで、今日の夜にSHUのライブがあるみたいですよ？」

「マジで!? あたしも行きたい!」

「私も! ライブを見るのは軽音部としてもいい勉強になるしな」

「私はよくわからないけど、みんなが行くなら一緒に行きたいわ♪」

「うんうん、私も♪」

どうやら律や澪だけではなく、紬と唯もライブに行くようだった。

「はあ……。みんな、いいよなあ……」

みんながライブに行くとかわかり、統夜は少しだけへこんでいた。

「と、統夜は魔戒騎士の使命があるもんな……」

「うん! し、仕方ないよな!」

「まあ、それはわかっているけどさあ……」

「きよ、今日はお茶の前に練習しましょうか?」

「そ、そうだね!」

唯たちは統夜の気を紛らわせるために先に練習を始めることにした。

1時間ほど練習を行い、その後はいつものようにティータイムを行っていた。

そしてティータイムが始まって間もなくだった。

『……統夜。番犬所からの呼び出しだぜ』

「そうか。また何か指令かな？」

統夜はイルバの言葉を聞くと残った紅茶を一気飲みすると、席を立った。

「統夜先輩、今日も指令なんですね……」

「この前もホラーと戦ってたんだろ？ バイクレースに潜り込んでさ」

「え？もしかして見てたのか？」

「ああ。私がレースとか見るの好きでな。たまたま昨日のレースをワンセグで見てたら統夜が映ってたって訳だ」

「顔を隠してもあのコートを着てたらバレバレだったよ」

「そ、そうか？ ヘルメット以外にも仮面を被ったからバレないかなって思ってたが」

統夜は自分の変装がバレバレだと知り、苦笑いをしていた。

「それで、やっぱりホラーは風間隼人だったのか？」

「ああ、そうだけど、もしかしてあいつをコースアウトさせた時点でわかったか？」

「ああ。すぐにわかったぞ」

「まあ、あのホラーはあの後無事に討伐したけどな」

「それは残念だけど、ホラーだったら仕方ないよなあ」

湊は少しだけ残念そうにしていたが、ホラーであるからと割り切っていた。

「このような話をしている間に統夜は帰り支度を済ませていた。」

「それじゃあ、行ってくるな」

「はい。統夜先輩、頑張ってくださいね」

「ああ」

統夜は音楽準備室を後にすると、そのまま番犬所へ直行した。

統夜は番犬所に到着すると、そこには統夜の先輩騎士である大輝が待っていた。

「おう、来たようだな、統夜」

「だ、大輝さん、どうしたんですか？その怪我は」

統夜は大輝が怪我をしていたことが気になり、すぐに事情を聞いていた。

「ああ……。実はホラーにな……」

「え？大輝さんほどの人がやられるなんて……。それほど手強いホラーだったんですか？」

「ああ。最初は大したことはないと思っただがな。戦いの途中で音楽が聞こえてきたんだ」

「音楽？」

「ああ、ギターのような音も聞こえたな。その音楽を聞いた途端にホラーの動きが急に

変わってな」

「ということはそのホラーは音楽を力の源に強くなるってことですかね？」

『いや、他にも秘密がありそうだけどな』

イルバは今回のホラーは他にも秘密が隠されていると読んでいた。

「ああ、そうかもしれないな。俺がこのザマだからな。このホラーの討伐をお前に頼みたい」

「大輝さんの頼みとあれば任せてください！」

統夜は二つ返事で大輝からホラー討伐の仕事を引き継いだ。

「統夜、大輝。話はまとまりましたか？」

「はい、イレス様。このように今回のホラーの討伐を統夜にお願いしたところです」

「そうですか。……統夜。相手はあの大輝を打ち負かすほどの相手です。油断してはいけませんよ」

「はい、わかりました。全力でホラーを討伐します」

「ここ最近ホラーの数が増えています。無理だけはしないでくださいね？」

「……イレス様、ありがとうございます」

統夜はイレスと大輝に深々と頭を下げると、番犬所を後にし、ホラー搜索のために行動を開始した。



イルバのナビゲーションを頼りに統夜が訪れたのは桜ヶ丘某所にあるライブハウスだった。

「……イルバ、もしかしてここにホラーが？」

『ああ。この中からホラーの気配を感じるぜ』

「……つて、ここは今日SHUさんがライブを行う会場じゃねえか！」

統夜が偶然訪れたライブハウスは奇しくもSHUのライブが行われるライブハウスだった。

(……まさか、SHUさんが……？調べる価値はありそうだな……)

統夜は裏口に移動すると、裏口からライブハウスの中に入った。

誰にも見つからないようライブハウスの中に入ると、SHUが談話室でのんびりしていた。

SHUは煙草をくわえ、それに火をつけようとした。

統夜はそのタイミングでSHUの瞳を魔導ライターで照らした。

しかし……。

(……何の反応もない!?ということはハズレか……)

統夜はSHUがホラーでないかと疑っていたが、その予想は外れてしまった。

「ああ、すいません」

SHUは統夜が煙草に火をつけてくれると勘違いをして魔導火に顔を近づけてきたので統夜は慌てて魔導ライターの火を消した。

「？」

「す、すいません……。何でもありません！」

統夜はSHUに謝罪しながら魔導ライターを魔法衣の懐にしまった。

「えつと……君は？」

「あつ、すいません……。実は僕、SHUさんのファンでして……」

統夜は事実を交えながらどうにか話をごまかそうとしていた。

「そうなんだ、ありがとう」

「勝手に入ってごめんなさい。どうしてもSHUさんの顔を一目見たくて……。あつ、そうだ。こんなものしかないんですけど、サイン、もらえませんか？」

統夜はポケットからピックを取り出すと、それにサインをお願いした。

「サイン？ ああ、はい」

SHUはサインペンを取り出すと、そこにサインを書いた。

「ありがとうございます♪これで軽音部のみんなに自慢できます♪」

「へえ、君は軽音部なんだ」

「はい！今日は僕の友達もライブを見に行くって言ってました！」

「へえ、バンドメンバーと仲が良いんだね。それはとても……」

「SHUさん！スタンバイお願いします！」

ライブのスタッフがSHUを呼びに来ていた。

「あつ、すいません。休憩の邪魔しちゃって」

「大丈夫だよ、それじゃ俺はこれで」

「ありがとうございます。ライブ、頑張ってください！」

統夜はSHUを見送ると、SHUは休憩室を出て行った。

統夜も休憩室を出ようとしたその時、入り口に見覚えのある顔が見えた。

「……あれ？レオさん、どうしたんですか？」

「ああ。僕も統夜君のサポートをするように頼まれてね」

「おお！それは心強いです」

「それで、ホラーは見つかりましたか？」

「いえ、まだです。ライブが始まったらホラーも出てくると思うんですけど……」

「そうですか。それじゃあ一緒にホラーを探しましょう」

「はい！」

統夜とレオは2人で休憩室を後にすると、何事もなかったかのように裏口から出て行き、表で受付をしてライブ会場に入った。

その時だった。

「……あれ？統夜とレオ先生じゃん！」

律が統夜とレオを見つけて声をかけてきた。

「おう、みんなで来てたんだな」

「はい。統夜先輩とレオ先生はもしかして……」

「ああ。ホラーを捜索中だ。この会場のどこかに紛れてる可能性が高くてな」

「ええ!!? そうなの!?!」

「ええ。でも、安心して下さい。僕と統夜君がいますからホラーの好き勝手にはさせま

せんよ」

「レオ先生がそう言うのと心強いです♪」

「とりあえず、一緒に行きましょう」

偶然唯たちと合流した統夜とレオは一緒に行動することになり、2人はライブ開始前もホラーがいないか周囲に目を光らせていた。

そして、ライブ開始時刻となり、ライブは始まった。

ライブが始まってから2曲演奏したのだが、特に不審な動きはなかった。

(これで2曲目……。だけど、ホラーの動きはない……。普通の演奏じゃホラーは反応しないのか?)

統夜は聞きたかったSHUのライブであったが、ホラーを探すために演奏に集中出来なかった。

『みんなありがとう！それじゃあ新曲行きます！……：br ight hope！』

統夜も好きな曲であるbr ight hopeが始まろうとしたのだが、SHUは今のピックから透明で歪な形をしたピックに変更した。

統夜はその瞬間を見逃さなかった。

(！あれってまさか……)

《統夜。あれはホラーの鱗だな》

(なんでホラーでもないSHUさんがそんなものを！)

《さあな。もしかしてホラーと戦った時に鱗だけが剥がれて、あの男が偶然それを拾ったんじゃないのか?》

統夜とイルバがテレパシーで話をしていると演奏は始まっていた。

「?統夜君、どうしました?」

「レオさん、この曲でホラーは動き始めます。気をつけてください」

「え?それはどうして……」

統夜が確信を持って言った言葉にレオは何故と問おうとしたが、統夜たちがいる場所から離れたところが急に騒々しくなった。

「ヒヤッハー!!これだよこれ!!たまんねえぜ!!」

小太り気味な中年男性が急に暴れ始めていた。

「!レオさん、ホラーはあそこです!」

統夜がホラーの存在に気付き、レオもホラーを補足した。

「……人が多い……。これじゃあホラーに近づけませんよ!」

この日はライブハウスが満員になるくらい人が入っており、移動するのも容易ではなかった。

周囲の客も会場の異変に気付き始めていたが、見て見ぬ振りをしていた。

そうこうしているうちに曲の1番が終わろうとしていた。

「よっしやあーこのまま全員喰ってやろうか!!」

ホラーが人々を捕食しようとしていた。

ホラーが1人でも捕食すれば、ライブが中止になるだけではなく会場は大混乱に陥るだろう。

そうなると人混みに紛れてホラーは逃走してしまう。

統夜とレオはこう危惧していた。

「くっ……このままじゃあ……」

「仕方ない……。レオさん、俺に任せてください!」

統夜はそう言うところからステージまでジャンプをし、ステージに乱入した。

「は!」

「え?」

突然の出来事に観客だけではなく、ステージの人たちも困惑していた。

統夜はそんなことはお構いなしにSHUのギターを無理やり奪い取った。

「ちよ!?!一体何を!?!」

「すみません、ちよつと借ります!」

統夜はポケットからSHUにサインしてもらったピックを取り出すと、ギターをジャ

ラーン!と鳴らしていた。

『♪bright hope〜今〜闇の向こう〜探していた揺るぎなき証を〜』

統夜がbright hopeを歌い始めると、始めは困惑していた観客だったが、乱入者の演奏に歓声をあげていた。

「おお!」

「上手いな……」

「さすがはヤーくん!」

「はい、統夜先輩のギターはかなりのものですからね!」

「素晴らしいわぁ♪」

唯たちは突然の統夜の演奏に満足していた。

その後統夜は最後まで演奏を続けていた。

他のギターの人もベースの人もドラムの人も最初は戸惑っていたが、統夜に合わせて演奏を再開した。

「う、上手い……」

プロ入りの道が見えているSHUも評価するほど、統夜のギターテクニクは高かった。

「ちっ……興奮だよ……」

ホラーは演奏者が統夜に変わったことががっかりだったのか、ライブハウスを後にした。

「あつ、待て！」

レオが慌ててホラーの追跡を始めた。

『急にすいません！だけどこのもライブを楽しんで行ってください！』

統夜はこう言うとうとSHUにギターを返却し、会場を飛び出していった。

「あつーやーくん！」

「みんな、追いかけてよう！」

唯たちも統夜に続いて会場を出て行き、入り口辺りで統夜を発見して合流した。

「統夜、どうしてライブに乱入したんだよ？」

統夜の唐突な行動を滯が問い詰めていた。

「あのままだとホラーが誰かを喰ってたぞ。そんなことになりやライブはあんな混乱じゃ済まなくなる。俺はライブの混乱を最小限にするためにあえて乱入したんだよ。こんなことはしたくなかったけどな」

統夜は自分がファンであるSHUのライブを汚すような真似はしたくなかったが、魔戒騎士として人を守る為に仕方なくこのような行動に出ていた。

「まあ、そういうことなら仕方ないですよね」

「そうよねえ。変に騒ぎ立てるよりこっちの方がいいと思うわ」

「まあ、俺のせいでライブを滅茶苦茶にしちやっただからもちろん謝りには行くけどな」

「統夜、ホラーはいいの？」

『ああ、問題ない。今はレオが追跡している。仮に逃げられたとしてもどうにかなるだろうさ』

「ああ、俺もイルバの意見に賛成だ」

統夜とイルバはレオがホラーを追跡しているから任せても大丈夫だろうと思っていた。た。

統夜たちはライブが終了するタイミングを見計らってSHUに謝りに行くことにした。

※※※

br ight hopeの演奏中に統夜が乱入し、その後はライブどころではなくなっていました。

その後、1曲だけ演奏するものの盛り上がり欠けてしまい、ライブはここで終了することになってしまった。

ライブが終了すると、SHUは休憩室に移動し、突然の出来事につくりとうなだれていた。

すると、裏口から中に入ってきた統夜たちが休憩室に入ってきた。

「あの……SHUさん……。すいませんでした……」

「お前……何てことしてくれたんだ！」

SHUは怒りに満ちた表情で統夜の胸ぐらをつかむと、思い切り統夜の頬を殴った。

「つてえ……」

「と、統夜先輩!!大丈夫ですか？」

「ああ、平気平気。殴られるのは覚悟の上だし。それに……」

統夜はいつの間にかSHUから盗んだ透明のピックアップらしきものを唯たちとSHUに見せた。

「!?か、返せ！」

SHUはピックアップらしきものを取り返そうとするが、統夜はひらりとSHUをかわして

いた。

「SHUさん、これはどこで手に入れたんですか？」

「お前には関係ない！返せ！」

「こんなものを持つてたらダメです、SHUさん」

「俺の大事なライブをぶち壊しておいて何偉そうなこと言つてんだよ！」

「それは謝ります。だけど、これには恐ろしい力が宿っているんです」

「恐ろしい力？」

SHUは統夜の言葉を素直に信じられないと言いたげな顔だった。

「信じられないとは思うんですけど、本当みたいなんです！」

梓が話に入り、統夜に助け舟を出していた。

「馬鹿な！5年間全く売れなくて、諦めかけてた時にそいつが俺にチャンスくれたん

だ！メジャーデビューがそこまで来てるんだよ！」

「俺もSHUさんのデビューを応援したいし、売れない頃からのファンでした。だけど、

それこれとは話が別です。こいつはあなたが思つてるほど……」

「そんなの関係ない！頼む、そいつはレコーディングに必要なんだよ！頼む！返してく

れ！」

SHUは再びピックらしきものを取り返そうとするが、再び統夜にかわされた。

「統夜、返してやるのはダメなのか？さすがにこのままじゃSHUさんが可哀想だよ」

「ダメだ。これでレコーディングなんかされたらあちこちでホラーが活発化しちまうだろうが。それだけは許されない。例え誰かの夢を踏みにじつてもな」

統夜はホラーの活性化を防ぐ為にあえて冷酷な人間を演じることにした。

個人的にはSHUを応援したかったが、ホラーとの戦いに私情を挟むわけにはいかなかった。

「頼む……！俺は……音楽に命をかけてるんだ……」

「……………」

必死に訴えかけるSHUの言葉を聞いて統夜は考え込んでいた。

「SHUさん。さっきも言ったけど、俺は人気が出る前からあなたのファンです。だからこそあなたの演奏に思うところがあるんです」

「思うところ？」

「あなたは売りたいと思う一心で音楽を奏でているから俺の心にあなたの音楽は響かなかった。……だけど俺が乱入した時、素人の俺の演奏でもみんなは盛り上がり上げてくれましたよね？それは何故だかわかりますか？」

「？それは一体……」

統夜はSHUに足りないものを説くが、SHUはそれをわかつてはいなかった。

「俺は演奏している時は楽しく弾くことを心がけています。音楽を楽しみむって気持ちにはけっこう敏感に伝わるものです。確かに演奏技術も大切ですが、心から音楽を楽しみむう持ちは自然と演奏をより良くするものです」

「音楽を心から……楽しむ……」

「……俺みたいな若造が生意気なことを言つてすいません。だけどあなたはこんなものがなくたって最高の音楽を奏でることが出来ると俺は信じています」

統夜は唯たちを連れてその場を後にしようとしたその時だった。

「……いつその事演奏して貰えばいいじゃないですか」

休憩室に突如現れたのはホラーを追っていたはずのレオだった。

「れ、レオ先生？」

「レオさん、ホラーは？」

「残念ながら逃げられました。だけど、はつきりわかったことが一つあるんです」

「わかったこと？」

「ええ。統夜君もご存知の通りそれはホラーの鱗です。彼の歌声とその鱗から発せられる波長が共鳴してホラーが活発化しているんです。さらに、ホラーはこの波長の音の近くに寄ってくる傾向があることもわかりました」

「……あ！もしかしてSHUさんにそれで演奏してもらつてホラーをおびき寄せらるって

作戦ですかあ？」

「……唯さん、ご名答です」

唯がレオの考えていることを当てると、唯はなぜか「ふんす！」とドヤ顔を決めた。

「……なるほど、それはありですね」

統夜もレオの提案に賛同していた。

「な、なあ……。話が見えないんだけど……」

今までの話を聞いていたものの、SHUは話についていけなかった。

「SHUさん、これを返してもいいですけど、条件があります」

「ま、まさかもう一度ギターを弾けってことか？」

「ええ。嫌なら無理強いはしません。今から俺がするのは危険な事ですから」

「危険なこと？」

「詳しいことは言えません。……SHUさん、あなたは音楽に命がけだと言いましたよね？俺にも命がけでこなすべき使命があるんです」

「命がけで……」

「ええ。あなたの本気、ぜひ見てみたいって気持ちも俺にはあります」

「……」

統夜の純粋な気持ちにSHUは何かを考え込んでいた。

「……まあ、無理ですよ。だったらその役目は軽音部のみんなに……」

「やらせてくれ」

統夜はSHUがこの提案を飲むとは思っていなかったの、驚きを隠せなかった。

「……SHUさん、いいんですか？」

「ああ。お前の事情はわからないけど、お前に俺の本気の演奏を聴いてもらいたいって思ったんだ」

「SHUさん……」

「そんなものに頼るのはこれっきりだ」

SHUの覚悟を聞いた統夜はホラーの鱗を投げ渡した。

「……あなたの本気、特等席で堪能させてもらいます」

統夜はSHUの協力を得てホラーをおびき寄せようとした。

しかし……。

「やーくん！ 私たちも協力するよ！」

唯がこう統夜に提案すると、唯、梓、滯はそれぞれの楽器を準備していた。

「私たちの演奏じゃ足を引つ張るだけかもしれないですけど、私たちも統夜先輩の力になりたいんです！」

「…………みんな…………」

「統夜君。僕はホラーをおびき寄せ準備をしながら彼女たちのことを守ります。統夜君は現れたホラーの掃討をお願いします」

「わかりました」

唯たちとSHUは準備のためレオと共にドラムやキーボードが置いてあるステージに移動し、統夜は外でホラーを迎え撃つことになった。

※※※

統夜は外に移動すると、ホラーを待っていた。

統夜のいるライブハウスの入り口に大型のアンプを設置し、そこからステージの演奏が聞こえるようレオがセッティングしてくれた。

「さて…………。あとはホラーが出てくるのを待つだけか」

『統夜。ホラーは音楽を聴いて戦闘能力が格段に上がっている。しかもあの大輝を打ち負かしているんだ。油断だけは絶対にするなよ!』

「ああ、わかつてる」

統夜は魔戒剣を抜き、ホラーの来襲に備えた、

そして、ステージの準備が整い、唯たちとSHUは演奏を開始した。

〈使用曲↓bright hope (桜高軽音部コラボver)〉

演奏が始まるとすぐ、ホラーは姿を現した。

「ヒヤッハー!!最高にご機嫌だぜえ!!」

ホラーのテンションは最初からマックスであった。

『……統夜、来るぞ!』

「承知!」

ホラーは高いテンションのまま統夜に体当たりを仕掛けるが、統夜はそれを見切っ
てかわした。

「おらあ!!」

統夜は魔戒剣を一閃するが、それはホラーに軽く受け止められてしまった。

「くっ……いっ……こいつ、なんて馬鹿力なんだ……！」

ホラーの鱗の効果は最高にてきめんだったのか、戦闘能力だけではなく、ホラーの腕力も上がっていた。

ホラーは統夜に頭突きをお見舞いしようとするが、その前に蹴りを放ってホラーを吹き飛ばした。

「……よし、一気に行くぞー！」

統夜はホラー相手に斬りかかろうとしたその時だった。

「ヒヤッハー!!祭りの場所はここなのかあ?」

突然ホラーがもう一体現れ、統夜に襲いかかってきた。

「げ!?もう一体いるなんて聞いてないぞ!」

『恐らく、近くのゲートから出てきたホラーがこの音に引き寄せられたのだろう』

「解説してる場合かよ!?つとと……！」

統夜はかろうじて2体のホラーの攻撃をかわした。

「ヒヤッハー!!さっさとその魔戒騎士を喰ってその中にいる奴らも喰ってやる!」

「おう!!餌は山分けだぞ!!」

2体のホラーは統夜を喰らってさらにライブハウスの中にいる唯たちとSHUを喰らおうとしていた。

音楽を聴いてやる気全開になっている2体のホラーは統夜に一斉に襲いかかってきた。

「……………くっ！」

統夜はどうかにか2体を迎え撃とうと考えていたその時だった。

突然何者かが現れると、2体のホラーを斬り裂き、蹴りで吹き飛ばした。

「……………統夜、無事か？」

統夜の危機を救ったのは、負傷してホラー討伐の仕事を統夜に託した大輝であった。

「だ、大輝さん、どうして？」

「後輩のお前に仕事を丸投げするのが心苦しいと思っただけだ」

「で、でも、この前の戦いの怪我がまだ…………」

「お前が仕事を引き継いでくれたおかげで少しは休ませてもらった。これくらいなら問題ない」

大輝は先程乱入してきた痩せ型の体型のホラーを斬り裂きながらこう答えていた。

「それに……………人の心配をする前に自分の心配をしろ！お前の悪い癖だ」

「は……………はい！」

統夜は大輝に叱責を受けながら小太り体型のホラーを迎撃していた。

「統夜、こいつは俺が斬る。お前はそっちのホラーに専念しろ！」

「わかりました!」

統夜は大輝の協力を得てホラーを分断することに成功した。

「ヒヤツハー!! 何人来ようと俺様たちを止めることは出来ないゼエ!」

大輝が応援に来てホラーの動きが変わることはなかった。

ホラーはピョンピョンとジャンプをしながら2度3度と統夜に蹴りを放った。

「くっ……」

統夜はどうか反撃しようとするが、ホラーの猛攻に反撃の機会がなかなか得られなかった。

「うっ……くっ……」

ホラーはさらに跳ねながら蹴りを放っていた。

(くそ……こんなところで……負けてたまるか!)

S H Uの本気に応えるためにこんなところで負けるわけにはいかない。統夜は気合でホラーの蹴りを受け止め、逆に蹴りを放ってホラーを吹き飛ばした。

「ヒヤツハー!! なかなかやるじゃねえか! だが!!」

小太り体型のホラーは人間の姿からホラーの姿へ変わっていった。

『統夜! こいつはグール。パワーはあるが単細胞なホラーだ』

「なるほど。確かに脳筋っぽいな」

統夜はイルバの話を聞いてグールが脳筋なホラーであるとすぐ察しがついた。「この野郎！馬鹿にするんじゃない！」

グールは統夜に体当たりを仕掛けるが、統夜はその攻撃をかわし、魔戒剣による一撃でグールを斬り裂き、さらに蹴りを放ってグールを吹き飛ばした。

そのタイミングで統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれて、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

それを見て再び突撃してくるグールめがけて皇輝剣を一閃し、グールの体を真っ二つに斬り裂いた。

切り裂かれたグールは断末魔をあげながら消滅した。

鎧を召還して一撃でグールを斬り裂いた統夜は鎧を解除した。

「はあ……はあ……はあ……」

グールとの戦いで相当消耗したのか統夜はかなりばてていた。

そして、唯たちとSHUの演奏は統夜が鎧を解除したタイミングで終了していた。

「……統夜、やったな」

統夜とは別のホラーを引き受け、それを討伐した大輝が統夜に駆け寄った。

「大輝さん……ありがとうございます……」

「……さて、ホラーは討伐したし、俺は行くぞ」

「ええ？もう行っちゃうんですか？」

「明日もエレメントの浄化があるからな。お前が学校に行っている間は俺の仕事だからな」

大輝こそが統夜が学校に行っている間のエレメント浄化を引き受けてくれている魔戒騎士であつた。

「大輝さん、いつもありがとうございます。大輝さんのおかげで俺は最高の学校生活を送れてます」

「フツ……それは何よりだ。統夜、お前は学校生活を通して守りし者とは何なのかを知ることが出来たのだろうか？」

「ええ、それはとても」

「統夜は日々の学園生活を通して守りし者とは何なのかということをよく理解していた。」

「それは結構だ。じゃあな、統夜。これから頑張れよ」

大輝はそのままライブハウスを後にした。

統夜は立ち去る大輝の背中を見守りながら深々と頭を下げた。

大輝を見送った統夜はライブハウスに戻ろうかと考えていたが……。

「やーくんー！」

それより先に唯たちが統夜に駆け寄ってきた。

「統夜先輩……大丈夫ですか？」

「まあ、だいぶ苦戦はしたけど、問題はないよ」

統夜は梓たちに心配させないためにこう言つて強がつていた。

「……SHUさん。あなたの本気、たつぷりと堪能させてもらいました」

統夜はこう言いながらSHUの目をじつと見ていた。

「どうだった？俺の本気は……」

「すごかったけど……。心には響かなかつたです」

「ちよ、統夜!？」

統夜の正直すぎる感想に滞が思わず声をあげていた。

「ハハッ、そうかもな。……俺、命がけだなんて格好つけてただけなんだよ……。こんな物に頼つて……。それでメジャーデビューが出来たつてそれは俺の力じゃない。そんな偽物な歌じゃファンだつて喜ばないよ……」

SHUはこうしみじみと言うとホラーの鱗を統夜に投げ渡した。

「それはもう必要ない。……俺、もう一度頑張るよ。お前のようなファンがいるんだ。お前もお前以外のファンも納得させるような音楽を作ってみせる」

「……はい、期待しています」

「なあ。お前らは軽音部なんだよな？良かったらこれからもこの曲を演奏して欲しい」
統夜はSHUがここまで言ってくれるとは思っていなかったのでSHUがこれからもbright hopeを弾いて欲しいとの言葉は素直に嬉しかった。

「……SHUさんが良いって言うなら遠慮はしませんよ？学園祭とかライブハウスとかで弾く機会があるなら絶対に演奏しますから！」

「ああ、そうしてくれ。俺はこのbright hopeは封印するから、これからはお前たちの曲として演奏してくれたら俺も嬉しいよ」

「はいっ！ありがとうございます!!」

統夜はSHUに一礼をすると、ライブハウスを後にして、唯たちはそれを追いかけた。

「……桜高軽音部の月影統夜……か……。あいつには負けてられないな」

SHUはその場を立ち去る統夜たちの背中を見送りながらこう呟いた。

※※※

S H Uが見えなくなる場所まで歩くと、統夜は倒れそうになったので唯たちが統夜のこゝとを支えた。

「ちよ、統夜君、大丈夫？」

「まったく……。S H Uさんの前だからって格好つけちゃって……」

「そ、そんなんじゃないよ……。あの音楽を背負うのは俺だけで十分だから……」

「やーくん……」

「統夜先輩、それは違いますよ。私たちがって一緒にこの曲を演奏したんです。だから私たちがって一緒にこの曲を背負っていきますよ」

梓の言葉に唯たちはウンウンと頷いていた。

「確かに……。この6人が桜高軽音部……。でももんね♪」

「はい……。そうですね！」

統夜はS H Uから受け取ったホラーの鱗を投げると、魔戒剣を居合のように一閃し、鱗を真つ二つに斬り裂いた。

「……さて、帰ろうか」

こうしてこの日の仕事を終えた統夜はそのまま帰路についた。

ちょうどその頃……。

「……ここか。魔獣の牙が眠る場所は……」

ホラー、ローウインとの戦いを終えた統夜の様子を見ていた謎の男が桜ヶ丘郊外にある洞窟を発見した。

「ククク……。もうすぐだ……。俺はグオルブを復活させ、俺の望みを叶えてみせる……！」

男はとてつもなく大きな計画を企んでいた。

「……だが、あの魔戒騎士の存在は目障りだな……。こいつを奪ったら一度挨拶をするとうちようか……」

男は統夜との接触も視野に入れていた。

「……待っている、月影統夜。貴様も、あの女のように……！」

男は怪しい笑みを浮かべると、そのまま高笑いをしていた。

この男との出会いが、統夜の運命を大きく変えることを統夜は知る由もなかった……。

……続く。

——次回予告——

『……やれやれ……。これはまた厄介なやつが現れたもんだ。この男、一筋縄じゃいかない相手みたいだぜ……。次回、「邪悪」。漆黒の騎士が牙を剥く!!』

第18話 「邪悪」

……ここは桜ヶ丘郊外にある洞窟。

ここは紅の番犬所が管理している洞窟で、この洞窟の奥には強大な力を持つ魔獣の牙が封印されている。

その封印が何人にも解かれぬよう、洞窟護衛専属の魔戒法師4人がこの場所を守っている。

4人の魔戒法師は精神を集中させ、さらに何人も寄せ付けないよう結界も貼って厳重な守りで魔獣の牙の封印を守っている。

この日も特に異常はなく、1日が終わろうとしていた。

しかし……。

その洞窟に近づこうとする影があった。

「……」

魔戒法師の1人がその足音に気付き、4人の魔戒法師たちは臨戦態勢に入っていた。

4人の前に立ちはだかったのはフードを被った謎の男だった。

「貴様……何者だ……」

「ここがどのような場所かわかってここに来ているのか!？」

「ここは強大な魔獣の牙が封印されている洞窟だ」

「この場から早々に立ち去れ。さもなければ危険人物として貴様を排除する」

「ククク……。貴様らのような雑魚に私を殺すことが出来るかな……。？」

フードを被った男が取り出したのはなんと魔戒剣に酷似した件だった。

「!そ、それは……。魔戒剣!？」

「貴様、魔戒騎士か!？」

「だとすれば魔戒騎士がなぜ魔獣の牙を狙う!」

「……。ここ、ここいつまさか……。闇に堕ちた……」

4人の魔戒法師がフードを被った謎の男の正体を見極めた時には全てが遅かった。

男は素早い動きで剣を操ると、4人の手練れの魔戒法師をあつという間に葬ってしまった。

「……。フン、雑魚が。準備運動にもならん」

男は剣を鞘に納めると、魔戒法師たちの結界をあつという間に破壊し、洞窟の中へと入っていった。

洞窟に入つてすぐ、その魔獣の牙は眠っていた。

「……。これが魔獣の牙か……」

男はすぐさま魔獣の牙を取ろうとするが、こちらにも結界が施されていることに気付いた。

「……やはりこちらにも結界が貼ってあるか……」

男はすぐさまその結界を破ると、魔獣の牙を手にとった。

「ククク……。ついに手に入れたぞ……！魔獣グオルブの牙を……！こいつを蘇らせて、私はこの世界の全てを闇に包んでくれるわ！」

男は強大な力を持つホラーを復活させ、この世界を滅ぼそうと企んでいた。

目的の魔獣の牙を手に入れた男はその場から立ち去った。

※※※

ホラーの鱗の力で強力になったホラー、グールを討伐した統夜は、その翌日の放課後、いつものように部室である音楽準備室でティータイムを楽しんでいた。

「…………♪」

「統夜はこの日、朝からずつとご機嫌だった。」

「……………統夜先輩、今日はずいぶんとご機嫌ですね」

『ああ。朝からずつとこの調子なんだ。気持ち悪いっいたらありやしないぜ』

「統夜のご機嫌ぶりにイルバも呆れていた。」

「まあ、昨日はSHUさんのbr i g h t h o p eを自由に使ってくれて本人が言つてたからな」

「まさか、自分で作った曲をあたしたちに譲ってくれるなんてなあ」

「律も軽音部でバンドを組んでいるため、自分の作った曲を譲るということが相当なことであることはよく理解していた。」

「それなら秋の学園祭で演奏したいわねえ♪」

「うん！やろうやろう！面白そうだよ！」

「唯先輩はその前にギターの基礎を覚えてください。唯先輩はいつも一つのことを覚えたら一つのことを忘れるじゃないですか！」

「うう……………あずにゃあん……………」

唯は痛いところを梓に突っ込まれてしまい、涙目になっていた。

『ま、確かに梓の言う通りだな。お前さんはもつと基礎をしつかりしないといけない』

て俺様も思うぜ』

「うう……イルイルはいいよねえ……。演奏しないんだもん……」

『そりゃあ俺様は魔導輪だからな。……あと、変なあだ名で呼ぶな！』

統夜たちはもうこのやり取りに飽き飽きしていたので、完全にスルーしていた。

「でも、イルバって声はいいから歌ったら凄そうだな」

「ああ、それはわかる！何かすごく格好いい曲を歌ってそうー！」

『おいおい、俺様は魔導輪だぜ？歌なんて歌わないぜ』

「ま、そりゃそうだろうな」

統夜たちはこのように話をし、この日も平和な日常が過ぎ去ろうとしていた。

しかし、そんな平和な時間は一瞬にして破られてしまった。

「……と、統夜君！大変です!!」

レオが血相を変えて音楽準備室に入ってきた。

「?レオさん、どうしたんです?そんなに慌てて」

「統夜君に指令が来たんですけど……」

レオは手に持っていた指令書を統夜に渡したのだが……。

「!!」

その指令書を見て統夜の表情が変わってしまった。

「?やーくん、その黒い指令書がどうしたの?」

事情を知らない唯は首を傾げながら統夜に聞いていた。

「黒の指令書……。この指令は拒否することが許されない指令書なんだ」

「!!!」

黒の指令書が普段の指令書とは違い、とんでもないことだと知った唯たちは驚きを隠せなかった。

「……俺、魔戒騎士になって黒の指令書を受け取るなんて初めてだよ……」

黒の指令書を見つめる統夜の顔は真っ青になっており、冷や汗もかいていた。

『まあ、こいつが来るといふことはとんでもないことが起きてるってことだからな』

「!!!とんでもないこと?」

「悪いけど……。ここから先のことは話す訳にはいかない。下手したら俺も生きて帰ってこれるかわからないから……」

「そんな……」

『統夜の言う通りだ。お前さんたちはこの件に首を突っ込まない方がいい。今回ばかりは統夜もお前さんたちを守る余裕はなさそうだからな』

イルバがこう警告をすると、統夜はゆっくりと立ち上がり、帰り支度を始めた。

「?統夜先輩?もしかして……」

「番犬所に行く。詳しい話を聞く必要があるからな」

(……………なんか、いつもの統夜先輩と違う……………。なんか、怖い……………)

黒の指令書を見てから統夜は終始険しい表情をしていたのでそれを見ていた梓は少し怯えていた。

「…それじゃあ、俺たちは行くな」

帰り支度を早々に済ませた統夜はまともな挨拶もせず音楽準備室を後にし、番犬所を目指すことにした。

その途中……………。

「……………あつ、統夜先輩」

「統夜さん、帰るんですか？」

「……………」

純と憂が統夜を見つけて声をかけるが、2人を無視して統夜はそのまま行ってしまった。

「？統夜先輩、どうしたんだろ？」

「……………何か今日の統夜さんの顔、すごく怖かった……………」

憂も統夜の異変を敏感に感じ取っていた。

「……………確かにそうかも。統夜先輩、どうしたんだろ？」

「さあ……」

憂は統夜が魔戒騎士であることを知っているため、ホラー絡みだということはわかったのだが、今日の統夜は普段見せない顔をしていた。

「私、音楽準備室に行ってくるね!」

憂は純にこう告げると音楽準備室に向かった。

そしてさらに……。

「……あら、統夜君。部活はどうしたの?」

「……」

今度は玄関で和が統夜を見つけて声をかけたのだが、統夜は和も無視して行ってしまった。

「?統夜君……。どうしたのかしら?ずいぶんと思いつめた顔をしてたけど……」

和は統夜が魔戒騎士であるということは知らなかったのだが、統夜の様子がおかしいということにはすぐにわかった。

「……あら、真鍋さん。こんなところでどうしたの?」

偶然玄関を通りがかったさわ子が呆然と立ち尽くす和を発見して声をかけた。

「……あつ、山中先生。実は、さつき統夜君を見かけたんですけど、様子が変だったんです」

「様子が変？」

「ええ。何かすごく思いつめているというか……」

「うーん……。あの統夜君がねえ……」

顧問として軽音部に関わっているさわ子にも思い当たる節はなかった。

「……あれ？真鍋さんと山中先生。どうしたんですか？」

今度は帰り支度を終えたレオが玄関にやって来て、2人を見つけたので声をかけた。

「あつ、布道先生……」

「実は統夜君の様子が変みたいなんです。布道先生は私の代わりに臨時顧問をしていますけど、何か変わったことはありませんか？」

「え？変わったことですか？僕が知る限りでは思いつかないですね……」

レオには思い当たる節はあるのだが、魔戒騎士の秘密を話す訳にはいけないのでこう答えて話を誤魔化そうとした。

「統夜君も今をときめく高校生ですからねえ。彼なりに悩みがあるんですよ」

レオは笑いながらこう言葉を付け足した。

「布道先生、発言が年寄り臭いですよ……」

レオの言葉に和がジト目でツツコミを入れていた。

「あれ？ところで布道先生は今お帰りなんですか？」

「ええ。今日はこの後どうしても外せない用事がありまして帰らせてもらうことになりました」

「あら、そうなんですか？」

「ええ。ですので僕はこの辺で失礼します」

レオは和とさわ子に一礼をするとそのまま玄関を出て行った。

「……布道先生の用事って何かしら……」

「さあ……私にはわかりません……」

レオが帰るのを見送った和とさわ子はしばらくの間その場に呆然と立ち尽くしていた。

「……お姉ちゃん！」

続夜が出て行ってしばらくたった頃、レオも出て行ったのだが、その直後に憂が音楽準備室の中に入ってきた。

「う、憂!? どうしたの!？」

憂が血相を変えてこの部屋に入ってきたので姉である唯は驚きながらこう聞いていた。

「と、統夜さん、何かあったの? さつき統夜さんに会ったんだけど、すごく思いつめた顔をしてたから……」

「ああ、憂ちゃんも統夜に会ったんだな」

「憂、実はね……」

「……やーくん。黒の指令書っていうのを受け取ってから様子がおかしくなったんだよね。相当危ない仕事が残ってるみたいなんだって」

唯が簡潔に事情を話した。

「なるほど……。それで統夜さんの様子が変わったのね……」

憂は唯の説明で事情をだいたい理解した。

「統夜先輩……。すごく怖い顔してた……。統夜先輩、大丈夫かなあ……」

梓は様子がおかしい統夜のことをとても心配していた。

「ああ、そうだな」

「さすがに今回はあたらしが手伝えることはなさそうだな」

「うん……。私たちが統夜君の足を引っ張る訳にはいかないもの……」

「そうだよね……。それはわかっているんだけど……」

「お姉ちゃん……。みなさん……」

唯たちは統夜が心配なあまり暗い表情をしており、それを見ていた憂もいたたまれない気持ちになっていた。

彼女たちに出来ることは統夜の無事を祈ることだけであった。

※※※

学校を後にした統夜は番犬所に直行した。

統夜が番犬所の中に入ると、神妙な面持ちをしている大輝の姿が一番最初に視界に入った。

「……統夜、来たか」

「……大輝さんもひよつとして？」

「ああ。俺のところにも来たぞ。黒の指令書がな」

「やつぱり……そうだったんですね……」

「まあ、俺も過去に黒の指令書を受け取ったことは一度しかなかったから正直動揺はしているがな」

ベテラン騎士である大輝でさえも黒の指令書の仕事の経験は一度しかなかったため、2度目の指令に動揺していた。

「……統夜も来ましたね」

「はい。黒の指令書を受け取って飛んできました」

「指令は見ましたか？」

「いえ。ここで見るともりで来ました」

統夜は魔法衣の懐から魔導ライターを取り出すと、黒の指令書を燃やし、指令の内容を確認した。

「……強大な力を持つホラーが復活する兆しあり。直ちに復活を阻止し、それを企みし闇に堕ちた騎士を殲滅せよ」

統夜が指令を読み上げると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

「……強大な力を持つホラー……ですか？」

「はい。この桜ヶ丘にそのホラーを封印した魔獣の牙があるのですが、それが昨晚、何者かに奪われました」

「!ま、まさかそんな……」

「残念ながら事実です。魔獣の牙を守っていた4人の魔戒法師は皆やられてしまいました」

「まさか、魔獣の牙を奪ったのは……」

「ええ。闇に堕ちた魔戒騎士と見て間違いないでしょう」

「……」

統夜の両親は共に闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師を討伐する仕事をしていた。

統夜にも同じ仕事に来たのは月影家の定めなのかと思ってしまった。

「どちらにせよその闇に堕ちた魔戒騎士とは接触せねばなるまい。奴が魔獣の牙を持っているのなら奪い返さなければいけないからな」

「大輝の言う通りです。あの牙はグオルブと呼ばれる強大なホラーを封じたものです。グオルブが復活すれば、恐ろしいことが起きるでしょう」

『何?!グオルブだ?!』

「イルバ、知っているのか?」

『グオルブというのは「メシアの腕」とも呼ばれているホラーで、並の魔戒騎士では束に

なっても敵わないほどの力を持つとんでもないホラーだ。もし奴が復活したならば今の戦力では勝ち目はない』

「！メシアの腕……だと!？」

メシアというホラーはホラーの始祖と呼ばれたホラーであり、とても強大な力を持つホラーであつたが、牙狼の称号をもつ冴島鋼牙によつて討伐された。

イルバの説明でグオルブと呼ばれるホラーがどれだけの力を持っているかを理解し、統夜は驚きを隠せなかつた。

「最悪の状況に備え、黄金騎士と銀牙騎士に応援を要請しています。ですが、彼らの到着はまだわかりません」

「！鋼牙さんと零さんも来てくれるのか?……ということは今回はそれだけやばい敵だつてことだよな……」

統夜は鋼牙と零が応援に来ることを知り、それだけグオルブや闇に堕ちた魔戒騎士の存在を元老院が重く受け止めているのではないかと推察していた。

「……統夜、大輝。大変ではありますが、布道レオもいます。3人で力を合わせてグオルブの牙を奪つた魔戒騎士を見つけて殲滅し、グオルブの牙を取り戻してください」

「はい！お任せください、イレズ様！」

「全力を尽くします！」

大輝と統夜はイレスに深々と頭を下げ、指令を受領した。その時だった。

「……すいません、遅くなりました」

レオが番犬所の中に入ってきた。

「レオ、来ましたね。ところで例の準備はどうですか？」

「はい、もう間もなく終わります」

レオはレオでイレスから別命を受けており、そちらの方は順調に事を進めていた。

「そうですか。レオはそちらの作業を速やかに終わらせて、終了次第統夜と合流し、共に闇に堕ちた魔戒騎士の捜索をして下さい」

「わかりました。任せてください」

レオも自分の指令を受領した。

こうして統夜、大輝、レオの3人は番犬所を後にすると、それぞれ別行動で動き始めた。

統夜は桜ヶ丘の街の方を北上していた。

「……イルバ、どうだ？」

『今のところは怪しい気配はない。これは気を引き締めて探す必要があるそうだ』

統夜とイルバは未だ闇に堕ちた魔戒騎士を発見出来ずにいた。

しかし……。

『……！統夜！ホラーの気配だ！』

「くそっ！こんな時にホラーか！」

『闇に堕ちた魔戒騎士を探す必要があるが、ホラーは捨て置けんからな。しかもここから近いぞ』

「ああ、わかった！」

統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラーを探すことにした。

統夜がホラー搜索を始める少し前、長い金色の髪に青い瞳の少女が街を歩いていた。

彼女は外国人でもハーフでもなく、純粋な日本人であった。

その少女……斉藤董（さいとうすみれ）は頼まれていた使いの仕事を終わらせて家に帰る途中だった。

董は実は紬の家で使用人として働いており、父は琴吹家に仕える執事である。

「ああ……遅くなっちゃった……。早く帰らないと……」

お使いが思った以上に時間がかかってしまい、帰りが遅くなってしまった。

董は急ぎ足でいつもの帰り道を歩いていたのだが、この日は何故か人が全くおらず、外の雰囲気にも気味ささえ感じていた。

「何か不気味だなあ……。いつもはこんなんじゃないのに……」

董はいつもと違う帰り道の雰囲気になんか少しだけ怯えていた。

その怖さを振り切って帰ろうと思ったその時だった。

——キシアアアアアアア!

突然奇妙な鳴き声が聞こえたと思ったたらこの世のものとは思えない怪物が董の前に現れた。

「ヒツ!? な、何!?!」

董は見たこともない怪物を目の当たりにして恐怖に怯えていた。

このままではいけないそう思って逃げようとしたが、恐怖で足がすくんで思うように逃げる事が出来なかった。

「……え? ど、どうして……?」

そうしているうちにも怪物は董に迫っていた。

(怖い……怖いよ……お姉ちゃん……お父さん……助けて……！)

董は目を閉じ、助けが来る事を祈っていた。

その時だった。

董の目の前に赤いコートの少年が現れると、その怪物を蹴りで吹き飛ばした。

「え……？」

董は目の前の少年の存在に驚いていた。

まさか本当に助けが来てくれるとは思っていなかったからだ。

「君……大丈夫か？」

その少年……統夜は怪物……ホラーを蹴りで吹き飛ばすと、魔戒剣を抜いて、構えた。

「え!? け、剣!?!」

統夜が手に持っている魔戒剣を見て董は目を丸くしていた。

このご時世剣を持っている人間なんていないからである。

董は驚きながら統夜のことを見るが、その佇まいと赤いコートに見覚えがあった。

(あれ? この人つてもしかしてお姉ちゃんの……)

「……君、早く逃げろ!」

統夜は董に逃げるよう告げると、ホラーめがけて突撃していた。

董は統夜の言葉を聞いてすぐさまその場から逃げ出したのであった。

『統夜、こいつはただの素体ホラーみたいだ』

「闇に堕ちた魔戒騎士を探さなきゃいけないんだ……。こんなところで時間を食うわけにはいかない！」

ホラーめがけて突撃した統夜はホラーを蹴りによる一撃で吹き飛ばすと

魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれた統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

統夜は奏狼の鎧を召還してすぐに皇輝剣を一閃し、ホラーを一撃で斬り裂き、葬った。

断末魔をあげながら素体ホラーは消滅した。統夜は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「……イルバ、他のホラーの気配はないな？」

『ああ。今のところはホラーの気配はないぜ』

「早く例の魔戒騎士を見つけなきゃいけないんだ……。急がないと」

統夜はすぐさまその場から離れると、再び闇に堕ちた魔戒騎士の搜索を再開した。

※※※

ちようどその頃、桜ヶ丘郊外を中心に捜索を行っていた大輝であったが、こちらもめばしい成果はなかった。

大輝はグオルブの牙が封印されていた洞窟にも行ってみたのだが、こちらも人の姿はなかった。

(やはりここにいないわけではないよな……。今度は町の方を探してみるか……)

大輝は桜ヶ丘郊外の捜索を諦め、町の方へ移動しようとしたその時だった。

「ククク……貴様が探しているのはこの私か？」

大輝の目の前に突然フードを被った謎の男が現れた。

「貴様か……！魔獣の牙を持ち去った魔戒騎士というのは！」

大輝は魔戒剣を抜くと、男を睨みつけた。

「いかにも……。だが、私をただの魔戒騎士と一緒にされては困る」

「闇に堕ちたから俺たちとは違うって言いたいのか？」

「フン、私はそこらの欲に溺れた連中とは違う……。私は、暗黒の力を得ているのだから……」

「!?ま、まさか貴様……!!」

大輝は暗黒という言葉を聞いて、男が何者なのかある程度検討がついたのであった。

「貴様のような称号も持たぬ雑魚など私の敵ではない」

「くっ!なめるなあ!!」

大輝は怒りに震えながら魔戒剣を一閃するが、男はその攻撃を鞘に納まったままの剣で受け止めた。

「な!」

「フン。貴様など剣を抜くまでもない」

男は蹴りを放って大輝を吹き飛ばした。

「鎧を召還したければするがいい。そうしても貴様など私の敵ではないのだからな」
「人をなめるのも……大概にしろ!!」

大輝は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、大輝は鋼の鎧を身に纏った。

「貴様を斬って魔獣の牙を取り戻す!」

「貴様にそれが出来るかな?」

男は終始大輝への挑発をやめなかった。

「貴様あ!!」

大輝は変化した魔戒剣を構え、男に攻撃をしかけた。男は迫り来る大輝を見ながら笑みを浮かべていた。

※※※

ちょうどその頃、ホラーを討伐した統夜は町をくまなく搜索していた。

「くそつ、街中にはいないな…」

『だとしたら郊外の可能性がありそうだな』

統夜は街中の搜索を一時中断し、郊外の方を搜索しようとしていた。

その時……。

「統夜君!!」

番犬所からの仕事を終わらせたレオが統夜と合流した。

「レオさん、仕事の方は終わったんですか?」

「はい。だからこの後は統夜君と行動を共にします!」

「よろしくお願いします。……とりあえず街中には例の騎士はいなさそうだから郊外の方を探そうと考えていました」

統夜から近況報告を聞いたレオはうーんと考え事をしていた。

「統夜君、一度グオルブの牙が封印された洞窟に行ってみませんか？」

「え？それってその洞窟周辺に潜伏してる可能性があるってことですか？」

「はい。その男は大きなことを企んでいるんです。そうそう遠くには移動しないのではないかと僕は思っています」

「それは一理ありますね。そしたらそこに行ってみましょう」

こうして2人はグオルブの牙が封印された洞窟へ一度行ってみることにした。

そして2人が洞窟に到着すると……。

「うっ……くっ……」

2人が目にしたのは血だらけの状態で倒れている大輝であった。

「！だ、大輝さん！」

統夜とレオは大輝に駆け寄った。

「大輝さん！大丈夫ですか？」

「統夜……レオ……。気を付けろ……あいつは……普通……じゃない……」

大輝はこう告げると意識を失ってしまった。

「大輝さん！」

「統夜君、傷はひどいですが、気を失ってるだけです。命に別状はありません」

「だとしたら一度治療しないといけないですね」

『……統夜。残念ながらその暇はないようだぜ』

「えっ？」

イルバは何者かの存在を察知していた。

「ほお、魔導輪はそれなりに優秀みたいだな」

統夜とレオの目の前に現れたのは、フードを被った謎の男であった。

(……こいつ、今まで戦ってきたやつらとは格が違う……！)

統夜はその佇まいから男が只者ではないとすぐに察しがついた。

「初めましてだな。月影統夜……いや、白銀騎士奏狼！」

男は統夜の名前だけではなく、統夜の称号までも知っていた。

「貴様！どうして俺の名前だけじゃなく、称号まで知ってるんだ！」

「ククク……。知っているさ……。この街を守る魔戒騎士さんだからな！」

統夜は男の不遜な態度に戦慄さえ覚えていた。

こうして統夜はグオルブの牙を奪った男と対峙していた。

統夜と男の邂逅はこれから起こる戦いの序章に過ぎなかった……。

……続く。

——次回予告——

『おいおい、こいつは驚いたな。どうやら俺たちが倒すべきなのはこの男だけじゃないうようだ。次回、「混沌」。統夜、油断するなよ！』

第19話 「混沌」

強大な力を持つ魔獣、グオルブの牙を奪った闇に堕ちた魔戒騎士を探すため、統夜たちは行動を開始した。

統夜は途中ホラーと遭遇するが難なく撃退し、レオと合流。2人はグオルブの牙が封印されていた洞窟へ向かった。

そこで2人が見たものは何者かに襲撃され、重傷を負った大輝の姿だった。

大輝の治療のため番犬所に戻ろうとするが、そんな統夜とレオの目の前に現れたのは、フードを被った謎の男であった。

(……いこいつ、今まで戦ってきたやつらとは格が違う……！)

統夜はその佇まいから男が只者ではないとすぐに察しがついた。

「初めましてだな。月影統夜……いや、白銀騎士奏狼！」

男は統夜の名前だけではなく、統夜の称号までも知っていた。

「貴様！……どうして俺の名前だけじゃなく、称号まで知ってるんだ！」

「ククク……。知っているさ……。貴様はこの街を守る魔戒騎士だからな！」

統夜は男の不遜な態度に戦慄さえ覚えていた。

「それにしても貴様のような子供が魔戒騎士とはな……。魔戒騎士というのも随分と人手不足なんだな」

「黙れ！俺はこの剣に認められて魔戒騎士になったんだ！お前も魔戒騎士ならわかるだろっ？」

「フン、今の私は魔戒騎士ではない。貴様らも聞いているのだろうか？私のことを」

「闇に堕ちた……。魔戒騎士……」

「そう。そして私はそれだけではない。暗黒の力を手に入れたのだ」

「！あ、暗黒の……。力だと!？」

「お、お前も……。暗黒騎士だということのか!？」

統夜とレオは暗黒騎士の力を手に入れた者の存在を知っていた。

レオは鋼牙からその話を聞いていたのだが、統夜にとって暗黒騎士は実の父を殺めた憎むべき相手でもあった。

「ほう？知っているのか？私以外の暗黒騎士の存在を」

「忘れるかよ！暗黒騎士呀（キバ）……。俺の父さんを殺した男のことを！」

統夜は怒りに満ちた表情で男を睨みつけていた。

「お前の父……。月影龍夜のことか。あいつは己の力量も計れず暗黒騎士に挑み犬死にした哀れな騎士だったな」

なぜこの男が統夜の父龍夜のことを知っているのか疑問だった。

しかし、今の統夜にはそのようなことを考える余裕はなかった。

龍夜のことをバカにするような言葉を聞いた瞬間、統夜の中で何かが切れてしまった。

「貴様ああああああ!!!」

「統夜君！駄目です！」

統夜はレオの制止も聞かずに魔戒剣を抜くと、男目掛けて突撃した。

「父親を悪く言われて頭に血がのぼるか……。まだまだ未熟だな」

男は統夜の攻撃を避ける素振りを見せなかった。

それどころか統夜が魔戒剣を一閃する前に統夜の顔面にパンチをお見舞いし、統夜を吹き飛ばした。

「ぐう………！」

「統夜君！」

「今の貴様など、剣を使う価値もない」

男は冷酷な目で統夜を睨みつけた。

「な……何だと!?!」

統夜は再び魔戒剣を構え、男を睨みつけた。

「だったら……嫌でも剣を抜かせてやるよ！」

統夜は再び男に攻撃をしかけるが、男は無駄のない動きで統夜の攻撃をすべてかわし、反撃でパンチやキックなどを放っていた。

『統夜！冷静になれ!!今の状態では倒せる者も倒せないぞ』

「うるさい!!」

統夜はイルバの制止すら一切聞いていない状態だった。

「やれやれ……。本当にこんなガキが魔戒騎士とはな」

男は怒りに任せて攻撃をしかける統夜に心底呆れていた。

「統夜君！援護します！」

このままでは統夜が危ないと判断したレオは魔戒剣を抜き、統夜の援護に入った。

「貴様は閃光騎士狼怒か。あの布道シグマの弟のようだな。力もないくせに魔戒騎士を滅ぼすなど無謀をほざいた奴だったな」

男は統夜の時のように身内を馬鹿にした発言をしていたが……。

「僕はお前の挑発など受けない！」

レオは一切感情を乱すことなく男に斬りかかった。

「ほお、貴様の精神力はなかなかのようだ。そこのガキとは大違いだ」

「黙れえ!!」

統夜の何度目かの一閃が男を捉えていた。

しかし……。

「ほお、まぐれ当りとはいえ、私に剣を使わせるとはな……」

男は魔戒剣を取り出すと、それで統夜の攻撃を受け止めた。

そして間髪入れずに衝撃波を放ち、統夜とレオを吹き飛ばした。

「ぐあつ！」

「くっ……！」

『レオ、無事かい？』

「大丈夫だよ、エルヴァ。この程度、何てことはない」

レオは男の衝撃波を受けてもまだ戦闘には支障がない状態だった。

それは統夜も同様なのだが……。

『統夜！いい加減冷静になれ！このままじゃお前が死ぬぞ！』

イルバが統夜を叱責すると、統夜はようやく目が覚めたようだった。

「そうだな……。相手は強敵なんだ。冷静にならなきゃ勝てないよな」

『フン、感情に左右されおつて。これは戦いが終わったら駄目出しどころか説教が必要だな』

「ああ、こいつを倒したらそれはゆつくり聞かせてもらおう」

統夜は先ほどとは違い、まっすぐな瞳で男を睨みつけていた。

「ほお、ようやくくらしくなったようだな。……いいだろう。今回は挨拶なんだ。私の力を見せてやる」

男はフード付きのコートを脱ぎ捨てると、魔戒剣を抜き、構えた。

男は銀色の長い髪に紅の瞳の青年で、紺のコートを羽織っていた。

「自己紹介がまだだったな……。私の名はディオス……。そして……」

男は自らの事をディオスと名乗っていた。

ディオスは黒のコートの懐から取り出したのは黒く丸い形をした盾だった。

ディオスは剣を装着してした盾を共鳴させると剣を正面に突きつけた。

すると、ディオスの前方に大きな空間が出現すると、そこから光が放たれてディオスはその光に包まれた。

そしてディオスは漆黒の鎧を身に纏った。

「……!!?あの盾は……!!」

統夜はディオスが身につけている盾に見覚えがあった。

そしてそんな統夜の脳裏に浮かんできたのは、母である明日菜を襲撃し、その命を奪った漆黒の鎧の騎士だった。

統夜の目の前にその漆黒の騎士が姿を見せていた。

『あいつは混沌騎士ゼクスか。もうその系譜は途絶えたと聞いていたんだが』
イルバは目の前の鎧のことを知っていた。

「混沌騎士？それはもう過去の名だ……。今の私は……。暗黒騎士ゼクスだ！」

ディオスは自らのことを暗黒騎士ゼクスと名乗っていた。

混沌騎士ゼクスとはディオスがまだ暗黒騎士になる前の彼の魔戒騎士としての名前だった。

しかし、ディオスは闇の力に魅入られてしまい、暗黒騎士の力を手に入れた。

統夜は怒りに満ちた表情で漆黒の鎧を睨みつけていた。

「……統夜君？」

「貴様か……。貴様が母さんを殺したのか!!」

「!!」

レオは統夜の言葉で事情を理解した。

統夜の母明日菜は漆黒の鎧の騎士に殺されたという話はレオも統夜から直接話を聞いていた。

その話が本当であれば明日菜を殺したのは目の前にいるこの漆黒の騎士ということになる。

「いかにも。あの女は私が殺した」

「何故だ!!何故母さんを殺したんだ!!」

「あの女は私のような人間を討伐する者だからな。私がこの力を手に入れたことを番犬所や元老院に知られては困るから始末したんだよ」

「それならどうしてあの時俺を見逃したんだ?」

「それ以上の問答は意味をなさない。貴様も魔戒騎士なら剣で聞くんだな」

「……っ!!貴様だけは絶対に許さねえ!!」

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「はああああああああああああ!!!」

統夜は全身に力を込めて皇輝剣を振るうが、それをいとも簡単に防がれてしまった。

「!馬鹿な……!!!」

「弱い。貴様のようなやつが魔戒騎士とはな……」

「こ、このお……!!!」

ディオスは盾で統夜の皇輝剣を防いでいたのだが、盾を前に押し出すだけで統夜を吹き飛ばした。

「くっ……」

「どうした?かかって来い。それとも貴様の實力はその程度か?」

「ぐっ……まだだ！」

統夜は再び皇輝剣を振るうが、今度は軽々と攻撃をかわされてしまった。

「フン、攻撃が素直すぎる。やはり子供だな」

「なめるなあ!!」

統夜は皇輝剣の刃に赤い魔導火の炎を当てると、烈火炎装を発動した。

「ほお、烈火炎装か。それを使えるということはそれなりの実力はあるということか。だが、烈火炎装を使えるのは貴様だけではない!!」

ディオスはそう言うと言ったと変化した魔戒剣の切っ先に触れるとそこから紫色の魔導火が放たれ、剣の切っ先は紫の炎に包まれた。

「!? 貴様も烈火炎装を!」

統夜は暗黒騎士であるディオスが烈火炎装を使えるとは思っていなかった?

「だけど、負けるかあ!!」

統夜とディオスは同時に剣を振るうが、そのパワーはディオスが圧倒していた。

「ぐあああああああ!!」

ディオスの力に競り負けた統夜はそのまま近くの柱に叩きつけられてしまい、その衝撃で奏狼の鎧は解除されてしまった。

「統夜君!!」

レオは魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、レオは狼怒の鎧を見に纏い、ディオスに向かっていった。

「……………フン」

ディオスは邪気を圧縮した波動弾をレオ目掛けて放った。

「!?」

レオは魔戒剣で受け止めようとするが、そのパワーは圧倒的であり、レオは統夜の叩きつけられた柱とは別の柱に叩きつけられた。

その衝撃で、レオの狼怒の鎧が解除されてしまった。

「くっ……………!」

レオはそれでも立ち上がり、ディオスを睨みつけた。

「ほお、鎧が解除される程の衝撃でも何ともないとは……………。さすがに様々な修羅場をくぐっただけはあるな」

ディオスは素直にレオの頑丈さを認めていた。

「くっ……………!俺だって……………!」

ディオスの烈火炎装の一撃を受けてボロボロのはずの統夜がゆっくりと立ち上がった。

「ほお、あれだけのダメージで動けるとは、お前も思ったよりはやるじゃないか」
「このお!!」

統夜は魔戒剣を手に、再びディオスに向かっていった。

「統夜君!無茶です!」

レオは統夜を制止するが、統夜はそれを聞かなかった。

「ほお、ガッツもなかなか……」

ディオスはあえて攻撃をかわさず受け止めようとしていた。

統夜が魔戒剣を一閃したその時だった。

ディオスの目の前に魔戒騎士の鎧のような姿のホラーが現れ、統夜の攻撃を受け止めた。

「!?ホラーだと!?」

『バカな!ホラーの気配はしなかったぞ!』

「……」

ホラーは何も語らず統夜を吹き飛ばした。

「ぐあつ!」

吹き飛ばされた統夜は再び立ち上がろうとするが、すでに体力は限界であり、立ち上がることは出来なかった。

「……ディオス様。このような小物相手に戯れはおやめ下さい」

乱入してきたホラーはただのホラーではなく、ディオスに忠誠を誓っていた。

「フツ……そうだな。挨拶のつもりが思わずはしゃいでしまったよ」

こう言ったディオスは鎧を解除し、魔戒剣を鞘に納めた。

それを見たホラーは人間態に姿を変えた。

人間態を見た統夜は驚きを隠せなかった。

なぜならば……。

「ーそ、そんな……ダンテ……さん!?あなたが……ホラーだなんて……」

そのホラーの正体は、統夜の父、月影龍夜の親友であり、統夜の母と共に統夜に修行をつけてくれていた魔戒騎士ダンテであった。

ダンテは統夜の母、明日菜が殺されてすぐに行方不明になっていた。

そのダンテがホラーとなって統夜の目の前に現れたことが統夜には信じられなかった。

「……俺は貴様の知るダンテではない。俺はディオス様に忠誠を誓う騎士。それ以上でもそれ以下でもない」

「そ、そんな……!」

統夜はダンテの変わりように怒りではなく絶望が支配していた。

「とりあえず今回は挨拶程度だからこの辺にしておいてやる」

「な、何だと……………」

「月影統夜、また会おう。今度会う時はこの私を楽しませてくれよ」

こう言い残してディオスとダンテは何処かへと姿を消した。

「く、くそ……………！待ちやがれ……………！」

統夜は立ち上がろうとするが、力尽きてしまい、そのまま気を失ってしまった。

「統夜君！大丈夫ですか!？」

統夜の受けたダメージはかなりのものであったが、命に別条はなかった。

「統夜君も大輝さんも一度どこかへ運ばないと……………」

レオは手負いの2人を連れて行こうとしたが、1人ではどうすることも出来なかった。

レオは迷った末に唯たちの手を借りることにした。

ポケットから携帯を取り出したレオは唯たち一人一人に事情を説明し、応援を要請した。

唯たちはレオから伝えられた言葉に驚きながらもレオの指定した場所へ向かうことを了承した。

5人全員に電話を済ませたレオは統夜と大輝を抱えながら5人と待ち合わせをして

いる場所まで急いだ。

※※※

レオが5人に電話をしてから30分が経過し、唯たちが合流したのだが……。

「……!!やーくん!!」

「統夜!!」

「統夜君!」

「統夜先輩!!」

唯たちはボロボロの統夜の姿を目の当たりにして息を飲んでいた。

「レオ先生!やーくんは大丈夫なんですか!!?」

「ええ。今は気を失ってるだけで命に別条はありません」

「そうですか……良かった……」

統夜が無事とわかり、唯たちは安堵していた。

「レオ先生、一体何があつたんですか？統夜だけじゃなくてこの人もひどい怪我じゃないですか！」

「僕たちはとても強大なホラーを復活させようとしている魔戒騎士と接触したのですが、その力は凄まじく僕たちは敵いませんでした」

「え!?レオ先生もやーくんも敵わなかつたんですか？」

「ええ。悔しいですが……」

レオは険しい表情をしており、自分の力不足を悔やんでいた。

「色々気になることはあるけどさ、まずは2人を休ませるのと治療が先だろ？」

「ああ、律の言う通りだな」

「この先に車を止めているわ。とりあえず2人を車に運びましょう」

レオは唯たちの協力を得て、傷だらけの統夜と大輝をリムジンまで運んだ。

「お嬢様、この方々はどうなされたのですか!？」

紬が戻ってくるのを待っていた執事の斉藤は、紬たちが怪我人を連れてきたことに驚いていた。

「斉藤、この2人は怪我をしているの。早く車の中へ」

「か、かしこまりました」

こうして続夜と大輝をリムジンに乗せると、唯たちもリムジンに乗り込んだ。

「紬お嬢様、彼らは琴吹の病院へお連れ致しましょうか？」

「そうね。ウチの病院であれば、秘密は守られるわ。斉藤、琴吹総合病院へ向かってちやうだい」

「かしこまりました！」

斉藤はリムジンを走らせると、紬の親が経営している琴吹総合病院へ向かった。

※※※

その頃、桜ヶ丘某所の廃ビルにディオスとダンテは潜伏していた。

「……ディオス様。例の魔戒騎士共はある病院に向かっていているようです」

「そうか。奴らはずいぶんとしぶとい連中のようだな」

「全くです。ですが、最近の魔戒騎士はずいぶんと弱くなりましたな」

「ハハ、元魔戒騎士のお前もそう思うか？私もそれは思っていた」

「やはり、闇の力こそが至高。それを知らぬ魔戒騎士など我らの敵ではありません」

「そうだな……」

「ディオスはダンテの言葉を肯定するが、なぜかディオスは浮かない表情をしていた。『？ディオス様、いかが致しました？』」

「ああ。実はな、あの小僧のことを考えていたんだよ」

「月影統夜……ですか？」

「最近の魔戒騎士は大したことないと思っていたが、あいつは油断できん。あの歳で魔戒騎士になっただけのことはある」

「ディオス様が気にかけるような奴ではありませんよ、あの子供は」

「ハハ、そう言うな。あいつは親友の子供なのだろう？」

「今の私は月影龍夜の親友でも何でもありません。あの男も所詮は闇を拒絶した男。相容れられる訳がありません」

「お前、ホラーではあるが、考え方はまるで暗黒騎士だな」

「お褒めの言葉、光栄です」

ダンテはディオスに深々と頭を下げた。

「どちらにせよ、グオルブを復活にはまだ時間がかかる。復活の時まで力を蓄えねばならないからな。その間に、もう一度月影統夜と相見えるつもりだ」

「何故なのですか？あのような小物など、ディオス様が構うほどではないかと」

「面白い余興を思いついたのでね。ダンテ、お前にも協力してもらおうぞ」
「はっ！ デイオス様のためならば」

「月影統夜……。あの男には致命的な弱点がある……。その致命的な弱点をついた時あの男はどうなるのか見ものだな……」

デイオスは統夜の弱点を突こうと画策していた。

統夜の弱点とは一体どのようなものか……？

それを知るデイオスは高笑いをしていたのであった。

※※※

負傷した統夜と大輝を乗せたりムジンが琴吹総合病院に到着した。

病院に到着するなり入り口でスタンバイしていた医師と看護師が統夜と大輝を専用の治療室へ連れて行った。

唯たちは2人の付き添いをしていたのだが、レオは一度番犬所に戻るとのことで病院に到着するなり番犬所へ戻って行った。

治療はすぐ行われたのだが、魔戒騎士の回復力は相当なものだったからか、治療らしい治療は行わず、応急処置程度の治療で済んだ。

治療を終えた統夜と大輝はVIP専用の病室へと運ばれ、2人は未だに目を覚まさないかった。

医師の見立てではすぐに目を覚ますだろうとのことだった。

唯たちは病室で統夜と大輝の看病を行っていた。

「やーくん……」

治療を受けて未だに目を覚まさない統夜を見て唯は泣きそうになっていた。

「それにしても統夜がここまでやられるなんて……」

「ああ……。今回戦った相手がそれだけ強かったってことだよ……」

律と滯は統夜がやられたというのが未だに信じられなかった。

「私たち、統夜君がホラーを倒すところしか見ていなかったものね……」

紬の言う通り、唯たちは幾度とホラーとの戦いを見たのだが、どれも全て統夜や鋼牙のような魔戒騎士がホラーを討伐するところしか見ていなかった。

「……統夜先輩……!」

梓も唯と同様に未だに目を覚まさない統夜を見て泣きそうになっていた。

唯たちがそれぞれ統夜と大輝の看病を行っていたその時だった。

「統夜さん！大丈夫ですか!？」

唯から事情を聞いた憂が病室に飛び込んできた。

「憂、しー、だよ」

憂の声が大きかったからか唯が憂のことをなだめていた。

「あ、ごめんなさい。統夜さんの話を聞いたら居ても立つても居られなくて……」

憂は唯になだめられ、しゅんとしていた。

（おお、唯先輩がちゃんとお姉ちゃんしてるー）

普段は姉らしいことをしていない唯をよく知っている梓は驚きを隠せなかった。

それは、唯と1年以上の付き合いがある律、漣、紬も同様であった。

「あつ、お姉ちゃん。これ、お弁当を作ってきたの。統夜さんが目覚めたらみんなで食べようと思って」

憂はレオから電話が来た時点で統夜のことを聞いていたのだが、この弁当の準備をしていたら遅くなってしまい、合流が遅くなったのだ。

（（出来た子だ!!）（））

相変わらず優秀な憂に唯を除く4人は感心していた。

その時だった。

「うっ……うん……」

統夜の体にわずかの反応があった。

「やーくん!？」

「統夜先輩!？」

「お……俺は……それに……」

統夜の意識が完全に回復し、ゆっくりと起き上がった。

『やれやれ。ようやくお目覚めか、統夜?』

統夜が目覚めるなりイルバが口を開いた。

「イルバ……。俺はひよつとして……」

『ああ。コテンパンにやられたな。ボロボロだったお前と大輝を舐たちが病院まで運ん

だんだよ』

「え……?」

「ここで統夜はようやく唯たちの存在を知り、唯たちのことを見た。

「みんな……どうして……」

『やれやれ。あの後は大変だったんだぜ。レオー人じゃお前と大輝を運ぶのは無理だつ

たから仕方なく唯たちに応援を頼んだんだからな』

「レオさんは？」

『レオなら一度番犬所に戻ったぜ。恐らく今回の件を報告しに行ったのだろう』

「そっか……。みんなも、ありがとな。おかげで助かったよ」

統夜が笑顔を見せると、安心したのか唯の瞳から涙が溢れていた。

「やーくん!!」

唯は泣きながら統夜に抱きついた。

「ちよ、ゆ、唯？」

「やーくんの馬鹿！馬鹿馬鹿馬鹿！やーくんが怪我したって聞いてすごく心配したんだからね！」

唯はワンワン泣きながらも自分の思っていることを統夜に伝えた。

「……ああ、ごめんな、唯」

すると、それに続いて残りの5人も一斉に統夜に抱きついてきた。

「ちよ……！病み上がりにも6人はきついって……！」

「唯の言う通りだぞ！お前があんなに思い詰めてたから心配したんだからな！」

「私も怖かったんだぞ！このままお前が死んじゃうんじゃないかって！」

「あなたに無茶だけはして欲しくないのよ！」

「そうですよ！私たち、統夜先輩に死んで欲しくないんです!!」

「良かった！統夜さんが無事で本当に良かったです！」

5人も唯のように泣きながら自分の思ったことを統夜に伝えた。

（……みんなには悪いことをしたな。俺は母さんの仇を目の前に我を忘れてこのザマだからな……。俺の命は俺だけの物じゃない。俺が死ねばみんなが悲しむからな……）

統夜は魔戒騎士として無茶な戦いは出来ないと感じていた。

（だけど、ディオスとは決着をつけないといけない。あいつを倒さないと、魔戒騎士として未来はない。……俺は、魔戒騎士になれなかったみんなの思いも背負っているんだ）

それと共に統夜はディオスを倒さなくてはいけないと思っていた。

これからも魔戒騎士として人を守るために。

（だけど、今はみんなの気が済むまでこのままでいよう……）

統夜は目を閉じると、6人が泣き止むまで現状を維持することにした。

そんな中で……。

「何だ……騒々しい……」

統夜同様に意識を失っていた大輝が目を覚ました。

目を覚ました大輝が目にしたものは……。

「……い、何じゃこりゃあ!!」

6人の少女に抱きつかれ、まんざらでもなさそうにしている統夜だった。

大輝が目を覚ましたことに全員が気付くと、6人は一斉に泣き止み、統夜から離れた。「統夜……。これは一体どういうことなんだ？」

「ああ……。これは……。その……」

「レオさんに頼まれたんです！怪我をした2人を介抱するために協力してほしいと。それで、私の親が経営している病院で2人の治療をしたんです」

「俺が聞いているのはそういうことじゃない！何で統夜は年頃の女の子に抱きつかれてまんざらでもなさそうにしているんだ!!」

「あー、そこですか？えつと……」

統夜は端から見たら異常な出来事についてどう言い訳をすべきか考えていた。

「抱きついたのは私たちからです！統夜君が無事だったのが嬉しくてつい……」

大輝の問いを紬が代わりに説明した。

「……まあ、事情はわかった。かなり解せぬがな」

どうやら大輝は渋々ながらも事情を理解しようだった。

こうして統夜と大輝はディオスとの戦いで負傷したものの、その回復力と医師の応急処置で回復したのであった。

※※※

その頃、琴吹総合病院の近くに2人の男が立っていた。

「……どうやら、月影統夜と桐島大輝が目を覚ましたようです」

「ほお、もう回復したのか。魔戒騎士の回復力はなかなかだな」

ディオスは素直に魔戒騎士の傷の治りの早さに感心していた。

「だが、これで楽しい余興を始められそうだ……」

ディオスは余興として統夜の弱点を突くことを画策しており、統夜が目を覚ましたことでその準備が整いつつあった。

ディオスは怪しげな笑みを浮かべて病院を眺めていたのであった。

……続く。

次回予告

『あの男……。一体何を企んでやがるんだ。やめろ統夜！怒りに心を任せるな！次回、「心滅」。猛り狂う獣の咆哮』

第20話 「心滅」

強大な力を持つ魔獣、グオルブの牙が闇に堕ちた魔戒騎士、ディオスに奪われ、統夜と大輝、レオの3人はその奪還の任を受けていた。

3人はディオスと遭遇。グオルブの牙を奪い返すために戦いを挑むが、暗黒騎士となったディオスの圧倒的な力に敵わず、統夜と大輝は重傷を負ってしまった。

レオは唯たちに協力を要請し、駆けつけた彼女たちとともに統夜と大輝は紬の親が経営をしている琴吹総合病院へ搬送された。

魔戒騎士であるが故にその回復力は高く、2人はその日のうちに目を覚ました。

2人が琴吹総合病院で眠っている頃、レオは番犬所へ戻ってきていた。

「……レオ、どうしたのですか？」

「イレス様、報告しなければいけないことがありまして……」

「報告……ですか？」

「ええ。僕たちはグオルブの牙を奪った男と遭遇しました」

「そうなのですか？」

レオの報告にイレスは驚いていた。

「はい。その男は……渾沌騎士ゼクスの称号を持っていたディオスという男でした」

「渾沌騎士ゼクス……。かつてはこの紅の番犬所所属の騎士でしたが、その系譜は途絶え、ディオスという男は行方不明になっていると聞いています」

イレスの言う通り、ディオスはかつてこの紅の番犬所に所属していた。

しかし、闇の力に心を奪われてしまい、行方不明となり、その系譜は途絶えてしまつた。

「彼は今暗黒騎士ゼクスと名乗り、僕たちに立ちはだかりました。その圧倒的な力に僕たちは歯が立ちませんでした」

「それで……統夜と大輝はどうしたのですか？」

「2人は暗黒騎士にやられ、重傷を負いましたが、今は琴吹総合病院にいます」

「琴吹総合病院……ですか？」

「はい。例の少女たちに協力してもらったんです。あそこならば秘密は守られると」

「なるほど……。今回の件に彼女たちを巻き込みたくありませんでしたが、仕方ないです
すね」

イレスは状況が悪いということから唯たちの協力は仕方ないと感じていた。

「ここに来る前に連絡がありました。統夜君も大輝さんもじきに目を覚ますとのこと
です」

「魔戒騎士の回復力は普通の人間を越えますからね……」

「はい。ですが、再びディオスとは戦わなければいけないでしょう。魔獣の牙を取り戻すために」

「そうですね……。現在黄金騎士と銀牙騎士がこの桜ヶ丘に向かっていると聞いています。恐らく今日の夜には到着するでしょう」

「……後、もう1つ報告があります」

「?何でしょう?」

「ディオスには仲間が1人いたのですが、そいつはホラーとなってしまうた魔戒騎士だったのです」

「!?それは本当ですか!?!」

レオのもう1つの報告にもイレスは驚いていた。

「……そいつはダンテという名前でした」

「!ダンテ!?レオ、それは本当なのですか?」

「え、ええ……」

「その男は剛風騎士ダンテ。かつて統夜の父、月影龍夜と共にこの番犬所所属の魔戒騎士としてホラーから人々を守っていましたが、統夜の母、明日菜が死んだ後に行方不明になったのです」

ディオスと共にいた男は剛風騎士ダンテの称号を持つ男だった。

しかし、彼は統夜の母の死後行方不明になり、ホラーとなって統夜たちの目の前に現れたのだ。

「なるほど……。統夜君にとっても大切な人だったのですね……」

レオは、ダンテが統夜の目の前に現れた時、何故統夜があそこまで動揺していたのかを理解した。

「……レオ、2人が到着したら再びディオスの元へ向かい、グオルブの牙を取り戻すので
す」

「はい、お任せください」

レオはイレスに深々と頭を下げると、番犬所を後にして、統夜と大輝のいる琴吹総合病院へ向かった。

※※※

統夜と大輝が目を覚ましたのは、病院に運ばれてから1時間ほど経ってからだった。統夜が先に目覚め、唯たちがそのことを喜び抱きついたタイミングで大輝が目覚めってしまった。

そのことを問い詰める大輝であったが、統夜と紬が弁解をしていた。

その弁解に大輝は渋々ではあるが、納得していた。

統夜たちが目を覚ました時間が夜遅くであったため、紬の計らいで唯たちも統夜と共にこの病院に泊まることになった。

唯たちはこの時に大輝が統夜と同じ紅の番犬所所属の魔戒騎士であり、統夜が学校に行っている間にエレメント浄化を行っていることを知った。

大輝のおかげで統夜は学校も部活も行けるので唯たちは大輝に感謝の言葉を述べるが、大輝はそれが照れ臭かったのか素っ気ない態度を取っていた。

統夜と大輝は今いる部屋で寝ることになり、唯たちは隣の部屋で寝ることになった。

翌日の朝、憂が持って来た弁当を朝食として取った。

この日は学校は休みだったので、唯たちは午前中は統夜と共に過ごし、12時になる

前に唯たちは一度帰宅することになり、病院を後にした。

その帰り道だった……。

「お前たちが月影統夜と同じ軽音部とやらか？」

暗黒騎士ゼクスことディオスが唯たちの前に現れた。

「あ、あなた……もしかして……」

梓は強大な力を持つホラーを復活させようとしている魔戒騎士がいるというレオの言葉を思い出していた。

「なんだ。月影統夜から話を聞いていたのか？だとしたら話は早い」

「あ、あたしたちをどうするつもりなんだ！」

「何、大人しく私についてきてくれれば手荒な真似はしない」

こう語るディオスは怪しげな笑みを浮かべていた。

このままではいけない、逃げなくては。

唯たちの思考にこのような考えが浮かんだ。

「み、みんな！逃げるぞ!!」

律の号令で唯たちは逃げ出そうとした。

「愚かな……。この私から逃げられると思ったか？」

唯たちが走り出そうとしたその時、彼女たちの前にダンテが現れた。

「！！！！！！！！」

「貴様ら、大人しくしろ。ディオス様は手荒な真似は避けたいと仰っている」

ダンテが現れたせいで唯たちは逃げ出すことが出来なかった。

「何で私たちを捕まえようとするんだ？」

「決まっている。貴様らは月影統夜をおびき寄せための餌だ。だから殺しはしない」

「な、何でそんなこと！」

「貴様らは月影統夜の守るべき存在であると共に月影統夜の弱点でもある」

「弱点？」

「そうだ。貴様らの存在そのものがあの男の枷になるのだよ」

「そんなことない！統夜君は私たちだけじゃない！色んな人のために戦っているんだもの！」

紬は自分たちの存在そのものが統夜の弱点であると認めなかった。

それは他のみんなも同様であった。

「やれやれ……。大人しくついてくる気はないか……。仕方ない」

ディオスとダンテは素早い動きで憂を除く全員を気絶させた。

「お姉ちゃん！みなさん！！」

ディオスとダンテは気絶した5人を捕まえた。

「そのの女。貴様は月影統夜に伝えろ。この5人を助けたければ今日の夜に○△ビルまで来いとな。もし来なければ……わかるだろう？」

ディオスが指定したのは桜ヶ丘某所にある今は使われていないビルであった。

「そ、そんな……」

「ハハハハハ！それではな！」

ディオスとダンテがその場を立ち去ろうとしたその時だった。

「貴様は………！ディオス!!」

番犬所から病院に戻ろうとしていたレオが偶然エンカウントした。

「ほお、これはいいタイミングだ。そのの女！月影統夜にしっかり伝えることだ！わかったな？」

「待て!!」

レオは魔戒剣を抜き、ディオスに向かって行こうとするが、ディオスがテレポートを使ってその場からいなくなってしまった。

「くそっ………！逃げられたか………！」

レオは魔戒剣を鞘に納めた。

「………布道せんせえ………」

憂は泣きそうな表情でレオを見ていた。

「う、憂さん。どうしたんですか？」

「お、お姉ちゃんたちが…あの人たちに捕まったんです……」

「え!?それは本当ですか!？」

レオの問いに憂は無言で頷いていた。

「返して欲しければ、今日の夜に○△ビルに来て……。来なかったら、お姉ちゃんたちは……」

最後まで言わずとも統夜が姿を現さなければ、唯たちを殺すつもりだということはレオには察しがついていた。

「わかりました……。一度病院に戻りましょう!」

こうしてレオと憂は病院に戻るようになった。

「統夜君!大変です!」

レオはこう言いながら病室の中に入っていた。

「?レオさんどうしたんです?それに憂ちゃんも。唯たちと帰ったんじゃないのか?」

統夜がこう憂に問いかけると、憂は涙をポロポロと流して泣き出してしまった。

「グスツ……。ヒック……。統夜さあん……」

憂は泣いていて話が出来る状態ではなかった。

「……統夜君。実は、唯さんたちがディオスに捕まりました」

「！レオさん、それは本当ですか!?!」

「ええ。返して欲しければ今日の夜に○△ビルまで来いと」

「……………」

統夜は何も言わなかったが、怒りを露わにしていた。

「これは罠だな。俺たちを誘き寄せるための」

大輝は冷静にこう判断していた。

「そうですね。ですが、統夜君が姿を現さなければ、ディオスは躊躇なく唯さんたちを殺すでしょう」

「くっ……………！そういうことか!」

大輝は罠に乗る必要はないと考えていたが、レオの話聞いてその考えをやめた。

「……………あいつら……………!!唯たちまでも利用しようって言うのか!!」

統夜は今まで誰も見たことがなく、らい怒りを露わにしていた。

「統夜、奴はお前1人で来いとは言っていないんだ。だから俺たちも共に行こう」

「……………俺1人で行きます」

「統夜君！無茶です！統夜君1人では暗黒騎士に勝てません!」

「そうだとしてもだ!!」

統夜はひどい剣幕で怒鳴り散らしていた。

「と、統夜君……?」

レオはここまで統夜が怒っているところを初めて見ていた。

「統夜、いい加減にしろ! お前1人の力で何が出来る! 今俺たちがすべきなのはあの5人を奪還することだ。奴を倒すのはそれからだ!」

「……」

大輝は頭に血がのぼっている統夜をなだめるが、統夜は納得していなかった。

「とりあえず、今は体を休めましょう。今日の夜には鋼牙さんと零さんも到着します。それから○△ビルに向かって問題はないでしょう」

「黄金騎士と銀牙騎士が来るのか。だとしたらその方が良さそうだな」

大輝はレオの提案に賛同していた。

しかし……。

「……」

統夜は何も言わず、怒りだけを露わにしていた。

「統夜! 今は私情は捨てろ! 確実にあの5人を奪還するためなのだからな!」

「……はい」

統夜は渋々了承したフリをしていたが、納得はしていなかった。こうして統夜たちは唯たちを救うために鋼牙と零の到着を待つことにした。

※※※

そしてその夜、事件は起きた。

「……………統夜君、遅いですね……………」

鋼牙と零を待っていたレオたちであったが、統夜がトイレに行くに行つて30分以上経つが戻つて来なかった。

「……………まさか！統夜君、1人で!?!」

「くそっ！あの馬鹿!!」

統夜の暴挙に大輝は舌打ちをした。

「統夜さん……………」

一緒に病室で待つていた憂も不安げな表情を見せていた。

「と、とりあえず僕たちも行きましょう！鋼牙さんと零さんには連絡をいれておきます」
「わかった！」

こうしてレオと大輝は統夜を追うことにした。

「憂さん、あなたはここで待っていて下さい！」

「私も行きます！私じゃ何も出来ないけど、お姉ちゃんたちを放っておくわけにはいきませんから！」

「……仕方ないですね。それじゃあ僕の言うことを必ず守って下さいね」

「はい！」

こうして憂もレオと大輝についていくことになった。

そしてその頃、統夜はディオスが指定した○△ビルへ向かっていた。

その顔はまさに悪鬼のような表情で、それだけ統夜は怒りを露わにしていた。

『おい統夜！何を考えている！！一人で行くなんて無謀だ！！』

「……」

イルバは統夜をなだめるが、今の統夜にイルバの言葉は届かなかった。

統夜は歩みを止めることなく○△ビルへと向かっていた。

統夜が○△ビルへ向かっている頃、そよビルの入り口でディオスとダンテは統夜の到着を待っていた。

そして捕まってしまった唯たちはロープで縛り付けられている。

「さて……そろそろ月影統夜は現れるかな？」

ディオスは統夜が現れることを心待ちにしていた。

「おいーあたしたちをどうするつもりだよー」

律はディオスに向かってこう吠えながらジタバタと暴れていた。

「大人しくしている。月影統夜が現れさえすればお前たちは解放してやる」

ディオスは統夜が現れさえすればすぐにでも唯たちを解放するつもりでいた。

「月影統夜は必ず来る。あの男がお前たちのことを見捨てるわけがないからな。……

まあ、来なければ貴様らはホラーの餌になるだけだな」

ディオスもし統夜が来なければ唯たちをホラーの餌にするつもりだった。

「……まあ、1人で来いとは言っていないからあの2人も連れてくるとは思うがな」

「あなた……統夜先輩をどうするつもりですか!？」

「別にどうもしないさ。だが、あの男の弱点であるお前たちを人質に取られ、あいつはど
うなるのか……。見ものだからな」

「あなた……。それだけのために私たちを攫ったって言うの!？」

「これは余興だよ。ホラー、グオルブが復活するまでのな」

ディオスが唯たちを誘拐したのはグオルブ復活までの余興に過ぎなかった。

唯たちは統夜たちから具体的な話は聞いていないが、グオルブというのが強大な力を持つホラーの名前であることは察しがついていた。

「あなた……最低です!!」

梓はディオスに怒りをぶつけた。

「黙れ小娘。貴様などいつでも消せるということをおぼれるな」

ダンテはそんな梓を不愉快に思ったのか魔戒騎士時代に使っていた魔戒槍を取り出すと、梓に切っ先を向けた。

「ひっ!？」

梓はダンテに切っ先を向けられ、恐怖に怯えていた。

「ダンテ、よせ!ここでこの女を消しては意味がないだろうが」

「はっ、申し訳ありません……ディオス様……」

ダンテはディオスに謝罪をすると、手に持っていた槍をしまった。

この時唯たちは余計なことを言えば自分たちの身が危ないということを感じて、これ以上ディオスに言葉をぶつけることが出来なかった。

その時だった。

「……………来たか」

ディオスが統夜が来たことを察知すると、唯たちの目の前に統夜が現れた。

「やーくん!!」

「統夜!!」

「統夜君!!」

「統夜先輩!!」

唯たちが統夜の出現に喜んだのは一瞬だった。

「統夜……………先輩?」

統夜が普段見たことのない悪鬼のような表情をしていることにすぐ気づいていた。

「ほお、1人で来たか。そのことは褒めてやろう」

「そんなことはどうでもいい!唯たちは無事なんだろうな!」

統夜の言葉にも怒気が混じっていた。

「心配するな。今にでもこの女どもは解放してやるさ。……………それよりも……………」

ディオスはまじまじと統夜の顔を見ていた。

「いいねえ。最高だよ、月影統夜!すぐくギリギリしてるじゃないか!今のお前の目は

最高に綺麗で深い……………闇の色だ!」

「黙れ!!」

愉快そうに笑うディオスに統夜は剣幕で返していた。

「まあまあ、こいつらを解放してやるからそうかつかするなって。……ダンテ、こいつらを解放してやれ」

「ハッ、かしこまりました」

ダンテは唯たち一人一人のロープを解いて唯たちを解放した。

ディオスから解放された唯たちは逃げるように統夜に駆け寄った。

「お前……何が目的なんだ!!」

「何ってただの余興さ。グオルブが復活するまでのな!」

「ふざけるな!!そのために唯たちを誘拐したって言うのか!?!」

唯たちは解放されたのだが、統夜の怒りは収まらなかった。

「なあに、あいつらはお前をおびき寄せるための餌さ。お前は絶対に食いついてくると思っていたからな」

「貴様ああああああああああああああ!!」

統夜は魔戒剣を抜くと、ディオスめがけて突撃してきた。

「やれやれ、血の気の多い奴だ。……ダンテ、遊んでやれ」

「ハッ!」

統夜は魔戒剣を振るうが、それをダンテが魔戒槍で受け止めた。

『!!そいつは、魔戒槍!やはりお前さんはあのダンテか!』

「言つたはずだ。私は貴様らの知るダンテではないと」

ダンテは冷酷な眼差しでイルバの言葉を返すと、そのまま統夜を蹴りで吹き飛ばした。

「ぐう……………」

「やーくん!!大丈夫!?!」

唯たちは統夜に駆け寄ろうとするが……。

「どけ!!お前らにウロウロされたら邪魔だ!!」

怒りに心が支配されている統夜には唯たちに優しい言葉をかける余裕はなかった。

「やーくん……………」

「唯先輩。離れていきましょう……………」

「あずにゃん……………」

「私たちが近くにいたら統夜の邪魔になるから……………」

「みおちゃん……………」

梓も濡も統夜が怒りに心が支配されているということがわかっていたが、悲痛な面持ちで唯に離れるよう訴えていた。

そんな2人の気持ちも汲み取った唯は頷くと、統夜の邪魔をしないよう安全な場所まで下がり、統夜の戦いを見守っていた。

「おお、怖い怖い。そんなこと言っちゃって、あいつらが可哀想だな」

「黙れええええ!!」

統夜はディオスに向かっていくのだが、ダンテに妨害されてしまった。

「小僧! 貴様の相手は私だと言っているだろう!」

ダンテは魔戒槍を振るうが、それは統夜にかわされてしまった。

「どけ!! 貴様に構っている暇はない!!」

「貴様にはなくても私にはある!!」

ダンテは魔戒槍の棒の部分で振るうと、その一撃で統夜を吹き飛ばした。

「貴様を斬って……俺はあいつを倒す!!」

統夜は魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。

そして、そこから放たれる光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

そしてダンテは精神を集中させると、魔戒騎士の鎧を召還する円を空中に呼び出し、まるで魔戒騎士の鎧を身に纏ったかのようにホラー態へと姿を変えた。

『やはり……。初めて会った時は気付かなかったが、あの姿……ダンテの鎧だな』

ホラーとなったことでその形は変容したものの、イルバは目の前にいるホラーがダン

テの魔戒騎士時代の鎧に似ていると感じていた。

しかし……。

「はあああああああああああ!!!」

そんなことはお構いなしに統夜はダンテにぶつかっていった。

統夜は皇輝剣を振るうが、ダンテは魔戒槍が変化した剛風槍でその一撃を防いでいた。

「はあっ!!」

ダンテは統夜を一度弾き飛ばすと、剛風槍の切っ先に風を集めると、それをエネルギー弾のような形で統夜に放った。

「ぐう……!!」

統夜はダンテの攻撃をモロに受けたが、統夜は構わず攻撃を続けていた。

「……なんだろう……」

「……? あずにゃん?」

「戦い方がいつもの統夜先輩と違うような……」

「恐らくは統夜が怒りに任せて戦ってるからだろうな」

「あたしもそう思う」

「統夜君、いつもはそんな戦い方じゃないものね……。人を守るために一生懸命。そん

な戦い方だつて私は感じたわ」

唯たちは統夜の戦い方がいつもと違うという事を感じていた。

「それは私も思いました。……私、嫌な予感がするんです……」

「嫌な予感？」

「はい。統夜先輩が統夜先輩じゃ無くなつちゃうような気がするんです……」

梓は統夜の怒りに任せた戦い方に不安を感じていた。

その統夜はダンテ相手に苦戦していた。

統夜の怒りに任せた攻撃はダンテには通用せず、ダンテは反撃で剛風槍による攻撃を何度も統夜に繰り出していた。

2度、3度と斬られながらも統夜はダンテに向かっていった。

「弱い。攻撃が直線的すぎる。そんな戦い方でよく今まで生き残ってきたな」

「黙れえ!!」

統夜は皇輝剣を振るうが、これもダンテにかわされてしまった。

ダンテは統夜の足の関節を狙って剛風槍を振るった。

「ぐう……!」

統夜は足に来る痛みに動きが鈍くなると、ダンテは蹴りを放ち、統夜を吹き飛ばした。

「ま……まだだ!!」

統夜は痛みに顔を歪めながらも統夜はダンテに向かっていった。

『統夜！冷静になれ!!そんな戦い方じゃ倒せる相手にも勝てないぞ!』

「うるさい!!」

統夜はイルバの警告を無視し、ダンテに向かっていった。

「愚かな……。魔導輪の言うことは正しいと言うのに」

ダンテは頭に血が上っている統夜に憐れみの目を向けていた。

「黙れえ!!」

統夜は冷静になることなく、戦い続けていた。

その時……。

「統夜君!!」

「統夜!!」

「統夜さん!!」

統夜を追いかけていたレオ、大輝、憂の3人がやって来た。

「憂!?!」

「お姉ちゃん!!」

唯たちを発見した憂は唯に駆け寄った。

「お姉ちゃん、大丈夫なの!?!」

「うん。私たちは大丈夫だよ。だけど……」

唯はダンテと戦っている統夜を見た。

憂もそんな統夜を見たのだが……。

「統夜さん……」

怒りに任せて戦う統夜に憂は言葉を失っていた。

「レオ！このままじゃまずいぞ！」

「ええ！統夜君を止めましょう！」

大輝とレオは同時に魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、大輝は鋼の鎧を、レオは狼怒の鎧を身に纏った。

鎧を召還した大輝とレオは怒りで我を忘れている統夜に向かっていった。

「統夜！落ち着け!!」

「統夜君！冷静になって下さい!!」

「どけ!!」

統夜は怒りに任せて皇輝剣を振るい、大輝とレオを吹き飛ばした。

「統夜!!無茶するな!!」

「統夜君!!落ち着いて下さい!!」

『まずいよ、レオ！もう坊やの鎧の制限時間が迫っているよ!!』

エルヴァは奏狼の鎧の制限時間が迫っていることを感知した。

『統夜！一度鎧を解除しろ!!』

イルバは統夜にこう警告をするが、統夜は一向に話を聞かなかった。

「やーくん!!」

「統夜君!!」

「統夜さん!!」

「統夜！無茶するなよ!!」

「このままじゃ危ないんだろ!？」

「統夜先輩!!お願いだからレオ先生やイルバの言うことを聞いて!!」

唯たちも必死に訴えかけるが、統夜の耳には届かなかった。

「このおとおおお!!」

統夜は再びダンテに向かっていった。

10……

9……

8……

7……

「……取った!!」

統夜はダンテを倒すことの出来るチャンスを得て、全力で皇輝剣を振るった。
しかしその時……。

3
……

2
……

1
……

0
……

奏狼の鎧が活動限界である99.9秒を過ぎてしまった……。

「うっ……」

この瞬間、腰部の四角のエンブレムが回転し、菱形に変わった。

「ぐう……ぐあ……!!」

鎧の制限時間が過ぎたことで統夜が急に苦しみ始めた。

「……!」

その様子を見ていたダンテは後方にジャンプをし、距離を取った。

統夜は手に持っていた皇輝剣を落としてしまい、皇輝剣は地面に突き刺さった。その時だった……。

「ぐう……ぐあ……!!」

統夜の身長に合っていた奏狼の鎧が、少しづつ変化を始めて行った。

腕……脚……体と徐々にその身体が人間とは思えない大きさになっていった。

「……!!」

「まさか、これが……!」

大輝とレオは今統夜の身に何が起こっているのかを理解していた。

「ああ……」

「な、何だよこれ……」

「そんな……」

「や……やーくんが……」

「統夜さん……」

「統夜……先輩……」

唯たちは統夜が目の前で変わっていく姿を目の当たりにし、今日の前で起こっている出来事が信じられなかった。

こうして統夜の身体は魔戒騎士の鎧から、巨大な獣のような姿に変わってしまった。この姿は心滅獣身（しんめつじゅうしん）。鎧の制限時間を超えた魔戒騎士がこの姿となり、巨大な獣のような姿になる。

この姿になると圧倒的な力を得ることが出来るものの、この状態が続くと鎧の装着者は鎧に心と魂を喰われてしまう。

統夜は鎧に魂を喰われそうになっていた。

「ほお……なるほど……」

統夜とダンテの戦いの一部始終を見ていたディオスは、心滅となっていく統夜を見てウンウンと頷いていた。

ディオスは暗黒騎士になった時、統夜のように心滅の状態となり、鎧に心と魂を喰われそうになったのだが、ディオスの邪心が逆に鎧の力に打ち克ち、暗黒騎士の力を手に入れた。

ディオスの戦闘力が圧倒的なのは暗黒騎士が心滅獣身の力をそのまま制御しているからである。

暗黒騎士の力の脅威はそれだけではない。心滅の状態になった時に鎧の制限時間を超えているため、鎧の制限時間はないのである。

さらに、ホラーを喰らうことでその力を吸収することも可能なのである。

「あの男……暗黒騎士になるつもりだな……」

ディオスは自身の経験から統夜が自分と同じ暗黒騎士になろうとしていると推察していた。

「こいつは……。まずいことになったな……」

「大輝さん！統夜君を止めましょう！」

大輝とレオは統夜の前に立ちほだかり、統夜を止めようとしたのだが……。全力で腕を振るうと、その衝撃で2人とも吹き飛ばされてしまった。

「ぐああああああ!!」

「があああああ!!」

その一撃の衝撃は相当なもので、それを受けた瞬間、2人の鎧は解除されてしまった。2人がそのまま地面に叩きつけられそうになったその時であった。

突然2つの影が飛び込んできると、吹き飛ばされている大輝とレオをキャッチした。

「……レオ、無事か？」

「あんたも、大丈夫か？」

レオと大輝を助けたのは、白いコートの男と、黒いコートの男だった。その2人の正体は……。

「！鋼牙さん!!」

「あんたが、銀牙騎士の涼邑零だな」

「ああ」

グオルブ討伐の応援として桜ヶ丘に派遣された鋼牙と零であった。

「僕たちは大丈夫です。ですが、統夜君が……」

「統夜が？」

鋼牙と零は統夜を見ると、巨大な獣に姿を変えていることを知り、息を呑んだ。

ダンテは心滅と化した統夜と立ち向かうが、その殺気は先ほど以上のものだった。

ダンテは剛風槍を振るうが、そのまま統夜に奪われてしまい、統夜は剛風槍をボキッと真つ二つにへし折った。

そして統夜はダンテを捕まえた。

「ぐっ……ぐっ……ぐっ……」

ダンテはどうにか脱出しようとするが、心滅と化した統夜の力は圧倒的で逃げる事が出来なかった。

「ぐうう……」

統夜は獣のような咆哮をあげながら尻尾についている刃でダンテの身体を貫いた。

「があっ！ぐおお……！」

この一撃が致命傷になっているのか、ダンテは苦しんでいた。

「がああああああああああああああ!!」

統夜は獣のような咆哮を再びあげると、尻尾の刃を振り下ろすと、ダンテの貫かれた部分から下の方が切り裂かれた。

「グオアアアアアア!!」

その痛みは想像以上のもので、ダンテは断末魔をあげていた。

そのまま統夜はダンテの身体を真つ二つに引き千切り、ダンテは消滅した。

「!!!!!!」

いくら統夜が正常ではないとはいえ、統夜の残虐な行動に息を呑んでいた。

ダンテを葬った統夜はその場で暴れまわっていた。

「……………これは一度退いたほうが良さそうだな……………」

ダンテが統夜に倒されたことに危機感を感じたディオスはこの場から立ち去った。

ディオスがいなくなったことで、統夜は鋼牙たちの方を向いた。

「……………零! 統夜を救うぞ!」

「ああ! わかつてるって!」

鋼牙と零は共に魔戒剣を抜くと、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれた光に包まれると、鋼牙は金色に輝く牙狼の鎧を身にまとい、零は白

銀に輝く絶狼の鎧を身にまとった。

鋼牙と零は心滅と化した統夜に向かっていった。

『鋼牙……ゼロ……。奏狼の鎧を解除してくれ……。頼む、紋章を突いてくれ……。このままじゃ……。鎧に喰われる……。』

イルバも心滅と化した奏狼の鎧に取り込まれそうになっていた。

「ああ、任せろ！」

鋼牙の眼は統夜を絶対に救うという使命感に満ちていた。

統夜は相手が鋼牙と零であるのにも関わらず、2人に攻撃をしかけ、2人は牙狼剣と銀狼剣で統夜を抑えていた。

しかし、最強と言われているこの2人であっても、心滅と化した統夜のパワーに押し返されていた。

「統夜！ 気をしっかり持て！」

「目を覚ますんだ！ 統夜！！」

「邪魔だ！ そこをどけ！！」

統夜は相手が鋼牙と零でも御構い無しだったので、言葉が普段使っている敬語ではなかった。

統夜は両手を振るうと、鋼牙と零それぞれにダメージを与え、2人は痛みで顔を歪ませていた。

「俺はあの男を絶対に倒す!!」

「統夜!闇に心を売り払うな!」

「あいつを倒すにはこれしかないんだ!邪魔をするな!!」

「統夜!しつかりしろ!お前が闇に堕ちたら唯たちはどうなるんだ!」

「うるさい!!」

統夜はそれぞれの手で鋼牙と零を捕まえ、2人を握り潰そうとしていた。

「と……統夜君!」

「統夜!しつかりしろ!」

レオと大輝も統夜に呼びかけをするが、統夜の耳には届かなかった。

「統夜!思い出せ!自分が何者なのか!」

「ぐうう……」

「統夜!お前は奏狼だ!暗黒騎士ではない!それに……お前が闇に堕ちるのを唯たちは望まない!!」

鋼牙は統夜の奥底に眠る良心に訴えかけていた。

しかし……。

「唯たちを守るために……俺にはこの力が必要なんだ!!」

鋼牙と零の必死の呼びかけも、統夜には届かなかった。

「統夜！頼むから、いつもの統夜に戻ってくれ!!」

律が統夜の近くまで駆け寄ると、こう統夜に訴えかけた。

「！律さん！危険です!!」

レオは律を止めようとするが……。

「レオ、ここは彼女たちに賭けるしかない」

大輝は軽音部の少女たちの声なら統夜に届くのではと思い、少女たちを信じることにしたのだ。

「そうだ！私たちは白銀騎士の統夜に守られたいんだよ!!」

滯も律の隣で統夜に訴えかけた。

「そうよ！私たちは闇の力のあなたに守られても何も嬉しくないわ!」

糸も悲痛な表情で統夜に訴えかけた。

「そうです！統夜さん、あなたは優しい騎士です！闇の力なんてあなたには似合わないです!」

続いて憂が統夜に訴えかけた。

「統夜先輩！あなたは暗黒騎士なんかじゃないです！あなたは奏狼！白銀騎士じゃないんですか!」

そして梓が統夜に訴えかけた。

「お願い！ 私たちはもつともつといつものやーくんとお茶したい！ だから！ いつものやーくんに戻ってよ!!」

最後に思いを訴えかけた唯が1番強い気持ちで統夜に訴えかけた。

6人の言葉も統夜に届かないのでは？

そう諦めかけたその時だった。

「律……瀧……ムギ……憂ちゃん……梓……唯……。……お、俺……俺は……」

6人の思いが統夜に届いたのか、統夜の両手から力が抜けると、鋼牙と零は解放された。

『ゼロ！今よ！』

『鋼牙！今だ！』

鋼牙と零の相棒は統夜の隙を見逃さなかった。

「わかってる！」

「承知！」

鋼牙と零は牙狼剣と銀狼剣を構えると、奏狼の腰部の紋章にそれぞれの剣を突いた。

紋章がソウルメタルの剣により突かれたその時だった。

「うっ……ぐっ……」

統夜から全身の力が抜けると、獣のような姿の鎧が分解されるように解除されていっ

た。

心滅の鎖から解き放たれた統夜はいつもの統夜に戻るが、力を使い果たしたのかその場に倒れ込もうとしていた。

「やーくん！」

唯は倒れそうになる統夜を支え、律たちも唯に続いた。

「はあ……はあ……。やったな……鋼牙……」

「ああ……」

統夜が元に戻ったことを確認した鋼牙と零は、鎧を解除すると、それぞれの魔戒剣を鞘に納めた。

無事に統夜が元に戻り、レオと大輝も統夜に駆け寄った。

『……やれやれ……。間一発だったな……』

『本当に危なかったわ。鎧に喰われる寸前だったから』

統夜は救出がもう少し遅ければ、鎧にその心と魂を喰われていたところだった。

「……思い出すな。かつて俺が心滅の状態になってしまったことを」

『俺様にはその時の記憶はないが、どうやらそのようだな。不思議なことに懐かしさを感ずるぜ！』

実は鋼牙も一度は統夜のように心滅したことがあったのだが、零に救われたという過

去を持つ。

ザルバはかつてメシアや暗黒騎士呀との戦いで一度消滅し、番犬所に復元された。

この時、鋼牙と共に戦った記憶を失っているので、鋼牙が心滅してしまった時の記憶はなかった。

しかし、不思議なことにザルバは統夜が心滅してしまったのを見て懐かしさを感じていた。

「……統夜、大丈夫か？」

「すいません……。鋼牙さん……。零さん……。俺のために……」

「礼には及ばないぜ。それに、礼なら唯ちゃんたちに言うんだな。唯ちゃんたちがいなかったら正直危なかったからな」

零は統夜に笑みを向けると、統夜は唯たちを見ていた。

「統夜……」

「統夜君……」

「統夜さん……」

「統夜先輩……」

「やーくん……」

「……みんなも……。本当にありがとう……。俺……。母さんを殺したディオスを倒す力を

得ることが出来るなら……。闇に肉体と魂を売ってもいいと思っただ……。」「」「」「……」

統夜がどんな思いで心滅になったのかを知った唯たちは言葉を失っていた。

「……それは……俺の邪心だった！」

唯たちに支えられていた統夜はゆっくりと立ち上がった

「……………」

無言で統夜の話聞いていた鋼牙は地面に刺さったままの魔戒剣を引き抜くと、それを持って統夜に歩み寄った。

「鋼牙さん、零さん、レオさん、大輝さん。それにみんな……。みんなが暗黒の淵から俺を救ってくれた」

統夜は自分を救ってくれたみんなに感謝と共に申し訳ないという気持ちも抱いていた。

自分が闇の力を求めたせいで、鋼牙たちだけではなく、大切な仲間である唯たちまで危険な目にあわせてしまったからである。

「……統夜。お前がそこまで力を求める気持ち……。俺にはよくわかる」

「え？」

「何故なら俺も……。闇に肉体と魂を捧げようとしたことがあるから……」

「鋼牙さんが……ですか？」

統夜は鋼牙がかつて心滅となつてしまったことを知らなかったので驚きを隠せなかった。

「かつての俺は精神が未熟だった。……今のお前のように」

「……はい」

自分の未熟さを痛感している統夜は鋼牙の言葉を真摯に受け止めていた。

鋼牙はそんな統夜に魔戒剣を渡した。

「統夜。これからは自分が何者なのかしかと胸に刻み込め」

「俺が……何者なのか……」

統夜は鋼牙から受け取った魔戒剣を真剣な眼差しで眺めていた。

「統夜。お前は守りし者なんだ。……それは、わかつているだろう？」

「……はい」

「統夜。お前には守るべき大切な人間がこれだけたくさんいるんだ。守りたい人間がいれば、魔戒騎士は闇の力を借りずとも強くなれる

「……」

「統夜……強くなれ！」

鋼牙はそう言って統夜の頭を優しく……そして力強く撫でていた。

「……はいー」

優しくも力強い鋼牙の言葉を聞いた統夜は力強く返事をする、静かに涙を流していた。

「……やれやれ。黄金騎士がそこまで言うなら俺は何も言えないな」

大輝は統夜に説教するつもりだったが、鋼牙の力強い言葉を聞き、これ以上何も言うことが出来なかった。

「……そうですね」

それはレオも同じ気持ちで、レオは笑みを浮かべていた。

こうして統夜は自らの弱さを身を持って思い知ることになってしまった。

統夜は自らの弱さを受け入れ、大切な人たちを守るためにもっと強くなる。そう心に誓ったのであった。

……続く。

次回予告

『まずいな……。魔獣の復活が近いようだ。そしてそのゲートがまさかあの場所とはな……。次回、「野望」。奴の野望を止めるぞ、統夜！』

第21話 「野望」

統夜は唯たちがディオスに誘拐されたことで怒りに心を支配されてしまった。

その状態でディオスの部下となったダンテと戦うが、統夜は鎧の制限時間を無視して戦っていた。

その結果、奏狼の鎧の制限時間が過ぎてしまい、統夜は心滅獣身という魔戒騎士の禁忌の姿になってしまった。

その力は圧倒的で、ダンテを撃破したが、統夜はそのまま闇の力を受け入れるつもりだった。

しかし、グオルブ討伐のために桜ヶ丘にやって来た鋼牙と零。そして、統夜を救いたいと心から願う軽音部の少女たちの力で、統夜は闇の呪縛から解放された。

そしてグオルブの牙を持つディオスはどこかに消えたまま、足取りはつかめなかった。

とりあえずこの日は夜も遅いので、統夜たちは統夜の家で休むことになった。

唯たちは統夜や鋼牙の勧めでこの日は帰ることにになり、それぞれの家に帰っていた。

統夜たちは統夜の家のリビングで今後の作戦会議を行っていた。

「……レオ、状況は？」

「鋼牙さん。ホラー、グオルブは復活のため力を蓄える必要があります。僕の推測ではグオルブの牙を奪ったディオスはその時が来るまでどこかへ潜伏すると思われる」

「なるほど……。そいつは厄介だな」

「力を蓄えたグオルブの牙はとある場所をゲートにその力を解き放ちます。グオルブは復活の時真魔界に現れますが、グオルブが復活すれば人界と真魔界がそのゲートを通じてつながってしまいます」

「!!そうなたらこの街に大量のホラーが溢れるじゃないですか!!」

統夜の指摘通り、グオルブが復活してしまえば、大量のホラーがこの桜ヶ丘に現れることになる。そうなってしまったらどれだけの被害がでるか想像がつかないほどである。

「レオ、そのゲートは見当がついてるのか？」

「ええ。僕が教師として桜ヶ丘高校に潜り込んだのもそのゲートを突き止めるのが目的ですし……。その場所の見当はおおよそついています」

「なあ、レオ。そのゲートってどこなんだ？」

零がレオにこの質問をすると、レオは浮かない表情をしていた。

「……レオさん？」

「その場所は……桜ヶ丘高校。もしくはその周辺と思われるす」
「!!」

統夜は自分が通う高校が強大なホラー復活のゲートとなる可能性があると聞いて驚きを隠せなかった。

「桜ヶ丘高校……。確か統夜や唯たちが通っている高校だったな？」

「はい。カオルさんの母校でもあるそうです」

「え!?カオルさんの？」

レオはそのことを知らなかったようで、驚きを隠せなかった。

「そういえば桜ヶ丘で個展をやると言った時にカオルは言っていたな。統夜の通っている高校は自分の母校だと」

「ああ、そういえばカオルちゃんそんなこと言ってたな」

どうやら零もその話を聞いたことがあるようだった。

「それで、桜ヶ丘高校の調査を行ったのですが、特に異常は見つかりませんでした。……桜高全域にホラー除けの結界を貼りました。なのでゲートは桜高の近くだと僕は思っています」

「それじゃあ明日桜高周辺を調査する必要がありそうだな」

「そうですね。ですが、一つだけ問題がありました……」

「？何だ？」

「明日は学校があるんです。その周辺で迂闊な動きをすると怪しまれる可能性があります」

「……」

鋼牙、零、大輝の3人はレオの言葉を聞いて言葉を失っていた。

「調査の狙い目は授業が行われている時間ですね。その時間なら問題なく調査が出来ると思います」

「桜高周辺なら搜索範囲もだいぶ絞れるしな」

「統夜とレオは学校があるから3人で調査をする必要がありそうだな」

「大輝。お前にはエレメントの浄化を頼みたい」

鋼牙の意外な提案に大輝は戸惑っていた。

「いくらこの仕事が必要な仕事でも魔戒騎士の使命は果たさなければならぬ。俺と零も桜高周辺を調査しながらエレメントの浄化は行おうが、その他の部分を任せたい」

「大輝なら桜ヶ丘の人間だし、この街の地理にも詳しいからな」

「……了解した。そういうことならゲートの調査は2人に任せたい」

「ああ、任せてくれ♪」

こうして話はまとまったのであった。

「そういえば、統夜の家って初めて入ったけど、思ったより広いな」

「アハハ、だけど魔戒騎士の家とは思えない普通の家ですよ。広さはそこそこですけど」

統夜の家は見た目だけ言うとう桜ヶ丘のどこにでもあるようなごく普通の家であった。

その内装もごくごく普通であり、とても魔戒騎士が住んでいる家とは思えなかった。

「だけど、地下には鍛錬のための部屋がありますからね。毎日の鍛錬は欠かしていません。まあ、鋼牙さんの家のやつに比べれば規模は小さいですけど」

統夜は毎朝エレメントの浄化に行く前に地下の部屋で鍛錬を行うのが日課になっている。

「そうなのか？それは一度使ってみたいものだ」

鋼牙は統夜がどのような鍛錬を行っているのか興味津々だった。

「それは俺も気になるな♪」

それは零も同じ気持ちだった。

「それじゃあ遠慮なく使って下さい」

統夜は2人が地下で鍛錬を行うことは大歓迎だった。

「とりあえず今日は寝ましようか。明日は忙しくなりそうですし」

「ああ、そうだな」

この日は就寝することになり、明日に備えて統夜たちは英気を養っていた。

※※※

翌日、統夜たちは朝食を済ませ、それぞれ動き始めた。

統夜とレオは学校へ向かい、鋼牙と零は学校が始まるまでの間は、大輝と共にエレメントの浄化を行っていた。

統夜は何事もなかったかのように教室に入り、授業を受けていたのだが、統夜はどこか上の空であった。

そしてあつという間に昼休みになると、統夜はじっとしていられず、校内の見回りを行っていた。

『おい、統夜。どうした？今日は朝から落ち着きがないが』

「そりゃ、落ち着けるわけはないよ。グオルブの復活が近いっていうのに」

『まあ、確かにそうだな』

「本当なら学校をサボってでも鋼牙さんたちの手伝いをしたいくらいだよ」

『それはやめておけ。あのディオスという男はこの学校の周辺に潜伏しているのだろう？下手に行動を起こすと騒ぎになるだけだぞ』

「まあ、そうだよな……。だからこそレオさんの張った結界に異常がないか見てるんだけどさ」

『なるほど……。見回りをしてるのはそういう訳か』

イルバはなぜ統夜が校内の見回りをしているのかを理解した。

『だが、じつとしていられないのはそれだけではないだろう？』

イルバの言葉を聞いた統夜は思わず立ち止まってしまった。

「……ハハ……やっぱりわかるか？」

『当然だ。俺様はお前の相棒だからな。お前の考えてることなどお見通しだ』

統夜はそうだよなと言いながら笑うが、その表情には少しだけ陰りがあった。

「俺……。本当にまだまだだよな……。心滅になつて鋼牙さんたちを殺そうとしただけじゃない。唯たちまで危険な目に……」

統夜は両手の拳を力強く握りしめると、唇を噛んでいた。

『ああ、確かにお前は未熟者だな』

イルバは統夜を励ますことはせず、思ったことをそのまま言っていた。

『怒りに支配されて心滅するとはな……。俺様はここまで阿呆で愚かな魔戒騎士を見たことがないぜ』

「……ハハ、返す言葉がないよ……」

イルバの容赦ない言葉に統夜は苦笑いしていた。

『確かに、愚か者だが、お前さんは救われたんだ。これから挽回するチャンスはあるぜ。お前だつて聞いただろうあの冴島鋼牙も心滅になったことがあるんだ』

「ああ。その話を聞いたときはびっくりしたよ……」

『そんな男でも今は最強の魔戒騎士なんだ。お前だつてあのディオスの野望を止めることが出来れば名誉は挽回できるはずだぜ』

「……ああ、そうだよな」

イルバとの会話で気を落としていた統夜の気持ちも少しだけ晴れていた。

「ディオスの野望は絶対に阻止する。俺はみんながいるこの桜ヶ丘が大好きだ。そんなこの街をホラーで溢れかえる街になんて絶対にさせないさ」

ディオスの野望を食い止める。統夜の気持ちはその決意に満ちていた。

『ああ、そうだな。……とりあえずさっさと見回りを済ませるぞ。急がないと昼休みが終わりそうだからな』

「おっと、そうだった！」

統夜は昼休みが終わるギリギリまで校内を見回りながらレオの貼った結界に異常がないか見ていた。

統夜が見た限りでは結界に異常は見当たらなかった。

その日の放課後、統夜は音楽準備室に立ち寄っていた。

鋼牙や零がディオスの居場所を突き止めたらすぐにも乗り込むつもりだが、零が軽音部でお茶がしたいと言っていたのでティータイムを行うことになっていたのである。

それを聞いていた鋼牙は少し呆れていたものの、カオルの母校に行ってみたくて言っていたので鋼牙もここに来ることになっている。

統夜が音楽準備室に入ると、すでに紬たちがティータイムの準備を行っていた。

「よう、みんな」

「あつ、やー……くん……」

唯は目の前にいる統夜の存在に驚いていた。

「おいおい、そんなに驚くことはないだろ？」

「だって……」

唯が浮かぬ顔を見せているのを見た統夜はその原因が自分にあると察しがついていた。

「お前が気にすることはないさ。あんな姿になったのは俺が未熟だったからだよ。それに、俺はみんなのおかげで元に戻る事が出来たんだぜ」

「え？だって鋼牙さんと零さんがやーくんを助けてくれたんでしょ？」

「そうだな、鋼牙さんや零さんにもすごく感謝している。だけど、唯たちの声が届いたから鋼牙さんや零さんも俺を助ける事が出来たんだよ」

統夜は心の底から唯たちに感謝していた。

唯たちがいなければ自分はおのまま鎧に心と魂を喰われ、唯たちの知る月影統夜は死んでいたからである。

鋼牙と零も予想以上に強大な統夜の力に苦戦していたが、唯たちの言葉を聞いたことにより統夜の動きに隙が出来たから心滅の鎧を解除出来たのであるからだ。

統夜はいつものように魔法衣と学生鞆を長椅子に置いていつも自分が座っている席に腰をおろした。

「統夜先輩！あなたは本当に統夜先輩なんですよね!？」

「もちろんだよ。今の俺はみんながよく知っている月影統夜だ」

『ああ、それは俺様も保証するぜ。こいつはいつもの統夜だ』

「……はいっ!!」

梓は怒りに任せて戦う統夜を見て統夜が統夜じゃなくなってしまっているのではないかと心配していたが、目の前にいるのがいつもの統夜だとわかり、満面の笑みを浮かべていた。

「……!! // // //」

満面の笑みで微笑む梓にドキッとしたのか統夜は顔を真っ赤にしていた。

「おお、統夜のやつ照れてる照れてる♪」

「なんか新鮮な感じだな♪」

「うんうん♪今日の統夜君は何か可愛い♪」

「ばっ! う、うるさいよ!!」

統夜は顔を赤くしたままプイツとそっぽを向いてしまった。

(おお、統夜が照れるとは……。こいつは恋愛に関してはあり得ないほどの朴念仁だからな。これはなかなか良い傾向かもな)

イルバは常日頃から統夜の恋愛での朴念仁ぶりを心配していたのだが、梓の笑顔を見て照れる統夜を見て、少しは朴念仁が治るのではないかと期待していた。

「やーくん、照れなくてもいいのに♪」

「……クスッ」

「だーかーら！照れてないって言ってるだろ!!」

統夜は唯にからかわれ、ついムキになってしまった。

「……お、ずいぶんと賑やかですね」

このようなやり取りをしていると、鋼牙と零を連れたレオが音楽準備室に入ってきた。

「あつ、レオ先生！それに……」

「鋼牙さんと零さんじゃないですか！どうしてここに？」

「ああ、いや……」

「俺が行きたいって言ったんだよ♪久しぶりにムギちゃんの紅茶が飲みたいしね♪鋼牙だつてそうなんだろう？」

「……ああ」

鋼牙はぶつきらぼうに返事をするものの、その表情は優しげなもので、笑みを浮かべていた。

「ところで鋼牙さん、零さん。ディオスの居場所はわかったんですか？」

「ああ、意外とあつさりな」

どうやらディオスの潜伏先はすぐ見つかったらしい。

『あの男、明らかにこちらを誘っているな。鋼牙や零相手でも問題ないと踏んでいるの

だろう』

こう語るザルバはどこか面白くなさそうだった。

ザルバの推測通りだとディオスは隠れることはせず、統夜たちのことを誘っているということになる。

ディオスは鋼牙や零が相手でも問題ないと踏んでおり、統夜たちを蹴散らした上でグオルブを復活させるつもりと推察することが出来た。

「……恐らく、罨を貼ってますね」

「僕もそう思います。ですから油断は出来ません」

統夜とレオはディオスが何かしらの罨を貼って自分たちを待ち受けているだろうと推測していた。

「そうだとしても進むしかない」

「そうだな、そいつの思い通りにさせるわけにはいかないからな」

鋼牙と零の毅然とした言葉と態度に統夜とレオは笑みを浮かべながら頷いていた。

「さあ、とりあえずお茶にしましよ♪」

「そうですね！これからの戦いに備えて英気を養わないといけません！」

「あれえ？今日は梓、練習しましょうって言わないんだな」

「当たり前じゃないですか!!今日は一大事なんですよ！練習どころじゃありません！」

梓がここまで言うのを聞いて統夜は思わず笑ってしまった。

「統夜先輩、何かおかしいんですか？」

「ごめんごめん。確かにその通りなんだけどき、真面目な梓が練習どころじゃない！つて言うのが可笑しくてき……」

「そ、そうですかね……」

笑っている統夜であつたが、梓は頬を赤くして恥ずかしそうにしていた。

「まあまあ、その辺にしておきましょう♪」

「……………」

鋼牙は統夜と軽音部の少女たちのやり取りを見て笑みを浮かべていた。

『……………鋼牙、どうしたんだ？』

「別に。ただ、統夜があんなに生き生きしている顔を初めて見るんだな」

鋼牙は統夜が普段自分たちの前で見せないくらい楽しそうにしている統夜の顔を見て笑みを浮かべていたのである。

「確かにそうかもな。それは間違いなくあの子たちのおかげだな」

「……………ああ」

零も一度ここに来たことがあるが、その時も今の鋼牙が思っていたことを思っていた。

統夜がここまで生き生きとしているのは軽音部の少女たちのおかげであることを鋼牙も零も確信していた。

こうしているうちにティータイムの準備が終わると、鋼牙、零、レオの3人は椅子に座り、3人の前に紅茶が出された。

「さあ、召し上がってください♪」

「……ほお、いい香りだな」

鋼牙は目の前の紅茶の香りの良さに満足していた。

「今日は零さんが来るとのことなのでケーキも多く用意しておきました♪」

「おおーさすがムギちゃん♪気がきくね♪」

零の目の前に6つほどケーキが出てきて、零は満足そうにしていた。

「……零、お前は相変わらずだな」

鋼牙は零が甘党であることはよく知っているので目の前のケーキに浮かれる零を見て呆れていた。

「まあな♪これでも少ない方だぜ♪」

「これで……か？」

『もお、ゼロつたら……』

零の甘党ぶりに鋼牙だけではなく、相棒のシルヴァも呆れていた。

「まあ、とりあえずいただこうか」

鋼牙は袖が出してくれた紅茶を一口飲んだ。

すると……。

「む……。確かにゴンザの淹れてくれる紅茶に似ているな……。これも悪くない」

どうやら軽音部で出される紅茶は鋼牙にも好評のようであった。

「良かった♪お茶はまだあるので遠慮しないで下さいね♪」

「ああ、そうさせてもらう」

「ムギちゃん、今日のケーキも最高だぜ♪」

「零さん、ありがとうございます♪まだケーキはありますから遠慮しないで下さいね♪」

「ああ。ありがとな♪」

鋼牙は紅茶を味わって飲んでおり、零は複数のケーキに舌鼓を打っていた。

そんな中、統夜は統夜でいつものようにティータイムを楽しんでいた。

こうして統夜たちはディオスの決戦を目前に控えていたが、ティータイムを楽しむむこ
とでこれから起こる戦いに備えて英気を養っていた。

※※※

その頃、桜高付近のとある場所に潜伏しているディオスは徐々に力を蓄えているゴルブの牙を眺めていた。

「もうすぐだ……。もうすぐゴルブは復活する……」

ディオスはゴルブの牙を眺めながらこう呟いていた。

「しかし……。ダンテがやられたのは想定外だったな……」

ディオスは統夜が心滅した時にダンテが倒されるとは思っていなかった。

「月影統夜……。私と同じ暗黒騎士になると思っていたがな、まさか寸前で鎧が解除されるとは……」

ディオスは統夜が心滅した時、そのまま闇の力を受け入れて自分と同じ暗黒騎士になると思っていた。

しかし、鋼牙や零。そして軽音部の少女たちの力で統夜は心滅から解放されたのである。

「だが……。まあ、いい。黄金騎士と銀牙騎士が来たようだが……。暗黒の力を手に入れた私の敵ではない……」

ディオスは鋼牙と零が現れた現在でさえも焦ることはなく、むしろ返り討ちにするつもりでいた。

「……さあ、いつでも来るがいい！私はいつでも貴様らを迎え討つ準備は出来ている！」

ディオスは既に統夜たちを迎え入れる準備を整えていた。

そのために鋼牙や零にこの居場所がすぐわかるようにしたのである。

「……目障りな騎士連中を始末し、グオルブを復活させる！そして、この世界を私の理想の世界にしてみせる！」

ディオスが抱いている野望は、グオルブを復活させ、この世界に大量のホラーを出現させることで自らにとって理想の世界を作り上げることである。

しかし、そのためには魔戒騎士の存在が目障りであった。

自らの理想を実現させるために、ディオスはグオルブを復活させ、さらに目障りな魔戒騎士を始末しようと考えていたのである。

ホラーを復活させて世界を滅ぼそうとするディオス。

そしてホラー復活を阻止し、多くの人を守るためにディオスを討とうとする統夜たち。

……両者の思いが交錯し、壮絶な戦いが始まろうとしていた。

……続く。

——次回予告——

『いよいよこの時が来たな。ここまで来たらあいつに一泡吹かせてやろうぜ！次回、「突入」！決戦の火蓋が切って落とされる！』

第22話 「突入」

桜ヶ丘高校軽音楽部の部室である音楽準備室で統夜たちはティータイムを行っていた。た。

外が暗くなり、そこでティータイムは終了して統夜たちはディオスのもとへ向かう準備を整えた。

「……統夜、いよいよだな」

統夜たちが音楽準備室を出る前に律が統夜に声をかけた。

「ああ、そうだな」

「統夜、無茶だけはするなよ」

「ああ、ありがとな、滞」

「統夜先輩、必ず生きて帰って来て下さいね」

「ああ。俺は必ず戻ってくる。信じて待っていてくれ」

「やーくん、私、信じてるから」

「おう、信じていてくれよな」

「ねえ、統夜君、これ」

紬が手に持っていたのは蒼い輝きを放つネックレスだった。

「ムギ、これって高いものじゃないのか？ そうだとしたら申し訳なくて受け取れないよ」

「これは宝石としての価値はないわ。これはお守りよ」

「お守り？」

「ええ。きつと統夜君を守ってくれるわ」

「……ありがとな、ムギ」

「ううん。今つけてあげるね♪」

紬はそのネックレスを統夜につけてあげた。

その間紬の柔らかい肌の感触が伝わり、さらにいい匂いもしていたので統夜はつけてもらっている間は顔を真っ赤にしていた。

「……何か、初々しいな。統夜のやつ」

「……ああ、そうだな」

鋼牙と零は恥ずかしそうにネックレスをつけてもらっている統夜を見て苦笑いをしていた。

「……はい、大丈夫よ」

「あつ、ありがと」

統夜は照れながらも唯たちの方を見ると唯たちはニヤニヤしながらこつちを見てい

た。

「そ、それじゃあ俺たちは行くから」

このままではからかわれると思い、統夜は音楽準備室を出ようとしていた。

「統夜先輩！」

しかし、梓に引き止められたので統夜はすぐに足を止めた。

「あつ、あの……い……い……武運を！」

梓の言葉を聞いた統夜は振り向いて微笑むと、そのまま音楽準備室を出て行った。

統夜が出て行くと、鋼牙たちも統夜に続いた。

「統夜……死ぬなよ……」

こう呟く律の言葉に唯たちは頷いていた。

音楽準備室を後にした統夜たちは学校の入り口で待機していた大輝と合流した。合流してから歩くこと3分。ディオスの潜伏先は本当に桜高のすぐ近くだった。

「……鋼牙さん、ここにですか？」

「ああ、そうだ」

『どうやら間違いなさそうだ。この先からとんでもない邪気を感じるぜ』

イルバも邪気を感じることから、ディオスが潜伏しているのはほぼ間違いないかった。

『当然だろう。俺様が前もって探知出来たんだ。お前のような骨董品とは違うんだよ』

『言ったな！ 貴様も俺様と同じ形の骨董品のくせに！』

『俺様をお前と一緒にするな！』

敵地を目の前にしてザルバとイルバが喧嘩を始めてしまった。

「おい、やめろイルバ！」

「お前もだ、ザルバ。……どうやら来たようだな」

ザルバとイルバが喧嘩している間に統夜たちの目の前に大量の素体ホラーが現れた。

「おつと……。これはこれはずいぶんな数だな」

「これだけのホラーを従えてるとは、あいつもどうやら本気みたいだな」

「……レオ。関係ない人たちが巻き込まれないように結界は貼ってあるか？」

「ええ。そこは抜かりないです。これで関係ない一般人がこの戦いに巻き込まれることはありません」

「よっしゃあ！ 一気に片付けようぜ！！」

「はい!!」

統夜たちはそれぞれの魔戒剣を抜くと、構えた。

「みんな、行くぞ!!」

「おう!」

「はい!!」

「承知!!」

鋼牙の号令で統夜たちはそれぞれ素体ホラーに向かっていった。

統夜たちがディオスの潜伏先に到着し、大量の素体ホラー相手に戦いを挑んでいた頃、桜高の中ではちよつとした騒ぎが起きていた。

帰ろうとしてもなぜか校内から出ることが出来なくなっているのだ。

この時間になつても残っている生徒たちが校内から出られないのは、レオが貼った結界が作動しているからである。

ホラーとの戦いに関係ない人を巻き込まないために、戦いが終わるまでの間、校内か

ら出られないようにしているのだ。

そうとは知らない唯たちはとりあえずお茶を飲んでいたのだが……。

「梓あ!!大変だよ!!」

まだ校内に残っていた純と憂が音楽準備室に駆け込んできた。

「じゅ、純!どうしたの?そんなに慌てて」

「い……今ね、何でかわからないけど、学校から出られなくなってるの!!」

「……え!!」

「今、校内が大騒ぎになってるの。皆さんも来て下さい!」

「う、うん!わかった!」

憂もこう言っていたので唯たちは2人の後に続いて玄関へ向かった。

どうやら玄関から外には出られるようだが、校庭に少しだけ人だかりが出来ていた。

「ど……どうなってるんだあ!?」

「まさかみんな出られないのか?」

校内には結構な数の生徒が残っており、校庭は少しだけ騒然としていた。

それを見ていた唯たちは啞然としていた。

(……!そういえばレオ先生が結界がどうか言ってたからそれで外に出られなくなってるの?)

梓の推測通り、レオはこの校内全体にホラー除けの結界を貼っていた。

グオルブ復活のゲートがこの学校の近くにあるということが判明していたので、この学校の中にホラーを入れないために結界を施していたのだ。

普段は人の出入りは出来るくらい結界は弱かったのだが、今回は誰も出入り出来ないくらい強い結界になっていた。

「……あつ、唯！みんな!!」

校庭の人混みの中にいた和が唯たちを見つけて声をかけた。

「あつ！和ちゃん！」

唯たちは和を見つけると、和のもとへ駆け寄った。

和の隣にはさわ子の姿もあった。

「みんな、今大変なことになっているのよ」

「ご覧の通り今この学校から出られなくなっているのよ。原因は全くわからないんだけどね」

さわ子が改めて事情を説明したのだが、教師であるさわ子もこの異常事態に困惑していた。

「そ、そう……ですか」

「ん？あなたたち、何か知っているの？」

さわ子は訝しげな目で唯たちのことを見ていた。

「し、知らないよ！さわちゃん！あたしらにそんなのわかる訳ないじゃん！」

「まあ、そうよねえ……」

「……一体、何が起こっているのかしら……」

「わからないわ……。だけど、今何かが起こつてて、大丈夫になつたら私たちも出られるんじゃないかしら」

紬はこう推測して和たちを安心させようとしていた。

「ーもしかして……もう戦いが始まつてること……だよね……。やーくん……無事だといいいけど……」

唯はこれだけの騒ぎから統夜たちがすでに戦いを始めたのではないかと推測し、統夜のことを心配していた。

（まさか……。この近くであのディオオスって人と統夜さんたちが戦っているの？）
憂はこう推察するが、それが当たっていることを本人は知らなかった。

唯たちはどうすることも出来ず、この場で待機することしかできなかった。

ちょうどその頃、遠くから結界が張られている桜ヶ丘高校を見つめる3つの影があった。

「……どうやら、始まったようだね」

「はい、そうみたいです」

「どうやら、思ったより事態は深刻なようだな」

「そうだね。でも統夜だけじゃない。鋼牙や零もいるんだ。あたしらが手を貸すまでもなさそうだね」

「ああ、そうだな」

「だけど、統夜の学校とあの子たちは俺たちが守ってやるさ」

「ああ、そうだね」

「統夜……。お前がどれだけ力をつけたのかお手並みを拝見させてもらおうか」

この3人はどうやら統夜たちのよく知る人物のようであった。

3人は遠くから統夜たちの戦いを見守り、そして桜ヶ丘高校を守れるよう目を光らせていた。

※※※

統夜たちは大量の素体ホラーを相手にしていたのだが、予想異常にホラーの数が多く先に進めることが出来なかった。

「くそっ！きりがない！どんだけの数のホラーを用意してるんだよ!!」
統夜は1体、2体と素体ホラーを斬り裂きながらぼやいていた。

「そっだなあ！これは少々面倒だぜ!!」

零も次々と素体ホラーを斬り裂きながら文句を言っていた。

「ここでグズグズしてはグオルブが復活してしまう!」

素体ホラーを次々と斬り裂きながら鋼牙は焦っていた。

「ここでいたずらに時間を費やしてはホラー、グオルブが復活してしまうからである。」

「統夜君！鋼牙さん！零さん！先に行ってください!」

レオは素体ホラーを斬り裂きながら統夜、鋼牙、零の3人に先に進むよう進言した。

「！レオさん!？」

「そうだな。ここは俺とレオが引き受ける！3人は先に行ってくれ！」

「え？でも……」

『統夜！迷ってる暇はないぜ！このままじゃグオルブが復活してしまうからな！』

『ああ！どうやらそのようだな！』

『ゼロ！迷ってる暇はないわよ！』

イルバ、ザルバ、シルヴァはレオや大輝の提案を受け入れるべきと考えていた。

「……わかった。零、統夜、行くぞ」

「おう、わかったぜ！」

「レオさん、大輝さん！無理はしないで下さい！」

「ふっ……。まだまだ未熟なお前に心配される筋合いはない！」

大輝は優しく笑みを浮かべながら素体ホラーを斬り裂いた。

「僕たちなら大丈夫です！そちらこそ無理はしないで下さいね！」

「はい！」

鋼牙、零、統夜の3人は大量の素体ホラーを突っ切ると、そのままディオスのもとへ

向かっていった。

「さて、レオ……。ここは一つ気合を入れないとな」

「そうですね」

大輝とレオは笑みを浮かべながら素体ホラーに向かっていった。

ディオスが潜伏しているのは今は使われていない3階建の広めな廃ビルだった。

そのビルの3階の1番広い部屋にディオスは潜伏していた。

「もうすぐだ……。もうすぐグオルブは復活する！」

ディオスはすでにグオルブ復活の儀式を済ませており、グオルブの牙は描かれている魔法陣の中央に突き刺さっていた。

グオルブの牙は封印が解かれてから十分なほど力を蓄え、いつ復活してもおかしくない状況だった。

その時だった……。

「ディオス!!」

統夜、鋼牙、零の3人がディオスの前に現れた。

「来たか……。だが遅かったな。まもなくグオルブは復活する！お前たちに止めることは出来ない！」

「そんな事は……させるか！」

統夜は魔戒剣を構え、ディオスを睨みつけた。

「フン……暗黒の力を拒絶した貴様らにこの私を止める事は出来るかな？」

「ああ、出来るさ。お前を斬ってグオルブ復活を阻止してやるよ！」

「これ以上、貴様の好き勝手にさせない！」

零と鋼牙は魔戒剣を構え、ディオスを睨みつけた。

「いいだろう。ここで貴様らを始末すればグオルブ復活を妨げる奴はいなくなるからな

……」

ディオスは魔戒剣を抜いて、それを構えた。

統夜、鋼牙、零の3人は一斉にディオスに向かっていった。

統夜と零が両サイドから攻撃を仕掛けると、ディオスは統夜の一撃を魔戒剣で、零の

一撃を盾で防いだ。

そして、鋼牙がその隙を突いて魔戒剣を一閃した。

「……っ！」

ディオスは統夜と零を吹き飛ばすと、どうにか鋼牙の一撃を魔戒剣で防ぐことが出来た。

「……なかなかやるじゃないか。先程の攻撃は少しだけ焦ってしまったぞ」

「こう言うってはいるものの、まだまだディオスは余裕そうにしていた。

「ふっ……。まだまだだ！」

鋼牙は蹴りを放つと、ディオスを吹き飛ばした。

「くっ……。！」

「今だ！」

「もらった!!」

統夜と零が同時に魔戒剣を振るった。

「ふっ……。甘いわ!!」

ディオスは無駄のない動きで統夜と零の攻撃をかわした。

「ちっ……。ダメか……。！」

「へえ、なかなかやるじゃないか！」

統夜は舌打ちをし、零はディオスの実力に素直に感心していた。

『ゼロ！感心してる場合じゃないわよ！』

すかさず相棒のシルヴァがツツコミを入れていた。

「わかってるって」

零はシルヴァのツツコミに苦笑いをする、2本の魔戒剣をグルグルと回転させながら構えた。

「こいつ……やっぱ強いな……!」

今の統夜には怒りの感情はなく、冷静にディオスの実力を分析していた。

『そうだ、統夜。冷静になればお前にも奴を倒すチャンスがあるぜ』

「ああ、そうだな」

統夜は素直にイルバのアドバイスを受け入れていた。

「はあっ!!」

統夜は再びディオスに向かっていき、零も統夜の援護を行っていた。

『鋼牙…あの男、思った以上にやるみたいだぜ!』

「そうらしい。だが、あいつの動きはだいぶ見切ってきた!」

鋼牙はこの短い時間でディオスの動きを見切りつつあった。

それを確かめるかのように鋼牙も攻撃に加わった。

「くっ……。さすがは最強の魔戒騎士か……。手強いな……」

ディオスは焦っていた。鋼牙と零の実力が自分の予想を遥かに上回っているからである。

それも無理はない。

鋼牙と零は暗黒騎士キバであるバラゴとの交戦経験があり、その後も様々な修羅場をくぐり抜けてきたのである。

そんな鋼牙と零を簡単に倒せる訳はないのである。

(それに、あの小僧……)

ディオスは統夜の動きが初めて戦った時より良くなっていると感じていた。

(最初に戦ったより強くなっている……。何故だ？ 奴は暗黒騎士ではないというのに)

統夜の実力は鋼牙と零には及ばないものの、引けを取らないものであった。

統夜の成長にディオスは焦りを感じていた。

「はあっ！」

「てえい!!」

「このお!!」

統夜、零、鋼牙は一斉にディオス目掛けて魔戒剣を振るった。

「このお……調子に乗るな!!」

ディオスは魔戒剣を盾に共鳴させて衝撃波を放つと、統夜たちを吹き飛ばした。

「うわっ！」

「くっ……っ！」

衝撃波を受けて吹き飛ばされた3人はすぐさま体勢を整えていた。

「思ったよりやるようだな。だが、これ以上貴様らの好き勝手にはさせせん！」

ディオスは魔戒剣を盾に共鳴させると、魔戒剣を前方に突きつけた。

すると、前方に円の空間が浮かび上がると、そこから放たれた光に包まれた。光に包まれたディオスは漆黒の鎧を身に纏った。

こうしてディオスは暗黒騎士ゼクスの鎧を身に纏ったのである。

「向こうも本気になったようだ。……零、統夜。俺たちも行くぞ」

「おうよ！」

「はい！いつでもいけます！」

鋼牙、零、統夜の3人はそれぞれの魔戒剣を構えた。

「貴様の陰我……俺たちが断ち切る！」

鋼牙がディオスに向かってこう言い放つと、鋼牙、零、統夜の3人は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に3人は包まれた。

そして……。

統夜は白銀の鎧を身に纏い、奏狼の鎧を召還した。

続いて零も統夜とは違うが白銀の鎧を身に纏い、絶狼の鎧を召還した。

そして鋼牙は金色の鎧を身に纏い、牙狼の鎧を召還した。

「ほお、それが牙狼の鎧か……。実物を見るのは初めてだな」

ディオスは初めて牙狼の鎧を見て笑みを浮かべるが、その黄金の輝きが鬱陶しいと感

じていた。

「ディオス！今度こそお前を倒す！」

統夜がこう言い放つと3人はゼクスの鎧を見に纏ったディオスに向かつていった。

その頃、レオと大輝は未だに大量の素体ホラーと戦っていたのだが、なかなか数が減っていないかった。

「くっ……きりがない!!」

「どうした、レオ。もう音をあげるのか？」

大輝は素体ホラーを斬り裂きながらこうレオをからかっていた。

「何の！まだまだです！」

レオも負けじと素体ホラーを斬り裂いていた。

(とは言うものの、このままではまずいな……。ある程度数が減れば鎧を召還して一気に蹴ちらすのだが……)

大輝は素体ホラーの数が思ったより減らないことに焦りを感じていた。

その時だった。

突然誰かが乱入してきたと思ったなら素体ホラーを斬り裂いた。

「……………あなた方は!!」

レオは突如乱入してきた2人に見覚えがあった。

「ほお……………思ってたより自体は深刻なようだな」

「ああ、そのようだ」

1人は40代中頃くらいの男で、そのオーラは歴戦の勇士が放っているオーラであった。

もう1人は30代前半から中頃くらいの男性で、彼もまた歴戦の勇士のような雰囲気を出していた。

40代くらいの男は四十万ワタル。雷鳴騎士破狼（バロン）の称号を持つ魔戒騎士で、かつては修練場で偶然統夜の指導教官になっていた男である。

もう1人は毒島（ぶすじま）エイジ。邪骨騎士義流（ギル）の称号を持つ魔戒騎士である。

2人は元老院所属の魔戒騎士であり、今回の事態を重く見た元老院の神官グレスが2人を桜ヶ丘に派遣したのである。

「……………あなたは、ワタルさんとエイジさん！どうしてここに？」

同じ元老院所属の魔戒騎士であるレオは当然2人のことは知っていたので驚いていた。

「元老院からの指令だ。ホラーグオルブ復活を阻止する手伝いをするようにな」

「元老院はそれだけ今回の件を重く見ているという訳だ」

「そうだったんですか……。でも、ありがたいです!」

レオは素体ホラーを切り裂きながら笑みを浮かべていた。

(これだけ実力のある魔戒騎士が揃うとはな……。これなら、どうにかなりそうだ!)

頼もしい味方が援軍に来たのを受けて大輝の戦意は一気に上昇していた。

「よし、さっさとこいつらを掃除するぞ!」

「おう!」

「はい!」

「承知!」

ワタルの号令にエイジ、レオ、大輝の3人は力強く返事をした。

そして……。

ワタルは両腕を交差させることで鎧の召還に必要な円を呼び出した。

円は上空に移動するとそこから光が放たれた。

光に包まれたワタルは蒼の鎧を身に纏った。

ワタルが身に纏った鎧は雷鳴騎士破狼。

雷鳴のような雄々しさをもち、蒼い輝きを放つ騎士である。

そしてエイジは鎧の召還に必要な円を呼び出すと、円が上空に移動し、魔戒剣を突き上げた。

円の部分から光が放たれ、その光に包まれたエイジは銅の鎧を身に纏った。

エイジが身に纏った鎧は邪骨騎士義流。

銅の渋き鎧が歴戦の勇士であることを物語っている。

続いて大輝とレオは魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

放たれた光に包まれて、大輝は鋼の鎧を、レオは狼怒の鎧を身に纏った。

鎧を召還した4人はそれぞれの武器を構え、多くの素体ホラーを睨みつけていた。

そして……。

4人は一齐に攻撃をしかけると、先ほどよりも早いスピードで素体ホラーを次々と蹴散らしていった。

4人が鎧を召還してから1分も経たないうちに大量にいた素体ホラーは全滅したのである。

素体ホラーの全滅を確認したところで、4人は鎧を解除した。

素体ホラーが全滅したところで4人はディオスと戦っている統夜の応援に向かおう

とするのだが……。

ズドオオオオオオオン!!

統夜たちが戦っている場所から轟音が鳴り響いていた。

「な、何だ!?!」

「ま、まさか!グオルブが!?!」

「何てことだ……!?!」

「統夜君……!鋼牙さん……!零さん……!?!」

レオたちは統夜たちが突入したビルをジッと見つめていた。

※※※

ワタルとエイジが応援に駆けつけた頃、統夜、鋼牙、零の3人はそれぞれの鎧を召還してディオスに戦いを挑んでいた。

暗黒騎士であるディオス相手に苦戦すると思われていたが、3人は善戦していた。

1番経験の浅い統夜も心滅したことで魔戒騎士としての未熟さを思い知ったのか大きく成長し、ディオスに立ち向かっている。

「くっ……！思ったよりやるな、こいつら……！」

ディオスは鎧装着後も統夜たちの善戦ぶりに焦りを感じていた。

特に統夜の成長ぶりには畏怖の感情さえ感じていた。

鎧を纏った状態でも最初に戦った時は余裕で叩き潰せたが、今の統夜はまるで別人のような成長ぶりであった。

「月影統夜……！貴様、いつの間にか力をつけたのだ!？」

「俺は……何も変わっちゃいない!」

統夜は皇輝剣を振るうとディオスは盾で防ぐが、そのままディオスを吹き飛ばした。

「ぐう……！何も変わっていない……だと!」

ディオスは体勢を整えながら統夜を睨みつけた。

「俺には守りたい人たちがいる!その想いが俺を強くするんだ!守りし者として!」

「統夜……」

「へへっ、言うじゃねえか、統夜!」

統夜の守りし者としての強い想いを聞いた鋼牙と零は笑みを浮かべていた。

「守りし者だと……くだらん!闇の力こそ崇高なる力なのだ!!」

「その力は偽物の力だ！俺は心滅してそれを思い知ったんだ！」

統夜は連続で皇輝剣を振るい、ディオスはそれを受け続けていた。

「小僧が……調子に乗るな！」

ディオスは統夜めがけて衝撃波を放つと、統夜は皇輝剣で受け止めていた。

「うっ……！ぐうう……！」

その衝撃波の威力は相当なもので、統夜は受け止めるだけで精一杯であったが、着実にダメージは受けていた。

「……鋼牙さん！零さん！今です！」

ディオスの攻撃を受け止め切ったところでこう鋼牙と零に告げた。

その時のダメージがかなりのもので、統夜の鎧は解除されてしまい、統夜は膝をついた。

「統夜！」

「承知！」

統夜がくれたチャンスが無駄にしないため、鋼牙と零はディオスに向かっていき、牙狼剣と銀狼剣を振るった。

その時だった。

ズドオオオオオオオン！！

グオルブの牙が突き刺さっている魔方陣から衝撃波が放たれた。

「ぐう……!!」

「ぐあつ!」

その衝撃波に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた鋼牙と零の鎧が解除されてしまった。

「鋼牙さん! 零さん!」

「統夜、大丈夫だ!」

「ああ! これくらい何ともないぜ!」

鋼牙と零の2人は鎧を解除されてしまってもダメージはあまり残っていなかった。

「今の衝撃は……何だ!?!」

「フハハハハ!! いよいよグオルブが復活する! 黙ってそこで見ているがいい! メシアの腕と呼ばれし魔獣、グオルブの復活を!」

「そんなこと……させるかよ!」

統夜は魔戒剣を構えてディオスを睨みつけた。

「もう遅い! すでにグオルブの復活は始まっているのだ!」

魔方陣から邪悪な輝きが放たれ、徐々に力が解き放たれていった。

「私はグオルブと1つになり、この世界を私の思い通りの世界にするのだ!」

ディオスはグオルブと一体化し、その意識を乗っ取ることで最強の存在となり、自分の理想の世界を作り上げようとしていた。

ディオスは徐々に力を解き放つグオルブの牙をその手に掴んだ。

「さあ、グオルブよ！我と一つになるのだ！そして、最強のホラーとして君臨するのだ！」

ディオスは高々と叫び、グオルブと一つになろうとしていた。

しかし……。

『ククク……。愚かな男よ……。貴様如きがこの私を制御出来ると本当に思っているのか!?!』

「なんだと……。!?そんな馬鹿な!!」

『愚かな暗黒騎士よ！望み通り私と一つになるがいい!!』

グオルブはディオスという媒体を手に入れたことで完全に覚醒しようとしていた。

「！まずい！一度外に出るぞ！」

鋼牙の号令を聞いた統夜と零は危険と判断したため、今いる場所から撤退した。

統夜たちが脱出したその時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

轟音が響き渡ると、ディオスが潜伏していたビルが崩れていった。

素体ホラーを全滅させたレオたちもその光景を啞然としながら見ていた。

ビルの崩壊が止まると、そのビルの跡地から怪しげな輝きを放つ光の柱が現れた。

この状態こそ、人界と真魔界が繋がってしまった瞬間であった。

こうしてメシアの腕と呼ばれた強大な魔獣、グオルブは完全な形で復活してしまったのである。

……続く。

——次回予告——

『ついに復活してしまった強大な魔獣。こいつは今まで以上に気を引き締めなければいけないようだぜ！次回、「翔翼」。銀の翼が空を駆ける！』

第23話 「翔翼」

暗黒騎士の称号を持つディオスはホラー、グオルブと一体化し、その意識を乗っ取ることで最強のホラーとなり、自分の理想の世界を作り上げようとしていた。

しかし、逆にディオスはグオルブの媒体となってしまう、取り込まれてしまった。

そのことでグオルブは完全に復活し、人界と真魔界をつなぐ怪しげな輝きを放つ光の柱が現れてしまった。

その光の柱は、桜ヶ丘高校から出られなくなっている唯たちも見ることが出来た。

正体不明な光の柱が現れたことで学校に残っている生徒たちは困惑し、パニックに陥っていた。

「なっ………！ なななな何、あれ!?!」

統夜が魔戒騎士であると知らない純もそんな1人であった。

（「まさか………あのディオスって人が言っていたグオルブってホラーが復活したの!?!」）

梓は状況からグオルブが復活したのではないかと推測していた。

それは統夜が魔戒騎士であると知っている唯たちも同じ考えだった。

「何なのよ………！ 一体何が起こってるのよ………!」

さわ子もパニックになっていた。

「や、山中先生！落ち着いて下さい！」

「そうだよさわちゃん！落ち着いて！」

「あなたたちは何でそんなに冷静なのよ!? あんなの明らかに異常じゃない！」

「えっ？それは……」

統夜が魔戒騎士と知らない和はどう返事をしたらいいか分からなかった。

しかし……。

「大丈夫ですよ、さわ子先生」

「そうだよ、さわちゃん先生！きつと何とかなるよ！世の中にはこんな異常なことを解

決させる人がいるんだよ！」

唯は具体的なワードを出さず魔戒騎士が人を守ってくれることを伝えた。

「そ、そうなの……かしら？」

さわ子は不思議にもその言葉を信じようと思った。

(統夜君……。あなたは無事よね？無理だけはしないでね……！)

細はひたすら統夜の無事を祈っていたが、それは唯たちも同じであった。

※※※

ディオスがグオルブに取り込まれたところを見た統夜たちは自らが突入したビルから脱出した。

脱出するなりビルの崩壊を見ていたレオたちと合流した。

「鋼牙さん！みなさん！無事ですか!？」

「ああ、俺たちはみんな無事だ」

「フツ……。さすがだな」

鋼牙たちは元老院から来たワタルとエイジの存在に気付いた。

統夜はかつて修練場で教官だったワタルを見て驚いていたが、それはワタルも同様であつた。

「！あ、あなたは……」

「お前は……もしかしてあの時の小僧か!？」

修練場に通つてからもうすぐ5年となり、統夜は17歳になっていたのだが、まだ幼

さが残る統夜のことをワタルはすぐわかったのである。

「俺はもう小僧じゃないですがお久しぶりです！」

「お前……魔戒騎士になれたんだな」

「はい！」

「統夜、感動の再会はそこまでだ。来るぞ！」

鋼牙がこう統夜に告げると、光の柱から再び大量の素体ホラーが現れた。

「うわ……また出やがった！」

『人界と真魔界が繋がってる今じゃそれは無理もないわね』

シルヴァの推測通り、人界と真魔界が繋がってしまったため、ホラーがこのゲートを通って現れることが出来るのである。

「皆さん！グオルブは真魔界から人界に出てくるのには時間がかかります。ですので、僕たちが直接あのゲートから真魔界に乗り込んでグオルブを討つしかないです！」

「そうか。……零！統夜！行けるか？」

「もちろん！」

「ええ、これ以上奴らの勝手にはさせません！」

「僕たち4人はここで出てきたホラーを抑えますので、よろしくお願いします！」

「承知！零、統夜、行くぞ！」

グオルブを直接叩くため、鋼牙、零、統夜の3人が真魔界に乗り込むことになったのである。

「皆さん！グオルブを討伐したら速やかにこのゲートから戻ってきて下さい！1秒でも遅れたら真魔界から出ることが出来ません！」

「わかりました！」

こうして鋼牙、零、統夜の3人は素体ホラーたちを突っ切ると、怪しげな輝きを放つ光の柱に突入した。

光の柱に突入し、一本道を進み続けると、3人はグオルブがいる真魔界に到着した。

「……」が真魔界か……」

統夜は魔戒騎士となって初めて真魔界を訪れたので、キョロキョロと周囲を見回していた。

（真魔界の話は鋼牙さんや零さんから聞いてたけど、本当に何も無いところなんだな）

真魔界は人界のように都市があるわけではなく、本当に何も無いところだった。

「それにしても……グオルブはどこにいるんだ……？」

『！統夜！この先だ！』

イルバがグオルブを探知し、統夜はイルバが示した方向を見た。

すると……。

統夜たちの目の前に巨大なホラーが現れた。

このホラーこそ、メシアの腕と呼ばれたグオルブの本体である。

その姿は統夜たちよりも遥かに巨大であり、禍々しいほど漆黒の身体をしており、その背中には羽根も生えている。

「あれがグオルブの本体か！」

『統夜！奴は今まで戦ってきたホラーとは比べものにならないぞ！油断するな！』

「ああ！」

『鋼牙！油断するなよ！』

「わかっている」

『ゼロ！あのホラーは手強いわよ！』

「ああ！どうやらそのようだな！」

イルバ、ザルバ、シルヴァはそれぞれの相棒にこう進言していた。

「行くぞ、零！統夜！」

「おう！」

「はい！」

『統夜！この真魔界では鎧を召還しても制限時間はない。思い切り行け！』

「わかった！」

イルバの言葉通り、この真魔界では鎧を召還したときの制限時間はない。

人界で鎧を装着する時は99・9秒という制限時間があるのだが、真魔界やホラーが生み出した空間のような人界とは異なる空間では鎧の制限時間はなくなるのである。

鋼牙、零、統夜の3人は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

3人はそこから放たれる光に包まれた。

そして……。

統夜は白銀の鎧を身に纏い、奏狼の鎧を召還した。

零は統夜とは違う白銀の鎧を身に纏い、絶狼の鎧を召還した。

鋼牙は金色の鎧を身に纏い、牙狼の鎧を召還した。

そして……。

「行くぞー！白皇!!」

「来い！銀牙!!」

「来い！轟天!!」

統夜、零、鋼牙の3人はそれぞれが持つ魔導馬を召還した。

統夜の召還した魔導馬は白皇という。

そして零の魔導馬が銀牙。鋼牙の魔導馬が轟天である。

魔導馬を召還した3人はホラー、グオルブに向かっていた。

『愚かな……。魔戒騎士如きがこの私を倒せると思うな』

グオルブは身体のあちこちから邪気を放出した弾を呼び出すと、それを3人めがけて放った。

3人はそれぞれの武器を用いてグオルブが放つ邪気の弾を弾き飛ばしていた。

「それにしてもデカイな、こいつ！イルバ、奴に弱点はないのか?！」

『残念ながら奴にはそう言ったものはないぜ』

「デスヨネー」

統夜はグオルブの攻撃を弾き飛ばしながらもがつくりと項垂れていた。

「つとー無駄口は叩いてられないか！」

統夜は勢いが増した邪気の弾の弾幕を皇輝剣で弾き飛ばしていた。

そして3人は攻撃を弾き飛ばしながら邪気の弾の弾幕を突破した。

「零！統夜！一気に決めるぞ！」

「おうよ！」

「わかりました！」

鋼牙は牙狼剣を轟天の力で牙狼斬馬剣へと変化させた。

零は2つの銀狼剣の柄をくつつけて銀牙銀狼剣の形態に移行させた。

統夜は皇輝剣を白皇の力で皇輝斬魔剣へと変化させた。

3人はそれぞれの全力で一氣に勝負をつけるつもりだった。
しかし……。

『愚かな……。その程度の攻撃で私を倒せるものか!』

グオルブは真つ黒な手を複数召還した。

その手たちはものすごいスピードで3人に迫った。

3人はそれぞれの武器を振るって迎撃しようとするが、迫り来る黒い拳のスピードには追いつけず、3人は黒い拳に殴られることで吹き飛ばされてしまった。

「ぐっ……!」

「ぐあ……!」

「この……!」

魔導馬から引きずり降ろされた3人はどうか体勢を立て直そうとするが、そこに複数の拳が迫ってきた。

3人は2発、3発と連続でパンチを受けたことでさらに吹き飛ばされてしまい、その衝撃で鎧が解除されてしまった。

「くそっ!なんてデタラメなスピードの拳だよ!」

「へっ、こいつは思った以上にやるようだな」

「ああ。あの拳を見切らなければ俺たちに勝ち目はない」

鋼牙はどこから飛んでくるかわからない拳の動きを見切らなければ勝機はないと推測していた。

「統夜。俺と零が囷になる。お前はその隙にグオルブに攻撃をしてくれ」

「……統夜、頼んだぜ！」

「……わかりました！」

3人は体勢を立て直したところで魔戒剣を高く突き上げ、再び鎧を召還した。鋼牙と零はグオルブに接近しようとするが、先ほどの拳が襲いかかってきた。

同じ攻撃に何度も屈する2人ではなく、2人は迫り来る拳をかわしたり弾き飛ばしたりしながら攻撃をしのいでいた。

「統夜！今だ！」

「はい！……行くぞ、白皇！」

統夜は再び白皇を召還し、グオルブに接近した。

そして……。

「こいつを喰らえ！」

統夜は皇輝剣を皇輝斬魔剣に変化させると、剣を一閃した。

しかし……。

「何だ！？」

その一撃でグオルブの身体を斬り裂くことは出来ず、あっさりを受け止められてしまった。

『愚か者が……。そんな剣では私は斬れぬよ』

「くっ！」

統夜は皇輝斬魔剣をさらに一閃させるが、やはり効果はないようだった。

『思っているがいい！私の力を!!』

グオルブは更に複数の拳を召還し、その攻撃は全て統夜に迫ってきた。

「ぐう……があ……お……」

2発、3発、4発とグオルブの容赦ない攻撃が続き、統夜はそのまま吹き飛ばされてしまい、遠く離れた壁に叩きつけられた。

その衝撃で奏狼の鎧は解除されてしまった。

「統夜！」

鋼牙と零は吹き飛ばされて鎧を解除された統夜を心配するが、グオルブの攻撃が激しく、救援に行ける状態ではなかった。

「くそっ……！まだ……だ！」

統夜は連続で受けた攻撃のせいですでにボロボロだったが、どうにか立ち上がった。

『まだ立つか。魔戒騎士とは相変わらずしぶとい連中だな。……いいだろう。私のさら

なる力を見せてやろう。……はあっ!!』

グオルブは統夜の前に魔方陣のようなものを呼び出すと、そこから複数の素体ホラーが現れた。

しかし、その効果はこの真魔界だけに及んだものではなかったのだ。

※※※

その頃、桜高の校庭では相変わらず取り残された生徒たちが出られるのを待っていた。
た。

(……戦いが始まってもう1時間……。統夜先輩……。大丈夫かなあ……)

梓たちが統夜たちと別れておよそ1時間が経過していた。

「……あずにゃん、もしかしてやーくんの事を考えてた?」

「はい、そうです」

梓は照れて隠すことはせず、素直に答えていた。

「大丈夫だよ、あずにゃん。やーくんならきつと……」

唯は統夜ならこの事態を何とかしてくれる。そう確信していた。

「……そうですね」

梓も統夜のことを信じていたので唯の言葉に頷いていた。

その時である。

「ね、ねえ！何なの、あれ?!」

桜高の校門前に突然魔方陣のようなものが現れ、それを見た生徒たちは困惑していた。

現れたのは魔方陣ではなかった。

その魔方陣から素体ホラーが10体ほど現れたのである。

ここにいる人間のほとんどはホラーを見たことがなかったので、突然現れた異形の怪物に悲鳴をあげると、その場は騒然となってしまった。

「な！何よあれ!!」

「か、怪物?!」

「……!」

ホラーを初めて見るさわ子、純、和の3人は恐怖に怯えていた。

「あれは……ホラー!？」

「何で学校の前にいきなり現れたの!？」

唯たちも突然ホラーが現れたことに困惑していた。

「な、何よあんたたち!あの怪物のことを知っているの!？」

「えっ、ええ……。一応……」

迂闊にホラーや魔戒騎士のことを話してはいけないと感じた紬はこう話を濁していた。

「今はそれどころではないわー」

和がこう言った瞬間、素体ホラーたちが目の前の結界を攻撃し始めた。

その様子を見ていた生徒たちは学校の中へと逃げ始めた。

「唯! 私たちも逃げるわよ!」

和もこのままではいけないと感じ、逃げるよう促していた。

「えっ? でも……」

「逃げたって、あいつらが入って来たら逃げ場はないんじゃない」

澁はこう冷静に判断していた。

逃げるのは良いのだが、結界を放っておけば、いくら強力な結界でもその結界が破れるのも時間の問題である。

そうなつたらホラーが一斉に校内に押し寄せ、どれだけの被害が出るか想像がつかなかった。

逃げようにも他に逃げ道はないのである。

「だけど、校内の方が安全よ！」

そう言つてさわ子も唯たちに逃げるよう勧めるが、ホラーたちは休むことなく校内に入れるよう結界を攻撃し続けていた。

そして、結界に僅かだがヒビが入ってしまった。

このままでは結界が壊れるのも時間の問題である。

しかし、自分たちにはホラーを倒す術はなく、統夜たち魔戒騎士はグオルブとの戦いに赴いている。

この状況に絶望しかけていたその時であった。

どこから弾のようなものが飛んで来ると、それが一体の素体ホラーを消滅させた。

『えっ?』

その様子を見ていた唯たちは驚きを隠せなかった。

今の攻撃はいったい誰が?

そう考えていると、黒いコートを身に纏った女性が現れ、素体ホラーと戦闘を開始した。

「こ、今度はなんなのよ!」

「あつ! あれは!」

唯たちは素体ホラーと戦う女性に見覚えがあつた。

「……! お前たち、無事か?」

「! 烈花さん!」

その女性の正体は烈花であり、紬が歓喜の声をあげていた。

「烈花さん、どうしてここに?」

「統夜からホラー、グオルブが復活することは聞いただろう? 俺たちは統夜とは合流せず! ここでお前たちを守ることにしたんだよ」

「俺……! たち?」

唯たちは何故烈花が俺たちと複数形で言っているのか理解できなかつた。

その時だつた。

「はあつ!!」

着物をカスタムしたような黒い服を着た女性が現れると、筆から放たれた光線で素体ホラーを消滅させた。

そして、白いコートに槍を持った男が素体ホラーを斬り裂いていった。

「! な、なあ! あの人つて!」

「魔戒……騎士？」

唯たちは目の前にいる魔戒騎士に驚いていた。

「お前たち……統夜のことを知っているのか？」

「ということはあの子たちが統夜の言っていた軽音部とやらの子達だね」

「そうです、邪美姉」

烈花はもう1人の女性のことを邪美姉と呼んでいた。

邪美姉こと邪美は閑岱という魔戒法師の里の魔戒法師である。

その実力は最強の魔戒法師と言っても過言ではなく、黄金騎士である鋼牙も一目置いている。

「自己紹介がまだだったね。あたしは邪美。魔戒法師さ」

邪美は素体ホラーを蹴散らしながら唯たちに自己紹介をしていた。

「俺は山刀翼、魔戒騎士だ。統夜が世話になってるそうだな」

白いコートの魔戒騎士……翼も素体ホラーを蹴散らしながら自己紹介をしていた。

「お二人も統夜先輩のことを知っていますか？」

「まあね、統夜のこととはよく知っているよ」

「俺はあいつに魔戒騎士として手ほどきをしたことがある。なかなか鍛え甲斐のある奴だよ」

「そ、そうだったんですか……」

統夜には一体どれだけの知り合いがいるのか？

そう脳裏をよぎった梓は苦笑いをしていた。

「「……………」」

さわ子、和、純の3人は全く状況を飲み込めず言葉を失っていた。

この世のものとは思えない怪物を難なく蹴散らすあの3人は何者なのか？

それに彼らや唯たちが口にする魔戒騎士や魔戒法師とは一体何なのか？

3人の頭の中でその疑問は絶えることはなかった。

全く状況が飲み込めない3人を置き去りにするかのように更に更に自体は動き始めた。

翼、邪美、烈花の3人によって素体ホラーは殲滅させたのだが、再び素体ホラーが現

れたのだ。

「ああ、もう！しつこいね！」

「恐らくはグオルブの力でしょう。奴の力でホラーが湧き出ているのでは？」

「どうやらそのようだ」

そう答える翼は眉間にシワを寄せていた。

話を聞いているだけでとんでもない話であると事情を知っている唯たちだけではな

く、さわ子、和、純も察していた。

「こいつらを一気に蹴散らす。……邪美、烈花。あいつらを頼んだぞ」

「ああ、わかったよ」

「任せておけ」

翼が再び出現した素体ホラーたちを殲滅することになり、邪美と烈花は唯たちの護衛にあたった。

『翼！ 白夜騎士の力を見せてやれ！』

突然翼の腕から男の声が聞こえ、カチカチという音も聞こえてきた。

今口を開いたのは魔導輪ゴルバ。腕輪の形をした翼の相棒である。

「？今の声、どこから？」

和は謎の声に首を傾げていた。

そして……。

翼は魔戒槍を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、翼は純白の鎧を身に纏った。

翼が身に纏った鎧は白夜騎士打無（ダン）。その白き鎧は高貴さを表している。

翼は魔戒槍が変化した白夜槍を振るい、次々と素体ホラーを蹴散らしていった。

「えっ？」

「何よ、あれ……」

「白い……鎧？」

魔戒騎士の鎧を初めて見る3人は驚きを隠せなかった。

というよりも今現在起こっている非日常の風景に驚きを隠せなかった。

再び素体ホラーを全滅させたところで翼は鎧を解除した。

（お前の大切な友は俺たちが守る……。だから統夜、お前は思い切り戦ってこい！）

翼は唯たちを守るとともに真魔界で戦っている統夜にエールを送っていた。

※※※

翼、邪美、烈花の3人が桜高の前で唯たちを守っていた頃、真魔界では激闘が続いていた。

鋼牙と零は無数に飛び交う黒い拳を相手に苦戦を強いられていた。

どうにかここを突破してグオルブに一撃を与えたいが、それを許してくれる状況ではなかった。

統夜はボロボロになりながらも素体ホラーの群れと戦っていた。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

統夜はグオルブの連続攻撃を受けてすでに体力は限界だったのだが、グオルブは休む暇を与えてはくれなかった。

そんな状態の中、統夜は2体、3体と素体ホラーを斬っていくが、体力が限界の中それは長く続かなかつた。

10体の素体ホラーが統夜に一斉に押し寄せてきた。

「くっ……くっ……」

素体ホラーたちを押し返す程の力は残っておらず、統夜は素体ホラーたちに押し倒されてしまった。

「統夜!!」

このままでは統夜がホラーに喰われてしまう。

鋼牙と零はどうか助けに行こうとするが、グオルブはそれを許さなかつた。

グオルブの攻撃はより激しさを増し、少しでも隙を見せれば連続で攻撃を受けてしまう。

そんな状況だった。

(統夜、ふんばれ……!)

（お前には帰りを待つてる人がいる。ここが正念場だぞ）
鋼牙と零はエールを送ることしか出来なかった。

「……はっ！やーくん!？」

ちようどその頃、唯が何か異変を察知していた。

「?どうしました、唯先輩？」

「このままじゃやーくんが危ないの!」

唯はそれだけ言うと学校の中へ走っていった。

「ちよ!唯、待てって!」

律たちはそれを慌てて追いかけて、校庭には状況を飲み込めずにいるさわ子、和、純が残された。

「あいつら、一体何をするつもりなんだ?」

「あの子たちはあの子なりに統夜の応援をしたいんだろうさ!」

「俺もそう思います」

翼、邪美、烈花の3人は走り去る唯たちを見守っていた。

現在はホラーは現れていないので3人はホラーの襲撃に備えていた。

学校の中へ走っていった唯が真つ先に向かったのは軽音部の部室である音楽準備室だった。

唯は中に入るなり迷うことなく自分のギターケースを取り出し、ギター演奏の準備を行っていた。

ちようどそのタイミングで律たちも音楽準備室に入ってきた。

「唯ちゃん、ギターを準備してどうしたの?」

「演奏するんだよ!」

「唯、何でまたこんな状況で演奏するんだよ?」

滯の指摘はもつともであった。

こんな非常事態に楽器を弾くとはあり得ない状況だからである。

「だからこそだよ! やーくんは今必死に戦ってるんだもん! 私たちは私たちに出来ることでやーくんの応援をしようよ!」

「お姉ちゃん……」

憂は姉である唯のここまで真剣な表情は初めて見た。

唯は魔戒騎士でも魔戒法師でもない。それ故に今自分が出来ることをやろうとしていた。

その思いを汲み取った軽音部のメンバーたちはそれぞれの楽器の準備を始めた。「!みんな!」

「確かに唯の言う通りだな。あたしたちに出来るのは演奏することだけだしな」

「ああ。統夜にこの演奏は聞こえないかもしれない。だけど、この気持ちは届けたい!」
「ええ。私たちの想いはきつと統夜君の力になるわ!」

「はい! 私たちの音楽を統夜先輩に届けましょう!」

「私は演奏は出来ないけど、祈ることは出来ます! 統夜さんの無事を。そして、統夜さんの勝利を!」

律たちはやる気になっており、演奏が出来ない憂も祈りを捧げていた。

「よし、みんな! やろう!」

「[[[[おー!!]]]]」

演奏準備が整ったところで唯たちは演奏を始めた。

統夜の無事を。そして、統夜の勝利を祈りに込めて。

く使用曲↓ふわふわ時間く

梓は演奏をしながら驚いていた。

普段はお茶ばかり飲んでだらけているのにいざという時にはプロ顔負けの演奏をしている。

その時、梓は統夜の言葉を思い出していた。

演奏をしている時はみんな楽しそうで、みんなの気持ちが1つになった時、自然と良い音楽になっていると。

梓は今演奏しているこの瞬間、統夜の言葉を実感し、理解していた。

（統夜先輩……。私、あの時の先輩の言葉を実感してます……。お願い、負けないで！無事に帰って来てください！）

そして梓は統夜の無事を音楽に込めていた。

それは梓だけではなく、唯たちも同じ気持ちであった。

そして、ふわふわ時間の演奏は終了したのである。

「……………なあ、唯。次は何を演奏する？」

律は次の曲を唯に相談するが……………。

「……………」

何故か唯はそれを答えようとはしなかった。

「……………？唯ちゃん？」

何故か無言になる唯に首を傾げていたその時だった。

「♪例えば、途切れた空が見えたなら〜」

唯は突然弾き語りのように歌を歌い始めた。

「！唯先輩？」

「なあ、この曲って……」

「ああ。ワルキューレの曲だよ。今流行ってる」

「統夜君もこの曲が好きだったわね」

唯が今歌っているのは最近人気が出ているアイドルグループ「ワルキューレ」の「僕らの戦場」という曲である。

統夜がワルキューレの曲が好きで、軽音部の練習と言ってはこの曲や他のワルキューレの曲を練習したりもしていたのである。

「唯のやつ良いチョイスをするじゃないか！」

「ええ。これなら統夜君にきつと翼を届けることが出来るわ」

唯の歌を聴きながら律、滯、紬、梓は互いの顔を見合って頷いていた。

そしてこの曲がサビに入ろうかというところで律たちも演奏に加わった。

（使用曲↓僕らの戦場（桜高軽音部ver））

唯たちが演奏を始めていた頃、統夜は絶体絶命のピンチに陥っていた。

体力が限界の中素体ホラーたちと戦っていたのだが、素体ホラー10体に押し倒され

てしまったのだ。

統夜はどうかこの危機を脱しようとするが、そこまでの力は残されていないかった。
（こんなところで死んでたまるか！俺は、唯たちと約束したんだ！必ず生きて帰るってだから！）

統夜はこの絶体絶命のピンチでも諦めてはいなかった。

生きて唯たちのもとへ帰るために。

どうか素体ホラーたちを引き剥がそうとしたその時だった。

突如細からもらったネットクレスが光りだしたと思ったら曲が聞こえてきたのだ。

唯たちが奏でる音楽が。

そして……。

——♪例えば、途切れた空が見えたなら

（！唯!?それに、この曲……）

統夜は間違うはずはなかった。

唯が歌っている曲は今自分がハマってるアイドルグループ「ワルキューレ」の曲だったからである。

（……俺は1人じゃない。俺にはみんながいる。みんなのこの想いが俺に翼を与えてくれる……。だから……！）

統夜が強く念じたその時であった。

統夜の身体から銀色の光が放たれたのである。

そして……。

素体ホラーたちが一気に消滅したと思つたら、何かが飛翔していたのである。

ホラーを消滅させて飛翔したのは統夜が身に纏っている奏狼であった。

しかし、ただの奏狼ではなかった。

奏狼の背中に銀色に輝く翼が生えていたのである。

その姿は雄々しくもあり、気高くもあった。

この姿こそ翔翼（しようよく）騎士奏狼。

唯たちの祈りが統夜に届き、その背中に翼を与えた奇跡の形態であった。

統夜は華麗に飛翔すると、そのままグオルブに向かつていった。

「あ、あれは、統夜？」

「統夜……。ふっ、そういうことか」

鋼牙はホラーの始祖と呼ばれたメシアと戦った時、カオルの想いと祈りが届き、金色の翼人となりてメシアを討滅した。

その時の記憶が頭をよぎり、鋼牙は笑みを浮かべていた。
そして……。

「行け、統夜!!今のお前ならグオルブを倒せる!!」

鋼牙は力強い言葉で統夜にエールを送っていた。

『ほお、まだ歯向かうか。良からう。まずは貴様を始末してやる』

鋼牙と零を捨て置き、統夜を始末しようとしたグオルブはその背中の羽で飛翔し、統夜に向かつていった。

統夜とグオルブは空中でぶつかり合い、互角の戦いをしていたのである。

『馬鹿な………貴様は既に限界のハズ。なぜそこまで動けるのだ!?!』

グオルブは焦っていた。

一時は統夜を相当追い詰めたのにそれを全く感じさせない動きをしていたからだ。
「俺には大切な仲間がいる!その支えがある限り、俺は絶対に折れたりはしない!」

統夜は赤い炎の斬撃を飛ばすと、グオルブを吹き飛ばした。

『ぐお!な、何だと!?!』

グオルブは壁に叩きつけられたが、すぐに体勢を立て直した。

「ホラー、グオルブ!その強大な力でこの世の全てを滅ぼそうとする貴様の陰我……陰我が断ち切る!!」

統夜はグオルブに向かってこう宣言すると、そのままグオルブに向かっていった。

『おのれ……。だが、これならどうだ!!』

グオルブはおびたしい数の拳を召還すると、その全てを統夜にぶつけようとした。

『まずいぞ、統夜。あれ全てを食らったら流石に持たないぜ!』

「そうだな、だけど!!」

統夜は皇輝剣に念を込めると、その姿が皇輝斬魔剣に変化した。

翔翼騎士奏狼の形態になると、魔導馬である白皇の力を借りなくても皇輝剣を皇輝斬魔剣に変化させることが出来るのだ。

さらに、統夜は皇輝斬魔剣の切っ先を赤い炎で包み込み、自らの体も赤い炎に包まれた。

そう。統夜は烈火炎装の状態になったのである。

迫り来る拳たちは統夜の身体から放たれる赤い炎に触れると消滅した。

こうしておびたしい数の拳をくぐり抜けながら統夜はグオルブに向かっていった。

『な、何だ?!?そんな馬鹿な!あれだけの攻撃を受け止めるなんて!?!』

グオルブは戦慄していた。

己が強大な力でさえも跳ね除ける目の前の強大な力に。

そして……。

「はああああああああああああああああああ!!」

統夜はまるで獣のような咆哮をあげながら赤い炎に包まれた皇輝斬魔剣を一閃した。その一撃はメシアの腕と言われたグオルブの身体を真つ二つにしてしまったのである。

『馬鹿な……。この私が……。こんな小僧に……。』

「俺は小僧ではない!」

『な、何?!』

「我が名は奏狼!!白銀騎士の称号を受け継いだ魔戒騎士だ!!」

統夜は高々と自分の魔戒騎士としての名前を宣言したのである。

そして……。

『ぐわああああああああああああ!!』

断末魔をあげながらグオルブの身体は爆発を起こし、その身体は消滅していった。

鋼牙と零の近くに着陸した統夜はグオルブ消滅の瞬間をジツと見据えていた。

こうしてグオルブを討滅した統夜は鎧を解除し、鋼牙と零も鎧を解除した。

「統夜、やったな。凄かったぜ!さっきの戦い」

「零さん……。ありがとうございます……」

「統夜、零。話はそこまでだ。脱出するぞ」

「おっと、そうだった。早く出ないとこの真魔界に取り残されるからな」
「はい！戻りましょう」

こうして統夜たちは勝利の余韻にひたる暇もなく、自分たちが入ってきた光の柱から人界に戻っていった。

※※※

統夜がハマってるグループである「ワルキューレ」の曲を最後まで演奏した唯たちはとても満足そうな表情をしていた。

「やーくんに……この歌は届いたかなあ？」

「はい！絶対に届いてますよ！」

「そうだけ！この演奏がきくと統夜の力になったさ」

「ああ、私もそう思う」

「ええ♪最高の演奏だったもの♪」

「皆さん、さすがです！」

唯たちの演奏は今まで以上のものであり、祈りを込めながら演奏を聴いていた憂も大満足だった。

「みんな、戻ろう！戻ってやーくんの帰りを待とうよ！」

「「「うん（はい）!!!」」」

こうして唯たちは自分たちの楽器を片付けると、統夜の帰りを待つために校庭に戻ることにした。

その頃、統夜たちが脱出した真魔界では、グオルブが開いた光の柱が閉じようとしていた。

そして、それを漆黒の鎧を身に纏った男がジッと眺めていた。

「おのれ……月影統夜……。あいつだけは……生かしておくわけにはいかない……！」

漆黒の鎧の男は統夜に憎悪の感情を抱いていた。

グオルブは討滅したが、戦いはまだ終わっていなかったのである。

……続く。

——次回予告——

『おいおい、どうやら戦いはまだ終わってないようだな。ここで一気に決着をつけようぜ、統夜。次回、「白銀」。勇気の刃で闇を斬り裂け！ソロお!!』

第24話 「白銀」

復活した強大な力を持つホラー、グオルブを討滅するために、統夜、鋼牙、零の3人は真魔界に乗り込んだ。

そこで3人が見たものは実体化したグオルブの姿であった。

統夜たちは鎧を召還し、グオルブに立ち向かった。

そんな中、統夜はグオルブの強大な力に徐々に追い詰められていった。

グオルブの容赦ない攻撃に鎧を解除された統夜はグオルブが呼び出した素体ホラーたちと戦っていた。

しかし、体力が限界だった統夜は素体ホラーたちに追い詰められていったのである。

その時、突然音楽が聞こえてきた。

絢がお守りとして統夜に渡した寶石から音楽が聞こえてきたのである。

そしてその時、不思議なことが起こった。

銀色の輝きを放って素体ホラーを消滅させただけでなく、奏狼の鎧にも変化が起こった。

銀色の翼が生え、翔翼騎士奏狼へとその姿が変わったのである。

統夜はその力で見事にホラー、グオルブを討滅し、統夜たちは真魔界から脱出した。統夜たちが真魔界でグオルブと戦っている間にレオたちは光の柱の前にいた素体ホラーたちを全滅させ、統夜を待っていた。

そして……。

「！統夜君！鋼牙さん！零さん！」

統夜たちの無事を確認したレオは統夜たちに駆け寄り、大輝、ワタル、エイジも統夜たちに歩み寄った。

「皆さん、グオルブを討滅したんですね？」

「ああ、統夜のおかげだ」

「いや、俺は……」

「謙遜することはないぜ。お前はよくやったよ」

「零さん……」

「ほお、どうやら小僧も一人前になったみたいだな」

統夜がグオルブを討滅したと知り、ワタルは笑みを浮かべていた。

「小僧はやめてくださいよ」

統夜はそう言って苦笑いをしていた。

「そうだな。……よくやった。月影統夜。……いや、白銀騎士奏狼」

「ワタルさん……」

統夜はかつての教官であるワタルに認めてもらったことが何よりも嬉しかった。

「あいつらも、きつと喜んでいるよ」

ワタルの言うあいつらとは修練場で統夜のチームメイトであり、ホラーに殺されてしまったシロ、アオ、ヤマブキのことであった。

「……俺もそう思います」

それを察した統夜はこうしみじみと呟いていた。

「とりあえず仕事は終わりだ。レオ、結界を解いても大丈夫だ」

「はい、わかりました」

レオが結界を解こうとしたその時だった。

『鋼牙！どうやらそれはまだ早いみたいだぜ！』

異変を感じたザルバが口を開いたその時だった。

真魔界のゲートとなった光の柱が砕け散り、漆黒の騎士が姿を現した。

「！貴様は！」

「暗黒騎士……ゼクス……」

「馬鹿な！貴様はグオルブに取り込まれて死んだはずだ！」

「馬鹿め。私はその程度では死なん。今の私にはどうしても始末したいやつがいるので

な」

統夜たちの前に立ちはだかったのはグオルブに取り込まれて死んだはずのディオスであった。

それも鎧だけ存在ではなく、本人の思念もあった。

「……月影統夜。貴様だけは私の手で殺す！貴様のせいで我が計画は水泡に帰したからな！」

ディオスは剣の矛先を統夜に向けていた。

「貴様を殺すだけでは物足りん！まず手始めに貴様の大切なものを奪ってやる。貴様を殺すのはそれからだ！」

そう宣言すると、ディオスはレオの貼った結界を破り、どこかへと移動を開始した。

「！逃がすか！！」

大切なものという言葉に心当たりのある統夜はディオスを追いかけるべくとある場所へと向かった。

※※※

その頃、邪美、烈花、翼の3人はホラー出現に備えていた。

唯たちが統夜にエールを送るため音楽準備室に行っている間も3人はホラー出現に備えていた。

唯たちがいなくなっておよそ20分。ホラー出現のゲートになっていた魔法陣が消滅した。

「！邪美姉。魔法陣が！」

「そうだね。どうやら統夜たちは無事にグオルブを討滅したみたいだね」

「ふっ……。統夜、それなりに成長したみたいだな……」

翼は自分の弟子のような存在の統夜の成長を実感し、笑みを浮かべていた。

魔法陣が消滅して数分後、唯たちが校庭に戻ってきた。

「あつ、唯！みんな！どこに行ってたのよ？」

唯たちがいなくなつてからその場に留まっていた和がこう唯たちを問い詰めていた。

「エへへ……。実は、演奏してたんだよね……」

「え!?演奏!?こんな状況なのに……。ですか!？」

「ああ、まあ……ね」

濡は言い訳が思いつかずこう返しながら苦笑いをしていた。

「ま、まあいいわ。どうやらあの怪物は出てこなくなつたみたいだし」

さわ子たちもホラー出現のゲートになつていた魔法陣が消滅したのを見ていたので、唯たちにそのことを報告していた。

「え、そうなんですか？」

さわ子の報告に紉が驚きながら返事をしていた。

（という事は統夜先輩に私たちの音楽が届いたのかなあ……）

（やーくん、ホラーをやっつけることが出来たんだね！）

唯たちは統夜たちがグオルブを討滅したのだろうと判断し、喜んでいた。

しかし、その喜びは束の間だった。

ガシヤアアアアアアアアン!!!

突然桜高入り口の結界が破壊されたと思つたら唯たちの目の前に漆黒の鎧の騎士が現れた。

「!!あ、あなたは?」

「ま、まさか……」

唯たちはこの鎧を身につけているのがディオスであるとすぐわかつていた。

「あんた……暗黒騎士だね!!」

「その子たちはやらせはしない!!」

「……………!!」

邪美、烈花は魔導筆を手にディオスを睨みつけ、翼は無言のまま魔戒槍を構えるとディオスを睨みつけていた。

「…………魔戒法師に魔戒騎士か。貴様らに私の邪魔はさせん!!」

「魔戒法師?」

「魔戒騎士?」

ディオスの発した言葉が理解できず、さわ子、和、純の3人は首を傾げていた。

「あなたはホラー復活が目的じゃないの!?!」

紬は目の前のディオ스에恐怖の感情を抱きながらも臆せずディオスを問い詰めていた。

「ああ。グオルブは復活したさ。だが、グオルブは討滅されてしまったよ。……月影統夜にな」

「という事はやっぱり統夜先輩は勝ったんですね!?!」

梓はディオスの言葉で統夜たちの勝利を確信していた。

しかし…………。

「だったらお前は何でここに来たんだよ!!」

この場所に来たディオスの目的がわからなかったの、律はこう言い放つてディオスを睨みつけた。

「貴様らを斬るためだ」

淡々と語るディオスの言葉に唯たちは恐怖を感じていた。

「貴様らを殺せば月影統夜の苦しむ顔が見られるからな……。これは見せしめだ」

「何でそんな事するのさ! 事情は知らないけど、ただの逆恨みじゃん!!」

「そうね! 彼女たちは私の教え子なの。はいそうですか? 許さないわよ!!」

事情を知らない純とさわ子であったが、ディオスの言葉が気に食わなかったのか、こう反発していた。

「黙れ!! さもなければ貴様らから始末するぞ!!」

「! やれるものならやってみなさいよ!! 私は教師よ!! あの子達は私が守る!!」

さわ子は教師として唯たちの盾になると、ディオスを睨みつけた。

「そうか……。ならば貴様から斬ることにしよう」

ディオスは剣の切っ先をさわ子に向けた。

「さわちゃん!!」

「さわちゃん先生!!」

「『さわ子先生!!』」

目の前にいるディオスは本気でさわ子を殺そうとしていたので唯たちは思わず声をあげていた。

「!させないよ!!」

さわ子たちを守るため、邪美が術を放とうとしたその時だった。

「させるかああああああああああ!!」

上空から統夜が飛び出してくると、魔戒剣を一閃した。

統夜の存在に気付いたディオスは統夜の攻撃を魔戒剣で防いだ。

統夜は唯たちをディオスから引き離すために蹴りを放ってディオスを吹き飛ばした。

「!統夜!!」

「統夜君!」

「統夜さん!」

「統夜先輩!!」

「やーくん!!」

唯たちを救うために現れた統夜に唯たちは喜びの声をあげていた。

「ちよ、ちよつと統夜君!!これは一体どういうことなのよ!」

事情を知らないさわ子が統夜を問い詰めていた。

「話は後です！みんなは下がってください!!」

「ちよつと統夜先輩!!どうするつもりなんですか?」

「俺はあいつを斬る。みんなを守るために」

魔戒剣を構えディオスを睨みつける統夜の顔は普段見せる統夜の顔とは別人で、純は困惑していた。

しかし、それは和もさわ子も同様であった。

「き、斬るって……。殺すってことよね?」

「大丈夫だ。あの男はもう化け物……ホラーと同じだ。だから斬らなきやいけないんだ」

「「……………」」

目の前にいるあの鎧は化け物と同様であると実感がない和たちは言葉を失っていた。

「和ちゃん!ここはやくんの言う通りにしよう!」

「純!私たちは下がるよ!!」

「ほら、さわちゃんもだよ!!」

唯たちもさわ子たちを説得しようとしていた。

「とは言っても統夜君は大丈夫なの!?!」

「はい、大丈夫です」

「だって……。統夜君は守りし者だもの。私たちのことをきつと守ってください」

「「……………」」

統夜に戦わせる。このことに納得はいかないものの、ここは統夜を信じることにした。さわ子たちは安全な場所まで下がり、唯たちも続いた。

「統夜!! あんたの覚悟、そいつに見せつけてやりな!!」

「!! 邪美さん!! それに……」

「邪美姉の言う通りだ!! しっぴかりあいつを倒して来い!!」

「烈花さん……」

「統夜。お前がどれだけ成長したのか俺に見せてみる!!」

「翼さん……」

統夜は邪美、烈花、翼の3人がこの桜高を守ってくれていたことに驚いていた。

そして……。

「はい!! こいつは俺が倒します!!」

先輩たちのエールを受け取った統夜の目は必ずディオスを倒し唯たちを守るという使命感に満ちていた。

統夜はディオスを再び睨みつけ、ディオスもまた魔戒剣を構えて統夜を睨みつけていた。

そして……。

「はああああああああああああああああ!!」

統夜はディオスめがけて突撃すると、魔戒剣を一閃した。

しかし、それは難なく剣で防がれ、ディオスは盾を押し出して統夜を吹き飛ばした。

「くっ……!!」

統夜は慌てることなく、再び魔戒剣を構えた。

そして、今度はディオスが攻撃を仕掛けてきた。

統夜はギリギリまで相手を引きつけると、無駄のない動きで魔戒剣の一閃をかわした。

「何!?!」

統夜の動きにディオスは驚いていた。

統夜はすかさず魔戒剣を連続で振り下ろし、ディオスはどうか防いでいたものの、統夜の猛攻に防戦一方だった。

「す、すごい……!!」

「ええ……!!」

「な、何なのよ! 統夜君は! あんな強そうな相手と互角じゃない!?!」

統夜の戦いを初めて見る純、和、さわ子の3人は統夜の戦いぶりに驚きを隠せなかつ

た。

「そうですね。統夜君はあの鎧の人やさっきの怪物を倒して人を守る魔戒騎士ですか
ら」

「こう語る紬の表情はどこか誇らしげだった。

「魔戒騎士……」

「あなたたち、知ってたの？統夜君があんな化け物と戦っているってことを」

「実は私たちもホラーに襲われたことがあって、統夜君が助けてくれたんです」

「そ、そんなことがあったんですか……」

純は唯たちまでこんな非日常に巻き込まれていると知り、驚いていた。

「へえ、統夜。強くなったじゃないか……」

統夜と久しぶりに会う邪美は統夜の成長ぶりに感心していた。

「はい。俺は統夜が魔導馬の力を初めて使う瞬間を見たけど、その時より強くなっている
と思います」

「俺からすればまだまだだな。……だが、悪くはない」

邪美も烈花も統夜の実力を認める中、翼だけは素直に統夜の成長を素直に認めようとし
なかつた。

しかし、翼は内心統夜の成長を認めていたので笑みを浮かべていたのである。

純たちが統夜の戦いぶりに驚き、邪美たちが統夜の成長を実感する中、戦いはまだ続いていていた。

統夜は連続で攻撃を仕掛けて勢いでディオスを圧倒していた。

（くっ……この小僧、さらに強くなっている……！黄金騎士や銀牙騎士がいて私と互角と思っていたのだが）

グオルブが復活する前は統夜、鋼牙、零の3人でようやくディオスと互角に戦っていた。

しかし、今統夜は自分一人の力でディオスと互角以上に戦っていた。

「何故だ……！貴様は何故そこまで強くなっているのだ！」

「俺は守りし者だ！守るべき者がいる限り俺はそれだけ強くなれる！まあ、闇の力に魅入られたお前にはわからないだろうさ！」

統夜はこれまでの戦いを通して自分が守りし者であること。守りたい人の存在が自分を強くすることを実感していた。

この気持ちがあるからこそ、統夜は魔戒騎士として大きく成長することが出来たのである。

「闇の力こそ偉大だ！それは貴様もわかっているだろう！」

「いや、今ならわかる。やっぱり闇の力は偽物の力だ！そんなものに頼らなくなったら人

は強くなれるんだ！」

「何も知らない小僧が……！調子に乗るな！」

ディオスは衝撃波を放つと、統夜を吹き飛ばしたが、統夜はあえてその攻撃を受けたみたいで、吹き飛ばされた勢いでディオスと距離を取った。

「これ以上俺の母校を戦場にしたいくないから一氣に決めてやる！……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はディオスにむかつてこう高々と宣言した。

すると統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

円の部分だけが違う空間に変化すると、そこから放たれる光に統夜は包まれていった。

そして……。

ガチャン！ガチャン！との金属音と共に統夜の身体に次々と白銀の鎧が装着されていった。

脚、腕、身体と鎧が装着され、統夜の顔以外は白銀の鎧を身に纏った。

少し時間を置いて統夜の顔に狼のような顔の鎧が装着された。

こうして統夜は白銀の鎧を身に纏ったのである。

「……！す、凄い……！」

「ぎ、銀の……狼？」

「すごく、綺麗じゃない！」

統夜の鎧を初めて見る純、和、さわ子はその鎧の放つ輝きに見入っていた。

それは何度も統夜の鎧を見ている唯たちも同様であった。

いや、唯たちはいつも以上に統夜の鎧が輝きを放っているように感じていた。

統夜の身に纏ったこの鎧こそ白銀騎士奏狼。

統夜が受け継いだ魔戒騎士としての名前である。

ソロというのは旧魔戒語で「勇気」という言葉であり、統夜が身に纏う奏狼は勇気の騎士である。

「鎧を召還したか……。だが、貴様一人でこの私を倒せると思うな！」

「違うな！俺は……一人じゃない！」

統夜はディオスに向かって突撃すると、魔戒剣が変化した皇輝剣を一閃し、さらに蹴りを放ってディオスを吹き飛ばした。

「俺は大切なみんなの思いを受け取って共に戦っている！」

「みんなの思い……。だと？くだらん！」

「それだけではない！」

この時統夜の脳裏には白皇に跨り魔界を駆ける数多の奏狼の姿が目に見えかかっていた。

「かつて奏狼の称号を受け継いだ全ての英霊と、俺は共に戦つて来たんだ！」

「ほざけええええええええ!!」

ディオスは獣の咆哮のような雄叫びをあげると、紫の魔導火を剣の切っ先に纏わせて烈火炎装の状態になった。

それを見た統夜もまた皇輝剣の切っ先に赤い炎を纏わせて烈火炎装の状態になった。

この時統夜は初めてディオスと戦つた時のことを思い出していた。

その時も今回のように互いに烈火炎装を発動していた。

その時はディオスの圧倒的な力に競り負けたが、今回は負ける訳にはいかない。

そう統夜は思っていた。

そして……。

互いに烈火炎装を発動した2人はその状態で互いにぶつかり合った。

その瞬間を見た誰もが互角の力だと思っていた。

しかし……。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

統夜はまるで獣のように咆哮をあげていた。

そして……。

統夜は一瞬の隙について皇輝剣を縦に一閃し、ディオスを斬り裂いた。
「ぐおっ!!」

その一撃が相当効いているのかディオスは手に持つている魔戒剣を落としてしまった。

「これで終わりだ!!」

統夜はさらに皇輝剣を横に一閃した。

この統夜の一閃が決定打となった。

「ば……馬鹿な……この俺が……こんな小僧に……」

統夜の渾身の一撃を受けたディオスは自身が身に纏う暗黒騎士ゼクスの鎧が粉々に砕ける形で解除された。

そして、苦しげな声をあげながらディオスの身体は灰となり、消滅していった。

「はあ……はあ……はあ……」

ディオスとの戦いに持てる全ての力を使い切った統夜は息を切らしていた。
そして鎧を解除すると、統夜はその場で膝をついたのである。

「統夜!!」

「統夜君」

「統夜さん!」

「統夜先輩！」

「やーくん！」

唯たちは統夜に駆け寄り、和、純、さわ子もそれに続いた。

「統夜先輩、倒したんですね！あいつを。そしてグオルブっていう凄い力を持ったホラーをー！」

「ああ。だけど俺たちがあいつらに勝てたのは俺たちだけの力じゃない」

「？統夜、どういうことなんだ？」

「グオルブとの戦いの時に俺は絶体絶命の状態に追い詰められたんだけど、そんな時に聞こえたんだ」

「聞こえた？それってまさか……！」

「ああ、みんなの音楽だよ」

統夜はこうしみじみと呟いていた。

ホラー、グオルブや暗黒騎士ゼクスことディオスに勝てたのは自分1人の力ではない。
い。

唯たちの応援があつたからであると統夜自身が実感していた。

統夜は袖がくれたネットレスを取り出そうとするのだが……。

「……あれ？ない！ないぞー！」

「？統夜さん？もしかして……」

「ああ。あの宝石が無くなってる。紐だけはちゃんと残っているんだけど」

「統夜君に歌が届いたのはあの宝石のおかげかもしれないわね。それで、使命を終えて消えたんじゃないかしら」

「なるほど、それなら一理あるかもな」

統夜は紬の推理を聞いてそれがあながち間違いではないと感じていた。

「それよりも、届いたんだね、私たちの音楽が♪」

「ああ。みんな、本当にありがとな」

「[[[[[[……！／／／]]]]」

統夜の優しい笑顔を見た唯、律、滯、紬、梓、憂の6人は顔を真っ赤にしていた。

「？みんなどうして顔を赤くしてるんだ？」

『やれやれ。お前は相変わらず鈍いやつだな、統夜』

「え？ゆ、指輪が……しゃ、喋った!？」

イルバが喋るのを目の当たりにした純は驚きを隠せなかった。

「え？指輪が？まさかそんな……」

『いいや、それは間違いではないぜ』

「!?それは、統夜君がいつも身につけてる指輪じゃない!」

『ああ。俺様はイルバ。魔導輪だ』

「魔導輪？」

『その話は後でしてやるよ』

「……」

こうイルバが説明する中、さわ子はイルバのことをジッと見ていた。

『おいおい、いくら俺様が喋るとはいえそんなに見なくてもいいだろう？』

「その指輪……前からいいと思っていたけど、喋る指輪とか最高じゃない！統夜君！それを私に譲ってちょうだい！」

さわ子はイルバが喋ると知ったことでさらにイルバのことが気になったようで、統夜に欲しいと交渉をしていた。

『ええい！やめろ！俺様に触るんじゃない！』

「アハハ……。イルバもこう言ってますし。それに、こいつは俺には必要ですから」
「そう？残念ね」

イルバを譲ってもらえないとわかり、さわ子はしゅんとしていた。

「やれやれ。随分と騒がしいね」

邪美たちは統夜たちのやり取りを見て苦笑いをしていた。

「確かに、そうですね」

「ああ、随分と賑やかだな」

烈花と翼も邪美同様苦笑いをしていた。

その時、3人の前に鋼牙、零、レオの3人が現れた。

鋼牙たちは統夜が戦っている間にディオスが潜伏していた場所の調査を行い、それが終わると大輝、ワタル、エイジの3人は帰って行ったのである。

それを見送ってから鋼牙、零、レオは桜高に向かったのである。

「ああ、みんな。今来たんだね」

「邪美、烈花、翼。お前たちも来てたんだな」

「ああ。グオルブの方はお前らがいるから大丈夫だと思っていたからな。だからここを守っていた」

「鋼牙。どうやらグオルブは倒したようだな」

「そうだな。だけど、グオルブを倒せたのは俺や零の力ではない」

「ああ。統夜の力でグオルブを倒したんだよ♪」

「フツ……。どうやらそうらしい。あいつ、暗黒騎士も倒したからな」

「そうか」

統夜はディオスを倒すと確信していた鋼牙は翼の報告を聞いて笑みを浮かべていた。

「統夜君、強くなりましたね」

「ああ、そうだな」

「だが、あいつもまだまだな部分は多い」

「だからこそ鍛え甲斐があるんだよ」

翼は統夜はかなり鍛え甲斐があると思っていた。

それ故に自分の弟子である日向や暁以上に厳しく稽古をつけたこともあった。

それでも統夜は必死に喰らいついてきていた。

翼がこの中にいる誰よりも統夜の成長を喜んでいたのである。

しかし、素直な性格ではないのでそれを表に出すことはしなかった。

「さて、ここから忙しくなるね！」

「そうですね。騒ぎを大きくしないために学校にいる人たちの記憶を消さないといけません」

グオルブとディオスは討滅されたものの、まだやるべき仕事は残されていた。

騒ぎを大きくしないために校内に残っている全員の記憶を消さねばならないからである。

そうしなければ校内から出られなくなったことやホラーの話が噂として広まる恐れがあるからである。

邪美、烈花。そしてレオの3人が記憶を消す準備を始めた。

唯、律、滯、紬、梓、憂の6人は前から魔戒騎士やホラーのことを知り、統夜を支えてくれたということに記憶は消さないでいてくれた。

そんな中、さわ子、和、純の3人は統夜に必死に交渉した結果、記憶は消されずに済んだのである。

こうしてそれ以外の人間のこの戦いに関する記憶を全て消しきったところで、強大なホラー、グオルプ。そして闇の力に堕ちた魔戒騎士である暗黒騎士ゼクスことディオスとの戦いは幕を閉じたのである。

統夜はさわ子、純、和の3人にホラーや魔戒騎士の話をするようになったが、それは別の話である。

※※※

ホラー、グオルブ。及びディオスを討滅してから数日が経った。

強大なホラーを討滅した後であっても魔戒騎士の仕事に休みはない。

統夜はこの日もいつものように起床し、鍛錬を済ませると、朝のエレメント浄化に出掛けた。

それが終わると学校へ向かい、授業を受けた。

数日前は大きな出来事が起こっていたにも関わらず平凡な日常になっているのはあの時学校に残っていた人たちの記憶を消したからであった。

みんな何事もなかったかのように日常を過ごしているのを見て唯たちは驚いていた。

放課後になると統夜は音楽準備室に向かい、この日もいつものようにティータイムが行われていた。

そしてこの日は番犬所から呼び出しがあるとのこと、1時間程ティータイムに参加してから統夜は番犬所へと向かった。

「統夜。ホラー、グオルブと暗黒騎士ゼクスを討滅してから数日が経ちました。……本当によくやってくれましたね、統夜」

「イレス様。ありがとうございます。お褒めの言葉は大変光栄です」

統夜はイレスに深々と頭を下げた。

「統夜の活躍は元老院も高く評価しています」

「元老院が……ですか？」

まさか全ての番犬所を総括する元老院が自分を認めてくれているとは思っておらず、統夜は驚きを隠せなかった。

「統夜……。桜ヶ丘高校を卒業したら元老院に行きませんか？」

「え？俺が元老院……ですか？」

思いもよらなかったイレスの言葉に統夜は驚いていた。

元老院付きの魔戒騎士は相当な実力の持ち主であるからだ。

先の戦いで共に戦った鋼牙、レオ、ワタル、エイジの4人が元老院付きの魔戒騎士である。

零は東の管轄の魔戒騎士であり、翼は魔戒法師の里であり、自分の故郷である閑岱の地を守る魔戒騎士である。

零も翼も元老院付きでもおかしくない実力の持ち主ではあるものの、元老院付きではないのである。

「冴島鋼牙や布道レオも統夜の元老院入りを推薦してくれています」

「鋼牙さんとレオさんが……」

レオはグオルブとの戦いが終わった翌日が教育実習の任期であったので、現在は元老院に戻っているのである。

「統夜、どうですか？この話は悪い話ではないとは思いますが」

「……………」

統夜は真剣な表情で考えていた。

元老院付きの魔戒騎士になれるというのは魔戒騎士にとってこの上ない程の名誉だからである。

さらに黄金騎士牙狼の称号を持つ鋼牙が推薦してくれてるとなればその価値はさらに上がるのである。

少し考えた後、統夜はすぐ結論を出した。

「…………大変ありがたいお話ですが、その話はお断りさせてもらいます」

統夜は考え抜いた結果、元老院には行かずこの番犬所に残るという道を選んだのである。

「何故ですか？いい話であると統夜も思ったはずですよ」

「そうですね。その話を聞いた時はすごく嬉しかったです。俺も魔戒騎士としてそれなりに一人前になったんだなって。ですが、俺は魔戒騎士としてはまだまだです。そんな俺に元老院付きの仕事は難しいでしょう」

「統夜……………」

「それに、俺はこの桜ヶ丘が好きです。だから、この街を守るといのが性に合ってる

んですよ」

これは統夜の本音であった。

統夜は生まれ育ったこの桜ヶ丘を愛していた。

それ故この街を守る魔戒騎士でいたい。そう思っていたからである。

「統夜の意思はわかりました。そこまで言うなら無理強いは出来ませんからね」

「申し訳ありません、イレス様。せっかくありがたいお話をくださったと言うのに……」

「良いのです。それに、そう言ってくれて私も嬉しいんですよ」

「イレス様……」

「さて、この話はこれでおしまいです。……そして統夜、指令です」

統夜の元老院行きの話がなくなったところでホラー討滅の指令が来た。

人の邪心がある限り陰我は生まれ、ホラーは現れる。

それ故に魔戒騎士に休む暇はない。

だがしかし、それでも統夜は戦うことを辞めない。

何故なら統夜はホラーから人々を守る魔戒騎士であるからである。

これからも統夜の戦いが終わることはない。

統夜はイレスから指令を受け取ると、この日もホラーを討滅するために動き始めたの

であった。

……
混沌魔戒士編・終

日常・番外編

UA5000 記念作品 「龍夜」

白銀騎士奏狼の称号を持つ月影統夜は、先代の奏狼である月影龍夜と魔戒法師である明日菜との間に産まれた。

先代の奏狼である龍夜はかなりの実力の持ち主で、その力で多くのホラーを討滅して来た。

時には一人で。そして時には友である剛風騎士ダントの称号を持つダントと共にホラーを討滅していた。

様々なホラーを討滅してきたその成果を認められ、龍夜は元老院付きの魔戒騎士となった。

元老院付きとなってもホラー討滅の使命は変わらず、多くのホラーを討滅してきた龍夜であった。

しかしそんなある日、元老院から己が運命を変える指令が下された。

闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師の討伐である。

闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師の多くは心に何かしらの陰我をかかえ、ホラーに憑依

されるパターンが多いのだが、中にはホラーに憑依されておらず自分の意思で闇の力に魅入られる魔戒騎士や魔戒法師も大勢いた。

龍夜は自分の使命を全うし、次々と闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師を殲滅していった。

そんなある日、元老院の命令で龍夜は魔戒法師のパートナーと組むことになった。

その魔戒法師こそが後の妻である明日菜であった。

魔戒法師である明日菜の家は代々闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師を討伐する闇斬師の家柄であった。

明日菜も元老院付きの魔戒法師であり、その実力は最強の闇斬師と言わしめるほどであった。

明日菜と組んでからの龍夜はまるで虎が翼を得たかのような破竹の勢いで闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師を討伐していったのである。

共に戦うことで絆を深めていった龍夜と明日菜は互いに惹かれあい、結婚することになった。

明日菜は結婚してからも闇斬師の仕事を続けていたものの、妊娠を機に闇斬師の仕事を引退した。

明日菜が引退した後も龍夜は闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師討伐の仕事を続けてい

た。

そして、統夜が産まれたのである。

統夜が産まれた後、明日菜は子供を守りたいという強い思いから普通の主婦として生きる道を選んだ。

統夜の住んでいる家が魔戒騎士の家に見えないほど普通の家なのはそんな明日菜の思いが残っているからである。

統夜が3歳になった頃、龍夜は元老院に呼び出されると、とある指令を受けた。

それは、いつものように闇に堕ちた魔戒騎士の討伐であったのだが、今回は普段とはわけが違うほどの強敵であった。

元老院から討伐するよう命令を受けた男の名前は「バラゴ」。この男はホラーに憑依された訳でもただ闇の力に魅入られただけでもない。

バラゴは心滅獣身を自力で乗り越えた先にある禁忌の力である暗黒騎士の力を手に入れた魔戒騎士だった。

バラゴは暗黒騎士呀（キバ）と名乗っているようであった。

バラゴは最強の騎士であった黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島大河を手に掛けていた。

それ故、元老院はバラゴの存在を危険視していた。

龍夜にこの指令が来る前に数多の手練れの魔戒騎士がバラゴの討伐に乗り出したが、

誰一人とバラゴを倒せる者はいなかった。

そんな中、龍夜にバラゴ討伐の指令が来たのである。

龍夜は最初断ることを考えてはいたが、それだけ危険な相手を野放しにしておく訳にはいかない。

そう考えた結果、バラゴ討伐の指令を受けたのである。

バラゴ討伐を明日に控え、龍夜は自分の家で英気を養っていた。

「……明日菜、統夜は？」

「今はぐっすりと眠っているわ」

「そうか」

「あの子は魔戒騎士を継ぐのかしらね。今日もあの子は剣を振るう真似事をしていたわ」

明日菜は微笑みながら統夜の近況を語っていた。

統夜は当時3歳で、この頃は魔戒騎士の修行を行ってはいなかった。

しかし、自分の家が魔戒騎士の家柄であると理解していたのか木の棒を振るってまるで魔戒騎士の真似事をしていた。

統夜の行いは近所の人や第三者から見ればただのチャンバラごっこに見えたので魔戒騎士の家であるとバレる心配はなかった。

それ故に明日菜は統夜がこのようなことをしても何も言わなかったのである。ただし、危ないことをしようとしたらその時は叱るのだが。

「魔戒騎士になるかどうか決めるのは統夜だ。この仕事を片付けたら俺は統夜に魔戒騎士として鍛錬を積み始めようと考えている。まあ、統夜が魔戒騎士を志すのならば」

「え？いくらなんでも早すぎるんじゃない？統夜はまだ3歳よ？」

「俺が剣を握ったのもそれくらいだ。大丈夫、俺と明日菜の子なんだ。きつと魔戒騎士の才能はある」

魔戒騎士の後継ぎが産まれた後、その子供をいつから魔戒騎士として育てるのは家によって異なる。

龍夜のように3歳くらいで指導することもあれば、1歳の頃からソウルメタルを操らせようとする家もある。

さらには子供が小学校入学時期まで訓練をしないところもあるくらいである。

龍夜は自分の子供には才能があると少しだけ親バカな発言をしていた。

「ウフフ、そうね。あの子が本気で魔戒騎士を目指すなら、きつと……」

明日菜はしみじみと呟いていた。

「？明日菜？」

「……私ね、統夜は奏狼の称号を継がなくてもいいかなって思うのよ。この家で主婦を

しているよね、よく聞こえるのよ。子供たちの当たり前な笑い声が。私は統夜に魔戒騎士としてではなく当たり前な人生を送って欲しいって思っているの。……これは私のエゴなんだけどね」

家で主婦をしていると、当たり前の日常という風景を目の当たりにするのはよくあることである。

それ故に自分のエゴだと思っても統夜に普通の人生を送って欲しいと考えてしまった。

「なるほどな……。だが、さつきも言っただろう？ 魔戒騎士になるかならないか。決めるのは統夜だって。あいつがそれを望むなら俺は何も言わないさ。俺だってあいつの幸せを望んでいるんだから……」

魔戒騎士の後継ぎが産まれた後、その子に魔戒騎士を継がせるか継がせないかはその子供自身に決めさせる家がほとんどである。

魔戒騎士として戦うということは当たり前の日常をすべて捨て去り、自分の人生をホラーを倒して人を守ることにだけに捧げるからである。

子供が魔戒騎士になりたいと願うと、修行は行われる。

修行が行われた後でも魔戒騎士の修行についていけず、当たり前の日常に逃げ出す子供も少なくはない。

その場合は、その子供が親の称号を受け継ぐことは無くなるのだが。

「あいつの幸せを望んでいるからこそ……俺は……」

龍夜は拳を強く握りしめると、唇を噛み締めていた。

「指令のことはダンテから聞いたわ。……暗黒騎士と戦うことになったって」

「……そつ、ダンテのやつ、余計なことを……」

龍夜は明日菜や統夜に心配させまいと指令の内容は言わなかった。

しかし、元魔戒法師の勘が何かを感じ取ったのか明日菜は龍夜の親友であるダンテを問い詰めて指令のことを聞いた。

龍夜はダンテには指令のことを話しており、ダンテは明日菜の勢いに負けて指令の話をしたのである。

「黙ってたのは悪かったよ。今回は相手が相手だから……。お前や統夜に変な心配はかけたくなかったんだよ」

「それは承知しているわ。私だって元魔戒法師……それも元闇斬師だもの。暗黒騎士がどれだけの存在かはわかってるつもりよ」

『そうだな。暗黒騎士など俺様も初めて見るが、実力はかなりのものようだ』

龍夜の指にはめられたイルバが口を開いた。

「ああ……。あいつはあの冴島大河だけじゃない。数多の手練れの魔戒騎士を葬って来

「たんだ。俺だって……もしかしたら……」

龍夜はこれから戦いを挑む相手に恐怖すら感じていた。

『おいおい、龍夜。戦う前からそんなんでどうする！お前さんは明日菜や小僧を守るためにあいつを斬るのだろう？』

「ちよ!!?イルバ!それは言うなよ!!」

『お前と明日菜は夫婦なんだ。それくらい気の利いたことは言ったらどうだ』

「ウフフ、確かにそれは言ってもらいたいわよね」

イルバにからかわれる龍夜を見て明日菜は笑みを浮かべていた。

「……ところで龍夜。あなたは明日そのバラゴの討伐に行くのよね?いつ行くの?」

「明日の朝には発つ」

「バラゴの居場所はわかっているの?」

『ああ、おおよその場所だな。奴がとある森に潜伏していると目撃情報があったからな。まずはそこに行ってみるつもりだ』

龍夜とイルバはバラゴがどこに潜伏しているのか目処がついていた。

それ故に今日はホラー討伐を親友のダンテに任せ、龍夜はバラゴとの戦いに備えて英気を養っているという訳である。

「龍夜、私にして欲しいことはない?今日は遠慮しなくてもいいわ」

「そうだな……。そしたら久しぶりにビールが飲みたいかな」
「はいはい、わかったわ」

明日菜は笑いながらそう言うのと冷蔵庫へ向かっていった。

冷蔵庫の中にあるビールを取り出すと、明日菜はそれを龍夜に渡し、何かツマミを作るためにキッチンへと向かった。

龍夜は自分の好きなビールと明日菜の作ったツマミを食べながらゆつくりと英気を養っていた。

※※※

そして翌日、朝食を済ませた龍夜は赤いコート……。魔法衣を羽織り、バラゴ討伐の準備を整えた。

「それじゃあ、行ってくる」

「気をつけてね、あなた」

「……………」

明日菜は龍夜を見送っていたが、統夜はジッと龍夜のことをみていた。

「ん？どうした、統夜？」

「お父さん、お仕事なの？」

「ああ、そうだ。俺は必ず帰ってくるからな。だから統夜は母さんのことを守ってくれよな」

「うん！おれがお母さんを守るから、お父さん、お仕事頑張つてね」

「ああー！」

龍夜は愛する我が息子である統夜を優しく抱きしめていた。

しばらく統夜を抱きしめると、龍夜は明日菜にキスをし、優しく抱きしめた。

「……………明日菜。統夜を頼む」

「……………ええ、わかったわ。龍夜」

こうして家族と別れを済ませた龍夜はバラゴ討伐のため家を発つたのでった。

しかし、その数分後……………。

「……………龍夜、行くんだな」

龍夜のことを待ち伏せしていた親友のダンテが龍夜に声をかけた。

「ああ。……それはそうと、何で明日菜に仕事のことを話したんだよ！せつかく黙ってようかと思つたのに……」

「俺だつてお前の気持ちはわかっているから黙ってるつもりだつたさ。だけど、問い詰めている明日菜が怖くてつい……」

ダンテは龍夜の仕事のことは黙っているつもりだったが、言い寄ってくる明日菜が怖くてつい口を割ってしまったのだ。

「まあ、いいさ」

「龍夜……いいの？良かったら俺も手伝うが。相手は手強いのだろうか？」

「いや、お前はこの街を守ってくれ。俺はバラゴとの戦いで多分死ぬだろう。だけど俺は刺し違えてもバラゴを倒す。これ以上暗黒騎士の好きにはさせないさ」

「龍夜……」

親友の覚悟を聞いたダンテは龍夜に何て声をかけていいのかわからなかった。

「ダンテ、もし俺が死んで、統夜が魔戒騎士の道を志したらお前にあいつの師匠になつてもらいたい」

「龍夜……お前……」

「俺、前々から考えていたんだ。父親が子の師匠として騎士の教えをするのが当たり前

だってことはわかっている。でも俺は統夜とは父と子でいたいんだよ。これは俺のワガママではあるけどな。

「……わかった。その時は俺が統夜を一人前の魔戒騎士に育てる。お前もびっくりするくらい強さを持った魔戒騎士にな」

「ありがとう、ダンテ……」

龍夜はダンテに一礼すると、その場を去っていった。

「……龍夜……死ぬなよ……必ず帰って来い……」

ダンテは去りゆく龍夜を見つめながらこう呟いていた。

暗黒騎士であるバラゴは桜ヶ丘の隣町にある森に潜伏していた。

暗黒騎士の力を得たバラゴは1000体のホラーを喰らうという目的のため、ホラーを蹂躪し、ホラーを喰らっていた。

その合間に自分を始末しに来た魔戒騎士を次々と蹴散らしていったのである。

「やれやれ……。また無謀な魔戒騎士が来たって訳か」

バラゴは目の前に対峙する龍夜を見てやれやれと肩をすくめていた。

「貴様がバラゴだな？」

「そうだが、貴様は？」

「暗黒騎士である貴様を斬る者だ」

龍夜は魔戒剣を抜くと、バラゴを睨みつけた。

「愚かな……。闇の力の前では貴様の力など無力だというのに……」

「黙れ！貴様はこの俺が斬る！」

「やれやれ……。よかろう。相手になってやる。貴様のような者が相手でも暇つぶしにはなりそうだな」

バラゴは龍夜のことを完全に見下していた。

そんな龍夜が相手でも暇つぶしにはなると思ったバラゴは魔戒剣を抜いて、構えた。

「はあっ!!」

龍夜は魔戒剣を一閃するが、その一撃はバラゴにあっさりと防がれてしまった。

「くっ……!!」

「どうした？その程度か？だとしたら暇つぶしにもならないが」

「なんの……まだまだあ!!」

龍夜はバラゴ相手に競り負けていたが、蹴りを放ってバラゴを吹き飛ばした。

「……………」

バラゴはわざと龍夜の蹴りを受けたのか吹き飛ばされた後も冷静だった。
「はあっ!!」

龍夜は2度、3度と魔戒剣を振るうが、バラゴは無駄のない動きで龍夜の攻撃をかわしていた。

「どうしたどうした! その程度か? もっと私を楽しませろ!!」

「このっ……!」

『龍夜! 相手の挑発に乗るな!! 冷静になれ!』

「ああ、そうだな」

「……! ん? 貴様の魔導輪……」

バラゴは龍夜がはめている魔導輪を凝視していた。

「その魔導輪……まさか、ザルバか!」

イルバがザルバに似ていると知らないバラゴはイルバを見て驚いていた。

『俺様を奴と一緒にするな! 俺様は魔導輪イルバだ!』

「イルバ……? ほう、ザルバではないか……」

バラゴはイルバとザルバは別だとわかり、納得したような表情をしていた。

「まあ、貴様が何者であろうと関係ない。貴様はこの私に叩き潰されるだけなのだから」

「いや、俺は刺し違えても貴様を斬る！」

「ほお………たいした覚悟だが、貴様に私が斬れるかな？」

「やってやる………！闇の力なんか頼らなくても人は強くなれるんだ！貴様には負けはしない！」

「闇の力の素晴らしさを知らない愚か者が……。良いだろう。貴様に思い知らせてやる。闇の力の偉大さをな!!」

バラゴは首にかけているネックレスを外すと、その宝石にフツと息を吹きかけた。

すると、そのネックレスが反応し、バラゴはそのネックレスを上空で回転させた。

すると、上空が円の空間に変わり、そこから放たれる光にバラゴは包まれた。

光に包まれたバラゴの身体に漆黒の鎧が装着された。

この姿こそ暗黒騎士キバ。闇の力という禁忌の力を手に入れた漆黒の騎士である。

その鎧からは禍々しいオーラが放たれており、その存在感に龍夜は冷や汗をかきながら畏怖の感情を抱いていた。

しかし……。

「俺は負けるわけにはいかない!!妻と子供にもう一度会うために!!」

龍夜の脳裏に浮かんだのは桜ヶ丘で自分の帰りを待っている明日菜と統夜の姿であった。

「貴様の陰我、俺が断ち切る!!」

龍夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれた龍夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「ほお、それが貴様の鎧か」

「我が名は奏狼! 貴様を倒す魔戒騎士だ! 覚えておけ!!」

「ソロか……。知らん名だな……。まあ、これから滅びゆく者など覚えておく必要はないが……」

「それは……。俺に勝ってから言うんだな!!」

龍夜はバラゴに突撃をしかけ、皇輝剣を一閃した。

しかし、バラゴはわざとその一閃を受けたのだが、キバの鎧に傷一つついていなかった。

「なっ! 無傷……。だと!」

「これこそ偉大なる闇の力だ!! その程度の一撃などビクともせん!!」

「くっ……。だが、まだまだだ!!」

龍夜は2度、3度と皇輝剣を振るうが、全てバラゴに防がれてしまった。

「どうした、鎧を装着してもその程度なのか? だとしたらがっかりだな」

「まだまだあ!!」

龍夜は至近距離で烈火炎装を発動し、バラゴに攻撃を仕掛けてきた。

バラゴが咄嗟に烈火炎装の攻撃をかわし、その一撃は腕をかすめる程度で終わってしまった。

「ほお、その距離で烈火炎装とは、なかなか大胆なことをするではないか。さっきのはさすがに危なかったぞ」

龍夜の大胆不敵な戦法にバラゴは少しだけ焦りを見せていたが、どうにか攻撃はかわした。

「貴様、なかなか面白い戦い方をする。良かろう、少しだけ本気を出してやる」

バラゴは魔戒剣が変化した黒炎剣の切っ先に赤紫の魔導火を纏わせると、烈火炎装の状態になった。

「この一撃で貴様を葬ってやろう」

「させるかあ!!」

龍夜は再び烈火炎装の状態となり、バラゴと対峙した。

そして……。

「はああああああああああああああ!!」

赤い炎と赤紫の炎。2つの炎は激しくぶつかり合った。

烈火炎装の対決はバラゴに軍配が上がり、龍夜は黒炎剣の一閃を受けたことにより、

鎧が解除されてしまった。

「くっ……………」

烈火炎装で受けたダメージは相当なものであったからか龍夜は膝をついていた。

「フン、ここまでのようだな。思ったよりはいい暇つぶしになったぞ」

「くそっ……………ま、まだだ……………」

「そのダメージで何が出来る。……………これで終わりだ」

バラゴは傷ついた龍夜にゆっくりと近づくと、龍夜の胸に黒炎剣を突きつけた。

「がはっ!!」

急所を突き刺され、龍夜は吐血していた。

しかし……………。

「言ったはずだ……………。刺し違えてでも貴様を斬ると……………!」

龍夜は致命傷を受けながらも魔戒剣を力強く握りしめていた。

龍夜は魔戒剣をバラゴの左胸に突き刺そうとするが……………。

「……………!」

バラゴは慌てて黒炎剣を引き抜くが、龍夜の魔戒剣はバラゴの左腕に突き刺さった。

「くっ……………!こいつ……………無駄なあがきを……………」

バラゴは突き刺さった魔戒剣を引き抜くと、それを地面に投げ捨てた。

バラゴに胸を貫かれた龍夜はその場に倒れ込み、意識も失いそうになっていた。

「……貴様、よくもこの私に傷を与えてくれたな……。このまま野垂れ死にさせてやろうと思ったが……」

バラゴは倒れている龍夜を睨みつけた。

そして、バラゴは黒炎剣を再び龍夜の身体に突き刺した。

「ぐあ!!……あ……明日菜……と、統夜……!」

バラゴに止めの一撃を受けてしまったことで、白銀騎士奏狼の称号を持つ月影龍夜は、バラゴに敗れるといった形で絶命したのであった。

バラゴは鎧を解除すると、魔戒剣を鞘に納め、どこかへと姿を消した。

※※※

龍夜の妻である明日菜は龍夜の帰りをずっと待っていたが、この日は龍夜が帰ってくることはなかった。

そして翌日、悲報は突然告げられたのである。

「あつ、明日菜！大変だ！」

龍夜の親友であるダンテが大慌てで家へ乗り込んできた。

「どうしたのよ、ダンテ。そんなに慌てて」

「た……龍夜が……！暗黒騎士に……！」
「!!?」

ダンテの発する言葉の意味を理解した明日菜は息を飲んでいった。

「？お母さん、どうしたの？」

「統夜、出かけるわよ。あなたも準備しなさい！」

「うん。わかったー」

統夜は遊んでいたおもちゃを片付けると、服を着替えて出かける準備を始めた。

明日菜も出かける準備を整え、2人はダンテと共に龍夜が殺された隣の森へと向かった。

そこで明日菜が見たものは……。

「!た、龍夜!!」

変わり果てた姿になった龍夜であった。

明日菜は慌てて龍夜に駆け寄り、統夜もダンテに連れられて龍夜に歩み寄った。

「くっ……!龍夜……馬鹿野郎が……」

龍夜の亡骸を見たダンテは悲痛な面持ちをしていた。

「?ダンテおじさん……?」

まだ幼い統夜にはダンテが何故辛そうな表情をしているのか理解出来なかった。

「龍夜!ねえ!しっかりしてよ!目を開けてよ!!」

明日菜は泣きながら必死に龍夜に声をかけるが、龍夜からの反応はなかった。

『明日菜……。龍夜はもう……。』

魔導輪であるイルバは龍夜が既に死んでいることを理解していた。

龍夜はイルバと契約していたので龍夜は1月のうちの1日をイルバに捧げなくては
いけない。

しかし、龍夜の命が尽きたことでイルバとの契約は無効になってしまったのだ。

「そんな……!龍夜!!」

愛する人の亡骸を見ながら明日菜は涙を流していた。

「……?お母さん?」

幼い統夜には理解出来なかった。

父親はどうなってしまったのかを。そして、母親は何故そこまで号泣しているのかを。

「お母さん……どうしたの？どこか痛いのか？」

統夜は明日菜に歩み寄ると、明日菜の服の袖をくいと引つ張っていた。

「統夜……お父さんが……」

「お母さん、泣かないで。お母さんはおれが守るから」

統夜は父親の言いつけを守り、母を守ると宣言していた。

愛する人を失った明日菜には統夜の言葉は胸に深く突き刺さる言葉であり、何よりも嬉しい言葉であった。

「統夜……ありがとう……ありがとう……！」

明日菜は統夜を力強く抱きしめ、涙を流していた。

「……お母さん……泣かないで……泣かないでよ……」

明日菜が泣き止まないから統夜の瞳にも涙が浮かんでいた。

そして……。

「うわああああああん!!」

統夜も母親の涙を見てもらい泣きし、思い切り泣き出していた。

「統夜……ごめんね……ごめんね……！」

明日菜と統夜は抱き合いながら互いに泣いていた。

その間ダンテは悲痛な面持ちでその様子を眺めていた。

こうして月影龍夜は暗黒騎士キバであるバラゴに殺され、明日菜は龍夜の死を悲しんでいた。

桜ヶ丘に戻った明日菜は龍夜の遺体を丁寧に埋葬し、再び日常が戻ってきた。

しかし、龍夜のいない日常ではあるが……。

龍夜が死んだ後も統夜はチャンバラごっこのように剣を振るう練習をしていた。

統夜が魔戒騎士の修行を本格的に始めたのは統夜が5歳になった時であった。

この頃には明日菜も魔戒法師として復帰し、統夜の修行を見ながら法師としての務めを果たしていた。

そして、龍夜の親友であるダンテも龍夜との約束を守り、統夜の修行を明日菜と共に見ていた。

この後、明日菜は暗黒騎士ゼクスの鎧を身に纏ったディオスに殺され、ダンテは何らかの原因でホラーになってしまった。

しかし、これらは別の話である。

……
完。

番外編① 「転校生 前編」

強大な力を持ったホラー、グオルブを討滅し、暗黒騎士ゼクスの鎧を身に纏ったデイオスを討伐してから数日が経っていた。

統夜は呼び出しを受けて番犬所に訪れたのだが、そこでイレスから聞かされたのは驚くべきことであつた。

高校卒業後は元老院付きの魔戒騎士にならないかとのことである。

鋼牙やレオも統夜の元老院入りを推薦しているので、それを受ければ統夜は名実共に一流の魔戒騎士であつた。

しかし、統夜はその話を断つた。

統夜はこの話が大変名誉であることは重々承知であつた。

だが統夜は自分はまだ元老院で働けるほどの器ではないということと、桜ヶ丘を愛している故にこの街を守る魔戒騎士でいたいという思いから元老院入りの話を断つたのである。

そして統夜はこの日も指令を受けてホラー討伐へと向かつていた。

「ウフフ……。統夜つたらずいぶんと一人前になりましたね……」

統夜が魔戒騎士になったばかりの頃から統夜のことを知っているイレスは、統夜の成長が何よりも嬉しかった。

「イレス様……例の件ですが、本当にやるのですか？」

イレスの付き人の秘書官の一人が心配そうにイレスにこう訪ねていた。

「もちろんです。私は人界の学校生活に興味がありますからね。これは良い機会です」

「それに元老院にこの事は……？」

「問題ありません。お母様に許可は取っています」

イレスの母親は現在元老院で神官をしているGRESであった。

今回イレスが行おうとしていることはイレス自身がとてもやりたかった事であり、母親であるGRESをどうにか説得したことで合法的に行うことが可能になったのだ。

「ああ……明日がすごく楽しみです♪」

イレスはすごくワクワクしており、イレスのそばには何故か桜ヶ丘高校の制服が置かれていた。

※※※

翌日、統夜はいつものように鍛錬を行い、朝のエレメント浄化を行った。

そしてそれが終わると統夜は学校へと向かい、教室の中に入った。

すると、クラスメイトたちはとある話題で盛り上がっていた。

「おはよー。どうしたんだ？何か騒がしいけど」

「月影君、おはよう！ねえねえ、知ってる!?今日、外国から留学生が来るんだって！」

「へえ、留学生かあ……」

統夜は魔戒騎士であるからか外国人との絡みはほとんどなかったもので、それを聞いて少しだけテンションが上がってしまった。

「来るのは男と女どっちかわかるか？」

「多分女子じゃないの？うちの学校、女子の割合が高いし」

この桜ヶ丘高校は共学であるものの、

男子生徒の数は少なく、女子生徒の割合は全体の8割であった。

「ふーん、女子ねえ……」

「あつ、もしかして月影君気になってる？可愛い子が来ればいいなあとか」

「?別にそんなことはないけど」

「そ、そう……。だけど、楽しみだよね…」

「ああ、そうだな」

ここで話は終わり、統夜は自分の席へと向かった。

(留学生ねえ……。レオさんの潜入が終わったばかりだったのに……。しかもこんな中途半端な時期に……)

統夜は先ほど話をしていて留学生のことを考えていた。

1月程前に元老院付きの魔戒騎士であり魔戒法師でもある布道レオが教育実習生として桜ヶ丘高校に潜り込んでいた。

その目的はホラー、グオルブ復活の阻止と、ホラー復活のゲートを探し出すことだった。

様々な出来事乗り越えて統夜たちはグオルブとグオルブ復活を企んだディオスを討滅し、その翌日にレオの任期は終了した。

それからそんなに経っていないのに留学生とは話が出来すぎではないか？

こう統夜は考えていたのである。

統夜が考え事しているとすぐにチャイムが鳴り、担任の先生が教室に入ってきた。

「ほら、お前ら。席に着け」

先生に促されながらクラスメイトたちは続々と自分の席に座った。

「既に知ってる奴もいるだろうが、この学校に留學生が来るようになった」

先生の発表にクラスメイトたちは知ってまーす！と返していた。

「お前から喜べ！その留學生はこのクラスに入ることになったんだ」

「え!?男かな?女かな?」

「男だったらレオ先生みたいなイケメンがいいな!」

「金髪の美少女の方がいいだろ!」

「あつ、私もそう思う!」

クラスメイトたちは口々に思ったことを言っていた。

「留學生ねえ……。月影君は男と女、どっちだと思う?」

統夜の隣の席に座っている姫子が統夜に声を掛けてきた。

「うーん。どっちだろ。どっちにしても仲良く出来ればいいけど……」

「アハハ、確かにそうだよね」

統夜と姫子はこのような話をしながら先生の話を聞いていた。

「それじゃあさつそく入ってきてもらおう。……おーい!入ってきてくれ!」

教室の扉が開くと、噂の留學生が中に入ってきた。

クラスメイトたちが歓声をあげてる中、入って来たのは……。

「それじゃあ、自己紹介をしてくれ」

「はいっ！」

教室に入ってきたのは黒のロングヘアが良く似合っており、絶世の美少女と呼んでも過言ではないほどの美貌を持った少女であった。

「皆さん、初めまして！私はイレス・サン・ヴァリアンテと申します。1週間という短い期間ではありますが、この学校で最高の思い出を作っていきたいと思っておりますのでよろしく願います！」

なんとこの学校に留学生として転入して来たのは紅の番犬所の神官であるイレスであつた。

(!!?!いい、イレス様!!?!何で学校に!?)

神官の服ではなく桜高の制服を来たイレスを見た統夜はこの世のものとは思えないものを見たような目で驚いていた。

《ほお、こいつは驚いたな……。あの女、高校生活にかなり興味を持っていることは知っていたが、まさか自ら乗り込んで来るとはな……。》

イルバはここまでイレスが積極的に動く人間だとは思っていなかったのか、驚きを隠せなかった。

「ヴァリアンテはイギリスのオクスフォード大学に飛び級で入学する程の秀才なんだ。

だからあまりここに来る意味はないようだが、ヴァリアンテがお前らのような学園生活を送ってみたいとのことなんだ。お前ら、仲良くしてやれよ」

「先生、イレスと呼んで下さい。ヴァリアンテは長いですから♪皆さんもイレスと呼んで下さい♪」

イレスの知的な雰囲気だけではなく、接しやすい雰囲気を感じ取り、イレスを歓迎していた。

「イレスちゃんよろしく！」

「よろしくね！」

「イレスちゃんすげー美人！」

「美少女k t t k r r！」

「フハハハ！我が世の春が来たあ!!」

「アハハハ……よろしくお願ひします……」

クラスメイトの歓迎ぶりにイレスは苦笑いをしていた。

「へえ……すごく綺麗な子だね……。月影君もそう思わない？」

「……………」

続夜はダラダラと冷や汗を流しながら呆然としていた。

「つ、月影君？どうしたの？」

姫子は統夜の異変を感じて声をかけたが、統夜は呆然としており、復活するまでに時間がかかってしまった。

イレスはそんな統夜を見つけると優しく笑みを浮かべていた。

（やれやれ……。統夜のやつ呆然としてるな……。まあ、それも無理はないが。……。それにしてもさつき御大将の台詞を言ったやつは誰なんだ？）

イルバは統夜が呆然としてすることに苦笑いをし、先ほど御大将の台詞を言っていた人間に呆れていた。

イレスは一番前の席に座ることになり、授業は始まったのである。

※※※

授業が終わり、休み時間になると、クラスメイトたちはイレスの席に集まり、質問攻めを行っていた。

「ねえねえ、イレスちゃんはイギリスから来たの？」

「ええ、そうですよ」

「大学では何を勉強してるの?」

「強いて言えば……生物学……ですかね」

番犬所の神官であるイレスは本当の話をするわけにはいかないの、嘘を交えながらどうにか質問に答えていた。

「イレスちゃんの髪って綺麗だよな? 手入れのコツとかってあるの?」

「い、いえ……特には……」

「彼氏とかっているの?」

「い、いえ……」

プライベートな質問も入ってきたので、イレスはさらに困惑していた。

統夜は自分の席でイレスの様子を伺っていた。

しかし、クラスメイトたちの質問に困り果てているイレスを見て統夜はいてもたってもいられなかった。

「あー! もう! お前ら、その辺にしておけ! イレス様が困ってるだろうが!」
『様?』

クラスメイトたちは統夜が当たり前のようにイレスのことを様付けで呼んでいることに驚いていた。

「統夜、いいのです。それに、私たちはクラスメイトですから、様付けは可笑しいですよ

？」

「そうだよ、月影君！」

「つていうか月影君とイレスちゃんって知り合いなの？」

「ええ、私は彼がここに通っていると知ってましたし、面識はありますよ」

「ふーん、そうなんだ」

「ねえ、後さあ」

1人がこう質問をしようとしたその時、次の授業を告げるチャイムが鳴り響いた。

「ああ！残念！」

「イレスちゃん、また後でねえ♪」

クラスメイトたちは自分の席へと戻っていった。

「それじゃあ、俺もこれで」

「統夜。後で話があります。いいですか？」

「わかりました」

こうして統夜も自分の席に戻り、授業を受け始めた。

授業が終わると、質問をしようとするクラスメイトたちをかわし、統夜とイレスは屋

上で話をする事になった。

「ウフフ、統夜。驚きましたよね？ 私が突然このような場所に来て」

「ええ。正直、すごく驚きました」

『それにしても番犬所の神官であるお前さんがどうしてこんな所に来たんだ？』

番犬所の神官は魔戒騎士や魔戒法師に指令を出すのが主な仕事であるため、外に出歩くことがない。

このように番犬所の神官が番犬所を抜け出すこと自体が非常に稀なケースなのである。

「私……ずっと憧れてたんです。人界の高校生活というものに。だから無理を言っただけで留學生としてこの学校に入れるよう手配をしたのです」

『それにしてもよく入れたな。元老院がそんなことを許可してくれるとは思えないが』

「お母様に無理を言っただけなんです。少し呆れてはいましたが、1週間だけなら許可してくれました」

「お母様って……。確か元老院の神官であるグレス様ですよね？」

「はい。そうですよ♪」

「……………」

統夜はイレスがとんでもないことをしていると苦笑いをしていた。

「とりあえずこの1週間、私とあなたはクラスメイトということになります。よろしくお願いますね、統夜♪」

「は、はい。よろしくお願います」

「それと、統夜。学校にいる間は様付けはやめて下さいね。これは命令ですよ♪」

「そ、そんな……じゃあなんて呼べばいいんですか？」

「そうですね……」

呼び名を変えなきゃいけないことに困惑する統夜の問いにイレスが考え込んでいた。

「……あつ！」「お嬢」とかどうでしょう？そう呼ばれるの憧れてたんです！」

「お嬢……ですか？」

『それもちよつと違うような気がするが……。まあいいだろう』

「改めてよろしくお願います、お嬢」

「ウフフ、出来れば敬語もやめてくれるとありがたいですけどね♪」

「……善処します」

「ウフフ♪それじゃあ戻りましょうか♪」

「わかりました、いれ……お、お嬢！」

統夜がイレスのことをお嬢と言うと、イレスは満足そうな表情をしていた。

「はい♪それじゃあ戻りましょう♪」

イレスは満足そうに屋上を後にした。

(何でだ……? 何で俺はこんなにドキドキしてるんだ……? 俺の目の前にいるのは神聖な番犬所の神官だぞ……?)

統夜は今ドキドキしているのだが、何故ここまでドキドキしているのか意味がわからなかった。

(ほお、これはいい傾向じゃないか……。これはあいつらに強大なライバルが登場かなかなか面白くなってきたぜ)

イルバはイルバでこんなことを考えながらこの状況を楽しんでいた。

「統夜！早く戻りますよー！」

「は、はい!!」

統夜は慌てて屋上を後にし、イレスと共に自分の教室に戻っていった。

※※※

こうしてイレスがこの学園に来た理由を統夜は理解したのだが、ここからが心労の始

まりだった。

統夜はイレスの身に何かあつてはまずいとイレスをいつでも守れるよう気を配っていた。

座学の授業では特に問題はなかったのだが、体育の授業はかなり神経をすり減らしていた。

この日の授業はバドミントンだったが、イレスは当然バドミントンの経験はなかった。

なのでイレスは飛んできた羽根を返そうとラケットを振るうのだが……。
「おっとっと……。きやあつ！」

狙いを定めようと後方に下がっているうちに尻餅をついてしまった。

それを見ていた統夜は……。

「お嬢！」

自分の行っていたラリーそっちのけで尻餅をついたイレスを駆け寄った。

「いたたた……」

「大丈夫ですか!?!お嬢！」

「ええ……大丈夫です……」

「アハハ！月影君つてば心配しすぎだつて！」

「そうだよ！私たちだつてついてるんだし！」

「で、でも……」

「統夜、私は大丈夫ですから」

「わ、わかりました……」

統夜は渋々戻つていった。

そして昼休みになり、昼食を持ってきてないイレスはクラスメイトの女子数名と購買でパンを買いに来たのだが……。

「うわあ、すごい人ですね……」

「そうだよ！昼休みは戦場なんだから！」

「なるほど、それはすごいです！」

購買に群がる人混みを見てイレスは感心していた。

「イレスちゃん、何が食べたい？」

「ここつて何がおいしいのですか？」

「やっぱり幻のゴールデンチョコパンかな？でも、もう売り切れかも」

「幻ですか、それは興味があります！」

そうやってイレスは人混みの中に入っていったのだが……。

「おっととと……きやあつ！」

あつという間に押し戻され、イレスは尻餅をついてしまった。

そして……。

「お嬢！大丈夫ですか？」

昼のパンを買いに来た統夜がイレスに駆け寄った。

「ええ、大丈夫です」

「お嬢は何が食べたいのですか？」

「私は幻のゴールドデンチョコパンとやらが気になっているのですが……」

「ゴールドデンチョコパンですね。ちよつと待って下さい」

統夜はそうやって人混みの中に入っていった。

そして……。

「すいません!!誰かゴールドデンチョコパン!譲ってくださいませんかねえ!!」

統夜はまるでホラーがいるかのようなまるで悪鬼の如く表情でゴールドデンチョコパンを求めた。

そうすると……。

「ゴ、ゴールドデンチョコパンならここに……」

とある男子生徒がゴールデンチョコパンを買おうとしていたが、統夜の表情に怯えてしまい、統夜にゴールデンチョコパンを譲ったのである。

「すいません、ありがとうございます……」

統夜は半ば強引にゴールデンチョコパンを譲ってもらったのでそこは申し訳なさそうに礼を言った。

統夜はゴールデンチョコパンの他に自分のパンも確保してイレスのもとへ戻っていった。

「お嬢、ゴールデンチョコパンを無事確保しました！」

「ありがとうございます、統夜。すごく嬉しいです♪」

「それにしてもこの人混みでよくゲット出来たね、月影君」

「まあね。実は親切な人が俺に譲ってくれたんだよ」

《よく言うぜ。半ば脅しに近い形で奪ったくせに》

一部始終を見ていたイルバがテレパシーでツツコミをいれていた。

（ちよ!?!俺は別にそんなつもりはないぞ!?!）

《どうだか……》

イルバは統夜に呆れながらもこれ以上は何も言わなかった。

「さて、教室に戻って食べましょうか♪」

「ねえねえ、月影君。たまにはみんなでお昼を食べない？月影君って1人か軽音部の子としかごはん食べないからさ」

「そうだな……。たまには一緒させてもらおうかな」

「やったあ♪それじゃあ、月影君、行こっ！」

「統夜、行きましよう♪」

こうして統夜はイレスやクラスメイトの女子たちと共に教室に戻ると彼女たちと昼食を取ったのであった。

そして昼休みが終わり、5時間目の授業が終わった。

統夜はトイレから戻ってくると、驚くべき光景が見えたのである。

それは……。

「ねえねえ君つてさ、留学生なんだろう？放課後俺たちと遊びに行かない？」

3年生の男子2人がイレスに声をかけていた。

「あつ、あの……。私は放課後は用事がありますから……」

「ええ？別に今日くらいいいじゃん！俺たちと遊びに行こうぜ！」

3年生の男子2人は半ば強引にイレスをナンパしていたのである。

「ねえ、あれって3年生だよね？」

「あの2人ってかなりチャライからねえ」

その様子を見ていた2人の女子生徒がヒソヒソとこのような話をしていた。

「……」

統夜は無言で3年生の男子2人とイレスの前に現れると、2人の男を睨みつけた。

「……おい、何の用だよ？」

「そうだけ。せっかくイレスちゃんに声をかけてるんだから邪魔するなよな」

男の言葉を聞いた統夜は無言で2人の胸ぐらを掴み、壁まで押し寄せた。

「ーんな!？」

「こ、こいつ……」

突然の出来事に男2人は驚いていた。

「汚い手でお嬢に触るな。この下衆が……!」

統夜はまるでホラーを相手にしているかのような目で男2人を睨みつけていた。

「ひっ!？」

「な、何だよ!」

「さもなくば2人とも無事でいられると思うな……!」

《おい、統夜!よせ!相手はホラーじゃないぞ!》

今の統夜だったら何をしでかすかわからないと判断したイルバが統夜を止めようとしていた。

「わ、わかったよ!」

男の言葉を聞いた統夜は掴んでいた手を離した。

統夜から解放された2人は逃げるように教室から出て行ったのである。

「…………ふう」

イレスは事態が無事解決し、安堵の溜息をついていた。

「すいません、お嬢。片付けるのに手間取りました」

「た、助かりました。でも、あまり手荒な真似はしないようにして下さいね?」

「うっ…………す、すいません…………」

統夜もさすがにやり過ぎたと思ったのか素直に反省していた。

こうして濃厚すぎる1日が終了し、放課後となった。

「ねえ、イレスちゃん!今からカラオケに行くんだけどさ、一緒に行かない?」

「カラオケ…………ですか?」

「あれ?もしかしてカラオケって初めて?」

「だったら是非一緒に行こうよ！この後用事がなければだけど……」
「そうですねえ……」

イレスは少し考え込んでいた。

この後統夜と共に軽音部の部屋に顔を出そうと考えていたからである。

しかし、番犬所から出たことのないイレスにとつてクラスメイトとカラオケというのは憧れの1つであったのだ。

「私……歌は歌えないのですが、いいんですかね？」

「もちろん大歓迎だよ！イレスちゃんが来るならクラスのみんなも来るよ♪」

「それでは……ぜひ一緒に一緒にさせてもらいます♪」

「そう来なくちゃ♪」

こうしてイレスはクラスメイトたちと人生初のカラオケに行くことになったのである。

「月影君はどうする？一緒に行かない？」

「そうだな……」

統夜も少し考え込んでいた。

この後いつものように軽音部に顔を出す予定だったからである。

「良かったら軽音部のみんなも誘ってよ！」

「あつー！それいいね！」

「今商店街にある娘のVIPルーム押さえたから人数増えても問題ないよ！」

今話に出ていた「娘（にゃんにゃん）」とは、桜ヶ丘の商店街にあるカラオケ屋であり、大手のカラオケ店並の安さから学生御用達のカラオケ店なのである。

そのVIPルームは20人から30人くらい入れる大きな部屋である。

「そうしたら軽音部に顔出すからみんなに聞いてみるよ」

「わかった。それじゃあ後でメールちょうだい」

「わかった。……みんな、お嬢を頼むな」

「任せて♪それじゃあ、イレスちゃん。行こっ♪」

「はいっ♪それでは、統夜、また後で会いましょう♪」

こうしてイレスはクラスメイトたちと共にカラオケボックスである娘へと向かった。

「さて……俺は部室に行こうかな」

統夜はフラフラになりながらも音楽準備室へと向かった。

※※※

その頃、紅の番犬所所属の魔戒騎士である桐島大輝は、日課であるエレメント浄化を行っていた。

その日行う必要のあるエレメントの浄化は終わり、大輝は桜ヶ丘の商店街を歩いていった。

少し歩くと大輝の目に留まったのは楽しそうに商店街を歩く桜ヶ丘高校の制服を着た女子生徒だった。

（あの制服……。確か桜ヶ丘高校の制服だったな……。あの学校の近くでホラーグオルブが復活したっていうのにもう平凡な毎日に戻ったんだな）

大輝もまた統夜と共に強大な力を持つホラー、グオルブを討滅するために共に戦った魔戒騎士である。

統夜が学校に行っている間にエレメントの浄化を行い、夜はホラー狩りと忙しい毎日を送っている。

統夜は毎日学校に行けるのは大輝のおかげであるため、大輝に感謝している分、大輝に頭が上がらないのである。

そんな中、大輝は偶然にも見覚えのある顔を見かけた。

しかし、大輝がその人物をこんな所で見かけるのはあり得ないのである。

その見覚えのある人物こそ、何故か桜ヶ丘高校の制服を着ているイレスだったからである。

イレスは番犬所の神官である為このような所にいる筈は無いのだが、イレスで間違いないのである。

大輝の存在に気付いたイレスは大輝に笑顔を向けていた。

この瞬間、その女性がイレスであると大輝は確信した。

呆然と立ち尽くす大輝を後目にイレスたちは大輝の視界から消えていった。

しばらく大輝は呆然と立ち尽くし……。

「な……なんじゃこりゃあ!!」

大輝はまさかの展開に思わず叫んでしまった。

その為街行く人々の視線が集中してしまったのだが、そんな事はお構いなしで大輝は暫くその場に立ち尽くしていた。

こうしてイギリスから来た留学生として桜ヶ丘高校にやって来たイレスであったが、彼女の放課後はまだ始まったばかりであった……。

……後編へ続く。

番外編② 「転校生 後編」

桜ヶ丘高校にイギリスから来た留学生がやって来た。

その留学生というのは高校生活に憧れ、1週間だけという条件でこの桜ヶ丘高校に潜り込んできたイレレスであった。

統夜は突然留学生としてやって来たイレレスに驚愕するが、憧れの高校生活を体験したいと言うイレレスの思いを理解し、そんなイレレスに協力する事になった。

統夜はイレレスの希望で彼女の事を「お嬢」と呼ぶようになった。

それからの統夜はイレレスが心配なあまり事ある度にイレレスの元へ駆け寄っていた。

そして放課後、イレレスはクラスメイトたちとカラオケに行く事になった。

そんな中統夜は一度軽音部に顔を出してから軽音部のみんなも誘ってカラオケへ行く事になった。

こうして音楽準備室に入った統夜はティータイムが始まるなりまるで愚痴のように今日の出来事を語っていた。

「なるほど……。だから統夜先輩はそんなに疲れ果てているんですね……」

「ああ……。そういうことだ」

続夜は紅茶を飲みながらげんがりとしていた。

「アハハ……それは大変だったね……」

唯は苦笑いをしながら紅茶を飲んでいた。

「それにしてもその留学生が番犬所の神官なんだろう？ そんな人が外に出歩いたりして大丈夫なのか？」

「まあ、それは俺も思ったんだけどな」

『あいつは全ての番犬所を総括する元老院に許可を得たみたいだからな。1週間だけという条件付きではあるが』

「どうしてそこまでしてそんな事をするのかしら？」

「おじよ……イレス様は人界の学校生活……特に高校生活に憧れていたんだ。だからこそ自分自身で高校生活を体験してみたくなったんだと思う」

「高校生活に憧れるっていうのはあたしも何か分かる気がするなあ」

「私もです。高校に入る前は高校生活ってとてもキラキラしてるように見えただすよね」

「それ私もわかる！」

「うんうん、私も♪」

「ああ、私もだ！」

どうやら唯たちはイレスが高校生活に憧れてる気持ちを理解できるようだ。

「それでな、イレス様は今クラスメイトのみんなとカラオケに行っているんだよ」

「へえ、放課後にカラオケとかそれっぽいやん！」

「それでな、俺もこの後行く事になってるんだよ」

「そうなんですか……」

「みんなも一緒に来ないか？ クラスのみんなも軽音部のみんなも誘ってくれって言ってきたからさ」

「そういうことなら私は行きたい！」

「あたしも!!」

「私も私もお♪」

唯、律、紬は賛成のようであった。

「おい、練習はどうするんだよ！」

「そうですよ！」

練習をしたいと思ってる滯と梓は反対であった。

「ええ？ いいじゃん！ こんな機会は滅多にないんだし」

「そうだよ！ だってやーくんが普段お世話になってる番犬所の人なんだよ!」

「そうね。この機を逃したら会える人じゃないわよね」

「そ、それは……」

滯と梓は3人の説得に少し心が揺らいだようだ。

『まあ、たまにはいいんじゃないか？あの女もお前さんたちに会いたがつていたぞ』

「イルバまで……」

まさかイルバまで賛成だとは思わず滯と梓は驚いていた。

そして2人はしばらく考え込んで……。

「……そうだな、確かに私もそのイレスって人に会ってみたいな」

「そうですね、私もです」

滯と梓も考えを改めて行きたいと意思表示をした。

「やったあ！そう来なくっちゃ！」

「それじゃあ片付けをして早速行きましょ♪」

カラオケに行くこと決まった所で唯たちはティーセットの片付けを始めた。

その間に統夜は電話で軽音部のみんもカラオケに参加すると伝えた。

ティーセットの片付けと帰り支度が済んだ所で統夜たちはクラスメイトたちが既にあるカラオケ店、娘娘へ向かった。

※※※

カラオケ店である娘娘に到着した統夜たちは受付でVIPルームに入ってる人と合流したと伝えるとそのままVIPルームへと向かった。

VIPルームへ入ると既には盛り上がっていた。

「おっ！早速盛り上がってるな！」

『あつ！月影君と軽音部のみんなが来たあ！』

今歌を歌っている子がマイクでこう言うとな既に集まってるみんなが統夜たちを歓迎していた。

『これはこれは……。なかなかの歓迎ぶりだぜ』

騒々しくて自分の声は聞こえないと判断したイルバは口をカチカチと鳴らしながらこう呟いていた。

イレスは統夜たちを見つけると満面の笑みを向けていた。

「ねえ、統夜君。あの人が？」

「ああ、イレス様だよ」

「綺麗な人……」

「ああ、そうだな……」

「絶世の美女って感じですよ……」

「それはあたしも思った……」

「ええ、綺麗ですよ……」

唯たちはイレスの美貌に見惚れていた。

《それにしても、あの女がかなりの年上だったと知ったら驚くだろうなあ》

（ああ、それは俺も思ったよ）

イルバと統夜はテレパシーでこのような会話をすると苦笑いをしていた。

「ほらほら、そんなところに突っ立ってないで早く座りなよ」

「あつ、ああ」

クラスメイトのみんなに促され、統夜たちは空いている席に座った。

本来であればイレスのそばに座る予定だったが、そこは既に埋まっているので統夜たちは空いている席に腰を下ろしたのだ。

統夜たちが座ったところで今流れてる曲は終了した。

「ねえねえ、月影君、曲入れなよ。私、月影君の歌を聞いてみたいなあ♪」

「あつ、私も私も♪」

「軽音部では月影君歌わないもんね！」

クラスメイトたちは統夜に歌って欲しいと話を振っていた。

「いや、俺は……」

「統夜、私も聴きたいです♪」

「うぐつ……」

イレスまでこう言ってきたので統夜は断るきつかけを失ってしまった。

「わ、わかったよ」

統夜はデンモクを受け取ると、曲探しを始めた。

「俺、歌は上手くないから期待はしないでくれよ」

統夜は曲を探しながら言い訳のようにこう言っていた。

「月影君の歌を聴くの初めてだなあ♪」

「ねえ、楽しみ♪」

「ええ、そうですね♪」

クラスメイトのみんなとイレスは統夜の歌に期待していた。

（そう言えば私たちは統夜先輩の歌を少しだけ聴いたことがあるけど、あの時は上手かったな……）

梓たちは売れる直前だったミュージシャンであるSHUのライブの時、統夜の歌を聞いたことがあった。

その時はそのライブハウスの中にホラーがいて、統夜はその場の混乱を最小限にする為にステージに乱入し、歌を歌ったのである。

(それに、カラオケは一度みんなで行った事もあったよね)

梓たちは以前御月カオルの個展に行った事があり、その後、カオルと食事をする前にカラオケに行った事があった。

その時に統夜も歌を歌ったので梓たちは統夜の歌を聞いた事があるのである。

(何がいいかな……)

統夜は曲選びに悪戦苦闘していた。

女子高生とカラオケに行っているという訳であり、女子高生の流行りが分からないので何を歌っているのか分からないのである。

(唯たちとカラオケに行った時はここまで迷わなかったのに……)

以前唯たちとカラオケに行った時は軽音部ということもあり、ロック系の曲を多く歌っていた。

なのでそこまで曲のチョイスに悩む事は無かったのである。

統夜がデンモクを操作していると、とあるアーティストの名前が目止まった。

……「ワルキューレ」である。

「！ワルキューレか。このグループなら今流行ってるはずだし、これにしよう！」

統夜はワルキューレの曲選択に入ると、ワルキューレのデビューシングルである「いけないボーダーライン」という曲を選択し、――6までキーを下げて送信した。

「お！ワルキューレだ！」

「へえ！月影君ワルキューレ好きなんだね！」

どうやら統夜の曲のチョイスは悪くないようであった。

そして、音楽が流れ始めると統夜は歌い始めた。

「~~~~~♪」

「おお！」

「月影君上手い！」

「格好いい！」

「へえ……」

クラスメイトたちに統夜の歌は好評で、イレスも初めて聴く統夜の歌に聞き入っていた。

（私……。普段は魔戒騎士としての統夜しか見てないけど、高校生の統夜もなかなか悪くないですね♪）

イレスは今まで見た事の無い程穏やかな顔をして歌を歌う統夜を見てイレスは笑みを浮かべていた。

こうして統夜は最後まで歌を歌い切ると、みんなから拍手が送られた。

「アハハ……お粗末さまで……」

統夜は恥ずかしそうにそうとだけ言っていた。

「ねえねえ、せっかくだから軽音部のみんなも歌ってよ！」

「えっ、いいの？」

「もちろんだよ！」

「やったあ！それじゃあ遠慮なく！」

こうして楽しくカラオケを楽しんでいたのだが……。

「統夜、ちよつといいですか？」

イレスが統夜を呼び出すと、2人は店の外へ出て行った。

「統夜……楽しんでるところ大変申し訳ないのですが、指令です」

「！わかりました」

統夜はイレスから直接指令書を受け取ると、魔法衣の懐から魔導ライターを取り出し、指令書を燃やした。

統夜は指令の中身を確認すると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

「統夜、早速向かって下さい。皆さんには私から上手く話をしておきます」

「分かりました。唯たちもいますから、上手く話は誤魔化せると思います」

「そうですね。統夜、頼みましたよ」

「分かりました……あつ、これはカラオケ代です。釣りはいらないので」

統夜はホラー討伐に出かける前にイレスにカラオケ代として5000円札を渡すと、そのままホラー討伐に向かっていった。

統夜がホラー討伐に向かった後、イレスはカラオケの部屋に戻ると、統夜が用事がある為帰った事を伝えた。

そのことにクラスメイトたちは残念がっていたが、統夜がカラオケ代といって置いていった5000円札を見せるとクラスメイトたちは驚いていた。

5000円は高校生がポンと出せる金額ではないからである。

そんな統夜に驚きながら、時間の許す限りイレスたちはカラオケを楽しんでいた。

※※※

ホラー討滅の指令が出された統夜はカラオケを抜け出し、イルバのナビゲーションを頼りにホラーを探していた。

ちょうどその頃、桜ヶ丘某所で1人の女性が1人の男に襲撃され、逃げ回っていた。「いやっ……！何なのよ！一体！」

恐怖に怯えながら女は逃げ回るのだが、気付けば行き止まりに追い詰められていた。

「そ、そんな……？」

女が行き止まりに愕然としていると、追いかけてきた男が追いついてきた。

「グへへ……もう逃がさねえぜ、こいつう！」

男は下衆な笑みを浮かべながら女に近付いていた。

「いや……来ないで……」

男が少しずつ迫りくる中、女は恐怖に怯えていた。

そして男の手が女に触れようとしたその時であった。

「悪いけど、そこまでだ！」

2人の目の前に統夜が現れ、男は動きを止めた。

「ああん。何だ、このガキ！」

男が突然現れた統夜を睨みつけていた。

「お兄さん……。そういうナンパは良くないですよ。……まあ、それは相手が人間だっ

たら……ですけどね」

「ああん!? てめえ何言って……」

統夜は魔法衣の懐から魔導ライターを取り出すと、魔導火を照らした。すると、男の瞳には何の反応もなかったのだが……。

「……………」

女の瞳に不気味な文字のようなものが浮かび上がった。

それは、この女がホラーであるという証である。

「お兄さん……。あんな化け物をナンパしようとするなんて趣味がいいですね」

「ああん!? クソガキ! 調子に乗ってんじゃねえぞ!」

男が統夜の胸ぐらを掴もうとしたその時だった。

女の体がこの世のものとは思えない怪物へと変化したのである。

「ひい!? な、なんだよあれ!」

「お兄さん、俺の胸ぐらを掴む暇があったら逃げた方がいいんじゃないんですか?」

統夜は男にそう告げると、男は血相を変えて逃げ出した。

「さてと……」

男がいなくなったことを確認すると、統夜は魔戒剣を抜いて構えた。

「おのれ……魔戒騎士……! せっかくの食事を邪魔しておつて!」

「やれやれ……。ずいぶんと趣味の悪い事をするもんだ。端から見たら誰もお前が悪党だなんて思わないぞ」

統夜はホラーのやり口に呆れており、ジト目でホラーを見ていた。

『統夜、奴はゴウグ。見た目は素体ホラーだが、ご覧の通り普通の素体ホラーとは違って重装備だ。気を付けろよ』

統夜が対峙しているホラー、ゴウグは、黒の鎧を装備している素体ホラーである。

そのため、防御力は通常の素体ホラーの倍と言われている。

「分かったー」

統夜はホラーの特徴を確認すると、ゴウグに接近し、魔戒剣を一閃した。

すると、ゴウグの体には傷一つ付いていなかったのである。

「なるほど……確かに固いようだな」

統夜はゴウグの体の硬さを確認すると、後方に下がり、距離をとった。

するとゴウグは畳み掛けるかのように統夜に接近して攻撃を仕掛けるが、統夜は魔戒剣を使うことなく無駄のない動きで攻撃をかわしていた。

そして統夜は魔戒剣の一撃はあまり効かないとわかりながら2度、3度と連続で攻撃した。

『おい、統夜！何故無駄な攻撃をするんだ？奴に魔戒剣の攻撃は効かないだろう？』

「ああ、知ってるよ」

統夜はそう答えながらも魔戒剣を振るうことをやめず、ゴウグは攻撃を防ぐだけで精一杯だった。

『だとしたら何故だ？』

「ストレス発散だよ」

『はあ?!』

「な?!」

統夜が闇雲に攻撃しているのはストレス発散と知り、イルバは呆れ、ゴウグは驚いていた。

「だって今日は無駄に神経をすり減らしたしな……。これくらいはな」

『やれやれ……。緊張感のない奴だぜ……。』

「おのれ……。私をただのサンドバッグ扱いするとは……。許さん!!」

統夜に見下されていることに激昂したゴウグは衝撃波を放ち、統夜を吹き飛ばした。

「おっとつと……」

統夜は衝撃波を受けて吹き飛ばされると、すぐさま体勢を整えていた。

「さて……。スッキリした所で一気にケリをつける……。貴様の陰我、俺が断ち切る!」

ゴウグを倒すと宣言した統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「！その鎧……。まさか貴様が噂のソロとかいう奴か！」

ホラー、グオルブを討滅したことで、奏狼の鎧の名前はホラーにも知れ渡るようになっていた。

「へえ、俺も有名人になったもんだな。それなら……。魔界行きの土産に我が名を刻むんだな！」

統夜はゴウグに接近すると、魔戒剣が変化した皇輝剣を一閃した。

その一撃はゴウグの体を真つ二つにした。

「つ……。強い……。こんな子供が……」

「子供じゃないさ。……。我が名は奏狼！白銀騎士だ！」

統夜がホラーに向かって高々と宣言すると、ゴウグの体は爆発し、消滅した。

ゴウグの討滅を確認した統夜は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「さて……。お仕事は終わった事だし、帰るとしますか」

『ああ、そうだな』

ホラーを討滅し、この日の仕事は終わったので、統夜はそのまま帰路についた。

※※※

翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行ってから登校すると、すでにイレスは登校しており、クラスメイトたちとおしゃべりを楽しんでいた。

《……あの調子なら、お前さんが見てなくても問題はなさそうだな》

(そうだな。みんなイレス様と仲良くしたくて一緒にいるんだ。余程のことがない限りはみんなに任せても問題はなさそうだ)

統夜とイルバはテレパシーで会話をしながら席につき、クラスメイトたちと楽しそうにおしゃべりをするイレスの様子を眺めていた。

しばらく様子を見ているとこちらに気付いたイレスが統夜に笑みを向けると、こちらへ来いと手招きをしていた。

なので統夜は席を立ってイレスに歩み寄った。

「統夜、おはようございます♪」

「イレスさま……お嬢、おはようございます」

「ついついいつもの癖が出そうになったが、すぐに訂正すると、イレスは満足そうに微笑んでいた。」

「月影君、昨日は用事だったの？急に帰っちゃったからさ」

「そうなんだよ。だから昨日はごめん？だからそのお詫びで昨日は多めにお金を置いといたんだけど」

「びつくりしたよ！月影君つてば5000円をポンと出せるんだもん、」

「そうだよ！月影君つてもしかして結構お金持ち？」

「そんなことはないって」

「統夜はそうとだけ答えて苦笑いをしていた。」

「お嬢、昨日は楽しかったですか？」

「ええ♪すごく楽しかったですよ！軽音部の皆さんとも少しだけ話が出来ましたし♪」

「そうでしたか、それは良かったです」

「統夜、私、今日は軽音部に顔を出す約束をしましたので案内を頼みますね」

「はい、わかりました」

「このタイミングでチャイムが鳴ったので、統夜たちは自分たちの席に戻っていった。」

こうして授業は始まり、休み時間になったのだが、イレスはクラスの人気者であり、彼女の席には常に誰かがおり、楽しげに会話をしていた。

統夜は楽しそうに過ごすイレスを見て笑みを浮かべていた。

「良かった……。イレス様、凄く楽しそうだ……。そんな姿を見る事が出来て凄く嬉しいよ……」

普段は番犬所の神官として魔戒騎士や魔戒法師の前で凜としているイレスが、まるで年相応の少女のようにクラスメイトたちと楽しげに過ごしているのが統夜には嬉しかったのである。

統夜は昨日は過保護な程イレスを見ていたが、この日は自分からイレスに近付くことをしなかった。

呼ばれた時に話をするだけであった。

こうして時は流れて昼休みになった。

この日イレスは昨日のように購買に向かっていた。

「やつぱりすごい人ですね……」

「うん！昼休みは戦場だもん！」

「ねえねえ、イレスちゃん。今日は何を狙うの？」

「みんなが美味しいと勧めてくれた3色サンドを」

「おお、いいねえ！それじゃあ頑張っついていこう！」

「はいー」

イレスは「ふんす！」と気合いを入れると人混みの中に入っついていった。

始めは昨日のように押し返されそうになったものの、気合いを入れて前進し、お目当の3色サンドをゲットすることが出来た。

イレスはその他にフルーツ牛乳を手に取り、そのお金を支払うと、人混みの中から無事脱出した。

「やった……。買えました！」

「やったね！」

「すごいよ！イレスちゃん！」

イレスはともにパンを買いに来たクラスメイトと喜びを分かち合っていた。

その様は番犬所の神官ではなく、どこにでもいる女子高生だった。

統夜は優しい表情でその様子を見ていた。

(頑張りましたね……イレス様……)

統夜もまるで自分のことのようにイレスが無事にパンを買えたことを喜んでいた。

《おい、統夜。感動するのは結構だが、自分のパンは買わなくていいのか？》

「！やべっ！早く買わないと！」

イルバがテレパシーでこう伝えてくれたおかげで本来の目的を思い出した統夜は慌ててパンを買いに行った。

統夜は完全に出遅れたため、人混みはまばらになり、残っているパンもあまり種類はなかった。

「くそつ、もうコッペパンと食パンくらいしか残ってないな……。まあ、食べるだけマシと思うかな」

パン争奪戦に完全敗北した統夜は仕方なくコッペパンと食パンを購入した。

（せめてアンパンでも残ってりゃ文句はないが、仕方ないよな）

コーヒー牛乳なども売り切れていたので統夜は近くの自販機でジュースを買うことにした。

「統夜、パンは無事に買えたのですか？」

「イレ……お嬢！待っててくれたんですか？」

イレスたちが統夜のことを待っていたと知り、統夜は驚いていた。

「ええ。今日も統夜とお昼を一緒に過ごしたいと思いましたがからね」

「月影君、それで、パンは買えたの？」

「一応ね。だけど、いいパンは全滅だったから食パンとコッペパンしか買えなかったけどね」

「そうなんだ。ねえ、今日も一緒にご飯食べようよ。私のパンを少し分けてあげる」

「いいのか？ だけど、それは悪いよ」

「いいっていいって」

「統夜。私の3色サンドも少し分けてあげますよ」

「そうそう、遠慮は無しだよ」

「それなら……遠慮なく♪」

こうして統夜は今日もイレレスやクラスメイトたちと一緒に昼食を取り、パンを交換し合ったりもしていた。

※※※

こうして昼休みは終わり、放課後になった。

イレスはこの日は軽音部に顔を出すことになっていたので、イレスは統夜と共に音楽準備室へ向かった。

「よう、来たぞ」

「お、お邪魔します……」

「おつ、来たな」

「イレスちゃん、待ってたよ♪」

「おい、唯！イレス様に何て呼び方をしてるんだよ！」

統夜はイレスが何者か知っている上でこう呼ぶ唯に怒るのだが……。

「統夜、いいのです。私が気軽に呼んでくれと言ったのですから」

「い、イレス様がそうおっしゃるなら……」

統夜はイレスがこう呼ぶことを望んでいると知り、これ以上は何も言えなかった。

「さあさあ、統夜君もイレスちゃんも座って♪今お茶を淹れるから♪」

統夜は魔法衣と学生靴を長椅子に置き、ギターケースをたてかけた。

それを見ていたイレスも学生靴を長椅子に置いた。

その後、2人は椅子に座ると、紬はティータイムの準備を始めた。

「はい、どうぞ♪」

紬は紅茶を淹れ終わると紅茶をイレスの前に出した。

「これが軽音部の紅茶……。統夜から話は聞いていましたが、楽しみです♪」
目の前にある紅茶にワクワクするイレスの前に今度はケーキが置かれた。

「さあ♪遠慮なく召し上がって下さい♪」

「はい、いただきます♪」

紬に促され、イレスは紅茶を一口飲んだ。

イレスの反応は……。

「……美味しい……!」

紬が淹れた紅茶はイレスに好評だった。

そして、イレスは目の前にあるケーキを一口頬張った。

「……これも美味しいです!」

「ウフフ♪喜んでもらえて何よりです♪」

「こんなに美味しい紅茶やケーキは久しぶりです♪ぜひ番犬所に差し入れて欲しいくらいですよ♪」

「い、イレス様。さすがにそれは……」

騎士でも法師でもない人間を番犬所に入れる事が良くないと知る統夜はイレスを窘めていた。

「ウフフ、冗談ですよ。私だってそれがダメだって事は分かっていますから♪」

「そうですね……それは残念です」

イレスや統夜がいる番犬所に入れると期待した紬はがっくりとうなだれていた。

「あつ、そうだ！これから時々やーくんが差し入れすればいいんだよ！」

「それはいい考えかもな。ケーキはそのまま持つて行って紅茶は茶葉を差し入れたら番犬所でもこの紅茶が飲めるもん！」

唯の出した提案に滯が賛同していた。

「おお！それは素敵な考えです！統夜、時々でいいので頼めますか？」

「わ、わかりました」

こうして統夜は番犬所に行く時に時々紬が用意したケーキと紅茶の茶葉を差し入れることになった。

「ウフフ、楽しみが増えました♪」

「あのつ、イレスさんって、普段は番犬所にいるんですね。出歩くことは出来ないんですか？」

「そうですね。私のような番犬所の神官は統夜のような魔戒騎士や魔戒法師に指令を与えるのが私の仕事ですからね。外に出歩くという事は基本認められていないですよ」

「それが嫌だと思つた事は無いんですか？」

「そうですね……。番犬所の神官というのは誇るべき仕事だと思つたので嫌だと思つ

た事はないです。ですが、私は高校生活というものに憧れていました。ですから、時々番犬所を抜け出して高校生活を見てみたいとは思っていました」

「それでイレスはこの高校にやって来たって訳か」

「はい。全ての番犬所を総括する元老院に1週間だけとの条件でどうか許可をもらったのです」

「「「へえ……」」」

唯たちは何故イレスがこの紅茶に来たのを知り、驚いていた。

『まあ、番犬所の神官ってのは変わった奴が多いが、こいつはその中でもかなり変わってるな。高校生活に憧れる神官なんてそうはいないぞ』

「おい、イルバ！イレス様に何てことを！」

統夜はイルバの発した失礼な言葉に怒っていた。

「統夜、いいのです。イルバの言うことは間違っていないですから」
「でも……」

統夜は反論しようとするが、反論の言葉が思いつかなかった。

「だけど、イレスちゃんは高校生活に憧れてたからウチに来たんだよねえ？だから私たちはこうやって出会えたんだよ！」

「唯……」

「私たちとイレスちゃんじゃ住む世界が違うかもしれないけど、時々遊びに来て欲しいな♪だって私たち友達だもん♪」

「友達……ですか……?」

「うん! 駄目……かな?」

「……………」

イレスはまさかこのような言葉をかけてもらえるとは思っていなかった。

イレスは唯たちの顔を見回すが、唯、律、滯、紬、梓、そして統夜は優しい表情で笑みを浮かべていた。

それはつまり律たちも唯と同じ気持ちだということである。

しかし統夜はイレスを友達として見ている訳ではなく、この状況を優しい表情で見守っているだけである。

「皆さん……ありがとうございます! 私、凄く嬉しいです!」

イレスは心の底から喜んでいた。

番犬所の神官として外に出る事を許されず魔戒騎士や魔戒法師に指令を出す毎日。

そんな生活を送っているからか友達と呼ばれる存在はいなかった。

いや、必要ないというのが正しいだろう。

そんな自分ではあるが、彼女たちは自分のことを心の底から友達と思っている。

このような嬉しい気持ちになったのは初めてだった。

(イレス様……良かったですね……)

イレスの事情を知っている統夜はイレスを見て笑みを浮かべていた。

「ささっ、お茶もケーキもまだあるから遠慮しないでくださいね♪」

「はいっ♪」

こうしてイレスは今までにない程楽しい気持ちでティータイムを楽しんでいた。

1時間程ティータイムを楽しむと、イレスは番犬所に戻らなければならない時間となった。

統夜もこの日は番犬所に用事があったので、イレスと統夜は共に音楽準備室を後にすると、番犬所へと向かった。

番犬所に到着した統夜は、魔戒剣の浄化を行った。

この日はホラー討伐の指令はなかったため統夜は魔戒剣の浄化が終わると番犬所を後にした。

「……ウフフ……。友達ですか……。そんな言葉をもらうのは初めてだったから、嬉しかったです……」

イレスは番犬所に戻り、神官の服に着替えののだが、唯が言ってくれた言葉を思い出し、笑みを浮かべていた。

「?イレス様、如何致しました?」

「へ?い、いや。何でもないので!」

「そうですか?それなら良いのですが……」

付き人の秘書官に今の気持ちを悟られそうになったのでイレスは慌てて話を誤魔化していた。

「フフ……。無理に行った留学でしたけど、行って良かったです……。明日も、本当に楽しみです♪」

イレスは桜高の制服を眺めながら笑みを浮かべていた。

こうしてこの日は終わっていった。

翌日以降もイレスは学校に通い、イレスは多くの友達に囲まれながら実りある学校生活を送っていた。

普通の学生と同じ授業を受け、昼休みは良いパンを求めて購買を訪れ、クラスメイトたちと昼食を楽しんだ。

そして放課後は、クラスメイトたちと共にアミューズメント施設でバッティングコーナーのバッティング体験をしたり、ゲームやボーリングなど、高校生が楽しんでいることを楽しんでいた。

こうして1週間はあつと言う間に経過し、イレスは番犬所の神官といういつもの日常に戻っていった。

そんなイレスであるが、この1週間、多くの友達と過ごした日々はイレスにとって何者にも変えがたい思い出になった。

統夜は楽しそうにしているイレスを見て、こんな当たり前な幸せを魔戒騎士として守っていききたい。

こう心に強く誓いを立てたのであった。

……完

番外編③ 「期末」

紅の番犬所の神官であるイレスが1週間という短い期間ではあるが、イギリスから来た留学生として桜ヶ丘高校に潜り込み、普通の高校生としての生活を送っていた。

イレスは番犬所の神官としては味わうことの出来ない多くの体験を行っていた。

1週間という期間はあつと言う間に過ぎていき、イレスは再び番犬所の神官という日常に戻っていった。

イレスの留学最終日は、クラスの誰もがイレスとの別れを惜しんでいた。

クラスメイトたちはイレスに色紙を送ったり、放課後にパーティーを行うなどしてイレスと最後の日々を過ごしたのだ。

そして翌日、イレスはいないが、平凡な日々は始まったのである。

統夜もいつもの日常に戻ると思いきや、その生活に若干の変化が生じていた。

統夜はイレスのおかげでクラスメイトたちとの交流の機会も増え、以前よりもクラスの誰かと接する機会が増えたのである。

以前の統夜は魔戒騎士独特の雰囲気ので近付き難い雰囲気を出していたのだが、ちゃんと話してみると話しやすいことがわかったのか、クラスメイトたちは統夜と話を

するようになったのである。

統夜は真面目な生徒ではあるのだが、その独特な雰囲気から生徒だけではなく教師にも時々怖がられ、「真面目な不良」という矛盾だらけなあだ名が教師たちにつけられるほどである。

そんな統夜ではあるが、少しだけクラスメイトたちとの関係も良好になり、この日は過ぎていった。

そしてこの日の放課後も統夜は音楽準備室に向かったのだが……。

「よう、みんなー……って、あれ？」

統夜が音楽準備室に入ると、何故か唯と律が難しい表情をしていたので統夜は首を傾げていた。

「おい、唯、律。どうしたんだ？ 難しい顔をして」

統夜は魔法衣と学生鞆を長椅子に置き、ギターケースを壁に立てかけながらこう唯と律に聞いてみた。

「あつ、統夜先輩」

「いや、もうすぐ期末試験だろ？ 唯と律は今回自分たちの力で頑張るって決めてな。それからあんな調子なんだよ」

澪は唯と律が難しい顔をしている理由を統夜に説明した。

「ふーん。期末テストねえ……。それは頑張らなきゃ……」

統夜は自分で「期末テスト」という単語を言うとか何を思い出したのか硬直していた。そして……。

「何い?! 期末テストだど?!」

「だからさつきからそう言ってるじゃないですか……」

大袈裟な程驚く統夜を見て梓はジト目でツツコミを入れていた。

「うわ……。ここ最近ではグオルブのことがあったからな。勉強のことなんかすっかり忘れていたわ……」

統夜は中間テストをどうにか切り抜けた後にホラー、グオルブ復活をめぐる事件に巻き込まれ、解決に奔走していた。

そのため、その間は魔戒騎士の使命に集中していたあまり試験のことなど頭の片隅にもなかった。

その事件解決後もイレスが留学してきたこともあり、統夜は勉強するという発想が完全に無くなってしまったのである。

統夜は再び厳しい現実を突きつけられ、顔を真っ青にしていた。

「アハハ……統夜先輩、また試験のことを忘れてたんですね……」

梓は中間テストの前にも同じような光景を見ていたのでそれを思い出して苦笑いを

していた。

『やれやれ……。これがあのグオルブを討滅した魔戒騎士とは思えないな……。』

イルバは統夜のあまりの動揺ぶりに呆れていた。

「明日から試験期間で部活も出来ないし、統夜君も勉強に集中するいい機会じゃない？」
「ムギの言う通りだな。唯と律も自分の力で頑張るって言ってるんだ。統夜も自分の力で頑張ってみたらどうだ？」

「うっ……」

統夜はこう濡にたしなめられ、顔を真っ青にしていた。

『統夜、諦めろ。ここで頑張らないとお前さんに待っているのは追試だぞ』

「わ、わかってるよー！」

こうして統夜もどうにか自分の力で試験勉強を頑張ることにした。

この日は少しだけティータイムを行って解散となった。

統夜は唯たちと別れた後、よく行くカフェで夕食を取りながら勉強していたのだが
……。

「……………全くわからん……………」

統夜は数学の問題に悪戦苦闘していた。

《おいおい、統夜。そんなんで大丈夫なのか?》

(やっぱり理数系は苦手だよ……。他の教科なら勉強しなくても何とかかなるんだけど……)

統夜は理数系の教科の成績は絶望的に低いのだが、他の教科は平均並。教科によつては学年トップ並の成績を取れるものもある。

(勉強が苦手な唯や律だつて自分で頑張るつて言つたんだ。俺だつて……!)

統夜は「ふんす!」と気合いを入れると再び数学の問題に向かつていった。

この日は2時間程勉強を行った後に店を出て、その後は街の見回りを行つてから家路についた。

こうして期末試験に向かつてどんどん日々は過ぎていった。

朝はエレメントの浄化を行うものの、放課後は幸い指令はなかったので、勉強に集中することが出来た。

統夜は放課後になると、学校の図書室やいつも通つてるカフェで勉強をしていた。

期末テスト3日前。この日も統夜はいつも通つてるカフェで軽食を取りながら勉強

をしていたのだが……。

「ふんふんふーん♪……つてあれ？統夜？統夜じゃないか！」

偶然このカフェに立ち寄った青年が統夜に声をかけた。

「……！シグトさんじゃないですか！」

統夜に声をかけたこの青年はシグトという名前で、邪美や烈花と同じ魔戒法師である。

「おう、久しぶりだな、統夜」

「お久しぶりです、シグトさん。それよりもシグトさんは指令で桜ヶ丘に来たんですか？」

「まあ、指令と行っても届け物を届けるだけなんだけだな。それで偶然この街に立ち寄っただけど……。まさかここがお前の住んでる街だったとはな」

シグトとはある物をこの街に住む魔戒法師に届けるという指令でこの街に訪れていた。

仕事を終えたシグトが偶然この店に立ち寄ると、統夜に偶然会ったのである。

シグトは統夜の座るテーブルの空いている席に腰を下ろした。

「なあ、統夜。ここのオススメってあるか？」

「ここのオムライスは美味しいですよ」

「よし！それにするか」

ちようどシグトが注文したものを決めたタイミングで店員がシグトに水を持ってきた。

「あつ、すいません。コーヒーつとオムライスーっ！」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

一礼すると、店員はキッチンに向かっていった。

「ところで統夜はここで食事でもしてたのか？」

「いえ、俺はもうすぐ学校のテストがあるんでテスト勉強をしてたんです」

「テスト勉強？」

「ええ、今はこんな勉強してます」

統夜はシグトに今勉強で使ってた教科書を見せた。

「うわあ……高校生ってこんなこと勉強するのかよ。俺にはさっぱりだぜ……」

シグトはすぐさま教科書を統夜に返した。

「アハハ……シグトさん、零さんと同じこと言ってますよ」

「え？そうなのか？」

「まあ、確かに難しいって言うのはわかります。俺だって今この問題に悪戦苦闘してた訳ですし」

「ふーん、大変だな。統夜、頑張れよ」

「はい、何とか頑張ります」

統夜とシグトが話をしていたその時だった。

「お待ちせ致しました。コーヒートオムライスです」

シグトが注文していたコーヒートオムライスがシグトの前に置かれた。

「おお！確かに美味そうだな！」

目の前に置かれたふわふわでトロトロなオムライスにシグトの胸は踊っていた。

「いただきますー！」

統夜が数学の問題を解く中、シグトはオムライスを一口頬張った。

「……ん！美味え!!確かにこのオムライス美味えよ！」

「アハハ……。そこまで喜んでもらえたら勧めた甲斐がありましたよ」

シグトはコーヒートオムライスをじっくりと味わい、統夜はコーヒートを飲みながら勉強を行っていた。

シグトがオムライスとコーヒートを完食したタイミングで統夜もこの日のノルマを終わらせた。

「……おつ、統夜。もういいのか？」

「はい。この日のノルマは終わらせました」

勉強のノルマを達成した統夜の顔はとても疲れ果てていた。

「アハハ……。俺が傍で飯食ってて邪魔じゃなかったか？」

「そんなことはないですよ！むしろリラックスして勉強出来ましたし！」

「そう言ってもらえると俺も嬉しいよ」

「アハハ……。それじゃあ出ましようか」

こうして統夜とシグトは会計を済ませて喫茶店を後にした。

本来であれば自分の食べたものをそれぞれ会計する予定だったのだが、シグトが統夜に奢ると言っていたので、統夜はシグトの言葉に甘えて奢ってもらうことにした。

喫茶店を出た統夜はそのまま番犬所に向かうことになっていたので、統夜とシグトは喫茶店の前で別れた。

そして統夜は一度番犬所に顔を出し、その後は街の見回りを行ってから家路についた。

統夜は順調に勉強を進めて行ったのだが、テスト前日、ホラー討伐の指令が下された。

いくら今はテスト前の大事な期間であるとはいえ、魔戒騎士の使命は全うしなければならぬ。

統夜は番犬所から指令を受けると、イルバのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を始めた。

「イルバ……ホラーはここか？」

統夜がたどり着いたのは今は使われていない廃品置き場であった。

この場所と思ったよりも広く、統夜の周囲には使われていない家電や自転車など大量のゴミが置かれていた。

『ああ、油断するなよ。統夜！』

統夜はホラー襲撃に備えていつでも魔戒剣を抜ける状態にしておいた。

そして……。

『統夜！来るぞ！』

イルバがこう警告をすると、統夜の目の前に巨大なホラーが現れた。

「でかつ！よりにもよってこんな面倒くさそうな奴が相手かよ！」

統夜は目の前にいる明らかに強そうなホラーを見てげんなりしていた。

『こいつは……。ハンプティ……。か？俺様が知っているハンプティとは姿が違うが……』

「ハンプティって確か鋼牙さんが初めて轟天を召還した時に倒したホラーだったよな？まさか、その強化系か!？」

統夜の言う通り、牙狼の称号を持つ冴島鋼牙は、初めて魔導馬轟天を召還した時にハンプティを倒している。

統夜の目の前にいるハンプティはそのハンプティよりも装甲が強化されている強大なホラー、「ハンプティマグナ」であった。

『………統夜、来るぞ!』

「!!」

ハンプティマグナが先制攻撃を仕掛けて来たので、統夜は魔戒剣を抜き、後方へジャンプすることで攻撃を回避してハンプティマグナと距離を取った。

「こいつは鎧を召還しないとダメそうだな……。……貴様の陰我、俺が断ち切る!」

統夜はハンプティマグナに向かって魔戒剣を突きつけると、その魔戒剣を上空へ高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれて、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

それだけではなく、統夜は鎧の召還と同時に、自分の魔導馬である白皇を召還した。

統夜は白皇に跨がり、ハンプティマグナと対峙した。

『こいつの装甲はやつかいだぞ、統夜』

「ああ、どうやらそうらしいな」

統夜は白皇の力で皇輝剣を皇輝斬魔剣に変化させると、ハンプティマグナを睨みつけた。

「明日はテストなんだ……。一気に決めるぞ！」

統夜は全力でハンプティマグナを討滅させるため、白皇をハンプティマグナに向かって走らせた。

ハンプティマグナは体から種のような弾丸を放つが、統夜は皇輝斬魔剣でそれらを全て弾き飛ばした。

「……取った!!」

統夜は絶妙なタイミングで皇輝斬魔剣を振るうが、ハンプティマグナの装甲は予想以上に強固であり、その身体に傷をつけることは出来なかった。

「何!?!」

統夜は今の一撃でハンプティマグナを倒せなかったことに驚いていた。

「くそっ………まだだ!」

統夜は諦めずに再び皇輝斬魔剣を振るうが、ハンプティマグナの腕で軽々と防がれ、

統夜はハンプティマグナの攻撃で少し吹き飛ばされてしまいが、どうにか体勢を立て直し、ハンプティマグナと距離を取った。

『こいつ……！ただのハンプティより装甲が硬いぜ……。ということはこいつはハンプティマグナか!』

イルバは今までの戦いでこのホラーがハンプティではなく、ハンプティマグナであると確信した。

ハンプティマグナは「どうした？かかって来いよ！」と言うかのように手招きをしてこちらを挑発していた。

（くそっ！あんな馬鹿みたいに硬い奴はどうやって倒せばいいんだよ!）

統夜はハンプティマグナをどう攻略するか考えていた。

すると……。

（……！待てよ！あの方法なら!）

統夜はグオルブと戦った時に皇輝斬魔剣を烈火炎装させたことを思い出した。

「よしっ！これなら!」

統夜は皇輝斬魔剣に赤い魔導火を纏わせると、再びハンプティマグナに向かっていった。

統夜は赤い魔導火に包まれた皇輝斬魔剣を3度、4度とハンプティマグナの身体に叩

きつめた。

その後統夜は全身を切り裂かれたハンプティマグナを睨みつけた。

ハンプティマグナの身体は魔導火の炎に包まれ、少しずつ崩壊していった。

そして……。

統夜の放った連続攻撃が致命傷になったのか、ハンプティマグナの身体はバラバラになり、爆発四散した。

「よしっ……なんとか……倒したな……」

統夜はハンプティマグナを撃破したことを確認すると鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「か……帰ろう……。今日は……疲れた……」

ハンプティマグナとの戦いで全力を使い果たした統夜はフラフラになりながらもどうにか帰宅した。

統夜は家に到着するなり風呂場へと直行した。

統夜はシャワーを浴びてその日の汚れを洗い流すと、浴槽に入ることにはせずに風呂場を出た。

統夜はバスタオルで全身拭くと、パンツだけをはいて、後は全て手に持って寝室へと向かった。

「……………もう、寝よう……………今日は……………疲れた……………」

統夜はパジャマに着替え、イルバを専用のスタンドにセットすると、ベッドにダイブし、1分もかからずに眠りについた。

ハンプティマグナとの戦いで疲れ果てた統夜は翌日がテストだということはすっかり忘れて眠りについてしまったのだ。

※※※

翌日、統夜の疲労は相当だったのか、普段起きる時間になってもまだ眠り続けていた。

『……………おい、統夜！起きろ！』

それを見かねたイルバが統夜を起こしていた。

「うにゃあ……………何だよイルバ……………もうちよつとだけ寝かせてくれよ……………昨日のホラーと

の戦いは……ハードだったんだから……」

統夜は寝惚けながらもなかなか起きようとしなかった。

『おい、統夜！今日から期末テストだろう？そんな悠長にしているいいのか？』

「期末テストお……？そんなの別にどうでも……あれ……？」

統夜は寝惚けながらも期末テストという単語に反応していた。

そして……。

「やっべえ!!全然勉強してねえ!!」

統夜はガバツと起き上がった。

『やれやれ……ようやくお目覚めか?』

「い、イルバ……どうしよう……。俺、昨日は全然勉強してない……。それに、勉強した内容を全部忘れちゃった……」

統夜は昨日勉強してないということだけではなく、勉強した内容を忘れたというところでもない爆弾発言をしていた。

『やれやれ……それはお前さんの自業自得だろ?』

「だってよ！昨日は仕方ないだろ!?あんな手強いホラーを相手にしたんだから！」

統夜が昨日戦ったハンプティマグナはホラーの中でもかなり強大な部類に入るホラーで、並の魔戒騎士ではまず歯が立たないホラーである。

そんなホラーを相手に全力を尽くしたせいで統夜は勉強したことも全て忘れてしまったのだ。

『はあっ……。統夜、今日の教科は何だ？』

「現国と社会だけど……」

『数学が来なくて良かったな。今日数学があつたらお前は赤点必至だったぞ』

「まあ、そうだな」

『とりあえずさっさと顔を洗つて来い。今日もエレメントの浄化をしてから学校に行かなきゃいけないんだからな』

「わかつてるよ」

統夜は顔を洗い、軽く朝食を済ませると、学校に出掛ける準備を済ませ、いつものように朝のエレメントの浄化に出かけて行つた。

そして日課のエレメントの浄化を終えた統夜は急いで学校に向かい、これから行われる試験に備えた。

こうして期末テスト初日はどうにか無事に終わり、翌日は統夜が大の苦手な教科が待ち構えていることもあり、統夜はすぐさま家に帰って勉強に集中した。

その甲斐があつてか、統夜は苦手教科もどうにか切り抜けることが出来た。

苦手教科を切り抜けて勢いに乗った統夜はその後も勉強に集中したことでどうにか期末テスト全教科を無事に乗り切ったのである。

そしてテストの返却日、統夜たちは音楽準備室でテストの点数を見せ合っていた。「じゃーん!! どうだ、すげーだろ?」

律が自慢気に唯と統夜に自分のテストを見せていた。

すると、律はなんと数学で「82点」となかなかの高得点を叩き出していた。

「おおー! りっちゃん凄い!」

「な……なん……だと……!?!」

唯は律の点数に関心し、統夜は同類と思っていた律が自分より遥かに高い点数を叩き出していることに驚愕していた。

「おいおい、これは本当に律のテストか? カンニングした訳じゃないだろうな!」

「失礼なことを言うんじゃないよ! 馬鹿統夜!」

統夜の言葉にムツときた律は統夜に拳骨をお見舞いした。

「いつてえ!」

統夜は律の拳骨を受けてあまりの痛みに拳骨を受けた場所を手で押さえていた。

「やれやれ……!」

滯はそんな統夜たちのやり取りをジツと見ていた。

「滯ちゃんもお疲れ様♪」

「ああ、本当に疲れたよ……」

滯は紬の言葉にこう気軽に答えたのだが……。

(……ってあれ!?!バレてる!?!)

「ウフフ♪」

紬は滯の考えを見透かして笑みを浮かべていた。

実は律がここまで高得点を取ることが出来たのは滯のおかげなのである。

滯は唯や律が自分の力で頑張るといふ言葉を信じて律が勉強を教えると泣きついてきても勉強を教えないつもりだった。

しかし、滯は律の必死な懇願に根負けしてしまい、仕方なく律の勉強を見ることになったのである。

紬は滯が唯や律に勉強を教えないと言いなながらも教えるだろうと予想し、その予想が見事に当たったのである。

「そういえば唯はテストどうだったんだ?」

統夜は唯のテストの結果が気になったので、唯に質問してみた。

「今回は憂に教えてもらったから追試はなかったよ」

「何だよ！結局1人でやってないじゃないか！」

そう言つて律は笑つていたのだが……。

『おい、ちよつと待て。確か憂は1年生だったな？……ということは唯は下級生に勉強を教わつたつてことなのか？』

「……あつ!!」

「ほえ？」

唯以外の全員はイルバの言葉の意味を理解して驚愕するが、唯だけは理解出来ずに首を傾げていた。

『ま、まあ……。赤点を回避出来たなら結果オーライで良かったんじゃないのか？』

イルバの言葉に唯以外の全員がウンウンと頷いていた。

「そういえばやーくんはどうだったの？」

統夜のテストの結果が気になった唯はがこう聞くが、それを聞いて統夜はドキツとしていた。

「あー、えつと……」

「まさか、追試だつて言うんじゃないだろうな？」

「それはない。何とか追試は回避したんだよ」

「？それじゃあどうしてはつきりそうだつて答ええないんですか？」

梓は赤点がないならそう答えればいいのに何で答えをはつきり言わないのか気になる、そう訪ねてみた。

「えつとな……。これを見ろ」

統夜は一番苦手な数学のテストを唯たちに見せた。

それを見た唯たちは統夜のテストの結果に驚愕していた。

その理由は……。

「え……。これって……」

「31点……。赤点が30点以下だからギリギリ……。だよな……」

統夜は僅か1点差で赤点を免れたので、ハッキリ答えたくなかった。

『まあ、自力で何とかしたにしては上出来じゃないか？テスト前日はホラーのせいでテスト勉強も出来なかったしな』

「えっ!? そうなんですか!？」

「あ、ああ。実はそうなんだよ」

『それだけならまだいいが、その時戦ったホラーがかなりの強敵だな。全力を尽くしてどうにか討滅はしたものの、統夜は勉強した内容を全て忘れちゃったんだよ』

「な、なるほど……。それでギリギリ赤点回避って訳ですか……」

統夜のテスト前日の話を聞いた梓は苦笑いをしていた。

「ま、まあ！良かったじゃん！追試はないんだから！」

「それもそうだな！これで勉強からは解放される訳だし♪」

『いやいや、普段からちゃんと勉強しろよ』

イルバのツツコミに滯、紬、梓はウンウンと頷いていた。

こうして統夜は期末試験をギリギリではあるが、無事に乗り切ったのであった。

……完

番外編④ 「外出」

）梓 side ）

……こんにちは、中野梓です。

突然ですが、今日の私は凄くドキドキしています。

それは何故かというと……。

「……梓、どうした？顔が真っ赤だけど」

「ふえ?!いい、いや!な、何でもありません!何でも!」

「本当か?」

「はい!」

「ならいいんだけど……」

私、中野梓は現在、統夜先輩とデートをしているからです。

先輩とのデートは楽しみで、凄くドキドキものなんです!

どうしてこんな状況になったのか……。それは4日前に遡ります。

～ 三人称 side ～

統夜はホラー討滅と期末試験をどうにか乗り越えてから2日後、予想外の出来事が起こっていた。

統夜はその日の休み時間に梓に呼び出され、屋上に来ていた。

「梓、どうした？こんなところに呼び出して」

「えっ？あつ、あのっ……！」

梓は顔を真っ赤にし、モジモジしていた。

（おお！梓のやつ、思い切ったことをするな！頑張れ！）

イルバはこの状況をとて面白がっており、梓のことを応援していた。

「統夜先輩、今度の日曜日ってひ、暇……ですか？」

「えっ？今度の日曜日？」

（なんだよ、そつちか。梓のやつ思いきって統夜に告白すると思ったんだがな。……ん？待てよ？これはこれで面白いことになりそうだ）

イルバは梓が統夜に告白すると予想していたが、その予想は外れてしまった。

しかし、梓の目的をすぐに察したイルバはこれはこれで面白いとこの状況を楽しんでいた。

「まあ、エレメントの浄化以外は特に予定はないけど。……イルバ、そうだよな？」

『ああ、その日は特に予定はないぜ』

統夜はその日は特に予定がないとイルバにも確認を取って、それを聞いた梓は安堵していた。

「あつ、あのつ……」

梓はどうか話を切り出そうとするが、ドキドキするあまりなかなか思い通りに話を切り出せなかった。

「？梓？」

「は、はい！あのつ、実はですね、この前お父さんに動物園のチケットをもらったんです！」

「動物園かあ。テレビで見たことはあるけど、行ったことはないな」

「それで……もし良かったら……一緒に……行きませんか？」

「ああ、いいぞ」

統夜は二つ返事でOKを出し、それを聞いた梓は驚いていた。

「ほ、本当ですか？」

「ああ。だって俺だけじゃなくて軽音部のみんなも誘うんだろ？」

「『えっ!?!』」

統夜のあまりにもデリカシーのない発言に梓だけではなく、イルバまで反応してしまつた。

「?イルバまでどうしたんだよ？」

『おい、統夜!どうしたんだよじゃないだろう?そこはちよつとは空気を読めよ!』

あまりに鈍感な統夜を見てじれつたかと思つたのかイルバが思わず口を出してしまつた。

「?空気を？」

統夜はイルバの言葉の意味を理解していなかった。

(ダメだこりゃ……。この唐変木め……)

イルバは統夜の鈍感ぶりに苦笑いをしていた。

そして梓は統夜の言葉に呆然としていた。

(落ち着け……。落ち着くのを、梓。統夜先輩が鈍感なのは今に始まつた事ではないじゃ

ない！)

梓は冷静になるために深呼吸をしていた。

「……統夜先輩。このチケツトは2人分しかなくて、私は統夜先輩と行きたいんです。

……ダメ……ですか？」

(よし！梓、よく言った!!)

梓ははつきりと統夜をデートに誘い、イルバはそんな梓を称賛していた。

「……俺でいいのか？動物園だったら唯あたりが喜びそうだけど」

(おい！言うに事欠いてまだそんなことを抜かすか！この唐変木が！)

統夜がまたまたデリカシーのないことを言うのでイルバは呆れることしか出来なかった。

「はい！今回は統夜先輩と行きたいんです！」

梓は統夜がそう言ってくると予想していたのか冷静に返していた。

「ああ、そういうことならわかったよ。俺も動物園は行ってみたいって思ってたしな」

「！本当ですか!？」

「ああ」

「それじゃあ、今度の日曜日、楽しみにしてますね♪」

「わかった。待ち合わせとかは近々メールで決めようか」

「わかりました！」

こうして梓は統夜をデートに誘うことが出来たのである。

『おい、統夜。俺を梓の指にはめろ』

「？何だよ、イルバ、藪から棒に。もう休み時間は終わるからそんな暇はないぞ」

『俺は梓に話があつてな。梓、大丈夫だよな？』

「は、はい！」

「まあ、そういうことなら……」

統夜は渋々自分の指にはめてあるイルバを外し、梓の指にはめた。

「あつ、ありがとうございます。それじゃあ次の休み時間にイルバを返しに行きますので……」

「ああ、わかったよ」

こうして統夜は屋上を後にした。

「それで……イルバの言つてた話つて何なんですか？」

『ああ。……梓……チャンスだぞ！』

「ふえ?! ちや、チャンス？」

『あの統夜をデートに誘うつてことはそういうことなんだろう? 思い切つたことをしたもんだな』

「わっ、私はそんなつもりじゃ……」

イルバの言葉の意味を理解した梓は顔を真っ赤にしていた。

『梓。言っておくが、俺様はお前さんを応援してるんだぜ?』

「え? わ、私を?」

『お前さんが統夜に惚れてるっていうのはだいぶ前から知っていたからな』

「もう! からかわないですよ!」

梓は顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

『だからこそポヤポヤしてられないぜ? 俺様は知っているんだからな。お前から5人と憂のやつが統夜に惚れてるってことを』

「え!? そうなんですか!」

イルバには全てわかっており、それを聞いた梓は驚きを隠せなかった。

『何だ、お前さんはそのことを知らなかったのか。てつきり知っていてアドバンテージを取るために統夜をデートに誘ったのだと思っただが』

「そっ! そんなんじゃないです!」

『アハハ! 照れるな照れるな!』

「もお! 知らないです! イルバの馬鹿!」

梓は顔を真っ赤にしながら屋上を後にした。

(やれやれ……。梓も梓でずいぶん初々しいものだ。こんなんで大丈夫なのか?)
イルバは梓のあまりの初々しさにこれから行われるデートが上手くいくのか心配になつてしまった。

梓は教室に戻ると、指にはめているイルバを机の中に隠し、授業を受けていた。そして休み時間になると、梓は統夜のクラスに向かい、統夜にイルバを返した。

統夜は梓からイルバを受け取ると、梓とどんな話をしたのかを聞いたが、イルバは答えなかった。

統夜はその後いつものように授業を受けていた。

そして放課後、統夜はいつものように音楽準備室に向かい、いつものようにティータイムを行っていたのだが……。

「……………」

梓は顔を真っ赤にしたまま紅茶を飲んでいた。

「……………あずにゃん、どうしたんだろ?」

「さあ、今日部室に来た時からあんな感じだったけど……」

「統夜……何か知ってるか?」

「ああ、俺が思い当たる事と言えば……」

『ま、まあいいじゃないか!梓には梓の事情があるんだろ』

統夜は正直に話そうとするが、イルバがそれを阻止していた。

「あれえ？イルイル。何か隠してない？」

『そんなことはないさ。俺様は思ったことを言っただけだ。それに唯！お前は毎度毎度俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

「もお！イルイルってばそうやって誤魔化すんだもん」

イルバと唯がいつものやり取りをしていると、唯が頬をぷうつと膨らませていた。

(？何でイルバは俺と梓が出かけるってことを隠すんだ？別に隠すことはないと思うんだけど)

統夜はイルバがなぜ話を誤魔化すのかわからず首を傾げていた。

統夜はわからないながらもここで言うべきではないのだろうと空気を讀んだ結果、統夜の口から今度の日曜日の話が出ることはなかった。

そしてこの日は最後まで部活に参加した統夜は番犬所へ顔を出した。

「……あれ？大輝さん、今日は来てないのかな？」

統夜は大輝に用事があったのだが、大輝は番犬所の中にはいなかった。

「？統夜、大輝がどうしました？」

「イレス様。実は、大輝さんに用事がありました……」

「大輝なら少し前に指令を受けてホラー討滅に向かいましたよ」

（あっちゃあ……。少し遅かったか……。指令だったら仕方ないけど）

統夜は大輝の不在に頭を抱えるが、ホラー討滅のことだったので、それも仕方ないと感じていた。

「統夜、大輝に何の用事なんですか？」

（イレス様には話しておいた方がいいかな）

そう判断した統夜は話を切り出した。

「実は、今度の日曜日に梓と2人で出掛けることになりました……。昼間のエレメント浄化ともし指令が来た時はお願いしようかと思いましたが」

統夜は正直に事情をイレスに説明した。

「へえ、梓と……ですか？」

「ええ」

「ということは梓とデートということですか？」

「さあ……デート……なんですかね？」

「へ？」

統夜のとんでもない発言にイレスは素っ頓狂な声をあげていた。

『イレス、気にするな。こいつは女が絡むとあり得ないくらいに鈍感になるからな』

イルバは統夜が女性関係の話になると鈍感になるといふ短所をイレスに説明していた。

「そ、そうだったんですね……」

「べ、別に俺は……」

『いや、否定はさせないぜ。この天然ジゴロが』

「なあ、イルバ。天然ジゴロって何だ？」

統夜はイルバの言葉の意味が理解できず、首を傾げながらイルバに聞いてみた。

『まあ、それはお前さんが知る必要はないぜ』

「??」

イルバが答えてくれないので、統夜は首を傾げていた。

「と、とにかく、事情は理解しました。ホラー討滅の指令が来たら大輝の方に回します」

「ありがとうございます。これから大輝さんにも事情を説明しに行ってきますね」

「わかりました。統夜、楽しんできてくださいね♪あと、梓にもよろしく言っておいてください」

「はい、わかりました」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

それから統夜は街を見回りながら大輝を探すことにした。

統夜が番犬所を出てからおよそ一時間後、大輝は指令がの対象であるホラーを見つけ、交戦していた。

「はあっ！」

大輝は魔戒剣を一閃し、ホラーに攻撃をしかけた。

そのホラーは素体ホラーであり、大輝の一撃を受けた素体ホラーはひるんでしまい、その隙をついた大輝は蹴りを放って素体ホラーを吹き飛ばした。

「よし……」気に決着をつける！」

大輝は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、大輝は「鋼」の鎧を身に纏った。

「これで……終わりだ!!」

大輝は魔戒剣を一閃し、素体ホラーを真つ二つにした。

大輝の攻撃を受けた素体ホラーは断末魔をあげながら消滅した。

素体ホラーを討滅したことを確認した大輝は鎧を解除し、魔戒剣を鞘に納めた。

「ふう……」

ホラーを討滅し、大輝が一息つくくと、パチパチパチと拍手を鳴らしながら大輝の目の前に赤いコートの少年が現れた。

「さすが大輝さん……。お見事です！」

その少年……。統夜は、大輝の仕事を労っていた。

「統夜か……。こんなところまで会いに来るのは珍しいな。どうしたんだ？」

「はい。実は大輝さんに頼みがありました……」

「頼み？」

「はい。番犬所の方には話をしたのですが、実は今度の日曜日に梓と2人で動物園に出掛けることになりました……。昼間のエレメント浄化ともしホラー討滅の指令が来たらそれを大輝さんにお願いしたいのです」

統夜は事情を説明し、大輝に交渉していた。

「梓……。確かあのちっこい嬢ちゃんだったな。それに動物園か……。行つてこい行つてこい！そんな機会は滅多にないからな」

大輝は統夜の交渉に嫌な顔一つせず、二つ返事で了承した。

「大輝さん……。ありがとうございます……」

「なあに、気にすることはない。お前は普段は魔戒騎士の使命を全うしてるんだ。遊ぶ機会があるのなら思い切り遊んでおくといい。お前は高校を卒業したらそんな暇はな

くなるからな」

大輝が二つ返事で統夜の話を了承したのは、統夜が高校を卒業したら本格的に魔戒騎士の使命を全うすることになる。

そのため、今のうちに遊んでおくといいて考えているからである。

「ま、日曜日は楽しんでこいよ」

大輝は統夜の頭にポンと手を置くと、すぐさまその手を放し、その場から姿を消した。

『これで日曜日は大丈夫になったな』

「ああ、そうだな」

大輝との話は終わったので、統夜はそのまま家路についた。

統夜は梓とメールのやり取りをして当日の待ち合わせ場所と時間を決めていた。

2人が行くこうとしている動物園は隣町にある動物園で、電車やバスを乗り継いでおよそ1時間くらいかかる場所にある。

そこで統夜は交通費を浮かせるために、当日はバイクで動物園へ向かうことにしたのである。

統夜はすでにバイクの免許を持っており、それがとある指令の時に役に立ったこともあった。

当日は梓の家の近くで待ち合わせをし、そのまま動物園編へ向かうことになった。

く梓 side く

統夜先輩とのデート前日の夜、私はクローゼットの中に入っている服たちとにらめっこをしていました。

明日どんな服を着ていくかを決めるためです。

「……………うう……………何着ていけばいいかわからないよお……………」

私は服選びに悪戦苦闘している最中です。

統夜先輩……………どんな服が好みなんだろう……………。

というより統夜先輩があんなだから先輩の好み自体がわからないんだよね……………。

統夜先輩優しいから何を着ても似合うじゃん！って言ってくれそうなんだけど……………。

本当だったら憂か純あたりに相談したかったけど、憂は統夜先輩のこと好きみたいだし、純に言ってもからかわれるだけだからね……………。

私は誰にも相談することができず服選びをしているという訳です。

……………それにしても明日は統夜先輩とデートか……………。

勇気を出して誘ってみたけど、まさか行くと行ってくれるなんて思ってなかったな……。

まあ、鈍感ぶりは相変わらずなんだけどね……。

私が統夜先輩のことが好きだと気付いたのはいつからだろう？

ホラーに襲われたところを助けてくれた時から統夜先輩のことは気になってたけど、この気持ちに気付いたのは統夜先輩がグオルブとかいうホラーと戦ってるときかな？

あの時、唯先輩の提案で先輩に歌を届けた時、私は自分自身の気持ちに気付けたんだと思う。

そう考えたら先輩たちや憂もその時に統夜先輩のことが好きになったのかな？

私はいつかこの気持ちを伝えたいとは思っているけど、統夜先輩はホラーから人々を守る魔戒騎士で、私はただの一般人。

住む世界が違うって言われちゃうかな……？

そう言われるのが怖くて、気持ちを伝えられないのかも……。

ダメダメ！そんなこと気にしたらダメだよ！

明日はデートなんだからそんなことは考えずに楽しまないと！

……その前に服はちゃんと決めないとね……。

私は服選びにかなり時間はかかったけど、なんとか着る服を決めて眠りました。

……明日が本当に楽しみだなあ♪

翌日、私は待ち合わせの2時間前くらいに目を覚ましました。

顔を洗い、髪型をセットし、そんなことをしていると、あつという間に待ち合わせの30分前になっていました。

私は軽く食事を取り、服を着替えると、急いで待ち合わせの場所に向かいました。

統夜先輩は朝は魔戒騎士の仕事をするって言うてるから少しは遅れるとは思うけど、時間には余裕を持っておかないとね。

そんなことを考えながら待ち合わせ場所に向かうと……。

「……おう、梓。早かったな」

統夜先輩がすでに来ていました。

「と、統夜先輩!? 早かったですね!」

「ああ。エレメント浄化が思ったより早く終わったからな。それで早めに来たんだよ」

「そうだったんですか。お疲れ様です」

「それよりも早く乗りなよ。今日は思い切り楽しむんだろ?」

「はいっ！」

統夜先輩はバイクに跨ると、私は先輩の後ろに座りました。

統夜先輩はヘルメットをかぶると、スピアのヘルメットを私に渡してくれたので私はそれを被りました。

……バイクに乗るなんて初めてだな……。

私はそんなことを考えながら統夜先輩の体にしがみ付きました。
すると……。

「……………／／／／／」

ヘルメットをかぶってるからよく見えなかったけど、統夜先輩の顔が赤くなってる気がする……。

統夜先輩は統夜先輩でドキドキしているのかなあ……？

そんなことを考えてたら、統夜先輩は首を傾げていた。

まさか……。

私は少しムツとしたので統夜先輩の頭をポカッと叩いた。

「痛っ！急になんだよ、梓」

「統夜先輩。さっき失礼なこと考えてませんでした？」

「へっ？そ、そんなことはないぞ！」

……どうやら凶星みたいだね……。

どうせ私の胸がないとか思ったんでしょ？

いいもん！これから大きくなるんだもん！

……おっと！それよりも今日のデートを楽しまなくちゃ♪

統夜先輩は苦笑いしながらもバイクのエンジンを吹かせると、バイクを発進させてそのまま動物園に向かいました。

＼三人称 side 〵

梓とのデート当日、統夜は朝のエレメント浄化を済ませてから一度家に戻り、バイクで梓との待ち合わせ場所へ向かった。

待ち合わせ場所へ到着すると、その数分後には梓が現れ、統夜は梓を後ろに乗せて動物園へと向かった。

バイクを走らせておよそ40分後、動物園に到着した。

バイクを駐輪場に停めると、梓はよほど楽しみだったのかニコニコしていた。

「統夜先輩っ♪早く早くっ♪」

統夜はヘルメットをしまい、魔法衣を取り出ししていると、梓はニコニコしながら統夜を呼んでいた。

「わかってるって!」

統夜は急いで梓に駆け寄った。

「統夜先輩♪早く行きましょっ♪」

「わかったから引つ張るなって!」

梓は統夜の手を取ると、そのまま入り口まで統夜を引つ張っていった。

入り口に入った2人はチケットを渡したことで入場料は払わずに中に入ることが出来た。

「へえ、思ったより動物がいるんだな」

統夜は入り口に置いてあるパンフレットを見ながらどのような展示コーナーがあるのかを確認していた。

「統夜先輩、統夜先輩!すぐそこにキリンがいますよ!ほら!」

梓は入り口近くにあるキリンコーナーを指差しながらまるで子供のようにはしゃいでいた。

(梓のやつ……楽しそうだな。それだけで一緒に来た甲斐があつたよ)

統夜は子供のようにはしゃぐ梓を見て笑みを浮かべていた。

「ほらほら、早く行きましょっ♪」

「そうだな」

統夜と梓は最初にキリンコーナーを見ることになった。

この動物園のキリンコーナーは入り口から近いこともあり、目玉スポットの一つであった。

それ故現在も多くの家族連れやカップルがキリンに見惚れていたのである。

「わあ♪キリン、可愛いですね♪」

「そうだな。キリンを生で見るのは初めてだからな。凄いよ!」

統夜も統夜で今までテレビでしか見たことのなかった生のキリンに興奮気味であった。

(やれやれ……。統夜のやつもはしゃいでるな……。いくら多くのホラーを討滅している魔戒騎士といえどもまだまだ子供だな)

イルバは梓ほどではないがはしゃいでいる統夜を見て子供っぽいと呆れていた。

数分間、2人はキリンを見続けていた。

「統夜先輩!今度はライオンを見ましょっ♪!」

「そうだな。ここからだったらライオンコーナーは近いしな」

統夜はパンフレットの地図を見ながら効率の良い回り方を推察していた。

「ほらっ、早く早くっ♪」

「おっ、おい！梓！」

統夜は梓に引つ張られる形でライオンコーナーへと移動した。

そしてライオンコーナーに到着した2人は生のライオンの雄々しきに見入っていた。

「ふおお……。凄いです！」

「そうだな、ライオンもやっぱり生で見たら違うよなあ」

「はいっ！そうですね♪」

2人は数分間、ライオンを見続けた。

「さてと、次は……」

「オオカミコーナーですかね？」

「そうだな、ここからなら一番近いし、次はそこがいいと思う」

「それじゃあ早く行きましょっ♪」

「おいおい、そんな急がなくてもオオカミは逃げないって」

急いで向かおうとする梓をなだめながら統夜はオオカミコーナーへと向かった。

「おお！オオカミも凄いです！」

「そうだな」

梓は目を輝かせながらオオカミを見ており、統夜もじつくりとオオカミを見ていた。（魔戒騎士の鎧はオオカミがモチーフになつてゐるからな……。なんかオオカミを見ていと他人じゃないって思えるんだよな）

魔戒騎士の鎧の顔の部分はオオカミをモチーフに作られており、それは統夜が普段身に纏う奏狼の鎧も例外ではなかった。

統夜はオオカミを見ていてオオカミに親近感を覚えていた。

「あつ、統夜先輩！あの子を見て下さい！」

梓は何かに気付いてとあるオオカミを指差していた。

「?どうした、梓?」

「あの子の顔……。何となく奏狼の顔に似てませんか?」

「あいつが……。か?」

統夜は梓が指差すオオカミを凝視してみた。

すると……。

「……何となくだけど似てる……。かもな」

少しは似ているのではないかと思っていた。

「凄い偶然ですね！統夜先輩、ここで鎧を着てみますか?」

「おいおい、ホラーもないこんなところで鎧の召還したら騒ぎになるだけだろう?」

「クスツ……それはわかってますよ♪冗談で言っただけですから♪」
「ま、そりやそうだよな」

梓が冗談を言うと思っただけでなく、統夜は苦笑いをしていた。

「梓、次はペンギンコーナーに行くか？この動物園のイチオシみたいだぞ」

「はいっ！行きましょう♪」

統夜と梓が次に向かったのは、この動物園の1番人気であるペンギンコーナーであった。

そのことを物語るかのようにペンギンコーナーは多くの人で溢れかえっていた。

「うわ……さすがに人が多いな……」

「そうですね……」

ペンギンコーナーの人の多さに梓は少し不安げな表情を浮かべていた。

すると……。

ぎゅっ……。

統夜が不意に梓の手を握ったのである。

「ふえ!?とっ……とととと……統夜……先輩!?!」

突然の出来事に梓は顔を真っ赤にし、動揺していた。

「か、勘違いするなよ。迷子になったら大変だし、面倒だからな。それで手を繋いだんだからな!」

そう言う統夜の顔も真っ赤になっていた。

(……いつは……統夜のやつ無自覚とはいえ、味なことをするじゃないか!これは面白くなってきたぜ……!)

このデートをずっと見守っていたイルバは、統夜の予想外な行動に驚くが、この展開を楽しんでいた。

「そ、それじゃあ行くぞ」

「はっ、はい……」

先ほどまでは子供のようにはしゃいでいた梓であったが、ここに来て恥ずかしくなったのかしおらしい表情を見せていた。

こうして2人は人混みの凄いペンギンコーナーを見に行ったのである。

本来であればじっくりとペンギンを見たかったのだが、人が多いせいで、1分も見ることが出来なかった。

「……あんまり見れませんでしたね……」

「まあ、少しでも見れただけでも良かったと思うぞ」

「それもそうですね」

人の流れがまばらになったところで、統夜は繋いでいた手を離れた。

「あつ……」

梓は少し残念そうな表情をしていたが、統夜はそのことを気にする素振りはなかった。

（おいー何でそこでどうした？くらい言えないんだよ！これはデートなんだぞ!?少しは気の利いた言動をしろよ！さつきは良くやったって褒めてやりたいところだったのに……）

イルバはまるで当事者のように熱くなり、統夜の行動にダメ出しをしていた。

「さて、次はどこにしようか……」

統夜はパンフレットを見ながら次に見て回る場所を探していた。

そんな中……。

「……／／／／」

梓は先ほどの統夜の行動を気にしてなのか顔を真っ赤にしていた。

「……梓、どうした？顔が真っ赤だけど」

「ふえ!?!い、いや!な、何でもないんです!何でも!」

「本当か?」

「はい!」

「ならいいんだけど……」

梓の顔が赤くなつたことが気になった統夜は梓に聞いてみるが、梓は何でもないと答えていた。

そんな梓に首を傾げていたが、統夜はあまり気にしないようにしていた。

「梓、けっこう色々歩き回つたんだし、休憩がてら飯でも食うか?」

「そ、そうですね。私、お腹空いてきましたし」

2人は動物を見るのを一時中断し、動物園内にある食堂で昼食を取った。

※※※

動物園の中にある食堂で昼食を取った2人は、その後も動物園の中にいる動物たちの見学を続けていた。

統夜たちが訪れているこの動物園はテレビでもよく取り上げられる動物園であり、展示されている動物も全国の動物園の中でもトップテンに入るほどである。

梓はまるで子供のようににはしゃぎながら動物たちを見ており、統夜はそんな梓に振り回される形で動物たちを見ていたのだ。

楽しい時間というのはあつという間に過ぎていくもので、気付けば閉園時間が迫っていた。

「……おっと、そろそろ閉園時間か」

統夜は場内に流れている閉園間近の音楽を聞いて閉園時間が迫っていることを知った。

「なんか、あつという間でしたね♪」

「そうだな。一通りは回ることも出来たしな。……梓、楽しかったか?」

「はいっ!」

「そっか。それは良かったよ」

統夜は安堵の表情で笑みを浮かべると、それを見た梓は顔を赤らめていた。

「とりあえず、出ようぜ」

「あつ、はい!そうですね」

2人は動物園を後にして、駐輪場に停めてあるバイクの前まで戻ってきた。

「さて、この後どうする？」

「もうそろそろ夕食の時間ですし、どこかご飯でも食べに行きますか？」

「俺もそうしようかなって思ってたんだよ。この近くといえればファミレスかな？ 駅の方に行けば美味しい洋食屋があるんだけどさ、そこでも……」

「統夜先輩。私はファミレスでいいですよ。私は気軽なファミレスの方が気楽ですし」

「そうだな、したらファミレスに行こうか」

「はいっ！」

統夜と梓はバイクに乗り込むと、バイクを走らせて、近くにあるファミレスへ向かった。

ファミレスの中に入ると、店員に席まで案内された。

その後、統夜と梓はそれぞれ注文するものを決めると、店員を呼んで注文を済ませた。注文した料理が来る間、統夜と梓は世間話をしながら料理が来るのを待っていた。

そして、待つこと10数分……。

「お待たせしました」

注文していた料理が2人の前に並べられた。

梓が注文していたのはエビフライ付きのハンバーグプレートで、統夜が注文したのはこのファミレスで人気メニューのオムライスドリアだった。

「統夜先輩のドリア美味しそうですね！」

「梓のハンバーグも美味そうじゃん」

「それじゃあ一口食べてみますか？」

「ああ、俺のも一口食べてみるよ」

「えっと……それじゃあ……」

梓はハンバーグをフォークで一口サイズに切ると、それをフォークに刺し……。

「あ……あーん……」

「あ、梓……。それって……」

女性関係の話はあり得ない程鈍感な統夜でも梓の行動の意味は理解していた。

「だ……ダメ……ですか……?」

「あつ……えつと……」

梓は上目遣いで統夜に訴えかけると、統夜はリアクションに困っていた。

（おお……。梓のやつずいぶんと攻めるじゃないか。さすがの統夜もリアクションに

困ってるしな）

イルバは梓のあーんに困惑する統夜の様子を面白おかしく観察していた。

（あ、梓のやつ……。何でそんなこと……。ええい！俺も男だ！どうにでもなれ！）

こう決断した統夜は梓のあーんに応え、フォークに刺さったハンバーグを頬張った。

「……うん、美味しいな」

統夜は平静を装ってこう答えるが、梓は凄く恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして
いた。

「さてと、次は俺の番かな」

統夜はドリアを一口分スプーンですくうと……。

「ほら、あーん……」

統夜は先ほどの梓のような行動を取った。

「ふえ!?!と、統夜先輩!?!／／／／」

「梓もやってたから俺もやった方がいいかなって思ってた」

統夜はここで空気を読んでこのような行動を行っていた。

(統夜のやつ変なところで空気を読むじゃないか……。これは面白くなってきたぜ)

イルバはこの状況を楽しみ、2人に聞こえないようにカタカタと音を立てながら笑っ
ていた。

「そ、それじゃあ……／／／／」

梓は顔を赤らめながら統夜が差し出した一口分のドリアを頬張った。

「美味しい……。けど、恥ずかしいです……／／／／」

「アハハ、慣れないことはするもんじゃないよな」

統夜はそう言つて笑いながら手に持ったスプーンでドリアを頬張った。

「あつ……」

「?どうした、梓?」

「な、何でもありません!」

「??」

何故梓がここまで顔を真っ赤にしているのか理解出来ず、首を傾げていた。

(い、今のつて……。間接キス……。だよね……。う。こんなことやつといつて今更だけど……)

梓は統夜がドリアを食べた瞬間、それが間接キスであると理解していた。

(!・ということはこのフォークで食べたなら……。私も……。// //)

梓はこのフォークでハンバーグかエビフライを食べたら自分も間接キスになると意識すると恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしていた。

(おお、梓のやつ恥ずかしがつてるな。それにしても統夜のやつは間接キスでも全く気にしないんだな。そこら辺はさすがと思うがな)

イルバは間接キスの状態になつても気付く素振りのない統夜に呆れていた。

梓はしばらく呆然としていたが、どうにかハンバーグを食べ始め、顔を真っ赤にしなから食事を取っていた。

統夜は梓と話をしようにも梓が恥ずかしがつていたので思うように話が出来ず、少し

だけ気まずい雰囲気のまま食事を終えたのであった。

食事を終えた2人はそのまま桜ヶ丘に戻って来たのだが、統夜が行きたいところがあるということとある場所にバイクを走らせた。

2人が向かった場所とは、桜ヶ丘の街並みが一望出来る展望台であった。

この展望台は夜になると夜景が見られるということからカップルにも人気のあるデートスポットにもなっている。

「うわぁ……」

バイクから降り、展望台に向かうと見えて来た絶景に梓は見入っていた。

「本当にここはいい景色だよな……」

「本当ですね♪」

「……………」

統夜は普段見せない程穏やかな表情をしており、それを見た梓はドキツとしていた。

「俺さ……。守れたんだよな……。この風景をさ」

「統夜先輩？」

「グオルブとあのディオスを倒してからそれなりに経ったけどさ……。俺、未だに実感

出来ないんだよ。いくら鋼牙さんたちの協力があつたからと言ってもよくあんな強敵を倒せたな……つてさ」

「統夜先輩……」

まっすぐ夜景を見つめる統夜の瞳には憂いの感情が写っているようにも見えた。

「……守れましたよ」

「梓？」

「だって統夜先輩はその命をかけて全力で戦つたじゃないですか！そりや、鋼牙さんたちの協力があつてのことかもしれないけど、今日もこんなに穏やかな毎日を送れるのは統夜先輩のおかげなんです！もつと自信を持つて下さいよ」

「梓……」

統夜は梓のまっすぐな言葉が何よりも嬉しかった。

「……そうだな。俺は魔戒騎士。守りし者なんだもんな……。俺はこれだけ大きなものを守れたんだ。もつと自信を持たなきゃダメだよな」

「はい！そうですよ」

「こう言いながら梓は笑っていた。

「統夜先輩。今日はありがとうございました。今日はすつごく楽しかったです！」

「そっか。そう言ってもらえると俺も嬉しいよ。……それに、俺は梓に礼を言わないと

いけないしな」

「お礼……ですか？」

「俺はさ、魔戒騎士だからこんな風に出掛けることなんてほとんどなかったんだよ。今日は来たことのなかった動物園に行けてすごく楽しかったよ」

こう語る統夜の顔は喜びに満ちていた。

「それに、動物園にいた人たちの幸せそうな顔を見てたらさ……。俺はこれからも魔戒騎士としてそんな当たり前の日常を守っていかないとダメだ。今日はいい息抜きにもなったし、魔戒騎士としてもっと気を引き締めないとダメだ。だから……。ありがとな」

「そ、そんな。お礼なんて……。私はただ、統夜先輩とお出かけが出来て嬉しかったんですよ」

「俺もさ、梓と2人で出掛けるってのがなんか新鮮で楽しかったよ」

「……はいっ！」

梓が統夜に見せた笑顔は満面の笑みであり、それを見た統夜は顔を赤らめながら夜景を見ていた。

そんな統夜を見た梓はさらにクスリと笑みを浮かべていた。

そのまま2人は何も語らずに夜景を眺めていたのだが……。

(おい！いい雰囲気なのはいいが、梓は何故アクションを起こさないんだ？今こそ告白する大チャンスだろうが！ええい！この沈黙が焦れたい！)

イルバだけがこの雰囲気を焦れたいと感じてしまい、悶々としていた。

梓はこの場で統夜に告白することも考えてはいたが、こうして統夜と2人でいられるだけで満足してしまったので、告白はしなかったのである。

統夜と梓は1時間程ここの夜景を見続け、それから梓を家に送り届けたところで解散となった。

梓を送り届けた統夜はそのままバイクを自宅に向けて走らせ、帰路についたのであった。

……完

次回予告

『もう夏休みだな。ということとは魔戒騎士の勤めに専念出来ると思ったのだがな。次回、「合宿 前編」。やれやれ。今年も行くんだな』

放課後ティータイム結成編

第25話 「合宿 前編」

強大なホラー、グオルブを討滅し、その復活を企んでいた暗黒騎士ゼクスことディオスを討伐してからそれなりに時間が経過していた。

統夜はその間も魔戒騎士としてホラーを討滅し続けていた。

そしてこの日は終業式であり、翌日からは長い夏休みが始まるのである。

夏休みの間は学校に行く機会が減るため、その分時間を魔戒騎士としてエレメントの浄化や自身の鍛錬に使うことの出来る貴重な時間であった。

しかし、終業式の放課後、音楽準備室でいつものようにティータイムをしていたその時であった。

「合宿をしよう！」

律の口から突然合宿の話が告げられたのであった。

「おお！いいね！やろうやろう！」

律の提案に唯はノリノリであった。

「合宿ですか……。練習がいっぱいできそうだし、いいですね♪」

(アハハ……それはどうか)

梓の言葉を聞いた統夜は苦笑いをしていた。

統夜は去年の合宿もどうにか参加したことがあり、その時は練習よりも遊んでる時間が多かったことを思い出していたからである。

「ムギ、今年も別荘は使えそうなのか？」

「うん♪任せて♪」

今年も紬の家の別荘は使えそうとわかり、合宿は決定的だったのだが……。

「悪い。今年の合宿なんだけど、参加出来るかわからないだよ」

「えっ? そうなの?」

「ああ。今年の合宿も3泊4日くらいだろ? さすがにそれだけ長い期間魔戒騎士の仕事を休むのもなあ」

統夜は魔戒騎士であるため、合宿に参加するということはそれだけの間、エレメントの浄化もホラー討伐も出来ず、その仕事は全て大輝に任せることになってしまうからである。

「そっかあ……。そういう理由なら仕方ないよね……」

統夜が合宿に行けないかもしれないとわかり、唯はしゅんとしていた。

「とりあえず。イレス様には頼んでみるよ。ダメ元だけだよ」

「それじゃあ、聞いてみてくれないか？もし統夜が駄目なら私たちだけでも行くさ。それは残念だけだな」

「わかった。今日も番犬所に立ち寄るつもりだからイレス様には聞いてみるな」

統夜は番犬所に寄った時にイレスに合宿に参加出来るよう交渉することになった。

善は急げとのことで、統夜はカップに入った紅茶を一気飲みすると、席を立って帰り支度を始めた。

「あれ？やーくんもう行くの？」

「ああ、善は急げと言うしな。交渉が終わったら律の携帯にメールを入れるよ」

「ああ、わかった」

統夜は帰り支度を終わると、そのまま音楽準備室を後にし、番犬所へ直行した。

「……あら、統夜。今日は随分と早いですね」

統夜が番犬所に顔を出すと、イレスは驚いていた。

普段なら部活に顔を出している時間なのだが、なぜか統夜は番犬所に顔を出しているからである。

「ええ、実はイレス様にお話がありました……」

「？お話……ですか？あつ、もしかしてまたデートですか？」

「いえ……違うんです」

「デートじゃないんですね……。あつ！もしかして軽音部のみんなとお出かけですか？」

「そんな感じですかね。実は明日から夏休みなんですけど、今度軽音部で3泊4日で合宿に行くことになったのです。俺も参加したいのですが、番犬所の許可を得なければと思ひまして」

統夜は軽音部で合宿に行くことをイレスに伝えた。

「うーんそうですね……。許可したいのは山々ですが、統夜が4日もいないとなるとその間はエレメントの浄化もホラー討伐も大輝1人にやってもらわねばなりませんからねえ……」

イレスは統夜の合宿行きを許可したかったが、大輝1人にかかる負担を考えると、簡単に許可は出せなかった。

無論、統夜もそのことは承知していたので、合宿行きを許可してもらえるのは難しいと考えていた。

しかし……。

「話は聞かせてもらったぞ」

突如統夜たちの前に大輝が姿を現した。

「だ……大輝さん？」

「統夜、4日くらいならこの街を空けても問題はない。ホラーは俺に任せてお前はその合宿とやらを楽しんで来い！」

「大輝がそこまで言うのなら良いのですが……。大輝、本当に大丈夫なのですか？」

「ああ、問題ない。俺は俺に出来ることをやるだけだ。それに……お前の高校生活は限られてるからな。楽しめる時に楽しんでおくといい」

「いいんですか？でも……」

大輝の申し出は有難かったが、統夜は大輝1人に仕事を任せることを申し訳ないと思っていた。

「それに、ちようどいいタイミングで助っ人が来たからな。統夜が合宿に行ったとしても仕事をするのは俺1人ではない」

「えっ？助っ人……ですか？」

助っ人が来るなんて話は聞いていなかったのか統夜は驚いていた。

その時……。

「そういうことです。ここは僕に任せて統夜君は楽しんで来て下さい」

そう言つて番犬所の中に入って来たのは元老院付きの魔戒騎士であり、魔戒法師でもある布道レオだった。

「れ……レオさん!? どうして……」

「ちようど元老院からの指令で桜ヶ丘で仕事がありましたね。そのついでに統夜君や大輝さんの手伝いをしようと思つてたんですよ」

「ああ! そういえばお母様がそのようなことを言つてた気がします。今思い出しました」

「どうやらイレスもレオが来ることを聞いてはいたものの、先ほどまで忘れていたようであつた。」

「それにしてもどうしてこの時期に……?」

「僕が学校に潜り込んだ時、唯さんや律さんから合宿の話を書きましたからね。それで、そろそろ合宿の時期になるかなと思つてたらちようど元老院から仕事が出来たつて訳です」

『ほお、それはなかなか絶妙なタイミングじゃないか』

レオの仕事が来るあまりのタイミングの良さにイルバも驚いていた。

「そういうことですので、統夜君は思い切り楽しんで来て下さい!」

「レオさん……大輝さん……。本当にありがとうございます!」

統夜は自分がいない間に仕事をしてくれるレオと大輝に感謝の気持ちを込めて深々とお辞儀をした。

「そういう訳ですので、統夜の合宿行きは許可します。統夜、楽しんで来て下さいね」
「イレス様……本当にありがとうございます」

そして統夜はイレスにも深々と頭を下げたお辞儀をしていた。

「それじゃあ、合宿に行く前に一仕事をしてもらいましょう。……指令です」
「はい！」

イレスの付き人の秘書官が統夜に赤い指令書を渡すと、統夜は魔導ライターを取り出し、指令書を燃やして指令の中身を確認した。

指令を確認した統夜はイレス、大輝、レオに一礼をすると、番犬所を後にして、指令の対象となったホラーを探すために行動を開始した。

統夜はホラーの捜索中、律に合宿に行ける旨をメールで伝えた。

律にメールした後、統夜はホラー捜索を再開し、気が付けば夜になっていた。

統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラーのいる場所まで移動すると、そのホラーを鎧を用いて討滅した。

ホラー討滅後、統夜はそのまま家路に着いたのである。

※※※

翌日、この日は夏休みであつたが、軽音部の練習はあつたため、統夜は部活に参加した。

この日は珍しくティータイムは少なめで、練習が中心に行われ、昼頃にはこの日の練習は終わった。

練習後、統夜たちは合宿の買い物をするために商店街を歩いていた。

「合宿の買い物とは聞いてますけど、何をかうんですかね？」

初めて合宿に参加する梓はワクワクしながら統夜と滞りに聞いていた。

「んー、そうだなあ……」

「新しい機材とかですかね？」

「えーつと……」

統夜と滞は今回の買い物で何をかうのか予想はついていたのだが、返答に困っていた。

2人がどう答えるか考えていると……。

「水着だよ」

水着が売っている店で足を止めた唯があっさりと答えていた。

(!あ、遊ぶ気満々だ!)

梓は水着を買いに来た時点で練習よりも遊び重視の合宿になると察しがついてしまった。

「どうせそんなことだろうと思いました」

梓はガクツと肩を落としていた。

「べつ、別にずっと遊ぶ訳じゃないぞ」

「信用出来ないです!」

梓がぶうつと頬を膨らませていた。

「何で?」

『まあ、普段のお前さんたちを見てたらそれもわかるかな』

「ぐぬぬぬ……」

イルバのツツコミに律は何も言えなくなってしまうた。

「まあ、息抜きも必要だから……。なっ?」

「……そっか……。そうですよね!」

溼の言葉に梓が納得したところで溼は梓の頭を撫でていた。

頭を撫でられた梓はエヘへと笑いながら喜んでいた。

『それにしても、濡と梓だが、2人並ぶと姉妹に見えなくもないよな?』

「ああ、言われてみればそうかもな」

統夜とイルバは濡と梓を見ながらこのような会話をしていた。

「とりあえず、みんなは水着を見てきなよ。俺は近くで待つてるからさ」

統夜は逃げるようにその場から移動しようとするが、律に捕まってしまった。

「統夜……。逃がさないよ……」

「な、何だよ!」

統夜は一刻も早くこの場から離れたいと思っていた。

男である統夜が女物だらけの水着売り場付近に居続けるのは恥ずかしいからである。

「なあ、みんな。統夜に水着を選んでもらわないか?」

「おお!それは面白いかも!」

律の提案に唯はノリノリだったのだが……。

「悪いが、それは無理」

「ええ!?!何でだよお!」

「恥ずかしいからだよ!」

『律、諦めろ。俺様から言わせれば、統夜のセンスで水着を選ぶのはオススメ出来ない

ぜ』

（うぐぐ……。イルバの言ってることは正しいが、なんかムカつくな）

統夜はイルバの容赦ない言葉にイラっとしていた。

「とりあえず、俺はいいから行ってきなな」

「うん、それじゃあ……。行ってくるね」

絨が先に店の中に入り、唯たちもそれに続いて店の中に入った。

「ふう……。やれやれ……。とりあえずこのベンチで待ってるか……」

統夜は近くにベンチを発見したので、そこに腰をおろし、全員の買い物が終わるのを待っていた。

およそ20分ほど待っていると、唯たちが買い物を終えて戻って来たので、その後は行きつけのファストフード店で食事と雑談をしてから解散した。

※※※

そして合宿当日、統夜たちは駅で待ち合わせをし、電車を乗り継いで紬の別荘へ向かった。

電車移動と徒歩移動を合わせると、およそ一時間半ほどかかっていた。それだけの時間を費やし、紬の別荘に到着したのだが……。

「「「「ふおおおおお!!」」」」

紬以外の5人は別荘のあまりの大きさに驚いていた。

「これはまた一段とすげえなあ……」

律は驚きながらこう呟いていた。

「本当にすごいなあ……」

『全くだ。去年も驚いたが、これだけの別荘を複数持つてるつてのが驚きだぜ』
統夜だけではなく、イルバも別荘の大きさに驚いているようだった。

「ムギちゃん!ここが去年言ってた借りれなかった別荘だね?」

「ごめんなさい。その別荘は今年もダメだったの……。少し狭いと思うけど、我慢してね」

((まだ上があるのか!))

紬は申し訳なきように言っていたのだが、統夜、唯、律、漣の4人はこれより別荘があることに驚いていた。

『ほう、ここよりデカイ別荘があるとはなかなか驚きだぜ』

「そ、そうかな?」

イルバの驚きの言葉に紬は少し照れていた。

「とりあえず中に入ろうぜ」

統夜たちは別荘の中に入り、荷物などを置いたのだが……。

「よっしゃあ!遊ぶぞお!」

「おお!!」

いつの間にか水着に着替えていた唯と律は完全に遊ぶ気満々であった。

「うおおおおおい!!!」

そんな2人に漣は思わずツッコミを入れていた。

「遊ぶのは練習してから!!」

「ええ!?!」

「遊びたい!」

唯と律は頬をぶうつと膨らませながら抗議していた。

『やれやれ……。お前ら、本当に子供だな……。』

イルバはそんな2人に呆れていた。

「私たちは子供だ!」

「そうだそうだ!」

『おいおい、開き直るなよ……。』

「ああ、全くだよ……」

ツツコミを入れながら呆れるイルバに統夜は共感していた。

「それじゃあ多数決にしよう。私は練習が先がいい」

「遊ぶ!!」

「練習がいいです!」

滯と梓は先に練習という意見であり、唯と律は遊ぶという意見であった。

そして……。

「遊びたいです♪」

紬も遊びたいという意見だった。

「統夜はどっちなんだ?」

「えっと……俺は……」

「練習ですよね!」

「遊びだよね!？」

決断が遅れた統夜に梓と唯が詰め寄ってきた。

「あー……えつとだな……」

「統夜の意見で決まるんだからはつきりしろよな!」

「そうだそうだ!」

続いて濤と律も詰め寄ってきたので統夜はさらに返答に困っていた。

『やれやれ……。統夜、お前も男ならばつきり決めたらどうだ?それにお前は別荘着いたら練習したいと言ってたじゃないか!』

「まあ、確かに練習はしたいとは思ってたけどな……」

「統夜が練習なら多数決でも3対3かあ……」

「イルバはどつちなんですか?」

『おいおい、練習も遊びもしない俺様に話を振るなよな。別に俺様はどつちでもいいって思っているぜ』

イルバはどちらでもないという中立な意見であった。

「それじゃあ公平にじゃんけんで決めないか?俺が勝ったら先に練習で、俺が負けたら遊びついで」

「よっしゃあ!その勝負、受けて立つぜ!」

こうして練習か遊びかは統夜と律のじゃんけんで決めることになった。
その結果は……。

「……すまん」

統夜の負けだった。

「……統夜が気にすることはないよ……」

「そうですよ……」

滯と梓は生暖かい目で励ましているものの、先に練習したかったのかその目は少しだけ恨めしそうな目であった。

『やれやれ……。お前はここぞつて時にはじゃんけんが弱いな、統夜』

「うっさい。気にしてるんだから言うなよなあ」

「ここぞの時にじゃんけんが弱いことを統夜は気にしていたのか、イルバをジト目で睨みつけていた。」

こうして遊ぶことになり、全員の着替えが済んだところでビーチに向かっていた。

唯たちは全員水着を着ていたのだが、統夜は下は水着であるが、白いTシャツを着て、まるで魔法衣を少し小さくしたような赤いパーカーを着ていた。

唯と律は急ぎ足でビーチに向かっていたのだが、残りのメンバーはゆつくりとした足取りでビーチに向かっていた。

その道中、澤は先に遊ぶのが納得いかなかったのかブツブツと愚痴を呟いていた。

「統夜先輩。ムギ先輩の遊びつてどんなのですかね？こんなに凄い別荘を持つてるんですもん」

「去年は特に変わったことはなかったけどな。……あつ！これは俺のイメージだけど、豪華なフルーツジュースを飲みながら日向ぼっこをしたり、大きな船でクルージングとかしたりしたら面白いかもな！」

統夜は自分のイメージで金持ちの遊びを想像し、それを梓に伝えていた。

「あつ、それはわかる気がします！私も似たようなイメージがありましたし！」

『おいおい、お前ら。そんな都合のいい展開がある訳……』

イルバがある訳ないと言い切ろうとしたその時だった。

統夜と梓の目に浮かんできたのは日向ぼっこに最適な椅子が2つと、海に漂う大きな船だった。

統夜と梓が驚いていると……。

「……いらないうて言ってるでしよう!!浜辺にあるものを今すぐ片付けて!お船もいらない!」

紬が涙目になりながら家の人間に電話をしていた。

「あ……アハハ……」

「こんな都合のいい展開がある時もあるんですね……」

『全く……。この展開はさすがの俺様も驚きだぜ』

統夜の言ったことがそのまま再現されていたことにイルバも驚いていた。

統夜たちが驚いている間に船や椅子などは撤収され、それを確認してから統夜はレジャーシートをセットした。

レジャーシートのセットが終わると、唯と律がビーチバレーで遊び始め、残りの全員はレジャーシートに座つてのんびりとしていた。

ビーチバレーを楽しむ唯と律は満面の笑みを浮かべており、そんな2人の様子を見ていた梓はぷうつと頬を膨らませていた。

(こんなんでちゃんと練習出来るのかなあ……)

多数決で遊ぶことになったものの、ちゃんと練習が出来るのか不安になってしまったのである。

「あずにゃん！ねえねえ！あずにゃんも一緒に遊ぼうよお！」

「結構です！」

唯が梓を誘うが、梓はふくれっ面のまま唯の誘いを断っていた。

「あれえ？もしかしてスポーツとかは苦手だったりするのなあ？」

律がニヤニヤしながら梓を挑発していた。

その言葉に梓はムツとしてしまった。

そして……。

「そんなことありません！やってやるです！」

律の挑発に乗った梓はビーチバレーに参加することになった。

こうして3人がビーチバレーを行っている中、統夜、澤、紬の3人はレジャーシートに座ってのんびりとしていた。

「ウフフ♪梓ちゃん、すっかりみんなと仲良くなったわねえ♪」

「……そうか？」

『俺様はただ単純に律の挑発に乗ってヒートアップしてるだけだと思うんだがな』

「俺もそう思う」

紬の言葉をイルバが否定し、統夜はそれに賛同していた。

「……ところで、統夜君も遊ばないの？」

「俺はいいんだよ。こうやってのんびりとしてるだけでも楽しいし、リフレッシュにもなるしな」

「そういえば去年の合宿の時に海で遊んだ時も統夜はこんな感じでのんびりとしてて水の中に入ったりはしなかったよな」

「うっ……」

濡は去年の合宿で気になったことを言うと、統夜の顔は真っ青になっていた。

『統夜、痛いところを突かれたな』

「うっさい！余計なことは言うなよイルバー！」

「そういえば確かにそうよねえ……。ねえ、統夜君、どうして？」

「そつ、それは……」

統夜は水に入りたくない理由を言うことを拒んでいた。

「統夜、もしかして泳げない……とか？」

濡は統夜が水に入りたくないのはカナヅチではないかと推測し、統夜に聞いてみた。

「いや、泳ぐことは全く問題ないんだよ」

「そうなの？それじゃあ、どうして？」

「あー……えつと……」

統夜は袖の追求にどう答えるべきか悩んでいた。

『統夜、お前はただ単純に背中中の傷を見られなくないからだろ?』

「あつ!イルバ、言うなよ!」

『こいつらは統夜が魔戒騎士だと知っているんだ。傷の話くらい問題ないだろう?』

「そ、そりやそうだけど……」

統夜は水が苦手だったり嫌いだったりという訳ではなく、単純に上半身裸になることにより背中にある傷を見られたくないだけなのである。

「何だ、そういうことだったのか。統夜がそこまで隠すから何か深い理由があるのかと思っただよ」

「ねえねえ、統夜君。私、その傷って見てみたいな♪」

「なっ!?そ、それは別にいいだろ?」

『統夜。別に背中中の傷くらい見せてもいいんじゃないのか?こいつらはここまで騎士の秘密を知ってる訳だし』

「い、イルバまで……」

イルバが見せても問題はないと言うので、統夜の逃げ場が無くなってしまった。統夜がそのことに呆然としていると……。

「ねえ、みんな!!ちよつと来て!」

紬がビーチバレーをしている3人を呼び出した。

「?ムギちゃん、どうしたの?」

「実は統夜君ね、背中に傷があるらしいのよ」

「え? そうなの?」

「なるほど……。統夜が去年の合宿でも頑なに上半身裸にならなかったのはそれが理由なのか……」

「統夜先輩は魔戒騎士だから、やっぱり傷くらい出来ますよね……」

「ねえねえ、ちよつとその傷を見てみたくない?」

「うん! 見たい見たい!」

「確かに興味はあるな!」

「私も気になります!」

先ほどまでビーチ巴厘ーをしていた3人も統夜の傷がどんなものか気になるようだ。

「……全く……。仕方ないな……。背中の傷を見ても引くなよ?」

統夜は渋々背中の傷を見せることを了承すると、パーカーとTシャツを脱ぎ、背中を唯たちに見せた。

それを見た唯たちは……。

「「「「「おぉ! 凄い!!」」」」」

「……………」

濡以外の全員は統夜の傷に驚き、濡は統夜の傷を怖がりながら見ていた。

統夜の背中には爪で切り裂かれたような大きな切り傷の痕が残っていた。

この傷は、統夜が魔戒騎士になったばかりの頃にホラーから人を守った時にホラーに攻撃されて出来た傷である。

統夜のような魔戒騎士は幼少の頃から修行を行っているが、修行の時に傷を負い、それが痕として残るということが良くあるのである。

統夜の場合はそのような傷はなかったが、ホラーとの戦いでついた傷であり、その傷は人を守った誇りある傷であった。

「……やーくん……。苦労して魔戒騎士になったんだもんね……」

唯は統夜の傷痕を優しく撫でていた。

それが恥ずかしかったのか、統夜は顔を真っ赤にしていた。

「も、もういいだろ?」

統夜は唯が数秒傷痕を撫でると統夜は回れ右して傷痕を見せるのをやめた。

「もお、やーくんってば照れなくてもいいのに♪」

「べ、別にそんなんじゃないって!それよりも俺もビーチバレーに混ぜてもらおうかな!」

統夜は立ち上がると、浜辺の方へと向かっていった。

「あつ、やーくん！待ってよお！」

唯、律、梓の3人は統夜の後を追いかけていった。

『おい、統夜。なるべく俺様に水はかけないでくれよ？海水如きで俺様はサビはしないが、俺様は海水は嫌いだからな』

「わかつてるって」

こうして統夜は唯、律、梓の3人としばらくの間ビーチバレーを楽しみ、漣と紬はその様子を見学していた。

ビーチバレーの後は海で泳いだり海を散策したりとそれぞれで楽しんでいた。

※※※

「ふはあ……」

「遊んだ遊んだ。……もうご飯食べて寝よう……」

気が付けばそれなりに時間が経っており、統夜たちはさつきまで遊び続けていた。

「練習はどうした？」

唯と律が完全にだらけモードだったので、統夜と滯がツツコミを入れていた。

『やれやれ。お前たち、今日の目的を忘れてるんじゃないのか？』

「イルバの言う通りですよ！ やっぱり遊ばずに先に練習した方が良かったじゃないですか！」

梓はプリプリと怒りながら抗議をするのだが、統夜たちはそんな梓を見て固まっていた。

「……梓が1番遊んでたじゃん……」

梓だけが日焼けで真っ黒になっていたからである。

「アハハ……確かにそうかもな」

『それにしても梓だけよくもそこまで焼けたものだな。これには俺様も驚きだぜ』

梓の豹変ぶりに統夜だけではなく、イルバも驚いていた。

「わっ、私はちゃんと練習するもん！」

「じゃあ一晩中？」

律はニヤニヤしながら意地悪なことを言っていた。

「む……。す、するもん！」

梓も梓でムキになっており、こう言い放っていた。

こうして遊ぶだけ遊んだ統夜たちは着替えを済ませてからスタジオへ移動した。

「うう……。疲れたあ……。お腹すいたあ……」

『やれやれ、あんだけ遊んだんだからちよつとくらいは我慢したらどうだ?』

「ああ、イルバの言う通りだぞ!」

ブーブー文句を言う律をイルバと漑がなだめていた。

そしてスタジオの中に入ると……。

「うわあ!すごい!」

「確かに凄いな……」

「あんなアンプ使ったことないです!」

スタジオの中は良質な機材がそろっており、高校生が使う機会がないくらい高級なアンプなどが揃っていた。

「漑!統夜!早く練習しようぜ!スネアが新品だ!」

ピカピカのドラムセットを見た律は、先ほどとはうって変わってやる気満々になっていた。

「現金なやつ……」

統夜と滯は同時にツツコミを入れていた。

こうして練習することになり、チューニングなど準備をしていたが……。

「ねえねえ、あずにゃん。それは何？」

唯は梓のギターについているチューナーが気になり、聞いていた。

「これですか？これはただのチューナーですけど……」

「へえ、チューナーって言うんだあ」

「へ!?唯先輩、チューナー知らないんですか？」

梓は唯がチューナーを知らないことに驚いていた。

「あれ？唯、チューナー知らなかったんだな」

統夜は唯がチューナーを使ってるのを見たことがないことを思い出していた。

「じゃあどうやってチューニングを……」

「えっ？適当に……」

唯は適当に微調整をすると、完璧な音程でチューニングをしていた。

「ほら」

「ぜ、絶対音感?!」

「ああ、だから唯はチューナー使わなくてもチューニング出来てたんだな。音程が狂っ

てなかったから気にもしなかったよ」

統夜は唯がチューナーを使わないことに違和感を感じてはいなかった。

「統夜先輩はチューナー使ってますよね?」

「チューナーはあるけど、面倒だから使っていないんだよ。俺もこうやって適当にだな……」

統夜も唯のように適当に微調整をすると、完璧なチューニングをしていた。

「これでどうだ?」

「と、統夜先輩も絶対音感ですか!?!」

梓は同じギターの先輩2人が共に絶対音感を持っていることに驚いていた。

『そういうえば統夜も絶対音感を持つてたな。チューナーなしのチューニングを当たり前に見てたから俺様も気にもしなかったぜ』

(統夜先輩は凄いつて思うけど、唯先輩は凄いのか凄くないのかわからないよ!)

梓は統夜は才能を持つていて凄いと思ってるが、唯は上手い時とか下手な時の落差が激しいので絶対音感も素直に凄いと思えなかった。

全員の準備が終わった所で練習は開始された。

練習では何回か「ふわふわ時間」の合わせを行っていた。

そして数回目の「ふわふわ時間」の演奏が終了した。

「お、今のはなかなかいい感じだったと思うぞ」

統夜は今の演奏に手応えを感じていた。

「はい！私もそう思います！」

梓も今の演奏に手応えを感じていたようである。

『律、今日は珍しくリズムキープが正確だったじゃないか』

「イルバの言う通りだな。特訓でもしてたのか？」

イルバと藩はいつもは走りがちのリズムを叩く律が正確なリズムキープをしている

ことを褒めたのだが……。

「あうう……お腹が空いて力が出ないよう……」

「……お腹が空いてるから無駄な力が抜けたのね」

「あうう……。もうご飯にしよう……。飯食わせろお！」

どうやら律は空腹が限界で、これ以上は練習に集中出来ないようであった。

「わ、私も……」

どうやら紬も空腹のようであった。

「みんな腹も減ってきた訳だし、練習は中断して飯にするか」

統夜がこう提案をすると、律の顔がぱあっと明るくなった。

「そうだな、材料を買って食事の準備をしようか」

統夜の提案に漣も乗ったことで、練習は一時中断となり、夕食の準備を行うことになった。

この日はバーベキューをすると決まっていたので、その材料をスーパーで買ってくることになった。

漣と律に留守番を頼み、残りのメンバーがスーパーで買い出しに行くことになった。

この頃にはもう夕方になっていたのだが、統夜たちの合宿はまだまだ始まったばかりである。

……続く。

次回予告

『合宿も随分と盛り上がって来たな。いくら合宿とは言えども、楽しいことだけではな

いみたいだけ。次回、「合宿 後編」。さて、この合宿は一体どうなることやら……』

第26話 「合宿 後編」

夏休みが始まり、桜ヶ丘高校軽音部の合宿も無事にスタートした。

統夜はどうか番犬所の許可をもらえたため、合宿に参加することが出来た。

紬の別荘到着後は一度海で遊ぶが、その後はちゃんと練習も行い、現在は夕食の準備を行おうとしていた。

滯と律が留守番し、残りのメンバーはスーパーで買い出しを行っていた。

買い出しを済ませた統夜たちはすぐさま別荘に戻ってきた。

「りっちゃん！戻ったよ♪」

「おお！待つてたぜ！」

留守番をしていた律は買い出し組が戻ってくるのを心待ちにしていた。

「さて、俺は先に火起こしをするからみんなは仕込みを頼む」

統夜は野菜の仕込みをみんなに任せ、自分は火起こしをすることにした。

「うん。それじゃあ、お願いね♪」

「ああ、任せろ」

女性陣はキッチンに向かい、1人残された統夜はバーベキューコンロを準備し、炭な

どを置いて火起こしの準備を始めた。

「……………」

後は火をつけるだけなのだが、統夜はなぜかコンロをジツと見つめていた。

『おい、統夜。どうした？ さっさと火をつけないと飯は食えないぜ？』

「ああ、そうだな……………」

『統夜、言っておくが、魔導火を使おうとは思うなよ。それを使ったらどうなるか……………お前もわかるだろ？』

「アハハ、さすがにそれはわかってるって」

統夜はそう言つて笑いながら火をつけ始めた。

（統夜のやつ、冗談だとは思うが、少しは考えたな。やれやれ……………）
イルバは火起こしをしている統夜をジト目で見ていた。

火起こしが終わってから数分後、バーベキューの仕込みを終えた唯たちが戻つてきた。

バーベキューの準備が整った所で本日の夕食でもあるバーベキューが始まった。

「あつ、りつちゃん！ それ私が食べようと思つてたお肉！」

「ふっふっふ……………。隙だらけのお前が悪いぞ、唯」

バーベキューが始まるなりさっそく肉の争奪戦が始まつていた。

「まったく……」

統夜は律が大事に育てていた肉を奪い取ると、何も言わずに唯に渡していた。

「やーくん、ありがとうー！」

「あつ！統夜！お前！」

「やれやれ、そういうお前も隙だらけだぞ、律」

「ムキーっ!!」

統夜はさりげなく唯の仇をうっていたのである。

「ほら、みんなも。ここら辺とか焼けてるぜ」

統夜は焼けている肉をテキパキと滲、梓、紬に渡していた。

「あ、ありがとう」

「ありがとうございます」

「ウフフ♪」

統夜から肉を受け取り、3人も満足そうだった。

「……うん、おにぎりも美味しいな……」

統夜は一旦肉を取るのを中断し、おにぎりを頬張っていた。

その間に串の肉をしつかりと焼き、育てていた。

それを見ていた律が……。

「統夜！隙あり！」

「……………」

統夜はおにぎりを頬張りながら律が奪い取ろうとした肉を取り、更には律が楽しみにしていた鶏肉の串を奪い取った。

「ああ！あたしの鶏肉！」

「やれやれ……。魔戒騎士である俺の隙を突こうなんて100年早いぞ。そんなことさえしなけりや律の肉を奪うことはしなかったのに……」

「ちくしょー!!」

肉争奪戦に完敗した律を見て唯たちがアハハと笑っていた。

こうしてこの日の夕食であるバーベキューが行われている間は、笑い声が絶えることがなかった。

バーベキューが終わり、バーベキュー用のコンロなどの片付けが終わると、外はすでに真つ暗になっていた。

「ねえねえ、花火しよう♪」

紬は事前に用意した花火を取り出し、花火を提案していた。

「おお、いいね！やろうやろう！」

「ああ！花火とかいいじゃないか！」

唯と律が賛同し、統夜、漣、梓の3人も了承したため、花火をすることになった。

別荘入り口の広いところに移動すると、それぞれが花火を手に取り、火をつけると、様々な花火を楽しんでいた。

最初ははしやぎながら普通の花火を楽しんでいたが、後半は線香花火を楽しんでいた。

「……………」

紬はゆらゆらと揺れる線香花火をじっと見つめていた。

だが、それもあつという間であり、火種が落ちてしまった。

「あつ……………」

線香花火の火種が落ちると、紬は少し寂しげな表情をしていた。

「アハハ…………」。線香花火つてき、本当に儂げだよな」

「そうだな、だからこそ最後の最後に頑張れ頑張れつて応援したくなるんだよな」

紬の寂しげな表情を見た統夜と律はこう優しい表情で語りかけていた。

「うん！もう一本！」

紬はもう一本線香花火を用意すると、その間、唯と律は線香花火に頑張れ頑張れと声

をかけていた。

「頑張れ……頑張れ……」

紬も真似をして声をかけるのだが、火種はすぐに落ちてしまった。

「……また落ちちゃった……」

紬が困ったような笑顔を梓に向けると、梓はクスツと微笑んでいた。

こうして楽しい花火の時間はあっという間に過ぎていき、統夜たちは協力し合っててきばきと花火の残骸を片付けたのであった。

「……肝試しをしよう」

花火の片付けが終わるなり、律が次の提案をしていた。

「まったく……次から次へと……」

休む間もなく遊びの提案をする律に滯は呆れていた。

「だって、夏と言ったら肝試しだろ？」

「まあ、確かに夏の定番だけど……」

律が言っていた肝試しが夏の定番という言葉に統夜は賛同していた。

(……まあ、この周辺の見回りはするつもりだったし、ちょうど良かったかな?)

統夜はこんな所でもホラーは出てくるかもしれないと予想し、みんなが風呂に入る時
間か寝静まった時間に別荘周辺の見回りを行うつもりでいた。

「わ、私はやらないからな!」

怖いものが苦手な滯は肝試しに乗り気ではなかった。

「ああ、滯は怖いのが苦手だもんなあ」

律はニヤニヤしながら滯を挑発していた。

「……ぜ、全然余裕よ! やってやろうじゃないの!」

滯は律の挑発に乗る形で肝試しに参加することになった。

律は肝試しの準備があるからといって何処かへ移動すると、滯が統夜に近づいてき
た。

「な、なあ……統夜……。一緒に肝試しをして欲しいんだけど……」

滯は頬を赤らめて上目遣いでオドオドしながらこう統夜に訴えかけていた。

その姿に統夜は思わずドキツとしてしまった。

「ま、まあそこまで言うなら……」

こうして統夜は滯とペアになって肝試しに参加することになった。

その前に統夜は一度荷物を置いてある場所に戻り、魔法衣を羽織ってから滯に合流し

た。

「? 何で統夜はいつもの赤いコートを着てるんだ?」

「ああ、これは念のためだよ。こんな森だ。急にホラーが出てくる可能性だってあるからな」

「ヒッ!? ここ、怖がらせるのはやめろよ!」

ホラーが出るかもしれないとわかり、滯の恐怖心は倍増したため、滯は涙目になっていた。

「わ、悪い悪い。と、とりあえず行こうか」

こうして統夜と滯は肝試しの会場となる森の中へ入っていった。

真つ暗な森を歩いていると、滯が統夜の手を繋いできたので、ドキツとしたものの、統夜はそれを受け入れていた。

「こ、高校生にもなつて肝試しもないよなあ……アハハ……」

滯は真つ暗な森が怖いのか、引きつった笑顔で動揺していた。

滯はギュツと統夜の手を握っていたのだが、その握力は少しずつ強くなっていた。

「なあ、滯。さつきから手が痛いんだけど……」

滯の握力があり得ないほど強くなっており、統夜は恐る恐る滯に手が痛いことを伝えた。

『おい、漣。いい加減握力を抑えろ。こっちまで痛みが伝わるだろうが』

統夜の手の痛みがイルバにまで伝わっていたので、それだけ漣の握力が凄いいことがわかる。

その時だった。

草むらからカサカサつという物音が聞こえたのである。

「!?」

「ヒツ!?き、きつと律だよな?」

統夜は繋いでいた手を離すと、魔法衣から魔戒剣を取り出し、いつでも抜刀出来る状態にしておいた。

漣は物音がした方向に懐中電灯の明かりを向けると、「うううううう……」と呻き声をあげながら怪しい人影がこちらに近づいてきていた。

(まさか……!・ホラーか!?)

統夜は近づいて来る人影に鋭い視線を向け、漣は恐怖に怯えていた。
そして……。

「みーおーじゃーん!!」

「ひいひいひいひいひいひい!!」

「うおっ!?!」

濡の悲鳴が凄かったのか、統夜は思わずたじろいでしまった。

濡はあまりの怖さに真っ白になってそのまま気絶してしまった。

統夜はすぐ我にかえると、魔戒剣を抜き、帽子をかぶっている謎の人影に魔戒剣を突きつけた。

「ヒッ!?!」

「貴様は何者だ!まさか、ホラーか!」

「そ、そんな……私は……」

『統夜、ちよつと待て。こいつは……』

「?……あつ!」

イルバの指摘に首を傾げた統夜はその人影を凝視すると、その正体はなぜかフラフラなさわ子であった。

「さわ子先生!?!どうしてこんな所に!?!」

統夜は魔戒剣を鞘に納めると、さわ子に駆け寄った。

「よ……ようやく会えた……」

「よ……ようやくつて……」

何でこんな森にいたのかわからず統夜が首を傾げていたその時だった。

「あれ?さわちゃん先生?どうしてここに?ていうか何でいるの?」

統夜と滯が出発した後、遅れて出発した唯、紬、梓の3人が合流した。

「後から合流してみんなを驚かせようと思ったんだけど……。道に迷って……」

「はあ……。やれやれ……」

『全く……。呆れて言葉もないぜ……』

さわ子がこんな森にいた理由がわかり、統夜とイルバは呆れていた。

「まあ、驚かせようって目的は達成出来たみたいですけど……」

「滯ちゃん！大丈夫だから。滯ちゃん！」

滯に駆け寄った紬が滯の肩を揺するが、滯は真っ白になって気絶したままだった。

（滯先輩ってこんなな怖がりだったんだ……）

梓は滯の知らない一面を見て驚いていた。

「……とりあえず戻ろっか」

唯の提案で別荘に戻ることにしたのだが……。

再び草むらからカサカサつという物音が聞こえてきた。

「!?な、何!?!」

突然聞こえてきた物音に唯は怯えていた。

「みんな、一か所に固まるんだ」

統夜は冷静に唯たちに指示を出すと、唯たちは統夜の指示に従って一か所に集まって

いた。

「……ハッ！私は一体……」

タイミングが悪く、滯が目を覚ましてしまった。

「？何でみんなは固まつてるんだ？」

「滯先輩、どうやら向こうの草むらに何かがいるみたいで……」

「ヒッ!?驚かせるなよ……!」

まだ何かがいるのかと思い、滯の顔は真っ青になっていた。

統夜は再び魔戒剣を手に取り、いつでも抜刀出来る状態にしておいた。

そして……。

草むらから何者かが現れ、その影は統夜に向かっていった。

「っー!」

その影が剣を一閃してきたので、統夜は魔戒剣を抜いてその一撃を防いだ。

「貴様……何者だ!」

統夜は剣を抜きながら影に問いかけるが、反応はなかった。

「お前こそ何者なんだ!まさか、お前がホラーか!」

しかしその影がすぐさま言葉を発し、統夜をホラーだと勘違いしていた。

「ホラーだ?!違う!俺は!」

統夜は違うと弁解しながら、相手を弾き飛ばして距離を取った。

その時、月明かりが照らされ、周りが明るくなったその時だった。

「……………なっ?!? そんな馬鹿な……………!?!」

統夜たちを襲撃したのは10代後半くらいの女性で、その女性が手に持っていたのは男にしか扱えないはずの魔戒剣だった。

「お前、魔戒騎士じゃないのにどうして魔戒剣を持てるんだ?!」

統夜は自分の持っている疑問を相手にぶつけていた。

魔戒剣はソウルメタルで出来ており、そのソウルメタルに認められた物にしか扱うことは出来ない。

更に言うところには魔戒剣を扱うことは出来ず、この女性のように操ることは本来なら不可能なのである。

(?!魔戒剣を扱う女……………?まさか、この人って……………!)

統夜はこの女性に心当たりがあるようであった。

「お前に話す必要はない!ホラーであるお前に!」

「違う!俺は!」

「問答無用!」

女性は統夜の話を聞く耳を持たず、統夜に襲いかかってきた。

「くっ………！」

相手の正体の見当がついた統夜は本気を出す事が出来なかった。

（あーっ！もお！こうなったら仕方ない！ちよつとだけ痛めつけてわかってもらおうしかない！）

統夜は女性を説得するために少しだけ相手を痛めつけて話を聞いてもらうことにしたのだ。

「統夜先輩……」

突然の乱入者との戦いを梓は心配そうに見つめていた。

それは唯たちも同様であった。

統夜は女性の魔戒剣による一閃を無駄のない動きでかわしていた。

「!?…いつ………強い！」

女性は少しだけ焦りを見せていた。

統夜がここまでの手練れとは思っていなかったからである。

統夜は一瞬の隙を見逃さず、女性の魔戒剣を弾き飛ばした。

「なっ!?…しまった!?!」

弾き飛ばされた魔戒剣は統夜の近くにある木に突き刺さった。

そして統夜は女性の喉元に魔戒剣を突きつけた。

「くっ……!」

「やれやれ……これで俺の話を聞いてもらえるかな?」

「誰が……!」

女性は怯むことなく統夜を睨みつけていた。

(マジかよ……。ここからどうしたものか……)

相手の誤解を解くためにどうすべきか考えていたその時だった。

「ちよちよちよ……ちよつと待った!」

突如20代前半くらいで、傘を持った青年が乱入してきた。

「えっ!?カイン!」

女性は青年のことをカインと呼び、その姿を見て驚いていた。

「おい、ユナ。そいつの格好をもっとちゃんと見ろよ!そいつ、魔戒騎士だぜ!」

「えっ?」

(やれやれ……ようやく誤解は解けたか……)

統夜は魔戒剣を降ろすと、そのまま魔戒剣を青い鞘に納めた。

「そういうことで、俺は魔戒騎士なんです」

統夜も再度自分が魔戒騎士であると説明をすると、ユナと呼ばれた女性は目をパチク

りとさせていた。

『やれやれ、お嬢ちゃんも随分とそそっかしいな。こんな真夏にこんなコートを着てる奴なんて魔戒騎士くらいしかいないだろうに』

今まで何故か黙っていたイルバがここで口を開いた。

「ま……魔導輪!? それじゃあやつぱり……」

ユナはイルバを見たことで統夜が魔戒騎士であると確信していた。

「おい、イルバ。何で最初からお前が説得してくれないんだよ。そうすりゃ、こんなことしなくても済んだのに」

『「このお嬢ちゃんがホラーではないとわかっていたからだ。それに、合宿中のお前さんには良い鍛錬になると思ってな』」

「お前なあ……」

イルバが今まで黙っていた理由がわかり、統夜はジト目でイルバを睨みつけていた。

「本当にごめんなさい! 怪我はなかった?」

ユナは勘違いとは言え統夜に剣を向けたことを謝っていた。

「まあ……。こんな森にいた俺も悪かったし、気にしてないです。だけど……」

統夜は唯たちに視線を移すと、ユナも視線を移してハツとしていた。

ユナはこの瞬間まで唯たちの存在に気付いていなかったのである。

「謝るなら彼女たちに謝って下さい。俺は魔戒騎士だからこんな慣れっこですけど、

彼女たちはこんな生活には慣れてないんですから」

「うん……そうだね……。……本当にごめんなさい！」

ユナは自分の行動を唯たちに詫びると、しゅんとしていた。

「い、いえ……。気にしないでください……」

梓がこう答えると、唯たちはウンウンと頷いていた。

『それで……お前さんたちはどうしてこんな所にいるんだ？』

イルバはユナとカインがどうしてこの森に来ているのか事情を聞いていた。

「ああ、実は番犬所からの指令でな。この森にホラーが出たみたいだから、倒してこいつでことで来たわけなんだよ」

カインが統夜やイルバに事情を説明した。

「やっぱりこの森にホラーがいたのか……」

統夜は肝試しをする前から嫌な予感がしていたのだが、その予感的中してしまつた。

その時、統夜は何かを思い出してハツとしていた。

「そういえば、律の奴の姿を見てないよな？」

「りっちゃん。脅かす役をやるって言つてたけど……」

「！このままじゃ律が危ない！」

統夜は慌てて森の奥を進もうとしていた。

「ちよ、やーくん!？」

「お前らは先に別荘に戻つてろ！律は俺が連れ戻す！」

統夜はそれだけ言うとそのまま森の奥へと向かっていった。

「ユナ！俺たちも追うぞ！」

「うん！」

ユナは木に突き刺さった魔戒剣を引き抜いてそれを鞘に納めると、カインと共に統夜を追いかけていった。

「統夜先輩……」

「ホラーのことは統夜君たちに任せて私たちは戻りましょう」

「うん、そうだね……」

「まさか……。こんなことになるなんてね……」

さわ子は合宿に合流するなりこんなことが起こるとは思っておらず驚いていた。

さわ子はゴルブの事件の後に統夜から魔戒騎士やホラーの話聞いたのだが、あまりに非日常過ぎて実感がなかったのである。

（統夜君……。無茶だけはするんじゃないわよ……）

さわ子はこう統夜を応援することしか出来なかったのである。

こうして唯たちは律のことを統夜たちに任せて先に別荘に戻ったのである。

※※※

統夜たちが律を探していたその頃……。

「……誰もこねー」

律はなぜかこんにやくをぶら下げた竿を持って待ちぼうけしていた。

律は夕食をなかなか食べさせてもらえなかった仕返しに濡を驚かそうと画策していたのだが、誰も姿を現さないのであった。

(それにしても真夜中の森って何か怖いよな……。なんか不気味だし……。)
律は静かで暗い森の怖さに少しだけ怯えていたのである。

(こんな森にホラーなんて……。出ないよな……。う？さすがにそれはないと思うけど……。)
律がもう一つ怖いと思ったのはホラーの存在である。

出るはずはないと言い切っているものの、ホラーはいつ現れるかわからないからであ

る。

(……もう帰ろうかな……。統夜たちも現れなさそうだし……)

律はこの場を離れようとしたその時だった。

カサカサっ！

背後の草むらから突然物音が聞こえてきた。

「ひっ!? な、何だよ!」

律は突然の物音に怯えて後ろを向くが、何もいなかったのである。

「何だよ……びつくりしたなあ……」

律は何もないことに安堵するが、再び物音が聞こえてきたので身構えていた。

そんな律の目の前に現れたのはどこにでも売ってそうな熊のぬいぐるみだった。

「何だ、ぬいぐるみか……」

律は安堵したのだが、ぬいぐるみの異変にすぐ気付いた。

「あれ? このぬいぐるみ……何でこっちに近付いてるんだ?」

こちらに近付いてくるぬいぐるみを不気味に思ったのか律はゆっくりと後ろに下がっていた。

その時だった。

——キシャアアアアアアアア!!!

どこにでも売ってそうな可愛い熊のぬいぐるみが、突然不気味な化け物に変貌してしまった。

「!?ほ、ホラー!?!」

律は突然現れたホラーに驚いていた。

ぬいぐるみが変わ化した森のホラー熊は、気付けば律と同じくらいの大きさになっていた。

「に……逃げないと!」

律は慌てて逃げ出すが、森のホラー熊は獲物を喰らうために追いかけてきた。

「くそっ!何で追いかけて来るんだよ!」

迫り来るホラー熊に怯えながら律は逃げ続けていた。

その時だった。

律が逃げてる方向から人のような影が迫ってきた。

「!?今度は何だよ!?!またホラーじゃないよな!?!」

律は逃げながらも迫り来る影に警戒していた。

その時であった。

「律!!」

迫り来る影の正体は統夜であり、律は統夜の姿を確認した。

「統夜!」

律と統夜は無事に合流することが出来たのである。

「律、無事か!」

「ああ、なんとか……」

「無事で良かったよ」

統夜が安堵の笑みを浮かべていた。

「!／／／／／」

律は統夜の笑顔を見て頬を赤らめていた。

その時、律を追いかけて来た森のホラー熊が2人の前に現れた。

「どうやら、こいつがホラーのようだな」

『そのようだ。統夜、油断するなよ!』

「ああ」

統夜が魔戒剣を抜いたその時、統夜を追いかけて来たユナとカインが合流した。

「!あいつが!」

「どうやらそうらしい!」

「ユナさんとカインさん……でしたね?」

「そうだけど、何だ?」

「2人は彼女を頼みます！こいつは俺が斬る！」

「えっ!?でもこいつらは……」

カインは統夜の言葉に戸惑っていた。

自分たちは目の前のホラーは自分たちの獲物だからである。

「誰の獲物とか言ってる場合じゃないでしょう!?守るべき人がいるなら然るべき行動を取る。それが守りし者のはずです！」

統夜はホラー熊に立ち向かいながらユナとカインを叱責していた。

「!!」

ユナとカインは統夜の叱責で自分たちがすべきことを理解したのであった。

「そこのお前!こつちに来い!」

「わ、わかった!」

律は少しだけ不安そうにしていたが、統夜の知り合いみたいだったので、2人を信じて2人に駆け寄り、安全な場所まで下がった。

『やれやれ……お前さんも一丁前なことを言うようになったな、統夜』

「無駄口を叩いてる場合じゃないだろう!」

統夜はホラー熊と交戦しながらイルバに怒っていた。

ホラー熊は爪による連続攻撃を仕掛けるが、統夜は無駄のない動きでホラー熊の攻撃

をかわしていた。

「あの子の戦い方……」

ユナは統夜の戦いに見入っていた。

「?どうしたんだ、ユナ?」

「あの子の戦い方なんだけど、何となくあの人に似てる気がするんだよね……」

「!あの人つてもしかして……」

カインの問いかけにユナは無言で頷いていた。

ユナが思い描いていたのは、かつて共にリングという強大なホラーと戦った涼邑零のことであつた。

ユナは統夜と零の戦い方が何となく似ていると感じていたのであつた。

ホラー熊と交戦している統夜は、苦戦している素振りは見せず、ホラー熊を翻弄していた。

そして統夜は蹴りを放つてホラー熊を吹き飛ばした。

「そろそろ戻らないとみんなが心配するし、一気に決める!……貴様の陰我、俺が断ち切る!」

統夜はこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げて、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「!あの子の鎧……」

「あいつとは違う銀の騎士がメシアの腕と呼ばれたホラーを討滅したとか。……まさか、あいつがその……」

「白銀騎士……奏狼……」

ユナとカインは統夜の鎧を見たことはないが、その武勇伝は聞いたことがあった。

統夜がグオルブを討滅したことは元老院だけではなく、あちこちの番犬所にも広まっているため、奏狼という名前も様々な魔戒騎士や魔戒法師に広がっていた。

ホラー熊は爪による連続攻撃を仕掛けるが、そんな一撃で奏狼の鎧に傷をつけることは出来なかった。

統夜はホラー熊にパンチによる攻撃を仕掛けると、ホラー熊はその一撃で吹き飛んだのであった。

「……」一気に決める!

統夜は一気に駆け出すと、皇輝剣を一閃した。

その一撃を受けたホラー熊の体は真つ二つになり、ホラー熊は断末魔をあげながら消滅した。

「……よしっ!」

ホラー熊が消滅したことを確認した統夜は鎧を解除して、元に戻った魔戒剣を青い鞘

に納めた。

「律、大丈夫か？」

「……………」

統夜は律に駆け寄るのだが、律は何故か黙ったまま俯いていた。

「……………？律？」

何故か黙る律に首を傾げるが、その時、律が急に統夜に抱きついた。

「!?り、律!?!?!?!?!」

「ふえ!?!?!?!」

「へえ、これはこれは」

律に抱きつかれて統夜は顔を赤らめており、それを見たユナも何故か顔を赤らめるのだが、カインだけはニヤニヤしながら動向を見守っていた。

「統夜あ……………！怖かったよお……………！」

律はあまりに怖かったのか、統夜に抱きついた状態で大泣きしていた。

「そうだよな……………。だけど、もう大丈夫だ……………」

統夜は律の頭を撫でながら優しく囁いていた。

「あ、あの子たち、付き合ってるの!?!?!?!?!」

「さあな。そこまではわかんねえよ」

ユナは顔を真つ赤にしており、カインは未だにニヤニヤしながら動向を見守っていた。

律が泣き止む間はそのままの状態を維持することになり、統夜は律の頭を撫でながら律をなだめ、ユナとカインはそんな2人を見守っていた。

しばらくして律は統夜から離れたのだが、ユナとカインに一部始終を見られていたことに気付कि、顔を真つ赤にしていた。

「……すいません、2人の獲物を横取りしてしまつて……」

統夜はユナとカインが倒すはずだったホラーを自分が倒したことを詫びていた。

「べ、別に……。気にしてないから大丈夫だよ」

「そうだな。おかげで噂の白銀騎士の戦いが見られた訳だしな♪」

「噂つて……俺が……ですか？」

「ああ。あちこちの魔戒騎士や魔戒法師たちはお前の話で持ちきりだぜ？ 強大なホラーを倒した若い騎士に黄金騎士も一目置いてるつてな」

「そんな……。俺なんてまだまだ魔戒騎士としては未熟なのに……」

統夜は自分の活躍が噂になってることは嬉しかったが、自分はそのまでの器ではないとも感じていた。

「そんなに謙遜することはないって！噂通りの実力だっと思ってたぜ！」

「それに、あなたの戦い方は何となくあの人に似てる気がしたんだよね……」

「？あの人？」

「涼邑零。この名前に聞き覚えはないか？」

「!!もしかして、零さんのことを知ってるんですか!？」

まさか零の名前が出てくるとは思っておらず、統夜は驚いていた。

「まあ、そういう事だ」

「君もあの人を知ってるんだね」

「ええ。俺は零さんに魔戒騎士としての心得を色々教えてもらいました」

「へえ、そうなんだね」

「今友達の別荘に来てるんですけど、良かったら一緒に来ませんか？色々お話を聞きたいですし」

統夜はユナとカインを紬の別荘に招待していた。

「……どうする、カイン？」

「せっかくだし、寄って行こうぜ！」

「そうだね」

こうしてユナとカインは統夜の申し出をありがたく受け入れ、統夜たちは別荘へと戻

ることになった。

その時だった。

「な、なあ……統夜……」

「?どうした、律?」

「……手、繋いでもいいか?」

「……それくらいおやすい御用だよ」

統夜は律の手を握ると、律は顔を真っ赤にしていた。

「……ありがとう」

「ああ」

2人の動向を見ていたユナは再び顔を赤らめて、カインは再びニヤニヤしながら動向を見守っていた。

こうして統夜たちは別荘へと戻っていった。

※※※

「……あつ！戻つて来たよ！」

統夜に別荘に戻るよに言われた唯たちは別荘に戻ると、入り口で統夜と律の帰りを待つていた。

すると、統夜と律が姿を現したのである。

「良かった……。りっちゃんも無事みたいで……」

紬は統夜と律が無事に戻つて来たことに安堵していた。

「ああ……。本当に良かったよ……。つて、あれ？」

濡は何かに気付いたのか訝しげな表情をしていた。

「お前ら……。どうして手を繋いでるんだ？」

濡は統夜と律がこちらに来るなり訝しげな表情で統夜と律に手を繋いでいることを追求していた。

「あつ！」

そこでようやく気付いたのか2人は慌てて手を離していた。

「べつ、別にこれは深い意味はなくてだな……」

統夜は慌てて手を繋いでいたことを弁明していた。

「む……。羨ましいです……」

梓はぷうつと頬を膨らませながら統夜を睨みつけていた。

「あらあら、統夜君とりつちやんつてば、いつの間にかそんな関係に……」

紬は笑みを浮かべていたのだが、そのオーラは恐ろしいくらい真つ黒であった。

「む………」

唯は何を言うわけではなかったが、ぷうつと頬を膨らませながら統夜を睨みつけていた。

「まったく……。見せつけてくれるわね……。これが若さつてやつなの？」

さわ子は統夜たちの様子を見て苦笑いしていた。

「アハハ………」

「何だかよくわからんが、あいつもどうやら大変そうだな」

ユナは苦笑いをしており、カインは統夜の現状に憐れんでいた。

「……：そういうえば、あなたたちはどうしてここに？」

ユナとカインの存在に気付いたさわ子は2人にこう問いかけると、唯たちはハツとしていた。

「ああ。実は統夜に招待されたんだよ」

「そうだったんですか……。それに、あなたたちは？」

「ああ。自己紹介をしてなかったな。俺はカイン。魔戒法師だ」

「私はユナ。カインと同じく魔戒法師でもあるんだけど……。魔戒剣を操る魔戒剣士でもあるの」

「魔戒剣士？」

「ちよつと待て。確か女性は魔戒剣を持ってないって統夜は言ってたけど、どうしてあなたは魔戒剣を？」

「濡は以前統夜から魔戒剣は女性には扱えないという話を聞いていたので、その疑問をユナにぶつけていた。」

「実は術を使って私の腕に死んだ父さんの骨を埋め込んだの。それで、私は魔戒剣を操れるようになったんだ」

「まあ、本当はその方法は体に相当負担をかけるんだけどな。ユナの覚悟は相当だったから、その術をかけるのに協力したんだよ」

「そうだったんですね……」

「そのような話を零さんから聞いたことがあったんですけど、実際見るのは初めてなので驚きました……」

「統夜は零からユナの話を聞いたことがあったのだが、実際に女性がソウルメタルを操る術を聞いて驚いていた。」

「とりあえず立ち話もあれなんで、中に入りましょう。お2人も良かったらゆつくりし

ていつて下さい！」

「うん！ありがとう！」

「それじゃあ、遠慮なく♪」

こうして統夜たちは別荘の中に入り、一度リビングに入った。

そこで唯たちは自己紹介を済ませると、そのまま風呂へ向かい、統夜、ユナ、カインの3人は紅茶を飲みながら様々な話で盛り上がっていた。

涼邑零という共通の知り合いがいるため、話はとても弾んでいた。

その中で統夜は強大な力を持ちながら人間とホラーの共存を考えていたというリングと呼ばれるホラーの話の聞いたりもしていた。

その話は零からちらっとしか聞いていなかったもので、詳しく聞いてみたいと思ったのである。

リングはユナの父親であるクロウドを殺したホラーであり、ユナは仇を取るためにクロウドの遺骨を術の力によって移植したのである。

その術をかけたのがカインであったのだが、その術は体に相当な負担をかけるもので、時折その影響が出て満足に戦えなくなることもある。

しかし、魔戒騎士だったクロウドの骨を移植したことで、女性には扱えない魔戒剣を扱うことが可能になったのである。

ホラー、リングとの戦いのいきさつを聞いた統夜はそのお礼ではないが、グオルブやディオスとの戦いのいきさつを語った。

暗黒騎士の力を得たディオスが強大な力を持つグオルブを蘇らせようとしたこと。

それを阻止するためにディオスに戦いを挑むが、敗れたこと。

そして、唯たちを人質に取られたことで怒りに支配されて心滅してしまったこと。

グオルブ復活が間近となり、復活を阻止しようとするが、グオルブが復活してしまつたこと。

真魔界に現れたグオルブをどうにか討滅し、ディオスを討伐したことを語った。

「へえ……統夜も随分と過酷な戦いをしてたんだな……」

「それに零さんや黄金騎士である冴島鋼牙さんだけじゃなくてレオさんも協力してたなんて……」

ユナは零、鋼牙、レオと多くの魔戒騎士や魔戒法師に知られる人物がホラー、グオルブやディオスとの戦いに参加していたことに驚いていた。

「レオ……。ああ、あの野郎か……!」

カインはレオの名前を聞いて眉間にしわを寄せていた。

カインとユナとはある指令でレオに会っていたのである。

その指令はレオが出したものであり、それも法師と騎士2つの顔を持つユナを試すた

めのものであった。

そのためカインを介入させる訳にいかないと判断したレオはカインをダウンさせたのだが、カインはその時に足を痛めてしまった。

その時からカインはレオに苦手意識を持つようになったのである。

レオの指令をどうにか乗り越えたユナはレオと邂逅し、その時、元老院にスカウトされた。

しかし、ユナはその話を断ったのであった。

元老院所属というのはこの上ない名誉であることをユナはもちろんわかっていたのだが、ユナは自分1人でもなくこれからカインと2人で戦っていきたいという理由で元老院へのスカウトを断ったのであった。

ユナはカインの不機嫌そうな顔を見ると統夜にその時の話をしたのであった。

「へえ……。ユナさんも元老院行きの話を通ったんですね」

「ユナさんも通ったことは統夜も元老院にスカウトされたの？」

「ええ。ゴルブを討伐した数日後に番犬所から話があったんです。俺が今通ってる桜ヶ丘高校を卒業したら元老院に来ないか？って。俺の元老院入りをレオさんや鋼牙さんも推薦してくれたんです」

レオだけではなく黄金騎士である鋼牙も統夜の元老院入りを推薦してくれたと知り、

ユナとカインは驚いていた。

「マジか？黄金騎士が統夜に一目置いてるとは聞いていたけど、元老院入りを推薦までしてたのかよ？しかもそれを断つたんだろ？もつたない気がするぜ」

カインは驚きながらも鋼牙の推薦をもらっているのに元老院入りを断つたというのがもつたないと感じていた。

「確かにそれは今でもそう思います。だけど、俺は魔戒騎士としてはまだまだだから元老院はまだ早いつて思いましたね」

「そんなに謙遜することはないと思うけどな」

「それに……俺は桜ヶ丘が好きだから……桜ヶ丘を守るつてのが性に合ってるんですよ」

統夜はイレスに言ったことと全く同じことをユナとカインに言っていた。

「なるほどね……。私は統夜君の気持ちは何となくわかるなあ」

「えっ？そんなのか？」

「うん。私が元老院入りを断つたのも似たような理由だしね♪」

「元老院入りは確かに名誉なことだけど、番犬所でも元老院でもホラーを狩つて人を守るつてのは変わらないですからね」

「うんうん♪私もそう思う♪」

統夜とユナは共に元老院入りを断ったということで意気投合していた。しばらく話をしていると、風呂に入っていた唯たちが戻ってきた。

「はあ……いい湯だった♪」

別荘のお風呂がとても良かったのか、唯は満足そうな表情をしていた。

それは唯だけではなく、みんなも同様であった。

「あつ、ユナさん。統夜との話は終わったんですか？」

「うん、一応ね」

「ユナさんも良かったらお風呂に入っていきませんか？」

「えっ? いいの?」

「はい♪遠慮しないでください♪」

「ユナ、入るなら入って来いよ。じゃないと俺も統夜も風呂に入れないな」

「それじゃあ……入って来るかな♪」

ユナは絨の案内で風呂場へと移動すると、そのまま風呂に入り、統夜とカインはそれを待っている間は唯たちとトランプをしながら遊んでいた。

1時間ほどトランプで遊んでいるとユナが戻ってきたので、統夜とカインは風呂場へと向かうと風呂に入り、戦いの疲れを癒していた。

※※※

統夜とカインが風呂から戻ってくると、しばらくは遊んでいたのだが、遊び疲れたのか唯たちはすぐさま眠りについたのであった。

みんなが寝静まった頃、統夜はこっそりと別荘を抜け出すと、剣の素振りを始めていた。

剣の素振りは毎日の日課であり、どのように忙しい日であろうと1日も欠かすことはなかった。

統夜は今や魔戒騎士の中でもかなりのレベルまで達しているものの、自らはまだまだであると感じており、魔戒騎士として精進する気持ちは今までよりも強くなっていたのである。

『統夜、今日も精が出るな』

「まあな。俺はこれからももつともつと精進しなきゃいけないんだ。これくらいは当然

だよ」

『お前さんは頑張るな。そこまでして力が欲しいのか?』

イルバは少しだけ意地悪な質問をしてきたので、統夜はその手を止めた。

「俺が確かに力が欲しいよ。だけどそれは自分を満たす力じゃなくて、誰かを守る力だ。俺だつて全ての人を守れるとは思ってはいないけど、この手が届くならその人は絶対助きたい」

統夜は右手の拳をギョツと握りしめていた。

「俺は1人だろうと2人だろうと明日へ……その先へ繋げていきたい。それは、守りし者としての俺の想いだよ」

こう語る統夜の目は凜としており、統夜の守りし者としての覚悟が伺える程であった。

『ほお……。随分と成長したな……。統夜』

「何だよ、今日は珍しく素直だな、イルバ」

『何を言っている。俺様はいつだって素直なんだぜ』

「ハハ、そうかもな」

統夜は笑みを浮かべると、素振りを再開した。

1時間ほど素振りをすると、統夜は別荘に戻っていった。

別荘の中に入り、自分が今日寝る部屋へ移動する途中、一部屋だけ明かりがついていた。

(?ギターの音が聞こえるな……)

統夜は明かりがついた部屋を覗こうとしたその時だった。

「あずにやんに出会えて良かったよ!」

明かりがついている部屋から唯の声が聞こえてきた。

「あずにやあああん!!……ウフフ……ありがとう♪あずにやん♪」

統夜が部屋を覗くと、唯が梓に抱きつき、頬ずりをしていた。

梓はまんざらでもなかったのか、優しい表情で笑みを浮かべていた。

(そっか……。練習をやったんだな……。これは邪魔しちゃ悪いよな……)

統夜は笑みを浮かべると、そのまま明かりがついた部屋を通り過ぎて、自分の寝る部屋に戻ると、すぐさま眠りについた。

翌朝、日課の稽古を行うためいつもの時間に目を覚ました統夜であったが、同じ部屋で眠っていたカインの姿がなかった。

1時間ほど剣の素振りを行ってから部屋に戻ってもカインの姿はなかったので、ユナと共に早朝にここを出発したと推測出来た。

唯たちも起床し、全員が歯磨き洗顔を終えると朝食の時間になった。

この後も合宿は続いたのであるが、練習よりも遊ぶ時間の方が長かった。

統夜は久しぶりの平和な時間を満喫し、心身共に休息を取ることが出来たのであった。

こうして軽音部の3泊4日の合宿は幕を降ろしたのである。

……続く。

—— 次回予告 ——

『夏休み、魔戒騎士である統夜に休みはないが、普通の高校生はのんびりと休日を満喫しているみたいだな。次回、「休日」。いくら休みと言っても勉強は忘れるなよ』

第27話 「休日」

軽音部の合宿が終わり、数日が経過した。

この日、憂は梓と遊びに出掛ける約束をしていた。

憂が待ち合わせの場所に到着してからおよそ10分後……。

「おーいー！」

梓が待ち合わせの場所に到着し、憂に声をかけた。

「あつ、梓ちゃん！……つて誰？」

憂は日焼けした梓を見て唾然としていた。

以前梓を見たときとは明らかに別人だったからである。

「えっ？」

梓は日焼けした自分がそこまで変わっているという実感はなく、ポカーンとしていた。

2人は行きつけのファストフード店に入ると、ハンバーガーのセットを注文し、窓側の席についた。

「本当に誰かわからなかったよお」

「そんなおおげさな……」

梓は日焼けした自分がそこまで変わっていると実感がないたため、苦笑いをしていた。「お姉ちゃんも日焼けしてなかったけど、梓ちゃんは どうしてそんなに焼けてるの?」

「それは……えつと……」

梓はどう答えるべきか悩んでいた。

自分も一緒になって遊んでたなんて言いたくなかったからである。

しかし……。

「……私が一番はしゃいでいたから……」

梓は顔を真っ赤にししながら本当のことを憂に話すと、憂はニコニコしながら梓の話を聞いていた。

「それにしてもいいなー、合宿。楽しそう」

「それなら憂も軽音部に入れば?」

「それも悪くないんだけどねえ……お姉ちゃんの晩御飯も作らなきゃいけないし……」
憂は姉である唯にも軽音部に誘われたのだが、学校が終わった後の家事が忙しいために断っていたのだった。

唯と憂の両親はとても仲が良く、2人を残してよく海外旅行へ行くほどである。

「ところで、軽音部ではお姉ちゃんはどんな感じなの?」

憂は普段から気になってる質問を梓にぶつけていた。

「うーん……ちよつとあれかな？」

梓は正直な意見を言うべきか悩んで言葉を濁していた。

「えっ？何々？」

「うーん……」

憂が食いついてきたので、梓はしばらくどう質問を返すか考えていた。

そして……。

「……全然練習しないし……。変なあだ名をつけてくるし……。やたらスキンシップをしてくるし……」

悩んだ末に梓は自分の思っていたことを正直に話すことにした。

「お姉ちゃんって暖かくて気持ちいいよね」

「いや、そういう話じゃなくて……」

憂のあまりにずれた発言に梓は苦笑いをしていた。

「そういうえば今日唯先輩は何してるの？」

「家にいるよ。お姉ちゃん暑いのが苦手だから……。冷房も嫌いだし」

「だれてる姿が目には浮かぶわ……」

唯は寒いのもそうなのであるが、暑いのも苦手であり、家にいる間はずっとぐったり

していた。

冷房を使えば済む話ではあるのだが、唯は冷房が嫌いのようなので暑い日は苦手みた
いであつた。

「最近是一日中ぐったりしてるよ」

「だらしないわねえ」

「でも……。ゴロゴロしてるお姉ちゃん、可愛いよ?」

憂はゴロゴロしてる唯を想像し、頬を赤らめながらニヤニヤしていた。

(何だろう……。この私と憂の感覚の違いは……)

梓は憂と感覚があまりにもかけ離れていることを感じて苦笑いをしていた。

「ねえねえ、もう一つ気になることがあるんだけど」

「ん?何?」

「統夜さんって軽音部じゃどんな感じなの?」

「それは、魔戒騎士だつてことは抜きにしてだよね?」

「もちろん!」

憂も梓も統夜が魔戒騎士であることは知っているので、統夜の普段の姿が気になつた
ので、このような質問をしたのである。

「うーん……。ギターに関しては凄く尊敬してるかな?普段は魔戒騎士の勤めで忙しい

のにそれを感じさせないくらいギターが上手いんだよね。練習に関しては厳しいところはあるけど、凄くためになるんだよね」

梓は統夜のギターテクをかなり評価していた。

魔戒騎士の勤めがあるが故に練習時間は少ないはずだが、普段から持っている才能のおかげなのか軽音部で一番のギターテクを持っている。

「それに何と言っても統夜先輩って格好いいし、優しいし……」

梓は統夜の良いところを考えながら統夜のことを考えているといつの間にか顔が真っ赤になっていた。

「ふーん、梓ちゃんって統夜さんのことが好きなんだね♪」

「べっ！別にそんなんじゃない……」

ニヤニヤしながらこう追求する憂に梓は顔を真っ赤にして反論しようとするが、いつぞやのイルバの言葉を思い出していた。

——俺様は知っているんだからな。お前ら5人と憂のやつが統夜に惚れてるってことを

(ちよつと待って……。ということとは憂も統夜先輩のことが好きってことなんだよね……)

梓は憂も統夜に惚れてるということを思い出し、どうリアクションをすればいいのか

わからなかった。

「確かに統夜さんって格好いいし、優しいよね♪」

憂はそんな梓の気持ちを感じ取ったのか統夜の容姿や性格の話に同意していた。

「だ、だけど！統夜先輩って本当に女の人のことになったら鈍いよね！」

「クスッ、そうだね♪だけど、私はそこも含めて統夜さんはいいなあって思うけどね♪」

「ねえ、憂。憂つてもしかして……」

「梓ちゃん、皆まで言わなくてもいいよ。私は何となくわかってるから♪それに、私は好きって言うよりは憧れてるって感じだから」

「そ、そうなんだ……」

憂は憂で気を遣っていると感じた梓はこれ以上余計なことは言わないことにした。

「そういえばさ、私は滯先輩みたいなお姉ちゃんだったら欲しいなって思うんだよね♪」

梓は場の雰囲気を変えるために話題を変えた。

「それ、何となくわかる！滯さん、優しくて格好いいもんね♪」

「軽音部で頼りになるのは統夜先輩と滯先輩だけだよ」

梓は軽音部の常識人が統夜と滯であると考えていた。

「律さんは？」

「律先輩？ああ、あの人はいい加減で大雑把だからパス」

梓は思ったことを正直に答えたのだが……。

「ほーお……」

いつの間にか梓の背後にいた律が目をギラギラとさせながら2人に近付いた。

(ええええええええええええ!?)

梓はまさか律がこの話を聞いているとは思っておらず、驚いていた。

律は梓の隣に座ると梓の頭をグリグリとしており、梓は「ごめんなさいごめんなさい」と繰り返していた。

「こんにちは、律さん」

「やつほー。外から見えたから来ちゃった」

「今日はお一人なんですか?」

「うん。滞は夏期講習に行ってるよ」

「り、律先輩は行かなくてもいいんですか?」

「へ?私?夏期講習?何で?」

律は何で自分が夏期講習に行かなければならないのかとキョトンとしながら思っていた。

「……で、ですよねー……」

梓は夏期講習に行かないのが当たり前前と思っている律に呆れていた。

「そういえば、律先輩。私、ずっと気になってたんですけど」
「ん？何？」

「ムギ先輩って自前のティーセットを持ってきてたり、大きな別荘持っていたり、リムジン
を運転する執事さんがいたり……。凄いお嬢様なんですか？」

梓は今までずっと気になっていた質問を律にぶつけていた。

今までの紬の行動を見ると、紬はお金持ちのお嬢様なのでは？と思うのには十分
だった。

「そうだぞお。執事さんはともかくとして長期休暇には海外に行ったりしてらんだぞお
！」

「本当ですか!？」

「だったら面白いよね！」

「知らないんじゃないですか……」

律のあまりにも適當すぎる発言に梓は呆れていた。

「それなら今から電話してムギんちに遊びに行こうぜ！」

律はそう言いながら携帯を取り出すと、紬の携帯に電話をかけた。

「いいんですか？そんな急に……」

梓は律の唐突な行動に不安を覚えるのだが、紬はこの日は忙しいのか電話に出なかつ

た。

「あれ？携帯に出ないなあ……。家電にかけてみるか……」

律は今度は紬の家の番号に電話をかけてみた。

すると……。

『はい』

今度はちゃんとつながり、50代くらいの壮年の声が聞こえてきた。

「あ、紬さんのお父さんですか？」

『いえ、私、琴吹家の執事でございます』

（そ、そういうえば執事がいたんだった！）

電話に出たのは執事をしている斉藤という男であった。

「つ、紬さんはい、いらっしやいますかしら？」

「り、律先輩、落ち着いて！」

梓は小声でテンパっている律のフォローをしていた。

『紬お嬢様はただいまフィンランドで避暑中でございます』

「そ、そうですか！ありがとうございます！失礼しました！」

律はそう言つてすぐに電話を切った。

執事である斉藤の言う通り、紬は合宿が終わった後、フィンランドの別荘で避暑をし

ていた。

「……ほ、ほら！あたしの言った通りだろ？」

奇しくも律が適当に言ったことが真実だったので、憂と梓は苦笑いをしながら拍手をしていた。

「……とりあえず、そろそろ出るか？」

律が席を立とうとしたその時であつた。

「……あれ？」

何かに気付いた憂が窓から見える景色を凝視していた。

「？憂、どうしたの？」

「あそこにいるの……統夜さんじゃない？」

「どれどれ……あ、本当だ！」

憂が目にしたのはこのような暑い夏にも関わらず赤いコートを羽織っている統夜であつた。

「夏場にあのコートだから目立つよな……」

「統夜先輩、こつちに気付くかなあ……」

「もしかしたら気付くかも……。……あつ！気付いたみたい！」

憂がその場で手を振ると、梓と律も同じく手を振り、それを見た統夜は苦笑いをして

いた。

律が袖に電話していた頃、朝からエレメントの浄化を行っていた統夜は偶然にも行きつけのファストフード店の近くを通っていた。

統夜は合宿が終わるとイレスや大輝、そしてレオにお土産をきちんと渡し、その日からエレメントの浄化を行っていた。

統夜はこの日、今までエレメントの浄化を頑張ってくれた大輝を休ませるために1日かけて1人でエレメントの浄化を行う予定だった。

ちなみにレオは統夜が戻ってきた翌日に自分の仕事を終わらせて元老院に戻っていった。

今日はエレメントの浄化も半分くらい終わらせた所で、昼食をどうするか考えながら行きつけのファストフード店の近くを歩いていたのであった。

統夜は行きつけのファストフード店を見つけて足を止めた。

(ハンバーガーかあ……。それも悪くはないけど、どうしようかな……。この近くに吉○屋があるからそこも捨てがたいよなあ……。)

統夜はハンバーガーにするか牛丼にするかで悩んでいた。

すると……。

《統夜。あのファストフード店に憂と梓と律がいるみたいだぞ?》

イルバは街中は人が多かつたため、テレパシーで統夜に話しかけていた。

(ん? そうなのか?)

《ほら、上の階にいるぞ》

統夜は上の階を確認すると、窓際の席に憂、梓、律の姿を確認した。

3人はその前から統夜に気付いていたのか統夜に手を振っていた。

「アハハ……あいつら……」

統夜は苦笑いしながら統夜も手を振り返していた。

《統夜。今日の昼飯はハンバーガーみたいだな》

(ああ、そうだな)

今日の昼食を決めた統夜はそのままファストフード店に入ると、注文を済ませた後に二階に上がった。

「あつ! 統夜先輩!」

「統夜さん! こつちです!」

梓と憂が統夜を呼んでくれたので統夜はそのまま3人のいる場所まで移動した。

「よう。梓と憂ちゃんはともかく律も一緒とはびつくりしたよ」

「まあ、あたしも偶然2人がいたのを見つけたんだけどな」

「なるほどね」

統夜はこう返事をする、空いている憂の隣に腰を下ろしていた。

「統夜先輩……。それ、全部食べるんですか？」

統夜のトレイにはLサイズのポテトとジュース。そして、4種類のハンバーガーが置いてあった。

「ああ。今日は朝から何も食べずに仕事してたから、腹減ってな。だからこれ位はな？」

「へえ……。さすがは男の子です♪」

「アハハ……。そうかな……」

統夜はそう言って笑いながらハンバーガーを頬張っていた。

3人は統夜の食べっぷりをじっと見つめていた。

「……。ん？どうしたんだ？食ってるところを見られるのは恥ずかしいんだけど……」

「ああ、ごめんなさい。だけど、統夜先輩の食べっぷりが凄くてつい……」

梓の弁解に憂と律もウンウンと頷いていた。

「まあ、いつもの時はここまで食べないからそれも無理はないかな？」

統夜はそう言って笑いながらハンバーガーを頬張っていた。

「統夜さん、今日は魔戒騎士のお仕事だったんですか？」

「そうだよ。合宿で長い事この街を空けてたからな。その分は仕事しないと」

「統夜先輩が合宿に行っている間は大輝さんが1人で仕事してたんですよね?」

「いや、たまたまレオさんが桜ヶ丘に来ててレオさんも仕事を手伝ってくれたみたいだよ」

「え!?!レオ先生来てたの?」

「あの事件以来だからまた会いたかったです」

レオはグオルブの事件が終わった翌日に教育実習の期間が終わって元老院に帰っていったので、憂、梓、律を始めとする桜ヶ丘高校の生徒たちはあれ以来レオに会っていないのであった。

「アハハ……レオさん、みなさんによろしくお伝え下さいって言ってたぞ」

レオからの伝言があったことを思い出した統夜は3人にレオからの伝言を伝えた。

「ところで、統夜先輩はまだお仕事終わってないんですか?」

「ああ。とりあえずやるべき仕事の半分は終わったからこの後残りの仕事を終わらせるつもりだよ」

「そうなんですか……」

「もし統夜が仕事終わってるなら遊びに誘おうかなって思ってたんだよね」

「そっか、それは残念だ」

「統夜はこの後も予定がなければ遊ぶのも悪くはないと思っていたので少し残念そうにしていた。」

「3人はこの後どこか行くのか？」

「いえ、まだ決めてないです」

「梓ちゃんも律さんもこの後良かったら家に来ませんか？スイカありますよ？」

「スイカ……。行く!!」

律はスイカにつられて憂の家に遊びに行くことを決めたのであった。

「うん、私も行くのかな」

梓は元々憂と遊ぶ約束をしていたので、憂の家に遊びに行くことを快諾していた。

「統夜さんも良かったらスイカだけでも食べて行きませんか？」

「うーん……。そうだなあ……」

統夜はどうしようか少し悩んでいたのだが……。

《統夜。これからエレメントの浄化に行くのはちょうど唯の家あたりから再開する予定だ。だから少しくらいはいんじやないか？》

意外にもイルバが少しくらいならと許可をしたのだった。

(何だよ、ずいぶんと気前がいいな。てつきりダメって言うかと思っただけ)

《まあ、半分とは言ったが、残りは少ないからな。ちよつとくらの骨休めは問題ないと

判断しただけだぜ》

(そうだな、スイカをご馳走になったらさつきと仕事を片付けるか)

統夜はイルバとテレパシーで会話をして憂の家に少しだけお邪魔することを決めた。

「それじゃあ、せっかくだからご馳走になろうかな」

「！本当ですか!?!」

「ああ。あんまり長居は出来ないけど、それで良かったらな」

「もちろん！大歓迎です♪」

「統夜先輩、大丈夫なんですか？この後もお仕事があるって言ってたのに……」

梓は統夜が無理にこちらに合わせてくれていると思つて仕事の心配をしてくれた。

「問題ない。イルバが許可してくれたからな」

「え？イルバは一言も喋つてないだろう？何でわかるんだよ？」

「ああ。さつき俺はイルバとテレパシーで会話してんだよ」

「そ、そんな事が出来るんですね……」

統夜とイルバがテレパシーで会話が出来たことを知らなかった梓は驚きを隠せなかつた。

それは憂と律も同様であつた。

こう話をしているうちに統夜はトレイに乗つたものを完食した。

「うん、ごちそうさんっ」と

統夜はかなり空腹だったからか、完食すると、とても満足そうにしていた。

「それじゃあそろそろ行きましようか」

「うん、そうだね」

「ああ♪」

「わかった」

こうして4人はファーストフード店を後にし、そのまま唯と憂の家に向かった。

「ただいまー!」

憂は家の中に入り、統夜、梓、律がその後続いた。

「ただいま梓ちゃんと律さんと統夜さんが来たよ」

憂はリビングの中に入り、3人もそれに続いた。

「おーかーえーりいー」

唯は団扇を扇ぎながらぐったりとしていた。

（なんかホツとするなあ……）

（聞いてた通りだ……）

（ああ……。ゴロゴロしてるお姉ちゃんは可愛いなあ……♪）

団扇を扇ぎながらぐったりとしている唯を見て、律はほんわかとしていた。

梓はジト目で唯のを見ており、憂はうっとりとしながら唯を見ていた。

(アハハ……。本当に唯のやつはだらけてるな……)

統夜もあまりにだらけている唯を見て苦笑いをしていた。

『おいおい、いくら夏休みだからってだらけ過ぎだろう』

イルバだけが思ったことを言葉に出していたが、唯はイルバの話を全く聞いていなかった。

憂はキッチンへ移動すると、冷蔵庫で冷やしてあったスイカを均等にカットし、統夜たちは美味しいスイカに舌鼓をうっていた。

スイカをある程度食べた統夜は唯の家を後にし、エレメントの浄化を再開した。

唯の家を出てから統夜は2時間ほどの時間をかけてエレメントの浄化を行っていた。

エレメントの浄化が終わる頃には夕方になるかならないかの時間であったため、統夜は番犬所へ向かった。

しかし、この日は指令がなかったため、統夜は街の見回りを行っていた。

統夜は見回りの途中で夕食を済ませ、すっかり夜になった街中を歩いていた。

しばらく街中を歩いていたその時だった。

『統夜。ホラーの気配だ!』

「……………わかった、行こう、イルバ」

統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラーが現れた場所へと急行した。

イルバがホラーの気配を探知した頃、茶色い髪にツインテールの少女が街中を歩いていた。

彼女の名前は若王子いちご。桜ヶ丘高校に通っており、統夜と同じクラスであった。彼女はとても愛らしい容姿ではあるものの、その性格は相当クールであり、さらつと毒舌を吐くなどギャップがある少女であった。

いちごはクラスメイトである統夜のこととはもちろん知ってはいたが、そこまで話をしたりはしていなかった。

この日は自身の用事があつて出かけており、今はその帰りであった。

(……ずいぶん遅くなつちやつた……早く帰らないと……)

思いのほか帰りが遅くなつてしまったので、いちごは急ぎ足で自宅へ向かつていた。こうしてしばらく歩いてきたその時であった。

「……」

「？」

いちごの視界に1人の男の姿が映つたのだが、その男は挙動不審な動きをしていた。

(なんなの、あの人……。気持ち悪い……。関わらない方がいいわよね……)

いちごは目の前の男を訝しげな目で見ており、男を避けようとしたのだが、男はいちごに近付いてきた。

(！何なの!?!あの人、すごく怖いんだけど……)

少しずつ近付いてくる男にいちごは恐怖を覚えていた。

いちごは少しずつ後ろに下がるが、それでもなお男は近付いていた。

男のあまりの不審さに警察を呼ぶことも考えていた。

いちごが携帯を取り出したその時だった。

「こんな奴相手に警察なんて呼んでも無駄だよー」

いちごこと男の間に赤いコートを着た少年が割り込んできた。

「!?!」

「え?月影……君?」

いちごの目の前に現れたのはクラスメイトである統夜であったので驚いていた。

「おっと、若王子さんか。ずいぶんと災難みたいだね」

「うん……。キモい男に付きまとわれそうになつてて……」

いちごの毒舌を聞いた統夜は苦笑いをしていた。

「アハハ……。こいつが「人間」だったらそうなるよね」

「え?」

統夜の唐突な発言にいちごは哑然とするが、そんなこともお構いなしに統夜は魔法衣の懐から魔導ライターを取り出すと、魔導火を男の瞳に照らした。

すると、男の瞳から不気味な文字のようなものが浮かび上がってきた。

これは、この男がホラーであるという証拠でもあった。

「やれやれ……。指令はないのにホラーは現れるんだな。もしかして、ゲートから出てきたばかりなのか？」

統夜はため息をつくとも男を睨みつけていた。

「貴様……魔戒騎士か……」

「? 魔戒騎士?」

いちごは男が言っている魔戒騎士という言葉の意味が理解できなかった。

「若王子さん、ここは危ないから早く逃げるんだ」

「え? 月影君は、どうするの?」

「あいつを斬る」

統夜はドスのきいた低い声でこう宣言すると、魔戒剣を抜いて、構えた?

「!? け、剣!?!」

いちごは目の前で起こっている現状があまりにも訳が分からず困惑していた。

すると、男の体が少しずつ変化していき、この世のものとは思えない怪物へと変化し

たのであった。

「ひっ……!?か、怪物!?!」

「若王子さん!早く逃げろ!!」

統夜は強めの口調で逃げるように促すと、無言で頷いてその場から逃げ出したのであった。

「よし、これなら……」

統夜は目の前のホラーを睨みつけると、ホラーは自身の背中に生えている蝶のような羽を飛ばたかせ、飛翔していた。

『統夜!こいつはホラー、ピクロ。飛翔能力もあるしなかなか厄介な相手だぞ、気を付けろ!』

「そうみたいだな……。わかった!」

統夜が対峙しているホラーはピクロというホラーである。

その特徴は蝶のような羽を持っていることであり、その様相は醜さを持った妖精のようなホラーである。

上空に飛翔しているピクロは統夜めがけて突撃するが、統夜はその動きを見極めて回避していた。

統夜に攻撃をかわされると、ピクロは再び上空に飛翔し、統夜と距離を取っていた。

「くそっ！いちいち空に逃げるとか面倒くせえ奴だな！」

『奴は飛翔能力を持つているからな。その能力を活かしているんだろう』
「そうだろうな」

統夜は空に逃げながら戦うピクロに苛立つが、冷静であった。

「どうした？来いよ？それとも、お前は空を飛んでなきや何も出来ないのか？……ホラーのくせに情けないねえ……」

統夜は上空にいるピクロに思い切り挑発をしていた。

実力のあるホラーであればこの程度の挑発では乗らないだろうが、ピクロであれば挑発に乗るだろうと判断したからである。

「貴様……！馬鹿にしゃがって……！許さん！」

統夜の挑発にあっさりと乗ったピクロは統夜目掛けて突撃した。

「やれやれ……。こんなにあっさりと挑発に乗るなんて。この単細胞が……」

予想通りとはいえ、ここまであっさりと挑発に乗るとは思っていなかったので驚きながらも呆れていた。

そして統夜はボソツと呟くと魔戒剣を構え、ピクロの攻撃を正面から受け止めた。

「なっ!?俺様の攻撃を受け止めただと!?」

ピクロはこんなにあっさりと防がれるとは思っておらず、焦りを見せていた。

統夜は一瞬の隙を突いて両足を魔戒剣の一閃で斬り裂いた。

「ぐう………こいつ………強い！」

足を斬られたピクロは慌てて上空に飛翔するが、思うように力を出すことは出来ず、先ほどよりも飛翔した時の高度は下がっていた。

「よしっ！一気に決める………貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

奏狼の鎧を召還した統夜は魔導ライターを取り出すと、魔戒剣が変化した皇輝剣の切っ先に赤い魔導火を浴びせた。

そして統夜の身に纏う奏狼の鎧も赤い炎に包まれ、烈火炎装の状態となった。

統夜はピクロ目掛けて大きくジャンプをすると、赤い炎に包まれた皇輝剣を一閃した。

赤い炎の刃を受けたピクロの体は真つ二つに切り裂かれた。

そのままピクロの体は爆発四散し、ピクロは断末魔をあげながら消滅した。

統夜はそのまま地面に着地をすると、そのまま鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「さて………これでお仕事は完了だな」

指令はなかったものの、出現したホラーを討滅した統夜はそのまま自宅に向かおうと
していたが……。

「……ねえ」

「うお!!若王子さん!!逃げたんじゃないの!?!」

逃げ出したはずのいちごが統夜の目の前に現れ、統夜は驚いていた。

「……あの化け物は何なの?後、月影君がつけてたあの鎧も」

「!?!もしかして見てたの?」

統夜の問いかけにいちごは無言で頷いた。

いちごは一度逃げ出した後に統夜のことや心配になり、再び戻ってきたのである。

その時に統夜が鎧を召還し、ホラーを討滅する瞬間を見ていたのである。

「……ねえ、教えてよ。今日のことや誰にも言わないから……」

「……」

いちごは統夜の秘密を聞き出そうとするが、統夜は何も語らず黙っていた。

「……何も言わないならクラスのみんなにバラすよ」

「(!?!こいつ……。可愛い顔してあげつねえな……)」

いちごがここまで強行手段に出ると思わず、統夜の顔は引きつっていた。

「やれやれ……。仕方ないな……」

『おい！統夜！正気か！』

「!?指輪が喋った!？」

いちごは統夜が身につけている指輪が喋ったことに驚いていた。

「……………って思ったけどね」

統夜はいちごが驚いた隙を突いて魔法衣の懐から一枚の札を取り出した。

そして……………。

「ごめんね」

統夜はそれだけ言うといちごの額にその札を貼り付けた。

いちごはそのまま倒れ、意識を失ってしまった。

「さて……………後は……………」

統夜は気を失ったいちごを安全な場所まで運ぶと、そのまま帰路についた。

統夜の貼った札はホラーに関する記憶を消し去る効果があり、ホラーとの戦いに巻き込まれた人に貼る札である。

魔戒騎士や魔戒法師はホラーから人を助けると、その人のホラーに関する記憶を消さなくてははいけないので、このようなことを行う必要があるのである。

その後目が覚めたいちごは何故自分がこんな所にいるのか理解出来ず、ホラーとの記憶が消えた状態で帰路についた。

こうして、魔戒騎士である統夜の夏休みのとある1日が終了したのであった。

……続く。

——次回予告——

『新学期が始まったな。学園祭が近付いているというのにまさかこのようなことが起こるとはな。次回、「波乱」。この状況、どう乗り切る？ 統夜！』

第28話 「波乱」

長かった夏休みが終わり、新学期となった。

合宿が終わった後も統夜は魔戒騎士として忙しい日々を送っていた。

普段は朝からビツチリとエレメントの浄化を行い、夜はホラー狩りという魔戒騎士としては当たり前の日常であった。

夏休み中盤には白夜騎士打無である翼からの指令で閑岱の地へ赴き、翼と猛特訓を行ったりもした。

その数日後にはとある事件に巻き込まれ、数日間桜ヶ丘を空けたりもしていた。

このような出来事がありながらも夏休みは終了し、統夜は魔戒騎士としてさらなる成長を遂げていた。

そして2学期もそれなりに経過し、学園祭が近付いてきた。

この日の放課後、統夜たちはいつも通りティータイムを行っていた。

「……♪」

梓は鼻歌を歌いながらご機嫌な様子であった。

「どうしたの、あずにゃん？ご機嫌だねえ」

「エヘヘ♪もうすぐ学祭でライブが出来ると思うとワクワクしちゃって♪」

梓がここまでご機嫌だったのは、もうすぐ学祭でライブが出来ることが楽しみでワクワクしていたからであった。

『そういえば梓は学祭でのライブは初めてだったな』

「はい！だからすごく楽しみなんです♪」

イルバの言う通り、今年の春にこの高校に入学した梓は初の学祭ライブであるため、とても楽しみだったのである。

「私、去年の軽音部のライブも見たかったです！」

梓は去年の学園祭ライブを知らないので好奇心でこう言うのだが、紅茶を飲んでいた滯は梓の話の聞くと紅茶を吹き出してしまった。

「去年は滯、大活躍だったからなあ」

律がニヤニヤしながら滯をからかうと、滯はブルブルと震えだした。

去年の軽音部のライブは滯がボーカルを務め、好評のまま幕を降ろした。

しかし、終了して撤収する時に滯はコードを足に引っ掛けて転んでしまった。

その時にスカートが捲れ上がってしまい、公衆の面前でのパンモロという出来事を起こしていたのである。

それ以降、去年の学園祭のライブは滯に取って最大級のトラウマとなってしまうたの

である。

「去年の学祭のライブならビデオに撮ってあるわよ！」

1枚のDVDを手にしたさわ子が音楽準備室に入ってきた。

そのDVDの中身を察した漣はビクンと肩をすくめていた。

「うわあ！見たいです見たいです！」

梓は見たかったDVDにとても興味津々だった。

「あ、梓……考え直さないか？」

漣はどうしても去年のライブを見られたくないのか必死に止めようとしていた。

「仕方ないわね……唯ちゃん、りっちゃん！」

さわ子は指をパチン！と鳴らすと、唯と律の2人は漣を捕まえて無理矢理引つ張り出

していた。

「はーなーせー!!」

漣は完全に動けなくなったのか涙目になっていた。

「それじゃあオススメシーンから……♪」

『おい、さわ子。そこは最初から再生した方がいいんじゃないのか?』

ノートパソコンの電源を入れ、DVD再生の準備をしているさわ子にこうイルバが言

及していた。

「わかってないわね、イルバ。ただ単純に再生したら面白くないじゃない！」
「いやいやいや……そんなことないんじゃないのかなあ」

統夜はさわ子の極論を聞いて苦笑いをしていた。

漣は「梓、やめとけ、呪われるぞお！」と往生際が悪くDVD再生を阻止しようとしていた。

そしてDVDは再生され、ライブ後の映像が流された。

問題のシーンが流されてしまい……。

「み……見ちゃいました……」

問題のシーンを見た梓は顔を真っ赤にしていた。

「ああ……」

そして何故か統夜も顔を真っ赤にしていた。

「!!と、統夜！お前まで見るなあ!!」

DVDが再生された後解放された漣はテーブルに置いてあったバンド雑誌を統夜に投げつけた。

「ぐえっ!!」

ちょうど本の角が統夜に直撃し、統夜はそのままダウンしてしまった。

『やれやれ……。とんだ災難だったな。このラッキースケベが……』

イルバはこう眩くと今までのやりとりに呆れていた。

統夜がダウンした状態で、今度はDVDを最初から再生した。

舞台の幕が上がると、ゴスロリのような衣装を着た4人と黒っぽいシャツを着た統夜の姿があった。

しばらくすると、演奏が始まり、梓はその演奏に聴き入っていた。

「……それにしてもライブの時だけは皆さん凄くいい演奏をしますよね」

梓は演奏を聴いて思ったことをポツリともらしていた。

「ほーお？言うようになったな。このおー」

律は梓の頭をグリグリとしていた。

「……ふっ、ふふふっ！」

唯は去年のライブの演奏を聴いて急に吹き出すと、そのまま笑い出した。

「ん？何？」

唯の隣でライブの演奏を聴いていた紬は首を傾げていた。

「ふふっ……何か色々思い出して……ふふふ！」

唯は自分の歌声を聴いたときに去年のライブのことを思い出して笑っていた。

「ああ、確かこの時、唯ちゃんは声が……ウフフ♪」

唯は去年の学園祭ライブの直前、歌とギターを同時にこなす練習をし過ぎたせいで喉

を痛めてしまったのである。

そのためボーカルが唯から滞へと変更になり、どうにかライブを行うことが出来た。その時唯はコーラスを担当したのだが、喉を痛めていたせいで声はカラカラであったのだ。

「……梓にとっては初めての学園祭でのライブだな」

梓の頭をグリグリしていた律は梓の肩を組むと、優しい口調でこう言っていた。

「はいっ！私、精一杯頑張ります！」

『まあ、肩の力を抜いて頑張るんだな』

イルバも梓にエールを送っていた。

「盛り上がっていると悪いんだけど……」

和が一枚のプリントを手に音楽準備室に入ってきた。

「ああ、和。どうしたの？」

「どうしたのじゃないのよ。……これ！」

和が律に渡したのは講堂使用届と書かれた紙であった。

「学祭で使う講堂使用届……出してないでしょ？」

「え!?!」

「ああ、忘れてたわ」

「そんな呑気な！」

律は学祭に参加するにあたって必要な書類を出し忘れていたみたいで、梓は驚いていた。

「いやあ、最近忙しくつてさあ」

『やれやれ。また書類の出し忘れか？律、お前さんが部長のはずなのに随分と頼りないじゃないか』

イルバも大事な書類を出し忘れても悠長にしている律に呆れていた。

「むっ！それを言うなよお！」

律はイルバに突っ込まれ、膨れっ面になっていた。

和は統夜が魔戒騎士であることを知っているので、イルバは遠慮なく口を開くことが出来たのである。

「とりあえずこいつを書くのが最優先みたいだな」

「そうですね……」

こうして統夜たちは講堂使用届を今この場で書くことになった。

「梓、お前書記頼むな」

律はそう言うとう用紙とペンを梓に渡した。

「まあ、いいですけど……」

梓は必要事項を記入していくのだが、すぐにペンが止まってしまった。

「あれ？名称ってバンド名でいいんですよね？そういうえば、私たちのバンド名って何でしたっけ？」

梓は1番の疑問をぶつけていた。

「あつ、そういうえばそうだな」

『俺様はてつきり桜高軽音部で定着していると思っていたがな』

「俺もそう思ってた。だけど、それは部活の名前だしなあ」

『まあ、バンド名を決めるいい機会かもな』

こうして統夜たちは講堂使用届を書くためにバンド名を決めることになった。

「それで……バンド名はどうします？」

「「えつと……# \$ * % & * !!」」

唯、律、滯がバンド名を言うが3人ともバラバラだったので、何を言っているのかわからなかった。

『おいおいおい！ちよつと待て！3人ともバラバラじゃないか！』

「イルバの言う通りだぞ！とりあえずどんなバンド名がないか1人1人意見を聞いていこうか」

統夜は話をまとめるために1人1人の意見を聞くことにした。

「んとねえ……」「平沢唯とずっとこけシスターズ」はどうかな？」

「あたしらはいったい何の集団だよ」

『それに、シスターじゃないのが1人いる時点でそれはダメだろう』

律がツツコミを入れ、イルバがダメ出しをすると、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「あのさあ……。」「ぴゅあぴゅあ」とかどうかな？」

「ああ、ネタはいいから」

滯の意見を律が一蹴するのだが……。

「あうう……。割と本気なのに……」

滯は自分の意見が却下され、涙目になっていた。

『おいおい、本気なのかよ?』

「まあ、滯の感性は相変わらずつてところだな」

統夜は滯が書く詞がともメルヘンなどところがあるので、その感性が出ていると理解していた。

「ねえねえ、統夜君はいいアイデアはないの?」

紬はバンド名の案を統夜に振った。

「うーん……。そうだなあ……」

統夜は真面目な顔をして考え込んでいた。

「……あつ！「魔戒歌劇団」とかはどうだ？」

「歌劇団って……。あたしらは踊らないだろう？」

「それに、端から見たらちよつと厨二っぽいバンド名ですよね……」

「!!マジか!？」

自分の考えたバンド名が梓に少し厨二っぽいと思われてしまい、統夜は少しショックを受けていた。

「あつ、あの！そうは言っても私は悪くないって思ってるんですよ！」

梓はショックを受けていた統夜を必死にフォローしていた。

「よしわかった！私が決める！」

「」「」「もう少しみんなで考えよう！」「」「」

統夜たちは一丸となってさわ子の言葉をスルーしていた。

「それじゃあ後で書類は生徒会室に持ってきてね」

今すぐは決まらなないと判断した和は生徒会室に戻ろうとしていた。

「ごめんな、和。待たせちゃって」

「いよいよ」

濡が申し訳なさそうに詫びを入れると、和は笑顔で返してくれた。

「和ちゃん！たまには帰りにお茶しようよ！」

「わかった。後でメールするね」

和は笑顔でこう返すと、音楽準備室を後にし、生徒会室に戻っていった。

「さて……バンド名は各自考えるところとして、練習しようぜ」

こうしてこのまま練習が始まるうとしていたのだが……。

「あつ、そうだ！ねえねえ、やーくん、あずにゃん。最近ちよつと音の調子が悪くて……」

「？何でしょうね？」

「とりあえず見せてくれないか？」

唯はギターケースから愛用のレスポールを取り出し、2人はそれを見たのだが……。

「……………これはこれは……………」

『これなら音の調子が悪いのも納得だぜ』

統夜はギターを見て唾然としており、イルバは冷静な分析をして納得していた。

「これ……弦錆びてるじゃないですか！これ、いつ弦を交換したんですか？」

「へっ？弦って交換するものなの？」

唯のとんでもない発言にその場の空気が一瞬凍りついていた。

「……………な、何い!?!……………」

唯を除く全員が唯の発言に驚いていた。

『やれやれ……………。それは問題だぞ、唯。それは音楽に詳しくない俺様でも知っているこ』

とだぜ』

イルバはギターに関してあまりにも無知な唯に呆れていた。

「ネックは反ってるし、これじゃあオクターブチューニングもめっちゃくちゃじゃないですか!」

梓の指摘は的確なものだったのだが……。

「落ち着け、梓!今の唯には到底理解出来ない!」

漣がフオローを入れたのだが、唯の思考は完全にオーバーヒートしていた。

「まあ、わかりやすく言えば大事にしなきゃダメだろう?つてことだよ」

統夜はわかりやすく唯に説明したのだが……。

「むう……大事にしてるもん!」

唯がすぐさま反論していた。

「一緒に寝たりとか、服を着せてあげたりとか……。とにかく大事にしてるんだから!」

「おいおい、大事にするベクトルが全然違うぞ!」

『ギターに服とか……。ギターは着せ替え人形じゃないぜ?』

統夜とイルバは的確なツッコミを入れていた。

「うう……。さわちゃん先生!なんとかしてよお!」

「ええ!」

唯はさわ子に助けを求めるが、さわ子は面倒くさそうなりアクションをしていた。

「そ、そういうのはお店に頼んだ方がいいんじゃないの？」

「先生、面倒くさいだけですネ」

「……………」

統夜の指摘が凶星だったのかさわ子は苦笑いをしながら黙っていた。

「とりあえず今日は練習どころじゃないから楽器屋に行つて治してもらおうか」

「ええ!?そこまでしなくても……………」

「唯、お前はギターのメンテは出来ないだろ? だったらプロに任せるべきだ。それに、唯のギターがそんなんじゃないや俺たちも練習どころじゃないからな」

「うーん…………。りっちゃんはお手入れなんてしてないよねえ?」

唯は同志が欲しかったのか律に対してかなり失礼なことを言っていた。

「しとるわい」

「やーくんは?」

(おいおい、ここで俺に話を振るのかよ…………)

今度は統夜に話が振られ、統夜は苦笑いをしていた。

「俺だつてちゃんとメンテはしてるぞ。最近弦の張り替えをしたのは1週間くらい前か。それにいくら律がいい加減で大雑把でも楽器のメンテはちゃんとしてるんだ。」

からしてなくても当たり前な言い方はやめるんだな」

「その通りだけど……。お前は一言多いんだよ！」

統夜の言葉が気に入らなかつたのか、律は統夜に拳骨をお見舞いした。

統夜は律の拳骨を受けるとしばらくの間うずくまっていた。

※※※

こうして統夜たちは唯のギターのメンテナンスをお願いするために行きつけの楽器店である「LOGIA」と呼ばれる店へと向かった。

「……私はここで待つてるよ」

店の入り口に到着するなり滞りがこう言い出した。

「え？何ですか？」

「私、左利きだし……。右利き用の楽器を見ても悲しくなるだけだし……」

楽器店は主に右利き用の楽器を主に扱っているため、左利き用の楽器は少なく、左利

き用の楽器を探すのは一苦勞なのである。

そんな事情もあって、滯は楽器店の中に入ろうとはしなかったのである。
しかし……。

「滯、なんか今日はレフティフェアをやってるみたいだぞ?」

「え!?!」

偶然にもこの日は左利き用の楽器のセールが行われていた。

それを聞いた滯の表情が変わると、レフティフェアのコーナーに直行した。
左利き用の楽器たちを見た滯の表情がぱあっと明るくなっていった。

「こ、ここは天国ですか!?!」

「アハハ……大袈裟だなあ……」

「て……店員さん!ここにあるの全部ください!」

「滯、落ち着け!」

統夜と律がツツコミを入れ、暴走状態の滯の発言をどうにか撤回させた。
《これ全部買ったらかなりの額になるな……。そんな金もないだろうに》

(イルバ、それは俺も思ったが、それは野暮な発言だぞ)

統夜とイルバはテレパシーでこのようなやり取りをしていた。

「とりあえず俺たちはギターを見てもらうよ」

こうして続夜、唯、梓の3人がカウンターへと向かった。

「すみません、ギターのメンテナンスを頼みたいんですけど……」

「はい。どちらのギターでしょうか？」

「これです」

唯は自分のギターケースをカウンターに置いた。

「それでは、中を確認させてもらいます」

店員はギターケースを開けるのだが、あまりの汚さにギョツとしていた。

「こ、これは……！ ヴィンテージギターですか？」

「すみません……ただ汚いだけです……」

「まだ買って1年です！」

「おい！そこは威張るところじゃないだろう？」

続夜は汚いギターを買って1年と宣言する唯にツツコミを入れていた。

「と、とりあえず終わったらお呼びいたしますので、しばらく店内でお待ちください」

こうして続夜たちはギターメンテナンスをお願いし、終わるまで店の中で待つことにした。

「………そういえば唯先輩は何であのギターを買ったんですか？」

「え？何でって？」

「だって重たいし、ネックは太いし、クセがあるじゃないですか」
「んとねえ……可愛いから！」

「え？可愛い？」

「うん。可愛いから」

唯のあまりにずれた発言に統夜と梓は啞然としていた。

それだけではなく偶然その話を聞いていた店員も思わず手を止めてしまった。

(唯(先輩)の感覚はよくわからない……！)

唯の感覚のずれに統夜と梓は思わず苦笑いをしていた。

「それじゃあ、俺はちよつと楽譜でも見てこようかな」

「あつ、はい！私たちはここで待ってますね！」

統夜はカウンター付近で待つ2人を置いて楽譜コーナーへと移動した。

統夜はギターの上を眺め、しばらく物色したのだが、欲しい楽譜がなかったので、すぐに唯と梓の元へ戻った。

「あつ、統夜先輩。なんかいい楽譜はありました？」

「いや、特に欲しい楽譜は見つからなかったよ」

「そうでしたか……」

統夜と梓がこのようなやり取りをしていたその時であった。

「お待たせしました！」

唯のギターのメンテナンスが終了し、ギターは先ほどとはうって変わり、ピカピカになっていった。

「ほわあ……」

唯はピカピカになった自分のレスポールに見惚れていた。

そして……。

「ギー太！」

唯はそう言つてギターを受け取り、そのギターに抱きついた。

(ギー太つて……名前付けてたのかよ……)

《唯のセンスは相変わらずだな》

(ああ、それは俺も思ったよ)

続夜はギターに名前をつける唯に少しだけ呆れており、イルバとテレパシーで会話をしていた。

「あつ、ありがとうございます！」

「いつ、いえ……。ああ、お題の方5000円になります」

店員がそう告げると、唯は固まっていた。

「へっ……? お金かかるの?」

「いや、当たり前ですよ」

（まあ、新しい弦を買ったりメンテナンス道具を揃えたら5000円前後つてところか……。まあ、あれだけ汚けりや妥当なところだろ）

統夜は冷静にメンテナンス代が妥当な金額だと判断していた。

「……………お金ない……………」

「ええええええええ!?!」

唯の爆弾発言に統夜と梓は驚愕していた。

「どうしたの?」

唯の手持ちがなくて困っていると、律と紬がこちらにやってきた。

「ああ、いえ……。唯先輩、メンテナンスにお金がかかるって知らなかったみたいで

……………」

「え? そうなの?」

「仕方ない……。その5000円は俺が立て替えるよ」

統夜はそう言つて財布を取り出した。

「さすがにそれは悪いわ。……………だけど、今、手持ちあつたかしら……………?」

紬は鞆に入っている財布を探し始めると、店員が慌て始めた。

「つ、紬お嬢様! こ、ここはサービスということぞ!」

店員がメンテナンスのお金はいらないと行ってきた。

(まあ、俺はともかく世話になってる社長の娘から金は取れないよな)

この「LOGIA」という楽器店は紬の父親が経営しているお店である。

以前唯はこの店でギターを買ったのだが、なんと紬が値切りをした結果、25万のギターを5万にしてもらったこともあった。

ちなみに統夜もこの時にギターを買ったのだが、統夜は18万のギターを一括で購入したのであった。

「えっ?でも悪いわ」

「とんでもない!日頃からお父様にはお世話になっておりますので、ここは……」

結局店員の熱意ある態度に押し切られ、ギターのメンテナンス代はサービスしてもらった。

「それじゃあ、そろそろ帰りますか」

唯のギターのメンテナンスが終了し、予定が終わったのでそろそろ店を出ることにした。

「その前に滯を呼ばないとな」

滯は今レフティフェアのコーナーを見ているので、全員で滯のもとへ向かった。

「ああ、あたし、滯を呼んでくるわ」

レフティフェアのコーナーに到着すると、律は滯を呼ぶために歩み寄った。

「滯、ほら、帰るぞ」

「やだ」

滯はこう即答し、その場から動こうとはしなかった。

「小学生か……。ていうかさ、みんな待ってんだって」

「やだ」

滯は全く聞く耳を持っておらず、みんなが待っているとわかれてもその場から動こうとはしなかった。

「まったく……。ほら、滯ちゃん！」

このままでは埒があかないと判断したのか律は滯の肩を引っ張って無理矢理その場から離れようとした。

「ちよっ！律！」

「はい、帰りまちようねえ」

「嫌だつてば！」

滯はその場から離れたくないのか必死に抵抗をしていた。

しばらくこのようなやり取りが続いていたのだが……。

ドスン！

滯はその場で尻餅をついてしまったのである。

「あつ……。な、何やってるんだよ、滯！」

「もういいよ！」

けつこうな剣幕でこう言い放つと滯は立ち上がった。

「えっ？」

「……バカ律……」

こう滯が言った瞬間、律が一瞬だけ悲しそうな表情をしていたことを統夜は見逃さなかつた。

（律……。何か一瞬だけ悲しそうな顔をしてるけど、気のせいじゃないかな？……。それにしても何故だろう……。嫌な予感がするぞ……。何か一波乱がありそう……。そんな気がするよ……）

統夜はこの時胸騒ぎがしていた。

律と滯との間にこれから何かが起こりそう。そんな予感がしたからである。

この統夜の嫌な予感は当たらずも遠からずであり、この出来事はこれから軽音部に待ち受ける危機の始まりに過ぎないことを統夜は知る由もなかつた。

※※※

楽器店を出た統夜たちは、今その楽器店の入り口にいた。

「良かったあ！ギー太元に戻って♪」

唯は汚れていたギターがピカピカになり、ご機嫌であった。

「……名前つけてたんだな……」

その場になかったら滯は唯がギターに名前をつけていたことを初めて知り、苦笑いをしていた。

「これからどうする？」

「そうだな……。よし！お茶でも飲んでくか！」

「おいおい、またお茶かよ……」

律がティータイムをしようという提案に統夜が反論していた。

「あつ、ごめん！私、この後和ちゃんに約束あるんだ！」

唯はこの後予定があるため、参加出来ない旨を伝えた。

「えっ？和も来るの？私も行っ方がいい？」

唯の言葉に滯が反応し、唯についていいか聞いていた。

「そっかあ。みおちゃん。和ちゃんと同じクラスだもんね。いいよ！」

「本当？」

唯がこの後の予定についていくことを了承すると、滯の顔はぱあつと明るくなっていた。

そんな滯を見て、律は浮かない表情をしていた。

(……？律、まだだ。一体どうしたんだよ？)

《ほお……なるほどな。俺様は何となくわかったぜ》

(本当か？それで、律は何で様子が変わんだ？)

《今俺様が答えを言っちゃつまらないからな。自分で考えるんだな》

(なんだよ、それ)

統夜はイルバとテレパシーで会話をするが、望んだ答えを得られなかったので、統夜は唇を尖らせていた。

「……？統夜先輩？」

「ああ、悪い悪い。何でもないんだよ」

統夜は律に何かあると他のみんなに悟られないよう、こう言って笑いながらおどけて

いた。

そうしているうちに唯と滯はその場を離れ、和との待ち合わせ場所へ向かった。

「……なあ、みんな。これからあの2人を尾行しないか？」

「ええ？ いいんですか？」

「だって気になるじゃん！」

「ウフフ、確かにそうかもね♪」

律の提案に紬は乗り気のようにであった。

「まあ、俺もまだ時間あるし、構わないぞ」

「と、統夜先輩も!？」

(まあ、乗り気じゃないけど、律の様子がおかしい原因がわかるかもしれないしな……)

統夜が律の提案に乗ったのは、律の様子がおかしい原因を調べるためであった。

「そ、それじゃあ私も……」

「よし、それじゃあ、行くぞ!……あつ、統夜! そのコートは脱げよな! 目立つから」

「わかったよ」

こうして統夜たちは唯と滯の後をこっそりと追いかけるのだが、統夜は律に言われて魔法衣を脱いで歩き始めていた。

唯と漣は和と合流し、向かったのはとある喫茶店だった。

3人が入るのを確認した統夜たちはしばらく待ってから店の中に入った。

統夜たちは唯たちが見える席を陣取り、紅茶とスイーツを注文した。

統夜たちは唯たちの様子を見てみると、唯はテーブルに並べられたスイーツを頬張り、漣と和は楽しげに話をしていった。

しかし、遠いところにいたせいで、会話の内容までは聞こえなかった。

「……何だよ。何かいい雰囲気だな」

「……あの……こんなにくっつきする必要があるんでしょうか？」

「ウフフ♪まるで探偵さんみたいね♪」

統夜たちはこそこそと唯たちの様子を見ていたのだが、梓はここまでこそこそするとに疑問を感じており、紬はニコニコしていた。

「……よしつ、突撃！」

律は席を立つと、そのまま3人が座っている席に向かい、乱入した。

会話までは聞こえなかったのだが、漣が困惑しているということは雰囲気を統夜は感じていた。

律が乱入したことにより、唯たちがこちらの存在に気付いたようであった。

「やれやれ……」

統夜は注文した紅茶を飲みながら事の動向を見守っていた。

（律のやつ、やつぱり様子が変だな……。何でわざわざあつちに乱入したりしたんだ……？）

統夜は律の行動の意味が理解出来ず、紅茶を飲みながら訝しげな表情で向こう側にいる律たちの様子を見ていた。

（やれやれ……。統夜は気付かないか……。律の様子がおかしくなったのは単純なことなんだがな……）

統夜だけではなく、梓と紬も律の様子がおかしいことに困惑する中、イルバだけがその原因を察していた。

（俺様がこいつらの問題を解決させても意味がないから……。統夜たちが自分でこの問題を解決させないとな。さて、どうするんだ、統夜？）

イルバはこの問題に介入することはせずにただ見守ることに徹することにしたのであった。

統夜は直接の原因はわからないものの、自分自身の嫌な予感的中しつつあるということを感じていた。

学園祭が近付いているというこの時期に軽音部にこれから危機が訪れることを統夜

や唯たちは知る由もなかった。

……続く。

——次回予告——

『どうやら面倒なことになったみたいだな。解決のために奔走するのはいいが、あの日が近付いてるぜ！次回、「危機」。さあ、一体どうするんだ、統夜？』

第29話 「危機」

学園祭が近付いており、統夜たちは学園祭ライブに向けて練習を行おうとした。

しかし、唯がギターのメンテナンスをしなければいけないことを知らなかったので、ギターの弦は錆び、汚れも目立っていた。

統夜たちはこの状況をなんとかするために楽器店へ向かい、ギターのメンテナンスを依頼した。

その帰り道から律の様子が少しだけおかしくなっていた。

統夜はそのことに勘付いたのだが、その原因がわからず困惑していた。

そして翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を終わらせた後に登校した。

その日の昼休み、統夜たちは音楽準備室にいた。

学園祭が近いから昼休みも練習しようという律の提案からである。

統夜はパンを手早く食べたので良かったのだが、他のメンバーは昼食も中途半端な状態で練習に参加することになったのである。

全員集まったところでそれぞれ楽器の準備を始めていた。

「今年は滞、何をしてくれるかなあ」

準備の途中で律が不意に口を開けた。

滯はそんな律の言葉を聞き流し、むすーっとしながらベースのチューニングをしていた。

滯も昼食の途中で半ば強引に律に連れ出されたので、機嫌を損ねているのである。

「去年はパンチラだったし、今年はヘソ出しとかなあ？あつ、それとも……」

「練習するんだろ!!」

滯は声を荒げ、それを聞いた統夜たちの視線は滯に向いていた。

それと同時にいつもとは違う空気を感じ取ったのか不安そうに見つめていた。

「もちろんするよおー!」

「?…だったら……」

「たこ焼きい♪」

滯が困惑する中、律が滯をからかい始めていた。

「……三つ編みい♪……ポニテえ♪」

続いて律は滯の髪で遊び始めた。

統夜たちはどうしていいのかわからず、そのやり取りを見てることしか出来なかった。

「やめろって!」

滯も律の行動に困惑していたのだが、髪をいじって遊ぶ律を振りほどいていた。「もお！何なんだよ！」

「あつ、そうだ！滯にオススメのホラー映画があるんだけどさ！」

「うっ！……これ、練習しないなら教室戻るからな！」

「ふーん、戻れば？」

滯の言葉に律はこう返したのだが、それは滯だけではなく、統夜たちにも予想出来ないものだった。

「悪かったよ。和との楽しいランチタイムを『邪魔』してさ」

律は一切笑わずにこう言い放っていた。

その際『邪魔』と言う言葉が強調されてるようにも聞こえた。

「そんなこと言つてないだろ!!」

律の言葉が痼に障ったのか、滯の剣幕が音楽準備室内に響き渡っていた。

「ど……どうしたの？」

あまりにも重苦しい空気を感じて、唯は怯えていた。

「お、お茶にしない？お茶にしようよ。ね？」

紬はこの重い空気をどうにか和ませようとかう提案するものの、空振りに終わって涙目になっていた。

(ど…………どうしよう…………なんとかしなきや…………)

梓はどうしていいのかわからず、オドオドしていたが、この空気をどうにかしようと考えていた。

そして、考え抜いて梓が思いついた行動とは…………。

「み、みなさん！仲良く練習しましよ…………う」

猫耳をつけて場の雰囲気のを和ませようとした。

しかし、みんなは黙ったままであり、猫耳作戦が失敗したことで梓は恥ずかしそうにしていた。

「梓、よくやったな…………」

統夜は一生懸命この場の雰囲気を和ませようと頑張った梓の頭を撫でていた。

「…………みんな、とりあえず練習するぞ」

『統夜の言う通りだ。後輩の梓がここまで頑張ったのにそれを無下には出来ないだろう？』

「統夜先輩…………イルバ…………」

梓は統夜とイルバが自分のフォローをしてくれたことが何よりも嬉しかった。

「…………そうだな」

「うん。練習…………しよっか」

律と滯が了承したことで統夜たちは練習することになった。準備を終えた統夜たちは「ふわふわ時間」の演奏を始めたのだが……。

「……………」

ドラムの音があまりにも小さかったので、統夜たちは演奏に違和感を感じていた。しばらく演奏した後すぐに演奏を止めた。

「……………律？あのさ……………ドラムが走らないのは良いけど、パワー足りなくなかないか？」

「……………」

律は滯の話を聞いておらず、何故かぼうっとしていた。

「……………あれ？律の奴、なんか様子が変だな……………。やる気がないにしても変だし……………」

統夜は律が何故ここまでぼうっとしているのか疑問を持つていた。

「……………律のやつ、まさかとは思うけど……………」

統夜は何か思い当たる節があるようだった。

「あ……………ごめん、なんか調子出ないや……………。また放課後ねえ……………」

律はそう言うときスティックを持って出て行った。

「あつ……………りっちゃん！」

唯は慌てて律を追いかけようとするが……………。

「いっよ、唯！」

藩は律を追いかけようとする唯を引き止め、扉を見つめていた。

「……………バカ律……………」

(……………なあ、イルバ。律の奴、もしかして……………)

《ああ、統夜の予想は当たってると思うぜ》

(それに、最近律の様子が変なのって律のやつが……………)

《ほお、お前もようやく気付いたようだな》

(ようやくってイルバは気付いていたのかよ!?)

《まあな。だが、俺様がこの問題を解決しても何の意味がないと思ったからな。この問題はお前らの力で解決するべきだ》

(まあ……………確かにそうだけど……………)

統夜とイルバはテレパシーでこのような会話をしていた。

イルバは一足早く律の様子がおかしい原因を突き止めたのだが、統夜も律の様子がおかしい原因を何となくではあるが突き止めたのであった。

昼休みの練習は律の不在で何も出来ないまま、お開きとなってしまった。

その日の放課後、律は部活に現れることはなかった。

※※※

そして翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

「……律のやつ、今日は部活に来るんだろうか……」

『さあな』

「もう学祭も近いんだから何とかしないな」

統夜はこのままでは学祭のライブどころではないので、この問題を解決させようと思っ
意したのだが……。

『統夜。張り切るのは結構なのだが、明日が何の日か、忘れた訳ではないだろうな』

「明日が何の日かって？……あつ！まさか……」

明日が何の日か思い出した統夜は顔を真っ青にしていた。

『そう、明日は魔導輪に命を差し出す日なんだ。だから明日は学校も休まなければいけ
ないことを忘れるなよ』

「そうだった……。だったら今日中にはある程度なんとかしないと……」

魔導輪と契約した魔戒騎士は1カ月のうちの1日を魔導輪に捧げなければならない
のである。

命を魔導輪に差し出しての間は仮死状態となり、1日中眠り続けるため、学校はもちろん魔戒騎士の仕事も休まなければならぬのである。

魔戒騎士が魔導輪に命を差し出す日は番犬所は把握しているため、わざわざ番犬所に報告をしなくても良いのである。

統夜は魔導輪に命を差し出さなければいけないので今日中にこの問題がある程度は解決させようと決めたのである。

朝のエレメントの浄化を終えた統夜はそのまま登校し、放課後になったのだが、この日も律は現れなかったのである。

「……りっちゃん……今日も来ないね……」

「律先輩……どうしたんでしょうか……」

律はこの日も現れなかったので、唯も梓も律のことを心配していた。

「それはやっぱり濡ちゃんが冷たいからじゃない？」

「え？」

さわ子の指摘に濡は困惑していた。

（まあ、それは当たらずも遠からずって感じなんだけだな……）

統夜はさわ子の指摘は全く正解でも外れでもないと思っていた。

「軽音部のために……今日1日、りっちゃんのおもちやになつてきなさい！」

「ちよちよちよ……あんた、先生なのに何言ってるんですか!」

統夜はさわ子のとんでもない発言に思わずツツコミを入れてしまった。

「このまままだとりつちちゃんの心は荒んでいつて……牛井屋で食べきれもしない牛井の特盛を頼み……。挙げ句の果てにはヘビメタの道へ突き進むことになるわ!」

統夜はさわ子の説明したことをストレートに想像してしまい、苦笑いをしていた。

「いやいやいや……。それはおかしいでしょう?」

『統夜の言う通りだな。しかもそれは失恋した時のお前さんなんじゃないのか?』

統夜とイルバはジト目でさわ子にツツコミを入れていた。

「……ああ!」

さわ子はそのような統夜とイルバを睨みつけるが、統夜は苦笑いをしていた。

「でも……。このまま律先輩が戻らなかつたら……学園祭のライブはどうなるんでしょうか……?」

梓は一番心配なことを指摘し、不安げな表情をしていた。

「練習しよう」

澪はそう言うのと立ち上がった。

「でも……りつちちゃんがないのに……」

「仕方ないだろ」

「でも、律先輩を呼びに行かなくていいんですか？」

「……」

梓の質問に滯は何も答えなかった。

「……最近色々あったからな。気まずくて顔を合わせられないんだろ」

「!!そ、それは……」

「違うって言うのか？」

「……」

統夜の厳しい追及に滯は何も言うことは出来なかった。

「もしくは代わりのドラムを探すとかね」

さわ子の提案に統夜たちの視線がさわ子に集中していた。

「まあ、この状況じゃそれもやむなしか……」

「そう言うことよ。まあ、あくまでも万が一のことも考えとくってことだけど……」

「え……でも……」

唯たちは困惑していた。

急に律の代わりを探すなんて思ってもいなかったことだったからである。

そんな中……。

「りっちゃんの代わりはいません!!」

珍しく紬が声を荒げていた。

紬がこのような声を出すのは珍しいことで、統夜たちの視線は紬に集中していた。

「ムギちゃん……」

「待つてよう……。りっちゃんが来るの……。待つていようよ……。りっちゃん……。きつと来るから……」

「ムギ……」

紬の懇願するような言葉を聞いた統夜は優しく笑みを浮かべていた。

「そうだな。今さら律の代わりなんて思いつかないし、俺だって律のことは信じている。だからこそ、今俺たちに来ることをしないと」

「統夜君……」

紬は少しだけ流していた涙を拭き取ると、につこりと笑っていた。

「みんな、律のことは俺に任せてくれないか？ 今日中に俺に来ることをやろうと思っ
ているんだ」

「えっ？ これからですか？ 明日じゃ……。ダメなんですか？」

「明日は、俺は学校を休まなきゃいけないんだよ」

「えっ？ どうして？」

「俺がイルバと契約していることはみんな知っているだろう？ 魔導輪と契約した魔戒騎

士は1カ月のうちの1日の命を魔導輪に捧げなければいけないんだよ」

「!もしかして、明日が……」

「ああ。魔導輪に命を差し出す日だ」

「「「「……」」」」

魔戒騎士と魔導輪の秘密を改めて1つ知ることができて、唯たちは驚いていた。

「……!あ、そつか!だからやーくんは毎月必ず学校を休む日があるんだ!」

「そう言うことだ。風邪をひいたとかそう言う理由をずっと通して来たんだよ」

「統夜先輩の事情はわかりました。でも、律先輩がこんな状態なのに統夜先輩までいなくなるなんて……」

「そうは言っても1日だけだぞ。明後日には元気な顔を見せるさ。もちろん、律の元気な顔もな」

「統夜君……」

「と言う訳でみんなは学園祭に備えて練習をしてくれ。律のことは俺に任せろ」

そう言っつて統夜は立ち上がると、帰り支度を整えてそのまま音楽準備室を出て行つた。

「統夜先輩……」

「ま、統夜君なら大丈夫でしょ?あの子は1度やるつて言っつたら最後までやり遂げる子

だからね」

さわ子は統夜とあまり話すことはないのだが、統夜のことは魔戒騎士であることは抜きにしてこのような評価をしていた。

「そうね……。今は統夜君やりっちゃんを信じて、私たちは練習しましょう?」

「そうだな……」

「はいっ! そうですね!」

紬たちも今自分たちに来ることをするということ、練習を開始したのであった。

※※※

音楽準備室を後にした統夜は、校内で1つだけとある用事を済ませてから学校を後にして、それから律の家へと向かった。

「さてと……これからが本番かな?」

統夜は気合を入れると、律の家のインターホンを押した。

『……………はい！』

「あつ、すみません。俺は律さんと同じ軽音部の月影統夜です」

統夜は自分のことを明かすと、ドアの鍵が開いたので、そのまま中に入った。中に入ると、玄関で出迎えてくれたのは中学生くらいの男の子だった。

「あの……………姉ちゃんに何か用事ですか？」

（姉ちゃん？ということはこの子は律の弟って訳だな）

統夜は目の前の少年が律の弟であるとすぐに察しがついたのであった。

「ああ。律とちよつと話があるんだけど、律はいるかな？」

「姉ちゃんなら、実は風邪で寝込んで……………」

（やっぱりな……………！）

統夜は昨日の昼休みの練習の時から律が風邪をひいているのではないかと予想していたが、その予想が見事に的中したのである。

「やっぱりそうだったんだね。実は話もそうなんだけど、それは律のお見舞いも兼ねてだったんだよ」

「なるほど……………。とりあえず姉ちゃんなら部屋にいますんで、どうぞ」

「ありがとう。……………えつと……………」

「聡（さとし）です！ 田井中聡！」

「聡か……。ありがとう、邪魔するよ」

統夜は律の弟の名前を聞くと、そのまま中に入り、階段を上がって律の部屋に向かった。

律の部屋に到着すると、統夜はコンコンと部屋のドアをノックした。

「何？ 聡？」

「律、統夜だけど、入ってもいいか？」

「と、統夜!？」

律は統夜が家まで来るとは思っていなかったので驚いていた。

「あ、ああ。いいぞ」

統夜は律の部屋に入ると、律はベッドにいた。

先ほどまで寝ていたのだろうが、起き上がったのである。

「おう、律。急に悪いな」

「……今日あたしが部活に来なかったことを怒ってるのか？」

「いや、怒ってないよ。俺は律の様子がおかしいと思って心配になったから来たんだよ」

「そ、そんな……。あたしの心配なんて……。ゴホッゴホッ！」

律は言葉の途中で咳き込んでいた。

「やっぱりな」

「? 統夜?」

「律、お前、風邪引いてるだろ。それも昨日あたりから」

「……………」

『驚くと言うことは本当のようだな』

イルバの問いかけに律は無言で頷いていた。

「とりあえずみんなにはまだ言っていないから安心しな。お前が風邪だつてこの瞬間まで確信はなかったからさ、みんなに余計な不安を煽りたくなかったし……………」

「やれやれ……………統夜には敵わない……………」

律はこうボソツと呟いていた。

「その様子じゃ明日も学校に来るのは無理だよな?……………だったら明日濡をお見舞いに行かせるからお前ら2人で腹割って話し合え」

「え?」

「俺はお前の事情はよくわからないけど、最近お前が変だったのは何か思うところがあつたからだろ? だったらそれを全部濡にぶちまけるんだ。そしたら濡も思ってることをぶちまけるだろうからお前はそれを受け止めるんだ」

「……………あたしに……………出来るかな……………」

「問題ない、お前らなら出来るさ。だって律と滯は親友……だろ？」
「……わかった……」

「それでいい。今日はもう遅いし、明日滯がお見舞いに来るよう手配するから」
統夜は自分が明日学校を休むことは告げずに明日滯をお見舞いに行かせることだけを伝えた。

「さて……俺がいちやお前もゆっくり寝れないだろ？俺はそろそろお暇するよ」
統夜は律の部屋を出ようとするが……。

「なあ、統夜」

律に呼び止められたので、統夜は足を止めた。

「ん？どうした、律？」

「……ありがと……」

「礼ならまだ早いぞ。礼を言うならまずは風邪を治すんだな」

統夜はそう告げると律の部屋を出て、そのまま律の家を後にした。

「……さてと……。これでお膳立ては終わったな」

統夜は律の家を眺めながらこう呟いた。

『ああ。どうやらそうみたいだな』

(俺に出来るのはここまで……。律……滯……後はお前ら次第だからな)

『統夜。こっちの仕事は終わったんだ。今度は魔戒騎士の仕事をするぞ』

「ああ、そうだな」

自分のやるべきことを終えた統夜は魔戒騎士としての務めを果たすために行動を開始した。

※※※

翌日の昼休み、滯は律の様子が気になったのか律の教室を覗くが、律の姿はなかった。滯はそのまま自分の教室へ戻ろうとするが……。

「あつ、滯ちゃん！」

律のクラスメイトである紬と唯が滯を見つけて声をかけた。

「あつ……えつと……」

「実はりっちゃんね……」

「ああ……律の様子を見に来た訳じゃなくて……その……」

滯は素直になれずついこのようなことを言うので、紬と唯は顔を見合わせていた。

「……学校休んでるの」

「……え？」

紬から告げられた言葉に滯は驚いていた。

「あとね、統夜君から伝言があるんだけど……」

「？統夜から？」

「うん。……今日の放課後、りっちゃんの様子を見るように……だって」

「統夜が……そんなことを？」

「うん！あとね、後はりっちゃんと滯ちゃん2人の問題だから2人次第だよ！とも言うていたわ」

「……」

統夜からの伝言を聞いた滯は言葉を失っていた。

統夜は昨日の夜に紬に電話をし、律が風邪であるということと、先ほどの言葉を滯に伝えて欲しいと伝えた。

統夜はこの日、学校を休むため自分が滯に伝えることが出来ないのです、紬に伝言を託したのであった。

統夜の伝言を聞いて言葉を失っていた滯の表情が変わり、何かを決心したようであつ

た。

その日の放課後、漣は部活を休むと、そのまま律の家へと向かった。

律のお見舞いに行くためである。

漣は律の家の中に入ると、階段を上がり、律の部屋に向かった。

そしてドアノブに手を伸ばしたその時だった。

「……………みお?」

律は足音を聞いただけでそれが漣だとわかったようで、漣は驚きながらも部屋の中に入った。

「お前は超能力者か?」

漣は部屋の中に入ると、自分の荷物を置いた。

「わかるよお。漣の足音は……………」

律の声はいつもより元気がなかったのだが、風邪なら仕方ないと漣は思っていた。

漣はベッドの近くに腰をおろした。

「風邪はどうなんだ?」

「うん。まだちよい熱がある……………」

「ドラムに力なくても無理ないよな……」

「学園祭が近いのに……」

律は申し訳なきように言っていた。

「今は体を治すことだけ考えなよ。みんな待つてるからさ」

「みんなは怒ってる？」

「こう質問をする律はとても不安そうだった。

「怒ってないよ」

「濡は？」

「ないよ。当たり前だろ」

濡は律を安心させるためなのか優しい口調で穏やかな表情だった。

「だけどさ……。やっぱり律のドラムが寂しいよ……。私はさ、走り気味でも勢

いがあってパワフルな律のドラムが好きなんだよ」

「……プツ！プククク……！」

律は布団をかぶり、笑いをこらえていた。

「なっ！律、お前！」

「もう治ったあああ!!」

律はそう言って起き上がるが、それで風邪は治ることはなく、くしゃみをして鼻水を

垂らしていた。

「ほら、寝てなつて。まだ熱があるんだからさ」

漣は律をベッドに寝かせていた。

「それじゃあ、私は帰るからな」

漣が立ち上がると、律が漣の手を握った。

「ええ？寝るまでそばにいてよお！ねえ、お願いみおお!!」

「クスツ……やれやれ……」

子供のように駄々をこねる律を見て、漣は優しい表情で笑みを浮かべていた。

「エへへ……」

律は満面の笑みを浮かべていた。

「……統夜には感謝しないといけないな……」

「？統夜に？」

「ああ……。統夜のやつは最初からわかってたみたいだから……」

「……そうかもしれないな……」

統夜は事情を理解した上で漣に律の家にお見舞いに行かせたのではないかと漣は推

察していた。

「統夜つてさ、普段は魔戒騎士としての務めがあるから忙しいのに、みんなのことをよく

見てるよな。……まあ、あり得ない程の朴念仁だけど、優しいし、頼りになるし……」
「そうだな……」

「あたしき……。和に嫉妬してたんだと思う。漣があたし以外の人と仲良くしてるのがなんか面白くないって思ってたんだと思う……。本当にごめんな」

律は自分の本音を漣にぶつけたのだが、漣はその時に律の様子がおかしかった原因がわかって納得していた。

それと同時に、楽器店に行った辺りから自分と律との間にわずかな心のすれ違いがあったことも理解した。

イルバはすぐさまその事情を理解し、統夜もその事情を理解したために、解決のために奔走していたのであった。

「私も律に謝らないとな……。私たちは長い付き合いだからこんなすれ違うなんて思ってたなかったんだよ……。だから、本当にごめんな」

「……うん」

お互いが本音をぶつけ合ったことにより、2人とも満足そうな表情をしていた。

律と漣とのやり取りから1時間が経過し、唯、紬、梓の3人が律の様子を見に来た。

「……お邪魔しまーす……。ねえねえ、りっちゃん……」

唯が律に声をかけようとするのだが……。

「シーツ！……今寝かしつけてるところなんだよ」

濡の穏やかな表情を見たことで問題が解決したことを察し、3人は安堵の表情をしていた。

そして唯たちはそのまま律のお見舞いをするのだが……。

「何で唯まで寝てるんだよ」

律のこのことを見ている間に唯まで寝てしまったのである。

「やれやれ……」

濡、紬、梓の3人は眠る律と唯を見て笑みを浮かべていた。

「ねえねえ、唯ちゃんが目を覚ましたら統夜君の様子を見に行かない？」

「いや、今日はもう帰ろう。統夜にとっては月に一度のゆっくり出来る日なんだ。ゆっくり休ませてあげよう」

「そうですね。唯先輩が起きたら私たちは帰りましょうか」

しばらくすると唯が目を覚ましたので、唯たちはそのまま律の家を後にして、この日は解散となった。

※※※

そして翌日の放課後……。

「ぜんかああああああああい!!」

完全に風邪を治した律は元気いっぱいであった。

ちなみに統夜も仮死状態で1日眠り続けていたので、いつもより元気いっぱいであった。

統夜は登校した後に問題が解決したことを滞から直接聞いていたのである。

「やれやれ……どうやら無事一件落着いたみたいだな」

『そうだな、お前もお膳立てした甲斐があったんじゃないか?』

「そうだな。無事にこの問題が解決して良かったよ」

統夜は自分が昨日1日動けなかったものの、問題が無事に解決し、安堵していた。

「さて、学園祭まで時間がないし、気合入れていこうぜ!」

律の号令で統夜たちのやる気は全開だったのだが……。

「……っ!!あなたたち!講堂の使用届……出さなかったの!？」

和が血相を変えて音楽準備室に駆け込んで来た。

「あっ!」

重要な事実を思い出し、律だけではなく、唯たちの顔色が青ざめていた。

しかし、統夜だけは顔色一つ変えることなく、何故か余裕そうな表情を浮かべていた。

「……すいません!すいません!」

統夜たちは生徒会室にやってきており、律は生徒会長に頭を下げていた。

「でも規則は規則だから……」

どうにか講堂使用届の提出を待ってもらおうと交渉するが、生徒会長は首を縦には振らなかった。

「会長。私からもお願いします。届が出せなかったのは部長が風邪で欠席していたからです!……」

和も頭を下げて、助け舟を出していた。

「……ああ、とりあえず、そこは問題ないよ。……そうですね?会長?」

「『『『『えっ?』』』』」

統夜の思いがけない言葉に和を含めた軽音部のみんなの視線が統夜に集中した。

「ええ、その話は聞いていたからね」

「会長、あなたも人が悪いですね」

「いやあ、こういうドッキリみたいなのが面白くて、つい♪」

統夜と生徒会長はこう話しながら笑い合っていた。

「な、なあ統夜。これは一体どういうことなんだ?」

「簡単なことさ。一昨日、みんなと別れた後に真っ先に向かったのが生徒会室だったんだよ」

「生徒会室……ですか?」

「ああ。あんなことがあったからみんな絶対に講堂使用届のことを忘れてると思ったかな。それで生徒会長と交渉したって訳だ」

統夜が事情を説明すると、唯たちは納得はしたものの、驚いていた。

「まあ、前もって提出が遅れると申請してくれたので、今日か明日までは待つことにしたんです。……本来はダメなんですけどね」

本来であれば生徒会の規則で許可は出来ないのだが、きちんと理由を説明して提出が遅れると申請したので、特別に提出を待ってくれたのである。

「統夜先輩……。さすがは抜け目ないですね……」

「ああ、まったくだよ……」

統夜の先を読んだ行動に唯たちは驚きを隠せなかった。

「とりあえず、一刻も早くバンド名を決めよう」

統夜たちは音楽準備室に戻り、再びバンド名を考えることになった。

「なあ、やつぱり「ぴゅあぴゅあ」良くないか？」

滯は前回考えたバンド名が良いと今でも思ってるようだった。

「却下」

律は即座にその意見を切り捨てていた。

「握り拳！とかは？」

『おいおい、それじゃ演歌っぽいぞ』

唯のあまりに渋すぎる案にイルバがツツコミを入れていた。

「靴の裏のガム！」

唯はさらにと思いついたことを言っていた。

「今日、踏んだんだな」

「それに、完全に思いつきだよな、それは……」

律が推測し、統夜はツツコミを入れていた。

「それじゃあねえ……箆笥の角に薬指とかは？」

「それはさすがに変だろ……って！薬指!?逆に器用だな、おい」

唯の奇抜すぎる発想に律は思わずツツコミをいれた。

『唯、話が進まないからお前さんは黙ってる』

イルバにこう言われると、唯は膨れっ面になっていた。

「なあ、ムギは何かいい案はないのか？」

「そうねえ……充電期間とかどうかしら？」

「縁起悪っ!!」

紬の提案に統夜が思わずツツコミをいれていた。

「じゃあ、統夜はいい案はあるのか？」

「俺か? そうだな……狐の神様……三狐神囃子（いなりばやし）とかはどうだ？」

「狐って……あたしらに狐要素はないだろ」

律が統夜の案にツツコミを入れていた。

「衣装を狐っぽくしたら面白そうじゃないか？」

「わぁ♪可愛いかも♪」

紬は乗り気なのだが……。

「いや、さすがに私たちっぽくないですし、さすがに却下じゃないですか？」

「そうだな、却下だ」

「マジか!? 我ながら名案と思ったんだけどなあ……」

統夜は自分に意見が却下されたことに納得いかないようだった。

その後も色々アイディアを出し合うものの、なかなかいい案が出ず、あーだこーだと話していると、それをずっと聞いていたさわ子の怒りのボルテージが上がっていた。

そして……。

「まあどろっこしい!!」

なかなか決まらないことに業を煮やしたさわ子が使用届を奪い取った。

「これじゃあゆっくりお茶も出来やしない。こんなのは適当でいいのよ」

さわ子は思いついたバンド名を適当に記入していた。

そのバンド名とは……。

「放課後ティータイムねえ……」

『なるほどな、これならお前らにぴったりかもしれないな』

この放課後ティータイムというバンド名はイルバも好評価であった。

バンド名が決まり、完成した講堂使用届を和に渡すと、ホワイトボードにバンド名を書いて、記念写真を撮った。

ここからは学園祭に向かって突っ走っていく。

そう全員で決意したのだが、写真を撮った直後に唯がくしやみをしていた。

それを見た統夜たちは大丈夫だろうかと不安にかられていた。

しかし、その不安は的中し、さらなる苦難が待ち受けることを統夜たちは知る由もなかった。

……続く。

——次回予告——

『やれやれ。律と滯の問題が解決したと思つたらこれか。一難去つてまた一難とはよく言つたものだぜ！次回、「学祭 前編」。学園祭まであとわずかだぜ！』

第30話 「学祭 前編」

律と滯のわずかな心のすれ違いの問題は無事に解決し、統夜たちのバンドも「放課後ティータイム」というバンド名を得た。

こうして学園祭に向けて本格的に動き始めると思いきや、再びとある問題が発生してしまった。

学園祭まであと4日なのだが、唯が風邪をひいてしまったのである。

時期的に考えれば、律の風邪が移ったと推測するのが自然なのだが、もう一つ唯が風邪を引いてしまった要因があった。

それはバンド名が決まった翌日に遡る。

「さてと、学園祭も近いことだし、そろそろステージ衣装を決めないとね！」

統夜たちがいつものようにお茶を飲んでみると、さわ子がこう話を切り出してきた。

「ええ？別に制服でもいいじゃないですか！あんまり派手なのは嫌だし！」

「何言つてるのよ！それじゃつまらないじゃない！」

さわ子はこう言いながらビシツと統夜を指差していた。

「アハハ……何言つてんだか……この人は……」

統夜は思ったことをボソツと呟いたのだが……。

「ああん!?今なんて言つたあ!?月影え!!」

「すみませんでした!!」

デスメタルをやっていた頃の迫力でさわ子が統夜を睨みつけると、統夜は土下座で謝罪をしていた。

(怖え!この人、下手したらホラーより怖いぞ!)

《やれやれ……それはさすがにオーバーだろ……》

さわ子に怯える統夜をイルバはジト目で見ていた。

「……」コホン!……それじゃあ、この中から選んで!」

さわ子はどこからか大量の衣装を持ってきた。

さわ子は統夜たちがまだ1年生の頃、初ライブの衣装を作ったのだが、それ以来衣装作りにハマってしまい、事あるごとに統夜たちに自分たちの作った衣装を着るよう強要したりもしていた。

唯たちは自分たちが知らない間にこれ程まで衣装が増えていくことに驚いていた。

「例えばこの……ウエイトレスとかは？」

さわ子がウエイトレスの服を見せつけると、紬がいつの間にかウエイトレスの服を着てみんなに見せていた。

（おいおい……いつの間に着替えたんだよ……。それに、ここに男がいるんだから、知らんところで着替えるのはやめろよなあ……）

統夜は紬が素早く着替えることに驚きながらも自重して欲しいと思っていた。

「絶対嫌だ！」

滯はウエイトレスの服を即答で拒否していた。

「それじゃあ、チャイナ服は？」

紬は続いてチャイナ服に着替えて、披露した。

「もつと嫌だ！」

滯はまたもや即答で拒否していた。

「それじゃあ、バニー！」

紬はその次、バニーに着替え、みんなに披露した。

「これはあり……かな？」

「マジかよ!?!」

これも滯は拒否すると思っていたので、統夜は驚いていた。

「先生！なんだか楽しくなつて来ました！」

「でしょお？なかなか着せ替え甲斐がある子よねえ♪」

滯は混乱してしまい、平常の感覚を失い、さわ子は色々な服を着てくれる紬を見て楽しそうにしていた。

「帰つてこーい！」

律がドン引きしながらもツツコミを入れていた。

「仕方ないわね……。それならとつておきを見せてあげる！」

さわ子はとある衣装を紬に渡すと、紬は別室へ移動した。

「唯ちゃん、滯ちゃん。あなたたちはこれを着なさい」

さわ子は続いて唯と滯にとある衣装を渡し、2人も別室へと移動した。

そして数分後……。

「待たせたわね……。私自慢の衣装は……。これよ!!」

さわ子の宣言と共に、唯、滯、紬の3人が出てきたのだが……。

「!!これは……」

『ほお、素材は全然違うだろうが、なかなか再現されているじゃないか……』

さわ子自慢の衣装に統夜は驚き、イルバは関心していた。

唯が着ているのが邪美の衣装を再現した衣装だった。

続いて濡が着ているのは烈花の衣装を再現した衣装だった。

そして袖が着ているのは見たことのない魔戒法師と思われる衣装だった。

「さわ子先生、これは？」

「ふっふっふ……。この前の事件の時に魔戒法師だったかしら？その2人の服を見たときにピーン！と来たのよ！それで、夏休みにこれらの衣装を再現したのよ！」

さわ子は邪美と烈花を見たときにこの2人の衣装を再現したいという思いだけで、再現したのである。

「それで、ムギの着てる衣装は？そんな衣装を着てる魔戒法師なんか見たことないですよ」

「ああ、それね？それはね、私のオリジナルよ！魔戒法師の人はこんなの着てそうだなと思っただけだよ！」

「マジか……！」

『この衣装の再現度は認めざるを得ないみたいだぜ』

続夜は改めてさわ子の衣装のクオリティの高さに驚き、イルバもダメ出しする所が思いつかなかった。

「確かにすげえな……」

「はい……。私も驚きです……」

さわ子の衣装のクオリティの高さに律と梓も驚いていた。

「ふっふっふ……。りっちゃんも梓ちゃんの分もあるわよ！」

さわ子は律と梓にもとっておきの衣装を手渡した。

「……梓、着てみるか？」

「はい……」

律と梓も着なきやいけないという空気を感じ取り、別室へ移動した。

そして、数分後、律と梓は出てきたのだが……。

「おおー」

「りっちゃんもあずにゃんも似合ってるよ！」

律と梓が着ている衣装も統夜が見たことのない魔戒法師らしき衣装だった。

「うんうん、みんな似合ってるわね。私の目に狂いはなかったわ！」

5人にこの衣装を着せたさわ子はとても満足そうだった。

「だけど……やっぱり恥ずかしいかもしれないな……／＼／＼」

烈花の服を着た澤は顔を赤らめて恥ずかしそうにしていた。

「いや、みんな似合ってるよ！これなら「放課後ティータイム」じゃなくて「魔戒歌劇団」

でも問題なくいけるよ！」

『統夜。お前さん、まだ諦めきれないんだな……』

統夜は今でも「魔戒歌劇団」というバンド名がいいと思っていたので、そんな統夜を見てイルバは呆れていた。

「この衣装格好いいですけど、私たちのバンドの雰囲気には合いませんよね」

「あー、確かにそうだな」

「他の衣装を決めようか」

こうしてさわ子の魔戒法師を再現した衣装は好評価であったものの、バンドの雰囲気には合わないという理由で却下となった。

1 度制服に着替え直した唯たちはしばらく衣装を物色していると……。

「ねえ！見て見て！」

「これなんてどうですか？」

唯と梓は浴衣を改造した衣装を着ていた。

「ねえねえ、これ可愛いよお！」

唯はこの衣装をとても気に入ってみたいだった。

「本当ねえ。これなら動きやすそうだし」

袖も唯と梓が着ている衣装は好評価のようだった。

「まあ、確かにこれなら……」

「ああ、まだマシ……かな？」

律と滯の評価も悪くはなかった。

「ねえねえ、これにしようよお♪」

唯の熱いリクエストもあり、女性陣の衣装はこれで決定したのであった。

「まあ、どうにか衣装が決まったか。さて、それじゃあ練習を……」

「何言ってるの？やーくんの衣装がまだ決まってないじゃん！」

「ヴェエ!? な、ナニライツテルノカナー」

統夜はまさか自分に矛先が向かってくるとは思っていなかったので、驚いていた。

「そうですよ！統夜先輩だけ制服じゃおかしいですし……」

「ふっふっふ……。もちろん、統夜君専用の衣装もたくさん用意しているわよ！」

さわ子はどこからか統夜専用の衣装を持ってきたが、その種類はなかなかのものであった。

「べ、別に俺はいいだろ!？」

「何言ってるんだよ。お前だけ衣装を着ないとかずるいじゃないか！」

統夜はどうにか制服のままいこうとするが、滯から抗議が入ってしまった。

「なあ、みんな。みんなで統夜の衣装を決めないか？」

「まあ♪それは名案ね♪」

「うん！りっちゃんに賛成♪」

「ああ……いや……俺は……」

『統夜。どうやら逃げ道はないみたいだぞ！』

「そ、そうみたいだな……」

統夜は冷や汗をかきながらそれでも逃げ出そうとするのだが……。

「ムギちゃん！」

さわ子が指をパチンと鳴らすと、紬は統夜を捕まえた。

「ちよ?! ムギのやつ、なんて力だよ? 動けないんですけど!」

統夜はどうにか脱出しようとジタバタするが、紬の腕力はかなりのものであり、脱出することが出来なかった。

そんな中……。

「」「」「ふっふっふ……!」「」「」

紬は統夜を捕まえながら黒い微笑みを浮かべ、残りの5人も黒い微笑みを浮かべながら統夜に近付いていった。

逃げる術を失った統夜の顔はみるみる真っ青になっていた。

「やめろ……来るな……!」

統夜の怯え方は強大な力を持つホラー、グオルブを倒した魔戒騎士とは思えないものだった。

それはイルバも思っていたようで……。

(やれやれ……。今の統夜はずいぶん情けない姿じゃないか。あのグオルブを討伐した魔戒騎士とは思えないぜ)

イルバはそんな統夜に呆れていたものの、この状況を楽しんでいた。

そして……。

「だっ……ダレカタスケター!!!」

統夜の悲鳴が音楽準備室に響き渡る中、統夜の衣装選びが始まったのである。

その間、統夜は言わば軽音部の着せ替え人形と化してしまい、あれやこれやと思いついた衣装を着せられた。

最初は抵抗していた統夜も無駄とわかった時点で抵抗をやめ、そして、考えることをやめた。

イルバはそんな相棒の様子を見てただただ楽しみ、笑っているだけだったのである。

こうして、どうにか統夜の衣装は決まったのだが、この日の出来事が統夜のトラウマになったの言うまでもなかった。

こうして衣装は決まったのだが、唯は浴衣を改造したような衣装が相当気に入ったよ

うで、この日はその衣装のまま帰宅し、そのまま過ごしていた。

季節も秋になってきているため、浴衣で過ごすとは当然寒く、冷えてしまったのも唯が風邪をひいた原因となっている。

放課後ティータイムのリードギターは唯の担当であったが、統夜はリードギターの練習もしていたので、最悪の場合、統夜はリードギターのパートと自分のパートを合わせて演奏することになったのである。

それを提案した滯は申し訳なさそうに統夜に頼んでいたのだが、統夜は「問題ない」と答えていた。

統夜はこの日から唯がいなくても曲のバランスを損なわないようにリードギターと自分のパートを合わせて必要な部分を演奏する練習を行っていた。

一見無謀なようにも見えるが、統夜が演奏するのは7割はリードギターのパートで、残りの3割が自分のパートなので、無茶なバランスにはなっておらず、どうにかなっていた。

時間の許す限り練習した統夜は1度番犬所に立ち寄った。

イレスに挨拶をした統夜は狼の像の口に魔戒剣を突き刺し、剣の浄化を行うと、魔戒剣を鞘に納めた。

「統夜、指令です」

この日はホラー討伐の指令があったので、統夜はイレスの付き人の秘書官から赤の指令書を受け取ると、それを魔導火で燃やし、指令を確認した。

「……わかりました。直ちにホラーを討滅します」

「頼みましたよ、統夜。……ところで、もうじき学園祭らしいですね」

「はい。4日後に行われます」

統夜は学園祭の日をイレズに伝えた。

「実は私も行きたいと思っっているので、楽しみにしていますよ♪……ところで、練習の方は順調ですか？」

「いえ、実は……」

「?どうしました？」

「唯が風邪を引きましてね……。今の状態だと、本番に間に合うかどうか……」

イレズに本当のことを話した統夜の表情は深刻そうな表情であった。

「そうですか、それは心配ですね……。ですが、問題ありません。私は、統夜や軽音部のみんなを信じていますからね♪」

「イレズ様……」

イレズの言葉は統夜にとってはかなり嬉しいものであった。

「統夜、魔戒騎士としての務めもそうですが、学園祭も頑張って下さいね」

「ありがとうございます！俺、頑張ります！」

統夜はイレスに深々と頭を下げると、そのまま番犬所を後にして、ホラーの搜索を開始した。

※※※

気が付けば夜になっており、統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を続けていた。

そして指令書に書いてあるホラーを発見したのだが、そのホラーは素体ホラーであった。

「さて、明日も学祭の練習があるんだ。一気に決める！」

統夜は魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を召還した。

統夜は魔戒剣が変化した皇輝剣を一閃すると、一撃で素体ホラーを葬り去った。

素体ホラーを討滅したことを確認した統夜は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞆に納めた。

ホラー討滅の指令を終えた統夜がそのまま家に帰ろうとしたその時だった。

「統夜……今日も見事だったな」

黒いコートを着た青年が統夜に声をかけてきた。

「……！零さん！お久しぶりです！」

その男は銀牙騎士絶狼の称号を持つ涼邑零であり、統夜と零はグオルブの事件以来会っていないなかったので、久しぶりの対面となった。

「おう、久しぶり♪そういえば聞いたぞ、統夜。お前、閑岱で翼にみっちりしごかれたんだって？」

「アハハ……。翼さんには厳しく指導してもらいましたよ……」

統夜は翼との修業を思い出し、苦笑いをしていた。

「まあ、その分強くなったみたいだな」

「あつ、ありがとうございます！」

「それはそうと、もうすぐ統夜の高校は学園祭なんだって？」

「ええ。4日後ですよ」

「そっかあ、鋼牙やカオルちゃんにも伝えとくよ。特にカオルちゃんが楽しみにしてた

からさ♪」

現在、黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙と婚姻している御月カオルは、元々桜ヶ丘高校の卒業生であり、さわ子の同級生でもあった。

それ故に統夜が桜ヶ丘高校に入ったと知り、学園祭は行きたいと考えていたようである。

「そういえばカオルさん、桜高のOGですもんね」

「俺も楽しみにしてるんだぜ♪学園祭って出店が出るんだろ？クレープとか、チョコバナナとかスイーツもいっぱいあるだろうし♪」

（アハハ……学園祭当日、スイーツをやる店はあり得ないほどの戦場になるだろうな……）

零の甘党ぶりをよく知っている統夜はスイーツをやる店の繁盛ぶりを想像して苦笑いをしていた。

『ゼロ、学校のお祭りなんだからほどほどにしておきなさいよ』

零の相棒であるシルヴァがこう零をたしなめていた。

「わかってるって♪」

『はあっ……本当かしら……』

零の甘党ぶりをよく理解しているシルヴァは苦笑いをしていた。

「さてと……それじゃ俺は行くな。統夜！軽音部でライブもやるんだろ？そつちも楽しみにしてるからな！」

「はいっ！ありがとうございます！」

統夜は零に深々と頭を下げると、それを見た零は苦笑いをしながらその場から立ち去った。

『統夜。俺たちもそろそろ帰るか』

「ああ、そうだな」

ホラーを討滅し、久しぶりに零と会うことが出来た統夜はそのまま帰路についた。

※※※

翌日の放課後、この日も唯は休みであったが、迫り来る学園祭に備えて練習していた。現在はライブで演奏する「ふわふわ時間」の練習を行っていた。

♪ジャジャーン!!

「統夜、どうだ？行けそう？」

「まあ、なんとかって感じかな？正直なところまだまだ課題は山積みなんだけどな」

統夜はどうかこなせてはいるものの、自分の演奏には納得していなかった。

「そ、そんなこと無いですよ！ー日練習しただけでここまで出来るのはさすがです！」

「梓、そう言ってくれるのは嬉しいが、ダメ出しをくれた方が嬉しいかな？その方が改善点も見つけられるし……」

「えっ……その……」

『まあまあ、統夜。そんなに気張る必要はないぜ。今のまま練習をこなせば問題ないと俺様は思うぜ』

梓にダメ出しを強要する統夜をイルバがたしなめていた。

「まあ、確かにイルバの言う通りだけど……」

統夜はイルバの言葉は理解したが、納得はしていなかった。

「私もイルバの意見に賛成だ。統夜は魔戒騎士としての務めもあるんだろう？だからあまり無茶はしないでくれ」

「そうね、高望みすることも大事だけれど、まずは自分の体も大事にしないとね」

「そ、そうだな……」

濡と舐にもこう言われたため、統夜は納得せざるを得なかった。その時だった。

「やつほー」

唯が音楽準備室に入ってきた。

「あつ、来た！」

「唯先輩！風邪は大丈夫なんですか？」

「え？あつ、風邪か……。ゴホッ！ゴホン！ゲフン！」

「わざとらしい……」

唯の咳がわざとらしい咳だったのか梓は呆れていた。

「それにしても唯ちゃんが元気になって良かったわあ♪」

「はい！まだ治るまでかかりそうだって聞いてましたし」

「憂が真剣に看病してくれたんだよ！」

「つていうか治ったんなら朝からちゃんと来いよなあ。みんな心配してたんだぞ」

「そ、そう！授業が終わる頃に良くなったの！」

「サボりたかっただけだろ……」

唯の言葉に律は呆れていた。

「……」

全員が唯が治ったことに喜ぶ中、統夜は何故か黙っており、ジト目で唯のことを見ていた。

（怪しい……。熱があるって言ってたよな？それってすぐ治るものなのか？それに、いつもの唯より少し声が高いような……。！まさか……！）

統夜は目の前にいる唯が本物の唯ではないと予想していた。

それはイルバも思っていたよう……。。

《おい、統夜。あの唯なんだけどな……》

（イルバ、皆まで言わなくてもいいぞ。俺の予想が正しければあいつは……）

このような会話をテレパシーで行い、2人は目の前の唯は偽者だと確信していた。

「それよりも早く練習しましょう！ねっ、唯先輩♪」

「そ、そうだね！」

とりあえず唯が来たということで練習することになった。

（まあ、実際の演奏となればこいつもボロを出すだろう）

統夜は演奏さえすればすぐにこの唯が偽者だとバレるだろうと思い、素直に演奏の準備を始めた。

全員の準備が整い、とりあえず先ほど練習していた「ふわふわ時間」を合わせることになった。

♪ジャジャーン!!

「ジャーン♪」

ふわふわ時間の演奏が終わったのだが……。

(((あれ!)))

唯(?)と梓以外の全員が今の演奏に違和感を感じていた。

それも下手という違和感ではなかった。

「なあ……どう思う?」

「わからないけど……」

「たまたまじゃないか……?」

この違和感に滲、紬、律は困惑していた。

そんな中、統夜は……。

(アハハ……。まさかここまでとは……)

《ああ、この演奏は本物以上のレベルだな》

(偶然だと言いたいけどな……)

統夜はこの違和感の正体がなんとなくわかっていたのだが、それを認めようとしなかった。

「……気のせいだとは思うけど、もう一回やってみよう!」

「そうね」

こうしてもう一度「ふわふわ時間」を演奏することになった。

♪ジャジャーン!

「ふう……」

「「「「……………」」」」

やはり演奏に違和感があるのか、統夜、漑、律、紬の4人は無言になっていた。

「……………なあ、唯」

「は、はい!？」

「完璧に合いすぎる!今までこんな感触なかったのに!!」

「唯のリズムキープが正確過ぎるんだ!何があった!？」

唯(?)の演奏が非の打ち所がないほど完璧だったので、漑と律が唯(?)に詰め寄っていた。

「な、何も…………」

(やっぱり…………。どうりで今まで以上に合わせやすい訳だよ)

唯(?)の演奏が正確だったので統夜も普段より演奏しやすかったのである。

(ここまで機械みたいに完璧な演奏が出来る時点でやっぱりこの唯は偽者だな。ということはやっぱり…………)

統夜はこの偽者の唯の正体の検討はついていた。

「いいじゃないですか！完璧に合ってるならそれで！私はすごく気持ち良かったです！」

「そうそう！『梓ちゃん』の言う通りだよ！」

「……え？」

梓も普段とは違う呼ばれ方のせいで目の前の唯（？）に違和感を感じていた。

「そ、そうよね？」

「何かいつもと違うから混乱しちゃったよ！」

「……『律さん』も『紬さん』も心配し過ぎだよ」

唯のこの一言で場の空気が一瞬で凍りついてしまった。

「えっ？律さん？」

「紬さん？」

言われた本人も困惑していた。

（あーあ……。やっぱりそうか。今のは完璧にボロを出したな）

統夜の疑惑も確信に変わっていた。

「もういいんじゃないか？これ以上はもう隠し通せないだろ」

「そうね……。もう唯ちゃんのフリはいいんじゃない？『憂ちゃん』」

統夜が唯(?)の正体を明かそうとしたその時、いつの間にか現れたさわ子があっさり正体を見抜いていた。

「「えっ!? 憂ちゃん!」」

漣、律、紬、梓の4人はまさか憂とは思っていなかったのか驚きを隠せなかった。

「みんなの目は誤魔化せても私の目は誤魔化せないわよ! だって……唯ちゃんよりおっぱい大きいじゃない!!」

「いやいやいや……そこかよ!」

さわ子が憂と見抜いた理由に統夜がツツコミを入れるが、その本人は恥ずかしいのか両手で胸を隠していた。

「な、ナンノコトヤラ……」

唯(?)は動揺したのかしどろもどろになっていた。

そのため、声色もどことなく憂に近付いていた。

「じゃあ私のあだ名言ってみて!」

「あ、ああああ……あずさ2号!!」

「偽者だ!!」

「ここで唯(?)の正体が憂であることが明白になった。

(あずさ2号って……)

《そんな感じの曲があった気がするな》

(ああ、確かに)

唯(?)の正体が発覚した中、統夜とイルバはテレパシーでこんなくだらないやり取りをしていた。

「ごめんなさい……。お姉ちゃん、まだ具合悪くて……」

憂は正体がバレて観念したのかいつものポニーテールに戻っていた。

とりあえず練習は一時中断となり、統夜たちはいつもの席に座っていた。

「それにしても似てたなあ……。全く気付かなかったよ」

滯は憂の完璧な変装に驚きを隠せなかった。

「なあ、統夜。お前、あの時一言も喋らなかったけど、さわちゃんより早く正体を見抜いていたのか?」

「まあ、最初から怪しいとは思ってたんだけどな……」

「さ、さすがは魔戒騎士ですね……」

統夜が最初から憂の変装を怪しいと思っていたことを知り、梓は驚いていた。

「もしかしてえ……統夜も憂ちゃんの胸見てわかったのかあ？」

律はニヤニヤしながら統夜をからかっていた。

「違うっての！そもそも演奏がまるで機械みたいに正確だったろ？だからおかしいって思ってたんだよ」

「まあ、確かにあれだけ完璧だったからな……」

「それよりも、憂ちゃんってギター弾けたのね！」

「いえ。お姉ちゃんに何回か触らせてもらっただけで……」

憂は唯に何回かギターを触らせてもらい、唯にギターの弾き方を教えているうちにここまで弾けるようになったという。

「な………なん………だと………!?何回か触っただけでここまで弾けるなんて凄すぎだろ！」

統夜は憂の才能に驚きながらも少しだけ嫉妬していた。

「そ、そんな………私は………」

統夜に褒められて嬉しかったのか憂は頬を赤らめていた。

「……………」のまま唯には休んでもらった方がいいのかも」

「おいおい」

律の言葉に統夜と澪が同時にツツコミを入れていた。

「梓ちゃんもごめんね。なんかベッドで寝てるお姉ちゃんを見てたら、居ても立っても居られなくて……」

憂は申し訳なさそうに梓に頭を下げていた。

『憂、気にすることはないぜ。お前さんは唯やこいつらのためにやってくれたんだろう？』

「イルバの言う通りだよ！私も憂がそこまでやってくれて嬉しかったよ♪」

「イルバ……梓ちゃん……」

イルバと梓のフォローが嬉しかったのか、憂は少しだけ涙目になっていた。

このようなやり取りをしていたその時であった。

「やつほー」

今度は本物の唯が音楽準備室に入ってきた。

「うわ！激しくデジャブ！」

「唯先輩！」

「ごめんねえ、心配かけて」

統夜たちは唯に歩み寄っていた。

「唯ちゃん、大丈夫なの？」

「うん！さつき起きたらねえ、なんか元気になつててねえ。……ふえ、ふえ、ふえつくしっ!!」

「!やべっ!!」

唯が思い切りくしやみをし、その時飛び出した鼻水が統夜に迫るが、統夜が咄嗟にかわしたことにより、鼻水は律の顔面に直撃した。

「……汚ねえー」

律は鼻水が直撃したことで啞然としていた。

憂は唯が持つてきたティッシュの箱からティッシュを取り出すと、唯の鼻をちーん!としていた。

「だからねえ、もう大丈夫♪」

「嘘つけ!……ああ、あたしにも一枚」

律は憂からティッシュを受け取り、顔面を拭いていた。

「……統夜、お前!咄嗟によけるなよなあ!お前がよけたからあたしに当たっただろうが!」

統夜が鼻水をかわしたことが納得できず、律は統夜に抗議していた。

「んなこと言っただって仕方ないだろ?体が勝手に動いたんだから」

統夜はホラーとの戦いでもギリギリのところまで攻撃をかわすということがあるので、

そのクセが私生活でも出てしまった結果だった。

「まあまあ、落ち着いて下さい」

梓がそんな律をなだめていた。

「……あつ！ギータ！こんなところにいたのかあ♪」

唯は長椅子に置かれたギータこと自分のギターを見つけると、それを手に取ろうとするのだが……。

「よっこいしょ……つて重っ！」

風邪で力が入らないのかギターを持った瞬間、ゆっくりとその場に倒れ込んでしまった！

「お姉ちゃん！」

「まったく、しようがないな……」

統夜は唯のギターを別の場所に移動させると、唯を抱き抱え、長椅子に寝かせた。

(……？何でみんなはそこまでドス黒いオーラを出しているんだ？)

唯を長椅子に寝かせた後に後ろを振り返ると、漑、律、紬、梓、憂がドス黒いオーラを出して統夜を睨みつけており、統夜は首を傾げていた。

《やはりお前さんはわからないか……。相変わらず鈍い奴だぜ》

(？？という事だ？)

統夜はイルバの言葉の意味が理解出来なかった。

その後、保健室から体温計を借りて唯の体温を測りながら袖が冷たいタオルを唯の額に当てたりして唯の看病をしていた。

やがて体温計の測定が終わり、漕が温度を見ると、漕は驚きを隠せなかった。

「!!まだ全然熱下がってないじゃないか!」

唯の熱はまだ全然下がっていなかったのである。

「ごめんね……。やっぱり駄目だね……。私抜きで本番の方がいいかも……」

「そんな……」

「あずにゃん……。やーくん……。ギターは任せたよ……」

唯は弱々しい口調で梓と統夜にギターを託そうとしたいた。

「「……」」

統夜と梓は何も答えず黙っていた。

しばらく考えた後に統夜は口を開いた。

「……断る」

「えっ?」

統夜の言葉に唯は驚いていた。

それは漕たちも同様であり、全員の視線が統夜に集中していた。

「断るって言ったんだ！学園祭までまだ3日もあるだろうが。そう簡単に諦めるんじゃないよ！」

「やーくん……」

「私も統夜先輩と同じ意見です」

「統夜さん……梓ちゃん……」

「やっぱり駄目ですよ！みんなでは出来ないなら辞退した方がマシです！」

梓は目に涙をいっぱい溜めてこう言い放った。

そして居た堪れなくなった梓はその場から逃げ出そうとするが……。

「梓！逃げるな!!」

統夜の剣幕を聞いた梓はすぐさま立ち止まった。

「統夜先輩……」

「唯、お前だつてわかつてるだろう？俺たちは6人揃つてこそ「放課後ティータイム」なんだ。唯抜きのリイブなんて意味ないしやる価値もない」

「やーくん……」

『そうは言うが唯はこの状態なんだ。統夜、お前はいつたいたいどうしたいんだ？』

イルバはあえて厳しい言葉を統夜にぶつけていた。

「そうだな……」

統夜は目を閉じて少しだけ考え事をしていた。

そして……。

「唯、お前に指令を与える」

「え？指令？」

「そうだ。これはお前にしか出来ない指令だ」

統夜の言葉に唯だけではなく、この場にいた全員が驚き、統夜の言葉を聞いていた。

「唯、お前はこれから本番までゆっくり体を休めて風邪を完全に治せ。それまでは何が
あろうと軽音部に来る事は許さん」

「やーくん……」

「お前は完全に風邪を治して全員で本番を迎えるんだ。だから絶対に諦めるな！」

統夜は唯に風邪を治すことに専念するように伝えた。

「……うん！わかったよ！」

「そして、梓！」

「はっ、はい」

「お前にも指令を与える！」

「えっ？私に……ですか？」

梓は自分にまで話が来るとは思っていなかったので驚いていた。

「今やっているパートの他にリードギターのパートも練習しておくように。これは唯がどうこうという訳じゃなくて今後のためにな」

「統夜先輩……。……はい！わかりました！」

「もちろん俺も今やつてる練習は継続する。今後のためにな。……みんな！今俺たちが出来る精一杯のことをやろう！」

統夜の言葉に全員が頷いていた。

その後、唯は憂に付き添われて帰り、練習を再開した。

この日はみっちり練習を行い、この日は解散となった。

本番が刻一刻と迫る中、統夜たちは今自分たち出来ることをやろうと決意し、日々を過ごしていた。

そして月日は流れ、学園祭当日となったのであった。

……。……続く。

『いよいよこの時が来たな。お前らがどんな演奏をするのか見せてもらおうか！次回、「学祭 後編」。その調べを響かせろ！放課後ティータイム！』

第31話 「学祭 後編」

月日は流れ、学園祭当日となった。

桜ヶ丘高校の学園祭はこの桜ヶ丘の中でも大きな規模の学園祭であり、多くの人で賑わっていた。

そんな中、黒いコートを着た青年が学園祭を満喫していた。

「これが高校の学園祭ってやつか……」

その青年……涼邑零は統夜から学園祭の話聞き、模擬店の食べ物目当てで来たのである。

それを物語るかのように、零は模擬店で購入したクレープやベビーカーカステラ。そしてチョコバナナなどを手に持ち、それらを頬張りながら歩いていた。

《もお、ゼロだったら……甘い物は控えなさいって言ってるのに……》
(わかってるって♪これでもいつもよりは遠慮してるんだぜ)

零はその店のスイーツを全種類注文するなど、甘党故にかなり無茶な注文をしたりもするが、今回は学園祭とのことで、注文は控えめにしている。

それでも各店で2種類から3種類くらいは注文していた。

当然その注文を聞いた生徒たちが哑然としたりもしていた。

しばらく模擬店を満喫していると……。

「……おい、零」

白いコートを着た青年が零に声をかけていた。

「おう、鋼牙。それに、カオルちゃんも来たんだな♪」

白いコートの男である冴島鋼牙は、黄金騎士牙狼の称号を持つ魔戒騎士であり、統夜とは前から面識があつた。

その鋼牙と共に行動していたのが、鋼牙の妻である御月カオルである。

カオルは桜ヶ丘高校の卒業生であることから学園祭にはずっと行きたいと思つていたので、画家や絵本作家としての仕事をが忙しく行く機会がなかなかあつた。

今回はどうにか行く機会を得たので、鋼牙とともに学園祭に来たのであつた。

「私、ずっと楽しみにしてたからねえ♪この学校の卒業生だし♪」

「そういえばそんなこと言つてたな」

鋼牙もカオルからその話によく聞かされていた。

「ところで零くん、さっそく満喫してるね♪」

「まあね♪これでも全然足りないくらいだぜ♪」

「零、お前は相変わらずだな……」

鋼牙は零が甘党であることはよく知っていたので、そんな零に呆れていた。

「そういえば統夜のライブっていつからだっけ？」

「んとねえ……あつ！13時15分からだつて！」

カオルは学園祭のパンフレットを取り出し、予定を確認していた。

「1時過ぎつてことか」

「ねえ、零くん。統夜君のライブが始まるまで一緒に学園祭を見て回ろうよ」

「もちろん♪まあ、鋼牙が良ければだけどな」

「……別に構わん」

「やったあ♪それじゃあ鋼牙、零くん、行こっ♪」

こうして鋼牙、零、カオルの3人はライブの時間まで模擬店や展示物を見て回っていた。

ちょうどその頃、統夜のクラスである2年3組ではお化け屋敷が行われていた。

その会場に1人の少女が向かっていた。

「………くんにはー」

「いらっしやい……つて！イレスちゃん!？」

統夜のクラスメイトはその少女……イレスを見て驚いていた。

イレスは以前留学生として1週間だけ統夜のクラスに潜り込んでいた。

統夜のクラスメイトたちはイレスを歓迎し、1週間の留学生活は実りあるものとなった。

「はいっ♪お久しぶりです♪」

「久しぶり!つていうかいっ♪日本に来たの!？学校は!？」

「じ、実は今日が学園祭だと統夜から聞いたのでイギリスから飛んで来たんです♪皆さんにも会いたかったですし♪」

イレスは嘘を交えてこう説明した。

「え!? そうなんだ。でも、そう言ってくれて嬉しいな♪」

「ねえねえ、一体どうしたの?」

お化け屋敷の会場となっている教室から数人が出てきた。

「あれ!? イレスちゃんじゃん!」

「久しぶり!! 会えるなんて思わなかったよ!」

「えっ、何々? もしかして今日のために日本に?」

「ええ、まあ……」

クラスメイトたちがイレスに詰め寄って来たので、イレスは苦笑いをしていた。

「イレスちゃんって、もしかして統夜君のライブを見に来たの？」

「そうですね。それもありますが、学園祭というものを見てみたかったです♪」

イレスはこう答えたのだが、これは嘘偽りのない、イレスの本心であった。

「そっかあ♪ねえねえ、軽音部のライブまでまだ時間あるし、良かったら私たちの手伝いをしてよ♪」

「え？で、でも……」

「いいからいいから♪」

イレスは半ば強引にお化け屋敷の手伝いをする事になり、1時間ほどお化け屋敷の手伝いをしていた。

統夜たちは音楽準備室で待機をしており、唯を待っていた。

この時点で機材は全て講堂に運び終えていたので、唯が来ればライブの準備は完璧であつた。

「……唯ちゃん……来ないね……」

紬は心配そうな表情を浮かべながらボソツと呟いた。

「そうだな、携帯は？」

「必ず間に合わせるってメールは来てたけど……」

「12時半か……」

『確かライブは13時15分からだったな？そろそろ来ないとさすがにやばそうだな』

イルバの言う通りライブが始まるのは13時15分からであり、13時には講堂に入っていないければならない。

そろそろ唯が姿を見せなければ唯なしでライブを行うことも考えなければならぬ。

「……おさらいしておくか？唯抜き演奏も」

律はステイックで鞆を叩きながらこう提案をした。

『まあ、この状況だ。それもやむなしかもしれないな』

「確かにそうかもな……」

律の提案にイルバが賛同し、滯も賛同していた。

「嫌です！やっぱり嫌です！このまま唯先輩抜きで演奏しても意味ないです！」

「確かにな。俺は唯は必ず来るって信じてる。だから唯抜きの演奏をおさらいしたって時間の無駄だ」

『そうは言っても最悪の状況は考えた方がいいんじゃないか？』

「イルバの言う通りだ。統夜の言うこともわかるけど、このままじゃ……」
イルバが統夜に指摘をし、漑が不安げに統夜に反論すると、統夜はため息をついていた。

「はあ……。なあ、漑。お前は唯が来るって信じてないんだな」

「っ！そんな訳ないだろ!!」

漑の剣幕に不穏な空気が漂うが、統夜はまったく気にする素振りはず、笑みを浮かべていた。

「ふっ……。それでいい」

「統夜、お前……」

「信じてるならどっしりと構えて待つてればいい。余計な不安は無駄でしかないからな」

統夜は唯が来ると信じているので、不安がる様子を一切見せなかった。

「……そうだな。統夜の言う通りだと思うよ」

唯が来ないのでは？と不安になっていた漑は統夜の自信に溢れた表情を見て、唯は来ると信じようと改めて思った。

それは漑だけではなく、他のメンバーも同様であった。

その時、音楽準備室の扉が開き、全員の視線が扉に集中していた。

音楽準備室に入ってきたのは和だった。

「どうしたの?……ステージは10分押しだけど、予定通り講堂に入って」

「ああ、わかった」

「……全員揃っているわよね?」

和は音楽準備室全体を見回すと、こう言っていた。

「……軽音部。出演者全員準備完了……つと」

もちろん全員揃っていないが、和は準備が完了していると書類に書き込んでいた。

「……和?」

「和も唯は必ず来るって信じてるんだな」

「ええ。……実は昔ね、こんなことがあったの」

こう言つて和が語り始めたのは昔の話だった。

唯と和は幼稚園からの付き合いなのだが、これはまだ2人が幼稚園の頃の話である。

唯は川でのザリガニ釣りに夢中になっていた。

バケツがザリガニで一杯になると唯はバケツを何処かへと運んでいた。

すると再び戻り、ザリガニ釣りを続け、再びバケツがザリガニで一杯になると、再びバケツを何処かへと運んだ。

それを日が暮れるまで繰り返し、和は帰宅してテレビを見ていたのだが、唯がバケツを持つて和の家を訪れていた。

唯は何処かへと移動すると再び和の家から出て行ったのだが、気になった和はお風呂場を覗き込んだ。

すると……。

風呂桶におびただしい数のザリガニがいたのであった。

「ひいっ!!」

その話を聞いた滯は顔を真っ青にして怯えていた。

「なんだそりゃ……」

「昔から変な人だったんですね……」

律と梓は唯の奇行に呆れていた。

「でも、何で今その話を?」

「和、唯は昔も今も好きなことにはそれだけに夢中になるってことなんだろう?」

「ええ、そうよ。だから、風邪のことなんか忘れちゃうわ。だから……」

和がしみじみと話をしていたその時、再び音楽準備室の扉が開いた。

「ちよーっす」

中に入ってきたのはさわ子だった。

「空気読め！」

「ええ？」

しみりとした空気をぶち壊したさわ子に律が抗議し、さわ子は驚いていた。

「……っというか今まで何やってたんだよお！みんな大変だったのに！」

「あら、もちろんブーツと過ごしてた訳じゃないわよ。寒さのことを考えて、あの浴衣の防寒バージョンを作っていたのです！」

「（（（そのやる気を他に回して欲しい……））））」

和を除く5人が心の中でツツコミを入れていた。

「そして、これがその衣装です！」

さわ子の紹介で音楽準備室に入ってきたのは……。

「やつほー、みんな！久しぶりだねえ♪」

さわ子お手製の衣装を着たカオルだった。

「「「か……カオルさん!」「」」」

衣装を着た意外な人物に統夜たちは驚くが、和だけは首を傾げていた。

「それにしても知らなかったよ。さわ子にこんな趣味があったなんて♪」

「まあ、言っただけだからね♪」

カオルは同級生の意外な趣味に驚きながらも普段着ることのない衣装を楽しんでい

た。

そして、カオルと行動していた鋼牙と零。さらにはレオも音楽準備室に顔を出していた。

「よう、みんな。久しぶり♪」

「!!?、零さん!?それに、鋼牙さんとレオさんも!?!」

鋼牙、零、レオの3人も入って来たことに統夜は驚いていた。

それは律たちも同様であり、目をパチクリとさせていた。

「……久しぶりだな、統夜」

「統夜君、夏休み以来ですね。そして皆さん、お久しぶりです♪」

「み、みなさん学園祭に来てくれたんですね!」

「おう! 模擬店はたっぷり満喫してきましたぜ♪」

(アハハ……。スイーツをやった店はかなり繁盛しただろうな……)

模擬店の繁盛ぶりを想像した統夜は苦笑いをしていた。

「ところで、カオルさんは何でその衣装を着ているんですか?」

「ああ、実はね。鋼牙と零くんとかで模擬店を回ってたならレオ君に会って、その後さわ子に会ったの」

「それで、私が作った衣装を着てみない? って聞いたなら即OKだったから、着替えてここ

に来たって訳」

カオルやさわ子の言う通り、鋼牙、零、カオルの3人は模擬店を見ていたのだが、途中でレオと合流した。

その直後にさわ子と出会い、さわ子が軽音部の衣装を作っていると話をし、着てみないかと提案したらカオルは即OKしたので、空き教室で衣装を着替え、鋼牙たちを連れてここまで来たのである。

「それに、この衣装はそれだけじゃないわよ!」

さわ子の紹介でもう1人が音楽準備室に入ってきた。

「し、失礼しまーす……」

その正体は、完全に風邪を治した唯であり、統夜たちは安堵の表情をしていた。

「ゆ、唯!」

「来てたなら真っ先にここに来い!」

律と滯が唯に詰め寄っていた。

「みんな……ごめんなさい……」

唯は申し訳なさそうにしながら梓の方を見ると、梓は目に涙を溜めて黙り込んでいた。

「……あずにゃん?」

「最低です！……みんなこんなに心配してたのに……。最低です！」

梓は俯きながらこう言うと、そっぽを向いてしまった。

「唯、後でちゃんと埋め合わせをしておけよ。梓が一番心配してたんだから」
続夜が唯にこう伝えると、唯の顔がぱあつと明るくなった？

「……あずにゃん！」

「まったくダメ過ぎです！だいたい、風邪をひいた時に……」

梓が最後まで言い切る前に唯は後ろからそつと梓に抱きついた。

「あずにゃん……ごめんね。心配かけて……。私、精一杯やるよ。みんなと一緒に……
ね？……最高のライブにするから……」

「……もお……。特別ですよ」

梓がはみかみながらもこう言うと唯の表情がさらに明るくなった。

「仲直りい！むちゅちゅー」

唯は唇を尖らせて仲直りのキスをしようと梓に迫るが、その前に梓の強烈な平手打ちが炸裂した。

「本当に……私のこと……心配してたの……かな？」

「多分……」

平手打ちを受けた唯の右頬は赤く腫れ、滯は苦笑いをしていた。

カオルは今までの一部始終を見ていて笑みを浮かべていた。

「うんうん♪こういうの……なんか青春っぽくていいね♪」

「ああ、それは何かわかるよ！」

カオルの言葉に零が賛同していた。

「青春って……そういうものなのか？」

「僕も、さっぱりです……」

鋼牙とレオは賛同出来なかったのか、首を傾げていた。

こうして、どうにかメンバーは揃い、ライブの準備は完璧に整ったように見えた。

しかし……。

「……さあ、みんな。そろそろ時間よ。移動して」

「『『『『『おお!!』』』』」

統夜たちは力強く答えていたのだが、唯がすぐに違和感に気付いた。

「あれ？ギータは？」

「えっ？」

「ここに置いていったよねえ？」

「あつ！あれ、憂ちゃんが持つて帰ったぞ！」

唯が熱が下がっていないのに学校に来た日、憂はギターを持ち帰り、唯の部屋にギ

ターを置いていたのである。

そのことを思い出した唯は顔を真っ青にしていた。

「そ………！そうだった！どうしよう!?!」

「しようがないわね……」

「さわちゃん先生……」

「これ………使いなさい」

さわ子が唯に渡したギターは自分が愛用しているギターだった。

「………ギターじゃなくていいのか？」

「………ていうか、ギター以外のギター弾けない……」

「「「「だろっなあ」」」」

統夜、律、滯、紬はそうだろうと予想していたので苦笑いをしていた。

「よっしやあ!!」

唯は自分のギターを取りに行くために音楽準備室を飛び出そうとするが……。

「唯！ちよつと待て！」

「ほえ?………やーくん?」

「今からだつたら唯の足じゃ間に合わないぞ」

「でも………ギターがないと……」

「それなら俺が行く」

「へ？やーくんが？」

統夜のまさかの提案に唯は驚きを隠せなかった。

それは律、漐、紬、梓、和も同様であった。

「ああ。だから唯はみんなと一緒にライブの準備をしていてくれ」

「でも……」

統夜の提案に唯は不安げな表情をしていた。

「心配すんなって。絶対間に合わせるから」

統夜の真つ直ぐな瞳を見た唯は、統夜を信じることにしたので、力強く頷いていた。

「和、本番まであとどれくらいだ？」

「今は13時前だから……あと15分しかないわよ」

「15分か……余裕だな」

統夜は長椅子に置いてある魔法衣を羽織り、少しだけウォーミングアップをしていった。

「みんな！俺のギターも講堂に移動しておいてくれ！それじゃあ行ってくる！」

「あつ、やーくん！家の鍵！」

唯は自分の家の鍵を統夜に渡した。

それを受け取った統夜はそのまま音楽準備室を後にし、唯の家へと向かった。

「……統夜先輩……」

「あずにゃん、大丈夫だよ！やーくんならきつと！」

「……はいっ！」

「それじゃあみんな、衣装に着替えて講堂に移動するわよ！」

さわ子の指示で唯たちは衣装に着替え、その後講堂へと向かった。

カオルは唯たちが着替えている時に私服に着替えていた。

※※※

桜高を離れた統夜は、唯の家に向かって全速力で疾走していた。

(……イルバ、ここら辺はあまり人はいないよな？)

《ああ、そうだが……。まさか、お前！》

(屋根伝いで行けばすぐに唯の家に着くだろ)

統夜は確実に間に合わせるために屋根伝いを移動しようとしていた。

《仕方ないか……統夜、あまり人に見られないよう注意しろよ!》
(わかってるって!)

統夜は人通りの少ない路地裏に移動すると、軽快にジャンプをして民家の屋根に着地すると、屋根伝いに移動し、唯の家を目指していた。

統夜は急いで向かっていたものの、人に見られないように注意しながら移動していた。

屋根伝いに移動を開始して数分後……。

『統夜!唯の家が見えて来たぞ!』

「そのようだ!」

統夜は唯の家の近くで屋根から降下し、再び走り出した。

唯の家に到着すると、鍵を開けて唯の家の中に入り、唯の部屋に入った。

「……!あつた!」

統夜は唯のギターケースを抱えると、すぐさま唯の家を後にした。

『統夜!まずいぞ!もう時間がない!』

唯の家の鍵をかけて、再び走り出したタイミングでイルバがこう告げたので、走りながら携帯を取り出して時間を確認した。

「13時9分……。このままじゃまずいな……」

統夜は焦りを感じながらとある民家の屋根に飛び乗った。

統夜は急いで移動しているが、このままでは間に合わないのは明白であった。

「仕方ない……!」

統夜は屋根伝いを移動しながら魔法衣の懐から魔戒剣を取り出した。

『統夜!? お前まさか……。鎧を召還する気か!? ホラーとの戦い以外での鎧の召還は禁じられていた。』

統夜の目論見を察したイルバは統夜をたしなめていた。

統夜たち魔戒騎士が鎧を召還するのはホラーを討滅するためのものなので、それ以外の場面で鎧を召還することは禁じられている。

これを破ったものは罰として数日分の命を没収されてしまうのだ。

「んなことはわかってるよ! 間に合わせると約束した手前、これしか方法はない!」

『まったく……。仕方ないな……。出来る限り誰にも見つかからないようにしろよ』

「ああ! わかつてる!」

統夜は高くジャンプをすると、魔戒剣を前方に突きつけ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、奏狼の鎧を身に纏った。

それと同時に魔導馬白皇を召還し、白皇に乗った統夜は家の屋根やビルの屋上を駆け

抜けていった。

(ま、魔導馬まで召還するのか!?これは見つかったら厳罰ものだな……)

統夜も重い罰を受けること覚悟で鎧と白皇を召還したのだろうと察したイルバはこれ以上は何も言わなかった。

(よし、学校まではあと少しだ!間に合え!!)

時間内に学校に到着するために、白皇は大きく飛び上がった。

その頃、そんな統夜の姿を偶然見かけた人物がいた。

「……………あれは……………まさか……………」

その人物は、エレメントの浄化を行っていた大輝であった。

「統夜…………… あいつ、何故鎧を召還してるんだ?鎧の私的使用は禁じられてると知っているはずなのに……………」

大輝は物凄いスピードで走り去る統夜を眺めていた。

「……………まあ、統夜にも事情があるだろうし、今のは見なかったことにしておこう……………」

大輝は統夜が鎧を召還していた事は見なかったことにして、再びエレメントの浄化を

行っていた。

『……統夜！学校が見えて来たぜ！』

「ああ！鎧を使うのはここが限界か！時間もやばいし」

鎧を召還してからすでに80秒は経過しており、そろそろ鎧を解除しなければ危険な状態だった。

「よし！一気に飛び上がるぞ！白皇！」

白皇は「ヒヒーン！」と鳴き声をあげると、再び高く飛び上がった。

そして……。

「よしっ、白皇！戻れ！」

統夜は白皇を踏み台にさらに高く飛び上がると、白皇の召還を解除し、白皇は魔界へと戻っていった。

高く飛び上がった統夜は、鎧を解除すると、学校の入り口付近で着地をした。

突如上空から統夜が現れたので、その場にいた人々は驚くが、そんなことはお構いな

しに走り出した。

※※※

その頃、軽音部のライブを直前に控えた講堂は、多くの人で賑わっていた。

「それにしても凄い盛り上がりですね……」

イレスは数人のクラスメイトと共に講堂に来ていた。

イレスたちは一番前の一番いい席を確保していた。

「軽音部のライブって盛り上がるからねえ♪」

「うんうん♪楽しみだねえ♪」

「はいっ！楽しみです♪」

クラスメイトたちだけではなく、イレスもこれから行われるライブを楽しみにしてい

た。

「……それにしても凄い人だね……」

同じ時間、講堂に来ていたカオルは、鋼牙、零、レオと共に講堂の入り口付近で立ち見をしていた。

「……ああ、それだけ統夜たちのライブを楽しみにしている奴がいるんだな♪」

「それにしても、統夜君、大丈夫でしょうか……」

レオは唯のギターを取りに行った統夜が時間内に現れるか心配していた。

「大丈夫だ。統夜なら間に合う」

鋼牙は統夜は必ず間に合うと信じていた。

「………そうですよね」

レオも統夜は必ず間に合うと信じることにした。

その時、講堂の扉が開き、2人の少女が中に入ってきた。

「うわあ………人いっぱいだあ………」

「うん、そうだね……」

その少女……憂と純は講堂の人の多さに驚いていた。

「こつちで見よつか」

「うん」

2人は偶然鋼牙たちの近くでライブを見ることにした。

「……あつ、皆さん！」

憂が偶然隣にいた鋼牙たちを見つけて声をかけた。

「お前は、確か唯の妹だったな」

「はいっ！妹の憂です」

「へえ、あなたが唯ちゃんの妹さんなんだ♪」

「えつと……あなたは？」

カオルと面識のない憂は戸惑いながらこう聞いていた。

「あつ、私は御月カオル。よろしくね、憂ちゃん♪」

「よ、よろしくお願いします……」

「あつ！レオ先生だ！」

純は鋼牙たちと共にいるレオを発見した。

「アハハ……。純さん、お久しぶりです」

「先生も軽音部のライブを見に来たの？」

「ええ、そんなところですよ」

純とレオはこのような会話のやり取りをしていた。

「もうすぐライブの時間ですね……楽しみですよ」

「ああ、俺も楽しみにしてるぜ♪」

零は統夜が唯のギターを取りに行っていることは伏せていた。

余計な心配はかけさせたくないという零の気遣いである。

(……統夜、お前はどんな感じでこの会場に来るんだ？楽しみにしてるぜ♪)

零は零で、この状況をも楽しむことにした。

そして、舞台袖では全ての準備を整えた唯たちが待機していた。

「統夜君……間に合うかしら……」

紬は不安げな表情になっていた。

「そうだよな……いくら統夜が魔戒騎士でも……間に合うかどうか……」

「大丈夫ですよ！統夜先輩なら必ず間に合います！」

袖と滯の不安を梓がこう言い放って一蹴しようとしていた。

「そうだけ！それに和だって、最悪の場合は少しだけ待つてくれるっていうし」

和は最悪の事態に備え、統夜が時間になっても現れない場合はライブ開始時間を少しだけ遅らせるよう生徒会に進言してくれたのである。

「そうだね！私たちはやーくんを信じて待つてよう！」

「みんな！そろそろステージで準備しなさい」

さわ子のこの一言で唯たちはステージに移動し、いつでもライブが始められる状態にした。

現在は13時14分。ライブ開始まで1分前であるが、統夜が現れる気配はなかった。

（まずいわね……。統夜君、間に合うかしら……）

和は時計の時間を確認しながら統夜がこの1分で現れるか心配していた。

「真鍋さん。ライブなんだけど、延長した方がいいかしら？」

ライブ開始まで間もなくとなり、生徒会長が和に確認をしていた。

「……………」

和は少し考えたのだが、この状況では、延長もやむなしと考えていた。

「……………それじゃあ、えん……………」

延長します。そう言おうとしたその時、ボタン！と力強く講堂の扉が開く音が聞こえた。

和は扉の方を見ると、そこにいたのは……。

「はあっ……はあっ……ギリギリ間に合った……」

時間ピッタリで講堂に到着した統夜だった。

「統夜君！」

和は歓喜の声をあげた。

それは唯たちにも聞こえていたようで……。

「え？今、統夜君って言いました!?!」

「つとということ……」

「統夜、間に合ったんだな！」

「うん！そうだよ！」

「統夜先輩！」

唯たちは唯たちで統夜が間に合ったことを喜んでいた。

「統夜、どうにか間に合ったようだな」

扉の近くにいた鋼牙が統夜に声をかけた。

「鋼牙さん……」

「ほらほら、統夜。早く行った行った！みんなライブを楽しみにしているんだぜ！」
「零さん……」

「そうだよ！早く行ってあげて！私も楽しみにしてるんだから♪」

「カオルさん……」

統夜はそれからレオ、憂、純の顔を見るが、3人は無言でウンウンと頷いていた。

「皆さん……ありがとうございます！」

統夜は鋼牙たちに礼を言うと、そのままステージに上がっていった。

それを見ていた和は笑みを浮かべていた。

「……今から5分後に、ライブを開始しましょう」

「そうね。……そのようにアナウンスをして！」

生徒会長はライブを5分後に行うというアナウンスをするように指示を出した。

それを聞いたアナウンス担当が、軽音部のライブは諸事情により、5分遅れて開始しますとアナウンスをした。

「みんな、待たせたな！」

統夜はステージに登り、唯たちの前に現れると、こう言って笑みを浮かべていた。

「統夜先輩！」

「ほら、唯。お前のギターだ」

統夜はギターケースを唯に手渡した。

「やーくん……。ありがとう……。ごめんね……」

「気にするな。どうにかライブに間に合ったしな」

統夜は唯に気を遣わせないように笑みを浮かべるのだが、唯の瞳には涙が浮かんでき
ていた。

「私……。いつもいつも……。みんなや……。やーくん……。ご迷惑を……。グスツ……。こんな
……。だ、大事な時に……」

風邪を引いた挙句ギターを忘れるというとんでもない失態をやったことに責任を感じ
た唯は泣き出してしまった。

「唯……。まったく……。お前ってやつは……」

統夜は優しい表情で唯を見ると、そのまま優しく唯を抱きしめた。

「「「!?」」」

突然の展開に先に律、漣、紬、梓が先に驚いていた。

そして……。

「ふえ!?や、やーくん!?!」

唯も突然の出来事に驚き、顔が真っ赤になっていた。

「気にするなよ。俺たちは、お前のことを迷惑だっと思ったことはないぞ。お前の元気

な姿や無垢な心に俺たちは何度も元気をもらったんだから……そうだよな、みんな！
「へ？あ、ああ！そこは統夜の言う通りだ！」

「そうだな。あたしたちはみんな唯のことが大好きだよ」

「うん♪」

「はいっ！」

みんなからの優しい言葉に唯はさらに泣き出してしまったので、統夜は唯の頭を優しく撫でていた。

その様子を見ていた4人は羨ましかったのかドス黒いオーラを統夜に向けていた。

(……？？？何でみんな、そんなに怖い顔をしてるんだ？)

《統夜。さすがに今の行動は迂闊だったな。これじゃあ唯の奴も勘違いするぞ》

(？勘違い？何をだ？)

《はあ……今の行動も無意識か……。天然ジゴロも大概にしろよな……》

イルバがテレパシーでこうぼやいていたので、統夜は首を傾げていた。

(まあ、唯の奴も統夜が天然ジゴロな朴念仁だっことは知っているし、勘違いすることはないか)

イルバはイルバでこのような結論に達していた。

「統夜君。お楽しみのところ悪いけど、そろそろ準備しなさい。ライブまで時間がない

わよ」

事の一部始終を見ていたさわ子がジト目でこう統夜に忠告をした。

「！そっだった！」

「衣装なら用意しているわ。そこで着替えなさい」

統夜な唯から離れると、さわ子から衣装を受け取り、誰の目にもつかないところで着替えを済ませた。

『大変長らくお待ちいたしました。これより、軽音楽部「放課後ティータイム」によるライブを開始いたします』

統夜の着替えが終わったタイミングでライブ開始のアナウンスが鳴り響いていた。

「おっと！急げ急げ！」

統夜は衣装の上から魔法衣を羽織り、ステージに移動した。

統夜は自分のギターを手に取り、幕が上がり、歓声があがるタイミングでチューニングを済ませた。

「みんな、色々あったけど、これが「放課後ティータイム」初のライブだ。思い切り楽しもうぜ！」

「うん！」

「ああ！」

「はいっー」

統夜の号令に唯たちは笑顔で答えていた。

ステージの幕が完全に上がると、多くの観客が統夜たちのライブを心待ちにしていることが統夜たちの目に見えていた。

統夜たちはお互いの顔を見合わせて準備が整っていることを合図した。

そして……。

「1・2・1・2・3・4!!」

律の合図で演奏が始まり、このライブ1曲目である「カレーのちライス」の演奏が始まった。

軽音部の曲は滝が作詞で紘が作曲をしている。

今演奏していき「カレーのちライス」もそのような形で作られた曲であり、テンポの良い非常に軽快な曲である。

律の問題や唯の問題があったため、練習が十分だったとは言えないが、6人の息はピッタリと合っており、演奏もバッチリな仕上がりがだった。

最初から最後まで良い感じで「カレーのちライス」の演奏は終了した。

演奏が終わると、客席から歓声があがっていた。

『皆さん、こんにはー！軽音部……もとい、「放課後ティータイム」です！』

統夜がMCを担当しており、統夜が挨拶をすると、さらに歓声があがっていた。

『只今演奏した曲は「カレーのちライス」でした』

統夜が曲名を言うと、その奇抜なタイトルに客席から笑い声が聞こえてきた。

『今日は、僕たちが「放課後ティータイム」というバンド名になってから初のライブとなります！皆さん、今日は思い切り楽しんでってください！』

統夜が会場を盛り上げるためにこう言うと、客席から歓声があがった。

『それでは、次の曲に行きます！次の曲は、プロを目指して活動しているSHUさんが作った曲で、心機一転を機に僕たちに譲ってくれた曲を演奏します！……「bright hope!」』

統夜は曲名を宣言すると、歓声があがり、統夜は前奏のギターパートを弾き始めた。それからドラム、ベースと入っていき、曲がスタートした。

この曲は統夜が説明した通り、プロを目指して活動しているSHUというギタリストが作った曲である。

彼はこの曲でプロを目指していたが、ホラーとの戦いに巻き込まれ、自分の覚悟の甘さを思い知らされた。

統夜に命懸けで目標に向かうということを教わったSHUは、新たな曲を作ってプロを目指すことを決意し、その時に統夜たちにこの曲をぜひ使ってくれと託した。

統夜がボーカルを勤めてこの曲は演奏されているのだが、統夜は演奏しながらその時のことを思い出していた。

SHUの思いも乗せて、統夜たちは最後まで演奏した。

『ありがとうございます！「bright hope」でした！』

先ほどの曲のような曲調であるものの、ボーカルが変わったことによつて曲の色も変わり、その違いを楽しんでいた観客から歓声があがっていた。

『次の曲は最初にやった曲と同じで、僕たちのオリジナルの曲を演奏します！聞いてください！「ふでペンくボールペンく」！』

またまた奇抜なタイトルに観客が少しだけざわついていた。

「……1・2・3！」

律の合図で「ふでペンくボールペンく」の演奏が始まった。

く唯 side く

私は今、ライブの3曲目である「ふでペンくボールペンく」を演奏しています。

風邪をどうにか治したけれど、ギー太を忘れた時はどうなるかと思っただけど、やーくんが私の代わりにギー太を持ってきてくれたおかげでどうにかライブをすることが出来た。

本当に……やーくんには感謝だよね……。

やーくんは魔戒騎士としてだけじゃなくて私たちのことを助けてくれるんだもん……。

それに、私がこれだけのことをしたのに、みんなは本当に優しいよね……。

私は演奏をしながらあることを考えていた。

入学式の時の私は何かしなきゃと思いつながら……。何をすればいいんだろうって思ってたよね……。

そして、このまま……大人になっちゃうのかなって思いつながら……。

でもね……。心配しなくてもいいんだよ、あの時の私。

すぐ見つかるから……。私にも出来ることが……。

夢中になれることが……。

大切な……大切な……大切な場所が!!

こう物思いにふけていると気が付けば演奏は終わっていた。

＼続夜 side 〵

……よし、ふでペンもいい感じだったな……。

お客さんもかなり盛り上がりつつあるし、最後の曲でさらに盛り上げないとな……。
だけど、その前に……。

「唯、最後のMCはお前に任せた！」

「え？私が？」

「ああ、お前ならうまく締めてくれると思ったからな」

「やーくん……。うん！わかった！」

学園祭のライブは終始俺がMCをやる予定だったけど、急遽最後のMCだけを唯に任せることにした。

何でかはわからないけど、そうした方がいいと思っただよな……。

『……改めまして、「放課後ティータイム」です！今日は私がギターを忘れたせいでライ

ブのスタートが少し遅れてしまっすいませんでした!……ギター太も忘れてごめん』
俺は今までのMCでライブのスタートが遅れたことを謝罪しなかつたのは、唯に任せようと思っていたからだ。

客席からは笑い声が聞こえてるし、みんな気にしてないよな?……多分……。

『目標は武道館!とか言つて私たちの軽音部は始まりました。ギターをかうためにみんなでバイトしたり、毎日部室でお茶を飲んでたくさんおしゃべりしたり、ムギちゃんの別荘で合宿したり、入部してくれる1年生を探したり……』

……懐かしいな……。この学校に入ったのは去年なのにずいぶんと昔のことのように感じるよ……。

今思い返すと、本当にいろいろなことがあつたよな……。

軽音部での楽しい日々があつたから、俺は魔戒騎士として今までやつてこられたんだと思うよ……。

『……脇目も振らず練習に打ち込んできた!なんてとても言えないけど……。でもここが!今いるこの講堂が!私たちの武道館です!』

唯のこの宣言に観客から大きな歓声があがつていた。

ふっ……。確かにそうなのかもしれないな……。

会場の規模なんて関係ない。俺たちは今ここで最高のライブを行っているんだから

!

『最後まで思いきり歌います！……「ふわふわ時間」！』

唯が曲名を宣言すると、律が合図をとって、演奏が始まった。

く使用曲↓ふわふわ時間 く

唯のギターはとてもしきいきとした良い音だった。

1曲目の時から思っていたけど、風邪のせいで全然練習出来てないっていうのによく感じだな！

歌ってる時の表情もすごくいきいきとしているな。

それはわかるよ。俺だって演奏しているこの瞬間がすごく楽しい！

サビに入った辺りで客席を見ると、何人かの生徒がステージの前で手拍子をして盛り上げてくれていた。

……客席全体を見回したんだけど、みんないい表情をしているように見えた。

あれ？ イレス様？ よく見たら先頭の1番いいところでイレス様が見学してるな。

……きつと、鋼牙さんたちも聞いてくれてるよな？ 俺たちの演奏を……。

今の演奏は6人の思いが1つになってるよな。じゃないとここまでいい演奏は出来るわけがない！

この時間が続けばいいのには思うけど、演奏というのはいつかは終わるもので、俺たちの気持ちが届もった演奏は終了してしまった。

あーあ……。もう終わりかよ……。本当に楽しい時間だからまだ終わってほしくないんだけど……。

その時だった。

♪♪♪♪

「!?ムギ、お前……」

演奏が終わり、会場が拍手と歓声に包まれて終了ムードが漂う中、ムギがふわふわのイントロを奏で始めた。

……まだ終わりにしたくないのはみんなも同じって訳か。

その後、律のドラムが加わり、滞のベース、梓のギターと加わっていき、音の層が厚くなった。

唯は音が増えるたびにその人の顔を見ていた。

よし……。次は俺だな……。

俺もみんなに続いてイントロを奏で、唯の方を見て無言で頷いた。

さあ！次は唯の番だぜ！！

唯は満面の笑みで返すと、唯のギターが加わり、完全にふわふわのイントロになった。

『もう一回！！』

客席の盛り上がりが最高潮に達したところで、俺たちはふわふわのサビをもう一度奏でた。

ムギはこの演奏を終わらせたくない一心であんなことをしたんだろうけど、そのおかげで会場がさらに盛り上がったからな。

余計に最高のライブになったって思うよ！

ふわふわのサビも終了し、唯は客席に向かって思い切り叫んだ。

『……軽音！大好き！！』

アハハ……。唯の今の一言でまたまた会場が盛り上がってるな……。

もうライブは終わりなのに……。

「りっちゃん！もう一曲！」

「よっしやあー！」

「ちよつと唯！」

「あつ、和ちゃん！」

「もう時間切れよ！」

「ええええええええ!?」

アハハ……さすがにこれ以上の演奏は出来ないよな……。

こうして学園祭のライブはどうか無事に終了した。

……本当に……最高のライブだったよ……。

この後、鋼牙さんたちと一緒に食事に行っただけで、それはまた別の話ってことで

♪

………続く。

——次回予告——

『最近のゲームというのは随分凄いな。これは現実と区別するのが難しいほどだぜ！次回、「空想」。ゲームは1日1時間だぜ！』

第3 2話 「空想」

……ここは桜ヶ丘某所にあるとあるゲーム会社のオフィス。

ここに、50代前半くらいの男性が力なくパソコンの画面と向き合っていた。

パソコンの画面には「モンスターバスター」という今この国で流行っているゲームの画面が映っていた。

「……くそっ！何がモンバスだ！こんなゲームのどこが面白いんだよ！……俺が作ったゲームの方が断然面白いのに……」

パソコンの画面を見ていた男……河上明宏（かわかみあきひろ）は、流行りの人気作であるモンスターバスター、通称モンバスを批判していた。

明宏も自信が立ち上げたゲーム会社でゲームを作っていたのだが、そのゲームは全く売れなかったのである。

「なんで誰も認めないんだ……俺のゲームの面白さを！」

明宏は自分のゲームが売れておらず、人気がないことを認めようとはしなかった。

さらに、明宏の会社から人気作が輩出されていないからか経営は傾き、倒産は時間の問題だった。

「くそっ……！次は……次こそは……作ってやるんだ！モンバスなど目ではないほどの最高のゲームを！」

明宏はこう決意しているのだが、次のゲームを作る経済的余裕はなく、今の状況に絶望していた。

その時だった……。

—— 貴様、それほどまでに作りたいか？最高のゲームを……

突然明宏の見ていたパソコンの画面が真っ暗となり、パソコンの画面から声が聞こえてきた。

「声!?どこから!?!」

—— 答えろ……！貴様はそれほどまでに最高のゲームを作りたいか？

「あつ、ああ！作りたい!!この日本……いや、この世界で唯一無二の最高の……そして、誰も真似出来ないゲームを！」

—— そうか……！貴様はそのために全てを差し出す覚悟はあるか？

「ああ！そのためならこの命……悪魔だろうがなんだろうがくれてやるよ！」

—— よく言った！ならば我を受け入れよ!!

「ぐおおおおおおお!!」

突然パソコンの画面から黒い帯のようなものが現れ、その黒い帯は明宏の中に入って

いった。

「……………」

しばらく動かなかった明宏は怪しげな笑みを浮かべていた。

明宏がオフィスを出ようとしたその時だった。

「……………あ、明宏さん、まだいたんすか?」

オフィスに入ってきたのは、この会社の社員である、20代後半の男だった。

「でもまあ、ちようど良かった。俺、この会社辞めるんで」

「……………辞める……………だど?」

「こんな辺鄙な会社にしても意味ないし、それに、俺、あのカプコムで仕事出来ることになっただんで」

男が言っていたカプコムとは、今や人気作となったモンバスことモンスターバスターを制作した会社である。

「!カプコム……………だど……………!」

自分が忌み嫌う会社に自分の会社の社員が行くことに、明宏は憤りを感じていた。

「まあ、せいぜい頑張ってくださいね。こんな会社、すぐ潰れるだろうけど」

男は捨て台詞を吐いてオフィスを出て行こうとするのだが……………。

「……………ちよつと待て」

「何すか？」

「この会社を辞めることは許さん！」

「はあ!?!んなの俺の勝手っしょ!?!それに、こんなボロ会社にいるより余程いいだろうがよー。」

男は、明宏の会社のことをボロクソに言っていた。

「……そうか……」

「話は終わりっすね?じゃあ俺は……」

「ならば……俺のゲームをクリアしてみせろ!!」

明宏の目が怪しく輝くと、会社のオフィスから、見たことのない草原に変わっていた。

「!?!ど、どこだよ、ここ!?!」

男は突然の出来事に困惑していた。

すると、男の目の前にこの世のものとは思えない怪物が現れた。

「ヒツ!?!な、なんだよ、この化け物!?!」

「まずは手始めにこのモンスターを討伐してみせろ!そうしたら無事に元の世界に帰してやる」

「くっ……くっ……くっ……!やつてやるよ!」

男は近くに落ちていた木の棒を拾ってモンスターに戦いを挑むが、当然そのような装

備でモンスターに敵うわけはなかった。

「…………この程度のモンスターにも勝てないか……。お前は一生この世界から出ることは出来ない！」

「そ、そんな……」

明宏の残酷な宣言に男の顔は真っ青になっていた。

「言い忘れたが、この世界でのゲームオーバーはすなわち死だ。このようなモンスターすら倒せない自分の愚かさを呪うんだな」

明宏はそう告げるとその場から姿を消した。

「や…………やめろ…………来るな…………」

モンスターたちに追い詰められた男は、恐怖に怯えていた。

そして、モンスターたちは一斉に男を喰らい始めた。

「ぐわあああああああああああ!!!」

男の断末魔がその場に響いていた。

※※※

学園祭が終了して1週間が経った。

統夜たちは様々な問題を乗り越えて、ライブに挑み、そのライブも大成功で幕を閉じたのである。

学園祭が終わってからはいつもの生活に戻り、統夜は朝はエレメントの浄化を行ってから登校し、昼は学校と部活。夜はホラー討伐と忙しい毎日を過ごしていた。

この日は学校で、この日の放課後も部活は行われていた。

統夜は日直の仕事があるため、まだ音楽準備室に顔を出していないのだが、音楽準備室ではティータイムではなく、意外なことが行われていた。

「ちよ……律先輩！そんなにむやみにハンマーを振り回さないで下さいよ！」

「ふっふっふっ……あたしの華麗なるハンマーさばきを見よっ！」

「おいおい……そんな隙だらけで大丈夫か？」

「……」

梓、律、漣の3人は今流行りのモンスターバスターをプレイしていた。

どうしてこうなったかは、昨日、律が漣とモンバスの話をしていると梓が乗っかり、一

緒にプレイしようということになり、今に至る。

モンスターバスターは携帯ゲーム機で発売されているソフトで、オンライン、オフラインを含めて最大4人プレイが出来るのがこのゲーム最大の魅力になっている。

紬は統夜同様にクラスの用事で遅れており、何故か唯だけは3人とは違う携帯ゲーム機で違うゲームをプレイしていた。

「ふっふっふっ……これで終わりだ！ってあれえ？外した！」

「ちよ!?だから言ったのに！」

「あー！死んだあ!!」

「おい！律！」

律の操るプレイヤーが強大なモンスターにやられてしまい、梓と律が呆れていた。

「ういーっす」

「みんな、遅れてごめんね！」

ちようど同じタイミングでクラスの仕事のため遅れていた統夜と紬が音楽準備室に入ってきた。

「あつ、統夜先輩！」

「ねえねえ、みんなで何をやってるの？」

長椅子に学生鞆を置いた紬は、みんなしてゲームをしていることが気になってこう訪

ねていた。

「ああ、あたしらはモンバスをやってるんだよ。唯は違うゲームやってるけどな」

「モンバス？」

ゲームについて詳しくない統夜と紬は首を傾げていた。

「ああ。モンスタースターっていうゲームで、モンスターを狩るゲームなんだよ」

「へえ、今時はそんなゲームも出てるんだなあ」

統夜は魔法衣と学生靴を長椅子に置き、ギターケースを立てかけると、滯のゲーム画面を覗き込んでしみじみと呟いていた。

『それにしても随分とリアルな画面だな。こいつは俺様も驚きだぜ』

ゲームの進歩を感じ取ったのかイルバも驚いていた。

「ところで、唯ちゃんは何をやってるの？」

「……………」

「?唯?」

「エへへ…………ピカ太…………可愛いなあ…………♪」

「「ぴ…………ピカ太?」」

ゲーム画面を見てうつとりしている唯を見て、統夜と紬は困惑していた。

「ああ、唯先輩がやってるのは「ボールモンスタースター」っていうゲームで、モンスターを育

「てて戦わせるゲームですよ」

「ちなみに、通称はボルモンな」

「へ、へえ……」

ゲームに無知な統夜と紬はなかなか話についてこれなかった。

「おっ！律先輩、濔先輩！もう少しで倒せそうですよ！」

「よっしやあ！あたしに任せろ！つてまた攻撃外した!？」

「だから無理するなつて！あと一回やられたらゲームオーバーなんだから！」

「なんの！これでどうだ！」

律が操作するキャラが振るうハンマーがモンスターに直撃すると、そのモンスターは倒れた。

「よっしやあ！倒したぜ！」

「ずいぶんとギリギリでしたけどね……」

「いい素材取れるかな？」

どうにかモンスターを倒した3人は盛り上がっていた。

「と、とりあえずお茶淹れるね」

「お、待ってました♪」

統夜は紬の紅茶を楽しみにしていたのだが……。

『統夜。残念ながら番犬所から呼び出しだぜ』

「マジかよ……。またホラー討伐の指令かな？」

緋の紅茶を楽しみにしていた統夜はガクツと肩を落としながらも帰り支度を始めた。

「統夜君、気を付けてね」

「ああ」

統夜は早々に帰り支度を済ませ、そのまま音楽準備室を後にし、番犬所へと直行した。

ちやうどそのタイミングで梓、律、漣の協力プレイは終了し、いつの間にかいなくなっていた統夜に困惑していた。

そして唯は……。

「エへへ……。ピカ太あ♪」

いまだに画面の中のモンスターを愛でていたのであった。

番犬所に到着した統夜はイレスに挨拶をした。

「来ましたね、統夜」

「はい。イレス様、指令ですか？」

「ええ、指令といえば指令なのですが……」

「？」

イレスの歯切れの悪い言葉に統夜は首を傾げていた。

「実は、この2週間くらいで多くの人が行方不明になっているのです。恐らくはホラーの仕業だと思いますが、未だにホラーの足取りをつかむことが出来ないのです」

『なるほどな。もしホラーの仕業だとしたら結界を貼っている可能性があるからな。ホラーの仕業かどうかの調査をすればいいという訳か』

「イルバの言う通りです。これ以上被害を出す訳にはいきません。統夜、大変だとは思いますが、調査を行い、ホラーの仕業であれば、ホラーを討滅するのです」

「わかりました！すぐに出發します」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にし、行方不明事件がホラーの仕業かどうかの調査を始めたのだが……。

『……おい、統夜。快く引き受けたのはいいが、心当たりはあるのか？』

「……まったくわからん」

『まったく……そんなことだろうと思っただぜ！』

「まあまあ。とりあえず被害者が行方不明になった場所でも言ってみるか」

統夜はまず情報を得るために被害者が行方不明になった場所へ向かおうと提案したその時だった。

「……なあなあ、お前、「ヴァーチャルクエスト」って知ってる？」

「え？何それ？」

統夜の前を通り過ぎようとしていた小学生がこのような話をしていたので、統夜は思わず聞き耳をたてていた。

「最近人氣が急上昇してるゲームなんだぜ！ゲームはオンラインらしいんだけど、現実と区別出来ないくらいいのヴァーチャル空間でゲームできるらしいぜ！」

「へえ、やってみたいな！」

このような話をしながら小学生たちはその場から去っていった。

「……ヴァーチャル空間ねえ……。もしかしたらもしかするかもな……」

『統夜、さすがにそれは考え過ぎじゃないのか？』

イルバはホラーがヴァーチャル空間を操るなんて都合のいい話はないと思っていた。

「でも、調べてみる価値はあるだろ？とりあえずゲームショップに行ってみるか」

『やれやれ……。それはお前が行きたいだけなんじゃないのか？』

「まあ、それは少しはあるけど、さっきのヴァーチャルクエストとかの情報欲しくてな」

『それなら行ってみるか?』

「ああ」

統夜は小学生が話していたヴァーチャルクエストというゲームの情報を得るために、商店街にあるTATSUYA（タツヤ）へと向かった。

桜ヶ丘の商店街にあるTATSUYAは、ゲーム、本の販売だけではなく、CDやDVDレンタルもやっている店で、毎日多くのお客さんと賑わっていた。

「ここがTATSUYAか……ずいぶんと広いんだな」

様々なコーナーがあるためにかなり広いので、統夜は驚いて周囲をキョロキョロと見回していた。

《とりあえず、ゲームコーナーを見てみるか?》

（ああ、そうだな）

統夜はとりあえずゲームコーナーに行ってみたのだが……。

（それにしても、ゲームと一括りに言ってもかなり種類があるんだな……）

統夜はゲーム機やゲームソフトの種類の多さに困惑していた。

魔戒騎士である統夜はゲームに触れる機会はほとんどないため、ゲームの知識もあま

りないからである。

どこか適当に見てみようと考えていたその時だった。

「……あれ？統夜？」

偶然TATSUYAに来ていた律たちが統夜を見つけたので声をかけたのだが、統夜がこんな所に来ているとは思っていなかったのか驚いていた。

「おう、みんな。どうしてここに？」

「実はな、統夜がいなくなった後にムギがモンバスをやってみたくてことでも来たんだよ」

「うん♪みんながやってるのを見てたらなんだか私もやりたくなっちゃって♪」

統夜が番犬所に向かった直後、紬はモンバスというゲームに興味津々だったため、部活終わりにゲームを見に行こうという話が出たのでこのTATSUYAに来たのである。

「ところで、統夜がこんなところに来るなんて珍しいけど、今日はどうしたんだ？」

「ああ、実は気になるゲームがあつてな」

「おおーやーくん、ついにゲームデビュー!？」

「なあ、統夜、それってもしかしてモンバスか？」

統夜がゲームに興味があると思ったのか、唯たちは統夜の話に食いついてきた。

「いや、そのモンバス……ではないんだよ」

「? だったら何のゲームなんですか?」

「なあ、ヴァーチャルクエストって聞いたことがあるか?」

統夜は小学生たちが話していたゲームのタイトルを律たちに聞いてみた。

「ああ、聞いたことあるぞ。最近オンライン専用のゲームで出たんだけど、そのリアルさに出た直後から人气が急上昇してるゲームらしい」

「へえ、オンラインってことはネットだけってことか……」

「はい。ヴァーチャルクエストならそこに情報が載ってますよ」

梓が指差す方向にヴァーチャルクエストのパンフレットが置いてあったので、統夜はそのパンフレットを手に取り、目を通した。

「ヴァーチャルクエスト……オンラインでリアルな冒険をあなたにお届けします……か……」

統夜は最初のページに書いてあったキャッチコピーに目を通していた。

《確かにリアルな冒険ってところはキナ臭いかもしれないな》

(イルバもそう思ったか。俺もそこが引つかかかってたんだよな)

統夜はヴァーチャルクエストの話聞いた時からこのゲームはホラーが作り出したものではないか? と推測していた。

(このゲームを作ったのは……「シグルド」?名前だけは格好いい会社だな)

このヴァーチャルクエストを制作したのは「シグルド」という小さなゲーム会社だった。

(シグルドか……。確信はないけど、行ってみるか)

統夜はパンフレットを読みながらその会社に直接行ってみようと考えていた。

(……へえ、コントローラーは脳波型のコントローラーなのか……。ずいぶんと最先端なんだな……)

このヴァーチャルクエストはPC専用のオンラインゲームなのだが、コントローラーは両手を使うものではなく、ヘッドギアのようなもので、脳内に直接ゲームの画面を送り込むといった、最先端のものであった。

「……あつ、このコントローラー凄いですよね!なんか時代を先取りしてるみたいですね!」

一緒にパンフレットを見ていた梓はコントローラーに食いついていた。

「確かに凄いよな」

《まあ、これがホラーの仕業でなければ純粹に凄いよな》

「……俺もそう思うよ」

脳波を使ったコントローラーなんて近未来の話だと思っていた統夜は、このゲームが

ホラーが作り出したものではないかという疑惑がどんどん強くなっていった。

パンフレットを全部読み終わったその時、その疑惑が確信に変わる会話が聞こえてきた。

「なあなあ、知ってるか？ヴァーチャルクエストの噂」

「何だよ、噂って」

統夜たちの近くでヴァーチャルクエストのパンフレットを見ていた中学生の男子2人組がこのように話を切り出していった。

「何か最近行方不明になってる奴が増えてるだろ？そいつらって全員ヴァーチャルクエストをプレイしてた奴らしいよ」

「何だよ、それ。それがマジだったらこのゲーム超怖いじゃん！」

「！」

統夜は偶然この話を聞いた時に、疑惑が確信へと変わった。

（やつぱりな……。脳波型コントローラー……行方不明になったプレイヤー……。あのゲームはやはりホラーが作ったゲームだったんだな）

統夜はヴァーチャルクエストがホラーが作り出したゲームだとわかった時、誰がホラーなのか見当がついていた。

「……なあ、その話、詳しく聞かせてくれないか？」

「え？」

統夜はヴァーチャルクエストの噂を話していた中学生の男子2人に声をかけ、情報収集をしていた。

2人は突然声をかけられたことに戸惑いながらも先ほどの噂の話を統夜にしてくれた。

「ありがとう！急にごめんな」

統夜は情報を提供してくれた中学生の男子2人に礼を言うと、2人はそそくさとその場から立ち去っていった。

「……？統夜先輩？どうしたんですか？」

「さっき言ってたヴァーチャルクエストだけだな、あれはホラーが作り出したゲームみたいなんだ」

「えっ!? そうなの!？」

「まあ、確かに時代を先取りし過ぎてるとは思ってたけど……」

「ホラーって、そんなこともするのね」

『まあ、憑依した人間がゲームを作ってるやつならそれもあり得ることだからな』

「なるほど……」

「まあ、そういう訳だから俺はこのゲームを作った会社に行ってみるつもりだ。本当に

ホラーなら斬らなきやいけないからな」

統夜の顔は穏やかな表情ではなく、魔戒騎士の顔になっていた。

「統夜君、無理だけはしないでね」

「ああ、俺は必ず戻る。信じてくれよ」

統夜は唯たちを安心させるためにこう告げると、TATSUYAを後にして、ヴァーチャルクエストを制作したシグルドという会社へ向かった。

※※※

その頃、ゲーム制作会社シグルドでは、ゲームについての問い合わせや専用コンソールリーの販売など、忙しく仕事をしていた。

「……それにしても凄いですね、ヴァーチャルクエスト。まだ発売して2週間ぐらいしか経ってないのに大ヒットですよ！」

シグルドの社員である20代前半ぐらいの男はヴァーチャルクエストをべた褒めしていた。

「まあな。このゲームは俺の最高傑作だよ。モンバスとは臨場感が違うんだよ」

明宏は自分が開発したヴァーチャルクエストは人気作であるモンスターバスターよ
り出来が良いと自画自賛していた。

「まだプレイヤー自体は少ないが、これからこのゲームは伸びる！モンバスを超えるの
も時間の問題だよ」

「そうなたら最高ですね！そしたら次回作も考えないといけないですね」

「そうだな、次回作はこれからぼちぼち考えるよ」

明宏は次回作の構想を考えながら怪しげな笑みを浮かべていた。

その時だった。

「すいませーん！失礼します！」

シグルドのオフィスに赤いコートを着た少年が入ってきた。

「あつ、はーい！」

男がその少年……統夜に駆け寄り、対応しようとしていた。

「あの、()用件は？」

「あのつ、河上明宏社長にお会いしたくて」

「申し訳ありません。社長はアポイントが取れてないお客様とはお会いになれないん

ですよ」

「そっかあ……そりや残念だな。せつかくゲームのアイデアを持ってきたっていうのに……」

「え？」

自分の構想にそれだけ自信があるのか、統夜は真っ直ぐな瞳をしており、男は困惑していた。

すると、明宏がこちらに歩み寄ってきた。

「どうぞ、お入りください」

明宏は統夜を招き入れ、オフィスの一角にある応接室に案内した。

統夜は椅子に腰をおろすと、自分の考えたアイデアを明宏に伝えた。

「……金の騎士と銀の騎士のゲームですか？」

「そうです。魔界から出てきた悪魔を金の騎士と銀の騎士が退治するというスタイリッシュアクションゲームです！おびただしい魔物をスタイリッシュな動きで蹴ちらす様はプレイヤーたちの快感になるでしょう」

統夜が提供したアイデアは、まるで魔戒騎士がホラーを退治する様をゲーム化したよ
うなものだった。

「あいにく私はその手の話が嫌いでしたね」

「それは、そのゲームのラスボスは自分だからか？」

「はあ?」

統夜の言葉に明宏は唾然とするが、統夜は魔法衣の懐から魔導ライターを取り出し、火をつけた。

すると、明宏の瞳から不気味な文字のようなものが浮かび上がってきた。

それは、明宏がホラーであるという証である。

「やはり……魔戒騎士か……」

明宏はゆっくりと立ち上がり、統夜も立ち上がり、明宏を睨みつけた。

「貴様、俺が魔戒騎士だと知ってここに誘い込んだな」

『統夜。どうやらこのビルには結界が貼ってあるぜ』

「道理で番犬所が気付けないハズだよ」

統夜は番犬所が今までこの会社にホラーがいることに気付けなかったのは結界のせいであると推測していた。

「遅かれ早かれ魔戒騎士には嗅ぎ付けられると思っていたからな。だったら、最高のゲームでおもてなしをしようと思った訳だ」

「面白いゲーム……だど?」

「昔ながらのゲームも捨てがたいが、やはりゲームはリアルであるに限る。中途半端なCGは辟易とするんな」

「そうか？俺はゲームのことはわからんが、お前の考えが一人よがりだつてことはわかるぜ」

「黙れ！ゲームを知らない貴様に何がわかる！」

「そんなことは関係ないね。俺はお前を斬るだけだ」

統夜は魔戒剣を抜くと、明宏を睨みつけながら構えていた。

「まあまあ、慌てるなよ、魔戒騎士。いったらう？最高のゲームでもてなすつて」

明宏はこう言うのと、指をパチン！と鳴らした。

すると、その場の風景は変化し、ビルの一室から草原へ変わっていた。

「……イルバ……ここはもしかして……」

『ああ。ここはホラーが作り出した空間だ。そのヴァーチャルクエストとやらもこんな感じなんだろうぜ』

統夜はコントローラーを介さずに、ホラーの力でヴァーチャルクエストの空間に誘い込まれた。

—— どうだ？魔戒騎士！これほどのリアルな映像は他じゃ再現出来ないぞ！

姿を消した明宏は天の声としてこう統夜に告げていた。

「どうもこうもないさ。さて、せっかくだ！お前のそのゲームとやらを楽しませてもらうか！」

統夜はホラーを討伐するついでに、ホラーが作り出したゲームを楽しむつもりでいた。

『やれやれ……緊張感のない奴だな』

イルバはそんな統夜に呆れていた。

——いいだろう！まずは小手調べからいこうか！

明宏がこう宣言すると、統夜の目の前に4体のモンスターが現れた。

一体目は水滴型の体にグミ状の性質を持った青い怪物だった。

このモンスターは、有名なRPGゲームである「ドラゴンクエスト」に登場するゲルスライムというモンスターそっくりだった。

二体目は、唯もハマっている人気ゲーム「ボールモンスター（ボルモン）」に登場する黄色く愛らしい電気ネズミことピカテルと呼ばれるモンスターそっくりだった。

三体目は、今や世界的人気を得ている「モンスターバスター」に登場する恐竜のような姿をしているレクボスというモンスターそっくりだった。

四体目は、四つ足の巨大なモンスターで、この四体の中では一番強そうだった。

「……なんかモンスターに一貫性が無さすぎだろ……。これだけパクリをする奴がゲームを語るのか……」

ゲームのことが詳しくない統夜でも四体のモンスターに一貫性がなく、作品もバラバ

ラであることはすぐに理解出来た。

——そんな口はこいつらを倒してから言うんだな。

「やれやれ……仕方ないか」

統夜は魔戒剣を構えると、モンスターたちを睨みつけた。

そして、四体のモンスターは、一斉に統夜に襲いかかってきた。

統夜はいの一番に突進してきたゲルスライムそっくりのモンスターの攻撃をあつさりとかわすと、一撃で葬り去った。

「……弱っ！」

ゲルスライムはドラグーンクエストの中でも最弱モンスターであり、そこが再現されている弱さに統夜は拍子抜けしていた。

『統夜、油断するな！次が来るぞ！』

ピカテルそっくりのモンスターが体から電気を放って電撃攻撃をしてきたので、統夜がそれをかわすと、レクボスそっくりのモンスターが突進してきた。

「おっとー！」

統夜はまるでとび箱を飛ばかのようにレクボスそっくりのモンスターの突進をかわすと、魔戒剣を一閃して、一撃で葬り去った。

その後迫り来る巨大なモンスターの攻撃をジャンプしてかわすと、統夜はピカテル

そっくりのモンスターに魔戒剣を突きつけた。
すると……。

「ぴっ……ピカア……」

ピカテルそっくりのモンスターが瞳をうるうるとさせていたので、統夜は思わず攻撃をやめてしまった。

「うっ……うぐっ……!」

『おいおい、統夜。奴は所詮偽物のモンスターだぜ』

「そ、それはわかってるんだけど……」

統夜が攻撃をためらっていると、ピカテルそっくりのモンスターは至近距離から電撃を放ってきた。

「やべっ!」

統夜は咄嗟に攻撃をかわすと、反射的に反撃でピカテルそっくりのモンスターを斬り裂いた。

「あっ」

統夜が気付いた時にはもう遅く、ピカテルそっくりのモンスターは消滅した。

(危ない危ない。思ったより可愛かったから油断しちまったぜ……。そういえば唯がゲームで可愛がってたのもあいつだよな。その気持ちかわかる気がするよ)

統夜の言う通り、唯がボルモンをプレイ中に愛でていたのは、ピカテルであり、唯はピカ太と名前をつけて可愛がっていた。

そのことを思い出した統夜は苦笑いをしていた。

すると、巨大なモンスターが再び突進してきたので、統夜はかわす素振りを見せずに、魔戒剣を一閃して迎え撃った。

巨大なモンスターは統夜にぶつかる前に体が真っ二つになってしまい、消滅した。

「どうした！もう終わりじゃないよな？」

——何の！これはまだ小手調べ。本番はこれからだ！

明宏は再びパチン！と指を鳴らすと、再び風景が変化し、草原から闘技場のような風景に変化した。

すると、すぐにとある光景が統夜の目に映った。

「……………これは……………」

統夜の目に映ったのは、息絶えている人間たちの山だった。

『どうやらこのモンスターに敗れたようだな。……統夜、残念だがこいつらはもう助からない。その魂はすでにあいつに喰われたようだ』

「……………」

統夜は何も語らなかったが、怒りを露わにしていた。

『……………！統夜！何か来るぞ！』

イルバがこう警告していたので、統夜が魔戒剣を構えると、現れたのはホラーとは違う悪魔のような怪物で、その真紅の出で立ちちは、多くの者を葬り去った返り血を浴びてきたようにも見えた。

この悪魔は「レッドイビル」と呼ばれるとあるゲームで多くのプレイヤーを苦しめてきたモンスターに似ていた。

「こいつは……………ホラーか？」

『いや、どうやらこいつはホラーではないようだ。こいつは何かのゲームに出てきたモンスターのそっくりなんじゃないのか？』

——こいつは実際のゲームでもこの世界でも多くのプレイヤーを苦しめてきたモンスターだ。貴様に倒せるかな？

「倒すさ……………！倒してお前を斬るためにな！」

こう言い放った統夜の声には怒りが含まれていた。

——さあ！ショータイムだ！

明宏がこう宣言すると、レッドイビルそっくりのモンスターが統夜に襲いかかってきた。

「……………！つと」

統夜はかろうじて攻撃をかわすが、レッドイビルそっくりのモンスターのスピードはかなりのものだった。

「へえ……！思ったより速いじゃないか……！そうじゃないと面白くないからな！」

統夜はレッドイビルそっくりのモンスターのスピードに驚きながらも、ワクワクしていた。

『統夜！また来るぞ！』

「そうだな…….」

統夜はギリギリまで相手を引き付けると、絶妙なタイミングでジャンプして攻撃をかわすと、そのまま魔戒剣を一閃し、レッドイビルそっくりのモンスターを真っ二つに斬り裂いた。

「…….そんな動きじゃ俺を捉えられないぜ！」

レッドイビルそっくりのモンスターを斬り裂いた統夜はこう言い放つと、何故かドヤ顔をしていた。

「ほお、やるじゃないですか。さすがは魔戒騎士だ。多くのプレイヤーが挫折したこのボスを難なく倒すとは。」

「こんなもの、序の口だ。それよりもボスはもう終わりか？だとしたらもうエンディングか？」

「まあまあ、慌てるな！本当ならこのゲームのストーリーはまだまだあるが、これはとっておきだ！」

明宏は再び指をパチン！と鳴らすと、再び風景は変わり、闘技場のようなところから、城の中へと変わった。

しかも、この場所は禍々しい空気に満ちており、まるで魔王の城のような雰囲気を出している広い部屋だった。

「……なるほど。一気にラスボスまでご案内つてことか。これは好都合だ」

統夜はこの場所の雰囲気からここがラスボスが出てくる場所と推測していた。

「その通り！まだここまで到達したプレイヤーはいないがな。貴様を葬れるのはこいつしかいらないようだ。」

「へえ、そしたら俺がエンディング到達第1号になるって訳か。光栄だね！」

統夜は皮肉を込めてこう言い放った。

「減らず口はそれまでだ。貴様にこいつを倒すことは出来るかな？」

明宏がこう宣言をすると、統夜の目の前に巨大なドラゴンが現れた。

「へえ……ラスボスがドラゴンとカリアルを追求する割にはずいぶんとベタだな……。そんな貧相な発想でよくゲーム会社なんて立ち上げたもんだよ」

明宏が作り出したヴァーチャルクエストはリアルは圧倒的ではあるが、展開や登場モ

ンスターがあまりにベタ過ぎると統夜は感じていた。

「黙れ！ 貴様はこのキングドラゴンに倒されて俺の餌となるんだ！」

「餌になる気はないね！ 俺はお前を斬らなきゃいけないからな」

統夜は魔戒剣を構えると、目の前のドラゴン……キングドラゴンを睨みつけた。

「行け！ そいつを殺せ！！」

明宏の指示で、キングドラゴンは動き始めた。

キングドラゴンは先制攻撃と言わんばかりに口から高温の炎を吐き出した。

統夜は難なくそれをかわすが、その熱さは伝わってきた。

「熱っ……りや、これをまともに受けたらひとたまりもなさそうだな」

統夜はおどけながらこう言っており、まだまだ余裕があることを物語っていた。

統夜は炎の息を吐き終わったタイミングでキングドラゴンめがけて突撃するが、キン

グドラゴンはすかさず尻尾による攻撃を繰り出して来たので、統夜は攻撃をかわし、反

撃を断念した。

「へえ……。思ったよりも隙がないな……。りや少しだけ苦労しそうだぜ」

このゲームのラスボスと言うだけのことがあると統夜は心の中で思っていた。

このゲームは発売して2週間くらいなのだが、まだクリアした者はいなかった。

先ほど統夜が倒したレッドイビルそっくりのモンスターを倒した者は何人かはい

のだが、その何人かは未だラスボスまではたどり着いていなかった。

キングドラゴンは再び炎の息を吐くと、統夜はそれをかわしながら反撃のチャンスを見計らっていた。

(くそっ……面倒くせえ！このままじゃジリ貧だ。鎧を召還するか？いや、それは今より状況が悪くなったらだな)

統夜は炎の息をかわしながら鎧の召還も考えていたが、今は様子を見ることにした。

統夜は何度か反撃を試みるが、尻尾による攻撃や牙による攻撃が飛んできたので、かわすしかなかった。

(くそっ……こうなったら、あのうざったい尻尾を叩き斬る！)

統夜はキングドラゴンの本体ではなく、尻尾に狙いを定めた。

キングドラゴンの炎の息をかわし、尻尾による攻撃もジャンプでかわし、尻尾に狙いを定めた。

「そっだ！」

統夜はキングドラゴンの尻尾を切り裂くと、痛みのみならず、あまりキングドラゴンは断末魔をあげていた。

「……これで決める！」

尻尾を斬られて隙が出来たのを見逃さなかった統夜は魔戒剣を一閃し、キングドラゴ

ンを真つ二つに斬り裂いて葬り去った。

「……よしっ！ラスボス撃破♪」

統夜は鎧を召還することなく、キングドラゴンを撃破したのであった。

「おい！ラスボスは倒したぞ！さっさと姿を見せたらどうだ？」

よかろう。俺自らが真のラスボスとなり、貴様を葬ってくれる！

明宏が指をパチン！と鳴らすと、再び風景が変化した。

魔王の城から、異次元空間へと変化していた。

「……なるほど、真のラスボス戦にはピッタリだな」

統夜の目の前に明宏が現れた。

「さすがは魔戒騎士だ。私のゲームを難なくクリアするとはな」

「お前のゲームが簡単過ぎるんだよ。展開もベタだったしな。そんなんでゲームを作ろうだなんて、笑わせるぜ！」

統夜は余裕の表情で明宏を挑発していた。

「黙れ！この俺が貴様を葬ってやる！」

怒りに満ちた明宏の体は変化し、ホラーの姿へと変わった。

『統夜。こいつはホラー、クラフトリイ。自分の考えたものを作り上げることの出来るちよつと変わったホラーだ』

イルバの言う通り、このホラー、クラフトリイは、自分の考えたものを作り上げることが出来るという力を持っている。

このヴァーチャルクエストの空間もクラフトリイの力で作り上げた空間で、最先端に見えるコントローラーもクラフトリイが作り上げたものであった。

「なるほど……。この世界はお前が作り上げたって訳だな。……だったら尚更お前の発想の貧相さに驚くよ」

「黙れ！ 貴様のその減らず口、叩けなくしてやる！」

「そうはさせるかよ……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はクラフトリイに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「貴様に見せてやる……！ 私のを……！」

クラフトリイは自らの力でかなりの数のモンスターを作り出した。

「ほお、結局は数にものを言わせるか。ここまで単純だともう呆れるな」

「いくら魔戒騎士でも、これだけの数は倒せまい……かかれ！」

クラフトリイの指示で、モンスターたちは一斉に統夜に襲いかかってきた。

「……………」

統夜は反撃や迎撃の準備をすることなく、何故かその場に立ち尽くしていた。

そしてモンスターたちが一斉に統夜に押し寄せていった。

「フハハハ!!何も抵抗しないとは……これだけのモンスターに恐れをなしたか!」

クラフトリイは一切抵抗しない統夜を見て高笑いをしていた。

しかし……。

統夜に一斉に押し寄せたモンスターたちの間に光が放たれると、統夜が姿を現し、モンスターたちは一斉に消滅した。

「な……なんだと!?!あれだけのモンスター相手に無傷だと!?!」

クラフトリイはかなりの数のモンスターをけしかけたにも関わらず、統夜は無傷でモンスターを全滅させたことに驚いていた。

「あんなモンスターなんていくら数がいようと俺の敵じゃない!」

「く……くそっ!」

『残念だったな!そんな攻撃じゃ、ソウルメタルに傷1つつけることは出来ないぜ!』

「おのれ……!何がモンバスだ!何がボルモンだ!何がマレオブラザーだ!そんなゲームよりも俺が作ったゲームの方が断然面白い!何故誰も俺のゲームを認めない!俺のゲームこそ、やがて世界も認めるゲームとなるというのに!」

『おいおい、こいつ、ずいぶん熱くなってやがるぜ!』

「俺はゲームのことは詳しくないが、他を認めないお前の傲慢さが売れない理由なん

じゃないのか？」

「黙れ！ゲームを知らぬ小僧がゲームを語るな!!」

「お前のその傲慢さと強欲が、多くの人をこの世界に迷い込ませたんだ！……その陰我、俺が断ち切る！」

「ほざけえええええええ!!」

統夜の言葉に激昂したクラフトリイは統夜めがけて突撃した。

統夜は皇輝剣の切っ先に赤い魔導火の炎を纏わせて、烈火炎装の状態となった。

統夜は迫り来るクラフトリイに向かって皇輝剣を一閃し、クラフトリイは真つ二つに切り裂かれた。

「そ……そんな馬鹿な……！俺は……最高の……ゲームを……作らねば……ならんのに……！」

クラフトリイの姿から明宏の姿に戻ると、そう言葉を残し、消滅した。

クラフトリイが消滅したことを確認した統夜は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

クラフトリイが討滅されたことにより、クラフトリイが作り出した空間は崩壊し、統夜はゲーム会社「シグルド」のオフィスに戻ってきていた。

「ふう……」

『どうか、戻ってこられたようだな』

「ああ。……とりあえずホラーは討滅したことだし、帰ろうぜ、イルバ」

『そうだな』

統夜はシグルドのオフィスを後にすると、そのまま帰路についた。

※※※

翌日の放課後、統夜はこの日は教師から呼び出しを受けて遅くなっていた。

早々と集合した唯たちはこの日もゲームで遊んでいた。

「……だーかーらー！律先輩は迂闊にハンマーをブンブンと振り回し過ぎですって！」

「何おう！あたしのハンマーさばきをなめるなよ！」

「おいおい、そこは慎重に頼むぞ、律！」

「りっちゃん！援護するね！」

なんと今回は袖までゲームに参加していた。

「エへへ……。ピカ太あ♪今日も可愛いよお♪」

唯は変わらずボルモンをプレイ中で、国民的電気ネズミことピカテルを愛でていた。「おーっす！遅くなった！」

教師から呼び出しを受けていた統夜が音楽準備室に入ってきた。

「あつ、統夜先輩！」

「お前ら、またゲームか……」

『やれやれ。ここはいつからゲーム部が変わったんだ？』

「むう……！れ、練習だつてちゃんとするからな！」

「『どうだか……』」

律の苦し紛れの言葉に統夜とイルバが呆れていた。

「ねえねえ、統夜君！見て見て！」

紬は統夜に自分のゲーム機を見せびらかしていた。

「む、ムギ!?お前も買ったのか!？」

「うん♪統夜君と別れた後に買ったのお♪私もみんなとゲームがしたかったから♪」

「アハハ……そ、そうなんだな……」

統夜は紬までゲームを始めたことを知り、苦笑いをしていた。

「ねえねえ、統夜君も一緒にゲームやろうよ♪」

「おっ、それはいいな！統夜もやろうよ！」

「おつ、俺はいいよ！」

「ええ!?!何でだよお！」

統夜がゲームをやることに反対したことに律はぶうつと頬を膨らませていた。

「もう、ゲームはこりこりなんだよ」

「こりこりって何かあったのか？」

「ま、まあな……」

「まあ、その話は後でゆっくり聞きましょう♪」

紬たちは今行っているクエストをクリアすると、ティータイムの準備を行い、そのままティータイムになった。

統夜はティータイムの時に昨日のホラーの話をする、この日は終始その話で盛り上がったのであった。

……続く。

『季節が冬になってきたな。まあ、俺様は冬だろうが関係はないがな。次回、「冬日」。この寒い日、お前さんはどう過ごすんだ？』

第33話 「冬日」

桜高の学園祭が終了し、それなりに時間が経過していた。

現在は12月前半であり、外もだいぶ寒くなっていた。

この日の放課後も、統夜たちは音楽準備室にいた。

「うう……寒いねえ……」

唯は遅れて音楽準備室に入ってきたのだが、中に入るなりブルブルと体を震わせながらこう言っていた。

唯は学生鞆を長椅子に置き、ギー太こと自分のギターを壁に立てかけると、いつもの席に座った。

「ねえねえ、りつちゃん」

「ん？何？」

唯は律に呼びかけると、「ふっふっふ……」と笑みを浮かべていた。

そして……。

「えいっ！」

唯は冷たくなった両手を律の頬にくっつけた。

「うひやあああああ!!」

唯の手が冷たかったのか律は悲鳴に近い声をあげていた。

「りっちゃんのほっぺた暖かい……」

『おいおい、何をやってるんだか……』

唯の行動を見ていたイルバは唯に呆れていた。

このやり取りの後、練習をすることになった。

唯はギターケースからギターを取り出すと、ジャラーンと音を鳴らした。

「……はあ、寒くてギター太弾けないや……」

唯はギターを鳴らすのだが、あまりの寒さで思い通りにギターが弾けなかった。

「あつー！いいこと考えた！手袋をしながら弾けばいいんだよ！」

「やってみろよ……」

統夜が唯のアイデアに呆れていた。

唯はさっそく手袋をはめて演奏を試みるが、当然のようにうまく行くはずがなかった。
た。

滑ってピックを落としそうになったり、手袋が弦に引っかかってまともな音が出な
かったりでまともにギターが弾けなかった。

唯はすぐに諦め、手袋を長椅子に置いた。

「失望した!」

「『そりやそうだ』」

漣、統夜、イルバが同時にツツコミを入れていた。

「なあ、律」

漣は律に同意を求めるが、律は何故かぼおつとしていた。

「……律? どうしたのか?」

「……りっちゃん?」

漣と唯は律の心配をしていた。

律は風邪をひいているわけではないのだが、ぼおつとしているからである。

「……な、なんでもない!」

我を取り戻した律は慌ててごまかしていた。

漣は首を傾げ、統夜はうーんと考え事をしていた。

「……なあ、律」

「な、何だよ!」

「お前さ、もしかして、好きなひ……」

「ちがあああう!!」

統夜が最後まで言い切る前に律は拳骨をお見舞いして口封じをした。

「へ……変なこと言うな！馬鹿統夜!!」

律は顔を真つ赤にしてそっぽを向いた。

「痛てて……。何だよ、律の奴……」

『統夜。その質問はいきなり過ぎたな。デリカシーがないと言われても仕方ないぞ』

「うーん……。そう言うものなのか？」

イルバの言葉に統夜は首を傾げていた。

「ああ！ブークロちゃん！怒ってごめんね！」

唯は長椅子に置いてある手袋に駆け寄った。

「また名前つけてるんですか……」

「みんな、冬がいけないんだよ！」

「おいおい、冬のせいにするなよ」

この日はそれだけ寒いのが冬のせいになっている唯に統夜は呆れていた。

「そ、そうだよね。やーくん。冬の日も楽しいことたくさんあるしね！」

「確かにそうだな」

「あ、そうだ！今度の日曜日、家で鍋しようよ！」

唯が突然鍋パーティーを企画してきた。

「へえ、それは面白そうではあるけど……」

「統夜のこの言葉を皮切りに、他のみんなも微妙そうな空気を出していた。

「……………あれ？」

「……………ごめんなさい……………。その日は用事があつて……………」

「紬が申し訳なきように欠席を伝えた。

「あたしも……………。弟を映画に連れてくつて約束してるから……………」

（弟？ ああ、あの子か）

「統夜は律と滯がギクシヤクしている時に律の家に行くと、律の弟が迎えてくれたことを思い出していた。

「私もちよつと……………。その日は家から出られそうにないんです……………」

「ええ!？」

「律だけではなく、梓も欠席を伝えたので、唯は残念そうな表情をしていた。

「……………みおちゃんは？」

「私もちよつと……………。新しい歌詞書きたいし……………」

『そういうえば滯。お前さんはここで歌詞を書こうとしていたよな？』

「ああ、そうなんだけど……………。いつも唯や律が邪魔するからなかなか集中出来なくて

……………」

「うぐつー!」

「なるほど。確かにそうかもしれないな」

「申し訳ありませんでした！」

濡の歌詞作りを邪魔していた唯と律は素直に謝罪していた。

「……そういえばやーくんも行けないの？」

「そうだな……。行ってもいいっちゃいんだけど……」

『おい、統夜。日曜日はエレメントの浄化があるだろう？鍋が夜だとしても指令があったらダメだからな』

「確かにな……。という訳で俺も行けないってことで頼むよ」

統夜も欠席ということで、結局日曜日は全員参加出来ないという結果になってしまった。

「……仕方ない。その日は私と憂とギー太の3人で鍋するかな」

『おいおい、ギターを頭数に入れるのかよ』

唯の言葉にイルバがツツコミを入れていた。

「ギター汚さないで下さいよ。この間メンテしたばかりなんですから」

「大丈夫だよ！ちゃんと前掛けもしてあげるし」

「いやいや……。そう言う問題じゃないだろ？」

「それなら……。いいですけど……」

『つて、いいのかよ！』

何故か梓が納得していたので、統夜とイルバが同時にツツコミを入れていた。

「冬はやつぱし鍋だよねえ♪」

「確かに、それは言えてるな」

唯の言葉に統夜は納得していた。

練習した後にティータイムを行い、この日の練習は終わった。

統夜はこの日も番犬所に寄らなければいけないため、途中まで唯たちと一緒に帰った。

この日は指令がなかったため、統夜は番犬所を後にすると、街の見回りを行い、帰路についた。

※※※

そして日曜日となった。

統夜はこの日はいつものように起床し、エレメントの浄化を行っていた。

「……はあっ！」

統夜は魔戒剣を一閃し、邪気の溜まったオブジェから飛び出した邪気を斬り裂いた。

「……これで良しっ」と

統夜は魔戒剣を鞘に納めると、魔法衣の懐にしまった。

「さてと……そろそろ腹へったな……。昼飯にするかな」

統夜は午前中いっぱい休憩せずにエレメントの浄化を行っていたので、商店街へ向かって、昼食を取ることにした。

（さて……今日は何食べるかな……。昨日の昼は牛丼食べたし、カレーかハンバーガーか……）

統夜は歩きながら昼食を何にするのか考えていた。

（……やっぱり今日はハンバーガーにしようかな）

統夜はハンバーガーを食べることを決めたので、いつものファストフード店に向かった。

ファストフード店に到着した統夜はいつものように注文を取りに行くのだが……。

「いらっしやいませ♪ご注文を……って、統夜君!？」

店員さんが統夜のことを知っているようなので、統夜は店員さんの顔を見ると、目を丸くしていた。

「む……ムギ!? どうしてそんなところに!？」

店員の正体が紬であったため、統夜は驚きを隠せなかった。

「あつ、あのね……。実はアルバイトをやってみたくて……」

紬の家は桜ヶ丘屈指の富豪の家なので、バイトは必要ないようにも思えた。

(なるほど、社会勉強ってやつかな?)

統夜は紬の事情を何となく察していたので、これ以上は追求しなかった。

「(づ)……(づ)注文を承ります!」

「えつと……ビッグバーガー1つと、チーズバーガー1つ……。あと、コーラのLサイズが1つ」

「ビッグバーガー1つと、チーズバーガー1つと、コーラのLが1つですね。……ご一緒にポテトもいかがですか?」

「じゃあ、ポテトもLでお願います」

「ありがとうございます!」

嬉しそうにドリンクの準備をする紬を見て、統夜は笑みを浮かべていた。

(なるほど……。ムギが今日用事あるっていうのはバイトがあるからなのか)

統夜は今日唯が提案した鍋パーティーが行けなかった理由を思い出し、納得していた。

統夜が物思いにふけっていると、注文した物が次々と置かれていき、全てのものが揃った。

「お待たせしました！ごゆっくりどうぞ！」

「ありがとうございます。ムギ、バイト頑張つてな」

「うん♪ありがとうございます♪」

統夜は紬に労いの言葉を言うと、そのまま席へ向かうのだが、統夜は紬が見えるところに座ってハンバーガーを食べ始めた。

紬は接客をしながらチラチラと統夜のことを見ており、統夜もそれに気付いてそちらの方を見ると、ときどき目が合うことがあった。

目が合う度に紬は統夜に笑みを浮かべ、統夜も笑みを返していた。

その様子を紬の先輩店員も見ていた。

「……ねえねえ、琴吹さん。あなた、さつきからあの赤いコートのお客様のこと見てるけど、もしかして琴吹さんの彼氏？」

「ふえっ!?!いい、いえ！そうじゃなくて！ただの友達で……」

「ウフフ♪それじゃあ、そういうことにしてあげる♪」

先輩の言葉に紬は顔を真っ赤にするのだが、先輩はそんな紬を見て笑みを浮かべていた。

統夜はポテトを頬張りながら紬たちのやり取りを見ており、統夜は首を傾げていた。やがて統夜はハンバーガーを完食すると、トレイのゴミを全てゴミ箱に捨て、店を後にしようとしていた。

店を出る前に紬と目が合った統夜は笑みを浮かべながらアイコンタクトを取り、店を後にした。

店を出た統夜はエレメントの浄化の仕事を再開した。

1時間半ほどエレメントの浄化を行った統夜はこの日の仕事を終わらせた。

そして、今は偶然にも梓の家の前にいた。

(……梓、今日は家から出られないって言ってたけど、何か用事でもあるんだろうか……)

統夜は梓が家で何かしらの用事があると推察していた。

『おい、統夜。さっき携帯が鳴っていたが、確認しなくてもいいのか?』

「え? そうなのか?」

イルバに言われて慌てて携帯を取り出した統夜は携帯の画面を確認した。

「……唯からメールだ。なんだろう?」

統夜はメールの中身を確認した。

F r o m 唯

s u b ねえねえ♡

マシユマロ豆乳鍋と

チヨコカレー鍋

どっちが

たべてみたい?? ☆ゝ(ゝ。∂)

「……は？何だよ、そのゲテモノ鍋は……」

統夜は唯からのメールに呆気にとられていた。

しかし……。

(でもまあ、こんな奇抜な発想は唯らしいよな)

内容が唯らしいと思った統夜は笑みを浮かべていた。

その時だった。

「……あれえ？やーくん？」

唯と憂が梓の家の前で立ち尽くしている統夜を見つけて、声をかけた。

「おう、唯。憂ちゃんどうしてここに？」

「あずにゃんから電話があつて、飛んできたの！」

「なるほど、よくわからないけど、訳ありっぽいな」

「あのつ、統夜さんはどうして梓ちゃんの家の前に？」

「その話は後でしよう。緊急事態なんだから？」

「うん、そうだね！」

「はいー！」

統夜は唯、憂の2人と共に梓の家の中に入った。

梓は統夜がいることに驚きはしたものの、そのまま3人梓の部屋に案内した。

すると、梓の部屋のソファにいた子猫がぐったりと横たわっていた。

統夜がいの一番に子猫に駆け寄ると、子猫に優しく手を当てた。

『……統夜、こいつはどうやら毛玉を吐いているだけのようだぜ』

「そうみたいだな。特に体調は崩してなさそうだ。もう落ち着いてくる頃だな」

「え？統夜先輩、猫のことわかるんですか？」

統夜が冷静に猫を診るのを見て、梓は驚いていた。

「ああ、こう見えて俺は動物が好きだからな。医者 of 真似事くらいなら出来るぞ」
統夜は子猫を優しく撫でながらこう答えていた。

すると、先ほどは具合悪そうにしていた子猫が元気になっていった。

「……うん、もう大丈夫だ。頑張ったな」

統夜は誰にも見せたことのない程優しい表情で子猫を撫でていた。

「……ニャア♪」

それが心地よかったのか子猫は統夜の腕にすりすり寄り添っており、その姿を見た統夜は笑みを浮かべていた。

「……とりあえず、問題はなさそうだ」

統夜は子猫にすりすり寄り添われながらこう宣言した。

「統夜先輩……。ありがとうございます」

「気にするな。この子が何でもなかったんだ。それが何よりだよ」

「ニャア♪」

子猫は早くも統夜に懐いたのか、統夜から離れようとはしなかった。

その様子を唯、憂、梓は優しい表情で見守っていた。

「……お騒がせして、すいませんでした……」

しばらくした後には梓は3人に詫びの言葉を言っていた。

統夜に甘えていた子猫はしばらくすると疲れたのかぐつすりと眠っていた。

「ううん。あずにゃん2号なんでもなくて♪」

「あ、あずにゃん2号?」

『おいおい、その猫は他人の猫なんだろう? 変なあだ名をつけるなよ』

唯のつけたあだ名に統夜は啞然とし、イルバは呆れていた。

「……猫が毛玉吐くなんて知らなかったもので……」

そう言った梓は俯いていた。

「梓、気にするなっ」

統夜は梓を安心させるために梓の頭を撫でた。

「……は、はい。ありがとうございます……」

梓は頭を撫でられて恥ずかしいと思うが、それと同時に嬉しいという感情もあった。

「それにしても、統夜さんって猫のこと詳しいんですね♪昔、猫を飼ってたんですか?」

「いや、動物は家で飼ったことはないかな。だけど、動物は好きでよく動物の本を読んで

たんだよ」

「「へえ……」」

統夜の知られざる一面を垣間見た3人は驚いていた。

「そういえば、やーくんはどうしてあずにゃんの家の前に行ったの?」

「ああ。エレメントの浄化の仕事を終えて偶然梓の家の前を通ったんだよ。それで、何してるのかなって考えてたら2人が来たって訳」

「そうだったんですね……」

「それよりも唯。メールに書いた鍋だけだな、俺はどっちも無しだと思っぞ」

「ええ？食べてみたら美味しいかもしれないのに……」

唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「……そういえば、皆さんは今どうしてるんでしょうね……」

「ムギなら見たけどな」

「え？紬さんは今日は何をしてたんですか？」

憂が統夜に紬のことを聞くと、唯の携帯に反応があつた。

「あつ！みんなからメール来てた！」

どうやら唯は統夜だけではなく全員にこのメールを送っていたようだった。

「ええ!?ムギちゃん、バイトしてるんだあ」

「ああ、昼飯を食いに寄つたらムギ、頑張ってたぞ」

「なるほど、それで偶然紬さんにあつたんですね」

「そういうこと♪」

唯は残りのメールもチェックしていた。

「え!? みおちゃん、海に行っただんだ!」

「へえ、漣が海にねえ……」

『冬の海とは、漣のやつずいぶんとロマンチックな奴だな』

漣は歌詞を考えるために冬の海に行っていた。

「りっちゃんは今どこ? だって。……あずにやんの家だよと……」

唯はこう律にメールを返すと、紬がバイトしているいつものファストフード店に集まろうとの話になった。

梓は預かっている猫を引き渡さなければならぬので、残りの3人は先にファストフード店に向かって、律と合流した。

律と合流してからそれほどかからずに梓も合流した。

梓に子猫を預かって欲しいと頼んだのは純で、その純が子猫を引き取りに来たので、梓はみんなと合流した。

その後は今日みんな何をしてたのか互いに報告し合っていた。

律は弟と映画を観に行っただが、その後、弟が友達と遊びに行ってしまったので、暇になってしまったらしい。

梓は純から預かった子猫をずっと見ていた。

このような報告を続けていると、漣が合流した。

「あつ、みおちゃんおかえり♪」

「おお、漣。いい歌詞は……浮かばなかったみたいだな」

漣はガクツと肩を落としながら律の隣の席に腰をおろした。

「でも、何か格好いい！1人で冬の海にふらりと行くなんて！みんなすごいよ！私を置いて大人にならないですよ」

今日はみんな何かしらやっていたことに唯は少しだけ嫉妬していた。

「りっちゃんはお変わってないよねえ？」

「なっ！あ、あたしだって！」

唯に言われたことが癪に障ったのか、律は反論していた。

「え、何？何かあつたの？」

「え、えつと……」

律は本当のことを言おうとするがそれを言うことは出来なかった。

「……？律？」

統夜はそんな律を見て首を傾げていた。

「……ああ、そうだ。律」

「？何？」

「この間郵便受けに入れておいた歌詞……どうかな？」

「へ？か、歌詞？」

漣の言葉に何故か拍子抜けした律が固まっていた。

「うん。頑張つてパソコンとか使つてみたんだけど……」

「パソコン？つてことは……」

『漣。だいぶ前に統夜にパソコンの相談をしていたな？もしかして、「冬日」で始まるやつか？』

「な、何で統夜とイルバが知ってるんだよ!？」

「な、何でつて言われても漣にパソコンのことを相談されたからだけど」

「そ……それじゃあ……あれは……漣が？」

「うん!」

統夜はここまでの話を聞いて今まで律の様子がおかしかった原因を理解した。

「な、なあ、律。お前、まさか……」

統夜はそのことを確かめようとうとう律に問いかけるのだが……。

「うわああああああああ!!!」

「へぶしつ!!」

律は恥ずかしさのあまり統夜に左フックをお見舞いすると、統夜は一撃でノックアウトされてしまい、その場に倒れ込んだ。

そして滯の肩をガクガクさせていた。

「あれ書いたの……。滯だったのかあ!!」

「ゆ、郵便受けに入れておくって言っただろ!？」

「今時そんな酷なことをするんじゃない!!」

滯と律はしばらくの間このやり取りをしており、統夜は律から受けた左フックが効いたのかしばらく倒れていたが、やがてゆつくりと起き上がった。

「痛てて……。律のやつ遠慮なくやりやがって……」

『律の左フックはなかなかのものだったな』

「か、関心してる場合かよ……」

統夜は痛みを抑えながらイルバにツツコミを入れていた。

律はギヤーギヤー騒ぎながら滯の肩をガクガクさせていた。

統夜はふと紬の方を見ると、紬は相変わらず接客に追われていたのだが、ふと統夜と目が合うと、紬は笑みを浮かべていた。

しばらくすると、紬のバイトの時間が終了し、紬も合流した。

紬の合流後は雑談をしながらワイワイと楽しんでこの日は解散となった。

この日は番犬所からの呼び出しはなかったので、唯たちと解散した後、統夜は街の見回りを行ってから家路についた。

※※※

数日後の放課後、統夜たちはいつも通り部活をしており、この日はティータイムの前に練習をしていた。

「ひゃうっ!!」

突然滯が声をあげた。

「どうしたの?」

「あ……いや……。ベースがすごく冷たくて、それが太ももに当たって……」

「ひゃうっ!……だつて♪もう一回言つて♪」

「いやーだ!!」

唯は目を輝かせて滯に詰め寄るが、滯は唯の額を手で押さえ、拒否していた。

「そういえば、ムギは普通にキーボードひゃうっ!!弾いてるけど、手が悴んだりしないのか?」

滯は話を誤魔化すために、紬に話を振っていた。

「私、体温高いから」

「あ、本当だ！暖かあい♪」

唯は紬の手を握り、紬の体温を確かめていた。

その後、律と澪も同じように紬の手を握っていた。

「おお、暖けえ♪」

「本当だな！」

統夜と梓はそれを遠巻きに見ていた。

梓は後輩故に先輩とのスキンシップが行いにくいという理由があり、統夜は男である故に余計スキンシップが行いにくいという理由があった。

「うーん……。一家に一台ムギちゃんだよお♪」

『おいおい、紬は家電じゃないぞ』

唯の言葉にイルバがツッコミをいれていた。

「あつ、あずにゃんも触ってみなよ！」

「えっ？わ、私はいいですよ」

梓は遠慮がちに唯の提案を断っていた。

「暖かいよお♪」

「はいっ♪」

唯が勧め、紬は両手を差し出していった。

「しっ、失礼します……」

梓は恐る恐る紬の両手を触った。

「あつ、本当だ、暖かい」

「あずにゃんの手は小さくて可愛いね♪」

唯は梓の手を握ってこう言うと、梓の顔が真っ青になっていた。

「どうせ私は手が大きくて心の冷たい女ですよ」

自分の大きい手がコンプレックスになっている滯は涙目でこう言っていた。

「手が冷たい人は心が暖かいんだよ、みおちゃん！」

「！」

唯の言葉を気にした紬は両手を窓にくっつけていた。

「ムギちゃんは手も心も暖かいよ！」

唯の言葉が嬉しかったのか、紬はばあつと顔を輝かせていた。

統夜はそんな女性陣のやり取りを笑みを浮かべながら見ていたのだが……。

「ふっふっふ……。次は……。やーくんだね……。！」

唯が目をキラリと輝かせながらこう言っていたので、統夜は嫌な予感を感じ取って、顔を真っ青にしていた。

統夜は隙について逃げ出そうとするが、その前に紬に捕まってしまった。
「ちよ……またかよ!?!しかも動けないし!」

紬の力はかなりのもので、抜け出すことが出来なかった。

「さてと……」

唯は統夜の右手を掴み、滯が統夜の左手を掴んでいた。

「おお!意外とやーくんの手って暖かい♪」

「本当だな♪」

「え?本当に?」

「どれどれ……」

続いて律と紬が統夜の手を掴み、その後は梓が統夜の手を掴んだ。

「おお、暖けえ♪」

「本当ね♪」

「そうですね♪」

律と紬は満足そうな表情を浮かべ、梓は頬を赤らめていた。

「やーくんは……心が暖かい……のかな?」

「おい!何で疑問系なんだよ!」

「それは……だって……なあ……」

「クスツ、そうですな♪」

滯と梓ははつきりと言わなかった。

『まあ、お前さんの普段の言動を見ていれば言わずともわかる気がするがな』

イルバの言葉に唯たちはウンウンと頷き、統夜は首を傾げていた。

「なあ、とりあえずそろそろ離してくれないか？さすがに恥ずかしいんだけど……」

「……ダメ（です）!!」

「何でだよ!?!」

統夜は未だ袖に捕まったままなのだが、唯たちは統夜を解放しようとはしなかった。

「そりゃあ、ねえ……」

「久しぶりにやーくんとスキンシップを取ろうかと♪」

「な、何を言ってるのかなあ?」

統夜はこれから何をされるのかおおよその予想がついていたので、顔を真っ青にしていた。

「……ふっふっふ……」

そして唯たちは何故か怪しい笑みを浮かべていた。

「おい……やめろ……来るな……」

統夜はいつぞやの衣装決めの時のように怯えていた。

(やれやれ……また怯えてるのか……。こう何度も見ていると、本当にこいつがあ
グオルブを討滅したのかと疑いたくなるぜ……)

イルバは統夜の怯えように呆れ果てていた。

そして……。

「だっ……ダレカタスケテー!!」

統夜の悲鳴が響き渡るなか、統夜は頭をくしゃくしゃに撫でられたり等、唯たちのお
もちやと言つても過言ではないほどみくちやにされていた。

(やれやれ……。唯たちは純粹に統夜とスキンシップを取りたいだけだろうが、男子に
とってはこの光景は天国に見えるだろう……。まあ、当の本人は地獄なんだろうが
……)

イルバは唯たちのやり取りを冷静に分析していた。

数分のスキンシップで唯たちは満足したのだが、統夜の髪はくしゃくしゃになってお
り、心身ともにボロボロになっていた。

(おいおい……。これがあの白銀騎士奏狼かよ。ずいぶんと無様な姿になっているが)

イルバは相棒のあまりのボロボロぶりに呆れていた。

その後唯たちは練習を終了させると、そのままティータイムを楽しんでいた。

律は濡が書いた歌詞を却下するのだが、全員に反対され、この歌詞は新曲の歌詞とし

て採用されることになった。

こうしてこの日は紅茶を飲んで、体を暖め、談笑を楽しんでいた。

……続く。

—— 次回予告 ——

『ほう、ライブハウスでのライブか。軽音部のお前たちにはいい機会かもしれないな。次回、「響家 前編」。さて、どのようなライブになるのやら』

U A 1 0 0 0 0 記念作品 「ゼクス〈暗黒騎士鎧伝〉」

……黒き闇に堕ちた心……。

その心に……輝きはなかった……。

その心に……希望はなかった……。

それを知りたい者は行くがよい。

黒く……深い……闇の中へと……。

……メシアの腕と呼ばれしホラー、「グオルブ」が封印された牙を奪ったディオスは、その復活を阻止しようとする若き魔戒騎士、月影統夜と対峙した。

暗黒騎士の力を得ているディオスは暗黒騎士ゼクスの鎧を召還し、その圧倒的な力で統夜を退けた。

その後、ディオスはホラーと化した自分のしもべであるダンテと共に、桜ヶ丘某所にある廃ビルに潜伏していた。

グオルブ復活前の余興としてとあることを企んでいたディオスであったが、その後のディオスは物思いにふけていた。

それはディオスに敗れて未だ眠り続けている統夜ではなく、自らのことであった。

普段は自分の過去のことなどは考えないディオスであったが、この日は何故か自分の過去のことを思い出していた。

※※※

混沌騎士ゼクスの称号を受け継いだディオスはかつて紅の番犬所に所属する魔戒騎士だった。

ディオスは優秀な魔戒騎士であったが、この頃から力ばかりを追い求める傾向があった。

ディオスが力ばかりを追い求めるのは幼少期の出来事があったからである。

ディオスの父親は魔戒騎士で、母親は魔戒法師というよくある騎士の家柄であった。

幼い頃のディオスは父親のような魔戒騎士になるために、修行に打ち込んでいた。

父親の修行は厳しかったが、ディオスは必死に修行に食らいついていた。

魔戒騎士になりたい。その気持ちかディオスを突き動かしていたからである。

そんな努力の甲斐もあつてか、修行を始めておよそ2年で、父親の魔戒剣を持つことが出来るようになった。

それだけではなく、ソウルメタルもそれなりに操ることが出来た。

そんなディオスが12歳の頃、悲劇は起こった。

ディオスの両親がホラーに殺されたのである。

ディオスの父親は魔戒騎士であったのだが、当時の混沌騎士ゼクスは無名の魔戒騎士であり、実力もあるとはいえなかった。

しかも、そのホラーの実力は自分の手に余るものであり、その実力差になす術もなく殺されてしまった。

両親が殺され、己の身を守るためにディオスはホラーに戦いを挑むが、自分の師である父も敵わなかったホラーにディオスが叶うはずがなかった。

ディオスはすぐさまホラーに追い詰められていた。

そんな中、ディオスは憎んでいた。両親を殺した目の前のホラーを。

そしてディオスは憎んでいた。何も出来ない無力な自分を。

そんな状況に絶望していたディオスだったが、そんなディオスの命を救ったのが奏狼の称号を受け継いだばかりの月影龍夜だった。

龍夜が来てくれたことにより、命を救われたディオスだったが、両親を殺されたディオスはホラーを憎む気持ちは変わることにはなかった。

それだけではなく、ディオスは自分の無力さを憎んだ。そして、誰よりも強い力をこの時から求めるようになっていた。

若かりし龍夜はディオスの両親を救えなかったことを負い目に感じて共に来ないかと提案するが、ディオスはそれを拒絶して旅に出た。

旅に出ながら自らを鍛え、強い魔戒騎士になるために日々精進していた。

ディオスはホラーや自分の無力さへの憎しみから、人を守る者になるという自覚はなく、強大な力でホラーを蹂躪する。それだけを考えていた。

それから時は流れ、ディオスは混沌騎士ゼクスの称号を受け継ぎ、紅の管轄に配属された。

そこでディオスはかつて自分の命を救った龍夜と再会した。

この頃の龍夜とダンテはとも面倒見が良く、ディオスにとっては、よき先輩であった。

ディオスは魔戒騎士となったのはいいが、人を守るという意識はかなり薄く、ホラーを討滅するためなら手段は選ばないといった考え方を持っていた。

この頃のディオスは「守りし者」ではなく、「討ち滅ぼす者」といった感じであり、救えた命を見殺しにして、叱責されたこともあった。

人を守れず叱責されても、ディオスは考え方を改めることはしなかった。

こうしてメキメキと実力はつけていったディオスであったが、龍夜は番犬所を統べる元老院にその実力を認められ、元老院所属の魔戒騎士となった。

龍夜が元老院へと異動となり、ディオスはそれから龍夜と顔を合わせることはなかった。

龍夜は元老院付きの魔戒騎士となると、様々なホラーを討滅していたが、やがて闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師を討伐する仕事をしていた。

そんな中、ディオスが衝撃的なニュースが耳に届いた。

とある騎士の討伐任務にあたっていた龍夜がその騎士に殺されたというのであった。

ディオスは龍夜ほどの実力者を殺した魔戒騎士に興味を示し、その騎士を探すために旅に出た。

そしてディオスが龍夜を殺した騎士を見つげるのにそれほど時間はかからなかった。

ディオスは龍夜を殺した騎士である暗黒騎士キバと対峙した時、禍々しい程の闇の力に魅入られてしまった。

暗黒騎士キバとの出会いこそ、ディオスが闇の力に魅入られてるきっかけとなった。

「貴様も私を討伐しに来た魔戒騎士か？」

「そのつもりだったが、気が変わったよ」

「？気が変わったと？」

「貴様、暗黒騎士だろ？教えてくれ！どうすれば貴様のような暗黒騎士になれるんだ！」
ディオスは暗黒騎士キバの称号を持つバラゴにどうすれば暗黒騎士になれるか聞いて

ていた。

ディオスは旅の途中で暗黒騎士の噂を聞き、最強の力を得るためには暗黒騎士の力しかないと思っていたからである。

「自ら闇を求めるか……。ふっ、面白い奴だ」

バラゴはディオスも葬るつもりだったのだが、ディオスも闇の力を求めていることを知ると、それをやめた。

「いいだろう。貴様も暗黒の力に酔いしれたいのなら教えてやろう……。究極の力を得る方法を……！」

バラゴはディオスがかつての自分と同じ目をしていると感じたため、あっさりと暗黒騎士になる方法を伝授した。

それは、鎧の制限時間である99.9秒を越えた場合に魔戒騎士が陥る心滅獣身の状態を憎しみなどの感情による強大な闇の力で抑え込み、自力で鎧に打ち克つことである。

そうすることにより、ソウルメタルで作られた騎士の鎧がデスメタルという特異な金属に変化し、暗黒騎士となる。

そうなった瞬間、騎士の系譜は抹消され、その称号は暗黒騎士に統一されるのである。暗黒騎士には鎧の制限時間はなく、さらに封印して魔界に送り返さなければいけない

ホラーを吸収することで己の力とする「陰我吸収」という特別な能力が得られる。

ディオスはバラゴの教えのもと、混沌騎士ゼクスの鎧を召還すると、わざと制限時間をオーバーさせ、心滅獣身の状態となった。

ホラーに対する深い憎しみや、強大な力に憧れを持っていたディオスはその強靱な精神力で、鎧に打ち克ち、暗黒騎士となった。

この瞬間、混沌騎士という系譜は消え去り、ディオスはそれから暗黒騎士ゼクスと名乗るようになった。

暗黒騎士の力を手に入れたディオスは各地を放浪し、ホラーを討滅することでホラーを陰我吸収によって喰らっていた。

ディオスが暗黒騎士の力を得て間もなく、暗黒騎士の先輩であるバラゴがメシアに取りこまれるといった形で最期を遂げたことを知った。

ディオスはバラゴの死を悲しむことはなく、バラゴがいなくなったことで、自分が最強の魔戒騎士であると自負をしていた。

多くのホラーを喰らっていたディオスが桜ヶ丘に一時期だけ戻ってきた。

それから間もなく、元闇斬師であり、月影龍夜の妻であった明日菜が、ディオスが暗黒騎士の力を得たことを突き止めた。

まだまだホラーの力を吸収したいと思っていたディオスは明日菜の存在が邪魔にな

り、ある日、明日菜を襲撃した。

明日菜の家に突入し、早々に明日菜を追い詰めると、剣を突き刺し、明日菜の命を奪った。

その様子を明日菜の息子である月影統夜に見られたのだが、この少年が騎士の称号を継いだとしても自分の敵ではない。

そう考えたため、ディオスは統夜を殺すことはしなかったのである。

しかし、この選択を後々悔いることになるのは、ディオスは知る由もなかった。

※※※

明日菜の命を奪ったのがかつて共に戦ったディオスであるとダンテが突き止めたのは、明日菜が死んで間もなくであった。

「……………見つけたぞ！ディオス!!」

ディオスの潜伏先を突き止めたダンテは、ディオスを見つけると、怒りに満ちた表情でディオスを睨みつけた。

「ほう……。貴様は剛風騎士ダンテか……。久しいじゃないか！」

「貴様！何故明日菜を殺した！あの龍夜の妻なんだぞ！」

「そんなことは知っている！誰かを殺すのに理由などいるか？……強いていうなら存在が目障りだから……。だな」

「貴様……。もう俺や龍夜の知ってるディオスじゃないな！身も心も腐ってやがる！」

龍夜の妻を躊躇なく手にかけてディオスをダンテは怒りに満ちた目で睨みつけていた。

「言いたいことはそれだけか？」

「ディオスはダンテの怒りの言葉をさらりと流していた。

「御託などどうでも良い。貴様は私を斬りに来たんだらう？」

「ああ！俺はお前を斬る！龍夜や明日菜のためだけじゃない！まだ幼い統夜のためにもだ!!」

ダンテは魔戒槍を構えると、ディオスを睨みつけた。

「統夜……。ああ、あの小僧か」

ディオスはダンテの語る統夜というのが自分があえて殺さなかった子供だと理解す

ると、魔戒剣を抜いて、構えた。

「……はあっ!!」

ダンテは魔戒槍を一閃するが、ディオスに軽々とかわされてしまった。

「まだまだ!!」

すかさずダンテは連続で突きを放つが、ディオスは軽々とかわしていた。

「くっ……いっ……速い!!」

「どうした？俺を斬るのだろうか？その程度で私は斬れないぞ」

ディオスは余裕の表情でダンテを挑発していた。

しかし、ダンテは挑発に乗ることなく、冷静だった。

「ほお、さすがは歴戦の勇士といったところか」

ディオスは感情に左右されず、冷静に戦況を見極めるダンテを少しだけ賞賛していた。

ダンテは一瞬の隙をついて魔戒槍を一閃するが、それはディオスの持っていた盾で防がれてしまった。

「くっ……いっ……盾か!」

「ほお！なかなか良いところに攻撃するじゃないか!」

ディオスは盾を前に押し出すと、ダンテを吹き飛ばした。

ダンテはそのまま綺麗に着地して、体勢を整えた。

「ディオス！遊びは終わりだ！俺は全力でお前を斬る!!」

ダンテは魔戒槍を高く突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、白と緑を基調とした鎧に包まれた。

この姿こそ、自らが受け継いだ剛風騎士ダンテの鎧であった。

「鎧を召還したか……。よかろう！私も少しだけ本気を出してやる！」

ディオスは魔戒剣を盾に共鳴させると、魔戒剣を前方に突き付けた。

すると、ディオスの前方に円の形をした大きな空間が出現すると、ディオスはそこから放たれた光に包まれた。

そしてディオスは漆黒の鎧を身に纏った。

この姿こそが暗黒騎士ゼクス。

心滅獣身を闇の力で克服し、多くのホラーを喰らってきたその姿は、禍々しいほどのオーラを放つ漆黒の鎧だった。

「……この禍々しいオーラ……！なるほど、これが暗黒騎士か……！」

ダンテは禍々しいオーラを放つディオスに畏怖の感情を抱いていた。

しかし、ここで退くわけにはいかないと自らを奮い立たせたダンテは魔戒槍が変化した剛風槍を力強く握りしめると、ディオスに向かっていった。

「はあっ!!」

ダンテは剛風槍を一閃するが、ディオスは軽々とかわしていた。

すかさずダンテは連続突きを放つが、ディオスは盾で連続突きを軽く防いでいた。「どうした? その程度か? もっと私を楽しませろ!」

「なんの……まだまだ!」

ダンテは剛風槍の切っ先に風を集めると、風の塊をディオスに向けて放った。

「なるほど、風の攻撃とは、剛風騎士の名は伊達ではないな。だが!」

風の塊はディオスの盾であっさりと防がれてしまった。

「貴様はやはり私の敵ではないな……」

「なんの! これならどうだ!!」

ダンテは剛風槍の切っ先に黄色の魔導火を纏わせると、烈火炎装の状態となった。

「なるほど、烈火炎装か。……いいだろう!」

ディオスも魔戒剣の切っ先に紫の魔導火を纏わせると、烈火炎装の状態となった。

「はああああああああああ!!」

ダンテとディオスは同時にそれぞれの武器を振るうが、そのパワーはディオスが圧倒していた。

「ぐああああああああ!!」

ディオスに競り負けたダンテは壁に叩きつけられてしまい、その衝撃で鎧が解除されてしまった。

「うっ……！くっ……！」

ダンテのダメージは相当なものであり、ダンテは立ち上がるが、立ち上がることは出来なかった。

ディオスはゆつくりと手負いのダンテに近付いていた。

「……勝負あつたな」

「くっ……！殺せ！」

潔く負けを認めたダンテはこう言いながらもディオスを睨みつけた。

「……」

ディオスは何故かとどめを刺さずにジツとダンテの瞳を見つめていた。

「……？ど、どうした？何故殺さない！」

「……貴様の眼に闇を見たからな」

「！や、闇……だと!？」

「貴様、月影龍夜に嫉妬……いや、憎悪の感情を抱いているな？」

「なっ!?!何を馬鹿なことを！」

ディオスはダンテに向けた指摘を、ダンテは全力で否定していた。

「月影龍夜は元老院の魔戒騎士で、貴様はしががない番犬所の騎士。あいつと自分とで何が違うのか！そうは思っていないのか？」

「そつ、そんなこと……！」

ダンテは違う！と否定したかったが、それは出来なかった。

それは、ディオスの言葉が凶星だったからである。

ダンテは龍夜のことを良き親友だと思っていたが、メキメキと実力をつけ、魔戒騎士として出世していった龍夜に嫉妬の感情を抱いたことももちろんあった。

ディオスはダンテの少し輝きを失った瞳からそのことを見通していた。

「隠したり否定することはない。嫉妬と憎悪に溢れた貴様の眼は闇に満ちている。……

私にはわかる。だから貴様は殺さない」

「な……なんのつもりだ！」

「その代わり……。私のしもべになってもらおうか！」

ディオスは自分の口から黒い帯のようなものを放つと、その黒い帯はダンテの中に入ってしまった。

「ぐあああああああー！」

黒い帯はどんどんダンテの中に入っていく、ダンテは断末魔をあげていた。

そして……。

「……………」

ホラーに憑依されてしまったダンテは、怪しげな笑みを浮かべていた。

「……………」これから貴様は私のために働いてもらおうか。来るべき私の野望を果たすために

！」

「はっ……………！承知いたしました。ディオス様」

暗黒騎士の力によってホラーに憑依されたダンテはディオスに忠誠を誓っていた。

※※※

ダンテを配下にしたディオスはその後ホラーを喰らい続け、力をつけていった。ちようどその頃になると、元老院にもディオスの存在は知られるようになった。

元老院はディオスの存在を危険視し、実力のある魔戒騎士を次々と派遣するが、ディオスはその魔戒騎士たちを次々と蹴散らしていった。

そんなディオスであったが、とある魔戒騎士がディオスを追い詰めていた。

その魔戒騎士は全力を出したディオスを追い詰める程の実力者だった。

この日、ディオスは廃工場に現れた素体ホラーを斬り裂き、自らの糧とした。

その時、ディオスは魔戒騎士の気配を感じ取っていた。

「……また魔戒騎士が来たか」

ディオスはボソツと呟くと、ディオスの目の前に1人の青年が現れた。

「……ほう、その出で立ち……。貴様はもしや、影の魔戒騎士最強と言われた絶影騎士ゾロか！」

ディオスの前に立ちはだかったのは、元老院付きの魔戒騎士であり、影に生き、影に消えゆく定めを持った隠密の騎士の中で最強の騎士と呼ばれた絶影騎士ゾロの称号を持つ男だった。

「……ディオスよ、知っているか？ 貴様のように闇に心を売り、暗黒の道を歩んだ者たちがいた。……たった1人成功した者はいたが、それもホラーに取りこまれ、それ以外は誰1人と成功しなかったんだ」

ゾロが指摘したホラーに取りこまれた暗黒騎士とは、バラゴのことであった。

「ふん、私はバラゴとは違う。私は純粋に闇を求めている。私こそ、最強の暗黒騎士となるのだ！」

ディオスは暗黒騎士キバの称号を持ったバラゴを越える力を持った暗黒騎士になることを決意していた。

「絶影騎士ゾロ……。影の魔戒騎士の中で最強の騎士である貴様は、私の糧となるのだ！」

「そのつもりはない。私は、貴様を斬る。それだけだ」

ゾロは切っ先の短い2本の魔戒剣を取り出すと、鎧を召還し、その体は白銀の鎧に包まれた。

「銀の騎士か……。私はどうやら銀の騎士と縁があるようだな」

自分を救った騎士といい、目の前の騎士といい、よく銀の騎士を見る。

そう思っていたディオスは苦笑いをしていた。

相手が何者であろうと目の前に立ちはだかる者は斬り捨てる。

そう決意していたディオスは魔戒剣を取り出すと、銀の鎧を身に纏ったゾロを睨みつけていた。

「ディオス様！ここは私が！この男、只者ではありませんん！」

「ダンテ、下がっている。こいつは私の獲物だ」

「はっ、かしこまりました」

ダンテはディオオスの援護をしようとしたものの、それを拒否されたため、戦いを静観することにした。

ダンテはホラーでありながらも、魔戒騎士としての実力は残っており、その本能からゾロの存在を危険視していた。

しかし、ディオオスはそんなことはおかまいなしで、むしろ手応えのある相手との出会いを喜んでくれた。

ディオオスは魔戒剣を抜くと、魔戒剣を盾に共鳴させ、それを前方に突き付けた。

すると、前方に円形の空間が出現し、そこから放たれる光に包まれたディオオスは漆黒の鎧を身に纏った。

「……………」

鎧を召還した両者は、迂闊に動くことはせず、互いの出方を伺っていた。

そして……………」

「……………はあっ!!」

両者は同時に駆け出すと、それぞれの剣を一閃するが、その一撃は互いの剣に防がれた。

その衝撃はかなりのものであり、両者の周囲には稲妻が轟いていた。

その後、ディオスはゾロを弾き飛ばし、距離をとった。

ゾロを弾き飛ばしたディオスは魔戒剣を一閃するが、ゾロの素早い動きに翻弄されていた。

「……………ほお、面白い！」

今まで戦ってきた魔戒騎士以上の力を感じ取ったディオスは笑みを浮かべていた。

ゾロは変化した魔戒剣をまるで鎖鎌のように飛ばした。

ディオスはその攻撃をかわすが、その攻撃は囷であり、ゾロの攻撃が迫ってきた。

「……………」

ディオスは剣と盾を用いてどうにか攻撃を防ぐことが出来た。

すかさずディオスは剣を一閃するが、ゾロは瞬間移動を繰り返し、ディオスを翻弄していた。

ディオスほどの実力者でもゾロの攻撃を捉えることは出来ず、少しずつダメージが蓄積されていった。

「くっ……………最強の影の魔戒騎士の名は伊達ではないか……………」

「ディオスよ、思い出せ。貴様が魔戒騎士となったその日のことを！その日の想いを！」

ゾロは戦いの中でもディオスの良心に訴えかけ、罪を償ってもらおうと考えていた。

殺す事は容易だが、殺さずに罪を償ってもらえるならそれに越したことはない。

そう考えていたからである。

「そんなもの……とうに忘れたわ!」

しかし、暗黒騎士になってからは、ディオスは余計に力を追い求めるようになった。それだけではなく、魔戒騎士になった頃もただ力を追い求める騎士だったので、純粹な「守りし者」としての気持ちは始めから持ち合わせてはいなかった。

ディオスは再び魔戒剣を一閃するが、ゾロは瞬間移動でその攻撃を回避した。「ならば……この私が引導を渡してやる!」

ゾロは2本の魔戒剣をクロスさせると、そこから雷の弾を出現させ、それをディオスめがけて放った。

ゾロは魔戒騎士であるが、魔戒法師の心得も持ち合わせており、瞬間移動や雷の弾など、いくつか法術も会得しているのである。

「……くっ! そんなもの!」

ディオスは魔戒剣を一閃すると、雷の弾を真つ二つに斬り裂いた。

しかし、その雷の弾は囀であり、青の炎に包まれたゾロがディオスに向かっていった。

「面白い!!」

ディオスも慌てることなく、烈火炎装を発動し、両者は激しくぶつかり合った。

そして……。

「もらったあ!!」

烈火炎装対決に競り勝ったディオスはそのまま魔戒剣を一閃し、ゾロの体を斬り裂いた。

「ば……馬鹿な……！暗黒騎士の力……これほどは……！」

全力を出してディオ스에敗れたゾロの体はそのまま消滅した。

ディオスはゾロが消滅する様をジッと見つめていた。

「……絶影騎士ゾロ……。その名前……覚えておこう……」

ディオスは自分が戦ってきた騎士の中で一番の強敵の名を胸に刻んでいた。

影の魔戒騎士最強の名を持っており、黄金騎士牙狼とも互角ではないか？と噂される程の騎士をディオスは倒したのである。

ディオスは追い詰められながらもこれ以上ない強敵との戦いが楽しいとさえ感じていた。

しばらくゾロを討伐した余韻に浸っていたディオスは戦いを見守っていたダンテと共に、何処かへと姿を消した。

ゾロを討伐したディオスはこれ以上の強敵と出会うことはなく、再び桜ヶ丘に戻ってきた。

桜ヶ丘に戻る前も魔戒騎士は立ちはだかつたのだが、ディオスの敵ではなく、魔戒騎士たちは圧倒的な力によって蹂躪されてしまった。

桜ヶ丘に戻ってきたディオスは現在魔戒騎士になっている月影統夜の戦いを見ていた。

戻ったばかりの頃は統夜が魔戒騎士の称号を受け継いだことは知らなかったが、その街にいる魔戒騎士の情報をダンテが調査して報告していたからである。

統夜が魔戒騎士になったと知り、どれだけの力があるのか期待をしていた。

しかし……。

「あれがあの中の時の小僧か……。奴の実力は絶影騎士に遠く及ばないな……」

ディオスは統夜の実力はまだまだであることに落胆していた。

それなりの実力はあると評価はしたものの、自分を追い詰めたゾロ以上の力はない。それがすぐにわかったからである。

「奴がその程度の実力なら、我が野望の邪魔は出来ないだろう……」

自分を追い詰め、倒せるのはゾロくらいのものである。

それだけゾロのことをディオスは課題評価していた。

当然、黄金騎士牙狼や銀牙騎士絶狼など最強と言っても過言ではない魔戒騎士は存在したが、ディオスは牙狼や絶狼も自分の敵ではないと思っていた。

ディオスはその後、強大な力を持つホラー、グオルブを復活させるために動き始めたのだ。

「……………様！ディオス様！」

「……………！」

物思いにふけっていたディオスはダンテに何度も呼びかけられるまでぼおつとしていた。

「……………ああ、すまない。昔のことを思い出していな」

「昔のこと……………ですか？」

「ああ、かつて私が倒してきた魔戒騎士のことを思い出していな」

「魔戒騎士……………ですか？ああ、そういえば絶影騎士ゾロは、かなりの実力者でしたね」

ダンテもディオスがゾロと戦った時のことを思い出していた。

ダンテもゾロの実力は認めざるをえない程であった。

「そうだな……。あいつ以上の騎士は現れなかった。……だからこそ、私を止める者はいないのだ！」

ディオスは昔の出来事を思い出し、自分を倒せる魔戒騎士が現れることはないと確信していた。

だからこそ、強大な力を持つグオルブを復活させ、一体化することで、さらなる強大な力を手に入れて、ついでにこの世界を理想の世界にしよいと企んでいた。

「……ダンテ、そろそろ行くぞ」

「はっ！かしこまりました」

「……月影統夜……。グオルブ復活前の余興……。楽しませてもらうか……。！」

こうしてディオスはダンテと共に統夜が運ばれた琴吹総合病院へと向かい、統夜の動向の調査を始めた。

統夜はまだ生きており、目が覚めてからが余興の始まりである。

そんなことを考えながらディオスは統夜が目覚めることを待っていた。

この後待ち受ける運命を、ディオスはまだ知る由もなかった……。

⋮
⋮
⋮
終。

オリキヤラ設定集

??月影統夜（1話時点で16歳）

イメージC↓内田雄馬（マクロスΔ ハヤテ役等）

今作の主人公であり、桜ヶ丘高校に通う高校2年生でありながら、白銀騎士奏狼の称号を受け継いだ少年。

父親は先代の奏狼である月影龍夜であり、母親は元闇斬師の魔戒法師、明日菜である。龍夜は暗黒騎士キバに戦いを挑むものの、敗れて死去し、明日菜は暗黒騎士ゼクスに殺された。

普段は穏やかで、誰にでも優しい性格だが、ホラーと戦う時は目付きも鋭くなり、顔つきも変わっている。

幼少期から魔戒騎士の才能はあり、メキメキと実力をつけているのだが、時に敵の挑発に乗るなど未熟な部分は多い。

特に大切な仲間や友達をバカにされたり、傷つけられると、我を忘れるほど怒り狂ってしまう。

冷静に戦況を見極めたり、ささいな出来事からホラーの存在を嗅ぎつけるなど、ホ

ラーとの戦いでは、勘の鋭さを発揮している。

しかし、私生活……特に女性絡みになるとあり得ない程鈍感になり、相棒のイルバには朴念仁や天然ジゴロと言われて呆れられている。

現在は両親が遺した一軒家に住んでいるために一応料理は出来るものの、食事は外食が多い。

さらに、かなりの味覚オンチであり、食べた物を必ず病院送りにしてしまうカオルの料理を美味しそうに平らげてしまうほどである。

桜ヶ丘高校軽音部に所属しており、担当はギターである。

統夜は魔戒騎士の勤めがあるが故にギターの練習はあまり出来ないものの、軽音部の中では一番ギターが上手く、梓から尊敬されている。

愛用の魔戒剣は青鞘であり、魔戒騎士としては珍しい色の鞘である。

普段着用している魔法衣の色は赤であり、背中には奏狼の紋章である四角形の紋章がついている。

強大な力を持ったホラー、グオルブと暗黒騎士ゼクスを討滅した実績を認められ、卒業後に元老院入りを推薦されたが、それを断り、桜ヶ丘で騎士の使命を全うすることを決めている。

??白銀騎士奏狼（ソロ）

統夜が継承した魔戒騎士の鎧。

その名の通り、白銀の輝きを放っている。

かつては黄金騎士牙狼と並ぶ程の称号であったが、現在は魔戒騎士の中でも上位に位置する称号である。

奏狼の鎧は黄金騎士の系譜なのではないか？と噂になったことがあるが、黄金騎士の系譜ではない。

鎧を召還すると、魔戒剣は専用の剣である皇輝剣（こうきけん）に変化する。

魔導火の色は赤である。

ソロは旧魔戒語で「勇氣」という意味がある。

??魔導輪イルバ

イメージC V ↓ 影山ヒロノブ

統夜がつけている意思を持った指輪で、ドクロのような形をしている。

一人称は「俺様」であり、傲岸不遜な性格である。

ホラーを探知することが可能で、統夜を時には鼓舞し、時には叱責したりと、統夜と

共に戦う相棒である。

イルバは牙狼の称号を持つ冴島鋼牙がつけている魔導輪ザルバとそっくりなのだが、それを認めようとしなない。

それはザルバも同様であり、会えば喧嘩ばかりしている。

軽音部では統夜たちのやり取りを見守りながらツツコミを入れていく役割である。

統夜と違って色恋沙汰等にも敏感であり、統夜とのデートを控えた梓を焚きつけたりもしていた。

奏狼の系譜を残すためにイルバは軽音部のメンバーの誰とくつついてもいいとは思っているが、ハーレムだけは認めていない。

??イレス（年齢不詳）

イメージC↓花澤香菜（IS シャルロット役、化物語 千石撫子役 等）

紅の番犬所の神官。

その容姿は統夜とそれほど変わらず、絶世の美少女と言っても過言ではないが、統夜よりも遙かに長い時を生きている。

彼女の母親は元老院の神官であるグレスであり、それ故それなりに強い権力を持っているが、それをひけらかしたりしない。

その性格は番犬所の神官とは思えないほどおっとりで、穏やかな性格であるが、番犬所の神官として毅然な振る舞いをするような心がけている。

彼女は人界の学園生活……特に高校生活に憧れを持っており、その実態を知るために統夜の桜ヶ丘高校入学を推薦した。

統夜が入学し、高校の話を聞くうちにその憧れはさらに燃え上り、母であるグレスに無理を言って1週間だけ桜ヶ丘高校に留学したこともあった。

長い時間を番犬所で過ごしていた割には社交的な性格で、人当たりも良かったので、クラスの人気者だった。

??桐島大輝（38歳）

イメージC V ↓ 森川智之（スパロボOG キョウスケ役等）

紅の番犬所に所属する魔戒騎士で、統夜の先輩にあたる魔戒騎士である。

称号を持たない魔戒騎士であるが、その実力はかなりのものであり、統夜も一目置いてる。

普段は真面目で実直な性格であるが、面倒見がいいという一面もある。

統夜が学校に行っている間、不足分のエレメントの浄化を嫌な顔一つせず行っているため、統夜は大輝に頭が上がらない。

魔戒騎士ではあるが、平凡な日常の大切さを常日頃から感じており、統夜には高校生として当たり前の日々を過ごして欲しいという思いから統夜がどこか遊びに行く時は代わりに仕事をこなすなど、非常に協力的である。

グオルブが討滅された後も、紅の番犬所所属の魔戒騎士として、ホラーを狩り、人々を守っている。

第34話 「響家 前編」

「ライブハウス？」

年末が近づいてきている12月のある日、律がこのような話を切り出した。

「そう。中学の時の友達がさあ、一緒に出ないかって誘ってくれたんだ」

律はライブハウスで行なわれるライブのチラシを全員に見せていた。

「でもこれ、大晦日って書いてあるけど……。あと10日しかないぞ？」

「何にも用意してませんよ？」

「ええ？でもなんだか楽しそう！私出てみたいなあ♪」

「だろお？」

「うん♪」

唯と律はライブハウスでのライブに出てみたいという意見だった。

「でも……。また大勢の人の前に出るのは……」

滯はその恥ずかしがり屋な性格ゆえ、前向きな意見を出すことが出来なかった。

「滯！そんなこと言ったらいつまでたっても成長出来ないぞお！」

『そこは律の言う通りだな。度胸試しにはちようどいいんじゃないか？』

「い、イルバまで……」

「ベースを弾いてるみおちゃん、凄く格好いいよ！」

唯が目をキラキラさせながらこう言っていた。

唯はお世辞を言えるタイプではないので、これが本音だということはすぐに察するこ
とが出来た。

「……」

「……？・漣？」

「そ、それじゃあ、多数決で決めよう……今回パスの人……」

漣は今回のライブに出るかどうか多数決で決めようと提案し、今回の出場に反対の人
を聞いていた。

それに手をあげたのは、漣と梓だけだった。

「……律先輩、唯先輩。ごめんなさい！」

「こしやくな梓！それじゃあ出たい人！」

唯はこう言うのと力強く手をあげていた。

「はい！はい！はい！！」

唯もそれに続いて手をあげた。

そして……。

「はい！」

紬も手をあげていた。

「む、ムギ先輩!？」

「ムギは、年末年始は旅行じゃなかったのか？」

滯の言う通り、紬は年末年始に家族と旅行に行く予定だった。

「うん。でも、こんな機会は滅多にないでしょ？それに……今年最後の日にみんなで演奏出来るなんて凄く幸せなんじゃないかなあって」

「ムギ……」

紬の言葉を聞いた滯と梓は考え込んでいた。

「ところで、統夜はどっちなんだよお！どっちにも手をあげてなかったらどろ？」

律は統夜がどちらの意見にも手をあげていないことを見逃さずに追求していた。

「俺はどっちでもいいと思ってたから手をあげなかったんだよ。俺はみんなの決定に従うよ」

『よく言うぜ。心の中では出たいと思ってるくせに』

「あつ！イルバ、バラすなよ！」

自分の本音をイルバに見透かされ、統夜は唇を尖らせていた。

「まったく……それなら参加って素直に言えよなあ」

「やーくん、素直じゃないねえ♪」

「うっ、うるさいよ！」

統夜は顔を赤らめてそっぽを向いた。

「あの……」

「私たちも参加で……」

濤と梓はおずおずと手をあげて、反対意見を撤回し、参加する意思を伝えた。

「よし、参加決定！」

「やったあ！」

「やるからには優勝だぜえ！」

『おいおい。このライブはそういうものじゃないだろう？』

暴走気味の律にイルバがツツコミを入れていた。

こうして、統夜たち放課後ティータイムのライブハウス初参戦が決定したのであった。

※※※

ライブハウス参戦を決めた統夜たちは、部活を早々に切り上げ、ライブハウスに行つて出演の申し込みをすることになった。

ライブハウスに向かう途中、商店街を歩いていたのだが、外はクリスマス一色であった。

(クリスマスねえ……。まあ、どうせ指令があるか、なくても街の見回りだから俺には関係ないな)

魔戒騎士にイベントは関係ないので、統夜にとつてもクリスマスは自分に縁のないものだと思つていた。

統夜はそんなことを考えていると、ライブハウスに到着していた。

「……………ここがライブハウスかあ……………」

「……………なんだか緊張するね」

初めてライブハウスに入るであろう唯と紬は少しだけ緊張していた。

「大丈夫だって」

『律の言う通りだぜ。ほら、さっさと用事を済ませるぞ』

イルバに促され、統夜たちはライブハウスの中に入った。

中に入ると統夜は「すいませーん！」と声をかけて人を呼んだ。

すると、さわ子と同一年くらいの女性が姿を現した。

「あつ、あの……」

部長である律が話を切り出そうとするが、律は恥ずかしそうにしていた。

「出演の申し込みに来たんですけど……。名前は、放課後ティータイムです」

「ああ、話は聞いてるわ。「ラブクライシス」のマキちゃんの紹介ね」

（ラブクライシス？ああ、律の友達のバンドの名前か。けっこう格好いい名前じゃないか）

唯もそのことが気になっていたのか、律に放課後ティータイムという名前がほわわんとし過ぎではないか？と耳打ちしていた。

「放課後ティータイムなんて、何だか可愛いバンド名ね！」

バンド名を褒められて、唯と律の表情がぱあつと明るくなった。

出演申し込みにあたり、そのバンドの実力を知るために、統夜たちはあらかじめ録音してあった「ふわふわ時間」の演奏を聴かせた。

「……こ、こんな感じなんですけど……」

「……はい。それじゃあ、参加申込書を書いてくれる？」

統夜たち放課後ティータイムの実力を認めてもらったところで受付の女性は参加申込書を律に手渡した。

「えつと……。当日、出演者は13時入りね」

「結構早いですね」

「リハをやるからね。各バンド15分で。それで、15時からミーティング。客入れは16時。開演が17時ね」

律はテンパリながら話を聞いていたのだが、統夜は慌てることなく、スケジュールをしつかりとメモしていた。

（おお！統夜！ありがてえ！）

冷静に話を聞きながらメモを取る統夜に、律は助けられていた。

その後も統夜は当日のスケジュールの話をしつかりと聞きながらメモを取っていた。

《やれやれ。これじゃあどっちが部長かわからないぜ》

（まあ、そう言うなって。律はこういうの苦手だろうし、俺がやるしかないだろ？）

《まあ、お前さんがスケジュールを把握していれば問題はないか》

統夜はテレパシーでイルバと会話をしながら当日のスケジュールの話を聞いてメモを取った。

その後、受付の女性……川上がライブハウスの中を案内してくれた。

最初に案内されたのは、出演者専用の楽屋だった。

唯は初めて見る楽屋にキラキラと目を輝かせていた。

それは袖も同様だったようで……。

「あのつ、暖簾をかけてもいいですか？」

このような素っ頓狂な事を言い出していた。

「いやいやいや……ダメに決まってるだろ」

統夜がすかさずツツコミを入れると、川上は苦笑いしていた。

続いて案内されたのは、実際自分たちが立つステージだった。

統夜たちは初めて立つステージに興奮していた。

「演奏中の照明プランとかも考えておいてね」

「わかりました」

「もう、グルッグルのキラツキラのピカッピカで！」

「おいおい……。それじゃわからんだろうが」

統夜はジト目で唯にツツコミを入れていた。

「……ここで演奏するんですね♪」

「ドキドキするわね♪」

梓と紬は楽しい表情を浮かべていたのだが……。

——プシュー！

澁が頭から煙を出して固まっていた。

「おいおい、燃え尽きるのは早過ぎだぞ」

統夜は濡にツツコミを入れると、苦笑いをしていた。

こうしてライブハウスで行なわれるライブの参加申込みと、中の見学は終了した。

※※※

統夜たちはライブハウスを後にして、唯の家でライブの打ち合わせをすることになったのだが、統夜は番犬所に呼び出されてしまった。

打ち合わせは唯たちに任せることにして、統夜は番犬所へと向かった。

統夜は番犬所の中に入ると、イレズに挨拶をして、狼の像の口に魔戒剣を突き刺し、剣の浄化を行った。

剣の浄化を終えた統夜は魔戒剣を青い鞆に納めた。

「統夜、さっそくですが、指令です」

イレスがこう宣言すると、イレスの付き人の秘書官が統夜に赤の指令書を渡した。統夜は指令書を受け取ると、魔導ライターを取り出し、赤の指令書を燃やした。すると、魔戒語で書かれた文字が浮かび上がり、統夜は指令の内容を確認した。統夜が指令内容を音読すると、魔戒語で書かれた文字は消滅した。

「……わかりました！ただちにホラーを見つけて、掃討します」

「頼みましたよ、統夜」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にして、ホラーの搜索を開始した。

統夜が番犬所を出る頃には、外はすっかり暗くなっていた。

統夜はイルバのナビゲーションを頼りにしながら移動を始めた。

ちようどその頃、ベースを抱えた少女が夜の街を歩いていた。

彼女は自分が所属しているバンドの練習を行っていたのだが、練習に熱が入ってしまった。気が付けば遅い時間になってしまった。

（遅くなっちゃったな……。早く帰らないと……）

少女は早足で家に向かっていった。

（今日の練習も熱が入ってたよね。もうすぐライブもあるし、それも仕方ないか）

少女はとあるバンドに所属しているが、もうじきライブが行われるので、練習にも熱が入っていた。

家の近くの駐車場に差し掛かったのだが、そこで怪しい物体を発見した。

「……………これ、何だろう？」

少女が見かけたのは、巨大な黒い球体のようなものだった。

少女は訝しげにその球体のようなものを見ていたが、好奇心からかそれがどのようなものかを確かめたくてゆっくりと近づいていった。

そしてその球体のようなものに手を伸ばそうとしたその時だった。

「それに触らない方がいいよー」

「え？」

誰かの声が聞こえて来たので、少女は手を止めて声の方を見ると、声をかけてきたのは、赤いコートを着た自分と同じくらいの歳の少年だった。

「あつ、あの…………」

少女は赤いコートの少年……………統夜を見ると困惑していた。

そんなことはお構いなしに統夜は続けた。

「あと、一刻も早くその場から離れた方がいいよ。死にたくなかったらね」

「え？」

統夜の発言に少女はさらに戸惑うが、少女の近くにある黒い球体のようなものに変化が起こった。

ガタガタガタと球体が動き始めると、その形が変形し始めた。

「ひっ!?何?何なの!?!」

少女は恐怖のあまり、統夜のそばに駆け寄ると、黒い球体のようなものは最終的にこの世のものとは思えない人型のものに変化していた。

「ひっ!?!ば、化け物!?!」

「早く逃げろ!」

少女が恐怖に怯える中、統夜はきつめの口調で逃げるよう警告した。

少女は統夜の言葉に無言で頷くと、逃げるようにその場から立ち去った。

「さてと……」

少女の姿が見えなくなったのを確認した統夜は魔法衣の懐から魔戒剣を取り出すと、それを抜いて、構えた。

『統夜、こいつはインバーシユ。腕についてる鉄球に気を付けろよ!』

統夜が対峙しているホラー、インバーシユは、人間より一回り大きいサイズで、筋肉質の体型である。

さらに特徴は右腕についている鉄球である。

インバーシユはいきなり鉄球を統夜めがけて放って来たので、それをかわすと、接近して魔戒剣を一閃した。

しかし……。

「くそっ！ やっぱり硬いな、こいつ！」

インバーシユの体は硬く、魔戒剣では傷をつけることが出来なかった。

統夜は後方にジャンプすると、インバーシユと距離を取った。

「こうなったら、一気に決めてやる……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はインバーシユに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

統夜は鎧を召還すると、すかさず魔戒剣が変化した皇輝剣の切っ先に赤い魔導火を纏わせて、烈火炎装の状態となった。

インバーシユは統夜めがけて鉄球を放つが、統夜はそれを回避し、距離を詰めた。

「……………だ!!」

統夜は絶妙なタイミングで皇輝剣を一閃した。

赤い炎に包まれた刃は、インバーシユの体を真っ二つに斬り裂いた。

炎の刃で切り裂かれたインバーシユは断末魔をあげると、その体は爆発四散した。

インバーシユを討滅したことを確認した統夜は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い

鞆に納めた。

『さて、仕事も終わったし、帰るぞ、統夜』

「そうなんだけど、その前に……つと」

統夜はポケットから携帯を取り出すと、メールが来てるかチェックしていた。

その理由は、ライブハウスでのライブでやる曲や衣装など、決まったことを律がメールで報告してくれるとのことだったからである。

メールをチェックすると、律からメールが来ていた。

今回のライブは制服で参加することになり、演奏曲は

1. 私の恋はホツチキス
 2. カレーのちライス
 3. ふでペンくボールペンく
 4. ふわふわ時間
- に決定した。

今回「bright hope」を入れなかったのは、ライブハウスでのライブということで、全曲オリジナルの方がいいという意見があったからである。

(なるほどな……。確かにライブハウスでのライブだから全曲オリジナルの方がいいよな)

統夜は唯たちの話し合いで出た意見は理にかなっていると思っていたので、特に反対することはなく、律にこれで問題ないと思うと返信した。

「さてと、メールも返したし、そろそろ帰ろうか」

『ああ、そうだな』

ホラーを討滅した統夜はそのまま帰路についた。

※※※

そして時は流れ、クリスマスも過ぎ行き、ライブ当日となった。
統夜たちは全員でライブハウスに向かっていた。

ライブハウスの前に着くと、すでに何人か人が来ていた。

「あつ、お疲れ様でーす！」

「どーもー！」

「ありがとうー!」

1人の女性が挨拶をしてくれたので、統夜と律が笑顔で返していた。

「?何だろ?出演バンドの子達かなあ?」

唯が首を傾げてこう聞いてきた。

「そのファンの子達だな」

「おお!すでにファンが!」

唯は驚いていたが、それなりに経験を積んだバンドであれば、ファンがいてもおかしくはない。

統夜はそう思っていた。

統夜たちはライブハウスの中に入った。

「こんにちはー」

「よろしくお願ひしま……」

律は途中まで言ったところで言葉を失い、統夜以外の全員が固まっていた。

統夜たちの目に映った少女たちは目付きが鋭かったり、独特な色の髪だったり、独特な雰囲気だったりと明らかに自分たちと違うからである。

「……これは皆さん手強そうな……」

律はこっそり逃げ出そうとするが、すぐさま律に捕まっていた。

(アハハ……。確かにパツと見は怖いかな。俺はこういうのは慣れっただけど) 《まあ、お前さんは普段からあれより怖いものを見ているからな》

統夜とイルバはこのような会話をテレパシーで行っていた。

「おはよー」

「おはよう」

「今日はよろしく」

怖そうな見た目とは裏腹に彼女たちはフランクに挨拶をしてくれた。

そのことに安心した唯たちの表情は明るくなっていった。

すると、サングラスをかけた少女がこちらに駆け寄ってきた。

「りっちゃん！……滞ちゃんも久しぶり!!」

この少女は律と滯と顔見知りのようだった。

「あつ、マキちゃん！……あ、紹介するね。こちら、「ラブクライシス」のドラマのマキちゃん。今回ライブに誘ってくれた」

「よろしくね」

マキはニコつと笑顔で挨拶をしてくれた。

「こちらこそ！りっちゃんがいつもお世話になってます！」

「おいおい、お前は保護者かよ」

唯のまるで保護者のよいな発言に統夜はツツコミを入れていた。

「あ！ 滯さんだ！」

今度は茶色の髪で、マキと同じような格好の少女がこちらに駆け寄ってきた。

「うちのベースのアヤ。滯ちゃんの大ファンなんだ」

「え？」

「学園祭のライブ……すつごく格好良かったです！」

思いがけない言葉に滯は顔を赤らめて恥ずかしがっていた。

「見に来てくれたんだ♪」

「はいっ！ すつごく楽しいライブでした！」

アヤの褒め言葉を聞いた唯は嬉しさのあまりぼおつとしていた。

「あ、あの……」

「アハハ、ごめんごめん。知らない人にライブを褒めてもらったことあんまりないから

……多分……」

「そうなんだ。……って、あれ？」

アヤは何かに気付くと、統夜の顔と赤いコートを凝視していた。

「……？ アヤ？ どうしたの？」

「？ 俺の顔に何かついてるか？」

「……」

マキと統夜がアヤに声をかけるが、アヤはしばらくの間、何かを考えながら統夜を凝視した。

そして……。

「あ!!あなた、あの時の!!」

何かを思い出したアヤは統夜に向かってこう言っていた。

「?あの時の?」

アヤの言葉に心あたりのない統夜は首を傾げていた。

《統夜。本当に心あたりがないのか?》

(多分……)

統夜はイルバの問いかけにテレパシーで答えるが、少しだけ見覚えがあった。

「あの……。あの時はありがとうございました!」

「へ?俺、何か礼を言われるようなこととしたかな?」

「そうですよ!あの時、駐車場で……」

「……!あ!もしかして、君はあの時の?」

「……ここで統夜はようやく思い出した。

統夜の目の前にいるアヤこそ、ホラー、インバーシユに襲われそうになったところを

助けた少女であった。

「え？君つてりっちゃんから聞いたけど、統夜君……だっけ？アヤのこと知ってるの？」
「ああ、以前彼女がチャラそうな男にナンパされて困ったところを偶然助けたんだよ」
統夜はホラーや魔戒騎士といった単語を出すわけにはいけないので、このような嘘をついていた。

「え？あの、あなたは……！」

「悪い、そういうことにしといてくれ。色々訳ありだからさ」

このままでとホラーや魔戒騎士のことがバレそうだったので、アヤにこう耳打ちをして話を合わせてもらうことにした。

「は、はい……！」

アヤは納得していないものの、訳ありと聞いて渋々納得してくれた。

「そ、そうなんです！統夜さんが偶然助けてくれて……！」

「ふーん、そうだったんだ。統夜君、うちのメンバーを助けてくれてありがとね！」

「気にしなくていいよ。俺は当然のことをしたただけだから」

「いやいや、だつてナンパされて困ってる女の子なんて普通の人なら助けないし、本当に感謝してるよ！ね、アヤ？」

「はい！本当にありがとうございました！」

アヤはペコリと統夜に一礼した。

「あのっ、もし良かったらアドレスを教えてくださいもらってもいいですか？改めてお礼をした
いので……」

「あつ、私も私も♪」

アヤとマキが統夜の連絡先を聞いてきた。

（まあ、メアドくらいだったら別にいいか）

統夜はあつさりとアドレスを教えるもいいかなと思っていた。

「ああ、構わないよ」

「ありがとうございます♪」

統夜、マキ、アヤの3人は携帯を取り出すと、メールアドレスの交換を行っていた。

（おいおい……。こんなにあつさり教えていいのかよ……。統夜のことだから無自覚な
んだろうが、唯たちがすごい顔してるぜ……）

あつさりと女の子と連絡先を交換する統夜を見て面白くなかったのか唯たちはドス
黒いオーラを放って統夜を睨みつけていた。

しかし、統夜はそれに気付かず、イルバは呆れていた。

「……これでOKかな」

「あつ、ありがとうございます！後でメールしますね！」

「あつ、私も私も♪……あと、これなんだけど」

マキは1枚のチラシを統夜に渡した。

「私たち、今度単独ライブをやるんだ。良かったらみんなで見に来てよ！」

マキが統夜に渡したチラシは、ラブクライシス単独ライブのチラシだった。

「凄い……」

ドス黒いオーラを放っていた唯たちはラブクライシスが単独ライブをやるを知って我に返っていた。

「あと、CDも。手作りですけど」

アヤは統夜に1枚のCDを手渡した。

「へえ、凄いなあ」

「うん！凄いやー！」

自作とはいえ、CDを出していることに統夜だけではなく、唯も驚いていた。

「それじゃあ、また後でね！」

「うん！」

マキとアヤは統夜たちに別れを告げると、自分のバンドのメンバーがいるところへ戻っていった。

「……さてと……」

律たちは一斉に統夜を睨みつけていた。

「な、何だよ！」

「統夜先輩……。私たちが言いたいこと……。わかりますよね？」

「?わからないけど」

「おいおい、統夜。お前なあ」

『お前ら、それはライブが終わってからにするんだな』

イルバが唯たちをなだめた。

少しなら喋っても問題ないと判断したので口を開いたのである。

「ま、まあ……。確かにそうだな」

ここで唯たちの追求は終わり、統夜は安堵していた。

「そ、それにしても俺たちとは意気込みが違うよな」

「確かにそうだな」

「ねえねえ、私たちも何かロゴマークとかあったらいいよね！」

「へ？」

唯はペンを取り出すと、手に何かを書いていた。

「えつとねえ……。こんなのか！」

唯は出来上がったものをみんなに見せていた。

「それじゃ温泉だ！」

統夜と律が同時にツツコミを入れた通り、唯が書いたのは地図記号でよく見かける温泉そのものだった。

「あ、そうだ！ティーカップも書いてみたらどう？」

こう唯が提案すると、唯はその通りに書いてみた。
すると……。

「おお！まつたりお茶するいい感じ！」

今度はオリジナリティ溢れるデザインとなっていた。

「……出来ました！」

統夜たちは控え室に移動すると、唯は自分のピックに先ほど自分の手に書いたものと同じものを書いた。

「おお！これにも書いて書いて！」

律は自分のステイックをテーブルの上に置いた。

「私のキーボードにも！」

「じゃあ、私はこれに……」

「私もピックに……」

統夜以外の全員がそれぞれロゴマークを書いてもらいたいものを取り出した。

「じゃあ俺は魔戒剣に……」

『統夜。さすがにそれはダメだろう！』

イルバにこう叱責され……。

「……じゃあ俺もピックで」

仕方なく自分のピックにロゴマークを書いてもらいことにした。

『魔戒剣にそのロゴを書いたらそれが奏狼の紋章だと勘違いされるだろうが』

「ああ、そう言われれば確かに」

イルバの指摘に統夜はようやく納得した。

「みんなでお揃いだねえ♪」

唯はみんなが用意したものにそれぞれロゴマークを書いていた。

「それじゃあミーティングを始めます！」

唯が全部書き終わるタイミングでミーティングの時間となった。

「よっしゃあー！」

「「「行つくぞお!!」「」」」

統夜たちは気合十分な感じでミーティングに臨んでいた。

こうして、ライブハウスでのライブは始まるうとしていた。

……続く。

——次回予告——

『ようやくライブが始まるな。このライブも何事もなく終わってくれればいいんだがな。次回、「響家 後編」。続夜！このライブ、成功させるぞ！』

第35話 「響家 後編」

ライブハウスでのライブ当日、統夜たちは予定通り13時前に会場入りした。

会場で、統夜たちは律の友達であり、「ラブクライシス」というバンドのドラムをしているマキと知り合った。

その後、「ラブクライシス」のベース担当のアヤとも知り合うのだが、アヤは以前ホラーに襲われそうになったところを統夜に助けられたことがあった。

アヤは統夜とライブハウスで再会し、その時のお礼を統夜に言おうとするが、統夜は訳ありで話を誤魔化していた。

渋々納得したアヤであったが、改めてお礼がしたいとのことで、連絡先の交換を行った。

そんな統夜を見て唯たちは嫉妬するが、これからライブの準備でバタバタするため、統夜に怒っている暇はなかった。

こうしてライブのミーティングが行われ、ライブのスケジュール表が配られた。

「おお！ 私たち2番目だ！」

「……2番か……」

唯や滯の言う通り、統夜たち「放課後ティータイム」の出番は2番目だった。

出演順を確認していると……。

「すいませーん！これ、バックステージパスです」

ライブハウスのスタッフの男性が、ライブで必要になるバックステージパスを人数分
手渡した。

「あつ、ありがとうございます」

統夜はスタッフに礼を言い、スタッフはペコリと頭を下げると、そのまま次の仕事へと向かっていった。

「ねえねえ！これってどこに貼ればいいの？」

唯は初めて見るパスの貼り方を聞くが、他のバンドのギターが目に入り、貼る場所を
理解した。

「ああ、あそこか！」

唯たちが目にしたギターには多くのパスが貼っており、それだけ経験を積んでいると
いうことが理解出来た。

「へえ、ずいぶんと経験値が高いバンドなんだな」

「ああ、すげえよな……」

「じゃあさ、私たちはこれが1枚目だね！」

統夜と律は多くのパスを貼ってあるギターに驚くが、唯はこの一枚目のパスを喜んでいた。

「はいっ!」

「ちなみに体の見えるところに貼っておけよ。ギターケースにパスを貼るのはライブが終わってからだからな」

統夜は唯は必ず貼る場所を間違えると思い、どこに貼るのか指示していた。

唯は統夜の指示で誰の目にもつきやすい左腕につけたのだが……。

「なんか無難なところだなあ……」

パスを貼った場所に納得していないようだった。

「それじゃあ、次はセッティングシートを書こうぜ!」

律はミーティングの時に渡されたセッティングシートを取り出した。

このセッティングシートはライブの時に照明や音響をどのようにするのかを書くもので、ライブハウスのスタッフがシートに書かれた指示通りに照明や音響の操作をしてくれる。

「色々書くところがあるんだねえ」

「まあ、曲名や曲調は決まってるからいいとして……」

「照明のイメージって?」

「そこなんだよなあ」

唯と律がやり取りしていたように、いきなりどう書いていいのかわからなくなってしまう。

「……………どう書けばいいのかしら……………」

統夜たちは途方に暮れていたのだが……………。

『そこは元気よく！とかポップな感じで！とかそんな感じでいいんじゃないか？』

まさかイルバがアドバイスしてくれるとは思っていなかったのか、唯たちは驚いていた。

「い、イルバ……………。わかるのか!?!」

『まあな。俺様は魔導輪だからな』

「ドヤ顔するなよな……………」

統夜は何故かドヤ顔をするイルバにツツコミを入れていた。

「と、とにかく！そんな感じで書こうぜ!」

律はイルバのアドバイス通りに照明のイメージ欄を書こうとするが……………。

「ま、待って!」

何故か律が書き込みを止め、統夜たちは首を傾げていた。

「うちは……………。全部ピンクで!」

滯は照明を最初から最後までピンクにしようととんでもない提案をしていた。

「び、ピンクですか!？」

「……ダメ？」

「さすがに全部はな……」

「そ、そうだな! それじゃあふわふわ時間のサビはピンクで行くか!」

律が妥協案を提案すると、滯の表情がぱあつと明るくなっていた。

「ねえねえ! ミラーボールも使おうよ!」

「お、前奏と間奏に入れたら面白いかもな」

唯の提案に、統夜は賛成の意見を出していた。

それはみんなも同じだったので、前奏と間奏にミラーボールを使うことが決まった。

「……あとは……。ズバツとあたしにピンスポットを当ててもらってもいいかな♪」

「な、何で律先輩だけに! メンバー紹介の時に1人ずつ照明当ててもらいましょうよ!」

律の提案に梓が付け加えるように提案した。

「ギー太もね!」

「おいおい、ギターにピンスポはいるのか?」

統夜はギターにまでピンスポットを当てさせようとする唯にツツコミを入れていた。

「あと、イルイルにも!」

『俺様はいらん！それと、俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

唯とイルバはいつものようなやり取りをしていた。

「わ、私はいらないから！」

そんな中、漣は自分にスポットライトが当たるのが恥ずかしいのか、ピンスポットの意見を拒否していた。

「ベースが転んだらすかさずスポットを……」

「絶対転ばない！」

律は意地でも漣にライトを当てさせようとするが、やはり漣は拒否していた。

「ねえねえ、音響のイメージはどうすればいいのかな？」

紬は新しい項目について聞いていたのだが……。

『そこはだな、例えば三曲目にリバーブくれとか、この時にボーカルいっぱいくれとかそんな感じでいいんじゃないのか？』

「なるほどな……。じゃあ、そんな感じで♪」

律はイルバのアドバイス通りに用紙を記入していたが、すぐにペンが止まった。

「……なあ、MCはどこに入れればいいのかな？」

『仕方ないな……。統夜、書くのを変わってやれ』

「わ、わかった」

統夜は律からペンと用紙を受け取ると、ここから統夜が用紙を書くことになった。

『統夜。俺様がアドバイスをするからそれ通りに書くんのだ』

「ああ、わかったよ」

統夜はイルバのアドバイスを聞きながらセッティングシートの全ての項目を埋めることが出来た。

統夜たちは何故かこのような知識に詳しいイルバに驚いていたが、イルバは誇らしげにドヤ顔をしていた。

※※※

セッティングシートを書き終わり、それを提出すると、各バンドのリハーサルの間となつた。

自分たちのリハーサルまでは時間があるのだが、他のバンドのリハーサルは勉強にな

るため、統夜たちは他のバンドのリハーサルを見学していた。

今リハーサルを行おうとしているのは、律の友達であるマキがいるバンドである「ラブクライシス」だった。

「他のバンドのリハも参考になるからな」

「確かにな。それに、こんな機会は滅多にないしな」

統夜たちは真剣な眼差しでリハーサルの準備をしているマキたちの様子を見ていた。

「あつ……」

そんな中、梓が何かを発見した。

「凄い……エフェクターがいっぱい……」

マキたち「ラブクライシス」のメンバーは複数のエフェクターを使用していた。

さらに……。

「あつ、マイマイクだ……。いくらくらいするのかな?」

律は準備しているマイクが自分たちの自前のマイクであるということに気付いた。

「ラブクライシス」は様々な機材を駆使しているため、それだけ予算をかけていることがわかる。

統夜たちは豊富な機材に関心していたのだが……。

「ねえねえ!お菓子も売ってるよ!あつ、りっちゃん!CDも売ってるよ!うわあ、私た

ち売るものないねえ、みおちゃん。……あ！ねえねえ、あずにゃん！私たちこれに映るのかなあ！へえ、凄いな、ムギちゃん！ワクワクするねえ、やーくん！」

唯はあちこち見回しながら様々な物を発見する度に興奮して大声をあげていた。

はしやく唯を見ていた統夜たちの顔が赤くなり、これ以上恥をかく前に唯を連れ出して、控え室に移動した。

それで唯が大人しくなれば良かったのだが、唯の興奮はまだ収まらなかった。

「うわあ！放課後ティータイム様”だって！”様”!!」

「いいから落ち着け!!」

未だ興奮する唯に統夜と滯が同時にツツコミをいれた。

そんな中……。

「お茶にしよつか♪」

相変わらずマイペースな紬はティータイムの準備をしていた。

《おいおい……。紬のやつ、緊張感がないんじゃないのか?》

(いや、いつも通りでいられるのは逆に凄いなと思うけどな)

統夜とイルバはテレパシーでこのような会話をしていたが、律と梓もいつも通りな紬に驚いていた。

こうして統夜たちは自分たちのリハを待っている時間を使ってティータイムを行っ

ていた。

「うーん、美味しいねえ♪」

「それに、暖まるしな♪」

統夜たちは相変わらず美味しい紬の紅茶とお菓자에舌鼓を打っていた。
すると……。

「わあ！いい香り！」

リハーサルを終えたマキたち「ラブクライシス」と、ビジュアル系の出で立ちをしている「デスバンバンジー」のメンバーが控え室に入ってきた。

「良かったら一緒に一緒にお茶、いかがですか？」

紬はマキたちをティータイムに誘っていた。

「え？じゃあ……」

こうして「ラブクライシス」と「デスバンバンジー」のメンバーが加わり、大人数でのティータイムが始まった。

統夜たちは紅茶を飲みながら、自分たちとは違うバンドのメンバーと交流していた。

「……え？それじゃあ、色々なコンテストに出てるんだ」

律は「デスバンバンジー」のメンバーの話聞いて驚いていた。

「ああ、なかなか入賞出来ないけどね」

「でも、絶対にプロになりたいから」

「そうだよね、諦めたら終わりだもんね」

「デスバンバンジー」のメンバーの話にマキが乗った。

「そうだな。諦めなければ道は開けるもんな」

統夜がこうしみじみと呟くと、「ラブクライシス」と「デスバンバンジー」のメンバーはその言葉に関心していた。

「そうだね……。私たち、頑張るよ！」

統夜にとっては、さりげない言葉だったのだが、そのさりげない言葉でマキたちは絶対にプロになりたいという気持ち強くしていた。

そんなひたむきな姿に唯たちは驚いていた。

それと同時に、目指せ武道館と軽々しく言っている自分たちが恥ずかしいと思ってしまうていた。

「……それにしてもあんたのその指輪、なかなかロックじゃん」

「デスバンバンジー」のメンバーで、赤髪の女性が統夜の指にはめられたイルバに注目していた。

「ああ、これ？実はこれは俺の手作りでさあ」

「へえ、アクセサリー作れるんだな」

統夜の嘘に赤髪の女性は関心していた。

《おいおい、嘘とはいえ今のは聞き捨てならないな》

(まあまあ、とりあえずそういうことにしておいてくれよ)

統夜の嘘にイルバはテレパシーで抗議するが、統夜はそんなイルバをなだめていた。統夜たちはこんな感じで、他のバンドのメンバーと交流していた。

その時だった。

「……放課後ティータイムさん！リハお願いしますー！」

リハの時間が迫っても来なかつたのでスタッフが統夜たちを呼びに来た。

(やべー！ちよつとまつたりし過ぎたな)

統夜たちは大慌てでステージに向かった。

そしてステージに立ったのは良かったのだが、初めて立つライブハウスのステージに緊張しているのか、統夜以外の全員がテンパっていた。

「ま、まずは何から……」

「と、とりあえずはセッティングだろー！」

「そ、そうねー！」

紬はテンパっているからか明後日の方向を見て返事をしていった。

「だー誰に言ってるんですかー！」

梓はそんな細にツツコミをいれるが、梓もテンパっていた。

統夜以外の全員はテンパってどうしていいのかわからず右往左往していた。

(まったたく……仕方ないな……)

統夜はテンパる唯たちを見てため息をついていた。

そして……。

「お前ら！落ち着け!!」

統夜はよく通る声で怒鳴ると、唯たちはピタッと動きを止めた。

「そんなんじやリハーサルにならないだろ？ほら、深呼吸をしろ」

統夜は唯たちに深呼吸をするよう告げると、唯たちは気持ちを落ち着かせるために深呼吸をした。

「そうそう。そんな感じで落ち着いて行こうぜ。大丈夫、俺たちなら出来る!」

今度は優しくも力強い言葉で唯たちを諭すと、唯たちはようやく冷静さを取り戻した。

「うんうん、それじゃ始めよう。唯、照明に見とれて歌詞を忘れないようにな」

「う、うん！わかった!」

「それじゃあ、4曲目「ふわふわ時間」のワンコーラスいきます!」

統夜がりハーサルの内容を宣言すると、律はスティックを叩いて合図を取り、ふわふ

わ時間の演奏を始めた。

統夜の叱咤激励が効いたのかりハーサルでミスらしいミスはなく、順調にリハーサルを終えた。

リハーサルを終え、後は本番を待つばかりだった。

統夜はリハーサルを終えて、のんびりしようとしたのだが……。

「あつ、月影統夜さん。入り口にあなたのお客さんが来てますよ」

「?お客さん?と、とりあえずわかりました」

スタッフは統夜に來客があることを告げると、そのまま次の仕事へ向かって行った。

「統夜先輩にお客さんって誰でしょうね?」

「わからないけど、とりあえず行ってくるよ」

統夜は入り口の來客に会うためにライブハウスの入り口に向かった。

ライブハウスの入り口に到着した統夜を待っていたのは……。

「統夜、来ちゃいました♪」

神官の服ではなく、清楚な白のワンピースを着たイレスだった。

「い……イレス様?!な、何でここに!?!」

「もお……統夜つてば水臭いですよ。こんな楽しそうなイベントのことを黙ってたなんて……」

イレスはぷうつと頬を膨らませていた。

「あつ、あの……。そ、それは……」

統夜はイレスにライブハウスでのライブを話していないのは事実だったので、統夜はどう弁解すればいいか困っていた。

しかし……。

「クスッ♪冗談ですよ♪実はライブハウスの話は前から唯に聞いていたのです」
「唯のやついつ話したんだよ……」

唯がいつの間にかイレスと接触していたことを知り、統夜は驚いていた。

（まあ、大方イレスがふらつと番犬所を抜け出した時に唯に会ったのだろう）

イルバは何故イレスが唯と接触出来たかを何となく察することが出来た。

「私が言いたかったのはそこではなくて、本題は別にあるんです」

「!もしかして……」

「はい、指令です」

イレスは統夜に赤の指令書を手渡した。

「本当だったら大輝に頼む予定でしたが、大輝には別の指令を出してしまってますね」

「そう……ですか……」

ライブ直前に指令が来てしまい、統夜はガクツと肩を落としていた。

「統夜、ライブの演奏が終わり次第、ホラーを討滅するのです」

「わつ、わかりました」

「統夜、申し訳ないですが、頑張ってくださいね」

イレスは申し訳なさそうに統夜に指令を告げると、その場から立ち去っていった。

統夜は人目のつかないところに移動すると、魔法衣の懐から魔導ライターを取り出し、指令書を燃やして指令内容を確認した。

「……音を奏でし者をごごとく喰らうホラーあり。直ちに殲滅せよ」

統夜が指令内容を確認すると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

『こいつはホラー、メロディアス。ホラーのくせに音楽を愛し、気に入らない音を出す連中を徹底的に喰らう少しおかしなホラーだぜ』

「……音楽のホラーか……。ということはこのライブに現れる可能性はあるかもな」

『そうだな、俺たちの出番が終わるまで奴が大人しくしてくれればいいが』

「ああ。イルバ、ライブが終わったら俺はホラー探しを始めるが、その前に不審な動きがあつた場合は教えてくれ」

『それはいいのだが、ライブ中にホラーが現れたらどうするつもりだ？』

「その時はライブ演出みたいな感じでどうにかするさ」

統夜はもしライブ中にホラーが近くに現れた時は、多少ライブをめちやくちやにして

もどうにかしようと思った。

「……とりあえず戻るか」

「ああ、そうだな」

統夜とイルバは唯たちのもとに戻り、ライブが始まるまでは控え室で待機していた。

※※※

そして、ライブハウスでのライブは始まった。

統夜たち放課後ティータイムの出番は2番目だったので、その出番はすぐ来た。

唯のMCでライブは始まったのだが、統夜は演奏をしながらも周囲を警戒していた。

(……イルバ、ホラーの動きはどうだ?)

《今のところはまだ現れてないぜ。今向かってるのか、他の所で誰かを喰ってるか……》

(わかった。俺は演奏を続けるから引き続き警戒を頼む)

《ああ、わかったぜー!》

イルバに周辺の警戒を頼んだ統夜は演奏に集中した。

今回のライブは準備期間が短かったにも関わらず、演奏のクオリティは高かった。

統夜たちは何故か本番には強く、練習がてんで駄目でも、本番で実力以上の演奏が出来るということはよくある話だった。

今回もそのような感じで、順調に演奏を続けていた。

そして、最後の曲である「ふわふわ時間」の演奏が始まった。

最後の曲ということもあって、統夜はより一層ホラーの出現を警戒していた。

しかし、イルバはこのライブハウス周辺でホラーの気配を探知することは出来なかった。

今のところはホラーが現れることはないということである。

最終的には放課後ティータイムのライブ中にホラーが現れることはなく、無事に統夜たちのライブは終了した。

ライブを終えた統夜たちは控え室に戻り、撤収の準備をしていた。

そんな中、統夜は足早にギターを片付け、帰り支度を整えていた。

「と、統夜先輩どうしたんですか? そんなに早く帰り支度をして」

「悪い、この後仕事があるんだ。だから俺は行かなきゃいけない」

梓の言葉に答えた統夜はもう完全に帰り支度を整えた。

「もしかして、ホラー？」

「そういうことだ」

「そんな……。この後打ち上げも兼ねて鍋をする予定なのに……」

「だったらさっさとホラーを倒して合流するさ。唯、どこで鍋をするか後でメールして
いてくれ」

「う、うん。わかった」

「統夜先輩！気を付けて下さいね！」

「ああ、俺は必ず戻って打ち上げに合流する。信じて待つてくれ」

統夜はそう唯たちに告げると、控え室を後にし、ライブハウスの入り口まで移動した。

『……統夜。ちようどいいタイミングだ。ホラーのお出ませいで！』

イルバはホラーの気配を探知したのだが、統夜たちのすぐ近くだった。

統夜はライブハウスを出たのだが、ライブハウスを出てすぐにいかにも怪しい人を見つけた。

「……イルバ、あのいかにも挙動不審な動きをしてる奴が……」

『ああ、ホラーみたいだぜ』

ホラーを発見した統夜はすぐさま挙動不審な動きをしてる男に駆け寄った。

「あの、すみません」

「ああ？何だ、お前」

「ちよつとお話があるんですけど、いいですか？」

「俺は忙しいんだ。邪魔するな！」

「それは、お前がホラーだからか？」

「ああ？お前何言つて……」

統夜は魔法衣の懐から魔導ライターを取り出すと、火を出して男の瞳を照らした。

すると、男の瞳に不気味な文字のようなものが浮かび上がってきた。

それは、この男がホラーである証である。

「貴様！魔戒騎士か！まさかこんな早く現れるとは……」

「貴様の事情は知らんけど、あそこのライブの邪魔はさせない！」

統夜は人目を気にして魔戒剣は取り出さず、格闘技の構えをとった。

「……はあつ！」

統夜は素早い動きでパンチを放つと、殴られた男は吹き飛ばされてしまった。

(まずいな……。ここじゃ人目につく……)

統夜はここではまともに戦えないと判断し、どうにかこの場を移動出来ないかを考えていた。

『統夜！奴をあそこの路地裏に誘導するんだ！そうすれば多少は人目につかないと思うぜ！』

「わかった！」

統夜は男と格闘戦を繰り広げながら、イルバの指示を了承した。

統夜は男のパンチをかわすと、蹴りを放って男を吹き飛ばした。

その後、統夜はすかさず男の手を掴むと、すぐ近くの路地裏に投げ飛ばした。

「ぐあっ！く、くそ……」

投げ飛ばされた男はすかさず逃げようとするが、統夜が立ちはだかったことにより、逃げ道を失った。

「これで思い切り戦えるな」

統夜は魔戒剣を抜くと、それを構えた。

「はあっ！」

統夜は魔戒剣を一閃すると、男の体を斬り裂きすかさず蹴りを放って男を吹き飛ばした。

「おのれ……魔戒騎士！あそこの目障りな音楽を消すのを邪魔しやがって！」

男の狙いはやはり今行われているライブハウスのライブだった。

「悪いがな、ライブハウスのライブの邪魔はさせない！」

統夜は魔戒剣を構えながら男を睨みつけた。

「この……こうなったら貴様を喰って目障りな音楽を潰してやる！」

男の体は少しずつ変化し、ホラーの姿へと変化した。

『統夜。こいつがメロディアスだ。気を付けろ！』

統夜の目の前に現れたホラーこそがメロディアスというホラーであり、様々な音を操るホラーである。

「ああ、わかった！」

統夜はメロディアスに接近するが、その前に音符を飛ばす攻撃を繰り返してきた。

統夜は魔戒剣を何度も振るい、全ての音符を弾き飛ばした。

「どうした？これでファイナルではないよな？」

「当然だ。ならば、これならどうだ！」

メロディアスはまるで指揮者のような動きをすると、まるで楽譜のような長い物体が出現し、それを統夜に向けて放った。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこに放たれる光に包まれたのと同時に、楽譜のような長い物体が統夜の体に巻き付いた。

しかし……。

統夜が奏狼の鎧を身に纏ったのと同時に、楽譜のような長い物体は消滅した。

「な、なんだと!?俺の自慢の音楽が……」

「だったら聞かせてやるよ!俺の音楽を!」

「な、なんの!!」

メロディアスは負けじと音符の塊を放つが、奏狼の鎧に傷一つつけることは出来なかった。

統夜は音符の塊による攻撃を受け止めながらメロディアスに近付いていった。

「くっ、くそ!」

「こいつで、ファイナーだ!!」

統夜は皇輝剣を一閃すると、メロディアスの体を真つ二つに斬り裂いた。

皇輝剣の一閃で斬り裂かれたメロディアスは断末魔をあげながら、消滅した。

メロディアスが消滅したことを確認した統夜は、鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「さて……思ったより早くホラーを討滅出来たな……」

統夜はライブハウスに出てすぐホラーを見つけたため、予想より早く仕事を終えていたのであった。

『どうする？ライブハウスに戻るか？それとも、大輝の応援に行くか？』

統夜に与えられた選択肢は、このままライブハウスにとんぼ返りするか、指令を受けている大輝の応援に行くかであった。

「うーん……。ライブハウスに戻るか。大輝さんならきつと大丈夫だ。俺は、みんなと一緒にいられる時間を大切にしたいからな」

統夜は少し考えた結果、このままライブハウスにとんぼ返りすることを選んだ。

統夜は魔戒騎士であるが故に、いつ命を落としてもおかしくはない。

それ故に大切な仲間である唯たちと一緒に過ごす時間は大切にしたい。

そう思っていたからである。

『まあ、確かに大輝程の実力ならばお前さんの助けはいらないだろうな。ここはライブハウスに戻るとするか』

統夜は移動を開始すると、そのままライブハウスへ戻っていった。

ホラーと戦った場所がそれほどライブハウスから離れていなかったため、ライブハウスにはすぐ到着した。

統夜がライブハウスの中に入り、控え室に入ると、まだ控え室にいた唯たちは驚いていた。

「や、やーくん!?!」

「ずいぶん早かったですね……。もしかして忘れ物……。ですか？」

「いや、ホラーは討滅したよ。タイミング良く近くに潜伏してたからな」

「そ、そうなんだ……」

事情は理解したものの、唯たちはやはり驚きを隠せなかった。

「ところで、ライブの状況は？」

「ちょうど今4番目の出番の『デスバンバンジー』の演奏が終わったところだよ」

律が指さしたところを見ると、ライブを終えた「ブラックバンバンジー」のメンバーが楽器を片付けて撤収の準備をしていた。

「そうか……。それじゃあこのライブももう終盤ってことだな」

統夜がホラー討伐を行っている間に2つのバンドが出番を終えていた。

残るバンドは2バンドであり、この2バンドの演奏が終われば、統夜たちが出演したこのライブの第1部が終了となる。

統夜たちは控え室にあるテレビ画面から残りのバンドの演奏を聴いていた。

こうして第1部出演の6バンドの演奏が全て終了した。

統夜たちは現在、ライブハウスから出ていた。

「んー！終わったあー！」

「終わったな」

唯は大きく伸びをして、唯の言葉に律が乗っていた。

「お疲れ様！」

さわ子、憂、和、純の4人が統夜たちを出迎えてくれた。

「あつー！さわちゃん先生！待っててくれたの？」

「……お姉ちゃん！」

憂と純が唯に駆け寄った。

「お姉ちゃん！凄く良かったよー！」

憂は唯たちの演奏に興奮していた。

「ありがとう♪」

「本当……みんな頑張ってたわね。格好良かったわよ」

和も唯たちの演奏をとっても評価しており、唯たちの表情は明るくなっていった。

「……ありがとう！」

唯が和にお礼を言うと、ライブハウスの入り口の方から黄色い歓声が聞こえてきた。

統夜たちはその声の方を向くと、ラブクライシスのファンの子達が登場が出てき

た瞬間に歓声をあげながら声をかけていたのである。

「すげえな！」

「はい」

ラブクライシスのあまりの人氣に律と梓は驚いていた。

「でも、私たちも和ちゃん、純ちゃん、憂、さわちゃん先生とみんな来てくれたよ」

ラブクライシスに比べたらファンは少ないが、自分たちを心から応援してくれる和たちの存在が、かけがえのないものだと思っていた。

そして……。

「ありがとう!!」

唯はラブクライシスのメンバーたちに大声で呼びかけた。

すると、その声に気付いたのかこちらを見ていた。

「また！一緒にライブしよう！」

「お世話になりました！」

「ありがとう！」

「お疲れ様！」

「単独ライブ！頑張れよ！」

続いて律、梓、紬、澪、統夜の順でラブクライシスのメンバーに呼びかけをしていた。

「ありがとう！また誘うからね！」

統夜たちの呼びかけにマキが応え、近くにいたアヤも笑みを浮かべてこちらに手を振っていた。

「良いお年を！」

唯は年末定番の挨拶をすると、ラブクライシスのメンバーたちと別れた。

ライブハウスを後にした統夜たちはそのまま唯の家に向かい、打ち上げを行うことになったのである。

……続く。

——次回予告——

『今年も終わって新しい歳になるか。それで盛り上がれるとは人間ってやつは面白いぜ。次回、「年末年始」！今年もよろしく頼むぜ！』

第36話 「年末年始」

12月31日。今年最後の日に行われるライブハウスでのライブに統夜たちは参加した。

初めての体験に戸惑うところはあったものの、統夜の叱咤激励のおかげで、どうにか無事に事を進めていった。

途中、普段のように行ったティータ임을きっかけに、他のバンドとの交流という統夜たちにとつてとても貴重な体験もしていた。

こうして本番を迎えたのだが、何事も問題なく、最高な形で統夜たちの演奏は終了した。

統夜はライブが終了するなり、ホラー討伐へ向かっていった。

ライブが始まる前にイレスが訪れてきて、そこで指令を言い渡されたからである。

偶然にも近くに現れたホラーを素早く討滅した統夜はすぐさまライブハウスに戻り、唯たちと共に最後まで他のバンドの演奏を聴いていた。

こうして、ライブは終わり、統夜たちは待つていてくれた憂、純、和、さわ子の4人と共に唯の家に向かった。

途中、純と和は家で歳を越すとのことで別れ、軽音部のメンバーだけで打ち上げを行うことになった。

ライブの打ち上げは憂お手製の鍋で幕を開けた。

憂の鍋はかなりの絶品で、統夜たちは美味しい鍋に舌鼓を打っていた。
そんな中……。

「あゝずゝさゝちゃん！」

「にや!? な、何ですか!？」

さわ子が急に梓に抱きつき、梓は驚いていた。

「私、今日いいもの持ってきたのよ」

「……って！ 服を脱がせようとししないで下さい！」

さわ子はお手製の衣装を梓に着せるために服を脱がせようとしていた。

「ちよつと、さわ子先生。ここに男がいるのにそんなことしないで下さいよ」

統夜は鍋の具材を頬張りながら暴走寸前のさわ子をなだめていた。

「統夜先輩……！」

梓は普通に助け舟を出してくれた統夜に感謝していた。

「もお、統夜君ってば真面目ねえ……。せつかくの寅ビキニなのに……」

さわ子は統夜になだめられ、しゅんとしていた。

しかし……。

「寅耳だけなら問題ないわよね♪」

「まあ、それなら」

「ちよ!?! 統夜先輩!?!」

まさかの手のひら返しに梓は驚愕していた。

「ほらほら、寅耳よお♪」

さわ子は梓に無理矢理寅耳を装着させた。

「さ、さわ子先生。酒グセ悪いんじゃないですか!?!」

さわ子の暴走は酒を飲んだからだと予想した梓はこうさわ子をなだめるが……。

「え? 私はみんなと同じジューズだけど?」

「シラフでこれですか!?!」

さわ子はシラフの状態だと知り、梓はさらに驚愕していた。

『やれやれ……。これは酒が入ったらさらに夕チが悪そうだな』

イルバは酔っ払ったさわ子は手をつけれないだろうと予想して呆れていた。

「うん、美味しいな!」

統夜は憂の鍋の美味しさを堪能していた。

「統夜君、本当に美味しそうに食べるわね♪」

紬は統夜の食べっぷりを見ながらニコニコと笑みを浮かべていた。

「だって、本当に美味いからな。ほら、ムギも食べないと無くなるぞ」

「ええ♪」

紬はニコニコしながら鍋に舌鼓を打っていた。

そんな2人のやりとりを見ていた梓は……。

「むー……！何か統夜先輩とムギ先輩がいい感じな気がします……！」

梓はぷうつと頬を膨らませながら統夜と紬のやり取りをジッと見ていた。

それを見ていたさわ子はニヤニヤしながら梓を見ていた。

「梓ちゃん♪もしかして……焼きもち？」

「にや!?そ、そんなにやんじやにやいですよ!!」

梓は凶星だったのか思わず嘸んでしまい、まるで猫っぽい言葉になっていた。

「ウフフ♪梓ちゃん、可愛いわね♪」

さわ子はそんな梓をニヤニヤしながら見ていた。

「ちよつと！そんな目で見ないで下さい！」

梓はさわ子にからかわれていると思ひ、ムキになっていた。

「うーん！あずにゃん、可愛いよお♪」

梓とさわ子の一部始終を見ていた唯は梓に抱きついていた。

「ちよ!?!唯先輩、抱きつかないでくださいよ!」

梓は急に抱きついてくる唯に抵抗していた。

「おいおい……」

「何やってるんだか……」

そんなやり取りを見ていた律と滯がこう言いながら苦笑いをしていた。

それは統夜と紬も同様なようで……。

「つたく……あいつらは……」

「ウフフ♪」

統夜はジト目で2人を見ており、紬はニコニコと笑みを浮かべていた。

「皆さん、年越しそばもありますので、どうぞ」

キッチンにいた憂は人数分の年越しそばを用意し、それをみんなの前に置いた。

「おお!」

「美味そう♪」

鍋をある程度食べ終わった唯たちは続いて年越しそばに舌鼓を打っていた。

「憂ちゃん、ごめんな。大晦日に大勢で押し掛けて」

統夜はただでさえ忙しい年末に鍋や年越しそばと色々準備をしてくれた憂に礼を

言った。

「いえ、全然です♪だって……」

憂はそう言って唯を見ると……。

「う〜ま〜♪」

唯は満面の笑みで年越しそばに舌鼓を打っていた。

「あの顔が見られるだけで幸せですから♪」

憂は憂で唯の幸せそうな顔を見て幸せそうにしていた。

「まあ、確かにな」

統夜も幸せそうな顔をしている唯や憂を見て笑みを浮かべていた。

それから統夜も美味しい年越しそばに舌鼓を打っていた。

※※※

美味しい食事を堪能した統夜たちは鍋や年越しそばを食べたこたつで、ババ抜きをしていた。

現在ババ抜きは終盤で、統夜と唯が残っていた。

統夜の手持ちカードは2枚で、唯の手持ちは1枚。

ババは統夜が持つており、唯がハートのキングのカードを引くことが出来れば勝ちと
いった形であった。

「さあ、唯。来い！」

統夜は力強い発言と共に唯にカードを突きつけた。

「うーん……」

唯が左のカードを引こうとすると、ハラハラした表情になり、右のカードを引こうと
すると、笑みを浮かべていた。

唯は統夜がポーカーフェイスが出来ていないと判断し、左のカードを引いた。

「うえっ!?……なんてな」

統夜はしたり顔をしていた。

その理由は……。

「ええ!?……つちがババだったのお!？」

勝ちを確信した唯は自分が引いたカードに驚いていた。

「唯、簡単なトリックに引つかかったな」

統夜はわざとポーカーフェイスを崩す戦法で唯を引っかけたドヤ顔をしていた。

「むう……やーくん、意地悪だよおー！」

唯はふうつと頬を膨らませて統夜を睨んでいた。

そして、2枚のカードをランダムにシャッフルしていた。

「ほら！次は騙されないからね！」

唯は2枚のカードを統夜に突きつけた。

「さてと……」

統夜は左右のカードを見てどちらを引くか慎重に考えていた。

そして統夜が選んだカードは……。

「！またババかよー！」

「へへーん！やったねー！」

唯は「ふんす！」と言いながらドヤ顔をしていた。

「な、何のー！」

統夜は再び2枚になったカードを唯に突きつけた。

唯は再びカードを選ぼうとするが、統夜の顔は見ずにカードだけ見ていた。

そして……。

「えいっ！」

「あー！」

唯が見事にハートのキングを引き当て、無事にあがることが出来た。

「やったあ♪やーくん最下位♪」

「くっそー！行けると思ってたんだけどなあ……」

統夜は悔しそうな表情で頭をポリポリとかいていた。

「なあもう一回！もう一回しようぜ！」

統夜がみんなに再戦を要求したその時だった。

『さあ！今年もあと一分を切りました！』

このようにテレビのアナウンスが聞こえてきた。

「お！そろそろ今年も終わるか」

「そうだな」

統夜と律はテレビの画面を感慨深い表情で見つめていた。

「……なあ、漣。今年はどうな年だった？」

律は漣にこう聞くと、漣は優しい表情で笑みを浮かべていた。

「怖いことや辛いこともあったけど、楽しいことがたくさんあったよ、みんなのおかげで」

「なるほどな……統夜は？」

「俺は魔戒騎士としては充実した1年だったかな？まあ、みんなに騎士の秘密を知られ

たのはまずつかつたかもしれないけど、みんなが支えてくれたおかげで俺は強大なホラーも倒すことが出来たんだ。だから……ありがとな」

「!!////」

統夜が微笑みながら礼を言うのと、その顔を見た漣と律は頬を赤らめていた。

「ど、どういたしまして……」

漣は恥ずかしがりながらもこう答えていた。

そして律は……。

「……よ、よせやい！ 気持ち悪い！」

律は照れ臭かったのか、思ってもいないことを言っていた。

「き、気持ち悪いって……」

『やれやれ。律、お前さんは随分と素直じゃないか』

「う、うるせえよ、イルバ！」

イルバに痛いところを突かれた律はこう反論していた。

「み、みんな！ もう年明けだぞ！」

律は恥ずかしさのあまりこう話題を変えるが……。

「……っつて、寝てるし!!」

統夜、漣、律を除く全員が心地よさそうに眠っていた。

そして……。

——ゴーン！ゴーン！

『あけましておめでとうございませす!!』

そんなことをしている間に新年になってしまった。

「あ、年明けた」

「つておい！肝心な時に寝てどうするんだよ！」

「………つたく………グダグダだな………」

『まあ、このグダグダな感じはお前らしくていいんじゃないのか?』

「………クスツ、確かにな」

このグダグダな空気に滯が笑い出すと、統夜と律もつられて笑い出した。

『やれやれ………つられて笑い出すとか、お前ら本当に仲がいいな………』

イルバは笑い合う統夜、律、滯の3人に少し呆れながらもその様子を見守っていた。

そして統夜、律、滯は正月特番を見ながら雑談を行い、しばらく経つと眠くなったのかテレビの電源を消し、そのまま先に眠るみんなのように眠りについた。

※※※

「……きて！みんな、起きて！」

まだ朝というには暗い時間、唯は全員を起こしていた。

「んあ……何だよ、一体……」

普段早起きな統夜でもまだ寝ている時間だったので、統夜はのろのろと起き上がると大きな欠伸をしていた。

他のみんなも唯に起こされてゆつくりと起きていった。

「ねえねえ！初日の出を見に行こうよ！初日の出！」

唯は初日の出を見たいがためにみんなを起こしたのである。

それで、こう提案をしたのだが……。

「悪いけど、眠いからあたしパス……」

「俺も……」

律と統夜は乗り気ではなかった。

「もお！こんな時に寝てどうするの！」

唯はプリプリと怒りながらこう言うが……。

「いや、お前が言うか……」

『確かに、年明けの瞬間寝てたお前さんが言えた義理じゃないよな』

統夜とイルバがそれぞれ唯にツツコミを入れていた。

結局統夜たちは初日の出を見に行くことになった。

さわ子は未だ眠っているのだが、家には憂があるので、さわ子は憂に任せることにしたのである。

統夜たちが初日の出を見るために向かったのは、桜ヶ丘某所にある高台だった。

「へえ……こんなところあつたんだ」

「ここつて、穴場なんだよ！」

「へえ、そうなんですね！」

穴場スポットに梓は驚いていたのだが……。

「へえ、ここが初日の出の穴場なんだな」

「え？ 統夜先輩、ここ知ってるんですか？」

「ああ、ここには時々来るんだよ。気持ちを引き締めるためにな」

「？ 気持ちを？」

「ああ。ここなら展望台と同じくらい街が見渡せるだろ？ 迷った時にはこここの景色を見渡すんだ。俺は、この街を守っている。その事を自分の誇りにしろつて自らを奮い立たせるつて訳だ」

「へえ……」

「それじゃあ、ここはやーくんにとって大切な場所なんだね！」

「ああ。だけど、これからはここは俺たちにとっての大切な場所だ」

「統夜がこう言うと、唯たちは互いの顔を見合わせて嬉しそうな表情をしていた。

「統夜、ありがとな」

「ああ」

「統夜も唯たちにつられて嬉しそうな表情をしていた。

すると、ちょうど初日の出の時間になり、綺麗な初日の出が顔を出していた。

「ほわあ……」

「綺麗ですね……」

「唯たちは綺麗な初日の出に見惚れていた。

「……それじゃあ、えっと……」

「何かを思い出した漣はこう切り出し、みんなの視線が漣に集中した。

「……あけましておめでとうございます！」

「漣は代表して新年の挨拶をした。

「統夜たちはすかさず「おめでとうございます！」と挨拶を返した。

「……とこころであずにゃん。それいつまでつけてるの？」

「えっ?……つて、にゃ!」

梓は寅耳カチューシャを付けっぱなしだったことに気付かなかったのだが、唯の指摘でようやく気付いたようだった。

「な、何で誰も教えてくれないんですか!」

梓は恥ずかしかったのか顔を真っ赤にしていた。

「ごみんごみん♪あんまり似合ってたもんで」

「すっごく可愛いわ♪」

『教えてやっても良かったが、それじゃ面白くないからな』

律はニヤニヤし、紬はニコニコしていた。

そしてイルバはカタカタと音を立てながら笑っていた。

「あずにゃん、自身もちなよ♪」

「あうう……// //」

梓は顔が真っ赤なまま、恥ずかしさのあまり顔を隠していた。

「やれやれ……」

統夜はそんなやり取りを苦笑いしながら眺めていた。

(これからも俺はこの笑顔を守るために戦っていかないとな……!魔戒騎士として。そして……守りし者として!)

大切な人たちをこれからも守っていききたい。

統夜は心にそう誓いを立てたのであった。

初日の出をしばらく見ていた統夜たちは一度唯の家に戻り、完全に朝になってから解散となった。

※※※

そして翌日の午後、統夜たちは桜ヶ丘某所にある神社に来ていた。

正月の日はみんなそれぞれ家族と過ごすということで、それぞれの正月を過ごしていた。

統夜は唯や憂の誘いを受けて、唯の家でおせちをご馳走になり、その後エレメントの浄化に向かっていた。

そして、翌日は全員特に予定がないとのこと、みんなで初詣に行くことになった。

「……悪い！遅くなった！」

午前中はずっとエレメントの浄化を行っていた統夜は、待ち合わせ時間ギリギリに待ち合わせ場所である神社の入り口に到着した。

「もお、やーくん。遅いよお〜！」

唯はぶうつと頬を膨らませながら統夜を睨んでいた。

「うぐつ、いつも遅刻か時間ギリギリの唯に言われるのは何か解せんな」

「あー！私だつてたまにはちゃんとしてるんだからね！」

『おいおい、それならいつもちゃんとしろよ』

「うっ……！」

イルバの鋭いツツコミに、唯は何も言えなくなってしまった。

「それよりも、滯、今年の初詣は晴れ着じゃないんだな」

統夜は別の話題を滯に振ると、滯は頬を赤らめていた。

「そ、それは！去年は私だけ晴れ着で恥ずかしかったからな！今年はやめたんだよ」

「そうなんですか？私、滯先輩の晴れ着姿、見てみたかったです！」

「え？」

梓のまさかの言葉に滯の顔は青くなっていた。

「ほらほらあ♪後輩の梓がこう言ってるんだから、今からでも着替えに戻ったらいい

「じゃんー！」

「へ？い、嫌だよー！」

ニヤニヤしながら濡の濡れ着姿を熱望する律の言葉を濡は拒絶した。

「まあ、今から晴れ着となるとそれだけ遅くなりそうだし、別にいいんじゃないか？」

「そ、そうだ！統夜の言う通りだぞ！」

「そうですね。みんな集まったんだし、早速行きましょ♪」

細がこのように促していたので、統夜たちはお参りをするために神社の中に入っていった。

ここに、桜ヶ丘神社は初詣となると大勢の人で賑わうのだが、今日は1月2日ということもあってか、人は少しだけ疎らだった。

なので、お参りはそれほど行列が出来なかったので、並ぶとすぐに自分たちの番がやって来た。

統夜たちはそれぞれお金を賽銭箱に入れて、ジャラジャラと鈴を鳴らし、手を合わせでお参りをした。

「……みんなは何をお願いしたんだ？」

「私は今年は軽音部でもっと練習出来ませうようにってお願いしました」

「アハハ、粹らしいな」

「私もそんな感じかな」

澪も梓と同じお願いだった。

「あたしは軽音部でみんなと楽しく過ごせますように、かな」

「あつ、私もそうだよ！」

「私も私も♪」

律、唯、紬のお願いは同じ内容だった。

「ねえねえ、やーくんはどんなお願いをしたの？」

「俺か？俺は……今年も一人でも多くの人を守れますように……だな」

「アハハ……さすがは魔戒騎士ですね……」

「それだけじゃないぞ？」

「「「「え？」」」」

統夜は魔戒騎士としてのお願い事だけだと思っていたので、唯たちは驚いていた。

「そして、今年も軽音部のみんなと楽しい日々を過ごせますように……つてな」

統夜のお願い事を聞いた唯たちの表情がぱあつと明るくなっていた。

「うんうん！それでこそやーくんだよ！」

「はいっ！」

「アハハ……そういうものかなあ……」

統夜は唯と梓のリアクションに苦笑いをしていた。

「それよりも次はおみくじを引きましよう♪」

「お、いいな！それじゃあ行こうぜ！」

統夜たちは続いておみくじを引くことになり、おみくじ売り場に移動した。

おみくじ売り場でお金を入れ、統夜たちはそれぞれくじを引いた。

「……おつ、小吉か」

「私も小吉でした」

律と梓は小吉を引いた。

「私は末吉だったよ♪」

紬は末吉だった。

「私は……吉か」

澪は吉だった。

そして……。

「あつ！大吉だあ！」

「俺も大吉だ」

唯と統夜はなんと大吉だった。

「おお！唯と統夜は大吉かあ！」

「いいなあ、羨ましいです」

「アハハ……。たまたまだって」

統夜はそう言いながらおみくじの中身を確認していた。

「何々……待ち人は来る。ねえ……失せ物、意外な場所で見つかる可能性あり。本当かなあ……。争い事、己を過信しなければ勝ち続ける。だいたいなあ……」

統夜は気になる内容を音読していた。

「そして、恋愛……。自ら動けば必ず実る……。ねえ……」

恋愛の部分聞いた唯たちは一斉に反応していた。

「?どうした?みんなして反応して」

「い、いや……。何でもないよ。なあ、みんな!」

律はどうか話をごまかそうとして、唯たちも頷いていた。

そんな唯たちを見て統夜は首を傾げていた。

(やれやれ……。動けば実る……。か。あの朴念仁の統夜が自ら動くのか?まあ、そこは見ものだな)

イルバはおみくじの内容が面白い内容だったので、1年かけて事の動向を見守ることにした。

統夜たちはそれぞれ引いたくじを専用の場所で結ぶと、神社を後にした。

初詣を終えた統夜たちはこのまま遊びに出かけることにした。

統夜も午前中でノルマは達成したので、一緒に遊びに出かけることにした。

こうして、統夜たちの新しい1年が幕を開けた。

去年は統夜にとっては、様々な出来事が起こった激動の1年であったが、この1年も去年に負けないくらい激動の1年になることを、統夜は知る由もなかった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『古の時代に造られた人型の魔導具か……。統夜、どうやら面倒な仕事を引き受けたよ
うだぜ！次回、「閃騎 前編」。あの魔戒法師……。一体何者だ？』

第37話 「閃騎 前編」

……今よりも遙か昔、この時代にもホラーは存在していた。

そして、この時代にもホラーを討伐する魔戒騎士は存在していた。

そんな中、1人の魔戒法師とある願いを込めて、人型の魔導具を開発した。

その魔導具はその時代からは考えられないくらい最先端の技術が使われ、その実力は実力のある魔戒騎士にも引けをとらない程だった。

その魔戒法師は「蒼炎（そうえん）法師」と呼ばれる、その時代の魔戒法師としては実力のある魔戒法師だった。

蒼炎法師が造った人型の魔導具は「阿号（あごう）」と名付けられた。

蒼炎法師と阿号は、とある場所にて、とあるホラーと戦いを始めようとしていた。

「なあ、阿号。お前には話していなかったよな？俺の夢を」

「法師の夢……ですか？」

「ああ。俺の夢は、ホラーのいない世界が来ることだ」

蒼炎法師の抱いた夢は魔戒騎士や魔戒法師にとっては、悲願とも言えるほど壮大な夢であった。

人間の邪神がある限り、陰我は生まれ、ホラーは出現する。

すべてのホラーを根絶やしにするというのは、夢物語のようなものでもあった。

蒼炎法師はこのような夢をもっているため、周りの法師や騎士からそんなのは夢物語だと揶揄されたこともあったが、蒼炎法師はそんなことは全く気にしていなかった。

自分の親のような存在である蒼炎法師の夢を聞いた阿号は、その壮大な夢に心を打たれていた。

「なあ、阿号。お前がどうして造られたかわかるか？」

「それは、ホラーを狩るためです」

「そうだ。だからこそお前は俺の夢なんだよ。俺はそのためにお前を造ったんだ」

「私が……法師の夢……」

阿号はその言葉が嬉しかった。

自分はそのような願いを込められて造られたとは知らなかったからである。

「……法師。その夢、私ももらってよろしいでしょうか？」

「ハハハ……もちろんだ！その夢、俺とお前で実現させよう！」

このような話をしていると、蒼炎法師はホラーの存在を発見した。

蒼炎法師と阿号はホラーに攻撃を仕掛けた。

蒼炎法師は魔戒法師としてはかなりの実力者である故、大量に出現した素体ホラーを

法術によって軽々と蹴散らしていった。

そして阿号も戦闘形態へと姿を変えると、大量の素体ホラーを難なく蹴散らしていった。

しばらくホラーを掃討していると、2人のターゲットであるホラーが姿を現した。

巨大な素体ホラーという見た目であるこのホラーは「グレゴル」と呼ばれる強大な力を持ったホラーだった。

蒼炎法師はグレゴルに戦いを挑むが、その強大な力には敵わなかった。

「…法師…」

蒼炎法師が倒されたことを目撃した阿号は、グレゴルの一撃で体を貫かれるものの、意地の攻撃によって、グレゴルを一撃で葬り去った。

グレゴルの一撃はかなりのものだったのか、阿号の戦闘形態は解除されてしまった。

阿号はフラフラになりながらも蒼炎法師に駆け寄り、その体を抱き抱えた。

そんな中、大勢の素体ホラーが迫り来るのだが……。

1人の騎士が現れると、その騎士は次々とホラーを掃討していった。

その騎士は、白銀の鎧の騎士であり、その手に持った剣で次々とホラーを掃討していった。

「あれは……一体……」

「ま……魔戒騎士……か……」

「？魔戒騎士？」

阿号は魔戒騎士という言葉に首を傾げていた。

この時代、魔戒騎士の数は少なかったからである。

「……彼に託そう……。俺とお前が……果たせなかった夢を……」

「！法師！」

「阿号……その時は必ず来る……俺たちの……ゆ……め……」

自分の叶えられなかった夢を目の前の魔戒騎士に託した蒼炎法師はそのまま息を引き取った。

「法師!!」

阿号が呼びかけても、蒼炎法師が応えることはなかった。

阿号は蒼炎法師を失って悲しみに打ちひしがれながらも立ち上がり、歩き出そうとするが、グレゴルから受けたダメージは大きく、その場に座り込んでしまった。

そして阿号は戦闘形態に変化すると、そのまま機能停止してしまった……。

※※※

そして時は流れ、現代……。

遙か古の時代に機能停止したはずの阿号そっくりの男が街を歩いていた。

男はしばらく街を歩いていると、ホラーに襲われている男の姿を発見した。

「……そこまでだ」

阿号そっくりの男がホラーと男の前に立ちはだかった。

「た、助けてくれ！」

ホラーに襲われていた男は阿号そっくりの男に駆け寄ろうとするが……。

「お前はそこで見ていろ」

阿号そっくりの男は男を逃がそうとはせずにそのままホラーに向かっていった。

「……貴様、魔戒騎士か？」

「俺は魔戒騎士ではない。だが、貴様らを狩るものでもある」

「いいだろう……。まずは貴様から喰ってやる！」

ホラーはターゲットを阿号そっくりの男に変更すると、そのまま襲いかかってきた。

「……………」

しかし、阿号そっくりの男は腕から鋭利な触手のようなものを放ち、ホラーは触手のようなものの鋭利な刃に貫かれて消滅した。

「……………ひ、ひいいいいいい!!」

男は阿号そっくりの男に礼を言うことなく、恐怖のあまり逃げ出してしまった。

「……………」

阿号そっくりの男は大きくジャンプすると、男の前に立ちはだかった。

「…な、何なんだよ！お前！俺を助けてくれたんじゃないのかよ!？」

「俺はお前を助けるつもりは最初からない」

阿号そっくりの男はそのまま男の胸ぐらを掴み、持ち上げた。

「くっ……………苦しい……………！助けて……………!」

「貴様には夢はあるか?」

「な……………何だよ……………訳わかんねえよ!」

「俺にはある。叶えるべき夢というものがな」

阿号そっくりの男はそれだけ言うと、とどめを刺さずに男を放した。

持ち上げられていた男は尻餅をつくが、ゆっくりと起き上がった。

「今日のところは見逃してやる。さつきと消え失せるんだな」

阿号そつくりの男がこう告げると、男は血相を変えて逃げ出した。

「……法師……」

阿号そつくりの男はこう呟くと、どこかへと姿を消した。

※※※

三が日もあつという間に過ぎ去り、冬休みも終わろうとしていた。

そんなある日、統夜は番犬所に呼び出されたため、番犬所を訪れていた。

「統夜、来ましたね」

「はい、イレス様。それで……呼び出しがあつたということは、指令ですか？」

「ええ。実は少々面倒な仕事でしてね……」

「こう語るイレスの顔は少し神妙な面持ちだった。

「?面倒なこと?」

「統夜。「翡翠の番犬所」はご存知ですか？」

「ええ、知ってますよ。確か、東京の秋葉原とかその辺りを管轄にしている番犬所ですよね？」

統夜の言う通り、翡翠の番犬所とは、秋葉原と神田と神保町辺りを管轄にしている番犬所である。

「ええ、実はここ最近翡翠の番犬所の管轄で少し奇妙な出来事が起こっていましたね」
「？それは一体？」

「ええ、魔戒騎士でも魔戒法師でもない者がホラーを討滅しているみたいなんです。管轄の騎士がホラー討滅に向かうと、そのホラーは既に倒されているというのです」

「魔戒騎士や魔戒法師にとっては助かりますが、これは妙ですね」

「ええ。ホラーの気配が消えた後、妙な気配を感じたとの報告がありました」

「妙な気配？」

「ええ。とある魔戒騎士の魔導具が探知したのですが、人でもホラーでもない妙な気配である」と

「！人でもホラーでもない!?まさか……!」

イレスの言葉に統夜は戦慄していた。

そのような気配を持つ者に心当たりがあったからだ。

「ええ。もしかしたら闇に堕ちた者か暗黒騎士か……。その可能性は否定出来ませんね」

「……………」

統夜はとあることを考えながら拳を力強く握りしめていた。

そのとあることは、強大な力を持つホラーを復活させた暗黒騎士ゼクスことディオスのことである。

統夜はあれほどの力を持った者がまた現れたのか。

そう考えると身震いをしていた。

「そこで、翡翠の番犬所にも頼まれたのですが、統夜、翡翠の番犬所に行つてその謎の気配の調査をお願いしたいのです」

「俺が翡翠の番犬所に……。ですか？」

「ええ、翡翠の番犬所の神官であるロデルもグオルブを討滅したあなたの腕を見込んで今回の調査を依頼したと言っています。ですから、ぜひ行ってあげて下さい」

「……わかりました。普段から世話になっているイレズ様の顔に泥を塗るわけにはいきませんから」

統夜は仕事がうんぬんではなく、普段から世話になっているイレズの顔を立てるために今回の仕事を受けると決断した。

『おいおい、統夜。本気か?……まあ、他の番犬所での仕事も魔戒騎士としては経験になるだろうな』

イルバはこの仕事は乗り気ではなかったが、他の番犬所の仕事を通して統夜が成長すると考えたら反対することは出来なかった。

「統夜、今回の仕事は数日は桜ヶ丘を空けることになると思います。申し訳ありませんが、調査の方、お願いしますね」

「わかりました」

「あつ、そうそう。忘れていました」

「?何ですか?」

「今回とある魔戒法師を助つ人として派遣すると先方から話がありました。その魔戒法師と協力して事に当たって下さい」

「わかりました」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

数日は桜ヶ丘を空けることになるので、一度家に帰り、軽く手荷物をまとめて、出かける準備を整えた。

準備を終えた統夜は家を後にして、翡翠の番犬所の管轄である、東京へと向かった。

魔戒道を使えばそれほど時間もかからずに目的地へ向かうことは出来るが、統夜は旅

の気分を味わいたいという思いから汽車に乗って東京へ向かうことにした。

※※※

汽車に乗って東京に向かった統夜は、東京の秋葉原に到着した。

テレビで見たことのある電気街など秋葉原特有の光景に統夜は呆然としていた。

「へえ……ここが秋葉原か……」

『ほう、なかなか面白い街じゃないか。お前さんとテレビを見ていたが、歩いてるだけでも楽しめそうじゃないか』

統夜とイルバは初めての秋葉原にワクワクしていた。

『だが、俺様たちはホラーを狩る謎の存在を調査するんだ。それを忘れるなよ、統夜』
「わかってるって！」

『とりあえずは翡翠の番犬所の神官に挨拶でもするか？』

「その方が良さそうだ。イレス様の言っていた魔戒法師はそれから合流してもいいだろう」

統夜たちは街を移動しながら翡翠の番犬所に向かうことにした。

秋葉原の街は桜ヶ丘よりも多くの人で賑わっており、中にはアニメキャラのコスプレをしている者や、メイド服を着た女性なども街を歩いていた。

『おい、統夜。どうやらこの街は変わった出で立ちをしている奴がちらほら見えるな』
「ああ。この感じなら俺が魔法衣を羽織ってても怪しくは見えないな」

統夜は普段から魔法衣を羽織って街を歩くのは目立つと思っていたのだが、この街ではそこまで気にする必要はないと感じていた。

統夜は番犬所に向かいながらも初めての秋葉原の景色を堪能していた。

しばらく歩いてみると……。

「……なあー！いいじゃねえかよ！俺たちと遊ぼうぜ！」

統夜は声の方を見ると、中学生と思われる少女3人組がチャラそうな男3人組に絡まれている。

統夜はふと周囲を見回すが、周囲の人々はそのことを認知してはいるものの、見て見ぬ振りをしていた。

その光景を見て、統夜ははあっとため息をついた。

「やれやれ……。あの子たちはあんだだけ怖がつてるのに無粋だねえ……」

『おい、統夜！むやみに人のいざこざに首を突っ込むなよ！』

「ホラーも指令もないんだ。少しくらいならいいだろ」

統夜はイルバの反対を押し切ると、そのまま絡まれた少女たちの方へ歩いていった。

統夜は秋葉原の街を歩いていて時に自販機で缶ジュースを買っていたのだが、統夜は空になった空き缶を一人の男の頭めがけて投げた。

「痛っ！誰だ！この野郎!!」

空き缶を投げつけられた男が統夜の方を向くと、そこにいる全員の視線が統夜に集中した。

「アハハ……。いやあ、すいませんねえ。つつい手が滑っちゃいましたよ」

統夜はヘラヘラと笑いながら一応謝罪をしていた。

「ああん!?何だてめえ、なめてんのか!?!」

「アハハ……。嫌だなあ、勘弁して下さいいよお〜」

統夜はヘラヘラとした態度を改めることはしなかった。

「何ヘラヘラしてんだ……。てめえ!」

空き缶を投げつけられた男は統夜に殴りかかるのだが、統夜は軽々とかわすと、足を出して男を引っ掛け、男は凄い勢いで転んで行った。

「あーあ……。何やってんすか……」

統夜はニヤニヤと笑いながら転んだ男を挑発した。

「てめえ！」

男2人が一齐に統夜に襲いかかるが、統夜は無駄のない動きでかわし、足を引つ掛けると、2人の男も凄いい勢いで転ばせた。

「……」

男3人に絡まれていた3人の少女は唐突な展開に啞然としていた。

「どうしたの？俺何にもしてないのに何勝手に自滅してるのさ？」

統夜は敬語からタメ口に口調を変えると、さらに男を挑発していた。

「野郎……！ぶっ殺してやる！」

最初に転ばされた男が立ち上がると、懐に隠していたナイフを取り出した。

「やれやれ……。そういうのやめないか？俺は出来ればあんたらを傷付けたくないんだけど」

統夜はため息をつくとき、男にこう警告した。

統夜は守りし者であるため、このようなことがあっても、相手は極力傷付けないよう心がけていた。

「うるせえよ……いらー！」

男は統夜を殺すつもりでナイフを突き刺そうとした。

しかし、そんなもので統夜を捉えることは出来ず、統夜は素早くナイフをかわずと、ナイフを奪い取り、逆にナイフを突き付けた。

「……………」

「これ以上はもういいでしょ？ここはお引き取り願えるかな？」

統夜はナイフを突き付けながらギロリと男を睨みつけた。

統夜の睨みを見た男は統夜の鋭い視線に戦慄していた。

そして……………」

「くそ！覚えてろよ！」

お決まりの捨て台詞を吐き捨てると、男は逃げ出し、2人の男もそれに続いた。

「やれやれ……………あんまり手荒な真似はしたくなかったんだけど……………」

統夜はこう呟くと、手に持っていたナイフを安全そうな場所に投げ捨てた。

「……………大丈夫？チンピラにナンパされるとかついてなかったね」

統夜なアハハと笑いながらこう語りかけて、3人の少女を安心させようとした。

「あつ、あの……………助けてくれてありがとうございます」

少し青が入った黒の長髪の少女が深々と頭を下げた。

「気にしなくてもいいよ。俺はたいしたことしてないんだから」

「いえ！そんなことないですよ！」

「そうですねよ！凄く嬉しかったです！」

サイドポニーの少女とグレーの髪の少女も統夜に感謝をしていた。

「そっか。それなら良かったよ。えっと……」

「ああ、私、高坂穂乃果（こうさかほのか）。中学2年です！」

「南ことりです♪穂乃果ちゃんと同じ中学2年です！」

「園田海未（そのだうみ）と申します。私も2人と同じ中学2年生です」

サイドポニーの少女は穂乃果といい、グレーの髪の少女がことり、そして黒のロングヘアの少女が海未という名前だった。

「俺は月影統夜。高校2年だ」

統夜も3人に自己紹介をした。

「統夜さん……ですか」

「統夜さんってどこの高校なんですか？」

「桜ヶ丘って街を知ってるか？俺は桜ヶ丘高校に通ってるんだよ」

穂乃果の問いかけに統夜が答えた。

「あつ、聞いたことがあります！……ここからはそう遠くないけど、桜ヶ丘って街の高校が共学になったって」

「へえ……桜ヶ丘高校ってそれなりに有名だったんだな」

統夜はまさか東京の女の子がここまで桜ヶ丘高校のことを知っているとは思っておらず驚いていた。

「私のお母さんが音ノ木坂学院の理事長をしまして……」

（音ノ木坂？何かどつかで聞いたような……）

《統夜。確かその高校は今年から共学になるって話を聞かなかったか？それで、先に共学になった桜ヶ丘高校に音ノ木坂の理事長が来て、色々聞いたとか》

（ああ！そういうえば冬休みの前にそんな話を先生がしてた気がするぞー！）

統夜はことりが話していた音ノ木坂学院という言葉に聞き覚えがあったが、イルバがテレパシーで伝えてくれた話で思い出していた。

「ああ、その高校なら聞いたことある。この前、音ノ木坂の理事長が桜ヶ丘高校に来たって先生に聞いたからな」

「あ！お母さんが言っていました！桜ヶ丘は凄く良いところだって！」

「まあな、住みやすいし、良いところだよ」

統夜の言葉に嘘偽りはなく、これは統夜の本音だった。

「それよりも、本当にありがとうございます。それで、助けていただいたお礼をしたいのですが……」

「え？別にそんなのはいいって！俺はそんなつもりで助けたんじゃないんだから」

統夜が3人を助けたのは下心ではなく、単純に3人が困っていたから助けたので、お礼というのは申し訳ないと思っていた。

しかし……。

「駄目です！助けて頂いたのに何のお礼も出来ないなんて！」

「そうですよ！何かないんですか？」

「うーん、そうだなあ……」

統夜は3人にどんなお礼をしてもらうか考えていた。

（本当ならジューズを奢れでもいいんだけど、それじゃ納得してくれないよな……。

なあ、イルバ。番犬所による前に寄り道しても大丈夫か？）

《本当ならさっさと番犬所に行った方がいいのだろうが……。まあ、少しだけならな》

事の一部始終を見ていたイルバも簡単過ぎるお礼じゃ納得出来ないと思い、統夜の提案を汲々聞くことにした。

「それじゃあ……。ここら辺で美味しいスイーツの店があったら案内してほしいかな」

「え？そんなんでいいんですか？」

「ああ、俺的には最高のお礼だからな」

「わかりました！それじゃあ、穂乃果たちが良く行くお店に案内しますよ！」

「ああ、よろしく頼むよ」

こうして統夜は穂乃果、海未、ことりの3人と共にスイーツの美味しい店へと向かった。

その店は、歩き始めてから数分かからないところにあつた。

「……はい！ここにです！」

「お、随分と近くだな」

統夜はここまでではなくお店に到着すると思っていなかったもので、驚いていた。

「3人も、ありがとうな。このお店を教えてくださいただけでお礼としては充分過ぎるかな」

統夜は穂乃果たちと別れてさっさと店の中に入ろうとしたのだが……。

「あの一！私たちも一緒にしてもいいですか？」

「え？」

「ちよつと、穂乃果？」

穂乃果の突然の提案に統夜、ことり、海未は驚いていた。

「せっかく知り合えたのに、ここでさよならは勿体無いかなあつて思つて……」

穂乃果はアハハ……と苦笑いしながら統夜とお茶したい理由を伝えた。

「……まあ、3人がいいなら好きにするといいよ」

統夜は穂乃果の提案を反対することはしなかった。

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

穂乃果はペコリと一礼していた。

《おいおい、いいのか?こんなところ、唯たちに見られたら面倒なことになりそうだな》
《?何でただお茶するだけなのに唯たちが出てくるんだよ?》

《やれやれ……。こつちに来てもお前さんは相変わらずのようだな……》

イルバは相変わらず鈍感な統夜に呆れていた。

こうして統夜は穂乃果たちと共に店の中に入った。

店の中に入り、テーブルにつくと、すぐさま注文を済ませた。

注文したものが来るまで、統夜たちはお互いの学校の話をしていた。

「へえ、統夜さんって高校では軽音部なんですね!」

こつちは統夜が軽音部だと話を聞いて、驚きと共に目を輝かせていた。

「ま、まあね」

「ちなみに、どのようなバンドなんですか?」

「ああ、バンド名は放課後ティータイムっていうんだよ」

「放課後ティータイム……可愛いバンド名ですね♪」

「メンバーは女の子が多いんですか?」

「ああ。俺たちは今6人で活動してるんだけど、男子は俺だけなんだよ」

「「へえ……」」

穂乃果たちに軽音部の部員の話をしていると、突然統夜の携帯が鳴り出した。「ん？電話か？みんな、ちよつとごめんな」

統夜はポケットから携帯を取り出すと、電話をかけてきたのは律からだつた。

「……はい、もしもし」

『あ、繋がった。なあ、統夜。お前、今日つてこれから時間あるか？』

「悪い。俺、今東京にいるんだよ」

『はあ!?!東京!?!』

律は受話器越しで大声を出していたので、統夜の耳にキーンと響いていた。

『どうして東京に?』

「それは……えつと……」

統夜は律に東京にいる本当の理由が話せなかつた。

それは、穂乃果たちに魔戒騎士やホラーという単語を聞かせる訳にはいかなかつたからだ。

『もしかして、ホラーなのか?』

「当たらずも遠からずつてところかな。それを確認しに来たんだよ」

「統夜は律のナイスアシストに乗っかり、理由を説明した。

『そっか……それじゃ仕方ないよな。もしかして、しばらくそっちにいるのか?』

「ああ、その予定だよ」

『わかった。統夜、今回も無茶するんじゃないぞ!』

「ああ、ありがとな、律」

統夜は電話を切ると、携帯をポケットにしまった。

「……ああ、ごめんな」

「もしかして、今のは軽音部の人からですか?」

「ああ、遊びの誘いだっただけど、俺は今こっちにいるからな。断ったんだよ」

「こっちには遊びに來られたんですか?」

「まあ、そんなところかな」

統夜は本当のことを話す訳にはいかないので、このように答えて話を誤魔化していた。

このような話をしていると、注文したものが出てきたので、統夜たちは美味しい紅茶とスイーツに舌鼓を打っていた。

その時、統夜は穂乃果たちが通う中学校の話を聞いていた。

話を聞く限りでは、穂乃果たちの通う中学校はいたって普通の学校だった。

ごく普通の生活ではあったが、それなりに充実しているみたいだった。

統夜は穂乃果たちの話を聞いたところで、スイーツも紅茶も完食し、席を立った。

「……もう行っちゃうんですか？」

「悪いな、この後行かなきゃいけない所があるんだよ。それじゃあな」

穂乃果は寂しそうな目をしていたのだが、統夜はお構いなしといった感じで、テーブルに千円札を3枚置くと、店を出て行った。

「行っちゃった……」

「それだけ急ぎの用事なのでしょうが、残念ですね……」

「……」

「?..ことりちゃん?..」

穂乃果と海未は統夜がいなくなって残念そうにしていたが、ことりはジッと統夜が出て行った方を見つめていた。

「ことり?..どうかしましたか?..」

「びい!?!な、何でもないよ!..ただ……」

「ただ?..」

「何でかはわからないけど、統夜さんとはまた会えそうな気がするの」

ことりはたったわずかな時間の付き合いではあったが、統夜と再び再会すると予想し

ていた。

「……ええ、そうだといいですね」

「その時は、統夜さんと友達になろうよ！」

「ええ！（うん！）」

統夜と再会した時は統夜と友達になろうと穂乃果たちは決意していた。

ことりの予想通り、そう遠くない未来に統夜と再び再会することを穂乃果たちは知る由もなかった……。

※※※

穂乃果たちと別れた統夜はそのまま本来の目的地である翡翠の番犬所へと向かっていた。

しばらく歩いていると、イルバが番犬所の入口を発見したのだが、そこは、先ほど穂

乃果たちとの話に出ていた音ノ木坂学院の近くだった。

番犬所の入口は何もない行き止まりであったが、統夜がイルバをかざすと、番犬所の扉が開いたので、統夜は番犬所の中に入った。

しばらく歩いてみると、番犬所の神官の間に到着した。

「……来ましたね、白銀騎士奏狼よ」

統夜を出迎えてくれたのは、20代前半くらいの物腰の柔らかそうな青年だった。

この青年こそ、この翡翠の番犬所の神官であるロデルであった。

「……はい、ロデル様。月影統夜。紅の番犬所神官、イレス様の命によりこちらに参上致しました」

「まあまあ、そう固くならず、気楽にして下さい」

「は……。あ、ありがとうございます」

ロデルが予想以上にフランクな性格だったので、統夜は驚いていた。

「統夜、おおよその話はイレスから聞きましたね？」

「はい。魔戒騎士でも魔戒法師ない者がホラーを討滅していると聞きました」

「そうです。何者かは知りませんが、ホラーを倒して回っているそうです。その目的がはつきりしない以上、野放しには出来ませんからね」

「それで、イレス様からとある魔戒法師と協力して事に当たるよう言われましたが、その

魔戒法師は来ていないのですか？」

統夜はこの番犬所に魔戒騎士もしくは魔戒法師が自分しかいなかったのも、こうロデルに問いかけた。

「はい、まだ姿を見せていません。統夜、謎の気配を探すついでにその魔戒法師も探して下さい。恐らくはすぐに姿を表すでしょう」

「わかりました」

「もし、ホラーの気配を察知したら構わずに討滅して下さい。私が許可しますから」

統夜たち魔戒騎士はそれぞれ番犬所の指令でホラーを討滅するのだが、管轄外の場所でのホラー狩りはトラブルの元であるため、行わないようにしている。

しかし、その管轄の番犬所の神官が許可したとなれば、スムーズに話を進めることが出来た。

「ありがとうございますー！」

統夜はロデルに一礼すると、番犬所を後にし、さっそく仕事を始めることにした。

統夜が番犬所を出た頃には夕方になっており、統夜はとりあえず共に戦うことになる魔戒法師を探しながら謎の気配を追うことにした。

しばらく歩き回っていると、空は暗くなっていた。

（もう夜か……。今のところは手がかりはないけど、もうちよつと探さないとな……）

統夜は手がかりを得るために再び歩き出そうとしたその時だった。

『……統夜！ホラーの気配だ！……ここから近いぞ！』

「ああ、わかった！」

統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラーがいる場所へと急行した。

ちょうどその頃、姉妹と思われる2人組の女の子が素体ホラーに襲われていた。

2人は金色の髪に青い瞳の少女であり、日本人とは思えない容姿であった。

その1人である絢瀬絵里（あやせえり）は、とある中学校に通う3年生で、音ノ木坂学院を受験する予定だった。

絵里はこの日、妹である亜理沙（ありさ）と共に買物に出かけていたのだが、思いの外遅くなってしまい、急いで家に帰る途中で素体ホラーに襲われてしまった。

2人はどうにか逃げようとするのだが、途中行き止まりに阻まれてしまったのである。

——キシヤアアアアアアア!!

素体ホラーは不気味な鳴き声をあげながら絢瀬姉妹に迫っていた。

「お……お姉ちゃん……！」

「大丈夫よ。あなたは私が守るわ……！」

こうは言うものの、見たことのない化け物相手に為す術はなかった。

(助けて……！誰か……！助けて……！お祖母様！)

絵里が助けを求める中、素体ホラーが絢瀬姉妹のすぐそこまで近付こうとしたその時だった。

「……そこまでだ！ホラー！」

誰かの声にホラーは足を止め、声のする方を向いた。

すると、すごい勢いで赤いコートの少年がこちらに駆け出してきて、高くジャンプをすると、絢瀬姉妹とホラーの間に現れた。

その少年……統夜は蹴りを放って素体ホラーを吹き飛ばした。

「……大丈夫か？」

「あ、あなたは……？」

「まあ、話は後だ」

統夜は魔戒剣を抜くと、ホラーに向かっていった。

「お姉ちゃん……あの人……」

「ええ。悪い人ではなさそうだけど……」

絵里と亜理沙は、ジッと統夜の戦いを見守っていた。

(くそっ！行き止まりだったらあの子たちを逃せない！近くで戦ったらまずいよな)

統夜は魔戒剣を振るいながら、絢瀬姉妹の安全を最優先で考えていた。

そんな中、統夜は蹴りを放って素体ホラーを吹き飛ばした。

(ここは鎧を召還して一気にケリをつけるか……？)

統夜は絢瀬姉妹の安全を考慮して鎧を召還して一気に素体ホラーを倒そうと決断した。

鎧を召還するために魔戒剣を高く突き上げようとしたその時だった。

どこからか銃の弾丸のようなものが飛んでくると、それは素体ホラーを貫いた。

銃の弾丸のようなものに貫かれた素体ホラーは今の一撃が致命傷となり、そのまま消滅した。

「……………！何者だ！」

統夜がこう呼びかけると、統夜の目の前に1人の青年が現れた。

青年は一般人とは思えない特異な格好をしていた。

その格好はどこか統夜の格好に通づるものがあった。

「お前……………もしかして……………」

統夜は目の前の青年が何者なのか何となく察知が付いていた。

「……………ふっ……………」

笑みを浮かべる青年の手には見たことのない銃のようなものが握られていたの
あつた。

……続く。

——次回予告——

『ついに姿を現した古の人形魔導具。こいつは……一筋縄ではいかないようだぜ！次
回、「閃騎 中編」。統夜、気を引き締めてかかれよ！』

第38話 「閃騎 中編」

統夜は紅の番犬所からの指令で翡翠の番犬所の管轄である東京を訪れていた。

翡翠の番犬所に訪れる前に秋葉原の街を少し歩くと、思いがけない出会いもあったが、統夜は翡翠の番犬所を訪れた。

翡翠の番犬所の神官であるロデルから直接今回の仕事の話を聞かされ、仕事を受けることになった。

その前に共に行動することになっている魔戒法師がまだ姿を見せてないとのこと、統夜は謎の気配を追うと共に魔戒法師も探すことになった。

そんな中、統夜はホラーの気配を探知し、そのホラーに襲われている姉妹を助けようとした。

ホラーの返り血を浴びさせないために少しずつ姉妹と距離を取り、鎧を召還してホラーを倒そうとしたその時だった。

突然飛んできた銃の弾丸のようなものがホラーの体を貫き、消滅したのであった。その男の手には銃のようなものが握られていた。

「…………お前が、もしかして例の…………」

「ご名答って所かな、月影統夜。いや……白銀騎士奏狼」

統夜の目の前にいるこの男がイレスやロデルが言っていた助っ人の魔戒法師だった。

統夜は男の持っていた銃のようなものをジッと見ていた。

「?あ、これか?これはな……」

男が銃のようなものの説明をしようとしたその時だった。

「あつ、あの……」

先ほどまでホラーに襲われていた姉妹が統夜に声をかけてきた。

「?君たちは確か……」

「た、助けてくれて、ありがとうございます……」

金色の長髪に青い瞳のまだあどけなさが残る少女……絢瀬亜理沙がペコリと一礼をしていた。

「大丈夫だよ、2人とも、怪我はない?」

「はい、大丈夫です」

金色の長髪をポニーテールにしている、青い瞳の少女……絢瀬絵里がこう答えた。

「あの……さっきの化け物は一体……」

「おっと、悪いけど、それは忘れた方がいいよ。2人ともあんな怖いのは思い出したくないだろ?」

統夜が答える前に男がこう言ってホラーのことを聞こうとする絵里をなだめた。
「そうですけど、でも……」

「やれやれ……仕方ないな……」

男は筆のようなものと、一枚の札を取り出した。

男は筆のようなものを一枚の札に当てると、札が輝き始めた。

その光を浴びた絢瀬姉妹は、意識を失ってその場に倒れ込んだ。

「あんだ、もしかして……」

「ああ、2人のホラーに関する記憶を消した。目を覚ましたら怖いことは忘れるさ」

こう語る男の瞳は何故か優しそうな瞳だった。

このような瞳を見てしまったので、統夜はこの男に対する疑惑が消え失せていた。

「……さて、自己紹介は後にして、とりあえず移動するか」

統夜と男はこの場から移動し、ゆっくり話をすることにした。

「……さて、着いたぞ」

統夜と男が向かっていたのは、秋葉原某所にある今は使われていない廃ビルだった。

「……、廃ビルだろ？こんな所に入って大丈夫なのか？」

「大丈夫だって！ほら、行くぞー！」

男が廃ビルの中に入って行ったので、統夜は続いて廃ビルの中に入っていった。

2人は廃ビルの中に入ると、階段を降りて地下に向かった。

すると、地下の1室は生活感のある居住空間が存在した。

「？！、！！は？！」

「ああ、ここは俺の隠れ家ってところかな」

男は廃ビルの1室を自分の隠れ家にしていた。

「そうそう。自己紹介がまだだったな。俺はアキト。魔戒法師であり、布道レオさんの1番弟子だ！」

アキトと名乗る魔戒法師は、元老院付きの魔戒法師で、統夜もよく知っている布道レオの1番弟子と名乗っていた。

統夜はそのことが知らなかったのか、呆然としていた。

「？どうした？師匠から何も聞いてないのか？」

「い、いや……。レオさんからそんな話、一言も聞いてないんだけど……」

「え！？だって師匠は1月くらい桜ヶ丘に行ってただろ？俺のこと何も聞いてないのか？」

『ああ。俺様も初耳だぞ。お前さん、本当にあのレオの弟子なのか？』

イルバの言葉にカチンと来たのかアキトは少しだけムツとしていた。

「失礼な！本当だぞ！それに、俺は師匠の「1番」弟子だ！1番を付け忘れるなよな！」
どうやらアキトはレオの1番弟子ということにこだわりを持っているようだ。

「アハハ……わかったよ……」

アキトの熱いこだわりで統夜は苦笑いをしていた。

「ところで、あなたの持ってた銃のようなものは何だ？」

「ああ、これ？」

アキトは銃のようなものを取り出し、それを統夜に見せた。

「これは「魔戒銃」という武器で、俺が作った対ホラー用の武器なんだ。まあ、まだ試作段階なんだけどね」

アキトは魔戒銃と呼ばれた武器を統夜に見せていた。

「へえ……。格好いいな……。だけど、これでホラーを倒せるのか？」

「こいつの性能はお前も見たる？現段階なら素体ホラーならこいつで倒せるさ。まあ、これから改良を重ねて低級ホラーは倒せるようにしたいけどな」

「へえ……。これが実用化したら凄そうだな」

統夜はまじまじと魔戒銃を見ながらその性能に興味を示していた。

「そりゃそうさ。俺はこいつを皮切りに色々対ホラー用の武器を作って魔戒法師の負担

を減らしたいんだよ。低級ホラーを楽に倒せるようになれば、魔戒騎士の負担だつて減るだろう？俺は、その手助けをしたいって思ってるんだよ」

アキトの思いは相当なものであり、統夜はアキトの熱い思いに心を打たれていた。

『ほお、お前さん、面白いこと言うじゃないか！気に入ったぜ』

イルバもアキトのことを評価しているようだった。

『それにしても、こんな武器は俺様も初めて見るぜ。お前さんがレオの1番弟子を自称するのも納得な気がするぜ』

レオも号竜と呼ばれる魔戒獣を開発し、阿門法師の再来と呼ばれている。

レオの開発した号竜の力はかなりのもので、下級ホラーであれば倒せるほどの性能である。

それ以外にも様々なものを開発し、それが多くの魔戒騎士と魔戒法師の手助けとなっていた。

アキトはそんなレオのようなものを開発し、魔戒騎士や魔戒法師の負担を減らしたいという思いを持っていた。

「へへっ、凄いだろ？」

アキトは「ふんす！」と胸を張りながらドヤ顔をしていた。

「ドヤ顔するなよ……」

統夜はそんなアキトをジト目で見ていた。

「それよりも、統夜。お前も謎の気配の調査を頼まれたんだろ？」

「ああ。アキトは心当たりがあるのか？」

「ふふん……それはな……」

自信たつぷりな態度に統夜は固唾を飲んで話を聞こうとした。

だが……。

「……まったくわからん！」

思いがけない言葉に統夜は思わずズッコケてしまった。

『おいおい、そんなこと、偉そうに言うなよな……』

「ところで、その魔導輪。お前は何か妙な気配を感じなかったか？」

『俺様はイルバだ！それに、妙な気配は感じなかったぜ。ホラーを倒すのが早かったか

らじゃないのか？』

「とりあえず、明日は2人で調査をするか」

「ああ、今日は遅いし、その方が良さそうだな」

統夜とアキトは謎の気配の調査は明日行うことにした。

「ところでさ、アキトは番犬所からこの仕事を受けたんだろ？俺の前に現れる前まで何をしてたんだ？」

「それは……えっと……」

統夜の問いかけにアキトは何故か答えにくそうにしていた。

「?それは?」

「……魔戒銃の調整をしてたら遅くなっちゃいました……」

『……………』

アキトの理由を聞いた途端、統夜とイルバは呆れて何も言うことは出来なかった。

「それに……あんな感じで登場した方が格好いいと思つて……」

「あのなあ……」

統夜はジト目でアキトのことを見ていた。

「そ、そんな目で見るなよな!!」

『やれやれ……。腕は確かなようだが、お前さんはとんだ変わり者のようだ』

イルバはこう呟くとアキトに呆れていた。

「と、とにかくさ!今日はもう休もうぜ!明日は早いんだし」

「まあ、確かにそうだな」

とりあえずこの日は休むことにして、統夜とアキトはそれぞれ眠って体を休めていた。

※※※

翌日、統夜とアキトは朝早くに起床すると、謎の気配の搜索を始めたのだが……。

「ふわああああ……」

アキトは歩きながら大きな欠伸をしていた。

「おいおい、ずいぶん眠そうだな」

「だってさあ、俺、朝弱いんだよ……。普段もこんなに早起きはふわああああ……」

よほど眠いのかアキトは再び欠伸をしていた。

『まったく……アキト、お前さんはずいぶんと緊張感がないな……』

「ええ？ そうか？ これくらいは普通だと思っただけだな」

「やれやれ……。それよりも、これからどうする？ 闇雲に探したって見つからないと思うんだけど」

「そうだな……。とりあえず……」

どこに向かうか考えたアキトだったが、お腹が鳴ってしまった。

「……飯にするか」

「そうだな」

統夜とアキトは仕事を始める前に食事を取ることにした。

2人はちようど近くにあった某牛丼屋で牛丼を堪能した。

「……いやあ、美味かった♪噂には聞いてたけど、本当に早い、安い、美味しいんだな」
牛丼屋を出たアキトは満足そうな表情をしていた。

「アキト、お前、牛丼屋は初めてなのか？」

「ああ、俺は街に出てきたのも久しぶりだしな」

アキトは普段は魔導具作りを主な仕事にしているため、このように街に赴いて仕事をするのは久しぶりなのである。

「……なあ、統夜」

「?何だ？」

「この街のはずれに古い遺跡があるらしい。そこに行ってみないか？」

「?何でまた？」

「魔戒法師の勘……かな？」

「まあ、他に手がかりがあるわけじゃないし、行くだけ行ってみるか」

統夜とアキトはとりあえず街はずれにあるという遺跡に行ってみる事にした。

アキトの話していた遺跡は、秋葉原のはずれにあるのだが、普段は立ち入りを禁止されている。

その建物は崩落の危険があるとの発表があったからだ。

そのせいで、この遺跡には誰も近付かなくなつたのだが、それを利用し、その遺跡に遙か昔に封印された強大な力を持つホラーの腕が眠っていた。

そのホラーの腕は翡翠の番犬所が管理しており、何者にも手出しさせないように腕利きの魔戒法師が守護している。

統夜たちはその遺跡のすぐ近くに來たのだが、そこは高さのある扉によつて守られており、立入禁止の札も貼つてあつた。

「……立入禁止かよ……」

「マジかよ……。この先に何か手がありそうだつたんだけどなあ……」

アキトはこの先に強大な力を持つホラーが封印されているとは知らず、途方に暮れていた。

「どうする？この扉を飛び越えて行くだけ行ってみるか？それとも、街に引き返すか？」

「うーん、そうだなあ……」

アキトがこれからどうするか考えていたその時だった。

『統夜！どうやらその遺跡に行くしかないようだぜ！』

「イルバ、何かあるのか？」

『ああ、微かだが邪気を感じるぜ。しかも、これはホラーのものじゃない！』

イルバが探知したのは、統夜たちが探していた謎の気配そのものだった。

「どうやら当たりみたいだ、アキト！行こう！」

「オッケー！」

統夜とアキトは大きくジャンプをして扉を飛び越えると、イルバのナビゲーションを頼りに遺跡へと直行した。

遺跡に到着した統夜とアキトが目にしたものは……。

「……………、これは……………」

強大な力を持つホラーの腕を守っていたはずの魔戒法師たちの屍だった。

統夜とアキトはまだ生きてるかもしれない。そう希望を持って魔戒法師たちに駆け寄った。

「おい！大丈夫か？しっかりしろ！」

統夜とアキトが魔戒法師たちに声をかけるが、反応は無かった。

「統夜、ダメだ。こいつらは、もう……………」

「……」

統夜は魔戒法師たちを救えなかった自分に憤り、拳を力強く握りしめていた。

その時、カチャつと物音が聞こえてきた。

統夜とアキトは物音の方を向いてその方へ向かうと、そこには1人の男が何かを手に持っていた。

「……この人たちを殺したのはお前か！」

「……魔戒騎士か」

「それに、お前の目的は何なんだ!?!その手に持つてるのは一体……?」

統夜は目の前の男に聞きたい事がたくさんあった。

「……」

しかし、男は何も答えようとしなかった。

「だったら……無理矢理聞き出すしかないな！」

アキトは魔戒銃を取り出し、男に狙いを定めた。

男に向かって魔戒銃を発砲するが、その弾丸は男に受け止められてしまった。

「な……!?!嘘だろ!?!」

「だったらー！」

統夜は魔戒剣を抜くと、男に向かって行った。

「はあっ!」

統夜は魔戒剣を一閃するが、何故か男の体に傷をつける事は出来なかった。

「!マジかよ!?!」

統夜は目の前の男に驚愕していた。

魔戒剣の一撃をまともに受けても傷一つ負ってないからである。

「!このお……!」

統夜は2度3度と魔戒剣を振るうが、その体に傷をつける事は出来なかった。

しかし、攻撃の衝撃で、男の体からポタンのような物がとれて、その場に落ちていた。

「……やめろ、魔戒騎士。無益な戦いだ」

「何だと!?!」

「俺のすべき事はお前を倒す事じゃない」

男は蹴りを放つと、統夜を吹き飛ばした。

「くっ……!」

統夜はすぐ体勢を整えると、魔戒剣を構えた。

「統夜、大丈夫か?」

「ああ、何とか」

アキトが統夜を気遣っていると、男の体に変化した。

男は人間の姿から、漆黒の鎧のようなものを身に纏っていた。

「!あ、あいつは……!?!」

『統夜!こいつはホラーでもなければ魔戒騎士でもないぜ!』

「えっ?」

統夜の目の前にいる男はホラーでも魔戒騎士でもないという未知の存在だった。

「あいつが何者かは知らんけど、倒すしかない!」

統夜は魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「……!ほお、お前は……!」

男は何故か統夜が身に纏っている鎧に見覚えがあった。

「アキト!同時に仕掛けるぞ!」

「わかった!」

統夜とアキトは二手に分かれて男に接近した。

先にアキトが魔戒銃を数発放つが、その一撃は男には全く効いていなかった。

さらに、男は腕から触手のようなものを放ち、アキトの動きを封じていた。

「くっ……!」

「はああああああああ!」

統夜は皇輝剣を一閃するが、その攻撃はかわされてしまった。

男は触手のようなものを集中させて、巨大な剣のようなものを呼び出した。

「！何だよ、あの剣！馬鹿でかいぞ！」

男は自分の体よりもでかい剣を横一閃してきたので、統夜とアキトは高く飛び上がって攻撃を回避した。

統夜とアキトが着地をして、反撃しようとするが……。

「……………くそ、逃げられたか！」

一瞬の間を突いて男は姿を消した。

統夜は男の姿が消えたことを確認すると、鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞆に納めた。

「……………ん？」

統夜は魔戒剣をしまつてすぐ、何かが落ちているのを発見した。

それは、先ほどの男が統夜の攻撃を受けた時に落ちたボタンのようなものだった。

「……………これ……………」

『統夜。それは一応回収しておくぞ。何か手がかりになるかもしれないからな』

「ああ、そうだな」

統夜は回収したボタンのようなものを魔法衣の懐にしまった。

「……統夜、大丈夫か？」

「ああ、俺は大丈夫だ。だけど……」

統夜が視線を向けたのはあの男に殺されたであろう魔戒法師たちの屍だった。

「……統夜。とりあえず一度番犬所に行こう。ロデル様に今回のことを報告しなきゃな」

「ああ、そうだな」

統夜とアキトはその場から移動し、一度番犬所に戻る事にした。

※※※

翡翠の番犬所に戻ってきた統夜とアキトは、ロデルに謎の気配をした男が遺跡にいた魔戒法師を皆殺しにしたことを報告した。

「……申し訳ありません。俺たちがもつと早く奴を見つけていたら……！」

「統夜、自分を責めてはいけませんよ」

「……っ！ですが！」

「それよりも、その男の足取りを追う必要がありますね」

ロデルは謎の気配の男の問題が最優先だということがわかっていた。

「ロデル様、あの男はあの遺跡に封印された何かを持ち去ったようなんです。あそこには何が封印されていたんですか？」

「……あの遺跡には遙か昔、強大な力を持っていたと言われた「グレゴル」と呼ばれたホラーの腕が封印されていました」

「……この街にも、グオルブみたいに強大なホラーの一部が封印されていたんですね……」
統夜は強大なホラーが封印されているという話を聞いて、自分が討滅したグオルブのことを思い出していた。

「グオルブもそうだったと思うのですが、グレゴルも封印したものを消し去ることは出来ませんでした。だからこそ、何人にも触れさせないように、守護していたのです」
『それが立て続けて奪われるとは皮肉なもんだな』

「おい、イルバ！」

「確かに、そうですね。だからこそ、グレゴルの封印が解かれる前にどうかしないといけません」

「そうですね。だからこそ、グレゴルの腕は俺たちが取り戻します」

「助かります。今、この管轄の魔戒騎士の数は少なく、そちらの応援に割ける戦力はなかったものですから」

「そう、ですよ。ホラーから人を守るのも大事な使命ですから」

ロデルの言う通り、この管轄にも少ないながら魔戒騎士はいた。

しかし、彼らはホラー討伐のために応援に行けず、その前に統夜以上の実力を持つているわけではないので、彼らには従来の仕事をしてもらおうとロデルが判断した。

「申し訳ないですが、頼みましたよ、統夜。アキト」

統夜とアキトラロデルに一礼すると、番犬所を後にして、アキトの隠れ家に戻った。

隠れ家に戻ったアキトは、本棚に置いてある本を物色し始めた。

「？アキト？」

「さつき戦ったあの男だけど、昔読んだ魔導書に載ってた気がするんだよ」

アキトは先ほど戦った男に見覚えがあった。

それは、アキトが昔読んだ魔導書にあったと記憶していた。

「……………えつと……………あつたあつた、これこれ」

アキトはお目当の本を発見すると、その本をテーブルに置いて広げたので、統夜もその本に目を通した。

「……………あ、……………じゃないか？」

アキトは男に関する情報が載っているであろうページを発見した。

統夜はそれと同時に、先ほどの戦いで回収したボタンのようなものを取り出し、テーブルの上に置いた。

「……………えつと……………。名は蒼炎。遙か昔に活躍した偉大なる魔戒法師の一人……………」

「蒼炎？そいつがああのお男と関係あるのか？」

「まあまあ、焦るなつて」

アキトはじつくりとそのページを読み進めていった。

「……………へえ、この人、魔導具作りの名人だったのか……………。まるで師匠みたいな人なんだな」

アキトは蒼炎という魔戒法師が魔導具作りの名人だったことを知り、レオのことを思い浮かべていた。

「……………！統夜、ここだ！」

「え？どこだ？」

アキトは読み進めていたページのとある部分を指差した。

「人型魔導具「阿号」を造り上げ、その阿号と共にホラーを殲滅した歴戦の勇士である」

「……………！ということは……………」

『ああ、そいつはその阿号とかいう魔導具で間違いないようだ。……………どうりで妙な気配

がしたはずだぜ』

イルバは男の正体が遙か昔に造られた人型魔導具「阿号」であるとかわり、妙な気配の訳に納得していた。

「……なあ、統夜。それ、見てもいいか？」

「ああ、もちろん」

アキトは統夜が回収したボタンのようなものをジッと眺めていた。

「……どうやらこのパーツ……。本当に阿号のものかもしれないな」

「……阿号って大昔の魔導具だろ？何で今、現れたんだ？それに、魔導具なら何で人を……」

男の正体はわかってても、謎は深まるばかりであった。

男が古の魔導具だとしたら、行動があまりにも解さないからである。

「そういえば、少し前に東京で季節外れの雷雨があっただろ？まさかその時に雷を浴びたとか？」

『おいおい。さすがにそれはあり得ないんじゃないのか？』

イルバはこう指摘するのだが、実は統夜の予想は当たっていた。

何日か前に東京で季節外れの雷雨があったのだが、その時偶然にも朽ちていた阿号の体に雷が直撃し、その衝撃で復活したのである。

「理由はよくわからないけど、あいつは何で仲間の法師を殺したんだ？」

「さあな。それは、奴に直接聞いてみるしかないんじゃないか？」

「ああ、そうだな」

統夜とアキトは、阿号と直接対峙し、その真意を問いただすつもりでいた。

「それに、奴はどうやってグレゴルを復活させるつもりなんだ？」

「わからん。だけど、何かをゲートにするつもりだと思うけど……」

統夜とアキトは阿号がどのようにグレゴルを復活させるつもりなのかわからずじま
いだった。

その時だった。

『！統夜、アキト！奴の気配だ！どうやら奴は何かしらのアクションを起こそうとして
るみたいだぜ！』

イルバが阿号の気配を察知した。

「……………アキト、行こう！」

「ああ、わかった！」

統夜とアキトは隠れ家を飛び出し、阿号が出現した場所に急行した。

外に出ると、日が沈み始めており、もうすぐ夜になるところだった。

統夜とアキトはしばらく走っていると……。

「……きやつー！」

統夜は前をちゃんと見ていなかったのか、中学生くらいの女の子にぶつかってしまった。

「ご、ごめん。大丈夫？」

「え、ええ……」

統夜は前方不注意の自分に非があつたので、ぶつかつた時に散らばってしまった本を拾うのを手伝つた。

「……はい、これで全部かな」

統夜は最後の一冊を女の子に渡した。

「あ、ありがとう……」

女の子は赤い髪で、ちよつとだけ気の強そうな女の子だつた。

「ごめんね。俺、急いでたから！」

「べつ、別に……」

女の子はそこまで気にしていないようであつた。

「それじゃあ！急いでるから！」

統夜はずつと待つていたアキトと共に阿号がいる場所へと急行した。

赤い髪の女の子……西木野真姫（にしきのまき）は、走り去る統夜とアキトの姿をジツ

と眺めていた。

「……もう、なんなの……？イミワカンナイ！」

真姫はこう言い放つと、そのまま自分の家へ向かって行った。

その頃、1人の少年が家に帰るために街を歩いていった。すると、統夜とアキトが凄い勢いで走り去っていった。

「……」

少年は足を止め、その様子をジッと眺めていた。

『……おい、小僧。どうしたんだ？』

少年の右手にはめられた指輪が突然口を開いた。

「……なあ、キルバ。今走り去って行ったの……」

『魔戒騎士と魔戒法師のようだな。ここの管轄の者ではないみたいだな』

少年の右手にはめられているのは魔導輪のようであったが、この少年はどうかやら魔戒騎士ではないようだった。

「魔戒……騎士か……」

この少年……如月奏夜（きさらぎそうや）は、魔戒騎士になるために修行を続けてい

る少年だった。

『まあ、今のお前には関係のないことだ。とりあえず魔戒騎士になるためにもつと精進しないとな』

「わ、わかっているよ!」

奏夜は統夜たちがいなくなったことを確認すると、そのまま帰路についた。

(何でだろう……。あの赤い魔法衣の人……。また何処かで会えそうな気がするな……)

奏夜は統夜と再会するのでは?と予想するのだが、近い将来、本当に再会することになるとは、知る由もなかった……。

そして2人はイルバのナビゲーションを頼りに辿り着いたのは、神田の街はずれにある今は使われていない廃ビルの屋上だった。

「……見つけた!」

統夜は廃ビルの屋上で佇む阿号の姿を発見した。

こうして、統夜とアキトの2人と古の時代に造られた人型魔導具「阿号」との戦いが始まるうとしていた。

……続く。

『やれやれ。ホラーを消すために人を滅ぼすだど？ ずいぶん矛盾なことを言うもんだぜ！ 次回、「閃騎 後編」。統夜！ あいつを止めるぞ！』

第39話 「閃騎 後編」

統夜と魔戒法師であるアキトは、合流すると、共に謎の気配を追っていた。

偶然訪れた遺跡で、統夜とアキトはとある男と遭遇した。

その男は人でもホラーでもない存在で、この遺跡を守護していた魔戒法師を皆殺しにして、強大な力を持ったホラー、グレゴルの腕を奪った。

統夜とアキトは男に戦いを挑むが、逃げられてしまった。

その後の調査で、この男は、遙か昔、魔導具作りの名人だった蒼炎という魔戒法師が作った人型魔導具「阿号」と呼ばれる者であると発覚した。

その目的もわからないまま、イルバが阿号の気配を見つけたので、2人は神田の街はずれにある今は使われていない魔ビルの屋上に到着した。

「……見つけた!」

統夜は魔ビルの屋上で佇む阿号の姿を発見した。

「……魔戒騎士と魔戒法師か」

阿号は統夜とアキトの姿をジッと見つめていた。

「……悪いが、俺の邪魔をするな。志はお前と同じだ」

「志って……お前の目的は一体何なんだ!？」

「俺の目的……俺の夢はホラーのいない世界が来ることだ」

「……なるほどな。それは俺もそんな世界を作りたいさ!」

阿号の語る夢にアキトは賛同していた。

「だったら……! どうしてホラーの腕を奪ったりするんだ! お前は人を滅ぼすつもりなのか!？」

「そうだ」

「!?!」

「このグレゴルの腕はだいぶ力を蓄えてきている。このホラーを復活させ、大勢の人間を殺す」

統夜の問いかけに阿号が肯定するとは思っていなかったもので、統夜とアキトは息を飲んだ。

「お前……ホラーのいない世界を作るんだろ!?! だったら何でこんなこと!？」

「だからこそだ。全てはホラーのいない世界を作るためだ」

「それが……お前の夢だと言うのか!?!」

「そうだ。そして、これは俺を作ってくれた法師の夢でもある」

『おいおい、お前さんのやろうとしていることはずいぶんと身勝手じゃないのか?』

阿号の野望をイルバも否定していた。

「俺はホラーを狩り続けた。だが、それだけではダメだと気付いたんだ！」

「何だと……!?!」

「俺が夢を実現し、真の守りし者になるためだ！」

「ふざけるな！」

統夜は魔戒剣を抜くと、阿号に向かつていった。

統夜は魔戒剣を一閃するが、やはり阿号の体に傷をつけることは出来なかった。

「統夜……」

アキトは魔戒銃と魔導筆を取り出すと、法術と銃を同時に放った。

しかし、その一撃はあっさりと防がれてしまい、阿号は左手から触手のようなものを放った。

その触手のようなものに薙ぎ払われたアキトは、その場から吹き飛ばされてしまった。

「……アキト……このお！」

統夜は魔戒剣を一閃しようとするが、その前に阿号が蹴りを放ち、統夜は吹き飛ばされてしまった。

すぐに大勢を整えた統夜は魔戒剣を構えて阿号を睨みつけた。

「貴様は……魔戒法師たちを殺し、多くの人を殺そうとしている……そんなお前は、守りし者ではない！そんなの、俺は絶対に認めない！」

「命懸けで守った人間はどうなる？病気で死ぬか不幸な死かそれぞれだ！ある者は同じ人間の手によって命が奪われていく！」

統夜は魔戒剣を振るうが、その攻撃は阿号に受け止められ、阿号はこのように語っていた。

「だけどな……！幸せな人生を送った人だつてたくさんいるんだ！」

統夜は力任せに魔戒剣を振るおうとするが、阿号はそのまま統夜を投げ倒した。

「くっ……！」

統夜はすぐに立ち上がろうとするが、その前に阿号は統夜の体を踏みつけた。

「ぐあっ……！」

統夜はあまりの痛みに顔を歪めていた。

「統夜……！」

アキトは魔戒銃を連射した。その一撃は阿号には効かなかつたが、視線をアキトに向けるには十分だった。

一瞬の隙について統夜は魔戒剣を阿号の足に叩き込み、少しだけ足が浮いたところで脱出した。

「……………くっ……………!」

統夜は大勢を整えて、魔戒剣を構えた。

「……………魔戒騎士。貴様に問おう。その幸せな人生を脅かす者は何だ? ホラーか!」

阿号は右手から触手のようなものを統夜めがけて放つが、統夜は大きくジャンプをしてかわし、魔戒剣を振るうが、その前に触手のようなものに薙ぎ払われてしまった。

統夜はすぐに着地をして、大勢を整えた。

「……………まあ、それもあるだろう。だがな、大半は人間の邪心だ。人を苦しめているのは、己の邪心なのだ!」

「そんなことはない!」

統夜は魔戒剣を振るうが、すぐに阿号に捕まってしまった。

「本当にそう言い切れるのか? 人間の心の邪心……………陰我は消え去りはしない!」

「それでも……………! そんな人の心だって……………守るに値する光はある!」

「そう、光だ」

阿号はそのまま統夜を投げ飛ばした。

「統夜!」

アキトは吹き飛ばされた統夜をキャッチした。

「悪いな、アキト」

「気にするな」

2人は大勢を整えると、阿号を睨みつけた。

「……光があるから闇があるのだ。……断ち切るべきなのは陰我ではない。……人間の心だ！」

「何だと……!?!」

阿号の発言に統夜の目がさらに鋭くなった。

「だからこそ……全ての人間を……殲滅するのだ!」

阿号の抱いている野望こそ、人間の邪心を消し去るために、グレゴルの力を使って全ての人間を滅ぼすというものだった。

「お前たちが俺の邪魔をするなら……お前たちから殲滅する!」

こう言い放った阿号は人間の姿から戦闘形態へと変化した。

統夜とアキトが初めて対峙した時とは異なり、両手に太刀が装着されていた。

「そんなことはさせない!……行くぞ、アキト!」

「ああ!奴を止めようぜ、統夜!」

統夜は再び魔戒剣を一閃するが、阿号は片腕で防ぎ、もう片方の太刀が統夜に迫った。

「……っ!」

統夜は魔戒剣の鞘を用いてもう片方の太刀を防いだ。

「……ほう、やるな」

統夜はニヤリと笑みを浮かべると、蹴りを放って阿号を吹き飛ばした。すかさずアキトが魔戒銃と法術を交互に放つが、阿号には効いていなかった。

統夜は魔戒剣と鞘をまるで二刀流のような形で構えた。

統夜はこの時、銀牙騎士絶狼の称号を持つ零の言葉を思い出していた。

ホラーと戦う時は機転の良さが危機を救うことがあると。

相手はホラーではないが、鞘を用いた二刀流という機転の良さが統夜の危機を救ったのは事実だった。

統夜は再び阿号に向かって魔戒剣を振るうが、阿号は片腕で防ぎ、再びもう片方の太刀で統夜を斬ろうとするが、統夜は再び鞘を用いて言葉を防いだ。

しばらくの間、統夜と阿号は壮絶な剣の打ち合いを行っていた。

度々飛び散る火花が、その激しさを物語っていた。

統夜は一度距離を取り、再び阿号に向かおうとするが、阿号は巨大な剣を呼び出した。阿号は巨大な剣を振るい、統夜はそれをかわしていた。

何度かは何とかかわすが、何度も振るわれ、統夜はまともにかわすことが出来なかった。

「……………くっ！」

統夜は魔戒剣と鞘を使って防御の姿勢になったが、このままでは危ないのは間違いないかった。

「……統夜………こいつはとっておきだぜ！」

アキトは魔戒銃にある弾を装填すると、阿号の右足めがけてその弾を放った。

その弾が阿号の足に当たった瞬間、弾丸が爆発した。

その衝撃で阿号は体勢を崩し、統夜に剣を振るうことは出来なかった。

先ほどアキトの放った弾丸は強力で、その衝撃で魔戒銃が壊れてしまった。

「くそ！壊れたか！」

アキトは壊れた魔戒銃を見て舌打ちをした。

アキトの魔戒銃はまだ試作段階であるため、銃の耐久性など改善すべき点は山積みだった。

「アキト……助かる！」

統夜はスライディングをしながらアキトが狙い撃った阿号の右足めがけて魔戒剣を叩き込んだ。

統夜の攻撃で阿号は完全にバランスを崩してしまい、その場に倒れ込んだ。

その時に巨大な剣を手放してしまい、そのまま巨大な剣は屋上を飛び越えて落下していった。

落下した巨大な剣はそのまま地面に突き刺さったのだが、ここは廃ビルということもあり、周囲に人はいなかったため、人的被害はなかった。

「ほう……やるな、魔戒騎士」

アキトと統夜の連携攻撃で倒れた阿号はゆっくりと起き上がった。

「阿号！お前のやろうとしていることは、間違っている！」

「そこまで言うのなら……この俺を止めてみせろ！」

「ああ！そのつもりだ！」

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれ、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「……はあっ！」

統夜は皇輝剣を振るうが、それは阿号に軽々と防がれてしまった。

阿号は両手の太刀で統夜を斬り裂こうとするが、統夜は皇輝剣で二本の太刀の攻撃を防いだ。

「まだまだあー！」

統夜は皇輝剣の一撃を何度も叩き込むが、それで阿号に致命傷を与えることは出来なかった。

「統夜！」

アキトは統夜を援護するために、法術を放った。

その一撃は阿号にダメージを与えられなかったが、足を止めるには十分だった。

「はあっ！」

統夜はアキトが作ってくれた隙を突いて皇輝剣を一閃した。

その一撃は阿号の左手の太刀を真つ二つに斬り裂いた。

「くっ……！」

さすがの阿号も焦りを見せていた。

統夜が予想以上に善戦していたからである。

「やるな、魔戒騎士。だが！」

阿号はビルから落ちて地面に突き刺さった巨大な剣を呼び寄せて、それを手に持った。

巨大な剣を手に持った阿号を見て、統夜は一度距離を取った。

『統夜！あんな剣で斬られたら流石に奏狼の鎧も持たないぜ！』

「わかってる！」

統夜は阿号の持つ巨大な剣に警戒していた。

阿号は巨大な剣を振るうと、統夜は大きくジャンプをしてかわした。

その後、追撃が来ることを読んでいた統夜は、皇輝剣の切っ先に赤い魔導火を纏わせ、

烈火炎装の状態となった。

「統夜！俺の力も使え！」

アキトは魔導筆を統夜に向けると、青色の雷を放つ法術を統夜に向けて放った。

統夜はその雷を皇輝剣の切っ先で受け止めると、奏狼の体は赤い炎だけではなく、青い稲妻も纏っていた。

この状態は「烈火電装（れつえんでんそう）」。

アキトの協力によってなることが出来た攻撃形態で、アキトの咄嗟の判断で偶然この状態になることが出来た。

「はあああああああああ！」

阿号が巨大な剣を振るうのと同時に統夜は赤い炎と青い稲妻に包まれた皇輝剣を振るった。

巨大な剣と皇輝剣の切っ先がぶつかり、火花を散らしていた。

そして……。

「はあああああああああ！」

2つの剣の衝突は、統夜に軍配が上がり、統夜は阿号の持つ巨大な剣を真つ二つに斬り裂いた。

「……………」

阿号は巨大な剣を斬り裂かれ、少し焦るものの、統夜は先ほどの一撃でかなりの力を使ったのかかなり消耗していた。

その隙を見逃さなかった阿号は蹴りを放って統夜を吹き飛ばした。

「ぐあつー！」

統夜は地面に叩きつけられ、その衝撃で鎧が解除されてしまった。

「くっ………まだだ！」

統夜は体にダメージが残っていたが、気合だけで立ち上がった。

「思ったよりやるじゃないか、魔戒騎士。だが、お前に俺は倒せない」

一方の阿号は巨大な剣を斬り裂かれた衝撃で少しダメージを負ったものの、戦闘に支障はなかったが、戦闘形態は解除され、素顔を出していた。

「阿号！もうやめるんだ！」

「……人の死が夢を実現させるのだ。ホラーのいない世界を」

「阿号、それは長い間考えたお前の答えだと言うのか!？」

「そうだ。全ては法師の夢。俺は、必ずこの夢を果たすと法師と約束したのだ！」

「ホラーのいない世界……。それは俺だつてそれを望んでる。……みんなが、ホラーの恐怖に怯えることのない、平和な世界を……！」

「何？」

統夜は阿号に対してこう言った時、唯たちの存在が脳裏に浮かんでいた。

「お前は、答えを出すことは出来たのか？その世界をどう実現させるのか！」

「……そんなものはない」

「話にならない」

「だけどな、俺たちは人を守るためにホラーを狩っているんだ。ホラーを殲滅するために人を滅ぼすなんて、やっぱり間違っている！」

「……」

「なあ、蒼炎法師はお前に夢を託したんだろ？……法師はどんな顔でお前に夢を語ったんだよ！」

「統夜……」

悲痛な表情で阿号に訴えかける統夜をアキトはジツと見守っていた。

「……」

統夜にこう言われ、阿号は思い出していた。

あの時の蒼炎法師の顔を。

“……阿号！”

蒼炎法師は笑っていた。

さらに言う、自分の夢を語っている時は、まるで子供のように無邪気な表情をして

いた。

「……法師……」

統夜の説得が功を奏しそうになったその時だった。

「ぐっ……！」

突然、阿号の体に異変が起こった。

阿号の持っていたグレゴルの腕が反応し、グレゴルが復活しようとしていた。

「阿号！そいつを放すんだ！」

阿号はグレゴルの腕を放そうとするが、腕を放すことは出来なかった。

——人間を滅ぼす。それは、我も同じ願いだ！

グレゴルは、ホラーを滅ぼすために人を滅ぼそうとする、阿号の思いに同調し、阿号をゲートにしようとしていた。

——人に造られし者よ、我と一つになり、その願いを果たそうではないか。

「うう……ぐう……」

「阿号！」

苦しそうな表情で抵抗する阿号にアキトも声をかけていた。

——貴様は気付いていなかったようだ。お前の体に私の肉身の一部があったことを……

遙か昔、グレゴルは阿号に倒される前に阿号の体を貫いたのだが、その時に、グレゴルの体の一部が阿号の体の中に潜んでいたものであった。

「な、何だと……!? うわあああああああ!!」

阿号は断末魔をあげると、グレゴルに体を取り込まれてしまい、巨大な素体ホラーのような見た目をしているグレゴルが実体化してしまった。

『グレゴルが復活したか……。統夜……いつは一筋縄ではいかないぜ!』

「そうみたいだな!」

グレゴルは阿号を取り込んだ事で得た能力である、鋭利な触手を体の一部から統夜めがけて放った。

統夜は魔戒剣でその触手を受け止めていた。

「統夜!!」

アキトはグレゴルめがけて法術を放ち、統夜を救った。

「アキト、助かったよ!」

「気にすんなって! それよりも、あいつをぶっ倒して阿号を助けようぜ!」

「もちろんだ!」

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧をを身に纏った。

鎧を召還した統夜は、そのままグレゴルに向かっていった。

統夜は皇輝剣を一閃してグレゴルの体の一部を斬り裂くが、ダメージは無いに等しかった。

その後、グレゴルは衝撃波を放ったのだが、その威力は凄まじく、統夜たちのいたビルはその衝撃で全壊した。

「ぐあつー！」

「があつー！」

統夜とアキトはビルが破壊された衝撃でその場に投げ出されてしまった。

アキトは法術を用いてどうにか下に降りる事が出来た。

そして、統夜は……。

「来い！・白皇！・」

統夜は魔導馬である白皇を召還し、白皇に乗り込むことで下に降下した。

2人が下へ降りると、グレゴルはどこかへと移動して行った。

『統夜！まずいぞ！あんなのが街に向かったら大惨事は避けられないぞ！』

「ああ！わかつてる！」

統夜は白皇を走らせ、グレゴルを追跡した。

グレゴルは追いかけてくる統夜を見て触手による攻撃を連続で繰り出した。

統夜は白皇の力で皇輝剣を皇輝斬魔剣に変化させると、触手の攻撃を全て薙ぎ払った。

白皇を大きくジャンプさせると、統夜はグレゴルの翼めがけて皇輝斬魔剣を一閃し、グレゴルを地面に叩き落とした。

「聞こえるか阿号！」

統夜はグレゴルに取り込まれた阿号に語りかけた。

「お前が法師から受け継いだ夢……俺が必ず果たす！」

その統夜の声はグレゴルに取り込まれた阿号に届いていた。

グレゴルは尻尾による攻撃を放った。

その攻撃で統夜は白皇ごと薙ぎ払われると、白皇の召還は解除されてしまい、皇輝斬魔剣も皇輝剣に戻ってしまった。

「くっ！」

それでも統夜は諦めず、街に被害を出さないために必死にグレゴルを食い止めていた。

その頃、グレゴルに取り込まれた阿号は、信じられない幻を見ていた。

『阿号……』

阿号の目の前に遙か昔に命を落としたはずの蒼炎法師がいたからである。

「蒼炎……法師……」

『あの若い魔戒騎士……。彼に託そう……。俺とお前が果たせなかつた夢を……』
 こう語る蒼炎法師の顔はとても穏やかな表情だった。

『阿号……。いつかきつと……。その時が来るさ……。お前は十分に戦つた……。もう、いいんだ。休んでも、いいんだよ』

こう語ると蒼炎法師の幻は消滅した。

阿号はその場に座り込むと、阿号の体も消滅したのであつた。

『！統夜！奴の体から何かが出てくるぞ！』

イルバにこう言われた統夜は一度グレゴルと距離を取つた。

グレゴルが断末魔をあげていると、グレゴルの体から出てきたのは、阿号の使つていた巨大な剣……。号殺剣だった。

『統夜！あれは阿号の剣だぜ！』

「そうみたいだな。……。阿号！お前の力、借りるぜ！」

統夜は号殺剣を手に取ると、それを構えた。

「はあああああああああ！」

統夜は号殺剣を手にグレゴルに接近すると、号殺剣を一閃した。

その一撃はグレゴルの体を真つ二つに斬り裂いた。

断末魔をあげながらグレゴルの体は爆発と共に完全に消滅した。

「はあ……はあ……はあ……」

グレゴルを討滅した統夜は鎧を解除すると、この戦いでかなり消耗したのか、膝をついていた。

「……統夜……」

自分の足で統夜とグレゴルを追いかけていたアキトが合流し、統夜に駆け寄った。

「……統夜、大丈夫か？」

「ああ、何とかな……」

統夜はゆっくりと立ち上がると、その目にとあるものが写っていた。

統夜はそれに近付いて拾うと、それは阿号の体の一部であるパーツだった。

『……統夜、そいつはお前さんが持った方がいいんじゃないか？お前があいつの夢を叶えるのだろうか？』

「……そうだな」

統夜は阿号の形見ともいえるパーツを魔法衣の懐にしまった。

「……今思えば、あいつは間違っていないかったかもな」

アキトがこう呟いたのを聞くと、統夜はアキトを睨みつけていた。

「人間がいなくなれば、確かに陰我は消し去ることは出来る。まあ、それは決して出来ないけどな」

『そうだな。あいつは、真つ直ぐ過ぎたのかもかもしれないな。俺様はそう思っているぜ』

「そんなの……悲しすぎるよ……。俺には守りたい人たちがいる。そいつらがいない世界なんて……俺は耐えられないよ……」

こう語る統夜の表情は悲しみに満ちていた。

「そうだな……。だからこそ、俺たちは戦わないとな。ホラーを討滅し、人を守るために……」

「ああ。そして、いつの日か叶えてみせるさ……。阿号や蒼炎法師が夢見たホラーのいない世界ってやつを……」

統夜はこう呟きながら、夜から朝になろうとしている景色を眺めていた。

ちょうどその頃、何者かが統夜と阿号、及びグレゴルの戦いをジツと見物していた。

「……ちつ、やっぱり骨董品の魔導具じゃこんなものか……」

マントを羽織ったその者は、何故か阿号の存在を知っていた。

「……まあ、いい。データは十分に取れたからな……。これで、理想の魔導具を造る事が出来る……！」

この者とはあることを計画していた。

「……楽しい余興を見たことだし、桜ヶ丘に戻るとするか……」

その者はこう呟くと、その場から姿を消した。

※※※

グレゴルを討滅した数時間後、外は完全に朝になっており、統夜とアキトは隠れ家である廃ビルの前にいた。

「……統夜、お前は桜ヶ丘に戻るのか？」

「ああ、翡翠の番犬所への報告は済んだし、このことを紅の番犬所のイレズ様にも報告しないといけないしな」

統夜とアキトはグレゴルを討滅した直後に翡翠の番犬所に直行し、事件の解決を報告した。

街が大惨事になる前にグレゴルを討滅したことをロデルはとても感謝していた。

そんなロデルに挨拶をすると、翡翠の番犬所を後にして、現在に至る。

「……アキトも行くのか？」

「ああ、俺は魔戒銃の改修作業をしなくちゃいけないからな」

アキトは先の戦いで壊れてしまった魔戒銃を修理し、その性能を向上させるための改修作業を行うつもりだった。

「……ま、お互い頑張ろうな」

「ああ。……統夜！また2人でタッグを組めるといいな。お前と組んだこの仕事はなかなか楽しかったぜ！」

「……ああ、俺もだ」

統夜とアキトは固い握手を交わすと、それぞれの場所へと帰っていった。

統夜は早く帰るために、魔戒道を利用して桜ヶ丘に帰ってきた。

桜ヶ丘に戻った統夜は番犬所に直行すると、イレズに今回の事件の一部始終を報告し

た。

報告を受けたイレスは統夜に労いの言葉を送り、今日はゆっくり休むように通達した。

統夜はそんなイレスの心遣いに感謝をして番犬所を後にした。

「……さて、確か明日から3学期だし、今日は家に帰ってゆっくり休もうかな……」

そう決めて家路につこうとしたその時だった。

「……あつ、やーくん!!」

統夜を偶然発見した唯が大きく手を振っていた。

「唯……それに、みんな……」

唯の他にも軽音部のみんながいて、唯たちは統夜に駆け寄った。

「統夜先輩、仕事で東京に行っちゃって律先輩から聞きましたけど、終わったんですか?」

「ああ、終わったよ。それで、今イレス様に報告した所だ」

『ちょうど今日は休めと言われたんでな、家に帰る所だったのさ』

「統夜君、お疲れ様です♪」

「ああ、ありがとな」

仕事が終わったと聞いた紬は労いの言葉をかけるが、唯は仕事が終わったと聞いて目をギラリと輝かせていた。

「だったらさ、これからやーくんも一緒に遊ぼうよ！」

唯は仕事を終えたばかりの統夜に遊ぼうと提案した。

「ちよ、唯先輩!？」

「あたしもそうしたいが、さすがに統夜は疲れてるだろ？」

普段なら賛同するであろう律が統夜の体を気遣って唯の提案に反対していた。

「むー……。やーくんと遊びたかったなあ……」

唯は頬をぷうつと膨らませてむくれていた。

『おいおい、統夜は過酷な仕事を終えたばかりなんだけ？少しは察してくれよ……』

こーイルバが唯をなだめるのだが……。

「……ああ、いいよ」

統夜がまさかのOKだったので、唯以外の全員が統夜の言葉に驚いていた。

「本当!？」

唯は嬉しかったのか、目をキラキラと輝かせていた。

『おい、統夜。本気か!? あんだけ消耗したんだから大人しく休んでた方がいいんじゃないのか?』

「確かにその方がいいんだけどさ、みんなと遊ぶのが俺にとっては何よりも息抜きになるからさ」

統夜の言葉に唯たちの表情がぱあつと明るくなった。

『まったく……。お前さんがそう言うなら仕方ないか……。』

イルバは渋々統夜がみんなと遊ぶことを了承した。

「ほら、やーくん。行こっ♪」

「おい、唯！引つ張るなって！」

唯に引つ張られる形で統夜は走り出し、律たちはその後を追いかけた。

こうして統夜は夕方頃まで唯たちと遊んだのであつた……。

……続く。

——次回予告——

『いよいよバレンタインか。俺様には関係ないが、統夜のやつ、色々勘違いしてやがる。次回、「甘味」。やれやれ、面倒なことが起きそうだけ』

第40話 「甘味」

冬休みの後半。統夜は番犬所からとある指令を受けて東京に向かった。

そこで、統夜は助っ人として組んだアキトと共に大きな事件に巻き込まれた。

遙か昔に造られた人型魔導具「阿号」が復活したのである。

阿号は、自分を作った蒼炎法師の夢であるホラーのいない世界を作るためにホラー、グレゴルの力を使って人間の殲滅を目論んでいた。

統夜とアキトは阿号の野望を止めるために奮闘し、復活してしまったグレゴルをどうにか討滅したのである。

それからおよそ一ヶ月が経ち、バレンタインデーが近付いていた。

そんな中、統夜はいつものように部室である音楽準備室に向かったのだが……。

「……あれ？何だこりゃ？」

音楽準備室の扉に一枚の張り紙が貼ってあったのである。

「えつと……」「ただいま会議中。男子の入室厳禁！」って、おいおい……」

何の会議かはわからないものの、男子は入るなという張り紙だった。

『ほお……なるほどな』

イルバは何故このような張り紙がしてあるのかおおよそ察しはついていた。

「……………？イルバ、心当たりがあるのか？」

『まあ、それはどうでもいいだろ』

「いやいやいや……………気になるんだけど……………」

『統夜、今日の部活は休みなんだ。とりあえず番犬所に行くぞ』

「……………わかったよ」

統夜は渋々引き返すと、そのまま学校を後にして、1度番犬所に立ち寄ることにした。

統夜が門前払いをくらう中、音楽準備室の中では……………。

「……………これより、バレンタインの対策会議を始める！」

少し大袈裟な会議が律主催で行われていた。

「もうすぐバレンタインだもんねえ♪楽しみだなあ♪」

唯は間も無く訪れるバレンタインデーを心待ちにしていた。

「統夜にはこれでもか！つてくらい世話になったからなあ。義理チョコの1つでもやらないとあいつが可哀想だしな」

「でもりっちゃん。今回はみんなそれぞれ手作りのチョコを作ってやーくんに渡すんだ

よねえ？」

「まあな。統夜のことだから義理と本命の区別はつかないだろうけど、手作りの方がいいだろう？」

「アハハ……確かにそうかもしれないですね……」

統夜の鈍感ぶりを思い出した梓は苦笑いをしていた。

「統夜君、喜んでくれるかしら？」

「ああ、いくら統夜が鈍感でもチョコをもらえたら嬉しいもんだろ」

紬が少しだけ不安そうにしていたので、それを滲がフオローしていた。

「……」

梓は4人の顔をジツと見ながらいつぞやのイルバの言葉を思い出していた。

「俺様は知ってるんだからな。お前ら5人と憂のやつが統夜に惚れてるってことを

……
”

(……先輩たち、多分本命のチョコを渡すだろうから……やっぱり統夜先輩のこと、好き

なのかな……)

梓はイルバの言葉を思い出してこのような不安を抱いていた。

自分だって本命のチョコを渡したいけど、それでいいのだろうか？

梓は葛藤していたのである。

「……？あずにゃん？どうしたの？」

「にゃ!?いい、いや、何でもないですよ！」

梓は焦つてこう答えるが、律はニヤニヤしながら梓のことを見ていた。

「……？何ですか、律先輩？ニヤニヤして」

「梓さあ、統夜のこと考えてたろ？」

「!?にゃ!?にゃに言ってるんですか！」

梓の顔は真つ赤になり、舌足らずな言葉がまるで猫っぽい感じになってしまった。

「あずにゃん、照れなくてもいいのに♪」

唯はニコニコしながら梓に抱きついていた。

「ゆ、唯先輩！抱きつかないで下さい！」

梓は恥ずかしさを誤魔化すために唯に対してこのような態度を取っていた。

「なあ、梓つてき、統夜のこと好きだろ？」

梓は話の核心を突いたのは意外にも滯だった。

「な!?わ、私は……」

梓は顔が真つ赤になりながらもどうにか話を誤魔化そうとするのだが……。

「あずにゃん、誤魔化さなくてもいいよ。実は私たちもやーくんのこと好きだから」

「え!?!」

イルバから話は聞いていたが、本当にそうだとは思っていなかった。梓は驚いていた。

「私たち、何度も統夜君に救われたでしょ？それで……ね……」

こう答える袖も恥ずかしそうにしていた。

「それで、私たち4人は話し合って決めたんだよ。いつになるかわからないけど、もしこの中の誰か統夜と付き合うことになっても文句は言いつこなしだつて」

「誰が統夜とくつついてもいいようにそこら辺は公平にしないと」

「……まあ、統夜君、鈍いから。今のままだと誰ともくつつかないと思うのよね」

統夜は女性が絡むとあり得ないほど鈍感になるといふのは良く知っているので、今のままでは誰とも付き合うことはないだろうと理解していた。

「あずにゃん、私、気付いてたよ。あずにゃんがやーくんのが好きだつて♪」

「へ!?! そ、そんなんですか!?!」

「梓ちゃん、凄くわかりやすかったわよ♪」

「ああ。統夜があそこまでの朴念仁じゃなかったら普通は気付いてただろうな」

「……// //」

自分が知らず知らずに統夜にアプローチをしていたと4人に悟られてしまい、梓は顔を真っ赤にして黙り込んでしまった。

「まあ、それは置いて。統夜には感謝してもしきれないんだからそれは伝えたいよな」

「そうだな、統夜、喜んでくれるといいけどな」

こうしてバレンタイン会議はそれぞれのようなチョコを作るのか相談し合い、幕を閉じた。

この会議の後、唯たちは統夜に送るチョコを作るために奔走するのであった。

※※※

そして、バレンタイン当日となった。

この日、統夜はいつもの日課であるエレメントの浄化を行っていた。

『……統夜、今日はバレンタインデーだな』

イルバがこう話を切り出したのは、この日のノルマを終わらせてすぐだった。

「まあ、そうらしいな」

統夜はさほど興味が無いのか淡々と歩き続けていた。

『統夜、お前さんは興味が無いのか？そのバレンタインってやつに』

統夜がバレンタインをどう思っているのか知りたかったのか、イルバがこう訪ねてみた。

「バレンタインってあれだろ？チョコレートをただで貰えるっていうチョコ好きには嬉しいイベントだろ？」

『と、統夜。冗談だろ？』

統夜のバレンタイン観があまりにもずれていたで、イルバは思わず絶句していた。

「？イルバ、違うのか？」

『まあな。それをリア充じゃない奴の前で言ってみろ？お前、ボコボコにされるぞ』

「よくわからないけど、違うってことか？」

統夜はバレンタインというイベントがどのようなイベントかわかっていなかった。

『わかりやすく言えば女の恋を後押しするイベントってところだぜ』

「？恋？」

『まあ、今日1日過ごしていれば何となくわかると思うぜ』

「と、とりあえず学校に行くか」

統夜は訳がわからなかったが、朝の仕事のノルマを達成したので、とりあえず学校に向かうことにした。

街を歩くと男子も女子もどこかソワソワしており、何故このような事になっているのか統夜は理解出来なかった。

(そういえば統夜のやつ、バレンタインの度にこんなリアクションを取ってた気がするぜ……)

統夜のパートナーとして長いこと一緒に過ごしていたイルバは、その鈍感さ故に毎年のバレンタインはこのように首を傾げていた事を思い出していた。

(今年は少しでも意味を教えてやらないとな。唯たちが浮かばれないぜ)

イルバは今年こそ統夜にバレンタインとはこういうものだということを教えるつもりだった。

こうして統夜は学校に到着したのだが、異変はすぐに訪れた。

いつものように上履きに履き替えるために下駄箱を開けるのだが……。
「……………何だこりゃ？」

統夜の下駄箱の中に小さな包が入っていた。

イルバはこれがチョコであるということはすぐに察しがついていた。

『ほう、さっそくーっ目のチョコか。お前さんも隅に置けないな♪』

イルバは空振りに終わるとわかっていたが、このように統夜をからかった。

「チョコか。ほら、やっぱりただでチョコを貰える日じゃないかよ」

『お前なあ……』

未だにバレンタインを勘違いしている統夜に、イルバは呆れていた。

統夜はとりあえずそれを鞆にしまうと、上履きを履いて教室に向かおうとしたのだが……。

「あつ、月影先輩来た!」

「あ、あの!月影先輩!おはようございます!」

2人の女子生徒が統夜を待っていたのか、見つけるなり挨拶をした。

「あ、ああ。おはよう」

統夜は制服のリボンを確認すると、梓と同じ赤のリボンだったので、1年生であるということはすぐにわかった。

「それで、俺に何か用事か?」

統夜は相手を怖がらせないようになるべく優しい口調でこう聞いた。

「あつ、あの……!」

2人組の1人である黒髪にポニーテールの女の子は顔を真っ赤にして、もじもじと恥ずかしがっていた。

「ほら、頑張つて！」

ポニーテールの女の子の付き添いと思われる黒髪で長髪の女の子は、エールを送っていた。

統夜はこの光景を見て首を傾げていた。

（ほう、これはこれは。何か面白いことになりそうだぜー！）

イルバはイルバでこの状況を楽しんでニヤニヤしていた。

「月影先輩……、これ！」

ポニーテールの女の子が渡してきたのは、先ほどの包より大きい包だった。

「これを……俺に？」

「はい。あと、これを！」

ポニーテールの女の子は統夜にピンク色の便箋を渡した。

「？これは？」

「そ、それは、後で読んで下さい！それじゃあ！」

統夜にチョコと手紙を渡したポニーテールの女の子は逃げるようにその場から立ち去り、長髪の女の子がそれを追いかけていった。

「……？何だろう？」

統夜はまじまじとピンク色の便箋を眺めながら首を傾げていた。

『統夜、良かったじゃないか』

「?何がだよ!」

『まあ、それは休み時間にも読むといいぜ。あ、誰もいない場所だな』

「よくわからんが、イルバが言うならそうするよ」

統夜はチョコと手紙を鞆にしまい、教室へと向かった。

すると、教室の中は……。

「な、何だ?この甘ったるいオーラは……」

色恋に関しては鈍感な統夜もドン引きするくらい、教室が激甘な空気に包まれていた。

チョコの受け渡しが行われていたり、既に付き合っているカップルがこれ見よがしにいちやついてたりとしていたからである。

《統夜。バレンタインとはこういうもんだぜ!》

(よ、よくわからないけど、わかった……)

統夜はこの甘い空気を感じてバレンタインとはチョコがただでもらえるイベントではないということだけは理解した。

統夜はとりあえず自分の席に座るものの、落ち着ける空気ではなかった。

「……おはよ、月影君」

「ああ、おはよう立花さん」

統夜は隣の席である姫子に挨拶をした。

「何か凄い空気だよねえ。バレンタインだからかな?」

「そうかもな。何かいつもと空気が違うから何か落ち着かないけど」

「月影君もチョコを心待ちにしているという訳か」

「べつ、別にそんなんじゃない……」

「隠さなくてもいいんだよ、男の子ってそういうもんだろうし。まあ、私はそういうの興味ないけどね」

「どうやら姫子はバレンタインというイベントに興味はなく、誰かにあげるであろうチョコも用意はしていなかった。」

姫子とこのような会話をしていると、始業のチャイムが鳴ったので、どうにか甘ったるい空気は収まったようだった。

こうして授業は始まり、休み時間になると、統夜は男子トイレに向かうと、大専用の個室に入り、手紙を取り出した。

「……んーと、何々……」

統夜は便箋の封を開け、中身を読み始めた。

// 月影統夜先輩へ

いきなりこのようなお手紙書きませんでした。

あと、いきなりのチョコで困惑したかと思いますが、心を込めて一生懸命作りました。味わって食べてもらえると嬉しいですよ。

月影先輩。私、先輩にお話したいことがあります。

今日の放課後、校舎裏で待っていますので、必ず来てください。

1年1組、日代玲奈〃

手紙にはこのようなことを可愛らしい文字で書かれていた。

この、日代玲奈という女の子は、統夜に手紙を渡したポニーテールの女の子だということとは察することが出来た。

「なあ、イルバ、これって?」

『統夜、良かったな。こいつはどうやらラブレターのようだ』

「ラブレター?これが?」

『文面からしてそうだろう。統夜、断るならちゃんと断らないとな』

「わかってるよ」

統夜は手紙を制服のポケットにしまうと、そのまま個室を出て、そのまま教室へと

戻っていった。

そして教室に戻ると、クラスメイトの女の子から義理チョコとはつきり言われたが、チョコを受け取った。

イルバはその様子を見ながらニヤニヤしていた。

そして昼休みになり、統夜は購買でパンを購入して教室に戻ろうとすると、憂と純に呼び止められた。

「統夜先輩、いきなりすいませんね」

「別にいいけど、どうしたんだ、2人とも？」

「統夜先輩、これ」

純は躊躇することなく、チョコと思われる包を統夜に渡した。

「統夜先輩ならたくさんもらってると思うけど、これはあたしからです！……義理ですけど」

そう言って純は苦笑いをしていた。

「と、統夜さん。私も……」

憂が統夜に手渡したのは、純のより少しだけ大きい包だった。

「私、初めて手作りしてみたんです。統夜さんには色々お世話になってますから……。食べてもらえると嬉しいです」

「ああ、憂ちゃん、純ちゃん、ありがとな」

「はいー！」

純と憂は統夜に一礼すると、自分の教室に向かつていった。

統夜も教室に戻ると、購買で買ったパンを頬張っていた。

ちょうど完食した頃合いに和がやってくると、和も統夜に義理チョコを渡していた。

※※※

そして放課後……。

統夜は手紙の返事をするために校舎裏に向かっていた。

校舎裏に到着すると……。

『統夜。例のお嬢ちゃんはもう来てるみたいだぜ』

統夜にチョコと手紙を渡した少女……日代玲奈は既に校舎裏におり、統夜を待ってい

た。

「ごめん、待ったかな？」

「い、いえ！私も今来たところですから！」

（……その台詞、デートではベタな台詞だよな……）

統夜と玲奈のやり取りにイルバは心の中でツツコミを入れていた。

「それで、手紙を読んだよ。俺に話があるんだろ？」

「はっ、はい……」

こう答える玲奈の表情は強張っていた。

「あつ、あの……私……」

玲奈はどうにか話を切り出そうとするが、勇気が出ないのか、なかなか話し出すことが出来なかった。

統夜はそれを悟ったのか何を言う訳ではなく玲奈の言葉を待つていた。

しばらく俯いていた玲奈であったが、覚悟を決めたのか目をカツ！と見開いた。

「わ、私！入学してからずっと月影先輩を見ていました！私、月影先輩のことが好きなんです！わ、私と付き合ってください！」

それは、統夜自身初めてとなる異性からの告白であった。

（おお、ついに言ったか！このお嬢ちゃん、唯たちでも出来なかったことをやりやがった

！そこは評価出来るぜ！)

イルバは唯たちよりも先に玲奈が告白したことに驚き、この状況を楽しんでいた。統夜は初めての告白に戸惑うものの、どう返事をするべきかじっくり考えていた。

そして……。

「……………めん、君とは付き合えない」

統夜の返事に玲奈はハツとするが、それと同時にやっぱりかと言う気持ちもあった。

「俺さ、女の子から告白なんて初めてだったから嬉しかったよ。でもな、俺と関わったら君は必ず悲しませることになる。俺をそこまで想ってくれている人を悲しませたくないんだ」

統夜は真剣な眼差しで振った理由を語った。

統夜は人知れずホラーを狩る魔戒騎士である。今は楽しい高校生活を送っているが、自分はいつ命を落とすかわからない。

ホラーのことを何も知らない彼女に悲しい思いはさせたくない。

何よりも、魔戒騎士である自分に関わったことでホラーに襲われる可能性に統夜は恐怖していたのである。

「アハハ……。そう、ですよね……。私なんか、月影先輩とは釣り合わないですよね……」

玲奈は困ったような笑顔を統夜に向けながら体をプルプルと震わせていた。

玲奈は振られたショックで今にでも泣き出しそうだったのだが、どうにか強がっていたのである。

「……………ごめんな、だけど、嬉しかったっていうのは本当だから」

「はいっ！とところで先輩は軽音部の中の誰かが好き……………なんですよね？」

「へ？お、俺が？」

統夜はそんなことまったく意識していなかったのかポカンとしていた。

「私、先輩のこと見てましたし、軽音部のことも見てましたもん。わかりますよ」

ここう玲奈に言われた瞬間、統夜は胸の高鳴りを感じていた。

（俺が……………あいつらのこと……………好き？）

玲奈の言葉に統夜が狼狽えていることはイルバはすぐにわかった。

（ほう……………あのお嬢ちゃんがいいきつけを作ってくれたみたいだな。これからどうなることやら……………）

イルバは統夜たち軽音部の関係に変化が起こるのではないかと予想していた。

「ご、ごめんなさい！私、先輩を困らせちゃいましたかね？」

「い、いや！そんなことはないよ！」

統夜はハツとすると、慌てて玲奈の言葉を弁解した。

「そ、それじゃあ私は行きますね！月影先輩。これからも軽音部、頑張ってくださいね！」

玲奈はこう言つてペコリと一礼すると、逃げるようにその場から立ち去つた。

『……統夜。バレンタインがどんなものか。身をもつて理解したか？』

「ああ、驚いた……。だからこそこの日になると男も女もソワソワしてゐるって訳か」

『ま、そういうことだ』

「でもさ、義理チョコつていうシステムもあるんだろ？やっぱバレンタインつてチョコをただでもらえるつていう要素もあるんじゃないのか？」

統夜は未だにチョコがただでもらえるということから離れられなかった。

『おい、統夜！お前さんはいい加減その発想は忘れる！』

イルバはそんな統夜にツツコミを入れていた。

「……まあ、それは置いて、部室に行こうか」

『置いていて……。まあ、いいだろう』

これ以上の問答が面倒になったのか、イルバは統夜の提案に賛同し、統夜は音楽準備室に向かった。

そして統夜は音楽準備室の中に入るのだが……。

「あつ、統夜。やつと来たな！」

「やーくん、遅いよお！」

律が第一声を発して、唯はぷうつと頬を膨らませていた。

「わ、悪い悪い」

統夜は遅れたことを謝りながらも考え事をしていた。

(……俺、本当に唯たちが好きなのか？今までこんな気持ち感じなかったけど……)

統夜はこう考えながら頬を赤らめていた。

(いやいや！ダメだ！俺は魔戒騎士なんだ！そんな浮ついた考えは命取りだろ！)

統夜は頭をブンブンと振ると、そのような考えを払拭していた。

自分は魔戒騎士であるが故にこのようなことにうつつを抜かす訳にはいかない。

そんな気持ちが自分の隙となり、ホラーに命を奪われかねない。そんなことを考えていた。

「……？統夜先輩？」

「な、何でもない！」

統夜は慌てて学生鞆と魔法衣を長椅子に置いていた。

（統夜のやつ、動揺してるな。こんなことになるのは初めてだからな。まあ、これがいい傾向になればいいのだが……）

イルバは心の中でこのようなことを考えていた。

統夜は鞆からイルバ専用のスタンドを取り出すと、それをテーブルの上に置いた。

梓は統夜がイルバ専用のスタンドを取り出す瞬間、鞆の中にチョコと思われる包が入っていることを見逃さなかった。

「統夜先輩、鞆の中に入ってるのってチョコですか？」

「ああ、見えたのか。まあ、ほとんどは義理チョコらしいけど、そうだよ」

「ふーん……そうなんだあ……」

こう答えた唯は何故かドス黒いオーラを発していた。

それは律たちも同様であった。

『それだけじゃないぜ！統夜のやつな……』

「イルバ！余計なことは言うなよ！」

統夜はこう話を誤魔化し、自分の指にはめられたイルバを外すと、強引にスタンドにセツトした。

『痛っ！おいおい、統夜。お前なあ……』

統夜の慌てっぷりにイルバはジト目になっていた。

「統夜、私たちに何か隠してないか？」

「そこらへん、じっくり聞きたいわねえ」

律と紬がドス黒いオーラを発しながらジリジリと統夜に迫っていた。

「……わ、わかった！話す！話すから！」

ドス黒いオーラを放つ唯たちがあまりに怖かったのか、統夜はあつさりと告白されたことを話したのであった。

「……ふーん、統夜がねえ……」

「やーくんって鈍感だからそういう話も聞き流しそうなのになねえ……」

「あのなあ……俺はそこまで鈍感じゃないぞ」

統夜は弁解するためにこう言ったのだが……。

「「「はあ?!」」」

それに5人が一斉に抗議していた。

「……すいません」

統夜は素直に謝ってしゅんとしていた。

「それにしても統夜、今年は随分とチョコをもらったんだな」

律は統夜に話を聞いた後に統夜の鞆を物色してこう言っていた。

「まあ、和に純ちゃん。そして憂ちゃんの分もあるからな」

「あつ、そういうえば昼休みに2人揃って出てったから、そうなのかなとは思ってました」
梓は憂と純が昼休みに出るところを目撃していたので、統夜にチヨコを渡したのだからと予想していた。

そう思えたのは、休み時間にチヨコの話をしていたからである。

「いくら義理チヨコとはいえ和が統夜にチヨコを渡すとは思わなかったな」

「和ちゃん、真面目で義理堅いところがああるからねえ」

幼なじみである唯は和のことをよく理解していた。

「さてと……なあ、統夜」

「?何だ?」

何かをしようと言を切り出した律に統夜は首を傾げていた。

唯たちは一斉に机の下に隠していたチヨコを取り出した。

「やーくん!これは私たちからだよ!」

「こ、これ……俺のために……?」

「当たり前ですよ!私たち、統夜先輩のために一生懸命作っただからですから!」

梓がこう言うのと、唯たちの表情が優しくなっていた。

「みんな……ありがとな!俺、凄く嬉しいよ!」

統夜は大切な仲間である唯たちからチヨコをもらい、心の底から喜んでいた。

「……………統夜君♪」

統夜の嬉しそうな顔を見た紬は満面の笑みを浮かべていた。

それは、唯たちも同様だった。

「……………ほら、統夜。さっそく食べてくれよ！」

「ああ、そうだな。いただくよ」

統夜は唯たちお手製のチョコたちを食べることにしたのである。

そこまでは良かったのだが……………。

「はい、あーん……………」

唯が自分の作ったチョコを統夜に食べさせようとしていた。

「ちよ、ちよつと……………唯？」

唯の突然の行動に統夜は困惑していた。

「む……………。ダメ？」

唯は少しだけ頬を赤らめ、頬を膨らませ、こう言っていた。

「うぐつ……………！」

今まで見たことのない唯の表情に統夜は動揺していた。

しかし、統夜は覚悟を決めたよう……………。

「ほ、ほら……………」

統夜は口を開き、唯は統夜の口にチョコを放り込んだ。

「んぐんぐ……。お、美味しいな」

「本当!？」

統夜の美味しいという言葉聞いた唯の表情はぱあつと明るくなった。

「あー！唯ばかりずりいぞ！あたしもあたしも！」

続いて律があーん攻撃を仕掛けてきた。

統夜は何度もやるのは恥ずかしいと思っていたが……。

(ええい！ままよ！)

統夜は勢いに任せて口を開き、先ほどのようにチョコが放り込まれた。

「……………うん、これもなかなか」

「だろお？あたしの自信作だからな！」

律も統夜に褒められて満更でもなさそうだった。

「わ、私も……………」

今度は濡が統夜にあーん攻撃を仕掛けてきた。

3度目となると、統夜は無心で口を開き、濡のチョコを味わった。

「……………これも美味しいな」

「本当!？」

濡も統夜に褒められて嬉しかったのか、ぱあつと表情が明るくなった。

「それじゃあ私ね♪」

その次は紬が同様にあーん攻撃を仕掛けてきた。

統夜は口を開けて紬のチョコを堪能していた。

「おーこれも美味しい！」

「本当!?!初めて手作りしたから嬉しいわあ♪」

紬は統夜に褒められ、頬を赤らめながら微笑んでいた。

「そ、それじゃあ最後は私ですわ……」

最後になった梓も先輩たち同様にあーん攻撃を仕掛けてきた。

統夜は口を開き、梓のチョコを堪能していた。

「うん、これも美味しい！」

「本当ですか?良かったです！」

梓は統夜に美味しいと言ってもらえてホッとしていた。

こうして5人全員のあーん攻撃を受けた統夜は5人のチョコをゆつくりと堪能していた。

唯たちも自分で作ったチョコや他のメンバーが作ったチョコを食べ始め、チョコの食べ比べが始まった。

(……統夜のやつ、満更でもなさそうじゃないか。ここから統夜の恋愛が少しでも進むといいんだがな……)

イルバはみんな楽しんでチョコを食べる統夜を見て、統夜の恋愛が少しでも発展することを祈っていた。

この日は練習を行うことはなく、のんびりとした時間を過ごしていた。

この時間は、魔戒騎士である統夜にとってかけがえのないのんびりとした時間となったのであった。

……放課後ティータイム結成編・終

次回予告

『統夜もいよいよ3年生か。魔戒騎士としての生活もどうなることやら。次回、「高三」。新しい季節が幕を開けるぜ!』

魔導人機襲来編

第41話 「高三」

寒かった冬が終わりを告げ、春がやってきた。

統夜はその間も学校に行きながら魔戒騎士としての務めを果たしていた。

春休みも終わりを告げ、この日は新学期の始業式であった。

始業式だろうと統夜の務めが変わることはなく、統夜は朝の日課であるエレメントの浄化を行っていた。

『統夜。お前さんも高3になるんだな』

「ああ、何かあつという間だったけどな」

統夜はイレスの薦めでこの桜ヶ丘高校に入ったのだが、気が付けば2年が経ち、今日から高校3年生になるのである。

「だけど、俺のやるべき事は変わらない。魔戒騎士としてホラーを狩って人を守るってことはな」

『ああ、そうだな』

「さて、クラス分けも気になるし、そろそろ行こうか」

この日のノルマを終わらせた統夜は、そのまま学校へと向かった。学校へと続く道を歩いていると、木々は満開の桜に覆われており、散りゆく花びらがとても風情のあるものだった。

統夜は春を感じながら学校へ向かっていた。

学校に到着した統夜はまずクラス分けを見に行った。

統夜はすでに出来ている人混みをくぐり抜け、クラス分けの一覧を見ていた。

3年2組の欄を見てみると、自分の名前を発見したのだが……。

「……………、これは……………」

統夜は偶然とある事実を発見し、驚愕していた。

《ほお、これはずいぶんと面白いことになっているじゃないか》

イルバもこの事実には驚きながら、ニヤリと笑みを浮かべていた。

統夜は自分のクラスを確認したところで、人混みを抜けるのだが……。

「……………あれ？統夜？」

澁が偶然統夜を発見し、統夜に声をかけた。

律、紬、唯も一緒のようだった。

「あ、みんな。おはよう」

「統夜、遅かったな。さっきまでみんなで朝練してたんだぞ」

朝練が始まったのは、唯がたまたま早く登校し、練習している音を律たちが聞いて、音楽準備室を訪れたところから始まったのである。

「悪い悪い。いつもの日課をこなしてから登校したからさ」

統夜は魔戒騎士という単語を出すわけにはいかなかったので、いつもの日課という言葉で誤魔化していた。

しかし、統夜の事情を知っている唯たちはその日課が何なのかすぐに理解していた。

「統夜君、今日もお疲れ様です♪」

「ああ、ありがとな」

統夜が優しい表情で微笑むと、それを見た紬は頬を赤らめていた。

「ねえねえ、さっきあそこから出てきたってことはクラス分けを見てきたの?」

「ああ、みんなの分もちゃんと確認してきたぞ」

「えっ?! そうなの!?!」

唯たちは統夜が抜け目なく唯たちのクラスも確認していたことに驚いていた。

「それで、私たちのクラスはどうなったの?」

「もしかして……滞ちゆわんだけ違うクラスだったりするのかあ?」

「そ、それはないだろ!」

律がニヤニヤしながら滞をからかうと、滞はムキになって反論していた。

「残念ながらそうじゃないんだな。……俺たち、みんな同じクラスだったぞ」
「……へ？今何と？」

統夜からの思いがけない言葉に唯たちはポカーンとしていた。

「だから、俺たちは一緒のクラスなんだって。俺もびっくりしてるけどな」

「え!? 私たち、本当に一緒のクラスなの!?!」

あまりの嬉しさに紬が統夜に詰め寄っていた。

「だ、だから最初からそう言ってるだろ……」

統夜は紬の勢いに思わずたじろいでしまった。

それはともかくとして、みんなが同じクラスだとわかり、唯たちは笑みを浮かべていた。

「ねえねえ! さっそく教室に行こうよ!」

「そうだな、行こうぜ。あ、ちなみに俺たちのクラスは3年2組な」

こうして統夜たちは自分たちのクラスである3年2組の教室へと向かった。

教室の中に入ると、すでにほとんどの生徒が登校しており、あちこちから話し声がかえってきた。

統夜たちは一度自分たちの席に座るために散らばり、統夜も自分の席に腰をおろした。

すると……。

「お、月影君、また同じクラスだね！」

統夜に声をかけてきたのは、2年生の時に同じクラスで、隣の席だった立花姫子だった。

「あ、立花さん。確かにまた同じクラスだな」

「今回は、軽音部のみんなも同じクラスなんだね」

「ああ、この1年は騒がしくなりそうだけどな」

「アハハ、これからもよろしくね！」

「ああ」

統夜と姫子はこのような挨拶をかわしていた。

姫子と話をしてしばらくすると……。

「あ、月影君だ」

統夜に声をかけてきたのは、2年生の時に同じクラスだった若王子いちごだった。

「おう、若王子さん。また一緒のクラスになったな」

「……うん」

「騒がしくなりそうだけどさ、この1年もよろしくな」

「……よろしく」

統夜と挨拶をしたいちごはそのまま自分の席に戻っていった。

それから統夜はすでに集まって話をしてる唯たちのもとへ行こうとするが、2年生の時に同じクラスだった子は他にもいて、その子たちが統夜に声をかけてきた。

それで統夜は挨拶をしていたのだが……。

《……おい、統夜。唯たちが恨めしそうにこつちを見てるぜ》

(ああ、嫌な気配を何となく感じたよ)

統夜と自分たち以外の女の子が話をしているのが面白くなかったのか、嫉妬の目で統夜たちを見ていた。

ちなみに和も同じクラスなのだが、その様子を見て苦笑いをしていた。

統夜も唯たちの嫉妬の目に苦笑いをしながらクラスメイトたちと交流をしていた。

《それにしても、まるで誰かに仕組まれたみたいに全員揃ったな》

(ああ、偶然だと思いたいけど、流石に出来過ぎだよな)

クラスメイトたちとの会話が終わると、統夜はイルバとテレパシーでこのクラス分けについて話をしていった。

《まったくくだ。こんなことが出来るやつなど……》

いない。イルバがこう言い切る前に教室のドアが開いて、1人の女性教師が入ってきた。

すると……。

《《いたああああ!!!》》

統夜とイルバは教室に入ってきた女性教師を見て驚愕していた。

それと同時にこの人ならこんなクラス分けもやれるだろうと判断した。

それは唯たちも同じことを考えており、統夜とイルバのように驚いていた。

統夜たちが驚いている間に他のクラスメイトたちは席につき、SHRが始まった。

始まってすぐ、先生の紹介が始まったのだが、その先生とは……。

「山中さわ子です。教師になって初めて担任を受け持つので至らぬ点はあるとは思いますが、よろしくお願いしますね」

さわ子は統夜たち軽音部の顧問をしている。

今は完全におしとやかで優しい教師を演じているが、実際の素顔はそれとは間逆な傍若無人なところがある。

衣装作りが趣味で、統夜たちは度々さわ子お手製の衣装を着せられたりと色々振り回されているのである。

統夜たちはさわ子の本性を知っているが、他の生徒はさわ子がそんな性格とはつゆ知らず、おしとやかで優しい先生という印象を持っていた。

《あ、あの女……。完全にキャラを作っていやがる……》

(ああ、みんな先生の上辺に完全に騙されてるよな……)

統夜とイルバはさわ子のいつもとは違うキャラに苦笑いをしていた。

それを知っている律はクラスメイトにそのことを耳打ちしようとしていたのだが

……。

「田井中さん！」

「は、はい！」

律はさわ子に呼ばれると、立ち上がった。

「私語は謹んでくださいね♪」

言い方は優しいが、そのオーラから、「余計なことを言ったら殺す」という言葉が伝わってきた。

「は、はい……。すびばせん……」

律は涙目になりながら自分の席に座った。

《律のやつ、明らかに口封じされたな》

(まったく……。あの人は1年間あのキャラで通すつもりか?)

《やれやれ……。どれくらいもつかな?》

統夜とイルバはテレパシーで会話をしていたのだが……。

「月影君！」

「は、はい！」

「今はHRだから……。その指輪は外してくださいね♪」

律の時同様、言い方は優しいが、そのオーラから、「余計なことを言ったら殺す」という言葉と「今すぐそいつを黙らせろ」という言葉が伝わってきた。

さわ子は何故だか統夜とイルバがテレパシーか何かで話をしていると感じ取ったのである。

「……す、すいやせーん……」

統夜はすぐさまイルバを外すと、制服のポケットの中に入れた。

（イルバ、少しの間、勘弁な）

《やれやれ……仕方ないな……》

イルバは渋々ポケットの中で大人しくしていることにした。

そしてSHRは終わり、この後は始業式が始まるのだが……。

「せんせーい！」

律が教室を出て階段を降りようとするさわ子を引き止めた。

統夜、唯、漕、紬、和も一緒だった。

「聞きたいことがあるんですけどー」

律がこう言うと統夜たちはさわ子に駆け寄った。

「クラス分けだけど……さわちゃん何かしたの？」

律はいきなり核心を突こうとしていた。

「そうよ、みんな同じクラスにしてあげたの」

『おいおい、いいのかよ。それは職権乱用じゃないのか？』

「何よおく、嬉しくないの？」

イルバに指摘され、さわ子はぶうつと頬を膨らませていた。

「い、いえ。嬉しいは嬉しいんですけど……」

澤は嬉しいながらも複雑そうにしていた。

自分たちが仲が良かったため、わざわざこのようなクラスにしてくれたと思うと申し訳ないからである。

「私も名前覚えなきゃいけない子が減るし♪」

さわ子がこのようなクラス分けにしたのは、このような理由からだった。

「アハハ……そこですか……」

『おいおい、お前さんのその理由は不純すぎるぞ……』

さわ子が語った理由に統夜とイルバは呆れていた。

「私は凄く嬉しいよ！ありがとう、さわちゃん♪」

唯はさわ子のことを「さわちゃん先生」と呼んでいたが、いつの間にかさわ子のこと

を「さわちゃん」と呼ぶようになっていた。

「ウフフ♪どういたしまして♪」

「唯、お前は少し落ち着けよ」

興奮気味な唯を律がなだめようとしていた。

「だって、高校最後の年にみんな同じクラスなんだよ!」

唯は軽音部のみんなや和と同じクラスになったことが嬉しいようだった。

「一緒なのも嬉しいけど、進路とかも考えないと……」

滯が進路の話をする、統夜以外の全員が暗い表情になっていた。

統夜は学校を卒業した後も魔戒騎士として生活していくが、他のみんなはそれぞれの

進路を考えなきゃいけないからである。

(そっか……。みんな、これから進路のことを考えなきゃいけないんだな)

《まあ、お前は魔戒騎士だから進路は決まってるからな》

(そうだよな……)

ここで、統夜は自分と唯たちとは住んでいる世界が違うことを実感し、暗い表情になっ

ていた。
《おいおい、お前まで暗くなってどうする!》

イルバは暗い表情になった統夜をなだめていた。

「でもね！修学旅行も一緒だし、学園祭のクラス発表も一緒だし、テスト勉強見てもらえるし、宿題写させてもらえるし♪」

唯が暗い空気を吹き飛ばすようなことを言うのだが、後半言っていることは少しずれたものだった。

『おいおい、唯。特に最後のはおかしいんじゃないのか？』

イルバもすかさずツツコミを入れていた。

「ワックワクだね、3年生♪」

唯はイルバのツツコミをスルーしていた。

「ほら、始業式始まるわよ。早く講堂に行きなさい」

『はーい！』

さわ子に講堂に行くよう促され、統夜たちは一斉に返事をする、そのまま講堂へと向かっていった。

※※※

始業式も終わり、放課後となった。

統夜はこの日も部活に参加し、音楽準備室はすでに全員集合し、お茶の準備も整っていた。

「……あたしき、春休み中に何度も部室に来たくなつたよ！」

「私もです！」

春休み中は毎日部活があつた訳ではなく、統夜たちがこうして部室に集まつたのは久しぶりであつた。

「ようし！新学期だからやることは？」

「あつ！新入ぶいん……！」

「ムギのケーキをたーべる！」

律がこう答えると、梓はぶうつと頬を膨らませていた。

「アハハ……嘘うそ、お約束お約束♪」

「もお……真面目にやつてくさいよ！」

「そうだよ、りっちゃん。新入部員が入らないと来年はあずにゃん一人になつちやうんだよ」

唯は珍しく真面目なことを言っていたのだが、その割にはのほほんとした態度だつ

た。

『おいおい、お前さんにしてはもつともな意見だが、そうだらけてたら説得力はないぜ？』

「アハハ……確かに……」

イルバが唯にツツコミを入れ、統夜は賛同しながら苦笑いをしていた。

「確かに……唯の言うことはもつともだよな」

「だけどさ、このままいけば確実に来年部長になれるぞ」

「……」

律の言葉を聞いた梓は何故かぼうつとしていた。

「……はっ！そんなのはどうでもいいんです！」

（考えた……）

（ちよつと考えた……）

（梓も案外満更ではなさそうだな）

自分が部長だということとを梓がちよつと考えたと律、漕、統夜は予想していた。

「そ、それよりも早く部員の勧誘に行きましよう！」

（誤魔化した）

（焦って誤魔化した）

《やれやれ……。素直になればいいものを……》

(まあまあ、そう言つてやるなつて、イルバ)

紬、唯、イルバは梓が話を誤魔化してることがわかつており、統夜はそんなイルバのツッコミをなだめていた。

「あ、そうだ！私、ピラ作つて来たんだよねえ！」

「「「嘘!」」」

唯のまさかの発言に統夜たちは驚愕していた。

唯が部員を集めるための行動をしているとは思つていなかったからである。

「うちの憂の勧めでしてねえ……。エへへ……」

『やれやれ……。ほとんど憂が作ったんだろ？まあ、そこは別にどうでもいいが』

「そうですね、とりあえずこのピラを配りに行きましようよ！」

こうして、ピラを配りに行く流れになったのだが、統夜は何か胸騒ぎを覚えていた。

(まさかとは思うけど……。去年みたいにヘンテコな着ぐるみを着たりはしないよな？
そうなると思ふ……。ここは退散しようか……)

統夜たちは1年前、新入部員を勧誘する時に何故か動物の着ぐるみを着て勧誘を行つていたのだが、統夜はそれを嫌々行つていた。

そのため、今年も同じようにやるのが嫌なので、ピラ配りは任せてどうか退散しよ

うとしていた。

しかし……。

「統夜……どこに行くんだ？」

「い、いや……。ちよつとトイレに……」

統夜はこう言つて話を誤魔化そうとしていた。

トイレと言えば誤魔化せると思つたからである。

「統夜君……。トイレに行くフリをして逃げたりはしないわよねえ？」

何故か統夜の狙いを見透かしていた紬がこう統夜を追求していた。

「うぐつーあ、アハハ……。ば、馬鹿だなあ。そんなことある訳ないじゃないか……」

統夜はこう弁解するが、統夜の顔は冷や汗でびっしょりだった。

《おいおい……。それじゃその通りですと言つてるもんじゃないか》

イルバは統夜のバレバレな弁解に呆れていた。

それは紬もわかつていたようで……。

「じゅ……」

紬はジト目で統夜を睨みつけていた。

統夜を睨む紬からはドス黒いオーラが放たれていた。

それを恐れた統夜は……。

「……申し訳ございません……」

あつさりと逃げようとしたことを白状した。

「だ、だってよ！今年もまたあの着ぐるみを使うつもりだろ？俺はあれは嫌なんだよ！」
統夜は正直に逃げようとした理由を明かしていた。

「着ぐるみつて、もしかして……」

何かを思い出した梓は苦笑いをしていた。

梓は軽音部に入る前、着ぐるみを着て勧誘する統夜たちを見てドン引きしたという過去があったからである。

「だって……普通にビラ配ってもインパクトないんだもん！」

『いやいや、そこは普通でいいんじゃないか？』

「そーだそーだ！」

イルバのツツコミに統夜は賛同していた。

「うーん……確かにそうかもな……」

イルバのツツコミに滞まで賛同しよいとしていた。

「おいおい、この勧誘はあたしら軽音部だけのアイデンティティだろ？だったらそこで勝負しないと！」

「アイデンティティ？」

律の言葉に唯は首を傾げるなか、律がどこからか着ぐるみを取り出し、ビラ配りの準備を始めた。

統夜はこの時点で、拒否権はないと判断し、観念していた。

「あ、統夜君。あなたには逃げようとした罰で、さわ子先生お手製の着ぐるみを着てもらおうね♪」

唯たちが着ている着ぐるみはほとんどが借り物なのだが、1つだけはさわ子手作りの着ぐるみだった。

紬は統夜にその衣装を着せようとしていた。

その衣装とは……？

「……屈辱だ……！」

統夜が着ているさわ子お手製の着ぐるみとは、何故か素体ホラーを着ぐるみつぱく可愛らしくデフォルメしたものだだった。

実際の素体ホラーとは見た目も全然違うので、怖いというより逆に可愛いという印象

の見た目であった。

しかし……。

『……魔戒騎士がホラーの着ぐるみを着るとは、これ以上の皮肉はないよな』

「……言うなよ、イルバ。それ、1番気にしてるんだから」

統夜は魔戒騎士でありながら素体ホラーの着ぐるみを着るといふ知っている人が見たらあまりに皮肉たつぷりな光景に、がつくりと肩を落としていた。

唯たちの着ぐるみは少し怖いのか不評だったのだが、統夜の着た素体ホラーの着ぐるみは意外にも可愛いと評価され、ピラを受け取ってくれる人がそこそこいたのである。

こうして統夜たちのピラ配りは終了したのだが……。

「……誰も来ないね……」

「統夜の着た着ぐるみは意外と好評だったけどな」

律は統夜の着た着ぐるみがここまでウケるとは思っていなかったたので、驚いていた。

「そうね……。ここまでこの着ぐるみが好評とは思わなかったわ」

統夜にこの着ぐるみを着せた袖もまさかこのような結果になるとは思っていなかった。

「まあ、魔戒騎士の俺から言わせれば屈辱でしかなかったけどな」

統夜はこんな着ぐるみを着せられたことを根に持っているのか、少しだけ不機嫌そうな表情をしていた。

「だけど、この着ぐるみ、可愛いよね♪」

「ああ、本当は怖いホラーをここまで可愛くデフォルメ出来るなんて、さわちゃん凄いな！」

「ああ、これならホラーを知らない人が見てもこれがホラーだってわからないよな」

「はい。自作の怪獣っぽいデザインですもんね！」

唯、律、滯、梓もこの素体ホラーの着ぐるみは高評価であり、パツと見も素体ホラーに見えないところも評価していた。

「それにしてもここまで部員が集まらないと来年は廃部だよなあ」

律は部員が集まらないことを悲観してこのようなことを言った。

すると、滯は律の言葉を聞いて何かを考え始めていた。

そして……。

「ひっ！うわああああ!!梓、梓あ！」

滯は何故か涙目になりながらその場から逃走した。

「廃部なんて駄目っす！」

「自分もそう思いまっす！」

唯と紬は何故か「○○っす」とおかし口調になっていた。

「部長！」

「ここで唯と紬は部長である律を頼っていた。

「……そうだな……。部員が増えれば部費も増えるし……」

「ブヒブヒ」

唯は何故か豚の鳴き真似をしていた。

『おいおい、何でそこで豚の鳴き真似なんだよ……』

イルバが豚の鳴き真似をしていた唯に呆れていた。

そんな中……。

「よし、部員獲得大作戦を実行だぜえ！」

「ブヒイ!!」

こうして部員を得るために律たちは動き始めようとしていたのだが……。

『……統夜、タイミングが良いのか悪いのか。番犬所から呼び出しだぜ』

絶妙なタイミングで番犬所から呼び出しが来てしまった。

「……おっと、だったら行かないとな」

統夜は面倒なことに巻き込まれることはないかと安堵しながら、帰り支度を始めた。

「統夜先輩、お仕事ですか？」

「ああ。恐らくは本物のホラーを狩ることになりそうだ」

着ぐるみのことを根に持っていた統夜は、少しでも言葉に皮肉を込めていた。

しかし、それを梓たちは全く気にする素振りはなかった。

「統夜先輩……。気を付けてくださいね！」

「ああ、俺は必ず戻る。だから、信じてくれ」

帰り支度を終えた統夜はこう言って梓たちを安心させると、そのまま音楽準備室を後にして、番犬所へと直行した。

「おつ、統夜。来ましたね」

「はい、イレス様」

統夜はイレスに挨拶をすると、狼の像の口の部分に魔戒剣を突き刺し、魔戒剣の浄化を行った。

魔戒剣の浄化を終えると、1つだけ出てきたホラーを封印した短剣をイレスの付き人の秘書官に渡し、魔戒剣を鞘に納めた。

「統夜、そういえば今日から3年生になったそうですね！」

「はい、そうです。唯たち軽音部のみんなとも同じクラスになりました」

「そうですか、それは良かったですね！」

『まあ、その分騒がしいクラスにはなりそうだがな』

「クスツ……そうかもしれないですね」

イレスは唯たちと面識があるため、統夜のクラスが騒がしいクラスになるだろうと想像し、笑みを浮かべていた。

「あつ、そうそう。統夜、指令です」

イレスがこう宣言すると、イレスの付き人の秘書官が統夜に赤の指令書を渡してきた。

統夜はその指令書を受け取ると、魔法衣の懐から魔導ライターを取り出し、指令書を魔導火で燃やした。

すると、魔戒語で書かれた文章が浮かび上がってきた。

「……狂気の刃。その美しさに魅入られたホラーあり。ただちに殲滅せよ」

統夜が指令の内容を音読すると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

『……こいつは、ホラー「ヴェイケンナ」。実力はたいしたことはないが、自分を強いと勘違いしてるたちの悪い奴だぜ』

イルバは指令の内容からホラーの正体を推察していた。

『こいつは単純だからな。こいつが暴れまわった時にすぐに尻尾をつかめるだろ』

イルバはヴェイケンナをすぐ発見出来ると予想していた。

「ですが、被害は最小限に抑えなければいけません。統夜、ただちにホラーを見つけ出し、殲滅するのです」

「わかりました。ホラーを見つけ次第に討滅します」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にして、イルバのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を開始した。

※※※

外が暗くなり、夜になった頃、桜ヶ丘某所にある公園で、数人のチンピラグループが1人の男にボコボコにされていた。

数人のチンピラは男に全く歯が立たず、その場で気を失っていた。

男は何かを探しているようであり、男は気を失っているチンピラたちから何かを物色していた。

そして……。

「グへへ……。やっぱ持つてるじゃねえか！」

男は一人のチンピラが隠し持っていたナイフを手に取ると、それをじつと眺めて悦に浸っていた。

「へへ……。やっぱりこの輝き……。刃物はやっぱり最高だぜー！これで俺はまた強くなったって訳だ！」

男は刃物が好きだという変わった男であり、端から見ても怪しいし危険だとわかる男だった。

目的の物を手に入れて撤収しようとしたその時だった。

「やれやれ……。ちよつと待てよ」

「ああん!？」

何者かに声をかけられ、男が振り向くと、赤いコートの少年……。統夜が魔導ライターを手にし、魔導火を放っていた。

すると、男の瞳に不気味な文字のようなものが浮かび上がってきた。

これは、この男がホラーであるという証である。

「……いて、てめえ、魔戒騎士か!？」

「武器集めとは時代錯誤も甚だしいな。武蔵坊弁慶にでもなったつもりか?」

「う、うるせえよ!」

「力尽くで人から武器を奪うなんて……。と、言いたいところだけど、こんな物騒な物を持つてる奴らだから、いいお灸になったかな?」

『そうだな、こいつらは気絶してるだけで生きてるしな』

統夜とイルバはチンピラたちが生きていることに安堵しながらも、ナイフを持つてるような悪い連中だったので、天罰は受けたかなと考えていた。

「……ま、お前がホラーであるならば斬るだけだ」

「てめえ! やれるもんならやってみろ!」

男の目が真っ白になると、男は人間の姿からこの世のものとは思えない怪物へと姿を変えた。

『統夜! こいつがヴェイケンナだ!』

「なるほど、狂気の刃ねえ……。いろいろ武器をぶらさげちゃって……」

ヴェイケンナの右手には巨大な斧を、左手には大剣を手にしており、その他にも様々な武器を装備していた。

「どいつもこいつも俺を馬鹿にしやがって……。もう、俺はあの頃とは違う! ヤクを

やって粹がつてた俺とは違うぜ！」

「なるほど、それがお前の陰我つて訳か」

統夜は目の前の男が何故ホラーになったのかを理解した。

(……………こだと戦いづらいな……。相手と距離を取るか)

統夜は倒れているチンピラを巻き込む訳にはいかなかったため、相手と距離を取るかのよう後方に下がっていった。

「てめえ！逃げるんじゃねえ！」

ヴェイケンナは統夜が逃げようとしていると思ひ込み、統夜を追いかけていた。

「ようし、いい子だ……………」

統夜は安全そうな場所まで移動しながらヴェイケンナを誘導していた。

「へへ……………！魔戒騎士、もう逃がさねえぞ！」

ヴェイケンナは統夜を追い詰めたつもりでこう言うが、統夜はニヤリと笑みを浮かべていた。

「……………引つかかったな。やつぱりお前の頭は単純みたいだな」

「ああん!?何がおかしいんだ！」

「あそこにいたら倒れてる人を巻き込むんでな。ここなら心置き無くお前を斬ることが出来る！」

統夜は魔戒剣を取り出すと、それを抜いた。

ヴェイケンナはその様子を凝視していた。

「そ、その青い柄の剣……てめえ、まさか噂のソロとか言う奴か！」

「へえ……だいぶ俺も有名人になったもんだな」

統夜は魔戒剣を構えると、ふふつと笑みを浮かべていた。

「そ、ソロだろうがなんだろうが関係ねえ！てめえをぶつ殺してその武器も奪ってやる！」

「……お前に出来るかな？」

統夜は一気に決着をつけるために魔戒剣を高く突き上げ、円を描こうとするが……。

「させるかよお!!」

その隙を突いたヴェイケンナは大剣を統夜に突き刺そうとするが、統夜は咄嗟にかわし、鎧の召還を妨害されてしまった。

その時、大剣の切っ先が統夜の頬に触れ、統夜の頬に軽い切り傷が出来ていた。

「鎧の召還はさせねえぜ！てめえが何度やろうとしても止めてやらあ！そいつで円を描ききらないとてめえは鎧を召還出来ねえってことは知ってるんだぜ！」

ヴェイケンナの言う通り、魔戒騎士の鎧は魔戒剣を高く突き上げ、円を描くことで召還出来る。

逆に言えば、円を描ききらないよう妨害すれば、魔戒騎士は鎧の召還は出来ないの
ある。

『……………つたく、脳筋のくせに物知りな奴だぜ……………』

「全くだ。それに、鎧の召還中に攻撃を仕掛けてくるとは、外連味のわからん奴だな
……………」

統夜とイルバは鎧の召還を妨害されて焦ってはいなかったが、相手が鎧の召還方法を
知っていたことに少しだけ驚いていた。

統夜に至っては、ヒーローで言うならば変身を妨害する相手に不満を抱いていた。

「鎧さえ召還させなきゃやめてめえなんて怖かねえー！ただの人間のガキだろうがよー！」

ヴェイケンナは統夜に鎧を召還させさせなければ必ず勝ると踏んでいた。

統夜はその言葉にピクンと反応し、少しだけ不機嫌そうな表現になっていた。

「……………言ってくれるじゃねえか……………」

不機嫌ではあるが、統夜は怒りで心を乱されている様子はなく、至って冷静だった。
そして……………。

「お前がその気なら、鎧を使わないでお前を倒してやんよー！」

統夜がまさかの発言をすると、その場の空気は凍りついていた。

「なっ……………!？」

『おいおい……』

統夜のまさかのナメプ宣言にヴェイケンナは絶句し、イルバは呆れていた。

鎧の召還の妨害など簡単に見切れることは出来たのだが、統夜は少しだけムキになり、鎧なしで相手を叩きのめすつもりでいた。

自分が馬鹿にされるとわかった瞬間、ヴェイケンナの中で何が切れてしまった。

「なめやがってえ！死にやがれ!!」

統夜の余裕な態度に激昂したヴェイケンナは力任せに巨大な斧を振るった。

しかし、統夜は何故か斧をかわす素振りを見せなかった。

統夜はふふつと笑みを浮かべたその時だった。

統夜はヴェイケンナよりも早く魔戒剣を一閃した。

その一撃で、ヴェイケンナが振るっていた巨大な斧が縦に真っ二つに斬り裂かれた。

「……いな、何……!?!」

「武器が良くても振るう奴が三下じゃ何も斬れないぜ」

統夜は斧を真っ二つに斬り裂くと、ヴェイケンナを苛立たせるためにドヤ顔をしていった。

「お、斧を真っ二つにしやがったぞ！しかも縦に真っ二つにしやがった！この野郎が!!」
ヴェイケンナは自慢の武器をあつさりとなり裂かれてしまい、動揺していた。

「な、何の！こんな偶然だ！こいつでぶつ殺してやらあー！」

ヴェイケンナはもう片方の手に持っていた大剣を振るうが、それは統夜に軽々とかわされてしまった。

「おいおい、そんだけ立派なものをぶら下げてるのに、武器の使い方がなってるぞ！」
統夜は魔戒剣を2度、3度と振るうと、今度は大剣をバラバラに斬り裂いた。

今の一撃はヴェイケンナにダメージを与えることは出来たのだが、相手の戦意を削ぐためにあえて武器を壊していたのである。

「どうした？まさかもうネタ切れじゃないよな？」

「く……クソツタレがあ!!」

ヴェイケンナは統夜を叩きのめすために、大量の剣を召還した。

「ひい、ふう、みい……。へえ、よくこんなに集めたもんだな」

「お、俺様は強い！強いんだよお！」

ヴェイケンナは大量の剣をまるでミサイルのように統夜めがけて放った。

「……」

統夜は魔戒剣と魔戒剣の鞘を用いて全ての剣を弾き飛ばした。

「馬鹿が！そいつは困だぜ！死ねえ！」

ヴェイケンナは隠し持っていた剣を統夜の心臓めがけて放った。

常人であれば対応できずに心臓を貫かれるだろうが、統夜の場合は……。

「……馬鹿はお前だ！」

統夜は奏狼の鎧を右腕のみを部分装着すると、ヴェイケンナが放った剣を弾き飛ばした。

「ば、馬鹿な！その右腕、鎧だど!? 鎧はそいつで円を描かなきゃ召還出来ないんじゃないやねえのか!？」

「こういう芸当も出来るのさ。ま、お前は知らなかっただろうがな」

統夜が鎧を部分装着した時、魔戒剣は皇輝剣に変化していた。

統夜はそのままヴェイケンナ目掛けて駆け出すと、皇輝剣を一閃し、ヴェイケンナを真つ二つにした。

「ホラーを封印するためには一応鎧の召還が必要なんでね。一部だけ召還させてもらっただぜ。悪く思うなよ」

統夜は全身に鎧を纏うことも出来たのだが、鎧なしで戦うと決めた手前、あえて部分装着という選択肢を選んだのであった。

「つ、強すぎる……こんな……ガキが……」

統夜の圧倒的な力に絶望しながらヴェイケンナは消滅した。

「俺には守りたい人がいるんだ。これくらいは当然だぜ」

統夜は消えゆくヴェイケンナにこう宣言し、ヴェイケンナが消えゆく様を見ていた。

この時に右腕の部分装着を解除し、皇輝剣が元の魔戒剣に戻ると、統夜は魔戒剣を青い鞘に納めた。

『……おい、統夜。いくらなんでも相手をなめ過ぎだったんじゃないのか？ さつさと鎧を召還してればさつさと倒せただろうに』

「そうかもな。だけどこれは力試しさ。鎧なしでどこまで戦えるかってことをな。これからこんな場面も出てくるかもしれないしな」

統夜はこれからの戦いでヴェイケンナのように鎧の召還を妨害するような外連味のわからないホラーが出てくるかもしれないと予想していた。

その時、対処出来るように鎧なしの戦いを試していたのである。

『まあ、それだけお前さんが強くなったってことか』

「イルバ、素直に褒めるとは珍しいな」

『俺様だつて褒める時は褒めるんだぜ』

「なるほどね……。明日も学校だし、そろそろ帰るとするか」

『了解だ、統夜』

ホラー、ヴェイケンナを討滅した統夜は翌日の学校に備えて帰路についたのである。

こうして統夜の高校3年生初日は幕を閉じた。

この戦いは、これから始まる壮絶な戦いの序章であることを統夜は知る由もなかった……。

……続く。

——次回予告——

『なかなか思い通りに部員が集まらないらしいな。お前ら、一体どんな勧誘をしているのやら……。次回、「勧誘」。新入部員は何人入るかな?』

第42話 「勧誘」

統夜の高校3年生の初日は、新入部員の勧誘を行ったり、ホラーを討伐したりと、忙しい1日となった。

そして翌日、この日は新入生歓迎会が行われ、統夜たち軽音部もライブを行う予定であった。

昨日、統夜がホラー討伐に行っている間、唯たちは新入部員勧誘のために色々な行動を行っていた。

まず最初に律が具合悪いフリをして倒れると、新入部員部員に音楽準備室まで運んでもらって1年生を音楽準備室に誘導するという「行き倒れ大作戦」を行った。

この結果は、言わずもがなではあるが、律を連れてきた2人の女の子は「間に合ってます！」と逃げ出してしまった。

当然ながらこの行き倒れ大作戦は失敗に終わってしまった。

次に行われたのは「なまり大作戦」という訳のわからない作戦だった。

それは唯がなぜか方言のようななまった言葉で音楽準備室の行き方を聞いていた。

しかし、道を聞いただけで終わってしまい、訳のわからないまま、なまり大作戦は失

敗に終わった。

続けて行われたのは、他の部活に体験入部して、その部がどのような勧誘をしているのかを調べる「スパイ大作戦」という作戦を行った。

色々な部活に体験入部したことで、勉強にはなったものの、根本的に部員を集める方法を見つけることは出来なかった。

そして今日、新歓ライブで新入生に軽音部をアピールする予定である。

新歓ライブ開始時刻が迫り、統夜たちは音楽準備室でライブに備えて待機していた。

「……それじゃあ、曲順はこれでいいか？」

「どれどれ……」

濤が律に曲順が書いてある紙を渡すと、統夜と紬も共に曲順をチェックした。

1. わたしの恋はホツチキス
2. S#0
3. いちごパフエが止まらない
4. ふわふわ時間

という順番だった。

ちなみに2曲目の「S#0」は、2月の終わり頃に統夜が作詞し、紬の協力で作曲した曲である。

この曲は、統夜が尊敬している魔戒騎士の1人である涼邑零の生き様をイメージして作詞した曲である。

この曲が完成した後、零に会った時にこの曲を聴かせたのだが、零はこの曲をすごく気に入っていた。

統夜はグオルブの事件以降、暇がある時に作詞をするようになり、最初に出来たのがこの曲である。

現在も作詞は続けているのだが、今制作しているのは、統夜が尊敬している黄金騎士をイメージした曲であり、現在も制作中である。

「うん、いいんじゃないか」

「あら、さっそく統夜君の曲を演奏するのね！」

「まあ、だいぶ練習もしたからな」

「統夜先輩の曲、良い曲ですもんね♪」

統夜が作詞した曲は唯たちにも好評であった。

こうして曲順は決まり、律と紬はこれから行われるライブについての話をしていた。

統夜、漣、梓はライブに備えてリラックスしていた。

すると……。

「ところで、統夜先輩。その頬の絆創膏はどうしたんですか？」
梓はずつと気になっていた統夜の頬の傷のことを聞いていた。

「ああ、これは実はホラーにやられたんだよ……」

こう答える統夜はどこか面倒臭そうだった。

それも無理はない。

この日の朝にこの傷を見た唯たちやクラスメイトたちがこぞってこの質問をしたのである。

唯たちにはホラーとの戦いで出来た傷と話したが、クラスメイトたちには転んで出来た傷とベタな嘘をついていた。

「え!? 統夜先輩、大丈夫なんですか!？」

「大丈夫だ。これくらいすぐ治るし」

統夜はこう答えると、梓はホツとしていた。

統夜と梓がこのようなやり取りをしていたその時だった。

『……おい、唯。お前さん、さっきからどうしたんだ? 表情をコロコロ変えて』

イルバはこつちを見ながらコロコロと表情を変える唯が気になって、声をかけた。

「へ? デヘへ……」

唯は笑って話を誤魔化そうとしていた。
統夜はさらに追求しようとするが……。

『おい、そろそろライブの時間だぞ』

イルバが統夜たちにライブの時間が迫っていることを伝えた。

「よっしやあーこのライブにかけようぜ！」

「！！！！！！」

律の号令に統夜たちが答えた。

こうして統夜たちは講堂へ向かい、新入生歓迎会での軽音部のライブが始まった。

『あー……テスト……。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます！軽音部です
！』

唯がMCを務め、このような挨拶をすると、客席から拍手が起こっていた。

そんな中、さわ子は客席で統夜たちを見守っていたのだが、どこか不満そうだった。

「……あーあ……。ミニスカフリルメイドと執事服……。絶対似合うのになあ……」

さわ子はぶうつと頬を膨らませていた。

さわ子が不満そうにしているのは、統夜たちが自分の作った衣装ではなく、制服でライブを行っているからである。

『私たちは放課後ティータイムというバンドをやつて、毎日お茶とかしてるんですけど、みんなで音楽やるのつてとつても楽しいです!』

唯の話を聞いた梓はウンウンと頷いていた。

『良かったらぜひ軽音部へ!』

唯のMCが終わると客席から大きな拍手が行われた。

こうして1曲目である「私の恋はホツチキス」の演奏が始まった。

統夜たち放課後ティータイムは全員が本番に強いのか、何の問題もなく、演奏は進んでいった。

こうして1曲目は終了し、少しのMCの後、2曲目が行われた。

統夜が作詞した曲である「S#0」である。

零から様々な話を聞いて、そこで思ったことをこの曲の詩に乗せたのだが、統夜の心にも響くものがあつた。

この曲は統夜がボーカルを務め、心を込めて最後まで演奏した。

統夜のボーカルは予想以上に好評のようで、客席からは今までで一番大きな拍手が送られた。

統夜は大きな拍手が嬉しかったが、それと同時に恥ずかしくもあり、苦笑いをしていった。

続いて3曲目に行われた曲が「いちごパフェが止まらない」という曲である。

この曲は、3学期の始め頃に作られた曲であり、澤が作詞で、紘が作曲している。

曲の感じは程よいロックなのだが、歌詞が女の子らしい可愛らしさがある曲である。

この曲も何の問題もなく、最後まで演奏した。

そして、最後の曲である「ふわふわ時間」を現在演奏していた。

曲の終わり頃、唯はいつもとは違う演奏アクションを起こしていた。

ピックを持った手をグルグルと回転させながらジャラーン!とギターを奏でていたのである。

この弾き方は「ウインドミル奏法」と呼ばれる弾き方であり、実際にプロのギタリストも用いている演奏技術の一つである。

統夜は唯がいつの間にかそんな弾き方を覚えたのかと驚いていた。

唯の意外な技も見られたことでライブも最後の最後で盛り上がり、新入生歓迎会でのライブは大成功に終わった。

※※※

新歓ライブが終わって数日が経過したのだが、一向に入部希望者が現れる気配がなかった。

「……誰も来ませんね……」

入部希望者が誰も現れないことに梓は不安そうにしていた。

「まあ、まだ時間あるし」

「ああ、これから頑張ればいいんだよ」

不安そうにしているのを見た滯と統夜がこう梓をフォローしていた。

「そうですね」

「こう言うと梓は席を立った。

「ビラ配ってくるの?」

「いえ、トイレです」

梓はこう言うと音楽準備室を後にしてトイレへ向かった。

「みんなでもう一回ビラ配るか?」

「そうだな。諦めずにやっつけていこうぜ」

「おかしいなあ……。誰も来ないなんて……。部室入りやすくしといたのに……」

「入りやすく？」

『おいおい、変なことはしてないだろうな？』

唯の言葉にイルバは疑いの目でこう言ったのだが……。

ボタン！

音楽準備室の扉が開くと、トイレに行ったはずの梓が何かを抱えていた。

「はあ……はあ……。ゆ、唯先輩！これ片付けてー」

梓が抱えていたのは、少し大きめなカエルの置物だった。

このカエルの置物は唯のお気に入りらしく、唯が持ち込んだものであった。

「ええ?!いいと思ったのにい！ケチケチい！」

自分お気に入りの置物が撤去されてしまい、唯はふくれっ面になっていた。

「アハハ……。それってあのカエルか……」

『まったく……そんなことだろうと思っただぜ』

イルバは唯がこのようなことをやらかすと予想していたらそれが当たったので、呆れていた。

結局この日は誰も入部希望者は現れず、部活は終了した。

「……統夜、どうしました？」

統夜はこの日も番犬所を訪れていたのだが、統夜はどこか浮かない表情をしていた。

イレスは統夜が浮かない表情をしているのが気になって、声をかけた。

「あつ、いえ……」

統夜はこのような悩みをイレスに打ち明けるべきではないと思い、答えようとはしなかった。

「統夜、私で良ければ相談に乗りますよ？何かあったのですか？」

「は、はい……」

統夜は少し考えてからイレスに今抱えている悩みを打ち明けることにした。

「実は軽音部で新入部員の勧誘を行っているのですが、誰も集まらないのです。それで、軽音部は人気がないのかと不安になりました……」

『統夜。お前さんがそこまで気にすることはないと思うがな』

統夜が悩みを打ち明けて、真っ先にイルバが答えたことに統夜は驚いていた。

『それに、軽音部のライブは新入生にはかなり好評価だったと聞いているぜ』

「そうなのですね……。これは私の推察ですが、あなたたち軽音部は6人が結束して見えて外から入りづらいのではないですか？」

イレスの指摘を聞いた統夜はハツとしていた。

『なるほどな……。確かにそれはあるかもしれないぜ』

「そうだな……。イレス様、ありがとうございます」

相談に乗ってもらったお礼と言わんばかりに統夜はイレスに深々と頭を下げていた。

「いいのです。魔戒騎士の心のケアをすることもこの番犬所を預かる私の使命と考えていますから」

イレスは時にはこのような悩みを聞いてあげること、番犬所の神官としての務めと考えていた。

だが、このように魔戒騎士や魔戒法師が番犬所の神官に悩みを打ち明けるなど、本来であればあり得ないことである。

しかし、イレスはそのようなことはまったく気にしていなかった。

統夜は改めてお礼を言っていた。

この日は指令がなかったため、統夜はイレスに一礼した後、番犬所を出ると、夜遅くまで街の見回りを行ってから家路についた。

※※※

それから2日ほど経過したのだが、今日も入部希望者は現れる気配がなかった。
「今日も来ないな……」

この日も入部希望者は現れないので、滯は少しだけ暗い表情でこう言っていた。
現在は梓意外の全員とさわ子が紅茶を飲みながらのんびりしていた。

「何でだろう……」

「何か悪いことでもしたのかなあ……」

「まあ、どうだかな……」

統夜はそんなことはまったく気にする素振りはなく、紅茶を飲んでリラックスしていた。
た。

「そ、そんなことは……」

「まあまあ、焦らなくても何とかなるでしょ♪ね?」

紬はマイペースな意見を言ってみんなを安心させようとしていた。ムギの笑顔を見た滯は、安心したのか安堵の笑みを浮かべていた。

「それじゃあ、次の作戦考えようぜ！虫取りアミ大作戦とか！」

「おいおい、虫取りアミで1年生を捕まえるつもりか？そんなんじや余計誰も入ってこなくなるぞ」

統夜は律の考案したためちやくちやな作戦を否定していた。

「ええ!?それじゃあ統夜は何かいいアイディアがあるのかよお！」

「そ、それは……」

統夜はいざ他の案がないかとツツコまれると、何も答えることは出来なかった。

そんな中、唯は統夜たちのやり取りを穏やかな表情で眺めていた。

『……唯、どうしたんだ?』

その様子が気になっていたイルバが唯に声をかけた。

すると……。

「……私、しばらくこのままでもいいな」

「」「え?」「」

『ほう……』

「……」

唯の唐突な発言に統夜たちは驚き、イルバとさわ子は笑みを浮かべていた。

「今はこのままでいいよ！こうやって、みんなと一緒に集まって……。今はあずにやんはいないけど……。お茶飲んで、練習して、演奏して。ずっと6人で！」

「「「「……」」」」

唯の気持ちを知った統夜たちは言葉を失い、少し考え込んでいた。

「……そうだな」

「ああ、後1年で何とかしようぜ！」

統夜と律が唯の言葉に賛同していた。

『おいおい、俺様だつて一応は軽音部の一員だろうが。忘れるなよ』

「アハハ、ごめんごめん、イルバ」

「そうね、イルバも軽音部の一員なものね♪」

「それよりもあなたたち、1年って短いわよ」

「え？365日もあるのに？あ、もう何日かは過ぎてるけど……」

（1年は短いねえ……。年長者なだけあつて言葉に重みが……）

「統夜君？余計なことは考えない方がいいわよ？」

統夜は心の中であることを考えてると、さわ子がこう言ってきた。

さわ子はドス黒いオーラを放っており、統夜はその空気に触れるとたじろいでいた。

「さ、サーセンっした……」

統夜は苦笑いしながらとりあえず謝罪しておいた。

「ねえねえ、ムギちゃん。今日のおやつは何？」

「はい、どうぞぞ？」

紬はケーキの入った箱を開けると、食べごろサイズのケーキが7個入っていた。

「おお！みんな何味がいい？」

「うーん、迷うなあ！」

統夜たちは7個のケーキを見比べてどれがいいかじつくりと考えていた。

「あつ、あずにゃんはバナナケーキだと思うんだ。だから残しといてあげて」

唯は梓の好みを理解し、このように気の利いた発言をしていた。

「じゃあ、あたしはオレンジな！」

「マロンマロン♪」

「私はチョコで♪」

「私バナラ！」

「じゃあ……イチゴ」

「俺はチーズケーキかな」

こうして7個のケーキの振り分けは終わった。

唯 ↓チョコケーキ

律 ↓オレンジケーキ

澪 ↓イチゴシヨートケーキ

紬 ↓バナラケーキ

梓 ↓バナナケーキ

統夜 ↓チーズケーキ

さわ子 ↓モンブラン

梓のバナナケーキを箱に残し、みんなはそれぞれのケーキを自分の手元に置いた。

「いやあ、これは美味しそうだね♪」

唯と律がケーキを一口頬張ると同時に梓が中に入ってきた。

それを見た唯と律は思わず今食べたケーキを吹き出してしまった。

「ご、ごめんごめん！すぐピラ配ってくるから！」

唯は慌てて立ち上がり、音楽準備室を出ようとするのだが……。

「……ムギ先輩、私、ミルクティー下さい」

「え？」

梓の言葉を聞いた唯はその場で立ち止まった。

「あと、バナナケーキも。私、今年だけはイルバとこの6人でやりたくなりました」
1番後輩を欲しがっていたであろう梓が、この1年は後輩はいらなと言っていたのである。

「あずにゃん……」

梓の言葉を聞いて、統夜たちの表情がぱあつと明るくなった。

「あずにゃん！」

唯はそんな梓に抱きつこうとするのだが……。

「唯先輩。これからはもつと厳しくいきますからね」

「へ？」

梓の言葉に唯は思わず梓に抱きつくのはやめてしまった。

「はい、ギター出して♪」

「ふえ!？」

唯は梓の言葉に思わず硬直してしまった。

そして……。

「やっぱ新入部員、カモン!!」

唯は思わずこう叫んでいた。

(アハハ……。唯のやつ災難だな。まあ、頑張れよ)

統夜は他人事のようにキーキを頬張っていたのだが……。

「ほら、統夜先輩もですよ！統夜先輩もギター出して♪」

「へ？」

まさか自分にまで来るとは思っていなかったので、統夜は啞然としていた。

『ほら、統夜、諦めろ。お前さんも頑張って練習するんだな』

「はいはい。わかってるよ」

統夜はゆつくりと立ち上がると、ギターを取り出していった。

統夜、唯、梓の3人はギターの練習をすることになり、残りのメンバーはその様子を見守っていた。

こうして、統夜たち放課後ティータイムは新入部員を入れることなく、この1年動き始めるのであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『やれやれ。部室の物置がひどいことになってるな。ま、きちんと掃除をしなきゃそうなるわな。次回、「整頓」。掃除は定期的にするんだな』

第43話 「整頓」

新学期を迎えておおよそ2週間が経過していた。

そしてこの日も無事に過ぎ、放課後になっていた。

「さてと……」

「あ、統夜。今から部室行くのか？」

統夜が部室に行く準備をしていると、律が声をかけてきた。

「ああ」

「だったらみんなと一緒に行こうぜ！」

「ああ、構わないぜ」

統夜はみんなで音楽準備室に行くことにした。

「ムギ、行こうぜ！」

律は続いて黒板に書いてあるものを黒板消しで消していた紬に声をかけた。

「ごめんね。この後、日誌とか届けなきゃいけないから、先に行つてて」

「あれ？今日ムギ日直だっけ？」

「ううん。本当は唯ちゃんなんだけど……」

絀が唯の方を指差すと、唯は机に突っ伏して爆睡していた。

「お昼休みからずつとあのままで……」

唯は日直の仕事もせずに寝てしまったので、絀が代わりに日直の仕事をしていた。

「おいおい……」

《昼休みからつて寝過ぎだろ……》

唯が昼の授業もそつちのけで寝ていたと知り、統夜とイルバは呆れていた。

「何度も起こしてゐるんだけど、全然起きないのよ」

唯の前の席である和はこう言うため息をついていた。

「ほら、唯。起きて」

和はどうか唯を起こそうとしていたのだが、いつこうに起きる気配はなかった。

(…あれ？立花さんも見守ってる。そういえば唯の隣の席だもんな)

唯の隣の席である姫子は唯を起こそうとしているこのやり取りを見守っていた。

「唯、起きろ！」

続いて律が唯を起こそうとするのだが……。

「大丈夫だよ、憂……。今日は日曜なのら……」

唯は寝言でとんでもないことを言っていた。

「うお、なんてポジティブシンキング！おい、唯！練習だぞ、ライブだぞ、ギターだぞ！」

律は音楽絡みの言葉をぶつけてみたが、唯は何の反応もなかった。

「ほら、唯！ギータが待ってるぞ！」

「う、うん……？むにゃあ……」

統夜の放ったギータという言葉に唯は一瞬反応するが、すぐに眠ってしまった。

(くそ、ギータでもダメか……。一体どうしたら……)

統夜はどうすれば唯が起きるか考えていた。

すると……。

「……あ……」

統夜たちは唯を起こすのに適している言葉を思いついた。

それは……。

「……唯(ちゃん)。ケーキだぞ(よ)！」

「ううん……」

ケーキという言葉に反応し、唯はのろのろと起き上がった。

すると、姫子を始めその様子を見守っていたクラスメイトたちから歓声があがっていた。

唯は寝ぼけ眼で周囲を見回すのだが……。

「……ない……嘘つき……」

唯はそれだけ言うと再び眠ってしまった。

「いい加減に起きろ！」

統夜はツツコミも兼ねてこう言い放った。

「ダメだ……。ムギ！こうなったら本物のケーキだ！」

律は本物のケーキで唯を起こそうと考えたのだが……。

「おいおい、ムギは今日直の仕事か？」

統夜は律が無茶な注文をするからか呆れていた。

その時だった。

「田井中さん」

さわ子が律に声をかけてきた。

「先生、さよなら」

「はい、さよなら」

唯たちのやり取りを見守っていた姫子はさわ子に挨拶をすると、帰っていった。

「あなたたち、前に貸した着ぐるみ返してくれない？演劇部で使うつもりなの」

「着ぐるみ？律、まだ返してなかったのか？」

「ああ？あれなら……。新入部員の勧誘に使った後に物置に入れといたんだよ」

「返せよ」

律の言葉を聞いて、統夜と滯は同時にツツコミを入れていた。

着ぐるみが部室にあるとわかったので、統夜たちとさわ子は音楽準備室へ向かった。

唯はいっこうに起きそうになかったので、そのままにしておくことにした。

音楽準備室に入り、物置の扉を開けたのだが……。

「な、何これ……」

まともな整頓をしていなかったからか、色んなものがあちこちに置かれており、散らかっていた。

「すいません……」

統夜と滯は代表してさわ子に謝っておいた。

「えっと……。着ぐるみでしたら……。ほら、ここにー」

律はダンボールとダンボールの間から着ぐるみを強引に取り出した。

その時だった。

ガタガタガタ……。

律が着ぐるみを取り出した衝撃で上の方に置いてあったダンボールまで動き始めてしまった。

そして、ダンボールがまるで雪崩のように飛び出していったのだ。

『おいおい、いくらなんでもこれは酷すぎるぜ』

「そうだな……」

イルバはあまりに汚い物置に呆れており、統夜はそれを認めることしか出来なかった。

さわ子は目的の着ぐるみを手に取り、とりあえず音楽準備室を後にした。

※※※

「……大掃除をします!」

しばらくすると、梓と寝ていた唯が音楽準備室にやって来たので、滯はこう提案していた。

「まあ、物置があればじゃ仕方ないよな」

『むしろ今までやらなかったのが問題だぜ』

「イルバ、それは言うなよ……」

滯の大掃除という提案に統夜は賛同し、イルバは少し厳しいことを言っていた。
そんな中……。

「ええ!？」

唯と律はわかりやすいくらい嫌そうな顔をしていた。

「そこーあからさまに嫌そうな顔をしない!」

滯が嫌そうな顔をしている唯と律をピシッと指差していた。

そして何を思ったのか、律はドラムの椅子に座り、唯はギターを構えていた。

「よし!今日は練習頑張るか!」

「そうだね、りっちゃん!目指せ武道館だよ!」

唯と律のやる気は掃除ではなく、練習に向うとしていた。

『おい、お前ら。そこまでしてやりたくないのか?』

イルバがツツコミを入れながら唯と律に呆れていた。

「だって……」

唯はこう前置きをすると、律と肩を組み合っていた。

「三度の飯より掃除が嫌いだ!!」

「『意味がわからん!』」

律と唯の発言に漣、統夜、イルバはツツコミを入れていた。

「……つていうかさあ。ここの掃除は音楽室の掃除当番がやってくれるんじゃないかなかったんですかあ？」

「そうだあ！ そうだあ！」

律と唯は頬をぶうつと膨らませながら抗議してきた。

「本来はそうだけど……」

「冷静に考えてこんな私物だらけの部屋を掃除させる訳にはいかないだろ」

統夜が律と唯をなだめていると、紬と梓が物置から私物を移動させていた。

「お、おっしやる通りで……」

「ああ！ 私のケロお！」

紬と梓が整理した荷物の中に唯が気に入っているカエルの置物があった。

「さあ、片付けるか……」

「しまつといたのに……」

律と唯は何を思ったのか紬と梓が出した荷物を再び物置に戻そうとしていた。

「だから戻すな！」

すかさず統夜と漣がツツコミを入れていた。

「それにしても、すごい荷物ですね……」

「何かある度にとりあえずつてことで倉庫代わりにしてたから……」

紬の言う通り、統夜たちは何かある度にとりあえずこれはしまっておこうと色々なものをしまつていくうちにこのような事態になったのである。

「つていうか、何でこんなにぬいぐるみがあるんだよ……」

統夜がぼやく通り、物置から引つ張り出した荷物の中には、ぬいぐるみが多数存在していた。

「あつーその大きいのは200円で取れたんだよ!」

唯が指差した大きなぬいぐるみは、200円という低投資で取ることが出来たぬいぐるみである。

「だがしかし……」

「聞いてないから……。ほら、ちゃんと持つて帰れ」

統夜はその大きなぬいぐるみを唯に押し付けると、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「……あれ? やーくん。これは私のぬいぐるみじゃないよ?」

唯はハゲオヤジっぽいキャラクターのぬいぐるみを統夜に押し付けてきた。

「? それじゃあこれは誰のだ?」

持ち主がわからず首を傾げていると、澤が統夜の持つているぬいぐるみをぶん取り、

大事そうに抱えていた。

「……つて！濡のかよ！」

まさかの意外な持ち主に統夜は思わずツツコミを入れてしまった。

私物整理を始めてしばらく経過したのだが、紬は食器棚に置いてあるティーセットの整理を始めていた。

「コーヒースセットも持って来たけど、全然使っていないねえ」

軽音部でのティータイムの時はほぼ紅茶だったので、コーヒーが出たことはなかった。

「お、ムギ。食器棚も整理するんだな」

「うん！せっかくだからついでにね！」

紬はティータイムの時に使うポットやカップなどを机に並べていた。

「おお、こう見るとなんか壮観だな……」

「まったくだよ。どれも高そうだし」

「ねえねえ、この食器っていくらくらいするの？」

「正確な値段はわからないけど……。ベルギー王室で使ってたものだって聞いたわ」

「お、王室!？」

統夜はスケールの大きな話に驚いていた。

『統夜。こいつは 1つだけでも数万はくだらないみたいだぜ』

「王室……数万……」

唯もスケールの大きな話に呆然としており、手にしていた食器の入った箱を落としてしまった。

「あ、危ねえ！」

律が咄嗟にキャッチしたので、大事には至らなかった。

※※※

私物整理を始めておよそ1時間が経過した。

一通り整理が終わったので、統夜たちは休憩を兼ねてティータイムを始めていた。

「……それにしても私たちのじゃない私物も結構あるな」

滯の言う通り、持ち主不明の私物が結構あり、ダンボール3つ分くらいはあった。

「昔の軽音部の私物じゃないかなあ。前は結構人数がいたみたいだし」

「細が持ち主不明の私物が誰ののかこう推理をしていた。」

「そうかもしれないですね……」

「……それにしても……」

「統夜が持っていたのはとある魔導具であった。」

「統夜先輩、それは？」

「ああ、これも魔導具なんだけどき……。何でこんな所に魔導具があるんだろう？」

『恐らくはレオが置いていったものじゃないのか？あいつも1月くらいここにいたからな』

イルバは魔導具を置いていったのはレオではないかと予想していた。

レオはグオルブの事件の前に1月だけ桜ヶ丘高校に教育実習生として潜り込んだことがあった。

統夜の持っている魔導具はその時にレオが置いていったものだといルバは予想した。

そんな中……。

「ねえ！見て見て！ババーン!!」

唯が物置から大きなケースを見つけてきた。

「何か出てきた……」

「おお！高そうなケース♪金目の物が入ってないかなあ♪」

律がワクワクしながらケースを開けた。

その中に入っていたのは……。

「ん？ギターだ！」

ケースに入っていたのは古くはあるものの、ギターであった。

「古いけど、良さそうなギターですね」

梓はギターを取り出し、このように分析していた。

「もつと面白いもんが入ってるって思ってたんだけどなあ」

「つまんなあい」

律と唯は中身がギターだとわかるとあっさりと興味をなくしてしまった。

『おいおい、お前らも軽音部ならもうちよつと興味を示せよ……』

ギターに興味を示さない律と唯にイルバは呆れていた。

「……あら、懐かしいわね」

音楽準備室に入ってきたさわ子がギターを見つけるなりこう切り出した。

「もしかして、これは先生のですか？」

「ええ。これはあまり使ってなかったんだけどね」

さわ子の答えを聞いた梓の表情がぱあつと明るくなった。

「先生ってひよつとして軽音部だったんですか!？」

「そうよ。言つてなかったっけ？」

「そうだったんですか！学祭の時に格好いいギターを持つてたんでそうなのかなって思つてました！」

学園祭の時、唯がギターを忘れた時にさわ子は自分のギターを唯に貸そうとしていた。

その頃から梓はさわ子は軽音部なのではないか？と思つていた。

気になつていた疑問が解決し、梓の表情は清々しいものになつていた。

「ブランクはあるけど……。今でも今の統夜君よりはギターは上手いかな」

さわ子は高校時代、軽音部で「DEATH DEVIL」というバンドを組んでおり、仲間たちと毎日ギターテクを競い合つていた。

そのため、さわ子は今の統夜より今でもギターテクはあると自負していた。

「今度ギターを教えて下さい！」

「ええ、いいわよ」

統夜よりギターが上手いとわかつた梓はさわ子にギターを教わろうと考え、胸は高ぶつていた。

しかし……。

「ちなみにこれが、学生時代のさわちゃんです」

唯は梓に高校時代のさわ子の写真を見せた。

さわ子は「DEATH DEVIL」時代には「キャサリン」と呼ばれており、いかにもデスメタルバンドをやっていると一目でわかるすごい格好をしていた。

「……やっぱりいいです」

「何でよー」

まさかの手のひら返しにさわ子はぶうつと頬を膨らませていた。

「私物は全部持って帰ることになったので、さわちゃんもはいー」

「ええ!?!」

梓からギターを受け取った唯はさわ子にギターを押し付けたが、ギターを手にしたさわ子の表情が変わった。

長いことしまわれていたためか、このギターはとてもカビ臭かったのである。

「うーん……。もう弾く時間もないしなあ」

「え?じゃあそのギターはどうするの?」

さわ子は手にしていたギターをケースにしまった。

「お店で売って、部費の足しにでもしてちょうだい」

さわ子はもうこのギターが必要ないのか、このような提案した。

「うわあ♪さわちゃん太っ腹♪」

「……つていうか……」

「押し付けられてるし！」

「それよりも、本当にいいんですか？パツと見、いいギターに見えますけど」

統夜はこのギターがいいギターではないかと予想してさわ子に改めて確認を取った。

「お父さんの友達からもらったものなんだけど……。これだけ保存状態が悪いと、もうダメなんじゃないかしら？」

「そんなもんですかねえ……」

「それに、もし売れるのなら他の誰かに使ってもらった方が、このギターは幸せよ」

「確かに……。そうかもしれないですね」

こうして統夜たちはさわ子のギターを店で買い取ってもらうことにした。

そのために帰り支度を整えて、統夜たちはいつもの楽器店へと向かった。

「……なかなか重いな、これ」

現在統夜たちは行きつけの楽器店である「I O G I A」に向かっているのだが、さわ

子のギターは統夜が持っている。

本来ならジャンケンで決める予定だったが、統夜が率先して持つと言ってくれたので、統夜がさわ子のギターを運んでいる。

「すみません、統夜先輩。重いのに率先して持つてもらって」

「気にすんな。これくらいはお安いごようさ」

統夜は笑顔を見せながらギターを運んでいた。

「……ところで統夜。お前のギターと鞆はどうしたんだ？」

濡はずつと気になっていた疑問を統夜にぶつけていた。

統夜はさわ子のギターは運んでいるのだが、自分のギターと鞆の姿がどこにもなかった。

「ああ、それな。それならこの魔法衣の中だよ」

統夜はさも当たり前かのように自分の着ている魔法衣を指差すが……。

「「「え!」」」

初めて知る意外な事実に唯たちは驚愕していた。

「ま、魔法衣っていったいどうなってるんだよ!」

今まで触れなかった魔法衣についての疑問をここでぶつけてみた。

『魔法衣の裏地は魔界に通じていてな。魔戒剣とかもここから出し入れしてるんだぜ』

「へえ、まるでドラ○もんの四○元ポケットみたいだね！」

「……その例えはちよつと解せないけど、まあそう考えてもらえればわかりやすいか」
統夜は唯の例えに少々不満気だったのだが、わかりやすい例えだったので、渋々納得していた。

「……ということは、統夜君のギターと鞆は……」

「ああ、この魔法衣の中だ。指令がある時はだいたいギターと鞆は魔法衣の中に入れてるな。みんなと帰る時はギターも鞆も背負ってるけど」

「なるほど……。今までずっと気になってましたけど、すっかりしました」

「むう……。だけど何かずるいなあ……」

梓は今まで気になっていた疑問が解決してすっきりしており、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

しばらく歩いていると、漣は一枚のチラシを受け取っていた。

それは近くにあるホームセンターのチラシだった。

「……なあ、みんな！」

漣はチラシを見て何かを思いついたのか、みんなを引き止めていた。

「……ん？どうした、漣？」

「こんな棚……部屋に置けないかな？こういうのが1つあると色々整理出来ると思うん

だ」

滯がみんなに見せたのは、ホームセンターのチラシに載っているとある棚だった。この棚は色々な物を収納出来るので、部屋に置いたら便利ではないかと滯は考えていた。

「……そうだな。これくらいなら部費で何とかなるんじゃないか？」

チラシに載っていた棚は良心的な値段だったので、軽音部の少ない部費でどうにか賄えそうな値段だった。

「そうですね。それじゃあ、ホームセンターに行ってみましょうか」
こうして統夜たちは楽器店に行く前にホームセンターに向かった。

※※※

「……ここ、ここがホームセンター!？」

ホームセンターの中に入るなり、絨のテンションが上がっていた。

「……ムギちゃん？」

「便利グッズがいっぱいあるのよね？ 大小様々な電球とか、七色のビニールテープとか」
♪

「そ、そうだな……」

テンションが上がる絢に統夜はタジタジになっていた。

「ムギ、ホームセンターに来るの初めてなのか？」

「うん！一度来たいと思ってたの♪……ふんす！行きましよう♪」

絢は目をキラキラと輝かせながら店内を進んでいった。

「あつ！私も行く！」

そんな絢に唯はついていった。

「やれやれ……」

統夜は子供のようにはしゃぐ絢に呆れながらも笑みを浮かべていた。

「とりあえず私たちも行きましょうか」

「そうだな」

統夜たちも絢と唯の後を追いかける形で店内を進んでいった。

絢はさっそく気になる商品を見つけていた。

「あつ！統夜君、梓ちゃん、見て見て！これ、壁に開いた穴を綺麗に補修出来るペンだつ

てー」

「はいー」

紬は続いて気になった商品を手に取った。

「こっちは古雑誌を簡単にまとめることが出来るテープ♪」

「ムギ先輩、そんなに珍しいですか？」

「ええ♪」

紬はニコニコしながらこう答えると、再び商品を物色していた。

「磨いただけで蛇口がピカピカに……本当に綺麗になるのかしら……」

紬はとある商品を手に取ると、その性能に関心していた。

「……ムギ、楽しそうだな……」

統夜は笑みを浮かべながら様々な商品に感動する紬を見守っていた。

そんな中……。

「ねえねえ！見て見て！」

唯が気になるものを発見したので、統夜たちを呼んでいた。

しかし、紬だけは商品を物色していたので、ついていったのは統夜と梓だった。

唯に連れられて来た場所は……。

「ねえねえ、これ全部ネジだよ!? 凄いよね!」

何故かネジ売り場だった。

「……………おいおい……………」

しょうもない所に連れられたので、統夜は呆れていた。

「ねえねえ！これ、格好良くない？」

唯は電動ネジ回しをまるで銃のように構えていた。

「唯！商品で遊ぶなって！」

統夜はさかさず唯を注意するが、唯は全く気にしていなかった。

「……………それ、何ですか？」

「電動ネジ回し！バン！バン！バン！」

唯はまるで銃を発砲する真似をしていた。

「……うるさい！」

たまたま近くにいた濡も唯を注意していた。

「はい！3人は死にました！」

「い、いやいやいや……………」

統夜と濡は唯の幼稚な行動に呆れていた。

そんな中……………。

「まったく……………唯は子供だな」

こういう律の頭にはライトヘルメットが装着されていた。

「……律、お前は人のこと言えないぞ」

「……………」

統夜はすかさずツツコミを入れるが、律は無言のままヘルメットのライトを点け出した。

「うお、眩しい！やめろって！」

統夜は無理矢理ヘルメットを外そうとするが、律は抵抗していた。

梓はジト目で統夜と律のやり取りを見ていた。

こんな感じでグダグダなやり取りはあったものの、統夜たちは目当ての棚を発見した。

棚を購入する前に、澤はさわ子に電話して、棚を部室に置いていいか確認を取っていた。

その結果……………」

「さわ子先生。棚を部室に置いてもいいって」

「したら明日の放課後、学校に届けてもらおうぜ」
律は店員にもらった商品発送の届を記入していた。

「……あれ？唯たちは？」

「そこら辺にいるんじゃないのか？」

統夜、律、滯の3人が棚を購入する準備をしており、唯、梓、紬は別行動していた。

「……あつ、ムギが来た」

「お待たせえ♪」

「つて！流石に買い過ぎだろ！」

買い物袋4つ分の商品を購入した紬が戻って来て、統夜たちは驚愕していた。

《やれやれ……。紬のやつ、そんなに買って使わないものもあるだろうに》

(まあまあ、それは言つてやるなつて)

イルバはテレパシーで思ったことを統夜に伝え、統夜はイルバをなだめていた。

紬が合流して少し経つてから、何処かを見ていた唯と梓が合流した。

こうして棚を購入し、翌日の放課後、学校に届けてもらうよう申し込みを済ませた。

ホームセンターの用事も済んだところで、本来の目的を果たすために楽器店に向かった。

※※※

「……ふう、意外と重かったな。カビ臭かったし」

行きつけの楽器店に到着し、楽器買取の申し込みをするためにギターを置いた統夜は一息ついて、こう呟いていた。

「それでは、査定させてもらいます」

「お願いします」

こうしてギターの査定が始まり、統夜たちは査定が終わるまで待つことにした。

「……統夜先輩、お疲れ様です♪」

「ああ」

統夜は梓の労いの言葉を簡単な言葉で返していた。

「本当にありがとうございます。あんなに重そうなものを率先して運んでもらって」

「なあに、力仕事は男の仕事だからな。気にするなよ」

統夜は重いギターを持ったにも関わらず、あまり文句を言わないので、梓たちはそれがありがたく、嬉しくもあつた。

「本当にありがとね、統夜君♪」

「あ、ああ……」

統夜は少し恥ずかしくなったのか、照れ隠しに頭をポリポリとかいていた。すると……。

「査定お待ちのお客様、お待たせ致しました」

査定が終わったことがわかり、統夜たちはカウンターに集合した。

「こちらのギターですが……。60万円で買い取らせていただきます」

店員の提示した値段を聞いて、統夜たちの周りの空気が一気に凍りついていた。

「「「ろ……60万円?!」」」

予想を遥かに越える金額に、紬意外の全員が驚愕していた。

《ほお、思ったより高く売れたじゃないか》

(予想外過ぎるだろ！)

統夜もまさかの値段に少しだけ気が動転していた。

このとんでもない値段で買い取ったギターがちよつとした波乱と、とある出会いをも

たらすことを続夜たちはまだ知る由もなかった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『ほお、あのギターはかなりの値段で売れたな。だけど、面倒なことが起きそうな予感がするぜ！次回、「邂逅」。あいつ……一体何者なんだ？』

第44話 「邂逅」

統夜たちは私物だらけの音楽準備室の物置を整理していたら、古いギターが見つかった。

そのギターはさわ子の昔のギターなのだが、さわ子がこのギターを売って部費の足しにしていると言ったので、統夜たちは行きつけの楽器店である「IOGIA」でこのギターを買い取ってもらうことになった。

そのギターはなんと60万円という誰も予想していなかった値段がつき、統夜たちは驚愕していた。

そして、統夜たちはしばらくの間呆然としていた。

「……………あ、あの。お客様？」

「……………ちそうさまでした！それでは！」

滯は気が動転してその場から逃げ出そうとするが、律がすぐさま捕まえていた。

「……………待ってっ！」

「だっ……………だだだだっ……………。ろ……………ろろ……………600万!!」

「落ち着け。桁が変わってるぞ」

統夜と律が濡にツツコミを入れていた。

濡は気が動転するあまり、桁を増やした金額を言っていたからである。

「ありがとうございます♪」

そんな中、紬は躊躇なく封筒に入った60万を受け取っていた。

「おめーは躊躇なさ過ぎだ!!」

統夜と律は続いて躊躇なくお金を受け取る紬にツツコミを入れていた。

《統夜。あのギターだけどな……》

イルバは何故かあのギターのことを知っていたので、統夜はその説明を受けていた。

(ふむふむ……。なるほどな……)

イルバの説明は長かったのだが、統夜はそれだけいいギターだったことは理解出来た。

そんな中、律が店員に何故こんな値段がつくのか聞くと、店員がこのギターの説明を始めた。

「このモデルは1960年代始めに生まれたギターでして、当初は材料や形が定まっておらず、様々な仕様のマイナーチェンジを繰り返しつつ、現在の形になったと言われています」

(……ここまでではイルバの説明とだいたい同じだ!)

先ほどイルバから聞いたフレーズがいくつも出てきたので、統夜は驚いていた。

そして、店員の説明は続いた。

「お客様にお持ちいただいたこのギターは、フィンガーボードに「ハカランダ」という今となつては貴重な木が使われていまして……。これが高い値段の1つの要因になつております」

店員の話は思ったより長く、まだ終わりそうになかったので、律は目をパチクリとさせていた。

「残念なことにごこのギターは、テイルピースが交換されております、フルオリジナルではないため、少し値段が落ちてしまいますが、ストックテイルピースの方が演奏性に優れており、こちらの方を好むお客様も多く、それほどのマイナスにはなりません」（へえ、これがフルオリジナルだったらもつと値段が上がってたつて訳か）

統夜はもしこのギターがフルオリジナルだったらどのくらいの値段がつくのかを想像し、苦笑いしていた。

「しかも、このギターは長いことしまわれていたそうで、あまり傷やフレットの減りはなく、年代物にしてはとてもコンディションが良く、この値段で買い取らせていただきました」

「ここでようやく店員の話は終わったのだが、あまりに話が長かったため、唯たちは呆

然としていた。

（それにしても、イルバの説明と店員さんの説明が似てたな。イルバ、何で年代物のギターのことなんて知ってるんだよ）

《ふん♪俺様は魔導輪だからな。お前さんがギターを始めてからというものの、だいぶギターの勉強をしたんでな。それで年代物のギターのことも知ったのさ》

テレパシーではあるが、このように語るイルバは何故か誇らしげで、ドヤ顔をしていた。

（ドヤ顔するなよ……）

誇らしげにドヤ顔をするイルバを、統夜はジト目で見ていた。

そんな中、唯たちは未だに呆然としていた。

「と、とにかく！それだけ貴重なギターなんです！」

店員の説明にとりあえず納得したところで、統夜たちは店を後にした。

店を出た統夜たちは行きつけのファストフード店に来ていた。

「……………うわ！肉厚だ！」

律は封筒の中身を覗き込んで驚いていた。

「あーん……。ああ、スペシャルバーガーだよ！」

「バーガーの話じゃねえ……」

律はお金の話をしていたのだが、唯は今食べてるバーガーの話かと勘違いをしていた。

「……それよりも、ポテト多くないか？」

濡の指摘通り、律のトレイに置かれたポテトは普段より量が多かった。

「これだけの金があるんだぞお♪ポテトXLサイズ！釣りはいらねえ！」

「なっ!? つ、使ったのか!？」

「いや、これは自腹だけだな……」

「つたく……びつくりさせるなよ……」

統夜は律が本気でギターの金に手をつけたと思ってしまったので、とりあえず安堵していた。

「でも……いいんですかね……。みんなでもらっちゃって……」

梓は金額が金額だったからか、不安そうにしていた。

高校生がこれだけの大金を持つことはないのです、このような心配をするのも無理はない。

「仕方ないだろ。さわちゃんが部費にしろっていうんだから」

「ブヒブヒ！」

「でも……」

釈然としない梓に対して律は札束を突きつけた。

「ほれ！6人で分けたら1人10万だぞ！」

梓はしばらく札束を眺めていたのだが……。

「ああ……。私、欲しいエフエクターがあつたんですよねえ……」

真面目な梓も金の力には敵わず、自分の欲しいものを思い浮かべていた。

「あ、あずにゃん陥落……」

「バカ！そんな大金見せびらかすな！」

「濡の言う通りだ！さっさとしまえって！」

濡と統夜は大金を持っていると知られたら危険と判断し、律を注意していた。

「全く……。統夜は大袈裟だなあ……。ほれほれ、濡に統夜。1人10万だぞお♪」

律は続いて統夜と律に札束を突きつけてきた。

「うっ……」

「……」

濡はあまりの大金に心揺れていたが、統夜は目の前の大金に全く興味を示さなかつ

た。

「10万か……。10万あったら……。マルチベースアンプシミュレーターに、新しいアンプ……」

滯も梓のように欲しいものを思い浮かべていた。

「あたしはツインペダルに、やっぱりフルアタムも欲しいなあ♪」

「……」

律は欲しいものを思い浮かべるなか、唯は何故か札束でビンタされる様子を想像していた。

「「「ふっふっふ……」」」

統夜と紬以外の4人はドス黒いオーラを放って笑みを浮かべていた。

「うわあ……」

統夜はそんな4人にドン引きしていた。

「みんな……。一体どうしたのかしら？」

唯たちの変化に紬は困惑していた。

「ムギ、みんなは大金を目の前におかしくなってるだけだよ」

「そうなの……？ 統夜君はいつも通りね？」

「俺はみんなと違ってそこまで欲しいものはないからな」

「そういえば統夜君って1人暮らしよな？ お金とかは大丈夫なの？」

紬はずっと心配していた統夜の生活についてのことを聞いていた。

「ああ、そこは問題ないよ。俺は番犬所からそれなりにお金をもらってるし、衣食住は保証されてるからな」

統夜たち魔戒騎士や魔戒法師はホラーと戦うというとても危険な仕事をしているので、番犬所からそれなりにお金を支給されている。

それだけではなく、最低限の衣類や住む場所なども場合によっては提供してくれる。

統夜も番犬所からそれなりにもらっており、さらには両親の遺産もあるため、毎日外食でも問題ないくらい生活には困っていないのである。

「へえ……。そうなのね」

「まあ、それだけ危険な仕事だし、それくらいはな」

紬は統夜がそれなりの生活をしていることを知り、安心していった。

この日はこのまま解散となり、ギターのお金である60万は統夜が預かることになった。

それが一番安全と判断したためである。

統夜はみんなと解散した後、1度番犬所に立ち寄ったが、この日は指令はなかった。

統夜は街の見回りを行い、帰路についた。

※※※

そして翌日の放課後、頼んでいた棚が到着すると、統夜がそれを音楽準備室まで運んだ。

「……………よし、こんな感じかな？」

統夜は手際よく棚を組み立て始め、完成までそれほど時間はかからなかった。

「統夜先輩ってけっこう器用なんですね」

「アハハ……………そうなのかな？」

褒められたのが恥ずかしかったのか、統夜は笑っておどけていた。

「これで色々収納出来るな。さあ、さっそくやつてくか」

棚が完成したので、本やメトロノームなど、様々な備品を棚に入れていった。

「……………綺麗に収まりましたね」

「そうだな、これでだいぶ整頓出来たよな」

統夜は周囲を見回すと、見覚えのあるカエルの置物を発見した。

「唯……これは何だろうね……」

「さ、さあ……なんだろうねえ……」

カエルの置物は唯が持ち込んだものであったが、シラを切っていた。

「だったらこれは破棄しても問題はないよな♪」

統夜はカエルの置物を破棄しようとしたのだが……。

「ごめんなさい！それだけは許してつかーさい！」

唯はカエルの置物が破棄されると知り、素直に自分のものだとは白状した。

「唯先輩！私物はみんな持って帰るって約束でしょ!?!」

「だって！昨日持って帰った物の他にこれだけあるんだよ!?!これ以上持って帰ったら憂に怒られちゃうよお！」

長椅子には唯の私物らしきものがおかれていたが、それは紙袋3個分もあった。

昨日は学生鞆がいっぱいになるまで私物を持って帰っていたので、唯の私物が圧倒的に多いということが推察できた。

「ここに置いていたら私が怒ります！」

「憂だって怖いもん！昨日だって……」

唯はぷうつと頬を膨らませながら昨日のことを話していた。

く回想く

唯はファストフード店で解散した後、まっすぐ帰宅したのだが、大量の私物を持って帰ったことが憂にバレてしまった。

そして……。

「……………めっ!!」

「許してつかーさい!!」

憂は実の姉をまるで子供を叱るかのように叱ると、唯は涙目になって許しを請うた。

「クスツ……………やれやれ……………」

——回想終了

「姉の威厳まるでなしかよ……………」

姉であるはずの唯の情けない話を聞いて、統夜と漣は同時にツツコミを入れながら呆

れていた。

『威厳どころか姉妹の立場が逆転してるな、こりや』

「！むうう……………」

イルバの的を得たツツコミを聞いた唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「……………やーくん！お願い！いくつかでいいからコートの中に入れてさせて！」

魔法衣の裏地が魔界に通じていると聞いた唯は瞳をウルウルさせながら統夜に懇願してきた。

「ダメに決まってるだろ……………つか、魔法衣の裏地は物置じゃないんだから……………」

魔法衣の使用意図を間違っている唯に統夜は呆れていた。

「せ……………せめてケロだけでも！ケロだけでいいから！」

「嫌だよ！何で魔法衣の裏地にカエルの置物をしまわなきゃいけないんだよ！」

魔戒騎士のことを知ってる人間が見たらあまりにシュールな光景を想像した統夜は唯の申し出を断固拒否していた。

『ま、当然だな。魔法衣には必要最低限なものしか入れないしな』

「むうう……………。やーくんのケチ……………」

「あのなあ……………」

膨れっ面になっている唯を見て統夜は呆れていた。

「お願い！ちゃんと持って帰るから、しばらくここに置かせて下さい！」

続いて唯は部長である律にこのように懇願していた。

「しょうがないなあ……。それだけだぞ？」

律は整頓したことでスペースの出来た棚に何故か漫画を置こうとしていた。

「お前は何をしている！」

統夜と漣は同時にツツコミを入れると、律は「キャハツ☆」と言つて笑つて誤魔化そうとしていた。

漣はそんな律に拳骨をお見舞いしていた。

律は相当痛かったのか、その場でうずくまっていた。

すると……。

「やつほー！」

さわ子がこのような声をあげて音楽準備室の中に入つてくると、漣と律が驚きの声をあげていた。

「棚は届いたの？」

「はい、これがその棚です」

統夜以外は何故か呆然とする中、統夜は棚をさわ子に見せていた。

「あら、いい感じじゃない！」

さわ子は柵を見て感想を言うが、この部屋の空気がおかしいことを感じ取った。

「……………ん？どうしたのよ？人がせつかく声をかけてるのに」

「……………？みんな？」

さわ子の問いかけに何故か誰も答えようとはせず、律はこっそり逃げ出そうとするが、漣が律の肩を掴み、さわ子の前まで押し出した。

「あ、さわちゃん♪来てたんだあ♪聞こえなかったあ☆」

（うぜえ……………。何で律はぶりっ子キャラになつてんだよ……………）

あまりにも律のキャラがぶれぶれだったので、統夜はドン引きしていた。

《おいおい、何でこいつら険しい表情してるんだよ……………。ギター代を誤魔化そうとしてるんじゃないだろうな》

イルバには律たちの考えはお見通しだった。

《まあ、とりあえずは黙っておくか。何か面白そうだしな♪》

（お前なあ……………）

イルバは面白そうという理由だけで黙っているつもりでいたので、統夜はそんなイルバに呆れていた。

「それで、昨日どうだった？」

「へっ?!?!き、昨日?!?!」

「私のギターよ。いくらで売れたの？」

さわ子からこの質問が来るのはわかりきってたはずだが、律は何故かテンパリ、説明しようとしなかった。

「え、えつと……。確か……」

「結構古くて……。確か50年くらい前のものだったらしいです」

「へえ……」

滯と梓も何故かテンパリ、買取額を誤魔化そうとしていた。

「あれえ？それじゃあさわちゃんはひよつとして、50代でいらっしやる……」

「『あ……』」

唯が言っではいけないことをいつてしまったと思い、統夜とイルバは思わず声を出してしまった。

そして……。

「どこにこんななにピチピチした50代がいるんじゃあ!!」

さわ子は怒りモードで怒鳴っていた。

「お父さんの友達にもらったって言ったでしょ？」

「エへへ……。そうでした……」

「で、結局いくらになったの？」

さわ子は改めて金額を聞いていた。

「え、えつと……」

（やれやれ……。俺が言うしかないか……）

誰も話そうとしなかったので、統夜が話すことにした。

「先生、ギターですけど、実は……」

「……」

「うっ……!」

統夜はふと袖を見ると、ドス黒いオーラを放って統夜を睨みつけていた。

正直に話すとどうなるか……。統夜は身の危険を感じていた。

「……それで?どうしたの?」

「アハハ……。すいません……。ド忘れしちゃいましたよ……」

「何よ、それ」

統夜の予想外な解答にさわ子は呆れていた。

「それで、りっちゃん。いくらだったの?」

「え……えつと……。い、1万円……」

律がこの金額を言った瞬間、その場の空気が一瞬にして凍りついた。

みんな頭が真っ白になりながらテンパっていた。

(り、律ううううう!!?)

(いくらなんでも無理があり過ぎますよ!!)

(おいおいおい!いくら何でも欲張り過ぎだろ!)

(す、すまん!つい!!)

統夜たちは心の中でこのような会話を繰り返していた。

(クククク……。律のやつ、欲張り過ぎたな。さて、ここからどうなるかな?)

イルバはカタカタと音を鳴らしながら心の中で笑っていた。

「そっかあ……。やっぱりそんなもんかあ。カビ生えてたもんね」

さわ子は律の言った金額を信じていたことに統夜たちは驚いていた。

そして……。

「それじゃあ、買取証明書をちょうだい」

さわ子のこの言葉にその場の空気が再び凍りついた。

「は……はひ!?!」

「部費に計上しておくから当然でしょ?……まさかもらってこなかったの?」

「あ……いや……あの……」

律が買取証明書を出そうか迷ってる中、統夜も本当の事を言うべきか葛藤していた。

しかし……。

(……本当のことをあつさりバラしたら酷い目にあいそうだしな……)

統夜は先ほどの紬のドス黒いオーラを思い出し、身震いしていた。

律はこれ以上誤魔化すのは無理だと判断し、鞆から買取証明書を取り出した。

ドクン……ドクン……。

さわ子に買取証明書を渡そうとする律の鼓動は激しく高鳴り、手も震えていた。

このまま大人しく渡してしまえば買取金額を大幅にサバ読みしていたことがバレてしまう。

迷った末に律が取った行動とは……。

なんと、買取証明書を口に含み、食べることで証拠隠滅を計ろうとしていた。

「「「!!?」」」

律のまさかの行動にみんな驚くのだが、何故か統夜以外の4人はどこか嬉しそうな表

情をしていた。

そして……。

「「食ーえ♪食ーえ♪食ーえ♪食ーえ♪」」

「アハハ……。何やってるんだか……」

『さすがの俺様もこれは予想外だぜ』

律の行動に唯、紬、漣、梓がエールを送っており、統夜とイルバは予想外過ぎたのか
啞然としていた。

「何やってるのよー早く出しなさい！」

「んあ（やだ）!!」

さわ子は律の頬をつねって紙を出そうとするが、律は抵抗していた。

紙を口に含んでいたので、「やだ」とは聞き取れなかった。

「……出しなさい！」

「!!」

「「あ!!」」

「あーあ……」

『やれやれだぜ……』

さわ子は眼鏡を外すと、まるで「DEATH DEVIL」時代のような迫力で律を

睨みつけていた。

この時点でこれ以上の抵抗は無意味と判断したのである。

統夜とイルバはようやくこの問題が解決すると思い、安堵しながらも呆れていた。

律は観念して口の中に含んだ買取証明書を吐き出した。

「先生……実はですね」

これ以上隠し通す必要はないと判断した統夜はさわ子のギターが60万で売れたことを、伝えた。

「嘘?!60万にもなったの!?!凄いじゃない!!」

統夜から金額を聞いて、買取証明書の中身も確認したさわ子はまさかの値段に驚愕していた。

統夜以外の全員はその場で土下座をしていた。

統夜だけは正直に申告したということと、すっかりお金を預かっているということと、土下座を免れたのである。

「ご、ごめんなせえ!隠すつもりはなかったんじやが、あまりの金額の多さにオラ、気が動転してしまつて」

律は何故金額を誤魔化したのかを正直に話していた。

「……心が汚いですね」

「昔からこうなんだ」

「お前らに言う資格ないだろ!？」

梓と滯のまさかの言葉に律は2人に反論していた。

「そうねえ。それじゃあ、りっちゃんと言った1万円を部費として計上しておくから、その棚を買ったことにおきなさい」

「ええ!?それだけ!？」

「統夜君みたいに最初から正直に言えば全部あげたのになあ♪」

「つか、統夜もギリギリまで黙ってたじゃねえか!何でお前はそっちなんだよ!」

律は統夜だけ土下座を免れていることが不満だった。

「俺は早い段階で本当のことを言うつもりだったからな。まあ、無言の圧力で黙らされたけど」

統夜は無言の圧力で黙らされたため、早い段階で本当のことを言えなかったと主張した。

「そう言うことよ♪あなたたちと違って嘘をつく気配はなかったしね」

「やっぱり統夜だけずりいぞ!」

「そう言うならまず反省しろよ……」

「統夜の言う通りだぞ。変に隠そうとするから……」

「そうですね。私はきちんと話した方がいいって……」

漣と梓はやはり最初の頃と言っていることが変わっていた。

「どの口が言うー！」

「そうだよなあ。漣、梓。それで、本音は？」

統夜はまるで誘導尋問のように漣と梓から本音を聞こうとしていた。

「申し訳ありませんでした!!」

漣と梓は再び土下座をし、最初から誤魔化せたらいいということを確認していた。

『やれやれ……。お前ら高校生のくせに金に汚すぎだぜ……。』

事の一部始終を見守っていたイルバは、律たちの強欲っぷりに呆れ果てていた。

「さわちゃん！お願いがあります！その札束でほつぺを……ほつぺを殴って下さい！」

唯はさわ子に奇妙なことをお願いしていた。

さわ子はお願ひ通り札束で唯を軽くピンタすると、唯は満足そうにしていた。

『やれやれ……。ずいぶんと幸せな奴だな、お前さんは』

イルバは札束で殴られて満足そうにしている唯をジト目で見ていた。

最終的にさわ子は残った59万で何か1つだけ好きなものを買っていいと言ってくれた。

1つだからよく考えて決めてくれと注意したところで、この日の部活は終了した。

統夜は唯たちと何を買ってもらうかの話し合いに参加する予定だったが、番犬所から呼び出しが来た。

統夜は何を買うかは唯たちに任せることにして、唯たちと別れて番犬所へ向かった。

※※※

番犬所についた統夜は指令書を受け取ると、魔導火を用いて指令書を燃やし、内容を確認した。

「……わかりました。ただちにホラーを見つけて、殲滅します」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にして、イルバのナビゲーションを頼りにホラー搜索を始めた。

番犬所を出るとすでに外は暗くなっていたので、統夜は急いでホラーを見つけること

にした。

しばらく街を歩いていると……。

『統夜！ホラーの気配だ！』

イルバがホラーの気配を探知した。

「……よし、行こう！」

統夜はイルバのナビゲーションを頼りに、ホラーのいる場所へと急行した。

統夜がホラーのいる現場に到着すると、ホラーはすでに実体化しており、40代前半くらいの男がホラーに喰われそうになっていた。

「やめろおおおおお！」

統夜はホラーに突撃すると、跳び蹴りを放って、ホラーを吹き飛ばした。

「……早く逃げろ！」

「……ひ、ひいいいいいい!?!」

男は相当恐怖に支配されていたのか、統夜の呼びかけに返事をすることなく一目散に逃げ出した。

「さて……………」

統夜は魔戒剣を取り出すと、魔戒剣を抜いた。

『統夜！こいつは「ジエミトレ」。目に映るものは何でも喰っちゃまうとんでもないやつだぜ！』

「ああ！わかった！」

統夜は魔戒剣を構えると、ジエミトレを睨みつけた。

『統夜！来るぞ!!』

ジエミトレは統夜に体当たりを仕掛けてきたので、統夜は大きくジャンプをして攻撃をかわした。

統夜はそのまま魔戒剣を振るうが、ジエミトレの体は固く、ジエミトレの体に傷をつけることが出来なかった。

「くっ……………！けっこう固いな、こいつ」

統夜は後方にジャンプして、ジエミトレと距離を取った。

「こうなったら鎧を召還して一気に決着つけるか！」

統夜は鎧を召還し、ジエミトレを一気に倒そうと決意した。

統夜が魔戒剣を高く突き上げようとしたその時だった。

『統夜！何か来るぞ!!』

「え？」

イルバの言葉に統夜が困惑していると、何かが飛び出し、統夜とジェミトレの間に何者かが現れた。

その者は濃い紫の鎧を身に纏った騎士だった。

その手には大きな剣が握られていた。

「……ま、まさか、魔戒騎士……？」

統夜は目の前の鎧を身に纏った者が魔戒騎士ではないかと予想していた。

「……堅陣騎士ガイア……参る」

紫の鎧から男の声が聞こえてきて、自らのことを「堅陣騎士ガイア」と名乗っていた。

『堅陣騎士ガイアだ?!』

「イルバ、知ってるのか?」

『ああ。だが、こいつはこの番犬所の管轄の騎士ではないはずだぜ!』

「!そしたら何で……」

ガイアと名乗る男の目的がわからず、統夜は困惑していた。

困惑する統夜はお構いなしにガイアと名乗る男の持つ剣の切っ先に黄緑の魔導火を纏わせ、烈火炎装の状態になった。

「……!これは……烈火炎装!」

『ほお、どうやらこいつはそれなりの実力はあるようだ』

「はあっ!!」

ガイアと名乗る男は、専用の剣……堅陣剣を一閃すると、ジエミトレの体を真っ二つにした。

ジエミトレは断末魔をあげると、その体は消滅した。

「……………」

ジエミトレが消滅した後、静寂がその場の空気を包み込んでいた。

「お前は……一体……」

「お前がこの番犬所の魔戒騎士、月影統夜だな?」

ガイアと名乗る男は鎧を解除すると、統夜にこう問いかけていた。

「!何で俺の名前を!」

「……………」

統夜は男が自分の名前を知っていることに驚くが、何も語らず統夜の方を振り向いた。

すると……………。

「……………!!お、お前は……………」

統夜は男の顔を見ると驚きのあまり絶句していた。

何故か統夜は目の前の男に見覚えがあったからである。

それは男も同様のようで、統夜の顔を見ると驚いていた。

そして……。

「……お前……。生きていたのか……。それに、お前が噂の白銀騎士とはな……。アカ」

男は統夜のことを、修練場時代に呼ばれていた「アカ」と呼んでいた。

「お前も、生きてたんだ……。」「クロ」

統夜は男のことを「クロ」と呼んでいた。

クロは修練場最終日、ホラーヴィアル襲撃の時に、仲間を助けようとして死んだと思われていた。

しかし、統夜の目の前にいる男は少したくましい顔つきになっているものの、あの頃のクロの面影が残っていた。

こうして、アカこと統夜とクロは、再会をはたしたのである。

この再会は偶然か必然か？

それは誰にもわからなかった。

しかし、この2人の再会は新たな戦いの序章であることを、統夜は知る由もなかった……。

……続く

——次回予告——

『まさかあの男が生きていたとはな。こいつはまさに運命の再会ってやつだぜ！次回、「堅陣」。ぶつかり合う2つの牙！』

第45話 「堅陣」

統夜たちはさわ子の古いギターを売った結果、なんと60万という破格の値段で売ってしまった。

買取金額を誤魔化そうとしたことがさわ子にバレたため、律が言った1万円のみが部費に計上されることになった。

しかし、さわ子は残りの59万で何か1つだけ好きなものを買ってくれると言ってくれた。

統夜は指令が来たので、何にするかを唯たちに任せてホラー討伐へと向かった。

統夜は鎧を召還して一気にホラーを倒そうとするが、統夜の目の前に「堅陣騎士ガイア」と名乗る男が現れた。

その男は圧倒的な力でホラーを葬り、その素顔を統夜にさらした。

すると、その男は、修練場時代に統夜と共に修行し、ホラーに殺されたと思われるいたクロだった。

「クロ。お前、生きてたんだな」

「それはこっちの台詞だ、アカ。いや、今は月影統夜だったな」

「まあな。えつと……」

統夜は男がクロと呼ばれていたことは知っていたが、本名は隠されていたため、知らなかった。

「……黒崎戒人（くろさきかいと）。それが俺の名前だ」

クロは自らのことを黒崎戒人と名乗っていた。

「まあ、そういう訳で改めてよろしくな、統夜」

「（こちらこそよろしく、戒人）」

こうして修練場時代、互いをライバルと認めていた2人は魔戒騎士となって再会したのである。

「それにしても、お前は何で桜ヶ丘に？」

「正式な辞令は改めてだが、この紅の番犬所に配属になつてな。この桜ヶ丘に来てすぐホラーの気配を感知したという訳だ」

「なるほど……」

「近々番犬所にも挨拶に行く。また会った時にもゆつくりと話を聞かせてもらおう」

戒人は自身が羽織っている黒いロングコート……魔法衣をなびかせて、その場を去っていった。

「……クロ……いや、今は戒人か……」

統夜は立ち去る戒人の姿をじっと眺めていた。

死んだと思われていたかつての仲間と再会し、嬉しいという気持ちもあったが、統夜は複雑な表情をしていた。

『……統夜、帰るぞ。あの魔戒騎士のことはいずれわかるだろうからな』

「……そうだな」

統夜は余計なことは考えず、とりあえず家に帰ることにした。

翌日、統夜はエレメントの浄化を行う前に番犬所を訪れた。

「……統夜、こんな朝早くに来るとは珍しいですね。どうしました?」

普段であればエレメントの浄化を行っているはずの統夜が番犬所を訪れたことにイレスは驚いていた。

「実はイレス様に聞きたいことがあります……」

「……戒人のことですね?」

「……どうしてそれを?」

統夜はイレスが聞きたいことを知っていたことに驚いていた。

「あなたの過去は聞きましたしね。それに、戒人は昨日、私のところに挨拶に来たのです」

「！もしかして、ホラーを倒した後に？」

統夜の推察通り、戒人はホラーを討滅し、統夜と別れた後、番犬所を訪れてイレズに挨拶をしていたのである。

「その場には大輝もいましたからね、戒人は大輝にも挨拶をしていましたよ」

その場には、統夜の先輩騎士である桐島大輝もいたので、戒人は大輝にも挨拶をしてきた。

「統夜は戒人に会ったのですよね？」

「ええ……」

統夜はイレズの問いかけに肯定すると、複雑そうな表情をしていた。

「統夜、困惑しているのですね？ 死んだと思われていた仲間が称号持ちの魔戒騎士として姿を現したことに」

「はい。それに、修練場の事件の後はどうしていたのか、それも気になります」

「それは……。直接本人に聞くといいでしょう。……大丈夫です、戒人はいい子ですよ。まあ、少し生真面目なところもありますけど……」

「……はい、そうします」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にして、エレメントの浄化を始めた。

朝のエレメント浄化を終えた統夜はそのまま登校し、授業を受けた。

そしてとある休み時間。

統夜たちは自然と集まって話をしていた。

「……あずにゃんが？」

「うーん……。6人でいいって言ったものの、やっぱり後輩が欲しいんじゃないかなあ……」

「私も同じことを思ってた……」

「……実は、私も……」

「……あずにゃんが来てくれた時、凄く嬉しかったもんね……」

「……」

唯たちは梓の話をしていた。

統夜が番犬所に向かった頃、偶然他の部活の練習風景を見ていたのだが、それを見て

いた梓が寂しそうな表情をしていたからである。

梓は6人でいいと言っているものの、後輩が欲しいという本音を隠しているのではないかと推測出来た。

その話で唯たちが盛り上がる中、統夜は上の空で、考え事をしていた。

「……統夜？」

「……！な、何だ？」

「それはこっちの台詞だよ。大事な話をしてるのに、ずっと上の空で……」

唯たちは話をしながらもずっと上の空で考え事をしていた統夜のこと気がなっていた。

「ごめんごめん。ちょっと考え事をしていてな」

「考え事？」

「ま、まあ！別にいいじゃねえか！それより、あのギターのお金で何を買うかは決めたのか？」

「いや、まだだけど……」

「そっか、そしたら早く決めないとな」

統夜がうまい感じに話を誤魔化したところで、休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「おーそれじゃあまた後でなー！」

統夜は逃げるかのように、自分の席に戻っていた。

「統夜君……」

紬はそんな統夜を心配そうに見つめていた。

「ねえ！さっきの話なんだけど、私にいい考えがあるの！」

「わかった！その話も改めてしようぜ！」

先生が教室に入ってきたので、みんな自分の席に戻っていった。

「……」

統夜は授業中であつたが、戒人のことを考えていた。

《……おい、統夜。お前はまだ戒人のことを考えていたのか》

（ああ……。やっぱりあいつが生きてたのは嬉しいんだけど、素直に喜べないんだよ……）

《まあ、戒人も戒人で複雑な気持ちはあるだろうな。だからお前もしつかりしろ！お前がそんなんじや、かつての仲間だったあいつらにも笑われるぞ》

「!!」

統夜はイルバの言葉にハツとしてしまって、思わず席を立ってしまった。

統夜が急に席を立ったことにびっくりしたのか、全員の視線が統夜に集中してしまっ

た。

「……………？月影？どうしたんだ？」

「いえ……………すいません……………」

統夜は恥ずかしさの余り顔を赤らめてそのまま席に座った。

（……………そうだよな……………。俺がこんなんじや、みんなに笑われるよな……………。戒人……………クロが生きてて、きつとみんなも喜んでるよな……………）

統夜は今まで複雑な気持ちを抱いていたが、少しだけその気持ちを吹っ切ることが出来た。

統夜はその後、授業に集中していた。

（やれやれ……………。この程度のこととこれだけ動揺するとは、統夜もまだまだだな……………）

統夜は魔戒騎士としてはそれなりの騎士に成長したものの、精神的にはまだまだ未熟だとイルバは思っていた。

（まあ、これから戒人と共に戦っていけば統夜もさらに成長するだろうな）

イルバはそれと同時に統夜のさらなる成長を期待していた。

こうして、今行われている授業は終わった。

次の休み時間は昼休みであり、みんなで食事を取っている時に何があったかを聞かれたが、詳しい話は放課後に話す約束した。

※※※

放課後になり、全員が集まったところで、統夜は昨日の話を語り始めた。

「……………え？修練場時代の……………ですか？」

「ああ。修練場の最終日、俺の仲間とライバルだったクロは死んだって話しただろ？実は、クロだけは奇跡的に助かったみたいなんだよ」

「それで、そのクロって人が統夜君の前に現れたって訳ね」

細がこのように推測すると、統夜は無言で頷いていた。

「俺さ、クロが生きてたことは嬉しかったけど、何か複雑な気持ちになってたんだよ」
「なるほど、だからやーくんはちよつと変だったんだね！」

「唯に変わって言われるのは解せないけど……………。まあ、そういうことだ」

「それで、そいつは統夜や大輝さんと一緒に戦うことになったって訳か？」

「ああ。これからあいつと共に戦う機会もあるだろうから、共に切磋琢磨が出来ればいいと思っっている」

統夜は戒人のことをかつてライバルと思っていた。

これからは同年代の魔戒騎士として、共に切磋琢磨していこう。

こう決意したことで、複雑だった気持ちを吹っ切ることに成功した。

「統夜先輩、頑張ってくださいね」

「ああ」

こうして、統夜は戒人の存在を唯たちに話したのである。

「ところで、例のギターのお金ですけど、何を買うか決めました？」

「うん！実はね、私に色々と考えがあるの。だから私に任せて」

「えっ？唯先輩がですか？」

唯が何か妙案を考えているらしいが、梓は不安そうにしていた。

「まあ、俺らもどうするのかは聞いてないけどさ、たまには唯を信じてみてもいいんじゃないか？」

「むう………！たまにつて何さあー！」

統夜は梓を安心させるためにこう言ったが、唯は「たまに」というフレーズが気に入らなかったのか、膨れっ面になっていた。

このようなやり取りをしていたその時だった。

「……………統夜君、いる?」

さわ子が音楽準備室に入るなり、統夜を呼んでいた。

「……………?どうしました?」

「あなたにお客さんが来てるんだけど……………」

「お客さん?」

統夜が首を傾げていると、誰かが音楽準備室に入ってきた。

その人物とは……………?

「んな!?か……………戒人?」

統夜を訪ねてこの音楽準備室に来たのは、なんと戒人であった。

「統夜、昨日ぶりだな」

「な、何で俺がこの学校にいるってわかったんだよ!」

「ああ、実はイレズ様に聞いた。お前はこの学校に行きながら魔戒騎士としてホラーを狩っている」と

戒人は一切躊躇せず魔戒騎士やホラーという単語を出していたので、統夜は少しだけ焦っていた。

唯たちは事情を知っているのでもいいが、ここに事情を知らない人がいれば誤魔化しよ

うがないからである。

「……そ、そっか……」

「あの……。あなたが、クロさん……。ですか?」

梓はおおずとおおずと戒人に訪ねていた。

「何だ、統夜のやつ、俺のことをそう紹介していたのか。……俺の名前は黒崎戒人。魔戒騎士だ」

戒人は唯たちに簡単な自己紹介をしていた。

「よっ、よろしくお願ひします」

梓は戒人にペコリと一礼していた。

「とりあえず、立ち話もあれなんで、座って下さい♪今、お茶を淹れますね♪」

「ほら、戒人」

「あっ、ああ……」

統夜は戒人を座らせると、紬はティータイムの準備を行っていた。

「が、学校の部活とは普段からこんな感じなのか?」

「いや……。俺たちが特殊なだけだ。普通の部活は練習中にティータイムはしないからな……」

「そ、そういうものなんだな……」

戒人は統夜と違って学校生活というものをよく理解していなかったのか、この部屋特有の空気に少し困惑していた。

すると……。

「どうぞ♪召し上がって下さい♪」

「……」

戒人の前に紅茶とショートケーキが置かれると、戒人はショートケーキをじつと眺めていた。

「……？戒人？」

「すまない。俺、甘い物が苦手だな……」

「あら、そうなの？ごめんなさいね……」

戒人は甘い物が苦手だということを正直に打ち明け、紬は申し訳なさそうにショートケーキを下げた。

「気にしないでくれ」

こういうと戒人は紅茶を一口飲んでいた。

「……こっちは美味いぞ」

「まあ♪ありがとうございます♪」

紅茶は好評だったので、紬はニコニコしていた。

「……とところでさ、戒人。聞きたいことがあるんだけど」
「……修練場の後、俺がどうしていたか、だろ？」

戒人は統夜の疑問を察していたのかこう聞くと、統夜は無言で頷いていた。

「まあ、俺が今日ここへ来たのもそれを話すためだし、話すよ。あれから俺はどうやって魔戒騎士になったかを」

戒人はゆっくりと語り始めた。

あの忌まわしき事件の後の話のことを……。

く戒人の過去編く

黒崎戒人は、父親が先代のガイアで、母は魔戒法師という魔戒騎士や魔戒法師にとつてはごく普通の家庭に生まれた。

戒人は6歳の頃から魔戒騎士としての修行を始めた。

戒人は魔戒騎士として才能があつたのか、メキメキと力をつけていった。

そして戒人が14歳の時、同年代の仲間と学び、成長するために、父の勧めで修練場

の修行に参加した。

自分は黒の鉢巻を与えられ修行に参加したが、共に修行する魔戒騎士の卵たちのレベルは低く、時間の無駄ではないかとも感じてしまった。

そんな中、目を引く相手が現れた。

それは、自分とは違うシロ組にいる赤いハチマキをつけた少年だった。

他のメンバーはバルチャスの腕はてんでダメで、あつという間にやられてしまっていたが、赤いハチマキの少年は相手を圧倒していた。

その結果、赤いハチマキの少年の活躍のおかげでシロ組は勝利した。

それを見た瞬間、こいつは自分と互角以上の実力を持っている。だからこそ、この男は自分のライバルになると感じていた。

修練場の修行は過酷なものであったが、戒人は弱音を吐くことはなく、修行をこなしていった。

修練場の修行も日を追うごとにクロは自身の成長を実感していた。

そして、鐘斬りと呼ばれる競技が行われる中、戒人は赤いハチマキの少年……統夜の成長を実感し、こいつは自分の手で倒すと決意した。

そして修練場の最終日、戒人たちクロ組の対戦相手は、統夜のいるシロ組だった。

試合が始まるなり、戒人の前に統夜が立ちはだかった。

戒人は統夜と全力でぶつかるが、これはシロ組の作戦だった。

1番強い相手をこちらの1番強い相手をぶつけて動きを封じて、後はその隙に戦う。統夜たちシロ組は戒人のことを警戒していたため、このような作戦が行われた。

この作戦は見事に的中し、戒人は統夜を相手するのに何も出来ず、クロ組は敗北してしまった。

戒人は統夜と互いの健闘を称え合い、再選を楽しみにしていた。

しかし……。

ホラーヴィアルの襲撃によって、多くの魔戒騎士の卵が喰われてしまった。

戒人は仲間を助けようとするものの、ヴィアルに吹き飛ばされてしまい、気を失って

しまった。

その時のダメージは大きく、戒人は生死の境をさまよっていた。そして、戒人が目を覚ましたのは、あの事件から4日後だった。

「……戒人！目が覚めたか！」

戒人が目を覚まし、ずっと看病をしていた父親は安堵していた。

戒人の母は喜びのあまり涙を流していた。

「……父さん……母さん……。俺は、一体……」

目を覚ましたばかりの戒人は現状を理解出来なかった。

「心配したのよ！あなたたちがホラーに襲われて、あなたは瀕死の重傷を負っていたのですから！」

「ホラーに……。……。他のみんなは!？」

戒人はここでようやく、自分が仲間を守ろうとして瀕死の重傷を負ったことを思い出した。

「……生存者はいるらしいが、ほぼ全滅だそうだ……」

「!!」

事実を聞いた戒人は絶句していた。

もしかしてアカや他のシロ組のみんなもホラーに喰われてしまったのではないか？

そう考えると、涙が止まらなかった。

両親はそんな戒人を気遣い、戒人はしばらくの間泣き続けていた。

事件の後、戒人の父親は魔戒騎士にならないという道も勧めたが、戒人はあんな事件があつたからこそ、誰かを守る力が欲しいと望み、改めて魔戒騎士になりたいと、願つた。

戒人はその後も魔戒騎士になるために厳しい修行を続けた。

今から1年半前、戒人の父親が魔戒騎士を引退し、戒人は「堅陣騎士ガイア」の称号を受け継いだ。

その後戒人は、この紅の番犬所に配属されるまで、桜ヶ丘からはそれなりに離れた街にある「橙の番犬所」の魔戒騎士として、ホラーを狩り続けたのだつた。

〈現代〉

「……戒人、お前も大変だったんだな……」

統夜は戒人の話を聞いて、こうしみじみと呟いた。

「ああ……。ほぼ全滅だって聞いた時はお前も死んだと思ってたよ。だけど、お前も生きてたんだよな」

「ああ。俺は助けられたんだよ……。あの時、ヤマブキが助けてくれなかったら俺も今頃は……」

統夜は自分が助かった経緯を話すと、唇を噛み締め、拳を力強く握りしめていた。

「統夜先輩……」

梓はそんな統夜の姿を心配そうに見つめていた。

「お前も色々あつて魔戒騎士になれたんだよな？」

「まあな。あの後も厳しい修行を乗り越えて、魔戒騎士になったんだ」

「お前の噂は聞いていたぞ。15歳という若さで魔戒騎士になった奴がいるって。それがお前だったんだな」

15歳という若さで魔戒騎士になるのはとても異例なので、その噂は瞬く間に広まっていた。

「まあな。俺が奏狼の称号を継いだのは中3の頃だったし」

「そういえばそんなこと言ってたね」

唯たちも統夜が中3の頃に魔戒騎士になったという話は聞いていたので、統夜の話聞いてウンウンと頷いていた。

「それから、お前の活躍も耳にしていたぞ。若干17歳って若さでメシアの腕と呼ばれたグオルブを討滅し、暗黒騎士の1人も討伐したと」

統夜がグオルブを討滅したことは多くの魔戒騎士や魔戒法師に知れ渡ることになった。

「ま、まあな……。だけど、それは俺1人の力じゃない。牙狼の称号を持つ鋼牙さんや絶狼の称号を持つ零さん。それだけじゃない。多くの魔戒騎士の協力があつたからグオルブやディオスを倒すことが出来たんだよ」

統夜は多くの人の協力があつたからこそこの偉業を成し遂げることが出来たと語った。

「そうか……。お前はあの黄金騎士や銀牙騎士と共に戦ったのだな」

戒人は統夜が最強と名高い黄金騎士や銀牙騎士と共に戦っていたことに驚いていた。

『ほお……。それならそれだけのホラーを倒せても納得じゃの』

突然戒人ではない声が聞こえてきた。

「あれ？今の声……どこから？」

紬はキョロキョロと周りを見回すが、他に誰もいなかったので困惑していた。

「戒人、もしかして……」

「ああ。俺の相棒の魔導輪だ」

戒人は統夜たちに銀色で、口のようなものが見える腕輪を見せた。

『自己紹介がまだじゃったの。ワシはトルバ。戒人の相棒の魔導輪じゃよ』

「あれ？魔導輪？それってイルイルみたいに指輪のことじゃないの？」

唯は首を傾げながらこう訪ねていた。

「魔導輪っていうのはイルバみたいな指輪もそうだが、腕輪型の魔導具も魔導輪って呼

ぶんだよ」

『それと唯。お前さんは毎度毎度俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

統夜は魔導輪について説明し、イルバは唯があだ名で呼ぶのをやめさせようとしていた。

「イルイルって……」

唯がイルバをあだ名で呼んでいることに戒人は驚いていた。

「ああ、気にするな。こう呼ぶのはあいつだけだから」

『ホッホッホ。どうやらここはずいぶんと賑やかなようじゃな』

唯は喋るトルバをジッと見つめていた。

『?どうしたんじや?お嬢ちゃんや』

「お爺ちゃんみたいな喋り方にトルバ……。あだ名はトル爺……。だね!」

『おいおい、何が「だね!」だ。俺様以外にも魔導輪に変なあだ名をつけるなよ……。』

イルバはトルバにまであだ名をつける唯に呆れていた。

『ホッホッホ。まあ、良いじやろう。好きに呼ぶといい』

トルバはイルバと違い、あだ名で呼ばれることをあつさりと承諾していた。

「……とりあえずお前のこともだいたいわかったよ、戒人」

「俺もだ、統夜。……それで、お前に頼みがあつてな」

「頼み?」

「……俺と……戦つてくれないか」

「『『『『?!』』』』」

「……」

戒人の突然の申し出に唯たちは驚き、統夜はジッと話を聞いていた。

「……まあ、それは俺も思つてたんだ。あの時つけられなかった決着をつけたいんだろ

?」

統夜も戒人とは決着をつけたいと思つていたので、その気持ちを察して、こう戒人に

訪ねた。

「ああ。私闘を禁じられてるのは百も承知でこのお願いをしている……。ダメか？」

「……」

統夜はジツと戒人を見てどう答えるかを考えていた。

『おい、統夜。何を考えている!? 魔戒騎士同士の私闘は禁じられていることはお前さんも知っているだろう?』

イルバは騎士の掟を破ろうとしている統夜を必死に止めていた。

『落ち着くんじや、若い魔導輪。戒人もその小童も寿命を没収されるのは覚悟の上じや。これは、2人が魔戒騎士として成長するために必要なことなのじや!』

本来なら止めるべき立場であるトルバは、罰を受けることは覚悟している戒人や統夜の気持ちを感じて反対しなかった。

「……戒人。決着をつけよう。……あの時出来なかった決着を!」

「ちよ、統夜先輩!? 本気ですか!」

「そうだぞ! 相手は魔戒騎士だろ? そこまでする必要はあるのか?」

統夜が戦いを承諾し、それを梓と濔が止めようとしていた。

「悪いけど、止めないでくれ。これは必要なことなんだよ。俺や戒人が魔戒騎士として成長するために!」

「やーくん……」

「……仕方ないわね。本来なら私も止めるべき立場だけど、学校を壊さないと約束出来るなら思い切りやりなさい」

さわ子は学校を壊さないという条件付きで2人の戦いを認めたのであった。

「せ、先生！いいんですか!?!」

「これは私たちの口出し出来る問題じゃないわ。2人の気の済むようにやらせましょう」

「……ありがとうございます。それじゃあ、戒人、行こう。屋上なら思い切り戦える」

統夜は席を立つと、長椅子に置いてあった魔法衣を羽織り、屋上へと向かった。

戒人は統夜の後に続き、唯たちもついていった。

屋上に到着すると、屋上のちょうど真ん中のあたりで統夜と戒人は対峙した。

「……統夜。鎧の召還はありにしないか?」

「ああ。後はサバックと同じルールでいいか?」

「問題ない」

こう戒人は答えると、戒人は魔戒剣を抜き、統夜も魔戒剣を抜いた。

2人は魔戒剣を構えると、互いを睨みつけていた。

この時2人の殺気はかなりのものであり、痛々しい空気がこの場を支配していた。

「……なあ、本当にいいのかよ！」

「あの2人……本気だわ」

「……なんか怖いよ……」

唯たちは統夜と戒人の放つ殺気に怯えていた。

(統夜先輩……。ケガだけはしないで……！)

この戦いを止めることが出来ない梓は統夜がケガしないことを祈っていた。

そして……。

「はあっ!!」

統夜と戒人は同時に魔戒剣を一閃し、互いの魔戒剣のソウルメタルが激しい打ち合いで共鳴していた。

統夜がすかさず剣を続けて一閃し、戒人はそれを魔戒剣で受け止めた。

「……どうした？まさか、これで終わりじゃないよな？」

「……っ！当然！」

戒人は統夜の剣を弾くと、その隙を突いて統夜を殴り飛ばした。

吹き飛ばされた統夜はすぐに体勢を立て直し、魔戒剣を構えた。

戒人は反撃の隙を与えないためにも突撃して、魔戒剣を一閃した。

統夜はジャンプして魔戒剣の攻撃をかわすと、戒人の顔面に蹴りを叩き込んだ。

蹴られたことで戒人は後方にさがり、統夜は着地して、魔戒剣を構えた。

「うわあ……」

「今のは痛そうですね……」

先ほどのパンチや蹴りを見て、唯たちは少しだけ引いていた。

「はあっ!!」

「っ!!」

戒人は統夜の顔面めがけて魔戒剣を叩き込むが、統夜は無駄のない動きでその一撃を

回避した。

統夜は一瞬の隙を突いて、戒人の足を引っ掛けることで、戒人を転ばせた。

「……………」

統夜は戒人の顔面めがけて魔戒剣を突き刺そうとするが、戒人はぐるっと横に回るこ

とで、回避した。

「……………あーやべー!」

統夜が気付いた時には既に手遅れだった。

魔戒剣の一突きのせいで、屋上の床に少しだけ傷がついてしまった。

「ちよつと！屋上は壊すなって言ったじゃない！」

「すいませーん!!」

統夜は隙を突いて攻撃を仕掛けてきた戒人の攻撃を防ぎながらさわ子に謝っていた。

その後、2人は激しく魔戒剣を打ち合い、その時に生じた火の粉がその激しさを物語っていた。

「凄い……」

梓は統夜と戒人の真剣勝負に見入っていた。

「確かに凄いけど、これってお互い殺す気で戦ってる感じがするよな？」

戦いの素人である律でさえ、この戦いは互いに手を抜いておらず、本気で戦っていることがわかった。

「……これが、魔戒騎士同士の本気の戦い……なのかな」

「うう……。2人とも本当に怖いよお〜！」

「そうね……」

唯と紬は初めて見る魔戒騎士同士の真剣勝負に怯えていた。

ホラーとの戦いは何度か見ているが、それとは違う恐怖感があったのである。

魔戒剣による打ち合いが続き、2人は一度距離を取った。

「……戒人！そろそろ鎧を召還して決着をつけようぜ！」

「ああ！受けて立つ！」

統夜と戒人は、同時に魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

2人はそこから放たれる光に包まれて、それぞれの鎧を召還した。

統夜は白銀の鎧を身に纏い、奏狼の鎧を装着した。

一方、戒人は濃い紫の鎧を身に纏い、ガイアの鎧を装着した。

「統夜、それがお前の鎧という訳か」

「ああ………白銀騎士奏狼。行くぜ！」

統夜はこう宣言すると、戒人めがけて駆け出し、皇輝剣を一閃した。

戒人はその一撃を堅陣剣で受け止めていた。

その後、戒人は統夜の攻撃を弾くと、戒人は堅陣剣を一閃し、統夜は皇輝剣で防がずに攻撃をかわしていた。

すかさず攻撃を仕掛けると、互いの剣を激しく打ち合っていた。

2人の実力は一見拮抗しているように見えた。

しかし、統夜は一瞬の隙を突いて戒人の攻撃を防ぐと、戒人を殴り飛ばした。

戒人は体勢を整えて、堅陣剣を構えた。

「………戒人！そろそろ決着をつけようぜ！」

「ああ、そうだな！」

2人は同時に駆け出すと、攻撃の体勢に入った。

「うおおおおおおお！！」

「はああああああああ！！」

2人はまるで獣のように吠えると、互いの剣を一閃した。

どちらが勝ったのかはわからず、唯たちはその様子を固唾を飲んで見守っていた。

しばらくの間静寂が支配し、勝者はすぐに決まった。

「くっ……………」

先ほどの一撃を制したのは統夜であり、戒人の鎧が解除されると、そのまま膝をついた。

統夜も鎧を解除すると、魔戒剣を戒人の喉元に突きつけた。

「…………勝負あり、だな」

「ああ…………参ったよ…………」

戒人が負けを認めると、統夜は剣を降ろし、魔戒剣を青い鞆に納めた。

「…………統夜、お前、これほど強くなっていたとは…………」

戒人は直接統夜と戦い、統夜が予想以上の実力を持っていたことに驚いていた。

「戒人、お前もかなりのものだったぜ」

こう言いながら統夜は笑みを浮かべると、戒人に手を差し伸べた。

戒人も笑みを浮かべると、統夜の手を取り立ち上がった。

「……ありがとう。俺のワガママを聞いてくれて……」

「気にするな。俺だってお前と決着をつけたかったんだから」

統夜も戒人もかつての決着をつけることが出来て、清々しい表情をしていた。

「統夜。これからは同じ番犬所で戦うんだ。だから、これから共に戦える時は共に戦おう！」

戒人はこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げた。

「ああー」

統夜は戒人の思いに応えようと、魔戒剣を抜いて同じように高く突き上げた。

2人の魔戒剣は交わり、仲間として……そして友としての契りを交わした。

しばらくこの状態でいて、唯たちはその様子を見守っていた。

『……そしたら番犬所にいかないとな』

2人が魔戒剣を鞘に納めるのを見たイルバがこう話を切り出した。

「……ああ、わかつているよ」

理由はどうあれ、統夜と戒人が騎士の掟を破ったのは事実であり、2人ともその罰を受ける覚悟は出来ていた。

「……統夜先輩……」

梓は心配そうな表情で2人のことを見ていた。

「……心配するな。罰と言っても多分数日から1週間分の命を没収されるだけだから」

「い、命を没収って……」

日数はともかくとして、命を没収されるということに梓は驚愕していた。

「……とりあえず、番犬所に行かなきゃいけないから帰るな」

「こう言々と統夜と戒人は屋上を後にして、そのまま番犬所へと向かった。

「……やーくん……」

「統夜君……大丈夫かしら……」

「大丈夫だとは思うけど……」

命を没収されるという穏やかではない話を聞いていたので、唯たちは不安そうにして
いた。

「……とりあえず戻りましょうか」

「……そうだな」

唯たちも一度音楽準備室に戻ったのだが、この日は練習もティータイムも行わず帰る
ことにした。

※※※

番犬所に到着した統夜と戒人は、イレスに掟を破って私闘を行ったことを報告した。イレスはそのことを察していたようだった。

「……イレス様、申し訳ありませんでした」

「俺たちは言い訳はしません。どんな罰も受ける覚悟です」

統夜と戒人は自分の罪を認め、罰を受ける覚悟はあった。

「やれやれ……。あなたたちの事情は知っていますが、まさか本当に勝負するとは思いませんでした……」

察していたイレスも本当にこのようなことをするとは思っていなかったのです、呆れていた。

「2人がぶつかることは確かにあなたたちの成長に必要なだと思いますが、咎めがないというのは他の騎士や法師たちに示しがつきません」

イレスは毅然とした態度でこう言うと、統夜と戒人はジッとイレスの目を見ていた。

「……月影統夜！黒崎戒人！罰としてあなた方の命の4日分を没収します！」

「……！4日分……それだけでいいのですか？」

統夜は思ったよりも罰が軽く驚いていた。

「まあ、あなた方は罪を認め反省していますからね。だから罰は少しだけ軽くしたので
す」

今回のように魔戒騎士が掟を破った時は、番犬所の神官が掟を破った者に罰を与える。
る。

さほど重い罪を犯していなければ、数日から1週間分の命を没収する。

その日数は神官の裁量で決められるのである。

今回の場合は統夜も戒人も罪を認め、罰を受ける覚悟があるとのことなので、罰は少しだけ軽くなったのである。

「……まあ、あなたたちのことですから、もうこのようなことはしないですよね？ですが、今後はこのような身勝手な行動は慎むようにして下さいね」

「……はい、肝に銘じます」

「……申し訳ありませんでした」

イレスからの厳しい言葉に統夜と戒人は素直に反省の意思を見せていた。

この日は指令がなかったので、統夜と戒人は罰として命を没収され、この日は帰された。

番犬所で戒人と別れた統夜はそのまま帰路についたのだが、統夜は家に着くなり、とてもない疲労感に襲われていた。

それは命を没収された反動であり、統夜はこの後何をする気力もなく、ベッドに入るとそのまま眠りについたのだった。

『おいおい……せめて俺様は外せよな……』

統夜はイルバを外す余裕もなかったのか、イルバを指にはめたまま眠っていた。

『まあ、仕方ないか……。本当ならあんな馬鹿な真似はさせるべきではなかったが、もうあんな真似はしないだろうしな……』

イルバは最初から2人の私闘に反対していたが、結果的にはこれで良かったと判断していた。

『やれやれ……統夜もあの小僧もまだまだ未熟だな……』

イルバはゴオルブを討滅した統夜も未熟扱いしていた。

『まあ、これからはあの小僧と共に精進するんだな』

イルバは統夜と戒人のさらなる成長を願い、この日は大人しくしていた。

※※※

翌日、いつもより早く起床した統夜はシャワーを浴びてからいつもの日課であるエレメントの浄化を行った。

『……おつ、統夜。いつもより浄化すべき場所が減っているぜ』

イルバが口を開いたのはエレメントの浄化を始めて1時間も経っていないかった。

「戒人もここの魔戒騎士として仕事してるからな」

『あいつもいるならお前と大輝の負担もかなり減るな』

「ああ、正直ありがたいよ」

戒人が紅の番犬所所属になり、その分浄化すべき場所も減るため、負担はだいぶ軽くなる。

しばらくエレメントの浄化を行っていると……。

「……あつ、統夜」

「おう、戒人」

偶然戒人と遭遇した。

「そういえば統夜はこの後学校に行くんだよな？」

「ああ」

「話はイレス様や大輝さんから聞いている。俺もお前の学校生活とやらをサポートするつもりだから、安心してくれ」

「戒人……ありがとなー」

戒人も大輝のように統夜の高校生活をサポートしてくれると言ってくれて、統夜は喜びを隠せなかった。

「それじゃあ、頑張れよ」

戒人はこう言うと統夜と別れ、エレメントの浄化を再開した。

『……さて、統夜。俺たちももうひと頑張りしないとな』

「……そうだな」

統夜はもう少しエレメントの浄化の仕事をこなしてから学校に登校した。

統夜が教室に入ると、唯たちは心配だったのか統夜に詰め寄った。

統夜は問題ないと伝えると、どうやら安心したようだった。

そして、この日は唯がさわ子のギターのお金を使って購入したある物が届くとのこと

だった。

その内容を聞いて統夜は驚くが、理由を聞くと何も言わなかった。統夜がその話を聞くと、チャイムが鳴ってこの日の授業が始まった。

※※※

この日の放課後、統夜たちは音楽準備室に入ると、昨日まではなかった水槽が置いてあり、その中で一匹の亀が悠々と泳いでいた。

「……何ですか、これ？」

昨日まではなかった水槽と亀を見て梓はポカーンとしていた。

「……新入部員のトンちゃんだよ！」

「先生に頼んで買ってもらったの！梓ちゃんの後輩よ！よろしくね！」

唯の提案こそがこの亀である。

みんなでホームセンターに行った時、梓は売られていた亀をジツと眺めていたのを唯は目撃していた。

その時、梓がこの亀が欲しいと唯は感じたので、この亀……トンちゃんを軽音部の部員として迎えることになった。

しかし……。

「……へえ……」

梓は亀が欲しがつてるとは思えないほどリアクションが薄かった。

予想外の展開にその場の空気が凍りついていた。

「おいおい……言ってることが違うくないか？」

「そうだよなあ。梓がこの亀が好きだって言ったのは唯だろ？」

「だってあずにゃん、欲しそうにジツと見つめてたから……」

「見つめてたのは唯先輩でしょ？私はただ変な顔だなと思って見てただけで……」

この時点で唯と梓のずれが生じていた。

梓はただ見ていただけであり、好きとか欲しいとかそういう気持ちはなかったのである。

「へ？」

その事実が発覚し、唯の顔は真っ青になっていた。

「……………やっちまったな……………」

『おいおい、そしたら早とちりでこの亀を買ったってことなのか?』

律は唾然とし、イルバは呆れていた。

「……………でも、何で急に?」

「梓、後輩いなくて寂しいのかなって思ってた……………」

「だから……………」

「新入りさんなんだけど……………」

この亀を買ってもらったもう一つの理由が、後輩がいなくて寂しがつている梓の後輩としてこの亀を迎えたいと思っただからである。

先輩たちの気持ちを汲み取った梓は笑みを浮かべて、水槽の亀……………トンちゃんに近付いた。

「……………もお、こんな早とちりで飼われたら迷惑だよね」

梓がトンちゃんに語りかけて、指で水槽に触れると、トンちゃんは頷く仕草をしていった。

「あ、頷いた」

「か、可愛い♪」

唯はトンちゃんの仕草が可愛らしいと感じて目をキラキラと輝かせていた。

「大丈夫、これからは私がちゃんと面倒を見るからね♪」

「いやいや、私もちゃんとするし♪」

「無理でしょ、唯先輩には」

『ああ、唯には無理だろうな』

唯にはトンちゃんのお世話は無理と判断した梓の言葉にイルバは賛同していた。

「むうう……。そんなことないもん！」

唯はぶうつと頬を膨らませながら反論していた。

滯はそんなやり取りを見て笑みを浮かべると、デジカメを取り出して、その瞬間を撮影していた。

『やれやれ……。軽音部の新入部員が人ではないとはな……』

「……イルバ、お前だつて人じゃないだろう」

『あ、確かにそうだな……』

統夜がこう指摘した通り、これで軽音部の部員は増えたのだが、軽音部の部員は6人と1体と1匹となったのである。

統夜たち6人意外に人間のメンバーがいらないことになる。

「……まあ、それでも新入りなのは間違いないんだ。これからもよろしくな、トンちゃん！」

統夜は水槽に近づいてカチン！と音を立てながら水槽に触れると、トンちゃんはウンと頷く仕草をしていた。

こうして統夜たち軽音部に人ではないが、新たな仲間が増えたのであった。

……続く。

——次回予告——

『カメ公が来たのはいいんだが、律のやつは一体どうしたんだ？変なことを考えてるみたいだが……。次回、「楽器」。まあ、時にはこんなのもいいかもな』

第46話 「楽器」

音楽準備室の物置を整頓していると、そこから古いギターが出てきた。

そのギターは60万円という破格の値段で売れたのだが、律たちがその金額を誤魔化そうとしたため、部費になったのはわずか1万円だった。

しかし、さわ子は残りの59万円で1つだけ好きなものを買ってあげると言ってくれた。

そんな中、唯に妙案があるとのこと、選ばれたのは機材ではなく、1匹の亀だった。唯はホームセンターに売られていたこの亀が好きだと思ったのだが、それは唯の勘違いだった。

しかし、唯たちは後輩がいなくて寂しがつている梓のために新入りの部員という扱いでトンちゃんを迎えたいと考えていた。

そんな先輩たちの優しさを汲み取った梓はトンちゃんを新入部員として歓迎した。

トンちゃんが軽音部にやってきた翌日、唯たちは水槽を悠々と泳ぐトンちゃんに見入っていた。

「……………か、可愛い……………」

唯が一番トんちゃんにメロメロになつていた。

そんな中、漣は遠巻きにトんちゃんを眺めていた。

「……漣ちゃん、怖いのか？」

「え？ここ、怖くはないけど、可愛いと思う境地にはまだ……」

「なんかそれわかる気がするよ」

漣はトんちゃんのことをまだ可愛いと思えておらず、そのことに統夜は賛同していた。

「ええ!?可愛いよお!ねえ、トんちゃん♪」

「あつ!唯ちゃんの方を見た!」

トんちゃんは唯に呼びかけられて、唯の方を見ていた。

『ほお、あのカメ公。人の言葉がわかるみたいだな』

「なあ、イルバ。カメ公ってトんちゃんのことか?」

『他に誰がいるんだ?』

「むうう……!ちゃんとトんちゃんって呼ばないとダメだよ!イルイル!」

『唯!お前さんは毎度毎度俺様を変なあだ名で呼ぶな!』

イルバは唯に注意されるが、イルバは唯にいつものツツコミをいれていた。

「そうだよねえ♪トんちゃん♪」

「トーンちゃん♪」

唯に続いて紬もトンちゃんに呼びかけていた。

「漣、お前もトンちゃんに呼びかけてみたらどうだ？」

「え？」

漣は統夜の言葉に困惑していた。

「と、トン……ちゃん……」

しかし、漣は勇気を出してトンちゃんに呼びかけた。

すると、トンちゃんは水面に顔をつけると、鼻をゴフゴフとさせていた。

「……可愛いな……」

今のトンちゃんの仕草を見て、漣はあっけなくトンちゃんに魅了されてしまった。

「唯先輩！ 飼うからにはちゃんと世話をしないとダメですからね！ 水温を一定にして、

定期的な水を変えないと」

梓は亀の飼い方の本を見ながらこう言っていた。

「ギー太より手がかかるねえ……」

『おいおい、ギターとカメ公を同列に語るなよ……』

イルバはギターと亀を同列に語る唯に呆れながらツツコミを入れていた。

「それに、餌も毎日……」

「あつ！餌足りなくなったら私持つてくる！家でもクサガメとか、南イシガメとか、ミシシッピニオイガメとか！」

（え、エキスパートだ！）

統夜と澁は鮠が亀を多く飼っていることに驚いていた。

「た、助かります」

「トンちゃん♪これからは毎日お世話するからね♪」

「そりやそうだな。もう飼うのやめた！なんてそんな無責任な事は言えないからな」

統夜が動物を飼うのに必要なことを語ったその時だった。

「もうヤダ!!」

一人だけパソコンで何かを見ていた律がこう叫んでいた。

そのため、全員の視線が律に集中していた。

そして……。

「ドラムやだあ!!」

律はいきなり不穏な言葉を叫んでいた。

「おいおい、ドラムがやだとか、どうしたんだよ」

律のあまりに不穏な言葉に統夜は心配になつて声をかけた。

「すまん！やだとは言い過ぎた！だが、これを見よ！」

そうやって律は統夜たちにとある映像を見せた。

「生徒会で撮った軽音部の活動記録。和がくれたんだけど……」

「へえ、生徒会もちゃんと軽音部の映像を撮ってくれたんだな」

律が再生しようとしているDVDが生徒会が作ったものだとなり、統夜は感心していた。

そして再生されたのは、軽音部初ライブである統夜たちが1年生の時の学園祭でのライブ映像だった。

「あっ！これ、1年生の時の！」

「懐かしいねえ！」

「私見ました！滯先輩の……」

「うわあ！やめろお!!」

滯にとつて、1年生の時の学園祭でのライブは黒歴史でしかなかった。

「違う！ドラムるところ見てみる！」

今回はそこが問題ではなく、ドラムの部分に問題があるようだった。

すると……。

「りっちゃん、暗い！」

「へえ、顔は暗いけどデコの部分はちゃんと……」

「ふんすー！」

「ぐえ!!」

統夜が最後まで言い切る前に律は統夜にボディーブローを放って統夜を黙らせた。

『これは、単純にライトが当たってないようだな』

イルバは何故律のデコだけが光っているのかをこのように推察していた。

「隅っこだから仕方ないですよね……」

「これだけじゃないんだよー！」

律は今まで行ってきたライブを順を追って再生したのだが、どれも最初のライブのようにおデコ以外が映っていなかった。

「あちゃあ……見事に映ってないな……」

「そうね……」

どうやら律はライブの映像に自分が全く映っていないのがショックのようである。

『おい、律。お前さんはそれで一体何をしたいんだ?』

イルバの問いかけに律が出した答えは……。

「……他の楽器やりたい」

ドラム以外の楽器がやりたいということだった。

「はあ?」

「おい、律。ちよつと待て、律がドラムやらなかったら誰がドラムやるんだよ！」
濡の指摘はもつともだった。

律がドラムをやらないなら、誰か代役を立てなければいけないからだ。
そんな中、律は……。

「……ジーン……」

統夜を凝視していた。

「はぁ!? 俺か!?!」

「いやあ、統夜なら何となく出来そうな気がしてさあ♪」

「あのなあ……。俺はドラムは無理だぞ!」

「まあ、そう言わないでちよつとやってみてよ♪」

律は無理矢理統夜をドラムの椅子に座らせた。

「……つたく……。どうなつても知らないぞ」

統夜はぶつぶつと文句を言いながら律からドラムのスティックを受け取った。

それから統夜はどうドラムを叩こうかしばらく考えていた。

「……梓、ふわふわのイントロを弾いてくれないか? それに合わせて叩いてみるから」

梓の協力でドラムを叩いてみることにしたのである。

「は、はい!」

梓はそれを了承すると、慌ててギターケースからギターを取り出して、チューニングを済ませた。

「……統夜先輩！準備出来ました！」

梓のチューニングが終わり、いつでも演奏出来る状態になった。

「……やーくんのドラム、一体どうなるんだろうね？」

「ええ♪凄く楽しみだわ♪」

「……大丈夫かなあ……」

唯と紬は統夜のドラムにワクワクしていたが、澪は心配そうに統夜を見ていた。梓の準備が整ったところで、梓はふわふわ時間のイントロを弾き始めた。

（よしーやってやるぜ!!）

統夜はやる気満々になり、ドラムを叩き始めたのだが……。

ベコッ！ベコッ！ベコッ！
ボヨーン！

「……………」

あまりに酷い統夜のドラムに梓は困惑していた。

そして、唯たちは……。

「……………」

統夜のドラムに呆然としていた。

(まあ、初めてのドラムならこんな下手くそでも仕方ないよな……)

イルバは統夜のドラムに呆れながらもこのような無茶振りをされた統夜に同情もしていた。

最初から梓のギターと合っておらず、あまりにずれていたの、演奏はすぐにストツプしてしまった。

「……………」だから言っただろ！俺には無理だつて！」

統夜は自分の下手くそな演奏に言い訳をしていた。

「まあ、やっぱりそうだよなあ……」

律はこの展開を予想していてこのようなことを言っていた。

すると……。

「……………」

統夜は部屋の隅っこで体育座りをして、激しく落ち込んでいた。

「ああ！統夜先輩！気を確かに！」

梓は必死に統夜をフォローしていた。

結局、ドラムを統夜にやらせようというのは統夜に精神的ダメージを与えるだけだった。

「律…………。そもそもお前、ドラム以外の楽器はチマチマしてて嫌だつて言つてなかったか？」

律がドラムを選んだ理由の1つは、ギターやベースなどの弦楽器はチマチマして自分の性には合わないという理由だった。

「…………それもそうなんだけどさあ…………。たまにはちよつと替えっこしてみようぜ！楽器」

「何か楽しそうだね！」

「ええ！たまにはいいかも！」

「ええ!?!」

律の気まぐれに唯と紬が賛同しており、滯は驚いていた。

「まあ、替えっこのせいで1人は心に傷を負ってますけどね…………」

梓は統夜の方を見ると、統夜は未だに落ち込んでいた。

「アハハ……笑えよ……どうせ俺なんて……」

『統夜！お前はもつとしつかりしろ！』

イルバはそんな統夜を叱責するが、統夜は落ち込み続けていた。

「りっちゃん！ギターやってみる？」

「おお、いいのかい？」

「ええ!!」

落ち込む統夜は放ったらかしにされて、律は唯のギターを受け取って構えてみた。

「ジャーン!!」

「おお！」

「結構似合うわね！」

「意外と様になってますね」

「何か見慣れないな……」

実際にギターを持ってみたら、意外とその姿が様になっていた。

「ねえ、りっちゃん。ちよつと弾いてみて！」

紬がこう提案したその時だった。

「うわああああん!!」

唯がいきなり泣き出してしまったのだ。

「どうしたんですか、唯先輩？」

「……ギターが浮気したあ！」

『おいおい、喜んでギターを渡したのはどこのどいつだよ……』

イルバは唯が泣き出した理由を聞いて呆れていた。

「……ありがとう！今まで楽しかったわ！」

「……面倒くさい人ですね……」

『まったくくだ』

唯のリアクションに梓とイルバが呆れていた。

「で、唯先生！どうすれば？」

「え？先生？」

律に先生と呼ばれ、唯はあっさりと泣き止んでいた。

滯はふと統夜を見ると、やはり統夜は落ち込んでいた。

「……ふふふ……。もう、パーフェクトもハーモニーもないんだよ……」

統夜は訳のわからないことをぶつぶつと呟いていた。

滯はそんな統夜にゆっくりと近付くと……。

「いい加減しっかりしろ！」

漣の容赦ない拳骨が統夜に襲いかかった。

その痛みは相当なもので、統夜は痛みのあまり手で頭を抑えていた。

そして……。

「……ハッ！俺つてば一体何を……」

統夜は漣の一撃で、現実逃避から抜け出せたようだった。

『やれやれ、やっと戻ったか……』

「ほら、統夜！私たちはお茶してるぞ！」

漣は正気に戻った統夜の首根っこを掴むと、そのまま連行し、そのままお茶を飲むことにした。

（まあ、律のことだ。きつとすぐに飽きるだろうな）

イルバは律の性格を理解していたので、ギターを教えてもらっても長くはもたないと予想していた。

唯と梓が律にギターを教えている間、統夜、漣、紬はお茶を飲みながらその様子を見守っていた。

そして数分後……。

「ギター無理かも」

「「早っ!!」」

律が予想以上に早くギターを諦めたので、統夜と漑は驚愕していた。

『おいおい……。いくら何でも早過ぎるだろう……。』

イルバは諦めの早い律に呆れていた。

「何か色々やることあつて大変だなあ。……お見それいたしました」

「いやいや……」

律は唯にギターを返したのだが、仰々しい動きをしていた。

「ギー太♪おかえり♪」

ギターが自分の手元に帰ってきて、唯は満面の笑みを浮かべていた。

律はそんな唯を見て、笑みを浮かべていた。

ギターが駄目だったので、律はティータイムに参加し、唯と梓もティータイムに参加していた。

この日は練習らしい練習は行われず、解散となった。

統夜は解散後、番犬所に直行した。

この日も指令はなかったので、街の見回りを行ってから帰路についた。

※※※

翌日、統夜はエレメントの浄化を行ってから登校した。

玄関に入り、教室に向かっていたその時だった。

「……あつ、統夜君、おはよう」

「先生、おはようござ……」

さわ子とすれ違ったので、挨拶をしようとしたのだが、さわ子の変化を感じて統夜は
啞然としていた。

『……？統夜、どうした？』

「なあ、イルバ。何かさわ子先生輝いてなかったか？」

『……言われてみれば、いつもと雰囲気が違うかもな……』

「何かプライベートでいいことあったのかな？……まあ、いつか」

統夜はさわ子の異変を感じて驚いたのだが、すぐにきにするのをやめて教室へと向
かった。

そして昼休み……。

「……いただきますーす!!」

統夜、滯、唯、紬、和の5人でテーブルを囲み、昼食を取っていた。

「和ちゃんのお弁当、毎日美味しそうね♪」

「紬は和の弁当を見ると、カラフルで凝っている和の弁当に関心していた。

「和ちゃん、お料理上手なんだあ♪」

唯は和の弁当からおかずをかつさらうと、それを頬張っていた。

「憂ちゃんもだよな」

「私って幸せ者だよねえ♪」

妹も幼なじみも料理上手であるため、それを食べる機会のある唯は幸せだということ

を噛み締めていた。

「ムギのは……いつも量が多いわね」

和の指摘通り、紬の弁当は量が多く、食べ盛りな男子高校生が食べられるかどうかと

いう程の量だった。

「うん!たくさん力使うから♪」

「何に?」

統夜と和がすかさずツツコミを入れていた。

「滯ちゃんのお弁当は、なんかいつも可愛い♪」

滯の弁当はタコさんウインナーや花型のおかずなど、女の子らしいお弁当で、袖も開心していた。

「お母さんにとっては、みおちゃんはいつまでも子供なんだねえ♪」

滯の弁当は滯の手作りではなく、滯の母親が作ったものだった。

唯は母親の愛情を感じ取っていたのだが、滯はその言葉が恥ずかしく、顔を赤らめながらタコさんウインナーを頬張っていた。

「やーくんは、今日もパンなんだね」

「まあな」

今日の統夜の昼食は、購買のパンではなく、コンビニのパンだった。

「統夜君って毎日パンなのよね？パンばかりだと栄養が偏るわよ」

コンビニのパンを頬張る統夜を見た和はまるで母親のように注意をしていた。

「まあ、そうなんだけどき、弁当作る暇がないんだよ」

統夜は毎朝エレメントの浄化を行っているので、弁当を作る暇はないのである。

統夜の事情を知っている和は統夜の言い訳を聞いて納得していた。

「そういえば統夜君って料理は出来るの？」

「人並みにはな。まあ、夜も外食が多いからほとんど作らないけどな」

統夜の言っていることは嘘ではなかった。

統夜は誰もが呆れるほどの味覚オンチであるのだが、料理は人並み以上にこなせるのである。

しかし、夜は外食がメインなので、料理する機会はほとんどなく、人にもあまり振るまわないのである。

「へえ、今度ぜひやーくんのご飯食べてみたいなあ♪」

「ま、気が向いたらな」

「……大丈夫かなあ……」

統夜が味覚オンチだと知っている滯は少し不安げな表情を浮かべていた。

「……あれ？そういえばりっちゃんは？」

「あそこだな」

統夜がとある方向に指を指すと、そこには律がいて、クラスメイトの子と談笑していた。

「……放浪中だね」

律はその持ち前の明るさのおかげで友達が多く、このクラスにも仲良しな子はたくさんいた。

しばらく色んな子達と交流した律は統夜たちのところに戻り、食事をしながら統夜たちと談笑していた。

そして昼休みは終わって放課後……。

「……という訳で今日はキーボードをやるぞ」

部屋に入るなり律はいきなりこんなことを言っていた。

「……何がという訳なんだよ……」

律の突拍子のない発言に滞は呆れていた。

「あれ?」Cagayake Rittyan!!」シリーズまだ続いているの?」

『おいおい、なんだよ、「Cagayake Rittyan!!」シリーズって……』

唯考案の奇妙なネーミングにイルバは呆れていた。

「やっぱ輝いてないと駄目かもしれない!」

「はい?」

「注目されるとキラキラってなるんだよ!見ろ!」

律はケーキを食べようとしていたさわ子を指差していた。

「……ん?何よ」

「……最近!担任になってからと言うもの、さわちゃんは肌はピカピカ!髪はツヤツヤ

「やたらと充実してると思わないか？」

「……ああ、確かに」

『統夜。今朝お前の感じた違和感はどうやら本物のようだったな』

統夜が何故さわ子の見た目に違和感を感じていたのか、イルバは納得していた。

「ウフフ……♪担任ともなると、教壇というステージに立つ回数が増えるからかしら♪」
統夜や律が感じている通り、さわ子は見た目もキラキラしており、普段の2割増は美人に見えていた。

「あたしもキラキラしたい！」

「で、今日はキーボードなんだ」

楽器を変えたいという理由がはつきりとわかり、漣は呆れていた。

「……へへっ！」

律はキーボードに近付くと、キーボードの音を鳴らした。

その音は何となく「ピンポン！」と言っているように聞こえた。

「あ、ピンポン！だって！」

「律先輩、楽譜読めるんですか？」

梓の問いかけに律は答えず、何故かキーボードを鳴らしていた。

「あっ！大丈夫♪だって！」

「つて！わかるのかよ!？」

唯が律のキーボードの音を翻訳したことに驚いた統夜はツツコミを入れていた。

『やれやれ……。これじゃ暗号だな』

「だよなあ。さすがにムギも迷惑だろ?」

そう思った統夜は紬を見たのだが、紬は目をキラキラと輝かせていた。

「つて！いいのかよ!」

迷惑どころかキラキラと目を輝かせている紬に統夜はツツコミを入れていた。

「ああ……。♪私のキーボードが喋ってる!」

今まで聞いたことのない音に紬は胸躍らせると、律はさらにキーボードを鳴らしていた。

「あ!今、ムーギーちゃん♪つて!」

「言った言った♪」

「やれやれ……!」

よくわからないキーボードの音の翻訳に統夜と漕は呆れていた。

しばらく律はキーボードの様々な音を楽しんでいた。

「キーボードは色んな音があつて楽しいな♪」

「ああ……♪新しい曲のイメージがどんどん湧いてくる♪」

『おいおい、それは一体どんな曲だよ……』

律が適当に音を鳴らしただけで曲のイメージが湧いてきたとのことだったので、イルバがその曲にツツコミを入れていた。

「……楽しそうだな……。ムギ、私にもちよつと弾かせてー！」

滯もキーボードに興味がわいてきたのか、そう言つてキーボードに近付くと、律はニヤリと笑みを浮かべていた。

そして、律は大きく怖い雰囲気を出して滯を怖がらせていた。

「やめろー！ 律、やめような！ そういうのはー！」

滯は両手で律のほっぺをつかみ、キーボードの演奏を阻止した。

そんな滯に律も抵抗して両手で滯のほっぺをつかみ、2人は互いのほっぺをつかんで引くに引けない状態になっていた。

「……りっちゃん、ベースはやらないの？」

唯の言葉にハツとした滯はとっさに両手を離した。

「ベースはだめ！」

「何で？」

「そうだよな。ベースなら弦の数も少ないし、ギターよりは少しはやりやすいと思うけど」

「……」

統夜の指摘はもつともであり、漣はしばらく考え込んでいた。

「……ベースは私……。ベース以外はやりたくないし、ベースじゃないと嫌だし……」

漣はベースに強い思い入れを持っていた。

「……低くて深い音色とか、目立たずにみんなを支えている感じとか……。みんなに合わせてベースのラインを作るのは楽しい……。飛び出し過ぎないように……。ただどみんなの音に埋もれないような、そんなベースリストでいたいっていつも……」

漣のベースに対する熱い思いに全員が聞き入っていた。

「知ってるよ！だから漣のベースには手を出さないのさ」

「……なるほどね、そういうことなら納得だわ」

統夜は漣がベースに対して熱い思いを持っているから律はベースに手を出さないと知り、統夜は納得していた。

「……うう、語りすぎた……」

熱弁したのが恥ずかしくなったのか、漣の顔は真っ赤になり、頭から煙を出していた。

「あれ？みおちゃん？みおちゃん!!」

唯は滯に呼びかけるが、反応はなかった。

「いいなあ……。ベースって、滯ちゃんそのものって感じよね♪」

「私、滯先輩のベース大好きです！」

「そうだな。あの力強い音は俺たちにはなくてはならない音だよな！」

統夜たちは滯のベースの力強さはかけがえのないものであると感じていた。

「ちよいとー、まだ固まってるのかい？この子は」

唯は再び滯に語りかけるが、滯は相変わらず反応がなかった。

「あ、りっちゃん！私に任せといて！大丈夫だからね、りっちゃん」

「おいおい、何を企んでるんだよ」

『まあ、ロクでもないことは間違いなさそうだ』

唯が何かを企んでいることはわかったのだが、ロクでもないことを企んでいると統夜とイルバは予想して呆れていた。

こうして、この日の部活は終了した。

この日も部活終わりに番犬所に顔を出したのだが、今日も指令はなかった。

統夜はこの日も街の見回りを行ってから家路についた。

そんな中、唯はドラムとして普段から目立たない律を目立たせようと色々模索していた。

唯提案の「C a g a y a k e R i t t y a n !!」作戦はまだ始まったばかりである。

……続く。

——次回予告——

『唯のやつ、また変なことを企んでやがるな。一体何をするつもりなんだ？次回、「光輝」。まあ、たまにはこういうのも悪くはないのか？』

第47話 「光輝」

律はドラムを担当しているのだが、ライブの時に自分がほとんど映っておらず、気分転換に違う楽器をやってみたいと言いついていた。

律がキーボードを体験した翌日、この日はクラス写真の撮影があった。

写真撮影の時は背の順で並ぶことになり、統夜はこのクラス唯一の男子であるため、一番後ろの列に移動した。

統夜たち3年生は男子生徒の数は少なく、統夜を入れても4人しかいなかった。

しかも、男子は1クラス1人と上手い感じに振り分けられていた。

「さてと……」

統夜は後ろの列の端の方に移動すると、既に紬と滯が並んでいた。

「あつ、統夜君♪」

「統夜はやっぱり後ろの列なんだな」

「まあな」

こう答えて紬の隣に立っていたのだが、滯の隣に律が割り込んできた。

前の方には唯と和がいて、偶然みんなが近くに集まっていた。

こうしてクラス写真は撮影された。

この写真は後に卒業アルバムに載る予定なのだが、この写真がちよつとした騒動の種になることをこの時の統夜たちは知る由もなかった。

そしてこの日の放課後、律が遅れて音楽準備室に入ると、いつもとドラムの位置が変わっていた。

「……何やってるんすか？」

「あ、りつちゃん！ドラムの位置を変えてみたの！めっちゃ真ん中！」

「ええ……？」

律は中央に置かれたドラムを見て微妙そうなりアクションをしていた。

「私、色々考えてみたんだよね。たまには席替えだよ！ちよつと座ってみて！」

唯は無理矢理律をドラムの椅子に座らせると、統夜たちも並んでみた。

「はいー！こんなポジションで！」

実際に並んでみると、ドラムが真ん中で、それに合わせて一列に並んでいた。

「……恥ずかしいぞ」

「うーん……。これよりもやっぱりこれよね？」

さわ子はじつくり考えた結果、やはりおかしいと思ったのか、ドラムの場所をいつもの場所に戻した。

「まあ、確かにこつちの方がしつくり来るよな」

「でもね、りつちゃん！大丈夫！」

唯はどこからか持ってきたライト付きヘルメットを被ると、ライトをつけて、光を律に浴びせていた。

「これでりつちゃんを照らしてあげる！」

「やめろおー！」

律はあまりにまぶしかったのか、どうにか光を遮ろうとしていた。

「……」C a g a y a k e R i t t y a n !! 「」

唯はライトをつけたまま、律に近付いていった。

「唯、その辺にしておけ」

統夜は唯の被ったヘルメットを奪い取り、ライトを消した。

しかし、律は真っ白になって力尽きていた。

「やってもうた！」

律が復活するまでには、しばらく時間がかかってしまった。

「……りつちゃんさ、もしかして寂しいの？」

律が復活したところで、唯がこう話を切り出した。

「ん？何で？」

「いや、いつも後ろだし、寂しいのかと」

唯はなんの根拠もなくこのような推理をしていた。

「いや、別に」

そして律はサラツと答えていた。

続いて唯は演奏中にもつとコミュニケーションを取った方がいいと主張していた。

そのコミュニケーション方法とは……。

「ジャカジャカジャンジャンジャカジャン ジャカジャン ジャカジャン！ジャカジャカジャンジャンジャカジャン ジャカジャン！！」

「うっ！」

唯は「ジャカジャン」！のタイミングで律の方を見ると、律は嫌がるような反応をしていた。

「さあーみんなもやるよ！後ろで寂しい思いをしているりっちゃんも、コミュニケーションだよ！」

唯だけは張り切っていたのだが、統夜と梓は面倒そうな表情をしていた。

唯の「さんはい！」という合図で、先ほどのコミュニケーション方法を全員で行った。

「ジャカジャン」!!のタイミングで5人が一斉に律の方を振り向くので、精神ダメー
ジは5倍になっていた。

「……これでバツチりなんじゃない？」

唯は手応えを感じていたが、統夜と滞はため息をついていた。

「唯……。あたし、別にそんなつもりじゃないんだけど……」

律は暴走気味の唯に少し言いくさそうにこう話していた。

しかし……。

「ダメだよ、りっちゃん！りっちゃんの悩みはみんなの悩みだよ。1人で悩んじゃダメだよ！」

「いや、だから悩んでないから……」

「みんなで乗り越えようね！」

唯は聞く耳持たずでこのようなことを言っていた。

「だからあー！違うんだって！」

律はどうか説得しようとするが、唯は終始律が悩んでいると勘違いをしていた。この日は終始唯に振り回される形となってしまう、この日の部活は終了した。

※※※

そして統夜たちは解散し、唯と梓は帰り道である商店街を歩いていった。

「うう………いっぱい持つてきたのにい………」

唯は紙袋いっぱい私物を入れており、その重量はかなりのものだった。

「もお、いい加減諦めて全部持つて帰って下さいよ」

唯の私物はまだまだたくさんあり、今日持つて帰ったのは、その一部であった。

「………ねえねえ、あずにゃん」

唯は足を止めてこう呼ぶと、梓も足を止めた。

「………? 何ですか?」

「りっちゃんかドラムやらなかったら、私がドラムやろうかな」

「へ？何ですか？」

唯の突拍子のない発言に梓は驚いていた。

「いやあ、りっちゃん何か悩んでるんだよ、きつと」

律自身が否定していたのにも関わらず、唯は律がドラムで悩んでいると思いついて入った。

「……何だっけ？スパイクでもなくて、ストライクでもなくて……」

「スランプですか？」

「そう、それ！」

「全然違いましたね」

「だからきつと、ちよつと違うことをしてみたくなくなったんじゃないかなあ？」

「……そうでしょうか？」

唯の深読みには梓は首を傾げていた。

「……という訳で私がドラム！あずにやんの後ろでドラム叩くよ！」

当然唯にはドラムの経験はなく、唯の言っていることは無謀極まりなかった。

「……ダメです！私の目が届く範囲にいて下さい！」

当然梓は唯がドラムをやることに反対だった。

「ええ!? 何で!？」

「先輩考え過ぎですよ! ほら、行きますよ!」

「う、うん。……ってあれ? ねえねえ、あずにゃん!」

唯は再び歩き始めようとする梓を引き止めた。

「……今度は何ですか?」

「あれって! やーくんの……!」

唯が見つけたのは、唯たちの反対の通りを歩いている黒いロングコートの青年だった。

「ああ、この前部室に来た戒人さんですね……」

梓もその青年を発見したのだが、その青年は戒人であった。

「おーい!! 戒人さーん!!」

唯は片手をブンブン振って戒人のことを大声で呼んだ。

戒人はそれで気付いたのか、足を止めて唯たちの方を見た。

唯たちを発見した戒人は車がないことを確認して、唯たちのもとへと駆け寄った。

「……確かお前たちは統夜の……」

「はい! 平沢唯です!」

「中野梓です!」

「ああ、よろしくな」

戒人が音楽準備室に来た時は唯たちの自己紹介は行っていなかったもので、ここで自己紹介をしていた。

「お前たちは今帰りなのか？」

「はい！戒人さんは？」

「俺はホラーを探している最中だ。指令があつてな」

戒人は唯たちに会う少し前に番犬所から指令を受けて、ホラー搜索の途中だった。

「それじゃあやーくんは？」

「もしかしたら俺と同じ指令を受けてるかもな」

戒人は番犬所で指令を受けた時は統夜の姿はなかったため、詳しいことはわからなかった。

「そうなんですか……」

話が一区切りついたところで、戒人は唯の手に持っている紙袋を凝視していた。

「ところでそれは何なんだ？」

「ああ、これは気にしないで下さい。ただの私物ですから」

戒人の問いかけに梓が代わりに答えていた。

「……家まで運ぼうか？何か重そうだし……」

「ええ!?! いいんですか!?!」

戒人のまさかの申し出に唯の表情がぱあっと明るくなっていた。
しかし……。

「唯先輩、ダメですよ! 戒人さんも大変なのに甘えたら!」

「うう……。あずにやあん……。厳しいよお……」

梓の厳しい言葉に唯は少しだけ涙目になっていた。

「……ほら、唯先輩。行きますよ……。戒人さん、頑張つて下さいね」

「ああん! あずにやあん! 待つてよお!」

梓が唯を置いて先に歩き始めたので、唯が慌てて梓を追いかけていた。

1人残された戒人はその様子をじっと見つめていた。

「……何て言うか……。騒がしい奴らだな」

『ホツホツホ! それがああ、嫌ちゃんたちの良いところじゃろうな』

「……そうかもな……」

そう答えると、戒人は唯たちが歩いて行った方向を見るが、この時には唯たちの姿はなかった。

『……戒人。もしかしてお前さん、統夜が羨ましいと思つたのではないか?』

「ち、違う! 俺は別に……」

戒人はトルバの指摘を慌てて否定していた。

『隠すこともあるまい。お前さんも統夜のような青春を送りたいって思ったんじやろ？』

「……そ、それはちよつとは思ったが、統夜が特別なだけだろ！それに、俺はホラーを狩る魔戒騎士だ。今はその使命に集中するだけだ」

戒人は統夜のような生活がちよつと羨ましいと思いつつも、騎士の使命を全うしようと思っていた。

『ホッホッホ。戒人、お前さんは相変わらず真面目じゃのう』

「う、うるさいな！と、とりあえずホラーを探すぞ！」

『わかっておる』

こうして戒人はトルバのナビゲーションを頼りに、ホラーの搜索を再開した。

※※※

しばらく歩いていると、夜になっていた。

トルバのナビゲーションを頼りに戒人がやって来たのは、桜ヶ丘某所にある今は使われていない廃工場の前だった。

「……トルバ、ここか？」

『うむ。ここから強い邪気を感じる。戒人、油断するでないぞ！』

戒人は魔戒剣を取り出し、いつでも抜刀出来る状態にしておいた。

そして……。

『戒人！上じゃ！！』

上空から一角獣の獣のような姿をしたホラーが戒人めがけて飛びかかってきて、戒人は冷静に攻撃をかわした。

『戒人！こいつはグリムゾーラというホラーじゃ！こやつ動きはすばしっこいぞ！気をつけるのじゃ！』

「承知！！」

戒人は魔戒剣を抜くと、グリムゾーラを睨みつけながら魔戒剣を構えていた。すると、グリムゾーラは戒人めがけて襲いかかってきた。

「……っ！」

戒人はグリムゾーラの攻撃を魔戒剣で受け止めていた。

「このお！！」

戒人はその後魔戒剣を一閃するが、グリムゾーラは素早い動きで戒人の攻撃をかわしていた。

その後グリムゾーラはすばしっこい動きで戒人を翻弄していた。

「くっ……！」

戒人は攻撃を防ぎつつ、反撃の機会をうかがっていた。

『……戒人！今のままでとジリ貧じゃぞ！』

「わかつてる！だが、もう少しだ……！」

戒人はグリムゾーラの攻撃を防ぎながらちよつとずつではあるが、敵の攻撃パターンを見極めつつあった。

グリムゾーラ何度目かの攻撃が戒人に迫ろうとしていたその時だった。

何者かが戒人とグリムゾーラの戦いに介入し、グリムゾーラを吹き飛ばしていた。

その人物とは……。

「……戒人！無事か!？」

「……！統夜か!？」

戒人を危機一髪の状態から救ったのは、統夜だった。

「まあ、何とか無事だ」

「……よし！2人で協力して一気にケリをつけようぜ！」

統夜は早急にグリムゾーラを倒すべく、魔戒剣を抜こうとしたのだが……。

「……統夜！ここは俺に任せてくれないか？」

「……え!？」

戒人のまさかの提案に統夜は驚いていた。

「あいつの動きはだいたい見切ったんだ。……ここは任せてくれ」

戒人がここまで防戦一方だったのは、相手の攻撃パターンを見極めるためだった。

戒人は今までの戦いでグリムゾーラの動きを見切っていたのである。

「……わかった！したらここはお前に任せるぜ！」

統夜は戒人を信じることにして、戒人の戦いを見守ることにした。

『おい、統夜。本当に手を貸さなくていいのか？』

「ああ。イルバだって戒人の実力は見ただろ？あいつなら大丈夫さ」

『まあ、確かにそうかもしれないな……』

イルバも納得したところで統夜は戒人の戦いを見守っていた。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

グリムゾーラに向けてこう宣言した戒人は、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、戒人はガイアの鎧を身に纏った。

その直後にグリムゾーラが襲いかかってくるが、戒人はその攻撃を無駄のない動きで

かわし、逆にグリムゾーラを殴り飛ばした。

すかさず戒人はグリムゾーラに接近し、とどめを刺そうとしていた。

しかし、グリムゾーラは素早い動きで戒人を翻弄しようとしていた。

だが、グリムゾーラの連続攻撃はすべてかわされてしまっていたのである。

連続攻撃を続けているうちに出来た一瞬の隙を突いた戒人は再びグリムゾーラを殴り飛ばした。

続けて戒人は魔戒剣が姿を変えた堅陣剣を一閃し、グリムゾーラを真つ二つに斬り裂いた。

斬り裂かれたグリムゾーラは断末魔をあげながら消滅していった。

グリムゾーラ討滅を確認した戒人は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を鞘に納めた。

「ふう……」

グリムゾーラを討滅したことを確認した統夜は戒人に駆け寄った。

「戒人、お疲れさん」

「おう。ところで、統夜はどうしてここに？」

「俺も指令を受けて来たんだよ。俺の獲物もさっきのホラーだったって訳」

統夜は何故このような場所に駆けつけたのかを説明していた。

「そっか……。悪かったな。お前の出番を丸ごと奪ってしまって……」

「まあ、気にするなよ。俺は気にしてないぜ」

統夜は倒せる人がホラーを倒すべきという考えだったので、そこまで気にしていなかった。

「そう言ってもらえると俺も助かるよ。……あつ、そうそう。今日ホラー探しの途中にお前の仲間に会ったぞ。確か、唯と梓……だったか？」

「へえ、あの2人に会ったのか」

「ああ、何か重そうな荷物を運んでたな」

「唯の奴……。まあ、そこは気にしないでくれよ」

「その時にも全く同じことを言われたよ」

戒人は唯と梓の2人と話をしていたことを思い出して苦笑いをしていた。

「まあ、これからも会うこともあるだろうし、その時はよろしくな」

「ああ、わかったよ」

「それじゃあ、明日も学校があるし、俺は帰るな」

統夜はこう言い残すと、家に帰るために歩き始めたのである。

戒人は去りゆく統夜の姿をじっと見つめていた。

※※※

翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

しかし、最後に浄化した場所から学校までの距離を全く計算していなかったため、遅刻は免れない状態になってしまった。

それでも統夜は急いで学校へ向かうが、学校の中に入った時にはもう遅刻は確定していた。

ちようど同じタイミングで律と滯も学校の中に入ってきていた。

教室までの移動中に事情を聞くと、律が遅くまで「ザ・フリー」と呼ばれる律が好きなバンドのDVDを見ていたため、寝坊してしまったみたいである。

教室の前に到着すると、既にHRは始まっていた。

出来る限り静かに扉を開けてこっそりと自分の席へ移動しようとするが、唯と目が合ってしまった。

「……あー！やーくん、りっちゃん、みおちゃん！お休みかと思ったよー！」

（バツ、バカ！大声出すなよ！バレるだろ！）

統夜がそう思った時には既に手遅れであり、遅刻という事実がクラス全体に知れ渡っ

てしまった。

そのためかあちこちからクスクスと笑い声が聞こえていた。

「いやあ、すいません。寝坊してしまいました……って、うっ!!」

統夜はヘラヘラと笑いながらさわ子を見て弁解したのだが、さわ子の異変に統夜は思わずたじろいでしまった。

「……はい、席についてね」

さわ子は何故かサングラスをかけ、口にマスクをしていた。

統夜はさわ子の異変が気になって仕方なかったのである。

「……さーわちゃん!」

そのためHR終了後、統夜、律、唯の3人がさわ子を追いかけて、さわ子を呼び止めた。

「……それ、一体どうしたの?」

律もさわ子の顔の異変が気になっていたので、そのことを聞いていた。

「……何か怖いですよ……」

「うう……。ピカピカになろうと思って色々試したの……」

さわ子は半泣きになりながらマスクとサングラスを外した。

さわ子の変わり果てた顔を見て、3人は絶句していた。

しばらく絶句すると、3人はさわ子の肩に手を置いてこう言った。

「「やり過ぎ」……」

さわ子は1度始めたことはやり過ぎなくらい徹底的にやる傾向があった。

高校時代にも好きな人のためにワイルドな女になるべく、かつて行っていたヴァイオリンを捨ててデスメタルに転向した。

さわ子は日を追うごとにワイルドになっていったが、それはどんどん目を背けたくなくなるくらい酷いものになっていた。

そして、ワイルドさを極めたと考えたさわ子は好きな人に再度告白するものの、「やり過ぎ」どドン引きされてフラれてしまったのである。

今回のさわ子はピカピカな女性を目指すためにあちこちから美容製品を仕入れて試していたのだが、それがやり過ぎたため、酷いことになってしまったのである。

《やれやれ……。あの女はアホ過ぎて何も言えんぞ……》

イルバはそんなさわ子にただただ呆れ果てていたのであった。



そして放課後、この日もいつものように部活に参加した統夜だったが、そんな統夜が目にしたのは、ドラムの椅子に座って嬉しそうにしている律だった。

「……ジャーン!! やっぱりドラムだよなあ♪」

ステージで目立たないのが嫌で他の楽器をやってみたいと言っていた律だったが、最終的にはドラムで落ち着いていたのであった。

「クスツ……そうだと思ったよ。昨日、「キース・ムーン」のDVDを見たって言うてたから」

漣の言っていた「キース・ムーン」とは、律の好きなバンドである「ザ・フリー」のドラマーである。

「誰?」

「ああ、律が憧れてるドラマーで……」

「ああ! 変人とか壊し屋とか言われた人ですよね? 爆竹を仕掛けて家を廃墟にしたこと

があるとか」

「いや、そこは憧れてないから……」

梓は長いことギターをやっているだけあって、キース・ムーンのことは知っていたが、梓が語ったのは奇妙な武勇伝だった。

「……でもさ、ライトが当たらなくても、影になっても、足しか映んなくても……。やっぱり、あたしはドラムが……」

「大好きだ！」と律が言い切る前に、唯は「うん！」と言って律の言葉を遮った。

「やっぱりドラムはりっちゃんだよ！」

「……唯……」

「演奏を始める時に振り返ると、りっちゃんが元気な顔でスティック叩いて合図してくれるでしょ？そしたら何かやるぞー！って気になるんだ！」

「……そうかもな」

唯の言葉を聞いた統夜は穏やかな表情でその言葉を賛同していた。

「……それに、りっちゃんのおかげで私、わかったよ！同じバンドをやっても見える風景も考えることも違うって！みんなにはみんなの場所があつて、全部違うけれど

……でも……！」

「演奏すると1つになるんだよな！」

「そう!!」

「……あたしき、みんなの背中を見て、みんなの音を聞きながらガンガンドラム叩くの……大好きだ!」

こう語る律の表情は幸せそうな表情だった。

統夜たちは互いの顔を見合わせて、それぞれ笑みを浮かべていた。

「……あつ! 私もりっちゃんのおかげで新しい曲が出来ました!」

紬がおずおずと手をあげながらこのような報告をした。

「りっちゃんが私のキーボードを喋らせてくれたから……」

『おいおい、あの時のでだろう? ちゃんとした曲になっているんだろ?』

律が適当に音を鳴らしただけで曲のイメージが出来たと言っていたので、イルバは少し不安そうにしていた。

「どんな曲なんですか?」

そんなイルバとは違って、梓は新曲と聞いてワクワクしていた。

「早く聴きたい!」

唯も新曲にワクワクしていた。

紬は一息つくと、キーボードを奏で、鼻歌でメロディを歌っていた。

(……………いい曲だな……………。何か凄くムギっぼいし、気持ちが悪くなる曲だな……………)

統夜は紬の奏でるメロディを聞いて、心が暖かくなっていた。

「……………いいんじゃないか？」

「これ、ムギちゃん弾き語りしたらどうかな！」

「へ？」

「それ、素敵です！」

唯の提案に紬はキョトンとしていたが梓も唯の提案には賛成だった。

「うん、いいかも！」

「俺もそれには賛成だよ」

梓だけではなく、漣と統夜も唯の提案に賛成だった。

「漣、歌詞頼むな」

この曲の作詞も漣が担当することになった。

「あ、あのね！曲のタイトルだけは考えてあるの……………」

「何？何？」

曲のタイトルはどのようなものになるのか？唯はワクワクしていた。

「……………」
「Honey sweet tea time！」

曲のタイトルを聞いた統夜たちの表情は優しくなっていた。

「やっぱりお茶か」

「だけど……。凄くムギらしくていいと思うよ」

統夜の言葉が嬉しかったのか、紬の表情がぱあつと明るくなっていった。

こうして、滯と紬が協力して作詞をすることになり、統夜も手伝うことになった。

残りのメンバーは、紅茶を飲みながら紬が持ってきたラスクにハチミツを塗って食べていた。

「……蜂蜜色の午後が過ぎてく……。Honey sweet tea time……」

「おっ、いい感じだな！それ2回繰り返したらどうだ？」

「……いいかもー！」

統夜の2回繰り返すというアイデアを採用した滯はそれを記入した。

作詞作業は一見順調に見えたのだが……。

サクサクサクサクサクサク……！

唯と律がわざと音を立ててラスクを食べていた。

「うっ……集中出来ない……」

唯と律のせいで統夜たちの集中力が削がれていった。

「……とりあえず休憩しよっか♪」

紬の一言で休憩することになり、統夜たちはそのままティータイムに参加した。

この日はこれ以上作詞ははかどることはなく、部活は終了した。

この曲が完成するのはもう少し先の話であった……。

……続く。

次回予告

『ほお、学校とはこのようなことをやるんだな。これは楽しいこと間違いなさそうだぜ』

！次回、「修学旅行 前編」。これはあくまでも勉強の一環だぜ！』

第48話 「修学旅行 前編」

季節は流れ、ゴールデンウィークも終了した。

数日後にとある行事を控えた統夜は、部活終わりに番犬所に顔を出していた。

「今日も来ましたね、統夜」

統夜が魔戒剣の浄化を済ませて魔戒剣を鞘に納めると、イレスが声をかけてきた。

「はい、イレス様」

統夜はイレスに深々と頭を下げた。

この日は統夜だけではなく、大輝と戒人も番犬所に顔を出していた。

「……イレス様、実は相談がありました……」

「……相談ですか？」

「ええ、実は来週の頭に修学旅行という行事がありました……」

統夜がイレスに修学旅行参加の許可をもらおうとしたその時だった。

「統夜、行ってこい！」

「ええ!? まだ本題も言っていないのに良いんですか!？」

統夜が本題を切り出す前に大輝が賛成し、そのことに驚いていたのは戒人だった。

「……まあ、戒人も入りましたし、統夜が抜けての人手不足は心配しなくても良さそうですしね……」

新しく戒人が紅の番犬所の魔戒騎士となったことで人手が増え、統夜が修学旅行に行っている間の穴埋めは可能とイレスは判断していた。

「え？え？しゅ、修学旅行って？それに、そんなに長くこの街を空けるって事ですか？」
戒人はこの現状についていけず、困惑していた。

「ああ、そういえば戒人は初めてだもんな。……統夜は学校行事があると、時々このように泊まりがけで出掛けることがあつてな。俺たちはなるべくそういうのには参加させたいと思っているんだよ。これから魔戒騎士としての人生が本格的に始まるんだ。今という時を楽しんでもらいたくてな」

「大輝さん……」

大輝の説明を聞いたところで、戒人はおおよその事情を理解した。

そして、その通りだと思っていた。

自分や大輝はこのような青春を捨てて魔戒騎士をやっているが、統夜は高校生としての青春を送りながら魔戒騎士の仕事をしている。

この経験が人を守るという強い思いに繋がっていく。

このことを理解しているからこそ、イレスも大輝も数日この街を空ける行事も出来る

「だけ参加させようと考えているのである。」

「……事情はわかった。そういうことなら行ってこい！」

「戒人……いいのか？」

「ああ、確かにそんな青春は大切だからな」

「……ありがとう、戒人」

事情を理解した戒人の賛成を得て、統夜は感謝の気持ちを伝えていた。

「……統夜、私も許可します。その修学旅行とやらに行つてきなさい」

「イレス様……ありがとうございます！」

統夜はイレスに深々と頭を下げていた。

「それで、修学旅行とやらで、どこに行くんですか？」

「……2泊3日で京都に行く事になっています」

「京都ですか……。確か、「都の番犬所」の管轄でしたね」

イレスの言う通り、京都一角は「都の番犬所」と呼ばれる管轄だった。

この番犬所がどうして「都の番犬所」なのかは、平安の世にも魔戒騎士は存在し、その時代、ホラー討伐は都と呼ばれた京都を中心に行われていたからである。

「都の番犬所の士官には私から話をおきます。……統夜、どうか時間を見つけて士官に挨拶へ行くのです。そして、もしそこで指令を受けたら、魔戒騎士としての務め

も果たして下さい」

「……わかりました！京都に着いたら都の番犬所へ挨拶に行きます」

「頼みましたよ、統夜。あ、それと、余裕があれば私たちへのお土産もぜひ♪」

「……は、はい……」

ちやつかりお土産まで要求してきたイレズに統夜は苦笑いをしていた。

「統夜、楽しんでこいよ」

「大輝さん、いつも本当にありがとうございます！」

統夜がこのような高校生活を送れるのも、大輝の協力があつてこそなので、統夜は大輝には深く感謝をしていた。

この日は指令はなかったので、統夜は戒人と共に街の見回りを行い、家路についた。

※※※

数日後、修学旅行当日を迎えた。

この日は集合時間が早かったため、エレメントの浄化は出来ずに統夜は学校へと向かった。

学校に到着すると、バスに乗り込み駅へ向かい、現在統夜たちは京都市の最新幹線の中である。

「……イエーイ！旅行旅行♪何かテンション上がるよな！」

修学旅行という大きなイベントだからか、律が喜ぶあまりはしゃいでいた。

(やれやれ……律の奴はしゃいでるな……)

統夜はそんな律の声を聞いて呆れていた。

統夜は唯たち4人と一緒に、6人座れる席に座っており、同じ班になっていた。

統夜たちのクラスに男子は統夜しかおらず、4人1組の班分けて統夜だけ余ってしまったため、さわ子や和の粋な計らいで、唯たちの班に統夜が入る事になった。

ただ、部屋割りに関しては男子が少ないため、クラスは関係なく男子生徒だけ固まっている。

「おい、律。もうちょつと静かにしろよ……。それに、座席の上でのあぐらはやめておけ」

統夜はジト目で律に注意していた。

「……そうだよ、りっちゃん。はしたないよ」

「……唯、お菓子食べながら言っても説得力はないぞ」

唯はお菓子を食べながら律を注意していたんだが、あまりに説得力がなかったので、統夜は呆れていた。

唯はお菓子を食べるだけではなく、後ろの席の子たちにお菓子を分けたりしていた。

「おいおい、お前も大人しくしていろよ……」

統夜は呆れながらも唯を注意するが、唯は聞く耳を持っていなかった。

「……なあなあ！みんな写真撮ろうぜ！」

「おお、いいね！可愛く撮ってもらおうと♪」

唯は小さな鏡を取り出すと、髪をいじるなど身だしなみを整えていた。

写真を撮ろうとして律と唯が席を立ったのだが……。

「ほら、そこ！用もないのに席を勝手に立たないの！」

当然といえば当然なのか、すかさずさわ子が注意をしていた。

「せんせー！秋山さんが写真を撮るって聞きましたーん！」

「んな!?律、お前！」

「まったく、人に責任をなすりつけるなよ……」

律の素早い責任転嫁に統夜は呆れていた。

「何言ってるのよ！早く座りなさい！」

さわ子は再び注意をするのだが……。

「ねえねえ、さわちゃんも一緒に写真撮ろうよ！」

「あのねえ……。私は先生なのよ？」

唯の突拍子のない提案にさわ子は呆れていた。

「ええ？さわちゃん、お願い！」

「行くわけないでしょ！あのねえ……。あなたたちはそうやって私を……」

さわ子は教師という立場から写真には反対だったのだが、結局は唯たちと写真を撮っていた。

その時カメラを担当した統夜はその状況に苦笑いをしていた。

写真撮影が終わり、ようやく律と唯が落ち着いたところで、統夜は大きな欠伸していった。

「……統夜君、眠いの？」

「まあ、相変わらず忙しかったから……。ちよつと眠いんだよ……」

統夜は魔戒騎士として毎日忙しい毎日を送っている。

そのためか、疲れが抜けておらず、統夜は眠そうにしていた。

「……統夜君、京都に着くまでまだ時間あるし、少し休んだらどうかしら？」

「……そうだな、少しだけ休ませてもらおうかな」

「ええ!？」

紬の提案に統夜が乗ったとわかると、漣は何故か驚いていた。

「……? 漣ちゃん、どうしたの?」

「あ、ああ……。いや……」

漣は今統夜に寝られては困ると思っていたが、そうと言うことは出来なかった。

統夜が寝るということは、唯と律が暴走した時は1人で抑えなきゃいけないからだ。

しかし、漣も統夜が毎日忙しい毎日を送っていたことを知っていた。

「……そうだよな。統夜、こう言う時しかゆっくり休めないならさ……」

ゆっくり休めよ。こう言おうとしたのだが……。

「……………」

統夜は既に寝息を立てて眠っていた。

「……統夜君、寝ちゃったみたいね」

「……そうだな」

紬と漣はすやすやと眠る統夜の寝顔を見て笑みを浮かべていた。

それに律と唯も気付いたようで、この2人も笑みを浮かべていた。

『お前ら、あまり騒いで統夜の睡眠を妨害するなよ。統夜もこういう機会がなきゃゆっくり寝れないんだからな』

イルバもイルバで、統夜の体を気遣ってこのようなことを言っていた。

「……ああ、わかってるよ」

漕が代表してこう答えると、残りの3人もウンウンと頷いていた。

その後、隣のブロックである4人が座れる席の窓から富士山が見えてはしゃぐ子も出てきたのだが、唯たちは統夜を起こさない程度に盛り上がっていた。

『京都く京都く』

京都駅到着数分前に起こされた統夜は、新幹線を降りて駅のホームに立っていた。

「んー!!ここが京都かあ……」

先ほどまで眠っていた統夜は大きく伸びをしていた。

『……統夜、リラックスするのもいいが、イレスから言われた任務も忘れるなよ』

「わかってるって。抜け出せそうな時に抜け出して番犬所に挨拶に行くさ」

統夜は都の番犬所に顔を出すと言われたことを忘れてはいなかった。

「……なあなあ、統夜！」

統夜はホームから移動しようとする、律に呼び止められた。

「……ん？どうした、律？」

「……金閣寺やで！」

「は？」

唐突な律の関西弁に統夜は訝しげな表情をしていた。

「統夜も関西弁で喋るゲームに参加するんやで！」

「はあ……。アホくさ……」

統夜は呆れながらその場をから歩き始め、律たちは慌てて追いかけていた。

ホームを出たところで、統夜たちはクラス毎に並ばされていた。

クラスの点呼を行うためである。

点呼が終了すると、統夜たちは駅の外に出ていた。

そこからバスに乗って、次の目的地へ向かうためである。

しかし……。

「ねえねえ、りっちゃん！あれ何？大根みたい！」

唯は京都タワーを指差してはしゃいでいた。

「……ほお、あれが京都タワーか。実物見るのは初めてだな♪」

統夜も統夜で初めての京都に胸を躍らせていた。

《おいおい、統夜。お前もはしやぎ過ぎじゃないのか?》

(だつてこんな機会は滅多にないんだぜ!たまにはいいだろ?)

《やれやれ……。お前もこんなじゃ先が思いやられるぜ……。》

統夜とイルバはこのような会話をテレパシーでかわし、イルバは初めての京都にはしやぐ統夜に呆れていた。

唯たちはバスに乗り込む前に5人で写真を撮っていたのだが、当然さわ子に注意されてしまった。

こうしてバスに乗り込んだ統夜たちを乗せて、バスは走り始めた。

バスが最初に向かった場所は、修学旅行の定番、金閣寺だった。

「りつちやーん!早く早く!こつちこつち!」

ここでも軽音部の5人で行動していた統夜たちだったが、唯がお寺めがけて走りだし

たため、4人は必死に追いかけていた。

こうして統夜たちの目の前に金閣寺の建物が姿を現した。

「うわあ！きれー!!」

「凄いな、ピカピカだ！」

「そうだな、あれ程の金色を見ると、何か牙狼を思い出すよ」

統夜は金色で壮大に佇む金閣寺を見て、鋼牙が身に纏う牙狼の鎧を思い浮かべた。

《おいおい、あれと牙狼を同列に語るなよ……》

金閣寺と牙狼を同列に語る統夜にイルバは呆れていた。

「ねえねえ！あれって、本当に金で出来てるの？……じゃなくて、出来てるん？」

「そうだぜ！……じゃなくて、そうやで！せやけどなあ、少しくらい持つて帰ろう思わな

……いやあ、思うたら、あかんで！お巡りさんに捕まる……捕まってまうんがオチだぜ

……いやあ……えつと……。オチやで」

「まったく、まだそのヘンテコな関西弁続けてたのか？」

《しかも飽きてきたみたいだな》

ただでさえ適当な関西弁が飽きのせいか変になっており、統夜とイルバは呆れていた。

「金閣寺ってな、昭和25年に燃やされてもうて、今あるんは新しく建てられたもんなんやうって。お釈迦様のお骨を祀った舍利殿の金閣は有名やさかい、金閣寺って呼ばれるよいうやったけど、ホンマは鹿苑寺って言うらしいわ♪」

何と絢が完璧なイントネーションの関西弁で、金閣寺の説明をしていた。

「へえ、ムギ、凄いな！関西弁、完璧じゃないか！」

「エへへ……おおきに♪」

統夜に褒められて嬉しかったのか、絢は今日一番の笑顔を見せていた。

唯たちも絢の完璧な関西弁に関心していた。

金閣寺の見学を終えた統夜たちの目に映ったのは、抹茶が飲める店だった。

「コン、抹茶が飲めるよ！確かこれって苦いやつだよねえ」

唯が抹茶を知っているのは意外に思えるが、唯は律や梓と共に様々な部へ体験入部していた。

その時に茶道部にも体験入部しており、その時に飲んだ抹茶が苦いという印象を唯は持っていたため、知っていたのである。

「お菓子もついているみたいだぞ！飲んでくか？」

「それじゃあいつもの放課後と変わらないだろ？」

「まあ、軽音部じゃ抹茶は出なかったし、たまにはいいんじゃないのか？」

統夜は抹茶を飲むことに賛成のようだった。

「ほら、統夜もこう言ってるんだから

行こうぜ！」

こうして店の中に入ると、お茶とお菓子を人数分注文し、統夜たちの前に抹茶とお茶菓子が運ばれてきた。

「おお！じゃあ、飲んでみるかな」

律はお菓子を食べる前にお茶を飲もうとしていた。

「律、ちよつと待て」

統夜がいきなり飲むのを制止してきたので、律は首を傾げていた。

「?どうした、統夜?」

「お茶会とかで抹茶を飲む時はな、お菓子を先に食べるといいんだよ。その方が抹茶の苦みが引き立つって言われてるんだ」

統夜は何故か抹茶についての知識があり、律に抹茶の説明をしていた。

「まあ、統夜君、詳しいのね♪」

「まあね、こういうことも知識として知ってるって訳だよ」

「へえ……」

「へえ、じゃないだろ? 律も少しは、そういう上品な作法を勉強したらどうだ?」

「そうだよ、りっちゃん。いじ汚いよ、りっちゃん。卑しいよ、お粗末だよ……」

「お前が言うな」

何故か唯がここまで言っていたので、統夜と律が同時にツツコミを入れていた。

抹茶とお菓子を堪能すると、ちょうどバスの移動時間となり、統夜たちは再びバスへ乗り込み、バスが走り始めた。

続いて統夜たちが訪れた場所は……。

「……北野……天満宮？」

「ここもまた修学旅行でよく行く場所の1つである北野天満宮であった。

「ここって有名なところなのか？」

「さあ、知らなーい」

「神社なんて学校の近くにもあるのになあ」

「きつと、ここに大仏がいるんだよ！」

「ねえよ」

唯の突拍子のない発想に統夜と律がツツコミを入れていた。

「この神様は学問の利益で知られてるの。受験生には有名な神様なのよ」

和の説明通り、北野天満宮には、藤原道真という人物が祀られていて、学問の神様として崇められている。

そのため、受験生が良くここを訪れるということとで有名になった場所である。

「この宮のあちこちに牛がいるだろ？この牛の頭をこうやって撫でるとな、頭が良くなるって言われているみたいだぜ」

統夜が和に代わって補足説明をして、実際に牛の像の頭を撫でてみた。

「へえ、統夜君って意外とこういう雑学は詳しいのね」

「意外って……。まあ、理数系はダメダメだけど、こういうのを調べるのって好きなんだよね」

統夜は理数系の成績は壊滅的ではあるが、その分この手の雑学には詳しいのである。

牛の頭を撫でると頭が良くなると知った唯と律はこれでもかというくらい頭を撫でまくっていた。

「おいおい……いくらなんでも撫で過ぎだろ……」

《これは利益どころか天罰がくだりそうだな》

統夜とイルバはこれでもかと牛の頭を撫でる唯と律に呆れていた。

すると……。

「いらい！」

こうさわ子に注意されると、統夜たち5人はまとめてさわ子の説教を受けてしまった。

（つか、マジで天罰がくだったな……。しかも、何で俺まで怒られてるんだよ）

《まあ、連帯責任って奴だ。諦めるんだな》

（それはわかつてるけど、さすがに解せんぞ、これは……）

統夜とイルバがこのようにテレパシーで会話をしていると……。

「ちよつと月影君！聞いているの!?!」

「はっ、はいいい！」

統夜はこう反応されると、さらにさわ子から説教を受けていた。

さわ子のありがたい説教が終わり、統夜たちは境内を歩いていると……。

「あつ、りつちゃん！絵馬だよ！絵馬！」

「絵馬かあ。よし、唯。これも何かの記念だ！書いてこうぜ！」

「そうだね！神様に私たちの願いを届けておこうよ！」

「おお！絵馬絵馬〜♪」

「牛っ、牛〜♪」

唯と律は上機嫌な状態で絵馬の書所へと向かっていった。

「おいおい……」

「まったく、あいつらは……」

濡と統夜ははしやぐ唯と律に呆れていた。

「……方向も同じだし、俺はお守りでも買っていないのかな」

統夜はそう言うのと唯と律が向かった方角と同じ方角に向かつて歩き出した。

濡と紬はそれと同時に走り出し、唯と律を追いかけていた。

ちょうど唯と律が絵馬の書所へ向かった頃、さわ子は……。

「あの、この縁結びのお守りを一つ……」

統夜が向かっているお守り売り場で縁結びのお守りを買っていた。

「はい、600円です」

代金を支払い、お守りを受け取ると、さわ子は縁結びのお守りを大事そうに抱えていた。

すると……。

「神様〜！天神様〜！」

「叶えてくださーい！」

大きな声をあげながら唯、律、漣、紬の4人が走り去っていった。

「……」

さわ子がそんな4人をスルーしたその時だった。

「……先生、こんな所で何してるんすか？」

お守りを買いに来た統夜がさわ子を見つけたので、声をかけた。

「へっ!?!と、統夜君!?!あなた、唯ちゃんたちと一緒にやなかったの!?!」

さわ子はいきなり統夜が登場したことに驚き、先ほど買ったお守りを咄嗟に隠していた。

「どうせ方向は一緒だったんで、記念にお守りを買おうかと思って」

「そ、そう……」

「ちなみに先生は何のお守りを……」

買ったんですか? こう核心を突いた話をしようとしたその時だった。

「叶うかなあ!」

「叶うといいねえ!」

「叶えてくださーい！」

絵馬を書きに行つたと思われた4人が何故か先ほど来た道に戻るかのように走り去つていった。

「……」

統夜とさわ子はそんな4人をスルーしながら黙つていた。

「と、ところで統夜君は何のお守りを買うの？」

統夜に縁結びのお守りを買つたと知られたくないのか、さわ子はこのように話を振つて誤魔化そうとしていた。

「俺ですか？俺は……」

何のお守りを買うか答えようとしたその時だつた。

「あつ、お賽錢忘れた〜！」

「何い!?!じゃあもう1度だ！」

先ほど絵馬を書かずにお参りをしていた4人が再び戻つてきた。

さすがのさわ子もこれ以上は耐えられなかつたようで……。

「ちよつと何よあなたたち！それはわざとなの!？」

さわ子は4人を捕まえると、泣きながらこのように訴えかけていた。

「さ、さわちゃん、誤解だつてば！」

「そうです！ 私たち、絵馬に書いたお願いを……」

唯たちはお参りの前に既に絵馬を書いており、それからお参りを行ったのであった。

「そうだよ！ 大切な絵馬に書いたお願いを念押しに……」

「適当なこと言ってもダメ！ こっち来なさい！」

さわ子は統夜たちを連れていくと、再び説教を始めた。

（ちよつと待て！ つか今回は俺関係なくね?!）

説教に巻き込まれるという理不尽に、統夜は納得していなかった。

《まあ、今日はそれだけ不幸でことで諦めるんだな》

イルバにとっては完全に他人事なので、カタカタと音を鳴らしながら笑っていた。

（お前なあ……!）

統夜はそんなイルバに呆れるが、話を聞いていないとさらに話がひどくなると思い、

大人しく話を聞いていた。

こうして説教が終わったところで、統夜はどうにかお守りを購入し、自由時間が終了

した。

この日見て回るスポットは全て見て回ったので、統夜たちを乗せたバスが向かったの

は、この修学旅行で泊まるホテルだった。



「……はあ、やっと解放された……」

統夜はホテルに到着し、自分の部屋に入るとすぐに寝転がっていた。

《おいおい、呑気に寝てる場合じゃないだろう？ 確かこの後少し時間があるんだからその隙に番犬所へ挨拶に行ったらどうだ？》

部屋には一緒に寝泊まりする3人もいたので、イルバはテレパシーで統夜と話をしていた。

(わかってるって。その前に少しでも休ませてくれよ……)

統夜もすぐにでも番犬所に向かいたいと思っていたが、唯たちに散々振り回されてしまったため、疲労がたまっていたのである。

「……なあ、月影。ずいぶんと疲れてるな」

この学年の男子の1人で、眼鏡をかけた細い男が統夜に話しかけてきた。

「まあな。今日は軽音部のみんなと回ったんだけど、散々振り回されてな」

「ふーん、何か羨ましいいけどな」

「こう言ってきたのは、少しぼっちゃり気味の男だった。」

「そんなことはないと思うけどな。お前らだってクラスの男子は自分だけだろ？」

「まあ、そりやそうなんだけどさ」

「あんまり女子と絡みがないからさ」

「ぼっちゃり気味の男の言葉に眼鏡の男がウンウンと頷いていた。」

「まあ、俺は別に月影が羨ましいとは思わなかったけどな。俺は彼女いるし」

「統夜を含む4人の中で、一番容姿が整っている男がこう語っていた。」

「くー！羨ましい!!」

「アハハ……」

「統夜は同い年の男子と少し話をするので、少しでも気持ちをリラックスさせることが出来た。」

「さてと……」

「少しだけ疲れが取れたところで、統夜はゆっくりと起き上がり、近くに置いてあった魔法衣を羽織った。」

「……あれ？月影、どっか行くの？」

「ああ、ちよつとな」

「どこに行くんだ？」

「悪い、ちよつとそれは……」

統夜は外に出るとははつきりと言わなかった。

「悪いけど、俺が出ることは黙っててくれないか？後で何か奢るからさー」

「まあ、よくわからないけど、そしたら後で何か奢ってくれよ！」

容姿端麗の男が統夜の外出を了承していた。

「……ありがとなーとりあえず夕食前には1度戻るからー」

統夜はホテルの部屋を後にすると、誰にも見つからないようにホテルを出て行った。

ホテルを出ると、イルバのナビゲーションを頼りに、都の番犬所へと向かった。

番犬所の入口はホテルから15分とかわからずに到着した。

そこはある道の行き止まりだったのだが、統夜が明けるイルバをかざすと、番犬所への扉が開かれ、統夜は番犬所の中に入った。

しばらく道なき道を歩いていると、神官の間に到着した。

この都の番犬所は統夜の所属の紅の番犬所とは神官の間の雰囲気はだいぶ違っていた。

「……お主があの小娘の言っておったソロか……」

統夜を見つけてこう言っていたのは、神官の間の中央にある高い椅子に座っている白塗りのおかつば頭の少女だった。

身に纏っている装束はまるで平安時代を感じさせるものであり、後頭部には狐らしきお面をつけていた。

「……はい。俺が紅の番犬所から来ました白銀騎士奏狼……月影統夜です」

統夜は深々と頭を下げて、自らの素性を名乗った。

「まあ、お主のことは小娘から聞いておるが、本当に小僧なのじゃな。このような小僧がよくあのグオルブを討滅出来たものじゃ」

穏やかな性格であるイレスとは異なり、この神官の言葉には少し棘があり、統夜は少しムツとしていた。

「……紹介が遅れたの。私は稲荷（いなり）。この都の番犬所の神官じゃよ」

「稲荷様……ですか？」

『ほお、お前さんがあの稲荷か。噂では同じ容姿の奴が3人いたと聞いたことがあるが』
「フン、それは私のご先祖じゃ」

稲荷が答えた通り、平安時代からこの番犬所は存在しているみたいなのだが、当時は目の前の稲荷と同じ容姿の神官が3人いて、その3人がこの番犬所を治めていたようである。

「私のことは良いのじゃ。お主、学校とかいうくだらぬ所へ行っておるようじゃの。そんなんでもよく魔戒騎士と名乗れるものじゃ」

稲荷は統夜が学校へ行きながら魔戒騎士の仕事をしていることを良しと思っていなかった。

そのためにこのような棘がある言葉になっていたのだが、統夜はその言葉に苛立ちを覚えていた。

「稲荷様！お言葉ですが、俺が学校へ行きながら使命を果たせるのはイレス様のおかげなのです」

「そうらしいな。あの小娘もGRESの娘のくせにくだらぬ事に興味を持ちおって……」
「……」

統夜は自分だけではなく、イレスにまで暴言を吐いていたので、これ以上苛立ちを抑えられなかった。

「挨拶は済ませました。俺はこれで失礼します」

統夜はこれ以上目の前の神官と話をしたくないと思い、番犬所を後にしようとした。

「またぬか！ソロよ」

稲荷は番犬所を後にしようとする統夜を引き止めていた。

「お主、あの小娘に言われておるのだろう？指令があれば受けるようにと」

「……ということはおもしかして……」

「うむ、私が許可する。お主の力を見せてもらうために1つ指令を受けてもらうぞ」
そう稲荷が答えると、統夜の手に赤の指令書が置かれていた。

統夜はいきなり自分の手元に指令書が来たので驚いていた。

だが、統夜はすぐ魔導ライターを取り出すと、魔導火を放って指令書を燃やした。

すると、魔戒語で書かれた文章が浮かび上がり、統夜がそれを音読すると、消滅した。

「……わかりました。ホラーを早急に見つけ、討滅します」

「うむ、お主の実力、しかと見せてもらうぞ」

統夜は稲荷に一礼すると、番犬所を後にした。

「……」

番犬所を出て、来た道に戻っていたのだが、統夜は少し不機嫌そうだった。

『統夜、ずいぶんと不機嫌そうだな』

「まあ、そりゃあな。俺のことを馬鹿にするならともかく、イレス様まで馬鹿にするなんて……」

「……」。しかもイレス様のことを小娘って……」

統夜は自分よりもイレスに向けて吐いた言葉が許せなかったのである。

『番犬所の神官などあんなもんだ。むしろ、イレスや翡翠の番犬所のモデルが優しすぎるくらいだぜ。それに、あの稲荷って奴はイレスより長い時を生きてるらしいからな。』

小娘とも呼びたくなるのもわかるぜ』

イルバの言う通り、番犬所の神官は厳しい人が多いというのも事実であり、イレスやロデルのような神官は希少なのである。

「イルバ、とりあえず1度ホテルに戻る。夕食が終わったらホラー捜索に行く予定だから、その間、ホラーの気配を探ってくれないか？」

『わかった。どうやらそれがいいみたいだしな』

あまり長いこといないとなると、口止めを頼んでいてもホテルを抜け出したことがバレそうだったので、統夜は1度ホテルへ戻ることにした。

イルバは夕食後にスムーズにホラーを探せるよう、ホラーの気配を探っていた。

統夜が部屋に戻ると、ちょうど夕食の時間になるところだったので、統夜は急いでジャージに着替え、食事を行う部屋へ向かった。

統夜は唯たちの隣になり、豪華な食事が統夜たちの前に並べられた。

こうして夕食の時間が始まったのだが……。

「……あれ？あんなたち、もう食べないの？もったいない」

統夜の向かいに座っていたクラスメイトが唯と律の2人が食事にあまり手をつけていないことに気付いてこう聞いていた。

「いや……ちよつと休憩……うぶっ」

「のこ……残さないで食べるって……うぶっ」

唯と律は何故か満腹で、苦しそうにしていた。

「ムギ、2人はもう腹いっぱいみたいだけど、何かあったのか？」

「あのね、実は……」

「唯と律の奴、もうすぐご飯だって言うのにおやつ食べてたんだよ」

「そうなの。ゲームで遊んでただけ……」

「なるほどな……」

澤と紬が事情を説明したことで事情を理解した統夜は苦笑いをしていた。

《やれやれ……。本当に子供だな、あの2人は……》

イルバも話を聞いていたので、おやつを食べて夕食を食べられない唯と律に呆れていた。
た。

「……ったく、しょうがねえな……。唯、律。少しだけなら食ってやるからちゃんと残りは全部食えよ」

統夜は唯と律のところからおかずなどを持っていった。

「やーくん、ありがとうー!!」

「統夜！助かったよ！」

それだけ満腹だったのか、統夜の助け舟に唯と律は感謝していた。

「おいおい、さすがに甘やかし過ぎじゃないのか？」

「まあ、今日は修学旅行だし、たまにはいいんじゃないのか？」

統夜はそう答えると、唯と律のところから持ってきたおかずなどを頼張っていた。

唯と律の2人は、統夜のおかげでどうにか夕食を残さず食べることが出来た。

夕食が終わると、交代でのお風呂の時間となった。

まず最初は女子の入浴時間であるのだが、人数が多いので、3回に分けて女子の入浴となり、男子は女子が全員入浴した後に入浴となっている。

統夜は再び同室の男子生徒に外へ抜け出すことへの口止めを頼み、ホテルを出た。

「……イルバ、ホラーはどうだ？」

『ああ、ホラーの気配を感じるぜ。統夜、運がいいな。ホラーはここから近いぞ』

イルバは自分たちが泊まっているホテルの近くにホラーがいることを突き止めた。

「よし、それならさっさとホラーを倒すぞ。風呂の時間までには戻りたいからな」

統夜は風呂の時間に間に合わせてのんびりと風呂に入るために、イルバの示す場所へ急行した。

※※※

「……イルバ、ここか？」

イルバのナビゲーションを頼りに統夜がたどり着いた場所は、現在は使われていない神社だった。

使われなくなっけてっこう経っているのか、社はボロボロになっており、古い社だということがわかる。

『……どうやら、目の前にいるのがそうみたいだぜ』

統夜はふと前を見ると、挙動不審な動きをしている男を発見した。

「よし、さっさと片付けるか」

統夜はそう言いながら魔導ライターを取り出すと、男に近付いていった。

「……おい」

「？」

統夜の呼びかけに反応した男が統夜の方を向いたのと同時に統夜は魔導火を放ち、男の目を照らしていた。

すると、男の瞳から不気味な文字のようなものが浮かび上がり、この男がホラーだという証だった。

「貴様……魔戒騎士か」

男は統夜と距離をとると、統夜を睨みつけていた。

「ああ、さつそくで悪いが、お前を斬る」

統夜は魔戒剣を抜くと、ホラーを睨みつけながら構えていた。

男は統夜と違つて丸腰の状態だったが、臆することなく統夜に向かつていった。

「……」

統夜はそんな男の動きをじつくりと見極めていた。

その効果があつてか、統夜は男の攻撃を軽々とかわし、蹴りによる一撃を放つて男を吹き飛ばした。

「くっ……おのれ……！魔戒騎士！」

統夜の蹴りを受けて本気になったのか、男の体に変化し、醜悪な仁王像のような姿になつていた。

『……統夜！そいつは閻閻（エンゴウ）。そのデカイ凶体から繰り出される攻撃に注意しろ！』

イルバの言う通り、このホラー、エンゴウは、醜悪な仁王像のような姿をしており、そ

のパワーも強力なホラーであった。

「……ああ、わかったー！」

ホラーの特徴がわかったところで、統夜はホラーを睨みつけた。

エンゴウは統夜めがけて突撃し、強靱な腕を活かした強烈なパンチを放つが、統夜は軽々とエンゴウのパンチをかわしていた。

すかさず統夜は魔戒剣を一閃するが、その体にダメージを与えることが出来なかった。

「くっ……！ 凶体がデカいからか硬いな……！」

エンゴウが仁王像のような姿をしているからか、その体も強固なものだった。

統夜は1度エンゴウと距離をとるが、エンゴウは頭頂部にある布のような物を統夜めがけて放った。

「……！」

統夜は魔戒剣を3度、4度と一閃し、布のような物を切り裂くことで、攻撃を防いだ。

「……は一気に決着をつけるか……。……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

エンゴウに向かってこう宣言した統夜は、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれた統夜だったが、エンゴウはそのタイミングで布のよう

な物を放つて、統夜の体を縛り付けようとした。

しかし、統夜が奏狼の鎧を身に纏った瞬間、統夜の体に巻き付かれた布のような物は一気に消滅し、白銀の鎧がエンゴウの眼前に姿を現していた。

「きつ……！……！貴様は！まさか噂のソロとかいうやつか！こんな所に現れるとは！」

「へえ、京都のホラーにも俺の名前が広まつてるんだな」

統夜は京都のホラーまでが自分のことを知っていることに驚いていた。

「え、ええい！相手が誰だろうと関係ない！貴様もこの俺が喰らってやる！」

エンゴウは両手から炎のようなものを集め、それを統夜目掛けて放った。

「……ふっ」

統夜はエンゴウが放った炎の攻撃をかわすことはなく、受け止めていた。

「……なっ?!効いていないだど?!」

『おいおい、そんな炎で奏狼の鎧を焼き尽くせると思っているのかよ』

奏狼の鎧を身に纏っている統夜は炎の攻撃を受けても平然としていた。

「……はあっ！」

統夜はそんな炎を自らの力で消し去ると、エンゴウ目掛けて突撃し、皇輝剣を一閃した。

その一撃でエンゴウの体は真っ二つに斬り裂かれた。

斬り裂かれたエンゴウは断末魔をあげながら消滅した。

エンゴウを討滅したことを確認した統夜は、鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「さて、これでお仕事は完了だな」

『ああ、さつさと戻るとしよう。バレたら面倒なことになるからな』

「そうだな」

エンゴウを討滅した統夜は急ぎホテルへと戻った。

ホテルへ戻ってきた統夜は誰にも見つかからないように自分の部屋へ戻り、魔法衣を脱ぐと、制服からジャージへと着替えた。

統夜は出かけたことを黙ってくれた3人にお礼としてホテルの売店に売っている高なお菓子を奢ることになり、売店へと向かった。

すると……。

「あつ、やーくんだ!」

売店を目指すためロビーを歩いていると、唯が統夜を発見し、統夜に声をかけていた。

「……お、唯。1人か?」

「うん!お風呂上がりにはジュースでも買おうかなって思ってた」

「そっか」

統夜はふと唯を見たのだが、風呂上がりだったのか、顔が火照っており、頬が朱色に染まっていた。

さらに少し暑いのかジャージから少しTシャツが見えており、それが少し色っぽく見えた。

「……………／／／／／」

それに反応した統夜は顔を真っ赤にして、唯から視線を背けていた。

「……………？やーくん？」

「な、何でもない！それよりも俺は今から売店に行くんだけど、お前も一緒に行くか？」
「うん！」

統夜は唯と一緒に売店へ向かい、一緒に買い物することになった。

統夜は売店に入るなり、奢ることになっていた高いお菓子を手に取った。

「あー！やーくん！それ買うの？美味しそー」

唯は統夜の取ったお菓子里に即座に反応していた。

「ああ、ちよつと一緒に部屋の奴らにお札に奢ることになってな」

「お札？」

「ああ、それは明日の自由行動の時に話すよ」

「ふーん……………。わかった」

とりあえず改めて話す約束をしたら唯はこれ以上は聞かなかつた。

「……唯、お前らもこれ食べるか?」

「ええ!?これ高いのに悪いよ!」

「いいよ、別にどうせ買うんだから1つも2つも変わらんし」

統夜は修学旅行ということもあつて、普段より多めのお金を財布に入れていた。

そのため、この買物物は苦ではないようである。

「やーくん、ありがとう!」

「お、おう……// //」

唯の満面の笑みが風呂上がり効果で色つぽかつたのか、統夜は再び頬を赤らめていた。

(ほお、統夜の奴、照れてやがるな。これはなかなか、いい傾向になつて来たな……。最近はみんなも少しは意識しているみたいだな)

バレンタイン以降、統夜は相変わらずの鈍感であつたが、唯たちを女性として意識するようになり、このように照れることも度々あつたのである。

イルバはこれを良い傾向と喜んでいた。

統夜は買う予定だった高いお菓子を2つ購入し、ついでに唯たちの飲むジュースと自分たちの飲むジュースも購入していた。

売店で買い物を買った。統夜はロビーで唯と別れると、自分の部屋に戻った。

部屋に戻ると、買ってきたお菓子とジュースを堪能し、しばらくすると入浴時間になったので、統夜たちは大浴場へと向かった。

風呂に入るのは、統夜たち4人だけだったので、ほとんど貸し切り状態だった。

今回付き添いの教師は全員女性だったので、今回風呂に入るのは統夜たちだけなのである。

統夜はほぼ貸し切りの大浴場を心ゆくまで堪能していた。

風呂からあがると、統夜は売店へ向かい、今度は人数分のアイスを購入した。

統夜は部屋に戻ると、3人にアイスを配り、アイスを食べながら普段あまり行っていない男同士の会話を楽しんでいた。

(……今思えば女子とばかり話してたからな……。たまにはこう男子とじっくり話をするのも悪くはないかな)

統夜は魔戒騎士でも魔戒法師でもない普通の同世代の男と話すのは久しぶりだったので、貴重な機会として会話を楽しんでいた。

しばらく話していると、あつと言う間に就寝時間となった。

統夜たちは大人しく布団にもぐって眠りにつこうとしたのだが……。

——アハハハ!!

誰かが騒いでいる声が聞こえてきた。

そのせいで、統夜たちはなかなか眠りにつくことが出来なかった。

「何か騒がしいな……」

「この声……あいつら……!」

統夜は騒いでいるのが唯たちであるとすぐにわかり、呆れていた。

しばらくすると、「早く寝なさい!」とさわ子の怒鳴り声が聞こえて来たら大人しくなった。

しかし、数分も経たないうちに再び唯たちが騒ぎ始めていた。

統夜は携帯を取り出すと、律に電話をかけた。

『……ん? どうした、統夜?』

「お前らうるさ過ぎ! おかげで寝れないだろうが! さっさと寝ろ!!」

統夜はそれだけ言って電話を切った。

「やれやれ……」

これでようやく落ち着ける。そう思って再び眠りにつくこうとするのだが、唯たちはまだ騒いでいた。

統夜は我慢してどうにか眠りについたのであった。

……続く。

——次回予告——

『ほお、京都の街はなかなか風情のある街じゃないか。見てるだけでも楽しいものだけ！次回、「修学旅行 後編」何事も問題なく終わればいいかな』

第49話 「修学旅行 後編」

修学旅行2日目を迎えた。

統夜は起床時間よりも2時間早く起床し、着替えを済ませるとホテルを出て行った。昨日ホラーを討伐したことを番犬所に報告するためである。

統夜は番犬所への移動中に携帯を見ると、唯と律からメールが来ていた。

メールには「しゃれこうべ」しか書かれておらず、内容がよくわからないメールになっていた。

統夜は番犬所の中に入ると、そのまま神官の間へと移動した。

「……ソロか。何じゃ、こんな朝早くから……」

早朝に統夜が訪れたことに稲荷はげんなりとしていた。

「……一応昨日のホラー討伐の報告をしとこうと思いましたが」

「どうやらそのようじゃのお。どうやらお主の実力は認めざるを得ないようじゃ」

昨日は色々言っていた稲荷だが、統夜の魔戒騎士としての実力は認めざるを得なかった。

「あつ、ありがとうございます……」

「お主が昨日ホラーを討伐してくれたおかげでこの管轄の騎士が楽が出来たからのお。今日1日はゆつくりと過ごすが良い」

統夜は稲荷がここまで素直な言葉を言っていることに驚いていた。
しかし……。

「はい、そうさせてもらいます」

統夜は稲荷の言葉を素直に受け止めることにした。

「フン、あの小娘にもよろしく言っておいてくれ」

「わかりました」

統夜は稲荷に一礼すると、番犬所を後にして、ホテルへと戻った。

ホテルへと戻った統夜は自分の部屋には戻らず、ホテルの裏の人目が少ない場所ですばらく素振りの稽古を行っていた。

素振りの稽古を終えるとちようど起床時間となっていた。

統夜もそれに合わせて洗顔等を済ませ、クラス毎に分かれて朝食を取った。

統夜はバランスのとれた朝食を取るのには久しぶりだったので、朝食をじっくりと堪能していた。

そして、統夜たちはクラス毎にホテルの入り口に集合していた。

この後は班ごとの自由行動なのだが、その前に点呼を行うためである。

点呼が終わったところで、班ごとに分かれ、自由行動が始まった。

「えっと……。私たちの班は嵐山なんだけど……」

「それじゃあ、行きはタクシーにしたらどうかかな？」

「その方がいいかもな。時間が稼げるし」

統夜たちの班は嵐山を回る事になってはいるのだが、紬がタクシーでの移動を提案したので、統夜がそれを了承していた。

統夜はタクシーを探すために周囲を見回したのだが……。

「よし……。まずはここだなー」

唯と律が楽器屋の前にはいたのである。

「何で京都に来てまで楽器屋なんだよ!!」

統夜と漣が反応し、ツツコミを入れていた。

「ほらー早く行くぞー」

漣は律を引つ張り出そうとするが、律は抵抗していた。

「ああ！漣のいけずうー」

「地元に戻ってから行けばいいだろー」

「漣の言う通りだぞ！それに、パツと見品揃えは桜ヶ丘の方が良さそうだし」

「それはそうだけどさ、ちよつとくらいいいじゃんー」

「まったたく……。置いていくからな！」

滯は楽器屋に行こうとしている唯と律を置いて行こうと言うのだが……。

「あつ！ここ、レフティモデルが置いてあるのか」

律のこの一言で滯は楽器屋に直行し、レフティ楽器をジツと見つめていた。

「はあ……。何でこうなるかなあ……」

「まあまあ」

滯まで楽器屋を見ていたので統夜はガクツと肩を落とすが、紬が統夜の肩にポンと手を乗せてフオローしていた。

『やれやれ。こんなんじゃ先が思いやられるな』

イルバもいきなり寄り道をしている統夜たちに呆れていた。

滯がレフティ楽器を見て満足したところで、タクシーを捕まえて嵐山へと向かった。

※※※

「おお！ここが嵐山かあ！」

タクシーから降りるなり、律は周囲を見回していた。

「お店がいっぱいだねえ！」

「人もいっぱいだあ！」

唯と律は周囲の店や人の賑わいに胸を躍らせていた。

「確か、最初は渡月橋から見るんだったよな？」

「ああ、まずはそこから……」

統夜は濡に確認を取ったところで渡月橋から見て回ろうとしたのだが……。

「おお！唯！すっげえぞ！モンキーパークだつて！」

「ええ!?お猿!?お猿がいの!?!」

唯と律は渡月橋の先にあるモンキーパークという建物が気になっていた。

すると唯と律は見て回るはずの渡月橋をスルーし、モンキーパークに向かって走り始めていた。

「だから何で京都に来てお猿なんだよ！唯！律！」

「おいお前ら！勝手にコース変えるなって！待ってくれよ！」

濡、統夜、紬の3人は唯と律を必死に追いかけていた。

『やれやれ……またか……。こんなんでも本当に大丈夫なのか?』

イルバは呆れるを通り越して、これから予定通り事を進められるのか不安になっていた。

唯と律が向かっているモンキーパークは渡月橋を越えた山の上にあった。

「着いたあ！おお、絶景かなあ！」

「すごい！これ、全部京都？」

その場所からは京都の街が一望でき、かなりの絶景であった。

「こんなにいい景色が見られるなんてな」

「まあ、かなり予定は狂ったけど、これはこれで良かったかもな」

濡と統夜も絶景に見入っていた。

『やれやれ……。まあ、結果的にこんな景色を見つけるとはな。そこは軽音部らしいと言えばいいのか』

イルバはこのグダグダな感じこそが軽音部らしいと感じていた。

「……ねえねえ、濡ちゃん、統夜君。あの休憩場の中で餌をあげられるみたいなんだけど……」

紬は休憩場で行える猿の餌やりに興味を持っていた。

そこで、統夜たちは休憩場の中に入り、実際に餌やりを行うことにした。

まずは紬が餌やりを行おうとしたが……。

「ウキッ!」

「……………あ!」

餌に手を伸ばす猿が怖かったのか、紬は手を引つ込めてしまった。

「怖がらなくてもいいよ!ほら!」

今度は唯が手を伸ばして猿に餌をやろうとした。

「ウキッ♪」

猿は唯の手のひらから餌を取ると、餌を食べていた。

「ね?」

「う、うん……………」

唯の二本を見た紬は勇気を出して再び餌やりをやってみることにした。

「ウキッ♪」

今度は上手く猿に餌を与えることが出来た。

「ああ……………♪出来た……………♪」

餌やりに成功し、紬は満面の笑みを浮かべていた。

統夜は椅子に座りながらそんな紬を見守っており、猿の餌やりに成功して喜ぶ紬を見て笑みを浮かべていた。

こうして餌やりを堪能したところで、モンキーパークを後にした。

「はあ、お猿満喫したねえ♪」

「楽しかったなあ♪」

しばらく歩いてみると、お土産売り場を発見し、足を止めた。

「……ねえねえ、あずにゃんに何かお土産を買っていかない？」

「そうだな、梓は1人で留守番だし」

「俺はイレス様で大輝さんに戒人に……。お土産を買わなきゃいけない人がたくさんいるからな」

唯たちが後輩である梓のためにお土産を買うことを決めていたが、統夜はそれとは別にこの修学旅行を許可してくれたイレス、大輝、戒人にもお土産を買う予定だった。

「ねえねえ、だったら京都っぼいものがないんじゃない？」

「京都っぼいもの？」

京都っぼいものとは何かと統夜たちは考えていた。

色々な案は出たのだが、1番京都らしいのは八つ橋ではないか？という結論に至った。

それを参考に統夜たちは梓やイレスたちのお土産を始め、それぞれの家族へのお土産なども探していた。

しばらく買い物を続け、他の見るべきポイントも見学した統夜たちは現在とはあるカ

フエで休憩していた。

「いやあ、いっぱい見て回ったねえ！」

「本当はもつと名所を見て回りたいかったけどな」

最初から見学プランが大幅に狂ってしまったため、見る予定だった場所が見れないなどがあつた。

そのため、漣はもつと名所が見たかつたと残念そうにしていた。

「でも、今日は何か財布の中がいっぱいなんだよなあ♪ほら、こんなに買っちゃつた♪」
律は修学旅行のため財布にかなりのお金が入つていたため、自分の欲しいものを色々購入していた。

「でも、何でこんなにお金が……」

「家族へのお土産代だろ？」

「はっ！」

漣の言葉に唯と律が反応していた。

「おいおい、忘れてたのかよ……」

唯と律は家族へのお土産を忘れていたようで、それを知つた統夜は呆れていた。

カフェで休憩を終えた統夜たちは唯と律のために再びお土産を見て回り、2人は家族へのお土産をどうにか購入することが出来た。

その後は見て回る予定だった場所を見て回り、気が付けば夕方になっていた。

「さて、そろそろ時間だし、ホテルに戻ろうか」

「帰りは電車にしましよ♪」

「そうだな。行きも帰りもタクシーじゃつまらないしな」

「ようし、駅はこつちだ！ついて来い！」

律は自信满满々とある方向を指差し、歩き始めた。

「大丈夫かなあ……」

統夜はそんな律に不安を感じながらも律について行つて歩き始めた。

しかし、歩き始めてから10分後……。

「……あれ？」

たどり着いたのは駅ではなく、閑静な住宅街だった。

「迷ったのか？」

「迷ってない！」

道に迷っているのは明白だが、律は道に迷っているとは認めようとしなかった。

『おいおい、あれだけ地図見てたのに迷ったのかよ？』

「今確認してるんだよ」

律は地図を凝視し、駅までの道を確認していた。

そんな中、唯は……。

「アハハハ！くすぐったいよー！」

とある家で飼われている犬と戯れていた。

「……やれやれ……」

統夜はマイペース過ぎる唯に呆れていた。

「……律、その地図を見せてくれないか？」

「あつ、ああ」

統夜は律から地図を受け取ると、地図をじっくりと凝視していた。

「……うーん……。ここがこうなっていて、ここがこうだから……」

統夜は初めての京都の地図に悪戦苦闘していた。

「……統夜、大丈夫か？」

「慣れない街だから、どうもな。だけど、だいたいの道はわかったよ」

「統夜君、本当なの？」

「ああ、こつちだ」

統夜は駅に向かって歩きだすと、唯たちも統夜のナビゲーションを信じてついていく

ことにした。

しかし、さらに10分後……。

「……すまん、迷った」

「……何てこった……」

まさか統夜が道に迷うとは思っていなかったもので、滯は啞然としていた。

「ここがどこかわかればいいんだけど……」

「ちよつと待つてろ！今確認するから！」

統夜は駅までの道を調べるために地図を凝視していた。

そんな中……。

「あーそうだー！」

唯は何かを思い出すと、携帯を取り出して誰かに電話をかけ始めた。

「おおー！」

「なるほど、その手があつたか！」

今は非常事態なので、電話をかけるといふのは良案だった。

しかし、電話をかけるまでは良かったのだが……。

「……あつ、もしもしあずにゃん？私たち、迷子になっちゃったんだよねえ」

唯は何故かさわ子ではなく梓に電話していたのである。

「梓に電話してどうするんだよ！」

「はっ！そっか！」

唯は梓に電話しても意味がないと気付いて慌てて電話を切った。

電話を切ると、桜高の制服を着た4人組が統夜たちの近くを歩いていると、統夜たちを発見した。

「唯ー!! 漣ー!!」

唯と漣を呼んでいたのは和であり、統夜たちの近くを歩いていたのは和たちの班だった。

「あ、和ちゃん!」

「助かったー!!」

道に迷った状況に現れた救世主に律は喜んで和に駆け寄るのだが……。

「ねえ、駅へはどう行ったらいいのかしら?」

どうやら和たちも道に迷っていたようで、律はまるでドリフのようなヘッドスライディングをしていた。

「和たちも迷ったのか?」

「ええ。北があつちだから、やっぱりこの道でいいのよね?」

「……多分な……」

和は方角から駅までの道を冷静に分析していた。

それが統夜たちには頼もしく見えたのである。

こうして統夜たちは再び駅を目指すのだが……。

「……同じ所に戻ってきたぞ」

何故か先ほどの場所に戻って来てしまった。

「……おかしいわねえ……」

「のどかあ……」

滯は頼みの綱である和が方向音痴だと知り、涙目になっていた。

「……もう一度、地図を確認してみろわ」

和は再び地図を確認し、駅までの道を調べていた。

すると……。

「……しやれこうべ……」

律が突然こう呟くと、何故か滯のツボに入ってしまったのか、滯は堰を切ったように

爆笑していた。

こうして、統夜たちは完全に八方塞がりな状態になってしまった。

《……やれやれ……。仕方ないな……》

(……?イルバ?)

《俺様が駅までの道を案内してやるよ。統夜は俺様の指示どおりに歩くんだ。そうすれ

ば駅に着くはずだぜ》

イルバが駅までの道をナビゲーションしてくれると言ってくれたのである。

(……悪い、頼めるか?)

《ああ、任せろ!》

「……みんな、駅までの道がわかったぞ」

「え? 統夜君、それは本当なの?」

「こつちだ」

統夜はイルバの指示どおりの方向に歩き始めると、唯たちも統夜について行った。

何度も分かれ道があったのだが、イルバの的確な指示で進んでいくと、10分もかからずに駅に到着したのである。

「やったあ!! 駅だあ!!」

「やつと帰れる!!」

念願の駅が見つかり、唯と律は大喜びしていた。

「統夜、さっきは道に迷ってたのによく駅への道がわかったな」

「いや、これは俺の力じゃないさ」

「え?」

統夜の言葉に滯が首を傾げていたので、統夜はイルバを滯に見せた。

イルバのドヤ顔を見た瞬間、滯はここまでのナビゲーションはイルバがしてくれたと

理解した。

こうして統夜たちは駅から電車に乗り込み、どうにか18時ギリギリにホテルに戻る
ことが出来たのであった。

「……ご飯に間に合って良かったねえ♪」

今は夕食の時間であり、どうにか夕食の時間までに戻ってこられたことを唯は安堵し
ていた。

「うんー！」

「まったく……心配させないでちょうだい」

統夜たちから道に迷ったことを聞かされたさわ子はこう統夜たちに注意していた。

「ごめんなさい……どす」

唯が唐突な京都弁を言っていたので、滯は必死に笑いを堪えていた。

「ご飯どす♪私はベースの秋山どす♪」

今度は律が唯の悪ノリに乗っかって京都弁を言うのだが、滯は笑いを堪えることが出
来ず、爆笑していた。

滯が1人爆笑していたため、クラス全員の視線が滯に集中していた。

※※※

夕食が終わり、全員の入浴時間も終わって、消灯時間を迎えていた。

統夜は同じ部屋の3人が眠ったのを見計らってベランダに出ると、夜風に当たりながらホテルから見える景色を眺めていた。

「……………」

『おい、統夜。どうしたんだ？ボケつとして』

「ああ、悪い。……明日で修学旅行も終わりだろ？もう軽音部でいられるのも1年もないんだなって思ってたさ」

統夜は現在高校3年生であり、来年の3月には桜高を去ることになる。

そうとはわかつているものの、統夜は名残惜しさを感じていた。

『何だよ、統夜。高校生活に未練でもあるのか?』

「……そうかもな……。正直、高校生活っていうのがここまで楽しいものとは思わなかったよ」

『それは、軽音部に入ったからか?』

「……ああ。唯たちと出会ったからこそ、俺は魔戒騎士としてここまで成長出来たんだと思う」

統夜は唯たちと出会い、共に日々を過ごすことで、守りし者とは何なのかということ进行を思い知ることが出来た。

『まあ、あいつらに魔戒騎士の秘密を喋ったのは問題だったかな』

「かもな。だけど、そのおかげでイルバだって部室の中では喋れるだろ?それに、みんなが支えてくれたから……。俺はグオルブやディオスを倒せたんだと思う」

統夜は強大な力を持つホラーや暗黒騎士と戦ってきたが、唯たちの支えがあったからこそ強敵との戦いに勝てたと信じていた。

『統夜、俺たちが守らないとな。当たり前前の日常つてやつをな』

「……そうだな。俺は守るさ。何があつたつて……」

そう答えながら統夜はそこから見える景色を眺めていたのだが、その瞳は何があつて

も絶対に人を守る。

そんな決意に満ちていた。

統夜が夜景を眺めていたその時、突如携帯が鳴り響いていた。

「……………ん？電話か？」

統夜は携帯を取り出すと、電話は唯からだった。

「……………どうした、唯？」

統夜は電話に出ると、少し呆れた口調になっていた。

『あつ、やーくん、繋がった！ねえねえ、やーくん。やーくんも私たちの部屋に来て一緒にお話しようよお』

「はあ？何言ってるんだよ。それはダメに決まってるだろ？先生に見つかるかもしれないのに……………」

『……………むうう……………。今さわちゃんだっているんだもん』

「はあ？何言つて……………って本当だ」

統夜は唯たちの部屋にさわ子が来ていると聞いても信じられなかったが、さわ子の話し声を聞いてすぐに納得していた。

「どっちにしてもお断りだ。もう夜も遅いしな」

『……………ダメ？』

「うっ……」

唯の粘り強いお願いに統夜は少したじろいでいた。

「……まあ、修学旅行じゃダメだが、また今度な」

『本当!? やーくん、約束だからね!』

「はいはい。とりあえずさっさと寝るんだぞ」

『うん、わかった♪ やーくん、おやすみ♪』

「ああ、おやすみ」

統夜はおやすみの挨拶をすると電話を切り、携帯をポケットにしまった。

『……統夜、お前もそろそろ寝た方がいいんじゃないのか?』

「ああ、そうするよ」

統夜はこっそりと部屋に戻ると、布団にもぐって眠りについた。

翌日、統夜はこの日も起床時間より1時間も早く起きて、人気の少ない場所で剣の稽古を行っていた。

剣の稽古を終えるとちようど起床時間だったので、洗顔等を済ませて朝食の時間となった。

朝食終了後は帰り支度を始めて、それが終了するとバスに乗り込み、駅へ向かった。

そして現在は、新幹線の中であり、現在は桜ヶ丘に向かっているところだった。

「はい、やーくん。お菓子どうぞ♪」

「お、ありがとな、唯」

今回も唯たちと一緒に席になった統夜は、唯からお菓子を分けてもらい、お菓子を頬張っていた。

「統夜君、お茶どうぞ♪」

続いて紬は水筒のコップに紅茶を淹れると、そのコップを統夜に渡した。

「お、サンキュー、ムギ」

統夜は紬から受け取った紅茶を飲み、まったりとしていた。

《おい、統夜。お前さんずいぶんとのんびりしているな》

（まあまあ、いいじゃねえか。桜ヶ丘に帰ったらその分魔戒騎士として仕事をしなきゃいけないんだしさ）

《まあ、確かにそうだな。のんびりするの今のうちか》

イルバはまったりムードの統夜を一度注意するが、桜ヶ丘に戻ったら魔戒騎士の仕事

が待っているという統夜の言い訳を聞くと、納得したのか統夜がだらけるのを許していた。

統夜がお菓子と紅茶を味わつてのんびりしていると……。

「あつ、また富士山だ!」

「えつ、嘘?!見たい!」

「わ、私も見たい……!」

唯と律が先に立ち上がり、漣も富士山が見たいからか立ち上がろうとするが、手に持っていた袋のお菓子を落としてしまった。

「あ、落としちゃった……」

「フッフ、みおちゃん、私と一緒にだね♪」

京都に向かう新幹線の中でも唯が同じようにお菓子を落としており、それを思い出した唯はクスクスと笑っていた。

「クスツ……本当だ!」

こう漣が答え、漣も笑い出すのだが、富士山が見えた時に寝ていた統夜は訳がわからず、首を傾げていた。

漣につられて律と紬も笑い出し、統夜も訳がわからないながらもその雰囲気になまめれ笑っていた。

統夜たちは疲れて眠っている子達などおかまいなしといった感じで笑い合っていた。『やれやれ……。お前らは本当に仲がいいよな』

イルバは笑い合う統夜たちを見てこう呟いていた。

こうして、高校3年生の一大イベントとも言える修学旅行が幕を降ろしたのであった。

……続く。

—— 次回予告 ——

『統夜たちは修学旅行で思い切り楽しんでいたな。だが、その間、学校に残っている梓は何をしているんだろうな？ 次回、「留守番」。梓は梓で楽しくしてればいいが……』

第50話 「留守番」

統夜たちは2泊3日の修学旅行に行っていたのだが、その間、2年生である梓は普通通り授業を受けていた。

そして今は休み時間であり、梓は憂の携帯に送られた唯から来たメールを読んでいった。

「……今、富士山の中。新幹線が見える……って、はあ……」

メールの内容を見た梓は思わずため息をついてしまった。

(もお、本当なら「今、新幹線の中。富士山が見える」でしょ？まったく、唯先輩は……) 真逆な内容をメールに書いていた唯に梓は呆れていた。

「お姉ちゃんすつごく楽しそうだよね♪良かった♪」

憂はこのメールを見ても呆れることはなく、前向きな意見を言っていた。

「もお、憂がそうだから、いつまで経っても唯先輩はダメなんだよ」

「え？ダメ？」

「……もう3年生なのに、部室でもダラーっとしてて、お菓子ばかり食べてるし。私か統夜先輩が怒らないと練習しないし」

梓の言う通り、唯は軽音部ではダラっとしていてお菓子をよく食べていた。

それは唯だけではなく軽音部全体がそんな空気なので、梓や統夜が注意しなとなかなか練習を行わないのである。

「それじゃあ、梓ちゃんはお姉ちゃんビシツとしてた方がいいの?」

「もちろん!唯先輩がちゃんとしてれば……」

梓はビシツとしている唯を想像したのだが、その唯は何故かスポ根ドラマのようなキャラになっていた。

梓はそんな唯を想像すると、苦笑いをしていた。

「あれ?何見てるの?」

「ああ、これ?お姉ちゃんからのメール♪」

憂は唯から来たメールを純に見せたのだが、純はそのメールを見て吹き出していた。

「憂のお姉ちゃんって面白いよね♪」

(そうかなあ?唯先輩はどっちかというと天然だと思っただけど……)

梓は心の中でこのようなことを考えていた。

「私もね、さつきジャズ研の先輩からメール来たんだ」

純はジャズ研の先輩から来たメールを憂と梓に見せていた。

「えっと、1年のこと頼むね」

「ちゃんとしてる……」

後輩を気遣っているメールに梓が関心していると、今度は梓の携帯が鳴った。携帯を取り出すと、どうやら唯からのメールだった。

「トンちゃんの餌よろしくね……。って、格好悪い……」

梓は唯から来たメールを見てガクツときていた。

唯からのメールに写メが添付されていたのだが、その写メには漣と律と紬が写っており、統夜も写ってはいいたのだが、統夜は眠っていた。

「あつ、統夜先輩寝てる……。毎日忙しいもんね……」

梓は写メに写っている寝ている統夜を見て、統夜のことを気遣っていた。

純はそんな梓を見てニヤニヤしていた。

「梓ってば統夜先輩に夢中だねえ♪」

「にや!?そ、そんなことないもん!」

ニヤニヤしながらからかう純に、梓は必死に否定していた。

「それはともかくとして、軽音部ってき!」

純は憂と梓の2人に軽音部のイメージを語っていた。

そのイメージとは、自分たちの楽器はそっちのけで缶蹴りを楽しむといったものであった。

「そんなにひどくないもん！」

純のイメージを、憂と梓は必死に否定していた。

そして昼休みになると、梓たちは購買でパンを買うことにしていた。

3年生が修学旅行でいない分、購買の人は少なかつた。

それ故なのか純は珍しいパンをみつけていた。

「あ！幻のゴールドデンチョコパン！2年にして初めて出会った！」

純はゴールドデンチョコパンを手にし、喜んでいた。

「そんなのあるんだ」

「うん、限定3個。いつも3年生が先に買っちゃうみたい」

純の言う通り、ゴールドデンチョコパンは3個しかない貴重なパンで、いつもは3年生が先に買っている。

なので、このパンに出会う機会は滅多にないのである。

純はゴールドデンチョコパンを購入し、パンを求める人混みから脱出した。

「純ちゃん、記念写真撮ろうよ♪」

憂の提案に賛同した純はまるで名バッテリーのようなポーズをとっていた。憂はすぐさま写メを撮ろうとするが、その寸前に唯からメールが来ていた。

その内容は、教室に弁当箱を忘れたので持って帰って欲しいという内容だった。

そのメールを見た憂は笑みを浮かべ、梓も唯から来たメールを見ていた。

その間、純はポーズをとったまま放置されており、純は恥ずかしさから頬を赤らめていた。

どうにか写メを撮り、3人は1度教室に戻って昼食をとった。

その後、昼休みが終わるまでまだ時間があつたので、3人は唯の弁当箱を回収するために、3年2組の教室に入った。

「失礼しまーす……」

「……静かだね」

「本当に入っていいのかなあ」

修学旅行のため無人になっているとはいえ、梓は勝手に教室に入ることを不安がっていた。

「忘れ物を取りに来ただけだから大丈夫だよ」

憂がこのように梓をフォローし、教室の中に入っていった。

「えっと……唯先輩の席は……その辺だったと思うけど……」

「……あつ、本当だ」

憂は机に引つかかっている弁当箱を発見し、弁当箱を回収した。

「……ねえねえ、滯先輩の席は？」

「……確か、ここだよ」

梓は純に滯の席を教えると、純は滯の席に座っていた。

「……何か格好よくなった気分♪」

「気のせいじゃない？」

滯の席に座って喜ぶ純を見て、梓は苦笑いをしていた。

そんな中、純が何かを発見した。

「……？引け？」

それは、机の中からはみ出している引けと書かれた紙だった。

純はそれを迷わず引いてみた。

「あつ、ダメだよ！勝手に！」

梓が注意した時は既に手遅れで、驚いているような顔の絵が描かれていた。

「……？何これ」

純はこの絵の意図が読めず、首を傾げていた。

「……律先輩……」

梓はこの絵を描いたのが律だということを察していた。

「…………あれ?とこゝろで憂は?」

近くにいた憂の姿が見えなくなったので周囲を見回すと、憂は唯の席に座っていた。

「…………お姉ちゃんの机だ♪」

憂は姉である唯が座っている席に座ると、満足気な表情をしていた。

「…………何か嬉しそうだね」

「ねえねえ、梓は統夜先輩の席に座らなくてもいいの?」

「にや!?べ、別に私は…………!」

梓は統夜の席に座りたいという気持ちはあったものの、顔を真っ赤にしてこう言うてからかう純の言葉を否定していた。

純は顔を真っ赤にしてしている梓を見てニヤニヤしていた。

「…………あ、それよりさ。憂はそんなにお姉ちゃん好きで寂しくないの?」

「…………え?」

「だって、明後日まで帰ってこないんだよ?」

「…………あ、そっか…………。お姉ちゃん…………帰って来ないんだ…………」

憂は唯が修学旅行に行っていることは知っていたが、明後日まで帰って来ないことは忘れていた。

「今気付いたの!？」

憂は目に涙をいっばいたため、今にも泣き出しそうだった。

梓と純はそんな憂を見て慌てふためいていた。

「…………お姉ちゃあん…………お姉ちゃあん…………」

「ご、ごめん！今日遊びに行つて上げるから！何なら泊まってもいいから！」

憂はさらに涙目になり、梓と純は必死にフオローし、この日は憂の家に泊まることになった。

※※※

そして昼休みは終わり、放課後となった。

憂は梓と純が泊まりに来てくれることになったので、そのお礼にジャズ研の練習を手伝うことになった。

憂と梓はジャズ研の部室に入ると、多くの楽器が置かれていることに驚いていた。

「へえ……いつぱいあるんだね……」

「へへん♪楽器の数ならブラバンにも負けなからね♪」

純は誇らしげにこう語っていた。

桜高の吹奏楽部は部員数もそれなりにいる部活で、コンクールなどにも頻繁に出場する程である。

ジャズ研も吹奏楽部に負けじと練習をしている部であり、楽器の数もそうだが、実力も吹奏楽部に負けてはいないのである。

「こんなに弾く人いるの?」

「そう!ジャズ研はサバイバルなの。だから、先輩いない間に頑張って練習して……。って!ああ!ベース教室に忘れた!」

純は教室にベースを置いてきてしまったので、慌てて取りに戻っていた。

「はあ……。相変わらずだな、純は……」

ちよつと抜けた部分がある純に梓は少し呆れていた。

すると、緑のリボンの女の子2人が部室に入ってきた。

リボンの色からこの2人が1年生だということがすぐにわかった。

「あつ、あの……私たち……」

「ごめんなさい、私たち、純ちゃんの友達で！」

上手く事情を説明出来なかった梓をフォローする形で憂が2人に事情を説明していた。

「もしかして梓先輩ですか？」

1年生の2人が梓と憂に駆け寄ってきた。

「え？」

「純先輩に言われていたんですよ。軽音部にすごいギターの上手い先輩がいるから教えてもらって」

「あっ……。そ、そうなんだ……」

ギターが上手いと褒められたことが恥ずかしかったのか、梓は頬を赤らめていた。

「あっ！ちよūdと良かった！」

ベースを取りに教室に戻っていた純が部室に戻ってきた。

「おはようございます！」

「おはよう。この2人、うちの1年なんだ。梓、ちよūdとギターを教えてあげてよ」

「あっ……。う、うん」

こうして梓は1年生2人にギターを教えることになった。

梓はリズムの基礎練習や、指のストレッチなど、丁寧にギターの指導を行っていた。

※※※

ジャズ研の練習も終わり、夜となった。

純と梓はお泊りの準備のため1度家に戻り、それから憂の家に行くことになっている。

梓は泊まりの準備を整えると、憂の家へ向かった。

憂の家に着し、中に入ると、既に純は来ていて、憂と一緒に出迎えてくれた。

「あつ、これ、お母さんが持っていけつて」

梓は家を出る前に母親に渡された袋を憂に渡した。

「わあ♪ありがとう♪」

「ねえ、ちなみに中身は？」

「？お寿司だけど？」

(ドーナツ遠のいたあー！)

純は心の中でこのように嘆いていた。

純は憂の家に行く前にドーナツ屋でオールスターパックという多くの種類のドーナツが入ったものを買ったのだが、梓が寿司を持って来たので、ドーナツは今日は食べられないのかと嘆いていたのである。

梓は憂と純と一緒にリビングに入るのだが、テーブルに置かれたおびただしい料理の数に驚いていた。

こうして、3人揃ったところで、梓たちは夕食をとることにした。

憂は梓と純が泊まりにくるからか料理を気合い入れて作っていたので、どれも美味しいものであったが、いかんせん量が多かった。

3人はじつくり夕食を楽しんだが、全部を食べ切ることは出来ず、残りは明日の朝食を食べることになった。

「ふう……」

「食べすぎた……」

「もう入らない……」

純はその場で寝転がり、梓もその場でリラックスしていた。

梓は近くにあったドーナツの箱が目に入ったのだが、そのドーナツは全部何故か一口

だけかじられた状態だった。

「……どんな食べ方してるの……」

「だって、味確かめてみたかったんだもん！」

全部何故か一口だけ食べた純は悪びれる様子もなく、伸びをしていた。

「梓、後は食べていいよ」

現在全員満腹で、かつ全部のドーナツが残っている状態だったので、純は相当な無茶振りをしていた。

梓はドーナツをジーツと見つめるのだが……。

「……入る訳ないでしょ」

満腹だからかこのようなりアクションをしていた。

「甘いものは別腹だよお。チョコのやつとか美味しいよ♪」

純の誘惑に心動かされてしまったのか、梓はチョコのドーナツに手を伸ばしていた。

それと同時に洗い物をしていた憂がリビングにやってきていた。

「あれ？食べるの？」

憂は満腹であるはずの梓がドーナツを食べようとしていることに驚いていた。

そんな憂はおかまいなしで梓はドーナツを一口頬張った。

「……甘い……」

梓は甘いチョコドーナツに舌鼓を打っていた。

すると、憂の携帯が反応し、憂が携帯を取り出した。

「どうやら、唯からのメールのようだ。」

「あ、お姉ちゃんだ」

「どれどれ」

梓も憂の携帯の画面を覗き込み、憂と一緒に唯からのメールを見て笑っていた。

唯は枕投げの様子の写真を送っていた。

その様子は本当に修学旅行の定番といった感じだった。

「修学旅行って感じだね」

憂もこの写真を見てこのように思っていた。

「憂たちもお泊り楽しんでる？だって」

唯からのメールを見た憂と梓は笑みを浮かべながら寝転がっている純を見ていた。

「……………ん？何？」

純は2人の様子が気になったのか、転がりながら2人のところへ移動するのだが、起き上がるタイミングで梓の頭にぶつかってしまい、思わず頭突きをしてしまった。

「だ、大丈夫？」

憂は苦笑いしながら梓と純を気遣っていた。

しばらくの間リビングでまったりしながら、交代でお風呂に入っていた。全員がお風呂に入り、3人は憂の部屋で寝ることになったのだが……。

「……すう……すう……」

純が憂のベッドを独占してそのまま眠ってしまったのである。

「寝ちゃってるねえ……。じゃあ、私たちも寝ちゃおつか？」

純も既に寝ているため、憂はこのような提案をしていたのだが……。

「ええ？まだ眠たくないよお」

梓は今寝るのは反対のようだった。

「それじゃあ、お布団でお話しようか」

憂は部屋の電気を消して、布団に潜り込んだ。

梓もとりあえず布団の中に入っていた。

「……唯先輩たち、きつと今頃楽しんでるんだろなあ……」

「もう寝ちゃってたりして」

「それはないよ。合宿の時とか、みんな遅くまで遊んでたし、きつと……」

く梓のイメージく

「お土産？あ、ごめん！楽しすぎて忘れちゃったあ♪」

「あ、やべ！俺も忘れてたよ♪アハハ♪」

「ごめんなあ♪」

「お茶ですよー」

「アハハ！」

梓はそつちのけで楽しむ統夜たちを見て、梓は一人涙を流す……。

くイメージ終了く

「……こんな感じで」

「アハハ、さすがにそれはないと思うけど……」

「まあ、そうだよねえ。部屋は違うだろうけど、班は統夜先輩も一緒だろうし……」

梓はふと統夜のことを考えて、頬を赤らめていた。

「……はあ、いいなあ……。統夜先輩と修学旅行に行きたかったなあ……」

梓は思わず本音をもらしていた。

それは、梓が今でも統夜のことが好きだという気持ちの表れだった。

そんな梓を見た憂は笑みを浮かべていた。

「……クスツ、梓ちゃんってやっぱり統夜さんのことが好きなんだね♪」

「う、うん……」

梓はムキになって否定することはせずに素直に認めていた。

「そういう憂はどうなの？ 憂だって統夜先輩のことが好きなんですよ？」

「ふえ!？」

梓が憂にこの話を振るのは初めてであり、憂は顔を真っ赤にしていた。

「う、うん……そうかもしれない……。統夜さんって格好いいし、優しいし、すごく面倒

見もいいし……」

「統夜先輩は鈍感だからきつと私たちが好きだってことは気付いてないよね」

「クスツ、そうだね」

梓と憂は統夜が鈍感だということを思い出して笑みを浮かべていた。

「先輩たちとも話し合ったんだけどさ、誰が統夜先輩と付き合うことになっても恨みつ

くなしにしようね……」

「うん、わかってるよ」

憂も梓だけではなく、自分の姉や他のメンバーも統夜のことが好きだと気付いていたので梓の提案をあつさりと受け入れていた。

「……ねえねえ、それはともかくとして、明日はどこか遊びに行こうよ！どこか行きたいところある？」

翌日は学校が休みであったが、翌日の予定はまだ立てていなかったのである。

憂は梓に明日どこへ行きたいかを聞いていた。

「……ど、動物園……」

梓が恥ずかしそうに提案したのは、以前統夜とデートした動物園だった。

「あつ、私も行きたい！」

「本当？」

「うん！」

憂も動物園に行きたいということがわかり、2人は笑い合っていた。

すると、憂の携帯に反応があったので、憂は携帯を取り出した。

それは唯からのメールだったので、梓と一緒にメールの内容を確認していた。

メールには「しやれこうべ」とだけ書かれており、メールの意味がわからずに2人は首を傾げていた。

唯からのメールを見た後は、お互い眠くなるまで統夜に関する話しや恋バナなどで盛

り上がっていた。

……その頃、京都にいる統夜は……。

「……………へっくしっ!!」

今夜何度目になるかわからないくしゃみをしていた。

《おい、統夜。どうした、風邪か?》

(いや、それは違うと思うんだけど……)

統夜はいたって健康であり、風邪を引いている感じはなかった。

(……………なるほど、恐らくは憂と梓だな? 唯の家に泊まってるらしいしな。まあ、おそらく統夜の話をしているんだろう。まあ、そのことは統夜には黙っておくか)

イルバには思い当たる節があつたのだが、それをあえて統夜に伝えることはしなかった。

統夜は何でくしゃみが出るのか首を傾げていたが、すぐに眠りについていた。

※※※

翌日、梓たちは起きると洗顔等を済ませ、昨日の残り物を朝食にとっていた。

朝食が終わると、出かける予定だったが、外は土砂降りだったため、今はリビングで大人しくしていた。

「……土砂降りだね……」

「うん……。動物園は無理っぽいね……」

雨がひどいため、動物園行きは断念せざるを得なかった。

「あーあ……。行きたかったなあ」

梓は動物園に行けないとわかると、残念そうにしていた。

そんな中、純は一人黙々とある漫画を読んでいた。

「純、何かすることない？」

「うん」

「どっか行きたいところはないの？」

「うん」

「ゲームとかでもいいよ？」

「うん」

純は漫画に夢中だったからか、梓の問いかけに「うん」としか答えていなかった。しばらくすると、漫画の単行本を読み終わったのか、純は漫画本を閉じていた。

「憂、これの6巻ってある？」

純がようやく放った違う言葉は、今読んでいる漫画の続きを聞くことだった。

「え？どうだったかな？」

「友達んちでそれやると友達なくすと思う」

梓は漫画にそっちのけな純に抗議をしていた。

リビングには単行本はなかったの、憂は唯の部屋を探してみることにした。「えつとねえ、お姉ちゃんの本棚にあったと思うんだけど……」

憂は唯の部屋に入ると、本棚を調べて単行本を探していた。

「……………」がお姉ちゃんの部屋？」

唯の部屋に初めて入った純は興味津々といった感じで部屋を見回していた。

梓も同じように部屋を見回していると、とあるものを見つけた。

「……………あ、この間の……………」

梓が見つけたのは、部室の整理をした時に唯が持って帰ったぬいぐるみ等だった。

「ああ、この前たくさん持って帰ってきて……………」

(大掃除の時の……………だよな?)

ぬいぐるみ等は唯が大掃除の時に持って帰った私物なので、その時のことを思い出した梓は苦笑いしていた。

憂は本棚から単行本を発見した。

「純ちゃん、あつたよ。7巻」

憂はとある漫画の7巻を純に渡そうとするのだが……………。

「え? 私が見たいのは6巻だよ」

「あれ? でも、ここから先しかないよ?」

「一冊くらいいいじゃん」

「よ、読んでみようかな?」

純は恐る恐る憂の持っている7巻を受け取ろうとしたのだが……………。

「やっぱダメだ! 本屋さん行こ!」

「え? まだ土砂降りだよ!?!」

梓の言う通り、外はまだ土砂降りで、止む気配はなかった。

「ええ!?……なんか一気に退屈になっちゃった」

6巻がないとわかり、純はぷうっと頬を膨らませていた。

「だからさつきから何かしようって言ってるのに……」

純は梓の提案をスルーしていたので、梓はそんな純に呆れていた。

すると、梓の携帯が反応したので、梓は携帯を取り出した。

「……あ、唯先輩からだ」

どうやら唯からメールのようで、憂は梓の携帯の画面を覗き込み、一緒に唯からのメールを見ていた。

「あずにやんたちは何してるの?だって……」

このようなメールと共に写真が添付されていたが、その写真は山らしきところで全員で撮ったと思われる写真だった。

滯、律、紬の3人は満面の笑みでピースをしていたが、統夜は苦笑いをしていた。

その写真を見るだけで唯たちは修学旅行を楽しんでいると感じていた。

それと同時に、天気が悪いからと言って何もしていないということを悔しく感じていた。

「……やっぱりどこか遊びに行こー!」

梓はこのままだったら過ごすのが癪だったので、出かけることを提案した。

憂と純は最初は戸惑っていたが、家でダラダラするよりは良いと判断し、梓の提案を了承した。

こうして梓たちは外に遊びに行くことになった。

梓たちが向かったのは、桜ヶ丘某所にあるアミューズメントセンターだった。

ここはゲームセンターやボーリング、バッテリーセンター、カラオケなどが楽しめる複合型のアミューズメント施設である。

アミューズメントセンターに到着し、中に入ろうとしたその時だった。

「……あれ？お前は梓、だったよな？」

黒いロングコートを羽織った青年が梓を見つけて声をかけた。

「あつ、戒人さん」

その青年とは、統夜と同じ魔戒騎士である戒人だった。

梓は何度か顔を合わせているが、憂と純は戒人を見るのは初めてだったので、首を傾げていた。

「梓ちゃん、知り合い？」

「ああ、この人は黒崎戒人さん。統夜先輩と同じ魔戒騎士なの」

梓の簡潔な説明で、憂と純は戒人が何者なのかを理解した。

「もしかして、この2人も魔戒騎士のことを知っているのか？」
「はい、そうです」

「統夜先輩と同じ魔戒騎士だったんですね」

戒人は憂と純が魔戒騎士について知っているととは思わず、驚いていた。

「私は鈴木純です！よろしくお願いします！」

「私は平沢憂です！」

「平沢？もしかして唯の？」

「はい！妹です！」

「へえ、あの唯に妹がいたとはな」

『ホツホツホ、性格も違うみたいだから驚きじやの』

トルバが突如口を開いたので、憂と純は驚いていた。

「あれ？今の声ってどこから……」

『ホツホツホ、ここじやよ』

戒人はわかりやすいようにトルバを憂と純に見せていた。

「あれ？イルバとは違う形なんですね……」

純も統夜がつけているイルバの存在を知っているため、指輪以外も喋ることを知り、驚いていた。

『ホッホッホ、ワシはトルバ。腕輪の形をしておるが、ワシも魔導輪じゃよ』

「へえ……」

指輪だけではなく、腕輪の形をした魔導具も魔導輪と呼ばれているとは知らなかった
ので、憂と純はジーツとトルバを見ていた。

『ホッホッホ！若いお嬢ちゃんに見られるというのはちと照れるわい！』

トルバは口ではこう言っていたが、憂や純に見られるのは満更でもないようだった。

「ところで、戒人さんは今もお仕事ですか？」

「いや、ちよつと前にエレメントの浄化を終わらせてな。今は見回りを兼ねて街を見て
いたところだよ」

戒人がこの場所にいたのは本当に偶然で、エレメントの浄化を終えた戒人が見回りを
兼ねて街を回っている時にたまたまこのアミューズメントセンターの前を通り過ぎよ
うとしたタイミングで梓を見つけたのである。

「ということは、今は暇なんですか？」

「まあ、一応は」

「だったら！戒人さんも一緒に遊びませんか？」

「へ？俺が？」

梓の思わぬ提案に戒人は驚いていた。

魔戒騎士である自分が普通の人間の遊びに誘われるとは思ってもいかなかったからである。

「で、でも俺、普通の人間の遊びとかよくわからないし……」

「それだったら尚更ですよ！ぜひ行きましょうよ！」

「い、いや……。俺は……」

『戒人。行ってみてもいいんじゃないかのお？普通の人のことを知るのも魔戒騎士には必要ようなことじゃぞ』

トルバは普通の人間の遊びをすることは人のことを知る機会であるため、戒人を後押ししていた。

「……まあ、確かにそうだな。たまにはいいか」

「やったあ♪それじゃあ行きましょう♪」

こうして戒人も遊びに誘った梓たちは戒人と共にアミューズメントセンターへと入っていった。

入り口入るとすぐゲームセンターがあり、戒人は初めて見る景色に見入っていた。

「……ここが噂の……。まるで別世界みたいだ……」

戒人は目をキラキラと輝かせ、入り口から見えるゲームなどを色々見ていた。

「……クスツ、戒人さん楽しそう♪」

「本当にこういうところに来るのが初めてなんだね……」

憂と梓は初めて見るゲームセンターにはしゃぐ戒人を見て、笑みを浮かべていた。

「……戒人さん、まずはここに行きましよう！」

「うわ！ちよつと！引つ張るなつて！」

純は戒人の手を引つ張ると、ある場所へと移動を始めたので、憂と梓も後を追いかけた。

純が向かった場所とは……。

「……………」

「バッティングセンターですよ！ボールが飛んでくるのでそれをバットで打ち返すんですー！」

純が向かった場所はバッティングセンターのコーナーだった。

「……それつて、もしかして野球とかいう球技なのか？」

「戒人さん、野球知つてるんですか？」

「噂程度だけだな。実際には見た事もやつたこともないんだよ」

戒人は野球というスポーツのことは噂などを聞いて何となく知つていたが、見たことや遊んだことはないのです、これが初めて触れる野球となる。

……厳密に言えば野球ではないのだが……。

「それじゃあまず私は私たちがお手本を見せますよ！見て下さいね！」
「ああ、わかった……」

こうして戒人を残し、梓、憂、純の3人はバッティングのブースへと入り、実際にバッティングを始めた。

「……それよりも何でバッティングセンターなの？……つとー！」

梓が何故バッティングセンターにしたのかを純に聞くと、ボールが飛んできたのが、バットを振るうことは出来なかった。

「だって……。野球漫画だったからさ……。つと!!」

純が読んでいたのは野球を題材にした漫画だったので、バッティングセンターに行ってみたかったのであった。

しかし純は飛んでくるボールを打ち返すことは出来なかった。

何度か挑戦してみたのだが……。

「……私無理かも。戒人さん、交代ね」

純はあっさり諦めて、戒人と交代することにした。

「え？」

戒人は戸惑いながらもブースの中に入り、バットを手を取った。

「……構え方は……こうか？」

戒人は見よう見まねでバットを構えてみたのだが、きちんとしたフォームにはなっていないかった。

そして、ボールが飛んできた。

「……………」

迫り来るものを弾くというのは魔戒騎士故に慣れているからか、まるで魔戒剣を振るうかのようにバットを振って、ボールを弾き飛ばした。

しかし、戒人は縦にバットを振るつたため、ボールは一度地面に叩きつけられると、大きくバウンドして飛んでいった。

「……………戒人さん！縦じゃなくて横にスイングです！」

「そんなこと言ってもな……………。つとー！」

戒人は続いてバントのような構えでボールを受け止めていた。

『戒人、隣の男のプレイを見るんじや』

トルバにこう言われたため、戒人は隣のブースでプレイしている男を見ると、男は綺麗なスイングで迫り来るボールを打ち返していた。

「へえ……………」

『戒人、野球とはあのような感じでバットを振り、ボールを打ち返すんじやよ』

何故か野球のことを知っていたトルバはこのように的確なアドバイスをしていた。

「……やってみるか」

戒人は先ほど見たスイングを参考にバットを構えた。

すると、ボールが迫って来たので、戒人は先ほど見たスイングを真似てバットを振るった。

するとボールは綺麗に飛んでいき、ホームランと書かれた板に直撃した。

「おお！戒人さん、凄い！」

「……野球か……悪くないかもな……♪」

戒人はいきなりホームランを打つと、野球の楽しさを実感し、笑みを浮かべていた。隣のブースでその様子を見ていた梓も戒人の筋の良さに驚いていた。

「……凄いな、戒人さん……。ところで、憂はどう？」

「うん、すつごく難し……。いい！」

憂はバットを振るうが、上手くボールに当たらなかつた。

どうバットを振るえばいいかわからない憂だったが、隣で遊んでいる父親と子供の会話が聞こえてきた。

それは、どうバットを振るればいいかという細かいレクチャーだった。

その細かいレクチャーに関心した憂はそのレクチャーを参考にバットを構えていた。

先ほどより綺麗なフォームになった憂は迫り来るボールを見事にとらえ、バットを振

るった。

バットは見事にボールを打ち返し、ボールは綺麗に飛んでいった。

すると、先ほど戒人が当てたホームランの板に直撃した。

「やった……」

「すげえ……」

隣で遊んでいた男の子も憂のホームランに驚いていた。

「やった……。やったよ！ 梓ちゃん！」

憂はホームランを打てた喜びを梓に伝えようとしたが、隣のブースにいるはずの梓の姿はなかった。

なのでブースから出ると、すぐ近くに梓、純、戒人の姿があった。

「……憂って本当に飲み込みが早いよね」

「本当に憂のそういうところは唯先輩そっくりだよね」

「え？ そうなのか？」

戒人は憂のことを知らなかったので、飲み込みが早いこととそういうところが唯に似ているということを知り、驚いていた。

憂はのんびりと椅子に座る3人を見て首を傾げるが、先程ホームランに当てた戒人と共に、ホームラン賞の景品を受け取った。

憂が受け取ったのは大きな亀のぬいぐるみで、戒人が受け取ったのは数年前に人気の出たウォークマンだった。

戒人はこのウォークマンが音楽を聴くものだとは理解していなかったので、受け取ったはいいものの、困惑していた。

「……お待たせえ！」

憂と戒人は梓と純の元へと戻ってきた。

「……って！憂のぬいぐるみでかつ！」

純は憂のぬいぐるみのでかさに驚いていた。

「戒人さんのウォークマン……ですか？」

「なあ、これって一体何なんだ？」

戒人はウォークマンを知らなかったもので、これが何なのかを梓たちに聞いていた。

「あつ、それはウォークマンって言って、音楽を聴く機械です」

「音楽か……。俺は音楽聴かないから必要ないな……。どっちかこれいるか？」

戒人はこのウォークマンを梓か純のどちらかに渡そうとした。

すると……。

「はい！はい！欲しいです！」

純がウォークマンが欲しいと手を挙げていた。

「まあ、私は同じもの持つてるし、大丈夫ですよ」

梓は手を挙げずにウオークマンを純に譲ることを伝えた。

「それじゃあ……ほら」

戒人は景品のウオークマンを純に渡した。

「ありがとうございます、戒人さん！大切にしますね♪」

「あ、ああ……」

満面の笑みで笑う純を見て恥ずかしくなったのか、戒人は頬を赤らめていた。

『戒人、お前が照れるとは珍しいのお』

「うるさいよ！」

ニヤニヤしながらからかってくるトルバに戒人は反論していた。

「それにしても憂のぬいぐるみはでかいよねえ」

「うん。トンちゃんの10倍くらいは……。……あ！」

梓は何かを思い出したのか、急に大声をあげた。

「？梓ちゃん、どうしたの？」

「トンちゃん……忘れてた……！」

梓はトンちゃんに餌をやるということをすっかり忘れており、顔を真っ青にしていた。

「トンちゃん？」

戒人は状況がわからず首を傾げていたが、その話を聞ける状況ではないと思っていたので、黙っていた。

梓たちは急いで桜高に向かうことになり、戒人も3人についていくことにした。

※※※

梓がトンちゃんの餌やりをしていないことを思い出した頃、もう1人の紅の番犬所所属の魔戒騎士である桐島大輝は、桜高の近くを歩いていた。

この日のエレメント浄化は終わり、街の見回りを行っている途中で偶然桜高の近くを歩いていたのである。

すると……。

「……………ん？あれは……………」

大輝が目にしたのは、桜高目指して走っている3人の少女だったのだが、その3人に
見覚えがあった。

「確か統夜の……」

統夜の友達である梓、憂、純だということはわかったのだが、その3人と行動を共に
している男を見て驚いていた。

「……あれは、戒人!? 何であいつがあの子と……」

戒人と梓たちには何の接点もないことは知っていたので、大輝は驚きを隠せなかつ
た。

「……まあ、今日は指令もなさそうだし、見なかったことにしても大丈夫か……」

今のところ指令はないため、戒人のことはスルーしても問題ないと判断し、大輝は歩
き始めた。

そんな中、戒人も大輝の存在に気付いたのだが、今のところ指令はないのでもう少し
だけなら3人と行動しても問題はないと判断していた。

そのため、戒人は一緒に桜高の中に入った。

この日は授業がないため、学校へは教員玄関から入るしかなかった。

事情を説明すると、3人はすんなり中へ入れたのだが、戒人だけは部外者ということ
で中に入ることは許されなかった。

しかし、純は戒人が自分の兄で、付き添ってもらっていると嘘をつくとき、その嘘を信
じた警備員はあっさり戒人が中へ入ることを許したのである。

こうしてどうにか中へ入れた梓たちはそのまま音楽準備室に直行し、どうにか無事に
トンちゃんに餌をあげることが出来た。

「良かったあ。ちゃんと元気だねー」

「ごめんね……トンちゃん……」

梓は申し訳なきようにトンちゃんのことを見ていた。

トンちゃんは餌を食べて元気が出たのか、水槽の中を悠々と泳いでいた。

「……この子がトンちゃんか……。確かに可愛いかも♪」

憂は初めてトンちゃんを見たのだが、トンちゃんをジッと見ながら笑みを浮かべてい
た。

「可愛い?」

「うん、お姉ちゃんが言ってたよ!あずにゃんと同じくらい可愛いって♪」

「私と同じ……」

梓は亀と同列に語られて微妙に思ったのか、トンちゃんをジト目で見ていた。

「あー!!ここにあったよ6巻!」

純は部屋を見回していると、偶然自分の読んでた漫画の続きを発見した。

「来て良かったね♪」

憂はこう純に声をかけると、純は満足そうに笑みを浮かべていた。

そんな中、戒人は水槽を悠々と泳ぐトンちゃんをジツと眺めていた。

「……こいつ、この前初めて来た時はいなかったよな。もしかして俺が来た後にこいつが来たのか?」

「はい、そうなんです」

「なるほどな……」

戒人はこの前来た時はいなかったトンちゃんがいつ来たのかを聞くと、その説明に納得していた。

「トンちゃんのこととは解決したし、良かったんだけど……。雨、止まないね……」

梓は未だに降り続ける雨を見て憂鬱になっていた。

「せつかくのお休みなのにね……」

「……それじゃあ3人でセッションでもしてみるか?」

「え？」

梓は純が出した意外な提案に驚いていた。

「こんな雨なんだし、ちよつとくらい大きい音だしても大丈夫なんじゃない？」

「3人で……。それ面白いかも！」

「え？でも、私、上手く出来るかなあ？」

「大丈夫、簡単なのにするから」

「ねえ、憂。オルガンなら弾けるんじゃない？」

「あつ！小さい頃弾いたことある！」

「それじゃあ、やってみようよ！」

こうして、憂、梓、純の3人でセッションを行うことになった。

「それじゃあ俺はそれを聴かせてもらおうかな」

そして戒人はたった1人の観客として、3人のセッションを聴くことにした。

ギターやベースはジャズ研の部室から借りることにになり、オルガンは音楽準備室に置かれていたものを使用することになった。

こうしてジャズ研の部室からギターとベースを持ってきた梓と純はそれぞれギターとベースの準備を行い、憂もオルガンがいつでも弾けるよう準備していた。

「……………それじゃあ行くよ。……………いち……………に……………さん……………し……………」

3人の準備が整い、純の合図で演奏が始まった。

3人が演奏している曲は、童謡である「むすんでひらいて」のアレンジである。

オルガンがメロディを弾き、ギターが伴奏部分を弾き、ベースの重低音がそんなギターの音を支えている。

3人のセツシヨンは即興で組まれたものとは思えないほどバランスの良い演奏になつていた。

音楽について無知な戒人でさえも、演奏に聞き入る程である。

こうして、即興とは思えないバランスの取れた演奏が終了した。

「……出来た!」

「凄い!何か格好いい曲になつたね!」

「うん!戒人さん、どうでした?」

「俺は音楽のことはわからないけど……すごく良かったよ」

戒人からの評価も良く、3人は満足そうに笑みを浮かべていた。

その時である。

先ほどまで土砂降りだった雨が止み、綺麗な夕焼けの光が射し込んでいた。

梓たちは綺麗な夕焼け空に目を輝かせ、戒人はそんな3人を見て笑みを浮かべていた。

その時、憂の携帯が鳴っていたので、憂は携帯を取り出した。

「……あつ、お姉ちゃんからだ！」

唯からメールが来たようなので、梓と純も憂の携帯の画面を覗き込み、一緒にメールをチェックしていた。

「うう、ギー太が恋しいよ。だって」

唯からのメールを見た3人は笑みを浮かべ、笑い合っていた。

その後、唯にメールを返す前に写真を撮ることになったのだが……。

「戒人さん。戒人さんも一緒に写りましょうよー」

「い、いや、俺はいいよ。恥ずかしいし」

戒人は照れながら写真に写るのを断ったんだが……。

「いいからいいから♪」

純は強引に戒人を連れ出し、4人で写真を撮ることになった。

憂たち3人がピタッと密着しており、戒人は3人と距離を置いて写るか写らないかの微妙な位置に立っていた。

その後、写真を撮ったのだが、憂たち3人がメインで写る中、戒人もかすかに写っていた。

そして憂はこうメールを返信した。

「お姉ちゃんへ……羨ましいでしょ♪」

※※※

桜高を後にして、純が家に向かうために乗るバス停に到着した時は少し日が傾き、暗くなろうとしていた。

純は帰りのバスに乗り込み、そのまま自分の家へと向かっていった。

「……戒人さん、すいません。今まで無理に付き合わせちゃって……」

純が乗り込んだバスを見送りながら、憂が申し訳なさそうに詫びを入れていた。

「気にするな。俺にとつてもいい機会だったから楽しかったぞ」

統夜と違って普通の人生を捨て去って魔戒騎士の修行を積んできた戒人にとっては、今日のような普通の人間の遊びはとても新鮮なものだった。

こういう遊びも人を守る者である魔戒騎士にとつては良い経験になったと戒人自身

も実感していた。

「戒人さん……」

楽しかった。こう言ってもらえただけで梓は戒人のことを誘って良かったなと思っていた。

その時だった。

突然梓の携帯が鳴り出したので、梓は携帯を取り出した。

今回はメールではなく、電話のようだったので、梓は電話を取った。

「もしもしー」

『あ、もしもしあずにゃん？ 私たち、迷子になっちゃったんだよねえ』

「へっ」

『梓に電話してどうするんだよ！』

『はっ！そっか！』

濡と統夜のツツコミに唯が反応したところで電話を切った。

「な、何？」

迷子という不穏な言葉が聞こえてきた電話に梓は困惑し、それを見ていた憂と戒人は首を傾げていた。

「……さっきの電話は気になるが、1度番犬所に寄らなきゃいけないし、俺は行くな」

「あつ、はい。戒人さん、今日はありがとうございました！」

梓と憂は戒人にペコリと一礼をし、戒人はそれに「ああ」と応じると、そのまま番犬所へと向かっていった。

戒人がいなくなったのを見送った2人は途中まで一緒に帰り、解散となった。

※※※

「修学旅行が終わった数日後、この日は久しぶりに3年生が登校する日だった。

「……………え？唯先輩が？」

「うん。お姉ちゃん、あずにゃん分が足りないって言ってたから」

「隠れようかな……………」

「これから起こる展開を予想した梓はげんなりとしながらこのようなことを言っていた。

「？何があるの？」

純が首を傾げながら梓に事情を聞こうとしたその時だった。

「あーずーにゃん♪」

「にゃ!？」

いきなり唯が現れると、梓に抱きついていた。

そして……。

「久しぶりぶり〜♪」

久しぶりに梓に会えたのが嬉しかったのか、唯は梓に頬ずりをしていた。

「やめて下さいよ!……廊下ですよ?」

所構わずこのようなことをする唯が恥ずかしかったのか、梓はこのように抵抗していた。

「……あ、そうそう。お土産も買ってきたんだよ!みんな部室で待ってるから行こっ♪」

「え?後でいいですよ」

「ダメだよお。ムギちゃんお茶淹れてたもん!……それじゃあねえ♪」

唯は無理矢理梓を連れ出すと、そのまま音楽準備室へと向かった。

音楽準備室の中に入るなり、梓がお土産として受け取ったのは「ぶ」と書かれたキーホルダーだった。

「……「ぶ」?お土産ですか?」

このお土産の意図がわからず少し困惑する梓であった。

「そう！それでね、私はこれなんだ！」

そう言つて唯が取り出したのは「ん」と書かれたキーホルダーだった。

「？」

唯のキーホルダーを見た梓が首を傾げると、唯たちは互いの顔を見合わせていた。

「「「「「セーの！」「」」」」

5人は同時に出したのは、どれも1文字のキーホルダーだった。

「……………これって……………」

全員のキーホルダーを見た時、梓はこれが何を意味するのかを理解していた。

しかし……………

「……………「おけぶいん！」桶を愛する部員のことだ！」

「いやいや、違うだろ」

律の繰り出すボケに統夜がすかさずツツコミを入れていた。

「いぶおんけ！」東北地方に生息する妖怪の名前だ！」

「それも違うつての！」

『おいおい、今はお前さんの大喜利コーナーじゃないんだぜ？』

「ムキーっ！うるせえよ！イルバ！」

イルバの指摘が気に入らなかったのか、律はムキになって反論していた。

「だからなあ、これは……」

「……「けいおんぶ！」ですよね？」

統夜が正解を言う前に梓が正解を当てていた。

「……ああ！」

統夜は全員のキーホルダーを並べてみた。

「け」「い」「お」「ん」「ぶ」「ー」

このように並べられたキーホルダーを見た梓は嬉しさのあまり笑みを浮かべていた。

「……あと、俺からもお土産があつてな」

統夜はキーホルダーのようなものを取り出すと、それを唯たち全員に渡した。

そのキーホルダーには盾と剣のイラストが描かれていた。

「あの、統夜先輩、これは？」

「まあ、簡単に言えばこれは俺の誓いの証つてやつかな？」

「……誓いの証？」

「ああ。俺はこれからも魔戒騎士として人を……みんなを守っていく。俺はそのため盾にもなるし剣にもなる。その思いを込めたものだよ」

「こう語る統夜の目は真剣そのものであった。」

……続く。

——次回予告——

『人間というのは面白いもんだな。自分の産まれた日をわざわざ祝うんだからな。次回、「生誕」！ま、俺様は祝ってもらったことはないがな』

第51話 「生誕」

統夜たちが修学旅行から帰ってきた翌日、統夜はイレスたちにお土産を渡すために紅の番犬所を訪れていた。

「……統夜、ありがとうございます♪」

統夜がお土産としてイレスに渡したのは、京都名物の八つ橋など京都ならではのお土産ばかりだった。

「お抹茶もありますし、これはおやつの時間が楽しみです♪」

イレスは統夜のお土産を心底喜んでいた。

「喜んでもらえて光栄です」

「統夜、俺たちにもこんなにお土産ありがとうな」

大輝と戒人にも、お土産を用意していた。

イレスよりは少ないものの、八つ橋など京都ならではのお土産を渡していた。

ちなみに甘い物が苦手な戒人に八つ橋などのお土産ではなく、京都っぽい雑貨を多く選んでいた。

「俺、甘い物苦手だからこのお土産は嬉しいよ。ありがとうな」

「いいんだって。……それよりも戒人！お前昨日は梓たちと遊んだんだって？」
「んな?!何でお前がそれを知ってるんだよ！」

統夜がその事実を知っているとは思っておらず、戒人は驚いていた。

「だって、唯の携帯に送られた写メにお前の姿がチラッと写ってたからな」

「ああ、なるほど……」

唯の写メを見たならば知っていても不思議はないと思い、戒人は思わず納得してしまった。

「へえ、珍しいですね。あなたはあまりそういう遊びに興味はないと思っていました」

「まあ、そうなんですけど、人のことを知るいい機会にはなりました」

「で、何をしたんだ？」

「バッテリーセンターとやらを体験してな。まぐれ当りだとは思いますが、ホームランも出たし面白かったぞ」

戒人はアミューズメントセンターで遊んだバッテリーセンターの話をしていた。

「へえ、バッテリーセンターかあ。確かに面白いよな」

統夜も唯たちと行ったことがあり、体験したことがあるため、面白さは理解していた。
「私もやったことあります！難しかったですけど……」

イレスも留学生として桜高に潜り込んだ時、クラスメイトたちとバッテリーセン

ターに行ったことがあった。

しかし、まったく打てずに諦めてしまったという結果だった。

「まあ、戒人にとつてはいい経験になったんじゃないのか？」

「はい！俺にとつていい経験になりました」

実はバッティングセンターに行ったことのない大輝が話をまとめていた。

「そういえば、梓にはお土産を渡したのですか？」

「いえ、今は学校を休んでますから、登校した時に渡そうってみんなで決めたんです」

「そうですか」

番犬所を訪れた今日は修学旅行の翌日だったため、3年生は学校を休んでいる。

なので、休みが明けてから梓にお土産を渡そうと唯たちと相談して決めたのである。

「梓、喜んでくれると良いですね♪」

「はいー」

こうして、お土産に関する話は終了した。

「……それはそうと、都の番犬所の神官から話は聞きましたよ。京都でも見事ホラーを討滅したそうですね」

「ええ、修学旅行を上手いこと抜け出してホラーを討滅しました」

「あの方は口や態度こそ辛辣なところはありますが、根は悪い人ではありません。そこ

は理解してあげて下さい」

「はっ、はあ……。イレズ様がそうおっしゃるなら……」

稲荷の性格を理解していたイレズは、このように統夜をフォローしていた。

「これは口止めされましたが、あの方は統夜のことを褒めてましたよ？学校なんてくだらないところに行つてくるくせにそこら辺の魔戒騎士より強いって」

『……どうやらあいつも人を見る目はあるようだな』

「ああ、そうらしい」

統夜は稲荷のことを快く思っていなかったが、評価するべき点はしっかりと評価していることから、稲荷に対する気持ちも少しだけ改めていた。

こうして稲荷に対する話も終了した。

その後指令はなかったので、統夜は修学旅行がどんなものだったかを報告した後、番犬所を後にした。

その後は街の見回りを行い、帰路についた。

※※※

休みが明けて、統夜たちは無事梓にお土産を渡すことが出来た。

梓にお土産を渡した日の部活が終了すると、統夜はこの日も番犬所を訪れていた。

「統夜、指令です」

番犬所の中に入ると、イレスにこう宣言されたので、統夜は赤の指令書をイレスの付き人の秘書官から受け取った。

魔導ライターを取り出すと、魔導火を放ち、指令書を燃やすと、そこから浮かび上がってきた魔戒語の文章を音読した。

統夜が指令を読み終えると、魔戒語の文章は消滅した。

『……裂空ホラーと言われたズフォーマーか……。これは随分と面倒な仕事を押し付けられたものだ』

イルバは指令の内容から討滅するホラーがズフォーマーと呼ばれるホラーとわかると、げんなりとしていた。

「?・そうなのか?」

『ああ、こいつは相当すばしっこいホラーだな。先回りして叩くしかない』

「先回りつて……。そのホラーはかなりすばしっこいんだろ？」

「統夜、そのホラー対策の魔導具が明日の朝にこの番犬所に送られます。その魔導具を用いてズフォーマーを待ち伏せするのです」

「その魔導具つて、レオさんの魔導具ですか？」

「ええ。数年前にもズフォーマーが現れたのですが、その時は冴島鋼牙がレオの魔導具を用いて討滅したと聞いています」

イレスの言う通り、以前もズフォーマーが出現したことがあったのだが、鋼牙はレオの魔導具を用いてズフォーマーを討滅したのであった。

「わかりました。明日の朝、その魔導具を受け取り、ホラーを討滅します」

「頼みましたよ、統夜」

統夜はイレスに一礼をすると、番犬所を後にした。

統夜はホラー討滅の準備のため、1度家に戻ることにしたのだが、その移動中にさわ子に電話をかけた。

明日のホラー討伐は長丁場になるため、学校を休まなきゃいけないからである。

魔戒騎士の仕事だと理解したさわ子は、風邪で学校を休むということにしてくれた。

統夜はそんなさわ子に礼を言うと電話を切り、家に戻って、明日の準備を始めた。

翌日の早朝、番犬所を訪れた統夜はレオから送られたズフォーマー捜索のための魔導具を受け取り、番犬所を後にした。

統夜はイルバのナビゲーションとある場所にたどり着くと、そこから開かれた扉に入り、奇妙な岩が並び立つ雲海にたどり着いた。

統夜はイルバの指定した場所に到着すると、すぐにレオの魔導具をセットした。

『……よし、これで後は奴さんが出てくるのを待つだけだぜ』

「……ああ。今日は長丁場になりそうだな」

統夜は今回のホラーとの戦いは待つことが多くなる持久戦となることを予想していた。

統夜は手頃な大きさの岩に腰を下ろすと、魔戒剣を取り出し、いつズフォーマーが現れても良いように準備していた。

統夜がズフォーマーが現れるのを待っていた頃……。

「やーくん、来ないね……」

「今日もひよつとして遅刻かしら？」

もうすぐHRの時間なのに統夜が現れないことを唯と紬は心配していた。

統夜はエレメントの浄化に夢中になるあまり遅刻することは度々あったので、紬は今日も遅刻ではないかと予想していた。

しかし、HRが始まり、さわ子から告げられた報告に唯たちは驚いていた。

「えーつと、月影君ですが、風邪をひいてしまったみたいで、今日は学校をお休みすると連絡がありました」

統夜が風邪を引いて休むと言われ、唯たちはもちろん、他のクラスメイトたちもざわついていた。

「え？月影君も風邪引くんだ……」

「何か丈夫そうなんだけどね……」

統夜はあまり風邪を引くことではないと思込んでいる人が多かったので、風邪と聞いて驚いていたのである。

「はい、静かに！HRはまだ終わってないですよー」

ざわつく生徒たちをさわ子が注意し、さわ子は連絡事項の説明を始めた。

「……やーくん……」

唯も学校を休んだ統夜のことを心配していた。

「……さーわちゃん！」

HRが終わり、さわ子は職員室に戻るため廊下を歩いていたのだが、律に呼び止められた。

「聞きたいことがあるんですけどー！」

そうやって律はさわ子に駆け寄った。

律だけではなく、唯、漕、紬、和もついてきていた。

「……もしかして、統夜君のこと？」

さわ子の問いに唯たちは頷いていた。

「ねえ、さわちゃん。やーくんは本当に風邪でお休みなの？」

唯はずっと気になっていた疑問をさわ子にぶつけた。

さわ子は他の生徒が聞き耳を立ててないか警戒し、周囲を見回すが、幸い唯たち以外の姿はなかった。

「……実は統夜君はね、ホラー討伐に向かっているみたいなの」

さわ子が本当のことを唯たちに告げると、唯たちは驚いていた。

「え!? だって今は朝だろ? こんな時間にホラー討伐に行つたつて言うのか?」

「私もそれは思つただけだね、今回のホラーは相当すばしっこいんですつて。だから待ち伏せして倒すしかないつて言つてたのよ」

「なるほど……。ホラーを待ち伏せして確実に倒すために今日は学校を休んだつてことね」

さわ子の説明を受けた紬はこのような推理を行い、その推理にさわ子は頷いていた。

「統夜君のことが心配だとは思うけど、統夜君なら大丈夫よ! だからあなたたちは教室に戻りなさい」

「そうだよね。確かにやーくんのことは心配だけど、やーくんなら大丈夫だよね!」

「そうだな。統夜は守りし者なんだ。そんな統夜の強さを私は信じてる」

「ああ! あたしもだ!」

「私も私も♪」

唯たちは統夜のことを心配はしていたが、統夜の強さを信じていた。

そんな統夜を信じる姿勢を見たさわ子は笑みを浮かべていた。

こうして唯たちは教室に戻り、いつも通り授業を受けていたのである。

※※※

その頃、統夜は未だ姿を見せないズフォーマーを待ち続けていた。

『……そろそろ授業が始まる頃合いだな』

「ああ。今日は学校休むって言ってたし、唯たちは心配してるだろうな」

『そうかもな。だからこそ唯たちを安心させるためにズフォーマーを確実に仕留めないとな』

「ああ、わかってる。このレオさんの魔導具があれば奴の動きはわかるからな」

現在レオの魔導具はまるで風車のようにグルグルと回転していた。

これは、ズフォーマーが移動を続けていることを示している。

統夜は精神を集中させてズフォーマーを待ち続けていた。

「……え？ 統夜先輩、お休みなんですか？」

この日もあつという間に過ぎ去り、放課後となった。

梓は唯たちから統夜が休みと告げられて驚いていた。

「ああ、統夜は朝からホラー討伐に向かったみたいなんだよ」

「え!?朝から……ですか?」

「今回のホラーは相当すばしっこいみたいなの」

「それで、ホラーを待ち伏せして確実にやつつけるために学校を休んだみたいなんだよね」

「……そうだったんですか……」

「……梓もやっぱり統夜のことか心配か?」

漣の問いかけに梓は無言で頷いた。

「心配ですけど、私は統夜先輩のことを信じています。だって、統夜先輩は多くの人を……私たちを守る守りし者ですから!」

統夜のことを心の底から信じている梓は力強い瞳で統夜の無事を確信していた。

「そうだよな、私たちもそう思ってるよ」

「うん!私もやーくんを信じてるよ、あずにゃん!」

「だからこそ私たちはいつも通りでいきましょう♪」

「はい!」

こうして唯たちは統夜を信じながらいつも通りの生活を送ることにしたのであった。

「……そういえば、今度の日曜日が統夜先輩の誕生日らしいんですけど、知ってました？」

いつものようにティータイムを行っていたのだが、梓が唐突に振ったこの話題を聞いた唯たちは啞然としていた。

「え!? もうすぐやーくんの誕生日だったの!？」

「全然知らなかった!」

「そう言えば統夜君の誕生日とか話をしなかったわよね」

「確かにそうだな……」

唯たちは統夜と誕生日の話をしたことはなく、統夜の誕生日がいつだか知らなかった。

「知らなかったんですか?先輩たちは知ってると思っただけですけど……」

梓は唯たちが統夜の誕生日を知らないことに驚いていた。

「つていうかあずにゃん誰からやーくんの誕生日を聞いたの?」

「え？本人からですけど？」

梓は去年の期末テストが終わった後に統夜と動物園でデートをしたのだが、その時に誕生日を聞いていたのである。

統夜は誕生日を隠す気もなかったもので、普通に教えてくれたのである。

「本人って、いつ聞いてたんだよ……」

いつの間にか誕生日の情報を仕入れていた梓に滯は驚いていた。

「まあ、それはともかくとして、統夜君は毎日大変だし、今度の日曜日、統夜君のサプライズバースデーパーティーをしたらどうかしら？」

「それだ！」

紬の提案に律はすぐに賛同していた。

「いいかもしれないですね」

「うん！面白そう！」

「私も賛成だ！」

梓、唯、滯も賛同し、統夜のバースデーパーティーを行うことになった。

「ところで、パーティーをやるのはいいんですけど、どこでやるんですか？」

梓はやるにあたって一番の問題である場所について聞いていた。

「んー、そうだなあ……」

「私の家はどうかかな？」

唯は真つ先に自分の家を提案していた。

「まあ、唯の家が一番無難だけど、憂ちゃんにかなり負担をかけちゃうよな」

「……………！だったら、ムギの別荘はどうなんだ？」

「それなら私たちで準備も出来るし、悪くはないかもな！」

律の考えた紬の別荘というのはかなりの妙案だと思われたのだが…………。

「ごめんなさい、ちようど今度の日曜日は別荘はどこも予定がいっぱいで使えないの…………」

紬の別荘は残念ながら使用出来ないという状態だった。

「……………あつ！鋼牙さんのお屋敷はどうかしら？」

「ゴンザさんなら相談したら喜んで協力してくれそうだな」

「だけど、尊敬する人の家でのパーティーって逆にやーくんが気を遣うんじゃないかなあ？」

「そうですね。それに、カオルさんはオメデタで、今は大変な時期らしいですからね」

梓の言う通り、鋼牙の妻であるカオルは去年統夜の学園祭を見に行ったあたりで妊娠が発覚し、今年の夏に産まれる予定になっている。

梓は時々カオルとメールでやり取りをしており、その時に妊娠したことを知ったので

ある。

ちなみに統夜や唯たちもカオルが妊娠していることは知っている。

「そうだよなあ……。大変な時期なのにカオルさんに迷惑をかけられないしな」

「やつぱり唯ちゃんの家が良さそうね……。」

「私たちも協力してなるべく憂ちゃんの負担を減らさないと」

こうして色々検討した結果、統夜のバースデーパーティーは唯の家で行うことになった。

「ねえ、プレゼントはどうしよう?」

「それは今度の土曜日にみんなで見にいこうぜ!」

「そうだな!」

「はい!そうしましょう!」

「うん!賛成!」

プレゼントも前日である土曜日に集まって買いに行くことを決めた。

その後はパーティーでどのようなことをするかを話し合っていたため、練習どころではなかった。

統夜のバースデーパーティーをどのように行うかある程度話をまとめたところでこの日の部活は終了し、解散となった。

※※※

統夜が魔導具を設置し、ズフォーマーを待ち続け、どれだけの時間が経っただろうか？

統夜は今現在もズフォーマーを待ち続けていた。

そして、待ちに待った瞬間が訪れたのである。

「……………」

統夜は何かを感じ取り、立ち上がった。

その異変はイルバも察知していた。

「……………統夜！来るぞー！」

統夜の眼前に龍のような姿をした何かが統夜の方に近付いてきた。

その龍のような姿をした何かこそが、統夜の追い求めていたズフォーマーであった。

統夜はズフォーマーと接触する直前に鎧を召還し、皇輝剣を一閃してズフォーマーを一撃で斬り裂いた。

千載一遇のチャンスを見事にものにした統夜は鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

『統夜、ようやく倒したな』

「ああ。これで家に帰れるよ……」

長い時間待ってホラーを倒したため、疲労がいつもより蓄積していたのか、統夜は大きく伸びをしていた。

「さて、さっさと撤収して、家に帰るとしますか」

『ああ、そうだな』

統夜はレオの魔導具を手にとると、それで帰る準備は整ったので、イルバのナビゲーションを頼りに今いる空間から脱出すると、そのまま帰路についた。

※※※

ズフォーマー討伐から数日が経過した。

この日は土曜日で、学校は休みであった。

今日は部活も休みだと事前に聞いていた統夜は、この日はいつも以上にエレメントの浄化を行っていた。

商店街で昼食を済ませた統夜はエレメントの浄化を再開しようとしたのだが……。

「……ん？あれって……」

統夜は唯たちを発見したのだが、唯たちは雑貨屋の中に入っていった。

「みんな揃って買い物かな？今日は部活も休みだし」

統夜は唯たちが統夜の誕生日プレゼントを買っているなど知る由もなかった。

『統夜。唯たちは気になるだろうが行くぞ。まだ今日の仕事はたくさん残ってるんだからな』

「わかってるって」

統夜は雑貨屋とは反対方向の道を歩き始めると、再びエレメントの浄化を行っていた。

この日のエレメントの浄化を終えた統夜は一度番犬所を訪れていた。

しかし、指令はなかったため、番犬所を出た統夜は街の見回りを行っていた。

そして、夜遅くになり、この日このまま帰ろうかと思っていたその時、突如統夜の携帯が鳴り響いていた。

統夜は携帯を取り出すと、律から電話が来ていた。

それがわかると、統夜はすぐに電話に出た。

「……はい、もしもし」

『あつ、統夜。今大丈夫か?』

「ああ、大丈夫だ」

『明日なんだけどき、明日も1日中魔戒騎士の仕事があるんだろ?』

「ああ、部活が休みなら午前午後とエレメントの浄化をしなきゃいけないからな」

統夜は日曜日も部活が休みと聞いていたので、明日も今日のようにエレメントの浄化を行うつもりだった。

もし指令があればホラー討伐に向かわなければならぬのだが……。

『明日、そのエレメントの浄化が終わったらさ、唯の家に来てくれないか?』

「唯の家？何かあるのか？」

『それは明日になったらわかるよ。それじゃあ、頼んだぜえ！』

「おい！ちよつと、律！」

統夜の有無を言わずに律は電話を切った。

ツイッターという電話の切れる音を聞きながら統夜は啞然としていた。

「……つたく、何なんだよ、律のやつ……」

統夜は正気に戻ると、このように文句を言っていた。

『やれやれ。行かないとうるさそうだし、これは行くしかなさそうだな』

「ま、仕方ないな」

統夜は遺憾ではあるものの、とりあえず明日のエレメントの浄化が終わり次第、唯の家に行くことにした。

予定が決まったところで、統夜は帰路についた。

※※※

翌日、唯たちは午前中から唯の家に集まり、統夜のバースデーパーティーの準備を行っていた。

それは、料理や飾り付けなど、憂一人に負担をかけさせないためである。

料理は憂、滯、紬が行うことになり、残りのメンパーは飾り付けなどを担当していた。ちなみに統夜のバースデーパーティーにはさわ子、和、純も来るようだった。

唯たちは戒人や大輝に声をかけることも考えたが、統夜のバースデーパーティーは魔戒騎士としてではなく、同じ軽音部の仲間として行いたいという思いがあった。

そのため、今回は誘っていないのである。

唯たちは統夜のエレメントの浄化が早く終わることも計算に入れて素早く作業を行っていた。

唯たちがそんなことをしてくれているとはつゆ知らず、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

「……それにしても唯の家で何をやるんだろうな？」

統夜は昨日の夜に律から電話が来てから、ずっとそのことが気になっていた。

『さあな。俺様にもわからん』

「もしかしたら指令が来るかもしれないってのに……」

『まあ、唯の家に行つてから番犬所に行けばいいだろう。そこで指令を受けたらそのままホラー討伐に向かえばいいしな』

「そ、そうだな」

統夜はイルバと話すことで納得したのか、これ以上はこの話をするのではなく、エレメントの浄化を行った。

昼食も済ませ、この日のエレメントの浄化が終わったのは、16時になる前だった。

統夜は律に今から唯の家に向かうと連絡し、唯の家に向かった。

移動を始めてから10分後、唯の家に到着した統夜は、ピンポンと家のチャイムを鳴らした。

ドタドタドタと足音が聞こえてくると、鍵が開く音が聞こえ、統夜は扉を開けた。

「統夜さん、いらっしやい♪」

「統夜、待ってたぞ！」

玄関で統夜を出迎えてくれたのは憂と律だった。

「ああ、遅くなった。それよりもき、今日はこの家で何をするんだ？」

「まあまあ、焦るなつて♪すぐにわかるからさ♪」

「？」

統夜が律の言葉に首を傾げていると、憂がスリッパを準備していた。

「とりあえず、上がって下さい♪」

「じゃ、じゃあ、お邪魔します」

律の目的がわからず困惑する統夜であったが、とりあえず家にあがり、2人に連れられてリビングに入った。

すると……。

——パン！パン！パン！！

「!？」

突然あちこちからクラツカーの音が聞こえてきて、統夜は驚いていた。

よく見るとクラツカーを鳴らしていたのは唯たちで、テーブルにはご馳走が並んでいた。

「なあ、律。これは？」

突然の出来事に困惑する統夜を見て、律はふふん！と笑みを浮かべていた。

そして、「せーの！」と全員に合図をしていた。

すると、その場にいた全員が口々に統夜に誕生日おめでとう！と言っていた。

その言葉を聞いた統夜は状況が飲み込めず、目をパチクリとさせていた。

「……う？やーくん？」

「どうしたんですか、統夜先輩？」

「あ、ああ。悪い悪い。突然だったからびつくりしちゃってな……」

統夜は突然誕生日を祝ってもらったことに驚いていたのである。

「それに、今日は俺の誕生日だったな。祝ってもらうまで忘れてたよ」

『え!?!』

統夜の言葉にその場にいた全員がこう反応していた。

『そういえば、去年の誕生日だってお前さんはど忘れしてたもんな』

「誕生日を祝ってもらうこと自体久しぶりだったからな……」

統夜は幼い頃に両親を失っており、その後は魔戒騎士になるため必死に修行していた。

そのため、日々の忙しさにかまけて誕生日のことなどすっかり忘れていたのである。

「そうだったんですね……」

「だけどき、みんなに誕生日を祝ってもらって嬉しいよ。ありがとう！」

統夜は自分の嬉しいという気持ちを素直に伝えると、それを聞いた唯たちは笑みを浮かべていた。

「さあ、統夜君。さつそくだけど、火を消して下さい♪」

統夜の誕生日ケーキは紬が用意したもののだが……。

「ああ、わかったよ。……つてでか！」

紬の持つてきたケーキは普通のケーキの倍以上の大きさであり、その大きさに思わず驚いてしまった。

しかし、統夜は気を取り直してロウソクに灯された火を吹き消していた。

統夜が火を消すと、唯たちから拍手が送られた。

「それじゃあ食べようぜ！あたしたちは統夜が来るまであんまり食べてないんだからもうお腹ペコペコなんだからな！」

「はいはい、わかったよ」

こうして統夜たちはテーブルに並べられたご馳走たちを食べ始めた。

テーブルのご馳走たちはかなり豪華なもので、朝から気合入れて作ったのだろうということが理解できる程である。

統夜はそのことに感謝しながらご馳走たちに舌鼓を打っていたのである。

※※※

「……あつ、そうそう。あたしたちから統夜にプレゼントがあるんだよね」

食事を始めてから1時間が経過し、律がこのように話を切り出してきた。

「え？そんなのか？」

統夜はプレゼントまで用意しているとは思っていなかったもので、驚いていた。

「これは私からよ」

和が用意したプレゼントは、少し高そうな万年筆だった。

「これは、良かったのか？何か高そうだけど……」

「いいのよ。魔戒騎士の使命も大事だけど、ちゃんと勉強もしなさいね」

「アハハ……。わかってるって」

本当に母親のような和の言葉に統夜は思わず苦笑いをしてしまった。

「私からはこれです！」

続いて純が用意したプレゼントは、ギターの交換用の弦だった。

「！純ちゃん、これって……」

「梓から聞きました。統夜先輩はそれを好んで使ってるって。ギターやってたら定期的
に弦の交換は必要だし、良いかなって思いました」

「ありがとな、純ちゃん！大切にするよ！」

統夜は魔戒騎士の使命があるからなかなか交換用の弦を買う暇がなかったので、純
からのプレゼントは心の底から嬉しかった。

「私からはこれよ！」

さわ子が統夜に渡したのは1枚のCDなのだが、それを見た統夜の表情が一変してい
た。

「！先生、これってまさか……」

「ええ、あなたの好きな「ワルキューレ」のアルバムよ。最近出たこのCDを統夜君は欲
しいって言ってたじゃない？良いかなって思ったのよ」

「ありがとうございます！凄く嬉しいです！」

ワルキューレは統夜の好きなグループなので、そのアルバムは素直に嬉しかった。

「わ、私からはこれです……」

憂が統夜に渡したのは、本なのだが、一冊だけではなかった。

「統夜さん、その小説読みたいて言っていましたよ？なので、その全巻集めてみたんです」

統夜が読みたがっているこの小説は、とある魔法使いが主人公の話で、世界中で大人気の小説であった。

「全巻って……。揃えるのにけっこうかかったんじゃないのか？」

統夜は読んでみたかった小説は嬉しかったのだが、一冊の予算がかなりのものなので、気を遣っていた。

「大丈夫です。私も読みたかったですし、インターネットを使って上手いこと安く仕入れましたからー！」

憂はネットオークションで普通に買うより安い値段で仕入れることが出来たため、経済的負担は思ったよりも少なかった。

「なので、読み終わったら私にも貸して下さいね♪」

「ああ、もちろんだよ」

統夜は憂と共有しながらこの小説をじっくりと読んでいくつもりだった。

「そして、私たちは5人は共同で統夜のプレゼントを選んだんだよ」

何と唯たちは一人一人ではなく、5人でお金を出し合って1つのものを購入したようだった。

そのプレゼントは小さな箱に入っており、軽音部を代表して、律が統夜にその箱を渡した。

「統夜先輩、開けてみて下さい♪」

梓がこう統夜を促すと、律、唯、漑、紬の4人はウンウンと頷いていた。

統夜は箱を開けて、中身を確認した。
すると……。

「い、これって……」

箱の中身を見た統夜はこの日で1番驚いていた。

「……ウフフ♪やっぱり驚いてるわね♪」

「やーくん、絶対気にいると思うよ♪」

紬と唯はこのプレゼントは統夜が必ず喜ぶと確信していた。
その中身とは……。

「……これは、ネックレスか。だけどここの部分はもしかして……」

「ああ。統夜のもう1つの名前、奏狼の紋章をモチーフにしたんだ」

唯たちのプレゼントこそ、統夜のもう1つの名前である奏狼の紋章が入ったネックレス

スであった。

「これ、どこで買ったんだ？」

「これはね、私の知り合いの人に作ってもらったの。今日の朝、出来上がったのよ♪」

紬の言う通り、このネックレスは紬の知り合いに頼んで作ってもらったオーダーメイドのネックレスだった。

「昨日色々見てみたんだけど、これが一番統夜らしいかなって思ってたさ」

昨日統夜は雑貨屋に入っていく唯たちを見かけたのだが、それは統夜のプレゼントを探すためであった。

しかし、雑貨屋では目ぼしいものはなく、話し合いを重ねた結果、紬の知り合いにオーダーメイドのネックレス作りを依頼し、今日の朝、完成したものを受け取ったのである。

一番統夜らしい。その言葉が統夜にとってはどんな言葉よりも嬉しかった。

そこまで自分のことを考えてこのネックレスを用意してくれたのか。

そんな唯たちの気持ちも統夜の心を満たしていたのである。

「統夜先輩。それ、つけてあげますね」

軽音部を代表していた梓が統夜にネックレスをつけた。

その間は統夜と梓はもう少しで体が密着するくらい近付いており、梓は恥ずかしさで顔を赤らめていた。

統夜は梓とここまで接近したことはなく、梓からは女の子らしい良い匂いがしていた。

その甘い匂いと、背伸びをして一生懸命ネックレスをつけようとする梓の姿に、統夜は顔を真っ赤にしていた。

純、和、さわ子はそんな光景を見てニヤニヤしていたが、残りのメンバーは羨ましそうにそんな光景を見つめていた。

（ほお、奏狼の紋章のネックレスとは、ずいぶんと面白いものを選んだじゃないか。それなら統夜が喜ぶのは確実だしな）

イルバは唯たちが送ったネックレスをこのように評価していた。

「……はい、終わりましたよ」

ネックレスをつけ終えた梓は統夜から離れるが、少しだけ名残惜しそうにしていた。

「唯、律、滯、ムギ、梓……。本当にありがとな！これ、大切にしているからな！」

つけられたネックレスを見つめながら統夜は満面の笑みでこう語っていた。

それを見ていた唯たちも満足そうに微笑んでいた。

「……さあ！プレゼントも終わったことだし、パーティーの続きをするわよ！」

「そうですよ！まだまだご馳走もあるんですから♪」

統夜と唯たちの間にとてと甘い空気が流れていたため、さわ子と純がこう切り出し、

そんな空気を断ち切っていた。

「2人の言う通りね。楽しいのはこれからだしね♪」

普段から真面目な和もこの雰囲気を楽しんでいた。

「そうだな、今日は思い切り楽しませてもらおうかな」

統夜はみんなが企画してくれたこの会を心の底から楽しむことを決めた。

『統夜、番犬所から呼び出しが来たらそっちを優先するからな』

「わかってるって♪」

統夜は魔戒騎士であるため、そう割り切ってはいたものの、今日だけは指令や呼び出しはやめてくれと心の底から祈っていた。

結局この日は指令も番犬所からの呼び出しもなく、統夜や唯たちはこのパーティーを思い切り楽しんでいた。

……続く。

『これはなかなかまずいことになったな。まさかアレと戦うことになるとはな……。次回、「獄龍」。アレを敵に回すとは厄介過ぎるぜ！』

次

第5 2話 「獄龍」

……ここは、とある場所に存在する地下洞窟。

その奥地には、かつて布道シグマが開発し、魔戒騎士を葬り去るために開発された巨大号竜、鉄騎が眠っていた。

この鉄騎は機能停止の状態で眠っていた、
そんな鉄騎に近づく影があった。

「……これがあの布道シグマが作った鉄騎か……」

鉄騎に近付いたのは、マントを羽織り、黒いフードを被っていた。

そのため、顔が確認出来ず性別も判断出来ないが、男で体格から男であると思われる。
「……俺が作っている最高の魔導具に比べりゃスクラップも同然か」

鉄騎は機能停止しているものの、外見の損傷はほとんどない。

そんな鉄騎を謎の男はスクラップ扱いしていた。

「まあ、こんなんでも持って帰って直せばいいデータも取れるだろ。そして、作ってやるさ。ホラーを滅ぼし、目障りな魔戒騎士を滅ぼす最高の魔導具をな！」

謎の男の目的は、自分が開発した魔導具で全てのホラーを滅ぼし、さらに魔戒騎士に

恨みがあるのか魔戒騎士を滅ぼそうとしていた。

目的自体はかつて魔戒騎士を滅ぼそうとした布道シグマと似ているが、根本的な目的は謎だった。

謎の男は鉄騎を回収すると、その場から姿を消した。

謎の男が鉄騎を回収してしばらくすると、布道レオとその一番弟子である魔戒法師、アキトがこの洞窟を訪れていた。

布道シグマが開発した鉄騎がこの洞窟に眠っていることが元老院の調査で明らかになったからである。

レオとアキトの目的は、この鉄騎が何者かに悪用されることがないように、回収することだった。

しかし……。

「……師匠！ここに……にあるはずの鉄騎が無くなっている！」

2人が駆けつけた時には時すでに遅く、鉄騎は姿を消していた。

「……本当ですね……」

レオも鉄騎が消えたことを確認し、驚愕していた。

「師匠、確かあの鉄騎は機能停止してたはずだよな？」

「ええ、ここら辺にはゲートもないから勝手に動くことはあり得ないのですが……」

「!まさか、誰かが鉄騎を持ち去ったとか?」

「……その可能性はあり得ますね」

アキトの推理にレオは賛同していた。

「とりあえず1度元老院に戻りましょう。早くこの件を何とかしないと、とんでもない

ことが起きそうですからね」

「了解だ、師匠!」

こうしてレオとアキトは元老院に戻り、鉄騎が何者かに持ち去られた可能性があることを報告しに向かった。

※※※

統夜のバースデーパーティーが行われた翌日、統夜はこの日も日課であるエレメントの浄化を行っていたのだが、この日の統夜はとても上機嫌だった。

『……統夜、ずいぶんと機嫌が良さそうだな』

「まあね♪唯たちのくれたネックレスが嬉しくてつい♪」

『やれやれ、浮れるのもその辺にしておけ。そんな浮ついた気持ちだと勝てる相手にも勝てないぞ』

「わかってるって♪」

イルバの小言をさらっと聞き流した統夜はそのままエレメントの浄化に向かった。

そんな統夜の姿を、何者かが遠くでジッと見物していた。

「……あの赤いコートのガキ……。確かあのグレゴルをぶっ倒した奴だったな……」

その人物は鉄騎を奪った謎の男であり、かつて統夜とグレゴルとの戦いを見ていた。

「……確かあのガキはグオルブをも倒したって周りが騒いでたな……」

謎の男の耳にも統夜がグオルブを倒したことは伝わっていた。

「白銀騎士奏狼……だっけか？あんな小僧にやられるとは、グオルブも案外たいしたことはないのかもな」

謎の男は統夜が倒したグオルブのことをかなり過小評価していた。

「……あの小僧で試してみるか……。この私が作った最高の力を持った鉄騎の力を……！」

謎の男は鉄騎を奪った後、改造を施し、通常の鉄騎以上の力を植え付けていたのである。

その鉄騎のテスト相手に統夜が選ばれてしまったのである。

「まあ、お手並み拝見といこうか……」

謎の男はこう呟くと、その場から姿を消した。

エレメントの浄化を終えた統夜はいつものように登校した。

そして統夜はいつものように教室に入ると、自分の席に座った。

「……あつ、統夜君、おはよう」

「ああ、おはよう。姫子」

3年生になってまだ2ヶ月も経っていないが、去年も同じクラスで、席も隣だったこともあり、統夜と姫子は互いに名前で呼ぶようになっていた。

「……あれ？統夜君、ネックレスなんてしてたっけ？」

姫子は統夜の胸元でチラリと光るネックレスが偶然目に入ったので聞いてみた。

「ああ、これ？昨日俺は誕生日でさ、このネックレスは唯たちからもらったんだよ」

「え!?統夜君、昨日誕生日だったんだ!おめでどう!」

姫子は統夜の誕生日を知って驚くと、統夜の誕生日を祝っていた。

統夜の誕生日が昨日だということを耳にしたクラスメイトたちが一斉に統夜の方へと押し寄せていった。

「え!?統夜君、昨日誕生日だったんだ!」

「おめでどう!」

「まあ、プレゼントはないけど、勘弁してね♪」

「アハハ、その気持ちだけで嬉しいよ」

クラスメイトたちが一斉に押し寄せてきたので、統夜は苦笑いをしていた。

統夜は姫子と話をしたら唯たちと話をしようと思っていたのだが、クラスメイトたちが一斉に押し寄せてきたので、話をする事が出来なかった。

すると……。

《おい、統夜。唯たちが恨めしそうにこつちを見てるぞ》

(アハハ……。そうみたいだな)

クラスの女の子たちと楽しげに話をしているのが気に入らなかったのか、唯たちはド

ス黒いオーラを放って統夜を睨みつけていた。

統夜はイルバに言われる前からそんな気配を察しており、苦笑いをしていた。

結局クラスメイトたちと話しているうちに始業のチャイムが鳴ってしまい、みんなそれぞれ自分の席に帰っていった。

さわ子が教室に入ると、そのままHRが始まった。

※※※

その後はいつものように授業が始まり、昼休みになった。

この日も統夜は軽音部のみんなや和と集まり、食事を取っていた。

「やーくん、そのネットクレス気に入ったみたいだね！」

1日中ネットクレスをつけていたことを知っていた唯はそのことが嬉しかった。

「まあな。やっぱりこういうのは嬉しいからな」

統夜は奏狼の紋章がついているこのネックレスを心底気に入っていた。

「そこまで気に入ってくれたのならプレゼントした甲斐があったわ♪」

このネックレスをあげることを思いついた紬も統夜の喜ぶ顔を見て、満足そうにしていた。

「それにしても、良くそのネックレスを作ってもらえたわね。だって、その四角の部分って奏狼の紋章なんでしょう?」

「普通の人が見たらこの紋章はただの四角形にしか見えないからね。だからすんなりと作ってもらえたのよ」

四角形の模様というシンプルなものだったからこそ、1日でネックレスを作ってもらえたのである。

「なるほどね、それなら納得だわ」

紬の説明を聞いた和は納得したのかウンウンと頷いていた。

その後も統夜たちは食事をしながら世間話をしていた。

統夜が唯たちと昼食を楽しんでいた頃、レオとアキトは元老院を訪れていた。

元老院の神官であるグレスに回収予定だった鉄騎が何者かに奪われた可能性がある

ことを伝えるためである。

レオとアキトの報告を聞いたグレスは驚きを隠せなかった。

「……レオ、アキト。話はわかりました。今回の状況は由々しき状況みたいですね……」
「はい。速やかに鉄騎を発見し、回収もしくは破壊しなければ犠牲者が出る可能性があります！」

「とはいえ、どうやって鉄騎を見つけられるのか……」

鉄騎を速やかに発見しなければ、鉄騎が目覚めてしまい、その鉄騎が人を襲う可能性は充分にあった。

「そうですね……。何か手がかりがあれば良いのですが……」

グレスも鉄騎が何処にいるかの手がかりがわからず、途方に暮れていた。

「……とりあえず全ての番犬所に警戒するよう伝えておきます。レオ、アキト。あなたたちは速やかに鉄騎を発見し、回収もしくは破壊するのです」

「はい、わかりました！」

こうしてレオとアキトは鉄騎の搜索を開始した。

「……師匠！俺は桜ヶ丘に向かってみるよ」

「桜ヶ丘……ですか？」

「統夜にもこの事を伝えておきたいって思っただけ。鉄騎を奪った奴が桜ヶ丘に潜伏してる

可能性だつてある訳だし」

「わかりました。そつちはアキトに任せます。僕はこの周辺から探ってみます」

「師匠、もし鉄騎を見つけたら連絡よろしく!」

「アキトも頼みましたよ。それに、無理は禁物ですよ。魔戒銃はまだまだ未完成なんですから」

「わかつてるつて♪」

こうしてアキトは鉄騎を探すために桜ヶ丘に向かい、レオは現在地周辺から搜索を開始した。

※※※

レオとアキトがそれぞれ行動を開始しているうちに放課後になつていた。

統夜は部活に参加する予定だったのだが、番犬所から呼び出しが来てしまったため、

部活を休んで番犬所へと向かった。

番犬所に到着すると、既に戒人と大輝も来ていたのだが、2人揃って神妙な面持ちをしていた。

「……統夜、来ましたね」

2人だけではなく、イレスも神妙な面持ちをしていた。

「はい、イレス様。もしかして、指令ですか?」

「いえ、指令ではないのですが、少々面倒なことが起きてまして……」

「面倒なこと?」

「……鉄騎が何者かに持ち去られた可能性がある」

イレスに代わり、大輝が今回の事件を簡潔に説明していた。

「て、鉄騎って……!あの布道シグマが作ったって言われてる、あの?」

「そうです。最近になって、最後の1体である鉄騎が見つかったと元老院が調べて、レオがそれを回収するため、現地に向かったそうです。ですが……」

「……レオさんが駆けつけた時には鉄騎の姿はなかったってことですね?」

統夜の推測にイレスは無言で頷いていた。

『とりあえず、速やかに鉄騎を見つけぬと、とんでもないことが起こりそうじゃの』

「ああ、そうだな。犠牲者が出る可能性だってあり得るからな」

こう語る戒人の表情は険しいものになっていた。

「……！鉄騎が無差別に人を襲う可能性があるってことか？」

『鉄騎を奪ったのが誰かは知らんが、その可能性は大いにあり得るぜ』

「イルバの言う通りです。速やかにこの問題を解決する必要があるため、元老院が全ての番犬所に警戒するよう通達がありました」

元老院の神官であるグレスが全ての番犬所に警戒するよう通達したのは、レオとアキトが鉄騎の捜索を開始してすぐだった。

「イレス様、俺たちもその鉄騎を探しに行ってくださいます！」

鉄騎が人を襲うことだけは避けたいと考えていた統夜はすぐに行動することをイレスに伝えた。

「そうですね。この桜ヶ丘に鉄騎を奪った者が潜伏してる可能性もありますからね」

「戒人、俺たちも一緒に行くぞ」

「ええ、もちろんです」

大輝と戒人も鉄騎捜索に動くことを決めていた。

「統夜、戒人。もし鉄騎を見つけたら無理に1人で倒そうと思うなよ。鉄騎はなかなか手強いからな。並の魔戒騎士なら倒すことは出来ないだろう」

「あれ？大輝さん、鉄騎のことを知っているのですか？」

「ああ。俺もイデアとの戦いに参戦していたからな」

布道シグマはイデアを建造し、ギャノンと呼ばれるホラーが復活した。

大輝もギャノンが復活する前にシグマに破滅の刻印を埋め込まれ、危うく命を落としそうになった1人であった。

牙狼の称号を持つ冴島鋼牙の活躍で大輝を含めた魔戒騎士たちの破滅の刻印は消え去り、九死に一生を得たのであった。

その後、ギャノンが復活し、ギャノンはシグマを取り込んでしまった。

ギャノンはイデアを乗っ取り、鋼牙、零、翼、ワタル、レオはギャノンを止めるために戦った。

その時、多くの魔戒騎士が鋼牙たちの手助けをしたのだが、大輝もそんな魔戒騎士の1人だった。

大輝は2体の鉄騎を斬り裂く零の戦いを見ており、その時鉄騎の力がかなりのものであると感じていたのである。

「大輝さんもギャノンとの戦いに参戦してたんですね」

「まあ、俺は魔戒騎士になってからだいぶ経つからな」

大輝は称号を持たないものの、様々な死地を乗り越えてきたベテラン魔戒騎士だったので、ギャノンとの戦いに参戦していてもおかしくないと思っていた。

「……とりあえず行くぞ！鉄騎を探し出さなきゃいけないからな」

「はい！」

こうして統夜、戒人、大輝の3人は番犬所を後にして、鉄騎の搜索を始めた。

統夜は1人で鉄騎を探すこととなり、戒人は大輝と共に鉄騎の搜索を行った。

称号を持たぬ故に大輝は魔導具を持っていないので、もし鉄騎を見つけたらすぐに連絡が取れるように戒人と行動することにしたのである。

こうしてそれぞれ行動を開始した。

※※※

統夜が番犬所で鉄騎の話をしている頃、唯たちはいつものように部室でティータイムを行っていた。

この日もティータイムがメインであまり練習をすることなく、部活が終了した。

「……やーくん、今日は来なかったね……」

今は5人揃って帰り道を歩いていただけだが、統夜が部活に現れず唯は少し寂しそうな表情をしていた。

「番犬所から呼び出しがあるって言ってたわね」

「またホラーの討伐でしょうか……」

「そうかもしれないな……」

統夜が番犬所から呼び出しを受けたということは聞いていたので、ホラー討伐の指令が来たのだろうと予想していた。

「まあ、統夜のことだから大丈夫だとは思うけどな」

「そうね。りっちゃん言う通りだと思うわ♪」

律も袖も統夜のことを信じているため、そこまで心配はしていなかった。

それは唯、漕、梓も同様にウンウンと頷いていた。

その時である。

「……あれ？やーくんだ！」

唯が偶然歩いている統夜を発見した。

「あつ、本当だ！」

「何か探してるようですね……」

「もしかしてお仕事かしら？」

「とりあえず声をかけてみようぜ！」

「うん！おーい！やーくん！」

唯は迷うことなく、大声で統夜を呼んでいた。

統夜はすぐに反応したのだが、こんな所で唯たちと会うとは思っていなかったのか驚いていた。

統夜は驚きながらもすぐさま唯たちのもとへ駆け寄った。

「お前ら、こんな所で会うとは奇遇だな」

「ウフフ♪そうかもね♪」

「統夜先輩は指令ですか？」

「まあ、そんなところかな」

厳密に言えば指令ではないのだが、指令のようなもので、こう答えていた。

「もしかして、ホラーですか？」

「ホラーとは少し違うんだが……。……！」

統夜は梓の問いかけに答えると、何かの異変を感じ取っていた。

「?やーくん、どしたの？」

「……何か嫌な気配を感じてな……」

統夜は険しい表情を浮かべながら周囲を見回していた。

『ああ、俺様もそんな気配を感じるぜ。統夜、油断するなよ』

イルバも謎の気配を察知しており、統夜に警戒するよう告げた。

「みんな、俺から離れるなよ」

統夜は下手にみんなを逃せば逆に危険かもしれないと推測し、唯たちを統夜の近くに集めていた。

そして……。

『統夜！上から来るぞ！』

イルバが何かが近付いてくることを察知し、上空から何かが飛び出してきた。

「ひっ!?!」

「な、何だよ、あれ!?!」

「もしかして、ホラー!?!」

上空から現れた怪物のようなものに滞、律、紬は怯えていた。

「みんな！とりあえず隠れてろ!」

統夜はこう唯たちに告げると、魔戒剣を抜いた。

唯たちは統夜の言うことを聞いて、安全な場所まで移動していた。

「イルバ、もしかしてこいつが鉄騎か!?!」

『どうやらそうらしいな』

統夜の目の前に現れたのは鉄騎だったのだが、シグマが作った鉄騎とは容姿が異なっていた。

この鉄騎はまるでケルベロスのように三つ首なのが特徴的だった。これこそ、この鉄騎を奪った謎の男が改良した鉄騎・獄龍だった。

「……戒人！聞こえるか、戒人！」

統夜は襲いかかってきた鉄騎・獄龍からの攻撃をかわしながら、イルバを通して戒人に連絡を入れていた。

魔導輪や魔導具を持つものは、それを通して連絡を取り合うことが可能性なのである。

『統夜！どうした!?!』

「例の鉄騎を発見した！大至急来てくれ！」

統夜は一人で倒そうとはせず、戒人と大輝に応援を要請した。

『わかった！急いで向かうからそれまで持ち堪えろよ！』

「ああ、もちろんだ！」

統夜は鉄騎・獄龍の攻撃をかわしながら戒人と連絡を取り合っていた。

連絡が終わったところで、統夜は反撃と言わんばかりに魔戒剣を振るうが、鉄騎・獄龍の身体は硬く、傷をつけることは出来なかった。

「くっ……いやっぱりこいつは身体が硬いか！」

統夜は後方にジャンプをして、鉄騎・獄龍と距離を取った。

その時、鉄騎・獄龍は三つの口からそれぞれ炎を吐き出した。

「！マジかよ！」

さすがに3方向からの炎をかわすのは困難だったが、統夜はどうか炎による攻撃をかわしていた。

『統夜！攻撃をかわしていたら街に被害が出るぞ！』

「んなことはわかってるよ！だけど避けないと俺が黒コゲだろうが！」

攻撃をかわし続けたら炎によって街に被害が出ることは統夜も承知していた。

しかし、炎をまともに受ければいくら統夜でも助からないというのは統夜自身が理解していた。

「くそっ！このままじゃ唯たちも危険か！」

統夜はこのまま戦いが長引くと、唯たちにも危険か及ぶと考えて、焦りを見せていた。

「……………こうなったら……………！鎧を召還して……………！」

戒人と大輝が来るのを待っていたら今いるこの一帯に大きな被害が出ると考えた統夜は鎧を召還して一気に決着をつけようとした。

その時だった。

どこからか弾丸のようなものが飛び出してきて、それは鉄騎・獄龍の身体を貫いた。「!?今の攻撃、まさか……………」

統夜は銃のような攻撃を繰り返す者に心当たりがあった。そして…………。

「よう、統夜!まさかお前がそいつを見つけるとはな!」

統夜の目の前に現れたのは、統夜のように一般人とは異なる格好をしており、手には銃のようなものが握られていた。

「…………アキト!久しぶりだな!」

その男は、かつて阿号と呼ばれた人型魔導具と戦った時に共に戦った魔戒法師のアキトであった。

「統夜、挨拶は後だ。それよりも…………」

アキトは目の前にいる鉄騎・獄龍を睨みつけていた。

「…………なあ、アキト。あいつが鉄騎で間違いないんだよな?」

「そうだな、だけど…………」

「だけど?」

アキトは深刻そうな表情で鉄騎・獄龍のことを見ていた。

そして…………。

「……何か、格好良くなってるな!!」

アキトは鉄騎・獄龍を見て目をキラキラと輝かせていた。

アキトのあまりにずれた発言に統夜は思わずズッコケそうになっていた。

「おいおい、そこかよ!?! 厄介だとかじゃないのか!?!」

こんな緊迫した状況でもマイペースなアキトに統夜は思わずツツコミを入れていた。

「いやあ、誰がこいつを改造したのかは知らないけど、改造した奴はセンスあるなあつて思つて」

「お前なあ……」

統夜はジト目でアキトのことを見ていた。

すると、鉄騎・獄龍がアキトに襲いかかった。

鉄騎・獄龍が迫り来る中、アキトは笑みを浮かべていた。

そして、アキトは魔導筆を取り出すと、魔戒銃の銃口に術をかけると、そのまま魔戒銃を発砲した。

魔戒銃の弾丸が鉄騎・獄龍の身体に着弾すると、その直後に爆発が起こり、鉄騎・獄龍は爆風で吹き飛ばされた。

「おお、すげえ……」

改良された魔戒銃の威力を目の当たりにして、統夜は呆然としていた。

「へへっ、どうよ！改良に改良を重ねた魔戒銃の力は！」

アキトは続夜に魔戒銃の威力を見せつけると、ドヤ顔をしていた。

『ほお、魔導筆で術を放つて力を蓄え、それを放ったか。お前さんは相変わらず面白いことを考えるな』

イルバもアキトの魔戒銃がここまでの威力をどう出したのかを分析すると、その威力に感心していた。

「ああ、何たつて俺はレオさんの一番弟子だからな。これくらいは当然さー！」

アキトは誇らしげに語っていたのだが、そのことを聞いていた唯たちは驚いていた。

「え!?あの人はレオ先生の?」

「ということはあるの人も魔戒法師ってことよね?」

「凄いな、あの銃のようなもので戦うんだろ?」

「何か格好いいよな!」

「はい!さすがはレオ先生のお弟子さんです!」

梓の言葉が聞こえてカチンと来たのか、アキトは唯たちの方を見ていた。

「おい、お前ら!俺は師匠の〝一番〟弟子だ!一番をつけるのを忘れるなよな!」

アキトは一番ということを強調したかったのか、こう唯たちに注意していた。

「「「「は、はい………!」」」」」

唯たちは啞然としながらもこのように返事をしていた。

「アキト！戦いに集中しろ！」

「わかってるって！」

アキトが統夜にたしなめられたところで、鉄騎・獄龍はゆつくりと起き上がった。

統夜はアキトに援護してもらいながら一気に目の前の鉄騎・獄龍を倒そう。

そんなことを考えていたその時だった。

「統夜！無事か!？」

統夜から連絡を受けてこの場に急行していた戒人と大輝が駆けつけた。

「ああ、何とかな」

「ん？2人はもしかして、この番犬所の魔戒騎士か？」

「そうだが、お前は魔戒法師か？」

「ああ、俺の名前はアキト。レオさんの1番弟子だ！」

アキトは戒人と大輝にもこのような自己紹介をしていた。

「そうか、お前がレオの……。だが、話は後だ！一気に奴を叩くぞ！」

「わかってるって！」

戒人と大輝も視界に入れた鉄騎・獄龍は大きな咆哮を上げていた。

「……行くこう！大輝さん、戒人！」

「おう！」

「承知！」

統夜の呼びかけに応じた大輝と戒人はそれぞれ魔戒剣を抜き、構えた。そして……。

統夜、大輝、戒人の3人は同時に魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、3人はそれぞれの鎧を身に纏った。

統夜は白銀の輝きを放つ、奏狼の鎧を身に纏った。

戒人は紫の輝きを放つ、ガイアの鎧を身に纏った。

大輝は銅の輝きを放つ、鋼の鎧を身に纏った。

「統夜、大輝！俺が奴を引き付ける！その間に烈火炎装で一気に奴を倒すんだ！」

「はい！わかりました！」

「承知！」

大輝の策を了承した統夜と戒人は左右に展開し、それぞれの魔導火を用意して、烈火炎装の準備にはいった。

鉄騎・獄龍は戒人に攻撃を仕掛けようとしたのだが、大輝が鉄騎・獄龍の攻撃を抑えていた。

しかし、鉄騎・獄龍の首は三つあるため、完全に動きを封じることが出来ず、三つの

首のうち一つの首が統夜に迫ろうとしていた。

「……………しまった！」

大輝は三つ首がそれぞれ動くことを計算に入れていなかったのか、焦りを見せていた。

しかし……………。

「俺も援護するぜ！」

アキトは統夜に迫ろうとしている鉄騎・獄龍の一つの首目掛けて魔戒銃を放った、

その銃弾は鉄騎・獄龍にダメージを与えることは出来なかったが、アキトに視線を向けさせるには十分だった。

「……………すまない、助かった！」

「へへっ、これくらいはお安い御用だぜ！」

アキトの援護に大輝が感謝の言葉を述べると、アキトはドヤ顔をしていた。

「それよりも……………」

「統夜！戒人！今だ！」

大輝の合図で統夜と戒人は烈火炎装の状態となり、左右から同時にそれぞれの剣を振るった。

魔導火を纏った皇輝剣と堅陣剣の一閃は、鉄騎・獄龍の三つ首のうち2人を切り落と

した。

すかさず2人はそれぞれの剣を一閃し、それぞれの剣は鉄騎・獄龍の身体をバラバラに斬り裂いた。

バラバラに斬り裂かれた鉄騎・獄龍は、断末魔をあげながら、その身体が爆散し、消滅した。

鉄騎・獄龍が消滅したことを確認した統夜、戒人、大輝の3人は鎧を解除し、それぞれ元に戻った魔戒剣をそれぞれの鞘に納めた。

「ふう……。どうにか倒したか……」

「ずいぶんと手強い相手だったな……」

「ああ、この中の1人でも欠けてたら勝てたかどうか……」

どうにか鉄騎・獄龍を倒すことは出来たが、実力のあるこの4人が揃ったからこそ得られた勝利であった。

もし、この中の誰か1人でも欠けていたら、倒せたとしても街に大きな被害を出す可能性があった。

「こつちとしても助かったよ。鉄騎を破壊したのは残念だけど、この状況じゃ仕方ないしな。後で師匠に報告しなきゃ」

アキトは統夜たちの協力に素直に感謝していた。

「……お前、なかなかやるじゃないか」

初めてアキトの戦いを見た戒人は、アキトの実力を認めていた。

「へへっ、そうだろそうだろ？もつと俺を褒めてくれよ！」

『やれやれ、相変わらずお調子者だな、お前さんは』

初めて出会った時からアキトは変わっておらず、そんなアキトにイルバは呆れていた。

「……自己紹介かまだだったな。俺は黒崎戒人。堅陣騎士ガイアの称号を持つ魔戒騎士だ」

「俺は桐島大輝だ。この2人のように称号は持っていないが、実力は2人に負けてないと思っっている。よろしくな」

「こちらこそ、よろしく！」

戒人、大輝、アキトの3人は無事に自己紹介を終えた。

ちようどその時、唯たちがゆっくりと歩み寄ってきた。

「あの、統夜先輩。この人は……」

アキトのことを初めて見た唯たちだったが、梓が代表して統夜に聞いていた。

統夜はアキトのことを紹介しようとするが、アキトはジツと唯たちのことを見ている。

「……？何ですか？」

「もしかして、5人は統夜の彼女なのか？」

「「「「へ!!」」」」

アキトの唐突な言葉に唯たちは顔を真っ赤にしていた。

「な、何言ってるんだよ！唯たちは同じ部活の仲間だよ！」

統夜も恥ずかしかつたのか、このような弁解をしていた。

すると……。

「「「「へえ……」」」」

統夜の弁解が納得いかなかったのか、唯たちは統夜をドス黒いオーラで睨みつけていた。

「……何か今のやり取りでお前らの関係がわかった気がするよ」

アキトは統夜と唯たちのやり取りを見て、とりあえずこの5人と付き合っただけではないことは理解していた。

「そういえばお前らには自己紹介がまだだったな。俺は魔戒法師のアキト。さつきも言っただけど、俺はレオさんの1番弟子だ！」

アキトは相変わらず自己紹介で「1番弟子」という言葉を強調していた。

「私は、平沢唯です！」

「あたしは田井中律。よろしく！」

「あつ、秋山……漣です」

「琴吹紬です♪ムギって呼んで下さい♪」

「中野梓です！」

唯たちも簡潔に自己紹介を行っていた。

「……へえ……なるほどな」

戒人は律、漣、紬とは自己紹介をしていなかったなので、ここで初めて3人の名前を聞いたのであった。

「えつと、唯ちゃんにりっちゃん。漣ちゃんにムギちゃんに梓ちゃんね。よろしくな！」

「「「「はい！」」」」

こうしてアキトと唯たちは互いに自己紹介を終えた。

「ところで、さつきアキトさんが使ってた銃みたいなものは何だったんですか？」

「ああ、これか？」

アキトは唯たちに魔戒銃を見せた。

「これは魔戒銃っていう武器で、俺が対ホラー用に開発した武器なんだよ」

「え!?これ、アキトさんが作ったんですか!?!」

「へえ、凄いですね！」

「ふふん♪まあね♪」

梓と紬が驚きながら感心しており、それを見たアキトはドヤ顔をしていた。

「……まあ、魔戒銃自体はまだ未完成らしいけどな」

「あつ！バラすなよお！」

ドヤ顔するアキトが気に入らなかつたのか、統夜は魔戒銃の真実をあつさりとバラしていた。

「え？充分凄かつたのにまだ未完成なんですか？」

「ま、まあな。銃の耐久性とか威力とか、改善すべき点はまだまだあるからな」

「バレた以上仕方ないと思ったアキトは魔戒銃の改善点を説明していた。

「へえ、これが実用化されたら凄いことになりそうだな」

戒人もアキトが開発した魔戒銃に興味津々だった。

「まあな。こいつが実用化すれば、低級ホラーなら今よりも楽に倒すことが出来るようになる。そうなれば魔戒法師の負担は減るし、それは魔戒騎士の負担だって減らすことになる。俺は信じている」

アキトが実用性のある武器や魔導具を作るのは、魔戒騎士や魔戒法師の負担を大きく減らすためである。

「……ほお、そいつは楽しみだ」

大輝もアキトの話聞いて魔戒銃が実用化することを楽しみにしていた。

「……とりあえずもう夜も遅いし、帰ろうぜ。みんなは送るからさ」

「そうですね、帰りましょうか」

こうして統夜と唯たちはアキト、大輝、戒人と別れ、それぞれの家に向かっていた。

※※※

統夜たちは見事に鉄騎・獄龍を撃破したのだが、鉄騎を鉄騎・獄龍に改良した謎の男は統夜たちの戦いをずっと見ていた。

「……ちつ、てんでダメじゃねえか。あのスクラップが」

謎の男はシグマが作った鉄騎に悪態をついていた。

「まあ、いい。鉄騎を改良したおかげでデータはだいぶ取れたしな」

謎の男はシグマが作った鉄騎を改良しているうちにそのデータを手に入れることに成功した。

「私の理想とする最強の魔導具も着々と出来上がってるしな。それに、目障りな魔戒騎士を叩き潰すための“あれ”も間もなく出来上がる」

謎の男は何故か魔戒騎士を憎んでおり、その魔戒騎士を倒す兵器を開発していた。

「クククク……！ハアツハツハツハ!!間もなく尽きるその命、せいぜい大切に使うんだな、魔戒騎士どもめ……！」

魔戒騎士の命が間もなく尽きると宣言した謎の男は高笑いをする、その場から姿を消した。

今回の鉄騎・獄龍との戦いこそ、これから起こる激闘の始まりであることを統夜たちは知る由もなかった……。

……続く。

『やれやれ……。アキトの奴、魔戒法師としては優秀な奴だが、まさかこのように
なるとはな。次回、「法師」。この展開は俺様も予想外だぜ!』

第53話 「法師」

統夜、戒人、大輝の3人がアキトの協力を得て、鉄騎の改良型である鉄騎・獄龍を撃破してから、2週間が経過していた。

アキトは鉄騎が桜ヶ丘に現れたことを元老院に報告していた。

グレスとレオに事の顛末を報告したアキトは、グレスからとある指令を受け、再び桜ヶ丘に向かった。

桜ヶ丘に到着したアキトは、そのまま紅の番犬所に直行した。

「……来ましたね、アキト」

「はい、イレス様」

「あなたが来ることは私の母でもあるグレスから聞いています」

「ええ。実はグレス様から直々に指令を受けてここへ来たんです」

「そうみたいです」

普段はレオにくつついて元老院の仕事をしているアキトだったが、レオと離れて仕事をする時は各地の番犬所に派遣されるのである。

今回もとある仕事を行うためにこの紅の番犬所に派遣されたのである。

「奪われた鉄騎がこの桜ヶ丘に現れたということは鉄騎を奪った者もこの桜ヶ丘に潜伏している可能性がありますからね。アキト、鉄騎を奪った者を探し出すのです」

アキトがこの番犬所に派遣されたのも、鉄騎を奪った者を見つけ出すという仕事のためである。

「わかりました、なるべく早く見つけますよ」

「アキト、しばらくこの街にいるんですから、統夜にも挨拶をしたらどうですか？」

「ええ、暇な時にでも統夜の学校に顔でも出してみますよ」

アキトはこう答えてイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

※※※

アキトが紅の番犬所を訪れている頃、統夜は日課であるエレメントの浄化を終えて学校に向かっていた。

最近梅雨入りしたとテレビでも報道しており、外は雨がザーザーと降っていた。

統夜は雨の日にエレメントの浄化やホラー捜索を行う時は、レインコートを着てから魔法衣を羽織っている。

魔戒騎士や魔戒法師が着ている魔法衣は霊獣の毛皮で出来ているので、雨も平気で弾くのである。

統夜は学校に到着すると、一度魔法衣を脱いでからレインコートを脱ぎ、濡れたレインコートの水分をよく切ると、ビニール袋の中にしまった。

その作業が終わると、ビニール袋と魔法衣を手を持った状態で教室へ向かった。

「おはよう。しっかしひどい雨だよなあ」

統夜は挨拶と愚痴を交えながら教室に入ると、真つ先にレインコートが入ったビニール袋と魔法衣を自分のロッカーにしまうと、自分の席についた。

ちなみに、ギターは雨に濡れるのを避けるために魔法衣の裏地の中にしまったままである。

そして、周囲を見回すのだが、唯たちの姿は見えなかった。

「あれ？唯たち、まだ来てないのかな？」

「ああ、唯たちだったら音楽準備室に行ってみたんだよ。唯ってば制服ビショビショだったからさ、制服乾かして着替えるんじゃないかな」

周囲を見回す統夜を見ていた姫子が唯たちが音楽準備室にいることを教えてくれた。「そうなのか。ありがとな！」

唯たちがどこにいるのかわかったので、姫子に礼を言っていた。

《やれやれ。唯のやつは一体どんな濡れ方をしたのやら……》

(まあ、この雨なんだ。ずぶ濡れになるのも仕方ない気がするけどな)

統夜は窓から見える景色を眺めながらイルバとテレパシーで会話をしていた。

「あつ、やーくん！おはよー」

すると、着替えを終えた唯が教室に入ってきて、統夜に挨拶をした。

「ああ。おはよう、ゆ……い？」

統夜は唯の方を見て挨拶しようとしたのだが、唯の格好を見て啞然としていた。

それだけではなく、唯の格好を見たクラスメイトたちも驚いているのかざわついていた。

「……？やーくん、どしたの？」

「どうしたもこうしたもあるか！何でその格好なんだよ！」

唯が着ているのは普通の服ではなく、何故かさわ子お手製の素体ホラーの着ぐるみだった。

「ええ？だつて可愛いからいいかなあつて思つて……」

《おいおい、いくら何でもそのチョイスはないだろう》
(だよな……)

イルバも何故か素体ホラーの着ぐるみをチョイスした唯に呆れており、統夜も共感していた。

「とりあえず、他のを着てこい！」

「ええ!?このままでもいいと思っただけどなあ……」

「ダメに決まってるんだろ!さっさと行つてこい！」

「チエツ……わかったよお……」

唯は不満そうではあったが、渋々了承し、再び音楽準備室に戻つて着替えを再び始めた。

しばらく経つて、唯は戻ってきたのだが、今度は何故かメイド服を着ていた。

こうして、唯はメイド服のまま、HRは始まった。

さわ子は出欠を取ろうとするが、メイド服の唯の姿がすぐ目についてしまった。

「……平沢さん?あ、あなた、何でそんな格好をしているの?」

「制服が濡れちゃったので、代わりに着ました!」

唯はさわ子にこのような格好をしている理由を説明した。

「い、いくら何でもそんな変な格好で授業を受けるのは……」

「なーに言ってるのさ。それ作ったのはさわちや……」

さわちやんじゃん。こう律が言い切る前にさわ子は律を睨みつけ、口封じをしていた。

さわ子に睨まれた律は顔を真っ青にして固まっていた。

「平沢さん、他の服はないの？」

「えつと……」

全くない訳ではなかったのだが、唯は返答に困っていた。

すると、教室の扉が開き、どこかに行っていた和が戻ってきた。

「遅れてすみません」

こう挨拶をした和はジャージを抱えて唯のところへと向かった。

「……これ、よそのクラスの子から借りて来たから」

そう言って和はジャージを渡そうとするが、何故か唯は不満そうだった。

「……?どうしたの?」

「せつかくだからもつと違う服が着たいなあ」

「おいおい、コスプレパーティーじゃないんだから……」

唯のあまりにずれた発言に統夜は思わずツツコミを入れていた。

「いいから、着替えなさい!」

さわ子からの櫛が飛び、唯は慌てて和からジャージを受け取ると、着替えのため教室から出て行った。

着替えをしている唯はひとまず置いておき、さわ子はHRを再開した。

唯がジャージに着替えて戻ってきたのは、ちょうどHRが終わった頃であった。

※※※

昼休みになると、音楽準備室に置いてある唯の濡れた制服は乾いていたので、唯たちは昼食を取った後に被服室を借りてスカートのアイロンがけを行っていた。

今回は統夜も一緒に被服室に来ていた。

唯は自分のスカートのアイロンを行うのだが、なかなか上手く出来なかった。

手つきも危なっかしく、その様子を見ていた統夜、漣、紬はハラハラしていた。

ちなみに律は、唯のワイシャツのボタンがとれそうだったので、ボタン付けをしてい

た。

唯のアイロンがけは危なっかしくて見ていられないと判断した紬は唯の代わりにアイロンがけを行った。

唯とは違い、紬の手際は良く、丁寧な仕上がりになっていた。

「……ムギ、上手いな」

「へえ、さすがはムギだな」

「ごめんね、ムギちゃん」

滯と統夜は紬のアイロンがけに関心しており、唯は代わりにやってくれたことに対して申し訳なさそうにしていた。

「ゆーい！ポタン、とれかけてたぞ」

ポタン付けを終えた律は唯にワイシャツを手渡した。

「……りっちゃん、つけてくれたの？」

「うん」

「りっちゃん、ありがとー！」

唯は律がポタン付けをしてくれたことに感激していた。

「チマチマしたこと苦手なのに、ポタン付けは早いんだよなあ」

「へえ、律がここまで出来るとはねえ、本当に意外……！」

意外だわ。統夜がそう言い切る前に律の拳骨が飛んできた。

「お前は一言多いんだよ、バカ統夜！」

「いてて……」

律の拳骨がかなり効いたのか、統夜は殴られたところを手で抑えていた。

『律、お前さんも女らしい一面があつたんだな』

続いてイルバが律をからかっていた。

「むう、うるせえよ！バカイルバ！」

律はぶうつと頬を膨らませながらイルバに反論していた。

『おいおい、バカは心外だな……』

律の反論に対してイルバはこのように呟いていた。

そんなやり取りをしているうちにスカートのアイロンがけも終わったので、統夜は一

足先に被服室から出て行き、唯は被服室で制服に着替えた。

「ごめんね、やーくん。お待たせえ」

制服に着替えた唯が被服室から出てきた。

しかし……。

「……なあ、唯」

「ほえ？なーに？」

「その下のジャージは女子としてどうなんだよ……」

唯はスカートの下にジャージのズボンをはいており、あまりにおかしい格好だったので、統夜は呆れていた。

「やっぱり統夜もそう思ってたか。あたしも女子としてどうかと思ってたんだよ」

統夜の意見に律も賛同し、律も統夜のように呆れていた。

「ええ!?!りっちゃんだつてよくやつてんじゃん!」

「ですわよねえ♪」

『そういえばお前さんもよくそんな格好をしていたな……』

律も今の唯のような格好をよくしていたことを思い出し、イルバも呆れていた。

「何やつてるの?」

「あ、さわちゃん」

唯たちが被服室を出てすぐ、たまたま通りがかつたさわ子が唯たちを見つけて声をかけた。

そして、すぐ唯のはいているジャージに目がいってしまった。

「ジャージは脱ぎなさいね」

さわ子は先生として当然の注意をしていた。

「ええ!?!」

「田井中さんも裾を中に入れて」

「な、何と！」

律は自分も注意されたことに対して驚いていた。

「さくらこ……。」

「月影君、あなたはネクタイちゃんと締めなさい」

「へ!?!」

統夜もまさか自分に飛び火が来るとは思っていなかったので、驚いていた。

「普段は怒らないのに！」

「今日に限ってどうしたんだよ！」

唯のジャージはともかくとして、律は普段からシャツの裾は中に入れておらず、統夜もネクタイは緩く締めてある。

普段は注意しないのに今は注意していることが気に入らなかつたのか、唯と律は反論していた。

しかし、統夜は……。

(……あ、なるほどね。そういうことか)

統夜は他の先生がこつちに向かっていることに気がつくのと、ネクタイをしつかりと締めていた。

さわ子は教師である手前、他の先生が見ている状態で身だしなみをちゃんとしていない生徒を注意しない訳にはいかなかったのである。

「……唯、律。ここは察して言う通りになしておけ」

さわ子の立場を察した統夜はこう唯と律を説得し、律は波々言うことを聞いていた。唯はジャージを脱ごうとはせず、膨れっ面のままだった。

こうしてこつちに向かっていた先生はそのまま階段を降りてどこかへ移動していた。先生がいなくなったのを見計らったさわ子は……。

「ほら、平沢さんも早く！」

「この方がいいんだもん！」

「ダメなものはダメなの！」

「スカートめくれても平気なのに……」

『唯。お前さんは女子としてもうちよつと恥じらいを持ってよ……』

ジャージだからか平然とスカートをめくる唯を見たイルバは全く恥じらいのない唯に呆れていた。

それは統夜も同じ気持ちで、統夜は苦笑いをしていた。

「いいから脱ぎなさい！」

さわ子は無理矢理唯のジャージを脱がそうとするのだが……。

「いやーん！さわちゃん、やめてえ！」

唯がいきなりこのようなことを言い出したため、他の生徒の視線も集まり、さわ子の顔は真っ青になっていた。

「ちよっ!?それじゃ私が襲ってるみたいじゃないの!」

こんなやり取りはあつたものの、唯は渋々ジャージを脱ぎ、この問題は解決した。

唯は制服姿で教室に戻ると、それを見たクラスメイトは少し残念そうにしていた。

それを見ていた唯は少し不満そうにしていたが、期待に応える必要はないと和にたしなめられていた。

もうすぐ昼休みが終わる時間だが、雨はまだ降り続いていた。

そして、放課後となった。

「……………さて、今日は先に部室に行ってるかな」

今日は掃除当番の仕事がない統夜はレインコートが入ったビニール袋と魔法衣を手に取り、教室を出て部室へ向かった。

すると……………。

「ねえねえ、今すっごいイケメンが職員玄関に来てるんだって♪」

「え、嘘?!ちよつと見てみたいかも?」

「それじゃあ、行こうよ!」

こんな話をしていた女子生徒が駆け足で玄関に向かっていた。

「……何だろう。凄く嫌な予感がする……」

《奇遇だな、俺様も同じことを考えていた》

(……とりあえず行ってみるか)

こうして統夜は部屋に行く前に玄関へと向かった。

玄関に到着すると、職員玄関のところに立っている一人の男が、女子生徒たちと楽しげに会話をしていた。

「………な………あ、あいつ………」

その男の姿を見た統夜は驚きのあまり絶句していた。

すると、男は統夜の姿を確認して……。

「あつ、おーい!統夜あ!!」

統夜を呼んで手をブンブンと振っていた。

「あ、アキト………お前………」

その男の正体は、仕事のため桜ヶ丘に来ていたアキトだった。

「おう、統夜。来たぞ！」

「来たぞって……。いきなりだな」

「まあ、お前に話もあつたしな」

アキトは統夜に用事があるらしく、そのためここを訪れたのである。

「ええ？あの人って、月影先輩の知り合いなの？」

「2人並ぶと絵になるわね♪」

「統アキ……アキ統……。ふっふっふ……。これならいけるわ！」

さっきまでアキトと話をしていた女子生徒たちは統夜とアキトが知り合いだとわかり、ざわついていた。

中には腐女子全開な言葉が聞こえてきて、統夜の顔が真っ青になっていた。

「とりあえず、ほら、そこで中に入る手続きをしてくれ。部室に案内するから」

「ああ、わかった♪」

アキトは受付で中に入る手続きを行い、それが済むと、統夜の案内で音楽準備室へ向かった。

統夜とアキトが音楽準備室の中に入ると、すでに唯たちは集まっており、紬がタイムの準備を行っていた。

「あ、やーくん来た！」

「あ、あと、あなたは……アキトさん？」

「おう、統夜に用事があつてな、寄らせてもらったぜ」

突然現れたアキトに唯たちは驚くが、アキトはそんなことなどお構いなしでここに来た理由を話していた。

「そうなんですか？まあ、とりあえず座ってください♪もうすぐお茶の準備が出来ますので♪」

「おつ、待つてました！」

「お前なあ……」

お茶と聞いたアキトはそれを心待ちにしており、マイペースなアキトに統夜は呆れていた。

そうしているうちにティータイムの準備が終わったようで、アキトを座らせた統夜も自分の席に腰を下ろした。

アキトの前に紅茶とケーキが置かれると、紬は遠慮なくどうぞとアキトを促していた。

「……これが軽音部のお茶か……。統夜から話を聞いていたけど、これは楽しみだよ♪」
紅茶の香りも良く、ケーキも美味しそうだったので、アキトは胸を躍らせていた。

「まあ♪それなら遠慮なくどうぞ♪」

「それじゃ遠慮なく♪」

アキトは紅茶を一口飲み、ケーキも一口食べた。
すると……。

「うまい！紅茶もケーキも今までの中で一番だ！」

「ウフフ♪気に入ってもらえたなら良かったです♪」

アキトにも紅茶とケーキは好評のようで、紬は嬉しそうだった。

「それはそうと。わざわざティータイムに参加するためにここに来たんじゃないだら
？」

統夜はアキトにここへ来た目的を問おうとしていた。

「おっと、そうだった」

アキトも大事な用事を思い出していた。

そしてアキトは一息つくつと、話を切り出した。

「……実は俺さ、しばらくこの街に居ることになってな。それで挨拶に来たって訳だ」
「ということは何か指令があるってことなのか？」

「ま、そういうこと♪ほら、この前襲ってきたあの格好いい鉄騎がいただろ？」

「あ、ああ……」

格好いいということには同意出来なかったのか、統夜は苦笑いをしていた。

「鉄騎を奪った奴がこの桜ヶ丘に潜伏してる可能性が高いんだよ。俺は元老院からそいつの捜索を命じられてるって訳さ」

「なるほどな。確かにその可能性はあり得るよな」

実は統夜も鉄騎が桜ヶ丘に現れたことで、この事件には黒幕がいるのではないかと疑っていたのである。

「まあ、なるべく早く早くそいつを見つけてとっ捕まえるつもりだから、その時は統夜も力を貸してくれよな」

「もちろんだ。鉄騎を奪った奴が何を企んでるかは知らんが、みんながいるこの街で好き勝手はさせないさ」

統夜も鉄騎を奪った者を探しているアキトに協力するつもりだった。

「へへっ、そう来なくちやな♪」

統夜が快く協力してくれるとわかると、アキトは嬉しそうにしていた。

「さーて、要件は伝えたいし、ムギちゃんのお茶を堪能させてもらおうかな♪」

「ウフフ♪お代わりもたくさんあるので、遠慮しないで下さいね♪」

「それじゃあお言葉に甘えて♪」

統夜に伝えるべきことを伝えたアキトは紬の用意した紅茶やケーキを味わい、悦に浸っていた。

統夜はまるで自分の家のようにくつろぐアキトをジト目で見ながら自身も紬の用意した紅茶やケーキを味わっていた。

こうしてティータイムは始まったのだが、今日の朝に誰かの制服がこの部屋に干されていた話や、梓がインターネットで購入した便利グッズの話で盛り上がっていた。

その中で、ギターを濡れたまま放置すると、フィンガーボードにカビが生えると梓が話をする、何故か濡が怯えていた。

唯も慌ててギターをチェックするのだが、弦が錆びていたので、弦の交換を行うことにした。

「……ふーん、弦の交換を見ると、本当にここが軽音部なんだなって思うよ」

「いやいや、軽音部だから……」

アキトがこの部活が軽音部だということを改めて実感していると、統夜は呆れていた。

「……あつ、そうだ！」

「？」

何かを思い出したアキトは、どこからか赤い封筒……指令書を取り出した。

「これ、番犬所から預かってたんだった」

「おいおい、そこは忘れるなよ……」

1番大事な用事をど忘れしていたアキトに統夜は呆れていた。

統夜はアキトから指令書を受け取ると、長椅子に置いてある魔法衣から魔導ライターを取り出し、魔導火を放って指令書を燃やした。

唯たちは何度かこの光景を見ているので、驚くことはなかった。

指令書が燃え尽きると、そこから魔戒語で書かれた文章が浮かび上がり、統夜は指令の内容を音読した。

『……ホラー、アンドウークか……。実力はたいしたことはないが、トラップを用いた戦術が厄介なホラーだぜ』

「トラップねえ、まるでアングレイみたいだな」

『ま、アングレイとは全く関係はないんだがな。名前が似ているだけで』

今回討伐するアンドウークとかつて牙狼の称号を持つ鋼牙が討伐したアングレイとは、名前が似ている以外の共通点はなかった。

「さて、指令なら行かないとな。今なら雨も上がってるし」

統夜はそう言いながら帰り支度をしていたのだが……。

「本当!?よし、私たちも帰ろう!今のうちだ!」

唯が雨の降らないうちに帰ろうと提案していた。

「何でそんなに急ぐんです?」

「だって、ギター太が濡れちゃうよお」

「またギター太って……」

唯はギター太とギター太の弦を交換している時にもギター太に語りかけていた。

そのことに梓はツツコミを入れるものの、それがやきもちと勘違いされ、先輩たちにかからかわれていたのである。

「……あずにゃんはあずにゃんで、大事に思ってるよ♪」

唯のこの言葉に梓の顔は真つ青になっていた。

唯と梓がこのようなやり取りをしているうちに、統夜は帰り支度を整えた。

「……統夜。今回のホラーだが、俺も手伝うぜ」

「えっ?でも、いいのか?お前だってやる事があるだろう?」

「まあ、そうだけどさ、これからお前らにも協力してもらうことが出てくるし、お前らの仕事も手伝わないと。魔戒法師として」

アキトはひょうきんな性格の上義理堅いところがあり、これからの仕事で統夜たちの手を借りる機会が増えるため、統夜たちの仕事も手伝おうと考えていた。

「それじゃあ、お前の力を借りるぜ、アキト!」

「おう、それじゃあ行くこうぜ!……という訳でケーキと紅茶ご馳走さん♪また遊びに来るからな」

「はい、待ってます♪」

アキトがケーキと紅茶をご馳走になったことに礼を言うと、統夜と2人で学校を後にして、イルバのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を開始した。

※※※

統夜とアキトがホラー搜索を始めた頃、桜ヶ丘某所にある小さな画廊で、二十代前半くらいの女性が翌日行われる個展の準備を行っていた。

女性は東ヒカリという名前で、とある画家に憧れて、画家を志した女性である。

「……よいしょ。……もうすぐ私の個展が始まるのね！」

ヒカリは明日行われる個展に胸を躍らせていた。

「……あたしもなれるかなあ。御月カオル先生みたいな画家に……」

ヒカリが憧れている画家こそ、画家や絵本作家として成功したカオルだった。

現在カオルは鋼牙と結婚しているため、本名は「冴島カオル」なのだが、仕事の時は旧姓である「御月カオル」と名乗っているのである。

ヒカリは偶然カオルの作品を見た時にその作品に心打たれ、こんな絵が描ける画家になりたいと思い、「画家の道を志した」。

ヒカリが個展の準備をしていると……。

「……東くん、精が出るね」

この画廊のオーナーがヒカリに労いの言葉を送っていた。

「はい！ワンフラットだけでも展示してもらえるのは本当にありがたいです！」

個展といってもワンフラットのみでの展示ではあるが、それでも画家としては大きな一歩であることに間違いはなかった。

「……あ、そうだ。倉庫の片付けがあつたんだつた。東くん、手伝つてくれないかな？」

「え？でも、まだ明日の準備がありますし……」

ヒカリがこう断ると、オーナーは何故か不機嫌そうな表情をしていた。

「……ま、仕方ないね」

そう言つてオーナーは倉庫の方へと消えていき、ヒカリは明日の準備を再開した。

1時間後、ヒカリは明日の準備を終え、一息ついていた。

「ふう、これで良しつと……」

ヒカリが一息ついて休んでいると……。

「おお、東くん。終わったかね？」

倉庫の片付けをしていたオーナーが再びやってきた。

「あ、はい！終わりました！」

ヒカリはオーナーに明日の準備が終わったことを報告した。

「おお、そうか。それじゃあ今日はもうここを閉めるから、この後食事でもどうかな？」

「あ、いえ……あたしは……」

ヒカリは唐突なオーナーのナンパに困惑していた。

「いいではないか。明日はここを使わせてもらうんだろ？食事くらい」

オーナーは自分の立場を利用してヒカリに迫った。

「……あ、いや、その……」

ヒカリはどう断るかを考えていたのだが、断る言葉が見つからなかった。

こうしてヒカリが困り果てていたその時だった。

「……そこら辺にしといた方がいいんじゃないですか？」

こう制止する言葉と共に統夜とアキトがヒカリとオーナーの前に現れた。

「……な、何なんだ！君たちは！ここは立ち入り禁止だぞ！」

「いやあ、実は探し物をしてたらたまたま通りがかりましてね。あなたがその人に迫る所を見ちゃったって訳ですよ」

「……！見ていたのか！」

「ま、安心してください。俺たちはあなたを脅すつもりはないですから」

「そ、それならさっさと出て行きたまえ！」

オーナーは少し安堵しながらも統夜とアキトを追い出そうとした。

「もちろん出て行きますとも」

「その前に……」

統夜はいつの間にかオーナーの前に移動すると、魔導ライターを取り出し、魔導火を放ってオーナーの瞳を照らした。

すると、オーナーの瞳から不気味な文字のようなものが浮かび上がってきた。

それは、オーナーがホラーであるという証であった。

ホラーであることが発覚したオーナーは素早い動きで何処かへ移動すると、結界のようなものをついた。

そして、統夜、アキト、ヒカリの3人は謎の空間にいつの間にか移動していた。

「な、何!?何なのよ！」

ヒカリはあまりに非日常的な光景に困惑していた。

「……どうやら、これがアンドウクお手製のトラップって訳か」

『ああ、そのようだぜ』

「え？声？今の何処から……」

イルバの声にヒカリが困惑していると、3人の目の前に人のような姿をした何かが現れた。

その手には槍のようなものが握られており、しかも、それは1体ではなかった。

「ひい、ふう、みい……つと。6体か。アキト、一気に蹴ちらすぞ」

「おうー！」

アキトは魔導筆を取り出すと、とある術を放ち、ヒカリを強制的に安全な場所に移動させた。

「え!? な、何!?」

突然体が動いたことに困惑するヒカリを後目に統夜は魔戒剣を抜き、アキトは魔戒銃を取り出した。

そして、人のようなものたちが統夜とアキトめがけて突っ込んでいた。

「……統夜！」

アキトは魔戒銃を発砲すると、統夜はそこから飛び出してきた弾を6等分に斬り裂

き、魔戒剣の切っ先に留まらせた。

統夜が魔戒剣を一閃すると、6等分に分けられた魔戒銃の弾がそれぞれ人のようなものに直撃した。

その一撃で急所が狙い撃たれたのか、人のようなものは消滅した。

「よっしやあー！ ナイスコンビネーション♪」

アキトは統夜との連携技が見事に決まり、満足そうにしていた。

「アキト、油断するなよ。ホラーはまだ生きてるんだからな」

「わかってるって♪」

「あなたたちは……一体……」

ヒカリは剣や銃を持つ統夜やアキトの戦いを唖然としながら見ながらも不審そうに見ていた。

こうしてアンドウークの放ったトラップは統夜とアキトにあっさりと破られ、空間が歪むと、元の画廊に戻ってきた。

アンドウークことオーナーは統夜たちがあっさりとトラップを破ると思っていなかったもので、驚愕していた。

「……トラップにしては歯応えがなかったな」

驚くオーナーを後目に統夜とアキトはトラップを破ったことを告げ、飄々としてい

た。

「……貴様ら、魔戒騎士と魔戒法師か」

オーナーは鋭い目線で統夜とアキトを睨みつけていた。

「え？魔戒騎士？魔戒……法師？」

全く聞きなれない単語にヒカリは困惑していた。

それと同時にこの2人は普通の人間ではないことも確信していた。

「……アキト、その人を頼む。俺は、こいつを斬る！」

統夜は魔戒剣を構え、オーナーを睨みつけた。

「わたった。任せたぜ！」

アキトはヒカリを連れて安全な場所まで移動した。

すると、オーナーの体が次々と変わっていき、この世のものとは思えない化け物に変化した。

「……こいつがアンドウークか」

『ああ、統夜、油断するなよ』

統夜は魔戒剣を力強く握りしめ、アンドウークを睨みつけた。

アンドウークもそんな統夜を睨みつけると、先制攻撃と言わんばかりに突撃してきた。

統夜はそんなアンドウークの攻撃を軽くあしらうと、蹴りを放ってアンドウークを吹き飛ばした。

「くっ……！」

その後、統夜は反撃と言わんばかりにアンドウークに突撃し、魔戒剣を一閃した。

1度だけではなく、2度、3度と魔戒剣を叩き込み、着実にアンドウークにダメージを与えていった。

「このお！魔戒騎士が！」

アンドウークはどうか反撃をしようとするが、統夜はその前に蹴りを放ち、アンドウークを吹き飛ばした。

「ぐあっ！く、くそ……！」

「一気に決着をつける！……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜がアンドウークに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。そこから放たれる光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

「！ぎ、銀色の……狼……？」

ヒカリは見たこともない白銀の輝きを放つ鎧を見て、驚愕していた。

アキトは驚いているヒカリを見て、笑みを浮かべていた。

「大丈夫だ。あいつはあの怪物を倒す。俺もそうだけど、あいつは守りし者だからな」

「守りし……者？」

あまり聞きなれない言葉ではあったが、ヒカリにとって、その言葉は心地の良い響きであった。

そんな中、統夜はゆつくりとアンドウークに向かつていった。

「おのれ！これならどうだ！」

アンドウークは統夜めがけて衝撃波を放つが、全く効いていないのか、歩みを止めることはなかった。

それでもどうにか統夜を止めようと連続で衝撃波を放つが、どれも統夜には効いていなかった。

衝撃波を受け止めながらアンドウークに接近した統夜は皇輝剣を一閃しようとするが……。

「こうなったら……！」

何かを企んだアンドウークはアキトとヒカリに接近した。

「！させるか！」

統夜はアンドウークが2人に接近する前に皇輝剣を一閃し、アンドウークを斬り裂いた。

しかし……。

「ククク……。計画通りだ……！」

アンドウークはこう言葉を言い残し、消滅した。

統夜がアンドウークを斬り裂いた時、アンドウークの血が飛び散ったのだが、その返り血がヒカリに接近していた。

アンドウークの狙いこそ、普通の人間であるヒカリを血に染まりし者にしてしまおうというものだった。

このままホラーの返り血がヒカリについてしまえば、ヒカリはホラーにとって格好の餌になり、100日後には尋常ではない苦しみと共に死に至ってしまう。

そうなってしまうば、ヒカリを斬らなくてはならなかった。

しかし……。

「させるかよー！」

アキトは魔導筆を取り出し、ヒカリに結界を貼った。

そのおかげでヒカリはホラーの返り血から守られ、そのままホラーの返り血も消滅した。

「ふう……良かった……」

アキトのおかげで最悪の事態は回避され、統夜は安堵していた。

そのまま鎧を解除すると、元に戻った魔戒剣を青い鞆に納めた。

そして統夜はアキトとヒカリのもとへ歩み寄った。

「あんた、怪我は……ないみたいだな」

とりあえずホラーとの戦いでヒカリが負傷していないことを確認すると、統夜は安堵していた。

「あ、あんたたち、一体なんなのよ!?それに、さっきの怪物は?」

あまりに非日常的な光景をたくさん見たヒカリは混乱して色々なことを問い詰めていた。

「いやあ、あれは……」

ヒカリのあまりの迫力に統夜とアキトはタジタジになっていた。

「それに、何てことをしてくれたのよ!あたしは明日の個展に命をかけてたのに、それを台無しにするなんて!」

ヒカリは怒りに満ちた表情で統夜とアキトを睨みつけていた。

この画廊のオーナーはホラーであったが故に統夜たちに討伐されたおかげで、明日行われる予定の個展は中止せざるを得なかった。

しかも、そのために支払ったお金も戻ってこないため、ヒカリがここまで怒るのも無理はなかった。

「それは悪いと思ってるよ。だけど……」

「俺たちが来なかつたらあんたはあのホラーに喰われてたぞ。あいつらは人間を喰らうからな」

統夜とアキトは個展を台無しにしたことを謝りながら自分たちが来なかつたらヒカリも危なかつたことを伝えた。

「ホラー？人を喰らう……怪物？」

ヒカリはあの怪物が何なのか少しわかつた気がしていた。
しかし……。

「ホラーとの戦いを見られたからには……」

「？」

統夜は魔法衣の懐から一枚の札を取り出すと、それをヒカリの頭に貼り付けた。

札を貼り付けられたヒカリはそのまま倒れ、気を失っていた。

「……さて、帰ろうぜ。統夜」

「あつ、ああ……」

統夜はそう答えながら気を失っているヒカリのことをジッと見ていた。

「？どうした統夜？早く行こうぜ！」

そう言つてアキトは先に画廊から出て行つた。

「ああ！今行く！」

統夜も慌ててアキトを追いかけた。

（画家を目指してて、ホラーのせいで個展がめちやくちやになる……。まるでカオルさんみたいだな。……もしかしたらまた会うことがあるかもしれないな）

統夜はヒカリとカオルが似ているところがあるからか気になっていた。

そして、もしかしたらまた会うことがあるかもしれないと感じていた。

そんなことを考えながら統夜は画廊を後にした。

途中アキトと別れていると、統夜はそのまま自宅へと向かった。

『……おい、統夜。お前はさつきから何を考えているんだ？』

家に帰る途中、イルバが声をかけてきた。

「ん？さつきホラーに襲われた人がいただろ？あの人、どこかカオルさんに似ているなって思ってたさ」

『ああ、確かにそうかもしれないな。あのお嬢ちゃんもカオルもオーナーがホラーになったせいで個展を台無しにされたり、画家を目指してるところとか似てるかもな。まあ、カオルは今や画家なんだがな』

統夜だけではなく、イルバもヒカリとカオルの共通点に気付いていた。

『まあ、ホラーに関する記憶は消えても個展を台無しにされた記憶は残ってるだろうか

ら今度会う時はつつかかられるかもな』

「アハハ……。出来ればそれは勘弁だな……」

『まあ、それはともかく早く帰ろうぜ』

「そうだな」

こうして統夜はそのまま自宅へと向かったのであった。

……続く。

—— 次回予告 ——

『ほお、こいつは驚いた。漣のやつファンクラブが出来ていたとはな。漣のやつ、人気はあるみたいだからな。次回、「茶会 前編」。まあ、俺様ほどの人気ではないだろうがな』

第54話 「茶会 前編」

アキトが桜ヶ丘で鉄騎を奪った黒幕捜索の任を与えられ、統夜のいる桜ヶ丘高校任を遊びにきてから1週間が経過した。

未だに梅雨は続いていたものの、最近の天気は安定していた。
そんなある日の放課後だった。

「……………」

統夜たちと一緒に部室に向かっていた濡だったが、何故かソワソワしていて落ち着かない状態だった。

「……………濡、どうした？そんなにソワソワして……………」

それが気になっていたら統夜はすぐさま濡に聞いていた。

「い、いや……………今日は朝から誰かの視線を感じるんだ……………」

「……………視線をねえ……………」

統夜は周囲を見回すが、怪しい気配はなかった。

《統夜、とりあえずホラーの気配もないし、怪しい気配は感じないぜ》

(やっぱりそうだよなあ)

統夜は濡の誰かに見られてるといふ言葉にストーリーカーの可能性を考えたが、イルバも妙な気配を感じていなかったの、その可能性は低いと感じていた。

「濡ちゃん、人気者だから♪」

「いや、そういうんじゃないなくて、ずっと誰かに監視されてるような……」

濡は不安気にこう答えるのだが……。

「「「ジ……」」」

統夜、唯、律、紬の4人が濡を凝視していた。

「うわあっ！み、見るな！／＼／＼／＼」

統夜たちに凝視されて恥ずかしかったのか、濡は顔を背けていた。

「それもさ、自意識過剰なんじゃないのかあ？」

「いや、だから！本当なんだってば！どこからか監視するような視線を……」

濡は必死に視線を感じるといふことを伝えると、濡の背後に何者かが近付いていた。

濡を除く全員がその気配に気付き、戦慄していた。

そして……。

「だーれだっ♪」

さわ子が滯の両目を両手で覆って隠すお約束をやっていた。

「はあ……さわ子先生……」

統夜は年相応ではない悪戯をするさわ子を見て、ため息をつきながら呆れていた。

そして、滯はというと……。

「……………」

余りに怖かったのか、真っ白になって固まっていた。

「あ……あれ？」

さわ子はここまで怖がるとは思っていなかったので、困惑していた。

「やれやれ……」

『全く……。あいつの悪戯にも困ったもんだぜ……』

統夜とイルバは真っ白になって固まってる滯を見て呆れていた。

「……………ふーん。誰かの視線を感じるねえ……」

滯が復活するとそのまま部室に向かい、ティータイムが行われると、滯はさわ子にも誰かの視線を感じると相談していた。

「まあ、私は見られまくってるけどね♪」

「さわちゃん、外見はいいからな」

律は、*は*という言葉を強調していた。

「ちよつとお！ *は*って何よ！ *は*って！」

「まあ、内面に問題ありってことだよな……」

統夜は誰にも聞こえないようにボソツと呟いたのだが……。

「ああん!? ふざけたこと抜かすとシメるぞ、月影えー！」

「！すいませんでしたあ!!」

さわ子の迫力が相当なものだったのか、ビビった統夜は土下座で謝罪をしていた。

『やれやれ……。統夜、お前なあ……。』

イルバはビビって土下座をする統夜を見て心底呆れていた。

「もしかして、滯を追っかけ回してたのはさわちゃんじゃないのかあ？」

律はこう言つてさわ子をからかうのだが……。

「あら、私だつたら見るだけじゃ済まないわよ♪」

あつさりともんでもないことを言うさわ子に、律は納得すると、これ以上は何も言わ

なかった。

そんな中、唯は1人うーんと何かを考えていた。

「……わかった！犯人はトンちゃんだ！」

「へ？何でそうなるんだよ！」

いつの間にか土下座をやめた統夜がすかさずツツコミを入れていた。

「だって……。みおちゃんはトンちゃんのことを怖がつて、あまり構ってあげてないから、トンちゃん……背中に張り付いているんだよ！」

唯がこのような話をする、滯はそんな様子を想像してみた。

すると……。

「怖い怖い!!」

滯は慌てて背中を掻いていた。

「ま、これがマジだったらかなりのホラーだけどな」

統夜は冷静に唯の語ったことを分析していた。

そんな中……。

「皆さん！真面目に考えて下さい！ストーカーに狙われてるかもしれないですよ！」

梓は先輩たちがまともに滯の心配をしていないことに怒っていた。

「梓……」

滯はそんな梓の言動が嬉しかった。

『やれやれ……。仕方ないな……。』

「……………？イルバ？」

イルバが何かを見通しており、滯は首を傾げていた。

『統夜、滯のやつ気付いてないみたいだから言つてやれ』

「あつ、ああ。わかったよ」

「？」

「……………滯、今日の朝飯は焼きそばパンじゃなかったか？」

「え？た、確かに……………今朝は寝坊して、朝ごはんをゆつくり食べる暇がなかったから

……………」

統夜が滯の朝ごはんを当ててしまい、滯は驚いていた。

「その焼きそばパンってさ、20%引きじゃなかったか？」

「な!?!何でそこまでわかるんだよ!」

焼きそばパンの値引き率まで当てられ、滯はさらに驚愕していた。

「…ま、まさか……………!」

「やーくんが……………ストーリーカー？」

律と唯がこのような推理をすると、ジト目で統夜のことを見ていた。

「おい！何でそうなる！」

「統夜先輩……最低です……」

梓はまるで腫れ物を見るような目で統夜のことを見ていた。

「だから俺じゃないつつうの！そもそも、俺より先にイルバが当ててるし！」

統夜はストーカー疑惑を払拭するために、今までの推理はイルバの推理と伝えた。

イルバの推理とわかると、統夜のストーカー疑惑はあっさりと払拭された。

「つたく……。イルバが話してくれば変な疑いはかけられずに済んだのに……」

統夜はいらぬ疑惑をかけられたことにブツブツと文句を言っていた。

『俺が言うよりお前さんが言った方が面白いと思つてな。それよりも統夜』

イルバの言葉に統夜が頷くと、統夜は濡の髪についている値引きのシールを優しく取った。

「……これ、朝からついてたぞ」

「それでみんな見てたのか……。つか、知ってたんなら何で言わないんだよお！」

「俺は言った方がいいと思つたんだがな、イルバの奴がこの方が面白いから黙つてろつていうからさ」

『……………』

統夜はこう弁解するが、何故かイルバは口を開こうとしなかった。

すると……。

「あなたたち、何覗いてるの」

音楽準備室の入り口から和の声が聞こえると、扉がボタン！と開き、2人の女の子がなだれ込んできた。

そして、この2人に声をかけたであろう和がぽつんと立っていた。

「……和、この子たちは？」

「いや、その……」

2人の女の子にどうやら和も困惑していて上手く答えることが出来なかった。
すると……。

「別に！怪しい者ではありません！」

《いやいや、この部屋を覗いてた時点で十分怪しいだろうが》

（だよなあ。っていうか、イルバはさっきあの2人に気付いてたから黙ってたのか？）

《まあ、そういうことだ。俺たちが話してる途中で覗いてたみたいだからな。だから俺様は黙ってたって訳だ》

イルバが急に黙り込んだのは、誰かがこの部屋を覗いていると気配で察知したからであつた。

「……私たちは、滯先輩ファンクラブの者です！」

そう言いながら1人の女の子が滯の写真が入ってる会員証らしきものを見せてきた。実は滯のファンクラブ自体は統夜たちが1年生の時に行った学祭ライブの後に出来たものであった。

それだけではなく、秘密裏に統夜のファンクラブも出来ているらしいのだが、本当かどうかはわかっておらず、本人も気付いていないようだった。

「ファンクラブ……」

その言葉を聞いて和は何かを思い出したようであった。すると、滯はガタン！と机に頭をぶつけていた。

「うう……。そのことはもう忘れようとしていたのに……」

統夜たちが1年生の時に行った学祭ライブの後にファンクラブが出来たことは滯も知っていたようで、そのことはライブと共に滯の黒歴史となっていた。

「……あ、もしかして、滯ちゃんの髪にシールがついてるのを見に？」

「はい！他の会員から聞きまして！」

「おいおい、だったら何で教えてやらなかったんだ？」

「さつきまで知らんぷりしてたお前が言うな！」

滯は少々呆れ気味に聞いていた統夜が気に食わないようで、すかさずツツコミを入れていた。

「私は教えた方がいいと思つたんですけど……」

「でも、そういうところが滯先輩らしくて素敵なんです！」

(アハハ……。それ、素敵なのかなあ?)

ファンクラブの子の力説に統夜は苦笑いをしていた。

《確かに滯は少々天然なところもあるからな。まあ、唯ほどではないがな》

(そうかもしれないな)

イルバは滯が少々天然な一面もあることを指摘し、統夜はそれに同意していた。

「……私はわざとつけてるのかな? って思つてたよ！」

「お前も知つてたのか！」

唯の言葉に滯がさかさずツツコミを入れていた。

《おお、さすがは本物の天然娘。滯の比ではないな》

(まあ、唯が天然なのは前から知つてだけだな)

統夜は唯が天然だと思つたのは、初めて顔を合わせた時だった。

その時の唯は入部を取り消すために来たのだが、その時の言動を見て唯が天然だとすぐにはわかつたのであつた。

滯の髪についてたシールを見て満足したのか、ファンクラブの子たちはいなくなり、和は残つてティータイムに参加していた。

「……ごめん、私がすっかりしていないせいでファンクラブの子たちが……」

「何で和が謝るんだよ」

『律の言う通りだ。和、お前さんは別にファンクラブとは関係ないんじゃないのか?』

「うーん、それは……」

「それよりもさ! ファンクラブってまだあったんだね!」

和が答えに困っていると、唯が話に割って入り、話題を変えていた。

唯は和に気を遣った訳ではなく、自分が話したいことを話しただけである。

「そうよね! 曾我部先輩が卒業して無くなっちゃったかと思ってた」

「曾我部先輩って誰ですか?」

「あれ? 梓は知らなかったっけ?」

「曾我部先輩はみおちゃんファンクラブの会長だった人だよ!」

「ほら、梓は知らないか? 和の前に生徒会長をやった人のこと」

「……! あ! もしかしてあの人のことですか!」

統夜のおかげで梓も思い出したようだった。

先ほどから話に出ている曾我部先輩こと曾我部恵(そかべめぐみ)は、統夜たちが2年生の頃の生徒会長で、藩のファンクラブを作った張本人であった。

「懐かしいなあ、もう、そんなに月日が流れたのか……」

「あれから?」

律はしみじみとしながら語るのだが、意味がわからず梓は首を傾げていた。

「そう、あれは卒業式前の2月……。誰かに見られている気がするって怖がってたから、見かねたあたしが、生徒会に相談してみたら?ってアドバイスをしたんだ」

「へえ、そうだったんですか……」

事情を知らない梓は律の話を信じていたのだが……。

「おい!ちよつと待て!」

「そうだ!妄想も大概にしとけよ!」

統夜と滯がすかさず律にツツコミを入れていた。

「へ?」

それを見ていた梓は唾然としていた。

「途中までは本ただけど、生徒会に相談したらとアドバイスしたのは俺だぞ」

律の妄想もおおよそ合ってはいたのだが、アドバイスをしたのは律ではなく、統夜だった。

「そうなんだよ。たまたま統夜が相談に乗ってくれたから、統夜と一緒に生徒会室に行っただよ」

こうして滯はその時の状況を語り始めた。

〈回想〉

バレンタインも終わり、卒業式も迫っていたある日、統夜はたまたま周囲を見回してソワソワしている滯を見つけた。

気になった統夜は滯から事情を聞くと、一緒に生徒会に相談しようとおアドバイスした。

こうして、統夜と滯は2人で生徒会室に向かい、その時生徒会室にいた和に相談した。「……ずっと誰かに見られてる気がする？ ストーカーの類かしら……。学内に不審者がいるとは考えにくいんだけど……」

『そうだな。俺様も調べてみたが、怪しい奴はいないみたいだぜ』

イルバも滯の話を聞いて気配を探知してみたのだが、怪しい気配を探知することはなかった。

統夜、イルバ、和が真剣にこのことを考えていると、急に滯が泣き出した。

「な、何泣いてるのよ」

「だ、だって！統夜やイルバ以外に普通の反応してもらえたのが嬉しくて……！」

「……軽音部でどんな扱い受けてるのよ……」

「……和、察してやってくれ」

まともな反応しただけで嬉し泣きする滯に和は呆れていたが、こう統夜がフオローを入れていた。

すると……。

「真鍋さん、いるかしら？」

生徒会に入って来た人物こそ、曾我部恵だった。

「あら、お客さん？」

「あつ、曾我部先輩じゃないですか」

「あら、月影君じゃない。久しぶりね♪」

「アハハ、そうかもしれないですね」

統夜の姿を見つけた恵はこう統夜に話しかけ、2人は親しげに話をしていた。

「あつ、そうそう。真鍋さん、引き継ぎの資料、持ってきたわ」

恵は生徒会長の任期を終え、後任となったのは和であった。

恵はその引き継ぎのために、生徒会室を訪れていた。

「……なあ、統夜。この人は？」

「滯、この人は生徒会長だよ。ほら、学祭の時だってお世話になっただろ？」

「学祭の時……。あつ！」

統夜の言葉で滯は思い出したようだった。

統夜たち軽音部は学祭前に律と滯がギクシヤクしてしまうという危機を迎えており、講堂使用届を出すことなどすっかり忘れていた。

そんな中、統夜は前もって提出が遅れることを当時生徒会長だった恵に告げ、使用届の提出を待ってもらったことがある。

滯もその時の状況を思い出し、その時の生徒会長は目の前にいる恵だということを思い出した。

「元生徒会長だけどね。まあ、思い出してくれて嬉しいわ♪」

「あつ、いえ……」

「改めて、よろしくね♪秋山さん♪」

こうして滯と恵は挨拶をかわし、統夜と滯は勧められるがままに椅子に座った。すると、恵は統夜と滯にお茶を出してくれた。

「……はい、どうぞ。軽音部みたいに良いお茶じゃないけど」

「あ、いえ……」

(……ん？あれ？)

統夜は恵の言葉に少し疑問を抱いていた。

《？どうした、統夜？》

(いや、軽音部が毎日のお茶のようにお茶してるってそんなに知れ渡ってるのかなって思ってたな)

《確かにそうかもしれないな》

この時、統夜は恵に対してとある疑惑を抱いており、イルバもそれに賛同していた。

統夜がイルバとテレパシーで会話している間に、漕は恵に誰かに見られていることを相談していた。

「……それにしてもストーリーカーなんて……。由々しき問題ね……」

漕の相談を受けた恵は深刻そうな表情をしていた。

「真鍋さん、後で風紀委員会にこのことを報告してくれる？」

「わかりました」

あまり話を大きくしたくない漕はアタフタとしていた。

「あつ、あの！そこまでしてもらわなくても！」

「いいのよ。うちの学校の生徒が困ってるのなら力になりたいのよ」

(うちの部長に伝えたい……)

「濡は普段から大雑把な律を思い出し、苦笑いしながらも、このような立派な言葉を律に伝えたいと思っていた。」

「それにしても、濡を追いかけ回す人って、どんな人かしら？」

「ファンクラブの人……とか？」

「恵の放ったファンクラブという言葉に、濡は過剰に反応していた。」

「そ、そのことは……」

「あら？どうかした？」

「い、いえ……。それにしても会長は軽音部のこと色々お詳しいんですね。私の名前も知ってたし」

濡は思ったことを言っただけなのだが、恵の顔は何故か真つ青になっていた。

「そう言えば軽音部がお茶会してたことも知ってたんですね」

「え、えつと……。真鍋さんが前に教えてくれたんじゃない」

「え？私は言っていないですよ？」

「そうだったかしら？でも、軽音部って色んな意味で有名だからね」

濡や和の指摘に、恵はあからさまに動揺していた。

《統夜。あの女の動揺ぶりだが……》

（ああ、間違いなさそうだな）

統夜とイルバは恵のことを怪しいと思っていたのだが、その疑惑は確信に変わろうと
していた。

「じゃ、じゃあ私は行くわね」

統夜は恵を捕まえようとしたが、その前に恵のポケットから何か飛び出してきた。

「……う……これは……。つてー！」

統夜はカードのようなものを拾って中身を確認すると、驚愕していた。

それには「秋山滯ファンクラブ」と書かれており、曾我部恵という名前も確認出来た
からである。

それを落としたことに気付いた恵は統夜の手にしたカードを奪い取った。

「……そ、それは、さつき廊下で拾ったのよ！」

「いや、そこに先輩の名前が書いてましたよ？」

「……」

統夜の追求に恵は黙り込み、室内に気まずい空気が流れ込んでいた。

滯はこの状況を和ませるためにどうするべきかを考えていた。

そして、滯はその考えを実行することにした。

「も、もしかして、会長がストーカーの犯人だったりしてえ♪」

「ちよ、滯?!」

漣がさらっと核心に迫る発言をされており、統夜は驚愕していた。

漣は軽い気持ちでこのように言ったのだが……。

「……………ごめんなさい！悪気はなかったの！」

「ええ!？」

「アハハ……………やっぱりか……………」

恵のまさかの告白に漣と和は驚愕するが、統夜は確信していたので、苦笑いをしていった。

「もうすぐ私……………。卒業でしよ？そうしたらもう、秋山さんに会えなくなっちゃうのになって思ったら、居ても立っても居られなくて……………」

恵は漣をストーカーカーまがいの方法で監視していた理由を明かすと、泣き出してしまった。

「会長！あなたの気持ちはわかるけど、やっていいことと悪いことがあるだろ!?!あんな感じがそうするせいで漣がどれだけ……………」

「統夜、いいよ」

統夜は恵の行動が許せずに怒りを露わにするのだが、漣はそんな統夜をなだめていた。

「何でだよ!?!お前だって怖い思いしただろ?！」

「まあ、そうだけどさ……。そこまで言ってもらえるのは嬉しいからさ。……まあ、やり方はあれだけど……」

滯は恵のせいで怖い思いをしたにも関わらず、そんな恵を許すことにしたのである。

「秋山さん……」

恵はそんな滯の優しさが嬉しかったのか、目をキラキラと輝かせていた。

「……ってか、会員番号ー番ねえ……」

統夜は先ほど見た会員証の会員番号が気になっていた。

「あっ、私、ファンクラブの会長でもあるの」

「「ええ!!」」

さすがにそれは予想外だったのか、統夜、滯、和の3人は驚愕していた。

こうして、滯のストーカー事件の犯人は見つかったのであった……。

〈現在〉

「……ということとは、生徒会長が犯人だったんですか？」

話を最後まで聞いた梓は驚きを隠せなかった。

犯人があまりに意外な人物だったからである。

「まあ、立场上それは言い出しにくいわよね」

「ええ……まあ……」

「だからね、私たち、そんな曾我部先輩に何か出来ないかなって思ったんだ！」

「そう、それで……」

澪は卒業式の日のことを語り始めた。

く回想く

卒業式当日、この日を持って恵は桜ヶ丘高校を卒業するのだが、軽音部のメンバーに呼び出され、和と共に講堂に来ていた。

「軽音部に講堂に来るよう言われましたけど、何なんでしょうね？」

「お、お礼参りとか？」

「まさか、そんな……」

こんな話をしていると、突如ステージの幕があがり、漣を中心に統夜、唯、紬、律が並んでいた。

今回は2年生だけでやろうという話になり、梓には声をかけていない。

そのため、ステージにいるのは梓を除いた全員だった。

「……曾我部先輩……ご卒業……」

「……おめでとうございます！……」

「あの……私たち、桜高軽音部がお祝いの意味を込めて演奏させていただきます！」

卒業する恵のために出来ること。

それこそが、恵のためだけのライブであった。

もちろん、ボーカルは漣である。

「聞いて下さい……」

「……ふわふわ時間！……」

統夜たちが曲名を宣言すると、そのまま演奏は始まった。

恵は突然の出来事による驚きと嬉しさと呆然としていた。

そして、気がつくとは恵は我を忘れて統夜たちの演奏……主に漣の勇姿に見入ってい

た。

「……先輩、曾我部先輩！」

そのためか、演奏が終わっても放心状態だったので、和に呼びかけられても、しばらく気付くことはなかった。

そして、ようやく和に声をかけられたことに気付いたのだが……。

「……ハッ！む、無断で講堂を使用するなんてどういうことですか!？」

「なにい!?!そりゃないぜ!曾我部先輩!」

恵のために行ったサプライズなのに怒られてしまったので、統夜は驚いていた。

統夜だけではなく、滞たちも困惑していた。

しかし……。

「……というのは建前で、ありがとう、みんな。こんな贈りもの、初めてよ!」

恵は滞たちのライブが嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべていた。

(……まあ、大成功ってところかな)

統夜は満面の笑みを浮かべる恵を見て、今回のサプライズは大成功したと思っていた。

ここで終われば綺麗にしまったのだが……。

「記念に……。サイン下さい!」

「ひいつ!？」

急に恵がサインをせがんできたので、滯は怯えていた。

「それで、「みおたんより」って書いて！」

大人びた感じの恵が、まるで人が変わったかのようにサインをねだっていた。

(そ、聡明な先輩のイメージが……)

和はそんな恵を見て、シヨックを隠せないようだった。

く現在く

「……それで、書いたんですか? 「みおたん」って」

「……うん、書いた……」

滯は当時の状況を思い出し、顔が真っ青になっていた。

「……先輩、すごく喜んでいたわ」

そう言うと和は一枚のカードを取り出した。

そのカードとは……。

「か、会員番号1番!」

「しかも、和の名前!」

漣フアンクラブの会員証なのだが、そこには会員番号1番と書かれており、名前の部分は「真鍋 和」となっていた。

和は恵の卒業後、正式に生徒会長の仕事を引き継いだのだが、ついでに漣フアンクラブ会長の座も引き継いってしまったのである。

始めは拒否した和だったが、熱心な恵に根負けし、それを了承してしまった。

和は統夜たちにそのことを伝えた。

「……この会員証、断りきれなくて受け取ったけど、結局機会がなくて会長としての責務を何一つ果たせなかった……」

こう語る和の表情は今まで何もしてこなかったことに申し訳ないといった気持ちが見え隠れしていた。

「和ちゃん……」

「まあ、和がそこまで気に病む必要はないけどな」

『ああ、俺様もそう思うぜ』

統夜は和を氣遣った言葉をかけ、イルバも同意していたが、そんな統夜とイルバの言

葉に和は「ううん」と首を振っていた。

「だから、今日はみんなにお願いがあつて来たの。ファンクラブの子たちのために、お茶会を開いてもらえないかなつて……」

和が統夜たちに提案したのは、溘ファンクラブの子たちが楽しめるお茶会だった。

その提案を聞いた統夜たちはその後の和の話をジツと聞いていた。

「このままなにもしないと、先輩にも申し訳なくて……」

「わかつた！ 私たちも協力するよ！」

「ええ!？」

「和にはいつも助けてもらつてるからな！」

「ええ!？」

唯と律が二つ返事で和の申し出を受けたので、溘は驚いていた。

「そうと決まればどんなお茶会にする？」

「ムギまで!？」

唯と律だけではなく、紬もお茶会に乗り気のように、溘の顔は真っ青になっていた。

「おいおい、お前ら、少しは落ち着けよ」

『統夜の言う通りだぜ！ 主役である溘が乗り気じゃないだろうが！』

統夜とイルバは一番重要なことを指摘すると、唯たちはそこに気付いたようだった。

「滯ちゃん、嫌なの？」

「え？いい、いやあ、嫌だつて訳じゃないけど……」

「みおちゃん！ファンクラブの子たちのためのお茶会だよ！ぜひやろうよ！」

「いや……だけど……」

紬と唯の説得に滯は困惑していた。

「もちろん滯が嫌だというなら、このお茶会は中心にせざるを得ないわ。だけど、1回く
らいはファンクラブの子たちや曾我部先輩のために頑張ってみない？」

「和……」

「まあ、それを決めるのは滯だ。お前が嫌だというならみんなだつて文句は言わない
さ。つていうか言わせない」

「統夜……」

『それで、滯。お前さんはどうするつもりだ？やるもやらぬもお前さん次第だぜ』

「……」

和や統夜。そしてイルバの言葉を聞いて、滯は少し考え込んでいた。

そして……。

「ちよつと恥ずかしいけど、私、やるよ！」

滯はお茶会をやる決意を固めた。

「よっしやあ！そうこなくちやな！」

「滯がやると言うなら、俺も協力するぜ！まあ、魔戒騎士の仕事があるからどこまで手伝えるかはわからないけど……」

「統夜……。ありがとな」

滯は優しい表情で笑みを浮かべると、統夜に感謝の言葉を述べていた。

「お、おう」

統夜はお礼の意味がわからず、困惑していた。

「統夜君、安心してちょうだい。統夜君が忙しい時はその分私たちが頑張るから！」

「はい！ですので統夜先輩は自分の使命に専念して下さい！」

「わかった。その時はよろしく頼むな」

こうして、滯ファンクラブのためのお茶会が開かれることが決定した。

この日は練習はせず、そのお茶会で何をするかの話し合いを終始行っていたのであった。

………続く。

—— 次回予告 ——

『とうとう始まるか。例のお茶会って奴が。やれやれ、一体どんなお茶会になるのやら。次回、「茶会 後編」。やるからには良いものにしていこうぜ!』

第55話 「茶会 後編」

漣ファンクラブのためのお茶会が行われることになった。

それが決まると、ファンクラブ会長である和主導で統夜たちはその準備に追われていた。

和はお茶会の会場を押さえ、梓はお茶会のポスターを制作し、お茶会の宣伝もバツチり行っていた。

この日も音楽準備室でお茶会の準備を行っていた。

「もうすぐお茶会だけど、だいぶ本格的になってきたわね」

「みおちゃんファンクラブのために大盤振る舞いだよ!」

唯は漣が一人で写っているプリントシールを大量に仕入れ、消しゴムやティッシュ、割り箸など様々な物に貼っていた。

「なあ、唯。大盤振る舞いってこれのことか?」

「そうだよ?んとねえ、「みおちゃん鉛筆」に、「みおちゃん消しゴム」、「みおちゃんティッシュ」、「みおちゃんチョコ」、「みおちゃん栓抜き」、「みおちゃんお箸」に、「みおちゃん孫の手」……っ」と

唯は滯の写真シールを貼っただけの物をいくつも紹介していた。

「変なものまで作るな！」

滯はそれらが恥ずかしいのが、唯に猛抗議していた。

「みおちゃんシール貼っただけ！」

「お手軽だけど可愛いでしょ？」

「……つか、いくらファンでもこんなもんもらって嬉しいものなのか？」

『俺様もそう思う。むしろありがた迷惑な気がするがな』

「まったく、統夜もイルバも冷めたこと言うなよな」

「そうだよ！やーくん、イルイル！こういうのは気持ちが大切なんだから！」

唯がそんな統夜とイルバを力説していた。

「そ、そういうものか……」

『それより唯！毎度毎度俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

統夜は唯の熱意にタジタジとなり、イルバはいつものツツコミをいれていた。

「憂がクツキーを焼いてくれたわ」

「みおちゃんクツキーだよ♪」

唯は新たな滯グッズ誕生に喜んでいた。

「それよりもやーくん。何かお茶会に出せそんな魔導具はないの？」

「そんなものはないけど、お前、まさか……!」

「そう!」「みおちゃん魔導具」も出したいの!」

「却下だな。つか、魔導具なんてもらつても一般人は使えないだろうが。それに、使えても魔導具をそんなことに使うのは……」

本来魔導具はホラーを探したり、ホラーを倒すためにと主に魔戒法師の仕事道具なため、このようなお茶会専用の魔導具を作るというのを統夜は良しとしなかった。

「むうう……。いいもん!アキトさんに聞いてみるから!」

「あいつだったたら悪ノリしそうだからやめてくれ。っていつかいつの間にか連絡先交換したんだな」

「うん!この前アキトさんが来た時に!」

統夜は東京でアキトと共闘した時に連絡先を交換したのだが、唯たちはアキトが桜高に遊びに来た時に連絡先を交換したのである。

ちなみに戒人は携帯を持っていないので、戒人とは統夜も唯たちも連絡先の交換はしていない。

「それよりも、律先輩。会費はいくら取る?とか言わないで下さいよ」

「何おう!人を守銭奴のように!」

「よく言うぜ……。ギターのお金を丸々ネコババしようとしたくせに!」

「そんな前の話を持ち込むなよ！そのお金のおかげでトンちゃん came たんだからいいだろう!？」

律は前にあつた話を誤魔化すために水槽の中を悠々と泳ぐトンちゃんを指差していた。

「まあ、確かにな」

統夜はこれ以上追求してこなかったもので、律は安堵していた。

すると、コンコンと扉をノックする音が聞こえて来ると、以前部室を覗いていた2人が音楽準備室に入ってきた。

「失礼します。差し入れを持ってきました!」

「本当に!？」

「皆さんで食べて下さい!」

短髪の女の子が袋に入った差し入れを差し出してきたので、唯がそれを受け取った。

「ありがとうお♪あ、焼きそば、パンだよ!？」

「マジか!？俺、焼きそば、パン大好物なんだよね♪」

統夜は大好物である焼きそば、パンがあると聞いて興奮していた。

(やれやれ……。統夜、お前なあ……。)

イルバは焼きそば、パンに興奮する統夜を見て呆れていた。

すると、シヨートヘアの女の子がスタンドに立てられたイルバを見て首を傾げていた。

「?どうかしたか?」

「あつ、いえ……。あそこのスタンドに立てられた指輪の表情が変わった気がしまして……」

「き、気のせいじゃないのか?」

統夜はシヨートヘアの女の子にこう言つて聞かせることにした。

まさか、イルバの微妙な表情の変化に気付くとは思つていなかったもので、統夜は少しだけ慌てていた。

「そ、そうですか……」

「それよりも、差し入れ、ありがとうな」

濡が2人に礼を言うと、嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべていた。

「あの!お茶会、楽しみにしています!」

「失礼しました!」

2人はペコリと一礼すると、音楽準備室から出て行つた。

「ありがとうねえ♪」

「可愛い♪」

あの2人は1年生なのだが、あまりに初々しい姿に紬はうっとりとしていた。

「みんな、楽しみにしてくれてるみたいね♪」

『……そんなことよりも、さつきは危なかったぜ……』

イルバは先ほどまでポーカーフェイスだったが、喋ることがバレそうだったので、焦っていた。

「確かに、さつきは俺も焦ったよ。まさかあの子……イルバの微妙な表情の変化に気づくとはおもってなかったからな……」

「え？ そうだったんですか？」

「まあ、多分バレてはいないと思うけど……」

「それよりもさ、肝心の曾我部先輩は来るのか？」

律は話題を変えて、1番肝心な話題を振った。

しかし……。

「ええ!? 来れない!？」

「手紙は書いたんだけど、その日はサークルの旅行で来られないって……」

恵は今通っている大学であるサークルに入っているのだが、お茶会の日はそのサークルの旅行と被ってしまったのである。

「それじゃあ、意味ないですね」

恵が参加出来ないとわかり、梓は残念そうにしていた。

「そうだよなあ。こうなったら日程をずらすか？」

統夜はお茶会の日を変更することを提案したのだが……。

「もう告知したのなら、わざわざ日程を変える必要はないって言われたの」

「そんな……」

「曾我部先輩の望みは、ファンクラブを継続させて盛り上げることだからって。お茶会で、ファンクラブの現役会員の人たちが喜んでくれればそれで満足だからって」

「……何か大人な発言……」

「女子大生だもんね」

恵は高校にいる時から大人びてはいたが、大学に進学し、より大人になったのであった。

「卒業して大人になって、滯ファンも卒業したってことなのか？」

「そんなことないです！きつとたまたま予定が重なって仕方なかったんですよ！」

律の滯ファン卒業という発言に何故か梓が猛抗議をしていた。

「……私たちに気を遣わせないようについて思っただけなのよね……」

滯は何か考え事をしていたのだが、律はそんな滯を見て滯の心中をナレーションしていた。

それに気付いた澪はすぐさまツツコミを入れていた。

「……それじゃあ、日程もプログラムも変更はなしってことで進めましょう！」

こうして、恵が当日欠席ということがわかったが、予定は変更せず行うことになった。

そして、紬が制作した当日の進行表が全員に配られた。

「司会は唯ちゃんとりつちちゃんでお願いなね♪」

「うーっす！」

唯と律は司会進行を任せられ、なぜか敬礼をしていた。

統夜も進行表を見て自分の役割を確認した。

すると……。

(俺の仕事は主に雑用って感じだな)

統夜の主な仕事はケーキや紅茶の配膳が主な仕事であり、お茶会中の雑用全般も仕事だった。

「統夜君も大変だと思うけど、よろしくね！」

「ああ、任せろ！」

統夜もお茶会に向けてやる気は満々であった。

こうしてお茶会の準備は着々と進んでいった。

※※※

そして、お茶会当日を迎えた。

この日はこのお茶会を歓迎するかのように快晴だった。

『ええ、本日は第一回秋山藩のファンクラブお茶会にお集まりいただき、まことにありがとうございます！』

律が最初の挨拶を行い、お茶会はスタートした。

このお茶会は音楽準備室ではなく、その隣の音楽室で行われた。

今日のお茶会は大々的な告知の効果があつたからか、会場の席は満席だった。

『僭越ながら次回を務めさせていただきます。私、田井中律と……』

『平沢唯です！』

『よろしくお願いします！』

律と唯の挨拶が終わると、会場から拍手が起こっていた。

「たくさん集まりましたね！」

梓は舞台袖から客席を見ると、お客さんの多さに喜んでいた。

「ああ、そうだな」

統夜も舞台袖からお客さんの様子を眺めていた。
すると……。

「……何か見たことある顔がちらほらいるが……」

統夜は客席を見渡すと、見知った顔が何人か発見した。

「……まあ、佐々木さんがいることはまだ良しとしよう」

統夜はクラスメイトである佐々木曜子の姿があつたのだが、そこは気にする素振りはなかつた。

「……イレス様がいるのもまあ、いいだろう」

そして、お客さんの中に何故かイレスがいたのだが、そこも気にしないようにしていた。
た。

しかし……。

「……何で戒人とアキトがいるんだよ……」

統夜が苦笑いしながら見ていたのは、濡グッズを手にはしゃぐアキトと、それを見て苦笑いをしている戒人だった。

統夜が客席にいるアキトや戒人に見ながら苦笑いしていると、唯と律が漫才のような話をして場を盛り上げていた。

『さて、私たちの話はここまでにして、主役に登場してもらいましょう!』
『その前にとある人に登場してもらいます。やーくん、どうぞ!』

唯と律の話が落ち着いたところで、漣が登場する流れなのだが、その前に統夜が唯に呼ばれた。

これも段取りに入っており、統夜はとある役割を与えられていた。

「おつ、呼ばれたか。それじゃあ行ってくる」

「統夜先輩、頑張ってくださいね!」

梓に見送られ、統夜が舞台袖からステージに移動した。

すると、客席から拍手が起こっていた。

『やーくんは本日の主役のナイトとして登場してもらいました!』

『それでは、入り口で主役を待つて下さい!』

統夜は律の言葉に無言で頷くと、入り口に移動し、漣の登場を待つていた。

唯が言っていた通り、登場は漣のナイト役として登場したため、魔法衣を羽織つてい
る。

『お待ちせしました! それでは主役に登場してもらいましょう!』

『本日の主役、秋山くみーおー!!』

唯が漣の名前を呼ぶと、扉が開き、漣が登場した。

漣が現れると、会場から大きな歓声が上がっていた。

漣が現れるのを確認した統夜は漣の前に立つと、その場で跪いていた。

「……お待たせいたしました。私、月影統夜は貴女様の騎士でございます」

統夜は跪いた状態でこう言うと、先程以上の歓声が上がっていた。

(……うわあ、マジで恥ずかしいんですけど！)

このような台詞を言うのは恥ずかしかったのだが、それを顔に出すことはせず、心の中で気持ちをぶちまけていた。

それで、気持ちを落ち着かせた統夜はゆっくりと立ち上がり、漣に手を差し伸べた。

「……さあ、参りましょう。私がエスコートいたします」

「と、統夜!？」

ここまではするとは知らなかったのか、漣は恥ずかしさのため、顔が真っ赤になっていた。

しかし、漣は統夜の手を取り、統夜のエスコートでステージまで移動すると、客席からの歓声がより激しさを増していた。

そんな中……。

「統夜あ！羨ましいぞ！コンチクショウ！」

「アハハ……。お前なあ……」

アキトが統夜に呼びかけ、戒人はそんなアキトを見て苦笑いをしていた。一方イレスは歓声に驚きながらも、ワクワクしながらその様子を眺めていた。

こうして、統夜のエスコートにより、主役である滯がステージまで移動すると、統夜は舞台袖まで去っていった。

「……制服のままとかつまんなあい！」

舞台袖にいるさわ子が制服姿の滯を見てふうつと頬を膨らませていた。

『大丈夫です！この後、お色直しがありますので！』

「いやーないからー！」

衣装チェンジを滯が全力で否定すると、さわ子、唯、律がブーイングをしながら頬を膨らませていた。

『……本日は、お忙しいなか、おあつ……あぐっ！』

滯はたくさんの人の前で喋っており、緊張しているからか思わず舌を噛んでしまった。

本来なら恥ずかしい場面であるのだが……。

「あー・噛んだー！」

「でもそこがまたー！」

「可愛いー！」

舌を噛んでしまっただけなのだが、すでに客席は大盛り上がりだった。

「アハハ……。この程度でも盛り上がるんだな……」

統夜は滯フアンの盛り上がりっぷりを見て苦笑いをしていた。

『お、おあつまりたいがつ！』

滯は再び舌を噛んでしまい、それだけでまた歓声が上がっていた。

『……いたがき……たいすけ……』

滯は何故か明治時代の偉人である板垣退助の名前を言っただけなのだが、客席は爆笑していた。

『……おいおい、唯と律のつまらんコントよりウケてるじゃないか』

「アハハ……。確かにな」

唯と律の話より盛り上がっているのを見て、イルバも統夜も苦笑いをしていた。

『それでは、スピーチはこの辺にして、ケーキ入刀に移ります！』

唯が司会として次のプログラムを宣言すると、紬がケーキを運んでいた。

そのケーキはまるでウエディングケーキのように大きなケーキであった。

ケーキの大きさに滯は驚き、舞台袖で見ていた統夜は啞然としていた。

「おいおい、いくらなんでもケーキデカすぎだろ！」

驚き、ツツコミを入れる統夜を気にすることなく、話は進んでいった。

『さあ、みおちゃん！初めての共同作業です！』

「誰と!？」

まるで結婚式のような展開に滯は思わずツツコミを入れていた。
「何でだろう、嫌な予感がする……」

統夜はこの後の展開を予想し、顔を真っ青にしていた。
すると……。

『やーくんがお手伝いします!』

「やっぱり俺かよ!」

統夜は自分の予想通り、自分が滯とケーキを切ることになり、ツツコミを入れるが、ケーキの前まで移動した。

そして、統夜と滯は2人で一つのナイフを持つと、まるで結婚式のようなケーキ入刀を行い、客席では歓声が上がったりカメラで撮影したりと大いに盛り上がっていた。

ケーキ入刀が終了すると、ここから統夜の大仕事の一つであるケーキ及び紅茶の配膳が始まった。

統夜はいの一番にイレスの元へ向かってケーキや紅茶の準備を行った。

「……統夜、ありがとうございます♪」

「イレッサ……お嬢も来たんですね」

みんながいる中、様付けはどうかと思つた統夜はかつてイレスがこの学校に留学した時に呼んでいたお嬢という言葉を使つていた。

「ええ♪話を聞いたら面白そうだったので面白そう」

イレスはイギリスの留学生という設定は相変わらずだが、たまたま日本に遊びに来たらこのようなことをやると統夜から聞いて参加したという設定でこのお茶会に参加した。

イレスの配膳が終わり、同じテーブルに座っている子達の配膳も終わると、続いてアキトや戒人の元へ向かった。

「……何でお前らがこんなところにいるんだよ」

統夜はジト目でお茶会に参加した訳をアキトや戒人に聞いていた。

「いやあ、こういうイベントって面白そうだからならぬ！だから参加したんだよ！」

「俺はアキトのやつに無理矢理連れ出されてな……」

アキトは滯のファンという訳ではなく、何となく面白そうという理由でお茶会に参加し、戒人はそんなアキトに半ば強引に連れ出されてこのお茶会に参加したのである。

「……まあ、わかつたよ」

とりあえず理由がわかつたところで、統夜は配膳の仕事を再開した。

ケーキヤや紅茶の配膳が終了すると、各テーブルに置かれているローソクに滯本人が火

を付け始めた。

全てのローソクに火をつけるまで時間はかかったが、それが終了すると、律が話を進めていった。

『それでは、次の企画に移りたいと思います！題して、秋山藩への100の質問コーナー！』

律が次の企画を宣言すると、音楽室の電気が消され、ローソクの灯りだけが灯されていった。

『さて、ここからは質問1つにつき、テーブルに置かれたキャンドルの火を1つずつ消していきます』

律がこの質問コーナーの趣旨を説明したのだが……。

「……1つずつ火を消すとか、どっかで聞いたことがあるんだが……」

『統夜、それは百物語じゃないのか？』

「そうそう、それぞれ」

統夜はイルバのおかげでローソクを1つずつ消していくのが百物語に似ていると思っ出したのであった。

『それでは、まず最初の質問です！これまで聞いた中で1番怖かった話は？』

『え!?な、何てこと聞くんなんだ!』

最初の質問でいきなり滯の顔が真っ青になっていた。

『次の質問！2番目に怖かった話は？』

『やめろお！』

ここで唯と律の悪ノリが始まり、滯は恐怖のあまり怯えていた。

「アハハ……。あいつら、悪ノリを始めやがったな……」

『そうだな。だが……』

滯が唯と律の悪ノリのせいで怯える中、客席からはキラキラとした視線が飛んできていた。

可哀想とかそのような発想はなく、滯の怯える姿に滯ファンは瞳をキラキラとさせていたのである。

『……客は盛り上がっているようだな』

『そうみたいだな』

唯と律の悪ノリのおかげで会場が盛り上がっていることも統夜とイルバは理解していた。

唯と律の悪ノリが終了すると、滯ファンたちからの質問が殺到したのだが、全ての質問が終わった頃には滯はまるで某ボクサーのように真っ白になって燃え尽きていた。

『それでは、質問コーナーはここまでにして次のプログラムに行きたいと思います！』

『こうして立派に育ったみおちゃんの半生をスライドショーで振り返りたいと思います！』

次に行われるのは滯の子供時代から今に至るまでの軌跡を追いかけるスライドショーのコーナーだった。

「おいおい、高3で半分とか魔戒騎士より寿命が短いじゃねえか……」

『まあ、それは言葉のアヤというやつだろう』

統夜は半生という言葉を使った唯にツツコミを入れるが、イルバがそれをなだめていた。

スライドショーの準備が整ったところで、梓がBGMを再生すると、スライドショーが始まった。

まず最初に映ったのは滯がまだ小学生くらいの運動会の写真だった。

まだ幼い滯をみたファンたちは……。

「めちやくちや可愛い……」

「大きく育ったのね……」

何故か親戚のようなりアクションをしながらうっとりとしていた。

次々と滯の写真が映っていたのだが、梓があることに気が付いた。

「……これ、滯先輩より律先輩の方が目立ってませんか？」

滯が目立つべきなのだが、滯よりも律の方が目立っている写真がほとんどだった。その訳は……。

「ウチのアルバムから持ってきた写真だからな！」

自分の家の写真を持参したことを律は誇らしげに語っていた。

統夜もそのことに気付いたようで……。

「……これ、滯より律の方が目立ってるな」

『やれやれ。恐らく律が選んだんだろう。写真のチョイスがまともじゃないぜ』

主役以上に目立つ律の写真を見て、統夜とイルバは呆れていた。

そんな中、真っ白になって燃え尽きた滯は復活して、写真を見始めたのだがそれは高校の入学式の写真だった。

その後は、軽音部で撮られた写真が続いていった。

部室で撮ったごく普通の日常を撮った写真や、初めての合宿の写真。2度目の学祭終了直後の写真や初日の出を見た時の写真などが次々と映し出されていった。

滯は写真を見ながら今までの思い出をまるで走馬灯のように思い出していた。

懐かしい思い出を思い出しながら、滯は笑みを浮かべていた。

そんな中、統夜も滯と同じように軽音部での思い出を思い出していた。

（……俺が軽音部に入ってから、本当にたくさんの思い出が出来たよな。だけど、この

思い出は魔戒騎士として多くの人を守るって思いに繋がっていく……。そんな気がするよ）

統夜は軽音部での思い出がこれから魔戒騎士としての今後に繋がっていくことを確信していた。

そして、これからも多くの人を。さらには大切な仲間たちを守っていきたい。

そんな風に決意させるようなスライドショーであった。

『……いよいよ、このお茶会も終わりに近づいて来ました！』

スライドショーが終了し、残すは最後のプログラムを残すのみとなった。

『それでは、フィナーレは私たち放課後ティータイムによる演奏を……』

「ちよつと待つてー！」

最後は統夜たち放課後ティータイムによる演奏なのだが、主役である滯がそれを制止していた。

「……あの、皆さんに聞いてほしいものがあります。私、口じゃ上手くこの気持ちを伝えられそうにないから、詩を作つて来ました！」

滯からのまさかの発表に会場がざわついていた。

その事を知らなかった統夜たちも驚きながらもまさかのサプライズに喜んでいた。

滯はポケットから一枚の紙を取り出し、そこに書かれた詩を読み始めた。

「……「ときめきシュガー」……」

まず最初にこの詩のタイトルの語り、続けて詩に入った。

「……大切なあなたにカラメルソース。グラニュー糖にブラウンシュガー。……メープル蜂蜜和三盆……」

最初は目をキラキラさせながら話を聞いていた漣ファンたちだったが、あまりに独創的な詩に徐々に困惑し、会場がざわつき始めていた。

「……あなたのためにカラメルソース。私のハートもカラメルソース。ちよつぱり焦げ付いちゃっても、あなたの火加減で美味しくなるの！」

漣は自信に満ちた表情で最後まで言い切ったのだが……。

『……………』

客席からざわつきが止むと、静寂がその場の空間を支配していた。

急に静かになった会場に漣は困惑すると、徐々に涙目になっていった。

《……どうやらファンと言えども漣のセンスについて行ける奴はいないらしいな》

(どうやらそのようだ。だから、律！きっさきと次に行け！)

ファンでも滯のセンスについて行ける者はいないとわかった統夜とイルバだったのだが、このままでは滯が泣き出してしまふと思ひ、統夜は次のプログラムへ行くように律に目で訴えかけていた。

それを見た律は察したのか、唯と共にステージに現れた。

『それではここで演奏です！放課後ティータイムの新曲！』

『びゅあびゅあハート』です！』

唯が曲名を宣言すると、紬は滯を椅子ごと運び、そのまま演奏の準備に入った。

会場の静寂に困惑していた滯も何とか復活し、統夜たちはそれぞれの演奏準備を行っていた。

少しだけ時間はかかったが、演奏準備が終わると、統夜たち放課後ティータイムは、新曲である「びゅあびゅあハート」の演奏を始めた。

この曲は滯がかなり力を入れている歌詞であり、滯のセンスがフルで入った曲となった。

この曲のボーカルは滯が勤めており、滯の綺麗な歌声を聴きながら、滯のファンたちは手拍子などで盛り上がっていた。

統夜たちもこの日のために練習に打ち込んできたからか、最初から最後まで演奏は順

調に行われた。

「……へえ、これが統夜たちの演奏か……」

「初めて演奏を聴くが、悪くないな」

統夜たちの演奏を初めて聴いたアキトと戒人はその演奏技術を素直に評価し、演奏に聴き入っていた。

放課後ティータイムの演奏が終了すると、最後はお茶会に参加した客全員と滞の集合写真の撮影を行った。

「はい、チーズ！」

最初は唯の携帯で写真を撮り、続けて律の携帯で写真を撮っていた。

続けて統夜はこの日のために購入したデジカメラで写真撮影を行っていた。

「……この盛り上がり、曾我部先輩にも見せたかったな……」

写真撮影の様子を見ながら、和はしみじみと呟いていた。

「……あ、そうだ！」

隣で和の呟きを聞いた和は携帯を取り出すと、集合写真を撮影していた。

「写真を撮ってどうするの？」

「送ってあげるんです。曾我部先輩に」

「え？でも、携帯のアドレスは？」

梓の出した提案に和は困惑していた。

「アドレスは生徒会で調べて下さい！」

こうして梓が写真を撮影し、和が恵のアドレスを調べるのだが、思いの外すぐにわかったため、お茶会終了後、和は恵にお茶会の写真を送った。

メールにとある言葉を残して……。

その頃、恵はサークルの旅行で北海道を訪れていた。

「……ちよつと飲み物買ってくるね」

「うん」

サークル仲間が自販機に向かったその時、恵の携帯が鳴ったので、恵は携帯を確認した。

それは和からのメールだったのだが、写真が添付されており、その写真を見た恵は頬を赤らめて、笑みを浮かべていた。

「……クスツ、また素敵な贈り物、もらっちゃった♪」

和が送ってくれた写真が嬉しかったのか、恵は微笑みながら空を見上げていた。和の送ったメールにはこのような文章が書かれていた。

—— 拜見 曾我部先輩。

今度は先輩もぜひいらして下さい。
きつと、楽しいお茶会になりますよ。

…… 続く。

—— 次回予告 ——

『統夜は高校を卒業した後の道は決まっているが、他の奴らはこれからのことを考えな

きやいけないのか。次回、「進路」。大変ではあるが、必要なことだよな』

第56話 「進路」

溇フアンクラブのためのお茶会が終わり、数日が経過した。

この日の放課後、統夜はそのまま音楽準備室に行こうとしたのだが、唯が何かのプリントと格闘していたのが気になっていた。

「……つたく、唯のやつ、何やってんだか……」

統夜が唯の席に移動すると、溇、律、紬の3人も唯の席に移動するところだった。

「……唯、一体どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないのよ……」

統夜が唯に声をかけるが、和の反応を見て、由々しき事態だということとは理解出来た。

溇は唯が向かっているプリントを見たのだが、そのプリントは「進路希望調査表」と書かれており、進路希望を書く欄は白紙だった。

「唯、まだ進路決めてなかったのか？」

進路希望調査表の提出期限はとうに過ぎていたのだが、唯はまだ進路を決めてなかったのである。

「……みおちゃんは何て書いたの？第一志望」

「私？私は推薦もらおうかかって」

滯は成績優秀で、授業態度も良く、教師からの評価も高いので、推薦は十分に狙えるレベルだった。

「……推薦つと」

唯はそんな滯の話の聞き、第一志望の欄に推薦と書こうとしていた。

「唯、お前は推薦つて言葉の意味を知ってるか？」

「ほえ？何のこと？」

統夜は唯に推薦の意味を問うが、唯は言葉の意味を理解していなかった。

《やれやれ、推薦も知らん奴が推薦とか無理な話だな》

（ああ、全くだよ）

推薦の意味も知らないのに推薦と書こうとしている唯に統夜とイルバは呆れていた。

それは統夜やイルバだけではなく、滯たちも呆れていた。

「ムギちゃんはどこにするの？」

唯は続いて紬に進路を聞いていた。

「私は、前話した女子大に」

紬は以前から某女子大に行くということを話していたのだが、そこは変わっていないな
かった。

「凄い！名門じゃないか！」

その女子大はレベルが高いので、濤は素直に紬に関心していた。

「私もそこにする！」

「いやいや、無理だろ！」

「そうよ、いい加減にしなさい！」

唯の適当さに統夜は呆れ、和はそんな唯を注意していた。

「ムギ、確かムギの行こうとしてしている女子大って難しいんだろ？」

「良かったら、赤本見てみる？」

「まあ、女子大だから俺は入れないが、参考程度に見てみようかな」

統夜は紬から赤本を借りてペラペラとページをめくって様々な問題を見てみたのだが……。

「……うん。理数系は未知の領域だが、他は何とか……」

理数系の教科は統夜には絶望的だったが、他の教科は勉強さえちゃんとすれば、何とかなる感じだった。

しかし、紬が受けるのは女子大なので、統夜は受けることすら出来ないが……。

「まあ、俺がこんなんだから唯には無理だと思っぞ」

統夜はこう唯に警告して赤本を渡すと、唯は赤本を読み始めた。

律も一緒に赤本を見ていたのだが……。

「ひい!?目がチカチカする!」

問題があまりに難しかったのか、2人揃って現実逃避をしていた。

「……現実を知ったな」

「ここは日本だ!英語なんて必要ない!」

「必要ない!」

赤本の問題を見たのがたまたま英語だったのか、唯と律は揃って英語を否定していた。

「我々は、日本語だけで生きていく!」

「生きていく!」

「アツハツハツハツハ!!」

唯と律は肩を組んで高笑いをしていた。

統夜はそんな2人を見てため息をついていた。

「……お前ら、学校の英語で赤点取ったら留年だつて知らないだろ?」

統夜の指摘を聞いた唯と律は少しの間固まり、英語が必要と思いき知らされてショックを受けていた。

「でも、入試だったら他の教科で良い点を取ればいいのよ」

「ほら、お前ら。ここなら何とかなるんじゃないか？」

統夜は机に置かれた赤本を手に取ると、古文の問題を唯に見せたのだが、唯には難しかったらしく、律に赤本を投げ渡した。

律は唯から赤本を受け取ると、統夜の言っていた古文の問題を確認した。

「……えっと、「次の助動詞が同じ使われ方のものを選びなさい」。か……」

律は問題を読んで少し考えるのだが……。

「こんなの習ってない！」

「おい、律。これは高1の問題だぞ。流石にその問題は俺でもわかるぞ」

統夜が唯や律に勧めた問題は、高1の範囲の問題だった。

「な……なん……だど？そんな馬鹿な!!」

律はこの問題が高1の問題とわかり、唾然としていた。

「……あのなあ、そんなに驚くことか？」

今解こうとしている問題が高1の範囲とわかって唾然とする律を、統夜はジト目で見ていた。

「助動詞はね、歌で覚えるといいつて習わなかった？」

「ほえ？」

紬はとある曲に乗せて助動詞の歌を歌うのだが、それは唯も知っているようで、唯は

途中から助動詞の歌を最後まで歌っていた。

「……それで、これをどうすればいいの?」

唯は助動詞の歌は知っていたが、肝心の意味は理解してないようで、統夜、滯、和の3人は思わずコケそうになっていた。

「おい! それじゃ意味ないだろ!」

すかさず統夜がツツコミを入れ、唯は苦笑いをしていた。

「……ところで、やーくんは卒業したらどうするの?」

「ああ、俺か? 俺は……」

統夜の進路はすでに決まっていたのだが、教室では公言することは出来ず、返答に困っていた。

「? やーくん?」

「唯、少しは察してあげなさい」

「察する? ……あつ、そうか!」

唯も統夜が魔戒騎士であることは知っているので、卒業後は魔戒騎士として本格的に活動するとはこの場で公言は出来ないことを察した。

「……ま、そういうことだ」

「そうだったね。……それで、りっちゃんはどうするの?」

「ん？あたし？あたしは未定って書いておいた」

律は一応進路希望調査表を提出したものの、未定と書いて提出していた。

「おいおい、良いのか？それで」

あまりに適当な回答に統夜は呆れていた。

「いいんだよ！進路なんてまだ全然わからないし」

「そうだよ！私も未定にしよう！」

唯は進路がわからないという律の言葉に賛同し、進路希望調査表に「未定」と記入してしまった。

「紙切れなんかにあたしたちの未来は決められないぜ！」

「ないぜ！」

律と唯はこう公言して堂々としていたのだが……。

『……3年2組の田井中さん、平沢さん、月影君。至急職員室まで来なさい』

校内放送で呼び出しがかかってしまったのであった。

「ガーン!!?」

「つか、何で俺まで!?!」

唯と律は呼び出しを受けたことにショックを受けて、統夜は自分も呼び出しを受けたことに驚いていた。

「まあ、呼び出しを受けたんだから仕方ないか。唯、律、行くぞ」

統夜は唯と律を連れて職員室に向かうことにした。

「……多分遅くなるから滯とムギは先に行つてくれ」

滯と紬にこう言い残すと、統夜はぶつぶつと文句を言っている唯と律を連れて職員室へ向かった。

統夜、唯、律の3人が職員室の中に入ると、すでにさわ子が3人を待つていた。

「あつ、やつと来たわね」

統夜たちの顔を見るなり、さわ子はため息をついていた。

「先生、唯や律はわかりますが、何で俺も呼び出しを？」

統夜は自分が呼び出された理由がわからなかったので、その理由をさわ子に聞いていた。

「ああ。統夜君の進路は知っているけど、それをハッキリと進路希望に書く訳にはいかないでしょう？とりあえず何か別の希望を書いて欲しいのよ。他の先生に見られても良いようにね？」

さわ子はそういうと、白紙の進路希望調査表を統夜に手渡した。

「……わかりました。それを考えてみます」

「統夜君はあといいわよ。問題はこの2人なんだから」

統夜は進路希望に魔戒騎士と書くのはまずいので、適当でもいいからそれに代わる何か希望を書いて欲しいと言われただけで、用事は終わった。

本当に問題なのは未だに進路を決めていない唯と律なのである。

「いえ、俺もここで話を聞いています。俺もこいつらが心配なので」

統夜は先に部屋に戻らず、唯と律の話を聞くことにした。

「……自分の進路なんだから、2人とももうちよつと真面目に考えなさい？」

「へー」

律は面倒臭そうに返事をしていた。

しかし、唯は釈然としないと聞いたげな感じだった。

「……唯ちゃんはまだ決められないの？」

「なんだか、ずつと先のことだから、想像出来なくて」

「……まあ、それはわからなくはないがな……」

統夜は魔戒騎士として生きることを決めてはいるが、魔戒騎士ではなく、一般人として生きてたらきつと同じことを思うだろうと考えていた。

「ずっと先でもないでしょう？あつと言う間よ」

「なるほど、さわちゃんも歳をとる訳だ」

「……何か言つたかしら？」

律の言葉が気に食わなかつたのか、さわ子は律の頬をつねっていた。

「……！そういえば、さわちゃんは昔はあんなだつたのに、どうして先生になろうと思つたの？」

律は普段から思つていた疑問を思い出すと、それをさわ子に聞いていた。

その質問に驚いたさわ子は思わず頬をつねるのをやめた。

「え？い、いや……それは……」

さわ子は頬を赤らめると、律の質問に答えようとはしなかつた。

「え？何々？」

「……恥ずかしいから……」

「参考にしたかったので、ぜひ聞かせてください！」

律は上手いことを言つてどうにかさわ子に教師になつた動機を聞こうとしていた。

「俺も気になるなあ！」

続夜も気になつていたことなので、律の話に乗つかつていた。

すると、観念したさわ子がようやくやく語り始めた。

「……実はね、その時好きだった人が先生になりたいつて言っていて、それじゃ私も！つて……」

「……不純だな」

「つか、その選び方はまるで唯みたいだな」

唯も先ほどまで誰かの進路を真似て書こうとしていたので、やり方が唯に似ていると感じていた。

「それで、その人とはどうなったの？」

唯は聞いてはいけけないであろうことをあつさりと聞いていた。

「フラれたわよ！」

さわ子はその時のことを思い出して泣き出してしまった。

「あーあ、唯のやつ、地雷踏んだな」

何も臆することなくさわ子のタブーを聞いた唯に統夜は呆れていた。

「でもさ、その人のおかげで大学に行けて先生にもなれたんでしょ？」

「そうだよ、大切なのは過去じゃなくて今だよ、さわちゃん」

「でも、その今も彼氏はいないんだよね？」

「あーあ、また言ってはいけけないことをさらつと……」

「ほえ？」

統夜はさわ子のタブーをズバズバ言っている唯に呆れていた。

とりあえずさわ子になるべく早く進路を決めるよう釘を刺されると、さわ子の話が終わったので、統夜たちは職員室を出て、そのまま部室へと向かった。

統夜たちが音楽準備室に入ると、漣、紬、梓、和の4人でティータイムを行っていた。

「あ、おかえり! どうだったんだ?」

「まあ、俺はたいしたことはなかったが……」

「またさわちゃん過去の過去が1つ明らかにになった!」

「ええ!? 怒られたんじゃないのか?」

さわ子から説教を受けたはずなのにケロッとしている唯と律を見て、漣は驚いていた。

「いやあ、人生色々ってやつだねえ」

「……また何かしでかしたんじゃないだろうな?」

「違うって、色々なことがあって、人は強くなっていくってことだよ」

『おい、律。たださわ子に話を聞いただけでそこまで哲学的ではないだろう』

さわ子の話を黙って聞いていたイルバは哲学的な話でまとめようとする律に呆れていた。

ずっとティータイムを行っていた4人はいまいち話がわからなかったので、首を傾げ

ていた。

そうしているうちに唯と律は自分の椅子に座り、統夜も椅子に座ってイルバ専用のスタンドを用意し、そこにイルバをセットした。

「それで、進路調査表はあれで良かったの？」

「まあ、当然駄目だよな」

統夜は苦笑いしながら結果だけを話していた。

「あれ？それじゃあ統夜先輩も駄目だったってことですか？」

「ああ。さすがに進路調査表に魔戒騎士と書く訳にはいかないからな。先生も何か代わるものを書いてくれて言われたよ」

「まあ、確かに魔戒騎士なんて書いたら周りに統夜君が魔戒騎士だつてことがバレるわよね？」

「そうですね……。それで、何て書くつもりなんですか？」

「んー、そうだなあ……。大学つてのも興味はあるんだけどな」

統夜は高校生活を通して、大学生活というものに興味を持っていた。

しかし、卒業後は魔戒騎士として生きる事を決めているため、進学は全く考えていなかった。

「とりあえず進学つて書いておいたらいいんじゃない？大学は後で自分のレベルに合う

ものを選んでおくといいわ」

「なるほどな。それじゃあ、そうさせてもらおうかな」

統夜は和の的確なアドバイスのおかげで、進路希望調査表にどうかすべきかはつきりとわかった。

とりあえず大学は後で調べてみようということで、統夜の話は落ち着いた。

しかし……。

「唯の進路希望調査表はあれで良かったの？」

統夜は良くても、唯と律は進路希望調査表に問題があったので、和が唯に確認を取っていた。

「駄目だった」

唯はあつさりと却下されたことを伝えた。

「将来なりたいたいものとかないの？」

「そうだよな。子供の頃の夢がそのまま仕事に繋がる可能性だつてあるもんな」

「……統夜先輩が言うとなんか説得力がありますね……」

統夜は子供の頃から魔戒騎士になりたいと願い、修行に打ち込んで魔戒騎士になれたため、過去の夢が未来の仕事に繋がるという言葉に説得力があった。

「……うーん、なりたいたいものかあ……。みおちゃん、何がいいと思う？」

「自分で決めろ」

『まあ、そこは誰かに決めてもらうことではないよな』

イルバは滯の態度を見て、それが当たり前前の反応だと感じていた。

唯は子供の頃の夢も思い出せず考え込んでいたのだが……。

「唯、小学生の頃は幼稚園の先生になりたいって言ってなかった？」

「あつ！そうだった！」

唯とは幼なじみである和は唯が小学生の頃になりたいと言っていた職業を覚えており、和の言葉を聞いて、唯も思い出していた。

唯は小学生の頃の作文で「将来の夢」というテーマで発表をしたのだが、唯は「幼稚園の先生になって子供達と一緒に遊んでいたい」と発表していた。

その作文を聞いた子供達は一斉に笑い出し、それを見た唯も笑っていた。

和が統夜たちにその話をすると、統夜たちも同様に笑っていた。

「アハハ！唯らしいな！」

「確かにな！それにしても、幼稚園の先生か。意外と向いてるかもしれないぞ」

「そうかもしれないですね。ただ、幼稚園の先生も大変みたいですけどね」

統夜は唯が幼稚園の先生に向いてるかもしれないと思っていた。

梓もそれに同意するものの、幼稚園の先生は大変だということを語っていた。

「……あつ、そうそう！作文といえばさ、滯が作文で優秀賞を取ったつて話があつてさ！」

律が作文と聞くととある話を思い出し、それを聞いた滯は慌てていた。

「え？その話、聞きたい！」

「私も聞きたい！」

紬と唯は律の話そうとしている話に興味津々だった。

「あ、梓！練習しよう！練習！」

滯はどうか話を誤魔化すために梓に練習しようと提案するのだが……。

「……」

梓は何も言わずに滯のことをジツと見つめていた。

言葉は発していないものの、自分もその話を聞きたいということは伝わった。

「……滯、諦めて話した方がいいんじゃないか？俺もその話に興味あるしな」

『ああ、俺様も興味があるな』

「統夜とイルバまで!？」

統夜とイルバも話を聞きたいと言っているため、滯の逃げ道は完全に無くなつてし

まった。

それで観念した滯は、話をするにしたのであった。

……続く。

—— 次回予告 ——

『漣と律のやつ、仲が良いとは思っていたが、こんなきっかけで仲良くなったとはな。次回、「親友」。律と漣、2人の友情のきっかけが明らかになる!』

第57話 「親友」

濡ファンクラブのためのお茶会から数日たったある日、唯は未だに進路希望調査表を提出していないことがわかった。

唯や律。そして統夜らさわ子に呼び出され、早く進路希望調査表を提出するよう言われた。

その後、和と共に統夜たちはティータイムを行っていたのだが、その時にたまたま作文の話が出てきて、濡にも作文に関する話があることを律が語った。

その話に統夜たちは興味津々であったため、濡はその話を語らざるを得なくなった。濡が語る前に律が小学生時代の濡のことを語り出した。

小学生の頃の濡は、今よりも物静かで大人しい女の子だった。

誰かと遊ぶということもなく、休み時間は一人で読書をしているような女の子だった。

そんな中、律はそんな濡に興味を持っていたのか、律は濡に話しかけてみたのである。当時の濡は声をかけられるだけで涙目になってしまいうレベルの人見知りだった。

その時も声をかけた律に怯えながら涙目になっていた。

律はそんな唯の反応が面白いと思ったのか、事ある度にちよつかいをかけていた。

「いーなー、私もちよつかい出したかったな！」

「おいおい、いいのか？それ……」

「統夜先輩の言う通りです！それっていじめじゃないですか？」

唯のちよつかいを出したい宣言に統夜は呆れ、梓はいじめではないかと追求していた。

『いや、そのちよつかいつてのは人間の子供にありがちの好きな子にはってやつじゃないのか？』

「そうそう、イルバの言う通りだよ♪」

「イルバ、お前そんなことも知ってるんだな」

『まあな。俺様は魔導輪だからな！』

「ドヤ顔するなよ……」

自分の知識を誇らしげに語るイルバを見て、統夜は呆れていた。

「だけどさあ、当時はそこまで仲良かった訳じゃないんだよなあ」

「そりやそうだろう！あんなことされたら！」

澤は当時のことを思い出していたのか、苛立ちを募らせていた。

「……思い出したらイライラしてきた。おデコ出さない」

「?何すんの?」

滯の言葉に律が首を傾げるが、滯はペンを取り出すと、律のおデコに「目」と書いていた。

「……あ」

律もそれに気付いたようで、統夜、唯、梓の3人は声を出して笑っていた。

「……水性だから安心しろ」

滯は水性のペンを使って律のおデコにいたずら書きをしていた。

「……それで?作文の発表はどうなったの?」

和も笑みを浮かべながら作文の話を改めて聞いていた。

「お、覚えてた……」

「いいじゃん、滯!話してやりなよ!」

律がその時のことを話すように言うと、滯は困惑していた。

そんな中、おデコに目と書かれた律は、「三つ目星人だじょお!」と言いながら唯と戯れていた。

「……小4の頃だっけ?私の作文が県から賞をもらって、賞をもらった人は全校集会でみんなの前で読まなきゃいけないなくなつてさ……。読みたくなって落ち込んでた私に律が話しかけてくれたんだ……」

戯れている唯と律を後目に、滯はこう話を切り出し、ゆつくりとその時の話を語り始めた。

く回想く

小学生時代の秋山滯は、かなりの人見知りな性格のせいか友達も出来ず、一人で読書をするが多かった。

そんな中、律は大人しい滯に興味を持ち、よく話しかけるようになった。

滯はちよつと律に話しかけられるだけで、オドオドしながら涙目になっていた。

そんな反応が面白いと思った律は、しょつちゅう滯にちよつかいをかけていたので、仲が良い訳ではなかった。

そんなある日、滯の書いた作文が県での優秀賞になったのである。

滯や律の通った小学生では、賞を取った作文は全校集会で発表しなければいけなかった。

人前に出る事が嫌な滯は1人公園で落ち込んでいた。
その時だった。

「……………どうしたの？」

律が滯に声をかけたのである。

滯は自分が作文で優秀賞を取ったことと、そのために全校集会で発表しなければなら
ないこと。

さらにはその作文の発表をしたくないことを律に伝えた。

「……………え？作文読みたくない？何で？」

「……………だって……………恥ずかしいもん……………」

こう答えるだけでも、滯は恥ずかしそうにしていた。

「ええ？恥ずかしくないよ！すごいよ！」

「つーぜ、全然凄くないよ……………」

「だって、クラスで賞をもらったの、滯ちゃんだけだよ！私だったら、みんなに自慢する
よー！」

この頃は律は滯のことを呼び捨てではなく、滯ちゃんと呼んでいた。

そんな滯がいつの間にか足を止めていたので、律も足を止めて滯のを見ていた。

「……………だったらりっちゃん賞をもらえば良かったのに！みんなの前で読むのやだよお

!!

滯は居た堪れない気持ちになったのか、つい声を荒げて自分の気持ちを律にぶつけた。

ちなみに滯はこの頃、律のことを呼び捨てではなく、りっちゃんと呼んでいた。

「……………、ごめんなさい……………」

すぐに我に返った滯は申し訳ない気持ちになったのか、すぐさま律に謝罪していた。

律は滯の大声に驚いてはいたが、傷ついたりしている様子はなかった。

（……………滯ちゃん、こんな大きな声を出せるんだ……………。なんか……………）

「面白い!!」

律は滯の新たな一面を見て、さらに滯に興味がわいたのか、目をキラキラと輝かせていた。

「ねえ!今から家においでよ。家で特訓しようよ!」

「と……………特訓?」

律の提案に滯は困惑していたものの、律の提案が非常にありがたいと思い、滯は律の家にお邪魔することになった。

「それでは、4年1組、出席番号1番、秋山滯さん、どうぞ!」

「ひうつ!!」

律の部屋に入るなり、本番さながらの練習を行うが、滯は律しかないのだが、恥ずかしかつて、作文を読むことが出来なかつた。

「あうう……。出来ないよお……。！」

「え？もつと台が高い方がいいの？」

律は滯を箱の上にあげて発表させていたのだが、律はもう一つ箱を取り出してこう聞いたのだが……。

「そ、そういうことじゃなくて！」

「……」

律は箱を置くと、どうすればいいか考えていた。

しばらく考えていると……。

「あつ！ちよつと待つてて！」

律はカチューシャを外すと、髪ゴムを取り出して髪型を変えてみた。

「……はい！出来上がり！」

「？何それ？」

「パイナップルだよ！お父さんがね、緊張した時は観客をジャガイモだと思えつて言ったの！でもあたしはジャガイモは出来ないから……パイナップル！」

律は両手をほっぺにくつつけて変顔をすると、パイナップルの物真似をしていた。

「アハッ！全然似てないよお！」

律の顔がおかしかったのか、滯は笑っていた。

それがとても効果的だったのか、特訓では緊張せずに作文を読むことが出来た。

……そして、作文発表当日を迎えた。

滯は律のアドバイス通り、生徒全員をパイナップルだと思ったらリラックス出来ていた。

その結果……。

「……ということ、人から人へ伝わっていくのでした。終わり。4年1組、秋山滯」
リラックス出来た滯は最後まで作文を読むことが出来たのであった。

〈現在〉

「……律のおかげで、凄くリラックス出来たんだよな」
「いい話ねえ♪」

滯の話を最後まで聞くと、紬はニコニコしていた。

「昔は良い子だったんですね、律先輩」

『確かに。その頃のお前さんはどこへ行ったのやら……』

「……やつぱり、りっちゃんのカラジャじゃないよ」

そんな中、梓、イルバ、唯の3人は律のことを素直に褒めることが出来なかった。

「……素直に褒めるってことは出来ないのかい？」

律はこんな良い話をしていつも通りな唯たちに不満だった。

「なあ、滯の作文ってどんな感じだったんだ？上手くいったんだろ？」

「統夜は1番気になっている作文の内容の話は律に聞いてみた。」

「ああ。作文発表は上手くいったんだよ。でもまあ、滯が書いた作文だから……。内容がともメルヘンだったんだよ……」

「……なるほど、滯の感性はその頃から健在って訳か」

「統夜は滯の作文がメルヘンだと聞くと、作文の内容を察してこれ以上は何も聞かなかった。」

「でも、あれからだよな？律の家に遊びに行くようになったのは」

「そうそう！あたしが色々教えてあげたっけか♪」

漣や律の言う通り、この作文のおかげで、2人はよく遊ぶようになり、仲良くなったのである。

「色々ねえ……。もしかして漣のその喋り方も律直伝だったりするのかわ？」

統夜はさすがにそれは無いと思っただけながらも冗談のつもりで律に聞いてみた。

すると……。

「うん、そだよ。自分に自信をつけさせるためにいいかなあって思ってたな」

「アハハ……。やつぱりそうなんだな……。って、何い!!?」

統夜はそうだよと返ってくるとは思っておらず、驚愕していた。

「……思い出してみれば、ロクなこと教えてもらってない気がする……」

漣は律の家で遊んだ時のことを色々思い出していたのだが、これと違っていい思い出がなかったのか、眉間にしわを寄せていた。

「……やつぱり、助けてもらうんじやなかったかな」

漣はさらりと酷い言葉を言うのと、律は哑然としていた。

「ひ、ひどいよ、みおちゃん！」

「唯だって好き勝手言っただけに……。でもまあ、私に音楽を勧めてくれたのは感謝してるかな?」

滯はこんな事を言うのが照れ臭かったのか、少しはにかみながらこの言葉を紡いでいた。

すると……。

「「みおしゃん！」」

「滯先輩！」

統夜と和を除く全員が目をキラキラと輝かせながら滯のことを見ていた。

「うおっ!？」

滯はそんな様子を見るなり驚いていた。

「アハハ……。何やってんだか……」

統夜はそんなやり取りを見て、苦笑いをしていた。

「……って！私と律の話じゃなくて！今は2人の進路調査をどうするかだろ？」

「あ……」

「そうだったわ！」

全員にとって興味深い話を聞いたため、一番大事な話をすっかりと忘れていた。

「唯、とりあえず難しく考えないで、漠然と自分のなりたいものから考えればいいんじゃない？」

和が唯に行ったアドバイスはとても的確なものだった。

「そっか……。じゃあ、お花屋さんかな？」

唯は花屋になった自分を想像してみた。

く花屋になった唯く

……私、平沢唯！街のお花屋さん！

そんな私のお店にとあるお客さんがやって来ました！

「……あの、このお花は育てるの大変ですか？」

「わかりません」

——閉店ガラガラ!!

「……植物の知識が必要ですね……」

花屋になるためには様々な植物や花の知識が必要になってくるので、唯には厳しいか

と感じられた。

「あ、そうだ！会社勤めのOLさんとか！」

唯は続けてOLになった自分を想像してみた。

くOLになった唯く

……私、新米OLの平沢唯！今日も遅刻しちゃった！テヘツ♪
そんな私ですが、どうにか会社に着きました。

「すいません！遅刻しました！」

……ど、どうしよう……。みんなの目が怖いよ……。

あれ？1人だけため息ついているけど、何でだろう？

「……あなたの会社、隣のドアだよ」

「し、失礼しました!!」

——解雇不可避!!

「……時間が決まってるのは無理かも……」

梓は冷静にOLも無理かもと分析をしていた。

「あうう……。あずにゃん、しどい……」

梓の厳しい分析に唯は涙目になっていた。

「ゆーい！バスガイドとかいいんじゃないか？」

「バスガイドねえ。確かに唯のキャラなら向いてそうだが……」

律がバスガイドを提案し、統夜はそれも悪くないと考えていた。

そして、唯バスガイドになった自分を想像してみた。

くバスガイドになった唯く

……私、バスガイドの平沢唯！

『えー、皆様、右手をご覧ください！みぎ……て、うぐう！』
やばい！乗り物酔いなのか吐きそうだよ！

も、もうダメ！我慢出来ない！

『ううおお……』

——大惨事!!

「……酔いやすい人は無理だと思います」

唯は想像したことで、実際にも吐き気を催していた。

「まあ、喋りが上手くても酔うようじゃ論外だよな……」

唯は復活までしばらく時間がかかっており、その間にも色々な職業を思いついたものの、どの職業も一筋縄ではいかず、どれも厳しそうだつた。

すると……。

「……あつ！これなんてどうかな！」

酔いが醒めた唯は、1つ良いアイディアを持っていた。

「それは何ですか？」

「魔戒法師になって、やーくんのお手伝いをするの！」

「アハハ……魔戒法師になるって……」

『おいおい、魔戒法師ってそう簡単になれるものじゃないぜ』

唯の魔戒法師になるという発言に統夜とイルバは呆れ果てていた。

今までの職業以上に簡単になれるものではないからである。

「まあ、無理だよな……」

「でも、魔戒法師になった唯先輩か……」

唯だけではなく、その場にいる全員が魔戒法師になった唯を想像してみた。

く魔戒法師になった唯く

……私、平沢唯！ホラーをやっつけて人を守る魔戒法師です！

今日はやーくんのお手伝いで、一緒にホラー退治です！

「……唯！法術で援護してくれ！」

え!? 法術? 私、法術は苦手なのに……。

だけど、やーくん苦戦してる!

ここは何とかしなきゃ!

私は魔導筆を取り出して、術を放ちます!

その術は……。

ポン!!

……私が出したのはまるで手品みたいに花を出すだけで終わってしまいました!
「……おい」

ああ! やーくんだけじゃなくて、ホラーも呆れてるよ!

——足手まとい!!

「……………これはあまり想像したくないな」

統夜は実際このような場面に遭遇したらと思うとゾツとしていた。

「そうですね。魔戒法師の人だって、統夜先輩みたいにすごく努力してるんだもんね……………」

梓も魔戒法師はそう簡単になれるものではないことは理解していた。

「……………まあ、とりあえずそんな感じで、自分で思いついたものを書いてみればいいんじゃないの?」

和は今までのやり取りを通して、自分で思いついたものをどんどんあげていくことを提案した。

「……………なりたいたいものかあ……………」

唯は律と一緒に自分のなりたいたいものは何かを考えていた。

すると……………。

「……………りっちゃん!」

「おう!!」

2人は何か思いついたようで、進路希望調査表に何かを記入すると、そのまま職員室

に向かっていった。

数分後……。

「……ダメでした、隊長！」

どうやら今回もダメみたいだった。

統夜たちは唯と律が何を書いたかをチェックすると、そこには「ミュージシャン」と書かれていた。

「……ミュージシャンって……」

和はミュージシャンと書かれた進路希望調査表を見て、啞然としていた。

「真面目にやりなさい！」

「いや、真面目……なんだけど……」

「ミュージシャンねえ……。本気で目指すならお茶なんかしてる場合じゃないよな」

「うぐっ！そ、それだけは！」

統夜が的を得た指摘をすると、律は狼狽えていた。

そんな中、啞然としていた和が急に笑い出した。

「おお、和ちゃんが笑ってる！」

「……呆れてるんじゃない」

「実は、和ちゃんを笑わせるよう仕込んだ、体を張ったギャグなんだよね！」

「……いや、無理がありますよ、唯さん……」

唯の苦し紛れの言い訳に、滯は呆れながらツツコミをいれていた。

この日は結局他のアイディアが出ずに部活が終了してしまった。

統夜はこの日も番犬所に立ち寄るが、この日も指令はなかったため、統夜は街の見回りを行っていた。

「……」

統夜は考え事をしながら歩いていた。

《……おい、統夜。どうしたんだ？ さつきから難しい顔をして》

今歩いている道は人が多いため、イルバはテレパシーで統夜に話しかけた。

（ああ……）

統夜はその場で足を止めると、近くにあった座り心地の良さそうな石に腰を下ろした。

（人の進路って色々なんだなあって思ってた）

《まあ、お前さんは子供の頃から魔戒騎士になると決めていたんだ。他の奴らみたいに将来に迷うことがなかったから、それが物珍しいんだろ？》

統夜とは長い付き合いであるイルバは、統夜が何を考えているのかを見透かしていた。

(つたく、お前にはかなわないよ)

どうやら凶星だったようで、統夜は苦笑いをしていた。

(まあ、俺が心配しても仕方ないけどな。俺と唯たちとは進むべき道が違うんだから……)

今は楽しい毎日を送っているが、魔戒騎士である自分と一般人の唯たちとは、いつかこんな生活に終止符を打たなきゃいけないことは統夜も理解していた。

《だからこそ、お前はあいつらとの日々を大切にしないと。その経験は今後には必ず活きてくるぜ》

イルバは大切な人と日々を過ごすことこそ、これから守りし者として多くの人を守ることに繋がっていくと信じていた。

無論、それは統夜も考えていたことだった。

(……そうだな。俺は俺で悔いのない高校生活を過ごすよ。クヨクヨと考えるのは時間の無駄だからな)

《ああ、そうだ。あまりセンチメンタルになつて考え事をするもんじゃないぜ》

イルバは色々考え事をしながらもいつも前向きな姿勢の統夜のことを高く評価していた。

気持ちを切り替えることは魔戒騎士としても大切なことだからである。

《まあ、とりあえず今日は帰ろうぜ。ある程度見回りは済んだからな》

(ああ、そうするよ)

続夜はゆつくりと立ち上がると、この日の見回りを終了し、そのまま自宅へと向かった。

翌日、唯はクラスのみんなに進路をどうするのか聞いて回っていた。

それが参考になるかと思われたが、ますますどうするかわからなくなってしまった。

唯は少し考えた結果、「とりあえず一生懸命頑張ります」と書いてさわ子に提出しようとするが、案の定却下となった。

唯が自分の進路を決めて、進路希望調査表がさわ子に受理されるのはまだ先の話であつた……。

……続く。

次回予告

『またやって来たな。この時期が。統夜、お前さんも気を引き締めないとダメだぜ！次回、「期末試験」。統夜、ちゃんと勉強するんだぞ！』

第58話 「期末試験」

唯と律は進路希望調査表に悪戦苦闘していた。

特に唯は自分がどのような道に進みたいかわからずにいた。

それでも唯はさわ子にとにかく一生懸命頑張るという意思だけは伝えていたのである。

その翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

「……はあっ！」

統夜はオブジェから飛び出して来た邪気を魔戒剣で斬り裂いた。

「……ふう」

統夜は一息つくくと、魔戒剣を鞘に納め、魔戒剣をしまった。

（……イルバ、時間的にあと一箇所くらいか？）

《ああ。どうやらそうみたいだな》

（よし、行くか……）

統夜が次のオブジェまで移動しようとしたその時だった。

「……あれ？やーくん？」

たまたま近くを通っていた唯が統夜を見つけて統夜に声をかけた。

「おう、唯か」

統夜を見つけた唯は統夜に駆け寄った。

「やーくんはお仕事の途中？」

「ああ。それで、唯はどうしたんだ？こんな朝早くに」

「うん？今ジョギングをしているの！とにかく一生懸命頑張ろうと思ってね！」

唯は一生懸命頑張るためにジョギングを日課にしようとしていた。

「へえ、それは殊勝な心がけだけど、そろそろ戻った方がいいんじゃないか？じゃないと遅刻するぞ」

「そうだね！私は戻ることにするよ！やーくんも遅刻しないようにね！」

唯はそう言うのと、今来た道に戻ってそのまま自分の家へと向かっていった。

「……………やれやれ……………」

統夜は自宅に向かって走り去る唯をジッと見つめていた。

《……………おい、統夜。俺たちもそろそろ行くぞ》

「……………おっと、そうだった！」

統夜は急いで次のオブジェへと向かっていった。

歩くことおよそ10分で、次のオブジェに到着した統夜は、魔戒剣を取り出し、それ

を抜くと、飛び出してきた邪気を魔戒剣で斬り裂いた。

「…………ふう、とりあえず今日はここまでかな？」

統夜は魔戒剣を鞘に納めると、魔戒剣をしまい、今日の仕事が終わったことを宣言した。

『ああ、そうだな。だから急いで学校に向かわないとな』

「わかつてるって」

統夜はエレメントの浄化を終えると、学校に向かって走り始めた。

歩いていたら遅刻は必至だったが、走れば時間内には到着できる距離だった。

統夜が駆け足で学校の入り口に入ると、それと同時に唯も入ってきた。

「あ、やーくん、おはよお！」

「おう！とりあえず唯、急ぐぞー！」

「そうだね…………あ！みんな!!」

唯は窓から滯、律、紬、和が見ているのを見つけた。

「ゆいー!!早く早く！」

和が大きな声で唯に呼びかけたのだが、唯はその場に留まり和たちに手を振っていた。

「おい！手を振ってる場合かよー！」

『やれやれ。遅刻ギリギリだというのに、余裕なもんだぜ!』

和たちに手を振る唯を見て、統夜はツツコミをいれて、イルバは呆れていた。

「ほら!唯、行くぞ!」

統夜は巻き添えで遅刻は嫌だったので、唯の首根つこをつかんでそのまま唯を引つ張りながら教室へ向かった。

「え!?ちよ!?やーくん!」

唯は突然の出来事に動揺するが、統夜は気にする素振りはなかった。

しかし、統夜が強引に連れ出したおかげで唯と統夜は遅刻を免れたのである。

2人が教室に入るとHRが始まるのは同時だったので、統夜と唯は教室に入るなりすぐ自分の席についた。

「ふわあ……間に合ったあ……」

唯はHRが終わるなり机に突っ伏していた。

「また寝坊か?」

律はニヤニヤしながら遅刻ギリギリの理由を聞いていた。

「いや、唯の奴ジョギングをしてたんだよ」

「それで遅れたのか。つか、何で統夜が知ってるんだ?」

藩がこう訪ねると、統夜は周囲を見回してみたが、人が多いため話を聞かれる可能性

があった。

「朝の日課をこなしてたらたまたま唯を見かけたんだよ」

エレメントの浄化という言葉は使わず、日課という言葉を使っていた。

濡たちは日課と聞いただけで魔戒騎士の使命だということは察しがついていた。

「やーくんの言う通りだよ。進路調査表に頑張るって書いたからねえ」

「うん、頑張つて♪」

「無意味に励ますなよ、ムギ」

紬が無意味に励ましの言葉を使っていることに律が呆れていた。

「そーいえば、もうすぐ期末だもんな」

「ええ!? もう?」

期末テストが近付いていることを知り、唯は驚愕していた。

そして、驚愕していたのは唯だけではなかった。

「な……なん……だと……!?」

統夜は顔を真っ青にしながら絶句していた。

統夜もまた、テストが近付いてきたことを知り、驚愕していた。

「アハハ……統夜は相変わらずだな……」

今回もテストと知った統夜は驚いていたので、それを見た律は苦笑いをしていた。

そして、今日から部室も使えないということだったので、統夜たちは放課後、図書室で勉強をすることになった。

そして放課後……。

統夜たちは図書室でテスト勉強を行っていた、

「……」

テストも近いということもあり、統夜たちは勉強に集中していた。

しばらく問題を解いていると、唯が紬のノートを覗き込んでいた。

「ほわあ、ムギちゃんのノートすごく綺麗……。欲しい……」

唯は紬のノートが綺麗にまとまっているのを見て、そのノートを欲しがっていた。

「後でコピーとる？」

「わあい！ありがとう、ムギちゃん♪」

「ムギ、悪いんだけど、俺もいいのか？理数系の教科だけでいいんだけど……」

統夜も自分が苦手な理数系の教科のノートのコピーを貰うために懇願していた。

「うん、いいわよ♪」

「悪いな、ムギ」

統夜はノートのコピーを得られることがわかると紬に礼を言いながら安堵していた。

唯は滯のノートを凝視すると、滯は恥ずかしそうにしていた。

「……みおちゃんのノート、可愛いね♪」

「うるさいよ／＼／＼」

滯は使つてるノートが可愛いと言われて恥ずかしかったのか、滯は頬を赤らめていた。

続いて唯は律のノートを見てニヤニヤしていた。

「……りっちゃん」

「ん？」

「お主も授業中に居眠りを……。心の友よ……」

律のノートには不自然な線が所々あり、勉強しながら眠ってしまった跡が残っていた。

唯は最後に統夜のノートを見ていた。

「……ん？」

「……やーくんも所々で居眠りしているんだねえ……」

唯は統夜のノートにも律のように居眠りの跡を発見してニヤニヤしていた。

「……う、うるさい／＼／＼」

統夜はノートを見られて恥ずかしかつたのか、頬を赤らめていた。

こんな感じで統夜たちは1時間程図書室で勉強してから学校を後にした。

その後、統夜たちはノートのコピーを取るために近くのコンビニに向かった。

統夜は理数系の教科のノートのコピーを紬にもらい、唯は全教科のノートのコピーを紬にもらっていた。

「ムギちゃん、ありがどうね！」

「本当にありがどうな。すごくありがたいよ」

「ウフフ♪どういたしまして♪」

唯と統夜は心から紬に礼を言うのと、紬はニコニコしていた。

ノートのコピーが終了すると、統夜たちはコンビニを後にした。

コンビニを出た所で、統夜は番犬所に寄るために唯たちと別れ、番犬所に直行した。

この日は指令はなかったため、統夜は街の見回りを行っていた。

その途中、統夜は唯の家の近くを歩いていたのだが、そこで統夜は70代くらいの女性と話をしている唯を発見した。

「……ん？あれは唯か？話をしているのは……知り合いか？」

統夜は唯と話をしていり女性が唯とどういう関係かわからず、首を傾げていた。

すると……。

「……あつー！やーくん!!」

唯が統夜の存在に気付いき、ブンブンと手を振っていた。

それを見た統夜はゆっくりと唯と女性の方へ歩み寄った。

「やーくん！もしかしてお仕事の途中？」

「まあ、そんなところかな」

統夜と唯が親しげに話すのを見ていた女性は首を傾げていた。

「あら、唯ちゃん。その人は唯ちゃんのお友達？」

「うん！そうだよ！」

「初めまして。月影統夜といいます」

統夜は女性に自己紹介をしたのだが……。

「月影？……その名前……どこかで……」

女性は何故か統夜の名前に聞き覚えがあるらしく、どこでその名前を聞いたのかを思い出していた。

「……ああ、思い出したわ！あなた、もしかして月影明日菜さんの息子さんかしら？」

「!!?か、母さんを知っているんですか!?!」

こんなところで母親の名前が出てくるとは思っていなかったので、統夜は驚きを隠せ

なかった。

「ええ。10年くらい前だったかしら？明日菜さんにはすごく親切にしてもらったのよ」

この女性はかつて統夜の母親である明日菜と親交があったみたいだった。

「最近は全然商店街でも見かけないから心配してたのよ。明日菜さんはお元気かしら？」

「……………か、母さんは……………」

この女性は明日菜がもうこの世にいないことを知らないようだった。

「……………やーくん……………」

唯は統夜の母親が暗黒騎士ゼクスことディオスに殺されたという話を思い出し、悲痛な面持ちをしていた。

「母さんは……………。交通事故に遭って……………」

暗黒騎士に殺されたとは言えなかったのです、このように説明した。

「！あら、そうだったの？ごめんなさいね、知らずに辛いことを聞いちゃったわよね」

「あつ、いえ。気にしないでください」

統夜は暗い顔をしないで女性に気を遣っていた。

「……………それにしても残念ねえ。明日菜さん、まだまだ若いのにねえ」

「ええ、そうですね」

統夜は母親のことを思い出して少しだけ悲しい表情をしてしまったが、苦笑いをしておどけてみせた。

「……ああ、自己紹介がまだだったわね。私は一文字とみ。唯ちゃんのお隣に住んでいるのよ」

この女性……とみは、唯のお隣さんだった。

それを知った瞬間、統夜は唯ととみが親しげに話をするのも当然だなと感じていた。

「お婆ちゃんには小さい頃からお世話になってるんだよー」

唯は明日菜の話で暗くなった空気を吹き飛ばすために話題を変えた。

「あらまあ、そんなこと言っちゃって♪……ところで、統夜君……だったかしら？あなたつてもしかして唯ちゃんとお付き合いをしているのかしら？」

「ちよ!?!お婆ちゃん!?!// //」

とみが統夜にど直球な質問をしていたので、唯は頬を赤らめていた。

そんな中、統夜は頬を赤らめることはなく、平然としていた。

「いえ、唯は同じクラスで同じ部活の友達ですよ」

統夜は照れることもなく思ったことをはっきりと言っていた。

それを聞いた唯は……。

「……むうう……！」

当然納得がいかず不満だったからか、ぷうつと頬を膨らませていた。

「あら、そうなの？それは残念ねえ。貴方みたいにしつかりとした人が唯ちゃんの彼氏なら安心なんだけど」

「アハハ……。そう言ってもらえるのは光栄ですけどね。唯とはそんな関係じゃないですけど、俺にとつては大切な人の一人ですよ」

「……！／＼／＼／＼」

統夜は心の底からそう思っており、それを話すと、唯は恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にしていた。

とみはその言葉で統夜と唯の関係を理解し、ウンウンと頷いていた。

「……そう。統夜君、これからも唯ちゃんと仲良くしてやってちょうだいね」

「……ええ、もちろんです」

統夜はこれからも唯と仲良くしたいという気持ちに変わりはないので、笑みを浮かべながら答えた。

それを聞いたとみも笑みを浮かべていた。

「……それじゃあ、俺はそろそろ行かなきゃいけないので……」

統夜は街の見回りを行わなければいけないので、こう話を切り出した。

「あら、そうなの？……あつ、そうだ。今度家に遊びにいらつしやい。あなたの話や明日菜さんの話を聞きたいから」

「ええ、時間がある時にぜひお邪魔します。……それじゃあ、唯。お互い勉強頑張ろうな」

統夜はそう言い残すと、ペコリと一礼し、唯やとみと別れた。

その後、統夜は街の見回りを再開し、それが終了すると、自宅に向かった。

※※※

翌日、統夜はこの日も日課であるエレメントの浄化を行うが、昨日のように唯を見かけることはなかった。

そのため、統夜とイルバは唯がジョギングを1日で挫折したんだなと察していた。

エレメントの浄化が終わり、学校へ向かった統夜は教室で唯にジョギングのことを聞

いたらやはりジョギングは1日で挫折してしまったようだった。

今はテストが近いので、統夜たちは唯がジョギングを挫折したことは何も言わなかった。

そしてこの日の放課後、今日も音楽準備室はテスト期間であるため使用出来なかった。

そのため、統夜は喫茶店でコーヒーやスイーツを堪能しながらテスト勉強をすることにした。

統夜は普段からよく行くお店ではなく、初めて行く店に入ってみることにした。

統夜はその喫茶店に入ってみるのだが、その店はどうやら最近出来たばかりの店のようで、内装はとても綺麗で、さらにお洒落な内装だった。

しばらくすると、店員がやって来た。

「いらっしやいま……。あーっ!! あんたは!!」

店員は統夜を見るなり大声を出して統夜を指差していた。

「あんたは！ 私の個展を台無しにした奴!!」

統夜を見るなり大声を出したこの女性は、かつてホラーとの戦いに巻き込まれた東ヒカリだった。

ヒカリはホラーとの戦いの後、ホラーに関する記憶は消されたのだが、統夜やアキト

のせいで個展がダメになってしまったという記憶は残っていたのである。

「あそここのオーナーも何でかわからないけど行方不明になっちゃったし……。あんたは何で個展を台無しにしたのよ!？」

ヒカリはホラーに関する記憶を失ってから、統夜に会った時に個展を台無しにしたことを問い詰めるつもりでいたのである。

「そ、それは……」

ヒカリがホラーに関する記憶を失っているため、統夜はヒカリにどう弁解すべきか悩んでいた。

その時だった。

「……東くん、どうしたんだい?」

ヒカリがなかなか統夜を席まで案内しないのを見かねた店長がこちらにやって来た。

「あつ……。えつと……。その……」

「事情はわからないけど、彼はお客様なんだから、早く席に案内してあげて!」

「……わかりました。……お席にご案内します」

ヒカリはムスツとしながら統夜を席に案内し、お冷を統夜の前に置いた。

「……ご注文はお決まりでしょうか」

「あつ、ショートケーキ一つと、コーヒーフ。コーヒはケーキと一緒にいいです」

「……少々お待ちください」

ヒカリは不機嫌な表情のまま厨房に向かつていった。

それを見届けた統夜はふうつと一息ついていった。

《……統夜。どうやら面倒な相手に絡まれたみたいだな》

(そうだな……。あの人はホラーに関する記憶が消えてるから凄く絡みにくいよ……)

ヒカリはホラーに関する記憶を失っているため、下手なことを言えないのである。

そのため、統夜はホラーに関する話題を避けなければならぬので、ヒカリはかなり絡みにくい相手なのである。

とりあえず本来の目的である勉強を行うために、統夜は勉強道具を用意し、勉強を始めようとしたその時だった。

「……お待たせしました」

ヒカリは統夜の注文したコーヒーとケーキを統夜の前に置くと、すぐ統夜から離れていった。

統夜はコーヒーとケーキを楽しみながら勉強を行っていた。

ヒカリはそんな統夜の様子をジッと観察していた。

(……何であいつが私の個展を台無しにしたかはわからないけど、オーナーが行方不明になったことに絶対関わってるわ……！絶対に突き止めてやるんだから！)

ヒカリはオーナーが行方不明になった事件を突き止めるつもりでいた。

ヒカリは統夜の観察を続けていたのだが……。

「すいませーん!!」

「あつ、はい!!」

他の客に呼ばれ、統夜の観察は中止せざるを得なかった。

(……やれやれ、やつと行つてくれたか)

統夜は勉強しながらもずっとヒカリの視線を感じていた。

(こつちはテスト勉強中だつつの、本当に迷惑だよな……)

統夜はヒカリに勉強の邪魔をされると思い、ため息をついていた。

《まったくだぜ。あのお嬢ちゃん、妙な真似をしなければいいが……》

イルバもイルバで、ヒカリの行動を不審がり、統夜の行動を探ろうとしないかが心配だった。

統夜はとりあえず勉強に集中しようとするのだが……。

《……統夜。勉強は一時中断だ。どうやら番犬所から指令があるみたいだぜ》

イルバは番犬所から呼び出しがあることを統夜に伝えた。

(マジか……。もうちよつと勉強したかったんだけどな……)

統夜はガツクリと項垂れながらもまだ残ってるコーヒーを飲み干し、ケーキを完食し

て、会計を済ませた。

そのレジもヒカリが務めたのだが、その時もヒカリは統夜を睨みつけていた。

統夜はそんなヒカリに苦笑いをしながら会計を済ませ、店を出た。

統夜が出て行つてからも、ヒカリは店の扉を睨みつけていた。

(……あいつ、勉強してたのに、急に出て行つたわね……。また何か企んでるのかしら？

絶対にあいつの尻尾を掴んでやるんだから！)

ヒカリは統夜に対して抱いている疑惑を明らかにしようとしていた。

しばらく扉を睨みつけていると、再び客に呼ばれ、ヒカリは忙しく働いていた。

※※※

どうにか番犬所にたどり着いた統夜は、指令書を受け取ると、魔法衣から魔導ライターを取り出して、指令書を燃やした。

すると、魔戒語で書かれた文章が浮かび上がってきたので、統夜はそれを音読した。

音読が終わると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

「……わかりました。直ちにホラーを見つけて討滅します」

「……頼みましたよ、統夜」

統夜はイレスにペコリと一礼すると、番犬所を後にした。

それから統夜はイルバのナビゲーションを頼りにホラー搜索を開始した。

しばらく歩いていると、陽は落ちて、夜になっていた。

「……イルバ、ここか？」

イルバのナビゲーションで統夜がたどり着いたのは、桜ヶ丘某所にある今は使われていない農場だった。

『ああ。ここから邪気を感じるぜ。統夜、油断するなよ』

イルバがこのように警告をすると、統夜は魔戒剣を取り出し、いつでも抜刀出来るようにしておいた。

すると……。

『……統夜！来るぞー！』

イルバがこう宣言すると、ティラノサウルスのような姿をしているホラーが現れた。

『統夜！こいつはレクス。本能のまま人間を喰らうたちの悪いやつだぜー！』

ティラノサウルスのような姿をしたホラー、レクスは、本物のティラノサウルスのよ

うな迫力であり、本能のままに人間を喰らう。

レクスが街中に現れれば大惨事は免れない状態になるのである。

「なるほど……。こいつが街に出る前に始末しないとな」

統夜は不敵な笑みを浮かべると、魔戒剣を抜いて、レクスを睨みつけながら魔戒剣を構えた。

すると、いきなりレクスが体当たりを仕掛けてきたので、統夜は横っ飛びをして攻撃をかわした。

「つと、危ねえ危ねえ！」

『統夜！油断するな！次が来るぞ!!』

イルバがすぐさま警告をすると、レクスは尻尾による攻撃を繰り出してきた。

統夜はジャンプして尻尾による攻撃をかわすと、そのまま魔戒剣を一閃した。

しかし、その一撃でレクスに大きなダメージを与えることはなく、レクスは反撃といわんばかりに尻尾による攻撃を統夜に叩き込んだ。

レクスの尻尾をモロに受けた統夜はそのまま吹き飛ばされ、近くに建てられた柱に叩きつけられた。

「ぐう……！」

その衝撃はかなりのものだったが、統夜はどうにか起き上がった。

「野郎……いやってくれるじゃねえか！」

今の一撃で統夜の闘志に火がついたのか、統夜は鋭い目付きでレクスを睨みつけた。その迫力はかなりのものだったからか、レクスは思わずだじろいでしまった。

「こうなったら一気に決着をつける……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はレクスに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

統夜の睨みで怯んだレクスだったが、統夜にトドメを刺すために再び体当たりを仕掛けてきた。

統夜はジャンプして体当たりをかわすと、皇輝剣を一閃し、尻尾を切り離した。

その痛みはかなりのものだったのか、レクスは断末魔をあげていた。

「これで……どうだ!!」

統夜はすかさず皇輝剣を一閃すると、今度はレクスの体を真っ二つに斬り裂いた。

自分の体を斬り裂かれたレクスは、再び断末魔をあげると、その体は爆散し、消滅した。

レクスが消滅したことを確認した統夜は、鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞆に納めた。

「ふう、どうにか倒したか。……いてて……」

レクスの攻撃で壁に叩きつけられた時、骨折はしなかったものの、ダメージは大きく、まだ痛みは残っていた。

『やれやれ……。統夜、あれくらいの攻撃をかわせないようじゃ、お前さんもまだまだだな』

イルバは戦いが終わるなり、統夜に先の戦いのダメ出しをしていた。

「うぐっ……。あ、あれは！ただ油断しただけだつての！」

統夜は素直にイルバの言葉を認めるのが癪だったのか、苦し紛れに言い訳をしていた。

『……。まったく、そんな油断をするからまだまだだつて言ってるんだぜ』

イルバは必死に言い訳をする統夜に呆れていた。

『まあ、それから速やかに奴を倒したのは評価するぜ。並の騎士ならあそこで戦闘不能になってただろうしな』

しかし、イルバは受けたダメージを物ともせず、速やかにレクスを討滅したことは評価していた。

『……。本来ならもつともつと精進すべきだが、まずはテストをどうにかしないと』

「……。わ、わかつてるよ！」

『だからさっさと帰るぞ、統夜。帰って勉強しないと』

ホラー、レクスを討滅した統夜は、テスト勉強を行うためにまっすぐ帰宅した。家に到着し、シャワーを浴びた後に1時間ほどテスト勉強を行ってから就寝した。……そして、期末試験が刻一刻と迫ってきていたのであった。

……続く。

——次回予告——

『やれやれ。唯のやつ、テスト期間だということにこんなことをするとはな。テストの方は大丈夫なんだろうな？ 次回、「演芸」。まあ、本気でやるなら頑張るんだな』

第59話 「演芸」

期末テストが近付いてきており、統夜たちは部活を行わず、テスト勉強に専念していた。

統夜もどうにかテスト勉強を行っていたのだが、そんな中、ホラー、レクス討伐の指令を受けると、どうにかレクスを討伐することに成功した。

その翌日の休み時間、唯の口から思いもよらぬ話が飛び込んできた。

「……演芸大会？」

唯は商店街主催の演芸大会があるという話をすると、その演芸大会に出場すると話していたのだ。

「面白そうね♪」

出場したいは良いのだが、演芸大会が行われる日にちに問題があった。

「……………これ、期末の次の日じゃないか！」

澗の言うように、演芸大会は期末試験終了の翌日に行われる。

出場するのであれば、テスト勉強と演芸大会の準備と両方頑張らなくてはいけないのである。

「うん！だからね、私1人で出るよ！だって、みんなテスト勉強もあるだろうし」

唯は同じくテスト勉強をしなくてはいいねない統夜たちに気を遣って1人で出場することを決めていた。

しかし……。

「いやいや、お前もだろ」

すかさず統夜のツッコミが飛んできた。

「本当に唯ちゃん1人で大丈夫？」

「とにかく頑張るって決めたから！」

「おいおい！何で辞退しないんだよお！」

《確かに。こつちを辞退しないとテストに影響が出そうだな》

(そうだよな)

律、イルバ、統夜の3人は、演芸大会がテストに大きな影響を与えることを心配していた。

しかし……。

「……お隣のお婆ちゃん。喜ばせたいんだよ」

「お婆ちゃん？」

「ああ、あの人か」

唯の言うお婆ちゃんという言葉に紬は首を傾げ、統夜はとみのことを思い浮かべていた。

「小さい頃からお世話になつて、恩返しをしたいって思つてたんだよ！」

「……へえ……」

「私の晴れ姿を見たいって。優勝して、温泉旅行をプレゼントするんだ！」

唯が演芸大会に出場しようと思つた大きな理由は、日頃から世話になつているとみに恩返しをしたいからである。

演芸大会が優勝商品である温泉旅行をどうにか勝ち取り、それをプレゼントすることで恩返しをしたいと考えていたのである。

そのため、試験も演芸大会の準備も両方頑張る覚悟はしていた。

「……なるほどな。そんな理由なら納得だよ」

統夜はそんな唯の気持ちを汲み取ると、演芸大会出場理由に納得していた。

「……素敵！助けた亀に竜宮城とか、お地藏様に笠とか、そういうお話大好き♪」

「昔話……」

「いやいや、それはちよつと違うような気がするんだけど……」

恩返しという言葉に日本昔話を連想した紬に、統夜はツツコミを入れていた。

「唯ちゃん、頑張つて！私に出来ることがあれば手伝うわ！」

そんな統夜のツツコミをスルーした紬は、唯のことを応援していたのである。

「じゃあ、差し入れに美味しいお菓子を……」

「おいおい……」

いきなり紬にお菓子を要求する唯に、統夜と漣は呆れていた。

「それで、一人で何やるんだ？」

「演芸大会といったら……」

律は演芸大会でやる演目を聞き、漣は演芸大会らしいということ、皿回しをする唯を想像していた。

「……こんな感じ？」

「違うよお！ギターで弾き語りしようと思つて！」

「唯のソロか」

「楽しみだわあ♪」

「それはなかなか面白そうだな」

律、紬、統夜が唯のギターソロに期待をすると、唯は笑みを浮かべていた。

「それにしても、唯がピン芸人デビューとはなあ」

「ボケ倒して終わりそうだな」

「だからあ！演奏するんだつてばあ！」

律と滯の言葉に唯が抗議をすると、唯以外の4人が笑っていた。

こうして、唯は1人で演芸大会に参加することになった。

この日も部活はないので、統夜は勉強を始める前に一度番犬所に立ち寄った。

今日は指令がなかったので、魔戒剣の浄化を済ませると、番犬所を後にして、行きつけの喫茶店で勉強を行っていた。

昨日行った喫茶店はヒカリがいるため、今日はいつも行っている喫茶店にしたのであった。

1時間ほど勉強を行うと、統夜は喫茶店を後にして、街の見回りを行った。

しばらくの間、街の見回りを行った統夜は帰宅し、家でもテスト勉強を行った。

※※※

翌日、統夜はこの日もいつもの日課であるエレメントの浄化を行ってから登校した。

そして、その日の放課後、演芸大会に出ると言っていた唯から思いも寄らぬ話が飛び込んできた。

「……え？ 梓が？」

それは、今回の演芸大会に梓も一緒に参加するという話だった。

「うん！ そうだよ！」

「やっぱあたしにも参加するか？ って話してただけだな」

昨日唯から演芸大会の話聞いた後に、唯のいないところでこのような話し合いを行っていたのである。

「2人のユニットもいいわね♪」

「そうだな。唯と梓のコンビなら演芸大会にも華が出るだろ」

演芸大会は年寄りばかりが出ると思い込んでいる統夜はこのような発言をしていた。

「エへへ……」

華があるという言葉聞いた唯は嬉しさのあまり笑みを浮かべていた。
すると……。

「唯先輩！」

梓が教室の入り口から唯のことを呼んでいた。

「あつ、あずにゃん！ やっほー!!」

唯はそんな梓を見るなり、駆け寄って抱き付こうとするのだが、その前に梓は一枚の紙を唯に突きつけた。

「ハ、これは？」

「唯先輩！私、スケジュール立ててきました！」

梓はテスト勉強と演芸大会の練習の両方を両立させられるスケジュールを作っていたのである。

そのスケジュール表を見て、あることに気付いた唯は顔を真っ青にしていた。

「……あずにゃん、おやつ時間は？」

「ありません。休憩の時にささっと食べちゃって下さい」

梓はスケジュールにおやつ時間をに入れておらず、おやつを食べるならささっと食べるよう告げた。

そして梓は唯の首根っこを掴んでそのまま図書室へと連行していった。

「梓ちゃん、頼もしいわね♪」

「今回は梓に任せるか」

「うん、そうだな」

「梓なら安心して唯を任せられるしな」

統夜たちは試験と演芸大会を両方成功させるためのスケジュールを立てた梓を信頼

し、唯のことは梓に任せることにした。

「さて、今日は教室で勉強しようかな」

「あつ、私も一緒に勉強するわ!」

統夜がここで勉強すると話すと、紬も一緒に勉強すると食い付いてきた。

紬は統夜と2人つきりで勉強したいと思ひ、こう言つてきたのである。

それを察した滯と律はそのまま下校するのだが、「今度はあたしたちの番だからな」と律が紬に耳打ちをしてから学校を後にした。

こうして、統夜と紬は2人机を並べて一緒に勉強をしていた。

統夜と紬は黙々と勉強を行つていたのだが、紬にとつては、統夜と2人つきりでいられる減多にない機会なので、紬は頬を赤らめながらドキドキしていた。

「……?ムギ、どうしたんだ?さつきから顔が赤いぞ」

統夜は頬を赤らめている紬が気になったのか、こう訪ねていた。

「ふえ!?!な、何でもないので?何でも!」

「?そ、そうなのか?ならいいんだけど」

統夜は何でもないという言葉で鵜呑みにすると、そのまま勉強やな集中していた。

紬も勉強を再開し、しばらく勉強を続けていると……。

「……ねえ、統夜君」

「ん? どうした、ムギ?」

「統夜君って……好きな人は……いるのかしら?」

「へ?」

紬からそんな質問が飛んでくるとは思つてなかつたのか、統夜はポカーンとしていた。

「な、何でそんな質問を?」

「だって私たち高3でしょう? だからどうなのかなあつて」

「……好きな人ねえ……」

統夜はうーんと考え始め、紬はドキドキしながら考えている統夜を見ていた。

「……俺、ムギは好きだぞ」

「ふえ!!」

予想外過ぎる言葉が飛び込んできて、紬の顔は真っ赤になっていた。

「ムギだけじゃない。軽音部のみんなや、憂ちゃんや純ちゃん。それに……」

「へ?」

そんな紬の喜びも束の間であり、統夜はあっさりともんでもないことを言っていた。

「そ、それって……仲間とか、友達としてつてことよねえ?」

「?他に何があるんだ?」

統夜の鈍感ぶりはこの日も健在であり、紬はため息をついた。

『やれやれ……。そんなことだろうと思っただぜ……。』

イルバも相変わらず鈍感な統夜に呆れていた。

今、教室の中には誰もいなかったため、イルバは問題ないと判断して口を開いたのである。
「そ、そうじゃなくて！彼女というかお付き合いしたい人というか……。そんな人はいないの？」

「んー……。ぶっちゃけよくわからないんだけど、そういった人はいない……。かな」

統夜にとつて、恋愛というのは未知の領域のようであり、恋人うんぬんと言われると今はいないと言わざるを得なかった。

「ムギはいるのか？そういう人」

「ふえ!？」

まさか統夜からそんな質問が飛んでくるとは思っただけだったのか、紬は顔を真っ赤にしていた。

そして……。

「……う、うん……。私にはいるわ。お付き合いしたいって思う人が……」

それが統夜だとは公言しなかったが、好きな人がいることをはっきりと答えた。

統夜はそうだとわかってても、それが自分だとは全く思っていないので、平然としてい

た。

「……ふーん……。だけど、羨ましい話だよな」

「へ!? な、何が?」

「だってムギは凄く美人だからさ、そんなムギに想われてる人は幸せだなあつて思ったんだよ」

「……」

美人と言われたのは嬉しかったのだが、紬は、それよりも統夜の発言に啞然としていた。

（やれやれ……。本当に朴念仁だな、統夜のやつ。そんな統夜に惚れた紬や唯たちが哀れに思えてくるぜ……）

イルバは統夜の朴念仁ぶりはよく知っているのだが、そんな統夜たちに好意を寄せている唯たちが可哀想に思えると感じていた。

「……あつ、そうだ。ムギ。この問題がわからないんだけど、教えてくれないか?」

統夜は全く無意識に話題を切り替えた。

少し気ままずくなった空気を変えるためではなく、今解いてる問題がわからないので聞いただけだった。

「どれどれ? 見せて?」

一方紬は気持ちを切り替えて統夜のわからない問題をチェックすると、わかりやすい説明で問題を解説していた。

その後は色恋沙汰の話は一切出ることではなく、1時間程勉強して、2人の勉強会は終了した。

勉強会終了後、統夜は番犬所に顔を出さなければいけないので、学校の入り口で紬と別れ、番犬所へと向かった。

※※※

統夜は番犬所に到着したのだが、この日はホラー討伐の指令はなかった。

なので、統夜はイレスと少しだけ世間話を行った後に番犬所を後にして、街の見回りを行った。

統夜が商店街近くの川辺を歩いていると、見覚えのある顔を見つけた。

「……あれは……。唯と梓か。演芸大会の練習かな？」

統夜のいる場所から唯と梓が練習しているのが見えた。

「……どんな曲をやるんだろうな……」

統夜は2人の練習の邪魔をしないよう、2人の練習を見守っていた。
すると……。

「……あら、統夜君？」

「え？」

急に声をかけられたので、声の方を向くと、唯のお隣さんであるとみが、茶色の紙袋を手に立っていた。

「あ、確か。唯のお隣のお婆さん……ですよね？」

「ええ、そうよ。覚えていてくれて嬉しいわ♪ところで、あなたも唯ちゃんに会いに来たの？」

「いえ、俺はたまたまここを通りがかっただけなんです」

「あら、そうなの？ 私は唯ちゃんに差し入れを持ってきたのよ。あなたもぜひ食べてちょうだい」

「は、はあ……」

統夜は唯と梓の練習を見てるだけだったハズなのだが、とみの差し入れを頂くことに

なつたのである。

「……唯ちゃん！」

そうと決まつたとみは、さつそく練習中の唯に声をかけた。

「あつ、お婆ちゃん！それに……」

「統夜先輩？どうしてここに？」

唯と梓は、統夜ととみが一緒にいるということに驚いていた。

「アハハ……。俺はたまたまここを通りがかつただけなんだよ。それで、お婆さんに会つてな」

「そうなんだあ」

統夜がとみと一緒にいる理由を説明すると、どうやらすぐに納得したようだった。

「……はい、肉じゃがコロッケ」

とみは茶色の紙袋の中に入った肉じゃがコロッケを唯に手渡した。

「ありがとうお♪」

「憂ちゃんからここだつて聞いたのよ。練習頑張つてるのねえ」

「そうなんだよ！……あつ、一緒に出場してくれる、あずにゃん！」

「おい！そこはあだ名じゃなくて、本名の方を言えよ！」

唯がいつものようにあだ名で梓を紹介していたため、統夜はさすがツツコミを入れ

ていた。

「お婆さん、この子はあずにゃんこと、中野梓です」

そして統夜は唯に代わってしつかりと梓を紹介した。

「初めまして！」

梓はとみにペコリと一礼していた。

「あら、そうなの？あずにゃんさん、無理しないでね」

とみは梓の本名を知っても、唯が紹介したあずにゃんにさんを付けて梓のことを呼んでいた。

「はい」

梓はそんなとみの呼び方に嫌そうな顔は全くしていなかった。

「統夜君、あなたも肉じゃがコロッケ、食べていつてね！」

「はい！ありがとうございます！」

「ウフフ、それじゃあ、唯ちゃん。練習頑張つてね！」

とみはこう言い残し、その場を後にした。

とみがいなくなると、唯と梓は休憩がてら肉じゃがコロッケを頂くことにした。

統夜の分もあるとのことなので、統夜も一緒に肉じゃがコロッケを頂くことにした。

「はむっ……美味しい♪」

唯はコロツケを一口頬張ると、幸せそうな表情をしていた。

「お隣のお婆ちゃん、優しそうな方ですね」

「それは俺も思つたよ」

「うん！お婆ちゃんの炊き込みごはんとか、おいなりさんとか、美味しいよ」

唯が話すのは食べ物のことばかりで、そのことを語る唯は幸せそうだった。

統夜はそんな幸せそうな唯を見て、笑みを浮かべていた。

（唯……幸せそうだな……。それに、これがお袋の味つて奴か……）

統夜はコロツケを頬張りながら幸せそうな唯を見ていたのだが、再びコロツケを一口頬張つた。

（……うん、美味しい。何か、いいよな、こういう優しい味は。魔戒騎士として殺伐とした毎日を過ごしていたら味わえない味だしな）

普段の統夜はかなり味オンチなのだが、お袋の味というのは、何となくわかつていたのである。

「……？統夜先輩？」

梓は幸せそうな唯を見て笑みを浮かべる統夜を見て、首を傾げていた。

「ん？ああ、悪い悪い。唯の奴が随分と幸せそうだなって思つてたらつい……」

統夜は唯を見て笑みを浮かべた経緯を梓に説明した。

「そうだったんですね……。それにしても、今の唯先輩つてまるで餌もらつてる猫みたいですよね♪」

梓にまるで猫みたいと言われた唯は何故か嬉しそうにしていた。

「……それにしても、頑張らないとですね……」

「そだねえ♪」

唯と梓はとみに良い演奏を見せるため、演芸大会でベストを尽くすことを決意していた。

「あつ、そうそう。ユニット名はどうする？」

『おいおい、まだ決めてなかったのかよ……』

演奏する曲もそうなのだが、2人のユニット名も決まっていなことがわかると、イルバは呆れていた。

「あつ、そつか。放課後ティータイムじゃないですもんね」

「ねえねえ、〃先輩後輩〃とかは？」

「それ、殊更強調されても……」

「何か体育会系みたいだよな」

梓は微妙そうな反応をし、統夜は冷静に名前の分析をしていた。

「じゃあ、〃唯とあずにゃん〃とか？」

「ちよつとど直球過ぎるよな」

「統夜は唯のアイディアに微妙そうな表情をしていたのだが……。

「……！あつ、〝ゆいあず〟なんてどうですか？」

「梓がユニット名のアイディアを出してみた。

「へえ、悪くないんじゃないか？」

『ああ。シンプルだが、良いと思うぜ』

「統夜とイルバは〝ゆいあず〟という名前は好評だった。

「うん！私も良いと思う！」

「唯も賛成していたので、2人のユニット名はゆいあずでほぼ決定した。

「それより、曲決めないといけないですね」

「唯と梓は色々練習はしていたものの、本番でやる曲は決めかねていた。

すると……。

「♪ふうわふうわたあくあくいむ！」

「唯が急に変な歌い方でふうわふうわ時間を歌っていた。

「おいおい、何だよ、それは……」

「ふうわの演歌バージョンだよ！」

「こう語る唯は何故かドヤ顔をしていた。

『さすがにふわふわの演歌は無しだな……』

ふわふわ時間の演歌バージョンを聞いたイルバはただただ呆れていた。

「……ま、何やるか今わかったら面白くないし、俺は行くとするよ」

統夜はゆつくりと立ち上がった。

「統夜先輩……。ひよつとして、お仕事ですか？」

「まあな。とは言っても指令はないから街の見回りだけだな」

今日はホラー討伐の指令がないとわかると、唯と梓は安堵の表情を浮かべていた。

「……したら、俺は行くな。2人とも、大変だとは思うが、無理はするなよ」

「うん！もちろんだよ！」

「はい！ありがとうございます！」

統夜が労いの言葉をかけると、唯と梓の2人は笑みを浮かべていた。

2人の笑顔を見た統夜はウンウンと頷くと、その場を離れ、街の見回りを再開した。しばらく街の見回りを行った統夜はその後帰宅し、この日も勉強に専念した。

※※※

試験が真近に迫ったある日の休み時間、さわ子は何故か顔を真っ青にして、げっそりしていた。

「ど、どうしたんですか、先生？」

「お茶とお菓子が足りないのよ！何で最近お茶会しないのよお！」

試験前で部活とティータイムを行っていないため、さわ子はそのせいで禁断症状のような状態になっていた。

「いや、試験前だし、規則だし……」

律はまともすぎる理由を述べていた。

そんな中……。

「そんな規則と私と、どっちが大事なの？」

さわ子のこの言い振りはまるで「仕事と私と、どっちが大事なの？」という恋人同士の喧嘩の時に言うような言い振りだった。

「……いや、規則だろ……」

まともな答えをしながら、律はジト目でさわ子を見ていた。

『……やれやれ……。今の発言は教師のものとはとても思えんな……。』
イルバもそんなさわ子に呆れていた。

こんなことがあつたものの、統夜は試験勉強に専念し、唯は梓と共に試験勉強と演芸大会の練習を頑張っていた。

そして試験当日を迎えた。

今回は試験前日に強大なホラーと戦うといったことはなく、万全の状態です試験に臨んだ。

今までで一番勉強していた統夜はその甲斐あつてか、苦手な理数系の教科もどうにかこなしていった。

そんな中、日本史の試験では唯はあまりの眠さに問題を解くのも中途半端な状態で眠ってしまった。

しかし、和がわざと消しゴムを落とし、それを拾うために「先生！」と声をかけると、唯はそれで目を覚ました。

和のフオローのおかげで唯は寝ぼけ眼ながらも問題に集中していた。

こうして期末試験は無事に終了し、演芸大会当日を迎えた。

この演芸大会は商店街が主催で行われたものであり、地元の間人がマジックや楽器演奏など、得意なものを披露する場となっている。

律、漣、紬、憂、和、さわ子が唯と梓を応援するために見学に来ていた。

もちろん統夜も顔を出しており、統夜だけではなく、アキトと戒人も顔を出していた。「……まさか、お前らも来るとはな」

統夜は今行われている三味線の演奏を聴きながら、こうアキトと戒人に言っていた。

「まあな。最近例の奴の搜索で忙しかったし、たまには息抜きしないと」

アキトは鉄騎を奪った者の搜索を続けていたのだが、未だにその足取りすら掴めていない状態だった。

そんな中、統夜から演芸大会の話を知ると、息抜きも兼ねて見に行こうとしたのである。

ちなみに戒人はエレメントの浄化を終えて街を歩いていたところ、たまたま統夜とアキトに会ったのだが、そこで演芸大会に行かないかと誘われたので、ついてきたのである。

「…………これが演芸大会か……。なかなか興味深いな……」

戒人は三味線の演奏を聞くと、三味線に興味津々のようだった。

戒人は音楽というものに興味があるのか、以前藩ファンクラブのためのお茶会に参加した時も統夜たちの演奏に興味津々だった。

統夜たちがこのような話をしてしていると、のど自慢のような鐘の音が聞こえ、三味線の演奏が終了した。

『続きましては、14番、東ヒカリさんによる、ギターの弾き語りです！』

三味線の演奏が終わると、司会の人次が次のプログラムを説明した。

「東？どこかで聞いたような……」

統夜は司会の人次が言っていた東という名字に聞き覚えがあった。

すると、ステージに現れた女性を見て、統夜とアキトは反応していた。

「あ、あいつ！」

「確かこの前ホラーとの戦いに巻き込まれた奴だ！」

統夜はヒカリを見て思わず身構えてしまい、アキトはヒカリのことを覚えていた。

「…………どうした、統夜？そんなに身構えて」

戒人はヒカリを見て身構えている統夜が気になってこのように聞いていた。

「ああ、実はな……」

統夜は、今ステージに立っているヒカリがホラーとの戦いに巻き込まれたことでホラーに関する記憶を失い、そのため、再開した時にかなり絡みにくい相手になっていたことを話した。

「なるほど、それは随分面倒な相手に目を付けられたな」

戒人は統夜の話を聞いて、ホラーの記憶のみを失ったヒカリが相当面倒だということ
は理解していた。

それと同時に、ヒカリと関わったのが自分でなくて良かったと安堵していた。

統夜は高校に通っているためそんな相手の対処もどうにかなりそうだが、自分だつたらすぐにボコを出しそうだなと思っていたからである。

ステージに立ったヒカリは統夜たちが目立つ格好をしているからか、統夜とアキトのことをすぐに見つけていた。

(……あ、あの2人！何でこんな所に!?また、私の邪魔をしようって訳!?)

統夜とアキトを見つけたヒカリはしかめっ面になっていた。

(それにあの黒コートの男……。あいつもあいつらの仲間って訳!?)

ヒカリは続いて戒人のことを睨みつけていた。

「……なあ、統夜、アキト。もしかして俺、睨まれてるのか?」

「まあ、俺たちと一緒にいるから、お前も俺たちの仲間だと思ってるんだろ」

「マジかよ……」

自分は全く関係ないのに睨まれており、戒人はげんなりとしていた。

(……まあ、いいわ。知り合いに頼まれて仕方なく出たこの大会だけど、あいつらに見せつけてやるわ！私の音楽を！)

ヒカリは統夜たちに対する敵愾心のおかげで、最高の演奏をしようとスイッチが入ったのである。

(……私の歌を聞けえ!!)

心の中でこのように絶叫すると、ヒカリは挨拶もなしにギターを弾き始めた。

「……いへえ、あの人、絵だけじゃないんだな……」

統夜は前奏部分を聞いただけで、ヒカリが相当ギターが上手いということを理解した。

それはアキトと戒人も思っていたようで、前奏でヒカリの演奏に引き込まれていた。

ヒカリの演奏している曲は自身が作詞作曲したオリジナル曲で、画家を目指す前はギタリストを目指していた時期もあった。

そのため、ヒカリの演奏は、軽音部で1番ギターテクのある統夜よりも上手だった。

律たちもヒカリの演奏が上手いと感じており、演奏に聴き入っていた。

そしてヒカリは、1番のサビを最後まで歌い切り、そこで鐘が鳴って、演奏は終了し

た。

「……本当に上手かったな……」

続夜はヒカリの演奏を聞いて、素直にその演奏を評価していた。

アキトと戒人もウンウンと頷きながら、ヒカリの演奏を評価していた。

『ありがとうございしました！続きましては、15番、ゆいあずのお2人です！』

ヒカリの次が、唯と梓の出番だった。

「さて、次が唯と梓の出番だな」

「2人のユニットとは聞いてたけど、どんな感じなんだろう？」

「ああ、俺も楽しみにしている」

アキトと戒人も唯と梓の演奏なや期待をしていた。

すると、赤い着物を着た唯と梓がステージに現れた。

ステージに現れた唯は、さっそくギターをジャラン！と鳴らしていた。

『どうもお！桜ヶ丘高校3年、平沢唯です！』

『同じく2年！中野梓です！』

『2人合わせて……ゆい！』

『あず！』

『でーす!!』

ユニット名を紹介したところで、唯はギターをジャラジャラと鳴らしていた。

「……どうやら、掴みは上々みたいだな……」

統夜は最初の自己紹介が中々良いものであると評価していた。

「……なるほど、唯ちゃんと梓ちゃん。2人の名前を取ってゆいあずなんだな」

アキトはここで、このユニット名の由来を理解していた。

『私たち、最初は演歌をやるうと思つて、拳を回す練習をしてきたんですよ！』

唯はこう言うと、何故かブンブンと腕を振り回していた。

『そ……そっちの拳じゃなくい！』

梓は少し照れていたのか、若干棒読み気味にツツコミを入れると、唯の頭をハリセンで叩いていた。

すると、少しではあるが、客席から笑いが起きていた。

「……ハハ、まさか漫才まで仕込んでいたとは……」

「梓ちゃん、相当緊張してるな」

「そうみたいだな。ツツコミも何か棒読みだし」

統夜は漫才を仕込んでいたゆいあずに啞然としており、アキトと戒人は、棒読みのツツコミを聞いて、梓が緊張していることを理解していた。

『あずにゃんは後輩ですけど、私よりちやつかりしています！』

『それを言うならしつかりだ!』

梓は再びハリセンを用いてツツコミを入れていた。

再び笑いが起きていたのだが、おじさんたちが「まいったな、こりや」と言いながら笑っていた。

『それでは演奏の方、行きましょう!』

『行きましょう!』

「ここで演奏が始まると思われたのだが……。」

『……あれ? 何演奏するんだっけ?』

『いい加減にしなさい!』

梓がハリセンを用いてツツコミを入れると、今までの中で一番大きな笑いが起きていた。

『それでは……。ふでペンくボールペンく』の「ゆいあずバージョン」です!」

唯と梓が今回選んだのは統夜だが放課後ティータムオリジナルの曲である「ふでペンくボールペンく」だった。

統夜たちは「ゆいあずバージョン」という言葉が気になっていた。

どのようなアレンジをしているのかと想像していたのだが、前奏は予想外のものだった。

まるで演歌のようなイントロになっていたのである。

それを聞いた統夜は思わずコケそうになっていた。

「おいおい、ゆいあずバージョンって、それかよー！」

《ほお、これは俺様も予想外だったぜ》

統夜もイルバも唯と梓が本気で演歌をやるとは思っていなかったもので、演歌っぽいアレンジに驚いていた。

演歌っぽいアレンジで、盆踊りが踊れそうなりズムだったので、客席から手拍子が鳴り、2人の演奏はそれなりに盛り上がっていた。

しかし、Aメロ終了と同時に鐘が鳴ってしまい、ここで2人の出番は終わってしまった。

「……あっちゃあ……ダメだったか……」

サビまでいかに演奏が終わってしまった、統夜は思わず頭を抱えていた。

「まあ、あのギターソロの後じゃそれも仕方ないよな」

2人の前に行われたヒカリの演奏がかなりのものだったので、アキトはこの結果も仕方ないと感じていた。

「とりあえず、2人の検討を讀えようじゃないか」

「ああ、そのつもりだぜ！」

戒人は2人の頑張りを素直に評価しており、それは統夜も同じ気持ちだった。こうして、演芸大会は終了し、優勝したのは何とヒカリだった。

※※※

「……………ごめんなさい、お婆ちゃん！参加賞でした！」

演芸大会終了後、唯は参加賞としてもらったタオルをとみに手渡した。

「……………あら、私に？」

「本当は、温泉旅行をプレゼントしたかったんだけど……………」

温泉旅行をプレゼントしてとみに恩返しをしようと思っていた唯は、優勝を逃してしまい、残念そうにしていた。

「ううん！気持ちだけで嬉しいわ！ありがとうね。本当に2人とも素敵だったわ！唯ちゃん、本当に立派になっちゃって。ねえ♪」

演芸大会での頑張りをとみに褒められた唯は、頬を赤らめながら嬉しそうにしてい

た。

「そうそう、ちらし寿司たくさん作ったのよ。憂ちゃんや皆さんと一緒に食べましょう」

「わーい！あずにゃん、行こっ♪」

「はいー！」

唯がとみとこのようなやり取りをしているその頃、統夜は少し離れた所でその様子を見守っていた。

「……唯、梓。本当に頑張ったな……」

統夜は優しい表情で微笑むと、このように呟いていた。

「……その言葉、本人に直接伝えればいいのに」

そんな統夜の様子を見ていたアキトはニヤニヤしながら統夜のことをからかっていた。

「も！もちろん！後で言うつての！」

「どうだか……」

「それは俺も同感だな……」

アキトにからかわれて焦る統夜に、アキトと戒人は笑みを浮かべていた。

統夜たちがこのようなやり取りをしていると……。

「……やーくん!!早く早く!!」

唯がブンブンと手を振って、統夜のことを呼んでいた。

「おう!今行く!……お前らも行くか?」

「ああ!俺は行こうかな。ご馳走にありつけそうだし♪」

アキトはご馳走につられて行くつもりだった。

一方戒人は……。

「いや、俺はやめておくよ。もしかしたら、指令が来るかもしれないし……」

戒人はこの後に来るかもしれない指令に備えるため、行かずに番犬所に向かう予定だった。

「……統夜、もし指令が来たらそれは俺が受けるから、お前は思う存分楽しんでこい!」

「……戒人、ありがとな」

「気にするな。これくらいは何てことないさ」

戒人は統夜に1つでも多くの思い出を作ってもらうために、その手助けを行うつもりでいた。

「……それじゃあ、俺は行くよ。統夜、アキト。またな」

こう挨拶をかわすと、戒人はそのまま番犬所へと向かっていった。

「それじゃあ、行こうぜ、アキト」

「おう……馳走、楽しみだなあ♪」

こうして、統夜とアキトは唯たちと合流し、とみお手製のちらし寿司をご馳走になったのである。

その頃、見事演芸大会で優勝したヒカリは、そんな統夜たちのやり取りをジツと見ていた。

「あいつ……。あの女の子たちと知り合いなのね……。桜ヶ丘高校軽音部か……。あの子たちがあの事件の真相を……。知らないか」

ヒカリは統夜と唯たちが親しげにしているのが気になっていたのだが、唯たちがオーナー行方不明の事件のことを知っているとは思っていなかった。

しかし、ヒカリは統夜が桜ヶ丘高校の生徒か、その関係者であると推理しており、そこから、統夜のことを調べようと考えていた。

統夜は、ヒカリが自分のことを調べようとしていることを予想し、面倒なことにならないよう警戒するつもりでいた。

そして数日後、期末テストの全教科が返ってきた。

何と唯は全教科80点以上と高得点を叩き出していた。

唯がいうには、山が当たったらしい。

ちなみに統夜は、唯ほど高得点ではなかったものの、努力の甲斐があつてか、全教科平均点以上は取っていた。

こうして、期末テストはどうか無事に終わったのであつた……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『……どうやらかなり面倒なことが起こっているようだな。これは気を引き締めないといけないみたいだぜ！次回、「猟獣」。統夜、油断するなよ！』

第60話 「獵獸」

……ここはとある街の町外れにある廃工場。

ここで、一人の魔戒騎士が素体ホラーを追い詰めていた。

「はあっー！」

魔戒騎士は、魔戒剣を一閃し、素体ホラーを斬り裂くと、続いて蹴りを放ち、素体ホラーを吹き飛ばした。

この魔戒騎士は、大輝のように称号を持たない騎士であったが、様々な死地を乗り越えてきたベテランの魔戒騎士であった。

「よし……一気に決めてやる！」

素体ホラーを物ともしていない魔戒騎士は、このまま素体ホラーにトドメを刺そうとしていた。

「く、くそ……魔戒騎士め……こんな所でやられてたまるか！」

そして素体ホラーは、魔戒騎士に追い詰められ、どうにかこの場を乗り切ろうとしていた。

魔戒騎士が素体ホラー目掛けて突撃しようとしたその時だった。

「……う？何だ？これは？」

魔戒騎士は何か違和感を感じ、足を止めた。

どこからか超音波のような音が聞こえてきたからである。

しばらくその超音波のような音を聞いていたその時だった。

「……い？！ば、馬鹿な!？」

先ほどまで難なく魔戒剣を持てた魔戒騎士だったが、何故か今は魔戒剣を持ち上げることが出来なくなっていたのである。

「な……何故だ!？何故魔戒剣が持てない!？」

急に魔戒剣が持てなくなってしまうことで、魔戒騎士は焦っていた。

「ど、どうなってるんだ?」

突然の出来事に素体ホラーも困惑していた。

しかし……。

「と、とにかく!これはチャンスだ!魔戒騎士を叩き潰してやる!」

魔戒騎士が魔戒剣を扱えないことを知ると、これを好機と考え、魔戒騎士に襲いかかった。

普段であれば冷静に格闘攻撃で素体ホラーをあしらうところだが、魔戒剣が扱えないことに焦ってしまい、冷静さを失っていた。

素体ホラーは魔戒騎士に飛びかかるのだが、魔戒騎士は何故か抵抗することが出来なかった。

そして……。

「貴様をいただくぞ！魔戒騎士！」

魔戒騎士の動きが鈍い隙に、素体ホラーは魔戒騎士を喰らい始めた。

「ぐわああああああああ!!」

魔戒騎士の体は粒子となり、素体ホラーの体に吸い込まれていった。

何故か魔戒剣を扱えなくなった魔戒騎士はそのまま素体ホラーに喰われてしまい、その生涯を終えた。

魔戒騎士の体は消滅し、地面に無造作に置かれた魔戒剣だけがその場に残されていた。

「ククク……。これが魔戒騎士の味って奴か……。格別な味じゃないか！」

この素体ホラーは初めて魔戒騎士を喰らったのだが、その味は今まで喰らった人間以上に美味だった。

「……そこそこ実力のある魔戒騎士の味……。堪能したか？」

その時、素体ホラーの前に現れたのは、ホラーだった。

そのホラーは素体ホラーではなく、まるでカブトムシを騎士の鎧にしたかのような姿

で、その色は真っ赤だった。

「貴様……同志か？悪いが魔戒騎士は俺が喰ったんだ。貴様には譲れないぞ」

「そんなことはわかつているさ……。俺が喰らいたいのは……貴様だからな！」

カブトムシのような姿をしたホラーは、同志であるはずの素体ホラーを喰らうと宣言していた。

「な!?き、貴様!何を!」

唐突な言葉に素体ホラーは困惑するが、カブトムシのようなホラーは、どこからか剣を取り出すと、素体ホラーの体を貫いた。

「ぐあ……!何故……!同志である俺を……!」

「何故……だと?わからないか?」

「き、貴様!まさか、ホラーを……」

素体ホラーが最後まで言い切る前に素体ホラーの体は粒子となり、カブトムシのようなホラーは粒子となった素体ホラーを喰らった。

「……ふう。やっぱり魔戒騎士を喰ったホラーの味は格別だな……」

カブトムシのようなホラーは、人間よりもホラーを好んで喰らう、ホラー喰いのホラーだった。

「あの男から受け取った“あれ”は問題なく稼動しているな……。まあ、奴の実験に協

力すればご馳走を食べ放題なんだ。協力はするさ……」

このカブトムシのようなホラーは、何者かの行う実験の協力をしていた。

その後も魔戒騎士を喰らったホラーを喰らいたいと願うこのホラーは、その場から姿を消した。

※※※

期末テストと演芸大会が終了し、この日、テストが全教科返ってきた。

この日の放課後、統夜たちはいつものように音楽準備室に集まり、久しぶりのティータイムを楽しんでいた。

「……ほわぁ……幸せ……♪」

このティータイムを一番心待ちにしていたさわ子は、紅茶を飲みながら幸せそうにしていた。

『おいおい、教師であるお前さんが1番だらだらしてるな……』

紅茶を幸せそうに飲むさわ子を見たイルバは、あまりに教師らしくないさわ子の行動に呆れていた。

「ま、いいんじゃないのか？先生、1番このティータイムを楽しみにしてたし」

さわ子をフオローする統夜も、紅茶を飲みながらだらけていた。

『おいおい、統夜。お前さんも随分とだらけてるな』

「まあまあ、いいじゃない♪テストもやつと終わったんだし♪」

期末テストが終わり、最初のティータイムだったので、さわ子や統夜だけではなく、梓もだらけていた。

『やれやれ……。お前ら、揃いに揃って……。まあ、たまにはこんな日があっても良いか……。』

イルバもこのだらけた空気を黙認し、統夜たちはまったりとティータイムを楽しんでいた。

今日1日はこのようにまったりとした空気のまま部活が終わると思われたのだが……。

「と、統夜!!大変だ!」

桜ヶ丘高校を訪れたアキトが血相を変えて音楽準備室に乗り込んできた。

「アキトか……？何だよ、そんなに慌てて」

いつもはそこまで慌てることのないアキトの慌てぶりを見て、統夜は首を傾げていた。

「……こ、これを見ろ！そんなに呑気ではいられないぞ！」

アキトは統夜に指令書を渡すのだが、それを受け取った瞬間、統夜の表情が変わった。

「……!!」

何故統夜の表情が変わったかと言うと……。

『……黒の指令書か……』

統夜にとつては2度目となる黒の指令書だったからである。

「！その黒いのって……」

唯たちもこの黒の指令書には見覚えがあった。

「確か、この指令書が来たつてことは、とんでもないことが起こつてることですよね？」

今からおよそ1年前にも、デイオスが強大な力を持つグオルブを復活させようとしていたのだが、それを阻止しよう命じた指令書も黒の指令書だった。

「統夜、とりあえず指令の内容を確認するんだ！」

「ああ、そうするよ」

統夜は長椅子に置かれた魔法衣を羽織ると、そこから魔導ライターを取り出した。黒の指令書を魔導火を放って燃やすと、そこから、魔戒語で書かれた文章が浮かび上がってきた。

それを見た統夜は、音読する前に、その内容に驚愕していた。

「……………？統夜先輩？」

「あ、ああ……………」

統夜はすぐ我にかえると、魔戒語で書かれた文章を音読した。

「……………現在、魔戒騎士狩りが行われている。これ以上犠牲を出す前に、騎士狩りの原因を調査し、速やかに阻止せよ……………」

統夜が音読すると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

そして……………」

「「「「「！！」」」」」

指令の内容を聞いた唯たちは驚愕していた。

「ま、魔戒騎士狩りって……………」

「統夜先輩……………」

魔戒騎士狩りということは、多くの魔戒騎士が殺されているということを理解し、梓は不安な声をあげていた。

「騎士狩りとか、穏やかじゃないな……。さっさと解決させないとな……」

「統夜、とりあえず番犬所に行くぞ」

「そうだな。イレズ様に詳しい話を聞かないと」

統夜はアキトと共に番犬所へ向かうため、帰り支度を始めた。

そんな中、騎士狩りと不穏な言葉を聞いた唯たちは不安そうな表情をしていた。

騎士狩りが行われているということは、統夜にも危険が及ぶ可能性があるからである。

統夜は帰り支度を整えると、唯たちが不安そうにしていることに気付いていた。

「……心配するな。俺は死なないし、必ず戻る。信じて待つてくれ」

統夜は自信に満ち溢れた表情でこう断言すると、アキトと共に音楽準備室を後にして、そのまま番犬所へと向かった。

「……統夜先輩、死なないで……」

統夜が音楽準備室を出て行く際、梓は誰にも聞こえないようにボソツと呟いていた。

※※※

統夜とアキトが番犬所に到着すると、既に戒人と大輝は来ており、2人を待つていた。

「……来ましたね、統夜、アキト」

「はい、イレス様」

統夜とアキトはイレスに頭を下げるのだが、神秘的な面持ちをしていた。

「その顔……。指令の内容は確認したのですね?」

イレスの問いに、統夜とアキトは無言で頷いた。

「それよりもイレス様。魔戒騎士狩りとは……」

統夜は指令に書かれていた魔戒騎士狩りに関する詳細を聞こうとしていた。

「1週間くらい前からなのですが、腕自慢の魔戒騎士がことごとくホラーに破れ、ホラーに捕食されたか、命を落としています。称号を持たぬ魔戒騎士がほとんどですが、称号を持つ魔戒騎士も犠牲になっています」

多くの魔戒騎士が犠牲になり始めたのは、つい最近の話であった。

犠牲になったのは、ほとんど称号を持たない魔戒騎士だったのだが、称号を持つ魔戒騎士も何名かホラーの餌食となっていた。

「それで、それだけの数の魔戒騎士を殺したのは一体どんなホラーなんですか?」

「それが……。まだわかっていないのです。どのようなホラーが、どのような手段で多くの魔戒騎士たちを葬ったのか……」

一番由々しき問題なのは、魔戒騎士狩りを行っているホラーの正体がわかっていないことと、どのような手段を用いて魔戒騎士を葬ったのかが未だにわかっていないことだった。

「元老院も調査をしています、速やかにこのようなことは阻止しなければいけません。魔戒騎士の皆さんはホラー狩りは必ず2人以上で行うよう元老院から通達がありました。どのようなホラーが相手でも、決して油断はしないで下さい」

イレスからの通達に、統夜たちは無言で頷いた。

「そしたら、二手に分かれて調査を行おう。アキトは統夜と共に行動してくれ。俺は戒人と行動する」

「わかりました！」

「おう、わかったぜ！大輝のおっさん！」

大輝がチーム分けを行い、統夜たちはそのチーム分けを了承した。

そんな中、アキトは大輝のことを大輝のおっさんと呼んでいたのだが、アキトは親しみを込めてこのように呼んでいるのである。

しかし、大輝はその呼び名を快く思っていないようだった。

「……おっさんはやめろ。……とりあえず行動開始だ！」

大輝の号令に統夜たちが頷くと、統夜たちは番犬所を後にして、魔戒騎士狩りの手がかりを得るために行動を開始した。

※※※

その頃、東京にある「翡翠の番犬所」の管轄である、秋葉原の町外れで、2人の魔戒騎士が1体のホラーと交戦していた。

1人は、称号を持たない魔戒騎士ではあるが、様々な死地を乗り越えてきたベテラン魔戒騎士だった。

そして、もう1人である如月奏夜は、中学3年生ながらも最近魔戒騎士になったばかりの少年である。

翡翠の番犬所の魔戒騎士たちにも魔戒騎士狩りの手がかりを得て、それを阻止するよう指令が来ており、奏夜は新人ということもあり、ベテランの魔戒騎士と行動を共にしていた。

奏夜は先輩騎士と共に素体ホラーと戦っていた。

素体ホラーが相手ということもあり、奏夜たちは、着実に素体ホラーを追い詰めていった。

そして、2人揃って素体ホラーにトドメを刺そうとしたその時だった。

どこからか、超音波のような音が聞こえてきたのである。

「……………これって……………」

「……………一体どこから……………」

奏夜と先輩騎士は、どこからか聞こえてくる超音波のような音に首を傾げていた。

……………その時だった。

「……………な、何だ!?!」

「魔戒剣が……………持てない!?!」

奏夜と先輩騎士は共に魔戒剣が持てなくなってしまったのである。

『!・奏夜!・この近くから妙な音波が出てるのだが、それがソウルメタルの性質を狂わせてるみたいだ!』

奏夜の相棒である、魔導輪キルバが急に魔戒剣が持てなくなった要因を分析していた。

「なるほど……。その音波が魔戒騎士狩りに使われたという訳か……！」

先輩騎士も、魔戒剣が持てないという現状から、謎の音波が魔戒騎士狩りに関わっていることを確信していた。

「……奏夜！お前は急ぎ番犬所に戻ってこの事実を伝える！」

「!?しかし！」

「このままじゃ2人揃ってやられるだけだ。俺は、お前のような若い魔戒騎士を死なせる訳にはいかないのだ！」

先輩騎士は、このような所で、若い魔戒騎士の命を散らすということだけは避けたかった。

「それに、原因がわかれば解決策も見つかる。お前に与えられた仕事は大仕事だと心得ろ！」

「……………は、はい！」

先輩騎士の言葉に心を動かされた奏夜は、その言いつけを守ることにした。持ち上げることの出来ない魔戒剣は放置し、番犬所へと直行した。

「……………頼んだぞ、奏夜……………」

先輩騎士は奏夜に全てを託すと、丸腰の状態で素体ホラーに戦いを挑んだ。格闘戦でも素体ホラーを圧倒していたのだが、素手でホラーは倒せず、消耗したところを素体ホラーに喰われてしまった。

そんな中、奏夜は振り返ることなく、番犬所へと向かっていた。

『……奏夜！もうすぐで番犬所だぞー！』

「あぁー！わかつているー！」

どうにか番犬所の近くまで来ていた。

しかし、簡単に番犬所に到着することは出来なかった。

「……そこまでだー！」

奏夜の目の前に、カブトムシのような鎧のホラーが現れた。

「くっ、ホラーかー！」

『奏夜！このホラーだが、魔戒騎士の鎧に酷似しているぞー！』

「何だと!?!」

キルバはこのホラーの容姿が魔戒騎士の鎧に酷似していると話すと、奏夜は驚愕して

いた。

「フン、冥土の土産に教えてやる。俺の名はヘラクレス。その魔導輪の言うように元魔戒騎士だ」

「お前か!? 多くの魔戒騎士を殺したホラーっていうのは!?」

奏夜は元魔戒騎士であるというヘラクレスに臆することなく、ヘラクレスを睨みつけた。

「厳密に言うとは違うがな。そう仕向けたのは俺さ」

魔戒騎士狩りを仕組んだのは奏夜の目の前にいるヘラクレスだった。

「元魔戒騎士であるお前が何でそんなことを!?」

奏夜は魔戒騎士になってまだ日は浅いが、元は魔戒騎士だったヘラクレスの所業が許せなかった。

「それをお前が知る必要はない! 何故なら……お前は俺に殺されるんだからな!」

ヘラクレスはどこからか剣を取り出すと、剣を奏夜に突きつけた。

「……………」

現在奏夜は丸腰であり、真つ向から立ち向かって敵う相手ではなかった。

奏夜は魔戒騎士になって日が浅いものの、死を覚悟していた。

そんな中、ヘラクレスが奏夜を殺そうと剣を突き刺そうとしたその時だった。

「やいせませんよ!」

突如ヘラクスと奏夜の間に何者かが割って入ってくると、剣でヘラクスの攻撃を防ぎ、続けて蹴りを放ってヘラクスを吹き飛ばした。

「!?な、何だ!?!」

突然現れた乱入者に奏夜は驚きを隠せなかった。

「き……貴様は!?!」

ヘラクスも突然現れた乱入者を睨みつけていた。

「……僕の名は布道レオ。お前たちホラーを狩る魔戒騎士だ!」

奏夜の命を救ったのは、元老院付きの魔戒騎士である、布道レオだった。

「ほお、まだ魔戒騎士がいたとはな……。だが、飛んで火に入る夏の虫ってやつだな」

魔戒騎士の乱入にヘラクスは驚くのだが、獲物が増えたと思い、笑みを浮かべていた。

「貴方は下がっていて下さい!こいつは僕が倒します!」

「レオさん……。でしたっけ?気を付けて下さい!こいつは、魔戒騎士狩りの首謀者なんです!」

「なるほど……。ですが、問題ありません!」

魔戒騎士狩りのことはレオも聞いているハズなのだが、何故かレオは余裕そうな表情をしていた。

「フン、強がりと言えるのも今のうちだ!」

ヘラクスはパチン！と指を鳴らすと、何かを起動させた。

それと同時にレオは手に持っている魔戒剣をヘラクスメがけて投げつけたのだが、ヘラクスはその魔戒剣を弾き飛ばした。

「ほお！貴様、魔戒剣が使えなくなることを知っていたか！しかし、丸腰の魔戒騎士など、俺の敵ではない！」

ヘラクスはレオの魔戒剣を弾き飛ばし、そのままレオを殺そうとレオに向かっていた。

しかし、レオは動じることはまったくなく、レオは笑みを浮かべていた。

そして……。

「……やはりそう来ましたね！読んでましたよ！」

レオは魔導筆を取り出すと、それをヘラクスに見せつけるかのように突きつけた。

「!?な、何だと!?貴様、まさか!?」

ヘラクスはレオのもう一つの顔にようやく気付いたのだが、その時には既に手遅れだった。

「そう！僕は魔戒騎士であり、魔戒法師でもあるんだ！」

こう宣言したレオは、法術を放つと、その法術でヘラクスを吹き飛ばした。

「魔戒騎士であり、魔戒法師……」

奏夜はレオのことを知らなかったのか、魔戒騎士と魔戒法師と、2つの顔を持つているレオの存在に驚いていた。

『ほお、こいつは驚いたな。奴がああの布道レオとはな……』

「キルバ、あの人のことを知ってるのか？」

『まあな。あの男はかなりの有名人だぞ』

「……ふーん。そうなのか……」

奏夜はレオの兄であるシグマの起こした事件のことは知らなかったもので、レオが有名な人と聞いて素直に感心していた。

「まさか、魔戒法師が現れるとは予想外だったな。まだ俺の実験は終わっていないのでな、俺はここで失礼させてもらうよ」

「待て！逃してたまるか！」

レオはヘラクスを逃がさないために、術を放とうとするが、その前にヘラクスは衝撃波を放った。

レオは法術でバリアを貼ると、衝撃波を防ぐことは出来たのだが、その隙にヘラク스에逃げられてしまった。

「……く、くそ！逃げられたか……！」

『あのホラー、随分とやるようじゃないか』

ヘラクスの引き際の良さに、レオの相棒である魔導輪エルヴァは感心していた。

ヘラク스가いなくなったことを確認したレオは、奏夜のもとに駆け寄った。

「……大丈夫ですか？怪我は？」

「いえ、大丈夫です」

「それは良かったです。……えっと……」

「……如月奏夜です」

奏夜は自身の名前をレオに名乗り出た。

「奏夜君……ですか。無事で良かったです」

レオは奏夜が無事だったことがわかり、安堵していた。

「あの……。レオさん……。でしたっけ？貴方は、どうしてここに？」

「僕は、例の魔戒騎士狩りの調査でこの街に来たんですけど、どこからか放たれる特殊な超音波がソウルメタルの性質を一時的に変容させることを突き止めたのです」

レオはこの街を訪れた経緯を奏夜に説明し、レオは魔戒騎士狩りが行われたである方法を突き止めていた。

『それをこの番犬所に報告しに行く途中に偶然ホラーに襲われてる坊やを見つけたという訳じゃよ』

さらにエルヴァが補足説明をしていた。

「そうだったんですか……」

『なるほどな、だが、お前が来てくれて助かったよ。魔戒剣を置いてきてしまった状態ではホラーを倒すことは困難だったからな』

「気にしないで下さい。魔戒騎士も魔戒法師も助け合いが大事だと僕は思っていますから」

「あ、ありがとうございます……」

「さあ、まずは魔戒剣を回収しに行きましょう。番犬所への報告はそれからです」

「は、はい」

レオはまずヘラクスに向けて放り投げた魔戒剣を回収すると、続いて奏夜の魔戒剣の回収に向かった。

奏夜とレオがその現場に到着すると、奏夜が先輩騎士と共に戦った素体ホラーは既に姿を消していた。

さらに、先輩騎士がそのホラーに喰われてしまった証として、先輩騎士が使っていた魔戒剣だけが残されていた。

「……！そ、そんな……!!」

奏夜は先輩騎士がホラーに喰われてしまったことを知ると、絶望が奏夜を支配し、立ち尽くしていた。

「……奏夜君……」

レオは絶望から立ち尽くしている奏夜を見て、何て声をかければいいのかわからなかった。

『……奏夜！しつかりしろ！魔戒騎士の日常とはこのようなものだ！いつ命を落としてもおかしくはないからな。気持ちを切り替えないと次に死ぬのはお前だぞ！』

相棒であるキルバが、奏夜に叱咤激励をしていた。

奏夜は魔戒騎士になってまだ日が浅いため、当然仲間の死を見るのは初めてだった。

しかし、キルバの指摘通り、そこを乗り越えて気持ちを切り替えなければ、それが命取りになってしまう。

「……そう……だよな……。すまない、キルバ」

『気にするな。お前は魔戒騎士としてはまだまだ未熟なんだ。そんなお前のサポートするのも俺の仕事だからな』

キルバは魔戒騎士になったばかりの奏夜を全力でサポートするつもりだった。

「ああ……俺は1日でも早くなくてやるさ！一人前の魔戒騎士に！」

奏夜は先輩騎士の犠牲を糧にして、1日でも早く一人前の魔戒騎士になることを誓った。

そんな奏夜を見て、レオは笑みを浮かべていた。

『……?レオ、一体何がおかしいんだい?』

「いや、今の奏夜君を見ると、統夜君もこんな時期があつたなあと思つてね」

レオは魔戒騎士になつたばかりの頃の統夜のことを知っており、今の奏夜をかつての統夜と重ねていた。

「……だから、奏夜君はきつと……統夜君みたいに……」

『そうかもしれないねえ』

同じく統夜のことを見守っていたエルヴァも奏夜が将来的に統夜のような魔戒騎士になるであろうと信じていた。

こうして、魔戒剣を回収した奏夜は、レオと共に番犬所へ向かい、魔戒騎士狩りの原因とも言える超音波の存在を報告した。

※※※

その頃、桜ヶ丘で魔戒騎士狩りの原因を調査していた統夜とアキトであったが、未だにその足取りを掴めずにいた。

「くそっ！全然手がかりがつかめないな！」

「そうだな。つか、ホラー自体まだ現れてないしな」

調査を開始してからだいぶ経つのだが、ホラーも現れておらず、騎士狩りの情報は全く得られていない状態だった。

『ホラーがないのは悪いことではないが、このままでは何の情報も得られないな』

「次の犠牲者を出す訳にはいかないんだ。早く何か手がかりを見つけないと……」

このまま何も手がかりがないと再び犠牲者が出る可能性があるため、統夜は焦っていた。

その時だった。

『……統夜！番犬所から呼び出しだ！』

「え？番犬所から？」

「！もしかして……！」

『ああ。何か手がかりが見つかったのかもしれないな』

「そういうことなら急いで番犬所に戻ろう！」

こうして統夜とアキトは番犬所から呼び出しがあったため、急いで番犬所へと戻った

のである。

統夜とアキトは番犬所へ向かったのだが、そんな2人をジツと見つめる影があった。

「……あれがこの街の魔戒騎士か……。どうやら魔戒法師も一緒のようだな」

番犬所に移動する統夜とアキトを見ていたのは、かつて鉄騎を奪い、統夜を襲わせた謎の男だった。

「……魔戒騎士狩りは順調のようだが、あの兵器の仕組みはバレてしまったみたいだな……」

謎の男は、魔戒騎士狩りの時に用いたとある兵器の仕組みがレオや奏夜のせいで判明してしまったことを知っていた。

しかし、謎の男は焦る様子はなく、笑みを浮かべていた。

「ククク……。ここまでは計画通りだ！ 仕組みがわかったところで、肝心のその兵器が見つからなければ意味がないからな！」

確かに、レオと奏夜は謎の兵器の仕組みは掴んだものの、肝心の兵器の場所は見つけることが出来なかった。

「まあ、せいぜい足掻くんだな。俺はどんな手を使っても必ず全て滅ぼしてやるよ。目障りな魔戒騎士共をな！」

謎の男は魔戒騎士に対して憎悪のような感情を抱いており、そのため、ホラー、ヘラクスと協力して魔戒騎士狩りを行っていたのである。

魔戒騎士狩りを阻止するための戦いは、まだ始まったばかりであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『例の魔戒騎士狩りがどのように行われたのかがわかったのはいいが、それを阻止しなければ意味がないぜ！次回、「強襲」。迫り来る、真紅の刃！』

第61話 「強襲」

現在、各地で腕自慢の魔戒騎士がホラーに破れて捕食されるか、命を落としてしまう、魔戒騎士狩りが行われていた。

それを阻止するため、各地の番犬所の魔戒騎士や魔戒法師が動き始めていた。

そんな中、翡翠の番犬所に所属する魔戒騎士、如月奏夜が先輩騎士と共にホラー狩りを行っている途中に、超音波のようなものを聞いた影響で、何故か魔戒剣が持てなくなってしまう。

この超音波こそ魔戒騎士狩りに使われたものと確信した先輩騎士は、命を賭けて奏夜を逃し、番犬所へと向かわせた。

その先輩騎士はホラーに捕食されてしまったのだが、奏夜は番犬所へ向かった。

その途中、ホラー、ヘラク스에襲われるが、偶然翡翠の番犬所に向かっていた布道レオに救われ、2人は翡翠の番犬所で魔戒騎士狩りの時に用いられたと思われる超音波のようなものの存在を報告した。

翡翠の番犬所の神官であるロデルは、奏夜とレオの報告を受け、各番犬所や元老院にその情報を流した。

そして、その情報を受け、番犬所から呼び出しを受けた統夜とアキトは、番犬所へと戻った。

2人が番犬所に戻ると、既に戒人と大輝は戻ってきており、2人を待っていた。

「みんな、揃いましたね」

「イレス様、もしかして魔戒騎士狩りの手がかりが見つかったのですか？」

統夜の言葉に、イレスは無言で頷いた。

「翡翠の番犬所の神官であるロデルから少し前に報告がありました」

「翡翠の番犬所ですか……」

翡翠の番犬所は、東京の秋葉原、神田、神保町あたりを管轄にしている番犬所である。

統夜とアキトは、かつて人間を滅ぼそうとしていた古の魔導具である阿号や、古のホラー、グレゴルと交戦したのだが、それは翡翠の番犬所の管轄内だった。

翡翠の番犬所という名前を聞き、統夜とアキトはその時のことを思い出していた。

「それで、翡翠の番犬所は何を掴んだというのだ？」

統夜とアキトが翡翠の番犬所のことを思い出すなか、大輝が肝心の本題をイレスから聞き出そうとしていた。

「ええ。これは、翡翠の番犬所にいる魔戒騎士になったばかりの少年の話なのですが、ホラーを追い詰めた時、超音波のような音が聞こえたそうなのです」

「超音波……ですか？」

「それで、その超音波を聞いた瞬間、何故か魔戒剣が持てなくなったとのことなのです」
イレスが話した魔戒剣が持てなくなったという言葉に、統夜たちは驚きを隠せなかつた。

そんな中、アキトはうーんと何かを考えていた。

「超音波……。もしかして、それは、魔戒騎士にだけ聞こえる特殊な波長の超音波で、それを聞いた瞬間、ソウルメタルの性質が変容し、扱うことが出来なくなったのか……？」
アキトは魔戒騎士狩りに用いられた超音波のようなものの正体をこのように分析していた。

「流石ですね、アキト。レオも貴方と全く同じ推理をしていたみたいですよ？」

イレスはレオと同じ推理をしたアキトに関心していた。

「え？ 師匠が？ もしかして、師匠は翡翠の番犬所にいるのか？」

「ええ。偶然翡翠の番犬所の管轄内でそのような推理をし、例の魔戒騎士になったばかりの少年と共にロゲルに報告したそうです」

「なるほど、師匠がそのような推理をしてるなら、その超音波のシステムはそれで間違いないさぞうだ！」

アキトは、自分が師匠であるレオと全く同じ推理をしたことが嬉しかった。

「システムがわかったのは良いのですが、1番の問題であるその超音波の発生場所が未だに掴めないのです」

魔戒騎士狩りがどのように行われたのかを知ったのは大きな収穫であったが、肝心なその超音波の発生源は未だに特定出来ずにいた。

「なあ、その魔戒騎士狩りっていうのはあちこちで行われているんだろ？二箇所以上同時に起こったりはしてないのかな？」

「恐らく、それはないと思います。二箇所以上で同時に魔戒騎士がホラーに捕食されたという報告はありませんから」

イレスから魔戒騎士狩りについての情報を聞くと、再びうーんと考え事をしていた。

「……ということは、その超音波のようなものを出す兵器は1つしかなくて、各地に移動をしながら魔戒騎士を狩っているという訳か……？」

アキトは魔戒騎士狩りに使われた兵器は複数ではなく、1つしかなく、各地に移動しながら魔戒騎士を狩るために使われているのではないかと推理していた。

「そうだとすれば、今は翡翠の番犬所の管轄内にある可能性が高いという訳か」

『そうだな。俺様もそう思うぜ』

『じゃが、こうしているうちにもその兵器とやらが移動する可能性もありそうじゃのお』

統夜とイルバは魔戒騎士狩りに用いられた兵器が翡翠の番犬所の管轄内にあると二

ラんでいたが、戒人の相棒であるトルバは、その兵器が移動しているのではないかと推理をしていた。

「ということは、次はどこに来るのか……」

「この街に来る可能性も否定は出来ないだろうな」

大輝は、この桜ヶ丘にも魔戒騎士狩りの魔の手が来るかもしれないことを危惧していた。

「その可能性は大いにありそうですね。皆さん、だからこそ、今後のホラー討伐の際はその兵器の存在に警戒して下さい」

イレスがこのような通達を聞いた統夜たちは無言で頷いていた。

「さて、今日はもう遅いです。今のところはホラーの出現報告もありませんから、今日は解散とします。明日からは今まで以上に気を引き締めて下さい」

イレスの言葉でこの日は解散となり、統夜たちは番犬所を後にすると、それぞれの家へと帰っていった。

※※※

翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

黒の指令書の指令を行っている途中であるものの、イレスが許可を出していたので、統夜はいつも通り学校に通い、授業を受けていた。

統夜が授業を受けている間に、戒人、大輝、アキトの3人は、街の見回りを行いながら、引き続き魔戒騎士狩りに用いられた兵器の調査を行っていた。

そして放課後になると、統夜はそのままアキトと合流することになった。

「……あれ？やーくん、帰るの？」

統夜が帰り支度をしていたのを見た唯が、こう統夜に訪ねていた。

「ああ。例の仕事がまだ片付いてないからな」

魔戒騎士やホラーなどの単語を出す訳にはいかなかったので、統夜は仕事とだけ答えていた。

「そっかあ……。やーくん、無茶はしないでね！」

「おう、ありがとな！それじゃあ」

帰り支度を整えた統夜は唯に挨拶をすると、教室を後にして、そのまま学校も後にし

た。

すると……。

「……お、統夜。待ってたぜ」

「……アキト、来てたのか」

学校が終わった後に合流予定だったアキトが、学校の入り口で統夜のことを待っていた。

「ああ。ここで待ってた方が早いと思ってな」

アキトはどこかで待ち合わせるより、学校の入り口にいた方が確実に統夜に会えると考え、学校の入り口で待っていた。

「そっか……。ところで例の兵器は見つかったのか？」

「いや、全く手がかりなしだ。やっぱりホラーが現れた時にその兵器は現れるんじゃないのか？」

「そうかもしれないな。とりあえず、また街の見回りをしながら何か手がかりがないか探そう」

「ああ、そうだな」

統夜とアキトは移動を開始すると、街の見回りを行いながら、魔戒騎士狩りに用いられた兵器の搜索を開始した。

長い事街を歩き回った2人だったが、何も足取りを掴むことが出来ないまま、夜になつてしまつた。

「……………くそ、もう夜になつちまつた」

「結局何の手がかりも掴めなかつたな……………」

「ああ……………。戒人と大輝さんも成果なしみたいだし……………」

戒人と大輝はエレメントの浄化を行いながら調査を行つていたのだが、2人も大きな手がかりを得る事は出来なかつた。

「もう夜になつたんだ。ホラーがそろそろ現れそうだよな……………」

「そうだな……………。イルバ、ホラーの気配はどうだ？」

『どうやら、お前らの予想はドンピシャみたいだ！ホラーの気配を感じるぜ！しかもこの邪気……………ただ者じゃなさそうだ！』

イルバは普段探知しているホラーの邪気以上に大きな邪気を探知し、手強いホラーの気配を探知していた。

「イルバ、ホラーはどこだ！」

『……………！統夜！アキト！来るぞ！』

イルバがこう宣言すると、統夜とアキトの目の前に、カブトムシのような姿をしたホラーが現れた。

「……赤いコートの魔戒騎士……。どうやらお前が“あいつ”の言っていた魔戒騎士みたいだな……」

2人の前に現れたホラー……ヘラクスは、統夜のことを探していたのだが、目の前の赤いコートを着ているのが統夜だと認識していた。

「お前、何者だ！それに、あいつって一体誰なんだ!!」

統夜はヘラクスを睨みつけると、気になったことをヘラクスにぶつけた。

「俺はこの通りホラーさ。見てわかるだろ？それに……。そんな大事なことを俺が話すとも思ったか？」

「だったら！力づくでも聞いてやるさ！」

統夜は魔戒剣を取り出すと、魔戒剣を抜いた。

「やれやれ……。魔戒騎士の直食いは俺の趣味じゃないんだが……。まあ、クライアントの依頼となれば話は別だな……」

ヘラクスはホラー喰いのホラーであるため、人間や魔戒騎士の直食いは嫌いなのだが、今回は協力関係にあるとある男の頼みがあったため、自らが動くしかなかった。

「……行くぞ!!」

統夜はヘラクスマ目掛けて突撃した。

「おい、統夜!!……仕方ない、援護する!」

アキトは魔戒銃を取り出すと、援護射撃の体制に入った。

「愚かな……。魔戒剣は封じられているとわかっているハズなのに……」

ヘラクスはこのように呟くと、パチン!と指を鳴らした。

『!?統夜、魔戒剣を離せ!来るぞ!!』

「!!」

統夜はイルバに言われて魔戒剣を離そうとするが、その時には手遅れであり、統夜の手にある魔戒剣はそのまま地面に叩きつけられた。

統夜は魔戒剣を持ち上げようとするが、持ち上げることが出来なかった。

「……いん、これが……例の超音波って奴か……」

統夜の耳に超音波のような音がはつきりと聞こえており、その音を聞いた直後に魔戒剣を持ち上げることが出来なくなっていた。

「フン、愚かだな。わかっついていて対策もせぬとは!」

ヘラクスはどこからか剣を取り出すと、その剣を手に、統夜に襲いかかった。

統夜は現在丸腰なのだが、ヘラクスの攻撃をかわしながらこの状況をどう打破すべきか考えていた。

「統夜……とりあえず、こいつで!!」

アキトは魔導筆を取り出すと、魔戒銃の銃口に術を放った。

力が収束されている状態でアキトは魔戒銃を発砲し、その弾丸がヘラクスに着弾した瞬間、爆発がおきて、ヘラクスを吹き飛ばした。

「統夜！俺に考えがある」

アキトはヘラクスが起き上がる前にこの状況を打破する作戦を統夜に説明した。

アキトの考えた大胆な作戦に統夜は驚くのだが……。

「……まあ、これしか策はなさそうだな」

統夜はアキトの考えた作戦で戦うことを決めた。

2人の作戦会議が終わったところで、ヘラクスは起き上がった。

「……ククク、やるじゃないか！久しぶりに本気になれそうだ！」

ヘラクスは先ほどのアキトの攻撃で闘争心に火がついていた。

「アキト……手筈通りに行くぞ！」

「ああ、そうだな。とりあえずここは……」

アキトは魔戒銃と魔導筆を手に臨戦態勢に入っていたのだが……。

「……にーげるんだよお!!」

回れ右をして、アキトは急に逃げ出してしまった。

「ちよ!? おい! 作戦はどうしたんだよ!!」

統夜は本気で慌てる素振りをするのだが、これこそがアキトの考えた作戦だった。統夜を見捨てて逃げるフリをして、謎の超音波を発した兵器を探すという作戦である。

これは、アキトが統夜の実力を信じた上で立てた作戦であった。

統夜ほどの実力者であれば、強大な力を持つヘラクス相手でも、しばらくは持ち堪えることが出来ると判断したからである。

「ククク……。魔戒法師は尻尾を巻いて逃げ出したか。仲間に見捨てられるとは、哀れな奴だな!」

「クソツ! アキトの奴……! 裏切りやがって!」

ヘラクスはこれが作戦だとは全く思っていないのか、高笑いをしていた。

統夜がアキトに対して怒り狂う素振りを見せたのも、ヘラクスに本気でアキトが逃げたと信じさせるためだった。

そんな統夜の名演技もあってか、ヘラクスはアキトが逃げたのは作戦だと全く気付いていなかった。

(……さーて、アキトにはさつきと仕事をこなしてもらわないとな)

《統夜! 気を引き締めろよ! どうやら相手は元魔戒騎士みただぜ!》

(やっぱりそうなのか？そんなオーラを感じたからな……)

統夜はかつて元魔戒騎士だったホラーというのを見たことがあり、交戦したこともあったので、目の前にいるヘラクスが元魔戒騎士だとイルバに聞いて、納得していた。

「くそっ！魔戒剣が使えなくなつて！やつてやるよ!!」

統夜は格闘戦の構えをすると、ヘラクスを睨みつけた。

「愚かな……！じっくり痛めつけてから喰らつてやるよ！」

こうして、丸腰の統夜はヘラクスに立ち向かい、時間稼ぎを開始した。

一方その頃、作戦で逃げ出したアキトは、統夜とヘラクスが見えないところまで移動していた。

「……やれやれ。作戦とはいえ、統夜には悪いことをしたかな？」

統夜の実力を信じてるとはいえ、アキトは統夜に対して申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。

「……それよりも……」

アキトは魔針盤という魔戒法師がよく使う魔導具を取り出すと、魔導筆で術を放つ

て、周囲の地図を展開させた。

すると……。

「……ん？何だ？この反応……」

統夜とヘラク스가交戦している場所からおよそ一キロ先のところで、今まで見たことのない反応を示していた。

「こいつは……ビンゴか？とりあえず急いで向かうか」

アキトは魔針盤が示した場所へと移動を開始した。

そして、その場所に辿り着いたのだが……。

「……？どうなってるんだ？」

その場所には、怪しいと思われるものが一切なかったのである。

「おかしいなあ……。ここだと思うんだけど……」

アキトは魔針盤を見ながら周囲を見渡していた。

魔針盤は確実に反応はしているのだが、アキトの周囲には怪しいと思えるものはやはりなかった。

「くそつ、早く超音波を出してる兵器を見つけないと、統夜が……」

アキトは焦っていた。

急いで超音波を出してる兵器を破壊し、魔戒剣を扱えるようにしなければ、統夜が危

険だからである。

アキトが焦りながらも周囲の搜索を行っていたその時だった。

「……アキト？ どうしてこんな所に？」

偶然近くを搜索していた戒人と大輝がこちらにやって来た。

「戒人……大輝のおっさん。どうしてここに？」

「トルバがこの辺から妙な気配を感じるというから調査に来たんだよ」

「それに、お前は どうしてここに？ それに、統夜は一緒じゃないのか？」

「実は……」

アキトは、ホラー、ヘラク스가現れたことや魔戒騎士狩りに用いられた超音波が作動したこと、さらに、作戦として、統夜が囷となってその間に超音波を発している兵器の搜索、破壊をしていることを2人に告げた。

「なるほど……。道理でさつきから耳障りな音が聞こえてきている訳か……」

戒人はこの場所を訪れてからずっと聞こえている耳障りな音を聞くことで、アキトの説明に納得していた。

「だが、統夜の奴は大丈夫なのか？ 魔戒剣は使えない状態なのだろう？」

「急いで戻らないとやばいかもしれない。だが、まずは超音波を出している兵器を見つけないと……」

急いで統夜の救援に行かなければいけないのは間違いないのだが、魔戒騎士狩りを阻止するためにも、超音波を発する兵器を見つけ出して破壊することも最優先事項だった。

「……俺が統夜の救援に行く。アキトと戒人は、例の兵器の搜索と破壊を頼む」

誰かが統夜の救援に行かなければいけない状況で、大輝が統夜の救援に向かうことになった。

「……わかった。無茶はするなよ、大輝のおっさん」

「……だからおっさんはやめろ」

アキトのおっさん発言に呆れながら、大輝は統夜の救援へと向かった。

「……さて、急がないとな」

「トルバ、この周辺に何か怪しいものはないか？」

『うむ、探ってみよう』

「頼む」

トルバは周囲に怪しいものはないか、調査を始めた。

しばらく気配を探知していると……。

『戒人、お主から見て正面にある柱の辺りから怪しい気配を感じるぞい』

トルバは怪しい気配を探知したのだが、トルバの示した柱の周辺には怪しいものはお

ろか、物など置かれてはいなかった。

「……………？トルバ、柱の周辺には何も無いぞ？」

柱の周辺には何もないので、戒人は首を傾げていた。

しかし、アキトは……………。

「いや、魔導輪であるトルバが言ってるんだ。間違いないだろう」

トルバの勘を信じていたアキトは、魔導筆を構えた。

『アキト！その柱周辺に向かって術を放つのじゃ！』

「了解したー！」

アキトはトルバの指示通り、指定された柱の周辺目掛けて法術を放った。

すると……………。

ドカアアアアン！！

爆発が起こると、アキトと戒人の目に浮かび上がってきたのは、スピーカーのような

ものの破片だった。

「……………いつは……………」

「どうやら、これが魔戒騎士狩りに使われた超音波の発信源って訳だ」

「！それならー！」

「ああ！普通に魔戒剣を扱えるはずだぜ！」

超音波を発していたスピーカーは破壊したため、今後は普通に魔戒剣を扱うことが可能となった。

「……統夜！聞こえるか！？例の兵器の破壊に成功した！魔戒剣が使えるはずだ！」

戒人はトルバを通して、統夜に連絡を入れていた。

魔戒剣さえ扱えれば、反撃を行うことが可能だからである。

すると……。

『……！！了解した！』

統夜から簡潔な返事が返ってきたのだが、それ以上の返事は返って来なかった。

「……アキト！俺は統夜や大輝さんの応援に向かう！」

「任せたぜ！俺はこいつを持ち帰ってこいつの分析をするよ」

戒人は既にヘラクスと戦っている統夜と大輝の援護に向かい、アキトはスピーカーの破片を持ち帰り、そのスピーカーの分析を行うことにした。

※※※

アキトが逃げたフリをしながら魔戒騎士狩りに用いられた超音波を発している兵器の捜索を行っていた頃、統夜は丸腰の状態でヘラク스에戦いを挑み、どうにか善戦していた。

しかし、元魔戒騎士であるヘラク스相手に丸腰では決定打を与えることは出来ず、統夜は徐々に追い詰められていった。

「……………くっ、やっぱり強えな、こいつ……………」

統夜は元魔戒騎士であるヘラクスの実力を素直に認めていた。

「ほお、剣も使わずにここまでやるとはな……………。正直お前がここまでやるとは思っていないかったぞ」

「へへ……………そりやどうも！」

統夜はヘラク스에追い詰められていたのだが、まだ減らず口を叩く余裕はあった。

「だが、これ以上は無駄な抵抗だ。大人しく俺の餌になるんだな」

「へっ、冗談だろ!？」

統夜はヘラク스目掛けてパンチを放つが、それはヘラク스에軽々と受け止められてしまった。

「……………」

統夜はすかさず蹴りを放とうとするが、その前にヘラクスは、統夜を近くの壁目掛けて投げとばし、統夜はそのまま壁に叩きつけられた。

「……………」

統夜の受けたダメージはかなりのものだったが、統夜はどうにか立ち上がった。

「ほお、あれだけやられてまだ立ち上がるか……。その丈夫さはなかなかじゃないか」

「当たり前だろ……。俺は、こんな所で死ぬ訳にはいかないんだから!!」

唯たちを悲しませないために、こんな所で死ねない。

その思いが統夜を突き動かしていた。

しかし、ヘラク스에 圧倒され、統夜はどうに限界を越えていた。

「やれやれ……。俺もそろそろお前を痛ぶるのも飽きたのでな。そろそろ引導を渡すでしょう」

ヘラクスは統夜がここまで耐えたことに驚きながらも、統夜にトドメを刺そうとしていた、

(……………諦めてたまるか! アキトが必ず例の兵器を破壊してくれる! それまでは持ち堪えるんだ!)

統夜はアキトのことを信じていたので、自分はまだ持ち堪えて、時間を稼ぐ。その事

を考えていた。

「……フン、これでトドメだ！」

ヘラクスが統夜目掛けて突撃し、絶体絶命の状態になったその時だった。

「させるかあ!!」

統夜とヘラクスの前に大輝が現れると、大輝は蹴りを放ち、ヘラクスを吹き飛ばした。

「大輝……さん？」

「統夜、大丈夫か？」

「ええ、何とか」

統夜はこう答えるが、顔を含めて統夜はボロボロだった。

「ふつ、ずいぶんとイケメンになったじゃないか。これはあいつらへの言い訳が大変そうだな」

「……ですね。それは、ホラーとの戦いよりきついですからね」

こんなボロボロになったのを唯たちに見られたらどれだけ問い詰められるか。それを考えただけで統夜はゾツとしていた。

それと同時に、先ほどまでの激痛が嘘のように和らいでいた。

「……ま、魔戒騎士がもう一人か……。だが、数が増えただけでは結果は変わらん！」

「ふつ、それはどうかな！」

大輝は格闘戦の構えをして、ヘラクスを睨みつけるのだが、その様子は数々の死地を乗り越えてきた歴戦の勇士だった。

そんな大輝の放つオーラに統夜だけではなく、ヘラクスもたじろいでいた。

「ふ、フーン！称号を持たぬ者がほざくな！」

ヘラクスは大輝に突撃し、攻撃を仕掛けるのだが、大輝はヘラクスの攻撃をすべてかわし、逆に反撃でパンチやキックを連続でヘラクスに叩き込んだ。

ダメージはなくても、ヘラクスを怯ませるのと、精神的ダメージを与えるには十分だった。

そんなヘラクスの隙を大輝は見逃さず、大輝は蹴りを放ってヘラクスを吹き飛ばした。

「……………すごい……………」

統夜は大輝の戦いをたくさん見てきたが、今日の大輝の戦いぶりはまるで鬼神のようだった。

「大事なものは称号ではない！本気で人を守ろうと考える……………騎士の心だ！」

このように語る大輝の表情はとても凛々しいものだった。

「騎士の心……………」

絶体絶命な戦いの中で、統夜はまた一つ魔戒騎士とは何なのかということ学んでい

た。

「生意気な……！良からう、まずは貴様から始末してやる！」

ヘラクスは再び大輝目掛けて突撃した。

大輝もヘラクスを迎撃する体制に入ると、ヘラクスと互角の格闘戦を繰り広げていた。

そんな大輝であったが、やはり丸腰の状態で戦うのには限界があった。

「くっ……！やはりずつと格闘戦はきついな……！」

一時は格闘戦でヘラクスを圧倒した大輝であったが、体力を消耗しているからか徐々にヘラクスに追い詰められていた。

「くらえ！」

大輝はヘラクス目掛けてパンチを放つものの、それを軽々とかわされてしまった。

その後、ヘラクスは反撃といわんばかりに蹴りを放つと、大輝を吹き飛ばした。

「くう……！」

「大輝さん！」

「問題ない。まだやれる！」

先ほどのヘラクスの蹴りを受けた大輝であったが、戦いを継続するのに支障がないレベルのダメージだった。

「ずいぶんと手こずらせてくれたな。……だが、これで終わりだ！2人揃って俺の餌にしてやるよ！」

ヘラクスは今度こそ統夜と大輝にトドメを刺そうとしていた。

そして、ヘラクスが2人目掛けて向かっていったその時だった。

「……！何か体が軽いような……！」

超音波の影響でずつと感じていた違和感が急に消えたのである。

そして……。

『……統夜！聞こえるか！？例の兵器の破壊に成功した！魔戒剣が使えるはずだ！』

イルバを通して、戒人の声が聞こえてきた。

それによると、魔戒騎士狩りに用いられた超音波のような兵器の破壊に成功したとのことであった。

「……！！了解した！」

これは、統夜にとつて、待ちに待った瞬間だった。

「大輝さん！」

「！承知！」

大輝は魔法衣から魔戒剣を取り出すのだが、魔戒剣を手にしても何の異常はなかった。

それを好機とみた大輝は、魔戒剣を抜くと、そのままヘラクスに向かつていった。そして統夜は、その隙に地面に放置されている魔戒剣の回収に向かった。

「……!!馬鹿な!!あの兵器を破壊したというのか!?!」

ヘラクスは、予想外の展開に焦りを見せていた。

「……ああ、そうだ!俺たちの連携を甘くみたようだな!」

大輝は笑みを浮かべながら魔戒剣を一閃すると、ヘラクスはそれを剣で防いでいた。それと同時に、統夜は自分の魔戒剣を回収した。

「…ま、まさか!あの魔戒法師は貴様を見捨てて逃げた訳じゃないのか!?!」

ヘラクスはこの瞬間、アキトが敵前逃亡をしたのが作戦であることを知ったのである。

「その通りだ!あいつが俺を見捨てる訳がないからな!」

統夜とアキトの作戦が見事成功したため、統夜はドヤ顔をしていた。

「おのれ……この俺をコケにするとは、絶対に許さんぞ!」

統夜とアキトの作戦に嵌められたヘラクスは怒りのあまり激昂すると、衝撃波を放った。

ヘラクスと距離が近かった大輝はその攻撃を受けて吹き飛んでしまった。

統夜はヘラクスと距離が遠かったので、衝撃波をかわすことができた。

「あれが壊された以上、貴様らは生かしておかん！ここで殺してやる！」

ヘラクスはこの場で統夜と大輝を殺そうとしていた。

ヘラクスが臨戦態勢に入ったその時だった。

「……統夜！大輝さん！」

アキトと一緒にいた戒人が、統夜と大輝に合流した。

「戒人！あれを壊してくれてありがとう……と……ところで、アキトは？」

「ああ、アキトなら例の兵器の破片を持ち帰って分析をすと言っていたよ」

アキトがどうしているかを説明した戒人は、そのまま魔戒剣を取り出すと、魔戒剣を抜いた。

「そっか……。それじゃあ、ここから反撃開始だな！」

「おう！」

「承知！」

統夜の反撃開始宣言に大輝と戒人が応じていた。

「おのれ……！魔戒騎士ども！」

狩る対象であった魔戒騎士の反撃に、ヘラクスは怒っていた。

そんな中、統夜、大輝、戒人の3人は、同時に魔戒剣を突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、3人はそれぞれの鎧を身を纏った。

大輝は、銅の輝きを放つ、「鋼」の鎧を身に纏った。

戒人は、紫の輝きを放つ、ガイアの鎧を身に纏った。

そして統夜は、白銀の輝きを放つ、奏狼の鎧を身に纏った。

こうして、ヘラクスの目の前には、狼をモチーフにした三騎が姿を現していた。

「フン、相手が何体だろうと関係ない！みんな蹴散らしてやる！」

ヘラクスは、統夜たち3人が相手でも、怯むことはなかった。

「行こう！戒人！大輝さん！」

「承知！」

戒人と大輝は同時にヘラクス目掛けて突撃した。

戒人と大輝がそれぞれ剣を振るうが、ヘラク스는その剣の攻撃を剣で受け止めていた。

「統夜！今だ！」

「ぶちかませ！」

「ああ！散々やられたんだ！倍にして返してやる！」

統夜は大輝と戒人が作ってくれた隙を活かすため、ヘラクス目掛けて突撃した。

ヘラク스는慌てて剣を振るって大輝と戒人を吹き飛ばすが、既に手遅れだった。

「はあああああああ！！」

統夜は全力で皇輝剣を振るった。

ヘラク스는どうか攻撃を受け止めるのだが、統夜は続けてパンチを繰り出すと、ヘラクスを吹き飛ばした。

「ぐう……！奴は既に限界なハズなのに、その力はどこから!？」

「当たり前だ！俺には守りたい人がいる！その思いがある限り、俺は絶対折れたりはない！」

統夜はボロボロではあったが、守りし者としての強い思いが統夜を突き動かしていた。

「だから俺はお前を倒す！そして、みんなのところに帰るんだ！」

統夜は皇輝剣を力強く握りしめると、再びヘラクス目掛けて突撃した。

「これで……終わりだああああ!!」

統夜はヘラク스에接近し、皇輝剣を一閃した。

これが決まれば確実にヘラクスを斬り裂くことが出来た。

しかし……。

どこかから法術が放たれると、統夜はヘラク스에 トドメを刺す前に吹き飛ばされてしまい、その衝撃で鎧が解除されてしまった。

「統夜!!」

戒人と大輝は慌てて統夜に駆け寄るのだが、鎧の制限時間が迫っていたため、鎧を解除した。

「……っ！何者だ！」

統夜は法術が飛んできた方角を睨みつけると、統夜たちやヘラクスの前に、マントを羽織った男が現れた。

男の手には魔導筆が握られており、魔戒法師であるといふことはわかった。

「……どうやら、あの音波を破ったようだな。そこは流石だと言っておこう」

謎の男は冷静であるが、殺意に満ちた目で統夜たちを睨みつけていた。

「お前……魔戒法師か!?!それに、魔戒騎士狩りの首謀者はお前なのか!」

統夜は今回の事件の真の首謀者が魔戒法師とわかり、怒りに満ちた目で謎の男を睨みつけていた。

「まあ、そんなところだ。あの音波を破壊されたことは予想外だったがな。それに、このホラーは私の実験に協力してくれた協力者だ。こんなところで死なせる訳にはいかな

いんだよ」

「へっ、今回ばかりはあんたに感謝するぜ！」

謎の男の助けがなければ、確実に統夜に倒されていたので、ヘラクスは謎の男に心から感謝していた。

「貴様は、何者なんだ！それに、魔戒法師だというなら、どうして魔戒騎士を殺そうとするんだ！」

謎の男の正体が魔戒法師であるならば、同志である魔戒騎士を狩りのように殺しておくことを企むなど統夜たちには信じられなかった。

「……これだから、魔戒騎士という連中は……。俺は魔戒騎士を心から憎んでいる。全ての魔戒騎士を滅ぼしたいくらいにな！」

謎の男は、魔戒騎士という存在を恨んでいた。

その恨みこそ、今回の魔戒騎士狩りの引き金になったということは統夜たちにも推測出来た。

「……今日のところは引かせてもらおう。だが、今度会った時は必ず貴様を殺す！月影統夜!!」

謎の男は魔戒騎士を恨んでいるのだが、その中でも、今一番殺したい存在なのは統夜だった。

「! 貴様、どうして俺の名前を!」

「貴様は有名人だからな! 貴様はグオルブとかいう雑魚を倒して調子に乗ってるただの小僧だ!」

謎の男は、メシアの腕と呼ばれる程のグオルブを雑魚扱いしていた。

「あのグオルブが雑魚……だと?」

統夜と共に戦った大輝はグオルブが雑魚という発言は聞き捨てならなかった。

「貴様らにいいことを教えてやろう。布道シグマが遺したあのスクラップを奪ったのはこの俺だ」

「!?!」

統夜たちは、謎の男による突然の告白に驚愕していた。

統夜たちの目の前にいるこの男こそ、一連の事件の首謀者ということになるからである。

「俺はあんなポンコツなんかより強大な魔導具を作る! そしてその力で目障りな魔戒騎士を殺す! せいぜいそれまで短い命を堪能しておくんだな!」

「待て! 貴様を逃す訳にはいかない! ここで捕まえてやる!」

「ここでこの男を捕まえれば、一連の事件が一気に解決するため、統夜たちは謎の男をこの場で捕まえようとした。

「阿呆が……！そんな状態で俺を捕らえられると思うな!!」

謎の男は魔導筆を用いて法術を放つと、統夜、戒人、大輝の3人をまとめて吹き飛ばした。

「くう……!」

戒人と大輝はすぐさま体勢を整えられたが、統夜はヘラクスとの戦いでダメージが大きく、思うように立ち上がることが出来なかった。

「……今日のところはこれで失礼するよ。さらばだ！哀れな魔戒騎士共!!」

それだけ言い残すと、謎の男は瞬間移動の法術を放ち、ヘラクスと共にその場から姿を消した。

「……くそ！逃げられたか……!」

「……」

一連の事件の首謀者に逃げられてしまい、戒人と大輝は唇を噛んでいた。

「……と、とりあえず……。番犬所に報告しないと……」

統夜はかなりボロボロだったからか、歩くのもおぼつかない状態だった。

『統夜！無茶するな！そんな状態で番犬所に報告など出来るわけないだろう!』

統夜が無理をしようとしていたので、イルバが統夜に叱責していた。

「番犬所への報告は明日しよう。あの男のことを調べるのも明日だ。今日はゆっくりと

体を休めることにしよう」

大輝は、統夜のダメージを考慮して、今日は各自家に帰るよう通達した。

そして、番犬所への報告は明日しようとして提案したのである。

「……………だけど……………」

「統夜、休むのも魔戒騎士の勤めだぞ。それに、そんな身も心もボロボロじゃ、あいつらも黙っていないぞ」

『確かに、問い詰めるだけで済むかどうか…………』

統夜がここまでボロボロだと唯たちにバレたら、問い詰められるのは間違いないが、それだけではなく、イルバは自分にまで飛び火が来るのを恐れていた。

『統夜、今日のところはゆっくりと休むぞ』

「……………ああ、わかったよ」

統夜は渋々ではあるものの、今日は家に帰って休むことを了承した。

こうして、統夜たちは魔戒騎士狩りに用いられた超音波を放つスピーカーを見事に破壊し、家路についた。

統夜たちは謎の男と邂逅したが、それは、これから起こる激闘の始まりだった…………。

……続く。

——次回予告——

『魔戒騎士狩りを阻止したのはいいが、あの男は一体何者なんだ？相当ヤバそうな奴だったぜ！次回、「調査」。奴の真意は明らかになるのか？』

第62話 「調査」

……ここは、桜ヶ丘某所にある今は使われない廃工場。

この中に、先の事件の首謀者である謎の男と、命の危機を救われたホラー、ヘラク스가いた。

「……本当に今回は助かったぜ。例を言う」

「フン、貴様を助けたのはただの気まぐれだ。貴様のおかげで実験は上手くいったんだ。あのまま用済みな貴様を斬り捨てても良かったんだがな」

「……だったら何で俺を助けてくれたんだ？」

「フン、気まぐれだと言っただろう？ 後、貴様にはまだ協力してもらいたいことがあるからな」

謎の男がヘラクスを助けたのは気まぐれと言っていたが、ヘラク스에 まだ利用価値があると判断したからである。

「？ それは一体？」

「………これを見ろ」

謎の男はヘラクスを連れて、とある場所へと移動した。

そこにあつたものは……。

「……!?こゝ、これは……?」

人の型をした鎧のようなものが置かれていた。

その鎧のようなものは、3メートルくらいの大さきで、かなり大きなものだった。

「……驚いたか?こいつは『魔導人機』。俺の開発した最高傑作の魔導具さ」

「ほお、魔導人機……ねえ……」

この鎧のようなものの正体は、謎の男が開発した魔導具で、「魔導人機」と命名されていた。

「こいつはかつて布道シグマが開発した『アイデア』のデータを解析し、より実用的に改良したのがこの魔導人機という訳だ」

謎の男はかつて布道シグマが造り上げたアイデアのデータも解析し、そのデータをもとに、より実用性のある兵器として、この魔導人機を開発したのである。

「ほお、なかなか凄いだではないか」

ホラーであるヘラクスも、謎の男が造った魔導人機に関心していた。

「まだ実験段階ではあるが、それももうすぐ終わる。こいつが完成した暁には、ホラーと魔戒騎士。全てを滅ぼしてやる!」

「おいおい、全滅は勘弁してくれよ。俺のご馳走が消えちまうだろうが」

ヘラクスはホラー喰いのホラーであるが、その中でも魔戒騎士を喰らったホラーが一番のご馳走であるため、全ての魔戒騎士が滅びるのはヘラクスにとって都合が悪かった。

「フン、貴様の餌を確保する分は残してやってもいいぞ」

「そういうことなら俺はあんたに協力するさ。助けてもらった借りもあるからな」

ヘラクスは命を救われた借りを返すため、引き続き謎の男に協力することにした。

「そして、まずはあいつから消してやる………月影統夜………」

謎の男は、統夜の戦いを見てからその実力を危険視し、真っ先に排除しようと思っていたのである。

こうして、ヘラクスの協力を改めて得ることが出来た謎の男は、魔導人機の最終調整を始めた。

※※※

統夜たちが魔戒騎士狩りに用いられた兵器の破壊に成功した翌日、アキトはその兵器であるスピーカーの分析を行っていた。

「……………うーん……………」

アキトは難しい顔をしながら考え事をしていた。

このスピーカーを回収してからずっと分析を行っていたのだが、どこにでもあるスピーカーで、特に変わったものは見つからなかったからである。

「ということは誰かがこのスピーカーに特殊な法术をかけて、その結果ソウルメイトの性質を狂わせる超音波を発したのか？それとも……………」

アキトはどのような仕組みでこの超音波が放たれたかがまったくわからなかった。

さらにアキトは謎の男にあっていないため、誰が黒幕なのかもわかっておらず、それも疑問に感じていた。

アキトは番犬所から呼び出しがあるまで、分析作業に没頭していた。

一方その頃、戒人と大輝は、エレメントの浄化を行う前に番犬所へ向かい、イレズに魔戒騎士狩りに用いられた兵器を破壊したことや、一連の事件の首謀者である謎の男の

存在を報告した。

簡潔に報告を聞いたイレスは、詳細な話は全員揃ってから改めて話すことにした。

こうして、簡潔な報告を行った戒人と大輝は、そのままエレメントの浄化へと向かっていった。

そんな中統夜は、昨日の戦いのダメージが残っていたせいか、まるで死んだように眠り続けていた。

いつもの起床時間にも起きず、イルバが何度も起こしたのだが、いっこうに起きる気配はなかった。

統夜はそれでも眠り続け、結局統夜が目を覚ました時には、始業時間はとづくに過ぎってしまった。

「……やべえ!!遅刻だあ!!」

遅刻は既に確定しており、統夜は大慌てで学校に行く準備を始めた。

『やれやれ……統夜のやつ……。まあ、昨日はかなり厳しい戦いだつたしな。たまにはいいだろう』

イルバは昨日の戦いの激しさを鑑みて、遅刻くらいは許してやろうと思っていた。

大慌てで学校に行く準備を整えた統夜は家を飛び出すと、学校へ向かって全速力でダッシュした。

統夜が学校に到着したのは、2時間目の途中だった。

この日の2時間目は音楽の授業であり、音楽の授業は音楽室で行われているため、教室には誰もいなかった。

統夜は音楽の教材を取り出すと、音楽室に向かった。

「すいませーん、遅刻しましたあー!」

統夜はヘラヘラと笑いながら音楽室に入った。

「もう、遅いわよ!月影……く……くん?」

さわ子は遅刻した統夜に起こるのだが、統夜のボロボロな顔を見て、啞然としてしまった。

それと同時に、統夜のボロボロな顔を見たクラスメイトたちが一斉にざわつき始めた。

「ちよ、月影君!一体どうしたのよ!?!その顔!ボロボロじゃない!」

さわ子はここまで顔がボロボロになった理由を統夜に聞いたのだが……。

「……階段から落ちました」

統夜はあまりにもベタな解答をしていた。

そのため……。

(ベタだ……)

(ベタだね……)

(ベタ過ぎる……)

クラスメイトたちは一斉にこのようなことを考えていた。

「階段から落ちたって、あなたねえ！」

さわ子はそれが嘘だとわかっていたのだが、何かを思い出してハツとしていた。

「ま、まあそれは後で聞くから、席に着きなさい。後、月影君。授業が終わったらあなただけ残りなさい。いいわね？」

「は、はい」

統夜はさわ子に居残りを命じられると、そのまま自分の席についた。

そして、中断されていた授業が再開された。

授業が終わり、クラスメイトたちが一斉に教室に戻る中、統夜は音楽室に残った。

統夜の顔がボロボロなことが気になっていた唯たちや和も音楽室に残っていた。

「……ねえ、統夜君。その顔の傷だけど、もしかして……」

「ええ、ホラーとの戦いで出来た傷ですよ」

統夜は悪びれる様子もなく、さらつと言うと、唯たちは驚いていた。

「と、統夜！一体何があったんだよ？そこまでボロボロになるなんて……」

「……わかった。みんなには話すよ。実は……」

統夜は昨日遭遇したホラーの話や、魔戒騎士狩りに使われた兵器の話。さらに、その兵器を破壊するために戦ったことなどを話した。

「……そんなことがあったんだ……」

「それにしてもとんでもない兵器だな！魔戒剣が使えなくなるなんて」

「本当にな。この兵器が出す音波は何故か魔戒騎士にしか聞こえないみたいなんだ。この兵器を作ったやつは本気で魔戒騎士を滅ぼそうとしているのかもな」

「このように語る統夜の顔は神妙な表情だった。

「魔戒騎士を滅ぼすって……。何でそんなことを……」

「ま、魔戒騎士は恨まれる存在だからな。ホラーにも、人間にもな……」

統夜は魔戒騎士として長いこと活動しているが、ホラーだけではなく、人間に恨まれることもあった。

だからこそ、魔戒騎士を滅ぼそうとする者がいても不思議ではないと思っていた。

「そんな！やーくんは今までだってたくさん人を守ってきたのに、恨まれるなんて……」

「人間なんてそんなもんさ。だけどな、いくら恨まれたって、どんな人間でも守らなきゃいけない。だって、俺は守りし者だから……」

統夜はどれだけ人に恨まれようと騎士の勤めを果たすつもりだった。

「統夜君……」

「……まあ、とにかくそういうことだから。もう休み時間も終わるし、戻ろうぜ」

さわ子や唯たちに昨日のことを報告した統夜は、そのまま教室に戻り、唯たちもその後を追いかけた。

その後はいつも通り授業を受け、そのまま放課後となった。

放課後になると、統夜は部室に行く前に人気の少ない場所へと移動した。

そしてイルバを介して、戒人と連絡を取っていた。

『……統夜、傷の具合はどうだ?』

「まあ、おかげさまで何とかかな……。それで、例の件はイレズ様に報告したのか?」

『ああ。大輝さんと一緒にな。詳細な話はみんなが番犬所に集まってから報告しようと思っている』

統夜は寝坊してからイレズには一切報告をしていなかったもので、戒人と大輝が報告をしてくれたことに安堵していた。

「今学校も終わつたし、今から番犬所へ向かうよ」

『……いや、少しくらい部室に顔を出してこい。その方があいつらも安心するだろ』

「……すまん、戒人」

『気にするな。それじゃ俺と大輝さんは先に待つてるから、お前はゆっくり番犬所に来いよな』

ここで戒人からの連絡は途絶えた。

戒人と連絡を取り合った統夜はそのまま音楽準備室へと向かった。

「……………うーっす」

挨拶と共に音楽準備室の中に入った統夜が見たものは、冷たい水の入ったバケツに足を突っ込んでるさわ子の姿だった。

「……………先生、どうしたんですか？何かぐったりしてますけど……………」

統夜はぐったりしているさわ子の様子が気になったのだが……………。

「それよりどうしたんですか!?統夜先輩！顔、ひどいですよ!!」

そんなことよりも、梓は顔がボロボロになっている統夜のことを気になっていた。

「ああ、このことか？実はな……………」

統夜は昨日の戦いのことを梓に伝えた。

「そうだったんですか……………」

梓は魔戒騎士狩りに用いられた兵器の存在や、それを阻止するために丸腰でヘラクスに挑んだことなどを聞いて、統夜の顔の傷には納得していた。

しかし……………。

「それよりも統夜先輩は無茶すぎです！無茶はするなっつていつも言ってるじゃないですか!!」

梓は無茶なことをしてボロボロになった統夜に怒っており、このように統夜のことを叱っていた。

「……返す言葉もございません……」

統夜は梓に反論することは出来ず、素直に梓の言葉を聞いていた。

「……統夜先輩に何かあったら、私たち……」

このように語る梓の表情は、とても悲しげだった。

「梓、ありがとう。そして、ごめんな。無茶をしたことは素直に謝るよ」

「統夜先輩……」

「けどな、俺は絶対に死なない。お前たちとそう約束したからな。その思いが俺を動かしてるんだよ。それに、大切なみんなを守るって決めたんだ。そう簡単に死ぬるかよ」

統夜はまったく無意識にこのような恥ずかしい言葉を言っただけだ。

その結果……。

「……………!!／／／／／」

唯たちは恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしていた。

「?みんな、何で顔を赤くしてるんだ?」

『まったく……。統夜、お前さんは相変わらずだな……。』

「本当、統夜君って天然ジゴロよね……」

相変わらず統夜は鈍感であり、それにはイルバだけではなくさわ子も呆れていた。

「……!それよりもさわ子先生だよ!一体どうしたんです?」

統夜は先程から気になっていた、さわ子がぐったりしていることを聞いていた。

「……ああ、実はね……」

さわ子は何故自分がここまでぐったりしているのかを語り始めた。

さわ子は担任としてまずはHRを行い、その後は1時間目から3時間目まで連続で音楽の授業を行っていた。

昼休みは貧血で倒れた子を家まで送り届け、5時間目は授業をサボっている者がいなか校内を見回っていた。

さらに、最近では吹奏楽部の大会が近いこともあり、そちらの練習を見ることに重きを置いていた。

とりあえず最近では忙しい毎日を送っているため、このようなことになっているのである。

「なるほど、それで先生はそんな感じだったんですね」

「ういつー！」

「……1日中立ちつばなしですもんね」

『おい、さわ子。いつそのこと健康サンダルでも履いたらどうなんだ？』

イルバはさわ子の健康を考慮してこのような提案をするのだが……。

「ダメよ！1年生にもおしとやかな先生で通ってるんだから！」

「なあ、さわちゃん！いつそのこと軽音部時代のことぶっちゃけちゃえば！」

『律の言うことにも一理あるな。お前さんのそのキャラ作りにも限界があるだろうからな』

「やっぱイルバもそう思うよな！だからぶっちゃけちゃおうよ？実は私……こんなだったの！ってさ」

律はそう言うのと、軽音部時代のさわ子の写真を突きつけた。

「ダメエ!!」

さわ子は大慌てで律から自分の写真を奪い取った。

「わかってないわね……！教育っていうのはちよつとの隙が大変なことを引き起こすのよ！こんな過去がバレたら……」

さわ子は自分の妄想を統夜たちに話した。

くさわ子の妄想く

「あ、あなたたち……。授業を……」

さわ子はオドオドとしながら荒れた生徒に注意をするのだが……。

「ああん!? うるせえよ! テメエだつて高校の時はこうだったんだろ? さくわくちゃん
!」

荒れた生徒に痛いところをつかれ、さわ子の顔が真っ青になっていった……。

く妄想終わりく

「……こんな風に」

「……それは飛躍のし過ぎだと思います」

「……俺もそう思う」

さわ子のおかしすぎる妄想に梓と統夜は呆れていた。

その時、さわ子の携帯に反応があった。

「……ちよ、ちよつと失礼〜」

どうやらさわ子に電話が来ていたようで、さわ子は統夜たちに断ってから電話に出た。

「……取るのかよ……」

「はい、もしもし」

律の呟きをスルーしたさわ子は電話に出たのだが、電話の相手の声を聞くと、「げつー」と反応していた。

「な、何よー！こんなところまで電話してきてー！」

さわ子が電話の相手にこう言うのと、電話の内容が気になった統夜たちがジト目でさわ子のことを見ていた。

「ちよ、ちよつと待っててねえ〜」

さわ子はそう言いながら音楽準備室を出て行った。

さわ子が出て行くと、しばらくの間、音楽準備室は静寂が支配していたのだが……。

「……な、何よー！こんなところまで電話してきてー！」

そんな静寂を破ったのは、律によるさわ子のモノマネだった。

『律、モノマネをするならもうちよつと似せる努力をするんだな』

「う、うるせえよ！イルバ！」

自身のツツコミをイルバにダメ出しされ、律はこう反論しながら膨れっ面になっていた。

「……あ！そういうえば、今朝……」

紬は今日の朝、さわ子を見かけたことを思い出していた。

しかし……。

「……悪い。その話は気になるが、そろそろ番犬所に行かないと」

統夜はあまりのんびりしていなかったのだが、そろそろ番犬所へ向かわなければと思い、帰り支度を始めた。

「……統夜先輩、もう行くんですか？」

「ああ。例の話をイレス様に報告しなきゃいけないし、一連の事件を起こしたあの魔戒法師についても調べなきゃいけないからな」

統夜は、イレスに昨日のことを報告するのはもちろんだが、その後は一連の事件を起こした謎の男について調査をしなければならないからである。

「統夜、今日は無理するなよ！ただでさえ、顔がボロボロなんだから」

「わかってるって。今日はなるべく大人しくしてるよ」

「イルバも統夜先輩が無茶しないように見張っててくださいよね！」
『お前さんに言われなくともそのつもりだぜ』

イルバは統夜がこれ以上無茶をしないよう見張るつもりでいた。

「……それじゃあ、俺は行くな。また明日な」

帰り支度を終えた統夜は、音楽準備室を後にして、そのまま番犬所へと向かった。

※※※

「……来ましたね。統夜……って、ひどい顔ですね……」

イレスは統夜が姿を見せるなり、統夜のボロボロな顔に驚いていた。

「ええ。昨日は派手にやられましたからね……」

統夜はここまで顔がボロボロなのは、昨日の戦いが原因でたと語った。

「昨日よりはマシになったが、やはりひどいな」

「今日は唯たちに散々言われたんじゃないのか？」

統夜のボロボロな顔を見ている大輝と戒人は、ニヤニヤしながら統夜をからかっていた。

「まあ、みんな心配してたよ。特に梓にはこっぴどく怒られたかな……」

統夜は正直にこう答えると、大輝と戒人は、「やつぱり……」と呟いていた。

「すまん、統夜。俺があんな無茶な作戦を考えたからそんな酷い顔に……」

アキトは統夜の顔がボロボロになったのは自分にも責任があると考え、統夜に謝罪した。

「……謝ることはないさ。アキトの作戦があつたから例の兵器を壊せたんだし」

統夜は自分がこんなにボロボロになったのは誰のせいでもないと思つているので、気にしていなかった。

「ありがとな、統夜」

統夜が気にしていないと聞いて安堵したアキトは、統夜に例を言っていた。

「……まあ、統夜のこととはわかりました。それで本題ですが、おおよその話は戒人と大輝に聞きました」

戒人と大輝が簡潔に昨日のことを報告していたので、イレスは大体の話は理解していた。

「それで、アキト以外の3人は一連の事件の黒幕に会ったのですね？」
「え？ そうなのか？」

イレスの言葉にアキト以外の3人は無言で頷き、アキトは驚いていた。

「魔導筆を持っていました。そいつは魔戒法師であることは間違いありません」

「!!」

一連の事件の黒幕が魔戒法師と知り、アキトは驚きを隠せなかった。

「……なるほど。それが元魔戒法師なのか、闇に堕ちた魔戒法師なのか。そこまではわかっていないのですね？」

「ええ。ですが、あの魔戒法師は鉄騎よりも強力な魔導具を作ると豪語していました」

「!-ということは、その魔戒法師つてのは魔導具作りに長けてるつてことなのか？」

「ああ、そうなんだろうな」

「……」

一連の事件の黒幕が魔導具作りに長けてると知り、アキトは心当たりがないか考えていた。

「……魔導具作りに長けた魔戒法師……。師匠や布道シグマ……。それに、阿門法師……。そんな人たちに匹敵する魔導具を作れる魔戒法師なんて……。……っ!!」

アキトは魔導具作りに長けた魔戒法師を次々とあげていくなかで、1人だけ思い当た

る人物がいた。

「まさか……。アスハ法師……!? いや、まさか、そんな……」

「アスハ法師？」

「誰なんだ？」

統夜と戒人は、アスハと呼ばれる魔戒法師のことは知らなかったもので、首を傾げている。

「……アスハ法師は、元老院付きの魔戒法師で、魔導具作りの腕はレオに匹敵する程と言われており、「阿門法師のもう一人の再来」と言われる程の魔戒法師でした」

「阿門法師なら俺も聞いたことがある。確か、邪美さんの師匠で、魔導具作りの天才と言われたとか……」

統夜は邪美と親交があるため、阿門法師の話は聞いたことがあった。

「阿門法師は殺されてしまいましたが、レオは阿門法師に匹敵する程の技術を持っていきます」

「まあ、師匠ならそれくらいは当然だけだな！」

「何でお前がドヤ顔をしてるんだよ……」

まるで自分のことのようにドヤ顔をしているアキトを見て、統夜は呆れていた。

「一方、アキトの言ったアスハ法師も魔導具作りの名人と言われた魔戒法師です。その

技術力は、レオと同じ……。いえ、もしかしたらレオ以上かもしれない」

「そんな!? 師匠以上の技術力を持つてるやつなんて、今はいないはずじゃないか!!」

レオの一番弟子であるアキトは、レオ以上の技術力を持つ魔戒法師がいることが信じられなかった。

「……確かに、アキトの言うことは一理あるかもしれませんがね」

「? イレス様? どういうことですか?」

「アスハ法師は確かに技術力は高く、質の高い魔導具を作りました。ですが、アスハ法師は質の高い魔導具を作るためなら手段を選ばない人なのです」

「手段を選ばない?」

「ええ。魔導具を作るためにホラーだけではなく、人間すら実験に使うような人でした」

「人間も……実験に……」

統夜たちは、イレスの話からアスハのマッドサイエンストぶりを知り、驚愕していた。

「それで、アスハ法師の行き過ぎた行動のせいか元老院がそれを咎め、アスハ法師の魔戒法師の資格を剥奪し、元老院から追放したそうです」

「なるほど。非人道的なことをしてた奴なんだ。元老院の判断は妥当なものだろうな」

アスハ法師が既に魔戒法師ではないことを知ると、大輝はその話に納得していた。

「そのアスハ法師ってのがどんな人なのかはわかったけど、何であいつは魔戒騎士を恨

んでいるんだ？」

「そういえば、アスハ法師は元老院から追放されたと言いましたが、アスハ法師が非人道的な実験をしていることを元老院に告発したのは魔戒騎士だったらしいです」

「!?ま、まさかそのことを恨んで？」

「そんな馬鹿な!もしそうだとしたらそれはただの逆恨みだぞー!」

統夜は謎の男がアスハであると確信してそのようなことを言っていた。

そして、アキトの言うように魔戒騎士の告発によって元老院を追放されたことが魔戒騎士への憎しみの始まりだとしたら、それはただの逆恨みと言われても仕方なかった。

「それ以上の話は私にはわかりません。ですが、魔導図書館であればそのことがわかるかもしれません」

「魔導図書館……ですか?」

「確かあそこって、元老院付きの魔戒騎士と魔戒法師しか入ることを許されていないんじゃない」

イレスが話した魔導図書館とは、様々なホラーのデータベースがあるほか、魔戒騎士や魔戒法師のリストも載っている。

そこには闇に堕ちた魔戒騎士や魔戒法師だけではなく、元老院や番犬所から追放された魔戒騎士や魔戒法師の情報もあるため、アスハ法師がどのような人物かを調べるには

うってつけだった。

アキトの指摘通り魔導図書館は、元老院付きの魔戒騎士や魔戒法師しか入ることを許されてはいなかった。

「……あ、俺は元老院付きの魔戒法師だから、俺は魔導図書館に入る権利はあるのか。だ
けど……」

「もう1人くらいは一緒に行きたいところだが、俺たちは番犬所付きの魔戒騎士だから
な……」

アキトは元老院付きの魔戒法師であるため、魔導図書館に入るとは許されている
が、統夜、大輝、戒人の3人はこの紅の番犬所所属の魔戒騎士なので、魔導図書館に入
ることは許されなかった。

「……そこら辺は問題ありません」

「え？ですが……」

「私のお母様は誰だと思っているのですか？」

イレスはこのように語ると、「ふんす！」と言いながらドヤ顔をしていた。

「い、イレス様。まさか……」

「ええ。私のお母様であるグレスに直接お願いして、魔導図書館の利用を許可してもら
います」

イレスは元老院の神官であるグレスの娘であり、それなりの権力は持っているのだが、普段は権力を持っていることをひけらかしたりはしない。

しかし、今回はこの権力を使う時と判断したため、元老院の神官であるグレスに魔導図書館の利用をお願いしてみることにしたのである。

「ですが、許可をもらえても、1人しか入れないと思います。誰がアキトと共に行きますか？」

「統夜、お前が行ってこい」

イレスがアキトと共に魔導図書館へ行く人間を誰にするか聞くと、すかさず大輝が統夜を推薦した。

「え？いいんですか？」

「俺は現場専門で難しい話はわからんからな。だから、その魔戒法師の調査はお前とアキトに任せる」

「俺も統夜に任せるよ。俺は調べ物よりも体を動かす方が性に合ってるからな」

大輝だけではなく、戒人も統夜を推薦していた。

「それでは統夜、いいですね？」

「はい！よろしくお願ひします！」

「私は今からお母様に話をつけますが、今すぐという訳にはいきません。統夜とアキト

は明日の朝、番犬所に来て下さい」

「わかりました！」

「おう、了解だ！」

こうして、魔導図書館へは明日の朝行くことになり、この日は解散となった。

この日は指令がなかったため、戒人と大輝は、それぞれ街の見回りを行うためそれぞれ行動していた。

統夜とアキトも街の見回りを行うためにとある道を歩いていた。

「……本当に、一連の事件の黒幕はアスハ法師なのかな……？」

統夜たちは、一連の事件の黒幕はアスハであると思っていたが、アキトだけはそのことに疑問を抱いていた。

「アキト？」

「確かに魔戒法師時代のアスハ法師のやったことは許されるものじゃないけど、本当に元老院追放されたことを恨んで魔戒騎士狩りをしたのだろうか？」

「うーん……。そう言われると確かにそうだけど、そう考えてたらキリがないよな」

『統夜の言う通りだ。そこから辺は明日魔導図書館で調べればはつきりするハズだぜ』

「……確かにそうだな。何か色々考えてたら腹減っちゃったよ」

「アハハ……。したらこの近くにファミレスがあるからそこで飯でも食うか？」

「お、ファミレス！いいねえ！」

統夜とアキトは近くにあるファミレスに立ち寄り、夕食をとることにした。

統夜とアキトがファミレスに到着すると、2人が見知った人物を見かけた。

「……………ん？あれって……………」

「唯たちか。それと……………」

統夜たちが見かけたのは、唯たちと、さわ子と同一年くらい短髪の女性だった。

「……………何か怖そうな人だな。唯ちゃんたち、あの人に絡まれてるのか？」

「いや、あの子は確か……………」

統夜は唯たちと一緒にいる女性に見覚えがあった。

（あの子、昔の軽音部の写真に写ってたような気がしたんだよな。別人かな？）

統夜も昔の軽音部の写真は見たことがあり、唯たちと一緒にいる女性が軽音部のOGなのではないかという推測もしていた。

すると……………。

「……………あつ、統夜!!それに、アキト!!」

律が統夜とアキトの姿を見つけて声をかけると、唯たちは一斉に統夜たちの方を見ていた。

「あつ、本当にやーくんとアキトさんだあ！」

「どうしてここに？」

唯は統夜とアキトの姿を見てはあつと表情が明るくなり、梓は2人とこのような場所で会うとは思ってなかったのが驚いていた。

すると……。

「……もしかして、さわ子の言ってた統夜ってあんたのこと？」

唯たちと一緒にいた女性が統夜の方を見て、こう聞いてきた。

「ええ。そうですけど……」

「おっと、自己紹介がまだだったね。あたしは河口紀美。さわ子とは軽音部の同期だったんだよ」

唯たちと一緒にいた女性……河口紀美は、このように自己紹介を行っていた。

「ねえ、あんた。さわ子から聞いたんだけど、あんたってあのカオルの知り合いなんだって？」

「ええ、そうですよ」

「あたしは卒業してからカオルには会っていないんだけど、カオルは元気なのかい？」

「ええ。元気みたいですよ。カオルさんは今結婚していて、もうすぐお子さんも産まれるみたいなんです」

「ふーん……。カオルのやつ、結婚したんだ……。亜佐美もカオルも結婚とは無縁か
なってるってだけ……」

紀美は、高校時代のカオルを知っているの、このように呟いていた。

「今度カオルにも会えるからそれを楽しみにしてたけど、まさか結婚して妊娠までして
るとはねえ……」

紀美は、今度カオルと会う予定があつたのだが、結婚していることは知らず、驚いて
いた。

「へえ、今度カオルさんに会うんですね」

「そうそう。それで、あんたたちに頼みがあるんだけど」

「頼み……ですか？」

紀美の言葉に統夜たちは困惑していた。

「まあ、立ち話もあれだし、ついてきな」

紀美はある場所に移動を開始し、統夜たちはその後を追いかけていった。

そんな中……。

「……あれ？何か俺、忘れられてないか？それに、ファミレスは？」

アキトは完全にスルーさせれおり、それだけではなく、本来行く予定だったファミレ
スも行かず統夜たちはどこかへと向かってしまった。

「……つて！俺を置いてくよお！

！」

アキトも慌てて統夜たちの後を追いかけていった。

※※※

統夜たちが紀美に連れられてきたのは、おでんを売っている屋台だった。

「ほお……これが屋台ってやつか……」

アキトは、初めて見る屋台に、瞳をキラキラと輝かせていた。

「……へえ、あんた、けっこう渋いの使ってるんだね」

紀美は、唯のギターを借りると、レスポール独特の重厚さに感心していた。

「は、はあ……」

「久しぶりだなあ……」

このように眩くと、紀美はギターを奏で始めた。

紀美のギターテクはかなりのものであり、統夜たちは驚きを隠せなかった。

「う、上手い……」

「さわ子先生より上手かも……」

「ありがとう、さわ子とは毎日ギターテクを競い合ってたからね」

紀美も軽音部ではギターを担当していたのだが、軽音部時代はさわ子と共に切磋琢磨しながらギターテクを磨いていた。

「そうだったんだ……」

「あ、そうそう。遠慮しないで好きな物注文しなよ。……そこのあんたもね」

紀美はアキトの方を見てこう言っていた。

「え、俺もいいのか？俺は軽音部と何も関係ないけど……」

「もちろん！だってあんた、この子たちの友達なんでしょ？だったら、遠慮はいらないよ」

「そ、それじゃあ、遠慮なく♪」

アキトは、遠慮なくご馳走になることにした。

「それじゃあ……。おっちゃん！大根と玉子とこんにやくね！」

アキトは遠慮なくおでんの品を注文していた。

「あいよー！」

「それじゃあ……俺は玉子と厚揚げをお願いしますー！」

統夜も紀美の厚意に甘え、おでんを注文した。

そんな中、紬はおでんのメニュー表とにらめっこしていた。
すると……。

「じゃ、じゃあ！がんもどきを下さいー！」

「あいよー！」

紬はじっくり考えた末、がんもどきを注文した。

「ムギ先輩、がんもどきが好きなんですか？」

「ううん。見たことないから。何か凄そうな名前じゃない？がんもどきって」

紬はがんもどきという響きに興味を持ってがんもどきを注文したのである。

「あいよ、兄ちゃんたち、お待ちー！」

紬ががんもどきを注文して少し経ったあたりで、統夜とアキトが注文したものが2人の前に置かれた。

「うっひょおー！これがおでんってやつか！初めてみるが美味そうだなー！」

「何だ兄ちゃん、おでん初めてかい？食ってみろ。うんまいぞおー！」

アキトがおでんを食べるが初めてと知ると、屋台の店主は、ここぞとばかりにおでん

「うおっ!？」

統夜たちが驚きの声をあげ、アキトはその声に驚いていた。

「アハハ、ごめんごめん。それは冗談」

「つて! 冗談ですか!」

《やれやれ、冗談にしてもその嘘はたちが悪いぜ!》

紀美の咄嗟のジョークに、統夜だけではなく、イルバも呆れていた。

「軽音部で同期だった子が結婚することになってさ。二次会であたしたち「DEATH

DEVIL」に演奏して欲しいって頼まれてね」

「もしかして、さわ子先生はそれを拒否したとか?」

「そうそう、あなたの言う通りだよ。さわ子は乗り気じゃなくてさ」

「軽音部にいたことは封印された過去だからな……」

さわ子は、軽音部にいたことを知る人間は少なく、さわ子自身がそれを明かそうとし

なかつた。

紀美が本題を切り出したその時だった。

「……あいよ! がんもお待ち!」

紬の注文したがんもが紬の前に置かれた。

「……これががんもどきっ!」

紬は自分の前に置かれたがんもをじつと眺めていた。
すると……。

「案外普通ね」

「どんなもの想像してたんですか!？」

「何かこう、トゲトゲした……」

「トゲトゲ？」

紬はがんもどきに対して妙なイメージを持っており、そのイメージを知った梓は首を傾げていた。

唯はギターを奏でる紀美の姿があまりに大人っぽかったので、その様子をジツと見つめていた。

「? ああ、ごめんね。勝手に長々と」

「あつ、いえ……」

紀美は唯から借りていたギターを唯に返した。

自分のギターが戻ってきて安堵した唯は、ジャラーン!とギターを鳴らして首を傾げていた。

「ごめん、何かマズかった？」

「ううん、何でもないです」

そう答えながら唯は再びギターをジャラーン!と鳴らし、紀美はその様子をジッと見ている。

「おつちやーん!俺、厚揚げとウィンナーと豆腐と玉子追加ね!」

「あいよ!」

そんな中、アキトは本当に遠慮なくおでんの具を注文していた。

「お前なあ、ちつとは遠慮しろよ……」

「へ?だって遠慮するなって言ってたじゃん!」

「そ、それはそうだけど……」

「いいから、あんたも遠慮なく頼みなよ!」

「は、はあ……」

紀美に遠慮しなくて良いと言われ、統夜も更に何品かおでんの具を注文していた。

こうして、統夜たちは紀美のおごりで、1時間程おでんを堪能していた。

そしてその帰り……。

「……それじゃあ、さわ子の説得、よろしくね」

紀美は、さわ子に結婚式でのライブに出てもらおうよう説得したものの、上手くいかなかった。

なので、現役軽音部である統夜たちにさわ子の説得をお願いしたのである。

「……とは言っても、さわちやんは結構強情だからな……」

「最初から弱気でどうするのよ。……んー、もし説得出来なかつたら……」

「出来なかつたら？」

「濡がおうむ返しのように話を返すと、紀美はビシツと律や濡のことを指差した。

そして……」

「……特訓が待ってると思いなさい！」

「は、はい!!」

「それじゃあ、頼んだよーじゃあねー」

こう宣言すると、紀美はそのまま帰っていった。

その場に残された統夜たちはポカーンとしていた。

「……それで、どうするんだ？さわ子先生の説得は」

「とりあえず、明日考えようぜ」

今日考えてもいい考えは浮かばないと考えた律は、どうさわ子を説得するか、明日改めて考えることにした。

しかし……」

「悪い、明日は俺学校休むから、先生の説得はみんなに任せるよ」

「はあ!?な、何で明日は学校を休むんだよお！お前だけ逃げる気か？」

律は、統夜の学校休む発言に納得がいかなかった。

「明日はアキトと調べ物をしなきゃいけないんだよ。ほら、前話した一連の事件があったろ？その黒幕のことを調べるためにな」

「黒幕を調べるって……。何かわかったんですか？」

「そいつが元魔戒法師の可能性があるから、それを調べに行くって訳だ」

統夜は明日学校を休む詳細な理由を唯たちに説明した。

魔戒騎士狩りのことを統夜から聞いていた唯たちは、何の反論も出来なかった。

「……わかったわ。先生のごことは私たちに任せて、統夜君は自分の使命を優先して！」

「ムギ……」

「そうだよ！やーくんにとってそれはやるべきことなんですよ？だったら、遠慮はなしだよー！」

「唯……」

細や唯が統夜に使命を優先するよう言ってくれて、梓と漣もウンウンと頷いていた。

「みんな、ごめん。明日は学校休むから、先生の説得はみんなに任せた！」

統夜は改めて、唯たちにさわ子への説得をお願いしていた。

「とりあえず、今日は遅いし、帰ろうか」

「そうだ。今日は遅いし、送るからさ」

とりあえずこの日は解散となり、統夜とアキトは共に唯たちをそれぞれ家まで送り届けた。

唯たちを送り届けた後、2人はそれぞれの家へと帰り、翌日の調査に備えたのであった。

……続く。

——次回予告——

『魔戒騎士を滅ぼそうとするあの謎の男にこんな過去があったとはな。これは俺様も驚きだぜ。次回、「真意」。まあ、こいつは認める訳にはいかないがな!』

第63話 「真意」

統夜たちが全力で魔戒騎士狩りに用いられた兵器を破壊した翌日、統夜たちはイレレスにそのことを報告した。

アキトを除く3人は、その兵器を破壊し、ホラー、ヘラクスを追い詰めた時に、一連の事件の黒幕である、謎の男と対峙した。

謎の男は魔導筆を操るということから魔戒法師であるということはわかった。

その件もイレレスに報告すると、魔導具作りの名人ということから、アスハ法師という元魔戒法師が怪しいとの意見があがった。

アスハ法師は、魔導具作りに長けた魔戒法師であり、その技術力はレオをも上回るとも言われていた。

しかし、アスハはホラーだけではなく、人間までも魔導具作りの実験に使うなど、非人道的な実験を行っていた。

そのことをとある魔戒騎士が元老院に告発したことでこの件が発覚し、アスハは魔戒法師の資格を剥奪され、元老院から追放されたとのことであった。

統夜たちは、一連の事件を起こしたのが本当にアスハなのかを調べるため、魔導図書

館へ行くことになった。

しかし、魔導図書館は、元老院付きの魔戒騎士か魔戒法師しか入ることが出来ず、アキトしか魔導図書館に入れない状態だった。

そんな中、イレスはグレスの娘という立場を用いてグレスに番犬所付きの魔戒騎士が魔導図書館に入るよう許可を求めた。

それが許可されたかどうかを確認するため、統夜とアキトは翌日の朝、番犬所を訪れた。

「……来ましたね、統夜、アキト」

「はい、イレス様」

統夜とアキトは、イレスに深々と頭を下げていた。

「それで、元老院から許可はもらえたのですか？」

「ええ。お母様には事情を話しましたら、1人だけという条件付きではありますが、特別で許可を出してくれました。令状もここに」

イレスの付き人である秘書官が、統夜に魔導図書館に入るための令状を渡した。

「魔導図書館の入り口でそれを渡して下さい。そうすれば、アキトと共に中に入れるはずですよ」

「……わかりました！」

「それじゃあ、統夜。さっそく行くこうぜ！」

「おう！」

「頼みましたよ。統夜、アキト！」

統夜とアキトはイレスに一礼をすると、番犬所を後にした。

その後、統夜とアキトは、元老院に繋がっている道を歩くと、元老院の手前にある大きな建物に向かった。

……その場所こそが、魔導図書館である。

この魔導図書館は、元老院付きの魔戒騎士と魔戒法師のみ入ることの許される場所であり、ホラーに関する書籍だけではなく、様々な魔戒騎士や魔戒法師のデータベースも存在していた。

この魔導図書館へ行けば、大抵のことは知ることが出来るほどの情報量がこの魔導図書館にはあった。

統夜とアキトが魔導図書館の入り口に向かうと、2人の門番が立ちはだかっていた。「……そこの2人、ちよつと待て！」

統夜とアキトは魔導図書館の門番に呼び止められた。

「俺は元老院付きの魔戒法師、アキトだ！この魔導図書館を利用しに来た」

「魔戒法師アキト……。確認した」

魔導図書館の門番は、石板のような魔導具を用いて、アキトが本当に元老院付きの魔戒法師か確認を取り、アキトは中に入ることを許された。

「そこのお前は何者だ！」

「俺は紅の番犬所付きの魔戒騎士、月影統夜です！紅の番犬所の神官イレス様より令状を預かっております！」

統夜はイレスから受け取った令状を魔導図書館の門番に渡した。

門番は、じつくりとその内容を確認していた。

「……!!ま、まさか、グレス様が許可を……!!」

門番は令状に書かれた内容に驚愕していた。

そこには、月影統夜の魔導図書館入りを許可するということが書かれていたのだが、その命令を下すためのサインがイレスのものではなく、グレスのものだったからである。

「……この令状はどうやら本物のようだ。お前も入ることを許可する」

門番から中に入る許可をもらうと、統夜とアキトは魔導図書館の中に入った。

魔導図書館の中に入ると、ものすごく広いエントランスが統夜とアキトを出迎えた。

「……凄いな……。かなり広いな……」

統夜は、初めて入る魔導図書館の広さに驚いていた。

そんな中……。

「えつと……。魔戒騎士や魔戒法師のデータベースはこっちだったかな？」

何度かこの魔導図書館に来たことのあるアキトは、うろ覚えの状態で魔戒騎士や魔戒法師のデータベースがある場所へと向かった。

統夜は場所がわからないため、アキトの後を追いかけていた。

「……おつと、ここだここだ」

アキトは迷うことなくどうにか魔戒騎士や魔戒法師のデータベースがある場所へとたどり着いた。

「……ここか。それにしても魔戒騎士と魔戒法師のリストだけでも凄い量だな」

魔戒騎士や魔戒法師のデータベースは、既にこの世にいない魔戒騎士や魔戒法師のデータが載っているため、その情報量はかなりのものだった。

「とりあえずしらみ潰しに探していくぞ」

アキトはデータベースの部分から適当に本を何冊かチョイスすると、その本を読み始めた。

統夜も、アキトのように何冊かを適当に見繕うと、本を読み始めた。

「どれどれ……平安時代の魔戒騎士……。へえ、この時代にも魔戒騎士はいたんだな

……」

統夜が取った本は、平安時代の魔戒騎士を紹介するものだったのだが、平安の世にも魔戒騎士がいたという事実には統夜は驚いていた。

「……………えっと、名は雷吼。黄金騎士牙狼の称号を持つ者……。へえ、この人、鋼牙さんの祖先にあたる人なのか……」

平安時代にも牙狼の称号を持つ者はいたようであり、統夜はそのことに関心していた。

「……………つと、違う違う！出来るだけ最近のを探さない」と！

統夜は今読んでいる本を読むのをやめて、別の本を読み始めた。

「……………これも違う……………」

アキトはパラパラと本のページをめくっていたが、お目当の情報はなかった。

統夜とアキトは3時間経っても、めぼしい情報を得ることが出来なかった。

そして、さらに30分後……………

「……………アキト！こいつだ!!」

統夜はようやく一連の事件の黒幕である魔戒法師の顔を発見した。

「!?本当か!?!」

アキトは統夜が見つけたページを覗き込むのだが……………

「……………いやっぱり、アスハ法師だったのか……………」

一連の事件の黒幕である魔戒法師とは、やはりアスハであった。アキトはギリギリまで違うのではないかと信じていた分、落胆は大きかった。統夜とアキトは、アスハの経歴や過去など、載っている情報に目を通し始めた……。

※※※

ちようどその頃、一連の事件の黒幕である謎の男ことアスハは、自身が作った魔導具である「魔導人機」の最終調整を行っていた。

「……もうすぐだ……！もうすぐで魔導人機は完成する！」

アスハによる魔導人機の調整も大詰めを迎えており、完成も時間の問題だった。

「この魔導人機の力があれば、魔戒騎士など……！」

魔戒騎士に対して強い恨みを抱いているアスハは、魔導人機力で魔戒騎士を滅ぼそうとしていた。

「魔戒騎士など、所詮は魔戒剣がなければ何もできない無能な奴らのくせに、自分は偉いと思っけていきがっている……！」

その怒りに満ちたアスハの表情からは、アスハがどれだけ魔戒騎士を憎悪しているかが理解出来た。

「あの時だつてそうだ！俺は魔戒騎士の力を高めるための魔導具を作つてただけなのに、無能な魔戒騎士どもは、俺の研究を非人道的とデタラメ言いおつて……！」

アスハが魔戒騎士のことを憎んでいるのは、かつて自分の実験を非人道的と魔戒騎士に告発されたこともその要因の1つだった。

そんな中、アスハは思い出していた。

かつて、自分がどのような魔戒法師だったのか。

そして、何故魔戒騎士を憎み、滅ぼそうと企んでいるのか。

〈過去編〉

魔戒法師のアスハは、父も母も魔戒法師という、魔戒法師のサラブレッドとして誕生

した。

アスハは幼少の頃から手先が器用であり、魔戒法師であった父から、魔導具作りの手ほどきを受けていた。

そんな中、アスハが魔戒法師となったのは20歳の時だった。

この頃のアスハは魔導具作りに長けただけでなく、法術や体術の扱いにも長けていた。

そんなアスハは着々と頭角を現していき、魔戒法師になってわずか1年で、元老院付きの魔戒法師となった。

この頃のアスハは最前線でホラーと戦うよりも、魔戒騎士や魔戒法師の手助けをする魔導具作りを中心に行っていた。

アスハはそれだけではなく、魔戒騎士が鎧の制限時間が過ぎた時に変化する、心滅獣身の研究も行っていった。

そんなある日、アスハにとって衝撃的な出来事が起こった。

それは、布道シグマの反乱である。

シグマは、全ての魔戒騎士に破滅の刻印を打ち込み、全ての魔戒騎士を滅ぼそうと企んでいた。

この頃のアスハは魔戒騎士に憎悪のような感情は抱いていなかったが、魔戒騎士の横

柄な態度を快く思っていないかった。

そんなアスハであったが、シグマの魔戒騎士を滅ぼそうとするという強大な野望が衝撃的だった。

破滅の刻印を打ち込み、全ての魔戒騎士を滅ぼそうとした計画も、黄金騎士牙狼の称号を持つ、冴島鋼牙の活躍によって阻止された。

その後、シグマの手によって復活したギャノンがシグマを取り込み、シグマの作った魔導具アイデアを操っていた。

アスハもギャノンと鋼牙たちの戦いに他の魔戒法師と共に参戦していた。

アスハは、真魔界に繋がっているゲートから見えるアイデアの姿に圧倒されていた。

そして、自分もいつかアイデアを越える魔導具を作る。このように決意をしていた。

最終的にギャノンは、魔戒騎士と魔戒法師が協力して放つ「光矢流星」によって消滅した。

多くの魔戒法師たちが真魔界に向けて自分の魔導筆を投げる中、アスハだけは自分の魔導筆を投げようとはしなかった。

アスハは布道シグマの生き様やアイデアの存在を見て、素直に協力するということが出来なかったのである。

こうしてギャノンは消滅し、布道シグマも死亡したのだが、アスハは今まで以上に魔

導具作りに情熱を傾けていた。

アスハはそれと同時に心滅獣身についても研究をしていたのだが、そんな中、アスハはとあることを考えていた。

闇の力など借りず、科学的に心滅をコントロールすることは出来ないかと。

そのような考えを抱いていた頃、アスハはとある魔戒騎士と出会った。

その魔戒騎士であるシヨウマは魔戒騎士として実力がある訳ではないが、人を守りたいという思いは誰よりも強かった。

そんな中、シヨウマはアスハが心滅獣身について研究をしていることを知ると、自分を心滅の実験に使ってくれと名乗り出たのである。

この頃のアスハは非人道的な実験をするような魔戒法師であったため、最初はその申し出を断ったのである。

しかし、シヨウマは心滅獣身の力をコントロールできれば、今まで以上に多くの人を守れると確信していたため、彼は再び自身を心滅の実験に協力したいと申し出た。

そんなシヨウマの熱意に押され、アスハは彼を心滅獣身の研究の被験体として、心滅の研究を行った。

この実験こそ、アスハの魔戒法師としての人生を大いに狂わせた。

実験当日、シヨウマは鎧を召還し、心滅獣身となる99.9秒が過ぎるまで、何も行

わずかに待機していた。

「……なあ、アスハさん。この実験……上手くいくよな?」

「当たり前だ。お前は多くの人を守るためにこのような危険極まりない実験に協力してくれたんだ。必ず成功させる」

アスハは実験に使う魔導具を並べており、既に実験の準備は整っていた。

「ああ、俺は信じてるよ。アスハさんを!」

鎧を召還しているため、顔を確認することは出来なかったが、シヨウマの澄んだ瞳は、アスハのことを完全に信用していた。

そして、鎧の制限時間が過ぎてしまった……。

「ぐう……ぐあ……!」

鎧の制限時間が過ぎたところで、彼の鎧は徐々に姿を変え、心を滅した獣に姿を変えてしまった。

「……!姿が変わった!今だ!!」

アスハは、とある魔導具を起動させると、心滅獣身となったシヨウマの動きを封じた。その隙に、もう一つの魔導具を起動させると、ソウルメタルで出来た刃が飛び出すと、心滅獣身となったシヨウマの体の一部を切り取った。

その痛みでシヨウマはまるで獣のような咆哮をあげていた。

アスハはさらに魔導具を起動させ、切り取った心滅獣身の体の一部を回収した。

シヨウマは痛みのみあまり暴れ出し、その結果、シヨウマの拘束が解かれてしまった。

「くっ！これ以上暴れられると手がつけれないか！」

アスハは、先ほど心滅獣身の体の一部を切り取った魔導具を再び起動させると、そこから飛び出したソウルメタルの刃がシヨウマの体を斬り裂いていった。

「……よし、今だ！」

これ以上心滅の維持は危険と判断したアスハは、魔導具を用い、そこから飛び出したソウルメタルの刃で、シヨウマの鎧の紋章を突いた。

その衝撃でシヨウマの鎧は解除されてしまい、シヨウマはその場に倒れ込んだ。

「……シヨウマ！」

アスハは急いでシヨウマに駆け寄り、その体を抱き抱えたのだが……。

「……しよ、シヨウマ……？」

シヨウマは心滅獣身に耐えることが出来なかったのか、鎧を解除する前に既に息絶えていた。

「……おい、嘘だろ？しっかりしろよ、シヨウマ！一緒に最高の魔導具を作ろうと約束したじゃないか!!」

アスハはシヨウマの体を揺するのだが、既に息絶えたシヨウマは何の反応もしなかつ

た。

「うわああああああああ!!」

シヨウマという大切な友を失ったアスハの慟哭が、その場に響き渡っていた。

その直後から、アスハに対してあらぬ噂が流され、魔戒騎士たちはアスハのことを煙たがるようになっていたのである。

「……なあなあ、あいつだろ? 若い魔戒騎士をそそのかして心滅させたあげく殺したっていう魔戒法師は……」

「ああ。だけど、何故か証拠を掴めなかったみたいで、元老院からはお咎めなしみたいだぜ」

「おつかねえなあ。所詮魔戒法師なんて余計なことをしないで俺たちの手助けだけをしとてりゃいいんだよ」

「そうそう。魔戒法師なんかより俺たち魔戒騎士の方が優れてるんだからー!」

布道シグマによって全ての魔戒騎士が滅びかかっても、このように魔戒法師を見下す魔戒騎士は大勢いたのである。

(……ふざけるな……! 俺はただ、人間を守るための魔導具を作っただけなのに……! 魔戒騎士の奴らは勝手なことばかり!)

このような一部の心ない考えを持った魔戒騎士への怒りが、憎悪へと変わっていった

のである。

この頃からアスハある考えを持つようになった。

自分の作った魔導具の力で、全ての魔戒騎士を滅ぼすと。そして、かつての布道シグマのように魔戒法師こそ真の守りし者であると知らしめようと。

このような決意をしたことにより、アスハは狂い始めた。

魔戒騎士を拉致しては、無理矢理心滅獣身の状態にさせて実験を行ったり、上等な魔導具を作るために本来守るべき人間を実験の道具に使ったりもしていた。

アスハの非人道的な実験によって集められたデータが、アスハの開発した魔導人機の礎となっていた。

そんな中、とある魔戒騎士が、そんなアスハの非人道的な実験の存在を知り、明確な証拠と共に元老院に告発した。

その告発により、アスハは元老院に咎められ、人を守るべき魔戒法師にあるまじき愚行との判断から魔戒法師の資格を剥奪され、元老院から追放された。

この出来事も、アスハの魔戒騎士への憎しみを募らせるには十分な出来事だった。

元老院を追放されたアスハは、ひっそりと身を隠しながら、来るべき時を夢見て魔導人機の開発に勤しんでいた。

そんな中、アスハは古の時代に誕生した人型魔導具が現代に蘇ったことを知ると、そ

の魔導具である阿号とその阿号の野望を止めに来た統夜とアキトの戦いを見ていた。

阿号の性能はアスハの予想を遥かに上回るものであり、阿号のデータ収集も行っていた。

そんな中、阿号は太古のホラーであるグレゴルに取り込まれ、阿号はグレゴルごと統夜に斬り裂かれた。

戦いを最後まで見届けたアスハは、阿号のデータを持ち帰り、魔導人機製作に活かしていった。

この頃からアスハは統夜の存在を知り、何故だか魔戒騎士の中でも統夜のことを強く疎んじるようになっていた。

そのため、アスハが鉄騎を強奪して改良した時も、統夜を消すために統夜に襲わせたのである。

アスハは魔導人機を開発しながら、魔戒騎士を滅ぼすためにとある兵器を開発した。

それこそ、スピーカーから魔戒騎士のみに聞こえる超音波を発し、それを魔戒騎士が聞いたことにより、ソウルメタルの性質が変容して、魔戒剣を扱えなくするものであった。

この兵器を完成させた直後に、アスハはホラー、ヘラクスに出会った。

ヘラクスが魔戒騎士を喰らったホラーを喰うのが好きだと知ったアスハは、ヘラクス

に完成したばかりの兵器の実験を依頼してみた。

この兵器を使えば自分以外のホラーが、楽に魔戒騎士を捕食出来ると知った瞬間、その実験を快諾した。

ヘラクスはアスハの仲間になったつもりはなく、アスハもヘラクスを仲間だとは思っていなかった。

しかし、お互いの利害が一致しているため、互いに協力することになったのである。ヘラクスの実験は順調に進み、多くの魔戒騎士が、その超音波の餌食となってしまうた。

その兵器も、統夜たちの活躍で破壊されてしまった。

その直後にアスハは統夜たちと対峙したのだが、この時アスハは、魔導人機が完成したら真っ先に統夜を殺すつもりでいた。

〈現代〉

アスハが過去の自分について物思いにふけている頃、統夜とアキトはアスハについての調査を終えていた。

「……」

アスハについての調査を終えた統夜とアキトだったが、アスハが予想以上に闇を抱えていたことに驚いていた。

「まさか、心滅獣身の研究をしたとはな……」

「心滅をコントロールするなんて、簡単に出来ることじゃないのに……」

自身も心滅になったことのある統夜は、神妙な面持ちで心滅を研究しているアスハのことを否定していた。

『そうだな。心滅の力は危険過ぎるからな……』

イルバも心滅の危険性は十二分に理解していた。

「だけど、その心滅の実験の失敗が、魔戒騎士を憎悪する引き金になるなんて……」

アキトは、アスハの経歴を見て、驚きを隠せなかった。

それと同時に、アスハは本気で魔戒騎士を憎んでいることを感じていた。

「……奴の真意はわかった。だからこそ奴の好きにさせる訳にはいかないさ」

『そうだな、奴の野望を阻止しなければ、本当に魔戒騎士を滅ぼしかねないからな』

「そうと決まればアスハ法師を早々に見つけないとな」

アスハの経歴を知ったことで、アスハの真意を知った統夜たちは、魔戒騎士を滅ぼすというアスハの野望を阻止するために、動き始めようとしていた。

※※※

統夜とアキトがアスハについて調べ終わった頃、アスハは魔導人機の調整を続けた。
た。

そして……。

「………ついに出来たぞ！俺の最高傑作、魔導人機が！」

長い時間をかけ、アスハが開発した魔導人機が完成した。

「こいつの力があれば、愚かな魔戒騎士など……！」

アスハは魔導人機の力があれば魔戒騎士を滅ぼすことが出来ると信じていた。

「まずはこいつのテストを兼ねてあいつを殺してやる！あの目障りな魔戒騎士、月影統夜を……！」

アスハは、最初のターゲットを統夜に決めていた。

「……おい、大丈夫か？あの魔戒騎士はガキながらも手強い相手だぞ」

統夜と交戦したヘラクスは、統夜が強敵だと理解しており、警戒していた。

「そこは問題ない。俺は奴の弱点は調べている。そこを突けば確実に奴を葬ることが出来るはずだ！」

アスハは、確実に統夜を始末するために、統夜のことを調べていた。

「だが、念には念を入れないとな……」

アスハは、統夜を葬るためにとある策を考えていたのである。

「クツクツク……。首を洗って待っている……。月影統夜!!」

策も用意したことで、アスハは自身に満ちた表情をしていた。

アスハは統夜を始末するために動き始めた。

……これこそ、統夜とアスハの壮絶な戦いの幕開けであった……。

……続く。

——次回予告——

『まさかあの男、このような手段で来るとはな。これは厳しい戦いになりそうだけ！次回、「激闘」。壮絶なる戦いが幕を開ける！』

第64話 「激闘」

統夜とアキトが、一連の事件の首謀者である魔戒法師アスハのことを調べていた頃、唯たちはさわ子にとあることを説得しようとしていた。

軽音部でさわ子と同期だったメンバーが結婚することになり、結婚式の二次会で「DEATH DEVIL」として演奏して欲しいとの要請があった。

他のメンバーが了承する中、さわ子だけが首を縦に振らなかった。

そのため、さわ子と同期である河口紀美が、現在軽音部である唯たちに、さわ子の説得をお願いした。

統夜がアスハについての調査を行っているため統夜は説得をすることは出来ないが、その分唯たちが頑張ろうとした。

しかし、自習時間を用いて考えたりしても、さわ子を説得出来る妙案は思いつかなかった。

放課後、職員室に行つて直接説得しようとしたものの、さわ子との写真撮影を求める1年生を見かけると、さわ子の人気ぶりを垣間見て、説得することは出来なかつた。

唯たちはその後、紀美に会つてそのことを報告すると、紀美は残念そうにしていた。

さわ子の説得に失敗したら特訓が待っていると云っていたのは冗談で、その代わり、唯たちはさわ子の代わりに演奏に参加することになってしまった。

さわ子の説得に失敗したため、唯たちは渋々その頼みを聞くしかなかった。

こうして唯たちも「DEATH DEVIL」に混じって演奏することになり、紀美と別れた。

唐突な展開に啞然とする唯たちだったが、とりあえずこの日は解散することにした。

……その時だった。

「……貴様らが月影統夜と同じ桜ヶ丘高校軽音部だな？」

唯たちの目の前に現れたのは、魔導人機を使って統夜を葬ろうとしているアスハと、アスハに協力しているヘラクスだった。

「あ、あなたは!?!そ、それに……」

「ほ、ホラー!?!」

梓は突然現れたアスハとヘラクスに困惑し、漣はヘラクスの姿を見て怯えていた。

「……何か、1年前もこんな状況があったよな?」

律は、1年前に暗黒騎士ゼクスの称号を持つディオスと、そのディオスに従っているホラー、ダンテが現れた時のことを思い出していた。

それ故、2人が何故自分たちの前に現れたのかを理解していた。

「お、お前ら！ 私たちを捕まえるつもりか!？」

「ほお、鋭いじゃないか。その通りだ」

アスハとヘラクスの目的こそ、唯たちを捕まえることだった。

「大人しく俺たちと来てくれれば手荒な真似はしない」

「まさか、貴方は統夜君を狙ってるの!？」

「お前たちが知る必要はない。大人しく来てもらおうか」

「……っ!!」

律は周囲を見回して状況を見極めるが、とても逃げ切れそうな状況ではなかった。

「やれやれ……。仕方ない……」

アスハはため息をつくど、魔導筆を取り出し、法術を放つと、梓以外の4人を拘束した。

その術の衝撃で、4人は気を失ってしまった。

「……!!皆さん!!」

「お前は月影統夜に伝える。この4人を助けたければ、今から3時間以内にこの場所に
来いとな」

アスハは、一枚のメモを梓に持たせた。

「1人で来いとは言わんが、もし来なかった時は……。わかっているな?」

「!!?」

梓はもし間に合わなかったら唯たちがどうなるかを察したのか、顔を真っ青にしていた。

「モタモタしてると時間が無くなるぞ。さっさと月影統夜に伝えるんだな」

「こう言い残すと、アスハは瞬間移動の術を放ち、ヘラクスや唯たちと共に姿を消した。

「……」

唯たちがさらわれてしまい、啞然とする梓であったが、急いで携帯を取り出すと、統夜に電話をかけた。

（お願い、統夜先輩！早く出て！）

梓はこのような祈りを込めて統夜に電話をかけた。

すると……。

『もしもし、どうした、梓?』

梓の祈りが通じたのか、統夜が早々に電話に出てくれた。

「統夜先輩！大変なんです!!」

『?どうした?まさか、先生の説得に失敗して、きつい特訓が待ってるとか?』

「違います!!そんなんじゃないやありません!!」

『?どうしたんだ?そんなに声を荒げて……』

梓は声を荒げて統夜の言葉を否定したことに、統夜は面食らっていた。

「実は、唯先輩たちが、魔戒法師とホラーにさらわれたんです」

『何だ?! 唯たちが!』

「今から3時間以内にとある場所に来いって……」

『……梓、今どこにいる?』

「学校の近くですけど……」

『梓、今から学校の校門前で待ち合わせだ! 急いで行く!』

統夜は、梓の返事を待たずに電話を切った。

梓の話を聞いて、事の重大さに慌てているようだった。

梓は、携帯をしまうと、そのまま学校の入り口に向かって走り出した。

5分後、学校の入り口に着いた梓だったが、それと同時に統夜とアキトも到着した。

統夜とアキトは、魔導図書館から帰る途中に梓から電話が来て、慌てて飛び出してきたのである。

「梓、唯たちが捕まったってのは本当なのか?」

「は、はい……。魔戒法師とホラーが現れて、先輩たちを……」

「！魔戒法師とホラーって、まさか……！」

『アスハって奴とこの前取り逃がしたホラーで間違いなさそうだ』

統夜たちは、唯たちをさらったのがアスハとヘラクスであることを確信していた。

「とりあえず、番犬所へ行こう。今回は緊急事態なんだ。梓が番犬所に入るのも許可してくれるだろう」

『……』

統夜が冷静だったことにイルバは驚いていた。

「?どうした、イルバ?」

『いや、お前さんも成長したなと思っただけだ』

1年前、唯たちがさらわれた時は、統夜は心滅になるほど怒り狂っていたのだが、今回は怒り狂うこともなく、冷静だった。

「もちろん唯たちをさらった奴は許せない。だけど、今は1秒でも早く唯たちを助けることだけを考えないと……」

統夜の心の成長ぶりに、イルバだけではなく梓も驚いていた。

こうして統夜たちは番犬所に向かおうとしたのだが……。

「あら、あなたたち、どうしたの?」

偶然これから帰るところだったさわ子が、統夜たちを見かけて声をかけた。

「！さわ子先生……」

「特に梓ちゃんはどうしたの？ 深刻そうな顔をして……」

「じ、実は……」

梓は、さわ子にも唯がさらわれたことを話した。

「！ねえ、それって本当なの!？」

「そうみたいです。……梓、どこに行けばいいかは聞いているか？」

「は、はい。メモを預かりました……」

梓はアスハから渡されたメモを統夜に渡した。

そこには、桜ヶ丘某所にある今は使われていない研究施設の名前が書かれていた。

「……アスハのやつめ、ずいぶんと遠いところを指定しやがったな……」

「え？ そうなんですか？」

「この場所、確か桜ヶ丘の本当に奥地にあるんだ。車を使えば1時間ちよつとくらいで着けるんだけど……」

統夜は、指令でこの場所を訪れたことがあったため、その場所がどれだけ距離があるかを理解していた。

「そういうことなら待つてなさい。車を出してあげるわ」

「え?でも……」

「唯ちゃんたちは私の教え子よ。だからこそ、私だつて出来ることをしたいのよ!」

さわ子は、教師として唯たちを救いたいという気持ちでいっぱいだった。

「統夜先輩!私も連れてつて下さい!!」

「!だけど、梓……」

「危険なことは覚悟してます!私だつて、大切な先輩たちを助けるお手伝いがしたいんです!!」

梓もまた、唯たちを助けたい統夜いう気持ちでいっぱいだった。

「……わかった。だけど、俺の言うことは聞くんだぞ」

統夜はそんなさわ子と梓の気持ちを汲み取り、同行することを許した。

『おい、統夜。本気か!?』

「今回は場所が場所だからな。俺たちだけの力じゃどうにもならないと思つてな」

統夜もバイクを持ってるのでバイクで向かうことは可能だったが、バイクは2人乗りのため、大輝や戒人の協力を得られないと考えていた。

それだつたらさわ子に車を出してもらい、大輝と戒人に協力を要請して共にアスハのもとへ乗り込むべきと判断していた。

『……そういうことならわかったよ』

イルバもさわ子や梓の同行を渋々許可した。

「……それじゃあ先生は車を出して下さい」

「ええ、わかったわ！」

さわ子は自分の車を取りに駐車場へと向かった。

「アキト、お前は番犬所に行つて戒人と大輝さんに応援を要請してくれ。事情を話せばイレズ様も許可してくれるハズだ」

「わかった！」

「俺はバイクを取りに行くから、梓はそこで待機してくれ」

「は、はい！わかりました！」

こうして統夜たちは、それぞれ散り散りになって行動を開始した。

アキトは、番犬所に急行し、大輝と戒人に応援を要請しに行った。

その間に統夜は1度自宅へ戻り、バイクを用意すると、そのバイクに乗り込み、学校の入り口に戻ってきた。

統夜が戻ってきた時には既にさわ子が車に乗ってスタンバイしていた。

しかし、アキトはまだ戻ってきていなかった。

待つ事10分……。

「統夜！戻ったぞ！」

アキトが戒人と大輝を連れて戻ってきた。

「統夜、例の事件の黒幕はやはりアスハとかいう奴だったんだな」

「はい。アスハたちに唯たちがさらわれたみたいなんです。あと2時間くらいで唯たちを助けに行かないと……」

アスハが唯たちを誘拐してから、早くも1時間が経とうとしていた。

「……統夜、大丈夫か？」

「ああ。唯たちをさらったアスハは許せないけど、まずは唯たちを助ける事を考えないと」

「……」

大輝は統夜の成長に驚いていた。

大輝も1年前に唯たちがさらわれたことで怒り狂う統夜の姿を見ているからである。

「……？大輝さん？」

「いや、何でもなし。とりあえず、先を急ぐのだろうか？」

「そうですね。さわ子先生、お願いします」

「わかったわ。みんな、私の車に乗り込んでちょうだい」

さわ子の言葉を聞いた戒人、大輝、アキトの3人は、さわ子の車に乗り込んだ。

「統夜先輩。私は統夜先輩のバイクに乗ってもいいですか？」

「あ、ああ。別に構わないけど」

統夜はバイクに跨り、梓はその後ろに乗り込み、予備のヘルメットを被った。

こうして統夜はバイクを走らせ、アスハが指定した場所へ向かい、アキトたちを乗せたさわ子はそれに続いて車を走らせた。

※※※

統夜たちがアスハの指定した場所へ移動を始めた頃、アスハの指定した桜ヶ丘某所にある研究施設の中では、アスハが統夜のことを待っていた。

「……あと1時間半か……」

アスハは時計を眺めると、約束の時間まであと1時間半となっていた。

「ククク……。月影統夜は間に合うかな？」

約束の時間まであと1時間半もあるのだが、アスハは時計を眺めながら笑みを浮かべ

ていた。

「おい、お前！あたしたちをどうするつもりだ!!」

アスハに捕らえられ、拘束されている唯たちであったが、律がアスハを睨みつけながらこう言い放っていた。

「別に、貴様らをどうこうするつもりはないさ。ただ、貴様らは月影統夜をおびき寄せる餌に過ぎないのさ」

「統夜君をおびき寄せてどうするつもりなの!？」

紬は、アスハを睨みつけてながらこう言っていた。

「俺は全ての魔戒騎士を滅ぼす。その最初のターゲットが月影統夜という訳さ」

「何で統夜や魔戒騎士を滅ぼそうとするんだ!」

滯はこの状況は怖かったものの、臆することなくアスハを睨みつけていた。

「魔戒騎士など己の力を示したいだけのただの無能。だから滅ぼすんだ」

「そんなことない!だってやーくんはどんなに辛くても人を守る守りし者なんだよ!?!そんな理由でやーくんや魔戒騎士を殺そうなんて間違ってるよ!!」

唯は自信に満ち溢れた表情でこう語るのだが、その言葉はアスハは気に入らなかった。

「……黙れ、小娘ども!月影統夜が来る前に貴様らを消すことも出来ることを忘れるな

!!

怒気の混じったアスハの脅迫に、唯たちは息を飲んでいた。

これ以上何かを言ったらアスハに殺されかねないと感じた唯たちは、これ以上アスハに対して攻撃的なことを言う事が出来なかった。

「貴様らに見せつけてやるよ。貴様らが信賴している男が無残に殺される姿をな！」

「!?そんな……!」

「奴がこの施設に乗り込んで来た時点で俺の勝ちは確定する。後は俺の最高傑作の力でじっくり痛ぶりながら殺すだけだ！」

このように語るアスハは、高笑いをしていた。

「さて、俺はこれから準備をする。生きてここから出たかったら妙な真似はやめるんだな」

このように言い残すと、アスハはどこかへと姿を消した。

「……やーくん……!」

唯はこれから起こる出来事に胸騒ぎを感じており、不安そうな表情をしていた。

※※※

アスハが指定した研究施設に向かって車とバイクを走らせてから、1時間が経過した。

ここから先は一本道であり、この道を突き進めば、後10分もかからずに研究施設に到着する予定だった。

《……統夜！アスハの指定した時間まであと30分しかないぞ!?!》

(30分か……。だけど、ここから先は一本道だ。何もなければあと10分もかからずに到着するはずだ)

1度この場所に来たことのある統夜は、目的地が近いことを知っていた。

それと同時に、誰かが統夜たちの行く手を阻むのではないかという心配もしていた。

(……みんな、待つてろよ！俺たちが絶対に助けるからな！)

このように決意を固め、アクセルを吹かせようとしたその時だった。

「……………!?くそっ……………」

統夜たちの目の前に何者かが立ちはだかつており、統夜はバイクを止め、さわ子も車

を止めた。

統夜たちはそれぞれの乗り物から降りると、統夜たちの前に立ちはだかっていたヘラクスと対峙した。

「貴様は、あの時のホラーか!!」

「悪いが、ここから先は行かせないぜ!ここでお前らの邪魔をしろとクライアントに頼まれたんでな」

ヘラクスは待ち伏せをして、統夜の邪魔をするようアスハに依頼されていた。

「……そこをどけ!お前の相手をしている暇はない!」

「お前らにはなくても俺にはあるんだよ。それに、お前らの相手は俺1人ではないぜ!」

「!?どういうことだ!」

統夜はヘラクスの言葉に困惑していると、ヘラクスは笑みを浮かべていた。

そして、パチン!と指を鳴らしたその時だった。

「……!!こいつら……!!」

「……イデアとの戦いで見たぞ。確か、号竜人だったか……?」

統夜たちの前に現れたのは、人のような姿をした魔導具である、号竜人であった。

それも1体だけではなく大量に現れ、号竜人だけではなく、2体の鉄騎と、1体のリグルと呼ばれる大型の号竜も現れた。

「！鉄騎が2体？それに……」

「くそっ！敵の数が多すぎるぞ！」

「アスハの奴、どうやら俺たちを行かせたくないようだな」

何故アスハがこれだけの軍団を従えてるのは不明だが、アスハも本気だということ
は伝わってきた。

「こいつらは全ての魔戒騎士を滅ぼすための尖兵だつてよ。こいつらは全てあいつが用意したみたいだぜ！入手経路は俺もわからんがな」

号竜人などの軍団は、アスハが全ての魔戒騎士を滅ぼすために用意したものだつた。

しかし、その入手経路はヘラクスにも知らされていなかった。

「時間が無い。こうなつたら……！」

統夜は魔戒剣を取り出すと、号竜人の軍団を睨みつけながら魔戒剣を抜いた。

「統夜先輩。一体どうするんですか？」

「強行突破する」

「!!まさか、あの数をつつ切るつもりですか!?!」

「それしか方法はない。……先生！俺が道を開くから、梓を乗せてついてきて下さい！」

「!?わ、わかつたわ！梓ちゃん！早く！」

さわ子に急かされながら、梓は予備のヘルメットをその場に置いて、さわ子の車に乗

り込んだ。

「統夜、俺もついていく。バイクは借りるぜ」

「ああ。構わない」

アキトは統夜からバイクのヘルメットを受け取ると、それを被ってバイクに乗り込んだ。
だ。

「……したらこいつらは……」

「俺たちが蹴ちらす！」

戒人と大輝は、魔戒剣を取り出すと、号竜人の軍団に立ちはだかった。

「……戒人！大輝さん！すいませんが、頼みます！」

「俺たちのことは気にせず、あいつらを助けてこい！」

「こんな奴らなど、俺と戒人だけで充分だ！とつとと行け！」

「……感謝します!!」

統夜は戒人と大輝に礼を言うのと、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏い、それと同時に自身の魔導馬である白皇を召還し、白皇に跨った。

「……ほお、強行突破する気か？無論、それはさせんがな！」

ヘラクスはどこからか剣を取り出すと、統夜の邪魔をする準備は整った。

「そこを通してもらおうぞ!!」

統夜は白皇の力で皇輝剣を皇輝斬魔剣に変化させると、さらに皇輝斬魔剣の切っ先に赤い魔導火を纏わせた。

そして……。

「どけえええええええ!!」

烈火炎装の状態となった統夜は、道を塞いでいる号竜人の軍団に突っ込んだ。

白皇が体当たりをするだけで号竜人が次々と消滅していった。

そして、統夜の行く手を阻むかのようにリグルが立ちはだかった。

「邪魔をするなあ!!」

統夜は赤い魔導火を纏った皇輝斬魔剣を一閃すると、リグルの体は真つ二つとなり、リグルは何の攻撃もしないまま、爆散した。

そのまま統夜は白皇を走らせると、号竜人の軍団を突っ切り、そのまま研究施設へと向かっていった。

「……いやそれじゃあ梓ちゃん。しつかり捕まってなさい!」

「は、はい。……って、えええ!」

さわ子は車を発進させると、ものすごいスピードで、統夜の作ってくれた道を突き進んだ。

途中、号竜人の妨害が入るが、さわ子は自慢のドライブテクニックで、号竜人をかわして、号竜人の軍団を突っ切った。

「さわ子先生、運転上手いですね……」

少しだけ運転は乱暴であったが、梓はさわ子の運転が上手なことに驚いていた。

「当然じゃない！それに、この展開……燃えてくるわ！」

号竜人という障害物をかわしながら突っ切っていったことが、さわ子の血を滾らせることになり、さわ子はスタイリッシュと言っても言い過ぎではないドライブテクニックで、完全に号竜人の軍団を通過していった。

そして、統夜のバイクを借りたアキトも、さわ子の後を追いかけるようにバイクを走らせた。

途中、2体の鉄騎がアキトに立ちはだかるが、アキトはバイクで大きくジャンプをすると、2体の鉄騎を飛び越え、そのままさわ子と共に研究施設へと向かった。

「……随分と行かせちゃったが、まあ、いいだろう。時間稼ぎにはなったからな。俺は、あの2人の魔戒騎士と遊ぶとするか」

ヘラクスは、号竜人の軍団と共に戒人と大輝の相手をするようになった。

「……行くぞ、戒人」

「はい、大輝さん！」

戒人と大輝は、魔戒剣を手に、ヘラクスや号竜人の軍団へと向かっていった。

※※※

統夜は、白皇を走らせて研究施設に到着すると、白皇と共に鎧を解除した。

統夜が鎧を解除してすぐに、梓を乗せたさわ子と統夜のバイクに乗っているアキトも研究施設に到着した。

『……統夜！約束の時間まで後10分だけ！』

ヘラクスや号竜人の軍団の妨害のせいで無駄な時間を食ってしまったが、まだ約束の時間まで後10分も残っていた。

「……みんな、急ぐぞ」

統夜の号令で、統夜たちは研究施設に乗り込んだ。

中に見張りがいる訳でもなく、順調に進んでいった統夜たちは、研究施設の大広間に

到着した。

「……!!見つけた!唯たちだ!」

統夜は、大広間の一番奥で拘束されている唯たちを発見した。

「!?先輩方!!無事ですか!?!」

「統夜!?!それに、梓まで……」

「さわちゃんとかアキトも一緒だったのか!」

澪と律は、統夜一人ではなく、梓、さわ子、アキトも一緒だったことに驚いていた。

しかし……。

「やーくん!来ちゃダメ!!早く逃げて!!」

「唯先輩!何言ってるんですか!?!私たちは先輩たちを助けに来たんですよ!?!」

「それは罠なのよ!あの人の狙いは統夜君なの!!」

唯が何故逃げるよう言ったのかを紬が説明していた。

しかし……。

「ククク……。もう遅い!」

『!?統夜!上から何か来るぞ!!』

イルバが何かを探知すると、上空から3メートルくらいの巨大な人のようなものが降ってきた。

統夜はその大きさではなく、その姿を見て驚愕していた。

「!?ま、まさか……心滅獣身……!?」

それは、まるで魔戒騎士が鎧の制限時間を過ぎた時になってしまいう心滅獣身そのものだった。

「ククク……。よく来たな、月影統夜……。時間通りじゃないか」

「その声……。貴様、アスハか!!」

「それに、この心滅獣身みたいな姿のこれは一体……!?」

統夜は鎧の声の主がアスハであることに驚き、アキトは、心滅獣身のような姿をした鎧に驚いていた。

「驚いたか……。?この鎧こそ、俺の技術の全てが込められた最高傑作の魔導具……。魔導人機だ!!」

「魔導……。人機?」

『こいつは……。一筋縄ではいかないようだな……。』

統夜やアキトだけでなく、イルバも、魔導人機の放つオーラに圧倒されていた。

「……。誰が相手だろうと……。こんなところで負ける訳にはいかない!!」

統夜は手に持っている魔戒剣を構えると、アスハの乗る魔導人機を睨みつけていた。

「……。統夜……」

「……大丈夫だろうか……」

「そうね。この戦い、何かが起こりそうな気がするのよね……」

紬は、アスハが統夜をここまでおびき寄せるのは何か理由があると思い、そこを心配していた。

「……やーくん……。お願い、死なないで……」

唯はただひたすら統夜の無事を祈っていた。

こうして、アスハの作った魔導人機と対峙した統夜とアキトであったが、こうして統夜たちとアスハとの激闘の幕が開けた。

守りし者として人を守るため戦う統夜たちと、魔戒騎士を滅ぼすために戦うアスハ。果たして、勝利するのは一体どちらになるのか？

……続く。

—— 次回予告 ——

『いよいよ幕を開けた激闘。統夜、全ての魔戒騎士を滅ぼす奴の野望は絶対に阻止するぞ！次回、「銀狼 前編」。絶望を斬り裂け！勇気の刃で!!』

第65話 「銀狼 前編」

全ての魔戒騎士を滅ぼすために、アスハは動き始めた。

最初に統夜を始末するために、アスハは唯、濤、律、紬の4人を誘拐した。

統夜は唯たちを救うためにアキト、戒人、大輝だけではなく梓ちゃんときわ子の協力も得て、アスハが指定した研究施設へと向かった。

研究施設到着までもう少しのところまで辿り着くところで、ヘラクスが現れて統夜たちの行く手を阻んだ。

ヘラクスは、さらに号竜人の軍団を従えており、統夜たちを通さないつもりでいた。

しかし、統夜は鎧と白皇を召還し、強行突破で研究施設へと向かい、梓、さわ子、アキトの3人も統夜に続いた。

この4人が研究施設へ向かう中、戒人と大輝は、ヘラクスや号竜人の軍団と戦いを挑んだ。

統夜が強行突破によって多くの号竜人とリグルを蹴散らしてくれたおかげで、2人の負担は大幅に減っていた。

号竜人は戒人と大輝ほどの実力があれば、鎧を召還しなくても倒せる相手だった。

そのため、2人は次々と号竜人を倒していった。

「くっ……。本当に数が多いな……」

「ああ、これじゃキリがないぞ……」

戒人と大輝は次々と号竜人を倒していったのだが、その数が思うように減らなかつた。

「ふふん、どうしたどうした!?その程度か?」

ヘラクスは、大量の号竜人を相手にしている戒人と大輝を見て、ドヤ顔をしていた。

『戒人、このままではジリ貧じゃぞ!どうするつもりじゃ?』

トルバは、悪化する一方の戦況を憂いていた。

「そうだな……。こうなったら鎧を召還して一気に蹴ちらすしかないか……」

「俺もそれは考えた。少しでも数を減らさないと……」

戒人だけではなく、大輝も鎧を召還して、号竜人の数を一気に減らそうと考えていた。

その時、2体の鉄騎が2人の前に立ちはだかった。

「くっ、ここにきてこいつか!」

「お前たち!その2人を一気に殺せ!」

ヘラクスは、鉄騎に戒人と大輝を始末するよう指示を出した。

様々な死地を乗り越えて来た戒人と大輝であったが、この状況に腹を括っていた。

2体の鉄騎が戒人と大輝目掛けて襲いかかったその時だった。

どこからか法術が飛んでくると、その法術は2体の鉄騎に直撃し、鉄騎を吹き飛ばした。

「!?な、何だ!?!」

「今の法術、どこから……?」

戒人と大輝は、突然飛んできた法術に驚いていた。
すると……。

「……大丈夫ですか!?!」

「!お前は、レオか!どうしてここに?」

戒人と大輝を救ったのは、アキトの師匠であり、元老院付きの魔戒騎士であり魔戒法師である布道レオだった。

「イレス様から事情は聞きました。そして、ホラーの気配を察知してここまで来たんです」

「そ、そうだったんですか……」

戒人は番犬所からここまで急行するレオの行動力に驚いていた。

そんな中、レオは戒人のことをジツと見ていた。

「……?あ、あの……」

「君が新しくこの番犬所属になった魔戒騎士の黒崎戒人君……ですよね？」

「は、はい。でも、どうして俺の名前を？」

「イレス様から聞きました。君が、統夜君の良きライバルだったということも」

レオはここに来る前にイレスから紅の番犬所の近況を聞いており、戒人がかつて修練場に通っていた時、統夜とは良きライバルだったことや、ホラーの襲撃から生き延びたことも聞いていた。

「そうだったんですか……。あなたが布道レオさんですよね？」

「ええ、そうです。ですが、話は後にしましょう。まずは、あれを止めないと……」

レオは魔戒剣を取り出すと、号竜人たちや鉄騎を睨みつけた。

「魔戒騎士が増えたか……。だが、たった1人増えただけでは結果は変わらん！」

「それはどうでしょうね？」

レオは、不敵な笑みを浮かべていた。

「……これ以上、兄さんが作った魔導具をお前たちの好きにはさせない！」

レオがここに来た1番の目的は、魔戒騎士を滅ぼそうとするアスハの野望を阻止し、兄である布道シグマが作った魔導具を悪用されることを阻止するためだった。

レオは魔戒剣を抜くと、それを構えた。

「……鎧を召還して一気に行きましょう！大輝さん、戒人君！」

「承知！」

「は、はい！」

レオの号令により、3人は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、3人はそれぞれの鎧を身に纏った。

大輝は、銅の輝きを放つ、「鋼」の鎧を身に纏った。

戒人は、紫の輝きを放つガイアの鎧を身に纏った。

レオは、ガイアとは異なる紫の輝きを放つ狼怒の鎧を身に纏った。

レオは魔導筆を取り出すと、そこから炎を放ち、炎は上空に飛んでいった。

炎は上空で3つに分かれると、レオ、戒人、大輝の鎧に直撃した。

「ハッハッハ!!これは傑作だ!いきなり同士討ちとはな！」

「……それはどうですかね？」

レオは笑い浮かべていたのだが、レオたちの体は炎に包まれた。

しかし、レオたちの体はただ炎に包まれた訳ではなかった。

レオたちの体は炎に包まれたことで、簡易的に烈火炎装の状態となった。

「な……3人揃って烈火炎装だ?!」

ヘラクスはこのような展開を予想していなかったもので、驚きを隠せなかった。

「……大輝さん!戒人君!一気に号竜人を蹴散らしましょう!!」

「承知！」

「はい!!」

レオ、大輝、戒人の3人はレオの法術で烈火炎装の状態となり、3人はそれぞれの剣を振るって号竜人を次々と薙ぎはらっていった。

レオの力によって烈火炎装の攻撃を放った3人は、号竜人の数を大幅に減らした。この攻撃で号竜人の数も少なくなり、2体の鉄騎が3人に立ちはだかった。

「……………っ！こいつは……………」

「こいつは僕と大輝さんで倒します！戒人君はあのホラーを！」

「わかりました！」

レオと大輝が2体の鉄騎を抑えている間に、戒人はヘラクス目掛けて突撃した。

戒人は堅陣剣を一閃するが、それはヘラクスに軽々と受け止められてしまった。

「……………貴様如きがこの私を倒せるかな？」

「倒すさ！統夜だつて頑張ってるんだ。お前如きを軽々と倒せなきや、あいつのライブルとは名乗れない!!」

このように言い放つ戒人は鬼気迫るものがあり、ヘラクスもたじろいでいた。

その時出来た隙を見逃さず、戒人は蹴りを放つてヘラクスを吹き飛ばした。

「くう……………！俺だつて、こんな所でやられてたまるかよ！」

ヘラクスは、手にした剣を構えて、戒人を睨みつけた。

そして、戒人は魔導ライターを用いて堅陣剣の切っ先に黄緑の魔導火を纏わせ、烈火炎装の状態となった。

「はあああああああ!!」

戒人は獣のような雄叫びをあげながらヘラクスに接近し、堅陣剣を振るった。

ヘラクスも戒人目掛けて駆け出し、剣を一閃した。

ヘラクスの一閃は戒人の一閃によって弾かれてしまった。

「な、なんだと!」

戒人はさすがに堅陣剣をもう一閃すると、ヘラクスの体を真つ二つに斬り裂いた。

「ば……馬鹿な……!!この俺が、こんな小僧にやられるのか……!」

ヘラクスは、戒人相手に敗北するということが未だに信じられなかった。

「どんな相手だろうと、ホラーは斬る!それが、魔戒騎士としての俺の使命だ!」

「ぐわああああああああ!!」

ヘラクスは断末魔をあげると、その体が爆散し、消滅した。

「はあ……はあ……はあ……ど、どうにか倒したか……」

ヘラクスを討滅するのに持てる全ての力を使い果たした戒人は、鎧を解除し、膝をついていた。

「……………戒人君！」

戒人がヘラクスを討滅したのと同時に2体の鉄騎を葬ったレオと大輝は鎧を解除し、戒人のもとに駆け出そうとした。

しかし、まだ生き残っている号竜人が、消耗した戒人を始末するために戒人に接近した。

「…しまった！まだ生き残りがいたか!？」

鉄騎との戦った時に、号竜人も全滅させたと思っていたが、まだ生き残りがいた。

大輝とレオは急ぎ救援に向かおうとするが、このままでは間に合わなかった。

「こっぴなつたら……………」

レオは魔導筆を取り出し、法術を放とうとしたその時だった。

——ヒュン!!

どこからか手裏剣のようなものが飛んでくると、それは号竜人の体を斬り裂いた。

「!?な、何だ!？」

「今のは一体……………」

突然飛んできた手裏剣のようなものに命を救われた戒人だけではなく、レオもその正体がわからず、驚いていた。

手裏剣のようなものは先ほど飛んできた方向へと戻っていった。

戒人たちは手裏剣のようなものが飛んでいった方向をジッと見つめていた。

その手裏剣のようなものは、戒人たちがいる辺りから離れた場所にいた壮年の男がキヤツチした。

「……」

その男は漆黒のコートを羽織った男であり、どうやら魔戒騎士のようだった。

その男は手裏剣のようなものをキヤツチすると、何処かへと姿を消した。

「……助かったけど、今のは一体……」

「戒人、それを考えるのは後だ！」

「ええ！統夜君を助けに行きましよう！」

こうしてどうにかヘラクスと号竜人の軍団を全滅させた戒人、大輝、レオの3人は、そのまま統夜たちが向かった研究施設へと向かった。

※※※

戒人たちがヘラクスと号竜人の軍団を全滅させる少し前、統夜とアキトは突如現れたアスハの最高傑作である魔導人機と対峙していた。

「……」

統夜は、魔導人機の圧倒的存在感に畏怖の感情を抱いていた。

（こいつが……。多くの人間を犠牲にして作った魔導具か……。必ず壊してやる！これ以上、犠牲者を出さないためにも！）

しかし、統夜はどうか恐怖を振り切り、魔導人機を破壊することを決意していた。

「ククク……。どうした、月影統夜。かかって来い。その小娘どもを救いたいのだろう？！」

「ああ、お前を倒して唯たちを助けるさ!!」

統夜は魔戒剣を構えると、魔導人機を睨みつけた。

そして……。

「はあああああああああ！」

魔導人機目掛けて駆け出していった。

「ククク……。計画通りだ！」

アスハは不敵な笑みを浮かべると、魔導人機の中から何かを起動させた。

すると……。

「……!?この超音波、まさか……」

統夜は今しがた聞こえてきた耳障りな音に聞き覚えがあった。

そして……。

「……!?そ、そんな馬鹿な……!!これは……」

統夜は何故か魔戒剣を持ち上げることが出来なくなってしまった。

この現象を統夜は知っていたのだが、知っていても驚きは隠せなかった。

「ククク……。驚いたか?それも無理はないよな。この兵器は貴様らが破壊したはずだもんな……」

統夜たちが困惑する中、アスハだけは不敵な笑みを浮かべていた。

「!?な、何よあれ!?統夜君は何で魔戒剣が持てなくなってるの!?」

「まさか……!魔戒騎士狩りに使われた兵器がここに?」

統夜から魔戒騎士狩りに使われた兵器のことを聞いていた梓は、統夜が魔戒剣を扱えないこの状況を見て、その兵器が再び使われているのではないかと推測していた。

「まさか、あの兵器はあれだけじゃなかったのか!?」

「ここに乗り込む前にもっと警戒しておくんだつたな。まあ、貴様らはあの兵器が複数あるとは思っていないかったようだからそれも無意味だったがな!」

統夜の魔戒剣を封じたアスハは、勝ち誇ったかのように笑っていた。

「月影統夜、貴様がどれほどの魔戒騎士だろうと、丸腰でこの魔導人機を倒せると思うな！」

「くっ……」

統夜は唇を噛み締め、焦りを見せていた。

アスハの言う通り、丸腰の状態では魔導人機は荷が重すぎる相手だからである。

「……だが、やるしかない！唯たちを助けるために！」

統夜は格闘戦の構えをして、魔導人機を睨みつけた。

「統夜、援護するぜ！生身じゃあいつは倒せないからな」

「すまん、アキト。俺が奴を引きつける。その隙に攻撃を頼む」

「ああ、任せとけ！」

統夜は魔導人機に向かって突撃した。

「!?統夜先輩！無茶です！」

「フン、魔戒剣が使いぬからといって狂ったか！いいだろう。速やかに貴様を始末してやるよ!!」

アスハは魔導人機を操作すると、魔導人機は右手を突きつけ、その右手を統夜目掛けて飛ばした。

「くっー！」

統夜は飛んでくる魔導人機の右手をどうにかかわした。

それを見ていたアキトは……。

「ロケットパンチ……。男のロマンじゃねえか!!」

魔導人機の繰り出したロケットパンチのような攻撃にアキトはキラキラと目を輝かせていた。

「アキトさん！戦いに集中して下さい!!」

「……つと、そうだった!!」

梓の叱責で我に返ったアキトは、魔戒銃を魔導人機に向けて発砲した。

しかし、その攻撃は魔導人機に傷一つつけることは出来なかった。

「魔戒法師！貴様は何故俺の邪魔をする!! 貴様だって魔戒騎士は疎んじているのだろう？」

「……まあ、確かに、魔戒騎士って嫌な奴もいるよな」

「っ！アキト……」

統夜はアキトの本音とも言える言葉を聞いて、息を飲んでいた。

「だけどな、俺が魔導具を作るのは魔戒騎士と魔戒法師の負担を減らして多くの人を守るためなんだ！お前みたいに恨みだけで魔戒騎士を滅ぼすような奴と一緒にするな!!」

「……」

統夜は改めてアキトの本音を知ることが出来た。

アキトもまた守りし者としての強い思いを持っており、統夜はそのことがとても嬉しかった。

「フン、所詮は貴様も愚かな魔戒騎士に毒された愚か者か……。良いだろう！貴様も一緒に始末してやるよ!!」

「させるかよ!!俺はお前みたいなのは奴は認めない！絶対にここで倒す!!」

アキトは魔導筆を取り出すと、魔戒銃の銃身に法術を放った。

その後、アキトはその状態で魔戒銃を発砲した。

魔戒銃の弾が魔導人機に着弾した瞬間、爆発が起こった。

「よし、直撃だ!」

その一撃は魔導人機に直撃し、アキトは攻撃に手応えを感じていた。しかし……。

「……!?!き、効いてないのかよ!?!」

「愚かな……。そんなおもちゃでこの魔導人機を倒せると思うな!!」

アスハは魔導人機を操作して、反撃の体制を取った。

魔導人機はアキトに攻撃を仕掛けるためにアキトに接近した。

「くっ……こいつ!!」

アキトは魔戒銃を発砲したり、法术を放つたりとどうにか魔導人機を近付けさせないよう努力したが、全ての攻撃は魔導人機には効いていなかった。

「フーン！攻撃は……こうやるんだ!!」

アキトに接近した魔導人機は、右手でアキトを薙ぎ払うと、アキトは凄いい勢いで施設の壁に叩きつけられた。

その衝撃はかなりのものだったのか、アキトが叩きつけられた壁は崩壊し、アキトはさらに吹き飛ばされた。

魔導人機から受けたダメージはかなりのものだったのか、アキトは起き上がることが出来ず、その場で気を失ってしまった。

「……!!アキト!!」

統夜は心配のあまりアキトの方を見ていたのだが……。

「余所見をしている暇があるのか!」

魔導人機は尻尾による攻撃で、統夜を吹き飛ばした。

「ぐあっ……!」

吹き飛ばされた衝撃がかなりのものだったのか、統夜の指に嵌められたイルバが飛び出してしまった。

「!?イルバが!!」

イルバが吹き飛ばされて地面に叩きつけられたのを見ていた梓は急いでイルバのもとへ駆け出すと、イルバを拾った。

《……梓、急いで俺を指に嵌めろ!》

(ひゃあ!?今の声、どこから!?)

梓がイルバを手にした瞬間、イルバの声が脳内に響いて来たので、梓は驚いていた。

しかし、梓は声を出していないため、梓がイルバを拾ったことはアスハには気付かれなかった。

《急げ!時間が無いぞ!!》

再びイルバの声が聞こえて来た瞬間、梓はイルバがテレパシーを送っていることに気付き、イルバを自分の指に嵌めた。

《いいか、梓。一刻の猶予もない。統夜が奴に反撃するためにはこの超音波の発生源を破壊しなければいけない》

(……そうは言っても、場所はわかるの?)

《ああ。妙な気配を感じるぜ。そこを辿れば……》

梓は試しに心に思ったことを念じてみたらイルバに通じたので、この状況でイルバと話をする方法を理解した。

《とりあえずこの部屋を出て、近くの階段に向かうんだ。俺たちの動きを奴に悟られるなよ》

(う、うん……)

梓はこっそりと部屋を抜け出すと、近くにあつた階段を上がつていった。

梓が小柄な体型だったのが幸いだったのか、アスハは梓がいなくなったことに全く気付いていなかった。

「くう……！」

統夜はゆつくりと立ち上がるのだが、梓がイルバを指に嵌めて部屋を出て行くところを偶然見かけた。

その瞬間、イルバに策があると確信し、どうにか時間稼ぎをしようと決意した。

「ほらほら……どうしたどうしたあ!!」

魔導人機は連続でパンチを繰り返すのだが、統夜はどうにか攻撃をかわしていたのだが、先ほどのダメージが残っており、徐々に動きが鈍くなってしまうた。

「フン……隙あり！」

魔導人機の何度目かのパンチが統夜の腹部に直撃すると、統夜はその場に倒れ込んだ。

「統夜!!」

「統夜君!!」

「やーくん!!」

その場にいる全員が、統夜が倒れるのを見て、思わず声をあげた。

「……フン、ようやく落ち着いたか……。これでこいつをなぶり殺すことが出来る……」
アスハは魔導人機の力で統夜を痛ぶろうとしており、不敵な笑みを浮かべていた。

その頃、統夜を救うために超音波の発生源を探していた梓は、イルバのナビゲーションを頼りに最上階である4階にたどり着いた。

「イルバ、この階で合ってるの?」

『ああ。妙な気配が近付いてきたぜ!』

「それじゃあ急ごう!」

梓はイルバのナビゲーションで超音波の発生源に向かおうとしたその時だった。

突如、号竜人が梓の前に現れた。

「ひっ!?ほ、ホラー!?!」

『ああ。どうやらこのシステムをダウンさせないと、超音波は消えないみたいだぜ』
「ど、どうすればいいの!私、コンピューターなんてまともに触れないよ!!」

梓は学校で習うレベルしかパソコンを扱うことが出来ず、プログラミングなどは出来るはずもなかった。

『大丈夫だ!俺様の指示通りにキーボードを操作しろ!』

「わ、わかった!」

梓はキーボードのある場所まで移動すると、イルバの指示通りにキーボードを叩いていた。

その動きはぎこちないものの、着実にこの施設のメインコンピューターに接続しようとしていた。

梓がキーボードと格闘を始めて5分が経過した……。

『梓、最後にエンターキーを押すんだ』

「うん!」

梓は力強くエンターキーを押した。

すると、梓の前にある大型のモニターに、とあるものが映されていた。

それは……。

「統夜先輩!!」

魔導人機に追い詰められ、痛ぶられている統夜だった。

『!? 妙な気配が消えない……。こうなったらこいつを破壊するしかないか……。』

メインコンピューターを操作しても、超音波は消えなかったので、イルバはコンピューター自体を破壊するしかないと判断した。

イルバはすぐに魔導火でコンピューターを破壊しようとするのだが……。

『……俺は、特にお前みたいなのが大嫌いなんだよ!!』

アスハは統夜に対して恨み言を言いながら統夜に蹴りをいれていた。

『があっ!! ぐう!!』

そして、統夜が苦しみの声をあげるのも、生々しく聞こえてきた。

「……」

その言葉を聞いた梓は、怒りで肩を震わせていた。

梓がイルバのナビゲーションでこの施設の最上階に到着した頃、統夜は魔導人機に痛ぶられていた。

「があっ！」

1 発蹴りをいれる度にアスハは高笑いをしていた。

「やめて……もうやめて!! やーくんが死んじやう!!」

唯は目に涙をいっぱい溜めて訴えかけるが、その言葉はアスハに届くはずもなかった。

「フン！先ほど言っただろう？こいつが無残に殺される様を見せるってな」

アスハは魔導人機を操作し、再び統夜の腹部に蹴りを入れた。

「ぐう……！」

統夜はあまりの激痛に顔を歪めていた。

「もうやめなさい!! あなた！何でそこまで酷いことが平然と出来るの!?!」

教え子が傷つくのを見て耐えられなくなったさわ子が、魔導人機を睨みつけながらこう言い放った。

「ああん!?! 何でだあ? そんなもん、俺が魔戒騎士のことを恨んでるからに決まってるだろうが!!」

「なっ……!!? あなたねえ……!!」

「俺は、特にお前みたいなのが大嫌いなんだよ!」

アスハは怒りに満ちた表情になると、再び統夜に蹴りを食らわせた。

「があっ……ぐう!!」

「魔戒騎士など魔戒剣がなけりや何も出来ない無能なのに、このクソガキは若いつてだけでチャホヤされていやがる!」

アスハが統夜のことを嫌う理由は、統夜への嫉妬だった。

アスハは魔戒法師として認められることはなかったが、統夜は魔戒騎士として番犬所だけではなく、元老院にも評価されている。

アスハはそのことに嫉妬していたため、統夜のことを許せなかった。

「グオルブとかいうザコを倒しただけでチャホヤされて……。そういうところが気に入らねえんだよ!!」

アスハは再び統夜に蹴りをいれた。

「いい加減にしなさい!!あなたはただ統夜君に嫉妬してるだけじゃない!?そんなくだけない理由で、私の教え子は殺させないわよ!!」

「黙れ!!黙らないと貴様から殺すぞ!!」

「やれるもんならやってみなさいよ!!あんななんてちつとも怖くないわ!!」

さわ子は、アスハと魔導人機に臆することなく、声を荒げて魔導人機を睨みつけていた。

「いいだろう。まずは貴様から殺してやる!!」

アスハはさわ子を始末するために魔導人機を向けようとしたのだが……。

「ま……待て!!お前の狙いは俺なら……俺だけを狙え!!」

統夜は氣力を振り絞り、こうアスハに向けて叫んだ。

「フン、どいつもこいつも死にたがりやがつて……。いいだろう!」

アスハは魔導人機を操作すると、統夜の胸ぐらを掴み、統夜を持ち上げた。

「やーくん!!ダメだよ!!このままじゃやーくんが!!」

「……大丈夫だ、唯……。俺は……。必ずお前らを……!」

統夜はここまで痛めつけられても、最後まで諦めてはいなかった。

「フン!目障りだ!2度と喋れないよう、その首、掻っ切つてやる!!」

アスハは魔導人機の力で、統夜の首を斬り落とし、殺そうとしていた。

それを実行しようとしたその時だった。

『……さつきから聞いていれば、いい加減にして下さい!!』

突如、スピーカーから梓の劍幕が聞こえてきた。

「あ、梓……?」

「あ、あずにゃん!?!どうして……?」

唯は梓が別の場所にいることに驚き、統夜はイルバの策の成功を確信して笑みを浮かべていた。

「!?あのチビか!!いつの間に移動しやがった!?!」

アスハはようやくやくこここで、梓がイルバと共に超音波の発生源を破壊するべく動き出したことに気付いたのであった。

『あなたはただ気に入らない人を消そうとしてるだけでそこら辺の不良と何ら変わりはありません!』

「くそっ!見張りもやられたのか!役立たずのスクラップが!!」

念のために配置した号竜人が破壊されたことを知り、舌打ちを打っていた。

『……色々あなたに言いたいことはありますが、特に言いたいことが1つあります!』

梓はこのように話を切り出すと、深呼吸をしていた。

そして……。

『私の大切な先輩を……。これ以上……。いじめるなあ!!』

梓がこう絶叫したその時、スピーカーから何かが壊れる音が聞こえた。

イルバがメインコンピューターを魔導火で破壊したのである。

その結果……。

「……!!今だ!」

統夜は一瞬の隙をついて魔導人機の拘束から脱出して、魔戒剣を回収しようとした。

「!!しまった!だが、やらせるかよお!!」

アスハは統夜を逃してしまったが、すかさず統夜目掛けてパンチを放った。
「……!? ダメだ! かわせねえ!」

ダメージが大きかったからか、まともな回避行動が取れなかった。
魔導人機の拳が統夜に迫ろうとしていたその時だった。

——ヒュン!!

どこからか、手裏剣のようなものが飛んでくると、それは魔導人機の体を斬り裂いた。
「くっ……!」

そのダメージがあったからか、魔導人機は動きを止めた。

その隙を見逃すことなく、統夜は魔戒剣を回収した。

そして統夜は唯たちのもとへ駆け出すと、拘束しているものを魔戒剣で斬り裂いた。
「やーくん!! 良かった! 良かったよお!」

唯は統夜に抱きつこうとするが、統夜はそれをかわした。

「唯、それは後にしてくれ。……先生! みんなを頼みます!!」
「わかったわ! さあ、みんな、早く!!」

さわ子は唯たちを安全な場所まで誘導すると、唯たちはその場所まで駆け出した。

統夜は魔戒剣を構え、唯たちの安全を確保していた。

「くそっ……! あれは……! 円参か……! 影の魔戒騎士……! コソコソすることしか能の

ない臆病者が……！」

アスハは、統夜を救うかのように飛んできた手裏剣のようなものが影の魔戒騎士が所持している円参と呼ばれるものであることを理解していた。

それを知り、影の魔戒騎士と呼ばれる者に対して怒りを向けていた。

その隙に、唯たちはさわ子と共に安全な場所まで移動することが出来た。

「さて……い……い……から反撃開始だぜ！」

統夜は不敵な笑みを浮かべると、魔導人機を睨みつけた。

統夜が反撃の体勢を整えた頃、先ほど戒人を救った漆黒のコートの男が、少し前に放った手裏剣のようなもの……円参を回収した。

「……」

そして男は、統夜の戦いをジッと見守っていた。

『……ねえ、クロウ。あの子を助けに行かなくてもいいの？』

男が黙って統夜の戦いを見守っていると、突如若い女性のような声が聞こえてきた。

「……反撃のお膳立てをしたんだ。私がこれ以上手を下す必要はない」

『ただどクロウ、あのデカブツに乗ってる奴って元老院に討伐か捕獲を依頼されたターゲツトでしょ？ 私たちも手助けした方がいいんじゃないの？』

「……あの小僧が奴を倒せなければ私が倒すだけだ。だが、あの小僧なら奴を倒すだろう。だから私は自ら手を下しはしない」

クロウと呼ばれる男は、統夜の実力を信じているのか、姿を現して応援することはせず、統夜の戦いを見守ることにした。

そして、統夜はここから魔導人機に向けて反撃を始めるのであった。

統夜と魔導人機……。果たして勝つのはどちらになるのか？

……続く。

——次回予告——

『やれやれ、一時はどうなるかと思ったが、どうにかなったな。統夜、ここから反撃だぜ』

！次回、「銀狼 後編」。ド派手な一撃、お見舞いするぜ！！』

第66話 「銀狼 後編」

魔導人機に対して反撃の体勢を整えた統夜は、魔導人機を睨みつけていた。

「次から次に余計な邪魔が……いっつで死にやがれ!!」

アスハは魔導人機を操作し、両手を統夜目掛けて飛ばした。

「……!!」

統夜は魔戒剣で両手のロケットパンチを防ごうとしていた。

両手のロケットパンチが統夜に迫ろうとしたその時だった。

魔導人機の両手に銃弾のようなものが着弾すると、弾が爆発し、ロケットパンチの軌道が大きくそれてしまった。

「……お前！俺のことを忘れてもらっちゃ困るぜ!!」

銃を発砲し、ロケットパンチの軌道をそらしたのは、魔導人機の攻撃を受けて気を失っていたアキトだった。

「……アキト！無事だったか？」

「当たり前だろ？俺の体の丈夫さをなめんなよ……それよりもお前が大丈夫か？ずいぶんと派手にやられたみたいだけど」

アキトは統夜が魔導人機によってボロボロにやられたのを知り、驚いていた。

「ああ、あちこち痛いのが、問題ない。……それよりも、負ける気がしない！」

様々な人の手助けのおかげで魔導人機への反撃を始めようとしていたのだが、統夜は自信に満ちた表情をしていた。

その時だった。

「……先輩方！」

イルバと共に超音波の発生源を破壊というフラインプレーを見せた梓が戻ってきた。

「……あずにゃん!!」

「梓ちゃん、お手柄よ！あなたのおかげで統夜君は……」

「い、いえ……。私は統夜先輩の力になりたい一心でしたから……」

梓は統夜の力になりたい。その一心で吹き飛ばされたイルバを回収し、イルバと共に超音波の発生源を破壊した。

しかし、アスハはその兵器を破壊した梓を許すことは出来なかった。

「……不覚だ！そのチビも一緒に捕らえておくべきだった！」

アスハは、梓を統夜の伝言係にしたことを後悔していた。

「貴様だけは殺してやる!!」

アスハは、余計な邪魔をした梓を始末するために、魔導人機を梓の方へと向けた。

「……………やらせるかよ!!」

統夜は魔導人機目掛けて魔戒剣を一閃し、アキトは魔戒銃を発砲してアスハの視線を梓からそらした。

「おのれ……………!邪魔するな!」

「そうはいかない!俺はみんなを守る!お前の好きにはさせない!」

統夜はこのように言い放ち、魔導人機を睨みつけた。

「……………!統夜先輩!!」

統夜の言葉は恥ずかしかったが、梓はそれをスルーして、イルバを統夜目掛けて投げた。

梓のパスは絶妙な位置に来ており、統夜はイルバをキャッチすると、指に嵌めた。

「……………イルバ!」

『……………統夜、待たせたな!』

イルバも統夜のもとに戻り、反撃の準備は完全に整った。

その時だった。

「統夜!!無事か?」

ヘラクスと号竜人の軍団を相手にしていた戒人と大輝が統夜の応援に駆けつけた。

「戒人!大輝さん!!」

「どうやら、無事のようだな」

「ええ、大輝さんと戒人も！」

「こつちは問題ない。頼りになる助っ人が来てくれたからな」

「助っ人？」

統夜は戒人の言葉に首を傾げていると……。

「統夜君、久しぶりですね！」

「れ、レオさん!?!」

戒人と大輝の助っ人がレオだったことに、統夜は驚いていた。

しかし、それは統夜だけではなく……。

「し……師匠!? どうしてここに？」

アキトも自分の師匠であるレオが現れたことに驚いていた。

「僕も一連の事件の黒幕がアスハ法師だと突き止めたんですよ。それで、イレス様に唯さんたちがさらわれたと聞きましてね、僕も応援に駆けつけたのです」

「そうだったのか……」

「アキト、使命を果たしながらよく統夜君たちのサポートをしてくれましたね。ありがとうございます」

「そんな、俺は当たり前のことをしたんだから師匠が例を言うほどじゃないよ……」

アキトはこのように答えていたが、内心はレオに褒められて嬉しかった。

「とりあえず、僕たちがすべきなのは……」

レオはこのように呟くと、魔導人機を睨みつけた。

「あいつを止めることですね!」

レオの言葉に呼応するかのように、魔導人機が統夜たちに立ちはだかった。

「フン、また魔戒騎士が増えたか!だが、どれだけ数を束ねようと、俺の魔導人機の力ではない!」

「それはどうでしょうね!」

レオは、魔戒剣を取り出すと、魔導人機の前に立った。

「!貴様は、布道レオか……。魔戒騎士としても魔戒法師としても中途半端な半端者みたいだな」

アスハは、レオのことをこのように評価していた。

「てめえ!師匠を馬鹿にする奴は俺が許さんぞ!!」

レオが馬鹿にされたことに対して、真っ先に怒っていたのは、本人ではなくアキトだった。

「アキト、いいんです。アスハ法師の言ってることは間違っていないですから」

「!だけど、師匠……」

「僕は魔戒騎士としても魔戒法師としても半端者です。ですが、こんな僕だからこそ出来ることがあると思っています」

このように語るレオは、己の信念を揺るぎなく貫いていた。

「ですが、あなたは私怨で魔戒騎士を滅ぼそうとしているだけではなく、兄さんの魔導具を好き勝手に悪用している……。それは、許してはけません!!」

普段は穏やかなレオであるが、今のレオはここにいる誰よりも怒りに震えていた。

そして、その怒りを闘志に変えていた。

「フン、だから俺を倒すか? いいだろう。この際貴様にも見せつけてやるよ! 俺の作りし魔導具の方が貴様や布道シグマの作りし魔導具より優れているということをな!」

「そんなことはさせない! 俺が……。俺たちがここで、貴様の野望を止める!!」

統夜は魔戒剣を力強く握りしめると、魔導人機を睨みつけた。

「戒人! アキト! 大輝さん! レオさん! 行こう! 俺たちで奴を止めるんだ!」

「ああ! もちろんだ!」

「言われなくても、師匠を馬鹿にしたあいつは許せないからな!」

「これ以上、奴の好きにさせる訳にはいかないからな!」

「みんなで止めましょう!! あいつを!!」

統夜たちは、それぞれの武器を構えると、魔導人機を睨みつけた。

「……元魔戒法師のアスハ!! 全ての魔戒騎士を滅ぼそうという傲慢に満ちた貴様の陰我……俺たちが断ち切る!」

統夜はアスハに向けてこのような宣言をすると、唯たちは統夜たちの迫力に圧倒されていた。

「やーくん……」

「それにしても、統夜君がああの言葉を使うと、不思議と何とかなる気がするのよね……」
「そうだな、それはあたしも思ったよ」

「ああ、あの言葉は本当に頼もしい言葉だよな!」

「そうね。だからこそ、私たちは信じましょう! 統夜君たちの勝利を!」

「……統夜先輩……頑張って!」

唯たちは統夜の言葉に安心感を抱いており、統夜たちの勝利を信じていた。

そして、アキトを除く4人は、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、4人はそれぞれの鎧を身に纏った。

大輝は、銅の輝きを放つ「鋼」の鎧を身に纏った。

戒人は、紫の輝きを放つガイアの鎧を身に纏った。

レオは、ガイアとは異なる紫の輝きを放つ狼怒の鎧を身に纏った。

そして統夜は、白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

「…………行くぞ!!」

「「「おう（はい）!!」」」

統夜たちは、魔導人機目掛けて一斉に攻撃を開始した。

「……………いつはとっておきだぜ!」

アキトは、魔戒銃にとある弾を装填した。

その後、魔導筆を取り出すと、魔戒銃の銃口に術を放ち、その後、その力を解き放つかのように発砲した。

魔戒銃から飛び出した銃弾は、魔導人機の体に着弾すると、爆発した。

しかし、その威力は格段に上がっており、魔導人機はその衝撃で後ろに下がってしまった。

アキトの放った一撃はあまりに強力で、その衝撃に耐えられなかった魔戒銃は壊れてしまった。

「くそっ、壊れたか!だが…………」

魔戒銃が壊れたことは残念だったのだが、アキトはこの一撃こそ次の攻撃に繋がると確信していた。

アキトの作ってくれた隙を無駄にしないために大輝、レオは連続で剣による攻撃を叩き込んだ。

続けて統夜と戒人もそれぞれの剣を一閃し、魔導人機を吹き飛ばした。

「ぐうう……!!馬鹿な!心滅獣身と互角の力を持つハズの魔導人機がパワー負けしているだ?!」

アスハは、予想を遙かに上回る統夜たちの猛攻に驚いていた。

「いくら心滅に似せたって、それは所詮偽物の力だ!」

「統夜君の言う通りです!僕たちは守りし者として、強い思いがあればいくらでも強くなれます!いくらデータを並べたって、人間の無限の可能性は越えられないのです!!」

「……っ!」

「レオのやつ、今日は随分と熱いな……」

「……ここまで熱い師匠は俺も初めて見た……」

レオは、かつての兄のように魔戒騎士を滅ぼそうとしているアスハに思うところがあつたのか、珍しく熱くなっていた。

それは、1番弟子であるアキトも見ることがない一面で、アキトも驚いていた。

「……ククク……ハアーツハツハツハ!!」

アスハは統夜たちに追い詰められてるハズなのだが、高笑いをしていた。

「……もういい、わかった。これを使う気はなかったんだが……。この建物ごと、てめえらまとめて吹き飛ばしてやるよ!!」

アスハはこのように宣言すると、魔導人機の胸が解放し、そこから銃身のようなものが飛び出してきた。

「こいつはイデアの主砲を解析して作ったんだ！その威力はイデアより劣るが、ここ一帯を吹き飛ばすには充分だ!!」

アスハは、魔導人機の主砲のエネルギーチャージを始めると、勝ち誇ったかのように高笑いをしていた。

「……何が強い想いだ！何が人間の可能性だ！そんなもん、強大な力の前には無意味なんだよ！てめえらに、この主砲は破れないんだからな!!」

魔導人機の主砲は、イデアの主砲より威力が落ちるとはいえ、魔戒騎士がこの主砲を防ぎ、被害をゼロにすることは不可能に近かった。

アスハはこの主砲の力で、黄金騎士牙狼や、銀牙騎士絶狼など力のある魔戒騎士を葬るつもりだった。

「……俺は絶対に諦めない！絶対に主砲を防いでお前を倒す!!」

統夜たちは、魔導人機の切り札を使われて絶体絶命だったのだが、統夜は最後まで諦めていなかった。

魔戒剣を構えてエネルギーチャージを行っている魔導人機を睨みつけていた。

……その時、不思議なことが起こった。

統夜はこう告げながら、号殺剣を手に取った。

そして、号殺剣の切っ先に赤い魔導火を纏わせ、烈火炎装の状態となった。

「……統夜！俺の力も使ってくれ！」

戒人は、堅陣剣の切っ先に黄緑の魔導火を纏わせて、烈火炎装の状態になると、その黄緑の魔導火を号殺剣の切っ先目掛けて放った。

このことで戒人の烈火炎装は解除されたのだが、号殺剣の切っ先には、赤と黄緑という2つの魔導火が纏われていた。

「統夜……いつも持っていていけ！」

アキトは、雷の法術を号殺剣の切っ先目掛けて放った。

すると、号殺剣の切っ先には2つの魔導火だけではなく、青い稲妻も纏われた。

この状態は「双炎電装（そうえんでんそう）」。2つの魔導火と青い稲妻が合わさったことにより出来た攻撃形態で、アキトと戒人の協力のおかげで、統夜はこの状態になることが出来た。

統夜が双炎電装の状態になったのと同時に魔導人機の主砲のエネルギーチャージが完了した。

「さらばだ、魔戒騎士ども！この一撃で地獄に落ちるがいい！」

「そんなこと……させるかよ!!」

アスハが魔導人機の主砲を発射させたのと同時に統夜が魔導人機目掛けて駆け出し、魔導人機の放った主砲を、双炎電装の状態の号殺剣で受け止めた。

これだけ攻撃面を強化しても、魔導人機の主砲を受け止めるのが精一杯で、統夜はパワー負けしないように踏ん張っていた。

「ぐう……ぐうう……」

「ほお、主砲を受け止めたか。しかし、いつまで保つかな？」

アスハは、魔導人機の主砲を受け止められたことには驚いたが、それを長いこと維持することは出来ないと予想していた。

「統夜……!!」

「統夜君!!」

「統夜先輩！負けないで!!」

「やーくん、頑張って!!」

唯たちの声援が統夜の力になっていたのだが、統夜は魔導人機の主砲の威力に耐えられず、少しずつ後ろに下がるのだが、統夜は必死に堪えていた。

『統夜！気合を入れろ!!そうでなければ、みんなやられるぞ!!』

「わかっ……てるよ!!」

統夜はイルバに言われるまでもなく、気合を入れていた。

その甲斐があつてか、少しではあつたが、前に進むことが出来た。

「うおおおおおおお!!」

統夜はまるで獣のような咆哮をあげながら魔導人機の主砲に耐えていた。

すると……。

——パライイイン!!

「ぐっ!!」

統夜の身に纏っている奏狼の鎧にもダメージが蓄積され、狼の形をした顔の鎧の一部が壊れてしまった。

「ああ!?!」

「う、嘘だろ!?!」

「と、統夜君の……」

「鎧が碎けるなんて……」

「統夜先輩……!!」

「やーくん!!」

唯たちは、統夜の鎧の一部が壊れたことに驚いていた。

「うわああああああああああ!!」

統夜はそれでも諦めることなく、魔導人機の主砲を受け止めていた。

「こいつ……。しぶといじゃないか……。いい加減くたばれ!!」

アスハは主砲の出力を徐々に上げていたのだが、統夜はそれに耐えていたので、業を煮やしたアスハは出力を最大にした。

「!?ぐうう……」

魔導人機の主砲を受け止めているその衝撃はかなりのもので、奏狼の鎧は限界に近かった。

しかし……。

「負けて……たまるかああああああああああ!!」

統夜は再び獣のような咆哮をあげていた。

そして……。

——パライイイン!!

魔導人機の主砲が最大出力に耐えられずに壊れるのと、号殺剣が粉々に砕け散るのは同時だった。

「!!? やったか!?!」

「だけど、統夜の剣が!」

「大丈夫です! 問題ありません……」

「だって、統夜の手にはまだ……」

「」「皇輝剣があるから!!」「」

統夜は、号殺剣が砕け散ると同時に皇輝剣を手に取り、烈火炎装の状態となった。

「行けえ!! 統夜!!」

「ぶちかませ!」

「これが最後の一撃です!」

「確実に決めろ!!」

「統夜!!」

「統夜君!!」

「統夜先輩!!」

「やーくん!!」

この場にいる全員の声援が、統夜の耳に響き渡った。

「これで……終わりだああああああああ!!」

統夜は獣のような咆哮をあげながら魔導人機に接近すると、魔導火を纏った皇輝剣を一閃した。

その一撃を受けた魔導人機は、中にいるアスハごと真つ二つに斬り裂かれた。

「がはっ!!……ば、馬鹿な……!俺の……魔導……人機が……!こんな……小僧に……!」

「俺はただの小僧じゃない!!」

「!!?」

「我が名は月影統夜!白銀騎士奏狼の称号を受け継いだ、魔戒騎士だ!!」

「ぐわああああああああ!!」

統夜が高々と自らの名前を宣言すると、魔導人機は、爆発を起こして消滅した。

魔導人機と共に体を斬り裂かれたアスハの体も魔導人機の爆発で共に消滅し、アスハは自身の最高傑作である魔導人機と運命を共にした。

「……………っ！」

統夜は鎧を解除すると、ダメージが相当なものだったのか、その場で膝をついていた。

「統夜!!」

「統夜君！」

戒人、大輝、レオの3人は、鎧を解除すると、思わず声をあげた。

「統夜！」

アキトも、統夜の体を案じて声をあげた。

そして……………。

「統夜!!」

「統夜君！」

「統夜先輩！」

「やーくん!!」

唯、律、漣、紬、梓の5人が統夜に駆け寄り、膝をついた統夜を支えていた。

「統夜、やったな！」

「まあ、相変わらず無茶はしてくれたけどな……………」

「アハハ……………返す言葉もないよ……………」

漣に痛いところを突かれた統夜は苦笑いをしていた。

「本当なら無茶すぎだつて怒るところですけど、今回は特別に許してあげます」

「アハハ……そうしてくれると助かるよ……」

「やーくん！無事で良かったよお！本当に心配したんだからね！」

「ごめんな、心配かけて……」

「だけど、統夜君が無事で本当に良かったわあ！」

「心配かけたな。俺は、みんなが無事で本当に良かった……」

統夜は満身創痍になりながら唯たちを救えたことに安堵して、優しい表情で微笑んでいた。

すると……。

「[[[[……!!////]]]]」

優しく微笑む統夜の表情にドキツとしたのか、唯たちの顔が一斉に真っ赤になっ

た。

「……？みんな、どうして顔が赤いんだ？」

唯たちが何故顔を真っ赤にしているのかわからず、統夜は首を傾げていた。

「やれやれ……」

「統夜君は相変わらずみたいですな」

統夜たちのやり取りを見ていたレオは苦笑いをしていた。

「とりあえず、これで一件落着だな」

「そうですね。まずはこのことをイレス様に報告しないと……」

大輝たちは、統夜の応援をアキトに頼まれた時に、イレスからアスハの討伐もしくは捕獲の指令を受けていた。

そのため、戒人はすぐにでも番犬所に戻って、イレスに指令を成し遂げたことを報告しようと思っていた。

「統夜！番犬所へは俺たちが報告しておくから、お前はゆつくりと体を休めてくれ！」

「あ、ありがとな、戒人……。そうさせてもらうよ……」

魔導人機との戦いでかなり消耗していた統夜は、戒人の申し出をありがたく受けることにした。

「統夜先輩、立てますか？」

「すまん、思うように動けなくてな……」

「それじゃあ私たちが支えますから、ゆつくりでもいいので立ちましよう」

統夜は唯たちに支えられながらゆつくりと立ち上がった。

「統夜、その傷じゃバイクは使えないよな？お前のバイク借りるから、お前の家の前にバイクは置いとくよ」

「すまない。頼めるか？」

「ああ、任せとけて！」

「アキト！僕も行きます！」

アキトがヘルメットを被ったタイミングで、レオがバイクに駆け寄り、予備のヘルメットを被った。

そしてアキトとレオが統夜のバイクに乗り込むと、バイクを走らせて、その場を後にした。

「さわ子先生。大輝さんと戒人さんを 番犬所の近くまで送ってあげて下さい」

「それは構わないけど、あなたたちはどうするの？」

「大丈夫です。問題ありません」

紬の言葉にさわ子が首を傾げていると、紬は携帯を取り出し、誰かに電話をかけた。

「……あつ、もしもし斎藤？大至急車を出してちょうだい。私たちは○△研究所の中にいるから。……ええ。お願いね」

紬が電話をかけたのは、琴吹家の執事である斎藤だった。

「……これで今から迎えが来るので、問題ありません♪」

「そ……そう？それじゃあ私は桐島さんと戒人君を送っていくわね」

とりあえず迎えが来ることがわかると、さわ子は大輝と戒人を乗せて、番犬所の近くまで送ることになった。

「ほら、桐島さん、戒人君！行くわよ！」

「わ、わかった」

「すみません、お願いします」

大輝と戒人がさわ子の車に乗り込むと、さわ子は車を発進させて番犬所の近くへと向かっていった。

統夜たちは、走り去るさわ子の車を見送っていた。

アキト、レオ、大輝、戒人、さわ子がいなくなったことで、この場には統夜たちしかない状態となった。

「統夜先輩、痛みますか？」

「ああ……。今になって痛みがひどくなってきたよ……」

統夜は魔導人機と戦った時にかかなりのダメージを負ってしまったが、統夜はどうかそれを堪えて魔導人機を討伐した。

そのダメージが今になって統夜を襲い、自力で立つことも出来ない状態になっていた。

「悪い、どこか座れるところで休ませてくれないか？さすがに疲れたからさ……」

「そうね。斎藤が来るまでまだ時間があるし、ゆっくり休んでちょうだい」

唯たちは統夜を近くの椅子に座らせると、統夜はダメージと疲労でぐったりとしてい

た。

唯たちも統夜のそばに腰を下ろすと、斎藤が来るまで待つていた。

そして1時間後……。

一台のリムジンがこちらにやって来た。

「……統夜君、来たわよ！」

「ああ……」

統夜は唯たちに支えられながらゆっくりと立ち上がり、斎藤が運転席から出てきた。

「……細お嬢様、お待たせしました」

「ありがとう、斎藤。彼はだいたいぶ消耗してるの。速やかに車に乗せるわ」

「かしこまりました」

斎藤は急いでリムジンのドアを開けると、統夜は唯たちに支えられながらリムジンに

乗り込み、唯たちもリムジンに乗り込んだ。

「……斎藤！ 琴吹総合病院に向かってちょうだい」

「かしこまりました」

細は斎藤に行き先を告げると、斎藤はリムジンを琴吹総合病院に向けて発進させた。

「……病院って、こんなの1日寝れば治るぜ？」

「ダメです！ 統夜先輩ひどいケガなんですから、大人しくゆっくりして下さい！！」

「……そうだな。イレス様への報告は戒人たちに任せて病院で休ませてもらうよ……」
 統夜は梓の剣幕にたじろいでしまい、病院で休むことを素直に了承するしかなかった。

「……統夜、完全に梓の尻に敷かれてるな……」

「むうう……。やーくんはあずにゃんがいいのかなあ……」

濡は梓が統夜を叱っているのを見て啞然とし、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「あらあら、統夜君ってば、いつの間に梓ちゃんと仲良くなったのかしら♪」

「……」

紬と律は、どす黒いオーラを纏った状態で統夜を睨みつけたいた。

《……統夜、紬と律がおっかない顔でお前さんを睨んでいるぞ》

(?何でだろう?)

《やれやれ……。こんな状態でもお前さんは相変わらずだな……》

相変わらず鈍感な統夜に、イルバは呆れていた。

こんなやり取りがありながらも、統夜たちを乗せたりムジンは、琴吹総合病院に到着した。

統夜たちが病院に到着すると、医者や看護師たちが既にスタンバイしており、統夜は医者や看護師たちにより、ストレッチャーに寝かされ、そのまま治療室へと連れていか

れた。

唯たちは、その様子を見守るためにストレッチャーについていき、治療室の前で統夜の治療が終わるのを待っていた。

統夜の治療で手術が行われるようなことはなかったが、検査の結果、肋骨が折れていたり、内蔵にダメージがあるなど、一般人なら命の危険があっても可笑しくないレベルだった。

医師は安静が必要と判断し、統夜に入院するよう強要した。

統夜はそれを断ろうとしたのだが、どす黒いオーラを放った紬に睨まれて、渋々入院を了承した。

こうして、アスハが引き起こした事件は解決し、統夜は琴吹総合病院に入院することになった。

統夜たちと魔導人機との激闘は、統夜たちの勝利で幕を降ろしたのであった。

……続く。

—— 次回予告 ——

『どうにかアスハの事件を解決したのはいいが、俺たちは、もう1つの問題を抱えていたとはな。次回、「再来」。DEATH DEVILがここに覚醒する!!』

第67話 「再来」

統夜たちは、アスハの開発した魔導具である魔導人機を破壊し、アスハの全ての魔戒騎士を滅ぼすという野望を阻止した。

戒人と大輝は、番犬所の近くまでさわ子に送ってもらうと、そのまま番犬所へと向かった。

「……戒人、大輝。無事戻ってきたようですね」

「はい、イレス様」

戒人と大輝はイレスに一礼をしていた。

番犬所には既にアキトとレオの姿があり、2人は統夜の家にはバイクを置いてからこの番犬所を訪れたのである。

「……ところで、統夜はどうしたのですか？」

「統夜は、アスハとの戦いでだいぶやられましたね、今頃は病院にでも連行されてるかもしれないですね」

戒人は、統夜がアスハとの戦いで負傷したことを伝えた。

「そうですか……。統夜はそれだけ酷くやられてしまったのですね……」

「ですが、統夜君の活躍があったからこそ、アスハの魔導具である魔導人機を破壊し、アスハを討伐することが出来たのです」

統夜がやられたと聞いてイレスは心配していたが、レオが統夜の活躍ぶりをイレスに報告していた。

「そうですか。アスハ法師を討伐したのですね」

「ああ。あの状況で捕らえるのは厳しかったからな……」

アキトは、アスハとの激闘を思い出しでこのように呟いていた。

「そうでしたか。とりあえず、アスハ法師の魔戒騎士を滅ぼすという野望は阻止出来たのですね？」

「ええ。あの男が悪用していた魔導具も全て殲滅しました。これで、一連の事件は解決したと言えます」

レオは、一連の事件の黒幕であるアスハが倒れたことにより、アスハの起こした事件の全てが解決したことをイレスに告げた。

「事件が解決したということは、アキトは元老院に戻るのか？」

「まあ、そういうことになるかな？桜ヶ丘は良い街だから去るのは名残惜しいがな」

アキトは元老院付きの魔戒法師であるため、元老院から与えられた仕事が解決したら、元老院に帰らなくてはならないのである。

「そっか、お前みたいにやかましい奴がいなくなると寂しくなるな」

「やかましいは余計だぜ、大輝のおっさん！」

「だからおっさんはやめろ！」

アキトと大輝のこのようなやり取りも、定番化し始めていた。

「確かに、寂しくなるな……」

「か、戒人までよせよ！ 恥ずかしい！」

アキトは照れ隠しに笑いながら戒人の肩をバシバシと叩いていた。

「……アキトは、みんなに慕われているのですね……」

レオは、アキトがその持ち前の明るさで、統夜だけではなく戒人や大輝にも慕われていることを垣間見て、笑みを浮かべていた。

「まあ、俺はこの街が気に入ったしな、ちよこちよこ遊びに来るさ」

アキトが桜ヶ丘にいた期間は短かったものの、桜ヶ丘の雰囲気がとても気に入っていた。

元老院に戻ることを決めたアキトだが、指令とは関係なしに桜ヶ丘に遊びに行くつもりでいた。

「とりあえずアスハ法師の件はわかりました。みんな、良くやってくれましたね」

イレスはこの場にいる全員に労いの言葉をかけた。

「とりあえず今日はゆっくり体を休めて下さい」

「はい、そうさせてもらいます」

「そうだな、しばらく統夜は休まなきゃいけないだろうし、その間は俺と戒人で頑張らな
いとな」

「はい！」

戒人と大輝は、アスハとの戦いでだいぶ消耗した統夜の分まで騎士としての使命を果
たそうとしていた。

「まあ、統夜が回復するまでは俺も手伝うから、元老院に帰るのはそれからかな」

アキトは今すぐ元老院に戻る訳ではなく、統夜が回復するまでは桜ヶ丘に残るつもり
でいた。

「僕は一足先に元老院に戻らせてもらいます。グレス様に一連の事件の報告もしなけれ
ばいけないので」

レオはグレスに報告するために先に元老院に戻ることにした。

「そうか。レオ、元気でな！」

「はい！今度はサバツクの時に会うと思いますので、その時を楽しみにしています！」

レオはそう言い残すと、番犬所を後にした。

レオが帰った直後に戒人たちも解散し、それぞれの家へと帰っていった。

※※※

激しい死闘の末、魔導人機とアスハを討伐した統夜は、唯たちに支えられながら紬の秘書である斎藤の運転で琴吹総合病院に向かった。

そこで治療を受けた統夜は、入院することになった。

そして翌日、統夜は学校を休んで病院で休んでいたのだが……。

「……暇だ……」

普段は魔戒騎士として毎日忙しく歩き回っている統夜だったが、ベッドで大人しくしているというのは性に合わなかった。

とりあえず統夜は暇つぶしを兼ねて昨日紬から預かったCDを紬が用意してくれたウオークマンで聴いていた。

統夜のいる病室は、普段は有名人や政治家などが入院する時に使われるVIPルーム

であり、病室であるにも関わらず、テレビや冷蔵庫など、様々な機材が充実していた。

統夜が聴いているCDは、さわ子が軽音部時代に組んでいたバンド「DEATH DEVIL」の曲だった。

「……………うわ、難しいな……………。短い練習時間でこれをやれと言うのか……………」

今聴いている曲はとても難しい曲で、短時間で覚えるのは困難だった。

統夜は昨日、唯たちから紀美と協力して結婚式の二次会でDEATH DEVILの曲を演奏するということは聞いていた。

そのため、統夜は退屈な病室でDEATH DEVILの曲を聴いて勉強していた。
しかし……………。

「……………やっぱり退屈だ……………！」

統夜はベッドでジツとしているのがあまりに苦痛だったから、ベッドから飛び出し、魔法衣を羽織った。

『おいおい、統夜。どこへ行く気だ?』

「決まってるだろ? 体を動かさしに行くんだよ」

『統夜、体はもういいのか?』

「まだ少し痛いけど、体を動かすのには支障はない」

統夜は一晩ぐっすり眠っただけで、ダメージは多少は回復していた。

完全に完治していないため、まだ痛みは残っていたが、歩き回るには充実だった。

『まったく……。お前さんの回復力の早さは知っているが、もうちよつと安静にしてた方がいいんじゃないのか?』

「それはそうかもしれないけど、このままじゃ体がなまっちゃまうよ」

『あまり無理はするな。サバックも近いんだからそれに支障をきたすぞ』

「うっ……。わかったよ」

イルバの指摘を聞いた統夜は外に出るのを諦めることにした。

そのため、魔法衣を脱ぐと、再びベッドに戻った。

「……………どうせ退屈なら今のうちに寝ておくか……………」

『その方がいいんじゃないか?』

統夜はベッドに寝転がると、今までの戦いの疲れを癒すために、眠りについた。

統夜はどうせ退屈ならと眠り続けたのが効いていたのか、2日間で傷はほとんど完治し、退院した。

退院した統夜は真っ先に番犬所に立ち寄り、一連の事件の報告と、自分が元気だということを伝えた。

イレスは統夜の回復を喜び、改めて一連の事件を解決したことへの労いの言葉を送った。

そして、明日から魔戒騎士の使命を行うように通達を受け、統夜は番犬所を後にした。そして翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行ってから学校へ登校した。統夜はいつものように教室に入ると、クラスメイトたちが一斉に統夜に押し寄せてきた。

「うお!?! な、何だ!?!」

「ねえねえ、月影君! 怪我は大丈夫なの!?!」

「あ、ああ……。なんとかな……。」

「心配したんだよ!?! 統夜君が交通事故に遭って入院したって聞いた時は」

「こ、交通事故?」

統夜は予想外の言葉を聞いて面食らっていた。

統夜は唯たちの方を見ると、「申し訳ない」と言いたげな仕草をしていた。

その時、統夜は、唯たちが入院したことを怪しまれないよう嘘をついてくれたことを察したのであった。

「そ、そうなんだよ。急に車が飛び出して来てな。咄嗟にかわそうとしたから直撃はしてないけど、怪我をしたから入院になったんだよ」

統夜は肋骨が折れたと話すと、回復が早過ぎないかと怪しまれると思い、具体的な怪我の程度は話さないで、交通事故に遭ったと話していた。

「もお！本当に心配したんだからね！」

「アハハ……。心配かけてごめんな。もう大丈夫だから」

統夜はもう怪我は治ったと伝えてクラスメイトたちを安心させた。

ちようどクラスメイトたちを安心させたタイミングでチャイムが鳴り、HRが始まった。

HRが終わると、統夜は唯たちのもとへ向かい、改めて自分が回復したことを伝えた。唯たちは統夜が回復したことに安堵し、和は「心配したのよ」と統夜を叱責していた。こうして統夜は回復し、そのまま放課後になった。

統夜が部室に入ると、梓が統夜の身を案じていた。

もう回復したことを伝えると、梓はホッとしていた。

こうして部活は始まったのだが、ティータイムを行いながら今度DEATH DEVILのメンバーと演奏する曲を聴いて勉強したり、その曲を練習したりしていた。しかし、それもさわ子に悟られないようにアンプは使わずに練習を行った。

※※※

そして、結婚式当日を迎えた。

さわ子は、一次会から結婚式に参加し、かつての仲間の結婚を祝福していた。

そして二次会となり、さわ子は今回結婚したかつての仲間であるミホコのもとへと向かった。

「おめでどう！」

「あ、さわ子」

「久しぶり！」

先ほどまでミホコに話しかけていた女性は、かつて統夜たちがライブしたライブハウスを経営している川上だった。

「ごめんね、演奏出来なくて。先生になっちゃうと色々あつてね」

「大丈夫♪ライブ、楽しみにしてるから」

「？」

ミホコの言葉の意味が理解出来ず、さわ子は首を傾げていた。

ミホコへ挨拶を済ませたさわ子は、周囲を見回した。

すると……。

「あつ、さわ子!!こつちこつち!!」

さわ子の同級生で、部活こそ違えど交流のあつた御月……ではなく、冴島カオルがさわ子を見つけてブンブンと手を振っていた。

「あーカオル!久しぶりじゃない!」

「うん!この前の学園祭以来だよねえ♪」

カオルとさわ子が再開したのは、去年の学園祭以来であつた。

カオルだけではなく、カオルの夫である鋼牙も出席しており、カオルの隣に座つていた。

「あつ、鋼牙さんも久しぶりね!」

「……ああ。お前も元気そうだな」

「それにしてもどうして鋼牙さんも?こういうところは苦手そうなのに……」

さわ子は鋼牙との交流は少ないが、鋼牙が人の多いところはあまり得意ではないということは予想出来た。

「まあ、そうなんだが、今回はカオルが心配だな」

「カオルが?……あつ!!」

さわ子は改めてカオルを見て、その変化に驚いていた。

その変化とは……。

「カオル！お腹大きくなってるじゃない！もうすぐ産まれるの？」

「うん、来月には産まれる予定なんだよね」

カオルは鋼牙との子供を身籠っており、間もなく産まれる予定だった。

「カオルがこの結婚式に行くと言ったらゴンザがえらく心配しててな。俺もついてきたという訳だ」

出産を来月に控えたカオルが結婚式に行くと言った時は、夫である鋼牙より、冴島家の執事であるゴンザの方が心配していた。

鋼牙がついていくと言ったことで、ひとまず安心したゴンザは、続いて妊娠しているカオルが着やすいドレスを探すのに奔走していた。

そしてそのドレスがどうにか間に合い、この日を迎えたのである。

「それにしても知らなかったな。カオルがこんな素敵な旦那さんがいるなんて」
「亜佐美も久しぶりね」

鋼牙やカオルと同じテーブルに座っている女性が口を開いた。

その女性……篠原亜佐美は、カオルの親友であり、カオルと同じく桜ヶ丘高校に通っていた。

現在は出版社に勤めており、カオルが画家として売れる前は、カオルに仕事を回した

り、金を貸したりと手助けをしていた。

酒といい男には目がなく、未だに良い縁とは巡り合えていない。

高校時代はカオルとも親交があった。

「さわ子！久しぶりね！今先生やってるんだって？」

「ええ、桜ヶ丘高校で先生をしてるのよ」

「ええ!?桜高の先生なんだ。あのキャサリンがねえ……」

亜佐美も高校時代のさわ子を知っているため、桜ヶ丘高校で先生をしているというに驚いていた。

「ということはこの後のライブに出るの？」

「ううん。それは断ったの。先生になっちゃうと色々あつてね」

「残念だなあ。キャサリンのギター、久々に聴きたかったのに……」

さわ子が演奏しないことを知り、亜佐美は本気で残念がっていた。

「……なあ、さつきから言ってるキャサリンって何なんだ？」

鋼牙はキャサリンと言われてもピンと来ていないのか首を傾げていた。

「あ、気になる？実はね……」

「もう！やめてっばー！」

このような話をしながら、さわ子は昔話なども交えつつ盛り上がっていた。

※※※

その頃、統夜たちは別室の控え室でこの後のライブの準備を行っていたのだが……。

「ギー太ああああああああ!!」

唯が愛用しているギターがデスマタルっぽく外見が改造されてしまい、唯は泣き出していた。

「泣くな! 余計に顔が怖い!!」

唯はデスマタルっぽいメイクを施されたのだが、唯が泣き出した時にメイクがおかしくなつてしまい、濡が怖がつていた。

「ええ? 私は割と好きなんだけど♪」

「ムギ先輩はやり過ぎです!!」

「あー、ちよつと部長さん! これ使って口から火を吹いてもらってもいい?」

紀美がいきなり無茶ぶりを言っていた。

「そ、それは……無理ですう!!」

律はそう言つて控え室を飛び出していった。

「……何で俺まで……」

今回、統夜たちだけではなく、何故かアキトもこのライブの手伝いに駆り出され、統夜同様にデスメタルっぽい衣装を着せられていた。

「まあ、お前も話を聞いたから共犯つてことなんだろうな」

「統夜の傷が治ったんだから元老院に戻る予定だったのに……」

アキトは今日元老院に帰る予定だったが、ライブの手伝いに駆り出されてしまったため、それを延長せざるを得なかった。

「まあまあ、そんなに急がずゆっくりとしてけよ」

統夜はブツブツと文句を言っているアキトをなだめていた。

「あー、そのこの2人!どつちでもいいけど、これ使つて口から火を吹いて欲しいんだけど」

「……」

紀美の無茶ぶりが2人に飛び火してしまい、2人は啞然としていた。

「……アキト、出来るか?」

「いや、無理。統夜は？」

「無理に決まってるんだろ……」

普段からホラーと戦ってる統夜とアキトはそれだけで充分あり得ないことをしているのだが、口から火を吹くというのはさすがに無理があった。

「ごめんなさい、無理です」

統夜とアキトはハッキリと断ると、紀美は残念そうにしていた。

こうして、どうにかライブの準備は整い、ライブ開始の時間となった。

『それでは、新婦と共に青春時代を歩まれた友人方のバンド、「DEATH DEVIL」によるライブを始めます』

司会がライブ開始の宣言をすると、会場から拍手が起こっていた。

『なお、本日は特別編成での登場です』

「特別編成？……って！ちよつと！」

さわ子は、DEATH DEVILのメンバー以外に統夜たちもステージに立ってい

ることに驚いていた。

「あ、あの子たち……。やだ、唯ちゃんと統夜君、そのギター……」

紀美と共にギターを弾くことになった唯と統夜のギターは、デスメタル仕様に改造されていた。

「な、何やってるのよ！」

ステージに立っている紀美と目が合うと、紀美はドヤ顔をしていた。

「わあ、統夜君、凄い格好だね！」

カオルはステージに立っていると派手な格好をしている統夜に反応していた。

「そうだな。それに、あの男は、確かレオの……」

「ああ、あの子って確かレオ君の一番弟子だっけ？何でこんなところにな？」

「さあな。だが、何か訳ありなんだろう」

鋼牙とカオルは、レオの一番弟子であるアキトの存在は知っており、このライブのステージに立っていることに驚いていた。

「へえ、あの子たちが今の軽音部なんだ……」

亜佐美も、唯たちの姿を見て、ウンウンと頷いていた。

『……………てめえら！今日はトバして行くぜ!!』

紀美の号令に、ステージの唯たちは「おお!!」と応じていた。

そして、激しいドラムから演奏が始まった。

今演奏している曲は冒頭から超絶技巧のため、唯は開始数秒で間違えてしまった。

『ああ!間違った……』

これにはさわ子もガクツと肩を落としていた。

「何やってるんですか!もお!」

梓の叱責が飛ぶのだが、既に手遅れだった。

《……統夜。お前さんも間違えただろう?》

(あ、バレた? やっぱりこの曲難し過ぎなんだよ!)

統夜もさりげなく間違ったことをイルバに見透かされ、曲の難しさに逆ギレしていた。

『す、すいません!もう1度最初から!』

気をとり直して最初から演奏しようとしたのだが……。

「……DEATH DEVIILっていうからどんなバンドかと思ったけど、結構可愛いね」

(!?か、可愛い!?)

近くにいた女性がこう話しているのに思わず反応してしまった。

「頑張れえ！DEATH DEVIL！」

「応援してるよ!!」

(お、応援!?)

今度は応援するという言葉に反応していた。

「ふふ、唯ちゃんたち、可愛いね♪」

カオルもこのように言っていたのだが、さわ子はその話は聞いていなかった。

すると、会場から「DEATH DEVIL」コールが響き渡っていた。

さわ子はそのコールを聞くと、プルプルと肩を震わせていた。

(……ち、違う！DEATH DEVILはこんなじゃない！もっとお互い魂をぶつ

け合う激しさこそがDEATH DEVILの真骨頂！)

さわ子は眼鏡を外そうとするのだが……。

(だ、ダメ！今の私は教師！あの時の魂はあの時に置いてきたの!!それに、私のために頑

張ってくれてるみんなに悪いわ……)

『いやあ、ごめんなさい。失敗失敗』

唯の喋りのせいで、会場は完全にふわふわした雰囲気になってしまっていた。

(違う……。DEATH DEVILは……！私が追い続けたDEATH DEVIL

は……。私の……！)

この瞬間、さわ子の中で何か切れてしまった。

《……！おい、鋼牙》

それを感じ取ったザルバが、鋼牙にテレパシーで声をかけた。

(どうした、ザルバ)

《これから面白いことが起きそうだぜ！ステージから目を離すんじゃないぞ！》

(面白いこと……?)

鋼牙はザルバの言葉に首を傾げていたが、ステージをジッと見ていた。

その時だった。

——プツン!!

急に会場の灯りが全て消えてしまった。

『え？な、何？どうしたの?』

唯は突然の出来事に動揺していた。

《……これはまずいことになったぞ、統夜》

(?まさか、ホラーか?)

《いや、ホラーではないのだが、下手したらホラーよりも恐ろしいかもな》

(ホラーより恐ろしいって……)

《とりあえず、これから起こることには決して目を離すなよ!》

(?)

イルバの言葉の意味が理解できず、統夜は首を傾げていた。

すると、コツンコツンとハイヒールの鳴る音が聞こえてきて、その音はステージに近づいてきた。

その音の正体はさわ子であり、さわ子はステージまで移動した。

そして、ステージに飛び移ると、その瞬間、会場の灯りが再びついた。

「さ、さわちゃん!」

まさかのさわ子の乱入に、唯は驚いていた。

「さ、さわ子?!いつの間にな?」

「カオル、久しぶりに来るよ!キャサリンが!」

さわ子の乱入にカオルは驚き、亜佐美はワクワクしていた。

さわ子は唯のギターを奪うなり、超絶技巧のギターソロを難なく弾かせてみせた。

そして……。

『てめえら……DEATH DEVILはこんなぬるつちい音楽じゃねえ！今……本物ってやつを見せてやる!!』

さわ子は眼鏡を外し、しばっていた髪も解くと、かつてキャサリンと呼ばれていたさわ子に戻っていた。

それを見た瞬間、統夜は邪魔になると考え、唯と共にステージ端に避難した。

(ま、まさか、まずいことつてこういうことなのか!?)

《ああ、()まで来たら俺たちでも止められないからな……》

(確かに……)

統夜は大人しくさわ子の演奏を聴くしかなかった。

さわ子が加わったことで、紀美はもちろんのこと、他のDEATH DEVILのメンバーの闘志にも火がついていた。

『……OK！行くぜえ!!』

紀美の号令で、再び激しいドラムが打ち込まれ、演奏が始まった。

その圧倒的な技術と存在感に、統夜たちは圧倒されていた。

「キャサリン!!」

「イェーイ!!」

さわ子と同じ軽音部だったメンバーは、両手を振り上げてノッていた。

それは新婦であるミホコも同様であり、そんな花嫁の姿を見た旦那も、同じようにノッていた。

「キャサリン!!」

そして、亜佐美も、DEATH DEVILの激しい演奏にノリノリだった。

「……………わ、私も……………」

「カオル!無理に激しい動きをしようとするな!体に障る」

カオルも亜佐美のようにノリたいと思っていたのだが、鋼牙に止められてしまった。

「……………はあい……………」

妊婦であると理解しているカオルは、諦めて足踏みをしてノるということにとどめた。

このノリは徐々に伝染していき、気が付けば、その場にいるほとんどの客が、DEATH DEVILの演奏にノリノリだった。

それは、ステージ端に立っている唯たちも同様だった。

「うっひよお!ノリノリだぜえ!!」

特にアキトはこの激しいノリに触発されてしまい、誰よりもノリノリだった。

「アハハ……………。アキト、お前なあ……………」

統夜は、そんなアキトに呆れながらも、自分自身も演奏にノリノリだった。

唯たちも演奏に聞き惚れながらもノリノリだった。

こうして、会場は1つとなり、魂を極限まで震わせたさわ子たちDEATH DEVILの演奏は終了した。

演奏を終えたさわ子は、最高の演奏をした高揚感に浸っていたのだが、しばらくすると、大事なことを思い出した。

そして……。

「……!!や、やつちやつたああああああああ!!」

「『『『『『やらせちやつた……』』』』』」

「？」

さわ子の叫びがごだまし、統夜たちはさわ子にギターを弾かせてしまったことを反省していた。

そして、アキトは訳が分からずに首を傾げていた。

こうして、結婚式の二次会のライブは、さわ子の本性を露わにしてしまい、幕を閉じた。

ライブ終了後、統夜は会場に来ていたカオルと鋼牙と話をしてから会場を後にしたのであった。



そして翌日の放課後……。

「……終わった……。ずっとずっと頑張っておしとやかなキャラで来たのに……」

さわ子は机に突っ伏すと、完全に落ち込んでいた。

「『『まことに面目ない……』』』』」

統夜たちは、とりあえずさわ子に謝罪の言葉を送っていた。

「……ふっ、いいのよ……。もとはと言えば……」

「そうだよ！ さわちゃんが勝手にキレイちゃんだもん！」

『全くだ。俺たちにも責任があるとはいえ、自業自得だな』

「……悪かったって言ってるでしょ……！」

さわ子は、ドス黒いオーラで、さわ子とイルバを睨みつけていた。

「『い、い、めんなさい……』』」

さわ子の放つオーラに怯えたのか、律とイルバはすぐさま謝罪していた。
すると……。

コンコンとドアをノックする音が聞こえてきた。

「はいー！」

「あ、あのー！さわ子先生……いますか？」

こう言いながら音楽準備室に入ってきたのは、1年生の子達だった。

「……え？」

さわ子は戸惑っていたが、1年生の子達はさわ子に写真を一緒に撮って欲しいと要求し、流れのまま写真を撮っていた。

何故このような状況になっているかがわからず、さわ子は啞然としていた。

「ありがとうございます！」

「昨日のライブすつごく格好良かったです!!」

「次も楽しみにしています!!」

1年生の子達はさわ子に一礼し、音楽準備室を後にした。

「……何故？」

さわ子は訳がわからず、啞然としていた。

「なあんだ。結局どのさわちゃんでも人気なんだ」

さわ子はおしとやかなキャラでも人気だったのだが、昨日のライブを見て、ファンになつた子達も大勢いた。

昨日の結婚式には桜ヶ丘高校のOGや新聞部、現役生徒も何人か来ていたので、さわ子のもう1つの一面は、瞬く間に広がっていった。

「しっかし、バンドってあれくらいやらないと印象に残らないのかねえ……」

「……そうねえ……」

「いやいや、さすがに俺たちのバンドの雰囲気には合わないだろう」

統夜は、昨日のライブを参考にしようとしている律と紬に待ったをかけたいた。

しかし、律は色々と考えており、この日は昨日のライブの話や、自分たちのバンドの印象を変える方法などを話して大いに盛り上がっていた。

こうして、統夜はアスハとの戦いの傷も癒え、当たり前前の日常に戻ってきた。

しかし、アスハの事件を解決したと言っても、統夜の守りし者としての戦いは終わりを告げた訳ではなく、むしろ始まりであつた。

……魔導人機襲来編・終

UA20000 記念作品 「師弟」

魔戒騎士を心から憎み、全ての魔戒騎士を滅ぼそうと企むアスハの野望を統夜たちの力によって阻止してから10日が経過した。

アキトは、元老院に戻って一連の事件についての報告を、グレスに済ませた。

アキトは、元老院の中にある自分の居住スペースで、先の戦いで壊れた魔戒銃の修理を行っていた。

「……」

アキトは真剣な眼差しで魔戒銃の修理に没頭していた。

しばらくの間、修理に没頭していたアキトだったが……。

「……？」

ふとアキトの目に入ってきたのは、レオが開発した号竜の設計図だった。

(……)これは、号竜の設計図か……。懐かしいな……。確か、師匠の開発した号竜があまりに画期的だったから……。俺は師匠に弟子入りしたんだよな……)

号竜の設計図を見たアキトは、懐かしさから笑みを浮かべていた。

そして、アキトは思い出していた。初めてレオと出会った日のことを……。

く過去編く

アキトは、魔戒騎士である父親と、魔戒法師である母親の間に産まれた。

アキトには兄がおり、アキトの兄は、魔戒騎士になるために毎日修行を積んでいた。

アキトは幼少の頃は、今のように明るい性格ではなく、内気な性格だった。

アキトは昔から手先が器用で、物作りをするのが趣味だった。

そんなアキトだったが、一人前の魔戒法師になるため、兄と共に修行に励んでいた。

アキトが16歳になった頃、とある事件が起こった。

布道シグマか全ての魔戒騎士に破滅の刻印を打ち込み、全ての魔戒騎士を滅ぼそうと企んでいたのである。

アキトの父も破滅の刻印を打ち込まれた。

アキトの父は他の魔戒騎士同様に破滅の刻印の効力で命の危機を迎えていたが、冴島鋼牙の活躍により、破滅の刻印は消滅した。

その後、布道シグマはギャノンに取り込まれてしまい、自らが作った魔導具のアイデアも、ギャノンに乗っ取られてしまった。

その後、冴島鋼牙を始めとした魔戒騎士たちは、アイデアを乗っ取ったギャノンを倒すために戦いを挑んだ。

その戦いに多くの魔戒騎士と魔戒法師が参戦したのだが、アキトの父もその戦いに参戦した。

こうして、冴島鋼牙を始めとする多くの魔戒騎士の活躍で、ギャノンはアイデアと共に討伐された。

その直後に、アキトは魔戒法師となった。

アキトがレオと運命的な出会いをしたのも、この頃だった。

アキトが魔戒法師になって1ヶ月が経ち、アキトはこの日も番犬所からの指令で、ホラー狩りを行っていた。

「はあっ!!」

アキトは魔導筆を素体ホラーに向けて法術を放つが、それは素体ホラーに軽々とかわ

されてしまった。

この頃のアキトは、魔戒法師として経験が浅かったこともあり、法術も体術もまだまだ未熟だった。

そのため、あつという間に素体ホラーに追い詰められてしまった。

「くそっ………こうなったら………」

アキトは、魔戒法師として修行をしながら趣味として魔導具作りをしていた。

その時に開発した爆弾のような魔導具を取り出そうとしたその時だった。

「………はあっ!!」

突然何者かが乱入し、素体ホラーを蹴りで吹き飛ばした。

「……大丈夫ですか?」

「あ、あんたは一体………」

「話は後です!君は下がってください。こいつは僕が倒します!」

乱入してきた男は、箱のようなものを地面に置くと、魔導筆を構えた。

「行きますよ!・コルト!!」

男は魔導筆から手綱のようなもの呼び出すと、それが箱に繋がると、箱の形は変わり、1メートルくらいの2脚の竜のような姿となった。

「!!?」

男の魔導具を見た瞬間、アキトの体に電流が駆け巡っていた。

魔導具作りを趣味としているアキトであったが、ここまで高性能の魔導具は見たことがなかったからである。

コルトと呼ばれた竜のような魔導具は、口から魔導火の火球を放つと、その一撃で素体ホラーを殲滅した。

「……よしーよくやりましたね！コルト！」

男がコルトと呼ばれた竜のような魔導具に労いの言葉をかけると、それは再び箱の姿に戻った。

「……」

男の魔導具が衝撃だったアキトは啞然としていた。

「あの……大丈夫ですか？」

男はそんなアキトに声をかけた。

「！あ、ああ。俺は大丈夫。それよりあんたは……」

「僕は布道レオ。ご覧の通り、魔戒法師ですよ」

アキトを助けた魔戒法師こそ、レオだった。

「なあ、その魔導具……。あんたが作ったのか？」

「はい。そうですよ。……えつと……」

「俺はアキト。俺も魔戒法師だ。まあ、まだ魔戒法師になったばかりの駆け出しだけど……」

アキトは、自分の名前と、まだ魔戒法師としては駆け出しだということを語った。

「そうだったんですね。……あつ、もしかして、君は魔導具作りをしたりしてるんですか？」

「ああ。そうなんだ。だから……俺をあんたの弟子にしてくれ!!」

「へ?で、弟子……ですか?」

まだまだ未熟な自分が弟子を取るなんて全く考えていなかったのも、レオは驚いていた。

「頼む!!俺の作る魔導具はまだただだけど、いずれかは俺の作る魔導具で多くの魔戒騎士や魔戒法師の手助けをしたいんだ!!」

アキトは、この頃から魔導具にかける情熱は持っていた。

「……」

レオはどうするべきかじつくりと考えていた。

レオは、アキトの魔導具に対する情熱を理解したため、無下には出来ないと考えたためである。

「……わかりました。あなたの申し出、受けましょう」

「ほ、本当か!？」

「ただし、条件があります」

「条件？」

「あなたの1番の傑作だと思える魔導具を見せて下さい。僕は、あなたがどれだけの魔導具を作れるのかが知りたいのです」

レオは、アキトがどのような魔導具を作れるのかをテストするつもりだった。

「……わかった。だけど、少しだけ時間が欲しい」

「もちろんです。僕は仕事があるため、1週間はこの街に留まるつもりですので、1週間後、この場所で会いましょう」

「ああ、わかったー!」

アキトは、再びレオと会う約束をかわし、レオと別れた。

これが、アキトとレオの最初の出会いだった。

※※※

レオと初めて出会い、レオに自慢の魔導具を見せることになったアキトは、その翌日、魔導具作りに没頭していた。

しかし……。

「……ダメだ……。こんなんじやあの人は認めてくれないよ……」

思うような魔導具のアイディアが出ず、魔導具作りに悪戦苦闘していた。

自分の作った魔導具をじっくり調べたりしたのだが、どれも実用的ではなく、どれもレオが認めてくれるとは思えなかった。

「……一番良さげなのはこいつか……」

そう言ってアキトが取り出したのは、昨日のホラーとの戦いで使う予定だった爆弾のような魔導具だった。

「これはなかなかだと思うけど、仲間を巻き込む可能性があるよな……」

威力はなかなかのものであると自負していたが、他の魔戒騎士や魔戒法師と共闘した時は、仲間を巻き込む危険があった。

「……やっぱり誰でも気軽に扱えるものがないよな……。それで、ホラーと戦ってても仲間を巻き込まないものだとおさら……」

アキトは、魔戒騎士や魔戒法師の手助けをしたいという思いがあるため、気軽に扱える魔導具が良いと考えていた。

アキトの魔導具作りに対するポリシーが、彼に大きなヒントを与えることとなった。

「……！これだ！！やってみる価値はあるぞ！！」

何か妙案を思いついたアキトは、紙を取り出すと、今思いついた魔導具の設計図を作り始めた。

設計図を完成させるのに2日かかり、実際にその魔導具を完成させるには4日もかかってしまった。

アキトは自身の最高傑作とも言える魔導具を完成させた翌日、アキトは、レオと約束した場所にいた。

現在は夕方であり、アキトが到着すると、すでにレオは待っていた。

「……あ、来ましたね。待ってましたよ」

「待たせてすまない」

「……その顔、どうやら、自信作が出来上がったみたいですね」

レオは、アキトの自身に満ち溢れた顔を見て、アキトが自分で作った魔導具に手応えを感じていることを察した。

「ああ。見てくれ！俺の最高傑作を！！」

そう言つてアキトが取り出したのは、銃のような形をした魔導具だった。

「……？これは……銃……ですか？」

「いや、これはただの銃じゃない。ホラーを倒すために作られた「魔戒銃」だ！」

アキトが開発した魔導具こそ、ホラーを倒すために作られた魔戒銃であった。

「へえ、すごいですね……。ですが、この銃の弾はどうなっているんですか？普通の弾では意味がない気がします……」

「それなら問題ない。この魔戒銃の銃弾はホラーを倒すために特殊な素材を使っているからな」

魔戒銃の弾は普通の弾ではなく、特殊な素材を用いたものだと言明した。

「そうですか。……とりあえず、第1の試験は合格ですね」

「？第1の試験？」

「あなたの魔戒銃が凄いことはわかりました。今度は、その魔戒銃の力を見せてもらいます」

「力を見るって……。ホラーと戦うのか？」

「ええ。ちょうど番犬所から指令がありましてね、そのホラー相手に、あなたの魔戒銃の力を計らせてもらいます」

こうして、アキトはレオと共にホラー討伐に向かうことになり、そこで、アキトの魔

戒銃の性能を見定めることにしたのである。

しばらく歩いてみると、レオは足を止め、魔導筆と魔針盤を取り出すと、法術を魔針盤に放つと、魔針盤からここ一帯の地図が表示された。

すると……。

「……近いですね。それでは、行きましょう」

レオとアキトは再び歩き出し、ホラー搜索を再開した。

少し歩くと、レオが足を止めたので、アキトも足を止めた。

「……どうやら、この辺みたいですね……」

「………だったら、やってやるさ！」

アキトは魔戒銃を取り出すと、どこからホラーが現れてもいのように臨戦体制に入っていた。

すると……。

「……アキト君！来ましたよ!!」

レオがこのように声をあげると、アキトとレオの目の前に1体の素体ホラーが現れた。

「見ててくれ！俺と、魔戒銃の力を！」

アキトは素体ホラーにしっかりと狙いを定めて、魔戒銃を発砲した。

その弾は素体ホラーの体を貫いたのだが、素体ホラーを倒すには至らなかつた。しかし、あまりの激痛に苦しんでるようだった。

「……よし！効いてる！」

アキトは、魔戒銃の性能に手応えを感じていた。

「……へえ、なかなか面白いですね……」

レオは、アキトの魔戒銃の性能を見て、笑みを浮かべていた。

（改良の余地はあるみたいですが、これはなかなか面白い武器ですね。……こんな面白い魔導具を作る魔戒法師に会うのは初めてかもしれない）

レオは、アキトのような発想を持つ魔戒法師に会うのは初めてだったので、アキトの存在に胸を躍らせていた。

「こいつで決めてやる!!」

アキトは、ある弾を魔戒銃に装填し、素体ホラーに狙いを定めた。

「……くらえ!!」

アキトは魔戒銃を発砲し、その時飛び出した弾が素体ホラーを貫いた。

素体ホラーは断末魔をあげると、その体は爆散し、消滅した、

「や……やった……!」

アキトが魔戒法師とデビューして僅かであるが、先ほどの素体ホラーは自分の魔導具

を用いて倒した初めてのホラーとなった。

「……………やりましたね！アキト君！」

「まあな！この俺にかかればこんなもんよ！」

アキトは「ふんす！」と言いながらドヤ顔をしていた。
すると……………。

ピキピキ……………。

「？何だ？今の音は……………」

アキトは気付いていなかったが、先ほどの音は、魔戒銃にヒビが入った音であった。

「……………アキト君！その魔戒銃が！」

「へ？」

レオに指摘され、ようやく気付いたのだが、その時には既に手遅れだった。

魔戒銃のヒビが徐々に大きくなり、魔戒銃はバラバラに砕け散ってしまった。

「ああ！！俺の魔戒銃が！！」

自分が作った魔戒銃が壊れてしまったアキトは思わず声をあげてしまった。

「フフ、威力はまあまあですが、改良を重ねれば、かなり優良な魔導具になりそうですね！」

レオは、アキトの作った魔戒銃を高く評価していた。

「!?そ、それじゃあ……」

「ええ、合かk……」

合格です！と言いつ切る前に、レオは何かを感じ取っていた。

「?どうしたんだ?」

「伏せて下さい!!」

レオに言われるがままその場に伏せると、何かが飛んできたのだが、レオのおかげでかわすことが出来た。

「……!!ホラー！もう一体いたのか!!」

2人の前に現れたホラーは、鳥のような姿をした、ヘルウイングだった。

「どうやら、指令のホラーはこっちだったみたいですね」

レオは、先ほど現れた素体ホラーはこの近くのゲートから現れたばかりのホラーであり、討伐の指令を受けたホラーは、このヘルウイングであると予想していた。

「……来るぞ!!」

ヘルウイングは、2人目掛けて突撃してきた。

「……魔戒銃がなくなつて！俺には、これがある!!」

アキトは魔導筆を力強く握りしめると、ヘルウイングに魔導筆を向けた。

そして、ヘルウイングに向かって法術を放つのだが、その攻撃はヘルウイングに軽々

とかわされてしまった。

「くそっ！まだだ！」

アキトは諦めることなく法術を放つのだが、やはりヘルウイングにかわされてしまった。

ヘルウイングはアキト目掛けて体当たりを仕掛けてきた。

それをまともに受けたアキトは、吹き飛ばされて、近くの壁に叩きつけられてしまった。

「……アキト君!!」

「くっ……こいつ、強えな……!」

アキトはフラフラになりながらも立ち上がるが、自分とあのホラーとは実力差があることを認識していた。

「フン、その小僧はまだまだ未熟者のようだ。だったら、貴様をいただくぞ!」

ヘルウイングは、アキト目掛けて飛び出し、アキトを喰らおうとしていた。

「……させません!!」

レオはアキトの前に立つと、魔戒剣を取り出し、接近してきたヘルウイングを魔戒剣の一閃により斬り裂いた。

「!?!」

魔戒法師であるはずのレオが魔戒剣を手にしていることに、アキトは驚きを隠せなかった。

そして、それは魔戒剣で斬られたヘルウイングも同様だった。

「き、貴様！魔戒騎士か!？」

ヘルウイングは後方に下がり、距離をとった。

「あ、あんた……」

「魔導具に頼らず、最後まで諦めずに守りし者としての使命を果たす……。あなたのその姿勢に感動しました。後は、僕に任せてください!」

レオは魔戒剣を構えると、ヘルウイングを睨みつけた。

「ええい！魔戒騎士がなんだってんだ！この場で2人まとめて喰らってやる!!」

ヘルウイングはレオが魔戒騎士だとわかっても臆せずに向かっていった。

「……ホラーの陰我！この僕が封じる!!」

レオはヘルウイングにこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、レオは紫の輝きを放つ鎧を身に纏った。

この鎧は閃光騎士狼怒。レオの受け継いだ、レオの魔戒騎士としての名前である。

ヘルウイングはレオ目掛けて突撃するが、レオはギリギリまでヘルウイングを引きつけていた。

「……………そこだ!!」

ギリギリまでヘルウイングを引きつけたレオは、片刃の剣に変化した魔戒剣を一閃し、ヘルウイングを真つ二つに斬り裂いた。

「ば、馬鹿な……………。この俺が……………こうもたやすく……………」

レオの圧倒的な力によつて一撃でその体を斬り裂かれたヘルウイングは、断末魔をあげながら消滅した。

ヘルウイングが消滅したことを確認したレオは、鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を鞘に納めた。

「……………アキト君、大丈夫ですか?」

「俺は大丈夫だ。だけど、あんたは魔戒騎士でもあつたんだな」

「ええ。僕は閃光騎士狼怒の称号を受け継いだ魔戒騎士ですが、魔戒法師としても、魔戒騎士や魔戒法師のサポートをしているのです」

「……………魔戒騎士の顔を持つ魔戒法師がいるとは噂で聞いたことはあつたけど、それがあんただったとはな……………」

「……………もしかして、僕の弟子になるのは嫌になりましたか?」

「……………」

レオの問いかけにアキトは少しの間黙っていた。

この沈黙は弟子になる気はないと言っているのと同じだとレオは思っていたのだが……。

「……いや、むしろ余計にあんたのこと気に入ったよ!」

「へ?」

アキトの予想外な言葉に、レオは驚いていた。

「魔戒騎士と魔戒法師……。2つの顔を持つてるなんて格好いいじゃねえか!俺はますますあんたの弟子になりたくなかったよ!!」

アキトは、興奮気味にレオに詰め寄っていた。

その様子を見ていたレオは、可笑しいと思っただのか、急に笑い出した。

「おいおい、何が可笑しいんだよお!」

「すいません……。君がすごく面白い魔戒法師だなど思っただけですよ」

「……そうかなあ?」

「それで、試験の結果ですが、もちろん合格です。君の魔戒銃は実用化させられれば多くの魔戒法師の手助けになると思いましたからね。これからは、僕と共に魔戒銃の改良や、他の魔導具作りを頑張っていきましょう!!」

レオはアキトを自分の弟子にする決意を固めたのである。

「本当か!?それじゃあこれからよろしく頼むよ、師匠!」

「し……師匠!？」

いきなり師匠と呼ばれ、レオは困惑していた。

「今からこの俺、魔戒法師のアキトはあなたの弟子になったからな。師匠と呼ぶのは当然だろう?」

「そ、それはそうですが……」

「いや、違うな……。今からこの俺、アキトは、布道レオの1番弟子だ!!これからはこう名乗るとしよう」

「い……1番弟子って……。1番って部分はそんなに重要なんですか?」

「当たり前だろう?あんたは凄い魔戒法師なんだ。この1番弟子という言葉は、後々俺にとって価値のある言葉になること間違いないからな!!」

「あ、アハハ……」

アキトのあまりに高いテンションについていけず、レオは苦笑いをしていた。

「ま、まあ。とりあえずこれからよろしくお願いしますね。アキト君」

「師匠、それは違うだろ?」

「え?何がですか?」

「あんたは俺の師匠なんだから、俺のことは呼び捨てで呼んでくれないと。後、その敬語をやめてくれるとなおいいかな?」

「そうは言っても、これは僕の素みたいなものですし……」

レオは、普段から誰かと接する時は敬語で話していたため、いきなりそれをやめるのは出来なさそうだった。

「……わかりました。君のことは呼び捨てで呼ぶつて言うのは頑張つてみますよ。改めでよろしく願いますね。アキト」

アキトはレオに呼び捨てで呼ばれると、ウンウンと頷いていた。

「そうそう、これだよ。これからもよろしくな！ 師匠！」

こうして、魔戒法師アキトは、布道レオの1番弟子となった。

この日以来、アキトはレオにくつついて行動する機会が増えていた。

レオと共に指令をこなすことで、アキトは魔戒法師として少しずつ成長していったのである。

アキトお手製の魔戒銃も、レオに学びながら、改良を重ねていった。

しかし、魔戒銃には多くの問題があつたため、その度にアキトは魔戒銃の改良を行つていった。

魔戒銃だけではなく、その他の魔導具もレオの手ほどきを受けながら、色々と開発していった。

その魔導具は実用的なものが多く、その魔導具が、多くの魔戒法師の手助けになつて

いったのである。

こうして、アキトはレオの1番弟子として、メキメキと頭角を現していった。そして、数年の月日が流れた……。

※※※

「……あ、師匠。おかえり。長い間どこに行ってたんだ？」

レオは1ヶ月程どこかの街の番犬所に行ったとは聞かされていたのだが、具体的にどここの街なのかは聞かされていなかった。

「ああ、僕は桜ヶ丘にある「紅の番犬所」に行ってたんですよ」

「ふーん、桜ヶ丘ねえ……」

街の名前を聞いても、アキトは興味を示してはいなかった。

「その街で戦ったのは、かなり厄介な相手でしたよ」

「厄介な相手って、師匠がそれだけ手こずる相手だったのか？」

「ええ。今回戦ったのは、暗黒騎士と、メシアの腕と呼ばれたグオルブというホラーです」

「!?暗黒騎士って……!かなり大事じゃないか!!」

アキトは、レオが戦った相手の話を聞いて、驚愕していた。

「ええ。ですから、鋼牙さんや零さんも応援に来てくれたんですよ」

「それじゃあ、暗黒騎士やそのグオルブっていうホラーは、鋼牙さんや零さんが倒したのか?」

「いえ。実際に暗黒騎士とグオルブを倒したのは、紅の番犬所に所属する魔戒騎士でした」

「え!?あの牙狼と絶狼を差し置いてそんな強敵を倒すなんて、何者なんだ?」

アキトは、強大な力を持つ相手を倒した魔戒騎士というのが何者か気になっていた。

「その人は、月影統夜君。白銀騎士奏狼の称号を持つ魔戒騎士です」

「白銀騎士……。聞いたことがないけどな」

「統夜君は、桜ヶ丘高校という高校に通いながら魔戒騎士としての務めを果たしている魔戒騎士ですが、その実力はかなりのものですよ」

「へえ、珍しいな。学校に行きながら騎士の仕事をしているなんて」

魔戒騎士や魔戒法師の中には、表の顔を作るために何か仕事をしている者がいるのは

知っていたが、それはごく少数だった。

なので、高校生をしながら魔戒騎士をしているというのが珍しいとアキトは思っていた。

「アキトもいつか彼と会う日が来るでしょう。だけど、彼は良い子ですから、きっとすぐに仲良くなれますよ」

「……そうかもしれないな」

レオは統夜とアキトがいつか会う時が会おうと予想していたが、その機会がすぐ訪れるということ、2人はまだ知る由もなかった。

それから再び月日が流れ、季節は冬になっていた。

人間の暦では、正月の三が日が終わった後だった。

この日、アキトは元老院に呼び出されていた。

「……お呼びでしょうか、グレス様」

普段はタメ口を使うアキトであつたが、さすがに元老院の神官であるグレスには敬語

を使っていた。

「ええ。……アキト。あなたに行ってもらいたい所があります」

「行ってもらいたい所……ですか？」

「ええ。実は、最近翡翠の番犬所の管轄内で魔戒騎士でも魔戒法師でもない者がホラーの討伐を行っているとのことなのです」

「魔戒騎士でも魔戒法師でもない者……」

アキトは、そのあからさまに怪しい人物が何者なのかがわからず、その正体について考えていた。

「それで、翡翠の番犬所から要請がありましたね、アキト、あなたは魔戒法師として、調査をお願いしたいのです」

「はい、わかりました！」

アキトは、グレスから受けた仕事を快諾した。

「あつ、そうそう。1つ言い忘れていました。今回の指令は、紅の番犬所から1人魔戒騎士が来ます。その魔戒騎士と合流し、協力してことにあたって下さい」

「は、はい。わかりました」

アキトはグレスに一礼すると、一度自分の部屋に戻り、旅支度を整えた後に、魔界道を使って、翡翠の番犬所の管轄である秋葉原へと向かった。

秋葉原に到着したアキトは、人の多さに驚きながらも、この街で寝泊まりする場所を探すことにした。

しばらく歩き回ったアキトは、秋葉原某所にある今は使われていない廃ビルを発見した。

「……ここなら大丈夫かな？」

アキトは廃ビルの中に入ると、ビルの中に生活出来そうな場所はないか探索を行った。

一階はとても寝泊まりが出来ないほどボロボロだった。

アキトは諦めて階段を降りて地下へ向かうと、とある一室を発見した。

そこに入ると……。

「……おお！ここならしばらく住めそうだな！」

アキトは、今回の指令が終わるまで、この場所で生活することを決めた。

アキトは持つてきた魔導書をテーブルにドン！と置き、いつでも調べ物が出来る状態にしておいた。

「さて……。これで大丈夫だけど、グレス様の言つてた魔戒騎士でも探しに行こうかな……」

アキトは、すぐにでも話にあつた魔戒騎士を探そうかなと考えていた。
しかし……。

「……いや、そいつにこの魔戒銃の力を見せたいからな。もうちよつと調整をしておこう……」

アキトはもう一度魔戒銃の調整を行うため、作業を始めた。

しかし、その作業に没頭し過ぎたせいかな、気が付けば夜になっていた。

「……いやつべえ!!急いで例の魔戒騎士と合流しないと!!」

アキトは慌てて隠れ家を飛び出すと、魔針盤を作動し、魔針盤が示したホラーの気配を追つた。

ホラーのところへ行けば、魔戒騎士に会えると考えたからである。

アキトはホラーのいる場所に急行すると、既に1人の魔戒騎士が素体ホラーと交戦していた。

「……あの金髪の女の子2人を守つて戦っているあの魔戒騎士……。あれが例の魔戒騎士かな?」

アキトは、現在交戦している魔戒騎士が、グレスの話していた魔戒騎士ではないかと

予想をしていた。

「とりあえずはご挨拶だ！」

間違つてた時はその時はその時という発想になり、アキトは素体ホラーに狙いを定めて魔戒銃を発砲した。

その銃弾は素体ホラーを貫き、素体ホラーは消滅した。

そして、アキトはその魔戒騎士の前に姿を現した。

その魔戒騎士こそ統夜であり、これこそが、統夜とアキトの最初の出会いだった。

統夜と出会ったアキトは、その後も統夜と共に戦う機会が増えて、アスハの野望を打ち砕いたのであった。

く現在く

「……本当、懐かしいな……」

アキトは、レオの一番弟子になった日のことや、統夜との出会いの日を思い出して、笑

みを浮かべていた。

「これからも、戦いは続いていく。俺は、魔戒騎士や魔戒法師の負担を減らすために頑張っていけないとな……」

アキトは、これからも自分の信念を貫いていく決意を固めたのであった。

すると……。

「アキト、どうですか？ 作業は捗ってますか？」

レオが、アキトの様子を見にきた。

「あ、師匠！ ああ、とりあえず魔戒銃の修理は終わったよ。改良のプランはこれから考えるところだけだ」

「そうでしたか。アキト、魔戒銃の設計図を見せてもらってもいいですか？」

「あ、ああ」

アキトは、魔戒銃の現段階の設計図をレオに見せた。

レオは魔戒銃の設計図を見ると、改善点を考えていた。

「……アキト、この部分なんですが……」

レオは魔戒銃の改善すべき点を発見すると、それをアキトに指摘した。

「……なるほどなるほど。確かにそこは改善した方が良さそうだな……」

アキトは、レオの指摘を素直に受け止め、その改善点を紙にメモして、すぐにでも設

計図の修正を出来るようにした。

「なあ、師匠。こここの部分なだけどき……」

アキトは、設計図を見て気になったことをレオに説明して、アドバイスを求めていた。

「……はい。確かにここはその通りにした方がいいかもしれませんね」

「やっぱりそうだったか。そしたらそうしようか」

アキトは、レオのアドバイスをメモして、魔戒銃改良の参考にしようとしていた。

こうしてアキトは、レオのアドバイスや指摘を参考に、魔戒銃の改良を行っていた。

……いつの日か、自分の作った魔導具が多くの魔戒騎士と魔戒法師の手助けになることを夢見て……。

……終

次回予告

『ほお、こいつは驚いたな。まさか、お前さんより年下の魔戒騎士がいたとはな……。次

回、「後輩」。先輩としての仕事が幕を開けるぜ!!」

サバツク激闘編

第68話 「後輩」

統夜たちの活躍によりアスハの野望が阻止されてから2週間が経った。

もうすぐ夏休みであり、学生たちはこれから来たる夏休みに胸を躍らせていた。

そんな中、統夜たちは朝イチでイレスに呼び出されて、番犬所を訪れていた。

「……みんな、揃いましたね」

「イレス様、どうしたんですか？こんな朝早くに」

「ええ……」

イレスは、何故か深刻そうな表情をしていた。

「ま、まさか……。また事件か？」

「いえ、そうではないのです。元老院から各番犬所に人事の異動を命じられましたね

……」

「なるほど、アスハの起こした魔戒騎士狩りのせいで、人手不足になってる管轄があるか

らか」

大輝の推測に、イレスは無言で頷いていた。

アスハは全ての魔戒騎士を滅ぼすため、ホラー喰いのホラー、ヘラクスを利用して、魔戒騎士狩りを行った。

それは、魔戒騎士にしか聞こえない超音波を使い、それを聞いた魔戒騎士は魔戒剣が使えなくなってしまうた。

その隙をつかれ、多くの魔戒騎士がホラーに捕食されたか命を落とした。

そのため、魔戒騎士が1人もいない管轄もあつたため、元老院は各番犬所に人事の異動を命じたのであつた。

「この紅の番犬所には魔戒騎士が3人もいますからね。この中で1人、翡翠の番犬所へ派遣しなくてはいけなくなつたのです」

統夜たちのいる紅の番犬所には統夜、戒人、大輝と3人の魔戒騎士がいる。

各番犬所には、魔戒騎士が1人か2人はいないといけなく、3人も魔戒騎士がいるのは、人手が足りている方であつた、

「ええ!?ということはこの中の誰かは翡翠の番犬所へ行かなきゃいけないってことですか……」

このようにイレスから言われ、統夜は焦りを見せていた。

もし自分が異動を命じられれば、有無を言わさず桜高を辞めなければいけないからである。

統夜が焦りを見せているその時だった。

「……俺が翡翠の番犬所に行くこう」

大輝が異動を申し出たのである。

「え?! いいんですか!?!」

「統夜は今いる桜ヶ丘高校を離れたくないだろう? それに、戒人はこの番犬所に来たばかりですぐ異動はかわいそうだからな。だから俺が行くんだよ」

「で、でも。大輝さんがいなかったら戦力的にも……」

大輝は称号を持たない魔戒騎士ながらも、その実力は統夜や戒人に引けをとらず、2人は大輝のことをかなり頼りにしていた。

そんな大輝がいなくなることが、2人は不安だったのである。

「大丈夫だ。今のお前たちは十分に強い。悔しいが、俺よりもな」

大輝は、統夜と戒人の成長を嬉しく思っていたが、2人が自分より強くなったことに少しか悔しがつっていたのである。

「大輝、本当にいいのですね?」

「ああ。初めて行く管轄だからしばらくは慣れないだろうが、すぐに慣れるだろうさ」

大輝は、翡翠の番犬所に異動する覚悟を決めた。

「戒人、統夜のことには任せたぞ。俺は統夜には高校生として当たり前前の青春を送ってほ

しいと思っっているからな」

「もちろんです！その気持ちは俺も同じですから！」

「戒人……」

統夜は、大輝や戒人が自分のために色々考えてくれたことがとても嬉しかった。

「統夜、何かあれば遠慮なく俺に言ってくれよ。力になるからさ」

「戒人……。ありがとう！その時はよろしく頼むよ！」

統夜は、何かあった時は、戒人の申し出をありがたく受けることにした。

「話はまとまりましたね。大輝、急な話で申し訳ありませんが、あなたは明日付けで翡翠の番犬所に異動となりますので、大至急、異動の準備をして下さい」

「承知した」

大輝はイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

「統夜、戒人。あなたたちは引き続きこの番犬所で使命を果たして下さい！」

「はい！わかりました!!」

統夜と戒人はこう返事をする、イレスに一礼した。

「……あ、統夜はちよつとだけ残して下さい。1つ話があります」

「？わかりました」

「それでは俺は、エレメントの浄化に行ってきます」

戒人はイレスに再び一礼すると、番犬所を後にした。

「……統夜、すいませんね。あなただけ残ってもらって」

「いえ。それで、俺に話とは？」

「……統夜、今度の日曜日ですが、何か予定はありますか？」

「いえ、何もありませんが」

「そうですか。それは良かったです」

今度の日曜日がフリーと聞いたイレスは、何故か安堵していた。

「……？それで、今度の日曜日に何かあるのですか？」

「……統夜、今度の日曜日ですが、あなたにはお願いしたいことがあるのです」

「お願いしたいこと？ 指令ですか？」

「いえ、これは指令とは少し違うのです」

イレスの言葉に、統夜は首を傾げていた。

イレスは一呼吸おいた後に、本題を切り出した。

「……統夜、あなたには翡翠の番犬所にいる魔戒騎士になったばかりの少年に稽古をつけてあげてほしいのです。あ、歳はあなたより下ですよ」

「!? お、俺が稽古を……ですか？」

イレスからの思ってもいない申し出に、統夜は困惑していた。

「翡翠の番犬所には大輝が行きますが、大輝は街に慣れるのに手一杯ですからね……。それに、歳の近い統夜からであれば、その少年も学ぶことが多いはずなのです」

翡翠の番犬所にいる魔戒騎士になったばかりの少年は統夜と歳が近いため、その統夜に教わるのが少年にとってプラスになるとイレスは考えていた。

「あと、これは、翡翠の番犬所の神官であるロデルからのお願いでもあるのです」

「！ロデル様が……ですか？」

「ええ。統夜、お願いできますか？」

「……わかりました！俺じや役不足かもしれませんが、その仕事、引き受けます」

統夜は少し考えてから、イレスやロデルからの頼みを引き受けた。

「ありがとうございます！助かりましたよ！ロデルには話しておきますから、今度の日曜日はよろしくお願いしますね」

「はい、わかりました！」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

番犬所を出た時には、授業開始まであと僅かだったため、エレメントの浄化は戒人に任せて、統夜はそのまま学校へと向かった。

※※※

「この日の放課後、統夜はこの日もいつものように部活に参加すると、今度の日曜日に東京へ行くことを唯たちに告げた。

「え?! やーくん、今度の日曜日に東京に行くの!?!」

「ああ。とある魔戒騎士に稽古をつけてくれと頼まれてな」

「とある魔戒騎士……ですか?」

「ああ。つい最近魔戒騎士になったばかりらしいんだ。歳は俺よりも下だと言っていたな」

「へえ、統夜だつて十分若いけど、10代で魔戒騎士になれるって凄いことじゃないのかな?」

統夜は中学3年生の時に魔戒騎士になったのだが、その歳で魔戒騎士になれる者はほとんどいないため、その少年も統夜と同じくらい努力をしてきたということになる。

そう律は気付いており、魔戒騎士になったばかりの少年の話を聞いて驚いていた。

「そうだな。恐らくは中3か高1だろうが、そんな若さで魔戒騎士になれる奴はほとんどいないからな」

「それで、統夜君はその子の稽古をつけるという訳ね？」

「ああ。指令ではないとは言っても番犬所の神官の頼みとあれば断れなくてな」

統夜は今回東京へ行くのは、イレスやロデルの頼みであるということを伝えた。

「ねえねえ、やーくん。私たちもついていったらダメかなあ？」

『おいおい、さっきの統夜の話聞いてなかったのか？ 東京へは遊びに行くんじゃないんだぞ』

「むうう……。そりやそうだけどさあ、やーくんばかり東京に行くなんてずるいよ!!」

唯は、イルバの言葉は理解していたが、それでも納得がいなくて膨れっ面になっていた。

「まあ、唯の言うことも一理あるかな」

「そうだよなあ。あたしたちが行ったって邪魔になるかもしれないけどさ、統夜がそいつに稽古をつけてる間に、あたしらは東京を楽しむことも出来るからさ♪」

「おい！それが本音かよ！」

律が思わず本音を言ってしまった、それを聞いた統夜は呆れていた。

「まあまあ♪東京まで行くなら私が送るから、私たちもついていっちゃダメかな？」

「統夜先輩！お願いします!!」

「うーん……………」

統夜は唯たちを連れていっても良いのかじっくりと考えていた。

『統夜、いいんじゃないのか？連れていっても』

イルバが唯たちの肩を持つような発言をすると、唯たちの表情が明るくなっていった。

「ちよ!?!イルバ、本気か？」

『まあ、統夜がその小僧の稽古をつける時に邪魔をしなければ……だがな』

「もちろんだよ!」

「ああ、そこは私たちもわかってるからさ!」

イルバの提示した条件を、唯と滯は当然守ると答えていた。

『統夜。お前さんはこの前あれだけの激闘をしてこいつらを散々心配させたんだ。多少

はこいつらのワガママを聞いてもいいんじゃないか？』

「イルイル、大丈夫だよね？何かいつもに増して優しいけど……」

イルバが珍しく優しい言葉を使っており、唯たちはそれに驚いていたのだが、唯が代

表してこうイルバに聞いてみた。

『俺様は正常だ!それに、俺様を変なあだ名で呼ぶな!!』

「あ、いつものイルバですね」

梓は、唯とイルバのいつものやり取りを見て、いつものイルバであることを確認した。

「それじゃあ、当日は私が迎えに行くから、一緒に東京へ行きましょ?」

「よろしく頼むよ、ムギ」

「ところで統夜、東京って言ってもどこら辺に行くつもりなんだ？」

「今回行くのは秋葉原あたりになると思うが、大丈夫か？」

「秋葉原ですか!？」

「うお!？」

秋葉原と聞いた梓が食いついてきて、統夜は驚いていた。

「私、1回行ってみたいと思ってたんですよ！」

「私もお♪なんか面白そうな街だものねえ♪」

どうやら梓だけではなく、紬も秋葉原という言葉聞いて胸を躍らせていた。

「楽しみだねえ♪」

「ああ、そうだな♪」

「よおし、日曜日は思い切り楽しもうぜえ!!」

「「「おお!!」」」

唯たちは、完全に遊ぶ気満々であった。

「やれやれ……。遊ぶ気満々じゃねえか……。まあ、確かにイルバの言う通り、ちよつとくらいはワガママに付き合わないとな……。――」

統夜も、イルバの言った言葉を理解し、唯たちには楽しんでもらおうと考えていた。

こうして、統夜と共に唯たちも東京に行くことになり、その話が終わったところで統夜たちはティータイムを再開していた。

統夜は最後まで部活に参加し、部活終了後は、ホラー討伐の指令がなかったため、統夜は街の見回りを行っていた。

※※※

そして、日曜日となった。

この日の朝、統夜たちは学校の入り口で待ち合わせをし、紬の秘書である斎藤の運転で東京へと向かった。

「……………ふおお……………ここが、秋葉原！」

唯は初めて訪れた秋葉原に目を輝かせていた。

「やっぱり凄い活気だな」

秋葉原の街は今日も賑わっており、律は街を歩き交う人々をジッと見つめていた。

澁、紬、梓も、初めて訪れた秋葉原の街に目をキラキラと輝かせていた。

「ムギ、このビルの屋上、使わせてもらっていいんだよね？」

統夜は、目の前にある大きなビルを指差していた。

「ええ。このビルは父の会社のビルだから♪許可はもらったから、大丈夫よ♪」

「悪いな、ムギ。送ってもらっただけじゃなくて鍛錬場所も用意してくれて」

「ううん。気にしないで。私も統夜君の力になりたいもの。これくらい、何てことないわ」

「それにしても、東京にもムギんちの会社のビルがあるんだなあ」

「そうだよね！凄いや、ムギちゃん！」

「エへへ……そうかな……」

東京にも紬の家の会社が進出していることに滯と唯は驚きの声をあげ、紬は照れ隠しに笑っていた。

「それじゃ俺は今から翡翠の番犬所に行つてからここに戻つてくるけど、お前たちはどうするんだ？」

「うーん、そうだなあ」

唯たちがこれからのことを考えていたその時だった。

「……あれ。統夜さん……ですよね？」

「へ？」

統夜は急に誰かに声をかけられたことに驚き、その声の方を向くと、3人の少女が立っていた。

サイドポニーの少女と、青の入った黒髪の少女と、グレーの髪の少女だった。

「やつぱり統夜さんだ!!」

「お久しぶりです!統夜さん!」

グレーの髪の少女と、黒髪の少女が統夜を見て歓喜の声をあげていた。

「え、えつと……。君たちは?」

「ええ!?忘れちゃったんですか?今年の始めに私たちが怖い人に絡まれてるところを助けてくれたじゃないですか!」

「今年の始め……。!!もしかして、あの時の!!」

今年の始めというキーワードを聞いた瞬間、統夜はこの少女たちのことを思い出した。

「確か、穂乃果、ことり、海未……。だったか?」

統夜は名前も思い出したようで、それを聞いた穂乃果たちの表情は明るくなった。

「やつと思ひ出してくれた!!」

「本当に久しぶりだな。元気だったか?」

「はい!元気ですよ!」

「統夜さんは今日は遊びに来たのですか？」

「いや、俺は用事があつて来たんだけど……」

統夜は穂乃果たちに秋葉原に来た目的を話したその時だった。

「「「「……」」」」

《……い、おい、統夜!!》

(イルバ、皆まで言うな。唯たちが俺を睨んでるのはわかっているから)

統夜が穂乃果たちと親しげに話しているのが気に入らなかつたのか、唯たちはドス黒いオーラを放つて統夜を睨みつけていた。

「ねえ、やーくん。その子たちは誰なのかなあ？」

「あ……いや……その……」

「そつかあ、統夜はあの時仕事と言いながらあの子たちと遊んでいたという訳か……」

律は統夜が秋葉原に行った時に統夜に電話したのだが、律が電話をかけた時はタイミングが悪く穂乃果たちとお茶をしていた。

「いや、仕事は本当だぞ！だからそういうんじゃないやなくてな！」

統夜は番犬所から指令がを受けて仕事をしていたのは本当のことなのだが、統夜は何故か必死に弁解していた。

「とりあえず、そのビルで詳しい話を聞きましょうか♪」

紬は、自分の親が所有しているビルを指差していた。

「さ、統夜先輩、行きましよう♪」

「ごめんな、ちよつとこいつと話があるからちよつと待つてくれるか？」

「「は、はい……」」

澤は優しいに言うのだが、そのオーラに穂乃果たちはたじろいでしまっていた。

「さあ、統夜君。お話しましようね？」

「ちよ……引つ張らないで……だ、ダレカタスケテー!!」

統夜は紬に引きずられながらビルへと連行され、唯たちに問い詰められていた。

そして10分後……。

「……」

統夜はボロボロになりながらビルから出てきた。

「ちよ、統夜さん!!大丈夫ですか!？」

「アハハ……。大丈夫だ、問題ない……」

「……って、全然大丈夫そうじゃない!」

穂乃果たちは、ボロボロな統夜を見て思わずツツコミを入れてしまった。

「待たせてごめんな」

「あつ、いえ……」

「もしかして、皆さんが軽音部の？」

「うん、そうだよ」

穂乃果たちはこの5人の少女が、以前統夜が話していた軽音部のメンバーではないかと推測していたが、その予想は当たっていたようだった。

「は、初めまして！私は高坂穂乃果。中学3年生です」

「私は南ことりです。私も穂乃果ちゃんと同じく中学3年生です！」

「園田海未と申します。私も中学3年生です」

穂乃果、ことり、海未の3人は、唯たちに自己紹介をした。

「よろしく〜！私は平沢唯だよ！」

「あたしは田井中律。よろしく！」

「私は秋山澪。よろしくな」

「琴吹紬よ♪よろしくね♪」

「中野梓だよ！よろしくね」

唯たちも、穂乃果たちに自己紹介をした。

「あの……。皆さんも桜ヶ丘高校の生徒さんなんですか？」

「そだよお。そのあずにやんだけが2年生で、私たちは3年生なんだ」

「「あずにやん？」」

梓のあだ名を聞いた穂乃果たちは首を傾げていた。

「ちよつと唯先輩！初対面の人いきなりあだ名を言わないで下さい！」

「ええ？あずにやんはあずにやんだからいいじゃん！」

梓の抗議が気に入らなかつたのか、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「あ、アハハ……」

唯と梓のやり取りを見て、ことりは苦笑いをしていた。

「と、とにかく、この5人が俺と同じ軽音部なんだよ。みんな、よろしくな」

統夜が改めて唯たちを紹介すると、唯たちは「よろしく」と言いながら笑みを浮かべていた。

「「こちらこそ、よろしくお願ひします！」」

穂乃果が唯たちに満面の笑みを見せると、ことりと海末も笑みを浮かべていた。

「ところで、皆さんは何か用事でここへ？」

「いえ、違うのよ。統夜君はここに用事があるのだけれど、私たちはそんな統夜君にくつついて来て東京に遊びに来たのよ♪」

海末の問いかけに、紬が丁寧に説明していた。

「そうだったんですか……」

「俺はこの後行かなきゃいけないところがあるんだけど、みんなは穂乃果たちにこの街を案内してもらったらどうだ？」

「おお！それは良いアイディアだな！」

「え？私たちが……ですか？」

統夜の申し出に、律は賛同したが、穂乃果たちは困惑していた。

「もちろん、穂乃果たちが嫌じゃなければ……だけだな」

そこは強要すべきではないので、統夜はこのように確認を取っていた。

「私はいいですよ♪」

統夜の申し出を真っ先に了承したのは、ことりだった。

「こ、ことりちゃん？」

「だって、せっかく知り合えたんだもの♪」

「そうですね。私も皆さんのお話を聞きたいと思っていましたし」

ことりだけではなく、海未も唯たちを案内するのは嫌ではなかった。

「うん！そうだよね！私たちがなんかで良かったら、ぜひ♪」

「やったあ♪それじゃあさっそく行くこうよ♪」

「はい♪」

唯たちと穂乃果たちは、共に秋葉原を見て回ることにになり、統夜は安心したからか笑みを浮かべていた。

《……?どうしたんだ、統夜》

(いや、唯たちだけでこの街を見て回るのは大丈夫かなと心配してたからな、安心しただけさ)

《なるほどな。あのお嬢ちゃんたちは地元の間人だろうし、そういう奴が一緒なら安心かもしれないな》

イルバは、何故統夜が笑みを浮かべていたのか納得していた。

「それじゃあ、俺は行くよ。……3人とも、唯たちをよろしくな!」

「は、はい!!」

統夜はこう言い残し、そのまま翡翠の番犬所へと向かった。

唯たちは、穂乃果たちの案内で、秋葉原の街を見て回るようになった。

※※※

翡翠の番犬所に到着した統夜は番犬所の中に入ると、茶色の魔法衣を羽織った少年が既にいた。

「……おお、来ましたね、統夜よ」

「ロデル様、お久しぶりです」

「いつぞやの時は世話になりました。あつ、そうそう。最近ここに配属になった桐島大輝は、とても良く働いてくれていますよ」

「そうでしたか……」

統夜は、この翡翠の番犬所に異動になった大輝の近況を聞いてホツとしていた。

「……ロデル様、そこにいる彼が例の？」

「そうです。名は如月奏夜。魔戒騎士になったばかりなのです」

「……如月奏夜です。今日は、よろしく願います」

奏夜は、今日稽古をつけてくれる統夜にペコリと一礼をしていた。

「（こちらこそよろしくな）」

「統夜、奏夜のこと、よろしく頼みますね」

「ロデル様、お任せ下さい。俺が魔戒騎士として得たものを、少しでも彼に与えてあげられればと思っていますので」

統夜は、この仕事を受ける以上は、しつかりと奏夜を鍛えようと考えていた。

「もしも今夜ホラーが現れた場合は奏夜と共に戦ってほしいので、頼みましたよ」

「わかりました。……奏夜、だったか？行こうか」

「はっ、はい！」

統夜はロデルに一礼してから番犬所を後にすると、奏夜もその後を追いかけた。

統夜は奏夜を連れて紬の父親の会社が保有するビルまで戻つてくると、エレベーターを使つて屋上までやってきた。

「あ、あの……。統夜さん、でしたよね？何故、このビルに来たんですか？」

「ここは、俺の友達の親の会社のビルだな。許可はもらったんでここなら思いきりやれると思つてな」

「思い切り……ですか？」

「奏夜。まずはお前の力がほしい」

統夜はこう言い放つと、魔戒剣を取り出した。

『！おい、統夜。何をする気だよ！』

「イレス様やロデル様からは許可をもらってる。鍛えるにはこれが一番手っ取り早いと思ってる」

統夜は予め許可をもらい、奏夜と決闘形式で戦いながら奏夜を鍛えるという方法を選んだ。

『なるほどな、確かに許可をもらってるなら思い切りやつても大丈夫か』

事情を理解したイルバは、納得したのかホツとしていた。

「……………」

奏夜も魔戒剣を取り出した。

『奏夜！こんな機会は滅多にないんだ。お前の力、存分に見せてやれ！』

奏夜の相棒である魔導輪のキルバが、奏夜を奮起させるような発言をしていた。

「そうだな…………。俺だつて魔戒騎士になつたんだ！俺の力！見せてやるよ！」

奏夜は魔戒剣を抜くと、統夜を睨みつけていた。

そんな奏夜を見て、統夜は笑みを浮かべていた。

(…………俺にもこんな時期があつたな。俺も今の奏夜のように先輩騎士に稽古をつけてもらつたけど、その時は大輝さんだつたっけ…………)

統夜は、かつて自分が大輝に稽古をつけてもらった時のことを思い出していた。

(大輝さんや色んな騎士に鍛えてもらったけどおかげで今の俺があるから…………。奏夜

だって……きつと……」

目の前にいる奏夜もかつての自分のように一人前な魔戒騎士になるだろうと確信していた。

物思いにふけて笑みを浮かべていた統夜は魔戒剣を抜くと、まるでホラーと対峙しているかのように奏夜を睨みつけた。

「……!?!」

奏夜は統夜の放つ威圧感にたじろいでいた。

(こ、これが……。18歳ながら様々な死地を乗り越えた魔戒騎士……なのか?)

奏夜は事前に統夜がどのような魔戒騎士であるかは聞いていたのだが、統夜の放つオーラに圧倒されていた。

『奏夜！ 気をしっかり持て！ ここで負けてたら話にならないぞ！』

「！そ、そうだよな……」

相棒であるキルバからの叱咤激励があったおかげで、奏夜はなんとか気を持ち直すことが出来た。

「そう来なくちゃな！ 来い、俺を倒してみろ!!」

「行きますよ、統夜さん!!」

奏夜は魔戒剣を構えると、そのまま統夜に向かって突撃し、魔戒剣を一閃した。

統夜はその攻撃を軽々と受け止めた。

「……………っ!？」

「どうした？お前の力はその程度じゃないよなあ？」

「まだまだあ!!」

統夜はあえて奏夜を挑発するのだが、奏夜は臆することなく向かってきた。

「そう来なくちゃな!!」

統夜もそんな奏夜に応戦していた。

こうして、統夜と奏夜の鍛錬を兼ねた戦いが幕を開けたのである。

※※※

その頃、唯たちは、穂乃果たちの案内で秋葉原某所にある店でショッピングをしていたのだが……………。

「……あれ？みんなどこ？」

唯だけがみんなとはぐれてしまい、迷子になってしまった。

「困ったなあ……。みんなはどこにいるんだろう……」

唯は周囲を見渡すのだが、この辺にはいないのか、それっぽい人物はいなかった。

「……とりあえずあずにやんに電話を……って、あれ？」

唯は梓と連絡を取るために携帯を取り出そうとするのだが、その前に、小柄でツインテールと、梓に似た容姿の少女を見つけた。

「……あ！あずにやんだ!!」

その少女を梓だと確信した唯はその少女の方へ向かっていった。

そして……。

「あ〜ず〜にやん♪」

「ひい!？」

唯はいつもと同じ感覚でその少女に抱きついた。

「もお、あずにやん、心配したよお！みんなはどこにいるの？」

その少女を梓だと思っていた唯はこのように話を進めていたのだが……。

「……ちよつと、離してくんない？私、そのあずにやんとかじやないんだけど」

「へ？」

唯はまじまじとその少女を見ると、すぐに梓ではないとわかった。

「す……すすす……すいません!!」

唯は慌ててその少女から離れた。

「まったく……。にこにこは可愛いから気持ちはわかるけど、いきなり抱きつかれるのは困るのよねえ」

少女は自分のことをにこにこと名乗っていた。

「ご、ごめんなさい……」

唯はとりあえずにこにこと名乗る少女に謝った。

すると……。

「あ……。いたいた……。唯先輩!!」

今度は本物の梓が唯を見つけて、唯のいる方へと駆け寄った。

「もお、勝手にいなくならないで下さいよ!みんな心配してましたよ!」

「エへへ……。ごめんね、あずにゃん……」

唯は笑いながらも梓に謝っていた。

すると……。

「……」

にこにこと名乗る少女が梓のことをジッと見ていた。

「?」

梓もその視線に気付き、にこにーと名乗る少女のことを見ていた。

(……なんだろう……)

(この子……)

(他人とは思えないんだけど……)

梓とにこにーと名乗る少女は容姿が似ているからか、お互いに親近感を覚えていた。

「……ふ、ふんーとりあえず、今度からは気をつけなさいよね!」

にこにーと名乗る少女はこう言い放つと、その場を後にしたのである。

「……唯先輩、あの人、知り合いですか?」

「ううん。知らない子だよ」

「ええ……」

梓は唯が赤の他人と知ってドン引きしていた。

赤の他人相手に何をしたのかと思っていたからである。

「ほら、みんな待ってますから、行きますよ」

「あ、あずにゃん!待ってよお〜!」

梓は近くで待っている律たちのところに戻ると、唯は慌ててその後を追いかけた。

統夜は実践形式で奏夜に稽古をつけていたのだが、稽古を始めてから1時間が経過した。

奏夜は全力で統夜に向かっていったのだが、その力の差は歴然であり、奏夜はその場に倒れ込んでいた。

《……統夜、この光景は随分と懐かしいんじゃないのか？》

(そうだな。もつとも、その時あんな感じで倒れてたのは俺だけだな)

統夜はその場に倒れ込んでいる奏夜を見て、かつて自分もこんな感じで大輝や他の先輩騎士に鍛えてもらったことを思い出していた。

「……おい、奏夜！いつまで寝てるんだ？まだ鍛錬は終わっちゃいないぞ！」

統夜はその場に倒れ込んでいる奏夜に声をかけた。
すると……。

「……すいません……。ちよつと休憩してただけですよ……」

奏夜はゆっくりと立ち上がり、再び魔戒剣を構えた。

「……その調子だ！まだまだ行くぞ！」

統夜も魔戒剣を構えると、今度は統夜から攻撃を仕掛けた。

奏夜は、統夜の攻撃をなんとかかわしていたが、反撃の糸口をつかめずにいた。

「どうした、どうした？反撃して来い!!」

このように奏夜を煽る統夜であったが、攻撃の手を緩めることはしなかった。

「くそっ！せっかく統夜さんが鍛えてくれたんだ！このまま無様なまま、終われるかよ！」

奏夜は、持ち前の負けん気の強さを発揮すると、統夜の魔戒剣を受け止めて、その状態で剣を一閃し、統夜の魔戒剣を弾き飛ばした。

「なっ……………!?!」

統夜は奏夜の予想外の攻撃に驚きを隠せなかった。

「よし……………このまま……………!」

統夜相手に一矢報いることが出来て、奏夜はしたり顔をしていた。

しかし、その一瞬の心の余裕が一瞬の隙を作ってしまった。

「……………ふっ、甘いぜ!!」

統夜は一瞬の隙を突くと、奏夜に蹴りを放ち、それを受けた奏夜は吹き飛ばされた。

統夜はその隙に魔戒剣を回収した。

「く、くそ……………!」

奏夜は体勢を立て直し、反撃をしようとするが……。

「……………」

その前に統夜が奏夜の喉元に魔戒剣を突き付けた。

「……勝負あり、だな」

統夜は魔戒剣を青い鞆に納めた。

「……参りました。流石です、統夜さん」

奏夜も魔戒剣を緑の鞆に納めた。

「さっきのお前の攻撃には驚かされたが、油断したな。そんな一瞬の油断がホラーとの戦いでは命取りになる。そのことを忘れるな！」

統夜は奏夜の改善すべき点を指摘し、先輩騎士として毅然な態度をとっていた。

「……はい、わかりました……」

奏夜もそのことは反省すべき点だということは理解していたので、統夜の指摘を真摯に受け止めていた。

『流石だな、白銀騎士。その若さで様々な死地を乗り越えただけのことにはある』

奏夜の相棒であるキルバは、統夜の実力を素直に認めていた。

「へえ、これがお前の相棒って訳か」

『俺は魔導輪のキルバだ。よろしく頼む』

『ほお、お前さんも指輪型の魔導輪なんだな』

指輪型の魔導輪の数はとても少ないため、イルバはキルバの存在に驚いていた。

『お前は白銀騎士の魔導輪か』

『ああ、俺様はイルバだ。これからも頼むぜ、小僧』

「こ、小僧って……」

「まあ、気にするな。こいつは実力を認めた奴しか名前で呼ばないからさ。いずれは名前前で呼ばれるようになるさ」

統夜も奏狼の称号を受け継ぐまでは、イルバに小僧と呼ばれていた。

なので、奏夜もいつかはイルバに名前で呼ばれる日が来ると確信していた。

「さて、とりあえず鍛錬の方はこの辺で……」

統夜はここで奏夜の鍛錬を終わらせる予定だったのだが、その時、一羽の鳩が、統夜たち目掛けて飛んできた。

『……統夜、どうやら指令のようだぞ』

「え、指令？」

「ええ。あの鳩はロデル様の使い魔で、あんな感じで指令書を運んでくれることがあるんです」

奏夜の説明通り、統夜たち目掛けて飛んできた鳩は、ロデルの使い魔である。

魔戒騎士に指令を告げる時に伝書鳩のように指令書を渡すことがあるのである。
「へえ、この番犬所はこういうシステムなのか。面白いな……」

統夜は、紅の番犬所とは違う指令書を渡すシステムを見て、目を輝かせていた。

そして、その鳩から指令書を受け取ると、鳩は番犬所に向かつて飛んでいった。

統夜は魔導ライターを取り出すと、魔導火で指令書を燃やした。

すると、魔戒語で書かれた文章が浮かんできたので、統夜と奏夜はその指令内容を音読した。

2人が読み終わると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

「……奏夜、行くぞ。ホラー討伐で改めてお前の力を計らせてもらう」

「あつ、はい！」

「その前に……」

統夜は携帯を取り出すと、律に電話をかけた。

「……もしもし」

『あつ、統夜。ちようどこつちも電話をかけようと思ったんだよ！』

「そうか。ところであいつらはまだ一緒なのか？」

『いや、穂乃果たちとはちよつと前に解散したんだよ。それで、仕事は終わったのか？』

「いや、それが、今ちようど指令が入ってな。今日は遅くなりそうだからみんなは先に

桜ヶ丘に帰っててくれ」

『えっ?でも……』

「それじゃあ、頼んだぜ」

『ちよつと、統夜?』

統夜は有無を言わずにこう言うと、そのまま電話を切って、携帯をポケットにしまった。

「……待たせたな。それじゃあ、行こうか」

「は、はい。あ、あの……」

奏夜は、統夜が誰と電話をしていたのかが気になっていた。

「ああ、今のは俺の友達だよ。一緒に東京までくっついてきてさ」

「その人は魔戒騎士やホラーのことを知ってるんですか?」

「ああ。ホラーに度々襲われたことがあり、その都度守ってきたんだ。俺にとっては守りたい大切な存在なんだよ」

「守りたい……存在……」

「奏夜ってまだ中学生だろ?俺みたいに高校へ行けばきつと見つかるさ。守りたい存在ってのがな」

「……そんなものですかね?」

今の奏夜には統夜の言葉が理解できず、首を傾げていた。

「その時によくわかるはずだぜ。守りし者とは何なのかってことがさ」

統夜は桜ヶ丘高校に入学し、唯たちに出会ったからこそ守りし者とは何なのかを理解することが出来た。

奏夜もそんな統夜のように守りし者が何なのかを理解する日が来ると確信していた。

「とりあえず、行くぞ」

「わ、わかりました」

統夜と奏夜は、それぞれの魔導輪のナビゲーションを頼りに、ホラーの搜索を始めた。

※※※

統夜と奏夜がホラーを搜索しながら街を歩いていると、既に夜になっていた。

「……………イルバ、どこか?」

イルバのナビゲーションで到着した場所は、とあるビルの屋上であった。

『ああ。ここから邪気を感じるぜ』

『俺も感じている。奏夜、油断するなよ!』

「ああ!」

統夜と奏夜は魔戒剣を取り出し、いつでも抜刀出来る状態にしておいた。

『……!!来るぞ!』

2つの魔導輪がこのように警告すると、虎のような姿をしたホラーが2人目掛けて飛びかかってきた。

「……!!」

統夜と奏夜は魔戒剣を抜くと、ホラーの攻撃を防いだ。

奇襲攻撃をかわされたホラーは後方にジャンプして、2人と距離をとった。

『……統夜、こいつはタイガード。かなりすばしっこいホラーだぜ!』

『奏夜!気を引き締めろよ!今の前には荷が重すぎる相手だぞ!!』

2人が対峙しているホラー、タイガードは、俊敏な動きをするホラーであり、その動きで戦う相手を翻弄する。

統夜は俊敏な動きをするホラーは何度か交戦経験があるが、魔戒騎士になったばかりの奏夜にはこのホラーは倒せるかどうかの強敵であった。

「……どんな奴が相手だろうとやってやるさ!!」

奏夜は魔戒剣を力強く握りしめると、タイガードに向かっていった。

「………奏夜!!むやみに飛び込むな!」

統夜はこう奏夜に警告するのだが、既に手遅れだった。

「はあっ!!」

奏夜は魔戒剣を一閃するのだが、それはタイガードにあっさりとかわされてしまった。

「なんの!まだだ!!」

奏夜は連続で魔戒剣を振るうが、タイガードはその俊敏な動きで奏夜を翻弄していた。

「……っ!すばしっこい奴め……」

「……」

統夜は、奏夜の援護をすることなく、奏夜とタイガードの戦いを見守っていた。

『おい、統夜。どうするつもりだ?』

「あいつが本当に危なくなったら援護をするつもりだ」

『おいおい、そんなに悠長に構えていいいいのか?』

「イルバの心配はわかるけど、これくらいの試練を乗り越えられないようじゃこれから

先の戦いを生き抜くことは出来ないよ。これは、奏夜の成長のために必要なんだよ」

統夜は今からでも奏夜の援護は出来るのだが、それをするのは奏夜のためにならないと思っていた。

だからこそ、出来るのであれば奏夜 1人の力でタイガードを倒して欲しいと統夜は願っていた。

奏夜は、そんな統夜の思いを汲み取っていた。

(……何で統夜さんは手を出さないのかと思っただけど、統夜さんは俺を試してるんだな。これからも多くの人を守る魔戒騎士になるため、こんな奴くらい1人で倒してみせろと)

このように分析していた奏夜であったが、タイガードに翻弄されており、防戦一方であった。

(……やってやるさ！俺だつて魔戒騎士なんだ！どんな奴が相手だつて倒してみせる!!)

奏夜はタイガードの攻撃を防ぎながら、反撃の機会をうかがっていた。
すると……。

(……!?待てよ？相手がすばしっこいなら、その機動性を奪えば!!)

タイガードへの対抗策を思いついた奏夜は、魔戒剣を地面に叩きつけるように一閃し

た。

その攻撃は当然のようにかわされてしまった。

しかし、奏夜は方向を変えながら何度も魔戒剣を一閃していた。

『おいおい、なんだよあの動きは。そんなデタラメな攻撃は奴には当たらないぜ？』
行き当たりばったりに見える攻撃に、イルバは呆れていた。

しかし……。

「いや、あれでいいんだ」

奏夜の思惑を見抜いた統夜は、笑みを浮かべていた。

奏夜は何度も魔戒剣を一閃するが、ことごとくタイガードにかわされてしまった。

そして、隙だらけな奏夜に蹴りを放つと、奏夜は吹き飛ばされるが、すぐに体勢を整えた。

「……よし、こんなもんでいいかな？」

奏夜は笑みを浮かべながらタイガードを見ていた。

タイガードは奏夜を喰らうためにその俊敏な動きで奏夜に接近しようとしたのだが

……。

「……!?!」

地面にあちこちクレーターのような穴が出来ており、そのため、自慢の素早い動きが

出来なくなってしまうていた。

『……なるほど、さっきの攻撃は、奴の動きを封じるための布石だったという訳か』
「そういうことだ。後は飛びかかるくらいしか出来ないだろうが、それは隙が多いからな」

イルバは奏夜の作戦に気付き、統夜はその作戦の補足説明をしていた。

(……あの僅かな時間で突破口を見つけるとは、やるじゃないか、奏夜のやつ)

今この瞬間にも魔戒騎士として成長している奏夜を垣間見た統夜は、嬉しさのあまり笑みを浮かべた。

「……どうやら、俺の出番はなさそうだが、少しくらいは援護してやるか」

統夜は魔戒剣を構えてタイガードを睨みつけた。

「……奏夜！ 鎧を召還して一気にケリをつけるぞ!!」

「は、はい!!」

奏夜に鎧を召還するように指示した統夜は、先に魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。そこから放たれる光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

「……あれが、統夜さんの鎧……」

統夜の鎧を見た奏夜は、その雄々しさに圧倒されていたが、すぐに我に返った。

「ホラー、タイガード！ 貴様の陰我、俺が断ち切る!!」

奏夜はタイガードにこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。そこから放たれた光に包まれた奏夜は、自身の鎧を身に纏ったのだが……。

「……へえ……」

統夜は、初めて見る奏夜の鎧に驚いていた。

奏夜の身に纏った鎧は、まるで牙狼のように黄金の輝きを放っていた。

その頭部は3本の角がついており、狼のような顔になっている。

腰の部分にはこの鎧の紋章である丸のエンブレムが存在していた。

奏夜の指に嵌められたキルバも、鎧と一体化したかのようにくつついていた。

奏夜の手を持っている魔戒剣も、専用の剣である陽光剣（ようこうけん）に姿を変え

ていた。

奏夜の身に纏っているこの鎧は、陽光騎士輝狼（キロ）。

奏夜が継承したこの鎧は黄金騎士の系譜とは関係ないが、その名のようにまるで陽の光のような輝きを放っている。

「……奏夜！俺が奴の動きを止める！お前はその隙に奴を仕留めろ！」

「は、はいー」

統夜は奏夜に指示を出す、タイガード目掛けて突撃した。

タイガードは俊敏な動きを封じられながらも統夜に向かっていた。

そしてタイガードは統夜に攻撃を仕掛けるのだが、それを軽々とかわしていた。

統夜は皇輝剣を一閃し、その一撃で怯んだ隙に蹴りを放った。

その一撃を受けたタイガードは、奏夜のいる方向に吹き飛ばされていった。

「奏夜！そっちに行つたぞ!!」

「はい!!」

奏夜はギリギリまでタイガードを引き付けると、絶妙なタイミングで陽光剣を一閃した。

その一撃により、タイガードの体は真つ二つに斬り裂かれた。

奏夜に斬り裂かれたタイガードは、断末魔をあげながら消滅した。

「……………や、やった……………倒した……………」

タイガードが消滅したことを確認した奏夜は手強いホラーを倒したことに喜んでいった。

そして、統夜と奏夜は同時に鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を、それぞれの鞘に納めた。

「……………奏夜、やったな!」

「統夜さん、ありがとうございます!」

「俺は何もしてないさ。あのホラーを倒したのはお前の力だ」

「統夜さん……」

この時、統夜は奏夜の実力を認めており、奏夜はそのことが嬉しかった。

「そういえば、お前の鎧は牙狼とは違う黄金の鎧なんだな」

「ええ、そうなんですよ。黄金騎士牙狼とは全然関係ない系譜なんですけどね……」

奏夜の鎧は黄金の鎧のため、味方だけではなく、ホラーにも牙狼と間違われることがあるが、牙狼とは関係ない系譜なのである。

「なるほどね……」

先ほどの奏夜の説明で、統夜は納得していた。

「……それじゃあホラーも倒したことだし、俺は桜ヶ丘に帰るよ」

統夜は、明日も学校があるため、早々に帰ることにした。

「統夜さん！今日はありがとうございました！また、稽古をつけてくれたら嬉しいです！」

「そうだな。また機会があればお前を鍛えに行くよ。……奏夜、強くなれ！」

「……っ！は、はい!!」

統夜は後輩である奏夜に力強いメッセージを送ると、その場を後にして、桜ヶ丘に帰るために歩き始めた。

奏夜と別れた統夜は、紬の親が所有しているビルの前を歩いていった。

「……みんなは帰ったよな。そしたら魔界道を使って帰るかな……」

唯たちが帰っただろうと確信していた統夜は、この場を後にし、魔界道を使って桜ヶ丘へ帰ろうとしていた。

……その時だった。

——プップー!!

突如クラクションの鳴る音が聞こえてきたので、統夜はその音の方向を向いた。
すると……。

「……みんな、待っていてくれたのか……」

それは、帰ったと思われる唯たちを乗せたりムジンだった。

「……やーくん！早く早く！」

リムジンの窓を開けて唯がこのように呼びかけて来たので、統夜は急いでリムジンに乗り込んだ。

統夜が乗ったことを確認した斎藤は、リムジンを発車させて、桜ヶ丘へと向かった。

「……みんな、帰ったんじゃないのか？」

「それがさあ、統夜から電話きただろ？その後、少し前までゲーセンで遊んでたんだよ」
唯たちは、統夜に先に帰れと言われたものの、統夜を待ちながらも少し遊びたいという話になり、少し前までゲーセンで遊んでいた。

遊び終わった後、紬の執事である斎藤が迎えに来てくれて、リムジンの中で少しだけ待っていたら指令を終えた統夜が現れたということである。

「それならそれで先に帰ってれば良かったのに」

「そうなんですけど、統夜先輩はあそこに戻ってから帰るだろうなと思ってたのであそこまで待つてたんです」

「なるほどな。だけど、待つててくれて助かったよ。じゃなかったら間違いなく桜ヶ丘に着くのは深夜になるからな」

魔界道を使ったとしてもそれなりに時間がかかるため、唯たちが待つててくれたのはとてもありがたかった。

「そんな、気にしなくてもいいのよ♪」

「ムギの言う通りだよ。……あつ、そうそう。穂乃果たちから伝言を預かってるんだよ」
「穂乃果たちから？」

「今度東京に来た時は一緒に遊びましょう！……だつてさ」
「連絡先も教えてほしいって言って言っていました！」

唯たちは穂乃果たちとメールアドレスを交換していたのだが、今度統夜のアドレスも教えてくれと穂乃果たちは唯たちに告げていたのである。

「ほら、アドレスを教えてあげるから穂乃果ちゃんたちに連絡しないと！」
「わ、わかったよ……」

帰りの車内で穂乃果たちのアドレスを聞いた統夜は穂乃果たちにメールを送ると、桜ヶ丘に着くまでメールで会話をしていた。

こうして、東京での長い1日は幕を閉じた。

……続く。

—— 次回予告 ——

『いよいよ来たな、夏休みが。そして、統夜にとっても大事な時期がやって来たぜ！次回、「旅立」。統夜の新たなる戦いが今始まる！』

第69話 「旅立」

統夜が東京へ行き、後輩騎士である奏夜の指導を行ってから何日かが経過した。

この日は終業式であり、明日からは長い夏休みが始まるのである。

終業式が終わると、統夜たち3年生組は一緒に下校していた。

すると……。

「……合宿をしよう！」

唯がいきなりこのように話を切り出してきた。

「「「え？」」」

唯の唐突な申し出に、統夜たちは思わず足を止めた。

「合宿ですよ！合宿！」

「したいしたい♪」

「おお、いいなあ♪」

唯の提案に、紬と律は乗り気であった。

「ちよつと待て！受験勉強だつてあるだろ？」

滯は3年生だからこそそのもつともな理由で反対したのだが……。

「合宿に賛成の人！」

唯がこう言うと、律と紬が手をあげた。

「おい！そういうことは梓に聞いてみないと」

梓を抜きにして多数決を取ることに濁は異議をとなえるのだが、唯は梓から来たメールを濁に見せた。

そのメールには写メが添付されており、梓も合宿に賛成と言うように手をあげていた。

「ええ!？」

「メールして、あずにゃんにも聞いておいたんだよー」

唯は予め梓にメールして、合宿のことを話しておいたのである。

「ところで、統夜君は大丈夫なの？」

紬は先ほども手をあげなかった統夜に合宿について聞いてみたのだが……。

「すまん。どちらにせよ俺は合宿には参加出来ないんだ。だからやるなら俺抜きで頼むよ」

「えっ……!?!? な、何で?!？」

統夜が参加出来ないこと知り、唯たちは落胆を隠せなかった。

「それはみんなで集まった時に話すよ」

こうして、今年の合宿は、統夜抜きで行なわれる感じとなった。

そして翌日、統夜たちは合宿の話し合いをするため唯の家を訪れていた。

「あつ、皆さん。いらつしやい！」

統夜たちが唯の家に入ると、憂が出迎えてくれた。

「……お邪魔しまーす！……」

「お姉ちゃん！皆さん来たよ！」

憂は階段の方に向かって唯を呼ぶのだが……。

「ああ、みんなあ。いらつしや〜い」

唯はひよつこりと階段から顔を出していた。

「アハハ……。唯のやつだらけてるな……」

統夜はさつそくだらけている唯を見て呆れていた。

そんな唯はゆつくりと階段を降りて、統夜たちを出迎えた。

そして、統夜たちをリビングに案内するのだが……。

「ゲームしよお♪」

いきなり唯はゲームをし始めていた。

「おおー！」

「やるやる♪」

律と紬はノリノリでゲームに参加しようとしていた。

唯が今やっているのは格闘ゲームであり、クラスメイトから借りたものであった。

「あの……私たち、何しに来たんでしたっけ？」

「合宿の話し合いと何で統夜が合宿に行けないかを聞くため……だよな」

梓と漣は、今日唯の家に集まった目的を確認していた。

「おい、始めるぞ」

今ゲームを始められるとグダグダになりそうだと判断した漣は、唯たちをなだめて先

に話し合いを始めさせることにした。

「ええ？ちよつとくらしいいいじゃん！」

「そーだそーだ！」

唯と律は異議を唱えるのだが、渋々漣の話を聞いて、先に話し合いをすることになった。

「あの……本当に良いんですか、合宿？」

「へ？何で？」

「皆さん、3年生ですし、統夜先輩は今回合宿に参加出来ないみたいですし……」

「まあ、ちよつと息抜きだよ、息抜き♪」

『おいおい、お前さんたちは息抜きをし過ぎなんじゃないのか?』

イルバは、律の樂觀的な言葉に呆れていた。

「去年とその前は海だったけど、今年は山がいいかな」

「ええ?今年も海がいい!」

山がいいという律の提案に、唯が異議を唱えていた。

「川で魚取つて、バーベキュー出来るぞ!」

「……」

唯はバーベキューという単語を聞いて少し考えていた。

そして……。

「美味しそうだねえ♪」

「だろお♪」

バーベキューをしている様子を想像した唯はニヤニヤしていた。

「やつぱり、遊ぶ気満々ですね」

「まあ、そんなことだろうと思つてたけどな」

合宿Ⅱ遊びという構図が1年生の時から出来上がっており、今年の合宿もこのようになるのだろうかと予想していた。

「ところで、梓はどこがいい?」

「え?」

滯が合宿の場所をどこにするか梓に聞くと、梓はうーんと考え込んでいた。そして……。

「あ、あの!山は山でも夏フェスとか!」

「ああ!いいかもな!」

梓の提案に滯は賛同していた。

しかし……。

「夏へス?」

「夏へソ?」

唯と紬は夏フェスというものが何なのかがわからず、このように変なことを言っていた。

「ち、違います!夏フェスです!」

「色んなバンドが大きな野外の会場で演奏するんだよ。何万人が集まるんだぜえ」

「夏フェス!1度行ってみたいと思ってたんだよ!」

「どうやら滯も夏フェスという案にはノリノリであった。

「私もです!プロの演奏を聴くのも勉強になると思うんです」

「んじゃ、決定だな！」

（ぐぬぬ……！夏フェスかあ。いいなあ……。サバツクがなければ俺も行きたくったんだが……）

統夜も夏フェスという言葉はテレビで聞いたことがあり、行ってみたいと思っていたが、行けない事情があつたのである。

（……ん？待てよ？夏フェスってことは……）

統夜は夏フェスという言葉を聞いて、何かを思い出した。

「なあ、お前ら。夏フェスは良いとは思うけど、チケットはどうするんだ？」

「……あつ！」

律は一番大事なことを思い出し、顔を真っ青にしていた。

いくら夏フェスに行きたいと思つていても、チケットがなければ中に入れないからである。

すると……。

「仕方ないわねえ。今回は特別よ」

いつの間にか現れたさわ子が夏フェスのチケットらしきものを見せびらかしていた。

「凄いです！」

「さすがさわちゃん！」

「エツヘン！」

さわ子はドヤ顔をしていたのだが……。

『おい、さわ子。お前さん、いつの間に現れたんだよ』

まるで最初からいたようにいつの間にか現れたさわ子に、イルバは呆れていた。

そして……。

「あっ!!本当だよ!!」

律はここでようやく気付いたのか、驚いていた。

「ああ、私にも麦茶をちょうだい」

「あ、はい」

憂は立ち上がり、さわ子の分の麦茶を用意した。

「……夏フェスデビューかあ……」

「私、野外ライブ初めてです！」

「気持ちいいだろうなあ……」

滯は、初めて夏フェスに行けることになり、ワクワクしていたからか、浮かれていた。

「そんな呑気に構えてたら負けるわよ」

「な、何にですか!？」

「夏によ!いい?ギラギラ燃える太陽、ムンムンした熱気!そして、今か今かと獲物を待

ち構える夏の虫たち！夏フェスに参戦する者は、その全てと戦うの！覚悟なさい！」
「は……………はい!!」

唯たちはあまりも熱くなっているさわ子に圧倒されていた。

『やれやれ……………さわ子のやつ、随分と暑苦しいな……………』

イルバは夏フェスに向けて熱くなっているさわ子に呆れていた。

「ねえ、さわちゃん。夏フェスのチケットって何枚あるの？」

「えつと……………6枚ね」

さわ子は現在夏フェスのチケットを6枚持っていた。

チケットの枚数を知り、律はあることに気付いた。

「……………って!!一枚足りないじゃん！」

チケットが1枚だけ足りないことに気付き、唯たちの顔も真っ青になっていた。

しかし……………。

「いや、6枚なら問題ないよ。俺はどちらにせよ夏フェスには行けないからさ」

統夜は今回の夏フェスには参加出来ないため、チケットの数は問題なかった。

「え、そうなの!?!それなら良かったけど……………」

チケットの枚数が足りるとわかり、さわ子は安堵していた。

「ねえ、ずっと気になってたんだけど、やーくんは何で夏フェスに参加出来ないの？」

唯は今まで気になっていた疑問を統夜にぶつけた。

「それはあたしも気になってたんだ。もしかして、魔戒騎士の仕事とか？」

「当たらずも遠からずつてところかな？ だけど、仕事つて訳ではないんだよ」

「？ 仕事じゃなければなんなんですか？」

「ああ、これだよ」

統夜は魔法衣の懐から、一枚の招待状のようなものを取り出し、それを唯たちに見せた。

「……？ 統夜君、これは一体何なの？」

この招待状は魔戒語で書かれていたため、紬は読むことが出来ず、統夜にこれが何なのかを聞いていた。

「これは、「サバック」の招待状なんだよ」

「「「「サバック？」「」」」」

初めて聞く言葉に、唯たちは一斉に反応していた。

その光景を見た統夜は苦笑いをしていた。

「サバックっていうのは各番犬所の魔戒騎士が集まって、7日間かけて最強の魔戒騎士を決める武闘大会のことだよ」

統夜はサバックというものを簡潔に説明した。

「え？でも最強の魔戒騎士って鋼牙さんなんだろう？それじゃ大会自体意味がないんじゃない？」

「サバックは牙狼の称号を持つ魔戒騎士に敬意を込めた大会だから、牙狼の称号を持つ魔戒騎士の参加は認められてないんだよ」

「ということは、ナンバー2を決める大会ってこと？」

「まあ、そうなるかな。ちなみに、前回大会は零さんが優勝したんだよ」

「へえ、零さんって凄い魔戒騎士なんだねえ」

唯は零が凄い魔戒騎士であることを改めて確認していた。

「サバックってさ、つまりはドラ○ンボールの天○一武闘会みたいなもんなのか？」

「……その例えはあれかもしれないけど、まあその発想でいいと思う」

統夜は律の出した例えに呆れていた。

統夜はさらにサバックについて詳しく説明を始めた。

「サバックはな、1対1のトーナメント形式なんだけど、ソウルメタルの剣じゃなくて支給される鉄の剣で戦うんだよ」

「ということは、魔戒剣は使っちゃダメってこと？」

「そうだな。それだけじゃなくて、鎧や魔戒獣の召還は禁止されてるし、魔導具の力を借りるのも禁止なんだよ」

『まあ、俺様も戦いの時は口出しをしてはいけないんだよ』

「それじゃあイルイルは黙ってなきやいけないんだね」

『そうなんだが、俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

唯とイルバはいつものやり取りをしていた。

「あと、魔導筆を使った術は禁止されてるんだ」

「ということは、魔導筆を使わない術はありつてことですか？」

「まあ、そういうことになるな。魔導筆を使わない術を使う魔戒騎士はけっこういるからな。だから厄介なんだよな」

梓の推測通り、魔導筆を使わない術であれば、使用を許可されている。

そのため、術を使える魔戒騎士は、術を用いて攻撃をすることが出来る。

「そういうえば、やーくんってそういう術は使えるの？」

「いや、俺は騎士としての鍛錬しか受けてないからそういうのは使えないんだよ」

統夜は魔戒騎士としての鍛錬しか受けていないため、術の使用は出来ないのである。

「あ、あと、サブツクの勝敗の付け方なんだけどな、どちらかが先に一滴でも血を流したら負けなんだよ」

「………ひっ!?」

血を流したらというキーワードを聞いた藩は怯えていた。

その様子を見た律はニヤリと笑みを浮かべていた。

「……戦いが終わったら血だらけ……」

「ひいいい!? やめろ! やめろつて!」

濡は律の言葉に怯えきつていた。

「……いい加減にしろ!!」

「うぎやつ!」

統夜は律に拳骨をお見舞いすると、律を黙らせた。

律の頭にタンコブが来ると、律はしゅんとしながら黙り込んでいた。

「……ま、サバックについてはこんなもんかな?」

統夜はサバックについての説明を終えた。

「ところで、そのサバックつて7日間かけて行うつて言ってみましたけど、その間はどこに泊まるんですか?」

「ああ、会場近くに宿泊スペースがあるからな。サバックに出る魔戒騎士はそこに宿泊する予定になってるんだよ」

「へえ、そうなのね」

「そもそも、そのサバックつてどこでやるんだ?」

「魔界道つていう魔戒騎士や魔戒法師にしか使えない道じゃないと行けない場所にある

んだよ。だから、一般人が迷い込むこともないしな」

サバツクの会場は、人界でも真魔界でもない場所にあり、そこへは魔界道を使わないと行くことが出来ない。

そのため、一般人がサバツクの会場に迷い込む心配がないのである。

「それで、そのサバツクはいつ行われるんですか?」

「サバツクの開催は3日後だから、明後日には会場入りしようと思ってる」

「3日後……。夏フェスは4日後だから、お見送りは行けそうね♪」

「アハハ……。お見送りって大袈裟だな……」

「そんなことないよ!だってやーくんにとって大一番なんだよ?」

サバツクという競技が統夜にとって重要なものであると理解していた唯たちは、統夜がサバツクの会場に向かう前に統夜のお見送りをしたいと考えていた。

「……まあ、好きにしてくれ」

唯たちがそうしたいというなら、その通りにさせてあげようと思った統夜はこれ以上否定的なことは言わなかった。

こうしてサバツクの説明も終わり、話し合うべき話を終えた唯たちは、麦茶を飲みながらまったりしたり、ゲームをしたりしていた。

※※※

そして、サバツクの会場へ向かう日となった。

午前中はエレメントの浄化を行い、午後に出発する予定になっている。

「……はあっ!!」

統夜は魔戒剣を一閃すると、オブジエから飛び出してきた邪気を斬り裂いた。

「……よしっ、次だ」

統夜はイルバのナビゲーションを頼りに次のオブジエへ向かおうとしたのだが……。

「統夜君、精が出ますね」

レオが突如現れると、統夜に声をかけた。

「れ、レオさん!?! どうしてここに?」

統夜はレオが来ていることに驚いていた。

「僕は桜ヶ丘高校に立ち寄ってきたんですよ。あそこに置いてきた魔導具を回収するた

めに」

「やっぱりあれはレオさんの魔導具だったんですね」

統夜たちは音楽準備室の中にある物置を整頓したことがあるのだが、その時に統夜はレオが置いたと思われる魔導具を見つけていた。

いつかレオが取りに来るだろうと思い、物置に置いておいたのである。

「ところで、あの魔導具ってどんな魔導具なんですか？」

統夜はあの魔導具がどんなものなのか知らなかったため、レオに聞いてみた。

「ああ、この魔導具は戦いの記録とかを記録する魔導具ですよ。もうすぐサバックがありますから、サバックの戦いを記録したいと思いませんか？」

「ということ、これはカメラみたいな魔導具ってことですか？」

「まあ、そういうことですかね。統夜君だってサバックでの戦いを唯さんたちに見てもらいたいでしょう？」

「！そ、そりやあ……まあ……」

統夜は素直に答えると、レオは笑みを浮かべていた。

「ま、そういう訳ですので、僕は先に会場に行つてますので、後で会いましょう！」

レオはこう言い残すと、その場を離れてどこかへと移動した。

『……統夜、仕事の続きをするぞ』

「ああ、そうだな」

統夜も気を取り直して、次のオブジェへ移動を開始した。

その後統夜は、午前中はずっとエレメントの浄化を行い、それが終わると、1度家に戻った。

すると……。

「……あ、やーくん！ やつと帰ってきたよお！」

「唯、それにみんな……」

統夜の家の前に、唯たち軽音部のメンバーと、憂と純と和。そしてさわ子がおり、統夜の帰りを待っていた。

『おいおい、本当に見送りに来たんだな』

イルバも本当に唯たちが統夜の見送りに来るとは思っていなかったので、驚いていた。

「だってやーくんの大一番なんだもん!!これくらいはしたいと思ってるね!」

「そうだそうだ!それに、こういうのってオリンピックの壮行会みたいで面白そうだからな!」

律はサバックを今度はオリンピックのようなものと例えていた、

「私たちだって統夜には悔いのない戦いをしてもらいたいと思ったからな」

「うん♪こういう応援って楽しいものね♪」

「統夜先輩、頑張ってくださいね！」

漣、紬、梓の3人が統夜にエールを送っていた。

「私たちも梓や憂から話は聞きました。どんな大会からよくわからないけれど、統夜先輩、頑張ってくださいね！」

純は事情をイマイチ理解していなかったものの、それでも統夜のことを応援しようと思っていた。

「私も純ちゃんと同じよ。統夜君、無茶だけはするんじゃないわよ」

和も唯や憂から事情を聞いただけなので、詳しいことはイマイチわかっていなかったものの、統夜の無事を祈っていた。

「まあ、私たちは今度夏フェス行ってくるけど、統夜君も頑張ってくださいよ！それに、戒人君や桐島さんにもよろしく言っておいてね！」

さわ子は統夜にエールを送るだけではなく、戒人や大輝のことも気にかけていた。「え、夏フェス?! いいなあ……」

純は夏フェスという単語に食いついて羨ましそうにさわ子を見ていた。

「あの、統夜さん。これ……」

憂が統夜に渡したのはおにぎりの入った包と、弁当箱だった。

「！憂ちゃん、これって……」

「みななでお弁当を作ったんです。統夜さんには頑張ってほしいって思ってるから……」

「……ありがとう……。凄く嬉しいよ！」

統夜は憂たちからの弁当の差し入れに心から感謝していた。

「統夜先輩、今から出発するんですか？」

「いや、昼飯食べてから行こうかなって思ってたけど」

「それだったら！是非そのお弁当を食べてから行って下さい！」

「……そうだな。ありがたくいただくよ。みんなも上がってくれ」

統夜は唯たちと共に家の中に入り、唯たちをリビングに案内した。

「さあ、遠慮なく座ってくれよ。ちよつと狭いかもしれないけど」

統夜は唯たちに対してこう言っていたが、唯たちは初めて入る統夜の家をキョロキョロと見回っていた。

「統夜先輩ってここに一人で住んでるんですよね？」

「ああ、両親が亡くなってからは一人で暮らしているぞ」

「へえ、だけど一人で住むには広いんじゃないのか？」

統夜の住んでいる家は、一般人が住んでいる平均的な一軒家である。

そのため、滯の言う通り、一人で住むには広すぎるくらいなのである。

「まあな。だけど、この家は俺にとっては大切な家だからな」

統夜は幼少の頃からこの家に住んでいるため、統夜にとっては思い出深い家である。

この家で統夜の母である明日菜がディオスに殺されたりもしたが、それでも統夜にとっては大事な家なのである。

「……あれ？この階段、地下に繋がってるのかな？」

純は地下に繋がってる階段を発見した。

すると……。

「ああ、地下は危ないから入らない方がいいぞ」

「あ、危ないって地下には何があるんですか？」

「地下は魔戒騎士として鍛錬するための部屋なんだけど、尖った木とか刃物とか飛んでくるからな」

「え!!めっちゃ危ないじゃないですか!?!」

純は地下の部屋の秘密を知ると、驚きを隠せなかった。

その地下の部屋があまりにも非現実過ぎるからである。

「だから命が惜しかったら絶対に地下には行くんじゃないぞ」

「は、はい……」

純はそんな話を聞いてしまったら地下に行きたいと言えるはずもなかった。

「あつ、統夜さん。お茶淹れるので座って下さい♪」

「いやいや、俺が淹れるから憂ちゃんもみんなも座っててくれよ」

「いや、でも……」

「いいんだって。みんなはお客さんなんだし」

統夜はキツチンへ向かうと、お茶の用意を始めた。

唯たちはリビングのテーブルを囲むように腰を下ろした。

数分後……。

「お待たせ。暑いし、麦茶でいいよな？」

統夜は人数分の麦茶を用意し、みんなの前に置いた。

「ごめんね、統夜君。これだけの人数のお茶の用意をしてくれて」

「気にするなよ。それよりもみんなが来てくれたことが嬉しかったしな」

紬はお茶の用意をもらったことに対して申し訳なさそうにしていたが、統夜は気にする素振りはなかった。

「それよりも統夜さん。お弁当食べて下さい」

「ああ、いたただくよ」

統夜はダイニングの方のテーブルに座ると、弁当箱を開けた。

その中身は……。

「……おお、これはこれは……」

『ゲン担ぎにしても凄いな、これは……』

弁当箱の中には、トンカツ、メンチカツ、ヒレカツとキャベツが入っており、「勝つ」ということを強調してるかのような弁当だった。

「そのサバツクっていうのは勝ち負けを決める大会ですよね？だから統夜さんの健闘を祈ってカツ弁当にしたんですけど……」

「そっか」

統夜はカツ弁当をジツと見つめながら笑みを浮かべていた。

そして、一口サイズにカットされたトンカツを頬張った。

「……うん、美味しい！これは元気出そうだよ」

統夜が美味しそうに頬張る姿を見た唯たちの表情がパアッと明るくなっていった。

「やーくん、もつと食べて食べて！そのおにぎりは私が握ったんだから！」

唯は統夜にもつと食べるように促し、自分で握ったおにぎりを強調していた。

そして、統夜はそのおにぎりを取り出し、包を開けたのだが……。

「……うん、形は、あれだな……」

唯の握ったおにぎりは、見た目はとても歪な形をしていた。

しかし、統夜は迷うことなくおにぎりを頬張っていた。

「……うん、美味しい。美味しいぞ、唯」

統夜は味オンチであるのだが、そんな統夜でも美味しいと言ってくれるのは嬉しく、唯の表情は明るくなっていった。

統夜はみんなの気持ちが込もった弁当をじっくりと味わい、唯たちはそんな統夜を見て笑みを浮かべていた。

※※※

弁当を食べ終わった統夜は旅支度を整えると、そのまま家を後にして、魔界道の入り口のある場所へと向かった。

ちなみに、唯たちも見送りがしたいがためにここまでついてきていた。

「……みんな、ありがとな。こんなところまでついて来てくれて」

「ううん。私たちはやーくんのお見送りをしたいからよ」

「ところで、こんな何もなかったところに道なんてあるのか？」

律の指摘通り、統夜たちが訪れたこの場所は何もなかったところだった。

「まあ、パツと見はそうなんだけどな。ここから行くんだよ」

「ふーん。そうなんだ」

律が統夜の説明に納得していたその時だった。

「……あれ、統夜？まだいたんだな」

統夜と同じくサバックに参加予定である戒人がこの場所に現れた。

「ああ、戒人。お前も今から向かうのか？」

「ああ。エレメントの浄化も終わったからさっそく向かおうと思っててな」

戒人も統夜のようにエレメントの浄化を終えて、今からサバックの会場に向かうところだった。

「もしかして、戒人さんもサバックに参加するんですか？」

「ああ。俺もサバックに参加するんだよ」

「そうだったんですか……」

「お前たちは統夜の見送りか？」

「は、はい。そうです！」

『ホッホッホ！こんな可愛いお嬢ちゃんたちの見送りを受けるとは、羨ましい限りじゃのお』

トルバは唯たちが統夜の見送りに来たことを知り、羨ましがっていた。

「そ、そうかな……」

統夜は改めてトルバに言われたことで照れ臭くなり、照れ隠しに笑っていた。

「統夜の見送りに来てくれたお前らには悪いが、俺が統夜に勝つてみせる！俺はお前に勝つことを目標にしてるからな！」

戒人はサバックで優勝することよりも、統夜と試合をして勝ちたいと言うことが目標だった。

戒人にとって統夜は、良き親友であり、良きライバルである。

そんな良きライバルに勝ちたいと言う気持ちはホラーと戦う魔戒騎士であれば持つていて当然だった。

「俺だつてそう簡単には負けないさ。俺だつて勝ちたい人がいるんだ！」

統夜も戒人のことはライバルだと思っているが、それ以上に統夜には勝ちたい相手があった。

「それってまさか……」

梓は、統夜が勝ちたい相手というのが誰なのかを理解していた。

「……まあ、だけど、俺は誰が相手だって全力で勝ちに行くさ」

統夜は今回のサブバックは全力で挑むつもりでいた。

「……統夜、俺と当たるまで負けるなよ！お前は俺が倒すんだからな！」

「ふっ……。それは俺のセリフだ！」

統夜と戒人は互いの手をコツンとぶつけ合っていた。

「……なんか青春ねえ♪」

紬は統夜と戒人のやり取りを見て、何故かうつとりとしていた。

「いやいや……。会話の内容は穏やかじゃないじゃない……。……」

お前を倒すという青春というにはあまりに程遠い台詞を聞いていた和は、ジト目で紬を見ていた。

「……まあ、とりあえず行ってくるよ」

「やーくん、頑張ってるね！」

「まあ、悔いのないよう頑張ってるこいよな！」

「だけど、無茶だけは絶対にするなよ！」

「帰ってきたらみんなで遊びましょ♪」

「私は統夜先輩の健闘を祈ります！」

「統夜さん、ファイトです！」

「私も応援してます!!」

「この前みたいに大怪我だけはしないでちょうだいね? みんな心配するから」
「悔いのないよう、思い切りやってきなさい!!」

唯たちはそれぞれ統夜にエールを送っていた。

「みんな……ありがとな! それじゃあ!」

統夜はエールを送ってくれた唯たちに感謝の言葉を送ると、イルバを前方にかざして、魔界道の入り口を解放した。

統夜と戒人は魔界道の入り口に入ると、その入り口は閉ざされた。

唯たちはしばらくの間、見えなくなった魔界道の入り口を見つめていた。

こうして統夜と戒人はサバツクの会場へと向かった。

……最強の魔戒騎士を決めるサバツクの開催が刻一刻と迫っていた。

……続く。

『いよいよサバツクが始まるな。どうやら手練れの騎士が多く参加してるみたいじゃないか。次回、「開幕」。統夜、気を引き締めろよ!』

第70話 「開幕」

サバツクの開幕を翌日に控え、統夜は偶然同じタイミングで会場に向かっていた戒人と共にサバツクの会場へと向かっていた。

サバツクの会場は、人界でも魔界でもない場所に存在し、魔界道でしか行くことが出来ない。

しかも、その道のりはかなり遠く、魔界道を使っても数時間はかかる。

そのため、統夜と戒人がサバツクの会場に到着した時には人界の時間で夕方になっていた。

「ふう、やっと着いたか……」

「話には聞いていたが、本当に遠いんだな……」

統夜と戒人は事前にイレスからサバツクの会場について聞いていたのだが、ここまで遠いとは思っていなかった。

「とりあえず受付に行つて申し込みをしようか」

「そうだな」

統夜と戒人はサバツクの会場の入り口へと向かった。

そこには、受付をしている元老院の議員が2名程いた。

「あなた方は……サバックに出場する魔戒騎士ですね？」

「はい」

「それでは、招待状の提示を願います」

統夜と戒人は魔法衣の懐からサバックの招待状を取り出すと、それを元老院の議員に渡した。

すると、サバックの招待状が偽物ではないか確認作業を行っていた。

「……はい、確認が取れました」

「白銀騎士奏狼・月影統夜と、堅陣騎士ガイア・黒崎戒人ですね？」

「はいー」

統夜と戒人の本人確認が取れると、サバックの招待状は回収された。

「サバックの開催は明日になります」

「それまで、専用の宿舎でお休み下さい」

「はい、ありがとうございますー！」

サバック出場の手続きを済ませた統夜と戒人は、サバックが行われる間宿泊する宿舎へと向かった。

2人が宿舎に到着すると、すでに多くの魔戒騎士が宿舎を訪れていた。

宿舎に在る魔戒騎士は来るべき大会に備えて体を休める者もいれば、鍛錬を行つてゐる者もいた。

統夜と戒人がそんな魔戒騎士たちを眺めていると……。

「おーい！統夜！！こつちこつち！！」

2人が声の方を向くと、銀牙騎士絶狼の称号を持つ涼邑零が、ブンブンと手を振つていた。

零だけではなく、翼、大輝、レオ、アキトがいたので、2人は零たちの元へと駆け寄つた。

「……統夜、久しぶりだな！」

「はい！零さんも翼さんもお久しぶりです！」

「統夜。レオから聞いたのだが、また1つ大きな事件を解決したそうだな」

「ええ、まあ。だけど、俺1人の力ではなく、力を貸してくれたみんなの力があつたおかげです」

統夜はアスハの起こした事件を解決出来たのは、自分1人の力ではないことを自覚していた。

「……そうか。お前も鍛錬を怠つてないみたいだな。サブツクの本戦でお前の力を見させてもらうぞ」

「アハハ……。お手柔らかにお願いします……」

統夜は模擬戦で零や翼に1度も勝てたことはなく、ボコボコにされないよう祈りながら苦笑いをしていた。

「……」

戒人は、零や翼と親しげに話をしている統夜に驚いていた。

零と翼は、前回のサブックでは優勝争いをした2人であり、そんな実力のある魔戒騎士と統夜が親交があるとは思っていなかったのである。

「それで……。お前が黒崎戒人だっけ？レオから話は聞いてるよ」

「は、はい！黒崎戒人です！以後、お見知りおきを……」

「アハハ……。そんな緊張すんなって、リラックスリラックス♪」

歴戦の勇士を相手に緊張していることを零に見透かされてしまい、零はそんな戒人を和ませようとしていた。

「は、はあ……」

「お前もなかなかの実力を持っていると聞いている。もし手合わせした時はよろしく頼む」

「は、はい！よろしくお願いします！」

「翼よお、戒人だって統夜のように後輩なんだからもつと優しくしてやれよ。戒人のや

「緊張してるだろ?」

「何を言ってる。俺はただ手合わせの時はよろしく頼むと言っただけだ」

零の言葉が気に入らなかつたのか、翼は眉間にしわを寄せていた。

「よう、統夜。元気だったか?」

「……なあ、アキト。1つ聞いていいか?」

「何だ?」

「何で魔戒法師のお前がこんなところにいるんだよ!レオさんは魔戒騎士だからわかるけど、本来お前は立ち入り禁止だろ?」

統夜の言うように、サバツクは魔戒騎士のための大会のため、魔戒法師がこの会場に出入りすることは禁止されており、本来であればアキトはこの場に出ることが出来ないのである。

「俺は師匠の手伝いだよ。師匠はサバツクの戦いを記録すると言ってるから、俺も元老院の許可をもらって記録の手伝いをするって訳」

「僕がアキトにお願ひしたんですよ。さすがに全ての試合を僕1人で記録するのは骨が折れますからね」

「……ということはレオさんはサバツクには参加しないってことですか?」

「ええ。僕は魔戒騎士と魔戒法師という微妙な立場ですからね……。だから僕はサバツ

クの戦いを記録するという大任を受けたのです」

レオは今回戦いの記録を行うために、サブツクの参加を辞退したのである。

「!だからあの魔導具を取りに桜高に来たって訳ですね」

「そんな感じですよ」

レオの一通りの説明を聞き、統夜はそれで納得していた。

「統夜、戒人、久しぶりだな」

「大輝さん!翡翠の番犬所はどうですか?」

「ああ、最近になってようやく街のことがわかってきたよ。ホラーを相手するより大変だったからな」

大輝は翡翠の番犬所に配属されてからそれなりに経ったのだが、街の地理に慣れるのに悪戦苦闘していた。

「そういうえば、奏夜は頑張ってますか?」

統夜は少し前に稽古をつけた奏夜のことを気にかけており、大輝に奏夜のことを聞いていた。

「あいつなら、未熟ながらも頑張ってるぞ。そういうところはお前そっくりだなんて思ってる」

大輝は奏夜に、かつての統夜を重ねていた。

「へえ、統夜にも年下の後輩騎士が出来たって訳か」

「それは会ってみたいものだ。鍛えてやりたいとも思ってる」

(アハハ……。奏夜のやつ大変な相手に目をつけられたかもな……)

統夜はこの場にいない奏夜に同情して苦笑いをしていた。

「……おっと、噂をすれば……」

大輝は宿舎の入り口で周囲をキョロキョロと見回している奏夜を見つけ、統夜たちもその姿を捉えていた。

「……へえ、あれが……」

「ああ……」

零と翼は、じつくりと奏夜の顔を見ていた。

「おーい！奏夜！こっちだ！こっち！」

統夜はブンブンと手を振り、奏夜のことを呼んでいた。

「……！あつ、統夜さん！それに、大輝さんも!!」

奏夜は統夜たちの姿を見つけると、統夜たちがいる場所へと駆け寄った。

「……奏夜。お前もサバックに招待されていたんだな」

「ええ。俺は魔戒騎士になってまだ日が浅いので、呼ばれたことに驚いています」

サバックは各番犬所から選ばれた魔戒騎士が参加出来るため、奏夜は自分が呼ばれた

ことに驚いていた。

「へえ、お前が最近魔戒騎士になったばかりの……」

「はっ、初めまして！如月奏夜です！よ、よろしくお願いします！」

奏夜は零や翼がどのような魔戒騎士であるか知っていたため、緊張しながら挨拶をしていた。

（おお、初々しいねえ。出会った頃の統夜もこんな感じだったよなあ）

零は統夜と出会った時のことを思い出し、笑みを浮かべていた。

「俺は涼邑零。そしてこいつは……」

「……山刀翼だ」

「おいおい、翼。もうちよつと愛想良くしろよなあ。奏夜のやつ顔が強張ってるじゃないか」

「……俺はもともとこんな顔だ」

零の言葉に翼は再びしかめっ面になっていた。

「……あつ、その……」

「奏夜、気にするな。零さんと翼さんはこんな感じだから」

統夜は困惑している奏夜にフォローの言葉をいれていた。

「おつ、統夜も先輩っぽくなつたじゃないか！」

「……確かにな」

「いやいや、俺なんてまだまだですってば！」

先輩っぽいと言われたのが照れ臭かったのか、統夜はこう言って笑っていた。

「……お前が統夜の言っていた奏夜か」

今度は戒人が奏夜に声をかけていた。

「あ、はい。あなたは……？」

「俺は黒崎戒人。俺は統夜のことをライバルだと思ってる」

「戒人、俺だってお前のことはライバルだっと思ってるさ」

「統夜さんの……ライバル……」

奏夜は統夜のライバルと聞いた時点で、それだけ戒人が魔戒騎士として実力を持っていると察していた。

「まあ、ここにいる魔戒騎士はお前よりも手練れが多い。今回のサブバックはお前にとってかなり勉強になるはずだから、そこを肝に銘じておけ」

「はい！わかりました！」

大輝は今回のサブバックが奏夜にとって良い経験になることを確信しており、このような言葉を奏夜に告げた。

「……僕とはこの前会いましたよね？」

「ええ。あの時はお世話になりました」

奏夜は魔戒騎士狩りが行われていた頃にホラー、ヘラクスに襲われのだが、その時にレオに助けられたのである。

「元氣そうですね、奏夜君。あらためまして、僕は布道レオ。そして彼が……」

「俺は魔戒法師のアキト。布道レオの一番弟子だ！」

「は、はあ……」

奏夜はアキトのキャラについていけず、困惑していた。

「おい、アキト。あんまりドヤ顔すんなよ。奏夜が困惑してるだろ？」

「何おう！ いいじゃねえかよ！ 俺はこんなキャラなんだから！」

「あ、いや……その……」

「奏夜、気にするな。アキトはやかましい奴だが、悪い奴ではないからな」

「おいおい、やかましいはないだろ？ 大輝のおっさん！」

「だからおっさんはやめろ！」

奏夜は年上である大輝にこんな口を聞けるアキトに驚いていた。

「と、ところで、アキトさんは魔戒法師なんですよね？ だとしたら何故ここに？」

魔戒法師がサバツクの会場に出入り出来ないことは奏夜も知っていたので、この疑問を奏夜にぶつけた。

「ああ、俺は特別に許可をもらってるんだよ」

「特別に許可？」

「ええ。僕が魔戒騎士と魔戒法師両方の顔を持つてゐることは知っていますね？」

レオの問いかけに奏夜は無言で頷いていた。

「それで、僕は今回サバックには参加せず、サバックの戦いを記録するという大任を与えられたのです」

「師匠1人じゃあまりに大変だからな。だから1番弟子である俺が特別に許可をもらつて師匠の手伝いをするという訳さ」

「な、なるほど……」

レオとアキトの説明を聞き、何故魔戒法師のアキトがこのような場所にいるのか理解した。

「とりあえず、今日はゆっくりと体を休めるといいよ。この宿舎は飯も出るし、風呂はあるし、リラックス出来るしな」

統夜たちのいるこの宿舎は、一般のホテルより豪華ではないものの、サバックに参加する魔戒騎士のために食事は用意されているし、疲れを癒すために温泉もある。

ホテルよりはリラックス出来ないにしても、普段戦いに明け暮れている魔戒騎士がリラックスするには十分すぎるほどだった。

「俺もそれを楽しみにしてたんだよなあ♪スイーツはたくさん用意してくれるかな？」

『もお、ゼロったら、元老院がそんな気の利いたことをする訳ないじゃない』

「……だよなあ……」

スイーツ食べ放題など、元老院がそこまでしないとシルヴァが零をなだめると、零はガクツと肩を落としていた。

「まあまあ、零さん。元氣を出して下さいよ。実は、ムギからケーキとお茶の差し入れはもらってるので」

統夜は魔法衣の裏地の中にしまっておいたポットに入った紅茶と、箱に入ったケーキを取り出して、それを零に見せた。

「本当か!? 統夜!？」

「は、はい……」

ケーキがあるという喜びのあまり、零は統夜に詰め寄っていた。
統夜はそんな零の迫力に圧倒されていた。

「サンキュー、ムギちゃん♪統夜、今度ムギちゃんに会ったらお礼を言っておいてくれよ
!」

「は、はい……」

『もお、ゼロったら……』

ケーキの存在にはしゃぐ零の姿を見て、統夜とシルヴァは苦笑いをしていた。

「……あ、あれが、最強と言われた銀牙騎士……」

奏夜は零がどのような魔戒騎士であるかは知ってはいたが、極度の甘党だということ
は知らなかったたので、驚きを隠せなかった。

「驚きました？ 零さんは、本当に甘党なんですよ」

改めて零が甘党であることを話したレオも苦笑いをしていた。

「と、とりあえず飯でも食いに行きましょうよ！ 俺、色々話したいことがありますし♪」

「……そうだな、行くか」

統夜の勧めもあつてか、統夜たちはそのまま食堂へと向かった。

そこで提供される料理を食べながら、統夜たちはお互いの近況を報告しあっていた。

食事の後に統夜は紬から差し入れとして渡されたケーキを用意したのだが、そのケー
キを零が1人でほとんど食べてしまった。

統夜な苦笑いしながらその様子を見つめており、紬の用意してくれた紅茶に舌鼓を
打っていたのであつた。

※※※

統夜たちの食事が終わり、風呂から上がると、魔戒騎士たちは明日行われるサバックに備えて休息を取っていた。

そんな中、統夜は眠れなかったのか、魔法衣の裏地の中に入れておいたギターを手にボケつと考え事をしていた。

「……明日はサバック本戦か……。緊張するな……」

統夜は誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いていたのだが……。

『おい、統夜。まだ始まってもないのに緊張してどうするんだよ』

イルバはしっかりと統夜の声を聞いており、このように返した。

「ま、そんなんだけどさ……」

『そんなに緊張するならギターでも弾いてリラックスしたらどうだ？』

「ああ、そのつもりだよ」

統夜はギターを構えて一呼吸つくと、ゆっくりとギターを奏で始めた。



統夜が今演奏しているのは、統夜が軽音部として所属しているバンドである「放課後

「ティータイム」の「私の恋はホツチキス」である。

それを、弾き語り用に統夜がアレンジしており、聞き取れるか聞き取れないかくらい
の声で口ずさんでいた。

「……みんなは今、何をしてるんだろう？もうすぐ夏フェスに行くみたいだけど……」
統夜は演奏している時に、唯たたちのことを考えていた。

「……俺もみんなと夏フェスに行きたかったな……。だけど、俺はそんな気持ちを押し
殺してサバックに出るんだ。しつかり結果を残さないと……」

統夜は夏フェスに行きたいという気持ちは持っていたが、サバックに出るためにそれ
は不可能だった。

ならば、サバックで結果を残そう。統夜はこう誓ったのであった。

そんなことを考えながらギターの演奏を行っていた。

ギターの演奏が終わると……。

パチパチパチ……。

突如拍手が聞こえてきたので、統夜が声の方を見ると、奏夜が統夜に拍手を送ってい
た。

「……何だ、奏夜。聞いてたのか」

「ええ。眠れなかったので外の空気を吸いに来たらギターの音が聞こえたので……」

奏夜は統夜の隣に移動しながらこう説明していた。

「……隣、いいですか？」

「ああ、もちろん」

奏夜が統夜の隣に腰をおろすと、統夜はギターをギターケースにしまっていた。

「……統夜さんも、眠れないんですか？」

「まあな。明日がサバツクだと思ったらな……」

「……」

奏夜は驚きを隠せないと言いたげな感じで統夜のことを見ていた。

「なんだよ、そんな顔で俺を見て」

「す、すいません。統夜さんも緊張するんだなって思っつて、つい……」

「当たり前だろう？俺だって魔戒騎士である前に人間なんだ。緊張くらいするさ。ライブ

の時だつてな……」

統夜はしみじみと呟きながら、ギターケースを優しく撫でていた。

「統夜さんつて、学校に通いながら騎士の勤めを果たしているんですよね？」

「ああ。そして、軽音部に入って、心から守りたいって思える人たちに出会ったんだよ」

「なるほど……。その守りたい人たちつていうのは軽音部の皆さんという訳ですね？」

「そういうことだ。そこでギターも覚えたつて訳さ」

「へえ……」

奏夜は魔戒騎士とは違う統夜の一面を垣間見ていた。

「そういえば、統夜さんも今回サブバックには初めて出場するんですね？」

「まあな。だから緊張してるって訳さ」

統夜は正直に緊張していることを明かすと、照れ隠しに笑っていた。

「それは俺もわかります。俺も緊張で眠れないんですから」

「アハハ……。だから俺は緊張をほぐすためにギターを弾いてたって訳だよ」

「俺、ギターを弾く人に会う機会はないですけど、統夜さんはギター上手いですね！」

「そりゃあ、軽音部でだいぶ練習してたからな」

「なるほど……」

「奏夜。明日はお互い頑張ろうな。例えどんな結果でも後悔がないようにさ」

「……はいっ!!」

「さてと……」

統夜はゆっくりと立ち上がると、ギターケースを手にとった。

「……俺はお前のおかげでリラックス出来たし、もう寝ることにするよ」

統夜は後輩騎士である奏夜と色々話しているうちに緊張が解け、そのまま眠ることにした。

奏夜は自分のおかげでリラックス出来たと言ってもらえたことが嬉しかったのか、笑みを浮かべていた。

「おやすみなさい、統夜さん。俺はもうちよつとだけ風にあたつてから寝ることにします」

「そうか。奏夜、あまり遅くなるんじゃないぞ」

そう言い残すと、統夜はそのまま宿舎に戻り、自分の寝る部屋へと戻った。

統夜は羽織っていた魔法衣を脱ぐと、そのまま置いてあるベッドに潜り込み、そのまま眠りについた。

※※※

翌日、統夜たちサバックに出場する魔戒騎士たちは朝食を済ませ、それからサバックの会場へ向かっていった。

サバックの開幕が刻一刻と迫っており、魔戒騎士たちはサバックの試合が行われる、魔戒騎士にとっては神聖な円陣に並んでいた。

この円陣はサバツクの会場内にある闘技場であり、魔戒騎士たちはこの場に立つことを目標としており、7日間かけて牙狼に次ぐ最強の魔戒騎士を決めることになる。

そして……。サバツク開幕の時間となった。

すると、この闘技場内の円陣がよく見える特等席に、1人の初老の男性が現れた。

その男は白髪 of 長髪に、白く長い髭の男であり、この中にいる誰よりも圧倒的なオーラを放っていた。

この男は朱雀。元老院の議長であり、元老院の神官であるグレスよりも権力を持つていた。

「……これより、サバツクを開催する!!」

元老院の議長である朱雀がサバツクの開催を宣言した。

(……………いよいよ始まるんだ……………！全ての魔戒騎士が憧れるサバツクが……………！)

統夜はこれから行われるサバツクに胸を躍らせていた。

こうして、サバツクの開催が宣言され、7日間かけた魔戒騎士たちの激闘が幕を開けた。

……続く。

——次回予告——

『いよいよ始まったな。サブツクの戦いが。だが、初戦の相手がまさかあいつとはな。次回、「初戦」。こいつはかなりの強敵だぞ、統夜！』

第71話 「初戦」

サバツクの開催日となり、魔戒騎士たちは、サバツクの会場内にいる闘技場に集まっていた。

そして、魔戒騎士たちは実際に戦う舞台である円陣に並び、サバツクの開催を待っていた。

そして、サバツク開催の時間となり、円陣がよく見える特等席に、元老院の議長である朱雀が姿を現した。

「……これより、サバツクを開催する!!」

元老院の議長である朱雀によって、サバツクの開催が宣言された。

「……諸君らも知つての通り、アスハという魔戒法師の起こした魔戒騎士狩りのせいで、多くの魔戒騎士がその命を奪われた!」

朱雀が改めて魔戒騎士狩りの話をすると、魔戒騎士たちは息を飲んでいった。

「このサバツクの開催さえ危ぶまれたのだが、私はあえてサバツクの開催を決意したのだ!このような状況だからこそ、騎士個人の力をこのサバツクによって高めたいと思っているからだ!」

(……まあ、多くの魔戒騎士が犠牲になったんだ。サブツク開催が危ぶまれるのも無理はないよな)

統夜は朱雀の説明に納得していた。

今回のサブツクに出場予定だった魔戒騎士も魔戒騎士狩りで命を落としていた。

元老院はこの状況を重く受け止めていたのだが、朱雀は本来呼ぶ予定のない魔戒騎士を呼んでもサブツクを行うことを決めたのである。

「何故自分がサブツクに選ばれたのか、驚いてる者もいるだろう。私は、そのような者も今回のサブツクを通して成長して欲しい。そう望んでいるのだ！」

「……」

朱雀の話聞いていた奏夜は、この言葉は自分にあてた言葉と理解し、話を聞いていた。

今回のサブツクでは、奏夜のように魔戒騎士になったばかりの若い魔戒騎士が他にも何名か参加しているが、奏夜も含め、本来は招待される予定はなかった。

しかし、魔戒騎士狩りのせいで魔戒騎士の数が減ったため、その穴埋めとして、奏夜や若い魔戒騎士たちはサブツクに呼ばれたのである。

奏夜を含めた若い魔戒騎士たちは、自分が呼ばれた意味を理解し、ウンウンと頷いていた。

「今回のサブバックは魔戒騎士狩りによって命を落とした魔戒騎士の鎮魂も兼ねておるため、そのつもりでいるように！」

魔戒騎士狩りの事実やそれでもサブバックの開催にこぎつけた経緯を話した朱雀は、サブバックのルール説明を開始した。

「……まず最初に、この大会では諸君らの使用している魔戒剣の使用を禁ずる。武器は、こちらで支給する鉄製の武器を使ってもらう」

魔戒騎士たちは朱雀の話を無言でウンウンと頷いていた。

「続いてこの大会は、1対1で試合を行うのだが、どちらかが一滴でも血を流した方の負けである」

(……うんうん。ここまでは聞いてた通りだな)

統夜もウンウンと頷きながら朱雀の話を聞いていた。

「続いて、諸君らは魔導輪や魔導具を用いてホラーの搜索を行ってるだろうが、魔導具の使用は禁止する。そのため、魔導輪などの助言も禁止なので、そのつもりでいるように！」

ここまでは今まで通りのサブバックのルール説明であり、魔戒騎士たちもわかってるよと言いたげだったが、それでも黙って朱雀の話を聞いていた。

「……続いて、術の使用であるが、魔導筆を用いての術の使用は禁止する！」

この術の使用についても従来通りであるのだが、ここから新たなルールとなった。「そして、魔導筆を使わぬ術の使用であるが、名言を避けていたため、以前の大会でも使っていた者もいただろう」

朱雀のこの言葉を聞くと、魔戒騎士たちはざわつき始めていた。

「今回は魔導筆や魔導具を用いなければ、術の使用は許可する！札やアクセサリーを用いての術は、それが魔導具でなければ認めよう!!」

朱雀が魔導筆と魔導具さえ使わなければ、術の使用を許可した。

この決定に術を使える魔戒騎士たちは歓喜の声をあげ、使えない魔戒騎士たちは抗議しており、ざわつきが増していた。

「へえ、術の使用を許可するとか、緩くなったもんだなあ……」

「ふっ……。これで、思い切り術を使えるという訳か」

術の使用を許可する話を聞いていた零は、ルールが変わったことに少し驚き、翼は、笑みを浮かべていた。

翼は閑岱という魔戒法師の里で育ったため、法術の心得がある。

そのため、今回の大会では、翼も術を使えるということになる。

そんな中、会場のざわつきが収まる様子はなかった……。

「……………諸君！静粛にしまえ!!」

朱雀の一喝で、魔戒騎士たちを黙らせていた。

「諸君らの言い分はわかる。しかし、魔戒騎士をとって重要なのはその剣技だ！最強の魔戒騎士を目指すのなら、術の1つや2つ、跳ね除けられるハズだ！」

朱雀の力説を聞いた魔戒騎士は、その話になんか納得せざるを得なかった。

(……なるほど、確かに今まではそこら辺が曖昧だったから……。術の使用が公認されたなら、厳しい戦いになることは間違いないさそうだな……)

統夜もサバックでの戦いが激しいものになることを予想していた。

「さらに、このサバックは本来、番犬所付きの魔戒騎士の参加が原則だったが、今回は元老院付きの魔戒騎士も数名参加している。諸君、気を引き締めるように！」

元老院付きの魔戒騎士が参加しているという話を聞き、魔戒騎士たちは再びざわつき始めた。

(……なるほど、どうりで見知った顔がちらほらいるわけだ……)

統夜はこのサバックに参加する魔戒騎士を見て、何人か見知った魔戒騎士がいたため、朱雀の話になんか納得していた。

「……ルール説明は以上である！試合開始は30分後である。諸君、これから対戦表を配るので、それを確認し、準備をするように！」

このサバックには数十名の魔戒騎士が参加しているのだが、試合はトーナメント形式

で行われる。

そのため、トーナメント表は元老院の議員が制作したものになっている。

「……それでは、解散!!」

こうして、サバツクの開幕式は終わり、魔戒騎士たちは元老院の議員からトーナメント表をもらい、自分の試合がいつ行われるか確認していた。

そして統夜も、トーナメント表をもらい、自分の試合をチェックしていた。

「えっと……俺の試合は……」

統夜は自分の試合を確認するのだが、思ったより自分の出番が早く、すぐ見つけるとが出来た。

「……第4試合か……。対戦相手は……。っ!!」

統夜は対戦相手を見て息を呑んでいた。

その対戦相手とは……。

『……毒島エイジ……。いきなり元老院付きの魔戒騎士が相手とは、お前さんもついてないな』

元老院付きの魔戒騎士である毒島エイジが統夜の初戦の相手だった。

エイジは元老院付きの魔戒騎士であるのと同時に、人知れずホラーを討伐する影の魔戒騎士と呼ばれている。

以前、同じ元老院付きの魔戒騎士である四十万ワタルと共に、ホラー、グオルブとの戦いに参戦したため、統夜とは面識があった。

「……いや、むしろ運が良い方だと思うよ。元老院付きの魔戒騎士相手に自分がどこまで通じるか、知る機会になったしな」

統夜は元老院付きの魔戒騎士が相手とわかってても、臆することはなく、むしろ前向きに立ち向かっていこうと思っていた。

すると……。

「……月影統夜、久しぶりだな」

対戦相手であるエイジが統夜に声をかけてきた。

「エイジさん、お久しぶりですー」

「初戦の相手がお前とはな……」

「ええ。ですが、相手があなただとしても、俺は負けるつもりはありません！全力で戦いましょう!!」

「……ふっ、たわけ」

統夜の言葉にエイジが笑みを浮かべると、エイジはその場を離れて、これから行われる試合の準備を始めていた。

「……おいおい、統夜！」

統夜とエイジの会話を聞いていた戒人が声をかけてきた。

「お、戒人」

「お前、今のは、確か元老院付きの毒島エイジだろ？ ずいぶんと強気な発言をしたな」
戒人も元老院付きの魔戒騎士であるエイジの顔は知っていたみたいであり、統夜がエイジに対して強気だったことに驚いていた。

「そうかもな。だけど、誰が相手だろうと弱気になったらその時点で負けだからな。だからこそ強気でないといけない」

統夜は強敵が相手なのは間違いないと思っており、強気な姿勢でいられるように気を引き締めていた。

「……なるほどねえ……」

「ところで、戒人の対戦相手は誰なんだ？」

「ああ、俺の対戦相手は奏夜だったよ。第13試合な」

なんと戒人の対戦相手は、統夜や戒人にとっては後輩にあたる奏夜だった。

「……戒人、奏夜を侮るなよ。あいつはなかなか出来るぞ！」

統夜はかつて奏夜を鍛えた時にその力を見極めており、楽して勝てる相手ではないことを戒人に告げていた。

「……そうだな。誰が相手だろうと、全力で戦うだけだ」

戒人は、奏夜が魔戒騎士になったばかりではあるもの、侮ることなく、全力で戦うつもりだった。

「……それよりも、そろそろ試合の準備をした方がいいんじゃないのか？ お前の出番はすぐなんだろう？」

「そうだな、そうさせてもらおうよ」

統夜はこの場を後にすると、サブバック会場内にある控え室に移動し、これから来る試合に備えていた。

すると、サブバックの第1試合が始まったのだが、統夜はその試合を見ることなく、精神を集中させていた。

そして、第1試合と第2試合が終了し、控え室にいた統夜とエイジがもうすぐ試合だと元老院の議員に呼び出されたため、闘技場に移動した。

2人が闘技場に移動すると、すでに第3試合は行われていた。

統夜は今行われている試合には目もくれず、精神を集中させていた。

「……おい、統夜。もうすぐ試合だが、大丈夫か？」

「……ああ、大丈夫だ。結果はともかく、無様な報告は唯たちに出来ないからな」

統夜は精神を集中させていた甲斐があつてか、落ち着いていた。

『確かにそうだな。それだけ落ち着いていれば大丈夫そうだな』

イルバは統夜が緊張していれば、喋れるうちにハツパをかけておこうとしたのだが、その心配は杞憂に終わっていた。

統夜とイルバがこのような会話をしていると……。

「……勝負あり!!」

第3試合がちょうど終わったところだった。

『統夜、いよいよ出番だな』

「ああ。全力で頑張つてくるよ」

統夜は全力でこれから行われる試合に挑むつもりだった。

そして、先ほどもで試合を行っていた2人が闘技場を後にした。

「……続いて、第4試合! 紅の番犬所付き、月影統夜!!」

審判をしている議員に呼び出されると、統夜は試合が行われる円陣に足を踏み入れた。

「対するは、元老院付き、毒島エイジ!!」

そして、エイジも呼び出されて、円陣に足を踏み入れた。

「……両者! 武器を構え!!」

統夜とエイジは事前に渡された武器を抜くと、それを構えた。

そして、2人は鋭い目つきで互いを睨みつけていた。

「……いよいよだな」

「なあ、この試合、どっちが勝つと思う？」

「そりゃあ、毒島エイジだろ。元老院付きの魔戒騎士はこの大会の優勝候補だしな」

「でもよお、あの統夜って魔戒騎士ってガキだけかなり強いみたいだぞ」

「いやいや……。いくらなんでも元老院付きの魔戒騎士には勝てないだろう」

サブツクの試合を見学していた魔戒騎士たちは総じてエイジの勝ちを確信していた。

そんな中、特等席で試合を見学していた朱雀は、統夜をジツと見つめていた。

「……月影統夜……。あいつは、あのディオスの事件とアスハの事件を解決させたと聞いている。ならば、毒島エイジが相手でも引けは取らないだろう」

朱雀は、統夜とエイジが互角の戦いをする予想していた。

そして、大輝、戒人、奏夜の3人も、統夜の試合をジツと見守っていた。

「いよいよだな……」

「統夜のやつ、あの毒島エイジを相手にどこまで戦えるか……」

「……統夜さん……!」

この3人は、勝ち負けはともかくとして、統夜の応援をしていた。

そして、サブツクの試合を記録しているレオも試合の記録に力を入れていた。

（統夜君、いよいよですね。エイジさんは手強いですよ……。頑張つて下さい!）

レオは心の中で統夜にエールを送っていたのだが……。

「統夜あ!! 頑張れ! 初戦で負けんじゃねえぞお!!」

アキトは仕事そつちのけで統夜を応援しようとしていた。
なので……。

「……アキト、仕事中ですよ。そつちに集中してくださいね」

「……はあい……」

師匠であるレオに注意され、レオは素直に言う事を聞いていた。

そして、試合開始が目前となり、この試合を見学している魔戒騎士たちは固唾を呑んで統夜とエイジのいる円陣を見つめていた。

「……試合、開始!!」

審判役の元老院の議員が試合開始を宣言したことで、統夜とエイジの試合は始まった。

「はあああああああ!!」

統夜は試合が始まるなり、エイジに突撃し、剣を一閃した。

しかし、その攻撃はエイジにあつさりと思われ防がれてしまった。

「フン……。攻撃が単調だな」

「なんの! これはただの挨拶……。ですよ!!」

統夜は続けて仕掛けてきたエイジの攻撃を剣で防ぎ、その攻撃を弾くと、1度後方に下がり、距離をとった。

すかさずエイジは統夜目掛けて突撃し、剣を振るった。

統夜も負けじと剣を振るい、しばらくの間、激しい剣の打ち合いが行われていた。

その様子を見ていた魔戒騎士たちは、統夜の善戦ぶりに驚いていた。

「……これは……！」

「あの小僧、やるじゃないか！」

「もつと一方的な展開になるとおもっていたのだがな」

試合を見学していた魔戒騎士たちは統夜が一方的にエイジにやられると予想していたため、ここまで互角に剣を打ち合うとは思っていなかった。

それはエイジも同じことを思っており、統夜がここまで善戦するとは思っていなかった。

「……ほお、やるではないか。正直、ここまでやるとは思っていなかったぞ！」

「当然です！俺は簡単にやられるつもりはありませんから！」

統夜とエイジは剣を打ち合いながら会話をしていた。

「お前もだいたい成長したのだろうが、お前に俺は倒せない」

「それは……どうですかね？俺はあなたに勝ちます！勝ってみせます!!」

統夜はエイジに対して勝利宣言をしていた。

「……たわけ！」

統夜の言葉が面白くなかったのか、エイジはこう言い放つと、剣を力強く一閃し、統夜を吹き飛ばした。

「くっ……！」

統夜はすぐさま体勢を整えて、エイジを睨みつけていた。

すると……。

「はああ……！」

エイジは一枚の札を手に精神を集中させると、その札は増殖していった。

（……っ！来るか!!）

統夜はこれから来るであろうエイジの術に備えていた。

そして、試合を見学していた魔戒騎士たちも、エイジの放とうとしている術に注目していた。

「……！来るぞ!!」

「ああ、あの札を使って術を放つんだらうな……」

「あれは魔導具じゃないから、いいんだよな？」

エイジがこの大会初めて術を使うようであり、試合を見学していた魔戒騎士たちはぎ

わついていた。

「……………これはやばそうだな」

「ああ。統夜が勝つためにはあれをかくぐらないとな」

「……………統夜さん……………」

戒人、大輝、奏夜も、固唾を吞んで統夜の試合を見守っていた。

「……………」

一方、特等席で試合を見学していた朱雀は、鋭い目付きで2人の試合の動向を見守っていた。

「……………術が来るか……………。月影統夜がどうこれを切り抜けるかが、見ものだな……………」

朱雀は、統夜をジツと見つめて、統夜がいかにしてエイジの術を破るのか、それを期待していた。

試合を見学している魔戒騎士たちが見守るなか、エイジは術を放つ準備を整えた。

増殖した札は集合し、1つ1つに炎が纏われていた。

そして、エイジはその札を統夜目掛けて放った。

「……………っ!!」

統夜は横に大きくジャンプすることで札による攻撃をどうにかかわすことが出来た。

ここから反撃をしようと思っていたのだが……………。

「……!?マジかよ!」

エイジの放った札は追尾式のようにあり、再び統夜の方へと向かっていった。

統夜はどうにか剣を使って炎を纏った札を防ぐことが出来た。

しかし……。

「熱ちちち!!」

札1つ1つに炎が纏われているため、統夜は炎の高温に襲われていた。

「……くそっ!!負けるかよお!!」

統夜は気合と根性で剣を一閃すると、エイジの放った札を切り裂き、どうにかエイジの術を凌ぐことが出来た。

しかし、エイジは術が破られたにも関わらず、笑みを浮かべていた。

「……かかったな!」

エイジはこう宣言すると、炎を纏っていない札が統夜に迫っていた。

「……くそっ!あれが囿で、こっちが本命か!」

統夜はエイジの作戦を理解したのだが、その時には既に手遅れだった。

エイジの攻撃が決まってしまうえば、そのまま自分の負けになってしまう可能性が高い。

なので、統夜は今すぐにも對抗策を考えなければいけなかった。

統夜は短い時間で対抗策を考えていた。

すると……。

(……！待てよ。これなら……)

統夜は1つ妙案を思いついていた。

(一か八かになるけど、やるしかない!!)

この大ピンチの中、他の作戦を考える時間はなく、統夜は今思いついた作戦を実行することにした。

すると、統夜は何を思ったのか、剣を迫り来る札目掛けて投げつけた。

「な、何だと!？」

この統夜の発想に、エイジだけではなく、試合を見学している魔戒騎士たちも驚きのあまりざわついていた。

「な!？」

「何考えてるんだ!あいつ、自棄になったのか?」

「……」

戒人、大輝、奏夜の3人も、統夜の予想外の行動に啞然としていた。

統夜の放った剣は、札を真っ二つに斬り裂くと、そのままエイジに迫った。

エイジは迫り来る剣をかわすと、剣は地面に突き刺さった。

剣はエイジの背後にあるため、接近しなければ、取ることは出来ない。

しかも、丸腰で突っ込むなど、無謀としか言えなかった。

だが、統夜は迷うことなくエイジに突っ込んでいった。

「フーン！丸腰になって自棄になったか。これで終わりにしてやる！」

エイジは剣を一閃して、そのままこの試合を終わらせようとした。

誰もがその一撃でエイジが勝つと確信していた。

そんな中、統夜は……。

「……ば、馬鹿な!?嘘だろ!?!」

統夜の予想外な行動にエイジは驚愕していた。

エイジは剣を横一閃に振っていたのだが、統夜はスライディングしてエイジの攻撃をかわしたのである。

「なっ!?!」

「そんなのありかよ!?!」

これには試合を見学していた魔戒騎士たちも驚きであり、ざわつきが大きくなっていた。

統夜はスライディングしてエイジの攻撃をかわすと、そのまま剣を回収し、すぐさま立ち上がって体勢を整えた。

すぐさま統夜は動揺するエイジに接近し、剣を一閃した。

エイジも負けじと剣を一閃するが、少しだけタイミングが遅れてしまった。

統夜とエイジ。2人の剣が交差し、その場は静寂に包まれていた。

そして……。

「……………くっ！」

2人の剣の打ち合いは統夜に軍配が上がり、エイジは手にしていた剣を落としてしまった。

そして、エイジの手からは微量ではあるが、血が滲み出していた。

「……………それまで!!月影統夜の勝ち!!」

審判役は、試合終了を宣言し、勝者は統夜であると伝えた。

統夜の勝利を知った魔戒騎士たちはこの結果にざわつきながらも歓声を上げていた。

「ま、マジかよ!?!」

「あの小僧、優勝候補を倒しやがったよ!」

「あいつ……………ただ者じゃないな!」

試合結果をうけて、魔戒騎士たちは、統夜の力を見誤っていたことに後悔していた。

「おお!やったぞ!!」

「まさか、本当に勝つとはな……………」

「統夜さん！凄いです!!」

戒人、大輝、奏夜も、統夜の勝利を驚きながらも喜んでいた。

「ほお、あのエイジに勝ったか……。これは、今後の試合も荒れそうだな……」

朱雀でさえも統夜の勝ち予想外だったようであり、この統夜の勝利が今後の試合にも影響を与えるかと確信していた。

「……まさかこの俺が負けるとはな。やるじゃないか」

「ありがとうございます。まさか俺も勝てるとは思わなかったですよ」

統夜が勝てたのも、一か八かの作戦が功を奏したためであり、あのままエイジに負けでもおかしくはない状態だった。

「良い戦いだったが、今度このような機会があれば今度は俺が勝つぞ」

エイジは統夜に敗れたのだが、不思議と悔しさはなく、清々しい表情をしていた。

「いえ、その時だって俺は負けませんよ!」

「ふっ……たわけ!」

エイジはこう言うものの、笑みを浮かべていた。

そしてエイジはそのまま闘技場を後にした。

『……統夜、やったな!』

今まで口を閉ざしていたイルバが統夜の勝利を祝っていた。

「ああ。どうにか勝つことが出来たよ」

『ハッキリ言ってお前さんの戦いにはヒヤヒヤさせられたぜ……。やっぱりお前さんには俺が必要みたいだな』

「……そうかもな」

イルバはこのように皮肉を言っていたが、統夜はそれを流して笑みを浮かべていた。

『とりあえず今日の試合は終わりなんだ。休養も兼ねて今後の試合を見たらどうだ？』

「そうだな、そうさせてもらおうよ」

統夜は一度闘技場を後にすると、別の階段から闘技場の客席に向かった。

こうして、統夜はサバツクの初戦を制することが出来た。

だが、サバツクの激闘はこれで終わりではなく、始まったばかりなのであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『どうにか統夜が勝って安心したぜ。だが、今度はあの2人がぶつかるとはな。次回、「勇情」。勝つのは後輩か、ライバルか?』

第72話 「勇情」

魔戒騎士による武闘大会であるサブツクが開幕した。

統夜の初戦の相手は、なんと元老院付きの魔戒騎士である毒島エイジだった。

誰もがエイジの勝ちを確信する中、統夜は予想以上の奮闘を見せていた。

そんな中、統夜はエイジを破り、サブツクの初戦を白星で飾った。

エイジの勝ちを確信していた魔戒騎士たちは驚きながらも、まさかの金星を讃えていた。

そして統夜は客席に移動し、この日行われる試合を見学することにした。

「……統夜、よく勝てたな！」

統夜が姿を現わすと、大輝は統夜に労いの言葉を送っていた。

「大輝さん、ありがとうございます。どうにか勝つことが出来ました」

「そうだよな。みんなお前の勝ちに驚いていたぞ」

「ですよねえ。誰もがエイジさんが勝つと思ってたでしょうし」

統夜自身も本気で勝てるとは思っていなかったのか、苦笑いをしていた。

「……まあ、いい。とりあえず、休息を兼ねて試合を見学すると良いぞ」

「そうします。戒人と奏夜の試合もありますからね」

「統夜は戒人と奏夜の試合を見学したいので、サブツクの試合を見学することにした。……ところで、2人は控え室ですか？」

「ああ、お前の試合が終わった後に控え室に行つたよ。2人ともお前の戦いぶりに刺激を受けたみたいだぞ。当然、俺もな」

戒人と奏夜は統夜の試合を見て刺激を受けたのだが、それは大輝も同じだった。

後輩である統夜がここまでの戦いぶりを見せたのだから自分はそれに負けないくらの戦いをしなければ。そう思っていたからである。

「まあ、だから俺も頑張らなきゃな」

このように思っていた大輝は今行われている試合を見ながらしみじみと呟いていた。

「大輝さん……」

大輝もこのサブツクに気合を入れていることがわかり、統夜は何も言うことはできなかった。

なので、統夜も今行われている試合をジツと見つめていた。

※※※

こうして、サブツクの試合はどんどん進んでいき、現在は第12試合が行われていた。両者互角のまま試合が進んでいき、15分にも及ぶ激しい剣の打ち合いの末、勝敗が決まった。

「……次は戒人と奏夜の試合か……」

「2人がどんな戦いを見せてくれるのか……凄く楽しみですよ！」

統夜は戒人と奏夜の試合を心待ちにしていた。

すると……。

「……それでは、第13試合を行う!!紅の番犬所付き、黒崎戒人！」

審判役に戒人が呼ばれると、戒人は戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「……対するは、翡翠の番犬所付き、如月奏夜!!」

奏夜も審判役に呼ばれ、円陣に足を踏み入れたのだが……。

「……あの馬鹿、緊張してやがるな……!!」

「……奏夜……」

大輝の指摘通り、奏夜は初めての舞台に緊張しているのか、ガクガクと足を震わせていた。

そんな奏夜を、統夜は心配そうに見つめていたのだが……。

『……統夜、問題ないだろう。あの生真面目な戒人が、緊張しつばなしの奴を蹂躪するとは思えんからな』

「確かにそうだな。戒人なら、何かしらアクションを起こして、奏夜の緊張を解いてくれるか……」

戒人は誰よりも騎士道精神を重んじており、卑怯な振る舞いや自分だけ有利な状況と、いうのを嫌っている。

そのため、正々堂々と戦うために何かしらのアクションを仕掛けるつもりだと統夜とイルバは予想していた。

しかし、他の魔戒騎士たちは……。

「……何だよ、2人ともさっきの統夜って奴くらい若いじゃねえかよ！」

「特にあの茶色の魔法衣のガキは特に若いな。何か緊張してるみたいだし」

「ギャハハ!!よくそんなんでサバツクに選ばれたよなあ?」

「こりゃ、あの黒の魔法衣のガキの圧勝なんじゃねえの?」

魔戒騎士たちは、緊張している奏夜を馬鹿にしており、戒人の勝ちを確信していた。

「……」

統夜は魔戒騎士たちの心無い野次が気に入らなかった。

それに抗議しようとするのだが……。

『……統夜、言いたい奴には好き勝手言わせとけ』

「……っ！でもー」

「イルバの言う通りだ。あんな奴らをまともに相手して、失格になんてなったら毒島工イジもガツカリするぞ」

このサバツク中は、特に騎士らしい振る舞いをするよう心がける必要がある、騎士同士のケンカは当然の如くご法度である。

初戦を制した統夜がケンカをふっかけるような真似をすれば、失格になることは免れない。

そうならないために、大輝とイルバは統夜をなだめていたのである。

「……そうだったな……。わかったよ」

統夜も自分の立場というものを理解したのか、大人しく座っていた。

客席からの心無い声は円陣からも聞こえていたのだが、奏夜は緊張のあまりそれが聞こえていなかった。

しかし、戒人は……。

「……」

これから戦う相手を馬鹿にされたことに怒り、肩を震わせていた。

そして、それと同時にこのようなことを思っていた。

勝ち負けはともかくとして、奏夜を本気にさせて、その実力をこの試合を見ている連中に見せつける。

そうすることで、心無い野次を黙らせるつもりだった。

「……両者！武器を構え！」

戒人と奏夜は、審判役の指示に従い、それぞれの剣を抜いて、構えた。

戒人と奏夜の剣も、魔戒剣と同じ形をした鉄製の剣である。

剣を構えた状態でも、奏夜は緊張で足を震わせていた。

「……」

戒人は、そんな奏夜を鋭い目付きで睨みつけていた。

そして……。

「……それでは、試合、開始!!」

審判役が試合開始を告げた瞬間、いきなり動きがあった。

戒人が凄いいスピードで奏夜に接近すると、剣を振るわずに奏夜を殴り飛ばしたのであ

る。

「!!? あいつ、何やって……」

「アハハ……。戒人のやつ、わかりやすい方法を……」

大輝や魔戒騎士たちは戒人の行動に驚き、統夜は戒人の行動を予想していたのか苦笑いをしていた。

戦場で緊張を解すのはこれが一番手っ取り早いと統夜も思っていたからである。

「……さつさと立て!! こは神聖な戦いの場だ。無様な負けは許されないんだ!!」

戒人は凄いい剣幕で奏夜を怒鳴りつけていた。

奏夜は殴られた挙句怒鳴られたことに唾然としていたがらしばらくすると、何故か笑みを浮かべて立ち上がった。

「……そうですよ。緊張したまま負けるなんて、戒人さんにも失礼ですもんね。ありますがごさいます、戒人さん！俺、目が覚めました！」

戒人の叱咤激励のおかげで奏夜の緊張は完全に消え失せて、奏夜は改めて剣を構えた。

「……それで良い！お前の全力を見せてみろ！それを踏まえて俺は、お前に勝つ!!」

「ええ！見せてやりますよ！俺の力を!!」

戒人の叱咤激励は奏夜の緊張を解くだけではなく、奏夜の闘志にも火をつけていた。

奏夜は気合十分な状態で戒人に接近すると、剣を一閃した。

戒人は、そんな奏夜の一撃を軽々と受け止めていた。

「どうした、その程度じゃないよな？俺をがっかりさせるなよ！」

「ええ、わかって……ますよ!!」

奏夜は両手にありつたけの力を込めて剣を一閃すると、戒人を弾き飛ばした。

戒人は大勢を立て直しながら、笑みを浮かべていた。

「そうだ、それでいい!!」

戒人はすぐさま奏夜に接近し、剣を一閃した。

奏夜は戒人の攻撃を剣で防ぎ、すかさず反撃として剣を振るった。

こうして、このような激しい剣の打ち合いをしばらく行っていたのであった。

「あの2人……」

「ああ、マジで強え……」

「ただのガキだと侮ってたが……」

先ほどまで奏夜を馬鹿にしていた魔戒騎士たちは、2人の激しい剣の打ち合いを見て、その実力を認めざるを得なかった。

「……うん、奏夜のやつ、戒人相手に頑張ってるな」

統夜は、2人の激しい剣の打ち合いを見ながら、奏夜が予想以上に善戦していること

に関心していた。

「だが、経験の差からも戒人の有利は変わらないがな」

大輝の指摘通り、魔戒騎士としての経験は戒人の方が圧倒的に上であるため、戒人が有利であることは変わりなかった。

そのことは実際戦っている奏夜が誰よりも痛感していた。

(……流石は統夜さんのライバルなだけはある……。まるで統夜さんと戦ってるみたいだ……)

奏夜は戒人と激しく剣を打ち合っているうちに戒人の实力を見極めて行ったのだが、戒人が統夜と互角の力を持っていると推測していた。

そのため、このままだとジリ貧だということを、奏夜は理解していた。

(……どうすればいい？ 僅かでもいい。隙をつければ……)

奏夜はこの状況を切り抜けるためにどうするべきか考えていたが……。

「……戦闘中に過度な考え事は、命取りだぞ!!」

戒人は何度目かの剣の一閃を行った。

しかし、奏夜はそれを剣で防ぐのだが、その直後に戒人は奏夜に蹴りを放ち、奏夜は吹き飛ばされてしまった。

「うっ……くっ……」

先ほどの蹴りがかなりのダメージだったのか、奏夜はゆっくりと立ち上がった。

この状態で追い打ちをかければ戒人の勝ちは確実だったのだが、戒人はあえてそれをしなかった。

「……………どうした、奏夜。もう終わりか？」

「へへ……………。何の……………まだまだですよ！」

奏夜はこう言っておどけてみせたのだが、もうすでに体力は限界に近かった。

しかし、戒人は息一つあげてはおらず、このままだと確実に負けるといふことはわかっていた。

「……………どうやら、ここまでか……………」

「そうかもしれないですね。奏夜も戒人に一矢報いることが出来ればいいんですけど……………」

続夜も奏夜の体力が限界に近いと推測していたが、大きな反撃を一つしてほしいと思っていた。

「……………どうすればいい？このままだと間違いなく負けるぞ……………」

奏夜は息を切らしながらも戒人に付け入る隙がないか探りを入れたが、それを見つけてることは出来なかった。

「……………こうなったらヤケクソだ！どうせ負けるなら思い切りぶつかってやる！」

奏夜は剣を構えると、戒人目掛けて突撃した。

「……はあっ!!」

奏夜は剣を一閃するが、それは戒人に軽々と防がれてしまった。

「……そこだ!」

奏夜は一瞬の隙を突いて、戒人の右足を狙って足払いを繰り返した。

「……何?」

戒人は奏夜のまさかの攻撃に驚き、足払いによって仰向けに倒されてしまった。

奏夜はそのまま戒人を殺す勢いで剣を突き刺した。

戒人であればかわすだろうと予想していたからだ。

その奏夜の予想通り、戒人はゴロンと横回転しながら奏夜の攻撃をかわした。

奏夜が剣を引き抜くのと、戒人が起き上がって体勢を立て直すのは同時だった。

「はあっ!!」

「このお!!」

そして、奏夜と戒人は同時に剣を振るった。

すると……。

「……っ!」

先ほどの剣の打ち合いは戒人に軍配が上がり、奏夜の手になっていた剣は弾き飛ばさ

れ、その後、地面に突き刺さった。

先ほどの一閃で奏夜にも少しダメージがあつたようであり、奏夜の手には微量ではあるが、血が出てきていた。

「……そこまで！勝者、黒崎戒人！」

戒人と奏夜の試合は戒人の勝利で幕を閉じた。

2人は予想以上の激闘に魔戒騎士たちは歓声を上げていた。

「おお！黒コートが勝ったぞ！」

「茶色のコートのガキも思ったよりやるじゃないか!!」

「ああ！良い試合だったぜ！」

魔戒騎士たちは先ほどまでは奏夜のことを馬鹿にしていたのだが、今は手のひらを返すかのように奏夜への評価を変えていた。

「……奏夜。頑張ったな」

「そうだな。戒人相手にあそこまで戦えれば良くやった方だと思うぞ」

統夜は惜しくも負けてしまった奏夜の健闘を讃え、大輝も、奏夜の健闘を讃えていた。

「……さすがですね、戒人さん。俺の負けです……」

奏夜は素直に自分の負けを認めていた。

「奏夜、よく頑張ったな。良い試合をさせてもらったよ」

戒人は、奏夜と全力をかけて戦ったため、奏夜の健闘を讃えていた。

「やっぱり、俺はまだまだですね……」

「そうかもな。だが、お前の最後まで諦めない姿勢には関心させられたよ」

「戒人さん……」

「とりあえず、これからは先輩騎士の戦いをしっかりと見ておけ。お前もそこから得るものがあるはずだ」

「……はいっ！」

こうして、戒人と奏夜の試合は戒人の勝利で幕を閉じた。

試合を終えた2人は揃って円陣から離れ、1度闘技場を後にすると、別の階段から客席へと向かった。

「……おつ、2人とも、お疲れさん！」

統夜は客席に戻ってきた戒人と奏夜を見つけると、2人に労いの言葉を送った。

「あつ、統夜さん。ありがとうございませす」

「奏夜、惜しかったな。だけど、戒人相手にあそこまで戦えたんだ。たいしたもんだよ」
「俺がここまで戦えたのは、統夜さんが俺を鍛えてくれたおかげです」

「そういえばロデル様がそんなこと言ってたな。統夜が奏夜を鍛えるためにここに来てくれたとな」

翡翠の番犬所所属になった大輝は、ロデルからその話を聞かされていた。

「へえ、統夜も先輩騎士らしいことをしてたんだな」

「ま、まあな。俺はあまり先輩という実感はないけどな」

奏夜と出会うまでは、自分が最年少の魔戒騎士だったので、どこへ行っても後輩感覚を持っていた。

なので、統夜は自分に後輩がいるという実感をいまだに持てないでいたのであった。

「何言ってるんですか！統夜さんは立派な先輩ですよ！俺が断言します！」

『おいおい、統夜。お前さんは随分と奏夜に懐かれたみたいだな』

「アハハ……」

奏夜がそこまで自分のことを慕ってくれているとは思っていなかったもので、統夜は苦笑いをしていた。

「とりあえず、他の試合も見学するぞ。奏夜にとっても良い経験になるだろうしな」

「はい！」

こうして統夜たちは、他の魔戒騎士の試合を見学していた。

サバツクの初日が終了し、この日は1回戦の半分が終了した。

今日試合を行っていない魔戒騎士は、翌日の2日目に試合を行うことになっている。

ちなみに大輝は1日目の最後が出番だったのだが、危なげなく勝利していた。

零と翼はまだ試合を行っておらず、2人の試合も2日目に行われる。魔戒騎士たちは、前回優勝した零と準優勝した翼の試合を心待ちにしていた。

※※※

サバツクの初日が終了し、夕食を終えた魔戒騎士たちは、談笑したり、稽古をしたりとそれぞれ自由に時間を使っていた。

中には、ホラー討伐の指令を受けてホラー討伐に向かった魔戒騎士もいた。サバツクが行われていても、ホラーは現れるため、その場合は魔戒法師が中心となつてホラー討伐に向かうのだが、人手不足な番犬所の場合は、その魔戒騎士がホラー討伐に向かわなければならぬのである。

今でも人手不足な番犬所があるのは、アスハが起こした魔戒騎士狩りのせいでもある。

そのため人事異動は行われたのだから、それでも人手が足りてない番犬所があるのが現状である。

しかし、魔戒騎士たちはそれを嫌とは思っておらず、むしろ良い鍛錬になると嬉々としてホラー討伐に向かっていったのである。

そんな中、統夜や戒人のいる紅の番犬所からの指令はなかったため、2人は宿舎でのんびりとしていた。

「あうう……サバツクの試合を記録するのってかなり大変なんだなあ……」

この日はレオと共にサバツクの試合を記録していたアキトは、想像以上に労力を消費したようで、机に突っ伏していた。

「アハハ……お疲れさん！」

戒人は、苦笑いしながらへろへろになっているアキトに労いの言葉を送っていた。

「……ところで、レオさんは？」

「さあね。多分師匠はしっかり試合の記録が取れてるかチェックしてんじゃないの？」

アキトはレオが何をしているのか定かでなかったのだが、今日の試合の記録をチェックしていると予想していた。

「零さんと翼さんもないみたいだけど、あの2人はレオさんの手伝いでもしてるのかな？」

「…………それはあり得るかもな。あの2人は師匠の盟友だしな」

「へえ…………そうなんですな…………」

奏夜も雑談に参加しており、先輩騎士の情報に耳を傾けていた。

そんな中…………。

「……………」

統夜は戒人たちと少し離れたところで、何故か勉強をしていた。

アキトはそんな統夜の姿を発見し、起き上がって、統夜の様子を見ることにした。

「おい、統夜。お前は何やってんだ？」

「ああ、俺か？俺は夏休みの宿題をやってたんだよ」

「しゅ…………宿題？」

「ああ。どうせ自由な時間が多いならこのサバックが行われてる間に夏休みの宿題を全部終わらせようと思ってな」

統夜はサバックに出場しながら、夏休みの宿題も一緒に片付けようとしていた。

「お前ってやつは…………。真面目なのか馬鹿なのか…………」

戒人は、サバックの空き時間で宿題を済ませようとしている統夜に呆れていた。

確かにこの時間は自由時間であるが、学校の勉強をする魔戒騎士など今までいなかったからである。

「……ま、まあ。自由時間に終わらせるのは良いのか……うん」

アキトも、統夜が宿題を終わらせている様子を見て、リアクションに困っていた。

「？まあ、いいや」

統夜は戒人やアキトの反応に首を傾げていたが、すぐさま宿題の続きに入っていた。

統夜は話の輪に入らず勉強に集中していたが、戒人たちは就寝時間になるまで談笑を行っていた。

そして翌日、サバツクの2日目が行われた。

この日は、1回戦の続きが行われていた。

この日の注目は、なんと言っても零と翼の試合だった。

零も翼も危なげなく勝利し、2回戦に駒を進めたのである。

そして、統夜、戒人、大輝はこの日は試合がないため、試合を見学していた。

初日と2日目でサバツクの1回戦は終了し、全ての魔戒騎士たちが一戦を交えたため、その数は半分となった。

敗れ去った騎士たちはそのまま帰って良い訳ではなく、最後までサバツクの戦いを見

届ける義務があった。

そのため、試合に敗れた魔戒騎士は、決勝戦が終わるまで帰ることは許されていなかった。

サバツクの2日目終了し、明日から2回戦に突入する。

これは当然のことであるが、2回戦の対戦相手は1回戦を勝ち抜いた猛者であるため、1回戦以上に激闘になることは簡単に予想出来た。

夜も更け、魔戒騎士たちは明日の試合に備え、眠りについていた。

そんな中、統夜は宿舎の外で風を浴びていた。

「……」

統夜は緊張で眠れなかった訳ではなく、携帯をチェックしていた。

統夜が携帯をチェックすると、唯たちからたくさんメールが届いていた。

その内容はどれもサバツクの健闘を祈るといふ内容のものだった。

統夜はそのメールを1つ1つチェックしていると、統夜は笑みを浮かべていた。

『おいおい、統夜。メール見てニヤニヤしてるぞ』

「へ？そ、そうか？」

イルバにニヤニヤしていると見透かされ、統夜は頬を赤らめていた。

『……それよりも、ここは人界でも魔界でもないのに、携帯の電波はあるんだな』

イルバは人界でも魔界でもないこの場所でもメールが届くことに驚いていた。
「ああ、それは俺も思ったよ」

統夜もメールが届くとは思っていなかったなので、驚いていた。
すると、再び統夜の携帯に反応があった。

今回は唯からのメールであり、今度のメールには写メが添付されていた。

統夜はすぐさまその写メを確認した。

その写メを見た統夜は……。

「……つたく、何やってんだか……」

統夜は優しい表情で笑みを浮かべていた。

唯が統夜に送った写メは、夏フェスの会場と思われる場所で、唯たちが仲良く寝転がっている写メだった。

「それに、梓のやつ、今年も日焼けしたんだな」

写メでハッキリとした映像ではなかったが、日焼けした梓を見て、今年も日焼けしたんだなと思っていた。

『梓のやつ、本当に日焼けしやすい体質なんだな』

イルバも携帯の写メを見たのだが、梓の日焼けしやすい体質に驚いていた。

統夜とイルバが写メをチェックしていると……。

「……おっと、今度は電話か？」

再び統夜の携帯に反応があったのだが、今度はメールではなく、唯からの電話だった。統夜はすぐさま電話に出た。

「……もしもし」

『お、繋がった！ねえ、やーくん。やーくんは今どこにいるの？』

唯も本当に電話が繋がると思っていたいなかったのか、驚いていた。

「ああ、俺はサバツクの会場の近くにある宿舎にいるぞ。サバツクはまだ続くからな」

『ふーん……。それで、やーくんは勝ってるの？』

「それは帰ってきたらじっくり話してやるよ。それまでは内緒な」

『……むうう……。教えてくれないのに……』

電話越しであるため、顔は見えないのだが、統夜は唯が膨れっ面をしているだろうと簡単に予想出来た。

「ところで、音楽が微かに聞こえるが、お前らは夏フェスの会場なのか？」

『うん！そだよお！』

サバツク開催の翌日が夏フェスだと言うことは統夜も聞いていたが、改めて唯たちが夏フェスの会場にいることを確認していた。

『統夜、羨ましいんじゃないのか？』

先ほどまでは唯の声だったのが、律の声に変わっていた。

近くにいた律が唯に電話を代わってもらったのだと簡単に予想することが出来た。

「……まあな。サバックがなければチケットを買ってでも行きたかったさ」

統夜は心から思っていることを律に伝えた。

『だろ？夏フェスのライブはどれも最高だったぞ!!』

今度は律ではなく漣に代わったのか、漣の声が聞こえてきた。

「そう言えば、漣の好きなバンドが出てるって話をしてたもんな」

統夜がサバックの会場に向かう前に、漣は統夜に夏フェスに自分の好きなバンドが出てから楽しみという話を熱くしていた。

統夜はその話を思い出しており、漣が夏フェスに興奮していることを察していた。

『私は、統夜君と一緒に良かったわ。だけど、仕方ないものね……』

今度は紬の声が聞こえてきたのだが、紬の声は少しだけ寂しそうだった。

「まあな……。俺もみんなと夏フェスに行きたかったさ。だけど、その寂しさを試合でぶつけるつもりだよ」

統夜は唯たちと一緒にでなかったため、どこか寂しさを感じていた。

そんな気持ちをエイジにぶつけており、そのおかげで勝てたのかもしれない。

統夜はそんなことを考えていた。

『私も統夜先輩と一緒に寂しいですけど、私は統夜先輩を応援してます！』
続いて梓の声が聞こえてきたのだが、梓は寂しいという気持ちを出しながらも統夜の応援をしていた。

「ありがとな、梓。俺、サブックでは悔いのない結果を残すから！」

統夜は梓の応援をこれからの戦いの力に変えるつもりだった。

『ねえ、やーくん。これからもずっと、みんなでバンドをやつていきたいよね？』

今度は唯の声が聞こえてきたのだが、唯はしみじみと呟くように言葉を紡いでいた。
恐らくそのような話をみんなですしていたのであろう。

統夜はそのことを予想出来た。

「……そうだな。俺だってそう望んでるよ」

統夜は魔戒騎士であるため、いつ命を落としてもおかしくはない。

願わくば、高校を卒業しても時々はみんなと演奏したいとは統夜は常々思っていたのである。

『そうだよねえ！ごめんね、変なことを聞いて』

「気にすんな。それじゃあ、俺はそろそろ寝るよ」

『うん、わかった！』

唯がこう言うと、今度は「おやすみなさい!!」と全員の声が聞こえてきた。

「ああ、おやすみ」

統夜はそう言って電話を切ると、携帯をポケットにしまった。

「……さて、明日に備えてそろそろ寝るとするか……」

統夜はそのまま自分の部屋で寝ることにしたのだが、その道中ずっと笑みを浮かべていた。

唯たちと話が出来て、統夜はそれだけで力をもらったからである。

その力を明日思い切りぶつけよう。

そう考えながら統夜は眠りについた。

こうして、サバック2日目の夜はふけていった。

……続く。

——次回予告——

『サバックもいよいよ2回戦か。戦いはもつと激しくなっていくと思うぜ！次回、「妙技」。騎士の剣技が冴え渡る！』

第73話 「妙技」

サバックも3日目に突入し、今日からは2回戦に突入する。

魔戒騎士たちは朝食を済ませると、サバックの会場へと向かった。

統夜も同様に朝食を済ませてサバックの会場へと向かった。

会場に到着すると、統夜は初日にもらったトーナメント表を確認した。

「えっと……。俺の2回戦の相手は……」

統夜が対戦相手を確認すると、その相手は、タクトという某番犬所所属のベテラン騎士だった。

「……このタクトって人って、確かサバック常連のベテラン魔戒騎士だよな」

『ああ。こいつは1回戦の試合を難なく制したみたいだからな。統夜、こいつも油断出来ない相手だぜ!』

「そうだな。それはわかって……。ん?」

統夜がイルバと話をしていると、統夜は視線を感じたので、その方を向いた。

統夜のことを見ていたのは、ちょうど話をしていた統夜の対戦相手であるタクトであった。

タクトは統夜をしばらくジッと見ていたが、フツと鼻で笑うと、その場を離れていった。

『……どうやら、あいつはお前さんをただの小僧と侮ってるようだな』

「そうみたいだな。俺がエイジさんに勝てたのもマグレだと思ってるんだろうな」

統夜もタクトの態度を見て、タクトは統夜がエイジに勝ったのはマグレだと思つていと予想していた。

『ま、お前さんは気に入らんだろうが、試合でお前さんの力を見せてやると良い』

「ああ。あいつに見せつけるさ。俺の力を……」

統夜はタクトに侮られた憤りを闘志に変えていた。

統夜の試合はすぐなので、闘技場で自分の試合を待つていた。

そして、現在は2回戦の第1試合が行われていた。

統夜は試合を見ながら、これから行われる試合に向けて精神を集中させていた。

この試合は序盤から白熱した試合が続き、激しい剣の打ち合いが行われていた。

そして10分後、試合は大きく動き、決着がついた。

「……勝負あり！」

審判役が試合終了を宣言すると、試合を見学していた魔戒騎士たちが歓声をあげていた。

『……統夜、いよいよだな』

「ああ。とりあえず、あのタクトって人に見せてやるさ。俺の力を！」

統夜は自分を侮っているタクトに自分の力を見せつけよう。

そう考えていた。

「続いて、第2試合！」

最初に呼ばれたのはタクトであり、タクトは戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「対するは紅の番犬所付き、月影統夜！」

統夜は自分の名前を呼ばれたので、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「……両者、武器を構え！」

統夜とタクトは、それぞれ支給された鉄製の武器を構えた。

統夜は1回戦同様に魔戒剣に似た剣であるが、タクトの武器は、ハルバードのような武器だった。

「……フン、1回戦で元老院付きの魔戒騎士を倒したらしいが、所詮は小僧。マグレは2度も続かないことを教えてやる！」

「……あなたに見せてあげますよ！俺の力を！」

統夜は鋭い目付きでタクトを睨みつけていたが、タクトはそんな統夜の言葉を、子供

の戯言と考え、鼻で笑っていた。

「……何かあのタクトってやつ、感じ悪いな」

客席で試合を見学していた戒人は、タクトの不遜な態度に嫌悪感を表していた。

「まあ、あの男も魔戒騎士としてはかなりのベテランだからな。それだけプライドが高いんだろう」

大輝の言う通り、タクトは魔戒騎士の中ではベテランであり、サブツクの出場回数も多い。

その分プライドが高く、自分より歳の下の者や実力の劣る者を見下す傾向がある。

「……あれ？大輝さんはあのタクトって人を知ってるんですか？」

「まあな。俺が紅の番犬所に配属される前に一度共に戦ったことがある。まあ、俺もあの男には見下されていたがな」

大輝も魔戒騎士としては多くの経験を積んだベテラン騎士であり、1度だけタクトと共闘したことがあった。

その時からタクトのプライドの高さは健在であり、タクトは大輝のことを見下していたのである。

「そんな……！大輝さんほどの人を見下すなんて！」

「そうだな、俺もそう思うよ」

大輝の言葉に奏夜は怒りを露わにしており、戒人はそんな奏夜に賛同していた。

「まあ、今の統夜であれば問題なく勝てるだろう。何たってあいつはあの毒島エイジに勝ったんだからな」

大輝は統夜の勝ちを確信していた。

「そうですよね！」

「ああ！あの統夜がそう簡単に負ける訳がないさー！」

奏夜と戒人も、統夜の勝ちを確信していた。

統夜の勝ちを確信していたのは大輝たちだけではなく、他の魔戒騎士たちも統夜が勝つと思っていた。

魔戒騎士たちは統夜がエイジに勝ったのを見ていたのもあるが、タクトが気に入らないため、統夜のことを応援していたのである。

「……フン、どいつもこいつもあの小僧を応援するか……。無駄なことを……」
タクトは、自分が統夜なんかには負けるはずがないと確信していた。

「……」
統夜は何も語らず、ジッとタクトを睨みつけていた。

「……それでは！試合、始め!!」

審判役の一声で、統夜とタクトの試合が始まった。

「……フン、これでもくらえ！」

タクトは試合が始まるなり、ハルバードを一閃した。

しかし、統夜はそんなタクトの攻撃を軽々とかわしていた。

「何だと!？」

「ふふん♪どうしました?そんなんじや、俺は倒せないですよ!」

統夜は先ほどまで馬鹿にされたことを根に持っていたのか、タクトのことを挑発していた。

「ガキが……!調子に乗るな!!」

統夜の調子に乗ったタクトは激昂し、怒りのままにハルバードを振るっていた。

そんな攻撃に統夜が当たるはずもなく、統夜は攻撃をかわしながらため息をついていた。

(……やれやれ、こんな挑発に引っかかるなんて……。たいしたことはないな……)

統夜はタクトが思ってた以上に実力が無いと思い知り、ガツカリしていた。

(だけど、誰が相手だろうと全力で戦う。それが、戦う相手への礼儀つてもんだからな)

統夜はタクトの力量を知ったのだが、全力で戦うことを誓っていた。

「どうした、小僧!避けてばかりじゃ俺には勝てんぞ!」

「まあまあ、慌てないで下さいよ。まだ試合は始まったばかりなんですから!」

統夜はタクトの攻撃をかわしながら、反撃の機会をうかがっていた。

「お前が来ないなら、ここで潰してやる！」

タクトはハルバードを大きく振りかぶった。

「……そこだ！」

統夜はハルバードを大きく振ったタクトの攻撃の隙を見逃さなかった。

統夜は大きくジャンプし、ハルバードによる攻撃をかわした。

さらに、攻撃をかわすだけではなく、統夜はそのハルバードの上に器用に乗っていたのである。

「……なっ!?!」

これにはタクトも驚きを隠せず、試合を見学していた魔戒騎士たちも驚いていた。

「ええい！小癩な！」

タクトはハルバードを振りかざし、統夜を振り落とそうとしたが、その前に再びジャンプして、ハルバードから降りていった。

そのまま統夜は降下し、勢いのあるまま、統夜は剣を一閃した。

タクトは慌ててその一撃を防ぐのだが、すかさず統夜は剣を一閃した。

その一閃はハルバードの柄を狙い打ちしており、狙い通りハルバードの柄は統夜の一閃で斬り裂かれ、斧の部分はそのまま地面に落下していった。

「おお!!すげえ!」

「ハルバードを切りやがったぞ!あいつ!」

「こりや、勝敗は決まったんじゃないのか?」

タクトは武器を失ってしまったため、この時点で誰もが統夜の勝ちを確信していた。

(おのれ……!俺は負けるのか?あんな小僧に!)

このままでは負けることをさすがのタクトも認識しており、悔しさをにじませていた。

(……あんな小僧に負けるくらいだったら……!)

何かを思いついたタクトは、統夜が決着をつけるための攻撃をかわし、蹴りを放って

統夜を吹き飛ばした。

統夜は何が起こっても良いように、体勢を立て直した後も、警戒を怠らなかつた。

タクトは今手に持っている棒になってしまったものを統夜に投げつけ、続けて斧の部
分も拾って統夜に投げつけた。

統夜は剣を振るって棒と斧を弾き飛ばしたその時だった。

タクトは密かに隠していた魔導筆を手にとると、誰にも見られないように術を放
た。

その術を受けた統夜はその場で転んでしまった。

「……!? な、何だ!?!」

さすがの統夜もこれには予想外であり、タクトの方を見ると、タクトの手には魔導筆が握られていた。

(……!? 馬鹿な!?! 魔導筆を使った術は放った時点で失格だろ? わかってて何で?)

統夜は反則を犯したタクトに戸惑っていた。

タクトが魔導筆を持った瞬間を他の魔戒騎士たちも見逃していなかったようで……。

「反則だ!!」

「お前! 何を考えてるんだ!」

魔戒騎士たちはタクトの反則に非難の声をあげていた。

「……!? 何である人はわかかってて反則を……?」

「統夜に負けるくらいだったら、反則負けを選ぶ。そんな所だろう」

「何て奴だ!」

大輝の推測通り、タクトはこのまま統夜に負けるくらいだったら、反則で失格になった方がマシと考え、魔導筆で術を放ったのである。

戒人は、そんなタクトに対して怒りをあらわしていた。

そして審判役は目の前で行われている反則行為を見逃すはしかなかった。

「……ただいま、反則行為があったため! 試合はここまで! 勝者……」

「そんな！いくら反則といえど納得出来ません！」

統夜は相手の反則で勝つても嬉しくないのが、審判役に抗議をしていた。

「しかし、これはサバツクのルールに則ったものだ。逆らうなら君を反則負けにしても良いのだぞー！」

「……っ!?!」

審判役にこのように言われてしまうと、統夜は何も言うことが出来なかった。

「……それでは、勝者……」

審判役が統夜の勝ちを告げようとしたその時だった。

「……その判断、しかと待たれよ!!」

このサバツクの主催者である朱雀が、統夜の勝利に待ったをかけた。

「……!?!朱雀様、ですが！」

「もちろん反則行為を許す訳にはいかぬ。くだらぬプライドで行われた反則行為は尚更な！」

朱雀は反則行為を犯したタクトを睨みつけていた。

「……月影統夜よ！お主が試合の継続を望むのなら、特別にそれを認めよう！」

「ほ、本当ですか!?!」

「!?し、しかし……」

「タクトよ、もしお主がこの現状で月影統夜に勝つことが出来たのなら、主催者権限によってお主の反則は不問にしよう！」

朱雀はあまりにも大胆なことをタクトに提案した。

魔導筆を使つても統夜に逆転勝ち出来れば、この反則は許されるとのことだからである。

「……ただし、お主が負けた時は……。わかつておろうな！」

朱雀は、もしタクトが勝てば反則は不問にするつもりだが、タクトが負けた場合は重いペナルティを課すつもりだった。

「……へへ、いいぜ！あの小僧をぶつ倒せばこの反則は許してくれるんだろ？やってやるさー！」

タクトは朱雀の申し出を受けることにした。

この判断に納得がいけない魔戒騎士たちはブーイングをしていた。

「……これは、ずいぶんと凄いことになったな……」

「そうですね。まあ、統夜ならあんな反則野郎に負けないと思うが……」

「はい！統夜さんは絶対に勝ちますよ！」

大輝はこの朱雀の判断に驚き、戒人と奏夜は、統夜の勝ちを確信していた。

「……これ、記録しても良いのでしょうか……？」

その頃、試合を記録していたレオは、目の前の反則を記録すべきか悩んでいた。

「師匠、これは記録するべきだろ。サブツクは魔戒騎士にとつて神聖なものなんだろう？
こんなことは許されないうて意味も込めてさ！」

レオが戸惑う中、アキトはこの試合をこのまま記録すべきだと熱弁していた。

「……そう、ですね……。そこはアキトの言う通りですね」

アキトの言葉に後押しされたレオは、このまま試合の記録を続けるのだった。

「……そ、それでは、試合、再開！」

審判役は戸惑いながらも試合の再開を宣言した。

「……喰らえ!!」

試合が再会されるなり、タクトは堂々と魔導筆を手に取り、統夜めがけて術を放った。

統夜はタクトの放った法術をどうにかかわし続けていた。

「ほら、どうしたどうしたあ！お前の力はその程度かあ？」

反則行為をしているにも関わらず、タクトは強気だった。

タクトが法術を放てば放つほど、ブーイングは強くなり、この会場にいる全員が統夜を応援していた。

(……確かになかなかの法術だけど、あんなもん。アキトの足元にも及ばない！)

統夜はタクトの放った法術は、アキトのものよりも劣っていると確信していた。

(それに、相手は魔戒法師じゃないんだ。こんなに術を多用してたらきつと……)

統夜は反撃しようと思えば出来たのだが、ある可能性を考慮してあえて攻撃をかわし続けていたのである。

すると……。

「これでもくらえ！……つて、えい！」

タクトは術を放とうとするのだが、その術は不発に終わってしまった。

「……今だー！」

これこそ、統夜の狙いだっつた。

魔戒法師でもない者が連続で術を放つても、それは長続きしないと確信していたため、統夜は相手が法術を使えなくなるタイミングを待っていたのである。

「……これで、終わりだー！」

統夜は隙だらけのタクトに接近すると、トドメの攻撃を打ち込もうとしていた。

「……させるかあ!!」

タクトは統夜めがけて蹴りを放つが、統夜はそれを軽々とかわし、剣を一閃した。

その一撃は、魔導筆を手にしているタクトの右手を掠め、タクトは手にしていた魔導筆を落としてしまった。

そして、タクトの右手から、微量ではあるが、血が滲み出していた。

「……そこまで！勝者、月影統夜！」

審判役が、今度こそ試合終了を宣言し、統夜の勝利を告げた。

すると、試合を見学していた魔戒騎士たちが、今までで一番大きな歓声をあげていた。

「……そんな……馬鹿な……！俺が……こんな小僧に……！」

タクトは、見下していた統夜に負けるとは思っておらず、ガクツと肩を落としていた。

統夜は剣を鞘に納めると、ゆっくりとタクトに近付いていった。

そして……。

「!？」

統夜は鋭い目付きでタクトを睨みつけると、タクトを殴り飛ばした。

この統夜の行動は誰もが予想していなかったのか、驚きを隠せなかった。

「……!?!あ、あいつ！」

「と、統夜さん……」

「……まあ、統夜の気持ちもわからんでもないがな」

大輝と奏夜は、統夜の行動に驚くが、戒人だけは、統夜の行動にウンウンと頷いていた。
た。

もし自分が統夜と同じ立場だったら、自分も同じことをするだろうと思っていたからである。

「……な、何するんだ！」

「あんたは神聖なサバツクの舞台を反則という卑劣な手で汚したんだ！これでも足りないくらいだぜ！」

統夜は勝ち負けがどうのこうのよりも、つまらないプライドで反則行為を行い、サバツクの舞台を汚したタクトが許せなかった。

「は……反則だ！敗者を殴り飛ばすなんて、魔戒騎士のすることじゃない!!」

タクトは統夜に殴られたことにつまらない言いがかりをかけた。

『やれやれ……。見苦しいにも程があるぜ』

イルバはずつとこの試合を見守っていたのだが、終始タクトの言動に呆れていた。

「あんたは……！まだくだらないことを言うならもう！発くれてやつてもいいんだぞ！」

統夜の怒りはかなりのものであり、誰も止めなければこのままタクトを半殺しにしかねない状態だった。

「……月影統夜！よさぬか!!」

それを見かねた朱雀がさかさず統夜を止め、統夜は素直に言うことを聞いていた。「確かにお主のやっていることは魔戒騎士として良い行為とは言えぬな」

「そ、そうだろう!? だったら！」

「だが、自らの反則を棚に上げて言えたことではない！」

朱雀は、統夜以上にタクトのことを厳しく叱責していた。

「……そなたには厳しい罰を与える。覚悟しておくのだな！」

朱雀の言葉を聞いたタクトは、ガクツとその場に崩れ落ちていた。

「……連れて行け！」

朱雀の命により、元老院の議員が数名現れ、タクトをどこかへ連行していった。

その去り際、タクトは統夜に「これで終わると思うなよ！」と言い残し、その場を去っていった。

「……月影統夜。よくやってくれたな。私は相手が反則行為をしようと正々堂々でいようとするとそなたを賞賛するぞ」

「朱雀様……」

「次の戦いも同じように励むが良い」

「……はいっ!!」

統夜は朱雀に一礼すると、円陣から離れ、闘技場を後にした。

闘技場を出た統夜は、違う階段から客席へと向かった。

※※※

「……あつ、統夜さん！お疲れ様です！」

統夜が大輝たちのいる場所へ到着するなり、奏夜が統夜に労いの言葉をかけていた。

「ああ、ありがとな」

「それにしても、色々大変だったな、統夜」

「そうですね。まさか相手が反則行為をしてくるなんて思ったなかったですよ」

「だけど、とんでもない奴だったよな。そこまで実力がある訳でもないのにプライドだけが高くてさ」

戒人は、やはりタクトの行動が許せなかったのかこのように悪態をついていた。

「まあな。俺も反則が許せなくて思わず殴っちゃったんだけどな」

「お前の気持ちはわかるが、あれはどうかと思うぞ？朱雀様だってああ言うさ」

「アハハ……。そうですねえ……」

大輝が統夜の行動をなだめると、統夜は苦笑いをしていた。

「統夜も3回戦に駒を進めたんだ。俺も負けていられないな！」

戒人も、次の試合に向けて気合は十分だった。

「お、戒人！その意気だぜ！」

統夜はそんな戒人にエールを送っていた。

「俺も試合が近いし、そろそろ控え室に行くよ」

「戒人さん、頑張ってくださいね！」

「ああ。俺はお前に勝って2回戦に来たんだ。無様な負けは絶対にしないさ！」

このように決意を固め、戒人は控え室へと移動した。

その場に残った統夜たちは試合の観戦を続けていた。

2回戦も順調に進んでいき、戒人の出番が訪れた。

戒人の対戦相手はエイジと同じ元老院付きの魔戒騎士であったが、激闘の末、戒人が勝利し、3回戦に駒を進めた。

エイジに続いて元老院付きの魔戒騎士が破れたことに、魔戒騎士は驚きを隠せなかった。

(……戒人も元老院付きの魔戒騎士に勝ったか……。さすがだな、戒人。これで、準々決

勝あたりで戒人と戦う可能性が出てきたな……)

統夜は戒人の激闘を最後まで見届けたのだが、このまま勝ち進んでいけば、戒人と戦う可能性があつたからである。

「……? 統夜さん? どうしました?」

険しい表情で考え事をしている統夜を見た奏夜は首を傾げていた。

「……いや、何でもないよ」

統夜は奏夜に呼びかけられて我にかえると、笑いながらこう答えていた。

(……今の戒人はかなり力をつけているからな。それに、戒人とサバックで戦えるなんて最高じゃないか!)

統夜は自分がライバルと認めた戒人とサバックの舞台で戦えるなんてこんなに光栄なことはないと考えていた。

そして、今からそんなことは考えず、実際戒人とぶつかった時に考えようとも考えていた。

そして、戒人が客席に戻ってくると、統夜たちは戒人と共に試合を見学していた。

そして、大輝、零、翼の3人は、危なげなく2回戦も勝ち進んでいき、2回戦全ての試合が終了した。

翌日は3回戦。ここまで勝ち進んできた魔戒騎士たちは名実共に実力のある魔戒騎

士ばかりであり、さらなる激闘は必至だった。

統夜はサバツクの試合で戒人と戦うことを考えていたのだが、3回戦でかなりの強敵と戦うことになるとは、この時の統夜はまだ知る由もなかった。

……続く。

——次回予告——

『3回戦の相手はあの男か。こいつはかなりの強敵だぜ、統夜！次回、「恩師」。お前がどれだけ成長したのか、見せつけてやれ！』

第74話 「恩師」

激闘が続くサバックも4日目に突入した。

この一戦に勝利すれば、ベスト8は確定し、それは魔戒騎士にとっては最大の名誉となる。

統夜は、3回戦の第1試合だったので、闘技場で試合が行われるのを待っていた。

「……………えっと……………。俺の次の相手は……………？」

統夜は待っている間にトーナメント表を確認し、対戦相手が誰なのかをチェックしようとしたのだが……………。

「……………お前の相手はこの俺だ」

統夜の対戦相手が統夜に名乗り出てきたのである。

統夜はその対戦相手を見て絶句していた。

……………その対戦相手とは……………？

「……………ワタルさん……………」

雷鳴騎士破狼の称号を持ち、修練場時代の統夜の恩師であった四十万ワタルであった。

「……驚いたか？まあ、俺もお前が相手と知った時は驚いたがな」

ワタルは元老院付きの魔戒騎士であり、1回戦は第1試合からだった。

統夜の恩師なだけはあつてその力は圧倒的だった。

1回戦と2回戦を難なく勝ち進み、統夜との対戦となったのである。

「1回戦のお前の試合は見たぞ。あのエイジに勝つとは、お前も成長したじゃないか。

あの生意気だった小僧がな」

ワタルは修練場時代の統夜のことを思い出すと、笑みを浮かべていた。

「ワタルさん、小僧はやめて下さいよー」

「わかつているさ。ただ、懐かしくなっただけさ」

修練場での日々はホラー襲撃のせいで悲しい思い出になつてはいるのだが、10日間の
厳しい修行は、統夜だけではなく、ワタルにとつても良い思い出になつていた。

「……ワタルさん、俺はあなたに見せつけます！俺が魔戒騎士として、どれだけ成長した
のかをー！」

対戦相手がワタルとわかつた瞬間、統夜は恩師であるワタルに自分の成長を見てもら
いたいという気持ちでいっぱいになつていた。

「……ふっ、楽しみにしてるぞ！統夜ー！」

ワタルは統夜の頭をくしゃつと撫でると、円陣の前へと移動した。

「……」

統夜はワタルとの対決に向けて気持ちを高めていた。

『……統夜、大丈夫か？あの男は一筋縄ではない相手だぜ』

「そうだな。だけど、俺はワタルさんに勝って俺の成長を見てもらおう。それがワタルさんへの恩返しだと思ってるし、あいつらにも俺の成長を見守ってもらいたいって思ってるから」

統夜の言うあいつらとは、修練場で共にワタルに鍛えられたアオ、シロ、ヤマブキのことであつた。

統夜は自分の成長を、今は亡きアオ、シロ、ヤマブキにも見てもらいたいと思つていたのである。

これから来たる3回戦に向けて気合をいれた統夜は、円陣の前に移動し、試合開始を待っていた。

そして……。

「これより、3回戦、第1試合を行う!!」

審判役が、3回戦の開催を告げた。

「……元老院付き、四十万ワタル!!」

審判役に名前を呼ばれたワタルは、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「……対するは、紅の番犬所付き、月影統夜!!」

統夜も名前を呼ばれたので、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

2人が戦いの舞台に足を踏み入れると、試合を見学している魔戒騎士たちはどちらが勝つかの予想に熱が入っていた。

「なあ、この試合、どっちが勝つと思う?」

「そりゃ、四十万ワタルだろ! 1回戦と2回戦のあの圧倒ぶりを見てないのか?」

「いや、待てよ! あの月影統夜だって元老院付きの毒島エイジに勝ったんだぜ! だから四十万ワタルが負ける可能性だって充分あるぞ!」

「そうかもしれないな。あー! もう! 全然予想出来ねえ!!」

魔戒騎士たちはどちらが勝つかの予想に苦戦していた。

「……随分と盛り上がってるな」

「まあ、その気持ちもわからんでもないがな」

「……あの人ってかなりの手練れなんですか?」

「まあな。あの人は修練場の教官をしていたんだが、鬼教官って言われてたんだぞ」

戒人は修練場の時のことを思い出し、しみじみと呟っていた。

「もしかして、戒人さんも修練場の修行に?」

「ああ。統夜とは違う班だったが、あの時から俺は統夜をライバルだと思っていたんだ

「よ」

戒人は修練場時代から、統夜の才能を見抜き、ライバル視していた。

「へえ、子供の頃から統夜さんは凄かったんですね！」

戒人の話を聞いていた奏夜は、その話にワクワクしていた。

「ところで、奏夜は修練場の修行は参加しなかったのか？」

「いえ。一応は修行に参加しましたよ。つと言っても俺はずっと落ちこぼれでしたけど」

奏夜も修練場時代のことを思い出したのか、こう話すと苦笑いをしていた。

「……そっか。ところで、奏夜は修練場時代にホラーに襲われたりしなかったか？」

「いえ。教官の魔戒騎士たちはかなり気を遣っていたのか、そういうのはなかったですけど……」

「……そっか……それは良かったな……」

奏夜は修練場時代、ホラーに襲われてはいないと知り、安堵の笑みを浮かべていた。

それと同時に、戒人の笑顔には悲壮感が出ていた。

「……戒人さん。あなたたちの時はもしかして……」

奏夜は戒人の哀しみの入った笑顔を見た瞬間、戒人や統夜の通ってた修練場の修行で何かあったのだと察し、それを聞こうとしたのだが……。

「そろそろ試合が始まるみたいだぞ」

大輝が統夜とワタルの試合が始まることを告げると、戒人と奏夜は試合を見ることに集中していた。

「……四十万ワタルは手強い相手だ。月影統夜はどんな戦いをするのか……」

サバツクの初戦で統夜に敗れた毒島エイジは、ワタルの実力がかなりのものであることを認識しており、統夜がワタル相手にどのような戦いをするのか期待をしていた。

「……なあ、翼。統夜はあいつに勝てると思うか？」

客席で試合を見学していた零は、一緒に見学していた翼にこの試合の勝敗について聞いていた。

「さあな。だが、四十万ワタルはかなりの手練れだぞ。そう簡単に勝てる相手ではないと思うがな」

「だよなあ。だけど統夜は成長したよな。1回戦と2回戦の試合を見てたらそう思ったぜ」

「そうかもな。だが、俺から言わせれば統夜はまだまだだ」

翼は統夜の力を認めてはいるものの、それを素直に言葉に出してはいなかった。

翼とは付き合いの長い零は翼が素直になれてないことを見通しており、苦笑いをしていた。

(……統夜、負けるなよ！お前の力を見せてみろ！)

零は心の中で、統夜にエールを送っていた。

「……両者、武器を構えよ！」

審判役の言葉を聞き、統夜とワタルはそれぞれの武器を抜き、構えた。

「……ワタルさん、俺はあなたに見せつけます！俺がどれだけ成長したのかを！」

「……それで良い！お前の本気を見せてみろ!!」

ワタルはこう言い放つと、統夜を睨みつけていた。

「……試合、開始!!」

審判役が試合開始を告げると、統夜は迷うことなく、ワタルに向かっていった。

統夜は剣を一閃すると、ワタルはそれを難なく受け止めていた。

「……今の攻撃のスピードはなかなかだな。だが、お前の力はこんなもんじゃないだろう？」

「ええ、もちろんですよ！」

統夜はワタルを弾き飛ばそうとするのだが、その前にワタルが統夜を弾き飛ばした。

「……っ！」

ワタルに弾き飛ばされた統夜はそのまま後ろろずさるのだが、すぐさま体勢を立て直した。

その時出来た隙を見逃さず、ワタルは統夜に接近し、剣を一閃した。

統夜はワタルの一閃を剣で防いだ。

「……………のお!!」

統夜は先ほどの仕返しと言わんばかりにワタルを弾き飛ばすと、ワタルはすぐさま体勢を立て直した。

「どうした?もつと来い!!お前の力はそんなもんじゃないだろ?」

「はいっ!もちろんです!」

統夜はワタル目掛けて接近すると剣を一閃し、ワタルもそれと同時に剣を一閃した。

2人は激しく剣を打ち合うのだが、その激しさがこの戦いの熾烈さを物語っていた。

(……………統夜、確かに成長したな。あのグオルブと戦った時よりも断然に強くなっている。

あのアスハとかいう魔戒法師を討伐したのも納得だ)

ワタルは、統夜が魔戒騎士狩りを引き起こしたアスハを倒したことを知っており、それだけの力をつけたことを実感していた。

(……………この試合、一瞬でも気を抜けば畳み掛けられるな……………。俺だつてあいつを鍛えたというプライドがある。そう簡単には負けてやれん!)

ワタルは統夜と激しくぶつかり合いながら、このようなことを考えていた。

(……………やっぱり強いな、ワタルさんは。さすがは俺たちの教官だけはあるよ)

統夜は実際に戦ったことにより、ワタルの実力を改めて実感していた。

(……そう簡単に勝てる相手ではない。だけど、俺はワタルさんに勝ってみせる！それが成長したことを見せるってことだと思おうから！)

統夜はワタルに自分の成長を見てもらうために、ワタルに勝つと息巻いていた。

そんな中、統夜はワタルと激しい剣の打ち合いをしながら修練場でのワタルとの日々を思い出していた。

〃……俺の名は四十万ワタル。俺がお前たちを指導する〃

(……そう、初めてワタルさんを見た時は、怖そうだなと思ったんだよな)

〃お前のように負けん気の強い小僧は大勢いるが、修行に耐えられない奴も多い。小僧、修行はきついで。帰るなら今だ〃

(……俺はワタルさんから負けん気の強い生意気な小僧って思われてたんだよな……)

統夜はその時のことを思い出しながら笑みを浮かべていた。

ワタルは、統夜が笑みを浮かべていることに気付き、その様子を訝しげに見ていた。

(……う？あいつ、笑ってる……？あいつは俺との戦いを楽しんでるのか？それとも……)

ワタルは、何故統夜が笑みを浮かべながら戦っているのがわからなかった。

ワタルは首を傾げながらも、攻撃の手を緩めることはなかった。

(……っ！そ、そうだ、これだ！ワタルさんは最初から厳しかったよな)

統夜は再び修練場での修行を思い出していた。

“……おい、どうした？お前らそんなもんか!?”

“息を止めるな！吐け!!”

修練場での修行は熾烈を極めたものであり、当時の統夜は必死になってその修行についていつていた。

(……今思えば、あの時の修行があったからこそ、俺は魔戒騎士として成長することが出来たんだよな。だから、ワタルさんには本当に感謝してる)

修練場での厳しい修行が今の統夜を作ったといっても過言ではなかったため、統夜は心の底からワタルに感謝していた。

(だからこそ、俺はワタルさんに成長を見てもらわなきゃいけないんだ！それが、ワタルさんへの恩返しだけじゃない！あいつらの鎮魂にもなるはずだ！)

統夜はワタルだけではなく、今は亡きシロたちにも統夜の戦いを見てもらい、その成長を見てもらいたいと思っていた。

そのような気持ちを含めて、統夜は剣を振るっていた。

(……!?!急に統夜の剣撃が重くなった。急にどうしたと言うのだ!?!)

ワタルは、統夜の剣撃が急に重くなったことに戸惑っていた。

先ほどまで意味がわからぬまま笑みを浮かべる統夜を見ていたのだが、それから統夜

の攻撃が変わっていたのである。

(だが……俺だってそう簡単に負ける訳にはいかない!)

統夜の攻撃が変わったことに触発されたワタルは、一撃一撃に力を込めていた。

「……………くっ!」

ワタルの剣撃も重くなっており、統夜は表情を歪ませていた。

「おら、統夜どうしたあ!!気合が足りてないんじゃないのかあ!!」

ワタルはまるで修練場時代を再現するかのように統夜に厳しい言葉をかけていた。

ワタルは統夜が自身の成長を見て欲しいことを理解しているため、このように厳しい言葉をかけたのである。

「もっと気合を入れろ!じゃないと俺は倒せんぞ!」

「はい!!」

ワタルの厳しい言葉に統夜は歯を食いしばりながら気合をいれていた。

そして、2人の剣の打ち合いはさらに激しさを増していた。

「……………凄え…………」

「ああ。今回のサブックで一番激しい試合になってるんじゃないのか?」

「俺じゃとてもあの2人に敵わないぞ!」

試合を見学していた魔戒騎士たちは、2人の壮絶な剣の打ち合いに啞然としていた。

「……凄いな、統夜のやつ……」

「ああ。あの四十万ワタル相手にここまでやれるとはな……」

戒人と大輝も、統夜の善戦ぶりに驚いていた。

さすがの2人もワタル相手にここまで壮絶な戦いを繰り広げるとは思っていなかったのである。

「……統夜さん……」

奏夜も、統夜の戦いぶりに唾然としながら2人の戦いを見守っていた。

「はああああ!!」

統夜は気合を込めて剣を一閃するが、その攻撃はワタルに防がれてしまった。

「おら、どうした!!お前の力はそんなもんなのか!」

「まだまだあ!!」

統夜は勢いよく剣を振るっているのだが、統夜は冷静だった。

剣を振るいながらワタルの隙を突こうと試みていたのだが……。

(……さすがワタルさんだ。付け入る隙がない!)

ワタルは魔戒騎士としては実力を兼ね備えたベテラン騎士であり、そんなワタルの隙を突こうというのは至難の技であった。

ワタルは、統夜に自分の隙をじっくり探させる時間は与えてくれなかった。

「どうしたあ！隙だらけだぞー！」

ワタルの隙を探るのに夢中になっていたからか、自分の方に隙が出来てしまい、そこをワタルに付け込まれてしまった。

ワタルは統夜の足をめがけて剣を放つが、統夜は咄嗟にワタルの一閃を回避した。しかし……。

「！っつとっ！」

ワタルの攻撃をかわしたのは良いものの、統夜はバランスを崩してしまい、今にも転びそうになっていた。

「……これで終わりだー！」

ワタルはこのまま決着をつけるべく剣を一閃した。

すると、統夜は……。

「……まだだあ!!」

統夜はワタルの一閃をバック転で回避した。

「何!？」

ワタルは統夜の回避方法に驚愕していた。

統夜はバック転でワタルの攻撃をかわすと、すぐに体勢を立て直した。

すかさず統夜は反撃と言わんばかりに剣を一閃した。

ワタルは統夜の予想外の回避方法に動揺していたものの、どうにか統夜の攻撃を防ぐことが出来た。

「ワタルさん……！ 次の一撃で決着をつけましょう！」

「いいだろう！ 受けて立つ!!」

統夜は戦いの決着を提案し、ワタルはそれを了承した。

そのため、統夜は一度後方へ下がると、ワタルの様子を見ながらワタルを睨みつけていた。

ワタルも統夜を睨みつけており、闘技場内は重苦しい空気に包まれていた。

そして……。

統夜とワタルは同時に駆け出した。

「はああああああああ!!」

「うおおおおおお!!」

2人はまるで獣のような雄叫びをあげながら互いに接近し、それぞれの剣を一閃した。

(……！ 取った！)

剣を一閃した瞬間、ワタルは手応えを感じており、この時点で自分の勝利を確信していた。

しかし……。

統夜は何を思ったのか一度剣を振るうのをやめていた。

「……なっ!？」

統夜の予想外な行動にワタルが戸惑う中、統夜はワタルの剣の軌道を読んでいたのか、ワタルの剣をかわし、そのままワタルの剣を叩き落とすかのように剣を思い切り振り下ろした。

「……!?!?なんだと!?!」

ワタルの剣はそのまま統夜に叩き落とされてしまい、すかさず統夜はワタルの手に切り傷を与えるように剣を一閃した。

その一閃によってワタルの手には微かではあるが、切り傷が出来てしまい、少量ながら出血をしていた。

「……勝負あり!勝者、月影統夜!!」

審判役が試合終了と統夜の勝利を告げると、試合を見学していた魔戒騎士たちは壮絶な試合の決着に歓声をあげていた。

「おお!月影統夜が勝ったぞ!!」

「凄え!元老院付きの魔戒騎士にまた勝つなんて!」

「凄く良い試合だったぞ!」

客席からは統夜の奮闘ぶりに対しての驚きこ声や、壮絶な戦いへの賞賛の声が上がっていた。

「……統夜、よく勝てたな……」

「そうだな、俺も本当に勝てるとは思ってなかったぞ」

「……凄いな、統夜さん……」

戒人、大輝、奏夜の3人も、統夜の奮闘ぶりに驚いていた。

「……俺も負けてられないな……」

統夜の奮闘ぶりを見た戒人は、これから来る自分の試合に向けて闘志を燃やしていた。

「……ふつ、やるではないか。本当に勝つとはな」

1回戦で統夜に敗れた毒島エイジは、統夜の勝利に賞賛の声をあげていた。

「……俺やワタル以上の強敵がいるんだ。あいつはそいつらに勝てるかな？」

エイジは、準々決勝以降で戦う相手は強敵が続くことを予想していたため、統夜が勝てるかと疑問視していたが、それと同時に期待もしていた。

「へえ!!統夜のやつ、やるじゃん!」

「そうだな。まさか統夜が四十万ワタルに勝てるとは思ってなかったぞ」

零と翼も、統夜の勝利は予想していなかったので、驚きを隠せなかった。

「だけど、翼はこのまま勝ち進めれば統夜と戦う可能性があるってことだよな？」

「ああ、どうやらそうみたいだな」

翼は、トーナメント表では統夜と同じブロックにいたため、このまま勝ち進めれば、準決勝の相手が統夜になる可能性があった。

「……あいつ、かなり強くなったな」

「そうだな。だが、俺はまだまだあいつには負けてないからな。あいつが相手なら全力で叩き潰す！」

「アハハ……。翼、お手柔らかにしてやれよ」

翼はもし統夜と試合になったら本気で叩き潰しかねなかったもので、零は苦笑いをしていた。

「……月影統夜。まさか、この俺を倒すとはな……」

ワタルは自分の敗北は予想外だったたので、驚きを隠せずに行った。

「……正直、勝てるとは思わなかったたので自分でも驚きです」

統夜は自分でも今回の勝利に驚いていた。

「ふっ……。だが、確かにお前は成長しているようだ。グオルブを倒した時よりもずつとな」

「ワタルさん……」

「お前の成長に、きつとあいつらも喜んでるよ」

ワタルの言うあいつらとは、修練場の修行の時にホラーに殺されたシロ、アオ、ヤマブキのことであつた。

「……そうですね……」

統夜も自身の成長を実感しており、しみじみと呟いていた。

「……この調子で励めよ。守りし者として……」

ワタルは統夜に近付くと、ポンつと統夜の頭に手を置き、クシヤツとその頭を撫でていた。

統夜を少し撫でると、ワタルは闘技場を後にした。

ワタルの去り際を見ていた統夜はワタルの姿が見えなくなるまで、深々と頭を下げていた。

統夜も闘技場を出ようとしたその時だつた。

『『アカ!!』』

「……!?!」

統夜の目の前にいたのは、ホラーに喰われたシロ、アオ、ヤマブキだつた。

目の前にいるのは幻だ。

統夜はそれがわかつていても、かつての仲間に出会えたことが嬉しかった。

『おい、アカ！お前、教官に勝ったんだって？』

『すげえすげえ!!』

『お前……本当に強い魔戒騎士になったんだな』

シロ、アオ、ヤマブキの3人は統夜の成長に喜びの声をあげていた。

『お前は、俺たちの分まで強くなったんだな!』

『これからも俺たちの分まで頑張ってくれよ！任せたからな!』

『任せたぞ!』

シロ、アオ、ヤマブキの3人は、そう言うどワタルからもらったピックのようなものを統夜に見せた。

そして統夜もピックのようなものを3人に見せていた。

友情の証を見て満面の笑みを浮かべた3人は、そのまま消滅して、姿を消した。

「……アオ……シロ……ヤマブキ……」

統夜は形見となったピックのようなものを握りしめると、感傷に浸っていた。

(俺、約束する。お前たちの分までもつともつと強くなることを。そして、多くの人を守っていくことを……。だから、見守っていてくれよな)

統夜は3人に魔戒騎士としての誓いを宣言すると、闘技場を後にした。

こうして、サブック3回戦は第1試合から白熱した試合となり、統夜の勝利で幕を閉

じた。

だが、白熱の3回戦はまだ始まったばかりである。

……続く。

——次回予告——

『今度はあの2人がぶつかるとか。勝った方が統夜と戦うんだよな。次回、「熱戦」。果たして、勝つのはどちらになるのか?』

第75話 「熱戦」

サバックも4日目に入っており、3回戦は第1試合から白熱した試合となった。

第1試合は統夜とワタルの対決であり、歴戦の勇士であるワタルとの戦いに統夜は大いに苦戦していた。

しかし、誰が相手でも諦めない姿勢と、勝ちたいという気持ちでワタルより上回っていたためか、統夜は誰もが予想出来なかった奮闘ぶりを見せていた。

その甲斐あってか、統夜は強敵であるワタルに勝つことが出来た。

その後も3回戦の試合は進んでいき、ここまで勝ち進んできた魔戒騎士たちが激戦を繰り広げていくことになる。

「……あつ、統夜さん！お疲れ様です！」

統夜は客席に移動すると、試合の見学をしていた奏夜が、統夜に労いの言葉をかけていた。

「おう、奏夜。ありがとう」

「統夜さん、凄いです！元老院付きの魔戒騎士を2人も倒すなんて！」

「アハハ……。運が良かったただだよ……」

統夜はここまで勝ち進んでこられたのは、実力以上に運が良かったからと思っ
た。

「……統夜さん、次は戒人さんと大輝さんの試合ですよ」

「!?あの2人が?」

次の試合の情報を聞いた統夜は驚きを隠せなかった。

「しかも、この試合の勝者が準々決勝で統夜さんと戦うことになります」

『なるほどな。どちらが勝っても激戦になるのは必至のようだな』

「そうだな。それに、戒人と大輝さん……。どっちが勝ってもおかしくはないが、戒人な
らきつと……」

大輝は称号を持たない騎士ではあるが、その実力はかなりのものである。

現時点では戒人と大輝の実力は互角であると統夜は推測していたが、統夜は戒人が勝
つと予想していた。

「……どつちにしても、凄い試合になりそうですね……」

「ああ……」

統夜と奏夜の2人はこれから行なわれる戒人と大輝の試合をジツと見守ることにし
た。

「……続いて、第2試合を行う！紅の番犬所付き、黒崎戒人！」

審判役に名前を呼ばれた戒人は、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「対するは、翡翠の番犬所付き、桐島大輝！」

続いて大輝も名前を呼ばれたため、大輝は戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「……桐島大輝……。あいつって確か称号を持ってないんだよね？」

「ああ。それなのにあの実力……。この大会でもトップクラスの實力じゃないのか？」

「あの黒崎戒人ってやつもかなりの手練れみたいだしな」

「なあ、この試合、どっちが勝つと思う？」

「わからん！だが、凄い試合にはなりそうぞ！」

試合を見学していた魔戒騎士たちは、大輝と戒人の實力をかなり評価しており、どちらが勝つか予想が出来なかった。

「……両者、武器を構えよ！」

審判役の一声で、戒人と大輝は剣を抜くと、それを構えた。

「……まさかこんなに早くお前と戦うことになるとはな」

「大輝さん！俺はあなたに勝ってみせます！勝って準々決勝で統夜と戦うんです！」

「……この試合に勝った方が統夜と戦うんだつたな。だが、俺だつてそう簡単にお前に負けてやる訳にはいかない！」

大輝は鋭い目付きで戒人を睨みつけていた。

「……っ！」

戒人は、大輝の放つオーラにたじろぎそうになるが、負けじと大輝を睨みつけていた。そして……。

「……それでは、試合開始!!」

審判役の一声で試合は開始された。

試合開始早々に動きを見せたのは戒人だった。

「……はあっ!!」

戒人は素早い動きで一気到大輝に接近すると、そのまま剣を一閃した。

「ふっ、さすがの速さだな。だが！」

大輝は戒人の動きを予想していたのか、戒人の攻撃を難なくかわしていた。

「……なっ!?!」

「戒人、今の動きは悪くなかったが、それで俺に勝てると思うな！」

大輝は反撃と言わんばかりに蹴りを放つと、戒人はそのまま吹き飛ばされてしまった。

「…………ぐっ!!」

戒人はすぐさま体勢を立て直すのだが、先制攻撃は空振りに終わってしまった。

「…………次はこちらから行くぞ!!」

戒人が体勢を立て直すのと同時に大輝は戒人めがけて駆け出した。

「はあっ!!」

大輝は剣を一閃するが、戒人はそれを何とか剣で受け止めていた。

「…………っ!!」

大輝の剣の一撃は予想以上に重く、戒人の表情は歪んでいた。

(…………さすがは大輝さんだ……………！剣撃に重みがある……………！だが、俺だって負ける訳には
いかない!!)

戒人は気合だけで大輝を弾き飛ばすと、大輝はそのまま後ろろずさってしまった。

「…………はあっ!」

すかさず戒人は剣を一閃し、大輝はその一撃を剣で防いだ。

その後、2人は激しい剣の打ち合いを行っていた。

(……………さすがだな、戒人。初めて会った時よりも強くなってるな。剣を振るえば振る
うほど剣撃が重くなってる……………！)

大輝は戒人と剣を交えることで、その成長ぶりを実感していた。

(……あいつがここまで強くなれたのは、統夜の存在が大きいのかもな)

大輝は、戒人が魔戒騎士として大きく成長出来たのは、ライバルである統夜の存在が大きいことを実感していた。

(……だが、あいつがどれだけ成長しようとして、俺は簡単に負ける訳にはいかない！一応先輩騎士としての意地があるからな！)

大輝は、戒人が相手だろうと、先輩騎士としての意地を見せようとしていた。

(……本当に大輝さんは強いな。この人と共に戦っていたからこそ、統夜はあれだけ強くなれたんだろうな)

戒人もまた、剣を交えている大輝の強さを実感しており、大輝と一緒にいたことが統夜を強くしているのではないかと予想していた。

(……だからこそ、俺は大輝さんに勝たなきゃいけない。統夜のライバルとして、このサバツクの試合で統夜に勝つために！)

戒人は、統夜と戦って勝つことをこのサバツクの目標としていた。

統夜にとっても大事な先輩騎士である大輝に勝たなければその目標は叶わない。

だからこそ、戒人は大輝に絶対勝ってやると心に誓っていた。

「……2人とも、凄い気迫だな……」

2人の試合をジッと見つめていた統夜はボソツと呟いた。

「……………？ 統夜さん？」

「この試合、どっちが勝ってもおかしくないと思つてな」

「そうですね……………。大輝さんも戒人さんも凄いです……………」

「統夜だけではなく、奏夜も2人の壮絶は試合に驚きながら試合を見守っていた。

他の魔戒騎士たちも、戒人と大輝の放つオーラに圧倒されていた。

「……………はあっ!!」

「何のお!!」

試合を見学した魔戒騎士たちが戒人と大輝のオーラに圧倒されるなか、2人の壮絶な剣の打ち合いは続いていた。

戒人は何度目かの剣の一閃を行い、大輝はそれを剣で防いでいた。

「……………っ!!」

戒人の凄まじい剣撃に大輝の表情は歪むが、気合を込めて剣を振るい、戒人を弾き飛ばした。

「……………っ!」

戒人は大輝の一撃で後ろささり、体勢を立て直すのが、大輝は一気に決着をつけるため、戒人に接近した。

「これで終わりだ!!」

大輝は戒人を殺す勢いで剣を突いた。

戒人であればかわすことは出来ると踏んでの攻撃だったのだが、この攻撃をかすめることができれば、その時点で大輝の勝ちが確定する。

「させるかよお!!」

戒人は剣を振るって突きを放った大輝の剣の軌道を狂わせると、アクロバティックな動きで大輝の突きによる攻撃を無傷で回避した。

「……!?何だと!?!」

渾身の一撃がかわされたことに大輝は驚いていたが、それは大輝だけではなかった。

「!?!」

「嘘だろ!?!」

「あれで無傷とか、凄いやないか!」

この試合を見学していた魔戒騎士たちも、戒人の動きに驚きながらも感嘆していた。渾身の突きをかわされたことにより、大輝に大きな隙が出来てしまった。

「これで……決める!!」

戒人はそんな大輝の隙を見逃さずに剣を一閃した。

大輝はそんな戒人の攻撃をかわすことが出来ず、戒人の剣は、大輝の腕に切り傷をつけたのだった。

「……勝負あり！勝者、黒崎戒人！」

審判役が試合終了を宣言し、戒人の勝ちを告げると、試合を見学していた魔戒騎士たちは歓声をあげていた。

「……戒人さんが勝ちましたよ！統夜さん！」

「ああ。やっぱり戒人は強いな……！準々決勝ではあいつと戦うことになるんだな」

戒人が大輝を破ったことにより、統夜の準々決勝の対戦相手が戒人で確定した。

統夜は、次の試合で戦うライバルの顔をジッと見つめていた。

「……おお！黒崎戒人が勝ったぞ！」

「凄いな！今年は若い魔戒騎士がかなり活躍してるじゃないか！」

「くっそお！俺も負けてられないぜ！」

統夜や戒人の快進撃は、魔戒騎士たちに大きな刺激を与えていた。

そのため、若い魔戒騎士に負けてられないという気持ちを持つようになり、それが実力の向上につながっていく。

これこそが、サブックを主催した朱雀の狙いだった。

今回のサブックは魔戒騎士狩りのせいで魔戒騎士の数が大幅に減ってしまった。

そのため、朱雀は魔戒騎士個々の能力を向上させたいと考えていた。

統夜や戒人といった若い魔戒騎士の活躍は、魔戒騎士たちの刺激となり、それこそが

朱雀の望んでいた魔戒騎士たちの能力の向上に繋がると朱雀は信じていた。

最後まで戒人と大輝の試合を見届けた朱雀は、笑みを浮かべていた。

「……やるな、戒人。俺の負けだ」

大輝はフツと笑みを浮かべながらも自分の負けを認めていた。

「ありがとうございます、大輝さん。最高の試合だったと思います」

「そうだな。俺もお前と戦えて楽しかったよ」

試合を終えた戒人と大輝は、固い握手をかわしていた。

2人の固い握手をかわす様子を見ていた魔戒騎士たちは、騎士として礼節を重んじた

2人の行動に拍手を送っていた。

「戒人。統夜はかなり手強い相手だぞ。心してかかれよ」

「大輝さん……ありがとうございます！」

大輝はフツと笑みを浮かべて握手をした手を離すと、そのまま闘技場を後にした。

戒人はそれを見届けてから、闘技場を後にした。

こうして、戒人と大輝の試合は、戒人の勝利で幕を閉じた。

※※※

サブツク3回戦も第2試合まで終了したが、それ以降も熱戦は続いていた。

3回戦と準々決勝を勝ち進めれば統夜か戒人と戦うことになる翼も、難なく準々決勝へと駒を進めたのであった。

そして、前回のサブツクで優勝した零も、危なげなく3回戦を勝ち進み、3回戦全ての試合が終了した。

魔戒騎士たちは夕食を済ませると、そのまま鍛錬に励む者や指令のためホラー討伐に向かう者。さらにはのんびり過ごす者などそれぞれの時間を過ごしていた。

そんな中、統夜はこの日も夏休みの宿題をこなしていた。

(……………明日の相手は戒人か……………。このサブツクで本当に戦えるとは思わなかったな……………。しかも俺か戒人。勝った方がサブツクのベスト4。こんなに戦い甲斐のあるタイミングで戒人と戦かえるなんて……………)

統夜は準々決勝でまさか戒人と戦えるとは思っておらず、驚きを隠せなかった。

しかも、勝った方がベスト4のため、自然と気合も入っていた。

(……………だけど、俺も戒人も……………まで勝ち進めるとは思わなかったな……………。2人とも3回

戦が限界かと思つてたからな……)

そして統夜は、ここまで勝ち進めたことに驚いていた。

3回戦でワタルを破ったことにも驚きだったからである。

(だけど、ここまで来たら行けるところまで行きたい。唯たちに最高の結果を報告するために！)

統夜は、ここまで勝ち進んだのならば、精一杯の結果を残そうと決めていた。

そんなことを考えながら統夜は夏休みの宿題に向かつていた。

初日に苦手な理数系の宿題を終わらせたのが良かったのか、その後は時間の許す限りサクサクと宿題を進めていき、明日には夏休みの宿題は全部終わりそうだった。

キリの良いところで宿題を中断した統夜は、明日の試合に備えて休むことにした。

その前に携帯電話のメールチェックをしていたのだが……。

「……おつ、唯たちからメールが来てる」

メールの受信履歴を見ると、5件もメールが来ており、それは唯たちからだった。

統夜は唯たちから来たメールをチェックし始めた。

最初に見たのは唯からのメールだった。

「やーくん、元気??怪我とかしてないよねえ?やーくんに会えないのは寂しいけど、やーくんが試合で良い結果を残せるように祈ってるよ!頑張つてね!」

「アハハ……唯のやつ……」

統夜は唯からのストレートなメッセージがとても嬉しかった。

「今度は律か……」

次にチェックしたのは律からのメールだった。

【統夜、元気にしてるか？あたらしに会えなくて寂しくしてるんじゃないのか？まあ、サバックだっけ？その試合の調子はどうなんだ？とりあえず、頑張れよな！】

「……フツ、寂しいのはどっちだよ。まあ、寂しいのは事実だが……」

統夜は唯たちに会えなくて寂しいという気持ちを素直に出していた。

「……次は滯だな……」

次にチェックしたのは滯からのメールだった。

【統夜、元気か？ここまで統夜に会えないとは思わなかったから私たちは寂しいよ。だけど、統夜だって同じ気持ちでも頑張ってるんだもん。だからこそ、そのサバックだったか？無理しない程度に頑張れよな】

「……ああ、もちろん俺もその気持ちだよ」

統夜は滯からのメールを素直に受け止めて、笑みを浮かべていた。

「……次はムギだな」

続いてチェックしたのは紬からのメールだった。

「統夜君、元気かしら？そして、サバックとかいう大会は順調かしら？私は凄く心配です。無理だけはしないでね。統夜君が帰ってきたらまたティータイムでもしましょうね」

「……俺もムギの紅茶が恋しいよ」

サバックの会場に行く前に紬から紅茶とケーキの差し入れをもらったが、それは初日でなくなってしまった。

そのため、統夜は紬の用意したケーキや紅茶が恋しくなっていたのである。

「……最後は梓だな」

統夜は最後に梓からのメールを確認した。

「統夜先輩、元気ですか？サバックという大会は順調ですか？私は統夜先輩に会えなくて寂しいです。帰ってきたら大会の話を知りたいです。大会でベストを尽くすのは良いですけど、無茶だけはしないでくださいね！」

「……ああ、わかってるさ。サバックが終わったらその話はするつもりだからな」

メールを見た統夜は優しい表情をしていた。

こうして統夜は唯からのメールを全てチェックしたのだが、そのおかげでだいぶラックスすることが出来た。

それと同時に、明日の戒人との試合を前にして、己を奮い立たせていた。

明日行われる試合に向けて気合十分となった統夜は明日に備えて就寝し、ゆっくりと体を休めていた。

こうして、サブツクの4日目は幕を閉じたのであった。

……続く。

——次回予告——

『いよいよ戒人との対決の時が来たな。統夜、今回も激戦になりそうだぞ！次回、「好敵手」。ライバル対決が今、幕を開ける！』

第76話 「好敵手」

魔戒騎士にとって神聖な大会であるサブバックも、折り返しを過ぎ、5日目になった。

この日は準々決勝であるため、勝ち残った魔戒騎士も8人だけとなってしまった。

試合に敗れた魔戒騎士たちは帰ることは許されず、最後まで試合を見届ける義務がある。

魔戒騎士たちはそれが嫌とは思っておらず、実力のある騎士同士の試合を見ることは勉強になるために、熱く試合の応援をしていた。

そして、5日目である今日は準々決勝が行われるため、その応援もさらに熱くなることが予想された。

統夜と戒人の試合は、準々決勝の第1試合に行われる。

統夜と戒人はすでに闘技場の中におり、互いにこれから行われる試合が始まるのを待っていた。

「……………」

統夜はこれから行われる試合に備えて精神を集中させていた。

『おい、統夜。戒人との試合だが、大丈夫なのか?』

「もちろんだ。久しぶりに戒人と再会した時だつてサブバック形式で試合をしただろ？」

『まあ、そりやそうだがな。それに、今回の試合は公式な試合だからな』

「そうだよな。だけど、俺は大丈夫だ。俺はサブバックの試合で戒人と戦うのを楽しみにしてるんだと思うよ」

『……なるほどな。まあ、あまり気負わずにお前の全力をぶつけてこい』

「ああ、そうするよ」

「こうして統夜は試合が始まるまでイルバと話をしていた。

『……戒人、いよいよじゃな』

その頃、戒人も統夜との試合に備えて精神を集中させていたのだが、トルバが戒人に声をかけていた。

「ああ。俺はこの時を心待ちにしていたよ。このサブバックの場で統夜と戦うことを」

戒人は、統夜と戦うことを心待ちにしていた。

『ホッホッホ！まあ、そんなに気負うでない。ただ、お主の持てる全てを出し切れれば良いのではないか？』

「もちろん、そのつもりだ」

戒人はこう答えると、そこで会話が途切れてしまい、再び精神を集中させていた。

そして……。

「……それでは、準々決勝、第1試合を行う！」

審判役が、このように宣言すると、統夜と戒人は揃って審判役を見ていた。

「……紅の番犬所付き、月影統夜!!」

統夜は名前を呼ばれたので、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「対するは、同じく紅の番犬所付き、黒崎戒人！」

戒人も審判役に名前を呼ばれたので、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「……それでは、両者、武器を構えよ!!」

審判役の指示通りに統夜と戒人は、それぞれの剣を抜き、構えた。

「……戒人、いよいよだな」

「ああ。俺はお前に全力でぶつかると。そしてお前に勝つてみせる!!」

「ふっ……。俺だつて同じ気持ちだよ。俺もお前に全力でぶつかると。俺は、ここで負け

るわけにはいかない!絶対に勝つ！」

統夜と戒人は互いに勝とうと気合を入れており、互いのことを鋭い目付きで睨みつけていた。

互いに勝ちたい。その想いが伝わってくるほど、2人の放つオーラは壮大であった。

「……っ!? 凄いオーラだ……」

「おい、あれで俺たちより年下……なんだよな?」

「おいおい、これがあいつらの本当の実力……なのか？」

「……元老院付きの魔戒騎士に引けを取らないレベルだぞ」

試合を見学している魔戒騎士たちは、統夜と戒人の放つオーラに圧倒されていた。

「……統夜さんと戒人さん……。凄いオーラだ……」

「まったくだ……。特に戒人の殺気、俺と戦った時より鋭いじゃないか……。本当にあの2人は成長したな……」

奏夜は、2人の放つオーラに単純に圧倒されていた。

一方の大輝は、2人の放つオーラの鋭さに驚きながら、2人の成長を肌で感じていた。

「……なあ、翼。あの2人、どっちが勝つと思う？」

零と翼も統夜と戒人の試合を見ており、零は勝敗の予想を翼に振っていた。

「別に……。どっちが勝ってもおかしくはないだろ」

「やれやれ……。この試合の勝者が恐らくお前と戦うんだろう？もうちよつと真剣に見守ったらどうだ？」

「俺は真剣に見ているつもりだ」

零の言葉が気に入らなかつたのか、翼はしかめっ面になっていた。

（……確かに、この試合の勝者が準決勝で俺と戦う可能性がある。どちらとも戦ってみたいものだがな……）

翼は時々稽古をつけている統夜だけではなく、その統夜のライバルである戒人とも剣を交えてみたいと思っていた。

(……統夜。様々な修羅場を乗り越えて得た力を俺に見せてみる！)

翼は、どちらとも戦いたいと思っていたが、統夜がどれだけ成長したかを戒人との戦いで見届けるつもりだった。

闘技場内の魔戒騎士たちは、2人の試合が始まるのを固唾を飲んで待っていた。

「……………」

一方、審判役はすぐさま試合開始を宣言しようとしたのだが、2人のオーラに圧倒され、なかなか試合開始とすることが出来なかった。

しかし、すぐにでも試合を開始せねばと思い、己を奮起させ……。

「そ、それでは！試合、開始い!!」

どうにか審判役は試合開始を宣言することが出来た。

すると……。

試合開始が宣言されるなり、統夜と戒人は全力で駆け出し、お互いに向かっていた。そして、同時に剣を一閃し、互いの剣は激しくぶつかり合っていた。

それは1度だけでは終わらず、2度3度と2人は剣を打ち合っていた。

戒人は統夜の攻撃を剣で防ぎながら統夜を弾き飛ばし、反撃して、統夜がその反撃を

防ぐ。

そのプロセスが何度も続いた。

そして、統夜は1度戒人を弾き飛ばし、その隙に1度後方に下がって、体勢を立て直した。

戒人はすかさず統夜に向かっていくが、統夜はジャンプすると、その勢いのまま、戒人の顔面目掛けて突きを繰り出した。

「……………!!」

この一撃が掠ただけでも勝敗が決まってしまうため、戒人は1度動きを止め、統夜の突きの軌道を見極めて攻撃をかわした。

その瞬間、試合を見学していた魔戒騎士たちはざわつき始めていた。

「……………なっ!?!」

「嘘だろ!?!」

「あれを完全にかわすのかよ!?!」

戒人のあまりに超人的な動きに魔戒騎士たちはさらに驚愕もしていた。

戒人はそのまま剣を振り下ろし、統夜が剣を持ち上げられなくしようとしたのだが、統夜は1度剣を手から離すと、蹴りを放った。

その蹴りを受けた戒人は、大きく吹き飛ばされてしまった。

戒人が吹き飛ばされた隙に統夜は再び剣を手にして、体勢を立て直そうとしている戒人に接近した。

戒人が体勢を立て直すのと同時に統夜は剣を一閃した。

「!!」

戒人は後方にジャンプすることで、どうにか攻撃をかわすことが出来たが、統夜は攻撃の手を緩めなかった。

1度2度と力強く剣を振るうと、戒人はその攻撃をなんとか剣で防いでいた。

戒人は再び後方にジャンプして体勢を立て直そうとするのだが、統夜はそれを許さず、戒人目掛けて再び接近し、力強く剣を振り下ろした。

戒人は大きくジャンプしたことで辛うじて統夜の剣をかわすことが出来たのだが、戒人は統夜の激しい剣撃に驚きを隠せなかった。

(……くっ！思った以上に攻撃が激しいな……！これがあいつの本気なのか?)

戒人が飛んだ勢いで体勢を立て直す様子を、統夜はギロリと睨みつけながら見ており、戒人は着地と同時に体勢を立て直した。

(だが！俺だつて!!)

戒人は剣の柄を力強く握り締めると、反撃の体勢に入った。

「うおおおおおおお!!」

戒人は統夜に接近し、大きくジャンプをすると、その勢いのまま統夜に近付き、剣を大きく振り下ろした。

その一撃は統夜に弾き飛ばされ、戒人は再び後方にジャンプするのだが、戒人はさすがに統夜に接近して、剣を振るった。

戒人の剣撃も重くなっており、統夜は防戦一方になっていた。

（くっ……！……さすがは戒人だな……！俺のあれだけの攻撃を凌いでここまで反撃してくるとは……）

統夜は戒人の重い剣撃を防ぎながら、どのように反撃をするか考えていた。

何度目かの攻撃で、統夜は後方に弾き飛ばされるのだが、戒人はさすがに統夜に接近し、剣を振るい、統夜が剣でそれを受け止めていた。

そして、2人の激しい剣の打ち合いはさらに激しくなっていた。

「すげえ……」

「なあ、これって、準々決勝……だよな？」

「ああ。あれは決勝戦だって言われても誰も疑わないレベルだぞ……」

試合を見学している魔戒騎士たちは、徐々に激しくなる統夜と戒人の激しい剣の打ち合いに圧倒されたのか、呆然としていた。

何度目か激しく剣を打ち合うと、統夜はジャンプして、戒人の顔に連続で蹴りを叩き

込んだ。

その衝撃で戒人は吹き飛ばされ、統夜は後方に下がって体勢を立て直した。

戒人はすかさず統夜に接近し、剣を振るうのだが、統夜はその攻撃を上手くいなして、戒人を転ばせることに成功した。

そのせいで、戒人は仰向けに倒れてしまった。

「……でえい!!」

統夜は戒人の顔面目掛けて剣を突き刺そうとするのだが、戒人はゴロゴロと横回転して、その突きを回避した。

戒人が起き上がるのと、統夜が剣を引き抜くのは同時だったのだが、統夜は再び戒人の顔面目掛けて剣を一閃した。

「……!!」

戒人はどうにか攻撃をかわすと、体当たりをしかけて統夜を吹き飛ばした。

そこで体勢を立て直した戒人は、畳み掛けるように統夜目掛けて剣を一閃した。統夜はどうにか戒人の剣を防いでいた。

そして、戒人も、統夜の顔面目掛けて剣を振るうのだが、統夜もどうにか戒人の攻撃をかわしていた。

そして、統夜は反撃と言わんばかりに剣を振るい、戒人がそれを受け止めた。

すると、鏝迫り合いの状態となり、ギシギシギシと金属の軋む音が鳴り響いていた。

(……ふっ、さすがだな、統夜。やっぱり強い……!)

(戒人……。本当に強いな。エイジさんやワタルさん以上に戦い甲斐のあるぜ……)

統夜と戒人は、互いに互いの実力を認めていた。

(やっぱり統夜は俺の……)

(ああ、はつきりわかった。やっぱり戒人は俺の……)

(最高のライバルだ!!)

統夜と戒人は、この戦いを通して、互いのことをライバルであるということを再認識していた。

「凄い……」

奏夜も、2人の激しい戦いに圧倒されていた。

「ああ、そうだな……。それにあの2人、互いに殺しにかかっているな……」

「え? 殺しに……ですか?」

「そうでなきやあそこまで激しい戦いは出来ん」

2人は顔面目掛けての攻撃を何度も繰り返しており、一歩間違えればどちらかが命を落としてもおかしくないくらいに激しい戦いだった。

「……そんな……2人が殺し合い……ですか？」

「まあ、2人は気合が入り過ぎてああなっただけだからあまり気にするな」

大輝は、何故統夜と戒人がここまで激しい戦いをしているのかを察していたため、このように奏夜をなだめていた。

そして、2人は鏑迫り合いを続けていたのだが、その鏑迫り合いを解くと、2人は同時に後方に下がって1度体勢を立て直した。

そして、2人はお互い目掛けて接近して……。

「うおおおおおおお!!」

「はああああああ!!」

同時に剣を一閃したのだが、その力は拮抗しており、互いに後方に吹き飛ばされてしまった。

「うっ……!!」

「くっ……!!」

互いに後方に吹き飛ばされた2人は、そのまま次の攻撃に備えて体勢を立て直した。

「……戒人!! 次の一撃で決着をつけようぜ! 俺は次の一撃に俺の全力を込める!!」

「ああ! 望むところだ!!」

統夜の出した提案を戒人が了承すると、2人は同時に精神を集中させていた。

2人が精神を集中させている間は沈黙が続いており、試合を見学していた魔戒騎士たちも思わず黙ってしまいう程だった。

そして、静寂がサバツクの舞台である闘技場を包み込んでいた。

精神集中を終えた2人は、同時に互いのことをギロリと睨みつけた。

「……行くぞ、戒人!!」

「来い! 統夜!」

そして、統夜と戒人は最後の一撃を繰り出すために同時に駆け出した。

統夜は上空へ大きくジャンプをすると、そこで剣を構え、落下の勢いを利用して剣を振るった。

一方戒人は、落下してくる統夜を見て大きくジャンプすると、上昇しながら統夜を迎え撃つことにした。

「うおおおおお!!」

「はあああああ!!」

統夜と戒人は、まるで獣のような咆哮をあげながら剣を互いに一閃した。

2つの剣は激しくぶつかり合い、激しくほとばしる火花がその激しさを物語っていた。

「…………負けてえ…………!!」

「たまるかああああああああああああ!!」

2人の意地と意地が剣にこもり、ぶつかり合っていた。

そして…………。

「うわああああああああ!!」

統夜が再び獣のような咆哮をあげると、力強く剣を振り下ろし、戒人を地面に叩きつけた。

その時の衝撃はかなりのものだったのか、戒人が地面に叩きつけられた瞬間に激しい砂埃が舞っていた。

砂埃が舞う中、統夜はゆっくりと着地した。

そして砂埃が消え去り、姿を見てたのは…………。

「…………うつ、くつ…………!!」

統夜の渾身の一撃を受けて、ボロボロになった戒人だった。

その時の衝撃で手傷を負ってしまい、微量ではあるが、出血していた。

「…………しょ、勝負あり!勝者、月影統夜!!」

審判役が試合終了を宣言し、統夜の勝ちを告げると、試合を見学していた魔戒騎士たちは大きな歓声を上げていた。

「おお！勝ったのは月影統夜か！」

「この試合、どっちが勝ってもおかしくなかったぜ！」

「ああ！すげえ試合だったぞ!!」

試合を見学していた魔戒騎士たちは、激しい戦いを繰り広げた統夜と戒人に賞賛の声を送っていた。

「おお！統夜さんの勝ちだ!!」

「この勝負、どっちが勝つかわからなかったが、統夜が勝ったか……」

「ええ！統夜さんはもちろん凄いですけど、あれだけの戦いをした戒人さんも凄いです！」

「ふっ、そうだな」

奏夜と大輝も、どっちが勝ってもおかしくない試合で統夜が勝ったことに驚きながらも、激戦を見せた2人に賞賛の声を送っていた。

「……さすがだな、統夜。俺の負けだ」

「いや、最高の試合をありがとうな、戒人。今回は俺の方が勝ちたいって気持ちが強かったのが勝因だよ」

統夜と戒人の力は互角であり、どっちが勝ってもおかしくないことは、2人も理解していた。

しかし、今回は統夜の方が勝ちたいという気持ち強く持っており、その紙一重な差で統夜は勝つことが出来たのであった。

「……そうなのかもしれないな。俺は俺のために試合に臨んでいたが、お前はお前だけではなくあいつらのためにも剣を振るっていたんだろ？」

「なっ!? お、俺は！」

「ハハッ、照れるな照れるな！ 俺にはお見通しだぜ」

統夜のことをライバルだと思っている戒人は、統夜が軽音部のみんなに最高の結果を見せたいと考えていた統夜の考えを見透かしていた。

「……ま、そこがお前の本当の強さかもな……」

ライバルである統夜の強さの秘訣を理解した戒人はフツと笑みを浮かべていた。

「とりあえず、次は準決勝だ。相手は俺なんかより強いはずだ。気合入れろよな」

「ああ、わかってるよ」

「それじゃあ、頑張れよ！」

「……ありがとな、戒人」

激戦を繰り広げた2人は、熱い握手をかわしていた。

その様子を見守っていた魔戒騎士たちは、大きな拍手を送っていた。

握手をかわした後、戒人は笑みを浮かべながら闘技場を後にした。

この戦いで自分の持てる力を出し尽くした戒人は、試合に満足していたのか、終始笑顔だった。

戒人が闘技場を去るのを見守っていた統夜も、試合の満足感からか、笑みを浮かべていた。

戒人が完全に出て行ったのを確認してから、統夜は闘技場を後にした。

こうして、サブツクの準々決勝は初戦から激闘であり、その初戦は、統夜の勝利で幕を閉じた。

※※※

「……勝負あり！勝者、山刀翼！！」

統夜と戒人の試合が終わってすぐに第2試合が行われたのだが、その試合は翼の圧勝だった。

翼は1回戦から準々決勝まで、まったく苦戦する様子はなく、さらに使用できるイヤ

リングを用いた術も使うことなく勝利していた。

統夜と戒人は試合終了後は大輝や奏夜と共に試合を見学していたのだが、その圧倒的な実力と言葉を失っていた。

(……翼さん、マジで強いな……。さすがは零さんと互角の力を持っていて、鋼牙さんとも互角の力を持つてるだけのことはあるな……)

翼は、魔戒法師の里である閑岱の地を守る魔戒騎士なのだが、その実力はかなりのものであり、零や鋼牙とも互角の力を持っている。

統夜はそんな翼に何度も鍛えてもらったのだが、今まで模擬戦で勝ったことは一度もなかった。

(……そんな強敵相手に勝てるかはわからない。だけど、俺は俺の全力を翼さんにぶつけるだけだ！)

統夜は、自分より実力のある翼相手に少しだけ臆していたのだが、全力を見せるといふ思いからか、自分を奮い立たせていた。

こうして、準々決勝第2試合は、翼の勝利で幕を閉じた。

そして、その後も準々決勝の試合は続き、零も危なげなく準々決勝を勝ち抜いた。

そして、準決勝で零と戦うことになるのは、最近元老院付きの魔戒騎士になったばかりの青年で、戒人より少しだけ年上な若い魔戒騎士だった。

その名は、鷹山宗牙（たかやましゅうが）。とある称号を受け継いだ魔戒騎士である。こうして、準々決勝の試合はすべて終了し、準決勝の対戦カードもその時点で決定した。

統夜はサバツクの試合が終わり、夕食を取った後は、残った夏休みの宿題を片付け、その後は明日の試合に備えて体を休めることにした。

その前にメールをチェックすると、憂、純、和から応援のメールが届いており、統夜はそのメールを見てから眠りについた。

こうして、サバツクの5日目は終了した。

サバツクは後2日であり、残りの試合も僅かとなった。

しかし、この僅かな試合がどれも激戦になるということは、誰もが予想出来たのであった。

……続く。

次回予告

『準決勝まで勝ち進めたのは良いが、今度の相手は本当に勝てるのか？俺様も正直不安だぜ！次回、「白夜」。続夜、お前の全力をぶつけてやれ！』

第77話 「白夜」

激闘続くサバックも、終盤戦である6日目を迎えた。

魔戒騎士たちは、朝食を済ませた後に闘技場へ向かった。

準決勝に勝ち進んだ4人の魔戒騎士は、これから行われる準決勝に備えて、闘技場で待機していた。

朱雀は、自分の特等席で準決勝まで勝ち進んだ4人の魔戒騎士をジッと見つめていた。

この4人の魔戒騎士は、実力のある魔戒騎士で、ここまで勝ち進めたのも朱雀も納得する程の実力者ばかりであった。

東の管轄を任せられ、前回のサバックで優勝した涼邑零。

閑岱の地を守る魔戒騎士であり、前回のサバックでは零に敗れたものの、準優勝した山刀翼。

最近元老院付きの魔戒騎士となり、それに相応しい力を見せた鷹山宗牙（たかやましゆうが）。

紅の番犬所に所属し、高校3年生ながらも大きな事件を解決させ、その実力をいかん

なく發揮した月影統夜。

初日からサバツクの試合を見ていた朱雀は、この4人の実力を認めており、ここまで勝ち進んだ4人の魔戒騎士に心の中で賞賛を送っていた。

今回サバツクは、初日から熾烈な戦いが続き、ハイレベルな戦いが続いた。

これは、朱雀にとつては喜ぶべき誤算であった。

魔戒騎士狩りがあったせいで、魔戒騎士たちの数が減ってしまっていた。

そのため、今回のサバツクはいつも以上に質の下がった大会になるだろうと朱雀は予想していた。

しかし、サバツクに参加した魔戒騎士たちは、魔戒騎士狩りがあったことを感じさせないほどの激闘を繰り広げていた。

そのため、今回のサバツクは今まで行われたサバツクの中でも一番と言つてもいいくらい質の高い大会となっていた。

「…………さて、もうすぐで準決勝が始まるか……。あの4人の魔戒騎士はどのような激闘を見せてくれるのか……。」

これから行われる試合に期待しているのか、朱雀は笑みを浮かべていた。

そして……。

「…………これより、準決勝を行う！」

審判役の一声で、準決勝の開始が宣言された。

「第1試合！紅の番犬所付き、月影統夜！」

統夜は審判役に名前を呼ばれたので、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「対するは、閑岱付き、山刀翼！」

今度は翼の名前が呼ばれ、翼も、戦いの舞台である円陣に足を踏み入れた。

「……統夜、ここまでよく勝ち進んできたな」

「……翼さん」

「今のお前がどれだけの力を持っているのか、この戦いで見極める！」

翼は審判役に言われる前に槍を構えていた。

「……っ！」

統夜もそれに感化されて、剣を抜いたのであった。

「そつ、それでは、両者、武器を構えよ！」

審判役は慌ててこのように宣言すると、統夜は抜いた剣を構え、翼を睨みつけていた。

「統夜、俺に見せてみる！お前の力を！」

「ええ！翼さん、あなたに見せますよ！今の俺の力を!!」

統夜も、今の自分の全力。そして、自分がどれだけ成長したかを翼に見せつけるつもりだった。

「……これは凄い戦いになりそうだな」

「なあ、どっちが勝つと思う？」

「そりゃ、山刀翼だろ。前回のサブバック準優勝の実力者だし、月影統夜だつて強いけど、その山刀翼には勝てないと思う」

「そうだよなあ。俺は月影統夜に頑張つてほしいけどなあ」

試合を見学していた魔戒騎士たちは、統夜のことを評価しながらも、翼には敵わないだろうと思っていた。

「……まあ、やはり相手が相手だからこのような評価はわかるな」

あちこちから聞こえてくる魔戒騎士たちの話を聞いていた大輝は、その的を得た話に納得していた。

「そうかもな。あの人のオーラ、ただ者じゃない」

翼はただ棒立ちのように突っ立っただけと思いきや、その翼の放つオーラはかなりのものであり、統夜以上に様々な修羅場をくぐり抜けてきた歴戦の勇士だということが理解できた。

「ですが、統夜さんだつて負けてないですよ！俺は統夜さんに頑張ってもらいたいです！」

奏夜も、翼の放つオーラを肌で感じながらも、統夜のことを応援していた。

だが、それは戒人と大輝も同じ気持ちだった。
そして……。

「……それでは、試合、開始!!」

審判役が試合開始を告げるなり、統夜は翼に接近すると、剣を振るうが、それは翼に軽々とかわされてしまった。

「なっ……!!?」

統夜は先制攻撃をあっさりかわされると思っていなかったので、驚きを隠せなかった。

「そんな単調な攻撃で俺を捉えられると思うな!」

翼は反撃と言わんばかりに槍の柄の部分で統夜に叩きつけると、その一撃で統夜を吹き飛ばした。

「くっ……!!」

先制攻撃に失敗し、翼に吹き飛ばされてしまった統夜だが、すぐに体勢を立て直した。そこは統夜と翼の、魔戒騎士としての経験の差が出てしまっていた。

「……統夜!今度は俺から行くぞ!」

翼はこう宣言すると、統夜目掛けて突撃し、槍を一閃した。

統夜はその一撃をどうにか剣で防いでいた。

「……………っ!!」

翼は連続で槍の突きを放つのだが、統夜はなんとか翼の連続攻撃をかわすことが出来たのであった。

「ほお、この突きを凌ぐとはやるな!だが、これで終わりだと思うな!」

翼は休むことなく攻撃を繰り返しており、統夜は防戦一方だった。

(……………っ!全然反撃する隙がない!これが、翼さんの本気……………なのか?)

統夜は翼と何度も稽古として戦ったことはあるのだが、ここまで激しい攻撃を繰り返してきたのは初めてだった。

統夜は翼の猛攻を防ぎながら翼の本気を肌で感じとっていた。

「……………統夜、押されてるな……………」

大輝は、翼の猛攻を見ながらこう呟いていた。

「……………流石は翼さんだ。あの牙狼と互角と言われるだけのことはあるな」

戒人も、翼がどれくらい魔戒騎士であるかを理解しているため、翼の戦いぶりにただただ感心していた。

「まあ、統夜はその山刀翼相手に善戦してる方だと思いがな」

翼は1回戦から準々決勝まで、対戦相手を開始数分で破っていた。

しかし、統夜はそんな翼相手にどうにか持ちこたえていたのだが、それもどれだけ続

くのかわからなかった。

「……統夜さん、頑張ってください！」

奏夜は、翼相手に苦戦を強いられている統夜にエールを送っていた。

統夜は、翼の猛攻をどうにか耐えながら、反撃の機会をうかがっていた。

（……くっ、このままだと確実に負ける……！どうにか反撃しないと……）

統夜は反撃しようにも、翼の攻撃が激しいため、思うように反撃が出来なかった。

「……どうした、統夜!!お前の力はその程度なのか?この状況で反撃をしてみせろ!!」

翼は統夜に隙もないほどの猛攻を見せながらも、統夜からの反撃を待っていた。

（……！こうなったら、一か八かだ！次、翼さんが突きを出してきたら、反撃してみせる

！）

統夜は翼の猛攻を凌ぐ作戦を思いついたのだが、それを一か八かで実践してみることが
にした。

「反撃出来ないなら……これで終わりにする!!」

なかなか反撃してこない統夜に失望したのか、翼は突きを出して統夜にトドメを刺そ
うとしていた。

（……！来た！今だ！）

統夜は翼が突きを放った瞬間、統夜はしゃがんで翼の突きをかわすと、そのままクル

リと前転をしながら、翼と距離をとった。

「……………!?何だと!?!」

翼は、統夜の予想外な行動に驚きを隠せなかった。

統夜の作戦はどうか上手くいったので、そのまま翼と距離を取り、体勢を立て直すことが出来た。

「ほお、面白いかわし方をするじゃないか。俺相手にここまで持ちこたえるとは、成長してるようだな」

「ええ、俺はいつまでもあなたの知ってる俺じゃないです！俺の力は、こんなもんじゃないですよ!!」

「ふっ……………。だったら、こいつを凌げるか?」

翼は、耳につけているイヤリングに触れると、術を放つ体勢に入った。

「……………っ！まさか、あの体勢は?」

統夜は、翼がイヤリングに触れることで術を放つことを知っていたため、翼が術を放とうとしていることを瞬時に理解した。

「……………今回のサブックで術を使うことはないと思っていたが、統夜相手に使うことになるとはな！」

「俺は、翼さんの術を凌いで、あなたに勝って見せます!」

「ふっ……。やってみろ!!」

翼は不敵な笑みを浮かべると、術を放った。

その効果でどこからか岩が飛んでくると、それを統夜目掛けて放った。

「……はあっ!!」

統夜は翼の放った岩をギリギリまで引きつけると、剣を一閃し、次々と岩を斬り裂いた。

「……はああああああ!!」

統夜はすかさず翼に接近すると、剣を一閃するのだが、難なく翼に防がれてしまった。

「……隙だらけだぞ!統夜!!」

翼はまだ術を放っており、複数の岩が統夜の背後に迫っていた。

しかし……。

「……いえ、予想通りです!!」

「何?」

統夜は余裕の笑みを浮かべているのを翼が訝しげな表情で見ていると、統夜は攻撃を辞めて横っ飛びをした。

その結果、翼の術によって放たれた岩が、翼自身に向かっていった。

翼は慌てて術を解除すると、その岩は翼に当たることなく、地面に叩きつけられた。

「……今だ!!」

術を解除した時に出来た隙を、統夜は見逃さなかった。

「……やらせるか!!」

統夜は剣を一閃するのだが、翼は意地だけで攻撃を防ぐことが出来たのだが、槍の柄の一部が統夜の一閃によって切り裂かれてしまった。

しかし、翼は冷静だった。

統夜の一瞬の隙をついてイヤリングに触れると、切り裂かれた槍の柄の一部をコントロールした。

そして放たれた槍の柄の一部は、統夜の鳩尾に直撃した。

「があっ……!!」

統夜はまるで強大な力でボディープローを受けた感覚を味わうと、そのまま吹き飛ばされてしまった。

一般人ならこの一撃を受けた時点で即気絶するほどなのだが、統夜は朦朧であるが、どうにか意識を保っていた。

「……まっ……だだ!!」

統夜は立ち上がろうとするが、意識が霞んでしまい、思うように立ち上がることが出来なかった。

これを見ていた魔戒騎士たちは、この時点で翼の勝ちを確信していた。

「……統夜にしてはよくやったが、ここまでか……」

「そうですね。あの一撃で気絶しただけでもたいしたもんだと思いますよ」

「……統夜さん……」

大輝、戒人、奏夜の3人も、統夜の奮闘を評価していたが、翼の勝ちを確信していた。

「……月影統夜。ここで終わるか？それとも、この窮地を乗り越切るか？」

闘技場内にいる魔戒騎士たちが翼の勝ちを確信する中、朱雀だけは統夜が窮地を乗り越切る可能性を考えていた。

(……くそっ！体に力が入らねえ……！……ここまでか……！)

統夜は起き上がることが出来ず、諦めようとしていた。

「……統夜。お前はよくやったが、まだまだ俺の敵ではない。これで終わりにする！」

翼はゆっくりと倒れている統夜に近付くと、槍を構えた。

このまま槍を振るい、軽く切り傷をつけてやれば、自分の勝ちになる。

戦いの決着をつけるべく、翼は槍を振るった。

この瞬間、誰もがこの一撃で勝敗が決まると思っていた。

翼の槍が統夜に迫ろうとしたその時だった。

『やーくん!!』

『統夜!!』

『統夜君!!』

『統夜先輩!!』

統夜の脳裏に、自分を心配して声をあげる唯たちの姿が映っていた。

「……………」

その呼びかけで意識を完全に取り戻した統夜は、グルリと回転して、翼の攻撃をかわした。

「……………何だと!？」

翼はこの一撃で勝敗が決まると思っていたので、驚きを隠せなかった。

その際に、統夜は立ち上がり、剣を構えた。

「……………ふっ、まさか、誰もがお前の負けを確信した状況を切り抜けるとはな……………」

翼は、統夜が窮地を乗り切り、反撃に出ようとしている姿が嬉しかったのか、笑みを浮かべていた。

「だが、それでいい!統夜、もっと俺を楽しませてくれ!!」

この時、翼は勝ち負けのことなど考えてはおらず、統夜との本気の戦いを楽しみたいと思っていた。

「ええ!もちろんですよ、翼さん!!」

統夜も自分を鍛えてくれた翼との本気の戦いを楽しみたいと考えていた。

「……統夜!! 俺の全力、受け止めてみる!!」

翼はイヤリングに触れて術を放つと、そのまま統夜目掛けて突撃した。

「……っ!!」

統夜は翼の攻撃を防ぐのだが、すかさず翼の術によってコントロールされた槍の柄の一部や岩が統夜に向かっていった。

「……くっ!」

統夜は翼を弾き飛ばすと、自分に向かってきた槍の柄の一部や岩をかわした。

「……まだだ!!」

すかさず翼は槍を一閃し、統夜は剣でそれを防いだ。

「くっ……!」

翼の攻撃は一撃一撃がかなり重いものであり、それを防ぐ統夜の表情は歪んでいた。

そして、再び術によってコントロールされた槍の柄の一部や岩が統夜に迫ってきた。

(……このままじゃジリ貧だな……。まずはあれを何とかしないと……)

翼が術によって放っている槍の柄の一部や岩をどうにかしない限り、統夜の負けは決定的だった。

なので、それを何とかするために、統夜は行動を開始した。

「……今だ！」

翼が再び槍を一閃したのと同時に、統夜は翼目掛けて蹴りを放った。

「……ぐっ！」

その蹴りを受けて表情が歪む翼であったが、統夜は蹴りによつて翼を吹き飛ばすのではなく、翼を踏み台にして、大きくジャンプをした。

そして、槍の柄の一部や岩が統夜に迫ってくるのだが、統夜はそれを剣の一閃によつて斬り裂いたり、地面に叩きつけたりしていた。

(……こうなったら、一か八かだ。また術を使われる前に決着をつける！)

統夜は地面に着地すると、そのまま翼目掛けて突撃した。

「……一気に決着をつけるつもりか！良いだろう!!」

そんな統夜の目論見を察した翼は、それを迎え撃つために統夜目掛けて突撃した。

そして2人は同時にそれぞれの武器を振り下ろすのだが、そのスピードは翼の方が速かった。

「……予想通りだ！」

統夜は同時に武器を振るったら、翼の方が速いことを予想していた。

そのことを予想していた統夜は攻撃を中心すると、勢いよく前転すると、翼の一閃を回避した。

「……!?馬鹿な!!」

翼は、奇抜な動きで攻撃をかわす統夜に驚きを隠せずにいる。

「……これで終わりだあ!!」

統夜は起き上がるのと同時に剣を連続で振った。

その攻撃により、翼の槍はバラバラに切り裂かれ、さらには翼の手に切り傷をつけることにも成功した。

「……!?」

翼は、ここで統夜にトドメを刺されるとは思っていなかったのか、驚きを隠せずにいる。

「……はあ……はあ……はあ……」

統夜は最後の攻撃で体力を使い果たしたのか、息が上がり、その場に跪いていた。

そして……。

「……しよ、勝負あり!勝者、月影統夜!!」

闘技場内にいる誰もが統夜の勝ちを予想していたかったので、しばらくの間、ポカーンとしていた。

だが、それが終わると、大きな歓声をあげていた。

「ま、マジかよ!?月影統夜が勝ったぞ!!」

「俺、あそこで山刀翼が勝ちを決めると思ってたのに、凄じやねえか！」

「ああ！俺たちは今、とんでもない光景を見てるんじゃないのか？」

「2人とも！良い試合だったぜ！」

「月影統夜！決勝も頑張れよ!!」

魔戒騎士たちは、統夜の勝利に驚きを困惑を見せながらも、その勝利に賞賛の声をあげていた。

「……やった!!統夜さんの勝ちです!!」

「さすがだな、統夜。まさか、あの山刀翼さんに勝つなんて……」

「そうだな、正直勝てるとは思ってなかったから驚きだよ」

奏夜、戒人、大輝の3人もまた、統夜の勝ちに驚きながらも、その勝利に喜び、賞賛の声をあげていた。

「へえ、まさか翼を倒すとは、統夜も成長したな」

零もまた、統夜が翼に勝つとは思っていなかったのか、驚きながらも感心していた。

『……ゼロ、決勝は油断しない方が良さそうね』

「そうだな、あの翼に勝つたんだ。俺も本気でいかなきゃな」

零の試合はこれからののだが、決勝に進むことを予想しており、統夜との戦いのことを考えていた。

「……まさか、前回のサブツク準優勝者を敗るとは、月影統夜……。彼奴はあの黄金騎士並の力を持っているのかもしれない」

朱雀は、統夜の大金星を最後まで見届けると、統夜の実力は鋼牙に匹敵するのでは？と考えていた。

「……サブツクの決勝戦は大きく荒れるかもしれないな……」

朱雀は、明日行われる決勝戦を大いに期待していた。

「……統夜、まさかこの俺を倒すとはな……」

「ええ。正直、翼さんの術を受けた時は半ば諦めてましたよ」

「だが、お前はあの窮地を切り抜けたな？」

「はい。諦めた時に大切な人達の声が聞こえたんです。それで、俺は再び奮起することが出来たのです」

統夜があの窮地を切り抜けたのは、唯たちの声が聞こえたからであると翼に説明していた。

あの時、何も聞こえてこなかったら、あのまま翼の勝ちで幕を閉じていただろうとも思っていた。

「……そうか。お前にとって守るべき者がお前に力を与えたのだな……」

統夜が窮地を切り抜けた理由を知り、翼は笑みを浮かべていた。

「……統夜、お前は守りし者とは何なのか。よく理解しているみたいだな」
「ええ。自分でもそう思っています」

統夜がはつきりと答えたことに驚きながらも、翼は笑みを浮かべた。

「……今回は俺の負けだ。だが、次はそうはいかないからな」

翼は、自分の負けを認めるものの、このままでは終わらないことを統夜に告げていた。

「ええ。翼さん、また稽古をつけてくださいな」

今回は翼に勝てたが、統夜にとって翼は頼れる先輩であり、自分を育ててくれた師匠の1人であった。

なので、これからも翼に稽古をつけてもらいたいとは考えていた。

「もちろんだ。お前はまだまだの部分があるからな。これからもビシバシお前を鍛えてやるさ」

「アハハ……。お手柔らかにお願いします……」

再び稽古でボコボコにされそうと思つた統夜は苦笑いをしていた。

翼は統夜の肩にポンと手を置くと、そのまま闘技場を後にした。

『……統夜、よく勝てたな』

「ああ、今でも信じられないよ。本気の翼さんに勝てたなんて……」

イルバは統夜に労いの言葉をかけるが、統夜はこの勝利をまだ信じられなかった。

『まあ、とりあえずは少し体を休めたらどうだ？』

「そうだな、そうするよ」

統夜は闘技場を後にすると、そのまま医務室へ向かい、しばらくの間そこで体を休めることにした。

統夜が休んでいる間に準決勝のもうひと試合が行われていた。

前回優勝した零と、新進気鋭の若手騎士である鷹山宗牙の対決である。

宗牙の実力はかなりのものであるが、牙狼と対等の力を持っている零が1枚も2枚も上手であり、宗牙は一矢報いることも出来ないまま、零に敗れてしまった。

こうして、準決勝は終了し、明日行われる決勝戦は統夜と零の対決となった。

……続く。

—— 次回予告 ——

『明日はいよいよ決勝戦か。だが、その前にこのようなことを行うとはな。次回、「鎮魂」。安らかに眠れ。騎士の魂よ!』

第78話 「鎮魂」

サバツクも終盤の6日目に突入し、準決勝が行われた。

第1試合は、統夜と翼の対決だった。

牙狼と互角の力を持っていると言われている翼相手に、統夜は苦戦を強いられ、最初は防戦一方であった。

どうにか反撃の糸口を掴み、反撃をしようとした統夜だったが、本気になった翼に再び追い詰められてしまった。

統夜はその危機を脱し、翼の本気を受け止め、ギリギリのところまで翼に勝つことが出来た。

この統夜の大金星に試合を見学していた魔戒騎士たちは、驚きを隠せなかった。

統夜自身も翼に勝てたことに驚いていた。

そして、第2試合は、零が難なく勝ち進み、決勝戦の組み合わせは統夜と零になった。

統夜は試合が終わると医務室で体を休めていたのだが、しばらく体を休めていると、朱雀に呼び出されたため、統夜は朱雀の部屋へと向かった。

朱雀の部屋に到着した統夜は、コンコンと扉をノックした。

「入れ」

「失礼します」

統夜は扉を開けて、朱雀の部屋に入った。

「月影統夜、すまなかつたな。急に呼び立てて」

「いえ……」

「まずは、決勝進出おめでとうと言っておこう。お主の勝ちも予想していなかったからな」

「あつ、ありがとうございます」

朱雀からのお祝いの言葉に、統夜はペコリと一礼をしていた。

「それで、お主を呼び立てたのは、頼みたいことがあつてな」

「頼みたいこと……ですか？」

「お主は人界の学校に通い、人界の楽器が出来ると聞いておるが、それは本当か？」

「はい。私はギターという弦の楽器を奏でることが出来ます」

統夜はギターが弾けるということを朱雀に説明すると、朱雀はウンウンと頷いていた。

「今宵は鎮魂の儀式を行うことはお主も知っているだろう？そこで、騎士の魂を弔うために、そなたに曲を奏でて欲しいのだ」

「曲……ですか？」

朱雀からの頼み事が予想外のものだったので、統夜は驚きを隠せなかった。

「うむ。出来ぬというのであれば無理強いはせぬが、やってくれるな？」

「は……はい！私の音楽なんかで良ければ!!」

統夜は朱雀からの申し出を二つ返事で了承した。

「おお、それはありがたい！急な申し出で悪いが、よろしく頼むぞ！」

「わかりました」

統夜は朱雀に改めて一礼をすると、部屋を後にし、そのまま宿舎へと向かった。

宿舎に到着した統夜はそのまま自分が寝ている部屋に向かい、部屋の中で何の曲を演

奏すべきか考えていた。

「……騎士たちの鎮魂の曲……ねえ……」

統夜はどんな曲が良いのかをじっくり考えていた。

『おい、統夜。何でお前は朱雀の申し出を受けたんだ？断っても良かったものを』

「まあ、そりやそうなんだけどさ、朱雀様が直々に頼んでくれたのが嬉しかったし、断れなくてな」

統夜は元老院の議長としてGRES以上の権力を持っている朱雀の頼みを無下にすることは出来なかったのだ、朱雀の申し出を受けたのであった。

『それはわかったが、何の曲をやるんだ？放課後ティータイムの曲では鎮魂にならんぞ』
統夜が軽音部で組んでいるバンド、放課後ティータイムの曲はふわふわとした曲が多く、歌詞も甘々なものがほとんどのため、鎮魂には相応しくなかった。

「…………だから考えてるんだよ…………」

統夜は難しい顔をして考え事をしていたのだが…………。

「…………!?待てよ…………今作っているあの曲はどうだ」

『あの曲って、お前さんが新曲と言って作ってたあの曲のことか?』

統夜は、アスハの事件を解決させた後あたりから、次のライブで使えそうな曲を作ろうと、騎士の使命の合間に新曲作りに勤しんでいた。

その曲はほぼ完成しているものの、時間がないため、楽譜にする作業はまだ終わっていないかった。

しかし、曲の歌詞やイメージは頭に叩き込まれているため、急ごしらえでもいけると判断していた。

『確かに、あの曲なら、騎士の鎮魂にはおあつらえ向きな曲かもしれない』

イルバからも太鼓判を押されたことで、統夜は騎士の鎮魂の曲は、新曲でいくことを決めていた。

『ところで、統夜。曲名は決めていたのか?』

「ああ。曲名は、「哀愁の輪舞」だ」

統夜はイルバに新曲のタイトルを明かすと、部屋を後にし、夜に行われる鎮魂の儀式の手伝いに向かった。

※※※

準決勝の試合が全て終わった後、この大会に参加している魔戒騎士たちの手で、鎮魂の儀式の準備は行われていた。

主に若い騎士が率先して作業を行っていたのだが、魔戒騎士たちは協力して、準備を行っていた。

そして、戒人、大輝、奏夜の3人も鎮魂の儀式の準備を手伝っていた。

「……それにしても、ずいぶんと大々的にやるんですね」

「そうだな。俺もここまで大々的な鎮魂の儀式は初めてだぞ」

今回の鎮魂の儀式は、宿舎の前にある広場で行われるのだが、その儀式で使うものはかなりあるため、予想以上に大々的な儀式となることが予想された。

しかし、これは魔戒騎士にとつて大事な儀式であるため、魔戒騎士たちは嫌がることはなく、準備に勤しんでいた。

「……あれ？　そういえば統夜さんは？」

奏夜は作業をしながらキョロキョロと周りを見回すのだが、統夜の姿がないことに首を傾げていた。

「さあな。朱雀様に呼び出されたみたいだから他の仕事を与えられたんじゃないの？」

統夜が朱雀に呼び出されたということを戒人は知っており、別の仕事を与えられているのでは予想していた。

「そうなんですか……つてあれ？」

「?どうした、奏夜?……つて!」

奏夜と戒人は、統夜の姿を見つけたのだが……。

「……何で統夜はギターを持ってるんだ?」

統夜は何故かギターを片手に鎮魂の儀式の会場に来ており、ギター演奏の準備を行っ

ていた。

「統夜さん……ライブでもするのかな？」

「もしかして、朱雀様の依頼って、統夜のライブなのか？」

「いや、恐らくは鎮魂歌を歌うんだろ。統夜ならそういうのも歌えそうだしな」

大輝は、何故統夜が演奏の準備をしているのかを察していた。

「……統夜みたいに音楽の出来る魔戒騎士って少ないからな……」

「俺も、ダンスだったら得意なんですけどね……」

「ここで、奏夜が意外な特技を暴露していた。

「へえ、奏夜ってダンスが得意なのか」

奏夜の意外な特技に、戒人は驚いていた。

「ダンスが得意だったら、それを取り入れた戦い方なんかやってみたら面白いかもな」

「ふむふむ……。参考になります」

「いやいや、本気にするなよ。冗談で言ったんだから……」

大輝が冗談で言った言葉を奏夜は参考にしようとしていた。

しかし、この冗談で言った大輝の言葉が、後の奏夜の戦闘スタイルに大きな影響を与えることをまだ誰も知る由はなかった。

魔戒騎士たちのテキパキとした作業のおかげで、予想よりも早く鎮魂の儀式の準備は整った。

儀式が行われるのは夜であるため、それまで魔戒騎士たちは自由に過ごしていた。

そして夜になると、鎮魂の儀式開始の時間となった。

「……それでは、これより鎮魂の儀式を執り行う!!」

朱雀が儀式の会場に現れると、儀式の開始を宣言した。

「諸君らも知つての通り、アスハという魔戒法師が起こした魔戒騎士狩りにより、多くの有望な魔戒騎士が命を落とした!」

朱雀の語る真実に魔戒騎士たちは言葉を失っていた。

「だが、その暴挙はそこにいる月影統夜によって阻止された。だが、我々は多くの同胞を失った!」

統夜がアスハを討伐した事実が語られると、魔戒騎士たちの視線が統夜に集中していた。

(アハハ……。そう紹介されると何か恥ずかしいよな……)

統夜はジッと魔戒騎士たちに見られていることが恥ずかしかったのか、顔を赤らめて

いた。

「だからこそ、今宵はこの神聖なるサバックが行われているこの地で、魔戒騎士たちの魂を鎮めようと思っている」

朱雀は、鎮魂の儀式を行う趣旨を魔戒騎士たちに説明していた。

「……サバックを勝ち進んだ魔戒騎士、月影統夜と涼邑零よ。点火台の前へ移動するのだ！」

朱雀が統夜と零を指名すると、統夜と零はこれから鎮魂の炎を灯す点火台の前へ移動した。

「……月影統夜、涼邑零！ 鎧を召還せよ！」

「はい！」

統夜と零は魔法衣からそれぞれの魔戒剣を取り出すと、それを抜いた。

そして、2人は魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、2人はそれぞれ白銀の輝きを放つ鎧を身に纏った。

統夜は、奏狼の鎧を身に纏い、零は、絶狼の鎧を身に纏った。

「両者！ 剣に魔導火を灯すのだ！ それが、鎮魂の炎となる!!」

鎮魂の儀式をサバック決勝前夜に行うのは、決勝まで勝ち進めた2人の騎士に鎮魂の

炎を灯してもらおう役割を行ってもらうためであった。

さらに、勝ち進んだ2人の魔戒騎士を紹介し、その2人の魔導火によって、魔戒騎士たちの魂を鎮めることを目的にしている。

統夜と零は、それぞれの剣の切っ先に魔導火を纏わせ、烈火炎装の状態になった。

「……これが、鎮魂の炎だ!!」

「勇敢なる魔戒騎士の魂よ、安らかに眠りたまえ!!」

零と統夜が烈火炎装の状態でこう宣言すると、それぞれの剣を点火台に近付け、点火台に赤と青の魔導火による鎮魂の炎を灯した。

炎が灯されたことを確認すると、2人は鎧を解除し、それぞれの魔戒剣を鞘に納めた。

「……全員、黙祷!!」

統夜と零が鎧を解除したことを確認すると、全ての魔戒騎士たちに黙祷するように告げた。

この場にいる全ての魔戒騎士たちは、目を閉じて、1分間の黙祷を行っていた。

(……俺がもつと早くアスハの野望を止めていけば、ここまでの犠牲は出ずに済んだのだろうか……?)

統夜は、アスハの野望を阻止したこと自体は誇らしげなことと理解しているが、ここまで犠牲を出さずに済む方法はなかったのかと心の中で問答をしていた。

(……俺が弱いから……。テツさんは犠牲になったんだ……い)

奏夜は、自分の弱さを呪い、拳をギュツと握りしめると、唇を噛んでいた。

奏夜の言っているテツというのは、魔戒騎士狩りが行われている時にホラー討伐に共についてくれたベテランの先輩騎士のことである。

奏夜とテツは、ホラーと戦っている時にソウルメタルの性質を変容させる超音波を浴びて魔戒剣が持てなくなったのだが、その時にそのシステムを理解した。

そのため、テツは奏夜にその事実を番犬所に伝えるよう依頼した。

奏夜はそれを拒否したのだが、このままでは2人まとめてやられてしまう。魔戒騎士になったばかりの奏夜を救うためにテツは自ら犠牲になることを選んだのである。

その思いを汲み取った奏夜は番犬所に向かい、テツは奏夜の無事を祈りながらホラーに捕食されてしまった。

テツの犠牲があつたからこそ、魔戒騎士狩りがどのように行われたのかが早々に明らかになったのである。

そうだとすることは理解していたのだが、奏夜はその時何も出来なかつた弱い自分を許せずにいた。

他の魔戒騎士たちも、黙祷しながら、それぞれ思うことがあり、そのことに思いを馳せていた。

「……そこまで！」

そして、あつと言う間に1分が経つと、全ての魔戒騎士は、朱雀の一声で目を見開いた。

「……本来であれば鎮魂の儀式はこれで終わりなのだが、本日は1つ余興を用意している」

朱雀からの意外な言葉に、魔戒騎士たちはざわついていた。

「……月影統夜、準備を」

「は、はいー！」

朱雀に再び指名された統夜は、予め準備していた自分のギターが置いてある場所に移動した。

そして、小型のアンプのスイッチを入れると、演奏の準備を整えた。

「……魔戒騎士狩りによって命を落とした魔戒騎士たちの魂を鎮めるため、月影統夜には鎮魂歌を歌ってもらおうと考えている！」

朱雀が余興の詳細を説明すると、ざわつきは大きくなっていった。

「……へ？統夜さんが鎮魂歌!？」

「まさか、マジで歌うのかよ!？」

「……やっぱりそう来たか……」

奏夜と戒人は、本当に統夜が鎮魂歌を歌うことに驚いており、大輝は予想通りだったのか、ウンウンと頷いていた。

「諸君、静粛に!!……月影統夜!演奏の前に一言語ってもらおうか」

「はっ、はい!!」

挨拶するよう求められた統夜は、1度深呼吸をしてから語り始めた。

「……皆さん、月影統夜です。今回は朱雀様の提案でこのような場を設けていただきました。今から歌う曲が本当に鎮魂歌になるのかはわかりませんが、先魔戒騎士狩りで亡くなった先輩たちの魂を鎮めるため、心を込めて演奏します!」

統夜はこのように語ると、再び深呼吸をした。

そして、精神を集中させると、ギターを奏で始めた。

く使用曲↓哀愁の輪舞(統夜ソロ ver)く

統夜が演奏した曲は、統夜がアスハの野望を阻止してすぐあたりから作り始めていた曲だった。

曲自体は100%完成した曲ではないが、統夜は今回の魔戒騎士狩りには思うところがあったので、曲自体はすんなりと出来上がった。

魔戒騎士狩りで犠牲になった魔戒騎士たちに捧げるかのような歌詞になっており、曲調もゆつたりとしていた。

統夜は鎮魂の意味を込めて歌うのだが、その歌声は、軽音部で歌う声とは、明らかに違う歌声だった。

(……魔戒騎士狩りによって命を落とした先輩方。魔戒騎士狩りを行った魔戒法師アスハの野望は俺が阻止し、あなた方の敵も討つことが出来ました。ですので、安らかにお眠り下さい!!)

統夜は、歌いながら亡くなった魔戒騎士たちが安らかに眠れるように祈っていた。

魔戒騎士たちは、統夜の心を込めた演奏をじっくりと聴いていた。

魔戒騎士たちのほとんどは音楽の知識に乏しいのだが、統夜の奏でている曲が、鎮魂歌にふさわしいものであると感じていた。

そして、それは朱雀も同様であった。

(うむ。この曲であれば、騎士の魂を鎮めるにふさわしい曲であるな。学校とやらに行っている統夜に頼んで正解だったかもしれないな)

そして朱雀は、統夜に鎮魂歌を頼んだことを良かったとさえ思っていた。

ここに在る全ての魔戒騎士が統夜の演奏に聴き入っており、統夜は鎮魂の気持ちを入れて最後まで演奏した。

「……改めて、魔戒騎士狩りによって命を落とした先輩方、安らかに眠り下さい！」

統夜は鎮魂の言葉を送ると、その場で深々と一礼をしていた。

「……これにて鎮魂の儀式は終了とする。この場に宴の席を用意している。明日も宴を行うためささやかではあるが、皆、楽しんで欲しい。それこそが弔いになるのだから」
魔戒騎士たちは、宴という言葉聞き、歓声をあげていた。

「……それでは、解散!!」

こうして鎮魂の儀式は終了し、魔戒騎士たちはこの場でささやかに行われる宴を楽しむことにした。

統夜はギターを撤収させた後に宴の席に現れ、奏夜、大輝、戒人と共に宴を楽しんでいた。

このようにして、サブック決勝戦前夜は更けていった。

そして、明日はいよいよサブックの最終日であり、決勝戦が行われる。

統夜は前回の優勝者である零に勝つことは出来るのか？

……続く。

——次回予告——

『激しくぶつかり合う2人の銀狼。ここまで来たら小細工は通用しないぜ！剣と剣でぶつかるのみだぜ！次回、「牙戦」。うおお!!熱い!熱いぜ!!』

第79話 「牙戦」

初日から熱戦が続いたサバックであるが、最終日となった。

この日は、実力者たちに勝ってきた者同士がぶつかる決勝戦が行われる。

決勝に勝ち残ったのは、紅の番犬所付きであり、強大な力を持つホラー、グオルプや、魔戒騎士狩りを行っていたアスハを討伐した実力者で、若年ながらも頭角を現している月影統夜。

対するは、東の番犬所付きで、前回サバックの優勝者であり、統夜にとっても師の人である涼邑零。

零は、黄金騎士牙狼である冴島鋼牙と対等の力を持っていると言われており、牙狼に次いで最強の騎士と言われている。

魔戒騎士たちは零の勝ちを予想していたのだが、準決勝での統夜の大金星を見ていたため、勝敗を予想出来ずにいた。

もしかしたら統夜が零を破ってそのまま優勝してしまうのか？そんな期待して持たせるほどだった。

どちらが勝つにしても、白熱した決勝戦になるであろうことは誰もが予想出来た。

(……いよいよ来たな。決勝戦が……。まさか俺が翼さんを破って決勝戦に勝ち進むなんて、今でも信じられないよ……)

統夜は、翼を破つてこの場に立っていることを未だに実感出来ずにいた。

(……正直、俺なんか零さんに勝てるなんて思つてはいない……。だけど、零さんに見せつけてやるんだ！俺の力を!!)

実感出来ないからか、零相手に勝つ自信が持てずにいた統夜であつたが、勝ち負けにこだわらず、自分の力をぶつける決意をしていた。

「……これより、決勝戦を行う!!」

このように開始を宣言する審判役であつたが、心なしか言葉に気合が入っているように見えた。

「……紅の番犬所付き、月影統夜!!」

気合の入った声で呼ばれた統夜は、戦いの舞台であり、これまでも数々の激闘を繰り広げてきた円陣に足を踏み入れた。

そんな統夜の顔は気合が入りすぎているのか、少しだけ強張っていた。

「……対するは、東の番犬所付き、涼邑零!!」

零も審判役に名前を呼ばれたため円陣に足を踏み入れたのだが、いつもと変わらない飄々とした態度だった。

「……統夜、まさか決勝戦の相手がお前とはな」

「零さん……」

「だが、俺はお前には負けないぜ！一応先輩としての意地つてのがあからな！」

零は2本の剣を抜くと、鋭い目付きで統夜を睨みつけていた。

（うつ……これが、鋼牙さんと対等の力を持つ零さんのオーラ……。この殺気は本物だ……。今にでも逃げ出したいくらいだよ……）

零の放つ殺気は、牙狼に並ぶ者と言うにふさわしいものであり、その殺気に恐怖した統夜は決勝戦をほっぽり出して逃げ出したいとさえ思ってしまうほどだった。

（……ダメだダメだ!!ここで逃げたら、今まで戦ってきた人たちに申し訳が立たない!!だから、まっすぐ向かっていくんだ!!）

統夜は零の放つ殺気の恐怖を振り切ろうと剣を抜くと、零を睨み返した。

「……へえ……」

零は統夜の放つ殺気に興味していた。

統夜の放った殺気は、零に並ぶものであり、自分より若いのにここまでの殺気を放てることに零は関心していた。

しかし、零はそれで臆することはなく、相変わらず飄々としていた。

「……統夜！余計な問答はここまでだ！後はこいつで語るとしようぜ！」

「はいっ!!」

統夜と零は同士にそれぞれの剣を構えた。

「……」

武器を構えよ!という前に2人が武器を構えてしまったため、審判役は何も言うことが出来ず困惑していた。

統夜と零はそれぞれの剣を構えると、無言で互いを睨みつけていた。

闘技場一帯を静寂が支配しており、魔戒騎士たちは言葉を発することが出来ずに息を飲んでその様子を見守っていた。

「……そーそれではー試合、開始いい!!」

審判役がどうか試合開始を宣言したことにより、決勝戦が始まった。

「はあっ!!」

「でりやあ!!」

試合開始が宣言されるなり、統夜と零は互いに高くジャンプをすると、互いに剣を一閃して、剣と剣が激しくぶつかり合った。

2人はそのまま地面に向かって着地をするのだが、その間も2人は激しい格闘戦を繰り広げていた。

地面に着地すると同時に2人は瞬時に攻撃をやめ、後方に下がり、相手の出方を

窺っていた。

しかし、その時間はごく僅かであり、2人は同時に駆け出すと、互いに剣を振るった。統夜は2本の剣を相手にしなければならぬのだが、1本の剣でどうにか零の剣を受け止めていた。

「へえ、本当に成長したな、統夜。驚いたよ」

「ありがとうございます、零さん。だけど、俺の力はこんなもんじゃありませんよ!!」
「その意気だ!来いよ!!」

統夜と零は互いに激しく剣を打ち合っていた。

「……………うっ……………くっ……………」

零の放つ剣撃は一撃一撃が重かったので、統夜は表情を歪めていた。

(さすがは零さんだ……………。あれだけがむしやらに攻めてるのに、隙が全然ない。ちよつとでも気を抜けば、そこを付け込まれる)

2本の剣から放たれる零の攻撃はかなりのもので、統夜はその攻撃を受け止めるのが精一杯だった。

そんな中、どうにか零の隙を見つけようとするが、零には全然隙がなかった。

「おらおらあ!どうした、統夜!!もつともつと攻めてこいよ!!」

零は激しく攻撃を繰り返しながら統夜を煽るような言葉を吐いていた。

「……………」

統夜は零の言う通り思い切り攻めたかったのだが、零の猛攻を防ぐのに精一杯だった。

どうにか意地で何度か反撃を繰り出すものの、それは簡単に凌がれてしまった。

統夜は何度目かの零の一閃を剣でどうにか防いだのだが、その後零は蹴りを放つと、統夜を吹き飛ばした。

「ぐう………」

吹き飛ばされた統夜は、どうにか体勢を立て直し、反撃を繰り出すために剣を一閃した。

零は統夜の攻撃を軽く防ぐが、統夜はすかさず連続で攻撃を繰り出していた。

「……………つーへえ……………」

零は統夜の繰り出す激しい連続攻撃に関心しながら攻撃を受け止めていた。

統夜の繰り出す攻撃は激しいものであったのだが、零は余裕そうな表情をしていた。

(……………本当に統夜は強くなったな。まるで、昔の鋼牙と戦ってるみたいだぜ……………)

零は、統夜の戦い方にかつての鋼牙の姿を重ねていた。

(こりやちよつとでも気を抜けば、一気にやられそうだな……………。まあ、統夜に優勝を譲ってやってもいいが、俺はそう簡単に負ける訳にはいかないよなあ!!)

零は余裕そうな表情をしているものの、統夜の成長に驚き、焦りすら見せていた。

そんな表情を見せようとしなのは、統夜以上の経験からなるものであった。

(……さすがだな、零さん。こんなに攻めてるのに、いつものように飄々としてる……)

だけどっ!!)

統夜は零を追い詰めるために力強く剣を握りしめて剣を一閃するが、その一撃を見極めていた零がジャンプして、統夜の攻撃をかわした。

「なっ……!!」

零の予想外な行動に統夜は驚きを隠せなかった。

ジャンプして統夜の攻撃をかわした零は、降下する勢いのまま2本の剣を同時に振るった。

統夜はどうか剣で零の攻撃を防ぐのだが、零は統夜の懐に接近すると、2本の剣の柄を使って統夜にボディーブローを放った。

「があっ……!!」

零のボディーブローが統夜の鳩尾に直撃すると、統夜はその一撃で意識を失いかけた。

零の攻撃はここで終わらず、今度は統夜の鳩尾目掛けて蹴りを放ち、統夜を吹き飛ばした。

零の2度にわたる攻撃で、統夜は吹き飛ばされたのだが、起き上がることが出来なかった。

2度も鳩尾に強烈な攻撃を受けたら、一般人なら即気を失うレベルだった。

しかし、統夜の意識は朦朧としてはいたものの、意識を失うほどではなかったのである。

「へえ……。あれ受けて気絶しないのか。流石だな」

零は統夜が気を失うことなく、どうにか起き上がろうとしている様子を見て、驚いていた。

「……さあ、統夜…この状況をどうにか打破してみろよ!!そのためにあえてトドメを刺さなかったんだぜ」

零は統夜の鳩尾にボディーブローを放ったタイミングで剣を振るっていれば、その時点で勝ちが決まっていた。

しかし、ここから統夜がどう巻き返すかを見たかった零はあえてトドメを刺さず、ボディーブロー程度にとどめておいたのである。

「これで立てないなら……。終わりにするぜ」

零は鋭い目付きで統夜を睨みつけ、その声色も低くてドスのきいたものであった。

(……………うっ、目が霞んでやがる……。だけど……そう簡単に負けられるかよ!!)

統夜は氣を失つてもおかしくない状況だったが、氣力だけでどうにか立ち上がった。試合を見学していた魔戒騎士たちは、統夜が立ち上がることを予想していなかったの
で、驚きの声をあげていた。

「……立ったか。そうでなくちゃ面白くないからな。だけど、それで攻撃は出来るかな？」

統夜は辛うじて立っている状況だったので、足取りはかなりフラフラだった。

(……く、くそ！まだだ！せめて、零さんに一矢報いるまでは！)

統夜はフラフラな足取りで零に近付いていった。

零はここで攻撃を繰り出すことは出来るのだが、あえて攻撃は仕掛けず、統夜の出方を待っていた。

「……うっ、ぐう……」

統夜は弱々しくも剣を一閃するのだが、そんな攻撃で零を捉えられる訳もなく、片方の剣を振るって統夜の剣を弾き飛ばした。

その瞬間、闘技場内のざわつきが大きくなっていった。

この時点で誰もが零の勝ちを確信していた。

そんな中、零は再び蹴りを放って統夜を吹き飛ばした。

この零の攻撃に魔戒騎士たちは疑問の声をあげていた。

あそこで統夜に切り傷をつければ零の勝ちだったのにそれをしなかったからである。中にはただ統夜を痛ぶっているだけと勘違いをして、非難の声をあげる者もいた。

「……………うっ……………くっ……………」

「どうした、統夜。もう終わりか?」

「……………ま……………まだまだ……………」

統夜はどうか立ち上がろうとするが、立ち上がることは出来なかった。

「統夜、お前はよく頑張ったよ。だが、今のお前じゃ俺には勝てない」

零の放ったこの言葉には氷のような冷たさを帯びていた。

「お前が限界だっていうなら、引導を渡してやるよ」

零は統夜の反撃を期待していたのだが、これ以上の反撃は無理と判断し、勝負をつけることにした。

「……………くそっ!……………ここまでか……………!……………負けるにしても零さんに一矢報いたかったのに……………!……………」

統夜は立ち上がろうにも立ち上がれず、悔しさを滲ませていた。

「……………こんな一方的な負け方……………唯たちには見せられないのにな……………」

統夜の脳裏には、唯たちの姿が浮かんでいたのだが、それで統夜はハツとした。

「そっだよ。負けるにしたってみっともないところを見せるわけにはいかないんだよ

!!

ここで統夜の意識はだいぶハッキリとするようになり、先ほどまでは立ち上がる気力もなかったのだが、唯たちのことを考えたら不思議と力が湧いてきていた。

「……統夜、これで終わりだ!!」

零は統夜にとどめの一撃と言わんばかりに剣を振るうのだが、その瞬間に統夜はカッと目を見開いた。

そして統夜はゴロゴロと横回転すると、零のとどめの攻撃をかわしたのである。

『ええ?!』

今の攻撃で勝負は決したと思っていた魔戒騎士たちは、一斉に声をあげてしまった。

「……そうだ、統夜。それでこそだぜ!」

統夜がまだ戦えることを察した零は笑みを浮かべていた。

統夜は起き上がると、弾き飛ばされた剣を回収するために駆け出した。

「……させないぜ!!」

零は統夜が剣を回収するのを阻止するために、片方の剣を統夜目掛けて投げつけた。

「……!?!」

背後から零の飛ばした剣が迫ってくることを察した統夜は、ギリギリまで飛んでくる剣を動きを見極めてから回避し、剣を回収した。

「……統夜、よくあの状態から立ち直ったな」

「ええ。この決勝戦で一方的な負けは見せられませんからね！」

「それは俺も同じ気持ちだぜ！来い！決着をつけようぜ！！」

「はい！！」

こうして体勢を立て直した統夜は、零に向かつていくと、剣を一閃した。

しかしそれは零に軽く防がれてしまった。

零は反撃と言わんばかりに剣を振るうが、統夜は無駄のない動きで零の攻撃をかわしていた。

「……へえ、やるな……」

(……………だ!!)

零が自分の攻撃をかわされたことに驚く中、統夜は零の隙について剣を振るった。

この一撃に手応えを感じていた統夜はここで勝ちを確信した。

しかし、零は剣が自分の体に迫る前にジャンプをして統夜の攻撃をかわしたの。

「……………!?嘘だろ!?!」

統夜はここで攻撃をかわされるとは思っていなかったのか、驚きを隠せなかった。

零はジャンプの着地と同時に統夜目掛けて投げつけた剣を回収し、すかさず統夜目掛けて駆け出した。

「……はあっ!!」

統夜は迫ってくる零に向かって剣を一閃するが、零は無駄のない動きで統夜の一閃をかわした。

そして、零は2本の剣を同時に振るい、それより少し遅れるが、統夜も剣を振るった。2人の振るった剣はかなりの威力だったのか、2人の手にした剣は同時に弾き飛ばされてしまった。

しかし……。

「くっ……」

統夜の手には微かではあるが、切り傷がついてしまい、その場に跪いた。

「……へえ……」

その数秒後、零の手にも、微かな切り傷がついてしまった。

「……しよ、勝負あり!!」

審判役は試合終了を宣言したが、すぐに勝者を宣言しなかった。

しかし、統夜の方が先に傷をおったことを審判役は見逃さなかった。

「……勝者、涼邑零!!」

統夜と零の対決は、紙一重の差で、零の勝利となった。

零が勝者と知った魔戒騎士たちは大きな歓声をあげていた。

「おお！涼邑零の勝ちか!!」

「惜しかったな！あと一歩だったのに！」

「だけど、良い試合だったぞ!!」

魔戒騎士たちは、惜しくも敗れた統夜に賞賛の声を送っていた。

負けるにしても前回優勝者の零相手に奮闘したことが評価されたのである。

「……統夜、惜しかったな」

「そうですね。だけど、決勝の舞台に立てただけでも十分凄いですよ」

「そうですね！負けちゃったのは残念ですけど、凄い試合でした！」

大輝、戒人、奏夜の3人は、統夜が惜しくも敗れたことに対して残念がっていたが、その健闘ぶりを讃えていた。

「……流石の統夜も零には敵わなかったか……」

準決勝で統夜に敗れた翼は、零の実力を誰よりも理解しており、自分を破った統夜もまだまだ零には敵わないだろうと思っていた。

「……統夜、惜しかったな。俺も危なかったぜ」

「いえ、俺の完敗です。流石ですね、零さん」

統夜は零との真剣勝負に敗れ、悔しくないと言えば嘘になるが、それを悟られないように平静さを装っていた。

零はそんなことは見通していたのだが、あえてそこは追求せず、笑みを浮かべた。

「零さん、今回は俺の負けですが、次は絶対に負けません!!」

統夜は「ふんす！」と気合を入れると、零に手を差し伸べた。

「望むところだ！次も俺が勝たせてもらおうぜ！」

零はニコツと笑みを浮かべると、差し伸べられた統夜の手を取ると、固く握手を交わした。

こうして、激戦を戦った2人は、互いの健闘を讃えて握手を交わしたのであった。

魔戒騎士たちは、2人が固い握手を交わすのを見ると、2人の健闘を讃えて、スタンディングオベーションをしていた。

大輝、戒人、奏夜も当然スタンディングオベーションに参加し、翼、ワタル、エイジの3人も統夜の健闘を讃えていた。

こうして、7日間に渡るサバツクは零の優勝という形で幕を閉じた。

※※※

サバツクの決勝戦が終わるなり、サバツクの閉会式の準備が行われていた。

準備が全て終了すると、全ての魔戒騎士たちは、数々の激闘が繰り広げられた円陣に集まっていた。

「……これより、サバツク閉幕の儀を執り行う！」

サバツクの責任者として、この大会を取り仕切ってきた朱雀が、サバツク閉幕の宣言をした。

「今回のサバツクは予想以上の熱戦が繰り広げられた。諸君らの健闘ぶりは魔戒騎士狩りを感じさせないものだった。過去行われたサバツクの熱戦に負けない程の質の高さであった！」

朱雀は、今回のサバツクをこのように振り返り、今回のサバツクを絶賛していた。

「その激闘を制した涼邑零は、前回に引き続きサバツクを制した魔戒騎士である」

朱雀は、零がサバツクを二連覇したことを説明した。

「サバツクのルールに則り、涼邑零はサバツク殿堂魔戒騎士となり、今後のサバツクには出場出来なくなる。それを肝に銘じるが良い」

「……はい、ありがとうございます」

零はサブバック殿堂魔戒騎士となった喜びと共に、深々と一礼していた。

サブバックは数年に一度執り行われる魔戒騎士による神聖な武術大会であるのだが、その大会に二連覇した魔戒騎士はサブバック殿堂魔戒騎士と認定され、今後サブバックの大会に出場することができなくなる。

しかし、サブバック殿堂魔戒騎士という名は魔戒騎士にとってこの上ない名誉であった。

だが、過去にサブバック殿堂魔戒騎士になった者の数は少なく、零は3人目のサブバック殿堂魔戒騎士となったのであった。

「さて、涼邑零よ。サブバックを制した者は「死人の間」へ入ることが許され、死者の魂に会うことが許される。祈るがよい。誰に会いたいのか」

「はーい」

零は目を閉じると、死人の間で会いたい人物のことを思い浮かべていた。

（零さん……。誰に会いたいのだろうか……。そういえば零さんは婚約者をあのキバに殺されたって聞いたことかあるけど、もしかしてその人なのか？）

統夜は、零が会いたいの人物に思い当たる節があった。

しかし、それが本当に合っているのかはわからなかった。

目を閉じて会いたい人物を思い描いていた零は、目を見開き、会いたい人物のイメー

ジを思い浮かべることが出来たようである。

「……どうやら、決まったようだな。……涼邑零。死人の間へ!!」

朱雀はこのように宣言すると、死人の間への扉を開いた。

それを確認した零はゆつくりと歩き出し、死人の間へと入っていった。

零が死人の間に入っている間、魔戒騎士たちは言葉を発することなくその様子を見守っていた。

そして、零が死人の間から戻ってきたのは、十数分後だった。

「……これにて、サブツクの閉会の儀は終了する。今宵も宴を用意する。各自、戦いの疲れを癒し、明日からの使命に備えよ!」

今日も宴があると知り、魔戒騎士たちは歓声を上げていた。

「……以上、解散!!」

こうして、朱雀の宣言によってサブツク閉幕の儀は終了し、7日間に渡るサブツクは幕を閉じた。

※※※

こうして夜になり、サブック終了を祝う宴が催されていた。

魔戒騎士たちは昨日に引き続き、用意されたご馳走に舌鼓を打ち、酒を飲み、大いに盛り上がっていた。

そんな中、統夜は桜ヶ丘に帰る支度を行っていた。

「……あれ？統夜さん、宴には参加しないんですか？」

統夜が帰る支度をしているのを見ていた奏夜は、統夜の行動に首を傾げていた。

「まあな。だつて宴は自由参加だろ？俺はそういう宴には興味がないしな」

『良く言うぜ。1秒でも早く桜ヶ丘に帰りたいって思つてるくせに』

「あつ、イルバ！バラすなよ!!」

イルバが統夜の真意をあつさりバラすと、統夜の顔は真っ赤になっていた。

奏夜はそんな統夜の姿を見て苦笑いをしていた。

「それに、サブックは終わつて明日からはいつもの日々が戻つてくるからな。騎士の使命を果たしながら俺はもつと強くならなきゃって思つてる」

「へえ……。統夜さん、十分強いのに、高みを目指す気持ちは忘れてないんですね」

「当たり前だろ。俺がその気持ちを忘れないのは守りたい人がいるからだよ」
「守りたい人……」

「まあ、お前にもいつか現れるさ。この命を懸けてでも守りたい人つてのがな」
「……」

奏夜は、統夜のいう命を懸けてでも守りたい人という言葉が気になっていた。

「そういう人が現れればお前にもわかるはずだぜ。守りし者とは何なのかをさ」

「……守りし者が……何なのか……」

「まあ、そういうことだ。奏夜、また東京には遊びに行くからまた会おうぜ！」

「ええ！統夜さん、待つてます!!」

統夜はこのように奏夜に別れを告げると、荷物をまとめて自分の泊まった部屋を後にした。

そして宿舎を後にすると、サブツクの間世話になったこの宿舎に対して深々と一礼をしていた。

そしてそのまま桜ヶ丘へ帰ろうとしたのだが……。

「……おつ、統夜。もう帰るのか？」

たまたま宿舎の近くを通りがかったアキトが、統夜に声をかけた。

「ああ。俺は別に宴に興味はないし、なるべく早く桜ヶ丘に帰りたいって思ってたな」

「ふーん。そんなに早く桜ヶ丘に帰りたいんだなあ」

何で統夜が早く桜ヶ丘に帰りたいのかを察したアキトはニヤニヤしていた。

「な、何だよ！ニヤニヤして！」

「別に？何でもないっての！」

こう答えるものの、アキトはニヤニヤをやめなかったため、統夜は首を傾げていた。

「あつ、そうそう。統夜は明日にでもあいつらに会いに行くんだろ？」

「ああ。そのつもりだけど」

アキトの言っているあいつらとは、唯たちのことであつた。

統夜もそのことは理解していたので、アキトの言葉を肯定していた。

「師匠が統夜の試合をまとめたのを明日持つてくるって言つてたぜ。その時は俺も師匠について行くけど、師匠から連絡があると思うぜ」

アキトの協力を得て、サブツクの全試合を専用の魔導具を用いて記録していたレオは、唯たちに統夜の試合を見せるために、統夜の試合をまとめたものを編集していた。

それはまもなく終わるようで、明日には統夜たちにそれを見せることが出来るようになっていた。

そのため、レオは宴には参加していない。

「そつか。レオさんには明日改めて礼を言うつもりだけど、アキトもありがとな」

「まあ、俺は師匠の手伝いをしたただけだからな。礼なら師匠に言ってくれよ」

「アハハ、わかったよ。それじゃあな」

統夜はそのまま宿舎を後にしようとしたのだが……。

「……統夜！」

アキトが統夜を呼び止めたので、統夜は足を止めた。

「……？どうした、アキト？」

「あのさ、決勝戦、惜しかったな」

「ああ、そのことか。あの試合に関しては、完敗だったさ。やっぱり零さんは強かった

よ」

統夜はこのように決勝戦を振り返っていた。

「まあ、零さんは師匠や鋼牙さんの盟友だからな。殿堂入りは納得だよ」

「そうだよなあ。だけど、次零さんに会った時は俺はもともともと強くなる。いつかは

零さんを越える騎士になってみせるさ！」

「ずいぶん大きく出たな、統夜。まあ、お前ならそんな騎士になれると思うぜ」

「アキトも自分の夢を叶えるために頑張れよな」

「当たり前だ！俺は俺の夢を叶えるために頑張るさ」

アキトの夢とは、自分の作った魔導具で、多くの魔戒騎士や魔戒法師の手助けをする

ことである。

そのために、アキトは魔戒銃を完璧なものにするため、日夜努力をしていたのである。「……それじゃあ、俺はそろそろ行くよ」

「おう。それじゃあ、統夜。またな」

統夜とアキトはすぐに会うことになるかと予想されたため、「じゃあな」ではなく、「またな」と答えていた。

アキトと別れた統夜は宿舎を後にし、魔界道を通って桜ヶ丘へと向かった。

こうして、7日間に渡る統夜の激闘は幕を閉じたのであった。

しかし、サバツクが終わったからといって魔戒騎士の使命が終わることはない。

これからも統夜は、守りし者として、多くの人を守っていくことになるだろう。魔戒騎士としての統夜の戦いの日々はこれからも続くのであった。

……続く。

—— 次回予告 ——

『やつと桜ヶ丘に帰ってきたな。だが、やることが多いから色々と面倒だぜ。次回、「帰郷」。新たに統夜の日常が始まる！』

第80話 「帰郷」

7日間に渡る激闘が続いたサバックが幕を閉じ、統夜は桜ヶ丘に帰ってきた。

統夜は魔界道を通って桜ヶ丘に帰ってきたのだが、宿舎を出た時間が早かったからか、到着したのは夜の10時だった。

統夜は桜ヶ丘に到着するなり、携帯を取り出すと、唯たちに電話をかけた。

桜ヶ丘に帰ってきたことを報告するためである。

唯たちは統夜の電話に出るなり、統夜が帰ってきたことに喜びの気持ちを現していた。

そして、翌日の昼に唯の家に集まることになり、統夜はその申し出を二つ返事で受けたのであった。

唯たち5人全員に電話をかけ終えた頃には自宅に到着しており、統夜は電話を終えると、これまでの戦いの疲れを癒すためにゆっくりと体を休めることにした。

そして、翌日の朝一で、統夜はイレスにサバックの報告を行った。

「統夜、久しぶりですね」

「はい、お久しぶりです、イレス様」

この7日間、桜ヶ丘にはホラーは出現しなかったため、統夜がイレスに会うのはおよそ1週間ぶりだった。

「統夜、サバツクの結果は聞きましたよ。惜しくも準優勝だったみたいですね」

「ええ。ですが、零さんは本当に強かったです。完敗でした」

「それでも、この番犬所からサバツク準優勝者が出るとは私としても鼻が高いですよ」
「……イレス様、ありがとうございます。そのようなお言葉をいただけるのは非常に光栄です」

イレスの言葉を素直に受け止めた統夜は、深々とイレスに一礼していた。

「サバツクの結果はわかりました。今日からはまた改めて騎士の務めを果たしてください」

「はい、わかりました！」

「統夜は、これからエレメントの浄化に行くんですよね？」

「ええ。それが終わり次第、唯たちにサバツクの報告をするつもりです」

「そうですか。あなたの激闘ぶりをぜひあの子達に伝えてきて下さい」

「ありがとうございます！それでは、失礼します！」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にして、エレメントの浄化を行った。

番犬所を出て数分後、最初のオブジェに到着した。

統夜は魔戒剣を取り出し、魔戒剣を抜くと、邪気の溜まっている魔戒剣を突き刺した。すると……。

「……!? くつ、7日間放つたらかしにしたらこれかよ!？」

オブジェから飛び出して来た邪気は統夜の想像以上に大きく、邪気は素体ホラーの形になっていた。

『やれやれ。7日も放つたらかしだとこれだけ邪気が溜まるんだな。よくホラーが現れなかつたもんだぜ』

「関心してる場合じゃないだろ!? つとと……」

素体ホラーの形をした邪気は、統夜に牙を向き、その攻撃を統夜は危なげなくかわした。

「……サブック準優勝の俺があっさりやられる訳にはいかない!!」

統夜は魔戒剣の柄を力強く握り締めると、魔戒剣を十の字に振った。

素体ホラーの形をした邪気は、十文字に斬り裂かれると、そのまま消滅した。

「……よし、まずは1つ」

統夜はオブジェから飛び出てきた邪気を切り裂くと、魔戒剣を青い鞘に納め、魔戒剣をしまった。

『統夜、次行くぞ。今日は浄化しなきゃいけないオブジェだらけなんだからな』

「はあ……。午前中に終わることが出来るかな……」

統夜はため息をついてこのようにぼやくと、そのままイルバのナビゲーションで次のオブジェへと向かった。

※※※

統夜は次々とオブジェから飛び出す邪気の浄化を行っていたのだが、どれも長い間放置されていたせいか、邪気が大きく、1つ1つの処理にかなりの労力を使っていた。

統夜が普段休みの日で、午前中に浄化するオブジェの数は7つから10くらいなのであるが、今日はおおよそ倍である20のオブジェの浄化を行っていた。

そのため……。

「……………うっ……………くっ……………」

統夜は午前中のエレメントの浄化でかなり体力を消耗したのか、近くにあった手すりにもたれかかっていた。

『……………統夜、ずいぶんと消耗してるな』

「そ、そりやそうだろ……。いつもの倍以上の仕事をしてんだから……」

いつも以上にオブジェに邪気が溜まってるせいか、統夜はいつも以上の仕事を強いられてしまい、そのせいで体力を消耗してしまった。

『統夜。じきに戒人も仕事を始めるだろうし、今日はここまでにしたらどうだ?』

「そうだな……。どつかで昼飯でも食ってエネルギー充填と行きますか」

統夜はある程度体力を回復させてから唯の家に行くことにして、どこか飲食店に移動して食事を摂ることにした。

歩くこと10分後、統夜が立ち寄ったのは、外にテーブルが置いてあるオープンカフェのような店だった。

統夜が適当な場所に座ると、メイド服っぽい格好をした女性がお冷とメニュー表を手をやってきた。

「……いらっしやいま……。!!あ、あんた!!」

「?」

店員の女性が統夜のことを知っている様子だったので、統夜は首を傾げながらその女性を見るのだが……。

「……!! あんたは、ここでもバイトしてたのか」

統夜はその女性を見ると、目を丸くして驚いていた。

その女性は、以前ホラーとの戦いに巻き込まれ、ホラーに関する記憶を失った東ヒカリだった。

ホラーに関する記憶のみ失つてゐるため、会うたびに統夜に突つかかつてきており、統夜はヒカリに苦手意識を持っていた。

「そ、そうよ! あんたは何しにここに来たのよ!？」

「何しにって俺は客として来たんだけど……」

統夜は呆れながらこう答えると、ヒカリはハツとした。

「……(注)文は?」

「……うーん……そうだなあ……」

統夜はメニュー表をチエックすると、何を頼むか考えていた。

「……それじゃあ、このトンカツサンドとアイスコーヒー。あと、食後にチーズケーキとチョコレートケーキ」

「……ずいぶんと食べるわね……」

「まあ、食べ盛りだし」

「……しよ、少々お待ちください」

ヒカリは統夜の注文を聞くと、厨房へと向かっていった。

(……やれやれ、あの人、色々なところでバイトしてるんだな)

《まあ、あの女も画家を目指してるらしいから色々大変なんだろ》

(そうかもしれないな。カオルさんもバイトを転々としてたつて聞いてたし)

統夜は今は画家として成功している冴島カオルも、成功する前はバイトを転々として、その度にホラーとの戦いに巻き込まれたという話をしてたことを思い出していた。

ヒカリもかつてのカオルのように苦勞をしているということは理解出来た。

しかし……。

(……あまり俺たちのことを探って欲しくはないんだけどな……)

ヒカリはホラーに関する記憶を失ったせいで、統夜が画廊のオーナー行方不明に関わっていると思い、探りをいれていた。

統夜にはそれが鬱陶しいと思っていた。

(……あのオーナーのことを探ったら絶対にホラーに関することにたどり着くだろうか。その前にそんなことはやめさせたいけどな……)

ヒカリが再びホラーに襲われる前に統夜はヒカリにオーナーが行方不明になったことと探りをやめさせようと考えていた。

統夜がこのようなことを考えていると……。

「……お待たせしました。アイスコーヒーとトンカツサンドになります」

ヒカリが統夜の注文したものを持ってきて、それをテーブルに置いた。

「……おつ、美味そうだな♪」

トンカツサンドを目の前にはしゃぐ統夜の姿は、年相応の高校生そのものだった。

「……ふーん。あんたって結構可愛い顔で笑うんだね」

「?何か言った?」

「な、何でもないーご、ごゆっくり!」

ヒカリは照れ隠しに少しツンが入った口調でこう言うと、その場を離れていった。

統夜はヒカリの様子に首を傾げながらも、トンカツサンドを幸せそうに頬張っていた。
た。

ヒカリは、少し離れたところでその様子を眺めていた。

(……本当にあいつがオーナーが行方不明になったことに関係してるのかしら……。変わった格好をしてるただの高校生にしか見えないんだけど……)

ヒカリは、ずっと統夜がオーナーが行方不明になったことに関わっていると思つていたのだが、その考えが揺らぎ始めていた。

統夜の年相応な振る舞いを垣間見たからである。

(……………だけど、何でオーナーが行方不明になったのかは気になるし、また調べないと……………)

統夜がオーナーが行方不明になったことに関わっていてもいなくても、その真実を知りたいヒカリは、引き続き調べることを決めたのだった。

そんな中、統夜は満足そうな表情を浮かべながらトンカツサンドを完食し、デザートとして注文したチーズケーキとチョコレートケーキにも舌鼓を打っていた。

「……………うーん、やっぱりうめえなあ♪」

統夜は毎日のように軽音部でお茶をした結果、甘党になってしまったのである。

とは言っても、統夜の先輩騎士である零はそれ以上の甘党であった。

統夜がデザートのケーキを完食し、追加注文したジュースを飲んでいたその時だった。

「……………あれ？ 統夜先輩？」

唯の家の向かう途中だった梓は、偶然にもオープンカフェで休憩している統夜を発見した。

「……………統夜先輩！」

梓はこう呼びかけながら、統夜のいる席まで移動した。

「……………おう、梓。久しぶりだな」

「はい！私、久しぶりに先輩に会えて嬉しいですよ！」

梓は統夜との1週間ぶりの再会を心から喜んでいた。

「統夜先輩はお昼食べてたんですか？」

「ああ。仕事は終わらせたからエネルギー充填を兼ねてな」

「そうだったんですか……」

「梓、とりあえず座りなよ」

「あつ、そうですね」

梓が空いた席に腰をおろしたその時だった。

「……いらつしやいませ」

ヒカリがお冷を手に見れると、お冷を梓の前に置いた。

「……あなたも隅に置けないわね。もしかして、この子は彼女？」

ヒカリはニヤニヤしながら統夜をからかっていた。

「にや!?そ、そんなんじゃないです!!」

彼女と問われたことが恥ずかしかったのか、梓は顔を真っ赤にして反論していた。

「ああ、違うぞ。梓は俺の後輩で、大事な友達だよ」

「……むー……むー……」

統夜がハッキリとこう言ったことが気に入らなかつたのか、梓はふうつと頬を膨らま

せていた。

「……………？ 梓、どうしたんだ？ 不機嫌そうにして」

「な、なんでもないもん!!」

梓はふいつとそっぽを向き、統夜は首を傾げていた。

「……………まったく、あんたには呆れたわ……………」

ヒカリは今のやり取りを見ただけで梓が統夜に惚れてることを見抜き、鈍感な統夜に呆れていた。

「……………ところで梓、何か飲むか？ 奢るけど……………」

「それじゃあアイスココアをください!!」

奢るといふ統夜の言葉を聞いた梓は、一切躊躇せずに飲み物を注文した。

「しよ……………少々お待ちください」

注文を聞いたヒカリはそのまま厨房へと向かっていった。

注文したものが来るまで、統夜と梓の話は絶えることがなかった。

そして、注文したアイスココアが来ると、梓は幸せそうな表情をしながらストローでチューつとすすりながらアイスココアを飲んでいった。

統夜はそんな梓の幸せそうな表情を見て笑みを浮かべていた。

ヒカリもその様子を見ながら笑みを浮かべていた。

(……なんかあの2人は見てると初々しいわね……。あれで付き合っていないとか、不思議だわ……)

ヒカリは統夜と梓の出す雰囲気を感じ取り、それでも付き合っていないのかと驚いていた。

梓がアイスココアを飲み終わると、統夜は会計を済ませ、この店を後にした。

ヒカリは、2人が出て行く様子をジッと見ていた。

(……とにかく、調べてみないとね。あいつが関係あるなしは置いといて)

ヒカリは、統夜がオーナーが行方不明になった事件に関係ないにしても、この事件について調べるつもりだった。

※※※

オープンカフェを後にした統夜と梓は、そのまま唯の家に直行した。

唯の家に到着すると、統夜は唯の家のチャイムを鳴らした。

家の扉が開くと、平沢姉妹が統夜と梓を出迎えてくれた。

「梓ちゃん、統夜さん、いらっしやい♪」

「やーくん、お帰りっ♪」

唯は久しぶりに統夜の顔を見たのが嬉しかったのか、顔を見るなり統夜に飛びついて抱きついた。

「ちよ……！唯、離れろって!!」

いきなり抱きつかれたのが恥ずかしかったのか、統夜は顔を赤らめていた。

「やだよお！やーくん分が足りてないんだもん！」

「抱きつくのは梓だけにしてくれよ」

「ちよっと！そこで私に振らないでくださいよ！それに唯先輩！いつまで統夜先輩に抱きついてるんですか？」

梓は唯が統夜に抱きついているのが気に入らなかつたのか、このように異議を唱えていた。

「ええ？いいじゃん別にいい」

「私も統夜先輩に抱きつきたいのに！」

「わ、私も!!」

「へ!?お、お前ら何を言ってるんだよ!!」

梓と憂がとんでもないことを言い出しており、統夜は驚いていた。

「と、とりあえず唯、離れろって！」

統夜は唯から離れると、抱きつき足りないことに不満だったのか、ぷうつと頬を膨らませていた。

「と、とりあえず上がらせてもらいな」

統夜は靴を脱いでリビングの方へ向かうと、唯たちもその後を追いかけた。

統夜がリビングの中に入ると……。

「……あつ、統夜君。待ってましたよ」

「よう、統夜。昨日はお疲れさん」

律、滯、紬だけではなく、レオとアキトも何故カリビングでくつろいでいた。

「……あれ、レオさん!?それに、アキトも!?どうしてここに?」

統夜はレオとアキトが来るとは思っていなかったの、驚きを隠せなかった。

「いやあ、アキトが統夜はここに来るだろうと言ってましてね。ちよつと前にお邪魔したんですよ」

「そういうことだ。お前らは何かあるとここに集まってんだろ?その話を思い出してな。ここに來たってわけだ」

「なるほど……」

レオとアキトがここにいる理由に納得した統夜はウンウンと頷いていた。

「それで、統夜君が来るのを待ってたんですよ。あれを見せるために」

「あれって……もしかして……」

「ああ。お前の試合の記録だよ。昨日の夜に出来上がったんだよ」

レオは昨日の夜に統夜の試合をまとめたものを編集し、それを専用の魔導具に記録したので、統夜たちに見せるために唯の家を訪れた訳である。

「え!? やーくんの試合の記録!？」

「見たい見たい♪」

「私も見たい!」

「私もお♪」

「はい! 私も見たいです!」

「私もです!」

唯たちは統夜の試合の記録という言葉に反応し、それを見たがっていた。

「もちろんですよ。僕たちはそれを見せるために来たんですから。ですが……」

「ですが?」

「魔導具を使って映像を出すんだが、ここじゃちよつと狭いかもしれないんだよな」

統夜の試合は魔導具に記録しているため、一般家庭のリビングでは狭くて記録を再生することが難しいのである。

「それじゃあ、広い所に移動しなきゃいけないってことですか？」

「ええ。そういうことです。統夜君が来たら移動しようと考えてました」

「とは言ってもどこがいいかは考え中だけだな」

「……広い所か……」

広い所と言われて、良い所がないか統夜は考えていた。

「学校の部室か屋上あたりなら良さそうだけど、制服着なきゃいけないしな……」

学校が一番無難だったのだが、今は夏休みでも、学校へは制服でなければダメなので、着替えという手間がかかってしまう。

なので統夜はその手間をかけないために他の方法を考えていたのだが……。

「……みんな、私に任せて♪」

紬に妙案があるようで、紬が手を挙げていた。

「ムギ、どこか良い所を知っているのか？」

「ええ、だけどちよつと待っててね」

そういうと紬は携帯を取り出し、どこかへと電話をかけ始めた。

そして1分後……。

「……さあ、みんな。行きましよう♪」

紬は誰かと交渉をしていたようで、紬は携帯をしまおうと立ち上がった。

『……とりあえず、紬について行った方が良さそうだな』

「ああ、そうだな」

こうして続夜たちは唯の家を後にすると、紬の先導でどこかへと移動を開始した。

※※※

紬の案内で到着した場所は……。

「……なあ、ムギ。ここって、ビルの会議室だよな？」

続夜たちは桜ヶ丘某所にあるビルの中にある会議室に来ていた。

「この広さはかなりのものなのだが……。」

「ええ、そうよ。ここは父の会社のオフィスの一つなの。お願いして使わせてもらえることになったわ」

このビルは紬の父の会社のビルであり、紬は父の会社の人間に交渉して使わせてもら

えることになったのである。

「まあ、ここなら秘密は守られるから良いのか……」

紬の父の会社であれば、魔戒騎士の秘密は守られるだろうと判断した統夜は、この場所です試合の記録を見るのは問題ないと判断した。

「そうですね。これくらい広ければ、問題ないと思います」

そう言いながら、レオは会議室の中央にサバツクの試合を記録した魔導具を設置した。

「……どんな感じになるんだろうね♪」

「そうだな、あたしも凄く楽しみだよ」

「私も楽しみだよ！」

「私も私も♪」

「私もです！」

「はいっ！私も楽しみです！」

唯たちはこれから再生される統夜の試合がどんな感じなのか楽しみにしていた。

「……それじゃあ、行きますよ！」

レオは魔導筆を取り出すと、会議室中央に設置された魔導具目掛けてとある法術を放った。

すると、その法術に反応した魔導具は、まるで立体映像のような映像を映し出した。そこに映し出されたのは、サブツクの舞台である円陣であった。

まだ統夜の試合前のため、円陣には誰もいない状態だった。

「おお！凄いい！」

「凄い立体的です!!」

唯たちは魔導具から映し出される映像が予想以上に立体的だったため、驚きと同時に感動していた。

すると、統夜の試合がこれから始まるようであり、統夜と初戦の相手である毒島エイジが姿を見せた。

「……あつ！統夜君出てきた！」

「この人……誰なんだ？」

「そこら辺の説明は後でするよ」

対戦相手の説明をしてるとキリがないと判断した統夜は、戦った相手の解説を後回しにすることにした。

こうしている内に統夜とエイジの試合が始まり、統夜とエイジは激しく剣をぶつけ合っていた。

「おお、凄いいぞ！」

「ああ。まるで近くで見てるみたいだぜ！」

魔導具から映し出される映像がかなり臨場感があったため、唯たちは驚きを隠せなかった。

唯たちは統夜の激闘を食い入るように見ていた。

そして、統夜は……。

(……こうやってみると本当にエイジさんは強いな……。よくあの人に勝てたもんだぜ)

当時のことを振り返り、改めてエイジに勝ったことに驚いていた。

そして、試合は終盤を迎え、統夜はエイジの法術を次々と潜り抜け、勝利を収めることが出来た。

「おお！やーくんが勝った！」

「ああ。初戦からかなり強敵だったけど、なんとか勝てたよ」

統夜はこのように初戦を振り返ると、客観的に試合を観戦して複雑な心境になっていた。

「それじゃあ、続けて2回戦に行きますよ！」

レオは引き続き魔導具を起動させ続け、サバック2回戦の映像を映し出した。

サバックの2回戦は、タクトという無駄にプライドの高いベテラン騎士が相手で、統

夜は難なくタクトを追い詰めるのだが、タクトは魔導筆を用いた術を使うという反則行為を犯していた。

朱雀は試合を継続させるよう宣言し、試合は再開された。

タクトはこれ見よがしに魔導筆を用いた術を連発し、統夜を追い詰めようとしたが、逆に統夜に追い詰められてしまい、そのまま統夜に敗れたのであった。

唯たちは、その後統夜がタクトを殴り飛ばした姿に驚きを隠せなかった。

統夜が普段そのようなことをする人間ではないことを唯たちは知っているのだが、それだけ統夜はタクトのことを許せなかったんだろうということを理解していた。

続いて3回戦の様子が再生された。

3回戦の相手は、統夜が修練場時代に世話になった四十万ワタルだった。

「ねえ、やーくん。この人はかなり強い人なんだよねえ?」

「ああ。あの人は俺が修練場時代に世話になった人なんだ。かなり手強い相手だったよ」

統夜はワタルのことを簡潔に説明していた。

「……ということは、統夜先輩の恩師ってことなんですね?」

「まあ、そうなるかな」

統夜は自分とワタルの試合を見ながらしみじみと呟いていた。

統夜は元老院付きの魔戒騎士であるワタル相手に苦戦しながらも善戦していた。そして、激しい戦いの末、統夜はワタル相手に辛くも勝利した。

「おお！またやーくんの勝ちだよ!!」

「凄いな、統夜!」

「今でも本当によく勝てたなって思ってるよ。だけど、これで準々決勝に行ったから、ベスト8は確定したって訳だ」

「ベスト8……凄いわね、統夜君♪」

唯たちが統夜の偉業を素直に褒めると、統夜は照れ隠しに笑っていた。

そして、次は準々決勝の様子が映し出された。

その準々決勝の対戦相手とは……。

「……あ！戒人さんが相手だよ!」

「戒人さんか……。統夜にとっては凄い試合になったんじゃないのか?」

「まあな。この試合でハッキリしたよ。戒人は俺のライバルだつてことがさ」

統夜は戒人との激闘で戒人が自分のライバルであるということを再認識していた。

そのことを物語るかのように2人の試合は熾烈を極めていた。

あまりにも激しい戦いに唯たちは言葉を失っていた。

最初から最後まで試合は熾烈を極め、ライバル対決を制したのは統夜であった。

「凄い！統夜さんの勝ちです！」

「これでベスト4は確定ってことよね？」

「凄いです！統夜先輩！」

再び唯たちに褒め言葉をもらった統夜は再び照れ隠しに笑っていた。

準々決勝が終わり、続いて準決勝の様子が映し出された。

次の統夜の対決相手は……。

「……あれ？この人って……」

「学校にホラーが出た時に助けてくれた……」

統夜が鋼牙や零と共に強大な力を持つグオルブを相手にしている頃、そのグオルブの力によって桜ヶ丘高校の近くにホラーの群れが出現した。

その危機を救った1人が、準決勝で統夜と戦った山刀翼だった。

唯たちはその時のことを覚えていたため、翼のことも見たことがあった。

「ねえ、統夜君。この人って確か鋼牙さんの知り合いだったわよねえ？」

「ああ、そうだ。それだけじゃなくて翼さんは鋼牙さんと互角の力を持つ人なんだ。かなりの強敵だったよ」

統夜は自分と翼の対決を見ながらこのように解説をしていた。

序盤は終始翼のペースで統夜も徐々に追い詰められていったが、統夜はどうか翼相

手に反撃を行った。

翼は最初から本気だったのが、翼はイヤリングを用いた術を使用し、さらに統夜を追い詰めていった。

そんな中、翼の一撃が統夜の鳩尾に直撃し、統夜は意識を失いそうになった。

その様子を見ていた唯たちは、思わず「ああっ!!」と声をあげた。

(……今思えばよくここから勝てたよな……。あの時点で誰もが翼さんの勝ちを確信しただろうしな……)

統夜は翼との試合を冷静に振り返るのだが、劣勢から勝てたことに改めて驚いていた。

翼は統夜にトドメの一撃を放とうとするが、統夜は間一髪でそれをかわし、体勢を整えた。

そして2人は最後の1撃を繰り出すのか、それを制したのは統夜だった。

「おお!統夜が勝ったぞ!!」

「あの状況で勝てるなんて凄いな!」

唯たちは、統夜の逆転勝利に驚きを隠せなかった。

「そうだよな。翼さんに勝てたのは驚きだったけど、翼さんに俺の成長を見てもらえて嬉しかったよ」

統夜はこのような一言で、翼との試合を振り返った。

そして統夜は決勝に勝ち進んだため、このまま決勝戦が映し出されると思われたのだが……。

「……………え？何、これ？」

「統夜先輩の……………弾き語り？」

何故か今映し出されているのは、鎮魂の儀にて、統夜が鎮魂歌を弾いているところだった。

「……………なっ!?何でこれが!？」

統夜は鎮魂の儀の様子まで記録しているとは思っていなかったもので、驚きと共に顔を真っ青にしていた。

「……………ハハ、驚きました？」

「師匠がせっかくだからこれも記録した方がいいんじゃないかと言ったもんでな。記録したって訳だよ」

鎮魂の儀の時、レオとアキトは隅っこの方にいたのだが、統夜の歌っている様子を唯たちに見せるために、あえてその様子を記録したのであった。

「……………なあなあ、この歌って統夜の新曲なのか？」

「まあな。夏休み明けくらいにみんなに発表しようと思ってたんだよ」

「凄く良い曲ね♪」

「はい！私も統夜先輩の作った曲を演奏したいです！」

「私も私も♪」

統夜の作った新曲は、どうやら唯たちに好評価であった。

「統夜、という訳で今度楽譜をよろしくな」

「わかったよ。なるべく早くみんなに渡すよ」

統夜は観念したのか、予定より早く楽譜作りに取り掛かり、それを唯たちに渡すことにした。

「……さあ、みなさん！次は決勝戦ですよ！」

レオがこのように宣言をすると、今度は決勝戦の様子が映し出された。

決勝戦の対戦相手とは……。

「えっ?!次は零さんが相手なの!?!」

「統夜、大丈夫なのか?」

「まあ、零さんもかなりの手練れだつてことはみんなも知ってるよな? 零さんは本当に強かったよ……」

統夜はこのようにつぶやき、決勝戦を振り返っていた。

そして、決勝戦は始まるのだが、試合は終始零のペースで進んでいた。

統夜は反撃の糸口をつかめないまま、あつという間に零に追い詰められてしまった。途中、どうにか反撃しようとするものの、零の一撃が統夜の鳩尾に直撃し、統夜は意識を失いかけた。

フラフラになりながらも統夜は攻撃を仕掛けるが、零はそんな統夜を吹き飛ばし、統夜は再びピンチに陥った。

唯たちは固唾を飲んでそんな統夜の様子を見守っていた。

そんな中、統夜はどうか零の最後の―撃をかわし、零に―矢報いるため、反撃を開始した。

しかし、実力は零の方が1枚も2枚も上手だったからか、零に全力の攻撃をしのがれ、そのまま統夜は敗れてしまった。

「……ああ、やーくん負けちゃったか……」

「だけど、ここまで勝てたのは凄いことだよな?」

「ああ!統夜、どの試合も格好良かったぞ!」

「うん♪格好良かったわ♪」

「はい!統夜先輩、素敵でした!」

「私もそう思います!」

唯たちは統夜が決勝で敗れたことよりも、ここまで戦い抜いたことを賞賛し、統夜に

労いの言葉を送っていた。

「……みんな、ありがとな」

労いの言葉に対して統夜が礼を言うと、サブツクの試合を記録していた魔導具が停止した。

全ての試合の映像を流し終えたため、魔導具はその機能を停止したのである。

「レオさんもありがとうございます。唯たちに俺の試合を見せるきっかけを作ってくれて」

「気にしないで下さい。僕だって唯さんたちに統夜君の勇姿を見て欲しいと思ってましたから」

「俺も師匠と同じ気持ちだ。だから気にすんなよ」

「アキトもありがとな」

統夜がアキトにも礼を言っていると、レオは会議室の中央に置いた魔導具を回収した。

「さて、無事唯さんたちに統夜君の勇姿を見せたことですし、僕たちはもう行きますね」

「俺たちはまだまだやらなきゃいけない仕事があるしな」

「そうなのか……。2人とも、本当にありがとう！」

統夜は試合の記録を見せてくれたレオとアキトに一礼をして、感謝の気持ちを示して

いた。

「いえいえ、僕たちも無事に撮れたのがわかってホッとしてますし、楽しかったですよ！」

「そういうことだ。それじゃ、またな！」

こうして、レオとアキトは会議室を後にして、その場には統夜たちが残された。

「……さて、統夜の勇姿も見れたことだし、これからどうする？」

「そうだな……。せつかくだからこれからみんなまで遊びに行くか？」

律が遊ぶことを提案した。

レオの魔導具による試合の再生は、1時間前後で終わったため、解散には中途半端な時間帯だった。

「賛成♪私、明日からフィンランドだからその前にみんなと遊びたいなあって思ってたの♪」

紬は毎年夏休みには家族でフィンランドに向かい、そこで避暑旅行をしている。

今年もフィンランドに行くのだが、日本を発つのが明日なのである。

「そういうことならぜひ遊びましょうよ！明日からはムギ先輩とはしばらく会えないんですから！」

「うん！私もムギちゃんと遊びたい！」

「私も良かったらぜひ一緒に一緒に遊びたいです！」

梓、唯、憂も遊びたい旨を伝えた。

さらに濡もウンウンと無言で頷いていた。

「俺も賛成だな。今日の仕事は一通り終わらせてきたし、たまにはみんなと遊びたいな」

統夜も遊びたいという意思を表すと、唯たちの表情がぱあつと明るくなっていた。

「……よっしゃあ！それじゃ決まりだな！」

「うん、それじゃみんなまで遊びに行こう！」

唯がこう宣言すると、統夜たちは「おお！」と返した。

こうして、サバツクの勇姿を唯たちに見せることが出来た統夜は、唯たちと共にどこかへ遊ぶためビルを後にしたのであった。

この日は指令がなかったため、統夜は解散するまで唯たちと遊び、解散後は少し街の見回りを行ってから帰宅した。

こうして、サバツクが終わった翌日が終わりを告げた。

明日も夏休みは続くため、統夜は魔戒騎士としての使命に専念することが出来るのであった。

サバツクは終了しても、統夜の夏休みはまだまだ終わらないのであった。

……続く。

——次回予告——

『こいつは参ったな。あのお嬢ちゃんが余計な調査をしていやがるぜ。次回、「捜査」。
まあ、面倒なことにならなきゃいいがな』

第81話 「捜査」

……ここは、桜ヶ丘某所にある桜ヶ丘警察署。

ここのとある部屋で、1人の若い刑事が、とある事件の捜査資料に目を通していた。

この刑事は、日代幸太。年齢は25歳と、刑事としては若年ではあるが、その熱い性格で、多くの凶悪犯を検挙するなど、実績もあげている刑事である。

この日幸太が調べているのは、今年の梅雨あたりに起きたとある画廊のオーナーが行方不明になった事件であった。

「……うーん……。特におかしな点はないんだよなあ……」

画廊のオーナーが行方不明になったことに事件性はないと警察は判断し、オーナーはいまだに発見されていない。

幸太は、当初からこの事件について調べていたのだが、全く手がかりをつかめなかった。

幸太が調べているのはこの事件だけではなかった。

桜ヶ丘で人々が不可解な失踪をする事件が多く発生していた。

しかし、どれもまともな証拠一つ掴むことが出来ず、事件は迷宮入りになっていた。

その中には、人気急上昇のアイドルの失踪事件や、近未来的なゲームを作った「シグルド」という会社の社長が行方不明になるといふ事件が含まれていた。

どの事件にも幸太は関わっているのだが、手がかりを掴むことは出来なかった。

今調べているオーナー行方不明の事件も同じく手がかりを掴めなかった。

しかし、この事件について調べている人がいるらしく、幸太は明日その人物と会う約束を交わしている。

「……何でここまで人がいなくなるのかはわからないけど、絶対に手がかりを見つけてみせる！」

他の警官がこの事件に手を引く中、幸太だけは諦めようとしなかった。

自分が関わった事件は解決させるという幸太の信念があるからである。

幸太がオーナー行方不明事件の資料に目を通していたその時だった。

「……おいおい、幸太。まだその事件を調べてるのか」

呆れながら幸太に声をかけたのは、幸太の先輩刑事である、真山修吾だった。

修吾は刑事歴20年のベテラン刑事で、その経験を活かして幸太とコンビを組み、様々な難事件を解決している。

「あつ、修吾さん」

「お前、上からもその事件からは手を引けって言われてるだろ？俺たちには解決すべき

他の事件が山ほどあるからってな」

警察は、解決の糸口すら掴めない事件を延々と調べるよりも、今日の前で行われている事件を優先すべきという考え方だった。

そのため、幸太以外の警官は、この事件には手を引いていた。

当然、修吾もその1人であった。

「……もしかしたら例の事件の手がかりを掴めるかもしれないんですよ。やっぱり俺はどうしても諦めきれなくて」

幸太の意思は固く、やめろと言っても聞いてくれないと判断した修吾はため息をついていた。

「まったく……。ほどほどにしておけよ。上にだつて突かれるし、例の行方不明事件に関わりすぎたやつはどうなるかお前も知ってるだろ？」

「そんなの、ただの噂じゃないですか？ 行方不明事件の核心を突こうとしたものは消されるだなんて」

幸太がこう言つて呆れているが、幸太の他にも行方不明を解決させようと動いていた刑事はいたのだが、その全員も謎の失踪を遂げているのである。

「……何か変な怪物を銀の狼が倒すなんて都市伝説だつて広がってるらしいじゃないか」

「ああ、その都市伝説なら俺も聞いたことがありますけど、それもただのデマでしょう？ 怪物やら銀の狼なんて目撃情報はありませんし」

今、桜ヶ丘では、夜な夜な不気味な怪物が現れ、それを銀の狼が退治するという都市伝説が広がっていた。

その都市伝説こそ、ホラーと、統夜の身に纏う奏狼の鎧のことなのだが、目撃情報もなく、その存在を信じるものはほとんどいなかった。

幸太もこの都市伝説は知っているものの、信じてはいなかった。

「……まあ、とりあえずほどほどにしとけよ。それじゃあ、お先」

「あつ、お疲れ様です」

修吾は一応幸太に釘を刺してから、警察署を後にした。

「さてと……」

幸太は行方不明事件の資料に一通り目を通してから、業務を終えて警察署を後にした。

「……ただいま」

幸太は現在実家暮らしであり、仕事が終わるとどこにも寄らずにまっすぐ家に帰宅した。

すると、ドタドタと足音を立てながら一人の少女が玄関まで駆け出してきた。

「お兄ちゃん、おかえり〜」

「おう、ただいま、玲奈」

少女が満面の笑みで微笑んで幸太を出迎えると、幸太は少女の頭をクシヤツと撫でていた。

「玲奈、ちゃんと宿題はやってるのか？」

「うん、ちゃんとやってるよ！」

「それなら良いんだ。友達と遊ぶのは良いけど、宿題は疎かにするなよ。後が大変だからな」

「もおく！お兄ちゃんつてばお母さんみたいだよ！」

幸太の言葉がこうるさかったのか、少女はぶうつと頬を膨らませていた。

「……ハハ、そりやすまんかったな、玲奈」

幸太は再び少女の頭を撫でていた。

この少女、日代玲奈は幸太の妹であり、桜ヶ丘高校に通う高校2年生であるのだが、現在には夏休みであった。

幸太は玲奈の頭を撫で終わると、そのままリビングへと移動した。

すると、テーブルにはラップに包まれた料理が置かれていた。

「おっ、美味そうだな。俺、腹ペコペコだよ」

幸太はそう言いながらスーツの上着を脱ぎ、ネクタイを外した。

それを玲奈が受け取ると、スーツの上着をハンガーにかけて、ハンガーをとある場所に掛けていた。

玲奈がそうしているうちに、幸太は夕食のおかずをレンジで温め、冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

おかずが温まると、今度は炊飯器をあけて、ご飯を茶碗によそった。

「……………いただきます」

幸太は缶ビールを片手に少し遅い夕食を取り始めた。

玲奈はそんな幸太の様子を少し見た後に冷蔵庫に移動すると、ペットボトルのジュースを取り出すと、幸太の向かいの席に腰を下ろした。

「……………玲奈、もう遅いから寝た方がいいんじゃないのか？」

「いいんだもん！今夏休みだし」

「……………まあ、そういうことならよしとするか」

幸太は妹を寝かせようとするが、玲奈は夏休みを理由にそれを拒否していた。

「……ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんが調べてる事件はどうなの？」

玲奈は、幸太の仕事の近況を聞いていた。

「うーん。相変わらず手がかりなしかな。この事件はあまりに不可解な事件だからな」

幸太の近況を聞いた玲奈は「ふーん」と軽い返事をする、ペットボトルの飲み物を一口飲んだ。

「ところで玲奈ってさ、銀の狼の都市伝説って知ってるか？」

幸太は先輩刑事である修吾の言っていた都市伝説の話で玲奈に振ってみた。

「銀の狼？ああ、知ってるよ！クラスでも持ちきりになったことがあるもん！だけど、みんな化け物も銀の狼も信じてないけどねえ」

「ま、やっぱりそうだよな」

予想通りの答えを聞いた幸太は苦笑いをしながら缶ビールをちびちびと飲んでいった。

「ねえ、お兄ちゃん。その都市伝説がどうしたの？」

「別に？その都市伝説の怪物やら銀の狼やらが事件に関わってたら面白いなと思ってな」

「もお、お兄ちゃんってば！そんなのあり得ないじゃん！もう酔っ払っちゃったの？」

「アハハ、俺は酔ってないけど、確かにあり得ない話だよな」

幸太はあり得ない話に笑いながら夕食や缶ビールに舌鼓を打っていた。

その間、幸太は玲奈と他愛のない話で盛り上がっていた。

幸太と玲奈の両親は幸太が警察官になる少し前に事故で他界しており、それ以来、幸太はまだ幼い玲奈の親代わりになっていた。

そのため、幸太は玲奈のことは良く知っており、玲奈が統夜にフラれたという話も知っていた。

そのため、統夜の存在は玲奈の携帯に入っている写メを見て認識していた。

しかし、統夜が都市伝説になっている奏狼こと銀の狼とは知る由もなかった。

※※※

翌日、桜ヶ丘某所にあるカフェのとある席に1人の女性が座っていた。

その女性は画家を志している東ヒカリであり、ヒカリはこの日1人の男と会う約束を

していた。

ヒカリは自分の個展を行う予定だったが、その直前に画廊のオーナーが行方不明になつてしまった。

しかしヒカリはその前後の記憶が曖昧になっていた。

画廊のオーナーはホラーに憑依され、ヒカリを喰らおうとしていたのだが、その前に統夜とアキトに救われた。

統夜はホラーと化したオーナーを討滅し、さらにヒカリのホラーに関する記憶を消した。

その結果、ヒカリは統夜とアキトの存在を認識しており、統夜とアキトがオーナーの行方不明に関わっていると考えていた。

ヒカリは事件の後も何度か統夜と会うのだが、その度に探りをいれていた。

しかし、統夜が事件に関わっているという証拠は掴めなかった。

なのでヒカリは探偵を使って統夜に探りを入れるのだが、プロの探偵でも魔戒騎士である統夜の足跡を追うことは出来なかった。

しかし探偵は統夜が桜ヶ丘高校の軽音部に入っていることを突き止め、軽音部にも探りを入れるのだが、それでも統夜の秘密を掴むことは出来なかった。

オーナーが行方不明になった事件の手がかりは一切掴めず、諦めようとしていた時、

ヒカリは1人の刑事がこの事件について調べてることを突き止め、連絡を取った。

そして今日、ここで会い、情報交換をすることになっている。

ヒカリは、もしここで有力な手がかりが得られなければオーナーが行方不明になった事件を調べてるのは諦めようと考えていた。

それは、統夜が本当にあの事件に関係しているのか疑問を持っていたからである。

(……さて、今日はあの事件の手がかりは得られるかしら……)

探偵を使って統夜の身辺調査をしても手がかりなしだったので、本当に手がかりを得られるかは首を傾げるほどだった。

しかし、些細な会話から何か手がかりが掴めるかもしれない。

ヒカリはそんな気持ちでその刑事と会うことにした。

すると……。

「……あ、すいません。お待ちせしました」

自分より少し年上の青年が店内に入ると、まっすぐこちらに移動してきた。

「いえ、気にしないでください」

「あなたがお電話をくれた東ヒカリさん……ですよね？」

男の問いかけに、ヒカリは無言で頷いていた。

「申し遅れました。私は電話で話した通り、あの事件を独自に捜査している日代幸太で

す。よろしくお願いします」

ヒカリと会う約束をしている男こそ、行方不明事件を追っている幸太であった。

幸太が席に座ると同時に店員がお冷を持ってきたので、幸太はコーヒーを注文した。

「……あの、日代さんは独自に例の事件を調べてるんですよね?」

「ええ。上はこの事件の解決は困難と判断し、手を引いたんです」

「そんな……!だって、オーナー以外にも同じように行方不明になった人だっているんですよね?」

「ええ。その事件に関しても警察は手を引いています。解決の糸口も掴めない事件を追うより目の前の事件を追えとうるさく言われておりまして……」

幸太は警察の現状をヒカリに語ると、ヒカリの顔は真っ青になっていた。

まさか、警察がこの事件の捜査を諦めているとは思わなかったからである。

「日代さんみたいに行方不明を捜査している人はいないんですか?」

「前はいたらしいですが、今は私だけみたいです。妙な噂が流れていまして……」

「妙な噂……ですか?」

「ええ。独自に行方不明事件を追っていた刑事が事件の真相にたどり着きそうになったらしいのですが、その直後に行方不明になったらしいのです。ですので、この事件の真

相を探ろうとしていている者は消されるという噂が流れていましてね」

幸太は、先輩刑事である修吾の話していた噂話をヒカリに話した。

「そんな……。そのいなくなつた人は手がかりを残さなかつたのですか？」

ヒカリの問いに幸太は無言で頷いていた。

幸太や修吾の話していた噂は実は本当であり、事件を追っていた刑事はホラーの存在を知り、そのホラーに捕食されたため、行方不明となつていたのである。

そのため、刑事内部でこのような噂が流れ、捜査打ち切りのきつかけとなつてしまつたのである。

ヒカリが手がかりがないことに絶望していると、幸太の注文したコーヒーが来て、幸太の前に置かれた。

幸太はコーヒーを一口ゆつくりとすすっていた。

「……：そういえば、東さんも独自に調べていたんですよね？何か手がかりはないんですか？」

「手がかり……：ですか」

ヒカリは表情が暗くなりながらも自分の知つていることを語つた。

「オーナーが行方不明になつた時に一人の少年がいたような気がするんです」

ヒカリの話した情報に幸太はピクツと反応していた。

「少年……ですか？」

「ええ。私もオーナーがいなくなる前は画廊で個展の準備をしていたんです。ですけど、準備を終えた後の記憶が曖昧で……」

「まさか、その少年が行方不明事件に関わっているとか？」

「私もそう思いました。それで探偵を使ってまで探りを入れたんですけど、全く手がかりは得られませんでした。その少年が月影統夜って名前で、桜ヶ丘高校に通ってるってことしか」

「……月影？どこかで聞いたような……」

幸太は統夜の名前に心当たりがあった。

「あの、もしかして、その少年は赤いコートを羽織ってたりしてませんか？」

「あ、そういえば、赤いコートを羽織ってた気が……」

統夜は魔戒騎士の勤めを果たしている時は赤いコート……魔法衣を着ているが、ヒカリはそのことを覚えていた。

「！もしかして、その月影統夜って……」

「！何か知ってるんですか？」

「ええ。実は私には妹がいるんですが、妹が彼に惚れており、彼にフラれてしまったみたいなんですよ」

「何よ、あいつ。ただの女たらしなのかしら……」

ヒカリは昨日、統夜が梓と一緒にいるところを見ており、その話を聞くと、統夜が女たらしなのではないかという疑惑を持っていた。

「……その彼に話を聞ければ何か手がかりが得られるのだろうか……」

「恐らく無駄ですね。私も色々探りを入れつつ、直接聞きましたけど、あいつはシラを切り通してまして」

ヒカリは統夜と会う度に話を聞いていたのだが、有力な話は全く聞けなかった。

「……彼は事件とは関係なさそうだけど、1度彼に話を聞いてみたいですね」

幸太は、統夜から話を聞けば何か手がかりが得られるかもしれないと考えていた。

幸太は刑事として手がかりを得られる可能性があれば、徹底的に追求する人物であるため、是が非でも統夜から話を聞こうと思っていた。

「……あつ、そういえば、東さんは銀の狼の都市伝説って知ってます？」

「……銀の狼？」

ヒカリはこの都市伝説は知らなかったのか、首を傾げていた。

「それによると夜な夜な怪物が現れて、それを銀の狼が退治するとか」

「……銀の……狼……」

初めて聞く言葉であるのだが、ヒカリはその言葉に引っかけかかりを感じていた。

「……………？東さん？」

「あつ、いえ。何でもありません！怪物とかいるわけがないのに可笑しい話ですよねえ」

ヒカリは苦笑いをして話を誤魔化そうとしていた。

（……………何でだろう……………。私……………もしかして、その銀の狼とやらを見たことがあるの……………？）

銀の狼という言葉に引っかけかかりを感じていたヒカリは、その銀の狼の存在を知っているのではないかという疑惑を持っていた。

ヒカリはその疑惑を必死に払拭しようとしていた。

しかし、ヒカリは銀の狼という言葉聞き、ホラーや魔戒騎士について思い出しそうになっていた。

ホラーに関する記憶を消された者が再びホラーに出くわすようなことがあれば、その時の記憶を思い出してしまう。

そのような前例は滅多にないのだが、全くないという訳ではなかった。

お互いに行方不明事件について情報交換を終えた2人は、喫茶店を後にすると、世間話をしながら街を歩いていた。

しばらく歩いていると、銀行の前でヒカリが足を止めた。

「……………？東さん？どうしました？」

「あつ、すいません。ちよつと銀行に寄つても良いですか？今日がバイトの給料日だつてことを忘れてまして」

「もちろん、良いですよ」

ヒカリはバイト代を降ろすために、銀行へと立ち寄つた。

ヒカリと幸太がATMコーナーに移動すると……。

「……あ、あいつは!!」

ヒカリは今現在進行形でお金を降ろしている赤いコートの少年を指差した。

「！彼がさつき話をしていた？」

幸太も妹である玲奈の写メで統夜を見ているハズなのだが、赤いコートを着ているのが統夜とすぐにはわからなかった。

「日代さん、せっかくだから話を聞いてみたらどうですか？」

「そうですね。そうします」

幸太が統夜から話を聞こうと決めると、統夜がお金を降ろし終えてお金を財布に入れていた。

そして、一箇所しかない出入り口に向かうのだが、統夜はヒカリの存在を見つけ、表情が歪んでいた。

(……げ、何でこんなところであいつに会うんだよ……)

統夜は朝からエレメントの浄化を行っており、その仕事もひと段落したので、お金を降ろすために銀行へ立ち寄ったのである。

お金を降ろし終えると、偶然ヒカリの姿を見つけたという訳である。

《またあのお嬢ちゃんか。統夜、今日はついてないみたいだな》

(そうだな。また例のこと聞かれるんだろうな……)

統夜は何度もヒカリに同じようなことを聞かれているため、正直げんなりしていた。

それでも無視は感じ悪いと思ひ、ゆっくりとヒカリと幸太に近付いていった。

幸太が統夜に話しかけようとしたその時だった。

——バァン!!

突然乾いた爆発のような音が聞こえてきた。

それが銃声であることは銀行内にいた誰もが理解し、あちこちから悲鳴が聞こえてきた。

「ガタガタ騒ぐんじゃねえ! 騒ぐとぶち殺すぞ!」

銃を手にした男は、顔がバレないようにマスクを被っていた。

男は1人ではなく、同じような格好をしている男があと3人もいた。

この4人組が銀行強盗であることは誰の目にも明らかだった。

統夜はそんな銀行強盗たちを見てため息をついた。

(……あーあ、面倒くせえ。銀行強盗かよ……)

銃で武装した銀行強盗でも統夜の敵ではなく、統夜はげんなりとしていた。

《やれやれ……。統夜、お前さんは今日厄日なんじゃないのか?》

(そうかもな)

《なあ、どうするつもりだ?》

(とりあえずしばらくは様子を見る。誰かが危なくなったら実力行使で取り押えるさ)

《おいおい、人間の事件にあまり首を突っ込むなよな……》

魔戒騎士はホラーから人を守るのが使命であり、人間の起こした事件には介入してはならないという暗黙の掟があった。

しかし……。

(この場合は仕方ないだろ? 現在進行形で巻き込まれてるんだからな)

《た、確かにそうだが……》

イルバが統夜がこの事件に介入しようと考えていることに異議を言おうとしたその時だった。

「おい、お前ら! こっちに集まれ! 余計なことしやがったら撃ち殺すからな!」

強盗たちは、統夜、ヒカリ、幸太を含む一般客を一箇所に集めていた。

統夜はその気になれば即相手を黙らせることは出来るのだが、他の人に被害が及ぶ可

能性を考え、今は強盗の指示通り動くことにした。

一般客たちは一箇所に集められ、突然の出来事に恐怖して震えていた。

強盗の1人が人質となった一般客に銃を突きつけ、動けないよう見張り、残りの3人が銀行員を脅して金を奪い取ろうとしていた。

(……さて、どうしたものか……)

一般客が恐怖で怯えるなか、統夜は冷静であり、どのように強盗たちを鎮圧するか考えていた。

《おい、統夜。本気でこいつらを鎮圧するつもりか?》

(この後番犬所に行きたいんだ。さっさと解決させたいんだよ)

統夜はお金を降ろした後は番犬所に顔を出す予定だった。

しかし、このような事件に巻き込まれて、それが長引けば番犬所に行くことが出来なくなってしまう。

統夜はそれを避けるためにこの状況をどうにかしようとしていた。

(……奴らは全部で4人か……。真正面から攻めるのは危険か……。奴らの弾なんてよければ、流れ弾が誰かに当たったら大事だからな)

真正面から鎮圧するのは、他の人を巻き込む可能性があり、危険であると統夜は判断した。

(こうなったら、俺が囮になって一気に鎮圧するしかないか……)

統夜は魔法衣の中に隠し持つてる何かを取り出そうとしたその時だった。

「……おい、お前。何をするつもりだ？」

統夜の行動を見ていた幸太は統夜に小声で声をかけた。

「……何って……。奴らを鎮圧するんですよ……」

「馬鹿なことはやめろ。危険すぎる」

幸太は統夜の安全を考えて統夜を制止した。

「……止めても無駄ですよ。あんたは大人しくしてて下さい」

「……私は警察だ。君を危険に晒す訳にはいかない」

「！」

統夜は幸太が警察だと知り、驚きを隠せなかった。

警察の目がある以上、迂闊な行動は出来ないからである。

「……あんたは何か作戦はあるんですか？」

「とりあえず奴らに金を持たせて、隙が出来たところを取り押える」

「悠長過ぎますよ。それに、あんた一人じゃ無理だ」

「無理ではない。俺ならやれる」

幸太は刑事として、強盗相手に引けを取らないと自負していた。

統夜と幸太が小声で相談をしていたその時だった。

「……おいそこ！何こそこそしてやがる!!」

統夜と幸太の密談に気付いた強盗の1人が2人に銃を突きつけた。カチャリと銃の音が聞こえるのと同時に統夜は舌打ちしていた。

(……あーあ、バレちまったか……。こうなったら仕方ない……)

統夜はこのまま強盗たちの視線を統夜に向けさせ、隙が出来たところを鎮圧する作戦を決行することにした。

《おい、統夜。相手は普通の人間なんだ。手加減はしろよ》

(わかってるって)

統夜はこのまま強盗たちの視線をこちらに向けさせることにした。

「……おい、その赤いコートのガキ。立て」

統夜は相手の言うことを聞いてゆっくりと立ち上がった。

「……両手を上げろ」

統夜は再び言うことを聞いて、両手をゆっくりと上げた。

(……さて、そろそろかな……)

統夜はそろそろ相手を鎮圧させようと考えていた。

「おい、その暑苦しいコートを脱げ」

「……今、両手上げてるんすけど」

「いいからさっさと脱ぎやがれ!!」

統夜の反抗に苛立った強盗の1人は銃を統夜に突きつけた。

(……ばっ?! あいつ馬鹿なの?! 何で相手を挑発するのよ?!)

ヒカリは統夜の行動をハラハラしながら見守っていた。

(……くそ、こうなったら仕方ない……)

幸太は統夜に何か起こる前に強盗たちを取り押えようと考えていた。

統夜は指示通りに魔法衣を脱いだ。

「……これでいいですか?」

「それを床に置け」

「ええ? これ俺のお気になのに」

統夜は相手の視線を統夜に釘付けにするあめにあえて挑発的な態度をとっていた。

「うるせえ! さっさと置かねえと殺すぞ!」

強盗の1人は銃の撃鉄を上げて、統夜を脅した。

統夜はそれに怖がることはなく、ため息をついていた。

「わかりました……よ!!」

統夜は魔法衣を床に置くと見せかけて、強盗の1人目掛けて投げつけた。

魔法衣が顔面に覆われた強盗の1人は視界が見えなくなり、統夜はその隙に蹴りを放って相手を吹き飛ばした。

統夜の蹴りは強力で、吹き飛ばされた男はそのまま気絶してしまった。

「てめえ！何してやがる！」

強盗の1人が統夜に銃を向けたその時だった。

「させない！」

幸太が強盗の1人目掛けて飛びかかり、蹴りを放って相手を行動不能にした。

「……やっぱりそう来たか」

統夜はこれを予想しており、笑みを浮かべていた。

しかし、この乱闘に一般客たちは悲鳴をあげていた。

「てめえら、ぶっ殺して」

ぶっ殺してやると言い切る前に統夜はその男を蹴り飛ばし、相手を行動不能にした。

「てめえ、死ね！」

最後に残った1人が、統夜に発砲した。

その瞬間、一般客たちは悲鳴をあげるのだが、統夜はニヤリと笑みを浮かべていた。

そして、完全に銃弾の軌道を読み、無駄のない動きでかわしていた。

「……!?嘘だろ!?こいつ、避けやがった！」

統夜が銃の発砲をかわしたことに驚いた男は呆然としていた。

そのため隙だらけになった男を、幸太が殴り飛ばし、相手を行動不能にした。

こうして、4人の強盗たちは統夜と幸太の活躍で鎮圧された。

安全が確保されたこの場にいる人たちは、大きな歓声と拍手を送っていた。

「……ふう、何とかなかったか」

統夜は無事に強盗たちを鎮圧することが出来て安堵していた。

(……ま、後は警察の仕事だ。あいつらは人間の法で裁いてもらうさ)

統夜は直接人間に手を下すことは出来ないため、それを人間の法に託した。

「……おい、お前ー」

統夜のあまりに無茶な行動に異議を唱えるべく幸太が詰め寄ってきた。

「今回はたまたま上手くいったから良いものの、失敗したらお前の命はなかったんだぞ

!?!? わかってるのか!?!」

幸太の声には怒気が含まれており、今にでも統夜に殴りかかりそうだった。

「失敗はしないさ。俺は1人でも何とかなかったけど、あんたがフオローしてくれろと思ってたしな」

統夜は自分の行動を正当化しているので、全く悪びれる様子ではなかった。

「……っ!?!? お前な!?!」

「それよりもあんたは刑事ですよ？俺に詰め寄る前にやることがあるんじゃないの？」

「……っ！お前には後で聞きたいことがある。逃げるなよ!!」

幸太は気絶した犯人に手錠をかけるために移動を開始し、持っていた手錠を犯人にかけていた。

「……あんた、逃げるんじゃないわよ」

統夜がその場から逃げないよう、ヒカリが見張りをしていた。

「……逃げないよ。逃げたら余計面倒なことになりそうだし」

本来なら素早くその場から離れようと考えていたが、刑事である幸太から逃げたら面倒なことになると判断し、その場に留まることにした。

《番犬所行きはかなり遅くなりそうだな》

(……ああ。それが悔やまれるけど、仕方ないな)

統夜は事件が落ち着くまで、ヒカリとともに幸太を待っていた。

すぐに他の警官が駆けつけ、銀行強盗をしようとした犯人を次々とパトカーに連行していった。

(へえ、まるで刑事ドラマを見ているみたいだな)

統夜は多くの警官がバタバタと動き回る様子を見て、刑事ドラマを連想させていた。

数分後、所轄の刑事に事件の引き継ぎを行った幸太は、統夜とヒカリのもとへ戻ってきた。

「……ああ、待たせてすまなかつたね」

「……それで、俺に何の用事なんです？これから行くところがあるんで手短にしてもらえれば助かるんですけど」

統夜は面倒そうな態度を取っていた。

「……ここでは目立つから移動しようか」

統夜たちは落ち着いて話をするため、人気がない裏口まで移動した。

「……それで、俺に聞きたいことは？」

「君は、梅雨頃にとある画廊のオーナーが行方不明になった事件を知っているか？」

「知ってるも何も、この人に散々その話は聞かれましたよ。俺、美術部でもないのにあんなところに行く用事はないですよ。俺っぽい人がいたっていうのは気のせいじゃないんですか？」

統夜はヒカリに事件のことを問い詰められた時もこのように返して誤魔化していた。

「……」

幸太は刑事としての勘で、これ以上統夜に何を聞いても無駄だということを悟った。

「……それじゃあ、質問を変えよう。君は、銀の狼の都市伝説は知っているか？」

「……まあ、クラスでもその話題になったことはあったし。……俺を含めて誰も信じちゃいないけど」

統夜は冷静に都市伝説のことを答えていたのだが……。

（……まったく、俺とホラーの戦いが都市伝説になってやがるんだよなあ。誰も信じてないのが幸いだけど）

《そうだな。一歩間違えれば一気に広まりそうな話だがな》

（そこは気を付けるつもりさ）

統夜は魔戒騎士やホラーの存在を何も知らない人に広めないように気を配っていた。

一般人にホラーの話を話せば、隣人がホラーではないかと疑心暗鬼に陥り、大混乱になることは火を見るよりも明らかだからである。

そのため、統夜を含む魔戒騎士たちは、一般人にホラーのことを知られないよう心がけ、一般人がホラーとの戦いに巻き込まれた時はホラーに関する記憶を消すという掟に従って行動していた。

「……他にも聞きたいことは？」

統夜は質問がなければさっさとその場を離れようと考えていた。

「君は強盗たちを軽々と蹴散らしていたね。君は何者なんだ？」

「俺は普通の高校生ですよ。護身用に格闘技は習ってましたけどね」

統夜は幸太に怪しまれないようにこのような嘘をついていた。

格闘技の心得があるとわかれば、幸太も渋々でも納得すると思っただからである。

「……」

幸太は疑いの目で統夜を見ていたが、統夜の嘘を暴くことは出来なかつたので、何も言えなかつた。

「話はもう終わりですか？ だつたら俺はもう行きますね」

幸太とヒカリはこれ以上統夜を引き止めることは出来ず、統夜はその場を離れ、番犬所へと向かつた。

※※※

番犬所に到着した統夜は、イレスに挨拶をすると、狼の像に魔戒剣を突き刺し、魔戒剣の浄化を行った。

「……統夜、指令です」

統夜が魔戒剣を鞘に納めてしまったタイミングで、イレスはこう告げた。

指令書を受け取った統夜は、魔導火を用いて指令書を燃やすと、そこから飛び出してきた指令の内容を確認した。

統夜が指令の内容を読み終えると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

「……わかりました。さっそく、ホラーの討伐に向かいます」

「頼みましたよ、統夜」

指令の内容を確認した統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

その後、イルバのナビゲーションを頼りに、ホラーの搜索を開始した。

統夜と別れた幸太とヒカリは、その後も行方不明事件について意見交換や、現場の調査などを行っていたが、手がかりはまったく得られなかった。

気が付けば夜になり、2人は画廊付近の道を歩いていた。

「……すつかり遅くなりましたね……」

「すみません、東さん。遅くまで付き合わせてしまいました」

「いえ。私も事件について調べたいって思っていましたから」

ヒカリは今日一日幸太と色々捜査をしていたのだが、それはヒカリのやりたいことでもあり、嫌という感情はなかった。

「とりあえず、早く帰りましょうか。今日はもう遅いので、送りますから」

幸太はヒカリを家に送り届けるためにヒカリの家に向かっていた。
すると……。

「……あれ？」

「？東さん？どうしました？」

何かを発見したヒカリは足を止め、幸太も足を止めたのだが、何故足を止めたのかわからず首を傾げていた。

「……あれっでもしかして……」

「！月影統夜!?何でこんなところに……」

ヒカリは統夜の姿を発見したので足を止めたのであり、幸太も統夜の姿を見つけた。

「とりあえず尾けてみましょう。日代さん」

「仕事柄気は進みませんが、行きましょう」

ヒカリと幸太は、統夜の後を追いかけて、統夜が何をしようとしているのか様子を見ることにした。

そんな中、統夜は早々にヒカリと幸太の尾行に気付いていた。

(……はあつ、またあの2人かよ……)

尾行しているのがヒカリと幸太であるとわかった統夜はため息をついていた。

《あいつら、このままついて行くつもりか?》

(このまま尾けられるのもうざったいけど、逃げたらまた面倒なことになるんだろうな)

《?統夜、お前、まさかとは思うが……》

(あの2人にホラーを見せてホラーを倒した後に事情を説明する。それであの2人がホラーの秘密を話そうとするなら完全に記憶を消してやるさ)

統夜はこれ以上付きまとわれないようにあえてホラーを見せる決意をしていた。

その後どうするかは2人次第だということも考えていた。

《おいおい、お嬢ちゃんはともかくあの男は刑事だろ?大丈夫なのか?》

(大丈夫だよ。あの人は刑事だからこそ、ホラーの存在を公にしたらどうなるかはわかるだろ。それがわからん愚か者なら記憶を消してやるさ)

イルバは幸太が刑事であることを憂いていたが、統夜は何とかなると考えていた。

《……わかったよ。統夜、上手くやれよ》

(わかつてるって!)

統夜はイルバとテレパシーで会話しながらホラーのいる場所まで移動していた。

ヒカリと幸太はそんな統夜の思惑など知る由もなく、統夜についていった。

歩くこと数分。統夜が足を止めたのは桜ヶ丘の街はずれにある今は使われていない広場だった。

「……あいつ、何でこんなところに？」

「もしかして、誰かを待っているのだろうか……」

ヒカリと幸太は、統夜から少し離れたところに隠れて統夜の様子を見ていた。

統夜はヒカリと幸太が安全な場所に隠れているのを確認すると、いつでも魔戒剣を取り出せるようにしていた。

すると……。

『……統夜、来るぞ!!』

イルバがこのように宣言すると、統夜の目の前にこの世のものとは思えない怪物が姿を現した。

「……!? な、何だ!? あの怪物は!？」

「……!!」

幸太はこの世のものとは思えない怪物を見て愕然としていたのだが、ヒカリはその怪物……ホラーを見ると、目を大きく見開いて固まっていた。

この時、ヒカリの脳裏には、ホラーへと変貌したオーナーの姿や、統夜が召還した奏狼の鎧の姿が映し出されていた。

「……………あぁ……………!」

ホラーに関する記憶を思い出したヒカリは、脳内に大量の情報が送られ、表情を歪めて頭を抱えていた。

幸太はすぐにヒカリの異変に気付いていた。

「……………あ、東さん!?!大丈夫ですか!?!」

そしてすかさず声をかけるものの、ヒカリは何も答えなかった。

しばらくその状態が続くと……………。

「……………私、思い出した……………」

ホラーに関する記憶を全て思い出し、情報も全て得たヒカリは、自分の状態が落ち着いてからこのように語り始めた。

「思い出したって……………何をですか?」

「行方不明になったオーナーはあの怪物みたいな怪物で、私を喰おうとしたんです……………」
「!?!何ですって!?!」

普通に考えたら信じられない話であったが、ホラーを實際目の当たりにした幸太は、ヒカリの話を信じざるを得なかった。

「それで、その怪物から私を助けてくれたのがあいつなんです」

「彼が……………怪物を?」

幸太はその話を聞いた瞬間、統夜が銀行強盗を軽々と撃退したことを思い出し、怪物を倒せるならと納得していた。

ヒカリが全てを思い出し、幸太と共に統夜の戦いを見守っていたその時だった。

統夜は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

「!!」

「……」

幸太は統夜の身に纏った銀の鎧を見て驚きを隠せなかった。

そしてヒカリは、ホラーのことを思い出したので、自分を救ってくれたのがこの銀の鎧の騎士だということを思い出したので、そこまで驚いてはいなかった。

「あの銀の鎧……まさか、都市伝説になってる銀の狼……なのか?」

幸太は、目の前に雄々しく佇む銀の狼の騎士が、都市伝説になっている銀の狼なのではないかと思っていた。

都市伝説の存在を目の当たりにした幸太は目を大きく見開いて驚いていた。

幸太とヒカリがジッと統夜を見守るなか、統夜は皇輝剣を一閃し、ホラーを真つ二つに斬り裂いた。

真つ二つに斬り裂かれたホラーは消滅し、そのことを確認した統夜は鎧を解除し、元

に戻った魔戒剣を青い鞆に納めた。

ホラーがいなくなっただことを確認した幸太とヒカリは統夜に駆け寄った。

「あんたら、怪我はないか？」

「もしかして、お前は俺たちが尾けてることを？」

「ああ。気付いていたよ」

「それにしてもお前は何者なんだ？それに、あの怪物は……」

幸太は統夜の戦いを見届けた上で感じた疑問を投げかけた。

「……今日見たことは忘れた方がいい。平穏な日常を過ごしたいならな」

「ふざけるな！俺は刑事だ！あんな化け物があるのに放っておけるか！」

幸太はどうしても怪物について知りたいと思っており、統夜はため息をついた。

「……ねえ、あんた。画廊のオーナーってもしかして……」

「ああ、記憶を取り戻したんだな。あの人はさっきの怪物と同じホラーになっちゃったんだ。あんたも喰われそうだったんだからな」

統夜がオーナーについて説明を聞くと、やはりそうだったのかと思い、ヒカリは納得していた。

「……もしかして、君はオーナーが行方不明になった事件の真相を知っているというのか？」

「まあ、そうなるのかな。オーナーは化け物になったなんて言ったところで信じてもらえないからな」

「……」

幸太は自分の知りたがっていた真実が意外なものであり、唾然としていた。

「……なあ、教えてくれないか？君が一体何者なのか。そして、あの怪物はいつたい何なのか」

幸太は新たに気になる疑問を統夜にぶつけ、それを教えるよう頼んでいた。

「……まあ、教えても良いが、条件がある」

「条件？」

「今から言う話を例え身内だろうと公言しないこと。これから話す話はそれだけ広まったらやばい話なんだ。それを守れないなら俺は教えるつもりはない。例え警察が強行手段に出ようとな」

統夜は鋭い目付きで幸太を睨みつけた。

「……っ！」

統夜の放つ殺気が高校生のものとは思えず、幸太は思わずたじろいでしまった。

そして……。

「……わかった、約束しよう。どうせ上に話しても信じてもらえない話だ。これからの

話は俺の胸の中に収めておくさ」

「……あんたが話のわかる人で安心したよ」

幸太の言葉に嘘はなく、そのことを察した統夜は安堵していた。

「……私にも教えなさいよ。私だつて周りに話すつもりはないから」

ヒカリも魔戒騎士やホラーの話が聞きたいのか他言はしないと宣言していた。

「……わかった。それじゃあ話すよ。あの怪物……ホラーと、それを狩る俺たち魔戒騎士のことを」

統夜はゆっくりとした口調で語り始めた。

ホラーが陰我のあるオブジェをゲートに現れて人に憑依し、人を喰らう怪物であるということ。

そして、それを狩るのが魔戒騎士であるということ。

イルバは何も語りはせず、説明は統夜に一任していた。

「……」

統夜の語るホラーや魔戒騎士の話があまりに非日常的な話だったため、幸太とヒカリは言葉を失っていた。

「これでわかっただろ？何でこの話が他言無用だつて言ったのかを」

「そうだな……。こんな事が一般市民に広がれば隣人が人を喰らうホラーではないかと

疑心暗鬼になり、大混乱になる。俺だってそうとわかって上に話す気は毛頭ないよ」

幸太はホラーの話が広がればどうなるかを理解していたため、この話を広めるつもりはなかった。

「私だって話すつもりはないわ。オーナーが何で行方不明になったのかわかった訳だし」

ヒカリは元々オーナーが行方不明になった事件の真相が知りたかっただけなので、真相を知った後もそれを誰かに話すつもりは最初からなかった。

「まあ、こんな話を聞いた後なんだ。俺に出来ることがあれば言ってくれ。力になるから」

幸太は刑事という立場から統夜をサポート出来れば良いと考えていた。

統夜にとってはそれはありがたいと思っていた。

刑事である幸太を味方に出来れば、都合の良いことが多いからである。

「その時はよろしく頼むよ。……えっと……」

「そう言えば自己紹介をしてなかったな。俺は日代幸太。よろしくな」

「日代？どこかで聞いたような……」

統夜は幸太が名乗った苗字に聞き覚えがあり、うーんと考えていた。

すると……。

「俺には妹がいるんだ。桜ヶ丘高校に通ってるな」

「!!まさか、あんたはあの子の……!!」

「ああ、兄だ」

「……」

幸太の妹である玲奈は、統夜に一目惚れをしており、バレンタインの時に勇気を出して告白したのだが、フラれてしまった。

幸太が自分のフった女の子の兄と知り、少しだけ気まずい雰囲気になっていた。

「……わ、私は東ヒカリよ!そう言えばまだ名乗ってなかったからね!」

ヒカリは気まずい雰囲気を払拭させるために自己紹介をした。

「私は画家になるため頑張ってるわ。御月カオルさんみたいな画家になるのが私の夢

」よ」

「へえ、あんたはカオルさんに憧れてるんだな」

「!!あ、あんた!カオルさんを知ってるの!?!」

「知ってるも何も知り合いなんだけど……」

「な、何ですって!?!」

統夜がカオルの知り合いと知ったヒカリは驚きながら統夜に詰め寄っていた。

「今度、カオルさんに会わせなさい!!」

「わ、わかったけど……。カオルさんは今臨月だから、いつ会えるかは……」
「え!? そうなの!？」

ヒカリはカオルが既婚者であることを知らず驚いていた。

「今度……詳しい話を聞かせなさいよ!」

「わ、わかったよ……」

憧れであるカオルに会いたいと思っているヒカリの鬼気迫る表情に統夜はタジタジになっていた。

「そういえば、俺の自己紹介がまだだったな。俺は……」

「月影統夜……だろ?」

「アハハ……それは知ってたのか……」

幸太とヒカリが統夜の名前を知っていたため、統夜は苦笑いをしていた。

「とりあえず、今日は遅いから帰ろうか。また改めて色々話を聞かせてくれ」

幸太が統夜やヒカリとまた会う約束を交わし、この日は解散することにした。

解散の前に統夜たちはそれぞれ連絡先の交換を行った。

こうして、幸太とヒカリはホラーや魔戒騎士の秘密を知り、明日からはいつもとは日常になる訳だが、何かあった時は統夜に協力することを決めていた。

統夜も、ヒカリが真実を知り、これ以上付きまとわれることがなくなり安堵していた。

しかし、カオルに憧れてるヒカリとこれから会える機会が増えるだろうかと統夜は感じていた。

だが、前みたいな気まずい感じではなく、これから良き友人になっていくだろうと統夜は予感していた。

幸太とヒカリの2人と別れた統夜はそのまま自宅へと直行した。

1つ大きな問題が解決されたことで、統夜は穏やかな表情で眠りについたのであった。

……続く。

次回予告

『夏休みも早くも半分が過ぎたか。まあ、みんなそれぞれ過ごしているみたいじゃない

か。次回、「暑中」。暑中見舞いを申し上げるぜ!!』

第82話 「暑中」

魔戒騎士にとって神聖なるイベントであるサバックがあり、梅雨あたりから事あるたびに統夜に突つかかっていた東ヒカリが魔戒騎士やホラーの秘密を知るなど、この夏休みは様々な出来事があった。

しかし、そんな夏休みもあつという間に半分が過ぎようとしていた。

そんな中、統夜は魔戒騎士として使命を果たしていた。

午前中はエレメントの浄化を行い、午後は特に予定がなければ街の見回りを行いながらエレメントの浄化の続き。

そして、夜はホラー退治と、このように統夜の毎日は過ぎていった。

というものの、ヒカリと日代幸太にホラーや魔戒騎士について話してからホラーは現れず、夜は街の見回りを行っていた。

統夜は何回かヒカリや幸太と喫茶店で話をしていた。

話と言ってもホラーや魔戒騎士に関するのではなく、他愛もない世間話が多かった。

このような機会が何度かあることで、統夜、ヒカリ、幸太の3人は友人と呼べるよう

な関係になつていた。

統夜を敵対視していたヒカリも、今や普通に統夜と話をする仲となつていた。

それ以上に、ヒカリは幸太と良い雰囲気になつており、統夜はそんな2人の仲が進展するよう密かに応援していた。

この日も、統夜は午前中にエレメントの浄化を行い、商店街で昼食を済ませた。

昼食後はエレメントの浄化を行いながら街を歩いていたのだが、偶然にも桜ヶ丘高校の付近を歩いていていた。

(……夏休みも半分が過ぎたけど、まだやつてる部活もあるんだな)

もうすぐお盆ということもあつてか部活をやっているところは少なくともゼロではなかつた。

(……軽音部もしばらく休みが続いてるしな。まあ、騎士の勤めを果たす手前、都合は良いけど、やつぱりムギの紅茶は恋しいかもな……)

紬がフィンランドに行つてから会っていないため、統夜は再び紬の紅茶を飲みたいと思つていた。

(まあ、とりあえずは騎士の勤めに集中するとしよう)

統夜が学校から離れようとしたその時だった。

「……あれ？統夜先輩？」

いきなり声をかけられたのでその方を振り向くと、制服姿の梓と憂が立っていた。

「梓と憂ちゃんか。どうしたんだ？ 2人とも制服姿で」

「私たちジャズ研にいる純に差し入れをと思ってきたんですけど、お休みみたいです」

「まあ、お盆も近いしな」

「統夜さんはお仕事ですか？」

「まあな。それでたまたま学校の近くを通ったって訳さ」

「統夜が何故学校の近くに来たのかわかった2人はウンウンと頷いて納得していた。

「統夜先輩、この後って時間ありますか？」

「まあ、エレメントの浄化はだいぶ落ち着いたし、時間はあるけど」

「それだったら、一緒に映画を見に行きませんか？ 私たち、これから映画を見に行くんですけど」

「映画か……。たまには良いかもな。別にいいだろ？ イルバ」

「統夜はイルバに確認を取っていた。

『まあ、エレメントの浄化もだいぶやったしな。別にいいんじゃないか？』

「……という訳でOKだ。俺もたまには映画を見たいと思ってたしな」

「統夜と映画を見に行けるのが嬉しかったのか、憂と梓の表情がぱあつと明るくなっ

いた。

「やったあ♪それじゃあ統夜先輩、さっそく行きましょう♪」

「ああ、そうだな」

こうして統夜は憂と梓の2人と共に映画を見に行くことになり、映画館へと移動を開始した。

※※※

桜ヶ丘の商店街にある映画館へ移動した統夜たちは、この日上映されている映画をチエックしていた。

「……統夜先輩。どの映画を見たいですか？」

「これ！」

統夜は迷うことなくある映画のポスターを指差した。

統夜が選んだ映画は『テト』と呼ばれる映画で、ヨーロッパ某所を舞台に少年とその愛犬テトの友情を描いた物語である。

統夜は動物が好きのため、迷うことなくこの映画を選んでいた、

「……あ、これですか？ 私は最初はホラー映画が良いかなって思ってたけど、私もこれが良いです！」

梓は当初はホラー映画が良いと考えていたのだが、何故か考えを改めてデトを見たいと意見を出していた。

「これだと次の上映まで少し時間があるねえ」

「だったら近くのカフェでも行くか？」

「はいっ！ぜひ!!」

こうして統夜たちは映画の上映時間まで近くのカフェで時間を潰すことにした。

統夜たちが喫茶店の中に入ると……。

「……いらっしやいま……って、統夜、いらっしやい！」

喫茶店の店員はヒカリであり、ヒカリは嫌な顔は一つせず統夜を歓迎した。

「ああ、ヒカリさん。ここでもバイトしてたのか」

統夜はヒカリや幸太のことを「さん」付けで呼んではいるが、口調はタメ口だった。

「そつちの子はこの前見たけど、こつちの子もあんたの友達？」

「ま、そんなところかな」

ヒカリは梓は以前バイト中に見たのだが、憂は初めて見るため、このように確認をとっていた。

「ふーん」

ヒカリは友達という言葉を疑ってるのか、ジト目で統夜を見ていた。

「何だよ、その目は」

「別に？統夜は女たらしなんだなあって思ってたさ」

「おいおい、そんなことはないからな……」

《いや、ある意味でお前さんはたらしかもしれないな》

（あのなあ……）

イルバまでヒカリの言葉に賛同していたので、統夜は苦笑いをしていた。

「あ、あのー！とりあえず座りましようよ」

憂は話の空気を変えるため、このように提案していた。

（ふーん、あの子、ずいぶんとしっかりしてるわね）

ヒカリは憂と知り合って何分も経っていないが、憂がよく出来た子であることを何となく理解していた。

「と、とりあえずお席へどうぞ」

ヒカリの案内で統夜たちはボックス席に移動し、席についた。

「…………注文は？」

「2人とも、好きなもの頼んで良いぞ。奢るからさ」

統夜はここでのお金は出すことを2人に告げた。

「で、でも統夜さん。悪いですよ」

「いいっていいって。遠慮はなしだぜ」

「じゃ、じゃあ…………」

憂と梓はすぐ来ると思われるジュースを注文し、統夜はアイスコーヒーを頼んでいた。

注文を聞いたヒカリは厨房の方へと移動した。

「統夜さん、すいません。奢ってもらっちゃって」

「統夜先輩、ありがとうございます♪」

「いいってことよ。とりあえずあと30分くらいはゆっくりしようぜ」

統夜たちが飲み物を注文してから間もなく飲み物が来たので、統夜たちは30分ほど飲み物を飲みながら雑談をしていた。

ヒカリは、そんな3人の様子を笑みを浮かべながら見守っていた。

30分ほど雑談を交わした後、統夜は会計を済ませてカフェを後にした。

カフェを出るとき、ヒカリは「また来てよね。友達」と一緒にね」と皮肉を込めて

言っていた。

統夜はヒカリの話を「はいはい」と受け流すと、そのままカフェを後にし、憂や梓と共に映画館へ向かった。

映画館の中に入るとチケットを購入し、ポップコーンや飲み物を購入して劇場へ向かうと、映画開始10分前になっていた。

統夜たちは席を確保すると、映画が始まるまで大人しく待っていた。

そして、映画の上映時間となると、劇場が真っ暗となり、スクリーンに映像が映し出されていた。

まず最初に近々上映される映画の予告から始まり、映画の注意事項を放送すると、ようやく本編が始まった。

映画が始まるなりこの作品の主演とも言えるテトと少年が登場し、2人は仲睦まじい姿を見せていた。

(……………これがテトか……………。可愛いじゃねえか……………！)

統夜は目をキラキラと輝かせながらスクリーンを見つめていた。

可愛い犬を無邪気に見る統夜の姿は、ホラーを狩る魔戒騎士の姿とは思えないものだった。

(……………おいおい。これがサブック準優勝の魔戒騎士の姿とはとても思えない……………)

魔戒騎士の時の統夜とはあまりにギャップがあったため、イルバは呆れ果てていた。梓と憂は統夜の顔をチラツツと見ると、テトを見てキラキラと目を輝かせており、あまりのギャップに驚きを隠せなかった。

(……統夜先輩、すっごく楽しそう……。そういえば統夜先輩って動物が好きなんだっけ?)

梓は統夜が動物好きの一面があることを思い出し、その様子を見てクスクスと笑みを浮かべていた。

(……そういえば統夜さんって動物好きだったよね? 普段とのギャップがすごく可愛い♪)

憂も統夜が動物好きの一面があることを知っており、梓同様に笑みを浮かべていた。そんな感じで映画を見ていた統夜たちだったが、映画も中盤のシーンとなった。

主人公の少年とテトはひよんなことから別れなければいけなくなり、少年はテトとの別れを惜しんでいた。

『……テト! 嫌だよ! 僕はテトと離れたくない!!』

少年はテトを抱きしめてこのように懇願していた。

このシーンを真剣な眼差しで見ている統夜は……。

「……」

ボロボロと涙を流して号泣していた。

(……………うう、何だよ。かわいそうじゃねえか!)

魔戒騎士である統夜は涙を人前で見せることはほぼないのだが、動物が絡む映画を見ると感情移入をし過ぎて号泣してしまう。

この映画も動物が絡む映画であるため、統夜はあり得ないくらい号泣していた。

上映中なので声は出していないものの、涙の量が多かったので、ハンカチとティッシュを使用していた。

統夜の席付近の客は、統夜のあまりの号泣ぶりにドン引きしていた。

(……………と、統夜さん!?)

(と、統夜先輩がここまで泣くの初めて見たかも……………)

憂と梓はここまで泣く統夜を初めて見たので、引くというよりは困惑していた。

(やれやれ……………。統夜のやつこの手の映画には弱いんだよな……………。さすがに泣き過ぎだけどな……………)

イルバは統夜が動物が絡む映画を見ると感情移入し過ぎて号泣することは知っていたが、この映画では今まで以上に号泣しており、それを見てドン引きしていた。

(本当にこれがサバック準優勝の騎士なのか? 本当に疑いたくなるぜ)

イルバはさらに統夜の魔戒騎士としての姿とのギャップに改めて呆れていた。

そして映画はクライマックスを迎えていた。

紆余曲折を経て主人公の少年は無事にテトと再会し、テトを抱きしめた。

そんな2人の友情を祝福するかのように鐘の音が鳴り響いていた。

『テト!!テト!!もう離さないからな!』

こうして映画はエンディングを迎えるのだが、統夜は中盤から最後までずっと泣きっぱなしだった。

統夜の席付近の客は統夜のあまりの号泣ぶりにドン引きし、もらい泣きするということとはなかった。

憂と梓も統夜のあまりの号泣ぶりに困惑してしまい、映画に感動することは出来なかった。

とりあえず映画は無事に終わり、真っ暗だった劇場内に明かりがつくと、客たちは次々と劇場から出て行った。

「…………いやあ、良い映画だったな♪感動したよ」

泣くだけ泣いてスッキリしたのか、統夜の表情はとてもイキイキとしていた。

「あ、アハハ…………そうですね…………」

憂と梓はそんな統夜を見て苦笑いをしていた。

「…………おっと、そろそろ番犬所に行かないと。梓、憂ちゃん。今日はありがとな」

「は、はい………」

「それじゃあ、またな！」

統夜は劇場を後にして、そのまま番犬所へと向かったのだが、憂と梓は呆然としながらその様子を見守っていた。

番犬所に到着した統夜はイレスに挨拶をすると、狼の石像に魔戒剣を突き刺し、魔戒剣の浄化を行った。

今日もホラー討伐の指令はなかったため、統夜はイレスと少しだけ話をした後番犬所を後にした。

この日は夜遅くまで街の見回りを行ってから家路についた。

※※※

それから何日かが経過して、お盆も過ぎていった。

統夜のような魔戒騎士にお盆は無縁なイベントであり、お盆の日も普段通り魔戒騎士

としての務めを果たしていた。

そしてこの日も、統夜はエレメントの浄化を行いながら街を歩いていた。

「……はあっ!!」

統夜はとあるオブジェから飛び出してきた邪気を魔戒剣で斬り裂いた。

「……よしー!」

邪気が消滅したことを確認すると、統夜は魔戒剣を青い鞘に納め、魔戒剣をしまった。

「……イルバ、あとどれくらいだ?」

『戒人もだいぶ浄化してくれてるからな。やってもあと1つくらいだな』

「あと1つか……。イルバ、それはここから近いか?」

『ああ。ここからそんなに離れてないぜ』

「したらさっさと片付けに行こう。その後寄りたいたいところがあるからな」

『寄りたいたいところ?』

「まあ、すぐにわかるさ」

統夜はイルバのナビゲーションを頼りにこの日最後となるオブジェへと移動を開始した。

イルバの言う通り、先ほどの場所からそれほど離れておらず、10分もかからないうちに到着し、統夜は早々にオブジェから飛び出してきた邪気を魔戒剣で斬り裂いた。

これで、この日行うノルマは達成され、それを確認した統夜はとある場所へと移動を開始した。

その場所とは……。

「……みんな、待たせたな！」

桜ヶ丘某所にある図書館であり、その入り口には唯、律、漑、紬の4人が待っていた。

「やーくん遅いよお!!」

統夜の到着が遅かったからか、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「悪い悪い。それでもエレメントの浄化を急いで終えてきたんだぞ」

統夜は遅くなったことを詫びながらもこのような言い訳をしていた。

統夜がこの図書館を訪れたのは律から前日に連絡があり、紬が今日帰ってくるのでみんなで勉強会をしようというものだった。

統夜は待ち合わせの時間の前にエレメントの浄化を終わらそうと努めるが、少しだけ遅れてしまった。

「まあまあ♪統夜君もちゃんと来てくれたんだし、さっそく中に入りましょう♪」

「そうだな。中に入ろうぜ！」

「ああ。さっさとやることやっちゃまおうぜ！」

統夜たちは図書館の中へと入っていった。

今日統夜たちが図書館に集まったのは、全員で勉強会をするためである。

澪と紬は進学を決めており、唯と律は変わらず進路は未定であるが、進学に向けての勉強を行っていた。

統夜は進学も就職もしないためこのような勉強は意味がないのだが、統夜は受験勉強ではない勉強をしようと考えていた。

唯たちは席につくなり教科書や参考書を取り出して勉強を開始した。

そんな中、統夜は本棚のとあるコーナーで立ち止まり、真剣な表情で本を吟味していた。

《……おい、統夜。お前の勉強しようとしてるのはもしかして……》

(ああ、動物についての本だよ。暇つぶしに勉強するには良いだろう?)

統夜は唯たちが受験勉強をしている間に動物についての勉強を行うことにした。

《やれやれ……。お前さんは本当に動物が好きなんだな……》

(もちろんだ!もし俺が魔戒騎士じゃなかったら多分獣医を志していたと思うぜ)

統夜はもし自分が魔戒騎士でなかったら獣医になりたいとさえ考えていた。

《お前さんが動物好きなのは知っていたが、そこまでだったとは初めて知ったぜ……》

統夜の意外な一面を垣間見たイルバは驚きを隠せなかった。

統夜は数冊の本を選ぶと、それを手に取り、唯たちが勉強しているテーブルに戻って

きた。

すると……。

「おつ、やーくん。それ、何の本なの？」

「ああ、これは動物に関する本なんだよ」

「へえ、統夜君って動物が好きなのねえ」

「それは意外だなあ」

「ああ。私もそう思う」

唯たちは統夜の意外な一面を知り、驚いていた。

「ああ、そういえば憂がやーくんとあずにゃんと映画を見に行っただって言ってたけど、動物の映画だったの？」

唯は妹である憂から話を聞いたのか、統夜が憂と梓の2人と映画を見に行っただけをあっさりバラしていた。

すると……。

ガタツ!!

漣、律、紬の3人は即座に反応していた。

「へえ……映画に……ねえ……」

「それは知らなかったなあ……」

「詳しく話を聞きたいわねえ……」

澤、律、紬の3人はどす黒いオーラを放って統夜を睨みつけていた。

「うっ……」

そのオーラにたじろいだ統夜は冷や汗をかいていた。

「お、お前から勉強するんだろ？」

統夜は慌てて話題を変えていた。

澤、律、紬の3人は納得していないものの、渋々勉強を再会した。

統夜はその様子を見て安堵すると、本棚から持ってきた本を読み始めた。

唯はその様子を見て笑みを浮かべると、唯も勉強を開始した。

統夜たちはそれぞれ勉強を行っており、それを3時間ほど続けた。

※※※

勉強を終えた統夜たちは図書館の入り口にいた。

現在、夕方になっており、統夜たちはこの後息抜きで夏祭りに行くことを計画していた。

このまま夏祭りの会場へ向かおうとしたその時だった。

「……あれ？ 憂？ あずにゃん!!」

唯が偶然にも近くを通りがかっていた憂、梓、純を発見して声をかけた。

それでこの3人もこちらに気付いたようである。

「あずにゃん!」

唯は梓に会えたのが嬉しかったのか、梓に駆け寄り、抱きついていた。

「あれ……？ 皆さん、どうして？」

梓は統夜たちが全員集合しているとは思っていなかったのか、驚いていた。

「ああ。さつきまでみんなで勉強しててこれから息抜きにお祭りに行こうかって話をしたんだよ」

「ま、俺はずっと読書をしてたけどな」

澁が全員揃っている理由を説明し、統夜は1人読書していることを明かした。

「すん……すんすん……。あずにゃんからプールの匂いがするう♪」

「嗅がないでくださいよ……。まあ、プールには行ってきましたけど……」

梓は憂や純と共に桜ヶ丘某所にある市民プールまで遊びに行っていた。

その帰りに偶然唯に声をかけられ、唯たちを見つけたという訳である。

「それじゃあ一緒にお祭りに行こうよ♪」

唯の提案に梓、憂、純の3人は無言で頷き、唯たちと共に夏祭りの会場に行くことになった。

夏祭りの会場に着いた頃にはすでに外は真つ暗になっており、会場は様々な屋台が置かれており、既に賑わっていた。

統夜たちはバラバラにならない範囲でそれぞれ屋台を覗いていた。

統夜は律と共に射的を楽しんでいたのだが……。

「……ああ！くそ！外した！」

「ハハ、統夜つて射的は下手なんだな」

「仕方ないだろ？俺、こういうの苦手だし……」

剣なら得意だけだな。と心の中では思っていたが、あえてそれは口に出さなかった。

「……仕方ない。あたしが見本を見せてやるよ！」

今度は律が射程に挑戦しようだった。

律はコルクを銃に詰めると、欲しい景品に狙いを定めていた。

そして……。

「よっしやあ！命中だ！」

律は見事景品を撃ち落とし、その景品をゲットした。

「へえ、上手いもんだな」

「ふふん♪まあね♪」

律は、「ふんす！」と胸を張ってドヤ顔をしていた。

「へへ、彼氏の兄ちゃんみっともないぞ。1発おまけしてやるから格好いいところ見せてやんな」

統夜のふがいない成績を見かねた店主のおじさんが、弾を1発サービスしてくれた。

「か、彼氏!？」

おじさんの思わぬ発言に律の顔は真っ赤になっていた。

統夜はそれを気にすることなく、適当な景品に狙いを定めようとしたのだが……。

「ああ、統夜。それじゃあダメだって！」

律はすぐに我に返ると、統夜にダメ出しをしていた。

「もつとしつかり狙わないと。ほら」

律は手取り足取り統夜に銃の狙い方を教えていた。

律の体の感触が伝わってきており、恥ずかしかったのか統夜は頬を赤らめていた。

店主のおじさんはそれを見てニヤニヤしていた。

統夜は恥ずかしさを振り切るために狙った景品を狙い撃つと……。

「おお！やったぞ！律！」

「よっしやあー！」

景品が取れたのが嬉しくて統夜と律はハイタッチをしていた。

「律、この景品やるよ。律のおかげで取れたんだからさ」

統夜は先ほど取った景品を律の有無を聞かずに手渡した。

「あつ……ありがと……／＼／＼／＼」

律は統夜のまさかの贈り物が嬉しかったのか、しおらしい表情でお礼を言っていた。

元氣いっぱい律の普段とは違う顔に統夜は思わずドキツとしてしまった。

これを見ていた店主のおじさんはリアクションに困って苦笑いをしていた。

すると……。

「むー……!!」

統夜が律に銃の構え方を教えてもらっていた頃から統夜と律の様子を見ていた唯と

梓がふうつと頬を膨らませて統夜を睨みつけていた。

「うおっ!? な、何だよ2人とも!!」

「りっちゃん……さりげなくやーくんとスキンシップしてる……」

「むー……羨ましいです!」

唯はふくれっ面のまま統夜を睨んでおり、梓はふくれっ面のままだが、ブンブンと手を振っていた。

「……アハハ、参ったな……」

統夜は何故唯と梓がここまで焼きもちを焼いているのかわからず苦笑いをしていた。

律は律で統夜とスキンシップが出来たのが嬉しかったのか、ドヤ顔をしていた。

「……統夜先輩。かき氷奢って下さいね」

「お、それ良いね!」

梓は統夜が律と仲睦まじくしてるのを許すかわりに、かき氷を奢るよう提案し、唯もそれに賛同していた。

「……まあ、別にいいけど」

統夜がかき氷を奢ることを了承したところで、漕、紬、純、憂も集まってきた。

紬は出店で購入した焼きそばを手にしており、満足そうにしていた。

「……みんな、どうしたんだ?」

「ねえねえ、みんな！やーくんがかき氷を奢ってくれるって！」
「ちよっ!?!お前!!」

統夜は唯と梓だけに奢れば良いと思っていたので、驚きと抗議の声をあげていた。

「いいじゃん！やーくん！」

「そうですよ！私と唯先輩だけじゃなくてみんなにも奢って下さいよ！」

「……まあ、別にいいけど……」

こうして統夜は唯たち全員にかき氷を奢ることになった。

統夜たちは全員でかき氷の出店へ向かい、唯たちはそれぞれかき氷を注文すると、そのお金は統夜が一括で支払った。

（つたく……。予想外の出費だな……。ま、みんなが楽しそうなら良いのか……）

《やれやれ、お前さんは唯たちには本当に甘いな》

（アハハ……。そうかもしれないな）

統夜とイルバはテレパシーでこのような会話をすると、統夜は苦笑いをしていた。

こうして統夜たちはかき氷を手になると、近くの階段に腰掛けてかき氷を頬張っていた。
た。

しばらくかき氷を食べていると……。

「ねえ、見へ見へ」

唯は唐突に舌を出すと、舌の一部がかき氷のシロップの色になっていた。

「や、やめろよ!」

「そういうみおちゃんだって、色変わってるよ?」

「え?」

濡は手鏡を取り出して自分の舌をチェックすると、確かに自分の舌の一部がかき氷のシロップの色に変わっており、濡はギョツとしていた。

「お姉ちゃん! あつちで金魚すくいをやってるつて!」

「あつ! やりたい!」

憂が近くで金魚すくいをやっているのを発見し、唯はやる気満々だった。

「金魚取ってトンちゃんの水槽に入れようよ!」

「同じ水槽に入れて食べられたりしないかしら?」

「ああ。食べられるだろうな。バリ! バリ! ガシャ! グチャア! つて!」

律は濡が怖がるようにわざとグロテスクな言葉を使っていた。

「や、やめろ! やめろつて!」

「そうだな。トンちゃんは金魚は食わないが金魚がかわいそうだからやめておけ」

濡は純粹に怖がつていたのだが、統夜は金魚がかわいそうという理由でトンちゃんと同じ水槽に金魚を入れるのを阻止しようとしていた。

「やーくん大げさだよお！トンちゃん小っちゃいし大丈夫だって！」
「そうだよな！大丈夫だよな！」

唯と律はこのように語りながら笑っていた。

梓は楽しげに話をして、統夜たちに見入っていた。

統夜たちはかき氷を完食し、金魚すくいに行こうとしたその時、大きな花火が打ち上がる音が聞こえてきた。

「ねえりっちゃん！あつちで花火やってるよ！」

「何い!?何故それを早く言わない?そんなに遠くはなさそうだな。よし、みんなで行こうぜ！」

統夜たちは花火を見るために一斉に駆け出した。

統夜は走りながら花火の美しさに魅入られていた。

(……綺麗だな……。まるで夢でも見てるみたいだぜ……。ホラーの存在はこんな綺麗な景色も脅かすんだ。だから、俺は守らないとな。この綺麗な景色もさ)

《ほお、お前さんにしてはロマンチックなことを考えるじゃないか。だが、俺様は嫌いじゃないぜ》

統夜は改めて人を守る決意を固め、イルバもその考えに賛同していた。

統夜は人混みを抜けると、その直後に花火が終わってしまった。

「あ、やーくん!!」

唯が近くにいた統夜に声をかけたので、統夜は唯に駆け寄った。

唯の他に漣、律、紬の姿はあったのだが、梓、憂、純の姿はなかった。

「あれ? やーくん、あずにゃんたちは?」

「あの人混みではぐれたかもしれないな」

「梓ちゃんたち、大丈夫かしら……」

紬は梓たちとはぐれたことを知り、心配そうな表情をしていた。

『まあ、あいつらのことだ。心配はないだろう』

「そうだな、俺もそう思う」

イルバと統夜は何故か梓たちは大丈夫だろうと確信していた。

『それに、ホラーも今の所は心配を感じないからな。大丈夫だと思うぜ』

さらにイルバはホラーの心配がないということを話し、それが問題ないという理由だった。

「……うん、そうかもね!」

統夜やイルバの安心させる言葉に唯が賛同し、漣、律、紬もウンウンと頷いていた。

「……とりあえず俺は街の見回りをしてから帰るよ。今日は楽しかったぜ。ありがとうな」

統夜は唯たちにこのように告げると祭りの会場を後にして、街の見回りを行った。

1時間ほど街の見回りを行った後に、統夜は家に帰った。

いつものように家の鍵を開けて中に入ろうとするのだが……。

「……………ん？なんだこりや？」

郵便受けに1枚のハガキが入っていたので、統夜はそのハガキを手に入れた。家の中に入

た。家の明かりをつけてハガキを確認すると、それは梓からの暑中見舞いのハガキだった。

「へえ、梓のやつわざわざ書いてくれたのか……」

『こんなのを書くとは、梓も随分とマメじゃないか』

「そうだな。梓にお礼の電話でもしておくか」

統夜は携帯を取り出すと、暑中見舞いのお礼をするため、梓に電話をかけた。

最初は通話中だったため、通じなかったが、数分後にはどうにか電話が繋がった。

統夜は梓に暑中見舞いのお礼を言って、その後は他愛のない世間話で盛り上がった。た。

……続く。

—— 次回予告 ——

『まだまだ夏休みは続くんだな。それに、このメンツで遊ぶのは珍しいかもな。次回、「夏期講習」。やれやれ、やっかいなことを頼まれたな』

第83話 「夏期講習」

夏休みも徐々に終わりに近付いてきたのだが、統夜はこの日も魔戒騎士としての使命を果たしていた。

「……はあっ！」

統夜はとあるオブジェから飛び出してきた邪気を魔戒剣で斬り裂いた。

「さて……。イルバ、あとどれくらいだ？」

『まあ、今日はハイペースでかなり頑張ってたからな。やつても後1つか2つぐらいだな』

「そっか。したらさっさと片付けるか」

統夜は魔戒剣を鞘に納めて魔法衣にしまうと、次のオブジェへと移動した。

早急に今日のノルマを達成した統夜は、ぶらぶらと街を歩いていたのだが……。

「……あれ？」

何かを見つけた統夜はその場で足を止めた。

『……どうした、統夜？』

「あれって……律とムギだよな？」

統夜は律と紬が何かを話しているのを見つけた。

『そうだな。それにしてもあの2人の組み合わせは珍しい気がするな』

統夜だけではなく、イルバも律と紬という珍しい組み合わせに驚いていた。

『……おつ、あいつらこつちに気付いたようだぞ』

イルバの指摘通り、律と紬は統夜の姿を見つけてブンブンと手を振っていた。

それに気付いた統夜は2人に駆け寄った。

「よう、律、ムギ。こんなところで会うなんて珍しいな」

「そうね♪統夜君はお仕事？」

「ああ。そうなんだけど、今はエレメントの浄化も落ち着いて街をぶらぶらしてたんだ

よ」

統夜が今は暇していることがわかれると、律は目をキラリと輝かせていた。

「なあ、統夜。それだったら今からあたしらと遊ばないか？」

「賛成♪私も統夜君と遊びたいわ♪」

律と紬は統夜と一緒に遊ぼうと提案していた。

それを聞いた統夜はうーんと考えていた。

「ま、たまにはこういうのも良いよな」

『そうだな。暇なうちに遊んでおくのは良いんじゃないか？』

統夜は2人と遊ぶ意思を伝え、イルバも了承すると、2人の表情はぱあつと明るくなった。

「よつしやあ！それじゃあ決まりだな！」

「ええ♪統夜君、行きましよう♪」

律と紬は満面の笑みを浮かべると、そのまま統夜と腕を組んでいた。

「ちよ!?!お前ら、離れろつて！」

いきなり腕を組まれて恥ずかしかったのか、統夜の顔は真っ赤になっていた。

「やーだよ♪たまにはいいいだろ？」

「そうよ？たまにはいいじゃない♪」

「統夜、光栄に思えよ。こんな美少女2人に腕を組んでもらえてさ♪」

律は何故かドヤ顔でこう言い放ち、紬も「ふんす！」と胸を張ってドヤ顔をしていた。

「おいおい……。それ、自分で言うのかよ……」

統夜は律の自信満々な発言に呆れて苦笑いをしていた。

(それよりも……)

統夜はキョロキョロと周囲を見回すのだが、2人の美少女に腕を組まれる統夜を街ゆく人たちは訝しげな目で見ていた。

中には統夜が羨ましいのか、殺気を出して睨みつける者もいた。

統夜はそんな人々の視線を感じて、ため息をついた。
こうして統夜たちは移動を開始した。

※※※

3人が最初に向かった場所は、桜ヶ丘某所にあるゲームセンターだった。

律は紬が普段行かなさそうな場所に連れていこうと考えており、それでゲームセンターに来たという訳である。

「……………、これがゲームセンター!?!」

律の考えが功を奏し、紬はキラキラと目を輝かせていた。

「……………ね、ねえ!…このシャンドリアみたいにキラキラしてるのは!?!」

紬は大型のメダルゲームの台を指差していた。

「ああ、それはメダルゲームだよ」

律が説明をすると、統夜はウンウンと頷いていた。

「あれ？統夜はゲーセン知ってるんだな」

「ああ。たまに暇つぶしに行くことがあるからな。知ってるぞ」

統夜はたまにゲーセンで遊ぶことがあるため、ゲーセンの存在は知っていた。

しかし、魔戒騎士の使命があるため、数ヶ月に一度行けるか行けないかのペースでしか行くことは出来なかった。

今回は久々のゲーセンなので、統夜は何気にワクワクしていた。

「ねえねえ！このハンドルがついたゲームはなあに？」

紬は続いてレースゲームの台を指差していた。

「これはレースゲームだな。俺もゲーセン来たら遊ぶんだよな」

今度は統夜がハンドルのついたゲームがレースゲームであることを説明した。

「わあ♪こんなところに釣竿があるわ♪」

「釣りゲームだな」

紬はゲーセンに置いてある様々なゲームに興味を示していた。

「ど、どうしよう！どれも面白そうで、どれから遊んで良いのかわからないわ♪」

「ムギ、落ち着けて」

ゲーセンにはしやぐ紬を見て、律は苦笑いをしていた。

「せっかくだからムギのやりたいゲームは全部やろうぜ！」

「そうだなあ。まずは何から……」

律は周囲を見回して、何のゲームから始めるか吟味していた。

すると……。

「ねえねえ、りっちゃん！統夜君！私、これやってみたい！」

紬がやってみたいと指定したゲームは、腕相撲のゲームだった。

手始めに律が挑戦するのだが、奮闘むなしくコンピューターに敗れてしまった。

今度は紬が挑戦するのだが、紬はコンピューターに圧勝し、統夜と律はその勇姿を見て苦笑いをしていた。

「……あれ？統夜君はやらないの？」

「俺がこれをやったらこのゲームを壊しそうだから……」

魔戒騎士である統夜は腕つぶしにも自信があるため、下手をすればゲームの筐体を破壊する恐れがあった。

なので、統夜は腕相撲のゲームは辞退したのである。

そのことに納得した2人は、次のゲームに移動した。

次に行ったのはクレイゲームであり、紬は初めてのチャレンジで上手いかわからなかった。

しかし、律が紬に代わって挑戦すると、1発で景品を取ることが出来た。

紬と統夜は律が1発で景品を取ったことに賞賛の声をあげるが、律は1発で取れたことに安堵していた。

そして、次に紬が目をつけたのはビデオゲームなのだが、紬は世界的に有名な某格闘ゲームに興味を持っていた。

紬はコンピュータと対戦してみるのだが、初めてだからか、上手いかずに敗れてしまった。

「ああ、負けちゃった……」

紬はコンピュータに敗れてしよんぼりとしていた。

「なあ、統夜。このゲームはやったことあるか？」

「まあな。それなりに上手いと思うぜ」

統夜はゲーセンに来た時はこのゲームはプレイしており、プレイングには自信があった。

「それじゃあ、あたしと勝負しようぜ！」

「ふっ、受けてたつぜ！」

こうして統夜と律は格闘ゲームで対戦することになった。

統夜は自信があると自負していただけあつてか、律と互角に戦っていた。

統夜も律もプレイングはなかなかのものであり、それを見ていた客も歓声をあげていた。

こうして、対戦は終わり、激しい激闘を制したのは……。

「へへっ、統夜もまだまだだな！」

律が統夜を破り、誇らしげな表情をしていた。

「くっそー！もうちよつとだったんだけどな！」

統夜は律に惜しくも敗れて悔しそうにしていた。

「ねえねえ、りっちゃん。私、りっちゃんと統夜君の3人で同じゲームをしたいわ！」

「んー、このゲームは2人用だから……」

律は今やったゲームで3人で遊べないと思っていたのだが……。

「……だったらこれをやろうぜ！」

律が指定したのは、ロボットが2対2で戦うゲームだった。

このゲームであれば、3人で遊ぶことは可能だった。

「なあ、統夜。あたしとムギペア対統夜で大丈夫だよな？」

「ああ、構わないぜ」

統夜は律の提示した条件を了承し、3人でロボットが2対2で戦うゲームをプレイすることになった。

統夜たちは100円を投入すると、チーム分けを行い、その後使用機体の選択画面になった。

「んー、どれにしようか……」

統夜は悩んだ末、剣を装備した青い機体を選択した。

律が選んだのは火力重視の機体で、紬が選んだのは金色の機体だった。

こうして統夜たちは対決するのだが、結果は律と紬の勝利だった。

ビデオゲームを終えた後も、紬がやってみたいと言ったゲームはひと通りプレイした。

そして、最後に3人でプリクラを撮ることになった。

統夜は誰かとプリクラを撮るのが初めてだったのか、困惑していた。

そんな中、どうにか写真は撮れて、その後のラクガキは律や紬に任せることにした。

こうしてプリクラを撮り終えたのだが、統夜は完成品を見て笑みを浮かべていた。

プリクラを撮り終えると、統夜たちはゲーセンを後にした。

「はあ……♪ゲームセンター楽しかったわ♪」

紬はゲーセンが本当に楽しかったのか、満面の笑みを浮かべていた。

「そこまで喜んでくれたら連れてきた甲斐があるよ」

「私、楽しすぎて明日死んじゃう♪」

「アハハ……大袈裟だな……」

紬のあまりにオーバーな発言に統夜は苦笑いをしていた。

「……統夜、悪いな。ちよいちよいゲーム代奢ってもらってさ」

統夜はゲーセンで遊んでる時に対戦ゲームやプリクラなどみんなでやるゲームのお金を支払い、律や紬の負担を軽くしていた。

「気にするな。俺だつて楽しませてもらったし、それはお礼だよ」

統夜はゲーム代を奢ることは全く気にしていなかった。

「なあ、2人とも。俺、行つてみたいところがあるんだけど」

「行つてみたいところ？」

律と紬は統夜の言葉をおうむ返しのように返すのだが、少しだけ警戒していた。

「……別に変な所ではないんだけど……」

普段は鈍感な統夜であるが、何故か2人が警戒している理由を敏感に感じ取り、ジロ目で2人を見ていた。

「アハハ、ごめんごめん。統夜も男だからつい……」

「私は統夜君と一緒にならどこでも良いけど♪」

「いや、そんなんじゃないよ。確かこの近くに駄菓子屋があつただろ？俺、行つたことないから行つてみたいよな」

統夜が行きたいと言っていた場所は、この近くにある駄菓子屋だった。

「駄菓子屋か……。確かにそこなら節約には良いかもな」

律は駄菓子屋に行くというのには乗り気であった。

しかし、紬は……。

「駄菓子屋……」

何か思う所があったのか、その場で立ち止まっていた。

「……？ ムギ、もしかして、駄菓子屋は嫌だったか？」

紬は桜ヶ丘随一の富豪の娘であるため、駄菓子屋みたいところは嫌なのかなと統夜は考えてしまった。

しかし……。

「……と、統夜君！」

紬は統夜に詰め寄り、両手を掴んでいた。

そした……。

「抱きしめてもよかですか!!」

「……なんで九州の言葉遣いなんだよ……」

『やれやれ……』

紬は嬉しかったのか何故か言葉遣いが九州のものになっていた。

統夜はそのことに困惑し、イルバは呆れていた。

こうして統夜たちは近くにある駄菓子屋に向かうことになった。

「……………、ここが駄菓子屋さん？」

駄菓子屋に到着するなり、紬は目をキラキラと輝かせながら周囲を見回していた。

「そうだよ。この一角にあるのはだいたい20円か30円くらいだから、気にしないで買っても問題ないと思うぞ」

「え、そうなの!?!これも?」

紬は駄菓子屋のお菓子が破格の安さであることに驚いており、近くにあったヨーグルト菓子を取り出して値段を聞いていた。

「それもだよ」

「この、串に刺さってるものも?」

「ああ、そうだな」

「じゃあじゃあ、この揚げ物みたいのもそうなの?」

「うん、そうだよ」

紬は次々とお菓子を手に取り、その値段を聞いていた。

高そうなお菓子も数十円で買えると知り、紬は驚きと共に目をキラキラと輝かせていた。

「凄いわ！価格破壊ってこういうこと？」

「いや、違うと思うけど……」

統夜はキラキラと目を輝かせている紬を見て苦笑いをしていた。

こうして統夜たちは気になる駄菓子を購入して、店の入り口のベンチに座ってそのお菓子を食べていた。

(……それにしても噂には聞いていたが、こんだけ買っても500円しないとは……。駄菓子屋……恐るべし……)

統夜は籠3つがいっぱいになるくらいのお菓子を購入したのだが、500円でお釣りが来たことに驚いていた。

《……おい、統夜。いくらなんでも買い過ぎだろ……》

(別にいいだろ？とつとけば明日以降も食べられるんだから。ちよつと小腹がすいた時の非常食になるしな)

統夜は買った駄菓子を一気に食べることはせず、食べる分以外は魔法衣の裏地の中に入ってしまった。

魔法衣の裏地は内なる魔界に通じているため、チョコレートを入れても溶けることはないのである。

統夜は魔法衣の特性を利用して駄菓子を騎士の仕事の合間の非常食にしようと考え

ていた。

《やれやれ……。非常食は駄菓子でなくても良いと思うけどな》

イルバは統夜が駄菓子を大量購入したことに呆れ果てていた。

統夜とイルバがこのようなり取りをしている間、律と紬は仲睦まじく駄菓子を頬張っていた。

駄菓子を食べてのんびりした統夜たちは駄菓子屋を後にすると、商店街へ向かい、行きつけのファストフード店へ向かった。

ファストフード店ではハンバーガーなどは頼まず、ドリンクと小さいスイーツを頼んで3人で談笑をしていた。

「……りっちゃん、統夜君。今日はありがとね♪すつごく楽しかったわ♪」
「気にするなって。俺も楽しかったよ」

統夜は久しぶりに普通の遊びを堪能出来たので、それが心の底から楽しいと思っていた。
「特にりっちゃん私の知らない所をいっぱい知ってるよね♪凄いね！」

「エツヘン！もつと褒めるがよい！」

律は紬に褒められたのが嬉しかったのか、ドヤ顔をしていた。

「おいおい、ドヤ顔すんなよな……」

統夜はドヤ顔をする律を見て苦笑いをしていた。

「このぬいぐるみは500円で取れたし、100円でけっこうお腹いっぱいになったし♪りっちゃんって、お金を使わず遊ぶ達人ね♪」

「そうだろうそうだろう♪でも、今日は統夜がちよいちよ奢ってくれたから少しは安上がりだったよ。だけど、一般庶民には今日の出費はけっこう痛いんですがねえ」

「そうなの？」

律のような普通の高校生はバイトをしてなければ親からの小遣いで遊ばなければいけないので、1度の遊びの出費でもけっこう痛いのである。

「まあね。正直先月もさ……」

こう前置きを置いて律が語り始めたのは、律と滯の2人で楽器屋に行った時の話だった。

律は楽器屋であるものを購入しようとしたのだが、少しだけ持ち合わせが足りなかった。

そこで律は滯に少しだけお金を貸して欲しいと頼むと、滯は渋々律にお金を貸すことにした。

それに気を良くした律はスティックやスコアやCDなど買うものを追加しようとした。

それに怒った漣は、いつものノリで律に思い切り拳骨を食らわせたのである。

その日は結局買う予定だったものだけを購入し、足りない分だけ漣からお金を借りることになった。

「……………つてなことがあつてさあ。漣のやつひどくないか？ 思い切りスパーン！ といくんだけぜ？」

『……………おい、律。それはお前さんの自業自得だろうが』

「ああ、俺もそう思う」

「スパーンと……………」

律の話を聞いていた統夜とイルバは、漣に叩かれたのは自業自得だと思っていた。

しかし、紬はうーんと何か考え事を初めていた。

「……………ムギ、どうした？」

急に紬の様子がおかしくなったので、統夜は心配そうに訪ね、律は首を傾げながら紬を見ていた。

「……………あ、あのね……………。りっちゃん、統夜君……………。実は2人をお願いしたいことがあるんだけど……………」

「お願い？」

「俺たちに出来ることなら何だってやるぜ。遠慮なく言ってみな」

「う、うん……」

統夜の言葉に後押しされたのか、紬の表情は少しだけ明るくなっていた。

そして、一呼吸を置いて紬は語り始めた。

「……わ、私のこと……。た、叩いて欲しいの!!」

「……」

紬のお願いというのがあまりに予想外過ぎて、統夜と律は言葉を失っていた。

「……な、なあ、ムギ。もう一回行ってもらっても良いか？叩いて欲しいだなんて、いくらなんでも俺の聞き間違いだよな？」

統夜は紬の言ったことが冗談であって欲しいと思っておどけながら苦笑いをしていた。

「ううん。聞き間違いじゃないわ。私のこと、叩いて欲しいの……」

そんな統夜の思いは紬の一言で簡単に崩れ去ってしまった。

改めて紬のお願いを聞いた統夜と律は呆然としていた。

「……痛いだけだぞ」

「それでも叩いて欲しいの!」

どうやら紬は本気で叩いて欲しいと言っているようだった。

「……軽くでいいんだろ？」

「お願いします!」

紬は頭を出すと叩かれやすい体勢になっていた。

そして律は右手を上げて拳骨の体勢に入るのだが、そこから拳を振り上げることが躊躇していた。

「……周りにSPGがいたりしないよな？」

「そんなのいないから！」

「じゃ、じゃあ行くぞ！」

「はい！」

こうして律はそのまま拳を振り下ろそうとするのだが、思うように出来ず、冷や汗をかいていた。

そして……。

「……あ、あたし無理!!統夜、パス！」

「ちよ!?!ここで俺かよ!?!」

律は紬を叩くことは出来ず、統夜に丸投げした。

丸投げされた統夜は驚きを隠せなかったが、「やれやれ」とため息をついていた。

「……それじゃあ行くぞ」

「う、うん！」

統夜は出来る限り軽い力で紬の頭を軽く小突いていた。

これでも一般人は痛いと感じるレベルだが、紬は平然としており、意外と威力の低い小突きにキョトンとしていた。

「……と、統夜君。出来れば遠慮なくやって欲しいんだけど……」

「うっ……」

統夜は本気でやることには抵抗があつたのだが、紬の澄んだ目を見るとそれを断ることが出来なかった。

統夜も律のように右手を上げてそれを振り下ろそうとするが、何故かプレッシャーを感じており、統夜は律のように冷や汗をかいていた。

そして……。

「ダメだ！俺も無理！無理だ!!」

統夜もいきなり紬を叩くなんてことは出来ず、ギブアップしてしまった。

「そうだよ。こういうのはタイミングが大事なんだから」

「タイミング?」

「そう。何もしてないのにムギのこと叩くとか無理。なんか派手にボケてくれればドカーンと突っ込めるんだけどなあ」

「ド派手なボケ……」

紬は律からのアドバイスを聞くと、真剣な表情で考え事をしていた。

(……アハハ……。何でだろう。嫌な予感しかしないんだけど……)

《統夜、奇遇だな。俺様も同じことを考えていたぜ》

統夜とイルバは、紬が変なことをしでかさないか心配で、苦笑いをしていた。

結局紬は明日の夏期講習で実践することを決め、この日は解散となった。

統夜は紬のことを心配しながらも指令がなかったため、街の見回りを行ってこの日は家路についた。

※※※

翌日、この日は夏期講習があるのだが、統夜は夏期講習には参加しないため、いつものようにエレメントの浄化を行っていた。

統夜はエレメントの浄化を行いながら、紬がおかしなことをしないか心配していた。

『……なあ、統夜』

エレメントの浄化が落ち着いたところで、イルバが声をかけてきた。

「ん？どうした、イルバ」

『紬の奴だが、大丈夫か？昨日は様子がおかしかったが……』

「そうだよな……。叩いて欲しいだなんて、ムギのやつもおかしなことを頼むよな……」
昨日の紬の話を思い出し、統夜は苦笑いをしていた。

「まあ、明日は登校日だし、その時にも変なことをしなきゃいいけどな」

夏休みはまだ続いているのだが、明日は夏休みの中で数少ない登校日であった。

統夜は久しぶりに学校へ行くのを楽しみにしていたのだが、叩かれないと言いつつ、このことを心配していた。

こうして統夜はエレメントの浄化を終えると、夜遅くまで街の見回りを行ってから家路についた。

そして翌日、この日は登校日で、統夜は久しぶりに通う学校を楽しみにしており、久しぶりに会うクラスメイトとの会話も楽しんでいた。

放課後、統夜たちは部室である音楽準備室に集まっていた。

「……それにしても、こうやって部室でティータイムをするのも久しぶりだよな」
「うん♪そうだよねえ♪」

統夜たちは音楽準備室で行われる久しぶりのティータイムを満喫していた。

「……やっぱり部室は落ち着くわ……」

特に統夜は久しぶりの部室でまったりとしていた。

「今日のおやつはショートケーキだけど、人数が6人だから綺麗に6等分出来て良かったわあ♪」

今日紬が用意したのは1ホールのショートケーキだった。

統夜たち軽音部は6人のため、ケーキは綺麗に6等分することが出来て、そのことに紬は満面の笑みを浮かべていた。

「とりあえず早く食べて練習するぞ」

「そうだねえ♪今日はちゃんとイチゴを食べられるしねえ♪」

唯はショートケーキのイチゴを見ると何故か安心していった。

唯は2日前に和と唯の家で勉強会をしたのだが、ケーキを一口食べさせあいつこする時に和がケーキのイチゴを食べてしまい、そのことを根に持っていた。

統夜は唯からその話を聞いており、ケーキのイチゴについて熱弁する唯に苦笑いをしていた。

唯がイチゴという言葉を放つと、紬は何故かハツとしていた。

「……………ムギ？」

統夜は紬の微妙な変化を見逃さなかった。

そして紬は何を思ったのか漣のケーキをガン見していた。

(……………おいおい、ムギ。まさかとは思うけど……………)

統夜はこの後紬がやるであろう行動を予想して苦笑いをしていた。

紬は何故か漣のケーキを捉えていた。

「……………ちよ、ムギ？」

統夜が慌てて止めようとするが、既に手遅れだった。

漣がケーキのイチゴを食べようとした瞬間、紬が漣のケーキのイチゴを奪い取り、それを頬張った。

「……え!?!」

紬のまさかの行動に目をパチクリとさせていた。

(あつちやあ……………間に合わなかったか……………)

統夜は紬がこうすることを予想しながら止めることが出来ず、頭を抱えていた。

そんな漣はまるで凍りついたかのように静止していたのだが、漣は一切声をあげずに静かに涙を流していた。

それを見た唯はガバツと立ち上がり、音楽準備室を出ると、どこかへ移動を開始した。そして数分後……。

「……ほら！見てよ、和ちゃん！」

唯は生徒会室にいる和をここまで連れてきたのである。

「ほら！イチゴを取られちゃったら悲しいんだよ！泣いちゃうんだよ!?!それくらい大切なものなんだよ、和ちゃん！」

唯は和にケーキのイチゴの大切さを改めて力説していた。

「……そ、それは悪いことをしたわ……」

和はケーキのイチゴを取られて静かに涙を流す濡の様子を見て、唯の言葉に説得力があると感じていた。

そう理解したうえで、和は唯に謝罪していた。

「やっとわかってくれたんだねえ♪」

やっと和にケーキのイチゴの大切さを理解してもらい、唯は満足そうにしていた。

『やれやれ……たかがイチゴ如きで大袈裟過ぎだろう……』

イルバはイチゴをめぐるこの騒ぎをどうでも良いと思いつつ見ている。

しかし、声を大にしてこれを言うとき再び唯の熱弁が始まると思いつつ、誰にも聞こえないくらい小さな声で言っていた。

「……………漣ちゃん……………ごめんね……………」

紬はまさか漣が泣き出すとは思っておらず、居た堪れなくなつたのか、申し訳なさそうに謝っていた。

「……………つたく……………。ほら、漣。俺のケーキやるから泣き止めよ。な?」

統夜はまだ口をつけていない自分のケーキを漣に差し出して泣き止ませようとしていた。

漣がどうにか泣き止み、和も生徒会室に戻つたところで、紬が何故このようなことをしたのか語り始めた。

「……………叩かれない?」

「ごめんなさい、私のワガママなの……………」

「いや、あんだだけボケてるのに何もしない漣が悪い」

「違うだろ!」

「アハハ……………。やっぱりムギのやつ昨日はボケ倒してたんだ……………」

昨日紬がやったであろうことを想像し、統夜は苦笑いをしていた。

「そんなことくらい……………。最初から素直に言えばいいのに!」

「え?」

「軽く叩くだけだろ?」

「いいの?」

「別に……それくらいなら……」

「!?抱きしめてもよかですかい?」

「アハハ……またかよ……」

紬は思わず九州の言葉を使っていたので、統夜は苦笑いをしていた。

「お、お願いします!」

紬は頭を少し下げると、叩きやすい体勢になっていた。

「へ、変なやつだな……」

紬が積極的に叩かれたという気持ちを出しており、漣は困惑していた。

漣は腕をあげて紬を叩く体勢に入るが、何故かこの場の空気が異常なまでの緊張感に包まれていた。

「うっ……」

(アハハ……。これじゃ叩くのを躊躇しちゃうよな……)

統夜も紬を思い切り叩けなかったので、この空気感で簡単に叩けないことを理解していた。

「な、何か緊張しますよね！」

梓が緊張をほぐそうと声をあげるかま、この場の緊張感は消えることはなかった。そして……。

ゴツン!!

滯はこの緊張感に耐え切れず、紬ではなく何故か隣にいる律の頭を思い切り叩いていた。

「な、何であたし!?!」

律は何もしていないのに叩かれてしまい、驚きと理不尽さを感じていた。

(……アハハ、ドンマイ、律……)

統夜は理不尽に叩かれてしまった律を同情して苦笑いをしていた。

結局滯は紬を叩くことは出来ず、この日は紬を叩けるものは現れなかった。

こうして、この日の部活は終了し、解散となった。

この後、律と紬は2人になる機会があったのだが、紬の何気ない一言で律に叩かれてしまったのはまた別の話であった。

……続く。

—— 次回予告 ——

『ほお、こいつ、靈獣か？こんなところに現れるのは珍しいじゃないか。次回、「幻想」。
ま、面倒なことにはなりそうだけだな』

第84話 「幻想」

長い夏休みも徐々に終わりに近付き、後10日程で夏休みは終わろうとしていた。

そんなある日の夜、統夜は番犬所からの指令を受けて桜ヶ丘某所にある廃工場に来ていた。

「イルバ……ここか？」

『ああ、この先から邪気を感じるぜ。統夜、油断するなよ』

統夜は魔戒剣を取り出すと、いつでも抜刀出来るよう準備をしていた。すると……。

『……統夜！あそこだ!!』

どうやらホラーは近くにいたようで、統夜もホラーの姿を捕捉した。

そのホラーは素体ホラーなのだが、素体ホラーは何故か大きな卵を大事そうに抱えていた。

「貴様……魔戒騎士か!? 貴様もこいつを狙ってるのか!? 絶対に渡さんぞ!!」

素体ホラーは何故か大きな卵を統夜から守ろうとしていた。

『……統夜、あれは霊獣の卵だ!』

「へえ、霊獣って卵から生まれるのか……」

統夜は霊獣の卵を初めて見たので、霊獣の子供が生まれる仕組みを知り、感嘆していた。

『何故ホラーがそれを狙ってるかは知らんが、統夜、そいつをホラーの好きにさせるな！』

「わ、わかったよー！」

統夜はとりあえず魔戒剣を抜くと、素体ホラーを睨みつけた。

「おのれ……こいつは渡さんぞ!!」

素体ホラーは霊獣の卵を安全な場所に置くと、そのまま統夜に襲いかかった。

「くっ……」

統夜は素体ホラーの一撃を魔戒剣で受け止めたのだが、予想以上のパワーに驚いていた。

「こいつ……。素体ホラーのくせにやる……」

素体ホラーといっても個体値の差はあり、低級ホラー並の力を持つ素体ホラーも少なからず存在する。

今回統夜が相手にしている素体ホラーは強個体のようであり、その力は統夜を驚かせていた。

しかし……。

「これ以上、貴様の好きにはさせない！」

統夜は蹴りを放つて素体ホラーを吹き飛ばすと、すかさず魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は奏狼の鎧を身に纏った。

鎧を身に纏った統夜は素体ホラーに接近すると、皇輝剣を一閃した。

その一閃で素体ホラーの体は真つ二つに斬り裂かれた。

「……お、おのれ……俺が、そいつの……親に……」

こう初期の言葉を残すと、素体ホラーの体は爆散し、消滅した。

素体ホラーが消滅したことを確認した統夜は鎧を解除すると、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

そして統夜は素体ホラーが守ろうとしていた霊獣の卵を回収した。

「……これが霊獣の卵……」

『俺様も実際に見るのは初めてだぜ』

そもそも霊獣というのは簡単に会える存在ではなく、その卵を見る確率はゼロに近いと言つても言い過ぎではないのである。

「とりあえず番犬所にこいつを持っていくか」

『そうだな。こいつは番犬所が何とかしてくれるだろう』

統夜は家に帰る前に霊獣の卵を番犬所に届けることになり、番犬所へと向かった。

※※※

「……これが霊獣の卵ですか……」

番犬所に到着するなり、統夜はイレスに霊獣の卵を預けた。

「私も本物を見るのは初めてなんですよ」

「霊獣自体、見ることは珍しいですからねえ」

統夜も実際に霊獣を見たことはなく、そんな霊獣の卵を見つけたことに驚いていた。

「統夜、霊獣の卵をホラーから守ってくれてありがとうございます。この卵は番犬所が責任を持って親元に返そうと思っています。統夜はゆっくり体を休めてください」

「はい、ありがとうございます」

統夜はイレスに一礼し、番犬所を後にしようとしたのだが……。

ピキピキピキ……。

イレスの手にしていた霊獣の卵にヒビが入り始めた。

「なっ!!?これは……?」

「霊獣の雛が……孵る?」

統夜とイレスは、今この瞬間に霊獣の雛が孵ることに驚きながらもその様子に見入っていた。

そして……。

霊獣の卵が砕け散ると、真っ白な毛玉のようなものが飛び出してきた。

その毛玉のようなものこそ霊獣の雛なのだが、霊獣の雛は統夜の前に飛び出し、統夜と目があつた。

「……」

統夜は霊獣の雛と目が合ったものの、どうして良いのかわからず、戸惑っていたのだが、霊獣の雛はそのままどこかへと飛び出していつてしまった。

「!?あ、あいつ!一体どこに?」

「と、統夜。改めて指令を出しますが、霊獣の雛を連れ戻すのです!」

「わかりました。霊獣の雛は俺が連れもどします!」

ホラー討伐を終えたばかりなのだが、霊獣の雛を探すという指令を受けて、統夜は番

犬所を後にした。

街を見回りながら霊獣の雛を探すが、手がかりすら見つけることは出来なかった。

統夜は霊獣の雛の捜索を明日に持ち越すことにして、家に帰ることにした。

その頃、どこかへと姿を消した霊獣の雛は桜ヶ丘某所にあるビルの屋上にいた。

「……」

霊獣の雛は屋上から見える街並みを見つめていた。

しばらく街並みを見つめてみると、突如霊獣の雛の体から光が放たれた。

そして、霊獣の雛はとある姿へと変わったのであった。

翌日、統夜はエレメントの浄化を行いながら霊獣の雛を探していた。

「なあ、イルバ。霊獣の雛の気配は感じるか？」

『いや、それらしい気配は感じないぜ』

霊獣というのは特別な存在であり、魔導輪であるイルバでさえその気配を追うことは出来なかった。

「そうか……。エレメントの浄化は落ち着いたし、地道に探すしかないか……」

統夜は霊獣の雛を見つけるのに時間がかかると予想しており、そのことに辟易してた

め息をついていた。

とりあえず霊獣の雛を搜索するために移動を開始しようとしたその時だった。

「あつ、やーくん！」

偶然近くを通りがかった唯が統夜を発見し、声をかけた。

「おお、唯。それにみんなも」

唯だけではなく、律たち軽音部のみんなも一緒だった。

「統夜先輩、もしかしてお仕事ですか？」

「まあ、そんな所かな？まあ、仕事と言っても探し物なんだけど」

「それって何なんだ？あたしたちで良ければ手伝うけど」

「うーん……。それは助かるが、俺が探してるのは見つけるのが困難だからなあ……」

「？統夜、どういうことだ？」

濡が首を傾げながら訪ねてきたので、統夜は唯たちに事情を説明した。

「……ふーん……。霊獣の雛ねえ……」

「それが逃げちゃったから保護するのね？」

「そういうこと。霊獣っていうのは魔戒騎士や魔戒法師でも見る機会はほとんどない生

き物だからな、搜索が難航してたんだよ」

「それは大変だね！早く見つけてあげないとね！」

こうして唯たちも霊獣の雛の搜索を手伝うことになった。

全員で搜索を始めようとしたその時だった。

「……パパ？」

「？」

唐突に声が聞こえてきたので、統夜たちは声の方を向いた。

すると、小学生くらいの女の子が目をウルウルとさせながら立ち尽くしていた。

「……？君は？」

「可愛い♪」

統夜は目の前にいる少女の存在に困惑し、唯は可愛い女の子を見て目をキラキラと輝かせていた。

少女は白く長い綺麗な髪を風で揺らしながら統夜のことをジッと見つめていた。

そして……。

「パパ！会いたかった!!」

少女は統夜をパパと呼び、統夜に抱きついて甘えていた。

「え!?!ちよ!?!俺はパパじゃないぞ!!」

「ええ?あなたは私のパパだもん!」

少女は統夜が自分の父親だと言って疑わなかった。

『おいおい、統夜。いつの間に仕込んだんだ？俺様も知らなかったぜ』

「ばつ、馬鹿野郎！それはあり得ないだろうが!!」

イルバも違うとわかっていて統夜をからかっており、統夜はムキになって返していた。

すると……。

「……」

唯たちがドス黒いオーラを放って統夜を睨みつけていた。

「……やーくんがそんな人だったなんて……」

「ああ、見損なっただぞ、統夜」

「統夜。あたしらの知らないところで子供を作ってたんだな……」

「統夜先輩、不潔です!!」

「統夜君、説明してもらえるかしら？」

ドス黒いオーラを放った唯たちから次々と非難の言葉が飛び出してきた。

「おいおい、そんな訳ないだろ!!この子かもし本当に俺の子供なら何歳の時の子供だよ

！」

「……あつ……」

統夜の弁解を聞いて冷静に考えた唯たちは統夜の言葉が嘘ではないことを理解して

いた。

「……それじゃあ、この子はいったい？」

「……それは……」

統夜も自分をパパと呼ぶこの少女が何者なのかわかっていなかった。

統夜たちが途方に暮れていたその時だった。

「統夜！」

再び統夜を呼ぶ声が聞こえてきたので、統夜たちはその声の方を見ると、その声の主は白のワンピースを着たイレスだった。

「い、イレス様!? どうしてここに？」

「統夜、今あなたに抱きついているその子が霊獣の雛なのです」

「へえ、この子がねえ……。って、ええ!?」

統夜は今抱きつかれているのが霊獣の雛だと知り、時間差で驚いていた。

驚いているのは唯たちも同様であり、口をポカーンとさせていた。

「こ、この子が、霊獣の雛……」

「そ、そんな不思議なこともあるんだな……」

「そうだよねえ。こんなに可愛いのに」

「そうですね……。驚きです……」

「うん、びつくりしちゃった……」

「？」

唯たちは人の姿をした霊獣の雛に驚きの言葉をあげると、霊獣の雛は首を傾げていた。

※※※

統夜たちは霊獣の雛を親元に返す方法を話し合うため、近くのカフェに立ち寄った。

「……………」

霊獣の雛は、初めて食べるケーキを嬉しそうに食べていた。

しかし、霊獣の雛は食べる作法など知るわけもなく、口にベタベタとクリームをつけていた。

「あーあ……。ほら、口にクリームがついてるぞ」

統夜はティッシュを取り出すと、霊獣の雛の口の周りについたクリームを取ってあげた。

「エへへ……♪」

クリームを取ってもらったのがくすぐったいのか嬉しかったのか霊獣の雛は年相応の女の子のような笑みを浮かべていた。

イレスは世話を焼く統夜の姿を見て笑みを浮かべていた。

「？イレス様？」

「いえ、統夜のお世話する姿が随分と板についてると思ひましてね♪」

「そ、そうですかね……」

統夜は世話をする姿が板についてると言われ、照れ隠しに笑っていた。

「エへへ……パパあ♪」

霊獣の雛は統夜のことを父親だと思っており、抱きついて甘えていた。

唯たちはその様子を悔しそうに見ていた。

（あの子……あんなに統夜にベタベタと……）

（私だつてあんなにやーくんにベタベタしたことないのに……）

（ぐぬぬ……羨ましいです……）

唯たちはごく自然に統夜に甘える霊獣の雛を羨ましそうに見ていた。

霊獣の雛はその自然に気付き、ビクンと怯えていた。

「ぱ、パパ……。あのお姉ちゃんたち怖いよ……」

「大丈夫だ、怖くないからな」

統夜は靈獣の雛の頭を撫でると、満足そうに笑みを浮かべながらさらに統夜にギュツと抱きついていた。

「……それよりも、イレス様。今からこの子を靈獣に返すんですよね？」

「ええ。子供と離れ離れになって親の靈獣も心配してるでしょうからね。一刻も早く親元に返さなくては……」

「そうですよね……」

統夜も靈獣の雛を一刻も早く親元に返したいという思いだった。

「ねえねえ、イレスちゃん！ 私たちもついていっちゃダメかな？」

唯は靈獣の雛を親元に返すところを見たいと提案し、4人もウンウンと頷いていた。

「あのなあ。これは遊びじゃないんだからダメに決まって……」

「いいではないですか。私は許可しますよ」

統夜が反対する中、イレスがあっさりと許可を出したので、唯たちの表情がぱあっと明るくなった。

「で、ですが、イレス様」

「一般人が靈獣を見てはいけないという掟はないですし、私は唯たちにも貴重な体験をさせてあげたいと思っていますのです」

「イレスちゃん……」

「……まあ、イレス様がこうおっしやるなら……」

統夜はイレスが許可を出したため、これ以上は何も言わなかった。

「統夜、私は1度番犬所に戻って薬を取ってきます。統夜はその間にその子を説得してください」

「はい、わかりました」

イレスは席を立ち、そのままカフェを後にすると、番犬所に向かった。

「……なあ、お前に話があるんだけど、良いか？」

「ん？なに？パパ？」

「俺はな、お前のパパじゃないんだよ」

「ええ？だってパパはパパじゃん！」

「お前の本当の親がな、お前を心配してお前を探してるんだ。だから、俺はお前を本当の親のところへ返さなくてはいけないんだよ」

「……」

統夜からの唐突な話に霊獣の雛はうーんと考え事をしていた。

すると……。

「……うん。わかった！」

霊獣の雛は素直に話を聞いてくれて、統夜は安堵していた。

「だけど、1つだけお願い聞いて欲しいな」

「お願い？」

「うん！あのね、私の本当の親に会うまででいいから、私のパパでいてくれる？」

「……ああ。お安い御用だよ」

統夜は霊獣の雛の頭を撫でると、それが嬉しかったのか、霊獣の雛は再びギュツと統夜に抱きついていった。

統夜は優しい表情で霊獣の雛の頭を撫でていた。

唯たちはそれが羨ましいと思っていたが、笑みを浮かべながらその様子を眺めていた。

イレスが薬を手に戻ってきたところで、統夜は会計を済ませ、カフェを後にした。

「皆さん、この薬を飲んで下さい」

カフェを出るなり、イレスは透明な液体が入った小さな瓶を唯たちに手渡した。

「イレスちゃん、これは？」

「普段見えないものが見えるようになる薬です」

「見えないものが見える……」

イレスの説明を聞いた藩は怖くなって顔を真っ青にしていた。

「濡お、怖いのか？あ、そっか！お化けが見えるかもしれないからな！」

「ひい!？」

律はニヤニヤしながら濡をからかうと、濡は恐怖で怯えていた。

「はあ……。律、その辺にしておけ。それに、これ飲んでも霊なんて見えないから」

統夜はため息をつきながらイレスから渡された薬を飲み干した。

その様子を見ていた唯たちもイレスから渡された薬を飲み干した。

すると、ごく普通の風景とは打って変わり、どこもかしこもキラキラと輝いていた。

「ふおお……。綺麗……」

「そうだな……」

「ああ、綺麗だ……」

「うん、すごいわ！」

「はい！凄いです！」

唯たちはイレスから渡された薬の効果でキラキラになった景色を見てぱあっと明るい表情になっていた。

「それでは皆さん、行きませうか」

「パパ、こっちだよ！」

霊獣の雛が先導し、統夜たちはそれについていった。

統夜たちが歩いているのはいつもの桜ヶ丘であるのだが、見えないものが見えているせいかキラキラして見えていた。

そんな街を見回しながらも統夜たちは桜ヶ丘某所にあるダムに向かって歩いていった。

「……何かこうやってみんなとお散歩するのも楽しいわね♪」

紬はダムに続く道を歩きながらニコニコと笑みを浮かべていた。

「うん！私も楽しい!!」

霊獣の雛はこの短い期間で紬にも懐いたらしく、今は紬にくつついて歩いていた。

「そう言ってくれると嬉しいわ♪」

紬は霊獣の雛の頭を撫でると、エへへと年相応の女の子のような笑みを浮かべて紬に

さらにくつついていた。

紬はまるで年下の女の子に懐かれた気持ちになって、嬉しさを表していた。

「やれやれ……。これは遊びじゃないんだぞ」

「エへへ……。わかつてるわよ♪」

「わよ♪」

紬はペロツと舌を出しながらおどけて笑うと、霊獣の雛も紬のモノマネをしていた。

「……まあ、いい。先を急ごう」

「……クスッ」

イレスは袖たちのやり取りを見て笑みを浮かべながら歩いていった。それから1時間程歩くのだが、目的地にはまだ到着しなかった。

「ねえねえ、やーくん。まだ着かないのお？」

1時間程歩いて疲れたのか、唯は少しだるそうな口調で統夜に訪ねていた。

「……唯、もうちよつと頑張つてくれ。目的地も見えてきたからさ」

「おねーちゃん、頑張つて！」

霊獣の雛は疲れた唯を元氣付けようと唯に駆け寄り、唯の手をギュツと握っていた。すると……。

「エへへ……。もうちよつと頑張ろうかなあ……」

可愛い女の子に手を握られたのが嬉しかったのか、唯はニコニコしていた。

霊獣の雛が唯を元氣付けてくれたのを見て、統夜は笑みを浮かべていた。

「さあ、皆さん。もうすぐ到着ですよ！」

イレスが先頭となって歩き出し、目的地は既に見えていた。

そして歩くこと数分、統夜たちは目的地であるダムに到着した。

「……もしかして、ここがそうなの？」

「ああ、そうだ」

「こんなところに霊獣が来るんですかね？」

梓はこのダムに本当に霊獣が現れるか疑い、周囲を見回していた。すると、ポツーンと水滴の音が聞こえてきた。

「……………来た!!」

統夜は霊獣の存在を捉え、唯たちも統夜の見ている方へ視線を向けた。すると、霊獣が統夜たち目掛けて飛んで来たのであった。

「……………あ、あれが霊獣……………?」

「綺麗……………」

「ああ、凄いな……………」

「うん、こんな美しい生き物は初めて見たかも♪」

「私もです!」

唯たちは美しく羽ばたく霊獣の姿に心を奪われていた。

そして、霊獣は統夜たちの前にやってきたのである。

「……………さあ、お迎えが来たぞ」

「う、うん……………」

霊獣の雛も本当の親である霊獣を捉えるのだが、親の元に帰ろうとしなかった。

「……………?どうした?」

「ねえ、パパ。また、パパに会えるかな?」

霊獣の雛は今後2度と統夜に会えないのではないかという不安を抱いているため、素直に親元に帰ろうとしなかった。

「……きつとまた会えるさ。俺たちがまた会いたいと願えばな」

統夜は優しい表情で微笑むと、霊獣の雛の頭を優しく撫でた。

その手が暖かくて心地よいものだったのか、霊獣の雛は満面の笑みを浮かべていた。

「……それじゃあ、また絶対に会おうね！約束だよー」

「……ああ、また会おう。絶対にな」

統夜は穏やかな表情を浮かべて、霊獣の雛との再会を約束した。

統夜が頭を撫でるのをやめると、霊獣の雛は霊獣にゆっくりと歩み寄った。

そして、霊獣の雛は両手を組んで念じると、体から光を放ち、その光に包まれた。

光が収まると、霊獣の雛が着ていた衣服が地面に落ちると同時に消滅し、統夜たちの

目の前に白い毛玉のようなものが姿を現した。

「……いも、もしかして、この子が……」

「あの子の……本当の姿？」

唯たちは霊獣の雛の本当の姿を見て目をパチクリとさせて驚いていた。

すると、霊獣の雛はまっすぐ、本来の親の元へと帰っていった。

その時だった。

『……ありがとう、魔戒騎士。私の子供を守ってくれて……』

「!?な、何だ?この声は?」

「恐らく、霊獣の声なんじゃないか?」

統夜たち全員の脳内に霊獣の声が聞こえてきたので、唯たちは驚きを隠せなかった。

『……そして、番犬所の神官よ。あなたもわざわざ来てくれて、感謝します』

霊獣は続けてイレスにお礼を言っていた。

「良いのです。私としても霊獣の雛をあなたに返せて安心していきますから」

イレスも自分のやるべき使命を果たしたことに安堵していた。

『そして、人間の子らよ……。私の子に優しくしてくれて、本当にありがとう……』

霊獣は唯たちにもお礼を言っていた。

霊獣が人間にお礼を言うとは思っていなかったのか、統夜は驚きを隠せなかった。

「そ、そんな!気にしないでください!」

「そうですよ!困った時はお互い様ですから」

「おかげで私たちは貴重な体験をすることが出来ました」

「それに、私たちはあの子と一緒にいて、本当に楽しかったです!」

「だから、私たちも感謝しています!本当にありがとうございました!」

唯、律、漣、紬、梓の順番で霊獣に話しかけると、霊獣は優しい表情で笑みを浮かべ

ていた。

『こんなにも優しい心を持った子たちがいる……この人間の世界も捨てたものではありませんね』

霊獣は統夜たちのことを認めており、そのことに対して統夜たちは驚いていた。

特に統夜は霊獣に認められるということがどういふことをよく理解していたので、特に驚いていた。

『……私たちはそろそろ行きますね。あなたたちに幸福が訪れんことを……』

『パパ！お姉ちゃんたち！また会おうね！約束だよ！』

統夜たちに別れの挨拶をすると、霊獣はバサバサ！と大きな翼を広げ、飛び立っていった。

「バイバーイ!!」

「また会おうな!」

「元気でな!!」

「親子で仲良くね!」

「さようなら!」

「いつかまた、会おうぜ!」

唯、律、滯、紬、梓、統夜の順番で飛び立つ霊獣に見送りの言葉を送っていた。

すると、上空から白くて綺麗な7枚の羽がひらひらと落ちてきていた。

それは統夜たちに向かって落ちてきたので、統夜たちはそれぞれその白い羽をキャッチして受け取った。

「……………」の羽は？」

「凄く綺麗ね♪」

唯たちは白い羽をまじまじと眺め、純粋な程真っ白な羽に見入っていた。

「これは靈獣の羽だよ。みんな、これは肌身離さず大切に持ってた方がいいぞ」

「?…どういふことですか? 統夜先輩」

統夜の言葉の意味がわかれず、梓は首を傾げていた。

『靈獣の羽を持ちし者は降りかかる不幸や災いから守ってくれる。そういう言い伝えがあるんだ。ま、俺様も実物を見るのは初めてだがな』

イルバの説明通り、靈獣の羽を持った者は、降りかかる不幸や災いから守ってくれるという伝説があった。

しかし、靈獣自体滅多に拝めるものでもなく、靈獣の羽を持つ者はごく僅かであるため、この話は伝説になっていたのである。

「私も、靈獣の羽は初めて見ました……。これは、我が番犬所の宝になるでしょう♪」

統夜たちよりも長い時を生きたイレスでさえ、靈獣の羽を見るのは初めてで、その羽

を手に喜びを表していた。

「……とりあえず帰ろうか」

「そうだね！ねえ、戻ったらそのまま遊びに行こうよ！」

「お、いいねえ！あたしは賛成！」

「おい、律！今日はみんなで勉強するんじゃないの？」

唯たちは本来図書館で勉強しに行く予定だったのだが、それを中止して霊獣へ会いに行つたのである。

「まあまあ♪いいじゃない、行きましようよ♪」

「ムギ先輩もですか!？」

紬も遊ぶ気満々だったため、梓は驚いていた。

「やーちゃんとイレスちゃんはどうするの?」

「お、俺は……」

「統夜、あなたは行ってきてもいいですよ。私はこの後番犬所に戻らなければいけないので遊べませんが」

統夜はこのまま遊んでいいのか悩んでいると、イレスが背中を押してくれた。

「イレス様……」

「そっかあ、久々にイレスちゃんと遊びたかったけど、残念だねえ」

イレスは一緒に遊べないことを知り、唯は残念がっていた。

こうして霊獣の雛を無事親元へ返した統夜たちは、来た道に戻ると、そのまま遊びに出かけていった。

イレスだけは番犬所へと戻っていった。

夏休みもあと僅かであるが、この日の出来事は統夜たちにとってかけがえのないものになったということは言うまでもなかった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『統夜のことを慕っているあいつだが、いつたいどのような生活をしているんだろうな？ 次回、「陽光」。そんな奏夜に意外な出会いが待ち受ける！』

第85話 「陽光」

……ここは東京、秋葉原。

この地は電気街として有名だけではなく、アニメや漫画などオタク文化を象徴する街としても知られている。

この日も秋葉原の街は多くの人で賑わっていた。

そんな中、真夏であるにも関わらず茶色のロングコートを着た少年が秋葉原の街を歩いていた。

少年の名は如月奏夜。数ヶ月前に魔戒騎士になったばかりの少年である。

奏夜は魔戒騎士になったばかりのため、未熟な部分は多いものの、早くもその才能を開花させつつあった。

数週間前に行われたサバックでは、初戦敗退という残念な結果ではあったが、才能の片鱗を他の魔戒騎士たちに見せつけていた。

奏夜はこの日もいつものように魔戒騎士の日課であるエレメントの浄化を行っていた。

「……はあっ!!」

奏夜はオブジェから飛び出してきた邪気を魔戒剣の一閃で斬り裂いた。

邪気が消滅したことを確認すると、奏夜は魔戒剣を緑の鞘に納めた。

「さて……。キルバ、あと浄化しなきゃいけないポイントはどんくらい残ってる？」

『ああ。今日はだいたい浄化をしたからな。あと一箇所くらいだな』

奏夜の相棒である魔導輪キルバは、今日の仕事のノルマを奏夜に伝えた。

「あと一箇所か……。したらそいつを浄化したらいつもの場所に行こうかな」

『おいおい、今日もあそこに行くのか？お前も好きだな』

「あそこは家から近いし、あそここの饅頭がまた美味いんだよ」

『ま、いいんじゃないのか？』

キルバも納得したところで、奏夜は次のオブジェへ移動した。

そのオブジェは今いる場所からそんなに離れておらず、早々にオブジェから飛び出てきた邪気の浄化を行った。

※※※

この日最後の仕事を終えた奏夜が訪れたのは、奏夜の家近くにある老舗の和菓子店だった。

奏夜は魔戒騎士になってから番犬所から今の家を与えられ、今はそこに住んでいる。

魔戒騎士になる前は家らしい家はなく、秋葉原周辺を転々としていた。

『それにしても、相変わらず古臭い建物だな』

「そうか？俺はこういう建物は好きだけど」

奏夜はキルバとこのような会話をかわしてから店の中へと入った。

「いらっしやいませ！……って、そーくんだ!!」

店の中に入ると、カウンターにはオレンジのように明るい髪で、サイドポニーの少女が接客していた。

その少女は奏夜のことを知っているようで、奏夜が入るなり満面の笑みで奏夜を歓迎していた。

ちなみに、奏夜は穂乃果に「そーくん」と呼ばれているのだが、未だそのあだ名には慣れていなかった。

「……おう、穂乃果。今日は店番なんだな」

「そうなんだよ。せっかくの夏休みなのに……」

この少女、高坂穂乃果は近くの中学校に通う中学校3年生で、この和菓子屋「穂むら」の娘である。

奏夜は魔戒騎士になって今の家に引越した時にここにも挨拶をしたのだが、その時に穂乃果と奏夜が同い年だとわかり、それがきっかけで仲良くなった。

穂乃果には妹もいるのだが、奏夜はその妹とも仲良くなつたのである。

それからすぐに穂乃果の幼なじみである2人がいるのだが、その2人とも友人となつた。

「……そーくん、真夏なのにまたそのコート着てるよお。暑くないの?」

「別に暑くはないぞ?むしろこれ着ないと暑いんだよな」

「ふーん。そうなんだ……」

「……あつ、そうそう。穂乃果、「ほむまん」を2つくれないか」

「はいよ、毎度あり♪」

奏夜の言っている「ほむまん」とは、この「穂むら」の名物となつている饅頭であり、1番人気の商品である。

奏夜も初めて食べた時からその味に魅力され、時々ほむまんを買いにこの穂むらをよく訪れている。

そんなことがあつたからか、奏夜は穂乃果と友達と言えるような関係になつていた。

穂乃果はほむまん2つを丁寧な袋に入れると、奏夜はお金を支払い、穂乃果は奏夜に商品を手渡した。

「……はい、毎度あり♪」

「おう、ありがとな、穂乃果」

奏夜は穂乃果にお礼を言って店を出ようとするのだが……。

「あつ、待って！そーくん！」

穂乃果が奏夜を呼び止めたので、奏夜は足を止めた。

「……？どうした、穂乃果？」

「もうすぐで店番が終わるんだけど、そーくんも一緒に遊ばない？海未ちゃんことりちゃんも来るよー！」

穂乃果は奏夜に遊びの誘いをしていた。

「うーん……そうだなあ……」

奏夜は遊びの誘いを受けるべきか考えていた。

（……なあ、キルバ。ちよつとくらいなら大丈夫か？）

《まあ、指令があればロデルが鳩を飛ばすだろう。だから別にいいんじゃないか？》

キルバの言う通り、奏夜の所属する翡翠の番犬所の神官であるロデルは、魔戒騎士たちに指令を伝える時に使い魔である鳩を飛ばし、指令書を渡すということをよく行つて

いる。

そのため、指令があれば使い魔の鳩が指令書を持ってきてくれるだろう。

そう判断したキルバは、遊んでも問題ないのでと奏夜に遊ぶ許可を出した。

「……まあ、少しくらいなら大丈夫だぞ」

「やったあ!!それじゃあ終わるまで待つてて!」

「ああ。それじゃあほむまんを食いながら待つてるよ」

奏夜は店内にある椅子に腰掛けると、先ほど購入したほむまんを頬張り、穂乃果の店番が終わるのを待つていた。

奏夜がほむまんを完食したところで、穂乃果の幼なじみである園田海未と、南ことりがやってきて、共に穂乃果の店番が終わるのを待つていた。

2人が来てしばらくすると、穂乃果の母親が店に現れ、交代の時間となった。

穂乃果は店番が終わるなり、自分の部屋へ直行すると、着替えを済ませて店内へと戻ってきた。

「みんな、お待たせ!」

「いえ、奏夜とお話してたのでそんなに待つてはいないですよ」

「うんうん♪そーくんとお話してると飽きないからねえ♪」

奏夜は穂乃果の店番が終わるまで、海未やことりと他愛のない世間話をして時間を潰

していたのである。

ちなみに、ことりも奏夜のことをそーくんと呼んでいる。

「むー……！海未ちゃんのことりちゃんだけずるいよお!!」

自分だけ奏夜とゆつくりと話が出来なかつたため、穂乃果はぷうつと頬を膨らませていた。

「お前は店番だつただろうが……」

「奏夜の言う通りですよ。それに、話などいくらでも出来るではありませんか」

「……まあ、確かにそうか」

ふくれっ面になつた穂乃果を海未がなだめるのだが、その説明で穂乃果は納得したようだった。

「とりあえず、行こうぜ。どっか行くんだろ?」

「うん! そうだね、さつそく行こうよ! お母さん、行つてきます!」

「行つてらっしゃい! 気を付けて行つてきなさいよ!」

穂乃果の母親に見送られ、奏夜たちは穂むらを後にした。

その後、奏夜たちは穂乃果が行きたいと言つたゲーセンで遊んでいた。

秋葉原という街に住んでいる手前、奏夜はゲーセンなどの知識はあつた。

むしろ奏夜は魔戒騎士としては珍しいくらいにゲーム好きという一面もあつた。

奏夜たちは1時間ほど様々なゲームで楽しんでた。

ゲーセンで遊んだ後は、行きつけのファストフード店で休憩をしていた。

奏夜たちはハンバーガーやポテトを頬張りながら世間話に花を添えていた。

(……なんか、この3人といると、本当に楽しいよな……)

奏夜は穂乃果たちと知り合ってまだ日は浅いものの、一緒に遊んだり食事をしたりするのが楽しく、心地よいものと感じていた。

(……もしかして、この3人が俺にとって守りたい人……なのかな?)

奏夜は穂乃果たちと出会い、守りし者とは何なのか、なんとなくではあるものの、理解することが出来た。

「……奏夜? どうしました?」

海末はボケつと考え事をしている奏夜が気になり、声をかけた。

「へ? い、いや! 何でもないよ!」

「そうですか? それなら良いのですが……」

海末は完全には納得していないものの、何を聞いても何でもないと思魔化されると判断し、聞くのを諦めた。

「……そういえばさ、やーくんの着ているコートなんだけど、似たようなコートを着た人をどっかで見たことがあるんだよねえ……」

「え!? そうなのか!」

自分のような格好の人間を見たことがあるという穂乃果の言葉に、奏夜は驚きを隠せなかった。

(……もしかして、穂乃果のやつ、知らず知らずに魔戒騎士に会ったことがあるのか?)
穂乃果が自分と似たような格好の人間を見たということはそれしかないと考え、穂乃果が魔戒騎士のことを知っているのでは? と心配していた。

「あつ、もしかしてそれって統夜さんじゃない?」

「あ、そうそう! 統夜さんもそんな格好してたっけ」
「!!?」

奏夜は穂乃果たちが統夜の存在を知っているとは思っておらず、目を大きく見開いて驚いていた。

「? そーくん、どうしたの? そんなに驚いた顔して」

「お、お前ら……。統夜さんを知ってるのか?」

「うん! 今年の始めくらいに怖い人に絡まれてるところを統夜さんが助けてくれたんだ」

(怖い人……? まさかホラーじゃないよな……)

まだまだ情報が足りてないので、怖い人というのがホラーではないかと心配してい

た。

「なあ、統夜さんが何者なのかも知ってるってことだよな？」

「ええ、知ってますよ」

「!!？」

「確か、桜ヶ丘つて街の高校に通う3年生で、軽音部に入ってるとか」

(……ホッ、良かった……。知ってるっていうのはそっちだったか……)

穂乃果たちが知ってる統夜が魔戒騎士ではなく、高校生だということを知り、奏夜は安心していった。

「というか、そーくんは統夜さんのこと知ってたんだね！」

「奏夜は統夜さんとはどういう関係なんですか？」

(うっ……! やっぱりこの質問が来たか……)

奏夜はこの質問が来ることを予想していたが、どう答えるべきか迷っていた。

少し考えた末奏夜が出した答えとは……。

「ああ、俺と統夜さんは古くからの知り合いで、俺は統夜さんのことを兄貴みたいに慕ってるんだよ」

奏夜の話は嘘が多く含まれていたが、どうにか誤魔化すためにこう答えていた。

「ふーん、そうなんだ……。あ、そうだ!!」

何かを思いついた穂乃果は携帯を取り出した。

「？穂乃果、携帯でどうするつもりだ？」

「今、みんな写真撮って統夜さんに送ってあげるんだよ！統夜さん、きつと驚くよ！」

「それ、面白そう♪」

「ええ、良いかもしれませんね」

穂乃果の提案にことりと海未は乗り気のようにだった。

「……まあ、みんながそこまで言うなら……」

写真を拒否する理由はなかったため、奏夜は渋々写真を撮ることを了承した。

こうして、奏夜たちは4人並んで写真を撮り、その写真を統夜に送った。

……その頃、桜ヶ丘にいる統夜は……。

「……はあっ!!」

現在はエレメントの浄化の真つ最中であり、オブジェから飛び出した邪気を、魔戒剣の一閃で斬り裂いた。

邪気が消滅することを確認した統夜は、魔戒剣を青い鞘に納めた。

「……………イルバ、これで全部か？」

『ああ、今日はこれで終わりだな』

これ以上浄化すべきオブジェはないことを知り、統夜は安堵していた。

「それじゃあ、どつかで休憩するかな……………つて、ん？」

統夜の携帯に反応があったため、統夜は携帯を取り出した。

「……………メールは穂乃果からか……………。久しぶりだな……………」

統夜は穂乃果とメールアドレスの交換をしており、時々メールのやり取りをしていた。
た。

今日は久しぶりに穂乃果からメールが来たのである。

「……………ん？写メが添付されてるな」

統夜はメールに添付されている写メをチェックするのだが……………。

「……………!!」

その写真があまりに予想外過ぎて、目をパチクリとさせていた。

「なっ……………！そ、奏夜!?!何で穂乃果たちと!?!」

統夜は奏夜が穂乃果たちと一緒に写真に写っていることに驚いていた。

『そういえば奏夜は中3だったな。だったらあのお嬢ちゃんたちと知り合いでもおかし

くはないんじゃないか?」

イルバは奏夜と穂乃果たちが一緒に写真に写っていることを冷静に分析していた。

「ま、まあ確かにそうか……」

イルバの分析に納得したものの、統夜は未だに驚きを隠せなかった。

「……ん?どれどれ?」統夜さんは奏夜君のお兄さんの存在だつて言ってますけど、本当ですか?」か……」

統夜は写メと共に送られたメールの一部を音読していた。

『なるほどな。奏夜のやつあのお嬢ちゃんに自分と同じ魔戒騎士だとは言えないからな』

「ま、そうだよな」

統夜は軽く答えると、穂乃果から来たメールを返信し、街の見回りを行うため歩き出した。

「……あつ、統夜さんからメール返ってきた!」

一方、秋葉原某所のファストフード店で休憩していた奏夜たちは、世間話をしながら

統夜からの返信を待つており、たった今、メールの返信が来た。

穂乃果はすぐメールをチェックしていた。

「……………えつと……………」【ああ、俺も奏夜のこととは弟みたいに思ってるよ。穂乃果たちと友達だったとは驚いたけどな】だって！」

「ほら、俺の言った通りだろ？」

奏夜は自分の言い分が正しいと強気に主張していたのだが……………。

(良かった……………。上手く話を合わせてくれて……………。流石は統夜さんだ……………)

統夜が話を合わせてくれたことに奏夜は安堵していた。

「それにしても統夜さんって優しいよね！」

穂乃果は統夜からのメールに返信しながら統夜の話をしていた。

「そうですね。私もそう思います」

「優しいし、世話好きみたいだし、統夜さんってお兄ちゃんみたいだよね♪」

ことりは統夜のことを兄のように慕っており、その発言に穂乃果と海未はウンウンと頷いていた。

奏夜も統夜のことを本当に兄のように尊敬しており、憧れの存在であった。

奏夜たちはファーストフード店を出るまで、統夜についての話や、他愛のない世間話で盛り上がっていた。

「いやあ、楽しかったねえ♪」

「そうですね。ここまで楽しいお話が出来たのは久しぶりな気がします」

穂乃果と海未はファーストフードを出るなり、先ほどまでかわっていた会話が楽しくて、それを思い出してニヤニヤしていた。

「ねえねえ、次はどこに行こっか？」

「そうだな……」

ことりが次向かう場所を訪ねて、奏夜がそれを考えていたその時だった。

《……！奏夜、どうやら指令みたいだぞ！》

ロデルの飛ばした鳩が近くにいることを探知したキルバはテレパシーで奏夜に伝えていた。

（……！もうちよつと遊びたかったけど、指令じゃ仕方ないな）

奏夜は遊ぶことを諦め、騎士の使命を果たすことにした。

「……なあ、みんな。悪いんだけど、俺、この後用事があるんだよ」

「え？そんなのですか？」

「だから、今日は先に帰らせてもらうな」

「そっかあ……。用事じゃ仕方ないもんね……」

奏夜が用事だと知り、ことりは残念そうにしていた。

「……むー……」

奏夜が先に帰るのが納得いかないのか、穂乃果は頬をぷうつと膨らませて奏夜を睨みつけていた。

「穂乃果、奏夜は用事なのですから仕方ないではないですか」

海未は穂乃果が奏夜ともつと遊びたいから拗ねていると察し、このようになだめていた。

「……用事ってそんなに大事な用事なの？」

「ああ。どんな用事かは言えないけど、俺にとっては大事な用事だよ」

「……」

奏夜は正直に話すのだが、穂乃果はまだ納得していなかった。

「ごめんな。埋め合わせは必ずするから」

「……じゃあ今度パン奢ってくれる？」

「お安い御用だ」

奏夜はむしろパンだけで許してくれるならと心の中で安堵していた。

「……じゃあ、許してあげる」

「悪いな、みんな。それじゃあ、またな！」

奏夜は穂乃果たちに別れを告げると、穂乃果たちの見えないところへと移動した。

さらに人気のないところに移動した奏夜は、ロデルの飛ばした鳩を待っていたのだが、少し待つと、その鳩が奏夜の前に現れた。

奏夜は鳩の持つ指令書を受け取ると、鳩はそのまま番犬所に戻っていった。

指令書を受け取った奏夜は、魔導ライターを取り出すと、指令書を燃やして指令の内容を確認した。

奏夜の確認が終わると、魔戒語で書かれた文字は消滅した。

「……よし、行こう、キルバー！」

『了解だ、奏夜』

指令を受けた奏夜は、キルバのナビゲーションを頼りに、ホラーの搜索を開始した。

※※※

奏夜がホラー搜索を開始してしばらく経ち、先ほどまでは夕焼け空だったが、今は日

も落ち、夜になっていた。

そんな中、1人の少女は家に帰ろうと歩いていたのだが、その途中、近くをうろついていたホラーに見つかってしまった。

そのホラーはまだ人間に擬態していたため、少女は何も気にすることはなくスルーしようとするのだが、ホラーは人間からホラーの姿に変わると、その少女を喰らうべく襲いかかった。

少女は必死に逃げようとするのだが、人間の足でホラーから逃げ切れるわけも無く、あつさりと思い詰められてしまった。

「ああ……ああ……」

絶体絶命の状態となった少女は恐怖に怯え、その瞳からは涙が滲み出ていた。

「ククク……。そうだ、その表情だ。恐怖に怯える女の味は格別だからな!」

この状態こそホラーの望むものであり、ホラーは笑みを浮かべていた。

「いや……来ないで……」

「さて、いただくとするか……」

ホラーが少女を捕まえ、捕食しようとしたその時だった。

「やめろおおおお!!」

叫び声と共に奏夜が現れると、奏夜はホラーを蹴飛ばし、少女を危機から救った。

「ぐうう……貴様……!!」

ホラーはあと一步のところで食事を邪魔され、苛立ちを募らせていた。

「あ、あの……。あなたは？」

「それはいいから、早く逃げろ！死にたくなければな！」

奏夜が少女に逃げるよう警告すると、少女は一目散に逃げ出していった。

『……奏夜！そいつはムドラ！刺々しい見た目で強そうに見えるが、実際はたいしたことはない！だが、油断するなよ！』

「ああ、わかった！」

奏夜はキルバからこのホラーについての説明を受けると、魔戒剣を抜いて、ムドラを睨みつけた。

「……！貴様、魔戒騎士か！せっかくの食事の邪魔をしておつて!!」

「悪いけど、お前らの邪魔をすんのが俺たちの仕事なんだよ!!」

奏夜はムドラ目掛けて突撃すると、魔戒剣を一閃した。

その一撃はムドラに受け止められてしまい、ムドラは反撃と言わんばかりに奏夜を吹き飛ばした。

「くっ……!!」

吹き飛ばされた奏夜はすぐに体勢を立て直した。

「魔戒騎士とはいえ、所詮はガキか。たいしたことはないな」

ムドラが奏夜を馬鹿にする発言をすると、奏夜は少しカチンときたのか、不機嫌な表情になっていた。

「俺がただのガキかどうか……その目で確かめろ！」

奏夜は魔戒剣を力強く握りしめると、再びムドラに向かつていった。

ムドラはそんな奏夜を迎撃しようと攻撃を仕掛けるが、奏夜は無駄のない動きでムドラの攻撃をかわし、魔戒剣の一撃を叩き込んだ。

その一撃でムドラにダメージを与えることは出来なかったが、怯ませることは成功した。

「おのれ……！」

ムドラは反撃と言わんばかりに体の棘を奏夜目掛けて放つが、奏夜はまるでダンスのような動きでムドラの攻撃を全てかわした。

「なっ……!? 何だ、あの動きは？」

ムドラに奏夜の予想外かつ奇怪な動きに驚きを隠せなかった。

奏夜は先輩騎士である桐島大輝にダンスの動きを戦いに取り込んだら面白いと言われる、実践してみたらず想以上に自分にしっくり来たのである。

そのため、奏夜は戦いの時に時折ダンスの動きを取り入れることで、自分らしい戦闘

スタイルを確立した。

「……………ええい！偶然は2度も続かん!!」

ムドラは再び体の棘を奏夜目掛けて放つのだが、奏夜は再びダンスのような動きでかわしながら、避けきれないものは魔戒剣で弾き飛ばしていた。

「くっ……………あのガキ……………腐っても魔戒騎士か……………!」

ムドラは奏夜の独創的な戦い方に困惑していた。

「一気にケリをつけてやる……………貴様の陰我、俺が断ち切る!!」

奏夜はムドラに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、金色の輝きを放つ鎧を身に纏った。

奏夜の身に纏った鎧は「陽光騎士輝狼（キロ）」。

牙狼とは違う黄金騎士で、牙狼の系譜の家元ではないものの、輝狼の鎧は、まるで太陽の光のような輝きを放っている。

「……………なっ!?き、貴様、牙狼か!」

「やれやれ……………みんなこの鎧を見ると牙狼と勘違いするんだよな……………。光栄な話だけどや……………」

奏夜の鎧は黄金の鎧であるため、牙狼と間違えられることはよくあるのである。

奏夜自身は牙狼と間違えられて、嬉しいとさえ思っているのであった。

「……それはともかく、俺はお前を斬る！それが俺の使命だからな！」
奏夜はムドラを睨みつけると、魔戒剣が変化した陽光剣を構えた。

「……お、おのれ！紛い物の黄金騎士などにやられる俺ではない!!」

ムドラは輝狼の鎧から放たれる黄金の光に畏怖していたのだが、どうにか自分を奮い立たせて奏夜に襲いかかった。

奏夜はギリギリまでムドラを引きつけると、ムドラの攻撃をかわし、反撃で陽光剣を一閃した。

その一撃でムドラは真つ二つに斬り裂かれた。

体を斬り裂かれたムドラは、断末魔をあげ、その体は、爆発と共に消滅した。

ムドラが消滅したことを確認した奏夜は、鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を緑の鞘に納めた。

「……さて……。仕事も終わつたし、帰るとしますか」

ムドラの討伐を終えた奏夜はどこも寄り道をすることなく自宅へと向かっていった。こうして、統夜の後輩騎士である如月奏夜の一日は過ぎていった……。

……サバツク激闘編・終

——次回予告——

『長い夏休みが終わったな。だが、すぐにこんなイベントがあるとはな。次回、「持久」。
まあ、こんなイベントは面倒でしかないがな』

漆黒の闇呀襲来編

第86話 「持久」

長かった夏休みが終わり、今日から2学期に突入した。

統夜にとって、今年の夏休みは、サバックという一大イベントがあつたからか、印象の強い夏休みとなった。

講堂で始業式が行われ、それが終わり、休み時間になると統夜たちは廊下で談笑していた。

「夏休み終わるの早過ぎだよお」

「たっぷり遊んだだろ?」

「あ……それは……そうなんだけど……」

たっぷり遊んだということが事実だったのか、唯は少し恥ずかしそうにしていた。

「遊んでどうする。受験生だろ?」

「あうう……」

受験生という立場だからか、藩がこう唯をなだめていた。

「だけど、楽しい思い出もたくさん作れたよね♪」

「うん！夏フェスとか、お祭りとか！」

「あと、駄菓子屋さんとかも！」

唯と紬は夏休みの思い出を振り返り、笑みを浮かべていた。

「俺にとつてはサバックが思い出深かったかな？」

統夜も夏休みの最大の思い出であるサバックを振り返っていた。

「やーくん、惜しかったよねえ。もうすぐ優勝だったのに」

「まあな。本当に零さんは強かったよ」

統夜は決勝での零との戦いを振り返り、改めて零の力を実感していた。

このように夏休みの思い出について話していたその時だった。

「おはようございます！先輩方！2学期始まりましたね！」

こう挨拶をしながら梓がこちらに駆け寄ってきた。

その声色はとても朗らかで、梓の放つオーラは眩しいくらいキラキラしていた。

「うお……」

「眩しい……」

梓の生き生きとした表情を見て、唯と律が眩しそうにしていた。

「2学期といえば学祭ですね！ライブですね！」

「なるほど、だからテンションが高いんだな」

統夜は梓のテンションが高い理由を冷静に分析していた。

「ライブ、頑張らなきゃな」

『そうだな。お前ら、悔いのないように頑張れよ』

イルバはカチカチと音を立てて笑みを浮かべながら統夜たちにエールを送っていた。

「……あつ、その前にこれ……」

紬は近くにあったポスターに目を向けたので、統夜たちもそれを見ると、それは「マラソン大会」と書かれたポスターだった。

「マラソン大会！」

「今年もついに来てしまったのか！」

「決めた！私、大学はマラソン大会のない大学に行く！」

「いやいや……普通、大学にそんなのないから」

滯は唯の発言に呆れながらツッコミをいれていた。

「え？」

その事実は唯にとっては衝撃だったようで、驚きを隠せなかった。

『おいおい、そこまで驚くことはないだろ……』

大学にマラソン大会がないことに驚く唯をイルバはジト目で見ていた。

こうして休み時間は終わっていき、統夜たちは教室へと戻っていった。

この日は始業式であったため、授業らしい授業は少なく、この日は終わっていった。

※※※

翌日の昼休み、統夜は購買でパンを購入し、教室に戻ろうとした。

すると……。

「……あつ、月影。ちよつといいか？」

体育教師である坂田に呼び止められ、統夜は足を止めた。

「どうしました？坂田先生」

「今度のマラソン大会だがな、お前、去年もぶつちぎりで暇を持て余してたよな？」

坂田の言う通り、統夜は去年のマラソン大会はぶつちぎりで優勝したのだが、統夜には物足りなかつたのか、ゴール後も疲れた様子もなく1人暇を持て余していた。

「そこでだ、月影、今年は男子のコースを2周してみないか？」

「2周……ですか？」

統夜は坂田の提案をおうむ返しのように返していた。

そして……。

(……それでも物足りないな……)

走る距離が2倍になったくらいでは、統夜としても物足りなかった。

魔戒騎士になるため厳しい修行を乗り越えて来た統夜にとって、数キロ程度走るだけなのは鍛錬にすらならなかった。

そこで、統夜はとあることを思いついた。

「坂田先生。俺、2周走ります。後、お願いがあるんですが……」

「お願い？」

統夜は先ほど思いついた提案を坂田に話したのだが、それを聞いた坂田は驚きを隠せなかった。

普通ならマラソンコースを2周しただけでもきついはずなのに、統夜はさらに自分を追い込むことを提案したからである。

「お、お前……それで大丈夫なのか？」

「ええ。それでも物足りないですけど、それならまだいいかなと」

「……」

坂田は統夜の底なしの体力を垣間見て絶句していた。

「とりあえず、当日はそんな感じで行きますのでよろしくお願いしますね」

統夜はこう坂田に告げると、そのまま教室に戻り、坂田はしばらくの間、その場に立ち尽くしていた。

「……あ、やーくん、おかえり〜」

統夜が教室に戻り、唯たちのもとへやってくるのを見た唯は、統夜に声をかけた。

「おう」

統夜は軽い返事をする、自分の椅子を唯の席のところまで持っていき、唯たちと一緒に食事するために席についた。

「それにしても遅かったな。そんなに購買が混んでたのか？」

「いや、帰りに坂田先生に呼び止められてな」

「坂田先生に？ひよっとして、マラソン大会のこと？」

「(ゴ)名答♪」

絢が坂田の用事を推理すると、それが正解だったので、統夜は笑みを浮かべていた。「どうしてマラソン大会についての話をしたんだ？」

「俺は去年のマラソン大会はぶっちぎりだったからな。先生も俺を疲れさせようと必死なんだろ」

「そ、そういうばやーくんって去年はさっさとゴールして暇そうにしてたんだっけ？」
唯たちもその時の統夜の様子を覚えており、そのことを思い出していた。

「まあな。それで、俺から先生にあることを提案したんだよ」

「あることって？」

「それは当日のお楽しみってことで♪」

統夜はここで話しても良かったのだが、あえて当日まで伏せることにした。

「むうう……今教えてくれてもいいのに……」

統夜が話を秘密にしたのが気に入らなかつたのか、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「まあまあ。当日になればわかるから良いじゃない」

ふくれっ面になっている唯を細がなだめていた。

「そういうこと。ま、その時を楽しみにしててくれよ」

統夜はこう話を終わらせると、購買で購入したパンを取り出し、そのパンを食べ始めた。

統夜かパンを食べ終えたあたりで、昼休みは終わり、午後の授業が始まった。

そして放課後……。

「あうう……。何で42。195キロも走らなければいけないのですかあ……」

現在、統夜たちはいつものように音楽準備室にいたのだが、唯はもうじき行われるマラソン大会が嫌なのか、このように嘆いていた。

「フルマラソンじゃないんですから。軽く4〜5キロです」

「どっちにしてもたたくさん走んなきゃって意味では同じですよ……」

梓がすぐになだめるのだが、唯は本気でマラソンが嫌なのか、力なく机に突っ伏していた。

『おいおい、年に1回4〜5キロ走るだけだろ？それくらい頑張ったらどうだ？』

イルバは力なく机に突っ伏している唯をなだめるのだが、頑張るとい言葉に聞く耳はなかったようだった。

「……そんなに嫌なら、少しでも楽しくするためにこれを着て走れば？他のみんなもどう？」

さわ子は軽音部員の遺産であるさわ子お手製の衣装を取り出していた。

「着ませんから」

「普通に走りにくいだろ」

『コスプレ着て走るとか明らかに不審者の集団だな』

「確かに……。それに全校生徒がこんなのも着て走ったら、来年からマラソン大会はなくなるんじゃない……」

梓のなくなるという言葉に唯が敏感に反応していた。

「そっか！それだ、あずにゃん！いいこと言った！」

唯はガタツと立ち上がり、梓の言葉を賞賛していた。

「何言ってるの。冗談よ、冗談」

（いや……。先生がいうと冗談には聞こえないんだが……）

《統夜、奇遇だな。俺様も同じことを考えていた》

統夜とイルバはこのようにテレパシーでやり取りをしていたのだが……。

「……統夜君？イルバ？言いたいことがあるならハッキリと言った方がいいわよ？」

さわ子は満面の笑みで統夜とイルバを睨みつけていた。

笑顔の方がプレッシャーを感じるのか、統夜とイルバの表情は引きつっていた。

そして……。

『……申し訳ありません……』

統夜とイルバは苦笑いをしながらもすぐさま謝っていた。

「お茶入りましたよ♪」

「お、待ってました♪」

紅茶の準備が整い、統夜たちはそのままティータイムに突入した。

紬は全員の前におやつを置くのだが、そのおやつとは……。

「……黒い……」

見た目はゼリーなのだが、そのゼリーは、真っ黒だった。

唯はスプーンで軽くつついでみるが、妙な弾力だった。

そんな中、さわ子は誰よりも早くこの真っ黒なゼリーを一口試食していた。

「……不思議な味……。なんだろう？ 口の中に広がるこの爽やかな磯臭い香り……」

さわ子はまるでテレビの食レポのように黒いゼリーの味を表現していた。

「マラソン大会に備えて貧血防止に鉄分の補給をと思つて。こんぶとひじきのブラマンジェです♪」

「……できれば次からは普通ので……」

さわ子は微妙そうな反応をしていた。

一方、統夜もブラマンジェを一口試食するのだが……。

「……そうか？ 俺は普通に美味しいと思うんだが」

統夜はこのブラマンジェを美味しいと思つており、その後も黙々と食べ続けていた。

唯たちはその様子を呆然と眺め、統夜が味オンチだということを思い出していた。

こうして、この日もあまり練習は行われず、ティータイムばかりが行われていた。

※※※

そして、マラソン大会当日を迎えた。

もしこの日が雨になればマラソン大会は中止なため、唯は雨を祈っていた。

しかし無情にもこの日は爽やかな快晴で、マラソン大会は行われることになった。

マラソン大会開始時間になると、生徒全員がグラウンドに集合し、マラソン大会の開会式が行われた。

選手宣誓を行うのは、生徒会長である和だった。

『……宣誓！私たち選手一同は、スポーツマンシップにのっとり、正々堂々、最後まで走りきることを誓います。生徒代表、3年2組、真鍋和』

和の選手宣誓が終わると、全員で準備体操が行われ、それが終わると走る準備を行った。

唯たちも同じように準備しており、滯と紬は長い髪が邪魔にならないよう、ポニーテールにしていた。

そして、統夜もマラソン大会の準備を始めたのだが……。

「……よつと」

統夜は重そうなりリュックを地面に置いていた。

「と、統夜!?!何なんだ?その重そうなりリュックは」

「まあ、見てなつて」

統夜はリュックを開けて何かを取り出すと、両手首と両足首に何かをつけ始めた。

「……ねえ、やーくん。今つけてるのはなあに?」

「これか?これはただの重りだよ。つっても1つ5キロはあるからな」

「ひ、1つ5キロ!?!」

統夜がさりげなくとんでもない発言をしており、律は驚愕していた。

1つ5キロということは、両手首と両足首につけているため、統夜は20キロの重りをつけていることになるのである。

「お、おい、統夜。そんなのつけて重くないのか?」

「?これくらいなら平気だけど、重くなきや鍛錬にならないだろ?」

統夜は平然と答えると、今度は重そうなりリュックを持ち上げ、それを背負っていた。

「統夜、これを聞くのも怖いんだけど……。そのリュックって何キロくらいなんだ?」

「……うーん……。50キロくらいかな?」

「『50キロ!?!』」

規格外な重さを聞き、唯たちは目を大きく見開いて驚いていた。

「両手首と両足首の重りを合わせると、統夜は70キロの重りをつけていることになる。」

「70キロといえば、おおよそ成人男性の平均的な重さであるため、統夜は成人男性をおんぶしてマラソンに挑むようなものであった。」

「ねえ、統夜君。もしかして、この前話してたのって……」

「ああ。坂田先生には男子のコースを2周走れって言われたんだけどな。それだけじゃぬるすぎるから重りをつけて走らせてくれて頼んだんだよ。ただ走るだけじゃ鍛錬にはならないからな」

「統夜は学校行事であるマラソン大会を鍛錬の手段として用いるうと考えていたのである。」

「「「……」」」

「そんな統夜の話が凄かったのか、唯たちは口を開けてポカーンとしていた。」

「ちょうどその頃、少し離れたところで走る準備をしていた梓は、そんな統夜の様子を見ていた。」

「……統夜先輩……。何であんな重そうなのを背負ってるんだろう？」

「わざわざ重そうなりユツクを背負う意図がわからず、梓は首を傾げていた。」

「……もしかして、そのリュックには100キロくらいの重りが入ってて、統夜先輩は自分を鍛えるために重りを背負って走るんじゃないの？」

純はこのように推察していたのだが、その推察はほぼ正解だった。

違うのは重さが100キロではなくら70キロだということだけであった。

「……統夜先輩ならやりかねないな……」

梓は統夜が魔戒騎士であることはよく知っているため、重りをつけて走ることにくらはするだろうと思っていた。

「……統夜さん、あんなんでちゃんと走れるのかなあ……」

憂は重りをつけて走るといふ普通ならば無謀なことをしようとしている統夜を心配していた。

「私も心配だけど、大丈夫だよ。統夜先輩なら」

「そうそう。むしろあれじゃ足りない！なんて思ってるかもしれないよ」

「もお、純ってば。それはさすがにないんじゃないの？」

梓は純の言葉に異議を申し立て、それを聞いた純は「そうだよねえ！」と言いながら笑い、梓や憂も一緒に笑っていた。

その頃、統夜は……。

(……ちつとは重いけど、まだ足りないな。これで本当に鍛錬になるのか?)

純の予想がドンピシャで当たっており、統夜は重りの重さを感じながらもその重さに対して物足りないと思つていた。

《まあ、お前さんには少し物足りないかもな。だが、物足りなくてもやりようはあると思ふがな》

(そうだよな。まあ、どうにか鍛錬になるよう走るさ)

統夜はもうちよつと重りの量があつても良いと思つていたが、この重さでも鍛錬になるよう上手く走るつもりだった。

そして、マラソンの開始時刻となった。

スタート地点にはまず女子生徒全員が並び、スタートを待つていた。

今回のマラソン大会は男子と女子ではコースも距離も異なる。

先に女子がスタートし、その5分後に男子が出発することになっている。

大まかなコースは女子と同じなのだが、男子は女子よりも距離が1キロほど長いので、一部は女子の走らない所を走ったりするのである。

『位置についてーよーいー!』

体育教師である坂田がスタートの合図をすると、女子生徒が一斉に走り出し、女子がスタートした。

スタート地点に誰もいなくなつたところで、数少ない男子生徒が並んでいた。

数少ない男子生徒たちは、統夜の重装備に驚いているのか、それを見て啞然としていた。

そんな感じで驚いていると、あっという間に5分が経過した。

『位置について！よいい！』

坂田が再びスタートの合図をすると、男子生徒たちが一齐にスタートし、この瞬間、全校生徒がマラソンをスタートした。

(……………走ると思つたよりきついな……。まだまだいけるんだけどな……………)

合計70キロの重りは予想以上に重く、統夜は一瞬表情を歪めるのだが、すぐに慣れたように、男子の先頭を切つて走つていた。

スタートしてすぐに男子専用のルートに入るのだが、統夜は難なくそのルートを通り抜け、男女共通である田園地帯に入つていった。

このあたりから女子生徒の姿がちらほらと見えたのだが、そんなことはお構いなしに統夜は走つていた。

重りをつけて走る統夜の姿はかなり目立つようで、統夜に抜かされた女子生徒たちは全員驚きの表情で統夜を見ていた。

田園地帯を越えると、このマラソンコース最大の山場である急な坂道に突入した。

(……………これは思つたよりはきついかもな……………)

統夜はペースを落とさず坂道を駆け上がったが、このマラソンの一番の山場なだけあってか、統夜の表情は歪んでいた。

しかし、息があがるほどではなく、統夜は息一つ乱すことなく坂道を最後まで駆け上がった。

(……さて、もうすぐチェックポイントだな)

坂道を越えたらチェックポイントはすぐそこであり、あとはゴールまで一直線である。

統夜はチェックポイントまで移動するのだが、そこで待機していたさわ子は統夜の到着の速さに驚きを隠せなかった。

「ちよ……統夜君、そんな重いのが背負ってるくせにどんだけ速いのよ!」

「これでも遅い方ですよ。こいつがなけりゃ後10分は早くここに来られたでしょうね」

統夜のこの言葉に驚いたさわ子は、目をパチクリとさせており、統夜はテーブルに置かれたスポーツドリンクを一気に飲み干した。

「……それじゃ、さっさとゴールして2周目行ってきますー!」

統夜は再び走り出し、ゴールである学校へと向かっていった。

そして、統夜はそれほど時間もかからずにゴールである学校に到着した。

予想以上に統夜のゴールが早く、体育教師である坂田は目を大きく見開いて驚いていた。

「……よし、1週目は終わりっつと」

とりあえず一度ゴールした統夜は2週目に向けてウォーミングアップをしていた。

「つ……月影……。これだけ重りを背負ってるのにずいぶんと速いな……」

「いやいや、これでも遅い方ですよ。こいつがなければもつと早くゴール出来ましたよ」

「……」

高校生とは思えない統夜の底なしの体力に坂田は啞然としていた。

「……それじゃあ、2週目、行ってきますー！」

統夜は呆然と立ち尽くしている坂田をそのままにして、統夜は再び学校を後にして、先ほどのコースを再び走り始めた。

1週目をかなりのハイペースで完走した統夜は、その分2週目はのんびりと走ることを決めた。

先ほどはじっくり景色を楽しむことはしなかったのだが、2週目からは周囲の景色を楽しむながら走っていた。

特に田園地帯ののどかな風景を統夜は楽しんでおり、重りを背負っていることを忘れて穏やかな気持ちで走っていた。

2週目スタートからここまで他の生徒の姿はなく、全員がコースの半分以上を走っていた。

(……ま、こんだけ時間が経つてれば誰もいないのは当然か。ここを抜けたら例の坂道だけど、完走出来てないやつが何人いるのやら……)

この先には心臓破りの坂が待ち構えていており、体力に自信のない人にとっては、最大の障害になることは間違いなかった。

(まあ、そろそろ何人か人が見えてくる頃だろ……。あ、いた)

統夜は心臓破りの坂に差し掛かる直前に辛そうに坂道を駆け上がる女子生徒を見つけた。

(……意外だな。唯たちがダラダラと走ってビリだと思つてただけだな)

現段階のビリが唯たちではないことに統夜は驚いていた。

特に唯は走るのが嫌いなので、ビリだろうと統夜は予想していたからである。

(……他の子もちらほらといるな。唯たちは坂道を越えたのだろうか……)

心臓破りの坂に苦戦しているのは1人だけではなく、他にも数人が坂道に苦戦していた。

そんな数人も追い越していき、坂道を越えたその時だった。

「……………」と、統夜？」

坂道を越えてすぐ、律、滯、紬を発見した。

3人は何故か慌てた表情をしていたので、統夜は首を傾げていた。

「……みんな、どうした？ そんなに慌てて」

「と、統夜！ 大変なんだ！」

「一緒に走ってたはずの唯ちゃんとはぐれちゃって……」

「今、純ちゃんが先生に事情を説明しに行っただけ……」

律、紬、滯の3人は統夜に唯がいなくなったことを説明した。

「マジかよ、唯のやつ……」

いなくなつたと聞いた統夜は唯を心配していたが、それと同時に呆れてもいた。

「どこで唯とはぐれたんだ？」

「坂の途中までは一緒なんだけど……」

「そうなんだよ！ そしたら滯が急に作詞を始めてな」

「だって……。 良い歌詞が思い浮かんだんだもん……」

「なるほどな……」

統夜は紬、律、滯から唯がいなくなった時の状況を聞き、少ない情報だけでその時の状況を理解していた。

「……ということは坂の途中で唯とはぐれたんだな？ だとしたら、そう遠くへは行って

ないとは思うけど……」

統夜が唯の行方を推察していると……。

『おい、統夜。確かこの辺は唯の家の近くだったよな?』

「……確かにそうだ。エレメントの浄化で度々通ってるしな」

『唯の家の近所に唯たちが世話になってる婆さんがいるだろう?そこを調べてみたらどうだ?』

「……お婆さんの家か?」

イルバの提案に統夜は驚きを隠せなかった。

唯の家の近辺だと推察をしていた統夜だが、人の家というのは発想になかったからである。

しかし……。

「……まあ、手がかりはないし、行くだけ行ってみるか」

「そうね。もしいかなかったらその時はまた考えましよう」

イルバの提案に統夜と紬が乗り、律と滯も手がかりが思いつかなかったので、一緒に行くことにした。

こうして統夜たちは坂道まで戻ると坂道を下り、途中の曲がり道を曲がって、そのまま唯の家の近くで、唯や憂が世話になっている一文字とみの家へと向かった。

とみの家がどこにあるか知っていた統夜の案内で、統夜たちはとみの家に到着した。統夜が家のチャイムを鳴らすと、家の扉が開き、とみが出て来た。

「あら……。あなたたちは、唯ちゃんの……。ちようど良かったわ。ちよつと待っててね」

統夜たちの姿を見るなり、とみは扉を閉めてどこかへと行ってしまった。

すると、「ゆいちゃん！お友達が来てるわよ！」というとみの声が微かに聞こえてきた。

『……。どうやら、俺様の勘は正しかったようだ』

とみの声を聞いた時点で、イルバの推測が確信へと変わった。

とりあえず統夜たちは唯の居場所がわかったところで唯が出てくるのを待つことにした。

そして、待つこと数分後……。

「まったく……。心配させやがって……。何呑気に栗羊羹なんて食べてるんだよ」

「ごめんなさい！途中で転んで、足を擦りむいちゃったところに、ちようどお婆ちゃんが通りかかって……。それで、絆創膏を貼ってもらったついでに休憩を……」

唯は事情を説明しているうちに恥ずかしくなったのか、徐々に頬を赤らめていた。

「擦りむいたつて、怪我は大丈夫か？」

「少し擦りむいただけだから大丈夫だよ」

唯は絆創膏を貼つてある膝を統夜たちに見せると、統夜たちは安堵していた。

すると……。

「お姉ちゃん!!皆さーん!!」

純から事情を聞いたであろう憂が、統夜たちを呼びながらこちらに駆け寄ってきた。

「あつ、憂く!!」

「純ちゃんから話は聞いたんだけど、大丈夫なの?」

「うん、擦りむいただけだから、たいしたことはないよ」

唯は憂にも絆創膏が貼つてある膝を見せていた。

「ホッ……。たいしたことなくてよかつた……」

憂は唯の怪我がたいしたことないことがわかり、安堵していた。

「それにしても、憂ちゃんもよくここだつてわかつたな」

「はい！純ちゃんから坂の途中でいなくなつたと聞いた時に、そこはうちの近くだった

ので、多分お婆ちゃんの家かなと思っただんです」

「へえ……」

憂の推察がイルバのものとはほぼ同じだったため、統夜は驚いていた。

「それじゃあ私は先に学校に戻ってお姉ちゃんは無事でしたって報告しておきますので、皆さんはゆっくりゴールして下さいね」

憂はこのように上げると、とみの家を後にして、そのまま学校へと戻っていった。

「……出来た妹だな」

「ああ、そうだな」

統夜たちは、改めて憂が優秀な妹であることを認識していた。

「それじゃあお言葉に甘えてゆっくりゴールしようよ」

「……駄目な姉だ」

「……ああ。俺もそう思う」

統夜たちは唯のあまりのマイペースさに呆れていた。

「……だけど、このままいったらあたしたちは確実にビリだな」

唯がとみの家に行ってしまった、統夜たちはその捜索を行ったため、大きくタイムロスをしてしまった。

「別にいいんじゃない?」

律や紬は最下位でもさほど気にしてはいなかったのだが……。

「……だ、駄目だ！ビリだと目立って恥ずかしいじゃないか！」

目立つのが嫌いな滯は、みんなの視線が集まるであろう最下位になるのを嫌がっていた。

「そこで転んでまたファンが増えたりして♪」

律はニヤニヤしながら滯のことをからかうのだが……。

「……変な予言をするな!!」

顔が真っ青になった滯は、律に拳骨をお見舞いした。

滯の拳骨を受けた律は甲高い悲鳴をあげていた。

(あーあ……。律のやつ、自業自得だな……)

統夜は滯の拳骨を受ける律をジト目で見ていた。

こうして、統夜たちはとみにお礼を言うのと、コースに戻り、ゴールを目指して走り始めた。

※※※

そして、統夜たちはどうかゴールである学校のグラウンドにたどり着くのだが、既に統夜たちを除く全校生徒が、お汁粉を食べながらマラソンの疲れを癒していた。

「……うう、やつぱり目立ってる……！」

予想通り、全校生徒の視線が集中しており、滯は顔を真っ青にしていた。

「大丈夫。みんなで仲良くゴールしましょう♪」

紬が滯をフォローすると、梓が「せんぱーい!!」と、統夜たちを呼んでいた。

「早くしないとお汁粉のお餅なくなっちゃいますよー！」

梓は統夜たちにハッパをかけるためにこう言っていたのだが、唯はその言葉にハッとしていた。

それと同時にゴールテープがスタンバイされ、マラソン大会もクライマックスに突入した。

「さて……。みんなには悪いが、1週目をトップで走ったやつがビリとか格好つかないし、先にゴールさせてもらうぜ」

統夜は1週目をトップ通過したプライドからか、唯たちと一緒にビリでゴールするの

は良しとせず、ペースを早めて先にゴールをすることにした。

それと同時に、唯の顔が真っ青になっていた。

「……あのお餅！」

「はあ？」

「私があのお餅を食べたから、お汁粉のお餅が一つ足りなくなって、だから、ビリの人にはお餅がないってことに！」

「何い!？」

唯はマラソン大会の前に偶然さわ子の車に乗せてもらったのだが、その時にお汁粉用のお餅が一つだけ唯の荷物に紛れてしまった。

マラソン大会前日である昨日、唯のお弁当にそのお餅が入っていた。

そのため、唯は自分のせいでお餅が一つ足りないと勘違いをし、ビリの人間にはお餅があたらないと思ひ込んでいた。

すると……。

「お餅いいいいいいいい!!!」

お汁粉のお餅をどうしても食べたい唯が急にペースを上げてきたのである。

「あ、こらー！待てー！」

唯はそんな唯を引き止めようとするが、唯は聞く耳を持たなかった。

「ビリだとお餅がないの!？」

「ビリは嫌だああ!!」

紬と滯もビリになるのが嫌だったのか、唯同様なペースを上げていった。

「待てえい!!」

律も負けじとペースを上げ、唯たち4人はハイペースで統夜に迫っていた。

統夜はそれに気付かず、少しハイペースで走り、悠々とゴールを目指していた。

すると……。

「……?!嘘だろ!!」

急にスピードを上げた唯たちに追い越されてしまい、統夜は驚きのあまり顔を真っ青

にしていた。

「……つか、そんな体力がまだ残っていたのかよ!？」

唯たち4人の体力は既に限界のハズなのだが、ここまでスピードを上げる体力が残っ

ていることに統夜は驚いていた。

「どこからそんなパワーが!？」

特に唯はいちばんハイペースになっており、そのことに滯は驚愕していた。

「お餅いいいいいい!!」

唯はお汁粉のお餅欲しさに、さらにペースを上げていた。

「そんなにお餅が大事なのかあ!!」

「う、うう……」

紬は意地でペースを上げているのか、頬にいつぱい空気を溜めてふくれっ面みたいになつていた。

「ビリは……嫌だああ!!」

4人は統夜を追い抜き、このままだと、統夜のビリが決まってしまうのだが……。

「させるかよおおおお!!」

統夜はビリにだけはなりたくない一心で、本気を出して全力疾走した。

そのため、統夜は全力疾走の唯たちをあつと言う間に抜き去り、早々にゴールした。

そして、唯たち4人は横一列に並び、ほぼ同列でゴールするのだが、漣は途中でバランスを崩してしまった。

漣はそのまま転びそうになり、全校生徒は固唾を飲んでその様子を見守っていた。

すると、漣は華麗な動きでグルグルと前転し、綺麗に着地をしていた。

その様子に全校生徒は驚きの表情で見っていた。

(……おいおい、今の漣の動き、魔戒騎士に勝るとも劣らないぞ……)

《まあ、偶然とはいえ、確かに驚きだな》

漣の華麗な前転は、魔戒騎士である統夜やイルバを驚かせるものでもあった。

しかし、そんな濡の動きは、普通に転ぶよりも目立ってしまい、何人かの生徒が濡を氣遣う言葉をかけていた。

それが恥ずかしかつたのか、濡は顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしていた。こうして、全校生徒がゴールをし、統夜たちもお汁粉をもらって食べ始めた。

ビリの人の分だけお餅が足りないということは当然なく、お餅は全員にあたった。

「……ビリの人の分もちゃんとお餅が残ってて良かったねえ♪」

唯はお餅が全員にあたったことを喜びながらお汁粉を頬張っていた。

「当たり前だろ？生徒の人数しかお餅を買ってないとかあり得ないし」

『ま、そこは少し考えればわかると思うがな』

統夜とイルバがこのような話をしてしていると、濡はお汁粉を食べようとしなくてシユンとしていた。

「あうう……。唯の勝手な思い込みのせいであつた……」

唯がお餅が足りないという思い込みをしなければここまで目立つことはなかったのだ、そこを悔やみながら濡は落ち込んでいた。

「……予感的中♪」

そんな中、律はこの展開を予想しており、濡に聞こえないよう呟くと、笑みを浮かべた。

「……みおちゃん、ごめんね」

「でも、ちよつと楽しかったわね♪」

このマラソン大会は色々あったが、終わってみると紬はこのマラソン大会が楽しかったと感想を言っていた。

「うん！マラソン大会もいいかもね！」

「お前が言うな!!」

1番統夜たちを振り回した唯がマラソン大会が楽しいと言うことに異議があるようで、統夜、滯、律の3人が同時にツツコミをいれていた。

3人からのツツコミを受けた唯は「エヘヘ……」と苦笑いをしていた。

「ところで、統夜君は良い鍛錬になったの？」

「まあ、思ったよりはな。だけど、まだまだ余裕だよ」

70キロの重りをして、10キロ以上走った統夜だったが、まだまだ余裕だったのか、まったく疲れた様子はなかった。

「……」

唯たちは、統夜の底なしの体力に啞然としていた。

すると……。

「……あつ、いたいた」

ゴール付近のチェックポイントにいたさわ子が戻ってきて、統夜たちのもとへやってきた。

「あ、さわちゃん！」

「唯ちゃん、心配したわよ。急にいなくなつたと聞いて」

「……ごめんなさい、さわちゃん」

「まあ、唯ちゃんが無事だったから良かったけどね。まあ、ゆっくりお汁粉食べて休みなさいね」

さわ子は唯の無事を確認したところで再び仕事に戻っていった。

こうして、マラソン大会は無事（？）に終了し、統夜たちはお汁粉を食べながら談笑し、マラソンの疲れを癒していたのであった。

……続く。

『やれやれ……。梓のやつ、また何か悩んでやがる。陰我を生み出しそうなものではないが、心配だな。次回、「先輩 前編」。さて、梓は悩みを解決出来るのか?』

第87話 「先輩 前編」

マラソン大会が終わってから数日が経ち、この日の放課後も、統夜たちはティータイムを楽しんでいた。

そんな中……。

「見て見て、可愛いでしょお♪」

唯は最近シール集めにハマっているらしく、お気に入りのシールを袖に見せつけ、袖はそれを見てニコニコしていた。

現在、モンブランが1個だけ余っており、梓はそれを物欲しそうに眺めていた。

「……梓、食べたいならもう1個食べてもいいんだぞ」

そんな梓の様子を見て笑みを浮かべていた統夜は、こう梓に問いかけたのだが……。

「え?! いいですよ、そんな……」

遠慮した梓は、統夜の申し出を断ろうとしていた。

「でも、今日は先生遅くなるからいらないって……」

「残しておくのも、勿体無いしな」

「そうだよ、あずにゃん。食べたそうな顔してるよ♪」

「……いいんですか？」

「遠慮する必要はないぞ、梓」

統夜が優しい表情でこう語りかけると、滯と紬がウンウンと頷いていた。

「……あ、ありがとうございます……。ところで唯先輩、髪に何かついてますよ？」

「へ？」

梓の指摘通り、唯の髪に何かついていたのだが、それはシールのようなものだった。

「唯先輩、これってシールですか？」

「うん！最近ハマってて。……って、痛てて！」

梓は出来る限り優しくシールを剥がそうとするが、どうしても髪が引つかかってしまい、唯は痛がっていた。

梓がシールを剥がそうとしたその時だった。

「梓、これ忘れ物……」

音楽準備室の扉が開き、純が中に入ってきた。

「……あつ、休憩中でした？」

梓は純に軽音部のだらけた一面を見られてしまい、顔を真っ青にしていた。

「ち、違うの！これは！」

梓はどうか弁解しようとするが、弁解の言葉が見つからなかった。

梓 side

……おはようございます、中野梓です。

昨日はいきなり純が来て焦ったな……。

普段から軽音部があんな感じだと思われたくないんだよな。

「それじゃあさ、軽音部の1日の活動内容を書いてみてよ」

昼休みになると、純がこう話を切り出してきた。

……活動内容かあ……。参ったなあ……。

「さくら」

私はとりあえず平静を装って、軽音部の活動内容を書いてみた。

えつと……。さすがにティータイムとは正直に書けないよね……。

うん、こうしよう。

16:30～17:30 ミーティング

17:30～18:00 練習

18:00~18:30 ミーティング

……うん、こんな感じでもいいかな？

「……ミーティングばつかじゃん」

うぐつ……！痛いところを……。

「で、このミーティングってどんなことをするの？」

「へ？あー……えつと……」

ど、どうしよう！他愛もない話しかしてないなんて言えないよねえ……。

「音楽のこととかも話すんでしょ？」

「あ、うん！今度のライブのタイトルはどうしようとか、曲順とか。あと、MCの時にウケるネタ作りとか」

「ふーん……」

憂、ありがとう！憂がフォローしてくれたおかげで、苦し紛れではあるけど、説明出来たよ！

憂が出来た子で本当に助かった……！

「……梓、変わったよね」

うっ……！一番言われたくなくて気にしてることを……！

「あつ、ジャズ研は学園祭に向けて練習始めてるよう？」

ぐぬぬ……！しかもそういうこと言うかなあ……。

とりあえずここでこの話は終わって、放課後になったんだけど……。

やばいやばい!! すつかりあの空気に馴染んじやつてる!!

学園祭も近いんだもん! このままじゃいけないよね!

こうなったら……。

「カムバック私!!」

私は部屋に続く階段の前で私はこう宣言したんだけど……。

これじゃあまるで唯先輩みたいだな……。

こうなったら……。

「よっしやあ! 行くぜ!」

音楽準備室の入り口に来た私はドアを開ける時も気合を入れてたんだけど、違和感が

あつたからすぐに扉をしめちやつた。

……これじゃあ、律先輩みたいだし……。

……えつと……。じゃあ……。

「それじゃあ、行こうか」

……ダメだ、これじゃ溔先輩だし……。

「それじゃあ、行きましよう♪」

……これじゃあムギ先輩……。

「……行くぞ、イルバ」

……つて!!これじゃ統夜先輩だし!今イルバもいないし!

私は何度もドアを開けては閉めてこんなことを繰り返してたけど、なんだか訳がわからなくなっちゃった……。

いや、ここで諦めたら負ける!

「ふんす!!」

私は気合を入れて中に入るんだけど、中には誰もいなかった。

……あれ?まだみんなは来てなかったんだ……。

私はとりあえず鞆を置こうと長椅子の方へ向かったんだけど……。

「……何かが出てる……」

窓の方から明るい色の何かがあった。

気になるから覗いてみようかな。

そう思つて覗き込んでみると……。

「……あつ、ムギ先輩!」

そこにいたのは、何故かうたた寝をしているムギ先輩だった。

「ど、どうしたんですか?」

ムギ先輩、何でこんなところにいるんだろう……。

とりあえず、私がこう訪ねたら、ムギ先輩は目を覚ました。

「……あれ? 知らない間に寝ちゃってたあ……。梓ちゃん、おはよお♪」

目を覚ましたムギ先輩はいつものおっとりとした笑顔を向けてただけど……。

「びっくりしましたよ、もお……」

「ここ、西陽が射し込んで、暖かくて気持ちいいの♪梓ちゃんもどう?」

「いえ、いいです」

「そっかあ……」

ムギ先輩は少しだけ残念そうな声をあげていた。

確かにそこは暖かそうだけど……。

……って、そうじゃなくて!

「でも、そんなところで何してたんですか?」

私がこう訪ねると、ムギ先輩はゆっくりと起き上がっていた。

「あつ……。うん! 誰か来たら驚かせようと思って隠れてたの! こう……わあ! って

♪

……可愛いこと考える人だな……。

しかもムギ先輩、「ふんす！」って言いながら気合を入れてるし……。
「ああ、早く誰か来ないかなあ♪」

ムギ先輩はワクワクしながら周囲を見回すと、私と目が合った。
あ……。まさかと思うけど……。

「……あつ。……わあ!!わあ!!」

やっぱり……。ムギ先輩は私を驚かそうとするんだけど……。

「いやいや、驚かせるって聞いた後じゃさすがに驚けませんよ」

私としても驚いてあげたいんだけどね……。

だけど、私が驚かないとわかると、ムギ先輩は涙目でしょんぼりしてしまった。

うっ……。これはまずい……!

「わ、わあ!びつくりしたなあ!もお!」

私は白々しいと思いつつも驚くフリをしてムギ先輩をフォローしていた。

ムギ先輩は私のわざと驚くりアクションを見てぱあっと表情が明るくなっていた。

本当に可愛い人だな、ムギ先輩……。

「あの、ムギ先輩。唯先輩たちはまだですか?」

私は「わあっ!!」と驚かす練習をしているムギ先輩にこう声をかけた。

「うん。今日はみんな掃除当番で遅くなるって。あ、統夜君は今日は日直だからみんな

よりは少し遅くなるんじゃないかな？」

「あ、そうですか……」

今日はみんな遅くなるんだな……。

あれ？そう言えば、部室でムギ先輩と2人きりって珍しいかも……。

私はじつとムギ先輩のことも見つけていると、ムギ先輩は視線を感じるのか、こちらに振り向いて首を傾げていた。

「あつ、そうだ！私、ギターの実習をしようかな！」

「あつ、そしたら私はお茶の準備するわね♪」

ムギ先輩はお茶の準備のため、ティーカップなどの準備を始めた。

……改めて意識しだすと、変に緊張するな……。

ムギ先輩って目がすごく大きくて素敵だし、色白さんだし……。

って、あれ……？

私はギターの準備をしていたんだけど、視線を感じたので、横を向いた。すると、ムギ先輩がいつの間にか私の側でギターをジッと眺めていた。

「つて、近っ!!」

アハハ……。思わず声をあげちゃった……。

「へ？私、何か変なことをした？」

「えっ? ああ、いえ……」

「そう? 良かった♪」

ムギ先輩はおつとりとした笑顔を私に向けていた。

「……ねえ、梓ちゃん。ギター弾くのって難しい?」

「へ? そうですね……。弾いてみます?」

「え? いいの?」

私がこう提案すると、ムギ先輩の表情がぱあっと明るくなった。

私はムギ先輩にギターを手渡したんだけど、ムギ先輩はギターの持ち方がおかしかった。

「……あの、普通に持っても大丈夫ですよ?」

「へ?」

「すみません。ちよつと髪いいですか?」

ムギ先輩は髪を少し上げてくれた。

「こーやってストラップを肩にかけて……」

私はムギ先輩の肩にストラップをかけると、なんだかそれらしくなってきた。

「……ありがとお♪何か前にりっちゃんもこんなことをしてたよね♪」

ムギ先輩は鏡の前に立ち、ギターを持つその様子を眺めていた。

「ど……………どうかな？」

「ムギ先輩もギター似合いますね♪」

「ウフフ♪」

ムギ先輩はギターが似合うと言われて満更でもない様子だった。

……………あれ？鏡にシールが貼ってある。

唯先輩だな……………。

「梓ちゃん、はい♪」

ムギ先輩はギターを弾かずにそのままギターを返してきた。

「どうもありがとうとお♪」

「弾かないんですか？」

「へ？」

もお……………。持つだけで弾かないんじゃないじゃん……………。

私はムギ先輩にコードの弾き方を教えたんだけど、ムギ先輩は思った以上に筋が良かった。

「……………それじゃあ次はちよつと難しいですよ。みんな最初につまづくこのFコードなんですけど……………」

「……………これでいいかしら……………」

「はい！いけると思いますよー……では、どうぞ！」

「うんー……せーの！」

ムギ先輩はFコードを弾いてみたんだけど、最初にしてはいい感じだった。

「せーの！」

だけど、どんどん音が出なくなってくると比例してどんどんムキになってギターを弾いていた。

必死になってるムギ先輩、本当に可愛いな……。

「……どうぞ♪」

ギターのレッスンは終了し、ムギ先輩はお茶を淹れてくれた。

「ありがとうございます」

「……やっぱりギターって難しいわねえ」

「根気はあるかもです」

「そっかあ……。私も小さい頃からピアノ習ってたけど、やっぱり毎日練習したもの。

続けないと指が動かなくなるからって」

「ああ、そこはギターもピアノも同じですね」

「本当ねえ♪」

あれ……？　そういえばムギ先輩ってどうして軽音部に入ったんだっけ？

どちらかというところラシックとか似合いそうなのに……。

あんまりそういう話をしたことなかったっけ……。

「……へ？　なあに？　私の顔に何かついてる？」

「え？　いえ……あの……」

ああ、ついムギ先輩の顔をジツと見ちゃってたな……。……つて、あれ？

「ムギ先輩、ほっぺにクリームついてますよ？」

「え!? どこ!?」

「ジツとして下さい」

「あつ、ありがとう……」

私はハンカチでムギ先輩のクリームを拭き取ってあげた。

「……つまみ食いしてたのバレちゃった……」

「え？　もしかして、今までも？」

「たまーに……」

ムギ先輩は恥ずかしかったのか頬を赤らめてただけ……。

「……プツ……！」

そんなムギ先輩を見るとおかしくなつて笑いが堪えられなくなつた。

何か色々考へてるのが馬鹿馬鹿しくなつてきちやつた……。

ムギ先輩もつられて笑い出し、私たちは笑い合つていた。

そしてしばらく笑い合つてると……。

『……お前ら、何やつてるんだ？』

『『『うわあ!!』』』

統夜先輩の声が聞こえてきたと思つたらドアが開き、唯先輩と律先輩、滯先輩がそのままなだれ込むように倒れ込んでいた。

「あつ！先輩たち！いつの間に！」

「……やれやれ……。入り口でこそこそしてると思つたら覗き見とはな……。」

『お前ら、趣味が悪すぎるぜ』

「だつて……面白い組み合わせだったからつい……。」

「まあ、気持ちはわからんでもないけどさ」

統夜先輩は私たちのことを覗き見していた先輩たちに呆れながら苦笑いしていた。

とりあえず全員揃ったので、私たちは練習の前にティータイムを行っていた。

「ムギちゃん♪今日のケーキも美味しいねえ♪」

唯先輩は幸せそうな笑みを浮かべていた。

「そう？良かった♪……あつ！ちよつと待っててね。渡すものがあつたの！」

ムギ先輩は鞆の中から何かを探していた。

「……何だこれ……」

律先輩が訝しげにカップを眺めると、律先輩のカップにシールがついていた。

「あつ！唯先輩でしょ！あちこちシール貼って！」

「可愛いでしょお♪」

「ダメですよ！」

『まったく……。あちこちシール貼るとかガキじゃないんだから……』

「むうう……。イルイルの意地悪……」

『だから俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

アハハ……。イルバってばまだ言ってるよ……。

こんだけ言われてるんだからいい加減諦めればいいのに……。

私だつて唯先輩に散々「あずにゃん」つて言われてるんだから……。

「お待たせえ♪今度の学園祭用に新曲書いてみたのお♪」

おお！ムギ先輩、新曲作つたんだ。

そういえば統夜先輩も新曲作つたから、学園祭でやる曲が2曲決まったのかな？

「さすがムギだなー！」

「エへへ……♪」

統夜先輩に褒められて、ムギ先輩満更でもなさそうだな……。

「そんなムギちゃんに！はい！」

唯先輩は懲りずにシールを見せていた。

しかも「たいへんよくできました」つて……。

「やれやれ……小学生じゃないんだから……」

『統夜、奇遇だな。俺様も同じことを思っていた』

統夜先輩とイルバが私の思つたことを代弁して苦笑いをしていた。

こんな感じでこの日も練習はほとんどなくて、ティータイムばかりだった。

※※※

翌日の昼休み、私は昨日のことを憂や純に話したんだけど、2人は思いきり笑っていた。

「お姉ちゃん、ハマると一直線だから……」

「それにしても、ムギ先輩も可愛いところがあるね」

「ちよつと不思議なところもある人だけどね」

「気付いたら近くにいてるってさ、きつと瞬間移動だよね!？」

「……いや、ないし……」

それはさすがにあり得ないでしょ……。

やれやれ、純は相変わらずだなあ……。

「でも、確かにお嬢様なのに世話好きっていうのは素敵だよね♪」

「そうなんだよ！お茶とか用意してくれる時はいつも生き生きしてて……」

「で、梓はそのお茶が毎日楽しみだよ」

「そ、そんなことないもん！」

いけないいけない。純がニヤニヤしながらからかってくるからついムキになっちゃった……。

「まあまあ♪それにしても、そのムギ先輩がちゃっかり味見してたなんてね♪」
「そうなんだよ!」

こう言つて私たちは笑い合つていた。

……!!ちよ、ちよつと待つてよ!!

ムギ先輩を可愛いと思うために部室に行ったんじやなかった!!

そして、放課後になり、私は音楽準備室の前に来ていた。

「よし……今度こそ……。カムバック私!!」

私は昨日のように拳を突き上げてこう宣言したんだけど……。

「なんか違うよね……」

私がこう呟いて、中に入ろうとしたその時だった。

「……何が違うんだ?」

「ギャー!!!」

後ろから統夜先輩の声が聞こえたもんだから、思わず声をあげちゃったよ……。

……びつくりしたなあ、もう……。

「うお!?な、何だよ!」

びつくりしたのは統夜先輩も同じみたいだった。

「す、すいません！後ろから急に声をかけられたから、びつくりしてつい……」

「そ、それは悪かったな……」

統夜先輩は素直に謝りながら音楽準備室のドアを開けると、私は統夜先輩と一緒に中に入った。

「ど……どうしたんだ？さっき凄い叫び声が聞こえてきたけど……」

私の叫び声が聞こえていたのか、長椅子に座っていた滯先輩がビクビクと怯えていた。

「あつ……いえ……大丈夫です……」

「本当にごめんな、梓。ドアの前で梓が何か言っていたのが気になって声をかけたんだけど……」

うう……。統夜先輩にあれ聞かれてたの!? 恥ずかしい……。／／／

「と、ところで、他の先輩方は？」

私は恥ずかしいから、とりあえず別の話題を振ることにした。

「日直とかいろいろあつてな……」

今日も他の先輩方は遅くなるのかな？

滯先輩と統夜先輩ならとりあえず……。

「3人で練習始めましょうか！」

この3人なら実りある練習が出来そうだしね♪

「そうだな……。だけど、ちよつと待ってて。そろそろ弦を張り替えたいんだ」

そう言いながら滝先輩は弦の交換を始めていた。

「それじゃあ、梓。2人でセツシヨンでもするか？」

「はいっ!!」

良かった……。今日はちゃんと練習出来そうだよ……。

私と統夜先輩はギターケースからギターを取り出して、演奏の準備を始めた。

「……梓、まずはお前が何か弾いてみてくれ。俺はその梓の演奏に合わせてるからさ」

統夜先輩は私に即興の演奏を要求してきた。

「じゃ、じゃあ……」

私はとりあえず昔から練習していたジャズのメロディを弾いてみたんだけど、統夜先輩はそれに合わせて伴奏やハーモニーを奏でていた。

それにしても凄いな、統夜先輩は……。

即興でこんなことが出来るんだもん……。

滝先輩は私と統夜先輩の演奏に聞き入りながら弦の交換を行っていた。

そして、私と統夜先輩の即興演奏は終了した。

「……………うん、さすがだな、梓。また腕が上がったんじゃないか？」

「そ、そうですかね……………」

私は統夜先輩に褒められたのが素直に嬉しかった。

どうしよう……………！嬉しいし、恥ずかしいから顔が赤くなってる！

「……………それじゃあ、今度は逆でやってみるか」

「逆……………ですか？」

「ああ。俺が即興で演奏するから、梓はそれに合わせてアドリブで弾いてみてくれ」

「は、はい！」

アドリブか……………。

もしかしたら私ってアドリブは苦手かもしれないなあ……………。

私がそんな心配をしながらも統夜先輩はギターを奏で始め、私は出来る限りそれに合わせて演奏していた。

だけ……………。

アドリブで弾くのがって意外と難しいな……………。

ジャズとかだったらアドリブで弾くことを求められることはあるけど、軽音部の曲は決まった譜面があるからね……………。

最近全然ジャズの曲をやってないから、アドリブ力が弱くなってるのかなあ？

そんなことを考えながら私はギターを奏で、どうにか即興の演奏は終了した。

「……」

演奏終了後、統夜先輩はさっきの演奏を吟味するかのようじつくりと考え事をして
いた。

うう……。何言われるんだろう。緊張するなあ……。

「……梓の演奏はやっぱり上手いな。下手したら先輩である俺なんかよりずっと……」
「いえ、そんな……」

「だけど、アドリブ力はちよつと弱いかもな。俺たちの曲は楽譜があるからいいけど、アドリブ力が強くなれば、梓はもつともつとギターが上手くなると思うぞ」

統夜先輩が指摘してくれたのは、私自身も感じていたことだった。

最近じゃズの勉強もしてなかったし、たまにはジャズの勉強もしようかな……。

「……なんてな。ごめんな、梓。アドリブ力が弱いとかちよつと偉そうだったかな？」
厳しい指摘を終えた統夜先輩は優しい表情でおどけていた。

優しいところと厳しいところがある。それが統夜先輩の良いところだよね！

「い、いえ。気にしないで下さい！私だつて統夜先輩にもつともつとギターを教わりた
いって思ってるんですから！直すべきところはどんどん言つて欲しいです！」

軽音部自体が緩すぎだからね。ちよつとくらい厳しい方が私としてはちよつどいい

んだよね。

今の軽音部の空気も嫌いじゃないけどさ。

「まあ、俺としては梓に教えられることはあんまないかもだけど、出来る限りのことはするよ」

「よろしくお願いします！」

こうして、私と統夜先輩のセッションは終了した。
すると……。

「統夜、梓、お待たせ。私も混ぜてくれよ！」

ベースの弦の張り替えを終えた滞先輩がこちらにやってくると、セッションのお誘いをしてくれた。

「……そうだな。3人で何か演奏するか」

「はいっ！」

そうそう。これ！これだよ！

これこそが軽音部にあるべき姿なんだよ！

「……カムバック私♪」

「？梓、今何か言ったか？」

「へ？い、いや！何でもありませんよ！」

「本当か？」

「はい！」

「……だといけど……」

ふう……。危ない危ない。

思わず本音が口に出ちやつたから、危うくバレるところだったよ。

それにしても……。

「……何かこうしてると、本当の軽音部っぽいですよね！」

『おいおい、ぼいじゃなくて軽音部だろ？ そう思う気持ちもわからなくもないがな』

アハハ……。イルバがジト目でこつちを見てるけど気にしない気にしない！

「さあ、始めましょうか！」

私たちが3人でセッションを始めようとするんだけど、バン!!と勢いよくドアが開く音が聞こえてきた。

律先輩が中に入ってきたんだけど、唯先輩とムギ先輩も一緒だった。

「なんだ律か……。どうしたんだ？ びっくりしたじゃないか」

「うう……。滞お!!」

律先輩が急に滞先輩に泣きついてきた。

「家庭科の宿題手伝って！」

「家庭科？って何かあったっけ？」

「りっちゃんはスカートが縫えないのです」

「ああ、そういうえばそんなのがあったっけ……」

何かを思い出した統夜先輩は苦笑いをしていた。

「お前も出来ないだろ!？」

「私は憂に手伝ってもらいます！」

『おいおい、それを偉そうに言うなよな……』

宿題を憂に手伝ってもらおうとハツキリ言う唯先輩にイルバが呆れていた。

まあ、私もそう思ったんだけどね……。

「律、ボタン付けは上手いのに……」

「ミシンじゃん！機械苦手なんだもん……」

へえ、律先輩ってボタン付けは得意なんだ。

ちよつと意外だな……。

「……仕方ない……。課題放っておいて部活は出来ないしな……」

え!?! 滯先輩ちよつと待って!?! ってことは……。

「りっちゃん、私も手伝うね♪」

ムギ先輩まで!?!

「それじゃあ、みんなでりっちゃんの家に行こうよ！」

「ええ!？」

何だろう……。このまま律先輩の家に行くビジョンしか見えないんだけど……。

「あ、あの……。練習は？」

私は嫌な予感がしながらも滯先輩に聞いてみたんだけど……。

「どうした、梓。行かないのか？」

「うっ……。と、統夜先輩……」

「梓の気持ちは察するけど、今日の練習は無理だろうな」

『ま、いつものことと言えばそうだが、今日は諦めろ、梓』

や、やっぱりそうなっちゃうのお!？」

これじゃあカムバックなんて言ってられないよね……。

結局はこうなるんだもんね……。

私たちはとりあえず楽器の片付けを済ませると、そのまま律先輩の家に向かうことになった。

……続く。

——次回予告——

『なるほどな。梓の悩んでることはわかったぜ。さて、統夜。梓の悩みをどう解決するんだ？次回、「先輩 後編」。先輩としての真価が試されるぜ！』

第88話 「先輩 後編」

マラソン大会も終わり、学園祭も少しずつ迫っていたある日の放課後、統夜たちは律の宿題を手伝うために律の家に訪れていた。

本来なら律一人の力でなんとかしてもらいたいところだったが、課題を放つておいて部活するのはどうかという滞の考えから、律の宿題を手伝うことにしたのである。

律の家に移動中、統夜は訝しげな表情で梓のことをチラチラと見ていた。

今日の梓の様子が少しだけおかしいと感じていたからである。

イルバもそれは感じ取っていたのだが、あえてその話題には触れなかった。

律の家に到着した統夜たちは、そのまま律の家に入った。

「「「お邪魔しますーすー」」」

こう言つて玄関で靴を脱ごうとすると、トイレから水が流れる音が聞こえ、トイレから中学生くらいの少年が出てきた。

「姉ちゃん？帰ってきたなら洗濯もん入れとけつて……」

その少年は律のことを姉ちゃんと言ったことから、律の弟であることが思われ、律の弟は統夜たちの姿を見ると動きが固まっていた。

「よっ、聡（さとし）！」

そんな中、澤は律の弟とも親しいのか、親しげに律の弟の名前を呼んでいた。

「あつ、みんな軽音部の友達」

律は自分の弟……聡に統夜たちのことを紹介した。

「「お邪魔します!!」」

律と澤以外の4人が聡に挨拶をしていた。

「……あ、ああ……どうも……ん？」

聡はただ1人の男子である統夜の存在が気になったのか、統夜のことをジツと見ていた。

「なあ、姉ちゃん。この人、姉ちゃんの彼氏……じゃないよな？」

「なっ!?ち、違うって!!」

聡の唐突な質問に律の顔は真っ赤になっていた。

「だよなあ。そこのお兄さん、すごくイケメンだし、姉ちゃんじゃ釣り合いそうにないもんなあ」

統夜が律の彼氏ではないということに、聡は納得していた。

「聡!!」

「ひゃあ!!そ、それじゃあごゆっくり!!」

律は恥ずかしさから聡を怒鳴りつけるが、聡は逃げるようにリビングへ逃げた。

「……聡のやつ、後で覚えてろよ……」

律はこう呟きながらぷうつと頬を膨らませていた。

統夜たちはそのまま家にあがると、律の部屋に入り、律の宿題を手伝うことにした。

ちなみに統夜は家庭科の課題の時はスカートではなく、ズボンを作っていた。

統夜自身手先がそこまで器用ではないが、どうにか完成させていた。

今手伝うのは律の課題であるのだが、紬が中心となりスカート製作を行っていた。

「……へえ、ムギって手際いいな」

統夜は手際良くミシンを操る紬をジツと見ながら感心していた。

「エへへ……。統夜君に褒められちゃった♪」

紬は統夜に褒められて嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべていた。

紬がスカートを縫っている間、統夜は特にやることがないので、紬の作業をジツと見ていた。

そして、いつの間にか律が姿を消しており、そんなことは気にすることなく、紬はスカートを縫っていた。

「……あれ？りっちゃんは？」

唯たちも律がいないことに気付いたのか、周囲を見回していた。

「そう言えば、下に行つたつきりかも……」

律はスカート製作を始めてすぐ、下に行き、そのまま戻つて来なかった。

『やれやれ……。自分の課題を放つぽり出して何やつてるんだか……』

イルバは課題を袖に任せつきりにしている律に呆れていた。

すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえると、律の弟である聡が中に入ってきた。

「どうした、聡？」

「姉ちゃんが呼んでこいって」

「？何だろう？」

「とにかく、行つてみるか」

統夜たちは聡の案内で下に降り、リビングに向かうと、律が食事の準備をしていた。

「おお！これ、全部りっちゃんを作ったの？」

「そうだぞお」

「うわあ♪いい匂い♪」

「りっちゃん、わざわざありがとう♪」

「ありがとうございます！」

唯、律、梓の3人が夕食の用意をしてくれた律にお礼を言っていた。

「いいっていいって。宿題手伝ってもらっただけじゃ悪いじゃん？」

（へえ、律のやつ、ちゃんと考えてたんだな……）

《ま、そういうことならまだ許せるよな》

統夜とイルバは、律がみんなのために料理をしていたということに感心していた。

「さあ、みんなで食べようぜ！」

「それじゃあ、遠慮なく頂こうぜ！」

一人暮らしである統夜は、ここで夕食をご馳走になるとは思っていなかったので、嬉しいという気持ちを大々的に出していた。

統夜たちはそれぞれ座って食卓を囲んでいた。

「えつと……。これで全部揃ってるかなつと……」

律はテーブルを見回して、作ったものが全部揃ってるかをチェックしていた。

「濡、そつちにお茶ある？」

「ああ。大丈夫」

食卓に足りないものはないようであり、食事の準備は万全だと思われたのだが……。

「……律先輩」

「ん？何か足んなかった？」

梓が何かに気付いたのだが、何故か頬を赤らめていた。

「そういう訳ではないんですけど……。やや食卓にそぐわないものが……」

統夜たちは梓が視線を向けた方向を見ると、綺麗に洗濯物が畳んであったのだが、一番上に男物のパンツが乗っていた。

「……すまん。父のだ……」

「アハハ……。ま、そうだろうな……」

『ま、パンツを見ながら飯は食いたくないよな』

聡は現在二階にいるため、イルバはこのように口を開いていた。

「……あつ、こちらこそ、何かすいません……」

梓の反応はもつともなのだが、何故か申し訳なさそうにしていた。

「ピンクだね」

「皆まで言うな！」

（……律の親父さん、随分と洒落たパンツを履いてるんだな……）

《……よく言うぜ。お前もそんなパンツを何枚か持つてるくせに！》

（おまつ!?!絶対それみんなの前で言うなよ!!）

イルバが統夜の履いてるパンツの話をすると、統夜は顔を真っ赤にして、ムキになっていた。

「…………？ 統夜先輩？ どうしました？」

「な、何でもない！」

急に顔を赤らめる統夜を見ていた梓は首を傾げていた。

その間に律は父のパンツを始め、他の洗濯物を見えない場所まで移動させると、ふうつとため息をついていた。

「それじゃあ、気を取り直して……」

この言葉と共に律は両手を合わせていたので、統夜たちも同じく両手を合わせた。

「……いただきます！」

「はい、召し上がれ♪」

（…………何か、こういうのっていいよな……）

幼い頃に両親を亡くし、その後も魔戒騎士になるために厳しい修行を積んできた統夜にとつて、このような暖かい食卓は憧れそのものだった。

しかも、大切な存在である唯たちと同じ食卓でご飯を食べてるといのが嬉しかったのか、統夜はご飯に手をつけずに笑みを浮かべていた。

「…………？ どうした、統夜？ 冷めるから早く食べるよな」

「あ、ああ。悪い悪い。いただきます！」

統夜は気を取り直してこの日の主食であるハンバーグを一口食べた。

「……！美味しいな！」

律手作りのハンバーグが絶品だったのか、統夜は満面の笑みを浮かべていた。

「はい！本当に美味しいです！」

梓も予想以上に美味しかったからか、思わず声をあげていた。

「そうかあ？良かった……」

「うん！ご飯もすつごく美味しい！」

「そりゃあ、我が家自慢の炊飯器ですから♪」

唯はハンバーグだけではなく、ご飯も美味しいと思っており、律は炊飯器が優秀なおかげだと説明していた。

「律、ご飯好きだもんな」

「ええ！日本人ですからね！」

律は根っからのご飯派であり、昼食も弁当やおにぎりである率が高かった。

律とは長い付き合いである滯は、律がご飯派だということをよく理解していた。

「ご飯は凄いもんね！あつ、でも朝はパンの時もあるよ。イチゴジャム美味しいしね♪」

「私はどっちだろう……」

唯は強いて言えばご飯派であり、梓はどっち派か決めかねていた。

「……俺はどっちも好きだが、強いて言えばパン派だな。昼飯はほとんどパンだし」

「そう言えば、統夜君っていつも購買でパンを買っていたわよね？」

紬は、統夜が購買でよくパンを買っていることをよく理解していた。

それは紬だけではなく、唯たちもよく理解していたのだが……。

「馬鹿者！日本人なら米食え米!!」

『おいおい……。昭和の頑固親父みたいなこと言ってるぞ……』

ご飯派である律が昭和のお父さんのような台詞を言っていたので、イルバは呆れていた。

こうして、統夜たちは楽しく話をしながら夕食を楽しみ、夕食の時間は穏やかなものになった。

夕食をご馳走になった後、統夜は番犬所へ向かうのだが、指令はなかったため、街の見回りを行ってから帰宅した。

く梓 side く

翌日の昼休み、私は昨日の出来事を憂や純に話すと、2人は思い切り笑っていた。

「アハハ！なんだあ、結局律先輩の家に遊びに行っただけじゃん！」

「うう……。違うよ！課題しに行っただももん！」

私は素直に認めるのが悔しかったから、こう言って反発していた。

「でもいいなあ、律さんの手料理！」

「うん！それは本当に美味しかったよ！」

「おっと、自慢ですかあ？妬けますなあ」

あうう……。純め、ニヤニヤしながらからかって来て……。

「そ、そんなんじゃないし！」

「まあまあ。こういうのもたまにはいいんじゃない？寄り道も必要だって」

「そうかなあ……」

「そうだよ」

まあ……。確かに純の言うことも一理あるけど……。

……っつて!!

寄り道ばっかりだから困ってるんじゃない!!

そして、この日の放課後、私は音楽準備室に通じる階段の前に来ていた。本当にこのままじゃダメだよね……。

だから今日こそは絶対絶対ぜーったい!!

「カムバックわ」

カムバック私!! って言おうとしたんだけど、上からギターの音が聞こえてきた。

……あれ? この曲……キーは違うけど、ワルキューレの曲……だよな?

ということは……統夜先輩だ!

私は階段を駆け上がって音楽準備室のドアの窓を覗くと、統夜先輩がギターを奏でていた。

……あつ、今から歌うのかな?

この曲って、確かワルキューレの「GIRAFFE BLUES」だったっけ?

ドラマの主題歌になってたよね?

……それにしても、統夜先輩の歌は上手いな……。

それだけじゃなくて、力強さとか、優しさとか、色んな感情が伝わってくるんだよね……。

このまま……ずっと聞いていたいな……。

こんなことを考えていたけど、統夜先輩の演奏は終わっちゃった。

それは残念だったけど、私はパチパチと拍手を送りながら部室に入ると、統夜先輩は少しだけ驚いていた。

「……あ、梓か。曲が終わるなり拍手が聞こえたからびつくりしたよ」

「すいません。統夜先輩の演奏が良かったのでつい……」

私はギターを構えた状態の統夜先輩のことをジッと見つめていた。

……やっぱり統夜先輩は格好いいなあ……。／／／／

……つて！そうじゃなくて！

「……？梓、どうした？首をブンブン振り回して」

「へ？い、いや、何でもないです！」

「そうか？」

「はいー！」

危ない危ない……。統夜先輩に見惚れてて思わずおかしな行動をしちゃったよ……。

……？あれ？

「統夜先輩、トンちゃんの水槽、掃除してくれたんですか？」

トンちゃんの水槽がピカピカになって、水槽の近くにはバケツとかの掃除道具が置いてあった。

「ああ。昨日からトンちゃんの水槽が汚れてると思ってたからな。今日の昼休みに掃除

したんだよ。バケツは時間なくて片付け忘れたんだけどな」

「そうだったんですか……。すいません、統夜先輩。1人で大変な仕事をさせてしまつて……」

「いいっていいって。俺はいつも魔戒騎士の仕事で忙しいし、この手の掃除はいつも梓がやってくれたからな。たまには俺もやらないと」

統夜先輩……。ただでさえ忙しいのに、そこまで考えてくれたんだ……。

「……トンちゃん、水槽が綺麗になつて気持ちいいだろ？良かつたな」

統夜先輩はギターを長椅子に置いてトンちゃんの水槽に近付くと、このようにトンちゃんに呼びかけていた。

……本当、トンちゃん、気持ち良さそうだな。

トンちゃんは水槽をいつもより悠々と泳いでる。

それに、時々統夜先輩の方を見て何か言おうとしている。

「ありがとう」って言いたいのかな？

「……うん、トンちゃんは今日も可愛いな♪」

あれ？そう言えば統夜先輩がトンちゃんを可愛いって言ったの初めて聞いた気がする……。

統夜先輩が動物好きなのは一緒に映画見た時にわかつたし、統夜先輩はトンちゃんも

好きなんだね♪

「……ところで梓、最近どうかしたのか？」

「ふえ!? な、何ですか？」

「最近、何か思いつめた顔してたし、ブツブツ何か呟いたりもしてただろ？それが気になつてな」

「うう……。私としては隠してきたつもりだったけど、統夜先輩にはお見通しだったの!?」

「何か悩んでることがあるなら話してくれよ。俺つてそんなに頼りないのか？」

「いえ……。違うんです！ そうじゃなくて！」

「あうう……。そんな風に言われちゃ話さない訳にはいかないじゃないですか！」

私は仕方なく、統夜先輩に今私が抱えている悩みを打ち明けた。

まあ、統夜先輩ならちゃんと話を聞いてくれそうだしね……。

「……なるほど、そういうことなら今までの梓の行動も納得だわ」

私の話を最後まで聞いた統夜先輩はウンウンと頷いていた。

「梓、ひよつとして焦ってるのか？ 学園祭も近いのにもいつも通りお茶ばつかでダラダラしてるってことか？」

「ーは、はい……」

私はここまでの話はしなかったけれど、統夜先輩は私の心情を察してこう聞いてくれた。

……普段は鈍感なのに、今日の統夜先輩は鋭いな……。

「……ま、梓の心配はわかるが、俺は心配しなくても良いと思ってるけどな」

「え？」

「梓、お前が軽音部に入ったばかりの時もこんな感じで悩んでただろ？その時に俺が言ったこと、覚えてるか？」

「……はい」

……忘れる訳ない、あの時なんでもん。統夜先輩が魔戒騎士だって知ったのは。

それに、統夜先輩が悩んだ私に力を貸してくれたんだよね……。

「あいつらは普段だらけてるけど、やる時はやるからな。それはお前もわかってるだろう？」

「ま、まあ……そうですけど……」

「お前だって1年以上一緒にいて、そのことを実感しただろ？」

「はい。統夜先輩の言う通り、先輩たちはいつもだらけてるけど、演奏してる時は楽しそうだって思いました。だからかな？自然と良い音楽を奏でられてる気がするんです」

先輩たちとたくさん演奏してきて、私はそのことを心から実感した気がするんだよ

ね。

「それに、昨日はアドリブが弱いとか言ったけど、梓はこの1年でかなりギターが上手くなったと思うぜ」

『それは俺様も思ったぜ。あんなだったららして居る部活でもお前さんはずいぶんと上達したんじゃないのか?』

「そ、そうかな……」

イルバの言葉にはちよつと棘があるけど、一応褒めてくれてるの……かな?

イルバが褒めてくれることなんて滅多にないからなんか嬉しいな……。

「だからな、俺はそこまで心配しなくてもいいと思ってるんだよ。俺はみんなを信じてるしな」

「はい……」

……何だろう……。上手く言いくるめられた気はするけど、さっきまでの悩みが嘘みたいになくなって……。

統夜先輩に話を聞いてもらって正解だな♪

……やっぱり……。私、統夜先輩が好きなんだな……。

この想いが報われるかはわからないけど、これからも統夜先輩の側にいたいと思ってる……。

いられるかなあ……。

「……？梓、どうしたんだ？」

「……クスツ、秘密です♪」

「おいおい、何だよそれ……」

アハハ……。統夜先輩苦笑いしてる……。

統夜先輩は鈍感だから私の気持ちには気付いてないよね……。

私のこの気持ち、鈍感な統夜先輩には教えてあげないんだから！

私と統夜先輩がこのようなやり取りをした直後にガチャツとドアが開く音が聞こえ、唯先輩が中に入ってきた。

「おう、唯。やっと来たか」

「あつ、やーくん！あずにやんも来てたんだあ！」

唯先輩は私と統夜先輩を見るなり人懐っこそうな笑顔を見せていた。

「あつ、そうだ！私、あずにやんに教えてもらいたいことがあったんだ」
「へ？」

「この前、ムギちゃんからもらった曲があるでしょ？何だか難しくて……」
「珍しいな……。唯先輩が率先してそんなこと聞いてくるなんて……」

確かに、統夜先輩の言う通り、心配する必要はなかったのかもね。

「ああ、ギターソロのところですよ？いいですよ」

「ううん、そこじゃなくて……」

「え？」

ギターソロじゃなかったらどこのことだろう？

私が困惑していると、唯先輩は楽譜を取り出すと……。

「いやあ、どう見たらいいのかわからなくて……」

そ、そこから!?

それって楽譜の読み方がわからないってことだよね。

それじゃあ、ギターソロ以前の問題じゃん!!

統夜先輩……。そんな哀れむような目で私を見ないでよ……。

こうして、他の先輩方が来るまで、私と統夜先輩の2人がかりで楽譜の読み方や流れを教えていた。

※※※

翌日のとある休み時間、私は統夜先輩とのやり取りを純や憂に話した。

「……へえ、音楽を楽しむことが良い演奏をすることに繋がるねえ……」

「統夜さん、いいこと言うね♪」

「確かに、軽音部ってそんなに練習してないのに、本番になると凄くいい演奏するよね」
……うん、私もそう思う。

練習は全然かもしれないけど、本番となると、私たちの気持ちは一つになって、最高の演奏になるんだと思う！

そんな感じで話をしていたその時だった。

「梓ちゃん！いる？」

他のクラスの子が私を呼んでいたの、私はその子のもとに駆け寄った。

「はーい！何？」

「これ、梓ちゃんのものでしょうか？」

そう言っ手渡してきたのは、「ぶ」と書かれたキーホルダーだった。

え……!?!嘘でしょ？まさか……!!

私は慌てて自分の学生鞆を見たら、いつ外れたのはわからないけど、キーホルダーが

なくなっていた。

「合ってた？」

「うん！どうもありがとう!!」

「はい！」

キーホルダーを届けてくれた子はそのまま自分のクラスへと戻っていった。

キーホルダーが見つかったのは良かったけど、どうして……。

私はキーホルダーの裏を見ると、見覚えのあるシールが貼ってあった。

……これは唯先輩だな……。まったく……。

だけど、これのおかげでこのキーホルダーが私のだつてわかつたんだし、後で先輩たちにお礼を言っておかないとね！

〈三人称 side〉

梓のキーホルダーが知らぬ間になくなつてるのが見つかり、その日のホームルームで、学園祭についての話がされていた。

梓たちのクラス話が喫茶店をやることになり、とりあえず来週までに希望する係りを決めておくよう先生に言われ、ホームルームは終わった。

「……梓ちゃん」

ホームルームが終わるなり、憂は梓の席まで移動をしていた。

「ん？」

「梓ちゃんは何やるの？」

「うーん……。どうしようかな……」

「私、ウエイトレスやろうかな。いらっしやいませえ♪って」

純も梓の席のところに来ていたのだが、純はウエイトレスを希望していた。

すると……。

「へえ、それなら何猫にするの？」

「えっ!?!」

梓の思いがけない言葉に憂と純は哑然としていた。

しかし、梓はおかしなことを言っているなどまったく気付いていなかった。

「え？だって、猫耳つけるんでしょ？」

「だから、なんで猫耳？」

純は梓の言葉に呆れているのか、ジト目になっていた。

「え？ウエイトレスって猫耳つけるものなんでしょ？」

梓は当たり前のことだと言いたげな感じでこのような発言をしていたのだが、梓のともんでもない発言にクラスメイト全員の視線が梓に集中していた。

「……はっ！」

全員からの視線を感じたことで、梓は自分の発言がおかしいということにようやく気付いていた。

「梓ちゃん……」

「やっぱり軽音部なんだね……」

憂や純だけではなく、クラスメイトたちは、軽音部のメンバーが他とは少しだけずれていることを再認識していた。

そのことに気付いた梓の顔はまるで茹で蛸のように真っ赤になり、顔面は汗でびっしりになっていった。

「こんなの……こんなの、私じゃなああああ!!」

梓の悲痛な叫び声がクラス中に響き渡っていた。

統夜の励ましで今のままでいいと思っていた梓だったが、やはり昔の自分に戻った方がいいんじゃないか？と思ってしまうた。

……続く。

—— 次回予告 ——

『魔戒騎士としてメキメキと力をつけている統夜だが、まさかこんな致命的な弱点があったとはな。次回、「弱点」。さらに、大変なことも起こってるみたいだぜ！』

第89話 「弱点」

……ここは桜ヶ丘某所にあるとあるマンションに続く道路。

この道を、仕事帰りと思われる女性が歩いていった。

「まったく……。今日も残業だなんて……。本当、あの会社人使い荒すぎよね……」

女性は会社で毎日のように残業しており、げんなりとしていた。

今日も残業終わりで、外はすでに真っ暗だった。

この日も女性は残業で疲れ果てており、酒でも飲んでゆっくり休もうと思いい、家へと急いでいた。

すると……。

「……クウウウン……」

子犬の鳴き声が聞こえてきたのか、女性は足を止めた。

足を止めて鳴き声の聞こえてきた方を見ると、ダンボール箱の中に子犬がいた。

それを見ただけで捨て犬だということは察することが出来て、子犬は寒さで震えていた。

「……どうしたの？ かわいそう……」

女性は残業疲れではあるものの、寒さで震えてる子犬を放っておけなかった。女性は子犬に駆け寄り、その場にしゃがみ込みながら子犬に語りかけた。

「……だけど困ったなあ……。うちのマンション、ペット禁止だしなあ……」
出来ることなら家で面倒を見たいと思っていたのだが、女性のマンションはペット禁止のため、家で飼うことが出来ないのである。

そのため、女性はこの子犬を救うにはどうすれば良いのかを考えていた。

「……まあ、明日は休みだし、1日くらいなら家で置いても大丈夫だよな？」
幸いにも女性は翌日が休みのため、今日は家で子犬を保護し、翌日に飼い主探しをすることにした。

そうと決めた女性は子犬を優しく抱き抱えていた。

「さあ、私のお家に行きましょう。お腹空いたでしょ？ご飯にしましょうね」
子犬が答える訳がないのだが、女性は子犬にこう語りかけた。
すると……。

「……ウ、ウン……」

「え？」

聞こえるはずのない声が聞こえて来たので、女性は周囲を見回したのだが、異常はなかった。

そして、女性は子犬のことをジツと見るのだが……。

「オナカ……スイタ……」

「!!?」

何と喋っていたのは本来喋るはずのない子犬だった。

その事実から、女性は驚きを隠せなかった。

「イタダキ……マス……」

子犬は大きく口を開くと、そこから素体ホラーが顔を出した。

「!!?」

女性は子犬を放そうとするが、既に手遅れであり、子犬の口から飛び出した素体ホラーが女性の顔をガシツと掴んでいた。

素体ホラーが大きく口を開くと、女性の体は黒い粒子になり、そのまま素体ホラーに吸い込まれていった。

「きやああああああああああ!!」

女性は子犬を保護しようとしたのだが、その子犬がホラーであり、そのことは知らなかった女性はそのままホラーに捕食されてしまい、その生涯を終えることになってしまった。

女性の姿が完全に消滅すると、無残にもその場には女性が手にしていたバッグだけが

残されてしまった。

女性を捕食した素体ホラーはそのまま子犬の体に戻り、子犬はその場で着地をした。

「……………モット……………タベタイ……………」

ホラーである子犬の瞳から怪しい輝きを放っていた。

そして、ホラーである子犬は次なる餌を求めて夜の街へと消えていった。

※※※

その数日後、桜ヶ丘警察署に、とある会社の社長から連絡があつた。

それは、自分の会社で勤務している一人の女性が姿を消したというものだった。

その通報を受けた警察はまた行方不明事件かとげんなりしながらも捜査を開始した。

そんな中、警察は行方不明になった女性の帰宅ルートを辿り、何か手がかりがないか探してみるが、まったく手がかりがなかった。

「……まったく手がかりがないな……」

ベテラン刑事として事件の捜査を行っていた真山修吾は、がっくりと肩を落としていた。

「……それにしても妙ですよ。ガイシヤの家の近くにガイシヤの鞆が落ちてましたけど、他に手がかりがないなんて……」

修吾のバディであり、若年ながらも刑事としては一流である日代幸太は、被害者のものと思える鞆以外の手がかりがないということに疑問を感じていた。

しばらく考え込んでいると……。

(……まさか……この事件もホラーの仕業……なのか?)

幸太は以前、ホラーと呼ばれる怪物を狩る魔戒騎士である統夜と出会い、仲良くなった。

幸太は統夜からこの街で起きてる不審な行方不明事件はホラーの仕業であることを知らされた。

真実を知った幸太であるが、これを話しても上司は信じないと予想し、さらに、一般人がホラーのことを知れば混乱が起きることも理解していた。

そのため、幸太は真実を警察の人間には話さないと決めたのであった。

「……? 幸太、何かわかったのか?」

「あ、いや。色々考えたんですけど、全然わからなくて……」

「そうだよなあ。この事件も不審な行方不明事件として迷宮入りになるんだろうな」

ホラーが原因で起きた行方不明はどれも未解決の行方不明事件として、迷宮入りになつていった。

修吾は、解決の糸口がつかめないことから、この事件も他の行方不明事件のように迷宮入りになると予想していた。

「……そうかもしれないですね……」

幸太は、自分の力では解決出来ない事件に再びぶつかり、悔しさから唇を噛んでいた。
(……後で、統夜君に連絡をしておくか)

ホラーが絡んでいることは間違いないと踏んだ幸太は、事件の捜査が終わった後に統夜に連絡することにした。

その後、手がかりらしい手がかりはなく、事件の捜査は終了した。

※※※

学園祭か近付いてきており、徐々にではあるが、学園祭で何を行うかという話し合いが頻繁に行われていた。

そして、文化系の部活は学園祭での発表に備え、練習に勤しんでいた。

統夜たち軽音部もライブを控えているため、練習には一層の気合が入っていた。

「……よし、統夜。みんなで部室に行こうぜ！」

「ああ、そうだな。もうすぐ学園祭だし、気合は十分であつた」

統夜も学園祭のライブに向けて、気合は十分であつた。

梓は軽音部はだらけているからライブは大丈夫だろうか？と心配していたが、今の統夜たち3年生はライブに向けてやる気に充ち満ちていた。

この日も気合十分に部室に向かおうとしたのだが……。

「その部室だけどね……」

「?さわちやん?」

やる気満々な統夜たちにさわちが声をかけた。

「使えないのよ」

「使えないって何が?」

「部室がよ」

「『『『……』』』」

部室が使えないという事実が呑み込めず、統夜たちは言葉を失っていた。
そして……。

「『『『ええええええええ?!』』』」

時間差で、統夜たちは驚きの声をあげていた。

部室が使えないことを理解した統夜たちは、さわ子と共に音楽準備室に行くのだが……。

「……マジかよ……」

音楽準備室の入り口には、立ち入り禁止の張り紙が貼ってあった。

「音楽室も使えないなんて……」

「嘘なんかつかないわよ」

「いったい何が!？」

事情が呑み込めない律は、何故音楽準備室と音楽室が使えないのか、理由をさわ子に聞いていた。

「……夜中誰もいない教室からポタリポタリと音がして……」

「ひっ!？」

濡はさわ子の話が怖い話と感じ取り、ピクンと肩をすくめていた。

「……………あつ、大丈夫です……………。続けてください…………。」

「……………何だろうと思つて調べてみたら…………。」

(……………何で怖い話っぽく言つてるんだよ…………)

《ああ、俺様もそう思つたぜ》

さわ子は何故か怖い話風に語つており、そのことに対して統夜とイルバは呆れていた。
た。

さわ子は一息つくと、目をクワツツと見開いて結論を語り始めた。

「……………天井から水漏れてたんだつて!!」

「ひいひいひいひいひい!!?」

さわ子は怖い話のオチのように大声を出すと、滯は怯えてしまい、思わず統夜に抱きついていた。

「ちよ、滯?!」

滯がギュツと抱きついてくるのが恥ずかしかったのか、統夜は顔を真っ赤にしていった。

『やれやれ……………。何だと思つて聞いてみれば、変哲のない普通の話じゃないか』

イルバはさわ子の話を最後まで聞いていたのだが、内容があまりに普通だったので、呆れていた。

「それが部室の下の階でね。配水管を取り替えるそうんだけど、それって部室も通つてるから立ち入り禁止になつちやうんですって」

「あうう……」

「……このタイミングでか……」

「学園祭まで後一ヶ月もないのに……」

「ここに来て大きな問題に直面してしまい、唯、律、紬の3人は不安げな表情をしていました。」

「そっだよなあ……。何とかしなきゃいけないが……」

「統夜はこの問題をどうするか考えていたのだが、滯がまだ統夜に抱き付いてることに気付くと……。」

「……み、滯！いつまで抱きついてるんだよ！」

「……！ご、ごめん！」

滯も咄嗟に統夜に抱きついたことに気付くと、顔を真っ赤にしながら統夜から離れた。

滯は統夜に抱きついたのが恥ずかしかったのか、もじもじとしながら恥ずかしがっていた。

「「……」」

唯、律、紬の3人は滯がどきくさに紛れて抱きついたので羨ましかったのか、ジト目で統夜を睨みつけていた。

「あ、アハハ……」

その視線に気付いた統夜は思わず苦笑いをしていた。

「とりあえず楽器は全部外に出しておいたから。……あと亀も」

さわ子が指差す方向に、ドラムセットやキーボードなどの楽器類と、バケツの中に入っているトンちゃんと、その水槽が置いてあった

「スッポンもどきだよ、さわちゃん！」

『いやいや、そこは今どうでもいいだろ……』

今はトンちゃんの種類について話している訳ではないため、妙なこだわりをしている唯にイルバは呆れていた。

「……？何かあったんですか？……あつ、トンちゃん！」

遅れて梓がやってくるのだが、すぐにバケツに入ったトンちゃんを発見し、トンちゃんに駆け寄っていた。

「……部室がね、水道の工事で使えないの……」

「え？」

紬がこんなことになっている事情を話すと、梓は戸惑いの表情を見せていた。

「お茶が飲めないんだよ！」

「そつちじゃないだろ!!」

唯のあまりにずれた発言に、統夜と滯は同時にツッコミをいれていた。

「予定だと工事は10日間だそうよ」

「!?ということはその間は部室での練習は無理ってことか……」

『こうなったら他の場所で練習するしかないんじゃないのか?』

「そうね……。吹奏楽部と合唱部が使ってる第2音楽室、使わせてもらえないか交渉してみるわ。……忘れてるかもしれないけど、私は吹奏楽部の顧問だし」

「あつ……そういえばそうでしたね……」

『お前さんも一緒にダラダラしてるからついつい忘れがちだな』

さわ子は元々吹奏楽部の顧問であったのだが、高校時代は元軽音部だということが統夜たちにバレ、そのことがバラされたくなければと、半ば強引に軽音部の顧問を兼任することになった。

軽音部の顧問になったさわ子は、部室で統夜たちと共にダラダラすることが多くなっていた。

そのため、さわ子が吹奏楽部の顧問であることはつい忘れがちになってしまっているのである。

「お、お願いしますー!」

とりあえずさわ子に頼るしがないため、統夜たちはさわ子が音楽室を使わせてもらえないか交渉しに行っている間はその場で待つことにした。

統夜たちは階段に座り、大人しく待っていたのだが……。

「……立ち入り禁止ってどうなってるんだろ……」

「見てみる? 見てみる!」

唯が立ち入り禁止の部屋が気になると切り出すと、紬まで興味を示していた。

「……おいおい、やめとけよ」

統夜は立ち入り禁止の部屋の扉を開けようとする唯と紬を制止しながら呆れていた。

すると……。

「……あつ、先生が戻ってきた!」

このようなやり取りをしていると、さわ子が戻ってきた。

「……どうだった、さわちゃん?」

「ごめん、ダメだった」

「ええ!?! さっきの自信はなんだよお……」

「ごめんごめん」

『まあ、学園祭が間近で練習しなきゃいけないのはどこも同じなのだろう』

イルバは、さわ子が交渉に失敗した原因をこのように分析していた。

「ええ!? それじゃあどこで練習すればいいのかなあ……」

「そうねえ……教室とか?」

「教室か……」

「……他にアテもないし、とりあえず行ってみるか」

他に良い場所もないことから、統夜たちは3年2組の教室で練習することになった。

「……おおーここで練習するんだ!」

一通り楽器のスタンバイが終わった頃、クラスメイトである中島信代が歓喜の声をあげていた。

教室には他にもクラスメイトが何人かおり、これから始まるであろう軽音部の演奏を心待ちにしていた。

「どうもどうも♪」

「すいません……。お邪魔します……」

梓だけはクラスも学年も違うため、少しだけ気まずそうにしていた。

「あんまり大きい音を出すと迷惑だから、軽くやってね」

「「「「「はーい!」」」」」

「じゃあ、そういうことだから」

楽器運搬の手伝いをし、共に3年2組の教室に来ていたさわ子は、仕事に戻るために職員室へと向かって行った。

「あずにゃん。私たちの教室だから遠慮せずにくつろいで♪」

「そう言われても……」

「まあ、先輩の教室だから居づらいよな……」

統夜は、居づらそうにしている梓の心中を察していた。

「よいこらせ〜」

ドラムの椅子に座った律は、何を思ったのか上履きを脱いでいた。

「それは靴脱いだ」

「サンキュー!!」

「……」

濡は律のボケに素直にツツコミをいれており、統夜はジト目で律を見ていた。

「おい、統夜!そんな目であたしを見るな!」

「はいはい……」

律はジト目で自分を見ていた統夜にこう追求すると、統夜はギターを奏でる準備を始めた。

「……オホン!それじゃあ、やるかあ!」

演奏準備も整い、クラスメイトたちが拍手を送っていた。

そんな中、何かに気付いた統夜は首を傾げていた。

《……う？どうした、統夜？》

(なあ、イルバ。俺たちさ、アンプのボリュームって抑えたっけ?)

《ああ、そう言えばそうだな。抑えてなかったら大変なことになるな……》

「よし、まずはカレーから行くぞ！」

嫌な予感がしている統夜とイルバはともかくとして、律は放課後ティータイムの中でも一番激しい曲である「カレーのちライス」の練習をすることにした。

「……ちよ……!?!」

律が一番激しい曲をチョイスしたため、気が動転した統夜は心の準備が出来ていなかった。

「1・2・1・2・3・4！」

律の合図により、「カレーのちライス」の演奏が始まったのだが……。

ドオオオオオオン!!

統夜の嫌な予感は的中していたのか、アンプのボリュームはいつも通りだった。

そのため、物凄い爆音が鳴り響いていた。

(おいおいおい?!いきなり爆音じゃねえか!?)

《……嫌な予感は的中したな……》

統夜とイルバの嫌な予感が当たってしまい、統夜は苦笑いをしながら演奏していた。統夜たちはいつも通り演奏をしていた。

そのため、最後まで勢いは収まることなく、爆音のまま最後まで演奏してしまった。

「うわあ、凄い迫力♪」

「格好いい♪」

「いやあ、それほどでも♪」

クラスメイトたちの評価は上々であったのだが……。

「あの一、すいません！」

音がうるさいと苦情を言いに来たと思われる女生徒2人が中に入ってきた。

「私たち、今文化祭の話し合いをして……」

「その……音が……」

(……やっぱりそうなるよな……)

音がうるさいと苦情を言いに来た2人を見た統夜は、そう来るだろうと予想しており、頭を抱えていた。

「ああ！ごめんなさい！」

「うるさかった？」

「ごめんなさい……」

唯たちもこれが苦情と察したのか、すぐに謝っていた。

「いえ、こちらこそすいません……」

苦情を言いに来た2人は、ハッキリうるさいとは言わず、むしろ申し訳なさそうにしていた。

とりあえず要件は伝えたため、2人は出て行った。

《……ま、演奏中にうるさいと怒鳴り込まれなかっただけでも運が良かったんじゃないのか?》

(ああ、そうかもしれないな……)

「……仕方ない、場所変えるか」

統夜たちは楽器の撤収を始め、それが終わると、練習に使えそうな場所を探すことになった。

まず最初に訪れたのは体育館だった。

現在体育館は運動部が使用しているが、空いているスペースがどうか使えそうだった。統夜たちは体育館で練習することになった。

しかし、とても集中出来る環境ではなかったため、統夜たちは体育館の使用を断念した。

他にも練習に使えそうな場所がないか探してみたのだが、講堂は演劇部が使用しており、屋上には詩吟部がいたため、練習に使えそうな場所は見つからなかった。

気が付けば夕方になっており、この日はこれ以上練習に使えそうな場所を探しても見つからないという結論になり、統夜たちは帰ることにした。

「……明日はどこかで落ち着けるといいわよねえ……」

「そうだよな……」

「今日は全く……」

「お菓子が食べられなかったもんね！」

「やっぱりそっちですか!!」

「アハハ……。ごめん、冗談だよ、あずにゃん」

「やれやれ……」

唯は冗談だと言ったものの、実はそれが本音だろうと推察した統夜はため息をついていた。

「……あ、そうだ、漑。歌詞は出来たのか？」

「お菓子が!？」

「そっちじゃなくて曲の歌詞だろ……」

歌詞という言葉に唯は思わず反応しており、統夜は唯の勘違いに呆れていた。

「新曲出来たんですか？」

「まあ、統夜が作ってくれた曲もあるし、あとはムギの曲も出来てるんだけどさ……」

「歌詞も書いただろ？でも、律がダメだって……」

「溼は新曲用の歌詞は書いていたのだが、何故か律は溼の歌詞を没にしていたのだった。」

「え？それってどうしてですか？」

「梓が律に歌詞を没にした理由を聞こうとしたその時だった。」

「……あれ？あの人……」

「紬は、学校の入り口に立っている1人の男を発見した。」

「……あの人、誰だろうね？」

「……！」

「統夜も男の存在を確認するのだが、その男は、統夜の知っている男だった。」

「？やーくん、あの人のこと、知ってるの？」

「ああ、あの方は……」

「統夜は唯たちに男のことを紹介しようとするのだが、男は統夜の存在に気付き、統夜に駆け寄った。」

「……統夜君、待ってたよ」

「こゝ、幸太さん!? 何でここに?」

桜高の入り口で統夜を待つていたのは、統夜の友人の1人で、刑事の日代幸太だった。「ああ、統夜君に伝えることがあつてね」

「……伝えたいこと……」

統夜は幸太の伝えたいことという言葉に心当たりがあつた。

「な、なあ、統夜。この人つて統夜の知り合いか?」

「ああ、この人は……」

統夜は唯たちに幸太のことを紹介しようとするのだが……。

「ああ、俺は日代幸太。桜ヶ丘警察署の刑事で、統夜君の協力者……みたいなものかな」

「[[[[刑事さん!]]]]」

統夜に刑事の知り合いがいるとは思わなかつたので、唯たちは驚きを隠せなかつた。

「な、なあ、統夜。協力者つてことは、この人も魔戒騎士の秘密を知つてることだろ? 刑事さんに秘密を話して大丈夫なのか?」

律は刑事である幸太が魔戒騎士の秘密を知つてることも驚きだつたが、刑事である幸太がこのことを知つて大丈夫なのか心配になつていた。

「ああ、そこは問題ないよ。ホラーなんて化け物があるなんて、警察じゃ誰も信じないだろうしね。それに、俺だつてホラーの話を経験上層部やマスコミに話して世間に広まる

とどうなるか……。理解してるから」

唯たちもホラーの存在が広まったらどうなるか。そのことは理解していた。

そして、刑事である幸太もそのことを理解しており、唯たちは安堵していた。

「ところで、統夜君、この子達もホラーのことを知っているか？」

「ええ、彼女たちもホラーとの戦いに巻き込まれたことがあります」

「そうだったのか……」

「……ところで、伝えたいことは？」

統夜はここで本題を切り出した。

「ああ。実は、数日前にある女性が不可解な失踪をしてな。警察は一連の行方不明事件

として処理するつもりだが、俺はホラーの仕業と踏んでるんだ」

「不可解な失踪……か」

『まあ、確かにホラーの仕業の可能性が高いな』

幸太の話聞き、統夜とイルバが口を開くのだが、幸太はイルバが喋るのを見て目を丸くしていた。

「ゆ……指輪が喋った!？」

幸太はイルバが喋るのを初めて見るので、驚きを隠せなかった。

『おっと、お前さんは俺様が喋るのを見るのは初めてだったな。……俺様はイルバ、魔導

輪だ』

「まさか、お前の力でホラーの捜索をするのか？」

『ほお、さすがは刑事だな。お前さんの言う通り、俺様はホラーを探知することが出来る』

「それで、俺はホラーを見つけて倒す訳だ」

「なるほどな……」

幸太はイルバについての説明を受けるのだが、1回の説明で納得していた。

「……とりあえずその魔導輪のことはわかったが、今回行方不明事件の捜査をして気になることがあるんだ」

「気になること？」

「……女性が行方不明になった時にその女性のもと思われる鞆が見つかったんだが、その女性は行方不明になる前に捨て犬を見ていたと思われるんだ」

「捨て犬……？」

動物が好きな統夜は捨て犬という言葉に反応していた。

「……お前、イルバ……だったか？人間だけじゃなくて動物に憑依するホラーって存在するののか？」

『ほお……』

イルバは、幸太が刑事であるが故の目の付け所に関心していた。

『お前さん、刑事にしておくにはもったいないくらいだぜ。……ああ、ホラーの中には人間ではなく、動物に憑依するホラーも存在するぜ』

「やつぱり……」

『おい、幸太とか言ったな？ 今回のホラーは犬に憑依した可能性があると言いたいのだな？』

「ああ。もし女性が捨て犬を保護しようとして、その捨て犬がホラーだとしたら、何故女性が不可解な失踪をしたか説明がつくんだよ」

「あの……。もしかして、その犬に憑依したホラーが既にその女性を捕食してしまった可能性が高いという訳ですか？」

「ああ、俺はその可能性が高いと思っている」

幸太の推理があまりに的確であり、その推理を聞いていた統夜たちは思わず拍手をしていた。

『どうやら幸太の推理は正解かもしれないぜ。統夜、指令が来たみたいだ』

「それじゃあ一度番犬所へ行つてそのホラー退治へと向かうよ」

『……統夜。相手は犬に憑依したホラーだぜ？ お前、大丈夫なのか？』

イルバは、統夜が重度の動物好きと知り、いざ戦いとなると統夜の剣が鈍らないか心

配していた。

「だ、大丈夫だよ！……多分……」

統夜はいくら犬が好きだろうとホラーであれば斬れるだろうと思っていた。

「……なあ、統夜君。今回だけでいいから俺もホラー討伐に参加させてもらえないだろうか？もちろん、俺が足手まといなのはわかっているが、何かしら力になれるはずだ」

幸太が今回のホラー討伐の同行を申し込み、統夜はうーんと考え込んでいた。
すると……。

『統夜、今回ばかりはこいつの力がいるかもしれないぞ。お前がともにホラーと戦えない可能性があるからな』

「そつ、そんなことは！」

統夜は全力で否定しようとするが、完全に否定することは出来なかった。

「……まあ、確かに今回は幸太さんの力が必要になるかもしれないしな……」

統夜は渋々と幸太の同行を許可した。

「なあ、統夜。私たちもついていっちゃダメかな？」

幸太だけではなく、律は自分たちも同行して良いか統夜に確認を取っていた。

「ダメに決まってるだろ。幸太さんは自分の身を守る術を持つてるけど、お前らは……」
幸太は刑事事であるため、ある程度身を守る術を持つているが、唯たちはそれを持って

いないため、統夜は唯たちの同行は容認出来なかった。
しかし……。

「彼女たちも連れていつてはどうだ？ いざとなれば俺がこの子たちを守る」

幸太は統夜にこのような提案をしていた。

幸太が唯たちを守ってくれれば自分はホラーとの戦いに専念出来るのでは？

統夜はそんなことを考えていた。

『……まあ、たまにはいいんじゃないか？ 今回の相手は少々面倒だからな』

イルバは意外にも唯たちの同行を容認していた。

「イルバ……本当にいいのかよ？」

『お前はホラーを倒して唯たちを守るんだろ？』

「……当たり前だ。……とりあえず今回だけだからな」

統夜は渋々ではあるが、唯たちの同行も許可した。

「とりあえず、番犬所に行くか」

指令書を受け取るために、統夜の先導で番犬所へと向かうことにした。

※※※

統夜は唯たちや幸太を番犬所の入り口まで案内したのだが、その場所は普通の行き止まりだった。

「……そういえば、ここって……」

唯たちはこの場所に見覚えがあった。

まだ唯たちが統夜が魔戒騎士であると知らなかった頃、統夜の秘密を探ろうと統夜を尾行した時にここにたどり着いたのである。

「……おいおい、ここは行き止まりじゃないのか？」

そこら辺の事情を知らない幸太は、ここがただの行き止まりだと思い込んでいた。

「いや、ここはただの行き止まりじゃないぞ。ここが番犬所の入り口なんだ」

「だけど、入り口らしいところはありませんよね？」

梓は行き止まりをキョロキョロと見ているが、入り口らしいものは見つからなかった。

以前、この場所で統夜を見失った時も調べたのだが、その時もそれらしきものを発見することは出来なかった。

「まあ、見てなつて」

統夜は何もない壁にイルバをかざすと、番犬所の扉が開かれた。

「「「「!!」」」」」

何もないところから扉が現れ、そのことに唯たちは驚いていた。

「……………」から先は一般人は入れないからな。行ってくる」

統夜はその扉から番犬所の中に入ると、番犬所の入り口も消えた。

「!?き、消えた!?!」

「やーくんはこの中に入ってたってことだよねえ?」

「まあ、とりあえず統夜君が戻って来るまでここで待つとしようか」

「そうですね」

唯たちは統夜が戻ってくるまで、その場で待機し、統夜を待つことにした。

番犬所の中に入った統夜は、イレスに挨拶をすると、狼の像に魔戒剣を突き刺し、魔戒剣の浄化を行った。

「……………統夜、指令です」

魔戒剣の浄化が終わるなり、イレスがこう宣言し、統夜はイレスの付き人の秘書官から赤の指令書を受け取り、浄化の時に出てきたホラーを封印した短剣を秘書官に渡し

た。

指令書を受け取った統夜は魔導ライターを取り出すと、魔導火で指令書を燃やした。そして、統夜は指令書から飛び出してきた指令の内容を読み上げると、魔戒語で書かれた文字は消滅した。

「……やっぱりこいつなのか……」

「……？統夜、ホラーの正体がわかっていたのですか？」

「ええ。この前話した例の刑事の協力者がこのように推理してくれたんです」

統夜は刑事である幸太が統夜の秘密を知り、協力してくれるということを既にイレスには話していた。

イレスも刑事の協力者がいれば、ホラー狩りの時に有利に働くこともあると判断し、特に統夜を咎めることもなかった。

「なるほど、彼も刑事として行方不明事件の捜査をしてたらホラーにたどり着いたのですね」

「ええ。幸太さんはホラーの秘密を言いふらすことはししないですし、俺も頼りにしてるんですよ」

面と向かってこのようなことは言わないのだが、統夜は幸太を頼れる存在だと思っていた。

「それで、今回は幸太さんをホラー討伐に同行させようかと思ひまして」
「?どうしてですか?」

『統夜のやつ動物好きだからな。今回のホラー相手だと手が鈍る可能性があるんだよ』
「お、俺は相手が誰だろうと斬るだけだけどな!」

イルバが代わりに幸太を同行させる訳を話したのだが、統夜は強がつてこのようなことを言っていた。

「……まあ、いいでしょう。統夜、彼だけではなく、他に同行者かもしれないとしたり、その人たちに被害がないよう努めてくださいね」

(うぐつ……いもしかしてイレズ様、今回のホラー討伐に唯たちを連れてくことをわかってるのか?)

《まあ、あの女ならあり得そうだな》

イレズは今回のホラー討伐に唯たちを同行させようとしていることを察しているような発言をしており、そのことに対して統夜は苦笑いをしていた。

「わかりました。相手が誰だろうと斬り、守るべきものは守る。それが魔戒騎士の使命ですから」

統夜は今度は強がりではなく、本心だったのか、統夜の言葉には穏やかな中でも芯の強さを感じ取れた。

「わかりました。統夜、頼みましたよ」

「はいー!」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

番犬所の入り口まで戻つてくると、統夜はイルバをかざした、

すると、再び番犬所と地上を繋ぐ扉が現れたので、統夜はそこから番犬所を出ると、先ほどの場所に戻つてきて、唯たちは待つていた。

唯たちは統夜が戻ってくるのを待つていたのだが、突如扉が出現し、そこから統夜が現れたので、驚いていた。

「……みんな、お待たせ!」

「お、お帰りなさい、統夜君」

紬は驚きながらも統夜を出迎えていた。

「それで、正式に指令は受けたのか?」

「ええ。みんなを同行させるのも許可をもらいましたよ」

「さっすがイレスちゃん!」

「い、イレスちゃん……?」

幸太はイレスが何者かわかっていないため、唯が親しげに話していることに驚いていた。

「イレス様はこの先にある番犬所という魔戒騎士を総括する機関の神官なんだよ」

『ま、お前さんにわかりやすく説明するならイレスは警察署の署長みたいなものたぜ』
「なるほど、それはわかりやすいな……」

幸太は統夜とイルバの説明で、イレスが何者なのかを何となくではあるが理解していた。

「それで、ホラーはやつぱり犬に憑依したホラーだったのか？」

『ああ。それで間違いなさそうだぜ。ホラー、ヘルビースト。人間ではなく動物に憑依して人間を喰らう。変わったホラーだぜ』

「動物に憑依するホラーもいるんだねえ……」

「唯、お前はただでさえ可愛いものが好きなんだから動物見ても迂闊に近づくんじゃな
いぞ」

「むうう……。やーくんには言われたくないよ！」

「うっ……。そう言われると……」

唯はぶうつと頬を膨らませながら統夜を睨みつけ、統夜は自分の同じことをしそうだなと心の中で思っており、苦笑いをしていた。

「と、とりあえず行こうぜ！ さっさとホラーを倒して学園祭のことを考えたいからな」

「そうだな。学園祭の曲だって統夜がいないと決められないし」

「?学園祭?ああ、そういうえば学園祭が近いから忙しいって妹が言ってたな」

「幸太さん、妹さんがいらつしやるんですか?」

紬は幸太の発した妹というキーワードに反応し、こう訪ねていた。

「ああ。俺の妹はみんなと同じ桜ヶ丘高校に通ってるんだよ。今は高校2年生だな」

「2年生……同じ学年だ……。あつ!日代つてもしかして……」

梓は幸太の妹が自分と同じ2年生であることと、幸太の名字が日代ということ、何かを思い出していた。

「そう、俺の妹は玲奈って言うんだ。君は玲奈のクラスメイトなんだな」

「はい!日代さんは引つ込み思案なところはあるけど、可愛くてクラスの人気者ですよ!」

梓は玲奈のクラスでの印象を話し、それを聞いて安堵したのか、幸太は笑みを浮かべていた。

「……」

続夜は幸太の妹である玲奈をつったとは唯たちに話していないため、ウンウンと頷いていた。

「……もう夜になるし、そろそろ行くぞ」

続夜は唯たちに何か追求される前にホラー捜索のために移動を開始した。

「あつ、やーくん！待ってよ！」

唯たちは慌てて統夜を追いかけ、ホラー捜索を開始した統夜に付いて行つた。

※※※

そして夜になり、外は真つ暗になっていた。

統夜がイルバのナビゲーションを頼りに移動したのは、桜ヶ丘某所にあるマンションが近くにある道路だった。

この時間、人通りは少ないのだが、ホラーはその人通りの少なさを狙い、人間が自分に近づくようアプローチをかけるのである。

「イルバ……。ホラーはこの辺りか？」

『ああ。この辺りからホラーの気配を感じるぜ。統夜、油断するなよ！』

「ああ、わかつてるよ……。っ！」

統夜はホラー捜索のために周囲を見回していたのだが、何かを発見した。

「?やーくん、どうしたの?」

「見つけた。多分あれがホラーだと思う」

統夜が指差す方向にダンボールが置いてあり、そこに1匹の犬がプルプルと震えていた。

「……あれ、ホラーじゃなかったらかわいそうなんだけどね……」

可愛いものが好き故、動物も好きな唯ではあるが、あの捨て犬がホラーの可能性があるとわかると、可愛いという感情はわかかなかった。

「統夜、どうするつもりなんだ?ホラーだってお前が魔戒騎士だつてわかつてるだろうから警戒されないか?」

律は、正攻法でホラーに近付くのはホラーに警戒されるのではないかと心配していた。

「問題ない。俺に考えがあるからな」

「大丈夫かなあ……」

心配な律はジト目で統夜のことを見ていたが、ここはホラー狩りのプロである統夜に任せることにした。

「クウーン……」

ダンボールの中にいる捨て犬は、小刻みに震えながら、誰かが来るのを待っていた。

一般人がこの光景を見れば、かわいそうな捨て犬だと判断するだろう。そんな中、統夜は……。

「……あら、お前、どうしたんだ？」

統夜はまるで一般人のように捨て犬に語りかけた。

その様子を見ていた唯たちは統夜のあまりに普通な対応にコケそうになっていた。

「つて、普通すぎだろ！」

統夜のあまりに普通な対応に滯は思わずツッコミをいれていた。

唯たちが普通な対応に呆れながらも統夜は捨て犬への対応を続けていた。

「こんな寒いのに捨てられたんだなあ、かわいそうに……」

統夜は優しい表情で微笑むと、捨て犬の頭を優しく撫でていた。

しばらくの間、統夜は微笑みながら捨て犬を撫でていたのだが……。

「……」

統夜は笑顔のままなのだが、表情が鋭くなり、逆に笑顔なのが怖いくらいに険しい表情になっていた。

すると、統夜は魔導ライターを取り出すと、魔導火を放って捨て犬の瞳に魔導火を照らした。

すると、捨て犬の瞳から不気味な文字のようなものが浮かび上がってきた。

これこそ、この捨て犬がホラーであるという証である。

「グルル……！魔戒騎士……！」

統夜が魔戒騎士であるとわかると、捨て犬ことホラーは統夜に敵対心を向けていた。

統夜がホラーから離れて魔戒剣を取り出そうとするが、ホラーはその脚で統夜を蹴り飛ばした。

「くっ……！」

蹴り飛ばされた統夜は、そのまま体勢を立て直し、魔戒剣を取り出そうとするが、素早い動きで統夜に迫っていた。

「くっ……！！」

このままでは魔戒剣を取り出す前にホラーに噛みつかれるのは必死であり、統夜は焦りから表情を歪めていた。

すると……。

「……統夜君!!」

そんな統夜を見て、いてもたってもいられなくなったのか、拳銃を取り出すと、ホラーの足元目掛けて発砲した。

ホラーにダメージを与えられなくても、威嚇して一瞬の隙は作れると判断したからである。

そんな幸太の読みは当たり、ホラーは足元に銃を撃ち込まれて足を止め、統夜はその隙に魔戒剣を取り出し、抜いた。

「グルル……！貴様……！！」

ホラーは自分に威嚇射撃をした幸太を睨み付けると、幸太を喰らうべく飛びかかった。

「……っ！」

幸太は拳銃を発砲するが、当然ダメージはなく、ホラーの牙が幸太に迫ろうとしていた。

「させるかああああ！！」

ホラーの牙が幸太に迫る前に統夜は幸太の前に現れ、ホラーを蹴り飛ばした。

統夜に蹴り飛ばされたホラーは壁に叩きつけられ、「キャイン!!」とまるで犬のような悲鳴をあげていた。

その悲鳴を聞いた統夜はハツとしてしまい、動きを止めてしまった。

相手がホラーだということは重々承知しているのだが、ホラーが本物の犬のような仕草をするため、統夜はまるで本物の犬を傷つけている錯覚に陥っていた。

『統夜、集中しろ！相手はホラーだ！油断すると命取りだぜ！』

「！そうだった！」

統夜はすぐに我に返ると、魔戒剣を構え、ホラーを迎撃する準備を整えていた。

「幸太さん、さっきの援護射撃、助かりました。ありがとうございます」

「気にしないでくれ。少しでも統夜君の手助けになれば幸いですよ」

「後は大丈夫ですから、幸太さんは唯たちと一緒に安全な場所まで隠れて下さい」

これ以上、犬の姿をしたホラーに惑わされないと決めた統夜は、幸太たちを安全な場所に移動させるよう誘導していた。

「わかった！ さあ、みんな。こつちへ！」

幸太は唯たちを先導し、少し離れた場所まで避難すると、統夜の戦いを見守っていた。

そして、それと同時に壁に叩きつけられたホラーは体勢を立て直すと、まるで本物の犬のように「グルルルル……！」と統夜を威嚇していた。

ホラーの威嚇は平気なのか、統夜は平然としたまま、ホラーを睨みつけていた。

そして、ホラーは素早い動きで統夜に近付き、統夜に噛みつこうとした。

しかし、統夜はホラーの牙を魔戒剣で受け止めると、そのまま蹴りを放ち、再びホラーを吹き飛ばした。

ホラーは吹き飛ばされる時に「キャイン！」と悲鳴をあげるが、統夜は平然としていた。

「同じ手が2度も通用すると思うな！」

統夜は吹き飛ばされて体勢を立て直すホラーを睨みつけていた。

そんな統夜を見ていたイルバは、ウンウンと頷いていた。

(一時は心配したが、統夜も魔戒騎士って訳だな。この様子なら心配なさそうだ)

イルバは統夜が動物好きであつても、ホラーであれば迷うことなく斬れそうだと感じている。

(俺もあのホラーが犬の姿をして惑わされそうになつたが、もう惑わされないぞ！ホラーは斬る！それが俺の使命だからな！)

一時は犬の姿をしたホラーに惑わされそうになつた統夜だったが、使命感からか、そんな気持ちを消し去り、目の前に対峙しているホラーを狩ることに集中することにした。

体勢を立て直したホラーは、再び素早い動きで動き回り、今度は統夜を翻弄していた。

しかし、統夜は慌てる様子はなく、冷静にホラーの動きを見極めていた。

そして、ホラーの牙が統夜に迫ろうとしたのだが……。

「……甘い!!」

ホラーの動きを見極めていた統夜は、ホラーの攻撃をかわすと、魔戒剣を一閃し、ホラーを斬り裂いた。

「キャイン!!」

魔戒剣の一撃を受けたホラーはそのまま地面に叩きつけられた。

「ホラーの姿になる前に決着をつける!!」

統夜はホラーが本来の姿を現わす前にトドメを刺そうと魔戒剣を振るった。
すると……。

「……クウーン……」

ホラーはダメ元で目をウルウルとさせ、統夜の良心に訴えかけようとした。
ホラー自身もこんなやり方が通用する訳がないと思っていたのだが……。

「……くっっ!」

どうやら統夜には効果できめんのようであり、統夜はホラーにトドメを刺すことは出来なかつた。

「ええ!?!」

「嘘だろ!?!」

「そこは通用するんですか!?!」

唯たちはホラーにトドメを刺せない統夜に驚きを隠せずに行った。

『おい、統夜!何を迷ってる!相手はホラーだぞ!』

「わかつてるよ!だが、ホラーでもこんな可愛い容姿をした奴、俺には斬れないよ!」

『あのなあ……』

魔戒騎士である前に重度の動物好きと改めて統夜のことを認識したイルバは、ジト目になりながら統夜に呆れていた。

「……………今だー！」

ホラーはこの隙を見逃さず、後ろ脚で統夜を蹴り飛ばした。

「ぐっ……………」

統夜はホラーにトドメを刺すことが出来ず、手痛い反撃を受けてしまった。

『おい、統夜。どうするつもりだ？あいつ、今のに味をしめてまたあんなことをしてくるぞー！』

「そんなこと言われても……………」

イルバの言う通り、可愛い仕草で同情を誘う作戦が有効であるとわかったホラーは自分が危なくなるとこのような攻撃を仕掛けてくるのは必至だった。

しかし、統夜はその対抗策を全く考えられずにいた。

すると……………

「やーくん！いつそのこと、あのホラーを見ないで戦えばいいんだよ！」

唯は統夜にこのようなアドバイスを送っていた。

「唯先輩！いくらなんでもそれは無茶ですよー！」

梓は唯のアドバイスが無謀なものだと思っていた。

同じことを思っていた律、滯、紬もウンウンと頷いていた。

しかし……。

『！それだ！統夜、奴を目で見ようとするな！目を閉じて、心の目で見るんだ！』

「なるほど！それなら！」

打開策が見つからない統夜は、唯のアドバイス通り戦うことにした。

目を閉じた統夜は、精神を研ぎ澄ませ、ホラーの気配を追っていた。

ホラーはあちこち動き回り統夜を翻弄しようとするが、統夜はホラーの気配を的確に読み取り、その居場所を追っていた。

そして……。

『……………統夜、来るぞ!!』

「ああ……………そこだあ!!」

ホラーが統夜に迫り、攻撃を仕掛けようとするが、統夜は読み取った気配の方を向き、魔戒剣を一閃した。

その一撃は見事にホラーを捉え、ホラーは地面に叩きつけられた。

「グルル……………魔戒騎士め……………こうなったら、本気で貴様を喰らってやる！」

これ以上はこの姿で戦えないと判断したホラーは、本来の姿を現わすことにした。

ホラーは可愛らしい犬の姿から、厳つい犬の怪物に姿を現した。

「……うん、この姿は可愛くないな……」

目を開けて、ホラーの本来の姿を見た統夜だったが、その姿は可愛いとは思えず、統夜はジト目でホラーを見ていた。

『統夜。奴がヘルビーストだが、ホラーがこんな姿なら斬るのに躊躇うことはないよな？』

「ああ。問題ない。だから一気に決着をつけてやる！」

統夜は魔戒剣を力強く握り締め、ヘルビーストを睨みつけていた。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はヘルビーストに向かってこのような宣言をすると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

『統夜！ヘルビーストは見た目は厳ついが、そのスピードはかなりのものだ！油断するなよ！』

「わかった！」

統夜は皇輝剣を構えると、ヘルビーストを睨みつけた。

ヘルビーストは、先ほど以上のスピードで統夜を翻弄していた。

「くっ……」

先ほどはホラーを捉えられた統夜であったが、ヘルビーストのスピードはかなりのものであり、統夜はヘルビーストのスピードに苦しんでいた。

ヘルビーストは爪による攻撃を何度も繰り返出し、奏狼の鎧に攻撃を仕掛けた。

「ぐう……」

爪による攻撃では奏狼の鎧に傷をつけることは出来なかったが、ダメージは与えられるため、統夜は痛みで表情を歪ませていた。

『……おい、統夜……このままだとまずいぞ！』

「大丈夫だ、奴の動きは見切った！」

統夜は攻撃を受けながらヘルビーストの動きを見極め、ついにはヘルビーストの動きを見切ることが出来た。

そんなこととは知らず、唯たちはヘルビースト相手に苦戦している統夜を心配そうに見つめていた。

そして、素早い動きで統夜を翻弄したヘルビーストは統夜にトドメを刺すために統夜に迫った。

「……そこだあー！」

統夜はギリギリまでヘルビーストを引きつけると、爪による攻撃が迫る直前に皇輝剣を一閃した。

その一撃により、ヘルビーストの体は真つ二つに斬り裂かれた。体を真つ二つに斬り裂かれたヘルビーストは断末魔をあげながら消滅した。

ヘルビーストを討滅したことを確認した統夜は、鎧を解除した。

「ふう……」

ヘルビーストとの戦いは予想以上に壮絶だったからか、統夜は一息ついてから元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

魔戒剣を鞘に納めたことを確認した唯たちは、そのまま唯たちに駆け寄った。

「統夜先輩、大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな」

「本当に大丈夫か？あのホラー、ずいぶんと手強そうだったけど」

「俺一人だったら危なかったかもな。だから、幸太さんや唯たちには感謝してるよ。ありがとな」

今回ヘルビーストを倒せたのは、一人の力だけではなく幸太や唯たちの手助けのおかげでもあったので、統夜は素直に幸太や唯たちにお礼を言っていた。

「ううん。私たちは何もしてないわ。だけど、そう言ってもらえるのは嬉しいわ♪」

紬は、統夜の感謝の言葉が嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべていた。

それは唯たちも同じ気持ちだったのか、唯たちも笑みを浮かべていた。

「幸太さんもありがとうございます。おかげで助かりました」

「お礼を言われるほどじゃない。だけど、少しでも統夜君の力になれたのなら良かったよ」

幸太は、少しでも統夜の手助けが出来たなら本望と思っており、笑みを浮かべていた。「ホラーも倒したから、仕事は終わりだろう？ だったら、どこかでご飯を食べに行かないか？ 奢るぞ」

「え、本当ですか？ やったぜ！」

幸太が夕食を奢ってくれるということに、律は喜びを表していた。

「え？ でも、いいんですか？」

「俺は社会人だしな。高校生に金を払わせる訳にはいかないさ」

「おお……！」

「さすが、大人ですね……」

唯と梓は、幸太の大人な対応に関心していた。

「それじゃあ、行こうか」

「はい。幸太さん、ご馳走になります」

こうして、ヘルビーストを討滅した統夜は、幸太の奢りで夕食を食べに行くことになり、移動を開始した。

その後、桜ヶ丘某所にある飲食店で統夜たちは食事をしながら幸太と話をしたり、学園祭で行うライブの曲について話をしていた。

食事タイムが終わると、統夜たちは幸太と別れ、統夜は唯たちを家に送ってから家路についた。

……続く。

——次回予告——

『やれやれ、歌詞を考えるのは意外と難しいんだな。どいつもこいつもまともな歌詞が出てこないぜ。次回、「歌詞」。心に込める歌詞は完成するのか?』

第90話 「歌詞」

学園祭まであと1月ほどとなり、統夜たちは学園祭でのライブに向けて気合を入れて練習しようとしたのだが、部室が水道工事のため使用出来なくなっていた。

統夜たちは練習を行うべく他の部屋が使えないか探していたが、どの部屋も他の部活が使用しており使用出来ない状態だった。

そんな中、統夜たちは明日にはどうかしようということ帰ろうとするが、桜高の入り口に刑事であり、統夜の友人である日代幸太が待っていた。

幸太は刑事として数日前に起こった行方不明事件を捜査していたのだが、幸太はその事件はホラーの作業ではないかと推理をしていた。

統夜は幸太や唯たちと共にホラー討伐へ行くことになり、捨て犬に憑依したホラー、ヘルビーストと対峙した。

動物好きな統夜は動物の容姿を使ったヘルビーストの戦い方に苦戦を強いられるが、幸太や唯たちの手助けによって窮地を切り抜け、ヘルビーストを討伐することが出来た。

その後、統夜たちは幸太の奢りで夕食をとっていた。

その時にも学園祭の話になったのだが、漣はどうやらスランプに陥っているようだった。

漣は数曲分の歌詞を書いたのだが、全て動物ネタの歌詞だった。付き合いの長い律曰く、漣が動物ネタに走る時は不調のようであった。

そこで、紬がそれぞれ歌詞を書いてみないかと提案し、明日発表することになった。こうしてこの日は解散となり、翌日を迎えた。

この日の放課後、統夜たちは職員室にいるさわ子のもとを訪れて、どこか使える部屋はないか聞くことにした。

「……あれから色々探し回ったんだけど……。ないわね。軽音部が練習出来そうな場所は」

さわ子は軽音部が使えるような部屋を見つけることは出来ず、統夜は予想通りと思っていたが、落胆を隠せなかった。

「ええ?!ないってそんな……」

「これでも頑張ったのよ?理科室や調理室……。さらには会議室や校長室までお願いに戻って……。1日でヒールがすり減ったわ」

さわ子は相当苦勞したのかぶうつと頬を膨らませていた。

「すいません、先生。苦勞かけて……」

「……部室が使えるようになるまでみんなでの練習は休みにするか？」

「文化祭前にそれはきつくないか？」

部室が使えないならそれまでは個人練習のみでどうにか過ごそうかということも考えたのだが、本番も近付いているこの状況で、それが最良の選択とは思えなかった。

そんな中……。

「……貸しスタジオでも借りてみたら？」

「貸しスタジオか……。その発想はなかったな……」

「行ってみよう！」

唯は貸しスタジオに興味津々のようで、目をキラキラと輝かせていた。

「でも、けっこう高いんじゃないですか？」

「大丈夫♪まだ部費は残ってる♪」

軽音部は人数の少なく、コンクールなどの課外活動がないため、部費にはまだ余裕があった。

律は笑みを浮かべながら部費があることを明かしていた。

「りっちゃん……。りっちゃんががめつくて良かったよお!!」

「おい」

唯は目をキラキラとさせながら律に抱きつくのだが、律はそんな唯をジト目で見てい

た。

こうして続夜たちは、部費を使って貸しスタジオを借りることになり、桜ヶ丘某所にある貸しスタジオへと向かうことになった。

※※※

貸しスタジオに到着した続夜たちは、受付でスタジオを借りる手続きを行っていた。

「それでは、こちらに代表の方のお名前とご住所をお願いします」

受付にいた店員が、受付に必要な用紙を渡してきた。

「ここは部長である律が書くと思われたのだが……。」

「滞、書いて♪」

「お前部長だろ？」

「ちえー、わかったよ……」

律は用紙を書くのが面倒だったのか、滞に押し付けようとするが、滞に部長だろと言

わかれて渋々用紙に必要な事項を記入していた。

「あと、初回ご利用時には身分証明書を拝見しております」

「身分証明書？」

身分証明書が必要とわかり、律は困惑していたのだが……。

「証明します！この人確かに軽音部の部長です！」

「いやいや、身分証明ってそういうことじゃなくてな……」

唯が口頭で律のことを証明しようとしており、統夜はこうなだめながら呆れていた。

「そうそう。生徒手帳で良いんじゃないのか？」

「アハハ、そっかそっか」

律は生徒手帳を取り出し、それを店員に見せると、それが身分の証明になった。

こうしてスタジオを借りる手続きを終えた統夜たちは、店員に案内された部屋に入つた。

「……あつ、最初に言っておくけど、スタジオは飲食禁止だから気を付けろよ」

統夜はスタジオになってる部屋に入るなり、このような注意をしていた。

細が間髪入れずにお茶の用意をしようと思つたからである。

「え!? そうなの? 私、お茶の用意しようと思つてた……」

細はこの部屋が飲食禁止だということに驚いていた。

「アハハ……。やっぱりな……」

統夜の予想は見事に当たっており、統夜は苦笑いをしていた。

「おお、これはこれは……」

唯はスタジオになっていいる部屋の周囲を見回していた。

「……思ったより狭いんだね」

「「贅沢言うな！」」

唯がこの部屋に対して文句を言っており、統夜、漣、律の3人がツツコミを入れている。

「……おっ！」

唯は大きな鏡を見つけると、鏡の前に立った。

「鏡かな？鏡じゃないかな？鏡だよ！」

唯は何故か575のリズムで鏡の存在を説明していた。

「……ねえ、もしかして私のギー太の背負い方ってちょっとマヌケっぽい？」

「ああ」

「やっとな気付いたのか」

律と漣は唯のギターの背負い方がマヌケっぽいと感じており、それを正直に答えていた。

「うーん……」

唯はそのことがわかると、真剣な表情で考え事をしていた。

その後、すぐに準備をするのかと思いきや、統夜を除く全員が大きな鏡を利用して髪型を整えていた。

「……」

統夜はそんな唯たちをジト目で見ていた。

《やれやれ……。女つてのは面倒な存在だな……》

(そんなこと言うなつて。女の子なんだから身だしなみを気にするのは当たり前だろ?)

《天然ジゴロがよく言うぜ……》

(天然ジゴロ?)

統夜とイルバはテレパシーでこのような会話をしており、統夜は未だに天然ジゴロという言葉の意味を理解していなかった。

「……鏡があると、つい……ねえ♪」

「女の子ですものねえ♪」

「うん、そうよねえ♪」

「え、演奏中の自分の姿もチェック出来ますしね!」

「う、うん！そうだな！」

「……」

唯たちはまるで統夜に釈明するように鏡を見て身だしなみを整えていたことを説明していた。

しかし、統夜は未だにジト目で唯たちを見ていた。

「と、統夜！そんな目であたしたちを見るなよお！」

「はいはい……」

統夜は律の言葉を軽く流しながらギターの準備を行っていた。

「ほら、お前らもさっさと準備しろよ。わざわざ部費を使ってスタジオ借りてるんだからな」

「わ、わかってるよ！」

統夜の叱責に唯たちは慌てて楽器の準備を始めていた。

終始ダラダラしてこのまま終了時間になってしまったのは、せつかくの部費の無駄遣いになってしまっからである。

「よし、時間も限られてるんだ。さっさと始めるぞ！」

限られた時間を有意義に使うために統夜が唯たちを先導していた。

「おお、今日のやーくんは何か燃えてる……」

「そうですかね？ 私はいつも通りの統夜先輩だと思えますけど」

唯はテキパキと指示を出す統夜を見てやる気に満ちていると思っていたが、梓は統夜はいつもと変わらないと感じていた。

「ほら、その2人！ 無駄話してないで、チューニングを確認しろ！」

「す、すいません！」

統夜に怒られた唯と梓は慌てて音程が狂っていないか確認していた。

こうして、どうにか演奏準備を整えることが出来た。

「よし……。始めるぞ！」

「わ、わかったよ！ 1・2・1・2・3・4!!」

律がステイックを叩いて合図をすると、まずは「ふわふわ時間」の練習を行った。

楽器の演奏を始めると、先ほどまでグダグダしていた唯たちも演奏スイッチが入ったようで、真剣な表情で演奏していた。

それが功を奏したのか、今の演奏は本番以上の出来になっており、その後も時間の許す限り練習を行っていた。

こうして、貸しスタジオでの練習は、予想以上に実りのあるものとなった。

※※※

そして貸しスタジオでの練習が終わると、統夜たちは統夜が最近鼻屑にしている喫茶店に来ていた。

「……さてと、今日は思ったよりも充実した練習が出来たよな」

喫茶店の中に入り、6人が座れる席に全員が座ると、律は今日行った練習に満足していた。

「そうだな。みんなの演奏もバッチリ合ってたしな」

「はい！私もすっかり練習出来て楽しかったです！」

貸しスタジオでの練習には滞や梓も満足しており、唯と紬も同じ気持ちであった。

「ああ。今日は何とか練習出来たし、次は新曲の歌詞決めか？」

「そうだな。それぞれ歌詞を書いてきただろうし、歌詞の発表でもするか！」

「ええ……」

律は歌詞の発表を切り出す、梓は自身なさげな表情をしていた。

すると……。

「いらっしやい、統夜。今日はずいぶん賑やかね」

「ああ、ヒカリさん。お疲れ」

統夜はヒカリと親しげに話をしており、唯たちはその様子を見て首を傾げていた。

「……ねえ、統夜君。そちらの方とはお知り合いなの？」

「ああ、この人は東ヒカリさん。カオルさんに憧れて画家を目指してる人だよ」

「東ヒカリよ。よろしくね」

「……よ、よろしくお願ひします」

ヒカリは簡単な自己紹介を済ませ、唯たちはペコリとヒカリに会釈をしていた。

「それで、注文は決まったの？」

「あ、えつと……」

統夜はメニュー表を開くと全員がメニュー表に釘付けとなり、何を注文するかを決めていた。

全員の注文が決まると、ヒカリは伝票にそれを記入していた。

「……はい。ちよつと待っててね」

ヒカリはウインクをすると、そのまま厨房へ向かっていった。

「……何か、この前会った時より優しい雰囲気な感じがします」

梓は1度ヒカリのことを見ており、その時は棘のある感じで統夜に接していたのだが、今は刺々しい感じは一切なく、穏やかな雰囲気を出していた。

「……まあ、あの人は色々誤解してたけど、その誤解が解けたからかな？」

「そうだったんですか……」

「まあ、その話はおいおいするからまずは歌詞の発表をしないと」

「統夜はヒカリがホラーの存在を知った経緯を話すと話が長くなると思い、話題を変えていた。」

「おっ！そしたら統夜から歌詞を発表するか？」

「まあ、別にいいけど……」

「統夜は鞆から歌詞が書かれた紙を取り出すと、律はそれを受け取り、統夜の歌詞を律は始めていた。」

「……集まれアニマルって……。お前も動物ネタかよ！」

「統夜の歌詞が最初から動物を用いたものであり、律はツツコミをいれていた。」

「え！？本当なのか!？」

「濡も動物ネタの歌詞を書いていたので」

「、統夜の歌詞に食いついていた。」

「律は発表の前に統夜の歌詞を読み進めていたのだが……。」

「……思ったよりもシンプルでわかりやすい歌詞だな……」

「統夜の考えた歌詞は予想以上にわかりやすい歌詞で、動物ネタであったのだが、律は」

統夜の歌詞は悪くないと思っていた。

しかし……。

「……ん？」

律は歌詞を読み進めていくとある部分に目が止まり、そこをジト目で見ていた。

「……」
「Let's Let's Dance 超かつこイーグル。いつも余裕シャー
クシャーク……」

「……ぶっ！なんか面白い歌詞だね！」

律がジト目で見ていた部分の韻の踏み方が面白いと思ったのか、唯は笑っていた。

「そうだろ？これは先週くらいから知り合いの動物学者と一緒に考えたんだぜ！」

「へえ、その学者さん、ずいぶんと独創的ね♪」

「……却下」

この歌詞は唯や紬には公表だったのだが、律は統夜の歌詞は無いと判断し、却下していた。

「何でだよ！面白い歌詞だとは思わないか？」

「何だよ、この変な韻の踏み方は！それにこれ、「がむしやライオン」って……」

「そうか？私は面白いと思うけど」

「そうですかね……」

滯は統夜の独創的な歌詞が気に入ったのかキラキラと目を輝かせていたのだが、梓はそれを理解出来ずに首を傾げていた。

「……まあ、他にもツツコミたいところはたくさんあるけど、統夜の歌詞は没だからな」
「くっそー！良い歌詞だと思っただけだなあ……」

統夜は自分が知り合いの動物学者と考えた歌詞が没にされると、悔しがりながらポリポリと頭を掻いていた。

「へえ、歌詞を考えてるんだ」

注文されたものを持ってきたヒカリが、このように声をかけてきた。

「ま、そんな感じかな」

「懐かしいわねえ……。私も桜高だったんだけど、美術部と軽音部を掛け持ちしてたのよ」

ヒカリは注文されたものをテーブルに置きながら自分のことを話していた。

「え!?!ヒカリさんって軽音部だったんですか!?!」

「俺も知らなかったから驚いたよ」

「ウフフ、そうでしょ?」

統夜たちの驚いたリアクションが嬉しかったのか、ドヤ顔をしていた。

「ヒカリさんって演芸大会にも出てましたよね?ギター上手いなって思ってたんです

！」

「ふふん！そうでしょう？今は絵に専念してるから下手にはなってるけど、それでもあなたたちには負けないっていう自負はあるわよ」

ヒカリは作詞作曲も自分で行う程センスを持っており、時々しかギターを弾かない今でも統夜たちよりは上手いと自負していた。

「今度、ギターを教えて下さい！」

「ええ、もちろんいいわよ」

「……軽音部でやったのはデスメタルとかではないだろうな？」

「そ、そんなのじゃないわよ！普通の曲よ！普通の！」

「そっか……。ならいいんだけど……」

ヒカリは軽音部時代に普通の音楽をやっていたことがわかり、統夜だけではなく唯たちも安堵していた。

「……ああ、そういえば、私の先輩の時は凄いメチャクチャだったって聞いたことがあるな……」

「それって……」

「さわちやんだな……」

「さわちやん？」

ヒカリはさわ子と会ったことがないため、名前を聞いてもわからず、首を傾げていた。
「私たち軽音部の顧問の先生なんですけど……」

「色々とメチャクチャな人で……」

「そのへんにしておけ。言いふらしてるのがバレたら後が怖いぞ」

統夜はこのような警告をすると、唯たちはさわ子の昔の話を言いふらしたのがバレたらさわ子がどれほど怒るかを想像していた。

それが怖かったのか、唯たちの顔は真っ青になっていた。

「?よくわからないけど、私は仕事だからもう行くわね。どうぞ、ごゆっくり」

ヒカリはこれ以上喋っていたら仕事に支障をきたすと判断し、そのまま仕事に戻っていった。

統夜たちは注文したスイーツを頬張りながら歌詞の発表を続けることにした。

「……それじゃあ次は誰が発表してくれるんだ?」

律は統夜の次に誰が発表するかを聞いていた。
すると……。

「はいはい!私が発表する!」

唯が自信満々に手を上げて立ち上がった。

「……大丈夫か?」

律は不安げだったが、とりあえず唯の歌詞を聞いてみることにした。

「……………飯はすごいよ！何でも合うよ！」

「へっ？飯？」

統夜と同じくらい独創的な歌詞に統夜はポカンとしていた。

それは唯以外の全員が同じ気持ちのようで、残りの4人も統夜のようにポカンとしていた。

そんなことはおかまいなしに唯は続けていた。

「ラーメン、うどんにお好み焼き。炭水化物と炭水化物の夢の……」

「ちよちよちよ……………ちよつと待った！」

唯の歌詞があまりに独創的すぎるため、律は唯にストップをかけていた。

唯は止められたことに対して不満そうにしていた。

「ええ？サビがなかなか面白いのに……」

「……………何だよ」

律は先ほどの統夜の歌詞と似たのが来るだろうと予想しながらも聞いてみることにした。

「……………いち、に、さん、し、ごはーん!!」

律の予想は見事に的中し、律は落胆からか頭をテーブルにぶつけていた。

「……ちなみに、タイトルは「ごはんはおかず」だよ」

「……無いな」

「ああ、却下だな」

統夜と律はジト目で唯のを見ており、2人揃って唯の歌詞を却下していた。

「ええ!? やーくんの歌詞より良いと思っただけだなあ……」

唯は歌詞が没になったのか不満だったのか、ふうつと頬を膨らませていた。

《……まあ、俺様から言わせてもらえればどっちもどっちだがな》

イルバとしては統夜の歌詞と唯の歌詞は同レベルだと思っていた。

(そうかなあ……)

統夜は自分の歌詞が唯と同レベルだと言われたのが気に入らなかった。

「……そしたら次は誰がやるんだ?」

「はいっ! 私がやります! 唯ちゃん、仇はとってあげるね♪」

「おいおい、仇って……」

言葉のアヤであることはわかっていたのだが、統夜はジト目で袖を見ていた。

袖は自分の書いた歌詞が書いてある紙を取り出すと、自分の歌詞を読み始めた。

「……吹きすさぶ冷たい風が肌をさす……」

「……おっ、いい感じじゃないか?」

頭の部分は良い感じの歌詞になっており、統夜は感嘆の声をあげていた。律たちも、紬の歌詞に大いに期待していた。

しかし……。

「……芳江は犯人を断崖絶壁に追い詰めた……」

「へ？芳江？」

「断崖絶壁？」

サスペンスで良く出てきそうなフレーズが出てきており、統夜と律はキョトンとしていた。

「健一さん……。あなたが……。あなたが……。犯人だったんですね！」

《おいおい、これじゃまんま2時間もののサスペンスじゃねえか！》

（そうだな。それは俺も思ったよ……）

紬の考えたあからさまに2時間サスペンスのような歌詞に統夜とイルバは呆れ果てていた。

「はい、却下」

「ええ!？」

律は即座に却下するのだが、紬は不満そうにしていた。

「なあ、ムギ。それって歌詞なのか？」

あまりに歌詞らしくない内容だったので、澤が確認を取っていた。

「うん！今までにない路線がいいかなって♪」

「なさ過ぎだろ！……つか、ムギってサスペンスが好きなんだな……」

「うん！実は好きなのよ♪」

「へえ、そうなんだな」

絢がサスペンス好きなのは意外だと思っていた統夜は少しだけ驚いていた。

「……次は梓な」

絢の歌詞も没であり、律は続いて梓を指定していた。

指名された梓の表情は強張っていた。

「あつ……はい……」

梓は鞆から一枚の紙を取り出すと、ゆっくりと立ち上がった。

しかし、梓は恥ずかしいのか、頬を赤らめてはにかんでいた。

「あつ、あの……。やっぱり読まなきゃダメですか？」

恥ずかしいのか自信がないのか、弱々しい口調で言っていた。

「まあ、無理して読まなくてもいいけどな。俺も律が読んじやったしな」

「梓、あたしが読むか？」

律は梓を気遣い、このように提案するのだが……。

「い、いえー私、やっぱりやりますー！」

覚悟を決めたのか、梓は自分の考えた歌詞を読み始めた。

「……いつもゆらゆら揺れている……あなたの視線を感じるの……」

「まあ♪いい感じ♪」

紬は梓の歌詞が良い感じだったのか、感嘆の声をあげていた。

「見つめて……見つめないで……」

「キタキタあ♪」

「ああ、いい感じだなー！」

梓の歌詞を、律と統夜は良いと思っていた。

「もうすぐあげるから……」

「おぉー！」

唯も梓の歌詞に感嘆の声をあげていた。

「ここまでは全員に公表で最後まで良い感じになると思われたのだが……」。

「……もうちよつと待っててね……。トンちゃん♪」

梓がトンちゃんの名前を言った瞬間、統夜たちはポカンとしていた。

「と、トンちゃんに餌をあげる歌？」

「……何か惜しいな……」

「……書き直し」

「ダメですか……?」

「途中までは良かったんだけどな……。トンちゃん部分を直せばかなり良くなると思うぞで」

「あうう……」

自分の歌詞は没ではなかったが、書き直しと言われてしまい、梓は涙目になっていた、
「それで……律はどうなんだ?」

「え? あたし?」

律は書いてあるであろう紙を統夜に見せてきた。

「えつと……。いくらはいくら?」。電話に出んわ。「猫が寝込んだ」……」

「いやあ、イマイチ笑えないんだけどさあ……」

「……」

統夜は律の考えた歌詞とは言えないダジャレのタイトルがくだらなかつたのか、ジト目で律を見ていた。

「そ、そんな目であたしを見るなよ!」

「歌詞作れよ! 歌詞!」

澪は歌詞ではなくダジャレを作ってきた律にツツコミをいれていた。

「ねえねえ、漣ちゃんは歌詞を書いてきたの?」

漣だけ歌詞を発表してないので、紬が確認をとっていた。

「ああ! 「アライグマが洗った恋」と「キリン凜々」どっちが見たい?」

漣は昨日と変わらず動物ネタであり、何故か漣は自信があるのか目をキラキラと輝かせていた。

「……相変わらず漣は不調か……」

律は漣が未だにスランプだということを見抜いていた。

「……どつちも没だ。漣、動物ネタ以外はないのか?」

「ええ!? 何でだよ! 統夜だって動物ネタだったろ?」

「まあ、そう言われたら2つとも見るだけ見てみたらいいんじゃないのか?」

統夜は漣の歌詞を見てみると、漣の表情がばあつと明るくなっていた。

統夜たちはとりあえず漣の書いた歌詞をチェックするのだが、あまりにも内容がメルヘン過ぎたため、とても歌詞として使用出来るものではなかった。

そのため、漣以外の全員は漣の歌詞を没にすることを決めた。

漣はその決定に泣きそうになるのだが、統夜たちはどうにか漣をフォローしていた。

統夜たちは注文したスイーツを食べながら歌詞決めを行っていたのだが、結局決定的な歌詞を作ることは出来ず、歌詞作りは明日以降に持ち越しとなった。

歌詞の発表が終わると統夜たちは会計を済ませて喫茶店を後にした。

店を出る時、ヒカリは満面の笑みで「また来てね」と言つて見送つてくれた。

「……部室、どうなつてるんだろう……」

喫茶店を後にしてすぐ、唯が不安げにこう話を切り出してきた。

「いつも行つていると、ありがたみつてものがわからないわよねえ……」

「……まあ、そういうもんだよ」

統夜たちは使えなくなつて初めて部室のありがたみというものを実感していた。

そんなことを考えていると、1台の車が統夜たちの前に止まった。

「……あつーさわちゃん！」

統夜たちの前に止まった車に乗つていたのはさわ子であり、統夜たちはさわ子の車まで駆け寄つた。

「……部室の工事、終わったわよ！」

「「「「え!」」」」」

予想外の吉報に、統夜たちは驚いていた。

「予定より早かつたわね」

「良かつたあ♪」

「やつと……部室に戻れるんだね！」

「旅は終わった……」

統夜たちは安堵と喜びの気持ちを表していた。

「大袈裟ねえ……。……。楽器、乗せてもいいわよ。明日、学校まで運んであげる」

「だったらあ、家まで乗っけてってよお♪」

「乗せてえ♪」

「だから、6人は無理だつて言ってるでしょ？」

律と唯がさわ子の車に乗せてと懇願しており、さわ子は苦笑いしながら困り果てていた。

「……ま、明日から部室が使えるなら俺も安心して騎士の使命を果たせるよ。だから、俺は番犬所に行くよ」

部室の問題が片付いたとわかった統夜は、唯たちと別れてそのまま番犬所へ向かった。

この日は指令がなかったため、街の見回りを行ってから家路についた。

※※※

そして翌日の放課後……。

「帰ってきたー!!」

音楽準備室に入るなり、唯のテンションは最高潮になっていた。

朝のうちにさわ子が楽器類やトンちゃんの水槽を元通りにセットしてくれたため、部屋は今までと同じになっていた。

「帰ってきましたよお……生還したよお！」

「なんかいいなあ」

「なんかホツとします」

「うん！ここで練習出来るなんて、ありがたいよね！」

無事に部屋に戻ってきて、唯たちは改めて安堵していた。

「まあ、有り難みなんてこんなことでもない限りわからないだろうしな」

「統夜先輩が言うと言得力がありますね」

「アハハ、そうか？」

「もう、あちこちうろろしなくていいのね……」

「いいんだよ！毎日ここに来ていいんだよ！」

「よっしやあ！まずは……」

「お茶淹れよっか♪」

相変わらずの紬の言葉に統夜たちは思わずズッコケそうになっていた。

「アハハ……。その前に1曲やろうよ！」

珍しく唯がティータイムの前に練習をしようと言っていた。

統夜たちも練習したい気分だったので、ティータイムの前に練習を行うことになった。

練習を行い、現在はティータイムを行いながら、全員で新曲の歌詞を考えていた。

「……なーにも思いつかん」

律は必死に歌詞を考えるのだが、良いアイデアが思い浮かばなかった。

「案外難しいですよね……。歌詞を書くなんて……」

「そうだよなあ……」

統夜も頭を悩ませながら歌詞のアイデアを考えていた。

「……行け、風の如く。宿命の剣士よ……。……って！こんなんじゃないやダメだよなあ……」

『そうだな。だが、不思議だな。俺様は案外そのフレーズは悪くないと思うぜ』

統夜はワンフレーズだけ思いついたので口ずさむのだが、それが良いアイディアだとは思えなかった。

しかし、イルバは何故か統夜の口ずさんだフレーズを気に入っていた。

「……振り返らず走れ……。その時代を駆け抜けて行け、激情の中で……」

統夜は再びフレーズが浮かんできたのか、それをノートにメモしていた。

「統夜先輩、今のフレーズ良い感じですね!」

「そうか?でも、ムギの作ってくれた曲のイメージに合わないような気がするんだよなあ……」

「なあ、統夜。そんなことはあまり考えてみないで作ってみたらどうだ?そしたら何か良い歌詞が出来るかもしれないぞ」

律は統夜にとりあえず考えてみたら良いのでは?とアドバイスをしていた。

「そうだな。何とか考えてみるよ」

統夜は思いついたフレーズを次々とノートに書いていった。

「……夜明けが来るのを待たず僕は一人旅に出るよ……。これ、良いかもしれない……」
統夜は良いフレーズが思いついたのか再び歌詞を書き始めた。

そんな中、唯は歌詞を書くことをせず、紅茶を飲んで余裕そうにしていた。

『おい、唯。歌詞を考えなくても大丈夫なのか？ずいぶんと余裕そうだが』

そんな唯の様子が気になったイルバがこのように訪ねていた。

すると……。

「うん！もう3つも作った！」

唯はミカンの皮を剥きながら飄々としていた。

統夜たちはその事実には驚き、唯の作った歌詞をチェックした。

「……！おいおい、ちゃんと韻を踏んだりしてるし、良いんじゃないのか？」

統夜たちは唯の歌詞が予想以上にしっかりしていたため、驚きを隠せなかった。

『おい、唯。本当にこれはお前さんが作ったのか？昨日はあんな歌詞を書いたやつとは思えないのだが』

「ちよこーつとだけ、憂に手伝ってもらった」

（絶対に……）

（ちよこつとじや……）

（ないな……）

（やはりそういうことか……）

（統夜たちはこの歌詞はほとんどが憂のアイディアなのだろうと予想していた。

唯は眠かったのか、大きな欠伸をしていた。

「唯ちゃん、ずいぶんと眠そうね」

「エヘヘ……。歌詞書くのに夢中になってあまり寝てないんだよねえ……」

『おいおい、夜更かしか？感心しないな』

「イルバの言う通りだ。去年みたいに風邪ひいたりしないでくれよ？」

唯は去年の学園祭前に風邪をひいてしまったため、今年はそんなことがないよう、統夜たちは心配していた。

「大丈夫だよ！おミカン様がついてるから！」

唯も風邪をひかないよう考えていたようであり、毎日ミカンを食べてビタミンの補給を行っていた。

「ミカンパワーを分けてあげよう！」

唯はまだ皮を剥いていないミカンを2つ取り出すと、それを濡の両頬にくつつけていた。

「アハハ……。何やってんだか……」

統夜はそんな唯を見ながら苦笑いをしており、歌詞作りを続けていた。

結局、この日もまともな歌詞は完成することはなく、解散となった。

部活が終わり、唯たちと別れた統夜はいつものように番犬所を訪れた。

この日も指令はなかったため、統夜は街の見回りを行っていた。

しばらく街を歩き回っていたが、この日も特に異常は見つからなかった。

そのため、明日に備えてまっすぐ家に帰ろうと思ったその時だった。

「……………ん？電話か？」

統夜の携帯に反応があったため、ポケットから携帯を取り出した。

「……………唯か。こんな時間に珍しいな……………」

確認すると、唯から電話だったため、統夜はすぐに電話に出た。

「……………もしもし、どうした、唯？」

電話に出るなりこう訪ねたのだが、唯の口から信じられない一言が飛び出してきた。

『やーくん……………。どうしよう……………。風邪ひいた……………』

「なっ、何い?!」

唯の爆弾発言に統夜は驚愕していた。

風邪をひくなど言った矢先だったからである。

「ちよつと待つてろ！今行くから！」

統夜はそう言って電話を切ると、律たちに連絡を取った。

統夜は全員に唯の家の前で待ち合わせをしようと話すと、唯の家に行く前にコンビニ

に立ち寄った。

そこでスポーツドリンクや果物、さらにプリンなどを購入してから唯の家に向かった。

統夜が唯の家の前に着くとすでに全員が集まっており、統夜たちは唯の家に入ったのだが……。

「……え？風邪をひいたのは憂ちゃん？」

家の中に入ると何故か元気そうな唯に出迎えられ、リビングに案内された後に事情を聞いた。

すると、風邪をひいたのは自分ではなく憂の方であった。

「焦らせるなよ……。って、憂ちゃんでも大問題だけど……」

風邪をひいたのは唯ではなくとりあえず安心はしたのだが、両親が家を空けることが多い中、憂が風邪をひいたというのは、平沢家としては大事件だった。

「わ、私、どうすれば……」

唯は憂が風邪をひいたことでどうすればいいのかわからず、気が動転していた。

「唯、とりあえず落ち着け」

滲はすかさず唯にフォロウをいれていた。

「……それで、肝心の憂ちゃんは？」

……。
統夜は唯にこう聞いたのだが、キッチンの方から物音がしたので、その方向を向くと

「みなさん……いらつしやい……」

憂は風邪をひいてるからか顔を赤くしていた。

そんな状態であるにもかかわらず、人数分のお茶を用意していた。

「お茶……良かったら……」

風邪のため力が入らないのか、トレイがプルプルと震えておりとても危なっかしいものだった。

憂の予想外な行動に滞、律、紬の3人はテンパってしまい、梓はため息をついていた。

とりあえず統夜はお茶入りのトレイを奪い取り、それをテーブルに置いた。

そして、全員で憂を部屋まで連れていくと、ベッドに寝かせた。

「ほらー！ちゃんと横になってなきやー！」

「ごめんね……梓ちゃん……」

「熱はそんなに高くないわ」

紬は憂の体温を測るのだが、幸いにも熱は高くなかった。

「良かった……」

「ま、しつかり栄養を取ってしつかり眠ったらすぐに治るさ」

統夜は熱が高くないということから、このようなアドバイスを送っていた。

「……それじゃあ、唯。あたしらは帰るな」

「え!? みんな帰っちゃうの!?!」

「……みんながいたら憂ちゃんもゆっくり眠れないだろう?」

統夜たちは、憂をしつかり眠らせるために、このまま帰ることにした。

「うう……。私、1人でちゃんと出来るかなあ……」

「私がいるから大丈夫だよ、お姉ちゃん……」

「……っておいおい! それはダメだろ!」

「憂は看病される側でしょ!?!」

統夜はすかさずツツコミを入れ、梓は憂を叱責していた。

「ご、ごめん憂! 私なら平気だから!」

唯はこう言ったものの、とても不安そうな表情をしていた。

しかし、統夜たちは唯1人の力で看病してもらうことにして、そのまま帰ることに
なった。

「……唯ちゃん、何かあったら連絡してね」

「またすぐ来るから」

「唯、俺はもうしばらく街の見回りをするから何かあったら連絡しろよ? すぐ駆けつけ

るから」

「統夜たちは唯を安心させると、そのまま唯の家を後にした。

統夜たちを見送った唯はすぐさま憂の部屋に戻り、憂の看病をしていた。

「お姉ちゃん……。私、一人で大丈夫だから……」

「でも……」

「お姉ちゃんがいると、風邪を移しちゃうかなってかえって心配だから……」

憂は唯に風邪を移させる訳にはいかないと思っており、このようなことを言っていたのである。

「憂……」

「部屋に戻って……」

「……うん」

唯はとりあえず憂の言う通りにすることにしたのか、憂の部屋を後にしようとしていた。

「憂、何かあつたら呼んでね」

「うん……」

唯は憂の部屋の電気を消すと、そのまま憂の部屋を後にした。

唯はとりあえずお粥を作ろうと思いい立ち、キッチンへと向かった。

唯は普段料理は作らないため、卵を落としたり、鍋を落としたりと悪戦苦闘していた。しかし、どうにかお粥に必要なものを鍋に入れると、グツグツと煮込み、お粥作りはどうか順調に進んでいた。

そんな中、唯は考えていた。

（大切な……大事なもの……。いつもそばにいてくれる……。でも、それが当たり前になつていると気付かない……）

憂が風邪をひいたことにより、唯は憂がかけがえのない存在であることを再認識していた。

しかし、いつもそばにるのが当たり前だと思つていたので、そんな当たり前なことも気付くことが出来なかつたのである。

そんなことを考えながら唯はお粥を作り、その後、唯は歌詞を書いていた。

今回の体験で思うところがあり、それが唯の筆を進めていたのである。

唯は一晚かけて、自分の思いを歌詞にまとめることが出来た。

そして翌日、憂は目を覚ますと、昨日と比べるとだいぶ体が軽くなつていた。

憂はゆっくりと起き上がるのだが、自分の机で眠っている唯の姿を発見した。

そして、その傍には唯が作ったお粥が置いてあったのだが……。

「……あれ？お粥の上に目玉焼き？」

唯はお粥を作ったのだが、その上に目玉焼きやウインナーを置いていたため、お粥と
いうよりはピラフっぽい見た目になっていた。

憂はそれを嫌だとは思っておらず、唯が一生懸命作ってくれたと思うと自然と笑みを
浮かべていた。

「……あれ？」

憂は唯が何かを書いているのを発見すると、その紙に手を伸ばし、その紙を見てみた。
すると……。

「……「U&I」……」

その紙は歌詞を書いたものであり、タイトルは「U&I」というものだった。

「……君がいらないと何も出来ないよ……。君のご飯が食べたいよ……。君がいないと謝
れないよ……。君の声が聞きたいよ……」

憂はこの文面を読んだ時、自分にあてたメッセージだということがわかり、嬉しさの
あまり笑みを浮かべていた。

「クスツ……。お姉ちゃん……。ありがとう……」

憂は穏やかな表情で眠る唯にお礼を言うと、そのまま部屋を出て朝食の準備を始め

た。

※※※

「……という訳で、投票の結果、唯の歌詞に決まりました！」

この日の放課後、紬の書いた曲の歌詞をどうするか、最終的に決めることになった。

唯は昨晚書いた歌詞を統夜たちに見せるのだが、その歌詞は統夜たちに好評であり、満場一致で唯の歌詞を採用することになったのであった。

「エへへ……。いなくなつて初めて大切なものの有り難さがわかるっていう気持ちを含めてみました！」

「本当に凄いです！これ、本当に唯先輩が書いたんですか？」

『これは、間違いなく唯一人の力で書いた歌詞だろうな。お前さんの気持ちが伝わってくるぜ』

「ああ、そうだな。それに、憂ちゃんど部屋がこの歌詞を作らせたんだと思う」

唯がここまでの歌詞を書けたのは、部屋が使えなくなったことと、憂が風邪をひいたことが要因だと推察していた。

律も同じことを考えていたようであり、ウンウンと頷いていた。

「凄いわ、唯ちゃん！私、感動しちゃった！」

紬もこの歌詞を気に入っており、改めて唯にその気持ちを伝えていた。

「いやあ……。才能が開花しちゃったっていうかあ……」

「『自分で言うな!!』」

統夜、律、イルバは褒められて有頂天になっている唯にツツコミをいれていた。

「……あうう……。私の歌詞……」

最終的に滞の歌詞は採用されなかったため、滞は涙目になっていた。

「わ、わかったよ！2曲作ろうな！2曲！な、統夜？」

律は今にも泣きそうな滞をフォローするためにこんなことを言っており、さらには統夜にも話を振っていた。

「おい、ここで話を俺に振るなよ！」

統夜はいきなり話を振られて律の申し出を断るつもりだったが……。

「あうう……」

「うぐっ……!」

今にも泣きそうな漣を見たからか、統夜は面と向かって断ることが出来なかった。

「わかったわかった!何曲だって作ってやるから!」

統夜はこう言つて漣をフォローすると、漣の表情がぱあつと明るくなった。

こうして、学園祭で演奏する曲が決まり、後は学園祭に向けて練習あるのみだった。

しかし、統夜は漣の書いた歌詞を使った曲作りを強いられてしまい、騎士の使命を果たす合間に大変な仕事をする事になってしまった……。

……続く。

次回予告

『ほお、統夜のクラスで演劇をやることになったのか。しかも、あれをやることになるのはな……。次回、「主役」。こいつは面白いことになりそうだけ!』

第9 1話 「主役」

学園祭まで1ヶ月を切り、学園祭に向けての準備が着々と進んでいた。

そんなある日のHRで、統夜たち3年2組がクラス発表で何をするかを話し合っていた。

話し合いの中で、桜ヶ丘高校の卒業生に画家であり絵本作家であるカオルの名前が出てきていた。

そして、そのカオルの父親が描いた絵本をクラスのほとんどが読んでおり、その内容が面白いと思っていた。

そのため、統夜たち3年2組は、カオルの父親である御月由児が作った「黒い炎と黄金の風」を演劇でやることになった。

(……へえ、まさかあの絵本を演劇でやるとはな……)

統夜はそのことに驚きを隠せずにいた。

《そうだな。一体どうなることやら……》

イルバはこの劇がどんな出来になるのか心配していた。

演目が決まると、今度はこの劇の主役である黄金の騎士役を決めることになった。

しかし、誰も立候補する者はおらず、投票で決めることになったのだが……。

「……月影君……月影君……秋山さん……月影君……」

ほとんどの人が統夜に投票したようであり、統夜はその様子をジト目で見ていた。

（おいおい……。ほとんど俺じゃねえか……。まあ、濔に投票したのは俺だが、これじゃあほぼ俺に決まりじゃねえか……）

ここまで自分に票が集まっては、統夜が黄金の騎士役になるのはほぼ間違いなかった。

そして……。

「……投票の結果、3年2組の学園祭の出し物「黒い炎と黄金の風」の黄金の騎士役は、月影統夜君に決定しました」

統夜たちのクラスで行われる劇の主役が統夜に決まってしまった。

主役が決まり、クラスメイトたちは大きな拍手を送っていた。

「おお！やーくんが主役！」

「これは面白いことになりそうだな」

主役が統夜に決まったことに、唯と律が感嘆の声をあげていた。

一方、主役に決まってしまった統夜は……。

（アハハ……。マジで俺が主役かよ……。それに、黄金騎士の役……）

統夜はこの絵本が黄金騎士牙狼である冴島鋼牙の父親である冴島大河の活躍をもとに描かれたものだということを知っていた。

そのため、自分が黄金騎士を演じるということに複雑な心境だった。

《……統夜、黄金騎士をやるって言っても所詮はお芝居だ。あまり気負うこともないんじゃないのか?》

(まあ、そうだな。決まった以上はどうかやってみるさ)

統夜は自分が主役だということに納得はしていないものの、決まった以上はどうかやってみると腹をくくっていた。

「続いて、黄金の騎士に救われる少女の役を決めたいと思います」

続いて決めるのは、絵本には登場しないが、オリジナルキャラクターであり、この作品の準主役である少女の役を決めることになった。

これも立候補がなかったため、投票で決めることになった。

「……秋山さん……立花さん……秋山さん……秋山さん……」

先ほどのように投票の結果が黒板に書かれていくのだが、統夜の隣席である立花姫子と、濬の一騎打ちになっていた。

しかし、若干ではあるが濬の方が票が多かった。

そして……。

「……それでは、投票の結果、黄金の騎士に救われる少女の役は、秋山滯さんに決まりました」

主役と準主役が決まり、クラスメイトたちは拍手を送っていた。

「おお！やーくんが主役で、やーくんに助けられる役がみおちゃんかあ！」

「良かったな、滯。準主役だぞ。……って、あれ？」

律は滯に声をかけるが、反応がなかったため、滯の顔を見て様子を伺った。
すると……。

「………気絶してるぞ、滯のやつー！」

滯は何故か笑顔のまま微動だにしなかった。

自分が準主役選ばれたのがショックだったのか、気絶していたのである。

「………いい、異議ありー！」

気絶から立ち直った滯は、弱々しく手を上げて異議を申し立てていた。

「何？秋山さん」

「あう……。えつと……。やつぱり、こういう役決めを投票で決めるのは良くないんじゃない？」

「でも、立候補もいなかったし、推薦もなかったでしょ？」

「り、律を推薦します！律ってガサツで男っぽいけど、女の子らしい一面もあるので」

「…………お前なあ…………」

褒めているのかけなしているのかわからない漣の言葉を律はジト目になって聞いていた。

「ファンクラブもある程人気抜群の漣さんが何をおっしゃる♪準主役はまさに適役でしょ♪」

「あうう…………」

律の言う通り、漣はファンクラブがある程の人気者のため、準主役という目立つ役は適任だと律は判断していた。

「それに…………」

こう前置きを置いてから、律は漣にこのような言葉を耳打ちした。

「…………劇とはいえ、統夜に守られるなんて…………。おいしいとは思わないか？」

「はっー！」

律の一言で、漣の表情が一変した。

劇とはいえ、自分の好きな人に守ってもらうというのは満更でもなかったからである。

そして…………。

「は、恥ずかしいけど、私、頑張ります！」

滯は腹をくくつてこの役をやる決意を固めると、クラスメイトたちから拍手が送られた。

(? 滯のやつ、何で急にやる気になったんだ?)

《……さあな。だが、ある程度予想は出来るがな》

イルバは何故滯が急にやる気になったのかを何となく察していた。

「統夜君が主役で、滯ちゃんが準主役……。これは気合が入るわあ♪」

今回の劇は特に紬がやりたいと思っていたからか、脚本は紬が担当していた。

主役と準主役が決まったことで、紬はより一層気合をいれていた。

「……それでは、他に異論もないみたいなので、他の役を決めていきたいと思います」

滯も納得してくれたところで、和は話し合いを進めることにした。

「まずは衣装ですが……」

「はい! 立候補します!」

衣装という言葉が出た瞬間、担任であるさわ子が衣装係に立候補したのである。

《おいおい、教師が立候補するなよな……》

(でもまあ、さわ子先生は素体ホラーの着ぐるみを作っちゃう程だし、任せても大丈夫なんじゃないか?)

さわ子は衣装作りが得意だということは、統夜もよく理解していた。

さらに、素体ホラーを可愛くデフォルメした着ぐるみや魔戒法師の服を再現してしま
うほどの腕前のため、統夜はさわ子なら自分の着る黄金騎士の鎧も再現してくれるだろ
うと思っていた。

「でも先生にそんなこと……」

「大丈夫よ♪悪いようにはしないから♪」

さわ子はノリノリのようであり、満面の笑みを浮かべていた。

統夜はそんなさわ子を見て苦笑いをしていたが、滯はどんな衣装にされるか不安だっ
たのか顔を真っ青にして震えていた。

こうして衣装係が決まり、他の役や裏方の仕事など、必要なことを決めていった。

※※※

そして放課後、統夜たちは音楽準備室にいた。

「へえ、じゃあクラスで劇をやるんですね」

「そうなのお♪」

統夜たちは梓に劇をやるということを話していた。

「しかも、あのカオルさんのお父さんの作品をやるんですね！」

「ええ。面白そうでしょ？」

「はい！」

「……ま、一体どうなるかはまだわからないけどな」

元々絵本の作品を劇として再現するため、この作品がどのような劇になるのか、統夜は少し不安だった。

「だけど、私はこれが成功したら面白いかなって思ったのよ。この学校の図書館にカオルさんの絵本もあるし、劇にするのも何かの縁かなって思ったのよ」

「なるほどな……」

『ま、確かに面白いかもしれないな』

「そういえば、あの絵本を劇にするってことはホラーも登場するってことですよね？」
梓はふと気になったことを口に出していた。

「そうだけど、先生は素体ホラーの着ぐるみを作ってるしな」

「ああ、そういえばそうでしたね……」

梓はさわ子が素体ホラーの着ぐるみを作っていたことを思い出していた。

「それにしても、統夜先輩が騎士の役なんて適役じゃないですか！」

「そうか？俺が黄金騎士を演じるなんて畏れ多いけどな」

『まあ、魔戒騎士の存在をバラさないように気を遣わなければいけないけどな』

「わかっているって」

統夜たちがやろうとしている劇は魔戒騎士とホラーの戦いを描いているため、その秘密がバレないように、細心の注意を払う必要があった。

「なるほど……。そういえば律先輩は何をやるんですか？」

「あたし？あたしは小道具の担当になったんだよ。ほら、剣とか必要なものがあるだろう？」

律は小道具の担当となり、これから劇に必要なものを作っていくことになっていた。

「へえ、律先輩は小道具ですか……。ムギ先輩は脚本なんですよね？」

「ええ、そうよ♪」

「それで、唯先輩は何をやるんですか？」

「フッフッフ……。木、Gだよ！」

役的にたいした役ではないのだが、唯は何故か誇らしげだった。

「A、B、C、D……。木ってそんなに必要ですか？」

『それは俺様も思ってたんだ。木は全部背景にしてその分小道具や大道具に回した方が良いつて思ってたぜ』

「そうだよなあ。俺もそれは思ったよ」

「あうう……。ジツとしてなきやいけないなんて……。なんて難しい役……」

唯は木のポーズを練習していたのだが、プルプルと体を震わせていた。

『いやいや、ジツとしてるだけいいから楽だろう……。』

木の真似が難しいと言っている唯に、イルバは呆れていた。

「じゃあ、私、セリフや動きのチェックがあるから先に行くね♪」

「あ、ムギ！俺たちも今行くよ！」

絢が先に音楽準備室を後にして教室へ向かったのだが、統夜もその後を追いかけて教室へと戻っていった。

その後、律と滯も教室に戻っていき、部室には唯と梓だけが残された。

唯は木のポーズを続けていた。

「……唯先輩は行かなくてもいいんですか？」

「和ちゃんにジツとしてる練習をしてなさいって言われたから」

「は、はあ……」

梓は木のポーズを続けている唯をジト目で見ていた。

統夜たちは教室に戻ると、台本のチェックが行われた。

統夜たちが劇で行う「黒い炎と黄金の風」は、元々絵本だったので、セリフなどはない。

そのため、紬が絵本を参考にストーリーを製作し、絵本を元にしたオリジナルの劇になっていた。

セリフと言っても、会話をするのがほとんど統夜と滯のため、実質的に統夜と滯のセリフ合わせだった。

「……ねえねえ、統夜、怪物役ってき、セリフはあるの？」

セリフ合わせをしていた統夜に声をかけてきたのは、素体ホラーこと怪物役の1人である中島信代だった。

怪物役は体を使うため、運動部に所属している人がその役を行うことになっていた。

「んー……。別に台詞はいらなと思うけどな」

統夜はこう答えたのは、素体ホラーの鳴き声は人のものとは思えないものであり、セリフとして鳴き声をつけるとリアリティに欠けると思っていた。

「私もそう思ったのよね。だからセリフは入れてないのよ」

紬は怪物役にセリフを入れるとリアリティに欠けると思っていたので、怪物役のセリ

フは入れなかった。

「あとさ、怪物役って言ってもどんな動きをすればいいのかな？」

「そうだなあ……。とりあえずは受け身の練習からかな？ 倒れたり転んでも怪我しないようにな」

「そうね。怪物役は統夜君の黄金の騎士役と戦うシーンがあるからそこは練習した方が良いかもしれないわね」

脚本であり監督も兼任することになった紬は、統夜の意見に賛同していた。

「そっかあ！ したら柔道部の練習場を借りて練習するよ！」

「その方がいいかもしれないな。俺もセリフ合わせが終わったらすぐに行くよ」

「了解！ 先に行ってるから待ってるよ！」

信代を始め、素体ホラーこと怪物役選ばれた数名は柔道部の練習場へ向かい、練習場を借りることになった。

統夜は引き続き滯と共にセリフ合わせを行っているのだが……。

「……あ、あなた……様は……光の……騎士様……」

滯はやはり恥ずかしかったのか、声がとても小さく、とても聞き取れるものではなかった。

「……おいおい、滯。いくらなんでも恥ずかしがり過ぎだろう。セリフ合わせとはいえ

もうちよつと大きい声を出さない」と

「あうう……。だ、だって……。恥ずかしいんだもん……」

「……あのなあ……」

濡のあからさますぎる理由を聞いた統夜は呆れていたのかため息をついていた。

（やれやれ……。こいつは苦勞しそうだな……）

《まったくだぜ。そう簡単には行きそうにないしな》

統夜とイルバは濡が恥ずかしがらないようにするためには相当の苦勞が必要だと感じており、ため息をついていた。

ある程度セリフ合わせを行うと、濡に1人セリフの練習をするよう言い渡した統夜は、そのまま柔道部の練習場へ向かい、この日は受け身の練習を30分ほど行っていた。

※※※

この日の練習が終わると、統夜は音楽準備室に戻ってきた。

その時には既に全員集合しており、ティータイムを行っていたのだが、滯は力のない感じで机に突っ伏していた。

「……あうう……」

滯は未だに恥ずかしいのを克服できず、この練習だけでかなり体力を消耗していた。

「アハハ……。滯ちゃん、ずっと頑張ってたものね……」

「みんなも心配してたぞ」

律は劇で使う小道具を作りながらも滯の様子を伺っていた。

他のクラスメイトも滯が恥ずかしかってセリフを思うように言えないことを心配していた。

「まあ、こればかりは練習を重ねて慣れてもらおうしかないな」

統夜も恥ずかしかがる滯をどうにかしたいと思っていたのだが、こればかりは滯自身が克服すべき問題のため、どうすることも出来なかった。

「……そ、そういうえば、カオルさんのお父さんの作品をやるんですよね？カオルさんには話をしたんですか？」

「いや、ただだけどー！今度の日曜日にカオルさんに会いに行くんだよ。鋼牙さんとカオルさんの子供も見たいしな」

「え!? そうなの!? 私も行きたい!」

唯は子供を見てみたいという統夜の言葉に反応し、一緒に行きたいと申し出た。

「ああ、構わないぞ。カオルさんもみんなも良かったら連れてきてねって言うてたし」

「だったらみんなで行こうぜ!」

「そうね。いい息抜きにもなると思うし♪」

「はい! 私も行きたいです!」

「わ、私も行きたい!」

唯以外の全員も行きたいという気持ちも伝えていた。

「後な、もう1人一緒に連れていきたい奴がいるんだが、いいか?」

「連れていきたい奴?」

「統夜君、それはどなた?」

統夜が連れていきたい奴が誰なのかわからず、唯たちは首を傾げていた。

「この前喫茶店で会った東ヒカリっていただろ?」

「ああ! 私たちに親しく話しかけてくれたお姉さんね!」

名前を聞いた途端に唯たちはヒカリがどんな人だったかを思い出していた。

「ああ。ヒカリさんはカオルさんに憧れて画家を目指しててな。俺がカオルさんの知り合いだと知ると、合わせろって前から言われてたんだよ」

「そうだったんですね……」

「まだ連絡は取ってないけど、カオルさんに会えると言ったらバイトを休んでも来ようさ」

「アハハ……」

「まあ、今日の帰りにでも連絡を入れてみるつもりさ」

統夜は、今日の部活の帰りにヒカリに連絡を取るつもりだった。

「それにしても楽しみなだねえ♪」

「はいー久しぶりにカオルさんに会えるので私も楽しみですー」

唯たちは久しぶりにカオルに会えるのを楽しみにしており、統夜はそれだけではなく、鋼牙に会えるのを楽しみにしていた。

この日は練習を行わず、ティータイムで学園祭の準備の疲れを癒して解散となった。

統夜は番犬所に向かう途中、ヒカリに電話をしてカオルに会いに行く旨を伝えたのだが、ヒカリは間髪入れずに行きたいと息巻いており、ヒカリも統夜たち同行することになった。

統夜はヒカリに待ち合わせの時間と場所を告げて電話を切った。

ヒカリに連絡を取った統夜はそのまま番犬所へと向かった。

この日は指令もなかったため、統夜は街の見回りを行ってから家路についた。

※※※

そして鋼牙やカオルのいる雷瞑館を訪れることになっている日曜日となった。統夜たちは待ち合わせの場所である桜ヶ丘高校の入り口に来ていた。

しかし、紬だけは車を用意しているため、まだ来ていなかった。

そして、同行することになっているヒカリも桜ヶ丘高校の前にやって来ていた。

「……お、ヒカリさん。来たな」

「……みんな、お待たせ」

「あつ、ヒカリさん！こんにちは！」

ヒカリが来るのを確認した梓は、ペコリとヒカリに一礼した。

「はい、こんにちは。……あれ？あの明るい髪の女の子はまだ来てないの？」

ヒカリはキョロキョロと周囲を見回すが、紬が来てないことに気付いていた。

「ああ、ムギですか？ムギなら……」

もうすぐ来るはずだと統夜が言おうとしたその時だった。

一台のリムジンが統夜たちの前に泊まると、そのリムジンから50代くらいの壮年の男と紬が出て来た。

「……みんな、お待たせえ♪ヒカリさんも来てたんですね♪」

紬はいつもと同じおっとりとした笑顔を向けていた。

そんな中……。

「り……リムジン!？」

ヒカリはリムジンなどテレビでしか見たことがなかったもので、驚きを隠せなかった。

「ちよ、ちよっと！あんたは何でリムジンなんかに乗って来てるの!？それに、その人は

……」

紬がリムジンに乗ってるだけでも驚きなのだが、ヒカリは一緒にいる壮年の男のことも聞いていた。

「私、琴吹家の執事をしております、斎藤と申します。以後、お見知り置きを」

「し……執事!？何でそんな人が……」

「……まあ、その話は車の中でしてやるから……」

ヒカリはいくつも疑問があったのだが、それをこの場で解決しては時間の無駄な

ため、雷暝館に向かう道中で話をするようになった。

「……さあ、皆様、お乗りくださいませ」

執事である斎藤は、統夜たちをリムジンの中に乗せるようエスコートしていた。

「さあ、みんな、乗ってちょうだい♪」

紬も同じように促すと、唯たちは当たり前のようにリムジンに乗り込んでいた。

ヒカリは当たり前のようにリムジンに乗り込む唯たちにも乗り込んでいた。

「……ほら、ヒカリさんも早く乗った乗った!」

「え!?ちよつと……」

統夜はヒカリにリムジンに乗るよう促すと、ヒカリは困惑しながらもリムジンに乗り込んだ。

全員が乗ったことを確認した斎藤は運転席に乗り込み、雷暝館へと向かっていった。

「……おお!凄く快適じゃない♪」

リムジンの車内が予想以上に快適だったため、ヒカリは目をキラキラと輝かせていた。

「……そういえば、この前みんなの自己紹介をしてなかったよな」

統夜は、ヒカリに唯たちの自己紹介をしてないことを思い出していた。

「あ、そういえばそうだったわね」

この前統夜たちがヒカリのバイトしてる喫茶店に来た時も自己紹介はしてなかったことをヒカリは思い出していた。

「私は平沢唯です！」

「田井中律です！よろしくです！」

「あ、秋山澪です！」

「琴吹紬です♪ムギと呼んでください♪」

「な、中野梓です！」

唯たちはそれぞれ簡単ではあるか自己紹介をしていた。

「えっと……。唯ちゃんにりっちゃん。澪ちゃんにムギちゃん。それに梓ちゃんね。覚えてたわ」

ヒカリは唯たちの名前を1回でどうにか覚えていた。

「それに、ムギちゃん……。だよな？執事がいたりリムジン持っていたり、あなたってお金持ちなの？」

「まあ、そんな感じかな」

「軽音部で合宿に行つたんですけど、ムギちゃんの別荘で合宿したんです！」

「べ、別荘……。？合宿!？」

ヒカリは唯たちの話していることが壮大過ぎて驚きを隠せなかった。

「……あ、あとヒカリさんにもう一つ言っておくけど、唯たちもホラーとの戦いに巻き込まれたことがあるから、俺の秘密も知ってるからな」

「なるほどね。まあ、そんなことだろうとは思っていたけど」

『だが、俺様のことはまだ話してなかったな』

イルバが突如口を開いたのだが、その声の正体がわからず、ヒカリはキョトンとしていた。

「あれ？今の声……どこから？」

『……だ』

ヒカリは統夜の指にはめられているイルバの存在を確認していた。

『まだ自己紹介してなかったからな。俺様はイルバ。魔導輪だ』

「!?ゆ、指輪が喋ってる!？」

ヒカリは初めてイルバが喋るのを見たため、目を大きく見開いて驚いていた。

『俺様はホラーの居場所を探知することが出来る』

「ホラーの話は前にしたと思うけど、そしてホラーを見つけて俺みたいなの魔戒騎士が討伐するって訳さ」

「なるほどね……。それにしても喋る指輪なんて珍しいわねえ」

ヒカリは統夜の手を取り、イルバを凝視していた。

まじまじとイルバを眺めていたヒカリは、コツンとイルバにデコピンをしていた。
『イタっ！何しやがる！』

イルバはいきなりデコピンされたことに驚きながら怒っていた。

「へえ、痛みは感じるのか……。面白いわねえ……」

『……お前なあ……』

ヒカリが興味本位でデコピンをしたことにイルバは呆れ果てていた。

ヒカリはまた1つ統夜の秘密を知ることになった。

「……あつ、そうそう。実はカオルさんもホラーや魔戒騎士の秘密を知ってるんだよ」

「え!? そうなの!？」

「それに、カオルさんの旦那さんは魔戒騎士なんだよ」

「……」

自分の憧れている画家もホラーや魔戒騎士の秘密を知っており、さらに旦那が魔戒騎士であると知ると、ヒカリは言葉を失って驚いていた。

「まあ、そこら辺はカオルさんから直接話を聞くといいよ」

統夜は、ヒカリがカオルの話を書くことは、ヒカリにとってプラスになると信じていた。

ヒカリは、統夜に魔戒騎士についての話を聞いていたのだが、そんな話をしてい

あつという間に鋼牙の家である雷暝館へたどり着いた。

「……へえ、ここがカオルさんの……。凄く広いわねえ……」

雷暝館を訪れるのが初めてなヒカリは、キヨロキヨロと周囲を見回していた。

「本当にそうですよね。凄く広いです」

唯たちも雷暝館を訪れるのは2度目だったため、その広さに驚きながらキヨロキヨロと周囲を見回していた。

「ほら、行くぞ」

統夜は唯たちを先導して入り口に向かつていった。

そして、緋の執事である斎藤は、その場に待機し、統夜たちの帰りを待つことにした。入り口に到着すると、統夜はコンコンとドアをノックすると、ガチャッと扉が開かれた。

そこから、1人の老紳士が出てくると、深々と頭を下げていた。

「これはこれは、統夜様。お久しぶりでございます」

「お久しぶりです、ゴンザさん」

統夜も久しぶりに老紳士こと、冴島家の執事であるゴンザに会うため、ペコリと一礼していた。

「皆様も、お久しぶりでございます」

ゴンザは唯たちの姿を見つけると、再びペコリと一礼していた。

「ゴンザさん、お久しぶりです！」

「ゴンザさん、お元気でしたか？」

唯と紬がゴンザに挨拶をしていた。

「ええ。私は変わらずでございます」

ゴンザは元気であることを伝えると、満面の笑みを浮かべていた。

「……おや？」

ゴンザは初めて見るヒカリの顔を見ると、首を傾げていた。

「統夜様、そちらの方は？」

「ああ、この人は」

「初めまして、私は東ヒカリといいます。私、カオルさんに憧れて画家を目指しているんです」

「左様でございますか……。カオル様に……」

カオルに憧れて画家を目指している人がいることがわかり、ゴンザは喜びの感情をあらわにしていた。

「ささ、立ち話もなんですので、お上がりください。鋼牙様もカオル様もお待ちになっておられますから」

統夜たちはゴンザの案内で屋敷の中へ通された。

「こちらでございませす」

ゴンザは統夜たちを応接室に案内すると、応接室の扉を開き、統夜たちは応接室の中に入った。

応接室の中では、鋼牙とカオルが椅子に座って統夜たちのことを待っていた。

「……鋼牙様、カオル様。統夜様とそのお友達でございませす」

「統夜、よく来たな。待ってたぞ」

「統夜君、いらっしやい♪それに、みんなも♪」

鋼牙とカオルは統夜たちの姿を見ると、優しい表情で笑みを浮かべながら統夜たちを歓迎していた。

「鋼牙さん、お久しぶりです！」

「統夜、サブツクの試合はレオに見せてもらったぞ。惜しかったが、準優勝とはやるじゃないか」

「決勝まで行けたのは運が良かったと思っっています。零さんには歯が立ちませんでした」

「でも、零君といい勝負をしたんでしょう？ 凄いよねえ！」

「あ、ありがとう……ございませす」

鋼牙とカオルが自分のサブックでの戦いを褒めてくれたのが嬉しかったのか、頬を赤らめていた。

「……あれ？ 統夜君、彼女は？ 初めて見る顔だけど……」

「は、初めまして！ 私、東ヒカリといいます！ 私、カオルさんに憧れて画家を目指していらまして……」

ヒカリはペコリと一礼をしながら鋼牙とカオルに自己紹介をしていた。

「ほお、カオルに憧れて……か」

鋼牙もゴンザのようにカオルに憧れて画家になる人物がいることに喜びの気持ちをあらわにしていた。

「え、そうなの!? エへへ、ちよつと照れ臭いけど嬉しいなあ♪」

カオルは少し恥ずかしそうにするが、満更でもないといった感じだった。

「それで、カオルさんに色々お話を聞いたらなあと思ひまして」

「うん！ 私で良かったら何でも聞いて！ あ、そうそう。統夜君たちも私に用事があるんだよねえ？」

カオルの問いかけに統夜は無言で頷いていた。

「実は、もうすぐ学園祭があるんですけど、そのクラス発表で、カオルさんのお父さんの絵本を劇にしようと思っています」

統夜が説明するより先に絢が事情の説明を行っていた。

「え!? 私のお父さんのつてことは、「黒い炎と黄金の風」を?」

「はい! やーくんが黄金の騎士の役をやるんです!」

「ちよ、唯! お前なあ!!」

統夜は何も考えずあつさりとそのことをバラす唯に少し焦っていた。

「ほう、統夜が黄金騎士……か」

「い、いや、違うんですよ、鋼牙さん! 俺みたいな奴が黄金騎士の役なんて畏れ多いなどは思っただんですけど、これは劇で、あの……その……」

統夜は必死になつて言い訳をするのだが、その様子がおかしかったのか、鋼牙は笑みを浮かべていた。

「……? 鋼牙さん?」

「いや、すまない。そんなに必死に言い訳をするお前が可笑しくてな。俺はお前が黄金騎士の役をやるのを嫌だとは思わないぞ。むしろ俺も見てみたいくらいだ」

このように語る鋼牙の表情はとても穏やかなものだった。

「うんうん。鋼牙の言う通り面白そう! 私も見てみたいな!」

「ええ。俺もお二人にはぜひ見てもらいたいです。招待しますので、ぜひ来てください!」

「うん！絶対に観に行くよ！私もそこは楽しみだから♪」

鋼牙とカオルは統夜たちの劇に興味を持っていたので、統夜はホツとしていた。

「あつ、そういえば、みんなにはまだ紹介してなかったよね？」

カオルが指差す方向に、ベビーベッドが置いてあり、カオルはそこへ統夜たちを案内した。

すると……。

「あう……あう……」

ベビーベッドに赤ちゃんが寝転がっていた。

「か……可愛い♪」

「ああ、本当だな」

「赤ちゃんなんてなかなか見る機会がないからな」

「ええ、そうね♪本当に可愛いわ♪」

「はい！凄く可愛いです！」

唯たちは普段あまり見ることのない赤ちゃんの可愛さに見とれていた。

「鋼牙さん、カオルさん。この子はもしかして……」

「……ああ。そういうことだ」

「この子の名前は何なんですか？」

「雷牙。冴島雷牙よ。格好いい名前でしょ？」

「本当だあ♪格好いいねえ♪」

特に唯は雷牙にメロメロであった。

（雷牙か……。この子がいずれ黄金騎士を継ぐことになるのかな？）

統夜も穏やかな表情で雷牙のことを見ていた。

雷牙は多くの人に見られているにも関わらず、泣こうとはせず、とても大人しかった。

「カオルさん、抱っこしてもいいですか？」

「うん、もちろん♪」

カオルに雷牙を抱っこする許可をもらうと、唯の表情がぱあつと明るくなっていた。

「おい、唯。気を付けろよ」

「わかってるって♪」

唯は雷牙を抱っこするのだが、抱っこされた雷牙は「あうあう」と言いながら手を伸ばそうとしていた。

そんな雷牙の様子が可愛かったのか、唯は終始ニヤニヤしていた。

「おい、唯ばかりずりいぞ！あたしもあたしも！」

「わっ……私も抱っこしたい！」

「ねえ、唯ちゃん。早く早く！」

「私も抱っこしたいです！」

自分たちも雷牙を抱っこしてみたいのか、今抱っこをしている唯に早く代わるよう催促するが、唯は代わろうとはしなかった。

「おい、唯。みんな待つてるから代わってやれよ……」

統夜はみんなのことを考えて唯に代わるよう催促していた。

「……むうう、わかったよお」

唯はふくれっ面になりながらも律に雷牙の抱っこをさせた。

唯たちは順番に雷牙を抱っこしており、統夜は穏やかな表情でその様子を見守っていた。

唯たちが抱っこを終えて満足すると、雷牙をベビーベッドへ寝かせた。

すると、見知らぬ大人と接して疲れたのかすやすやと眠りについていった。

「……それにしても、雷牙はずいぶんと物怖じしないんですね」

「そうねえ。手がかからないのは助かるけど、赤ちゃんにしてはしっかりとるから私は心配なのよねえ」

カオルが言うには雷牙はそこまで手がかからないらしく、泣くといえばお腹がすいた時とオムツを交換してほしい時くらいであった。

雷牙は赤ちゃんにしてはしっかりといたため、カオルはそこを心配していた。

「そこは気にしなくてもいいと思いますよ。子供なんて勝手に年相応な感じになりますから」

ヒカリは穏やかな表情を浮かべながらしみじみと答えていた。

「ヒカリちゃんだっけ？もしかして、子育ての経験があつたりするの？」

「いえ。ただ、兄の子供の世話はしたことがあるのでそこで実感したんです」

ヒカリには4つ離れた兄がおり、ヒカリの兄は結婚していて今は3人の子供のお父さんであつた。

ヒカリは度々兄の子供の面倒を見ていたため、子供は手がかかるということをよく理解していた。

「そっかあ。それじゃあこれからわからないことがあつたら教えてね！」

「はい！もちろんです！」

ヒカリは、カオルと友好的な関係が築けてきたことに喜びの感情をあらわにしていた。

「……お待たせいたしました。お茶の準備が整いました」

いつの間にか姿を消していたゴンザが、ティータイムの用意をして戻ってきた。

こうして、続夜たちは鋼牙やカオルと共に、ベビーベッドで眠る雷牙を見ながらティータイムを行っていた。

「……そういえば、ヒカリちゃんは私に聞きたいことがあるんだっけ？」

「はい！さつきも言いましたが、私はカオルさんに憧れて画家を目指しました。できればカオルさんみたいな画家になれるのかなと思います」

「うーん……そうだなあ……」

カオルは自分がここまで成功したのをどう説明すべきか迷っており、じつくりと考え込んでいた。

「私、バイトをしながらコツコツお金を貯めていつの日か個展が開けるようになって頑張ってるんです」

「私だってそうだったよ。それでどうにか初めて個展が出来そうになったんだけど、それが無くなっちゃって……」

「もしかして、ホラーとの戦いに巻き込まれたんですか？」

ヒカリがホラーのことを知っているとは思ってなかったのか、カオルは驚きを隠せなかった。

「ヒカリちゃんもホラーのこと知ってるんだね」

「はい。私もどうにか個展にこぎつけたんですが、その画廊のオーナーがホラーで、統夜君に救われたんです」

記憶は完全に戻っているヒカリは、その時の状況を簡潔に説明した。

「その時、返り血を浴びたりしなかった？大丈夫だった!？」

「ええ。返り血は飛んできたんですけど、統夜君の仲間が術のようなもので守ってくれたので、大丈夫でした」

「そうなんだ……。良かったねえ」

ヒカリがホラーの返り血を浴びていないことがわかり、カオルは安堵していた。

『……なるほど。お前さんは魔戒法師に守られたんだな』

鋼牙の指にはめられているザルバが口をカチカチと鳴らしながらこう話していた。

それを見ていたヒカリは……。

「い……イルバと同じ形の指輪?!」

ザルバの容姿がイルバと似ていることに、ヒカリは驚いていた。

『おいおい、あんなクソ指輪と一緒にさせてちゃ困るぜ。俺様はザルバ。あいつよりも優秀な魔導輪だ』

『フン、自分で優秀とはよく言うぜ。この骨董品なクソ指輪が』

『何だと、貴様!やるのか!』

『ああ、いつだって受けてたつぜ!』

ザルバとイルバは互いに挑発し合い、一触即発の状態になっていた。

「おい、イルバ!やめろ!!」

「ザルバ。お前もそこまでだ!」

統夜と鋼牙は互いの相棒をなだめていた。

『フン!!』

イルバとザルバは互いが気に入らないのかそっぽを向いていた。

「アハハ……。イルイルもザルザルも相変わらずだね……」

相変わらず仲の悪いイルバとザルバに唯は苦笑いをするのだが……。

『俺様を変なあだ名で呼ぶな!!』

イルバとザルバは同時に同じことを言っていた。

統夜と鋼牙はそんな相棒を見て苦笑いをしていた。

「……ねえ。イルバもザルバも続けていい?」

『あ、ああ……』

『話を進めてくれ』

イルバとザルバが落ち着いたところで、カオルは話を続けた。

「私もね。色んなバイトをしながらいつの日か個展を開くのを夢見て頑張ってたんだ。

そして、ワンフラットだけだけど、ようやく個展を開くチャンスが来たの」

「……私と同じだ……」

状況が自分の時と酷似しており、ヒカリは驚いていた。

「それでね。その画廊のオーナーがホラーに取り憑かれていたの。そこに現れたのが

鋼牙だった」

カオルは当時の事を思い出していると、穏やかな表情になっていた。

「あの時は本当にビックリしたわよ。いきなり現れたと思ったらライターの火をつけ出して……」

「……」

鋼牙もちろんをその時のことは覚えていたが、何も弁解はせず、ただ黙っていた。

「それで、色々あつてそのオーナーがホラーだつてわかつて、鋼牙はそのホラーを倒すために戦つたの。それで、私はホラーの返り血を浴びてしまったの」

「…そうだったんですか!？」

ホラーの返り血を浴びたというのは自分とは異なる状況であり、ヒカリは驚きを隠せなかった。

「ホラーの返り血を浴びた者は100日後に死に至るだけではなく、ホラーにとつては最高の餌となる。だから即座に斬り捨てなきゃいけないのが騎士の掟なんだよ」

「……なるほど、だからこそ統夜君たちは私に返り血を浴びせないよう必死だったのね……」

もしホラーの返り血を浴びていたら自分はここにいなかったかもしれない。

そう考えると、ヒカリは今まで以上に統夜に感謝していた。

「だから本来カオルは斬らなきやいけなかつた」

『だが、斬れなかつた』

「ホラーの返り血を浴びた者はホラーにとつては最高の餌になるからな。俺はホラーをおびき寄せるためという名目でカオルを斬らなかつたんだ」

「ひどいでしょ？ 私もそのことを知った時は本当にショックだったわ。だけど、今なら鋼牙の気持ちも理解出来るのよ。鋼牙はどうかして私を救いたかつたんだなって」

「……」

鋼牙は恥ずかしいからか、「ああ、そうだ」とは言わず、黙っていた。

「それでね、私は色々バイトをしながら画家になるために頑張ってたの。鋼牙やゴンザさんには度々モデルになつてもらつたかな？」

「私もバイトを続けながら画家になるために頑張ってるんです」

「そっかあ。私たち、境遇が似てるかもね♪」

「そうかもしれないですね。でも、私は1ヶ月くらい前までホラーに関する記憶を失つていたんです」

「え!? そうなの!？」

ヒカリがホラーに関する記憶を失っていることを知り、カオルは驚きを隠せなかつた。

「本来なら魔戒騎士はそうしななければいけないんだ」

『魔戒騎士やホラーの秘密を一般人に知られる訳にはいかないからな。本来ならホラーに襲われた人間のホラーに関する記憶を消さなければならぬんだよ』

ホラーに襲われた人間のホラーに関する記憶を消さなければならぬということ、鋼牙とザルバが説明していた。

「カオルの場合はホラーの返り血を浴びていたからな。だからこそ記憶は消さなかったんだよ」

「そうだったんだ……」

カオルは鋼牙やザルバの説明で納得したようだった。

「それで、私は統夜君がオーナー行方不明事件に関わっていると誤ってしつこく追求してたんです」

「ああ、本当に参ったよ」

『まったく。会うたびにこちらに突っかかってきてたからな』

「ちよ?! あんたねえ!」

統夜とイルバは気を使うことなくこのようなことを言っていたので、そのことにヒカリは焦っていた。

「アハハ……。それで?」

「はい。最近またホラーに遭遇して、その時に全部思い出したんです」

「俺もこれ以上つきまとわれたくなかったから、全部話したんです。もしヒカリさんがこのことを公表しようとしたら全ての記憶を消すつもりでしたけど」

「ちよつと！さらつと怖いこと言わないでよ！」

統夜が穏やかではないことをさらつと言いのけていたため、ヒカリは顔を真つ青にしていた。

「それで、ヒカリちゃんは統夜君たちと仲良くなったわけね？」

「まあ、そんな感じです。あの子達とは今日仲良くなりましたけど」

ヒカリは唯たちを指すと、それを見た唯たちは笑みを浮かべていた。

「それで、カオルさんは度々ホラーとの戦いに巻き込まれたんですか？」

「ええ。どこへ行つてもホラーとの戦いに巻き込まれて、もう大変だったわ」

カオルは当時の事を思い出しながら、顔を真つ青にしていた。

「それで、カオルは度々ホラーとの戦いに巻き込まれたんだが、その度に俺はカオルを救いたいと心から思うようになったんだ」

鋼牙は改めてこんなことを言うのは恥ずかしかったのだが、頬を赤らめながらこのようなことを言っていた。

「鋼牙……」

カオルはそんな鋼牙の言葉が嬉しかった。

「それで、ヴァランカスの実という血に染まりし者を浄化する物を手に入れるため俺は奔走した」

「それで、その実は手に入ったんですね？」

ヒカリの問いかけに鋼牙は無言で頷いた。

「それでね、私は画家として力をつけるためにイタリアに留学したのよ。画家として売れ始めたのは留学から帰ってきてからかな？」

「そうだったんですね……。私は高校生の時にカオルさんの個展でカオルさんの作品を見て、画家になりたいと思っただんです」

「私の個展に来てくれたんだ！それに、それを見て画家になりたいだなんて、画家冥利につきるよー！」

カオルはヒカリが本気で自分に憧れていることを感じ取り、心の底から喜んでいた。

「カオルさん、時々遊びにきてもいいですか？私、一人前の画家になれるようカオルさんから学びたいんです！」

「もちろん！私で良かったらいくらでも力になるわ！時々、雷牙の子育てを手伝ってくれたら助かるかな」

カオルは少しだけ申し訳なさそうに子育ての手伝いを申し出ていた。

「もちろんです！こう見えて、私は甥や姪が赤ちゃんの時から面倒見てたので慣れてますから」

「おお！それは頼もしいね！ねえ、鋼牙」

「ああ、そうだな」

『おいおい、お前らはあいつの親だろ？そんなんでいいのかよ？』

ヒカリに時々子育てを手伝ってもらおうという言葉に、ザルバは呆れていた。

「いいのよ。カオルさんに色々教わるんだもの。これくらいは当然よ」

『まあ、お前さんが良いならいいのだが……』

「カオルさん、これからもよろしくお願いします！」

「こちらこそ！私なんかで良ければよろしくね！」

こうして、カオルとヒカリは、師弟の契りを交わしたのであった。

「ささ、お茶のお代わりもお菓子もまだまだございますから、ゆつくりしていつて下さい
！」

「はい、ありがとうございます！」

その後、統夜たちは一時間ほどティータイムを楽しんでいた。

ティータイムが終わると、統夜たちは雷瞑館を後にし、桜ヶ丘に帰っていった。

桜ヶ丘に戻つてくるとそのまま解散になった。

ヒカリにとっては貴重な1日となり、統夜たちにとつても貴重であり、リラックス出来た1日となったのであった。

※※※

翌日、この日は学校であり、この日も学園祭の準備が行われていた。

恥ずかしがり屋である滯は、今日も上手くセリフを言えないのではないかとクラスの誰もが心配していた。

しかし……。

「……待って下さい！光の騎士様！私も行きます！」

先週末までのオドオドした滯はどこへ行ったのか、滯は恥ずかしがることなく、ハッキリとセリフを言っていた。

滯の成長ぶりに、クラスメイトたちは歓声をあげていた。

「おおー！いい感じじゃん！」

「何？何かあったの？秋山さん！」

「ああ……いやあ……べ、別に……」

滯は恥ずかしかったのか、ハッキリとは答えなかった。

滯は昨日、統夜たちと共に鋼牙やカオルから絵本の話聞いていた。

その時、2人にとつて「黒い炎と黄金の風」という絵本の存在が大きいことを理解し、滯は2人のためにも覚悟を決めて最後まで自分の演技をしようと決めたのであった。

(……滯のやつ、あれなら大丈夫そうだな)

先週から大きく成長した滯を見て、統夜は安堵したのか笑みを浮かべていた。

《そうだな。これなら、殺陣の稽古にだいぶ時間を使えるんじゃないか？》

(ああ。殺陣のシーンはこの劇で1番重要なシーンだからな……。みっちり稽古しておかないとな……)

学園祭までもなくであり、統夜はこれからの稽古に向けて気合を入れていた。

《統夜。気合十分なのはいいが、騎士の務めも忘れるんじゃないぞ》

(わかっているって。イレズ様にもきちんと報告するさ。戒人だつて協力してくれるだろうし)

統夜はこれから稽古が多くなるため、騎士の務めに費やせる時間が減ることをイレズに伝えるつもりだった。

イレスだけではなく、統夜と共に魔戒騎士の務めを果たす黒崎戒人も統夜に協力してくれるだろうと判断していた。

《とりあえず、今日にでも番犬所に行かないとな》

(わかつてるって)

統夜は番犬所への報告はしつかりと行うつもりだった。

統夜とイルバがテレパシーで会話をしていたその時だった。

「統夜！ほら、稽古に行くよ!!」

劇で素体ホラーこと怪物の役である信代が、統夜のことを呼んでいた。

「おう！今行く！だから先に行つててくれ！」

「わかった！」

信代を始め、素体ホラーこと怪物役を務める4名は、練習場所として借りている武道場へと向かった。

「さて……。最高の劇にするために俺も気合をいれますかね」

統夜は自らを奮い立たせると、その後、殺陣の稽古を行うために借りた武道場へと向かった。

こうして、学園祭の準備は着々と進んでいったのであった。

……続く。

——次回予告——

『ようやく学園祭が始まったか。さて、統夜たちの劇はどのような出来になっているのやら。次回、「伝説」。黄金騎士の伝説がここに蘇る！』

第9 2話 「伝説」

学園祭まで日が迫っており、統夜たちは劇の稽古に追われていた。

統夜は学園祭の準備が忙しいことをイレスに報告した。

それを了承したイレスは、ホラー討伐の指令は極力戒人に回すよう手配することになった。

その事を戒人も了承しており、戒人は統夜が学園祭の準備に専念できるようにサポートをするつもりでいた。

そんな中、統夜はイレスや戒人だけではなく、レオやアキトなどにも連絡を取り、自分たちが行う劇をぜひ見て欲しいとお願いしていた。

こうして、統夜たちは学園祭へ向けて準備を順調に行っていた。

しかし、劇の準備が忙しいせいか、全員揃つての練習はあまり行えず、梓はそこに不安を募らせていた。

学園祭まで数日と迫ったある日、統夜はこの日も殺陣の稽古を行っていた。

この日は講堂のステージを借りて、実際に動きを確かめるリハーサルのような練習だった。

「さあ！統夜！思い切り行くよ!!」

「そうだよ！講堂使えるのは今日だけなんだから！」

素体ホラーこと怪物役であるバスケット部の中島信代と、バレー部の佐伯三花は、この日しかない講堂での練習に気合をいれていた。

「アハハ……。そうだな。今日で一通りの動きをマスターしないと！」

統夜は実際の小道具を使つての練習となり、牙狼剣に酷似した剣を構えていた。

「それじゃあ！まずは動きの練習から始めます!!」

講堂の一番前の席に座っている紬がこのように宣言すると、ステージに立つ全員が無言で頷いた。

「それでは！よいい……。始め！」

紬の宣言で練習は始まった。

まず最初に行つたのは、殺陣のシーンの練習からだつた。

素体ホラーこと怪物役の4名は、元々運動部にいたからか、統夜の指導でメキメキと動きが上達し、アクション俳優顔負けの動きをしていた。

それに合わせて統夜は剣を振るったり回し蹴りの仕草をしたりと台本に書かれている動きを難なくこなしていた。

そして、怪物役の4名はアクション俳優のようにクルクルと回転しながら転倒したり

もするのだが、受け身の練習をしつかりと行っていたからか、怪我もなく順調に進んでいた。

最後は統夜が剣を一閃し、4人が倒れたところでこのメンバーでの殺陣のシーンは終了だった。

「はい、OKです！」

統夜を含めた5人の動きがかなり良かったからか、それを見ていたクラスメイトたちから大きな拍手が送られた。

「……よし、いい感じだな。これなら本番も大丈夫そうじゃないか」

「そうだね。統夜の指導が良かったからかな？」

「うんうん、私もそう思ったよ。それにしても統夜君って運動神経がいいから軽音部なのもつたいたないなあ。ぜひバレー部に入って欲しかったよ」

「何言ってるのさ……ここはバスケット部でしょう！」

素体ホラーこと怪物役を引き受けた4人は統夜と殺陣の稽古を重ねていくうちに、統夜の運動神経の良さを実感していた。

そのため、三花と信代はそれぞれ自分の部に統夜をスカウトしようとしていたのである。

「アハハ……。気持ちは嬉しいけど、俺は軽音部だから……」

「そうよ！統夜君は軽音部の大切な部員なんだから」

紬は三花と信代のスカウトをやめさせるため、少し強めな口調で言っていた。

「まあ、そうだよね」

「でも残念だなあ」

信代と三花は諦めたのだが、落胆の色は隠せなかった。

「さあ、時間もないし、練習しましょう。次は統夜君と漣のセリフ合わせかしら？」

今回みんなを取り仕切る1人である和が、このように次の練習の指示を出していた。

素体ホラーこと怪物役の4人は1度ステージから離れ、漣がステージに上がり、2人でセリフの通し練習を行った。

漣は恥ずかしがることはなく、最後までしっかりと演技をやり切っていた。

それに応えるように統夜もセリフ一つを確かめるように正確な芝居をしていた。

それを見ていたクラスメイトたちから大きな拍手が起こっていた。

最初こそは不安だったが、ここまでの出来になるとは思ってもいなかったからである。

続いて統夜1人でのアクションの練習が行われ、最後に木の役の人間の立ち位置を確認して講堂での練習は終了した。

※※※

……場所は変わって東京、秋葉原。

この日も魔戒騎士として務めを果たしていた如月奏夜は、街の見回りを行う前にエネルギーを補充するため、近所にある和菓子屋「穂むら」へ向かった。

「……あら、奏夜君、いらっしやい」

奏夜が店内に入ると、30代か40代くらいの女性が接客しており、奏夜を出迎えていた。

「ああ、どうも」

この女性は奏夜の友人であり、この家に住んでいる高坂穂乃果の母親であり、奏夜は穂乃果の母親に軽く挨拶をしていた。

「穂乃果なら2階にいるわよ。良かつたら上がってうちの新作メニューを食べて行ってちょうだい。海未ちゃんところりちゃんも来てるわよ」

「じゃ、じゃあ、お邪魔します……」

ただで新作のお菓子を食べられるならと考えた奏夜は、お言葉に甘えて上がらせてもらうことにした。

店の奥から家の中に入った奏夜は、そのまま階段を上り、2階にある穂乃果の部屋に直行した。

奏夜はコンコンとノックをすると、「はい！どうぞ！」と穂乃果の声が聞こえてきたので、奏夜は穂乃果の部屋の中に入った。

「……よう、みんな」

「あ、そーくんだ！どうしたの？」

「いや、いつもみたいにここへ寄ったら穂乃果のお母さんが上がって言って言ってくれな」

「そうそう！今ね、穂むらの新作のお菓子を海未ちゃんところりちゃんと一緒に試食してたんだよ」

「うん♪すごくおいしかったよ♪」

「奏夜も良ければいかがですか？」

「ああ、ただこうかな」

奏夜は空いたスペースに腰掛けると、穂乃果が大福を差し出してきたので、奏夜はそれを頬張った。

「……ん！美味しい！やっぱり穂むらの和菓子は最高だな！」

「エへへ……。そう言ってくれると嬉しいな♪」

奏夜が穂むらの和菓子を絶賛していたのが嬉しかったのか、穂乃果は満面の笑みを浮かべていた。

「……あつ、そうそう！そーくん、今度の土日って暇？」

「え？まあ、暇つちや暇だけど……」

奏夜は魔戒騎士の使命以外は特に予定がなかったもので、こう答えていた。

「今度の土日って、統夜さんの学校の学園祭なんだって。もし良かったら一緒に行かない？」

「え？そうなのか？そういうことなら俺も行きたいかな」

「本当!?それじゃあ、決まりだね」

奏夜も共に行くと言出し、学園祭に行くという話は確定したのだが……。

「穂乃果。学園祭は2日とも行くのですか？」

「そうだよ。土曜日は統夜さんが劇の主演をやるみたいだから見てみたいし、日曜日は軽音部のライブを見たいし！」

穂乃果は統夜からメールで学園祭の予定を聞いていたため、土曜日と日曜日の両方見たいと思っていた。

「ということは、2日も秋葉原と桜ヶ丘を往復するということですよ？」

「んー、そうだねえ。どこか泊まれればいいけどアテがないからねえ」

「そうですよね……」

「……まあ、2日も往復するのは大変だけど、こんな機会も滅多にないしな」

「うん、そうだね！そーくんの言う通りだよ！」

「確かに……そうですね……」

奏夜の滅多にないという言葉に、ことりと海未は賛同していた。

「いやあ、統夜さんや皆さんの晴れ舞台……楽しみだなあ♪」

「うん♪私も楽しみ♪」

「はい！私もですー！」

「俺も楽しみだよ」

奏夜たちは、学園祭での統夜たちの舞台を心待ちにしていた。

奏夜は穂むら新作の和菓子を食べながらしばらくのんびりしていたのだが、その後は穂むらを後にして、街の見回りを行っていた。

※※※

そして、学園祭当日を迎えた。

毎年桜ヶ丘高校の学園祭は模擬店が多数出店されているからか、大いな賑わいを見せていた。

統夜たちの劇はこの日の午後から行われることになっており、軽音部のライブは翌日の昼からになっていた。

統夜たち3年2組は、午後から行われる劇の準備に追われていた。

そんな中……。

「へえ、かなり賑わっているねえ」

秋葉原から桜ヶ丘までやってきた奏夜たちであったが、穂乃果は周囲をキョロキョロと見回しながら賑わいぶりを確かめていた。

「そうだねえ♪模擬店もいっぱいだし♪」

「ええ♪今から回るのが楽しみです♪」

ことりと海未も目をキラキラとさせながら周囲を見回していた。

すると……。

「……おつ、奏夜じゃないか」

奏夜は声をかけられたのでその方を振り向くと、声をかけてきたのは黒いコートの青年だった。

「！れ、零さん。お久しぶりです！」

その人物は銀牙騎士絶狼の称号を持つ涼邑零で、奏夜とはサバック以来の再会だった。

「元氣そうだな。わざわざ桜ヶ丘に来たってことは統夜たちを見に来たのか？」

「はい！零さんですか？」

「まあな。それに、ここの出店はどこも美味しくてな。それを楽しみに来たんだよ」

零は去年の学園祭でも模擬店を堪能していたのだが、今年も同様に模擬店を楽しむにしていた。

「それよりも……」

零は声をかけた時から同行している穂乃果たちが気になっていた。

「この子たちは奏夜の彼女か？3人とも可愛いじゃないか♪」

「ちよ!?そ、そんなんじゃないですって！」

奏夜は零の問いかけを顔を真っ赤にしながら否定しており、穂乃果たちも可愛いと言

われたのが恥ずかしかつたのか、顔を真っ赤にしていた。

そんな奏夜たちの初々しい反応に零は笑みを浮かべていた。

「あつ、そうそう。2年生の教室で喫茶店をやってたぜ。梓ちゃんのクラスな」

「え、そうなんですか!？」

「梓さん？」

零の言葉に穂乃果は反応し、梓と会ったことのない奏夜は首を傾げていた。

「ま、思い切り楽しんでな。それじゃあ、またな」

零は話し込んで邪魔をするのも悪いと思い、そのまま模擬店の方へと消えていった。

「奏夜、今の人は知り合いですか？」

「ああ。知り合いだよ」

「へえ、そうなんだ♪」

「ねえねえ、さっきの人が言ってた梓さんの喫茶店に行ってみようよ!」

「そうですね。梓さんにも挨拶をしたいですし」

「行きましょ行きましょ♪」

とりあえず次にどこへ行くのかは決まったのだが……。

「なあ、梓さんって誰なんだ？」

「あれ?そーくんって梓さんに会ったことないんだね」

「梓さんは、統夜さんの後輩で、統夜さんと同じ軽音部に入っているんです」
「なるほど」

奏夜は海未の簡潔な説明で納得していた。

「ほらほら、まずはそこに行こうよ！」

「ええ！」

「うん♪」

「そうだな」

こうして、奏夜たちは梓のいる教室へと向かっていった。

その頃、梓は統夜たちの様子を見に統夜たちのクラスを覗いていたのだが、あまりに忙しそうだったので、声をかけずに自分のクラスへ戻っていった。

「……あ、梓ちゃん。おかえり。お姉ちゃんたちどうだった？」

「うん。何か忙しそうだったから声かけてこなかった」

「お姉ちゃんたちの劇、お昼からだもんね。楽しみだなあ♪」

梓と憂は昼から行われる統夜たちの劇を見たいがために午前中いっぱい自分のク

ラスの出し物に専念することになっていた。

すると……。

「あ、梓さーん!!」

穂乃果が梓の姿を発見し、ブンブンと手を振っていた。

「あ、穂乃果ちゃん!それに海未ちゃんとことりちゃんも」

梓は穂乃果、海未、ことりのことはすぐにわかったのだが、奏夜のことにはわからず、首を傾げていた。

だが……。

「君が奏夜君……だよね?」

「え!?何で俺の名前を?」

「統夜先輩と似たような格好をしてたからわかったんだ。奏夜君のことは統夜先輩から聞いてたから」

「そうだったんですか……」

梓は統夜の後輩であるため、奏夜の話も聞いていても不思議ではないと奏夜は感じていた。

「こんにちは、平沢憂です。あなたたちのことはお姉ちゃんから聞いてるよ♪」

穂乃果たちと初めて会う憂は、このように自己紹介をしていた。

「もしかして、あなたは唯さんの……」

「うん、妹だよ♪」

穂乃果たちは唯に妹がいるという話は聞いていたため、名前を聞いた時点で何となく察しがついていた。

しかし、奏夜は唯たちに会ったことがないため、首を傾げていた。

「まあ、立ち話もあれだから中に入れて入って♪」

「『お邪魔しまーす!!』」

奏夜たちは、梓と憂の案内で、教室内の喫茶店に入り、この店で提供している食べ物や飲み物を堪能していた。

そしてその頃……。

「……へえ、これが学園祭ってやつか。師匠から話は聞いてたけど、ずいぶんと賑わってるな」

物珍しそうに周囲を見回しながら歩いているのは、レオの1番弟子である魔戒法師のアキトだった。

学園祭のことはレオから聞いていたものの、実際に見るのは初めてだったので、賑わ

う景色一つ一つを楽しんでいた。

「……食い物はどれもこれも美味そうだしな。どれから喰おうかな♪」
模擬店へ向かい、色々と物色しようと考えていたその時だった。

「……あつ、アキト！こつちです！」

アキトの師匠である布道レオがアキトの姿を発見して呼んでいたので、アキトはレオのもとへ駆け寄った。

「師匠も学園祭を見に来たのか？」

「ええ。そんなところです。後で鋼牙さんとカオルさんも来るみたいですよ」

「へえ、そうなのか」

「アキト。もし良かったら僕と一緒に回りませんか？」

「それはいい！師匠、案内を頼むよ」

「もちろん！」

こうしてアキトはレオと共に学園祭を見て回ることになった。

※※※

統夜たちのクラス発表まであと一時間程となり、統夜たちは本番で着る衣装を着始めていた。

そんな中、今回衣装を担当したさわ子は、自分たちのクラスの衣装だけではなく、他のクラスの衣装にまで手をつけていたため、ここ何日か徹夜で作業をしていた。

2年2組が出している「マンモスの肉」という店の衣装と、1年3組の「ヴァンパイア喫茶」という店の衣装などを作ったりしていた。

「……せ、先生……。大丈夫ですか?」

和は顔が真っ青で、目にくまが出来ているさわ子のことを気遣っていた。

「……さ、さすがに今回は手を伸ばし過ぎたわ……。でも大丈夫。どの衣装も気合入れて作ったから!!」

顔は疲労でボロボロだったが、さわ子は全ての衣装の出来に満足しており、満面の笑みを浮かべていた。

さわ子が自身満々に語るように、さわ子の衣装はどれもクオリティが高く、模擬店の衣装は他の生徒や学園祭に来たお客さんにも好評だった。

「…………ふおお!!やーくんの鎧、凄い!!」

統夜はさわ子お手製の鎧を着ていたのだが、そのクオリティの高さに唯は驚いていた。

しかし、それは唯だけではなく、その場にいる全員が同じことを思っていた。

「本当に凄いよな、これ。かなり金もかかってそうだけど……」

統夜の着ている黄金騎士の鎧はまるで絵本から飛び出してきたかのようなクオリティであり、その分費用がかかっていると思われる。

しかし、この衣装を作るにあたっては紬が支援をしていたため、格安でこの衣装を作る事が出来た。

「本当にさわ子先生は凄いわねえ♪この鎧もそうだし。それに……」

紬はある方向へ視線を向けるのだが、視線の先には素体ホラーの着ぐるみを着た4人が立っていた。

さわ子は以前作った素体ホラーの着ぐるみを量産したのである。

どれもクオリティは落ちておらず、その出来栄えに統夜たちは驚いていた。

そして、素体ホラーの着ぐるみを着ている佐伯三花は、「食ってやるぞお!」と言いなからクラスメイトの子達とじゃれあっていた。

「あうう……。本当にこれを着て舞台に出なきゃいけないの……?」

澪は自分の衣装を着て恥ずかしくていたのだが、その衣装はさわ子の衣装にしては非常にシンプルなワンピースだった。

「みおちゃん！凄く可愛いよ!!」

「あ、ありがとう……。だけど、唯は……」

「ほえ？」

澪は唯の衣装を見て苦笑いをするのだが、唯は木の役のため、木の格好をしていた。

「……うん、明らかに変だよな……」

律は木の姿をした唯を見て苦笑いをしていた。

「うーん、そんなに変かなあ？」

唯はこの木の衣装が気に入っているのか、首を傾げていた。

「さあ！みんな、集合して！」

劇の開始時間が迫っており、和と共にこの劇を取り仕切っている松本美冬が全員を集まるよう呼びかけていた。

「さあ、澪。行きますか」

「う、うん……」

統夜は澪をリードするようにみんなのもとへ向かっていった。

その様子が姫を守る騎士のように見えたのか、クラスメイトたちは感嘆の声をあげて

いた。

全員が集合したところで、今後の流れと劇の流れを確認し、本番が行なわれる講堂へと向かった。

※※※

統夜たちの劇が始まる10分前となり、梓、憂、純の3人は講堂に来ていた。

この時点で講堂の席はほぼ埋まっており、満席に近い状態だった。

「うわあ、人いっぱいだね！」

「座れるところ、あるかなあ？」

憂と純は3人が座れる場所がないか探し始めていた。

そんな中、梓は手伝うことはせず、その場に立ち尽くしていた。

(……結局最後の方は先輩たちは全然来なかったな……。……ライブなんて、どうでも

良くなったのかな?)

学園祭1週間前くらいは時々顔を出してちよつとは練習出来たのだが、それを過ぎると、統夜たちは劇の練習に専念していたため、全員集まつての練習は出来なかつた。

そのため、悲観的な考え方になってしまった梓は頬をぷうつと膨らませていた。

「……梓ちゃん!」

「席、あつたよ!!」

梓たちの席はさわ子が確保してくれたみたいで、憂と純の呼びかけを聞いた梓はハツとしていた。

(……私つてば、嫌な子……)

先ほどの考えを払拭するかのようになり、梓はブンブンと首を振っていた。

「ごめん!ありがとう!」

梓は慌てて憂たちの元へ向かい、空いている席に腰を降ろした。

(先輩たちにとってはこれが最後の学園祭なんだもん!まずはこの劇の成功を祈らなくちゃ!)

3年生である統夜たちにとってこれが最後の学園祭であることをわかつている梓は、最後のクラス発表であるこの劇で、悔いのないようにしてほしいと心の底から祈っていた。

統夜にこの劇を見て欲しいと案内されたカオルと鋼牙は、講堂の特等席に座っていた。

零、レオ、アキトの3人もその列の席に座っていた。

戒人も本当は行きたかったのだが、統夜に代わってエレメントの浄化を行っているため、行くことが出来なかった。

しかし、明日のライブは顔を出すつもりでいた。

カオルは今回雷牙も連れてきたのだが、カオルに劇を見ることに専念して欲しいと思っていたヒカリが、講堂の入り口で雷牙の面倒を見ていた。

雷牙はヒカリに懐いていたため、抱っこをしてもぐずることはなかった。

そして、秋葉原から統夜の晴れ舞台を見に来た奏夜たちも、どうにか4人分の席を確保して、席についていた。

「……いよいよ統夜さんの劇が始まるね!」

「どんな劇なのでしょうね?とても楽しみです♪」

「うん!ことりも凄く楽しみだよ♪」

穂乃果、海未、こどりの3人は、これから始まる劇が楽しみだからか、目をキラキラと輝かせながら劇が始まるのを待っていた。

奏夜も同様にワクワクはしていたのだが……。

(統夜さん、一体どんな役をやるんだろうか？ 劇なんて見る機会はなかったし、それも楽しみな……)

奏夜は幼い頃から魔戒騎士の修行に励んでいたからか、劇を見る機会はあまりなかった。

映画に関しては、穂乃果たちに誘われて何回か見に行ったのだが、それもつい最近のことであった。

そのため、奏夜もこれから始まる劇を心待ちにしていた。

ここにいる全員がこれから始まる劇を心待ちにする中、開演を告げるブザーが鳴り響いた。

『それでは、3年2組による演劇。「黒い炎と黄金の風」を開演いたします』

劇の始まりを告げるアナウンスが流れると、講堂の明かりが消えて、ステージの幕が上がり、ステージを照明が照らしていた。

背景は草原のようなものであり、ステージには誰も立っていないが、すぐにBGMが流れてきた。

『……光あるところに漆黒の闇あり。古代より人々は闇を恐れていました』

最初にナレーションから始まったのだが、その声を担当していたのは紬だった。

「あ、ムギ先輩だ！」

「紬さんの喋り方、いい感じですね」

梓と憂はすぐ紬の声に反応し、目をキラキラと輝かせていた。

『ですが、闇を切り裂く騎士の剣によって、人々は希望の光を得たのです』

「おお！ここは絵本にはないけど、何かそれっぽいね。鋼牙」

「……そうだな」

カオルも鋼牙もこの劇を楽しみにしており、2人は互いに顔を見合わせると笑みを浮かべていた。

『……今ではない、遙か昔……』

紬が時代背景をナレーションで説明すると、少女の役である漣がステージに現れた。

「……遅くなってしまいました……。早く帰らなくては……」

漣は恥ずかしがることはなく、堂々とセリフを言っていた。

漣のセリフを聞いた途端、漣ファンクラブの子達が漣の登場に喜びの気持ちをあらわにしていた。

そんな中、純はあることに気付いていた。

「……木って顔を出す必要があるの？」

現在、唯が木の役として登場しており、かなりの存在感を出していた。

純はジト目でその様子を見ていたのだが、憂は唯の活躍を見て目をキラキラと輝かせ

ていた。

「…………そこはあまり突っ込まない方向で……」

さわ子も木を演じている唯を見て苦笑いをしていた。

『…………とある地方のとある村に住んでいる少女は、暗い夜道を歩いていました。すると…………』

紬がこう言うと、不穏なBGMが流れると、素体ホラーこと怪物役の4人が濻の前に現れた。

『少女の前に現れたのは、この世のものとは思えない怪物でした』

この劇を通してホラーや魔戒騎士の秘密を明かす訳にはいかないので、この劇ではホラーや魔戒騎士といった単語は一切出てこない。

そのため、素体ホラーは怪物と銘打たれていた。

「か…………怪物!？」

『この世のものとは思えない怪物の存在に少女は怯えていました。そんな中、怪物は少女を喰らうために迫ってきます』

紬のナレーションの後に素体ホラーこと怪物役の4人はゆっくりと濻に迫っていた。

「…………だ、誰か…………!」

『少女はどうか声を振り絞って助けを求めますが、誰も現れる気配はありません。こ

のままでは怪物に食べられてしまいます』

BGMの影響もあつてか、緊迫した状況になっており、観客は息を呑んでその様子を見守っていた。

『……そして、怪物が少女を食べるために襲いかかろうとしたその時でした』

「……そこまでだ!」

統夜の声が聞こえるのと同時にBGMは止まり、照明も一度消えて真っ暗になった。た。

そして、再び明かりがつかくと、滯の前に鎧を着た統夜が立っていた。

『暗闇から一筋の光が照らされ、金色の輝きを放つ騎士が現れました』

あまりにリアルな騎士の登場に、客席からは歓声や「カッコイイ!!」と言った声が聞こえてきていた。

(……私、グッジョブ!!)

この鎧を作ったさわ子は歓声などが嬉しかったのかニヤニヤしつつドヤ顔になっていた。

「あ……あなたは?」

「下がっている」

「は、はい!」

『黄金の騎士は少女を守るように剣を構えると、少女は安全な場所まで避難しました』
紬のナレーション通り、統夜は剣を構え、濡は安全な場所まで移動とのことだったの
で、舞台袖に移動していた。

『4体の怪物が黄金の騎士に襲いかかってきましたが、黄金の騎士はそれを迎え撃ちま
した』

紬のナレーションを聞き、怪物役の4体が統夜に襲いかかった。

4人は統夜に殴りかかる真似ではなく、本気で殴りにかかっていた。

これは統夜の提案であり、本気で来てくれた方が臨場感があると思っただからである。
戦闘BGMに合わせて統夜は攻撃をかわし、剣を振るった。

すると、「ザシュツ！」と斬られる効果音が鳴り、怪物役の4人は勢いよく倒れた。

練習の甲斐あつてか、綺麗な受け身を取っており、4人は再び立ち上がった。

「貴様らの闇、俺が断ち切る!!」

統夜は陰我という言葉セリフにはいれず、闇という言葉にしていた。

統夜は怪物に向かって4回剣を振るった。

アクションショーのように「ザシュツ!」「ザシュツ!」と斬り裂かれる効果音が鳴り
響くと、怪物役の4人は苦しうに舞台袖へ移動した。

すると、爆発の効果音が響き渡り、怪物を倒したかのような演出になっていた。

黄金の騎士が見事に怪物を倒し、客席から大きな拍手が送られた。

そこでステージの照明が消えると、次の場面の準備が行われた。

1分ほどで準備が終わると、背景はそのままののだが、滯と木の役の数人以外ステージには立っていないかった。

この劇では、魔戒騎士の鎧の召還を再現しているため、戦闘シーン以外は統夜は登場しない。

統夜は天の声的な感じで滯とやり取りをするのであった。

『黄金の騎士は圧倒的な力で怪物を討伐しました。……すると、黄金の鎧はどこかへと消え、その場にいたのは若い青年でした』

「……あつ、あの！助けてくれて……ありがとうございます……」

『……気にかけることはない。俺は当然なことをしたまでだ』

統夜は姿を現さず、天の声的な感じで語り始めた。

その感じは、まるで滯の一人芝居だった。

そのため、滯のファンクラブの子達にはたまらない展開だった。

「あつ、あの……。あなたの名前は？」

『……名乗るほどの者ではない……』

「あなたの鎧……。私の村の伝説にあった、光の騎士の鎧……。ですよね？」

『少女の住む村には、とある伝説がありました。「この地に災いが降りし時、光の騎士が現れ、その災いを斬り裂く」と……』

絨がナレーションで言っていたのは、完全にオリジナルであり、絨がそれっぽい伝説を考えたものであった。

『……俺は、そんなんじゃない……』

「嘘です！だって、あなたの鎧は、金色の輝きを放っていたではないですか！」

『……確かにそうだが、俺はお前の言う光の騎士ではない』

『黄金の騎士である青年は、少女の言っている伝説の光の騎士ではありません。ですが、少女はそれを認めようとはしませんでした』

『……とにかく、お前は自分の村に帰るんだ。この先は危険だからな』

「あなたは、一体何をしようと言うのですか？」

『……この先に怪物を支配している怪物の王がいる。俺はそいつを倒すためにここへ来た』

『黄金の騎士である青年は自分の目的を告げると、そのまま、怪物の巣窟へと向かおうとしていました。ですが……』

『……待って下さい！光の騎士様！私も行きます！』

『少女は、自分の村の近くで大きな災いが起きそうだと感じ、居ても立っても居られな

かったため、このようなことを申し出ていたのです」

『……ダメだ。危険すぎる。お前は村に帰るんだ。いいな?』

『黄金の騎士である青年は、有無を言わさないといつた感じでこう告げると、そのまま怪物の巣窟となっている谷へと向かいました』

「……光の……騎士様……」

濡がこのように呟いたところで、ステージの照明が消え、真っ暗になった。

すると、クラスメイトたちが協力して背景の入れ替えなどの作業を行っていた。

全ての準備が整うと、再び照明が照らされ、劇の続きが行われた。

ステージには黄金の騎士と、4体の怪物。さらには木の役が数人立っていた。

「……やはり、そう簡単には通してくれないか……」

『黄金の騎士はこう呟きながらも剣を構えました』

統夜は紬のナレーション通りに剣を構えた。

こうして黄金の騎士と怪物は対峙し、この場には緊張感が漂っていた。

「……何か、ドキドキするね……」

「う、うん……。そうだね……」

ジツと劇の動向を見守っていた純と憂は固唾を飲んで劇の様子を見守っていた。

梓も同じようにドキドキしていたのだが、その視線は統夜や怪物ではなく、木の役を

やっている唯に向けられていた。

唯は木の役としてジツとしていながらも鼻がムズムズしてきたのか、くしゃみを必死にこらえていた。

(べ、別の意味で緊張するよお!!)

梓はこの劇が始まった時から唯が何かしでかすんじゃないか心配していたのだが、今この瞬間にも大きなくしゃみをして、この緊張感をぶち壊すのではないかと心配していた。

唯の仕草一つ一つにハラハラしていた梓は、劇を見るのに集中できずにいた。

梓がこのような心配をする中、黄金の騎士と怪物との戦いが始まった。

疾走感のあるBGMをバックに戦いが繰り広げられ、剣で相手を斬り裂く効果音や、「ガキン!!」という怪物の爪による攻撃を剣で防ぐ効果音などが響き渡っていた。

効果音はとても音量が大きく、これをチャンスと思っていた唯は、「ガキン!」という効果音と同時にくしゃみをしていた。

効果音が大きいため「ぶえつくし!」という声は聞こえなかったのだが、くしゃみをしているということはすぐにわかったため、観客たちは苦笑いをしていた。

「……もう、唯先輩……!」

唯のくしゃみの仕草は予想以上に目立っていたようで梓は頭を抱えていた。

「……木がくしゃみ……」

純は木がくしゃみをするというシニールな光景に苦笑いをしていた。

「まあ、効果音に合わせてくしゃみをするってところは褒めてあげてもいいわね……」

唯は唯なりに空気を読んでいたことにさわ子は理解していた。

そして、唯がくしゃみをしているのはステージ上でアクシオンしている統夜もわかっていた。

（……つたく、唯のやつ……。こんな緊迫なシーンでくしゃみをしやがって……）

効果音で誤魔化せてはいるだろうと思いつつも統夜は苦笑いをしながらアクシオンに臨んでいた。

鎧を着ている統夜は顔も隠れているため、苦笑いをしてもしやれないのが幸いであった。

そして、舞台袖にいる和たちも唯がくしゃみをしているのを見ていた。

「……ああ、もう！唯のやつ何やってるんだよ！」

舞台袖で劇の行方を見守っていた漣は頭を抱えていた。

「唯のやつ、何かやらかすんじゃないかと思つたが、まさか本当にやるとはな……」

律も漣の近くで劇の行方を見守っていたのだが、予想通りの展開になつてしまい、苦笑いをしていた。

「でもまあ、ちゃんと効果音に合わせてくしゃみをして誤魔化してたから、まだいいんじゃない？」

和も唯のことを心配しつつ、何とか誤魔化させたことから結果オーライだと思っていた。

唯のくしゃみというハプニングはあったものの、黄金の騎士と怪物の戦いは続いていた。

今回もヒーローショー顔負けの動きに観客は魅了されていた。

「……凄いな、鋼牙」

「ああ。ホラー役の4人の動きがいい。統夜がここまで特訓したんだろう」

ホラー役の4人の動きは予想以上に良かったのか、鋼牙はその動きに感心していた。

黄金騎士の称号を持つ鋼牙が認める中、統夜は4体の怪物目掛けて剣を一閃した。

『黄金の騎士は、その圧倒的な力で怪物を打ち倒していきました』

怪物役の4人はフラフラしながら舞台袖に移動し、その姿が見えなくなると、「ドカーン！」という爆発の効果音が鳴り響いていた。

ここで、再び照明が消えて真っ暗になると、次のシーンに向けての準備が行われた。

この劇は演じる人間が少ない分、背景を使って表現しなければいけない部分が多々あった。

そのため、大道具の人間を多めに配置し、多めの人数で定期的な背景の入れ替えを行っていた。

ここで木の役としての唯の出番は終わり、唯は舞台袖に移動していた。

「ふう、やっと終わったあ……」

「おい、唯。もうちよつとくしやみを我慢出来なかったのか？あれじゃせつかくのシーンも台無しだぜ？」

唯の姿を見つけるなり、律は反省すべき点を唯に指摘していた。

「だって、我慢出来なかったんだもん！」

「ま、まあ……。まだ多少は誤魔化せだし、許してあげましょ？」

ここで和がフォローをいれると、唯の表情がぱあつと明るくなっていた。

そして、準備が整うと……。

『黄金の騎士は、怪物の王を探すために先へ進みました』

まだステージに照明は照らされていないのだが、紬はこのようにナレーションをする
と、話を進めていった。

背景はそのまま再びステージの照明が照らされると、怪物の王にたどり着くのは決して楽ではないということを示すナレーションで説明していた。

2度ほど怪物との戦闘シーンがあったり、この谷に住むものとの会話があったりと、

こちら辺でちよい役の人達の出番があった。

この劇は登場人物があまりに少ないため、このように必要なさそうなシーンを入れなければ、人手が余ってしまうだけではなく、劇の時間があまりに短くなってしまうからであった。

『……そして、黄金の騎士はついに怪物の王のもとへとたどり着きました』

このシーンの前にステージの照明が消え、背景の入れ替えが行われていた。

紬がこのようにナレーションをすると、ステージに照明の明かりが照らされ、そこには統夜と木の役2人だけが立っていた。

「……貴様が、怪物の王か」

『ククク……。よくぞここまで来たな！光の騎士よ！』

背景に描かれた巨大な怪物こそが怪物の王であった。

怪物の王の声は統夜が事前に録音し、それをボイスチェンジャーを用いてそれっぽい声に加工したものであった。

「俺は光の騎士ではない。だが、貴様を倒す者だ!!」

『怪物の王も黄金の騎士が伝説の光の騎士と勘違いをしていましたが、それを即座に否定していました』

『我を倒すか……。愚かな！』

「ここで「ドーン!!」というまるで衝撃波を放つような効果音が鳴り響くと、統夜は吹き飛ばされる演技をすると、その場に倒れ込んだ。

そして、すぐさまゆっくりと立ち上がった。

統夜は剣を構えて背景に描かれた怪物の王に向かっていくが、再び衝撃波が放たれる効果音が鳴り響き、統夜は再び吹き飛ばされる演技をしていた。

『怪物の王の力は圧倒的で、黄金の騎士は苦戦を強いられていました』

「くっ……いっ、こんなところでやられてたまるか……いっ」

このように語りながらゆっくりと立ち上がる統夜は演技っぽくなく、まるで本物のホラーと対峙しているかのようだった。

『黄金の騎士が再び怪物の王へと向かっていったその時でした』

「……光の騎士様!!」

緋のナレーションに合わせて、漣がこのように声をあげながらステージに現れた。

『自分の村に帰ったはずの少女が現れたのです』

漣の登場を漣ファンクラブの子達は待ちわびており、パチパチと拍手を送っていた。

「……アハハ……。さすがは漣先輩だ……」

梓は漣の人気ぶりを垣間見て苦笑いをしていた。

そして、秋葉原から来た奏夜たちは、漣が登場しただけで何故盛り上がり上がっているのか

わからず首を傾げていた。

「……なんか、凄い盛り上がりだね……」

「ええ。それだけ滯さんは人気なのでしょう？」

「滯さん、凄く美人だしね♪」

「……この人も、軽音部なのか？」

「うん、そうだよ！さつきくしゃみしてた人もね！」

「そうだったのか……」

奏夜たちは滯の人気ぶりに驚き、奏夜は会ったことのない軽音部のメンバーを確認していた。

滯の登場で盛り上がりながら話は進んでいった。

「……！来るな！ここは危険だ！」

『黄金の騎士がこう叫びますが、怪物の王の牙が少女に迫ります。すると、黄金の騎士は身を呈して少女を守りました』

緋のナレーションに合わせて、統夜は滯を守る体勢になり、その直後に「ザシュツ！」という斬り裂かれるような効果音が響き渡った。

「ぐっ……！」

統夜はその場に倒れ込み、その一撃を受けて、倒れたという状況を作り出した。

「光の騎士様!!」

『少女は自分を守って傷ついた黄金の騎士を気遣って声をあげます。その一撃は強力
で、黄金の騎士は立ち上がることは出来ません』

続夜はどうにか起き上がろうとするが、起き上がれない演技をしていた。

『……フン、その女を守ったか。無駄なことを……。どうせ貴様もその女もこの場で始
末するんだからな』

『黄金の騎士は絶体絶命の状況に追い込まれ、怪物の王は勝ち誇ったかのように高笑い
をしています』

紬のナレーション通りに話は進んでいき、『ハツハツハツハ!!』と怪物の王の高笑いの
音声が生再生されていた。

「……それは、どうかな?」

『すでにボロボロだった黄金の騎士はどうか立ち上がり、剣を構えています』

「俺はお前を倒す。そして、そいつを守る。それこそが、人を守る者としての俺の使命だ
!!」

「守りし者」というフレーズは使われず、人を守る者というフレーズに変更されていた。
『ボロボロだった黄金の騎士を突き動かしていたのは、人を守るという騎士の誇りから
でした』

「光の騎士様……」

「怪物の王よ！貴様の闇、俺が断ち切る！」

『黄金の騎士は声高々に宣言をすると、剣を構えました』

紬のナレーションが入った直後に再び照明が消え、ステージが真っ暗になった。

「うおおおおお!!」

背景の入れ替えが行われるなか、統夜は獣のような叫び声をあげていた。

『黄金の騎士はまるで狼のような唸り声をあげると、怪物の王へ突進していききました』

紬のナレーションが入ると、「ザシユツ！」という何かを斬り裂く効果音が3度ほど鳴り響いていた。

『黄金の騎士の激しい攻撃に、ついに怪物の王は倒れました』

『……ば、馬鹿な……！王であるこの……俺が……！グワアアアアア!!』

怪物の王の断末魔が響き渡ると、先程よりも大きな爆発の効果音が響き渡っていた。

この爆発により怪物の王が倒されたことを理解した観客たちは大きな拍手を送っていた。

そして、拍手が収まったタイミングでステージの照明が照らされ、ステージには統夜と漣。さらに木の役2人が立っていた。

『怪物の王が倒れ、黄金の騎士は闇の中からでした光を取り戻しました。これでもう

人々は怪物に襲われることはありません。黄金の騎士の戦いはこうして終わったのでした』

「……光の騎士様！大丈夫ですか？」

「……大丈夫だ。問題ない」

『黄金の騎士はこう答えますが、先の戦いで消耗したため、ボロボロでした』

ボロボロな黄金の騎士は何も言わず歩き始めた。

黄金の騎士の足取りは重く、剣を杖代わりになっていた。

「……光の騎士様！どこに行くのです？」

「……戦いは終わった。だから俺は行く」

『ボロボロに傷ついた黄金の騎士はどこへ行くのかは明かしませんでした』

「……私も付いていきます！私、光の騎士様に救っていただいたお礼がしたいのです！」

「……好きにしろ」

『こう語ると黄金の騎士は再び歩き始めました。その傍らには少女が寄り添っていました』

紬のナレーションに合わせて統夜と漑はゆつくりと歩いていった。

ソウルメタルの鎧に一般人が触れると大変なことになるということを忠実に再現させるため、漑は統夜には一切触れていなかった。

滯が何故黄金の騎士を支えないのか観客たちは疑問に感じていたが、そのまま劇はクライマックスに向かっていった。

『戦いを終えた黄金の騎士は少女と共に何処かへと向かっていきました』

この紬のナレーションが終わると、再びステージの照明が消えると、最後の背景の入れ替えが行われた。

ステージにいる全員は舞台袖に移動し、背景の入れ替えは終わった。

『ポロポロになつている黄金の騎士と、それを支える少女を待ち受けていたものとは……』

紬のナレーションの直後にステージの照明が照らされたのだが……。

ステージには誰も立っておらず、背景は何も描かれていない真っ白なものだった。

まさかの展開に観客の多くがざわついていた。

しかし、この劇の元を知っている人間はなるほどと言いたげな感じで頷いていた。

『……物語の結末は人それぞれあるものです。そう、この先の未来を決めるのは……あなた自身なのです！』

この劇の元になつている絵本の最後は白紙なので、それを忠実に再現するかのような終わり方でこの劇は終了した。

最後のナレーションが終わったところで、幕が降りてきて、客席から大きな拍手が送

られた。

「……鋼牙、面白かったね！」

「ああ、そうだな」

カオルも鋼牙も統夜たちの劇が予想以上のクオリティだったことに驚きながらも、その出来に満足していた。

近くに座っていたアキトとレオ、そして零も笑みを浮かべながら拍手を送っていた。

秋葉原から統夜たちの晴れ舞台を見にきた奏夜たちも大きな拍手を送っていた。

特に奏夜は、黄金騎士の伝説を垣間見た気持ちになり、満足そうにしていた。

梓、憂、純の3人も、統夜たちの活躍を賞賛して大きな拍手を送っていた。

大きな拍手が客席から送られる中、統夜は劇の成功に安堵していた。

「統夜、やったね！」

「統夜君！お疲れ様！」

「ああ！」

素体ホラーこと怪物役を好演した信代と三花が統夜を出迎え、統夜とハイタッチをして成功の喜びを分かち合っていた。

「統夜！お疲れ様！」

「ああ！漣もお疲れ！」

統夜は滯ともハイタツチをして、互いに劇の成功の喜びを分かち合っていた。

「やーくん、お疲れ様！」

「統夜！なかなか良かったぞ！」

唯と律が統夜に駆け寄り、統夜に労いの言葉をかけていた。

「ああ、ありがとな！」

統夜は2人からの労いの言葉に笑みを浮かべていた。

統夜はその後もクラスメイトたちと劇の成功の喜びを分かち合っていたのであった。

こうして、統夜たち3年2組の劇、「黒い炎と黄金の風」は、大成功で幕を閉じたのであった。

劇は無事に終わったが、学園祭はまだまだ続くのであった。

………続く。

—— 次回予告 ——

『劇は無事に終わったが、今度はライブが待ってるぜ。だが、ライブに向けて準備はきちんとしないとな。次回、「準備」。学園祭はまだまだ終わらないぜ!』

第93話 「準備」

統夜にとっては最後となる学園祭が幕を開けた。

統夜たち3年2組は、クラス発表で劇を行うことになっていた。

その劇とは、冴島カオルの父である御月由児の作品である「黒い炎と黄金の風」である。

元は絵本であるこの作品を、紬が劇用にオリジナルにアレンジした作品となっていた。

そのため、絵本には登場しないオリジナルキャラクターが登場したり、ホラーとの戦いが詳細に描かれていたりと誰もが楽しめる劇となった。

統夜たちの劇は大成功で幕を閉じ、学園祭初日も終了した。

統夜たちの劇が終わると、梓は先に音楽準備室に向かい、統夜たちが戻ってくるまで個人練習を行っていた。

しばらく練習を行っていると……。

「……あー、疲れた……」

このようにぼやきながら統夜が入ってくると、唯たちもそれに続いていた。

「統夜君も滞ちゃんもすつごく良かったわよ！」

「ムギのナレーションもすつごく良かったぞ」

「本当!! エヘヘ、嬉しいわ♪」

紬は統夜と滞の演技を絶賛しており、統夜は紬のナレーションを絶賛していた。

統夜に褒められたのが嬉しかったのか、紬は満面の笑みを浮かべていた。

「……あつ! あずにゃん!」

音楽準備室に入った唯は長椅子で練習している梓を発見すると、梓に駆け寄っていた。

「ねえねえ、あずにゃん。どうだった? 私たちの劇!」

「えつと……その……」

梓は劇の感想をどう言えばいいのか迷っており、口をつぐんでいた。

「あれえ? もしかして最近構ってあげられなかったから寂しかったのかあ?」

律は梓をからかうようにニヤニヤしていた。

「そ、そんなんじゃないです! ただ……」

「ただ?」

「皆さん、あんまり部屋に来てなかったから……。ライブのこと、あまり大切に思っていないのかなくて、心配になっちゃって……」

梓は自分の本音と不安を統夜たちにつつけていた。

「梓ちゃん……」

「す、すいません！皆さん、劇で忙しかったんですもんね。あれだけ迫力あつて凄い劇をやるうと思つたら、そりゃたくさん練習や準備が必要なきや無理ですよね！」

梓は本音を言い過ぎたと思つたのか、まるで言い訳をするかのように必死に言葉を紡いでいた。

《やれやれ。梓のやつ、そんなことを考えてたとはな……》

(……そうだよなあ。だけどさ……)

統夜は梓の本音を聞いて穏やかな表情で笑みを浮かべると、梓の額に軽くデコピンをしていた。

「痛つ!!な、何するんですか!!」

いきなりデコピンされた梓は驚きながら怒っていた。

「馬鹿だなあ、梓……。俺たちが軽音部のライブを蔑ろになんてする訳がないだろ？」

「統夜君の言う通りよ。私たちも軽音部のことを何よりも大切にしているもの」

「心配かけてごめんな、梓」

統夜が梓をフォロースすると、その言葉に紂と滯も乗っていた。

「そうだよ、あずにゃん！私なんて一日中あずにゃんのこと考えてたんだから……」

そう言いながら唯は梓に迫ってキスをしようとするのだが、梓はそれを必死に阻止していた。

「そ、そこまではいいです！」

「やれやれ……」

統夜は唯と梓のやり取りを見ながら苦笑いをしていた。

「よし!!明日のライブに向けて今日は泊まり込みで練習だあ!!」

明日のライブに向けてこれから練習しなければいけないのだが、律は泊まりがけでの練習を提案していた。

「学校って泊まって大丈夫なのか？」

「大丈夫だって♪」

学校に泊まる機会などなかったため、濡は不安そうにしていたが、律がその不安を一蹴していた。

「お泊まりの用意はしてないんだけど、それでも？」

「ノープロブレム!!」

「ご飯は何杯でもおかわり？」

「自由!ってなんでやねん!!」

唯だけが関係ないことを言っていたので、律がすかさずツツコミをいれていた。

『やれやれ……。何をやってるんだか……。』

イルバは今までのやり取りを苦笑いしながら見守っていた。
すると……。

「みんな！寝袋持ってきたわよ!!」

さわ子が人数分の寝袋を用意して音楽準備室に入ってきた。

「……ほらな？」

律はさわ子が寝袋を用意してくれることを知っていたため、泊まることは問題ないと断言していた。

「ありがとう、さわちゃん！さわちゃんは今日も徹夜なの？」

「そうなのよ。明日のライブ衣装がまだ出来てないのよ。だからこれから被服室に籠らなきゃ……」

さわ子は寝袋を唯に手渡すと、音楽準備室を後にしようとするが、すぐに足を止めた。

「……絶対……覗いちゃだめよ？」

さわ子はこう言い残すと、そのまま被服室へと向かっていった。

「……鶴の恩返し……」

さわ子のセリフが完全に鶴の恩返しのものであり、唯たちはポカンとしていた。

「……と、とりあえず練習しようぜ！」

「そうだな！みんな、練習しようぜ！」

統夜と律がこのように促すと、全員がそれぞれの楽器を準備をして、練習を開始した。統夜たちは1時間半ほど練習を行っていた。

その頃、学園祭初日を満喫した奏夜たちは、現在桜ヶ丘高校の入り口にいた。

「いやあ、今日は楽しかったねえ♪」

1日色々なものを見て満足したのか、穂乃果は満足そうな表情をしていた。

「ええ。出店の数が多くとても楽しめました♪」

「それに、統夜さんたちの劇も面白かったよねえ♪」

魔戒騎士やホラーの秘密を知らない穂乃果たちにとって統夜たちの劇は昔話を題材にしたものだと思っていた。

しかし、奏夜は素体ホラーの着ぐるみを見た瞬間にこれがホラーと魔戒騎士についての戦いが描かれていることを理解していた。

「ああ。俺も面白かったよ。最初から最後まで迫力が凄かったしな」

そのように理解したうえで、奏夜は心から劇を楽しめた。

「……ねえねえ、これからどうする?」

「あまり遅くなつてもいけませんし、今日のところは帰りますか?」

「そうだねえ。今日はもう帰ろつか」

ここに長居していても帰りが遅くなるため、奏夜たちは東京に戻ろうとしていた。

その時、お弁当箱のようなものを抱えた少女がこちらに近付いてきていた。

少女は奏夜たちの姿を確認すると……。

「あつ! 奏夜君たちだ!!」

その少女は奏夜たちのことを知っており、声をかけると奏夜たちに駆け寄った。

「あ、憂さん」

奏夜たちに声をかけたのは、憂であり、お弁当箱のようなものを抱えていた。

「憂さん、そのお弁当箱みたいなものはどうしたんですか?」

穂乃果は憂の抱えていたお弁当箱みたいなものが気になっていた。

「ああ、これ? これは軽音部の皆さんへの差し入れだよ。今日は学校に泊まり込みで練習するみたいだから」

「へえ……。それはなかなか大変ですね……」

「でも、学園祭って感じがして楽しそうですね♪」

「うん、私もそう思うよ。……あ、そうだ! 4人とも一緒に食べていかない? お弁当は

いっぱい作ったから♪」

憂は奏夜たちも一緒にお弁当を食べないか誘ったのだが……。

「お気持ちは嬉しいんですけど、今日はもう帰らないと……」

憂からの申し出は有り難いのだが、明日のことを考えて今日はそのまま帰るつもりだった。

「そういえば、奏夜君たちは東京から来てたんだもんね。……もし良かったらなんだけど、今日は家に泊まらない？」

「……え!!」

憂からのまさかの提案に奏夜たちは驚きを隠せなかった。

「お姉ちゃんは今学校に泊まるから私一人なんだ。お父さんとお母さんは家を空けることが多くて……」

憂は平沢家の事情を語りつつ今日は家に帰っても一人だということを伝えた。

「だから、みんなが良かったらなんだけど、遠慮しなくてもいいんだよ!人数が多い方が寂しくないし」

憂からの提案と事情を聞いた奏夜たちは互いに顔を見合わせていた。

しばらく考えていると……。

「……親に連絡してみないとわからないですけど、OKだったら是非お邪魔したいです

！」

「ええ。私もぜひ！」

「私もです！」

穂乃果、海未、ことりの3人は、親の許可がもらえればぜひ憂の家に泊まりたいと告げていた。

そんな中、奏夜は……。

「悪い。俺は終電で帰るよ。朝はあつちでやることがあるし」

今日は桜ヶ丘に行く前にエレメントの浄化を済ませてきた奏夜だったが、今日泊まってしまうのは、エレメントの浄化を大輝1人に押し付けることになってしまう。

そのため、奏夜は魔戒騎士の務めを放つぱり出して泊まるということは出来なかった。

「ええ!?!ねえ、そーくん!1人で帰っちゃうの!?!」

「そうですよ!そのやることというのは明日帰ってからではダメなのですか?」
「い、いや。ダメって訳ではないけど……」

1人だけ帰ると聞いた途端、穂乃果と海未に詰め寄られてしまい、奏夜は返答に困っていた。

「せつかくなんだし、そーくんも一緒に泊まってごうよお!」

「いや……だけどな……」

「奏夜君、遠慮しなくてもいいんだよ？」

「いえ、遠慮してる訳じゃなくて、俺は……」

穂乃果がさらに懇願し、憂も説得するのだが、奏夜は首を縦に振ることはなかった。

「ねえ、そーくん……」

何故ことりは俯きがちに奏夜の名前を呼び、奏夜は首を傾げながらことりを見ていた。

すると……。

「……おねがい!!」

「!!?」

ことりは目をウルウルとさせながら甘い声でお願いと言っていた。

ことりのお願ひ攻撃に奏夜は過剰に反応し、頬を赤らめていた。

「……うつ、ぐう……」

ことりのお願ひ攻撃はあまりに強力だったからか、奏夜はたじろいでいた。

そして……。

「……はあ……わかったよ」

結局はことりのお願ひ攻撃には勝てず、渋々ではあるが共に泊まることを了承した。

「やったあ♪」

奏夜が渋々ではあるが了承しており、穂乃果もことりはハイタッチをしていた。

「2人とも、喜ぶのはまだ早いですよ？おうちの人に確認しないと」

「あーそうだったー！」

穂乃果は家に連絡をしなければいけないという大事なことを思い出し、慌てて携帯電話を取り出した。

海末とことりも携帯電話を取り出すと、それぞれの自宅に連絡を取った。

海末とことりはすんなりと両親に許可をもらえたのだが、穂乃果だけは交渉が難航していた。

そこで、憂が穂乃果と電話を変わり、電話を応対していた穂乃果の母親に丁寧に説明をしていた。

憂の対応があまりにしつかりしていたため、穂乃果の母親は泊まりを許可し、憂に「娘をよろしくお願いします」とお願いをしていた。

こうして穂乃果は、憂のおかげで泊まりの許可を得られたのである。

「……はい。これで穂乃果ちゃんも泊まれるよ♪」

「あ、ありがとうございます……」

穂乃果は憂のあまりに丁寧な対応に呆然としていた。

「さ、とりあえず軽音部の皆さんのところに行きましょう♪」

「「は、はい……」」

穂乃果、海未、ことりの3人は憂のあまりに丁寧な対応に呆然としながら頷いており、奏夜もコクンと無言で頷いていた。

こうして、憂の家に泊まることになった奏夜たちは、憂について行き、学校の中へと入った。

「あ、あの……。俺たちは部外者ですけど、入っても大丈夫なんですか？」

軽音部の部室である音楽準備室に向かっていたのだが、奏夜たちは部外者であるため、不安そうな表情をしていた。

「大丈夫だよ。みんな学園祭の準備で忙しいから、他の学校の子が入ってもわからないって♪」

「そ、そういうものですかね……」

憂はこのようにフオローはするものの、それでも奏夜たちは不安げだった。

憂たちは音楽準備室に続く階段を上がっていくと、統夜たちの演奏が聴こえてきた。

「……お姉ちゃんたち、頑張ってるなあ……」

憂は統夜たちの演奏を聞いて明日のライブに向けて頑張っていることを実感していた。

奏夜たちも、統夜たちの迫力ある演奏に圧倒されていた。

曲が終わったところで、憂たちは音楽準備室の中に入った。

統夜たちは憂からの差し入れに大喜びしており、奏夜たちが憂と一緒にいることに驚いていた。

奏夜は梓以外の軽音部のメンバーとは初めて会うため、唯たちは自己紹介を行っていた。

統夜たちは練習を中断して休憩するところだったため、そのまま休憩を取り、奏夜たちと共に憂の作ったお弁当を食べることにした。

憂はお弁当は4段になっており、1段目と2段目は食べやすい大きさのおにぎりが詰められていた。

3段目と4段目は様々な種類のおかずが散りばめられていた。

統夜たちは憂お手製のお弁当に舌鼓を打っていた。

「皆さん。いっぱいありますから、遠慮しないでくださいね」

「おいひいよお。うい〜」

憂のお弁当を頬張りながら唯は満足そうにしており、姉の幸せそうな顔を見るのがたまらなく嬉しい憂は、クスリと笑みを浮かべていた。

「ほら、奏夜君も穂乃果ちゃんたちも遠慮しないでいいからね」

「は、はあ……」

「それでは、いただきます……」

穂乃果は遠慮がちにおにぎりに手を頬張った。

「……！ 凄く美味しい……！」

予想以上に憂のおにぎりが美味しかったのか、穂乃果の頬が紅潮していた。

「そうなのですか？ どれどれ……」

海末もおにぎりを手に取り、それを頬張った。

「……！ ええ、とても美味しいです！」

「はい！ 凄く美味しいです！」

海末だけではなく、ことりもおにぎりを頬張っており、2人揃って笑みを浮かべていた。

「……ほら、奏夜も遠慮なく食べるよ。凄く美味しいぞ」

統夜はおかずを頬張りながら遠慮している奏夜にこう促していた。

「は、はあ……」

奏夜はおそるおそるおにぎりに手を伸ばし、それを頬張った。

「美味しい……」

「だろ？ 憂ちゃんのご飯は美味しいんだよ」

「……ほ、褒めてくれて……嬉しいです……」

憂は統夜に褒められて嬉しかったのか、頬を赤らめて照れていた。

「……やっぱり統夜先輩は料理上手の子が好きなのかなあ……」

「むうう……。やーくんは憂がいいのかなあ……」

「「……」」

梓は統夜の好みを分析しており、唯はぶうつと頬を膨らませながら統夜を睨みつけていた。

律、滯、紬の3人も無言のまま統夜を睨みつけていた。

「あ、アハハ……」

「もしかして、唯さんたちって……」

「統夜さんのこと……」

「……らしいな……」

「？」

穂乃果たちはこのやり取りだけで統夜と唯たちの関係を理解していた。

しかし、統夜は相変わらずそのことに気付いておらず、首を傾げていた。

《やれやれ、相変わらずだな。統夜のやつ……》

イルバは相変わらず鈍感な統夜に苦笑いをしていた。

《まさかあの白銀騎士があり得ないほどの天然ジゴロだったとはな》

(キルバ！そんなこと言ったら統夜さんに失礼だろ!?)

《俺は本当のことを言っただけだ。それに、お前だってそう思ってるだろ?》

(そ、そりや……まあ……)

奏夜は統夜がここまで色恋に関して鈍感だとは思っていなかった。

キルバとテレパシーでこのような会話をしながら苦笑いをしていた。

「……あつ、そうそう。デザートは私たちが用意したのがあるから、良かったら食べて

いってね? いっぱいあるから奏夜君たちも遠慮しないでね?」

「え、いいんですか? ありがとうございます!」

「ありがとうございます!」

「遠慮なくご馳走になりますね」

「ありがとうございます♪」

「よ、夜に甘いものは……」

食後のデザートがあることに憂、穂乃果、海未、ことりの4人は喜んでいた。

しかし、濡は携帯で時間を見ながら表情を曇らせていた。

現在は夜になろうとしており、そんな時間の間食をしては体重が増えてしまうのではないかと濡は不安になっていたからである。

「大丈夫だ。何時にケーキを食べようがへっちゃらだ。なぜなら……徹夜だから♪」
律は濡の肩にポンと手を置き、シリアスな口調で語り出したと思いきや、急におどけ
だした。

「ええ!?!寝ないんですか!?!」

「当たり前だろ?学祭といえば徹夜で準備だからな!」

「あ、なんかそれわかる気がします!」

律の学祭といえば徹夜という極論に穂乃果が賛同していた。

すると、唯が梓の肩にポンと手を置いた。

「……今夜は寝かさないぞ、子猫ちゃん♪」

唯はウインクをしながらバタなセリフで梓を口説いていた。

「……1人でどうぞ……」

梓はジト目になりながら唯をスルーしていた。

「あうう……。いけずう……」

唯と梓のやり取りを見ていた残りのメンバーは笑っていた。

「……」

そんな中、穂乃果は笑みを浮かべながら、そんな統夜たちの様子を羨ましそうに眺めていた。

「……う？どうしたのですか？穂乃果」

海未はそんな穂乃果の様子が気になって、声をかけた。

「ああ、いや……。統夜さんたち、楽しそうだなって思ってた……」

「そうですね。私も同じことを考えていましたよ」

「そうだよ。私たちも高校に入ればこんな楽しい日々を過ごせるよ♪」

穂乃果は統夜たちの高校生としての当たり前な生活に憧れていた。

そのため、来年高校に入ればそんな日常が過ごせるとことりがフオローを入れていた。

「そう……。そうだよね！」

「ああ。俺もそう思うぞ！」

「うん！」

穂乃果は海未やことり、そして奏夜の言葉を聞いて元気になった穂乃果は、満面の笑みを浮かべていた。

穂乃果の笑顔を見た奏夜、海未、こたりの3人も笑みを浮かべ、4人は笑い合っていた。

すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえてきて、和が音楽準備室に入ってきた。

た。

「あなたたち、泊まるのはいいけど、宿泊届は出したの？」

「あつ！忘れてた！」

「おい」

相変わらず律は提出すべき書類の提出を忘れており、統夜と漕は同時にツツコミをいれていた。

「まったく……。それじゃ、渡しとくわね」

和もこの展開を予想していたのか、宿泊するための申請用紙を律に手渡した。

「申請用紙？さっすが和！」

「やれやれ……。あら？」

和は律に申請用紙を手渡したところで、奏夜たちの存在に気付いた。

「あなたたちは、この学校の生徒じゃないわよね？どうしたの？」

「あつ……。いや……。その……」

奏夜たちは無断でここに来たことがバレたと思つてしまい、焦っていた。

「す、すいません！私が無理に誘つたんです！この子たちは統夜さんたちの知り合いで、わざわざ東京から学園祭を見に来てくれたんです！」

憂は自分が奏夜をここまで連れてきたため、そのことを和に説明していた。

「あなたたち、統夜君の知り合いなの？」

「はい、そうなんです」

「それで、今日は憂さんの家にお世話になることになってまして……」

「それで、憂さんについて来たんです……」

奏夜だけではなく、海未とことりも弁解を行っていた。

奏夜たちの弁解を聞いた和はため息をついた。

「仕方ないわね……。それじゃあ、あなたたちのことは見なかったことにしてあげるわ」

和が奏夜たちのことを許してくれ、奏夜たちの表情はぱあつと明るくなった。

「和さんも良かったらお一つどうぞ」

「ありがとう。いただくわ」

和は空いているところに腰を降ろすと、おにぎりを一つ手に取り、それを頬張ろうとした。

「……徹夜で準備の人ってけっこういるんですか？」

憂に声をかけられた和はおにぎりを頬張ろうとする動きを止めていた。

「そうねえ、2日目だけど、けっこういるわね」

「どうしてみんなそんなにギリギリまでやるんでしょうね？」

「わざとやっているとこもあるのよ。ほら、徹夜って楽しいし」

「何だあ？その和らしからぬ発言は」

真面目な和とは思えない発言を聞いた律は驚いていた。

和がこのようなことを言うとは思っていなかったからである。

「ま、私は帰るけどね」

こうは言ったものの、和は仕事がひと段落ついたため、今日はこのまま帰るつもりだった。

「梓あ……。一緒に帰ろう……」

先ほどまで練習していた純がへろへろになりながら音楽準備室にやって来た。

「ジャズ研は徹夜じゃないんだ……」

統夜たち軽音部とは違い、ジャズ研は日頃からコツコツと練習しているため、徹夜して練習の必要はないのだろうと梓は予想していた。

「……この子たち誰?!それに、軽音部は徹夜なの!?!」

純は奏夜や穂乃果たちを初めて見るため驚いており、さらには軽音部が泊りがけで練習することを知って驚いていた。

「ずるいです！ずるいです!!」

純はぶうつと頬を膨らませながら統夜たちに羨望の眼差しを向けていた。

膨れっ面になりながらむくれる純を見て統夜たちは笑っていた。

純がやって来てから間もなくして、休憩を終わらせて練習を再開することにした。

和と純は早々に帰り、憂も奏夜や穂乃果たちを連れて帰っていった。

こうして統夜たちは練習を再開したのだが、現在は夜のため、アンプのポリウムはなるべく抑えて練習を行っていた。

そして1時間程練習を行うと、さらに夜は更けていったのであった。

「さあ、ここからはアンプを切って練習するぞ」

自分たち以外にも学校に泊まっている生徒はいるため、その生徒たちに迷惑がかからないよう、ここからはアンプなしで練習を行うことにしたのであった。

「あれ？でも、ドラムはどうするの？」

アンプを切って練習しても、ドラムをピシバシ叩いていたら意味はないため、紬はこのような疑問を口にしていた。

「ああ、それな？これをこうして。ああして……。はい、即席ドラムの完成でちゅ♪」
律は教科書を上手い具合に積み上げ、即席のドラムを用意したのであった。

「おおー！」

「おいおい、教科書を積み上げるなよ……」

「と、統夜の言う通りだぞ！」

即席ドラムを作りあげた律に紬は感動し、統夜と澪がツツコミをいれていた。

こうして統夜たちはアンプを切った状態で練習を行っていた。

※※※

アンプなしでの練習を終えると、日付が変わっていた。

統夜たちはここで練習をやめることにして、学校の敷地内をぶらぶらと歩いていた。

『おいおい。お前ら、徹夜で練習とか言っただけでなかつたか?』

「まあまあ。息抜きだつて必要だろ?」

「お!統夜、わかっているじゃんか!」

『やれやれ。お前さんもずいぶんと甘くなったもんだぜ』

「アハハ……。そうかもな」

統夜は前々から唯たちの前だと甘いことを自覚はしていたが、イルバに改めて指摘されると、そのことを再認識していた。

「それでね、我慢しなきゃとは思ってたんだけど、そう思えば思うほど鼻がムズムズしちゃってさあ」

「は、はあ……」

唯は梓に劇でくしゃみをしてしまった時のことを話していた。

しばらく校内を歩いていると、梓がふと足を止めたので、統夜たちも足を止めた。

「……梓？」

「まだ、起きてる生徒、たくさんいるみたいですね……」

「そういや、結局今日は劇の準備とかで1日中バタバタしてて、ほとんど何も見れなかったな……」

律の言う通り、統夜たちは朝から劇の準備に追われていたため、模擬店や展示などを
見ている暇などなかった。

「ちようどいいし、このまま夜の学園祭を見て回らない？」

「おお、それいいじゃん！探検しようぜ♪」

紬の提案に律が乗っかり、統夜たちは誰もいない出店を見て回ることにした。

「あーっ!!みんな、来て来て!!」

唯が何かを発見したため、統夜たちを呼んでいた。

唯に呼ばれた統夜たちは唯のもとへと向かうのだが……。

「おーにーくーだあ!!」

唯が見つけたのは「マンモスの肉」という店であり、統夜たちもそれを確認していた。

「すげえ凝ってるなあ……」

律はマンモスの肉のクオリティの高さに驚いていた。

「あつ、私食べましたよ？」

「え？どうだったの？」

「はい！凄く美味しかったです！」

「へえ……。明日午前中の時間ある時に買ってみようかな……」

明日の午前中は多少時間はあるため、統夜はその自由時間にもこの店を訪れてみようかなと思っていた。

「あつ、やーくん！私も私も！」

「はいはい……」

唯もこの店の味に興味津々だったため、食いついていた。

統夜は苦笑いをしながらそれを受け流していた。

その後、統夜たちは外の出店をぐるっと回った後、部室へと戻っていった。

※※※

夜の校内散歩を終えた統夜たちは部室に戻って来た。

この日はもう遅いため、練習はお開きにして寝ることにした。

女性陣はジャージに着替えるということだったので、統夜は1度部室から退散した。

統夜は教室でジャージに着替え、それが終わると音楽準備室に戻ってきた。

音楽準備室の入り口まで来ると、コンコンとドアをノックした。

「俺だけど、入っても大丈夫か？」

『うん！大丈夫だよ』

扉越しから唯のOKが聞こえてきたので、統夜は音楽準備室の中に入った。

すると、女性陣はすでにジャージに着替えていた。

「ああ、統夜先輩もジャージに着替えたんですね」

「まあな」

「それにしても、夜の学園祭っていうのはなんかワクワクするよな♪」

「うん♪なんかそれわかるなあ♪」

律は普段経験出来ない夜の学校のお泊まりというものに興奮していた。

それは紬も同じ気持ちだったのか、紬も興奮していた。

「おにぎり余っちゃったね」

「さわ子先生に持つていく?」

「でも、覗いちゃだめだつて……」

「覗いたら、月に帰っちゃつたりして!」

「おいおい、それだと話が混ざつてないか?」

『それじゃあかぐや姫になつてるじゃないか……』

イルバがツツコミをいれると、唯と律は笑いだした。

「本当にさ、夜の学校つてテンション上がるよね!」

「なるなる!なんかウズウズしてくる!」

律や紬だけではなく、唯までもテンションが上がつていた。

梓は携帯をいじつていたのだが、唯は梓に近付いてトントンと肩を叩くと、振り向い

た梓の頬を指で突いていた。

「……何ですか……」

「なんとなく♪」

梓は唯の行動をジト目で見ていた。

「はあ……。みんなおかしくなつて……」

澪はテンションが上がる唯や律、紬を見て、ため息をついていた。

「はいっ！それじゃあもう一曲作っちゃおう♪」

紬は手を上げて、とんでとないことを言い出していた。

「おお♪ムギも壊れた♪」

「はいはい！ドキドキ分度器がやりたい！」

「いや、ここは鞆のバカーンだろ？」

唯と律は紬の曲を作るといふ言葉を聞いて、まるでダジャレのような曲のタイトルを言っていた。

『おいおい、それじゃただのダジャレじゃないか……』

唯や律の言っていたダジャレのようなタイトルに呆れていた。

「ええ!?ドキドキ分度器でしょお!!」

「じゃあ！アライグマが洗った恋にしよう！」

唯と律がダジャレのような曲のタイトルの語中、何故か濡が会話に割り込んできた。

「じゃあの意味がわからん……」

「確かに……」

律と統夜は、キラキラと目を輝かせる濡をジト目で見ていた。

すると、梓が急に「ぷっ！」と吹き出していた。

「おお、ついに梓も壊れたか」

「もう、こんな時間ですよ？さすがにそろそろ寝た方が……」

「いえ、私……。まだ焼きそば……。食べてませんので……」

絢が何故か焼きそばのことを言っていたので統夜たちは絢の方を見ると、絢はいつの間にか眠っていた。

「もう寝てる……」

「早いな……」

「まあ、ムギも疲れただろうしな」

統夜はすやすやと眠る絢を見ながら笑みを浮かべていた。

(さて、みんなも寝るみたいだし、俺もそろそろ……)

唯たちと一緒になることはせずに教室で寝ようと考えていた統夜は、ゆっくりと立ち上がり、絢以外の全員の視線が統夜に集中していた。

「みんなもそろそろ寝るだろ？俺は教室で寝るから。それじゃ……」

統夜はドアを開けて音楽準備室を出ようとしたのだが……。

「待てい!!」

その前に律が統夜の肩を掴んで静止していた。

「おい、統夜。何でお前だけ教室で寝るんだよ!」

「そうだよ、やーくんもここで一緒に寝ればいいじゃん！」

「まあ、みんながいいならいいんだが、俺は男だろう？だから別の部屋の方がいいと思ってな」

「統夜先輩も一緒に寝ましょうよ！一人だけ別なんておかしいです！」

「……」

統夜は梓がここまで積極的に説得してくるとは思っておらず、驚きながらもどうするか考えていた。

すると……。

「……まあ、みんなが良ければいいんだがな」

統夜はみんなが良ければという条件付きで、一緒に寝ることを了承した。

「もちろんだよ、やーくん！」

「はいー！」

「それじゃあ、お言葉に甘えて……」

統夜は学生鞆からイルバの専用スタンドを取り出すと、それを机の上に置いた。

統夜は自分の指からイルバを外すと、イルバを専用スタンドにセットした。

「それじゃあ、イルバはそこで寝ろよな」

『まあ、いつものテーブルよりかは広くていいじゃないか』

イルバは机の上が思ったより広いというのが気に入ったようだった。「さてと……」

統夜はさわ子からもらった寝袋の中に入り、そのまま寝ることにした。

「それじゃあ、電気消しますよ」

「いやーん♪」

「お前の全てを見せてみろ！」

律が訳のわからないことを言うと、唯と律は笑っていた。

「律、うるさい」

統夜と滯は呆れながらこう言い放ち、しばらくすると、全員が眠りにつこうとしていた。

その直後……。

「……隙ありっ！」

唯は寝袋のまま統夜にくっついていて。

「あ、唯先輩！ずるいです！」

唯だけが統夜にくっついていたのが気に入らなかつたのか、梓も統夜にくっついていて。

「まったく……。暑苦しいから2人とも離れてくれよな」

「ヤダー！」

「嫌ですー！」

「つたく……」

唯と梓は統夜から離れようとしなかったの、統夜は仕方なくそのまま眠ることにした。

（やれやれ……。唯と梓のやつ、ずいぶんと大胆なことをするじゃないか……。統夜の奴は相変わらずだがな……）

唯と梓はこんなチャンスはないと思い、ここぞとばかりにくつついており、それでも統夜は恥ずかしがることはなく平然としていた。

そんな統夜の態度を見ていたイルバは苦笑いをしていた。

統夜はすぐに眠りについたため、唯と梓も諦めてすぐ眠りについていった。

※※※

翌日、統夜は誰よりも早く起きていた。

「う、うん……。え？」

統夜は目を覚ますなり飛び込んできた光景をジト目で見ていた。

統夜の視線の先にはぐっすりと眠る唯が写っていたのだが、唯はよだれをたらして眠っていたため、統夜はその光景に呆れていた。

統夜は唯と梓を起こさないように寝袋から出ると、魔法衣を羽織り、スタンドにセツトしていたイルバを指にはめた。

統夜は誰も起こさないようにこっそりと音楽準備室を抜け出すと、そのまま屋上に向かい、屋上で剣の稽古を行っていた。

いくら学園祭で忙しいからとはいえ、魔戒騎士としての務めを怠ることはなかった。

統夜は1時間ほど剣の素振りを行い、30分ほどイルバの協力で精神統一の修行を行っていた。

魔戒騎士の修行を終えた統夜は屋上を後にすると、音楽準備室に戻ろうとした。

しかし、音楽準備室の扉を開けようとするのだが、何故か音楽準備室が騒がしかった。

「？なんだろ……」

統夜は首を傾げながら音楽準備室に入るのだが……。

「グツジヨブさわちゃん！」

「グツジヨブさわ子！」

「これ……これなのお！」

「グツジヨブさわちゃん！」

「もつとお！」

「グツジヨブさわ子！」

統夜が目にしたのは、唯と律がさわ子をべた褒めしており、そのことに対して充実感に包まれているさわ子の姿だった。

「……これは、一体何の騒ぎだ？騒々しいなあ」

「お、統夜！どこに行ってたんだ？」

「ああ。さつきまで剣の稽古をな。それよりも一体どうしたってんだ？」

「あのねあのね！さわちゃんの衣装が出来ただけど、これがかなり良いの！」

「ほらほら、統夜君も見て！」

そう言ってさわ子は一枚のTシャツを統夜に見せてきた。

そのTシャツには「HTT」と書かれていた。

「！このTシャツの「HTT」って……」

『もしかして放課後ティータイムの略なのか？』

「うんうん、その通りよ♪」

さわ子のいう通り、今回の衣装は、放課後ティータイムの頭文字であるHTTと書かれたTシャツだった。

統夜はこのTシャツのデザインに驚きながらも気に入っていた。

「これは……！シンプルだけど悪くないな」

『確かに、俺様もケチのつけようがないぜ』

統夜とイルバはさわ子のTシャツにケチをつけることは出来なかった。

「初めて統夜君とイルバに褒められた♪」

さわ子は統夜とイルバに素直に褒められたことがとても嬉しかった。

「やれやれ……」

統夜は満足そうに笑っているさわ子を見て苦笑いをしていた。

「さて、とりあえず俺はトイレに行くてくるよ。ついでに制服に着替えてくるな」

統夜は再び音楽準備室を出ると、1度トイレに向かい、その後は教室に向かった。

教室で統夜はジャージから制服に着替えると、音楽準備室へと戻っていった。

統夜が音楽準備室へ続く階段を上がっていったその時だった。

『ぎやああああああああ!!』

「うお!? な、何だ!？」

突然漣の叫び声が聞こえてきたので、統夜は慌てて階段を駆け上がり、ボタンと音楽準備室の扉を開けた。

すると……。

ゴツン!!

統夜が扉を開けると同時に鈍い拳骨の音が聞こえてきた。

統夜はこの瞬間、律が漣に悪戯をしてそのことに対して制裁の拳骨を受けたのだろうと察していた。

「……漣がぶったあ!!」

「何だよこれは!!」

漣は自分の腕を律に見せつけていた。

「つたく……。律、お前は何をやらかして……」

統夜は呆れながら漣の腕を見ると、思わず絶句してしまった。

漣の腕にはあちこち「人」という文字が書かれていたからである。

(うわ……。これはなんとも……)

《ここまできると、おまじないというより呪いだよな……》

統夜とイルバは漣の腕におびただしく書かれた「人」という文字にドン引きしていた。

「いやあ、漣があがらないようになって思ってたよ」

「書きすぎだろ！」

「多い方が効果ありそうじゃん？」

『やれやれ。物には限度があるだろう？』

イルバはジト目で律のを見ていた。

「生命線も太くしておきましたあ♪」

唯の言う通り、滯の生命線もペンで太くなっていた。

「あうう……」

滯は涙目になっており、統夜はそんな滯を見て苦笑いをしていた。

※※※

全員が起きた後は憂が持ってきてくれたお弁当の残りで朝食を取り、その後は本番に向けて最終調整をするため、合わせの練習を行った。

1時間ちよつと練習した後、模擬店で買った食材で昼食を済ませ、現在は機材も運び

終えて、本番に向けて待機していた。

滯は緊張をほぐそうと、手に人という字を書いて飲み込んでいた。

統夜たちはこれから行われるライブに向けて準備は万端だった。

「……よし、そろそろ行くか」

ライブ開始時間が迫っており、統夜たちは講堂に向かうことにした。しかし、おまじないをしても滯は未だに緊張していた。

「大丈夫だよ、みおちゃん！」

「そうよ！特訓だったし！」

「そうだ。あまり気負わず楽しもうぜ！」

唯、紬、統夜の3人が、不安そうにしている滯をフォローしていた。

「……そうだよな……」

「はい！いつも通りにやりましょう！」

「よし、みんなやるぞお！」

「……おお!!」

律の号令に、統夜たちは全員で反応していた。

「私たちのライブ！」

「……おお!!」

「最高のライブ!!」

「「「「おお!!」」」」

紬と梓の号令に統夜たちはそれぞれ反応していた。

しかし……。

「終わったらケーキ!!」

「「「「おお!……おお?」」」」

唯の口からケーキという単語が飛び出し、統夜たちの返事は力ないものになってしまった。

とりあえず、これから行われるライブに向けて気合をいれた統夜たちは、それぞれ衣装である「H T T」と書かれたTシャツを着て、そのまま講堂へと向かった。

こうして、統夜にとっては最後となる学園祭でのライブが始まろうとしていた。

……続く。

——次回予告——

『いよいよライブが始まったな。お前たち、後悔のないよう思い切り行け！次回、「仲間」。これが俺たち、放課後ティータイムだ!!』

第94話 「仲間」

学園祭も2日目を迎え、間もなく統夜たち「放課後ティータイム」のライブが行われる。

全ての準備を整えた統夜たちは現在講堂の舞台袖に来ていた。

すると、先ほどまで公演を行っていた落語研究会の発表が終わり、舞台袖に撤収するところだった。

「お疲れでした〜」

律が落語研究会の人たちに軽く挨拶をしていた。

先ほどまで行われていた落語研究会の発表の次が統夜たちのライブであるため、統夜たちはライブのセッティングを開始した。

ドラムやキーボード。さらにはアンプのセッティングを終えると、統夜たちは自分たちの楽器のチューニングなどを行っていた。

「……よし、準備万端だな」

ライブの準備は手際良く行われたため、準備は早く終わった。

「ねえねえ、学園祭でのライブもこれで3回目だよね？」

「そうだな。2年前は初めてで、すっごく緊張したっけ」

「そうそう。俺もかなり緊張したよ」

「続夜たちにとつて初のライブは全員が緊張していたが、どうにか成功したのであった。」

しかし……。

「2年前……」

2年前のライブでのトラウマを思い出した滯は顔を真っ青にしていた。

「ああ！そういうことじゃなくて！」

「律はからかうつもりはなかったため、焦ってフォローしようとしていた。」

「ほ、ほら！去年は！」

「律はどうか話をそらすために去年の話題を振ったのだが……。」

「私が風邪をひいて、ギー太を家に忘れてきたんだっけ……」

「今度は去年のライブのことを思い出した唯が落ち込んでしまった。」

「……あの時は……本当に申し訳ない……」

「ああ、いやいや！だからそういうんじゃないんだってば！」

「律は必死になって滯や唯のフォローを行っていた。」

「続夜はその様子を見て苦笑いをしていた。」

『おい、お前ら。もうライブが始まるぞ。気持ちを入れ替えろ』

ライブ前に気落ちしてはまずいと判断したイルバは統夜たちをフォローしていた。

その言葉で統夜たちがハツとしたその時だった。

『さあ、皆さんお待ちかね！桜高祭の目玉イベント。放課後ティータイムの演奏です！』
和は心からそう思っているのか、このようなアナウンスを行っており、このアナウンスを聞いた客席からは拍手が聞こえてきた。

「ハードル上げるなよ、和……」

和がこう言ってくれたのは光栄だったのだが、逆にそれがプレッシャーとなっており、律は苦笑いをしていた。

「もうヤダ……。あんなのヤダ……」

「だ、大丈夫よ、滯ちゃん」

「2度あることは3度あるっていうし！」

「おいおい、それは励ましてないから……」

逆に滯を追い詰める言葉に統夜は苦笑いをしていた。

すると、唯がコードに足を引っ掛けてしまい、唯はその場に座り込むような形で転んでしまった。

「唯ちゃん!？」

「唯先輩!？」

「ふ、ふええ……」

急に転んでしまい、唯は涙目になるが、それと同時にステージの幕が上がった。

そして、幕が完全に上がると、統夜たちは客席が異様な光景になっていることに驚いていた。

「な……何これ!？」

「み、みんな私たちと同じTシャツを着てます!」

唯と梓だけではなく、統夜たちもここにいる観客全員が自分たちと同じTシャツを着ていることに驚いていた。

唯は驚きながらもゆっくりと立ち上がっていた。

『……さあ、皆さん!盛大な拍手を!』

こう言いながら和がステージに登場すると、客席から大きな拍手が送られた。

「の、和ちゃん!?これは!？」

「ちよつと和、何やってるんだよ」

「……なんかなし崩しにだけど、濔ファンクラブの会長、引き継いじやったし」

和は和で濔ファンクラブの仕事として、軽音部を盛り上げていた。

「じゃあじゃあ!」

「みんなが着てるTシャツは？」

「落ち着いて」

和は興奮している唯と梓をなだめていた。

「Tシャツは山中先生が用意してくれて、ライブ前にみんなに配ったのよ」

そして、和は舞台袖を指すと、観客のみんなが統夜たちと同じTシャツを着ているのは何故かを説明していた。

「うう……。さわちゃんありがとう！」

「ありがとうございます！」

唯と梓は涙目になりながらさわ子にお礼を言っていた。

「先生ありがとう!!」

「ありがとう!!」

歓声が響き渡るなか、信代と三花の声が聞こえてきた。

さわ子は唯たちだけではなく、客席からもありがとうという言葉が聞こえてきたことに満足そうだった。

『ええ……。？放課後……。ティータイムです……。えつと……。』

和やさわ子たちによるTシャツのサプライズが嬉しかったのか、唯の目には涙が溢れており、声も涙声だった。

すると、客席から「頑張れ唯！」や「頑張れー!!」と唯を応援する声が聞こえてきた。『みんなありがとうとお！……私たちの方がみんなに色々してもらって……。グスツ、なんだか涙が出そうです』

「もう、泣いてるじゃねえか……」

律の的を得ているツツコミに、客席は笑っていた。

「唯ー!!」

唯のことを呼ぶ声が聞こえてくると、唯はずっと鼻をすすっていた。

「汚いよ！」

「部長ナイス！」

「エツヘン！」

「濡も何か言ってるえ！」

「え、えつと……ありがとう……」

客席からの無茶ぶりに濡は照れながらも答えると、客席から黄色い歓声が上がっていた。た。

「統夜も何か言ってくれ!!」

客席から統夜に無茶ぶりしたのは、アキトだった。

「!?アキトのやつ……」

アキトからも無茶ぶりが飛んでくるとは思わなかったので、統夜は苦笑いをしていった。

「みんな！今日はライブに来てくれてありがとうがとな!!」

統夜が力強く宣言すると、再び歓声が聞こえてきた。

「統夜ー!!最高だぜえ!!」

アキトは興奮気味に叫んでおり、隣にいたレオは苦笑いをしていた。

『それじゃあ、1曲目行きますー!』

最初の挨拶もほどほどにして、統夜たちは最初の曲を演奏することになった。

統夜たちはそれぞれの楽器を構え、演奏体勢に入っていた。

『……「ごはんはおかず」!』

唯は1曲目のタイトルを言うのと、「何だそりゃ!」という声と、笑い声が聞こえてきた。

『では、聴いてください!!』

唯はみんなの顔を見て合図を送ると、みんなは頷いていた。

『……1・2・3・4!!』

律の合図で、ライブの1曲目の演奏が始まった。

統夜たちが今奏でているのは、「ごはんはおかず」というタイトルの曲だった。

この曲は、部室が使えなくなった頃に唯が書いた歌詞で、あまりにも独創的な歌詞

だったため、当初は却下された曲だった。

しかし、ご飯という食べ物の素晴らしさを表現した曲だという唯の熱弁に根負けした統夜たちは、この歌詞を採用することになった。

歌詞は独創的であるのだが、曲調はハードロックっぽい感じであり、結果的にはこのギャップが魅力となったのであった。

この曲は要素所でセリフがあるので、そこで笑いが取れるだろうと統夜たちは予想していた。

そして、最初のセリフの部分が近付いてきた。

『♪でも私、関西人じゃないです！』

「「「「どないやねん!!」」」」

唯以外の全員がこのセリフを言うと、客席が笑いに包まれていた。

続いて、1番盛り上がるであろうサビに突入した。

『♪1・2・3・4・GOHAN!……1・2・3・4・GOHAN!!』

1曲目からこの曲を持ってきたのが吉と出たのか、観客たちは手拍子をしたりしながら演奏を盛り上げていた。

この曲は1曲目にも関わらず、いきなり演奏者と観客が一体となってライブを盛り上げていた。

大いに盛り上がる中、再びセリフの部分が近付いてきた。

『♪私前世は、関西人!』

『どないやねん!!』

今度は統夜たちだけではなく、先頭でライブを盛り上げてくれているクラスメイトもセリフを言ってくれた。

サビの部分で唯は「G O H A N!」の部分を言ってもらうために客席にマイクを向けていた。

1回目は唐突だったからか何も反応はなかったが、2回目は元気よく応えてくれて、客席を大いに盛り上げてくれた。

こうして、大盛り上がりの中、1曲目の「ごはんはおかず」の演奏は終了した。

まだ1曲しか終わっていないにも関わらず、まるで最後の曲を終えたかのような拍手と歓声だった。

統夜はまさかここまで盛り上がってくれるとは思っていなかったのか、驚きを隠せなかった。

『えつと……。ごはんはおかずでした!……。改めまして、放課後ティータイムです!』

1曲目が終わり、唯が挨拶をすると、客席から大きな歓声が聞こえてきた。

『私たち3年生のメンバーは、みんなは同じクラスなんですけど、昨日は演劇をやって大

変だったんですよ』

唯がMCでこのように語り出すと、客席からは「ええ!？」と驚く声が聞こえてきた。

『黄金の騎士、格好良かったですよね!あの中に入ってたのは、やーくんだったんですよ!』

「お、おい、唯!!」

唯が黄金騎士の中の人が続夜だということをあつさりバラしており、驚きを隠せなかった。

しかし、観客たちはポカンとすることなく、逆に続夜に拍手や歓声を送っていた。

『ねえねえ、やーくん。何かやってよ』

『はあ?まさか、セリフをか?』

『うん』

唯がいきなり無茶ぶりを振り、続夜は困惑していた。

しかし、観客たちは期待しているのか、大きな歓声を送っていた。

《……やれやれ。ライブでも唯は相変わらずだな》

(まったくだよ……。ま、ここは期待に応えますかね……)

いきなりセリフを言えというのは恥ずかしかったが、観客たちの期待に応えるために、セリフを言うことにした。

統夜は一度深呼吸をしてから、セリフを言い放った。

『……貴様の闇、俺が断ち切る!!』

統夜は素体ホラーこと怪物と対峙した時のセリフを言うと、客席から大きな歓声があがっていた。

その歓声には黄色い歓声も混じっており、「格好いい!」や、「統夜先輩!!」などといった声も聞こえてきた。

統夜は滯のようにファンクラブがある訳ではないが、女子生徒の人気は高く、一部ではアイドルのような扱いを受けていた。

『ねえねえ、みおちゃんも準主役だったんだから、何かセリフを言ってよ』

唯の無茶ぶりの矛先は、続いて滯に向けられた。

『ふえ!!ば、バカ!!そんなの出来る訳ないだろ!!』
『ええ!!』

唯が滯にもセリフを言って欲しいとの言葉に主に滯ファンクラブの子達が黄色い歓声を送っていた。

「いいだろ、滯。セリフだってまだ覚えてるだろ?」

「り、律まで!!」

律は自分に無茶ぶりの矛先が向かないことを良いことに、ニヤニヤしながら滯のセリ

フを待っていた。

結局滯は、歓声に負けてセリフを言うことにした。

『……待つてください！光の騎士様！私も行きます！』

滯が劇中のセリフを言った瞬間、この日一番の黄色い歓声が飛び出していた。

その迫力にステージに立つ統夜たちは苦笑いをしていた。

セリフを言った後、滯は恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしていた。

その様子がファンにはたまらないのか、さらに滯のファンが歓声をあげていた。

『ありがとう、ご両人……あつ、ちなみに私は、木Gでした！』

《おいおい、その情報はいらんだろ……》

(俺もそう思うよ……)

イルバが所々でツツコミをいれており、統夜はそれをテレパシーで返していた。

『ずっと動いちやいけないって言われてただけど、途中我慢できなくてくしゃみをしちやいますてえ♪』

唯のトークに客席から笑いが飛び出すのが、このまま唯がグダグダと喋り続けていれば、それだけライブの時間が押してしまう。

そのことを危惧していた和は、舞台袖から「巻きで行け」と合図をしていた。

唯は和の合図にはまったく気付いておらず、お構い無しといった感じでMCを続けて

いた。

すると唯は木の時のように梓の方に移動すると、梓にぶつかってしまった。

『あつ、ごめんあずにゃん!』

『もう、大丈夫ですか?』

『梓ちゃんのクラスは何をやったの?』

『え?喫茶店です……』

梓は一応唯の質問に答えたのだが……。

「いいから次行つてください!」

梓はグダグダと喋り続ける唯を耳打ちで注意していた。

『ああ、はいはい。……それでは、次の曲に行きましよう!』

唯はすぐさま自分の位置に戻っていったのだが……。

『あつ! 私たちの劇は御月カオルさんのお父さんの御月由兎さんが描いた絵本が原作

で、ムギちや……: 琴吹さんがシナリオとナレーションを担当しました!』

《おいおい、次の曲に行くくんじやないのかよ……》

(まったくだ。いつになつたら新曲に行くのやら……)

続夜とイルバは再び思い出したかのように語り出す唯に呆れていた。

『琴吹さんのナレーション。凄く良かったですよね!』

紬はここで自分が脚本とナレーションをしたことを紹介してくれるとは思っておらず、満面の笑みを浮かべていた。

『それに、この劇をやることを了承してくれたカオルさん、ありがとうございます！』
唯は父親の作品を劇としてやることを了承してくれたことに感謝の気持ちを表していた。

「……アハハ、まさかこんな形で私まで紹介してくれるなんて……」

カオルにスポットライトは当たらなかったが、自分の名前と父親の作品が紹介されるとは思っていなかった。

『カオルさんは実はこの桜ヶ丘高校のOGなんですよ！それで……』

唯はさらにトークを進めようとしたのだが……。

『おい、唯。そろそろ次の曲へ行くぞ。じゃないとお前の漫談でライブが終わっちゃうからな』

『あうう……。やーくんの意地悪……』

唯のグダグダとしたトークはこれ以上見過ごせないと思った統夜はこう唯を促し、この2人のやり取りの後、客席から笑い声が聞こえてきた。

「ねえねえ。次の曲ってなんだっけ？」

「だからどつかにメモを貼っとけって言っただろ？」

「どこかに無くしちやっただけで……」

「落としたのか？」

「ポケットに入れといたんだけど……」

「あっ！さっきTシャツに着替えたから」

『はっ！そうか！』

唯は曲順を記入したメモを誤ってブレザーのポケットに入れてしまい、その事に気付いた唯はハツとするが、その時の声をマイクが拾ってしまった。

そのことで客席から再び笑いが起こっていた。

統夜たち軽音部はライブの中でもグダグダであり、統夜はそんな状況に頭を抱えていた。

※※※

そんなグダグダな状態だったが、どうにか2曲目に突入することが出来た。

2曲目に演奏している曲は、統夜たち放課後ティータイムの十八番である「ふわふわ時間」だった。

この曲は統夜たちは何度も演奏している曲であり、統夜たちは楽しげな表情で演奏をしていた。

「……」

統夜たちの演奏を聴いていた穂乃果は、楽しげに「ふわふわ時間」を奏でる統夜たちがキラキラ輝いて見えていた。

そんな統夜たちに見入っていた。

「……穂乃果? どうしたのですか?」

海未は目を大きく見開いて統夜たちに見入っている穂乃果のことが気になっていたので、声をかけていた。

「……え? いやあ……。統夜さんたち、凄くキラキラしてるなあって思ってた……」

「……確かに、統夜さんたちはとてもいきいきしていますよね」

「うん♪ 凄く楽しそうだよね♪」

「それが……。どうしたんだ?」

統夜たちが楽しそうに演奏していることは奏夜も理解しており、穂乃果はそれを見て何を考えてるのはか理解出来なかった。

「……私たちもさ、来年高校に入ったら、統夜さんたちみたいにキラキラした何かを出来るのかなあ？」

「キラキラした何か……ですか？」

「うん。上手く言葉には出来ないけど、私は音ノ木坂に入ったら、統夜さんたちみたいに何かをやつて輝きたいんだよね」

「輝きたい……。うん！ことりもそう思うよ！」

「ええ。きつと出来ますよ。穂乃果がその気になれば」

「ああ。俺も応援するぜ」

「ことりちゃん……。海末ちゃん……。そーくん……。ありがとう」

穂乃果は自分の曖昧なビジョンを否定することなく受け入れてくれた奏夜たちに感謝していた。

そして、今の統夜たちのようにキラキラ輝きたいと願いながら統夜たちの演奏を聴いていた。

しかし、2年後に穂乃果たちは今の統夜たちのように打ち込めるものが見つかり、大きく輝いていくことを、知る由はなかった……。

こうしている間にも、2曲目であるふわふわ時間は終了した。

2曲目が終わり、次のMCは統夜が担当することになっていた。

『ありがとうございます！ふわふわ時間でした！』

統夜がこのようにMCを入れると、大きな拍手と歓声を送られた。

『次の曲は僕の作った曲なので、僕がMCを務めます！』

3曲目は統夜の曲を演奏するため、統夜がMCをすることになったのであった。

『この曲は僕にとつて大切な曲で、特別な想いを込めてこの曲を作りました』

特別な想いというキーワードが出てきたため、観客たちは次の曲に大いに期待していた。

『次の曲はゆったりとしたバラードではありませんが、聴いてください！「哀愁の輪舞」』
統夜は曲名を宣言すると、演奏は始まった。

く使用曲↓哀愁の輪舞（放課後ティータイムver）く

絢のピアノソロからこの曲は始まった。

絢がしつとりとピアノを奏でた後、統夜たちが入り、統夜がしつとりと歌い始めた。

この哀愁の輪舞は、サブツクの時に、統夜が多くの魔戒騎士の前で歌った曲であった。

「……………の曲って……………」

「ああ、鎮魂の儀の時に統夜が歌ってたよな、この曲」

サバックに出演していた戒人は、この曲に即座に反応しており、アキトも鎮魂の儀の時にはいたため、この曲のことを知っていた。

「その曲を軽音部用にアレンジしたんですね……」

「へえ、悪くないじゃん♪」

レオはサバックで歌った曲を軽音部用にアレンジしたことを推測しており、零は統夜のしつとりとした歌声に聞き入っていた。

「……ふっ、悪くないな……」

鋼牙はレオからサバックの映像を見せてもらった時に統夜の歌も聴いていたのだが、改めて統夜の歌を聴いて笑みを浮かべていた。

普通の観客たちもこの曲に聞き入っていたのだが、鋼牙たちは特に統夜たちの演奏に聞き入っていた。

奏夜も例外ではなく、目を閉じて一音一音を噛みしめるかのように聴いていた。こうして、統夜がボーカルを務めた「哀愁の輪舞」は終了した。

曲が終了すると、客席から大きな拍手が送られた。

『……哀愁の輪舞でした！』

次のMCは唯のため、唯がMCを入れていた。

『やーくんの作った曲はどうでした？凄く良かったですよね！』

唯は観客たちにこう投げかけると、客席から再び大きな拍手が送られた。

『それでは、ここでメンバーを紹介したいと思います』

唯は前からの打ち合わせ通りこのタイミングでメンバー紹介を行うことにしていた。

『まず最初に……顧問のさわちゃんです！』

「ええ!? 私?」

最初に紹介されたのが顧問で、しかも唯は普段と同じ呼び方で呼んでいたため、統夜はズッコケそうになっていた。

「おいおい、山中先生だろ?」

ここはステージ上で、他の先生も見ているということもあったので、藩は訂正するよう耳打ちをしていた。

『あ、山中先生です!山中さわちゃん先生!』

「……お前、それじゃ意味ないだろ」

唯が苗字とあだ名をくつつつけた呼び方をしており、統夜はジト目になって呆れていた。

『山中先生はいつも優しく、私たちの部活をいつも応援してくれています!』

「みんなあ!凄く輝いているわよ!」

さわ子が統夜たちにエールを送ると、客席から大きな拍手が送られた。

『……続いてベースのみおちゃんです!』

唯は滯のことを紹介すると、待ってましたと言わんばかりに大きな拍手と歓声を送っていた。

『みおちゃんは昨日の劇で準主役を務めました……』

『それはさつき言っただろ?』

『あう!』

統夜に的を得たツツコミをされた唯だったが、その様子を見ていた客席から笑い声が聞こえてきた。

『……こんにちは。今日は私たちのライブを聴いてくださいます、ありがとうございます。聞かせてきた。』

滯は恥ずかしがることはなく、しっかりとした口調で挨拶をしていた。

『私……。ここにいるみんなとバンドをやつて……。最高です!』

滯の力強い発言を聞いたファンクラブの子たちの興奮が高まり、先ほど以上に黄色い歓声が上がっていた。

『みおちゃんにはファンクラブもあるので、入りたい人はそこにいる和ちゃんに言ってください!』

「へ!？」

『和ちゃんは私の幼なじみなんですけどら生徒会長で、しっかり者で、いつも助けられています』

「ちよ、ちよつと、唯!」

舞台袖にいた和はまさか自分の名前を呼ばれるとは思っていなかったのか、驚きながらステージに出てきた。

すると、すかさずスポットライトが和に当たり、和は逃げるように舞台袖に引つ込んでしまった。

『それでは、和ちゃんも一言どうぞ!』

「何ですよ。私はいいから次行きなさい、次」

和は頑なにステージに現れようとはせず、手だけを出して先に進むよう促していた。

『ええ!?!……まあ、いいや』

唯は和の挨拶がないことに納得がいかなかったのだが、とりあえず次にいくことにした。

『続いて、キーボードのムギちゃんです』

『皆さん、こんにちは!今日は、私たちの演奏を聴いてくださいます、ありがとうございます!』

唯に紹介された紬は、簡単に挨拶をしていた。
すると……。

「せーの……」

『ムギー!!』

クラスメイトたちが一斉に紬のことを呼んでいた。

『!みんな、ありがとー!バンドつてすっごく楽しいです!今も、すっごく楽しいです!!』

紬はクラスメイトに呼ばれたことが嬉しかったのか少し興奮気味だった。

『ムギちゃん、落ち着いて。……ムギちゃんの淹れてくれる紅茶はとても美味しくて、私たちも毎日楽しみなんですよ』

唯がティータイムのことを軽く話すと、客席から「私も飲みたい!」という声が聞こえてきた。

『いつでも部室にお越しください!大歓迎ですから!』

『部室にはトンちゃんもいますので、ぜひ会いに来てあげてください!』

唯はトンちゃんのことまで紹介していたのだが、客席から「トンちゃんって?」という声が聞こえてきた。

『ああ、はいはい。トンちゃんっていうのは、部室で飼っているスツポンモドキっていう

亀で、鼻が豚みたいで可愛いんですよお♪ね、あずにゃん?」

『あつ、は、はい……』

唯はトンちゃんのことを紹介すると共にトンちゃんの魅力について梓に同意を求めていた。

『続いて、ギターのあずにゃんです!』

唯はこの流れのまま梓を紹介したのだが、いつも通りあずにゃんと呼んでいた。

『な、中野梓です。よろしくお願ひします……』

梓は恥ずかしそうに自己紹介をするのだが……。

「梓ー!!」

「梓ちゃん!!」

客席から純と憂の声が聞こえてきた。

『あずにゃんは2年生なんですけど、すつごくギターが上手くて、私はいつもあずにゃんに教わってます。いつもありがとね、あずにゃん♪』

『あつ、ありがとうございます……』

梓は唯に改まってお礼を言われたのが恥ずかしかったのか、頬を赤らめていた。

『次にドラムのりつちゃんです!我らが軽音部の部長です!』

唯が律を紹介すると、律はドラムの椅子から立ち上がり、そのまま挨拶を始めた。

『ええ、みなさん。本日は私たちのライブを聴いてくださり、ありがとうございます』

「よっ、りっちゃん！」

「緊張してんじゃないよ！」

『……それでは次です』

律はクラスメイトの声を聞き流し、次に話を振っていた。

「え？ いいの？」

「いいよ」

「うーん……。まあ、いいや」

律は簡単な挨拶しかしていなかったが、唯は気を取り直して次に進むことにした。

『……次にギターのやーくんです！』

続いて唯は統夜を紹介していた。

すると……。

「統夜ー!!」

「統夜さーん!!」

「ちよつと、奏夜!!」

アキトと戒人が同時に統夜を呼んでおり、離れたところにいた奏夜も統夜を呼んだの

だが、それが恥ずかしかつたのか、海未に注意されていた。

さらに……。

「統夜ー!!」

「統夜くーん!!」

「統夜せんぱーい!!」

クラスメイトだけではなく、あちこちから統夜の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

『やーくんはちよつと鈍いところはああるけれど』

『強さと優しさを併せ持っていて』

『誰よりも軽音部のことを大切にしている』

『誰よりも頼もしくて』

『尊敬出来る先輩です!!』

唯、紬、律、滯、梓の順番で口々に統夜のことを紹介していた。

統夜は突然このようなことを言われて嬉しさと困惑が入り乱れていた。

統夜はゴホンと咳払いをすると、そのまま語り始めた。

『皆さん、今日は俺たちのライブに来てくれてありがとうございます！俺は軽音部のみんなから、多くのものをもらうことが出来た。今日、このメンバーでライブが出来るのが幸せだし、最高だ!!』

統夜は今自分が思っている素直な気持ちを明かすと、大きな歓声が上がっていた。

『やーくん、ありがとう！……それじゃあ、次の曲行きます！』

唯は自分の紹介をしないで先に行こうとしていた。

「唯、自分の紹介をしてないぞ」

「あつ、そうだった！」

「ここで唯は自分の紹介がまだなことを思い出しており、苦笑いをしていた。

『最後にギターの唯ちゃんです』

そんな唯に代わり、紬が唯の紹介をしていた。

『唯は見た目のまんままでのんびりしててすつとぼけてるけど』

『いつま全力で、一生懸命で』

『周りのみんなにもエネルギーをくれて』

『自然とみんなを笑顔にしてくれる』

『とつても頼れる先輩です！』

律、紬、漣、統夜、梓の順番で唯のことを紹介していた。

「うお?!どうした!?!何があつた!?!」

唯も先ほどの統夜同様に嬉しさと困惑が入り乱れていた。

「お姉ちゃん!!」

突然憂の聲が聞こえてくると、唯は声の方へ振り向いていた。

『おおーういー!!』

「お姉ちゃん!!」

平沢姉妹は互いに目が合うと、手をブンブンと振っていた。

「ああ♪お姉ちゃんと目が合ったよ♪」

憂は唯と目が合つて互いに呼び合ったのが嬉しかったのか、その喜びを純に伝えていた。

「アハハ……。そりや目が合うだろうよ……」

あれだけ大きな声で呼びかければ目が合うのは当然だと考えていた純は苦笑いをしていた。

「唯ー!!」

「放課後ティータイム!!」

「放課後ティータイム!!」

会場の盛り上がりがピークに達したのか、唯の名前だけではなく、統夜たちのバンド名である放課後ティータイムの名前を呼ぶ者もたくさんいた。

これは統夜たちにとっては予想外の出来事であり、それと同時に喜ぶべきことでもあった。

続夜たちはこのステージ上で自分たちの名前を呼んでくれていることにしばらく耳を傾けていた。

『……それでは、次が最後の曲です!』

盛り上がりかひと段落したところで唯が話を進めるのだが、最後の曲とわかると、客席からそれを惜しむ声が聞こえてきた。

『もつと演奏していただきたいけど、時間が来ちゃいました』

「良かったよー!」

「放課後ー!!」

「放課後ー!!」

「せめてティータイムまで言ってあげようよ!」

続夜たちのバンド名を略して言っている者がおり、誰かがそのことにツツコミをいれると、客席から笑いがおこっていた。

『今日は本当にありがとうごさいました!山中先生!Tシャツありがとう!!和ちゃん!いつもありがとー!憂!純ちゃん!ありがとー!』

唯は曲に入る前に色々な人に感謝の言葉を伝えていた。

「唯ー!!」

「最高!!」

『トンちゃんありがとー!! 部室ありがとー!! みんなみんな本当に、ありがとー!!』

唯の興奮が冷め止まぬ中、唯は様々なことに対して感謝の言葉を述べていた。

その感謝の言葉を聞くと、客席から大きな拍手と歓声が送られていた。

そして、歓声と拍手が落ち着いたタイミングで、唯は再び語り始めた。

『放課後ティータイムは。いつまでも……いつまでも……。放課後』です!!』

唯の言葉の意味が理解出来なかったのか、客席が一斉に静まり返ってしまった。

ほとんどの観客がポカーンとする中、憂だけは目をキラキラと輝かせていた。

しばらくすると、気を遣った数人が小さく拍手をしてくれた。

『それでは、最後の曲、聴いてください……。「U&I」ー!』

唯が最後に演奏する曲名を宣言すると、大きな歓声が上がっていた。

律のドラムが合図となり、統夜たちの演奏は始まった。

このU&Iは、唯が詩を書いた曲で、とてもクオリティの高い詩になっていた。

いなくなったことで初めてそのありがたみがわかるという思いが込められていた。

この歌詞は憂にあてたものであり、日頃からお世話になつていいる憂への感謝の気持ち

も込められていた。

憂は風邪を引いた時にこの歌詞を見た時、これは自分にあてた歌詞であると理解して

いたため、思い入れは大きかった。

最後の曲ということもあり、統夜たちは一音一音に気持ちを含めていた。

そんな中、統夜はギターを奏でながら会場を見回していた。

まず最初に目についたのはクラスメイトたちであった。

クラスメイトたちは曲に合わせて小刻みに動きながらノっていた。

続いて目についた鋼牙は、穏やかな表情で笑みを浮かべており、カオルも雷牙を抱えながら楽しげにしていた。

その隣にはヒカリと幸太もおり、ヒカリと幸太はウンウンと頷きながら統夜たちの演奏を聴いていた。

零とレオは統夜たちの演奏を聴きながら笑みを浮かべており、戒人とアキトは、興奮しながら盛り上がっていた。

奏夜、穂乃果、海未、ことりの4人も、楽しげな感じで演奏を聴いていた。

憂と純は手拍子を叩きながら演奏を盛り上げていた。

そして、舞台袖にいる和とさわ子は、幸せそうな表情で演奏を聴いていた。

それだけではなく、統夜たちの演奏を聴いている他の観客たちも、心の底から演奏を楽しんでいた。

この時、統夜は考えていた。

この時間が終わることなく続いて欲しいと。

それだけ今回の演奏に手応えを感じており、統夜たち6人の気持ちは1つになっていった。

それは統夜だけではなく、唯たちも同じ気持ちであり、この時間がいつまでも続ければいいのと思っていた。

しかし、無情にも現実はそのを許してはくれず、大歓声の中最後の曲は終わり、最高の結果となったライブは幕を閉じたのであった。

※※※

ライブが終了し、機材も含めて全ての撤収を終えた統夜たちは部室に戻ってきた。統夜たちは並んで地べたに座り込むと、ライブ成功の余韻に浸っていた。

「……大成功……だよね？」

「なんか……あつという間だったな……」

「そうだな。それは俺も思ったよ」

今回のライブが最高に楽しかったからなのか、ライブの時間があつという間に過ぎ去ってしまったのであつた。

「ちゃんと演奏出来たかどうか、全然覚えてないわ……」

「……つていうか、Tシャツのサブライズで全部吹っ飛んだ……」

「私もです……。もう、何が何だか……」

統夜たちはライブ冒頭にいきなり行われたTシャツのサブライズに驚いていたため、頭が真っ白になっていたのである。

(……俺も、ちゃんと演奏出来たか覚えてないや……)

統夜もこんな気持ちになるのは初めてであり、ライブの時の記憶が曖昧になつていた。

《やれやれ、お前もか。俺様が聞く限りは今までで1番良かったと思つたがな》

(それ、後でみんなに聞かせてやれ。喜ぶと思うから)

イルバは素直に統夜たちの演奏を評価していたのだが、それを言葉にはせず、統夜にだけテレパシーで伝えていた。

「……でも、すつごく楽しかったよね!」

「今までで最高のライブだったな!」

「みんなの演奏もバツチり合ってたし」

『まあ、俺様も良かったと思うぜ』

「ああ。本当に完璧な演奏だったよ」

「エヘヘ……。やーくんとイルイルに褒められたあ♪」

イルバは先ほど思っていたことを唯たちに伝えて、統夜もそれに同意していた。

唯はそのことに喜んでいたので、イルバはあえてあだ名を言われても何も言わなかった。

「……ギー太も喜んでるんじゃないのか？」

「うん！ エリザベスもね！」

「エリザベスう♪」

滯は自分のベースに抱きついていた。

エリザベスというのは唯が命名したのだが、何だかんだ言いながらも滯はその名前が気に入ったのであった。

「私のむったんだって！」

梓は自分のギターをむったんと名付けて対抗していた。

「おお！ 梓のギターはむったんっていうのか」

「ムスタングだからむったんです！」

「ウフフ……♪」

「やーくんのギターは……」

「名付けなくていいからな」

「続夜は自分のギターに変な名前をつけられることを嫌がっていた。

「ねえねえ！この後何する？」

「とりあえず、ケーキが食べたいです！」

「おお、部費ならあるぞ♪」

「ダメよお。私持ってきてるもん！」

「紬は自分の持ってきたケーキを食べて欲しいのか、足をパタパタとさせていた。

「やったあ♪それ食べながら次のことを考えよう！」

「次は……クリスマスパーティーだよな！」

「初詣に行きましょう！」

「それから……次の新歓ライブか……」

「また学校に泊まり込みじゃおっつか♪」

「今度はさわちゃんも誘おうよ！」

「いいですね！それ！」

「唯たちの語る未来はこれから決して起こることのない未来であった。

『……おい、お前ら。それは……』

「イルバ」

統夜はこれからのことを嬉々として語る唯たちを止めようとするイルバを制した。

この時、イルバはその未来がないとわかってて言っていることを察したため、口をつぐんでいた。

「夏になつてもクーラーあるし♪」

「合宿もあるし♪」

「楽しみだねえ♪」

唯たちはあるはずのない未来を語ることをやめようとはしなかった。

統夜はその言葉を1つ1つ反芻していくうちに胸の痛みを覚え、やるせない気持ちになつていった。

来年には統夜たちは卒業することを知っているため、言葉を1つ1つ噛み締めていると、次なんてものはないことを思い知らされるため、切ない気持ちになつていったのである。

「その次はねえ」

「えつと……その次はですねえ」

「……つて！次はないない」

こう未来を語ることを制止する律の瞳にはうつすらと涙がにじんでいた。
「来年の学園祭は……もつともつと上手くなってるよお……？」

「こう語る唯の瞳からは大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「お前、留年する気か？ 高校でやる学園祭はもうないの」

「そつかあ……。それは残念だねえ……」

「ヤダヤダあ!!」

紬はまるで子供のように駄々をこねながら、大粒の涙を流していた。

「ムギ先輩、ワガママ言わないで。唯先輩も子供みたいに泣かないでください」

「これは汗だよお……！ううっ！」

唯と紬は我慢出来ずに泣き始めてしまった。

「梓……。俺だつて嫌だよ……。これが最後だなんて……！くっ！」

統夜も軽音部での日々はかけがえのないものであるため、最後の学園祭というのが納得出来ず、涙をこらえることが出来なかった。

「統夜先輩……」

梓は、統夜がここまで涙を流すとは思っていなかったのだ、驚きを隠せなかったのだ、
が、なんて言葉をかけていいのかわからなかった。

「みくお。リコピーン！」

律は顔を伏せて泣いている滯を笑わせようとこんなことを言っていた。

「……………ふっ！ふふ……………律だつて泣いてるくせに」

「あたしのも汗だ！」

律は泣いてると認めようとしなかったが、滯と共に笑い合っていた。

「ほら……………ムギ先輩も」

梓はハンカチを取り出すと、ポロポロと泣いている紬の涙を拭いていた。

「梓ちゃん……………。グスツ……………ありがどお！」

「ムギ先輩。大丈夫ですから、落ち着いて」

まだ卒業まで時間のある梓は統夜たちがいなくなるということが実感出来てないのか、一人だけ涙を流すことはなく、冷静だった。

「……………良かったよな……………本当に良かったよな!!」

「うん！本当に良かった！」

「私、みなさんと演奏出来て……………幸せです！」

「俺も……………みんなと出会えて、一緒にライブが出来て……………幸せだぜ」

「ヒツク……………。グスツ……………やーぐうーん!!」

唯が涙をポロポロとこぼしながら統夜に抱きつくくと、他のみんながそれに続いて一斉に抱きついていた。

「ちよ……!?唯、おま!鼻水鼻水!!」

唯は涙と共に鼻水も出ていたため、統夜はその状態で抱きつかれるのは鼻水がつきそうに焦っていた。

「あうう……。ムギぢやーん!」

「アハハ……。鼻水う!」

「汚い!アハハ!」

「うわああああああん!!」

「リコピーン!」

「アハハハハ……」

統夜たちの涙と笑い声が、夕焼けの日差しに溶けていった……。

この時、統夜は胸に強く刻み込んでいた。

この日、夕焼け空の下でみんなで流したこの涙を絶対に忘れないと……。

この想いは、統夜を魔戒騎士としてさらに成長させるということを、確信させるには十分だった。

こうして、統夜たちは気が済んで泣き止むまで、ひたすら泣き続けていた。

くさわ子 sideく

唯ちゃんたちのライブが終わってしばらく経ち、私は真鍋さんと一緒に音楽準備室に向かっていた。

「唯たち……。すごく驚いてましたね」

「ウフフ……。ドツキリTシャツ作戦大成功！」

うんうん。我ながら完璧な作戦だったと思うわ！

唯ちゃんたち、すごく驚いてたもんね……。

ウフフ……。これでみんなも……。

くさわ子の妄想く

『さわちゃん！やっぱりさわちゃんは凄いよ！』

『ああ！さわ子先生以上の先生に出会ったことがないよ！』

『ええ。さわ子先生は最高だわ!』

『ああ、あたしもそう思う! さわちゃんも最高だよ!』

『はい! さわ子先生はすごく素敵です!』

『参ったな……。俺、鋼牙さんと同じくらい……。いや、それ以上に先生のことを尊敬してるよ!』

『やれやれ。お前さんがここまで優秀だったとは、俺様も驚きだぜ!』

『』『』『』『さわ子! さわ子! さわ子! さわ子!』

——妄想終了。

「みんな! お疲れ様!」

こんな妄想をした後、私は音楽準備室のドアを開けた。

だけど、中はとてとても静かだった。

「……ん?」

「あ……?」

私たちはくっついてやすやすや眠っているみんなを発見した、

「……幸せそうな顔……」

「クスツ……。そうね……」

みんな手を繋ぎながら眠っており、そんなみんなの姿を見た私の表情は緩んでいた。

『……おい、お前ら。静かにしろよ。こいつら泣き疲れてさつき寝たばかりなんだからな』

ずっとみんなの様子を見てたであろうイルバは、みんなが眠った経緯を説明してくれた。

「……ええ。わかってるわよ」

みんな幸せそうに寝てるんだもん。しばらくそつとしておきましょう……。

真鍋さんも私と同じ気持ちだったのか、何も言わずに一緒に音楽準備室を後にした。

……続く。

次回予告

『学園祭は無事に終わったのはいいが、こんなことをやるとはな。次回、「写真」。やれや

れ、これは面倒なことが起きそうだけ！』

第9 5話 「写真」

統夜にとつて最後の学園祭が終わってから2日が経った。

本来この日は登校日なのだが、統夜は学校を休み、騎士の使命を果たしていた。

学園祭期間中は劇の準備やライブの準備に追われていたため、エレメントの浄化などの仕事を戒人1人に押し付けてしまう結果になってしまった。

そのため、学園祭終了後、統夜は魔戒騎士の仕事を最優先で行うことにした。

振り替え休日は戒人を休ませるために丸々1日騎士の務めに使っていた。

この日も学校を休んでまでエレメントの浄化を行うのは、今日も戒人に休んでもらうためである。

「……はあっ！」

統夜は現在、とあるオブジェの前に来ており、そこから飛び出してきた邪気を、魔戒剣で一閃していた。

飛び出してきた邪気が消滅するのを確認すると、統夜は魔戒剣を青い鞘に納めた。

「よし……。イルバ、浄化しなきゃいけないオブジェはどれくらいある？」

『お前さん1人でこなすというのなら5つ以上は残ってるぜ！』

「そんなに残ってるのか……。だとしたらやっぱり今日は学校に行けないな」

統夜は携帯を取り出して時刻を確認すると、間もなく4時間目の授業が終わるといったところであり、この日のノルマを達成してから学校へ行ったとしても、その時には放課後になっていると予想された。

「ま、学祭期間中は戒人に頑張ってもらったし、今日1日は頑張らないとな」

統夜は戒人のおかげで学祭の準備に専念出来たため、振替休日だった昨日と今日はいつも以上に頑張ろうと思っていた。

『さて、統夜。もうすぐ昼の時間だが、これからどうするんだ?』

「とりあえず、ハンバーガーでも食って、すぐ仕事を再開しようかな」

『ま、ちよつとくらいならゆっくりしても良いとは思うが、いいんじゃないのか?』

今日の昼食のメニューが決まり、統夜はいつものファストフード店に向かうため歩き始めた。

歩き始めてしばらくすると、統夜の目にケバブの移動販売車が目に止まっていた。

そこはどうやら営業しているようで、何人かのお客さんと賑わっていた。

『……? どうした、統夜?』

「いや、ケバブの移動販売車とか珍しいなって思ってたさ……」

統夜は時々家でテレビを見たりするので、ケバブという食べ物存在のことは知って

いた。

しかし、そのケバブを販売している店は初めてであり、統夜はマジマジとケバブの移動販売車を見つめていた。

すると……。

「……あれ？統夜？」

ここでバイトをしていると思われるヒカリが統夜の姿を発見したのだが、こんな時間にいるとは思っておらず、驚いていた。

「おーい！統夜あ!!」

とりあえず声をかけてみようとのことと、ヒカリは統夜に声をかけていた。

「お、ヒカリさん。ここでもバイトしてたのか」

統夜はヒカリがいることに驚きながら、ヒカリがいるケバブの移動販売車まで移動した。

「……ちよつと、統夜。あんた今の時間は学校でしょ？サボったの？」

「そうじゃないって。今日はやるべき仕事があるから学校を休んでそつちを優先してらって訳」

ヒカリはやるべき仕事というのは魔戒騎士に関するものであることを察していた。

しかし……。

「……世間一般ではそれをサボリと言うのよ」

魔戒騎士的にはそうじゃないにしても、世間的にはサボリだったため、ヒカリはジト目で説明をしていた。

「うぐつ……！確かに……」

ヒカリの正論に統夜は反論することは出来なかった。

「おうおう、兄ちゃん。サボリかい？感心しねえなあ」

統夜とヒカリの話を聞いていた50代後半くらいの男性が話に入ってきた。

「あつ、マスター」

この男性がこの移動販売車の持ち主であり、この店の責任者であった。

「おう、ヒカリちゃん。この兄ちゃんは知り合いかい？もしかして、彼氏なのかあ？」

男性はニヤニヤしながら統夜との関係を勘ぐっていた。

「ち、違いますよ！この子は私の弟みたいなものです！それに、彼氏だったらちゃんといますから！」

「え!? そうなのか？まさか……」

統夜はヒカリの彼氏という存在に心当たりがあった。

「……うん、幸太さんよ。最近付き合い始めたのよ」

ヒカリは頬を赤らめて恥ずかしがりながら近況を報告していた。

「いつの間に……」

統夜はヒカリと幸太は遅かれ早かれそんな関係になるとは思っていたが、既にその関係になっていたことに驚いていた。

「何だ、ヒカリちゃん。彼氏いたのか」

男性もヒカリに彼氏がいるとは知らなかったもので、驚いていた。

「まあ、いいや。兄ちゃん、サボりでも何でもいいが、せつかくだからケバブを食っていきな」

男性はここを通りがかったのは何かの縁と思い、統夜にケバブを勧めていた。

「そうだな。ケバブは食べてみたいって思ってたし、マスターオススメのケバブを2つ下さい。あとコーラも」

ケバブに興味を持っていた統夜は、さりげなく注文していた。

「あいよ！毎度あり！代金は全部で千円にしといてやるよ」

統夜は財布から千円札を取り出すと、それをマスターに渡した。

マスターはその千円札を手に、移動販売車のカウンターにいる女性のもとへ向かった。

「おい、母ちゃん！SケバブとAケバブを頼むよ！」

どうやらこのオススメはSケバブとAケバブというようで、マスターはオーダーを

女性に伝えていた。

マスターはこの女性のことを母ちゃんと呼んでおり、この女性はマスターの妻だった。

「……クツパ嫌いでしょう！」

女性はいきなり意味のわからないことを言っていたのだが、どうやらそれは「わかったよ」という意味らしく、ケバブの用意を始めていた。

統夜は近くのテーブルの席に腰を下ろすと、ケバブが出来上がるのを待っていた。

「……そういえば、ここっていつもここでやってるんですか？」

統夜は気になっていた疑問をマスターにぶつけていた。

「いや、昨日ぐらいからここでやってたんだが、今週いっぱいには違う街に行く予定なんだよ」

「そうなのよ。それで、私は今週いっぱいここでアルバイトをしてるって訳」

「本当にヒカリさんはあちこちでバイトしてるんだな」

「まあね。私は画家になるために頑張ってるからね」

ヒカリは画家になるためにアルバイトを頑張りながら、色々と作品を作っていた。

「ヒカリさん、頑張ってるな。俺は応援してるからさ」

「うん、頑張るよ！……そういえば、この前のライブだけど、凄く良かったよ」

「ああ、ありがとうな」

ヒカリは改めてこの前のライブを賞賛しており、統夜はそれが照れ臭かったのか、簡単な言葉しか返さず、笑っていた。

「なんだ、兄ちゃん。あんたバンドやってんのか？」

「はい。俺は桜ヶ丘高校に通ってて軽音部に入ってるんですよ」

「ほお、軽音部か。いいじゃないか。俺も若い時はギターでバリバリ言わせてたんだよ！」

マスターはどうやらギターの経験者であった。

そのままマスターは自分の武勇伝を語ろうとしたのだが……。

「ほらー父ちゃんー！」

マスターの妻である女性が、マスターのことを呼んでいた。

どうやら、統夜の注文したケバブが出来上がったようだった。

マスターはカウンターへと移動すると、女性からケバブを受け取り、コーラも用意して、それを統夜のところへと持ってきた。

「はいよ、お待ちどう」

「おお！美味そう！」

統夜は始めて生で見るケバブに、目をキラキラと輝かせていた。

「ほら、早く食ってみな。美味しいからよ」

「はい、いただきます♪」

統夜はさつそくケバブを一口頬張ってみた。

「……美味しい！これ、凄く美味しい！」

統夜はケバブの美味しさに魅了されたのか、目をキラキラと輝かせながらケバブをがつついていた。

「そうだろそうだろ？そこまで喜んでくれるとはこつちも嬉しくなるぜ！」

マスターは美味しそうにケバブをがつつくと統夜を見てみると嬉しいという気持ちになつていた。

統夜は初めて食べるケバブをじっくりと味わっていた。

今週いっぱいはいっていると聞いたので、統夜は唯たちを誘ってまた来よう。

そんなことを考えながらケバブを完食し、そのままエレメントの浄化の仕事を再開した。

この日のノルマを達成した時は、既に16時を過ぎていたため、統夜はそのまま番犬所へと向かうことにした。

この日は指令はなかったため、統夜は街の見回りを行ってから家路についた。

※※※

翌日の放課後、統夜たちは音楽準備室で、明日の卒業アルバムに載せる個人写真を撮る練習を行うことにしていた。

統夜自身も卒業アルバムに載せる個人写真を撮ることは当然知っていたのだが、唯が個人写真に強いこだわりを持っているために練習を行うと聞かされた時は驚いていた。

律が自分のデジカメを持参し、2年生である様がカメラマンを担当することになった。

「……りっちゃん髪の毛って本当にサラサラねえ♪」

最初に撮影するのは律のようであり、紬がクシで律の髪をといていた。

「もう、いよいよ」

律は紬が髪をときながらスキンシップをしてくるのが恥ずかしいのかくすぐったいのか、このようなことを言っていた。

「ずっと触ってたあい♪」

「おい、よせって」

紬はさらにスキンシップをしてくるのだが、律はこうは言いながらもまんざらではないようだった。

髪の手入れが終わると、紬は律のカチューシャを取り出し、カチューシャをセットするのだが……。

「えっと、この辺かな？それとも、この辺？」

紬は律のカチューシャをどの高さでセットすればいいのかわからず、悪戦苦闘していた。

しかし……。

「……………この辺」

律のことを良く知っている湊は、一回で適切な位置にカチューシャをセットしていた。

その適切さに統夜たちは拍手を送っていた。

「それじゃあ、撮りますよー！」

髪の手入れが終わったところで、梓はデジカメを手にして律の写真撮影を行った。

一枚だけではなく、数枚撮影して律の写真撮影は終わり、次は湊の撮影に移った。

恥ずかしがり屋の滯は、写真を撮られることも苦手なようであり、梓が撮った写真はすべて照れからか目を伏せていた。

続いては紬の番なのだが、紬は最初は普通にしていたものの、撮影寸前に何故かぷくーっと頬を膨らませてその状態で写真は撮影された。

「……何故？」

写真を撮った梓も何故紬がこのような表情をしているのか理解出来ず、啞然としていた。

次は統夜の番となった。

統夜は魔法衣を既に長椅子に置いていたため、そのまま椅子に座り、写真を撮る体勢になったのだが……。

「……梓。写真を撮る人は普通にしてもらえると助かるんだが……」

統夜の写真を撮るといふことで、緊張してしまった梓の頬は赤くなっており、表情が強張っていた。

「す、すいません。つい……」

統夜に注文されたことでハツとなった梓はそのまま統夜の写真を撮った。

その直後……。

「……律先輩。後でその写真、焼き増ししてくださいね」

「……ああ、いいぜ。一枚100円な」

「お、お金取るんですか？ま、まあいいでしょう」

「？お前ら、何話してるんだ？」

梓と律は小声で密談しており、統夜はその様子を首を傾げながら眺めていた。

（やれやれ……。梓のやつ、ちやつかりしてやがるぜ……。まあ、気持ちはわからんでもないがな……）

イルバはちやつかり統夜の写真をゲットしようとしてるのを見て、苦笑いをしていった。

最後に唯の番となり、唯は椅子に座った。

梓はデジカメを構えて写真を撮ろうとするのだが……。

「……ぷっ！」

普段見せることのない唯の真面目な表情が可笑しかったのか、梓はぷつと吹き出し、笑っていた。

「もお！あずにゃん!!」

「す、すいません！」

梓はとりあえず謝ると、気を取り直して写真を撮影した。

その写真は……。

「……ああ、いいじゃないですか」

「まとも過ぎるくらいまともだ……」

梓は唯の写真を見て無難だという評価をしており、律は唯の写真が予想以上にまともだったことに驚いていた。

「ああ。これなら何の問題もないとは思われないがな」

統夜も唯の写真を見たのだが、問題のある部分は見当たらなかった。

そのため、この写真は問題なく見えた。

しかし……。

「うーん……」

唯は納得していないのか、渋い表情をしていた。

何故唯がこの写真に納得をしてないかというと……。

「……何か前髪長くない？」

前髪が長いと思っていたからであった。

「え？そそうですかね？」

『俺様も問題はないと思うがな』

「ううん。やっぱりちよーつとだけ長いよ……」

梓とイルバがフォローを入れるのだが、唯はやはり前髪の長さになんて納得していないよう

だった。

そのため、唯が取った行動とは……。

「切る！」

前髪を切ると決めた唯は、ハサミを取り出した。

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ！」

梓は唯を制止しようとするのだが、唯は「ふんす！」と気合をいれていた。

「切るなら美容院行ってこいよ！」

「美容院だったら前髪だけカットしてくれるだろう？」

藩の言うとおり、素人の唯が自分でやるより、プロである美容師にやってもらう方が無難であった。

「だって、美容院だと短過ぎるんだもん！切つてから1週間くらいしたらちよつと良くなるんだけどね。明日までに伸びないし……」

「だったらムギに切ってもらえ！」

「え!?私、そんな重要な役出来るかなあ……」

「それか、統夜に切ってもらえ！統夜、得意だろ？」

「……俺が切るのはホラーだけだ。だから専門外に決まってるんだろ……」

「大丈夫だよ！時々自分でやってるもん！」

統夜が魔戒騎士として切るのはホラーだけであり、人の前髪をカットするなどやったこともなかった。

統夜はジト目になっていたのだが、そうしているうちにも唯は机にティッシュを置き、その上で前髪を切り始めた。

統夜たちは息を呑んで唯のことを見守っていた。

唯は少しだけ前髪を切ると、髪を整えていた。

「……………どう?」

「ああ、いいじゃない?」

「それで行け!それで!」

これ以上ハラハラしたくないため、律はこれで唯を納得させたかったのだが…………。

「うーん…………」

唯は鏡を見て髪の長さをチェックしたのだが、前髪を少しだけ切ったにも関わらず、まだ納得していなかった。

「……………え!?!」

「ちよ!?!」

「『もうやめておけ!』」

律、滯、紬、梓の4人は未だ前髪の長さに納得していない唯に驚いており、統夜とイ

ルバはどうにか止めようとしていた。

しかし、そんなことなど気にすることなく、唯は再び前髪を切り始めた。

統夜たちは先ほどよりもハラハラしており、不安そうな表情で唯の様子を見ていた。

唯は前髪を切ろうとするのだが、こんな時に限って鼻がムズムズしてしまった。

そして……。

「ふえ……ふえつくし!!」

唯はくしゃみをした勢いのまま、前髪を切ってしまったのだが、その量はかなりのものであった。

「『『『あ……ああ……』』』」

取り返しのつかない状態になってしまい、統夜たちは絶句していたのだが、唯はとんでもないことになっていることにまだ気付いていなかった。

しかし、唯は鏡を見たのだが、前髪が眉毛の位置より短くなっていることにここでもうやく気付いた。

唯は鏡に映る自分を見て、しばらく固まっていた。

「き……切りすぎました……。ど、どう……かな……」

唯はようやく口を開いたのだが、事の重大さに口は震えていた。

さらに、顔は冷や汗でびっしりになっていた。

「う、うん！」

「すつごく似合ってるよ！」

「むちやくちや可愛いぞ！」

「はい！若返ったっていうか……」

濡、紬、律、梓の4人は必死に言葉を紡いで唯をフォローしようとしていた。

しかし……。

「……子供っぽいってこと……かな？」

「くはあ！」

唯は若返ったという言葉を悲観的に子供っぽいと捉えてしまい、唯のフォローに失敗した梓はその場でダウンしてしまった。

「ああ！でもさ、そこまで切ったなあって感じじゃ……」

「果たしてそうでしょうか……」

「ああ！」

濡も唯のフォローに失敗してしまい、その場にダウンしてしまった。

「あ……。あの……何て言うか……」

統夜もまた、必死に唯をフォローする言葉を考えていたのだが……。

『まあ、確かに子供っぽいですが、それはそれでいいんじゃないのか？』

「おい！イルバ！」

イルバは唯をフオローしようなどとは思っておらず、思ったことをハッキリと言っていたため、統夜はイルバをたしなめた。

しかし、それは手遅れであり、唯はそのハッキリとしたセリフを聞いて……。

「あうう……。卒アルなのに……。グス……。ヒック……。一生残る写真なのに……」

唯のショックは計り知れないもので、その場で号泣していた。

「……誤魔化せ！これで誤魔化せ！」

律は自分のカチューシャを外して、それでどうにか誤魔化そうと唯に手渡そうとした。

「いや、おでこだけは勘弁していただきたい」

唯はおでこを出すのが嫌だったのか、カチューシャに拒否反応を示していた。

「くうう……。すまなかつた！」

律はガツクリと肩を落としたが何もしてやれないことを詫びていた。

「……ちよつと横に流したらいい感じになるんじゃない？」

紬は唯の前髪をハッキリと見るのだが、誤魔化す余地がありそうだと判断し、短くなつた前髪を横に流していた。

「……ほら、これでいい感じよ」

紬は唯に鏡を見せるのだが、唯は不安そうな表情をしていた。

「…………どう?」

「うん! いい、いい!」

「ああ、悪くないよ」

「可愛くなった!」

「はい!」

律、統夜、漣、梓の4人はこう言っていたのだが、4人は心の底からこう思っていた。

「…………ほんと?」

「はい! 何か垢抜けた気がしますよ!」

梓はさらにダメ押しで思ったことを唯に伝えていた。

「エへへ…………。そうかなあ…………」

唯は照れ隠しに笑っていた。

統夜たちはこのままティータイムを行うことにした。

この日のおやつは唯の大好きなモンブランであった。

「…………おいひい♪」

大好きなモンブランを頬張り、幸せそうな表情をしていた。

統夜たちは幸せそうにモンブランを頬張る唯を見て、穏やかな表情で笑みを浮かべて

いた。

すると、律は自分のモンブランの栗を、唯に譲っていた。

「え？りっちゃん、いいの？」

「いいよ」

「わああ……♪」

唯は栗を譲ってもらい、ぱあつと表情が明るくなった。

すると、滯と紬も自分の栗を唯に譲っていた。

「ん？……うおおー！」

唯は自分のところに栗がさらに増えたことに驚いていた。

「もお、甘やかし過ぎじゃないですか？」

「まったくだ」

梓と統夜はこう言いながらも自分の栗を唯に譲っていた。

「おお!!」

唯は全員から栗をもらい、さらに表情が明るくなっていった。

「みんな……♪ありがとお♪」

唯は栗を譲ってくれたことにお礼を言っており、統夜たちは笑みを浮かべていた。

《やれやれ……。みんな揃って甘やかし過ぎだろ》

(まあまあ、今日くらいは許してやれよ)

イルバは全員が唯に栗を譲ったことに呆れていたが、統夜はこう言つてイルバをたしなめていた。

この日はティータイムのみで練習は一切行われなかった。

部活が終わつて解散すると、統夜はこの日も番犬所へと向かった。

しかし、この日も指令はなかったため、街の見回りを行つてから家路についた。

※※※

翌日、この日は卒業アルバム用の個人写真を撮る日だった。

唯は短い前髪のシヨックから未だに抜け出せずにいた。

唯は登校してからというものの、ずっと布で頭を隠していた。

しかし、それを見かねた紬がそんなことをしているとおやつを抜きにすると、

唯はあっさりと布を外した。

こうして、個人写真撮影の時間が来た。

滯の一番が近付いてきており、紬は滯の髪をくしでといていた。すると……。

「秋山さん」

「は、はい！」

「怖くないからね♪」

「よし、行つてこい！」

滯が呼ばれ、滯は緊張しながらも写真を撮る場所へと移動した。

滯は写真を撮る場所へ移動し、椅子に座ろうとしたその時だった。

「みおちゃん!!」

「頑張つて！リラックスリラックス！」

唯と紬が大きな声で声援を送っており、それを聞いていたクラスメイトたちはクスクスと笑っていた。

(……かえって恥ずかしいんだけど……)

声援を送られたのは逆効果だったようで、滯は恥ずかしさのあまり頬を赤らめていた。

「……1回深呼吸だ！」

そんな中、律は濡りにリラックスしてもらったために深呼吸をするようアドバイスをした、

律のアドバイス通り1度深呼吸したことで落ち着いた濡は、どうにか無事に写真撮影は終わった。

その後も写真撮影は続いていき、紬、律、統夜の3人の撮影は終わった。

「ああ！次私だ！」

次は唯の出番であり、唯は慌ててリップクリームを塗っていた。

そして律と紬が制服のリボンや髪などの身だしなみを直していた。

「……行ってくるね！」

唯は覚悟を決めて写真撮影を行う場所へ移動してその椅子に座るのだが、座ってからも短くなってしまった前髪を左右に分けていた。

どうにか準備が終わったかと思えば、ピースをしてふざけていたところをさわ子に注意されていた。

それからはどうにか無事に写真撮影を終えることが出来て、唯は統夜たちのところへ戻ってきた。

「……ああ、秋山さん」

「は、はい」

「後で職員室にいらっしやい」

「はっ、はい」

滯はさわ子に呼び出しをされたので、休み時間に職員室へと行くことになってしまった。

そして休み時間になると、滯はまっすぐ職員室へ向かい、さわ子と話をしていた。

統夜たちは、職員室の入り口で滯が戻ってくるのを待っていた。

「……失礼しました」

統夜たちが待つこと数分後、滯は職員室から出てきた。

「……みおちゃん。呼び出していったいなんだったの？」

「……」

滯は浮かない表情のまま口をつぐんでいた。

「……もしかして、推薦入試断ったとか？」

「「えっ!?!」」

「う、うん……」

滯が推薦入試を断つたことを知った統夜、唯、紬の3人は驚きを隠せなかった。

滯はかねてから推薦入試を目指しており、今の滯の成績なら問題ないとさわ子から太鼓判をもらったばかりであった。

「……だけど、何でそれを？」

律が推薦入試を断つたということを言い当てたことに滯は驚きを隠せなかった。

「やっぱりなあ。推薦の書類忘れるなんて、滯らしくないなって思ってたさ」

「でも、何で断つたの？」

「滯の成績だったら推薦も問題ないんだろ？もつたいなくないか？」

「……」

推薦入試というのはそもそも成績が良くないと厳しいものであり、それを断るとい
うのはもつたいない話だった。

滯は推薦を断つた理由をなかなか語ろうとはしなかった。

しばらく黙った後、滯は覚悟を決めて語り始めた。

「……あのさ……」

「「「ん？」」」

「……私も、みんなと一緒に勉強して、出来たら……出来たらだけど、私も、一緒の大学

に行けたらなつて。統夜は魔戒騎士の仕事があるから無理なのは仕方ないけど……」
「二緒の大学つて……。唯、律、お前ら、まさか……」

統夜は滯の気持ちに驚いていたが、それ以上に唯と律の2人がどこの大学に行こうとしてるのかを察して驚いていた。

「……うん、私たち、ムギちゃんと同じ女子大に行きたいって思ってるの」

「……やっぱりそういうことか……」

統夜が察した通り、唯と律は紬が狙っている女子大を直指すことを決めていた。

『……おいおい、そこの大学はレベルが高いんだらう？大丈夫なのか？』

イルバは、唯と律の2人がその女子大を受けることは無謀と思っていたので、心配していた。

「うん！確かに無謀かなとは思うけど……」

「あたしたちは自分の意思でそこの大学へ行きたいと思っただんだよ」

唯と律の意思は固く、生半可な気持ちで言っているわけではなかった。

「……そつか……。大変かもしれないけど、頑張れよ」

唯や律だけではなく、滯の気持ちも汲み取った統夜は、笑みを浮かべながら4人を応援していた。

「うん！」

「ありがとな、統夜！」

「俺はみんな揃って同じ大学に受かるよう応援するよ」

4人の行きたい大学が同じだと知り、統夜は安堵していた。

本当に4人揃って合格すれば、大学を卒業するまでは4人がバラバラになることはないと思つたからである。

自分は魔戒騎士の仕事しながらでも4人に会おうと思えば会えるため、卒業して離ればなれになることはないと考えていたため、統夜は安堵していたのである。

「うん！統夜君、ありがとう！」

「やーくんも同じ大学に行けたらもつと最高なんだけどね」

「おいおい……。俺は男だぞ？それに、俺は魔戒騎士の仕事があるからな」

統夜は唯の希望を聞くと、苦笑いをしていたが、それが冗談だということも察していた。

「そういえばさ、統夜は高校卒業しても桜ヶ丘からは離れないのか？」

「そのつもりかな。まあ、異動の命令があればわからないけどな」

『ま、イレズがお前さんを手放そうとはしないだろうし、大丈夫だろう。それに、お前さんは元老院行きの話を断ってるしな』

統夜は滯からの質問に答え、イルバが補足説明を行っていた。

「元老院つて確か……。番犬所の上の機関……。だったわよね？」

「お前、それを断つたのか？それこそもつたいない気がするけど」

「アハハ、よく言われるよ。だけどさ、俺はこの街が大好きなんだ。だから、この街を守りたい。それに、俺は大好きな街を守ってる方が性に合ってるしな」

統夜はイレスから元老院行き話を勧められた時も、そのような理由で断っており、今もその考えは変わっていなかった。

「そつか……。やーくんも頑張つてね！」

「おう。俺はずっと続けるつもりだぜ。魔戒騎士として、多くの人を守っていくつてことをな」

統夜の魔戒騎士としての生活はむしろこれからが始まりであり、守りし者という終わることのないレールの上を走り続ける覚悟だった。

こうして、卒業アルバム用の個人写真の撮影が終わったただけではなく、唯たち4人が同じ大学を目指すことになった。

※※※

そして翌日……。

「「……………さわ子先生！」」

とある休み時間に唯、律、滯の3人は職員室を訪れていた。

「あら、どうしたの？3人揃って」

「進路希望用紙、出しに来ました！」

唯、律、滯の3人は同時に進路希望用紙をさわ子に差し出した。

さわ子は3人から受け取った進路希望用紙をチェックしており、3人はその様子を不安げに眺めていた。

チェックを終えたさわ子は、穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

「……………はい、受け取りました」

3人の希望は無事を通り、進路希望用紙は受理された。

「やったあ！」

唯たちは進路希望用紙が受理されたことに安堵していた。

「頑張つてね。4人揃って一緒の女子大に行けるといいわね」

「「はい！」」

唯たちはこのように返事していた。

統夜と紬は職員室の入り口でその様子を見守っており、進路希望用紙が受理されると、2人揃って笑みを浮かべていた。

「……やったね、統夜君♪」

「ああ、良かったな、ムギ」

統夜と紬はハイタッチを行い、その後紬はその場でステップを踏んで喜びを表情していた。

（……みんな、頑張れよ。俺は4人揃って同じ大学に行けることを祈ってるからな……！）

統夜は口には出さないものの、唯たちが4人揃って合格することを心の底から祈っていた。

こうして唯たちの進路は決まり、ここから先は受験に向けての勉強が本格的に始まるのであった。

………続く。

—— 次回予告 ——

『ようやく唯たちの進路が決まったのはいいが、厄介な奴が蘇りやがったぜ！次回、「怨念」。黒き怨念が牙をむく！』

第96話 「怨念」

……今からおよそ1年と数ヶ月前、闇に堕ちて暗黒騎士の力を手に入れた魔戒騎士、ディオスは、メシアの腕と呼ばれたホラー、グオルブを復活させようと企んでいた。

企み通りグオルブを復活させたのは良かったのだが、グオルブは紅の番犬所に所属する若き魔戒騎士、月影統夜や、黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙らの手によって討伐された。

そして、ディオス自身も、統夜に討伐され、その肉体は暗黒騎士の鎧と共に消滅した。しかし、それでも消滅せずに残っているものはあった。

それは、ディオスが統夜に対して抱いている「恨み」である。

ディオスは統夜に自らの計画を潰されただけでなく、統夜自身に討伐されたため、その恨みは大きいものだった。

ディオスの統夜に対する恨みは怨念となり、陰我と共に集まりつつあった。

——おのれ……。月影統夜……。このままではすまさんぞ……。！どのような形だろうと俺は貴様に復讐してやる……！

ディオスの統夜に対する憎悪が陰我の塊となり、その陰我はとあるオブジェに現れて

いった。

そして、それからすぐオブジェから飛び出し、それが何かへと実体化していった。

ホラーは陰我あるオブジェをゲートに人間に憑依し、人間を喰らうため、ディオスの憎悪による陰我の塊が実体化したのはホラーではなかった。

それはホラーではなかったのだが、魔戒騎士の鎧に酷似したものであった。

魔戒騎士の鎧に酷似した邪気の塊が実体化した翌日、イレスは統夜や戒人が討伐し、その穢れを浄化した時に現れた短剣が12本になったため、それを魔界へと強制送還しようとしていた。

ホラーを討伐するのは魔戒騎士の仕事なのだが、魔戒騎士が封印したホラーを魔界へと強制送還させるのは番犬所の神官の仕事だった。

ホラーを封印した短剣が何故12本になったら魔界へ強制送還するかというと、12という数字は魔を払う数字と言われているためだからである。

イレスはいつものようにホラーを封印した12本の短剣を魔界へと強制送還したのだが……。

「……………？何でしょう……………。おかしいですね……………」

強制送還が終わった瞬間、イレスは違和感を感じていた。

今送った短剣が魔界に到着せずにごそつと無くなってしまうような違和感であった。

「……………!!イレス様！何者かがホラーの短剣を奪ったようです！」

異変を感じ取ったイレスの付き人の秘書官はイレスにそのことを報告していた。

「それは本当ですか!？」

「はい。恐らくは短剣が魔界にたどり着く直前に何者かが奪ったのでしよう」

「……………今すぐ統夜と戒人を呼び出してください！ホラーを封印した短剣を野放しにしたらとんでもないことが起きると言われていますからね」

「かしこまりました！」

イレスの付き人の秘書官は、イレスの指示どおり、統夜と戒人を呼び出していた。

「……………何でしょう……………。この胸騒ぎは……………。何もなければ良いのですが……………」

何故か胸騒ぎを覚えていたイレスは、不安げな表情をしていた。

※※※

卒業アルバムの個人写真を撮り、唯たち4人の進路が決まり、本格的に受験勉強を始めてから1ヶ月ほど経過し、いつの間にか12月になっていた。

この日も唯、律、漣、紬の4人は、音楽準備室で受験勉強を行っており、統夜は梓のギター練習に付き合っていた。

統夜たち5人は学園祭が終わった後、そのまま軽音部を引退という形にはなっていないのだが、統夜たちにとって音楽準備室は居心地が良かったため、居ついているのである。

唯たちは受験勉強という名目があるのだが、統夜は何の名目もないため、梓のギター練習に付き合いながらその後はティータイムに参加するというのが定番になっていた。

この日も、唯たちが勉強する中、統夜と梓はギターの練習を行っていた。

「……………なあ、梓。このフレーズなんだけどさ……………」

統夜は梓とセッションを行い、そこで気になった部分を指して、こうすれば良くなるんじゃないかと指摘していた。

「ああ、なるほど……………！確かに、その方がいいかもしれないですね！」

梓は統夜からの指摘を真摯に受け止めて、それをギターテク向上の糧にしていた。

「さすがは統夜先輩です！毎日毎日凄く勉強になります！」

「アハハ、そうか？俺なんかでも梓の力になれるのは嬉しいよ」

「ふえっ!? そ、そんな……」

統夜のストレートな言葉が恥ずかしかったのか、梓の顔は真っ赤になっていた。

「「「……」」」

唯たち4人はそんな統夜と梓の様子をジト目で見ていた。

「……いいなあ、あずにゃん」

「統夜君と2人つきりで練習だもんね……」

「……どうしても気になるんだよなあ……」

「そうだよな。何てったって、統夜とのプライベートレッスンだしな」

「……おいおい、お前らは勉強に集中しろよ……」

勉強そつちのけでこちらを見ている唯たちに統夜は苦笑いをしていた。

しかし、梓は律の言ったプライベートレッスンという言葉が気になったようで……。

「……統夜先輩と……プライベート……レッスン……」

梓は頭の中でいらぬ妄想をしていた。

く梓の妄想く

『……統夜先輩……』

『……梓……』

周囲は何故かキラキラした空間で、統夜が優しく梓を抱きしめる。

『……俺のとびつきりの愛、お前にレッスンしてやるぜ』

『……イエス、プリーズ……♪』

『……I love you……』

統夜が梓を力強く抱きしめる……。

――妄想終わり。

「……Me too……」

梓は未だに妄想から抜け出せていないのか悦に浸っていた。

しかし……。

「……あ、あずにゃん！鼻血鼻血!!」

「ハッ!!」

梓は唯に指摘されたことで、自分がダラダラと鼻血を出していることに気付いた。

「つたく、しょうがねえなあ」

統夜はティッシュを取り出すと、梓の鼻血を拭き取ってあげていた。

「ふえ!?と、統夜先輩!？」

「いいから、ジツとしてろ」

「は、はい……」

梓の顔は真っ赤になり、梓はその場で硬直していた。

(ど……どうしよう!?また鼻血が出ちゃいそうだよお……!)

現在、統夜は梓の鼻血を拭き取っているため、かなり至近距離まで接近していた。

そのため、梓のドキドキは止まることはなかった。

(ほお……。これはこれは……)

イルバは予想もしていない出来事が起こっていることに対して口をカチカチと鳴ら

しながらニヤニヤしていた。

「「「……」」」

唯たちはそんな統夜と梓のやり取りをジツと見ていた。

「……なあ、みんな」

「「「……うん」」」

唯たち4人は、統夜と梓とのやり取りを見ながらとあることを話し合っていた。

その話を気付かぬまま、統夜は梓の鼻血を拭き終わっていた。

「……ま、こんなもんだろ。梓、ティツシユを鼻に詰めるのは窮屈かもしれんが、勘弁な」
「あつ、ありがとう……ございます……」

「ま、幸い制服に鼻血はついてないからそれは良かったな」

統夜はこう言いながら、ティツシユで床に落ちた鼻血を拭き取っていた。

ティツシユでさつとふき取ると、それをティツシユで包み、ゴミ箱へと捨てた。

「……さて、練習はこの辺にして、ひと休みしようぜ」

「は、はい。そうですね」

「ちようど良かったわ♪私たちも休憩しようと思っていたの。みんなでお茶にしましよ
う♪」

唯たち4人の話も終わったようで、紘がティータイムを提案していた。

統夜と梓が唯たちのもとへ行き、ティータイムを行おうとしたその時だった。

『……！統夜、残念ながらのんびりお茶をしてる暇はないようだぜ』

「……!?まさか、ホラーか?」

『わからん。だが、番犬所から呼び出しだぜ。それも大至急だそうだ』

「……!?わ、わかった。それじゃあ急いで向かわないとな」

番犬所から大至急の呼び出しと聞いた時、余程の事が起こっているのではないかと

推測していた統夜の表情は強張っていた。

そして、大急ぎでギターをギターケースにしまい、帰り支度を始めていた。

「……統夜先輩……」

梓は胸騒ぎを覚えており、不安げな表情で統夜の帰り支度を見守っていた。

「……みんな、ごめんな。そういうわけで、俺は行かなくちゃ」

「……統夜君、気をつけてね！」

「統夜、無理だけはするなよ！」

「あたしたちは統夜の無事を信じてるからな」

「頑張ってるね！やーくん」

唯たち4人は、統夜の無事を祈る言葉で統夜を見送ろうとしており、統夜はそんな言葉に頷いていた。

しかし……。

「……行かないでください……」

梓は統夜の羽織った魔法衣の袖をクイッと引っ張ると、統夜に行かないでと懇願していた。

「……梓？」

「あずにゃん？」

梓がそんな言葉を発するとは思っていなかったの、統夜だけでなく、唯たちも困惑していた。

「困らせるようなことを言って、すいません……。だけど、凄く胸騒ぎがするんです……。今行ったら、統夜先輩はそのまま帰ってこないんじゃないかって……」

「梓ちゃん……」

「もちろん、統夜先輩は魔戒騎士として使命を果たすために行かなきゃいけないのはわかってます……。けど……」

梓の表情は沈んでおり、唯たちは梓に何て声をかけてあげればいいのかわからなかった。

「まったく……。馬鹿だなあ、梓は」

こう言いながら笑みを浮かべた統夜は、梓の頭を優しく撫でていた。

「……どんな奴が相手だろうと、俺は死なない。必ずみんなのもとへ帰る。信じてくれないか？」

「……でも……」

「……俺は大切なみんなを守るって決めてるんだ。そう簡単には死ねないさ。だから、信じて待っていてくれ」

統夜は再び梓の頭を撫でると、優しい表情で微笑んでいた。

すると、梓は無言のままコクリと頷いていた。

「……ありがとな。それじゃあ、行ってくる」

統夜は手を放した後に音楽準備室を後にして、そのまま番犬所へと向かっていった。

「……統夜先輩……。無事に帰ってきてくださいね……」

統夜が音楽準備室を出た直後、梓はその様子を見つめながらこのように呟いていた。

※※※

「……あつ、統夜。来ましたね」

番犬所へ直行した統夜が番犬所の中へ入ると、イレスが統夜を出迎えていた。

統夜と同じく番犬所からの呼び出しを受けた戒人は、すでに来ており、統夜の到着を待っていた。

「統夜、待っていたぞ」

「おう」

統夜は戒人の挨拶を簡単な言葉で返していた。

「イレス様。俺と戒人が呼び出されたということは、何か指令ですか？」

「ええ。実は、今日あなたたちが封印したホラーの短剣を魔界へ強制送還したのですが、短剣が魔界へたどり着く瞬間に何者かがそれを強奪したのです」

「!？」

イレスから告げられた大きな事件の内容に、統夜と戒人は驚きを隠せなかった。

「……まさか、そんな……！ホラーを封印した短剣が奪われたことも驚きだけど、魔界へたどり着く瞬間に短剣を奪うなんて出来るわけが……」

『ああ。ただの人には出来ないだろうな。だが……』

『うむ。ホラーであればそれも可能かもしれないのお』

ホラーであれば、短剣が魔界へたどり着く瞬間に奪い取ることは可能ではないかとトルバは推測をしていた。

「それもただのホラーではありません。そのような芸当が出来るのは陰我が大きくかなりの力を持つホラーで、まだゲートから出てきていないホラーであれば成せるとは思いますが……」

「!?そんなことって、あるんですか!？」

『理論的には可能ただけだ。俺様もこのケースは初めてだからな』

魔導輪として長い時を生きているイルバでさえ、ホラーを封印した短剣が魔界へたど

り着く瞬間に奪われるというケースは初めてであった。

「どちらにせよ、短剣が奪われたというのは事実です。統夜、戒人、あなたたちは協力して奪われた短剣を取り戻してください。それが指令です」

「わかりました、イレス様！」

「ホラーを封印した短剣が奪われたとなると、放つてはおけません」

ホラーを封印した短剣が悪用されることを恐れていた統夜と戒人は、イレスからの指令を快諾していた。

「頼みましたよ、統夜、戒人」

統夜と戒人はイレスに一礼をすると、番犬所を後にして、2人でホラーを封印した短剣を奪ったホラーを搜索することにした。

『……統夜、1ついいか？』

ホラー搜索の途中、イルバが統夜に声をかけてきたので、統夜は足を止め、一緒にいた戒人も足を止めた。

「……どうした、イルバ？」

『お前さんは軽音部の誰と付き合うのか決めたのか？』

「は、はあ!?!何言ってるんだよ!?!」

イルバからの唐突な質問に統夜は頬を赤らめていた。

『俺様はずつと前から気になっていたんだ。お前さんはここ最近唯たちとかなり親しくなっているからな。5人の中で誰か好きな奴がいるのだろう?』

「ばっ、馬鹿!今はそれどころじゃないだろ!?!早くホラーを見つけないと!」

『まだホラーの気配はない。だからこそ、お前さんの気持ちをハッキリ聞いておきたいと思つてな』

「それは俺も気になるな。お前ら6人は本当に仲が良いからな。俺はてつきりその中の1人と付き合つてると思つていたが、違うんだな」

戒人も、ライバルである統夜の色恋事情には興味津々だった。

「か、戒人まで!?!」

『ホッホッホ。統夜、諦めて白状したらどうじゃ?』

トルバも興味があつたようで、統夜から話を聞き出そうとしていた。

「俺……俺は……」

統夜は困惑しながらも何て答えるべきかを考えていた。

統夜は色恋に關してはあり得ないくらい鈍感になるのだが、最近は少しづつ唯たちのことを女性として意識するようになってきていた。

その中でも、その一人に対して特別といえる気持ちを抱いていることに統夜は気付きつつあった。

「……俺が……好きなのは……」

統夜はじつくりと考え、答えを見出そうとしたその時だった。

『統夜、その続きは気になるが、それは後だ！ 強大な邪気を感じるぜ！』

「ああ……！ 確かにピリピリとした空気を感ずるぜ……！」

ホラーを探知出来ない統夜ですら、その邪気の大きさに冷や汗をかいており、その邪気の凄まじさがハッキリと分かる程だった。

統夜だけではなく、戒人もそんな邪気を感じ取っており、統夜同様に冷や汗をかいていた。

『……統夜、行くぞ！』

『遅れるでないぞ、戒人！』

「ああ！」

「わかつてる！」

統夜と戒人の2人は、それぞれの相棒のナビゲーションを頼りに、邪気の大きなポイントへと移動を開始した。

※※※

それから10分もかからずに目的の場所にたどり着いたのだが、そこは桜ヶ丘某所にある現在に使われていない広場だった。

『統夜、ここだぜ』

「ああ。何かさつきよりもピリピリとした空気が伝わってくるぜー！」
「そうだな……」

戒人もこの場に蔓延する強大な邪気を感じ取っており、2人揃って冷や汗をかいていた。

『2人とも！油断するではないぞ！』

「ああ」

「わかってる」

統夜と戒人はどこから何が現れるのか予想が出来ないため、魔戒剣を手に取り、いつ

でも抜刀出来る状態にしておいた。

……その時だった。

——久しぶりだな！月影統夜！！

どこからかはわからないのだが、突然男の声が聞こえてきた。

「……何者だ！それに、何で統夜の名前を!?」

戒人は、何故謎の声の人物が統夜のことを知っているのかわからないため、驚いていた。

一方、統夜は……。

(……！あの声、まさか……!!)

統夜は聞こえてきた声に聞き覚えがあり、その顔は真っ青になっていた。

ククク……。月影統夜……。忘れたか？この俺のことを……。

「忘れるわけないだろ……！ディオス……！」

「!?ディオスって確か……。統夜が倒した暗黒騎士……！」

戒人は統夜からディオオスの事件については聞いていたため、この声の主がディオオスであることに驚きを隠せなかった。

それは統夜も同様であり、統夜も驚きを隠せなかった。

「……ああ、そうだ。ディオオスは俺が倒したハズだ!」

—— そうだ。俺は貴様に倒されたさ……。だから厳密には俺はディオオスではない。ディオオスの怨念の塊……と言っておこうか……。

「ディオオスの怨念の塊……」

「ホラーを封印した短剣を奪ったのも貴様なのか!？」

—— いかにも……。ホラーを封印した短剣の力で、俺の実体を完全に蘇らせるためにな……。

ディオオスの怨念こそが、ホラーを封印した短剣を奪った張本人であり、その短剣の力を自身の復活に使うつもりだった。

「そんなこと……させるかよ!!」

統夜と戒人は魔戒剣を抜くと、どこにいるかわからないディオオスの怨念を警戒していた。

「ディオオス!姿を現せ!」

統夜は険しい表情で周囲を見回していた。

「まあ、慌てるな。姿は現わすき。だが、その前にこいつでお前の力を見せてもらう。」

「このようにディオスの怨念が語ると、突如地響きが起こった。」

「!?な、何だ!?」

「これはいったい……」

「統夜と戒人は、突如起こった地響きに驚きながら周囲を警戒していた。」

『……!!統夜、何か来るぞ!気をつけろ!』

『戒人!巨大な邪気の塊じゃ!油断するでないぞ!』

イルバとトルバは強大な邪気を感じ取り、それぞれの相棒に警告した。

地響きが収まると、巨大な邪気の実体化していた。

その邪気は動き出し、とある姿に実体化していた。

その姿とは……。

「……!?こ、こいつは、素体ホラーか!?」

「そうだけど、何でデカさだよ!!」

巨大な邪気は、素体ホラーの姿へと姿を変えたのだが、その大きさは素体ホラーとは比べものにならないくらい大きかった。

「ククク……!こいつは12本の短剣が一体化した姿。それだけ力は強大になっ

ているぞ。もし、こいつを倒すことが出来れば、俺の姿を見せてやろう！

「くそつ、ディオス！出てきやがれ……………つて!？」

統夜はディオスに向かって怒りの口調で叫ぶものの、その瞬間、12本の短剣の力が1つになった融合巨大ホラーが、統夜に襲いかかってきた。

統夜はとうにが攻撃をかわすのだが、その力は強大であり、まともに攻撃を受けたらひとたまりもなかった。

「くつ……………こいつ、何て力だよ!？」

融合巨大ホラーの攻撃をかわした統夜は、その力に驚愕していた。

『統夜！気をつけろ！そいつはディオスの言う通り、短剣の中に眠る12体のホラーが融合した姿だ！その力はかなりのものだぞ!』

「ああ、そうみたいだな」

先ほど、融合巨大ホラーの力を目の当たりにした統夜は、力がかかりのものだということを実感していた。

「統夜！ここでこいつを止めないと街に被害が出るぞ!」

「そうだな……………。鎧を召還して、一気にケリをつけよう!」

「ああ!」

統夜と戒人は、魔戒剣を構えると、融合巨大ホラーを睨みつけた。

統夜と戒人は、それぞれの魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

2人はそこから放たれる光に包まれた。

すると、戒人は、紫の輝きを放つガイアの鎧を身に纏った。

そして、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

鎧を召還した2人は、融合巨大ホラーに果敢に立ち向かい、皇輝剣と堅陣剣を一閃した。

しかし、12体分のホラーの力を持つ融合巨大ホラーに傷をつけることは出来なかった。

「なっ……!?!」

「こいつ……!?!何て硬さだよ!?!」

予想を遥かに越える融合巨大ホラーの頑丈さに統夜と戒人は驚愕していた。

融合巨大ホラーは反撃と言わんばかりに腕を振り回すと、統夜と戒人を吹き飛ばした。

「ぐう……!?!」

「くうう……!?!」

強大な力を持つ融合巨大ホラーの一撃を受けた統夜と戒人はかなりの勢いで吹き飛

ばされたのだが、2人が壁に叩きつけられそうになったその時だった。

「来い！白皇！」

「行くぞ！天陣！」

統夜と戒人は、魔導馬を召還し、壁に叩きつけられる衝撃を抑えることで、ダメージを最小限にとどめていた。

戒人は統夜と再会した時には魔導馬を得ていない戒人であったが、サバツクを終えて間もなくホラーを合計100体討伐し、内なる影との試練を乗り越えた。

その時に戒人は魔導馬の力を得た。

戒人の魔導馬は、天陣（てんじん）という名前であった。

魔導馬を召還した2人は、融合巨大ホラーに接近し、皇輝剣と、堅陣剣を一閃した。

魔導馬に乗った状態で、剣による攻撃の威力は少し上がったものの、融合巨大ホラーにダメージを与えることは出来なかった。

「……やっぱり硬いな……」

「そうだな。こうなったら……」

統夜は、白皇の力を用いて、皇輝剣を皇輝斬魔剣に変化させた。

その状態で、統夜は融合巨大ホラーに向かっていき、皇輝斬魔剣を振るうのだが……。

「……………?!?!?!いつでもダメか……」

皇輝斬魔剣の一撃で、融合巨大ホラーにダメージを与えることは出来たものの、致命傷とはいかず、融合巨大ホラーはピンピンとしていた。

統夜の一撃に激昂した融合巨大ホラーは、反撃と言わんばかりに統夜目掛けてパンチをお見舞いした。

「があっ……い！」

融合巨大ホラーの一撃は強烈で、それを受けただけで、白皇の召還は解除されてしまった。

統夜はそのまま壁に叩きつけられてしまい、その時の衝撃で、鎧が解除されてしまった。

「うっ……くっ……い！」

壁に叩きつけられた統夜のダメージは相当なものだったが、フラフラになりながらもどうにか起き上がっていた。

「統夜!!」

融合巨大ホラーの一撃を受けた統夜を心配して戒人が声をあげるのだが……。

『戒人！よそ見をしとる場合じゃないぞい!!』

「!？」

統夜のことを気遣うことで隙が出来てしまい、戒人は融合巨大ホラーのパンチをモロ

に受けてしまった。

この一撃で、天陣の召還は解除されてしまい、戒人もまた、壁に叩きつけられてしまった。

その時の衝撃はかなりのものであり、戒人もまた、鎧が解除されてしまった。

戒人もフラフラになりながら立ち上がるのだが、2人とも、融合巨大ホラーの一撃だけでかなりのダメージだった。

『統夜！急いで体勢を立て直せ！このままじゃまずいぞ！』

「わかって……るよ……！」

統夜はフラフラになりながらも魔戒剣を構えるのだが、融合巨大ホラーがゆっくりと統夜と戒人に近付いてきた。

「……諦めて……たまるかよ……！」

唯たちに生きて帰ると約束した統夜は、強大な敵を相手にしてもなお、諦めてはいなかった。

そんな統夜の思いを打ち砕くべく、融合巨大ホラーが統夜と戒人にトドメを刺そうと2人目掛けてパンチを放った。

「……っ!?!」

統夜と戒人は迫り来る拳に息を飲むが、2人で協力してどうにか攻撃を受け止めよう

としていた。

その時、複数の銃弾のようなものが飛び出し、それは融合巨大ホラーの顔面に直撃した。

その銃弾のようなものはさらに爆発を起こすと、その状態で、融合巨大ホラーはその場に倒れ込んだ。

「……………!?今の攻撃、まさか……………」

統夜と戒人は、危機を救ってくれた攻撃方法に心当たりがあった。

統夜と戒人を救った人物とは……………。

「統夜、戒人！どうやら苦戦してるようだな！」

「アキト！」

「どうしてここに？」

統夜と戒人の危機を救ったのは、魔戒法師であり、レオの1番弟子を自称しているアキトだった。

しかし、アキトは元老院付きの魔戒法師のため、ここにいることに2人は驚いていた。「……………ん？どうしてかって？たまたま桜ヶ丘に遊びに来たら嫌な気配を感じてな。イレヌ様から事情を聞いて助太刀にきたって訳だ」

アキトが何故ここにいるかということを経夜と戒人に説明していた。

「なるほど……。助かったぜ、アキト！」

「なあに、気にすんなよ。それに……」

アキトが融合巨大ホラーに視線を向けると、融合巨大ホラーはゆっくりと立ち上がった。

「こいつを倒さなきゃいけないんだろ？」

「……ああ、そうだな」

「統夜、戒人。お前ら、まだ戦えるか？」

アキトは、先ほどの戦いでダメージを負っていたであろう統夜と戒人のことを気遣っていた。

「ああ、当然だ」

「それに……。俺と戒人とアキト……。この3人が揃えば、倒せない敵はいない!!」

統夜は、戒人とアキトと共に戦えば、どんな困難も乗り越えられると確信していた。

「……統夜、戒人！ 鎧を召還して、魔導馬を呼んでくれ。戒人、お前は魔導馬を呼び出せるよな？」

「ああ！ 問題ない！」

「俺に考えがある。3人で奴を倒すぞ！」

「「ああ！」」

アキトを信じてその考えを実行しようと考えていた統夜と戒人は、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。そして、戒人は、紫の輝きを放つガイアの鎧を身に纏った。

それと同時に、統夜と戒人はそれぞれの魔導馬である、白皇と、天陣を呼び出し、魔導馬に跨った。

「……統夜、魔導馬の力で武器を強くするんだ！」

「ああー！」

統夜はアキトの指示通りに白皇の力で、皇輝剣を皇輝斬魔剣に変化させた。

アキトは続けて指示を出そうとするが、融合巨大ホラーが3人に迫ってきた。

「……………いつで動きを止める!!」

アキトは魔戒銃にとある弾を装填すると、融合巨大ホラーの足元目掛けて発砲した。

その弾丸は融合巨大ホラーの両足に着弾すると、そこから冷気が飛び出し、融合巨大ホラーの足が凍りついてしまった。

「おおー凄いなー！」

統夜は、魔戒銃の力に改めて感嘆していた。

「へへっ、新型の弾の実験は大成功だな！これで少しの間だけ、奴の足止めが出来るはず

だ！」

この氷の弾は、アキトの新作であり、この弾に着弾した相手を一定時間凍らせるといった優れたものだった。

しかし、まだまだ実験段階であり、それがどれだけ効果的なのかは未知数だった。

しかし、攻撃の準備を整えるには十分だった。

「……統夜、戒人！2人とも、烈火炎装の状態になってくれ！」

「わかった！」

「承知！」

統夜と戒人は、アキトの指示通り、魔導馬に乗った状態のまま、烈火炎装の状態になった。

統夜は全身に赤の魔導火を、戒人は全身に黄緑の魔導火を身に纏った。

それを見ていたアキトは魔導筆を取り出すと、法術によって魔導火のような炎が放たれた。

「統夜、戒人！俺たちの力を合わせるぞ！そうすれば、奴を倒せるはずだ！」

アキトの考えた作戦こそ、統夜、戒人、アキトの力を一つにまとめ、それを融合巨大ホラーにぶつけるといったものだった。

『なるほどな。それならあいつ相手でも勝機はありそうだぜ！』

『戒人！迷ってる暇はなさそうじゃぞ！』

トルバがこのような警告をしたその時、融合巨大ホラーの足止めをしていた氷が溶けてしまい、融合巨大ホラーは再び統夜たちに向かってきた。

「……やろうぜ！戒人、アキト！」

「おう！」

「行こうぜ！」

統夜の号令で、3人は散り散りになり、それぞれ融合巨大ホラーに向かっていった。

「……戒人!!」

まず最初に、アキトが魔導筆から放った炎を、戒人目掛けて放った。

アキトの放った青い炎は、戒人の体に纏われ、戒人の体には、黄緑と青い炎が纏われた。

戒人はその状態で融合巨大ホラーに向かっていくと……。

「……統夜!!」

戒人は融合巨大ホラーをギリギリまで引き付けると、2つの炎を統夜目掛けて放った。

その直後に戒人は堅陣剣を一閃し、融合巨大ホラーの足を止めた。

「……受け取ったぜ！みんなの力！」

統夜の体に黄緑の炎と青い炎が纏われ、統夜の体には赤い炎と黄緑の炎、そして青い炎が纏われた。

そして、皇輝斬魔剣の切っ先にも赤と黄緑と青の炎が纏われていた。

この形態は「三炎業破（さんえんごうは）」。統夜、戒人、アキトの3人の力が1つになった形態で、今までにない程の攻撃力を得ることが出来る。

この技は、統夜、戒人、アキトの3人の心が1つになっているからこそ放つことの出来るコンビネーション技であった。

戒人が融合巨大ホラーの足止めをしてくれたことを活かそうと考えていた統夜は白皇を走らせ、融合巨大ホラーに向かっていった。

融合巨大ホラーは、そんな統夜を葬ろうとパンチを繰り出すが、白皇は大きくジャンプして、攻撃をかわした。

そのため、融合巨大ホラーに攻撃を仕掛ける最大のチャンスが訪れた。

「はあああああああああああああ!!」

統夜は獣のような咆哮をあげながら、3つの炎を纏った皇輝斬魔剣を一閃した。

融合巨大ホラーはその巨大な体で、巨大な炎の刃を受け止めていた。

「ぐっ……ぐう……!!」

統夜は皇輝斬魔剣を振り抜こうとするが、融合巨大ホラーの体は硬く、上手い具合に

切り裂くことが困難だった。

しかし……。

「負けて……たまるかああああああ!!」

統夜は維持と気合だけで、再び皇輝斬魔剣を一閃した。

今度は融合巨大ホラーの体を切り裂くことに成功し、融合巨大ホラーの体は真つ二つになった。

統夜、戒人、アキトの決死の攻撃によって真つ二つに斬り裂かれた融合巨大ホラーは断末魔をあげ、その体は、爆発と共に消滅した。

「はあ……はあ……はあ……」

融合巨大ホラーを討伐するのに全ての力を使い切った統夜は、白皇の召還解除と共に、鎧を解除した。

それと共に地面に着地した統夜だったが、そのまま膝をついていた。戒人も鎧を解除し、アキトと共に統夜に駆け寄った。

「……統夜、大丈夫か？」

「ああ……。なんとかな……」

「統夜、やったな」

「ああ。俺たち3人が力を合わせたから、あいつを倒せたんだよ」

統夜は、融合巨大ホラーを打ち倒せたのは、3人の力が1つになった結果だと確信していた。

それは戒人もアキトも同じ気持ちであり、2人は笑みを浮かべていた。

こうして統夜たちは、笑みを浮かべていたのだが……。

やるじゃないか、月影統夜！まさか、本当にあれを打ち倒すとはな。

勝利の余韻を打ち砕くように、ディオスの怨念の声が聞こえてきた。

「でい……ディオス！いい加減姿を現せ!!」

統夜は先ほどの戦いで消耗していたが、フラフラになりながらもゆっくりと立ち上がった。

ククク……。いいだろう……。貴様らがあいつと戦っている間に俺も完全に実体を手に入れることが出来た……。貴様らに見せてやろう。

ディオスの怨念がこのように告げると、統夜たちの目の前に黒い邪気の塊が現れ、それが収束していった。

すると、統夜たちの目の前に現れたのは、禍々しい邪気を放った漆黒の鎧だった。

「……貴様が……ディオスカ！」

統夜たちの目の前に立ちはだかった漆黒の鎧こそ、統夜に倒されたはずの暗黒騎士ゼクスこと、ディオスであった。

「……フン。今の俺は、ディオスではない。我が名はゼクス。暗黒騎士だ」
「ふ……ぎけるな!!」

統夜は怒りに満ちた表情で、ゼクスを睨みつけていた。

「貴様は騎士なんかじゃない！お前はホラーと同じだ！」

「そうだ！そして、俺たちはホラーを狩る魔戒騎士と魔戒法師だ!!」

統夜だけではなく、戒人とアキトもゼクスを睨みつけていた。

「貴様が月影統夜と共に戦いし者か。……悪いが、貴様らに用はない。俺は月影統夜を殺せればそれで良いのだからな」

「そんなことさせるか！貴様は俺が斬る！」

戒人は魔戒剣を構えると、それを前方に突き出し、円を描くと、その円目掛けて走り出した。

そのことで、戒人は再びガイアの鎧を召還し、ゼクスに向かつていった。

「……フン、愚か者が……！」

ゼクスは笑みを浮かべると、剣を一閃することで放たれる邪気の刃を、戒人目掛けて放った。

戒人は堅陣剣で邪気の刃を受け止めようとするが、先ほどの戦いでかなり体力を消耗していた戒人はゼクスの攻撃を受けきけることは出来なかった。

「があっ!!…………ぐうう…………」

ゼクスの一撃で壁に叩きつけられた戒人は、そのまま鎧が解除されてしまい、その場に倒れ込んだ。

「戒人!!…………貴様あ!!」

「統夜!無茶だ!」

戒人がゼクスに倒されてしまい、その怒りから統夜も鎧を召還してゼクスに向かつていくが、戒人以上に消耗している統夜がゼクスと戦うのは無謀としか言えなかった。

アキトは懸命に止めようとするが、統夜はそのままゼクスに向かつていった。

「フン…………。愚かな…………。そのダメージで俺を倒せると思うなよ!」

「はあっ!!」

統夜は渾身の力を込めて皇輝剣を一閃するが、その一撃は、ゼクスの盾によって軽々と受け止められてしまった。

「自分の状態を鑑みず向かってくるとは、それで成長したつもりか?」

「何だと…………!?!」

「貴様など所詮は未熟な小僧。それを俺が証明してやる」

ゼクスは盾を押し出して統夜を吹き飛ばすと、烈火炎装を発動し、その体は紫の炎に包まれた。

烈火炎装を発動したゼクスは、すかさず紫の炎の刃を、統夜目掛けて放った。

統夜はその一撃を皇輝剣で受け止めようとするが、ボロボロの統夜に受け止められる訳もなく、戒人のように壁に叩きつけられてしまった。

「ぐあっ!!」

その衝撃で鎧が解除されて、統夜はその場に倒れ込んだ。

「くっ……くっ……まだだ……!」

統夜はどうにか起き上がろうとするが、力を完全に使い果たしてしまったため、起き上がることは出来ず、そのまま気を失ってしまった。

「統夜!」

「ククク……。後は魔戒法師。貴様だけだ……」

ゼクスは統夜と戒人を倒して勝ち誇ったかのように、アキトのことを見ていた。

「貴様を始末して、月影統夜にトドメを刺してやる!」

ゼクスは、この場で憎悪している統夜を始末しようと考えていたのである。

(……くっ……このまま真っ正面から向かってもらわれるだけだ。こうなったら……)

アキトは、ゼクスとの実力差をすぐさま分析すると、今戦っても全滅するだけと判断していた。

そこで、アキトは爆弾のような形をした魔導具を取り出すと、それをゼクス目掛けて

投げつけた。

「……愚かな。そんなもの！」

ゼクスは魔戒剣でアキトの魔導具を切り裂くのだが、その瞬間、大量の煙がゼクスを包み込んでいた。

この魔導具はアキトの開発した魔導具であり、煙玉のような効果を持つ魔導具だった。

アキトは、ゼクスの視界を遮ることで、この場は退却して体勢を立て直すことにした。ゼクスは煙を払うのだが、その時には既に統夜たちの姿はなかった。

「……フン、逃げたか。まあ、いい。月影統夜に恨みを晴らすために色々と楽しませてもらおうか」

ゼクスはこの場で統夜を殺せなかったのは惜しいと思っていたが、それはそれで、統夜への恨みを晴らす良い機会であると考えていた。

ゼクスは統夜への恨みを晴らす方法を考えるため、その場から姿を消していた。

※※※

「……く、くそ……！さすがに今回はヤバかったな……。さすがは師匠を手こずらせた暗黒騎士だよ……」

暗黒騎士ゼクスこと、デイオスの話を、アキトは統夜やレオから聞いていたため、強いということを知っていたが、その実力を身を持って思い知った。

現在アキトは、先ほどゼクスと戦った場所から一キロ程離れたところを歩いており、統夜と戒人を運びながら歩いてきたため、その足取りはゆっくりだった。

「……それにしても参ったな……。この2人をどこで休ませるべきか……」

アキトは、気を失っている統夜と戒人をどこで休ませるべきかわからず、ひたすら歩きながら途方に暮れていた。

その時であつた。

「……あれ？アキトさん？」

偶然にも家に帰る途中だった唯たちとアキトは遭遇したのであつた。

唯たちはアキトの姿を見つけると、さらにあることに気付いていた。

それは……。

「……!? やーくん!! それに、戒人さん!!」

「どうしたんですか!?!ひどい怪我じゃないですか!」

唯たちはボロボロになってしている統夜と戒人の姿を見つけると、そんな2人を抱えているアキトに駆け寄っていた。

「そんな……統夜先輩……!」

ボロボロになった統夜を見て、梓の顔は真っ青になっていた。

「心配するな。統夜も戒人も気を失ってるだけだ。命に別状はない」

アキトはとりあえず統夜と戒人の無事を伝えると、梓を除く4人は安堵していた。

しかし、梓だけはボロボロな統夜を見て泣きそうになっていた。

「あずにゃん……」

唯はそんな梓の気持ちがかかるため、悲痛な面持ちをしていた。

「とりあえずこいつらを休ませたいんだが、お前ら、どこかいとところは知らないか?」

アキトは、唯たちに統夜たちを休ませられる場所がないかを聞いていた。

「……ちよつと待つてて」

紬は携帯を取り出すと、どこかへと電話をかけた。

「……あつ、もしもし、斎藤?至急車を出して欲しいの……。場所は……。うん……。お願いね」

紬は琴吹家の執事である斎藤に電話をかけると、車を出すように連絡していた。

「少し待っててください。今車が来るので」

「あつ、ああ」

アキトは、紬の呼んだ車が来るまで、その場で待つことにした。待つこと数分後、一台のリムジンがアキトたちの前に止まった。

「り……リムジン!?!」

アキトはリムジンの存在を知っていたのだが実物を見るのは初めてで、驚きを隠せなかった。

アキトが驚きながらも、リムジンの運転席から琴吹家の執事である斎藤が出てきた。

「お嬢様。お待たせいたしました」

「お……お嬢様?」

アキトはなんのことやらわけがわからずポカーンとしていた。

「斎藤、この2人、怪我をしているの」

「かしこまりました。ただちに車に乗せましょう」

アキトたちは、斎藤に手伝ってもらい、統夜と戒人をリムジンの中に乗せ、唯たちもリムジンに乗り込むのだが……。

「……」

初めて乗るリムジンに緊張しているのか、アキトはなかなかリムジンに乗ろうとはし

なかった。

「?アキトさん、どうしたの?」

「い、いや、何でもない!」

「どうぞ、お乗りくださいませ。アキト様」

斎藤はアキトのことも知っているのか、このようにアキトを促していた。

「は、はい!」

アキトはリムジンに乗り込むと、斎藤はドアを閉め、運転席に乗り込んだ。

「紬お嬢様。琴吹総合病院でよろしいのですね?」

「ええ。お願いね」

「かしこまりました」

斎藤はリムジンを走らせると、琴吹総合病院へと向かっていった。

そんな中、リムジンを見つめる黒い影があった。

「…………ククク…………。月影統夜…………。お前は簡単には殺さんぞ。貴様を徹底的に痛ぶつて

から殺してやる。そのために、あいつらも利用させてもらおうか…………!」

その影とは、先ほどまで統夜たちと戦っていた暗黒騎士ゼクスであり、ゼクスはリム

ジンが走り去った後もその方角を見つめていた。

そして、統夜を葬る計画を実行するために動き始めた。

……続く。

——次回予告——

『まさかあの男が蘇るとはな……。しかも、あんな姑息な手を使ってくるとは……。次回、「情愛」。おい、統夜！しっかりしろ!!』
次

第97話 「情愛」

暗黒騎士ゼクスことディオスは、かつて強大な力を持つホラー、グオルブを復活させ、世界を闇で包もうと企んでいた。

しかし、その野望は白銀騎士奏狼こと月影統夜によって阻まれ、さらにはディオス自身も統夜の手によって討伐された。

ディオスはそんな統夜に対して強い恨みを抱いており、その恨みは強大な陰我となつて、邪気の塊として実体化した。

ディオスはホラーを封印した12本の短剣を強奪し、その力で実体を取り戻そうとしていた。

そんな中、恨んでいる相手である統夜と、堅陣騎士ガイアの称号を持つ黒崎戒人がホラーを封印した短剣を奪い返すべく現れた。

ディオスは統夜の力を見極めるために、短剣の力を使って12体のホラーが融合した融合巨大ホラーを呼び出すと、統夜と戒人に仕向けた。

最初は融合巨大ホラーの圧倒的な力に追い詰められる統夜と戒人であったが、偶然桜ヶ丘に遊びに来ていたアキトの協力によって、どうにか融合巨大ホラーを倒すことが

出来た。

統夜たちが融合巨大ホラーと戦っている間に、ホラーを封印した短剣の力の一部を使って、暗黒騎士ゼクスの鎧が実体化したのであった。

このゼクスはディオスではなく、ディオスの怨念が生み出した邪気が実体化した姿だった。

統夜と戒人はゼクスに戦いを挑むが、融合巨大ホラーとの戦いで消耗した体では敵うわけもなく、返り討ちにあつて、気を失ってしまった。

アキトはどうかか機転を利かして逃げることに成功し、偶然会った唯たちの協力を得て、傷ついた統夜と戒人を琴吹総合病院へと運んだ。

琴吹総合病院到着後は、待機していた医師により、即座に処置が行われた。

その結果は命に別状はなく、じきに目を覚ますだろうというものであった。

アキトは番犬所に戻り、イレスに今回のことを報告することも考えたのだが、統夜と戒人が目を覚ますまでは待つことにした。

現在、統夜と戒人は、琴吹総合病院のVIPルームにベッドを2つ用意してあったので、そこに案内されて未だに眠り続けていた。

「……統夜先輩……」

梓は悲痛な表情で未だに眠り続けている統夜を見つめていた。

「……ねえ、あずにゃん」

そんな中、唯が梓に声をかけていた。

「?何ですか?」

「ちよつといいかな? 私たちから話があるんだけど……」

唯がこのように話を切り出すと、澤、律、紬の3人はウンウンと頷いていた。

「え?でも……」

梓は未だに眠り続けている統夜や戒人を放っぽり出して話をすることに抵抗があった。

しかし……。

「……行って来い。2人は俺が見てるからさ」

アキトは、唯たちの話が重要な話だと察したため、その話をさせるために2人の看病を買った出たのである。

「ありがとう、アキトさん。……それじゃあ、梓ちゃん、行きましょう」

「はっ、はい……」

唯たちは2人の看病をアキトに任せて、病室を後にした。

その後、紬の案内で入ったのは、統夜と戒人が眠っているVIPルームの向かいにある部屋で、今は患者のいない閑散とした部屋だった。

「……あの、先輩方。話って何ですか？」

唯たちに改まって呼び出されたからか、梓は少しばかりオドオドしていた。

「梓、そんなに畏まらなくても大丈夫だぞ」

「そうだけ。梓がそんなんじゃないよこつちも話しにくいしな」

「は、はあ……」

「ねえねえ、あずにゃんつてさ、今でもやーくんのが好きなんだよねえ？」

「ふえ!？」

唯からの唐突な言葉に、梓の顔は真っ赤になっていた。

そして……。

「……は、はい」

「だったら、梓ちゃんは統夜君に気持ちを伝えたらいいんじゃない？」

「え……?」

細もまた唐突な言葉を発しており、梓は驚きを隠せなかった。

「で、でも、皆さんも統夜先輩のこと……」

梓は唯たち4人も統夜のことが好きだということを知っているため、素直にその唯たちの提案を受けることは出来なかった。

「私たち、この前話し合ってたんだよ」

「統夜、最近梓といい雰囲気だったし、統夜を梓になら譲ってもいいかなって思ったんだよ」

「梓ちゃんは私たち以上に統夜君のことが好きなんだもんね♪」

「そうだよ、あずにゃん！私もあずにゃんだからいいって思ったんだから！」

「皆さん……」

梓はここで初めて先輩たちの本音を聞くことが出来た。

そんな本音に戸惑いながらも、嬉しいという気持ちもあった。

「……だからさ、統夜が目を覚ましてこれからのバタバタが終わったら梓から気持ちを伝えろよ」

「統夜は鈍感だからな。こっちから行かないと気持ちは伝わらないからな」

律と滯は、梓の背中を押しながら告白するよう仕向けていた。

「……は、はい！」

梓はずっと統夜に告白をしたいと思っていたが、唯たちのことを気遣うあまりそれは出来なかった。

そのため、唯たちが背中を押ししてくれるとわかり、梓は統夜に告白をするという意味を固めたのであった。

「まあ、話はそれだけだ」

「だからまた病室に戻ろうぜ」

「そうだよ、あずにゃん！やーくんだってそろそろ目を覚ますと思うし」

「梓ちゃん、行きましよう」

「はい！」

こうして唯たちの話は終わり、唯たちはこの部屋を後にすると、向かいにある病室へと戻っていった。

「……おつ、お前ら、もういいのか？」

「はい！ありがとうございます、アキトさん」

「いいってことよ。それより梓ちゃん」

「は、はい」

「……告白、上手くいくといいな」

「!!?な、何で知ってるんですか!?!」

梓は、統夜に告白するということをアキトが知っていると思っておらず、顔を真っ赤にしていた。

「やつぱり……。お前らが統夜に惚れてるのは知ってたし、特に梓ちゃんはわかりやすかったからな。多分そうだろうと思っただよ」

「あうう……」

アキトにはすべてお見通しだったようであり、梓は恥ずかしさのあまり小さくなっていった。

その時だった。

「う、うん……」

統夜と戒人が同時に反応を示し、目を覚まそうとしていた。

「……あつー！やーくと戒人さん！」

「気が付いたのか!?!」

「……は……は……?」

統夜と戒人は目を覚まし、虚とした意識のまま、左右に視線を向けていた。

「……はうちの系列の病院の病室よ。傷ついたあなたと戒人さんをここまで

運んで来たの」

「そっか……。俺はディオスの奴に……」

統夜はここで、何故自分が運ばれてきたのかを理解したのであった。

すると……。

「統夜先輩!!」

梓はいの一番に統夜に抱きついていていた。

「あ……梓?」

「馬鹿馬鹿！統夜先輩の馬鹿!!こんなにボロボロになって、どんだけ心配したと思ってるんですか!?!」

梓は瞳に涙をいっばいためながら怒っていた。

「…………ごめんな、梓。心配かけて…………」

統夜は穏やかな表情で、梓の頭を優しく撫でていた。

唯たちはそんな統夜と梓の様子をしばらく見守った後に、4人揃って統夜に抱きついていった。

「ちよ…………!?!お前らもかよ!?!」

唯たちは怒ることも泣くこともなく、ただただ黙ってぎゅつと統夜に抱きついていった。

「…………みんなも、心配かけてごめんな」

統夜は唯たちの頭を順番に撫でると、無言で頷いていた。

そんな中…………。

「…………何か俺、蚊帳の外じゃないか?」

統夜と同時に目を覚ました戒人には誰も触れていなかったため、戒人は寂しい気持ちを呟いていた。

「…………アハハ、ドンマイ、戒人」

アキトは苦笑いをしながら戒人に気休めの言葉を送っていた。

※※※

「……それで、アキトさんから話は聞いたけど、あのディオスって奴が蘇ったんだって!?」

唯たちかしばらく統夜に抱きついた後、統夜から離れると、律がこう話を切り出して
いた。

「……ああ。厳密に言えばディオスの怨念が生み出した邪気の塊らしいけど、あの力は、
ディオスだったよ」

『だが、奴からは生気は感じない。言わば鎧だけの存在ってところだろうな』
「そうなんですか……」

統夜の口からディオスが蘇ったことを告げられ、梓は不安げな表情をしていた。

「心配するな。今度こそはディオスを斬る。じゃないと奴は何をしでかすかわからない
からな……」

蘇ったディオスの目的は統夜への復讐のため、どのような姑息な手段を使ってくるか予想出来なかった。

そのため、統夜は早急にディオスことゼクスを斬るつもりだった。
しかし……。

「統夜、もうちよつと寝てろよ。まだ本調子じゃないんだから」

澗が統夜の体を気遣って休むよう勧めるのだが……。

「そういう訳にもいかないだろ。ディオスはいつ動き出すかわからないんだから」

一刻も早くディオスを探し出すために統夜は立ち上がるうとするのだが……。

「ダメです！まだ本調子じゃないんですからしつかり休んでください！まったく……。
じゃないと統夜先輩はすぐに無茶をするんですから……」

「……わ、わかったよ……」

梓に怒られてしまった統夜は、素直に言うことをきくことにした。

「……やれやれ……統夜のやつ……」

戒人は梓の尻に敷かれている統夜を見て、苦笑いをしていた。

「ま、今日1日くらいは休んだ方がいいんじゃないか？」

アキトも苦笑いをしながらこの日は体を休めることを提案していた。

「明日は土曜日だし、あたしらもここに泊まろうかな」

「部屋ならあるから大丈夫よお♪」

律はこのような提案を唐突にしていたのだが、紬は即座に対応していた。

「そうですね。統夜先輩つてば見張つてないと無茶しそうですし……」

「まあ、俺が見張つてるから大丈夫だけどな」

梓は統夜を見張るつもりでここに泊まるつもりだったが、一緒に入院してる戒人が統夜の見張りを買つて出た。

「そうですか……」

「でも、せつかくだからみんなでお泊まりしようよ!」

「あのなあ。みんなの気持ちはわかるけど、病院に泊まるとか迷惑がかかるだろ?」

『滯の言う通りだぜ。それに、病院はホテルでも旅館でもないんだぜ?』

滯は病院に泊まることに反対意見を出す、それにイルバも同意していた。

「だけど、ディオスがみんなを狙つてくるかもしれないから今日1日はここにいた方がいいんじゃないのか?」

統夜はディオスが唯たちを狙つてくる可能性を考慮して、ここに泊まるという律の提案に賛同していた。

『確かに、その方が安心かもしれないのお』

「ああ。万が一奴が襲つてきても迎撃すればいいだけだからな」

続夜の話の聞くと、トルバと戒人も、唯たちが泊まることに賛成の意見を出していた。「私もそう思うわ♪さつき部屋の部屋なら大丈夫だから、今日はみんなで泊まりましょ？」
紬は、経営者の娘という立場をフルで活用し、唯たちをここに泊まることを勧めた。

「ま、まあ。ムギが良いんだつたら……。あ、だけど、家に連絡しないと！」

澪は携帯を取り出すと電話をかけるために病室を後にした。

それに続くように唯、律、梓の3人も携帯を取り出すと、電話をかけるために病室を後にした。

数分後、電話を終えた4人は病室に戻ってきた。

どうやら家に電話をかけていたようである。

唯は憂に事情を説明し、残りの3人は友達の家泊ると親に説明をしていた。

家族への説明が終わったところで、唯たちはこの部屋の向かいの部屋で泊まることになった。

※※※

翌日、1日ぐつすりと睡眠を取ったことで、統夜と戒人のダメージはほぼ完全に回復していた。

医師からも退院を認められたこともあり、統夜と戒人は揃って退院することになった。

その後、琴吹総合病院を後にした統夜たちは、唯たちを家に送り届けるために歩いていた。

しばらく歩き、桜ヶ丘某所にある広場を通り過ぎようとしたその時だった。

『……………！統夜！奴の気配を感じるぜ！気をつけろ！』

「!? 奴の気配って……………。今は朝だろ？」

『奴は厳密に言ったらホラーではないからな。朝や昼に動いても不思議ではないだろう』

「なるほどな……………」

統夜と戒人は魔戒剣を取り出すと、いつでも抜刀出来る状態にしておいた。

唯たちは不安げな表情を浮かべながらも統夜たちから離れないようにしていた。

その時だった。

「……………」

どこからか邪気の塊が飛び出してきたので、統夜は魔戒剣を抜くと、その邪気の塊を斬り裂いた。

そして……………」

「……………ほお、この攻撃を防ぐとは。傷の方はだいぶ回復したようだな」

デイオスの怨念の塊である暗黒騎士ゼクスが、統夜たちの前に現れた。

「……………あの鎧って……………」

「本当に復活したんだね……………」

「あいつが……………統夜先輩を……………」

滯と唯はゼクスが復活したことに驚いており、梓は統夜を傷つけたゼクスのことを睨みつけていた。

「お前、ここで決着をつけるつもりか？」

「まあ、慌てるな。俺が今来たのは別の用事があるからだ」

ゼクスが統夜たちの前に現れたのは、戦うためではなかった。

「そんなことは知るか！ 貴様は俺たちが斬る！」

統夜と戒人は魔戒剣を抜くと、ゼクスに向かっていった。

「フン、相変わらず血の気の多い奴らだ……」

問答無用で襲いかかってくる統夜と戒人に、ゼクスは呆れ果てていた。

そんな中、ゼクスは魔戒剣を盾に共鳴させて衝撃波を放つと、統夜と戒人を吹き飛ばした。

「くっ……!!」

衝撃波によって吹き飛ばされた統夜と戒人は、すぐさま体勢を立て直した。

すると、ゼクスは梓の方へ向かっていった。

「やらせるかよー！」

アキトは梓を守るためにゼクスを相手にするのだが、ゼクスはアキトに蹴りを放つと、アキトを吹き飛ばした。

「アキトさん……きやつ!」

ゼクスは梓を狙っていたのか、梓を捕まえていた。

「は……放して!!」

梓は抵抗してジタバタと暴れ出すのだが、ゼクスは梓にボディーパーをお見舞いし、梓を気絶させた。

「あずにゃん!!」

「梓を放せ!!」

唯たちは梓を取り返そうとするのだが、それよりも先にゼクスは後方へとジャンプしていた。

「……この小娘は預かった！返して欲しければ、今から1時間以内に○△ビルにここにいる全員で来い！1分でも遅れるようならこの小娘は殺す！覚えておけ！」

「させるかよ！梓を返せ!!」

統夜は梓を捕まえたゼクス目掛けて駆け出しながら、魔戒剣を前方に突き出して円を描いた。

統夜は奏狼の鎧を身に纏うと、ゼクスを狙って皇輝剣を一閃するが、それよりも早く、ゼクスはテレポートを使ってその場から姿を消したのであった。

「……いーく、くそー逃げられたか！」

統夜はゼクスを逃したことに舌打ちをすると、鎧を解除して、魔戒剣を青い鞆に納めた。

戒人も魔戒剣を鞆に納めており、統夜たちは何も言わず集まっていた。

「……ね、ねえ！やーくん、どうしよう!?!」

唯は梓が目の前でさらわれてしまい、1番焦っていた。

「……奴がここにいた全員で来いと要求した以上、不本意だけどみんなにも来てもらわなきゃいけない！」

『あの男……。梓を人質にして確実に統夜を葬ろうと考えてやがるな。行けば間違いなく奴に殺されることになるだろうな』

ゼクスの目的は統夜を殺すことであるため、要求通り○△ビルに向かえば、梓を人質にして身動きを封じて殺されることは容易に推察出来た。

「……だとしても行くしかない」

「なあ、番犬所に相談したらどうなんだ？緊急事態だろう？」

「濡は一番無難だと思われる提案を統夜にするのだが……。」

「……ダメだ。下手なことをしたら梓が危ないからな。俺らだけでなんとかするしかない」

「……っ！でもー！」

「大丈夫だ。奴がどんな汚い手を使おうが、奴を倒して絶対に梓を助ける！」

統夜は梓がさらわれたことでゼクスに対して怒りを抱いていたが、非常に冷静であり、何があつても梓を救い出すという決意を固めていた。

「そうだな。俺とアキトもいるんだ。これ以上は奴の好きにはさせないさ」

「その通りだぜ！それに、人の恋路を邪魔してる時点で奴の負けは決まってるんだよ」

「？恋路？何言ってるんだ？」

統夜はアキトの言葉の意味が理解出来ず、首を傾げていた。

こんな状態でも相変わらずな統夜を見て、唯たちは苦笑いをしていた。『とにかく、今はボヤボヤしてる暇はない。さっさと目的地に向かうぞ』

「ああ、そうだな」

統夜たちは、さらわれた梓を救うために、ゼクスが指定した○△ビルへと向かっていった。

※※※

統夜たちが移動を始めた頃、ゼクスは一足先に○△ビルへと来ていた。『……さて、そろそろ奴らが来る頃か……』

ゼクスは統夜たちが到着するのを待っていた。

ゼクスにさらわれた梓は、両手両足を縛られた状態で、身動きが取れない状態だった。

「……あなた！私をどうするつもりですか!!」

梓はこのビルに來た時から目を覺ましていたのだが、身動きが取れずにジタバタとしていた。

「貴様は奴らをおびき寄せるための餌だ。そして、確実に始末するためのな」

「あなた……！元は魔戒騎士だったのに、卑怯ですよ!!」

「フン、そんなことは百も承知だ。だが、俺は月影統夜を始末出来るなら騎士のプライドなど捨ててやるさ」

「あなたは、ただ統夜先輩のことを逆恨みしてるだけです！今のあなたなんて……！統夜先輩の足元にも及ばないです!!」

梓は、自分の大好きな人を殺そうと企むゼクスの方が許せず、険しい表情でゼクスを睨みつけていた。

「ほお、言うじゃないか……。だが、貴様は自分の立場というものを理解していないな」
ゼクスは梓の言葉に怒りを示すわけではなかったが、魔戒劍の切っ先を梓に突きつけていた。

「ひっ!?!」

「以前と違い、貴様が生きてようが死んでようがどうでもいいんだ。死にたくなければ、余計なことと言わないことだな」

「……っ!!」

ゼクスの放つ殺気は本物であり、これ以上ゼクスに対して敵対するような発言をしただら、殺されてしまうと察した梓は、これ以上何も言う事は出来なかった。

……その時だった。

「……来たか……」

ゼクスは統夜たちの気配を感じ取っており、それから間もなくして、統夜たちが現れた。

「……梓！無事か!!」

「統夜先輩！皆さん!!」

梓も統夜たちの姿を確認し、声をあげていた。

「おい、お前!!あたしたちの大事な後輩に何をするつもりだ!!」

「そうだよ！あずにゃんを返して!!」

律と唯は、鋭い目付きでゼクスを睨みつけていた。

「……フン、小娘どもが……。その小娘は、俺が月影統夜を始末するために利用させてもらう」

「何だと!？」

統夜、戒人は魔戒剣を取り出し、アキトは魔戒銃を取り出すとするので……。

「おっと!!まずはその目障りな武器を捨ててもらおうか!さもなければ……」

「ひっ!？」

ゼクスは魔戒剣の切っ先を梓に突きつけると、統夜たちに武器を捨てるように告げていた。

「くっ……!卑怯な……!」

「それが元魔戒騎士のすることか!!」

ゼクスの騎士の誇りに反した行為に、統夜と戒人は異議を唱えるのだが……。

「減らず口はそこまでだ。今度余計な事を言ったら容赦なくこいつを殺すぞ」

ゼクスは魔戒剣をちらつかせ、いつでも梓を殺せることを強調していた。

「……くっ」

「わかった。武器を捨てる」

統夜と戒人は魔戒剣をすぐ目の前に投げ捨て、アキトは魔戒銃を目の前に投げ捨てた。

「おっと、その魔戒法師!お前は魔導筆も捨ててもらおうか」

「……っ」

アキトは魔導筆を取り出すと、魔導筆も同様に投げ捨てた。

「……お前、魔導具を他にも隠し持っているだろう?そいつも捨ててもらおうか」

「……わかったよ」

アキトは爆弾の形だが、煙を出す魔導具や、爆弾のように爆発する魔導具など、敵の足を止めるのに使われる魔導具を取り出すと、それらも投げ捨てた。

「……………これでいいのか？」

「ああ、そうだな…………。それじゃあまずは目障りなお前から潰させてもらおうか！」

ゼクスは魔戒剣を盾に共鳴させると、衝撃波を放ち、戒人とアキトを吹き飛ばした。

「うっ……………！」

「くっ……………！」

吹き飛ばされた戒人とアキトは、吹き飛ばされた場所で倒れ込んだ。

「貴様らはそこで大人しくしてもらおう。変な動きを見せたら、その小娘を即座に殺す！」

「くっ……………くっ……………！」

戒人とアキトは梓を人質にとられてしまっているため、ゼクスに対して攻勢に出ることとは出来なかった。

「……………さて、そこのお前らにも仕事をしてもらおうか」

ゼクスは、統夜を追い詰めるために、唯たちも利用しようとしていた。

「お前から4人で月影統夜をボコボコにしてもらおうか」

「!!? 私たちがやーくんを!!」

ゼクスのまさかの言葉に、唯たちは驚愕していた。

「私たちが統夜を傷つけるなんて……。出来る訳ないだろ!」

大切な仲間である統夜を傷つけることに澁は拒否反応を示していたが……。

「嫌ならそれでもいいさ。その時は、その小娘が死ぬだけだな」

「……っ!」

梓を救うためとはいえ、唯たちは統夜を傷つけることを躊躇っていた。

すると……。

「……お前ら、遠慮なくやれ!!」

「っ!?!だけど、統夜君!!」

「お前らの攻撃なんて痛くもかゆくもないんだ。だから、思い切りやれ!!」

統夜は、梓を救う糸口を見出すために、自ら唯たちにボコボコにされることを望んでいた。

「……言っておくが、手加減なんてするなよ。そうしたらその瞬間にその小娘を殺す」

ゼクスは、手を抜くことなく、全力で統夜をボコボコにするよう告げていた。

「「「……」」」

唯たちは梓を救うためとはいえ、全力で統夜を傷つけなければいけないことに唇を噛み締め、うつすらと涙を流していた。

すると……。

「……っ！」

軽音部の部長である律が、みんなの先導となり、全力で統夜を殴っていた。

「……ぐっ！」

女性のパンチではあるものの、意外に威力があり、統夜の表情は歪んでいた。

「……統夜君、ごめんね！」

紬は統夜に謝りながらも、全力で統夜を殴っていた。

「統夜……！」

「やーくん……！」

それに続いて滯と唯も統夜を殴り、その後は連続で統夜を殴り続けていた。

「いや……やめて……もうやめて!!」

自分の大好きな先輩たちが、自分の大好きな人を殴るといふ光景が堪えられないのか、梓は涙を流しながら必死に声をあげていた。

「うっ……くっ……！」

間髪入れずに殴られ続けては、統夜も平気ではなく、ダメージは蓄積していった。

「ハハハハ!!……ハアーツハツハツハ!!」

自分の大切だと思っている人にボコボコにされる光景がゼクスにとっては非常に愉

快であり、ゼクスは高笑いをしていた。

何度も何度も殴られ続けた統夜はその場に倒れ込んでいた。

そんな統夜の顔にはいくつか痣があったが、顔がボロボロになる程ではなかった。

「お前ら！そのままそいつを蹴れ！踏み潰せ！！」

「「……………！！」」

殴るだけでも苦痛なのだが、さらに統夜を傷つけなくてはいけないため、唯たちは涙を流しながら統夜を蹴り、さらに踏み潰していた。

「ぐう……………ぐあ……………」

統夜の表情は苦痛によつて歪むのだが、まだまだ唯たちの攻撃は終わることはなかった。

「……………くっー」

「あの野郎……………」

統夜を徹底的に苦しめようとしているゼクスの行動に、戒人とアキトは怒りを募らせるが、梓を人質にされている手前、何も出来なかった。

この状態が5分ほど続いていた。

すると……………。

「……………よし、もういいだろう」

ようやくゼクスがやめても良いと告げたため、唯たちは即座に攻撃をやめていた。

大切な仲間である唯たちにボコボコにされるということは、統夜たちにとって肉体的苦痛だけではなく、精神的苦痛も相当なものだった。

統夜を傷つけることを強いられた唯たちも、精神的苦痛はかなりのもので、ずっと涙を流していた。

「…………と、統夜…………」

「統夜君…………」

「やーくん…………。ごめんね…………ごめんね…………」

望まない形ではあったが、統夜を傷つけたのは事実であり、唯たちは、涙を流しながら統夜に謝っていた。

ゼクスに人質にされた梓も、見たくない光景を見せられてしまい、涙を流していた。

「ハハハハハ!! 所詮人間の友情などこんなものよ! ここまでためらいもなくボコボコにするとは…………! お前ら、最低だな!! ここまで容赦なく傷つけたんだ。そんなお前らはもうこいつの仲間などとはほざくことは出来ない!!」

ゼクスのこの発言は、唯たちの精神を著しくえぐる言葉であり、その言葉に深い傷をつけられた唯たちは、その場で泣き崩れていた。

「…………お前ら…………。奴の言うことは気にするな…………!!」

唯たちにボコボコにされてしまった統夜は、ゆつくりと立ち上がり、唯たちにフォローを入れる言葉を言っていた。

「グスツ……ヒック……。で、でも、私たちはやーくんを……」

「……言つたろ？ お前らの攻撃なんて痛くもかゆくもないってな。だから、俺は気にしてないぜ」

本当は体も心もあり得ない程に痛かったのだが、唯たちの深い心の傷を癒すために、優しい表情で笑っていた。

そんな統夜の笑顔に唯たちの心の傷を多少は癒すことは出来たが、それでも申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「……ゼクス!! お前の狙いは俺だろ? こんな回りくどいことはしないで、直接俺を殺しに来い!!」

「……フン。この余興を見たらそうするつもりだったさ。それに、この女はもう用済みだ。解放してやるさ」

ゼクスは何故か素直に梓の縄を解くと、梓を解放した。

「……もう行け!! お前はもう用済みだ!」

「あなたは……!!」

ゼクスの非道な行為を許せなかった梓はゼクスを睨みつけるが、ここは素直に解放さ

れようと思ひ、唯たちのもとへと駆け寄つた。

その時だった。

「……フン、何てな!!」

梓が統夜の近くに來た瞬間、ゼクスは魔戒劍の切っ先からレーザーのようなものを放つと、それを梓目掛けて放つた。

ゼクスは、統夜を絶望させるために、梓を解放させるフリをして梓を殺そうとしていた。

しかし、梓を解放したのは、それとは別の狙いもあった。

「……!!梓、危ない!!」

梓の危機を察した統夜は、近くにいた梓を突き飛ばすと、梓を守る体勢に入った。

すると……。

ゼクスの放ったレーザーのようなものにより、統夜の胸は、貫かれたのであった。

「「「?!」」」

「そ、そんな……!」

「嘘だろ……!?!」

「ああ……!ああ……!?!」

唯たちは目の前の光景が信じられず、絶句していた。

アキトと戒人も、目の前で起こった光景が信じられなかった。

「統夜先輩!!」

梓は胸を貫かれてその場に倒れ込んだ統夜に駆け寄ると、そんな統夜を抱き抱えていた。

「統夜!!」

「統夜君!!」

「やーくん!!」

唯たちも、統夜を囲むように統夜に駆け寄った。

「貴様ああああああああ!!」

「てめえ!!絶対に許さねえ!!」

統夜がやられたことに激昂した戒人とアキトは、それぞれの武器を回収すると、ゼクスに向かつていった。

「……フン、いいだろう。俺の目的は果たしたんだ。貴様らも奴の後を追わせてやる」

ゼクスも魔戒剣を構え、臨戦体勢に入っていた。

これこそが、ゼクスの本当の狙いであった。

人質を解放するフリをして梓を殺そうとすれば、統夜は確実に梓をかばうと予想し、梓を庇った統夜を確実に葬るためにこのようなことを行っていたのであった。

仮に統夜が梓を庇わなくても、梓の死によつて、統夜たちを絶望させるには十分だった。

すなわち、ゼクスの作戦は、どちらに転んでもゼクスにとっては都合の良い展開になつた。

「統夜!! しつかりしろ!!」

「おい! 統夜! 目を開けてくれ!」

「統夜君!!」

「やーくん!!」

『おい、統夜!! しつかりしろ! お前さんは生きて帰るんだろう!』

戒人とアキトがゼクスとの激しい戦いを繰り広げる中、唯たちは統夜に必死に呼びか

けをするのだが、統夜は目を閉じたまま、ピクリとも動かなかった。

「統夜先輩！しっかりして下さい！目を開けて！統夜先輩!!」

梓はまるで泣き叫ぶかのように統夜の名前を呼ぶのだが、統夜はピクリとも動かなかった。

この時、唯たちの脳裏には、統夜の死という事実が浮かび上がっていた。

梓は必死に統夜へ呼びかけをするのだが、統夜はやはり反応しなかった。

「そ……そんな……私、まだ統夜先輩に言っていないのに……!!あなたのことが……好きだって……!!」

梓はここでようやく自分の気持ちを打ち明けることが出来たのだが、統夜は反応を示さなかった。

「……統夜……先輩……!!」

梓は統夜を失った悲しみから、ポロポロと涙を流していた。

「……あずにゃん……」

唯たちにとっても統夜の死というのは耐えがたい事実ではあったが、今は梓に何て声をかけて良いのかわからなかった。

梓の涙が、ポタポタと何滴も統夜の顔に零れ落ちていた。

梓たちが、統夜の死を悲しんでいたその時、信じられない出来事が起こった。

「………そんなにも呼びかけなくても聞こえてるっての……。梓、それにみんな
………」

……胸を貫かれて、死んだと思われていた統夜は生きており、統夜が弱々しくも口を開いていた。

「「「「?!」」」」

唯たちは統夜が死んだと思っていたため、生きていたという事実は驚きと共に喜びでもあった。

「……!?何だと!?そんな馬鹿な!!奴は確実に仕留めたハズだ!」

ゼクスは、統夜を殺したと確信していたため、統夜が生きているという事実に驚いていた。

それはゼクスと戦っている戒人とアキトも同様であった。

「……………！統夜！！」

「良かった！生きてたんだな！」

戒人とアキトは、ゼクスと戦いを繰り広げながら、歓喜の声をあげていた。

「やーくん！良かった！良かったよお！！」

「だけど、統夜君はどうして無事だったの？」

唯たちは統夜が無事だったのは喜ばしいことだったが、急所を貫かれたハズの統夜が生きていたことは疑問であった。

「……………ああ、これだよ」

統夜は自分が何故無事だったのかを説明するためにあるものを取り出した。

それは……………。

「……………あつ、それって……………！」

「みんな、こいつを壊しちゃってごめんな。だけど、こいつのおかげで俺は助かったんだよ」

統夜が唯たちに見せたのは、統夜の誕生日に唯たちがプレゼントした、奏狼の紋章が描かれたネットワークスであった。

そのネットワークスはディオオスの一撃によって破損してしまったのだが、これが、統夜の命を救ったのである。

「私たちがプレゼントしたネットワークスが、統夜を救ったんだな！」

「良かった！本当に良かったよ！」

唯たちは改めて統夜が生きていることに喜んでいたので……。

「……」

梓は喜びと困惑が入り混じっているため、素直に喜ぶことが出来なかったのである。

そして……。

「統夜先輩っ!!」

梓は力強く統夜に抱きつくと、堰が切れたかのように泣き出していった。

「良かった……！統夜先輩が生きてて……グスッ……本当に良かったです！わたし……

統夜先輩が……死んじゃった……かと……」

梓は泣きながらも必死に言葉を紡いでいた。

「梓……。心配かけて、本当にごめんな。俺は必ず生きてみんなのもとに帰ると約束し

たんだ。そう簡単にくたばってたまるかよ……」

「統夜先輩……」

「それに、俺は気付いたんだよ。自分の気持ちって奴をさ……」

「統夜先輩の……気持ち？」

「それに、しっかりと届いたぜ。お前の気持ちってやつがさ……」

浮かべていた。

「「……………」」

そして、統夜のことが好きだったが、梓に譲ると決めた唯たちは、フラれて悲しいという気持ちと、統夜と梓が結ばれて嬉しいといった気持ちが入り混じっていた。

しかし、4人の表情は思った以上に清々しいものであった。

そんな中……………」

「貴様ら……………!!俺を忘れるなあ!!」

統夜と梓はゼクスのことを忘れてラブメモードに突入していたため、ゼクスは激昂していた。

ゼクスは怒りのまま魔戒剣を一閃すると、戒人とアキトを吹き飛ばした。

「ぐう……………」

「くっ!!」

「戒人!!アキト!!」

戒人とアキトの2人が吹き飛ばされた様子を見た統夜は声をあげて立ち上がり、唯たちも同様に立ち上がった。

「統夜……………」までお膳立てしてやったんだ!後はお前が決める!」

「戒人の言う通りだ!今のお前ならあいつ如き問題ないだろう」

「……ああ！任せておけ！」

統夜は魔戒剣を回収すると、それを抜いて、構えていた。

「月影統夜！このままではすまさんぞ！今度こそ貴様を殺す!!」

「悪いが、そう簡単にやられる訳にはいかない。貴様をもう一度地獄へ叩き返してやる！」

梓というかけがえのない存在を得た統夜は、誰が相手だろうと負ける気がしないと
いった気持ちだった。

「……その前に……」

統夜はゼクスから視線を外すと、梓の方を見て、ゆつくりと梓に近付いていった。

すると……。

「……!!? / / /」

「「「え、ええ!?!」」」

「おいおい……」

「こいつ……統夜……だよな?」

統夜は梓にキスをしており、普段は天然ジゴロである統夜らしからぬ行動に唯たちだ
けではなく、戒人とアキトも驚愕していた。

キスをされた本人である梓は、唐突な出来事に訳がわからず、顔が真っ赤のまま硬直

していた。

(おいおい……。天然ジゴロを卒業したと思ったら、統夜の奴大胆になったな……)

イルバは、普段の統夜ではあり得ない行動に、苦笑いをしながらも呆れていた。

「……ちよつと待つてくれ。すぐにケリを付けてくるから」

「……は、はい！私、信じてますから！」

梓は、ゼクスに向かってゆっくりと歩き出す統夜の背中をジツと見つめていた。

梓の中には不安というものは一切なく、心の底から統夜のことを信じ切っていた。

「……月影統夜……。貴様はどこまで俺をコケにするんだ……。許さんぞー」

殺したと思っていた統夜は生きており、その後の信じられない行動に怒りを露わにしていた。

「……ゼクス！てめえのくだらない逆恨みのせいでみんなを心から傷付けた。俺は、そんなてめえを許さない!!」

統夜は、ゼクスの姑息な策略によって自分が傷付いたことよりも、かけがえのない存在である唯たちを傷付けたことが何よりも許せなかった。

統夜は鋭い目付きでゼクスを睨みつけていた。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はゼクスに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。「貴様相手に出し惜しみなどせぬ！確実に貴様を殺す!!」

ゼクスは確実に統夜を葬るために最初から本気を出すことにした。

ゼクスは魔戒剣の切っ先に紫の魔導火を纏わせると、その魔導火は大きくなりながら力を蓄えていた。

「……業火炎破!!……灰になるがよい!!」

ゼクスは魔戒剣を十字に振るうと、十字の炎が統夜に向かっていった。

「……」

統夜は皇輝剣を構えてはいたものの、ゼクスの攻撃を、避けようとも、防ごうともしなかつた。

そんな中、ゼクスの放った渾身の攻撃が統夜に迫ろうとしたのだが……。

「……効かねえよ!!」

統夜は皇輝剣を十字に振るうと、ゼクスの渾身の一撃である業火炎破を相殺した。

「……な、何だと!？」

ゼクスは、自分の渾身の一撃が簡単にしのがれるとは思っておらず、驚きを隠せなかつた。

「……今度はこちらから行くぜ!」

統夜は先ほどのゼクスのように皇輝剣の切っ先に赤い魔導火を纏わせた。

その赤い魔導火は激しく燃え上がり、螺旋のように皇輝剣の切っ先に収束していた。

この状態は「猛火斬撃」といい、烈火炎装と似た形態であるのだが、魔導火を皇輝剣の切っ先にのみ纏わせ、斬撃に特化した状態にして、攻撃力を飛躍的にあげるものであった。

この状態で、統夜はゼクスに向かっていった。

「おのれ……今度こそ貴様を殺す!!」

ゼクスは再び烈火炎装の状態になると、統夜を迎撃する準備に入っていた。

「……倒されるのはお前だ!!」

統夜はゼクスが統夜の攻撃を受ける前に皇輝剣を一閃し、ゼクスの体を斬り裂いた。

「ぐああああああああ!!」

統夜がゼクスを斬り裂いた直後に大きな爆発が起こり、それによりゼクスは消滅した
ものと思われた。

「……やったか?」

『今の一撃に手応えはあったが、奴は命からがら逃げたようだ。だが、奴の消滅も時間の
問題だぜ』

ゼクスは猛火斬撃によって斬り裂かれた後に起こった爆発に乗じてどうにか逃げ延

びていた。

しかし、統夜の一撃は確実にゼクスを斬り裂いており、消滅するのは時間の問題だった。

「……また奴が来たとしても斬るだけだ」

統夜はこう呟きながら鎧を解除すると、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「統夜!!」

「統夜君!!」

「やーくん!!」

ゼクスを退けたことを確認した唯たちは統夜に駆け寄っていた。

「やーくん……勝ったんだね!」

「当たり前だろう?俺はどんな奴が相手だろうと、みんなを……そして梓を守るって決めたんだからな」

「統夜先輩!!」

統夜の力強い言葉を聞いた梓は統夜に駆け寄ると、そのまま飛びつく形で抱きついていた。

「……良かったです……本当に良かったです!」

梓は統夜が無事にこの危機を乗り越えたことと、自分の想いが通じて結ばれたことに

安堵していた。

「ああ……。梓、改めてなんだけどさ、これからもよろしくな」

「はい！私は先輩が無茶しないようにしつかりと見張りますからね。覚悟してて下さいね♪」

「アハハ……。お手柔らかに頼むよ……」

統夜はこれから梓の尻に敷かれそうだなと予想しながら苦笑いをしていた。

「やれやれ……」

「梓と付き合うことになっても、統夜は変わらなさそうだな」

「だけど、少し大胆になったわよね♪」

「そうだよねえ。いきなりあずにやんにキスするんだもん。それも私たちの目の前で」

「!?お、俺……そんなことを!？」

統夜は無我夢中での行動だったため、梓にキスをしたということは覚えていなかった。しかし、その事実を唯たちに告げられると、統夜の顔は茹で蛸のように真っ赤になっていた。

そして……。

「うわああああああああ!!」

あまりの恥ずかしさに居ても立っても居られなくなった統夜は、逃げるようにその場を走り去っていった。

「あ！逃げた!!」

「おい、統夜！ちよつと待てつて！」

「統夜君!!待って!!」

「やーくん！待ってよお〜!!」

「統夜先輩!!」

唯たちは大慌てで統夜を追いかけに行き、その場には戒人とアキトのみが残されてしまった。

「……………」

戒人とアキトは、あまりに唐突な展開に驚きを隠せないのか、言葉を失っていた。

「……………とりあえず番犬所に報告に行くか」

「……………ああ、そうだな」

色々と思うところがある2人だったが、とりあえず2人だけで番犬所へ報告を行うためにそのまま番犬所へと向かって行ったのである。

こうして、怨念の塊として蘇ったディオスこと暗黒騎士ゼクスは統夜によって討伐され、この事件は解決したと思われた。

だが……。

※※※

「……お、おのれ……。 月影統夜……。 今度こそ……。 今度こそ息の根を止めてやる……！」

命からがら逃げ延びたゼクスは、統夜への恨みをさらに募らせており、今度こそ復讐を果たそうと心に決めていた。

しかし、統夜によって受けたダメージは相当なものであり、回復にはかなりの時間がかかると思われた。

ゼクスはどこかへ移動し、その傷を癒そうと考えていたのだが……。

ガシャン！ガシャン！

鎧を身に纏ったかのような足音が聞こえてきており、それは徐々にゼクスの方へと近付いていった。

「……………この邪気……………何者だ？」

こちらに向かってくる鎧のような足音の先から、自分とよく似た邪気を感じ取ることが出来た。

その足音はどんどん大きくなり、そして、ゼクスの前に現れたのは、自分とよく似た漆黒の鎧だった。

「……………!!き、貴様は……………まさか……………!!」

「……………ずいぶんと無様な姿だな。暗黒騎士ゼクスよ……………」

「!? 貴様、何故俺の名を知っている!?」

「何故……………だど？ 貴様に暗黒騎士になる方法を教えたのは誰だったかな？」

「なっ……………!!き、貴様、まさか……………!!」

「御託はここまでだ。貴様の力は微弱なものだ……………。だが、私と1つになり、私の闇の肥やしとなるがよい！」

ゼクスによく似た漆黒の鎧の騎士は、手にしていた剣をゼクスの体に突き刺した。

「ぐう……………ぐあ……………!!」

すると、ゼクスの体は徐々に粒子のようなものとなり、次第に漆黒の鎧の騎士の中へと吸収されていった。

「ぐわあああああああああ!!」

ゼクスは、まるでホラーに捕食されるかのように漆黒の鎧の騎士の体に吸い込まれてしまい、その巨大な怨念と共に、ゼクスの意思も消滅してしまった。

暗黒騎士ゼクスの力を取り込んだ漆黒の鎧の騎士の体にはさらなる邪気が纏われ、そのオーラは禍々しいものであった。

「ククク……これで良い。これでこそ、奴をわざわざ蘇らせた甲斐があるというものだ！」

ゼクスが復活したのは本当の怨みが陰我となって収束したからなのであるが、そう仕向けたのは漆黒の鎧の騎士であり、12体のホラーを封印した短剣を強奪したのも、ゼクスではなく、この騎士だった。

漆黒の鎧の騎士は、短剣を強奪し、ゼクスに渡すことで実体化させ、その上でその体を取り込むつもりだったのであった。

「……これで私は究極の闇そのものとなった……。この私の力で、この世界を漆黒の闇へと包み込んでやるさ……」

漆黒の鎧の騎士の目的は、自分の得た闇の力により、この世界を闇で覆うという大そ

れたものであった。

「まず手始めにこの街だ……。先ほどの戦いは見ていたが、あの程度の実力など私の敵ではない……。！」

漆黒の鎧の騎士は、統夜とゼクスの戦いを見ていたのだが、それでも自分の敵ではないと判断し、手始めにこの街を壊滅させることを決めたのであった。

暗黒騎士ゼクスを倒したのは統夜にとっては終わりではなく、むしろこれから始まる壮絶な戦いの序章であることを、統夜は知る由もなかった……。

……続く。

UA30000記念作品 「日常」

ナツク・G 「さあ、みなさんこんにちは、ナツク・Gです！今回は皆さん気になるであろう魔戒騎士の日常に密着していきたいと思います！」

……ここは人界でも魔界でもない場所。ここにいるのは、この作品「牙狼×けいおん 白銀の刃」を書いているナツク・Gです。

今回、UAが30000を越えたとのことなので、特別企画としてこのようなことを行おうと考えたのであります。

ナツク・G 「さあ、今回は何とスペシャルゲストも呼んでおります。この方です、どうぞ！」

統夜 「ど……どうも」

今回、ゲストとしてやって来たのは、この小説の主人公である白銀騎士奏狼こと月影統夜です。

ナツク・G 「いやあ、ゼクスとの戦いは激戦でしたね」

統夜 「アハハ……。確かにあの時の戦いは正直やばかったよ……」

ナツク・G 「それに、梓とも付き合うようになって……。羨ましいな、この野郎!!」
 統夜 「ちよ、ちよっと！本音がダダ漏れなんですけど！」

イルバ 『おいおい、俺様の紹介を忘れるなよ』

ナツク・G 「あ、ごめん。すっかり忘れてた」

筆者がすっかり忘れていたので、ここで紹介をしたいと思います。

魔導輪イルバ。白銀騎士奏狼である統夜のパートナーであり、統夜の頼れる相棒です。

その外見は黄金騎士牙狼こと冴島鋼牙の魔導輪ザルバにそっくりなのですが、これを認めようとはしていないのです。

ナツク・G 「……説明はこんな感じでいいの？」

イルバ 『ま、まあいいだろう』

ナツク・G 「それでは、さっそく最初の企画に行ってみよう！」

今回の企画は、魔戒騎士の日常に密着という企画であり、魔戒騎士の知られざるプライベートを明らかにしていこうというものであった。

まず最初に紹介する魔戒騎士は……。

統夜 「……あ、大輝さんだ」

ナツク・G 「そう！まずご紹介するのは現在翡翠の番犬所で活躍している桐島大輝

です。統夜はよく知っているよね？」

統夜 「もちろん！大輝さんは前は俺と同じ紅の番犬所において、色々教わったからな」
その通り！さらに桐島大輝は称号は持っていないが、その実力はかなりのもので、ベテラン騎士の名に恥じないものとなっているのです！

それでは、桐島大輝の日常に密着していきましょう！

——魔戒騎士の日常 桐島大輝編——

統夜 「アハハ……。なんかそれっぽい感じになってるな……」

ナツク・G 「さて、苦笑いしている統夜はさておいて、桐島大輝の1日を見てみましょう」

桐島大輝の所属する翡翠の番犬所は、神田と秋葉原と神保町あたりが管轄エリアになっ
ていて、彼は今年の夏にこの地に配属になったばかりなのです。

それには事情がありまして、アスハという魔戒法師が魔戒騎士狩りを行い、そのせいで魔戒騎士の数がかなり減ってしまったのです。

そこで、各番犬所の人事異動があり、それで大輝は翡翠の番犬所に配属されたのです。おや、今日は秋葉原周辺のエレメントの浄化を行っているみたいですね。

大輝 「……はあっ!!」

ナツク・G 「おっと、さすがはベテラン騎士、確実に邪気を浄化してるな」

統夜 「さすがは大輝さんだ。相変わらず手際の良さだ」

ナツク・G 「この日のエレメントの浄化は終わりみたいだな」

統夜 「あつ、本当だ。大輝さんって普段はどこでご飯を食べるんだろう」

ナツク・G 「おつ、どうやら食事のためにどこかへ移動するようだ」

エレメントの浄化を終えた桐島大輝は、食事を取るために移動を開始しましたが、どうやら彼は行きつけの店とかはないようで、色々な店で食事を取るみたいですね。

お、どうやら今日も初めて入る店みたいですよ。

桐島大輝は秋葉原某所にある某飲食店に入って行きました。

ナツク・G 「おっと、この店は……」

統夜 「あれ?この店知ってるのか?」

ナツク・G 「ま、まあ。このお店と中継が繋がっているんで、実際見てもらった方が早いかも」

統夜 「は、はあ……」

ナツク・G 「それでは、店の中に入った大輝さんの様子を見てみよう
さて、大輝の入った店とはいったいどのようなものなのか？」

メイドA 「お帰りなさいませ、ご主人様♪」

統夜 「……ここって確か……」

ナツク・G 「そう、メイド喫茶です。大輝さんはここがメイド喫茶だとは知らずに
入ったみたいだね。大輝さん、困惑してるみたいだし」

メイドB 「ご主人様♪そのコート、渋くて素敵ですね♪」

メイドC 「コートだけじゃなくて、ご主人様、渋くて素敵ですね♪」

大輝 「あ、ああ……」

どうやら大輝は、慣れないメイドさん相手にタジタジな様子みたいです。

統夜 「大輝さん、相当困ってるな」

ナツク・G 「まあ、普段メイド喫茶に行かない人があの環境に慣れるわけではないです
からな。おや、オムライスが来たみたいだ」

メイドB 「ご主人様も一緒にお願いします♪」

大輝 「い、一緒って何をするんだ？」

メイドB 「美味しくなるおまじないでございます」

大輝 「美味しくなるおまじないか……」

メイドC 「それでは一緒に行きますよ！」

大輝 「ちよ、ちよつと待て！何て言ったらいいんだ？」

メイドB 「えつとですねえ……。美味しくなーれ！萌え萌えキュン♪」

大輝 「え？も、もえ……。？」

ナツク・G 「おやおや。大輝さんはどうやら見知らぬフレーズに困惑しているようだね」

統夜 「そりや、そうだろ。俺だつて困惑してるし……」

ナツク・G 「あれ？統夜はメイド喫茶つて行ったことないのか？」

統夜 「放課後の部活で唯たちから話だけは聞いてるけど、実際に行つたことは……」

ナツク・G 「ふーん……。あつ、大輝さんがこつちのカメラに気付いたみたいだな」

大輝 「統夜！統夜じゃないか！それに、お前は……」

大輝はどうやら撮影しているのに気付いたようで、そちら側に用意してあるテレビに統夜とうぶ主が映つてるもんだから驚いてるみたいです。

ナツク・G 「やあ、大輝さん。どうですか？初めてのメイド喫茶は。知らずに入ったみたいですけど」

大輝 「どうもこうもあるか！俺はな、こんなところには……」

メイドB 「ご主人様、行きますよ！」

メイドB・C 「美味しくなーれ!! 萌え萌えキュン♪」

大輝 「も……もえもえ……きゅ……／＼／＼」

ナツク・G 「ぷっ! ククク……。あの大輝さんが……アハハ!!」

統夜 「ちよつと! そんなに笑わなくたって……」

イルバ 『いや、俺様はこいつの気持ちかわかるぜ。これはなかなか見られない

シユールな映像だからな』

どうやらうぶ主だけではなく、イルバもこのシユールな映像に笑っているようです。

メイドB 「はい、ご主人様♪あーん!」

大輝 「や、やめろ! 自分で出来る!!……おい、お前ら! 見てないで助けろ!!」

統夜 「い、いや……。助けたいのは山々ですが、俺たち遠いところにいるし……」

ナツク・G 「大輝さん。俺からメッセージがあります」

大輝 「な、何だ? それよりもこの状況を何とかしてくれ」

ナツク・G 「大輝さん……。ファイトだよっ! (穂乃果風)」

大輝 「貴様ああああああ!!」

メイドB 「ほら、ご主人様。あーん……」

大輝 「じ、自分で出来る!」

ナツク・G 「……はい、中継は以上です」

中継のカメラが切られて、スタジオのテレビの映像も途切れた。

統夜 「……大輝さん、放っておいていいのかなあ……」

ナツク・G 「これもまた経験だよ。統夜だってそう思うだろう？」

統夜 「ま、まあ……」

イルバ 『やれやれ。魔戒騎士でもないのにずいぶんと偉そうだな』

ナツク・G 「……はい、それじゃあ次行きまーす」

うぶ主はイルバの言葉をスルーすると、次の人物を紹介することになりました。

その人物とは……。

——魔戒法師の日常 アキト編——

イルバ 『おい！この企画は魔戒騎士の日常を紹介するものだろう？企画の趣旨がずれてないか？』

ナツク・G 「いやあ、アキトなら面白い画が撮れそうだなと思つて……」

統夜 「そういえばアキトがどんな日常を過ごしてるのかは興味があるかも」

ナツク・G 「だろう？ そう思って今回の企画に取り入れた訳だよ」
イルバ 『はあ……。 まあ、そういうことなら別にどうでもいいが』

ナツク・G 「それじゃあ、VTR行ってみよう♪」

はい、了解です♪

魔戒法師のアキト。彼は阿門法師の後継者と言われている布道レオの1番弟子です。

彼は対ホラー用の武器である魔戒銃の他、全ての魔戒騎士と魔戒法師を手助けする魔導具の開発を行っています。

……おや、今も魔戒銃の調整を行っていますね。

魔戒銃の調整や魔導具の開発は彼の日常といったところででしょうか？

ナツク・G 「まさかとは思うけど、魔導具の開発だけでアキトの1日が終わるなんてことはないよな？」

統夜 「それはあり得るかも。本当にアキトのプライベートは俺も知らないからな……」

イルバ 『だが、作業に行き詰まってるみたいだな』

イルバの言う通り、アキトの手は止まっており、うーんと頭を抱えていました。
すると……。

アキト 「あー!!もう!ダメだ!脳の刺激が足りん!飯を兼ねて、あそこ」に行つて

くるかな」

統夜 「あそこ……?」

ナツク・G 「どうやらアキトには行きつけの店があるようです。なのでそこも密着してみましよう!」

アキトが訪れたのは某所にある多国籍料理の店で、この店自慢のメニューは、超激辛の料理の数々みたいです。

おつと、アキトが何かを注文したようです。

厨房の様子を見ましよう。

ナツク・G 「……?!?!?冗談だろ!?!」

統夜 「へえ、辛そうだけど美味そうだな」

どうやらアキトが注文したのは激辛の麺のようです。

ひき肉を中華鍋で炒めてますが、な、何だこれは!?!

鷹の爪よりも辛いものが入っていたり、激辛の唐辛子を刻んだものが入っていたりと、こんな物が人間に喰えるのかといったものだぞ!

イルバ 『おいおい。これはいくらなんでも入れ過ぎだろ。こんなもの、よく作れるよな。料理人もむせてるし』

イルバの言う通り、アキトが注文したメニューは料理人をむせさせる程の辛さのよう

です。

おっと、料理が完成し、アキトの前に置かれたようです。

店員A 「お待たせしました」

アキト 「うっひょお！相変わらず辛そうだな！」

店員A 「制限時間は20分になります。挑戦が失敗しましたら、2500円の罰金がありますので、ご了承ください」

アキト 「おう！望むところだぜ！」

どうやらアキトはこの店自慢の激辛メニューに挑戦するようです。

ちなみにこのメニューですが、何人かは成功しているみたいですが、最近の成功者はいないみたいですね。

アキト 「いったきまーす！」

アキトの激辛メニュー挑戦が始まりました！

アキト最初の一口は……。

「……かぁー!!辛えなあ!だけど、すつごくうめえよ!!」

ナツク・G 「……あんだけ辛いものを平然と食べてる……」

統夜 「……アキトって辛いものが好きなんだな……」

イルバ 『やれやれ……。あんな辛そうなものを平然と食うとは、こいつ、あり得ない』

くらい辛党なんだな』

どうやら、魔戒法師のアキトは、かなりの辛党のようであった。

ナツク・G 「……どうやらあれと同じものがスタジオに運ばれましたね」

アキトが現在美味しそうに頬張っている激辛麺がスタジオに運ばれ、それはうぷ主と
統夜の前に運ばれました。

統夜 「……辛そうだな」

ナツク・G 「もう、匂いの時点で凄いよな……」

さあ、せっかくなので、これがどれ程の辛さなのか、お2人に実食してもらい、体感
してもらいましょう。

ナツク・G 「ま、マジか!？」

統夜 「まあ、そういうことなら……」

2人は目の前の激辛麺を実食しました。

果たして、そのお味は?そして、その辛さは如何程のものなのか?

まず最初にうぷ主が麺をズルズルと啜るのですが……。

……おや?うぷ主の顔がどんどん真っ赤になっていくような……。

ナツク・G 「……ぴ、ぴぎやああああああああああああ!!」

うぷ主は奇妙な叫び声をあげたかと思ったら、あまりの辛さにその場で気絶してしま

いました。

統夜 「ええ!?!ちよつと!しつかりしろよ!」

イルバ 『……やれやれ。普通の人間がこいつを喰えばそうもなるよな』

……うぶ主がダウンしたのを不安げに眺めながら統夜も実食しますが……。

統夜 「……!?!確かに辛い……。だけど、美味しい!!」

この料理の辛さは、魔戒騎士である統夜の顔をも歪ませるものでしたが、それでも味わっているようです。

……おや、そうこうしているうちにアキトはこの麺を完食したみたいですね。

時間の方も5分も時間を残しての成功で、これには店員さんも驚いております。

ちなみに制限時間以内に食べ終えると、この麺のお代はタダになり、アイスクリームのサービスがつくそうです。

うぶ主はダウンしていますが、アキトは食後のアイスクリームを堪能していました。

おやおや、うぶ主がダウンしている間にアキトは店を後にしてどっかに行つたようです。

ちよつと!後を追わなくてもいいんですか？

ああ、行つちやつた……。

※※※

アキトがどこかへ行ってから数分後、うぶ主がどうか目を覚ましたようです。

ナツク・G 「……………ああ……………！ひどい目にあつた……………」

統夜 「アハハ……………。大丈夫か？」

ナツク・G 「まだ口がヒリヒリするけど、気を取り直して次に行こうか……………」

ま、まあ！うぶ主も大丈夫そうですね、次の企画に行ってみましょうか！

—— 魔戒騎士の日常 黒崎戒人編 ——

統夜 「おつ、ここに来て戒人の日常か！」

ナツク・G 「さすがにライバルなだけあって、食いつきが半端ないな……………」

統夜 「だって、戒人のプライベートなんて知る機会はなかったし……………」

ナツク・G 「さすがにライバルでもプライベートまではわからないか。まあ、安心し

てくれ。面白いものを見せれるはずだよ」

イルバ 『何でそこまで自信満々なんだよ……』

イルバは自信満々なうぷ主に呆れてますが、ここで黒崎戒人の紹介をしましょう。

黒崎戒人は、紅の番犬所に所属する魔戒騎士で、堅陣騎士ガイアの称号を持つ魔戒騎士です。

その実力はかなりのものであり、先のサブックでは、惜しくも準々決勝で統夜に負けましたが、初出場でベスト8という快挙を成し遂げました。

そんな黒崎戒人の日常に密着します。

黒崎戒人の朝は他の魔戒騎士同様に早く、朝はエレメントの浄化を行っていました。午前中いっぱいエレメントの浄化を行った戒人は、どうやら昼食を取るようです。

……おや？ここは公園ですね。ここで昼食を摂るのでしょうか？

ナツク・G 「あれ？戒人はどこかの店で昼食を摂る訳じゃないのかな？」

統夜 「だとしたら何を食べるんだろう……」

戒人はベンチに座ると、魔法衣の裏地の中から何かを取り出しました。

それはいったい何なのか？

ナツク・G 「……こ、これは……！」

統夜 「もしかして……。手作りの弁当？」

イルバ 『しかも彩りも良いじゃないか。戒人のやつ、料理上手だったんだな』

そうです！戒人は自分で弁当を作り、それをお昼に食べているのです。

ナツク・G、統夜 「か、家庭的だ……」

これは、魔戒騎士にしては珍しい一面ですねえ。

普段から自炊をする魔戒騎士も多いようですが、ここまで見た目も綺麗なお弁当はなかなか作れないですよ。

うぶ主も統夜も驚いていますが、昼食を終えた戒人は、再びエレメントの浄化を再開するようです。

……エレメントの浄化が終わると、戒人は番犬所を訪れます。

指令がある時は指令書を受け取り、ホラー討伐に向かいますが、今日は指令はないそうです。

番犬所を後にした戒人は、1度家に戻ると、夕飯を作り始めましたね。

統夜 「ゆ、夕飯まで自炊なんだな……」

ナツク・G 「本当に家庭的な一面があるんだな……」

イルバ 『しかも手際が良すぎる……。こいつは俺様も驚きだぜ……』

いやあ、戒人の手料理は本当に美味しそうですねえ。

え？何を作ってるかって？

それはぜひ想像してみてください。

夕食を終えた戒人は、街の見回りに向かいました。

……おっと、どうやら街の見回りを行っている戒人と中継が繋がったようです。どうやらスタジオにいるうぶ主に物申したいことがあるそうです。

戒人 「……お、繋がった。おい、統夜！うぶ主！聞こえるか！」
ナツク・G 「大丈夫、聞こえてるよ」

統夜 「戒人、お前つてずいぶんと家庭的な一面があるんだな」

戒人 「くつ、魔戒騎士っぽくないから、出来れば秘密にしたかったんだがな。まあ、UAが30000を越えたんだ。これくらいはいいだろう」

トルバ 『やれやれ、戒人。さっそくメタ発言をしておるのお』

戒人のメタ発言に呆れているのは、戒人の相棒である、魔導輪のトルバです。

魔導輪と言っても指輪ではなく、腕輪の形をした魔導具で、イルバと同じく魔戒騎士のサポートを行っています。

トルバ 『ホッホッホ。ナレーターよ、丁寧な説明ありがとうよ』

戒人 「トルバ。お前も十分メタ発言をしてるじゃないか……」

……ま、まあ。メタ発言は置いておいて、本題に参りましょうか。

戒人 「おっと、そうだったな」

統夜 「なあ、戒人。お前、うぶ主に言いたいことがあるとか言ってたけど、それって

？」

戒人 「ああ。UAも30000を越えたからな。これを機に言っておきたいことがあつてな」

ナツク・G 「言っておきたいこと？」

戒人 「ああ。俺は統夜のライバルだろう？なのに、やけに俺の出番が少くないか？」
イルバ 『まあ、この小説はけいおん！メインの話が多いからな。その時は自ずと戒人やアキトの出番もないしな』

統夜 「イルバ、お前までメタ発言を……！」

戒人 「イルバの言うこともわかるんだが、やはり、俺メインの回が1話もないっていうのはどういうことだよ」

ナツク・G 「あ、そういえば戒人メインの回はなかったかもな。初登場のシーンやヘラクスを倒すシーンとかでは活躍してたけどな」

統夜 「戒人はサブツクの時だつて活躍してたよな？」

戒人 「まあ、そうだな。だが、俺は2回戦で元老院付きの魔戒騎士に勝つたのに、丸々カットだもんなあ」

ナツク・G 「そ、それは。あまり尺を長くするのもどうかと思つて仕方なく……」

戒人 「まあ、そこはいいだろう。なあ、うぶ主。この小説ももうすぐ完結なんだろ

？」

ナツク・G 「いや、これから劇場版の話も入ってくるからな。もう少し続くと思うぞ」

統夜 「劇場版ってことは……。もしかして口……」

ナツク・G 「ストーツプ!!メタ発言は仕方ないけど、ネタバレは許さんぞ!」

統夜 「アハハ……。確かにこつから先はネタバレになるか……」

ナツク・G 「劇場版の話をしてたけど、まだまだ統夜の試練は終わった訳じゃないんだからな」

統夜 「うぐつ……。確かにそうだけど、それもネタバレにならないのか?」

ナツク・G 「これは次回予告みたいなもんだからいいんだよ」

統夜 「出たよ。うぶ主の特権ってやつが」

イルバ 『それに、次回予告は俺様の役目だからな。そこを取らないでもらおうか』

おやおや、ずいぶんとメタ発言がひどくなってきましたね(笑)

戒人 「おいおい、話をそらさないでくれよ」

ナツク・G 「悪い悪い。それで、どうしたんだ?」

戒人 「俺は統夜のライバルなんだから、そろそろ俺メインの話を書いてくれよ。それか、俺が主役の別の作品だな」

ナツク・G 「別の作品って……。絶狼みたいなやつか？それは面白そうだけど……」
戒人 「んー……。そうだなあ……。さしずめタイトルは、「G A I A 〱 P h a n t o
m T u s k 〱」みたいな感じかな？」

ナツク・G 「アハハ……。もうタイトルまで考えてるのかよ……。まあ、そこは前向きに考えとくよ。何か面白そうだし」

戒人 「まあ、そういうことだから、前向きに考えといてくれよ。それじゃあな」

自分のリクエストを話してスッキリしたのか、戒人との中継はここで途絶えてしまいました。

ナツク・G 「アハハ……。戒人のやつ、中継を切りやがった……。でもまあ、戒人の日常には密着出来たと思うし、良しとするか」

統夜 「なあ、うぶ主。本当に戒人が主役の作品を作るのか？」

ナツク・G 「まあ、まだわからん。この小説もまだまだ続くし、色々考えてることもあるからな」

統夜 「へえ……。そうなんだ」

ナツク・G 「とりあえず、魔戒騎士の日常に密着という今回の企画はひとまず終了とします」

イルバ 『おいおい、まだまだ紹介仕切れてない魔戒騎士がたくさんいるだろう』

ナツク・G 「まあ、そうなんだけどき。今回は第1回ってことで、他の魔戒騎士の日常に密着するのはまた次の機会かな？」

イルバ 『ま、この企画が好評だったら……の話だけどな』

ナツク・G 「うぐつ……！確かに今回の話は今までにない話になったから、不評だったら次はないけどさ」

統夜 「まあまあ。この小説の文字数的にもいい感じの長さなんじゃないのか？」

イルバ 『統夜。お前さんも普通にメタ発言をしてるな……』

ナツク・G 「ま、それはともかくとして、今回の企画はここまですなりませう」

イルバ 『ま、今回の形式は今までにない形だったが、まあ良かったんじゃないのか？』

統夜 「確かに、アキトや戒人の知られざる一面が明らかになったしな」

ナツク・G 「まあ、これが好評だったら幸いだけど……。感想待ってます！」

イルバ 『おいおい、それは小説本編で言うべきことではないだろう』

ナツク・G 「……ま、それはともかくとして、僕から1つお知らせがあります！」

統夜 「お知らせ？だったら活動報告で書けばいいんじゃないのか？」

ナツク・G 「いやあ、そうなんだけどき。せつかくだからいいかなあと思つて」

イルバ 『あのなあ……。それで、お前のいうお知らせとやらは何なんだ？』

ナツク・G 「お知らせというのは……。この小説の続編のタイトルを決めたので発表しようかなと思ひまして」

イルバ 『おいおい、まだ完結もしてないのにもう続編の予告かよ……』

ナツク・G 「まあ、1話だけは書いたからいいかなあと思つて……」

続夜 「ま、別にいいんじゃないのか？それで、続編のタイトルつていうのは？」

それは私が発表させてもらいます。

この小説、「牙狼×けいおん 白銀の刃」の続編は……。

「牙狼ライブ！〜9人の女神と光の騎士〜」

に決まりました！

イルバ 『おいおい、なんだよ。牙狼ライブつて……』

ナツク・G 「いやあ、続編は牙狼とラブライブ！のクロスで考えてるからさあ……」

続夜 「へえ。ということ、あいつと穂……」

ナツク・G 「ストーツプ!!ここから先のネタバレは無しだぜ!」

統夜 「いやいやいや……。散々フラグ立てといて何言ってるんだよ!」

イルバ 『確かに。あそこまでフラグを散りばめてたらネタバレもヘツタクレもないよな……』

ナツク・G 「そうなんだけどさ……。それ以上の情報は出したくないって思ったんだよ!」

イルバ 『ま、別にいいんだが……』

ナツク・G 「まあ、そういう訳で、これからもこの小説を頑張っていけますが、次回作もぜひご期待ください!」

統夜 「次回作……。俺も出るのかな?」

ナツク・G 「それはどうだろうね。出す予定ではあるけどさ!」

統夜 「うっ……。ま、まあ、それならそれで仕方ないけどさ……!」

ナツク・G 「それはともかくとして、今回のUA30000記念作品は以上になります!」

イルバ 『おい、今度はUA40000だろ?何か考えてるのか?』

ナツク・G 「いや、まだ考えてないんだよ。なので、こんな話が見てみたいなどリクエストがあれば感想なり個人的にメッセージなりください!待ってます!」

イルバ 『おいおい、他力本願過ぎるだろ』

統夜 「まあ、UA40000なんてまだ先だろうし、じっくり考えていけばいいんじゃないのか?」

ナツク・G 「まあ、そういうことだ。という訳で、今回は以上になります。進行役は私ナツク・Gと」

統夜 「月影統夜と」

イルバ 『イルバでお送りしたぜ!』

ナツク・G 「それでは皆さん、次回をお楽しみに!……イルバ、次回予告で締めつけてよな」

イルバ 『おう、任せておけ!』

……終

—— 次回予告 ——

『どうにか決着がついたな。梓と付き合うようになって日常に変化はあるのか？ 次回、「平穩」。この平穩が続けばいいんだがな』

第98話 「平穩」

かつて統夜が討伐した暗黒騎士ゼクスことディオスが、怨念の塊として蘇った。

それはディオスそのものではなく、ディオスの怨念が鎧として実体化した姿だった。

ゼクスは12体のホラーを封印した短剣の力を用いて実体化に成功したのであった。

ゼクスは統夜を確実に葬るために梓を誘拐し、姑息な手段で統夜を追い詰めていった。

そんな中、ゼクスは不意に梓を解放するのだが、これはゼクスの罠であった。

ゼクスは梓を殺すために攻撃を仕掛けるのだが、統夜は梓を庇ってその攻撃を受けてしまい、倒れてしまった。

この一撃で統夜は殺されてしまったと思われたのだが、唯たちが統夜の誕生日に送ったネットワークスのおかげで、統夜は一命を取り留めた。

一命を取り留めた統夜は梓に自分の気持ちを伝えた。

そのことによって自然と力のみなぎって来た統夜は、蘇ったゼクスと決着をつけるべく戦いを挑んだ。

統夜は渾身の一撃でゼクスを退くことに成功したが、完全にゼクスを討伐したことに

はならなかった。

そのゼクスは、謎の漆黒の騎士に取り込まれてしまった事を、統夜たちはまだ知らなかった。

その戦いから数日後、統夜はこの日も普通に登校した。

「……おう、みんな。おはよう！」

統夜はいつものノリで唯たちに挨拶をするのだが……。

「……あつ、やーくん……」

「おつ、おはよう、統夜君……」

「おつ、おはよう、統夜」

唯たちは統夜を見るなりとりあえずは挨拶をするのだが、どこかよそよそしい態度だった。

「……？みんな、どうした？」

「あ……。いや……。えつと……」

「……あつ、統夜君ごめん！私、トイレに行ってくるね！」

「あ、私も」

「あたしも行ってくるよ」

「あつ、私も行くー！」

唯たちは揃ってトイレに行くとのことで、教室を後にした。

「……………？どうしたんだ？唯たちのやつ」

《まあ、あいつらの気持ちもわからんではないがな》

イルバは、何故唯たちが統夜によそよそしい態度を取っているのか理由を察していた。

（……………イルバ、そうなのか？）

《そりやそうだろ。だって、あいつらは……………》

イルバが説明をしようとしたその時だった。

「……………ねえねえ、統夜君。唯ちゃんたちとケンカでもしたの？」

いつもと違う様子の唯たちを見ていたクラスメイトの佐伯三花が、統夜に声をかけた。

「いや。別にそんなことはないんだけど……………」

「あつ！もしかして、4人揃ってフっちゃったとか？」

統夜と三花との会話に、中島信代が割って入ってきた。

「アハハ！さすがにそれはないんじゃない？そうだよね？」

「アハハ……………ま、まあ……………」

4人揃ってフったという言葉が統夜の胸にグサリと刺さったのか、苦笑いをしてい

た。

《統夜……凶星だな》

（わかつてるっての！）

《だが、唯たちがよそよそしいのはそれだけが理由ではなさそうだな》

（え？……!?も、もしかして……）

統夜は唯たちが統夜によそよそしい態度を取るもう1つの理由を察していた。
すると……。

「……？統夜君？どうしたの？」

「もしかして……。あたしの言ったこと、当たってるのか？」

「アハハ、違う違う。そんなんじゃないからさ」

統夜は苦笑いをしながらこのように話を誤魔化していた。

「お、俺もトイレ行つてくるかな」

統夜は平静を装い、そして逃げるように教室を後にすると、本当にトイレに向かった。
トイレで用を足した統夜はそのまま教室に戻ることにしたのだが……。

「……あっ」

偶然にも梓とばったりあったのだが、お互いを意識しすぎて互いに恥ずかしくてい
た。

「……あつ、そうだ。統夜先輩！」

「ん？どうした？」

何かを思い出した梓は、恥ずかしがるのをやめて統夜に話しかけた。

「さつき先輩たちを見かけたんですけど、先輩たち、すごくバツが悪そうで……」

「ああ、梓も見かけたのか……」

「私が統夜先輩と付き合うようになったから、気まづくなつたんですかね……」

「いや、それだけが理由じゃないと思うんだよ」

「それだけじゃない……。あつ！もしかして……!!」

「まあ、そういうことだろうな」

「……」

梓はゼクスにさらわれたことを思い出し、俯きながら黙っていた。

「梓、気にすることはないんだぜ。悪いのはゼクスなんだから……」

「……っ！でも！」

「唯たちには改めて話をするよ。俺としてもこのまま唯たちと気まづいのも嫌だしな」

統夜は未だに気まづいと思っっている唯たちときちんと話をしようとして心に決めていた。

「それじゃあ、今日も部活に顔を出すから、その時に唯たちに話をするからな」

「はい！それじゃあまた後で！」

統夜は梓と会話を終えて、梓と別れると、そのまま教室へ戻っていった。教室に戻った統夜は、こちらを気まずそうに見つめる唯たちの姿を確認するが、唯たちを氣遣つて自分から声をかけることはしなかった。

※※※

そして放課後、統夜はいつものように音楽準備室を訪れたのだが……。

「……あつ、やーくん……」

「統夜君……」

「やれやれ……。お前たち、まだあの時のことを気にしてるんだな」

統夜は相変わらず気まずそうにしている唯たちを見ながら苦笑いをしていた。

それから魔法衣と学生靴を長椅子に置き、学生靴からイルバ専用のスタンドを取り出すと、自分の席に座り、イルバ専用のスタンドをテーブルの上に置いた。

統夜は自分の指にはめられたイルバを外すと、専用のスタンドにセットした。

「……………だつて……………私たち……………」

「梓を助けるためとはいえ、統夜をあれほど傷つけて……………」

「だから……………」

「やーくんに合わせる顔がないよ……………」

唯たちが統夜に対してよそよそしい態度を取っているのは、ゼクスとの戦いの時に梓を救うために、統夜を傷つけた罪の意識があるからであった。

それは仕方のないことだということは頭ではわかっていても、申し訳無さは消えることとはなかった。

「皆さん……………」

梓は悲痛な表情で唯たちのことを見ていた。

もし自分ではなく違う誰かが誘拐されていたら、きつと同じことをしていただろうと思っていたからだ。

そのため、梓はどのような言葉で唯たちを励ますべきかわからなかった。

「……………やれやれ……………。馬鹿だなあ、お前ら」

統夜もそんな唯たちの気持ちは理解していたが、穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

「……あの時だつて言つたら？お前らの攻撃なんて痛くもかゆくもないつてな。それに、あの状況じゃああするしかないつてのは俺もわかつてるから」

痛くもかゆくもないつていうのは嘘だったが、梓を人質にとられた状況ではやむなしだということとは統夜もよく理解していた。

「……つーだ、だけどー！」

「それに……。それだけ後ろめたく思つてゐるつてことは、それだけ俺のことを大事に思つてくれてゐるつてことだろ？そこは嬉しく思つてゐるぜ」

『ほお……』

統夜は梓と付き合うようになり、その時に唯たちの気持ちがあんとなくではあるが理解出来るようになっていた。

色恋に関しては鈍感だった統夜の成長ぶりに、イルバは笑みを浮かべていた。

「だからさ……。いつも通りでいてくれないか？このままずっと気まずいのも嫌だしや」

統夜は唯たちの気持ちを理解した上でこのように告げながら笑みを浮かべていた。

そんな統夜の言葉は唯たちの胸に響いたようで、唯たちの瞳には涙が滲んでいた。

そして……。

「やーくへん！」

「うおっ!？」

唯は統夜にタツクルするかのように飛びついてきて、その勢いで、統夜は唯に押し倒される形になってしまった。

「やーくん……! やーくん……!」

唯はすかさず統夜に抱きつくつと、堰が切れたかのように泣き出していった。

「やれやれ……!」

統夜は穏やかな表情で笑みを浮かべると、唯の頭を優しく撫でていた。

そして、そのやり取りがしばらく続くと、漣、律、紬の3人も統夜に抱きついていった。

「統夜……! 統夜!」

「ごめんな……! 本当にごめんな!」

「統夜君、本当にごめんね!」

律、漣、紬の3人も涙を流しながら統夜に詫びの言葉をいれていた。

「まったく……。俺たちの絆があれくらいのことと壊れる訳ないだろ。だから、奴の言った言葉は気にしないでもいい。俺はみんなのことを大切に思ってるんだからな」

統夜は1人の女性として好きになったのは梓だったが、唯たちのことも色恋とは別として大切に思っていた。

「うん……! 私もやーくんのこと、好きだよ!」

「ああ、色恋は別にしても、あたしは統夜のことを大事に思ってるんだからな！」

「私も同じ気持ちだよ！」

「うん！私も統夜君が大好き!!」

律と澪は色恋は別にといい線引きをしてこのように言っていたが、唯と紬に関してはまるで告白のような言い回しだった。

だが、唯と紬も色恋は別にと線引きをした上で統夜に好きと言っており、統夜もそのことは理解していた。

そんな中……。

「……むー……むー……」

1人だけ蚊帳の外になってしまった梓は、ぷうつと頬を膨らませながら不機嫌そうにしていた。

だが……。

（……まあ、私だって先輩たちの気持ちはわかるし、あれくらいなら許してもいいかな？）

梓は唯たちの気持ちはよく理解していたため、統夜は譲れないものの、多少のスキンシップであれば許してもいいと考えていた。

こうして、唯たちの心の中にあつたわだかまりは、統夜の優しさによって切り裂かれ

たのであった。

その後、ティータイムに入ったのはいいのだが……。

「……」

統夜はいつもと違うティータイムの様子に困惑していた。

それは何故かというと……。

「エへへ……。やーくん♪」

「統夜、疲れただろ？肩もんでやるよ」

「とつ、統夜。恥ずかしいけど……。私がケーキを食べさせてやる！」

「エへへ……。統夜君♪」

唯たち4人があまりにも統夜にベタベタくっついていたからである。

唯と紬は統夜に抱きつき、律は統夜に肩もみをしており、漣は統夜にケーキを食べさ

せようとしていた。

「ちよ……。お前ら！暑苦しいから離れろ！」

「ええ？いいじゃん別に」

「そうよそうよ！」

離れてくれと言われたのが不服だったのか、唯と紬は頬をぷうつと膨らませていた。

「それに、漣。ケーキは自分で食べられるから」

「あうう……。ダメ？」

「うぐつ……。！」

滯は目をウルウルさせながら上目遣いと、男であれば一発で落ちてしまいそうな仕事をしていた。

それを見ていた統夜の頬は赤くなり、滯の仕草に動揺していた。

「つたく……。わかつたよ……」

統夜は覚悟を決めると、滯はケーキを統夜に食べさせていた。

そんな唯たちの一部始終を見ていた梓は……。

「むー……。!!」

自分は蚊帳の外で唯たちが統夜とベタバタしていたのが気に入らなくて、梓はぶうつと頬を膨らませながら様子を伺っていた。

「先輩たち！そろそろ統夜先輩から離れてください！統夜先輩は私の彼氏なんですからね！」

「ええ？あずにゃんはこれからやくんといくらでもイチヤイチヤ出来るんだから、ちよつとくらいはいいじゃん！」

「い……。イチヤ？」

唯の言葉を聞いて恥ずかしくなった統夜は、顔を真っ赤にしていた。

「確かにそうよね。それに、私たちだつて時々は統夜君とスキンシップしたいわ♪」
 「そうだよなあ。梓は統夜と2人きりの時に思い切り甘えればいいんだし、ちよつとくらいいいだろう?」

「ああ。あたしもそう思うぜ!」

「あつ……!?!甘つ!?!甘つ!?!」

「
 //
 //
 //
 //」

漣の言葉に動揺した梓と統夜は、顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

梓は統夜と付き合うようになったのはいいのだが、恋人としての接し方というものがよくわかっていなかった。

それは統夜も同様であり、出来る限り普段と同じ感じで接しようと思っていたのである。

「ま、まあ……。ちよつとくらいだつたら許してもいいですけど……」

梓は唯たちが統夜に惚れていることを知っているため、部活の時だけは統夜を独占しなくてもいいかなと思っていた。

「やったあ♪さすがあずにゃん♪」

梓のちよつとくらいならいいという言葉を聞いた唯は、さらにぎゅーつと力強く統夜に抱きついてた。

「アハハ……。どうしてこうなった……」

統夜はあまりに唐突な展開についていけず、苦笑いをしていた。

《まあ、唯たちを散々心配させたし、悪いこともしたからな。今日1日くらいは唯たちの好きにさせてやったらどうだ?》

(ああ、俺はそのつもりだぞ)

統夜はいつも以上の唯たちのスキンシップに恥ずかしいという感情を抱きながらも、それを受け入れていた。

「あー！もう！私も我慢出来ないですー！」

唯たちばかりスキンシップをしており、我慢出来なくなったのか、梓は席を立つと、統夜に近づき、空いているスペースを使って統夜に抱きついていった。

「……やれやれ……」

統夜は苦笑いをしながらもこの状況を受け入れていた。

……その時、音楽準備室の扉がガチャリと開かれた。

「みんな！今日もお茶してるの?」

ティータイムが目当てでさわ子が音楽準備室に入ってきた。

さわ子は統夜たちを見つけるなり、信じられないものを見たような目でその場で固まっていた。

「あつ……」

『やれやれ。これは面倒なことになりそうだな』

イルバはまるで他人事のような発言しており、カチカチと音を立てながら笑みを浮かべていた。

「なつ……！ なななな……！ 何やってるのよ、あなたたち！」

「い、いや、さわちゃん。これはだな……」

唯たちは慌てて統夜から離れ、律が必死に弁解をしていた。

「前からスキンシップは多いと思ってたけど……。統夜君は5股をする最低男だったなんて……」

さわ子はどうやら唯たちのスキンシップを見て、統夜が唯たち全員と付き合っていると勘違いをしているようだった。

「!? ち、ちがつ……。俺は……!!」

「統夜君！ そこに正座なさい!!」

「はっ、はいいい!!」

統夜はさわ子の言うことには逆らえず、大人しくさわ子の前で土下座をしていた。

「まったく……。統夜君、あなたって人は……」

さわ子は統夜が5股をしていると勘違いをしたまま、統夜に説教を始めていた。

(…………お、お前ら！助けてくれ！助けて事情を…………)

統夜は唯たちに助けを求めるため、視線を向けるのだが…………。

「…………いやあ、今日のお茶も美味しいなあ」

「ムギちゃん、今日のケーキも美味しいねえ♪」

「そう？良かった♪」

先ほどまでのスキンシップは何だったのか、唯たちはまるで他人事のようにテイータイムを楽しんでいた。

(う…………裏切りやがったなあああああ!!)

《やれやれ…………。あいつらの手のひら返しは鮮やか過ぎるぜ。よほどさわ子の説教を受けたくないんだな》

(み…………ミナザン!!オンドウルラギツタンデイスカー!!)

統夜は何故か心の中で数年前に流行ったオンドウル語を使って絶叫していた。

「…………ちよつと、統夜君！聞いているの!?!」

「ヴェ!?は、はいい!!」

さわ子は小一時間ほど統夜の説教を行っていた。

(あうう…………。何で俺がこんな目に…………)

《ま、損な役割はいつものことだろう。今回も諦めるんだな》

(そうだな……)

統夜は自分の不幸な役回りを呪いながらさわ子の説教を聞いていた。

さわ子の説教が1時間を越えると、さすがに統夜がかわいそうになり、唯たちは眞実を話し、統夜のフォローを行った。

「……え!?何?統夜君と梓ちゃんが付き合うことになったの!」

「は、はい……// //」

統夜と梓は改めて付き合っているのかと聞かれるのが恥ずかしかったのか、2人揃って頬を赤らめていた。

「……まあ、唯ちゃんたちも統夜君のことが好きなんだもんね。そういうことなら許してもいいわ」

さわ子は唯たち5人が統夜に惚れていることを見抜いており、事情を聞いたことにより誤解は解かれ、統夜はどうか許されたのであった。

「それにしてもあの朴念仁な統夜君に彼女が出来るとはねえ……♪」

さわ子は統夜の性格を知っているため彼女が出来るとは思っていなかったため、ニヤニヤしながら統夜のことをからかっていた。

「いやいや……。俺はそこまで鈍くはないですって!」

統夜は此の期に及んで自分は鈍感ではないと主張するが……。

「「「はあ?」」」

「……すいませんでした」

唯たちが統夜の主張を全力で否定すると、しよんぼりとしながら謝罪をしていた。

「まあ、とりあえずお茶でも飲みながら詳しい話を聞かせてもらいましょうか」

「は……はい……」

統夜たちは再びティータイムに突入すると、統夜がいかにして梓と付き合うようになったかを説明していた。

さわ子はゼクスの起こした事件の話に驚きながらも、2人が付き合う経緯を聞いて納得していた。

その説明がひと段落ついたところで帰る時間となり、統夜はそのまま番犬所へと向かった。

※※※

「……統夜、来ましたね。傷の具合はどうですか？」

統夜が番犬所に顔を出すなり、イレスは統夜を氣遣うことを言っていた。

それは何故かという、戒人とアキトがゼクスの起こした事件のことを話し、その戦いで統夜がだいぶ消耗していることを告げられたからである。

統夜はゼクスとの戦いの後、統夜はまともに動くことは出来ず、どうにかエレメントの浄化に出かけられたのは昨日であった。

「ええ。おかげさまで、もう何ともないです」

「そうですか。それは何よりです」

統夜はイレスに一礼すると、狼の像の前に立つと、魔戒剣を突き刺し、剣の浄化を行った。

この数日でホラーは討伐していないが、エレメントの浄化を行ったことで少なからず魔戒剣に浄化がこびりついているため、ホラーを討伐していなくても定期的に魔戒剣の浄化は行っていた。

浄化を終えた統夜は、魔戒剣を青い鞘に納めた。

「……それはそうと。統夜、あなたは梓と付き合うことになったそうですね？」

「え!? な、何故それを!？」

梓と付き合ったことがイレスの耳に届いているとは思わず、統夜は驚きを隠せなかった。

「戒人とアキトから聞いたのです。2人ともニヤニヤしながら報告していましたよ」

「あいつら……!!」

戒人とアキトの2人が統夜と梓が付き合ったということをイレスに報告したことを知り、統夜は一瞬怒りを覚えるが、隠すようなことでもないと冷静に判断することで、怒りは収まったのであった。

「統夜と梓……。すごくお似合いだと思いますよ♪……あつ、だとしたら、梓が奏狼の後継者を産むのですかねえ?」

「ちよつ!? それは気が早すぎますよ、イレス様!」

「ウフフ♪わかっていますよ♪今はそこまで考えられないですもんね♪」

イレスは統夜のウブな態度が面白く、少々からかっていたのであった。

「それにしても、あの統夜によく大切な人が出来ましたか……。いえ、梓と付き合う前から梓は大切な人でしょうし、唯たちもそうなのでしょう?」

「はい! 俺は唯たちと出会ったことで「守りし者」とはなんなのかを教わりました。彼女

たちこそ、俺にとつてはかけがえのない存在なんです」

「ウフフ♪そう言ってもらえたら、あなたを桜ヶ丘高校に入学させた甲斐がありました♪」

統夜が桜ヶ丘高校に入学出来たのはイレスの力添えがあったからであり、統夜はそんなイレスに対する感謝から、イレスには頭が上がらなかつた。

「それにしても、私としてはあなたが誰かとくつつくのをずっと待つてたのですよ？ 愛といえば、高校生活の醍醐味でもありませんからね♪」

イレスは統夜に恋人が出来ることを願っており、その願いが果たされたことに喜びの気持ちを感じていた。

「アハハ……。そうかもしれないですね……」

恋愛が高校生活の醍醐味というイレスの言葉に賛同した統夜は苦笑いをしていた。

「統夜。梓をきちんと幸せにしてあげるのですよ。魔戒騎士としてではなく、1人の男として」

「……はい。もちろんです！」

統夜は力強く答えており、その瞳からは、何があつても梓を守るといふ覚悟を感じるこゝろが出来る。

「統夜。今日は指令はありませんので、今日はゆっくりと体を休めてくださいね」

「イレス様、ありがとうございます。街の見回りを少し行ったら少しばかり休養させてもらいます」

統夜はイレスに一礼をすると、番犬所を後にした。

統夜はいつも使用している番犬所の出入り口に戻つてくると、そのまま街の見回りに向かおうとしたその時だった。

「……統夜先輩」

「……!? 梓、待つてたのか?」

番犬所の出入り口の場所で梓が待つていたため、統夜は驚きを隠せなかった。

「はい。私、統夜先輩と一緒にいたいって思いました」

「……ずっと待つてたんだろ? こんなに寒いのに……」

梓は寒空の下、統夜のことを待つていたと思われ、梓の手が冷えていると思った統夜は、両手で梓の両手を包み込んでいた。

「ふえ!?!と、統夜先輩!?!////」

「か、勘違いするなよ! 俺はただ冷たくなった梓の手を暖めてるだけだからな!」

統夜は恥ずかしさからか、なぜかツンデレのような言い方になっていた。

『おいおい、何でツンデレっぽい言い方になってるんだよ……』

そのことに、イルバはすかさずツツコミをいれるが、統夜はそれをスルーしていた。

「あつ……ありがとうございます……。統夜先輩……。凄く……暖かいです。」

梓は統夜の手の温もりを感じており、満面の笑みを浮かべていた。

『やれやれ……。付き合ってるからといって、これ見よがしにイチヤつきやがって……』

「ちよ!?!イルバ!?!」

イルバの言葉で正気に戻った統夜は慌てて手を離すと、互いに顔を見合わせて恥ずかしそうにしていた。

『ところで梓。お前さんは統夜を待っていたのだろうか?何か用事があるのか?』

「……あつ、そうそう。統夜先輩、今日って指令はあつたんですか?」

「いや、今日は指令はないよ。街の見回りをして帰るつもり」

「でしたら……。私も付いて行ってもいいですか?」

「え?」

梓の思わぬ提案に、統夜は驚きを隠せなかった。

『おいおい。いくら街の見回りとはいえ、遊びに行くわけじゃないんだぞ?』

「そ、それはわかってますよ!でも、私は少しでも多く統夜先輩と一緒にいられたらなと思っただけです」

「ま、俺も同じ気持ちではあるし、今日くらいなら問題はないかな?」

「ほ、本当ですか?」

街の見回りに梓が同行することを統夜が許可すると、梓の表情がぱあつと明るくなっていた。

『やれやれ……。お前さんは相変わらず甘いな、統夜』

「わ、わかってるよ！」

『だが、街の見回りを兼ねてデートというのもたまにはいいのかもしれない』

「……そう言ってもらえると助かるぜ」

「ありがとうございます！統夜先輩、イルバ！」

統夜と一緒に街の見回りに行けることになり、梓は統夜とイルバに礼を言っていた。

「とりあえず、これが俺たちが付き合ってから初めてのデートってのもあれだけど……行くか」

「はい！私、統夜先輩と一緒にだつたらどこだって嬉しいです！」

「……アハハ、そう言ってもらえると嬉しいよ。それじゃあ行くぞ」

こうして統夜は梓を連れて街の見回りを行おうとしたのだが……。

ぎゅっ……。

梓が不意に統夜の手を握ったのである。

「エへへ……。こつちの方が恋人っぽいと思ひまして……」

「……そうだな」

統夜も梓と手を繋ぎたいと考えていたため、穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

こうして、統夜と梓は手を繋ぎながら街の見回りを開始した。

1時間ほど街を歩いた後、梓を家まで送り、統夜はそのまま家路についた。

……続く。

—— 次回予告 ——

『今年もこの季節がやってきたか。こいつは統夜にとつても無関係なイベントじゃなくなってきたぜ。次回、「聖夜」。メリークリスマス!!』

第99話 「聖夜」

怨念の塊として蘇ったゼクスを討伐し、統夜と梓が付き合うようになってから、早くも10日ほどが経過した。

クリスマスが間近に迫っており、街のあちこちでクリスマスのイルミネーションが目立つようになっていた。

統夜はこの日も学校に行く前にエレメントの浄化を行っていた。

「……はあっ!!」

統夜はとあるオブジェから飛び出して来た邪気を、魔戒剣で斬り裂いた。

「……よし。イルバ、ノルマはあと1つくらいか?」

統夜は魔戒剣を青い鞘に納めながらイルバに確認を取っていた。

『そうだな。もうそろそろ学校に行かないと遅刻するし、こここの近くのオブジェの浄化を終えたら学校に向かうぞ』

「了解だ、イルバ」

たった今浄化を終えたオブジェの近くに別のオブジェがあるとのことなので、統夜はそこへ向かうことにした。

『……それはそうと、統夜』

「ん？どうしたんだ？」

移動を始めようとしたところでイルバが声をかけてきたので、統夜は足を止めた。

『あちこち装飾がうつとおしいのだが、もうすぐクリスマスだったな』

「そういうばそうだな」

『例年なら関係なく騎士の務めを果たすところだが、今回はそういう訳にはいかないだろう？』

「そうだよなあ。俺だつてクリスマスは梓と過ごしたいけど、指令があつたらダメだからなあ」

統夜も恋人である梓とクリスマスを過ごしたいという気持ちはあつたものの、指令があつたらと考えると考えたら複雑な心境になっていた。

『まあ、その時はその時だろう。せめてプレゼントくらいは買ってやらないとな』

「わかっているつて。それよりもさっさと仕事を終わらせないと。学校に遅れちまう」

統夜はここで話を終わらせると、この近くのオブジェへと向かい、そこから飛び出してきた邪気を浄化した。

それを終えた統夜はそのまま学校へと向かっていった。

※※※

この日の昼休み、統夜はいつものように購買へ向かい、パンを買おうとしていた。

「さーて……。今日はどのパンを狙おうか……」

既にパン争奪戦は始まっており、統夜はその争奪戦に出遅れないように、人混みの中へと入っていきこうとしたその時だった。

「……統夜先輩！」

梓が人混みの中へと入ろうとする統夜に声をかけると、統夜は足を止めた。

「おう、梓か。どうしたんだ？」

「統夜先輩は今日も購買でパンですか？」

「まあな。急がないと出遅れちゃうからな」

「クスツ……。統夜先輩、良かったらなんですけど、私、統夜先輩の分もお弁当を作ったんです。一緒に食べませんか？」

「え!?マジで!?いいのか!？」

タダで食事にありつけるとわかった統夜は食いついてきていた。

「は……………はい……………」

統夜の食いつきぶりに、梓は苦笑いをしていた。

「統夜先輩っていつもパンですよ？それじゃ栄養が偏るかなと思ひまして、弁当を作ってみました！」

「アハハ……………。和と同じことを言うんだな……………。だけど、ありがたいよ！」

「それは良かったです！それじゃあ部室で食べましょう！」

「ああ、そうだな」

梓が弁当を用意してくれたことで購買のパン争奪戦を行う必要のなくなった統夜は、梓と共に音楽準備室に向かい、共に昼食を取ることになった。

「……………よし、唯先輩たちはいない」

梓は音楽準備室に入ると、誰もいないことに安堵していた。

統夜たちは自分の教室で集まって食べることがほとんどなのだが、時々音楽準備室で食事を取り、食後に紅茶を楽しんだりもしていた。

しかし、唯たちは教室で昼食を取っているため、音楽準備室には誰もいなかった。

統夜と梓は隣り合って座ると、梓は弁当を広げ始めた。

「……………お！美味そうじゃないか！これ、全部梓が作ったのか？」

統夜と梓の前に並べられた弁当は、栄養バランスを考慮したものであり、さらには彩りも良かったので、料理上手な人間が作る弁当だった。

「お母さんに教わりながらですけど……。全部私の手作りなんですよー!」

梓は料理はそれなりに出来るが、料理上手という訳ではないため、母親に教わりながら、この弁当を完成させたのであった。

「手作りか……。男心がくすぐられるよ♪」

（やれやれ……。よく言うぜ。鈍感で天然ジゴロのくせに……）

イルバは統夜が男心というものを語る発言が気に入らなかったのか、心の中で悪態をついていた。

「統夜先輩。食べてみて下さい!」

「おう!それじゃあ、いただきます!」

統夜は箸を手にとると、さっそく弁当のおかずを一つ取って頬張った。

「……!!美味しい!これ、すげー美味しいよ!」

統夜は梓の作ってくれた弁当が美味しかったのか、頬を紅潮させていた。

「本当ですか!?!良かったです!」

梓は統夜に美味しいと言ってもらえて、安堵したのか笑みを浮かべていた。

『おい、梓。統夜は味オンチなんだ。何を食っても美味しいと言うことを忘れてはいない

「だろうな？」

「あつ……」

イルバの指摘で現実には引き戻された梓は、苦笑いをしていた。

「おいおい、イルバ。水を差すようなことを言うなよ。俺は本気で美味しいって思ってるんだぜ」

『どうだか……』

「……」

梓はイルバに言われて統夜が味オンチだということを思い出したのだが、統夜が自分の作った弁当を美味しいと言いながら食べてくれるのは、純粹に嬉しかった。

「統夜先輩！遠慮しないでどんどん食べてくださいいね！」

「ああ、そのつもりだよ」

統夜と梓は、イルバの発言をスルーすると、2人で楽しいランチタイムを送っていた。

そんな中……。

「ぐぬぬ……。やーくんとあずにゃん、いい雰囲気だね……。！」

「まさか、梓の奴が手作り弁当を持ってくるとはな」

「梓も統夜の彼女って感じがしてきたな」

「そうねえ。私たちとしては悔しいけど、2人を見守りましょう」

「うん、そうだね……。！」

統夜たちより早く昼食を終えた唯たちは、恨めしそうに統夜と梓の様子を見ていたが、仲睦まじい2人を見守っていかうと思っていた。

統夜とイルバは唯たちがこっそり見ていることに気付いていたが、あえて知らないフリをしていた。

※※※

「……あつ、そうだ、梓」

「?何ですか?」

梓お手製の弁当を完食し、少しの間まったりしていた統夜と梓だったが、統夜が不意に話を切り出していった。

「もうすぐクリスマスだろ？そこら辺の話をしておきたくてな」

「え？でも統夜先輩はクリスマスこそ魔戒騎士の務めで忙しいですよ〜？」

梓は統夜とクリスマスを過ごしたいと思っていたのだが、魔戒騎士の務めが忙しいと予想し、気を遣っていた。

「まあ、そうなんだけどさ……。もし時間が取ればクリスマスは梓と過ごしたいって思ってるんだよ」

「統夜先輩……。はい！私も統夜先輩とクリスマスを過ごしたいです！」

「24日は厳しいかもしれないけどさ、25日は冬休みだし、どうにか時間作るからさ、一緒にどこか出かけないか？」

24日は終業式であり、この日は指令が来る可能性が高いと思われるのだが、25日の朝と昼はどうにか時間を作れると判断し、梓にデートを申し込んだ。

「はい！統夜先輩とデート出来るならいいだつて大丈夫です！」

梓は統夜とデート出来ること自体が嬉しいと思っていたので、25日でも問題ないことを告げた。

「ごめんな、梓。それじゃあ近くなったら詳しいことを決めような」

「はー」

こうしてクリスマスデートの日程を決めた統夜と梓だったが、昼休みも終わりが近付いてきたので片付けをして、それぞれの教室へと戻っていった。

そして放課後になったのだが、統夜はいつものように部室へ顔を出し、唯たちの受験勉強の風景を眺めながら、梓にギターを教えていた。

勉強と練習がひと段落ついたら、ティータイムに突入し、この日は解散となった。

唯たち4人が同じ大学を目指すようになってからは、このような感じで1日が過ぎていくことが多く、クリスマスまではずっとこのような感じで1日が過ぎていった。

※※※

そして、クリスマススイブを迎えたのだが、この日は2学期の終業式だった。

「今日はクリスマススイブか……。今年こそみんなでパーティーしようぜ！」

この日も統夜たちは部室に集まっていたのだが、律がクリスマスパーティーを企画して

いた。

「おお！面白そうだね！」

「おい！私たちは受験生だろ？そんなことしてる暇はないだろ」

「わかってるよ。だけど、息抜きは必要だつて♪」

さすがの律も自分の立場はわかっていたのだが、息抜きが必要だと主張していた。

「ごめんなさい……！私もそれには賛成なんだけど、今日はうちのクリスマスパーティーに参加しなきゃいけないくて……」

紬は軽音部のみんなでのクリスマスパーティーには賛成だったのだが、今日はこれから行われる琴吹家のクリスマスパーティーに参加しなければならず、申し訳なさそうにしていた。

「そっかあ……。それじゃ仕方ないよな……」

律は紬が参加出来ないと聞いて残念そうにしていた。

「それに、私も参加出来そうにありませんので……」

梓は申し訳なさそうに、欠席を伝えていた。

「……彼氏ですよ、奥さん」

「羨ましいですねえ」

梓が欠席と聞いた律と唯は、ニヤニヤしながら梓をからかっていた。

「ち、違います！今日は家族と過ごすんです！」

「あれ？そうなの!?」

「それは意外だな……」

梓は統夜と2人きりのクリスマススイブを過ごすとは唯たちは予想していたのだが、その予想が外れると、意外だと驚いていた。

「統夜はクリスマススイブって忙しいのか？」

「ああ。クリスマススイブはかなりの確率で指令があるからな」

『この時期は幸せな奴が多い分、陰我も多いからな。ホラーもよく現れるという訳だ』
「そ、そうなんだ……」

イルバの説明を聞くと、唯たちはどうやら納得したようだった。

「あつ、わかった！今日は無理でも明日はデートするんだろ！」

「ふえ!?な、何でわかったんですか？」

「やつぱりな。今日じゃないなら明日あたりでもデートするだろうと思ってたんだよ」

「それにしても羨ましいですなあ」

統夜と梓が明日デートするとわかると、唯はニヤニヤしながら梓をからかっていた。

「あうう……／＼／＼／＼」

改めて明日デートすることがバレて恥ずかしかったのか、梓は顔を真っ赤にしてい

た。

「梓ちゃん、統夜君、楽しんできてね♪」

「そうだぞ、梓。統夜とのんびり出来る機会は少ないんだから今のうちにしつかり甘えておかないと」

「そ、そうですね……」

細と溼は梓を焚きつけるようなことを言っており、梓にはそれが恥ずかしかった。

「とりあえず、お茶にしましょうか♪」

細はティータイムの準備を整えると、そのままティータイムに突入した。

統夜は唯たちにからかわれながらもティータイムを楽しみ、それが終わると、番犬所へと向かっていった。

「……お、統夜。来ましたね」

「はい、イレス様」

統夜はイレスに一礼すると、狼の像の前に立ち、そこに魔戒剣を突き刺すことで、魔戒剣の浄化を行った。

「……それはそうと、今日はクリスマススイブみたいですね」

統夜が魔戒剣を鞘に納め、しまうタイミングでイレスがこのように話を切り出した。

「ええ。だからか街はクリスマススのイルミネーションでいっぱいですよ」

「すいませんね、統夜。せっかくのクリスマススイブだというのに。梓と一緒に過ごしたいでしょう?」

「いえ……。梓とは明日ゆっくり過ごそうと思つていますし、この時期は陰我が集まりやすいことも理解していますので」

「そうなんですよね。この時期は幸せそうな人が多い反面、その幸せを妬む気持ちも陰我になりかねますからね」

クリスマス時期はいつもより陰我が集まりやすいことから、ホラーの出現率も高く、かなりの確率でホラー討伐の指令が下される。

「どうやら今年もそのようであり……」

「……統夜、指令です」

統夜に指令が下され、イレスの付き人の秘書官が、統夜に赤い指令書を手渡した。

それを受け取った統夜は、魔法衣から魔導ライターを取り出すと、魔導火を放つて指令書を燃やした。

すると、そこから魔戒語で書かれた文章が飛び出してきた。

「……人の幸せを妬み、その幸せを喰らうホラーあり。ただちに殲滅せよ」

統夜が文章を読み上げると、魔戒語で書かれた文章は消滅した。

『やれやれ……。いかにもらしい指令じゃないか。ホラー、エンヴィード。幸せそうなカップルを狙って捕食する胸くそ悪い奴だぜ』

「幸せそうなカップルを捕食……。？そんなことさせるかよ！」

統夜は人の幸せを踏みにじろうとしているホラーの存在を許すことは出来なかった。

「そうですね。幸いにも今の所被害の報告はありません。ホラーが誰かを捕食する前に討滅するのです」

「わかりました。ホラーを見つけて、討滅します」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にして、イルバのナビゲーションを頼りにホラーの搜索を開始した。

※※※

統夜が番犬所を後にして、ホラー搜索を始めてしばらく経過すると、すっかり夜にな

り、街はクリスマスのイルミネーションでキラキラと輝いていた。

今日はクリスマスイブということもあり、街は幸せそうなカップルが多く見受けられた。

そんな中、その幸せそうなカップルたちを恨めしそうに見ている男が1人いた。

「……………くそっ！何がクリスマスだよ。どいつもこいつも幸せそうにしやがって……………」

幸せそうなカップルを睨む男の様はただクリスマスというイベントと幸せそうなカップルに嫉妬している男に見えたのだが、この男こそ、ホラーであった。

「……………幸せそうな奴らはこの俺が食ってやるさ」

ホラーである男の標的こそ、幸せそうなカップルだった。

その時、男は1組のカップルに目を付けていた。

「よし……………。まずはあいつらからだ」

目を付けたカップルを捕食するためにゆっくり近付こうとしたその時だった。

「……………おい、ちよつといいか？」

男がカップルに近づくと前に赤いコートの少年……………統夜が男に声をかけた。

「……………な、何だお前！邪魔するな！」

「……………そういう訳にはいかないんだよ。だってお前……………」

統夜はこう前置きをする、魔法衣から魔導ライターを取り出すと、魔導火を放って、

男の瞳を照らした。

すると、男の瞳から不気味な文字のようなものが浮かび上がり、その男がホラーであるということが明かされた。

統夜が魔導火を照らした時、男に狙われたカップルはふと統夜の姿を見て足を止めた。

それは何故かというところ……。

「……あれ？もしかしてあれって、統夜？」

「それに、あいつは……！」

この2人はヒカリと幸太であり、幸太は統夜が男の前で魔導火を放っているのを見て、この男がホラーであることを推測した。

「……貴様、魔戒騎士か……！」

「ま、そういうことだ」

男は統夜が魔戒騎士だとわかると、統夜を殴り飛ばし、統夜はヒカリと幸太の近くまで吹き飛ばされた。

「……ちよつと、統夜！大丈夫？」

「つつつ……。ってあれ？ヒカリさんと幸太さんじゃないか。デート中って訳だな」

「そういう統夜君はホラー退治か？」

「ま、そんなところだ」

統夜は体勢を立て直す、男を睨みつけていた。

ここは人が多いため、迂闊に剣を抜くことが出来ない状態であった。

「統夜！ホラーをその路地裏に誘導するんだ。あそこなら人目につかず戦えるはずだ」

「了解だ！感謝するぜ、幸太さん！」

幸太のアシストに感謝しながら、統夜は男の体を掴み、近くの路地裏に移動した。

統夜が移動したことを確認すると、幸太とヒカリは、路地裏の入り口に移動し、他の人が入ってこられないようにした。

幸太とヒカリのおかげでホラーとの戦いに専念出来る統夜は、男を蹴り飛ばすと、魔戒剣を抜いた。

「……おのれ……魔戒騎士……。俺の邪魔をしやがって！」

「悪いが、お前らの邪魔をするのが俺の仕事なんだな」

統夜は魔戒剣を構えると、男を睨みつけていた。

「……おのれ……!!こうなったら、目障りな貴様を始末し、俺の食事を楽しませてもらおうぞ！」

「そうはさせるか！せっかくのクリスマスなんだ。お前の好きにはさせない！」

統夜はホラーである男を倒すために男に向かっていった。

男も統夜を仕留めるために向かっていって攻撃を仕掛けるが、攻撃は統夜に難なくかわされてしまい、逆に蹴りによる攻撃を受けて吹き飛ばされた。

「くそっ……こうなったら……本気で貴様を殺してやる！」

こう言った男の瞳は真っ白になると、人間の姿から、ホラーの姿へと変わっていった。

『……統夜！こいつがエンヴィードだ。油断するなよ！』

「ああ、わかつてる！」

統夜は魔戒剣を構えると、エンヴィードを睨みつけた。

ホラーの姿となったエンヴィードは統夜に襲いかかると、爪による攻撃を仕掛けた。

統夜はエンヴィードの攻撃を軽々と防ぐと、魔戒剣を一閃してエンヴィードを斬り裂き、蹴りを放ってエンヴィードを吹き飛ばした。

「よし、一気に決着を付けてやる……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はエンヴィードに向かってこのように宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

「………いついっまさか、奏狼とかいう魔戒騎士か！」

エンヴィードは奏狼の存在を知っていたのか、統夜と対峙して驚きを隠せずいた。

「へえ、お前も俺のことを知っていたか……。だが、一気に決着をつける！」

統夜は魔戒剣が変化した皇輝剣を構えると、エンヴィードに向かっていった。

「おのれ……。これならどうだ!!」

エンヴィードは統夜の接近を阻止するために、衝撃波を何度も放つが、奏狼の鎧に傷一つつけることは出来なかった。

エンヴィードに接近した統夜は、皇輝剣を一閃すると、エンヴィードの体を真つ二つに斬り裂いた。

「ハ……。ハ……。ハ……。強すぎる……。ハ……」

エンヴィードは統夜の圧倒的な力に為す術もなく、真つ二つにされてしまい、その体は、爆発と共に消滅した。

エンヴィードが消滅したことを確認した統夜は鎧を解除すると、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めた。

「ふう……。とりあえずお仕事は完了だな」

統夜はエンヴィードを討伐し、一息ついていた。

「統夜君！」

「統夜！」

機転を利かして統夜とエンヴィードを路地裏に誘導した幸太とヒカリは、統夜がホ

ラーを討伐したことを確認すると、統夜に駆け寄った。

「幸太さん、ヒカリさん。的確にここまで誘導してくれてありがとう。おかげでスムーズにホラーを狩ることが出来たよ」

統夜は、幸太とヒカリによる的確な誘導に感謝をしていた。

2人のおかげで、統夜は一般人に怪しまれたり巻き込んだりすることなく、ホラーを討伐することが出来たのであった。

「気にするなよ。俺にはホラーを倒す力はないが、出来ることでお前のサポートをした
いと思ってたしな」

「それは私だって同じ気持ちよ」

幸太とヒカリは魔戒騎士でも魔戒法師でもないため、ホラーを倒すことは出来ないが、それでも統夜のサポートはしたいと考えていた。

「そう言ってもらえると助かるよ。それにしても、2人ともデートなんだろう？ 邪魔して悪かったな」

「気にするな。ホラーを見つけたとなるとおちおちデートなんかしてられんからな」

「幸太の言う通りだわ。これで私たちは心置き無くデート出来るって訳♪」

ヒカリは幸太と出会ったばかりの頃は「幸太さん」と呼んでいたが、付き合うようになって「幸太」と呼び捨てで呼ぶようになった。

その微妙な変化を統夜は感じ取り、苦笑いをしていた。

「それはそうと、2人ともデートなんだろ？邪魔しちゃ悪いし、俺はそろそろ行くな」
統夜はホラーを討伐したということで、幸太とヒカリのデートを邪魔しないよう足早にその場から立ち去った。

その後はキラキラと輝くクリスマスイルミネーションを眺めながら街の見回りを行い、家路についていた。

※※※

翌日、この日はクリスマスであり、統夜は梓とデートの約束をしており、桜ヶ丘某所で待ち合わせをしていた。

統夜は約束の時間より20分も早く待ち合わせの場所に到着したのだが……。

「……………あつ、統夜先輩」

何と梓は統夜よりも早く待ち合わせの場所に来ており、統夜のことを待っていたのであった。

「梓、ずいぶん早いな。まだ待ち合わせまで時間あったらどう？ちよつと待ったか？」

「いえ、大丈夫です！ここに着いたのは5分くらい前ですから」

「アハハ……。それにしても早いな……」

「私、今日が凄く楽しみです、家でジツとしていらなくて……」

梓は今日のデートを楽しみにしてたからこそ、待ち合わせの時間よりも早く来ていたのであった。

「ま、そこは俺も同じ気持ちだよ。……とりあえず、行こうか」

「はいっ！」

統夜は自然と梓の手を繋ぎ、2人揃って幸せそうな笑みを浮かべながら移動を始めた。

(……やれやれ。最近はどうやく恋人同士らしくなってきたか。今日のデートはいったいどうなることやら……)

ずっと統夜と梓のことを見守ってきたイルバは、最近の2人が恋人同士らしくなったことに安堵しており、今日のデートが無事に終わるよう心配していた。

2人が向かったのは、隣町にある複合型のショッピングモールであり、様々な店だけではなく、ゲームセンターや映画館も併設されている。

今日のようなイベントの日にもなれば、多くの若者で賑わうのである。

梓がこちらのショッピングモールに行きたいと話をしたため、ここを今日のデートスポットにしたのであった。

統夜たちがショッピングモールに到着すると、すでに多くの人で賑わっており、カップルの姿が目立っていた。

「凄い人ですね……」

「そうだな……。さすがはクリスマスといったところだな……」

人が多いことは予想していたものの、ここまで多いとは思っていなかったもので、2人は驚きを隠せなかった。

「……梓、まず最初にどこに行きたい?」

統夜は梓に行きたい場所の確認をとっていた。

「……そうですね……。まずはお買い物したいです!」

「わかった。それじゃあ行こうか」

「はいっ！」

統夜と梓は買い物をするために移動を開始した。

最初に向かったのは、服屋が多いブースであり、すでにここも多くの人で賑わっていた。

「アハハ……。やつぱりみんな服を見るんだな」

このショッピングモールの来場客の多くが10代〜20代であり、オシャレな服が揃っていることから、服を売っている店は大賑わいだった。

2人はとりあえず梓の服を見るために女性ものの服を扱う店で服を物色していた。

「統夜先輩」

「ん？どうした？」

「私の私服って……。ちよつと子供っぽいですかね？」

「へ？」

梓からの思いがけない質問に、統夜は面食らっていた。

「今日はデートだからちよつとは頑張つてオシャレしましたけど、普段の服はちよつと子供っぽいのかなあつて……」

「んー……。そうか？そこは気にしなくてもいいと思うけどな」

《俺様から言わせてもらえば子供っぽい気はするが、あまり背伸びをする必要はない気

がするがな」

イルバは梓にも伝わるようにテレパシーを送っていた。

「……そうですかねえ……」

「梓、イルバの言う通りだぜ。オシャレは大切だけど、あまり背伸びはしなくてもいいと思うぜ。俺はありのままの梓が好きなんだからな」

「あつ……ありがとう……ございます……／＼／＼／＼」

統夜のストレートな言葉が恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

「とりあえず、色々服を見てみようぜ。欲しい服があれば買ってやるよ」

「え？で、でも……。悪いですよ！」

「大丈夫だって。魔戒騎士の仕事をしてるから番犬所からそれなりにもらってるし、両親の遺産もあるからけっこう貯金はあるんだぜ」

統夜は自分の懐事情を梓に説明し、気兼ねなく奢れるようにしていた。

統夜の現在の収入は、エリートと呼ばれるサラリーマン以上であり、貯金を含むとかの金額がある。

そのため、統夜は毎日のように外食をしているのであった。

「あ、ありがとうございます……。それじゃあ、遠慮なく……」

梓は統夜と共に服の物色を行った。

梓は気に入った服を手にとって試着を繰り返して、欲しい服を吟味していた。

一方統夜は、大好きな梓がコロコロと衣装チェンジをするのを見て満足そうにしていた。

最終的に、梓は2着ほどの服をチョイスし、統夜はその2着の服を購入した。

続いては、統夜の着る服をチョイスすることになった。

「それじゃあ次は統夜先輩の服を見ましょう」

《まあ、統夜はこんな感じで出掛けない限りはほぼ同じような格好をしているからな》

イルバの指摘通り、統夜は唯たちと遊ぶ時はちゃんとした私服に着替えるのだが、休みの日のエレメントの浄化の時は、同じような格好をしていることが多かった。

「今の格好でも十分オシヤレですけど、やっぱり統夜先輩にはもつとオシヤレな格好をしてもらいたいです」

「そ……そうか？俺はあまりオシヤレとかは無頓着だからさ。梓、コーディネートをお願いしてもいいか？」

「任せて下さいい！」

梓は男物の服を物色し、どれが統夜に似合うかをじっくりと吟味していた。

いくつかの服をチョイスした梓は、統夜にそれを試着してもらい、さらに吟味をして

いた。

自分の服よりもじっくりと時間をかけて統夜の服を選んだ梓は、2セットの服をチョイスし、統夜は梓に選んでもらった服を迷わず購入した。

「俺の服を選んでもらって、ありがとな、梓」

「いえ、気にしないでください。だけど、この服、次のデートに着てきて下さいね」

「わかってるって」

服の買い物を終えた統夜と梓は、続いて雑貨を見て回り、めぼしいものを見つけては購入していた。

雑貨を見た辺りでちょうど昼食の時間になり、2人はショッピングモール内にあるフードコートで昼食を取った。

食事を終えた後、梓はショッピングモール内にある映画館だとある映画を観たいということを提案した。

しかし、まだ映画の上映まで時間があつたため、近くにあるゲームセンターで時間をつぶすことにした。

クレイジーゲームの辺りを歩いていると……。

「……あつ」

梓はとある景品に目が止まって足を止めると、統夜も足を止めた。

「……梓、これが欲しいのか？」

「はい。でも、難しいですよね……」

梓は不安げに景品を見つめるが、その景品は猫のぬいぐるみなのだが、クレインゲームの初心者には厳しそうな配置だった。

「……梓、任せろ」

「……統夜先輩？」

統夜は魔戒騎士としてではなく梓に格好いいところを見せようと張り切ると、500円を入れると、クレインゲームに挑戦した。

統夜は何度かクレインゲームの経験はあるものの、魔戒騎士であるが故に初心者同然のため、1発で景品を取ることとは出来なかった。

500円はあつという間に無くなり、統夜は追加投資をした。

その500円もあつという間に無くなり、統夜は気が付けば2000円も投資していた。

「と、統夜先輩。もういいですよ！気持ちだけでも十分に嬉しいですからー」

「だ、大丈夫だ……。も……。もう少しだ……」

梓は追加投資をしてまで挑戦を続けている統夜を申し訳なさそうに見ていたが、統夜は諦めずに挑戦を続けていた。

(やれやれ……。格好つけるどころか、格好悪いところを見せることになったな、統夜……)

イルバは格好悪いところを見せる結果になってしまった統夜に呆れていた。

そして、投資額は3000円を越え、それもなくなるかと思われたその時だった。

「……よし！そこだ！」

アームが絶妙な位置に移動し、アームはガツシリと猫のぬいぐるみを掴んでいた。

「行け！そこだ！」

統夜は成功を祈っており、その祈りが届いたのか、猫のぬいぐるみを掴んだアームは絶妙なバランスで戻ってきた。

そして……。

……ガタン！

統夜の祈りが届いたのか、猫のぬいぐるみを掴んだアームは離され、統夜は見事に景品を獲得することが出来た。

「よし！やっと取れた……」

統夜は3000円を使ってようやく景品を取ることが出来、疲労感を露わにしていた。

「……ほら、梓」

統夜はやつとの思いで獲得した景品を梓に手渡そうとした。

「え？でも、悪いですよ……」

「いいんだよ。俺は梓にプレゼントするために頑張ったんだから。受け取ってくれなかったら、苦労が無駄になっちゃうよ」

統夜は苦笑いしながらおどけて、梓にぬいぐるみを受け取るよう促した。

統夜の気持ちを察した梓は統夜からぬいぐるみを受け取った。

「統夜先輩……ありがとうございます！これ、大切にしますね！」

「ああ」

梓は心から喜んでいるようであり、梓の笑顔を見た統夜は、穏やかな表情で笑みを浮かべ、先ほどまでの疲労感はあるという間に吹っ飛んでいた。

クレインゲームコーナーを楽しんだ2人は、ゲームセンターを一周し、そこで上映時間が迫ってきたので、映画館へと戻ることにした。

受付でチケットを購入し、ドリンクやポップコーンを購入すると、劇場の中へ入り、適当な席へと座った。

2人が座ってから数分後に映画の予告編が始まり、映画が上映された。

2人が見ている映画は、若者に絶大な支持を得ている恋愛映画であり、ひよんな事から出会った2人が互いに惹かれあい、結ばれるという感じの内容であった。

恋愛映画ということもあってか、カップルが多く、主役である2人の恋愛に夢中になっていった。

一方統夜は……。

「……」

恋愛映画はあまり見ないからか、ジト目で映画を見ており、少しばかり退屈そうだった。

《……おい、統夜。ずいぶんと退屈そうだな》

(まあ、俺ってあまり恋愛映画は見ないからちよつと苦手なんだよな)

《そうかもな。だが、たまにはこういう映画も悪くないんじゃないか?》

(そうだな。あまり退屈そうにしても梓に悪いしな)

統夜はイルバとテレパシーで会話をしていたのだが、会話が終わると、映画に集中していた。

そして映画がクライマックスに近付いていくのだが、とある事情で2人は離れ離れにならなければいけなくなった。

そんな2人に感情移入をしたカップルたちは感動からかうつすらと涙を流していた。

梓も同様に感情移入したのか、涙を流すまではいかなかったが、瞳をウルウルとさせ
ていた。

そんな中、統夜は……。

(……ダメだ……。全然感情移入出来ねえ……)

統夜は色々と思うところがあるせいか、感情移入が出来ず、ジト目で映画を見ていた。そして離れ離れになった2人だったが、ラストで再開を果たし、2人の絆がより一層深まったところで、映画は終了した。

映画を見終わった統夜と梓は、ショッピングモールの中を歩いていた。

「映画、面白かったですね!」

「ああ、そうだな」

統夜の本音としては面白くないと思ったのだが、梓に気を遣わせないように面白いと答えていた。

「恋愛映画ってあまり見ないから新鮮だったよ」

統夜は嘘がバレないようにこう答えたのだが、これは嘘偽りのない本音だった。

「そうなんですか? だったら良かったです!」

(良かった……。梓のやつ、楽しそうだよ)

《まあ、お前さんも頑張ってるってことだな》

イルバはせっかくのデートで梓を楽しませようと奮闘している統夜のことを評価していた。

映画も終わり、気が付けば間も無く日が落ちる時間帯になっていた。

「……統夜先輩。ここを出る前に1箇所だけ行きたいところがあるんですけど、いいですか?」

「もちろんだ」

「ありがとうございます!それじゃあ、行きましょう!」

梓は統夜を連れてとある場所へと向かった。

その場所とは……。

「……綺麗ですね……」

「そうだな……」

2人はこのシヨツピングモールに併設されている観覧車の中にいて、そこから見える景色に見入っていた。

「統夜先輩……。今日は本当にありがとうございます。すっごく楽しかったです!」

「俺も楽しかったぞ。梓とゆつくり過ごせたからな」

魔戒騎士として忙しい日々を送る統夜ではあったが、このように梓と普通のデートが出来ることが素直に嬉しかった。

「統夜先輩……。隣にいてもいいですか?」

「もちろん」

向かい合わせに座っていた2人だったが、梓が統夜の隣に移動した。すると、梓は何も言わずに統夜にもたれかかっていた。

梓の温もりを感じた統夜は何も言わずにただ笑みを浮かべていた。

2人は何も言わずにしばらくの間、その状態でした。

「統夜先輩。ちよつといいですか？」

「ん？どうした？あず……」

梓に呼ばれて統夜が梓の方を見たその時だった。

梓は自分から統夜にキスをした。

「……エへへ／＼／＼キス……しちやいました／＼／＼」

梓は少し恥ずかしそうにしながらも満面の笑みを浮かべていた。

「お、おう……／＼／＼／＼／＼／＼／」

統夜も梓にキスされて恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしていた。

2人は既にファーストキスは済ませていたのだが、それはゼクスとの戦いの最中で統夜が無我夢中の時だったので、統夜は記憶していなかった。

なので、統夜がハッキリと感じたキスはこれが初めてなのである。

「統夜先輩……。今度は統夜先輩からキスして下さい……」

「……わかった」

今度は統夜から梓にキスをし、いい雰囲気になったところで観覧車の時間は終了した。

観覧車を出た2人は、シヨッピングモールを後にすると、桜ヶ丘へと戻っていった。

※※※

桜ヶ丘に戻ってきた2人は、統夜の知っている店でクリスマスらしい夕食を取った。

そこで、統夜と梓はそれぞれ用意したクリスマスプレゼントを手渡した。

食事を終えた2人は、桜ヶ丘某所の道を歩いていった。

「……梓、今日は本当にありがとな。凄く楽しかったぜ」

「はい！私も楽しかったです！」

「それじゃあ、今日はそろそろ帰るか？送るからさ」

「……」

統夜から帰るといふワードが出ると、梓は何故か黙った状態で俯いていた。

「……？梓？」

「……帰りたくないです……」

「え？」

「統夜先輩……。今夜は統夜先輩と一緒にいたいです……」

「!?」

梓からのまさかの言葉に、統夜は驚きを隠せなかった。

いくら恋愛に関しては鈍感な統夜でも、帰りたくないというのがどういう意味なのかは理解しているからである。

「……あー……。その……。えつと……」

梓の言葉に動揺した統夜は、梓に何て返答すべきか迷っていた。

『おい、統夜。お前さんも男だろう？ だったら覚悟を決めたらどうだ？』

ここでイルバが梓に助け舟を出すと、そのイルバの言葉に統夜はハツとしていた。

「……わかった。したら、俺の家に行こうか」

「はいー」

統夜はホテルという選択肢は選ばず、梓を統夜の家招くことにした。

こうして、統夜は梓の家に泊まることになり、クリスマスの夜は2人で過ごすことになった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『今年ももう終わるのか。何だかあつという間じゃないか。次回、「新年」。来年もよろ

しく頼むぜ!!
』

第100話 「新年」

統夜にとって様々な思い出が出来た2学期が終了し、冬休みに突入した。

冬休み初日であるクリスマスは、梓と2人で過ごした。

恋人同士とした楽しい時間を過ごした2人であった。

クリスマスが終わると、統夜は魔戒騎士としての使命に追われていた。

唯たち4人は図書館で受験勉強に勤しみ、梓は憂や純と遊んだり、統夜と会ったりして過ごしていた。

魔戒騎士の使命があるといっても暇な時間がない訳ではないため、統夜はちよつと暇な時間があれば、梓と連絡を取り合い、梓と会っていた。

そんな感じで冬休みは過ぎていき、気が付けば12月31日になっていた。

統夜たちは朝と昼は魔戒騎士の使命だったり受験勉強したりとそれぞれの時間を過ごしていた。

そして、夜は唯の家に集まり、鍋を囲みながら共に新年を迎えようという話になっていった。

統夜は指令が来る可能性を懸念していたが、とりあえず夜は唯の家でのんびりと過ご

し、万が一指令が来た場合は、速やかにホラーを討伐し、唯の家に戻ろうと考えていた。こうして、朝と昼はそれぞれの時間を過ごした統夜たちは、夕方になると、唯の家に集まった。

唯の家に集まった統夜たちは、憂手作りの鍋を囲みながら、談笑しながらテレビを見ていた。

デデーン！

○○○○……out!!

スパーン！

『あー!!』

「アハハ!!この番組面白いねー」

唯は鍋を頬張りながらテレビを見てゲラゲラと笑っていた。

今統夜たちが見てるのは、数年前から毎年やっている「笑ってはいけない」という企画であり、もし笑えばその場できつい罰が待っているというものだった。

「そうだなあ。やつぱり年越しっていったらこれだよなあー」

律は唯の面白いという言葉に同意しており、律は年末といえはこの番組だと思っていた。

「確かに面白いけど、私は紅白見てカウントダウンライブを見る感じかな？」

「あつ、私もそうです！」

濡と梓もこの番組は毎年見ているものの、それは録画したやつを見ており、普段は紅白歌合戦を見て、その後はカウントダウンライブを見て年を越すというパターンが多かった。

「私は……。年越しは海外つてこともあるから第九かしら？それにしても、この番組、面白いわね♪」

紬は家の都合で海外で年を越すことは多く、第九の生演奏を聴いて年を越すことも多かった。

そのためこのようなバラエティはあまり見ないため、紬は楽しみながらテレビを見ていた。

「統夜先輩はどうなんですか？」

「うーん……。そうだなあ……。俺、大晦日はだいたい街の見回りをしているうちに年を越してそのまま初詣だからなあ……」

統夜は大晦日も魔戒騎士として過ごすというのがここ数年のパターンであり、テレビは見ないで外で年を越すが多かった。

その後は帰る前に初詣に行くというのも定番だったが、唯たちと初詣に行くようになってからは年を越したらそのまま帰宅していた。

「……テレビを見るにしても、俺は格闘技を見るかな？」

「アハハ……。そつちですか……」

統夜が格闘技を見ているとは思わなかったのか、梓は苦笑いをしていた。

「格闘技か！確かに格闘技もいいよな！」

滯は統夜が格闘技を見ると聞いて食いついてきた。

「アハハ……。滯って痛そうなのは苦手なのに格闘技とかも好きなんだよな……」

滯は元々スポーツ観戦が好きなのだが、格闘技を見るのも好きだった。

そのことを知っている律はこのように説明をすると、苦笑いをしていた。

「ああ。不思議と格闘技とかは見てても平気なんだよな」

「俺は格闘技を見て戦い方の参考にしてるんだよな」

統夜は格闘技を見るのが純粹に好きなどころもあるが、格闘家の動きを見て魔戒騎士

としての戦い方の参考にしたりもしていた。

「アハハ……。統夜先輩、勉強熱心ですね……」

格闘家の動きさえも戦いに活かそうとしている統夜に梓は苦笑いをしていた。

統夜たちは大晦日に見る番組についての話をしながら「笑ってはいけない」を見て、笑

いながら鍋をつついていた。

「皆さん、年越しそばもありますよ」

台所で色々と料理の仕込みをしていた憂は、年越しそばを続夜たちのところへと持つてきた。

「おお！今年の年越しそばもうまそー!!」

律は憂の年越しそばにキラキラと目を輝かせていた。

「憂ちゃん、今年も大人数で押しかけて色々やってもらってごめんな」

「いいんです。だって、今年もお姉ちゃんのあの笑顔を見て幸せですから♪」

「う〜ま〜♪」

唯は憂お手製の年越しそばを食べて満面の笑みを浮かべていたのだが、それを見て満足そうな表情をしていた。

「アハハ……。そっか……」

滯は唯の笑顔を見て幸せそうな表情をしている憂を見て苦笑いをしていた。

「だけど、憂ちゃん、ごめんな。これだけのことを一人でさせちゃって。俺も手伝いたかったんだけどさ」

「いえ、気にしないでください。私は皆さんが楽しんでいただけたらそれだけでも幸せですの♪」

「アハハ……。相変わらず出来た子だよな……」

『やれやれ。お前さんのその姿勢は立派だが、働き過ぎて無理はするんじゃないぞ』

「フフ、ありがとう、イルバ♪」

イルバは働きの者の憂を気遣う言葉をかけていたのだが、それを聞いて憂は笑みを浮かべていた。

イルバが普通の人間を気遣うことなど珍しいことだったので、統夜は驚いていた。

こうして統夜たちも憂お手製の年越しそばに舌鼓を打っていた。

鍋とそばを食べ終えた統夜たちは、紬の持つてきた「人生当てもんゲーム」というボードゲームをしながら笑ってはいけないを見ていた。

紬の持参したボードゲームは予想以上に白熱したゲームとなり、ゲームを終えた頃には気が付けば新年になっていた。

人生当てもんゲームが終わった頃には唯たちは眠くなつたのか、みんな揃って眠りについていた。

※※※

それから数時間後、統夜は目を覚ました。

目を覚ました統夜はくつついて眠る梓と唯を起こさないように離すと、ソファに置いてあつた魔法衣を羽織り、唯の家を出た。

統夜は唯の家の前に誰もいないことを確認すると、魔戒剣を取り出して、剣の素振りを行った。

『統夜、新年早々精が出るじゃないか』

「まあな。昨日の夜はだらだらし過ぎたからその分体を動かさないと……」

統夜は唯たちと鍋を囲みながらだらだらとした時間を過ごしていたため、その分、体を動かさそうとしていたのである。

『確かに、そうかもしれないな。素振りをするのはいいが、うるさくして唯たちを起こすなよ』

「わかってるって」

統夜はこうして素振りを開始した。

1時間ほど素振りを行い、統夜は唯の家に戻つたのだが、まだ唯たちは眠っていたため、また少しだけ眠って体を休めることにした。

それからおよそ2時間後……。

「…………くん！やーくん！起きてー！」

眠っていた統夜を唯が起こし、統夜は目を覚ました。

「んあ…………？ちよつと寝てたか…………」

統夜が目を覚ますと、既に朝になっており、テレビではお笑い芸人がネタを披露していた。

「今から初詣に行こうよー！」

「ああ、そういうえば起きたら初詣に行つて解散つて話をしてたもんな」

統夜たちは大晦日に唯の家を集まって鍋をしようと言った時にこの日はみんな唯の家に泊まつて初日の出は見ないで初詣に行き、解散しようという話になっていた。

「そうだよ。みんなも起きてるし、さっそく行こうよー！」

こうして統夜たちは桜ヶ丘神社に向かい、初詣を行うことにした。

統夜たちが神社に到着した頃には既に多くの人で賑わっていた。

「…………凄いい人だねえ…………」

「この時間だからな。こんだけ混んでても仕方ないよな」

「そうだよなあ……。とりあえずお参りに行こうぜ！」

統夜たちはさっそくお参りをするために移動を開始した。

今日は元旦ということもあり、境内は人が多く、お参りをする人の行列が出来ていた。統夜たちはその行列に並び、自分たちの順番が来るのを待っていた。

「ねえねえ、みんなは何をお願いするつもりなの？」

「おいおい。それを今言っちゃったらつまらないだろ？」

唯の問いかけに滯がもつともなツツコミをいれると、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「それにしても……。凄い行列ですね……」

「確かにな……。ま、別に急ぐわけじゃないし、こうやってみんなとのんびりしながら待つっていうのも一興じゃないか？」

「そうねえ♪しばらくはみんなとのんびりも出来ないものね♪」

唯たち4人は受験が迫っているため、このようにみんなでのんびり出来るのは今のうちなのであった。

「そうですね……。私も皆さんとちよつとでものんびりしたいです！」

「あれえ？ 梓の場合は“皆さん”とじゃなくて“統夜先輩”とじゃないのか？」

「にや!?へ、変なこと言わないでください!」

律がニヤニヤしながら梓のことをからかっていたため、梓はぷうつと頬を膨らませながらムキになっていた。

「まあまあ、落ち着けて」

統夜はそんな梓をなだめようと頭を優しく撫でていた。

「ふ、ふにやあ……// //」

梓は統夜に撫でられて嬉しかったのか、頬を赤らめながら幸せそうな表情になっていた。

「早くも機嫌が直ってる……」

「統夜は唯よりも梓の扱いがわかってるな」

統夜は梓と付き合うようになってから梓の扱い方を熟知するようになっていた。

「むう……。私の時には見せない顔をしてるよ。あずにゃん……」

唯は梓が自分には見せない表情をしているのが悔しいのか、再びぷうつと頬を膨らませていた。

「あらあら。ウフフ♪」

紬はそんな統夜たちの様子を笑みを浮かべながら眺めていた。

このようなやり取りをしているうちに統夜たちの順番が来たので、統夜たちは一列に

並んで、それぞれお賽銭を入れた。

そして、ジャラジャラと鈴を鳴らし、手を合わせてお参りをした。

「……みんなは何をお願いしたんだ？」

お参りを終えて、移動をしながら統夜は唯たちにお願いを聞いたことを聞いていた。

「あたしは……。志望校に受かりますように……。かな？」

「私も……」

「私もそうかな？」

「私もそうだよお！」

どうやら受験を控えている4人は志望校に受かるようお祈りをしていた。

「そういうやーくんは？」

「そうだなあ……。これからも梓と仲良くやっていきますように……。かな？」

「あつ……。私も同じようなことをお願いしました……。／／／／」

「まったく……。2人揃ってのろけやがって……」

律は2人揃って仲睦まじいお願いをしていたことに呆れ気味だった。

「それだけじゃないぞ」

どうやら統夜は他にもお願いをしていたようだった。

「お前たちが4人揃って志望校に合格しますようにってお願いもしたぞ」

「やーくん……」

唯たち4人が揃って志望校へ行く。それは統夜の願いでもあった。

「それに……」

統夜はまだまだ願いがあつたらしく、こう前置きをして話を続けた。

「卒業しても……。みんなずっと仲良くいられますように……つてな」

「統夜……」

「統夜君……」

「やーくん……!」

「統夜先輩……」

唯たちは統夜の最後のお願いが何よりも嬉しかったのか、笑みを浮かべていた。

「そうだな! あたしだって卒業してもみんなと仲良くしたいって思ってるよ!」

「私もだ! 卒業したって私たちは仲間なんだからな!」

「ええ。みんなとの日々はとても楽しかったもの。そう簡単に忘れるなんて出来ない

わ」

「そうだよ! 私だって卒業してもみんなともっともつと仲良くなりたい!」

「はい! 私もです! 私も先輩たちとずっと仲良くしたいです!」

どうやら唯たちも統夜と同じ気持ちであった。

軽音部でかけがえのない時間を過ごした統夜たちの絆はとても大きく、そう簡単に断ち切れるものではなかった。

《統夜。そのお前さんの願いを無駄にしないためにも魔戒騎士として励むんだな》
(わかっているよ。俺は魔戒騎士で、守りし者なんだから……)

統夜はお祈りをしたことで、守りし者としてさらに精進しようと思っていた。

「それじゃあ、最後におみくじ引いて帰ろうよ！」

「おつ、そうだな！」

こうして統夜たちは帰る前におみくじを引くことにした。

おみくじを引いて、それぞれの運勢を確認すると、それを結び、それが終わったところで帰ることにした。

「さて、おみくじも終わったし、そろそろ帰ろうか」

「そうだな。私は帰ってさっそく勉強しないと……」

「そうね……。ここからが正念場だもの……」

「わ、わかっているよ！」

「うん！私も頑張らなきゃ！」

唯たちは家に帰ったらそのまま受験勉強を頑張ろうと決意していた。

「先輩方、頑張ってくださいね！」

梓も受験生である唯たちにエールを送っていた。

「それじゃあ今日のところは解散しようか。だけど、その前に1つやることがある」「1」「やること?」「1」「1」

統夜のいうやることという言葉の意味がわからず、首を傾げていた。

「……あけましておめでとう!今年もよろしくな!」

「ああ!よろしくな!」

「あけましておめでとう!」

「ええ!今年もよろしくね!」

「みんな、よろしくね!」

「はい!今年もよろしくお願ひします!」

統夜のいうやることというのは、まだ行っていない新年の挨拶だった。

それを聞いた唯たちも同様に新年の挨拶を返していた。

「さて……。それじゃあ帰ろうか」

こうして新年の挨拶を終えた統夜たちは解散し、それぞれ帰路についた。

こうして新年を迎えた統夜たちだったが、新年早々に暗雲が立ち込め、統夜にとって最大の試練が訪れるのだが、統夜はそれを知る由はなかった……。

第100話到達記念作品 「饗宴」

……どうもみなさん、ナック・Gです！

この小説、「牙狼×けいおん 白銀の刃」を応援していただき、誠にありがとうございます！
ます！

前回でこの小説も第100話を迎えることが出来ました。

なので、今回は趣向を変えまして、この小説のメインメンバーを招待して、鍋でも囲みながらこの小説を振り返っていきましょうかと思えます。

律 「まあ、確かに第100話はめでたいけど、鍋は大晦日の時に食べたばかりだしなあ」

漣 「おい、律。いきなりメタ発言はやめろよ。それに、せっかかうぶ主が用意してくれただから」

いやあ、そう言ってくれるとありがたいねえ。

唯 「そうだよお。この鍋だつて美味しそうだし♪」

紬 「そうねえ。でも、こうやってみんなで囲む鍋はいつやっても楽しいわ♪」

梓 「はい！私もそう思います！」

統夜 「そうだな。せっかくの機会だし、今日は受験のことは忘れて思い切り楽しもうぜ」

唯、律 「「やったー!!」」

皆さん、喜んでいただいで何よりです。

イルバ 『やれやれ……。受験生のくせに呑気な奴らだぜ。まあ、今回は特別か……。』
さて、イルバも納得したところで、まずは今日のメンバーの自己紹介を軽くしましうか。

まずは、この作品の主人公であり、魔戒騎士と高校生という2つの顔を持つ少年、月影統夜です！

統夜 「まあ、もうみんな知ってると思うけど、よろしくな」

続いては、その統夜のパートナーであり、戦いの時は統夜のサポートを務める頼もき相棒であるイルバです！

イルバ 『俺様はイルバ、魔導輪だ。まあ、そういうことだからよろしくな』

主役である2人の紹介が終わったので、続いては軽音部の皆さんの紹介をしましう。

まず最初にギター担当の平沢唯です。おっとりとした性格で、可愛いものと美味しいものが大好きな少女です。

唯 「平沢唯だよお。よろしくねえ♪」

続いてはベース担当の秋山澪です！普段は真面目でしっかり者ですが、痛い話と怖い話が苦手とギャップのある少女です。

澪 「あつ、秋山……澪です……。よろしくお願いします……」

統夜 「澪、恥ずかしがらなくても大丈夫だぞ。これは小説なんだから直接見られる訳じゃないんだから」

唯 「そうだよ、みおちゃん！恥ずかしがらなくてもいいからね♪」

澪 「そ、そうか……？そうだよな！」

イルバ 『やれやれ……。随分とメタ発言が酷いな……』

確かにそこは気になるところですが、そこは気にしないようにしましょう！

さて、次行きましょうか！

続いては、ドラム担当の田井中律です！

軽音部の部長であり、明るく元気な性格で、一緒にいると楽しい女の子です！

律 「みんな、やつほー！容姿端麗頭脳明晰……幸せ笑顔で爽やか笑顔で幸せ運ぶみんなのアイドル、田井中律だぜ！」

ゴッソ！！

おや、澪の拳骨が律に炸裂したみたいです。

漣 「自分だけ盛り過ぎだろ！」

紬 「アハハ……」

おやおや。律と漣のやり取りを見てムギが苦笑いをしていますね。とりあえず次に行きましようか。

続いてキーボード担当の琴吹紬です。

おっとりポワポワな性格で、一緒にいるとこちらまで暖かい気持ちになれる女の子です。

紬 「ウフフ♪琴吹紬です。よろしくお願いします♪」

……おお、これはなかなか素晴らしい笑顔だ……。

統夜 「……あれ？うぶ主、もしかして照れてる？」

う、うるさいな！次行こう！次！

統夜 「はいはい……」

ま、そういう訳で次に行きたいと思います。

最後にギター担当で、軽音部で唯一の2年生の中野梓です。

小柄な体型にツインテールが特徴の女の子で、真面目で一生懸命なところのある女の子です。

梓 「な、中野梓です……。よろしくお願いします」

あ、ちなみに今作のヒロインは梓で、統夜と梓は最近付き合い始めたばかりなんですよ。

統夜、梓 「ちよっ!?! // //」

ハツハツハ！照れるな照れるな！

唯 「それにしても、ずいぶんとヒロインが決まるのに時間がかかったよね」

澪 「そうだよなあ。散々引つ張って決まったのがこの前だもんな」

律 「だけどさあ、その分あたしらにだって統夜とくつつくチャンスはあつたよな」

紬 「そうね♪だけど統夜君は鈍感だから、はつきりと気持ちを伝えられた梓ちゃん
の勝ちみたいなのところがあるわよね」

梓 「そ、そうですかね…… // //」

統夜 「おいおい。俺はそんなに鈍感ではないと思うんだけどなあ……」

5人 「はあ!!」

統夜 「……サーセンっした……」

やれやれ……。

まあ、それはともかく、今回の番外編はこの6人でお送りするので、よろしく願
います！

6人 「よろしくお願ひしまーす!!」

さて、鍋もちょうど食べ頃になったみたいだから、みんな、遠慮なく鍋を食べてくださいね。

唯 「わーい♪いただきまーす！」

アハハ……。みんな、本当に美味しそうに鍋を食べてるねえ……。

唯 「だってこの鍋、本当に美味しいんだもん！」

澪 「ああ。この前食べた憂ちゃんの鍋も美味しかったけど、この鍋はそれと同じくらい美味しいよ」

律 「ああ。まさしく100話記念に相応しい味だぜ！」

イルバ 『おいおい。いきなりメタ発言をぶっこむなよな……』

紬 「だけど、本当に美味しいわ♪」

梓 「はい！こうやって皆さんと鍋を囲みながらこの小説を振り返るのはいいかもですな！」

統夜 「アハハ……。梓、お前までメタ発言を……」

ま、まあ！気に入ってもらえて何よりってことで……。

とりあえずみんなには鍋を食べてもらい、そうしながらこの小説を章ごとに振り返っていきななと思っています。

それでは、さっそくどうぞ!!

振り返り・混沌魔戒騎士編

まず最初は混沌魔戒騎士編。

今年の4月から投稿を始めたこの小説ですが、統夜の魔戒騎士としての戦いと、軽音部の5人との交流が描かれています。

唯 「そういえば、私たちがやーくんの秘密を知ったのはあずにゃんが軽音部に入部してからだったよね」

梓 「私が入部する前は先輩たちは統夜先輩の秘密は知らなかったんですね」

滯 「そうだな。部活の途中で急に帰ったり部活を休んだり……。怪しいところはあつたけどな」

律 「その度に統夜は必死に誤魔化してたよな」

統夜 「しつ……仕方ないだろ？俺が魔戒騎士だっていうことは秘密なんだから」

紬 「今思えばそうかもしれないわね」

唯 「やーくんの秘密をまず知ったのがあずにゃんだったんだね」

梓 「はい。あの頃の私は凄く悩んで、軽音部に顔を出してない頃でしたからね……」

統夜 「俺はたまたまあのライブハウス周辺を歩いたらイルバがホラーの気配を探知してな。そこで、ホラーにナンパされそうになつてる梓を見つけたって訳さ」

梓 「な、ナンパって……」

イルバ 『お前さんだつてそう思つてたんだろ?』

梓 「確かにそうですけど……」

唯 「それで、その人がホラーで、あずにゃんはやーくんに助けてもらつたって訳だよねえ?」

梓 「はい。そうですね」

律 「その後だったよな。あたしたちが統夜の秘密を探ろうと動いたのは」

統夜 「まあ、バレバレの尾行だったけどな」

紬 「アハハ……。気付いてたのね」

濡 「それにしても、行き止まりで統夜を見失つたのは驚いたけど、そこが番犬所の入り口だったとはな……」

まあ、番犬所については置いといて、先に行きましようか。

梓 「そうですね……。そして私たちはホラーに襲われて、統夜先輩が助けてくれた

んですよね……」

滯 「その時に私たちは統夜が魔戒騎士だと知ったんだよね……」

そう。唯たちは統夜の秘密を探るために動いていた時にホラーと遭遇し、統夜に救われしました。

その時に統夜が魔戒騎士であるということを知ったのです。

その後、唯たちは統夜から魔戒騎士やホラーについての話を聞かされ、後日、ホラーとの戦いを見届けた時にその現実を思い知らされました。

魔戒騎士はホラーを倒しても、必ずしも人に感謝される訳ではなく、恨まれることもあると唯たちは知りました。

それ以降、積極的にホラーとの戦いに関わっていくことはしなくなった唯たちですが、それでも統夜を支えたいという気持ちはありました。

自分を鍛えてくれた涼邑零との再会や、魔導馬白皇の入手など、統夜は魔戒騎士としてメキメキと力をつけていきました。

そんな中、ディオスという謎の魔戒騎士が桜ヶ丘に眠る魔獣の牙を持ち去り、メシアの腕と呼ばれたホラー、グオルブを復活させようと企んでいました。

その企みを察知した元老院より送られた魔戒騎士布道レオや、統夜の先輩騎士である桐島大輝と共に、統夜はその野望を阻止するべく動きまわりました。

そんな中、ディオスと対峙するのですが、その時、ディオスが暗黒騎士ゼクスであることを知り、戦いを挑みましたが、暗黒騎士の圧倒的な力になすすべはなく、統夜たちは敗れました。

その後、ディオスは余興として唯たちをさらい、その事に統夜は怒り狂い、その結果、統夜は鎧の制限時間超過になり、心滅獣身の状態となつてしまいました。が、冴島鋼牙や涼邑零。さらには唯たちの支えもあり、統夜は心滅から解放されたのです。

唯 「あの時のやーくんは本当に怖かったよね……」

梓 「はい。それに、あんな姿になるなんて……」

統夜 「そうだよな……。その事に関しては返す言葉もないよ」

ま、まあ。心滅のことについては余裕があればまたするということで……。

その後、ディオスはグオルブを復活させてしまうのですが、統夜たちはグオルブを討滅させるために戦いを挑みました。

その力は圧倒的で、統夜は絶体絶命の危機に追いやられますが、唯たちの祈りが届いたことで、「翔翼騎士奏狼」となり、グオルブを討滅したのでした。

グオルブを討滅した後、ディオスは統夜に復讐すべく唯たちを殺そうとしますが、統夜に阻止され、暗黒騎士ゼクスことディオスは、統夜に討滅されたのです。

統夜 「混沌魔戒騎士編についてはこんなもんかな？」

イルバ 『振り返りとしてはかなりぎっくりだけだな』

紬 「まあまあ。他の章もあるんだし、いいんじゃない?」

滯 「そうだな。とりあえずこんな感じで他の章も振り返っていくんだよな?」

律 「そうなるかな。なあ、うぷ主。その後はどうするんだ?」

皆さんの印象に残ったシーンを聞いていこうかなと。

梓 「なるほど……。なんかそれっぽいですね!」

まあ、そういうことで、次の章を振り返っていきましょう!

――振り返り・放課後ティータイム結成編――

律 「おお、この章か!この章の見どころといえば……」

唯 「学園祭ライブと年越しライブだよね!」

イルバ 『おいおい、ぎっくり過ぎるだろ!』

統夜 「それに、阿号やグレゴルとの戦いも忘れてないか?」

まあまあ。そこも含めて説明しましょうか!

暗黒騎士ゼクスことディオスとグオルブを討滅した統夜ですが、魔戒騎士としての彼

の生活は終わりではありません。

夏休みには軽音部として合宿に参加したりしてしまいました。

夏休みが終わると学園祭に向かって準備を始めていったのです。

そんな中、律は滯と和が仲良くしていることに嫉妬していたからか、些細なことで滯とギクシヤクしてしまいました。

統夜は月に1度のイルバとの契約の日が迫りながらも2人に仲直りさせようと奔走しました。

その甲斐あつてか、律と滯は互いに本音を伝え合い、仲直りをする事が出来たのです。

その後、統夜たちのバンド名がさわ子によつて「放課後ティータイム」と勝手に命名されてしまいました。

しかし、統夜たちはこのバンド名をすぐに気に入ると、バンド名は放課後ティータイムに決まったのです。

その後、学園祭直前に唯が風邪を引くというハプニングがありました。どうにか学園祭でのライブを成功させることが出来ました。

その後、季節は秋から冬へと変わり、大晦日が近付いていたのだが、統夜たちは律の友人の紹介でライブハウスでライブを行うことになりました。

そのライブを成功させた統夜たちは、唯の家で鍋を囲み、年越しそばを食べて年を越したのです。

三が日が過ぎた頃、東京の秋葉原周辺で魔戒騎士でも魔戒法師でもないものがホラーを討伐しているとの報告があり、統夜はその調査を命じられ、秋葉原へと向かいました。そこで統夜は布道レオの一番弟子を自称するアキトと出会いました。

アキトは魔導具作りに長けており、自ら作った魔導具で魔戒騎士や魔戒法師の手助けをしたという夢がありました。

そんな2人で調査を行ったのですが、ホラーを討伐していたのは、古の時代に活躍した魔導具、阿号でした。

阿号はグレゴルと呼ばれるホラーの腕を奪い、そのホラーの力で、人々を滅ぼそうと企んでいました。

阿号は、遙か昔、蒼炎法師という魔戒法師に造られ、共にホラーのいない世界を作ることを夢見ていました。

蒼炎法師亡き後、阿号は長い間眠り続けていたのだが、その眠りの中で、人を絶滅させない限りホラーがいなくなることはないという結論に達してしまったのです。

統夜はそんな阿号を止めるべくアキトと共に戦いを挑み、自分もホラーのいない世界を望んでいることを語りかけていました。

そんな中、力を蓄えたグレゴルの腕は

阿号を取り込むことで実体化し、統夜やアキトの前に立ちはだかりました。

統夜はグレゴルとの戦いの中、自分が阿号や蒼炎法師に代わってホラーのいない世界を作る夢を受け継ぐと宣言したのです。

阿号は自分の夢を統夜に託す決意をすると、自らの武器である号殺剣を統夜に託しました。

統夜は号殺剣による一撃によってグレゴルを斬り裂き、新たなる思いを胸に戦いは終わったのです。

唯 「それにしても、秋葉原ではやーくんも大変だったんだね」

律 「そうだよなあ。ただ穂乃果たちと知り合っただけかと思っただけだな」

統夜 「だから言っただろ？仕事だって。あの時の戦いだってかなり熾烈だったんだからな」

そうなんです。魔戒騎士である統夜の戦いはいつも熾烈なものですが、今回の戦いはかなり熾烈なものでした。

まあ、今回は振り返りなので、詳細なことは話さないとのことで。

気になる方は第37話から第39話の話を読んでみてください。

イルバ 『おいおい。ここで部分的な広告を入れるなよ』

まあ、イルバのツツコミはさて置いて、次に行きましようか！

――振り返り・魔導人機襲来編――

統夜 「おつ、この章でようやく俺たちは進級したんだよな」

律 「そうだぜえ！ここから3年生編に突入って訳だ」

紬 「ここからアニメけいおん!!の二期の話が出てきたわよね」

梓 「確かに、戒人さんが出てくるまではほのぼのとした内容が多かったかもですね」

唯 「戒人さんが出てきてアキトさんが再登場してもほのぼのとした内容は多かったけどね」

……まあ、この章の始めはみんなが説明してくれた通りの展開だったよね。

改めてこの章の振り返りをしたいと思います。

3年生になった統夜たちですが、新入部員は入らず、現状のメンバーで1年を過ごすことになりました。

そんな中、統夜はかつて修練場の修行を共に過ごし、ホラーに殺されたと思われたク口こと黒崎戒人と再会を果たすのでした。

戒人は、「堅陣騎士ガイア」の称号を持つ魔戒騎士で、その実力は統夜に引けを取らないものでした。

2人は互いを良きライバルと認め合い、互いにホラーと戦っていく決意をしたのです。

そんな中、謎の魔戒法師アスハが動き始め、レオの兄である布道シグマが作りし魔導具である鉄騎を強奪し、改良をして統夜に襲わせました。

統夜は鉄騎との戦いで危機を迎えますが、そんな統夜を助けたのは、阿号やグレゴルの戦いで共に戦った、魔戒法師のアキトでした。

アキトは強奪された鉄騎の奪還もしくは破壊を命じられ、統夜のいる桜ヶ丘を訪れた時に鉄騎を見つけたのでした。

鉄騎を倒したのはいいですが、ここから、アスハは動き始めました。

自らが恨んでいる魔戒騎士を滅ぼすために特殊な音波兵器を開発すると、ホラー食いのホラーであるヘラクスと協力関係になり、ヘラクスにとあることをさせていました。

それこそ、その音波によってソウルメタルの性質を変容させて魔戒剣を扱えなくしてその魔戒騎士をホラーに捕食させる魔戒騎士狩りでした。

この魔戒騎士狩りで、多くの魔戒騎士が犠牲になってしまいました。

それを阻止するために統夜も動きましたが、他の魔戒騎士同様にその音波を浴びた結

果、魔戒剣が持てなくなるといふ危機に直面しました。

そんな中、アキトや戒人、さらに大輝の協力もあつて魔戒剣を封じていた音波の破壊に成功したのです。

これで魔戒騎士狩りが終わったと思つたのですが、ヘラクスはトドメを刺される直前にアスハに救われ、この時にアスハは姿を現したのです。

アスハは全ての魔戒騎士を滅ぼすために特殊な音波を使つていましたが、魔戒騎士を滅ぼすための魔導具は他にも開発していました。

それこそが、アスハの最高傑作である「魔導人機」でした。

特殊な音波を放つ兵器は破壊されたものの、魔導人機を開発させたアスハは、魔戒騎士を滅ぼす手始めとして、統夜を始末しようと企んでいました。

アスハは統夜をおびき寄せるために唯たち4人を誘拐し、梓に指定した場所へ統夜を連れてくるよう指示を出しました。

その話を梓から聞いた統夜はアキト、戒人、大輝の協力を得てアスハの元へと向かいました。

アスハはヘラクスに統夜たちの足止めをするよう命じ、そのために多数の魔導具を投入しました。

統夜は強行突破して、付いてきた梓やさわ子。さらにはアキトと共に唯たちを救おう

としますが、これこそアスハの罠でした。

魔導人機に乗ったアスハが唯たちをさらって統夜をおび寄せたのは、もう一つ作っていた特殊な音波兵器によって統夜の魔戒剣を封じて確実に始末するためでした。

その戦いの最中、吹き飛ばされたイルバを梓が回収し、統夜を救うために音波兵器破壊に動き出しました。

丸腰の統夜は魔導人機に敵うわけがなく、アスハに痛めつけられていました。

そして、トドメを刺そうとするのですが、間一髪のところまで音波兵器の破壊に成功し、統夜はアキトや戒人と大輝。そして、統夜たちの応援に駆けつけたレオと共に反撃を始めた。

魔導人機の性能は高く、鎧を召還した統夜たちでも苦戦は必至でした。

魔導人機の放った主砲によって、アスハは統夜たちを吹き飛ばそうと企みましたが、統夜は脳裏に聞こえてきた阿号の声と共に現れた号殺剣を受け取ると、それで魔導人機の主砲を受け止めていました。

統夜は全力で主砲を受け止めた結果、号殺剣は粉々になりましたが、主砲は受け止めることが出来ました。

そして統夜は、皇輝剣の一閃によって、魔導人機とアスハを討伐したのです。

こうして、魔戒騎士狩りを行い、多くの魔戒騎士の命を奪ったアスハは、統夜によつ

て討伐されたのでした。

唯 「それにしても、あの時のあずにゃんは本当にフラインプレーだったよね」

統夜 「そうだな。俺は梓のおかげで奴に反撃することが出来たしな」

梓 「い、いえ……。私は統夜先輩を助けたって無我夢中でしたから……」

イルバ 『まあ、厳密に言えばあの兵器を破壊したのが俺様だが、梓がいなければそれも出来なかつたしな』

漣 「それにしても、よくあいつに気付かれずに行けたよな」

イルバ 『まあ、梓がちっこいからな。だから奴は気付かなかつたんだろう』

梓 「……むー……！」

紬 「まあまあ、梓ちゃん、落ち着いて」

唯 「そうだよ、あずにゃん！あずにゃんはちっちゃいから可愛いんだよ！」

梓 「みんなしてちっちゃい言うなです！」

アハハ……。何気に小さいっての気にしてたんだね……。

まあ、とりあえず魔導人機襲来編の振り返りはこんなもんだから、次に行きましょうか。

振り返り・サバック激闘編

唯 「おお！この章と言えば……」

統夜 「魔戒騎士にとつて神聖な大会であるサバックだろ」

漣 「レオ先生やアキトさんのおかげで統夜の戦いを見ることが出来て良かったよな」

律 「そうだな。だけど、本当に惜しかったよな」

唯 「やーくん、零さんに負けて準優勝だもんね」

統夜 「ちよっ!?さらつと結果だけ言うなよ!」

唯 「だってサバックについてはこの小説の第80話で振り返ってるじゃん!」

統夜 「まあ、確かにそうだけどさ……」

そうなんです。

唯が言った通り、サバックの試合に関しては既に第80話 「帰郷」で振り返っているため、ここでの振り返りはかなりぎつくりと行きたいと思えます。

詳細が気になる方は、第80話 「帰郷」をご覧ください。

イルバ 『おいおい。ずいぶんと投げやりだな』

そうかもしれないけど、詳細な説明をしてたら長くなるからね。

ここでの振り返りはざっくりと行きたい訳なんだよ。

イルバ 『ま、そういうことなら大丈夫だがな』

イルバも納得したところでざっくりと説明をしていきますが、皆さん、鍋の方は食べてますか？

漣 「今新しい具材を入れたばかりだからちよつと煮込んでるんだよ」

唯 「うん！鍋は凄く美味しいよ♪」

それは何よりです。

それでは、改めてサバックを振り返りましょうか。

サバックというのは、黄金騎士牙狼に敬意を表して行われた武闘大会であり、各番犬所より選ばれた魔戒騎士が互いの腕を競い合うという訳です。

ここでの振り返りは、統夜が誰と戦ったかと結果のみをお伝えしたいと思います。

詳細を知りたい方は先ほども話しましたが、第80話を参照して下さい。

統夜のサバック初戦の相手は、元老院付きの魔戒騎士で、影の魔戒騎士と呼ばれている邪骨騎士義流こと毒島エイジでした。

元老院付きの魔戒騎士ということもあり、誰もがエイジの勝ちを予想しましたが、統夜がエイジを下しました。

2回戦の相手は、称号はないもののベテラン騎士のタクトという魔戒騎士でした。タクトはプライドが高いだけなので、統夜は難なくタクトに勝ちました。

続いて3回戦の相手は、元老院付きの魔戒騎士で、雷鳴騎士破狼の称号を持つ四十万ワタルでした。

激闘の末、統夜はどうかワタルに勝つことができました。

準々決勝の相手は、統夜と同じ紅の番犬所の魔戒騎士であり、統夜の最大のライバル。そして、堅陣騎士ガイアの称号を持つ黒崎戒人でした。

2人はライバル対決に相応しい激しい激闘を繰り広げ、統夜に軍配が上がりました。

そして、準決勝の相手は、閑岱という魔戒法師の里の魔戒騎士であり、白夜騎士打無の称号を持つ山刀翼でした。

翼は黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙と互角の力を持っている実力者であり、統夜はその翼に追い詰められるものの、どうか勝利を勝ち取り、決勝へと駒を進めました。

そして決勝の相手は、東の番犬所所属の魔戒騎士で、銀牙騎士絶狼の称号を持つ涼邑零でした。

零は前回のサブツクの優勝者であり、鋼牙や翼と互角の力を持っている実力者です。

統夜はそんな零相手に善戦はしますが、惜しくも敗れ去り、零がサブツク2連覇を達成しました。

こうして、今回のサバツクは幕を閉じたのでした。

統夜 「……本当に零さんは強いんだよ……。俺なんかじゃ全然敵わないくらい……」

唯 「やーくん……」

イルバ 『だけど、あの男は本気を出していた。本気のあいつを相手にあそこまで戦えればなかなかのものだと思いがな』

梓 「そうですよ！統夜先輩、もつと自信を持って下さい！」

統夜 「……そうだよな。初出場で準優勝っていうだけでも凄いことをしたんだもん
な、俺……」

律 「そうそう。しんみりしてたら鍋が不味くなるからさ。楽しく行こうぜ！」

澤 「律の言う通りだ。今回の企画は楽しみながらこの小説を振り返るんだからさ」

紬 「ええ。次も楽しみましょう♪」

統夜 「ああ、そうだな！」

唯 「ねえねえ！さつきまで煮てた具材がだいぶ煮えてきたよ！」

統夜 「それじゃあそいつを食べながらこの章を振り返るとするか」

梓 「はい！」

まあ、そういう訳で次、行ってみましょう！

振り返り・漆黒の闇呀襲来編

統夜 「この章がちょうど今やっている章だよな」

唯 「この章の見どころと言えば、やっぱり学園祭だよな！」

漣 「今年の学園祭は劇をやったりライブしたりと充実してたよな」

梓 「本当に楽しいライブでしたよね！」

紬 「そして、もう1つの見どころと言えば……」

律 「あのディオスって奴が蘇って統夜に戦いを挑んできたんだよな」

唯 「あの時は本当にごめんね、やーくん。あんなにやーくんのことを傷付けて……」

統夜 「ま、気にすんなくて。俺は気にしてないからさ」

梓 「それに、あの戦いがあつたから、私は統夜先輩に想いを伝えられたんだと思いま
す」

唯 「今やラブラブだもんね♪やーくんとあずにゃんは♪」

梓 「にやつ!?へ、変なことは言わないで下さい！」

統夜 「アハハ……」

まあ、話も盛り上がってるところで、この章を振り返りましょうか。

統夜たちは学園祭に向けて準備を始めました。

統夜たち3年2組は、劇をやることになったのですが、その劇とは、桜ヶ丘高校のOGで、黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙の妻となった冴島カオルの父親が描いた絵本が元になっていました。

その絵本とは、黄金騎士とホラーとの戦いを描いたと思われる「黒い炎と黄金の風」と呼ばれるものです。

元々は絵本がモデルのため、紬がストーリーをつけて、劇の準備を行いました。

すっかりとした準備の甲斐あって、劇は大成功。その後、統夜たちは翌日のライブに備えて学校に泊まり込みで準備を行っていました。

そして、翌日は軽音部のライブですが、3年生である統夜たちにとってはこれが最後のライブとなりました。

ライブの舞台となった講堂には多くの人が集まり、ライブを盛り上げていました。

こうして、軽音部のライブは大成功で幕を閉じたのです。

学園祭ライブも終わり、唯たち4人は本格的に進路を決めなければならなくなりました。

そんな中、漣は推薦入試を辞退したのです。

滯は出来ることならば4人で同じ大学を受験し、同じ大学に合格したいと願っていた。

滯の願いを聞いた唯たちは、共に同じ大学を受験する決意を固めたのです。

こうして、唯たちは同じ大学に合格するため、受験勉強を始めたのです。

それから間もなく、統夜に対して憎しみを抱いていたディオスが怨念として蘇りました。

そして、ホラーを封印した12本の短剣の力によつて実体を得ることに成功しました。

ディオスは暗黒騎士ゼクスとして実体化し、統夜たちの前に立ちはだかりました。

その圧倒的な力は健在で、統夜は1度ゼクスに叩き伏せられてしまいました。

その後、ゼクスは梓を誘拐し、統夜を誘い出しました。

それはゼクスの罠であり、確実に統夜を仕留めるためのものでした。

統夜はゼクスが指定してきたため、唯たちも連れてゼクスと梓の元へ向かいました。

ゼクスは卑劣な手段で統夜を追い詰めていきました。

そして、ゼクスは統夜を追い詰めた後、梓を解放するのですが、それはゼクスの罠でした。

統夜の絶望した姿を見るためにゼクスは解放した梓を殺そうとしたのですが、統夜は

梓を庇い、胸を貫かれてしまいました。

それにより統夜は命を落としたと思われましたが、統夜の誕生日に唯たちがあげたネックレスによって、統夜は命を救われたのです。

統夜は意識が朦朧としている中、梓の気持ちを知り、統夜も自分の想いを梓に告げ、2人は結ばれたのでした。

そんな梓の力をもらった統夜に倒せない敵はおらず、圧倒的な力を持つゼクスさえも寄せ付けずにゼクスの撃退に成功しました。

こうして、事件は解決し、無事に年を越しましたが、これで終わりではないのです……。

律 「おいおい、何だよ、この終わり方は？他にも黒幕がいるみたいじゃんかよお！」
濤 「確かにそうだな。私たちは受験を控えてるっていうのに……」

まあ、黒幕の正体についてはこの後触れようと思っっていますが、察しがついてる人は多いかと思われず。

統夜 「まあ、この章のタイトルを考えたらな……」

イルバ 『ここからはこの章のクライマックスの見どころについて話すのか?』

そうなりますかね。

その後、皆さんの印象に残ったシーンを聞いていくので、よろしくお願いしますよ。

6人 「はいー!」

それでは、この章のクライマックスの展開を軽く紹介して、見どころを紹介していきます
たいと思います。

新年を迎えた後、ホラーの活動が活発になっていました。

統夜と戒人はホラーを討滅しながら、その原因を調査することになったのですが、巨大な陰我がその原因となっていたのです。

その事実を知った統夜に待ち受ける試練とは?

そして、そんな統夜の前に現れる謎の男とは?

「牙狼×けいおん 白銀の刃」 漆黒の闇呀襲来編。いよいよクライマックスです!

統夜 「おお。これはこれは……」

イルバ 『見どころを簡潔に説明してるな』

唯 「うん!これならネタバレもないもんね!」

梓 「まあ、一部ネタバレはありますけどね……」

そこは置いてくとして、次回からのクライマックスに乞うご期待!

イルバ 『おいおい、ずいぶんと綺麗にまとめたじゃないか』

だって、そろそろみんなにこの小説の印象に残ったシーンを聞きたいしね。

唯 「そうだねえ♪お腹いっぱいにもなったし、そろそろいいかもね♪」

おお!確かに鍋は綺麗に無くなってるな。

紬 「お鍋、凄く美味しかったですよ♪」

むぎゆううううううう!!

じゃなくて、そう言ってもらえると嬉しいですよ♪

律 「あれ?うぶ主ってムギ推しだったっけ?」

ムギも好きだけど、1番は唯かな?

唯 「エへへ……。そう言ってもらえると嬉しいな♪」

もちろん、5人とも可愛いし、好きだけどね。

律 「何故だろう……。うぶ主に言われてもあまり嬉しくないんだけど……」

黙らっしやい!!

そこはともかくとして、話を進めるぞ!

6人 「はーい!」

まったく……。

まあ、それは置いて、さっそくみんなの印象に残ったシーンを聞いていこうと思います。

まずは、律の印象に残ったシーンは？

律 「おいおい、なんであたしから何だよ！」

だって、律は軽音部の部長でしょ？

律 「……もしかして、さっきあたしが言ったことを根に持つてる訳じゃないだろうな？」

ヴェエ!? そ、そんな訳ないだろ！

律 「どうだか……。ま、別にいいけどさ」

そ、それじゃあ律。改めてどうぞ！

律 「そうだな……。やつぱり統夜が心滅獣身だっけ？あの姿になった所かな？」

滯 「あつ！ずるいぞ、律！私もそこが印象に残ってたのに！」

紬 「わ、私も……」

やつぱりみんなこのシーンは印象深いみたいだね。

統夜 「まあ、俺が心滅になっちゃったのは、俺がまだまだ未熟だったからだからな……」

イルバ 『確かにそうかもしれないが、お前さんはあの頃から比べるとかなり成長し

たと思うがな』

統夜 「イルバ……」

イルバ 『まあ、テレビ版の牙狼でもあの冴島鋼牙の心滅はかなり衝撃的だったからな。心滅のシーンが印象に残るっていうのはわかる気がするな』

梓 「アハハ……。テレビ版って……」

統夜 「発言がメタいけど、まあ、気にしないようにしよう……」

まあ、そういうことって訳で。

それでは、次に行きましよう！

ムギの印象に残るシーンは？

紬 「そうねえ……。統夜君の鎧に羽が生えて、グオルブっていうホラーをやっつけるところかしら？ 私も見えてみたかったわ！」

唯 「あつ、確かに見てみたいかも！」

梓 「はい！ 格好いいんでしようね」

統夜 「あの力を得ることが出来たのはみんなのおかげだよ。みんなの歌が俺に力を与えてくれたからな」

梓 「エへへ♪ありがとうございます♪」

おやおや、なんかいい雰囲気ですねえ。

それはともかくとして、あの形態について説明したいと思います。

あの形態は「翔翼騎士奏狼」。この形態は牙狼一期に登場した「翼人牙狼」の奏狼バージョンであり、カオルの絵の力で飛翔したのが鋼牙で、唯たちの音楽の力で飛翔したのが統夜という訳です。

統夜 「そういえば鋼牙さんもその力でメシアを討伐したって言ってたっけ」

そうそう、その通りです。

ちなみに今まであがった2つのシーンは僕も印象に残ったシーンでした。

さあ、それでは次、聞いていきましようか。

濡の印象に残ったシーンは？

濡 「んー……そうだなあ……。私たちにとつては最後の学園祭……かな？」

唯 「わかる！ 本当にあつという間だったもんねえ」

梓 「はい！ もう皆さんと学園祭でライブが出来ないのは残念ですけど、凄く楽しいライブでした！」

紬 「ええ！ 私も楽しかったわ♪」

良かった。このシーンを振り返るとなるとみんな感極まるかと思つてたからな。

しみじみと振り返ってくれて良かったよ。

という訳で次聞いていこうか。

唯の印象に残ったシーンは？

唯 「うーんそだねえ……。あのアスハって人との戦い……。かな？」

律 「あいつは本当に卑怯なやつだったよな」

統夜 「まったく。振り返りの時も言っただけ、梓のおかげで俺はあいつに反撃することが出来たしな」

梓 「いえ……。そんな……」

アスハとの戦いもかなり熾烈なものだったからねえ。

個人的には魔導人機の主砲と号殺剣がぶつかり合うシーンは印象的だったけどね。

俺の話はともかくとして、次にいつてみようか。

梓の印象に残ってるシーンは？

梓 「え？そうですわね……。この前のディオスって人が蘇って、私をさらって……。

統夜先輩たちが助けに来てくれたシーンですかね」

律 「梓はやっぱりそこか……」

唯 「私もそこは印象的だったけど、あずにゃんが言うかなって思ったから言わなかったよ！」

梓 「あ、ありがとうございます……」

紬 「それに、統夜君と梓ちゃんが付き合うきっかけにもなったしね♪」

濤 「ああ、そうだよな」

統夜、梓 「あうう……／＼／＼／」

アハハ……。2人揃って照れてるな。

そのシーンは梓をヒロインって決めた時にどういう感じにしようか考えて出来たシーンになってます。

僕も良い感じのシーンになったと思ってますよ。

さて、最後にこの小説の主人公である統夜に印象に残ったシーンを聞いていきたいと思えます。

統夜 「そうだな……。俺はやっぱリサバツクかな？」

唯 「うんうん！やーくんも気合入れてたもんね！」

イルバ 『結果としては惜しかったが、初出場で準優勝はよくやったと俺様は思うぞ』

梓 「そうですね！レオ先生に映像を見させてもらいましたけど、一生懸命試合に臨む統夜先輩は格好良かったです！」

統夜 「あつ、ありがと……。／＼／＼／」

律 「おいおい、本編のみならず番外編でもいちやつくのはやめてくれよな」

紬 「そうよ、2人とも！今日はみんな楽しんで企画なんだからね」

統夜、梓 「は、はい……」

まあ、そういうことだ。

今回の企画も終わりに近付いてるけど、楽しくやっていきましよう！

統夜 「そっか。振り返りは終わったし、みんなの印象に残ったシーンも発表したもんな」

そうそう。そういうことだよ。

みんなは綺麗に鍋を完食したし、振り返りなども終わったから、今回の話はこれで終了ということになります。

唯 「お鍋は美味しかったし、この小説のお話を振り返れたし、今日は凄く楽しかったねえ♪」

律 「そうだなあ。あたしもこの小説がここまで長編になるとは思わなかったからな」

滯 「100話を越えるってことはかなりの長編ってことだもんな」

紬 「けどこの小説も終わりが近付いてきてるし、少し寂しいわよねえ」

梓 「そうですね。だけど私は最後まで皆さんと楽しく過ごしたいです！」

統夜 「俺の魔戒騎士としての戦いは終わるわけじゃないけど、俺はこれからも頑張っていくぞ。守りし者としてな」

まあ、みんなから一言もらえた訳だし、これでこの話は終わりにしたいんだけど……。

統夜 「だけど？」

最後にこの章が終わった後の章の話を軽くしておきたいと思えます。

統夜 「次の章？」

そうですね。そして、次の章がこの小説の最終章となります。

統夜 「そつか……。卒業も近いし、だからか終わりが近いってことだもんな」

そうですね。

第100話を突破したとのことで、今回特別に最終章がどのようなのか軽く紹介したいと思えます。

統夜 「この前は俺が話そうとしたらネタバレはダメだつて言つたくせに」

今回は第100話到達記念だからな。

内容を少しだけざっくりと説明しようと思つています。

唯 「ねえねえ、新章はどうなるの？ 凄く気になる！」

お、いいリアクションだね！

それじゃあさつそく紹介していききたいと思えます。

最終章では、卒業を間近に控えた統夜たちがとあるところへ行くことになりました。

統夜たちはいつどこへ行くことになったのか？

そして、統夜たちにとある課題を抱えることになりましたが、その課題とはいつたい？

最終章、「卒業！金色の試練編」。乞うご期待!!

統夜 「おお、もう最終章のタイトルを決めたんだな」

梓 「金色の試練……。いったいどんな試練があるんでしょうか……？」

まあ、さすがにそこは秘密です。

最終章がどのようになるか、楽しみにしていてください！

イルバ 『ま、今の章も完結してないしな。そこは仕方ないだろう』

そういうことです。

新章の紹介をしたところで、今回の企画は終了になります。

最後にみんなから一言ずつもらいましょうか。

唯 「今日は凄く楽しかったよー！お鍋も美味しかったし♪」

律 「そうだな。この小説を振り返るいきつけかけにもなったからな」

濤 「ああ。改めて振り返ってみると、統夜の戦いはどれも本当に熾烈なものだった

よな」

紬 「そうね♪だけど、戦いだけじゃなくて楽しいこともいっぱいあったわよね♪」

梓 「はい！これからも皆さんと楽しい思い出を作っていきたいです！」

イルバ 『ま、そのためには乗り越えなきゃいけないことがあるみたいだがな』

統夜 「そうだな……。まあ、そういう訳で、これからもこの小説を応援してくれよな！」

6人 「よろしくお願いしまーす!!」

うんうん。いい感じに締まったね。

そういう訳で、みんなで鍋を囲んでこの小説を振り返る特別編は終了となります。

さあ、イルバ。最後に次回予告をよろしく！

イルバ 『ああ、わかったぜ』

……終。

——次回予告——

『おいおい。凄まじい陰我を感じるぜ。これはとんでもないことが起きる予兆なのか？
次回、「幽冥」。……あの男……！……いったい何者なんだ？』

第101話 「幽冥」

統夜にとって激動な1年が幕を閉じ、統夜は無事に新年を迎えることが出来た。

それだけではなく、大晦日は唯の家でのんびりすることで英気を養うことも出来た。

唯の家で唯たちとのんびり過ごし、元旦の朝には6人揃って初詣に行つて、この日は解散となった。

統夜はそのままエレメントの浄化を行ったのだが、この時、既に異変は起こっていたのであった。

統夜はいつものようにオブジェから飛び出して来た邪気を魔戒剣で斬り裂いたのだが……。

「……………何だ？これ……………」

『統夜、どうしたんだ？』

「冬休みはしつかりエレメントの浄化を行つてたのにオブジェの邪気が濃かつたんだよ」

冬休みに入ると、統夜は毎日のようにエレメントの浄化を行つていたため、オブジェに溜まった邪気は少ないはずなのだが、今日の邪気はそれを思わせない程濃いもので

あった。

『そうなるよ、他のオブジェもその可能性はあるな。統夜、油断するなよ』

「ああ、わかってる！」

こうして統夜は次のオブジェに移動するのだが、この日浄化した邪気はどれも濃いものであり、ホラーが出現してもおかしくないほどであった。

エレメントの浄化を終えると、この日異変をイレレスに報告するため、番犬所へ向かうことにした。

「……統夜、このような時間に来るとは珍しいですね。どうかしたのですか？」

現在時刻は午後一時を回ったばかりであり、統夜は普段この時間はエレメントの浄化を行ってるか、街をぶらぶらしてるかのどちらかなので、この時間に統夜が来ることにイレレスは驚いていた。

「はい。実はイレレス様に報告しなければならぬことがあります」

「報告……ですか？」

「はい。先ほどまでエレメントの浄化を行っていたのですが、毎日浄化をしているにも

関わらずオブジェから飛び出す邪気が大きいのです」

「それは妙ですね……。何かが起こる兆候なのでしょうか？」

統夜の報告を聞いたイレスは、神妙な面持ちで原因を考えていた。

『この前のゼクスのことだつてあるんだ。その可能性は充分にありそうだな』

「そうですね。こちらの方でも調査してみるつもりですが、統夜も気を付けて事にあたってくださいね」

「わかりました。よろしくお願いします」

統夜はイレスに一礼をすると、番犬所を後にした。

現時点で指令はないのだが、指令が来る可能性は高かったので、統夜は街の見回りをすることにした。

※※※

その頃、桜ヶ丘の郊外にある洞窟に、邪悪な影が忍び寄っていた。

この地は、かつてメシアの腕と呼ばれたグオルブの牙が封印されていた場所であり、暗黒騎士ゼクスことディオスの手によって封印が解かれてしまったのだが、その後は誰も立ち入らない場所になっていた。

「……………ここか。あのメシアの腕と呼ばれたホラーが封印されていた場所とは」

洞窟の中にあるグオルブの牙が封印されていた場所に、漆黒の鎧を身に纏った騎士が立っていた。

その漆黒の鎧の騎士は、邪悪でありかつ禍々しいオーラを放っていた。

「この周囲に漂う邪気……。私には心地よいものではないか」

この洞窟はグオルブの牙が封印されていたということもあり、周囲には邪気が充満していた。

これが、誰も立ち入らなくなった理由であり、何度も魔戒法師による浄化が行われたのだが、効果はなく、魔戒騎士や魔戒法師だけではなく、誰もが立ち入らない場所へとなってしまったのであった。

「……………これだけの邪気があれば、私の野望を果たすのに利用出来そうだな」

漆黒の鎧の騎士は、精神を集中させると、周囲に漂う邪気を自らの身体に吸収していった。

「……よし。この力……。存分に使わせてもらおうぞ！」

漆黒の鎧の騎士は、吸収した邪気を自らの力へと変えていった。

その結果、漆黒の鎧の騎士はさらに禍々しいオーラを放ち、身体のあちこちから闇を放っていた。

「この地を闇で覆うためにここを人界と魔界を繋ぐゲートにさせてもらおうぞ！」

漆黒の鎧の騎士の目的は、この世界を闇で覆うというものであり、手始めに桜ヶ丘を狙っていた。

さらに、グオルブが封印されていたこの場所を人界と魔界を繋ぐゲートにしようとしていた。

漆黒の鎧の騎士は、手に邪気を集中させると、それを前方に放つと、それはゲートのようなものへと姿を変えた。

しかし、まだ力が足りないのかゲートは小さく、ホラーがこのゲートを通って人界に現れる程ではなかった。

「まだ力が足りないか……。だが、まあいい。こいつの力によつてこの街のゲートも活発になるだろう。それまでは私も力を蓄えさせてもらおうか」

漆黒の鎧の騎士は、人界と魔界を繋ぐゲートが完全に開くまで、この場に留まり力を蓄えることにした。

※※※

漆黒の鎧の騎士が人界と魔界を繋ぐゲートを開いたことによつて、この街にも影響が及んでいた。

統夜と戒人によつて浄化された邪気が再びオブジエに現れていた。

その変化にイルバはすぐ気付いたのであった。

『……!!統夜、やはり妙だぞ』

「?どうした、イルバ?」

『さつきエレメントの浄化を終えたばかりだが、また同じ場所から邪気を感じるぜ』

「!?嘘だろ!?そんなことつてあるのか?」

統夜はイルバから聞いた異変に驚きを隠せなかった。

一度浄化した邪気はその日のうちに現れることなど今までなかったからである。

『本来ならあり得ないんだが……。やはりこの街に何らかの異変が起きてるようだ』

「やれやれ……。新年早々にかよ……」

世間的には今日は元旦であり、仕事をしている者は少ない。

そんな日に限つてこの街に異変が起こっていることを知り、統夜はげんなりとしていた。

『……統夜。また番犬所から呼び出しみたいだぜ』

「早いな……。もしかして、イレス様は何か手がかりを掴んだのか？」

『さあな。とりあえず行つてみるぞ、統夜』

「ああ」

こうして統夜は番犬所に呼び出されたとのことで、再び番犬所へと戻ることになった。

「早々に呼び出してすいませんね、統夜」

「いえ。それよりも何か掴めたのですか？」

「ええ。すぐに異変を感じ取つたのです」

「そうでしたか……」

番犬所には統夜だけではなく、戒人の姿もあり、戒人もまた、番犬所から呼び出しを受けて駆けつけたのであった。

「おう、戒人。お前も呼び出されたんだな」

「ああ、統夜。今年もよろしくな」

統夜と戒人は新年の挨拶を交わしていた。

「ああ、そういえば今日は元旦でしたね。改めて今年もよろしく願いますね、統夜。戒人」

「はい！よろしく願います！」

統夜と戒人は、イレスとも新年の挨拶をかわしていた。

「あつ、そうそう。それで、この街に起こった異変なんです……」

本題を思い出したイレスは話を切り出そうとしていた。

「統夜、桜ヶ丘の郊外にグオルブの牙が封印されていた洞窟があることはご存知ですね？」

「ええ。ディオスがグオルブの牙を奪った時にその話を聞きましたからね」

「俺も統夜からその話は聞きました」

「それなら話は早いです。実はその洞窟から巨大な邪気が探知されました。その洞窟で何かしらのことが起こっていると思われれます」

「何かしらのこと……」

「それが何かはわかっていません。統夜、戒人。2人で協力し、洞窟を調査し、この街の異変を突き止めるのです！」

「はい、わかりました！」

「誰が何を企んでいるかは知りませんが、この街をそいつの好きにはさせません！」

戒人はイレスの申し出を了承し、統夜は了承しながらも、自分の決意を語っていた。

統夜は戒人と共に番犬所を後にすると、桜ヶ丘郊外にある洞窟へと向かった。

※※※

「……イルバ、ここだな？」

『ああ。今までにないくらい邪気を感じるぜ』

統夜と戒人は目的地である洞窟の前に到着したのだが、その洞窟からは強大な邪気が漂っていた。

「そうらしいな。さつきから嫌な気がプンプンと漂っているからな」

『そうじゃのお。戒人、油断するでないぞ』

戒人も強大な邪気を感じ取っており、冷や汗をかいていた。その時だった。

『……!!統夜!!洞窟から何かが出てくるぞ!』

イルバは異変を統夜に告げると、魔戒剣を取り出して抜いて、迎撃の体勢に入った。戒人も同様に魔戒剣を構えた。

すると、洞窟の入り口から現れたのは……。

「……!!なんて数のホラーだよ……」

かなりの数の素体ホラーだった。

『ここはかなりの邪気が漂っているからな。これだけのホラーが実体化してもおかしくはないだろう』

イルバの推測通り、この地に漂う邪気はかなりのもので、さらには漆黒の鎧の騎士の力もあつたため、多数の素体ホラーが実体化したのであつた。

「だが、何かを企んでいる誰かがここにいるということは間違いなさそうだな」

『そうみたいじゃのお。戒人、油断するでないぞ!』

「ああ!」

『統夜、お前も油断するなよ!』

「わかつてる!」

戒人と統夜は、それぞれ魔戒剣を構えると、多数の素体ホラーを睨みつけた。

『……………統夜！来るぞ!!』

イルバがこのように警告をすると、多数の素体ホラーが統夜と戒人に襲いかかってきた。

2人はそんな多数の素体ホラーを迎え撃っていた。

その頃、漆黒の鎧の騎士は、そんな2人の戦いを遠いところから見ている。

「……………外が騒がしいと思えば……………。ネズミが潜り込んできたか……………」

漆黒の鎧の騎士は、統夜と戒人のことをネズミと称しながら戦いを見ていた。

「未熟な魔戒騎士ごときが、この私の野望を止められるかな?」

漆黒の鎧の騎士は、魔戒騎士の存在を知っており、それでいて統夜と戒人を未熟と言っていた。

「思ったより陰我が大きいからか。予想よりも早くゲートが開きそうだな……………」

漆黒の鎧の騎士は、人界と魔界を繋ぐゲートを開いていたのだが、この地の陰我が予想以上に大きく、ゲートも少しずつ大きくなっていった。

そのため、人界と魔界を繋ぐゲートが完全に開くのは時間の問題だった。

「今も多くこのホラーがネズミどもの相手をしているが、奴らの手並みを拝見しながらゲートが開くのを待つとしよう。人界と魔界を繋ぎ、この街が闇に覆われるところを私は魔界から見届けさせてもらおうか」

漆黒の鎧の騎士は、人界と魔界を繋ぐゲートが開いたその時は自ら魔界へと赴き、この街が闇に覆われるところを見届けるつもりだった。

少しずつ開いているゲートを見つめながら、漆黒の鎧の騎士は高笑いをしていた。

※※※

その頃、多数の素体ホラーを相手にしている統夜と戒人は、その数の多さに苦戦を強いられていた。

「……くそっ！斬っても斬ってもキリがない!!」

戒人はあまりにも減らないホラーにげんなりとしながらも1体のホラーを斬り裂いていた。

「ああ！このままじゃジリ貧だぞ！」

統夜もこの状況を良しとしていないながらも素体ホラーを斬り裂いていた。

『統夜！番犬所に応援を要請した。何名かの魔戒騎士と魔戒法師を援軍に送るとのことだ』

「そうなのか？だけど、この街の魔戒騎士は俺と戒人だけじゃ……」

『どうやらイレスは他の番犬所から応援を要請したようじゃ』

『だから、そいつらが来るまで持ちこたえろよ！』

「わかってる！」

「承知！」

統夜と戒人は、素体ホラーの数を減らしながら応援が来るのを待っていた。

しかし、応援の到着は遅れており、統夜と戒人の体力は徐々に消耗されていた。

「く、？くそ……！このままじゃ……！」

「このままじゃやられるだけだ。鎧を召還するしかないか……？」

統夜と戒人は、体力温存のためにあえて鎧の召還はしなかったのだが、それはもう限界だということは実感していた。

『戒人の言う通りだぜ。一度鎧を召還して、奴らの数を減らすんだ！』

「そうだな……」

統夜と戒人は素体ホラーを斬り裂きながら、鎧召還の機会をうかがっていた。

何体かのホラーを斬り裂き、2人は後方へジャンプして体勢を整えていた。

すかさず鎧を召還しようとするのだが、何体かの素体ホラーがそれを阻止するために襲いかかってきた。

「……………」

2人は魔戒剣を高く突き上げようとしていたので、迎撃をすることが出来なかった。ホラーからの攻撃を受けることを覚悟し、2人が息を呑んだその時だった。

どこからか銃弾のようなものが複数飛んで来ると、それらは素体ホラーの体を貫き、その一撃で、数体の素体ホラーは消滅した。

それから間髪入れずに2人の魔戒騎士らしき男が現れると、統夜と戒人に近づく素体ホラーを斬り裂いていた。

統夜と戒人のピンチを救ったのは…………。

「…………統夜、戒人。大丈夫か？」

「遅くなつてすいません、統夜さん、戒人さん！」

「待たせたな！2人とも！」

元老院付きの魔戒法師で、統夜と戒人の盟友であるアキトと、翡翠の番犬所付きの魔戒騎士で、統夜と戒人にとっては後輩騎士となる如月奏夜と、同じく翡翠の番犬所付きの魔戒騎士だが、以前は紅の番犬所において、2人にとっては先輩騎士である桐島大輝だった。

「アキト……。奏夜!？」

「それに、大輝さんも！」

「もしかして、みんなが……。?？」

「まあ、そういうことだ」

「統夜は度々翡翠の番犬所の管轄で手助けをしてくれたからな。今度はこつちが助ける番だとロデル様が張り切つていてな」

「俺なんかの力じゃ足手まといになるかもしれないが、統夜さんと戒人さんの力になりたかつたんです！」

アキトは元老院の神官であるグレスからの指令でこの地を訪れており、大輝と奏夜は、翡翠の番犬所の神官であるロデルからの指令でこの地を訪れていた。

「みんな……。ありがとう！」

「俺たちが力を合わせればこの場は乗り切れる!!」

統夜と戒人は、応援に来てくれた3人の力を借りれば、この困難な状況を乗り切れると確信していた。

「とりあえず話は後にして……」

アキトは魔戒銃と魔導筆を構えると、多数の素体ホラーを睨みつけていた。

「まずはこいつらを掃除しちゃおうぜ!」

「ああ!」

「承知!!」

「はい!」

統夜、戒人、大輝、奏夜の4人はそれぞれの魔戒剣を構えると、素体ホラーたちを睨みつけていた。

「鎧を召還して、一気にケリをつけるぞ!」

統夜の掛け声にアキト以外の全員が無言で頷いていた。

4人はそれぞれの魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、4人はそれぞれの鎧を身に纏った。

大輝は、銅の輝きを放つ「鋼」の鎧を身に纏った。

奏夜は、牙狼とは異なる黄金の輝きを放つ輝狼（キロ）の鎧を身に纏った。

戒人は、紫の輝きを放つガイアの鎧を身に纏った。

そして統夜は、白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

「みんな！一気にケリをつけよう！」

「ああ！」

「もちろんだ！」

「任せろ！」

「はい！」

統夜たちは戦闘準備を整えたところで、多数のホラー相手に攻撃を仕掛けた。

アキトは、更に改良を加えた魔戒銃を発砲し、魔導筆から術を放ち、素体ホラーを蹴散らしていった。

統夜と何度も戦うことでアキトの魔導具の質は向上し、アキト自身も魔戒法師としてはかなりの実力者になっていた。

大輝は、変化した魔戒剣を豪快に振るい、素体ホラーを次々と蹴散らしていった。

統夜にとつては先輩騎士である大輝は、様々な修羅場を乗り越えてきたことにより、称号を持たない魔戒騎士ながらも上位の称号を持つ魔戒騎士並の実力者となっていた。

そして、統夜にとつては後輩騎士である奏夜は、専用の剣である陽光剣に橙色の魔導火を纏い、烈火炎装の状態となり、次々とホラーを蹴散らしていった。

奏夜は魔戒騎士として経験が浅く、魔戒騎士になった当初は烈火炎装は使えなかったのだが、夏に行われたサブバック以降、特訓を重ねた奏夜は、どうにか烈火炎装を使うことが出来るようになったのである。

とは言っても烈火炎装を習得したのは最近であり、まだまだ不安定な要素はあるのだが、素体ホラーを蹴散らすには十分だった。

統夜と戒人は、互いに烈火炎装の状態になると、次々とホラーを蹴散らしていった。統夜と戒人も魔戒騎士になって長い訳ではないものの、様々な修羅場を乗り越え、一人前の魔戒騎士として成長したのであった。

5人はそれぞれホラーに攻撃を仕掛けて素体ホラーを蹴散らし、アキトを除く4人が鎧の制限時間のため鎧を解除した時にはその場にいたホラーの80%は討滅することが出来た。

「後は俺と奏夜の2人で十分だ。統夜、戒人、アキト！お前らは先に行け！」
「俺たちはこいつらを掃除してから駆けつけますから！」

大輝と奏夜は、ホラーを斬り裂きながらこのように3人を促していた。

「……わかった。行こうぜ！」

「大輝さん、奏夜。後は頼みます！」

「奏夜、無理はするなよ」

「ふっ……。任せろ！」

「ええ、もちろんです！」

統夜、戒人、アキトの3人は、残ったホラーを大輝と奏夜に任せて、洞窟の中へと入っていった。

「あいつらは行ったか……。奏夜！お前がどれだけ成長したか、俺に見せてみる！」

「はい！大輝さん！」

大輝と奏夜は、次々とホラーを討伐していったのであった。

※※※

統夜、戒人、大輝の3人は、洞窟の中へ入り、そのまま奥へと進んでいった。

洞窟の入り口からかつてグオルブの牙が封印されていた場所までは一本道であり、統夜たちはすんなりとグオルブの牙が封印されていた場所へたどり着くことはできた。

だが……。

「……っ！誰もいない？」

「いったいどうなってるんだ……っ？」

『だが、この邪気はかなりのものだけ』

『さすがはグオルブが封印されてただけのことはあるのお』

「……っ！統夜、戒人！あれを見ろ！」

周囲を見回していると何かを発見したアキトは、このように統夜と戒人に呼びかけていた。

アキトが発見したのは……。

「……っ？これは……」

『恐らくは人界と魔界を繋ぐゲートだろう。こいつを開いた奴は、人界と魔界を繋いでホラーが入りやすくなるようにかでも企んでいるんだろう』

イルバの推察通り、アキトが発見したのは穴のようなものであり、これこそ人界と魔界を繋ぐゲートになっていた。

このゲートを作った漆黒の鎧の騎士の姿はなく、既に魔界へ入っていったということが予測された。

ホラーが入りやすくなったというのは、イルバの推察通りだが、この世界を闇で覆う

という漆黒の鎧の騎士の野望まではイルバも推察出来なかった。

「とりあえずこいつを調べないとな……」

統夜は人界と魔界を繋ぐゲートの調査をしようとしていた。

その時だった。

「……！！統夜、危ない！！」

「っ!？」

背後から一体の素体ホラーが急速に接近し、統夜を攻撃しようとしていた。

このホラーは現在洞窟の入り口で戦っている大輝と奏夜が討ちもらしたものであることが予測された。

思わぬ不意打ちに統夜は反撃の体勢を整えることが出来なかった。

覚悟を決めて素体ホラーを睨みつけていたその時だった。

「てえええええい!!」

掛け声と共に金色の光が近付いてくると、その光は素体ホラーを斬り裂き、消滅させた。

「おい、統夜。大丈夫か？」

「ああ、なんとかな……」

統夜たちは、統夜の危機を救った金色の光に首を傾げていたが、しばらくすると、光

は消え去り、実態が明らかになった。

金色の光の正体とは……。

「……が……牙狼……？」

「鋼牙さんですか？ すいません、助かりました」

黄金騎士である牙狼の鎧が統夜たちの目の前に現れ、統夜は牙狼の鎧を見ただけでその人物が鋼牙だと思っていた。

しかし……。

『いや。統夜、こいつは冴島鋼牙じゃないぜ』

イルバは牙狼の気配から、冴島鋼牙ではないと推測していた。

「え？ それじゃあいったい誰が……？」

牙狼の正体に統夜は首を傾げていたが、そうしているうちに牙狼は鎧を解除した。

牙狼の鎧から現れたのは、冴島鋼牙ではなく、50代過ぎの壮年の男性だった。

「!? こ、鋼牙さんじゃない？」

「ほう。鋼牙のことを知っているのか？ そうだな。あいつも黄金騎士として立派に成長した訳だしな」

牙狼の鎧を身に纏っていた壮年の男性は、鋼牙の存在をよく知っていた。

「あつ、あの……。あなたは……？」

「……冴島大河。かつて牙狼の称号を受け継いだことのある男だ」

「!!?!」

冴島大河という名前に聞き覚えのある3人は、その人物が目の前にいることに驚きを隠せなかった。

「……あなたは、ひよつとして、鋼牙さんの……」

「……ああ。鋼牙は私の息子だ」

「!」

統夜たちの目の前に現れたのは、かつて牙狼の称号を受け継いだ冴島大河であった。しかし、大河は暗黒騎士キバことバラゴとの戦いに敗れて命を落としたはずだった。そんな大河がなぜここにいるのか？

その詳細はこれから明かされることになるのであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『まさか、あの冴島大河と対面する日が来ることになるとはな……。心強い味方と共にこの事件、解決させようぜ！次回、「双融」。暗黒を斬り裂く金と銀の刃!!』

第102話 「双融」

統夜は無事新しい年を迎えることが出来た。

しかし、新年早々に普段以上に邪気が大きくなっているという異変が起こっていた。

その異変の元凶が桜ヶ丘郊外にあるかつてゲオルブの牙を封印していた洞窟にあるとわかった統夜は、戒人と共に異変の元凶を断つべく洞窟へと向かった。

そんな2人を待っていたのは、強大な陰我を纏った洞窟及びその近辺と、入り口に現れた多数の素体ホラーだった。

2人は多数の素体ホラーに苦戦するが、アキト、大輝、奏夜の3人が応援に駆けつけ、その力でホラーの数を減らすことに成功した。

そして、残ったホラーを大輝と奏夜に託した3人は、洞窟の中に入るのだが、そこにあったのは人界と魔界を繋ぐゲートであった。

このゲートを作った漆黒の鎧の騎士は、ここからホラーの出入りをしやすくするだけではなく、世界を闇で覆うということを企んでいた。

統夜はそんなゲートを調査しようとするが、突如ホラーの奇襲に遭い、危機に直面した。

そんな統夜を救ったのは、なんと黄金騎士牙狼であったが、その鎧を纏っていたのは
冴島鋼牙ではなかった。

その人物とは……。

「……冴島大河。かつて牙狼の称号を受け継いだことのある男だ」

「!!?」

冴島大河という名前に聞き覚えのある3人は、その人物が目の前にいることに驚きを
隠せなかった。

「……あなたは、ひよつとして、鋼牙さんの……」

「……ああ。鋼牙は私の息子だ」

「[[……]]」

統夜たちの目の前に現れたのは、かつて牙狼の称号を受け継いだ冴島大河であった。

しかし、統夜たちはある疑問を抱いていた。

「あの……。大河さんは確かあのバラゴにやられて……」

「そうだ。私はバラゴに敗れて命を落とした。だから私は本来の実体を持ち合わせてい
ない。言うならば私は冴島大河の思念の塊というものだろうか」

「……そんなことがあるのか……?」

死者が思念の塊として実体化という非現実的な話に、戒人は半信半疑であった。

しかし……。

「いや、この前だつて死んだ奴が怨念の塊として実体化したんだ。まったくあり得ない話じゃないさ」

統夜は以前、暗黒騎士ゼクスことディオスが怨念の塊として蘇った実例をあげていた。

「怨念の塊……。暗黒騎士ゼクスのことか？」

「!?大河さん、知っているんですか？」

大河がゼクスの存在を知っているとは思っていなかったのか、統夜たちは驚きを隠せなかった。

「確かにゼクスはそのお前への恨みを募らせた結果、実体化した。だが、それは奴1人の力ではなく、そのように仕向けた奴がいるのだ」

「仕向けた奴……」

「……!!まさか、もう1人の暗黒騎士、キバの仕業とでもいうのか!？」

アキトはこのように推測をするが、自分でも信じられない話だと思っていた。

「その通りだ。暗黒騎士キバの鎧は私の息子である鋼牙の手で葬り去られた。しかし、奴は完全に消滅した訳ではなく、邪気を少しずつ体に蓄えて実体化する時を待っていたのだ」

「……」

大河の口から語られる信じがたい話に、統夜たちは驚きを隠せなかった。

「そして、キバはもう一人の暗黒騎士ゼクスが憎しみを募らせて実体化しようとしていることを知り、奴を利用しようと考えた」

「!?それじゃあ、ゼクスは結果的にキバ復活に利用されてただけって訳なのか?」

統夜はこのように推測していたのだが、大河はそれに無言で頷いていた。

「そして、ホラーを封印した12本の短剣を奪うよう仕向け、その力でゼクスは復活し、それと同時にキバも実体化したのだ」

「だけど、そのゼクスも統夜が倒したはずだぜ。実体化しても奴がやられたのなら意味ないんじゃないのか?」

アキトはここまで話を聞いて、もっともな疑問を投げかけていた。

「あの戦いは私も遠くから見守っていた。だが、あの戦いでゼクスはかろうじて消滅を免れた。そこにキバが現れ、ゼクスを取り込んだのだ。そして、本格的に力を取り戻すまで奴は潜伏していたという訳だ」

「!?そんな!俺が奴を仕留めきれなかったから、キバの力を高めちゃったのか?」

『統夜、落ち着け。それはお前さんのせいではない。奴と戦っていたのが戒人だろうと結果は同じだっただろう』

「ほお……。その魔導輪……」

大河は統夜の魔導輪であるイルバをまじまじと見つめていた。

『おいおい。あのザルバと似てるなんていうなよ。俺様はイルバ。あのザルバなんかよりも優秀な魔導輪なんだからな』

「ほう、お前はイルバというのか」

大河はイルバを見てザルバと似ていると言いたかったが、それをイルバが良しとしなかつたため、そこは言わなかつた。

「奴は暗黒騎士ゼクスを吸収し、さらにはこの街の邪気をも吸収したことによって新たな力を手に入れた。言うならば奴は「闇呀（やみきば）」と言つてもいいだろう」

「闇呀……。それがこの事件の黒幕……」

「それに暗黒騎士キバと言つたら、最強の魔戒騎士の牙狼でさえ手に負えない相手……。そんな奴に勝てるのだろうか……？」

統夜は今まで様々な強敵と戦つてきたのだが、今回戦うであろう闇呀こそが、最大の強敵と予測していたからか、珍しく弱気になっていた。

『おい、統夜、しつかりしろよ。お前はみんなと一緒に卒業するんだろ？どんな強敵だろうと跳ね除けるくらい強気でいないでどうするんだよ』

イルバは弱気になっている統夜を叱咤激励していた。

「!! そうだな……。俺はみんなと卒業するんだ。だから、こんなところでやられる訳にはいかないんだ! 誰が相手だろうと……!」

イルバの叱咤激励によつて、統夜に闘志がみなぎつてきたのであった。

「ふっ……。その意気だ。私は君たちにも協力してもらおうと思つていふのだからな」

「あの……。大河さんはもしかしてその闇呀を倒すために……?」

「そういうことだ。私は、生前バラゴを止めることは出来なかつた。だからこそ、私は闇呀にこれ以上好き勝手をさせる訳にはいかないのだ」

「「……………」」

何故大河が思念の塊として実体化したのかという理由を聞いた統夜たちは、死してもなお戦おうとする大河の姿勢に言葉を失つていた。

それと同時に、真の守りし者としてあるべき形というものを、統夜たちに知らしめていた。

「……大河さん、俺は闇呀を倒すのに協力します! 俺だつて、この街をあいつの好きにはさせません!」

「俺も同じ気持ちです!」

「俺だつてこの街のことは気に入つてゐるんだ。奴の好きにさせるつもりはないぜ!」

統夜、戒人、アキトの3人は、大河と共に闇呀の野望を食い止める覚悟を決めていた。

「そう言ってもらえると私も助かる。君たちの力を貸してくれ」
「はい!!」

こうして、統夜たち3人は大河に協力することになった。

「闇呀は恐らくこのゲートを使つて魔界へと移動しているのだろう。ここがホラーの出入り口となるのも時間の問題だろう」

「それを阻止するためには、魔界へ乗り込んで闇呀を倒せばいいつてことですね?」

「単純な作戦だけど、それしかなさそうだな」

「うむ。私もそう考えていた。闇呀は手強い相手だ。小細工は通用しない相手だろう」

大河も、作戦を立てることなく闇呀と戦おうと考えていた。

「まずは魔界へ乗り込もう。この先は何があるかわからない。油断するんじゃないぞ!」

「はー!」

こうして、統夜たちはこの事件の首謀者である闇呀の野望を止めるために魔界へ乗り込むことにした。

4人は闇呀が開いた人界と魔界を繋ぐゲートの中に入り、魔界へと向かっていった。

※※※

人界と魔界を繋ぐゲートは一本道であり、1分ほど歩くと、魔界へとたどり着いた。

「……………ここが魔界か……………」

初めて魔界へと足を踏み入れる戒人は、キョロキョロと周囲を見回していた。

「さすがに落ち着かないな、ここは」

アキトも魔界は初めてで不安からか落ち着かないといった感じだった。

「……………」

グオルブとの戦いの時に真魔界に来たことがある統夜ではあったが、この重々しい雰囲気には慣れていなかった。

『……………統夜！強大な邪気を感じるぜ！』

イルバが周囲を探っていると、強大な邪気を感じ取っていた。

「ああ……………そうみたいだな……………」

その邪気は統夜も感じ取れるものであり、統夜は冷や汗をかいていた。

「……………みんな、あそこだ！」

大河はとある方向を指差すと、そこにいたのは……。

「……ほお、魔戒騎士に魔戒法師か。よくぞここまでたどり着いたな」

漆黒の鎧の騎士こと闇呀であった。

闇呀はゼクスではなく、様々な邪気を吸い取っていたからか、体の周囲には目で見えるほど大きな邪気が纏われていた。

「……お前が暗黒騎士キバ……いや、闇呀か!!」

暗黒騎士キバはかつて統夜の父親である月影龍夜を手にかけており、そのことを思い出した統夜は険しい表情で闇呀を睨みつけていた。

「いかにも。……闇呀とはいいい名前だな。これからはそう名乗らせてもらおうか!」

暗黒騎士キバこと闇呀は、統夜の言った闇呀という名前が気に入ったようで、このように自称するようになっていた。

「ゼクスを蘇らすように仕向けたのも、お前が実体化して、力を得るためか!!」

「フン、そこにいる冴島大河に聞いたか。その通りだ。全ては私が強大な闇の力を手に入れてこの世に舞い戻るためだ。この世界を闇で覆うために」

統夜たちはここで初めて闇呀の野望を直接聞いたのであった。

「……そんなことさせるか!!」

統夜は魔戒剣を構えると、闇のへと向かっていった。

「……………統夜！よせ！」

大河は慌てて統夜を制止するが、既に手遅れだった。

「愚かな……。あまりにも直情的で未熟!!」

闇呀は専用の武器である黒炎剣の切っ先から衝撃波を放つと、統夜はその一撃をモロに受けてしまった。

「ぐあつ……………」

その一撃によって吹き飛ばされてしまった統夜は、大河たちのもとへ戻り、体勢を立て直した。

「貴様ら如き奴らが何人集まろうと所詮は烏合の集。私の敵ではない」

「そんなことは……。俺たちを倒してから言うんだな！」

闇呀の先制攻撃を受けてしまった統夜ではあつたが、強気な発言をしていた。

「フン、口だけは達者なようだな。……………いいだろう。私と戦いたければこいつらを倒し、私のもとへ来るがよい！」

闇呀はそう言うのと精神を集中させ、別のゲートを作った。

そして、闇呀はそのゲートの中に入って姿を消した。

さらに……………。

『……………!統夜、気を付けろ！数えきれないほどの邪気を感じるぜ』

イルバがこのように警告すると、闇呀の入っていったゲートの付近から邪気が溢れ出すと、おびただしい数の素体ホラーが姿を現した。

「……………!? ここ、これは……………」

『おいおい、とんでもない数だぜ』

『ざっと数えても2000体はくだらないじゃろうなあ』

トルバの推測通り、統夜たちの前に現れた素体ホラーは2000体ほどおり、先ほど洞窟に現れた素体ホラーの何倍にも及んでいた。

「このホラーを何とかしなければ奴のもとへはたどり着けない。みんな、協力して奴らを倒すぞー！」

「「はー」「」」

大河の言葉かけに、統夜たち3人は応じていた。

『この魔界では鎧の制限時間はない。だから、思い切り行け!』
「そういえばそうだったよな」

魔戒騎士は人界で鎧を召還する時は9.9.9秒という制限時間があるが、魔界ではその制限時間はない。

真魔界で戦った時もそうだったため、統夜はその時のことを思い出していた。

そして、アキトを除く3人は魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、3人はそれぞれの鎧を身に纏った。

戒人は、紫の輝きを放つガイアの鎧を身に纏った。

統夜は、白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

そして大河は、黄金の輝きを放つ牙狼の鎧を身に纏った。

冴島鋼牙の身に纏う牙狼の鎧は瞳が緑なのだが、冴島大河の纏う牙狼の鎧の場合、瞳は赤になっていた。

魔戒騎士の鎧は、装着者によって、瞳の色は異なってくる。

鎧を召還した3人は、そのまま魔導馬を呼び出し、烈火炎装の状態となった。

「統夜、戒人。私たちはあのホラーの群れに突っ込むぞー」

「はい!!」

「撃ち漏らしは俺に任せてくれー」

アキトもまた、魔戒銃と魔導筆を構えて臨戦体勢に入った。

「行くぞー!」

「はい!!」

「承知!」

大河の号令で、統夜たち3人は烈火炎装の状態です体ホラーの大群に突っ込んでいった。

それぞれの魔導馬も魔導火を纏っており、素体ホラーに突進をしていくと、次々と素体ホラーは蹴散らされていった。

3人の攻撃で撃ち漏らした素体ホラーは、アキトの魔戒銃や法術によつて倒されていった。

2000体というのはおびただしい数ではあるものの、3人の激しい攻撃により、その数は一気に減っていった。

「よし………まだまだ!!」

最初の攻撃でかなり素体ホラーの数は減らしたものの、未だに千体強のホラーが残っていた。

統夜たち3人は烈火炎装の状態のまま、再びホラーの群れに突撃し、次々とホラーの群れを蹴散らしていった。

アキトも負けじと魔戒銃と法術を駆使し、ホラーを討滅していった。その甲斐あつてか、2000体いたホラーの9割は討滅することが出来た。

「残りは俺とアキトで片付ける!統夜は大河さんと共に闇呀を追え!」

「ホラーの数はだいぶ減ったからな。後は任せておけ」

「……統夜。ここは2人に任せるとしよう」

「わかりました。……戒人、アキト。後は頼んだぞ!」

統夜と大河は残った素体ホラーは戒人とアキトに任せ、魔導馬を走らせると、闇呀が入っていったゲートへと向かっていった。

そして、2人はゲートの中に入るのだが、その時の衝撃で、鎧は魔導馬と共に解除されてしまった。

ゲートの中に入り、統夜と大河が訪れた場所は、魔界ではあるのだが、戒人やアキトが戦っている魔界とはかけ離れた場所であった。

統夜たちのいる場所は足場はあるのだが、それほど足場は広い訳ではなく、落ちてしまえば何も無い空間に放り出されてしまうのであった。

「……………ハ、ハハハは？」

『どうやら、ここは魔界ではあるようだが、闇呀が作った空間のようだな』

「うむ、そのようだ。奴は近くにいます。油断はするんじゃないぞ」

「はいー」

大河はゆっくりと魔戒剣を構え、統夜もまた魔戒剣を構えると、どこから闇呀が現れても対応できるように周囲を警戒していた。

すると……………

『……………統夜、あそこだ！』

イルバは闇呀の気配を感知しており、統夜と大河はその方向を見ると、禍々しいほど

の邪気を纏った闇呀が統夜たちの前に立ちはだかった。

「……ほう、よくここまでたどり着いたな。褒めてやろう」

「闇呀……!!」

統夜は目の前に立ちはだかる闇呀を鋭い目つきで睨みつけた。

「せめてもの手向けだ。私自らの手で貴様らを葬つてやろう」

闇呀は、黒炎剣を構えると、臨戦体勢に入っていた。

「……統夜……ここで奴を倒し、奴の野望を阻止するぞ！」

「はー！」

大河と統夜は互いに顔を見合わせると、目の前に立ちはだかる闇呀を睨みつけて、臨戦体勢に入った。

すると、統夜と大河は同時に魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、2人はそれぞれの鎧を身に纏った。

統夜は、白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った。

そして大河は、黄金の輝きを放つ牙狼の鎧を身に纏った。

「……行くぞっ!!」

「はー！」

鎧を召還した統夜と大河は、そのまま闇呀のもとへと向かっていった。

2人は同時に皇輝剣と牙狼剣を一閃するのだが、それは軽々と闇呀に防がれてしまった。

反撃と言わんばかりに闇呀は黒炎剣を一閃すると、その一撃を受けた大河は上空へと吹き飛ばされてしまった。

「……………!?大河さん!このお!!」

統夜は大河が吹き飛ばされてしまった直後に皇輝剣を一閃するのだが、逆に振り返り討ちにあつてしまい、大河同様に上空へと吹き飛ばされてしまった。

「……………!統夜!」

大河はこちらに向かってくる統夜を自分の足で受け止めると、自分の足をバネにして、統夜を再び闇呀のもとへと向かわせた。

「……………これでどうだ!!」

大河のおかげで着地に成功した統夜は、そのまま闇呀に向かっていき、皇輝剣を一閃した。

その一撃は闇呀の黒炎剣で受け止められてしまった。

統夜はこのまま闇呀を押し切って反撃しようと考えていたのだが、それは叶わなかった。

統夜の背後から何者かが現れると、統夜はその何者かに斬られてしまった。

「ぐっ……！な、何だ!？」

統夜はもう1人いる敵の方を振り向くと、それは何ともう1人の闇呀であった。

「!?う、嘘だろ!？」

闇呀が2体いることに統夜は驚きを隠せなかったのだが、そうしているうちに闇呀がもう1体現れると、3体の闇呀は統夜に一斉攻撃をした。

「……くっ!!」

統夜はどうかその攻撃を防ぐことは出来たが、身動きを取ることは出来なかった。

「……統夜!!」

闇呀に吹き飛ばされていた大河は、体勢を立て直すと、統夜を救うために、統夜の背後にいる闇呀に攻撃を仕掛けると、統夜が体勢を立て直す手助けをした。

大河は統夜と合流すると、3体いる闇呀に警戒していた。

しかし、闇呀はさらに数を増やすと、闇呀は6体になってしまった。

6体になった闇呀は一斉に統夜と大河に襲いかかってきた。

統夜と大河はそれぞれ3体ずつの闇呀を相手にしていた。

『おいおい。今度は分身しやがったぜ』

イルバは分身能力を兼ね備えている闇呀に驚きながらも戦いを見守っていた。

闇呀は3体ずつに分かれて統夜と大河を相手にしていたが、真つ先に統夜を潰そうと

闇呀は、勝ち誇った表情で笑みを浮かべると、何も無い空間へと落ちていった統夜と大河を眺めていた。

『……………！統夜！！このままだとまずいぞ！早く上に戻らないと一生ここから出られないぞ！』

「わかってるよ！俺だって初詣でみんなとお参りしたばかりなんだ。そう簡単に死ねない！」

いくら統夜が魔戒騎士といえど、空を飛ぶ力はなく、絶望的な状態であるのだが、最後まで諦めてはいなかった。

「……………そうだ、統夜！諦めるな！！」

上空から声が聞こえてきたので、統夜はその方向を向くと、統夜の瞳には金色の輝きを放つ牙狼の鎧が飛び込んできた。

「……………!?大河さん、どうして!?!」

統夜は、自らを救うために飛び込んできた大河に驚きを隠せなかった。

「……………未来ある有望な魔戒騎士をこんなところで死なせる訳にはいかなからな」

大河は生前は牙狼の称号を持つ魔戒騎士だったため、統夜のような若くて有望な魔戒騎士をこのような場所で死なせるのは忍びないと思っていた。

「……………統夜！我が力を使うのだ！そうすれば闇呀も倒せるはずだ！」

「大河さんの力を……？でも、どうやって……？」

大河の力を借りるといえるのは願ってもないことだったが、どうすればいいのかわからなかった。

「我が力を纏え！はあつ!!」

大河は精神を集中させると、牙狼の鎧は光に包まれ、大河は光の塊となった。

光の塊となった大河は、そのまま統夜の体の中に入って統夜の中に入っていった。

そのことによつて統夜の体に何かしらの異変があつた訳ではないのだが、統夜の左手にある物が握られていた。

それは……。

「……これは……。牙狼剣?!」

いつの間にか統夜の手に牙狼の称号を持つ者の証である牙狼剣が握られていたことに、統夜は驚きを隠せなかった。

本来であれば牙狼の称号を持つ者でなければ扱えないはずの牙狼剣を統夜は普通に手にしているからである。

——我が牙狼剣の力を使うのだ！我が牙狼の力とそなたの奏狼の力……。合わせれば闇呀を倒せるはずだ！

「……牙狼の力と奏狼の力……？そんなことが……？」

統夜は大河の言っていた牙狼と奏狼。2つの鎧の力を合わせるなど聞いたことがなく、本当にそんなことが出来るのかと半信半疑だった。

『統夜！この状況だと迷ってる暇はないぜ。ここは冴島大河を信じてやってみるしかないぞー！』

「そうだな……。この状況を打破出来るなら、それに賭けてみるさ……」

このままだと、永遠に何も無い空間を落ちながら彷徨い続けるだけなので、打開策があるのなら、統夜はそれに賭けることにしたため、腹をくくった。

「……大河さん……。黄金騎士の力……。お借りしますー！」

統夜は大河の力を借りることを決意すると、右手に持っている魔戒剣と左手に持っている牙狼剣をそれぞれ左右に突き上げると、それぞれで円を描いた。

すると、統夜は左右の円から放たれる光に包まれた。

2つの光から鎧が飛び出してくると、その鎧のパーツは、統夜の身に纏われることなく、統夜の周囲を回転していた。

その時、不思議なことが起こった。

奏狼と牙狼の鎧のパーツが合わさったのであった。

そのパーツが統夜の身に纏う瞬間、統夜の体から強大な光が放たれた。

「……!?な、何だ？この光は……！」

統夜と大河が落ちゆく姿を見ていた闇呀であったが、突如現れた強大な光に驚きを隠せずにはいた。

光が収まると、統夜は落下することなくその場に留まり、さらには金と銀の鎧が合わさった不思議な鎧を身に纏っていた。

この形態は、「双烈融身（そうれつゆうしん）」。

統夜が奏狼の鎧と牙狼の鎧を同時に召還することによって2つの鎧が融合し、変形した奇跡の形態である。

奏狼と牙狼。2つの力を身に纏った統夜のこの形態は、「双烈融身奏狼」と言うべき姿であった。

この形態の最大の特徴は、背中から烈火炎装の翼を生やして飛翔する能力である。

さらに、奏狼の皇輝剣と牙狼の牙狼剣の両方を操ることが可能であり、統夜は魔戒騎士最高位である牙狼の力を使うことが可能となった。

烈火炎装の魔導火も、2つの鎧が合わさったことにより、赤と緑と2色が混じった魔導火になっていた。

双烈融身の鎧を身に纏った統夜は、烈火炎装の翼を使って飛翔すると、上で待ち構えている闇呀の元へと向かっていった。

そのスピードは疾風（かぜ）のように速く、あっという間に闇呀の前に姿を現した。

「……な、何だ、あの鎧は!? 2つの鎧が合わさったとでも言うのか!」

暗黒の力を手に入れた闇呀でさえもこのような力は知らないようであり、驚きを隠せなかった。

「……闇呀……!! 世界を闇で覆おうとしている貴様の陰我……。俺が断ち切る!」

統夜は皇輝剣と牙狼剣の両方を構えると、闇呀に対してこのように宣言していた。

「フン! 牙狼の力を得ようと所詮は未熟な小僧。私の敵ではないわ!」

雄々しきオーラを放つ統夜に闇呀は一瞬たじろぐのだが、恐れることなく、自分の分身体を統夜に向かわせた。

すると……。

ヒュン!!

統夜は素早い動きで移動をしながら皇輝剣と牙狼剣を一閃すると、一撃で5体の闇呀の分身体を消滅させた。

「なっ……!!?我が分身を一撃で葬った……だど?」

双烈融身の予想以上の力に、闇呀は驚きを隠せなかった。

「闇呀!次はお前だ!!」

統夜は皇輝剣を前方に突きつけると、闇呀に狙いを定めていた。

「フン!貴様の力はわかった。だが、究極の闇の力を手に入れた私の敵ではない!!」

闇呀は、素早い動きで上空に飛翔すると、精神を集中させると、今まで自分が集めてきた邪気を身に纏っていった。

「……まさか今まで貯めてきた闇の力をこんなところで使うことになるとはな……。だが、ここで貴様を始末し、また闇の力を集めさせてもらうさ!」

闇呀は、暗黒騎士ゼクスを始め、多くの闇を吸収し、力の肥やしにしてきた。

集めた闇の力を全て解放することで、統夜を確実に葬るつもりだった。

闇の力を解放することにより、闇呀の体は大きくなり、体に纏っていた邪気もさらに禍々しくなっていた。

「……」

統夜は闇の力を解放して強化された闇呀を見ても臆することはなく、ジツと闇呀を見据えていた。

「……地獄に落ちろ！未熟な魔戒騎士!!」

闇呀は、黒炎劍の切っ先に邪気を集中させると、その邪気の塊を統夜目掛けて放った。

「させるかよ!!」

統夜は皇輝劍と牙狼劍を同時に一閃すると、自分目掛けて放たれた邪気の塊を跡形もなく斬り裂いた。

「……!?何だと!?!」

闇の力を解放した攻撃でさえも統夜に軽々と防がれ、驚きを隠せなかった。

「……闇呀!!貴様の闇、俺たちの金と銀の刃で断ち切る!!」

統夜は闇呀目掛けて飛翔すると、皇輝劍と牙狼劍を同時に一閃した。

「……させん!貴様の光を我が闇の力で断ち切ってやるわ!」

闇呀も負けじと黒炎劍を構えて臨戦体勢に入っていた。

そして、統夜による攻撃を黒炎劍で受け止めて、3つの劍の切っ先からバチバチと火花が飛び散っていた。

「ぐうう……!」

「(っ)のお……!」

統夜と闇呀の力は拮抗しており、互いに負けじと剣を振り切ろうとしていた。

「……………俺は、負ける訳にはいかないんだ！唯たちの……………そして、梓のもとへ帰るために！」

統夜は頭の中でこのようなことを考えていた。

頭の中で大切な人のことを思い描くことで、統夜に力が湧き、先ほどまで拮抗していた剣の押し合いだったが、徐々に統夜が闇呀を押し去っていた。

「……………!?な、何だと!?こいつ、どこからそんな力が？」

「俺には守りたい人がいる！その思いが俺を強くするんだ！守りし者として」

「くだらん！そんなものは無意味だということを貴様を葬ることで教えてやる！」

「死ぬのは……………貴様だ!!」

統夜は闇呀の黒炎剣を斬り裂くと、隙が出来た闇呀にすかさず皇輝剣と牙狼剣を一閃した。

2つの刃に斬り裂かれ、闇呀の体はバラバラになっていた。

「……………ば、馬鹿な……………この俺が……………こんな小僧に……………！」

「俺は小僧ではない！」

「何だと……………!?!」

「我が名は奏狼！白銀騎士だ!!」

「ぐわああああああああああ！」

統夜が自らの称号を高々と宣言すると、闇呀は断末魔をあげ、その体は爆発と共に消滅した。

「……やった……。あの闇呀相手に俺……勝ったんだ……！」

今までで一番の強敵に打ち勝ち、統夜は喜びの気持ちを露わにしていた。

——統夜。喜ぶのはまだ早い。一刻も早くここから……そして、魔界から脱出するのだ。

『冴島大河の言う通りだぜ。まずはここから脱出してから安心するんだな』

「わかってるよ」

統夜は鎧を解除することなく、そのまま闇呀が作り出したゲートから脱出し、魔界へ戻っていった。

※※※

その頃、魔界で多数の素体ホラーと戦っていた戒人とアキトは、2000体のホラーを討伐し終えた後も現れる素体ホラーと戦い続けていた。

「……………そーキリがない！数があまりにも多すぎるぞー！」

現在、戒人は魔導馬の召還を解除し、鎧を身に纏った状態で戦っていた。

現在戒人とアキトの前にいる素体ホラーは50体もいないのだが、2000体との戦いで疲弊している2人にとってはかなりの数のホラーだった。

「お、俺も……………そろそろ力を使い果たしそうですぜ……………」

アキトも、多数の素体ホラーとの戦いで消耗しており、魔導筆による法術を放つには限界であり、魔戒銃の弾も尽きそうになっていた。

「……………このままじゃ……………やばいぞ……………」

戒人とアキトは絶体絶命の状況に陥っており、覚悟を決めて腹を括っていた。

その時だった。

ゼクスの作り出したゲートから何かが出てくると、そのゲートは消滅したのであった。

さらに、その何かはこちらに飛翔してくると、たった一振りでも50体程の素体ホラーを一掃したのであった。

「……!? な、何だ!？」

「あの数を一撃で……!」

戒人とアキトは、突如現れた何者かの圧倒的な力に驚きを隠せなかった。

その何者かは2人の前まで来たのだが……。

「……戒人、アキト。無事か?」

その何者かから統夜の声が聞こえてきたため、2人は驚いていた。

「お、お前……。統夜……。なのか?」

「それに、その鎧……。まるで牙狼の鎧が合わさったような……」

「その説明は後だ。とりあえず、闇呀は倒した。ここから脱出しようぜ」

「そうなのか!？」

「そういうことなら了解だ!」

戒人は魔戒剣を鞘に納め、戒人とアキトは一足先に魔界と人界を繋ぐゲートを使って脱出し、それを見届けてから、統夜は同じゲートから脱出した。

(……大河さん、本当にありがとうございました!あなたと共に戦うことで、俺は魔戒騎士として多くのことを学びました。そのことをこれからの使命に活かしていきたいと思っっています)

統夜は人界と魔界を繋ぐゲートに入った瞬間に鎧を解除しようとするが、その時に共

に戦った大河へお礼を言っていた。

——うむ。私は英霊としてこれからも戦いを見守っていくつもりだ。統夜もそうだが、鋼牙と我が血を受け継ぎし者も見守っていく。

大河は、本来あるべき姿に戻り、これからは英霊として統夜たちの戦いを見守っていくことにしたのであった。

——統夜……。強くなれ！

(……はい！)

大河からのエールに力強く答えた統夜は、鎧を解除し、それと同時に牙狼剣は消滅した。

すると、今まで統夜の脳裏から聞こえてきた大河の声が聞こえなくなっていた。

(……大河さん、本当にありがとうございました！)

統夜は心の中で改めて大河に礼を言うと、ゲートを通って、人界へと戻っていったのであった。

「……統夜！無事だったか！」

統夜がゲートから戻ってくると、先に戻っていた戒人とアキトが、統夜の帰りを待っていた。

「……統夜、大丈夫か？」

「ああ、何とかな」

戒人の問いかけにこう答えながら、統夜は魔戒剣を青い鞘に納めていた。

「あの闇呀を倒したって言うってたけど……大河さんは？」

「大河さんは、闇呀を倒す時に俺に力を貸してくれて、その役目を終えた後は、消えちゃったんだよ」

「そうだったか……。それじゃあ、あの妙な鎧は、大河さんが力を貸した結果なんだな？」

アキトは、統夜の身に纏っていた鎧について推察すると、それが正しかったからか、統夜は無言で頷いていた。

「……とりあえず入り口に戻ろう。まだホラーがいるなら、大輝さんと奏夜が戦ってるはずだ」

「そうだな、急いで戻ろうぜ」

こうして、魔界から無事生還した3人は、洞窟の入り口で戦っているであろう大輝と奏夜のもとに戻ることにした。

※※※

その頃、統夜たちが乗り込んだ洞窟の入り口では、大輝と奏夜が入り口にいた多数の素体ホラーの殲滅をたつた今終えたばかりだった。

「はあ……はあ……。キルバ、これで全部か？」

『ああ。どうやらそのようだ。それに、洞窟の中から感じた邪気が消えた。恐らくあの3人がこの事件の黒幕を倒したのだろう』

入り口の素体ホラーを殲滅した奏夜は、相棒であるキルバにその確認を行った結果、素体ホラーは完全に殲滅したようであった。

さらに、洞窟内の邪気が消滅したことから、統夜たちが黒幕を倒したということをキルバは推測していた。

「……と言うことは……。統夜さんたち……勝ったんだ！」

「フツ……流石だな、あの3人は……」

キルバの推測を聞いた奏夜は歓喜の声をあげ、大輝は統夜たちの実力を改めて評価していた。

その時、洞窟の入り口から何者かが出てきた。
その正体とは……。

「……統夜さんたちだ！」

「フツ……。3人とも無事でなによりだ」

統夜、戒人、アキトの3人が洞窟の入り口から出てきたため、奏夜と大輝は安堵の笑みを浮かべていた。

統夜たち3人は、ゆっくりとした足取りで、奏夜と大輝に歩み寄り、それを見た2人は魔戒剣をそれぞれ鞘に納めていた。

「……皆さん、無事でなによりです！」

「ああ。そつちも大丈夫だったようだな」

「そうだな。奏夜も魔戒騎士として多少は成長したようだからな。俺も少しは楽をさせてもらったよ」

大輝の言葉は先輩騎士として多少厳しい言葉ではあったものの、自分の成長を認めもらえたということが、奏夜には嬉しかった。

「ありがとうございます！俺、もつともつと精進を続けます」

「フツ……。もつと精進するんだな」

「やれやれ。奏夜も頑張ったんだから、もつと素直に褒めてやれよ。大輝のおっさん」

「……だからおっさんはやめろ！」

大輝は相変わらず自分のことをおっさん扱いするアキトにやめるよう言っていた。

「アハハ……」

奏夜は、大輝とアキトのやり取りを見て苦笑いをしていた。

「それで、事件の黒幕は誰だったんだ？」

洞窟の入り口でずっと戦っていた大輝は、気になっていた話を切り出した。

「それなんですけど……。今から俺の家に来ませんか？そこでゆっくりと話をしたいなあと思います」

「おー！いいじゃねえか！行こうぜ行こうぜ！」

アキトは、統夜の家に行くという案にノリノリであった。

「はい！俺も統夜さんの家に行きたいです！」

「まあ、今日は仕事も終わったし、いいかもしれないな」

東京から来た奏夜と大輝も、統夜の家に行くということを了承していた。

「俺も行きたいが、その前に番犬所に報告に行くよ。誰か一人は報告に行った方がいいと思うからな。それが終わったら合流する」

「戒人。お前は相変わらず真面目だねえ……」

アキトは、戒人の生真面目な言動に少々呆れていた。

「あつ、報告だったら、俺が……！」

この中で最年少である奏夜が番犬所への報告を名乗り出たのだが……。

「いいんだ、奏夜。お前は翡翠の番犬所の魔戒騎士だし、イレス様への報告は紅の番犬所にいる俺の仕事だからな」

「戒人さん……」

「奏夜。とりあえず報告は戒人に任せよう」

「……はい、わかりました」

統夜はこのように奏夜をなだめると、奏夜は納得したのか、あっさりと了承していた。

こうして、戒人は番犬所へと向かい、残りのメンバーはそのまま統夜の家に向かうことになった。

統夜の家で、買って来た食料を食べながら、統夜は魔界での闇呀との戦いや、冴島大河との出会い。さらには不思議な力で闇呀を倒したことを話していた。

統夜はこのような話をしていっているうちに、同じ話を唯たちにもしたいと考えながら話していた。

こうして、闇呀は統夜や大河の力によって討伐され、世界を闇で覆うという野望は阻止された。

桜ヶ丘に平穏が訪れたのだが、ホラーの脅威は消えた訳ではなかった。

人の邪心がある限り、陰我は生まれてホラーは出現する。

そう、統夜たちの戦いは決して終わることはないのである。

「そうだとしても、統夜たち魔戒騎士は、守りし者として戦っていこうという決意を固めながら戦っていくのであった……」。

……続く。

—— 次回予告 ——

『いよいよ唯たちの受験が近付いて来たな。4人揃って合格出来ればいいのだがな。次回、「受験」。サクラよ、咲き誇れ!』

第103話 「受験」

統夜と戒人は、アキトと大輝、奏夜の力を借り、さらには思念の塊として実体化した冴島大河の力を借りて闇呀を討伐することが出来た。

それからおよそ1ヶ月が経過し、唯たち4人の第一志望の受験が迫っていた。

この日の放課後も、唯たち4人は音楽準備室で受験勉強を行い、統夜は梓にギターを教えていた。

「……………うーん……………」

唯は今英語の勉強をしており、英文に悪戦苦闘していた。

「……………「who」?……………誰……………」

唯は「who」という単語が誰という意味だということは理解していたのだが、どう使えばいいのかが分からなかった。

「……………ハッ!……………お前は誰だ!?!」

「……………俺の中の俺……………」

唯の「お前は誰だ」という発言に、統夜は歌を歌うことで反応していた。

「ちよつと統夜先輩!唯先輩たちの勉強を邪魔しちゃダメじゃないですか!」

「アハハ……。ごめんごめん。この前みんなと一緒に観た映画の主題歌を思い出してついで……」

統夜がこのように弁解した通り、統夜は冬休みが終わる前に軽音部のみんなと映画を観にいった。

その映画は突如現れた未知の生命体と、その生命体になってしまった若者との戦いを描いた作品であった。

統夜が不意に口ずさんだのは、その映画の主題歌となっていたのである。

「……まあ、それは私もちよつとは思いましたけど……」

「あの映画……。面白かったよねえ♪」

「……ちよつとグロかったけどな……」

その映画にはホラー映画程ではないがグロいシーンがあり、それを思い出した瀧の顔は真っ青になっていた。

「……そうじゃないだろ」

律はジト目になってツツコミを入れていた。

「……「who」っていえば、キース・ムーンがいたバンドだろ？」

『……おいおい。確かにそのバンドは「The who」だが、この場合はそれでもないだろう？』

イルバはいつものテーブルにスタンドが置かれ、そこにセットされた状態で唯たちの勉強を見守っていた。

「イルバの言う通りね。ここでの「who」は「関係代名詞」のことじゃないかなあ？ここにしかかかってきて……」

紬は唯の苦戦していた「who」が関係代名詞ではないかと推測して、解説をしていた。

唯と律は真剣にその解説を聞くのだが、理解は出来ていないようであった。

「ダメだあ……さっぱりわからん」

「基本だろ？」

『そうだな。そこは俺様でもわかる問題だぜ』

イルバは魔導輪であるため学校の勉強は当然しないが、統夜と一緒に授業を受けているような状態だったので、様々な教科の基礎的内容は頭に入っていた。

そんな中……。

「……あつ！大丈夫だよ、りっちゃん。いざとなればあれがあるよ！」

「あ！そうだったな！」

「？あれって？」

唯と律はある物の存在に笑みを浮かべるが、澤は首を傾げていた。

すると、律は一本の鉛筆を取り出した。

その鉛筆は六角で短めの鉛筆で、角の部分には数字が書かれていた。

『……………おい、律。お前さん、それはまさか……………』

「そう！マークシートなら任せとけ！六角君7号！」

「……………ややこしい……………」

『やれやれ……………。山勘頼みじゃないか……………』

滯とイルバは、ジト目で律の取り出した鉛筆を見ていた。

「何を言う！あらゆる鉛筆で試した結果……………。7号は正解率60%を叩き出した優れものなんだぞ！」

『……………おいおい……………』

イルバは律の手にした鉛筆にこのような効果があるとは思っておらずジト目で律を見ていた。

「例えば、この問題の答えは……………」

律は鉛筆を転がして正解を導き出そうとしていた。

その結果……………。

「……………この問題の正解は、3だぜ！」

鉛筆は3のところまで止まったため、律は正解は3だと宣言していた。

紬は正解を確認すると……。

「……凄いわ、りっちゃん！正解よ！」

「よっしやあー！」

どうやら問題は正解だったようであり、律は誇らしげな表情をしていた。

『やれやれ……。ただのマグレだろ……』

イルバはこの結果を見てもこの鉛筆の効果を信じようとはしなかった。

「この鉛筆があれば、合格間違いなしだね！」

「おう！」

「今度受けるところの試験は、マークシートは1から9まであるけどな」

ここで滞は、律にとって衝撃的な事実を打ち明けた。

「……なっ!？」

そのことを知らなかった律は目を丸くして驚いていた。

そして……。

「じゃあ、不合格……」

「早っ！」

『おいおい、諦めるのが早すぎるんじゃないのか?』

得意の鉛筆が使えず絶望している律に、イルバはフオローを入れていた。

そんな中、統夜と一緒にギターの練習をしていた梓は、唯たちの勉強が気になるようで、しきりに唯たちの様子を見ていた。

「……梓。唯たちの勉強が気になるのか？」

「へっ!? あ、あの……」

その様子が気になった統夜は梓に声をかけるのだが、梓は弁解に困っていた。

梓はこの時もうすぐ来たるバレンタインのことを考えていた。

統夜にあげることは決めていたものの、唯たちにもあげるべきかを考えていた。

去年のバレンタインは、全員で統夜にチョコをあげたという形であったため、直接唯たち4人にはチョコを渡さなかったのである。

この頃になると、梓が統夜と付き合うようになったことは純や憂だけではなく、クラス中にも知れ渡るようになっていた。

去年のバレンタインに統夜に告白した、日代玲奈も、梓が統夜に惚れていたことを察しており、2人のことを祝福していた。

統夜は梓がバレンタインのことを考えてるとは知らずに首を傾げていた。

すると、勉強していた唯たち4人が梓の視線を感じてこちらの方を見ていた。

「……梓ちゃん? どうかしたの?」

「へ!?! い、いや! 何でもないです!」

「梓、私たちに気を遣わないで練習に専念していいんだぞ」

「そうそう♪」

「暇人のやーくんがコーチをしてくれるしね！」

「……おい、暇人は余計だ」

統夜は唯の暇人という発言が気に入らなかつたのか、ジト目で唯を見ていた。

「さあ、梓、統夜。BGMよろしく♪」

「そういうことだ。梓、軽快な曲でも演奏しようぜ。俺はそれに合わせるからさ」

「は、はあ……。それじゃあ……」

梓は軽快な曲を弾き始め、統夜はそれに合わせる形でセッションを行った。

2人のセッションはかなりいい感じであり、付き合ってる効果もあるのか息はぴったりだった。

唯たち4人は2人の奏でる音楽をBGMとして勉強を始めた。

しかし、律と唯は軽快なリズムに無意識でノってしまい、集中力を乱していた。

しばらく勉強を続けていると……。

「……ねえ、ちよつと休憩しない？お茶でも淹れるわよ♪」

紬は集中して勉強するために休憩を提案した。

それを聞いた唯と律の表情がぱあつと明るくなった。

「よっしやあ！もう我慢出来ない！ドラム触ろうっと」

「私もギター太触りたい！」

2人の演奏を聴いて我慢出来なかったのか、唯と律はそれぞれの楽器を触ることにした。

しかし……。

「その前におトイレ〜」

唯はギター太を奏でる前にトイレに向かった。

「梓ちゃんと統夜君もお茶にしましょう？」

「そうだな。梓、休憩しようぜ」

「はい！」

こうして、統夜と梓も休憩して、みんな一緒にティータイムを行うことにした。

「……すいません。何だか先輩たちの勉強を邪魔してるみたいで……」

梓は勉強している唯たちを尻目にギターを弾くことを、今までずっと後ろめたく思っていた。

「気にするなって。俺たちはここを使わせてもらってるんだからさ。そうだろ？」

「ああ、統夜の言う通りだ。私はむしろ、音楽があつた方が集中出来るくらいだからさ、ガンガン弾いてくれていいんだぞ」

「梓、そういうことだから気にするなよ」

「は、はあ……」

滯は音楽があつた方がいいというのは本音であり、それを察した統夜はこのように梓をフォローしていた。

そして、滯も我慢出来なかつたのか、ベースを手に少し練習しようとしていた。

「……梓ちゃんと統夜君はミルクティーでいいかしら？」

「はい！」

「ああ、それで頼むよ、ムギ」

「ごめんね……。クツキーしか用意してなくて……」

紬は受験勉強で忙しいからか、ちゃんとしたおやつを用意出来ず、申し訳なさそうにしていた。

「そんな、十分ですよ。受験勉強の方が大事なんですから」

「そういうことだぜ、ムギ。それに、今日は俺、差し入れを持ってきたからな」

「あら、そうなの？ 珍しいわね」

「アハハ……まあな」

統夜が軽音部のみんなのために何かを用意するというのは初めてであり、紬は驚いていた。

「……ほんとと言うとね、もうすぐバレンタインだから、チョコレートも用意したかったんだけど……」

「……あつ」

バレンタインのチョコが用意出来ないという紬の発言に、梓はハツとしていた。

「気にすんなって、ムギ。もうすぐ受験だからそんな暇もないだろ？俺はそんなムギの気持ちだけで嬉しいからさ♪」

申し訳なさそうに俯く紬をフォローするために、統夜は満面の笑みでこう言葉を紡いでいた。

「ふえ!?あ、ありがとう……// // //

紬は梓に統夜を譲ったのだが、今でも統夜のことを好きであり、そんな統夜の笑顔を見た結果、顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

「……むー……!」

梓は統夜と紬を見て焼きもちを妬いたのか、ぷうつと頬を膨らませていた。

『やれやれ……』

イルバはそんな統夜たちのやり取りを呆れ気味な表情で見ている。

こうして、ティータイムの前に唯たちは軽く自分の楽器を触り、満足したところで、全員でティータイムに突入した。

「……ねえ、統夜君。今日は差し入れを持ってきたのよね？」

「え!? そうなのか？」

「ねえねえ、やーくん、出して出して！」

統夜が差し入れを持ってくるといふ珍しいケースに律は驚き、唯はワクワクしていた。

「……ああ、ちよつと待つてな」

統夜は魔法衣の裏地から箱のようなものを取り出すと、それをテーブルの上は置いた。

「統夜……。それはケーキか？」

滯は箱をジッと見ながら統夜に確認していた。

「ああ、そうだ」

「もしかして、このケーキは、統夜君の？」

「いや、このケーキは俺が作ったんじゃないよ、戒人からの差し入れなんだよ」

「え? これって戒人さんの手作りなんですか!？」

戒人が料理をするという発想がなく、驚きを隠せなかった。

それは唯たちも同様であり、驚いていた。

「まあ、俺もたまたま戒人が料理上手だと知つてな。その時は俺も驚いたもんだよ」

統夜もまた、戒人が料理上手だと知ったのは最近であり、その時は驚いていた。

「今日の朝、エレメントの浄化をしてたら戒人に会ってな。唯たちの受験が近いってことを前に話してたから、これ食べて頑張ってくれと言ってこれを預かったんだよ」

統夜は、今日戒人に会って、このお菓子をもらった経緯を唯たちに説明していた。

「戒人さん、ありがとう！」

「今度戒人さんに会ったらお礼言いたいわ♪」

「そこは俺が言つとくよ。番犬所で会うことも多いからな」

統夜は魔戒騎士という仕事柄、戒人と会う機会が多いため、統夜はみんなに代わって戒人に礼を言うつもりだった。

このお菓子が戒人の手作りだと説明したところで、統夜は箱を開けた。

その中身とは……。

「す、凄……い……」

「美味しそう……!」

見た目も完璧なショートケーキであり、その見た目に梓は驚き、唯は目をキラキラと輝かせていた。

ケーキは戒人が6等分してくれたのか、6つに分かれていた。

統夜はそのケーキを皿に盛り付け、配った。

「……さあ、食べようぜ」

「「「いただきます!」」」」

唯たちは一斉に戒人お手製のケーキを頬張った。

その味は……。

「……!?な、何これ!?!」

「ああ!めちやくちや美味いぞ!」

「そうだな。クリームも濃すぎずにバランスも良いしな」

「ええ!まるでうちでよくいただくケーキと同じレベルだわ!」

「はい!凄く美味しいです!」

一口食べただけで、唯たちは美味しいと反応し、目をキラキラと輝かせていた。

「確かに美味しいな。みんなが美味しいって言ってたことを伝えたら戒人も喜ぶだろう

ぜ」

統夜は自らも美味しいと感じており、戒人の喜ぶ顔が頭に浮かんでいた。

こうして、統夜たちは美味しい戒人のケーキを食べながら、ティータイムを楽しんで

いた。

そのティータイムによって息抜きを終えたところで、唯たちは勉強を再開し、統夜と

梓はギターの練習を行っていた。

そして翌日の昼休み……。

「ふうん……。それじゃあ今回は先輩たちにもチョコをあげることにしたんだ」

梓は純と憂にバレンタインのチョコを統夜だけではなく、唯たち4人にも渡そうと考
えていた。

「うん。純と憂の分も用意するね」

それだけではなく、梓は純と憂の分もチョコを用意するつもりだった。

「梓ちゃんのチョコ、楽しみだなあ♪」

「うん、私も楽しみだよ♪」

憂と純は、梓の用意するチョコを心待ちにしていた。

「だからね……。統夜先輩にもだけど、絶対に唯先輩たちに言っちゃだめだからね!!」

梓はバレンタインのチョコを用意することを秘密にしたかったからなのか、憂と純に
詰め寄り、口外しないよう念押ししていた。

「わ、わかった。わかったって……。だけど……」

「？」

「……クラスのみんなには広まつちやったかな？」

梓は2人に念押しをする時、かなり大きな声で言っていたので、結果的にクラス中に広まることになってしまった。

「!?」

そのことに気付いた梓は、まるで茹で蛸のように顔が真っ赤になっていた。

「……梓ちゃん、フアイト♪」

「梓ちゃん、可愛い♪」

梓が彼氏である統夜や先輩である唯たちにチョコをあげるといふ話を聞いたクラスメイトたちはニヤニヤとしながら梓に話しかけていた。

「し……しまったああああああ!!」

梓はあまりに興奮していたため、うっかりクラスメイトたちにもバラしてしまう結果となり、それを悔いるように叫んでいた。

※※※

こうして、唯たちはもうじき来たる受験に向けて勉強をしており、梓はもうじき来たるバレンタインのために何を作るのかを考えていた。

そして、いよいよ翌日は唯たちの受験当日であった。

この日の夜、統夜は指令を受けており、現在は桜ヶ丘某所にてホラーと戦っていた。そして、統夜は鎧を召還し、ホラーを追い詰めていた。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る！」

統夜はホラーに向かってこう宣言すると、皇輝剣を構えてホラーに向かっていった。

そして、皇輝剣を一閃すると、ホラーを真つ二つに斬り裂いた。

その一撃によって斬り裂かれたホラーは断末魔をあげながら消滅した。

ホラーが消滅したことを確認した統夜は鎧を解除すると、元に戻った魔戒剣を青い鞆に納めた。

「……ふう……。これでお仕事は完了だな？」

『ああ、そうだな。……ところで統夜。明日はいよいよ唯たちの受験だな』

「……ああ、そうだな……」

統夜は明日は何の日かということは理解していたので、険しい表情をしていた。

『おいおい、統夜。何でお前さんがそんなに緊張してるんだよ』

「だってよ……。明日は唯たちにとつて大事な日だろ？唯たちのために出来ることが応援だけってというのがなんか落ち着かなくてな……」

統夜は出来ることなら唯たちの力になりたいと思っていたのだが、勉強を教えることは出来ないため、応援することしか出来なかった。

魔戒騎士として剣を振るう以外は何も出来ない自分をもどかしく思っており、先ほどのホラーと戦っている時も、唯たちの受験のことが頭をよぎり、戦いに集中出来ずにいた。

イルバはその事に気付いてはいたものの、統夜の心中を察したのかダメ出しはしなかった。

『統夜。何度も言ってるだろう？俺たちに出来ることは応援だけだな』

「んなことはわかってるよ！でもなあ……」

統夜もそのことは頭ではよくわかっているのだが、それでも釈然としていなかった。

『……統夜。どうしても唯たちのために何かをしたいなら、今から何か差し入れを用意して、明日唯たちが電車に乗る時に渡したらどうだ？』

「……それはいい考えだな。だけど、俺は普段は料理はしないし、何を差し入れたら……」

統夜は料理が出来ない訳ではないのだが、普段から外食が多いため、料理に関しては自信はなかった。

それだけではなく、唯たちにどのような差し入れをすれば良いのかがわからず、統夜は悩んでいた。

「……パツと思いついたのがカツサンドだけど、この時間じゃスーパーはやってないしなあ……」

統夜は受験へのげん担ぎとしてカツサンドを差し入れることを考えたのだが、もう夜も遅く、開いているスーパーはないと思われた。

しかし……。

『……そういえば、隣町に24時間営業しているスーパーがなかったか？そこだったら豚肉も売ってそうだが……』

「……それだ！イルバ、今からそのスーパーに向かうぞ！」

『やれやれ……。差し入れを提案したのは俺様だが、今から行って間に合うのか？』

「どうにか間に合わせるさ。万が一間に合わないならその時はまた何かを考えればいいだけのことだ！」

『まあ、確かにそうだな』

「とりあえず、さっそく向かうぞ、イルバ」

『やれやれ……。今日は眠れないかもしれないな……。』

今日は眠ることはなさそうと予想していたイルバは苦笑いをしながらも、統夜は隣町にある24時間営業のスーパーに向かって行った。

スーパーに到着した統夜は、無事に差し入れに使うメニューを購入することができ、そのまま家にとんぼ返りをする、慣れない手つきながらも料理を作り始めた。

※※※

そして翌日、いよいよ唯たちの受験当日を迎えた。

現在は朝の6時45分。

まだ外は暗いのだが、駅のホームには律、滯、紬の姿があった。

律たちは始発の電車を使わないと時間内に受験の会場にたどり着けないため、朝早くから集まっていたのであった。

「……………うう、寒いなあ……………」

「まさか当日降るなんてねえ……」

紬の言う通り、現在は雪が降っており、受験当日にしてはあまり良い天気とは言えなかった。

「受験票……受験票はこの中……このポケットの中……」

滯は一番大事な受験票の場所を入念にチェックしていた。

「……入れ込んでるな……」

律は滯のあまりの慎重すぎる態度に苦笑いをしていた。

「りっちゃんは大丈夫？」

「もちです！昨日のうちにちゃんとここに……」

律は受験票を入れた学生鞆のポケットに手を突っ込むのだが……。

「……あ、あれ？」

すっかりそこに入れたにも関わらず学生鞆のポケットには受験票はなく、律の顔は真っ青になっていた。

「おいおい！」

滯が驚く中、律は大慌てで学生鞆の中身をチェックしていたのだが……。

「……律、探し物はこれか？」

突如男性の声が聞こえてくると、その男性は律に受験票を差し出した。

「……！アハハ……どうもすいませ……って、と、統夜!？」

律に受験票を差し出したのは統夜であり、それに気付いた律は驚きを隠せなかった。

「と、統夜、どうしたんだ!?! こんなに朝早くから」

濡も突如統夜が現れたことに驚きを隠せなかった。

「もしかして……。私たちのためにお見送りに来てくれたの?」

「まあ、そういうことだ。……それよりも律。こんな大事なもの、失くすなよ。縁起が悪いからな」

この受験票はホームの入り口のところに落ちていたのだが、統夜はあえて落ちていたという言葉は使わなかった。

これは、統夜なりの気配りであった。

「おう、悪いな、統夜」

「あ、あと。これを見んなに渡そうと思ってるな」

統夜は小さな箱4つを取り出すと、そのうち3つを律たちに手渡した。

「統夜君、これは?」

「今日は受験だろ?俺は4人揃って受験に勝ってほしいと思ってるからな。げん担ぎのためのカツサンドだ。電車の移動中でも食べてくれよ」

「統夜……」

「統夜君……」

律たちは統夜がそこまで料理が得意ではないことを知ってはいたが、自分たちのために寝る間を惜しんで凝った差し入れを用意してくれたことが嬉しかった。

その嬉しさ故に目をウルウルさせていると……。

「……おつ、ようやく唯も来たか」

フラフラとした足取りで唯がやって来た。

「遅いぞ、唯」

「唯ちゃん、おはよう」

律と紬は唯に挨拶をするのだが……。

「……は、話しかけないで……」

「え？」

「た……単語が……こぼれ落ちそうだから……」

唯は頭を抱えてどうにか覚えたことを忘れないようにしていたのだが、カンカンカンと電車の来る音が聞こえてくると、唯の集中力が少し削がれてしまったようだ……。

「……あ！何か落ちた！どうしよう！単語、落ちちゃった！」

唯は目に見えるわけでもないのに、必死に単語を探す素ぶりをしていた。

「……究極の一夜漬けだな……」

唯の度を越えた一夜漬けを見て、律は苦笑いをしていた。

「やれやれ……」

統夜も律と同じことを考えており、苦笑いをしていた。

「……濡、後で唯にもこいつを渡しといてくれ」

「ああ、わかった」

統夜は濡に唯の分のカツサンドを渡すと、濡はそれを受け取った。

そして、それと同時に電車が到着した。

「……それじゃあ、みんな、頑張れよ！」

「ああ、ありがとな、統夜」

「統夜君の応援があつたら、私たちは頑張れるわ♪」

「ああ、あたしたち、頑張るからな！」

「あうう……単語が……」

統夜の激励の言葉に濡、紬、律が答える中、唯だけはこぼれ落ちた単語を今でも気にしていた。

「ほら、唯。行くぞ」

律は唯の首根っこを引っ張ってそのまま電車に乗り込んだ。

「それじゃあ、統夜。行ってくるな」

「今日は学校お休みだし、ゆっくり体を休めてね」

紬は統夜の目にくまが出来ていることを見抜いており、統夜を気遣う発言をしていた。

そして、滯と紬も電車に乗り込み、統夜は発車する電車を見送っていた。

「……………みんな……………頑張れよ……………」

統夜は電車が向かっていった方向を見つめながらこのように呟いていた。

『……………さて、統夜。エレメントの浄化を行う前に家に戻って体を休めろよ。そんなに疲れてちゃ騎士の使命は果たせないからな』

「そうだな……………。一眠りだけさせてもらおうかな……………」

統夜はエレメントの浄化を行う前に一度家に帰り、仮眠をとることにした。

そのため、統夜はそのまま自宅へと向かった。

唯たちが4人揃って合格出来るよう祈りながら……………。

※※※

一眠りを終えた統夜は、そのままエレメントの浄化を行った。

統夜は唯たちのことが心配だったからか、心ここに在らずといった感じではあったが、確実に仕事をこなしていった。

この日の仕事は無事に終わり、この日は指令もなかったので、統夜は街の見回りを行つてから家路についた。

翌日以降も唯たちの受験は続き、統夜は唯たちと会えないまま日々を過ごしていた。

その日々はエレメントの浄化を行つてから学校に通つて授業を受け、放課後は梓と少し練習をしてから番犬所へと向かうといった感じの日々であった。

そして、気付けばバレンタイン当日になっていた。

この日には唯たちの受験も終わっていたので、統夜は早々にエレメントの浄化を終えて、唯たちと一緒に登校していた。

『……おい、統夜。今日はバレンタインだろ？梓と一緒に登校しなくても良かったのか？』

「いいんだよ。恐らく梓はチョコを用意してくれてるだろうし、一緒だと逆に梓が緊張しそうだからな」

統夜は梓の性格をよく理解しているからか、今日はあえて一緒に登校するという選択肢はとらなかつた。

「羨ましいですなあ、このこの！」

律はニヤニヤしながらと統夜のことをからかっていた。

「…………お前なあ…………」

統夜はニヤニヤしながらからかってくる律をジト目で見ていた。
すると…………。

「…………あつ、あの！漣先輩！」

突如漣の名前が呼ばれたため、統夜たちは足を止めると、1人の女子生徒が立っていた。
た。

コートを着ていたためにリボンの色はハッキリとは見えなかったが、梓と同じ2年生であると思われた。

「あ、あの…………これ…………受け取ってください！」

その女子生徒は恥ずかしそうにもじもじしながらもチョコと思われる箱を漣に手渡した。

「あつ、ありがとう…………」

漣は困惑しながらも笑みを浮かべながらチョコと思われる箱を受け取った。

チヨコを無事渡した女子生徒は、逃げるように校舎の方へと向かっていった。

「……さすがはファンクラブまである滯さんですなあ」

律はニヤニヤしながら今度は滯のことをからかっていた。

「うっ……うるさい！ほら、早く行くぞ！」

滯はそのまま学校の方へと向かうべく歩き始めた。

それから間も無くすると……。

「……統夜先輩♪」

今度声をかけられたのは、統夜であり、統夜に声をかけたのは、去年のバレンタインも統夜にチヨコを渡していた日代玲奈だった。

「あつ、玲奈ちゃんか」

統夜は気軽に玲奈のことを「玲奈ちゃん」と呼んでいた。

玲奈は現在桜ヶ丘警察署の刑事で、統夜の協力者でもある日代幸太の妹であった。

幸太とは盟友と言えるほどの仲になった統夜は何度か幸太の家を訪れたこともあり、その時に「日代さん」ではなく、「玲奈ちゃん」と呼ぶようになっていた。

それと同時に玲奈も今までは「月影先輩」と呼んでいたが、今では「統夜先輩」と呼ぶようになっていた。

「……はい、あれ」

玲奈はチョコレートが入っていると想われる箱を、統夜に手渡そうとしていた。

「もちろん、これは義理ですよ？本命渡しちゃうと、梓ちゃんに悪いですしよ！」

玲奈はもちろん梓と統夜が付き合うことを知っていたため、梓に気を遣って渡すチョコは義理チョコにしていた。

「……ありがとな。つか、玲奈ちゃんのチョコを受け取らなかつたら、君の兄さんが乗り込んできそうで怖いしな」

統夜は笑っておどけた発言をしながら玲奈のチョコを受け取った。

「アハハ、それはあり得るかも……。お兄ちゃん、今はヒカリさんに夢中だけど、シスコンだし……」

玲奈は幸太のことをシスコンと称していたが、玲奈は大のお兄ちゃん大好きっ子であり、玲奈の友達玲奈をブラコンだと思っていた。

統夜はそういうのに疎いからか、仲睦まじい兄妹という解釈をしていた。

「……それじゃあ、私はこれで」

玲奈は統夜にペコリと一礼すると、そのまま校舎の方へと走っていった。

「……統夜ってば、彼女がいるのに相変わらずモテますなあ♪」

律はニヤニヤしながら再び統夜をからかっていた。

「そ、そんなんじゃないって！玲奈ちゃんは幸太さんの妹だから、親しげになっただけ

だよ」

「え、そうなの!？」

「あ、そういうえば幸太さんと初めて会った時にそんなこと言ってたっけ？」

「あの子も可愛い子だね♪」

「梓が言うには、玲奈ちゃんはクラスでも人気者みたいだぞ」

「へえ、そうなんだ」

「そんな人気者も好意を持つてるとは……。お前も隅に置けないなあ♪」

律は玲奈が人気者だと知ると、さらにニヤニヤして、統夜をからかっていた。

「う、うるさい!ほら、早く中入るぞ!」

統夜は律に何度もからかわれたことでムキになり、そのまま校舎の方へと向かっていった。

「あ、やーくん!待ってよお!」

唯たちは慌てて統夜を追いかけていった。

「……」

この時梓は統夜たちよりも早く学校に来ており、待ち伏せをしていたのだが、次々と他の子が濡や統夜にチョコを渡していたため、完全にチョコを渡すタイミングを逸していた。

「……梓、とりあえず教室行こっか」

「そうだよ、梓ちゃん！」

梓と一緒にいた純と憂は、梓を励ますかのように教室へ行くよう提案していた。

「……あつ、うん。そうだね……」

こうして梓は、純や憂と共に自分たちの教室へと向かっていった。

※※※

そして、この日の昼休み、唯たち4人は今現在出ている試験の結果報告をさわ子へ行うため、職員室に来ていた。

統夜も結果が気になるため、4人に同行していた。

「……うん。唯ちゃんとりつちゃんも第三志望の大学に合格……。そして滯ちゃんとムギちゃんは第二志望まで合格……。あなたたち、本当に本番には強いわねえ」

唯と律は第三志望の大学に、そして滯と紬第二志望の大学の合格が内定していた。

「へへーん！まあね！」

第三志望まで合格し、律は誇らしげな表情を浮かべていた。

「……確かに、ライブだけじゃなくて受験でと本番に強いつてのに俺も驚いているよ」

統夜も、唯たちの予想以上の頑張りぶりに驚きながらも嬉しいという気持ちだった。

「……あとはみんな一緒に第一志望ね……。結果はいつ出るんだっけ？」

「明後日です」

滯の言う通り、4人一緒である第一志望の大学の結果が出るのは明後日になっていった。

「……みんな一緒に合格して、揃って同じ大学に行けるといいわね」

「「はい!!」」

唯たち4人は揃って同じ大学に行きたいという想いが強く、ここまで頑張ってきたのであった。

「でもまあ、これで試験も終わったことなんだし、今まで頑張った分、卒業まではのんびりと過ごすといいわ」

さわ子はここまで頑張ってきた唯たちに労いの言葉を送っていた。

「はい、ありがとうございます」

「それじゃあ、失礼しました」

統夜たちはさわ子に一礼すると、そのまま職員室を後にしようとしたのだが……。

「……あれ？あずにゃん？」

職員室の入り口で梓、純、憂の3人が待つており、梓を見つけた唯が声をかけていた。

「梓ちゃん、どうしたの？」

「あつ、いえ……その……」

梓は統夜たちに用事があったのだが、なかなか話を切り出せずにいた。

「……ほら、梓」

純は梓がどうか話を持ち出せるようフォローしていた。

「う、うん……」

純からの励ましがあっても、梓はなかなか話を切り出そうとしなかった。

そのことに業を煮やした純は……。

「あ、あの！瀧先輩！」

「は、はい！」

瀧は突如純に名指しされ、そのことに驚いていた。

「瀧先輩は私の憧れのベアシストなんです。だから……これを、受け取ってください！」

純は勢いよく梓がチョコを渡せるように自分が先に憧れのベアシストである瀧に

チョコの入った箱を手渡そうとした。

「あつ、ありがとう……」

滯は自分が憧れの存在と言われて恥ずかしかったが、それと同時に嬉しくもあり、純からチョコの入った箱を受け取った。

「あつ、あと、先輩たちにも」

純は滯以外の4人にもチョコを渡したのだが、義理なのか明らかに滯のとはサイズが違っていた。

「ほら、今度は梓の番だよ」

「えっ、何々？もしかしてあずにゃんも？」

「それは楽しみだわ♪」

「まさか、統夜だけっていうオチはないよな？」

唯、紬、律の3人は梓もチョコを用意しているのではないかと期待をしていた。

「あ、あの……。えっと……」

純がスムーズにいくようアシストしても、梓は素直に話を切り出すことが出来なかった。

そして……。

「……あつ、私、ちよつとトイレに……」

梓はこう話を切り出すと、逃げるように職員室を後にした。

「あ、ちよつと、梓!!」

「梓ちゃん、待って!」

純と憂は、慌てて逃げる梓を追いかけていった。

「……あずにゃん、どうしたんだろ……」

いつもとは違う梓の様子に、唯は不安げな表情を浮かべていた。

そんな中……。

「青春ねえ♪」

今までのやり取りの一部始終を見ていたさわ子は、笑みを浮かべていた。

「?」

唯はさわ子の言葉の意味がわからず、首を傾げていた。

「……統夜。梓を追いかけていいのか?」

濡は梓だけではなく、統夜も気遣って、このような問いかけをしていた。

「……いいんだよ。純ちゃんと憂ちゃんと任せるさ」

「でも、統夜君……」

「俺、梓が今何を思ってるのかわかってるんだよ。だからこそ、今追いかけるのは俺じゃないって思ったんだ」

「やーくん……」

「ま、そういうことよ。私から言えるのは、私の分も取っておきなさいよ」
「は、はあ……」

さわ子の言葉を聞いた統夜は、とりあえず生返事で返しておいて、そのまま唯たちと共に自分の教室へと戻っていった。

そして、逃げるように職員室を後にした梓は、中庭の入り口で立ち止まり、すぐさま純と憂も追いついてきた。

「……梓、そんなに恥ずかしがることもないじゃん。普通に渡せばいいんだよ。「はい」ってさ……」

純は梓が恥ずかしかったからチョコを渡せなかったと解釈して、このような励ましの言葉を送っていた。

しかし……。

「……そうじゃなくてさ……」

「え？それじゃあ……」

「……先輩たち、もう卒業しちゃうんだって……。みんな、いなくなっちゃうんだなっ

て……」

「梓……」

「梓ちゃん……」

この時、梓がどのような表情をしていたのかは、梓が顔を隠していたからか理解することは出来なかった。

しかし、純と憂はそんな梓の心中を察することはでき、2人は梓を優しく包み込むかのように抱きついていた。

「……よしよし……」

純はそれ以外何も言うことはなく、優しく梓の頭を撫でていた。

その後は、昼休みが終わるまで、3人はその場に留まっていた。

※※※

そして放課後になり、統夜たちは音楽準備室に集まっていた。

「……梓ちゃん、今日は来るかしら……」

「大丈夫だ、あいつは必ず来るさ」

紬は不安げな表情をしている中、統夜は梓が来ると信じてどんと構えていた。

「統夜、ずいぶん自信だな」

「そりやそうだろ。だって俺、まだ梓からチョコをもらってないしな♪」

「……お前なあ……」

『理由が明らかにおかしいな』

梓が来ると信じている理由があまりにもあからさま過ぎたのか、律とイルバはジト目で統夜を見ていた。

すると……。

「……！あずにやんの気配だ！」

唯は突如梓の気配を感じ取り、音楽準備室の入り口に移動した。

その直後に扉が開くと、唯はその扉に直撃し、唯は思いきり頭をぶつけてしまった。

「痛たた……」

「ゆ、唯先輩!?大丈夫ですか?……っっていうか何でそこに?」

「い、いやあ……あずにやんの気配がしたから……」

「……なんですか、それ」

梓はジト目になって唯の話を聞いていた。

「おつ、梓。来たか！」

「待つてたぜ、梓」

「皆さん……」

統夜たち5人は梓のことを歓迎しており、少しの間だけ呆然としていたが、すぐにコートを脱いで学生鞆と共に長椅子に置き、ギターケースを壁に立てかけて自分の席に座った。

その間に紬は紅茶の用意を行っていた。

「この前いい茶葉をゴンザさんに譲ってもらつてね、その茶葉を使つてみたの。凄く絶品の紅茶だつてゴンザさんも鋼牙さんも絶賛していたわ♪」

紬は家の関係で鋼牙やゴンザのことを知っており、以前家の用事で雷暝館を訪れた時にゴンザから茶葉を少し譲ってもらつた。

それはゴンザや鋼牙も絶賛するほど絶品の紅茶で、ぜひ統夜たちにも飲んで欲しいとのことだった。

「そ、そうなんですか？」

「ゴンザさん絶賛なら間違いはなさそうだな」

統夜は雷暝館でゴンザの淹れた紅茶を何度も飲んでおり、だからか目の前に置かれた紅茶にも期待していた。

「そうだな。それに、凄くいい匂いだしな」

「なあなあ、ムギ。今日のお菓子は何なんだ?」

律は袖にお菓子のメニューを聞いたのだが……。

「ごめんなさい……。今日は用意出来なかったの……。その代わり、梓ちゃんが用意してくれてるみたいよ♪」

「へ?」

梓は一瞬袖の言葉の意味が理解できず、ポカーンとしていた。

そして、その意味を理解した瞬間、梓は慌てふためいていた。

「な、何でバレてるのお!」

梓は内緒で統夜たちに手作りチョコを食べてもらおうと考えていたのだが、それがバレたとは思っておらず、慌てふためいていた。

「あつーもしかして……」

梓は一つ心当たりがあり、彼氏である統夜がさらっとバラしたんだと勘違いしていた。

そのためか、梓はぶうつと頬を膨らませながら統夜を睨みつけていた。

「違う違う。俺じゃないって。まあ、俺はチョコをくれるとはわかってたけどさ。みんなの分をしつかりと用意してくれてるとは思わなかったよ」

統夜は昼休みに梓が抱えていた箱を見た瞬間にこれは自分だけじゃなくてみんなのために用意したものだど理解していた。

しかし、あえて黙っていたのだが、それを見抜いていた人物がもう一人いた。

その人物とは……。

「……私の分、残しときなさいよ。だつてさ」

それは今ここにはいないさわ子であり、さわ子はすべてをわかった上でこのようなことを言っていたのであった。

「あうう……」

自分の行動がバレバレだったと思い知らされた梓は、顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

こうして、梓はバレバレながらも統夜たちに手作りのチョコケーキを振る舞うことになり、統夜たちは梓の用意してくれたチョコケーキを頬張った。

その味は……。

「……うん！あずにゃんチョコ、すっごく美味しいよ！あずにゃん天才だよお！」

唯はこのチョコケーキがかなり美味しかったのか、梓をべた褒めしていた。

「そ、そんな。大きいですよ……」

「でも、本当に美味しいよ♪」

「そ、そうですかね……」

「本当に美味いぜ、梓。この場に零さんがいたらきつと一つ残らず美味しそうに食べ尽くしてただろうな」

「アハハ……そうですかね……」

「統夜は極度の甘党である銀牙騎士絶狼こと涼邑零を話に出すと、梓は苦笑いをしていました。」

「なあ、梓。チョコケーキってことは、これってやつぱり……」

「へ？えつと……なんて言うか……。日頃の感謝というか……」

『やれやれ……素直じゃないな。梓のやつ』

専用のスタンドにセットされているイルバは、カチカチと音を鳴らしながら笑みを浮かべていた。

「なるほど……感謝ね」

「律も梓が素直ではないことを知っており、ジト目で梓を見ていた。」

「統夜先輩、すいません……。今年も、先輩だけのためのチョコを用意出来なくて……」

「このチョコケーキは統夜たち全員のために作ったものであり、彼氏である統夜のため」

だけに作ったチョコはないことを梓は謝罪していた。

「気にするなよ。だってこれはみんなのために作ったんだろ？だとしたらそれだけ気持ちが悪くもつてるってことだから、俺は十分嬉しいぜ」

「統夜先輩……」

統夜の本音を聞いた梓は、統夜がこのように思ってくれていたことが何よりも嬉しかった。

「あずにゃんや。お返しにこれをあげよう」

「？何ですか？」

唯はお返しと銘打って、梓にあるものを手渡した。

それは……。

「飴ちゃん♪」

なんと、お返しと銘打ったあるものとは、ただの飴であった。

「ホワイトデーのお返しだよ♪」

「早っ！」

「『安っ！』」

唯のホワイトデーのお返しという発言に、梓だけではなく、律、統夜、イルバがさすがツッコミをいれていた。

『おいおい。ホワイトデーのお返しっていうのは当日じゃないと意味がないんじゃないのか?』

「え? そうかなあ?」

「アハハ……お前なあ……」

イルバはホワイトデーのお返しについて説明するものの、唯は納得しておらず、統夜は苦笑いしていた。

そんなこともありつつ、統夜たちは梓お手製のチョコケーキを完食した。

「「「「」」」」馳走様でした!」」」

「あつ、お粗末さまでした……」

「さわちゃん、早く来ればいいのにね」

唯は残ったチョコケーキを見つめながらこのようなことを言っていた。
すると……。

「……あつ」

何かに気付いた滞は窓を眺めていた。

そこから見えたものとは……。

「……雪だ……。かなり降ってるぞ」

雪が降っているのが遠くからも見えており、その雪量からかなり降っているものと予

想された。

「あつ、本当ですね」

窓から一番近いポジションにいる梓は窓まで移動すると、窓から見える景色を眺めていた。

「うわあ……。もう真つ白ですよ」

どうやら雪は積もっているらしく、一面銀世界のようにであった。

「へえ、どれどれ？」

「わ、私も見たい！」

「わ、私も……！」

続いて律が窓まで移動し、紬と澪も興味津々と言いたげな感じで窓まで移動していった。

「せっかくだし、俺も……」

統夜も席を立ち、窓まで移動しようとするのだが……。

『おい、統夜。俺様を忘れるなよな』

「はいはい……」

イルバも雪に興味を示していたので、統夜は専用のスタンドにセットされているイルバを取り出すと指にはめ、それから窓まで移動した。

「何だよ、全員来たのかよ」

「統夜も窓まで移動し、これで全員かと思われたのだが……。」

「ま、待って〜！置いてかないで〜！」

唯も窓まで移動したかったのだが、スカートが椅子に引っかかってしまい、移動が出来なかった。

「はいはい。早くおいで」

律はまるで子供をあやすかのような発言をすると、唯はスカートの引っかかりを解消し、窓まで移動した。

しかし……。

「あうう……。見えない……。」

唯の位置からは窓からの景色は見えなかった。

それでも窓の景色を見たかった唯は強引にベストポジションまで移動しようとしていた。

「あつ、こら！また強引に……。」

「……ふんすー！」

唯は強引ではあったものの、ベストポジションまで移動し、気合をいれていた。

「……子供ですか」

梓はそんな唯に呆れていた。

「おお！真っ白だね！」

「綺麗ねえ……」

「それにしても、今年はよく降るよなあ……」

「まったく。こんなに降ってちやエレメントの浄化やホラー討伐も少しばかり大変だからな」

唯たちは窓から見える景色を楽しんでいたのだが、統夜はこれだけ雪が個人的に都合が悪く思っていた。

統夜たちはしばらく窓からの景色を眺めていると……。

「あっ！あつぶねえ!!」

窓から見えた誰かが転びそうになっており、統夜たちは思わず反応していた。

「本当に危なかったな……」

「そうですね……」

「ローファーって、意外と雪道す……」

「うわあ!!その先は禁句だ！」

澤は不意に滑ると言いそうになり、律が慌てて止めていた。

「い、い、いめん……」

滯は申し訳なきように謝ると、唯はふと笑い出し、それにつられてみんなが笑っていた。

しばらく笑い合っていると……。

「……何か、いいですね……」

「ん？」

「みんなでこうしてるのって、いいですね……。今日は朝から寒かったですけど、先輩たちと一緒にいると、何か寒くないっていうか……。あつ、もちろんトンちゃんとイルバも……」

『おいおい、俺とカメ公はついにかよ。まあ、別に構わないがな』

イルバは自分やトンちゃんがついだというのが気に入らなかつたのか、思わず口を開いていた。

イルバはトンちゃんが初めて軽音部に来た時からずっとカメ公と呼んでおり、度々唯に注意されるのだが、一切直す気はなかつた。

すると、唯は後ろにいた梓に寄りかかると、両手をギユツと握っていた。

「?唯先輩?」

「エへへ……。あつたかあつたかだよ。あずにゃん♪」

唯は満面の笑みを浮かべており、唯の両手からは暖かさが伝わってきた。

「はいっー！」

そのため、梓は素直に唯の温もりを感じていた。
すると……。

「あつたかあつたか♪」

律が全員を包み込もうとしながら抱きついており、統夜たちは全員で身を寄せ合いながら笑い合っていた。

『やれやれ……。相変わらず仲の良い連中だぜ。お前らつてやつは……』

イルバは統夜たちの仲の良さを改めて認識しており、呆れていたのだが、これ以上は何も言わずに統夜たちの動向を見守っていた。

そして、その頃にはさわ子が音楽準備室に来ていたのだが、仲睦まじい統夜たちの邪魔をすまいと入り口のとこで、統夜たちの様子を見守っていた。

そして、程よい頃合いでさわ子は統夜たちのもとへ移動し、ここで統夜たちはさわ子の存在に気付いていた。

いや、統夜とイルバはさわ子が来たことに気付いていたが、この雰囲気の水を差す真似はしたくないとの判断から何も言わなかった。

さわ子がやって来たことで、統夜たちは再びティータイムを再開した。

※※※

翌日の夕方、統夜はいつものように番犬所を訪れていた。

そして、この日は指令がなかったため、統夜は番犬所を出て、街の見回りを行おうとしたのだが……。

「……統夜先輩」

番犬所の入り口で梓が待っており、統夜は梓が待っていることに驚いていた。

「おっ、梓か。どうしたんだ？」

「統夜先輩。今日ってホラー討伐の指令はありますか？」

「いや、今日は指令はないからこの後は街の見回りに行こうと思つてたところだよ」

統夜はこれからの予定を正直に話していた。

「だったら、今、ちよつとだけいいですか？一箇所だけ付き合つてほしいところがあるんです」

「付き合っつてほしいところ?」

「はいー!」

統夜はとりあえず梓がなぜ一緒にとある場所に行つて欲しいのか事情を聞くことにした。

「……お百度詣り?」

「はい。憂は毎日のように近所の神社で先輩たちが同じ大学に合格出来るようお参りしてみたいなんです。だから、私も今から100回は無理ですけど、お参りがしたくて……」

「……なるほどな。だいたい事情はわかったよ」

「それで、統夜先輩と一緒に参りしたくて、ここで待つてたんです」

「……そういうことなら、ぜひ一緒に参りしようぜ」

唯たちが全員同じ大学に合格することは統夜も祈っていることであり、お参りに行くことを二つ返事で了承していた。

「本当ですか!?!」

「ああ。俺だつて気持ちと同じだからな。いいだろ、イルバ」

『……どうせダメだと言つても行くつもりだろう?今日は指令もないし、たまにはいいんじゃないのか?』

イルバ的にはあまり気乗りがしないことだったが、統夜や梓の気持ちを察して、渋々了承していた。

こうして統夜と梓は、唯の家の近くにある神社に向かい、お参りをする事になった。

「……100円、かける1000回。えいっ！」

神社に到着すると、梓は千円札を取り出すと、それを賽銭箱の中に入れた。

100円の1000回分だから、10000円だったのである。

「なるほどな……。それじゃあ、俺も」

統夜も財布から千円札を取り出すと、梓同様に千円札を賽銭箱の中に入れた。

その後、2人でジャラジャラと鈴を鳴らすと、2人揃って両手を二回叩いた。

そして……。

「……唯たち4人が揃って同じ大学に受かって、全員揃って卒業できますように……！」

統夜は心の底から思っていることを願いにのせていた。

そして、梓の願い事とは……。

「……先輩たちが絶対絶対……絶対絶対絶対絶対ぜーつたいたい!! みんな揃って第一志望に合格しますように!!」

「梓……」

統夜は梓のひたむきな願いを聞いて、心打たれていた。

「……そして……」

梓の願い事はまだ終わりではなかった。

「卒業まで、みんなで笑って過ごせますように!」

「……」

卒業まで笑って過ごせるように。

それは、統夜も同じことを考えていた。

卒業というのは1つの大きな別れであるが故、統夜はこのままみんなとバラバラになるのは嫌だと思っていたが、その経験が統夜をさらに強くすると信じていた。

だからこそ……!

「……梓、その願いはきつと叶うさ」

「統夜先輩……」

「俺だつてそう願つてるんだ。卒業まで笑つて過ごせるように……。その願い、一緒に叶えていこうぜ！」

「はいっ！」

梓は統夜も同じことを願つていたことを嬉しく感じており、統夜の力強い言葉を聞き、満面の笑みを浮かべていた。

「……それじゃあ、梓。そろそろ行こうか」

「はい！……つて、あれ？」

統夜と梓は神社を後にしようとしたのだが、梓はコートのポケットに何かが入つてることに気付き、それを取り出した。

「それつて、確か昨日唯が梓に渡した……」

『ホワイトデーのお返しと言つてた飴か……』

梓が取り出したのは、昨日唯が梓に渡した飴であった。

その時のことを思い出した梓は、笑みを浮かべながらその飴を舐め始めた。

「……あまつ」

梓は唯からもらった飴を味わいながら歩き始め、統夜はその後に続いて歩き始めた。

統夜は梓を家に送ってから街の見回りを行い、それが終わってから、家路についた。

※※※

翌日、この日は唯たちの第一志望の大学の合格発表の日だった。

唯たち4人は結果を見るために学校を欠席しており、統夜はいつものように授業を受けていた。

(……そろそろ、結果が出てくる時間だよな……。唯たち、大丈夫だろうか……?)

現在は授業中なのだが、統夜は唯たちの結果が気になるあまり、授業に身が入らなかつた。

《おいおい。統夜、しっかりしろよ。こういうのはどっしりと構えて結果を待つもんだぜ》

(それはわかってるんだけどさ……。……って、ん?メールか?)

統夜は受験結果を伝えるメールだと予想し、こつそりと携帯を取り出すと、たった今届いたメールをチェックしていた。

すると……。

(……!!?)

そのメールを見た統夜は、目を大きく見開いて驚いていた。

《お、おい！統夜。こいつは……》

(ああ……！間違いない……！)

イルバもそのメールをチェックしており、統夜も驚きの表情から徐々に喜びの表情へと変わっていった。

そのメールは唯からであり、タイトルは「やーくん!!」であり、本文は、桜の絵が4つ並んでいた。

これは、すなわち4人揃って第一志望に合格したと告げるものであった。

(あいつら……やっただな！)

《ああ！あいつらの努力が実を結んだみたいだぜ》

(やった……！やっただぞ!!)

現在は授業中であり大きな声を出すことは出来なかったが、心の底から喜びの気持ち露わにしていた。

こうして、唯たち4人は無事第一志望に合格し、4月から4人揃って同じキャンパスに通えることになった。

受験という大きな節目を終えたところで、あと残すは卒業のみとなった。

統夜も高校生でいられる期間もあと僅かとなってしまった。

果たして、統夜は卒業するその日まで、みんな笑って過ごすことは出来るのだろうか？

卒業までのカウントダウンはすでに始まっていた……。

……漆黒の闇呀襲来編・終

番外編⑤ 「計画 前編」

統夜たちの卒業まであと僅かとなっていた。

新しい年を迎えてすぐに闇呀による事件が起こり、統夜は様々な人たちの協力で闇呀の野望を阻止した。

そして、唯たちは同じ大学を目指して受験し、4人揃って合格することが出来た。今回の話は、その後日談ではなく、夏休みまで話は遡る……。

統夜たちは揃って夏祭りに行ったのだが、その数日後に唯の家に集まっていた。

紬はつい最近までフィンランドに旅行に行っており、そのお土産を祭りの時に渡しそ

びれたため、今日お土産を渡したいというのが、今日集まった理由である。

今集まっているのは、梓を除く全員であった。

梓には後で渡す予定だったため、今回梓は誘わなかったのであった。

紬のお土産を受け取った後、紬が毎年のように海外に行くのが羨ましいという話が出ており、律は海外旅行へ行こうという話を提案した。

統夜たちは場所を変えて話し合うことにし、梓もメールで呼ぶことにした。

統夜たちが向かったのは行きつけのファストフード店だった。

統夜たちは先に注文をすませ、談笑しながら梓を待っていた。

しばらく談笑していると、階段を上ってきた梓の姿を確認することが出来た。

「おーい、梓ーこっちこっちー」

律は梓を呼びかけると、そこでようやく統夜たちの場所がわかった梓は、統夜たちのいる場所まで移動した。

梓は空いている席に腰を下ろすと……。

「……はい！あずにゃん、バナナシエイク頼んでおいたよ！」

統夜たちは自分たちのものを注文するついでに梓が好きなバナナシエイクと一緒に注文していた。

「ありがとうございますー！」

梓は自分の好きなバナナシエイクを用意してくれたことが嬉しく、礼を言っていた。
「梓ちゃん、はい」

紬は、小さな紙袋を梓に手渡した。

「あつ、ありがとうございます」

梓は紙袋の中身を確認すると……。

「うわあ……。綺麗……」

その中身は、スノードームであり、中身がとてもキラキラしており、梓の目もキラキラとしていた。

「ありがとうございます、ムギ先輩！」

「ウフフ♪どういたしまして♪それにしても、もう日焼けは冷めたのね」

紬の言う通り、数日前に見たときは真っ黒だった梓だったが、今は真っ白になっていた。

「は、はい。どうにか……」

「それにしても早いよなあ」

「若いわねえ♪」

「赤ちゃん並の新陳代謝でちゅね♪」

澪は梓の日焼けが収まる速さに驚いており、紬は笑みを浮かべながら感心し、律は二

ヤニヤしながら梓をからかっていた。

「それは若すぎますよ」

梓は律に馬鹿にされていると判断し、ムキになっていた。

「ところで、唯先輩。さっきのメールなんですけど、いったい何なんですか？」

梓はここに来る前に唯からメールが来たのだが、そのメールに書かれていたのは「海外進出!」という内容だった。

「実はな、みんなで旅行へ行こうって話が出ててな」

「そっだよ! それも、海外旅行だよ、あずにゃん!」

「あ、だから海外進出なんですね……」

梓は何故唯が海外進出というメールを送ったのか理解していた。

海外旅行自体はいいと思っていた梓だったが、1つ気がかりなことがあった。

「……あつ、でも皆さん。この前夏フェス行ったばかりですよね?」

梓が一番心配していたのは経済面の話だった。

紬と統夜は経済的に問題なさそうなのだが、残りの4人は経済的には不安であった。

「まあ、俺はサバック出てたから夏フェスは行けなかったけどな……」

統夜はよほど夏フェスに行きたかったのか、しょんぼりと気を落としていた。

「ああ! 統夜先輩! 気を確かに!」

梓は夏フェスに行けずしょんぼりとしていた統夜をフォローしていた。

『そうは言っても仕方ないだろう？その時期はサバックだったんだからな』

イルバは正論を言つて、統夜をなだめていた。

「そうだよ、やーくん。私もやーくんが一緒じゃなかったのは残念だけど、頑張つて準備勝だつたじゃん！」

「ま、そうだよな……。魔戒騎士として結果を残せたのはかなり大きいよな！」
自分が魔戒騎士であると自覚した統夜は、ようやく復活したようであった。

「あと、先輩たちは受験もありますよね？」

梓がもう一つ心配していたのが、統夜を除く4人は大学受験をする可能性が高く、この大事な時期に海外旅行など行けるのか？という懸念だった。

「だからさ、受験が終わったあたりで行きたいなつて思つてるんだよ」

律はそこまでするかと考えていたようであり、海外旅行は受験が終わったあたりに行きたいと考えていた。

「ああ、卒業旅行ですか。いいですね」

「あずにゃんも一緒に行くんだよ！」

「え？い、いいんですか？」

「だって、みんな一緒の方が楽しいじゃない？」

「そういうことだから、遠慮はなしだぜ、梓」

唯たちはどうせ卒業旅行に行くなら、梓も一緒の方が楽しいと判断しており、出来るなら一緒に行きたいと思っていた。

「は、はい。ありがとうございます……」

梓も統夜たちと過ごす時間は楽しいと思っていたので、一緒に海外旅行という提案自体は嬉しかった。

「よし、それじゃあ旅行代理店に行つて色々見てみようぜー」

律は旅行代理店に向かってどこの国に行きたいかの案を決めることにした。

それに賛同した統夜たちは、テーブルに置かれたポテトやシェイクを完食した後、桜ヶ丘商店街の中にある旅行代理店へと向かった。

桜ヶ丘商店街の中にある旅行代理店はそれほど規模が大きい訳ではないのだが、それなりのお客さんで賑わっていた。

「さてと……」

「それにしても、たくさんあるねえ」

統夜たちはたくさん並んでいるパンフレットを眺めながらその多さに驚いていた。

「パンフを見て、どこに行くか検討しようぜ！」

「……こんなことしてて、本当にいいんですか？」

「まあ、梓の言い分はもつともだよな。夏期講習だつて近いんだろ？」

梓は受験生である唯たち4人が悠長に旅行の計画なんて立てている場合ではないのではないかと心配になっていた。

統夜もそれは察しており、夏期講習が近いことも確認していたのだが……。

「もちろん夏期講習にも行くし、受験勉強だつてやるさ！」

「でもほら！人はおやつがあるから頑張れるんだよ！頑張った後にはおやつを食べるんだよ！」

「おいおい、言いたいことはわかるが、何で例えがおやつなんだよ……」

大変な勉強の後にはご褒美が待っている。そのことでやる気を出すことができるのではないかと統夜も思っていたのだが、唯のおやつを使った例えが解せなかったのか、苦笑いをしていた。

「そうだな……。楽しみがあれば、きつと受験も乗り切れるよなあ……」

澪はまるで現実逃避しているかのように力なく呟いていた。

「……わ、わかりました。ちよつと現実逃避したいんですね……」

「逃げてない！逃げてないぞ！」

「今朝もちゃんと勉強したよ！」

「いいんだ……。ちよつとくらいは楽しいこと考えてもいいんだ……」

「アハハ……」

唯たちのやり取りをずっと見ていた統夜は、予想以上に全員がナーバスになっていることを知り、苦笑いをしていた。

「……ま、梓の心配はわかるが。少しくらいは息抜きをさせてやってくれ。その方が受験勉強にも身が入るだろうしな」

「そうそう！その通り！」

「さすがはやーくん！わかってるねえ！」

統夜の肯定的な発言を聞き、律と唯は統夜に詰め寄りながら過剰に反応していた。

「はいはい。とりあえずパンフレットを色々と見てみるぞ」

唯たちが受験のことを考えてナーバスにならないよう、統夜は率先して話を進めることにした。

統夜たちは、色々なパンフレットを手に取ってから1つのテーブルを囲むように椅子に座り、どの国がいいかの検討をしていた。

アメリカ、イギリス、ハワイなどみんなは行きたいところを言っていたが、意見がまとまることはなかった。

そんな中、紬は家の関係であちこち海外へ行っているからか、特に行きたい国のリクエスはなかった。

そして統夜も魔戒騎士としての日々を過ごしているからか海外にはあまり興味はなく、みんなと一緒にどこでもいいということを書いていた。

しかし、番犬所の許可がないと海外旅行は無理だということをやたらに念押ししていた。

色々案が出たが、決まらなかったため、各自で検討することとなり、この日は解散となった。

解散した後、統夜は番犬所を訪れた。

この日は指令がなかったため、統夜はそのまま街の見回りを行っていた。

気が付けば夜になり、統夜はもう少し街の見回りを行ったら家に帰ろうと考えていた。

その時、突如統夜の携帯が鳴ったため、統夜は足を止めた。

「……………ん？何だろ？」

統夜はポケットから携帯を取り出すのだが……………。

「……………珍しいな……………。憂ちゃんからだ」

どうやら電話が来ていたようで、電話をして来たのは憂だった。

意外な人物からの電話に驚きながらも、統夜は電話を手を取った。

「……はいはい、どうした、憂ちゃん」

統夜は相手が憂だとわかっていたので、いきなり憂と呼んでいた。

『あつ、統夜さん。夜分遅くにすいません。今、大丈夫ですか?』

「ああ。ちょうど家に帰ろうと考えてたところだから問題ないよ」

『良かった……。実は統夜さんに相談がありました……。』

「相談?」

憂からの要件はさらに珍しいものだったため、統夜はまるでおうむ返しのように返していた。

『はい。統夜さんたちは海外旅行へ行くことを考えてるんですよ?』

「ああ、唯から話を聞いたんだな。そうそう、とりあえず受験が終わったあたりとは考えてるけどな」

『それで、お姉ちゃんに何かあったらと思うと心配で、今日お姉ちゃんのために護身術の本を買ってきたんです』

「アハハ……。心配性だな……」

大好きな姉のため出来ることをしたいという憂の想いは汲み取ったのだが、心配性すぎると感じた統夜は、苦笑いをしていた。

『それで……統夜さんにお問い合わせがあるんです』

「お願い？」

『はい……』

憂は一呼吸置いてから本題を切り出した。

憂からのお願いを聞いた統夜は少しばかり驚いていたが、姉である唯のことを想つてのお願いだったため、統夜は二つ返事で憂からのお願いを引き受けた。

『あつ、ありがとうございます、統夜さん！それじゃあよろしくお願いします！』

「ああ、わかったよ。それじゃあ、憂ちゃん、おやすみ」

『はい、おやすみなさい』

憂からのお願いを聞いた後に統夜は電話を切り、携帯をポケットにしまった。

「さてと……」

憂との電話を終えた統夜は、ある人物と連絡を取るために歩き始めたのであった。

※※※

翌日、統夜たちはこの日、桜ヶ丘某所にある公園に集まっていた。

「なあ、唯。何で今日は公園に集合にしたんだ？」

「そうですよ。何かやるんですか？」

既に公園には全員集合しており、今日は一体何をするのか唯に聞いていた。

「……何で俺まで……」

統夜たちの他に何故か戒人まで呼び出されており、突然の呼び出しに戒人は少しだけ戸惑っていた。

「悪いな、戒人。これからやることにはお前の協力が必要だったんだよ」

「……まあ、お前から事情を聞いた限りではそうなんだろうな……」

憂との電話の後、統夜が連絡を取ったのは戒人であった。

同じ魔戒騎士である戒人に協力してもらい、あることを行おうと考えていたからである。

そのあることとは……？

「ふっふっふ……。これだよー」

唯は何故かドヤ顔で一冊の本を統夜たちに見せた。

その本とは……。

「……護身術……ですか？」

「そうだよ！昨日憂が買ってきてくれたんだよ！」

梓が答えた通り、唯が手にしているのは護身術についての本であった。

「……憂の買った本ってそれだったんだ……」

梓は昨日旅行代理店で解散した後に本屋へと立ち寄ったのだが、その時にたまたま憂とばったり会っていたのであった。

その時に何の本を買っていたのか気になっていたが、その中身がわかり、少しだけすつきりしていた。

「まあ、確かに海外に限らず旅行は何かがあるかわからないし、そういう備えは必要な気はするよな」

「なるほど……。だから俺が呼ばれたという訳か」

戒人は、何故自分が呼ばれたのか理由を理解し、納得していた。

「そうだよ！やーくと戒人さんにはお手本をやってもらおうと思ってるね！」

「お手本……ねえ……」

『おいおい、お前さんの言いたいことはわかるが、魔戒騎士の動きが護身の参考になるのか？』

イルバの指摘はもつともであり、普段から魔戒騎士はホラーと戦っているのだが、その動きは護身術のそれではなく、常に激しい動きをしているので、そんな魔戒騎士である統夜と戒人の動きが参考になるとは思わなかった。

『ホツホツホ！まあ、やるだけやってみたらいいじゃろう。その方がお嬢ちゃんたちも納得するだろうからのお』

冷静に本当のことを話すイルバとは対照的に、トルバは肯定的な発言をしていた。

「さすがトル爺！わかつてるねえ！」

「おいおい、トル爺って……」

唯は初めてトルバを見た時からトルバをトル爺と呼んでおり、未だにその呼び名に慣れない戒人は苦笑いをしていた。

『戒人の言う通りだぜ。いちいち俺様やトルバのような魔導輪に変なあだ名をつけるなよな……』

イルバは、自分も含めて魔導輪をあだ名で呼ぶ唯に呆れ気味だった。

「むうう……！別にいいじゃん、イルイルの頭でつかち！」

『あのなあ……』

イルバは頭でつかちという唯の言葉に呆れていたからか、あだ名で呼ばれたことを訂正しようとはしなかった。

「おいおい、護身術の勉強をするんだろ？まずは実践してみないか？」

統夜は、自分と戒人がお手本を見せる前にまずはやってみることを提案した。

「そうだね！まずはやってみよう！」

唯もそれには賛成のようで、唯は憂の用意してくれた本のページをめくって、使えそうな護身術の練習をすることにした。

「……あつ、まずはこれを練習しようよ！」

唯はとあるページを指すと、それを統夜たちに見せた。

「なるほど、これは確かにやっという方がいいかもな」

「それじゃあ、あたしが犯人役をやるから、滯は実践してみてくれよ」

「ああ、わかった」

こうして、最初の護身術はりつみおのペアで行うことになった。

律は滯の手を掴み、不意に手を掴まれそうになったらという状況を作り出そうとしていた。

「カネを出せ」

律は棒読みつぽくこう言うとシユチュエーション通りに滯の手を掴んでいた。

「みおちゃん！手を掴まれたら、掴まれた手の親指を上に向けて思いつきり手刀をきる！」

唯がそこ護身術の方法を読み上げ、澤はそのまま通りに実践を行っていた。

「そして、振り切ったらダッシュで逃げる」

唯が読み上げた通りに澤はダッシュで逃げていった。

「……なるほど、これはいい感じだな」

20メートルほど逃げるように走った澤は、今行った護身術に関心しながら戻ってきた。

「……次はこれをやってみようよ！後ろから抱きつかれた時」

「あつ、それは私が犯人役をやるね。梓ちゃんは実践してね」

「あつ、はい」

今度の実践は、ムギあずペアで行うことになった。

「……フヒヒヒヒヒ！金よこせ〜！」

紬は棒読みっぽい言い方で梓に抱きついていった。

「いやいや、演技はいらないだろ？」

それとなく演技が棒読みっぽかったため、澤がツツコミを入れていた。

「エへへ……。臨場感あるかなって思ってた♪」

紬はノリノリだったからかニコニコしており、梓は少しだけ気恥ずかしかったのか、頬を赤らめていた。

「あずにゃん！かかとでムギちゃんのスネを蹴って逃げる」

「ええ……」

やり方としてはなるほどと思っていたものの、梓は紬のスネを蹴ることに躊躇していた。

「なるほどなあ」

「結構勉強になるのねえ」

律と紬は唯の読み上げた護身術の内容を聞いて関心していた。

「さてと……。それじゃあ、やーくんと戒人さん！今度は2人が実践してみよー」

「実践ねえ……」

今度は統夜と戒人がやってみることになったのだが、何をすればいいのか統夜は考えていた。

「……統夜。後ろから強盗に襲われた場合の撃退方法をやってみないか？」

「ああ、それは大事かもな」

戒人の提案を受け入れた統夜は、戒人などのような実践をするかを話し合っていた。

そして数分後、話し合いを終えた2人はさっそく実践を始めることにした。

「……」

どうやら実践をするのは統夜のように、統夜はゆつくりと歩いていった。

すると……。

「……動くな。金を出せ」

突如背後から戒人が現れると、戒人は険しい表情でナイフのようなものを統夜に突きつけていた。

もちろんこれは本物ではなく、何故か戒人が持っていたおもちゃのナイフであった。

「……臨場感あるな……」

戒人の俳優顔負けの演技があつたからか、臨場感のある実践となり、唯たちは息を飲んで様子を見守っていた。

すると……。

「っ!？」

統夜は反撃と言わんばかりに回し蹴りを放つと、戒人はとっさにそれをかわし、その隙に統夜は戒人の手にしているナイフを叩き落とした。

その後、2人は実践さながらの格闘戦を繰り広げていた。

「「「「……」」」」

あまりの迫力に、唯たち5人は言葉を失っていた。

しばらく格闘戦を繰り広げたところで、2人の実践は終了した。

「ふう……。何か護身術の実践のつもりが、ただの実践になっちゃったな」

「ああ、いい感じに体を動かすことが出来たぜ！」

意図していたものとは大きくかけ離れてしまったものの、実践さながらの稽古が出来て、統夜は満足そうにしていた。

「なあ、統夜……」

「ん？どうしたんだ、律？」

「あたしらにそんな動きが出来るか!!」

もつともなツツコミを入れた律は、統夜に拳骨をお見舞いし、その一撃を受けた統夜はその場にうずくまっていた。

こうして、統夜と戒人の実践は、ただのスパーリングで終わってしまった。

※※※

護身術の実践が終了すると、統夜たちは日陰のベンチで一休みすることにした。

「……ちべた〜い♪」

唯は缶ジュースの缶を額に当てて、その冷たさに笑みを浮かべていた。

「すいません、戒人さん。私たちの分を奢ってもらって……」

戒人は唯たちにジュースを奢っており、梓が代表として礼を言っていた。

「気にするな。俺はみんなより年上だし、何より高校生にお金を払わせるわけにはいかないからな」

戒人はホラーを討伐する魔戒騎士といっても社会人である事は間違いないので、たかが1000円ちよつとの缶ジュースだとしても、高校生である唯たちにお金を使わせるのは忍びないと思っていた。

「俺まで奢ってもらってありがとな、戒人」

戒人は同じ魔戒騎士であり、自分と同じくらいの収入があるであろう統夜にもジュースを奢っていた。

「気にするなよ。みんなに奢ったのにお前にだけ奢らないってのは感じ悪いと思っただけだ」

「……大人ですね……」

戒人とはおよそ2つくらいしか歳は離れていないものの、落ち着いた対応を見ていると唯たちは戒人がとても大人に見えていた。

「ハハ、そうか？まあ、とりあえず護身術の練習は終わりだろ？俺はエレメントの浄化の続きをしてくるよ。統夜はせっかくだからみんなとゆつくり過ごすんだな」

戒人は統夜たちにこのように告げると、公園を後にして、エレメントの浄化の作業を再開した。

「……あと気をつけなきゃいけないのは道に迷うことかな？」

戒人がいなくなつて間もなく、漑がこのように話を切り出していた。

「地図を見れば大丈夫だろ」

「確かにその通りだな」

地図さえあれば迷う事はないと律と統夜は確信していた。

「そう言つてて京都で迷子になつたじゃないか」

『挙げ句の果てには俺様が駅までナビゲートしたよな』

「うぐつ、確かに……」

漑とイルバは修学旅行の自由行動の時のことを話の引き合いに出し、2人の正論に統夜はたじろいでいた。

一方律はと言つと……。

「それじゃあ歩いてる人に聞く〜」

律は京都で道に迷つたことを気にしていないのか、前向きな姿勢だった。

「……言葉通じないぞ」

「ねえねえ、ムギちゃん、英語出来る？」

「簡単な日常会話なら」

『おい、統夜。お前も英語はそれなりに出来たよな？』

「まあ、幼い頃から魔戒語の勉強はしてたし、魔戒語は英語と通づるところもあるから、それなりには得意なんだよな」

「へえ……」

紬は日々の勉強以外でも海外へ行く機会があるため、簡単な日常会話であれば英語を話す事は可能であった。

一方統夜は、そこまで勉強は得意な方ではないものの、特に英語の成績はすば抜けて良かった。

幼い頃から魔戒語を勉強しており、英語は魔戒語と似ている部分があった。

そのため、英語は得意であり、現地の人間の英語を聞いたらそこで意味を理解し、会話することも可能なのであった。

統夜の知られざる特技を知った梓は感嘆の声をあげていた。

「もしムギや統夜だけじゃなくてみんなとはぐれたら？」

漣は続いて、一番最悪であるパターンをあげていた。

「そ、それは考えたくないね……」

唯はいざその状況になったらと考えてしまい、顔を真っ青にしていた。

「それじゃあ、今から日本語禁止な」

律は唐突にこのような提案を行っていた。

「オーケーオーケー、ノーニホンゴ」

唯は何故か片言で英語っぽいことを言っていたのだが……。

『おいおい、ニホンゴはまんま日本語だろうが……』

「オーケーオーケー」

イルバは真つ当な指摘をする中、唯は軽く返していた。

「……ウエアー、ベリー、デリシヤス、ケーキシヨップ」

「どこ、美味しい、ケーキ屋さん」

「イエース！」

梓は唯の言った単語単語を訳しながらその文章を訳していた。

「何でダイレクトにケーキ屋を聞くんだよ……」

旅行でいきなりケーキ屋を聞くことではないため、統夜はツツコミを入れながら苦笑いをしていた。

「やっぱり聞くとしたら、観光名所とか、泊まってるホテルだよな」

「ウエアー、マイホテル？」

「どこ？私のホテル……」

「ホテルのオーナーかよ！」

「その言い方だとそうなっちゃうよな……」

唯のおかしな英文を梓は訳して、律はすかさずツツコミを入れていた。

統夜も唯のおかしな英文に苦笑いをしていた。

「怪しいけど、ホテルの名前を言えば察してもらえるよな！」

「ホテルの名前とどこにあるかを言えばさらに確実かもな」

滯はホテルの名前を言えばなんとなくわかってもらえらると思っており、統夜はそれ現場所も言うといいと付け足しを行っていた。

「ホテルって英語でもホテルだもんね」

「発音通じますかね？」

「確かに、日本人が「ウォータープリーズ」って言っても通じなくて相手を困惑させちゃうことがあるからな」

梓は発音の心配をしていたが、統夜は日本語の発音だと通じない可能性があることを話していた。

「じゃあ、どう話せばいいの？」

「そうだなあ。「ウォータープリーズ」じゃなくて、「water please」の方が通じるしな」

統夜は正確な発音を実践し、それに関心した唯たちは拍手を送っていた。

「水がないと人は生きてはいけないんだよ!」

『確かにそうだが、今はそういうことを言いたい訳ではないだろう……』

イルバは唯の哲学的な話に心底呆れていた。

「ねーねー、やーくんも日本語禁止やってみてよ!」

「え、俺がか?」

「うんうん、統夜君の英語聞いてみたいわあ♪」

「得意っていうならお手本を見せてくれよな」

唯は統夜にも英語禁止の話を振り、唯たちは統夜の話す英語に興味津々だった。

「えつと……それじゃあ……」

一呼吸をおいて、統夜は語り始めた。

「……コンニチハ、キョウハイイテンキデスネ」

統夜は流暢な英語の発音で話していたのだが、あまりに流暢だったからか、唯たちは目をパチクリとしていた。

「ソレニトテモアツイデスネ。アイスノオイシイオミセヲシリマセンカ?」

統夜はアイス屋さんについて聞いていたのだが、唯たちは聞き取ることが出来なかった。

「ね、ねえ、ムギちゃん。今のわかった？」

唯は日常会話ならなんとかなる紬に今の統夜の言葉を聞いたのだが……。

「……早いわ……」

「ええ!？」

統夜は外国人さながらのスピードで喋っていたため、紬はその早さについていけず、意味を読み取ることが出来なかった。

そのことに、澪は驚いていた。

「……まあ、英語って難しいよな」

英語から日本語に戻った統夜は、結論を出して話をまとめようとしていた。

「何か英語が出来る統夜が言うとかシヤクだけど……。確かにその通りだな」

律は英語が得意な統夜が難しいと言うのがシヤクだったが、とりあえず統夜の結論に納得していた。

「……あつ、そういえばみんな、パスポート持ってる？」

紬は海外へ行くにあたって一番必要になるパスポートの存在を話に出していた。

「……あつ……」

紬以外の5人は、1番大事なことに気付いたのか、互いに顔を見合わせ、それから紬の顔を見ていた。

「それに、統夜君は魔戒騎士でしょうか？パスポートって取れるのかしら？」
紬はさらに気になることを告げていた。

「た、確かに……そうだよな……」

ここにきて、最大の問題に直面し、統夜の顔は真っ青になっていた。

こうして、統夜たちの海外旅行の計画に、最大の問題が直面したのであった……。

……後編に続く。

番外編⑥ 「計画 後編」

夏休みの夏期講習前、統夜たちは不意に海外旅行へ行こうという話をしていた。

以前夏フェスに行ったばかりで、さらに唯たち4人は受験生であるため、海外旅行はその受験が落ち着いてから行うことに決めた。

そして、どの国にするか話し合ったものの、案がまとまらなかったため、それは後日改めて決めることにした。

その翌日、海外旅行へ行くにあたっての護身術を学ぶこととなり、統夜だけではなく、戒人も呼び出され、護身術の実践が行われた。

憂が唯のために買ってきた本を元にその内容を読み上げながら実践をしていたのだが、統夜と戒人も護身術の実践を行ったのだが、魔戒騎士の激しい動きは護身術とは呼べなく、ただ単純に統夜と戒人のスパーリングになってしまった。

護身術の実践終了後、戒人はそのままエレメントの浄化へと向かっていったが、統夜たちはベンチで一休みをしていた。

そこでは道に迷ったらどうするかという話や、英語の重要性を話していた。

ここで、紬が1番大事な話を切り出した。

それは、パスポートの問題である。

紬は既にパスポートは取得済みであり、唯たち4人も申請さえすれば取得自体は問題ないと思われた。

しかし、魔戒騎士である統夜は無事にパスポートを取れるのか？そこが最大の懸念であつた。

唯たち4人もパスポート申請に必要なものがわからなかったため、自宅にネット環境のある漕が、パスポートに必要なものを調べることにして、この日は解散となった。

その帰り道、統夜はとりあえず番犬所へ向かおうと考えていたのだが……。

「……なあ、統夜。ちよつといいか？」

先に帰つたと思われた漕が、統夜の元へ戻ってきて、声をかけてきた。

「……ん？どうしたんだ、漕？」

「今ネット環境があるのは私の家と統夜の家だけだろ？統夜は忙しいだろうから私が調べるのを引き受けたけど、自信なくて……」

漕は今自分が思っていることを正直に話すと、俯いた表情をしていた。

現在自宅にネット環境があるのは漕、統夜、紬であつた。

紬は家だからネット環境はあるものの、紬は普段からパソコンを使うことはあまりなく、ネットを使つての調べ物は困難だと思われた。

そして統夜は家にいる時はパソコンを使うことが多く、人界のことを知るためにネットですぐと調べ物をしたりもしていた。

しかし、魔戒騎士としての仕事が忙しいため、触らない時はほとんどパソコンに触ることはなく、濔が調べ物を引き受けることになっていった。

「それで……。統夜、この後って少しでもいいから時間取れないか？ 私の家に来て調べ物を手伝ってほしいんだよ」

「うーん……。そうだなあ……」

統夜としては引き受けてあげたい気持ちだったのだが、魔戒騎士の使命も大事なため、二つ返事で了承することは出来なかった。

統夜がしばらく考えていると……。

「……ダメ……かな？」

「!!? / / /」

濔は涙目で、頬を赤らめ、上目遣いという男を落とす三拍子をさりげなく使いこなし、統夜は頬を赤らめていた。

「……わ、わかった！俺も知りたいことだし、手伝うよ」

「ほ、本当か!!？」

濔はあのような三拍子を使いこなししていたものの、断られると思っていたからか、

ばあつと表情が明るくなっていた。

「……いいよな、イルバ？」

『やれやれ……。どうせダメだと言っても行くつもりだろう？まだ指令もないようだし、指令が来るまでで良ければ俺様も許可してやるよ』

「イルバ……ありがとう！」

滯は統夜だけではなく、イルバにも例を言っていた。

「それじゃあ、さっそく滯の家に行くか？」

「ああ。よろしく頼むよ」

こうして、統夜は滯と一緒にパスポートに必要なものについて調べることになり、2人は滯の家へと向かった。

10数分ほど歩くと、滯の家に着した。

(……今思えば、滯の家に入るのは初めてかもしれないな……)

統夜は滯の家にあがるのは初めてであり、少しばかり緊張していた。
どうやら、それは滯も同様であった。

(……い、勢いよく統夜を誘ってしまった……。調べ物自体は1人で出来るけど……統夜と2人きりになるきっかけが欲しかったんだよな……)

滯は普段から統夜と2人きりになれる機会を伺っていたが、なかなか2人きりにはな

れなかった。

漣も他のメンバー同様に統夜のことを好きであったが、他のメンバーと比べて、統夜とスキンシップをすることもなく、2人きりになるきっかけもなかった。

しかし、今回の調べ物に関しては、2人きりになれるきっかけになると思っており、いきり統夜を誘ってみたのであった。

いざ統夜を誘ってみたなら漣は意識してしまい、恥ずかしさがあるからか頬を赤らめていた。

「と、とりあえず上がってくれよ、統夜」

「ああ、お邪魔させてもらうよ」

統夜は漣に案内され、漣とともに家の中に入った。

「ただいま〜」

「お邪魔しまーす」

漣と統夜は家に入ると共にそれぞれこのように言っていた。

それからまもなく、ドタドタと足音が聞こえてくると、1人の女性がやって来た。

「あらあら、漣ちゃん。お帰りなさい」

「うん、ただいま。まm……お母さん！」

漣は統夜が隣にいるため、慌てて母親の呼び方を訂正していた。

(今漣のやつ、ママって言いそうになってたよな……?)

《ああ。漣のやつ、しっかりしてそうで唯以上に幼い一面があるからな》

(確かに、言われてみたらそうかもしれないな)

統夜とイルバは、漣がママと言おうとしたことについてテレパシーで話をしていた。

「あらあら、ウフフ♪」

そのことを察した漣の母親は、穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

そして、漣の母親は、統夜の姿をジッと見ていた。

「あらあら……あなたは、漣ちゃんのお友達？」

「初めまして。月影統夜です」

統夜は初めて会う漣の母親に丁寧に挨拶をしていた。

「もしかして、漣ちゃんのボーイフレンドかしら？」

「ふえ!?ま、ママ!違うから!」

「？」

漣の母親の問いかけに漣は顔を真っ赤にして、咄嗟にいつもの呼び方をしてしまった。

統夜はなぜ漣がそこまでムキになっているのが理解できずに首を傾げていた。

《統夜、言っておくが、ボーイフレンドっていうのは彼氏って意味だからな》

（え？ そうなのかな？ てつきりボーイフレンドってただの男友達って意味だと思ってたけど……）

《やれやれ……。 やっぱりか……》

統夜はボーイフレンド＝男友達と思っていたようであり、統夜の勘違いを見抜いていたイルバが苦笑いをしていた。

「ですが、 漣は俺にとつて大切な友達です」

ボーイフレンドは彼氏だということを理解した統夜は、 漣のことは大切な友達だということを漣の母親に伝えていた。

「そうなの？ 統夜君、 これからも漣ちゃんと仲良くしてあげてね？」

「はい、 もちろんです！」

「あうう……」

統夜のまつすぐな言葉が恥ずかしかったのか、 漣は顔を真っ赤にして恥ずかしかった。

「……と、 統夜！ とりあえず上がってくれよな！」

漣は気持ちを切り替えて、 靴を脱いでそのまま上がっていった。

「わかった」

そんな漣の動きに合わせて統夜は靴を脱いで上がっていった。

「後でお茶とお菓子を持っていくわね」

「ありがとう！まm……お母さん！ほら、統夜。行くぞ」

「ああ」

統夜は滯の案内で階段を上がり、そのまま滯の部屋へと入っていった。

「……」

滯の母親は階段を上がる2人の様子をジッと見ていた。

「ウフフ。変わった格好はしてるけど、素敵な男の子じゃない♪」

滯の母親はいつものように魔法衣を羽織っている統夜にこのような評価をして、台所へと向かっていった。

「……へえ、滯の部屋ってけっこう整理されてるんだな」

滯の部屋はあまり女の子っぽくない部屋で、きちんと整頓されており、統夜はキヨロキヨロと周囲を見回していた。

「と、統夜！あんまりジロジロ見ないでくれ」

「わ、悪い悪い」

滯は統夜に部屋をジッと見られるのが恥ずかしかったのか、このようなことを言っていた。

「さて……とりあえず始めようか」

「ああ、そうだな」

滯はパソコンの電源を立ち上げると、続けてインターネットを起動した。

「うーん……。ここまではわかるけど、何て検索しようか……」

滯は本当は操作方法などわかっていたものの、1人で全部やってしまうと、統夜を誘った意味がなくなるためこのようにわからないフリをしていた。

「パスポートと必要書類で検索したら出てこないか？」

「なるほど、やってみるよ」

滯はゆっくりと統夜の言ったキーワードを打ち込むと、エンターキーを押した。

すると、打ち込んだキーワードの検索結果が出てきた。

「……思ったより多いな……。どこを探したら……」

「……滯、ちよつとごめんな」

どこを調べればいいのか迷う滯を見かねた統夜は、マウスを手にしてる滯の手を取った。

「ふえ!?と、とととと……統夜!?!」

「あ、悪い。嫌なら手を離すけど」

「いい!びつくりしたただけだから!」

「そうか?」

統夜はマウスと一緒に滯の手を掴みながら詳しい情報が載ってそうなホームページにアクセスした。

「……あつーこれじゃないか!」

「そうだな!」

お目当のホームページが見つかったところで、統夜は手を離し、そのホームページをジッと見ていた。

「えっと、必要なものは……」

滯は携帯を取り出すと、ホームページに書かれたパスポートに必要なものをそのままメールに打ち込んでいた。

調べた結果をそのまま唯たちにメールで送るためである。

ホームページによると、住民票を始めとして、多くの書類が必要となっていた。

「……結構用意しなきゃいけない書類は多いんだな」

「そうだなそれに、身分証明証と未成年は親の同意……つと」

「お、親の同意!?!」

滯が最後に言った親の同意という言葉に、統夜は驚愕していた。

「と、統夜?」

滯は何故統夜がここまで驚いているのか理解出来ず、首を傾げていた。

「つ、詰んだ……。俺、両親いないし……」

統夜の父親は暗黒騎士キバに、統夜の母親は暗黒騎士ゼクスことディオスに殺されており、そのため、統夜には今許可をもらう両親はいないのであった。

「あつ……」

澤もそれを察したのか、バツが悪そうにしていた。

『おい、統夜。両親がいなくても、法定代理人がいれば問題はないんじゃないのか?』

「確かに、それは私も聞いたことがある」

「法定代理人ねえ……」

「統夜、法定代理人のアテはあるのか?」

「ある訳ないだろう?俺が普通の高校生ならいたかもしれないけど……」

統夜は両親の死後は魔戒騎士になるため精進していたためか、法定代理人などそのような存在など考えたことはなかった。

その理由としては、修行以外の生活は両親の遺産があったため、何不自由はなかったからである。

「……とりあえずイレス様に相談してみるよ」

「その方がいいかもしれないな」

統夜はパスポートについて、イレスに相談してみることにした。

番犬所の神官であり、統夜を桜ヶ丘高校に入れたイレスであれば、なんとかしてくれるかもしれないと思っただからである。

「とりあえず、明後日にこれらの書類を全部集めて集合ってことでいいよな？」

「そうだな」

「それじゃあ、みんなにもメールするよ」

滯は、統夜を含めた全員にパスポートに必要な書類を羅列し、それらを集めて明後日に集合とメールを送っていた。

統夜にメールを送ったのは、口頭で説明しただけじゃ何の書類を用意したらいいかわからないからである。

「統夜、ありがとな。おかげで助かったよ」

「気にするなよ。つか、俺はそんなたいしたことしてないしな」

統夜はそう言って苦笑いをしながらおどけていた。

「それじゃあ、調べ物も終わったし、俺はそろそろ行くよ」

「え？もう行っちゃうのか？」

「本当ならもうちよつとのんびりしていたいが、番犬所にも行きたいと思ってるしな」

「そっか……。残念だな……」

もう少し統夜と一緒にいたいと思っていた滯は、しょんぼりと肩を落としていた。

「ごめんな、滯。それじゃあ俺はこれで……」

統夜はそのまま滯の部屋を出ようとしたのだが、それより先にコンコンとドアをノックする音が聞こえると、滯の母親が部屋に入ってきた。

「あつ、まm……お母さん」

「滯ちゃん、お茶とお菓子を持ってきたわ」

「あつ、ありがとう。でも……」

「でも?」

「すいません、用事も終わったので、俺はそろそろお暇しようと思ってまして……」

「あら、残念ねえ。晩御飯、あなたの分も用意したのに……」

「え、そうなんですか!」

まさか滯の母親が自分の分も晩御飯を用意しているとは思っておらず、驚いていた。

「ねえ、統夜君、この後、用事があるのかしら?」

「ええ、まあ……」

「急ぎの用事?」

「そ、そう言われると……急ぎではないですけど……」

番犬所へ行くのは急ぎの用事ではないため、正直に急ぎの用事ではないことを伝えていた。

「だったら、せめて晩御飯だけでも食べていってちょうだい」
「そ、それじゃあ……お言葉に甘えて……」

統夜は滯の母親の説得に根負けし、渋々晩御飯をご馳走になることにした。

ここまであっさり引き下がったのも、タダで晩御飯がありつけるのはありがたいと思っていたからである。

統夜と自分の母親とのやり取りを聞いていた滯の表情は、ぱあつと明るくなっていた。
た。

（ママ……ありがとう！まさか、ママが統夜を引き止めるなんて思わなかった）

滯は、統夜を引き止めてくれた滯の母親に感謝していた。

「ウフフ♪実は統夜君のことは滯ちゃんからよく聞いていたのよ♪だって、滯ちゃんつてば、いつも軽音部の話かあなたの話ばかりするんだもの」

「ちよ、ちよつと、ママー」

滯は顔を真っ赤にしながら慌てていたが、咄嗟にいつもの呼び方になってしまった。
統夜は滯がママと呼ぶことにツッコミを入れなかった。

「晩御飯が出来るまで滯ちゃんとお茶でも飲んで待っててちょうだい♪」

「はい」

こうして滯の母親は滯の部屋を後にして、台所へと向かっていった。

「……まあ、そういう訳で、もうしばらくのんびりさせてもらおうよ」

「統夜、ごめんな。無理に引き止めちゃって」

「気にするなよ。のんびりするのとはまには悪くないしな」

統夜はそこまで気にしていなかったため、すかさず滯をフォローするような言葉をかけていた。

こうして統夜は、滯と一緒にお茶とお菓子を楽しみ、食事が出来上がると共に食卓へと向かって夕食を取っていた。

その時には滯の母親だけではなく父親もおり、統夜は少しだけ気まずいと思っていたものの、物怖じすることなく、滯の両親とコミュニケーションを取りながら食事をしていった。

夕食終了後、統夜は滯の家を後にして、番犬所へ向かうことにした。

※※※

滯の家を後にした統夜は、番犬所へ直行した。

番犬所へ到着した時は、既に夜になろうとしていた。

「統夜、今日は珍しく遅いですね。今日は来ないかと思っていましたよ」

イレスは、いつもより遅く番犬所を訪れた統夜に驚いていた。

「すいません。ここへ来る前に滯の家に行つてまして、夕食もご馳走になつていたので
統夜は何故いつもより遅くなったのかを説明していた。

「おお、良かったですね！滯も楽しそうにしてたでしょうね」

イレスはその理由に納得しており、滯の楽しそうな表情が頭に浮かんでいた。

「今日は遅かったことは気にしないでくださいね。今日は指令はありませんので」

「あつ、ありがとうございます。あと、イレス様に相談したいことがあるのですが……」
「私に相談……ですか？」

統夜が自分に相談とは珍しいと思ひ、イレスは驚いていた。

「はい。実は昨日から唯たちと海外旅行の計画を立てていました……」

「海外旅行ですか……。いいじゃないですか！魔戒騎士である貴方にとつても貴重な経験になるはずですよ」

イレスは統夜の海外旅行行き自体を反対しようとはしなかつた。

「それで、1つ大きな問題がありました……」

「問題……ですか？」

「はい。実は海外旅行にはパスポートなるものが必要なんですが、未成年で両親もいない俺には法定代理人なる者が必要みたいなんです」

統夜は今抱えている障害をイレスに打ち明けていた。

「つまり、統夜はパスポート作りに悩んでいるという訳ですね？」

「は、はい……そうなります」

「クスツ……。統夜が深刻に話すから何かなと思いましたが、そういうことでしたか」

イレスは統夜の話を聞いて、笑みを浮かべていた。

「?イレス様？」

「ああ、すいません。それで、統夜はパスポートが必要なんですよね？」

「はい、そうなりますかね」

「唯たちもパスポートを発行するのですよね?いつ手続きしに行くのですか？」

「明後日です。みんなそれぞれ必要な書類を集めて」

「わかりました。統夜、私に明後日まで時間をくれませんか?それまでに必要な書類を集めますので」

「え……?いいんですか？」

「問題ありません!あなたが桜ヶ丘高校に入るための書類を集めたのも私でしたしね」

「そうだったんですか……」

統夜はイレスが桜ヶ丘高校に入るきつかけだけでなく、必要な書類も集めてくれたことを初めて知り、驚きを隠せなかった。

統夜は入学に必要な書類を誰が集めてくれたのかずっと疑問だったが、その疑問を解消することができて、少しだけスッキリしていた。

「あつ、そうそう。あの時も写真だけは撮ってもらいましたが、今回も写真だけ撮っててくださいね。明日中に撮って番犬所へ持ってきてもらうと助かります」

「わかりました。パスポート用の写真は明日持ってきますので」

「頼みましたよ、統夜」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

統夜はイレスに一礼をすると、番犬所を後にした。

「さてと……。書類集めは統夜が高校に入る時以来ですね」

「い、イレス様。よろしいのですか？一介の魔戒騎士のためにイレス様自らが動くなど」
統夜のために動いているイレスをたしなめようと付き人の秘書官の一人が言っていた。

「良いのです。魔戒騎士はホラーを狩るのが仕事。それ以外のことをお手伝いするのが我らの使命だとは思いませんか？」

「そうですが、しかし……！」

「大丈夫ですよ。統夜にはその分、魔戒騎士として頑張ってもらおうつもりですから」
イレスは統夜に高校生として楽しんでもらいたいと思っているが、それと同時に魔戒騎士としても今まで以上に使命を果たしてもらいたいとも思っていた。
「そ、そういうことでしたら……」

イレスの付き人の秘書官は、イレスの力説に納得せざるを得なかった。
「それにしても海外旅行ですか……。いつ行くかは知りませんが、統夜にとって素晴らしい出になるといいですね……」
イレスは穏やかな表情でしみじみと呟いていた。

※※※

翌日、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

写真撮影も大事なことであるが、まずは魔戒騎士としての使命が最優先だと思ってい

たからだ。

「はあっ!!」

統夜は魔戒剣を一閃すると、オブジェから飛び出してきた邪気を斬り裂いた。

それが終わると、統夜は魔戒剣を青い鞘に納めた。

「ふう……。イルバ、あと浄化しなきゃいけないポイントはどれくらいだ?」

『あと一箇所だな。ここからは少しだけ距離はあるぞ』

「そっか、それじゃあさっさと片付けて写真を撮らないとな」

統夜は早くパスポート用の写真を撮るために、最後に浄化すべきオブジェまで移動を開始した。

およそ20分ほど歩いたところに最後に浄化すべきオブジェはあり、統夜は早々にそこから飛び出してきた邪気を浄化した。

「……よし、これで全部だな?」

『ああ、これで全部だ。統夜、さっそく写真を撮りに行くのか?』

「もちろん。イレズ様が色々書類を用意してくれるんだから俺だつてなるべく早く写真を撮ってイレズ様に届けたいしな」

『なるほどな……。そういえば、この近くに証明写真用の機械があつたぞ』

「そうなのか!? それじゃあさっそくそこへ向かうぞ、イルバ」

『やれやれ……。忙しないやつだぜ……。』

エレメントの浄化を終えたばかりだというのに、慌ただしく動くこうとしている統夜にイルバは呆れていた。

こうして、統夜はイルバの案内で近くにある証明写真用の機械を見つけ、そこでパスポート用の写真を撮影した。

その撮影を終えた統夜はすぐさまその写真を番犬所のイレスに届けた。

写真を受け取ったイレスは、統夜のパスポート発行のために動き始めた。

この日も指令はなかったため、統夜は夜遅くまで街の見回りを行ってから帰宅した。

そして翌日、統夜たちが集まったのは、パスポート発行を行う桜ヶ丘にある県庁の建物だった。

パスポート発行以外にも様々な手続きがこの場所で行うことができ、この日もパスポート窓口以外の場所も多くの人で賑わっていた。

紬は既にパスポートは持っているが、付き添いで一緒に来ていた。

統夜たちは集合するなり忘れ物がないか確認をしていたのだが、律が身分証となる生徒手帳を忘れてしまった。

律は弟に生徒手帳を持ってきてもらうために携帯を取り出すと、律の弟に電話していた。

統夜は律が戻って来てからイレズに書類を頼んでいることを話してもいいと判断したのか何も言わなかった。

律の弟が来るまで、統夜たちは暑い外ではなく、涼しい待合室で待つことにした。

10分ほど待つと、律の弟が来たようであり、律は弟のもとへ向かっていった。

「……ねえねえ、みおちゃん。りっちゃんの弟ってどんな感じ?」

「そうだなあ……律に似てるかも。目元とか特に」

「おおー!りっちゃんの男バージョン!」

唯は律の弟が律に似ているということに反応していた。

そして、もし憂が妹ではなく弟だったらと想像してみた。

く唯の妄想く

男憂 「……つたく、姉ちゃんは……。気を付けろよな」

顔は憂のまんまだが、何故か学ランを着ている……。

唯の妄想終わり。

「……おお！なんかいい！」

「確かに、良いですよね、弟って」

唯と梓は、弟という存在を良いと思っており、弟が欲しいとも少し考えていた。

「弟か……。もし俺に弟がいたら、そいつは魔戒法師になるのだろうか……」

統夜はもし自分に弟がいたらとしみじみと考えていた。

統夜がそんなことを考えていると……。

「……つたく、姉ちゃんは、気を付けろよな♪」

唯は何故かニヤニヤしながら弟っぽいことを言っていた。

「ええ、唯先輩が弟ですか……?」

「ええ!? ダメ?」

梓は唯が弟だったらと考えたくなかったのか、ドン引きしていた。

統夜たちがこのようなやり取りをしていると……。

「……ごめん、お待たせ」

律が統夜たちの元へ戻ってきたのだが……。

「おう、待ってたぜ。り……つ……つ……？」

律の隣にはもう一人おり、その人物を見て、統夜は硬直していた。

果たして、律と一緒にいる人物とは……。

「あつ！イレスちゃん！」

いつもの神官としての格好ではなく白いワンピースを着ていたが、イレスであり、唯が反応していた。

「皆さん、お久しぶりです♪」

イレスは唯たちと会うのは久しぶりだったため、満面の笑みで挨拶をしていた。

「だけど、どうしてここへ？」

「ええ。統夜から話は聞きました。皆さん、海外旅行を計画してるんですね？」

「ああ。だけど、私たちの受験が終わったらって考えてるけどな」

唯たちはかつてイレスが留学生として桜ヶ丘高校に潜り込んだ時に仲良くなり、普通の友達のような接し方をしていた。

「なるほど、受験が終わったあたりで考えてるんですね」

統夜はいつ頃行くこうとしているのかは言わなかったため、いつ頃行くのかわかり、スツキリしていた。

「イレス様。もしかして……」

「ええ♪必要な書類は全部用意しましたよ♪保護者の同意の部分も問題はありませぬ♪あとはこれを提出するだけです」

イレスはパスポートに必要な書類を全部用意し、統夜のところへ持ってきた。

1番のネットクとなる両親の同意の部分は番犬所の力を使って上手いこと誤魔化せるようになっていた。

「あ、ありがとうございます。イレス様」

統夜は書類をすべて受け取ると、イレスに礼を言っていた。

「むうう……。やーくんだけずるい！」

統夜だけ書類を全部用意してもらったのが気に入らなかったのか、唯は膨れっ面になっていた。

「仕方ないじゃないですか。統夜先輩は色々と事情があるんですから」

「それはそうだけどさ……」

梓は膨れっ面になる唯をなだめており、唯は頭では理解していても、納得は出来なかった。

「そういうことだけ、唯。俺だつて出来ることなら1人で何とかしたかったけど、厳しいからイレス様に頼らざるを得なかったんだよ。そこはわかってくれよな」

「……うん。わかった」

統夜の説得で、唯はようやく納得してくれたようであった。

「それでは、統夜に書類を届けたので、私はそろそろ行きますね」

「ええ？ イレスちゃん、もう行っちゃうの？ これ終わったらみんなでアイス食べに行こうと思ってるのに……」

「アイス……ですか？」

アイスという言葉にときめいたのか、イレスは少しだけ頬を赤らめていた。

しかし……。

「わ、私も食べたいですけど、番犬所に戻らなければいけないので！」

イレスはアイスに釣られそうになったが、神官としての使命が最優先だったため、どうにか唯の申し出を断っていた。

「残念だけど……仕方ないよね」

唯はしょんぼりしながらも仕方ないと諦めていた。

「ごめんなさい。だけど、また一緒に遊べたらいいですね♪」

「……うん！」

「それでは、私はこれで！」

イレスは唯たちにペコリと一礼をすると、そのまま番犬所へと向かって行った。

「それじゃあ、さっそく申し込みに行こうか」

こうして、統夜たちはパスポートの申請を行うために受付に並ぶことにした。

唯、滯、律、梓、統夜の順で並んでいたのだが、何故か唯は滯に先頭を譲っていた。

滯の順番がきて、滯は書類を提出するのだが、滯の撮った写真に問題があるらしく、受付が出来なかった。

写真をよく見ると、髪がアップになっていたため、余白が無くなり、余白がないためこの写真ではダメとのことであった。

受付がないとなると仕方ないため、滯は近くにある証明写真用の機械で写真を撮り直すことにした。

滯は機械の中に入り、写真を撮ろうとするのだが、唯たちが何度も笑わそうとするため、何度も写真撮影に失敗していた。

統夜とイルバはジト目でその様子を眺めていた。

こうして、何度目かの挑戦でようやくちゃんとした写真が撮影出来、再びパスポートの申請を行った。

今度は滯の写真も大丈夫で、統夜を含む全員が見事に申請が通ったのであった。

※※※

「お、終わった……」

予想以上に長丁場になったせいで、滯はひどく疲れきっていた。

統夜たちはパスポートの申請を終えると、予定通り度々訪れるアイス屋でアイスを食べていた。

「いやあ、なんか凄く疲れたよなあ」

「誰のせいだっ!」

証明写真撮影の時に一番滯を笑わしていた律がとぼけていたので、滯はすかさずツツコミをいれていた。

「でも、おかげですつごくアイスが美味しいよ!」

「ホント、甘いものには前向きですね」

『まったくだぜ』

唯の甘いものに対しては前向きな姿勢に、梓とイルバは呆れるが、唯は満面の笑みを浮かべていた。

そんな中、滯は撮影に失敗した写真を眺めていた。

「……つか、これどうするんだよ……」

「記念にとっておこうぜ！」

この律の発言がおかしかったのか、漣、律、紬の3人は笑っていた。

漣は統夜、唯、梓にも失敗した写真を見せ、それを見た3人もまた同じように笑っていた。

「……1週間くらいしたら、パスポート取りに行かないとね」

「夏期講習が終わったら行くか」

来週から夏期講習があり、バタバタしてしまうため、夏期講習が終わってからパスポートを取りに行くことにした。

「それで、私たち、どこに行くんですしたっけ？」

梓は、結局どこへ行くのか確認をとっていた。

「そういえばまだ決めてなかったねえ。どこがいいかなあ？」

「イギリスでライブ！」

「ハワイ！」

「アメリカ……」

「温泉で卓球とか♪」

漣、律、梓、紬の順番で自分の行きたいところをあげていた。

「温泉じゃパスポート取った意味はないが、いいかもな！」

『おいおい、パスポート取った意味がなくなるからそれはダメだろ』
「だよねえ〜」

イルバからのツツコミに統夜と紬はおつとりと返していた。
統夜たちは海外旅行の場所をどこにするかということ、とても楽しげに話していた。

そんな中、唯は……。

「……それじゃあ、2回行こうよ！卒業旅行！」

「[[[[[[え?!]]]]]]」

唯からのまさかの提案に驚いた統夜たちは、思わず唯のを見ていた。

「あずにゃんが卒業する時も行けばいいし！」

「え？私の時も、みんなですか？」

「まあ、梓が嫌でなければだけだな」

「私は、皆さんと一緒なら嬉しいですけど……」

梓は本音でこのように話すと、唯はふと立ち上がっていた。

「そうしたら、イギリスもハワイもアメリカも温泉もみーんな行けるよ！」

『おいおい、それだけの場所、2回の旅行で行ける訳が……』

「イルバ！」

唯の発言に統夜たちは戸惑う中、イルバが正論を言おうとしており、統夜はそんなイルバをなだめていた。

唯はそんなイルバの言葉を気にすることなく話を続けていた。

「……私たち、どこへだつて行けるよ！」

この力強い唯の言葉を聞いた統夜たちは笑みを浮かべていた。

「……うん、そうだな」

「ああ、そこは唯の言う通りだぜ」

唯の力強い言葉に賛同していた律と統夜はウンウンと頷きながらこのようなことを言っていた。

「よし、海外旅行に必要なものを見に行くか」

「お、いいねえ！」

こうして統夜たちは、旅行に使うであろうバッグなどを見るため、移動を開始した。

※※※

統夜たちが訪れたのは、桜ヶ丘某所にある、桜ヶ丘一番のデパート的な店であり、そこにあるトラベルコーナーに来ていた。

「おお、海外旅行って感じだなあ♪」

律はキャリアバッグなどを眺めながら目をキラキラと輝かせていた。

「ねえねえ、りっちゃん！これがあれば授業中も熟睡できそうだよ！」

唯がそう言っつて律に見せてきたのはアイマスクだった。

「寝るな」

『つか、バレバレだろう』

唯の発言に、滯とイルバがすかさずツツコミをいれていた。

「律にはこういうのいるだろ？」

そう言っつて滯が律に見せていたのは、海外でも手軽に日本食が食べられる日本食のコーナーだった。

「日本人として当然ですな！」

お米が大好きな律は、日本食は必要不可欠だと思っていた。

「ノーライス、ノーライフ」

唯は唐突にギャグをかましていたが、統夜たちはスルーしていた。

「もしお金すられたら、私たちストリートミュージシャンとしてお金を稼ごうよ!」

「わあ!海外デビューね!」

「つか、お金をすられたらなんて考えたくもないけどな……」

唯の発言に紬は目をキラキラと輝かせていたが、統夜はさらつととんでもないことを言っている唯に苦笑いをしていた。

「ウィーアー、ホウカーゴ、ティータイム!」

唯は何故か「放課後ティータイム」を英語っぽく言っていた。

「……なんか長いな」

「略して「HTT」ね!」

「だけど、英語だったら、「After School Tea Time」になるんじゃないですか?」

放課後は英語で「After School」なため、梓はバンド名も変わってしまったのではと思っていた。

「確かにそうだな。だけど、唯が言いたいのはそういうことじゃないんじやないのか?」

「え?」

統夜も梓の言うことはもつともだと思っていたが、唯が何を言いたいかということ

を汲み取っていた。

「うん！やーくんの言う通りだよ！私たちはどこへ行っても「放課後ティータイム」だよ！」

唯のこの言葉はとても力強いものであり、この言葉を聞いた統夜は笑みを浮かべながらウンウンと頷いていた。

そして、漣、律、紬、梓の4人も穏やかな表情をしていた。

そして、確かにその通りだなと心の中で思っていた。

「……でもさ、旅行に楽器持っていないだろうか？」

唯の言葉に賛同しながらも律はもつともな指摘をしていた。

それに対して唯は……。

「エアギター！これエアギター！」

唯は何故か片言でエアギターを行っていた。

「ビリーブするヒトには見えまーす！」

律もそれに乗っかって片言でおかしな言葉を言っていた。

「もうやめろよ。その怪しい喋り」

「私たちはどこへ行ってもこんな感じですね。きつと」

「ああ、そうだな」

漕、梓、統夜の3人は、唯と律の奇妙な喋り方に呆れながらも苦笑いをしていた。こうしてこの日は旅行に使えそうなものを見ただけで店を後にして、この日は解散となった。

統夜は、番犬所に立ち寄ると、イレスに無事パスポート申請の手続きが済んだことを報告し、イレスに礼を言っていた。

この日も指令はなかったので、統夜は夜遅くまで街の見回りを行い、帰宅した。

統夜たちがパスポートを受け取ったのは、唯たち4人の夏期講習が終わってからであつた。

統夜を含めて全員が無事パスポートを取得し、唯の家に集まってみんなで喜びを分かち合っていた。

特に統夜は、本当にパスポートが取得出来たことに驚きながらも、心から自分のために奔走してくれたイレスに感謝していた。

結局海外旅行でどこへ行くのかは決まらなかったが、統夜たちは全員パスポートを取得し、海外へ行く準備だけは整えることが出来た。

最後に全員でパスポート取得記念の写真を撮り、これもまた統夜たちにとって貴重な思い出の1ページとなったのであった……。

……終。

—— 次回予告 ——

『唯たちが揃って合格出来て一安心だぜ。まさか、この時期になってこの話が出るとはな。次回、「提案」。やれやれ。いったいどうなることやら』

卒業！金色の試練編

第104話 「提案」

唯、律、漣、紬の4人は揃って同じ大学を目指し、必死に勉強を重ねていた。

そして、その苦労の甲斐あつてか、唯たち4人は揃って第一志望の大学に合格し、4月からは4人揃って同じキャンパスへ行くことになった。

その翌日、唯たちはいつものように登校し、さわ子に4人揃っての合格を伝えた。

さわ子は素直に4人の合格を祝福していたが、実はこの頃には4人の合格はさわ子の耳に入っていたのであった。

昨日、統夜は唯たち4人の合格がわかると、わかりやすい程喜びをあらわにして、クラスメイトたちにもこの情報を共有していた。

そのため、クラスメイトたちも唯たち4人の合格を祝福してくれたのであった。

こうして、唯たちは合格の報告も終え、ここでようやく受験という呪縛から解放されたのであった。

そして放課後、統夜たち5人は音楽準備室に集まると、今まで溜まっていたフラストレーションを発散するように演奏を行っていた。

厳密に言うと、ラジカセに入っているテープを再生し、そこから流れてきた激しい音楽に合わせて演奏したフリをするエアバンドであったが、遊びとしてはかなり上等なものであった。

音楽準備室からいつもとは違う雰囲気 of 激しい曲が聞こえてきており、それを聞いて困惑している生徒たちもいた。

梓もそのうちの一人であり、音楽準備室から聞こえる激しい曲に困惑していた。

そんな気持ちを抱きながらも音楽準備室に入るのだが……。

「……スカイハイ!!」

梓が音楽準備室に入ると同じタイミングで唯がわけのわからないことを叫んでいた。

「……な、何やっているんですか?」

梓は困惑した状態で今何をしているのかを聞こうとしていたのだが……。

「……違う! 放課後ティータイムが目指している音楽は……こんなじゃない!」

「でも……。私はこの路線で行きたいんだよ」

「何?……唯のくせに唯のくせに唯のくせにい!!」

何故か音楽の方向性で対立している律と唯であったが、律は唯の胸ぐらを掴み、唯の体をガクガクと揺らしていた。

「やめて！2人とも！」

「ムギの言う通りだ。その辺にしておけ」

紬と統夜の2人で律を止めたため、律は手を離していた。

「あの……。何かあったんですか？」

「もう……。軽音部は……。解散しちゃうかも……」

「え!?何でこんな時期に!？」

梓は突然の解散宣言に驚きを隠せなかった。

「みんな……。目指す方向性が違ってきたんだよ」

「音楽性の違いだよ!あずにゃん!」

「なーにが音楽性だよ!」

「1つの行動を覚えたら3つ忘れるような唯が音楽性……。う!」

「?」

梓は滯の言い方が少しだけ棒読みっぽいのが気になったが、そこは気にしないことにした。

「みおちゃんだって、転んでパンツ見せたくせに」

「なっ!?!そ、それは関係ないだろ!?!」

唯は1年性の時の学祭ライブの話を出すと、滯は顔を真っ赤にして否定していた。

「あ、あの……。音楽性の話をしてたんじゃ……」

「梓ちゃんはどう思う？」

「は、はい！ やっぱり私たち、放課後ティータイムは、やっぱり明るくて元気な曲が……」
梓は放課後ティータイムには明るくて元気な曲が合っていると考えており、音楽の方向性を変える必要はないと思っていた。

すると……。

「……正直……。ふわふわした曲はもう……きついんだよね」

「ぶっ！」

唯のとんでもない発言を聞いた統夜は思わず吹き出してしまい、笑っていた。

「どの口が言う！ 統夜が笑うのもわかるぜ！ 唯が入部してきて、「軽音部って軽〜い音楽をやってるんでしょ？」って聞かされた時はババ掴まされたと思ったぜ！」

「ババ……？」

梓は律の言葉に困惑していた。

「ごろごろしてるだけでいいからどうしてもって言ったの、りっちゃんじゃん！」

「何い!？」

「あ、あの……。ババ抜きやりませんか？」

梓はこのピリピリとした空気をどうにか和ませるためにババ抜きを提案したのだが

……。

「馬鹿野郎！ 梓！ 軽音部が生きるか死ぬかを決める大事な話をしてるんだぞ！」

律はそんな梓の提案を少しだけ怒り気味に却下していた。

「あずにゃん！」

「は、はい！」

「後で……やろうね……」

どうやら唯は今ではなく後からならばババ抜きをやってもいいと思っっているみたいであった。

（後ならいいのかよ……）

このやり取りを聞いていた統夜は、心の中でツツコミを入れていた。

「まったく……。入ったはいいものの、ギターは弾けないわ、ハーモニカは吹けないわ！」

「吹けるもん！ ハーモニカ吹けるもん！」

律は唯が軽音部に入ったばかりの頃の話を持ち出し、唯はムキになって反論していた。

「え、そうなの？ それじゃあ、さっそくふいてみて……」

「ごめんなさい！ 吹けません！」

律は制服のポケットからハーモニカを取り出そうとするが、その前に唯はハーモニカが吹けないことを正直に白状し、謝っていた。

「……ちゃんちゃらおかしいわね」

「……？ムギ……ちゃん？」

「「ムギ？」」

唯、統夜、漣、律の4人は、紬の唐突な言葉に困惑していた。

「そ、そもそも！ムギちゃんがお菓子持ってくるから悪いんだよね！」

『おいおい、一番飲み食いしてるやつが言うなよ……』

今まで沈黙を貫いてきたイルバだったが、先ほどの唯の発言は黙っていられずにツツコミを入れてしまった。

「美味しいの持ってくるからいけないんだよお」

「それは悪うございましたねえ」

「……何をー!!みおちゃんも何か言いなよ！」

「り、律が悪い！」

「そうだそうだ！りっちゃんのくせに！」

「な、なんだとー!?統夜！お前も黙ってないでなんか言えよ！」

「……俺はノーコメントで」

「なんだとー！すかしやがって！」

音楽性についてもめているつもりが、いつの間にかレベルの低い口喧嘩のようになってしまった。

「…………あれ？このラジカセ…………」

梓は長椅子に置かれたラジカセが気になり、再生ボタンを押した。
すると…………。

——♪ズンジャンズンジャンズンジャン！

「あ、これ、さっきの…………」

ラジカセからは先ほど聞こえてきた曲が再生されており、梓はふと先輩たちの方をみると、統夜たちはその曲のリズムに合わせてノっていた。

「…………」

梓は停止ボタンを押して曲を止めると、統夜たちの動きはピタリと止まった。

「…………」

再び再生ボタンを押すと、また統夜たちは曲のリズムに合わせてノっていた。

「…………」

そして、また停止ボタンを押すと、統夜たちの動きはピタリと止まった。

「…………」

梓は再生ボタンを押すフリをしてフェイントを仕掛けてみると、律がフライングしてスネアを叩いていた。

「……何やってるんですか?」

「……バレちゃった♪」

「デスデビルごっこだよ、あずにゃん!」

「楽しかったねえ♪」

統夜たちは本気で音楽性についてもめていた訳ではなく、デスデビルごっここと称して遊んでいただけであった。

「なあ、いい加減練習の合間に小芝居を挟むのやめないか?」

「ええ!?!みおちゃんだってノリノリだったじゃん!」

『まあ、ちよつと濡は棒読み気味だったのが俺様は気になったがな』

「ええ!?!そ、そんなことはないと思うけどな……」

イルバは統夜たちの遊びを呆れて見ていたのだが、気になったところを指摘し、それを聞いた濡は納得していなかった。

「……お芝居ですか……」

「そうだよお。だって、一度はやってみたいじゃん?音楽的な対立ってやつをさ」

「バンドの定番だもんなー♪」

「ねー♪」

「……まあ、そんなところだろうと思いましたが……」

梓は今までのやり取りが遊びであり安堵するが、そうではないかと予想も少しはしていた。

そして……。

「……まさか統夜先輩も悪ノりに付き合うとは思いませんでしたけど」

梓にとつては恋人であり、軽音部の数少ない常識人だと思っていた統夜まで悪ノリをしており、梓はそんな統夜をジト目で睨みつけていた。

「だ……だってよ！みんなはノリノリなのに俺だけやらないのはおかしいだろ!」

統夜は必死になって悪ノリをしていた理由を明かしていた。

『まあ、お前さんは割と大人しい方だったかな』

イルバは最初からこの悪ノリの様子を見ていたが、統夜は積極的に参加している訳ではなかった。

「……まあまあ♪とりあえず、梓ちゃんも来たわけだし♪」

「あつ、ちよつと待つてくださいい！」

統夜たちは悪ノリをしながらではあるが、練習はしていたため、梓はギターを取り出して練習に混ぜてもらおうと考えていた。

しかし……。

「お茶にしようか♪」

「え!？」

梓は練習する気満々だったのだが、唯がティータイムを提案しており、驚きを隠せず
にいた。

結局唯の意見が採用されることになり、統夜たちはいつものようにティータイムを行
うことになった。

「……それじゃあ、さっきの反省会でもするか」

「もうちよつとあずにやんをドキドキさせられるかな? って思ったんだけどね……」

統夜たちは練習の反省会ではなく、先ほどの悪ノリの反省会を行おうとしていた。

「練習の反省会じゃないんですね」

「あつ、そうそう。トンちゃんに餌をあげといたからね♪」

唯は先ほどの悪ノリを始める前にトンちゃんに餌をあげており、それを梓に報告して
いた。

「あつ、ありがとうございます」

「みんないまひとつだったわねえ」

「ムギのちゃんちゃらおかしいはどうかと思うぞ」

「それに統夜！お前はいきなり笑い出すなよな！梓にバレると思つて本気で焦ったじゃねえか！」

滯は紬のおかしい言動を指摘しており、律は統夜が急に笑い出したことを指摘していた。

「だつて仕方ないだろ？唯が柄でもないこと言い出すからよ！」

どうやら、唯の「ふわふわは正直きつい」という言葉が、統夜にはツボだったようであつた。

「うーん……。そんなに変かなあ？」

「エへへ……。みんな、ドンマイ♪」

紬は自分のことを棚に上げてこのようなことを言つて笑みを浮かべていた。

「……私、こういういい加減な部とは知らずに入部しちゃったんですね……」

「あーら！梓、そんな生意気なことを言つていいのか？」

「そうだよ、あずにゃん！軽音部に入らなかつたら、このお茶、飲めなかつたかもしれないよお！」

「うっ……」

「琴吹家と冴島家自慢の紅茶よ♪」

紬が毎日持つてくる茶葉は、琴吹家自慢の茶葉が主なのだが、家柄親交のある冴島家

の執事であるゴンザからもらう茶葉があった。

どちらの茶葉も最高級品の茶葉であり、普段は間違ひなく飲めない紅茶であった。

「……す、すいません。美味しいです……」

梓もこの紅茶をガブ飲みしていたため、これ以上否定的な発言は出来なかった。

「……あつ、ムギ！ 今日のおやつはバームクーヘンかあ！ 一枚ずつ剥がして食べようぜ

！」

「やめろ！ なんか痛そうじゃないか！」

一枚ずつ剥がすというのが濡には耐えられないのか、顔を真っ青にしていた。

そんな中、紬は袋を開けてバームクーヘンを取り出そうとするが、なかなか開かず、袋

を開けるのに悪戦苦闘していた。

「……後は卒業するだけだねえ」

唯は唐突にこのようなことを言っていた。

「確かにそうですけど、いいんですか？ こんなにのんびりしてて」

「だって大学受かったしー。ねー、りっちゃん」

「ねー」

唯と律は互いに顔を見合わせて笑みを浮かべていた。

「それにしても奇跡ですよ。瀧先輩やムギ先輩はともかくとして」

「まあまあ、梓。気持ちにはわかるがそう言つてやるな。確かに奇跡的な結果だったけど、2人も凄く頑張つたんだしさ」

「統夜が一言余計なことを言うから嬉しくない……」

統夜は唯と律のフォローをしたつもりだったのだが、一言余計なことを言つていたよ
うであり、律は苦笑いをしていた。

4人でこのようなやり取りをしている間にどうやらバームクーヘンの袋が開いたよ
うなので、紬はそのバームクーヘンを切り分けていた。

「……では、改めて」

「みんな一緒の大学に受かつて良かったわねえ♪」

「つてことで乾杯しようぜ！」

「ほらほら、あずにやんとやーくんも！」

「は、はあ……」

「はいはい……」

こうして統夜たちはそれぞれのカップを手に取り、乾杯の体勢に入った。

「かんぱーい!!」

「「「かんぱーい!」」」」

6人は律の合図で乾杯をしたのだが……。

「……かんぱうい！」

突如7つ目のカップが現れたのであった。

「」「うわあ！」「」

突如現れた7つ目のカップに統夜を除く全員が驚いていた。

「やれやれ……。いきなり現れないでくださいよ、さわ子先生……」

「えへっ」

さわ子はペロツと舌を出しておどけていた。

「いやあ、私もホツとしたわ。みんな一緒の大学に受かって……」

「3年生の担任も大変ですね……」

「うん……。でもあつという間だったわ。唯ちゃんたちがもう卒業だなんて……」

さわ子は統夜たちの卒業が間近ではあるもの、それがあつという間だったとしみみ
みと呟いていた。

「私たち、この3年間でどれくらいお茶を飲んだのかなあ？」

「軽く千杯はいつてるかもね」

「サウザンド！」

「まさしく放課後ティータイム」

「体を張ってバンド名を現してますね……」

『……俺様から言わせてもらえばそれだけダラダラしてたという訳だが……』

「うぐつ、確かにそうだが、話に水を差すようなことを言うなよ、イルバ」

イルバは正論を突いており、統夜はその言葉にたじろいでいた。

「まあ、後は送り出すだけね。……留年しなければね」

「留年？」

「そう。来週会議があるの。出席日数が足りてるか、赤点は多くないか、審査するのよ」

「そ、そんな大事な会議が!？」

「マジかよ……」

卒業出来るかを審査する会議の存在に唯は驚いており、統夜は愕然としていた。

「ふっふっふ……」

さわ子はどす黒い笑みを浮かべると、唯と律の肩を掴み、さらに統夜の肩も掴んでいった。

「「ひいつ!？」」

肩を掴まれたことで、自分が留年の可能性があるかと思いきや知らされた統夜、唯、律の3人は怯えていた。

「さっ……さささささわちゃん! さっき私たち、デスデビルごっこをしてたんだよ!」

「で、デスデビル凄いやお!!」

「そうだな！流石はさわ子先生のいたバンドだよ！だから……」
「だから？」

「「ひいっ!？」」

さわ子は再びどす黒い笑みを浮かべており、3人は再び怯えていた。

「こ、ここは1つ、軽音部の先輩として……」

「よろしくう!!」

「今さらゴマ擦ってもねえ」

「そ、そこを何とか!」

「さわ子大先生!」

「偉大なるさわ子大先生!」

統夜、唯、律の3人はどうか留年を回避するために必死になっていた。

『やれやれ……。これが様々な事件を解決してきた白銀騎士の姿とは思えないな……。』

留年を避けるために必死な統夜の姿に、イルバは心底呆れていた。

こうして、ティータイムの間、3人は留年を避けるために必死にさわ子にゴマをすつていた。

ティータイムを終えると、統夜たちは必要なくなった本をまとめたり、ゴミをゴミ袋に集めたりして、それをゴミ捨て場へと持っていかうとしていた。

その途中、中庭への入り口で、唯は足を止めたので、統夜たちも足を止めた。

「うーん……」

「どうした、唯？」

「うん……」

「さっきのさわちゃんと言ったことを気にしてるのか？」

「んー、そうじゃなくてねえ……」

唯は言いたいことがあるようなのだが、それを上手く言葉にまとめることが出来ていなかった。

しばらく考えた後に、唯は話を切り出した。

「……私たち、先輩としての威厳がないまま卒業しちゃうんじゃないのかなあ？」

「そうか？ そんなことはないと思うが……」

「やーくんは普段から先輩っぽいことしてるからそう思うんだよ」

唯の言う通り、統夜は梓と付き合う前から良き先輩として梓に接しており、梓は恋愛感情とは別にそんな統夜のことを尊敬していた。

「私たちだってそんなことないと思うけどな」

「そうよ！ 私たちは背が高いし、元気だし！」

「それに年上だ！」

「……他にないのか？」

紬と律の言う先輩らしきというものがどれもイマイチであり、漣は少し呆れていた。

「私……。最後に何か先輩らしいことをしたい！」

「いいじゃんそれ！唯、ナイスだぜ！」

「エへへ……」

唯の考えたアイディアに律が賛同し、唯はそれが嬉しくて笑みを浮かべていた。

「確かに面白そうだが、何にする？」

「あずにゃんっぽいプレゼントとかいいかもね！」

統夜たちはゴミ捨てのことなど忘れてしまい、梓へのサプライズを何にするか考えていた。

しばらく話をして……。……。

「……先輩！」

統夜たちの姿を見つけた梓が統夜たちに声をかけた。

「「わあっ!!」」

「おう、梓。どうした？」

唯たち4人は急に梓に声をかけられて驚く中、統夜だけは冷静に返事をしていた。

「これ、落ちてましたよ」

梓は廊下に落ちていたチョコレートの袋を見せていた。

「ぶ、部室への帰り道がわからなくなるかなって思ってた……」

「おいおい、ゴミ袋に穴が開いてたんだろ？」

「そうですよ。それに、拾っちゃいましたし」

「あうう……もう帰れない……」

「そんな訳ないでしょ。ほら、行きますよ」

「へーい」

こうして統夜たちは梓へのサプライズをどうするかという話を中断し、梓と共に本来の目的であったゴミ捨てを行った。

※※※

この日、部活が終わると、統夜は番犬所に直行し、いつものように狼の像の口に魔戒

剣を突き刺し、魔戒剣の浄化を行った。

「統夜、今日は登校日だったのですか？」

「はい。今日は登校日で、唯たちは4人揃って同じ大学に合格したことを報告していましたよ」

統夜たち3年生は、2月になると毎日登校という訳ではなく、週に2回か3回ほどの登校日以外は学校は休みであった。

今日は登校日であるため、統夜は授業を受け、部活へ行った後、番犬所に顔を出していた。

「統夜ももう卒業なんですネ……。貴方を学校へ行くよう勧めたからか、とても感慨深いです」

「イレス様には本当に感謝しております。イレス様が学校へ行くよう勧めてくれたからこそ、俺は唯たちと出会い、守りし者とは何なのかを知ることが出来ました」

「そう言ってもらえると私も嬉しいです。それに、ホラーを狩るだけが魔戒騎士ではありませんからね。そこを学んでいただけなら、私も学校行きを勧めた甲斐があるというものです」

「イレス様……」

「統夜、もうすぐ卒業ですから、明日からは魔戒騎士の使命をお休みしてもいいのですよ

? 思い出を作ることでも大事ですし」

「ちよ!? イレス様!」

統夜に休みを与えるという発言を見過ごせなかったのか、イレスの付き人の秘書官の1人が異議を唱えようとしていた。

しかし……。

「……イレス様のお気遣い、大変痛み入ります。ですが、俺は騎士の使命を休むことは出来ません。いつどこにしよう、俺は人を守る、魔戒騎士なんですから」

「統夜……」

統夜は休みよりも騎士の使命を優先しており、その姿勢に先ほど異議を唱えようとしていた付き人の秘書官の1人もウンウンと頷いていた。

「……ですが、この2月から3月のどちらかに卒業旅行に行く可能性はあります。その時は改めて報告しますが、イレス様の許可をいただくことになるかもしれません」

「それはもちろん許可します。ですが、その時はなるべく早めに言ってくださいね?」

「ありがとうございます、イレス様。もしそうだといいことが決まれば、すぐに報告します」

統夜はイレスにペコリと一礼をすると、番犬所を後にした。

この日は指令はなかったため、統夜は街の見回りを行ってから家路についた。

そして数日後、この日は登校日であったのだが、統夜はいつものようにエレメントの浄化を終えてから登校した。

統夜が教室に入ると、すでに全員が揃っていた。

とりあえず統夜は魔法衣をコートをかける場所に向け、自分の席に座ったのだが……。

「……おはよう、統夜君。今日もギリギリなんだね」

隣の席である立花姫子が統夜に声をかけていた。

「まあな。それにしてもみんなは早いな」

統夜はいつも通り登校したのだが、普段であれば8割の生徒がいれば上等だったのだが、今日は統夜以外は全員早く登校していた。

「まあ、登校日じゃないとみんなに会えないしね」

「なるほどな」

統夜は姫子と挨拶がてらの会話をしていると……。

「……ねえ、みんな！ちよつといい？」

クラスメイトの1人であり、黒の長髪に眼鏡が特徴の高橋風子が、クラス全員にこう呼びかけていた。

その呼びかけを聞いた全員は一斉に教壇に立つ風子を見ていた。

「卒業式の日にさわ子先生に何かしたいんだけど、何がいいと思う？あ、これはもちろんさわ子先生には内緒で」

風子はどうやら、この1年間世話になったさわ子にサプライズでプレゼントをしたいということ提案していた。

クラスメイトたちは全員賛同のようであり、口々に案を言っていた。

(……何かねえ……)

統夜もそのクラスメイトたちの一部であり、同様にさわ子へのサプライズを考えていた。

「ねえ、統夜君は何がいいと思う？」

統夜の隣である姫子は統夜に今現在のアイデアを聞いていた。

「俺は無難に寄せ書きでいいと思うけどな」

「なるほど……確かにそれはいいね！」

統夜の出した案に姫子だけではなく、聞いていたクラスメイトたちも賛同しており、始業のチャイムが鳴るまで、この話で盛り上がり上がっていた。

※※※

そして放課後、梓を除く統夜たち5人はいつものように音楽準備室に集まっていたのだが……。

「……という訳で、卒業旅行に行こうと思います！」
律が唐突に卒業旅行に行きたいと提案をしていた。

「わく!!」

その意見に賛成な唯と紬は拍手をしていた。

「……何がという訳なんだ？話の意図がわからんぞ」

統夜は急に卒業旅行の話を出されて予想はしていたものの、困惑していた。

「実は、バレー部のみんなが卒業式の前に卒業旅行に行くって聞いてさ。それで、律は急

に言い出したんだと思う」

「なるほどな……。それは理解したし、俺も反対ではないが、梓へのプレゼントはどうするんだ？」

「それはもちろん考えるよお♪」

「やれやれ……。いい加減なやつだな……」

律のあまりの適当な対応に統夜は呆れていた。

「あつ、私、憂にインタビュしてきたよ！」

「聞かせてもらおうか」

「うん、わかった」

唯は梓のクラスメイトである憂から色々話を聞いていたので、そのことを報告しようとしていたのだが……。

『……。おい、ちよつと待て。唯、そのホワイトボードに描いてる絵はなんだ？』

イルバは唯がホワイトボードに描いた落書きが気になるようで、こう訪ねていた。

「「ちよーじゅーぎが」だよお。これねえ、この前教科書見てたらさあ」

『わかった、もういい。唯、話を進めてくれ』

イルバはこれ以上唯に話をさせたら長くなると判断し、話の本題に入ってもらおうことにした。

「えーと、憂はねえ、私たちがもう1年学校にいて、一緒に卒業するのがいいんじゃないかって」

「おいおい……。冗談だろ？プレゼントは留年ってことか？」

「うん！留年！」

唯が「留年」と言ったのと同時に音楽準備室の扉が開いて梓が入ってきた。

「ええ！」

「「「「うわあ!!」」」」

「アハハ……」

突然の留年発言に梓は困惑し、統夜以外の5人は梓に驚いていた。

そして、統夜はそんな唯たちの様子を見て苦笑いをしていた。

「ど、どうしたんですか？」

「べ、別に？」

「今、明らかに焦ってましたよね？」

「焦ってない焦ってない！」

「それに……今、留年って……」

梓にしてみれば聞きたいことだらけであったため、色々聞いてみたが、唯たちは慌てて取り繕っていた。

「空耳く多分空の耳く」

唯は梓の前に立つと、手をぐにやぐにやと動かし、今の発言を忘れさせようとしていた。

「……何やってるんですか……」

梓はそんな唯をジト目で見ていた。

「あ、あのね！今、卒業旅行の話をしたの！それで、ドイツ連邦に「リューネン」って都市があつてね……」

（アハハ……。言い訳が苦しすぎる……）

統夜は紬のつつさに出た言い訳を聞いて苦笑いをしていた。

「え!? そんな不吉な街があるの!?!」

「そこはダメだな」

「ああ、卒業旅行ですか!」

しかし、梓は卒業旅行という単語に反応してくれたおかげで、どうにか上手く誤魔化すことが出来た。

どうにか話を誤魔化し、統夜たちは安堵のため息をついていた。

そして、このままティータイムに突入し、卒業旅行の場所をどうするのか話し合いが行われたのだが……。

「……ドバイ！」

「……ハワイに行きたいって言ってなかったか？」

滯の指摘通り、律は以前海外旅行に行きたいという話が出た時、ハワイに行きたいと言っていたのだが、今は何故かドバイと言っていた。

「ヨーロッパ！」

そして唯は、ヨーロッパに行きたいと言っていたのだが……。

『おいおい、ヨーロッパって範囲が広いな……』

唯のヨーロッパがいいという意見に、イルバはすかさずツツコミを入れていた。

「温泉♪卓球してみたい♪」

『だから温泉はパスポート必要ないだろう……』

紬は海外旅行に行きたいという話が出た時から温泉に行きたいと言っており、その時もイルバはツツコミを入れていた。

『それで、統夜はどこに行きたいんだ？』

「んー……！…悩みなあ……。だけど、オーストラリアかな？動物と戯れたいし」

統夜は以前は温泉などと言っていたものの、自身が動物好きなこともあって、オーストラリアに行きたいと提案していた。

「みおちゃんはどこに行きたいの？」

「え、私？ 私は……ロンドン……かな？ 色んなミュージシャンの故郷だし、音楽の歴史もあるし」

澤はロンドンに行きたいと提案し、理由も軽音部らしい理由だった。

「みんな見事にバラバラですね」

前回海外旅行に行きたいという話が出た時も、ほぼ意見はバラバラだったが、今回は見事なまでに意見がバラバラになっていた。

「梓ちゃんはどこに行きたい？」

「へ!? わ、私は卒業しないのでどこでも……」

梓は自分はまだ2年生だからという理由で、意見を出そうとはせず、トンちゃんの餌やりを行っていた。

「……っていうか、いつ卒業旅行に行くことになったんだよ」

卒業旅行に行く前提で話が進んでいることに、澤はツツコミを入れていた。

「そこは流れで……さ」

「すいません、すいません」

「まあ、どこに行きたいくらいは考えてもいいんじゃないのか？」

このような話をするきっかけを作ってしまった唯はひたすら謝罪し、統夜は海外旅行に肯定的な意見を出していた。

「滯ちゃん、行きたくないの？」

「そりゃ、行きたいけど……」

「それじゃあ！卒業旅行に行きたくない人！」

「「「……」」」

「……トーンちゃん♪」

統夜たち4人は反応を示さず、梓は水槽を悠々と泳ぐトーンちゃんを眺めていた。

「決まりだな♪」

「……凄い決め方だな……」

『まったくだ。これが公平な決め方とは思えないがな』

「それじゃあみだくじで決めようよ！私、こう見えてもあみだくじは得意なんだよ」

「なんですか、それ……」

唯は空いた紙でいそいそとあみだくじを作っていた。

「……よし、出来たよ！」

こうして、唯は海外旅行の行き先を決めるあみだくじを作ったのだが……。

「……唯、ちよつと待て」

「ほえ？」

「始める前にそのあみだくじを見せてもらえないか？」

「ふえ!? な、何で!？」

統夜はあみだくじを始める前にその中身を確認しようとするのだが、それを聞いた唯の顔が真っ青になっていた。

「つか、何でそこまで動揺する? やましいことがなければ見せられるだろ?」

「あ……………あうう……………」

唯の顔は真っ青になったままだったが、さらにダラダラと冷や汗をかいていた。

追い詰められた唯の取った行動は……………。

「……………あつ! 逃げた!」

唯は統夜相手に誤魔化せないと判断し、逃げようとしたが、すぐにバランスを崩してしまい、転んでしまった。

その拍子にあみだくじを書いた紙を落としてしまったので、統夜はそれを拾って中身を確認したのだが……………。

「……………やっぱりな……………」

「ああ!」

統夜はあみだくじの中身を見てしまい、唯は焦っていた。

その理由は……………。

『……………全部ヨーロッパと書くとはな。唯にしては賢いことをよく思いついたもんだ

ぜ』

あみだくじには全てヨーロッパと書かれており、どれを選んでもヨーロッパになってしまう仕組みになっていた。

「……八百長ですか……」

唯の不正がわかり、梓はジト目で唯のことを見ていた。

「おい、唯！ インチキしてたのかよお！」

「そうなの!? 唯ちゃん、凄い！」

「エへへ……」

「照れるな」

律は唯の不正に抗議し、紬は何故か唯をほめていた。

そして、それに照れる唯に滯がツツコミをいれていた。

「いやあ、ちよつと間違っちゃって……」

唯は必死に言い訳をするが、不正を働いた唯にとある罰が下されることになった。その罰とは……。

「……ふえーん！」

唯は顔に妙な顔が書かれた紙を貼られていた。

「しばらくそうしているといい」

この妙な顔が書かれた紙を貼ることこそが、唯に与えられた罰であった。

「唯」

滯は唯を呼ぶと、滯の方を向いたタイミングで写真を撮っていた。

「「「「ぶっ！」」」」

その光景がおかしかったのか、唯を除く全員が吹き出して笑っていた。

「そろそろどこに行くかをちゃんと決めないとな」

律はこれ以上のおふぎけはなしで、卒業旅行の場所を決めるよう話を切り出した。

「多数決は？」

「全員の意見がバラバラだから無理だな」

滯は多数決で決めることを提案したが、それは困難であると思われた。

「ねえねえ！だったらトンちゃんに決めてもらったら？」

「トンちゃんに？」

「うん！」

唯は卒業旅行の場所をトンちゃんに決めてもらったらと提案していた。

その方法は、トンちゃんの水槽に卒業旅行の候補の数だけカップを置き、その前に国

名が書かれた紙を置いた。

トンちゃんがどのカップを触るかによって卒業旅行の場所を決めようということであつた。

唯の候補であるヨーロッパのカップだけはかなり小さかつたが、それは、先ほどズルしたペナルティーだつた。

最初はティーカップに興味を示さなかつたからか、トンちゃんは水槽の上の方を泳いでおり、徐々にいつものように泳ぐようになっていた。

統夜たちはそんなトンちゃんの様子をジツと眺めていた。

しかし、トンちゃんはティーカップには触ろうとせず、ただ時間だけが過ぎていった。そして……。

「あー!!と、トンちゃんが……ヨーロッパの前に立ってる!」

唯はトンちゃんに動きがあつたのを見逃さず、現状を報告していた。

確かにトンちゃんはヨーロッパのカップの前に立ってはいたのだが……。

「……だけどこれ、ロンドンを触ってないか?」

律の指摘通り、トンちゃんが触っていたのは、ロンドンのティーカップだつた。

「「ええ!」」

まさかの展開に、唯と滯は驚きを隠せずにした。

「それじゃあ、卒業旅行はロンドンってこと……?」

「ああ、そうなるな」

「ええ!」

卒業旅行の場所がロンドンに決まり、唯は不満そうなのだが……。

「いいじゃないですか。ロンドンだってヨーロッパですし」

「え、そうなの!?!……っていうか、どこからどこまでがヨーロッパなの?」

唯はヨーロッパに行きたいと言っておきながら、根本的な部分を理解していなかった。

『おいおい。よくそれで大学に合格したな……』

そんな唯に、イルバは心底呆れていた。

「滯、ロンドンだぞ!」

「良かったね、滯ちゃん!」

「……や……」

「……? 滯?」

「やったああああああああああ!!」

滯はロンドンに行けるのがよほど嬉しかったのか、このように叫んで喜びを表していた。

「ロンドン……！やった！ロンドン！」

「アハハ、漕、落ち着けて」

「本当にロンドンに行きたかったんだねえ。みおちゃん」

「ロン……ドーン！」

漕は全身で喜びを表現しており、それだけロンドンに行きたかったということが理解出来た。

こうして、統夜たちは卒業旅行でロンドンへ行くことが決定したのであった。

……続く。

次回予告

『卒業旅行の場所が決まったのはいいが、他にも決めなきやいけないことが山積みだな。さて、これからどうなることやら。次回、「企画」。ま、決めなきやいけないことはまだ

あるんだがな」

第105話 「企画」

唯たちの受験が無事終わり、統夜たちは不意に卒業旅行のことを考えるようになった。

どこに行きたいかを話し合った結果、統夜たちはロンドンへ行くことが決まったのであった。

「……アフタヌーンティーが出来るね♪」

「え？ロンドンでお茶が飲めるの？」

卒業旅行の場所が決まり、統夜たちは再びティータイムを行っていたのだが、紬が不意にアフタヌーンティーの話を出していた。

「ロンドンといえば紅茶の国でもあるからな」

「すごい！私たちにピッタリだね！」

毎日のようにティータイムを行っている統夜たちにとってはロックの国であり、紅茶の国であるイギリスのロンドンにはピッタリな場所であると、唯は感激していた。

「6人だから、部屋は2つかしら？」

「ちようど3人ずつでいけるからな」

「おい、ちよつと待て。俺は男なんだから1人部屋がいいんだが」

「ダメよ! 3部屋にしちやったらその分予算もかかっちゃうじゃない」

「安心しろ、統夜。梓とは相部屋にしてやるから」

「……まあ、そういうことなら仕方ないか」

統夜は男であるため、部屋は相部屋ではなく1人部屋を希望していたが、統夜だけ1人部屋となると、その分予算もかかってしまうため、紬に却下されてしまった。

そこを理解した統夜は、渋々2部屋を3人ずつで割ることを承認していた。

「へ? ちよ、ちよつと待ってください!」

梓は自分も卒業旅行に行く前提で話が進んでいることに驚いていた。

「梓ちゃんも行くでしょ?」

「いえいえ。先輩たちの卒業旅行ですから!」

梓は自分はまだ卒業しないため、先輩たちと卒業旅行に行くということに抵抗があった。

「梓ちゃん、パスポート失くしちゃった?」

「ありますけど、私には学校が……」

「期末テストの後に休みがあるだろ?」

「……な、何!? 期末テストだと!」

魔戒騎士としての使命があるため、普段から勉強していない統夜は、期末テストというキーワードに過剰に反応してしまった。

「3年生は期末テストはないから」

「統夜、話が進まんから黙っててくれ」

「す、すいやせん……」

3年生は卒業を間近にしているため期末テストはないのだが、統夜はテストというフレーズに過剰に反応したせいか、律に怒られてしまい、しょんぼりとしていた。

「……た、確か5連休になるはずで……」

「じゃあ、なんの問題もないじゃん！」

「で、ですけど……」

「私はあずにゃんと一緒にいいよ！あずにゃんがいてこそその軽音部なんだし！」

「……」

唯の力説を聞き、梓は行きたいという気持ちと、自分に行かない方がいいという葛藤と戦っていた。

「梓、行きたくないなら無理強いはしないぜ。だけど、俺は梓と一緒にいいと思ってる」

「わ、私も行きたいです！行きたいですけど、私がいたら邪魔になりませんかね？」

「やれやれ……。梓、俺たちってそんなに遠慮し合う仲だったか？俺たちは梓と一緒にな

のがいいんだから、遠慮されるのは寂しいぜ」

「……」

恋人である統夜の説得はかなり効果的だったのか、梓は真剣な表情で考えていた。

そして……。

「……私も、皆さんと一緒にいきたいです！」

「「やったあ!!」」

梓も行くことを決意し、それを聞いた唯と律はハイタッチをしていた。

「で、でもその前に、おうちに確認をしないと……」

いくら行きたいと思っても親の承認がなければ行けないため、梓は携帯を取り出して、親と連絡を取っていた。

電話をかけるため梓は音楽準備室を出たのだが、その様子を見ていた唯たちは互いに顔を見合わせていた。

そして統夜を除く4人はとある行動に出ていた。

すると……。

『「……ありがとう！お母さん！」』

梓の声が扉越しに聞こえてきた。

その声色は明るく、どうやら、承認が下りたようであった。

「……オホン！母もいいと言ってくれたので……」

梓は音楽準備室に戻り、結果を報告しようとしたのだが……。

「……そう、ロンドン！」

「うん、みんなで卒業旅行に行くことになったのよ」

「あつ、もしもし、ママ？」

「お母さん！一生のお願い！」

「……うん、律も一緒だから大丈夫」

どうやら唯たちもそれぞれ親に連絡を取り、卒業旅行へ行く許可をとっていた。

「ホントに？ありがとー!!」

「それじゃねえ、バイバーイ！」

親の承認を得た唯たちは一斉に電話を切った。

こうして無事に卒業旅行へ行けることになり、唯たちは笑みを浮かべていた。

（……私がしつかりしよう）

梓は自分が中心になって卒業旅行を進めていこうと決意していた。

一方、統夜は……。

（……今日部活が終わったら、イレス様に許可をもらわないとな……）

統夜だけが卒業旅行に行けるかどうか不透明であり、この部活が終わったらイレスに

卒業旅行の許可をもらおうと考えていた。

こうして、卒業旅行へ行くことが決まったところで、この日の部活は終了した。

部活が終わると、統夜は番犬所へ直行し、イレスに卒業旅行の許可をもらおうとしていた。

「……お、統夜。来ましたね」

「はい、イレス様」

番犬所に入るなり、先に魔戒剣の浄化を済ませ、それから統夜はイレスに挨拶をしていた。

都合のいいことに、番犬所には戒人の姿もあった。

「……イレス様。いきなりで申し訳ありませんが、相談がありました」

「相談？もしかして、この前話していた卒業旅行のことですか？」

「ええ、今日軽音部のみんなと行くことが正式に決まりました」

イレスは卒業旅行に行く可能性があると統夜から聞いていたため、統夜の相談が卒業旅行に関するのだということとは察していた。

「いつ行くのですか？それに場所も……」

「2月×日から5連休が入るんですけど、その5連休で行くことになりました。場所はロンドンです」

統夜は卒業旅行に行く日と場所をイレスに報告していた。

「ロンドンですか、いいですね。それに、×日ってことは来週の終わりあたりですかね？」

「そうですね。それで、俺もぜひその卒業旅行に参加したいのですが……」

「……統夜、行ってこい」

イレスが許可を取る前に、戒人が統夜の卒業旅行を後押ししていた。

「戒人……いいののか？」

「もちろんだ。だって統夜にとつてはその旅行が最後の思い出になるんだろ？5日間という期間は長いが、俺なら問題はないさ。だから、統夜。お前は最後の思い出、悔いのないように作ってこい！」

「戒人の言う通りですよ。それに、こんなこともあろうかと思いましたが、元老院から応援を要請したのです」

イレスは、統夜が卒業旅行に出かけるであろうことを見越して、既に元老院へ応援を要請していたのであった。

「元老院から?」

「まさか……」

元老院へ応援を要請と聞いた瞬間、誰が来るのか統夜には思い当たる節があった。

「……そのまさかだぜ!」

統夜が元老院からの応援に来る人物のことを考えていると、番犬所の入り口から声が聞こえてきて、2人の青年が番犬所に入ってきた。

「……よう、統夜、戒人。元氣そうだな」

「久しぶりですね。統夜君、戒人君」

「れ……レオさん!」

「それにアキトまで……」

番犬所に現れた元老院からの応援こそ、統夜とは親交の深い魔戒騎士と魔戒法師の2つの顔を持つ布道レオと、統夜にとっては盟友である魔戒法師のアキトであった。

「イレス様から話は聞きました。統夜君は卒業旅行に行きたいんですよね?」

「はっ、はい」

「卒業旅行かあ。俺も行ききてえなあ。でも、俺英語はからきしだし、別にいいけどな」

アキトも卒業旅行に行きたいといきなりとんでもないことを言うが、すぐにその発言を撤回していた。

「ま、そういうことだから、思い切り楽しんで来い」

「ええ。あなたのすべき仕事は僕とアキトで引き受けます。だから、統夜君はぜひ最後の思い出を作ってきてください」

「アキト……レオさん……」

統夜は、自分のために協力をしてくれるアキトやレオに心から感謝をしていた。

「……あつ、あと！お土産は忘れるなよ！」

「もちろん。みんなへのお土産は必ず用意するから」

統夜は言われるまでもなく、イレスタちにお土産をかうつもりでした。

「統夜、そういうことですので、心置きなく卒業旅行に行ってください」

「イレス様……本当にありがとうございます！」

統夜は卒業旅行に行くことを許可してくれたイレスに非常に感謝しており、深々と一礼をしていた。

こうして、卒業旅行に行く許可をもらった統夜は、番犬所を後にした。

この日は指令がなかったため、せめて街の見回りは頑張ろうと気合を入れて街の見回りを行っていた。

※※※

翌日、この日は梓も学校が休みだったため、全員で旅行代理店に行くことになった。

「……いらつしやいませ。ご旅行の相談ですか？」

統夜たちを対応していた女性店員は、百点満点な笑顔で接客を行っていた。

「は、はい！」

普段はこのような場所を訪れる機会はないのか、律は少しだけ緊張していた。

「ロンドンで5日間」

「ロンドンで3泊5日ですね？」

「え？3？減ってない？」

「行き帰りで1日使うから」

紬はなぜロンドン行きが3泊5日になるのか簡単に説明していた。

「あー、うん！」

「知ってたし！」

唯と律はなぜ3泊5日なのか知らなかったのだが、意地を張って知ってる風に装っていた。

統夜はそんな2人の様子を見て苦笑いをしていた。

「ロンドン市内のみでよろしいですか？」

「いいんだっけ？」

「ああ、いいんじゃないのか？」

「いいと思います！見る場所はたくさんあるので！」

梓はロンドンのガイドブックを見ながらロンドン市内のみを見て回ることに賛同していた。

律は梓の見ていたガイドブックを見ると……。

「あー！あたし、これ乗りたい！」

「これ、美味しそうだねえ！」

「はい！」

「紅茶屋さんにも行こうね♪」

「これ、格好いいな！」

「わ、私はジミヘンとかジミー・ペイジの住んでた家に行きたい！」

「あ、いいですねー！」

「あと、アビーロードもー！」

統夜を除く5人は、店員そつちのけでどこへ行きたいか盛り上がっていた。

（おいおい、それじゃここに来た意味がないだろうが……）

店員そつちのけで盛り上がる唯たちに、統夜は呆れていた。

店員もそんな唯たちに困惑していた。

「あ、あの……。それでしたら、全て自由行動の個人旅行がオススメですよ？」

旅行代理店の旅行は、プランに沿って行動するため、あちこち行きたいところがあるなら、個人旅行の方がいいと店員は勧めていた。

「え!? さすがにそれは……」

「じゃあ、それでお願いまーす!!」

律は勝手に個人旅行で卒業旅行を行っていくことを決めていた。

「ええ!?」

「やれやれ……。やつぱりこうなるか……」

梓は律の決断に驚き、統夜はそんな律の決断を予想して頭を抱えていた。

こうして、統夜たちは旅行代理店に頼ることなく、自分たちで旅行のプランを考えることになった。

翌日、この日は学校であり、放課後に音楽準備室で紅茶を飲みながら旅行のプランを考えることになった。

そんな中、唯はオカルト研の人に頼まれたと話し、ネツシーを見たいと言い出していった。

「……という訳なんだけど予定に入れられないかな？」

「おいおい、ネツシーって……」

唯の唐突な提案に統夜は呆れていた。

「ネツシーですか？……さすがにネス湖は遠いですね……」

梓はガイドブックを参考に旅行のプランを考えていたのだが、ネス湖はかなり距離があるため、プランに組み込むのは困難であった。

「それに、ネツシーっていないって言うらしいじゃない」

その場にはさわ子もおり、さわ子はネツシーは存在しないと話をしていった。

「まあ、ホラーがいるくらいだからネツシーがいてもおかしくはなさそうだけだな」

統夜は魔戒騎士として日夜ホラーと戦っているからか、ネツシーのようなUMAの存

在には肯定的だった。

「ええ?! それじゃあネツシーっていうのはオカルト研ギャグ?! レベル高すぎてわかんないよおー!」

「まあまあ、平沢さん♪」

律は唯をリラックスさせようと唯の肩を揉んでいた。

「皆さん、他に行きたいところはないですか?」

「ないです♪」

梓の問いかけに、唯と律は揃って答えていた。

「それじゃあ、これを元に行程をまとめてきます」

「梓、頼んじやっても大丈夫なのか?」

「はい! 私、こういうの好きなんです!」

「だけど、1人でやらせるのは悪いから、俺も手伝うよ」

統夜は梓1人に旅行のプランを考えさせるのは忍びないと思い、手伝うことを提案したのだが……。

「いいんですよ。それに、統夜先輩は卒業旅行に行く前まで魔戒騎士のお仕事で忙しいですよ? 私に任せてください!」

統夜は、卒業旅行に行く前はイレスに多くの仕事を与えられたため、休む時間は少な

く魔戒騎士として働いていた。

梓は統夜の申し出自体は嬉しかったのだが、旅行のプランを一緒に考えることで無理をさせたくなかったため、統夜の申し出を断ったのであった。

「……わかった。それじゃあ、悪いけど、頼むな」

統夜はそんな梓の気持ちを汲み取ると、旅行のプランを考えるのは梓に任せることにした。

「はい！任せてください！」

「梓ちゃん、紅茶のお代わりはいかが？」

「あつ、大丈夫です。もうお腹パンパンなので」

「あずにゃんが予定立てるとおやつの時間なくなっちゃうんだよなあ……。自由行動なんだから、自由に行動すればいいのに……」

『おいおい、それじゃあ旅行として成り立たないだろう？おやつなんてどつかで適当に食べればいいだろ』

イルバは唯の眩きを見逃さず、このようになだめていた。

「……ハッ！確かにそうだね！イルイルの言う通りだ！」

『だからお前さんは何度も何度も俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

イルバは唯が自分をあだ名で呼ぶことを今でも気に入らず、相変わらずなやり取りを

していた。

そんな中、梓は帰り支度を始めていた。

「あれ？梓ちゃんはもう帰るの？」

「はい！皆さんは帰らないんですか？」

「あつ、俺はそろそろ番犬所に向かわないと……」

「待てい!!」

律はこのまま帰りそうになっていた統夜の首根つこを掴み、帰り支度をしようとしていることを阻止していた。

「……梓へのプレゼントはどうするつもりだよ」

律は梓にバレないように、小声で耳打ちをしていた。

「………！そうだった!」

「?どうしました?」

梓はそんな統夜と律を訝しげに眺めており、首を傾げていた。

「梓、悪いけど、先に帰っててくれないか？俺たちはまだちよつとやる事があつてな」

「は、はあ……」

「梓ちゃん、これ、クッキー持っていて!食器は私たちで洗っておくから!」

紬は今日のティータイムのおやつであるクッキーの余りを梓に渡していた。

「あつ、ありがとうございます。それでは、失礼します」

梓は統夜たちにペコリと一礼をすると、音楽準備室を後にした。

「……………さて」

「……………ここからが本番……………やで♪」

梓がいなくなつたことを確認すると、律は今日決めるべき本題を切りだそうとするのだが……………。

「何の?」

さわ子がまだ音楽準備室にいることを忘れており、統夜たちは驚いていた。

「うわあ!さわちゃん!いたのかよ!」

「ちよ、ちよつとお!」

「つまらないものですが♪」

紬はさわ子に余つたクツキーを差し出し、律はさわ子を押し出して音楽準備室から追放しようとしていた。

「あれえ?さわちゃん、今日はデートの予定があるんじゃないやなかつたっけ?」

「そんな予定ないもん!」

律の言葉が気に入らなかつたのか、さわ子はぶうつと頬を膨らませていた。

「またまたあ♪」

さわ子は統夜たちに半ば強引に追放される形で、音楽準備室を後にすることとなってしまった。

「……………」

「改めて、あずにゃんへのプレゼントを考えないとね！」

さわ子もいなくなつたところで、今日決めなければいけない本題の話し合いを始めた。

「梓にはかなり世話になつてゐるからな……………」

「梓への感謝の気持ちをあたしらなりに表現するとなると……………」

「劇とか？」

「それは勘弁してくれ!!」

統夜はもう劇をやりたくないのか、否定的だった。

「……………んー、他にないかなあ？」

「劇は嫌だが、せめてきよk……………」

「あーっ!!あずにゃん、むつたんを忘れてる!!」

統夜が意見を出そうとしたその時、唯は梓の忘れ物に気が付いていた。

唯のいうむつたんとは、梓愛用のギターである「ムスタング」のことであり、梓自身が命名した名前であった。

「ムスタングだろ？」

「濡ちやんのはエリザベスよね？」

「……／＼／＼／」

エリザベスというのは、濡愛用のベースのことである。

この名前を命名したのは唯なのだが、なんだかんだでこの名前が気に入ったのか、濡自身も時々エリザベスと呼ぶようになっていた。

濡はそれが恥ずかしいと思ったのか、頬を赤らめていた。

「あ、そうだ！むったんに聞いてみようよ……むったくん♪」

唯はムスタングことむったんの入ったギターケースの前に歩み寄り、その前でしゃがんでいた。

「あずにゃんへのプレゼント……。何がいいと思う？……なくんちやって♪」

唯は梓のギターケースを軽くツンツンとつつくのだが、その衝撃で、ギターケースが倒れそうになっていた。

「あ、危ねえ!!」

「へ!?!う、うわあ!むったん!!」

梓がいない中、ギターを傷つけるわけにはいかなかったため、唯は咄嗟にむったんを抱きかかえると、そのまま倒れ込み、頭を打ってしまった。

その時、むったんは軽く音を鳴らしていたのだが……。

「……ハッ!!」

唯はその音を聞いて何か閃いたようであった。

「……む、むったんが……」

「「ん?」」

「曲つて言った……」

「しまった!打ちどころが悪かったのか!」

「北極?」

唯のこの提案を、統夜たちは理解しておらず、紬に至ってはボケをかましていた。

「違うよ!曲……」

「芸?」

「じゃなくて、曲……」

「たん♪」

律と紬はボケを繰り返すため、話がなかなか進まなかった。

『おいおい。要するに梓のための曲を作るってことだろ?』

イルバは唯の曲という言葉を聞いて、ここまでのことを分析していた。

「うん!そうだよ!それに、憂も言ってた!あずにゃんは、軽音部と、軽音部の音楽が大

好きだつて！」

唯は起き上がりながら何故曲という案がいいのか理由を話していた。

「梓ちゃんのための曲……」

「いいじゃん！それ！」

「つたく……。曲つて案は俺が最初に言おうとしたのに、美味しいところを持つてきやがつて……」

統夜は梓に曲をプレゼントするという案をだそうとしたのだが、その前に唯に止められてしまい、今までそれを言うことが出来なかった。

「いいよね！先輩が後輩に向けて贈る曲なんて、すつごく格好いいよね！」

「ああ。それなら先輩らしいし、俺もいいと思ったんだよ」

「なあ、唯。どんな曲にしよう？」

「やつぱり、先輩が後輩に贈る曲だからね……。バーン！として、ドーン！として、ドツカーン！だよ」

「……わからん」

『おいおい、そんな擬音語だらけじゃわかる訳ないだろう？』

唯のイメージはあまりに伝わりにくいため、イルバはこのように唯をなだめていた。

「……要するにスケールの大きい曲つてことか？」

統夜は擬音語からこのように察していたのだが……。

『わ、わかるのかよ!?!』

唯の擬音語だけでここまで察した統夜にイルバは驚愕していた。

「そうだよ！今までにない、スケールの大きい曲を作りたいんだよ！ふんす！」

唯は自分の作りたい曲のイメージを伝えると、何故か誇らしげにしていた。

「なあ、みんな。曲についてなんだが、実はな……」

統夜は梓に贈る曲について案があり、それを話そうとしたのだが……。

『待て、統夜！誰か来るぞ！』

イルバは階段を上がる音を聞き取り、誰かがここへ来ることを告げていた。

「もしかして、あずにゃん？」

「その可能性はあるな。……ここは任せろ」

統夜はむったんの入ったギターケースを手にとると、そのまま音楽準備室の入り口まで移動し、ドアを開けた。

すると……。

「……あつ、統夜先輩」

梓はドアを開けようとしたら統夜が姿を現したことに驚いていた。

「梓、もしかしてこれを取りに来たんだろ？」

「はい。忘れちゃったのを思い出しまして……」

「ま、忘れることもあるよな。ほら、もう忘れるなよ?」

統夜はむったんの入ったギターケースを梓に手渡していた。

「あつ、ありがとうございます。先輩たちはまだ何かやってるんですか?」

「まあな。実は、俺たちのクラスでさわ子先生へのサプライズを考えていてな。今、それについて話をしてたんだよ」

統夜は今話していたのとは違うサプライズの話を選び、梓に怪しまれないよう仕向けていた。

「へえ、そうなんですか!それはさわ子先生も喜びますね!」

「だから、この話はさわ子先生には内緒だからな?」

「はい!もちろんです!」

「それじゃ俺たちはもうちよつと話し合いをしてから帰るから、梓は先に帰っててくれ」

「わかりました!失礼します」

梓は統夜にペコリと一礼をすると、そのまま階段を降りていった。

「……さてと」

どうにか誤魔化すことに成功した統夜は、音楽準備室に戻ってきた。

「……統夜、どうだった？」

「ああ。さわ子先生へのサプライズの話を持ち出して、どうにか誤魔化したよ」

サプライズの話をしているということに対しては嘘ではなく事実なので、どうにか誤魔化すことが出来たのであった。

「イルバが気付いてくれたおかげで助かったぜ」

『まあな。ここで梓にバレてしまったら、サプライズは台無しだからな』

イルバは、統夜たちの気持ちを汲み取り、自分なりに統夜たちのサポートをしようと考えていたため、このようなアシストを行うことが出来たのであった。

「よっしゃあーしたら、梓への曲のアイデアをみんなで考えようぜ！」

「『『おお!!』』」

こうして統夜たちは、梓へ曲をプレゼントすることを決めて、その曲について話し合っていた。

この日だけでは上手くまとまることはなく、各自で考えてくることになり、この日は解散となった。

統夜は唯たちと解散した後、番犬所に立ち寄り、イレスから与えられた仕事をこなしていたのであった。

こうして、卒業旅行や梓へのサプライズに向けて、それぞれが動き始めたのであった

……。

……続く。

——次回予告——

『いよいよこの時が来たな。俺様も海外は初めてだからな。いつたいていどうなることやら……。次回、「渡英」。放課後ティータイム。いざ、ロンドンへ!!』

第106話 「渡英」

統夜たちは卒業旅行を企画し、もうじき訪れる5連休を利用してロンドンへ行くことになった。

唯たちは親の承認を得て、統夜は番犬所への承認を得ることが出来たため、卒業旅行に向けて動くことになっていた。

それと同時に統夜たち3年生は、唯一の後輩である梓に曲をプレゼントしたいということを考えていた。

どのような曲にするかはまだ決まっておらず、各自で考えることにした。

他のメンバーがなかなかどのような曲にするか決まらない中、統夜はある程度のイメージは出来ているのか、空いた時間を使ってパソコンでその曲を作っていた。

各自がそれぞれの時間を過ごす中、いよいよ卒業旅行の前日を迎えていた。

統夜はこの日、いつものようにエレメントの浄化を行っていた。

明日から5日間も桜ヶ丘をあけるため、統夜はいつもよりも気合を入れて魔戒騎士としての仕事に臨んでいた。

幸い今日は登校日ではないため、統夜は午前中からお昼にかけてじっくりとエレメン

トの浄化を行い、途中昼食を挟んでから再びエレメントの浄化を行っていた。

エレメントの浄化を終えると、統夜は番犬所を訪れた。

「統夜、明日はいよいよ卒業旅行ですね」

統夜はいつものように狼の像の口に魔戒剣を突き刺して剣の浄化を行うと、それが終わったタイミングでイレスが声をかけてきた。

「はい、そうですね」

「明日は何時に出発なんですか？」

「明日は始発の電車に乗って空港へ向かうので、6時にみんなと待ち合わせをしています」

「6時ですか、早いですけど、統夜はそれくらいには起きてますもんね？」

「はい。毎日それより早く起きてエレメントの浄化を行ったり鍛錬をしますので、早起きは苦ではないです」

統夜の魔戒騎士としての朝は早く、普段は5時〜6時の間に起きて、鍛錬を行い、それからエレメントの浄化へと向かう。

そのため、統夜にとって早起きは苦ではなかったのであった。

「統夜、今日は指令はありません。ですから、この後は直ちに帰宅し、旅行の準備をするといいでしょう。旅行の荷物全部を魔法衣に入れるわけにはいけませんからね」

魔法衣の裏地は内なる魔界に通じており、統夜はそこに魔戒剣やギターケースを入れたりしていた。

魔法衣の裏地の中に入れるものは最低限度に留めておくと統夜は決めており、他の魔戒騎士たちの場合は魔戒剣やホラー討伐に使う道具をしまう程度に留めていた。

イレスの言う通り、旅行の荷物まで魔法衣の裏地に入れてしまうと、いざ旅行先でホラーと出くわした時になかなか魔戒剣が取り出せず、戦いに支障が出る可能性がある。た。

「ありがとうございます、イレス様。ありがたく、その申し出を受けさせていただきます」

統夜にとっても明日の旅行の準備をさせてくれるというのはとてもありがたいことであり、深々とイレスに一礼していた。

「統夜、楽しんで来てくださいね♪それと、お土産も忘れないように♪」

「ええ、もちろんです！」

イレスはちやつかりお土産をかうよう要求していたが、統夜はそのつもりだったのか嫌な顔一つしなかった。

「……あつ、そうそう。統夜、気を付けて下さいね。これは噂なのですが、イギリスの方にはホラーとは異なる魔獣がいるみたいなのです」

「ホラーとは異なる魔獣……ですか？」

『まあ、その可能性はあるかもな。イギリスにもホラーはいるだろうが、ホラー以外の魔獣がいたってなんの不思議もないからな』

統夜たち魔戒騎士は日頃からホラーという非現実劇な怪物と日夜戦っているため、ホラー以外の怪物がいたとしてもおかしくはないとイルバは推測していた。

統夜もそう思っていたのか、ウンウンと頷いていた。

「仮にホラーではない魔獣がいて、遭遇した場合は、討伐よりも身の安全を最優先して下さい。倒せるならば倒しても構いません」

「わかりました。その時は、守りし者として、最善の行動をとります」

本当にホラーではない魔獣と出くわすことはないかと内心では思っているながらも、もしそうなった場合は然るべき対応をすることを統夜は決めていた。

「頼みましたよ、統夜」

「ありがとうございます、イレス様。それでは、失礼します」

統夜はペコリとイレスに一礼すると、番犬所を後にした。

番犬所を出た統夜は、家に帰る前に以前唯たちと訪れた桜ヶ丘某所にある桜ヶ丘1番のデパートのような建物だった。

統夜がここを訪れたのは、旅行に必要なものを購入するためである。

「……………まずはバッグを見るか……………」

統夜がまずチェックしたのは、キャリーバッグの売り場だった。

《……………おい、統夜。お前さんはそんなに荷物はないだろ？ だったらそんなでかいバッグは必要ないんじゃないか？》

（んー……………！ 確かにそうなんだけど、もしものことを考えて日本食を買って入れとこうって考えてたんだよな）

統夜はキャリーバッグを買おうと考えていたのは、自分のためではなく、唯たちのためにここに売ってる日本食を多めに入れておこうと考えてたからであった。

《ま、そういうことならわかったが、相変わらず唯たちには甘いな、お前は》
（アハハ……………そうかもな）

統夜は1番サイズが手頃なキャリーバッグをチョイスし、さらにいざという時用の日本食も購入していた。

統夜が買い物を終えて、建物を出ようとしたその時だった。

「……………あれ？ 統夜さん？」

統夜は突如声をかけられたので足を止めた。

「……………おう、憂ちゃんか。こんなところで会うとは珍しいな」

統夜に声をかけたのは憂であり、このような場所で会うとは思っていなかったのか驚

いていた。

「そうですね。統夜さんは明日の旅行の買い物ですか？」

「ああ、そんなところかな」

統夜はキャリーバッグを購入していたため、旅行の買い物に来たということは一目瞭然だった。

「もしかして、憂ちゃんも唯のための買い物か？」

「はい。おおよその物は揃ってるんですけど、いざという時用に日本食を買っておこうかなと思います……」

「アハハ……。どうやら、考えてることは一緒みたいだな」

「あれ？もしかして、統夜さんも日本食を買ったんですか？」

「ま、そういうことになるかな」

日本食を買ったというのは隠すようなことではないため、正直に話していた。

「やつぱりいざという時のために備えることは大事ですよね！」

「そうだな。俺もそう思うよ」

統夜と憂はありきたりな会話を交わし、共に笑みを浮かべていた。

「それじゃあ、俺はこれから明日の準備をしなきゃいけないし、そろそろ帰るな。それじゃあ、また……」

統夜は憂と別れて、家に帰ろうとしたのだが……。

「……あつ、統夜さん！待って下さい！」

憂はどうやら統夜に用事があるようで、呼び止められた統夜は足を止めて、憂の方を見ていた。

「?どうした、憂ちゃん？」

「あの、統夜さんたちは、梓ちゃんのために何かしようとしてるんですね

？」

「!?な、何のことだ？」

いきなり憂から核心を突いた質問が飛び交い、統夜は驚いていたが、どうにか平静を保っていた。

「クスツ、隠さなくても大丈夫ですよ♪お姉ちゃんが梓ちゃんの好きそうなこととか物はないかって聞いた時にそうかなって思ったんです」

「さ、流石は憂ちゃん。鋭いな……」

憂は唯たちが何をしようとしているのかは知らなかったものの、梓のために何かをしようとしていることは理解していた。

「なあ、憂ちゃん。このことは、梓には……」

「もちろん、言いふらしたりはしませんよ。私も、梓ちゃんの喜ぶ顔が見たいので♪」

梓の同級生である憂に、サプライズのことをバレてしまったのだが、憂は梓に他言するつもりはなく、統夜は安堵していた。

「そう言ってもらえると助かるよ。それじゃあ、悪いけど、よろしく頼むな」

統夜は憂に改めて口止めをお願いすると、憂と別れ、そのまま帰路についた。

家に帰った統夜は、明日の卒業旅行に備えて、荷物の準備を行っていた。

着ていく服は最低限に留め、それ以外の荷物としては、先ほど購入した日本食をキャリーバッグの中に入れていった。

こうして、旅行に必要なものをキャリーバッグに入れることが出来たのだが、キャリーバッグには少しばかり余裕があった。

「……これでよし」と

『おい、統夜。旅行の荷物にしては随分と少なくないか?』

「そうか?こんなもんだと思うけどな」

『まあ、足りないものは現地で仕入れれば問題はないか』

「その必要はない気はするけどな」

統夜はイルバと共に、荷物のチェックを行うと、キャリーバッグをわかりやすい場所へ移動していた。

「さて、とりあえず今日は明日に備えて寝るとしますか」

『ああ。そうした方が良さそうだな』

旅行の準備も整ったところで、統夜は明日に備えて休むことにした。

※※※

そして翌日、統夜はいつもより早く起床し、出かける準備を整えると、待ち合わせの30分前に家を出た。

10分ほど歩くと統夜は待ち合わせの駅に到着したのだが……。

「……お、3人とも、早いな」

既に待ち合わせの駅には唯、律、滯の姿があった。

梓はまだ来ていないのだが、紬とは紬の最寄り駅で待ち合わせており、あとは梓が来たら始発の電車に乗り、紬の最寄り駅まで向かうことになっていた。

「あつ、やーくん！おはよおー！」

「おう、おはよう」

『……やれやれ、お前らも楽器持参なんだな』

イルバは唯のギターケースや漕のベースケースを見て、苦笑いをしていた。

「あれ？もしかして統夜もなのか？」

「ああ。魔法衣の中に入れてはあるけどな」

「むうう！やーくんずるい!!」

統夜がいつものように魔法衣の裏地にギターケースをしまっていることが気に入らなかつたのか、唯はぶうつと頬を膨らませていた。

「アハハ……まあまあ」

漕は苦笑いをしながら唯をなだめていた。

「……おつ、梓も来たみたいだぞ！」

統夜と唯がこのようなやり取りをしている間に梓も待ち合わせの場所に現れた。

『……どうやら、梓の奴もギターを持って来たみたいだな』

梓も、唯や漕のようにギターケースを持ってきていた。

梓は統夜たちの姿を見つけると、ぱあつと表情が明るくなり、統夜たちに駆け寄っていった。

「皆さん！おはようございますー！」

「おう、梓。おはよう」

「梓もギターを持ってきたんだな」

「はい！先輩たちは持つてくるのかな？と思いましたので」

梓は最初はギターは持つていかないと考えていたのだが、統夜たちは全員楽器を持つてくるだろうと予想したため、持つていくことにしたのであった。

「ぐ、偶然誰か有名なミュージシャンに会ったら、サインもらいたいと思ってな！」

滯がベースを持つてきた理由は、有名なミュージシャンに出会えたらサインをしてもらいたいからという理由であった。

『なるほど、それは滯らしい理由だな』

イルバは滯がベースを持つてきた理由に納得し、カチカチと音を立てながら笑みを浮かべていた。

「さて、とりあえずムギ以外は揃ったことだし、ムギの駅まで行こうぜ」

紬以外の全員が揃ったため、統夜たちは、数分後に来た始発の電車に乗り込み、紬の最寄り駅へと向かうことになった。

統夜たちは電車内で忘れ物がないかを確認し合つて過ごしていた。

統夜たちが待ち合わせた駅から紬の最寄り駅までは二駅程であり、時間的には10分程度であった。

10分ほど電車で揺られ、紬の最寄り駅に到着した統夜たちは、電車を降りると、紬が待っているであろう改札まで移動した。

改札まで到着すると、そこで紬は待っていた。

「ムギちゃん！おはよお！」

「……みんな！おはよお！」

唯が紬に挨拶をすると、紬はおっとりとした笑顔で挨拶を返した。

そんな紬は唯のギターケースが目についたのか、そのギターケースを見ていると……。

「あーっ!!ずるい！私も持って来れば良かったあ！」

紬はキーボードを持参しておらず、ギターを持ってきた唯たちが羨ましかったのか、紬はふうつと頬を膨らませていた。

「……あら？統夜君はギターを持ってきてないのね？」

「いや、俺は……」

早朝でも人が行き渡っているため、統夜はギターは魔法衣の裏地の中だということを公言出来なかった。

なので、統夜は魔法衣をポンと叩いてこの中にあることを伝えていた。

そのことを汲み取った紬は……。

「ずるい！統夜君もずるい!!」

魔法衣の中にギターをしまっている統夜がずるいと思ったのか、紬は再びぷうつと頬を膨らませていた。

こうして全員が揃ったところで、統夜たちは、紬の最寄り駅近くのバス停から、某国際空港へと向かうことになった。

紬と合流してから数分後にはバスが到着し、統夜たちはバスのトランクにそれぞれのキャリーバッグを入れ、バスに乗り込んだ。

そしてバスは発進し、某国際空港へと向かっていった。

※※※

某国際空港に到着すると、まだ暗かった空はすっかりと明るくなっており、朝になっていた。

統夜たちはバスの中で朝食を済ませていたので、統夜たちはバスを降りてキャリーバッグを回収すると、そのまま搭乗手続きを済ませることにした。

この某国際空港は、日本有数の国際空港であり、連日多くの旅行者で賑わっている。この日も多くの人で賑わっており、空港の規模も大きく、統夜たちはこの雰囲気にしただけ戸惑っていた。

特に統夜は魔戒騎士であるため空港に訪れることはなく、空港の広さやキャリーバッグ片手に行き交う多くの人がとても珍しかった。

そのため、統夜はキョロキョロと周囲を見回しており、落ち着きがなかった。

《おい、統夜。そんなにキョロキョロするなよ。みつともない》

そんな統夜を見かねたイルバは、テレパシーで統夜を注意していた。

(だって仕方ないだろ？こんなところ来ること自体初めてなんだから)

統夜はイルバに注意されても、キョロキョロと周囲を見回すことをやめなかった。

「……統夜先輩って空港は初めてなんですか？」

「ああ。普段はこんなところに来る機会はないしな」

「ここ、広いですね。統夜先輩がキョロキョロしちゃうのもわかりますよ」

統夜の恋人である梓は、統夜がキョロキョロしていることがすぐ気になっていたのだが、それをなだめることはせず、統夜に共感していた。

「本当に広いよねえ……」

「ああ！すつげえなあ！」

唯と律もあまりに広い空港に驚き、キヨロキヨロと周囲を見回していた。

「みんな！先に荷物を預けちゃいませう！」

空港に何度も来たことのある紬は冷静であり、最初にすべきことを指示していた。

こうして統夜たちはまっすぐ搭乗手続きを済ませ、キャリーバッグを預かることになったのだが……。

「大変申し訳ございません。本日機内は大変混み合っておりまして……。よろしければ、そちらの荷物をお預かりさせていただけいてもよろしいでしょうか？」

統夜たちはキャリーバッグを預かることになっていたのだが、機内は混雑しているため、唯たちが背負っているギターケースもキャリーバッグ同様に預かりたいと受付の女性に言われてしまった。

そのため、唯たちはギターをキャリーバッグと共に預かってもらうことになった。

その前に統夜は魔法衣の裏地からギターケースを取り出しており、同様にギターを預かってもらうことになった。

統夜が事前にこのような行動が取れたのは、その前に紬がギターを預かってもらった方がいいと進言したからである。

海外旅行へ行くため、荷物のチェックはかなりうるさいのであるということも紬に言われたため、前もってギターを取り出しておいたのである。

手続きを済ませた統夜たちは、キャリーバッグとギターケースを預かってもらい、荷物は飛行機のもとへと運ばれていった。

「……ギー太。ロンドンで会おう!」

唯は運ばれていくギー太に別れを告げていた。

搭乗手続きとキャリーバッグ等の大型荷物を預け終えた統夜たちは、そのまま搭乗口近くまで移動するために動く通路に乗って移動していた。

「おお!これなんかいいいね、りっちゃん!これ、学校にもあればいいのに!」

「そうだな!歩く廊下な!」

「動く……だろ?」

律はボケる気はなく、素で歩く廊下と言っていたのだが、濡がすかさずツツコミをいれていた。

《つか、廊下が歩き出すとかどんだけホラーなんだよ……》

(アハハ……。確かにな……)

律の素のボケに、イルバと統夜は苦笑いをしていた。

この動く床が気に入ったのか、唯と律は落ち着きがなく次に取った行動は……。

「……噂の彼とは、どうなってるんですか?」

「付き合ってるんですか?」

唯と律は動く床から離れたと思つたら、突然記者の真似事を始め、絀にインタビューを行つていた。

「どうなんですか！ 琴吹さん！」

律は記者の真似事をして絀に迫るが、絀はワイドショーに出てくる芸能人の真似事をしていいのか、何故かぷうつと頬を膨らませていた。

それが可笑しかったのか、統夜を除く全員が笑い合つていた。

《やれやれ……。あいつらは何をやってるんだか……》

（まあまあ。はしやぎたくなる気持ちはよくわかるし、これくらいはいいんじゃないか？）

《相変わらずお前さんは唯たちに甘いな》

（アハハ……そうかもな）

イルバに痛いところを指摘された統夜は、苦笑いをしていた。

そしてその後も唯と律の暴走は収まらず、滯が終始ツツコミにあたり、統夜とイルバはそれを見て苦笑いをしていた。

動く床が終わつたところで唯と律はようやく落ち着き、統夜たちはそのまま搭乗口近くの待合室に向かった。

待合室到着後は飛行機搭乗までまだ時間があつたので、搭乗口に移動するアナウンス

が流れるまで、統夜たちは時間を潰していた。

それから間もなく飛行機搭乗が始まり、統夜たちは他の搭乗客と共に飛行機に乗り込んだ。

飛行機に乗り込み、チケットにある席まで移動すると、席の上にある収納口に手荷物をいれていた。

ちなみに統夜たちの席は後方の窓側で、トイレの近くの6席を確保していた。

席の並び順は、

窓↓紬、漣、律

窓↓唯、梓、統夜

となっていた。

「……なんか嘘みたいだな！降りたらロンドンなんだよな！」

「違う国なんだよな！」

「本当にみんな海外にいけるなんて！」

「過去とか未来とかに行けちゃったりして！」

「タイムマシンじゃないですよ？」

「でも……時間、戻るよ？」

「む、ムギ先輩!？」

席と席の間の隙間から紬は覗き込むように唯、梓、統夜の3人を見ており、梓は驚いていた。

「はい、アイマスク」

「ありがとう、ムギちゃん♪」

「ありがとうございます」

「サンキューな、ムギ」

ムギは後ろにいる3人にアイマスクを渡すと、滞や律と会話をしていた。

「時間が戻るってどういうことなの？」

「簡単に言えば日本とロンドンには時差があるんだよ」

「時差？」

統夜は時差という言葉を使って説明するが、唯は意味が理解できていないのか首を傾げていた。

「地球の自転と反対方向に行くからじゃ……」

「そしたら自転の反対側に言ったら時間が戻るの？」

「いや、なんて言ったらいいか……」

統夜は唯への説明に悩んでいたのだが、その時、ポーン！ポーン！とシートベルトをつける合図が鳴っていた。

「唯先輩、統夜先輩。シートベルトをつけてください」

「うん」

「了解した」

梓の指示通り、唯と統夜はシートベルトを装着していた。

「ねえねえ。ずっと逆回りしたらさ、やっぱり過去に行っちゃうのかなあ？」

「いやいや、そんな極端には戻らんぞ……」

「統夜先輩の言う通りです。それに、もう離陸しますよ」

「テイクオフですか!？」

もうすぐ離陸すると聞いた唯は、窓から見える景色に釘付けになっていた。

「あずにゃん!やーくん!ムービング!!」

唯が興奮する中、飛行機の離陸が始まった。

滑走路を走る飛行機は飛翔し、ロンドンに向けて飛び立っていった。

飛行機が一定の高度に到達すると、シートベルト着用への指示は解除され、それと同時に席を立つ者もおり、ワゴンサービスの人も活動を始めていた。

「……ねえ、あずにゃん、やーくん!ここからは日本語禁止だよ!」

「ええ……?」

「やれやれ……大丈夫か?」

「……オーケー？」

「……アイ、アンダースタンド」

「Me too」

唯は英語禁止を切り出し、梓と統夜は一応英語で返していた。

「……あずキャット」

「へ!？」

「……ふっ!ふくくく……!!」

唯の唐突に言った「あずキャット」という言葉がツボだったのか、統夜は爆笑していた。

そして言われた本人である梓は、唯の唐突な言葉に困惑していた。

「……ノージャパニーズ！」

「……イエス……」

梓と統夜は少々呆れ気味で返事をしていた。

「……あずキャット。ミスターやーくん。機内食は英語で……?」

《おいおい、何だよ、ミスターやーくんって……》

(確かに、唯の英語はめちやくちやだよな……)

イルバと統夜は、唯のめちやくちやな英語に心底呆れていた。

「……ふ、フライトミール」

梓は機内食を英語で言った言葉を正直に答えていた。

「……ビーフ、オア、チキン？」

唯は中学校で習う定番のフレーズを言っていた。

「……」

梓はどう答えようか考えていたのだが……。

「エクササイズ！」

「ぶっ！」

唯は意味不明な言葉を言っていたため、統夜は再び笑っていた。

そんな中、梓は……。

「……チキン、プリーズ……」

「エクセレント！」

唯は梓がきちんと答えてくれたのが嬉しかったのか、笑みを浮かべていた。

それから間もなくして、自分の英語に笑ってる統夜を膨れっ面で睨みつけていた。

そんな中、梓は唯がした質問と全く同じ質問を唯にしていた。

それに唯はビーフと答えていたのだが……。

「お客様」

「あ、はい」

「和食と洋食。どちらにいたしますか？」

ワゴンサービスの人は英語ではなく普通に日本語で機内食の種類を聞いてきたため、唯と梓は硬直していた。

「やれやれ……」

呆然と硬直する2人を見て、統夜は頭を抱えながら呆れていた。

その後、どうにか機内食を注文し、統夜たち3人は機内食に舌鼓を打っていた。

その後は会話をしたり、機内で見られる映画などを見たりしてそれぞれ時間を潰していたのだが、気がつくとな夜になっており、乗客のほとんどは寝静まっていた。

統夜の前にいる紬、滯、律の3人はどうやらアイマスクをつけて爆睡しているようであつた。

唯も眠っており、梓は統夜に身を寄せる形で眠っていた。

「……」

統夜はまだ眠っておらず、穏やかな表情で、眠っている梓の頭を撫でていた。

(……イルバ、この機内にホラーの気配はないよな?)

《心配するな。ホラーの気配はないし》

、ゲートの気配も感じない。この飛行機を降りるまでは安全ってことだぜ》

(そっか……良かった……)

統夜はこの飛行機に乗った当初から、こんな狭い場所でホラーが現れたらどうしようと考えており、気が気ではなかったのであった。

《お前さんが気張るのもわかるが、それじゃせっかくの旅行が台無しだぜ?》

(それはわかっているんだけどさ。やっぱり俺は魔戒騎士だから色々考えちゃうわけだよ)

《そう考えるのは魔戒騎士としては殊勝なものだが、せっかく体を休めるチャンスなんだ。今のうちに思い切り寝ておいたらどうだ?もし何か異常があれば、俺様が伝えるぜ》

(悪い。そうしたら、お言葉に甘えて一休みさせてもらうよ)

統夜は魔戒騎士として毎日忙しい日々を送っているため、まともに休養をとる機会はほとんどなかった。

月に一度のイルバとの契約の日は、統夜にとっては休日なのだが、仮死状態になっているため、休養とは言えなかった。

そのため、統夜はロンドンに着くまでゆっくり体を休めることにして、眠りについた。イルバはそんな統夜の様子をジッと眺めており、しばらく様子を見た後、自分も眠ることになった。

※※※

「……統夜先輩！起きてください！」

「ん……んあ……？」

梓に起こされ、統夜はゆっくりと目を開けていた。

「もう、やっと起きましたか。何度も起こしたんですよ？」

統夜はよほど疲れていたのか爆睡しており、そんな統夜を起こすのに苦労した梓は膨れっ面になっていた。

《俺様が呼びかけても起きなかつたからな。それほど疲れてたんだな》

イルバがテレパシーで呼びかけても統夜は起きなかつたため、それだけ疲れていたことは容易に想像出来た。

「悪い悪い。それで、どうしたんだ？」

「もう着きますよ?」

「マジか!俺はかなり爆睡してたんだなあ……」

どうやら統夜はかなりの時間寝ていたらしく、それに気付いた統夜は苦笑いをしていった。

「そうですよ。それに、もう着陸なのでシートベルトを締めないといけませんよ」

「うん、わかったよお、あずにゃん」

「わ、わかった」

統夜は起きて早々シートベルトを締めることになったのだが、指示通りシートベルトを締めた。

それから間もなく飛行機は着陸し、滑走路を走った後に、飛行機はようやく停止した。統夜たちはこうしてロンドンの地に降り立ち、空港であるロンドンの某空港に入っていた。

空港に入ると、ここにもあった動く床で移動し、入国審査が行われる場所へと向かっていった。

「イギリス!?ここってイギリスだよね!」

「思ったより早く着いたよな」

「来ちゃったよ!ロンドンに来ちゃったよお!」

「唯先輩落ち着いて！」

「ここは既にイギリスであり、統夜たちの興奮は収まらなかった。

「なあ、この後は入国審査だったよな？」

「へ？それって何をするの？」

「はい！大抵は旅行の目的を聞かれるらしいです」

梓は旅行のガイドブックを取り出し、入国審査について説明をしていた。

「目的？」

「はい！だから、「サイトシーイング (sight seeing)」って答えれば、大丈夫です！」

サイトシーイングというのは、名所を見て回るという意味であるため、統夜たちはこう答えれば入国審査は通れると梓は説明していた。

こうして統夜たちは入国審査を迎えることになったのだが……。

「サイドビジネス!!」

唯はサイトシーイングではなく、サイドビジネスと言ってしまった。

「……Side Business？」

入国審査官は唯のサイドビジネスという言葉に首を傾げるが、恐らくはサイトシーイングだろうと判断してくれたのか、どうにか通ることが出来た。

そして、滯、律、紬の3人も難なく入国審査を終えることが出来たのだが……？
「……………」

入国審査官は梓が本当に17歳なのかを疑っており、改めて確認をしていた。

「……………」
「……い、イエス。アイアムセブンティーン」

梓は自分で17歳であることを説明し、パスポートにも不備はなかったため、どうにか通ることが出来た。

1番の問題は統夜であった。

統夜の羽織る魔法衣があまりにも怪しいと感じていた入国審査官は、統夜に魔法衣を脱ぐよう指示し、魔法衣の中に怪しい物が入っていないかをチェックしていた。

10分ほどチェックを行い、異常がないことがわかり、統夜はようやく通ることを許されたのであった。

「はあ……。やっと通れた……」

入国審査に10分もかかってしまったため、統夜はげんなりとしていた。

「魔法衣はバッグの中に入れといた方がいいんじゃないですか？」

「本当はそうなんだけどな。魔法衣をバッグに入れたら何かあった時に対応出来ないしなあ」

「大丈夫だって！帰りはあんな感じに引つかからないでくれよ！」

「わかってるよ」

こうして入国審査を終えた統夜たちは、荷物を受け取ることになった。

統夜、唯、律、紬、梓の5人は何の問題もなく、自分の荷物を回収することが出来た。

「やつとギー太と出会えたよお！これでやつと安心♪」

「でも、よく考えたら、私たちは何で楽器を持って来たんですかね？」

「アハハ……。確かにな」

「滯！荷物来た？」

「……まだ……」

滯はベースケースは回収したものの、自分の荷物が入ったキャリーバッグは未だに回収できずにいた。

「大丈夫、すぐに来るって！」

統夜たちは荷物が全部出てくるまで待つていたのだが、滯のキャリーバッグは出てくることはなかった。

「………本当に出てこないな……」

「………どうして私のだけ？」

自分のキャリーバッグが姿を現さないため、滯は不安げな表情をしていた。

「無くなっちゃったのかなあ？」

「どうするの？秋山さん、おパンツ。レディとして」
「律。この状況であまりからかうなよ」

律は濡をからかっていたのだが、統夜はそれを見かねて律をなだめていた。
そして、濡は涙目になっていた。

「あれ？濡ちゃんって履かない派なんじゃ……」

「イエス、シーイズ、ノーパン」

「そつ、それは寝る時の靴下の話だろ!？」

「どうでもいいが、パンツの話はやめろ／＼／＼」

統夜はこんなに堂々とパンツの話をするのがら恥ずかしかったのか、頬を赤らめていた。

『……おい、濡。そこにポツンと残されたバッグはお前さんのじゃないのか?』

何故かパンツの話をしているうちにイルバが濡のと思われるバッグを見つけていた。

「……あ、本当だ!」

「アハハ、まさしく灯台下暗しだな……」

「統夜は思ったより近場にバッグがあつたことに対して苦笑いしており、濡は半ベソの状態でバッグに駆け寄っていた。

こうして、全員入国審査も済み、荷物も回収したところで、空港の外に出ることになっ

た。

統夜たちは無事ロンドンの地に降り立ったのだが、統夜たちの卒業旅行は始まったばかりであつた。

……続く。

——次回予告——

『ようやくロンドンの地に降り立ったか。まあ、ロンドンに着いたと言ってもこいつらは相変わらずだな。次回、「英国」。まあ、何も起きなければいいんだがな』

第107話 「英国」

ついに卒業旅行当日を迎えた統夜たちは、朝早くに待ち合わせて、紬の最寄り駅の近くから出ているバスに乗り込み、某国際空港へと向かった。

空港に到着した後、搭乗手続きやキャリーバッグなどを預かってもらい、その後は搭乗口近くの待合室で時間を潰していた。

搭乗開始になると、統夜たちは他の乗客と共に飛行機に乗り込んだ。

そして飛行機は離陸し、長いフライトが始まったのである。

約12時間のフライトで、飛行機はようやくロンドンの某空港に到着した。

その後、入国審査や荷物受け取りで多少のトラブルはあったものの、統夜たちは無事にロンドンの地へ降り立ったのであった。

外に出た統夜たちであったが、冷たい風が吹きつけてきた。

「さ、寒いー！」

「ロンドンの寒さだ」

「わあ、」

統夜たちがいるロンドンの寒さは、昨日までいた桜ヶ丘とそれほど変わりはないのだ

が、ロンドンにいるという理由だけで、それが新鮮に感じていた。

「そうか？ロンドンも桜ヶ丘もそんなに変わらないと思うけどな」

「まったく、せっかくのロンドンなのに、冷めたことを言うなよな」

「そうだよ、やーくん！いくらそのコートがあつたかいつて言つたつて！ちよつとしたことでも感動しなきゃ！」

「はいはい……」

唯の言う通り、統夜の羽織っている魔法衣は夏は涼しく冬は暖かくと、季節に合った温度になっているため、どの季節にも対応しているのである。

律と唯が冷めた態度の統夜を注意していたのだが、統夜は呆れ気味に返事をしていった。

「……あつー！ロンドンの空ー！」

唯はとある方向へ指差すと、漣が反射的にカメラを取り出し、唯が指した場所を撮影していた。

「ロンドンのタクシー！」

唯は続いてタクシーを指差すと、漣は唯が指したタクシーを撮影した。

「ロンドンの英語！」

次いで唯が指したのは、近くにある英語で書かれた看板であり、漣はすかさずその看

板を撮影していた。

『おいおい。英語なんてあちこちにあるんだから珍しくもないだろう』

イルバは英語で書かれているという理由だけで看板を撮影する滯に呆れていた。

「そして、ロンドンにいる、私たち！」

最後に唯と滯はツーショットで自撮り写真を撮影していた。

「……おい」

『やれやれだぜ……』

ツーショットで自撮り写真を撮影している唯と滯に、統夜、律、イルバは呆れ気味だった。

撮影を終えた唯と滯が満足したところで、近くにあったタクシーに乗り込むことになった。

「タクシー、タクシー」

タクシーの前には、運転手であると思われる50代くらいの壮年の男性が出迎えてくれた。

統夜たちはタクシーのドアの前に立ったのだが……。

「お父さんがね、ロンドンのタクシーは自分で開けなきゃいけないんだよって言ってたよ！」

「へえ、そうなのか」

唯の説明通り、ロンドンのタクシーは日本のタクシーとは違って自動ドアではないため、自分でドアを開けなければならないのであった。

唯はさっそく実践するのだが、あるべきところにあるはずの取っ手がなく、困惑していた。

「あれ?……あれ?」

しばらく開かないドアに悪戦苦闘していると、運転手の男性がドアを開けてくれた。

ロンドンのタクシーのドアの取っ手は、日本のタクシーのドアの取っ手の反対方向にあるため、唯は気が付かなかったのであった。

運転手の男性はドアはここだぜ!と言いたげに茶目つ気のあるウインクをしていた。

「……ああ、そうそう。こっちこっち」

唯はドアの場所に気付かなかったが、あたかも知ってる風に装って強がっていた。

すると、運転手の男性が続夜たちがどこに行きたいのかを英語で聞いていた。

「……どこに行きたいのか聞いてみたいだぞ」

続夜は男性の言っている言葉を通訳して唯たちに伝えていた。

「えつと……ホテルアイビス、プリーズ」

梓は宿泊の予約を入れている「ホテルアイビス」へ行つて欲しいと男性に伝えた。

それを聞いた運転手の男性はそのホテルの場所を聞いていた。

「……どこのホテルアイビスだと聞いているぞ」

統夜は再び男性の言葉を通訳して唯たちに伝えていた。

「どこつて、ロンドンに決まってるじゃん！」

「ロンドンジョーク？」

ホテルはロンドンにあるのは当たり前だと感じていた唯と律は、ニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「いやいや。この場合はそういうことじゃなくてな……」

唯と律はどうやら男性の言葉の意味を理解していないようで、統夜はそんな2人に呆れていた。

「……London City?」

運転手の男性は、ロンドンという言葉聞き取り、ロンドンシティーにあるホテルアイビスか?と確認を取っていた。

「イエース!!」

「ちよっ?!おまつ?!」

唯と律が何の確認もしないで、ロンドンシティーでOKと答え、統夜は焦っていた。

このままロンドンシティーのホテルアイビスに向かって良いものかわからなかった

ので、統夜はとある行動を取った。

それは……。

「……Wait a minute! (ちよつと待つて!)」

統夜は英語でちよつと待つてと言つて、男性の動きを止めた。

それを聞いた運転手の男性は、何だろうと言いたげな感じで首を傾げていた。

「……? 統夜先輩?」

「梓。ホテルの予約の紙があつたら? それを見せてくれないか?」

「……あつ、はい」

梓は統夜の行動の意図が読み取れず、困惑しながらもホテルの予約確認の紙を取り出して、統夜に手渡した。

統夜はその紙に書かれたホテルアイビスの住所を確認するのだが……。

「……やつぱり……」

「? 統夜君? どうしたの?」

統夜が急にホテルの住所を調べだしたことに、紬は首を傾げていた。

それは唯たちも同様であつたが、そんなことはおかまいなしに統夜はホテルの予約確認の紙を運転手に見せて、この住所のホテルアイビスへ行つて欲しいと英語で伝えた。

「[[[[[.....]]]]」

統夜の現地顔負けの流暢な英語に、唯たちは驚きのあまり絶句していた。

「.....OK! Earls Court?」

運転手の男性はアールズコートだね?と確認を取ると、統夜はそうだと英語で返していた。

統夜の流暢な英語に男性も驚いており、「兄ちゃん、英語上手いね」と統夜に話しかけた。

統夜は「少し喋れるだけです」と謙遜気味に英語で返していた。

こうして、タクシーの目的地を正確に伝えたところで、運転手の男性は統夜たちのキャリアバッグをトランクに積み込み始めた。

「.....梓、ありがとうな」

統夜は梓に予約の紙を返した。

「い、いえ.....。それより統夜先輩。今のやり取りは?」

「ああ。ホテルアイビスってのはロンドンシティーだけじゃなくてあちこちにあるみたいなんだ。住所を調べたら俺たちが予約したホテルはアールズコートってところにあるから、そのホテルアイビスまで連れてってくれて説明したって訳」

「え、そうなの!？」

「そ、それじゃあ、あのままタクシーに乗り込んでたら……う？」

「予約の取れてないホテルアイビスに向かうことになり、後々面倒なことになっただろうな」

「「「「……」」」」

統夜が確認してくれなかったらどうなったかを想像した唯たちは、顔を真っ青にしていた。

「あ、ありがとうございます！統夜先輩！」

「やーくん、すつごく頼りになるよお！」

「ふん♪まあな♪」

統夜は「ふんす！」と気合を入れるとドヤ顔をしていた。

《《おおいおい、ドヤ顔するなよな……》》

イルバは、ドヤ顔をしている統夜を、ジト目で見ていた。

「まあ、とりあえず目的地は伝えたし、さっそくタクシーに乗り込もうぜ！」

統夜たちが話している間に荷物の積み込みは終わったようであり、統夜たちはタクシーに乗り込んだ。

タクシーの席順は以下の通りである。

助手席 運転手

漣、律、唯

統夜、梓、紬

統夜が最後に乗り込み、ドアを閉めたその時、タクシーは即発進していた。

急発進の衝撃で、唯は前に倒れこむのだが、紬の太ももがクッションとなったため、大事には至らなかつた。

「ゆ、唯先輩！大丈夫ですか!？」

「す、すまん！唯！俺がいきなり閉めちまつたから……」

「エへへ……。大丈夫大丈夫。ムギちゃんが柔らかくて助かつたよ」

「そう？良かった♪」

「いやあ、それにしても驚いたよお」

「いやいや。それはこつちのセリフだつて！」

唯は急発進の衝撃で前に倒れ込んだことに驚いていたが、それは周りの全員が同じことを思っており、律が代表して代弁していた。

こうしてタクシーは、アールズコートにある「ホテルアイビス」に向かって走り出した。

滯は窓から見える景色を写真に撮っており、統夜、梓、紬の3人は、窓から見える景色を楽しんでいた。

そして、唯と律の2人は今この瞬間がとても楽しいのか、楽しげに歌を歌っていた。

※※※

車で走ることおよそ15分。統夜たちを乗せたタクシーは、無事にホテルアイビスへと到着した。

統夜がタクシー代とチップを支払い、統夜たちはタクシーを降りて、荷物を回収した。後はフロントに向かって予約の確認を取ってからチェックインをするのだが……。

「うぷ……。酔っちゃった……」

あまり乗り物に強くない唯は乗り物酔いをしてしまい、顔は真っ青になっていた。

「唯ちゃん、大丈夫？」

「う、うん……。ヘーキヘーキ。ちよつと休めば良くなると思うから……」

唯は吐き気を催してるのか、手で口元を押さえていた。

「したら唯はそこで休んでてくれ。俺と梓でチェックインの手続きを済ませてくるから」

「はいー」

「あつ、私も行くわー!」

統夜、梓、紬の3人がチェックインの手続きを行うためにフロントへ向かい、残りのメンバーは、入り口近くのソファに座り、ひと休みをしていた。

統夜がタクシーに乗り込む前に確認をしたおかげか、しっかりと予約は確認されており、チェックインは問題なく行われた。

チェックインを終えた統夜たちは、前もって割り振られた部屋にそれぞれ移動し、荷物を置いたらロンドンの街を見て回るため、部屋の前で集合することになった。

統夜たちの部屋は3人ずつの2部屋で割り振られており、隣り合っているため、入り口で集合することにしたのであった。

「はああ……。やつと落ち着けたねえ……」

「そうですね……」

統夜は、唯と梓の2人と相部屋であり、部屋に入るなり、力無い感じで梓に抱きつい

ていた。

「やつと2人きりになれたねえ、あずにゃん……」

「へ？」

「おいおい、俺がいることを忘れるなよ……」

「はっ！ そうだった！」

唯は梓だけではなく、統夜とも相部屋であることを思い出し、先ほどまで抱きついていた梓から離れていた。

『やれやれ……。せつかく統夜と梓が2人同じ部屋になれたんだ。唯、あまり邪魔するんじゃないぞ』

「ちよっ?!?!?!」

「お、おい！ イルバ!? // // //」

イルバの唐突な発言に、統夜と梓の顔は真っ赤になっていた。

「むうう、それはわかってるよお。イルイル」

『おい！ お前さんはロンドンでも俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

ロンドンに来てても相変わらず唯はイルバのことをイルイルと呼んでおり、唯とイルバはいつものやり取りをしていた。

「そ、それに……。唯先輩がいたら……。ゴニヨゴニヨ……。// // //」

「気になること?」

統夜の言葉に紬は首を傾げるのだが、そんなことはおかまいなしに統夜は梓の靴を見ていた。

「? 私の靴がどうしました?」

「梓、その靴、オシャレでいいとは思うんだが、少し歩きにくくないか?」

統夜は、この旅行を始めた時から、梓の靴が気になっていた。

「は、はい……。せつかくの旅行だからと思つて新しい靴を用意したんですけど、実はちよつと歩きにくくて……」

どうやら梓もこの靴が歩きにくいことを自覚していたようであつた。

「梓、足は痛くないか?」

「はい、大丈夫です」

「だったら良かった。靴擦れを起こしたら痛くてせつかくの旅行が台無しだからな」

「統夜先輩……」

梓は、自分のことを考えてくれている統夜の言葉が何よりも嬉しかった。

「なあ、みんな。このホテルの近くに靴屋もあるし、ロックっぽい服が売つてる店もあるみたいなんだけど、行つてみないか?」

「統夜。それつてここだろ? 私も行つてみたいと思つてたんだよ!」

澤はガイドブックを開くと、とある洋服店を指差すと、その洋服店が気になっていることを伝えた。

「よし、それじゃあ、まずはそこで買い物しようぜ！」

「え？で、でも……」

「俺たちも買い物したいんだから、遠慮はなしだぜ」

「そ、それじゃあ……」

こうして統夜たちはホテルを後にすると、梓の靴や、服を見て回るため、アールズコートにあるその店まで移動を開始した。

統夜たちは歩きながら周囲の景色や人々を見ていたのだが、とてもオシャレな人が多く、驚いていた。

まず最初に梓の靴を買うために靴屋へと立ち寄った。

そこでは、歩きやすい靴を見繕い、統夜もロンドンへ来た記念と言つて靴を見繕っていた。

「どうだ？梓」

「うんうん。これなら大丈夫そうだね！あずにゃん！」

「は、はい。これなら大丈夫そうです」

「似合ってるわよ♪梓ちゃん♪」

「あつ、ありがとうございます」

梓の買った靴は、動きやすい靴であるため、靴擦れを起こす心配はなさそうだった。「あつ！あそこ写真撮りたい！」

統夜たちはこの後服屋に移動する予定だったのだが、その前に唯が気になった風景があったのか、デジカメを取り出し、その風景を写真に収めようとしていた。

しかし、手には少し前に買ったドリンクの入ったプラスチックのコップが握られており、上手く写真を撮ることが出来なかった。

それを見かねた紬が……。

「唯ちゃん。荷物あずキヤットくよ」

「ありがとう、ムギちゃん♪」

「ええ!？」

紬が唐突にあずキヤットという言葉を使って新しい言葉を作っており、梓は驚いていた。

唯は紬に荷物をあずキヤットいて……もとい、預かってもらい、写真を撮影していた。唯の撮影が終わったところで、統夜たちは靴屋のすぐ近くにあった服屋へと向かった。

この服屋にはロックっぽい服が多く販売されており、統夜と漕はこの店に行きたいと

思っていた。

それが叶ったからか、統夜と滯はロックっぽい服を見て、キラキラと目を輝かせていた。

しばらく服を物色していた統夜たちであったのだが、統夜は気になった服を片っ端から購入しようとしていた。

旅行用にとってきたお金は限られているため、イルバや梓に止められてしまい、渋々1番気に入った服のみを購入することになった。

滯も欲しい服が買えたようであり、服屋での買い物を終えた統夜たちは店の外に出た。

「いやあ……。いい買い物をしたなあ♪」

滯は欲しい服を買うことが出来て、ご満悦のようであった。

「俺もいい買い物はしたけど、あの服とあの服は買いたかったぜ……」

統夜はまだまだ欲しい服があるため、物足りなさを感じていた。

「ダメですよ！統夜先輩！旅行用のお金は限られてるんですから、もっと計画的に使ってください！」

「まあ、そうなんだけどさ。金がなくなればお金をおろして、ユーロに替えれば……」

「手間がかかり過ぎるからダメです!!」

『梓の言う通りだぜ！お前さん1人の都合で旅行に支障をきたす訳にもいかんだろう』
「……ま、確かにそうだよな……」

統夜はしょんぼりとしながらも渋々お金を計画的に使うことを了承していた。

「アハハ……。あずにゃん、お母さんみたい……」

「やれやれ。統夜のやつ、梓の尻に敷かれてるな……」

統夜と梓のやり取りを見て、2人の関係性がハッキリとわかり、律は苦笑いをして
いた。

すると、統夜の前を1人の男性が通り過ぎていった。

その男は、まるで統夜たち魔戒騎士のような格好をしており、統夜はふとその男の方
へ目が行ってしまっていた。

「？統夜先輩、どうしました？」

「ああ、いや。何でもない！」

梓に声をかけられ、統夜は慌てて男から視線をそらしていた。

『統夜。お前が気になるのもわかるぜ。あの男からだならぬ気配を感じたからな』

「ただならぬ気配？それって……」

「あーっ!!」

統夜とイルバは真剣な話をしていたのだが、唯の大声によつてそれは遮られてしまっ

た。

「つたく……。どうしたんだ、唯？」

「ねえねえ、見て見て！お寿司屋さんだよ！」

唯は「KAITEN SUSHI」と書かれた看板を発見し、それを指差していた。

「あ、回転寿司ですね？」

「え？回るの？」

「はい！」

「へえ……」

紬は回転寿司屋に入ったことがないのか、回転寿司という存在に興味津々だった。

「ねえねえ、入ってみようよ！」

「え？ロンドンに来てまでお寿司？」

濡はせっかくロンドンに来たのだから、ロンドンっぽい何かを食べたいと考えていた。

しかし……。

「いや、ロンドンだからこそだぜ！」

お米が大好きな律は、あえてロンドンの回転寿司へ行ってみようと提案していた。

「お手並み拝見させてもらおうか……。ロンドン!!」

こうして、統夜たちは回転寿司で夕食をとることになり、そのまま回転寿司屋の中へと入っていった。

すると、先ほど統夜たちがすれ違った魔戒騎士のような出で立ちをしている男が、その様子をジツと見つめていた。

「……ほお、あの赤いコートのガキ……。あいつはまさか……」

男は統夜の着ていた魔法衣に見覚えがあるようで、フツと笑みを浮かべていた。

統夜とこの男の出会いには、楽しい卒業旅行に1つだけ大きな波乱を与えるものとなることを、統夜たちはまだ知る由もなかった……。

……続く。

次回予告

『まさか、ロンドンにまで来て寿司を選ぶとはな。だが、寿司を食うのに一筋縄ではいか

ないようだぜ！次回、「悪魔」。あの男、一体何者なんだ？』

第108話 「悪魔」

卒業旅行でロンドンの地へ降り立った統夜たちは、タクシーに乗り込み、どうか予約の取れているホテルへチェックインすることが出来た。

荷物を置いて街を見て回ることにした統夜たちは、靴屋や服屋などを見て、楽しんでいた。

そんな中、ロンドンで回転寿司屋を発見した統夜たちは、そこで夕食を取ることに決めて、回転寿司屋の中に入っていった。

統夜たちの入った回転寿司屋は、日本の回転寿司屋とは違って、とてもオシャレな雰囲気、パツと見たと回転寿司のお店とはわからない程であった。

「……なんじやこりや……」

律は日本の回転寿司屋とは全然違う雰囲気、に啞然としていた。

「なんか凄い雰囲気だね」

「ああ。俺、回転寿司の店はテレビでしか見たことはないが、明らかに日本とは違う雰囲気だよな」

「え!? そうなんですか!？」

統夜は回転寿司の店に入ったことはないを知り、梓は驚いていた。

「本当に回ってるわねえ……」

紬の言う通り、雰囲気はオシャレでも、きちんと回転寿司としての機能はしっかりしており、様々なお寿司が回っていた。

「回ってる……」

漣は回るお寿司を見ながら、顔が真っ青になっていた。

「アハハ……。空港でのトラウマが蘇ったか？」

漣は空港の荷物受け取りの時、自分の荷物が出てこないで近くで発見された事件がトラウマになっており、それ以来回るものに苦手意識を持つようになっていた。

「でも、思ってたのとはちょっと違うわ。私、バレリーナみたいなお寿司を想像してたのよね」

紬は小さな声で統夜と梓にこう伝えていた。

《……どんな寿司屋だよ……》

(確かに……。ムギの感性はなかなかのものだよな……)

少しずれている紬の感性に、統夜とイルバは苦笑いをしていた。

「あれ？何かステージが……」

唯は何故か設置されているステージを発見すると、そこへ移動しようとするのだが

……。

……ボーン！

唯は誰かとぶつかってしまったのだが、その人物は唯よりも遥かに身長が高かった。

「Hello」

唯がぶつかつた相手は、低い声で唯に挨拶をした後、「日本から来たのですか？」と質問していた。

その男性は唯よりも背が高く、唯はその男性に畏怖の感情を抱くにはそれだけで十分だった。

「ふ、フロムって言った……。ジャパンって言った……」

唯はいきなり話しかけられたため、少し怯えていた。

「え、えーと……えーと……。い、イエス」

「Welcome to my Sushi-bar」

男性はどうやら統夜たちを歓迎してるようであり、唯と握手をしていた。

「い、イエース……」

「おい、簡単にイエスって言うなよ」

「心配すんな。俺の方で通訳はしてるから。それに、今のところは歓迎されてるみたいだぞ」

「統夜は最初から男性の言葉を通訳しており、ヤバそうであれば、仲介に入るつもりだった。」

すると、他のスタッフが統夜たちの荷物やコート類を預かり、統夜たちにハッピを着せていた。

「凄いいね！ロンドンのお寿司屋さんにはハッピ着て食べるんだ！」

「焼肉屋のエプロンみたいなものか？」

何故かハッピを着せられたことに対して、唯と律はこのような解釈をしていた。

《おい、統夜。これは……》

（ああ。これは完全に客とは思われてないみたいだな……）

統夜は荷物などを預かってハッピを着せられた時点で、普通の客ではないことを察していた。

そして、その統夜の予測は現実のものとなりつつあった。

「g e e t o n s t a g e e !」

先ほど唯がぶつかった長身の男性がとある方向を指すと……。

「え!? ギー太!? どうなってるの!？」

預けたはずの楽器たちが何故かステージにスタンバイされており、統夜たちは驚きを隠せなかった。

(あちゃあ……。やっぱりそういうことか)

予測通りの展開になってしまっているのか、統夜は頭を抱えていた。

「な、なんてこと!」

何故か紬は怒り気味であり、カツカツと靴音を鳴らしながらステージの方へ向かっていった。

「……エクスキューズミー!」

紬はステージで準備をするスタッフに声をかけ、何かを話していた。

すると相手は手で頭を抑えると、わかったと言いたげな感じで人差し指を立てていた。

「ムギちゃん。私たちはお寿司を食べに来たただけだって伝えてくれたんだねえ♪」

「やっぱ持つべきものはムギだよな!」

統夜たちは、紬が自分たちは演奏しに来たのではないと相手に伝えたと思っていた。しかし……。

「……つて！違うじゃん!!」

スタツフがキーボードを用意しているのを見て、律がツツコミをいれていた。

紬は演奏しに来た訳ではないということを伝えたのではなく、キーボードがないことを伝えていたのであった。

紬は「うふふ♪」と満足げに笑みを浮かべると、小走りでこちらに戻って来た。

「……何してんだ、ムギ」

「だって、キーボードだけなかったんだもの！」

どうやら、紬は演奏する気満々のようであった。

「仕方ない……。ここは俺に任せろ」

軽音部メンバーで一番英語力のある統夜が、先ほどの長身の男性のもとへ向かって事情を話すことにした。

統夜の身長は170センチと、魔戒騎士の中では小柄な方であり、だからか、長身の男性ともかなりの身長差があった。

※統夜と男性の会話は日本語になっていますが、英語で話しています。

「あの、すいません」

「はい? どうしました?」

「僕たち、お寿司を食べに来たのであって、演奏しに来た訳ではないのです」

「え!? そうなのですか!? あなたたちは「ラブクライシス」ではないのですか?」

「は、はい。違います」

「そうでしたか……」

男性はここでようやく統夜たちは演奏しに来た訳ではないことを説明していた。

「ですが、あなたたちはバンドをやってますね? せっかくですから、演奏してくれませんかね?」

「あつ、いや、僕たちは……」

「ぜひ! お願いします! 今日はこの店の開店祝いなんです!!」

どうやら、「ラブクライシス」というバンドがこの店の開店祝いに演奏するらしいのだが、ついでに統夜たちにも演奏をお願いしていた。

「……あー……えつと……」

「ぜひ!! お願いします!!」

男性の熱意は凄まじく、統夜はその熱意に根負けしてしまい、演奏を引き受けること

になった。

※会話終わり。

「……あ、やーくん！どうだった？」

「みんな、すまん。俺たちは演奏しに来た訳ではないことは伝えたんだけど……」

「結局演奏することになったのか？」

律の問いかけに統夜は無言で頷いた。

「今日はこの店の開店祝いで「ラブクライシス」ってバンドが演奏するみたいなんだよ。……あれ？ラブクライシスって何か聞いたことがあるな……」

「統夜！それはマキちゃんたちのバンドだよ！ほら、ライブハウスでのライブで一緒だったろ？」

ラブクライシスという名前に統夜は聞き覚えがあったのだが、それは、律の友達のパ

ンドの名前であり、律はそのことを説明していた。

律の説明で、統夜だけではなく、漣を除く全員が思い出していた。

律の友達であるが故に漣もラブリシスのことはよく知っていたため、名前を聞いた瞬間に理解していた。

「それで、バンドをやってるならぜひ演奏してくれって言われてな。あの人の熱意に根負けしちまったよ」

「ええ!?!それじゃあ、演奏しなきゃダメってこと!?!」

「まあ、そうなるかな」

「仕方ない。どちらにせよ逃げられなきさそうだし、やるしかないぜ!」

「そうよ! せっかくキーボードを用意してくれたんだもの! やらなきや!」

どうやら紬だけはやる気満々のようであり、「ふんす!」と力強く息巻いていた。

「そうだね! やろうよ! 私たちの演奏をロンドンの人に聴いてもらえるチャンスだよ!」

唯もどうやら乗り気のようにあり、そんな唯の言葉に、統夜たちは頷いた。

そして、覚悟を決めた統夜たちは、ステージへと向かい、演奏の準備を始めた。

統夜に演奏するよう頼んでいた男性は、演奏準備をしている統夜たちをジッと見つめていた。

こうして、ひよんなことから演奏することとなり、演奏準備も整った。

「さて……。みんな、何の曲にする？」

「そうねえ……」

「どうする、唯」

「えーと……えーと……」

唯はどの曲を演奏するか考えながら、客席を眺めていた。

すると、インド人と思われる男性と目が合い、その男性は穏やかな表情で笑みを浮かべると、手を振ってくれていた。

それを見た唯は……。

「……カレーのちライスにしよう！」

インド人らしき男性を見て、曲を決めたのであった。

「カレー!? 寿司屋なのか？」

ここは回転寿司屋であるにも関わらず、カレーの歌を歌うという大きな矛盾に、律は驚きを隠せなかった。

「ご飯繋がりだよー」

「なるほどー」

唯がカレーのちライスを選曲した理由を話すと、律は納得していた。

「あと、いい人そうだったから！」

「はあ？」

唯のもう1つの理由が素っ頓狂なものであり、律は首を傾げていた。

「……………やれやれ……………。お前、あそこにいる人を見て決めただろ……………」

統夜もカウンターに座るインド人らしき男性を目視しており、唯がこの曲を選んだ理由に呆れていた。

「……………みんな、行くよ！」

唯はかなりノリノリになっているからか、統夜たちの方を見て、ピシッと親指を立てていた。

「……………なんのマネだよ……………」

「……………置いてかないでください……………」

1人盛り上がる唯を、律と梓はジト目で見ていた。

「ああ！ごめんごめん！なんか盛り上がっちゃって！」

「やれやれ……………。とりあえずやると決めた以上はしつかりやろうぜ！チューニングは問題ないか？」

統夜は音程の確認を取るためにギターをジャランと鳴らし、唯と梓も続けてギターをジャランと音を鳴らしていた。

「あずにゃん、半音の半音くらいずれてる気がする!」

絶対音感を持つている唯は、チューナーを使わずに梓のギターの音程が狂っていることを見抜いていた。

「ちゅ、チューニングしてる時間が……」

「梓、慌てなくていいから、唯の音に合わせてくれ」

「はい!」

梓は唯のギターの音を聴いて耳でチューニングを行っていた。

そしてボーカルを担当する唯がマイクを自分に合った高さに調整したところで、演奏準備は完全に整った。

全員が互いに顔を見合い、ウンウンと頷いていた。

「……1! 2! 1 2 3 4!」

全員の準備が整ったことを確認した律がリズムを取ると、統夜たちは「カレーのちらイス」の演奏を始めた。

それと同時に天井に吊るされた照明が回り始めた。

回る照明を見た漣はビクツと反応し、紬は吹き出しそうになっていた。

統夜と梓はジト目になっており、律も吹き出しそうになっていた。

唯は照明に見とれながら演奏していたのだが、歌を歌わなきゃいけないことを思い出

し、ハツとしていた。

『……どうも！放課後ティータイムです！』

前奏が終わりそうだったので、唯は早口で自分のバンド名を説明していた。

そして、唯はそのまま歌を歌い始めた。

統夜たちの演奏する「カレーのちライス」は、ロック調の曲であるため、この店に来ている客たちは、統夜たちの演奏にノリながら寿司を楽しんでいた。

即興での演奏にも関わらず、統夜たちの息はピッタリ合っており、練習以上の力を発揮していた。

こうして、統夜たちの演奏は終始息ピッタリの状態で終了し、演奏が終わると、あちこちから大きな拍手が鳴り響いていた。

「……Thank youーアリガトゴザイマシタ!!」

統夜に演奏するよう頼んでいた長身の男性は、慣れない日本語で、統夜たちにお礼を言っていた。

そして、統夜たちはこの店のスタッフに囲まれ、スタッフたちは口々に統夜たちの演奏を評価していた。

統夜、律、紬、梓の4人はスタッフたちが褒めてくれていることを察して嬉しそうにしており、澤は顔を真っ青にしていた。

唯も照れながら笑みを浮かべていた。

「サンキュー、サンキュー。それじゃあ、お寿司の方を……」

本来の目的は演奏ではなく寿司を食べることだったので、唯はこう話そうとしたのだが、何故忙しなく撤収作業が行われ、統夜たちの着ていたハッピーが回収され、荷物とコートを受け取った。

帰り支度が済んだところで統夜たちは何故か入り口の方へ案内されていた。

そして……。

「Thank you! ホーカゴティータイム!!」

店のスタッフが手を振りながらこう統夜たちに告げると、統夜たちは何故か店の外に出るハメになり、そのまま扉を閉められて外へ出されてしまった。

※※※

統夜たちは偶然立ち寄った回転寿司屋で何故か演奏することとなり、演奏が終わると、寿司にありつけることなく、店の外に出されてしまった。

統夜たちは今自分たちが置かれている状況に啞然としながら店の前の階段に座っていた。

「……何でこうなったんだよ……」

「俺は確かに寿司を食いに来たと伝えたんだけどな……」

『恐らくはお前たちの演奏に満足して、そのことをすっかり忘れていたのだろう』
「やっぱり……回るのは良くないんだ」

空港の荷物受け取りでバッグがなかなか見つからなかったり、回転寿司屋に入ったら演奏させられて寿司は食べられなかったりと、今日は回るものを見るとロクなことが起こらなかった。

そのため、滞の回るものに対してのトラウマは募るばかりであった。

「……あうう……お腹空いたねえ……」

「言うなよお〜！」

「言っちゃいましたね……」

統夜たちは夕食を食べ損ねてしまったので、お腹が空いてきたのであった。

「お寿司〜」

「食べたいねえ」

「だけど、もう一度あそこに入る勇氣はないわ」

回転寿司屋に入ったのだから、お寿司を食べたかったのだが、もう一度入ってお寿司を食べたいと言う勇氣は、統夜以外の全員は持ち合わせていなかった。

「……とりあえず、邪魔になるから移動しましょうか」

「そうだな」

ずっとここに座っているのは往来の邪魔になるため、統夜たちはとりあえず階段を降りることにした。

「それにしても何だったんだよ。あの寿司屋はよお!」

寿司にありつくことが出来ず、律は恨めしそうに呟いていた。

その時だった。

「あれ?りっちゃん! 漣ちゃん!」

「!!い、イエース!!」

突然誰かに律と漣の名前を呼ばれ、律は咄嗟に英語で返していた。

「ビックリした!もしかして旅行?」

「イエース! サイトシーイング!!」

「みんなで来たんだ！」

「イエース！」

律はほとんどイエスとしか答えていなかったが、会話は成立していた。

「……やばい、あたし英会話出来てる」

「でも、相手は日本語……」

律はここまでやり取りが出来たため、英会話が出来ると勘違いしてたが、漣の言う通り、相手は日本語で話していた。

「へ？」

律はその人物の顔を見たのだが……。

「……あつー！マキちゃん!!」

「ラブクライシスジャパン！」

「……おいおい。ジャパンはいらんだろ」

律と漣に声をかけたのは、統夜たちが2年生の時にライブハウスでのライブで一緒だった「ラブクライシス」のマキであった。

他のメンバーも一緒にであり、唯は何故か「ラブクライシス」にジャパンをつけて呼んでいた。

統夜はそんな唯に呆れ気味にツツコミを入れていた。

「えー!?なんでいるの!?訳わかんない!!」

律はこのようところでマキと会えたのは嬉しかったのか、抱き合って喜びを分かち合っていた。

「あつ、そういえば背の高い男の人がラブクライシスがどうか言ってたけど、もしかしてここでライブを?」

統夜は男性との会話でラブクライシスという名前が出ていたことを思い出し、マキに話を振っていた。

「うん、そうだよーみんなはどうしたの?」

マキは、統夜たちが何故この店の前にいたのかが気になっていたので、このように話を振っていた。

「あのねえ、なんかお寿司を食べようとしたら演奏してって言われて、演奏したらお寿司が食べられなかったんだよお。下手くそだったのかなあ?」

唯は半ベソ状態で、このようになった経緯を話していた。

「俺たちはラブクライシスじゃないことは伝えたんだけどな。バンドやつてるならぜひ演奏してくれて頼まれちゃってな。それで演奏したらそのままさよならって訳だ」

統夜は唯が説明したことに対して補足説明をしていた。

「アハハ……そうなんだ。ライブハウスの川上さんは覚えてる?川上さんとこの店長

「が知り合いで、それで私たちにこの店の開店祝いにライブをして欲しいって頼まれてたの」

「あつ、そういうえばあの人も開店祝いでどうか言ってたな……」

「統夜はマキの話を聞いて、男性との会話を思い出していた。」

「それにしても、世界は狭すぎるよなあ」

「うん。なんか不思議な気分」

「意外なところで繋がりがあることがわかり、唯たちはその不思議さに驚いていた。」

「さて、そろそろ行った方がいいんじゃないか？きつとみんなが来るのを待ってるぜ」

「あつ！そうだね！それじゃあみんな！またね！」

「ラブクライシスのメンバーは各々統夜たちに手を振って別れを告げると、そのまま店の中へ入っていった。」

「……あたしにもホテルに戻るか？」

「そうですね……」

「こうして統夜たちはホテルに戻ろうとするのだが……」

『……統夜！ホラーではないが、妙な気配を感じるぜ！』

「妙な気配？」

『ああ。どうやら、イレスの言ってた噂とやらは本当だったようだぜ』

「噂……ですか？」

統夜とイルバの話の意味がわからず、梓は首を傾げていた。

「イレズ様が言つてたんだ。このイギリスにはホラーとは異なる魔獣がいるらしいと」「ホラーとは異なる魔獣!？」

ホラー以外の怪物がこの世にいることを知り、梓は驚きを隠せずにいた。

それは梓だけではなく、唯たちも同様であつた。

「で、統夜、お前は どうするんだ？」

「誰かが襲われてる可能性があるからな。その魔獣のところへ行つてくるさ」「統夜先輩！危険ですよ！相手が誰なのかもわからないのに……」

ホラーであれば統夜は戦い慣れてるが、ホラーではないものとの戦いとなると、何が起ころかわからないため、梓はいつも以上に統夜のことを心配していた。

「……心配するな。俺は必ず戻る。だから、信じてホテルで待つててくれ」

統夜は梓の頭を優しく撫でて、このようになだめるのだが……。

「……嫌です……」

「？梓？」

「嫌です!!統夜先輩が行くなら私もついて行きます!じゃないと絶対に認めません!」

梓はどうしても行くのなら自分も連れてけと言つていた。

「梓の言う通りだぜ。統夜一人残しておいたら心配で旅行どころじゃないからな」

梓の言葉に律が同調し、律の言葉に唯たちも頷いていた。

「……仕方ない。だったらなるべく俺の側から離れるなよ」

『おい、統夜。本気か!?』

「心配するな。相手が誰であろうとみんなは俺が守る。守りし者としてな」

「『『『……／／／』』』」

統夜のストレートな言葉が恥ずかしかったのか、唯たちは一斉に頬を赤らめていた。

「?みんな、どうして顔が赤いんだ?」

『やれやれ……。彼女がいても鈍感な相変わらずか……。』

「?」

イルバは相変わらず鈍感な統夜に呆れており、統夜は首を傾げていた。

「と、とりあえず行くぞ、イルバ」

『了解だ。統夜』

統夜たちはイルバのナビゲーションを頼りに、妙な気配のする場所へと急行した。

※※※

統夜たちがたどり着いたのは、統夜たちの泊まるホテルアイビスの近くであり、人通りの少ない場所であつた。

「……イルバ、まさかあれか？」

『ああ。そうみたいだぜ』

統夜が指差した方向に、人形のような奇妙な姿をしたものがあり、その人形のようなものは、手に備え付けられている刃物を突きつけながら1人の女性に迫っていた。

「あつ！女の人が襲われています！」

「やーくん！助けないと！」

「当然！」

統夜は魔戒剣を取り出してそれを抜くと、人形のようなもの目掛けて走り出し、蹴りを放つて人形のようなものを吹き飛ばした。

「……大丈夫ですか？」

統夜はこの言葉を英語で伝えると、女性は無言で頷いていた。

「早く逃げろ!!」

さらにこの言葉を英語で伝えると、女性は逃げるようにその場から走り去っていった。

「さてと……」

統夜は魔戒剣を構えると、ゆっくりと体勢を整える人形のようなものを睨みつけた。

体勢を整えた人形のようなものは、統夜を獲物として捉えたのか、襲いかかってきた。

「……………」

統夜はすぐさま迎撃体勢に入り、魔戒剣を一閃すると、人形のようなものは真つ二つに斬り裂かれ、そのまま消滅した。

「……………」よし。鎧を使うまでもなかったけど、イルバ、これで全部か?」

『いや。まだ奴さんはいるみたいだぜ』

イルバの感じた妙な気配はまだ消えてはおらず、先ほどのような怪物がまだいることを伝えていた。

そして……………」

『……………」統夜!来るぞ!!』

イルバがこのように警告をすると、統夜の目の前に先ほどの人形のような怪物が4体も現れた。

「げっ……！まだあんなにいるのかよ……」

この怪物が何なのかはわからなかったが、まだ怪物がいることに、統夜はげんなりと
していた。

「……統夜先輩！気を付けて下さい！」

「ああ！わかつてるよ！」

統夜は改めて魔戒剣を構えると、4体の人形のような怪物は、一斉に統夜に襲いか
かってきた。

統夜は人形のような怪物の攻撃を難なくかわし、魔戒剣を一閃してまずは1体を葬つ
た。

続いて2体の怪物が一斉に襲いかかってくると、統夜は大きくジャンプをして攻撃を
かわし、連続で魔戒剣を叩き込むことで、怪物を蹴散らした。

残りは1体となり、統夜は魔戒剣を振るおうとするのだが……。

「……っ！統夜先輩!!危ない!!」

統夜の背後に死神のような怪物が現れると、統夜目掛けて鎌を振り下ろした。

「ちっ！まだいやがったか！」

統夜は舌打ちをしながら死神のような怪物の方を向いて迎撃体勢を整えた。

そして、人形のような怪物を蹴り飛ばそうと考えていたその時だった。

バン！バン！バン！バン！

突如銃声が聞こえてきたと思ったら、人形のような怪物と、死神のような怪物の体は銃弾のようなもので貫かれ、2体揃って消滅した。

「……………!!?銃?!いつたいどこから……………」

統夜は突如銃によって危機を救われたことに驚いていた。
すると……………。

『……………!!統夜!上だ!』

イルバはとある建物の上を指すと、統夜と唯たちはその方向を向いた。

そこにいたのは、二丁の拳銃を手に佇む、魔戒騎士のような格好をした男性だった。

「……………!!?あいつ……………!!確か、寿司屋の近くですれ違った……………」

その男は、統夜が回転寿司屋の近くですれ違った男と同一人物であり、統夜はそのこ

とをすぐに理解していた。

「ほう……。あの『悪魔』を難なく倒すとはな……。ガキのくせにやるじゃねえか！」

魔戒騎士のような格好をした男は、魔法衣によく似たコートをなびかせながら、こう統夜の実力を評価していた。

男の話す言葉は英語ではなく日本語だったため、統夜だけではなく、唯たちも言葉を理解していた。

「悪魔……。奴らはホラーじゃなくて悪魔っていうのか？」

「ほう。まさかホラーという名を聞くとはな……。お前、やつぱり魔戒騎士か？」

「!?お前、何で魔戒騎士のことを知っている!？」

「あ?知ってるも何も俺は……」

『統夜!またその悪魔とやらが来るぞ!』

イルバがこのように警告をすると、統夜たちより背の高い少し大きな怪物と、先ほどから現れている人形のような怪物が複数現れた。

「……またこいつか。それに、あいつは……」

『ああ。どうやら奴が親玉みたいだぜ』

「よし、こうなったら……」

統夜は臨戦体勢に入ろうとするが、その前に魔戒騎士のような格好をした男が大きく

ジャンプをすると、統夜の目の前で着地をした。

「……お前は下がってな！」

「何でだよ！俺だつて奴らと戦える！」

「そうらしいが、あまりお前に暴れられたら俺が暴れたりないんでね。それに……」
「それに？」

「ホラーを狩るのがお前の仕事だというなら、悪魔を狩るのが俺の仕事という訳さ」
魔戒騎士のような男は、統夜とは戦う相手は違えど、目の前にいる悪魔を狩るものだということは理解した。

「……わかった。俺は仲間を守る。奴らはあんたに譲るぜ」

統夜は魔戒剣を手にしたまま、その場を離れ、唯たちのもとへと戻ってきた。

「……統夜先輩。本当にいいんですか？あの人を1人にしちやつて」

「大丈夫さ。あの人だつてあの悪魔を狩るものなんだ。俺の力は必要ないだろうさ」

「ついで、でも！」

「心配すんな。こちらとしても、みんなを守るのに専念出来るから助かるしな」

「……………」

統夜のストレートな言葉がやはり恥ずかしかったのか、唯たちは頬を赤らめていた。

統夜たちがこのようなやり取りをしている間に、人形のような怪物が一斉に魔戒騎士

のような格好をした男に襲いかかってきた。

男は、両手に持つている拳銃を構えて発砲すると、その一撃で次々と人形のような怪物は倒されていった。

何体かの人形のような怪物が銃撃をかくぐつて男に飛びかかっていた。

男は背中に装備されている剣を取り出すと、その剣を一閃し、飛びかかってきた人形のような怪物を一気に蹴散らしていた。

「!?……そ、その剣!! 貴様……まさか、スパイダーの……!!」

数分もかからないうちに従えていた人形のような怪物は全滅してしまい、さらに男の持つ剣を見た瞬間、親玉の怪物は畏怖の感情を抱いていた。

親玉の怪物が話す言葉は英語であり、統夜は話を理解していたが、唯たちはちんぷんかんぷんであった。

「ああ。スパイダーは俺の親父だ」

魔戒騎士のような格好をした男は、英語で怪物と話をしていった。

「……!? スパイダーだ?!」

「……? イルバ、知ってるのか?」

『あの悪魔とかいう怪物も見覚えあると思ってたのだが、そういうことだったのか……』
イルバはどうやら、あの悪魔という怪物の存在を知ってはいたようであった。

「なあ、イルバ。それって……」

『統夜。詳しい話は後だ!』

統夜とイルバは一旦話を中断させると、スパードの息子と自称している男の戦いを見守っていた。

「ええい……!スパードの息子だろうと関係ない!!貴様をぶち殺して、俺様が悪魔の王となつてやる!!」

怪物は、男がスパードの息子と知つて怯えていたのだが、勇気を振り絞り、男を始末しようと駆け出して男に迫っていた。

男は非常に冷静であり、ニヤリと怪しい笑みを浮かべていた。

「死ぬのは……てめえだ!!」

男は怪物をギリギリまで引き寄せると、剣を一閃し、怪物を真つ二つに斬り裂いた。

「つ……強すぎる……!これがスパードの息子の力か……!」

「強すぎるだど?フン、それは認めてやるが、てめえが弱すぎるんだよ!」

男はまだまだ余力を残しており、余裕の笑みを浮かべていた。

男によつて斬り裂かれた怪物は、男との力の差を感じながら消滅していた。

「す、凄い……」

「あの怪物をあつという間に……」

「ああ、まるで魔戒騎士みたいだったな……」

「ええ。本当に凄かったわ……」

「はい。びつくりです……」

「……」

唯たちは男の戦いぶりに驚愕しており、統夜は魔戒剣を青い鞘に納めると、ジッと男を睨みつけていた。

「……お前、一体何者だ？」

「だから言つたろ？俺は悪魔を狩ってるって……」

「それにスパードってのは何者なんだ？返答次第じゃ、あんたを斬らなきゃいけない！」
統夜は再び魔戒剣を抜くと、魔戒剣を男に突き付けて男を睨みつけた。

統夜がこのような行動に出たのは、この男の力が余りにも強大で、その力に危機感を覚えたからであつた。

「ちよ、ちよつと！統夜先輩!？それはいきなりすぎなんじゃ……」

統夜が男にいきなり剣を突き付けたことに、梓は驚きながらも止めようとしていた。

「やれやれ……。そこのお嬢ちゃんの言う通りだぜ。俺はただ悪魔を退治しただけなのに、お前に剣を突き付けられる理由はねえぜ」

男は睨みつけながら剣を突き付けている統夜を見て呆れていた。

「……それを信用しろと?」

「僕はこの地の魔戒騎士です。この人……ダンテさんとは何度も仕事をしてますから、信用できる人です」

「!?ダンテだつて!?!」

ダンテという名前を聞いて、統夜とイルバは驚愕していた。

「何だよ。俺のことを知ってるのか?」

「いや。そうじゃなくて、俺の父の友人の名前がダンテだったから……」

統夜は、父の親友であり、後にホラーとなつてしまつて心滅となつてしまつた統夜に葬られた剛風騎士ダンテことダンテのことを思い出していた。

「ほう。まさか俺と同じ名前のやつがいたとはな」

ダリオと呼ばれた男のおかげで一触即発の状態は解除され、統夜とダンテと呼ばれた男は互いに剣をおろした。

一触即発の状態は解除され、唯たちも安堵のため息をついていた。

「あなたが白銀騎士奏狼ですよね?」

「そうですね、どうして俺のことを?」

「あつ、申し遅れました。私はダリオ・モントーヤ。黒曜騎士是武（ゼム）の称号を持つ魔戒騎士です」

「!?あなたも、魔戒騎士ですか?」

統夜はこのロンドンで魔戒騎士に会えるとは思っておらず、驚きを隠せなかった。

「ええ。この国はホラーだけではなく悪魔も姿を現してしまっていて……。それで、ダンテさんと度々共に戦っているのです」

「ま、そういうことだ」

「さつきも聞いたが、スパードって一体何者なんだ?それに、ダンテだったか?あんたは……」

「まあ、その話はおいおいしてやるよ。それよりも、そろそろ帰った方がいいんじゃないか?そこのお嬢ちゃんたちをいつまでそこに立たせておく気だ?」

「……っ!」

統夜はダンテやダリオから色々聞きたいことはあったのだが、唯たちをいつまでも待たせる訳にもいかず、これ以上のことは聞けなかった。

「……まあ、お前らがいつまでここに居るかは知らんが、聞きたいことがあれば俺の店……」「デビルメイクライ」まで来な」

ダンテはこのように告げると、剣を背中に背負うようにしまうと、その場を立ち去っていった。

「あなたが来ることは番犬所から聞きました。私もデビルメイクライに出入りしていま

すので、詳しいことはそこで話しましょう」

ダリオは統夜に一礼をすると、その場から立ち去っていった。

統夜たちだけがその場に残ることになり、しばらくの間、呆然としながらその場に立ち尽くしていた。

「……そろそろ戻ろっか」

「……そうだな」

これ以上ここにいる意味はなかったため、統夜たちはホテルに戻ることにした。

※※※

ホテルに戻った統夜たちであったが、回転寿司屋で寿司が食べられなかったため、まだ食事は取れなかった。

そのため、食事をどうするかが問題となってしまうが、ここで統夜が用意した日本食が活躍するのであった。

ホテルに戻るなり同室の唯がシャワーを浴びると言い出したので、統夜は日本食を持って部屋を後にした。

そして、梓と一緒に隣の部屋である律、漣、紬の部屋へ向かった。

「おっ！統夜！お前も日本食を持ってきてたのか！」

律は統夜が入ってくるなり、統夜の持ってきた日本食たちを凝視していた。

「やれやれ……。ん？お前も？」

統夜は律の言っていたお前もという言葉が気になっていた。

「あつ、統夜先輩！ベッドの上に……」

梓はベッドの方を指差していたので、統夜はその方を見ると、そこには日本食やカツプ麺などが置かれていた。

「あれ？この日本食つてもしかして……」

「ああ！どうやら憂ちゃんが持たせてくれたみたいだぞ」

「なるほど……。あの時か……」

統夜は旅行の買い物をした時、憂と会っており、その時のことを思い出していた。

「これだけあれば、今日のご飯は困らないだろうな」

「憂ちゃん、ありがとうね♪」

「統夜君もありがとうね♪」

律はカップ麺を手に、ベッドの上ではしゃいでおり、紬はおっとりとした笑顔で統夜に礼を言っていた。

「気にするなよ。それにしても、本当に日本食が必要になるとは思わなかったけどな」

統夜は万が一のことを考えて日本食を用意したのだが、本当に必要になるとは思っていなかったもので、少しだけ驚いていた。

「……ところで、お前らは何で制服を着てるんだ？」

統夜はこの部屋に入った時から気になっていた質問をぶつけてみた。

「いやあ、実はさっきまで記念写真撮ってたよ」

律、滯、紬の3人はこの部屋に戻るなり制服に着替えて、記念写真を撮っていたのであった。

「それにしても、何で制服なんですか？」

「だって！そのために持ってきたんじゃないよ」

統夜たちはみんな制服を持っていこうと話に出ていたため制服は持ってきたのだが、律は記念写真を取りたいがために制服を持ってきたのであった。

「まったく……。すぐ嬉しがるんだから」

「そういう滯先輩もしっかり着てますよね」

梓に痛いところを指摘されたのか、滯の顔は真っ赤になっていた。

すると……。

「あー……さっぱりした♪」

シャワーを終えた唯は、パジャマを着た状態でまっすぐ律たちのいる部屋に来ていた。

統夜、唯、梓の部屋と律たちの部屋は通路で繋がっているため、気軽に入出入りするこ
とが出来るのであった。

「それにしても、憂も統夜先輩も本当に準備いいよね」

「自慢の憂だからね♪」

「まあ、俺の場合は備えあれば憂いなしって思ったからな」

唯は用意周到な憂に感謝しており、統夜は魔戒騎士として、日頃から様々なことに備
える癖をつけていたため、ドライヤーをコンセントに刺そうとしていた。

唯は髪を乾かそうと、ドライヤーをコンセントに刺そうとしていた。

統夜はその事にすぐ気付き……。

「……!?!ちよっ!?!唯、そのまま電源入れるなよ!!」

「ほえ?」

統夜は慌てて止めに入るのだが、唯は首を傾げながらドライヤーの電源を入れた。

すると……。

ボン!!

「うひやあああああ!!」

爆音と共に少しだけ火花があがり、唯はそれに驚いていた。

幸い火が吹いたのは一瞬で、大惨事にはならなかった。

「おい、唯。どうしたんだ?」

「火……吹いたんだけど」

「怖っ!!」

唯がドライヤーの電源を入れた途端に起こったことを話すと、その内容に律は驚いていた。

「あちゃあ……。だから電源入れるなって言ったのに……」

静止が間に合わなかったためこのようなことになってしまい、統夜は頭を抱えていた。

「唯ちゃん。変圧器つけないと」

『気を付けろよ。日本とイギリスじゃ電圧に違いがあるからな。こういうのが火事のもことになるんだぜ』

イルバの説明通り、日本とイギリスでは電圧に違いがあるため、日本の家電を日本にいる感覚で使ってしまうと、先ほどの唯の起こしたことが起こってしまう。

変圧器をつければその心配はないのだが、それを忘れると、大惨事になる可能性もあるのである。

「もうヤダ……怖いよお……!」

唯は先ほどの光景が余程怖かったのか、ベソをかきながら弱々しい口調になっていた。

「……………ご飯食べよう?」

ベソをかいていた唯であったが、ご飯は食べたいと思っていたのか、こう提案すると、統夜たちは無言で頷いていた。

こうして、統夜と憂が用意した日本食を夕食として食べた統夜たちは、それから各自も部屋に戻り、眠りについた。

ロンドンに着いてから色々あったのだが、無事にロンドン最初の夜は更けていったのであった……。

………続く。

次回予告

『さあ、いよいよロンドンも2日目だな。今日は色々回りようだが、どうなることやら……。次回、「街並」。あいつらのことも気になるよな』

第109話 「街並」

統夜たちは卒業旅行でロンドンを訪れていた。

どうにか無事にホテルにチェックインした統夜たちはホテルの近くで買い物をし、回転寿司屋を見つけたのでそこで食事を取ろうとした。

しかし、そこで何故か演奏するよう頼まれた統夜たちは演奏することになったのだが、演奏をすると、そのまま店を出されてしまい、寿司にはありつけなかった。

寿司屋の入り口で偶然ラブクライシスのメンバーとばったり出会うという偶然があった。

ラブクライシスのメンバーと別れてすぐ、イルバは妙な気配を感じ取り、その場所へ急行すると、統夜たちは悪魔と呼ばれる魔獣と遭遇した。

統夜は魔戒騎士として悪魔と応戦するが、その最中、悪魔を狩る者であるダンテが現れ、統夜はダンテと出会ったのである。

ダンテの力は圧倒的で、難なく危機は乗り越えられたのだが、統夜はダンテの存在を危険視し、敵意を向けていた。

そのため、統夜とダンテは一触即発の状態になってしまったのだが、その2人の仲介

に入ったのが、この地の魔戒騎士である、黒曜騎士是武（ゼム）こと、ダリオ・モントーヤであった。

ダリオのおかげで無益な争いは避けることが出来て、ダンテとダリオは姿を消した。こうして統夜たちはホテルに戻り、統夜と憂が用意した日本食を食べて、各自の部屋で眠りについた。

そんな中、梓は妙な夢を見ていたのであった……。

く梓の夢く

『……あずにゃん！私、留年したよ！』

『へ!?!』

『これからは同級生だよ！』

『そ、そんな!?!』

『梓、俺も留年したぜ！俺も梓と同級生ってことだな！』

『と、統夜先輩まで!?!』

『よろしくね♪』

『よろしくな♪』

『じゃ、じゃあ……。先輩たちのことは何て呼んだら……』

『唯……でいいんじゃないかな？』

『俺は統夜って呼んでくれよ』

『え？えつと……。ゆ、ゆ……。い？と、とう……。や？』

『うんうん！その調子！』

『もつと大きな声で言ってくれよな！』

『ゆ……。い。とう……。や』

『もつと大きな声で！』

『ちよつと唯！やめてよお!!』

『その調子!』

『梓！ほら、俺も俺も!』

『ちよつと統夜！統夜もやめてよお!』

『うんうん。いい感じいい感じ♪』

『何だか……。しつくり来ません!』

『んなこと言ったって俺たちは……』

『そうそう。私たちはもう、先輩じゃないんだよ……』

ないんだよ……。

ないんだよ……。

ないんだよ……。

く梓の夢、終わりく

「……はっ！」

先ほどまで妙な夢を見ていた梓は、ゆつくりと目を覚ましていた。

梓はゆつくりと起き上がるのだが、現在は朝の4時頃であり、まだ唯も統夜も眠っていた。

「……あれ？」

梓は、唯のベッドの枕元の明かりがついていることに気付き、唯の眠るベッドに近付いた。

すると、唯はノートを広げて寝ていたのだが……。

「……………え!？」

唯のノートには、「あずにゃん LOVE!」と大きく書かれていた。

「な、何これ!?!唯先輩怖っ!」

梓は唯のノートに書かれた内容を素直に受け止めてしまい、唯がそのような性癖があると勘違いして、おののいてしまっていた。

梓は慌ててベッドに飛び込むと、布団を被っていた。

「……………おやすみなさいです……………」

梓は小さい声ではあるが、しっかりとおやすみの挨拶をしてから再び眠りについた。

それからおよそ1時間後、今度は統夜が目を覚ました。

統夜はゆつくりと起き上がると、唯や梓を起こさないように洗顔等を済ませ、着替えを済ませると、外に出る準備をしていた。

「……………ん?」

統夜も唯のベッドの枕元の明かりがついていることに気付いて、そこまで移動した。

統夜はそこに置かれた唯のノートを見たのだが……。

「アハハ……。唯のやつ、何書いてんだか……」

梓はこのノートの内容にドン引きしつつおののいていたが、統夜は呆れ気味に苦笑いをしていた。

《こんなのを梓に見られたら梓のやつ、勘違いするだろうな》

(アハハ……。確かに……)

イルバは唯や梓を起こさないようにテレパシーを用いて会話をしていた。

《統夜。こんな早く起きたということは、鍛錬しに行くのか?》

(ああ。いくら卒業旅行っていつても、魔戒騎士としての鍛錬はサボれないしな)

《ま、確かにその考え方は魔戒騎士としては大事だよな》

どうやら統夜は、ロンドンに来て、魔戒騎士として鍛錬を欠かすつもりはないようであった。

(とりあえずみんなが心配しないように……つと)

統夜は紙とボールペンを取り出すと、目を覚ました唯と梓が心配しないように「鍛錬に行ってくる。心配しなくても朝飯までには戻る
統夜」と伝言を残して

た。

(これでよし……つと。それじゃあ、行くぞ、イルバ)

《了解だ。統夜》

統夜は唯と梓を起こさないようこつそりと部屋を出ると、ホテルを後にして、鍛錬を行うことにした。

統夜は最初に、観光がてらジョギングをすることにした。

『おい、統夜。鍛錬つて剣の素振りじゃなくてジョギングか？』

「まあな。鍛錬と街の観光を兼ねてな」

統夜はせっかくロンドンに來たのだから、魔戒騎士として修行をしながらロンドンの街を楽しむと考えていた。

『やれやれ……。お前つてやつは。修行を何だと思つてるんだよ……。』

イルバは、遊び半分な気分で修行に臨む統夜に心底呆れていた。

「まあまあ♪たまにはこんな修行もいいだろ？」

『やれやれ……。』

「とりあえず、行くぞ、イルバ」

『わかつたよ。だが、夢中になり過ぎてあまり遅くなるなよ』

「わかつてるつて」

こうして統夜は、鍛錬と街の観光を兼ねたジョギングを行うことにした。

昨日は立ち寄れなかつた部分を中心に走っており、統夜は心地よい気分で走り続けて

いた。

そして、1時間ほど走り、統夜はホテルへ戻ることにしたのだが、その途中、気になる建物を発見し、足を止めた。

「……………」

『どうした、統夜？』

「なあ、イルバ。あの建物なんだけどき……」

統夜が指差した建物は、「DEVIL MAY CRY」と書かれた看板が立てられていた建物であった。

「デビルメイクライ……」

『昨日あの男が言っていた店だな』

「ああ。あの男や、ダリオって魔戒騎士には色々聞きたいことがあるから……。今日時間があれば立ち寄ってみるか」

統夜は今日の自由行動の空いている時間に立ち寄ればこの店に立ち寄ろうと考えていた。

『統夜。とりあえず戻るぞ。あまり遅いと唯たちがうるさいからな』

「わかってるって」

こうして、鍛錬を終えた統夜は、そのままどこか寄り道をすることなく、ホテルへと

戻っていった。

ホテルへ戻った統夜は梓に電話をかけ、部屋に入っても大丈夫だということを確認してから部屋に入った。

もし確認せずに部屋に入って2人が着替え中だったら、後が怖いからであった。

統夜が部屋に入ると、2人は既に起きており、着替えも済んでいた。

こうして統夜たち3人は、一緒に部屋を後にすると、隣の部屋にいる律、漣、紬の3人と合流し、一緒に朝食を取った。

朝食終了後、統夜たちはホテルを後にすると、梓が立てたプランに基づいてロンドンの街を見て回ることにした。

最初はロンドン市内を歩き回り、その途中でコンビニのような建物に立ち寄った。

しばらくの間、そこに滞在した統夜たちは、その場を離れると、近くにあった「L O K R I G H T」と書かれた道路標識を発見し、それに合わせて左右を確認していた。

その後、車が来ていないことを確認した統夜たちはそのまま道路を渡り、次の目的地へと向かっていった。

統夜が鍛錬を兼ねて街を見回っていたおかげで、迷うことなく順調に次の目的地へ向かうことが出来た。

その話を唯たちにしたら唯は「ずるい！」と言いながら膨れっ面になっていたが、統

夜は苦笑いしながら「はいはい」と話を流していた。

最初の目的地に着いた統夜たちは記念写真を撮影することになった。

唯は梓にくつつこうとするが、離れられてしまい、写真撮影後にベンチで休憩していた時も、唯は梓に近付こうとしたら、逃げるように唯から離れていった。

（アハハ……。どうしたんだ？梓のやつ。今日はやけに唯を避けてるように見えるが、どうしたんだ？）

《まさかとは思うが、梓のやつもあの唯のノートを見てしまったのかもしれないな》
（それなら梓の行動も説明がつくよな）

統夜とイルバはこのような推理をしていたのだが、実はそれが正解で、梓が唯のノートを見てしまったということを知ることになった。

ベンチで小休憩を終えた統夜たちはその後、再び街を歩き回り、公園へと到着した。そこでリスの親子を偶然発見し、統夜たちは目をキラキラと輝かせていた。

その後、統夜たちは公園を歩いていると……。

「ねえ、みんな！見て見て！ワンちゃんの様子のポストだよ！」

「あ、本当だ！可愛いねえ♪」

唯は偶然犬の様子のポストを発見し、紬と共に目をキラキラと輝かせていた。

そして、唯はそのポストの口に手を突っ込もうとするのだが……。

「……唯、それに手を突っ込むのはやめといた方がいいと思うぞ」

「ほえ? 何で?」

統夜があと少しのところまで止めたのだが、唯は何故止めたのかが理解出来ず、首を傾げていた。

「本で読んだことがあるんだ。ロンドンには犬の糞を処理する専用のポストがあるって」

「え!? そうなの!?!」

「……つということは、これが?」

「ああ。そうなんだろうな」

統夜の説明通り、このポストは犬の糞専用のポストであった。

唯は何も知らずにあのまま触れていたらと考えると、顔を真っ青にしていた。

すると、このポストのことを説明するかのようになり、犬の散歩中の中年女性がポストのところへとやって来た。

その手にはビニール袋が下げられており、その中身は犬の糞であると思われた。

女性は日本人である統夜たちがこのような場所にいるのが珍しいのか、ニコニコしながらも統夜たちのことをジッと見ていた。

統夜は女性の視線に気付いたため……。

「Hello」

と挨拶をした。

まさか向こうから挨拶してくるとは思っていなかったのか、女性は驚きながらも挨拶を返していた。

※ここから先の会話は日本語で表示していますが、英語で会話をしています。

「もしかして、この辺の人ですか？」

「ええ、そうよ。あなたたちは観光かしら？」

「はい、そうです。それにしても可愛いですね。撫でてもいいですか？」

「もちろんよ♪♪どうぞ♪♪」

統夜は女性の許可を得たところで、犬の頭を優しく撫でていた。

統夜が動物好きだというのが犬にも伝わったのか、一切抵抗することなく、むしろ尻尾を振って喜んでいた。

「それにしてもあなたは学生さん？随分と英語が上手なのね」

「はい。僕たちは高校生です。卒業旅行でここに来まして。だけど、僕の英語はまだま

「ですよ」

「統夜は女性にここへ来た目的を話すと、自分の英語力については謙遜気味に答えていた。」

「そんなに謙遜することもないのに……。せつかくの旅行、楽しんでね♪」
「ありがとうございます。失礼します」

統夜は女性にペコリと一礼をすると、その場を離れていった。

※会話終了※

「……あつー！やーくん！待ってよお！」

「どうやら女性との会話は終わったようであり、唯たちは慌てて統夜を追いかけた。」

「統夜先輩、あの人と一体何を話してたんですか？」

「ん？何の変哲もない世間話だよ。学生なのか？って聞かれたから、そうと答えて、卒業

旅行に来たとも話してたんだよ」

「そうだったんですか……」

「それにしても、統夜の英語は凄いな。まったく聞き取れなかったぞ」

普段から成績が良く、多少なら英会話も出来る滯りでも、統夜と女性の会話を完璧に聞き取ることは出来なかった。

「そうか？あれでちゃんと通じてるか不安だったけどな」

「謙遜することはないわよ。凄かったわよ♪」

「はい！凄かったです！」

「アハハ……。そうかな？」

統夜はベタ褒めされたのが恥ずかしかったのか、頬を赤らめて恥ずかしかった。

「おお！やーくんが照れてる！」

「う、うるさい！／＼／＼」

「照れなくてもいいのに♪」

「照れてない！ほら、次行くぞ！」

唯と律はニヤニヤしながら統夜をからかっていたのだが、統夜はムキになってしまい、そのまま歩き出してしまった。

「あー!!やーくん！待ってよお!!」

「統夜先輩！待ってください！」

唯たちは慌てて統夜の後を追いかけると、そのまま公園を後にして、次の目的地へと向かっていった。

続いて統夜たちが向かったのは、大きな時計がかなり目立っている店の前だった。

その時計は何故か高速で逆回転しており、それが目に留まったため、立ち寄ったのであった。

梓がガイドブックを開くと、どうやらこの店は、ヴィヴィアン・ウエストウッドというブランドを扱う店の本店のようであった。

そこで記念写真を撮影した後、次の目的地へと向かった。

続いて向かったのは、かつての名探偵であるシャーロック・ホームズが住んでいたと言われているベーカー街B221の建物だった。

この建物は現在はホームズの博物館としてイギリスのみならず、多くの国の人が訪れる観光スポットとなっている。

ここに行きたいと提案したのは、サスペンスが大好きな紬であった。

入るには入館料がかかるため、この建物の中には入らなかつたが、入り口にいる門番の人と一緒に記念写真を撮影していた。

写真撮影を終えると、統夜たちは次の目的地へと向かった。

統夜たちは次の目的地である大英博物館へと向かっていたのだが、その途中に滞りが起きたがっていたアビーロードを発見し、そこを通って大英博物館へと向かったのだった。

大英博物館に入るなり、唯たちがトイレへ行きたいと言い出したため、統夜1人残して女性陣はトイレへと向かっていったのであった。

1人残された統夜は、どこかへ移動することなく、携帯をいじりながら大人しく待っていた。

数分後、唯たちが戻ってきたため、博物館見学の続きを行うことにした。

30分程、展示物の見学を行った統夜たちは、大英博物館を後にした。

次の目的地はロンドンアイなのだが、その途中……。

「……すつごく歩いたねえ」

「なあ、少し休まないか？」

途中、休憩は何度も挟んでいたのだが、それなりの距離を歩いてきたため、律が休憩を提案していた。

「確か、この近くにアフタヌーンティーが出来るところが……」

梓はガイドブックを広げると、今いる場所の近くにアフタヌーンティーが出来る店があることを確認していた。

「アフタヌーンティー！あずにゃん、それは私たちの魂だよ!!」

「確かにな。とりあえず行ってみるか」

こうして統夜たちはアフタヌーンティーを行うためにガイドブックに書いてあったお店に向かい、中に入ったのだが……。

「……予約が必要だったとは……」

その店はどうやら予約制の店のようであり、統夜たちは紅茶を飲めずに店を出たのであった。

統夜たちは休憩を諦めることにして、そのまま当初の目的地であるロンドンアイへ向かうことにした。

※※※

「……みんな！早く早く！」

ロンドンアイが見えてくると、唯ははしやぎながらロンドンアイへ向かって走り出しており、統夜たちもそれに合わせて走り出していた。

そして、階段を降りると、統夜たちの目の前にロンドンアイがそびえ立っていた。

「おお！大きいねえ！」

「そうだな」

統夜たちはロンドンアイの大きさに見とれており、唯と統夜が感嘆の声をあげていた。

「……………回ってる……………」

「回ってる♪」

この卒業旅行で、回るもの恐怖症になってしまった澪は顔を真っ青にしており、紬はププツと吹き出しそうになっていた。

「早く乗ろうよ！ねー、ムギちゃん！」

「うん♪」

「ねー、みおちゃん！」

「え?!」

ロンドンアイに乗りたいたいという唯の提案に紬は同意しており、澪は唯に同意を求められて驚いていた。

「わ、私は下でみんなの荷物番をしてるよ！」

「え？」

滯はロンドンアイに乗りたくないのか、荷物番をすると名乗り出ていた。

「じゃ、じゃあな！楽しんでこいよ！はは、あはは……」

滯は引きつった表情で笑みを浮かべながら、統夜たちを見送って逃げようとしていた。

「滯……」

「みおちゃん……」

そんな滯を見て、律と唯が取った行動は……。

「ダメだー!! 回るのはダメだー!!」

律と唯が協力して滯の首根っこを掴むと、そのままロンドンアイに向かって引っ張っていった。

残りのメンバーは、それを見守るかのようについて行ったのであった。

「いいからいいから♪」

「ダメだ！本当に回るのはダメだ！」

滯は本当に嫌だったのか、ジタバタと暴れて抵抗をしていた。

「大丈夫よ、みんな一緒なんだから♪」

紬がこう言つて励ますのだが、漣は聞く耳を持っていなかった。

「ダメだ！ 回るのはあ!!」

こうした漣は半ば強引にロンドンアイに乗ることになり、統夜たちはロンドンアイに乗ったのだが……。

「凄いなあ！ ロンドンが見渡せる!!」

ロンドンアイの中に入ると、漣は拒絶反応は無くなり、それどころか、絶景を見てはしゃいでいた。

「みおちゃん、楽しそうだね♪」

「ま、乗ってたらグルグル回るのは見えないからなあ」

「そうだな。楽しそうだから良かったよ」

唯、律、統夜の3人は楽しそうに景色を眺めている漣を見て、笑みを浮かべていた。

「そうだ！ 写真撮ろう」

「はっ！」

漣は写真を撮ろうと考えて、カメラを出そうとするのだが……。

「漣！ 荷物あずキヤットくよ！」

「……」

律までもあずキヤットを使って預かると言っており、それを聞いた梓は複雑だったの

か、苦笑いをしていた。

ロンドンアイを満喫した統夜たちが次に向かったのは、バラ・マーケット（BOROUGH MARKET）と呼ばれる市場であり、ロンドン有数の食品市場である。

その市場で統夜たちは美味しそうなカップケーキを購入し、食べることにした。そのカップケーキを食べている途中……。

「……なあ、ムギ。これ、あずキヤットいてくれないか？」

「はい♪」

濡までもあずキヤットを使っており、袖にカメラを預かってもらっていた。

（……流行っちゃった……）

唯が言い出しついでであり、そこからどんどんあずキヤットという言葉が流行りだしてしまい、梓は複雑そうに苦笑いをしていた。

（さ、流石に統夜先輩は使わないよね！）

恋人である統夜はこのようなフレーズは使わないだろうと梓は予想していたのだが

……。

「……唯、悪い。これ、ちよつとあずキヤットいてくれないか？」

「うん！わかったよお！」

（と、統夜先輩まで!?!）

統夜までもがこのあずキヤットを使っており、梓は目を丸くして驚いていた。

さらに、統夜までもがこのフリーズを使うのが気に入らなかつたのか、梓はぷうつと頬を膨らませながら統夜を睨みつけていた。

《……おい、統夜。梓に睨まれてるぞ》

(あ、本当だ。俺があずキヤットを使ったのが気に入らなかつたのか?)

《やれやれ……。みんなに合わせて悪ノリするところは、お前さんもまだまだガキだよな》

(うぐつ……。ま、まだ俺は20歳前なんだからガキなのは当たり前だろ?)

《おいおい、開き直るなよな……。》

イルバにガキ扱いされたことで統夜は開き直つてしまい、イルバはそんな統夜に呆れていた。

こうして市場を見て回つたところで、この日の観光は終了となり、統夜たちはホテルに戻つてきた。

※※※

「じゃあなあ!!」

「じゃあねえ!!」

統夜、唯、梓の3人は隣の部屋である律、漣、紬の3人が部屋に入っていくところを見守っていた。

3人が部屋の中に入ると……。

「私もあつちで」

「あずにゃんはこつちでしょ?」

梓は何故か律たちの部屋に行こうとしており、それを唯に止められていた。

すると梓は……。

「……統夜先輩。もし私が唯先輩に襲われそうになったら、助けてくださいね」

「はあ?」

小声でこのように統夜に耳打ちをしたのだが、統夜は言葉の意味が理解出来ず、首を傾げていた。

こうして、統夜たちは部屋に入ったのだが……。

「ただいまー!!」

統夜がドアを閉めるなり、唯はまるで梓にキスをするかのように口を尖らせ、梓目掛けて勢いよく迫っていった。

「!!」

梓は唯に襲われると思ったのか、体勢を低くすると、唯のみぞおちにヒジを打ち込んだ。

梓のヒジ打ちは鮮やかであり、唯はその場に倒れ込んでしまった。

「おお〜!」

梓の鮮やかなヒジ打ちに統夜は思わず拍手を送るのだが、とんでもないことをやらなかったと思った梓は、倒れている唯に駆け寄った。

「す、すいません!大丈夫ですか?で、でも私、統夜先輩もいますし……そういうんじゃないんです!」

「アハハ……。そういうのって……」

梓の言葉の意味を理解した統夜は、少々呆れ気味に苦笑いをしていた。

すると……。

「ど……ど……ど……どうなの?」

「へ?」

「私はただ、ギー太に抱きつこうとしただけなのに……!」

唯は梓に抱きつこうとしたのではなくて、ホテルに置いてきたギー太に抱きつこうと
していたのであった。

「へ!」

梓はここで自分が勘違いをしていたことをようやく理解し、その顔はまるで茹で蛸の
ように真っ赤になっていった。

「すいません!勘違いでした!すいません!」

梓は自分の勘違いが恥ずかしいと思ったのか、ベッドに飛び込み、そのまま布団に包
まっていた。

「よつと……。唯、大丈夫か?」

統夜は唯の手を取って唯を起き上がらせるのだが、唯は統夜の手を取ってどうにか起
き上がり、その後はみぞおちの部分を優しくさすっていた。

「エへへ……。へーきへーき。憂にもらった護身術の本が役に立って良かったよお」

唯は梓に強烈なヒジ打ちをもらったことについては怒っておらず、おっとりとした笑
みを浮かべていた。

夏休みに憂が買ってくれた護身術の本が、ここに来て活躍するとは思っていなかった
ので、唯は結果的に良かったと思っていた。

「あうう……」

梓は勘違いをしていた恥ずかしさと、唯への申し訳なさが合わさったからか、涙目になつていた。

「あれ？あずにゃん、寝るの？エへへ……子守唄……歌つてあげようかな」

唯は梓のベッドに乗り込み、梓の隣に移動すると、子守唄を歌おうとしていた。

そして……。

「……ふねーんねーん……ころーりーよー」

唯は本当に子守唄を歌い始めていた。

「すみません……」

梓は申し訳ない気持ちでいっぱいだったため、改めて唯に謝罪の言葉を送っていた。

「おこーろー……りー……よ……。……あう……。zzz……」

子守唄を歌っていると梓ではなく、唯が眠くなつてしまい、唯はそのまま眠つてしまった。

『おいおい、子守唄を歌う本人が寝ちまつてどうするんだよ』

「アハハ……。確かにな」

イルバと統夜は、子守唄を歌っていた唯が眠ってしまったことに呆れながらも苦笑いをしていた。

『どうやら、梓のやつは、本当にあの唯のノートを見ちまっただみだいな』

「ああ。それで唯がそんな性癖を持つてるって勘違いしたのか」

『まあ、あんな風に書いてあれば梓が勘違いするのもわかる気はするぜ』

「まあ、そうだよな」

『おい、統夜。これからどうするんだ？』

梓は布団に包まり、唯は眠ってしまったため、統夜はポツリと一人残された状態になつてしまった。

「そうだな……。ホテルを出ると唯たちに心配をかけそうだし、少しでも休むことにするよ」

『まあ、それがいいかもしれないな』

こうして統夜は、少しでも体を休めることにした。

それからしばらくすると、律から「あたしらの部屋に来てくれ！」とメールで告げられたので、この時には既に起きていた唯と共に3人の部屋に向かうことになった。

統夜は既に寝巻き代わりのジャージに着替えており、唯はシャワーを浴びた時に寝巻きに替えていたため、寝巻きの格好で、3人の部屋に入った。

統夜と唯の2人が律たちの部屋に入ると、澤は今日撮った写真を確認していた。

「……………」

公園で撮った写真がおかしい写真だったからか、漑は笑みを浮かべていた。

「……つて！写真を取るために集まった訳じゃなくてだな！」

「わかってるつて。梓のための曲について相談するんだろ？」

「ねえ、誰か出来た？梓ちゃんへ贈る曲のコンセプト」

絢が、今話すべき話題を切り出していた。

「……まだなーんにも」

「どうやら、アイデアはまだ思いついていないようだった。」

「ロンドンに来れば、スケールの大きい曲が浮かぶと思っただけだね……」

「確かに、インスピレーションが刺激されると思っただが、なかなか上手くいかないよな」

ロンドンで何か良いインスピレーションを得て、それを元手に梓へ贈る曲を作ろうと
考えていた統夜たちだったため、曲作りの方は難航していた。

現在、ホテルへ戻ってから2時間程経過しており、梓は布団に包まった状態のまま
眠ってしまったため、統夜と唯は梓に怪しまれることなくこの部屋に来れたのであつ
た。

律、漑、絢の3人は既に寝巻きに替えており、完全にリラックスマードになつてい
た。

「……ビッグベーン！ロンドンアイ！テムズ川!!」

唯は何故か野太い声で、ロンドンの地名を叫んでいた。

『それは曲じゃなくて、ただ名所を叫んでるだけじゃないか……』

「しかも、何だよ、その野太い声は……」

イルバと統夜は、揃って唯の歌と思えないフレーズに呆れていた。

「だって、今までにない凄い曲を作りたじゃん！ 私たちがいなくなった後も、その曲を聞いたらやるぞー！ って気持ちになるような……」

唯が考えている曲のイメージは少しばかり抽象的であつたが、こんな曲を作りたいという気持ちは伝わってきた。

「無敵になれる感じ？」

「無敵かあ……」

紬は唯の曲のイメージをこのように解釈していた。

「なあ、唯の考えてるイメージとはかけ離れてるんだけどさ、俺、1曲だけ作ってみただよ」

「え!? そうなの!？」

「つか、そうならそうと何で早く言わないんだよお！」

統夜が新曲を作っていたことに、紬は驚き、律は文句を言っていた。

「俺だって早く言いたかったさ。だけど、何度も何度も言うタイミングを逃してな」

統夜の曲が出来たのは、卒業旅行に行く前で、新曲を作ったことは話そうと思えば話せたのだが、旅行中はバタバタしており、なかなか話を切り出せなかった。

「ねえねえ！やーくんの作った曲、聞いてみたい！」

「私も聞きたい！」

どうやら唯たちは、統夜の曲と聞いて、興味を示していた。

「そう言うと思つてな、用意はしてきたぜ」

統夜はズボンのポケットから携帯用の音楽プレイヤーを取り出すと、それを唯に手渡した。

唯から順番に統夜の曲を聞いており、紬、律、漣とこの曲を聞いていった。

「やーくん！凄くいい曲だね！私は好きだよ、この曲！」

「ええ。私も凄く気に入ったわ♪」

どうやら、唯と紬はこの曲を気に入ったようであった。

「あたしも良いとは思うけど、この曲は、梓も交えてやりたいよな」

「あ、それは私も思っていた！」

律と漣もこの曲を気に入ってはいたのだが、梓に贈る曲ではなく、放課後ティータイム全員の曲にしたいと思っていた。

「確かに！その方がいいかもね！」

「梓ちゃんのための曲は、改めて考えましょう」

「そうだな。とりあえずこの曲は、卒業旅行が終わったら楽譜を用意するよ。俺たち放課後ティータイムの曲としてな」

「ああ！統夜、よろしくな！」

こうして、統夜の作った曲は、梓に贈る曲としては没になったが、放課後ティータイムの曲としては、採用となった。

「ところで、統夜。この曲のタイトルは何なんだ？」

話がまとまったところで、律が気になっていた疑問を統夜に聞いていた。

「ああ。この曲のタイトルは……。『風々旅立ちの詩』」

統夜は曲のタイトルを告げると、唯たちの表情がぱあつと明るくなっていた。

「うん！凄くいい感じだよ！」

「そうだな！」

「ええ♪早くこの曲を演奏したいわ♪」

「統夜！この旅行が終わったら早く楽譜作ってくれよ！」

「はいはい。わかってるって」

曲のタイトルを告げたところで、統夜の作った曲についての話は終了した。

時間も遅くなってきたため、梓に贈る曲についての話し合いはここで中断することに

した。

「ねえねえ、やーくん。部屋の鍵って持ってきた？」

「いや。梓もいるから置いてきたぞ」

「ええ!!?それじゃあ、私たちの部屋に帰れないじゃん!」

「いや、そこから戻れるから問題はないだろ」

統夜はとある方向を指すのだが、この部屋と統夜たちの部屋は繋がっており、正面の入り口だけではなく、裏口からも互いの部屋に行き来することが出来る。

このようなタイプの部屋は、コネクティングルームと呼ばれている。

「あつ、そっか!それなら良かったよ!」

鍵は持ってきてなかったが、部屋に戻る手段を知り、唯は安堵していた。

その頃……。

「…………んあ…………あれ？」

布団に潜り込んでしまったまま眠っていた梓は目を覚ますのだが、部屋は真つ暗で、統夜と唯の姿はなかった。

梓はまだ寝ボケているのか、少しばかり目がうつろだった。

そんな状態で部屋を出るのだが、律たちの部屋に続く道に何個も飴が落ちていた。

「今度こそ…………。本当に道しるべ…………」

梓は飴を拾いながら、のろのろと律たちの部屋へと向かっていった。

そして時を同じくして…………。

「…………それじゃあ！私は、あずにゃんのもとへ帰りますので！」

「唯、俺はもうちよつとここでのおんびりしてから戻ることにするよ」

「うん。わかつたよお！」

唯は自分の部屋に戻ろうとするのだが、唯の手にしている飴の袋から飴がポロポロとこぼれ落ちていた。

「おい、唯！ 飴ちゃん落としてるぞ！」

「ああ、あげるよ。食べといて♪」

「おやすみ、唯ちゃん」

「おやすみ♪」

こうして唯はもう一つの出入り口を使って、自分の部屋へと戻っていった。

「やれやれ……。テキトーなやつだな……」

濡は飴を落としても気にする素振りのない唯に呆れていた。

すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえてきた。

「あれ？ こんな時間に誰かしら？」

「統夜。ちよつと見てきてくれないか？」

「はいはい……」

律は自分がドアまで行って様子を見に行こうと考えたのだが、自分より背の高い統夜に頼むことにした。

統夜はやや呆れ気味の状態でドアに近付くと、覗き窓から誰が来たのかを確認していた。

すると……。

「……………!!おい、梓が来るぞ！」

この部屋に訪れたのは梓であり、統夜がその事を伝えたと、律たちは大慌てでノートなどを隠していた。

そのノートには梓に贈る曲のネタが書かれていたため、梓に見られる訳にはいかなかった。

ノートなどを隠し終えたところで、統夜はドアを開けると、梓が中に入ってきた。

「はいよ、いらつしやい」

「あ、ども」

梓はゆつくりとであるがベッドのあるあたりまで移動をしていた。

「梓ちゃん」

「どうしたんだ？」

「もしかして、統夜を探しに来たのか？」

「んー……」

梓は寝ボケているのか、滯や律の問いかけをスルーし、周囲を見回していた。

「……おお」

「どうやら統夜の存在は認識したようであり、再び梓は周囲を見回すのだが……」

「……んん？」

「「んん？」」

梓が首を傾げていたので、律、漣、紬の3人もつられて首を傾げていた。

「……あ、お邪魔しました〜」

梓は寝ボケてたまま、コネクティングドア側から、自分の部屋へと戻っていった。

そして、それから間もなくドンドンドンドンとドアを叩く音が聞こえてきた。

統夜が覗き窓から誰が来たか確認すると唯だったので、統夜はドアを開けるのだが

……。

「やーくん！大変！大変大変!!」

唯は何故か血相を変えて部屋に入って来ており、そこから唯の慌てっぷりが垣間見れた。

「おいおい、落ち着けて」

「どうしたんだよ、唯」

「あずにやんがないんだよ!」

「梓ちゃんならたつた今来たよ?」

「え!?!」

「でもまた戻っていった」

紬と漣は、梓が先ほど出て行ったコネクティングドアの方を指差した。

「なんと!」

梓は戻っていると聞いた唯は、慌ててコネクティングドアを使って自分の部屋へ戻って行った。

それから間もなくして、再びドンドンドンとドアをノックする音が聞こえてきた。

統夜は覗き窓を見ると梓だったのでドアを開けるのだが……。

「統夜先輩！おかしいです!!」

今度は意識がハッキリとしている梓が、部屋の中に飛び込んできた。

「あ、起きた」

「唯先輩がいませぬ!」

梓は唯がいないことに慌てていたのだが、紬と漣は何も言わずにコネクティングドアの方を指していた。

「へ?」

梓がそのことに呆然としていると、再びドンドンドンとドアを叩く音が聞こえたので、統夜は再び覗き窓で確認を行った。

すると、再び唯だったため、ドアを再び開けると、唯が慌てて飛び込んできた。

「やーくん!やつぱりいないよ!大変!大変!」

部屋に慌てて飛び込んできた唯は、目の前にいる梓に近付くと……。

「大変だよ、あずにゃん!あずにゃん!あずにゃん!あずにゃん!」

目の前にいるのが梓であることに唯はまだ気付いていないのか、梓に対して梓がいな
いと話をしており、梓はポカーンとしていた。

その数秒後……。

「おお！いるじゃん！」

「は、はい」

「どこ行ってたんだよ。心配したよお！」

唯は梓のことをぎゅつと抱きしめていた。

「あ……その……えっと……」

梓はどうリアクションしていいのかわからず、困惑していた。

『……おいおい。何なんだ？今のコントは』

「アハハ……確かに。こんな感じのコントをテレビで見たことがあるような……」

イルバと統夜は、今までの唯と梓のやり取りがコントのようだったため、苦笑いをし
ていた。

すると、突然部屋に備え付けられている電話が鳴った。

突然の電話に統夜たちは驚いていた。

「な、何だ？こんな夜遅くに」

「もしかして、日本からじゃないか？」

「日本は今、朝の6時だよ！」

「へえ、時差に詳しくなったな、唯」

統夜は現在の日本の時刻を即答した唯に驚いており、時差計算の速さを褒めていた。

「エへへ……」

唯が褒められて嬉しそうにしていると、律が電話を取った。

「あつ、ハロー。イエース！オーイエース！」

律はきちんと会話をしているのか適当に返しているのか、よくわからないが、ハローとイエスしか英語を使っていなかった。

すると……。

「……何!? 殺し!?!」

「ひっ!?!」

律が刑事ドラマのような台詞を言うのと、濡はビクン!と怯えていた。

「……なーんちやって♪出た途端に切れちやった♪」

どうやら先ほどのやり取りはただのおふざけだったようであり、律はペロツと舌を出していた。

すると……。

ゴツン!!

律のおふぎけに起こった漣は、律に拳骨をお見舞いしていた。

「どこからだだったんだろう」

「大事な用ならまたかかってくるわよ♪」

「そーだねえ」

漣、紬、唯の3人が何事もなかったかのように会話をしていると、律は殴られた部分を優しくさすりながらブツブツと何かを呟いていた。

その後、統夜、唯、梓の3人は自分たちの部屋に戻り、そのまま眠りについた。

統夜は普段からの疲れを癒すかのように爆睡しており、唯は梓へ贈る曲をどうするかを考えていた。

そして梓はというと……。

「……あうう……。それじゃあ、唯先輩や統夜先輩のことを何て呼べば……」

また唯と統夜が留年したという夢を見ているようで、このように寝言を言いながらうなされていた。

「？」

唯はそんな様を見て、首を傾げていた。

こうして、ロンドン2日目の夜は、更けていったのであった……。

……続く。

——次回予告——

『まさか、ロンドンの街でこのようなことをすることになるとはな。統夜、ここは気合を
いれないとな！次回、「参加」。そして、奴らの秘密も明らかになる！』

第110話 「参加」

ロンドン3日目の朝、統夜たちは、ホテルのレストランで食事を取っていた。

「ふわああ……」

梓は寝不足なのか、大きな欠伸をしていた。

「梓、寝不足か？」

「ええ、まあ。ちよつと妙な夢を見たせいで……」

「妙な夢ねえ……」

統夜と梓がこのような会話をする中、唯は瞬きもせずに梓のことをジツと見つめていた。

（あずにゃんのための曲……）

唯は梓に贈る曲のコンセプトをずっと考えており、それを考えているからか、梓のことを凝視していたのである。

「……う？どうした、唯。梓をジツと見て」

「唯先輩。瞬きはした方がいいですよ」

唯の集中力はかなりのものだったのか、統夜と梓が声をかけても聞こえてはいなかつ

た。

(……あずにやんにやんにやん♪あずにやんにやんにやん♪)

唯は頭の中で妙なフレーズを口ずさんでいた。

そして梓は唯にジツと見られているのが恥ずかしかったのか……。

「そんなに見ないでください！もお！」

梓は食パンを頬張りながら膨れっ面になっており、そっぽを向いていた。

(怒られちゃった……)

唯はここでようやく我に返り、怒られていることに気付いたのであった。

統夜は、そんな唯をジト目で見ながら、朝食を取っていた。

朝食終了後も唯は梓に贈る曲のコンセプトを考えており、全員で出かける時間までずっと考えていた。

しかし、良いアイデアは出ず、そのまま街へと繰り出したのであった。

まず最初に訪れたのは楽器屋であり、ロンドンならではの品揃えに、統夜や律、漣は興奮していた。

そんな中、唯はやはり梓に贈る曲のことを考えていた。

(……もつとスケールの……。♪大きな大きな大きなあ♪……じゃなくて！)

先ほどから妙なフレーズしか頭には浮かばず、どうすればいいのか悩んでいた。

楽器屋を出て、次の目的地へ向かう統夜たちだったのだが……。
「うわああああああ!!」

道中、ゾンビの格好をした男の人と遭遇し、濡はそれが怖かったのか、ベソをかきながら逃げ出していた。

統夜たちも一緒になって逃げ出し、どこへ行くのかも定まらずにただ走っていた。

(……あずにゃんのための曲……)

そんな状況下でも、唯の頭は、梓のための曲についてでいっぱいだった。

しばらくの間走り続けた統夜たちは、疲れたからか、ベンチに座ってひと休みするこ
とにした。

(……!!なあ、イルバ。ここって……)

《ああ。あの男の店……デビルメイクライの近くだな……》

統夜たちは偶然にも、デビルメイクライの近くに来ていたのであった。

(とりあえず、ひと休みしたら、みんなに話してデビルメイクライに行ってみるか)
《ああ。お前さんも色々聞きたいことがあるんだろう?》

(まあな)

統夜とイルバがテレパシーで会話をしていると、突然律の携帯が鳴り出した。

律は携帯を取り出すのだが、どうやら電話のようであった。

「あれ？川上さんからだ」

電話をかけてきたのは、以前ライブハウスでのライブの時に世話になった川上だった。

「はい、もしもし」

『あつ、もしもし。ラブクライシスのマキちゃんからみんながそっちにいるって聞いてね。まだそっちにいるんでしょう？』

「あ、はい」

『実はね、ロンドンで日本のポップカルチャーを紹介するイベントがあつてね。ラブクライシスのみんなやブラックフリルのみんなも参加するんだけど……。あなたたち放課後ティータイムにも是非参加して欲しいのよね』

川上は、統夜たちがロンドンにいると聞いた上で電話をかけており、ロンドンで行われるイベントに参加して欲しいという内容だった。

唐突な演奏依頼に、律は驚き、くっついて律の電話の内容を聞いていた統夜たちも驚いていた。

「ほえ？ポップコーン？」

「いやいや。違うから……」

唯はポップカルチャーという言葉を理解していないのかこのようなボケをしており、

統夜は呆れながらツツコミを入れていた。

『イベントは明日の午後からなんだけど、みんなはそっちにいるかしら?』

「あ、明日ですか? 明日の夕方には帰るので、少し考えさせてもらえませんか?」

律はその場で答えは出さず、答えを保留にしておらつていた。

『わかつたわ。詳しいことは後でメールするから、なるべく早めに連絡をちょうだいね』

「あ、わかりました。失礼しまーす」

こうして、川上との電話は終わり、律は電話を切った。

「……まさか、こんなことになるとはな……」

統夜も律と川上の電話の会話を聞いており、まさかの展開に驚きを隠せなかった。

「律、どうするつもりなんだ?」

「後で川上さんからメールが来るし、みんなでじっくり考えようぜ」

「そうね。そうしましょうか」

明日行われるイベントに参加するかは今は保留にしておいて、後で改めて話し合うことにした。

「……なあ。それだったら、今から一箇所寄りたい所があるんだけど、いいか?」

「寄りたい所?」

統夜の唐突な提案に、紬は首を傾げていた。

「一昨日出会った、悪魔を狩る男、覚えてるか？」

「ああ、あのダンテって人な」

「どうやらそいつのやってる店がこの近くにあるらしいんだ。あの男やダリオって魔戒騎士には色々聞きたいことがあるからな。もしみんなが良ければ寄ってみたいと思つてたんだ」

統夜はデビルメイクライに立ち寄りた理由を、詳細に説明していた。

すると……。

「いいですよ！みんなで行きましょう！」

統夜のデビルメイクライへ行きたいという申し出を、梓が即答で了承していた。

「え？いいのか？これは俺のワガママだけど……」

「だって、統夜先輩のことだから、ダメだって言ったら別行動をしても行きそうなんですよん」

「たしかに、そうなんだよな」

「それじゃあ旅行の意味がないしな」

「そうね。みんな楽しんでこそだものね♪」

「それに、私も興味あるよ！ホラーとは違うあの悪魔とか、やーくんとは違う魔戒騎士とか！」

「はい！私も興味があります！」

唯たちが統夜の申し出を断らなかつたのは、唯たち自身も悪魔やダリオの存在に興味があつたからであつた。

「みんな……。ありがとな。それじゃあ、さっそく行こうか！」

「はい！」

こうして統夜たちは、この近くにあるデビルメイクライという店へ向かうことになつた。

※※※

移動を初めてから10分とかからず、統夜たちはデビルメイクライに到着した。

「ここがデビルメイクライか……」

「どんなお店なんだろうね？」

「訳したら悪魔が泣き出すだから……。やっぱり悪魔に関係してるのかな？」

澤は、デビルメイクライの意味を訳し、悪魔に関係する店だろうと推測していた。

「とりあえず、入ってみようよ！」

「そうだな。まずは入ってみるか」

統夜たちはデビルメイクライの入り口に立ち、統夜がドアをノックした。

すると、「は〜い!!」と、何故か女の子の声が聞こえてきた。

そして、ドアが開いたのだが、出てきたのは、ブロンドヘアで、統夜たちよりも年

下の女の子だった。

「……」

統夜たちを見て、少女は目をパチクリとさせていた。

「あ、あの……」

統夜は全員を代表して、英語で話しかけていた。

「……あつ、すいません。あなたたちは日本人……ですよね？」

「ああ、うん。そうだけど……」

統夜がこう答えると、少女の表情はぱあつと明るくなっていた。

「私、日本人に会うの初めて!!えーっと……は、ハジメマシテ!!」

少女は慣れない日本語で、統夜たちに挨拶をしていた。

「「「初めまして！」」」

唯たちは少女が日本語で挨拶をしてくれたのが嬉しくて、挨拶を返していた。

「ところで、ダンテは……いるかな？」

「いるけど、あなたたちは、ダンテの知り合い？」

「まあ、そんなところかな。あとダリオも」

「え!?ダリオも知ってるの!?そういえば、あなた、ダリオと似た格好をしているものね! 2人ともいるから、さあ、入って入って!」

「……どうやら歓迎されてるみたいだぞ」

「そうみたいね。この子の雰囲気で何となくわかるわ」

唯たちはこの少女の言葉は理解出来なかったが、歓迎されている雰囲気は感じ取ることが出来た。

そして……。

「「「お邪魔します……」」」

統夜は堂々とは中に入るのとは対照的に、唯たち5人は恐る恐る中に入っていた。

「おう、お前ら、来たのか。もう帰っちゃったかと思っただぜ」

中に入ると、その中は思ったよりも広く、その部屋の奥には大きなテーブルと椅子が置かれており、ダンテはその椅子に座り、足をテーブルにつけた状態で、ピザを頬張つ

ていた。

「まあな。あんたには色々聞きたいことがあるしな」

「まあ、待て。俺はご覧の通りピザを食べている真つ最中だ。適当に座って待つてな」

ダンテはどうやらピザが好物なのか、マイペースにピザを食べており、それが終わるまでは話をするつもりはなさそうだった。

「アハハ……。さあ、どうぞ。こちらに座ってください」

「ああ。……みんな、こっちだ」

統夜はダンテやダリオとの会話は英語で、唯たちとの会話は日本語と器用に言葉を使い分け、唯たちをソファまで案内した。

統夜たちがソファに腰を下ろすと、統夜の隣に少女が腰を下ろしていた。

「ねえねえ、あなたたちは日本人なんですよ？日本の話をもっと聞きたいな！」

「へ？えつと……」

少女は英語で話しかけてきたため、唯たちは言葉の意味を理解出来ず、困惑していた。すると……。

「日本の話を聞きたいって言ってるぞ」

すかさず統夜が少女の言葉を通訳し、唯たちに伝えていた。

「うん！OK！OK！」

唯がOKと話すと、それが伝わったのか、少女の表情はぱあつと明るくなっていった。「ありがとう！私はパティ。パティ・ローエル。あなたたちは？」

少女……パティ・ローエルは、簡潔に自己紹介をすると、統夜たちの名前を聞いていた。

「俺は統夜。月影統夜だ。そして……」

統夜は英語で、5人の自己紹介をしようとしたのだが……。

「平沢唯だよお！」

「田井中律だぜ！」

「秋山滯だ」

「琴吹紬よ。ムギって呼んでね♪」

「中野梓だよ」

唯たちは日本語で自己紹介をして、統夜が念のために通訳をしてパティに伝えていた。

「えつと……。トウヤにユイに、リツ。ミオ、ツムギ……。ムギ？そして、アズサね！」

パティは1人1人を指差しながら名前を確認すると、統夜たちは無言で頷いていた。

「よろしくね！それじゃあ、日本の話を聞きたいんだけど……」

パティは日本の話に興味津々のようで、それを聞き出そうとしたのだが……。

「……パティ。悪いがそれは後回しだ。まずこいつらに悪魔のことを話してやらなきゃいけないからな」

ピザを食べ終えたダンテがソファの所まで移動し、ダリオの隣に腰を下ろした。

「え？トウヤたちも悪魔のことを知ってるの？」

「ああ、そうだ。俺たちはこのロンドンへ旅行に来ただけど、偶然悪魔に出くわしてな」

統夜は、パティの言葉を通訳して唯たちに伝えると、今度は悪魔と遭遇した経緯を英語で話していた。

「ふーん……。せっかくの旅行なのについてないのね」

「アハハ……。確かにな」

統夜はパティの言葉に苦笑いをしていたのだが、その後、すっかり唯たちに訳した言葉伝えていた。

「なあ、その悪魔っていうのは、いったい何なんだ？」

統夜は一番聞きかかった疑問をダンテにぶつけていた。

「悪魔っていうのはな……。簡単にいえば、魔界に生息する怪物のことだ」

「!?魔界に生息!?だけど、魔界っていうのはホラーの棲家なはずじゃ……」

統夜は翻訳することを忘れて、驚いていた。

そのため、唯たちは言葉の意味を理解出来ず、首を傾げていた。

「確かにそうですね。実は、ホラーの住む魔界と悪魔の住む魔界……。これらは別々に存在しているのです！」

「なるほど。魔界が別々にあるなら、俺たちが今まで悪魔のことを知らなかったのも納得だよ」

統夜は、ダリオの補足説明を聞くと、今まで抱いていた疑問が全て解けたため、すつきりとした気分になっていた。

「ホラーは陰我をゲートに出現しますが、悪魔はどこから現れるのかわかりません。ですので、ホラー以上に厄介な存在とも言えます」

「なるほどな……」

統夜は、ホラーと悪魔の出現方法の違いを聞いて、さらに納得していた。

「ねえねえ、やーくん。あの人たちはさっきから何言ってるの？」

「ああ、悪い悪い。後でまとめて説明してやるから」

統夜は今まで聞いた話を後で改めて唯たちに話すことにして、話を進めることにした。

「それで、ダリオはホラーだけではなく、悪魔とも戦っているという訳か」

「その通りです。私の所属する番犬所は少々特殊な環境でして、特別に元老院からも隔

「離されてる存在なのです」

「なるほど、それだったら俺や他の魔戒騎士が悪魔の存在を知らないってのもわかる気がするよ」

「はい。だからこそ、私は、デビルハンターであるダンテさんと度々共闘してる訳です」
「まあ、悪魔は俺の獲物だし、ホラーとの戦いも仕事として時々手伝ってるしな」

ダンテもまた、デビルハンターとして悪魔を狩るだけではなく、度々共に悪魔と戦っているダリオと共にホラーと戦うこともあるのであった。

「それに、あの悪魔が言っていたスパードってのは一体何者なんだ？」

そして、統夜はもう一つ気になっていた疑問をダンテにぶつけたのだが……。

『……それは俺様から話すぜ』

イルバも何故か知らないが英語を話せるようであり、イルバも英語で話をしていた。

イルバも英語を話せるとは知らなかったのか、唯たちは驚きを隠せず、目をパチクリとさせていた。

それだけではなく……。

「え?!指輪が喋った!?!」

パティはどうかやら魔導輪を見たことがないようであり、イルバが喋ることに驚いていた。

『俺様はイルバ。魔導輪だ』

「イルバ……魔導輪……」

パティは聞き覚えのない言葉に驚いていたが、ダンテとダリオは魔導輪の存在は知っているからか、驚くことなく、平静を保っていた。

「それで、イルバ。スパードって？」

『ああ。俺様がまだ魔導輪になる前。魔界にいた頃に噂として聞いたことがあったんだ。その魔界の他にもう一つ魔界があつて、その魔界はムンドウスとかいう悪魔の王が支配していたと』

「ムンドウス……悪魔の王……」

悪魔が生息している魔界にも、メシアやグオルブのような強大な力を持つ存在がいたことに驚いていた。

『そして、そのムンドウスと敵対して、人間を守った悪魔がいたというのだが、そいつがスパードというらしい』

「人間を守った悪魔……」

もう一つの魔界の世界観が統夜たちの関わっている魔界と酷似しており、そのことに驚いていた。

「それじゃあ、そのスパードっていうのが……」

「ああ、スパイダーは俺の親父だ」

「……」

1つの疑問が解決したのだが、その話はあまりにも強大であり、統夜は言葉を失っていた。

そして、その疑問を解決したのと同時に、統夜はもう1つの疑問を抱えることとなつてしまった。

「ちよつと待てよ。そのスパイダーっていうのは、人間を守ったって言ってたけど、悪魔なんだろ？それじゃあ、あんたは……！」

「ああ。俺は悪魔の息子でもある」

「……！」

ダンテのこの言葉を聞いた瞬間、統夜の表情が険しくなり、目を鋭く細めると、ダンテを睨みつけていた。

「ちよつと……トウヤ！落ち着いてください！確かにダンテさんはスパイダーの息子ですけど、ダンテさんの母親は人間なのです」

「!?っということは……」

「ああ。俺は悪魔と人間のハーフって訳だ」

「……」

統夜はさらなる衝撃的な真実を知り、驚きのあまり目を丸くしていた。

「つたく……。トウヤとか言ったか？お前は早とちりが過ぎるぜ。俺を危険視して敵対視したり、悪魔の息子と知って殺気立った目で睨んできたりな」

「うぐつ……。そう言われると返す言葉が……」

呆れ気味なダンテに痛いところを突かれ、統夜には返す言葉がなかった。

「……まっ、俺の話すべきことはここまでだ。これでわかっただろう？俺や悪魔のことを」

「ああ。俺はあんたのことを誤解していたみたいだ」

「フン、わかっただのならいいんだがな。こっちとしては勘違いされたまま敵視されたり睨まれたりとイライラはしたがな」

「そ、それは悪かったよ！」

統夜は確かにダンテのことをあまり知らないまま、敵対視していたのは事実なため、素直に謝罪をしていた。

「ま、それはともかくとして、話はもう終わりよね？私は、早く日本の話を聞きたいの！」
悪魔についての話が終わったと判断したパーティは、待つてましたと言わんばかりに話に割り込んできた。

「そうだな。そこら辺の話もしょうか」

統夜はパティに対してこう答えると、唯たちにパティが日本の話を聞きたいということとを伝えた。

こうして、統夜の通訳のもと、日本について話をしようとしたのだが……。

「……おや？今日は随分と賑やかじゃないか」

突如このような声が聞こえてくると、50代と思われる壮年の男性が中に入ってきた。

「……あつ！モリソン！」

パティはこの男のことを知ってるようであり、親しげな雰囲気を出していた。

「パティ、この人は？」

「情報屋のモリソンだよ。いつも仕事を持ってきてくれるの！」

「仕事を？」

「この店は表向きは便利屋だからな。ま、こいつの持つてくる仕事はロクなのがないがな」

「つれないこと言うなよ、ダンテ。俺の持つてくる仕事は金になる仕事ばかりじゃねえか」

当然モリソンが話しているのも英語であるため、言葉の意味を理解出来ない唯たちは目をパチクリとさせていた。

すると、モリソンは、統夜のことをジッと見ていた。

「あ、あの……。何か？」

「おお！お前さんがダリオの言つてた日本から来た魔戒騎士か！」

「え？あつ……。はい……」

まさか、このモリソンという男も、魔戒騎士のことを知っていることに、統夜たちは驚いていた。

「それに……。よく見たら、お嬢ちゃんたちは、回転寿司屋で演奏してた子たちじゃないか！」

「!？」

統夜はモリソンのまさかの発言に驚きながらも、その発言を唯たちに通訳して伝えた。

すると……。

「ええ!?!おじさん、私たちの演奏聴いてたんですか!？」

唯が驚きながらもこう聴いていたので、統夜は、おじさんという部分を訂正した形で唯の言葉を訳し、モリソンに伝えた。

「ああ。俺はたまたまあそこで寿司を食つてたからな。なかなか良い演奏だったぜ！」

モリソンは統夜たちの演奏を素直に褒めており、統夜がその旨を伝えると、唯たちの

表情がぱあっと明るくなっていった。

「だとしたら、明日ロンドンアイの近くで行われる日本の高校生によるライブはお前たちは参加するのかわ？」

「ーい、いえ……。知り合いに参加しないかと誘われましたが、まだ返事は出してないんです」

統夜は、何故かモリソンが明日のイベントのことを知っていたため、そのことに驚きながら、まだ参加するしないの答えを出していないことを伝えた。

「なるほどな……。ダンテ、こいつらも明日のイベントに出るかもしれないし、今回俺が持つて来た仕事、受けた方がいいんじゃないかねえか？」

「あ？何で俺が……」

ダンテは仕事を受ける気がないのか、気だるそうに返していた。

「今回の仕事は悪魔絡みの仕事だぜ。悪魔に好き勝手やられたら、明日のイベントは台無しになるかもな」

「……っ！そ、そんな！」

「やれやれ……。正直気乗りはしねえが、悪魔が絡んでるつつうなら話は別だ。モリソン、その仕事、受けるぜ」

「そうこなくっちゃな！」

ダンテは面倒くさそうな表情をしていたものの、仕事の内容が悪魔絡みだったため、渋々この仕事を受けることにした。

しかし……。

「……おい、トウヤとか言ったか。お前も俺の仕事を手伝え」

「はあ!? な、何で俺が!」

「お前たちは明日のイベントに出る予定なんだろう? それに、俺は魔戒騎士であるお前の手並みを拝見したいしな」

「断る! 俺は旅行でこの地を訪れたんだ。ホラー討伐ならまだしも、悪魔退治に積極的に関わることはしないよ」

統夜は卒業旅行でこの地を訪れたため、指令でもない限りは自分の専門外である悪魔とは関わるつもりはなかったのである。

「まあまあ、そうつれないことを言うなよ。これは仕事だから当然報酬は出るぜ。お前さんだって、旅行なら色々和金が必要だろう?」

「……」

統夜はこの仕事を断るつもりだったが、どうするか考えていた。

すると、統夜はあることを思いついたのであった。

「……その仕事、引き受けてもいいけど、条件がある」

「あ？条件だあ？」

「ダンテ。あんたの持つてる銃のスペアか設計図が欲しい。それをくれるなら金はいら
ない」

「ほお、金じゃなくてダンテの銃を欲しがるとは、面白いじゃねえか。……おい、ダンテ。
どうなんだ」

「別に設計図くらいならくれてやってもいいが、何に使うつもりなんだ？」

魔戒騎士である統夜が銃か銃の設計図を欲しがるのは妙だと感じたのか、ダンテは使
用目的を聞いていた。

「俺の仲間が対ホラー用の銃を開発してるんだけど、まだ未完成みたいなんだ。その設
計図から、その銃完成のヒントを与えられたらと思ってるな」

統夜がダンテの銃の設計図を欲しがったのは、アキトの作った魔戒銃の改良のためで
ある。

魔戒銃完成のヒントを与えることこそが、アキトにとっては最大のお土産になると考
えたからである。

つまり、自分のためではなく、アキトのためにこの仕事を受けようと考えたのであつ
た。

「ったく……。わかったよ」

ダンテはソファから立ち上がると、どこかへと移動した。

数分後、一丁の拳銃と、その設計図と思われる紙を手にして戻ってきた。

「……ほら、これでいいんだろ？」

「ああ」

統夜は、ダンテから銃とその銃の設計図を受け取ると、それを魔法衣の裏地の中にしまった。

「報酬は前払いしたんだ。もうこの仕事を断るのは許さねえぜ」

「わかってるよ。だけど、まずは唯たちに事情を説明させてくれ」

統夜はここで、唯たちに仕事を受ける経緯を説明し、ダンテと共に悪魔退治を行う旨を伝えた。

先ほどまでは容赦なく英語が飛び交っていたため、どうしたらいいかわからずちよんと座り込んでいた唯たちだったが、統夜が日本語で話しかけてくれたことに、唯たちはホッとしていた。

「それじゃあ、統夜君は悪魔退治の仕事を手伝うことになったっていう訳ね？」

「ああ。そういうことだ。悪いけど、ここから先は別行動になっちゃうな」

「ええ!? それじゃあ明日のイベントはどうするんだよお!」

「それはみんなで決めてくれ。俺はその決定に従うよ」

「うん。わかったよお！やーくん、気を付けてね！」

「ああ、さつきと悪魔を蹴散らしてみんなのところへ帰るさ」

こうして統夜は、唯たちの許可をもらい、ダンテと共に悪魔狩りの仕事をする事になった。

しかし、そのことに納得出来ない者が1人だけいた。

「そんな……！せつかく統夜先輩や皆さんとの旅行だっていうのに……」

「あずにゃん……」

梓だけは、ホラーではない相手との戦いに統夜が駆り出され、せつかくの旅行を台無しにさせられるのがいたたまれなかった。

「……心配すんな。すぐに仕事を片付けて戻ってくる。俺を信じてくれないか？」

「……わかりました。私は信じてますからね！統夜先輩がすぐに合流してくれるって！」

梓は恋人である統夜を信じる決意を固め、統夜を送り出す決意をした。

「ああ、信じて待っていてくれよな！」

統夜は満面の笑みを浮かべると、梓の頭を優しく撫でていた。

梓は頭を撫でられて嬉しかったのか、頬を赤らめながら、笑みを浮かべていた。

「話はまとまったか？それじゃあ、とつとと行くぞ」

ダンテは統夜にこう言い放つと、自分の一張羅であるコートを羽織り、ギターケースにしまったダンテの剣……リベリオンを背中に背負った。

「……それじゃあ、みんな。行ってくる」

統夜はすでに魔法衣を着た状態であったが、唯たちに向かつて力強く宣言した。

「ええ!? もう行つちやうの!? 日本の話は!」

パティはずつと聞きたいと思っていた日本を話を聞きそびれてしまい、ぷうつと頬を膨らませていた。

「仕方ねえな……。お嬢ちゃんたちがまだ残るつつうのなら、俺が通訳をしてやるよ」

なんとモリソンは、多少であれば日本語が話せるようであり、通訳をやることを名乗り出していた。

「本当!? モリソンって日本語は話せるの!」

「まあ、それなりにな。……という訳で、トウヤとか言ったか。お前さんは何の気兼ねもなく仕事に専念して来い!」

「は、はい!」

こうして統夜は、唯たちとパティとの会話の通訳をモリソンにお願いすることにして、ダンテと共にデビルメイクライを後にした。

そして、そのまま悪魔が出現しているとモリソンから聞かされた、ロンドンアイ付近

へと向かって行ったのであった。

統夜がダントと共に出掛けた直後、モリソンは約束通り唯たちとパティとの会話の通訳を行うことになり、1時間程の会話で、無事に通訳の仕事をこなしたのであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『やれやれ……。まさか卒業旅行なのに、こんな仕事を引き受けることになるとはな……。まあ、受けた以上はしっかりと仕事をこなそうぜ！次回、「邪気」。統夜！こいつはなかなか手強いぞ！』

第111話 「邪気」

統夜は、卒業旅行で訪れたロンドンの地で、偶然、ホラーとは異なる魔獣である悪魔を狩る男……ダンテと出会った。

そして、ロンドン滞在3日目に偶然ダンテの店であるデビルメイクライに、統夜たちは偶然訪れることになった。

そこで、ダンテから聞かされたのは、悪魔という存在のこと。そして、ダンテが人間と悪魔のハーフであるということであった。

その話を聞いた統夜であったが、ひよんなことから、悪魔退治の仕事を引き受けることになった。

本来ならば断るつもりだったが、ダンテの持つ銃の設計図を手に入れば、アキトの魔戒銃完成のヒントになると考えていた。

そのため、ダンテの持つ銃のスペア及び設計図を報酬として求めることで、統夜はこの仕事を引き受けたのであった。

こうして、仕事のため、唯たちとは別行動することになった統夜であったが、ダンテと共に、今回の仕事の間である、ロンドンアイ付近へと向かっていった。

「……まさか、またここに来ることになるとはな……」

統夜とダンテはロンドンアイに到着したのだが、統夜はグルグルと回っているロンドンアイをじっくりと眺めていた。

『まあ、もし明日のイベントに出るのなら、また来ることにはなるがな』

「そうだな……。明日のイベントを中止にしないためにも、さっさと悪魔を見つけ、ちらさないとな……」

統夜は早々に仕事を片付けたのか、鋭い目付きで、周囲を見回していた。

「おい、トウヤ。慌てるなよ。この人の多さだ。悪魔も不用意には仕掛けてはこないぜ」
常日頃から悪魔を狩り続けているダンテは、非常に冷静であった。

悪魔もホラーのように人間に擬態する場合もあれば、どこかへ潜伏して、獲物を捕食する場合もある。

どちらにしても、人の多い場所に現れて、暴れ回るケースはほぼないのである。

「今、悪魔の気配を追っている。見つけ次第叩きに行くからちよつと待ってろ」

『おい、ダンテ。俺様も協力しよう。俺様はホラーを探知するが、悪魔の気配も探知出来るはずだぜ』

「ま、好きにしな」

こうしてダンテとイルバは、悪魔の気配を探り始め、特にやることのない統夜は、大

人しくしているしかなかったのであった。

それからおよそ30分後……。

「……！どうやら、出てきたみたいだな」

『ああ。俺様も妙な気配を感知したぜ』

「!?それはどこに?」

「ついて来い。こつちだ」

悪魔の気配を感知したダンテは移動を開始すると、統夜は、その後を追った。

移動すること数分。2人が訪れたのは、ロンドンアイのある広場のはずれであり、人通りの少ない場所であった。

「……イルバ、ダンテ。ここなのか?」

「ああ、そうだ」

『妙な気配を感じるぜ。統夜、気を付けろよ』

「ああ……！わかった!」

統夜は魔戒剣を取り出すと、いつでも抜刀出来る状態にしておき、鋭い目付きで周囲を見回していた。

すると……。

『……！統夜！来るぞ!』

イルバが何かを感じ取り、それを統夜に伝えた。

その直後に巨大な影が統夜たちの前に姿を現した。

その巨大な影の正体は、巨大な蜘蛛のような怪物だった。

「……………!?ここ、ここいつも……………悪魔!？」

統夜は蜘蛛のような怪物が、予想以上に大きかったことに驚いていた。

「……………フーン！人間風情が、私のことを知っているのか！」

この蜘蛛のような怪物は、人間の言葉を話せるようであり、英語を使って統夜のことを見下す発言をしていた。

そんな中、ダンテは……………。

「……………やれやれ……………。またお前かよ……………。大人しく眠っていりやあいものを……………」

どうやらこの悪魔を知っているようであり、その悪魔が登場したことに呆れ果てていた。

「……………!?貴様は……………！スパーダの息子か……………!!」

「どうやら、俺のことは覚えているようだな。また、地獄へ叩き返してやるぜ！」

ダンテは二丁の拳銃を構えると、不敵な笑みを浮かべていた。

「なあ、ダンテ。お前はあいつのことを知っているのか？」

ダンテがこの悪魔のことを知っていることに驚いており、魔戒剣を抜いて、構えなが

しかし、その一撃でファントムの身体に傷をつけることは出来ず、ファントムは反撃と言わんばかりに尻尾についた針を統夜に向けてるが、統夜はその一撃を魔戒剣で受け止めた。

「うっ……くっ……！」

統夜は魔戒剣でどうかファントムの尻尾についた針を受け止めるのだが、予想以上の力に統夜の表情は歪んでいた。

魔戒剣から飛び散る火花が、その激しさを物語っていた。

「つたく……。世話の焼ける！」

ダンは2丁拳銃を交互に発砲することでファントムを怯ませると、隙が出来たため、統夜は後方に下がり、体勢を立て直した。

「すまない、ダンテ」

「おい、トウヤ。仮にもお前は魔戒騎士だろ？こんなザコ相手に手こずるなよな」「無茶言うな！こいつ、並のホラーよりも手強いんだから！」

ダンはファントムをザコ扱いしているが、統夜はファントムをかなりの強敵と感じており、普段戦っているホラーよりも手こずっていた。

それは、ホラーと悪魔は別の存在ということもあるのだが、ファントム自体が、悪魔の中では強大な個体であるからであった。

統夜は、そんなフアントムをザコ扱いしているダンテに驚きながらも、本当にそう思っているのか半信半疑だった。

「ほぎくな、ダンテ！それにそのガキ！貴様は魔戒騎士なのだな？」

「!? 貴様、何故魔戒騎士を知っているんだ？」

「フーン！貴様ら魔戒騎士はあのホラーと戦っているのだろうか？」

「!?ホラーのことまで知ってるのか!？」

統夜は、フアントムが魔戒騎士だけではなく、ホラーのことも知っていたことに驚いていた。

「フーン！我々悪魔は、ホラーごとき低級な魔獣とは一味もふた味も違う。そんな奴らと一緒にされては困る！」

『おいおい。それは俺様も聞き捨てならないな!』

イルバは魔導輪であるが、元を辿ればホラーであり、自分のことを馬鹿にされた気分になったイルバは不快感を露わにしていた。

「貴様は人間ごときに協力している無能なホラーか。その無能な人間のガキと共に私の餌になるがいい！」

『おい、統夜！あんな奴相手に負けるんじゃないぞ!』

「アハハ……。わかってるよ……」

イルバがいつも以上にムキになっており、統夜は苦笑いをしていた。

「愚かな魔戒騎士とダンテめ……！2人まとめて葬ってやる！」

フアントムは口の中で炎を収束させると、それを炎の弾として、統夜とダンテめがけて放った。

「……………?!」

統夜はフアントムの炎の弾を防ぎ切ることが出来ないと判断したのか、左に横っ飛びをして、フアントムの攻撃をかわした。

ダンテは、統夜とは反対方向である右に横っ飛びをして、攻撃をかわしていた。

「こいつ……………！接近戦だけでも厄介なのに、遠距離攻撃も出来るのかよ！」

『統夜！まずは奴の接近戦を封じるために奴の脚と尻尾を叩つ斬るしかないぜ！』

「簡単に言うなよ！奴の懐に入るのは一筋縄じゃ行かないぞ！」

統夜はフアントムに接近するのは容易ではなく、げんなりとしながらどのように接近するかを考えていた。

「つたく……………。だらしねえなあ。こんなん軽々突破出来ねえでどうするんだよ」

弱気になってしている統夜に呆れていたダンテは、背中に背負っていたギターケースからダンテ専用の剣……………リベリオンを取り出すと、それを手に、フアントムへと突っ込んでいった。

「愚かな……!!私を今までの私と一緒にするな!!」

フアントムは策もなく突っ込んでいくダンテを見てニヤリと不敵な笑みを浮かべると、針のついている尻尾を、ダンテめがけて放っていた。

ダンテはリベリオンを一閃してそれを防ぐのだが、その尻尾は囷であった。

「……っ!」

フアントムは右前脚を振るってダンテを吹き飛ばすと、すかさず先端についている鋭い爪をダンテの胸に突き刺し、そのまま壁に叩きつけた。

「!?ダンテ!!」

統夜はその光景に目を丸くしていた。

腕に自信のあるはずのダンテが、いとも簡単にやられてしまったからである。

「貴様ああああああ!!」

ダンテがやられたことに激昂した統夜は、何も策を立てることなく、フアントムに突っ込んでいった。

今まではずつと英語で話していた統夜であったが、怒りのあまり、英語ではなくつい日本語が出てしまっていた。

「愚かな……。貴様のあの男の二の舞にしてやるわ!」

フアントムは左前脚や尻尾を使って統夜に攻撃を仕掛けるが、魔戒剣を振るって攻撃

を防ぎ、さらに魔戒剣を一閃して、ダンテの体を貫いている右前脚を切断した。

ファントムは痛みのみあまり、断末魔をあげていた。

「おのれ……！下等な人間風情が……！貴様は私が必ず殺す！」

ファントムの体の一部を斬り裂いたことでファントムの怒りを買ってしまった統夜は、ダンテに駆け寄り、寄る隙も与えてもらえず、ファントムの猛攻撃をひたすらに防いだ。

（くっ……！鎧を召還してケリをつけたいけど、その隙がねえ！どうする？）

統夜は決着をつけるために鎧を召還しようと考えていたのだが、ファントムの攻撃が激しいため、その隙を与えてはくれなかった。

そしてファントムはさらなる追い討ちをかけるべく、口から炎の弾を放った。

「……………」

統夜は後方にジャンプして、炎の弾をかわしたのだが……。

「愚か者が！死ぬがよい!!」

ファントムはジャンプしたことで統夜に隙が出来たことを見逃さず、針のついた尻尾を統夜めがけて放った。

「くっ……………」

ファントムの尻尾は統夜の心臓を狙っていたのだが、統夜が魔戒剣を一閃したことで

軌道がずらされ、右腕をかすめる程度にとどめることが出来た。

「ぐう……！」

フアントムによる攻撃は最少限度に留めることは出来たものの、右腕から鮮血が飛び散り、その痛みからか、統夜は表情を歪めていた。

統夜はどうにか着地をして、体勢を立て直した。

だが、フアントムの攻撃は、まだ終わらなかつた。

「愚かな人間よ……！まずは貴様から喰ってやるわ!!」

フアントムは、統夜を捕食するべく左前脚と、尻尾を同時に放っていた。

「くっ……！」

フアントムの激しい攻撃が迫り、統夜はこの攻撃をどう防ぐべきか考えながら息を飲んでいった。

その時だった。

バン！バン！バン！バン！

突如銃声が聞こえてきたかと思つたら、その銃弾はファントムの体を貫き、その攻撃を受けたファントムは吹き飛ばされたのであつた。

「!?銃!?!いったい誰が……?」

銃夜はどこから銃弾が飛んできたのかを確認するためにキョロキョロと周囲を見回すのだが……。

「………つたく……。相変わらずお前は早とちりが過ぎるぜ……トウヤ」

「!?だ、ダンテ……なのか!?!」

銃夜を救うために銃を発砲したのは、ファントムによって体を貫かれて、死んだと思われていたダンテだった。

「!?馬鹿な……!貴様は私の手で始末したはずだ!」

「ダンテ、あんたはよく生きてたよな……」

心臓を貫かれたはずなのだが、ピンピンとしているダンテに、ファントムだけではなく、銃夜も驚きを隠せずにいた。

「あ?馬鹿じゃねえか?俺は悪魔と人間のハーフだと言つたら?あんな攻撃で俺が死ぬ

はずはねえぜ」

悪魔と人間のハーフであるダンテは、普通の人間とは体の作りが違うため、心臓を貫かれたからと言って死ぬ訳ではないのである。

「おのれ……!!こうなったら、貴様らまとめて始末してやる!」

フアントムは、統夜だけではなく、生きていることがハッキリしたダンテも、改めて始末しようと思嚇をしていた。

「おい、トウヤ。お前もそろそろ本気を出しやがれ。じゃねえと、前払いした報酬を取り上げるぞ」

「!?それは困る!だから、ダンテの注文通り、本気を出してやるよ。あいつの動きも見切ったしな」

統夜は今までの戦いは、ある程度本気で戦ってはいたものの、100%の力ではなかったため、ここで、100%の力を出そうとしていた。

統夜がここまで本気を出さなかったのは、フアントムの力がどれほどのものかを見極めるためであった。

「本気を出すだ……?下等な人間風情が、私を倒せると思うな!」

「フアントム!!貴様の陰我……俺が断ち切る!!」

統夜はフアントムに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

そこから放たれた光に包まれると、統夜は白銀の輝きを放つ、奏狼の鎧を身に纏った。「ほお……。これがあいつの鎧か……。ダリオのとはまるで違うじゃねえか……」

ダンは統夜と同じ魔戒騎士であるダリオの鎧を見たことがあるため、そこまで驚くことはなかったが、奏狼の鎧の放つ白銀の輝きに、ダンはウンウンと頷いていた。

「なるほど……。それが貴様の本気という訳か……。良いだろう！その忌々しき輝きごと、貴様を消し去ってやる！」

「貴様に来るかな……。？」

統夜は魔戒剣が変化した皇輝剣を構えると、鋭い目付きでファントムを睨みつけていた。

「……行くぞ!!」

そして、統夜はファントム目がけて突っ込んでいった。

「愚か者が……。突っ込むだけで私を倒せると思うな!!」

ファントムは先ほどのように左前脚を統夜目がけて振り下ろすが、統夜はそれを難なくかわした。

しかし、左前脚の攻撃は囷であり、針がついた尻尾で、奏狼の鎧を貫こうとしたのだ。が……。

「……愚か者は……。お前だ!!」

統夜はこの攻撃を読んでいたのか、無駄のない動きでファントムの尻尾をかわすと、皇輝剣を一閃し、尻尾を斬り落とした。

右前脚だけではなく尻尾まで斬り落とされ、ファントムは痛みのみならず、断末魔をあげていた。

「殺す……!! 貴様だけは絶対に殺す!!」

人間である統夜相手にここまで追い詰められたことにファントムは激昂し、統夜のみをターゲットにしていた。

「やれやれ……。俺のことを忘れるなよな……」

ファントムはダンテのことを忘れているようであり、そのことにダンテは心底呆れていた。

「こいつでその鎧を溶かしてくれるわ!!」

統夜が後方に下がる前に、ファントムは口から炎の弾を統夜目がけて放った。

炎の弾は至近距離から放たれたからか、統夜は攻撃をよけることが出来ず、皇輝剣で炎の弾を受け止めていた。

「うっ……くっ……!!」

統夜は苦しそうな声をあげて炎の弾を防いでおり、統夜は少しずつではあるが、後方に下がっていった。

そして、ある程度下がりと……。

「……はあっ!!」

統夜はわざと後方に下がったのか、一定の距離まで下がると、皇輝剣を振り下ろし、炎の弾をかき消した。

「馬鹿な!?!人間風情が私の炎を防ぐだど!?!」

「そんな炎じゃ俺は殺せないぜ!それに、俺はただの人間じゃねえ!そのことを思い知らせてやる!!」

統夜はフアントムに向かってこう宣言すると、魔導ライターを取り出し、皇輝剣の切っ先に赤の魔導火を浴びせ、烈火炎装の状態となった。

「フーン!そんな炎で私を倒せると思うな!」

「それは……こいつを受けてから言うんだな!」

フアントムは再び炎の弾を放つのだが、統夜は皇輝剣を一閃することで炎の弾をかき消した。

そして、赤い炎の刃を前方に収束させると、それをフアントム目がけて放った。統夜の放った赤い炎の刃は、フアントムの左脚全てを斬り落とした。

左脚が全てなくなったことでフアントムはバランスを崩し、左側に倒れ込んだ。

フアントムの左脚を斬り落とした赤い炎の刃は、統夜の方へと戻っていき、統夜の体

に纏われた。

「おのれ……！魔戒騎士など所詮は無能な人間に……この私が負けるはずはない!!」

統夜の猛攻によつて、すでにボロボロだったが、ファントムはまだ諦めておらず、ゆつくりと統夜に迫っていた。

「……これで決めてやる!」

統夜は皇輝剣を構えて、ファントムにトドメを刺そうとしたのだが……。

「おい、トウヤ。お前の本気はわかったが、こいつは俺の獲物だ。トドメは俺に譲れ!」

「やれやれ……。わかったよ」

ダンテはリベリオンを構えてやる気満々なため、統夜はダンテにトドメだけは譲ることにした。

『……統夜!ダンテ!来るぞ!!』

イルバがこのように警告する通り、すでに満身創痕の状態であるファントムが統夜とダンテ目がけて飛び掛つてきた。

統夜はファントムをギリギリまで引き付けて、赤い炎を纏った皇輝剣を何度も斬りつける、ファントムの残つた全ての足を斬り落とし、地面に叩きつけた。

その隙を見逃さなかったダンテは、全ての脚を失つたファントムの上に飛び乗ると、ファントムの体のコアと思われる部分目がけて何度もリベリオンを突き刺していた。

「これで……終わりだ!!」

ダンテはフアントムにトドメを刺すべく1度フアントムから飛び降りると、フアントム目がけてリベリオンを一閃し、フアントムの体を真つ二つに斬り裂いた。

その一撃を受けたフアントムは、痛みあまり断末魔をあげていた。

そして、そのまま倒れ込み、動かなくなった。

フアントムだ倒れたことを確認した統夜は、鎧の制限時間が迫っているということもあり、鎧を解除した。

しかし、まだ油断は出来ないため、元に戻った魔戒剣は手にしたままであった。

「……やったな、ダンテ」

「フツ、お前もまあまあやるじゃねえか」

統夜はダンテのもとへと駆け寄ると、互いの健闘を讃えていた。

すると……。

「おのれ……。ダンテ……。脆弱な魔戒騎士……。私はまだ負けていない!」

体を真つ二つに斬り裂かれたフアントムはまだ生きており、統夜とダンテを倒すという執着心によって突き動かされていた。

「!? あいつ……。まだ生きてるのかよ!」

『やれやれ……。ゴキブリ並の生命力だな……。』

体を真つ二つにきれても生きているファントムに統夜は驚愕しており、イルバは呆れ果てていた。

「コロス……！コロシテヤル……！！」

ファントムは統夜とダンテを葬るべく、2人に飛びかかってきた。

統夜は魔戒剣を構えて臨戦体勢に入る中、ダンテはニヤリと笑みを浮かべていた。

そして……。

「……Jack pot!」

ダンテは片方だけ手にしている拳銃を突きつけると、何度も発砲し、ファントムに容赦なく銃弾の雨を浴びせた。

その攻撃によって体を貫かれたファントムの体から爆発が起こり、ファントムは断末魔をあげながら消滅した。

『……どうやら、これで奴は本当に消滅したようだぜ』

「ああ、そうみたいだな」

統夜はファントムが完全に消滅したことを確認したところで、魔戒剣を青い鞘に納めた。

そして、魔戒剣を魔法衣の裏地の中にした。

ダンテもまた、手にしている拳銃をホルスターにしまうと、リベリオンをギターケー

スに収納し、それを背中に背負った。

「……………これで、仕事は終了だな」

「ああ。それにしても、悪魔って連中は、ホラーと同じくらい厄介な存在なんだな」

統夜はファントムと交戦したことで、改めて悪魔という存在の厄介さを認識していた。

「フツ、あんな奴如きにそう感じてる時点でお前もまだまだだな」

ファントム相手はかなり苦戦していたのだが、ダンテはファントムはザコだと思っていたようであり、そんなファントムを厄介と感じている統夜に呆れていた。

「アハハ……………俺が未熟なのはわかってるよ……………」

統夜は魔戒騎士として、それなりに経験は積んでいるものの、自分はまだまだ未熟だと考えていた。

統夜は更に精進しようと考えていたのだが、そう考えていたその時……………

「……………やーくん!!」

「統夜!!」

「統夜君!」

「統夜先輩!」

何故か唯たちが来ており、統夜のことを呼んでいた。

「み……みんな！何で!？」

統夜は唯たちがここに来て、驚きを隠せずにいた。

「……ほら、行つてこい」

ダンは統夜の背中を押すと、統夜を唯たちのもとへと向かわせようとしていた。

「え？いいのか？」

「仕事は終わったんだ。これ以上お前がここにいる必要はねえぜ」

「……悪いな、ダンテ。また会おうぜ！」

「フツ、気が向いたらな」

統夜はダンテに別れを告げると、そのまま唯たちのもとへと駆け出していった。

「……あつ！来た来た！」

「みんな、何でここに来たんだ？」

「モリソンさんから聞いたの。統夜君たちがロンドンアイの近くで仕事をしてるって」

「それに、凄い爆発とかしてましたからね。ちよつと騒ぎになってましたよ」

「それで、その爆発を辿つて様子を見に来たんだ」

細、梓、濤の3人がここへ来た経緯を説明していた。

「ちようど私たちが来た時には、やーくんは鎧を召還してたよ！」

「アハハ……。そうだったのか……」

唯がさらに、この場に着いた時の状況を説明しており、それを聞いた統夜は苦笑いをしていた。

「……あつ！そうそう。明日のイベントはどうするつもりなんだ？」

統夜はダントテとの仕事中也ずっと気になっていた疑問をぶつけていた。

「ああ、あれからあたしたちだけで話し合ったんだけど、参加することは決めたんだ」

「おお、そうか。したら頑張らないとな」

「だけど、まだ川上さんに返事を出してないんだよ」

「へ？何でなんだ？」

「だって……」

「やっぱり統夜先輩も一緒に、返事を出したいからですー！」

唯たちは明日のイベントに参加することは決めていたのだが、返事を出すのは統夜がいる時にと決めたため、まだ返事は出していなかったのである。

「みんな……」

みんな一緒にという気持ちを大切にしてくれたことに、統夜は素直に喜びを現していた。

すると、律は携帯を取り出すと、何故か携帯を高く突き上げていた。

律は携帯を持っていない手で手招きをしており、漣、紬、唯の順番で律の携帯に手を

添えていた。

それを見た統夜は笑みを浮かべると、同じように律の携帯に手を添えていた。

「ほら、あずにゃん！早く早く！」

「はいっ！」

梓は頬を赤らめ、嬉しそうな表情で律の携帯に手を添えた。

「……よし、それじゃあ行くぞー！そーしん!!」

全員の手が添えられたことを確認した律は、予め書いておいた明日のイベントに参加することを伝えたメールを送信した。

「おおー！未来に向かって送信した！」

『おいおい、お前さんはまだ時差のことを言ってるのかよ……』

飛行機に乗った時から言っていた話を唯はまた持ち出しており、そのことにイルバは呆れていた。

こうして、統夜たちは明日行われるライブに参加することになったのである。
しかし……。

「なあ、明日って帰国する日だよな？ライブの時間は何時からなんだ？」

統夜は今頃になって大事なことを思い出し、律に確認を取っていた。

「演奏は16時からだって」

「16時か……。空港に行かなきゃいけないのは17時だから、ギリギリだけ……。なんとかなるだろう」

『おいおい、随分と樂觀的だな』

「そんなことはないさ。飛行機の時間は心配してるけど、そこを今から気にしたつてどうしようもないからな」

統夜は飛行機の時間に間に合わないのではと内心気が気ではなかったのだが、あえてそこは気にしないようにしていたのであった。

こうしてライブの参加が決まり、統夜の仕事も終わったため、統夜たちはホテルに戻ると、明日のライブの演目などを決めなければいけないため、打ち合わせを行っていた。

その中で、唯が「ごはんはおかず」の英語バージョンを歌いたいと言いつつ、統夜が必死になって歌詞の翻訳を行っていた。

1時間程の話し合いでライブについての内容が決まったため、統夜たちはそれぞれの部屋に帰ると、明日に備えて寝ることにした。

統夜もフロントムとの戦いで疲れ果てていたのでぐっすりと眠っていた。

そんな中、梓はロンドンに来てから見ている唯と統夜が留年するという夢に苦しめられてうなされていたのであった。

……続く。

——次回予告——

『ロンドンの街ともお別れか。まあ、俺様もかなり楽しませてもらったぜ。次回、「帰国」。その前にライブを成功させないとな！』

第112話 「帰国」

統夜がダンテと共にファントムを倒し、さらに川上から誘われていたライブにも参加することになった。

そして翌日、この日はライブの当日であり、日本に帰国する日でもあった。

朝食を済ませた統夜たちは6人揃ってエレベーターに乗っていた。

「ふわああ……」

エレベーターの中で、梓は大きなあくびをしていた。

「眠そうだね、あずにゃん」

「梓、昨日はあまり寝られなかったのか？」

梓と同室だった統夜と唯は、眠そうにしている梓を気遣っていた。

「唯先輩と統夜先輩の夢を見たせいでよく眠れなかったんです」

「え？どんな夢なの？」

「それが凄く変な夢だったんですよ」

「それでそれで？」

「……秘密ですけど」

統夜と唯が留年するということが正夢になっては嫌だったため、梓はジト目で口をつぐんでいた。

「ええ!?!」

唯は梓の見た夢の内容を秘密にされたのが面白くなかったのだが、そうしているうちにエレベーターは1階に到着したため、統夜たちはエレベーターを降りた。

「……あつーちよつと待つてて!」

エレベーターを降りるなり、紬はロビーの奥へと向かっていった。

それを追いかけるように統夜たちもついていったのだが……。

「!?ど、どうしたの!?ムギちゃん」

「エへへ……♪」

紬は自分が愛用しているキーボードを抱えており、唯は驚きのあまり目を丸くしていた。

だが、それは統夜たちも同様であった。

「まさか、わざわざ自分のキーボードを持ってきたのか?」

「だって、私のだけじゃなかったんだもの♪」

自分だけ楽器を用意しておらず悔しさを募らせていた紬であったが、自分の楽器が到着したことがとても嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべていた。

「……金持ちすげーな……」

紬のキーボード程のものをわざわざ日本からここまで運ぶのはかなりのコストがかかるため、律は呆然としていた。

「いっぱい揃って良かったね!」

「まあ、これでライブの準備は整ったってことなのかな?」

キーボードであればライブ会場のスタッフが貸してくれるとは思いますが、紬愛用のキーボードが届いたため、ライブの準備は整ったと思われた。

律は自分のステイックは持参しているものの、自分のドラムだけは持ち運びは出来ないため、ドラムセットだけは借りる必要があった。

こうして準備を整えた統夜たちはチェックアウトをしてホテルを後にすると、そのままライブの会場であるロンドンアイへと向かった。

※※※

こうして、ロンドンアイに到着した統夜たちは、階段を降りていき、再びグルグルと回るロンドンアイを眺めていた。

「何度見ても大きいねえ」

「……何度見ても回ってる……」

唯はキラキラと目を輝かせながらロンドンアイを見ていたのだが、滯は顔を真っ青にしなからロンドンアイを見ていた。

「どうやら、回るものに対するトラウマはまだ治ってないようであった。」

「……どうやら、会場はあっちみたいだな」

統夜はイベント会場の入り口ゲートを発見したのか、そこを指差していた。

こうして統夜たちはライブを行うイベント会場へと足を踏み入れた。

このイベントは日本のポップカルチャーを紹介するイベントのようで、屋台ではたこ焼きや焼きそばなどといった日本特有のメニューが並んでいた。

そして、コスプレをしている人の姿も多く、セーラー服を着た女性や袴を着た女性、さらには戦国武将の甲冑を着ている者もいたのである。

統夜たちはライブ会場を探しながらイベント会場の盛り上がりぶりを眺めていた。しばらく歩いていると、ライブ会場に到着した。

「……あつー！りっちゃん！みんな!!」

統夜たちの姿を見かけたラブクライシスのマキは、ブンブンと手を振って律や統夜たちのことを呼んでいた。

「あつ、マキちゃん！」

その姿を見かけた律はマキのもとへ駆け寄り、統夜たちも後に続いていた。

「マキちゃんたちは何時からなの？」

「私たちは3時半だよ」

「あつ、私たちの前なんだ」

「ねえ、ブラックフリルさんたちは？」

近くにはブラックフリルの2人が座っており、唯が出演時間を聞いていたのだが、言葉を送らずに手で「4」とサインをしていた。

「え？4時!？」

「私たちも4時からでしたよね？」

「おい、律。出演時間を間違った訳じゃないだろうな」

統夜は律に出演時間の確認をしていたのだが、ここで間違っていることがわかれば、飛行機に間に合わなくなることが必至になるからであった。

「あ、あたしはちゃんと確認したぞ！」

律は唇を尖らせながらしつかりと確認したことを伝えていた。
すると……。

「間違いないじゃないよ。私たちとブラックフリルは中のステージでライブをやるんだけど、りつちゃんたちは野外ステージでライブを行うんだよ」

どうやらライブ会場は1箇所だけではないようで、マキが演奏場所の割り振りを説明していた。

その説明を受けて、統夜たちは野外ステージの方へ移動した。

「へえ、ここで演奏をするのか……」

「うん！結構いい眺めだよね！」

野外ステージからの眺めはなかなかのものであり、統夜たちは目を輝かせながら周囲を見回していた。

「素敵ね♪ここで演奏するなんて！」

「そうだな！」

「それにしても、あたしたちだけ野外かよって思ったけど、いいかもしれないな！」

「はい！それは私も思いました！」

統夜たちがそれぞれこの野外ステージでライブが出来ることに感動していると……。

「ハーン！ホーカゴティータイム？」

ステージの下から、このライブのスタッフらしき男性が声をかけてきた。

「イエス！」

統夜が全員を代表して返事をする、スタッフらしき男性の指示を聞いて、了承の旨を伝えた。

「……みんな！セッティングを始めてくれとのことだから、始めようぜ！」

統夜がスタッフらしき男性からの指示を伝え、統夜たちはライブのセッティングを始めていた。

ちようどその頃、ラブクライシスのメンバーは、ライブを行っており、自慢のパフォーマンスを観客に見せつけていた。

そして統夜たちはコートを脱いでライブの準備を行っており、律はドラムセットの調整や、スネアなどのチューニングを行っており、紬はキーボードのスタンバイをしていた。

統夜たち弦楽器組も、それぞれ楽器をスタンバイし、チューニングもバツチリ行っていた。

今回のステージは制服で出ると昨日の打ち合わせで決めたため、統夜たちはホテルを出る時には既に制服を着ていた。

あとはシールドのプラグをアンプに差し込めばおおよその準備は完了なのだが……。

「……ねえ、これって挿しているのかな？」

「え？」

「火花が出たりしない？」

「そんなこと、ある訳ないじゃないですか！」

唯はどうやらホテルで変圧器を使わずにドライヤーを使って火花が出たことがトラウマになっているようであった。

「……そうだな、何か嫌な予感がする」

「濔先輩まで!？」

「やれやれ……。こいつは日本製の楽器じゃないんだから、火花が出るとかあり得ないだろ……」

統夜は呆れているのか、ジト目で唯のことを見ていたが、唯はシールドのプラグをアンプに差し込むことをためらっていた。

「つたく……。しようがねえな……」

統夜が唯に代わってシールドのプラグをアンプに差し込もうとするのだが、その前に何者かが乱入し、シールドのプラグを掴んでいた。

そして……。

「そのまま挿せばいいのよー！」

乱入者はシールドのプラグをアンプに差し込むのだが、唯は勢いあまって尻もちをついてしまった。

統夜たちは恐る恐る乱入者の顔を見るのだが……。

「……さ、さわちゃん!!」

乱入者の正体は何とさわ子であり、統夜たちは驚きのあまり、全員揃ってさわちゃんと呼んでいた。

「そもそも、そのギターは日本のメーカーじゃないでしょ?」

さわ子は、先ほど統夜が言っていたこととまったく同じことを言っていた。

「な、何? 幻?」

「何でこんなところに!?!」

「足は……ある」

「まさか、ホラーの仕業か!?!」

統夜たちは驚きのあまり気が動転してるのか、言いたい放題であった。

『おいおい、ひどい言われようだな……』

「そうよ! 私は幽霊でもホラーでもないわよ!」

さわ子は言いたい放題な統夜たちの発言を否定していた。

「だけど、念には念を入れないと……」

統夜はいつものように制服の上から魔法衣を羽織っており、魔法衣の裏地から魔導ライターを取り出そうとするのだが……。

「違うって言うてるでしょ!!」

さわ子は軽音部時代に戻ったかのように、鋭い目付きでギロリと統夜を睨みつけていた。

「も……申し訳ございません……」

統夜はさわ子のあまりの迫力に、顔が真っ青となり、しゅんとしながらさわ子に謝っていた。

「さわちゃん、何でロンドンに？ハネムーン？」

唯はさわ子にロンドンへ来た理由を聞いていたのだが、とんでもないことを言っていた。

「おいおい……。お前なあ」

『さすがは天然娘だな……』

統夜とイルバは恐れ知らずな唯の発言に呆れ果てていた。

「マイルが貯まつたのよ。飲み会もカードで払ってコツコツ貯めて……。なのに、有効期限が切れそうだったから」

さわ子がロンドンを訪れたのは、大人ならではの理由だった。

「それに私、軽音部の顧問だしね♪」

さわ子がロンドンへ訪れたのは、マイルの期限が切れそうだというのは建前で、本当は軽音部の顧問だからというところが大きいと思われた。

「それで、いつ来たの？」

「着いたのは昨日よ」

「帰るのは？」

「今夜♪」

「……大人って凄い……」

滯は、さわ子の大人ならではの行動力に驚きを隠せなかった。

「さわちゃん、一言言ってくれればいいのに……」

「あら、電話はしたわよ。だけど、あなたたち、出なかったんだもの」

「あー……。あの時の電話はさわちゃんだったのか……」

ホテルの部屋にかかってきた電話の正体がさわ子だと知り、律は苦笑いをしていた。

「それに私は今日のために衣装を持ってきたのよ！……ジャパニーズニンジャ！アンドレデイスニンジャ！」

「忍者とくノ一かよ!!」

さわ子はキャリアバッグを開けて衣装を取り出すのだが、それは日本ならではの

忍者とくノ一の衣装であった。

さわ子が見せたのはくノ一の衣装だったのだが……。

「ブラボー！ブラボー！」

それをたまたま見ていた壮年の男性が、歓声をあげながら拍手を送っていた。

「い、いやいやいや……」

律は苦笑いをしながらこの衣装を着ることを否定していた。

「モデルにも着てもらったんだから、ちよつと見なさい！」

「モデル……？」

「これよ、これ！」

さわ子はここに来る前に誰かにこの衣装を着てもらったらしいのだが、それが誰かわからず、統夜は首を傾げていた。

そして携帯を取り出したさわ子は写真を統夜に見せるのだが……。

「……!!和ちゃん!？」

まず最初のモデルは和であり、唯は驚きを隠せなかった。

「まだいるわよ♪」

「………！憂まで！」

「純まで!？」

和だけではなく、憂や純もモデルになっていたようであり、唯と梓は驚いていた。

「…………ふふん♪今度のはとっておきよ♪」

さわ子はさらに写真を撮っていたようで、それを統夜たちに見せていた。

「…………!?レオ先生!?!」

「アキトまで!!」

『…………何やってんだ。あいつら…………』

さわ子のとっておきと言うのが、先ほどの3人同様に忍者のコスプレをしているレオとアキトであった。

意外すぎる人物に滯と統夜は驚くのだが、イルバだけは呆れ果てていた。

「この写真を撮った時にたまたま2人が来てね。急遽モデルをお願いしたのよ♪」

「…………しかも2人とも随分とノリノリだなあ」

「アキトならまだしも、レオさんまでノリノリとは…………」

写真をよく見ると、2人とも楽しそうであり、レオまでもここまで楽しそうにしてるのを見て、統夜は苦笑いしていた。

「それに、魔戒法師レプリカの新作もあるのよ♪」

さわ子は新しく作った魔戒法師レプリカの衣装を見せようとするのだが…………。

「…………却下」

「ええ!？」

「はい、みんなスタンバイスタンバイ!」

律はジト目のまま手を叩いてこのように統夜たちを促すのだが、さわ子は自分の衣装を採用してもらえず、ぷうつと頬を膨らましていた。

こうして統夜たちは再びライブの準備を始めると、16時にライブをスタートさせた。

※※※

統夜たちがライブをスタートさせようとしているちようどその頃……。

「……ほら、早く早く!」

「はいはい。引つ張らなくても大丈夫よ。パティ」

デビルメイクライで統夜たちが出会った少女……パティが、黒髪の女性と一緒に統夜

たちが参加するイベントの会場に来ていた。

「……………ここまで一緒に来てくれて、ありがとうね、レディ」

パティは黒髪の女性をレディと呼んでいた。

その名前は本名ではないのだが、彼女の本名を知る者は少ないのであった。

「いいのよ。私だって気になるしね。ダリオとは違う日本の魔戒騎士っていうのが」

「ああ、トウヤのことね？ トウヤは魔戒騎士としてはまあまあだなってダンテが言ってたよ」

「へえ、トウヤって言うのね……………」

「あ、あそこにいるのがそうだよ！」

パティは野外ステージで演奏をしている統夜たちの姿を発見し、指を指していた。

「へえ……………あの子が……………」

統夜はこの時魔法衣は羽織ってなかったが、放課後ティータイム唯一の男子であるため、レディはすぐに統夜の存在を認識していた。

「……………かなり若いけどあの子……………。それなりに修羅場をくぐってるみたいね……………」

レディは人間でありながらダンテの同業者であるデビルハンターであり、その経験から統夜がただの子供ではないことを見抜いていた。

「へえ、本当にみんなバンドやってるんだ！」

パーティは演奏している統夜たちを見て、キラキラと目を輝かせていた。「ふーん……。なかなか可愛らしいバンドじゃない……」

レディは、統夜たちの演奏を聴き、日本語はわからなかったが、可愛らしい雰囲気を出していることに対して笑みを浮かべていた。

現在統夜たちは1曲目の演奏を終えて、2曲目である「ふわふわ時間」を演奏していた。

(……………ん?)

統夜は演奏中にパーティの姿を見つけるのだが、レディとは会っていないため、それが誰なのかわからず、首を傾げていた。

(パーティの隣にいるあいつは誰なんだ?ただ者じゃないって言うのは間違いなさそうだけど……)

統夜は演奏しながらレディのことをジッと見ており、彼女から放たれるオーラが並の人間のものではないことに驚いていた。

レディもそんな統夜の視線に気付いてウイंकをしていたのだが……。

《おい、統夜!本番中だぞ!集中しろ!》

(わ、わかつてるよ!)

イルバに叱責されたことで我に返った統夜は、演奏に集中し、ミスをしないうよう努め

ていた。

こうして、2曲目の「ふわふわ時間」もどうにか最後まで演奏することが出来た。

2曲目が終了し、客席からパチパチパチと大きくはなかつたが、拍手が起こっていた。『……という訳で、ロンドンとつても楽しかったです！ベリーインタレストイキング！』

唯はMCとして簡単に挨拶をするのだが、統夜が唯の言葉をすかさず通訳し、観客にもわかるようにしていた。

「……合ってる？」

「大丈夫だ。それに、通訳もしてるし、問題はないぜ」

「……唯、そろそろ飛行機の時間が……」

ライブの時間も決まっており、あまり長々とライブをしていては帰りの飛行機に間に合わないため、律がそのことを唯に伝えていた。

唯は律の言葉を聞いて無言で頷くと、再び観客の方を見ていた。

そして……。

『……それでは、最後の曲です！「ごはんはおかず」！』

唯がこのように話をすると、統夜がすかさず通訳を入れたのだが、タイトルを聞いて、客席から少しだけ笑いが起きていた。

「……1！2！1・2・3・4！」

律の合図と共に、統夜たちは「ごはんはおかず」の演奏を始めた。

統夜たちが演奏しているごはんはおかずは、前回の学園祭で初めて演奏した曲であり、唯が作詞した非常に独特な曲である。

お米の素晴らしさを歌った曲であるため、ロンドンの人々に伝わるかはわからないが、全員の話し合いの末、この曲を最後の曲にしようと決めたため、現在演奏しているのであった。

こうして、イントロが終わり、唯は歌い始めた。

『♪♪はんくは凄くよ。何でもあーうよホカホカ♪♪』

唯は日本語の歌詞で歌っていたのだが……。

(結局……)

(日本語かよ……)

(昨日一生懸命翻訳したのに……)

統夜は昨日の夜にライブの打ち合わせをした時に、唯に「ごはんはおかず」の英語バージョンを歌いたいから訳してくれと頼まれたたま、疲れた体に鞭を打ちながら訳していた。

しかし、結局はいつもと同じ日本語で歌っていたのを聞いた統夜はがっくりと肩を落としていた。

《残念だったな、統夜。まあ、俺はこうなるだろうとは思っていたがな》

(あうう……。思っけていても言うなよな……)

イルバはカタカタと音を鳴らしながらテレパシーで統夜をからかうと、統夜はさらにしゅんとしてしまった。

しかし、演奏自体には手を抜いておらず、いつも通りの演奏を行っていた。

こうして、演奏は何の問題もなく進んでいったのだが、曲の後半になると、唯はステージから最も近い場所で座っている親子連れをちよくちよく見るようになっていた。

母親らしき女性が穏やかな表情で赤ん坊を抱いていたのだが、赤ん坊はあうあうと言いながら動こうとしていた。

さらに近くに止まった鳩を触ろうと必死に手を伸ばしていたのだが、唯は演奏して歌いながらその様子を見ていた。

《おいおい。唯のやつ、さっきからあの赤子ばかり見てるが、大丈夫なのか?》

(それは俺も気になってた。唯のやつ、変なミスをしなきゃいけないけど……)

イルバと統夜は、テレパシーでこのような会話をしながら、唯がミスをしなにか心配していた。

そんな中、演奏は最後のサビを残すのみとなった。

『♪……1・2・3・4、GOハン!……1・2・3・4、GOハン!』

後は同じフレーズをもう一回言えばこの曲も終わりになるのだが、唯は先ほどから気にしていた赤ん坊と目が合い、赤ん坊は無邪気に笑っていた。

その姿にメロメロになってしまった唯は、最後のフレーズの「GOハン」の「ん」の部分で、「うう〜♪」となってしまうていた。

そして……。

『もう一回！』

後は曲を終わらせるだけなのだが、唯が唐突に曲を継続させようとしており、それに統夜たちは困惑しつつも、一瞬崩れた曲をすぐに持ち直していた。

『ロンドンブリッジ・テムズリーパー！ロンドンタワーにロンドンアイ!!』

唯はロンドンの名所を指差しながら歌っていたのだが、これは完全に唯のオリジナルであった。

「……………ここで英語かよ……………」

「唯先輩……………」

「やれやれ……………。一人で暴走しやがって……………」

律は急に英語バージョンになったことに対して苦笑いをして、梓はポカーンとしていた。

そして、統夜は一人で暴走している唯をジト目で見ながら心底呆れていた。

『♪ロンドン！ロンドン！やっぱり、お好み焼きアンドご飯！私自身は、ロンドン人!!』
(……どないやねん)

「……どないやねん」

唯のメチャクチャなフレーズにさわ子は心の中で思い切りツツコミを入れており、統夜はジト目でツツコミを兼ねて「どないやねん」と言っていた。

その後は普段通りの演奏を繰り返して、この曲は終了した。

そして、曲が終了すると、唯は……。

『……スカイハイ!』

と、唯が叫ぶと、大きな拍手が送られ、ここで統夜たちのライブは終了となった。

※※※

ライブ終了後、統夜たちは大急ぎで撤収すると、タクシーを捕まえるべく道路を目指

して走っていた。

「何だよ！スカイハイって！」

唯が暴走したことによって演奏時間が延びてしまい、律はそのことに文句を言っていた。

「やり過ぎちゃった！赤ちゃん可愛かったんだもん！」

「それには同意しますけど!!」

どうやら梓も赤ん坊の存在を認識していたようだが、だからと言って最後の曲の時間を延長させたことを認めた訳ではなかった。

「あ、それって、前に座ってた子よね？」

「ああ、そうだ。だからと言って暴走し過ぎなんだよ、お前は！」

細も認識していたようであり、確認を取る問いかけに同意した統夜は、暴走していた唯に文句を言っていた。

「格好いいところを見せたかったんだよお!!」

唯は申し訳ないとは思っていたものの、熱い思いを止めることは出来なかった。

統夜たちはどうか車道のある道にたどり着き、タクシーを呼ぼうとしていたのだが、その前に小型のバスが止まると、運転席から壮年の男性が出てきた。

「お前ら、乗りな！急いでんだろ？」

「!?モリソン!?どうして?」

その男性は情報屋としてダンテに仕事を提供しているモリソンであり、統夜は驚きを隠せなかった。

「パティの奴に頼まれてな。統夜たちを空港まで送ってやれってな」

「それはありがたい!モリソン!よろしく頼むよ!」

「任せな!さあ、早く乗りな!」

統夜たちは小型バスのトランクにキャリーバッグや楽器を積み込むと、バスに乗り込んだ。
んだ。

モリソンも運転席に座ると、バスを走らせ、空港へと向かっていった。

統夜たちが乗ったバスは小型で、10人ほどが乗れるバスで、統夜たちは自然と近くに集まっていた。

梓は統夜の隣に座っていたのだが、しばらくすると統夜にもたれかかって眠っていた。
た。

「……寝ちゃったな」

「梓ちゃん、旅行中色々調べてくれて、頑張ってくれたもの」

梓はこの旅行が決まった時から旅行の計画を立てており、旅行中もガイドブックを頼りに色々調べものをしたりと統夜たちのために頑張ってくれたのであった。

「疲れたのかもな」

濡や袖だけではなく、律もすやすやと眠る様を穏やかな表情で見守っていた。

「……あつ、雪だ！」

どうやら雪がちらちらと降ってきたみたいであり、唯は窓から見える景色を眺めていた。

統夜たちも同じように窓から見える景色を眺めていた。

「……ねえ、私、凄いことに気付いたよ」

「……ん？」

唯は何かを発見したようであり、それが何なのかわからない統夜たち4人は、首を傾げていた。

「……いつもの自分たちの曲でいいんだよね？」

「あら、今頃気付いたの？」

「私もそう思ってたわよ。唯ちゃん」

「私もとつくの昔に気付いていたよ」

「気付いてないのはお前だけだぜ、唯」

『そうだな。俺様から言わせてもらえば、何で今まで気付かなかったのか不思議なくらいだぜ』

「ええ!？」

いつも通りでいい。このことに統夜たちは気付いていたのだが、唯は今回のライブを通して、ようやく気付いたようであった。

こうして統夜たちを乗せた小型バスは空港に到着した。

統夜は全員を代表してモリソンに礼を言うと言とうと搭乗手続きを済ませ、統夜たちの乗った飛行機が日本へ向けて飛び立っていった。

こうして統夜たちの卒業旅行は幕を閉じ、今回の旅行は統夜にとって忘れられないものとなった。

唯たちも、初の海外を大切な仲間たちと過ごすことが出来たため、かけがいのない思い出となったのであった、

……続く。

—— 次回予告 ——

『ようやく日本に帰ってきたな。帰って早々こうなるとは大忙しだな。次回、「学友」。
統夜が学校に通うのもあと僅かだぜ！』

第113話 「学友」

統夜たちの3泊5日に渡る卒業旅行は無事に幕を下ろした。

飛行機が某国際空港へ到着すると、統夜たちはバスに乗り込み、ようやく桜ヶ丘へ到着した。

バス停で統夜たちは解散し、それぞれ家へと帰っていった。

そんな中、統夜はまっすぐ家に帰ることはせず、桜ヶ丘に帰ってきたことをイレスに報告するために、番犬所へ向かった。

「……おお！統夜！ようやく帰ってきましたね！」

「はい、イレス様。月影統夜。無事に戻りました」

統夜は深々と頭を下げながら戻ってきたことを報告すると、続いて狼の像の前に移動すると、魔戒剣を抜いて、狼の像の口に突き刺すことで、魔戒剣の浄化を行った。

ロンドンではホラーとは戦わなかったが、悪魔と戦っていたため、魔戒剣に邪気が溜まっていると思われるからである。

しかし、狼の像のからは、ホラー封印の時のように短剣が出てくることはなかった。

「……やっぱり悪魔相手じゃ短剣は出てこないか……」

統夜は、悪魔を倒したことで短剣が出てこないことを予想していたのか、驚くことはなかった。

「……統夜。やはりロンドンにはホラーではない魔獣がいたのですか？」

統夜の独り言を聞いていたイレスは、驚きながら統夜に確認を取っていた。

「ええ、運がいいのか悪いのか、旅行先で遭遇してしまいました」

統夜は魔戒剣を青い鞘に納め、魔法衣の裏地にしまいながら、悪魔と遭遇したことを伝えた。

さらに、統夜はその詳細を語り始めた。

「……そいつらは悪魔と呼ばれておりまして、ホラーのいる魔界とは別の魔界に生息している魔獣のようです」

「ホラーのいる魔界とは別の魔界……ですか？」

どうやら番犬所の神官であるイレスも、ホラーのいる魔界とは別の魔界があることを知らなかったようであり、驚きを隠せずにいた。

「そこで、俺たち魔戒騎士のように悪魔を狩る者や、ロンドンの地にいる魔戒騎士とも出会いました」

「へえ、その悪魔を狩る者がいるのは納得ですが、ロンドンで魔戒騎士とも出会ったのですね」

「ええ。悪魔を狩る者はダンテ。魔戒騎士は、黒曜騎士是武ことダリオ・モントーヤという名前でした」

「ダンテとダリオですか……。それにしても黒曜騎士ですか……。初めて聞く称号ですね」

『まあ、あそこは元老院から隔離されてるみたいだからな。お前さんが知らないのも無理ないんじゃないのか?』

「確かに……。イルバの言う通りかもしれないですね」

「そんなことはありましたが、おかげさまで楽しい旅行となりました」

「そうでしたか。そう言っていたら、送り出した甲斐があるというものです」

イレスは、統夜が心の底から旅行を楽しんでいたことを知り、喜びのあまり笑みを浮かべていた。

「あつ、そうそう。イレス様、お土産です」

統夜は魔法衣の裏地からイレスのために用意したお土産を取り出すと、それをイレスの付き人の秘書官に渡していた。

「……おお、いっぱいですね」

統夜はイレスのお土産を多く用意しており、その多さに驚いていた。

「イレス様にはお世話になってますからね。これくらいはしなきゃと思ひまして」

「まあ♪嬉しいことを言ってくれますね♪」

統夜はイレスへの感謝の気持ちとして多くのお土産を用意していたのだが、統夜の心遣いがイレスには嬉しかった。

イレスがお土産をもらって喜んでいたその時だった。

「イレス様、ホラーを討伐してきました」

「あー……。疲れた……」

「まあ、俺たち3人で戦ったし、いつもよりは楽だったけどな」

ホラー討伐を終えたレオ、アキト、戒人の3人だった。

「3人とも、ご苦労様です。ちょうど統夜も帰ってきましたよ」

「「え？」」

3人はイレスの言葉に驚き、横を向くと、ここでもうやく統夜の存在に気付いたようであった。

「統夜君、お帰りなさい」

「ありがとうございます、レオさん」

「旅行は楽しかったか？」

「まあな。色々あったけど、楽しかったよ、戒人」

「統夜！早くお土産！お土産をくれよ！」

「はいはい……。焦るなよ、アキト」

レオ、戒人、アキトの3人は口々に統夜の帰りを喜んでおり、アキトに至ってはお土産欲しさに興奮していた。

そんなアキトを、統夜はジト目で見ながら、3人のためのお土産を用意していた。

レオとアキトはロンドンならではのクッキーなどのお菓子を渡し、戒人は、ロンドン特有の調味料セットを渡した。

「おお！美味そうだな！」

「ありがとうございます！統夜君！」

「これは……。料理のレパートリーが増えそうだな」

3人はそれぞれお土産を受け取り、喜びを露わにしていた。

さらに……。

「アキト。お前にはお土産がまだあるんだよ」

「え？まだあるのか？」

「ああ、これだよ」

統夜は魔法衣の裏地から、ダンテからもらった銃のストックと、設計図をアキトに手渡した。

「……？統夜、これは？」

「俺、ロンドンで悪魔というホラーとは違う魔獣と遭遇したんだけど、そこで悪魔を狩る奴がいて、そいつが使ってた銃のストックと設計図をもらったんだよ」

「へえ、ロンドンにはホラーとは違う魔獣がいたんだな」

「それに、それを狩る者が使っていた武器と設計図とは……」

戒人とレオは、ホラーとは異なる魔獣がいるということに驚いていた。

そして、統夜から受け取った設計図を見ていたアキトは……。

「!!こ、こいつは……」

「?アキト、どうしました?」

「こいつは普通の銃じゃないぜ!見た目は普通の銃だけど、内部の細かい部分が全然違う!」

「そ、そうなんですか?」

アキトは設計図を見ただけでこの銃がただの銃ではないことを見抜き、驚きを隠せずにいた。

「こいつを参考にすれば魔戒銃を完成させられる……!ありがとな、統夜!こいつは最高の土産だぜ!」

「アハハ……。そこまで喜んでくれると悪魔狩りの仕事を引き受けた甲斐があるつてもんだよ」

自分の予想以上にアキトは喜んでいたので、統夜は苦笑いをしていた。

「おっと、こうしちやいらねえ！ さっそくこいつを参考にして、魔戒銃の改良に入らせてもらうぜ！」

アキトは早く魔戒銃を改良させたいとウズウズしているからか、イレズに挨拶もせず番犬所を飛び出していった。

「あ、アキト！ 待つてください！……それでは、失礼します！」

レオはイレズや統夜たちに一礼をすると、アキトを追いかける形で番犬所を後にした。

「と、とりあえず、今日は統夜も疲れていますし、明日から再び魔戒騎士として使命を果たして下さい」

「はい、ありがとうございます。イレズ様。お言葉に甘えて今日はゆっくりと休ませてもらいます」

統夜はイレズに一礼をすると、番犬所を後にして、そのまますすぐ家路についた。

翌日は登校日ではなかったため、統夜は午前中いっぱいエレメントの浄化を行い、午後は普段から世話になっている幸太やヒカリのもとへ行き、2人にもロンドンのお土産を渡していた。

その後は番犬所に顔を出し、指令がないことを確認すると、そのまま鋼牙の家である

雷暝館へ向かい、鋼牙やカオル。そしてゴンザにもお土産を渡した。

そして、偶然にも雷暝館に零がいたため、零にもロンドンのお土産を渡していた。

鋼牙たちにお土産を渡すと、みんなそのお土産をとっても喜んでくれていた。

統夜はゴンザの淹れてくれた紅茶を飲みながら、卒業旅行の話をしていた。

牙狼の称号を持つ鋼牙や、鋼牙の魔導輪であるザルバも、悪魔の存在は知らなかった

ように、ホラーとは違う魔獣の存在に驚いていた。

こうして、統夜は鋼牙たちに卒業旅行の話をしていたのだが、気が付けば遅い時間と

なり、統夜は話を終えるとそのまま雷暝館を後にした。

その後、桜ヶ丘に戻ってきた統夜だったが、すでに夜も遅かったため、街の見回りは

行わず、真つ直ぐ家へと帰っていった。

※※※

翌日、この日は登校日であるため、統夜はエレメントの浄化を行ってから登校した。

統夜が登校した時にはクラスメイトたちは統夜たち軽音部が卒業旅行に行ったこと

やロンドンでライブしたことを知っていたようであった。

そのため、その話で持ちきりとなっていた。

「ねえねえ、ロンドンでライブやったんでしょ？どうだったの？」

「ああ、かなり楽しいライブだったぜ」

「ねえねえ、何を演奏したの？」

「ごはんはおかずだよ！」

クラスメイトの問いかけに唯はすぐさま答えていた。

「……どないやねん……」

ごはんはおかずをやったと聞いたクラスメイトの若王子いちごは、ボソツと呟いていた。

「それだーいちご!!」

律はその呟きを見逃さず、自分の呟きが聞こえて恥ずかしかったのか、いちごは無言で髪をクルクルとさせていた。

「だけど、卒業する前にもう一度聞きたいよね。唯たちの演奏」

唯と統夜に挟まれる形の隣である立花姫子は統夜たちの演奏を聴きたいと望んでいたが、それは姫子だけではなく、クラス全員の望みであった。

「ねえ、ジャズ研は卒業ライブするんだよね？」

「う、うん」

「そうだな。せっかくだし、やれるなら卒業ライブやりたいよな」

「うん！面白そう！」

「確かに、思いつかなかったねえ」

「どこでやるつか？」

「やっぱ部室か？」

どうやらジャズ研究会は卒業ライブを行うようであり、それを聞いた統夜たちは卒業ライブをやる気になり、どこでライブを行うか検討していた。

「ねえ、だったらさ、リクエストしてもいい？」

すると、クラスメイトの1人である中島信代がこのようなことを言っていた。

そのリクエストを聞いた統夜たちは驚くのだが、断ることはせず、検討してみることにした。

そこで始業のホームルームが始まってしまったので、その検討は後回しとなってしまうた。また。

そしてとある休み時間、統夜たちは職員室へ向かうと、軽音部の顧問であり、担任でもあるさわ子に相談することにしたのであった。

「……………え？教室でライブを？」

信代がリクエストしたのは3年2組の教室であり、それは信代だけではなく、クラスメイト全員がそれを希望していた。

統夜たちもそれに同意して、さわ子にそのことを相談したのであった。

「へえ、懐かしいわねえ。私もよくやつ……」

さわ子は私もよくやつていたと言おうとしていたのだが、それと同時にさわ子の同僚教師である堀込が統夜たちの後ろを通り過ぎ、聞き耳を立てていたので、さわ子は口をつぐんだ。

そして……。

「……や、やつぱりダメよ！許可出来ないわ！」

「ええ!?何で駄目なんだよお！」

先ほどとは態度が変わっているさわ子に、律はぶうつと頬を膨らませながら文句を言っていた。

統夜たちの話を聞いていた堀込は通り過ぎて自分のデスクへと向かっていき、さわ子は律の言葉をスルーしながらその様子を横目で眺めていた。

「とにかく！あなただけ特別扱いというわけには……」

さわ子は堀込がこつちを見ていない隙に紙とペンを取り出すと、紙にあることを書いていた。

「いかないの!」

さわ子はそう言いながら紙に書いた文字を統夜たちに見せるのだが、そこには「朝とかどう?」と書かれていた。

どうやらさわ子は教師の立場として、ライブに反対する素振りを見せていたが、内心はライブを賛成しており、このような提案をしていたのであった。

それを察した統夜たちは……。

「ああ……」

「うん!うん!」

「わかったよ、さわちゃん!」

さわ子に合わせて、ライブを認められず素直にそれを受け容れる素振りをしていた。

「そう。わかってくれればいいの」

堀込が訝しげな表情でこちらの様子を伺う中、統夜たちはさわ子の言うことに従う素振りをして職員室を後にした。

「……」

統夜たちが出ていくのを見送ったさわ子は、教室でのライブのことを考えていた。

(……あの時、何か知らないけど、メチャクチャ怒られたのよね……)

さわ子たちDEATH DEVILも、卒業前に教室でライブをしたことがあるのだ

が、その当時から教師であった堀込に止められ、かなり怒られてしまったことがあった。(……フツツ、統夜君は魔戒騎士だから修羅場には慣れてるだろうけど、後のみんなは全然口ツクじゃないし、ふわふわのひよこちゃんだもの……。絶対に泣いちゃうわ……)もし統夜たちが自分たちと同じ道を歩むことになってしまつては、統夜以外の全員は怒られることに耐えられず泣いてしまうのではないかと予想していた。

(……だつたら、私が……守るしかないじゃない!!)

さわ子は無意識のうちに鋭い目付きで前を向くと、さわ子の向かいに座っていた教師が、そんなさわ子を見てビビっていた。

こうして、さわ子は統夜たち以上に教室でのライブを成功させようという決意を固めていたのであった。

教室でのライブが決まり、統夜たちはそのことを梓に報告するために2年1組の教室に向かっていた。

梓たち2年生は卒業式で3年生がつけるコサージュを作っていた。

統夜たちがその様子を見てみると、梓が統夜たちの存在に気付き、教室を出て統夜たちのもとへと駆け出していた。

梓が来たことで、統夜たちは自分たちの教室で卒業ライブをすることを話したのであった。

「……教室でライブですか？」

「うん。でもさ、あたしたちの教室だからさ、あたしたちだけでやろうかな〜って……」
「思ってたんだけど……」

「統夜たちは梓にも参加して欲しかったのだが、梓に気を遣って最初は自分たちだけでやることを恐る恐る話したのだが……」

「そんなのダメです！私も一緒に出たいです!!」

「本当!?!」

「はい!」

梓もライブに参加したいことを聞くと、律は小さくガッツポーズをしていた。

唯も梓と一緒にライブが出来て嬉しいのか、梓に抱きつこうとするのだが、梓はそんな唯の両側の頬を掴んでブロックしていた。

「で、いつやるんですか？律先輩!」

梓のこの問いかけに、律は、明後日の登校日に行くことを話していた。

この日は統夜たち3年生最後の登校日であり、卒業ライブを行うならこの日がいいと統夜たちは考えていた。

こうして、梓もライブに参加することが決まったところで、この日の放課後にはライブの打ち合わせを行って解散した。

※※※

その日の打ち合わせが終わり、唯たちと解散した統夜は、番犬所を訪れていた。

「……？統夜、どうしたんですか？今日はずいぶんと嬉しそうですね」

イレスは、番犬所に入った時から表情が緩んでいる統夜のこと気がなっていた。

「どうせ、梓ちゃんとよろしくやってたんだろ？」

「ああ、そう言えば統夜君と梓さんは付き合ってるんですけどものね」

「つたく……。お前ってやつは……」

番犬所にはアキト、レオ、戒人の姿があり、アキトの言葉をレオと戒人は素で受け止めていた。

「ちよっ!!それは違うから!!」

アキトの言葉を聞いた統夜は顔を真っ赤にしながらその言葉を否定していた。

「そ、それにアキトもレオさんも元老院に帰ったんじゃないのか!」

そもそもアキトとレオは統夜が卒業旅行に行っている間に統夜の代わりにホラー討伐を行うため元老院から派遣されたため、統夜は2人が既に元老院に戻ったと思っていた。

「まあ、確かにそうなんだけどさ」

「統夜君も卒業ですしね。しばらく桜ヶ丘に留まって統夜君の卒業を見届けようと思いまして」

アキトとレオは統夜が卒業旅行から帰ってきた後は元老院に戻る予定だったが、統夜の卒業を見届けるためにしばらく桜ヶ丘に留まることにしたのである。

「アキト……レオさん……」

自分の卒業を見届けるというアキトとレオの言葉が、統夜には嬉しかった。

「それで? 統夜はどうして嬉しそうにしてたんですか?」

イレスは統夜たちのやり取りを最後まで聞いた後に先ほどから聞きたかった話を切り出した。

「はい。明後日は最後の登校日なんですけど、自分たちの教室でライブをすることになったのです」

「へえ、それはいいですね! 私も聞きに行きたいくらいですよ!」

「い、イレス様。さすがにそれは……」

「エへへ……わかつてますよ。だけど、私もまた統夜たちの演奏を聴きたいと思いでね」

イレスは度々統夜たちの演奏を聞いたことがあるのだが、再び統夜たちの演奏を聴きたいと思っていた。

イレスもまた、統夜たち放課後ティータイムのファンの一人であった。

「イレス様。でしたら、僕が魔導具を用意しますので、それを統夜君の教室に設置させてもらい、ライブの様子をこの番犬所に中継しますよ」

「え!? 本当ですか? それではレオ、お願い出来ますか?」

「もちろんです! お任せください!」

「それじゃあ師匠。さっそく準備をしないとね」

「そうですね。それでは、魔導具の準備をしますので、僕たちはこれで失礼しますね」

アキトとレオはイレスに一礼をすると、そのまま番犬所を後にして、明後日に使う魔導具の準備を始めることにした。

「……イレス様、今日はホラー討伐の指令はありますか?」

「いえ。今のところは指令はありませんよ」

「そうですね……。統夜、俺は街の見回りに行ってくる。お前はあまり無理せずゆっく

り休むといい」

「悪いな、戒人。だけど、ちよつとは仕事はさせてくれよ。休み過ぎは体がなまるからな」

「アハハ……。それはそれで好きにしろ」

戒人はイレスに一礼をすると、番犬所を後にした。

それからあまり間をおかず、統夜もイレスに一礼をして、番犬所を後にし、少しだけ街の見回りを行ってから帰路についたのであった。

※※※

そして、統夜たち3年生の最後の登校日を迎えた。

この日は予定通り朝のホームルーム前にライブが行われることになり、朝早くから、3年2組の教室では、ライブの準備が行われていた。

クラスメイトたちは机をくつつけて即席のステージを作っており、統夜たちはドラムセットなどの機材を教室に運んでいた。

ある程度機材を運び終えると、統夜は即席のステージが良く見えそうな場所に、レオから渡された魔導具を設置した。

レオは設置した時点で魔導具が起動するようセッティングをしてくれており、統夜が魔導具をセッティングすると、それは起動し、その魔導具が映した映像は、番犬所へと中継されていた。

即席のステージはしつかりと映っており、それを番犬所で見たいイレスは笑みを浮かべ、レオとアキトは小さくガッツポーズをしていた。

戒人も統夜たちの演奏は聴きたいと思っていたのだが、現在はエレメントの浄化を行っており、統夜たちの演奏を聴くのは諦めていた。

こうして全ての準備が整うと、放課後ティータイムの卒業ライブが、3年2組の教室で行われた。

このライブは朝のホームルーム前には終わらさなければいけないため、3曲だけ演奏することになっていた。

1曲目に選んだ曲は、統夜が作詞作曲した曲である「PREDESTINATION」という曲であった。

この曲は統夜が尊敬し、目標としている黄金騎士牙狼こと冴島鋼牙と、その妻である冴島カオルの生き方をイメージにしている曲であり、ボーカルは統夜が担当している。

統夜は以前から牙狼をイメージした曲を作曲したいと考えていたのだが、それで完成したのがこの曲であった。

他にも魔戒騎士の生き様をイメージした曲や、自分の生き様をイメージした曲を現在制作しているのだが、予想以上に苦戦をしており、それはまだ完成してなかった。

放課後ティータイムのボーカルは唯か滯であるが、時々統夜がボーカルを担当することもあり、クラスメイトたちも統夜の歌声が聴けて嬉しいと思っており、楽しみに演奏を聴いていた。

そして、「PREDESTINATION」が終わると、次のボーカルは滯に変わり、「五月雨20ラブ」という曲の演奏を始めた。

ちょうどその頃、さわ子はどの先生よりも早く出勤していた。

しかし、ライブを見ることなく、職員室で待機をしていたのだが、これは他の教師が来ても、ライブのことを勘繰られたり怪しまれたりしないようにするためであった。

さわ子がジッと職員室で待機をしていたその時だった。

「山中先生。お早いですね」

「ええ。色々やることがありまして」

堀込が出勤してきて、堀込は既に出勤してきたさわ子に驚いていた。

「…………おや？この音は？」

職員室にも統夜たちの演奏音は聞こえてきたため、特にベースの重低音が響き渡っていた。

「え？あ…………。工事でもしてるんじゃないかしら？」

「そうですか。随分と景気のいい工事ですね」

堀込はさわ子の工事という言葉に軽く笑いながら自分のデスクへと向かって行くのだが…………。

「なんてな！こないだコソコソしてたのはこれか！怪しいと思っていたんだ！」

堀込はどうかやら統夜たちやさわ子のやろうとしていたことを見抜いていたようであり、鞆を自分のデスクへ投げ捨て、方向転換をして職員室を出て行った。

「!?待ってください!!」

ここで堀込にライブを止められては、これまでの計画が水の泡になるだけではなく、統夜たちが堀込に怒られることになり、当時の自分たちの二の舞になってしまう。

さわ子はどうか堀込を止めようと慌てて堀込を追いかけた。

堀込が職員室を出て行ったちようどその頃、2曲目である「五月雨20ラブ」の演奏が終わり、残すは最後の1曲となっていた。

統夜たちが最後に選んだ曲は、最後の学園祭ライブのトリとして演奏し、放課後ティータイムとしても思い出深い曲である「U&I」であった。

この曲が始まった頃には3年2組の教室に人数がかなり増えており、統夜たちの演奏を楽しんでいた。

そして、レオが用意した魔導具のおかげで、イレス、レオ、アキトも番犬所で統夜たちの演奏を楽しむことが出来た。

そんな中、堀込は統夜たちの演奏を止めるべく3年2組の教室に向かっており、それをさわ子が必死になって止めようとしていた。

「ま、待つてくださいい！」

「問答無用！」

「朝のホームルームまでには終わらせますから！」

さわ子は堀込にしがみついて必死に止めようとするが、その甲斐むなく、ズルズルと引きずられていた。

そんなこととは知る由もなく、統夜たちの演奏は進んでいった。

U & Iの演奏が進めば進むほど盛り上がっていき、教室内だけではなく、廊下から覗き込むように演奏を聴いている者もいた。

憂と純がまさしくその例であり、廊下で演奏を聴いていたのだが、それを見たいいちごが憂と純を教室へと手招きしていた。

いちごの計らいにより、憂と純は教室の中で統夜たちの演奏を聴いていたのであった。

曲も後半になっていき、唯は梓や統夜と向かい合わせになり、同じリズムを奏でて笑い合っていた。

こうして、最後のサビに向けて唯は歌い始めるのだが、「笑わないでどうか聞いて。思いを歌に乗せたから」という部分は、梓の顔をジッと見ながら歌っていた。

梓はこの唯の行動が理解出来ず、首を傾げていた。

そして、最後のサビに突入すると、唯はステージからジャンプして下に飛び降りて、クラスメイトたちに囲まれながら演奏していた。

そんな唯の咄嗟のパフォーマンスにクラスメイトたちは歓声をあげ、ステージで演奏

している統夜たちは苦笑いをしていた。

その頃、堀込は3年2組の教室の前まで来ていたのだが、止めようとはせず、統夜たちの演奏をジッと聞いていた。

「……ま、昔のお前たちに比べたら、可愛いもんだな」

堀込は学生時代のさわ子の演奏と今行われている統夜たちの演奏を比較し、これならば問題はないだろうと判断し、統夜たちの演奏を止めることはしなかった。

すると、教室の扉が開かれると、クラスメイトたちは堀込とさわ子を囲むと、2人を教室へと誘導していた。

堀込とさわ子の登場に梓は驚くのだが、紬が「大丈夫よ」と言いたげな感じで笑みを浮かべていた。

曲も後は後奏を残すのみとなり、唯は気持ちが高ぶりすぎてピョンピョンと跳ねながらギターを奏でるのだが、紬もそんな唯につられてピョンピョンと跳ねながらキーボードを奏でていた。

統夜たちは心から演奏を楽しみ、観客たちと1つになり、最後の曲である「U&I」を最後まで演奏し切った。

最後の曲が終わると、ライブを聞いていたクラスメイトたちが大きな歓声と拍手を送り、統夜たちの卒業ライブは幕を閉じたのであった。

※※※

ライブも終わり、撤収作業を済ませると、朝のホームルームの時間となり、いつものような授業が行われていた。

そして最後の登校日の授業が終わり、統夜たち5人は朝のライブの成功の余韻に浸るかのように教室に残っていた。

登校日の授業といっても6時間フルで行う訳ではなく、午前中には授業は終わっており、他の学年は普通に授業を行っていた。

「……さて、後はあずにゃんの歌を完成させるだけだね！」

静寂がその場を支配する中、その静寂を破るかたちで口を開いたのは唯だった。

「だけってそこが一番大事なことだろ？」

『漣の言う通りだぜ。お前ら、ちゃんとあれから考えたのか？』

卒業旅行も終わり、最後の登校日も終わったことで卒業式までは時間が出来た統夜たちであるが、梓に贈る曲がまだ完成していなかった。

曲の練習もしなければならぬので、そろそろ完成させないとまずい状況であるのだが……。

「……私、メロディ作ってきたの」

「え？聴かせてえ！」

紬はどうやらこの曲のベースとなる音源を用意していたようであり、その音源が入っているプレイヤーを取り出すと、それを唯に渡し、唯はイヤホンを両耳にセットしてその音源を聞いていた。

唯はその音源を聴くとそれが良かったのか、唯は頬を赤らめていた。

唯はプレイヤーを濡に渡すと、律とイヤホンを共有しつつ音源を聴いていた。

すると……。

「あ、ムギ！凄いでー！これ！」

「ああ！」

どうやら、律と濡にも好評のようであった。

「どれどれ？」

後は聴いていないのは統夜だけなので、濡からプレイヤーを受け取り、統夜は音源を聴いていた。

「……ああ。いい感じだな！」

「それじゃあ、後は歌詞がまともれば完成ね！」

統夜にも好評であり、曲はこの曲で行くことが決定し、後は作詞のみとなった。

「あずにゃんといた時間がたくんあつて困っちゃうね。私たちの宝物だよ」

「あ！それ使おうよ！」

さつそく歌詞のフレーズが思いついたのか、ここから統夜たちは梓に贈る曲の歌詞を話し合っていた。

色々アイディアは出たのだが、上手くまとまらず、統夜たちはそのアイディアを各自まとめて後日発表しようと結論を出してこの日は解散となった。

この日を境に統夜たちは、梓に贈る曲を作るために本格的に動き出すのだった。

そしてそれは、統夜たちの卒業も間近に迫っていることをも意味していたのであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『まったく、人間というのはよくわからん生き物だな。何でもかんでも写真を撮りたがるんだからな。次回、「撮影」。ま、ああいう写真であれば俺様も良いと思うがな』

第114話 「撮影」

統夜たち3年生は最後の登校日もつつがなく過ごすことが出来、後は卒業式を残すのみとなっていた。

統夜は、魔戒騎士としての務めを果たしながら、唯たちと共に梓に贈る曲を考えていた。

これはサプライズであるため、当然梓には秘密であった。

そのため、梓にバレないようにコソコソしてしまう場面が何度かあったため、梓は統夜たちの行動を怪しんでいた。

梓は恋人である統夜に何度も問い詰めるのだが、統夜はどうか上手く誤魔化していた。

「……つという訳でさ、統夜先輩もそうなんだけど、何か変なんだよね、先輩たち」

現在は体育の授業で卓球を行っていたのだが、梓は対戦相手の純と審判をしている憂に今の悩みを相談していた。

「ずっと変じゃん。統夜先輩は特殊な環境の人でちよつとズレてるところがあるし、他の先輩たちも……ねえ……」

あまりにもハッキリとした純の物言いに、憂は苦笑いをしていた。

「そうじゃなくてさ。私に隠れて何かをやってるみたいなんだよねえ」

「隠れてねえ……」

純は梓とのらりくらりとラリーをしながら統夜たちが梓に隠れて何をしているのかを考えていた。

すると……！

「……はっ！もしかして、宇宙と交信してるとか！」

「……さすがにそれはないよ」

純が素っ頓狂なことを言いだしているため、梓はジト目になって呆れていたのだが、そのため純のボールを返せなかったため、憂は純に1点をプラスしていた。

「……はっ！まさか、統夜先輩。私に隠れて浮気を……!!」

梓はサブをした直後に1番最悪と思われることが脳裏に浮かんでしまった。

「アハハ……。さすがにそれはないよ」

「そうだって！統夜先輩ってラブコメに出てくる主人公並の朴念仁だもん。そんな先輩が浮気なんかする訳ないじゃん！」

「アハハ……。純ちゃん、それはちよつとメタ発言っぽいよ……」

純のメタ発言ともとれる発言に憂は苦笑いをしていた。

「まあ、そうだよね。統夜先輩は真面目で鈍感だし、浮気は流石にないよね！」

「……梓。あんた、自分の彼氏をデイスリ過ぎ……」

本当に恋人なのかと疑いたくなるような梓の容赦ない発言に、純はジト目で呆れていた。

「……あつ！もしかして、梓に隠れてすつごくお菓子を食べてるとか！」

「ああ、それはあり得る……かも。零さんがもし遊びに来てたら尚更……」

梓は甘いものが大好きな銀牙騎士絶狼こと涼邑零のことを頭に浮かべながら、統夜たちがかつそりと凄いお菓子を食べてるのはあり得るかもしれないと考えていた。

「……憂、まさかと思うけど、唯先輩が留年なんてことは……」

梓はロンドンの地で統夜と唯が留年するという夢を見ていたため、それが正夢にならないか心配していた。

「それはないよ。今度卒業式用のタイツを買って言ってたし」

「まさか、統夜先輩は留年になったとか……?」

「それもないんじゃない?だって統夜先輩はお勤めもしてるんでしょ?もし本当に留年になりそうならしよっちゅう学校に顔を出すんじゃないかな」

「確かに、言われてみればそうかも……」

純は統夜が魔戒騎士であることを知っているため、そのキーワードをハッキリ出すこ

とはなく、曖昧な表現をして、周囲にバレないよう努めていた。

「もしかして、大学に落ちてたとか!」

「それも無い。何度も確認したもん」

純はニヤニヤしながら梓を不安がらせることを言っていたが、憂は唯の合格を何度も確認していたため、それを否定していた。

「……それじゃあ、いったい何だろう?」

梓は統夜たちが何を隠しているのかがわからず、首を傾げていた。

「だ、大丈夫だよ・梓ちゃん!」

憂は不安になる梓を必死に説得していた。

こんな感じで体育の授業は終わり、放課後となった。

この日はジャズ研の練習も休みであるため、梓、憂、純の3人は一緒に帰ることにして、その前にどこか寄り道をしようと考えていた。

そのため、商店街の方へと向かおうと考えていたその時だった。

「あれ……? あなた、梓ちゃんじゃない?」

「へ?」

梓は急に誰かに声をかけられてその方を振り向くのだが、梓に声をかけたのは、パツと見ただけでは年齢がわからないガツシリとした男性(?)であった。

「やつぱり梓ちゃんじゃない！久しぶりね!!しばらく見ないうちにずいぶん可愛くなっちゃって!」

「は、はあ……」

「ねえ、梓。この人、知り合い?」

「へ?え、えつと……」

男性(?)は梓のことを知っているようで親しげに話しかけてきたのだが、梓は誰なのかわからず、困惑していた。

しばらく考えていると……。

「あつ!!もしかして、お父さんの知り合いの京水さんですか!?!」

「あら!やつと気付いてくれたのね!そうよ!京水よ!本当に梓ちゃん、可愛くなったわねえ」

「エへへ……♪」

この人物が梓の知り合いだとわかり、梓は笑みを浮かべていた。

「梓ちゃん。本当にこの人が知り合いだったんだね」

「うん!この人は泉京水さん。お父さんの知り合いのカメラマンで、お父さんやお母さんの演奏を度々撮影してくれるの!」

梓の説明通り、この男性(?)は泉京水という名前であり、梓の両親の所属している

ジャズバンドの撮影を度々行ったことがきっかけに、中野家の両親と親交が出来て仲良くなったのであった。

「そう、私は泉京水よ♪」

京水は、名刺を取り出すと、それを憂と純に手渡していた。

「は、はあ……」

2人は名刺を受け取り、中身を見るのだが、そこには「Photo studio NEVER 専属カメラマン 泉京水」と書かれていた。

「あの、ずっと気になってたんですけど、京水さんって……。男性……ですよね？」
純は京水と会った時から気になっていた疑問をぶつけるのだが……。

「あら、そんな野暮なことは……。聞かない方がいいわよ」

「は、はい……」

純の質問は触れられたくないのか、急に京水の声色が変わっていた。

その低い声色に気圧されて、純と憂はこれ以上何も言うことは出来なかった。

「それにしても、梓ちゃんとか会うのは久しぶりだけど、本当に可愛くなったわよねえ。もしかして、彼氏がいたりするのかしら？」

「ふえっ!」

京水はニヤニヤしながらこう聞くと、梓は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

そして……。

「……は、はい。います。彼氏が……」

隠すようなことではなかったため、梓は彼氏がいることを正直に話していた。

「え!? そうなの!? ねえねえ、梓ちゃん、その彼氏の写メはあるのかしら?」

「ええ……まあ……」

梓は統夜と付き合う前から軽音部のみんななどの写真や統夜の写真をよく撮影しているため、梓の携帯には統夜の写真はたくさん入っていた。

「見てみたいわ! 梓ちゃんの彼氏!」

「あつ、はい……」

梓は携帯を取り出すと、統夜の写真の中で良さそうなものをチョイスし、それを京水に見せた。

すると……。

「!? まあ、イケメンなのね! 嫌いじゃないわ! 嫌いじゃないわ!」

京水は統夜の写真を見ると、何故か非常に興奮していた。

梓はそんな京水の様子を見て、少しだけ引き気味に苦笑いをしていた。

「梓ちゃんとこのイケメン……。ふっふっふ……。これならいけるわ!!」

統夜の写メを見た瞬間、京水にとある考えが浮かんだようであり、ニヤリと笑みを浮

かべていた。

「あ、あの……。何か？」

「あのね、梓ちゃん。実はあなたに相談したいことがあるのよ」

「相談……ですか？」

「実はね、今度うちのスタジオであるテーマで写真を撮ることになってね。そのモデルを探しているのよ。ぜひ、梓ちゃんと彼氏にお願いしたくてね」

「へ!?!私がモデル……ですか!?!」

京水からのまさかの申し出に梓は驚きを隠せずにいた。

まさか、自分がモデルを頼まれるとは思ってもみなかったからである。

「で、でも私、小さいし、スタイルも良くないのにモデルだなんて……」

梓は自分の体型にコンプレックスを持っているのか、前向きに京水の申し出を受ける気にはなれなかった。

すると……。

「梓、せっかくなんだから、その申し出を受けなよ」

「へ!?!じゅ、純!?!」

「だって統夜さんだってもうすぐ卒業だし、1つでも思い出を作ろうとは思わない?」

「う、憂まで!?!」

まさか、純と憂がノリノリだとは思わず、驚きを隠せずにした。

しかし、憂が言ったことは非常に的を得ており、その言葉を聞いて、梓は少し迷っていた。

少し考えた結果……。

「……わかりました。統夜先輩が良ければ、その仕事、お受けします」

「本当!? 助かるわあ、梓ちゃん。撮影は明後日だから、なるべく早く彼氏に聞いて改めて返事をちょうだいね」

「はい。わかりました」

「それで、今回撮影するテーマなんだけど……」

京水が梓たちに明後日撮影するテーマを説明したのだが、それを聞いた梓たちは目を大きく見開いて驚いていた。

その後、京水と連絡先を交換し、梓たちは京水と別れたのであった。

その直後、梓はすぐさま統夜に「相談したいことがある」と銘打って電話をかけた。

統夜はどうやら唯たちと一緒にいるようであり、唯たちも一緒に良ければOKと統夜は返事をしていった。

梓はむしろ唯たちも一緒の方が良いと思っていたので、それを了承して、待ち合わせ場所を決めることにした。

梓は行きつけのファストフード店ではなく、もっと落ち着いた場所で話をしたいと統夜にリクエストをすると、統夜の知り合いである東ヒカリがアルバイトをしている喫茶店で待ち合わせをすることにして、電話を切った。

統夜と電話した後、梓は憂と純に別れを告げると、そのまま待ち合わせ場所である喫茶店へと向かっていった。

※※※

梓はまっすぐ喫茶店へ向かうと、その喫茶店の中に入っていった。
すると……。

「……あ、梓ちゃんいらっしやい。統夜たちならもう来てるわよ」
「はいーわかりました」

ヒカリの案内で、梓は既に統夜たちが座っている席へと向かった。

すると……。

「あつ、あずにゃくん!!」

「梓、こつちだ、こつち!!」

「はい!」

唯と統夜が梓に手を振っており、梓は統夜の向かい側に腰をおろした。

「梓ちゃん、注文は?」

「はい。それじゃあ、ホットココアをお願いします」

「わかったわ。ちよつと待っててね」

梓の注文を聞いたヒカリは、厨房の方へと向かっていった。

「先輩方、すいません。急に呼び立ててしまいました」

「大丈夫よ。気にしないで、梓ちゃん♪」

「それで、俺に相談したいことって何なんだ?」

「はい。実は先ほど、父の知り合いのカメラマンに会いました」

「へえ、カメラマンの知り合いがいるんだな」

「ええ、まあ」

梓はそのカメラマンである京水がどのような人物かを言わなかったので、苦笑いをしていた。

「それで、そのカメラマンさんに私に彼氏がいると話したんですけど、そこであるお願いをされてまして……」

「あるお願い？」

梓が話の核心に入ろうとしたのだが、そのことに対して漕は首を傾げていた。
すると……。

「あ、わかった！もしかして、梓と統夜の2人にモデルをやって欲しいとか？」

「は、はい。そうです」

まさか律が1発で正解を導き出すとは思っていなかったもので、梓は驚いていた。

「も、モデルって……。俺と梓がか!?!」

『まあ、どのようなテーマかは知らんが、そう言うことだろうな』

何故か知らないが、自分がモデルをやるということは、統夜にとっては思ってもみないことであつた。

『それで、梓は先方には何て返事をしたんだ?』

「統夜先輩が良ければ引き受けますって……」

「なるほどな……」

「統夜先輩。私も恥ずかしいとは思ったんですけど、統夜先輩と1つでも思い出が作れたらと思つてたんです。これは良い機会かなと思ひまして……」

「梓……」

梓がどのような気持ちでモデルの仕事を引き受けようと考えていたのかを知り、統夜はそんな梓の気持ちを無下には出来ないと考えていた。

そして……。

「……わかったよ、梓。お前が受ける気なら、俺も受けるさ」

「本当ですか!?!ありがとうございます!」

統夜もモデルの仕事を引き受けると聞き、梓の表情がぱあつと明るくなった。

「ところで、その撮影っていつやるんだ?」

「はい。明後日にやるって言っていました」

「明後日か……」

「その日ならちょうど学校もお休みだったわよね」

「ねえねえ、あずにゃん。その日は私たちも付いて行っている?」

「もちろんです!私もぜひ来て欲しいと思っていました」

「やったあ♪」

梓は唯たちにも来て欲しいと考えていたので、唯の申し出を断ることはせず、それを聞いた唯は笑みを浮かべていた。

その時であった。

「はい、梓ちゃん。ホットココアよ」

ヒカリが梓の注文したホットココアを運んで来たのであった。

「ありがとうございます！」

「いえいえ。それじゃあごゆっくりね♪」

ヒカリは梓の前にホットココアを置くと、そのまま厨房の方へと向かって行った。

「なあ、ところで、モデルと言つても、俺と梓の2人でどんな写真を撮るつもりなんだ？」
統夜はモデルを引き受けるにあたり、どのようなテーマで写真を撮るのかを聞いていた。

その答えは……。

「……は、花嫁と……花婿……みたいです」

「「「へ!」」」」

「!」

梓の思いがけない言葉に、統夜たちは驚きを交えながら啞然としており、偶然聞き耳を立てていたヒカリは思わず反応してしまい、足を止めてさらに聞き耳を立てていた。

「そ、それはなかなか……」

「凄いテーマだよな……」

花嫁と花婿という予想していなかったテーマに、統夜たちは驚きを隠せなかった。

そんな中……。

『なるほどな。それはそれで面白いかもな』

「そうだよなあ。だった梓のウエディングドレス姿が見られるんだろ？それは俺も楽しみだよ♪」

統夜は花嫁と花婿と聞いて驚きはしたものの、梓の花嫁姿が見れるならと考え、ノリになっていた。

「あずにやんの花嫁さんも楽しみだけど、やーくんの花婿さんも楽しみだよねえ♪」

「そうねえ♪統夜君だから、きつと似合うと思うわ♪」

「うんうん！あたしもそう思う！」

「そうだな。それに、私もウエディングドレス……着てみたいなあ……」

唯、紬、律の3人が統夜の花婿姿を楽しみにする中、滯だけは、あわよくば自分もウエディングドレスを着てみたいと考えてみた。

「……滯？」

「ふえ？い、いや。だって女の子なら誰だって憧れるのは当然だろ？」

「確かにそうかもしれないわねえ」

「滯先輩。先輩たちも花嫁さんのモデルになれるようお願いしてみますか？」

「え!?!いいのca?!」

梓からの思わぬ申し出を聞いた澪は、興奮のあまり梓に詰め寄っていた。

「は、はい……。あちらも色々な写真を撮りたいと言ったので、モデルは多い方がいいと思いますよ……」

梓はそんな澪にタジタジになりながらもこのような申し出をした経緯を話していた。その時だった。

「ねえ、梓ちゃん。その話……本当なの？」

統夜たちの話に聞き耳を立てていたヒカリが、話に割り込んできた。

「は、はい……！」

「だったら私もそのモデルに入れてちょうだい！私だって花嫁は憧れなのよ!!」

「ひ、ヒカリさん。あんたは幸太さんと付き合ってるんだろ？結婚は考えてないのか？」

「そりゃ考えてるわよ！だけど、それとこれとは話が違うのよ!」

「は、はあ……」

どうやらヒカリは本気でモデルをやりたいと思っているらしく、その姿に統夜は気圧されていた。

「わ、わかりました。ヒカリさんのことも一緒に聞いてみますね」

梓も同様に気圧されており、わかったと答えるしかなかったのであった。

「うんうん♪それじゃあ、お願いね♪後で幸太に連絡しなくちゃ♪」

完全にその気になっているヒカリは、ノリノリの状態で厨房の方へと向かっていった。

「と……とりあえず先方には連絡をいれておきますので、明後日はよろしくお願ひしますね」

「ああ、わかったよ。梓」

「それにしても、楽しみだねえ♪」

「うん！私も私も♪」

明後日行われる撮影を唯と紬は楽しみにしていた。

この日は注文した飲み物を飲みながら談笑した後には解散となった。

梓はそれとなく何かを隠していないか聞き出そうとしていたが、統夜とイルバが上手くかわして話を誤魔化していた。

梓へのサプライズはイルバも協力的であり、話を誤魔化すのにも積極的に協力していた。

そのため、梓は何も聞き出すことは出来ないものであった。

唯たちと解散した後、統夜は番犬所へと向かっていった。

統夜はそこでイレスに明後日行われる花嫁花婿姿の撮影をすることをイレスに報告していた。

イレスはそれを聞いて梓と結婚するのかと勘違いをしてしまうのだが、統夜はそれを慌てて否定していた。

統夜も梓との結婚は考えてはいたものの、自分は魔戒騎士としてまだまだ未熟であると考えており、一人前の魔戒騎士になるまでは結婚のことは考えないつもりでいた。

そのことは梓には話していないのだが、いずれは話そうと考えていた。

この日は指令はなかったため、統夜は街の見回りを行った後に帰路についたのであった。

※※※

そして、撮影当日を迎えた。

統夜たちは商店街で待ち合わせをして、梓の案内で今回撮影が行われる「Photo studio NEVER」へと向かっていった。

「Photo studio NEVER」は、桜ヶ丘某所にあるフォトスタジオであり、桜ヶ丘の中では一二を争うほどの規模である写真屋である。

そのため、お見合い写真や履歴書の写真など、連日様々な写真を撮影するべく、多くの客で賑わっている。

それだけではなく、桜ヶ丘近辺で活躍するモデルの写真撮影などもこのスタジオで行われており、芸能人が来店することも度々あるのである。

統夜たちは集合時間の5分前にNEVERに到着するのだが……。

「……あつ、来た来た!」

「待ってたぞ!みんな!」

店の前にヒカリと幸太が立っており、統夜たちが来るのを待っていた。

「あつ、ヒカリさん、幸太さん」

「2人ともずいぶんと早いな」

「あなたたちが遅いだけよ。もつと早く来なくちゃ」

「つて言っても俺らも5分くらい前に来たばかりだけだな」

どうやら幸太とヒカリは集合時間の10分前には到着したようであり、それを聞いて統夜は苦笑いをしていた。

そして、この場所に集合していたのは統夜たちと幸太たちだけではないようであつ

た。

「……さて、みんな揃ったことだし、さっそく行こうぜ！」

「アハハ……」

「……」

「つていうか……。何でお前らまでいるんだよ！」

何故かアキト、レオ、戒人の3人が来ており、統夜はすかさずツツコミをいれていた。

「イレス様から話を聞いてな。面白そうだと思つてついで来た訳だよ」

「僕としても興味深かったですしね」

「ちょ!?!レオさんまで!!」

「イレス様から伝言だ。写真が出来たら見せるようにと」

「アハハ……。もちろんそのつもりだけども……」

イレスも本来は番犬所を抜け出して行こうとしたのだが、付き人の秘書官にそのことがバレて必死になって止められたため、行くことは出来なかった。

だからこそ、行こうとしている戒人たちに出来た写真を見せるようにと言付けをしたのであった。

「ねえ、この人たちって統夜たちの知り合いでしょ？この2人は見たことがあるし」

「ああ、そういえば改めての紹介をしてなかったっけ」

ヒカリはアキトたち3人のことがずっと気になっており、統夜は3人のことをちゃんと紹介していないことを思い出していた。

すると……。

「俺は黒崎戒人。統夜と同じ魔戒騎士だ」

戒人は幸太とヒカリが魔戒騎士の秘密を知っていることを理解しており、魔戒騎士である与自己紹介をしていた。

「僕は布道レオ。魔戒騎士と魔戒法師の2つの顔を持っています」

「魔戒法師？ ああ、確か統夜たち魔戒騎士とは違って法術でホラーを倒すんだっか？」

「ええ。そんな感じですよ」

「そして俺はそんなレオさんの1番弟子のアキトだ!!」

アキトも自己紹介をするのだが、何故かドヤ顔で自己紹介をしており、レオと統夜は苦笑いをしていた。

「ず、ずいぶんとひょうきんな子だったのね……」

ヒカリは統夜と初めて会った時にアキトとも会っていたのだが、ここまでひょうきんな性格だとは知らなかったので苦笑いをしていた。

「とりあえず、3人とも統夜みたいにホラーと戦ってるって訳だよな？」

「ああ、そうだ」

「僕とアキトは管轄が違うのですが、統夜君の卒業を見届けるために桜ヶ丘に来たんです」

「そういえば統夜ももう卒業だものね」

ヒカリは統夜が高校3年生であることを思い出し、しみじみと呟いていた。

「さて、そろそろ時間だし、行くかうか。3人とも俺とヒカリのことは知ってるんだろ？」

「まあな。統夜から聞いているよ」

「そ、それじゃあ行きましようか！」

梓が先導し、統夜たちは「Photo studio NEVER」の中へと入っていった。

※※※

NEVERの中に入った統夜たちは受付で花嫁花婿のモデルをお願いされたと話すと、受付の人が撮影場所へと案内してくれた。

「……あつ！待ってたわよ、梓ちゃん」

「お待たせしました。それに、電話で話した通り、大人数で押しかけちゃってすいません」

「いいのよ。モデルは多ければ多いほど色々撮れて嬉しいしね」

梓は撮影を依頼した京水に統夜の他に部活の先輩や知り合いも一緒に来ると話しており、京水はモデルは多ければいいということでも承していた。

「……あなたが梓ちゃんの彼氏ね！」

京水は統夜の姿を見つけると、目をキラキラとさせていた。

「は、はい……」

統夜はそんな京水の迫力に気圧されていた。

「写真で見るよりもイケメンなのね！嫌いじゃないわ！嫌いじゃないわ！」

京水は実物の統夜を見て、さらに興奮していた。

《な、何なんだ!?!このオカマは!》

（そ、そう言うなよ、イルバ。世の中にはこういう人だっているんだから）

イルバは普段見ることのないいわゆるオカマと呼ばれる存在に不快感を露わにしていたが、統夜にたしなめられていた。

しかし、そんな統夜も顔が引きつっていた。

「ねえねえ、あずにゃん。この人が知り合いのカメラマンさんなの?」

「はい、そうですよ。この人は……」

「私がこのNEVERの専属カメラマンの京泉水よ」

京水は統夜たちに自分の名刺を渡した。

「あつ、それじゃ俺も……」

京水からの名刺を受け取った幸太は、着用しているスーツのポケットから名刺を取り出すと、それを京水に渡した。

「……あら、あなた刑事さんなの!? 凄いわねえ」

「アハハ……それほどでも」

「それに、よく見たらイケメンだらけじゃない! 素晴らしいわ! 素晴らしいわ!」

京水は今来ている男性陣を見て、さらに興奮しており、それを見た統夜たちは苦笑いをしていた。

「ささつ、衣装はあつちの部屋よ。今日のためにアシスタントさんたちが来てるから、梓ちゃんはアシスタントさんたちに着替えを手伝ってもらってね」

「え? アシスタントさんたち?」

京水のいうアシスタントさんという言葉に梓は首を傾げていた。

すると……。

「梓あ!!こつちだよ!こつち!」

「梓ちゃん!早く行こつ!」

「え!?憂!?」

「純まで!」

そのアシスタントさんというのが純と憂のようであり、唯と梓は驚きを隠せずにした。

「あら、私だっているわよ」

「さわちゃんまで!」

憂や純だけではなく、さわ子もアシスタントのようであり、律も驚いていた。

「3人も……どうして?」

「だって、統夜さんたちはもうすぐ卒業ですよね?」

「だから、梓にとつても統夜先輩にとつても良い思い出になればと思つて。京水さんにお手伝いをお願いしたんです」

憂と純の2人がこの撮影のアシスタントをすることになったのかは、統夜と梓にぜひ最高の思い出を作つて欲しいという気持ちからであつた。

「まったく……。こんなイベントがあるなんて黙つてるなんて……」

憂と純は梓にも内緒で、京水に連絡を取つてお手伝いを申し出ようと思うのだが、そ

の前にその計画がさわ子にバレてしまい、さわ子は自分も手伝わせると迫ったため、2人は渋々さわ子もお手伝いにと京水に頼んだのであった。

その時に3人はお手伝いのお駄賃はいらないとハッキリ言っており、京水はそんな憂と純の友達思いな気持ちに心を打たれ、3人をアシスタントにすることにしたのであった。

「まさか教え子のドレス姿を先に見ることになるなんて……」

さわ子がここへ来たのは好奇心ではあったのだが、自分より先に教え子がウエディングドレスを着ることに複雑な心境になっていた。

「だ、大丈夫だよ！さわちゃん!!」

「そうだよ！さわちゃんにもいい人が現れるよ!」

「うんうん。さわ子先生は顔はいいからな」

『あつ……』

統夜はポロつと言つてはいけないことを言つてしまい、イルバが思わず声を出してしまった。

「ああん!?今なんつった?月影え!余計なこと言つたらシメるぞ!!」

「も!申し訳ありませんでした!」

さわ子はデスデビル時代のキャサリンのように統夜を睨み付けると、統夜は土下座を

してさわ子に謝罪していた。

「こ、これが噂になってたキャサリン……なのね？」

ヒカリは桜ヶ丘高校の卒業生で、軽音部と美術部を掛け持ちしており、噂に聞いていたキャサリンの姿を垣間見て驚いていた。

「あら、あなた。私のことを知ってるの？」

「は、はい。私も桜ヶ丘高校の卒業生で、軽音部にいたことがあったので……」

「あら、そうだったのね？えっと……」

「初めまして。私は東ヒカリといいます」

「俺は日代幸太です」

「あれ？日代？聞いたことある苗字ね……」

「はい。妹の玲奈が桜ヶ丘高校に通っているので聞いたことはあるかと」

「あなた！あの玲奈ちゃんのお兄さん？」

「はい。そして、ヒカリとお付き合いをさせてもらってます」

「!!」

自分よりも若い後輩に、素敵な彼氏がいることを知り、さわ子は目を大きく見開いて驚いていた。

「……負けたな、さわちゃん……」

律は誰にも聞こえないくらいのボリュウムで呟いていたのだが、さわ子はその言葉を聞き取り、鋭い目付きで律を睨みつけていた。

そんなさわ子に、律はビクンと肩をすくめて怯えていた。

「……さ、さあ！早く準備しちやいましょう！アシスタントさんたち！女性陣をよろしくね！」

「はい！わかりました！」

「ほらほら、こつちだよ、梓」

梓たち女性陣は、憂、純、さわ子の案内で衣装を着替える控え室へと移動していった。「さて、男性陣は私が案内するわ。ついてらっしゃい」

男性陣の案内は京水自らが行うようであり、統夜たち男性陣は一応京水について行くのだが……。

《……おい、統夜。あんなオカマに着替えを手伝わせて本当に大丈夫なんだろうな？》

（ああ。大丈夫だよ。……多分）

イルバには大丈夫と答えたものの、統夜自身も京水に何かされるのではないかと気が気ではなかった。

こうして、統夜たちも控え室へと移動し、花嫁花婿の撮影のイベントは幕を開けたのであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『それにしても、花嫁花婿の撮影とは驚いたがな。だが、こんな展開になるとはさらに驚きだぜ。次回、「花嫁」。こんなところにも陰我が蔓延してるとはな！』

第115話 「花嫁」

……ここは桜ヶ丘某所にあるとある民家。

この家の広間にはウエディングドレスが立てられており、その前に一人の女性が泣き崩れながら座っていた。

「タカシ……!?! どうして!?! どうして貴方は私を遺して死んでしまったの!?!」

この女性、河村千尋は、婚約者である天田タカシを事故で喪い、悲しみにくれていた。タカシは結婚前に親孝行をすることと、両親を乗せて日帰りで温泉旅行へ行ってきたのだが、彼らに乗せた車は、飲酒運転をしていた車と正面衝突してしまった。

その事故により、タカシたち3人だけではなく、飲酒運転の運転手も即死という最悪な事故として、ニュースにもなっていた。

「タカシの命を奪った男は絶対に許さない! だけど、あいつもこの世にはいない!」

千尋にとつて最も憎むべき相手は、もうこの世にはいないため、この怒りと憎しみをどこへぶつけていいのかわからなかった。

「……タカシのいない世界なんて生きてる価値はないわ! こんな世界……! 無くなってしまうばいばいのよ!」

婚約者を喪ったことで、千尋は歪んだ感情を露わにってしまった。

その気持ちは、千尋の大きな陰我であった。

タカシを喪つて泣き崩れていたその時だった。

——ほお、お前。この世が無くなることを望むのか

「!?だ、誰!？」

どこからか突然声が聞こえてきたため、千尋はキョロキョロと周囲を警戒していた。

——そんなに怯えることはない。我もこんな世界は消えてしまえばいいと思つてい
る。我と共にこの目障りな人間共を滅ぼそうではないか!

「それは私も望んでるけど……そんなこと出来るの?」

——ああ、出来るさ。お前が悪魔と契約する程の覚悟があるならな

「ええ………タカシのいない世界なんて意味はないもの。悪魔だろうがなんだろうが構
わないわ!」

千尋は、どうやら人間を捨てても構わないとさえ思っているようだった。

——よく言った!ならば、我を受け入れよ!!

謎の声が聞こえると、ウエディングドレスからドス黒いオーラが放たれ、そこから素
体ホラーが飛び出してきた。

「!？」

この世のものとは思えない怪物に千尋は驚くが、声をあげる程ではなかった。素体ホラーは体を帯状にすると、千尋の中に入っていた。

「……………」

千尋は一切悲鳴をあげることではなく、ホラーに憑依されることを受け入れていた。

こうして千尋はホラーに憑依されてしまい、怪しげな笑みを浮かべると、どこかへと移動していった。

その数日後、千尋は桜ヶ丘某所にある教会にいた。

この地で結婚式を挙げるために下見に訪れたカップルを不快そうな表情で見ているのである。

「……………何よ。幸せそうにしちゃって……。私よりも幸せになる奴らなんて、この世には必要のないのよ！」

千尋は、幸せそうに教会を下見しているカップルに憎悪の感情を抱いていた。

そして、千尋はそのカップルが教会から出てくるのを待ち伏せていた。

「ねえ……………ちよつといいかしらっ？」

カップルが教会から出てくると、千尋はすかさず声をかけていた。

「な……何ですか？」

いきなり声をかけられたことに、カップルの男は、怪訝そうな表情をしていた。

「何であなたたちは……そんなに幸せそうなの？ 私はこんなにも不幸なのに……」

「はあ!? あなた、いきなり何言ってるんですか!？」

千尋の不可解な言葉に、カップルの女は苛立ちを募らせていた。

「ねえ、あなたたち……。消えてくれないかしら？ あまりに幸せそうで目障りだから」

「はあ!? あんたに言われなくなつて出て行くわよ! ほら、行きましょう」

千尋の言葉にさらに不快感を露わにした女は男と共にこの場から立ち去ろうとするのだが、すかさず千尋は男の手を掴んだ。

「なっ……!? 何するんだ!」

「違うのよ。私が言ってるのは、〃この世〃から消えてつてことよ」

千尋は怪しげな表情で笑みを浮かべると、舌舐めずりをして獲物を吟味していた。

「い、いい加減にしなさいよ! じゃないと警察を呼ぶわよ!」

「ウフフ……。好きになさい。私にとつては〃餌〃が増えるだけだから……」

「え、餌……?」

「あなた、何言つて……」

千尋の不可解な言葉に男も女も動揺していたのだが、千尋はそんな男のもう片方の手

も掴んだ。

そして……。

「ウフフ……。いただきます……」

千尋は怪しげな笑みを浮かべて、カツ！と目を見開くと、男の体を粒子状にして、男を自分の体に取り込んだ。

「ぐわああああああああ!!」

千尋に取り込まれてしまった男は、一切抵抗することが出来ず、千尋に捕食されてしまった。

「い……。嫌ああああああ!!」

女の目の前で男が千尋に捕食されてしまい、女は顔が真っ青になった状態で悲鳴をあげていた。

そして、身の危険を感じた女はどうか逃げ出そうとするのだが、すかさず千尋は女を捕まえていた。

「い、嫌！放して！」

「ウフフ……。暴れたって大声出したって無駄よ。あなたは私の餌になるのだから」

「お、お願い……。助けて……！」

女は目に涙を溜めて助けを求めるが、千尋はそんな女を冷酷な笑みを浮かべながら睨

みつけていた。

「うるさいわね……！さっさといただくとしますか……」

「ちよつと……やめ……！」

千尋は女の言葉には一切耳を傾けず、女の体を粒子状にして、女を捕食し始めた。

「きやあああああああああああああ!!」

先ほどの男同様、女は一切抵抗することは出来ず、千尋に捕食されてしまった。

「……さて、まだまだ目障りな奴らはいるのでしようから、そいつらを喰いに行きましょう

かね……」

千尋は、自分が許せないと思った相手を捕食するために、移動を開始し、夜の闇に消

えていった。

千尋がホラーに憑依されたのは、統夜の最後の登校日と同じ日であり、千尋は統夜や

戒人を避け、人を喰らっていた。

その時、千尋はウエディングドレスを着用しており、夜な夜なウエディングドレスを

来た幽霊が現れるといった都市伝説として、世間で騒がれるようになったのであった。

※※※

そして統夜が梓に頼まれ、花嫁花婿の写真を撮ることになった当日、統夜たちは撮影が行われる「Photo studio NEVER」を訪れた。

統夜たちだけではなく、幸太とヒカリ。そして、戒人、アキト、レオも一緒であった。そして、店の中に入った統夜たちは、そこで専属のカメラマンである京水と会い、男性陣と女性陣に分かれて衣装の着替えを始めた。

女性陣の方にはアシスタントとして憂、純、さわ子の3人が来ており、衣装への着替えや撮影の手伝いを行うことになっていた。

一方男性陣の方には京水がついていたのだが、統夜は京水に何かされないか身の危険を感じていた。

そんな中、女性陣側の控え室では、アシスタントの3人だけではなく、唯たちやヒカリも梓の衣装を着替える手伝いをしていた。

その甲斐あつてか着替えにはそこまで時間はかからなかった。

そして、ヒカリが梓のメイクを担当した。

ヒカリはメイクアップアーティスト助手のバイトをしていたことがあるようで、

メイクを担当するにはうってつけであった。

少々時間はかかったものの、的確にメイクをこなし、梓は完璧な花嫁の姿になっていた。

それを見た唯たちは……。

「ほわあ……。あずにゃん、綺麗……」

「うん！とつても素敵だわ！」

「ああ！可愛いぞ、梓！」

「こりゃ、統夜が見たら惚れ直すんじゃないか？」

「うん！梓ちゃん、可愛い♪」

「似合ってるよ、梓」

「エへへ……。そうかな？」

唯たちは梓の花嫁姿をべた褒めしており、梓はそのことに恥ずかしがりながらも嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「ええ、メイクもバツチリだし、可愛いわよ、梓ちゃん」

「ぐぬぬ……。教え子の方が先にウエディングドレスを着るなんて……！」

ヒカリも梓のことを褒めていたのだが、さわ子だけは少しだけ悔しそうに梓のことを見ていた。

「アハハ……。さわちゃん、今日は梓が主役なんだから、嫉妬はダメだって！」
そんなさわ子に苦笑いをしながら、律はさわ子をなだめていた。

「ねえねえ！早くやーくんにも見せてあげようよ！」

「そうだな。統夜も準備は出来てるだろうし」

「梓ちゃん、歩きにくいと思うから、こつちを持つね♪」

「それじゃあ私はこつちを！」

憂と純は長いスカートの端を持ち、梓が歩きやすいようサポートをしていた。

「あずにゃん！私があずにゃんの手を引くね♪」

「は、はい……。お願いします……」

唯が梓の手を引くために手を差し伸べると、梓は恐る恐ると唯の手を取った。

こうして花嫁の衣装に着替えた梓は、自分の晴れ姿を統夜に見せるために移動を開始したのであった。

そしてその頃、統夜もまた花婿の衣装に着替えていた。

京水が興奮して着替えを手伝うと言ってきたのだが、それをどうにかかわして、自分

で花婿の衣装に着替えたのであった。

「おお、似合うじゃないですか、統夜君」

「確かに。思ったよりサマになつてゐるぞ、統夜」

「うんうん。馬子にも衣装つていうしな」

『……おい、アキト。それだと褒めてないぞ』

「あれ？ そうだったか？」

アキトは間違つた言葉の使い方をしており、それを聞いた統夜は苦笑いをしていた。

「うんうん。さらにイケメンになつたわね。素晴らしいわ！ 素晴らしいわ！」

「アハハ……。ども……」

統夜の花婿姿を見て京水は再び興奮しており、そんな京水を見ていた統夜の顔は引きつっていた。

「それじゃあ、先にスタジオで待つてみましょうか。梓ちゃんはきつと時間がかかるだろうから」

「はい。そうですね」

こうして花婿の衣装の着替えを済ませた統夜は、先にスタジオ入りをして、梓が到着するのを待つていた。

待つことおよそ15分……。

「花嫁さん入られまーす!!」

このフォトスタジオのスタッフが、梓が来たことを告げると、スタジオの扉を開けた。そして、花嫁姿の梓が出て来たのだが……。

「……………」

「へえ……………」

「だいぶ見違えたじゃないか」

「うんうん。可愛いぜ、梓ちゃん」

「ああ、似合ってるよ」

レオ、戒人、アキト、幸太の4人は花嫁姿の梓に称賛の声をあげていた。

そして、統夜はいつもと違う梓の姿に見惚れているのか、赤面したまま何も語らなかつた。

「エへへ……………。ありがとうございます……………」

統夜を除く男性陣にも褒められ、梓は満更でもなさそうだった。

「……………統夜先輩……………。どうですか?」

そして梓は、頬を赤らめながら、自分のこの格好が似合ってるかどうか統夜に確認を取っていた。

「あつ、ああ。似合ってるよ、梓」

「本当ですか?」

「本当だよ。それに、悪いな、梓。俺、今までにないくらいドキドキしてるみたいだ。だから気の利いたことが言えなくてな／＼／＼」

統夜は男として少しは気の利いたことを言おうとしたのだが、梓の花嫁姿に照れてしまい、気の利いたことが言えなくなっていた。

「そつ、そうでしたか……。でも、ドキドキしてくれてるなら……嬉しいです／＼／＼」
梓も今になって恥ずかしくなったのか、さらに頬を赤らめ、モジモジしながら恥ずかしがっていた。

「……な、なんだ。この甘ったるい空気は……」

「た、確かにそうだな……」

現在統夜と梓が放っているオーラに、アキトと戒人は引き気味になっていた。

「まあまあ。いいじゃないですか。2人とも幸せそうですし」

「ああ。俺もそう思うよ」

「うんうん。あずにやんもやーくんもすつごく可愛い♪」

「本当ね♪」

「ま、こうあからさまだと、ちよつとこつちまで恥ずかしくなるけどな」

「た、確かにそうかも……」

「ぐぬぬ……！やっぱり幸せそうじゃない！」

「アハハ……。さわ子さん、落ち着いて」

レオを始めとして、唯たちも口々に今思っていることを言っていたが、さわ子だけは統夜と梓に嫉妬の感情を抱いており、ヒカリが苦笑いをしていた。

「さあ、さつそくだけど撮影に入るわよ！2人とも位置についてちょうだい」

「あつ、はい！」

「わ、わかりました」

花嫁と花婿が揃ったことなので、統夜と梓は撮影場所へと移動し、これから行われる撮影の準備が行われた。

アシスタントである憂、純、さわ子の3人も、自分たちの出来る範囲で撮影のお手伝いを行っていた。

5分ほど撮影準備が行われると、これから撮影が行われることになった。

「それじゃあ、撮影するわよ！梓ちゃんと彼氏くんは腕を組んでちょうだい！」

「は、はい……」

どうやら最初は腕を組ませた状態で撮影がしたいようであり、統夜と梓はその指示に従って腕を組んでいた。

「うんうん♪いい感じだね♪」

「そうね♪本当に新婚さんみたい♪」

「……………」

唯と紬の言葉を聞いて恥ずかしくなったのか、統夜と梓は顔を真っ赤にしていた。

「さあ、恥ずかしがってる場合じゃないわよ！」

これから撮影を始めるため、恥ずかしがっているのは撮影にならないため、京水が注意していた。

そのことによつてハッと我に返つた統夜と梓は、撮影に集中することにした。

「うんうん。準備は出来たわね。それじゃあ撮影を始めるわよ」

「はっ、はい！」

「よろしくお願いしますー！」

撮影が始まるとのことであり、先ほどまでは緊張と恥ずかしさで頬を赤らめていた二人だったが、自然とリラックスしており、幸せそうな笑みを浮かべていた。

幸せそうな二人を見て、唯たちは満足そうに笑みを浮かべていた。

「それじゃあ、撮影するわよ!!」

こうして、京水は統夜と梓をモデルに、花嫁花婿の撮影を始めていったのであった。

その頃……。

「……何よ、あの2人。私より幸せそうにして……。気に入らないわね……」

ウエディングドレスを身に纏っている千尋は、遠くから統夜と梓の撮影の様子を見ていた。

そして、幸せそうな表情で撮影を行っている統夜たちが気に入らなかったのであった。

「……あいつらも喰らってやる……！目障りな奴は消し去るまでよ！」

そのため、千尋は統夜と梓を次の獲物に決めたのであった。

しかし、統夜が魔戒騎士であることを、千尋は知る由もなかった。

《……む？》

(トルバ、どうした?)

《さつき店の入り口あたりから妙な邪気を感じたんじゃ》

(妙な邪気?)

《うむ。ホラーかもしれないのお》

(……ちよつと様子を見てくるか……)

唯たちだけではなく、レオとアキトも撮影に釘付けになっていたため、戒人はこっそりとスタジオを抜け出し、怪しい人物がいなか確認をすることにした。

トルバが妙な気配を感知した場所だけではなく、店の周辺も探ってみたのだが、特に怪しいものはいなかった。

「……トルバ。特に怪しいものはなさそうだな」

『おかしいのお……。さつきは妙な気配を感知したんじやがのお』

「まあ、ホラーがいることは間違いなさそうだな。この撮影が終わったら番犬所で確認してみるさ」

『うむ。それが良さそうじやの』

「とりあえず戻るか。あまり長いこといなかかったら統夜も心配するだろうしな」

『うむ。それが良いじやろう』

こうして、戒人はホラーらしき妙な気配の足取りを掴めないまま、スタジオに戻ることにした。

「……あれ？戒人、どこへ行ってたんだ？」

未だに撮影が行われる中、戒人が急にいなくなつたことをアキトが訪ねていた。

「ああ。トルバが妙な気配を感知したらしいから周囲を見てきたんだ」

「妙な気配？ホラーですかね？」

「それはわからんがな」

《そういえば、確かに妙な気配を感じたかもしれないのお》

レオの魔導輪であるエルヴァも妙な気配を感知していたのだが、エルヴァも撮影をジツと見ていたため、スルーしていたのだった。

「とりあえず、統夜に心配をかける訳にもいかないし、このことは統夜には黙っておこうぜ」

「そうですね。それがいいと思います」

「ああ」

こうして、アキト、レオ、戒人の3人はホラーが現れたかもしれないことを統夜には黙っておくことにした。

せつかくのイベントなのに、統夜に無駄な心配をかけさせたくないからである。

そんな中……。

(……あれ？戒人たち、集まって何を話してるんだ？まさか、ホラーが近くに居るのか!?)

統夜は撮影を行いながら集まって話をしている戒人たちのことが気になっていた。

《いや、ただの世間話だろう。心配することはないと思うぜ》

(そうか? ならいいんだけど……)

実はイルバも妙な気配を探知していたのだが、統夜に妙な心配をかけさせないために黙っていた。

戒人たちもいたため、何かあった時は対応してくれると思つたからである。

統夜が戒人たちのことを気にしていると……。

「ほら、彼氏くん! ボケつとしてるんじゃないわよ! 集中集中!」

「!は、はい!」

ボケつとしてることを京水に注意されると、ハッと我に返り、撮影に集中していた。

写真は1枚だけではなく、何枚も撮影していた。

様々なバリエーションを撮影したいという京水の思いからである。

統夜が戒人たちのことを気にしてボケつとしていたのはちようど撮影終盤だったため、京水に注意されたのであった。

「さあ! 最後の写真を撮るわよ!」

どうやら、次の撮影が最後の撮影になるようであった。

「あの、京水さん。次はどのような写真を撮るのですか?」

「最後はね……。2人、キスをしてちようだい!!」

「!!?」

京水から言われたまさかの指示に、統夜と梓は驚きを隠せず、顔を真っ赤にしていた。

「あ、あの……。さすがにそれは恥ずかしいんですけど……」

「何を言ってるのよ！花嫁と花婿のキス。これはとても大事なシチュエーションなのよ！」

「そ、それはそうかもしれませんが……」

「……梓、こうなったらやれることはやってやろうぜ！」

「ふえつ!?!と、統夜先輩!?!」

統夜がまさか乗り気だとは思っていなかったのか、梓は驚きを隠せなかった。

「俺も恥ずかしいけどさ、せっかくこんな格好で写真を撮るんだからさ」

「統夜先輩……」

統夜も恥ずかしいんだということを知り、梓は覚悟を決めて、写真を撮ることにしたのであった。

「さて、梓ちゃんも覚悟を決めたわね。それじゃあ、こっちの準備は出来てるから、自分たちのタイミングでキスをしてちょうだい！」

「は、はい！」

統夜と梓は互いに向かい合い、ジッと見つめ合っていた。

そんな2人を見て、唯たちもドキドキしていたのであった。

「それじゃあ梓、行くぞ」

「は、はい……」

統夜と梓はゆつくりではあるが、互いに顔を近づけていった。

このゆつくりさが、唯たちをさらにドキドキさせたのであった。

そして2人の顔がさらに近付くと、2人の唇と唇が触れ合い、キスをしたのであった。その瞬間、京水は目をギラギラと輝かせ、カメラでその様子を何枚も撮影していた。

「……はい！OKよ！」

京水の合図を聞いて、統夜と梓はゆつくりと唇を離し、体も離れていった。

「……／＼／＼／＼」

統夜と梓は今になって恥ずかしくなったのか、互いに顔を真っ赤にして、モジモジとしていた。

「これで撮影は終了よ！2人のおかげでかなりいいものが撮れたわ！本当にありがとね！」

「いつ、いえ。こちらとしても、良い思い出が出来たので、感謝しています」

統夜はみんなを代表して、京水にお礼を言っていた。

「さて、今日はこのスタジオは貸切にしたから、みんなも好きな衣装で写真を撮っていい

わよ！」

京水はモデルを引き受けてくれたお礼に、このスタジオを貸切にして、好きな衣装を着て写真を撮ることを了承していた。

「本当ですか!? それじゃあ、私たちもあれを着ましようよ！ 幸太！」

「アハハ……。わかったよ……」

ヒカリは花嫁衣装を着たかったようであり、非常に興奮していた。

幸太はそんなヒカリを苦笑いしながら見ていたが、一緒に写真を撮ることを了承していた。

「ドレスなら他にも種類があるから、色々見てみるといいわよ！」

京水は今日のために複数の衣装を用意していたため、ヒカリの身の丈に合ったドレスもあることが予想された。

「やったあ♪ それじゃ、行ってくるわね！」

ヒカリは嬉しそうに、女性陣の控え室へと向かっていった。

「わっ……私も着たい!!」

「そうねえ。せっかくだから、私も着てみたいわ！」

「ねえねえ、やーくん！ 私たちもドレスを着たいからさ、花婿さんをやつてよ！」

「マジか!? まだこれを着てなきやいけないのか？」

「そうですね！それに、統夜先輩は私の彼氏なんですから、流石にそれは……」

梓は自分の彼氏が他の人とウエディング写真を撮るのはどうかと思っていたのだが、唯たちもまた統夜と思いい出を作りたいだろうと考え、否定的な言葉をつぐんだのであった。

「わ、わかりました。特別ですよ？」

「やったあ♪さすがあずにゃん♪」

「梓、いいの？」

「はい。先輩たちだって一つでも思いい出を作りたいでしょうし、今日だけならいいかなと思いいまして」

「そっか……わかったよ」

統夜は梓の心中を察したため、それ以上は何も言わなかった。

こうして、女性陣は衣装に着替えるために控え室へと移動し、スタジオには京水と撮影スタッフ。そして、幸太を除く男性陣が残されていた。

「なあ、俺たちはどうする？」

「僕は見ただけでもいいですけどね」

「俺もだ。別に他の衣装を着て写真を撮ることに興味はないしな」

レオと戒人の2人は、他の衣装を着て写真を撮ることには興味ないようであった。

「うーん……。とりあえず俺は衣装だけでも見てくるかな」

どうやらアキトは写真撮影よりも衣装に興味があるようであり、衣装を見るために男性陣の控え室へと移動していた。

その場に残された統夜たちは、他愛のない話をしながら時間をつぶしていた。しばらく話をしてしていると……。

「……おう、戻ったぜ！」

「ああ、おかえり。アキ……ト？」

「……な、何ですか？アキト。その格好は」

どうやらアキトは衣装を見ただけではなく、衣装を着たようなのだが、その姿にレオは驚いていた。

「へへっ、これってサムライの衣装だろ？俺、こういうの1度着てみたいって思ってたんだよ♪」

アキトが今着ているのは侍の衣装であり、この衣装をアキトが見つけた時、迷うことなく着用していた。

「ほう、これがサムライってやつか。俺も初めて見るな」

「僕も見たことはありませんが、話なら聞いたことがあります」

以前とある侍に憑依したカゲミツというホラーが零と戦ったのだが、その時の話をレ

才は零から聞いていたため、侍の存在は聞いたことがあった。

それは統夜も同様であり、ウンウンと頷いていた。

「まあ♪なかなかイカしてるじゃない！素晴らしいわ！素晴らしいわ！」

「へへっ、そうだろそうだろ？」

京水はアキトの侍姿を見て、興奮しており、アキトは何故かドヤ顔をしていた。

「ざざっ、他のみんなが来る前に撮影を済ませちゃいましょう♪」

「よし来た！よろしく頼むぜ！」

こうしてアキトはノリノリで写真撮影を行うことになった。

アキトと同時に幸太も来ていたのだが、幸太は統夜同様花婿の格好をしていた。

統夜たちは女性陣の着替えを待つ間、アキトの撮影を眺めていた。

京水もアキトもノリノリであり、色んなポーズをとって撮影は行われていた。

撮影はしばらく続き、ちょうどアキトの撮影が終わったその時だった。

「お待たせえ♪」

唯の声が聞こえてくると、女性陣がスタジオに戻ってきた。

どうやら衣装の着替えが終わったようであった。

「おう、みんな。待ってた……ぜ……」

統夜は唯たちの姿を見て、頬を赤らめていた。

その訳とは……。

「エへへ……。やーくん、似合うかなあ？」

ヒカリや梓だけではなく、唯と漣がウエディングドレスを着ており、いつもと違う2人の姿に、統夜は照れていたのであつた。

京水は多めにウエディングドレスを用意していたのだが、軽音部のメンバー全員が着るほどウエディングドレスのストックはなく、着たがつていた漣と、唯の2人がウエディングドレスを着ることになった。

「あ、ああ……。見違えたよ……」

「本当？！良かったあ♪」

「な、なあ、統夜。私も……似合ってるか？」

漣は頬を赤らめて少し照れながら、このように統夜に聞いていた。

そんな漣の仕草は、統夜だけではなく、男性陣をドキッとさせるには十分だった。

「あ、ああ。漣も似合ってるぜ！」

「ほ、本当か？！良かった……」

統夜に似合っているとんでもない、漣は嬉しそうに笑みを浮かべながら安堵していた。漣は狙ってる訳ではないのだが、嬉しそうに安堵するその表情も男心をくすぐるもの

であり、主に統夜はドキドキしていたのであった。

「私も着たかったなあ……」

「ま、ドレスの数も限られてるし、仕方ないよな」

紬と律はドレスのストックが無くて着られなかったのだが、特に紬が残念そうにしていた。

「りっちゃんもやっぱり着てみたかったわよねえ？」

「あつ、あたしは別に！」

律も実はドレスを着てみたいと思っていたのだが、紬にそこを追求されると、顔を真っ赤にして否定していた。

「ウフフ♪りっちゃん、可愛い♪」

紬は律もドレスを着たがっていることを見抜いており、笑みを浮かべていた。

「う、うるせえ!!」

律は普段あまり見せることのない乙女な一面を見せていたのだが、律はそれを否定するかのよう顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

「と、とりあえず、私と幸太が先に写真を撮るからみんなは後でね」

「はい！」

ウエディングドレスを着たヒカりは、早く写真撮影をしたいのか、先に撮りたいと主

張し、唯がみんなを代表して返事をしていた。

こうして、ヒカリと幸太は先に写真撮影を行うことになり、統夜たちはその撮影を見届けていた。

ヒカリと幸太の撮影が終わると、続いては紬、唯の順番で、統夜とツーショットで撮影を行い、1人でも撮影を行った。

紬と唯の撮影が終わると、京水は今日の記念ということで、全員での集合写真を撮ってくれることになった。

衣装を着替えたメンバーが真ん中にたち、衣装を着替えていないメンバーはそれぞれ並んでいた。

アシスタントである憂、純、さわ子の3人も一緒に集合写真を撮るため、一緒に並んでいた。

「エへへ……。まさかこうやってみんなで集合写真を撮ることになるなんてね♪」

軽音部の中で集合写真は度々撮っているが、戒人たちやヒカリたちも一緒に写真を撮るのは初めてであった。

そのため、唯はいつもとは違う集合写真を撮れることを喜んでいた。

「そうだな。俺も嬉しいって思ってるよ」

統夜もまた、盟友である戒人やアキト。そして尊敬しているレオと共に写真が撮れる

というのは嬉しい限りであった。

「……そうですね♪」

梓は、統夜の嬉しそうな表情を見て、満足そうに笑みを浮かべていた。

「さて……。みんな！撮るわよ！」

全員が並んだことを確認した京水は、集合写真の撮影を行った。

何枚か撮影を行うと、集合写真の撮影は終了し、統夜たちは衣装からそれぞれ着てきた私服に着替えたところで撮影の仕事は終了した。

「梓ちゃん、本当にありがとうとね♪すごく助かったわ♪」

「あつ、いえ。私たちも良い思い出を作れたので、感謝しています」

全員の着替えが終わると、京水が店の入り口まで見送りに来てくれた。

「写真が出来たら送るわね」

「はい！楽しみにしています！」

「あの、私たちの写真はさっき話した住所に……」

「ええ。そこに送るわね」

ヒカリは京水に自分と幸太の写真を送ってもらうために住所を教えていた。

「はい！よろしくお願ひします！」

この写真撮影は一応仕事であるのだが、統夜たちは報酬はもらっていないかった。

その代わり、付き添いで来た唯たちの撮影を許可し、撮った写真を送るのを報酬とさせてもらったのである。

「それじゃあ、今日はありがとね。また何かあれば連絡するから、よろしくね！」
「アハハ……。その時はよろしくお願いします……」

続夜たちは京水に一礼すると、そのまま「Photo studio NEVER」を後にした。

「……ねえねえ、この後どうする?」

撮影は思った以上に時間がかかったため、外は既に暗くなっていた。

「せっかくだし、みんなで焼き肉でも行くか?」

「焼き肉……。賛成!!」

律は焼き肉が食べたかったのか、唯たちの意見を聞かずに幸太の提案を了承していた。

「おい、律!勝手に!」

「いいじゃない♪私もぜひ行きたいわ♪」

「うん、私も♪ね、憂」

「うん!たまには焼き肉もいいよね♪」

焼き肉に行くという案に、紬、唯、憂も了承していた。

「私もぜひ行きたいです！」

「そうね。このメンツで食事だなんてもうないかもしれないしね」

さらに、純ときわ子も焼き肉に参加する意思を伝えていた。

「……ま、まあ。みんな行くなら私も行こうかな……」

「そうですね……」

唯たちは行く気満々なため、澤と梓も参加の意思を伝えた。

後、参加するかどうかハッキリしていないのは、統夜たち魔戒組だった。

「統夜先輩たちはどうですか？」

「うーん、そうだなあ……」

統夜が参加するかどうかを考えていたその時だった。

『……!? 統夜! どうやら焼き肉はお預けのようだぜ!』

「!? ということは……」

『うむ! ホラーの気配じゃ! それもこちらに近付いておるぞ!』

『レオ! 油断するんじゃないよ!』

魔導輪たちがホラーの気配を感じ取っており、統夜、戒人、レオの3人は魔戒剣を取り出し、ホラーの襲撃に備えていた。

「……みんな! 俺たちの後ろへ!」

統夜、戒人、レオ、アキトが前に出て、唯たちは統夜たちの後ろへと移動していた。その時、ウエディングドレスを着た女性……千尋が統夜たちの前に現れた。

「イルバ……。こいつがホラーか」

『ああ。どうやらそうらしい』

『これだけ殺気がむき出しじゃと、魔導火を使うまでもないのお』

トルバの言う通り、千尋の殺気はかなりのものであり、魔導火を使わなくても、千尋がホラーであると探知することが出来た。

「……ねえ、そのあなた」

「……!?わ、私ですか?」

千尋は鋭い目付きで梓を睨みつけると、梓を指差していた。

「あなた……。何でそこまで幸せそうなの?正直目障りよ」

「へ?な、何でって……」

梓は千尋の言葉に困惑していたのだが……。

「……言いたいことはそれだけか」

統夜は魔戒剣を抜くと、千尋を睨みつけていた。

「……あなた……。魔戒騎士だったのね……。さらに目障りなんだけど……」

「フツ、目障りか……。俺もホラーであるお前が目障りだと思ってるよ」

「あなたたちはまとめて私の餌になってもらうわ」

千尋は怪しげな笑みを浮かべると、ホラー態になろうとしていた。

「……………くつ、ここでドンパチする訳にはいかないな……………」

統夜たちがいる場所は一応商店街の中であるため、ここで戦ってしまうと、騒ぎになるのは必至だった。

そこで統夜は……………。

「……………レオさん！アキト！」

「わかりました！行きますよ！アキト！」

「おう！わかったぜ！」

統夜の意思を汲み取ったレオとアキトは魔導筆を取り出して、とある術を放った。

すると、この場にいる統夜たちと千尋の姿が消えてしまった。

「Photo studio NEVER」の前から姿を消した統夜たちは、どこだかわからない不思議な空間に移動していた。

「……………!?ここ、ここは……………?」

「僕とアキトが作った特殊な結界です」

「ああ。ここだったら、どんだけ激しくドンパチしても問題ないからな」

統夜は街中で戦うと騒ぎになるのが必至だったため、アキトとレオに結界を作るよう

頼んだのであった。

「そういうことだ。ここなら思い切り戦えるからな」

統夜は魔戒剣を構えると、ホラー態へと変わろうとしている千尋を睨みつけた。

「……レオさん、アキト。唯たちを頼む」

「あのホラーは俺と統夜で狩る！」

戒人も魔戒剣を抜くと、それを構えながら千尋を睨みつけていた。

「ええ。任せてください！」

「みんなは俺と師匠が守る！だから、お前らは思い切り戦ってこい！」

レオとアキトは魔導筆を構えると、唯たちを守る体勢に入っていた。

すると、ホラー態になろうとしていた千尋が、完全なホラーの姿へと変貌した。

そのホラーは花嫁のような姿をしていたのだが、その上には巨大なブーケの怪物が姿を現していた。

『統夜！こいつはブーケリア。陰我にまみれた花嫁の成れの果てのホラーだ』

『このホラーは手強いからのお。戒人、油断するではないぞ！』

「ああ！」

統夜たちが対峙しているこのホラーはブーケリアと呼ばれるホラーであり、花嫁の陰我から生まれたホラーである。

このホラーは上級ホラーであるため、並の魔戒騎士では倒すことは困難な程の力を秘めている。

『……統夜！戒人！来るぞ！』

イルバが警告をすると、ブーケリアはツタのようなものを統夜と戒人目掛けて放った。

「……っ！」

「くっ！」

統夜と戒人は魔戒剣を振るい、迫り来るツタのようなものを斬り裂いていった。

そのツタのようなものは、統夜と戒人だけではなく、唯たちにも迫っていた。

「させませんよー！」

「ああー！」

レオは法術を放ってツタのようなものを消滅させ、アキトは魔戒銃を取り出すと、法術と魔戒銃を組み合わせてツタのようなものを消滅させていた。

アキトの魔戒銃はまだ完璧ではなかったが、統夜の持つて帰ったきたお土産のおかげでその性能は飛躍的に向上していた。

「……っ！俺も援護するー！」

幸太も拳銃を取り出すと、ツタのようなものを狙い撃っていた。

幸太の拳銃ではホラーにダメージを与えることは出来ないが、ツタのようなものを破壊するには十分だった。

「！幸太さん！助かります！」

「気にするな！俺だって刑事なんだ。守れるものはこの手で守ってみせる！」

「幸太……」

ヒカリは、刑事として人を守るために一生懸命な幸太に惹かれたため、そんな幸太に熱い視線を送っていた。

こうして、唯たちはレオ、アキト、幸太の3人によつて守られ、統夜と戒人はブーケリアとの戦いに専念することが出来た。

しかし、ブーケリアの放つツタのようなものはさらに勢いを増しており、統夜と戒人はブーケリアに接近出来ずにいた。

『おい、統夜！どうするんだ！このままじゃ奴に接近出来ないぜ！』

「大丈夫だ！隙を見つけて鎧を召還して奴に接近するさ！」

統夜はどうにか隙を見つけて、鎧を召還するつもりでいた。

「ああ！俺もそうするつもりだ！」

どうやら戒人も、隙を見つけて鎧を召還するつもりだった。

そうしているうちにツタのようなものが戒人に迫り、戒人は右に大きくジャンプをし

てツタのようなものをかわすと、その状態で魔戒剣を高く突き上げて円を描いた。

そして、戒人はその円の中に入っていくと、戒人は紫の輝きを放つガイアの鎧を身に纏った。

そして、魔戒剣から姿が変わった堅陣剣を振るってツタのようなものを斬り裂いていくと、どうにかブーケリアに接近しようとしていた。

そんな中、統夜もまた、ツタのようなものを斬り裂いて反撃の機会を伺っていた。

統夜は何度かツタのようなものを斬り裂くと、後方にジャンプして、ツタのようなものが迫る前に鎧を召還することにした。

「……陰我にまみれた花嫁。俺が解き放つ!!」

統夜はブーケリアに向かってこのように宣言すると、魔戒剣を高く突き上げて円を描いた。

そこから放たれる光に包まれた統夜であったが、ツタのようなものが統夜に迫っていた。

統夜が白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏った瞬間、ツタのようなものが統夜の両手と左足にからまった。

しかし……。

「うおおおおおおお!!」

統夜は獣のような咆哮をあげると、統夜を縛り付けていたツタのようなものを消滅させ、ブーケリアに向かっていった。

統夜は皇輝剣を振るいながらツタのようなものを斬り裂きながら、どうにかブーケリアに接近しようとしていた。

そんな中……。

「……取った!!」

どうにか戒人がブーケリアに接近し、堅陣剣を一閃しようとするのだが……。

「……!!?しまった!」

戒人の左足にツタのようなものがからまってしまい、ブーケリアはそのツタのようなものを振り下ろし、戒人を地面に叩きつけていた。

「ぐう……!!」

「!?戒人!」

「俺は大丈夫だ!だからホラーに集中しろ!」

地面に叩きつけられながらも、戒人は堅陣剣を振るってツタのようなものを斬り裂き、どうにか立ち上がろうとしていた。

統夜は戒人が心配だったが、戒人の思いを無駄にしないためにブーケリアに向かっていった。

ブーケリアの懐にどうにか接近した統夜は、トドメを刺すべく皇輝剣を一閃した。

しかし、ブーケリアは大きなブーケの口の部分から息のようなものを吐いた。

「ぐあああ!!」

その息のようなものに吹き飛ばされた統夜は、思い切り地面に叩きつけられた。

「統夜先輩!!」

統夜がホラーの攻撃を受けてしまい、心配していた梓が声をあげていた。

「……………くっ……………。っ!?!」

ブーケリアはゆっくりと立ち上がる統夜に追い討ちをかけるためにツタのようなものを統夜に集中して放っていた。

「うっ……………くっ……………」

統夜は皇輝剣でどうにか受け止めるが、このまま押し切られてしまっただけは体を貫かれる可能性があった。

しかし、攻撃を統夜に集中させたことは、ブーケリアにとって致命的なミスとなってしまう。

「……………戒人!!今だ!」

統夜に攻撃が集中したため、ツタのようなものの攻撃から解放された戒人が一気にブーケリアまで接近し、堅陣剣を大きく振り下ろした。

その一閃は、ブーケリアの巨体を真つ二つに斬り裂き、その一撃を受けたブーケリアは断末魔をあげながら消滅していった。

それによりツタのようなものも消滅し、統夜は絶体絶命の状況から救われた。

「……………はあ……………はあ……………はあ……………」

絶体絶命の状況から救われた統夜は、そのまま鎧を解除すると、その場で膝をついていた。

「統夜先輩……」

統夜が膝をついたのを見ていた梓は、いの一歩に統夜に駆け寄っていた。

戒人はその様子を見ながら鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を鞘に納めた。

「統夜先輩、大丈夫ですか？」

梓は統夜の体を支えると、統夜をゆっくりと立たせていた。

「ああ、なんとかな。あのホラー相当手強かったよ。俺一人じゃ危なかったかもしれないな」

『まあ、確かに奴は手強かったが、お前もまだまだだ。お前がもうちよつと慎重になっていればさつきの一撃で奴を倒せたはずだぜ』

「そうだな……………。俺は魔戒騎士としてはまだまだなんだ。もつともつと精進するさ」

統夜は前回のサブバックで準優勝した程の実力者なのだが、今でも自分ことを未熟と

思っており、常に精進を怠らなかつた。

「統夜先輩……」

梓はそんな統夜のことを心配そうに見つめていた。

「だけど、やーくんも戒人さんも無事でよかつたよお」

「そうだな。こつちも見ててヒヤヒヤしたけどな」

「それだけあのホラーが強かつたってことだよな」

「そうねえ。だけど、本当に良かったわ♪」

ホラーとの戦いを度々目撃していた唯たちは、統夜の戦いを心配そうに見ていたのだが、無事に終わって安堵していた。

「こ、これがホラーとの戦い……」

あまりホラーとの戦いを見てきていない純は、ブーケリアとの激しい戦いに圧倒されていた。

「……」

憂は統夜が無事で安堵はしていたものの、心配そうに統夜のことを見ていた。

「改めて、魔戒騎士っていうのは凄い仕事よね……」

さわ子も久しぶりに統夜たちの戦いを見ており、その迫力に圧倒されていた。

ブーケリアとの死闘を繰り広げた戒人は唯たちのもとへ歩み寄り、統夜はどうか魔

戒剣を鞘に納めると、梓に支えられながらゆっくりと唯たちのもとへ歩み寄っていた。

「さて、ホラーも倒したし、そろそろ結界を解かないとな」

「そうですね。……アキト！」

「了解だ！師匠！」

レオとアキトは魔導筆を用いてとある法術を放つと、2人の作った結界は消えていった。

そして、統夜たちはもといた場所へと戻ってきたのであった。

「……あ、戻ってきたー！」

「これで一安心だな」

統夜たちは先ほどまでいた「Photo studio NEVER」の入り口に戻ってきて、滞は安堵していた。

「さて……ホラーもいなくなった訳だし、気を取り直して焼き肉にでも行くか？」

「そうね。行きましよう♪」

ホラーも討滅されたということで、幸太は改めて焼き肉を提案すると、それにヒカリが乗っていた。

元々行こうという提案していた唯たちも行くことを伝えており、まだハッキリしていないのは、やはり魔戒組だった。

「ホラーも倒したし、俺も行くかな」

「僕もいきます！たまにはいいですしね」

「俺も俺も♪焼き肉焼き肉♪」

統夜、レオ、アキトの3人は行く気満々のようであった。

そして、戒人はというと……。

「俺はやめておくよ。番犬所への報告もあるしな」

戒人は、番犬所にホラーを討伐したことを報告するために、焼き肉屋へ行くのは断っていた。

「ええ？いいじゃねえか、別に。報告は後でもさ」

「む……。だけど……」

「そこはアキトに賛成だな。たまにはみんなでワイワイ食事つてのも悪くないと思うけどな」

「と、統夜まで……」

「ほら、戒人君。ぜひ行きましょう♪」

「……」

アキト、統夜、レオの3人からの説得を受けて、戒人は少し考えていた。

そして……。

「……わかった。ちょっとだけ参加させてもらおう」

戒人は渋々焼き肉に参加することを決めたのであった。

「よっしやあ！それじゃあさっそく行こうぜ！」

アキトは本当に焼き肉を食べたかったのか、凄くノリノリであった。

「アハハ……。店はこっちだぞ」

幸太が先導をして焼き肉屋へと向かうと、統夜たちは幸太について行った。

統夜たちが向かった焼き肉屋は、桜ヶ丘商店街にあり、桜ヶ丘の中では大手の焼き肉屋であった。

さらにこの店は幸太の行きつけということもあり、大人数で押しかけても融通が効くのであった。

こうして、統夜たちは焼き肉屋に到着すると、大人数での焼き肉を楽しんでいた。

そのため、この日は統夜たちにとってもかけがえのない思い出の1ページとなったのであった……。

……続く。

—— 次回予告 ——

『卒業が近付いてきたな。だからこそ、このように平穩に過ごしたいよな。次回、「学校」。ま、たまにはこんな1日もいいんじゃないのか?』

第116話 「学校」

統夜たちが卒業旅行でロンドンから帰ってきて、最後の登校日も過ぎていった。

それから間もなくして、梓の知り合いであるカメラマン泉京水の依頼で、花嫁花婿の衣装を撮影することになり、統夜は梓と共にその写真を撮ることになった。

唯たちも付き添いで来ており、撮影は終始盛り上がったのだが、その帰りにホラー、ブーケリアと遭遇してしまった。

統夜、戒人、アキト、レオの4人の連携によってブーケリアは討滅され、その後は幸太行きつけの焼き肉屋で、食事を楽しんでいた。

翌日以降、統夜は魔戒騎士としての使命を果たしながら、唯たちと共に梓に贈る曲の製作を行い、さらにはその曲の練習を行っていた。

そうしているうちに時はあつという間に過ぎて行き、卒業式を翌日に控えていた。

そんな卒業式前日であったが、統夜はいつものようにエレメントの浄化を行っていた。

「……はあっー！」

統夜は某所にあるオブジェから飛び出してきた邪気を、魔戒剣で斬り裂いた。

その一閃により邪気は消滅し、統夜は魔戒剣を青い鞘に納めた。

『統夜。卒業式前だというのに、精が出るな』

「まあな。卒業式前だからって家でジツとしてるのは性に合わないからな。だったら騎士として使命を果たそうと思つてな」

統夜が卒業旅行から帰つてきてからは、イレスは統夜に積極的に指令を出すことはしなかった。

イレスはこの卒業間近の時間を、魔戒騎士としてではなく、一人の高校生として過ごしてほしいという思いがあつたからである。

統夜は花嫁花婿写真の撮影時にブーケリアと出会つた以降はホラーと遭遇することはなかった。

実は2体ほどホラーがゲートから出現していたのだが、そのホラーは戒人、レオ、アキトの手によって討伐されたのであつた。

『それはそうと、統夜。梓に贈る曲の練習はもういいのか?』

「ああ。練習自体は問題ないよ。ただな……」

『ただ?』

「一部の歌詞がどうもしっくり来なくてな。なんかモヤモヤしてるんだよ」

梓に贈る曲については統夜たちの入念な話し合いの末、歌詞も完成したのだが、統夜

はその一部分だけ違和感を感じていた。

しかし、他に良案もなく、そのまま行くことにしたのだが、統夜は未だにその部分をどうするか悩んでいた。

『ま、悩んでいても仕方ないんじゃないのか？ 大事なのはその曲にお前たちの気持ちが込もっているかどうかだぜ』

「イルバ……」

統夜はイルバの言ったストレートな言葉に、心を打たれていた。

「……そうだな。悩んでたって始まらないもんなー！」

『そうだぜ、統夜。その調子だ。だから、さっさとエレメントの浄化を終わらせないと』

「わかってるって、次へ行くぜ、イルバ」

統夜が次のオブジェへと移動しようとしたその時、突如統夜の携帯が鳴り出した。

「……ん？ 電話か……」

統夜は足を止めて携帯を取り出すと、本当に電話のようであり、電話をかけてきたのは律だった。

「……もしもし、どうした、律？」

『あつ、もしもし統夜？ 今って何してる？』

「俺はエレメントの浄化を行ってるよ。ジツとしてるのは性に合わなくてな」
『やっぱりそうなんだな』

どうやら律は統夜がエレメントの浄化を行っていることを予想していた。

『なあ、あたしたち今学校にいるんだけどさ、統夜もこないか?』

「へ?今日は登校日でも何でもないだろ?何で学校に?」

律たちはどうやら今学校にいるようであり、そのことに統夜は驚いていた。

『だって明日は卒業式だろ?学校はあたしたちにとつても思い入れがあるし、今日1日は学校で過ごしたいと思ってるな』

「なるほどな。そういうことか」

律たちが何故学校を訪れたのかを知り、統夜は納得していた。

『だからさ、統夜も今から学校に来ないか?』

「そうだな……」

統夜は今からでも学校に行きたいという気持ちはあったが、どうするか考えていた。

「今からでも行きたいけどさ、魔戒騎士の仕事中途半端にする訳にもいかないからさ。昼頃に顔を出すよ」

統夜はキリの良いところまで仕事をして、およそ昼頃に律たちと合流することを伝えた。

『ええ!? 昼からかよお! ……まあ、仕方ないよな。だけど、なるべく早く来いよな!』
「はいはい。わかってるって」

統夜は苦笑いをしながらこう答えると、電話を切って、携帯をポケットにしまった。
「さてと……」

『統夜、結局学校に行くのか?』

「ああ。エレメントの浄化をある程度終わらせたならな」

『なるほどな。だったら早く終わらせないと』

「そういうことだ。行くぞ、イルバ」

『了解だ、統夜』

こうして、統夜はなるべく早くエレメントの浄化を終わらせるために、次に浄化する
オブジェへと移動を開始した。

統夜は出来る限り早く学校へと向かうために、手早くそして正確にオブジェから飛び
出してきた邪気を浄化していった。

そして、正午頃には自分の浄化すべきポイントはすべて浄化し、統夜はそのまま学校
へと向かった。

道中コンビニに立ち寄り、パンとコーヒー牛乳を購入してから学校へと向かった。

統夜が学校に着いた時は既に昼休みであり、後輩たちに「あつ! 統夜先輩だ!」と驚

かれながら音楽準備室へと向かっていた。

「……みんな、いるか」

統夜はこう言いながら音楽準備室に入るのだが、唯たちはいつもの席に座つてのんびりとしていた。

「あつ、統夜！ やつと来たな！」

「やーくん遅いよおー！」

「仕方ないだろ？ これでも急いで来たんだぞ」

唯はふうつと頬を膨らませながら昼になつてようやく顔を出した統夜に文句を言っていたが、そんな唯を統夜はなだめていた。

「まあまあ♪ それよりも統夜君、早く座つて。今、お茶を淹れるわ♪」

「ああ、頼むな、ムギ」

紬は立ち上がると、統夜の分の紅茶を淹れ始め、統夜は魔法衣を脱いで長椅子に置き、ギターケースを壁に立てかけてから自分の席に座つた。

「……あれ？ やーくん。お昼買つてきたんだね」

唯は統夜が机の上に置いたコンビニの袋にすぐ反応していた。

「ああ。購買は使えないと思つたからな。だからコンビニに寄つてパンを買つてきたんだよ」

「ふーん、そうなんだねえ……」

「はい、統夜君♪」

「おう、悪いな、ムギ」

統夜がコンビニに立ち寄ったことを唯に説明していると、紬は紅茶を統夜の前に置き、さらにチョコパンらしき切れ端も統夜の前に置いた。

「あれ？ムギ、このパンは？」

「ゴールデンチョコパンだよお♪さつきあずにゃんが私たちの代わりに買ってきてくれたんだあ♪」

「アハハ……。そうだったんだ……」

「そういえば、統夜ってゴールデンチョコパンって食べたことあったっけ？」

「一応な。イレズ様がここに留学生として来たことがあったろ？その時にイレズ様のために買ったんだけど、少しだけ分けてくれてな」

統夜はイレズが桜ヶ丘高校に潜り込んだ時に、半ば強引な手段でゴールデンチョコパンを入手し、それをイレズに渡した。

その時、イレズやクラスメイトたちと一緒に食事をしたのだが、その時イレズは頑張ってくれた統夜にお礼として少しだけゴールデンチョコパンを分けてくれたのだ。た。

それ故に統夜は一応ゴールデンチョコパンを食べたことがあるのである。

「まあ、統夜はほぼパンだったし、食べたことがあるのは当然と言えば当然か」

律は統夜がほぼ毎日購買のパンを食べていたことを思い出していた。

「ま、3年生の時に買うチャンスは何度もあったけど、そういう時は大概1番人気のカツサンドを狙ってたしな♪」

「アハハ……。そうなんだ……」

「ところで、これは俺が食べてもいいのか？」

「もちろんよ♪そのためにとっておいたんだもの」

「だって、私たちだけ食べてやーくんだけ当たらないっていうのが申し訳ないって思ってたね」

「悪いな、みんな。それじゃあ、こいつらと一緒にいただくよ」

統夜はコンビニで買ってきたパンと共に、ゴールデンチョコパンを食べ始め、唯たちは既に食べ終わっていたのか、その様子を眺めながら紅茶を飲んでいた。

※※※

統夜の食事が終わると、統夜も同じくティータイムに参加し、まったりと過ごしていた。

「……ねえねえ、何かやり残したことないかなあ？」

「やり残したことねえ……」

唯の唐突な問いかけに統夜はじつくりと考えていた。

そんな中……。

「わ、私……。トンちゃんに餌をあげたことがなくて……」

トンちゃんとは春からの長い付き合いであるが、滯は1度もトンちゃんに餌をあげたことがなかった。

主に唯か梓の仕事なのだが、統夜、紬、律の3人も時々ではあるが、トンちゃんに餌をあげたことがあった。

『だったら悔いの残らないよう、カメ公に餌をやったらどうだ？』

「う、うん。そうだな……」

こうして、滯は初めてトンちゃんに餌をあげることになった。

しかし……。

「むうう……。カメ公じゃなくて、ちゃんとトンちゃんって呼んであげなきゃダメだ

よお！イルイル！」

『おい、唯！だからお前さんは何度も何度も俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

唯たちが統夜の秘密を知り、イルバが部室で喋るようになってだいぶ経つのだが、イルバは未だにイルイルと呼ばれるのが許せないようで、今回もまたそう呼ぶのをやめるように言っていた。

「やれやれ……。イルバは相変わらずだよなあ」

「ウフフ♪そうね♪」

律と紬は、そんなイルバと唯のやり取りを見て、笑みを浮かべていた。

「なあ、イルバ。せっかくだし、お前もトンちゃんって呼んでやれよ！」

「あ！それ良いね！カメ公カメ公って呼ばれちゃトンちゃんがかわいそうだもん！」

『お断りだ。何で俺様があんなカメ公をトンちゃんって呼ばなきやいけないんだよ』

イルバはトンちゃんと呼ぶつもりはなかったのだが、ふとその言葉を口にしてしまい、その言葉に水槽の中を悠々と泳ぐトンちゃんが反応していた。

「あ！トンちゃん嬉しそうだよ！」

「トンちゃんもイルバのことを認識してるのかしらねえ」

「そうかもな。トンちゃんもそうだけど、イルバだつて軽音部の一員だしな」

トンちゃんが嬉しそうな反応をしているのを見た統夜は、穏やかな表情で笑みを浮か

べていた。

唯たちもそんなトンちゃんが可愛いと思ったのか、目をキラキラと輝かせていた。

そんな中、滯はトンちゃんの餌を取り出すと、恐る恐るではあるが、その餌を水槽の中に入れた。

「……あー！食べてる食べてる！」

「ああー！本当だな♪」

滯は自分があげた餌を美味しそうに食べるトンちゃんを見て、頬を赤らめながら嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「ねえねえ、次はどうする？」

滯がやり残したことをこなしたところで、唯が続けて何をしたいのかを聞いていた。

「……実は部費が余ってたな」

律はこう言つて部費の入った封筒を取り出した。

どうやら、余った部費の使い道に困っているようであった。

律は封筒から残ったお金を出したのだが、その金額は……。

「……たったの5円かよ!!」

『確かに、そんなもんしか残ってないならどうするか困るよな』

部費は5円しか残っておらず、そのことに統夜はツツコミをいれ、イルバは冷静に分

析していた。

「そうなんだよ。だからさ……」

律は何かを取り出すと、5円玉にとある細工をした。

その細工とは……。

「……リボンをつけてみました!」

「おお!おめでたい感じでいいわね♪」

律は5円玉にリボンをつけており、それを見た紬が感嘆の声をあげていた。

「……これ、さわちゃんにあげる?」

「やめておけ。そんなことをしたら後が怖いぞ」

唯はさらっととんでもないことを言っていたため、統夜が慌ててそれを制止していた。

「せっかくだし、とっておこうぜ」

『まあ、それが一番いいんじゃないのか?』

最終的にはこの5円玉は特に使わずとっておくということで落ち着いた。

「あつ、あのね。これ買ったけど、使ってなかったの。窓をピカピカにするクロス」

紬は軽音部のみんなでホームセンターに寄った時にこのクロスを買ったのだが、結局は使わずじまいだった。

試しにそれを取り出し、窓を拭いてみたのだが、窓は本当にピカピカになっており、それを見て、紬は感動していた。

「なあ、せつかくだから、部屋全部をピカピカにするのは良くないか？」

「おお、それはいいかもな。この部屋にはかなり世話になつてるからな」

紬が窓を拭いているのを見て、滯は掃除することを思いついたのだが、統夜はその案に賛同していた。

「そうだよ！ 私たちは今日、掃除をしに来たんだよ！」

『やれやれ……。調子のいい奴だな……。』

唯は滯の案に賛成なのか、このようなことを言っていたのだが、イルバは調子のいいことを言っている唯に呆れていた。

こうして、統夜たちは音楽準備室の掃除を開始した。

掃除道具を準備すると、床の雑巾がけを行ったり、窓の下や棚等、細かいところも徹底的に掃除をしていた。

この音楽準備室には全員の思い出が詰まっているため、掃除を行うことに誰一人愚痴も文句も言うことなく、確実に掃除を行っていた。

そんな中、唯は未だに部屋に置いてあるカエルの置物を掃除すると、笑みを浮かべていた。

そのことに統夜とイルバがツツコミを入れるという場面もあったが、あまり深く追求することはせず、そのまま掃除を行った。

そして、1時間ほど掃除を行った結果、音楽準備室は隅々まで綺麗になっていた。

「終わったあ!!」

「ああ、終わったな」

「うん♪部室も綺麗になってるしね♪」

統夜たちは、1時間ほどの大掃除を終えた達成感と、思い出深い部屋を掃除したという満足感を抱いていた。

そんな気持ちを嘸み締めていたその時だった。

——キーンコーンカーンコーン……。キーンコーンカーンコーン……。

放課後を告げるチャイムが鳴り響いていた。

このチャイムは、統夜たちにとって最後の放課後を告げるチャイムであったため、感慨深くこのチャイムを聞いていたのであった。

そして……。

「放課後だあ!!」

「よっしやあ! 梓が来たら演奏するぞ!!」

律は演奏する気満々だったからか、非常に興奮していた。

本来であれば演奏はしたかったのだが、1年生と2年生は授業をしているため、自重していたのであった。

律だけではなく、統夜も演奏する気満々だったのだが……。

「ねえ、その前にお茶しない?」

そんな中、紬が再びティータイムを提案していた。

「え? また?」

『おいおい。掃除前も散々お茶は飲んでただろ?』

「だって、最後の放課後だし……」

紬のティータイムという案に、澤は驚き、イルバは反対意見を出していたのだが、紬は最後の放課後だからこそ、自分たちらしいティータイムを提案したのであった。

「最後?」

そんな中、唯は「最後」という言葉に過剰に反応していた。

すると……。

「ね、ねえ！どうしよう！私たち、何かしなくてもいいのかなあ!？」

「唯、落ち着けて!」

「だって、最後の放課後でしょ!？」

唯は最後の放課後と聞き、今さらになって慌てていた。

「何かって、いったい何をしたいんだ?」

統夜は慌てている唯をなだめるように唯のしたいことを聞いていた。

「何か残すつてのはどうかな?和ちゃんの写真みたいに」

「和の写真?何の話だ?」

統夜は午前中はエレメントの浄化を行っていたため、唯の言葉の意味が理解できず、

首を傾げていた。

「統夜君が来る前に生徒会室に遊びに行っただけど、そこで和ちゃんの写真を見つけ

たのよ」

「毎年生徒会長のアルバムを作って、歴代の生徒会長の写真を残しておくみたいだぞ」

「なるほどな……。和みたいに何かを残すつてのがどういふことか納得だわ」

統夜は生徒会長に行つたという話を聞き、唯の言葉の意味を理解していた。

「残すつて言つてもな……。俺たちの曲を録音して残すくらいしかないんじゃないのか

?」

「それだよ！やーくん!!」

「うおっ!？」

統夜の提案を聞いて、唯が詰め寄ってきたため、統夜は驚いていた。

「私たちの曲を残すか……いいかもな!」

「ラジカセもテープもあるしな♪」

この音楽準備室には、ラジカセが置いてあり、未使用のテープもあったため、唐突な提案ではあったものの、対応は可能であった。

「うん！素敵ね！それじゃあ、梓ちゃんが来たたら始めましょう♪」

こうして、統夜たち放課後ティータイムの曲をテープに録音するという案が、満場一致で決まると、統夜たちはそれぞれの楽器の準備を始めた。

統夜、唯、漣の弦楽器組は、楽器のチューニングを行っていたのだが、そのチューニングが終わると同時に、梓が音楽準備室に入ってきた。

「あつ、あずにゃん！待ってたよお!」

「あれ？演奏するんですか?」

統夜たちが演奏準備をしていることに、梓は驚いていた。

梓は唯たちが来てたことは知っていたが、どうせお茶を飲みながらダラダラしていると思っていたからである。

さらに、統夜が来ていることは同級生だけではなく、1年生の子達も言っていたため、統夜がいても驚くことはなかった。

「ああ！そうだぞ」

「今までの曲、全部ね♪」

「え？全部……ですか？」

まさか、今までやった全曲をやるとは思っていなかったもので、梓は驚きを隠せなかった。

「録音するんだよ！あずにゃん！」

そう言っただけは、長椅子に置かれているラジカセを指差していた。

「え？これで……ですか？」

「まあ、こんなもんしかないし、とりあえずはこれでな」

この音楽準備室には録音に適した機材などないため、ラジカセを使った録音しか出来ないのだった。

「放課後ティータイムの記録っつーか、足跡っつーか……。そういうのを残しておきたくてな」

「……はい！わかりました！」

梓は自分たちの曲を残すということに賛同しているのか、嬉しそうにギターの準備を

していた。

そして、すぐにギターの準備は終わったのだが……。

「……とところで、曲順はどうするんですか？」

「曲順？」

梓の曲順という言葉に、唯は首を傾げていた。

しかし、しばらく時間が経つと、その意味を理解したようであり……。

「『あつ！』」

「アハハ……。そういえば考えてなかったな……」

『おいおい、そんな調子で大丈夫か？』

どうやら、統夜たちは曲順までは考えてなかったようで、慌てていたのだが、イルバはそんな統夜たちをジト目で見ていた。

こうして統夜たちは、楽器を置いていつもの席に座ると、これからやる曲の曲順を話し合うことになったのであった。

「……うーん……。最初はふわふわかなあ？」

「それ、最後がいいんじゃないかなあ？」

「いや、俺は最初で良いと思うんだけどな……」

統夜たちは最初にやる曲の時点で、何をするのか決めかねていた。

「あたしはカレーからの方がいいと思うけどな」

「私もそう思う。やっぱり1曲目はアップテンポな曲の方がいいと思うし」

律と漣は1曲目はアップテンポな曲調の「カレーのちライス」が良いと思っていた。

「いや。私たちの音楽性からすると……」

「おい、ただそれを言いたいだけじゃないのか？」

唯の口から音楽性という言葉が出てくると思っていなかった統夜は、ジト目で唯のこ
とを見ていた。

「なあ、梓は1曲目は何がいいと思う？」

「はい！1曲目はふわふわのインストにしてみましたらどうですか？」

「インストかあ。その発想はなかったな！」

梓はふわふわ時間のインストウルメンタルバージョンを提案したのだが、その発想は
思いつかなかった統夜は、素直に感心していた。

「ねえ、インストって何？」

唯はインストという言葉聞いたことがないのか、首を傾げていた。

「インストウルメンタル。歌なしで演奏だけするんだよ」

漣が、インストについて簡潔かつ分かりやすい説明をしていた。

「あつ！カラオケバージョンのこと？」

「厳密に言えば違うけど……。まあ、そんなところかな？」

カラオケとインストは似てるといえば似てるのだが、異なるものであるので、唯の例えに統夜は苦笑いをしていた。

「そういえば、アルバムとかでもあるもんない最初と最後にインストが入ってるの！」

「はい！」

「まあ、それはわかるけど、そこまで込んでもいいんじゃないか？」

滯はプロのバンドのアルバムの一例をあげて賛同していたが、律はそこまでのことはしなくていいと思っており、消極的な意見を出していた。

『それは俺様も賛成だぜ。スタジオとかならまだしも、テープで録音なら時間も限られてるしな』

「ああ、確かにそうだよな。良い案ではあるけど、そこがなあ……」

「そ、そうですよね……」

イルバの的確な指摘に統夜は納得しており、梓は自分の案がボツになって少しだけ残念そうにしていた。

「それにしても、曲順決めるのって意外と難しいんだねえ」

「確かに、そうかもしれないな」

統夜たちは、曲順を決める難しさというものを改めて認識していたのであった。

「あつ、お茶淹れるね♪」

紬は紅茶を飲んでリラックスした方がいいと考えたのか、席を立って紅茶を淹れる準備をしようとしていた。

しかし、その途中、長椅子に置かれたラジカセをジーつと見ていたのだが、何かいいアイデアを思いついたのか、ラジカセを手にして戻ってきた。

唯たちが梓と雑談をする中、紬はラジカセをテーブルの上に置くと、ラジカセの録音ボタンを押していた。

「……………」

紬の唐突な行動に、全員の視線が紬に集中していた。

「この時間も録音しておかない？」

どうやら紬は、この変哲もない会話こそ放課後ティータイムだと思い、会話も録音しようと考えたのであった。

「おおー！」

「つまり、放課後ティータイムっていうのはな、今を生きる高校生のロックスピリットを熱く、激しく表現するロックバンドつつうかさあ！」

「いいこと言おうとしてるだろお」

「だって、後に残るんだろ？これ……」

「つか、俺たちはそんな仰々しいバンドじゃないだろうが」

律はこの会話が残るといふことで良いことを言おうとしたのだが、それを漑に見透かされ、統夜にツツコミを入れられていた。

「では、部長のりつちゃん。あなたにとつて、放課後とは？」

唯は何故かインタビューのような口調で律に質問をしていた。

「そうだなあ……。人生の無駄遣い……。かな？」

律の答えがあながち的を得てるのか、統夜たちはクスクスと笑みを浮かべていた。

「確かにな」

「本当ですよね」

「それじゃあ、ちよつと聞いてみようよ！」

そう言つて唯は、ラジカセの停止ボタンを押して、録音を止めると、巻き戻しをして、再生ボタンを押した。

『そうだな……。人生の無駄遣い……。かな？』

『確かにな』

『本当ですよね』

律、漑、梓の声が再生されており、それが恥ずかしかったのか、3人は揃つて頬を赤らめていた。

「わ、私の声ってこんななのか？」

「や、やめましようよ！撮るのは曲だけにしましょう！」

「ええ？面白いじゃん！」

唯はまったく気にしていないのか、再び録音ボタンを押して、会話を録音しようとした。

すると……。

「やめてくださいー！」

梓はとても恥ずかしかったのか、慌てて停止ボタンを押していた。

「ふふん♪今のも撮れたかな♪」

「はっ!？」

どうやら先ほどの梓の声も録音されてるようであり、唯は巻き戻しをすると、ちゃんと撮れてるか確認をしていた。

『やめてくださいー!』

梓の声に、6人は揃ってビクツとしていた。

「い、怖い……」

梓は自分の怒鳴り声がここまで怖いとは思ってなかったのか、驚きを隠せなかった。

「そうだしよお♪」

「あずにゃん怒ると怖いんだよ♪」

「すいません、私、ずっとこんな感じで……」

梓は自分が怒ったら意外と怖いということを知り、申し訳なさそうにしていた。

「そうそう。俺なんかしょっちゅう梓に怒られてるしな♪これ以上に怖い思いしてるんだぜ♪」

『おいおい。統夜、それはお前さんの自業自得じゃないのか?』

「イルバの言う通りです!それに、統夜先輩はいつもいつも無茶ばっかするから悪いんじゃないですか!」

梓は先ほど申し訳ないと思ったばかりなのだが、恋人である統夜の前ではつついっ普通段のように怒ってしまっていた。

「あずにゃん怖あい♪」

「もお!唯先輩みたいなこと言わないでくださいよ!」

統夜は唯のような口調でおどけていたのだが、そんな統夜を梓は膨れっ面で睨みつけていた。

「それに!そうじゃなくて!早く曲順決めないとダメじゃないですか!」

今度は統夜だけではなく、唯たちにも梓の説教が飛び火していた。

「あずにゃん怖あい♪」

「あー！もう！唯先輩と律先輩まで！」

統夜だけではなく、唯と律もおどけていたため、梓はさらに膨れっ面になっていた。

「まあまあ♪それよりも早く曲順決めて演奏しましょう♪」

「そうだな。じゃないと時間がなくなっちゃうしな」

こうして統夜たちは再び話し合いに戻り、曲順を決めたのであった。

そして、決まった曲順は以下の通りとなった。

1. ふわふわ時間
2. カレーのちライス
3. 私の恋はホッチキス
4. ふでペンとボールペン
5. ぴゅあぴゅあはーと
6. いちごパフエが止まらない
7. Honey sweet tea time
8. ときめきシユガー
9. 冬の日

- 10. 五月雨20ラプ
- 11. Bright hope
- 12. S#0
- 13. Predetermination
- 14. ごはんはおかず
- 15. U&I

最後の方に統夜がボーカルの曲が集中しているのだが、テープの録音可能時間はA面B面合わせて80分なため、厳しそうであれば、カットすることにした。

こうして曲順が決まったところで、統夜たちはその曲順通りに演奏し、それを録音していった。

録音途中にさわ子が来たり、休憩を挟んだりしたため、録音が全て終わった時にはすでに夜になっていた。

ちなみに、統夜がボーカルを務める曲は一応全て出来たのだが、テープの時間の都合上で、一部をカットして、ギリギリ全曲収まったのであった。

「あうう……。やっと終わったねえ……」

「つーか、何やってんだろうな、あたしら……」

全ての録音を終えた統夜たちは長丁場の演奏に疲れたのか、机に突っ伏していた。

「だけど出来たよ♪ 私たちのアルバム♪」

唯はラジカセからカセットを取り出すと、それをジツと眺めていた。

「ま、アルバムにはお粗末だが、これはこれで味があつていいかもな」

「そうだな」

滯は穏やかな表情で頷いており、統夜たちは、唯の手にしているカセットをジツと眺めていた。

「唯、ちよつと貸して」

律は唯から、先ほど録音したカセットを受け取ると、油性ペンを取り出した。

すると、テープの何も書いていない部分に「放課後ティータイム」と書いていた。

「よし、書けたぞ」

「……聴いてみようよー」

「いいねえ！ 聞いてみようぜー」

「おいおい、明日は卒業式だろ？ そろそろ帰った方がいいんじゃないか？」

録音に使ったカセットはA B面合わせて80分録音出来るため、今これを聴くとすると、さらに帰りが遅くなるのが予想された。

「統夜君の言う通りよ。それに、もし聴くなら一回だけにしておきなさい」

さわ子もまた、帰りが遅くなるのを心配してこのようなことを言っていた。

そして、録音したものを聴こうとしたのだが……。

「あーっ!!卒業式用のタイツ買ってない!」

どうやら唯は卒業式用に新しくタイツを買う予定だったのだが、今まで忘れていたようであった。

「帰りに買えばいいじゃない」

「ま、今ならまだ間に合うだろうしな」

統夜は、先ほど録音したものを聴かずに帰れば、問題なくタイツを買えるだろうと判断していた。

「あっ!そういうえば部室が綺麗になってますね!」

「やっど気付いたのか」

梓はようやく部室が綺麗になったことに気がき、律は安堵していた。

「そうだよ、あずにゃん!私たち、掃除したんだから!」

「唯先輩。制服汚れてますよ?」

「あー!!明日は卒業式なのに!」

どうやら掃除の時に少しだけ唯の制服が汚れてしまったようで、それに気付いた唯は慌てていた。

すぐ取れる汚れではあるのだが、唯の慌てぶりに、統夜たちはそれを見て笑っていた。

こうして統夜たちは放課後ティータイムの曲をカセットに記録し、1つの「形」として残すことが出来た。

明日は卒業式であるため、録音したものを聴くことはなく、そのまま帰ることにした。唯は無事に明日使うタイツを購入することが出来、この日は解散となった。

明日はいよいよ卒業式である。

この日は統夜にとっても唯たちにとってもかけがえのない1日になるであろうことは容易に予想することが出来た。

統夜は家に帰ると、明日行われる卒業式に期待を膨らませて、眠りについていた。

……続く。

—— 次回予告 ——

『いよいよ統夜も卒業か。今日は悔いのないように過ごしていきたいよな。次回、「卒業」。統夜の高校生最後の1日が今始まる！』

第117話 「卒業」

卒業式前日、統夜たちは登校日ではなかったのだが、桜ヶ丘高校を訪れていた。卒業式前日は学校で過ごしたいという思いがあったからである。

統夜はエレメントの浄化があったため昼からの合流であったが、同じように過ごしていた。

その中で、統夜たちはやり残したことを探し、それをこなすことで悔いなく卒業出来るよう努めていた。

梓が合流した後、統夜たちは放課後ティータイムの曲全部をカセットテープに録音する作業を行っていた。

何か形として残したいという思いがあったからである。

その録音が終わって、統夜たちは解散した。

そして翌日。この日は卒業式である。

そんな中、統夜は朝早くに番犬所を訪れていた。

イレズに卒業の挨拶をするためである。

「あら、統夜。こんな時間に珍しいですね。どうしたのですか？」

「はい。今日は卒業式ですので、イレズ様に卒業の挨拶をしようと思ひまして」

「そうですか……。統夜ももう卒業なんですね……。何かあつという間でしたね」

統夜を桜ヶ丘高校に入学するよう推薦したイレズは、感慨深い思いがあるのかしみじみと呟いていた。

「俺はイレズ様のおかげで守りし者の何たるかがわかり、大切な思い出もたくさん出来ました。だから、イレズ様には本当に感謝しております」

統夜は心からイレズに感謝しており、それはいくら言葉を尽くしても足りないくらいであつた。

そのため、統夜は深々と頭を下げることで、その感謝を表現していた。

「統夜。頭を上げて下さい。私もあなたに感謝しているのですから」

「え？イレズ様が俺に……。ですか？」

イレズからの思いがけない言葉に驚いた統夜は頭を上げたのであつた。

「はい。私はあなたに感謝しているんですよ。あなたのおかげで憧れの高校生活について色々を知ることが出来たのですから」

イレズは人界の生活……。特に高校生活に憧れていた。

そのため、統夜を桜ヶ丘高校に入学するよう薦め、さらに自分も留学生として桜ヶ丘高校に潜り込み、高校生活を楽しむきっかけも得る事が出来たのであつた。

「統夜。だからこそ、今日の卒業式は胸を張って臨みなさい。この学校に行つて良かったと嘯み締めながら……」

「……はい！」

こう答える統夜の顔は、とても凛々しく、清々しいものだった。

そんな統夜の顔を見ていたイレスは、統夜が心身共に成長したことを実感していた。様々な出来事や困難が、統夜を魔戒騎士だけではなく、1人の男としても大きく成長させたのである。

そんな一人前の男の顔をした統夜を見ながら、イレスは優しい表情で笑みを浮かべていた。

「……イレス様。これから唯たちと待ち合わせをしていますので、この辺で失礼します」
「あら、珍しいですね。唯たちと登校ですか？」

「はい。今日が最後ですから、俺も一緒にみんなで登校したいと言われました」

「そうですか。だったら早く行くといいですよ。みんなにもよろしくお伝え下さい」
「わかりました。それでは失礼します」

統夜はイレスに一礼すると、番犬所を後にして、そのまま唯たちとの待ち合わせ場所へと向かった。

その待ち合わせ場所は番犬所からさほど遠くはなく、すぐに到着した。

統夜が到着した時には、律、漣、紬の3人が揃っていた。

「……あつ、統夜君来た！」

「統夜あ！遅えぞお！」

紬が統夜の姿を見て表情が明るくなり、律はぶうつと頬を膨らませていた。

「おいおい。時間通りに来ただろうが。それに、番犬所に寄つてたからな」

「あれ？番犬所に何か用事があつたのか？」

「まあな。イレス様に卒業の挨拶をしに行つたんだよ」

「なるほどな」

漣たちは今日、統夜はエレメントの浄化をしないと聞いていたため、何故統夜か番犬所に行つたのか疑問だった。

しかし、その理由を聞いて、漣は納得していた。

「……それにしても、唯はやっぱりまだ来てないんだな」

今はまだ唯の姿はないのだが、そのことに統夜は驚いてはいなかった。

『やれやれ……。今日は卒業式だというのに何をやってるんだか……。』

もうすぐ待ち合わせの時間が過ぎようとしていたため、イルバはこの日も遅刻しそうな唯に呆れていた。

その時だった。

「あれ？メールだ……」

律の携帯が反応したようなので、律が携帯を取り出すと、どうやらメールが来てるようだった。

「あ、唯からだ」

さらに、そのメールの送り主は唯だった。

その内容とは……。

「……は？鮭に痛てて？」

唯から来たメールは、「鮭に痛てて」という、訳のわからない文章であった。

「……鮭に痛てて……。唯のやつ、訳わからないことを……」

統夜はよくわからないメールを送った唯に呆れていた。

『……おい。これって先に行つてつてことじゃないのか？それならそのヘンテコな文章も納得だぜ』

「おお！なるほどな」

「確かに、そうかもしれないわね」

イルバが唯から来たメールの意味を推測していたのだが、そのことに統夜と紬は賛同していた。

「どうする？それじゃあ先に行つてるか？」

「いや、もうちよつとだけ待つてようぜ」

こうして統夜たちは後5分程待つて、唯がそれでも姿を現さなければ先に行くことにした。

そして5分後、唯は姿を見せなかったなので、先に行こうとしたのだが……。

「……ねえ、みんな！あれ、唯ちゃんじゃない？」

「「え？」」

どうやら紬は唯を見つけたようであり、統夜、漣、律の3人は、紬が指差す方向を見ていた。

すると、家からここまで全力疾走してきたのか、息を切らしている唯の姿を発見した。

唯は落ち着いてから統夜たちの姿を発見したようで……。

「みんなあーごめえん!!」

唯は半ベソの状態で統夜たちに駆け寄っていた。

「早く起きて、ギター太触つてたらこんなことにい！」

どうやら唯は、ギターの練習に夢中になったことで、遅れてしまったようだった。

「アハハ……。お前らしい理由だな。だけど、急がないと遅刻だからな。みんな、急ぐぞ！」

統夜は遅刻を免れるために走り出し、律たちもそれを追いかけるように走っていつ

た。

大慌てで統夜たちは桜ヶ丘高校へ向かうのが、たまたま近くでエレメントの浄化を行っていた戒人が、その様子を見守っていた。

「やれやれ……。随分と慌ただしいな……」

戒人は今日が卒業式だということを知っているため、そんな日に、慌ただしく学校へ向かっている統夜たちを見て苦笑いをしていた。

「まあ、あいつらしいと言えばいいのか……。卒業式、悔いのないように過ごせよ」
戒人は穏やかな表情で笑みを浮かべると、そのまま続けて浄化を行うオブリジェへと移動を開始したのであった。

※※※

統夜たちが大慌てで桜ヶ丘高校へ向かっている頃、統夜たち3年2組の教室には、統夜たちを除く全員が集まっていた。

そんな中、さわ子が教室に入ってくると、そのまま教壇へと移動していた。

「おはよう。みんな揃ってるかしら」

さわ子は出席の確認を取るのだが……。

「揃ってませーん！」

「秋山さんと琴吹さんと田井中さんと平沢さんと、あと月影君が来てません！」

「え？まったく……あの子らは……」

この時統夜たちは玄関に来ていたのだが、この時点では遅刻するかしらないかの瀬戸際であり、さわ子は呆れ果てていた。

その頃、梓は憂や純と共に講堂へと向かっていた。

その手には、卒業生の胸につける花が握られていた。

「とうとう卒業式だねえ」

「うん」

「はあ……。先輩たちともお別れだよお……」

「……………」

梓は純の口に使っていた「お別れ」という言葉に過剰に反応していた。

「…………う、うん…………」

このように相槌を打つ梓は少しばかり浮かない表情をしていた。

しばらく歩いてみると、続夜たちが大慌てで階段を上がり、自分たちの教室へ向かって行く様を見かけた。

「おお！さすが軽音部だね！ギリギリで生きてる感じ！」

「うん…………そうだね…………」

梓は階段の方を見つめながらぼおつとして歩いていたのだが、よそ見をしていたからか、目の前に壁があることに気付かず、そのまま壁に激突してしまった。

「あでっ!!」

「な、何?！」

梓がいきなり変な声を出していたため、純と憂は驚いていた。

「いったあ…………。ぶつけたあ…………」

梓は額を強打してしまったため、両手で額を抑えていた

思わぬアクシデントが発生してしまい、梓たち3人は講堂に向かう前に保健室へ向かうことになった。

そこで梓は、額に絆創膏を貼ってもらったのであった。

「たいしたことなくて良かったね、梓ちゃん」

「うん……。だけどこれ、けっこう目立つよね？」

「前髪で隠れるから大丈夫なんじゃない？」

「そうかなあ……」

梓は額に貼られた絆創膏が気になっていたのだが、純がそんな梓にフォローを入れている。

「だけど、こんな日に怪我するなんて……」

梓は卒業生前に怪我をしてしまったことにしよんぼりとしていた。

「卒業式、無事に終わるといいよねえ」

純は卒業式の最中に何かが起こるのではないかと予想していたのだが、そんな純の言葉聞いて、梓の顔は真っ青になっていた。

梓の手当てでも終わったので、梓たちはそのまま講堂へと向かっていった。

その頃、統夜たちはどうにか教室に到着したのだが、集合予定時間ギリギリに到着し、何とか遅刻は免れていた。

しかし……。

「……すいませんでした！」「……」

自分たちだけ遅かったのは事実なため、統夜たちは謝罪をしていた。
「まったく……。何やってるのよ、あなたたちは……」

さわ子はそんな統夜たちに怒りはしなかったのだが、呆れ果てていた。

「アハハ……。本当に申し訳ございません……」

統夜は苦笑いしながら、5人を代表して、再び謝っていた。

すると……。

「……あれ？ひ、平沢さん！」

「へ？」

「それ、穴が開いてるわよ！」

さわ子は唯の足元に違和感を感じて見ていたのだが、すぐにタイツに穴が開いていることを見抜いていた。

「そ、そうだ！朝来る時に転んじやって」

唯は学校へ来る道中に1度転んでしまい、それが穴が開いてしまった原因だった。

唯は新しいタイツに穴が開いてしまい、シヨックを受けていた。

「どうしよう……」

卒業式に穴の開いたタイツで出る訳にはいかず、さわ子はどうするべきかわからず途方に暮れていた。

すると……。

「大丈夫です！ 憂から替えのタイツを預かってますから！」

タイツに穴が開いてしまったことを聞いていた和は、立ち上がると、学生鞆から替えのタイツを用意していた。

《う、憂のやつ、そうなると予想するとかエスパーかよ!?》

(た、確かにそうだよな……)

イルバと統夜は、タイツに穴が開くという事態を予想していた憂に驚きを隠せなかった。

こうして唯と和はタイツを替えるために、教室を後にした。

さわ子がそんな唯と和が出ていったドアの方に気を取られていると……。

「……ねえねえ、あとりっちゃんたちだけだよ？ 先生の寄せ書き書いてないの」

クラスメイトの1人が1枚の色紙を律に手渡していた。

「ああ、ありがとう」

律は色紙を受け取ると、さわ子の隙をついて、寄せ書きを書き始め、統夜、滯、紬もそれに続いて書いていた。

あと書いてないのは唯だけが、後で合流した時に書かせるつもりだった。

こうして、統夜たちも講堂へ移動する時間となったため、講堂へと向かって行った。

※※※

講堂の前には、統夜たち卒業生と在校生が集まっていた。

「ここで何が行われるかと言うと……。」

「それでは、在校生は卒業生に花をつけて下さい！」

先生の指示により、在校生たちは自分の手にしている花を卒業生の制服の胸ポケットあたりにつけ始めていた。

そのため、「おめでとうございまーす！」と言った声があちこちから聞こえてきた。しばらくその作業が行われていると、唯と和も合流し、在校生に花をつけてもらっていた。

そして、統夜は在校生の男子生徒に花をつけてもらっていた。

この学校の男子生徒は少ないのだが、出来るだけ男子は男子の花をつけるように先生たちが計らっていた。

「月影先輩、おめでとうございます」

「ああ、ありがとうございます」

統夜は穏やかな表情で笑みを浮かべながら、花をつけてくれた男子生徒にお礼を言っていた。

花をつけてもらった統夜は、そのまま律たちと合流し、他愛のない話をしていた。

その頃、梓は在校生として、卒業生の先輩に花をつけていた。

「おめでとうございます」

「ありがとうございます」

梓は花をつけ終えたあと、少し離れたところで楽しそうに談笑している統夜たちの姿を見つけた。

そして、憂いを帯びた表情でその様子を見つめていた。

自分だけ在校生であるため、あの輪の中に入れないことに寂しい気持ちになっているからである。

その時、突如強い風が吹くと、梓の前髪が上がってしまい、絆創膏が丸見えになってしまった。

梓はそれを慌てて両手で抑えていた。

そして、卒業生全員が花をつけてもらったため、全員が講堂の中へと入っていった。統夜たちもそれに続いて入ろうとするのだが……。

「あつ、そうだ、唯。これ書いて。さわちゃんへのサプライズプレゼント。みんなの寄せ書き」

律は隠し持っていた色紙を取り出すと、それを唯に渡していた。

「おいおい。持ってきたのかよ」

「エへへ……」

色紙を持ってきたことに統夜が呆れ、律が照れ笑いをしていたその時だった。

「田井中さんたち！早く中に入りなさい！」

「「「は、はーい!!」」」

統夜たちはこう返事をして、唯は慌てて色紙を後ろに隠していた。

「……ん？何してるの？」

「な、なんでもないよ！」

統夜たちはさわ子に色紙を見せないようさわ子の方を見ながら講堂へと向かっていった。

すると……。

「……あつ、月影君！」

突如さわ子に呼ばれ、統夜はビクンと肩をすくめていた。

「は、はい！なんでしょうか？」

「その指輪……。式の時は外しなさいね」

他の先生たちも見ている手前、イルバとは言えなかつたさわ子は、このように注意をしていた。

「は、はい！わかりました！」

統夜は慌ててイルバを外すと、制服のポケットの中にしまった。

（イルバ。卒業式の間だけ勘弁な）

《やれやれ……。仕方ないな……》

ポケットの中は居心地が良くないのだが、イルバは渋々ポケットの中にいることを了承していた。

こうして統夜たちはさわ子から逃げるように講堂の中へと入っていった。

「これ……。式の間どうしよう？」

「あつ、団扇にするのはどう？」

「おいおい、それじゃあつさりバレるだろ……」

紬は冗談でこの提案をしたのだが、そんな紬を統夜はジト目で見ていた。

「さわちゃんに預かってもらおうか」

「ダメだろ」

「つか、それじゃサプライズの意味がない」

唯の言葉は本気か冗談かわからなかったが、滯と統夜がツツコミを入れていた。

「あ、そうだ！こうやって持っておくよ！」

唯はお腹の部分に色紙を隠し、式の間はそうやって隠し通すつもりだった。

「まあ、それしかないよなあ」

「魔法衣があればそんな中に入れられるけど、教室に置いてきたからな……」

魔法衣の裏地になってしまうのが確実な手段だったが、羽織っていたら確実に注意されると
思い、教室に置いてきたのであった。

「ごめんよ」

この色紙を持ってきてしまった律は、申し訳なさそうにしていた。

「大丈夫だよ！それよりもさあ、なんか講堂がいつもと違うよ！」

唯の指摘通り、講堂はいつもの感じではなく、完全に卒業式仕様となっていた。

「卒業式……なんだねえ……」

唯はいつもと違う講堂を見て、自分は卒業するんだと改めて認識していた。

こうして統夜たちも自分の席に座り、卒業生や在校生だけではなく、卒業生の保護者

も席についていた。

そして、卒業生が始まる時間となった。

『それでは、第85回桜ヶ丘高等学校卒業式を執り行います』

この卒業式の司会を務める先生が開式の宣言をしていた。

『学校長式辞。起立』

司会の先生の合図で全員が立つのだが、唯は隠してある色紙を気にしているため、両手でお腹を押さえながらゆっくりと立っていた。

そして、座る時も同様にお腹を押さえていた。

律、紬、滯、統夜は唯のことを心配していたため、校長の話がまったく耳に入ってこなかった。

《やれやれ……。色紙なんぞ持つてくるから無駄な心配をするんだろうが》

（まあ、そう言うなよ、イルバ。どうか式の間だけはやり過ぎさないと……。だけど、気になって集中は出来ないけどな）

《まったく……》

統夜だけではなく、律、紬、滯も式に集中出来てないようであり、イルバはそんな統夜たちに呆れていた。

そんな中……。

(……ん？みんな、唯ちゃんのことを気にしてる……。一体何があつたの?)

唯の席周辺の人たちが唯のことを気にしている素振りを見せていたため、さわ子はそれを気にして唯のことを凝視していた。

さわ子が唯のことを気にしているうちに、校長の話が終わっていた。

『一同、起立』

司会の先生の言葉で全校生徒は立つのだが、唯は再びお腹を手で抑えて立っており、さわ子はその瞬間を見逃さなかった。

(も、もしかして、お腹が痛いとか？いや、さっき何かを隠してた。何を……?)

お腹を手で抑えているところだけを見ると腹痛なのかと思ってしまうのだが、さわ子は、統夜たちがコソコソしていたことを見逃さなかった。

何を隠しているのかさわ子は考えていたのだが、すぐに何かを推測し、ハツとしていた。

(ま、まさか……！お菓子……？ギター……？もしかしてトンちゃん!)

さわ子はこれだけのことを考えていたのだが、どれも違うだろうと小さく首を振っていた。

だが、唯が何かを隠しているのは間違いないと判断し、それが何か気になっており、唯のことを凝視していた。

そんな中、統夜と滯は、唯のことを凝視しているさわ子を発見してハツとしていた。

統夜はクラス唯一の男子であるため出席番号は1番であり、滯は女子の出席番号1番であるため、隣なのであった。

「……な、なあ、統夜」

「そうだな。さわ子先生、唯のことを気にしてるな」

「こ、これはまずくないか？」

滯と統夜は小声で話をしており、さわ子が唯のことを気にしていることに焦りを見せていた。

『卒業生、起立』

卒業証書授与が行われるため、3年生は全員起立していた。

「……ねえ、唯に伝えてくれない？さわ子先生が心配してるって」

「唯にね？わかった」

滯は隣に座っている子に伝言ゲームのような形で唯への言葉を伝えてもらい、滯の伝言は紬へと渡り、律へと渡り、そして唯へと伝わっていったのだが……。

「……唯ちゃん。滯ちゃんから伝言。さわ子先生が失敗してるって」

「ほえ？失敗？」

どこでこうなったのかはわからないのだが、心配という言葉が失敗という言葉に変

わってしまい、このように唯へと伝わってしまった。

これはまさに伝言ゲームの失敗例なのだが、唯は藩からの伝言を聞いてハツとしていた。

(さ、さわちゃん！何を失敗したの？それも、何で私に？み、みおちゃん……何を伝えたいんだろう……)

藩からの伝言の意図が理解出来ず、唯は困惑していた。

着席と指示が出たため座り、唯が困惑しながらしどろもどろしていると……。

『卒業生答辞』

「はー！」

和が卒業生を代表して答辞を読み上げるため、返事をするとその場で立ち上がった。た。

そして、ステージが上がると、和は答辞を読み始めていった。

さわ子は未だに唯のことを気にしていたが、和の答辞が始まると、洩々ステージの方を見ていた。

こうして和は最後まで凜とした表情で答辞を読み上げ、さらに式は進んでいった。

そして、どうにか卒業式は終了し、唯はさわ子にバレることなく、色紙を隠し通すことに成功した。

「みんな！守り抜いたよ！」

「良かったわあ♪」

「式の間、気になって仕方なかったよ」

「俺も……。全然式に集中出来なかったよ」

どうにかさわ子にバレることはなかったのは良かったのだが、漣や統夜はハラハラしていたため、式に集中することが出来なかった。

「私も気になって仕方なかったよお。みおちゃん、さわちゃんの失敗って何？」

「え!?私は、さわ子先生が心配してるって……」

「そうなの？」

「私のところまでは心配だったわよ」

紬のところまではどうやらしっかりと伝わっていたのだが、紬がこの話をした途端、何故か律はしどろもどろとしていた。

「ま、まあいいじゃん！」

「……間違えたのはお前か」

漣は、律がわざと間違えたと思抜いて、ジト目で律を睨んでいた。

「それで、唯は書いたのかな？色紙は」

「まだだよお」

「早く書きまちようね」

律は何故か赤ちゃん言葉で唯に早く寄せ書きを描くよう促していた。

「唯ちゃん、これ使つて♪」

「ありがとう♪」

紬は持つていたペンを唯に渡すと、唯は早々に寄せ書きを書いていた。

こうして唯が書いたことで寄せ書きは完成したのだが……。

「……あなたたち、1度教室に戻つて。卒業証書を渡すから」

さわ子が背後から声をかけてきたため、唯は慌てて色紙を隠していた。

「は、はーい!」

「それはそうと唯ちゃん。式の最中何をしてたの?」

「べ、別に?」

「嘘。気になつて卒業式に集中出来なかつたじゃないの」

さわ子もまた、何かを隠してた唯が気になつていたため、卒業式に集中出来なかつた。

「守つてました!」

「何を?」

「それは後でわかるつて♪」

「今言いなさい。今!」

「教室に行きましよう♪さわ子先生♪」

「そうそう。早く行こうぜ！」

「あつ、ちよつとお！」

さわ子は唯の守つてたという発言を追求しようとしていたが、紬や統夜に上手く言いくるめられ、共に教室へと向かうことになった。

※※※

こうして統夜たちはさわ子と共に教室へと戻ってきた。

卒業式が終わり、続いて行われるのは教室にて全員分の卒業証書の配布が行われていた。

統夜は受け取った卒業証書をジツと眺めていた。

《……こいつを受け取ったとなると、お前さんもようやく卒業だな、統夜》

(そうだな。今になってようやく実感してきたよ。卒業するんだなってな)

卒業証書を受け取ったことで、統夜は自分がこの学校を卒業するということを実感していた。

「みんな、卒業証書に名前の間違ひはないわね？各自確認したら、大事にしまっておいてね」

さわ子がこのような指示を出す、統夜たちはそれぞれ卒業証書を専用に入れ物である筒の中へとしまっていた。

「……それでは、皆さんの高校生としての生活は、以上をもって終了となります。えつと……。私にとっては初めて受け持ったクラスでしたが、みんな元気でこの日を迎えることが出来て良かったです」

（……ああ、そうだな。この日までどうにか生き延びることが出来たし、本当に良かったよ）

魔戒騎士である統夜は、ホラーとの戦いで負傷することもあったのだが、どうにかこの日を迎えることが出来て、統夜は穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

「卒業してもみんな……。元気でね」

さわ子の送った言葉は簡潔ではあるが、気持ちが届もっていた。

そして、穏やかな表情で教え子たちの顔をジッと眺めていた。

「じゃあ……。解散」

挨拶も終えて、卒業式の日程はこれで完全に終わったと思われたのだが……。

「先生！あの、私たちから、先生に感謝を込めて、渡したいものがあります」

「え？」

統夜のクラスメイトで黒い髪 of 長髪で眼鏡をかけている高橋風子がそう言って立ち上がると、思いがけない言葉にさわ子は驚いていた。

「えつと……今持つてるの誰だっけ？」

「はい！私だよ！」

さわ子へ贈る色紙は唯が持っているため、唯は大きく手を上げていた。

「じゃあ、唯ちゃん。贈呈お願いします」

唯はさわ子のいる教壇へと移動すると、持っていた色紙をさわ子に手渡した。

「山中先生！お世話になりました！」

「もしかして……式の間持ってたのは……」

「これです！」

「……ありがとう」

さわ子はここでようやく唯が隠し持っていたのが自分の受け取った色紙だとわかり、驚きながらもお礼を言っていた。

「……大切にするね！」

さわ子のこの言葉を聞くと、歓声のような嬉々とした声が聞こえてきた。

「私……私こそ、本当にありがとう！初めての担任がこのクラスで良かった！」

さわ子にとってこのクラスは理想のクラスであり、そのことを今日改めて実感していたのであった。

「卒業しても遊びに来てね」

さわ子は統夜たちの顔をジツと眺めると、大きく息を吸った。

そして……。

「お前らが来るのを待ってるぜ!!」

何故かDEATH DEVIL時代のキャサリンを彷彿とさせるように叫んでいた。

唐突なさわ子の豹変ぶりに統夜たちはリアクションに困っており、「よっ、さわちゃん……」としか言うことが出来なかった。

こうして、卒業式の全日程は終了したのであった。

卒業式の全日程終了後、統夜たちはクラスメイトたちと記念写真の撮影を行っていた。

「ありがとうね！」

「おう、こちらこそありがとう！」

写真を撮るのは和が担当しており、統夜たち軽音部と、何人が一緒に写真を撮って

いた。

すると……。

「あ、あの……。私も軽音部と一緒に……。いいい？」

このように統夜たちに話しかけてきたのは、クラスメイトであり、ポニーテールに眼鏡をかけており、クラスの中でも大人しい少女だった宮本アキヨだった。

「もちろん！」

「はい！真ん中真ん中！」

「あ、ありがとう……。月影君は違うけど、他のみんなは同じ大学に行くんでしょ？これからも音楽続けてね」

アキヨは他のクラスメイト同様、軽音部の音楽のファンであり、これからもバンドを続けて欲しいと願っていた。

「みんなの演奏は凄く……。面白かったです！」

（お、面白かった!?)

（格好いいとか上手いとかじゃなくて!?)

（アハハ……。これは予想外だわ……）

アキヨは軽音部の音楽にまさかの評価を下しており、唯と滯は顔を真っ青にしており、統夜は苦笑いをしていた。

こうしてアキヨとも写真撮影を行い、ここでクラスメイトたちとの撮影は落ち着いたのであった。

撮影を終えた統夜たちはそのまま音楽準備室に向かおうとするのだが、さわ子が写真撮影をせがまれて一緒に写真を撮っている姿を見かけていた。

「……さわちゃん、人気者だね……」

「後で部室に来てくれるかなあ？」

「お茶しに来るよ」

統夜たちにとっては今日が音楽準備室で行われる最後のティータイムであるため、さわ子も顔を出すだろうと予想することが出来た。

「私、生徒会室に寄っていくわ」

統夜たちは音楽準備室に向かうのだが、和はどうやら生徒会室に顔を出すようであった。

「うん！」

「じゃあな、和！」

「じゃあねえ♪」

「またな！」

「それじゃあな！」

統夜たちは和に別れを告げて、音楽準備室に向かおうとしたのだが……。

「……和ちゃん！今日、帰れたら、一緒に帰ろう!!」

唯は幼馴染である和とも、一緒の時間を過ごしたいと考えていたのか、このように提案していた。

「……うん。わかったわ」

「それじゃあ、電話するね!」

こうして、和と別れた統夜たちは音楽準備室へと向かっていった。

卒業式は終わったのだが、統夜たちの放課後は始まったばかりであった……。

……続く。

次回予告

『卒業式はどうか無事に終わったな。だが、俺たちにはまだやることがあるんだぜ!』

次回、「天使」。これこそが、梓に贈る歌だぜ！』

第118話 「天使」

この日は卒業式であり、その卒業式も無事に終えることが出来た。

さわ子へ贈る寄せ書きが書かれた色紙を律が持つてきてしまい、それを唯が式の間守っていたことから、それをさわ子が気にするというアクシデントはあったものの、どうにかごまかし切ることに成功した。

教室に戻り、卒業証書を受け取り、さわ子にサプライズで寄せ書きを贈り、高校生活最後のホームルームは終わりを告げた。

その後はクラスメイトたちと写真撮影を行っていた統夜たちであったが、それが終わると音楽準備室に向かつていった。

そして、統夜たちは音楽準備室の前に到着したのだが、真っ直ぐ音楽準備室に立ち寄ることはせず、扉が開いていた屋上へとフラツと入っていった。

しかし、唯だけは和を引き止めて話をしていたため少し遅れて部室に続く階段を上がっていた。

統夜たちの姿がなかったため、唯はキョロキョロと周囲を見回していたのだが……。

「……唯！開いてたぞ！」

屋上の入り口にいた律は、唯のことを呼んでいた。

律に導かれた唯は屋上に入ると、ギターなどの荷物を入り口近くの壁に置いていた。すると……。

「うわあああああああああああ！」

唯は何故か叫びながら屋上を走り始めていた。

「うわあああああああああああ！」

「うわあああああああああああ！」

「わあああああああああああ！」

律、紬、滯の順番で唯のように叫んで屋上を走っていた。

「やれやれ……」

統夜はその様子を苦笑いしながら見守っていたのだが、統夜は叫ばずに同じように屋上を走っていた。

屋上の端っこまで走った統夜たちは息を切らせながら肩を組んで、円陣を組んでいた。

……統夜だけは息を切らしてはいないのだが……。

「……ねえ、りっちゃん。上手く演奏出来るかな？私、今までで一番緊張しているよお」

この後、統夜たちは梓に贈る曲を梓のために演奏することになっていた。

そのため、その演奏が上手くいくかどうかどうか、唯は不安になっていた。

「私も……。凄く手が冷たいのお！」

普段は手が暖かい絅であったが、梓に贈る曲を演奏する前に緊張してしまったのか、手が冷たくなっていった。

唯たちは1度円陣を解除して、絅の手を触り、本当かどうか確認していた。

「……本当だ」

澪は絅の手を触るのだが、本当に冷たく、緊張感が伝わっていた。

「緊張……するよな！」

「やばあい!!」

どうやら律も緊張しているようであり、再び円陣を組むと、ギュツと抱きしめるかのように力を入れていた。

「やっぱりやめる?」

「ダメだ！」

「梓ちゃん、喜ぶかしら?」

「喜ぶに決まってる!!」

律は力強く言っているのだが、自らを奮い立たせ、自らに言い聞かせているようであった。

「良かった。みんなドキドキしてたんだねえ♪」

「当たり前だ！」

「だけど……統夜は緊張してなさそうだな……」

唯たちが緊張する中、統夜はいつも通りであり、そのことが澁は気になっていた。

「俺だつて緊張してるさ。だけど、俺は梓が喜んでくれるつて信じているからな」

統夜も内心はドキドキしていたのだが、それを表に出してはいなかった。

何故なら、梓がこの演奏を聴いて嫌がるような娘ではないと確信していたからである。

『統夜の言う通りだぜ。お前らにとつても大事な後輩だろ？ だったらその大事な後輩を信じたらどうなんだ？』

「イルバ……」

「イルイル……」

『唯。お前つてやつは……。ま、まあ！ 今だけは許してやろう』

イルバは再び唯が変なあだ名で呼ぶことを追求したかったのだが、唯たちを元気付けるためにあえて追求はしなかった。

統夜たちがお互いに緊張していたその時だった。

一陣の風が吹くと、1羽の鳥が上空を飛ばたき、飛行機雲に重なっていた。

統夜たちは円陣を解除すると、その鳥をジツクリと眺めていた。

そして、同じ頃、梓もまた同じ景色を見ていたことを、統夜たちは知る由もなかった。飛行機雲に重なった鳥が飛び去るのを眺めていた統夜たちは、そのままその場に座り込んでいた。

「……ねえ、私が初めてりっちゃんたちの演奏を聴いたのは、「翼をください」だったよねえ？」

「そうだな。改めて振り返ってみれば本当にメチャクチャな演奏だったけど……」

統夜は苦笑いしながら当時のことを振り返っていた。

軽音部は律と滯から始まり、紬が入部してきた。

そして、統夜は偶然音楽準備室の近くでイルバと話しているところを律に目撃され、入部希望者と勘違いされたところから半ば強引に軽音部に入ることになったのである。

そして、唯が入部希望として来たのだが、唯は軽音を文字通りの軽い音楽と勘違いをしており、ギターをやるつもりはなかった。

しかし、その時初めて統夜たちの演奏する「翼をください」を聴き、楽しげに演奏する統夜たちに惹かれて軽音部入部を決意したのであった。

「それで5人で軽音部が始まって……」

「あずにゃんが入って、凄くパワーアップしたわよね♪」

絢と唯もまた、軽音部として歩んできたことを振り返っていた。

「統夜のギターに梓のギターが合わさると、より一層曲が締まるんだよね♪」

「唯のは力技だからな」

「お前が言うな」

律もまた、どちらかというところとパワフルな演奏をしているため、滯と統夜からツツコミを受けていた。

「それに、梓ちゃんは技のギターって感じで、統夜君は力と技が合わさったって感じよね♪」

「……なんかどつかで聞いたフレーズだけど……。まあ、いいだろう」

統夜は絢の例えに聞き覚えがあったのか、苦笑いをしていた。

「私たちに翼をくれたのはあずにゃんなんだよね！」

唯のこの言葉を聞いた統夜、律、滯、絢の4人は無言のままウンウンと頷いていた。

「あずにゃんは、私たちが幸せにしてくれた、ちっちゃくて可愛い「天使」なんだよ」

「天使って……」

「確かにそうかもしれないな……」

唯の言っている「天使」というのは、少しばかり大げさかもしれないが、律と滯はそ

の通りだと思っていた。

『やれやれ……。お前さんはよくそんな恥ずかしいセリフをスラスラ言えるよな』

「そう言うなって。俺だって唯の言葉はその通りだと思うぞ」

「うんうん♪統夜君にとって梓ちゃんも真正銘の天使だものね♪」

「……／＼／＼／＼」

梓と付き合っている統夜にとっては、梓は真正銘の天使であった。

細に的の得たことを言われてしまった統夜は恥ずかしさから頬を赤らめていた。

「……ね、ねえ！みんな！」

「……ん？」「……」

唯は何かを思いついたようであり、統夜たちは一斉に唯の方を見ていた。

そして唯は深呼吸をすると……。

「♪でもね、会えくたよ。すてゝきな、 “天使” に〜」

「わあ♪」

「なるほどな……」

「ねえねえ、どうかな？」

「凄くステキだわ！」

「天使って……。ちよつと恥ずかしくないか？」

「いや、凄くいいと思う！」

「ああ！俺もその部分をどうするか悩んでたけど、今のが一番しっくりきたぞ！」

統夜たちは様々な反応を見せていたのだが、どれも前向きな反応であった。

律も恥ずかしかつてはいたものの、内心は悪くないと思っていた。

「この曲もあずにゃんの羽になるかな？」

「なる！……と思いたい」

「いや、絶対になるさ」

「統夜君の言う通りよ！だって、たくさん詰め込んだもの！梓ちゃんへの気持ちを

いーっばい！！」

「気に入ってくれるといいな」

統夜と紬は、この曲が梓の羽になるということを確信していた。

『気に入るさ。俺様もそう信じているぜ』

イルバもまた、統夜と同じ気持ちだったからか、簡潔でありながら力強い言葉を送っ

ていた。

「……お茶にしようか♪」

「……そうだな」

「うん！」

こうして統夜たちは屋上を後にすると、音楽準備室へと向かった。

音楽準備室に到着した統夜たちは長椅子に鞆を置き、統夜、唯、滯の3人はそれぞれの楽器ケースを壁に立てかけていた。

その間、紬はティータイムの準備を行っていた。

「紅白饅頭食べたい♪」

卒業式の時に卒業生全員に紅白饅頭が当たったため、唯はそれを食べようとしていた。

「あつ、でもあずにゃんの分も取っておかないとね」

紅白饅頭は卒業生の分だけで、在校生である梓には当たらないため、唯は梓の分もとっておこうとしていた。

こうして、唯は紅白饅頭を取り出そうとするのだが……。

「な、なあ……。梓にどうやって話を切り出そう?」

滯が1番重要となる話を切り出した。

「うくん……。そうだなあ……。ここは部長のあたしが……」梓、聞いてほしい曲があるんだ。と切り出してだな……」

律は軽音部の部長であるため、話を切り出すのは自分がやりたいと考えていた。

「その後はムギだな。梓ちゃんのために作ったのお♪」って感じてな」

『おいおい。紬の真似をするならもつとクオリティを高くしたらどうだ?』
「むう……うるせえよ!イルバ!」

渾身のモノマネをイルバにダメ出しされてしまい、律はぷうつと頬を膨らませていた。

「わ、私、上手く言えるかなあ」

紬は重要な役を与えられ、少しだけ不安そうにしていた。

「笑ったりしたらダメだよ、ムギちゃん」

「あ、でも待つて。こういう話をしてる時っていつも……」

濡はこういう話をした直後に梓がやってきていたことを思い出していたのだが、その予感が見事に的中し、ガチャッと扉が開く音が聞こえてきて、梓が中に入ってきた。

「おお、梓」

「待つてたぜ、梓」

「あつ、すいません。今日くらいは私がお茶を淹れようと思ったんですけど……」

「ダメよお〜」

梓はこの部屋で統夜たちとお茶をするのが最後のため、自分がお茶を淹れようと考えていたのだが、自分の仕事を取られたくない紬はそれを拒否していた。

「なあ、梓。これからの軽音部のことなんだけど……」

梓へ贈る曲の前に、大きな問題であるこれからの軽音部についての話を律が切り出していた。

統夜たちが卒業してしまうため、4月からは軽音部は梓1人になってしまう。

あと部員を4人集めなければ、軽音部は廃部になってしまうのである。

そんな不安はあったのだが……。

「大丈夫です！」

と梓は力強く答えていた。

「いや、でも……」

梓の根拠のない力強い発言に滯は不安になるのだが……。

「大丈夫です！ 新入部員をいっぱい入れて、絶対廃部にはさせません!!」

梓にとっても軽音部はかけがえのない存在であるため、廃部だけにはさせるつもりはなかった。

「まあ、俺は桜ヶ丘に残るから何かあったら相談しな。力になるぜ」

「はい!!」

統夜は卒業しても、魔戒騎士としてこの地に残るつもりなので、これからも何かあれば梓に協力するつもりだった。

「あつ、あと……。先輩たちには本当に感謝してまして、手紙を書いてまして、さつきま

で書いていたんですけど……」

梓が部室に来るのが遅れたのは、統夜たちへの手紙をしたためていたからである。

それも1人1人に書いていたため、時間がかかっていたのである。

梓は手紙を統夜たちに手渡ししていた。

「……ねえ、あずにゃん！今読んでもいい？」

「は、はいー！」

この場で手紙を読まれるのは少しばかり気恥ずかしいと思っていたのだが、感謝の気持ちを知ってもらいたいと思い、それを了承した。

統夜たちは梓からもらった手紙を開いて読み始めるのだが、それを読んでいるうちに統夜たちの表情が明るくなっていった。

梓が統夜に当てた手紙は1番長く、統夜への感謝と、恋人としての言葉。さらには魔戒騎士である統夜に対して無茶はしないようにと警告する言葉などが綴られていた。

そんな梓の手紙を読んだ統夜は少しばかり気恥ずかしくなったが、梓の気持ちの込もった手紙を読み、穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

「あつ、先輩方。ご卒業おめでとうござい……」

梓は長椅子に移動して、卒業おめでとうと言おうとしたのだが、長椅子に鞆を置こうとしたら筒に入った卒業証書が目に入り、口をつぐんでいた。

「?..どうしたの?..」

「.....梓?..」

梓は学生鞆を長椅子に置いたのだが、それから顔を伏せ、視線を統夜たちからそらしていた。

「.....卒業しないで下さい.....」

梓は弱々しい口調で呟くように言っていたのだが、それはハッキリと統夜たちに聞こえていた。

「もう、部屋片付けなくても.....お茶ばかり飲んでても叱らないから.....」

ここの言葉を紡ぎながらゆっくりと統夜たちの方を向くのだが、その目には、涙がいつぱいたまっていた。

「卒業.....しないでよ.....!..」

梓はまだまだ統夜たちと一緒にいたい。そんな思いが強かったことから、珍しくワガママを言っていた。

「うわああああん!!」

自分の思いの丈をぶつけた梓は、その場でしゃがみ込み、泣き出してしまった。

「あ、あずにゃん!..」

「梓.....」

「す、すみません……」

統夜たちは席を立つと、梓のもとへと駆け寄っていた。

すると……。

「オデコ……どうしたの？」

梓の額に貼られた絆創膏が剥がれており、ぶつけた部分が露出していた。

「ケガ……したの？」

「は、はい……。グスツ……。卒業なのに……。ヒック……。お祝いなのに……」

「私、絆創膏持つてるよ！」

唯は学生鞆の中から手帳を取り出すと、その中に挟まっている絆創膏を取り出すと、それを梓の額に貼っていた。

「……はい。これで大丈夫だよ」

「梓、大丈夫か？」

「はい……。すみません……。泣かないつもりだったのに……。笑って見送ろうと……」

梓は卒業式というイベントのため、どれだけ悲しくても笑って見送ろうと思っていた。しかし、

気持ちが爆発してしまい、涙を堪えることが出来なかった。

「うん」

「気にするなよ、梓。泣きたい時は思い切り泣いてもいいんだぜ」

唯は穏やかな表情で相槌を打ち、統夜は優しい表情で梓をなだめていた。

「私……大丈夫です。ちゃんと軽音部を続けて……あの、トンちゃんもいますし……」

梓は涙を堪えていたのだが、目には涙がいつぱい溜まっていた。

それが梓の強がりだと言うのは明らかであり、統夜たちはそんな梓をどう元氣付けるべきか考えていた。

そんな中、唯は手帳に挟まっているとある写真を見つけた。

「……あずにゃん、これをあげよう」

そう言つて唯が梓に渡した写真は、軽音部が5人揃つた時に撮られた写真であり、その写真の端つこには小さく梓の写真が貼られていた。

「私たちが1年生の時の写真だよ！今のあずにゃんよりも若いよ！」

梓は軽音部の始まりとなった写真を受け取ると、目をウルウルとさせていた。

「これもあげよう」

唯が続けて梓に渡したのは、1枚の花びらだった。

「花びら5枚。私たちみたいだね、あずにゃん♪」

「おい、唯。ちよつと待て！」

『統夜の言う通りだぜ！5枚だったら1人足りなくないか？』

統夜たち軽音部は6人であるため、花びら5枚であるならば、1人足りないのではないのかと統夜とイルバは追求していた。

「だって、やーくとあずにゃんは2人で1つなんだもん！」

「そ、そうか……／＼／＼／＼」

『やれやれ……。唯、お前さんはそんな台詞を恥ずかしげもなく言えるよな……。』

唯のストレートな言葉に統夜は頬を赤らめ、イルバは少しばかり呆れていた。

「なーに、格好いいことやっつてんだよ、唯」

「そうよ！唯ちゃんばかりずるい！」

唯が立て続けに梓へ贈り物をしていることが気に入らなかつたのか、律と紬が異議を唱えていた。

「梓……。聞いてほしい曲があるんだ」

「あー!!滞まで！」

「梓のために作った曲なんだぜ」

「統夜君！それは私が言うはずの台詞だったのに！」

梓に贈る曲について話を切り出すのは律と紬の予定だったが、滞と統夜で話してしまい、出番を奪われた律と紬はぶうつと頬を膨らませていた。

「ふふふ……」

統夜たちのグダグダなやり取りに、梓は目には涙を溜めながらも笑みを浮かべていた。

そんな中、唯は梓に手を差し伸べていた。

「……あずにゃん。こっちにおいで」

「……」

梓はゆっくりと唯の手を取ると立ち上がり、唯は梓を長椅子までエスコートしていった。

梓が長椅子に座ると、統夜たちはそれぞれの楽器の準備を始めていた。

梓は、統夜たちが楽器の準備を行っているのをジックリと眺めていた。

数分ほど準備を行うと、チューニング等もバツチリ終わり、統夜たちはみんなの顔を見合わせていた。

全員の準備が終わっていることを確認した律はスティックで合図を出し、その合図をもとに統夜たちは曲を奏で始めた。

↓使用曲↓天使にふれたよ↓

現在統夜たちが奏でているこの曲こそ、梓のために作った曲である。

この曲は絃が作曲を担当し、詩は5人で話し合って完成させたものである。

この曲は梓へ贈る曲であるため、終始唯のボーカルではなく、5人がそれぞれソロを担当しているのである。

最初に歌い始めたのは滯であり、滯がワンフレーズを担当していた。

最初は唯から行くと思っていた梓は驚きながら滯の方を見ていた。

「……………そっか……………」

梓はこの曲を聴いた瞬間、今までの統夜たちの不可解な行動の理由がわかり、納得していた。

自分へのサプライズのために、コソコソしながらこの曲を用意してくれたのだと。

そして、続いているフレーズを担当するのは統夜であり、梓は驚きながら統夜の方を見ていた。

統夜は穏やかな表情で笑みを浮かべながらギターを奏で、歌を歌っていた。

統夜の次にボーカルを任されたのは律であった。

まさか、ドラム担当の律が歌うとは思わなかったのか、梓は再び驚きながら律のこと

を見ていた。

そして続いてボーカルを任せられたのは紬であり、紬は朗らかな表情で伸び伸びと歌っていった。

そして、この曲はサビに突入するのだが、サビの部分は唯がメインボーカルを務め、他のメンバーはコーラスとして参加していた。

『♪でもね、会えくたよ。素敵な、天使に。卒業は、終わりじゃない。これくからくも、仲間だから！』

唯は仲間だからという部分を強調していた。

これこそが、統夜たちが梓に伝えたかったことである。

卒業することによって離れ離れになってしまうが、統夜たちはいつまでもかけがえのない仲間である。

そんな統夜たちの気持ちが伝わったのか、梓は涙を堪えることが出来ず、瞳からポロポロと涙が溢れ落ち、その涙は唯からもらった写真に数滴落ちていた。

統夜たちは最初から最後まで梓への思いを曲に乗せて、演奏しきった。

演奏が終わると、梓はパチパチパチと拍手をしながら立ち上がった。

統夜たちは梓へ贈る曲を最後までやり切った達成感を感じているのか、互いに顔を見合わせて笑みを浮かべていた。

そして、梓が感想を口にするのだが……。

「……あんまり上手くないですね！」

「「「え!」」」

『やれやれ……。それは唯が統夜たちの曲を初めて聴いた時と同じ感想じゃないか……』

梓の思いがけない感想に、統夜たちは素っ頓狂な声をあげていた。

さらにイルバの言う通り、「あんまり上手くないですね」という台詞は、唯が初めて統夜たちの「翼をください」を聴いた時に言った感想と同じであり、当時のことを思い出して呆れていた。

「だけど……。もつともつと聴きたいです!アンコール!!」

この「あんまり上手くない」という言葉は、普通に解釈すれば酷評なのだが、梓にとっては最高の褒め言葉を送ったつもりであった。

「それじゃあ、今度は、あずにゃんも一緒に!」

「はい!!」

アンコールは梓も一緒に演奏することになり、梓はギターの準備を始めていた。

梓の準備が終わるタイミングで音楽準備室のドアが開くと、さわ子と和が入ってきた。

「あつ、私たちの曲、聴いてくれる？」

唯のこの問いかけに、さわ子と和は無言で頷いていた。

統夜たちの表情が明るくなると、互いに顔を見合わせていた。

そして律がスティックを叩いて合図を取ると、統夜たちにとっては始まりの曲である「ふわふわ時間」を奏で始めた。

この時、統夜たち6人の心は1つになっており、いつも以上にクオリティの高い仕上がりとなっていた。

統夜たちは心の底から音楽を楽しみ、このふわふわ時間が終了すると、撤収作業を行い、学校を後にするのであった。

こうして、統夜たちの卒業式は幕を閉じたのだが、統夜にとっての「真の卒業式」は、これから始まるのであった……。

……続く。

次回予告

『とうとう奏狼もここまで来たか。白銀騎士と共に綴った数々の熱きドラマ。お前らも十分、胸に刻んだろう？次回、「未来」。別れつてやつは次の旅への扉なんだぜ！』

第119話 「未来」

卒業式が無事に終わり、統夜たちは音楽準備室に向かう前に屋上へと足を運んだ。

梓に曲を贈る前に統夜たちは緊張しており、その緊張感を共有していた。

梓が喜んでくれる。そう信じた統夜たちは音楽準備室へと向かった。

統夜たちがどのように話を切り出すか話し合っていると、梓が音楽準備室へとやって来た。

梓へ贈る曲を披露する前にこれからの軽音部のことを聞いていた。

梓は軽音部は絶対に廃部させないと強く誓っており、統夜たちを心配させまいとしていた。

そして、梓は統夜たちに卒業して欲しくないとワガママを言って泣き出してしまったのである。

本来であれば笑って統夜たちを見送りたいと思っていたのだが、自分の気持ちを抑えることが出来なかつたのである。

そんな梓に、唯は2つの贈り物を送り、澁と統夜が梓に聞いてほしい曲があると話を切り出した。

そして、統夜たちは梓に贈るために用意していた曲を演奏した。

この時にはまだタイトルはなかったのだが、この曲は後に「天使にふれたよ」というタイトルがつけられるのであった。

この曲を演奏した後、梓はアンコールを要求するのだが、梓も一緒に演奏することになった。

そのタイミングでさわ子と和が音楽準備室に入ってきて、統夜たちはさわ子と和に「ふわふわ時間」の演奏を聞いてもらっていた。

統夜たちの演奏が終わると、帰り支度を始め、そのまま帰ることにしたのであった。帰り支度が終わり、みんな揃って音楽準備室を後にしようとしたその時だった。

コンコンとドアをノックする音が聞こえると、ドアが開かれとある人物が入ってきた。

その人物とは……。

「!?、ゴンザさん!? どうしてここへ?」

黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙の執事である倉橋ゴンザであり、意外な訪問者に統夜は驚きを隠せなかった。

「統夜様。皆様。ご卒業おめでとごございます」

ゴンザは統夜たちにこう挨拶をすると、深々と頭を下げていた。

「ゴンザさん、まさか、わざわざその挨拶をしに来た訳ではないですよね？」

「もちろんでございます。鋼牙様よりこちらを統夜に渡すよう言付かりまして」

ゴンザは赤の指令書のようなものを取り出すと、それを統夜に手渡していた。

「これは……指令書？」

『いや、少し違うようだな』

統夜が受け取ったものは形そのものは赤の指令書なのだが、どうやら普通の指令書ではないようであった。

「統夜様。読んでみてください。鋼牙様からのメッセージが入っております」

「は、はい」

統夜は魔導ライターを取り出すと、魔導火を放ち、ゴンザから受け取った指令書のうなものを燃やした。

すると、従来の指令書同様に魔戒語の文章が浮かび上がってきた。

「……統夜。卒業おめでとう。明日の朝7時。カカシの丘で待つ。魔戒騎士としての卒業式を行う」

統夜が文章を読み上げると、魔戒語の文章は消滅した。

「……!? カカシの丘って確か……!」

『確か鋼牙と零の2人がサバツクの本場の決勝戦として決闘した場所だったな』

冴島鋼牙が約束の地より魔竜の試練を終えた直後、鋼牙はサブバックで優勝した零と本当の決勝戦と称して決闘を行っていた。

その場所こそが、今回指定された場所であった。

その場所は正式な名前はないものの、鋼牙が幼少時代に修行に使ったカカシが佇んでいることから、そう呼ばれるようになった。

『それにしても魔戒騎士としての卒業式か。一体何をするつもりなんだろうな?』
「そうだよな……」

魔戒騎士としての卒業式がどんなものなのかわからず、統夜は不安そうにしていたのだが……。

「……だけど、どんな試練だつて乗り越えてみせるさ!」

そんな不安を振り払うかのように、統夜は強気な発言をしていた。

「統夜先輩! その調子です!」

梓は、そんな統夜のことを励ましていた。

「あの、統夜君の卒業式……私たちも見届けてもいいですか?」

「もちろんですとも! 鋼牙様はぜひ皆様にも来て欲しいと仰っております!」

「どうやら統夜以外のメンバーも来ても構わないとのことだったので、そのことを知った紬の表情がぱあっと明るくなった。」

そして、紬だけではなく、唯たちも見届けたいという気持ちは同じだったため、表情が明るくなっていた。

「それでは、明日お待ちしておりますので、よろしくお願いいたします」

ゴンザは深々と礼をすると、そのまま音楽準備室を後にして、学校も後にした。

「……統夜先輩。明日は頑張ってくださいね！」

「ああ！」

「明日は学校で待ち合わせをしましょう。私、迎えに行くね♪」

「悪いけど、頼むな、ムギ」

こうして、明日の朝は紬の車でカカシの丘まで向かうことになり、その確認を行ったところで学校を後にした。

※※※

統夜たちは学校を後にして、一緒に帰っているのだが、和と梓が先行しており、統夜

たちはその後ろをのんびりと歩いていった。

「……あずにゃん、喜んでくれたかなあ」

「うん！」

「俺はそう信じてるぜ！」

梓に向けて曲を贈り、紬と統夜は梓が喜んでくれたと確信していた。

すると……。

「うう……」

滯はずつと我慢していたのか、涙を流していた。

「あれえ？滯、泣いてるのか？」

「ち、違う！鼻が詰まっただけだ！」

滯は泣いていたのだが、律にからかわれるのが癪だったため、このように強がった発言をしていた。

「泣いてる暇なんてないわよ、滯ちゃん！」

「そっだよ！私たち大学生だよ！」

統夜以外の4人は卒業しても同じ大学に進むため、唯は前向きな発言をしていた。

「ポジティブだな、お前ら」

唯の前向きな発言を聞いた律は苦笑いをしていた。

「お茶の時に食べるお菓子も、もっと大人っぽくしなきゃ！」

「本当ねえ♪」

「つて、そこかよ！」

「俺はしばらくムギのお茶が飲めないだろうし、今からムギの紅茶が恋しいよ……」

統夜だけは魔戒騎士として桜ヶ丘に残るため、いつものティータイムを楽しむことは出来ないと考え、肩を落としていた。

「統夜君、いつでも遊びに来てね♪おもてなしするから♪」

「ありがとうつて言いたいところだけど、女子大じゃねえか！」

唯たち4人が行く大学は女子大であるため、統夜が気軽に入れるところではなかった。

『迂闊に踏み込んだら完全に不審者だよな……』

統夜たち魔戒騎士の身に纏う魔法衣はかなり目立つため、迂闊に女子大に踏み込んでしまったら、不審者として通報される可能性があった。

「まあ、統夜が遊びに来た時はなんか考えとくから安心してくれ」

「ああ、そうしてくれると助かるよ」

滯はもし統夜が遊びに来てくれた時は統夜が気軽に入れるよう何かしらのことを考えておこうと考えていた。

統夜はとりあえずそうしてもらうしかなかったので、滯の申し出を素直に受け入れていた。

「……あつ、そういえば、この前DEATH DEVILごっこで使った曲だけどさ、あれも先輩が後輩のために作った曲なんだって」

統夜たちは卒業旅行に行く前にDEATH DEVILごっこをしていたのだが、その時に使った曲には、そのような驚きのエピソードがあつたのであつた。

「……ま、人の感性はそれぞれだよなあ……」

先ほど統夜たちが演奏した曲とは曲調があまりに違うため、律は感性の違いを実感していた。

すると、唯が急に走り出し、統夜たちも後に続いていた。

「ねえ、来年はどこ行く?」

「来年って?」

「あずにゃんの卒業旅行だよ!」

唯はどうやら、梓の卒業旅行も一緒に行こうとしているようだった。

「つて、行くのかよ!」

「行くうよ!」

「そんな時は俺は高校生じゃないんだから一緒に行けるかわからんぞ!」

統夜はこれから魔戒騎士として本格的に活動するため、今までのようなワガママが通用するとは思えなかった。

「行こうよ！だって、統夜君も一緒じゃないと始まらないし！」

「……わかったよ。その時はなんとかするさ」

統夜の交わした約束は絶対叶えられるという訳ではなかったが、統夜はこれからもみんなの思い出を大事にしていきたいと考えていたため、どうにかその約束を果たそうと決意していた。

すると、唯はまるで飛行機のように両手を広げて走り出すと、先行している梓と和のもとへ駆け寄っていた。

こうして統夜たちは途中までみんな揃って帰り道を歩き、解散した。

解散後、統夜は番犬所に顔を出すと、改めて卒業の報告を行っていた。

そして、イレスに鋼牙から課せられた指令についての報告も行っていた。

そのことにイレスは驚いていたが、高校生魔戒騎士最後の戦いを悔いのないよう頑張りたいとエールを送っていた。

イレスへの報告を終えた統夜は、番犬所を後にすると、明日の指令に備えて家に帰り、ゆつくりと体を休めていた。

※※※

翌日、朝6時前に桜ヶ丘高校の前に集まった統夜たちは、紬の執事である斉藤が運転するリムジンに乗り込み、カカシの丘へと向かった。

この日は学校も休みであったため、統夜たちだけではなく、梓、憂、純、和、さわりも一緒だった。

およそ50分ほど車を走らせると、カカシの丘に到着し、統夜たちは鋼牙が待っているであろう場所へと向かった。

歩くこと5分。統夜たちは鋼牙の指定した場所に到着したのだが、既に鋼牙の姿があり、統夜が来るのを待っていた。

さらに鋼牙だけではなく、ゴンザとカオルも一緒であり、カオルは雷牙を抱えていた。それだけではなく、零、戒人、アキト、レオの4人も統夜の試練を見届けるために駆けつけていた。

「……統夜、来たか」

「はい、鋼牙さん」

統夜は鋼牙と軽く挨拶を交わすと、鋼牙と対峙していた。

唯たちは少し離れた場所で、統夜の戦いを見届けることにしていた。

「……お前もようやくやく卒業か。この3年間、高校に通いながら魔戒騎士として様々な試練を乗り越えていったようだな」

「はい。今の俺があるのは、桜ヶ丘高校でみんなと出会ったからです。みんなの存在が、笑顔が、俺を守りし者として力をくれたんです」

こう言い放つ統夜の瞳は、自信に満ち溢れていた。

そんな自信に溢れた統夜の言葉を聞いた唯たちの表情は明るくなり、鋼牙も穏やかな表情でフツと笑っていた。

「そうか……。そうかもしれないな……」

鋼牙は先輩騎士として、統夜のことを見守り、度々家に招いたりもしたのだが、唯たちと過ごしている統夜はとても生き生きとしていた。

唯たちが統夜にとって守るべき存在だというのは鋼牙も理解しており、統夜の言葉を実感していた。

「ところで、鋼牙さん。魔戒騎士の卒業式と言いましたが、一体何をするんですか？」

統夜は昨日指令をもらった時から気になっていた疑問を鋼牙にぶつけていた。

「……統夜。お前がこの3年間でどれだけ強くなったのか……俺に見せてみる」

「え？ま、まさかとは思いますが……」

「……統夜。俺と戦え」

鋼牙は牙狼の証である赤鞆の魔戒剣を取り出すと、鋭い目付きで統夜を睨みつけながら魔戒剣を抜いていた。

「!?で、でも、魔戒騎士同士の私闘は禁じられてるのでは？」

統夜の言う通り、魔戒騎士同士の私闘は騎士の掟で禁じられていた。

それを破ると、罰として何日分かの寿命を没収されてしまうのである。

しかし……。

『そこは問題ないぜ。グレスから許可は得ているからな』

ザルバの説明通り、鋼牙は事前にグレスに報告をし、統夜の力を確かめるために戦わせてくれと申し出ていた。

グレスはそれを二つ返事で了承したため、この決闘が実現したのであった。

「……そういうことなら！」

統夜もまた、鋼牙と戦ってみたいと思っていたのか、魔戒剣を取り出すと、鋼牙を鋭い目付きで睨みつけながら魔戒剣を抜いた。

「ルールはサバックと同じだ！どちらかが一滴でも血を流した方の負けとなる！」

「わかりました！」

今回の戦いは、サブックと同じ形式で行うようであり、統夜はそのルールで了承していた。

冴島鋼牙と月影統夜。2人の魔戒騎士が互いに魔戒剣を手にして対峙していた。

「……………」

「す、凄い緊張感だな……………」

「ああ……………。統夜のやつ、大丈夫かな……………」

「そうね……………」

唯、滯、律、紬の4人はヒシヒシと伝わってくる緊張感を肌で感じていたため、少しだけ怯えていた。

そんな中……………。

「大丈夫です！統夜先輩はこれまで色んな試練を乗り越えてきました。今回だって、きつと……………」

「……………そうね。私もそう思うわ」

「ええ。統夜君は私の教え子で、最高の魔戒騎士だもの」

「はい！私も統夜さんのことを信じています！」

「私も私も！」

梓、和、さわ子、憂、純の5人は統夜のことを信じており、力強い言葉を紡いでいた。

そんな力強い言葉に、唯たちは無言でウンウンと頷いていた。

「……これはなかなか面白いことになりましたね……」

「そうだな、師匠。黄金騎士とその他の騎士との戦いなんてそうそう見れるもんでもないしな。記録でもしとくか？」

「やめましょう。この戦いは記録に残すのではなく、僕たちの記憶に残しておきましょう」

「……そうだな」

アキトはこの戦いを記録しようと思ったのだが、レオの記憶に残そうという言葉に賛同したため、その考えはすぐやめることにした。

「……統夜。お前の力、見せてくれ。俺にとつて最高のライバルであるお前の力を……！」

戒人は、統夜の姿をジッと見ており、最高のライバルである統夜の戦いを見届けることにしていた。

「……統夜。鋼牙のやつはどの魔戒騎士よりも手強いぞ。それに、お前があれからどんなだけ成長したか、俺も楽しみにしてるぜ！」

去年の夏に行われたサバツクの決勝戦で統夜と戦った零は、あれからどれだけ統夜が成長したのかを楽しみにしていた。

「……これは、凄い勝負になりそうですね、カオル様」

「そうだね、ゴンザさん。……雷牙、あなたもすっかり見届けるのよ。この2人の戦いを」

「あう」

まだ1歳にも満たない鋼牙の息子である雷牙だが、赤ん坊にしては大人しく、しっかりと統夜と鋼牙のことを見ていた。

こうして、この場にいた全員が真剣な表情でこれから行なわれる統夜と鋼牙の戦いを見守っていた。

(……っ！さすがは黄金騎士牙狼の称号を持つ鋼牙さんだ……。オーラが半端ない……。こりや、ホラーがビビるのもわかる気がするよ……)

統夜は鋼牙と実践形式でぶつかるのは初めてなのだが、鋼牙の放つオーラに気圧されそうになっていた。

《おい、統夜。気合を入れろ！みんなが見守っているんだからな！》

(そうだったな。これは魔戒騎士としての卒業式だ……。みんなだけじゃない、これから戦う鋼牙さんに無様な姿は見せられないさ！)

統夜はこのような思いを抱いたことにより、自らを奮い立たせていた。

統夜と鋼牙は何を語る訳でもなく互いを睨みつけており、静寂がその場を支配してい

た。

しばらくその静寂が続いていたのだが、その静寂を破ったのは、鋼牙だった。

「……………統夜！来い！」

「……………っ！行きます！」

統夜は魔戒剣を構えると、鋼牙に向かって突撃すると、魔戒剣を一閃した。

鋼牙はそんな統夜の一撃を魔戒剣で軽々と受け止めていた。

統夜は鋼牙の追撃を受ける前に後方に下がって体勢を立て直そうとするのだが、そんな暇を鋼牙が与える訳もなく、統夜を追撃するのだが、統夜はどうか鋼牙の攻撃を受け止めていた。

鋼牙は魔戒剣を手にしたまま、肘打ちを統夜の鳩尾めがけて放つのだが、その一撃は幸いにも鳩尾から外れていた。

しかし、その一撃で統夜は怯むのだが、鋼牙は容赦なく魔戒剣を一閃した。

統夜はそんな鋼牙の攻撃をかわし、鋼牙は休む間もなく魔戒剣を一閃した。

その攻撃は、後方に大きくジャンプすることで、統夜はどうかかわすことができた。

鋼牙はかささず統夜を追いかけられるようにジャンプすると、統夜目掛けて魔戒剣を一閃し、統夜はその一撃をどうにか魔戒剣で防いでいた。

最強の魔戒騎士の名は伊達ではなく、鋼牙の容赦ない攻撃に、統夜は防戦一方だった。

そんな中、統夜はどうか反撃をしようと気合で鋼牙を弾き飛ばし、魔戒剣を一閃するのだが、鋼牙は後方に大きくジャンプすることでその攻撃をかわしていた。

(……流石は牙狼の称号を持つ鋼牙さんだ……。全然隙がない……。どうにか食らいつくだけで精一杯だよ)

統夜は相手が鋼牙であろうとも臆することなくどうにか食らいついていたのだが、並の魔戒騎士ではそれすら出来ないため、ここでも統夜の成長ぶりが伺えた。

(……統夜……。本当に強くなってるな……。グオルブと戦った時以上に……。サブバツクで零と互角に戦ったのも納得だ)

鋼牙はレオの魔導具で統夜のサブバツクの試合は全て見たのだが、実際に戦ったことにより、統夜の実力を実感していた。

(ふっ……。だからこそ、本気を出しても問題なさそうだな……。)

統夜の成長を垣間見た鋼牙は、闘争心に火がついたのか、本気を出して統夜にぶつかることになった。

「……統夜！来い!!」

「もちろんです！鋼牙さん！」

統夜は魔戒剣を鋼牙に突きつけると、鋼牙を突き刺しそうな勢いで、飛び出していた。

そんな統夜の突きを鋼牙は軽くいなすと、鋼牙はすかさず魔戒剣を一閃し、その攻撃を統夜は魔戒剣で受け止めていた。

その後、統夜と鋼牙は互いに激しく魔戒剣を打ち合っていた。

「す、凄い……」

「鋼牙さん、凄く強いわ……」

「そんな鋼牙さんが相手だけど……」

「ああ。統夜は食い付いてるよ」

「統夜君も鋼牙さんも強過ぎよー！」

「そうですね……」

「魔戒騎士って凄い……」

「統夜さん！頑張って!!」

「統夜先輩！」

唯、紬、漣、律、さわ子、和、純、憂、梓の順番で、2人のこれまでの戦いの感想を口々に言っていた。

憂と梓は、統夜の応援に熱が入っていたのだが……。

そして……。

「……へえ、統夜の奴、なかなかやるじゃん」

「ええ。あの鋼牙さんと互角に戦ってますね……」

「統夜のやつ……。少し見ない間にまた強くなってるな……」

アキトとレオは、鋼牙と互角に戦う統夜に驚き、統夜のライバルである戒人は、統夜の成長を誰よりも実感していた。

「へえ、どうやら統夜のやつ、俺と戦った時よりも強くなってるな♪」

『ゼロ。もしかして、統夜ともう一度戦ってみたいなんて思っていないわよね？』

「そんなの、思ってるに決まってるんだろ、シルヴァ。あんな戦いを見せ付けられちゃなあ」

『もお……。ゼロったら……。』

魔戒騎士は私闘を禁じられているため、今の鋼牙と統夜の戦いのような大義名分がなければ、番犬所に処罰されてしまう。

そうとわかっていても零は統夜ともう一度戦ってみたいと思っただけで、そんな相棒にシルヴァは呆れていた。

「統夜様……。立派になられましたな……」

ゴンザは統夜の戦いを見守る機会はなかったものの、鋼牙と互角に戦う統夜を見て、魔戒騎士として一人前になっていると実感していた。

「そうだね……。それに、強くなっただけじゃない。男としても一人前の顔をしてるよ。」

統夜君は」

「そうですね！これも軽音部の皆様のおかげですか？」

カオルは魔戒騎士としての実力だけではなく、顔つきも立派になっていると見抜いており、それにゴンザが同意していた。

「雷牙！お父さんも統夜君も凄いね！」

カオルは抱き抱えている雷牙に同意を求めるように語りかけるのだが、雷牙はジッと2人の戦いを見ていた。

その落ち着きぶりは赤ん坊のものとは思えないものであり、カオルはそんな雷牙に驚いていた。

そして、剣の打ち合いを行っていた2人であったが、統夜は鋼牙の一瞬の間隙をついて、腹部めがけて蹴りを放った。

「ぐっ……！」

統夜の蹴りはかなり効いているのか、鋼牙の表情が歪むと、そのまま後方へと吹き飛ばされてしまった。

統夜は油断することなく、すかさず鋼牙へ向かっていき、追い打ちをかけようとしていた。

（ほお……！今までの統夜なら、あそこで一瞬気を抜いてただろうが……。あそこです

かさず攻撃を仕掛けるとは……。統夜もちよつとは成長したみたいだ」

長いこと統夜と一緒にいるイルバは、統夜の未熟な部分を熟知していた。

今回のように格上の相手に一矢報いた時に、一瞬気を抜くことで、そこを相手に付け入られてひどくやられるというパターンが、統夜は多かつた。

しかし、今回の統夜は相手が誰であろうと油断することなく、状況を見極めて戦っていた。

イルバは、そんな統夜を見て成長を実感するが、それでも統夜はまだまだ未熟だと感じていたのであった。

その証拠に、統夜は油断せずに追い打ちをかけるが、それを決め切ることは出来ず、鋼牙の反撃の蹴りを受けて吹き飛ばされてしまったからである。

『おい、鋼牙。あんな蹴りをまともに受けるとは……。油断してたんじゃないのか?』

ザルバは、先ほど鋼牙が統夜の蹴りを受けたの見て、あれはかわせると思っていた。

そのため、統夜の蹴りかわせなかった鋼牙にダメ出しをしていた。

「……ザルバ、少し黙ってろ。集中出来ない」

鋼牙はザルバにダメ出しされたことで眉間にしわを寄せて、少しだけ不機嫌そうにしていた。

『おいおい。これは統夜と鋼牙の真剣勝負だぜ?魔導輪が口出しするなよな』

2人の戦いに水を差すようなザルバの発言に、イルバは異議を唱えていた。

『別に、口出しではなくダメ出しをしただけだぜ？お前さんだつて統夜にダメ出ししたくなる場面はあるだろう？』

『確かにな。だが、お前さんみたいに勝負の最中に口出しをしたりはしないぜ。流石骨董品の魔導輪はそんなこともわかんないんだな』

『言ったな。お前さんだつて骨董品だろう。このクソドクロが』

『何だ?!やるのか、この骨董品!!』

『フン！受けて立つぜ！このクソドクロが！』

鋼牙と統夜の戦いの最中に、互いの魔導輪であるザルバとイルバの舌戦が始まろうとしていた。

「……イルバ！こつちは真剣勝負してんだから喧嘩するな！」

「お前もだ、ザルバ」

『……フン!!』

2人の魔導輪であるザルバとイルバは、その容姿が非常に似ているのだが、互いにそれを認めようとはしない。

ザルバとイルバはお互いのことを見下しているからか、会えば喧嘩ばかりしていた。

そんな悪い癖がこのようなどころでも出てしまい、舌戦が始まる寸前で互いの相棒に

叱責されて止められていた。

ザルバとイルバはまるで子供のようになつぽを向いており、その様子を見た唯たちは苦笑いをしていた。

「……統夜、すまないな。場を白けさせてしまつて」

「いえ。こちらが悪いので、お互い様ですよ、鋼牙さん」

「そう言つてもらえると助かる」

2人は真剣勝負の最中だったのだが、鋼牙は穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

「……統夜！ここから先は互いに鎧を召還して勝負だ！」

「……っ！望むところですよ！」

鋼牙はサブバックのルールにはない鎧の召還を提案したのだが、統夜は戸惑いながらもそれを了承していた。

勝ち負けはともかく、本気の鋼牙と戦いたいという思いがあったからである。

「……俺は本気を出す。お前の本当の強さ……俺に見せてみろ！」

「もちろんです！鋼牙さん！あなたに見せつけてやります！この3年間で得た集大成を
!!」

統夜は鎧を召還することで、高校3年間で得た力を全て鋼牙にぶつけるつもりだった。

2人は鋭い目付きで互いを睨みつけると、互いに魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。そこから放たれる光な包まれると、2人はそれぞれの鎧を身に纏った。

統夜は白銀の輝きを放つ奏狼の鎧を身に纏い、鋼牙は黄金の輝きを放つ牙狼の鎧を身に纏った。

統夜は黄金の輝きを放つ牙狼の鎧を目の前にして、一瞬ではあるがその迫力に慄いてしまった。

(……黄金騎士牙狼……。味方だとこの上ないほど頼もしいけど、実際対峙すると凄いだよな……)

統夜は何度か鋼牙と共に戦ったことがあるため、その時は頼もしさを感じていたのだが、実際ぶつかるとなると、脅威でしかなかった。

(……そんな相手だからこそ、俺の集大成を見せるには相応しいんだ！)

しかし、統夜はそんな牙狼の鎧に臆することはなく、むしろ闘志を燃やしていた。
「……来い！統夜!!」

「行きますよ！鋼牙さん！」

統夜は専用の剣である皇輝剣を構えると、鋼牙めがけて突撃した。

しかもそのスピードと勢いは先ほどの統夜を上回っており、これは鎧を召還したからという訳ではなさそうだった。

「くっ……い！」

予想以上に勢いのある統夜の攻撃に、鋼牙は表情を歪めていたが、どうにか牙狼剣で受け止めていた。

鋼牙は反撃と言わんばかりに牙狼剣を振るうのだが、統夜はギリギリまで攻撃を引きつけて、鋼牙の一閃をかわしたのであった。

「何?！」

この一撃がかわされるとは思っていなかった鋼牙は驚きを隠せなかったが、統夜はすかさず皇輝剣を握っていない手を思い切り振り下ろし、鋼牙を殴り飛ばした。

鎧を召還してからは、統夜が鋼牙を圧倒しており、その光景に唯たちは驚いていた。

「はあああああああ!!！」

鋼牙を殴り飛ばした統夜であったが、攻撃の手を緩めることはなく、皇輝剣を振り下ろしていた。

鋼牙は負けじと牙狼剣で統夜の攻撃を防ぐと、反撃と言わんばかりに牙狼剣を一閃した。

今度は統夜が皇輝剣で鋼牙の攻撃を防ぐと、2人は再び激しい剣の打ち合いをしていった。

(……)これが、統夜の本気か……。フッ、ここまで心が踊るのは、零や翼との戦い以来だ

な……)

この戦いは統夜の成長を確かめるための戦いであつたが、鋼牙はそんな戦いを楽しんでいた。

魔戒騎士最強である牙狼と互角に渡り合えるのは銀牙騎士絶狼こと涼邑零や、白夜騎士打無こと山刀翼くらいであつた。

統夜はこの高校3年間で、そんな2人と遜色ないほどの力を身につけており、統夜の成長を垣間見た鋼牙は、笑みを浮かべていた。

そして、鋼牙は剣を打ち合いながらこのようなことを考えていた。

この時間が出来る限り続いて欲しいと。

それは鋼牙だけではなく、統夜も同じ気持ちであつた。

(……本当に鋼牙さんは強いな……。それにしても、黄金騎士である鋼牙さん相手にここまで戦えるとはな……)

統夜は自分が最強の魔戒騎士である鋼牙と互角に戦えていることに驚きを隠せなかった。

いや、「互角」と言ってしまうのはおこがましい。

そんな考えが頭をよぎってしまった統夜は苦笑いをしていた。

(……鋼牙さん相手にこんなこと思うのは失礼かもしれないけど、この戦いは、凄く楽し

い……………！ここまで心が踊ったのは零さんや翼さん。それに、戒人と戦った時以来だよ……………」

統夜もまた、零や翼だけではなく、ライバルである戒人との戦いを思い出し、笑みを浮かべていた。

そして、統夜もまた、この戦いが出来る限り続いてほしいと願っていた。

そんな2人を現実引き戻すかのよう、ガキン！ガキン！と牙狼剣と皇輝剣が響き合う音が聞こえていた。

「……………」

そんな中、統夜のライバルである戒人は、2人の戦いに魅入られていた。

「……………どうした？戒人」

「いや。統夜のやつ、凄いなって思ってた……………」

「……………そうだよな……………。鋼牙さん相手にここまでやるとは予想外だぜ」

戒人だけではなく、アキトもまた、統夜の予想外の奮闘に驚きを隠せなかった。

「……………俺も負けてられないな……………」

戒人はこう呟くと、両手の拳を力強く握りしめており、闘志を燃やしていたのであった。

統夜と鋼牙の戦いを見て、闘志を燃やしていたのは、戒人だけではなかった。

「……まさか統夜のやつ、ここまでやるとはな……。あんな戦いを見せつけられちゃ、体が疼いて仕方ないぜ」

零の場合は、戒人のようにあからさまに闘志を燃やしているわけではないのだが、心の中で闘志を燃やしていた。

「それに、この戦いを翼が見たらなんて言うか……」

『そうね。翼のことだから、戦いが終わってすぐに俺と戦えって言いかねないわね』

シルヴァは、翼の性格もよく理解しており、翼がいたならこのような行動をするだろうと予想して、苦笑いをしていた。

そんな中、鋼牙と統夜は渾身の力を込めて互いの剣を振るうのだが、その勢いで、2人は互いに吹き飛ばされてしまったのだが、すぐ体勢を立て直した。

そして、鎧の制限時間はあと40秒となろうとしていた。

「……統夜！ 次の一撃で決着をつけるぞ!!」

鋼牙はこう宣言をすると、魔導ライターを取り出し、牙狼剣の切っ先に緑の魔導火を纏わせることで、烈火炎装の状態となった。

「望むところですよ！」

統夜はその提案に応じると、同じく魔導ライターを取り出し、皇輝剣の切っ先に赤い魔導火を纏わせることで、烈火炎装の状態となった。

2人が烈火炎装の状態になると、鎧の制限時間が残り30秒になろうとしており、2人は間を置かずに互いに向かって突撃していた。

「うおおおおおおおおお!!」

「はああああああ!!」

鋼牙と統夜はまるで獣のように吠えようと、互いに激突し、牙狼剣と皇輝剣の鏝迫り合いが行われていた。

「うう……くっ……!!」

「ぐうう……!!」

2人は互いに一步も引かず、2人の力は拮抗していた。

「負けて……たまるかああああ!!」

統夜は再び獣のように雄叫びをあげると、かなりの力で鋼牙を押ししていた。

しかし、そんな統夜の剣は力任せであり、鋼牙は本気を出しているものの、心の余裕はあるのであった。

鋼牙は力任せになっている統夜の一瞬の隙を突くと、あえて牙狼剣の力を抜き、統夜の攻撃を受け流していた。

「……なっ!?!嘘だろ!?!」

鋼牙の機転によって攻撃を受け流された統夜はそのままバランスを崩してしまった。

どうにか反撃しようとするものの、それが上手くいかず、統夜は隙だらけになってしまった。

「そこだああああ!!」

鋼牙はここで来た最大限のチャンスを活かすために全力で牙狼剣を振り下ろした。

統夜はどうか体勢を立て直し、皇輝剣で攻撃を受け止めるのだが、鋼牙は全身の力を込めて牙狼剣を振り下ろし、統夜を吹き飛ばした。

「ぐああああ!!」

その時の衝撃はかなりのものであり、統夜は吹き飛ばされた後、偶然にも唯たちの近くで倒れ込むと、そのまま鎧の召還が解除されてしまった。

鋼牙も鎧の制限時間があと僅かだったため、鎧を解除して、統夜に追い打ちをかけることはせずその場で静観していた。

その理由とは……。

「うっ……くっ……」

「と、統夜先輩！大丈夫ですか？」

戦いの一部始終を見ていた梓は、不安そうな表情で統夜に声をかけていた。

「あ、ああ……。なんとかな……」

統夜はゆっくりと立ち上がるのだが、統夜の右手には微かではあるが、鮮血が溢れ落

ちていた。

「……………」

痛いのと怖いのが苦手である漣は、統夜の鮮血を見てビクンと肩をすくめるが、すぐに持ち直していた。

「……………おお！漣のやつ成長したな……………」

血を見ても前のように顔を真っ青にして怯えたりしていない漣を見て、律は漣の成長を実感して感心していた。

「……………統夜。勝負あつたな」

今回の対決は鋼牙に軍配が上がり、鋼牙は魔戒剣を赤い鞆に納めていた。

統夜は吹き飛ばされた衝撃で魔戒剣を落としてしまったのだが、その魔戒剣を拾うと、青い鞆に納めていた。

「……………さすがは鋼牙さんです。俺なんか勝てる訳はないや……………」

統夜はこのように自分を卑下する言い方をしていたのだが、内心はあと一步のところまで追い詰めたという満足感と負けたことに対する悔しさに満ちていた。

「統夜。そこまで自分を卑下する必要はないぞ。……………いい勝負をさせてもらった。感謝している」

鋼牙は統夜の力を確かめるためにこの勝負を持ちかけたのだが、統夜の予想以上の奮

闘に鋼牙は本気を出していたのだが、戦いを楽しんでもいたのである。

「こちらこそ、感謝しています。俺の力を凶る戦いではありませんでしたが、凄く勉強になりました」

最強の魔戒騎士である鋼牙と戦った。

このことだけでも、統夜にとってはかけがえのない財産となり、統夜をまた一つ成長させたのであった。

「統夜……。強くなったな……」

「!!」

統夜は、鋼牙が言ってくれた言葉に過剰に反応していた。

かつて唯たちがさらわれ、統夜は怒りで我を忘れた結果、心滅となってしまうた。

結果的には鋼牙や零に救われたのだが、その時、鋼牙から言われた「強くなれ」という言葉は、統夜の胸に深く残っていた。

そんな鋼牙から「強くなったな」と言ってもらい、統夜は感無量であった。

鋼牙の言葉に統夜は泣きそうになったのだが、グツと涙をこらえていた。

そして……。

「……はい！俺もそう思います！それに、俺がここまで強くなれたのは、軽音部のみんながいてくれたからなんです！」

この言葉は、統夜が心から思っていることであり、それを聞いた唯たちの表情がぱあつと明るくなっていった。

「……統夜。お前はこれから普通の魔戒騎士として、今まで以上にホラーと戦っていくことになる。今まで以上の困難がお前を待ち受けていることだろう」

「……」

統夜は真剣な表情で、鋼牙の話をジッと聞いていた。

「だが、お前には守るべき大切な存在がこれだけたくさんいる。守りし者として、そこは深く胸に刻みつけろ」

「……はい！」

「そして、どんな困難が待ち受けようと、振り返らず走れ！」

「ありがとうございます！鋼牙さんの言葉は深く胸に刻みつけます！そして、これからもたくさんの人を守るために精進します！……守りし者として……」

統夜は鋼牙からのありがたい言葉を聞くと、自らの決意を鋼牙に打ち明けていた。

「そうか……。頑張れよ、統夜！」

「はい！」

こうして、統夜の魔戒騎士としての卒業式は幕を閉じたのであった。

その後、統夜は出血部分を梓に応急処置してもらい、それが終わると唯たちお共に袖

の執事の運転するリムジンに乗り込み、桜ヶ丘へと帰っていった。

その帰り道は、先ほどの鋼牙との戦いの話で持ちきりであり、唯たちは鋼牙と互角に戦った統夜に驚いていたということをも本人に明かしていた。

統夜は、互角なんて言うのはおこがましい。俺はまだまだと少し照れながら答えていた。

こうして桜ヶ丘に着くまではその話で盛り上がり、桜ヶ丘高校の前に到着すると、統夜たちはそこで解散した。

明日からは高校へと行くことはなく、普通の魔戒騎士として生活していく。

そのことに少しだけ不安になる統夜であったのだが、高校3年間で得た経験が、統夜の糧になると信じていたため、その不安は取り除かれた。

高校を卒業したとしても、統夜の守りし者としての戦いが終わりを告げたわけではない。

むしろ、これからが始まりなのである。

そんな魔戒騎士としての生活を想像し、決意を新たにした統夜は、イレスに今日のことを伝えるべく番犬所へと向かっていったのであった……。

……卒業！金色の試練編・終

……エピソードに続く。

エピソード

カカシの丘で行われた統夜の魔戒騎士としての卒業式から数日が経過した。

統夜たち5人がいなくなったことで、軽音部の部員は梓とトンちゃんだけになってしまった。

そんな状態ではあったが、梓は今日も1人音楽準備室に顔を出し、トンちゃんに餌をあげていた。

部員が1人になったということは、トンちゃんの世話は梓1人で行わなくてはならぬのだが、それを梓は苦だとは思わなかった。

むしろ、統夜たちがいなくなった寂しさを少しでも埋められたらと思っていた。

しかし、すぐに寂しさがごみ上げるのだが、梓はそんな不安を払拭するかのようによくをブンブンと振っていた。

トンちゃんの餌やりを終えた梓は、1人で練習を行う訳でもなく、今までティータイムの時に自分の座ってた席に座ってぼおつとしていた。

そして、梓は思い出していた。ここで行われたティータイムのことを。

ここでのティータイムは特別なことは行われていないのだが、そんな当たり前な日常

が梓にとっては宝物だった。

だが、それは梓だけではなく、統夜たちもそう思っているに違いない。

そう考えると、少しだけ寂しきは紛れたが、やはり統夜たちがいなくなり、梓の胸にはポツカリと穴が開いたような気持ちになっていた。

(……私、本当に……。一人になっちゃったんだな……)

トンちゃんがいってくれるといっても、現在の軽音部の部員は梓だけになるので、やはり寂しいという気持ちが勝っていた。

しかし……。

(ダメダメ！弱気になってたら！これから新入部員をドンドン入れて、廃部を阻止しなきゃいけないんだもん！)

統夜たちとの思い出が詰まった軽音部を廃部にさせる訳にはいかない。

心にポツカリと穴が開いたような気持ちになった梓が奮い立つには十分すぎる動機であった。

梓が一人で一喜一憂していたその時、音楽準備室の扉がガチャッと開かれると、純と憂の2人が入ってきた。

「梓、やっぱり辛気くさい顔してるねえ」

統夜たちが卒業し、授業中もぼおつとするようになっていた梓であったが、部室でも

同様にぼおつとしていたため、純は苦笑いをしながら呆れていた。

「……純、憂。2人ともどうしたの？」

「あのね、梓ちゃん。私たち、軽音部に入りに来たの」

「……」

どうやら憂と純は軽音部に入部するためにこの音楽準備室を訪れたのだが、それが信じられないと言いたげな梓は目をパチクリとさせていた。

「あ、あの……。今、なんて言ったの？」

「だーかーらー!!入部希望だつて言ってるんじゃない!」

呆けている梓に対して、純は改めて入部の意思を伝えていた。

梓が呆けているのには1つ理由があるのである。

それは……。

「だ、だつて純!ジャズ研はどうしたの!?!」

純は軽音部ではなく、ジャズ研究会に所属しており、卒業までそのジャズ研にいるものだと思っていたからだ。

「……実はね。昨日、退部届を出して来たんだよね」

純は、軽音部に入るために2年間所属していたジャズ研究会に退部届を提出したのである。

「な……何で!? 純、ずっとジャズ研でベースを頑張っていたじゃん!」

梓は純がずっとジャズ研で真面目にベースを頑張っていたのを知っているため、そんなジャズ研をやめるということが信じられなかった。

「私だって本当は辞めたくないって思ったし、迷ったんだけどさ……。最後の1年くらいは梓と一緒にバンドをやりたいって思ったんだよね」

純も2年間頑張ってきた部活をやめることに抵抗はあったのだが、梓と一緒にバンドをしたい。

そんな強い気持ちだが、ジャズ研を辞めて軽音部に入るという気持ちを強くしていた。

「純……」

梓は、そこまでのことを言ってくれた純の言葉を心から喜んでいた。

それに、梓と一緒にバンドをしたいというのは、純だけではなかった。

「私も純ちゃんと同じ気持ちだよ♪4月からはお姉ちゃんやんは大学の寮に行っちゃうからやることもなくなるし、私も梓ちゃんや純ちゃんと一緒にバンドをやりたいの!」

平沢家の両親は家を空けがちであり、唯も4月からは大学へ進学するため、それに合わせて大学の寮で生活することになっている。

そのため、憂は4月から1人で過ごす機会も多くなると予想された。

時間も多く出来るため、憂は梓とバンドをやってみたいと思っていたため、ジャズ研

を辞めた純と共に軽音部へ入部することを決意したのであった。

「本当に……いいの？」

「もちろんだよ！ 梓ちゃん！」

「つか、もうジャズ研辞めちゃったし、もう後には退けないって」

梓は改めて2人に入部の意思があるのか確認したのだが、2人ともその意思は固かった。

「……」

軽音部に親友である憂と純が入ってくる。

それが嬉しいと感じていた梓だったが、何故か顔を隠して俯いていた。

「……梓？ どうしたの？」

「梓ちゃん？」

純と憂は、何故梓が俯いているのかがわからず、首を傾げていた。

「……か……」

「か？」

梓が口にした言葉は「か」だけであつたため、その意味を理解出来ない2人は首を傾げていた。

すると……。

「確保おおおおおおお!!」

梓は不意にこう叫ぶと、憂と純目掛けて駆け出していき、2人に抱きついて捕まえるために飛びかかっていた。

「ギャー!!」

突然の出来事に、憂と純は、思わず悲鳴をあげてしまったのだが、梓に抱きつかれ、満更でもないようであった。

こうして、軽音部の部員は梓1人だけではなく、純と憂が加入し、3人になった。

しかし、部員は5人揃わないと廃部であるため、梓たちの問題は解決した訳ではなかった。

しかし、1人ではなく、3人であるため、これからも3人力を合わせてこの問題を解決していくだろう。

3人の絆は、こう確信させるものであった。

そんな3人の様子を、学校の外から見守っている者がいた。

「……梓……良かったな……」

それは高校を卒業したばかりの統夜であり、統夜は音楽準備室近くに生えている木に登り、梓たちの様子を見守っていた。

当然声は聞こえなかったのだが、窓から見える景色から、憂と純が軽音部に入ったの

であろうと推測することは出来たのである。

『やれやれ……。どうせ梓の様子を見るなら、堂々と正面から入れればいいものを……』

イルバは統夜が正面からではなく、このように木に登ってコソコソと3人の様子を見ているのが理解出来なかった。

「確かにそうなんだけどさ、卒業したばかりで正面から様子を見るのもどうかなって思ってた……」

『やれやれ……。お前さんは本当に面倒くさいやつだな……。』

イルバはなんだかんだと理由をつけて、正面から梓たちを見守ろうとしない統夜に呆れていた。

『……。まあ、梓の様子も見たことだし、これで満足だろ?』

「……。ああ。とりあえず番犬所へ行こうか」

統夜は木から飛び降りると、誰にも見つからないように桜ヶ丘高校を後にすると、そのまま番犬所へと向かった。

「……。あれ?」

そんな統夜に気付いたのか、憂は首を傾げていた。

「ん?どうしたの、憂?」

「いや……。さつき、統夜さんの姿を見たような気がしたんだけど……」

「気のせいじゃない？ 統夜先輩は魔戒騎士の仕事で忙しいんでしょ？ だったら、こんな所で油を売ってるわけないよ！」

「アハハ……。そうだよね……」

純は統夜がいるということを否定し、憂は納得してしまっていた。

そんな中、梓だけは本当に統夜が来てくれたんだと信じていた。

（統夜先輩……。私たちこと、見守ってくれてるんだね！）

卒業しても何かあれば力になる。

卒業式の時に統夜はこう言っていたのだが、統夜は魔戒騎士の仕事の合間に自分たちの様子をこっそりではあるが、見に来てくれた。

梓にはそれが嬉しかったのである。

「……さて！ 新歓に向けて練習しよっ！ 練習！」

「うん!!」

こうして、憂と純が正式に加わった新生軽音部は、春に行われる新歓ライブに向けて、練習を開始するのであった。

（続夜 side）

……鋼牙さんが俺に高校生最後の試練を行ってから、数日が経過した。

それからの俺は魔戒騎士として、より一層使命を果たすべく励んでいた。

そんな中、俺たちが卒業することで1人になってしまった梓のことが気がかりであった。

心配な気持ちから、俺はこっそりと桜ヶ丘高校に忍び込み、音楽準備室の様子が見える木に登って、梓の様子を見ていた。

別に正面から入っても良かったんだけど、卒業早々遊びに行くっていうのは気恥ずかしくてな……。

やっぱり1人寂しそうにしていた梓だったけど、どうやら憂ちゃんと純ちゃんが軽音部に入ってくれるみたいだ。

純ちゃんはジャズ研をやめてまで軽音部に入ってくれたのかな？ そうだとしたら申し訳ないけど、ありがたい。

憂ちゃんの場合は唯が大学の寮に行っちゃうから時間も出来るだろうしな……。

この3人なら軽音部はきつと大丈夫だろう。

少しだけ肩の荷が下りた俺は、イルバに呆れられながらも桜高を後にして、番犬所へと向かった。

そして今は、指令を受けてホラーを探してるんだけど、今は商店街で一休みしており、賑わう人々のことをジツと眺めていた。

……俺は、これからこの人たちの当たり前の日常を守っていくんだな。

まあ、高校に行つてた時からそうだったけど、もつともつと多くの人を守るために戦うことになる。

鋼牙さんも言つてたけど、これからも多くの試練が俺を待ち受けてるだろう。

だけど、大丈夫だ。

俺には守りたい大切な人がいる。

それだけじゃない。この街は大好きだし、この街の人々だつて大好きだ。

だからこそ、俺はこの街をホラーの好きにはさせないと思つている。

そんな気持ちがあれば、俺はもつともつと強くなれるし、俺の力になる。

これは、純粹に力を求める訳じゃない。守りたい大切な人の思いを受け取ることで、

俺はもつと強くなれるんだ……！

俺がそんなことを考えながら物思いにふけつてしていると……。

『……おいおい、続夜。どうしたんだ？ボケつとして』

「……別に？これからはもつともつと頑張っていこう。そう思ってただけさ」
『何を当たり前なことを……』

まあ、別にいいじゃねえか。

イルバは呆れてるけど、俺は心の底からこう思ってるんだから……。

そんなことを考えていたその時だった。

『……統夜！ホラーの気配だぜ！』

おっと、どうやら仕事のようだな……。

「わかったぜ、イルバ。さっそく行こう！」

『了解だ、統夜』

こうして、俺はイルバのナビゲーションを頼りにホラーのいるであろう場所へと向かっていった。

さつきも言ったけど、この大好きな桜ヶ丘を、ホラーの好きにはさせないさ！

……我が名は月影統夜！白銀騎士奏狼の称号を持つ魔戒騎士だ！！

この街は……桜ヶ丘は……。

……俺が守る!! 守ってみせる!!

「牙狼×けいおん 白銀の刃」、終。

番外編 邂逅！もう1人の牙狼編

E P I S O D E 1 「邂逅～ENGAGE～」

白銀奏狼の称号を持つ若き魔戒騎士、月影統夜が無事に卒業式を迎え、黄金騎士牙狼の称号を持つ冴島鋼牙の与えた試練も、鋼牙に敗北はしたものの、乗り越えることが出来た。

それから少し時は流れ、3月も終わろうとしていた。

この日、唯たちは大学近くの寮に引越しをする日であり、統夜はその見送りに来ていた。

ちなみに、見送りに来てるのは統夜だけであった。

昨日は梓たちが送別会を開いてくれたのだが、その時に、明日の見送りは同じ学年の統夜先輩だけでと梓が気を遣ってくれたからである。

唯たちの必要な荷物は、前もって寮に送っており、後は唯たちが寮へ向かって荷ほどきをするだけだった。

統夜たちは今、桜ヶ丘高校の前に来ており、一台の車が止まっていた。

本来であれば、琴吹家の執事である斉藤の運転するリムジンで寮に向かう予定だった

のだが、大学の寮へは普通の車で向かいたいという紬の意向から、普通のワンボックスカーで大学の寮へと向かうことになった。

「……みんな。いよいよ大学生なんだな」

見送りに来た統夜はこのようにしみじみと呟いていた。

「……うん！ そうだね！ 今からすっごく楽しみだよ！」

「統夜君、見送りに来てくれてありがとうね♪」

「気にするな。しばらくみんなに会えなくなるんだし、今日は絶対に来るつもりだったしな」

「そうだよな……。統夜、元気でな！」

「ああ。みんなもな。大学に行っても、頑張れよ」

「統夜。時々は軽音部の様子を見てやってくれよな」

「もちろんそのつもりだよ。だから安心してくれ」

「やーくん！ たまには遊びに来てね！」

「わかってるって。俺もたまにはみんなに会いたいしな」

紬、澤、律、唯の順番で統夜に別れの挨拶をかわし、統夜は穏やかな表情で笑みを浮かべると、それに応えていた。

「……それじゃあ、統夜君とお別れするのは惜しいけど、そろそろ行くね」

「ああ。みんな、本当に元気だな」

「や……やーくん!!」

紬の執事の運転するこの車に乗れば、統夜とはしばしの別れになってしまう。

統夜と別れるのが惜しいと思っっているのか、唯は瞳に涙を溜めてウルウルとしながら統夜に抱きついていてた。

「……………つとー!おいおい……………」

唯が抱きつくのを見た3人は、唯に続く形で、統夜に抱きついてた。

「ちよ……………だから4人いっぺんはきついって……………!!」

今回のように一斉に抱きつかれることは度々あったのだが、今回はいつも以上に力が強かったのか、統夜は少しだけ苦しそうにしていた。

「統夜君……………!私、統夜君に出会えて本当に良かった!!」

「俺だってそう思ってるぜ、ムギ。ムギだけじゃない。みんなに出会えて、本当に良かった……………」

「うん……………!」

統夜の言葉が嬉しかったのか、紬の抱きつく力が少し強くなっていた。

「統夜……………死ぬなよ!」

「わかってるさ。俺はみんなを遺して簡単に死ぬ訳にはいかないからな」

これから魔戒騎士としての戦いはさらに激化することが予想されたのだが、統夜はそう簡単には死ぬ訳にはいかないと誓っていた。

「梓と仲良くな。それに、梓のこと……よろしく頼むな」

「もちろんだ。任せておけ。漕、みんなのこと……頼むな」

統夜は梓と付き合っているため、これからも梓のことは見守っていくつもりであった。

そのため統夜は、漕に、唯たちのことを任せていた。

「……イルイルも、元気でねー」

『唯！お前さんはいつもいつも……。俺様を変なあだ名で呼ぶな！』

唯はイルバのことを知った時からずっとイルイルと呼んでおり、その度にイルバはそのあだ名を否定していた。

そして今回も、イルバはイルイルというあだ名を否定していた。

「やれやれ……。もういい加減そう呼ばれるのに慣れろよな……」

統夜もまた、唯に「やーくん」と呼ばれるのは慣れなかったのだが、1年程で慣れることが出来た。

そのため、未だにイルイルというあだ名に慣れないイルバに、統夜は呆れていた。

唯たちは統夜との別れを惜しむかのように、統夜をぎゅっと抱きしめていた。

（やれやれ……。これを梓が見たら何て言うのか……。だがまあ、しばらく会えなくなるんだ。梓も許してはくれるだろうな）

イルバは冷静にこの状況を分析し、万が一梓がいたとしても、渋々許してくれるだろうと判断していた。

しばらく統夜に抱きついていた唯たちも統夜から離れると、そのまま車に乗り込んでいった。

そして、4人が乗り込んだことを確認した執事の斉藤は、車のギアをチェンジさせると、そのまま車を発車させ、N女子大の学生寮へと向かっていった。

唯たちは車の窓を開けると、統夜に向かって大きく手を振っており、統夜もまた、大きく手を振って唯たちの出発を見送っていた。

唯たちも統夜も、互いに姿が見えなくなるまで、手を振り続けていた……。

唯たちがいなくなったのを確認した統夜は少しだけ寂しそうな表情を浮かべると、そのまま番犬所へと向かっていった。

……そんな統夜を、この世ではないどこかで見ているものがいた。

「な、何だ……。あの小僧は……。黄金騎士と同じ輝きを感じるぞ……！」

「統夜の様子を見守っていたのは、ホラーのような姿をした魔獣だった。」

「奴がこの世界の黄金騎士だと言うのか!? あんな小僧が……！」

「魔獣は、まだ幼さの残る統夜が、牙狼の称号の魔戒騎士と勘違いをしていたのだが、信じられないと言いたいのか訝しんでいた。」

「私の復活も近い！ その暁には、この世界の牙狼と私の世界の牙狼……。2人まとめて消し去ってやる!! そのことで、完全に忌々しい黄金の輝きを消し去ってやるのだ!! 魔獣は、どうやら牙狼の称号を持つ魔戒騎士に恨みを持っており、統夜を牙狼と勘違いしていることで、統夜を消し去ろうと企んでいた。」

「そんな魔獣の邪気は、どうやら統夜たちにも伝わったようであった。」

「……!? おい、統夜。妙な邪気を感じるぜ!!」

「そうだな……。俺も殺気のようなものを感じるよ」

「どうやらイルバだけではなく、統夜も探知出来るほどの邪気であり、統夜は冷や汗をかきながら周囲を警戒していた。」

すると……。

『……統夜!!こいつは妙なことになってるぜ!!』

「妙って何が……。!?こ、これは……」

統夜は、今起こっている状況が信じられず、目をパチクリとさせていた。

統夜とイルバは自由に動けるのだが、それ以外の時が止まってしまったのである。

「……この状況……。鋼牙さんから聞いたことがあるけど……。まさか……!!」

『だが、奴は黄金騎士を目の敵にしてる奴だぜ!白銀騎士であるお前さんを敵視する理由は無いはずだ!』

「確かにそうだよな……」

どうやら統夜だけではなく、イルバも思い当たる節があるのだが、2人が連想する魔獣は黄金騎士を滅ぼそうとしている存在であり、自分たちが狙われる謂れはないのであった。

時が止まり、統夜は動揺を隠せずにいたその時であった。

『……おい、統夜!!空を見ろ!』

「!?こ、これは……!」

統夜は空を見て息を飲むのだが、先ほどまで青空だった空が緑の空になり、空の一部から歪みのようなものが現れた。

その歪みから大量の風が吹き荒ぶと、統夜を歪みの中へと吸い込もうとしていた。「うっ……くっ……！な、何なんだよ！これは！」

統夜はたまたま近くにあつた電柱に掴まって踏ん張るのだが、風の勢いには勝てず、統夜は歪みの中へと吸い込まれてしまった。

「うっ……うわああああああ!!」

統夜の悲鳴がその場に響き渡り、統夜の姿は消えてしまった。

統夜がいなくなった直後に時は再び動き出し、何事もなかったかのように日常が始まっていた。

※※※

謎の歪みに吸い込まれてしまった統夜は、人気のない広い場所へ投げ出されていた。「………痛っ!!」

統夜は着地をする間もなく、地面に叩きつけられてしまった。

そこそこ高い場所からの落下だったのだが、魔戒騎士として鍛えているため、痛いと感じる程度のダメージであった。

「……………つたく……………。なんなんだよ……………」

どこかわからない場所に投げ出された統夜は、ブツブツと文句を言いながらゆっくりと立ち上がった。

そして、周囲を見回すのだが、先ほどまでいた場所とは景色が変わっており、統夜は驚きを隠せなかった。

「おいおい……………。どこだよ、ここ……………」

『さあな。だが、桜ヶ丘でないことは間違いなさそうだ』

「……………やっぱりそうか……………」

今いるこの場所が桜ヶ丘ではないということは、統夜もイルバも予想することが出来た。

「……………まさか、またホラーのいない異世界に来たとかはないよな……………」

『その可能性はあり得るが、微かに邪気は感じるぜ。どうやら、この世界にはホラーはいらるようだ』

「そうなのか？ てつきり魔女みたいな怪物はいる世界なのかと思っただが……………」

統夜は異世界に迷い込んだのは間違いないのだが、何故か冷静だった。

統夜が高校2年生の時の夏休み。いつものように魔戒騎士の使命を果たし、とあるホラーを討伐したのだが、その時にこの世のものとは思えない不思議な宝石を拾った。

その宝石に導かれる形で、統夜は異世界に迷い込んでしまったのだが、その世界は何と、ホラーや魔戒騎士の存在しない世界であった。

しかし、そんな世界にもこの世のものとは思えない魔獣は存在し、魔女と呼ばれし魔獣が、人知れず人の命を脅かしていた。

そんな魔女と戦っていたのが、「魔法少女」と呼ばれる統夜よりも幼い少女たちで、統夜が拾った宝石は、その魔法少女の証であるソウルジェムと呼ばれるものであった。

統夜はその戦いに巻き込まれる形で戦うことになり、無事に自分たちの世界に戻るこ
とが出来た。

そんな経験があるからか、統夜は異世界に迷い込んだと聞いても冷静だったのであ
る。

「だけど……。ここがどこなのかは調べないとな……」

統夜がどんな世界に迷い込んだのかはわからないために、情報を集めるためにも動く
しかなかった。

『……とりあえず移動しようぜ。どうやらここは街ではないようだが、街に行けば何か
はわかるだろ』

「そうだな」

イルバの言う通り、統夜のいる場所は明らかに街から離れた場所にあるようであり、統夜はこの世界の情報を得るためにどこにあるかもわからない街へと向かって歩き始めた。

※※※

歩き始めておよそ1時間後、ようやく街を発見した統夜は、その街に立ち寄り、何か情報を得るために街を歩き回っていた。

統夜はすぐに看板のようなものを発見したのだが、そこには「ラインシティ」と書かれていた。

「……ラインシティ……？聞いたことのない名前だな……」

街の名前に聞き覚えがないからか、統夜は首を傾げていた。

『俺様も聞いたことはないな。とりあえず、この街を見て歩いてみたらどうだ?』

「そうだな……。そうすれば、この世界の魔戒騎士のこともわかるかもしれないしな」

統夜は、このラインシティという街がどのような街かを調べ、この世界の魔戒騎士についての情報を得るために歩き始めた。

1時間ほど街を歩いてみたのだが、特に変わりのない活気のある街であった。

『……いたって普通の街だな……』

『そうだな。だが……』

「だが?」

イルバもこの街は普通の街だとわかっていたのだが、1つだけ気になることがあった。

それは……。

『この街のどこにいても妙な法力のようなものを感じるんだ』

「妙な法力?もしかしてホラーか?」

『いや、この感じは恐らく魔戒法師だろう。それも強大な力を持っている』

イルバは街のあちこちから魔戒法師のものと思われる法力を探知していた。

「魔戒法師って……。この世界にも邪美さんや烈花さんのような魔戒法師がいるってことなのか?」

『そうかもな。だが、その2人よりも強大な力を感じるぜ』

「!?あの2人よりも……なのか!？」

邪美や烈花以上の魔戒法師がいることが信じられないのか、統夜は目を大きく見開いて驚いていた。

『まあ、あの2人よりも強い奴がいたとしても不思議ではないがな』

「そ、そうかもしれないけど……」

『統夜。とりあえずこの街をもう少し調べようぜ。何か情報が得られるかもしれないから』

「そうだな……」

統夜はこのラインシティの情報を得るために、再び街の散策を始めた。

さらに1時間街を散策し、合計2時間街を散策したのだが、特に変わったところはなく、魔戒騎士やこの街に法力を放つ魔戒法師の足取りは掴めなかった。

「……夜になったが、特に変わったことはないな……」

『そうだな。何か目ぼしい情報を得られると思ったんだがな……』

「仕方ない。今日はどこかで野宿でもするか」

この日の探索は諦めて、統夜は野宿するのに適した場所を探すために動き始めようとしていた。

その時であった。

『……！統夜！ホラーの気配だ！ここから近いぞ！』

「！世界が違うって言っても、ホラーが出たとなると放っておけないな。イルバ、行くぞ」

『了解だ、統夜』

こうして、統夜はイルバのナビゲーションを頼りに、ホラーの出現した場所へと急行した。

※※※

……ここは、ラインシティ某所にある人気のない広場。

この場所に1人の少女がいたのだが、少女はこの世のものとは思えない怪物……ホラーに襲われていた。

「いや……来ないで……」

少女はホラーから逃げていたのだが、途中で転んでしまい、現在はホラーに追い詰められていた。

その瞳には涙がたまっており、恐怖に支配されていたのだが、ホラーはそんな少女に容赦なく迫っていた。

「ククク……。その恐怖に怯えた表情……。たまらんな！」

ホラーは恐怖に支配されている少女を見て、笑みを浮かべていた。

そして、獲物を吟味するかのように舌なめずりをしていた。

「……だ、誰か……。助けて!!」

少女が誰かに救いを求め、ホラーが少女を捕まえようとしたその時だった。

「やめろお!!」

どこからか現れた赤いコートの少年……。統夜が、魔戒剣を一閃してホラーを斬り裂き、蹴りを放ってホラーを吹き飛ばした。

「……早く逃げろ」

ホラーが吹き飛ばされた際に統夜は少女を逃がそうとして、少女は統夜に礼を言うこともなく、一目散に逃げ出していた。

「さてと……」

統夜は魔戒剣を構えると、吹き飛ばされて、起き上がろうとしているホラーを見据えていた。

「……まさか、またこいつと出くわすとはな……」

『そうだな。こいつはアレグレウス。お前さんが初めて梓を助けた時に倒したホラーだ』

「ま、世界が違うんだ。同じホラーがいたって不思議はないか」

統夜と対峙しているホラーは、かつて梓を初めて助けた時に倒したアレグレウスというホラーであった。

統夜の世界にいるアレグレウスは既に魔界へと強制送還されているのだが、ここは違う世界のため、交戦経験のあるホラーと遭遇しても不思議はなかった。

「とりあえず、こいつを蹴散らさないとな！」

統夜がアレグレウスをまじまじと見ている間に、アレグレウスは統夜目掛けて襲いかかってきた。

アレグレウスは爪による攻撃を仕掛けるのだが、統夜は軽々と魔戒剣で受け止めていた。

そして、反撃と言わんばかりに魔戒剣を一閃するのだが、その体は固く、皮膚に傷を与えることは出来なかった。

「相変わらず体は固いみたいだな……」

アレグレウスとの交戦経験がある統夜は魔戒剣ではあまりダメージを与える事が出来ないことを理解していた。

その後の攻撃パターンも簡単に見極めることが出来た。

そのため、アレグレウスが反撃として放った衝撃波をかわすと、今度は蹴りを放ってアレグレウスを吹き飛ばした。

「……ぐう……」

アレグレウスはすぐ体勢を立て直すのだが、再び統夜に向かっていった。

統夜は完全にアレグレウスの動きを見切っており、アレグレウスの攻撃をかわすと、今度は魔戒剣を3度振り下ろし、その攻撃で怯んだところに蹴りを叩き込み、近くに立てられた木に叩きつけた。

相手の攻撃パターンを理解しているからか、統夜は鎧を召還することなく、アレグレウスを圧倒していた。

「……貴様……俺の攻撃を見切っているとでもいうのか!？」

木に叩きつけられ、ゆっくりと立ち上がったアレグレウスは、自分の攻撃がことごとく通用しないことに驚きを隠せずにいた。

「ああ、そうだ。お前は知らないだろうが、同じ個体と交戦経験があるんでね」

「おのれ……！魔戒騎士……！！」

「……さて、一気に決着をつけさせてもらおう！」

統夜は速やかにアレグレウスを討滅するために鎧を召還しようとしていた。

その時だった。

『……！統夜！何かが来るぞ！！』

イルバが何かを感じ取ると、どこからか手裏剣のようなものが飛んでくると、その手裏剣のようなものは、アレグレウスを斬り裂いた。

「……!?な、何だ!?!」

統夜は突然の出来事に驚き、手裏剣のようなものが飛んできた方向を見ると、そこには黒いロングコートを羽織った青年と、ポニーテールの女性が立っていた。

「……何者だ!?!」

「見てわかんない？俺は魔戒騎士だよ。そういうあんたも見ない顔だけど、魔戒騎士なのか?」

「ああ、そうだ」

「流牙（りゆうが）。あの坊や、それなりに出来るみたいよ」

「そうらしいな、莉杏（りあん）。あのホラーを圧倒してたみたいだしな」

黒いロングコートの青年は道外流牙（どうがいりゆうが）という名前の魔戒騎士であ

り、ポニーテールの女性は、莉杏という名前であり、どうやら魔戒法師のようであった。「おのれ……！魔戒騎士に魔戒法師か……！いいだろう！みんなまとめて叩き潰してやる！」

「へえ……。やれるもんならやってみなよ！」

流牙はアレグレウスに向かって軽口を言いながら魔戒剣を抜くのだが、統夜は流牙の魔戒剣の鞘を見て驚愕していた。

その理由は……。

「……!?う、嘘だろ!?赤鞘……なのか？」

流牙の魔戒剣は赤鞘であり、赤鞘といえば、黄金騎士牙狼の証でもあるものであるからだ。

『あいつがこの世界の牙狼だと言うのか……!?』

牙島鋼牙以外の赤鞘を持つ魔戒騎士に会えるとは思っていなかったからか、イルバも驚きを隠せずにいた。

まさかの出会いに呆ける統夜は御構いなしなのか、流牙は魔戒剣を高く突き上げると、円を描いた。

そこから放たれる光に包まれると、流牙は黄金の輝きを放つ鎧を身に纏った。その鎧を目の当たりにした統夜は、驚きのあまり目を丸くしていた。

その理由とは……。

「……う、嘘だろ……!?が、?牙狼……なのか?」

流牙の身に纏った鎧もまた、冴島鋼牙同様、黄金騎士牙狼の鎧であったからである。しかし……。

『……統夜!確かにあれは牙狼の鎧みたいだが、形状が少し違うぞー!』

「……あつ、本当だ……」

イルバの指摘通り、流牙の身に纏った鎧は、統夜の見慣れた牙狼の鎧ではなかった。

この鎧は、「牙狼・翔」と呼ばれる鎧であり、牙狼の鎧が戦闘的に進化したものである。通常の牙狼の鎧と比べると、より鋭角的になっており、牙狼剣の形も若干ではあるが異なっていた。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る!」

流牙はアレグレウスに向かってこう宣言すると、アレグレウス目掛けてゆつくりと歩いていった。

「おのれ……!」

アレグレウスは牙狼の鎧を見ても臆することはなく、衝撃波を放つのだが、牙狼の鎧に傷一つつけることは出来なかった。

流牙はアレグレウスに接近すると、牙狼剣を構え、牙狼剣を大きく振り下ろした。

その一撃でアレグレウスの体は真つ二つに斬り裂かれ、アレグレウスは消滅した。

アレグレウスが消滅したことを確認した流牙は、鎧を解除して、元に戻った魔戒剣を赤鞘に納めていた。

流牙がアレグレウスを討滅したのを見届けた莉杏は、流牙に駆け寄っていた。

「流牙。お疲れ様」

「ああ。……それよりも……」

アレグレウスを討滅した流牙は、魔戒剣を手にしたまま呆けている統夜の姿をジッと見ており、そんな統夜に話を聞くべく歩み寄った。

「……なあ、あんた。魔戒騎士なんだろう？ここら辺じゃ見ない顔だけど、管轄はどこなんだ？」

「……」

流牙に呼び掛けられた統夜は、鋭い目付きで何も答えようとはしなかった。

それだけではなく、未だ手にしている魔戒剣を流牙に突き付けて睨みつけていた。

「……!？」

まさか、剣を突き付けられるとは思っていなかったのか、流牙は息を飲んでいた。

これこそが、統夜と、別の世界の牙狼である道外流牙との出会いであった。

この出会いこそが、新たな激闘の幕開けになるということを、統夜はまだ知る由も

なかつた……。

……E P I S O D E 2 に続く。

EPISODE 2 「黄金～GARO～」

3月の終わり、唯、漕、律、紬の4人が大学の寮へ向かうのを見送った統夜は、何者かの手によって別の世界に飛ばされてしまった。

その世界にもどうやらホラーはいるようであり、統夜はこの世界の情報を得るために、近くにあった「ラインシティ」と呼ばれる街を訪れた。

暗くなるまで街の散策を行うものの、目ぼしい情報は得られなかったのだが、野宿先を探そうとした矢先に、かつて統夜が倒したホラー、アレグレウスと遭遇した。

統夜はアレグレウスを圧倒していたのだがそんな時に、魔戒騎士である道外流牙と魔戒法師である莉杏が乱入してきた。

流牙の魔戒剣はなんと赤鞆の魔戒剣であり、牙狼の称号を流牙が持っているという証であった。

流牙は牙狼・翔の鎧を召還すると、一太刀でアレグレウスを討滅したのであった。

そして、牙狼の存在に驚いていた統夜であったが、こちらに歩み寄ってきた流牙に魔戒剣を突き付けたのであった。

「……ねえ、これはいったい何の真似なの？」

「赤鞘の魔戒剣……。牙狼の鎧……。あなたが黄金騎士牙狼だって言うのか……！」
「あんたも見てただろ？俺が牙狼の称号を持つ魔戒騎士だってば」

「……」

統夜に魔戒剣を突き付けられ、流牙はいつでも抜刀出来るように備えていた。

「……すまないな。あんたじゃない牙狼の存在を知ってるからつい……」

統夜はどうか冷静さを取り戻すと、魔戒剣を下ろし、そのまま青い鞘に納めていた。
統夜に敵意がないことを知った流牙は安堵のため息をついていた。

「ねえ、あなた。流牙じゃない牙狼を知ってるってどういうことなの？」

「……俺は実はこの世界の人間じゃないんだ。俺の知ってる牙狼とは違ったからついあんたに敵意を向けちゃった」

「……へえ、異世界の魔戒騎士ねえ……」

流牙は、統夜が異世界から来たと知っても特に驚いたりはしていなかった。

「……驚かないのか？」

「別に。こんな仕事をしてるんだ。異世界の人間が紛れ込んだって何の不思議もないよ」

流牙が統夜に向かってこう答えると、流牙は何かを感じ取り、左手に嵌められた指輪のバイザーを外した。

すると……。

『俺様は気になるがな。異世界の魔戒騎士とやらがな』

バイザーから出てきたのは、鋼牙の相棒であるザルバと全く同じであった。

そのため……。

「ぎ、ザルバ!？」

統夜は流牙の魔導輪がザルバであると知って、驚いていた。

『なんだ、小僧。俺様のことを知っているのか?』

「まあな……。俺の知ってる牙狼の相棒もザルバだったから……」

「へえ、やっぱり黄金騎士の魔導輪はザルバなんだな」

統夜の世界の牙狼もザルバが相棒だと知り、流牙は感嘆の声をあげていた。

「……そういえば自己紹介がまだだったな。俺は道外流牙。魔戒騎士だ」

「私は莉杏。魔戒法師よ」

流牙と莉杏は、統夜に自己紹介をしていた。

「俺は月影統夜。あんたらとは住む世界は違うが、白銀騎士奏狼の称号を持つ魔戒騎士

だ」

「白銀騎士奏狼?」

「聞いたことないわね」

流牙と莉杏が聞き覚えがないことでわかるように、どうやらこの世界には奏狼の称号を持つ魔戒騎士はいないようであった。

『……ま、世界が違えば奏狼が存在してなくても仕方ないよな』

「『ぎ』……ザルバ!?!」

口を開いたイルバを見た流牙と莉杏は、イルバの見た目がザルバそっくりだったため、驚いていた。

『違う！俺様はイルバ！白銀騎士の魔導輪だ！間違えるな！』

イルバはザルバと間違えられるのが嫌いなため、少しだけ怒りの口調で自分の存在をアピールしていた。

「へえ、それにしても、本当に似てるんだな……」

『ああ。俺様も驚きだぜ。まさか、自分そっくりの魔導輪がいるとはな……』

どうやらこの世界のザルバは、イルバのことを嫌っている訳ではなさそうなので、イルバはいつもと違う感じに少しだけ戸惑っていた。

「それにしても、君は凄く若いけど、何歳なの?」

莉杏は統夜のことを一目見た時から、魔戒騎士にしては幼いと感じていた。

そのため、統夜に年齢を聞くのだが……。

「今は18で、もうじき19になる。ちなみに、魔戒騎士になったのは15だったかな

「？」

「じゅ、15で魔戒騎士になったのか!？」

「ず、ずいぶんと凄いわね……」

流牙と莉杏は、10代で魔戒騎士として活躍している統夜に驚きを隠せなかった。

自分が牙狼の称号を受け継いだ時よりも統夜が奏狼の称号を受け継いだ方が早かったため、特に流牙の方が驚いていた。

「……その若さで活躍するなんて、統夜は本当に苦労したのね」

「そうかもしれないな。俺は高校に通いながら魔戒騎士として使命を果たして心から守りたいと思った大切な人と出会ったんだ」

「え!? 統夜って、学校に通いながら魔戒騎士の仕事をしていたの!？」

「どうやらこちらの世界では、統夜のように学校に通いながら魔戒騎士の仕事をする者はいないようであり、莉杏は驚きを隠せずにいた。」

「……なるほどな……。学校に通いながらってのはわからないけど、統夜は統夜で守りし者とは何なのかを理解していたんだな……」

「ま、そういうことかな」

『俺様から言わせてもらえば学校とやらに通いながら魔戒騎士をするなど解せないがな。お前さんの他にもそういう奴はいるのか?』

「ああ。俺と同じで15で魔戒騎士になった奴がいるんだけど、そいつが今年の春に高校に入学するんだ。恐らくは俺の影響かな？」

統夜が言っている人物は、先ほど統夜が言った通り15で魔戒騎士になった統夜の後輩騎士である如月奏夜のことであつた。

奏夜が高校に入ることを決意したのは、統夜の存在が大きいと言つても過言ではない。

高校に通いながらも魔戒騎士の使命を果たすことが出来る。

そのことを統夜が証明してみせたので、これからも高校や大学に通いながら魔戒騎士として使命を果たす者が増えてくることが予想された。

『ほお……。どうやらお前さんはその若さで残すものを残していたんだ……。』

統夜の残した足跡について話を聞いていたザルバは、ただの小僧と侮つていた統夜の評価を改めていた。

『ま、まあ。確かにそうなのかもしれない……。』

鋼牙の相棒であるザルバは、統夜のことを認めたことはなかったのだが、このザルバは統夜のことをあつさりとして認めており、その違いにイルバは戸惑つていた。

「とりあえず他にも聞きたいことはあるけど、今日のところはゆつくり休んで明日リュメ様のところに行こう」

「リュメ様？」

統夜は聞いたことのない名前を聞いて、首を傾げていた。

「この街を治めている魔戒法師のことよ」

「へえ、この街には番犬所は存在しないんだなあ」

「リュメ様のいる場所が番犬所みたいなものだけだね」

「どうやらこのラインシティの魔戒騎士は、リュメと呼ばれる魔戒法師のもとへ行き、そこで指令を受けるようであった。」

「明日そこに案内するよ」

「今日は私たちが泊まるところがあるから、統夜も一緒に行きましょう」

「そうだな。それじゃあ、遠慮なく一緒に過ごさせてもらおうかな」

「流牙と莉杏は、このラインシティ某所にある使われていない建物を隠れ家として使っており、そこで寝泊まりをしていた。」

「2人は統夜をそこに案内し、その場所で眠ることになった。」

「統夜としても野宿をする予定だったので、2人の申し出はありがたかった。」

「そして、統夜たちは互いの世界の話や互いにどのようなホラーを狩ってきたなど武勇伝を語り合ってから、眠りについた。」



そして翌日、統夜は流牙と莉杏に連れられて、ラインシティ某所にある海の見える通りに来ていた。

「……なあ、流牙。もしかして、ここが昨日言ってたリユメ様とやらがいる場所に繋がってるのか？」

「ま、そんな感じかな。……見てな」

流牙はバイザーに覆われたままのザルバを目の前の壁にかざすと、魔法陣のようなものが出現し、これこそが魔戒法師であるリユメのいる「リユメの間」に繋がっている場所であった。

「さあ、統夜。行くわよ」

「あ、ああ」

流牙と莉杏が先にリュメの間へと入っていったので、統夜もそれを追いかける形でリュメの間へと入っていった。

中に入ると、何もない道をひたすらまっすぐ進んでいき、しばらく歩いたところにリュメの間はあった。

その様相は番犬所に酷似していたため、統夜は驚きのあまりキョロキョロと周囲を見回していた。

すると、この部屋の中央部分だけが高くなっており、そこに20代前半くらいの女性が立っていた。

そして、その女性を守るように付き人の秘書官らしき仮面の男2人が左右に展開していた。

女性がよく見える場所まで進んだ流牙と莉杏は、その女性に深々と頭を下げていた。統夜はこの瞬間、あの女性こそがリュメだと理解し、同様に頭を下げていた。

「……よく来たね。流牙、莉杏」

「はい、リュメ様」

リュメは穏やかな表情で流牙と莉杏に挨拶をすると、2人は簡潔に返事をしていった。「……おや？その魔戒騎士は見ない顔だね」

リュメは統夜を初めて見たため、興味津々と言いたげにジッと統夜を見ていた。

「……は、はい。おれ……私は白銀騎士奏狼の称号を持つ、月影統夜といいます。ここではない世界で魔戒騎士として活躍していたのですが、何故かこの世界に迷い込んでしまっています……」

「白銀騎士奏夜……。聞いたことない称号だね……。昨日、妙な気配を感じ取ったんだけど、きつとそれは統夜だったんだね」

昨日、リユメは統夜がこの世界に迷い込んだのと同じ時刻に妙な気配を感じ取ったのだが、統夜がこの世界に迷い込んだと聞き、そのことだろうと推測していた。

「統夜、ちよつとこつちに来てくれるかい？」

「え？」

まさかの言葉に統夜は戸惑って流牙と莉杏の方を見るのだが、2人は穏やかな表情で頷くだけだった。

統夜は戸惑いを隠せないまま、リユメの立つ高台の前に移動すると、統夜の足元の部分が変わると、リユメと同じ高さまで移動した。

「こ、こんな感じでよろしいでしょうか？」

「もつと近くまで来てくれるかい？」

「は、はあ……」

統夜はさらに戸惑いながらもさらに前に出ると、リユメの近くに立っていた。

「……これでもいいですか？」

「うん。大丈夫だよ」

リユメは穏やかな表情で笑みを浮かべると、リユメは両手で統夜の頬を触れると、自分の額を統夜の額にくっつけていた。

「!？」

突然の出来事に、統夜は驚きを隠せずにいた。

『ほお、これは……』

イルバはリユメが何をしているのかを理解しているようであるため、感嘆の声をあげていた。

「……統夜。お前は苦勞して魔戒騎士になったんだね……」

どうやらリユメは統夜の思念を読み取ったようであり、どのようにして魔戒騎士になったのかを理解したのであった。

「……それに、仲間たちと笑い合っているのが見えるよ……。統夜はこの子たちを守るために戦っているのかい？」

「……!?!?そうです。俺にとつてあいつらはかけがえのない存在ですから……」

唯たちの存在まで読み取られるとは思わなかったため、統夜は驚きを隠せなかったが、毅然と答えていた。

「……わかったよ。ありがとう、統夜」

リユメは統夜から離れると、統夜は何も言わずに一步下がり、足元が下がって元の状態へと戻っていた。

足元が元に戻るのを確認した統夜は、流牙と莉杏のもとへと戻っていった。

「……統夜。お前は信用出来る魔戒騎士みたいだ。元の世界に戻る間、私たちに力を貸してくれるかい？」

「もちろんです、リユメ様。俺は1日でも早く元の世界に戻りたいと思っていますが、それまではリユメ様の信頼に依ってみせます！」

統夜は、元の世界に戻る間だけではあるが、自分のことを信頼出来ると言ってくれたリユメのために動くことを決意した。

「ありがとう、統夜。期待しているよ！」

「はー！」

穏やかな表情でリユメは微笑んでおり、統夜は力強くリユメの言葉に応えていた。

「……それじゃあ、さっそくだけど、統夜の力を見たいから、この指令を受けてくれないかな？」

リユメがこのように宣言すると、赤い仮面を被ったリユメの付き人の1人が統夜に赤の指令書を渡していた。

統夜が魔導ライターを取り出すと、魔導火を放ち、指令書は消滅した。

すると、魔戒語で書かれた文章が浮かび上がってきた。

統夜はその文章を読み上げるのだが……。

「い、こいつは……」

統夜は最後まで文章を読み上げて魔戒語で書かれた文章は消滅したのだが、その内容に驚きを隠せずにいた。

「？統夜？」

「い、いえ……。実はこのホラー、元の世界で戦ったことがあります……」

「え!? そうなの!？」

「そういえば、昨日現れたアレグレウスも戦ったことがあるって言ってたよな?！」

今回の指令で戦うホラーと交戦経験があることに莉杏は驚き、流牙は昨日のホラーとの交戦経験があることを確認していた。

「ああ。まさか、2回連続で知ってるホラーが相手でびっくりしてるけどな……」

『ホラー、タイガードか……。初めて奏夜と出会った時に戦ったホラーだったな』

「？統夜、その奏夜っていうのは誰なんだい?！」

「はい。実は俺の世界には、俺と同じで15で魔戒騎士になった如月奏夜という俺の後輩騎士がいるんです。今回戦うタイガードは、その奏夜と初めて共闘した時のホラーな

んです」

『ま、お前さんはほとんど手を出してなかったがな』

「まあな。それは奏夜の成長に必要だと思っただし……」

「それで、タイガードってホラーはどんなホラーなんだ？」

「ああ。奴はかなりすばしっこくてそこが厄介だけど、そこさえなんとかすれば倒すのは容易だよ」

「そう……。それじゃあ、統夜のお手並みを拝見ね」

「ああ、任せてくれ」

「とりあえず、頼んだよ。統夜、流牙、莉杏」

「「はい！」」

こうしてリユメから指令を受けた統夜たちは、リユメに一礼をすると、リユメの間を後にして、ホラーを搜索するため行動を開始した。

※※※

統夜たち3人はイルバのナビゲーションを頼りにホラーを探していた。

気が付けば夜になっており、統夜たちは現在ラインシティ某所にある人気のない広場にいた。

「……イルバ、ここか？」

『ああ。かなりの邪気を感じるぜ。統夜、油断するなよ！』

統夜は魔法衣の裏地の中から魔戒剣を取り出すと、いつでも抜刀出来るようにしながら周囲を警戒していた。

すると……。

『……統夜！来るぞ!!』

イルバがこのように警告すると、虎のような姿をしたホラー、タイガードが現れれど、統夜を急襲していた。

統夜は冷静にタイガードの攻撃をかわすと、魔戒剣を抜いて一閃するのだが、素早い動きでかわされてしまった。

「……統夜！大丈夫か!？」

タイガードが出現したため、流牙は魔戒剣を取り出そうとしたのだが……。

「……大丈夫だ。ここは俺に任せてくれ！」

統夜は流牙や莉杏の力を借りずに、自分の力でタイガードを倒すつもりだった。

「……流牙。ここは統夜に任せてみましょう」

「……そうだな」

流牙は魔戒剣を取り出すのをやめると、タイガードは統夜に任せることにした。

タイガードは素早い動きで統夜を翻弄しようとしていたのだが、統夜は魔戒剣を構えるとそんなタイガードの動きを見極めていた。

(……奏夜はあいつの機動力を奪って倒していたが、そこまでする必要はないな……。あいつの動きは見切れる！)

どうやら統夜はタイガードの素早い動きを全て捉えており、攻撃を見切るのは容易だった。

そんなことなど知る由もなく、タイガードは素早い動きで統夜に接近し、爪による攻撃を繰り出すのだが、統夜は軽々と魔戒剣で受け止めていた。

そして反撃と言わんばかりに魔戒剣を一閃するが、タイガードにかわされてしまい、再び素早い動きで統夜を翻弄する。

しかし、これは全て統夜の計算通りだった。

「……っ！あのホラー、相当すばしっこいわね……」

「だけど統夜は冷静だよ。まるであいつの動きを全て捉えてるみたいだ」

「へえ……。それが本当だとしたら、やるじゃない、統夜」

タイガードの動きを見極めている統夜の実力を流牙は冷静に分析しており、莉杏はそんな統夜に関心していた。

タイガードは素早い動きで動き回りながら統夜に接近するが、統夜はタイガードがどこから攻撃を仕掛けてくるのかを予想することが出来た。

「……そっだ!!」

タイガードは統夜の右側から攻撃を仕掛けるのだが、それを見切っていた統夜は、魔戒剣をタイガードの脛に叩き込んだ。

その一撃を受けたタイガードは痛みのみならず、統夜はその隙に体勢を立て直していた。

「……なるほどね……。あの素早い動きも足が資本になってるから、そこを突いたって訳ね……」

「へえ、その発想はなかったから驚きだな……」

統夜の的確な攻撃に、莉杏と流牙は関心していた。

統夜もタイガードの機動力を奪って確実に仕留める戦い方だったのだが、奏夜の時とは違い、素早い動きを見極めた上でタイガードの足を狙って機動力を奪うという作戦で

あった。

「ぐ……グウウ……」

タイガードはゆつくりと立ち上がるのだが、統夜の一撃が効いており、得意の素早さは活かせそうになかった。

「……貴様の陰我、俺が断ち切る!!」

統夜はタイガードに向かってこう宣言すると、魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。その部分だけ空間が変化すると、そこから放たれた光に、統夜は包まれた。

すると、変化した空間から白銀の輝きを放つ鎧が現れると、統夜はその白銀の鎧を身に纏った。

こうして、統夜は白銀騎士奏狼の鎧を身に纏ったのである。

「白銀の鎧……」

「へえ、これが統夜の鎧か……」

統夜の鎧を初めて見た莉杏と流牙は、感心しながら白銀の輝きを放つ鎧に見入っていた。

「ぐ……グウウ……!」

統夜が鎧を召還するのを見て、タイガードは素早い動きをしようとするのだが、統夜の一撃が効いているのか、先ほどのスピードで移動することは出来なかった。

統夜は一気に決着をつけるためにゆっくりとタイガードへと向かっていった。

このままでは何もせずにはやられてしまう。

それを避けるためにタイガードは正面から統夜に向かっていき、爪による攻撃を繰り返すのだが、統夜はその一撃を鎧で受け止めていた。

そして、そのまま渾身の力で魔戒剣が変化した皇輝剣を一閃すると、タイガードの体は真つ二つに斬り裂かれた。

皇輝剣による一撃で斬り裂かれたタイガードは、断末魔をあげ、その体は陰我と共に消滅した。

「……」

統夜はタイガードが消滅したのを確認すると、鎧を解除し、元に戻った魔戒剣を青い鞘に納めていた。

タイガードを討滅したことを確認した流牙と莉杏は、統夜に駆け寄った。

「……統夜、あなた、思ったよりもやるじゃない。びっくりしたわ」

「そうだな……。俺よりも若いのに、統夜はかなり経験を積んでるみたいだな……」

統夜の戦い方はベテランの魔戒騎士と同じものだと言った流牙は感じていたため、その実力に驚いていた。

「……まあ、俺は色んな試練を乗り越えてここまで来たから……」

統夜は高校に通いながら様々な事件を解決しており、その経験が魔戒騎士として統夜を大きく成長させたのである。

「そうみたいだな……」

「ええ。統夜に聞かせてもらった話はとても興味深かったしね♪」

統夜は流牙や莉杏に自分が直面した事件の話をしたのだが、それを流牙や莉杏は興味深く聞いていた。

そのため、統夜が色々な試練を乗り越えたという言葉は理解出来たのである。

「……とりあえず、ホラーは倒したし、帰ろうか」

「そうね」

「そうだな」

タイガードは統夜によって討滅されたため、統夜たちは流牙と莉杏の隠れ家へと移動を開始した。

※※※

そんな統夜の戦いを遠くから見ている影があった。

——何だと!?あの小僧……。黄金騎士ではないのか!?

統夜の戦いをこの世ではないどこかで見えていたのは、統夜をこの世界へと送り込んだ魔獣であつた。

魔獣は、統夜を黄金騎士だと思い込んでいたため、統夜の正体に驚きを隠せなかつた。

——だが、奴から黄金騎士と同じ輝きを感じるのは事実……。この世界の黄金騎士と共に消し去らねばならぬ……。

魔獣は、統夜が黄金騎士ではないとわかつて、統夜のことを狙っており、それだけではなくこの世界の黄金騎士である流牙のことも狙っていた。

——もうじき我は復活を遂げる!!その時が貴様らの最後だ!!

魔獣は徐々に力を蓄えており、間もなく流牙たちのいる世界に現れようとしていた。そのため、魔獣は自身の復活に備えて力を蓄えていた。

「……ハッ!?!」

ここはラインシティから離れたところにある祭壇なのだが、この場所に、統夜をこの

世界へと送り込んだ魔獣が眠っていた。

この地を守っている小柄でツインテールの魔戒法師は、祭壇に起こっている若干な変化を感じ取っていた。

「このままでは魔獣、「ザジ」が復活してしまう……！ 奴は黄金騎士を狙う魔獣……！ 黄金騎士にこのことを伝えなければ……！」

自分の力では、ザジと呼ばれる魔獣の復活を食い止めることは出来ないため、黄金騎士である流牙にこのことを報告しなければと思っていた。

この魔戒法師は、流牙がラインシテイに知っていることを知っているため、魔戒法師はラインシテイへと向かった。

……統夜と流牙に待ち受ける激闘は、この魔戒法師との邂逅によって始まるということ、2人は知る由もなかった……。

……EPISODE 3に続く。

EPISODE 3 「法師～PRIEST」

統夜が自分のいる世界とは異なる世界に迷い込んでから、今日で3日目だった。

統夜はこの世界の黄金騎士である道外流牙と、その相棒である魔戒法師の莉杏のもとへ身を寄せていた。

統夜はこの日の朝、ラインシティの観光を兼ねてエレメントの浄化を行っていた。

この街はどこにいてもリユメの法力を感じ取ることが出来るが、エレメントの浄化はしっかりと行わなければホラーが出現してしまうからである。

「……はあっ!!」

統夜はあるオブジェから飛び出してきた邪気を、魔戒剣の一閃によって斬り裂いた。

「よしっ……。とりあえずはこれで全部かな?」

統夜は魔戒剣を青い鞘に納めると、イルバに残った仕事はないか確認を取っていた。

『ああ。残りの分は流牙がやってくれたみたいだからな。やるべきエレメントの浄化はこれで終わりだぜ』

流牙もエレメントの浄化を行っているおかげで、昼前には統夜のすべき仕事を終わら

せることが出来た。

「さてと……。腹減ったな……」

統夜は朝食はしつかりと食べたのだが、エレメントの浄化でそれなりに体力を使ったからか、空腹であり、それを証明するかのようにお腹が鳴っていた。

『……そういえば、流牙の奴がエレメントの浄化が終わったらラインシティの中央部あたりにあるリサイクルショップに来てくれて言っただけだったか？』

「確かに言っただけだ。でも、リサイクルショップに飯屋なんてあるんだろうか？」

『さすがにそれはないんじゃないのか？とりあえず、行ってみるぞ』

「ああ、わかったよ。イル……バ……」

統夜は素直にわかったと言おうとしたのだが、何かに気付いて口をつぐんでいた。

統夜の視線の先には、梓と似た容姿の人物がおり、その人物はどこかへと向かって姿を消していた。

『……おい、統夜。いったいどうしたって言うんだ？』

「いや……さつき梓とそっくりの奴を見かけて……。それでびっくりしてつい……」

『まあ、ここは俺たちの世界じゃないんだ。梓にそっくりな奴がいても不思議ではないだろ？』

「まあ、確かにそうだけども……」

『ほら、とりあえず行くぞ。既に流牙や莉杏が待つてるだろうしな』

「わかってるって」

統夜は梓そっくりの人物が気になっていたが、とりあえず流牙と莉杏が待つていると思われるラインシテイ中央部あたりにあるリサイクルショップへと向かった。

歩くことおよそ10分。

統夜は流牙の指定したリサイクルショップの近くまで来ていた。

「ラインシテイの中央部ってだいたいここだよな？ だったらここら辺だと思っただけ……」

統夜はキョロキョロと左右を見ながらリサイクルショップらしき場所を探していたのだが……。

「……ん？」

再び何かを発見した統夜は足を止めてその方角を向いていた。

『統夜……。今度は何なんだ？』

何かを見つけて再び足を止めた統夜に、イルバは呆れながら確認を取っていた。

「あの屋台……。どっかで見たことがあるような気がするんだよなあ……」

統夜が見つけたのは目立つ様相の屋台であり、「ケバブ販売」と旗を立てられていた。
「ケバブ……。アハハ……。まさかな……」

ケバブ販売の旗を見た瞬間、思い当たる節があるようであり、統夜は苦笑いをしていった。

すると……。

「……あつ、来た来た。おい！統夜!!こつちこつち!!」

屋台の前に置かれているテーブルの所に流牙と莉杏が座っており、統夜の姿を見つけた流牙はブンブンと手を振っていた。

流牙と莉杏の姿を見つけた統夜は、2人が座っている場所へと移動した。

「……なあ、流牙。リサイクルショップに来て言っただけか？」

「ああ、言ったよ。リサイクルショップはあそこだしな」

屋台に隠れて見えにくかったのだが、流牙の指定したりサイクルショップはすぐそこにあつた。

「……このケバブ屋さんはおそこの店のマスターが経営してるのよ」

「へえ、ケバブにリサイクルショップとは儲かってるんだな……」

「さあて、それはどうだかね」

「このマスターとは知り合いなのか、流牙は苦笑いをしていた。

「すると……」

「おうおう、流牙よお。ウチの店は儲かってるに決まってるだろ？」

「この店のマスターと思われる60代くらいの男性が、統夜たちの前に現れたのだが……。」

「……!? あ、あなたは!!」

統夜はマスターの顔を見て驚きを隠せないのか、目をパチクリとさせていた。

「……D・リング。統夜のこと知ってるのか？」

「統夜のアマリの驚きのように、流牙はこの店のマスターであるD・リングに確認を取っていた。」

「あ? 俺は知らねえよ。こんな坊主は。流牙の知り合いか？」

「この世界のD・リングは統夜の世界にいたケバブ屋のマスターとは違うため、D・リングが統夜のことを知らないのは当然であった。」

「ああ。つい最近知り合ったんだよ。どうやら統夜は別の世界から迷い込んできたみたいなんだよ」

「ほお、別の世界ねえ……。おい、坊主。お前のいる世界には俺のそっくりさんがいるのか？」

「は、はい。本当に見た目もそっくりで、ケバブの移動販売をしてたんです」

「なるほどな……。で、そのケバブは美味かったのか？」

「は、はい……。美味しかったです……」

D・リングは統夜が別の世界の人間と知っても特に気にする様子はなく、統夜の世界のD・リングの話の聞き出ししていた。

「そりゃあ……。負けてられないな……。おい、坊主！ウチのケバブ、食ってきな！」

どうやら統夜の世界のD・リングに負けたくないと思っただのか、D・リングは統夜にケバブを振る舞おうとしていた。

「……母ちゃん！特性ケバブ、一丁な！」

D・リングは屋台の方へ移動すると、店番をしている女性にケバブを作るよう頼んでいた。

すると女性は……。

「……クツパ嫌いでしょ!!」

女性は意味不明な事を口に出すと、せっせとケバブを作り始めたいた。

「……アハハ……。あの人もいたんだな……」

「へえ、統夜の世界にはD・リングだけじゃなくてユキヒメもいるのね……」

「2人とも自分の世界で会った人と瓜二つだから本当に驚いているよ」

この世界と自分の世界。どちらの世界にも同じ人物が同じようなことをしているため、統夜は驚きを隠せなかった。

統夜たちがこのような会話をしているうちに、ケバブが出来上がったようであり、D・リングが完成したケバブを統夜のところに持ってきていた。

「……おまつとさん。ささ、食ってみなよ」

「はい。それじゃあ、さつそく……」

ケバブが統夜の前に置かれると、統夜はケバブを一口頬張るのだが……。

「……!!う、美味しい!!この前食べたケバブよりも!」

統夜の食べたケバブは予想以上に美味だったからか、統夜は驚きのあまり目を大きく見開いていた。

「そうだろうそうだろう。ウチのケバブは、どこの店にだって負けないぜ」

統夜が美味しそうにケバブを頬張るのを見ていたD・リングは、嬉しかったのか、ドヤ顔をしていた。

「確かに、俺もさつきケバブを食べたけど、すつごく美味かったんだよな」

「ええ。ユキヒメ、本当にケバブ作りの腕が上がったわね」

どうやら流牙と莉杏は、統夜を待っている間に既にケバブを食べたようであり、莉杏はケバブを作ったユキヒメの腕を褒めていた。

「当たり前だろう？何たってウチの母ちゃんなんだからな」

「……クツパ嫌いでしょ!!」

ユキヒメはまたしても何を言っているのかよくわからなかったが、莉杏に褒められて嬉しいのか、誇らしげな表情をしていた。

統夜は予想以上にケバブが美味しかったからか、食が進み、あつという間にケバブを平らげてしまったのである。

「……と、統夜。もう全部食べちゃったのか!？」

統夜が予想以上に早くケバブを完食したことに、流牙は驚いていた。

「アハハ……。ケバブが思ったよりも美味くてつい……」

「おうおう。嬉しいことを言ってくれるじゃねえか!」

ここまで美味しそうにケバブを食べる客はなかなかいないからか、D・リングは嬉しそうにしていた。

「とりあえず、ご飯は終わったし、しばらくはここでのんびりしようか」

エレメントの浄化は午前中のうちに終わっているため、統夜たちはしばらくの間はここで休憩しようと考えていた。

しかし、ザルバが何かを伝えたいようであり、流牙はザルバのバイザーを開いて喋れる状態にした。

『……流牙。どうやらのんびりしてる暇はないようだぞ?』

「え?もしかして、リュメ様からの呼び出しか?」

『ああ、そういうことだ』

リュメから呼び出しがかかってしまったため、休憩はお預けとなってしまうた。

「……リュメ様と呼んでるなら仕方ないよな」

「そうね。行きましょう、流牙、統夜」

「「ああ!」」

こうして、D・リンゴの経営するケバブ屋を後にした統夜たちは、急いでリュメの間へと向かうのであった。

※※※

「……3人とも、すまないね。急に呼び出してしまって」

「いえ、気にしないでください」

統夜たちが番犬所へ到着すると、急に呼び出したことに対してリュメは申し訳なさそうにしており、莉杏はそんなリュメの気遣いに感謝していた。

「リュメ様……。もしかして、指令ですか？」

「まあ、そんな感じだね。……指令と言つても、普通のホラーが相手ではないんだけど……」

「普通のホラーではないとは？」

「ああ……。実は、ここ最近、このラインシティから少し離れたところにある祭壇に邪気が集まっかけていてね、このままではとある魔獣が復活してしまいそうなんだよ」

「とある魔獣とは？」

「それは……。そのことを伝えに来てくれた魔戒法師から話を聞くといいよ」

「魔戒法師……。ですか？」

「……。ああ、彼女はそこにいるよ」

どうやらリュメの話していた魔戒法師はすでにこの場に来ているようであり、その魔戒法師は統夜たちの前に姿を現していた。

その魔戒法師は小柄な体型で、ツインテールが特徴の魔戒法師なのだが、その魔戒法師を見た統夜は、驚きのあまり目を大きく見開いていた。

「……………あ……………あず……………さ……………!?!」

「!?!」

「統夜……………。この子のことを知っているの?」

「まあな……………」

統夜たちの目の前に現れた魔戒法師は軽音部の仲間であり、統夜の恋人である中野梓と瓜二つだった。

「梓、お前、何でこんなところに?それに、お前が魔戒法師だなんて……………」

まさかの展開に困惑していた統夜は梓そっくりの魔戒法師に近付くのだが、梓そっくりの魔戒法師は、鋭い目付きで統夜のことを睨みつけると……………。

「貴様……………。一体何者だ!何で私の名前を知っている!!」

梓そっくりの魔戒法師は、自分の名前を知っている統夜を訝しげに睨みつけて、魔導筆を突き付けていた。

「何でって……………。お前は俺と同じ軽音部で、俺の恋人だろう?」

「軽音部?恋人?一体何の話だ!!」

梓そっくりの魔戒法師にしてみれば、統夜の言葉は訳のわからないものであり、今にでも統夜に襲いかかりそうになっていた。

『……………おい、統夜。落ち着け!!こいつは梓にそっくりなだけで、こいつは別人だ!』

統夜は困惑しているため、イルバがそんな統夜をなだめていた。

「そ、そうだよな……。ここは俺の世界じゃないんだから、梓のそっくりさんがいたっておかしくはないよな……」

統夜は目の前にいる梓は別人だというのは頭ではわかっていたのだが、それを改めて実感した統夜は、寂しさを覚えたのか、しょんぼりとしていた。

「俺の世界じゃないって……。お前はいつたい……」

「ごめんね。統夜は私たちの世界とは違う世界からやってきた魔戒騎士なの」

「……そうだったのか……」

梓そっくりの魔戒法師は、統夜の事情を理解したところで、突き付けていた魔導筆を降ろしたのであった。

「……へえ、統夜の恋人はそのアズサに似てるんだ。ちよつと会ってみたい気はするね」

統夜の知られざる情報を1つ知ったりリュメは、穏やかな表情で笑みを浮かべていた。

「……リュメ様。彼女が先ほど言っていた魔戒法師ですか？」

「ああ。アズサの家は代々とある魔獣の封印が解けないように、その魔獣が眠る祭壇を守っているんだよ」

リュメの紹介通り、梓にそっくりな魔戒法師であるアズサは、とある魔獣が眠る祭壇

を守る一族である。

「君がわざわざここに来たってことは……」

「……ああ。魔獣「ザジ」が復活しようとしているんだ」

「……！やっぱりザジだったか……」

統夜はアズサからザジの名前を聞いて、少しは驚くのだが、自分がこの世界に飛ばされる前の現象を思い出し、やはりという感情にもなっていた。

「……!?お前、ザジのことを知っているのか!?!」

まさか、統夜がザジの存在を知っているとは思わなかったからか、アズサは目を大きく見開いて驚いていた。

「ああ。俺は違う世界から来てるからな。俺の世界にいる黄金騎士からザジの話は聞いたことがあるんだよ」

「……そうだったのか……。お前の世界にもザジが……!?!」

この世界だけではなく、統夜のいる世界にもザジがいることに驚きを隠せなかった。

「……なあ、2人の言っているザジっていうのはホラーのことなのか?」

「いや、ザジっていうのは厳密に言えばホラーではないんだ」

「ああ、そいつの言う通り、ザジはホラーじゃない。時空を超えて存在する邪悪な思念のことというんだ」

「邪悪な思念……」

『……奴は黄金騎士を目の敵にしており、黄金騎士の絶滅を目論んでいる』

「!?ということは俺が……?」

『ああ。奴が復活したならば確実にお前のことを狙ってくるだろうな』

「……そういうことか……」

黄金騎士をつけ狙う魔獣が存在していることを初めて知ったため、流牙は驚きを隠せずにいた。

「……俺がこの世界に飛ばされた時もザジの力の片鱗を感じたんだ」

「!?そうなのか!?!」

『ああ。恐らく俺たちをこの世界に飛ばしたのは、この世界のザジってことになるだろうな……』

統夜とイルバは、自分たちをこの世界に飛ばした犯人が誰なのか確信を持つことができた。

しかし、ここで一つの疑問が浮かび上がってくる。

「ねえ、そのザジって魔獣は流牙みたいな黄金騎士を狙ってるんでしょ? 何で黄金騎士じゃない統夜をこの世界に飛ばす必要があったのかしら?」

統夜は黄金騎士ではないため、統夜をこの世界に飛ばしたことが、莉杏は不可解に

思っていた。

その時、何かを感じ取った流牙は、ザルバのバイザーを外し、ザルバが喋れるようにしていた。

『……そのザジという奴は統夜を黄金騎士と間違えたのではないのか？』

『それは俺様もそう思う。黄金騎士を目の敵にするザジは、俺らの世界とこの世界の牙狼を一網打尽にしようと考えたんだろうな』

「……」

ザルバの意見にイルバが賛同しており、そんな光景を初めて見た統夜は驚いていた。自分の世界ではまず見られない光景だからである。

『……おい、統夜。どうしたんだ？そんな驚いた顔をして……』

「いや……。イルバがザルバの意見を素直に聞くななんて珍しい光景だったから……いな」

『おいおい。お前さんの世界の俺様とどれだけ仲が悪いんだよ……』

統夜の世界のザルバとイルバが喧嘩ばかりだとは知らないこの世界のザルバは、苦笑いをしていた。

「……どちらにしても、ザジは捨て置けない存在だ。奴は時間や空間を操ることの出来る。それに、奴は牙狼の存在を消し去るためなら手段を選ばないだろう……」

「……そうなるよこのラインシティにも被害が及びそうだね」

「リユメ様。このままでは間違いなくザジは復活します。被害が広がる前にザジを討滅するために、彼らの力を借りたいのです」

アズサがこのラインシティを訪れたのも、黄金騎士である流牙にザジ討滅の協力をお願いするためだった。

まさか、異世界の魔戒騎士がザジについて知っているとはいえないもよらなかったのだが……。

「……もちろん、そうするつもりだよ、アズサ。これは捨て置けない問題だからね……。流牙、莉杏、統夜。お願いできるかい？」

「もちろんです、リユメ様！」

「そのザジっていう奴が俺を狙うのなら、断る理由もないしな」

「俺がこの世界に飛ばされたのも、流牙や莉杏と共にザジを倒すためなのかもしれない。だから、俺も協力させてください！」

莉杏と流牙は、リユメの頼みを二つ返事で聞いており、統夜は、逆に自分も協力したいと申し出ていた。

「……すまない。ザジを討滅するために、お前たちの力を貸してくれ！」

統夜たちの協力を得られることを知ったアズサは、申し訳なきように頭を下げている。

た。

「頭を上げなよ。世界は違うし、別人なのはわかってるけど、梓のためなんだ。俺は力を貸すぜ」

「……………っ、あ、ありがとう……………／／／／／」

統夜のストレートな言葉が恥ずかしかったのか、アズサは頬を赤らめて恥ずかしがっていた。

「……………これからよろしく頼む。流牙、莉杏。…………と、統夜…………」

アズサは統夜のことを意識してしまったのか、恥ずかしがっていたのである。

「…………アハハ…………何というか…………」

「…………統夜って、天然な女タラシよね…………。本人は気付いていないみたいだけど…………」

『…………わかってくれるか、お前ら…………』

「?」

流牙と莉杏は、天然ジゴロな統夜の言動に苦笑いをしており、イルバはそんな統夜の理解をありがたく思っていた。

そして、統夜は言葉の意味がわからず、首を傾げていた。

「…………お、オホン!!…………と、とりあえず、頼んだよ。みんな!」

「「「はい!!」」」

統夜たちはリュメに一礼をすると、リュメの間に後にした。

そして、ザジが復活してしまった場合、ザジを討滅するために、ザジが封印されている祭壇へと向かうことになった。

……魔獣、ザジは復活のための力を十分に蓄えてしまっているため、ザジの復活は近い。

そのため、統夜たちとザジとの戦いは間もなく始まるのであった……。

……EPISODE 4に続く。

E P I S O D E 4 「暗雲～DARKNESS～」

統夜が自分の世界から流牙たちがいる世界に飛ばされたのは、黄金騎士を絶滅させようとしている魔獣、ザジの仕業であることが判明した。

ザジの封印が解けぬよう祭壇を守っていた魔戒法師のアズサは、統夜たちに協力を要請するのだが、その容姿は、統夜の恋人でもある中野梓と瓜二つであった。

そんなアズサに統夜は驚くのだが、すぐに世界が違うのだから、別人であると気付くのである。

しかし、別人だとわかっていても統夜はザジを倒し、アズサを守ろうと心に誓うのであった。

統夜たちは、ラインシティを後にすると、ザジが封印されている祭壇へと向かっていった。

「……なあ、アズサ。ラインシティを離れてそれなりに経つけど、祭壇は遠いのか？」

「ああ、あと1時間は歩けば着くとは思うが」

「ふーん、確かに遠いは遠いけど、思ったほど遠くはないよな」

「そうかもしれないな」

統夜たちはこのように会話をしながら祭壇へと向かっていった。

「……なあ、統夜」

「ん？どうした、アズサ？」

「……お前の世界にいる私は……どんな奴なんだ？」

「あつ！それは俺も気になるな！」

「そうね。だって、統夜の彼女なんですよ？」

アズサは純粹に気になってこの質問をしたのだが、統夜の色恋事情が聞けると判断した流牙と莉杏は、ニヤニヤしながらその話に乗っかっていった。

「ちよっ!?!流牙と莉杏まで!!」

アズサはともかくとして、流牙と莉杏は統夜のことをからかっていることは統夜も気付いており、統夜は顔を真っ赤にしていた。

「クスツ、可愛い反応するじゃない。統夜もやっぱり年相応の坊やよね♪」

「う、うるさいな！」

流牙よりも莉杏の方が統夜をからかっており、統夜は顔を赤くしたまま、プイツとそっぽを向いていた。

「す、すまない。話をするのが嫌ならこの話はやめるのだが……」

「クスツ、大丈夫よ、アズサ。統夜はただ、恥ずかしくて照れてるだけなんだから♪」

「……………そうなのか？」

『ああ、ここまで照れてる統夜を見るのも久しぶりだぜ』

統夜と長いこと一緒にいたイルバがこう言うのだから、どうやら間違いないようだ。

「……………と、とりあえず！話せばいいんだろ？話せば!!」

これ以上からかわれるのが耐えられないからか、統夜は早々に梓のことを語り始めることにした。

「……………俺の世界にいる梓は、俺の通っていた学校の後輩で、同じ軽音部だったんだ」

「学校？お前は魔戒騎士なのに学校なんか通っていたのか？」

「まあな。俺の所属していた番犬所の神官が薦めてくれてな。そのおかげで、俺は守りし者とはなんなのかを知る事が出来たんだよ」

「……………俺は統夜の戦いぶりを見る限り、その言葉に偽りはないと思うけどな」

流牙は、統夜と知り合ってから間もないのだが、統夜が心身共に一流の魔戒騎士であることを肌で感じる事が出来た。

「なるほどな……………。守るべきものがあるから、統夜は強いということなのか」

「そうは言っても俺はまだただけどな」

統夜は卒業式の翌日に、自分の世界の黄金騎士である冴島鋼牙と互角の戦いを繰り広げたのだが、それでも統夜は自分が未熟だと思っていた。

「……なるほど、お前の世界の私のことはまだわからないが、彼女はお前のそんなひたむきなところに惚れたのかもしれないな」

アズサもまた、統夜と知り合ったばかりなのだが、統夜の世界の梓が統夜に惚れたのも何となくわかる気がしていた。

「それでな、俺の世界にいる梓は、真面目で、一生懸命で……。それに、周りの気配りも出来る優しい子だよ」

統夜は、自分の世界の梓がどんな人間なのか、簡単に説明していた。

「……そうか。私とは全然違うのだろうな……」

「そんなことはないけどな。そりゃ、喋り方や俺の呼び方は違うからそこは戸惑ってるけど、俺の知ってる梓とお前の根本は似てると思うよ」

「……!?か、からかうな!／＼／＼」

統夜のストレートな言葉が恥ずかしかったからか、アズサは顔を真っ赤にしていた。

「……それにしても、統夜の世界にいる梓は統夜に愛されているのね。彼女のことを語るあなたはとても優しい眼をしていたもの」

「統夜、早く元の世界に帰って、彼女と会えるといいな」

「みんなには悪いけど、そのつもりだよ。だからこそ、俺はザジを倒す!……みんなと一緒にな」

統夜としても早く元の世界に戻りたいと思っていたが、その前にやるべきことがあるため、魔戒騎士としての使命を果たそうと考えていた。

それを聞いた流牙、莉杏、アズサの3人は、無言で頷いていた。

こうして、統夜たちは話をしながらザジの眠る祭壇へと向かっていった。

そしておよそ1時間ほど歩き、祭壇の近くまで来たその時であった。

『……統夜！かなりの邪気を感じるぜ。どうやら、奴さんは近いようだ』

イルバがザジの気配と思われる邪気を探知したため、それを統夜に伝えていた。

その直後、ザルバが何かを伝えようとしていることを感じた流牙は、ザルバのバイザーを上げて、ザルバが喋れるようにしていた。

『それだけじゃない。ホラーの気配も感じるぜ。お前たち、油断するなよ！』

「……なるほど、まだ昼で、ホラーの出てくる時間じゃないけど、この邪気の濃さが、ホラーを呼び寄せてるんだな」

通常のホラーは、夜に陰我のあるゲートから現れるのだが、ザジの黄金騎士に対する憎悪は、相当な邪気を放っており、そこからホラーが出現させたようであった。

「っ!?なんて数のホラーだよ!」

「恐らくはザジが復活したんだ。奴の陰我がこれだけのホラーを引き寄せたのだろう」

統夜は多くのホラーが現れたことに驚いており、アズサはこれだけのホラーが現れた

要因を冷静に分析していた。

「とりあえず、こいつらを蹴ちらさないと先には進めないわ」

「そうだな……。まずはこいつらを片付けるぞ！」

莉杏と流牙がこう促すと、流牙と統夜は魔戒剣を構え、莉杏とアズサは魔導筆を構えていた。

それだけではなく、莉杏の手にはアキトのとは形の異なる魔戒銃らしきものが握られていた。

「!?それは……。魔戒銃か!？」

「あら、これを知っているの?」

「俺の仲間の魔戒法師がそれとは違う形だが、魔戒銃を使っていたんだよ」

「そう……。一度その魔戒法師に会ってみたいわね」

同じ魔戒銃を使う者がどんな人間なのか、莉杏は興味津々だった。

「……来るぞ!!」

流牙がこのように警告をすると、多くの素体ホラーが統夜たちに向かってきていた。

「……はあっ!!」

統夜と流牙は同時に魔戒剣を一閃し、素体ホラーを真つ二つに斬り裂いていた。

そして、アズサは法術を放って素体ホラーを倒し、莉杏は魔戒銃と魔導筆を使い分け

てホラーを倒していた。

「流牙！なかなかなかやるな！」

「統夜……お前もな！」

統夜と流牙は、素体ホラーを倒しながら、互いの力を認め合っていた。

4人とも魔戒騎士や魔戒法師としてはかなりの力を持っているようであり、次々と素体ホラーが倒されていった。

かなりの数だった素体ホラーは4人の奮戦により程なく全滅したのだが、再びどこからか多くの素体ホラーが出現し、統夜たちに襲いかかってきた。

「!?また来やがった！」

「しかもさつきより数が多いわ！」

統夜たちは素体ホラーを迎撃していたのだが、先ほどよりも数が多く、少しだけ倒すのに手こずっていた。

その原因は……。

「くそっ！倒しても倒してもキリがないぞ！」

素体ホラーを倒しても、またどこからか素体ホラーが現れるため、数が減らないからである。

「こうなったら鎧を召還して一気に決着をつけるか？」

統夜は鎧を召還してホラーを倒すことを考えていた。
しかし……。

「ダメよ！こんなところで統夜や流牙の体力を消耗させる訳にはいかないわ」

「莉杏の言う通りだ！ザジは並のホラーとは比べものにならない。こんなところで全力を出して倒せる相手じゃないぞ！」

莉杏とアズサが、統夜の意見に反対していた。

それは、これから戦うであろうザジに備えてのことだった。

「それじゃあどうすりゃいいんだよ!?このままじゃジリ貧だぞ！」

「確かにそこは統夜の意見に賛成だよ」

統夜だけではなく、流牙もまた、この状況を良しとしていなかった。

「……統夜！流牙！ザジの祭壇はこの先だ！お前たちは先に行け！ここは私と莉杏で引き受ける！」

このホラーたちを越えればザジがいると思われる祭壇はすぐそこなため、アズサは統夜と流牙を先に行かせようとしていた。

「そうね。統夜！流牙！あなたたちは先に行きなさい！ここは私たちに任せて！」

「っ！だ、だけど！」

「私たちのことなら心配しないで。私とアズサの実力は知ってるはずでしょ？」

「心配するな。私たちは死ぬつもりはない。速やかにこいつらを蹴散らしてすぐに合流するぞ!」

「そういうこと。統夜!流牙!早く行って!」

「……統夜。行くぞ!」

「そうだな……。2人とも、死ぬなよ!」

統夜と流牙は素体ホラーの相手を莉杏とアズサに任せることにして、ザジがいると思われる祭壇へと向かっていった。

ホラーたちはそんな2人を逃さないために襲いかかろうとするが、2人の行く手を遮るホラーは、優先的に莉杏とアズサによって倒されていった。

「あんたたちの相手は私たちよ!」

「2人の邪魔はさせない!」

こうして、莉杏とアズサの魔戒法師タッグが、素体ホラーの軍団に戦いを挑んだ。

アズサの放つ法術は強力であり、その法術により次々とホラーを蹴散らしていった。

そして、莉杏の法術はアズサの法術には劣るものの、魔戒銃と組み合わせることにより、アズサ以上の火力を引き出すことが出来ていた。

莉杏とアズサ。この2人は、魔戒法師の中ではトップクラスの實力の持ち主であるということが明らかになった。

これだけの攻撃を繰り返しても、未だに素体ホラーの数は減らなかつた。
「アズサ。一気に蹴散らすわよ！」

「無論だ！早くこいつらを倒して、統夜たちと合流しないと！」

再び迫り来る素体ホラーを見据えた莉杏とアズサは、魔戒銃や魔導筆など、自分の武器を構えると、さらに攻撃が激しくなり、素体ホラーたちが蹴散らされていった。

「……………いつはとっておきよ!!」

莉杏は、魔導筆を構えると、とある術を素体ホラーの群れに放ち、その術によって放たれた光の塊に向けて、魔戒銃を発砲した。

魔戒銃の弾が着弾すると、光の塊から大きな爆発が起こり、素体ホラーたちは次々と消滅していった。

「…………やるな、莉杏。それでは、私もとっておきを見せるとしよう！」

莉杏の本気に焚きつけられる形となったアズサは、精神を集中させると、魔導筆で魔法陣を描いていた。

そしてアズサは魔導筆をその魔法陣に突きつけた。

すると、その魔法陣から鳳凰のような鳥が出現すると、その鳳凰のような鳥は、素体ホラーを焼き払っていった。

「へえ……………」

莉杏もまた、アズサの本気を肌で感じ取っており、感心していた。

アズサはザジが封印されている祭壇を守る魔戒法師であるため、それだけに留めておくのは勿体無いと思ったからである。

そんな2人の活躍もあり、素体ホラーたちは全滅し、今度は増援もないようであった。

「…………ふう。ずいぶんと時間がかかってしまったわね」

「そうだな…………。統夜たちのもとへと急ごう！」

素体ホラーたちを蹴散らした莉杏とアズサは、先にザジのもとへと向かっている統夜と流牙の2人と合流するためにザジが封印されていた祭壇へと向かっていった。

※※※

そしてその頃、統夜と流牙はザジの封印されていた祭壇に到着していた。

「…………イルバ。ここが例の祭壇だよな？」

『ああ。とてつもなく大きな邪気を感じるぜ。統夜、気を付けろよ』

『流牙。お前も油断するな。恐らくザジは手強いぞ!』

『大丈夫だ。統夜と2人なら負けはしないさ!』

流牙は、共に戦っている統夜の力を信じているため、誰が相手だろうと負ける気はしなかった。

流牙がそのような態度をとっていると……。

『クッククック……』

不気味な笑い声が祭壇から響き渡ると、2人の前に、ホラーのような外見をした魔獣が姿を現していた。

「……貴様が噂のザジって訳か!」

『その通りだ!黄金騎士の系譜を受け継ぎし者よ……』

ザジは不敵な笑みを浮かべながら、流牙のことを睨みつけていた。

『そして貴様をこの世界に呼んだのは最大の誤算だったな……。黄金騎士ではなく、白銀騎士の系譜を受け継ぎし者よ!』

続けてザジは、統夜のことを睨みつけていた。

「やっぱり貴様が俺をこの世界に呼んだんだな……」

『その通りだ!俺は2つの世界の黄金騎士をまとめて始末するつもりだった。貴様をこ

の世界に呼んでしまったのは、貴様から黄金騎士と似たオーラを感じたからだ!」

「どうやらザジは、統夜を黄金騎士と勘違いをして、この世界に呼び寄せてしまったようであった。

『その貴様がまさか、白銀騎士の系譜を受け継ぎし者とはな。白銀騎士も、俺にとつては忌々しき系譜。この世界には存在しないが、まさか、別の世界にはいたとはな……』

ザジの説明通り、流牙の世界には統夜と同じ白銀騎士奏狼の称号は存在していない。

正確に言うくと、存在はしていたのだが、その系譜はかなり昔に途絶えてしまったのだ。

この世界には奏狼の称号はないと知り、統夜も流牙も驚いていた。

『だが……。黄金騎士の系譜と共に、白銀騎士の系譜も今ここで消し去ってやる!』

「ふざけるな!俺はお前を倒す!生きて元の世界に帰らなきゃいけないからな!」

統夜は速やかにザジを討滅し、そのまま元の世界で自分を待っている梓のもとへ帰ろうと本気で思っていた。

『くだらないことを……。来い!!』

「行くぞ、統夜!奴を倒すんだ!」

「もちろんだぜ、流牙!俺たちならそれが出来る!」

統夜と流牙はそれぞれの魔戒剣を構えると、ザジを睨みつけていた。

そして、2人はザジに向かっていった。

こうして、2人とザジとの戦いの火蓋は切って落とされたのであった……。

……E P I S O D E 5 に続く。

E P I S O D E 5 「希望～HOPE～」

自分のいる世界とは違う世界には飛ばされた統夜は、その世界の牙狼である道外流牙と、その相棒である魔戒法師、莉杏と出会う。

さらに統夜はこの世界を脅かす魔獣であるザジが復活しようとしていることを知り、そのザジの祭壇を守っていた魔戒法師とも出会う。

その魔戒法師はなんと、統夜の恋人である中野梓と瓜二つの魔戒法師、アズサであった。

統夜、流牙、莉杏、アズサの4人はザジ討伐へと向かっていき、その途中、素体ホラーの大群と遭遇する。

その数は多かつたため、莉杏とアズサが素体ホラーたちを倒す役割を引き受け、統夜と流牙はそのままザジのもとへと向かっていった。

祭壇に到着した2人は、今回の事件の元凶であるザジと遭遇した。

ザジの目的は、黄金騎士の系譜の抹消である。

ザジは統夜が牙狼と似たオーラを放っていると感じたため、間違えてこの世界に呼び寄せてしまったのだが、統夜が白銀騎士奏狼の称号を持つ魔戒騎士と知ると、統夜にも

狙いを定めていた。

「どうやらザジは黄金騎士だけではなく、白銀騎士も目の敵にしていたのだが、流牙の世界の奏狼の系譜は既に途絶えていた。」

別の世界にて生き残る奏狼の系譜を断つため、ザジの魔の手が伸びようとしていたが、統夜と流牙はそんなザジを倒すために向かっていった。

「……はあっ!!」

統夜と流牙は同時に魔戒剣を一閃するのだが、ザジは両手を使って2人の攻撃を防ぐ。

すかさずザジは反撃と言わんばかりに衝撃波を放っており、それを受けた2人は吹き飛ばされてしまった。

しかし、統夜も流牙もすぐに体勢を整えており、再び魔戒剣を構えてザジを睨みつけていた。

「はあああああああ!!」

統夜は負けじとザジに向かっていき、魔戒剣を一閃するのだが、これもまた、ザジに防がれてしまう。

「愚かな……。同じ攻撃がこの俺に通用すると思うなよ!」

懲りずに同じ攻撃を仕掛ける統夜にザジは呆れており、ザジは両手に備え付けられて

いる爪と剣による攻撃を仕掛けた。

剣による攻撃は魔戒剣で防ぐことは出来たのだが、爪による攻撃が統夜に迫る。

そんな中、統夜は咄嗟に魔戒剣の鞘を取り出すと、鞘を巧みに使つてザジの爪による攻撃を防いでいた。

「へえ、鞘をこんな風にするのか」

『なかなか面白い戦い方をするもんだな、あの小僧は』

鞘を巧みに使う統夜の戦い方に、流牙とザルバは感心していた。

「よし、俺だつて！」

流牙は1度魔戒剣を鞘に納めると、少しだけ魔戒剣を抜刀し、また鞘に納めた。

すると、魔戒剣の鞘から複数の刃が飛び出してきた。

「……統夜！避ける！」

流牙は統夜にこう警告をしてから鞘に入った魔戒剣を振るうと、そこから複数の刃が飛び出してきた。

統夜はザジを弾き飛ばすと横つ飛びをして回避をしたため、流牙の放った刃がザジに直撃した。

「……!?飛び道具？」

『ほお、魔戒剣の鞘に仕込み刃とは……。これは面白いぜ』

流牙の魔戒剣の鞘に隠されたギミックに統夜は驚いており、イルバは感心していた。「おのれ……！忌々しき騎士どもめ……。俺の本当の力で、貴様らを葬り去ってやる！」ザジは統夜と流牙の2人を睨み付けると、精神を集中させていた。すると、ザジの体は徐々に大きくなっており、その体は先ほどの倍になっており、背中には羽が生えてきた。

ザジの体が変わったのと同時に、その場の空間が変化しており、未知の空間へと変化していた。

空間が変化したことに2人は驚くのだが……。

「そうはさせるか……行くぞ、統夜！」

「ああー！」

そんなことには負けじと、流牙と統夜は互いに顔を見合わせると頷き合っていた。

そして、2人は同時に魔戒剣を高く突き上げ、円を描いた。

円を描いた部分だけ空間が変化し、2人は円から放たれる光に包まれていた。

すると、それぞれの円から黄金の鎧と白銀の鎧が現れると、流牙は黄金の鎧を身に纏い、統夜は白銀の鎧を身に纏う。

こうして、流牙は黄金騎士牙狼の鎧を身に纏い、統夜は白銀騎士奏狼の鎧を身に纏ったのであった。

「…………行くぞー！」

「ああー！」

流牙は牙狼剣を構え、統夜は皇輝剣を構えると、そのままザジに向かっていく。

ザジは2人が迫ってくる前に強力な衝撃波を放っており、2人はその衝撃波によつて吹き飛ばされてしまった。

「くっ…………！」

「何て力だ…………！」

ザジの衝撃波の強さに統夜と流牙は驚いていたが、どうにか体勢を整えていた。

「消え去れ！忌々しき騎士どもよ!!」

ザジは素早い動きで統夜と流牙に接近すると、腕に備え付けられた爪と剣を振るい、統夜と流牙を何も無い空間へと吹き飛ばしたのであった。

「くっ…………！」

『おい、2人とも！どうか這い上がれ！さもなければこの空間から出られなくなるぞ』
統夜と流牙は勢いよく落ちていき、このままでは無の空間を彷徨うことになることをイルバが警告していた。

「……………こんなところで終わる訳にはいかないさ。なあ、統夜」

「無論だ。俺は生きてみんなのいる世界に帰るんだ！こんなところで負ける訳にはいか

ない!!」

ザジの攻撃によって何も無い空間に突き落とされた統夜と流牙であったが、互いに顔を見合わせて頷いており、ザジを倒すことを諦めてはいなかった。

そして、2人は精神を集中させ、力を集中させていた。

すると、統夜の身に纏っている奏狼の鎧の背中に羽が生え、流牙の身に纏っている牙狼の鎧にも羽が生えたのであった。

それだけではなく、流牙の鎧は黄金の鎧だったのが、黒と金の鎧へと変わったのであった。

統夜は、かつてメシアの腕と呼ばれたホラー、「グオルブ」を討滅した時に使った力である、「翔翼騎士奏狼」に変わったのである。

そして流牙は、自らの心の闇に打ち勝って手に入れた力である「牙狼・闇」へと変化した。

2人の鎧に翼が生えたことにより、2人はそのまま上空へと飛翔し、危機を脱していた。

そして、変化した姿をザジに見せつけるのであった。

「……!?馬鹿な……!ー奴らの鎧が変わっただと……!?!」

ザジは、再び2人が現れ、さらには姿を変えて現れたことに驚いていた。

「いいだろう。我が全力をもって、貴様らを葬るとしよう。そして、今度こそ、忌々しき牙狼と奏狼の系譜を完全に断ち切ってくれよう！」

統夜と流牙の2人が姿を変えたのを見たザジは、周辺にある岩を集中させると、その岩を取り込み、巨大な魔獣へと姿を変えていった。

これこそが、現在統夜と流牙の2人が対峙しているザジの真の姿である「邪竜ザジ」である。

「こいつ……。さらに禍々しくなりやがって……」

「大丈夫だ！俺たちが力を合わせれば誰にも負けない……。そうだろう？統夜！」

「そうだな……。俺たちの力を見せてやろうぜ、流牙！」

「ああ、そうだな。統夜！」

ザジの姿は先程と比べて大きく禍々しいものとなっていたが、統夜も流牙も怯むことはなく、勝利のための希望の翼を羽ばたかせるのであった。

「愚か者共め……。これでも喰らえ!!」

巨大な魔獣へと姿を変えたザジは、自らが取り込んだ巨大なビルを、2人に向かって放つのであった。

いくら2人が鎧を纏っているとはいえ、巨大なビルにまともに衝突すれば、ひとたまりもないだろう。

しかし、2人は至って冷静であった。

統夜は精神を集中させることにより、自らの魔導馬である白皇の力を借りることなく、皇輝剣を皇輝斬魔剣へと変化させるのであった。

それだけではなく、統夜は自らの魔導火を全身に纏うことにより、「烈火炎装」の状態となるのであった。

さらに、流牙もまた、統夜に負けじと魔導火を身に纏い、烈火炎装の状態となる。

赤い魔導火を身に纏った統夜が皇輝斬魔剣を縦に振るうことで、たったの一太刀で自分の身の丈を遥かに超えるビルを切り裂くのであった。

さらに、緑の魔導火を身に纏った流牙は、牙狼剣を3、4度と振るうことにより、緑の炎に包まれた刃を飛ばすのであった。

流牙の放つ炎の刃は、統夜の一太刀によって斬り裂かれたビルを、さらに細かく刻むのであった。

2人の息の合ったコンビネーションにより、巨大なビルという障害物を取り除いた2人は、そのままザジへと向かっていくのであった。

「くっ……。まさか、あれをあつさりと凌ぐとはな……。だが、これならどうだい！」

自らが放ったビルを突破されて驚くザジであったが、すかさず両手を構えると、それぞれの手から、巨大なビームのようなものを放つのであった。

『…………!?お前ら、あの一撃を受けたらひとたまりもないぞ!』

「そうみたいだな……。流牙!」

「ああ!」

すっかりとした打ち合わせはしていないのだが、統夜は左側に展開し、流牙は右側に展開した。

2人はそれぞれの剣を構えると、迫りくるビームを抑え込むのであった。

「くっ……………」

「うっ……………ぐう……………」

ザジの放つ攻撃はかなり強力なものだからか、2人は烈火炎装の状態にもかかわらず、押されるのであった。

そのため、2人の表情は苦痛と共に歪むのであった。

ちやうどその時であった……。

「…………!?あれは、もしかして、流牙?」

「それに、統夜か!」

ホラーの群れを殲滅した莉杏とアズサがザジの作り出した空間へと到着し、ザジの攻撃に押される流牙と統夜を見つけるのであった。

「あれは……………!ザジか!封印が解かれ、強大な力を身につけたというのか!」

アズサはザジの放つ攻撃に注目し、押されている統夜と流牙を心配そうに見つめていた。

「大丈夫よ。流牙と統夜は絶対に勝つわ。だって2人とも、数多の試練と修羅場を乗り越えてきた、守りし者だもの……」

「守りし者……」

アズサは、莉杏の呟いた「守りし者」という言葉に心を打たれるのであった。

「だから、祈りましょう。2人が勝てるように……」

「莉杏……。わかったー」

こうして、莉杏とアズサは祈るのであった。

統夜と流牙の無事を。

そして、2人がザジを打ち払うことを。

（流牙……。あなたなら、どんな敵が相手でも負けることはないわ。なぜなら、あなたは牙狼。黄金騎士だもの……）

（統夜……。何があつても絶対に死ぬな！お前にもしもの事があれば、お前の世界にいる私が悲しむ事になるからな……。それにしても、おかしいな。お前とは住む世界が違うはずなのに……。私は……）

2人はこのように祈りを捧げるのであった。

そして、その祈りは、統夜と流牙に届くのであった。

「……………!? 莉杏……………?」

「アズサ……………」

統夜と流牙の2人は、莉杏とアズサの祈りを聞き、ハッとするのであった。

「統夜! 俺たち、こんなところで負ける訳にはいかないぞ!」

「そうだな……………俺たちは絶対に勝つ! 2人の祈りに応えるために! そして、元の世界に帰るために!」

莉杏とアズサの捧げた祈りは、統夜と流牙をより奮い立たせるのであった。

「うおおおおおおおおお!!」

「はああああああああああ!!」

統夜と流牙はそれぞれ獣のような咆哮をあげると、皇輝斬魔剣と牙狼剣を一閃するこ
とで、ザジのビームを斬り裂くのであった。

「!? 馬鹿な……………俺の渾身の一撃を凌いだだと……………!?」

先ほどのビルに続いて巨大なビームによる攻撃も防がれ、ザジは驚きを隠せなかつ
た。

ザジがこのように驚いている間にも、統夜と流牙がザジに向かってきた。

「おのれ……………忌々しい騎士どもよ……………この俺の力で、その憎き血を絶やしてくれ

「！」

様々な手を使ったが、統夜と流牙を止められなかったザジは、その巨体にて2人を迎撃とうとしていた。

「はああああああああああああああああああ!!」

「うおおおおおおおおおおおおおお!!」

統夜と流牙は、それぞれ獣のような咆哮をあげると、皇輝斬魔剣と、牙狼剣を振るうのであった。

ザジは、その巨体を生かし、2人の剣を抑え込む。

「ぐ、ぐうう……!!」

「くうう……!!」

ザジの力は相当なものであり、2人による同時攻撃でも、押されそうになっていた。

「こんなところで……負けるかああああああ!!」

統夜は苦しい状況ながらも再び獣のような咆哮をあげ、ザジの体を斬り裂こうとしていた。

しかし、そんな統夜の健闘もむなしく、ザジはその巨体による強大な力で、統夜と流牙を吹き飛ばすのであった。

「ぐああ!!」

「くっ……まだだ!!」

しかし、統夜と流牙は体勢を立て直し、すぐにザジの元へと向かって行く。

「何度来ても無駄だ!!ここで貴様らを潰してその血を絶やしてやる!!」

一度2人を撃退したザジはこれで気を良くしたのか、強気に統夜たちを倒そうとしていた。

「……統夜!少しの間、奴を抑え込めるか?俺に考えがある!」

「わかった!お前を信じるぜ、流牙!」

流牙はこの状況を打開する策を思いついたようであり、統夜はそれに乗ることにした。その言葉に頷いた流牙は、少しだけ後退するのであった。

「血迷ったか、黄金騎士!ならば、その小僧を先に潰してやる!!」

「させるかよお!!」

ザジは統夜を倒すために巨大な腕を振るい、統夜は皇輝斬魔剣を一閃し、迎撃しようとする。

先ほどのように罅迫り合いのような状態になるが、流牙がいなくなった分、統夜はザジに力負けしそうになっていた。

『統夜!気合いを入れる!このままじゃやつに潰されるぞ!』

「わかってる……よ!!」

統夜は自分の持てる力をこの剣に込めるが、それでもザジに押されていた。

「終わりだな、小僧!!」

ザジは渾身の力を込めて統夜にとどめを刺そうとしたその時だった。

「そうはいくか!!」

一時戦線を離脱していた流牙が、いつのまにかザジの背後に迫っていたのである。

「ふん!無駄なあがきを!!」

ザジは自分の体から岩の破片を放つと、それは流牙に向かっていった。

流牙は無駄のない動きでザジの攻撃を放つと、魔導火を纏った牙狼剣を何度も振るい、炎の刃をザジに向かって放つ。

「ぐうっ!?!」

その一撃でザジは怯み、大きな隙が出来たのだった

「!今だああああああ!!」

統夜は渾身の力を込めて皇輝斬魔剣を振ると、ザジの体を切り裂くのであった。

「ぐあっ!お、おのれ……!」

その一撃でザジを倒すことは出来なかったが、追い詰めることは出来ていた。

「……流牙!決めるぞ!!」

「ああ!わかった!」

2人は飛翔しながら合流すると、そのままザジのもとへと向かって行く。

「これで……!!」

「終わりだああああああああああ!!」

流牙と統夜はそれぞれの剣を同時に振るうと、ザジの体は2人の剣によって大きく切り裂かれるのであった。

「おのれ……！忌々しき騎士どもよ……！だが、俺は何度でも蘇る！黄金騎士の系譜を断ち切るその日までな！」

ザジはホラーではなく、牙狼に倒されたホラーの恨みの塊でもあるため、いつの日かは復活する可能性があるのであった。

しかし……。

「たとえそうだととしても、どの時代、どの世界の牙狼もお前に負けはしない！」

「そうだ……なぜならば……！」

統夜は牙狼がザジに負けないと断言することが出来ており、流牙は一呼吸置いてからこのように言い放つ。

「……我が名は牙狼！黄金騎士だ！」

「ぐわああああああああああああ!!」

流牙の力強い言葉の後、ザジの体は爆散し、その体は巨大すぎる邪気とともに消滅し

た。

「やったわ！流牙！統夜！」

「ああ！まさか、本当にザジを倒せるとは！」

ザジが爆散するのを遠くから見ていた莉杏とアズサは、明るい表情で歓喜の声をあげていた。

そして、ザジが消滅したことにより、未知の空間は消滅し、統夜たちはザジの祭壇に戻って来ていた。

空間が消滅したことにより、統夜たちは駆け寄ることもなく合流できたのであった。

「……流石ね、流牙。かなりの強敵だったでしょう？」

莉杏は、流牙の姿を見るなり、流牙の戦いぶりを称賛していた。

「俺一人じゃ厳しかったかもしれない……。統夜が俺に力を貸してくれたから、ザジを倒せたんだ」

「統夜、ありがとう……。流牙と共にザジを倒してくれて……」

そして、アズサは、ザジ討滅に貢献した統夜に、称賛も込めて礼を言っていた。

「気にかけることはないよ。俺は魔戒騎士として当たり前のことをしたんだから……」

どのような敵が相手でも、その脅威を振り払い、人を守る。

世界は異なっても、統夜は魔戒騎士としての本分を果たしていた。

その時である。

「あ、あれ……………」

統夜の体が徐々に透明になり、今にも消えそうになっていた。

「!?と、統夜?」

まさかの出来事に、流牙、莉杏、アズサは驚きを隠せなかった。

「どうやら…………。元の世界に帰る時間みたいだ」

『やれやれ…………。まさかこの世界での役目がザジを倒すこととはな…………』

統夜はかつて、魔法少女と呼ばれる少女たちが魔女と呼ばれる魔獣と戦う世界に迷い込んだ。

その時も、最強で最悪な魔女と呼ばれた「ワルプルギスの夜」と呼ばれた魔女と死闘を繰り広げた。

その魔女から放たれる邪気は統夜が感じたことのないものであり、そこから陰我が生まれてしまい、その世界で初めてのホラーである「ワルプルギスのメシア」が誕生してしまう。

統夜は持てるすべての力を使い切り、ワルプルギスのメシアを撃破する。

その時も、その魔女を倒した時に統夜は元の世界に戻ることが出来たのだ。

「そう…………。残念ね。出来ることなら、あなたともうちよつと戦いたかったわ」

「ああ。莉杏の魔戒法師としての力、かなりのものだったよ」

「統夜、元の世界に戻っても頑張つてね。あ、あと、私と似た武器を使うって言つてた魔戒法師にもよろしくね！」

「ああ、あいつにとつてもきつといい土産話になるはずだしな」

莉杏は統夜と別れの握手を交わし、統夜が元の世界へ戻るのを見送るのであった。

「統夜、お前との共闘、楽しかったよ」

「黄金騎士であるお前にそう言われるとは光栄だな」

「お前は、若いけど黄金騎士に近い力は持つてるさ。お前なら、これからどんな困難が来ても斬り裂ける」

「流牙……」

「じゃあな、統夜！お前の世界の牙狼にもよろしくな！」

「わかった……！流牙！俺、お前と出会えたこと、絶対に忘れないからな！」

そして、流牙もまた、統夜と別れの握手を交わし、流牙もまた、統夜が元の世界へ戻るのを見送るのであった。

そして……。

「統夜……。行ってしまうんだな」

「ああ。ありがとな、アズサ。俺の知ってる梓とは違うとはわかってはいるけど、お前と

出会えて良かったよ」

「……………っ！統夜!!」

統夜の言葉に思うところがあるからか、アズサは統夜の胸に飛び込み、統夜は優しくそれを受け止める。

そして……………。

チュツ……………

「まあ!?!」

「おお!」

アズサは突然統夜の唇にキスをしたため、それを目の当たりにした莉杏と流牙は驚き

からか目を大きく見開いていた。

そして統夜もまた、突然の出来事に驚くが、自分にとつて大切な人とそっくりな人物からのキスであるため、統夜は恥ずかしがることもなく、満更でもなさそうだった。

「アズサ……」

「統夜……。元気でな！そして、お前の世界にいる私のこと、ちゃんと大切にするんだぞ！」

「ああ、わかってるさ。アズサ、お前に出会えて良かったよ……」

「ああ、私もだー」

アズサは今まで、統夜たちに笑顔を見せることはなかったのだが、この時初めて満面の笑みで微笑むのであった。

そんなアズサの笑顔を見て、流牙と莉杏も満たされたような表情をする。

『ザルバ。どうやらお前さんは俺の世界にいるあのクソドクロと同じように全然違うみたいだ。お前ともう少し話をしたかったぜ』

『やれやれ……。どれだけお前の世界の俺様と仲が悪いんだよ……。お前の世界の俺様とも仲良くな』

『悪いが、それだけは無理だ！』

「イルバ、お前なあ……」

イルバは、この世界ともザルバとは分かり合えたみたいだが、どうしても、自分の世界のザルバとは仲良く出来そうにはなかった。

それを知った統夜は、苦笑いをしつつジト目でイルバを見る。

「それじゃあ、流牙、莉杏、アズサ。みんな、元気だな」

「ああ！統夜、お前も元気で！」

「住む世界は違うけれど、お互いに守りし者として頑張りましょう！」

「統夜……元気だな！」

「みんな……。本当にありがとう……」

統夜は流牙たちに感謝の言葉を述べたところで、その体は消滅し、自分の世界へと帰っていった。

統夜が消えたのを目の当たりにし、流牙たちはしばらくの間その場に立ち尽くすのであった……。

※※※

「……ばい！統夜先輩！」

「ん……」

誰かの声が聞こえてきたため、統夜はゆっくりと目を覚ます。

すると、統夜の目に飛び込んで来たのは、見覚えのある天井であり、自分のことを心配そうに眺めている恋人の梓の姿であった。

「あ、梓か……？ここは……？」

「学校の保健室です。統夜先輩が倒れているのをたまたま見かけた純が私に教えてくれて、ここまで運んできたんですよ！」

「そうだったか……」

統夜はゆっくりと体を起こすと、すかさず梓は統夜に抱きつく。

「梓……」

「統夜先輩のバカ!!何があったかはわからないけど、私、凄く心配したんですから！」

梓は目に涙を溜めながらこのように統夜に訴えかけており、そんな梓を、統夜は愛お

しそうに見ていた。

「梓、心配かけてごめん……。俺は大丈夫だから……」

そして、優しく梓の頭を撫でながら梓のことをなだめる。

そのような感じの状態がしばらく続くのであった。

「……なあ、梓。今日って何月何日だ？」

「?何言ってるんですか?今日は統夜先輩、先輩達を学校で見送ったばかりじゃないですか!」

「!?そうなのか!?!」

「あ、はい……。今日は部活の練習に遅れた純がたまたま倒れてる統夜先輩を見つけて、統夜先輩は3時間くらいずっと眠ってたんですよ」

(……!どうやら、俺がこの前異世界に迷い込んだ時みたいに、あまり時間は経過してないみたいだな)

《そうみたいだな。まあ、前の世界は滞在時期も長かったからかこつちの世界では数日経っていたが、あの世界には2日ほどしかいなかったからな》

梓から話を聞いた統夜は、この世界と流牙の世界との時間の流れが異なっていることに驚く。

しかし、高校2年生の夏休みに異世界に迷い込んだ時は、1ヶ月ほど滞在してしまっ

たのだが、それでもこちらの世界では数日しか経過してなかったのだ。

時間の流れが異なっていると改めて感じた統夜は納得したからかウンウンと頷くのである。

「……統夜先輩？」

そんな統夜の顔を、梓は訝しげに眺める。

「ああ、悪い悪い」

「統夜先輩、何があつたんですか？今日はもう部活は終わりましたし、時間があるので教えて欲しいです」

「わかったよ。それじゃあ、どっかで飯でも食いに行くか。その時にゆっくりと話すよ」
「はいー」

統夜はもう立ち上がっても問題はないため、そのまま立ち上がると、学校を後にして、梓もそれに続く。

そして、立ち寄ったレストランで食事をしながら、統夜は語るのであつた。

自分がまた異世界に飛ばされてしまったこと。

そこで、鋼牙とは違う牙狼である道外流牙と出会ったこと。

その世界で、梓と同じ名前で見えた目もそっくりな魔戒法師と出会ったこと。

黄金騎士を狙う魔獣ザジを流牙と共に撃破し、その後この世界へ戻ってきたこと。

全てを語った後、梓は驚きを隠せなかったが、そんな統夜の話を受け入れるのである。食事の後、統夜は梓を送り、この日は解散となる。

次の日はいよいよ4月になり、多くの人々が新しい生活を始める。

統夜もまた、魔戒騎士としてホラーを狩り、多くの人を守っていくことになる。それでも統夜は歩みを止めることはないだろう。

なぜなら統夜は……。

白銀騎士奏狼。

守りし者であるからである。

守りし者である統夜の戦いはこれからも続くのである。

……邂逅！もう一人の牙狼編・終